鬼斬り　かぐや

千風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鬼斬り　かぐや

【Ｎコード】
Ｎ１３２８Ｄ

【作者名】
千風

【あらすじ】
人と動物の姿をもつ獣人たちの暮らす世界、『御伽界』。かつて、鬼により侵略され御伽界を、“桃タロー”と呼ばれる一人の英雄が救った。それから数年……桃タローの弟子・最強凶悪かぐや姫は、イヌ・サル・キジの獣人をお供に、復活した鬼を退治するべく旅に出る！壮大そうで、そうでもない？とにかく笑える御伽ファンタジー☆２／２４、全１００章完結いたしました。

第1章　鳥の国の犬王子　☆1　（前書き）

こんにちは、千風と申します。
このたびは「鬼斬り　かぐや」をクリックいただき、どうもありがとうございます。

この作品は、大変長いお話となっております。
読みにくい箇所は多々あるかと思いますが、少しでも多く読んでいただき、「鬼斬り　かぐや」の世界に触れていただければ幸いです。

では、「鬼斬り　かぐや」、スタートです。

第1章　鳥の国の犬王子　☆1

ここは、御伽界。
人の他にもう一つ、様々な動物の姿を持つ“獣人”と呼ばれる人々の存在する世界。
獣人は獣化・人化を自在に行い、どちらの姿でもどちらの言葉も話すことができ、人間離れした身体能力の他に自然の力を操ることもできるという。
人間と獣人たちが共存する平和だった御伽界は、“鬼人”とされる鬼の化け物の出現により、混乱の渦へと巻き込まれていった。
しかし、“桃タロー”と呼ばれる青年が現れ、全ての鬼人を退治し、御伽界に平和をもたらしたのである。
そして、十年後……。
再び現れ始めた鬼人により、御伽界はまたもや混乱の時代を迎えようとしていた。
この“おとぎ話”はこんなところから始まるのである……。

“世界は僕に影を落とす…”

御伽界の南に、“雀”と呼ばれる国がありました。
雀国は、人と雀の姿を持つ“雀人”とされる獣人一族が治めており、他の鳥系獣人も多く暮らしていました。
そんなところから、この国についた別称は“鳥の国”。

「なんっでだよっ!?」

その鳥の国の中央道に、大きな声が響き渡った。
「なんっでっ！“骨っこ”が売ってないんだよっ！」
大きな声を響かせているのは、触り心地の良さそうな毛並みの一匹の白いイヌ。乱雑ではあるが、イヌのわりには流暢な人語を話している。
「そんなこと言われてもねぇ～」
イヌの言葉に困り顔を見せる、店の主人らしき一羽のニワトリ。こちらも普通に人語を話している。イヌがいるのは、雀国の中央道に立ち並ぶ店の一軒、食品店の前であった。店の前で騒いでいるイヌに、通りすがりの者や他の店の客たちも視線を集めている。
「ウチに売ってるのはパンカスにクッキーカスにチョコクッキーカスに～」
「カスばっかじゃねぇーかっ！もうちっと身になるもん売っとけよっ！」
売り物のラインナップを紹介するニワトリに、イヌが思い切り文句を言い放つ。
「仕方ないでしょ～ここは鳥の国だよっ？身になるもんなんて、みんな喉に詰まらせちゃうよぉ～」
「そっ…それもそうかっ」
「だいたい何で鳥の国にイヌがいるのさぁ～？」
「ええっ！？それはっ…！そのっ…！あのっ…！そのだなぁっ…！」
ニワトリの問いかけに、明らかに動揺を見せるイヌ。
「とぉにかく～ウチにはあんたの身になるもんなんて売ってないよっ！営業妨害だぁ～帰った帰ったっ！」
「ああっ！ちょい待っ…！せめてパンカスをっ…！！」
――バタンっ！
「ううっ！」
力強く締まる扉に、イヌが思わず耳を畳む。

「ううっ……」

――ぐゅるるぅ～～っ

豪快に鳴く腹の虫。

「ああ～身がっ……足りねぇ……」

凹んだ腹を引きずるようにして店の前から歩き出していくイヌ。

顔色は元々白いのでわからないが、空腹に相当参っているようである。

「あ～あ～鳥だったらいっくらでも食うもん売ってんのにっ」

「今日のペリカン便は大盛況でねぇ～っ！困ったものだよぉ～っ！」

「あったしもこぉ～んなに伝書がっ！ハト泣かせだわぁ～っ！」

「……っ」

空を飛んでいるのは、荷物を運んでいるペリカンと手紙を届けているハト。鳥の国である雀国にとっては当たり前の光景を、イヌはどこか悲しげに見上げる。

「鳥……だったら……」

眩しく映る、ペリカンとハトの翼。

「あぁ～っ！んな不可能なこと考えたって余計に腹が減るだけだっ！とりあえず何か食いもんをっ……！」

――ドンッ！

「んっ？」

振り返ったイヌが、顔面から何かにぶつかる。

「ええっ……と？」

イヌがゆっくりと顔を上げる。

『……。』

見上げた先にあるのは、悪を絵に描いたような人相の悪いゴツ男。

イヌがぶつかったのは、その男の足のようである。静かに目と目を合わせるイヌと男。

「あっ……えっと……すんませぇ～んっ」

男に睨みつけられ、とりあえず愛想笑いを浮かべるイヌ。

「おいおいおいっ！てめぇ～イヌっ！なぁ～にウチのアニキのお足にぶつかってやがんだっ！？ああっ！？」

「アニキのお裾が汚れちまったじゃねぇーかよっ！」

イヌがぶつかったゴツい男の両脇から、子分らしき小太り男と痩せ身の男がしゃしゃり出てきて、イヌに文句をつけてくる。

「だっから謝ってんじゃねぇーかっ！だいたい裾、大して汚れてねぇーだろっ！？」

「毛がつくんだよっ！イヌの毛がっ！」

「……っ」

子分の言葉に表情をしかめるイヌ。

「裾なんて汚れてる方が歩きやすいだろっ！ほれっ！」

『ああぁーっ！！』

気分を害したイヌはその勢いでゴツ男の裾に、くっきりと自分の足跡を付けた。その様子を見た子分二人が大声をあげる。

『てっ…！てっめぇーっ！アニキの裾になんてことをっ……！！』

「ワンポイントでカワイイだろっ？」

『ウチのアニキが可愛くなってどうすんだよっ！！』

「おいっ……」

『あっ…！アニキっ……！』

ポツリと声を出し、二人の前に手を出すアニキに、イヌに食ってかかっていた子分二人があっさりと下がる。

「どうやらイヌだけあって……この国で最も恐ろしいものを知らないようだなぁ……ワン公っ……」

「この国で最も恐ろしいもの？」

アニキの言葉に、首をかしげるイヌ。
「んん～……鳥肉大好き人間？」
「俺様だよぉっ！」

――ボォォォ～～ンッ！

アニキと子分二人の全身を白い煙が包んでいく。

「俺様こそっ！あっ！泣く子も黙る雀国最強集団“ペンタゴン”のお頭っ！あっ！銀ペー様よぉっ！！」
「同じく団員その一っ！ペン太っ！」
「団員その二っ！ペン吉だぁっ！」
「……。」
白い煙の中から出てきたのは愛らしい丸みの三匹のペンギン。ペンギンの姿となっても人相は悪い。ダサいポーズで古臭い自己紹介をするペンギン集団に、固まるイヌ。

「フッハッハッハっ！恐ろしくて声も出ないかぁっ！」
「何だぁ～飛べない鳥かっ、だっせぇーのっ」
「……っ！！」
イヌの一言に、銀ペーが表情を凍りつかせる。
「ああーっっ！！それだけは言ってはいけないランキング一位のその言葉をぉっ…！」
「へっ？」
「飛べない鳥っ…飛べない鳥っ…！飛べない鳥っ……！！」
体を震わせながら、何度もイヌの一言を連呼する銀ペー。
「あっアニキっ！！落ち着いて下さいっっ！！こんなところであの技だけはぁっ！！」
「うおおおっ！！」
『ぎゃあああああっ！！』

「うえっ？」
子分ペンギンの制止を振り切り、雄たけびをあげる銀ペーに、子分ペンギンたちが震え上がる。何となく嫌な予感がして、少しずつ後退し始めるイヌ。
「よっくも言ってくれたなぁっ！人がっ……！ってかペンギンが一番気にしてることをぉっ！！」
「いいいっ！？」
そう叫んで、急にその場に寝転ぶ銀ペー。
「“ペンペンっ！！スライディーグっ！ジェット気流”っ！！」
――ビュゥゥゥーーンッ！！
「んなっ！？」
ツルツルとした頭を地面に滑らせて、物凄い勢いでイヌへと向かってくる銀ペー。
「だあああっ！！」
「待てぇぇーっ！！」
命の危機を感じ取り、形振り構わず必死に逃げるイヌ。そのイヌを追ってスライドしていく銀ペー。銀ペーの滑った舗装道路は、そのあまりの勢いに深く抉られていく。
「わわわ悪かったっ！俺なんて鳥でもねぇーくせに飛べないとかってバカにして悪かったってっ！！」
「今更遅いわあっ！！」
「ぎゃあああああっ！！」
滑り迫ってくる銀ペーから必死に逃げるイヌ。イヌが逃げれば逃げるほどに地面は激しく抉られ、近くを歩く人々も仰天の表情で２匹の追いかけっこを見る。

「そっ…そうだっ！地面から離れりゃアイツも滑って来れねぇーだろっ！」
イヌが思いついた様子で方向転換をする。
「いよっとっ！」
街から外の森へと続く並木の上へと飛び上がるイヌ。
――パアアアーンッ！
『いいぃっ！？』
イヌが飛び乗った瞬間に、真っ黄色の並木が真っピンクの見るも鮮やかな満開の桜の木へと変わる。その光景に目玉が飛び出そうなほどにまで驚く、銀ペーと通りすがりの人々。
「よぉーしっ！これでっ……！」
“花咲かワンコ”だああっ！」
「売りゃあ希少価値だぞっ！！捕まえろぉぉっ！！」
「だあああっ！何か追ってくる人、増えてるぅっ！！」
イヌの“花咲か”っぷりに目の色を輝かせて、イヌ捕獲作戦に乗り出してくる通りすがりだった人々。イヌは頭を抱えてさらに必死に逃げる。
「アニキっ！あのイヌっ！」
「ああっ！！俺たちが最初に見つけた俺たちの獲物だっ！絶対一番に捕まえて、あれで金儲けすっぞっ！」
『ういっすっ！！』
銀ペーの言葉に子分二匹が景気よく頷き、ペンギン三匹組もイヌ捕獲に乗り出す。

『どおりゃあああーっ！！』
「ぎゃあああーっ！！」
軽く三十人にはなった追っ手から必死に逃げるイヌ。
「もお何なんだよぉ～っ！！」

――ポンっ！ポンっ！ポンっ！ポォォンっ！！

『おおぉぉっ！！』
イヌが他の木に飛び移る度に、その飛び移った木が桜へと代わり、その度にまた追っ手が増える。

『“花咲かワンコ”で金儲けっ！目指せ、一代企業っ！！』
「お前らっ！！動物愛護の精神ってもんがねぇーのかっ！って、うわあああっ！！」
追っ手に怒鳴りつけていたイヌが、枝から足を滑らせて木の上から落下していく。

「だあああああっ！！」

――どっすぅぅーんっ！

イヌの悲鳴と激しい衝撃音。

「痛ちちっ……！」
「んんっ……痛いですねぇ～……」
「ああ、まったくだっ……って、へっ？」

打ち付けた背中を押さえながら、ゆっくりと起き上がるイヌ。しかし聞こえてくるもう一つの痛がる声に、イヌが目を丸くして下を見る。

「急に落ちてくると危ないですよ？ワンコさん」
「……。」

イヌがゆっくりと自分の起き上がったその場所を確認すると、そこは地面に寝転がっていた人の体の上。
イヌが落下したのは、長い黒髪の艶やかな大きな黒い瞳の美しい少女の上であった。
少女は自分の体の上で起き上がっているイヌに、穏やかな笑顔を向ける。
その少女の笑顔に固まるイヌ。

「……っだあああっ！！」
「えっ？」
イヌが狂ったように叫びながら、勢いよく少女から離れて後退していく。そんなイヌに目を丸くする少女。
少女は着物を動きやすく改良したような変わった服に、その服とはあまり似つかない金色の三日月形のモチーフのピアスを右耳にだけしていた。
年頃は十五，十六に見える。

「おっ……俺の半径一メートル以内に近づくんじゃねぇっ！！」
「……っ“獣人”……？」
人語を話すイヌに、少し驚いた表情を見せながら起き上がる少女。

「“犬人”の方ですか？鳥の国なのに珍しいですねぇ」
「だあああっ！！近寄るなぁっ！！」
歩み寄る少女から、必死に後退していくイヌ。

「あっ、でもそれ以上行くとっ……」
「いいから近寄んじゃっ……！」

――パアアアーンッ！

「痛ってぇっ！！」
「……っ」

勢いよく後退していったイヌが、勢いよく後方の木に後頭部をぶつけ、青々とした木が満開の桜の木に変わるとともにイヌの悲痛な声が響き渡る。桜の木を驚いたように見上げる少女。

「あぁ～あ……それ以上行くと木にぶつかりますよと言おうとしたんですが……」
「ううっ…うっ……」
後頭部を押さえ、もがき苦しむイヌ。
「それにしても面白い力ですねぇ～獣人の方特有の能力というものですかぁ？」
「ううっ…ううっ……」

感心する少女を横目に、まだまだ苦しむイヌ。

『いたぞぉっ！！』

「……？」

「げっ！」

そこへやって来るペンギン三匹組をはじめとする、どんと膨れ上がった追っ手の人々。少女は首を傾け、イヌは後頭部を押さえたまま表情を引きつる。

「やっべっ！ううっ！」

逃げようとするイヌであったが、後頭部が痛み、その場に蹲ってしまう。

「大丈夫ですか？ハチ」

「見た目で名前つけんじゃねぇっ！！ってか一メートル離れろっっ！！」

勝手に命名した少女に突っ込みつつも、どうにも一メートルに拘りを見せるイヌ。

「“花咲かワンコ”だっ！捕まえろっ！！」

「金のなるイヌだぁっ！！捕まえろおっ！！」

「げぇっ！！来たっっ！！」

そうこうしている内に縮まってくる追っ手との距離。

「先は越させるかっ！“ペンペンっ！！スライディーグっ……！！」

追っ手の先頭で寝転んで、発射準備を整える銀ペー。

「ジェット気流”っ！！」

――ビュゥゥゥーーンッ！

「また出たっ！！」

地面を抉りながら滑り迫ってくる銀ペー。その距離は迫るが、蹲ってしまっているイヌに逃げ場はない。

「“花咲かワンコ”っ！覚悟ぉぉっ！！」

「ぎゃあああああっ！！」

間近に迫るスライディング銀ペーに、頭を抱え狂ったように叫ぶイヌ。

「もうダメだぁっ！！」

イヌが思わず目を閉じる。

「……っ」

「ぬおおおうっ！！」

――ドッスゥゥーンッ！

「へっ……？」

何やら潰れたような銀ペーの声と大きな衝撃音に、イヌがゆっくりと目を開く。

「……っ！」

目を見開くイヌ。

「ううっ……ペンっ……」

「まったくっ……危ないペンギンさんですねぇ～ぶつかったらどうするんですかぁ」

銀ペーの頭を踏みつけて、銀ペーのスライディングを右足一本で止めていたのは、先ほどの少女であった。

「ううううっ……」

『あっ……！アニキィーっ！！』

「すっ……すげぇ……」

見るも無残なアニキの姿に叫び声をあげる子分二匹と、少女の見かけとはかなりギャップのあるパワーに、感心の声を漏らすイヌ。

『このヤローっっ！！！アニキから足をどけやがれぇーっ！！』

「……っ」

今にも力尽きそうな少女の足元の銀ペーを見て、少女に向かって子分ペンギン二匹が飛び掛っていく。

――ドンっ！ガシャンっ！ピンっ！ダッポンっ！

『きゅぅ～っ……』

「ふぅっ……寝起きはやはり体が重いですねぇ」

「……。」
一瞬にしてやられる子分ペンギン。余裕たっぷりの少女に、イヌはまたもや固まる。

「よいしょっとっ」
「ぐっ……ぐふっ……」
少女がやっと銀ペーから足をどけると、銀ペーは力尽きた様子で地面に顔を付けた。

『うおおおーっ！』
「……っ？」
銀ペーの後方からやって来る、追っ手となった一般市民を見て、目を丸くする少女。

「飼い主の方ですかぁ？」
「んっなわけねぇーだろっ！！飼い主的な情なんて、これっぽっちも醸し出してねぇーじゃねぇーかぁっ！」
少女の間の抜けた問いかけに、力の限り突っ込むイヌ。

「追われてんだよっ！！」
「追われ……？」
『うおおおーっ！』
「だあああっ！！もおダメだあっ！！」
迫り来る追っ手に、イヌが今度こそ覚悟を決める。

「よっとっ」
「へっ……？」
覚悟を決めたイヌの体が、急に宙に浮く。目を丸くして離れていく地面を見つめるイヌ。

「って、お前っっ！！」
イヌが浮いたのは、少女がイヌの体を持ち上げたからであった。
「おっ……！おおおまっ……！おっ！俺に触っ……！触るんじゃっ！ねねねっ……！」
嫌がろうにも声が浮ついて何を言っているのかわからないほどにうろたえているイヌ。
「なっ……！何だぁっ！？女っ！！」
「そのイヌをこっちに渡しやがれぇっ！」
「……っ」
『ううっ……！！』
少女がひと睨みすると、強気に怒鳴りかけてきていた追っ手たちが思わず足を止める。
「ウチのハチに……何か御用ですか……？」
『……っ！』
少女の凍りつきそうなまでに冷たい笑顔に、少し後ずさる追っ手たち。
『いえっ、何でもありませんっ！失礼しましたっ！』
少女の冷たさに目だけで殺され、危機を悟ったのかあっさりと退いていく追っ手たち。

「ふぅっ……」
追っ手たちを追い払い、一息ついたように肩を落とす少女。

「大丈夫ですか？ハっ……」
「きゅううぅ～～っ……」
「あれっ？」

腕の中にいるイヌに声をかけようとした少女であったが、イヌは少女の腕の中で気を失っていた。

第1章　鳥の国の犬王子　☆2

一時間後……。

「ぷひゃあああっ！！」

勢いよく飛び起きるのは、先ほどのイヌ、ハチ（仮）。

「あっ……危なかった……危うく夢で冥土カフェに連れて行かれてご主人様地獄を味わうとこだった……」

「へぇ～何だか面白そうですねぇ～」

「全っ然っ！おもしろかねぇーよっ！！って、へっ？」

妙に近くから聞こえてくる声に、ハチが恐る恐る上を見上げる。

「面白くないものなんですかぁ」

「……。」

見上げたすぐ目の前にある少女の顔。よく見れば、ハチがいるのは少女の膝の上。イヌが固まって、どんどん顔色を青くしていく。

「どんぎゃあああっ！！」

「うわっ」

狂ったように叫びながら、物凄い勢いで少女の膝の上から飛び出していくハチ。

「どうかしっ……」

「ぜぇっ！ぜぇっ！ぜぇっ！ぜぇっ！」

「……。」

今にも死にそうな顔つきで心臓を押さえているハチの姿に、心配そうにしていた少女も少し呆れ気味。

「おっれの半径一メートル以内に近づくなっつってんだろーがっ！！」

少女からしっかりと一メートル離れてから、強気に怒鳴りかかってくるハチ。

「ハチ、もしかしてぇ～……ただ単に女が苦手なだけなんじゃっ……」

「うっせぇっ！！こっちは女に抱きつかれて三日間気絶してたことだってあんだよっっ！！」

「そりゃあスゴいっ」

何故か自ら秘密を暴露するハチに対し、何故か感心した反応を返す少女。

「だいたいお前は一体、何々だよっ！？何だってこんなとこに寝てたんだっ！？」

「えっ？私ですか？」

ハチの今更な質問に、目を丸くする少女。

「私は竹取輝矢（たけとりかぐや）といいます」

「かぐっ……やっ……？」

「まぁ色々あってこの国に来て、色々あってこの場所に着いて、色々あってここに寝てたわけです」

「何一つわかんねぇっ！！」

この上なく適当な輝矢の説明に、突っ込むよりもショックを受けてしまうハチ。

「まぁいいかっ……別にお前が誰でも関係ねぇーしっ……」

――ぐゅるるぅ～～っ

「ってか腹減ったっ……」

再び鳴り響く腹の虫。ハチが力なくその場に座り込む。

「ハチはお腹が減っているのですか？」

「ああ～何せもう三日三晩、ロクに食ってねぇーんだっ……」

先ほどの追いかけっこのせいで、空いていた腹がさらに空いてしまった。

「そうだっ！お前、何か食うもん持ってねっ……！」

――ぐゅるるぅぅ～っ！

「偶然ですねぇ～私も四日間、何にも食べてないんですよぉ～」

「持ってねぇな……」

ハチよりも豪快に腹の虫を鳴らして笑顔を見せる輝矢に、ハチが諦めたように呟いた。

「ああ～腹減ったっ……」

「ハチは桜以外の木は咲かすことできないんですか？柿とかリンゴとかバナナとかスイカとか」

「桜オンリーだ。そしてスイカは木に生らねぇー」

輝矢の問いかけに、元気なく答えるハチ。

「そうなんですかぁ～んっ？」

「あっ？」

上方から聞こえてくる無数の羽音に、輝矢とハチ一斉に顔を上げ

る。

「げっ」

上を見た途端に、顔をしかめるハチ。

「太鷲(たわし)隊長っ！この下辺りで不自然な桜の木が途絶えておりますっ！」

「よし、降りて調べてみよう」

「鳥の……群れ？」

不思議そうに首をかしげる輝矢。見上げた空には、大きなワシを先頭とした種々様々な鳥たちの群れ。種類も色もバラバラなので、群れと呼ぶにはあまりに不自然である。

「あれは一体っ……」

「おっ！おおおいっ！」

「……？」

妙に上ずった声に、上を見上げていた輝矢が振り向く。

「俺がここに隠れてるってこと、アイツらには内緒なっ！！」

「はっ？」

振り向いた先にいるのは、近くの草陰に身を隠しながら、妙に切羽詰った表情を見せているハチ。

「どうしたんです？ハチ」

輝矢が目を丸くして問いかける。

「女が苦手な上にワシも苦手なんですか？」
「いいから絶対言うなよっ！！わかったなっ！！」
「……？」
輝矢が首をかしげる中、ハチは草陰の中にその小さな体を完全に隠す。

「……っ」
そこへ降りてくる鳥の集団。輝矢が振り返る。

「少し尋ねたいことがあるのだが」

――ボォォォ～～ンッ！

鳥集団の先頭を飛んでいるワシの体を白い煙が包む。

「……っ」
「我らは雀国が国主・朱実（あけみ）家の警備隊・“レッドチュンチュン”。私は隊長の太鷲だ」
次の瞬間、白い煙の中から現れたのは、黒をベースに赤いラインで脚色された軍服らしき服をまとった、まるでワシのように鋭い金色の瞳をした、まだ若い男であった。

「“鷲人”っ……」
ワシから人へと姿を変えたその男・太鷲を見て、輝矢が少し眉をひそめる。

「我らは行方不明となっている現雀国主・朱実　孔雀様の甥、朱実桜時王子を捜索中である」
「オウジオウジ？」
太鷲の長々とした固い説明に、首をかしげる輝矢。
「そんな新種のアライグマ知りませんけど？」
「あっ……アライグマ？」
“オウジオウジ”を勝手な解釈した輝矢の言葉に、太鷲が少し間の抜けた表情を見せる。

「いや、我々が探しているのは朱実桜時という名の王子様なんだが……」
「オウジという名？そんな恥ずかしい名前の人がいらっしゃるんですかぁ？」
「まぁ」
少し遠慮がちに頷く太鷲。

「桜時様を見なかったか？」
「顔知らないのに見たかどうかなんて、わかるはずないじゃありませんか」
「そっ……それもそうか」
「ええ」
太鷲の言葉に大きく頷く輝矢。

「触れた木が桜になって、女が半径一メートル以内に近づくと騒ぎ出す、無意味にうるさい白いイヌなんだが」
「へっ？」
太鷲から伝えられたその言葉に、輝矢が目を丸くする。

「触れた木が桜になって……女が半径一メートル以内に近づくと騒ぎ出す……無意味にうるさい白いイヌ……？」

輝矢が俯き、少し考えるように首を捻る

「あっ……」

頭の中で正解のベルが鳴ったかのように、すぐに後方の草陰を見る輝矢。

「心当たりがあるのか？」

「えっ？あっああ～いえいえっ、何でもありませんよっ」

ハチがいることは言うなとハチ自身に強く止められているため、輝矢がとりあえず笑顔を振りまいて誤魔化す。

「そうか……見つけた者には一千万チュンの報奨金が与えられるんだが……」

「一千万チュンっ！？」

太鷲の口から発せられたあまりの高額金に、一瞬にして目を輝かせる輝矢。

「ここにいます」

「だああっ！！あっさりバラすなっ！そして触るなああっ！！」

「……っ」

高額報奨金の誘惑に負け、あっさりとハチを売る輝矢。輝矢に持ち上げられたハチが、必死に騒ぐ。そのハチを見て、目を見開く太鷲。

「とっとと離せよっ！ったくっ！金に釣られやがってっ！！」

「だって金は金ですもん」

「開き直るなぁっ！！」

「やっと見つけましたよ……」

「……っ」

輝矢を批判しつつも何とか輝矢の手から逃れようと足を動かしてもがいていたハチが、太鷲のその一言に急に顔をしかめる。

「さぁ、お屋敷に戻りましょう……」

太鷲がハチへとゆっくり手を伸ばす。

「“桜時様”……」

「……っ」

「一千万チュンですかぁ～」

浮かれている輝矢を横目に、ハチは厳しい表情を見せていた。

第1章　鳥の国の犬王子　☆3

雀国の南端に位置する巨大な屋敷。
国土の4分の1を占める土地に広々と作られた見事な庭に囲まれた、20階建ての木造屋敷。
もう400年以上も雀国を治めてきた、雀人“朱実”の屋敷であった。

「3日か……もった方かな……」

見慣れた広大な庭を眺めながら、屋敷の廊下に立ち尽くしているハチこと朱実桜時。
見た目は野良犬だが、実はこの立派な朱実家のお坊ちゃま。

「桜時様っ！！」
「……っ？」

名を呼ばれハチが振り向くと、そこには肩まで伸びた黒髪に何とも白い肌をした美しい女性が立っていた。

「千鶴っ……」

「まぁ～た勝手に外まで散歩に出られてっ！千鶴はもう気が気でなかったですよぉっ！！」
「散歩じゃねぇっ。家出したんだよっ！家出っ！」
「またそのようなことをっ……」

意地を張るように言い放つハチに、千鶴が少し呆れた表情を見せた。

「あまり太鷲隊長の手を煩わせになられてはっ……」

「何でぇぇっっ!!何でだよぉぉぉっっ!?」

「……っ?」

庭を眺めていたハチが、庭の向こうから聞こえてくる大きな声のする方へと目をやる。

「あれはっ…」

「俺を警備隊に戻してくれよぉぉぉっっ!!太鷲いいいっっ!!」

「さっきの……ペンギン?」

庭の向こうにある警備隊の隊舎の前で、太鷲を相手に大声で何やら懇願しているのは、先ほどハチを追いかけてきた挙句、輝矢に踏み潰された、銀ペーとかいうあのペンギンであった。銀ペーは太鷲の前に座り込み、地面に擦りつきそうなほどにまで頭を下げている。

「ああ、銀ペーさんですね」

「えっ?千鶴知ってんのか?」

「ええ、この間まで警備にいた方ですよ」

驚いたように問いかけるハチに、笑顔で答える千鶴。

「15年以上仕えて下さったベテランさんで、“要塞ペンギン”なんてあだ名が付いたほどの方だったんです」
「へぇ～……」
その割にハチを捕まえて売ろうとしていたが、と目を細めるハチ。
「でも太鷲隊長が来られてすぐ、“飛べない鳥”は役に立たないからと無理やり辞めさせられてしまって……」
「えっ……？」
ハチが眉をひそめる。

「何度来ても同じだよ、銀ペーさん。あんたみたいな飛べない鳥、朱実の警備隊には必要ない」
「……っ！」
土下座までした銀ペーに冷たい言葉を投げ捨てて、あっさりと隊舎の中へと入っていく太鷲。

「ううっ……うううぅぅっっ……！！」
『アニキィィィィィ～～っっっ！！！』
ショックのあまり泣き崩れる銀ペーに、子分ペンギンたちが駆け寄る。

「他にも多くのベテランが辞めさせられて……太鷲隊長のやり方は私も賛成しかねます……」
「……。」

――――人がっ…！ってかペンギンが1っ番気にしてることをぉぉーーっっ！！――――

「それであんなに怒ったのかよっ……」

ハチは確かに、銀ペーが1番傷つくことを口にしてしまったのだ。
どこか申し訳なさそうに俯くハチ。

「いっやぁ～広いお屋敷ですねぇ～でぇ？私の１０００万チュンはどこですかぁ～？」
「くわぁぁぁ～ムカつくっ……」
聞こえてくる陽気な声に、一瞬にして表情を歪めるハチ。

「いやぁ～今日は空が１０００万チュン色をしていますねぇ～」
「何だっ、１０００万チュン色って」

現れたのは、１０００万チュンに目が眩み、あっさりとハチを太鷲に売り渡した女・輝矢。報奨金を貰うため、ハチとともに朱実の屋敷へとやって来たのである。
そんな浮かれきった輝矢に、しかめっ面を見せるハチ。

「あっ……！あなたですねっ！桜時様を見つけてくださったのはっ！」
「……っ？」
駆け寄ってくる千鶴に、首をかしげる輝矢。

「わたくし、桜時様の世話役の千鶴と申します！」
「ああ、どうもぉ～ハチを見事に発見した、竹取輝矢ですっ」

「探しもしてねぇーだろーがっ」
爽やかな笑顔で千鶴に言い放つ輝矢に、ハチが不満げな顔を見せた。

「そうですかっ！あなたが見つけて下さったんですねっ！ありがとうございますっ！是非っ……！」

――――ボォォォォォォ～～ンッッッ！！！――――

「へっ……？」

「恩返しさせて下さいぃっっ！！」

「ええ～っ？」

千鶴の体が白い煙に包まれると、次の瞬間に白色の美しい鶴が現れ、泣きじゃくりながらその鋭い嘴を、輝矢へと向けてくる。

「何とお礼を言っていいかぁぁ～～っっ！！」

――――ドスッ！ドスッ！ドスッ！――――

「うわっ、わわわっ、わっとっ」

破壊的な恩返しを続ける千鶴の嘴攻撃を、素早く避ける輝矢。

「彼女は？」
「恩返しが大好きな“鶴人”だ」
「なるほどぉ」

「恩返しいいいっっっ！！！」

――――ドスっ！ドスっ！ドスっ！――――

最早、輝矢でなく壁に嘴を突き刺しだした千鶴を、呆れるように見ながら会話をする輝矢とハチ。

「それにしても驚きましたぁ～ハチが雀国の王子様だったなんてぇ～」

壁を突付いている千鶴を無視し、輝矢が桜時に笑顔を向ける。

「いやぁ～朱実は雀人だっていうから、てっきり雀だとばかりっ」

「……っ」

輝矢の言葉に俯くハチ。

「まぁお陰で１０００万チュンいただけるわけですけどっ」

「ったく、人をっ……ってかイヌをあっさり金で売りやがって」

ハチが輝矢に非難の目を向ける。

「まぁいいかっ。お前に助けられてなきゃ、俺はあのペンギンたちに捕まってたわけだし」

ハチが庭に背を向け、廊下の先の大きな扉の方を向く。

「一応、礼は言っとくよ。サンキューなっ……」

「……っ」

憂いを帯びた笑顔で礼を言うハチに、輝矢が少し違和感を覚える。

「まるで……戦場へでも向かう前のようですねぇ……」
「同じようなものですよ」
「えっ？」

輝矢が振り返ると、そこにはいつの間にか人の姿に戻った千鶴が真剣な表情で立っていた。

「それってどういうっ……」

「入っぞっ！千鶴っ！」
「えっ！？いやっ！あのっ！でもっ！桜時様っ！国主の前に出られる時は人化をっ……！」

目の前の大きな扉に手を伸ばすハチを、千鶴が慌てて止めに入る。

「俺はイヌだっ！イヌの姿のまま出て何が悪いっ！」
「悪いとゆーか何とゆーかっ……」
「とにかく行くっ！！」

――――バアアアーーンッッッ！！！――――

「ああっ……！！」

千鶴が止める中、勢いよく目の前にある大きな扉を開け放つハチ。

『……っ』

輝矢たちが表情に緊迫を走らせる中、ゆっくりと扉が開いていく。

第1章　鳥の国の犬王子　☆4

「ああ～らぁ～？どぉぉ～～しってこの部屋にイヌが入ってくるのかしらぁぁ～～っっ？？」

「……っ」

扉を開け放った出入口からまっすぐに敷かれた赤絨毯の先、三段ほど段になった床を上がったところに置いてある、まるで玉座のような金色の椅子。

そして、そこに腰掛けているのは、燃えるように真っ赤な長い髪に鋭く光る青色の瞳の、何とも派手なゴテゴテした着物を身にまとった女。

整った顔立ちをしており、年齢不詳な空気を漂わせているが、恐らく３０代半ばから４０代くらいであろう。

「孔雀サンっ……」

どこか怯えるように伏せ目がちに女を見上げるハチ。

「雀国の国主・朱実孔雀様。桜時様の実の伯母上です」

「へぇーっ……」

千鶴の説明に感心の声を漏らす輝矢。偉そうな空気はビンビンに出ているが、ハチを見るその冷たい目は、とても血の繋がりがあるとは思えない。

「まぁぁぁ〜〜ったく仕方のないワンちゃんねぇ〜っ！こぉ〜んなところに迷いこんでぇっ！」

「お母様ぁ〜っ♪」
「お母様ぁ〜っ♪♪」
「お母様ぁ〜っ♪♪♪」

「……っ？」

聞こえてくるハーモニーに孔雀が振り向く。ハーモニーを奏でているのは、孔雀の座るすぐ横に立ち並んだ、赤毛の青年3人組であった。
年は少しずつ違うようだが、顔立ち等よく似ている。

「あれは？」
「左から朱実　松人（まつと）様、竹人（たけと）様、梅人（うめと）様。孔雀様のご子息で、桜時様のお従兄弟です」
輝矢の問いかけに千鶴が小声で答える。

「何かしら？我が愛しの息子たちぃ〜」

「あのイヌはぁ〜♪」
「ウチのぉ〜♪」
「桜時ぃ〜♪」

「あっらぁぁ〜っ？そうだったのぉぉ〜〜？わからなかったわぁ〜

～っっ！！」

3兄弟のハーモニーに、わざとらしい反応を示す孔雀。

「なんせぇ～イヌなんてぜぇぇ～んぶ同じに見えるものだからぁぁっ！オホホホホっっ！！！」

『確かにっ！アハハハぁぁぁ～～～っ♪』

「……っ」

あからさまにハチをバカにした笑いをあげる孔雀と3兄弟。

ハチが俯いたまま、悔しげに歯を噛み締める。

「ふぅっ……」

笑いを止め、急に冷たい表情を見せる孔雀。

「私の前に出る時は、イヌの姿をするなと何度言えばわかるの？桜時……」

「……。」

孔雀がハチを冷たく睨みつけると、ハチはその顔を上げて睨み返すように孔雀を見た。

「別にっ……俺は“犬人”だっ！この姿だって俺の本当の姿だっ！隠す必要なんてないだろっ！？」

「……。」

突き上げるように見るハチを、孔雀が静かに見つめる。

「隠す必要なんてなぁぁ～いぃぃ～っ？」

「そんなことなぁぁぁ～いぃぃぃ～～♪」

「隠した方がいいぃぃ～～～♪」

「少し黙ってなさぁぁ～～いっ」

『ごぉぉぉ～～～めんなっさぁぁぁ～～～いっ♪』

ハーモニーを刻んでいた3兄弟が、孔雀から注意を受けて口を押さえて黙り込む。

「そうねぇ～。確かにっ、それがアナタの本っっ当の姿だわぁぁぁ～～～っ」

3兄弟を黙らせて、改めてハチを見下ろす孔雀。

「朱実の名に泥を塗る姿っ……」

「……っ」

孔雀の言葉に、唇を歪めるハチ。

「雲雀(ひばり)っ……愚かな妹っ……鳥でないだけならまだしも、よりにもよって他種の獣人の男に騙されて……」

「……っ！父さんは母さんを騙したりなんかっ……！」

「あぁぁぁーーっっ！！ごめんなさいっ！！わたくし、イヌの言葉はわからなくてよぉぉっっ！！」

「……っ」

ハチの言葉を頭から遮る孔雀。

「とにかくっ！アナタのその姿そのものが朱実家の恥なのっ。あまり出歩いて人に晒さないでもらえる？」
「……っ」
「あなたはこの広い庭の中で一生、散歩でもしていればいいのっ！」
「……っ！そんなのっ……！」

ハチが思わず声をあげる。

「そんなの嫌だっっ！！」

「……イヤっ……？」
ハチの言葉に、首をかしげる孔雀。
「俺っ……俺っ本当はっ……！もっと外の世界を見たいんだっ！」

「桜時様っ……」
「……。」

堪えるように俯いてばかりいたハチが、孔雀をまっすぐに見て自分の思いを訴える。
その姿を千鶴と輝矢はまっすぐに見つめる。

「外の世界に出てっ、色んな人と知り合いたいっ……父さんを探したいっ！」
「……っ」

ハチの言葉に、孔雀が少し顔を引きつる。

「バカを言わないで。あなたはイヌなのよ。イヌならイヌらしくお家の庭を走り回っていればいっ……！」

「確かに俺はイヌだけどっ……！イヌなんだけどっ……」

真剣な瞳と想いを孔雀に向けるハチ。

「羽ばたきたいんだっ！もっと羽ばたいていきたいんだよっ！！」

「……っ」

胸を突き刺すようなハチの訴えに、輝矢はどこか驚いたような表情を見せた。

「羽ばたく……？」

孔雀が目を丸くする。

「イヌの分際で羽ばたくぅぅぅ～～～～っっ？？」

扇子を広げ、ハチの言葉を長々と響かせて繰り返す孔雀。

「冗っ談じゃないわぁっ！精々、“犬掻き”がいいところじゃなくってぇ～っ！！オーッホッホッホッホっ！」

『さすが母上っ！上手いこと言うっ！アッハッハッハァァァ～～～っっ！！！』

「……っ」

高々と笑いあげる孔雀と3兄弟に、ハチは唇を噛み締め、強く前足を握り締めた。

「……っ？」
「……っ」
「……。」
ハチと同じように悔しげに拳を握り締めている千鶴を見て、輝矢が少し目を細める。

「ふぅ～っ、片腹痛いわぁ～。こんなくだらない話はもう止めにしましょっ。では太鷲っ」
「はい」

孔雀が呼ぶと、玉座の後ろから先ほどのワシ男、太鷲が姿を見せた。

「１０００万チュンです」
「おおっ」

太鷲が差し出した台の上に積み上げられた札束を見て、感嘆の声をあげる輝矢。

「お約束通り、報奨金を差し上げますわぁぁぁ～～～」
孔雀がハチから目を逸らし、輝矢を見る。

「ありがとうございます。私の１０００万チュンっ」
爽やかな笑顔でお礼を言う輝矢。

「その代わりっ」
「……？その代わり？」
続いて聞こえてくる孔雀の声に、輝矢が１０００万チュンから孔雀の顔へと視線を移す。

「桜時がイヌであることは他言無用でお願いしますわぁぁぁぁ～～～」
「えっ？」
孔雀の言葉に目を丸くする輝矢。
「由緒正しき雀人一族にイヌの子供が生まれたなど、国民はおろか他国に知れ渡っては恥もいい所っ！」
「……っ」
大金を前に浮かれていた輝矢も、孔雀の言葉にさすがに眉をひそめた。
「桜時の存在は、わたくしたち一族が全力を持って隠し通さねばなりませんのぉ～っ！」
「……。」
孔雀の言葉に、さらに俯いていくハチ。
「だぁかぁ～らぁっ！くれぐれも他言無用でお願いしますわぁぁっっ！！」
そう高らかと言いながら、孔雀が金の積まれた台を引く太鷲とともに、輝矢の前までやってくる。
「受け取りなさい」
「……。」
孔雀の顔をまっすぐに見つめる輝矢。

「ではっ、遠慮なくっ」

――――バッコォォォォーーンッッッ！！！――――

「のおおおおおおーーーんっっっ！！！！」

輝矢が笑顔で、金の積まれた台を孔雀へ向けて蹴り上げる。

「へっ……？」

「……っ」

『母上ぇぇぇぇぇぇぇぇぇっっっ！？』

それぞれに驚きの表情を見せるハチ、太鷲、３兄弟。

輝矢の蹴り上げた台を直撃し、物凄い勢いで先ほどまで座っていた玉座へと吹き飛んでいく孔雀。どれほどの力で台を蹴り飛ばしたのか、玉座はあっさりと砕ける。

「孔雀様っ……！」

『ひいいいいいいいいいいっっっ！！！！』

「なっ……！何をっ……！」

慌てて孔雀の元へと駆け寄る太鷲、輝矢の力に震え上がる３兄弟、そして戸惑いがちに輝矢の方を見るハチ。

「んなっ……！んなんななっ……！何するのよぉっっ！？」
「何だ、元気そうですね」

吹き飛ばされたわりに太鷲の手も借りず元気に起き上がる孔雀を見て、少し残念そうな顔を見せる輝矢。

「あっ！あなっ！あなたっ！こんなことしてどっ……どうなるかわかっているのっっ！？」
「全然っ」
「んなっ……！！」

笑顔を見せる輝矢に、孔雀が顔を引きつりまくる。

「あなたねぇっっ……！！！」
「確かにっ……この庭は、ウチのハチには少々狭すぎるようですねぇ」
「んなっ……！？」

「お金は要りませんっ。その代わりっ」
輝矢が笑顔を浮かべたまま手を伸ばす。

「彼をっいただけませんっ？」
「へっ？」
軽々とハチを抱きかかえる輝矢。ハチが目を丸くする。

「ぎゃあああああっっ！！！触るなぁぁぁっっ！！！」
「はぁぁぁっっっ！！！？」

輝矢に抱きかかえられ、尋常でないほどに騒ぐハチと、大きな声

に目を飛び出させて驚く孔雀。

「オーッホッホッホッホっ！！そぉぉ～～んなイヌもらってどうするってゆぅ～のぉ？」

孔雀が勢いよく立ち上がり、得意の高笑いをする。

「ペットにでもしようってゆぅ～のかしらぁぁ～～っっ？？」

「ええっ」

「えええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっっっ！！！？」

何の躊躇いもなく頷く輝矢に大きく驚くハチ。

「オーッホッホッホッホっっ！！！冗談じゃないわっ」

孔雀が急に瞳を鋭くする。

「そのイヌはねぇっ！一生この広いお屋敷で暮らしていくのっっ！！誰の目にも触れずにねぇぇっっ！！」

「……っ」

孔雀の言葉に再び歯を食いしばるハチ。

「もぉぉぉぉ～～～うっっっ！！とっととあの小娘を何とかしてしまってっ！！太鷲っっ！！」

輝矢を指差し言い放つ孔雀。

「……。」

「……？太鷲？」

返答のない太鷲の方を孔雀が振り返る。振り返ると太鷲は深く俯

いたまま、微動だにしないでいた。

「何をしているのよっ！？早くっ……！」
「じっくり行くつもりだったが……」
「はぁっ？」

「……っ」
籠もったように呟く太鷲に首をかしげる孔雀と目を細める輝矢。

「たっ……太鷲っ……！何をっ……」
「こうも早く機会が巡ってくるとはなぁっっ！！！」

――――バァァァァァーーンッッ！！！――――

「……っ！」
「なっ……！」
「えええええっっ！！？きゃあああああっっっ！！！！」

叫んだ太鷲が、身に纏った軍服を弾き飛ばすように巨大化し、濁った緑色の皮膚に2本の金色の角を持つ、鬼のような化け物へと姿を変える。黄色い目に真っ赤な眼球を光らせ、鋭い爪と牙を持った禍々しい姿。
輝矢やハチが驚きの表情を見せる中、鬼と化した太鷲は孔雀の体を右手で掴み上げた。

第1章　鳥の国の犬王子　☆5

『ぎゃあああああああああああっ！！！』
「……っ！あっ……！あれはっ……」
叫びまわる3兄弟と、恐怖からか少し後ずさる千鶴。

「“鬼人”……ですか……」

「鬼人っ！？」
輝矢の言葉に驚くハチ。
かつて御伽界を脅かした異形の生物。“桃タロー”がすべてを退治し、世界に平和をもたらしたはずであったが、１０年の後、鬼人は再び現れ始めたのである。

「本当に復活してたのかっ……」
「思いがけない展開ですねぇ～」
「暢気に言ってる場合かよっっ！！」
感心したように腕組みをしている輝矢に、ハチが少し怒ったように突っ込む。

「ハァーっハッハッハっ！内部から徐々に崩していくつもりだったがぁっ」
「ひぃっ！」
太鷲が孔雀を掴んでいる右手を振り上げる。

「四大国の国主を、こうもあっさり殺せるチャンスが巡ってこようとはなぁっっ！！」
「殺すぅうっっ！？」

太鷲の狙いが自分の命であることを知った孔雀が表情を凍りつかせる。

「いっやぁぁぁぁーーーっっ！！！」
凍りついたわりに大声で叫びまくる孔雀。

「助けてぇぇぇぇっっ！！！我が愛しの息子たっ……！！」
『ひっやあああああああああああああっっ！！！』

孔雀のことなど見向きもせずに、我さきにと逃げていく3兄弟。

「息子たちぃぃぃ～～っっっ！！！！」
去っていく背中に、孔雀が悲しげに手を伸ばす。

「愛しの息子たちにも身捨てられたところでぇ、いっちょ死んどくかぁ～？」
「いっやあああああああああああっっ！！」

「まっ……！待てっっ！！」

「……っ」

「息子たちっ！？」

制止を訴える勇ましい声に、眉をひそめる太鷲と期待の目で振り向く孔雀。

『……。』

勇ましい声の主は、どうやら無理に輝矢の腕の中から飛び出したらしきハチであった。こじんまりしたイヌの姿を遥か上から見下ろす太鷲と孔雀。

「何だ、イヌかっ……」

孔雀ががっくりと肩を落とす。

「孔雀サンを放せっ！！」

「誰がっ……！」

「誰があんたなんかに助けてもらうもんですかぁっっっ！！！」

「えっ？」

太鷲よりも大声で否定したのは孔雀であった。

思いがけない孔雀の反応に、少し間の抜けた表情を見せるハチ。

「イヌに助けられるくらいならねぇっっ！あたっしは死んだ方がマシよぉっ！！！」

「そんなっ……！孔雀サンっ！」

どこか孔雀を責めるように、ハチが突き上げて孔雀を見る。

「ハァーっハッハッハっっ！！いい度胸だぁぁぁっっっ！！！」

「ひいっ！」

ハチには強気だった孔雀であるが、太鷲がその禍々しい顔を振り

向かせた途端に背筋を震え上がらせる。

「望みどおり殺してやろうっっ！！！」

「やっぱ死にたくはなぁぁぁぁーーいっっっ！！！」

ハチに助けられるくらいなら死んだ方がマシなようだが、やはり死にたくはないらしい孔雀。

自分の思いのままに叫ぶところは見事である。

「孔雀さっ……！」

「ちょっと待って下さい」

「ぬはぁぁぁっっ！！」

孔雀の意志を無視して飛び出していこうとしたハチであったが、輝矢に容赦なく尻尾を踏みつけられ、その場に顔から倒れこむ。

「何すんっ……！」

「派手派手スズメババア」

「誰っが派手派手スズメババアよっっ！！小娘っっ！！」

ハチの尻尾を踏みつけたまま、輝矢が上を見上げて孔雀を呼ぶ。

「1つ提案があるんですけど？」

「てっ……提案っ？」

輝矢の言葉に、目を丸くする孔雀。

「提案って何よっ！？」
「私がアナタを助けますので、無事助けられたらハチを私に下さい」
「んなっ！？」
倒れこみながら表情を引きつるハチ。
「オーッホッホッホっ！！だぁぁぁ～～～れっがそんな約束っ……！」
「まぁ助けてほしくないならいいんですけどね」
「うっ……」
いつものように高らかと笑いあげる孔雀であったが、輝矢の一言で笑っている場合ではない現状に気づく。
「わっ！わかったわっっ！！ＯＫっ！ＯＫっ！とりあえず私を助けなさいっっ！！」
「決まりですねっ」
孔雀の返答に輝矢が笑顔を見せる。
「さてとっ……」
「おっ……！おいっ！」
ハチの尻尾から足をどけて、準備を整えるかのように手足を動かす輝矢に、ハチが起き上がって声をかける。
「やめろよっ！俺のためなんかに鬼人と戦うなんてマネっ……！」
「別にアナタのことはついでですよ」
「えっ？」

「私は私の仕事をするだけです」

「仕事……？」

輝矢の言葉に、戸惑うように首をかしげるハチ。

「フワァーっハッハッハっ！！貴様のような小娘が私を倒す気かぁぁっっ！！？」

「ええっ」

太鷲の問いかけに笑顔で答えて、輝矢がゆっくりと右耳の三日月形のピアスへと手を伸ばす。

「“げっ……」

「うおおおおおっっ！！！あれは見た限りっ！国主様のだぁーいピィィーンチっっ！！」

『……っ？』

ピアスへ手を触れようとした輝矢とハチが、どこからか聞こえてくる大きな声に振り向く。

「アイツらはっ……」

「ナァーっハッハっっ！！あっ！俺様こそっ！雀国最強集団“ペンタゴン”お頭っ！“銀ペー”様よぉっ！」

「同じく団員Ａっ！ペン太っっ！！」

「同じく団員Ｂっ！ペン吉だぁぁっっ！！」

『……。』

扉を開け放ち、堂々とした自己紹介をするのは、先ほどハチを追い回してきたペンギン軍団。相変わらずのダサいポーズと愛らしい姿に、部屋内の皆を固まらせる。

「ここで国主様を助けられればポイントアップアップっ！間違いなしですよっ！！アニキっっ！！」

「警備隊への復帰も夢じゃありませんよっ！！アニキっっ！！」

「うおおおおーーっしっっ！！！やってやるぞぉぉっっ！！！！」

場違いな空気を醸し出しながら、やる気だけは満々に部屋の中へと入ってくる銀ペー。

「覚悟しやがれぇぇっっ！！！鬼の化け物ぉぉぉっっっ！！！」

そう叫んで、床に寝転がる銀ペー。

「喰らえぇぇぇっっっ！！！“ペンペンっ！！スライディーーーグっっっ……！！！」

銀ペーが発射準備を整える。

「ジェッッット気流”ぅぅぅっっ！！！」

――――ビュウウウウウーーンッッ！！！――――

床を抉りながら、スライディングで太鷲へと向かっていく銀ペー。

「邪魔です」

――――ドォオオオーーーンッッッ！！！――――

「ぎゃあああああああああっっっ！！！」

『アニキィィィィィィーーーーっっっ！！』

滑っていく銀ペーを太鷲までの道の途中で、容赦なく踏みつけて止める輝矢。床に体がめり込むまで踏みつけられ悲鳴をあげる銀ペーに、子分たちが声をあげる。

「うっ……ううっ……」

「せっかく話がまとまったのに、ややこしくしないで下さい」

「鬼かっ」

力尽きた銀ペーに冷たく言い放つ輝矢を見て、ハチが思わず突っ込む。

「貴様らの茶番にこれ以上付き合ってる暇はないっっ！！死ねぇっっ！！朱実孔雀っっ！！」

「いっやあああああああっっっ！！！！」

「……っ」

「孔雀サンっ……！」

ついに太鷲が孔雀を宙へと放り投げ、その体に右手の鋭い爪を向ける。思わず身を乗り出すハチ。

「“月器っ……」

輝矢が右耳のピアスの、三日月形のモチーフ部分のみを弾く。

――――パァァァァーーンッッッ！！！！――――

「……っ！！」

弾かれた三日月形のモチーフは、宙を舞いながら金色の光を放ち、一気に巨大化していく。

驚きの表情でその光景を見つめるハチ。

「三日月”っ」

第1章　鳥の国の犬王子　☆6

まるで金色の曲剣のような大きさとなった三日月の先の取っ手部分を、輝矢が持って身構える。

「……っ」

「何っ……！？」

三日月を構え、目にも見えぬ速さで太鷲へと向かっていく輝矢。孔雀を攻撃しようとしていた太鷲が、焦ったような表情で振り向く。

「このっ……！！」

「……っ！」

――――――――――――――――――――っっっ！！！！――――――

交錯する輝矢の三日月と太鷲の爪。

「ぎゃあああああああっっっっ！！！！」

次の瞬間、悲鳴をあげたのは太鷲の方であった。

床に太鷲の鋭い爪が転がり、太鷲の指先から紫色の血が滴り落ち

る。

「その武具はっ……我ら“対鬼人用”のっ……！！貴様、一体っっ……！！」

「私？私の名は竹取輝矢」

戸惑いの目を向ける太鷲に対し、余裕の笑顔で自己紹介する輝矢。

「わが師“桃タロー”の意志によりっ、鬼退治させていただいまぁ～すっ」

「何っ！！？」

「桃タローだってっっ！！？」

輝矢の言葉に、太鷲やハチ、皆が驚きの表情を見せる。

「ちっがぁぁぁーーうっっ！！！条件はソイツを倒すんじゃなくって私を助けることでしょっっ！？」

そう叫びながら、太鷲に放り投げられた状態のまま、高い地点から勢いよく落下してきている孔雀。

「早く私を助けなさいよぉぉぉっっ！！！」

「ああ、忘れてました」

「いっやあああああああっっっ！！！！」

輝矢に忘れられたままに、孔雀がどんどん落下していく。

「孔雀サンっ……！！」
「あっ！桜時様っ……！」
千鶴の制止を振り切り、孔雀の元へと飛び込んでいくハチ。
「ひっやあああああっっっ！！！！！」
「……っ！」
――――ドッスゥゥゥゥーーンッッッ！！！！！――――
落下音が激しく部屋中に響き渡った。
「あ～あ～死にましたかねぇ～」
暢気に状況を見つめる輝矢。
「んっ……んんっ……んっ？」
「痛つつつつつつっ……」
あまり痛みのない体と下からする声に孔雀が振り向くと、孔雀の大きな体の下に飛び込み、衝撃を和らげたのであろう傷だらけの子犬の姿があった。
「大丈夫かよっ？孔雀さっ……」

「きゃあああああああっっっ！！！触らないでよっっっ！！着物に毛が付くじゃないっっ！！」
「……っ」
心配するハチの手を避け、勢いよく桜時から離れていく孔雀。
「だいたいイヌに助けられるくらいならねぇっ！真っ逆さまに落ちた方がっ……！！」
「良かったっ……元気そうだなっ……」
「……っ！」
自分は傷だらけで、孔雀はただ蔑みの言葉しか吐かないというのに笑顔を見せるハチを見て、孔雀は思わず言葉を止めて目を見開いた。
「……バカな子っ……」
「えっ？」
孔雀はハチに聞こえないくらい小さな声でそう呟き、それ以上は何も言わずに俯いた。
「……っ」
そんな孔雀とハチの様子を見て、少し笑顔を浮かべる輝矢。
「さてとっ……こちらもとっとと片づけましょうか」
「クっ……！」
再び太鷲の方を向く輝矢に、太鷲が少し表情を歪める。

「まさかっ……桃タローの弟子とはなっ……だがっ！！」

――――シュンッッ……！！――――

「……っ」

太鷲が右手を振り払うと、輝矢の三日月に切り落とされた爪が超速で伸びて再生する。

「負けはせんぞぉぉっっ！！！小娘ぇぇぇっっ！！！」

「……。」

駆け込んでくる太鷲を静かに見つめる輝矢。

「だあああああああああああっっっ！！！！！！」

――――バァァァァァーーーンッッッ！！！！！――――

「……っ！？何っ！？」

輝矢に振り下ろしたはずの爪は、勢いよく床を抉る。

「どっ……どこにっ……！？」

「ここです」

「……っ！」

冷静な声が聞こえてくるのは、太鷲の巨体よりもさらに上。太鷲が上を見上げると、そこには三日月を構えた輝矢の姿があった。

「クっ……！」

「三日月っ」
「……っ！ぎゃあああああああっっっ！！！！」

落下の勢いも味方して、太鷲が防御の姿勢を取る前に、輝矢が太鷲の体を上空から切り裂いた。激しく吹き出る血が、輝矢の冷静な表情に飛び散る。

「うっ……ううぅ～っ……」
その頃、やっと起き上がる銀ペー。

『あっアニキっっ！！！』
起き上がった銀ペーに、駆け寄っていた子分ペンギンたちが嬉しそうな表情を見せる。

『大丈夫っスかぁっ！？アニキっ！！』
「ああっ……しかしあの女っ！一度ならず二度までもこの銀ペー様を踏みつけやがってっ！」
「でも何か凄いっスよ？あの女っ」
「何っ？」

子分の言葉に、銀ペーが太鷲と戦闘中の輝矢の方を見る。平然としている輝矢に対し、胸部を切り裂かれ激しく血を流している太鷲。どちらが優勢かは一目瞭然である。

「何でもあっの“桃タロー”の弟子だとかでっ」
「さっきから化け物押しっぱなしだしっ。ありゃあ次元違いますよっ」
「何とっ！？桃タローの弟子っっ！！？そっ……そうなのかっ……

むっ？」

銀ペーが今度は、孔雀とともに戦況を見守っている白いイヌ、ハチに気づく。

「ややっ！あれはあの時の“花咲かワンコ”っっ！！」
「ああ～あのイヌ、どうやら朱実のお坊ちゃんみたいっすよぉ～」
「何いいいいいっっっ！！！？」

「アニキ、１５年も警備隊にいたのに見たことなかったんスかぁ～？」
「いやっ……俺が見た時は確かっ……」

「ぐおおおおおおおおっっっ！！！！！」

『ひいっっ！！！』
急に激しく叫び始めた太鷲に、ペンギンたちが震え上がって身を寄せ合う。

「おのれっ……！！小娘ぇぇぇっっ……！！！！」

「大したことありませんね。さすがは１番格下の緑鬼」
「何だとぉぉぉっっっ！！！？」

挑発するようなことを言う輝矢に、怒りを全面に出してくる太鷲。

「まぁ所詮、私の相手では……」

「油断し過ぎじゃないかぁぁっっ！！？小娘っっ！！」
「えっ？」

怒りの表情からふいに笑顔を見せて言い放つ太鷲に、輝矢が目を丸くする。

「貴様の足元をよぉぉぉーーく見てみろっっ！！！」
「足元っ？……っ！」

太鷲の言う通りに輝矢が足元を見てみると、そこに落ちているのは先ほど輝矢が切り落とした太鷲の爪。
それを見て輝矢が表情を変える。

「しまっ……！」
「フハハハハっっっ！！！“鬼爪・天回”っっ！！！」
「……っ！」

太鷲の言霊に乗って、飛び出してくる爪。

――――ブシュッッ……！！！！――――

「ううううっっっ！！！」

『なっ……！！？』

床から勢いよく飛び出した太鷲の爪が、輝矢の右足を貫通する。
表情を歪めるとともに、真っ赤な血の流れる右足を抱え込むように

してしゃがみ込む輝矢。

「クっ……！」

「フハハハハぁぁぁ～～～っっっ！！！桃タローの弟子もこうなっては終わりだなぁ～っ！！」

「……っ」

苦しげな表情を見せる輝矢に、笑みを浮かべながら両手を突き出す太鷲。

「ここまでだっ！！小娘っ！！“鬼爪・天回”っっ！！」

「……っ！」

突き出した１０本の爪を、動けない輝矢へと放つ太鷲。

「アイツっ！動けねぇーのにっ……！！」

『うわああっっ！！終わりだぁぁぁっっ！！』

思わず身を乗り出す銀ペーと、思わず目を覆う子分ペンギンたち。

「……っ！」

「なっ……？」

「桜時様っっ！！！？」

孔雀と千鶴が驚く中、ハチが輝矢の元へと飛び出していく。

「クっ……！……？ハチっ……？」

何とか足を動かそうとしていた輝矢の目に飛び込んでくるのは、こちらへと駆け込んでくる1匹の白いイヌ。

「ダメですっ！ハチっ！来てはっ……！」

――――ボォォォォ～～ンッッッ！！！――――

「……っ」

『……っ！！』

イヌの包んだ白い煙。そして次の瞬間、煙の中から飛び出してくる人間。

「……っ」

「ハ……チ……？」

それは鮮やかなピンク色の髪に澄んだ青色の瞳の、勇ましさを感じる凛々しい表情の青年であった。

輝矢が戸惑うように見上げる中、青年が輝矢の前に立ち、向かってくる鬼爪に両手を向ける。

「“瞬花”っっっ！！！」

――――パァァァァーーーンッッッ！！！――――

「……っ」

「何っっ！！？」

桜時の向けた両手から桃色の光が発せられた途端に、飛んできていた鋭い鬼爪が淡い桃色の桜の花びらとなって散っていく。

その美しい光景に輝矢は目を見張り、太鷲は驚きの声をあげた。

「獣人の力かっ……！」

太鷲がまたもや表情をしかめる。

「雀人・朱実が代々受け継いできた力、“花力”……」

「……？孔雀様？」

人の姿を見せた桜時を見つめ、珍しく真剣な表情を見せて呟く孔雀に、孔雀の体を支えている千鶴が少し首をかしげた。

「姿はイヌでも、あの“花力”は紛れもない朱実の証……」

孔雀の桜時を見る、その遠い瞳。

「因果なものね……雲雀っ……」

「孔雀様っ……」

孔雀の言葉に、千鶴は少し目を細めた。

「ハチ、意外とカッコイイですねぇ。惚れましたよ」

「バっ……！バカなこと言ってんじゃねぇーよっっ！！！」

軽い口調で言う笑顔の輝矢に、顔面真っ赤にして照れまくる桜時。

「それよりお前、足はっ……！」

「チィィィっっっ！！！こうなったら一気にカタをつけてやるっっ！！！」

『……っ』

そう叫ぶ太鷲に、表情を厳しくして振り向く輝矢と桜時。

太鷲が大きく口を開けると、太鷲の口の中に強いエネルギーの塊のようなものが集められていく。

「何かマズい空気だなっ！とりあえず避けっ……！うっ……！」

「……？」

その場から逃れようと、振り向いて輝矢に手を貸そうとした桜時であったが、伸ばした手は輝矢の１ｍ手前で止まってしまう。

「クっ……！こっ……これは逆にピンチだっ……！」

「どの辺りが“逆”なんでしょう……」

解説しよう。桜時は女性に半径１m以内に近づかれただけでおかしくなってしまうほどの女恐怖症なのである。しかし避けるには、足の動かない輝矢に近づくどころか触れなければならない。

「何ならお姫様だっこしていただいてもけっこうですよ？」
「んなことできるかぁぁぁっっっ！！！！！」

「フハハハぁぁっっ！！！2人まとめて跡形もなくなれぇぇっっ！！！“鬼口”っっ！！！」

『……っ！』
太鷲の口から2人に向かって、巨大なエネルギーの塊・“鬼口”が放たれる。

「だあああああああっっっ！！！撃っちゃったぁぁぁっっ！！！！！」
向かってくる鬼口に、慌てふためく桜時。

「どっ……！どうしたらっ……！」
「別に避けなくていいですよ」
「へっ？」
聞こえてくる声に、桜時が目を丸くして振り返る。

「“月器……」
桜時が振り返ると、輝矢がしゃがみ込んだまま三日月を掲げていた。

「なっ……何をっ……」

「十六夜”っ」

――――パァァァァァーーンッッッ！！！！！――――

「……っ」

三日月が金色の光を放ちながら満ちてゆき、満月が少し欠けたような形の巨大な盾へと姿を変える。

桜時が驚きの表情で見つめる中、鬼口へ向けて十六夜を突き出す輝矢。

「フハハハハハっっ！！そんなもので“鬼口”がっ……！！」

「十六夜……」

――――バァァァァァァーーンッッッ！！！！――――

「何いいいいいいいいっっっ！！！！！？」

十六夜に当たり、きれいに弾き返された鬼口がまっすぐに太鷲へと飛んでいく。

「そっ……！そんなっ……！ぎゃあああああああっっっ！！！！！」

自らが放った鬼口を見事に直撃し、壁を突き破るほどに吹き飛ば

されていく太鷲。

「クっ……！おっ……！おのれぇぇぇぇぇ～～～っっ……！！」

「まだ生きてんのかよっ……」

全身から血を流し、崩れた壁に埋もれながらも立ち上がってくる太鷲を見て、桜時が少し呆れたように呟く。

「ハチ、イヌに戻ってその辺りに寝転がっといてもらえますか？」

「へっ？なっ……何かよくわかんねぇーけど、わかったっ」

――――ボォォォォォォ～～ンッッッ！！！！――――

輝矢のやろうとしていることはわからないが、輝矢にも何か秘策があるのだろうと、とりあえず輝矢に言われた通りにイヌの姿へと戻って輝矢の前辺りに寝転ぶハチ。

「さてとっ、三日月っ」

輝矢が十六夜を元の三日月へと戻して、床に突き立てる。

「クソクソクソクソぉぉぉぉぉっっっ！！！！！」

今度こそ怒り全開に、思うがままに叫び始める太鷲。

「こうなったらっ……！！」

「……っ？」

向きを変える太鷲に、輝矢が首をかしげる。

「国主だけでもぉぉぉぉぉぉぉっっっっ！！！！！」

「へっ？いっやあああああああっっっ！！！！」

「……っ！」

「なっ！？あのやろっ……！！！」

孔雀へと飛び出していく太鷲に、輝矢が身を乗り出し、寝転んでいたハチが思わず立ち上がる。

「そうはさせるかっ！！」

『えっ？』

「“ペンペンっ！！スライディーーーグっっっ！！！ジェッツット気流”ぅぅっっっ！！！」

――――ビュウウウウーーンッッ！！！――――

「何っ！？ぎゃあああああああああっっっっ！！！！」

孔雀へ向かっていこうとした太鷲であったが、横からスライディングしてきた銀ペーの頭突きが太鷲の背中に炸裂し、太鷲が勢いよく吹き飛ばされる。

「アイツっ……！」

『いやぁぁぁぁあったぁぁぁぁっっっ！！！カッコイイぃーーーっっ！！！アニキぃぃっっ！！！』

思いがけない銀ペーの活躍に、少し笑顔を見せるハチと嬉しそうに叫ぶ子分たち。

「クっ……！ペンギンの分際でっ……！！」

「今だぁぁぁっっっ！！！踏みつけ女ぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」

「……っ」

苦しげに起き上がろうとしている太鷲を見ながら叫ぶ銀ペー。銀ペーの言葉を受け、輝矢が目つきを鋭くし、床に刺した三日月を杖代わりにして立ち上がる。

「では失礼します、ハチ」

「えっ……？ぐへぇぇぇぇぇっっっ！！！！」

寝転んだハチの体の上に勢いよく輝矢の右足が乗る。

「竹取輝矢っ……参りますっ……！」

「ぬほおおおおおおうっっっ！！！！」

ハチの柔らかな体を踏み台にして、勢いよく太鷲の方へと飛び出していく輝矢。

「グっ……！！待っ……！待っ……！！」

やっとのことで立ち上がった太鷲が、飛び込んでくる輝矢へ必死に手を突き出して“タイム”を要求する。

「……っ」

しかし待つはずもなく、輝矢は鋭い表情で三日月を振り上げた。

「ううっ……！！」

太鷲の表情が恐怖に歪む。

「三日月っ……！」

――――……っっっ！！！――――

「……。」

「うぐっっ……！！！があああああああああっっっっ！！！！」

静かに着地した輝矢の後方で、縦真っ二つに切り裂かれた太鷲が激しい叫び声を響かせる。

「おっ……のれっ……竹取……輝矢っ……」

切り裂かれた太鷲の体が、徐々に灰色の砂へと化していく。

「だがっ……これで終わりと思うなよっ……！我らっ……鬼人はっ……まだまだ増えっ……！ぐふっ……」

――――パァァァァァァーーーンッッッ！！！！――――

「……。」

完全に砂となり、風に吹かれて消滅していく太鷲。

太鷲の残した意味深な言葉に、輝矢は少し目を細めた。

「鬼人復活のウワサは……本当だったのかっ……」

輝矢の元へとやって来る、背中にくっきり輝矢の足跡のついているハチ。

「それにしても太鷲が鬼人だったなんてっ……」

「何いいいいっっっ!!!?あの鬼っ!太鷲だったのかぁぁぁぁぁっっっ!!!!?」

「遅せぇーよっ」

太鷲の正体が鬼人であったことを今知り、大きく驚いている銀ペーにハチが突っ込む。

「まぁいっか。お前がいなかったら孔雀サンは死んでたっ。サンキューなっ!ペンギンっ!」

「……っ」

笑顔で礼を言うハチを見て、銀ペーがどこか申し訳なさそうな表情を見せる。

「もぉぉぉぉーーーっしわっけあんませんっっっ!!!!」

「えっ?」

いきなり土下座して頭を下げる銀ペーに、ハチが目を丸くする。

「朱実のお坊ちゃんとは露知らずっ……!!暴言吐いたり追い回したりスライディングしたりっ……!!」

「あっ、ああ」

スライディングで味わった恐怖を思い出し、少し顔を引きつるハチ。

「許してやってくだせぇぇぇっっ!!!!さっきはアニキも虫の居所が悪かっただけなんスぅぅ〜〜っ!!!」

「悪いついでにスライディングしちゃう困ったちゃんなアニキなだけなんスよぉぉぉ〜〜〜っっ!!!!」

「フォローしてんのか……？それっ……」
フォローになっていない子分ペンギンたちの言葉に、ハチが呆れた表情を見せる。
「まぁもぉーいいよ」
「へっ？」
銀ペーが深々と下げていた頭をやっと上げる。
「俺も……悪かったなっ。無神経に“飛べない鳥”とか言って……」
「いえいえいえっ！滅相もないっ！わたくしなど、たかが飛べない鳥っ！その通りなんですからっ！」
「たかがなんて言うなよ」
「えっ？」
またもや頭を下げようとした銀ペーが桜時を見上げると、ハチはどこか悲しげな表情を見せていた。
「飛べなくても、あんたは立派な鳥だっ……」
――――イヌはイヌらしく、広い庭の中を駆け回ってればいいのっ！！――――
イヌであるが故に受ける蔑み。認められない存在。何度、鳥であったらと願っただろう。
「だから……俺にはアンタだって……眩しく見える……」

「……っ」
ハチのその言葉に、一気に目を潤ませる銀ペー。
「うおおおおおおっっっ!!!ハチ様ぁぁぁっっっ!!!!」
「だっから俺はハチじゃねぇーよっっ!!」
感動のあまり泣きつく銀ペーに、感動ムードぶち壊しで怒鳴りつけるハチ。

「やれやれ……ですね」
輝矢が足の傷の止血をしながら、呆れた様子でハチと銀ペーを眺める。

「何とお礼を言っていいかぁぁっ!!恩返しさせてくださぁぁぁぁーーーいっっ!!!」
「……っ」
「ぐはあっっ!」

そんな輝矢に恩返しをしようと突っ込んできた千鶴であったが、輝矢がひらりと千鶴をかわし、千鶴は勢いそのままに壁に激突した。

「やれやれですねぇ……。……？」
「……。」

壁に激突した千鶴を見ていた輝矢が振り返ると、そこにはどこか不満げな表情を見せ、しっかりと腕組みをした孔雀が立っていた。

「まっ……まぁ約束しちゃったものはしょうがないわっ！あなたの望み通りっ……！」

「アナタを助けたのは私ではなく、イヌとペンギンです」

「えっ？」

輝矢の言葉に戸惑うように顔を上げる孔雀。

「彼らの願いを……叶えてあげて下さい」

「……。」

笑顔で言う輝矢に、孔雀が真面目な表情を見せる。

――――俺はイヌだけどっ…！もっと羽ばたきたいんだっ…！！――――

「……っ」

思い出されるハチの言葉に俯く孔雀。

「“願い”……ね……」

「……。」

呟いた孔雀を見て、笑顔で肩を落とす輝矢。

「恩返しさせてくださぁぁぁぁーーーいっっっ！！！」
「おおおうううっっっ！！！後頭部を嘴で刺すなぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！」
『アニキっっ！！！頭から血がっ……！！』
「うっぎゃあああああああああああっっっ！！！！」
「何やってんだよ、お前らっ……」

こうして、雀国で起きた戦いは終わりを告げた。

翌日……。

「えっ！？じゃあお前、退治屋だったのかっ！？」
「ええ」

驚きの声をあげた白いイヌ、ハチに、輝矢が笑顔で頷く。
２人は朱実の屋敷入口にある、ハチが咲かせたのか季節はずれの桜の木の下に座り込んでいた。

「雀国にも元々、鬼人が入り込んでいるという噂を聞いてやって来

たんですよ」
「ふぅぅぅ～～～んっ……」
――――アナタのことはついでですよ、私は私の仕事をするだけです――――
「そうゆうことかっ……」
戦闘中に輝矢が言ったあの言葉の意味を、ハチは今、やっと理解した。
「鬼人復活の噂を聞きつけ、桃タロー師匠との修行を終えて、鬼人退治の旅をしているところなんです」
「鬼人退治の……旅……」
どこか興味深く、輝矢の言葉を繰り返すハチ。
「四大国ともなれば狙われることも多いでしょう。また何かあれば呼んで……ということもありませんか……」
笑顔を浮かべ、ゆっくりと立ち上がった輝矢が、まだ座っているハチを見下ろす。
「朱実を出る許可、出たのでしょう？」
「……うん」
少し浮かない表情で頷くハチ。
太鷲との戦闘でハチに助けられた孔雀は、ハチの願いを聞き届け、ハチが朱実の屋敷を羽ばたいていくことを認めたのである。
「でもっ……せっかく許し出たってのに、何か不安でさっ……」

「不安？」
ハチの言葉に、輝矢が首をかしげる。
「何か……一度家出たら……帰ってきた時、“お前の家はここじゃない”って言われちゃいそうで……」
「ハチ……」
閉じ込められている時はその狭い世界を不満に思っていたが、外の世界へと飛び出せば、あれほどハチを嫌っている孔雀なのだから、もう繋がってはいられないような不安にかられる。
そのハチの不安を理解し、輝矢は少し目を細めた。
「結局、俺はぁ……羽ばたく翼のない、ただのイヌなんだよなぁ～」
「そんなことありませんよ」
「えっ？」
ハチが戸惑うように輝矢を見上げる。
「私には確かに見えますよ？」
「見え……？」
「アナタが背負う、その翼が……」
「……っ」
輝矢の笑顔に、ハチが思わず目を見開く。

「……あのっ……さっ……」
「桜時ぃぃぃぃ～～～～っっ♪」
「桜時ぃぃぃぃぃぃ～～～～っっ♪」
「桜時ぃぃぃぃぃぃぃぃ～～～～～～っっ♪」
「うわあっ！」

何かを切り出そうとしたハチの言葉を遮るようにハーモニーを刻みながら、輝矢の頭上へと舞い降りた3羽のスズメ。ハチが少し驚きながら輝矢の頭の上を見る。

「松兄！竹兄！梅人！」

『おぉぉぉぉぉ～～～～うぅぅぅぅ～～～じぃぃぃぃぃぃ～～～っっっ♪♪♪』

「いいからとっとと降りて下さい」
『ぎゃあああっっっ！！！』

改めてハモるスズメたちを、容赦なく払い落とす輝矢。

――――ボォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！――――

『痛たたたたたっ……』

落ちたスズメたちを白い煙が包むと、そこには孔雀の息子たちである朱実3兄弟の姿があった。皆、背中やら腰やらを痛そうに押さえている。

「まったく……人がせっかくハチを口説き落とそうとしてる時にぃ～」

「えっ！！？そうだったのかっっ！！？」
輝矢の言葉に1番驚くハチ。

「それよりも母上が家出る許可出したって本当なのかいっっ！？桜時クンっっ！！」
「えっ？あっああ」
勢いよく問いかけてきた、眼鏡がトレードマークの1番上の兄・松人（２０歳）に、勢い負けしながらも頷くハチ。

「本当なんだっ……」
ハチの頷きに、どこか衝撃を受けたように呟く、お坊ちゃんヘアの3兄弟の末っ子・梅人（１６歳）。

「そんなぁぁぁぁぁ～～～～っっっ！！！桜ちゃんが出てっちゃうなんて寂しすぎだよぉぉ～～っっ！！！」
甲高い声で泣きじゃくる、ピアスやネックレスなどの激しいチャラ男、3兄弟の真ん中・竹人（１８歳）。

「そんなの耐えられないよぉぉぉぉぉぉ～～～～っっっ！！！！」
「そうだっっ！！耐えられないっっ！！！」
「うんっ！！耐えられないっっ！！」

「みんなっ……」
寂しがる3兄弟に、ハチが少し目を細める。

『桜時が出てったら、誰をからかって楽しめばいいんだぁぁぁぁぁぁ～～～～っっっ♪♪♪』
「さっ、とっとと行こうっ」

3兄弟のハーモニーに、旅立ちの決意を固めるハチ。

「桜時様っ！！」
「……っ？千鶴」
屋敷の中から慌てた様子で姿を現したのは、千鶴であった。

「もう行かれるのですかっ！？竹取様もっ……！まだ足の傷だって癒えてらっしゃらないのにっ！」
「けっこう丈夫なんで大丈夫ですよ。あんまり長居してると旅立ちにくくなってしまいそうですし」
「俺もっ！とっとと行かないと決心鈍りそうだしなっ」
「桜時様っ……」
笑顔を見せるハチに、千鶴が不安げに目を細める。

「それで……孔雀サンは……？」
「いえ、それがっ……」
「やっぱ……見送ってはくんないか……」
『母上は意地っ張りだからねぇぇぇぇ～～～～っっっ♪♪♪』

俯いた千鶴に、寂しげな笑顔を見せるハチ。そんなハチに、3兄弟がハーモニーを奏でる。

「まぁ朱実のことは、このっ！警備隊長のっ！あっ！警備隊長の銀ペー様に任せておいてくれいっっ！！」
『いよぉっ！！アニキぃぃぃっっ！！！』
「へーへー、警備隊長に任命されて嬉しいのはわかったから」

どこからともなく現れ、誇らしく言い放つ銀ペーと、それを盛り上げる子分ペンギンたち。

太鷲との戦いの中で孔雀を救った銀ペーは、隊長であった太鷲がいなくなったということもあり、警備隊長に後任されたのである。
子分たちももちろん警備隊入りを果たした。
盛り上がるペンギン集団に少し呆れた顔を見せるハチ。

「まぁじゃっ、そろそろ行っ……。……っ！」

『……っ？』

立ち上がったハチが、ふいに驚きの表情を見せ、皆がハチの見ている方を振り向く。

『……っ』

「……。」
「孔雀サンっ……」

屋敷の入口から現れたのは、今日もゴテゴテとした派手な着物を身に纏った孔雀であった。
孔雀は真面目な表情で、ゆっくりとハチの前まで歩み寄ってくる。

「桜時クン、人化を……」
「えっ？あっ、ああ」

――――ボォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！！！――――

松人に言われ、人の姿となる桜時。いつも桜時を見ようとしていなかった孔雀が、今日はまっすぐに桜時を見つめていた。

「孔雀さっ……」

「これを……」
「えっ？」

孔雀が桜時へと差し出したのは、紫色の鮮やかな柄の、白い鞘に入った1本の刀であった。
桜時が戸惑いながらも刀を受け取り、その刀を鞘から静かに抜く。

「……っ」

磨きぬかれた半透明の何とも美しい刀身。吸い込まれてしまいそうである。そして何かただならぬ力のようなものを感じる刀であった。

「その刀の名は“村雨丸”」

「村雨……丸……」

刀を掲げながら、そっと刀の名を呼ぶ桜時。

「かつてあなたの父親が、我が妹・雲雀に送った刀……」
「父さんがっ……母さんにっ……？」

「父親を探すというのなら、少しは手がかりになるかも知れないわね」

「……っ」

そっぽを向きながら話す孔雀。その孔雀の言葉に、桜時は驚いたように目を見開いた。

「孔雀さっ……」

「それに丸腰じゃ、いくら何でも困るでしょ？ただでさえ翼もないイヌなんだからっ」

そう言って、孔雀が桜時に背を向ける。

「まぁ精々、野垂れ死なないようになさいっ」

「……っ」

桜時の方を振り返ることなく、あっさりと屋敷の中へと戻っていく孔雀。

優しい言葉ではない。いつもと同じ、蔑みの言葉。なのに何故か、温かく胸に染み込む。

「孔雀サンっ……！」

「……っ」

桜時の呼ぶ声に、屋敷に入ろうとした孔雀の足が止まる。

「俺っ……！これから色んなとこ行って、色んなことやって、色んな人に会ってくると思うけどっ……！」

村雨丸を大事に抱え、必死に叫ぶ桜時。

「全部が終わって気が済んだらっ……！この家に帰ってきていいか

なっ！？」

『いいよぉおおおおおおお～～～～っっっ♪♪♪』

「アナタ方には聞いてませんよ」

桜時の問いかけにハーモニーで答える3兄弟に、輝矢が冷たく一言。

「……。」

桜時が緊張した面持ちを見せ、その場に少しの間だけ訪れる沈黙。

「まっ……」

「……？」

「他に帰るところがないなら、しょうがないわね」

「……っ！」

そう言って屋敷の中へと消えていく孔雀。しかし桜時は零れんばかりの笑顔を見せる。

「……っ」

孔雀の入っていった朱実の屋敷へ、深々と頭を下げる桜時。

「行ってきますっ……！」

「……っ」

笑顔で顔を上げた桜時を見て、輝矢もそっと笑みを零した。

第1章　鳥の国の犬王子　☆8

「はぁぁぁぁぁ～～～～っっ…行っちゃったなぁ～桜ちゃ～～～～ん」

「桜時のヤツ……大丈夫かな……」

「どうだろうねぇ～。外の世界は危険がいっぱいだからぁ～」

輝矢とハチが去り、その姿が見えなくなった後もひたすら去っていった方角を見つめながら、別れの余韻に浸っている3兄弟。思い思いの不安を口にする。

『イヌも歩けば棒に当たるってゆ～し～♪』

「きゃあああああっっ!!!桜時様が棒に当たって怪我しちゃったらどうしましょ～っっ!?」

『過保護っ…』

旅立ちから5分。すでに気が気でない千鶴の様子に、呆れてハーモニーも忘れる3兄弟。

「まぁーー大丈夫だろっ!!」

『えっ？』

明るい声をあげたのは、銀ペーであった。

「何でだよぉ～ペンギン～」

「適当なこと言うなよぉ～飛べない鳥～」

「冗談はそのツルツルの頭だけにしとけよぉ～」

「ううっ……！この仕事やめようかなっ……」
『アニキィィィィィーーーっっっ！！！！』
3兄弟たちのトゲある言葉に傷つき涙する銀ペーに、子分たちが駆け寄る。

「どうして、大丈夫だって言えるんですか？」
「んっ？」
千鶴の問いかけに、銀ペーが顔を上げて笑顔となる。
「あぁーの踏みつけ姉ちゃんが付いてんだっ！！ちょっとやそっとじゃ死ねねぇーってことよっ！！」
『へぇっ？』

その頃、雀国・東側出口。

「では私は旅の続きをしますので、これで」
「……。」

出口へと辿り着き、後ろを歩いているハチの方を振り返る輝矢。
ハチはその小さな背に大きな刀をくくりつけ、どこか悩み込むような表情で俯いていた。

「ハチも色々と頑張って下さいねっ」
俯いたままのハチに、輝矢が笑顔を向ける。

「では私はこれでっ」
「待っ……！待ってくれっ！！」
「……？」

去ろうとした輝矢を、ハチが顔を上げて大声で引き止める。不思議そうに振り返る輝矢。

「何です？いってきますのチュ～でもしましょうか？」
「していらんっっ！！！あのっ……！そのっ……！」

輝矢のチュ～をはっきりと断った後、言葉を詰まらせるハチ。

「そのっ……俺っ！付いてっちゃダメかなっ！？」

「えっ……？」

ハチの思いがけない言葉に、目を丸くする輝矢。

「退治屋がイヌなんて連れてっても大して何の役にも立たねぇーか

も知れないけどっ……でもっ！！」
ハチが突き上げるようにまっすぐに輝矢を見る。

「少しでも何かしたいんだっっ！！俺にもできることがあるならっっ！！」

「……っ」
真剣なハチの言葉に、目を細める輝矢。
悲しげに俯いていくハチ。

「やっぱ……ダメ……かなっ……」

「誰がダメだと言いました？」
「へっ？おわわわっっ！！」
急に浮くハチの体。輝矢が軽々とハチの小さな体を持ち上げる。

「だっからっ！俺の半径１ｍ以内に近づかずに尚且つ、俺に触るんじゃないって何回もっ……！！」
「私は初めから、アナタを手放す気なんてサラサラありませんよっ」
「へっ？」

暴れるハチをしっかりと掴んで、輝矢が爽やかな笑みを浮かべる。

「私はもうとっくにアナタを私のモノにするって決めてたんですからっ」

「えぇぇぇっっっ！！！？うっそぉぉーーんっっ！！」
輝矢の笑顔に、衝撃を走らせるハチ。

「覚悟しておいて下さいねっ、ハチっ」
「かっ……！覚悟ってっ……！」
「ではまぁとりあえずっ……」

「……っっ！！」

――――――　チュっ……――――――

輝矢の唇が、ハチの鼻の頭に触れる。

「よろしくお願いしまぁ～すのチュ～ってことでっ」

「……。」
笑う輝矢と固まるハチ。

「まぁ朱実が後ろ盾になってくれたら、こちらも色々と仕事がしやすっ……って、あれっ？ハチ？」
「うっ……ううううっ……」
「ハチぃぃ～～？」

「きゅうううぅ～～～～っっっ……」

鼻キッスは女恐怖症のハチにとっては、気絶するほどの衝撃だったようである。

“世界は僕に……光を落とした……”

とある国、とある少女とイヌの出会い。

こんなところから、この“おとぎ話”は始まるのである……。

第1章　鳥の国の犬王子　☆8（後書き）

やっと第1章終りです。
旅立っていった輝矢とハチを、今後待ち受けているものとは…？

第2章　ヒツジが1匹、キツネも1匹？　★1（前書き）

2章です～

第2章　ヒツジが1匹、キツネも1匹？　★1

『ようこそっ！“冥土カフェ”へっ！わんこサマっ』
「うげっ！」
ハチを出迎える、メイド服の愛らしい多くの“子冥土”たち。

「お風呂に入れて差し上げますっ」
「私の特製・骨っ子食べてくださいなっ」
「萌え燃えジャンケンしましょ～っ」
「だあああーっ！いらんいらんっ！全部パスだっ！パスっ！」
『ええぇ～っ』
様々な誘惑とともに近づいてくる子冥土たちを必死に拒絶するハチ。ハチに拒絶され、子冥土たちは悲しげな表情を見せた。

「とにかくっ！こんな店、とっとと出ようっ！うんっ！」
「そうは行きませんよ」
「へっ？」

“冥土カフェ”を出ようとしたハチの前に立ち塞がる一つの影。

「うっ……！おっ……！お前はっ……！！」

「フフっ」
それはメイド服を身に纏い、いつものように爽やかでどこか腹黒い笑みを浮かべている輝矢であった。

「……っ」
「ひいっ！」
輝矢が笑顔のまま、ハチの体を抱き上げる。

「バっ……！離っ……！俺の半径一メートル以内に近づくんじゃっ……！」

「逃がしませんよっ、ハチっ」

「……っ！」

「うっぎゃあああっ！！」

顔全体で恐怖を表し、近くの木の鳥たちも飛び立っていくほどの大声で飛び起きたのは、ごく普通の白いイヌ、ハチであった。

「はぁっ……はぁっ……夢かっ……」

目の前に広がる穏やかな山の景色。“冥土カフェ”ではないらしきその場所に、ハチは安心したように肩を落とす。

「ふわぁ～っ……良かっ……」

「んっ……んん～～っ……後五分っ……」

「たっ……？」

妙に近くから聞こえてくる声に、ハチが戸惑うように首をかしげる。

「……。」
恐る恐る自分のすぐ横を振り向くハチ。
「……っ！！」
「んん～っ……」
そこにはハチの体にピッタリくっつき、ハチの尻尾を握り締めながら気持ち良さそうに寝息を立てている輝矢。ハチの表情が凍りつく。
「あっぎゃああっ！！」
「んっ……？もう五分経っちゃいましたかぁ～……？」
ハチの悲鳴で、輝矢はゆったりと目を覚ました。

一時間後。
「だっから何度言ったらわっかんだよっ！俺の半径一メートル以内に近づくなっつってんだろーがぁっ！！」
「いえねぇ、ハチの尻尾の触り心地があまりに良かったものでついっ……」
「ついじゃねぇーよぉっ！ついじゃあっ！！」
強気に輝矢を責めつつも、その距離はきっちり一メートル以上開き、輝矢に近寄るなと言わんばかりに前足を突き出しているハチ。

何となく情けない姿である。

「以後、気を付けます。毎朝毎朝、一時間気絶されても困りますし」
「うっせぇっ！一時間で起きただけマシな方なんだよっ！！」

刺々しく言う輝矢に怒鳴り返すハチ。隣で寝ている輝矢を見つけ絶叫した後、一時間ほどハチは気を失っていたのである。

「はぁっ……やっぱ無謀だったかなぁ……女と旅なんてっ……」

鬼人退治屋を務める、かの“桃タロー”の弟子・竹取輝矢と出会い、朱実の家を出て雀国を旅立ってからまだたったの一日。すでに後悔の連続のハチ。

「とにかく行きましょうか。一時間のロスを取り戻さないと」
「いちいち嫌味なヤツだなぁ～」

支度を整え、素早く歩き出していく輝矢を、ハチが不満げな顔を見せながらも追う。雀は山に囲まれた国なので、他のどの国へ行くにも山を越える必要があり、昨日からもう随分と山道が続いていた。山での野宿はそういいものではないが、初めて外の世界に出たハチとしては何もかも新鮮であった。

「んでっ？次はどこの国に行くんだっ？」
「さぁ～」
「へっ？」

首をかしげる輝矢に、ハチが眉をひそめる。

「決めてないのかぁっ！？」
「ええっ」

ハチの大声の問いかけに、あっさりと頷く輝矢。

「旅は風の吹くまま、足の向くままですよぉ～」

「おっ前、退治屋だろっ！？フツーは依頼が来たぁとか、鬼人の目撃情報があったぁとかで動くもんじゃっ」

「私、“さすらい”って言葉、好きなんです」

「だから……？」

輝矢の言葉に、呆れた表情を見せるハチ。

「はぁっ……何だよ、適当かぁ～」

「ハチはどこか行ってみたい国はあるのですか？」

「えっ……？」

輝矢の急な問いかけに、ハチが少し驚いたように顔を上げる。

「例えばぁ～……お父様の居場所の心当たりとか……」

「……。」

ハチが輝矢の言葉に少し俯く。ハチが雀国を出たもう一つの理由、父親探し。輝矢はしっかりと気にかけていてくれたのだ。

「心当たりとか……ねぇーから……」

「えっ？」

輝矢が表情を曇らせる。

「父さんっ……母さんと引き裂かれるようにして朱実の一族に、無理やり雀国から追い出されてさっ……」

「……っ」

辛そうに語るハチに、目を細める輝矢。

「母さんも俺が小っせぇ頃に死んじゃったから、父さんの話とかも

全然聞いたことなくって……」
ハチが歩く足を止める。
「だからホントはっ…生きてんのかどうかだってっ……」
「生きておられますよ」
「……っ」
ハチが見上げると、そこには輝矢の穏やかな笑顔があった。
「まずは信じないとっ」
「……そうだな……」
輝矢の言葉に、ハチも笑顔を見せた。
「さぁーて、じゃあまぁとりあえず、あちらの方へ行ってみましょうかっ」
「鬼人の気配でも感じんのかっ！？」
「いえっ、勘ですっ」
「……。」
雀国を旅立ってまだ一日。やはり後悔の連続のハチなのであった。

その日、夕刻。
「いっやぁ～適当に歩いてて着くもんですねぇ～街っ」
「まぐれだろっ……」
輝矢の勘で歩き続けた輝矢とハチは、山岳地帯の途中にある、と

ある街へと奇跡的に辿り着いていた。得意げな笑顔を見せる輝矢に、冷静に一言入れるハチ。

「それにしてもっ……」

輝矢が街を見渡す。

「よぉ～ってらっしゃいっ！メェってらっしゃいっ！ウール百パーセントっ！着心地最高のガウンだよぉっ！」

「ラム肉たっぷりラム肉まんっ！！メェ～っちゃ安いよぉ～っ！」

「迷える子羊よ……我が教会に立ち寄るがメェ～案でしょう……」

ウール百パーセントのガウンを売るヒツジ、ラム肉まんを売るヒツジ、教会への呼び込みを行っているヒツジ。その街は道を行く人、来る人、皆、ヒツジであった。

「ヒツジが一匹、ヒツジが二匹っ……くぅ～っ」

「寝るなぁっ！！」

行き交うヒツジを眺め、寝入ってしまう輝矢に、ハチが全力で突っ込みを入れる。

「いやぁ見渡す限りのヒツジですねぇ～」

「ここは“羊（ヨウ）の国”だな。雀の東にある小さな国だって聞いたことある」

「へぇ～」

「へぇーってお前なっ……」

初めて雀の国から出たハチよりも外のことに疎い輝矢に、ハチが呆れた表情を見せる。

「羊の国の方々は、大々的に旅人を歓迎する習慣でもあるのですかぁ？」
「はぁっ？そんなん聞いたことねぇーけどっ……なんでっ？」
「あれっ」
「……？」

輝矢が指差すままに、街の奥を見つめるハチ。

『どゅおおおっ！！』

「んなぁーっ！？」

街の奥から入口に立っている輝矢とハチの元へと駆け込んでくるのは、鉄製の面を付けた、明らかに武装しているヒツジの軍団。物凄い勢いでこちらへと迫ってきている。悲鳴にも似た声を出すハチ。

「怪しいヤツらっ……！！捕まえろぉ！！」
『おおぉーっ！！』

士気を高めて、さらに迫り来るヒツジ軍団。

「なっ……！何か明らかに敵意剥き出しだぞぉっ！？」
「あははぁ～面白いですねぇ～」
「全っ然面白かねぇっ！！」

暢気な輝矢に、少し泣きそうな表情で突っ込むハチ。

『どゅおおおっ！！』

「あっぎゃああっ！！」

――ガッシャーーンッ！

目の前で強く締まる牢の戸に、茫然とした表情を見せるハチ。

「何故っ…何故なんだぁっ！？」

苦悩するように叫びあげる、牢屋の中のハチ。

「……。」

「ハチが入ると、牢屋というよりペットショップですねっ」

「じゃかましいっ！！」

牢屋の中でも笑顔を絶やさない輝矢に、ハチが強く怒鳴りつける。

怒涛のヒツジ軍団に、あっけなく捕まった輝矢とハチは、詳しい事情も呑み込めないまま牢屋に入れられてしまったのである。

「この状況でお前はなんでそう落ち着いてられんだよっ！？」

「だってこんな牢屋、私の力なら一瞬ですもんっ」

「……。」

鬼人のような化け物を粉砕する女が、このような牢屋にうろたえるはずもない。黙り込んでそう考え付いたハチは、落ち着いてその

場に座り込む。

「まっ、俺も至って冷静だがな」
「すっごいウソくさいですねっ」
冷静を装うハチに、輝矢が穏やかな笑顔を向けた。

「はぁっ……何だってこんなことにっ……」
「ハチがいかにも羊肉好きそうな顔してるからですよ」
「ヒツジ聞きの悪いこと言うなっ！」
「こちらですっ！メリー様っ！！」
『……？』
牢の外側から聞こえてくる声に、何やかんやと騒いでいた輝矢とハチが振り向く。

「ご苦労様。あなた達は下がってなさい」
『はっ！』

輝矢たちを捕らえた武装ヒツジたちに偉そうに命令をしながら、牢の前へと現れたのは、輝矢と同じような年頃のまだ幼い少女であった。柔らかそうな白い巻き髪に大きな紫色の瞳の美しい、暖かそうなモコモコのドレスを身に纏った少女である。少女の横には執事らしきメガネの老人が立っていた。

「あなた達ね？街の入口をうろついてたってゆー怪しい連中は」
「怪しいだなんてそんなっ……！」
「アナタの着グルミのようなドレスの方がよっぽど怪しいですよ、小娘」
「んなっ……！？」
「なぁーに言ってんだよっ！お前はっ！」
輝矢が笑顔満面で言った一言に、表情を引きつりまくる少女。そ

んな輝矢をハチが思い切り睨みつける。

「ハチもそう思ったでしょう？」

「えっ？いやぁ～まぁ～そりゃあちょっとはぁっ……」

「メェェ～っ！！」

「うおっ」

「……っ」

少女の急な雄たけびに、少し怯えるように後退するハチと輝矢。

「さぁ～っきから聞いていれば好き勝手言いまくりまくってっ……」

怒りを煮えたぎらせるように籠もった声で言う少女。

「私をどこの誰だと思っているのぉっ！？私はねぇっ……！」

「羊の国・国主、日辻芽里様にございます」

「何でアンタが私より先に言うのよぉーっ！！」

「ぐほおおうっ！！」

芽里より先に芽里の正体を明かしてしまった執事の老人に、芽里の強烈な突っ込みエルボーが炸裂する。

「ったく、もうっ！」

「ちなみにわたくしが芽里様の側役、メェ蔵でございます」

「はぁ……」

芽里のエルボーを喰らった腹部を押さえながらも自己紹介をするメェ蔵に、呆れた表情を見せながら頷くハチ。

「とぉーにぃーかぁーくっ！とっとと正体を見せなさいっ！鬼人っ！」

『はぁっ？』

強く輝矢たちを指差して言い放つ芽里に、大きく口を開けて首をかしげる輝矢とハチ。

「鬼人だぁ～っ！？バッカ言うなよっ！俺たちが鬼人のはずっ……！」
「惚けないでぇっ！もうお見通しなのよ！いっくら誤魔化したって無駄なんだからっ！」
「はぁ～っ！？」
完全に輝矢とハチのことを鬼人だと思っている芽里に、ハチが表情をしかめまくる。

「イヌなんて可愛らしいもんに化けてくるなんて考えたんでしょうけどっ！騙されないわよっっ！！」
「あんなぁっ！俺たちはっ……！」
「どう言っても疑いは晴れませんよ、ハチ」
「ええっ！？」
何とかしようと必死に訴えるハチを止めたのは、相変わらず平静な顔をした輝矢であった。

「けどよぉっ！このままじゃっ……！」
「人化して下さい」
「へぇっ？」
輝矢の言葉に、ハチが大きく首をかしげる。
「何でっ……」
「いいから早く」
「はいっ」
輝矢の有無を言わせぬ眼力に、大人しく頷くハチ。

――ボォォォ～～ンッ！

『……っ』
ハチが輝矢の言われた通りに人化し、鮮やかな桃色髪の青年・桜

時の姿となる。その姿を見て、驚いた表情を見せる芽里とメェ蔵。

「でぇ、牢を桜に」
「へっ？」
「いいから早く」
「はいっ」
輝矢に言われるがままに、桜時が両手を牢の鉄格子に当てる。

「……“瞬花”っ」

――パァァァーーンッ！

「……っ！」
桜時の両手から桃色の光が発せられた瞬間、鉄格子が桜の花びらへと代わり、美しく散っていく。その光景に芽里が目を大きく見開く。

「え～こちらっ、雀国国主・朱実孔雀様の甥方にあられますっ」
「おっおいっ！」
「えっ！？」
「朱実っ！？」
勝手に正体を明かす輝矢に桜時は驚くが、もっと驚いたのは芽里とメェ蔵の方であった。

「朱実の“花力”っ……間違いないわっ……」
床に散った桜の花びらを見つめ、呟く芽里。

「もうっしわけありませんでしたぁっ！」
「うおっ」
激しく叫んで、その場に土下座する芽里。

「朱実の方とも知らず何てことをっ……！！」
「本当にもぉ～メリー様には困ったものでぇ～」
「アンっタも謝んなさいっ！！」
「ぎゃあっ！！」
「……。」
他人事のように話していたメェ蔵の頭を、芽里が無理やり床にこすり付ける。悲鳴をあげるメェ蔵を、呆れた表情で見下ろす桜時。

「ふぅ～っ、無事、疑い晴れましたねぇ」
ゆっくりと立ち上がり、牢から出る輝矢。

「ハチはやっぱり使えますねっ」
「やっぱり一緒に旅するのやめようかな……」
輝矢の屈託のない笑顔に、桜時がこっそり呟いた。

第2章　ヒツジが1匹、キツネも1匹？　★2

桜時のお陰で疑いの晴れた輝矢たちは、無事に牢から出してもらい、牢屋のあった武装ヒツジたちの宿舎から芽里の屋敷へと移動した。豪勢な客間に通され、紅茶を出される輝矢たち。

「じゃあ……他の国も鬼人にっ……？」

眉をひそめて問いかけるのは桜時。

「そう、近隣諸国がいくつか鬼人の手に落ちてるわっ」

「いずれも人または獣人に化けた鬼人が潜り込み、内部から制圧したという話を聞きましたので……」

「街に侵入してくる怪しいヤツを片っ端から捕まえてたってわけっ」

「なるほどっ」

芽里とメェ蔵の説明に、やっと自分たちが捕まった理由を理解し、頷く輝矢。

「……。」

その横で俯く桜時。

――じっくり行くつもりだったがっ……こうも早く機会が巡ってくるとはなぁっ……！――

「確かにっ……雀にも鬼人が潜り込んでた……」

鬼人であったのは朱実の警備隊の隊長である太鷲。確かに孔雀の独断で隊長となり、そのやり方に反対する者もいたが、怪しい素振りはまったくなく、鬼人だなんて夢にも思わなかった。

「そうなの？」

「ああ、それも相当、狡猾に、誰一人疑ってなんかなく当たり前の

ようにな」
「そうっ……」
桜時の言葉に、どこか不安げに俯く芽里。
「潜り込んでるはずがないって思っているから、疑わないんですよ」
『……？』
輝矢の言葉に、桜時と芽里が顔を上げる。
「案外、もうこの屋敷の中に潜り込んでるんじゃないですかぁ～？」
「メェェっ！？」
適当に言った輝矢の言葉に、叫び声をあげて立ち上がる芽里。
「どぉーしよっ！？どうしよっ！？どぉしよぉっ！？」
「メリー様、落ち着いて下さい」
「これが落ち着いてられるかぁぁっ！！」
「ぐはあああああっ！！」
異常に取り乱す芽里に、宥めようとしたメェ蔵が殴られる。
「おっ前っ！何、焦らせるようなこと言ってっ……！」
「そうだわっ！！」
「えっ？」
輝矢に注意しようとした桜時が、何かを思いついたような芽里の明るい声に振り向く。
「桜時様に見つけて退治してもらっちゃえばいいのよぉっ！！何せ、あの朱実一族なんだからっ！」
「はっ……はぁっ！？」
笑顔で提案する芽里に、思い切り顔を歪める桜時。
「あのなぁっ！俺はっ……！」
「このまま羊の国が鬼人に滅ぼされちゃってもいいってゆうのっ！？」

「うっ……！そっ……それはっ……」
芽里の潤んだ瞳に、桜時が言葉を詰まらせる。
「もちろん～っ、ただでぇとは言わないからぁっ」
「へっ？」
そう言って顔を赤らめる芽里に、何となく嫌な予感を走らせる桜時。
「鬼人をやっつけてくれた暁にはぁ、こっの芽里が桜時様のお嫁にっ……！」
――バァァァーンッ！
「えっ……？」
急に砕き割れる、カップの置かれていた目の前のテーブルを見て、言葉を止めて目を丸くする芽里。
「仕方ありませんねぇ～っ」
テーブルを砕き割った、とある右足。
「今回は特っ別にっ、無報酬で退治して差し上げましょぉ～っ」
「どっ……どうもっ……」
テーブルを砕き割った右足の持ち主である輝矢の、何とも重圧のかかってくる笑顔に、芽里が大人しく頷いた。
「もう完全完治してんなっ……右足の傷っ……」
無残なテーブル後を見て、しみじみと呟く桜時であった。

第2章　ヒツジが1匹、キツネも1匹？　★3

こうして輝矢と桜時は、羊の国を狙う鬼人の退治を引き受けたのであるが。

『……。』

呆然と立ち尽くす、輝矢とイヌの姿へと戻ったハチ。

「どうもぉ～っ、メリー様より屋敷の案内役を申し付かりましたっ、羊スイでっすっ」

『……。』

芽里に屋敷と屋敷に住む人物を一通り見ておくよう言われて客間を出た輝矢とハチの前に現れたのは、右頬を派手に腫らした、腫れさえなければ愛らしい顔立ちの、白い巻き毛に軽い口調の少年であった。

「どうしたんだ……？その頬……」

「あっ、これっスかぁ～？いっやぁ～案内役なんてメェ～んどいって言ったら、メリー様にバシコォンとっ！」

「笑顔で言うなよ……」

どこか楽しげに話す羊スイに、呆れた表情で突っ込むハチ。

「苦労しますねぇ」

「気持ちが痛いほどわかる」

「何か？」

「いえっ、何でもございませんです」

輝矢の冷たい笑顔に、すぐさま目を逸らすハチ。

「じゃっ！まず押入れから案内するっスねぇ～っ」

「いやいやっ！もっと人のいそうなトコから案内しろよっ！」

羊スイのリードにハチがいきなり突っ込みを入れる。

「俺ら、鬼人が化けてそうな怪しいヤツを目星付けに行くんだからさぁ～」

「あっ、そうなんスかぁ？」

「あでっ」

まったく趣旨を理解していない羊スイに、ハチが前足のバランスを崩し、思わず転びかける。

「アイツで大丈夫なのか……？」

「まぁメリーさんが何故、彼を案内役に任命したのかはわかりましたけどね」

「鬼人が化けてるにしちゃあ、間抜けすぎるもんなぁ～」

「じゃあまず厨房とかから行っとくっスかぁ～」

輝矢とハチの会話はもちろん羊スイには聞こえず、羊スイは軽いノリで屋敷の案内を始めた。

「この時間なら晩飯の準備中なんで、試食にありつけるっスよぉ～」

「それ狙いかよ……」

羊スイから特に役に立たない情報ばかりを聞きながら、屋敷の広い廊下を歩いていく輝矢とハチ。

「羊スイさんは、この屋敷に勤めて長いんですか？」

「そうっスねぇ～当社比でもう三年くらいになるっスかねぇ～」

「へぇ～」

「どこだよ、当社って」

羊スイの言葉に感心したような声を出す輝矢と、突っ込みを入れるハチ。

「あっ、ここが厨房っスぅ～っ」
『……っ？』
そうこう言っているうちに辿り着く厨房。羊スイが扉を開くと、輝矢とハチが同時に扉の向こうを見た。

「おいおいおいっ！！そっこの料理冷めちまってんじゃねぇーかぁっ！何やってんだよっ！」
「うおっ」
扉を開けた途端に聞こえてくる怒鳴り声に、ハチが思わず耳を塞む。

「こらっ！てめぇっ！とっととこの肉焼きやがれっ！！」
「うわわわっ！はいっ！すんませんっっ！！」
厨房を仕切っているのは、短い金髪のツリ目のキツい、まだ二十代前半くらいの若い男。怒鳴りあげたり、他の料理人の背中を蹴り飛ばして急かしたりと、かなり乱暴な振る舞いが目立っている。

「焦がしすぎだぁっ！人を癌で殺す気かぁっ！？ボケぇっ！！」
「ひぃっ！」
そのツリ目男に怒鳴りまくられ、他の料理人は泣きそうになっている。

「あの方は？」
「料理長の孤上（こがみ）ゴンさんっス」
「ゴンザレス？」
羊スイの返答を、見事に聞き間違える輝矢。

「何よっ！アイツっ！新入りのくせにっ」
「いきなりやって来て料理長だもんなぁ～」
「そりゃ前の料理長がたまたま体調崩したからだろっ？」
「アイツが毒もったって噂もあんぜっ？」
「“羊人”っつってるわりに全然ヒツジになんねぇーしっ、とにかく怪しいヤツだよっ」

「……。」
厨房から聞こえてくる他の料理人たちの声に、輝矢が少し表情を曇らせた。
「随分、評判悪いみたいだな」
ハチも輝矢同様、その表情を曇らせて呟く。

「おいっ、羊スイ、あのツリ目男ってっ……」
「ゴンさぁ～んっ！今日も試食に来たっスよぉ～っ！」
「おいっ！」
仕事そっちのけで試食をしに厨房の中へと入っていく羊スイに、ハチが全力で怒鳴りつける。

「ああっ！？羊スイっ！てめぇー性懲りもなくっ……！」
「今日は“子羊のムニエル”かぁ～いっただきっ……！」
「厨房はつまみ食いするとこじゃねぇっ！！」
「ぎゃあああっ！！」
「おっとぉ～」
「うおっ」
皿の上のおかずをつまみ食いしようとした羊スイが、ゴンに激しく蹴り飛ばされ、扉付近にいた輝矢とハチの間をすり抜けるように吹き飛んでいき、廊下の壁へと激突する。

「ああっ？」
蹴り上げた足を下ろしたゴンが、扉付近にいる輝矢とハチに気づく。
「何だぁ？お前らっ」
「うっ……」
ただ見ているだけかも知れないが、ゴンの目つきが相当悪いので睨み付けられているように感じてならない。その睨みに、ハチは思わず表情を引きつった。

「その人たちはメリー様が雇った退治屋の方たちっスよぉ～」
壁にぶつけた背中を押さえながら、羊スイが説明する。
「ああっ？退治屋ぁ～？」
『……っ』
怪訝そうな目で輝矢とハチを見回すゴン。
「退治屋じゃあ厨房に用はねぇーだろっ！とっとと出たっ！出たっ！」
「あっ……！おいっ……！」

――バタンッ！

「うおっ」
ゴンは輝矢とハチを無理やり厨房の外に押し出すと、強く厨房の扉を閉めた。閉まる大きな音に、またもやハチが耳を畳む。

「んだよぉ～っ！あれっ」
あんまりなゴンの態度に、不満げな顔を見せるハチ。

「彼について詳しくお聞かせ願いますか？」
「えっ？ああ～」

羊スイが背中を押さえながら、ゆっくりと立ち上がる。
「料理長のゴンさん。屋敷に来たのは二週間くらい前っスね」
「前の料理長が体調崩したというのは？」
「ゴンさんが来て二日後のことっス。でぇ、前の料理長直々のご指名でゴンさんが料理長にっ」
「んん～絵に描いたように怪しいな」
羊スイの説明を受け、疑うように言うハチ。

「でもゴンさんの料理の腕は確かっスよぉ～？前料理長がご指名したのも頷けるっス」
羊スイが笑顔で二人に話す。
「確かに乱暴だし、ヒツジにしちゃあツリ目だけどぉ、俺は別にぃ～怪しいだなんてっ」
「そりゃお前だからだ」
暢気な笑顔を見せる羊スイに突っ込むハチ。

「アイツで決まりだな、うんっ」
「ええ～？そうっスかぁ～？」
「……。」
ハチと羊スイの会話を聞きながら、輝矢は少し気難しそうに目を細め、閉まった厨房の扉を見つめていた。

「えっ！？料理長のゴンがっ！？」
驚きの表情を見せたのは芽里であった。
「ああ。俺が見たトコ、アイツが鬼人じゃねぇーかって思う」
「そうっ…」
一通り屋敷の案内を受けた後、ダイニングでそのゴンの作った夕食を口にしながら、ハチは調査の結果を芽里に報告していた。

「やっぱりねっ。実は私もっ……！」
「わたくしも彼が怪しいのではと思っておりましたっ」
「何で私より先に言うのよっ！！」
「ぐほおおうっ！！」
またしても芽里より先に言ってしまったメェ蔵が、芽里のエルボーを腹部に喰らう。

「……まっまぁ、とにかく今晩、俺たちがアイツ見張ってみるから、あんたは部屋から出んなよっ」
「わかった……部屋で桜時様の夢でも見てるっ！」
「うげっ」
目を輝かせて言う芽里に、ハチが寒気を覚える。

――ヒュンッ！

「ひいっ！！」
そんな芽里のすぐ横をかすめ、壁へと突き刺さるナイフ。芽里の目の輝きが一瞬にして奪われる。

「永遠に夢から醒めないようにして差し上げましょうか……？」
「けっ……結構ですっ……」
輝矢の冷たい笑顔の問いかけに、芽里は表情を引きつりながら呟いた。

第2章　ヒツジが1匹、キツネも1匹？　★4

そして、その日・夜更け。

「んん〜〜っ……」

羊スイに教えてもらった、怪しげな料理長・ゴンの自室の前を、壁に隠れながら見張っているハチ。時計も十二時を回り、重くなってくる瞼を何とか持ち上げながら、目を光らせている。

「んっ？」

――キィっ……

「……。」

「あれはっ……」

扉を音を立てないように静かに開けて、部屋の中から現れたのはゴンである。厨房の時の白いコック姿とは違い、全身黒い服を身に纏っているところがいかにも怪しい。ゴンは辺りに人がいないかを用心深く確認してから、ゆっくりと部屋を出る。

「おっ……おいっ、ついにアイツ、動き出したぞっ……って……」

ハチの振り向いた先にいるのは、ただの木。

「いねぇっ！あっ、あわわわわっ」

一緒に見張っていたはずの輝矢の姿がなくなっており、思わず叫ぶハチであったが、ゴンに悟られてしまうので慌てて口を塞いだ。

「……っ」
ゴンはどうやらハチの声には気づかなかった様子で、辺りを警戒しながらどこかへと歩き出していく。

「仕方ねぇっ……こうなったら俺だけでっ……」
輝矢を探していて見失っては元も子もないと、ハチが静かにゴンの後をつけ始める。
「ったく、こんな肝心な時にどこいったんだよっ、アイツぅ～っ」
輝矢への文句を呟きながら、悟られないように適度に距離を離してゴンを追っていくハチ。ゴンは人気のいない廊下を進み、裏口から庭へと出る。
「外っ……？国主が狙いじゃねぇーのかっ……？」
眉をひそめながら、ハチも続いて庭へと出る。

「あっ、ゴンさんっ！こっちこっちっ！」
「バッカヤローっ！でっかい声出すんじゃねぇーよっ！気づかれんだろーがぁっ！」
「いえっ……ゴンさんのんが十分でかいっス……」

「……っ？」
ハチが裏口へと続く扉の陰に隠れながら、庭に出たゴンの様子を覗う。庭の木の陰に隠れていたらしき人物が姿を現し、どこか親しげにゴンに声をかけた。

「仲間……？なっ……！？」
その姿を見せた人物に、思わず目を見開くハチ。
「羊スイっ……！？」
そう、それはハチたちを案内してくれた、あの羊スイであった。

しかし夕方に顔を合わせた時のゴンと羊スイの雰囲気とはどこか違う。

「どうっス？そっちの様子はっ」
「ああ、ついにシッポを見せやがったっ」
「へっ？」
問いかけた羊スイに得意げに話すゴン。

「お前らグルだったんだなっ！」
「まんまとおびき出されやがったなっ！」
同時に言いながら、扉の陰から飛び出していくハチと振り返るゴン。

『観念しろっ！！鬼人めっ！！』

――……。

『って……ええっ！？』
同じタイミングで同じ台詞を言い放ち、これまた同じタイミングで驚くハチとゴン。

「ハチ……くん……？」
出てきたハチを見て、羊スイが首をかしげる。

「バッカ言ってんなよっ！てめぇーが鬼人だろーがぁっ！」
「ふざけんなっ！お前こそ鬼人だろっ！」
「鬼人でなけりゃあ、何でイヌがヒツジの国にいんだよっ！？」
「お前こそ、ヒツジだってんなら何でそんなにツリ目なんだよっ！？」

「ああっ！？」
段々、くだらない言い争いになってくるハチとゴンの会話。
「あっのぉ～っ……」
『ああっ！？』
「ひえぃっ！」
遠慮がちに話しかける羊スイであったが、ハチとゴンに一遍に睨まれて、背筋を震え上がらせる。
「すみません、俺、帰るっス」
「帰んなっ！言いたいことがあんならとっとと言えっ！！羊スケっ！」
「はっはいっス！」
「羊スケ？」
ゴンに強く言われた羊スイが、帰るのを思い留まる。ゴンが呼んだ羊スイの名に首をかしげるハチ。
「ハチくんは鬼人じゃないと思うっスよぉ？」
「何でだよっ？」
「だってぇハチくん、雀の朱実一族だしぃ～」
「朱実っ！？」
羊スイの言葉に、この上なく驚くゴン。
「マジかっ！？」
「マジだよっ」
ゴンの問いかけに、ハチがどこか不機嫌面で答える。
「おいっ！羊スケっ！何っで、んな大事なこと、とっとと言わねぇーんだよっ！？」
「あれっ？言ってなかったっスかぁ～？すんませぇ～ん、あははぁ

〜っ」
「……っ」
羊スイの謝っているかどうかもよくわからない軽い笑いに、顔の血管を浮き出させるゴン。
――バッコォォォーンッ！
「ううっ……」
「……。」
怒ったゴンに思い切り殴られ倒れこんだ羊スイを見て、少し呆然とするハチ。
「んでぇっ!?他に言いたいことはっ!?」
「はっ……はいっ……実はっ……羊の国の近隣の聞き込みを行っていた第二捜査班から報告が入ってっ……」
「聞き込み?捜査班?」
羊スイの言葉に、どんどん首を傾けていくハチ。
「何だっ!?」
「実はっ……この国の近くの村である男が発見されまして……」
『……っ?』

同刻。屋敷内、芽里の自室。

――キィッ……

静かに開く扉。扉の外には、門番らしき武装ヒツジが何頭か、気を失って倒れこんでいた。

「……。」

ゆっくりと部屋へと入ってきたその者が、まっすぐに部屋の奥にある寝台へと向かっていく。寝台のすぐ横へと立つその者。寝台は恐らく芽里が眠っているのであろう、掛け布団が大きく膨らんでいる。

「……っ」

高々と右手を上げるその者。

「死ねっ……！！」

その者が、寝台へと手を振り下ろす。

「あっれぇ～？」

「……っ！！」

背後から聞こえてくる声に、その者の手が止まる。

「こぉ～んな時間に、国主様のお部屋に何の御用ですかぁ～？」

「……っ」

その者が振り返った先にいたのは、芽里の部屋のソファーにゆったりと腰を掛け、笑顔を浮かべている輝矢。

「ねぇっ……？」

輝矢が鋭くその者を見つめる。

「メェ蔵サンっ……」

「……っ」

輝矢の見つめた先に立っていたのは、メェ蔵であった。

「メェ蔵っ！？メェ蔵だとっ！？」

羊スイの報告を聞き、驚いた表情を見せるのはゴン。

「そうっス。病気にかかって、一ヶ月ほど前から故郷であるその村で療養してたそうっス」

驚いているゴンを前に、報告を続ける羊スイ。

「第二班が聞いたところによると、ちゃんと休暇届は出してきたとっ……」

「一ヶ月だとっ？俺が潜入した二週間前には、アイツはちゃんといたぞっ……！」

「どっ……どういうことだよっ！？じゃあもしかしてメェ蔵さんがっ……！……っ！」

ゴンと羊スイの話に混乱していたハチであったが、何やら嫌な予感が頭の中を駆け、思わず言葉を止める。

「まさかアイツっ……」

ハチの頭を過ぎる、輝矢の顔。

「……っ！」

「あっ……！おいっ！ワン公っっ！！」

ゴンの制止も聞かず、ハチはその場を走り出していった。

「なっ……何をしているかですって？」
妙に焦ったような表情を見せながら、鋭い輝矢の視線から目を逸らし、笑顔を浮かべるメェ蔵。

「わっ……わたくしは、肩凝りがひどくて眠れないと言うメリー様のために、肩揉みをしに来ただけでっ……！」
「へぇ～門番を倒してわざわざっ？」
「……っ」
輝矢の問いかけに、表情を引きつるメェ蔵。

「そっ……それはっ……！」
「ああ、それとっ、国主様なら隣のお部屋でぐっすりお眠りになられてますよぉ～？」
「何じゃとっ！？……っ！」
輝矢の言葉に、メェ蔵が寝台の掛け布団を払い取る。

「んなっ……！？」
そこに寝ていたのは、芽里ではなく巨大なヒツジのぬいぐるみ。

「図ったかっ……」
「さぁ、懺悔の時間ですよ」
輝矢がメェ蔵に笑みを向ける。

「子羊さんっ……」
「……っ」
今まで見せてきていた穏やかな表情を消し、ゆっくりと輝矢の方を振り返るメェ蔵。
「そうだな……消え逝く貴様の命に祈りでも捧げようかっ……！！」
「……っ」

――バァァァーンッ！

黒いスーツが引き千切られ、白い肌が赤色の皮膚へと変わり、メェ蔵が天井を突き破るほどに巨大化していく。金色に輝く一本の角を持った、赤色の鬼が姿を見せる。

「赤鬼……」
「まずは貴様から血祭りにしてやろうっ！」
「やれやれ……」
輝矢が面倒臭そうに呟きながら、ゆっくりと右耳のピアスに手をかける。
「“月器（げっき）・三日月”っ」

――パァァァーンッ！

輝矢が右耳のピアスを弾き、巨大化した三日月を剣のように構える。

「うおおおおっ！！」
「竹取輝矢っ……鬼退治いたしますっ……！」
迫り来るメェ蔵に、輝矢が三日月を構えて飛び出していく。

第2章　ヒツジが1匹、キツネも1匹？　★5

「“鬼爪・天回”っ！！」
「……っ三日月っ！！」
メェ蔵が飛ばした十本の鬼爪を、輝矢が三日月を振るって十本すべて叩き落す。

「まだまだぁっ！！」
「……っ」
叩き落した鬼爪がメェ蔵の操作で、輝矢へと再び向かってくる。

「もう二度と足に穴をあける気はありませんよっ」
飛び出してくる鬼爪をすべて素早く避ける輝矢。前回の緑鬼・太鷲との戦いが、輝矢の中で教訓となっていた。

「何度避けても無駄だっ！鬼爪は延々、貴様を追っていくっ！」
「……っ」
「何っ？」
そのメェ蔵の言葉を聞き、少し考えるような表情を見せた輝矢が、急に避けることをやめ、メェ蔵へ向かって走り出していく。
「チっ……！ギリギリで避けて俺に当てる気かっ……！」
「……っ？」
輝矢の作戦を読んだメェ蔵が、輝矢を追ってきていた鬼爪を自分の手元へ素早く戻す。

「行くぞっ！！」
戻った鬼爪を輝矢へと振り下ろすメェ蔵。

「うおおおおっ！！」

「……っ！」

――……っ！！

激しくぶつかり合う、輝矢の三日月とメェ蔵の鬼爪。

「フハハハハっ！！かかったなっ！！」

「……っ？」

輝矢と向き合った途端に笑い声を漏らすメェ蔵に、輝矢が戸惑うように顔を上げる。

「鬼爪の攻撃も貴様を接近させるためっ……！」

「えっ……？」

「死ねぃっ！！」

「……っ」

輝矢へ向けて、大口を開けるメェ蔵。

「“鬼口（きこう）”ですかっ」

「悪いな、威力は“鬼口”の三倍だっ」

「えっ？」

「はあああああっ！！」

「……っ！」

メェ蔵の口の中で巻き上がっていく、赤々とした炎。輝矢が目を見開く。

「“鬼炎（きえん）”っ！！」

「クっ……！」

――バァァァーンッ！

「……っ！何だっ！？」
巨大な衝撃音に、庭を駆けていたハチが勢いよく顔を上げる。

「って……」
見上げた空から、勢いよく落ちてくる瓦礫の数々。

「どぅわあああっ！！」
ハチが焦って叫びまくる。

「クっ……！」

――ボォォ～～ンッ！

白い煙に包まれ、人化して桜時の姿となるハチ。

「“瞬花”っ！」

桜時が両手を掲げると、降り注いできた瓦礫がすべて桜の花びらとなって、美しく桜時に降り散った。

「今の瓦礫はっ……どっからっ……！？」
瓦礫の落ちてきた方を見上げる桜時。
「あれはっ……芽里の部屋っ……？」
屋敷の三階部分の庭側の部屋の壁がなく、部屋の中が露見している。その光景に桜時が眉をひそめる。

「まさかアイツっ……！もう鬼人とっ……？」
桜時の頭を過ぎる予感。

「輝矢っ……！」
「はいっ？」
「だあっ！！」
思わず身を乗り出して叫んだ桜時であったが、輝矢はいつの間にか桜時のすぐ前に座り込んでおり、すぐさま返ってくる返事に桜時がバランスを崩してその場に腰をついた。

「おっ……お前、いつの間に……」
「瓦礫と一緒に落ちてきたんですよぉ～」
輝矢が桜時へ笑顔を向ける。

「それよりハチ、今、何か言いませんでした？」
「へっ？」
「か○やとか何とか……」
「ういっ……！？」
焦ったあまり輝矢の名を大声でしかも呼び捨てで叫んでしまったことを思い出した桜時が、顔を赤くして思わず口を押さえ込む。

「あっ……！あれは家具屋っつったんだっ！家具屋ってっ！ほぉ～ら壁が崩れてきてたからさぁ～っ！」
「へぇ～」
「ううっ……！」
慌てながらも何とか誤魔化そうとする桜時に対し、悪戯っぽい笑みを浮かべながらゆっくりと桜時に接近していく輝矢。接近してくる輝矢に、桜時が顔色を青くする。

「ちょっ……！待っ……！俺の半径一メートル以内に近づくんじゃないっつってっ……！！」
「もう一度呼んでくれたら気が済みそうな気がするんですけどねぇ～」
「なっ……！何言ってっ……！！」
嫌がる桜時を嘲笑うかのように、どんどん桜時に迫っていく輝矢。

「とりあえず離れっ……！……っ！」
「ぐあああああっ！！」
「鬼人っ！？」
瓦礫の落ちてきた芽里の部屋から飛び降りてきて、輝矢の背後から二人の元へと駆け込んできている赤鬼・メェ蔵の姿を確認し、目を見開く桜時。

「来てるっ！来てるっ！！後ろぉ！！」
「このまま死ぬのと名前呼ぶのと、どっちがいいです？」
「んな選択肢作んなぁ！！」
「はあああああっ！！」
「ぎゃあああっ！！」
恐ろしい形相で駆け込んでくるメェ蔵の姿に、悲鳴をあげる桜時。最早、名前を呼ぶどころの騒ぎではない。

「ちょぉっと待ったぁぁっ！！」
『……っ？』
何とも大きな声に、輝矢たちやメェ蔵が振り向く。

「やぁっと見つけたぜぇっ！鬼人ヤローっ！」
「アイツっ……」
二人に迫り来ていたメェ蔵の後方から高々と強気に言い放って現れたのは、あの怪しいツリ目男のゴンであった。その横には羊スイ

の姿もある。

「貴様の相手はっ！このっ！俺だぁっ！！」

「何です？あれっ」

「さぁ……？とりあえず鬼人ではなかったみたいだぞ……」

とにかく大きな声でメェ蔵に宣戦布告するゴンを見て、呆れた表情で会話をする輝矢と桜時。

「退治屋のガキどもっ！てめぇーらはそこでイチャついてでもいながら、俺様の戦いっぷりを見てろっ！」

「誰がイチャついてなんかっ……！」

「わかりました、そうします」

「すんなっ！！」

ゴンの言葉に素直に頷く輝矢に、桜時が激しく突っ込みを入れる。

「貴様は確か料理長の……」

「まっさかてめぇーが鬼人だったとはなぁ？メェ蔵っ……まぁ今となっちゃメェ蔵だったのかもわからんがっ」

振り向いたメェ蔵に、ゴンが鋭い瞳を向ける。

「てめぇーの悪事もここまでだぜっ！！」

――ボォォ～～ンッ！

『……っ』

ゴンの体を白い煙が包むと、次の瞬間、煙の中から一匹の黄金色のキツネが姿を現した。可愛らしい体にふさふさの尾を持っているが、妙に目つきが悪い。

「“孤人”っ……？」
「どうりでツリ目なはずですねぇ」
「そんな理由っ！？」
妙に納得している輝矢に、リアクション大きく驚く桜時。

「行くぜっ！！」
キツネとなったゴンがメェ蔵に向かって、高々と飛び上がる。

「“火力”っ……？」
「マズいですねぇ……」
「えっ？」
上空からメェ蔵へ向けて、火の玉を放つゴン。そんなゴンを見て眉をひそめる輝矢に、桜時が首をかしげる。

「“狐火（きつねび）・一髪（いっぱつ）”っ！」
「ふわぁーっはっはっはっはっ！何だぁっ？これはっ！炎のつもりかぁ！？」
「んだと！？」
高らかと笑うメェ蔵に、顔をしかめるゴン。

「炎というのはっ……こういうのを言うのだっ！！“鬼炎”っ！！」
「……っ！！」
メェ蔵が大きく口を開き、先ほど輝矢に向けた時と同様に、口から赤々とした炎を放つ。

「んなっ……！？」
一瞬でゴンの放った炎を飲み込んでしまう鬼炎。

「うっぎゃあああああっ！！」
ゴンが炎をもろに喰らって、力なく地面へと落下していく。

「うわあっ！！キツネがぁぁっ！！」
「偉そうなこと言ってたわりに弱いですねぇ～」
焦る桜時に対し、顔色一つ変えない輝矢。

「ゴンさんっ！」
炎に焼かれ落下したゴンの元へ、羊スイが慌てて駆け寄る。
「うっ……ううっ……熱ちぃっ……」
全身に火傷を負いながらも、丈夫に起き上がるゴン。
「ああ～いいニオイっ！いっそこのまま油揚げになったらどうっスかぁ～？」
「てめぇー、殺すぞ？」
「冗談っスよっ！冗談っ！」
特に心配した様子なく笑顔を浮かべている羊スイに、ゴンは本気の睨みをきかせた。羊スイの笑顔が苦笑いへと変わる。

「にしてもあの鬼人、炎使っちゃったりなんかしてビックリっスねぇ～」
「ありゃあレベル三の赤鬼だ。鬼爪や鬼口以外に“火力”も持ってやがるっ」
「へぇ～そこまでわかってて“火力”で攻撃したんスねっ」
「うっ……」
羊スイの鋭い一言に、顔を引きつるゴン。

「まっ！元々ゴンさんには“火力”以外の攻撃なんてできっこなっ……！」

――バッコォォーーンッ！

「ううっ……」

「てめぇーはしゃべってばっかいないで、とっとと俺の怪我の手当てをしろっ」

何の悪びれもなく鋭いことばかりを指摘していた羊スイに、ついにゴンの鉄拳が降り注ぎ、羊スイは笑顔から急激に泣き顔へと変わった。

「“火力”かぁ……じゃあ俺の花も燃やされるだけだなぁ～」

その頃、同じように赤鬼の能力を輝矢から聞き、険しい表情を見せているのは桜時。

「んん～どうしたらっ……」

「さてとっ」

「へっ？」

気合いを入れたような声を出し、ふいに立ち上がった輝矢を、桜時が不思議そうに見上げる。

「おっ……！おいおいっ！どうする気だよっ！？」

「倒しますよ？フツーに」

「普通にってお前っ！相手はレベル三だぞっ！？この前、戦ったレベル一の緑鬼とは比べ物になんなっ……！」

「大丈夫ですよっ」

不安げに止める桜時に、輝矢は余裕の笑みを向ける。

「私は“桃タロー”の弟子ですからっ」

「……っ」

その自信に満ち溢れた表情に、桜時はそれ以上、言葉を続けるこ

とができなかった。輝矢が桜時に背を向け、再びメェ蔵と向き合う。

「竹取輝矢……鬼退治いたしますっ」

「来いっ！小娘っ！！」

「……っ」

三日月を構え、メェ蔵へと飛び出していく輝矢。メェ蔵も鬼爪を光らせ、輝矢へと駆けていく。

第2章　ヒツジが1匹、キツネも1匹？　★6

「ああっ！！あっの退治屋のガキっ！俺様の戦いっぷりを見てろっつったのにっ！」

戦いを始める輝矢に、不満げな叫びをあげるのは、羊スイに火傷の治療をしてもらっている最中のゴン。いつの間にか人の姿に戻っている。

「ったくっ！これだっから素人はっ……！」

『……っ！』

文句を叫ぶゴンの前で、戦いを繰り広げる輝矢とメェ蔵。

「……。」

目にも留まらぬ速さで互角に斬り結ぶ輝矢とメェ蔵に、偉そうに文句を言っていたゴンがどんどん目を見張らせていく。

「輝矢さん、強いっスねぇっ。ゴンさん以上じゃないっスかっ？」

「ああっ、そうだなっ……って、そんなわけあるかぁっ！！」

「痛っ！一回、頷いたじゃないっスかぁ～っ！」

またしても殴ってきたゴンに、今度は不満げな顔を見せる羊スイ。

「“鬼爪”っ！！」

「三日月っ」

――……っ！！

一歩も譲り合うことなく、同等の力でぶつかり合う輝矢の三日月とメェ蔵の鬼爪。

「やるなぁっ……小娘っ……」
メェ蔵が不適な笑みを浮かべる。
「だがっ、これならどうだぁっ！？」
「……っ！」
再び輝矢へ向けて大きく口を開くメェ蔵。

「マズいっ！さっきの炎だっ！」
桜時が思わず立ち上がる。

「“鬼炎”っ！！」
「クっ……！」
メェ蔵の口から放たれた真っ赤な炎が輝矢へと迫り来る。輝矢は表情をしかめ、一瞬考えた後、すぐさま炎に三日月を向けた。

「“月器・十六夜”っ！」

三日月が満ちていき、ほぼ円形の大きな金色の盾・十六夜へと姿を変える。

「そうかっ！アイツにはあの盾があったんだっ！」
諦めかけていた暗い表情を、一瞬で笑顔へと変える桜時。

「十六夜っ」
「何っ！？」

――バァァァーンッ！

輝矢が十六夜で鬼炎を真正面から受け止める。その様子に眉をひそめるメェ蔵。

「よぉーしっ！この前みたいにそのまま跳ね返しちゃっ……！」

「うっ……！」

「えっ…？」

調子よく応援していた桜時の表情が、十六夜を構えている輝矢の表情とともに曇る。

「十六夜っ……！」

鬼炎の力に溶け出す十六夜。輝矢が少し驚いたように目を見開く。

「ふわぁーっはっはっはっ！我が炎は無敵よぉっ！！」

その光景に勝ち誇ったように笑いあげるメェ蔵。

「このまま盾ともども、我が鬼炎に燃やし尽くされるがいいっ！！」

「クっ……！」

メェ蔵の言葉に表情を引きつった輝矢が、十六夜を振り上げる。

「“月器・三日月”っ！」

――バァァァーンッ！

「ううぅっ！！」

「ああっ……！」
輝矢が十六夜を三日月に変えるとともに、輝矢を襲う鬼炎。輝矢も自ら後方に飛び、直撃を何とかかわしはしたが、炎の威力に吹き飛ばされ屋敷の壁に背中を打ちつけた。桜時が思わず身を乗り出す。
「ふはっはっはっはっ！！とうとう終わりのようだなぁっ！小娘っ！」
「ううっ……」
座り込んだままの輝矢を見て、愉快な笑みを浮かべるメェ蔵。
「チィっ！こうなったら俺様がっ……！」
「ゴンさん出てったって足手まといなだけっスよぉ～っ！！」
「何をぉっ！？」
飛び出していこうとするゴンを必死に止める羊スイ。
「あの盾でも止められないなんてっ……もうっ……」
打ち付けた痛みを表情に見せている輝矢を見ながら、諦めたように呟く桜時。
――カランっ……
「……？」
思わず後退した桜時の足に、何かが当たる。
「……っ」
それは、孔雀から授かった父の刀・“村雨丸”であった。人化した時に、背負っていたものが落ちたのであろう。

「村雨丸……」

――父親を探すというのなら、少しは手がかりになるかも知れないわね……――

「……。」

そう言って孔雀が与えてくれた。いつも桜時のことを蔑んでばかりで、桜時の存在を決して認めようとしなかった孔雀が、桜時と正面から向き合ってこの刀を与えてくれた。

――俺っ！羽ばたきたいっ！羽ばたいていきたいんだっ！――

そう自分から言ったのだ。もう決意して、羽ばたき始めたのだ。迷っていては、飛んでいけない。

――私には確かに見えますよ？――

「……っ」

桜時が素早く地面に落ちていた村雨丸を拾い上げる。

――アナタが背に、その翼が……――

「……っ！」

桜時が決意した表情で顔を上げた。

「どゅわぁーっはっはっはっ！我が炎はステキっ！無敵っ！快適だぁっ！！」

「ああ～痛いっ……耳も痛いっ……」

背中を押さえながらゆっくりと起き上がる輝矢。高らかと笑うメェ蔵の大声に、多少顔をしかめる。三日月は少し焼け焦げ、三日月を持っている右手首にも火傷を負っていた。

「ほぉぉぉ～まだ立ち上がるとは大したものだなぁ、小娘っ」

「どうもっ」

手首の火傷に懐から出した手ぬぐいを巻きながら、輝矢が適当に返事をする。

「レベル三はさすがにキツいですねぇ……この力はあまり使いたくありませんでしたがっ」

「んっ？」

火傷にとりあえずの処置をして、再び三日月を構える輝矢に、メェ蔵が眉をひそめる。

「その目……まだ諦めてはいないようだなぁ」

「ええ」

輝矢が大きく頷く。

「今からアナタの炎を打ち砕いて差し上げようかと思いまして」

「何っ……？」

輝矢のその言葉に、メェ蔵が少し表情を引きつる。

「打ち砕くだとぉ？我がステキにして無敵にして快適な炎を」

「ええ、アナタのスブタにして無糖にして海鮮丼な炎を、です」

「旨そうだなっ」

「何、リアル妄想してんスかぁ～？」

興味深く呟くゴンに、羊スイが呆れた表情で突っ込んだ。

「なるほどっ……」
少し唇の両端を上げるメェ蔵。
「やれるものならやってみろぉっ！！」
「……っ！」
怒ったようにそう叫び、メェ蔵が輝矢へ向けて大きく口を開く。
三日月を両手で持ち、縦に構える輝矢。
「“月器っ…！」
「“鬼爪・天回”っ！！」
「えっ？」
月器を変形させようとした輝矢に対し、メェ蔵が放った攻撃は鬼炎ではなく鬼爪。
「きったねっ！アイツ、賭けに乗ったフリしてっ……！」
ゴンが思わず声をあげる。
「クっ……！」
飛んでくる十本の爪に、輝矢が焦りの表情を見せ、月器を構え直そうとする。
「そのまま構えてろっ！」
「えっ？」
上空から聞こえてくる声に、輝矢が顔を上げる。
「……っ」
輝矢の上を舞う、桜時の姿。

「村雨丸っ……」
桜時が空中で鞘から村雨丸を抜く。姿を現す透き通るように美しい刀を、桜時が振りかぶった。
「“瞬花”っ！！」
――パァァァーーンッ！
「……っ」
「何っ！？」
輝矢へと飛んできていた鬼爪が、一瞬にして桜の花びらへと変わり、散っていく。
「行けっ！！」
降下してきながら、輝矢へと叫ぶ桜時。
「輝矢っ！！」
「……っ」
呼ばれる名に輝矢が目を見開く。
「……っ」
輝矢は桜時へ向けて少し笑みをこぼすと、すぐにその表情を厳しくし、メェ蔵の方へと飛び出していく。
「チィっ……！」
向かってくる輝矢に、メェ蔵が顔を歪める。
「望み通りっ……！！」
メェ蔵が再び口を開く。
「灰にしてやろぉぉっ！！“鬼炎”っ！！」

「……っ」
輝矢へ向けて鬼炎を放つメェ蔵。輝矢が向かってくる炎へ、三日月を向ける。
「三日月っ……」
光を帯びていく月器。
「水月っ！！」
輝く三日月から放たれたのは、無数の水の刃。
「何っ！？」
メェ蔵が驚きの表情を見せる。
「水っ…」
無事、地面へと着地して目を見張らせる桜時。
「たかが水力にっ……！」
――パァァァンッ！
「……っ！！」
輝矢の水月に、消し去られる鬼炎。
「俺の炎がっ……負けるだとっ……！？」
鬼炎を消し去った水月が、まっすぐにメェ蔵へと飛んでいく。

「ぎゃあああっ！！」

第2章　ヒツジが1匹、キツネも1匹？　★7

激しい断末魔を残して、赤鬼は青々とした水の中へと消えていった。

「……“月器”」

降り散る水飛沫を見ながら、輝矢が三日月をピアスの姿へと戻す。

「おいっ！！」

「……？」

輝矢が振り返ると、心配そうに駆け寄ってくる桜時の姿。

「おおっとっ！一メートルっ！」

駆け寄る桜時であったが、やはり輝矢の一メートル手前で足を止める。

「大丈夫かっ！？」

「ええ」

一メートル離れた桜時へと笑顔を見せる輝矢。

「ハチが名前を呼んでくれたので、痛みもすべて吹き飛びました」

「うっ……！」

戦いに必死になるあまり、ついつい呼んでしまった名前。そのことを思い出し、桜時が少し頬を赤く染める。

「あれはだなぁっ！鍵屋っつったんだっ！鍵屋っ！ちょぉぉ～ど家の鍵を失くしてっ……！」

「今日を二人の記念日にしましょうねっ」

「しなくていいっ！！」
ひたすら笑顔の輝矢に、少しムキになって怒鳴り返す桜時。

「いっやぁ～倒しちゃったっスねぇ～鬼人っ」
「……。」
そんな二人を、呆気にとられた表情で見つめる羊スイと、妙に真面目な顔を見せているゴン。
「あの力……まさかっ……」
ゴンが意味深に呟く。

「一昨日が出会った記念で、昨日が一緒に旅立ち記念でぇ、今日が名前呼んだ記念でぇ」
「いちいち記念日にすんじゃねぇっ！！」
こうして、輝矢とハチの二度目の鬼人退治も何とか終わったのであった。

翌朝。
「御伽警察ぅ～っ？」
芽里の屋敷の前で、ハチの声が響き渡る。

「おおっ、略してオトポリだ、オトポリっ」
ハチの疑問の声に答えたのは、ゴンであった。
「この上なくダサいですねぇ」
「そんなもんがあるなんて聞いたことねぇーぞぉっ？」

「“対鬼人用組織”だからな。組織自体も鬼人復活とともに十年振りに形成されたってわけだっ」
「へぇ～」
組織名“御伽警察”と書かれた腕章を付け、黒い制服を身に纏ったゴンと羊スイを前にし、ハチが感心するように声を漏らした。

「ガキのお前らが知らんのも無理はない。俺も十年前の組織については知らんからな」
「お前はっ？」
「名前くらいは聞いたことがありましたが、実際にお会いするのは初めてですね」
ハチの問いかけに輝矢が笑顔で答える。

「この屋敷の料理長は十年前、オトポリにいた人でなぁ」
ゴンが屋敷を見ながら言葉を続ける。
「俺をこの屋敷に潜入させてくれたってわけよっ」
「俺は元々、双子の弟の羊スイが働いてたんで入れ替わったんスよっ！あっ、俺、ホントは羊スケっつーんで」
「なるほどねっ……」
すべての謎が解け、肩を落として頷くハチ。

「俺はオトポリでは潜入捜査官として有名でなぁ、化け刑事（デカ）のゴンって呼ばれてんだっ！」
「ハゲデブのゴンザレス？聞いただけで哀れな気持ちが巻き起こりますねぇ」
「化け刑事だっ！！そしてゴンザレスじゃねぇっっ！！」
「つーか、普通に怪しすぎて潜入してんの丸わかりだったぞ……」
聞き間違える輝矢に大声で突っ込みを入れるゴンを見ながら、ハチも突っ込んだ。

「そぉそっ！ゴンさんの潜入ってばいっつもモロバレで、しっかもいっつも大して成果でなくってっ！」

――バッコォォ～ンッ！！

「ううっ……」

「成果とかゆーんじゃねぇっ！捜査は心意気でするもんなんだよっ！」

『……。』

またしても笑顔で余計なことを言ってしまった羊スイもとい羊スケに、ゴンの鉄拳が炸裂する。成果が挙げられなくて警察が務まるのだろうかと思いつつ、呆れた表情を見せる輝矢とハチ。

「まっ！とにかくっ！鬼人退治は俺らオトポリの仕事だっ！鬼人は俺らに任せておけばいいっ！」

「ゴンザレスなんかに任せておけないから、こうして退治屋をしているのではありませんか」

「なんか言うなっ！！そしてゴンザレスじゃねぇっ！！」

輝矢の言葉に突っ込みまくるゴン。

「とにかくっ！！退治屋なんかやってないでガキはガキらしく適当に遊んでろっ！！」

そう言ってゴンが屋敷の前に停めてある吹き抜けの黒い車に乗り込む。

「わかったなっ！」

「じゃあ俺たちは報告とかあるんで、これで失礼するっス～」

羊スケが輝矢たちに頭を下げ、運転席へと乗り込む。

「じゃあなっ！！ガキどもっ！！」

ゴンがそう言い軽く手を挙げると、二人を乗せた車は発進し、あ

っという間に輝矢たちからは見えなくなった。

「変わった警察だったなぁ……」
「そうですねぇ」
しみじみと呟く輝矢とハチ。

「あっんれぇ～？もう行っちまったのかぁ～？孤上のヤツっ」
「ウチのアニキも行っちゃったみたいっスねぇ～」
『……？』
屋敷の中から聞こえてくる声に輝矢とハチが振り返る。
屋敷の中から出てきたのは芽里と、調理服を着た恰幅のいい白髪の中年男に、羊スケと瓜二つの顔をした少年であった。

「ったくアイツ、潜入させてやったちゅーんに、お礼も言わんと」
「メリーさん、その人たちもしかしてっ……」
「ええ、本当の料理長のシープンと、本当の使用人の羊スイよ」
「いんやいんやこの度は色々とご迷惑をおかけしましてぇ～」
「兄とその上司がお世話になりました」
「いえいえ、お礼を言うくらいならモノを贈って下さい」
「お前なっ……」
深々と頭を下げるシープンと羊スイに対し、笑顔でがっついたことを言う輝矢にハチが呆れた顔を向ける。

「それにしてもメェ蔵が鬼人だったなんて驚いたわぁ～」
芽里が眉間に皺を寄せて言う。
「確かに、前は私が言いたいこと先に言っちゃったりしないヤツだったから、おかしいとは思ったのよねぇ～」
「そんなことでっ……？」
芽里の見解に、またしても呆れた顔を見せるハチ。

「本物のメェ蔵さんの具合はどうなんです？」
「ああ、ただの食あたりだったみたい。来週には復帰するですって」
「それは何よりですね」
輝矢が笑顔で頷いた。

「では私たちもそろそろ」
「ええ～っ！？行っちゃうのっ！？桜時様っ！！」
「えっ？」

――ヒュウゥゥ～ッ……

「ううっ……！！」
ハチに駆け寄ろうとした芽里が、背中から冷たいものを感じ、ゆっくりと振り返る。

「何か……問題でも……？」
「いえっ……まったく問題ありませんでございます……」
凍りつきそうな輝矢の笑顔に見つめられ、芽里は引きつった表情で呟いた。

「では失礼いたします」
「じゃあなっ！」
輝矢とハチが三人に別れを告げる。

「本当にありがとう、輝矢さん、桜時様。また羊国に来てね」
「その時は私の料理を召し上がってって下さいっ」
「またどっかでウチのアニキに会ったら、たまには顔見せろっつっといて下さいっスっ！」
三人が輝矢とハチに笑顔を向ける。

「ええ、必ずっ」
「またなぁ～っ！！」
三人が大きく手を振って見送る中、輝矢とハチは羊国を旅立っていった。

数分後、羊国すぐ外。
「でもさっ」
「……？」
急に口を開いたハチに、輝矢が少しハチの方を見下ろす。

「何でメェ蔵が鬼人だってわかったんだ？」
あの状況では明らかにゴンの方が疑わしかったのに、輝矢は初めからゴンではなくメェ蔵に狙いを定め、芽里の部屋で待ち伏せていた。

「やっぱ長年の経験から、鬼人は国主の側近になりすます傾向にあるからとかそんな感じでっ…！」
「ああっ」
ハチの言葉の途中、輝矢が笑顔で頷く。
「“勘”ですっ」

「へっ……？」
輝矢の答えに固まるハチ。
「いやぁ～意外と当たるものですねぇ～勘って」
「……。」
笑顔を浮かべたまま歩いていく輝矢を、足を止めて後方から呆然と見つめるハチ。
「勘って……。……。」
ハチの呆れた表情が、ふいに笑顔へと変わる。
「まっ、いっかっ」
「ハチ？」
「おうっ！」
振り返った輝矢のところへと駆け寄っていくハチ。二人の旅は、まだ始まったばかりである。

第2章　ヒツジが1匹、キツネも1匹？　★7（後書き）

2章終りです～。
3章もよろしくお願いします。

第3章　サイ蔵法師サマ御一行　☆1

「だっはぁ～っ……」
力の抜けきった何とも情けない声を出すのは、ひたすら続く山道をゆっくりと四つ足で歩くハチ。声だけでなく、その顔も力の抜けきった何とも情けない顔である。

「そんなにダハダハ言ってるとエリマキトカゲになってしまいますよ、ハチ」
「何故にっ!?」
涼しげな表情で前を歩いていく輝矢の言葉に、大きく反応するハチ。

「つーかさぁ、羊の国出てからロクに飯食ってねぇーしっ……イヌの俺でもキツいってぇ～」
「まだ三日じゃないですか。私なんていつも一ヶ月はロクにご飯食べてませんよぉ？」
「やっぱ俺に旅って無理だったのかな……」
輝矢の笑顔に、ハチが自信を失う。

「そんなにお腹が空いているのなら、先ほど見かけた山小屋の老夫婦宅へ押し入って食料をっ……」
「頼むから、人の道に反することは止めてくれ……」
卑劣極まりないことを言う輝矢に、ハチがやつれた表情で願う。

「だっはぁ～っ……って、ああっ!!」
「えっ？」
エリマキトカゲになっていたハチが何かを見て大声をあげる。その声に驚き、ハチの見ている方を見る輝矢。

「バナナっ！！」
森のとある木に違和感たっぷりに生っている一房の黄色いバナナ。
「何故、このような森にバナナが？」
「神のお導きだぁっ！ひぃやっほぉーうっ！！」
「あっ」
輝矢の疑問を完全に無視し、バナナの生っている木へと飛び出していくハチ。
「いっただっきまぁーっ……！！」
「おおっとっ」
「のわあああっ！！」
「ハチっ」
バナナに飛びつこうとしたハチが、横から出てきた影に地面へと突き落とされる。
――ドッスゥウーンッ！
「痛つつつっ……」
「ハチ、もしやショックで私との美しい思い出をすべて忘れてしまったのでは？」
「大してねぇーだろっ！思い出っ！！」
地面に落下したハチが、輝矢の言葉に割りと元気よく怒鳴りながら起き上がる。
「ったく誰だぁっ！こんなマネしやがったのはっ……！！って、うえっ！？」
上を見上げたハチが、大きく目を見開く。

「サル……」
「サルぅっ！？」
「よぉーうっ！」
木の枝の上に自然と立ち、ハチが獲ろうとしたバナナの房を抱えて、下にいる輝矢とハチに笑顔で手を上げたのは、何とも可愛らしい茶色の子ザルであった。話しているところを見ると、“猿人”のようである。

「“よう”じゃねぇっ！！お前なぁっ！いっきなり人っ……いやっ、イヌを突き飛ばして一体っ……！」
「お前が俺のバナナ獲ろうとしたからやんかぁ～ワンコっ」
「ああっ！？」
サルの小ばかにしたような笑みに、顔を引きつるハチ。

「俺のって、それは生ってたバナナだぞっ！？見つけたもん勝ちだろっ！？」
「それを言うなら獲ったもん勝ちやろぉ？何なら獲ってみるかぁ？」
サルがハチを挑発するかのように、ハチの方へとバナナをひけらかす。

「よぉーしっ！！臨むところだぁっ！獲ってやろうじゃねぇーかぁっ！！」
怒りを全面に押し出して、木の上にいるサルへと飛び出していくハチ。

「どりゃあああっ！！」
「もぐもぐっ」
飛び出してくるハチを見ながら、素早くバナナを一本、皮を剥いて食べる。

「ぽいっ」
「へっ？」
木の上へと四つ足で器用に登っていったハチの足元を目がけて、サルが食べ終えたバナナの皮を落とした。
――つるんっ……！
「だあああっ！！」
バナナの皮に足を滑らせ、見事に木から落下していくハチ。
「ぐへぇぇっ！！」
地面に全身を打ちつけ、死んだような声を出すハチ。さすがに本日二度目の落下はきいたようである。
「イヌも木から落ちるってやつですね」
特に手を貸すわけでもなく、冷静に呟く輝矢。
「どうやら俺の勝ちみたいやなぁ～っ！ほなっ、バナナは貰ってくでぇっ！ワンちゃんっ」
「かっ……！」
「じゃっあにぃ～っ！」
余裕の笑みを浮かべて、素早く木を飛び移り、どこかへと去っていってしまうサル。
「何じゃあっ！！あのサルわあああっ！！」
力の限り叫ぶハチ。
これが今回の事件の、そもそもの始まりであったのである。

第3章　サイ蔵法師サマ御一行　☆2

一時間後。
「ああ～街ですよっ、ハチっ」
山道のすぐ先に灯りの集まった集落を見つけ、輝矢が嬉しそうに後ろを歩くハチの方を振り返る。

「クッソっ……！あのサルめっ……！」
「まだ気にしているのですかぁ～？」
しかしハチは街よりも、先ほどのサルへの怒りで頭が一杯の様子である。

「街に着いたら私がバナナよりもいいもの、買ってあげますからぁ～」
輝矢が怒っているハチを宥めるように言う。

「朱実の金でっ」
「俺ん家の金じゃねぇーかっ！！」
怒っていても突っ込むことは忘れないハチ。

「いやぁ、着きましたよぉ」
「ようこそぉっ！！お二人さんっ、旅の人かいっ？」
『えっ？』
輝矢たちが街の入口に足を踏み入れた途端に、近くに立っていた若い男が親しげに二人に声をかけてくる。少し戸惑うように顔を上げる輝矢とハチ。

「この街はいぃ～い街だよぉっ！オススメは特に足つぼマッサージ

かなっ？是非、試してってよっ！」
「足つぼっ……」
男の言葉に、ハチが少し表情を引きつる。

「ここは何という名の街なのですか？」
「名前なんてないさぁっ！ここは所謂、“雑種の街”っ！いっろんな獣人が交じって暮らしてるんだっ」
「雑種の街……」
輝矢が目を丸くして、男の言葉を繰り返す。

「ちなみに俺は“蛸人”のタコ吉ねっ！街で有名な“八本足つぼマッサージ”のお店の主人やってからっ！」
「それでオススメなわけですか……」
「ただの宣伝じゃねぇーかっ」
親切な案内というよりはしつこい宣伝であるタコ吉に、呆れた表情を見せる輝矢とハチ。

「にしてもこの街は平和だなぁ」
街を見渡しながらハチが言う。

「そう離れてない羊の国なんて、鬼人出現に厳戒態勢だったってぇーのにっ」
「そっりゃーこの街は鬼人が出たって平気だからだよっ！」
「はぁっ？」
「平気っ……？」
タコ吉の言葉に、首をかしげるハチと眉をひそめる輝矢。

「この街には、御伽界随一の退治屋がいるからなっ！」
『退治屋っ？』
二人が同時に驚いた顔を見せる。

『サイ蔵様だぁっ！！サイ蔵法師様がいらっしゃったぞぉっ！！』
「おっ！君たち、運がいいなぁ～っ！ちょぉ～どサイ蔵法師様が拝めるぞっ！」
「サイ蔵法師様っ？」
「……っ？」
急に声をあげ、一箇所に集まり始める街人たち。タコ吉の言葉に、輝矢とハチは首をかしげながらも、駆け出していくタコ吉の後を追って、街人たちの集まっている方へと歩み寄って行く。

『サイ蔵法師様ぁっ！！』
「君たちっ！こっちこっちぃ～っ！！」
『……？』
集まっている人々は、その集まりの中央へと必死に手を振り、声援のようなものをかけている。人込みをスルスルと抜けていくタコ吉に続いて、何とかその中央付近へと顔を出す輝矢とハチ。

『……っ』

『サイ蔵法師様ぁっ！！』
「ああ～押すな、押すな。サインは一人一枚、写メールは一人二シヨットまでじゃぞぉ」
街人の集まりの中央で、声援をかけられながら街人にサインやら握手やらを求められているのは、白い法衣を纏った灰色の髪の老人であった。老人は背こそ低いが、がっしりとした体付きをしていた。真ん中に寄った瞳の人相は、街人が慕っているほどのいい人間には見えない。

「サイ蔵様っ！この間はウチのペットをいじめた鬼人を退治してくださってありがとうございましたっ！！」

「鬼人っ！？」
「ペットをいじめた……？」
ある街人のサイ蔵への言葉に、輝矢とハチ同時に眉をひそめる。

「お安い御用じゃよ」
「ウチのバナナ畑を荒らした鬼人も退治してくださってありがとうごぜぇましたぁ～」

「鬼人っ！？」
「畑を荒らした……？」
続いて礼を言う街人の言葉にも同じような反応を示す輝矢とハチ。

「何っ、いちいち驚いてんのぉ～っ！ほっんと何も知らないねぇ～まっ、旅人だっから無理ないかぁ～」
「タコ吉さん、あの方は一体っ……」
「あのお人はサイ蔵法師っ！仏に仕えるお坊さんにして、御伽界随一の鬼人退治屋っ！」
「御伽界随一っ……」
「あのじいさんがぁっ！？」
タコ吉の説明に、あまり納得していなさそうな声を出す輝矢とハチ。

「ナメちゃいけねぇぜっ？倒した鬼人数知れずっ！この街に出た鬼人も六匹ぜぇーんぶ退治してくれたし！」
「六匹っ…」
「今じゃ鬼人の方が逃げてくって噂よっ！ヌワッハッハっ！！」
「……。」
タコ吉の笑いを聞きながら、輝矢が気難しげに俯く。
「あのじじいがなぁ～」

「サイ蔵法師サマっ！！サイン下さいっ！」
「んっ？おお～いいぞぉ～っ」
ハチが意外そうに見つめる中、白髪のまだ幼い少年が人混みを掻き分けてサイ蔵へと駆け寄る。サイ蔵はその少年の頭を撫でて、サインを書いた。

『お師匠様ぁ～っ！！』
「あっ？」
人込みを掻き分けながらやって来るいくつかの声に、ハチたちが振り向く。

『お探ししましたよっ！お師匠様っ』
「おおっ、門貴（もんき）、コショー、九戒（きゅうかい）っ」
サイ蔵を“師匠”と呼び、人込みの中央へと姿を現したのは、頭に皿の乗った緑色のカッパと、丸々と太った大柄な肌色のブタと、可愛らしい茶色の子ザルであった。

「んっ？」
三匹の中の子ザルにどことなく見覚えのあるハチ。

――ほなっ、バナナは貰ってくでぇっ！ワンちゃんっ！――

「……っ！あああああっ！！」
『……？』
あの屈辱的な出来事を思い出し、サルを指差して思わず大声を出すハチ。その声にサイ蔵とサルたち三匹、そして集まっていた街人たちが皆、振り返る。

「あっ」

サルもハチを見て、思い出した様子で声を出す。

「知り合いかのぉ？門貴」

「知り合いゆうかぁ、通りすがり会うただけですわぁっ！“ご機嫌よぉ～”ゆうてっ」

「ウソをつけぇっ！お前が人のっ……！いやっイヌのバナナを横取りしてったんじゃねぇかっ！」

サイ蔵に笑顔を向けるモンキと呼ばれたサルに、思い切り怒鳴り返すハチ。

「横取り？」

「お師匠さんの前で人聞き悪いこと言いなやぁ～ワンコぉ～」

顔をしかめるサイ蔵を見て、困ったような顔を見せるモンキ。

「ホントのこったろっ！」

「獲ったもん勝ちやゆうて、俺がちゃ～んと勝ったやんっ？」

「あんなんで納得できっかぁっ！！」

ハチがさらに鋭い目でモンキを睨みつける。

「しゃーないなぁ……」

「……？」

急に声のトーンを落とすモンキに、ハチが少し表情を曇らせる。

「ほんならっ……」

――ボォォォ～ンッ！

「……っ！」

モンキの体を白い煙が包む。

「みんなが見とうトコで勝ち負けハッキリしたろかぁっ！」

「……っ」
次の瞬間、煙の中から現れたのは、茶色い短髪にまっすぐと光る金色の瞳をした、いかにも活発そうな背の高い青年・門貴であった。派手な赤い胴着を着ている。

「これこれ、門貴っ」
「いっくら師匠さんでも、俺の決闘止める権利はないでぇ～っ！」
「……やれやれ、お前は言っても聞かんヤツじゃからなぁ」
笑顔で言い切る門貴を見て、サイ蔵が少し疲れたように肩を落とした。

「皆、危ないから下がりなさい」
サイ蔵の指示に、集まっていた街人が大人しく後退していく。
「やりすぎんなよぉ～、門貴っ」
「おうっ！」
やる気なく声をかけるカッパに、手を挙げて答える門貴。

「“如意棒（にょいぼう）”っ！」
「……っ」
門貴がそう言うと、門貴の右手の中にどこからともなく金色の装飾が施された真っ赤な棒が現れた。その様子を少し驚いたように見つめるハチ。

「さっ！お前もとっとと人化しぃ～やっ！」
「あのなぁっ！バナナもないのに何で今更っ……！」
「それともぉ～、その背負っとう立派な刀はコケ脅しかぁ～？」
「……っ」
ハチの背負っている村雨丸を指差し、ハチを嘲笑うかのように言い放つ門貴。その門貴の見え透いた挑発に、ハチが思い切り表情を引きつる。

――ボォォォ～～ンッ！

「上等じゃねぇーかぁっ！このクソザルぅっ！！」

桜時の姿となって、村雨丸を抜くハチ。

「そうこなっ……！」

門貴が楽しげに笑って如意棒を振りかぶる。

「おいおいっ！アンタの連れっ！とっとと止めないと、サイ蔵様のお弟子さんとっ……！」

危機を感じて、輝矢の方を振り返るタコ吉。

「はいはぁ～い、イヌＶＳサルっ、どっちが勝つと思いますぅ～？一口、十チュンからですよぉ～」

「商売始めてるしっ！！」

近くにいる街人を相手に、決闘を賭け事にして商売を始めている輝矢。その姿にタコ吉が驚く。

「まっ、とりあえず俺っ！サルに五十チュンっ！」

「俺、イヌに三十っ！」

「サルに百っ！」

「はいはぁ～いっ」

驚きながらも、とりあえず賭け勝負に参加するタコ吉。その他の街人もどんどん参加していき、輝矢がテキパキと動いていく。

「おっらぁっ！！如意棒っ！！」

「クっ……！」

門貴が全力で振り下ろす如意棒を、村雨丸で正面から何とか受け

止める桜時。

「やるやんっ！派手な頭しとるだけのことはあるなぁっ！」
「髪の色は関係ねぇーだろーがっっ！！！」
「おおっとっ」
村雨丸に力を込めて、受け止めていた如意棒ごと門貴を押し返す桜時。門貴が身軽に後ろに飛ぶ。

「こっからやっ！“如意棒”っ！」
「村雨丸っ！！」

「行けぇっ！サルっ！」
「そこだぁっ！イヌっ！！」
激しく村雨丸と如意棒を交錯させていく桜時と門貴。戦いが白熱するほどに、周りからの歓声も熱くなる。

「へぇっ」
見事な動きでレベルの高い戦いを繰り広げている桜時と門貴に、商売を終えた輝矢はどこか感心するような声を漏らした。

『はぁっ……はぁっ……はぁっ……』
二人は少し間合いを取り、肩で息をしながら呼吸を整える。

「やるなぁ、イヌ。思とった以上やっ」
門貴が笑みを浮かべる。

「けどっ……そんくらいの力じゃあ、まだまだ俺には勝てへんでぇっ」

「……？」
余裕に見える笑みを浮かべ、桜時とは離れた間合いのまま如意棒を構える門貴。今までに見たことのない構えをとる門貴に、桜時が少し眉をひそめる。
「今日は特別に見せたるわっ！俺の力っ」
「……っあれはっ……」
門貴の構えた如意棒の周りに集まっていく大気に、輝矢が目を見張らせる。
「何だっ？あの棒の周りに白い靄みたいなもんがっ……」
「これぞっ！俺の“風力”が奥義っ！」
「風力だとっ！？」
「行くでぇっ！如意棒・第一の舞っ……」
「クっ……！」
村雨丸に両手を当てて、“花力”での防衛体勢を取る桜時。
「“くっ……！」
「そこまでっ」
「ぎゃほおおっ！！」
「へっ……？」
今まさに必殺技を繰り出そうとしていた門貴が、横からやって来た輝矢の一蹴りで５ｍほど離れた家の壁まで吹き飛ばされていく。防衛体勢を取っていた桜時も目を丸くする。
「お痛ててっ……」
「まったく、ウチのハチが傷物にでもなったらどうしてくれるんで

すかぁ。危ないサルですねぇ」
蹴られた腹を押さえながら、やっとこさ起き上がる門貴を見ながら、輝矢が冷たく言い放つ。

「というわけで、勝負は私の勝ちということでっ」
『納得できるかぁっ！！』
笑顔の輝矢に、賭け勝負をしていた街人たちからの非難が集中する。

「金返せこんにゃろうっ！」
「そうだそうだっ！サギ女ぁっ！！」
「どうやら痛い目に合わないと納得できないようですねぇ……」
「頼むから金を返して、ちゃんと謝ってくれっ……」
文句を言いまくる街人たちに殺意を向ける輝矢に、桜時が泣く泣くお願いをする。

「ふぅっ…折角、一儲けするチャンスでしたのにっ」
「俺は人の道をはずれるくらいなら貧乏に生きた方がマシだっ」
「私はハチのためなら人の道をもはずれる覚悟です」
「ちょっとカッコよく言うなっ！！」
何とか桜時の願いを聞きいれ、街人に金を返した輝矢。

「いっやぁ～姉ちゃんっ！強いなぁ～っ！」
「……？」
そんな輝矢の元へ、輝矢の蹴りを喰らったわりに元気そうな門貴が笑顔でやって来る。

「姉ちゃんっ！俺と結婚せぇ～へんっ？そいで二人の息子を世界最強のサルにっ……！」
「結構です」

「ほんならぁ～俺を姉ちゃんの愛の付き猿にっ……！」
「私、サルって嫌いなんです」
「ううっ……」
調子のいい笑顔を見せていた門貴であったが、輝矢の冷たい一言で悲しみに暮れる。

「あっ、イヌは好きですよ？」
「聞いてねぇっ！」
付け加える輝矢に、少し顔を赤らめて怒鳴り返す桜時。

「サイ蔵様、門貴を倒すなんてあの女……」
「うむ……」
周りの街人を気にしながら小声で言う河童に、サイ蔵が表情を曇らせて頷く。

「サイ蔵様ぁっ！！」
『……？』
そこへ街の出口の方から、一人の若い男が血相を変えて駆け込んできた。その男を輝矢や桜時たちも見る。

「サイ蔵様ぁっ！！」
「どうしたのじゃ？」
サイ蔵の前まで走ってきた男に、サイ蔵が声をかける。

「森がっ……！森の木がっ……！！」
「何っ……？」
『……っ』
男の言葉に、輝矢たちもサイ蔵とともに眉をひそめた。

第3章　サイ蔵法師サマ御一行　☆3

街のすぐ外。“実りの森”。

「これはっ……」

愕然とした表情で呟くハチ。

「……。」

輝矢も厳しい表情を見せている。二人の前に広がっていたのは、森の一部の木が切り落とされた、無残な光景であった。

「実りのっ……！実りの木がっ……！！」

「もうすぐ実がなる予定だったのにっ……！」

「……っ」

後方にいる街人から漏れる嘆きの声に、ハチが少し振り返って目を細める。

「でも一体、どうしてっ……」

「鬼人じゃな……」

「えっ？」

「そんなっ……！」

「きゃあああっ！！」

「……っ」

サイ蔵の言葉に驚くハチであったが、街人たちはもっと驚き、怯える者・悲鳴をあげる者が多く出た。混乱状態に陥る街人を見て、ハチが慌てたようにサイ蔵の方を見る。

「おいっ！あんたっ！そんな適当なことっ……！」

「適当ではないっ！」

「……っ！」

強く言い放つサイ蔵に、ハチは思わず言葉を止める。

「わしは鬼人の気配が読める。鬼人はまだこの近くにおるっ！」

「気配がっ……？」

サイ蔵の言葉に戸惑うように呟くハチ。

「ああ～そういえばぁ、私たちも退治屋なんですぅ～」

『……っ？』

ハチとサイ蔵の間に割って入ってくる輝矢に、ハチとサイ蔵が不思議そうに振り向く。

「姉ちゃん、退治屋なんっ！？まっすますスッテキぃ～っ！」

「退治屋……？お主らもっ……？」

「ええっ」

盛り上がるモンキを無視し、顔をしかめるサイ蔵と、あっさりと頷く輝矢。

「でぇ、私も鬼人の気配が読めるんですがぁ」

「えっ！？おっ……おいっ、お前、気配なんてこれっぽっちも読めねぇーじゃねぇーかよっ」

「こうゆうのはノリです、ノリっ」

「ノリって……」

サイ蔵たちには聞こえないよう小声で囁くハチに、輝矢が適当に答える。輝矢の答えに呆然とするハチ。

「気配が読めると……？」

「ええっ、でも私の方はまったく気配感じないんですよねぇ～」

「……っ」

輝矢の言葉に眉をひそめるサイ蔵。

「何でですかねぇ～」
「……。」
サイ蔵に笑顔と鋭い瞳を向ける輝矢。サイ蔵が険しい表情を見せ、河童の方を振り向くと、同じく険しい表情を見せていた河童が小さく頷いた。

「おいおいおいっ！何だぁ～？てめぇーっ！サイ蔵様に文句付けようってのかぁ！？」
「……？」
どこのヤクザかというくらい人相と態度悪く、サイ蔵を庇うようにして前へと出てくる河童とブタ。河童が輝矢を見下すように見る。

「お前らも退治屋とか言ってけど、怪しいなぁっ」
「ああっ！？」
輝矢とハチをじろじろ見ながら言う河童に、ハチが顔をしかめて声をあげる。

「もしかしてお前らが鬼人なんじゃねぇーのぉっ？」
「そうだブヒっ」
「んだとっ！？ふざけんじゃねぇっ！」
「せやせやっっ！！薄汚いイヌはともかく、こぉ～んなかわゆい鬼人がおるわけないやろぉっっ！！」
「だっれが薄汚いだぁっ！！」

――ざわざわざわっっ……！

「……っ！」
急にざわつき始める街人たちに、モンキと言い争っていたハチが思わず言葉を止める。

「鬼人っ？そういえば何となくっ……」
「人の振りをして街に入り込んだんじゃっ……」
「来る前にここの木を切ってきたのかもっ……」
「なっ……何だよっ……」
一斉に向く疑いの目に、戸惑うように後退するハチ。輝矢も厳しい表情を見せる。

「お前らがやったんだろっ！！」
「そうだっ！お前らが鬼人なんだっ！！」
「ちげぇーよっ！俺たちはっ……！」
「最早、どちらが正しいかは一目瞭然じゃなぁ……」
「うっ……！」
街人たちを味方に付け、輝矢たちを追い詰めるサイ蔵。サイ蔵が2人に冷たい目を向ける。

「ええ～そんなぁ～」
「お前、どっちの味方してんだよっ」
追い詰められていく輝矢とハチに、悲しげな顔を見せるモンキ。そんなモンキに河童が突っ込みを入れる。

「仕方ありません。ここは全員、ハッ倒して突破を……」
「一般市民を殺す気かっ！お前はっ！」
真剣な顔をして言う輝矢に、ハチが追い詰められながらも全力で突っ込む。

「にしてもどうしたらっ……」
『退治しろぉっ！！』
「どわあああっ！！」
「おぉーうっ！退治屋のガキどもじゃねぇーかぁっ！」
「へっ……？」

街人が輝矢とハチに飛びかかろうとした、ちょうどその時、聞こえてきた一つの声。ハチが目を丸くして顔を上げ、飛びかかろうとしていた街人も皆、振り向く。

「あっ！ホントっスねっ！おぉ～いっ！輝矢さぁ～ん、ハチくぅ～んっ」

「何やってんだぁ～？んなとこでっ」

「ごっ……ゴンっ……羊スケっ……」

皆が振り向いた先の道にいたのは、この前の羊の国での鬼人騒ぎで出会った、ゴンと羊スケであった。二人は目立つ黒いオープンカーに乗っている。

「おっおいっ、あれっ、オトポリの制服じゃっ……」

「オトポリと知り合いってことはっ……」

「それに今、確かに退治屋って……」

街人の疑いの目が徐々に消えていく。

「たっ……助かったっ……」

「ふぅっ……」

「あっ？何だ？」

肩を落として息をつく輝矢とハチに、ゴンは大きく首をかしげる。

「ほお……オトポリの方々と知り合いであるほどの退治屋の方じゃったかぁ」

サイ蔵は妙に企んだような笑みを浮かべながら、輝矢たちを見た。

「どうじゃ？ここは一つ、わしらと勝負せんかぁ？」

「勝負……？」

サイ蔵の言葉に、首をかしげる輝矢。

「ああ、先に鬼人を見つけ退治した方が勝ち。負けた方は退治屋を止め、即刻この街を出る……というものじゃ」
「いいですよぉ～」
「ええっ！！？」
あっさり返事をした輝矢に、ハチは大きく驚いた。

数時間後。

「はぁ～助かったぁぁ～～っ…」
力の抜けきった様子で呟くのはハチである。

「あのタイミングでゴンたちが来なかったら、俺ら鬼人として退治されちまってたぜぇ～……」
「ほぉ～んとゴンザレスが役に立つこともあるんですねぇ～明日は雨でしょうかぁ～」
「どういう意味だっ！こらっ！そして俺はゴンザレスじゃねぇっ！ゴンだっ！！」
安心しきっているハチの横で、明日の天気を心配しながら窓の外を見る輝矢に、ゴンが思い切り怒鳴りつける。街人たちに鬼人と疑われ、退治されそうになった輝矢たちであったが、都合よく現れたゴンたちのお陰で誤解も解け、難を逃れたのである。

「いっやぁ～俺は信じてたよぉ～っ！君たちのことっ」
「ウソつけぇっ！思いっきり疑いの目向けてたじゃねぇーかぁっ！！」
軽い口調で言いながらハチの足のつぼ押しをしているのは、先ほ

ど街の入口で出会った男・タコ吉。誤解の解けた輝矢たちは、とりあえずタコ吉の店で休むことにしたのである。

「だってぇ～サイ蔵様が仰ったことだしさぁ～」
「だってじゃねぇーよっ！」
「サイ蔵法師っスかぁ～」
「……？」
しみじみ呟く羊スケに、ハチが首をかしげる。

「羊スケ、あのじいさん、知ってんのかっ？」
「知ってるっスよぉ～サイ蔵法師様御一行って、オトポリ内でも結構有名な退治屋っスからぁ～」
オトポリ。正式名称：御伽警察。対鬼人用に形成された組織で、ゴンと羊スケはオトポリの警官なのである。

「この街以外にも、鬼人の被害に遭ってたところをサイ蔵たちに救われたって街がいくつかあるんスよ」
「へぇ～やっぱスゴいじいさんなのかぁ」
「どうだかなぁ」
「えっ？」
感心していたハチが、横から口を挟んだゴンの言葉に目を丸くする。

「どうだかなって？」
「どの街にしたってそうだが、ヤツらが倒したってゆーわりに、鬼人の目撃情報が出てなさすぎなんだよ」
ハチの質問に、曇った表情で答えるゴン。

「それにっ……」
「それに被害状況も妙ですしね」

「そうそうっ……って、俺が言おうとしたこと言うんじゃねぇーよっ！！」

ゴンに変わって言葉を続けたのは、珍しく真面目な顔をしている輝矢であった。先に言ってしまった輝矢を非難するゴン。

「妙って？」

「タコ吉さん、この街で起こった鬼人の被害をすべて教えていただけませんか？」

「ええっとぉ、ペットいじめ、畑荒らし、食料泥棒、井戸水汚し、屋根瓦割り、街のオブジェ破壊っ」

ハチの足つぼマッサージをしながら、次々と思い出していくタコ吉。

「そんで最後が今日の森の木切り倒しっ」

「どう思います？」

輝矢がマッサージを受けているハチに問いかける。

「どうって酷いことすんなぁとしかっ……」

「はぁっ……」

「何かムカつくなっ！その溜め息っ！！」

ハチの答えを聞いて深々と溜め息をつく輝矢に、ハチが顔をしかめる。

「確かに酷いことは酷いですが、鬼人がやったにしてはショボすぎるんですよ」

「ショボい？」

輝矢の答えに戸惑うように首をかしげるハチ。

「ええ、簡単に言うと私にもできるってゆーか」

「お前は基準にならんだろうがっ」

輝矢の例えに突っ込みを入れるハチ。

「今までの鬼人は皆、国主を殺して国を乗っ取ろうとしていました」
「ん～確かにっ……」
考えるように俯くハチ。今までの鬼人は二匹とも国に周到に潜入し、国主の命を狙っていた。それに比べると、今回この街に現れている鬼人は確かに妙だ。

「短期間でそう何度も鬼人が出るのも妙っスしねぇ～」
「こんな国主もいない雑種の街を狙うのは一層変ですよ」
「じゃあもしかしてっ……」
「あれかぁっ！この地方に出る鬼人はちょっと変わってるっつーことかぁっ！」
『……。』
すごいことを思いつきましたと言わんばかりに輝いた笑顔を見せて言い放つゴンに、皆が呆然と固まる。

「じゃあもしかしてっ……」
「ええ、サイ蔵は……」
「サイ蔵様は御伽界で一っ番強くって、一っ番優しい退治屋だぁっ！！」
『へっ？』
気を取り直して話を続けようとした輝矢とハチが、横から聞こえてくる幼い声に振り向く。

「あっ……お前っ……」
「……っ」
輝矢とハチに鋭い瞳を向けているのは、先ほどのサイ蔵に人が集まっていた時に、サイ蔵にサインを求めていた白髪の少年であった。

「イカ吉っ！」
「知り合いか？」
少年の名前を呼んだタコ吉に、ゴンが問いかける。
「弟ですっ」
「イカなのにっ！？」
「アイツ、名前はイカですけど、立派な蛸人ですよぉ～っ！」
「イカなのにっ！？」
笑顔で説明するタコ吉に、繰り返し驚くゴン。

「サイ蔵様の悪口を言うなんてっ……！やっぱりお前たち、悪いヤツじゃないのかっ！？」
「おっおいっ！イカ吉っ！」
輝矢とハチを指差して責めるイカ吉を、タコ吉が慌てて止めに入る。

「この人たちはなぁっ！あぁ～のオトポリも認める優秀な退治屋でぇっ……！」
「オトポリっていったってっ……！このお兄ちゃんっ！どう見ても悪役面じゃないっ！」
「んなっ……！！」
『プっ！』
イカ吉にその悪役面を指差され、思い切り顔を歪めるゴン。その光景にハチと羊スケが思わず吹き出す。

「何笑ってやがんだぁっ！てめぇーらぁっ！！」
「怒らない怒らないぃ～さらに悪役面になるっスよっ！ゴンさんっ！」
「てめぇーっ……」
宥めているのかバカにしているのかわからない羊スケに、ゴンは静かに拳を握り締める。

「お前たちなんかっ！サイ蔵様にこってんぱんに負けちゃえばいいんだっ！！」
「イカ吉っ……！」
タコ吉が止めるのも聞かず、そう言い放ってイカ吉が家を飛び出していく。

「すみません～～」
「ホント小憎たらしい弟さんですねっ」
「おいっ！」
笑顔で冷たく言い放つ輝矢に、ハチが突っ込みを入れる。

「あの子、街のオブジェが大好きだったんですよぉ～それを鬼人に壊されちゃってから酷く落ち込んでっ」
イカ吉のフォローを入れるようにタコ吉が話し出す。

「そこをサイ蔵様に救ってもらったんです……」
『……。』
タコ吉の穏やかな笑顔に、真剣な表情を見せる一同。

「あの子にとって……サイ蔵様は英雄なんですよ……」
「英雄っ……か……」
大切なものを壊され、その壊した悪いヤツを退治してくれたサイ蔵は、イカ吉にとって何よりも絶対的な存在なのかも知れない。ハチが少し気難しい顔を見せる。

「完っ璧、アウェイだよなぁ～けど勝負に負けるわけにはいかねぇーしっ」
「何故です？」
「おっ前が“負けた方は退治屋やめる”なんて勝負、あっさり受け

たからだろーがぁっ！」
「ああ、ノリで返事したアレですか」
「ノリで退治屋生命賭けたのかっ！？お前はっ！」
暢気この上なく答える輝矢に、マッサージ中でありながら全くリラックスできないハチ。

「ったく、どうすんだよっ！もしアイツらがでっちあげた鬼人なら、退治のしようなんてないしっ」
「そうですねぇ～」
輝矢が少し考え込むように俯く。

「とにかく鬼人の被害に遭った場所でも回ってみますかぁ～」
「まぁこのまま考えててもしょうがねぇーしなっ」
輝矢がゆっくりと立ち上がると、ハチもタコ吉のマッサージを終えて立つ。

「ゴンザレスとヒツジは街の方への聞き込みお願いします」
「おうっ！任せとけっ！」
ゴンの爽やかな返事に見送られ、タコ吉の店を出て行く輝矢とハチ。

「って何で俺様がアイツにコキ使われなきゃいけねぇーんだよっっ！！」
「一回返事しちゃったことに文句付けないで下さいよぉ～」
「そして俺はゴンザレスじゃねぇっ！！」
ゴンの怒声とともに、輝矢たちの調査が始まった。

第3章　サイ蔵法師サマ御一行　☆4

「うぅ～んっ……」
無残に破壊された、街のとある家を眺めながら、気難しい表情で唸り声を発している輝矢。もう日が暮れ始めており、街にはオレンジ色の光が差し込んでいる。

「鬼爪で攻撃されたというよりはハンマーか何かでバッコォンとやったような感じですねぇ～」
「そうだなぁ～」
輝矢の言葉にハチが頷く。
「井戸水汚しも食料泥棒も鬼人がやったにしては細かいっつーかショボいっつーかだったしっ」
「次は畑ですねぇ～」
色々と考えながら、輝矢とハチは畑へと移動していく。

「いっづもいづもあんがとぉ～ごぜぇ～ますだぁ～門貴さぁ～ん」
「いいってことよぉ～っ！」
『……？』
畑へと着いた輝矢とハチが、聞こえてくる声に気づく。

「あれはっ……」
「んっ？ああっ！かっぐやぁ～んっ！！」
畑の前で老婆と話していたモンキが、輝矢に気づき、笑顔となって駆け込んでくる。

「はいっ？」
「んぐっ！」

嬉しそうに飛び込んできたモンキを、顔面から足で受け止める輝矢。

「ほいっ」

――バァァァーンッ！

「ぐへぇぇっ！！」

輝矢がそのまま足でモンキを地面へと押し付ける。カエルが苦しんでいるような変な声を出すモンキ。

「そんなっ……お転婆なお前もっ……好きやっ……ぐふっ……」

「アホかっ」

輝矢の足の下で力尽きるモンキを見て、起き上がったハチが呆れた顔を見せた。

「でもでもぉこんなとこで会えるやなんてっ、二人の運命やったりしっちゃったりしっちゃっとうっ！？」

「しちゃってません」

輝矢の足の下でモジモジと動きながら浮かれきったことを言っているモンキに、きっぱりと答える輝矢。

「つーかお前、こんなトコで何やってんだよぉ？」

「へっ？」

「門貴さんはぁ、鬼人に荒らされたぁ～ウチの畑を直すのを手伝ってくれてるんでずぅ～」

「手伝いっ？」

畑の方からやってきたのは、皺の目立つ小柄な老婆であった。老婆の言葉にハチが目を丸くする。

「このサルがぁ～？」
「えええぇ～、私はこの通り、もう体が動きませんのでぇ～ひんじょ～に助かっておりますぅ～」
「まぁ困った時はお互い様やからなっ！」
モンキが笑顔を見せて立ち上がる。
「人助けはしちゃう性質(たち)っ……こんな俺ってどおっ！？輝矢んっ！」
「別にどうでも」
「ううっ……」
輝矢の淡白な反応に悲しむモンキ。
「お陰様でぇ～もうほっとんど元通りになってきますたぁ～ほんどに門貴さんはすばらしいお猿さんです～」
「えへへっ」
「そうですかぁ？」
老婆の言葉に、照れるモンキとあまり納得していない表情で返す輝矢。
「じゃあ婆ちゃんっ！明日もくっからなぁ～っ！」
「どうもぉ～」
モンキがいるところで詳しい話も聞けぬまま、モンキとともに畑を去る流れとなった輝矢とハチ。
「へっ？他の被害者んトコにも手伝いに行ってんのかっ？」
道中、モンキの話を聞いていたハチが、驚いたように声を出した。
「おうっ！俺、身軽やしわりと何でも器用にこなすねんでぇっ？」

モンキが得意げな笑顔で話を続ける。

「けど街のオブジェだけはどうにも直せんでなぁ～」

急に難しい表情を見せるモンキ。

「あっのオブジェ作ったヤツとは、どうも芸術的センスが噛み合ってへんみたいやね～んっ」

「つーかお前に芸術的センスがねぇーだけだろうがっ」

考え込むように腕組みをするモンキに、ハチが突っ込みを入れる。

「せやけど鬼人も酷いことしおうよなぁ～」

「えっ？」

「みんなが大切にしとうもん、平気で壊してっ……許せへんわっ」

「……っ」

その時のモンキの表情からは本当に鬼人に対する怒りが感じられ、ハチは少し戸惑うようにモンキを見つめた。

「まっ！せやから師匠の弟子になってんけどなぁっ！」

「そうっ……なのかっ……？」

今度は曇りない笑顔を見せるモンキに、ハチが少し言葉を詰まらせながらも聞き返す。

「おうっ！俺がなぁ～んもなくって腐っとった時に、師匠が言うてくれてんっ」

モンキが笑顔で話を続ける。

「“お前は人々の役に立つために生まれてきたおサルや”ってっ！」

「……っ」

輝いた笑顔を見せるモンキに、驚いたように目を見開くハチ。まっすぐな、そして完全にサイ蔵のことを信じきっている目。このモ

ンキが鬼人の振りをして街人の大切なものを破壊することなどできるだろうか。

「おいっ、アイツが鬼人のでっちあげなんかしてると思うか？」
「サルは見かけによりませんからね」
「けどよぉ」
「おっ！あれやでぇ～っ！街のオブジェっ！」
『……っ？』
モンキについて小声で会話をしていた輝矢とハチが、モンキの大きな声に振り向く。

「あれっ？」
「……。」
街の中央に、無残に破壊されて倒れている像。その前で、悲しげな表情のイカ吉が1人、佇んでいた。

「……？お前たちっ……」
やって来た輝矢たちを見て、表情をしかめるイカ吉。

「なんやっ！ボーズぅ～っ！もう暗なんのに一人で出歩いとったら危ないでぇっ？」
「……っ！門貴さんっ！？」
明るく声をかけるモンキを見て、イカ吉が急に目を輝かせる。

「門貴さんっ！？門貴さんだよねっ！サイ蔵様の弟子のっ！」
「えっ？あっああ～そうやけどぉっ？」
「ボクっ！超ゲキマジ本イキスペシャルファンなんですっ！」
輝いた目をモンキに向け、熱く語るイカ吉。

「如意棒操る姿とか最高にカッコ良くてっ！それでめっちゃくちゃ

強くってっ！」
「そんなぁ～照れるなぁ～っ」
誉めまくるイカ吉に、嬉しそうに頭を掻くモンキ。

「ボクっ！大きくなったら門貴さんみたいな強いサルになりたいんですっ！！」
「俺たちへの態度とはまるで違うな」
「というかサルにはなれないでしょう、イカは」
「いや、タコだって」
輝矢たちへの冷え切った態度とは一転して、何とも嬉しそうに語るイカ吉に不満の声を漏らす輝矢とハチ。

「おぉーうおうっ！いいボーズやぁ～っ！お前ならきっとなれるでぇっ！俺みたいなサルにっ！」
「ホントっ！？」
「だからサルにはなれませんて、イカは」
「いや、だからアイツはタコだって」
イカ吉の頭を撫で、少しカッコつけながら言うモンキ。さらに目を輝かせるイカ吉を見ながら、輝矢とハチはくだらない会話を繰り返す。

「おぉ～いっ！退治屋ぁ～っ！」
『……？』
聞こえてくる声に振り向く輝矢とハチ、そしてモンキ、イカ吉。
街の中央から畑の方へとやって来るのは、ゴンと羊スケであった。

「何かわかりましたか？ゴンザレス」
「偉そうに聞くなぁ！そして俺はゴンだぁっ！！」
輝矢の問いかけに、怒声のみを返すゴン。

「やっぱり街人で実際に動いてる鬼人見たって人はいなかったっスよぉ～輝矢さんっ」
「あっさり報告すんなっ！てめぇーもぉっ！」
「みんな、サイ蔵が倒した後の残骸しか見たことないそうっス。それもすぐ砂になっちゃったって」
「やはりそうですか……」
羊スケからの報告を受け、ゴンのことは無視して、考え込むように俯く輝矢。

「門貴、少し聞きたいことがあるのですが」
顔を上げて輝矢がモンキの方を見る。

「何々っ！？俺が動物占い何やとかっ！？」
「いえ、まったく興味ないです」
嬉しそうに勢いよく聞き返すモンキ。

「アナタ方がこの街で倒してきたという六匹の鬼人のことなんですが」
「へっ？鬼人？」
輝矢の問いかけにモンキが目を丸くする。

「レベル・形態、その他特徴を教えていただけますか？」
「へぇ～っ？」
さらに目を丸くするモンキ。

「さぁ～っ？」
「さぁってお前っ、見たことくらいあんだろっ！？」
大きく首をかしげるモンキに、横からハチが強い口調で問いかける。

「いっやぁ～俺っ、いっつも寝とって、その間に師匠たちがちゃっちゃと倒してまうからさぁ～」
「はぁっ！？」
「えっ……？」
モンキの言葉に顔を引きつるハチと戸惑いの表情を見せるイカ吉。
「じゃっ……じゃあっ！お前っ、鬼人見たことないのかっ！？」
「おうよっ！師匠がなぁ、“お前はいざという時のために力を温存しとけ”てさぁっ！」
モンキが誇らしげに語る。
「まぁそんだけ、俺への期待がデカいっちゅーこっちゃなぁ～っ！うんうんっ」
「なっ……」
満足そうに頷いているモンキを見ながら、唖然とした表情を見せるハチ。
「おいっ、まさかアイツ、本当に何も知らないんじゃっ……」
「有り得ますね。あのサル結構強いですから、本当に鬼人が現れた時のために仲間にしておいたのかも」
「ええ～？何々っ？」
小声で話している輝矢とゴンに、陽気に話しかけてくるモンキ。
「そんなっ……」
イカ吉がショックを受けた様子で俯く。
「もうこうなったらサイ蔵の所へ行って直接っ……」
「サイ蔵様は悪いヤツなんかじゃないっ！！」
「えっ？」
輝矢の言葉を遮って、大きな声をあげたのはイカ吉であった。

「やっぱりお前たちは悪いヤツだっ！悪いヤツだからサイ蔵様を追い出そうとしてるんだっ！」
「あのなぁ、俺らは根拠があっからこうしてぇっ……！」
「お前たちなんかサイ蔵様にやっつけてもらうっ！！」
「ああっ！おいっ！」
ゴンが止めるのも聞かず、どこかへ走り出して行ってしまうイカ吉。

「参ったなぁ～」
「何、わめいてたんやぁ～？あのボーズ」
困ったように頭を掻くゴンの横で、状況をまったく飲み込めていない様子で首をかしげるモンキ。

「でもサイ蔵んとこに行ったんならマズいなっ……おいっ！サルっ！俺らをサイ蔵んとこまで案内しろっ！」
「いっややねぇっ！だいったい誰も連れてくんなって師匠に言われてんねんっ！」
ハチの言葉を、あっさりと断るモンキ。

「頼みます、サル」
「喜んでいっ！！」
「おいっ！！」
輝矢の頼みにはあっさりと頷くモンキに、ハチは不機嫌な顔で声を荒げた。

第3章　サイ蔵法師サマ御一行　☆5

街のすぐ外・“実りの森”奥。実りの木に囲まれた一軒の山小屋。ここがサイ蔵たちが滞在している場所であった。山もすっかり夜が更けている。

「サイ蔵法師様、どうでブヒっ？」
「うむ？おおっ、今回も実に良いデキだ。九戒」
丸々と太ったブタの九戒が差し出した何かを見て、満足げに微笑むサイ蔵。

「これなら誰も疑わんじゃろう……」
サイ蔵が手に取ったそれは、鬼人の残骸に似せた、よく出来た石像であった。

「後はトドメを刺す振りをして、ハンマーで砕いて砂にしてしまえば良い……」
「もうそんな周到にすることもないんじゃないですかぁ～？街人は完っ全、俺らの力信じきってるしっ」
「念のためじゃよ。あの退治屋とオトポリのこともあるしのぅ……」
軽い口調で話す河童のコショーに答えながら、いやらしい笑みを浮かべるサイ蔵。

「でももしアイツらにオイラたちが鬼人退治でっちあげてるってバレたらどうするブヒぃ～？」
「バレはせんよ。勝負でわしらが勝てば、ヤツらは嫌でも街人に追い出されるじゃろうからな」
不安げに問いかける九戒に、サイ蔵が滑らかな口調で答える。
「足が付きそうになったら違う街へ行けば良い。どうせこの街もそ

ろそろ潮時じゃ」
サイ蔵が再びいやらしい笑みを浮かべる。
「もう壊すものもそうないからなぁ～っ！ハッハッハッハッ！！」
「そうですねぇっ！アッハッハッ！！」
「そうだブヒっ！ブヒヒヒっ……！ヒっ……ヒ……」
「あんっ？」
サイ蔵・九戒と同じように高らかと笑っていたコショーが、小屋の入口を見て、その笑みを止める。
「コショー、どうしたブヒ？」
「……。」
九戒の問いかけに答えることなく、小屋の入口へと歩いていくコショー。
「誰だっ！？」
「うっ……！」
『……っ』
コショーが勢いよく戸を開くと、そこには怯えた表情を見せたイカ吉が立っていた。イカ吉の姿を見たサイ蔵と九戒が眉をひそめる。
「てめぇー確か、街のっ……」
「いっ……今の話っ……って……」
イカ吉が震えた声で呟く。
「おっやぁ～？どうやら聞かれちまったみたいですよぉ～師匠っ」
「そいつは困ったな……」
「サイ……蔵っ……様っ？」
コショーの言葉に答えながら、ゆっくりとイカ吉の方へとやって

来るサイ蔵を、イカ吉がまっすぐに見つめる。

「サイ蔵様っ……サイ蔵様っ！ウソだよねっ！？サイ蔵様は鬼人たちをやっつけてくれた街の英雄っ……！」

「このガキ、どうしますぅ～？お師匠さんっ」

「殺すかのぉ」

「……っ！」

サイ蔵の冷たい笑みと言葉に、イカ吉が大きく目を見開く。

「いいブヒかぁ？」

「ガキが一匹殺される……鬼人が出たといういい演出となるっ……」

「……っ」

その冷たい笑みは、イカ吉の知っているサイ蔵ではなかった。

「酷い人ですねぇ～アッハッハッ！！」

「ブヒブヒブヒブヒっ！」

「ではっ……」

「うっ……！」

コショーと九戒の高らかとした笑いが響く中、サイ蔵がイカ吉へと手を振り上げる。表情を凍りつかせるイカ吉。恐怖で体など動かない。

「運がなかったのぉ……ガキぃっ！！」

「……っ！うわあああっ！！」

――バシィッ！

「えっ……？」

聞こえてくる接触音に、目を閉じ俯いていたイカ吉がゆっくりと目を開ける。

「あっ……」

開いた目を、もっと見開くイカ吉。

「門貴っ……さんっ……」

「……。」

イカ吉の前に立ち、サイ蔵の拳を受け止めていたのは、何とも険しい表情を見せたモンキであった。

「門貴、お主っ……」

「どうゆうことやっ……？今のっ……」

モンキが静かな表情で問いかける。

「どうゆうことや言うてんねんっ！！」

「門貴っ！これはなぁっ……！」

「コショー」

「……？お師匠さんっ？」

何とか誤魔化そうと声を出したコショーの前に手を出し、サイ蔵が止める。

「見た通りじゃよ、門貴」

「見た通りっ？って、まさかっ……！」

「そうこの街でも前の街でも、起こった鬼人騒ぎはすべて、わしらが自作自演じゃっ！」

「……っ！」

「……。」

ハッキリと答えるサイ蔵に、衝撃を走らせるモンキと辛そうに俯くイカ吉。

「街の何かを壊して鬼人のせいにし、鬼人の石像で倒したと見せかけ、街人に英雄視させた……」
「じゃあっ……今までのことは全部っ……」
「そう、これがお主を仲間にする前からやっておる、わしらのやり方じゃよっ」
ショックを隠しきれないでいるモンキに、冷たく笑いかけるサイ蔵。

「お主を仲間にしたのは、本物の鬼人が出た時の戦力と考えたのと、それとっ……」
サイ蔵が見下したような目でモンキを見る。

「騙しやすかったからじゃよぉっ！お前はバカで間抜けなサルじゃからなぁっ！ハッハッハっ！！」
「……っ！」

――お主は、人々の役に立つために生まれてきたサルなんじゃよ……――

思い出されるのは、出会った日のサイ蔵の笑顔。

「……っ」
モンキが強く拳を握り締める。

「そういえばそのガキ、街のオブジェを壊した鬼人を退治してくれたワシに感謝しとったガキじゃなぁ」
「……っ」
イカ吉のことを思い出したサイ蔵に、イカ吉が少し顔を上げる。

「あのオブジェを壊したのはなぁっ……ワシじゃよっ！！」
「……っ！」
――大切なオブジェを破壊するとは……許せんのぉ、鬼人はっ……
――
「うっ……！」
あまりの悔しさに、イカ吉の瞳から涙が溢れた。
「ボーズっ……。……っ！」
――ボォォォ～ンッ！
高々と笑うサイ蔵を見て、モンキは意を決したように顔を上げ、白い煙に包まれて人化をする。
「許さへんっ……お前だけは許さへんっ！」
人化した門貴が、サイ蔵に怒りの表情を見せる。
「何じゃあ～？そんなに騙されたことが悔しかったのかぁ～？」
「そんなんどうでもええっ！！」
「何っ……？」
門貴の言葉に眉をひそめるサイ蔵。
「俺は確かにアホで間抜けやっ……お前らみたいなんに騙された、俺が悪いっ……けどなぁっ！」
――いっづもいづもありがとぉ～ごぜぇ～ますだぁ、門貴さん――
――門貴さんだよねっ！？サイ蔵様の弟子のっ！――

過ぎる人々の笑顔。イカ吉の笑顔。

「……っ！」

サイ蔵に鋭い瞳を向ける門貴。

「純粋な人の思い踏みにじったお前らはっ……お前らだけはっ！絶対許されへんっ！！」

「反吐が出るほどまっすぐな言葉じゃのぅ……」

――ボォォォ～ンッ！

「なっ……！」

サイ蔵が白い煙に包まれると、次の瞬間、小さな小屋の天井を突き破るほどに巨大な灰色の体に、額に鋭い角を持った犀（さい）が姿を現した。

「“ミ犀（サイ）ル・ドリル”っ！！」

「んなっ……！」

――ドッヒュウゥゥーンッ！

「うわあああああっ！！」

「ボーズっ！クソっ！！」

その名の通り、ミサイルのような勢いでドリルのように鋭く突っ込んできたサイ蔵の角に、イカ吉とイカ吉を庇うように抱きかかえた門貴が小屋の壁を突き破り、軽々と吹き飛ばされてしまう。

「ううっ……！！」

森の木の幹へと背中を打ち付ける門貴。

「門貴さんっ！」

「怪我ぁ～ないかっ？ボーズっ」

門貴の腕の中で、不安げに門貴を見上げるイカ吉に、門貴が穏やかな笑みを浮かべる。

「ごめんなっ……お前をこんな目にっ……」

「門貴さんが謝ることじゃないよっ！」

「何とかお前だけでもっ……」

「させると思うかぁっ！？」

『……っ！』

二人へと突進してくる巨大な犀。

「如意棒っ……！」

「遅いわぁっ！！」

「……っ！」

門貴が如意棒を出そうとするが、サイ蔵のスピードの方が速く、二人に角が迫る。

「死ねぇぇっ！！」

「うわあああああっ！！」

「クっ……！」

再び突き出される鋭い角に、イカ吉が叫び、門貴が唇を噛み締める。

「アナタの方が死んだらどうです？」

「何っ？」

突進するサイ蔵の横から、飛んでくる足。

「どわあああっ！」

「……っ！」

急に吹き飛んでいくサイ蔵。サイ蔵のその巨体を蹴り飛ばした人物に、門貴が驚きの表情を見せる。

「輝矢んっ……」

「悪役女っ……」

そう、それは輝矢であった。

第3章　サイ蔵法師サマ御一行　☆6

「へっ……？どわあああっ！！」
「ブヒィィっ！！」

輝矢に蹴り飛ばされたサイ蔵の巨体が見事に小屋を直撃し、崩れていく小屋にコショーと九戒が押し潰される。

「輝矢んっ……！愛する俺のために必死に駆けつけてくれたんやなっ……！」
「違います」
「ってかお前が道案内してるくせに、先々行っちまったんだろうがっ」
目を輝かせて言う門貴の言葉をあっさり否定する輝矢と、突っ込みを入れるハチ。

「おっ……おのれっ……お主たちはっ……」
「まったく、とんだ悪徳法師ですねぇ」
ゆっくりと起き上がった、まだ蹴りが効いている様子のサイ蔵に、輝矢が冷たい表情を見せる。

「どうしてくれましょうか……？」
「うっ……！」
輝矢の冷たい笑みに、寒気を覚えるサイ蔵。

「クっ……！」

――ボォォォ～～ンッ！

「……？」

人の姿へと戻るサイ蔵に、輝矢が少し首をかしげる。

「皆のものっ！撤収じゃっ！！」

『アイアイサーっ！！』

「あれっ？」

サイ蔵の言葉に、元気よく返事をするコショーと九戒。三人は息ぴったりに素早くその場から逃げていく。その様子に目を丸くする輝矢。

「早く追って下さい、ゴン」

「おうっ！って、何で俺様がお前の指示を聞かなきゃいけねぇーんだよっ！」

「はいはいっ、とっとと行くっスよぉ～？」

輝矢に文句を言っているゴンを、車へと引っ張っていく羊スケ。

『ぎゃあああああっ！！』

「あれっ？戻ってきたぞ？」

何やら悲鳴のようなものをあげて戻ってくるサイ蔵たちに、ハチが首をかしげる。

「自首する気になったんスかねぇ～？」

「でも何か様子がへっ……」

「グワアアアッ！！」

「どおおえぇっ！？」
様子のおかしいサイ蔵たちを覗っていたハチが、サイ蔵たちの後方からやって来る巨大な緑色の鬼に、目玉が飛び出しそうなほどに驚く。

「鬼人っ！？」
『助けてぇっ！！』
追いかけてくる鬼人から必死に逃げてくるサイ蔵たち。

「スゴイ出来栄えですねぇ～どこからどう見ても本物っ……」
「だから本物だってぇのぉーっ！！」
「へっ？」
感心して鬼人を見上げていた輝矢が、サイ蔵たちの叫びに間抜けな声を出す。

「本物って……」
「だっから本物の鬼人が出てきちゃったって言っとるんじゃあーっ！！」
「ウソから出た誠というヤツですかぁ」
『感心してないで、とっとと助けてぇーっ！！』
声を揃えて助けを求めるサイ蔵法師様御一行。

「グワアアアッ！！」
「ひいいっ！！」
『お師匠様っ！』
「のわあああっ！！」
サイ蔵が鬼人の右手に捕まれ、勢いよく上空まで持ち上げられる。
身を乗り出すコショー、九戒と、鬼人の手の中で狂ったように叫ぶサイ蔵。

「お助けぇーっ！！」
「やれやれ……退治屋と名乗っていたわりに対鬼人用の力はまったく持ち合わせていないようですねぇ～」
助けをもおめるばかりのサイ蔵を見て、少し呆れた表情を見せる輝矢。

「仕方ありませんねぇ……“月器っ」
「……？」
ピアスに手を触れる輝矢に、立ち上がった門貴が気づく。

「三日月”っ」
『……っ！』
ピアスから剣のような武器へと姿を変える月器に、驚いた表情を見せる門貴とイカ吉。

「さてとっ」
「ええっ！？助けるのっ！？」
「へっ？」
驚いたように問いかけるイカ吉に、輝矢が振り返る。

「あんな“悪いヤツ”っ……！助ける必要なんかっ……！」
「でもっ……」
「……っ？」
イカ吉の言葉を遮り、まっすぐな瞳でイカ吉を見つめる輝矢。

「ここで助けないと、これから“イイヤツ”にだって、なれないでしょう？」
「……っ」
輝矢の笑みに、イカ吉が大きく目を見開く。

「……。」
輝矢とイカ吉の会話を聞き、少し考え込むように俯く門貴。

「……っ！」
イカ吉との会話が終わると、輝矢が三日月を構えて鬼人の元へと駆けていく。

「貴様だなぁっ！？最近ここいらで鬼人を退治しまくっているという御伽界随一の退治屋とはぁっ！！」
「いっえぇーっ！！違います違いますっ！それは尾ひれのついたウワサ話というかぁっ！」
「そうですよぉ～」
「へっ？」
「何っ？」
聞こえてくる声に、サイ蔵と鬼人が同時に顔を上げる。と、そこには三日月を振り上げた輝矢の姿。

「御伽界随一の退治屋はっ、この竹取輝矢ですからっ」
「うっ……！」
輝矢が笑顔で話しながら、素早く三日月を鬼人に振り下ろす。

――……っ！

「ぐわあああっ！！」
「のっはあああっ！！」
三日月に右肩から腹部までをナナメに切り裂かれ、叫び声をあげる鬼人。三日月の攻撃に力が緩んだのか、サイ蔵を掴んでいた右手が開かれ、サイ蔵が地面に勢いよく落下する。

「お痛つつつつつつっ……！！」
打った後頭部を痛そうに押さえるサイ蔵。

『師匠ぉ～っ！』
「んっ？おおっ！コショーっ！九戒っ！」
倒れこんでいるサイ蔵の元へと駆け込んでくるコショーと九戒。

「お師匠様っ！大丈ブヒかぁっ！？」
「ご無事で何よりですっ！」
「まったくだぜっ」
『へっ……？』
サイ蔵の元へと駆け寄ろうとするコショーと九戒の前に立ち塞がる人物。

「これからいぃ～っぱい聞かなきゃいけねぇーことがあんだからなぁっ……」
『うっ……！』
それは両拳の関節を鳴らしまくっているゴンであった。笑っているのにどうにも怖いゴンの顔に、コショーと九戒が観念したように足を止めた。

「まぁ確かに悪役面っスよねぇっ」
「そうだなっ……」
陽気に話しかけてくる羊スケの言葉に、呆れた表情で頷くハチ。

「おっのれぇっ！！“鬼口”っ！！」
「……っ“月器・十六夜”っ」

「うわああっ！！」
傷ついた鬼人がすかさず鬼口を放つが、三日月から変形した盾・十六夜にあっさりと跳ね返される。自らの鬼口を受け、苦しむ鬼人。

「おのれっ！“鬼爪・天回”っ！！」
「“月器・三日月”っ！」
飛んでくる十本の鬼爪を、三日月で一本ずつ弾いていく輝矢。

「はいっ、十本っ！」
「“鬼口”っ！！」
「うっ……！」
十本目を弾き落とし、少し油断した輝矢の元へ、再び鬼口が飛んでくる。

「クっ……！」
十六夜に変形させる間もなく、輝矢はギリギリのところで鬼口をかわす。

「避けていいのかぁ？」
「えっ……？……っ！」
含んだ笑いを浮かべる鬼人に眉をひそめた輝矢が、避けた鬼口の飛んでいく先を振り返る。

「へっ……？あっひゃあああっ！！」
その先にいるのは、先ほど鬼人の手の中から落下し、倒れこんだままのサイ蔵。飛んでくる鬼口に、サイ蔵が狂ったように悲鳴をあげる。

「しまっ……！」
『お師匠様ぁぁっ！！』

「クソっ……！」
「……っ」
「えっ……？」
サイ蔵を助けに行こうとしたハチの横から、ハチよりも素早くサイ蔵の元へと飛び出していくある人物。

「“如意棒”っ！」
『門貴っ！？』
「門貴さんっ……」
コショーと九戒が目を丸くし、イカ吉が戸惑うように見つめる中、如意棒を出して鬼口とサイ蔵の間に割って入ったのは門貴であった。

「第一の舞っ……」
サイ蔵の前に立った門貴が、向かってくる鬼口へと如意棒を構える。

「“空（くう）”っ！！」

――バァァァーンッ！

「何っ！？」
『……っ！』
門貴が如意棒を振り切ると、如意棒を包んでいた大気の集まりが鬼口へと当たり、その衝撃で鬼人の方へと勢いよく鬼口を弾き返した。鬼人や皆が驚きの目で見る。

「ぎゃあああっ！！」

自らの鬼口と門貴の技を受け、後方の木へと激しく吹き飛ばされる鬼人。

「すっげ……」

ハチも思わず唖然とする。

「……。」

鬼人に自分の技が当たったことを確認し、静かに俯く門貴。

「もっ……もももっ……門貴っ！」

そんな門貴へ、やっと起き上がったサイ蔵が声をかける。

「わしを助けてくれたんじゃなっ！？やはりわしの弟子はお前だけっ……！」

「……っ」

「ぐっはああっ！！」

『……っ！』

『お師匠様ぁぁっ！！』

都合のいい言葉を投げかけてくるサイ蔵を、門貴が振り返った途端に如意棒で吹き飛ばす。ハチやゴン、コショーと九戒も皆、驚いた表情を見せた。

『門貴っ！ってんめぇーお師匠様になんてことをっ……！』

「うるさいっ！！」

『すんませぇーんっ……』

凄まじい気迫の門貴に、大人しく謝るコショーと九戒。

「ぐっ……ぐふっ……」

「今の一発で俺を騙したことは全部チャラにしたるわっ」

倒れこんでいるサイ蔵に向かって門貴が言い放つ。

「イカ吉や街の人たちへの償いは、とことん生きてやってもらうでっ！」
「……はいっ……」
門貴の言葉に、サイ蔵は力なく頷いた。

「けどっ……」
「……っ？」
門貴がサイ蔵に背を向け、小さな声を落とす。

――お主は人々の役に立つために生まれてきたサルなんじゃよっ……――

「あの言葉だけはっ……貰っといたるわっ」
「……。」
どこか悲しげに呟いた門貴に、サイ蔵はそっと目を細めた。

「門貴さん……」
そんな門貴をまっすぐに見つめるイカ吉。

「……っ」
その様子を見て、少し笑みを浮かべる輝矢。

「クっ……！クソぉ～っ……！」
「……。」
輝矢がすぐさま表情を鋭くし、ゆっくりと起き上がる鬼人の方を振り返る。

「何だっ！？今の技はっ……！」

「さてとっ、そろそろ終わりにしましょうか、緑鬼さん」
「何っ？」
輝矢の言葉に、鬼人が眉をひそめる。

「三日月っ……」
「待っ……！待てっ……！！」
「鬼退治、いたしますっ」
「ううっ……！！」
必死に手を突き出す鬼人へ、輝矢が容赦なく三日月を振り下ろす。

――……っ！！

「ぎゃあああっ！！」

飛び散る血と、響き渡る断末魔。

「終わったスねぇ～」
「ああっ」
羊スケの言葉に頷くゴン。

「……。」
門貴が見つめる中、鬼人は砂と化して消えていった。

第3章　サイ蔵法師サマ御一行　☆7

翌日。“実りの森”。

『ふわぁ～っ』

サイ蔵たちに切り倒された木の一帯に集まったタコ吉や畑の老婆をはじめとする多くの街人たちが皆、目と口を大きく開けたまま一斉に声を漏らした。

『……っ』

街人たちの視界一面に広がるのは、桃色鮮やかな幾本もの満開の桜の木。

「いっやぁ～ははははぁ～っ」

唖然と桜の木を見上げる街人たちに、苦い笑みを向けるのはハチ。

「悪りぃなぁ、俺、木は桜しか咲かせらんなくってさぁ～」

サイ蔵たちに無残にも切り落とされた木たちを、ハチは昨日の戦いの後、“花力”を使って桜の芽を植え込み、その芽はたったの一日で立派な木を咲かせたのである。

「思いっきり季節はずれだし、この桜じゃ実、食えねぇーけどっ……」

「すんばらしぃーっ！！」

「へっ……？」

大声をあげるタコ吉に、ハチが目を丸くする。

「何と素晴らしい桜だぁーっ！！」

「ホントっ！キレイぃーっ！！」

街人からは次々と感嘆の声が漏れる。

「サイ蔵みたいな悪党の肩を持ち、あなた方を鬼人とまで言った我らにここまでしていただいてっ……！」

「申し訳ありませんでしたっ！そしてっ……本当にありがとうございましたっ！」

『ありがとうございましたぁっ！』

街人たちが一斉に輝矢とハチに頭を下ろす。

「いっ……いいってっ！誤解されたこととか特に気にしてねぇーしっ！」

「深く傷ついたので一人十チュンずつ払って下さい」

「おいっ！！」

金の請求をする輝矢に、ハチが勢いよく突っ込む。

「ボクもっ……ごめんねっ……」

『……？』

街人たちの一歩前へ出て、輝矢とハチに気まずそうに謝るイカ吉。

「そのっ……悪いヤツだって……散々言っちゃってっ…ホントごめんなさいっ！」

「イカ吉っ……」

深く頭を下げるイカ吉を見て、タコ吉が穏やかな笑みをこぼす。

「いいってっ！俺ら別に気にしてなっ……！」

「私にあのような失言の数々……決して許されることではありませんねっ」

「えっ？」

「おっおいっ！」

冷たく言い放つ輝矢に、何となく嫌な予感を感じて顔を引きつる

ハチとイカ吉。

「罰としてっ……」

「……っ」

輝矢を見つめ、息を呑むイカ吉。

「今後はアナタがこの街を守りなさいっ」

「えっ……？」

冷たい笑みではなく笑う輝矢に、イカ吉が戸惑いの表情を見せる。

「二度と私の手を煩わせないように。そうすれば許してあげます」

「……っ。うんっ！」

「……っ」

輝矢の言葉に笑顔で大きく頷くイカ吉。そんなイカ吉を見て、ハチもそっと笑顔をこぼした。

「じゃあ俺らはコイツらを本部まで連行してくっからっ」

『……っ』

鬼人に襲われてからはとても大人しくなったサイ蔵一行を車の後部席に乗せ、助手席の扉を開けたゴンが輝矢とハチに言う。

「それからそこでこっそり隠れてるサルっ」

『……？』

ゴンが森の木陰の方を向いて言うと、輝矢やハチ、街の人々の視線がそちらに集中した。

「あっ、門貴っ」

「……。」

木陰に隠れるようにして佇んでいたモンキに、皆が気づく。一斉

に注がれる街人たちの視線にモンキはどこか悲しげに俯き、離れたその位置から歩み寄ろうとはしない。

「コイツらの証言も取って、お前がこの鬼人でっちあげ事件には無関係だったことが立証された」

「じゃあアイツは無罪ってことか？」

「ああ、まぁ後は自由に暮らせっ！じゃあなっ」

「では失礼するっス～」

そしてゴンたちはサイ蔵一行を連れ、一足先にこの街を旅立っていった。

『……。』

モンキと街人たちとも間に立ち込める沈黙。

「アイツっ……やっぱ気まじぃのかなっ……」

「……。」

そんなモンキに表情を曇らせる輝矢とハチ。

「無関係だったっつったって、街の人が信じてくれっかどうかっ……」

輝矢とハチが不安げに見守る中、モンキと街人たちとの間に静かで気まずい空気が流れる。

「あっ……あのっ……」

ゆっくりと口を開くモンキ。

「俺っ……」

「門貴さんっ！ありがとうっ！」

「へっ？」
モンキが言葉を発しようとするその前に、モンキに笑顔で礼を言ったのはイカ吉であった。

「イカ吉っ……」
「門貴さん、あんがとぉ～ごぜぇ～ましたぁ～っ」
「えっ……？」
イカ吉に続くように礼を言う、昨日の畑の老婆。

「これは感謝の気持ちのバナナですぅ～」
「……っ」
老婆の差し出した大量のバナナを見て、モンキが唇を噛み締める。

「せっ……せやけど俺っ！サイ蔵の仲間やったしっ……！せやのにサイ蔵のしとること気づかんかったしっ！」
モンキが俯き、叫ぶ。
「お礼言ってもらう資格なんかっ……！」
「あんりますよぉ～」
「へっ……？」
老婆の言葉に、モンキがゆっくりと顔を上げる。

「門貴さんはぁ、一生懸命ウチの畑、耕し直して下さったじゃあないですかぁ～」
「ばあちゃんっ……」
「俺ん家の屋根瓦も直してくれたっ！」
「ウチの井戸水もキレイにしてくれたわぁっ！」
街人が次々に明るい声を出す。

『ありがとうございましたっ！門貴さんっ！！』
「みんなっ……」

笑顔で礼を言う街人たちに、モンキがその目を少し潤ませる。

「ありがとおっ！！」

バナナを受け取り、心から嬉しそうな笑顔を見せるモンキ。

「門貴さんっ」

「……？」

次々とお礼の品を渡す街人たちの最後に、イカ吉が門貴の前へと出る。

「色々あったけどっ……ボクっ！やっぱり門貴さんみたいな強いおサルさんになるよっ！」

「イカ吉っ……」

「だからサルにはなれませんて、イカは」

「だからアイツはタコなんだって」

変わらぬ輝く瞳を向けて、イカ吉がモンキに言う。感動しているモンキの横で、昨日と同じくだらないやりとりをしている輝矢とハチ。

「ああっ！頑張りやっ！」

「うんっ！」

『……っ』

モンキの言葉に、大きく頷くイカ吉。そんな2人を見て、輝矢とハチも笑みをこぼした。

「ああっ！でも俺っ！まだ街のオブジェの修理をっ……！」

「街も落ち着いたし、修理は街のみんなでやるよぉ～」

「そっそうかぁ？」

タコ吉の言葉に、モンキはオブジェを作りたかったのか、少し残

念そうな顔を見せる。

「じゃあ私たちはそろそろ行きましょうか」
「ああっ」
「おうっ！」
「ああっ！？」
輝矢の言葉にハチと同じように返事をするモンキに、ハチが勢いよく振り返る。

「なんっでお前が返事すんだよっ！！」
「へぇっ？だって俺、今日から一緒に旅する仲間やんっ？」
「誰がっ！いつっ！どこでどうなってそうなったんだよっ！！」
自然と答えるモンキに、突っ込みを入れまくるハチ。

「だって俺ぇ～、自由にしぃ～言われたけど、特に行く当てとかないしぃ～それにっ」
「それにっ？」

「輝矢んの心意気にどぉーんと惚れたぁーっ！！」
「はぁ～っ！？」
大声で愛を叫ぶモンキに、ハチがこれ以上歪まないくらい顔を歪める。

「俺はこの世の終わりまでもお前と一緒に行くでぇっ！輝矢んっ！」
「一人でっ……あっ、間違えた。一匹で行って下さい」
目を輝かせて言うモンキを、相変わらず冷たくあしらう輝矢。

「おっおいっ！どうすんだよっ！？」
「別にいいんじゃないですかぁ～？そこそこ強いし使えるかも」
「んな適当なっ……！」

「ひぃやっほぉっ！じゃあとりあえず行こかぁっ！次はバナナの国へっ！！」
「仕切んなっ！しかも何だぁっ！？バナナの国ってっ！！」

こうして、輝矢とハチの旅に、新たにサルの門貴が加わった。

また、とある“雑種の街”に、“サル”を象った英雄のオブジェが作られるのは、もう少し後の話である……。

第3章　サイ蔵法師サマ御一行　☆7（後書き）

3章終りです。
サルのモンキを仲間に加えた輝矢一行。
さてさて、次に待ち受けているものとは…？

第４章　不幸な女の青い鳥　★１

とある小高く美しい丘。爽やかな風の吹く、穏やかな地。

「どぉぉーーう考えてもおっかしいだろぉぉっっ！！」

に響き渡る、穏やかでない声。

「なんでっ！なぁぁーんでっ！あんだけ貰ったバナナが一晩でなくなるんだよっっ！？」

その穏やかでない声の主は、１匹の白いイヌ・ハチである。

「さぁ～？バナナの七不思議ちゃうっ？」

「バナナにそんなに不思議があってたまるかぁぁぁぁっっ！！」

ハチの怒声に適当に答える、１匹の茶色いサル・モンキ。その適当な返事に、ハチの怒りはさらに加速する。

「ったくっ！旅の貴重な食料をガッツリ食いやがってっ！」

「ハチ、そんなに食料が欲しいのなら、私が１つ、通行人を締め上げてっ……」

「だっから人の道に反することはすんなっつってんだろーがぁっっ！！！」

真顔で非道なことを言う輝矢に、力強く突っ込むハチ。

「あぁぁ～っ！かっぐやぁぁ～俺も腹減り過ぎて死にそぉぉ～～っ

っ！」

「安らかに餓死して下さい」

「ううっ……」

輝矢に冷たくあしらわれ、悲しい表情を見せるモンキ。

とある雑種の街でニセ退治屋・サイ蔵の悪事を暴いた輝矢たちは、サイ蔵に騙されていたサルの門貴を仲間にし、新たに1人と2匹の旅が始まったのである。

「だぁぁーっっっ！！！やっぱお前が悪いっっ！！クソザルっっ！！」

「ああっ！？やろうっちゅ～んかぁっっ！？アホイヌぅぅぅ～～っっ！！！」

しかしどうにも相性の悪いイヌとサルのお陰で、旅は一層騒がしくなっていた。

「何かお困りですか？」

『へっ？』

「……？」

上空から聞こえてくる声に、殴り合いを始めそうな空気であったハチ・モンキと、輝矢が上を向く。

『……っ』

上を見た3人が皆、目を見開く。

「私で宜しければ、お力になりますよ？」

輝矢たちが見上げた先の空にいるのは、青空と同じ、鮮やかな青色の羽根を持った1羽のトリであった。トリは可愛らしい笑顔を向け、囀(さえず)りのような美しい声で輝矢たちに声をかける。

「鳥っ……」

ハチがどこか悲しげにその翼を見る。

「ああ、申し訳ありません」

――――ボォォォォ～～～ンッッッ！！！――――

『……？』

トリが地面へと降下し、その体が白い煙に包まれる。

「私、コウノトリの獣人、幸(さち)コと申します」

「……っ！」

白い煙の中から現れたのは、先ほどのトリの羽根と同じ鮮やかな青色の長い髪に、大きく穏やかな緑色の瞳の美しい少女であった。少女が丁寧に微笑みかけると、モンキが大きく目を見開く。

「何かお困りの様子でしたのでお声をおかけしたのですが……」

「ずっきゅぅ～～～んっっっっ！！」

「えっ？」

モンキが叫んだ突然の擬音語に、幸コが目を丸くする。

――――ボォォォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！！――――

『……？』

輝矢たちや幸コが首をかしげる中、人化するモンキ。

「ああっ……実はめっちゃ困っててんっ……」

人の姿となった門貴がすかさず幸コに近寄り、その手を取る。

「アンタと出会ったことでっ……収まらへんくなったこの胸の高鳴りにっ……」

「えっ……？」

「くだらねぇーこと言ってんじゃねぇぇっっ！！！！」

「ぐおおおおおうっっっ！！！！」

妙にカッコをつけて言い放った門貴の後頭部に、ハチの飛び蹴りが炸裂する。

「せっかくイイ感じやったのに何すんねんっ！！このアホイヌぅぅっっっ！！！」

「なっにがイイ感じだっ！！女に会う度に軽口叩いてんじゃねぇーよっ！！この色ザルっっ！！」

「女が嫌いっちゅーお前のんがおかしいねんっ！お前、人生３０割損しとうでぇっ？」

「サルに人生語られたくねぇーよっっ！！しかも何だぁぁっ？３０割ってっ！」

「あっ……あのぉ～っ……」

ゴングを鳴らしたイヌとサルの終わりなき口論に、口を挟む隙もなく、幸コの方が困り顔を見せる。

「えっ……えっとっ、何かお困りなことはありませんか？」

「はいっ？」

気を取り直して、今度は輝矢に問いかける幸コ。

「そうですねぇ～」

輝矢が少し考え込む。

「十分愛情注ぎまくってるんですけど、どうにもハチが釣れないんですよぉ～どうしたらいいと思います？」

「えっ……？」

「くだらねぇーこと聞いてんじゃねぇぇっっっ！！！」

輝矢の発言に、ハチが顔を赤らめながら、門貴との口論を放り出して突っ込みを入れる。

「かっぐやぁぁぁ～～～俺にも愛情をぉ～っ」

「そんな余分な愛情は残っていません」

「ううっ……」

「あのぉ～お困りでないようでしたら私はこれでっ……」

「ちょちょちょっ……！ちょっと待てっ！！」

あまりにも自分たちのペースで生きている輝矢と門貴の様子に、諦めたように立ち去ろうとした幸コを、ハチが慌てて止める。

「俺ら旅の途中なんだけどっ、食料なくなっちゃって困ってんだっ」

「旅っ？」

物珍しそうに聞き返す幸コ。

「ああっ、それでこの近くに国か街かあれば教えてもらいてぇーんだけどっ……」

「それなら是非っ、私の街にいらして下さいっ！」

「えっ？」
急に笑顔となる幸コに、ハチが少し驚いたように目を丸くする。
「幸コチャンの街っ！？そんなぁ～いきなり両親に紹介なんてどないしょぉ～っ？」
「人語も理解できないのですか？サル」
妄想を繰り広げる門貴に、輝矢が冷たく一言入れる。

「ここから1時間くらいですからっ！私が道案内しますわっ」
「そっそうか、じゃあ頼もうかなっ」
「はいっ！」
笑顔で大きく頷く幸コ。

「あの街を訪れれば、きっと貴方がたも“幸せ”になれますわっ」
『幸せにぃっ？？』
幸コの言葉に、輝矢たちは皆、不思議そうに首をかしげた。

1時間後。

「僕と結婚してくれないかっ！？ヒトミっ！」
「まぁっ……！その言葉を待ってたのっ！ツトムさんっ……！」
幸せそうなカップル。

「お生まれになられましたぁぁーっっ！！元気な男の子ですよぉぉーっ！！」
「うおおおおーーっっ！！！たろぉぉぉーーっっ！！」
幸せそうな父親になったばかりの男。

「ワンワンワワンっ！」
「にゃ～んっ♪」
道行く普通のイヌやネコまでもが幸せのオーラを出している。

『……。』

「ここが私の住んでいる“幸ノ街”ですわ」
街の入口で呆然とした表情を見せている輝矢たちに、幸コが笑顔で紹介する。

その街は人はもちろん、イヌやネコまでもが幸せ全開の桃色でもしていそうなオーラを醸し出しており、外からやって来た輝矢たちとはかなり温度差のある空間となっていた。

「この街は住む者、訪れる者は皆、幸せにしてくれる“幸福の街”なんですよ」
「幸福の街？」
幸コの言葉に、首をかしげるハチ。

「ええ、この幸ノ街には昔から私たちコウノトリ一族が暮らしています」

『……？』
幸コが空を見上げるので、輝矢たちもつられて空を見上げる。と、街の上空には確かに多くのコウノトリが飛び交っていた。

「私たちには人を少しだけ幸せにできる“幸力（こうりょく）”が備わっていて、人々を幸せにするよう活動しているんです」

「それでみんな幸せオーラ全開なわけかっ……」

「他人の幸せってこうも鼻につくものなのですねぇ」

幸コの解説に、冷めた反応を示すハチと輝矢。

「今日も3丁目の大鳥サン、幸せにしてこなくっちゃっ！」

「私、今日は後3件も回らなくてはなのよぉ～」

空を飛ぶ2羽の青いコウノトリが、どこかうんざりした表情を見せながら、忙しなく飛び交っていた。

「ああして割り当てられた人の所を回っていくんですよ」

「へぇ～」

「下手な営業マンより大変ですね」

飛び交う青い鳥たちを見ながら、感心したように呟く2人。

「特定の人物の“専属ブルーバード”として活動しいるコウノトリもいますけどね」

「じゃあアンタが俺の専属の……いやっ、舞い降りたブルーバードっちゅーわけかっ……」

「はぁっ？」

またもやカッコを付けながらキザなセリフを吐き、幸コの手を取る門貴。

「あっ……あのぉ～っ……」

「何なら幸せついでに、このままゴールインってのはどっ……！」
「却下じゃっ！！ボケぇぇっっ！！」
「どゅおおおおうっっ！！」
幸コにプロポーズし始めた門貴に、再びハチの飛び蹴りが炸裂する。

「何ぃ～っ？俺が幸コちゃんに夢中やからって、かぐやん、嫉妬ぉお～～っ？」
「蹴ったのは俺だっっっ！！！」
「えっ？嫉妬っ……？」
「違げぇぇーっっ！！」
戸惑うように聞く門貴に、ハチが全力で突っ込みを入れる。

「とりあえず宿と食料の手に入るお店、教えてもらえません？」
「あっはいっ！」
「きゃあああああっっっ！！！！！」

『……？』
急に聞こえてくる女の悲鳴に輝矢や幸コ、ケンカ中だったハチと門貴も振り向く。

「ああっ……どうしましょっ……どうしましょっ……」
４人が振り向いた先にいたのは、黒いローブを纏った地味な３０代半ばくらいの女性。肌の青白く、少し窶れた顔をしていた。困った様子で街の中央にある噴水池の中を見ている。

「お財布がっ……どうしましょっ……」
どうやら財布を池の中に落としていまったようである。

「ミチルさんっ……？」
「……っ？」
眉をひそめて女性の方を見る幸コに、隣の輝矢が首をかしげる。

「でもお財布がないと困るしっ……よいしょっとっ」
女性が右手の裾を左手で捲り上げ、右手を財布の落ちている池の中へと伸ばす。
「んん～っ！ふわぁっ！きゃあああああっ！！」

「あっちゃっ！」

――――ドッボォォォォーーンッッッ！！！！――――

バランスを崩し、キレイに頭から池の中へと落ちていく女性。門貴が思わず頭を抱える。

「ミチルさんっ！！」
思わず声をあげる幸コ。

「おいっ！イヌっ！行くでぇっ！」
「えっ！？いやっ、でもっ、俺っ、女はっ……」
「人助けやっ！ごちゃごちゃ言いなっ！」
「うっ……わっわあったよっ！」

――――ボォォォォォォ～～～ンッッッ！！！！！――――

渋りながらも門貴に急かされたハチが桜時の姿となり、門貴とと

もに池にはまった女性の元へと駆けていく。

「おおぉ～いっ！大丈夫かぁっ！？おばはんっ！」

「ぐほぉっ！ぬほおっ！なはあっっ！！」

浅い池の中で何故か溺れている女性に、門貴が声をかける。

「掴まりぃっ！」

――――パシィィィィィッ！！――――

「……。」

門貴が女性へと伸ばしたその手の手首に、しっかりと捕まる桜時の手。

「何でお前が掴まんねんっ！！」

「いやっ、だからぁ、お前が掴んだらぁ俺が一緒に引き上げるからぁっ」

「男に手掴まれたって何も嬉しないわっ！とっとと手離せぇっ！！」

「ああっ！？元はと言えばお前が手伝えっつーからだなぁっ！俺は女が嫌いなのも押してっ……！」

「女に触れんとか今時ありえんこと抜かしとうお前が悪いんやろがぁぁっっ！！」

「んだとぉぉっっ！！？」

女性を助けに行ったというのに、女性のことはそっちのけで口論を始める桜時と門貴。

「ぶはあああぁっっっ！！！ううううっっ！！」

『へっ？』

溺れる寸前の女性が、必死に門貴と桜時の手を掴み、その手を強

く引く。傾いていく体に目を丸くする2人。

『うわあああああああっっっ！！！』

――――ドッボォォォーーンッッッ！！！――――

勢いよく池にはまる桜時と門貴。

「ハチさんっ！？門貴さんっ！？」

「あららぁ～」

焦る幸コの横で、至って冷静な表情を見せている輝矢。

「あらっ……足が付くわっ……」

今更ながら池底に足が付くことに気づく女性。

「あらっ……？」

『……。』

女性の前には、池にはまりズブ濡れとなった桜時と門貴。2人を見て、女性が目を丸くする。

「俺たちには……幸せの青い鳥は来てねぇーみたいだなっ……」

「そうやなっ……」

諦めたように呟いた桜時の言葉に、門貴は力なく頷いた。

第４章　不幸な女の青い鳥　★２

「ふわぁぁぁぁぁーーっっくしょんっっ！！！」

豪快なくしゃみをしたのは、派手なピンク色の髪もズブ濡れ状態の、全身タオルにくるまった桜時である。

「ううっ……！」

「わたっっっしのせいで申し訳ありませんっっ！！」

「うおおおっっっ！！！近けぇぇぇっっっ！！！！！」

寒気を感じて震え上がる桜時の目の前に現れる、先ほど池にはまっていた女性。その至近距離に桜時がさらに寒気を覚える。

「俺の半径１ｍ以内に近づくんじゃねぇっ！！」

「申っし訳ありませんっ！！申しっ訳ありませんっっ！！！」

「人の話を聞けいっっ！！」

桜時の怒鳴りを無視して、桜時に縋り付くように謝り続ける女性に桜時が強く突っ込む。

女性のお陰で池へとはまり、ズブ濡れになってしまった桜時と門貴。それから助けに入った幸コが女性と顔見知りだったこともあり、桜時たちは女性の家へと案内されたのであった。

「ほらほらっっ、ミチルさんも頭拭いてっ」

「ああ、幸コちゃん、いっつもいつっもごめんなさいねっ……って、あらっ？」

――――ツルンっ……！――――

「きゃあああああああっっっ！！！！」

――――――ドッスゥゥゥゥゥゥーーーンッッッ！！！！！――――――

床の水滴に足を滑らせたミチルが、顔面から豪快に転ぶ。

――――――ドンっ！ズサンっ！バンっ！ガッコォォーンっっ！！！――――

「ぎゃあっ！ううっ！のんっ！んんっ……」

ミチルが転んだ衝撃で、次々と落ちていく棚の皿やコップ。落ちていくものはすべて見事なまでにミチルの頭を直撃する。頭に物を受けすぎて、力尽きていくミチル。

「うわっっちゃぁ～っ！不っっ幸ぉぉ～～っっ」

そのミチルの様子を見て、思わず目を伏せるモンキ。

「ホント、絵に描いたような“不幸女”ですね」

「今日、蟹座占い最下位でしたからっ……」

「がぁぁぁぁーーんっっ！！俺も蟹座やっっ！！！」

「つーか占いの問題なのかっ……？」

冷たい輝矢の一言にミチルが上に落ちてきた皿やらを手にしながら起き上がる。ショックを受けている蟹座のモンキにちょっとした疑問を投げかけるハチ。

「あんたも青い鳥呼んだ方がいいんじゃないのか？」

『……っ』

「……？」

ハチの言葉に同時に表情を曇らせるミチルと幸コ。その様子に輝矢は少し眉をひそめた。

「ああっ！そうだわっ！」

「うおっ！！だっから近けぇぇってっっ！！」

急に立ち上がり駆け寄ってくるミチルに、再び突っ込む桜時。

「ズブ濡れにしてしまったお詫びに、今晩は是非、ウチに泊まっていって下さいっ！！」

「いやっ……それはちょっとっ……」

「そうと決まったら晩御飯の材料を買って来ないとっ！」

「だから人の話聞けってっっ！！」

桜時の返事を聞くことなく、１人でどんどん話を進めてしまうミチル。

「どないするん～？輝矢んっ」

「ん～不幸がうつりそうで嫌ですが、宿代浮くのは魅力的ですからねぇ～」

モンキの問いかけに、少し悩みながら答える輝矢。

「では早速買い物に行っ……！あらぁっ？」

『げっ』

何やら嫌な予感がし、顔をしかめる輝矢たち。

――――グキっ……！！――――

「きゃあああああっっっ！！！！」

張り切って出かけようとしたミチルが、玄関先で勢いよく足を捻り、その場にしゃがみ込む。

『……。』

その不幸というかドジっぷりに、言葉も出ない3人であった。

「で……？」

不機嫌な表情を見せる輝矢。

「どうして私が買い物などにわざわざ出かけなくてはならないんです？」

「しょーがねぇーだろぉー？あの人に行かせたら、永遠に晩飯食えなそうな空気だったんだからぁー」

そんな機嫌の悪い輝矢を宥めるように言うのは、輝矢の前を歩くハチ。

ミチルを買い物に行かせることに危機を覚えたハチは、自ら買い物に行くことを進み出たのである。

「まったくっ……」
うんざりしたように呟く輝矢。
「まっ確かに1人で行かせたら、次は恐竜にでも追われてそうな感じやもんなぁ～っ！あのオバはんっ」
「幸福の街にもあんな人がいんだなぁ～」
「コウノトリ呼ぶ金ないんちゃう？」
「コウノトリ呼ぶのに金いんのかっ？」
「そりゃあー幸せにしてくれるねんでぇっ？」
「……。」
ハチとモンキの会話を聞きながら、先ほどのミチルと幸コの曇った表情を思い返す輝矢。何かがありそうな、そんな空気を醸し出していた。
『待てぇぇっ！！！！こらぁぁっっ！！！』
『……？』
横路地から聞こえてくる、あまり穏やかではない声に輝矢たちが振り向く。
「クっ……！んっ？」
『……っ』
後ろを警戒するような素振りを見せながら、横路地から輝矢たち

の前へと飛び出してくる1人の少年。青々とした鮮やかなサラサラ髪に、大きく赤い瞳が特徴的な愛らしい顔立ちをしていた。年頃は15，16であろうか、少年が輝矢たちの方を見る。

「……。」

少年が少し考えるように下を向く。

『待てぇぇぇーーっっっ!!!クソガキぃーーっっ!!』

「……っ」

『……？』

その少年を追うようにして、横路地から現れるイカつい顔のいかにもゴロつきといった風貌の男3人。男たちを見て、少年が厳しい表情を見せる。

「毎っ度毎度、ウチの売り物ササミチーズつまみ食いしやがってっ!今日という今日は勘弁ならねぇっっ!」

男の1人がかなり怒った様子で声を荒げる。

「覚悟はできてんだろーなぁっ!!?クソガキぃぃぃっっ!!」

「……ううっ……!」

『ふぇっ？』

急にしゃがみ込む少年に、首をかしげるゴロつきの男たち。

「ううぅっ……！！ごめんなさいっ……！！」
少年はその場で泣き崩れ、その大きな赤い瞳からポロポロと涙を流す。

「ボクっ……！ボクっ、本当はこんなことっ……！したくなかったんだっ……！！でもっ……！！」
声を震わせ、泣きながら話を続ける少年。

「この人たちがっ……！」

『へっ……？』

少年が涙ながらに指差したのは、輝矢たち3人。

「この人たちがっ……！！盗んで来ないとボクの可愛らしい顔をボコボコにするぞってっ……！！」

『えっ……？えええええっっっ！！！？』
少年の言葉に、息ぴったりに声をあげるハチとモンキ。

「おっ……！おまっ……！急に何言ってっ……！」
『うおおおぉぉぉ～～っっ！！』
「ああっ！？」
ハチが少年に問いかけようとした時、激しい声が路地に響き渡った。

「何てっ……！何て酷な話なんだぁぁぁぁぁっっ！！！」
「あんまりだぁぁぁっっ！！！」
「クソガキ可哀相ぉぉぉぉっっ！！！」

「ええっっ！！？」
ハチが振り向いた先では、イカつい顔つきのゴロつき3人が少年の話にもらい泣きして泣きじゃくっていた。
「バカ言うなっっ！！今のはアイツが適当に言っただけでっ……！」
「せやせやっ！俺らは何にもっ……！」
「そんなっ……！ボクっ……」
『あの目がウソついてる目かぁぁっっ！！』
『うおっ』
再び悲しい目を見せる少年に、一気に燃え上がるゴロつきたちの闘志。さすがのハチもモンキも気圧される。
「あぁぁーんないたいけな少年を脅すとは許せんぞぉぉっ！！！お前らぁぁっっ！！」
「だっから違うっつってっ……！！」
『問答無用ぉぉぉっっ！！！』
「だあああああっっっ！！！」
ハチの言葉を聞くことなく、飛びかかってくるゴロつきたち。
「お前なぁっ！一体、何のつもりっ……！あっ？」
――――ボォォォォォォォーーーーンッッッ！！！！――――
『……っ』
少年の体を白い煙が包むと、次の瞬間、白い煙の中から青空へと1羽の青いトリが羽ばたいていく。

「後よろしくぅ～っ」

『……っ！』

青いトリは可愛らしい笑顔でニッコリと微笑み、空へと飛び去っていく。その笑顔に顔を引きつりまくるハチとモンキ。

『あんのっ……クソどりぃぃぃっっ！！！』

『ぎゃあああああああっっっ！！！！』

怒りのままに声と拳を突き上げたハチとモンキにより、ゴロつき2人が軽々と吹き飛ばされていく。

「おおぉ～息ピッタリですねぇ～」

「ウチのササミチーズを返せぇぇぇっっ！！」

「……っ」

感心していた輝矢に、最後に残ったゴロつきのリーダー格の男が殴りかかる。

――――バァァァァァーーーンッッッ！！――――

「ぎゃあああああああああああっっっ！！！！」

自分の2倍はありそうな大きな体格のゴロつきを、一瞬にして踏み倒す輝矢。輝矢に踏みつけられ、地面に体をめり込ませたゴロつきが悲鳴にも似た叫びをあげる。

「だぁーかぁーらぁ、ササミチーズなんて知らないと言っているでしょうっ……？」

「はひっ……すみまへぇんでひたっ……」

輝矢の凍りつきそうな冷たい視線に、ゴロつきは大人しく謝った。

「何々だよっ！！あっのクソ鳥はぁぁっ！！！ああーっ！丸焼きにしないと気が済まねぇっ！！」

両手に買い物袋を持ち、2本足で歩くハチが、怒りの収まらない様子で叫ぶ。罪を着せた上にとっとと飛び去っていったあの青い鳥への怒りは、買い物を終えてもまだ収まりきらないのであった。

「ああっ！俺が如意棒で串焼きにして、焼き鳥として食ってやらな気が済まへんわぁっ！！」

同じように買い物袋を両手に抱えながら、激しい怒りを見せているモンキ。

「そんな物騒なことを言ってはいけませんよ、2匹とも」

『へっ？』

穏やかな口調でそう言う、特に買い物袋は持っていない輝矢。ハチとモンキが目を丸くして振り返る。

「精々、跡形もなくしてやるくらいに踏みとどまらないとっ」

「お前が1番物騒だろうがぁぁっっ！！」

「そんな物騒なお前も好きやでぇぇぇっっ！！輝矢んっ！！」

笑顔で物騒発言をする輝矢に、力強く突っ込むハチと愛を叫ぶモンキ。

そんなこんなと青い鳥への怒りを語っているうちに、3人はミチルの家へと帰り着いた。

「ただいっ……」

「きゃあああああああっっっ！！！！！」

――――ドンガラガッシャンバァァァーーンッッッ！！！――――

「まっ……」

扉を開けた途端に聞こえてくる悲鳴と破壊音に、“ただいま”を言っていたハチの表情が曇る。

「って、大丈夫かぁぁっっ！！？」

「今度は何やったんやぁ～」

慌てて家の中へと入っていくハチと、少し呆れたような顔を見せる輝矢とモンキ。

「ミチルさんっ！？うっ……！」

部屋に駆け込んだハチの表情が凍りつく。

「だっ……大丈夫ですっ……」

物の激しく散乱したリビングの中央で、弱々しく蹲っているのは

ミチル。髪も服も乱れており、まるで嵐の中を歩いてきたような状態となっていた。

「いっ……一体、何やったんだっ……？」

「いえ…お部屋のお掃除をしようと掃除機のスイッチを入れたら、掃除機からミニ台風が発生しましてっ……」

「どんな掃除機だよっっ！！」

「うわっちゃああ～っ」

ハチがミチルに突っ込みを入れている中、部屋に輝矢とモンキが入ってくる。

「こりゃ晩飯の前に大掃除やなぁ～」

「え～」

モンキの言葉に不満げな声を出す輝矢。

「んっ？幸コちゃんはぁっっ？」

モンキが買い物に出かける前はいた幸コの姿がないことに気づく。

「ああ、幸コちゃんなら幸福回りがあるからって、さっき……」

「ぐわぁぁぁぁーーんっっ！！」

ミチルの返答に、激しくショックを受けるモンキ。

「俺はっ……！俺はっ……自分の幸せを見失ってもたっ……というわけで掃除を頼む、イヌ」

「何が“というわけ”だよっっ！！掃除したくねぇーだけだろっ！！てめぇーはぁっっ！！」

「それにしても……」

「……？あっ、すみませんっ……」

ハチとモンキの言い合いを聞きながら、輝矢がミチルに駆け寄り、蹲っていたミチルに手を差し伸べる。輝矢の手を取り、ゆっくりと起き上がるミチル。

「よいしょっとっ……」

「ちょっとはコウノトリに頼んで、“幸力”をかけてもらった方がいいのではないですかぁ？」

「……っ」

「……？」

輝矢の言葉に、どこか悲しげな笑みを浮かべるミチル。輝矢はそのミチルの様子にまた眉をひそめる。

「だっから幸コちゃんがいなくなって掃除する活力がぁっ……！」

「いいからとっとと片付けやれっっ！！」

「ただいまぁー」

『へっ？』

「んっ？」

ハチとモンキの口論が続く中、“ただいま”と言って部屋へと入ってきたのは見覚えのある青髪の少年。

ハチ、モンキ、少年が目を丸くして互いを見る。

「あっ……」

『あああああああっっっ！！！！』

勢いよく声をあげるハチとモンキ。それは、先ほどハチたちに罪

を着せて逃げ去ったあの鳥の少年であった。

『おっ前っ！！』

「さっきはどうもぉ～ワンコさんとおサルさんっ」

「どうもじゃねぇっ！！丸焼きにしてやるっ！！」

「串焼きにして焼き鳥として食ったるわぁぁっっ！！」

笑顔を見せる少年に、今にも飛びかかりそうな勢いで怒鳴りつけるハチとモンキ。

「まぁまぁ2匹ともっ」

そんな2人を宥めて、少年の前へと出る輝矢。

「私が跡形もなくしてやりましょうっ……」

「うっ……」

輝矢の冷たい笑みに、さすがの少年も顔を引きつる。

「覚悟はでっ……」

「おかえりなさい、由雉（ゆきじ）」

「ええっ？」

少年に容赦なく月器を向けようとしていた輝矢であったが、横のミチルが笑顔で少年を迎えたため、間の抜けた様子で肩を落とした。

「おかえりっ……？」

「輝矢さんたちと知り合いだったの？」

「うん、まぁ何てゆーか、この人たちが泥棒の疑いをかけられてた所を颯爽と助けてあげたってゆーか」

『ウソをつけぇぇっっ！！！』

少年の言葉に、同時に突っ込みを入れるハチとモンキ。

「まぁ、それはイイことをしたわねっ」
「うんっ」
「だっからウソだっつってんだろーがぁぁっっ！！」
笑顔で頷きあうミチルと少年に、ハチがもう1度突っ込みを入れる。

「つーかコイツ、誰なんやぁ～？ミチルさんっ」
「ああ、ご紹介しますね」
モンキの問いかけに、ミチルが笑顔で少年に手を向ける。

「私の“専属ブルーバード”の由雉です」

『えっ…？えええええええええっっっ！！！？』

部屋にハチとモンキの叫び声が響いた。

第4章　不幸な女の青い鳥　★3

数分後。

「せっせっせっ、せっせっせっ」
掃除機が巻き起こした嵐により荒れ果てたリビングを、言葉通りせっせと片付けているハチ。

「サルっ、これ棚の上に置いてぇー」
「あいよぉ～」
ハチがトスしたダンボールを持って、軽々と棚の上へと飛び上がるモンキ。
「ついでに棚の上の掃除ぃー」
「あいよぉ～」
ハチがトスしたハタホウキで、モンキが棚の上を掃除する。
「せっせっせぇ～せっせっせぇ～っ」

「むっ」
モンキが掃除している棚の上から落ちてきた埃が、下でゆったりとソファーに座っている由雉へと降りかかる。

「ちょっとぉ～埃舞ってるんだけどっ」
「へっ？」
由雉の声に、モンキが下を向く。

「もっと丁寧にやってよ。それとここの床の縁も掃除してぇ～」
「ああっ、すんませんっ……って、何でお前に小姑的なこと言われなあかんねんっっ！！」
1度は謝ったモンキが、何か違和感を感じて怒鳴りあげる。

「ってか何で俺らが掃除しとって、お前が座ってんねんっ！！」
「そうだっ！お前も手伝えっ！」
モンキの怒鳴り声に合わせて、ハチも不満げに由雉に怒鳴りかける。

「……ううっ！ボク、か弱いから部屋が埃っぽいだけで頭痛がっ……！」
『ウソをつけぇぇぇっっっ！！！』
急に弱々しく蹲る由雉に、ハチとモンキが同時に突っ込みを入れる。

「絶対お前のせいだろっ！？ミチルさんが不幸なのってっ！」
「せやせやっ！お前みたいな薄情トリ、“あなたを幸せにします”ってキャラちゃうでぇっ！！」

「……。」
２人の言葉に、由雉が少し目を細める。

「何で他人をわざわざ苦労してまで幸せにしてあげなきゃいけないのぉ～？」
『ああっ！？』
やる気なく言う由雉に、顔をしかめるハチとモンキ。

「だいたいこの街どうかしてんだよ～幸せって他人に貰うもんじゃなくって自分で手に入れるもんでしょ？」

「うっ……！なかなか正論なこと言いよってからにっ……！」
由雉の正論っぷりに、返す言葉を詰まらせるモンキ。

「だぁ～かぁ～らぁ～、ボクはだぁ～れも幸せになんかしないのっ」
「幸せにしないならまだしも不幸にしてんだろっ！不幸にっ！」
「……ううっ……！」
睨みながら指差すハチを見た途端に、由雉がソファーので泣き崩れる。
「あんまりだよっ……！誰かを不幸にするなんて酷いことっ……こんな純粋なボクができるはずないのにっ……！」
「いや、するだろ」
「誰が純粋やねん」
泣き崩れた由雉に、まったく同情することなく冷たく一言入れるハチとモンキ。
「……。」
ハチやモンキと戯れている由雉を、ダイニングテーブルの椅子に座って、どこか気難しい表情で見つめている輝矢。特に掃除を手伝おうとしている気配はない。
「醤油ベースとお塩ベース、どちらがお好きですか……？」
台所に立ち、晩御飯の支度をしているミチルが、輝矢へと問いかける。
「どっちも嫌いなんで、味噌ベースでお願いします」
「味噌っ……？どこにしまっ……あらっ？きゃあああああっっっ！！！！」
「……。」
味噌を探して冷蔵庫を開けたミチルが、冷蔵庫の中から溢れ出し

てきたものたちに押し潰される。その光景を見て、もう段々馴れてきたように呆れた顔を見せる輝矢。

「ったく、何やってんのぉ～？冷蔵庫の中くらいキレイにしときなよっていつも言ってるじゃ～ん」

「そうよねぇ……ごめんなさいっ」

「……っ」

笑顔を見せて謝るミチルを見て、由雉はすぐさま目を逸らして顔をしかめた。

「……。」

冷蔵庫から出てきたものを片付けながら、どこか悲しげな表情を見せるミチル。

「……っ」

そんなミチルと由雉に、輝矢は少し眉をひそめた。

翌日。

「もう1日いるぅぅぅっっ!!?」

朝っぱらからミチルの家に大きな声が響き渡る。

「ええ」

その大きな声に、いつもの平静な表情で頷く、ティーカップ片手の輝矢。

「何でぇっ!?こんなまったく幸せのやって来ない幸せの街なんてとっとと出た方がっ……!」

「何となく居たいので居ます」

「えええぇぇぇーーーっっ!?」

そんな適当な理由に、不満げな表情を見せるハチ。

「おい、モンキぃ～、お前からも何とかっ……」

「ひゃっほぉぉぉーーいっ!幸コちゃん探しに行ってこよぉ～っ!」

「……。」

もう1日滞在することが決まり、機嫌よく出掛けて行くモンキに、ハチが固まる。

「わかったよっ、じゃあ俺はもう1回寝っ……」

「あっ、ちょうど良かったっ!お散歩付き合ってぇ、ワンコくんっ」

「ああっ!?」

ソファーの上に寝転がろうとしたハチを、横から抱えあげて、玄関の方へと歩いていく由雉。

「ちょっ……!何すんだよっ!俺は寝るっつってっ……!」

「ほらほらぁ～ボク、可愛い顔してるじゃない?だからぁ悪い年上の女が寄ってこないよう番犬してぇ～」

「いやっ!俺っ、年上の女相手じゃ気絶するしっ……ってか待って

って！まだイイなんて一言もっ……！」
「行ってきまぁ～すっ」
「行きたくねぇぇーーっっっ！！！」
ほぼさらわれるようにして、由雉とともに出掛けていくハチ。

「随分と慌てて出掛けて行きましたねぇ」

「ふぅ～っ、やっと干し終わったわぁ……」

「……？うっ……」
声が聞こえ振り向いた輝矢が、ベランダから戻ってきたミチルを見て表情を引きつる。

「あらっ……？皆さん、もう出掛けてしまわれたんですか？」
ベランダで洗濯物を干してきたのか、洗濯籠を片手に部屋へと戻ってきたミチルは、髪も服も乱れており、山で遭難にでも遭ってきたような有様であった。

「何で洗濯物干しただけで、そうボロボロになるんですかねぇ……」
「それが……干し始めた途端に地域限定竜巻みたいなものが襲いかかってきまして……」
「はぁっ……」
笑顔で話すミチルを見て、深々と溜め息をつく輝矢。

「見事なまでの不幸っぷりですね」
「今日、蟹座、占い１０位でしたからっ……」
「……。」
笑って答えるミチルに、輝矢が少し真剣な顔つきとなる。

「青い鳥が付いているのに……？」

「……っ」

輝矢の問いかけに、ふいに表情を曇らせるミチル。

「ミチルさん……彼は本当にコウノトリなのですか……？」

「……。」

その問いかけに、ミチルはそっと俯いた。

一方、由雉に連れられ、無理やり散歩に連れ出されたハチ。

「でぇ？散歩ってどこ行くんだよっ？まったササミチーズ盗み食いに行くとかじゃねぇーだろーなっ？」

相変わらず幸せそうな人々の行き交う道を、由雉と並んで歩いていくハチが由雉へと問いかけた。随分と朝っぱらから出掛けたものだから、まだ商店街の店もあまり開いていない。

「別にぃ～行くとこなんかないけどぉ？」

「はぁっ！？」

由雉のやる気のない返事に、大きく顔を歪めるハチ。

「じゃあ何だって散歩に出てきたんだよっ！！？」
「ん～？何となくかなぁ～」
「クッソっ……どいつもコイツもっ……」
輝矢と同じようなことを言う由雉に、ハチは怒りを感じて前足を強く握り締めた。
「それにっ……あんまりミチルさんと顔合わせたくないんだよね」
「えっ……？」
由雉が不意に漏らした呟きに、ハチが少し驚いたように顔を上げる。
「それってどういうっ……」
「由雉っっ！！」
『……？』
前方から聞こえてくる由雉を呼ぶ声に、ハチと由雉が前を見る。
「あれはっ……」
「幸コ」
前方からこちらへと駆けてくるのは、昨日、ハチたちをこの街まで案内してくれた幸コであった。幸コは何やら慌てたような表情を見せている。
「幸コ、何か用？」
「それがっ……！」
「さっちこちゃぁぁぁーーんっっ！！」

「ぎゃぷっ！」
「ええっ？」
ハチを踏み潰して、勢いよく幸コの前へと飛び出してくるのは、明るい顔、声、動きのモンキであった。

「こんな街中で出会えるなんてぇ、やっぱ俺らって運命のカッポォっっ！！？」
「あっ……あのっ……」
「俺と2人で幸せの街の人々さえ羨むほどの幸せの作り上げっ……！」
「アホなこと言ってないで、とっととどけぇぇーーーっっ！！」
「ぎゃうううう～～～っっ！！」
勢いそのままに幸コにプロポーズしようとしたモンキを、ハチが下から突き飛ばす。

「ったくっ！」

「で、何の用？」
「えっ？あっ、ああっ、うんっ」
ハチとモンキのことを特に気にする素振りなく、再び幸コに問いかける由雉。幸コが気を取り直して頷く。

「大変なのっ！噴水池の“幸福の出目鯉”がっ……！」

「えっ……？」
「出目鯉？」
幸コの言葉に、由雉とハチが眉をひそめた。

幸ノ街中央。噴水池。

「あああっ……！！わたっ……！私の大っ切な大切な出目鯉がっ……！」

「お気を確かにっ！街長っ！」

「１匹ずつ水槽に移し変えて丁重に運べぇぇーっっ！！」

噴水池の前には多くの街人が集まり、混乱状態となっていた。池にプカプカと浮いている鮮やかな模様の出目鯉を、１匹ずつ丁寧に水槽に移し変えて運んでいく者たち。その者たちの横で鯉を見ながら、頭を抱えている太めの中年男。どうやらこの街の街長のようである。

「うっわぁ～何やぁ？たかが鯉にえらい騒ぎやなぁっ」

「あの鯉はこの街の幸福の象徴なんです」

「幸福の象徴？鯉が？」

「はい。初めてこの街に我々コウノトリ一族が降り立った時に、共に連れてきた鯉だそうで……」

「ナルホドなぁ～」

幸コの解説に、モンキが感心したように頷く。

「昨日までは元気だったのに、今朝世話係の人が来たら、全匹弱りきって池に浮いていたそうです」
「せやけどそんなに大変なことちゃうんじゃっ……」

「だっ……誰だぁぁぁっっ！！私の大切な出目鯉に何をしたぁぁっっ！？」

『……？』
街長である太めの男が、集まっている街人に向かって叫ぶ。

「お前かっ！！？お前ではないのかっ！？それともお前かっっ！！？」
街人たちを次々と指差して、問い詰めるように聞いていく街長。

「何やぁ～？あのオッサン、感じ悪いなぁ～」

「おっ……！俺、見たぞっっ！！」

『……？』

そんな中、集まっていた街人の1人が手を挙げて声を出した。そちらに皆の注目が集まる。

「昨日っ……！ミチルが噴水池にはまってるトコっ……！！」

「なっ……！」
『……っ』
その男の言葉に、由雉やハチたちが表情を変える。

「それならボクも見たっ！何か見慣れないヤツらと一緒に池でバタバタやってんのっ！」
「私も見たわっ！！」
次々と声を出していく街人。

「ミチルだとぉぉ～～っっ！？」
街長が怒った顔で、ミチルの名を口にする。

「よぉぉぉーーーしっ！問い詰めてやるっ！ミチルをここへっ……！」

「ちょっ……！ちょっと待ってよっっ！！」
「んんっ？」
側近の者にミチルを連れてくるよう命令しようとしていた街人に、思わず声をあげたのは由雉であった。街長や街人たちの視線が由雉に集まる。

「お前はミチルのところのっ……」

「池にはまったって、たったそれだけのことでミチルさんを疑う気っ！？そんなのおかしいよっ！」

「何だとっ？」
由雉の言葉に、街長が眉をひそめる。

「そうだそうだっ！だいたいミチルさんがんなことするわけねぇーしっ！」
「それに俺らがミチルさん引き上げた時は、その鯉、ピンピンしとったでぇっ！！」
由雉に並ぶようにして、街長に訴えるハチとモンキ。

「んん？何だぁ？あのイヌとサルはっ！」
「昨日、ミチルと一緒にいた者たちだそうです。何でも旅の途中で立ち寄ったとかっ」

「旅の者ぉぉ～？怪しいな」
『……っ』
街長が疑いの目をハチとモンキに向ける。

「お前たちがミチルとツルんでやったのではないかぁ？」

「だぁーっから違うっつってんだろっ！！」

「そうだよ。この人たちが疑わしいのは確かだけど、ミチルさんは無関係さっ」
「お前なぁっ！人がフォロー入れてやってんねんからフォローで返せやっ！！」
ミチルのみを庇い、特にハチたちを庇う気のない由雉に、モンキが突っ込む。

「どうだかなぁ～っ！なんせミチルはっ！“不幸を呼ぶキジ”なんか飼ってっからさぁっっ！！」

「……っ！」

その時、街人の1人が発した言葉に、由雉の表情が凍りつく。

「キジっ……？」

「ちょっとっ！そんな言い方っ……！！」

目を丸くするハチ・モンキと、怒ったようにそう言った街人を見る幸コ。

「確かにっ！出目鯉たち、みぃ～んなミチルの不幸菌にやられちまったんじゃないのぉっ？」

「おお～っ！怖っ！感染したくねぇぇーっっ！！」

『あっはっはっはっはぁぁ～～っっっ！！』

「……っ」

街人たちの笑い声に、歯を食いしばり、強く拳を握り締める由雉。

「だいたいミチルはさぁっ！」

「……っ」

「ふえっ？」

――――バッコォォォォーンッッッ！！！！！――――

「ギャアアアアっっっ！！！！」

『……っ！』

さらにミチルへの愚弄の言葉を続けようとした街人の1人を、モンキが飛び蹴りで景気よく吹き飛ばす。驚きの表情となる由雉を初

めとするそこにいる者たち。

「ふぅ～っ」

「ふうじゃねぇっっ！！何やってんだよっ！！お前はぁぁぁっっ！！！」

「うおっ！」

着地して一息ついたモンキに、ハチが全力で突っ込みを入れる。

「いやぁ～だってついっ……」

「ついじゃねぇーよっ！ついじゃあっっ！！」

苦笑いを見せるモンキを、容赦なく攻め立てるハチ。

「だいったいお前は後先考えずに行動しすぎなっ……！」

「おいおいっ！あのサルたちもミチルの不幸菌にやられちまってるんじゃっ……！」

「……っ」

「ふえっ？」

――――バッコォォォーーンッッッ！！！！――――

「ぎゃあああぁっっっ！！！！」

「……って、何してんねんっっ！！お前っ！！」

「……っ！」

またしても愚弄するような言葉を吐いた違う街人を、今度はハチが飛び蹴りで吹き飛ばした。

「うおおおーっっ！！何してんだぁぁっっ！！俺ぇぇっ！！」

着地したハチにモンキが突っ込みを入れるが、ハチは自分のした行動に苦悩するように頭を抱える。

「あの危険さ、間違いないっ！アイツらが出目鯉弱らせた犯人だっ！」
「捕まえろっっ！！」

『……っ』
街人たちが敵意のこもった目でハチとモンキを見つめ、2人を包囲する。2人は表情を鋭くし、敵意を向けてくる街人たちを突き上げるように睨んだ。

「確かについやっちまったことだっ」
「ああっ後先まったく考えてへん行動やっ……せやけどなぁっ」

――――ボォォォォォォォーーーンッッッ！！！――――

2人が一斉に人化する。

『人を笑う奴に幸せになる資格はねぇぇっっっ！！！』

『うおおおおーーっっっ！！！捕まえろぉぉーーっっ！！』

桜時・門貴と、街人たちとの間で乱闘が始まる。

「大変っ！由雉っ！私、輝矢さん呼んでくるからっ！」
「……。」
その場に由雉を残して、走り去っていく幸コ。由雉は幸コの言葉

に返事することなく、ただまっすぐに街人たちと殴り合っていく桜時と門貴の姿を見つめていた。

「……熱くなっちゃって…バカみたいっ……」

そう呟いた由雉は、どこか泣きそうな表情を見せていた。

第４章　不幸な女の青い鳥　★４

その頃、ミチルの家。

「では由雉は“雉人”の……？」

「ええ。群れからハグれたのでしょう、１人彷徨っていた所をコウノトリ一族の群れに拾われたそうです」

ダイニングテーブルに向かい合って座る輝矢とミチルは、２人とも真剣な表情を見せていた。

「拾われた由雉はこの幸せの街で、コウノトリとして生き始めました……」

「……。」

伏せ目がちに話すミチルを見ながら、輝矢が少し目を細める。

「そんな時です……あの子が私の前に現れたのは……」

――――ねぇっ、ボクをあなたのブルーバードにしてよっ！――――

笑顔で舞い降りた青い鳥。

「はじめは私を幸せにしようと必死に頑張ってくれていたのですが……」

「キジに幸力はありませんからね……人を幸せにできるはずもない……」

「そう……あの子も思っているんです……」

「えっ……？」
ミチルの言葉に、首をかしげる輝矢。
「自分はキジだから幸せにはできない……と……。でもね、輝矢さん……」
「輝矢さんっ！ミチルさんっ！」
『……？』
そこへ慌てた様子で幸コが駆け込んでくる。
「幸コちゃん？どうかしっ……」
「大変なんですっ！ハチさんと門貴さんが街の人たちと乱闘騒ぎになっちゃっててっ……！」
「ええっ？」
「……っ」
幸コの言葉に、輝矢は眉をひそめた。

再び、噴水池前。

「おっらぁぁぁーーっっ！！」
『ぎゃあああああああああああっっ！！！！！』
「たりゃあああああああっっっ！！！！！」
『ぐおおおおおおうううううっっっ！！！！！』
人だかりの真ん中で、どんどんと街人を吹き飛ばしていく桜時と門貴。

「ああっ！もうほとんど倒しちゃってるっ……！」
輝矢とミチルを連れて戻った幸コが、圧倒的な強さで街人を倒しまくっている桜時たちを見てマズイ顔をする。
「輝矢さんっ！早くお2人をお止めしてくださっ……！」

「おっりゃあああああっっっ！！！！！」
「うっ……！」
桜時の後方から、桜時へ向けて鍬を振り下ろす男。

「……っ」
「ぎゃあああああああああっっっ！！！！！」
を、蹴りで軽々と吹き飛ばす輝矢。

「まったく、ウチのハチに何てことしてくれるんですかぁ」
「お前……鬼相手じゃねぇーんだから、ちったぁ手加減しろよ……」
冷たく言い放つ輝矢に、少し呆れた表情を向ける桜時。

「ああっ……！止めてもらうつもりがっ……！」
「事態悪化だねっ」
止めるどころか乱闘にあっさりと参戦している輝矢に、頭を抱え

る幸コ。そんな幸コの横で呆れきった様子で呟く由雉。

「……？」

由雉の横を通って、ミチルが街長の元へと歩いていく。

「ミチルさっ……」

「すみませんでした……」

「えっ……？」

『……？』

街長の前に立ち、深々と頭を下げるミチル。そのミチルの行動に由雉は驚いたように目を開き、乱闘をしていた輝矢や桜時たち、街人たちも動きを止めた。

「私が池に入ってしまったことで……出目鯉さんたちに何かショックを与えてしまったのかも知れません……」

ミチルがもう1度深く頭を下げる。

「本当にっ……申し訳ありませんでした……」

「……っ」

頭を下げるミチルを見て、唇を食いしばる由雉。

「ふんっ！謝ればいいというものではないわっ！」

まだ顔を上げないミチルに、街長は冷たい言葉を投げかける。

「次やったら街を追い出すからなっ！鯉は運び終わったかっ！？」

「はっはいっ」

「なら行くぞっ！鯉の手当てをせねばっ……！」

「はっはいっ！」
そう言って街長と側近や、鯉の入った水槽を持った者たちが次々と去っていく。街長たちが去ったことで、集まっていた街人たちも自然と噴水池の前から去っていった。

『……。』
その場に輝矢たちと、ミチル、由雉、幸コの６人だけが残る。

「ふぅ……」

「何でっ……何で謝ったの……？」

「えっ……？」
やっと頭を上げたミチルに、由雉が厳しい表情で問いかける。

「だって鯉に何にもしてないんでしょっ！？」

「覚えはないけれど……昨日、私が池にはまったことが原因になってしまったのかも知れないでしょう……？」
非難するように問いかけた由雉に、ミチルが穏やかな笑顔を見せる。

「ほらっ……蟹座今日、１０位だったし……私の星回りの悪さが鯉さんたちに影響してっ……」
「そうやっていつもいつもっ……自分が悪かったって平気で頭下げるよねっ……」
「由雉……？」
俯いたまま、どこか震えた声を発する由雉に、ミチルが少し首をかしげる。

「言えばいいでしょっ!?ボクがいるせいで不幸なんだってっ!!」

「由雉っ……」

顔を上げた由雉は、泣きそうな顔で強くミチルを攻め立てた。

「追い出せばいいでしょっ……!?幸せを呼ばないっ……ただのキジなんていらないってっ……!!」

『……。』

由雉の叫びを、輝矢たちは何も言えないまま、ただ見つめる。

「同情でもしてるのっ……？」

「……っ。由雉っ……！私はっ……！」

「もうそんなのっ！たくさんなんだよっっ！！」

「由雉っ……！」

――――ボォォォォォォーーンッッッ!!!!――――

由雉が雉化して、大空へと飛び立っていく。

「由雉っ……！あらっ？きゃあああああっっっ!!!!!」

「うわちゃっ！」

由雉を追おうと走り出したミチルが、３歩で足首を捻り、その場に転がり込む。

「大丈夫かぁっ？」

桜時と門貴が転がり込んだミチルへと駆け寄る。

「由雉っ……由雉を追って下さいっ……」
ミチルが必死に顔を上げ、まっすぐな瞳で輝矢を見る。
「お願いしますっ……！」
「……。仕方ありませんねっ……」
必死に懇願するミチルを見て、輝矢は少し肩を落とした。
「私はキジを追いますので、ミチルさんをお願いしますね」
「任しときぃっ！俺が幸コちゃんの傍にずっとおるでぇっ！」
「そっちじゃねぇーよっ」
景気よく返事する門貴に桜時が突っ込みを入れている中、輝矢は由雉を追ってその場を去った。

第4章　不幸な女の青い鳥　★5

――――申し訳ありませんでした……――――

何度、あの姿を見ただろう。
いつもあの人は、自分を責めるように深々と頭を下げる。

「……っ」

――――ボォォォォォォーーーーンッッッ！！！――――

「はぁっ……！はぁっ……！はぁっ……！」
キジから人の姿へと戻って、街のはずれの森へと降り立つ由雉。

――――私が悪かったのよ……ほらっ、蟹座、今日11位だったし……――――

――――そうよねぇ……私が悪いわ、ごめんなさい……――――

不幸な目に遭って、周りがそれをキジである由雉のせいだと言っても、ミチルはいつもそう言って自分のせいにしては謝っていた。
自分が悪いのだと笑って言った。

「なんで……」
由雉が地面に膝を付き、力なく呟く。

「なんでっ……！」
「何故でしょうね……」
「……っ？」
背後から聞こえてくる声に、由雉が少し驚いたように振り返る。
そこに立っていたのは輝矢であった。

「君っ……なんでっ……」
「ミチルさんにアナタを追うよう頼まれましてね」
「ボク、飛んできたのに追いつくの速すぎじゃない？」
「私に追いつけないものなんてあるはずないでしょう？」
「はぁっ……」
由雉が不思議がりながらもとりあえず頷く中、輝矢はゆっくりと由雉に歩み寄り、由雉の横へと膝をつく。

「何しにっ……来たのっ……？ボクっ……下手な励ましとかいらないんだけどっ……」
「まったく励ます気はないので、ご心配なくっ」
「あっそお……」
冷たい笑顔でハッキリと言い放つ輝矢に、少し呆れた表情を見せる由雉。

「本当のことだけ……言いに来ました……」
「本当のこと……？」
輝矢の言葉に、由雉は戸惑うように顔を上げた。

その頃、街はずれの森。輝矢と由雉のいる辺りから少々離れた地点。

「由雉っ！由雉っ！？あらっ？」

森の中を歩きながら、必死に由雉の名を呼んでいたミチルの前に、木陰から何かが飛び出してくる。

「ガルルルルぅぅぅっっっ！！！！」

それは獰猛そうな、野生のトラ。

「ひっえええええええっっっっ！！！！！！」

「ガルルルルっっ……！！！！」

震え上がるミチルに、トラが飛び出していく。

「助けてぇぇぇぇぇぇーーっっっ！！！！！」

「ぎゃあああああっっっ！！！！近寄ってくんなぁぁぁぁっっっ！！」

逃げ込んでくるミチルから、必死に逃げるハチ。

「はいはいっ！」

――――バッコォォォォォーーンッッッ！！！！！――――――

「きゅうううううぅぅぅぅ～～～～っっっ」

「ちぃ～っと大人しく寝といてやっ！」

ハチを追うミチルを追っていたトラの額に蹴りを食らわせ、あっさりと気絶させるモンキ。その動きはかなり手馴れた様子。それもそのはず、こうしてミチルがトラに襲われるのは、もう早5回目なのである。

「それにしてもこの森のトラ、ちょぉ～っと気ぃ、立ち過ぎなんちゃう？」

「いつもは大人しいんですけどっ……」

モンキの問いかけに、戸惑ったような表情を見せる幸コ。

「一体、どうしちゃったんでしょうか……」

「まぁ幸コちゃんのことはがっちり俺が守ったるから安心しぃっ！オバハンもあんま勝手に動かんとっ……！」

「由雉ぃぃっっ！！！」

「って、聞けいっっ！！」

モンキの忠告を聞くことなく、由雉を探してどんどん森へと入って行ってしまうミチル。

「ったくもうっ！大人しく輝矢がキジ連れて帰ってくんの、街で待っとけばええのにっ！」

「居ても立ってもいられねぇーんだろ」

面倒臭そうに言うモンキに、ハチがどこか穏やかな顔つきで答える。

「孔雀さんもあんくらいだったらいいのにっ……」

「こんにゃくぅ？」

「別に何でもねぇっ」

思わず漏らした呟きを、ハチは適当に誤魔化した。

「きゃあああああああっっっ！！！！！」
『……っ』
先を行くミチルが悲鳴をあげる。
「きゃあああああああっっっ！！！！」
「だあああああああああああっっっ！！！！」
再び駆け込んでくるミチルから、再び必死に逃げ惑うハチ。
「またトラかぁ～？」
「トラっ……！トラトラトラトラっ……！」
「やっぱトラかぁ～」
ハチを追いかけているミチルにモンキが問いかける。ミチルは引きつった表情で前方を指差している。
「トラももう飽きっ……なっ……！？」
「これはっ……！」
ミチルの指差している前方を見たハチとモンキの表情が変わる。
そこには傷ついた獰猛なトラが、何頭も倒れこんでいた。皆、何者かに襲われたような傷を負っている。
「どういうこっちゃっ……」
「まさかトラたちの気が立ってたのって……」
『グワアアアーーーッッッ！！！！』
『……っ！』
聞こえてくる雄たけびに、ハチとモンキが顔を上げる。

『ガアアアアアアーーーッッッ……』

「鬼人っ！？」

「きゃあああああああああっっっ！！！」

傷ついたトラたちの向こうから現れたのは、濁った黄色の肌を持った角２本の巨大な鬼、３匹。その禍々しい姿にミチルと幸コが震え上がる。

「黄鬼っ……！レベル２かっ」

「さっすが蟹座１０位っ！黄鬼３匹とは桁が違うでぇっ！！」

――――ボォォォォォーーーンッッッ！！！！――――

すぐさま人化して、それぞれ村雨丸と如意棒を構える桜時と門貴。

「輝矢ん抜きで大丈夫やろかぁ？」

「やるしかねぇーだろっ！行くぞっ！」

『グワアアアアアーーーッッッ！！！！』

桜時・門貴と、鬼人３匹との戦いが始まった。

そんな大変な頃。再び、輝矢と由雉側。

「本当の……ことって……」

「はい。アナタはたかだかキジなんですから、誰かを幸せにするなんて大それたことできるはずないですよ」

「ぬなっ……！」

笑顔で歯に衣着せぬことをスッパリ言い放つ輝矢に、さすがの由雉もその愛らしい表情を引きつった。

「確かにっ……励ましに来たわけじゃないみたいだねっ……」

「私、そういう無駄なこと、好きじゃないんです」

少し呆れたように言う由雉に、淡白に答える輝矢。

「それにアナタ、自分で言っていたじゃないですか」

「えっ……？」

「幸せは青い鳥に与えてもらうものじゃない。自分で手にするものなのだと……」

「それはっ……」

由雉がどこか気まずそうに下を向く。

「その通りだと思いますよ」

「……っ？」

輝矢が由雉に笑顔を向ける。由雉は少し戸惑うように目を丸くした。

「人は誰しも幸せを手にしようと、幸せになろうとする……そういう生き物です」
「……。」
輝矢の言葉を、まっすぐに輝矢を見つめながら聞く由雉。
「だから逆を言えば、自分が不幸である状態では決して留まらない」
「……っ？」
由雉が少し首をかしげる。
「何故、ミチルさんがアナタを追い出さないか、アナタと一緒に居続けるのか……それはっ……」
輝矢がまっすぐに由雉を見る。
「“幸せ”だから……ではないのですか？」
「えっ……？」
教えられた答えに、戸惑いの表情を見せる由雉。
「そんなっ……ボクを飼ってるってだけであんな言われ方してるのにっ……幸せなはずっ……」
「それを決めるのは、ミチルさんでしょう……？」
「……っ」
その問いかけに、由雉がハッとした表情となる。
「幸せかどうかを見定める努力くらい、してもいいと思いますけど？」
「……。」

迷うように俯く由雉。

「おいおいっ！見たかぁ～っ？」

『……っ？』

上空から聞こえてくる声に、顔を上げる輝矢と由雉。

「森の向こう側に鬼人が出たらしいぞぉ～っ！しっかも3匹っ！」

「マジっ？街に連絡行ってんのかぁ？」

「ああっ、もう厳戒態勢に入ってるってよぉ～」

「……っ」

森の上空では営業帰り風のコウノトリが2羽、世間話をしていた。

その世間話の内容に、輝矢が眉をひそめる。

「けっど俺見たんだけどさぁ、ミチルと旅の連中が、もう鬼人に出くわしちまってたぜぇ～」

「えっ！？」

「……っ」

そのコウノトリの言葉に、驚きの表情を見せる輝矢と由雉。

「ちょっとっ！その話っ……！」

「“月器・上弦”」

「へっ？」

上方へ向かって身を乗り出した由雉の横で、輝矢が静かに右耳のピアスを弾く。

――――バァァァァァーーーンッッッ！！！！！――――

『ぎゃあああああああああっっっ！！！！！』

輝矢が弾いたピアスは、２羽のコウノトリよりもさらに上空で楕円形の月・上弦となり、コウノトリたちの上に降り落ちて地面へと叩きつけた。

「ううううっ……痛てててててっ……」

「……。」

「んんっ？ひいいっっ！！」

目の前に立った冷たい表情の輝矢に、背筋を震え上がらせるコウノトリたち。

「今の話……少々詳しくお聞きしたいのですが……」

「はっはははははいっ……！何なりとっ……！」

見られただけで凍りつきそうな笑みを向けてくる輝矢に、声を震わせながら必死に頷く罪なきコウノトリたち。

「鬼っ……？」

そんな輝矢を見て、由雉が思わず呟いた。

「“鬼爪・天回”っっ！！」
「“瞬花”っっ！！」

――――パァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――

鬼人が飛ばした１０本の鬼爪を、村雨丸を振り切って桜の花びらへと変える桜時。

「グワアアアアアッッッ！！！！！」

「キャアアアアアアアアッッッ！！！！！」
必死に逃げ惑う幸コへと爪を振り下ろす別の鬼人。

「如意棒・第１の舞っ……“空”っっ！！」

――――ビュウウウウウウゥゥゥゥゥンッッッ！！！――――

「ぎゃあああああああっっっ！！！！！」

幸コの前に門貴が立ち、鬼人へ如意棒を向ける。門貴が繰り出した真空波を受け、後方に吹き飛ばされる鬼人。

「大丈夫かぁっ!?幸コちゃんっ!!」

門貴が少し後ろを振り返り、幸コの方を見る。

「幸コちゃんのことは俺が死んでも守るからっ、心配あらへんでぇっ!」

「門貴さんっ……」

門貴の勇ましい言葉と頼れる笑顔に、少しキュンとくる幸コ。

「せやからぁ〜っこの戦いが終わったらぁ〜俺とこぉ〜ムフフフフっ」

「やっぱりこういう人ですよね……」

頼れる笑顔は一瞬にしていやらしい笑顔へと変わり、幸コのトキメキも一瞬にして消え失せる。

「“鬼口”っっ!!」

『……っ!』

その時、門貴が吹き飛ばした鬼人が、門貴と幸コへ向けて鬼口を放つ。

「クっ……!」

「きゃあああっっ!!」

幸コを庇うようにして、横へと飛ぶ門貴。

――――バァァァァァァーーーーンッッッ!!!――――

「ううっ……！」
「門貴さんっ！！」
鬼口が門貴の右腕をかすめ、如意棒が力なく地面に転がり落ちる。
思わず膝をついた門貴に、不安げな表情で駆け寄る幸コ。門貴の右腕から真っ赤な血が溢れ出る。

「チっ……しくったなっ……」
動きの鈍い右腕に、表情をしかめる門貴。

「サルっ……！」
「“鬼爪”っっ！！」
「うっ……！クソっっ！！」
門貴のことを気にかけていた桜時に、そんな暇を与えることなく飛んでくる鬼爪。鬼爪を村雨丸で弾き返しながら、桜時が少し顔をしかめる。

「このままじゃっ……全滅しちまうっ……！」

「グワアアアアアアアアッッッ！！！！」
「“瞬花”っっ！！」

――――パァァァァァァァーーーーンッッッ！！！――――

桜時が再び鬼爪を桜の花びらへと変える。

「ガアアアアアアアアアッッッ！！！！」
「うっ……！！うわあああああああっっっ！！！！」

「ハチさんっ！！」
横からやって来たもう1匹の鬼人に吹き飛ばされる桜時。避難していたミチルが思わず身を乗り出す。
「ううううっっ！！！」
――――パァァァァァァァーーーーンッッッ！！！――――
桜時が背中を打ちつけた青々とした木が、一瞬で桃色の桜の木へと変わる。
「痛てててててっ……」
「きゃあああああああああっっっ！！！！」
「ああっ？」
背中を痛そうに押さえていた桜時が、聞こえてくる悲鳴に振り向く。と、そこには木陰から飛び出してきたらしきミチルが、地面にべったりと座り込んでいた。
「何やってんだ？」
「いえっ……急に木が桜になったもので腰を抜かしちゃってっ……」
「……。」
そんなミチルに呆れた顔を見せる桜時。
『グワアアアーーッッッ！！！！』
『……っ！』
桜時とミチルの元へと、駆け込んでくる2匹の鬼人。
「ひえええっっっ！！！！」

「クっ……！」
桜時が背中の痛みを堪えて立ち上がり、腰を抜かして動けないでいるミチルの前へと立つ。
「ハチさんっ……！？」
「俺がヤツらの気ぃ引いとくからっ！アンタは体引きずってでもこっから逃げろっ！！」
「でもそんなことしたらハチさんがっ……！」
「アンタを死なせるわけにはいかねぇーだろっ！！由雉のためにもっ！」
「えっ……？」
ミチルが戸惑うように桜時を見る。
「どうしてっ……そこまでっ……」
「……。」
桜時が少し目を細める。
――――なんせミチルは“不幸を呼ぶキジ”なんか飼ってっからなぁっ！――――
――――あっはっはっはっはぁぁぁぁ～～～っっっ！！！――――
「似てるからっ……」
「えっ……？」
――――イヌのくせに羽ばたきたいっ！？バカ言ってるんじゃないわよっ！――――
――――イヌはイヌらしくっ！家の庭を駆け回ってればいいのっ！

―――

「わかるからっ……」

蔑みの言葉。見下した笑い。自分だけが違うものであることの孤独。

「だからっ……」

桜時がミチルに笑顔を向ける。

「アンタと由雉は“幸せ”であってほしいっ……」

「ハチさんっ……」

桜時の言葉に、ミチルが少し目を潤わせる。

“鬼口”っっ！！！」

「……っ！」

「ハチさんっ……！！」

向かってくる鬼口を避けようともせず、正面から村雨丸を構える桜時。ミチルが必死に桜時の名を呼ぶ。

「ハチさんっ！！」

「クっ……！」

ミチルが叫ぶ中、前方から向かってくる鬼口に桜時が顔を引きつる。

第4章　不幸な女の青い鳥　★6

「“月器・十六夜”っ」

――――バァァァァァァァーーーンッッッ！！！！――――

「……っ」

桜時の前へと広がり、鬼口を弾き返す金色の盾。桜時が思わず目を見開く。

『ギャアアアアッッッ！！！！』

弾き返された自らの鬼口を喰らい、２匹の鬼人が吹き飛ばされていく。

「ふぅぅぅ～っ」

「……輝……矢っ……」

「はいっ？」

桜時の声に、笑顔で振り返る十六夜を構えた輝矢。

「……はぁっ……」

「大丈夫ですか？ハチ」

輝矢がやって来てホッとしたのか、桜時が深々と肩を落とす。そんな桜時に声をかける輝矢。

「遅くなってすみません。あの桜が咲くまで位置がわからなかったもので」
「道を聞こうとしたコウノトリを誰かさんが恐怖与えすぎて気絶させちゃったからねっ」
「……？由雉っ」
聞こえてくる声に桜時が振り返ると、そこには呆れた表情を見せた由雉が立っていた。

「由雉っ……良かった……無事だったのねっ……」
「……っ」
現れた由雉に安心したように笑みをこぼすミチル。しかし由雉は、気まずそうに視線を落とす。

「痛ぅっ……！」
「……？どこか痛めたのですか？」
「ああっ……ちょっと吹っ飛ばされた時に背中をっ……」
少し表情を引きつり、背中を押さえながら桜時が答える。

「私のハチに怪我をさせるとは…許し難いですねぇ……」
「別にお前のものになった覚えはねぇーよっ」
「かっぐやぁぁぁぁ～～～んっ！あなたの門貴がこぉぉ～んな大怪我をしちゃってるよぉぉぉ～～っ！！」
「使えないサルですね」
「がいいいいいいいいいいいいいい～～～～～んっっっ！！！！」
「鬼っ……？」
ショックを受けている門貴の横で、幸コがこっそりと呟く。
「ハチに怪我をさせた罪を償ってもらいましょうか。“月器・三日月”」

十六夜を三日月へと変形させ、鬼人に向けて構える輝矢。

「竹取輝矢っ……鬼退治いたしますっ」

輝矢が三日月を構え、３匹の鬼人の方へと飛び出してくる。

『グワアアアアアアッッッ！！！！！』

「……っ“水月”っ」

――――バァァァァァァァーーーンッッッ！！！！！――――

「ギャアアアアアアッッッ！！！！！」

輝矢が三日月を振り払うと、三日月から無数の水の刃が飛び出し、鬼人の１匹を吹き飛ばした。

「ガアアアアアアアッッッ！！！！」

「……っ！」

横から飛びかかってきたもう１匹の鬼人の爪を、三日月で受け止める輝矢。

「“鬼口”っ！」

「うっ……！」

さらにもう１匹が、輝矢に向かって鬼口を放つ。

「クっ……！」

「ガアアアアアアッッ！」

――――バァァァァァァァーーーンッッッ！！！！！――――

三日月で対峙していた鬼人を払い飛ばし、何とかギリギリのところで鬼口を避ける輝矢。

「ふぅっ」

着地した輝矢が、険しい表情で1つ息をつく。

「さすがに3匹相手は厳しいですね……」

少し汗を流しながら、再び三日月を構える輝矢。

「“鬼口”っっっ！！」

「……っ」

輝矢に休む暇も与えず飛んでくる鬼口。

「第1の舞“空”っっ！！」

「……っ？」

――――バァァァァァァーーーンッッッ！！！――――

輝矢へ向かって飛んできていた鬼口が、輝矢の後方から飛んできた真空波に掻き消される。

「よぉーしっ！何とか握れるなぁっ！」

「サルっ……」

輝矢が後ろを振り返ると、そこには門貴が立っていた。先ほど鬼口で受けた右腕の傷に白い布を巻いて血止めをし、さらに右手と如意棒も布で巻きつけるようにして何とか構えている。

「こんな体で戦う俺っ……どおっ！？輝矢んっ！」

「いえ特には」

「ううっ……」
輝矢の淡白な反応に悲しむ門貴。
「“鬼爪”っっ！！」
『……っ』
「“瞬花”っっ！！」
――――パァァァァァーンッッッ！！！！――――
2人に飛んできた鬼爪が、2人の目の前で桜の花びらとなって散る。
「ハチっ」
輝矢の横に立ったのはもちろん、村雨丸を構えた桜時であった。
「何やぁ～？怪我犬は大人しくしてたらええねんでぇっ？イヌぅ～」
「てめぇーこそ静かに寝てろよっ！重傷猿っ！」
『グワアアアアアッッッ！！！！』
『……っ！』
向かってくる鬼人たちに、3人が一気に表情を鋭くする。
「三日月っ」
「村雨丸っ！」
「如意棒っ！！」
それぞれに武器を構え、鬼人1匹ずつと交戦していく輝矢、桜時、門貴。

「……。」

3人の戦いを静かに見守る由雉。

「クっ……！うわあああああああっっっ！！！！」

「だあああああああああああっっっ！！！」

「ううっ！！クっっ……！！マズいですねっ……」

3匹の鬼人を相手に、傷を負っている桜時と門貴は完全に押され、輝矢も2人の様子が気になっているのか、力が出し切れずに押され始める。このままでは3人とも負けてしまう。

「もうダメっ……このままじゃみんな殺されちゃうっ……」

「ミチルさんっ……」

「……っ？」

諦めたように呟く幸コの横から、由雉が静かにミチルを呼ぶ。

「ボクっ……コウノトリになりたかったんじゃないよっ……？」

「えっ……？」

「ただっ……ミチルさんを……幸せにしたかったっ……」

「由雉っ……」

少し笑みをこぼしながら話す由雉に、ミチルが少し目を細める。

「だって……ミチルさんはっ……1人ぼっちだったボクの……家族になってくれた人だからっ……」

「……っ」

振り返った由雉を、ミチルがまっすぐに見つめる。

「だからねっ……ミチルさんっ……ボクはミチルさんを幸せにはしてあげられないけどっ……」

由雉が言葉を続ける。

「ミチルさんの幸せはっ……ボクが守るよっ」

「由雉っ……」

「……っ！」

覚悟を決めたように表情を鋭くし、輝矢たちの元へと駆け込んでいく由雉。

「ああっ！！由雉ぃいっっ！！」

「……。」

不安げに幸コが呼ぶ中、ミチルは穏やかな笑顔でその背中を見つめていた。

「がはぁぁぁぁぁっっ！！」

「うううううっっ！！」

鬼人の攻撃を喰らい、並んで地面に倒れこむ桜時と門貴。

「“鬼口”っっっ！！！」

「ハチっ！サルっ！」

『ううっ……！』

倒れこんでいる2人に向け、鬼口を放つ鬼人。輝矢が振り返って2人を呼ぶが、最早2人に避ける力は残されていない。

『クっ……！』

「“左翼・滅羽”っ！」

――――バァァァァァァーンッッッ！！！――――

『……っ！』

2人に向かってきていた鬼口に、強く光る赤い羽根のようなものが突き刺さると、その瞬間、鬼口は光を放って自ら砕け散った。砕け散った鬼口を大きく目を見開いて見つめる桜時と門貴。

「なっ……」

「ったく、だらしないなぁ～」

『えっ？』

2人がゆっくりと起き上がり、声のする後方を振り返る。

「ボクが力を貸してあげないと、あれくらいの鬼も倒せないわけぇ～？」

『ああっ！？』

そこにいたのは面倒臭そうに言い放つ由雉であった。その由雉の言いっぷりに、一気に怒りを起こして立ち上がる桜時と門貴。

「何やとぉぉぉっっ！！！？クソキジぃぃっっ！！！」
「もっぺん言ってみろっ！！こらぁぁぁぁっっ！！！」

「“ボクが力を貸してあげないと、あれくらいの鬼も倒せないわけ？”」

「ホントにもっぺん言いやがったぁぁぁっっ！！！！」
繰り返し言う由雉に、桜時と門貴の怒りは最高潮に達する。

「三日月っ」
「グワアアアアアアアアアッッッ！！！！」
「……？」
交戦していた鬼人を振り払い、３人の元へと合流する輝矢。輝矢と由雉が目を合わせる。

「どうやら覚悟を決めたようですね」
「別にぃっ。君たちの不甲斐なさに見ていられなくなっただけだよぉ」
『んだとぉぉぉぉぉぉぉぉっっっ！！！！？』

『グワアアアアアアアッッッ！！！！！』

『……っ』
鬼人が３匹一斉に４人の元へと向かってくる。

「同時に行きなさい、イヌ、サル、キジ」

「喜んでぇぇぇぇっっ！」
「ええ～っ」
「いいから殺されたくなかったら聞いとけっ！」
輝矢の命令に素直に頷く門貴と、不満げな由雉を必死に諭す桜時。
『グワアアアアアッッッ！！！！！』

「村雨丸……“瞬花……」
「如意棒・第1の舞っ……」
“右翼っ……」
飛びかかってくる鬼人に、桜時が村雨丸を、門貴が如意棒を、由雉が青い羽根を一斉に構える。

「終刀”っっ！！」
“空”っっ！！」
「裂羽”っっ！！」

『ギャアアアアアッッッ！！！！！』

3人が繰り出した剣技・真空波・羽根に、鬼人3匹が同時に吹き飛ばされていく。

「“月器……」
吹き飛ばされていく鬼人たちに、輝矢が月器を向ける。

「望月”っ……」

――――パァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――

三日月が満ち、やがて金色の球体・望月となって鬼人たちを包み込んでいく。

「……っ“新月”」

――――……っっっ！！！！！――――

『……っ！！ギャアアアッッッ！！！！！』

望月は輝矢の言霊により、鬼人たちとともに一瞬にして闇へと消えていった。鬼人たちの断末魔が森に響き、やがて掻き消えた。

「……。」

空から三日月が降り落ちてきて、輝矢のピアスへと戻る。

「どっはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～っっ」

「ああ～疲れたっ……」

戦いが終わった途端に、力なくその場に座り込む桜時と門貴。

「ふぅぅ～っ」
「あらっ？きゃあああああっっっ！！！！」
「……。」
一息ついていた由雉が聞きなれた悲鳴に、少し呆れた表情で振り返る。由雉が振り返ると案の定、足でも挫いたのか、ミチルが地面に転がっていた。

「今度はどこ痛めたのぉ～？」
やれやれといった表情で、ミチルに歩み寄っていく由雉。由雉がミチルのすぐ前でしゃがみ込む。

「ミチルさっ……」
「……っ」
「……っ？」
ミチルの顔を覗き込もうとした由雉の頬に、そっとミチルの手が触れる。

「ミチルさん……？」
「……。」
戸惑うように由雉が見つめる中、ゆっくりと顔を上げるミチル。

「……っ」

ミチルは穏やかな笑みを浮かべ、その優しい瞳から涙をこぼしていた。ミチルの涙に、由雉が少し驚く。

「こんな立派な息子を持って……私は……“幸せ者”ねっ……」

「……っ！」
ミチルの言葉に、由雉が思わず目を見開く。

「……っ」
唇を噛み締め、目を細めたその由雉の瞳から、溢れ出るように涙がこぼれた。

「……“母さん”っ……」

「……っ」
そっと呟いた由雉を、ミチルが力いっぱい抱きしめる。

『……。』
その光景を穏やかな笑顔で見つめる輝矢たち。

「これ以上の“幸せ”はありませんね……」
「ああっ……」
「せやなぁっ」
こうして、幸せの街での戦いは終わりを告げた。

第４章　不幸な女の青い鳥　★7

翌日。

「いっや～っ！まっさかあなた方がかの有名な桃タローのお弟子さんで、鬼人退治屋の方だったとはぁっ！」

街の入口で一際、大きな声を出しているのは、昨日の太っちょ街長である。

「出目鯉が弱ってたのも鬼人がやったことだったそうでぇっ。ミチルと協力して捜査してたんですってぇ？」

街長はテンション高く、どんどん話を続ける。

「そんなこととは露知らずぅっ！“怪しい”だなんて言ってホントに申し訳ありませんでしたぁぁっ！！」

「はっ……はぁっ……」

頭を下げる街長に、捜査をしていた覚えはないがとりあえず頷いておく輝矢。

「ミチルっ！昨日は酷いこと言って悪かったなぁっ！」

「私もっ！疑ったりしてごめんなさいっ！」

「いえっ……いいんですよっ……昨日、蟹座占い１０位でしたしっ……」

次々と謝る街人たちに、笑顔を向けるミチル。

「どうなってんだぁ～？」
街人たちからすっかり正義のヒーロー扱いされていることに、不思議そうに首をかしげるハチ。

「感謝してくれていいよぉ」
「へっ？」
不思議がっていたハチに、得意げに言ったのは由雉であった。

「ボクがナイスフォローしとかなかったら、君たち今頃、鬼人呼んだぁって街追い出されてたとこだよっ？」
「それはともかく鯉まで鬼人のせいってホンマか？」
「うわさによると、一昨日の夜あげたエサが腐っていたそうですよ」
「フツーやなぁ」
こっそりと答える幸コに、モンキが呆れたように肩を落とした。

「ではそろそろ行きましょうか」
「おうっ」
「幸コちゃ～～～んっっ！！手紙書くからなぁぁぁぁ～～～っっっ！！！！」
「はっ……はいっ……」
輝矢の言葉に大きく頷くハチ。涙ながらに手を振るモンキに、幸コは少し呆れながらも手を振り返した。

「お元気でぇぇ～～っ！！」
「またいらして下さいねぇっ！」
ミチルや幸コをはじめとする多くの街人に見送られて、幸ノ街を旅立っていく輝矢たち。

「……。」
そんな遠ざかっていく輝矢たちの背中を、1人浮かない表情で見つめる由雉。

「由雉っ」
「……？」

「はいっ」
「えっ……？」
そんな由雉に、ミチルが荷造りされた大きな鞄を差し出した。由雉が戸惑うようにミチルを見る。

「何っ……」
「行きたいのでしょう……？」
「……っ」
ミチルの問いかけに、少し驚いたように目を開く由雉。

「でもっ……」

「今度はあなた自身で、あなたの幸せを見つけていらっしゃい……」

「ボクのっ……？」
「ええっ」
ミチルが大きく頷く。

「私はいつまでもこの街で、あなたの帰りを待っているわっ……」
「ミチルさんっ……」
優しく微笑みかけるミチルに、由雉も笑顔をこぼす。

「うんっ」

ミチルから鞄を受け取る由雉。

「行ってきますっ……！」

――――ボォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――

由雉が青い鳥となり、同じ青い空へと高く羽ばたいていく。

「……。」

羽ばたいていく1羽のキジを見上げるミチル。

「あぁ～あ～行っちゃったぁ～」

ミチルの横で、幸コがどこか寂しそうに呟く。

「いってらっしゃいっ……」

こうして幸せを呼べない青い鳥は、幸せの街から飛び立っていった。

「ううぅ～っっっ！！！幸コちゃぁぁぁ～～んっっっ！！！！」
「だあああああっっっ！！！何、すぐ落ち込んでんだよっ！鬱陶しいっっ！！！」
街を出て5分。もう幸コと離れたことに限界を感じて落ち込むモンキに、ハチが怒鳴りあげる。

「かぐやぁぁぁ～～んっ、こんな傷ついた俺を励ましっ……」
「お断りします」
「ううっ……」
言い終わらないうちに断られ、さらに落ち込むモンキ。

「こっらぁぁぁぁっっっ！！！！待てぇぇっっ！！！このクソ鳥ぃぃぃっっっ！」

『……？』
脇道から聞こえてくる声に、輝矢たちが振り向く。

「俺の弁当に入ってたササミチーズ返しやがれぇぇぇっっ！！！！」

『ササミチーズ？』
妙に聞き覚えのあるフレーズに、ハチとモンキが首をかしげる。

「クっ……！」

『ああっっ！！由雉っっ！！！』

「えっ？」
かなり怒った様子のゴツい大男に追われるようにして、脇道から輝矢たちの前へと飛び出してきたのは、青いキジ、先ほど別れたばかりの由雉であった。

「お前なんでっ……」
「こっらぁぁぁぁぁっ！！！クソ鳥ぃぃっっ！！！」

「……っううっ……！！」

「あんっ？」
男がやって来ると、ユキジがその場で泣き崩れる。

「何かっ……嫌な予感がっ……」
ユキジが泣き崩れた途端に、表情を引きつる輝矢たち面々。

「ボクっ……！ボクっ……！本当はこんなことしたくなかったんだけどっ…この人たちが無理やりっ……！！」

「何いぃぃぃぃっっっ！！！？」
『お前なぁぁっっ！！！いい加減にしやがれぇぇっっ！！！！！』

「エへっ」
怒り狂うハチとモンキを見て、愛らしい笑みをこぼすユキジ。

こうして、輝矢一行に1羽の性悪キジが加わった。

第４章　不幸な女の青い鳥　★７（後書き）

４章終わりました～
やっとかぐや姫のもとに、イヌ・サル・キジが集いましたね。
さてさて、今後、４人を待ち受けるものとは…？
御期待下さい！

第5章　クマった上司　☆1（前書き）

5章です。
また新キャラが出てきます…。

第5章　クマった上司　☆1

「というわけでだなぁっ」

と言うのは、見た目はヤクザだが実は御伽警察（通称：オトポリ）の警官の孤上ゴン。老けてる22歳。

「白熊の街に出た鬼人の退治をだなぁ、手伝ってもらっちゃったりしたいなぁ～と思ってんのよっ！」

「面倒なのでお断りします」

ゴンの頼みを、即答で断る輝矢。

「そぉぉーーう言わずによぉっ！俺とお前の“よしみ”じゃんっ！？」

「どんな“よしみ”だよっ」

「俺は“良美チャン”のんがええなぁ～っ♪」

「アホっ」

必死に懇願するゴンを見ながら、気の抜けた会話を交わすハチとモンキ。

「退治屋に鬼人退治頼むようじゃオトポリも終わりだね～10年振りの復活とか必要なかったんじゃない？」

「ああっ！？」

横から口を挟んだ青いキジ・ユキジの言葉に、ゴンが顔を引きつる。

「何だぁぁ～っ！？竹取っ！お前んトコの新しいペットっ！異常にムカつくなぁっ！」

「ペットじゃありません。勝手に付いて来てるだけです」
ゴンの言葉に輝矢が冷たく一言。
この前の幸ノ街での一件で、キジの由雉が押し入るように仲間に加わり、輝矢たち一行はさらに賑やかさを増したのである。

「私のペットはハチだけです」
「ちょぉぉぉぉぉっと待ていっ！俺はペットになったつもりはねぇーぞぉっ！？」
「ええ～っ？輝矢ん、俺はぁぁ～っ？」
輝矢の一言に異議を唱えるハチと、手を挙げて自己主張するモンキ。

「とにかく頼むっ！！なっ！？」
「だから何度言われても答えは変わりませんって」
深々と頭を下げるゴンに、輝矢が疲れたように肩を落とす。

「けっど変だよなぁ～あのゴンがあんな必死に頭下げるなんてっ」
「確かになぁ～」

「うううっ！！ゴホゴホっ！うおおおっへんっっ！！」
『……？』
妙にわざとらしく咳き込む声に、会話をしていたハチとモンキが振り向く。

「うううっうんっ！ゲハゲハっっ！！のほほほほっほんっ！！」

「羊スケ……？」
2人が振り向いた先にいたのは、動きもわざとらしく、どこか怪しげに咳き込んでいる羊スケであった。そんな羊スケにハチが眉をひそめる。

「めっちゃワケアリな空気出してんなっ」
「ウソがつけない人なんだよ、きっと」
そんな羊スケに、どこか呆れたように言うモンキとユキジ。

「とぉぉぉぉーーっにかっく頼むっ！！あぁぁぁぁぁーー頼むっっ！！」
「だからぁ、何度言われてもっ……」
「今回ばっかりはどぉぉーしても必要なんだっ！！“桃タロー”の弟子であるお前の力がっ！！！」
「えっ？」
「あっ！」
桃タローの弟子という部分を妙に強調して言ったゴンに、輝矢が眉をひそめて顔を上げる。と、ゴンはしまったと言わんばかりの表情で口を押さえた。

「ほぉ～……どうやら師匠と何らかの関係のあることのようですねぇ～……」
「ううっ……！そっ……それはっ……！そのっ……」
鋭い目を向けて問い詰めてくる輝矢に、思わず目を逸らしてしまうゴン。

「わかりました、行きましょう」
「マジかっ！？」
「ええ～っ？」
嬉しそうに聞き返すゴンと、不満げに口を尖らせるユキジ。

「不満なら付いて来なくていいですよ、キジ」
「ブー」
輝矢の返答に、ユキジはさらに口を尖らせた。

「よっしゃぁぁぁっっ！！じゃあっ！“白熊の街”へレッツラゴーだぁぁっっ！！！」
「その掛け声古いっスよぉ～ゴンさんっ」
「うっせぇっっ！！！」
「ぎゃあっ！」

というわけで、こんなところから今回の話は始まるのである。

御伽界、南東部。雪の降る“白熊の街”。
その名の通り、白熊の獣人たちが暮らす、山奥の小さな街である。

「鬼人が出たのは7日前の夜。街の若い男が襲われて重傷を負ってる。他にも山の動物が何頭かヤラれてるが」
街に入り、輝矢たちに鬼人の出た時の説明をするゴン。

「7日前以来、パッタリ現れてねぇ。どう思う？」
「寒いので帰りたいです」
「そうじゃねぇぇぇぇーーーっっっ！！！！」
輝矢の発したコメントに、ゴンが全力で突っ込みを入れる。

「街に潜伏して機会を狙ってるんじゃないかとか、そういう見解を聞きたいんだよっ！」
「そうじゃないですかぁ～？」
「適当だなっ！おいっ！！」
いつもの軽装に分厚いコートを着て、体を丸めて言う輝矢。この寒さに一気にやる気が失せたようである。

「うぅ～んっ……寒いよぉ～っ」
輝矢と同じように服を着込んで震えているユキジ。
「そんな寒いかぁ～？」
「いいよねぇ～イぃ～ヌは喜びっ庭駆け回りぃ～だから」
「よくわかんねぇー羨ましがり方だな……」
降り積もった雪の地面を歩いても、平気そうな顔を見せているハチ。ハチはイヌであるため寒さには強いが、キジであるユキジにはこの寒さは堪えるようである。
「俺もわりと平気やでぇ～っ」
「いいよねぇ～サルはバカだから」
「えええぇっっ！！？何やっ！その理由っ！？」
雪の上に転がって遊びながら言ったモンキに、冷たく言い放つユキジ。ユキジの言葉にモンキがショックを受ける。

「まぁとにかく今からその襲われた人間ってののトコに一緒に聞き込みにっ……」

「やぁーっと到着のようだねっ！狐上さんっ！ふわぁーっはっはっはっはっ！！」

『……？』

「出たっ……」
聞こえてくる声に、皆が顔を上げる中、ゴンだけが表情をしかめる。

「遅かったねぇ～！待ち過ぎて身長が3センチ伸びたよっ！ふわぁぁーっはっはっはっはっ！！」

『……っ』

丁寧な言葉遣いで輝矢たちの前へと現れたのは、黒髪オカッパ頭に細めの黒目の、どこか嫌味っぽい顔つきの若い青年。１９，２０歳くらいだろうか。オトポリの黒制服に、その右腕には“鉄”と書かれた派手な赤い腕章をしていた。その背にはかなり重そうな、巨大な鉞を背負っていた。

「鉄汰(てつた)っ」
「テッタ……？」
厳しい表情で呟いたゴンに、輝矢が少し首をかしげる。

「鉄汰じゃなくて、現場では“正刈(まさかり)隊長”と呼んでもらいたいねっ！狐上隊員っ！ふわぁっはっはっはっ！」
「ああっ！？」
「ゴンさんっ、抑えて、抑えてっ」
「隊長って……」
鉄汰という青年の言葉に、今にも殴りかかりそうになるゴンを必死に抑える羊スケ。どう見てもゴンより若いというのにゴンより偉そうな態度を取っている鉄汰に、輝矢たちが首をかしげる。

「ああ、輝矢さん、紹介するっス。こちら今回の事件で俺らの隊の

隊長を努める正刈鉄汰さんっス」
「隊長っ？こんな若いのにっ？」
「オトポリは実力主義なんスよっ」
「どういう意味だぁぁっっ！！？こらぁぁぁっっっ！！！」
ハチの問いかけに答えた羊スケの言葉に、さらに顔を引きつるゴン。

「鉄汰サンはその実力を買われてオトポリが直々に入ってくれぇ～って勧誘したくらいなんスよぉ」
「へぇ～」
羊スケの解説にハチが感心したように声を漏らす。

「オトポリ内じゃあ、“桃タロー2世”って呼ばれてるくらいなんスっ」
「桃タロー2世っ？」
輝矢が少し目を丸くする。

――――どうしても必要なんだっ！桃タローの弟子であるお前の力がっ！――――

「まさかそれでっ……」

「うっううんっ！！ゲハゲハっ！！」

輝矢が冷たい目を向けると、ゴンはわざとらしく咳き込んだ。

「羊スケくん、そちらは？」
「ああっ、この方々は実はっ……」
「聞っいて驚くんじゃねぇーぞぉっ！？」
説明しようとした羊スケの前にしゃしゃり出て、鉄汰に向かって

ゴンが高々と言い放つ。

「こっの小娘は見た目はたっだの小娘だがなぁっ！何とっ！あの桃タローの弟子の退治屋なんだっ！！」

「桃タローのっ……？」

ゴンの言葉に、鉄汰が一気に眉をひそめる。

「前回の鬼人退治の時も色々と協力してもらったんで今回も手ぇ貸していただこうかなって思ってっ……！」

「必要ないねっ」

「へぇっ？」

『……っ』

羊スケの言葉を冷たく遮った鉄汰に、輝矢たちが首をかしげる。

「鬼人退治はオトポリの仕事だ。素人に入って来られると捜査にも影響が出るよっ！ふわぁっはっはっはっ」

「素人ってっお前なぁっ……！」

「どうしても鬼人退治がしたいのなら君たちもオトポリに入りたまえ！そうすれば仲間に入れてあげよう」

「ああっ！？」

明らかに小ばかにしたような口調で返す鉄汰に、表情をしかめるモンキ、ハチ、ユキジ。

「おいっ！鉄汰、コイツらはホントに強えぇーし、必ず俺らの力にっ……！」

「そういう他力本願な考えだから、いつまで経っても隊長になれないのではないかいっ？狐上さん」

「んなっ……！！」

致命的なところを突かれたのか、ゴンが大口を開けて固まる。

「それにっ……」
「……？」
鉄汰が鋭く輝矢を見る。
「ボクは“桃タロー”ってのが嫌いでねっ」
「えっ？」
思いがけない鉄汰の言葉に、輝矢が目を丸くする。
「とにかくここはオトポリに任せて、部外者はとっとと帰ってくれたまえっ！ふわぁーっはっはっはっはっ！」
鉄汰が冷たく言い放ち、輝矢たちに背を向ける。
「さぁ捜査に行くよ。狐上さん、羊スケくん」
「おっおいっ！」
歩き去っていく鉄汰に、ゴンが思わず手を伸ばす。
「あのなぁっ……！」
「どうしてもそちらの方々と一緒に捜査がしたいのなら、オトポリを辞めて退治屋に弟子入りするといいよ」
「んなっ……！！」
またしても大口を開けて固まるゴン。
「何じゃっ！！あのクソガキャァァーーっっ！！」
――――バッコォォォォォォォーーーーーンッッッ！！！――――

去っていく鉄汰への怒りを、近くにあった雪だるまを殴り潰して発散するゴン。

「器物破損で逮捕されるっスよぉ～」

そんなゴンに羊スケが突っ込む。

「とりあえず行きましょ～ゴンさんっ」

「ああっ!?俺はあんなヤツなんかと捜査なんて御免だっっ!!」

「まぁ～た問題起こして出世遅らせる気っスかぁ～?ほらっ、行くっスよっ」

「だあああああっっ!!ぎゃあああああっっ!!」

喚いているゴンを無理やり引っ張って、去っていく鉄汰の後を追いかける羊スケ。

「そんなわけで色々とすんませぇ～んっ、輝矢っさんっ!今は失礼するっス～」

「ええっ!?おいっ!羊スケぇっ!」

ゴンたちの方から輝矢たちを呼びつけたというのに、この雪の中、輝矢たちを残して去っていくゴンと羊スケ。ハチが声をあげるが、2人は鉄汰を追ってその場を去っていった。

「おいっ、輝矢、一体どうすんだよ?」

「とにかくっ……」

「とにかくっ……?」

真剣な表情を見せる輝矢に、ハチが少し息を呑む。

「どこかのお家に押し入って、無理やりあったかいものでも作らせましょうか」

「だあああああああああっっっ!!!」

輝矢の言葉に、ハチが雪の中を思い切り転んだ。

「さぁ～てどこの家にしましょうか？やはり金のありそうなあの家にっ……」
「ちょっと待てぇぇいいっっ！！」
街に並ぶ家を物色する輝矢を、ハチが必死に止めに入る。
「人の道に反することはするなっっ！！何度言わせる気だぁぁっ！！」
「でもぉ～このまま寒いのって可愛い上にか弱いボクには耐えられないんだけどぉ～」
「お前の根性の悪さは絶対長生きだ。俺が保証してやる」
「え～」
文句ばかり言っているユキジに、ハチが突き放したように言い放つ。
「とにかく上がらせてもらうんだったら、もっと穏便にっ……」
「かっぐやさんでねぇ～かぁっ？」
『……？』
聞こえてくるナマリのキツい低い声に、輝矢たちが振り返る。
『いっ……！？』
振り返ったイヌ、サル、キジが、一斉に驚きの表情を見せる。
「やっぱりかっぐやさんだぁぁぁ～～」
４人が振り返った先に立っていたのは、身長２ｍはありそうな大きな図体の１頭の黒熊であった。

『黒っ……クマっ……？』

「ひっさしぶりだなぁぁ～～っ！ガッハッハッハッハっ！」

第5章　クマった上司　☆2

「んん～っ！うまいっっっ！！！！」
湯気の昇るスープを一気に飲み干して、満足げな顔を浮かべるモンキ。

「生き返るわぁぁぁ～～～っっ」
「じゃあ何っ？今までは死んでたわけ？」
「ああっ？」
幸せそうにしていたモンキに、横から口を挟むユキジ。嘴を皿に突付かせて、器用にスープを飲んでいる。
「死んどったわけないやろぉ～？」
「じゃあ何で生き返ったって言ったのさ？」
「それはやなぁっ！すんげぇーあったかくってうまいってことを表すための言い回しでぇっ……！」
「じゃあ、そんなまどろっこしいコト言わずに、すんげぇーあったかくてうまいって言えばいいでしょ？」
「なんやとぉぉぉっっ！！？」
暖炉のある暖かい部屋の中、くだらない言い合いにさらに熱くなっていくモンキとユキジ。

「表出ぇぇ～やぁぁっっ！！！ネチネチキジぃぃっっ！！！」
「寒いからイヤぁ～」
「んやとぉぉぉぉっっ！！？」
「おいっ！お前らやめろよっ」
2人の向かいで同じようにスープを飲んでいたハチが、険悪になっていく2人を止めに入る。

「イヌのくせに人の会話に入って来ないでよぉ～」

「せやせやっ！イヌは黙っときぃっ！」
「ああっ！？」
イヌをバカにしたような発言をするモンキとユキジに、ハチが顔をしかめる。
「んだとぉぉおっっ！！？お前らなぁっ……！！」
「３匹ともっ……」
『……っ？』
ハチの横でゆったりとスープを飲んでいた輝矢が口を開き、３人が輝矢の方を見る。
「あまりうるさいと、丸焼きにしてスープの具にしますよ？」
『……。』
笑顔でサラっと言い放つ輝矢に、一瞬にして静まるイヌ、サル、キジ。
「ホントにやりかねないから怖いよねっ」
「ああ、絶対やる」
「んん～輝矢んの血肉と化せるんやったら、それもまた本望っ？」
『アホっ』
また優雅にスープを飲み始めた輝矢を見ながら、こっそりと言葉を交わすハチとユキジ。食われるのも悪くないといった表情を見せるモンキに、２人から突っ込みが入る。
「スープはお代わりあっかんねぇ～っ！どぉ～んどんお代わりしとくれよぉぉ～っ！ガッハッハっ！！」
４人が寛いでいる部屋へ大きな鍋を持って現れたのは、先ほど輝

矢たちに声をかけてきたあの黒熊である。体と同じく豪快に笑いながら、４人の方へとやってくる。

「すみません、クマ二郎」

「いいっでことよぉっ！他ならぬ輝矢っさんのためだからなぁっ！ガッハッハっ！」

「クマ二郎さんと輝矢って知り合いなのか？それに白熊の街なのに黒いし」

親しげに話す輝矢とクマ二郎を見て、ハチが少し不思議そうに問いかける。

ゴンたちが鉄汰とともに行ってしまい、街で行く当てもなく取り残されていたところを、輝矢と知り合いらしきクマ二郎に、自宅へと上がらせてもらったのである。

「私とクマ二郎の関係がそんなに気になりますか？」

「いやっ、そんなには気になってねぇーよっ……」

「大丈夫、ちゃんと愛してますよ」

「だっからお前はいちいち、そういうこと言わなくていいっつってんだよっっ！！」

よくわからない愛情宣言を行った輝矢に、ハチが少し顔を赤らめて怒鳴り返す。

「おおぉ～輝矢っさんもついにそういうお年頃だべかぁ～？ガッハッハっ！」

「照れますね」

「茶化すなっ！！クマぁぁぁっっ！！」

楽しげに笑うクマ二郎に、輝矢は穏やかに微笑み、ハチは怒鳴り声をあげた。

「でぇ？クマと輝矢はどういう知り合いなわけぇ～？」
ユキジがやっと話を戻す。
「ああっ」
思い出したように言う輝矢。

「まぁ色々あって知り合いです」
「色々あったっぺぇ～知り合いだべさぁ～っ！ガッハッハッハッハっ！」
「まったくわかんないんだけど？」
「もう放っとけ」
輝矢とクマ二郎の答えに顔をしかめるユキジ。そんなユキジにハチは呆れた表情で呟いた。

「そっれと白熊の街なのに、黒クマのおいらがおる理由だがぁっ……」
『……っ』

皆が注目してクマ二郎を見る。

「“ハートは白熊だから”だべっさぁ～っ！」
「さすがはクマ二郎さん、心意気が違いますね」

「もうわけがわからない……」
「いよっ！クマ二郎っ！」
「何っ！適当に乗ってんだよっ！」
自分のペースで生きる輝矢とクマ二郎に、理解することを諦めたような顔を見せるユキジ。流れのままに声を出すモンキに、ハチが突っ込みを入れる。

「それよりとっとと本題行こうぜっ！」

「本題？」
「鬼人退治のこったよっ！鬼人退治っ！！」
「ああ」
ハチの怒鳴り声に、思い出したかのように頷く輝矢。
「クマ二郎さん、この街に出たっつー鬼人のことだけどっ」
「おいらぁ、この街越して来たのが3日前だけん、わからないだぁ～」
「あっそ……」
まったく役に立たないクマ二郎に、呆れきった顔を見せるハチ。
「んでもぉ街の人、みぃ～んな怯えてしもうってぇ、ろくに街の外出れない状況なんだべぇ～」
深刻な表情で話すクマ二郎。
「ほぉ～んとクマった、クマったっ！」
『……。』
クマ二郎のくだらない親父ギャグに、静まり返る一同。
「まぁとりあえず……周囲の山を捜索して、街人に聞き込みでもしにいきますか」
『おう』
「え～」
ユキジだけが面倒臭そうな返事をする中、輝矢たちの鬼人捜査が始まった。

白熊の街、すぐ外の山道。

「ねぇ～いつまで探せばいいのぉ～？」

面倒臭そうに声を出すのは、上空を飛びながら白熊の街の周囲を見下ろしているユキジ。

「鬼人っぽいものなんて全然見えないんだけどぉ～？」

「見ようとしていないから見えないのです」

「何、仙人みたいなこと言ってんのさぁ～」

ユキジのちょうど真下、山道途中の大きな岩に腰掛け、のんびりと本を読んでいる輝矢の言葉に不満げな顔を見せるユキジ。

「こっちも鬼人らしいもんは見つからんかったでぇ～」

「俺もっ」

輝矢の座っている場所へ、それぞれ逆方向から戻ってきて言うハチとモンキ。

「使えない動物さんたちですねぇ。野生の勘はどこに置いてきたんです？」

「ごめんなぁ～っ！輝矢ぁぁ～んっ！」

「てめぇーこそ退治屋の勘はどうしたんだよっ……」

冷たく言い放つ輝矢に、泣きそうな顔で謝るモンキと不満げに呟くハチ。

「ねぇ～どっこにもいないからさぁ～とりあえず街戻ろうよぉ～ここ、超寒いしぃ～」
上空からユキジが訴える。
「だいたいか弱いボクが何だってこんなことっ……んんっ？」
――――ヒュンッッッ！！！！――――
「えっ？ふわぁぁっっ！！！」
「由雉っ……！」
上空にいたユキジが、横から物凄い勢いで飛んできた何かとぶつかり、まっ逆さまに下へと落ちてくる。
「うわあああああっっっ！！！！」
「……っ危ないですねぇ」
「ふぅっ……」
ちょうど真下にいた輝矢に受け止められ、何とか一息つくユキジ。
「ああっ！！ユッキーばっかりズルいぃぃっっ！！俺も輝矢んに受け止められたいぃぃぃっっ！！！」
「アホなこと言ってる場合かっ！今のっ……！まさか鬼人じゃっ……！」
「ふわぁぁぁぁーーーっはっはっはっはっ！！！」
『……っ？』
鬼人かと警戒する一同であったが、聞こえてくる何となく聞き覚

えのある笑い声に、皆、眉をひそめる。

「鳥を使って捜索かぁぁ～～いっ？随分と原始的な捜査をするんだねぇ～っ！桃タローのお弟子さんはっ！」

「あっ、嫌味上司っ」

輝矢の手の中から飛び立ちながらユキジが言う。山道に大きな笑い声を響かせて立っていたのは、オトポリの隊長・鉄汰であった。その横には不機嫌そうなゴンと羊スケの姿がある。

「もしかしてさっき飛んできたのってっ……」

「ああっ、これのことかいっ？」

『……っ』

鉄汰が自慢げに取り出したのは、手の中に程よく納まりそうなサイズの、鈍い光を放った鉄球であった。

「危ないでしょ～っ！可愛いボクが怪我でもしたら、どうしてくれんのさぁ～っ」

「コイツが何なのか知りたいだってぇっ！？」

「うぅわっ……」

「まったく人の話、聞いていませんね」

「そうだねっ！！教えてあげなくもないよぉっ！！」

ユキジの言葉をまったく無視して、鉄球の紹介を始める鉄汰に、ユキジと輝矢が呆れきった表情を見せる。

「コイツはね“鉄汰スペシャル”と言って、半径１０m以内の鬼人を感知できる仕組みになっているんだよ！」

「すっげぇーっスね！」

「ケっ」

目を輝かせる羊スケの横で、少し不満げな顔を見せるゴン。

「コイツでこの辺り一帯は調べたけど、反応はナッシングさっ！君たちも無駄なことは早々にやめるんだね」
勝ち誇ったように言う鉄汰に、顔を引きつる一同。

「では失礼っ！ふわぁぁぁーーっはっはっはっはっ！！」
高々と笑い声をあげながら、鉄汰がゴンと羊スケを連れて去っていく。

「何ぃ～っ？あれっ！滅茶苦茶ヤな感じっ！」
鉄汰が去った途端に、ユキジが声を出す。

「でも鉄汰スペシャルあったら便利だよなぁ～」
「輝矢んっ！俺が輝矢んの“輝矢スペシャル”になってみせるでぇっ！」
「はいはい」
やる気満々に叫ぶモンキを、輝矢が適当にあしらう。

「まぁこの辺りに鬼人がいないのは確かなようですし、街へ戻って聞き込みでもしましょうか」

ということで戻って、白熊の街。

「最近、街にやって来た怪しいクマ？クマ二郎さんかなぁ～」

「最近になって様子の変わったクマはいないけど、怪しいのはクマ二郎さんじゃない？」
「そりゃクマ二郎さんでしょ～だって黒いしっ」

『……。』

街の白熊たちへ聞き込みを始めた輝矢たちであったが、鬼人が化けて紛れていそうな怪しい人物を尋ねると、皆、口を揃えてクマ二郎の名を出した。

「怪しいってよ、お前の知り合い」
「んん～これは複雑な心境ですねぇ～」
ハチの言葉に、あまり複雑ではなさそうに答える輝矢。

「そりゃ怪しいよぉ～3日前にいきなり越してきて、しかも1頭だけ黒熊だしっ」
「けどあのスープの旨さは、鬼人では出せへんでぇ～」
「まぁとにかく一旦、クマ二郎さんトコへっ……って、んんっ？」

――――ヒュンッッッ！！！――――

「どわあああああっっっ！！！」
クマ二郎の家へ戻ろうと振り返ったハチへと、正面から物凄い勢いで何かが飛んでくる。避けることもできずに、叫び声をあげるハチ。

「ハチっ」
輝矢がハチを抱き上げる。

――――バッコォォォォォォーーーーンッッッ！！！――――

「ぐほぉぉぉぉぉっっっ！！！」
輝矢がハチを抱き上げたため、ちょうどハチの後ろに立っていたモンキの顔面に飛んできた何かが直撃する。モンキは鈍い声と音を漏らして、力なく後方に倒れこんだ。
倒れたモンキの横に、モンキの顔面を直撃した鉄球らしきものが転がる。

「んんっ……かぐやっ……これぞっ……愛の試練っ……」
「何言ってんのぉ～？」
倒れこんだモンキの意味不明な呟きに、ユキジが呆れた顔を向けた。

「ふぅ～大丈夫ですか？ハっ……」
「ぐぶぐぶぐぶぐぶっ……」
「こちらも気絶しちゃいましたね」
輝矢に抱き上げられた女恐怖症のハチは、輝矢の腕の中で泡を吹いて気絶していた。

「ふわぁぁぁーーーっはっはっはっはっ！！！」

『……っ』
もう聞きなれてきた笑い声に、輝矢とユキジが一瞬にしてうんざりした表情となる。

「一軒一軒聞き込みかぁ～いっ？これまた古臭さ極まりない捜査だねっ！桃タローのお弟子さんっ！」
案の定、輝矢たちが振り返った先に立っていたのは、ゴンと羊スケを連れた鉄汰であった。

「またアナタですか……」

「いかにもっ！いかにもっ！ほいっ！」
鉄汰が右手を挙げると、モンキの横に転がっていた鉄球が浮き上がり、鉄汰の元へと飛んでいく。

「コイツが何だか知りたいだってぇっ！？」
「知ってるよっ、“鉄汰スペシャル”でしょっ？」
「ノンノンノンっ！」
「言動がいちいちムカつくなぁ～」
またしても無理やり鉄球の紹介にいこうとする鉄汰に、ユキジが強い口調で答えたが、鉄汰は人差し指を立て左右に動かしてその答えを否定する。その動きと言動に苛立ちを感じるユキジ。

「コイツはねぇっ！“鉄汰スペシャル・バージョン2”さぁっ！」
「バージョンつぅ～っ？」
鉄汰の解説に、ユキジが顔をしかめる。

「擬人化した鬼人は姿形では判別不能だが、その体温が１０度ほど人間より低いんだよ」
「体温っ……？」
「知っていたかいっ？桃タローのお弟子さんっ！知らなかっただろうっ！ふわぁーっはっはっはっ！」
「……っ」
小ばかにしたように笑う鉄汰に、輝矢が少し表情を歪める。

「このバージョン2はねぇっ！半径１０m以内の人間の体温を瞬時に測定し、鬼人を見つけ出せるのさっ！」
「すっげぇースねっ！」
「ケっ」
バージョン2にまたしても目を輝かせる羊スケと、不機嫌顔を続けるゴン。

「測定の結果、この街の住人の中に鬼人はいなかったよっ！聞き込みも無駄になってしまったようだねっ！」
勝ち誇ったように鉄汰が言う。

「いないって……じゃあ鬼人はどこにっ……」
「きっともうこの街にはいないんだよっ！」
『えっ？』
鉄汰の言葉に、ユキジやゴンたちが驚いたような顔を見せる。

「いないってっ……！」
「もう7日も現れていないんだよ？街の中にも外にもいないし、きっとどこかへ行ったんだよっ」
思わず身を乗り出したゴンに、鉄汰が冷静に答える。

「念のため周囲の街や村に警戒要請はしとくよ。明日の朝には本部へ戻るから報告書よろしくね、2人とも」
「はぁぁっ！！？」
ゴンが血管を浮き出させて、声を荒げる。

「本部へ戻るだぁぁっ！！？お前なぁっ！確信もないのにそんな簡単にっ……！！」
「抑えて抑えてっ！ゴンさんっ！隊長命令っスよっ！」
「確信ならある」
『へっ？』
鉄汰へ飛びかかろうとしていたゴンと、ゴンを必死に抑えていた羊スケが、鉄汰の言葉に目を丸くする。

「“鉄汰スペシャルの力は絶対”。これが確信だ。間違ってはないだろう？」

「……っ」
自信たっぷりに言い放つ鉄汰に、さすがのゴンも言い返す言葉を失くす。

「さて行こうか。今回は桃タローのお弟子さんが出るまでもなかったようだねっ！ふわぁーはっはっはっ！」
高らかと笑いながら、その場を去っていく鉄汰。

「そういうこった。無駄足踏ませちまって悪かったなっ！今度、何か奢るからよぉ」
「すみませんっスっ！じゃあ俺たち、報告書あるんで失礼するっス～っ！」
そう言うと、ゴンと羊スケが鉄汰の後を追うようにしてその場を去っていった。

「ふぅ～んっ、何かつまんない幕引きになっちゃったねぇ～輝っ……」
「……。」
ユキジが振り向くと、そこには厳しい表情で何やら考え込むように俯いている輝矢の姿があった。

「輝矢っ……？どうかしっ……」
「何……奢ってもらいましょうか……」
「……そんなことだろうとは思ったけどっ……」
ユキジは少し肩を落とし、呆れた表情で呟いた。

第5章　クマった上司　☆3

その日・夜。クマ二郎の家。

「ひぇぇぇっ！おいらぁ、そんなに街のクマさんたちに疑われとるだかぁ～？ショックで立ち直れないだぁ」

「仕方ないじゃん。黒いんだから」

捜査から戻ってきた輝矢たちから、自分が街で1番怪しい人物とされていることを聞かされ、ショックを受けるクマ二郎。そんなクマ二郎に冷たい言葉を投げかけるユキジ。と言いつつもクマ二郎の作ってくれた晩御飯を早いペースで食べている。

「おいらのどっこかいけながったんだろ～さぁ～？輝矢さぁ～ん」

「さぁ？笑い方じゃないですか？」

「笑い方っ！？ガッハッハってやつだべかっ！？」

「“ウナッギッギっ”の方がええんとちゃう～？」

「そうだべかっ！？じゃあちょっくら練習をっ…ウサッギッギッギっ！おおーっ！ウサギになっちまうだぁ」

適当なことばかりを言う輝矢とモンキの言葉を間に受け、必死に笑い方を練習し始めるクマ二郎。

「まぁ良かったじゃねぇーか。何とかバージョン2のお陰で疑われなくて済んだんだしっ」

「まぁあんなのなくてもクマ二郎さんが鬼人じゃないことくらい、わかりそうなもんだけどね」

「……。」

ハチとユキジの会話を聞きながら、輝矢が晩御飯を食べる手を止め、表情を曇らせる。

――――“鉄汰スペシャルの力は絶対”。これが確信だ……――――

「この世に……“絶対”なものなどあるのでしょうか……」

『へっ？』

輝矢の言葉に、皆が振り向く。

「私の強さの他に……」

「よく考えたら鉄汰とタイプ似てるよな」

「うん、高慢なところがね」

「そんな輝矢んが俺は大好きやぁぁーっっっ！！！！」

こうして緩やかに、輝矢たちの夕食時間は過ぎていった。

そんな頃……。

「グフっ……グウウウっ……ガハっ……」

白熊の街近くの山の地面から、苦しげな声を出して顔を出す何か。

光る角と、鋭い目を持った化け物。

「グワアアアーーッッッ！！！！」

土の中から巨大な化け物が姿を現した。

白熊の街はずれ。オトポリ警官用テント。

「ふんふふふぅ～んふぅ～んっ♪」

『……。』

部屋着ですっかりリラックスムードの鉄汰が、機嫌よく鼻歌を歌いながら鉄汰スペシャルの手入れをしている。丁寧に鉄球を拭く鉄汰を見ながら、少し呆れた顔を見せているゴンと羊スケ。

「あんなもん磨いてなぁ～にが楽しいんだっ？」

「さぁ～？ってかゴンさぁ～ん、報告書書くの、手伝って下さいよぉ～」

「面どい」

「いっつもそれじゃないっスかぁ～」

報告書を羊スケ1人に押し付けてゴロゴロしてばかりいるゴンに、羊スケが不満げな顔を見せた。

「まぁあの桃タローの弟子とやらも少しはわかったんじゃないかいっ？」

『……っ？』

鉄汰スペシャルを磨きながら、不意に声をあげる鉄汰に、ゴンと羊スケが顔を上げる。

「ボクらオトポリさえいれば、退治屋なんて必要ないってことがねっ！ふわぁーっはっはっはっ！」
テントに響く、鉄汰の笑い声。

「だいたい桃タローの弟子なんてっ……」
「前から聞こうと思ってたんスけどぉ～、鉄汰隊長って何でそんなに桃タローが嫌いなんスかぁ～？」

「……っ」

「ありっ？」
急に表情をしかめる鉄汰に、羊スケが少し戸惑うように首をかしげる。

「何かマズいこと聞いたっスかね？俺っ」
「さあなっ」
小声で問いかける羊スケに、ゴンは突き放すように答えた。

――――テッキュウウーーンッッッ！！！――――

「だあああああああああああっっっ！！！！！」
テント内に響きわったった甲高い機械音に、ゴンが飛び起きる。

「なっ……何だぁぁっっ！！？」
「白熊の鳴き声っスかね～？」
「どう考えても違うだろーがっ！！」

「“鉄汰スペシャル”だっ……」

『えっ？』

鉄汰の言葉に、振り向くゴンと羊スケ。

「ソイツ、そんな音出すのかっ？っつーか、鳴いたってことはもしかしてっ……」

「鬼人反応っ……。……っ！」

「あっ！おいっ！！」

鉄汰スペシャルを手に、慌ててテントの外へと出て行く鉄汰。そんな鉄汰を追いかけ、ゴンと羊スケもテントを出る。

『……っ！』

テントを出た3人が目を見開く。

「きゃあああああああああっっっ！！！！！」

「うわあああああああっっっ！！！！！」

「グワアアアアアッッッ！！！！！」

「鬼人っ……！？」

逃げ惑う人々の中で、空へ向かって雄たけびを上げる、濁った緑色の皮膚の禍々しい鬼の化け物。数軒の家は炎に包まれ、道端に倒れているシロクマの姿も見える。

「何で鬼人がっ……！」

「んなことより救助だっ！行くぞっ！羊スケっ！」

「はっはいっス！」

――――ボォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――

ゴンと羊スケがそれぞれ狐化、羊化をして、倒れている人やシロクマの元へと駆けていく。

「グワアアアアッッッ！！！！」

「何故っ……」

再び雄たけびをあげる鬼人を見つめ、どこか茫然と呟く鉄汰。

「“鬼口”っっっ！！！！」

「ひいえええええっっっ！！！！」

「……っ」

鬼人が逃げ惑うシロクマたちの一帯に、鬼口を放つ。眉をひそめて、懐に手を入れる鉄汰。

「“鉄汰スペシャル・バージョン3”」

鉄汰が懐から出した鉄球を、鬼口とシロクマたちとの間に投げる。

――――パァアアアアーーーンッッッ！！！――――

「グガッ……！」

『おおぉぉぉぉぉぉ～っっっ！！！』

鬼口とシロクマの間に入った鉄球は、一瞬で壁のように広がり、鬼口を空高くへと跳ね返した。その光景に鬼人が顔をしかめ、守られたシロクマたちからは感嘆の声が漏れる。

「すっげぇーっスねっ！！バージョンスリーっっ！！」

「ケっ」

シロクマを救助しながら感動するヒツジと、不機嫌そうにするキツネ。

「ふわぁーっはっはっはっはっ！！白熊の諸君っ！存分にボクに感謝したまえっ！」

「“鬼爪・天回”っっっ！！」

「んっ？」

シロクマたちに恩を売っていた鉄汰に、鬼人が１０本の爪を飛ばす。

「“鉄汰スペシャル・バージョンっ……」

「“瞬花”っっ！！」

「何っ？」

――――パァァァァァーーーンッッッ！！！――――

鬼爪が飛んでくる中、再び懐へと手を伸ばした鉄汰であったが、新しい鉄球を出そうとした矢先に、鬼爪が桜の花びらとなって散っていった。

「大丈夫かっ！？」

そこへ現れたのは、村雨丸を構えた桜時であった。

「何してくれるんだよっ！！せっかくバージョン４のお目見えの時だったのにっっ！！」
「ええっ！？」
助けたというのに怒ってくる鉄汰に、桜時が少し困った顔を見せる。

「大体、君は誰さっ！？」
「俺はあれだよっ！輝矢っ！じゃあわかんねぇーかっ……えっと桃タローの弟子と一緒にいたイヌっ！」
「桃タローの弟子っ……？」
「当てがハズレましたね」
「……？」
ハチの言葉に表情をしかめた鉄汰が、聞こえてくる声に振り返る。
「君っ……」
鉄汰が振り返った先に立っていたのは、輝矢とモンキ、ユキジであった。

「何が絶対で何が確信なんでしたっけ？」
「……っ」
少し嫌味っぽく言い放つ輝矢の言葉に、鉄汰が顔をしかめる。

「ふわぁーっはっはっはっはっ！きっと鉄汰スペシャルのちょっとした故障さっ！」
鉄汰が無理やり笑ってみせる。

「何にせよ、鬼人を倒せば終わる話だよっ」
そう言って鉄汰が表情を鋭くし、背中に背負っていた巨大マサカリを手に取る。

「“アイアン・スイング”っ！」

――――ビュンッッッ！！！――――

「グガッ……！？ギャアアアアアッッッ！！！！」

鉄汰がマサカリを振り切ると、マサカリから強烈な鉄の塊が飛び、鬼人を吹き飛ばした。

「見たかい？桃タローのお弟子さんっ！レベル１の鬼人など、ボクが本気を出すまでもないよっ！」

「すっげ……」

「……。」

高らかと言い放つ鉄汰。その力に桜時は感心したように声を出すが、輝矢はそっと眉をひそめた。

「君とボクとの力の差を見せ付けてきてあげようじゃないかっ！ふわぁーっはっはっはっ！」

笑いながら、倒れこんでいる鬼人の方へと駆け込んでいく鉄汰。

「……っ？」

鬼人の倒れこんでいる傍で救助にあたっていたキツネ姿のゴンが、何かに気づいて顔を上げる。

「グガッ……ガッ……ガガッ……」

「……っ」

起き上がった鬼人はどこか苦しげな声を出している。先ほどの鉄汰の攻撃によるダメージを苦しんでいるというよりは、体の奥深く

から苦しんでいるような、そんな声であった。

「終わりだよっ！」

そんな鬼人へと駆け込んでいく鉄汰。

「ちょっと待てっ！何か鬼人の様子がっ……！」

「“アイアンっ……」

制止を促すゴンの言葉を無視し、まだ座り込んだままの鬼人に向かってマサカリを振り上げる鉄汰。

「スイっ……！」

「ガアアアアアアッッッ！！！！」

「何っ……！？」

――――バァァァァーーーンッッッ！！！――――

「ううっ……！！」

鬼人が叫んだ途端に、鬼人の全身から激しい光が放たれる。その光の強さに、突っ込もうとしていた鉄汰が押し返される。

「何っ……！」

「グガァァァァァァ～～～ッッ……」

「……っっ！！」

鉄汰の目の前に現れる赤き鬼。

「“鬼炎”っっっ！！！」

「ううっ……！！」

赤鬼が鉄汰へ大口を開き、燃え盛る炎を放つ。

「うわあああああっっっ！！！！」

「鉄汰っ……！」

叫ぶ鉄汰。ゴンが身を乗り出す。

「“月器・十六夜”っ」

――――パァァァァァァァーーーンッッッ！！！！――――

「……っ！」

「ギャアアアアッッッ！！！！」

「ふぅっ……」

鉄汰の前へと立ち、十六夜で鬼炎を鬼人へ弾き返した輝矢が、疲れたように肩を落とす。

「君っ……」

鉄汰が少し戸惑いがちに輝矢を見る。

「べっ……！別に助けてもらわなくったってねぇっ！あれくらいの炎っ！ボクのバージョン3でっ……！」

「鬼人は形態を変える時、7日から10日の仮死期間を要するんです」

「えっ……？」

素直に礼を言うことなく、どちらかというと文句で言い返そうとしていた鉄汰が、輝矢の言葉に首をかしげる。

「土深くで仮死状態に入ると、どんな精巧な探知機も鬼人の反応を察知することはできない……」
「……っ」
輝矢の言葉に驚いたように目を開く鉄汰。レベル1の緑鬼が、赤鬼へと形態を変えるために仮死期間に入っていたのだとしたら、鉄汰スペシャルに反応がなかったことにも納得がいく。
「それでっ……」
納得したように頷くゴン。
「こんなの素人の私でも知っていますよ?」
輝矢が鉄汰に余裕の笑みを向ける。
「オトポリでは……習いませんでしたか?」
「……っ!」
その嫌味でしかない問いかけに、今まで自信満々だった鉄汰の表情が歪む。
「知っていたさっ!ちょ~っと君たちを試しただけだよっ!ふわぁーっはっはっはっ!!」
無理に笑い声をあげる鉄汰。
「ウソばっか」
「見てて痛いよね」
そんな鉄汰に、呆れたように言い放つ桜時とユキジ。
「知識はまぁあるようだが、それでもまぁ素人よりちょい上くらいだねぇっ!ボクには遠く及ばないよっ!」
親指と人差し指で“ちょっと”を表現し、輝矢を小ばかにする演

説を続ける鉄汰。

「はぁっ……」

「ああっ！何だいっ！？その顔はぁぁっっ！」

疲れたように肩を落とした輝矢に、鉄汰が不満げに声をあげる。

「何なら勝負してみるかいっ！？アイツを先に倒した方が勝ちさっ！ふわぁーっはっはっはっはっはっ！」

「はぁっ！？あんなぁっ！今、んなこと言ってる場合じゃっ……！」

「いいですよ、ハチ」

「えっ？」

高々と笑う鉄汰に、桜時が怒鳴りかけるが、そんな桜時の言葉を輝矢が止める。止めた輝矢を不思議そうに見る桜時。

「口で言うだけではわからないようですから」

「……っ」

表情を鋭くした輝矢を見て、鉄汰が不敵に笑う。

「ボクは桃タローの弟子なんかに負けはしないっ。絶対にねっ！」

「……っ」

どこか必死に言う鉄汰に、輝矢は少し眉をひそめた。

「証明してあげるよっ……！！」

「あっ……！ちょっ……！」

桜時が止める間もなく、鉄汰が鬼人の方へと走り出していく。

「シロクマさんたちの救助は頼みますよ、ハチっ」

「えっ？おっおいっ！輝矢っ！」

鉄汰に続くようにして、鬼人の方へと走り出していく輝矢。

第5章　クマった上司　☆4

「グガガガッ……」

「桃タローの弟子なんかにっ……」

やっと立ち上がった鬼人に、マサカリを振り上げる鉄汰。

「ボクは劣りはしないっ！！“アイアン・スイング”っっ！！」

「“月器・三日月”っ」

輝矢は三日月を、鉄汰はマサカリを、鬼人へ向けて同時に振り切る。

――――ゴッチィィィィィーンッッッ！！！――――

鬼人の前で交差し、止まってしまう三日月をマサカリ。

「グガッ？」

『……。』

鬼人が間抜け面で首をかしげ、輝矢と鉄汰もそれぞれ唖然とする。

「何、してくれてるんだよっ！邪魔だよっ！邪魔っ！！」

「それはこちらの台詞です。そんな無駄に大きいマサカリ、振り回すのやめて下さい」

「このマサカリはボクの一族の伝統なんだよっ！君こそ何だいっ！？三日月っ！？まんまじゃないかっ！！」

「まんまで何が悪いんです？」

三日月とマサカリが交差したまま、くだらない口論を繰り広げる輝矢と鉄汰。

「“鬼口”っっ！！！」

そんな隙だらけの２人へ、鬼人が鬼口を放つ。

『……っ』

「“月器・十六夜”っ」

「“鉄汰スペシャル・バージョン３”っっ！！」

またもや同時に輝矢が三日月を振り上げ、鉄汰が懐かあら鉄球を投げる。

――――ゴッチィィィィーーンッッッ！！！――――

『……。』

輝矢の十六夜と鉄汰のバージョン３のそれぞれの盾が、幅を大きく取るため、またしても構える前に衝突する。

「だっから邪魔だって言ってるんだよっ！その満月っ！！」

「満月じゃありません、十六夜です。そちらのナマクラ鉄壁こそ邪魔なんですけど？」

「何だってっ！？」

「おっおいっ！！お前ら、前見ろっ！！前っ！！」

『えっ？』

またしてもくだらない口論を繰り広げていた輝矢と鉄汰が、少し慌てたように叫ぶゴンの声に前を見る。

『うっ……！』

構えられなかった両者の盾の間を抜けて、２人へと向かってくる鬼口。２人が顔をしかめる。

「“左翼・滅羽”っ！」

『……っ』

――――パァァァァァァーーンッッッ！！！――――

２人に迫り来ていた鬼口に、横から青い羽根が突き刺さると、鬼口が２人の目の前で消滅した。

「もぉ～何やってんのさぁ～」

「由雉っ」

呆れた顔を見せながら、２人の前へと立ったのは、人化して青い羽根を構えた由雉であった。

「足の引っ張り合いしてるだけじゃ～ん。ボクの手を煩わせないでよぉ～」

「そうですね、こんな鉄クズ使いに構ってないで、とっとと鬼人をっ……」

「そぉ～うはいかないよぉーっ！！勝負にはこのボクが勝たせてもらうっ！！」

『へっ？』

由雉の言葉に輝矢が気持ちを改めようとしている中、まったく気持ちを改めずに再び鬼人の元へと飛び出していってしまう鉄汰。

「そんな正面から飛び込んだらっ……！」

「ボクが桃タローより優れているということを示さなければならないんだっっ！！」

輝矢が止めようと手を伸ばすが、鉄汰は強い意志を見せて突き進む。

「“アイアン・スイング”っっ！！」
「……っ“鬼炎”っっ！！ガアアアアッッッ！！！！」
鉄汰がマサカリから鉄の塊を放つと、鬼人も口から炎を放った。
「そんな炎っ……！」
ぶつかり合う2つの力を見ながら、余裕の表情を見せる鉄汰。
――――ジュウウウウウゥゥゥ～～～ッッッ！！！――――
「何っ……！！？」
鉄汰の放った鉄は、鬼人の鬼炎にあっさりと溶けていく。
「ううっ……！！」
鉄を溶かしつくした強力な炎が、鉄汰へと向かってくる。表情を凍りつかせる鉄汰。
「うわあああああああっっ……！！」
「……っ」
――――バァァァァーーンッッッ！！！！――――
『……っ』
鬼炎が鉄汰のいた辺りの地面を直撃し、土を抉るように深く穴をあける。不安げな表情で見守る一同。
「ううっ……」
『……っ！輝矢っ！！』

地面にあいた穴のすぐ横で、鉄汰と重なるようにして倒れている輝矢。その左腕には鬼炎がかすったのか、ひどい火傷を負っていた。桜時やゴンたちが身を乗り出して輝矢の名を呼ぶ。

「……っ！君っ……！」

起き上がった鉄汰が、負傷した輝矢に駆け寄る。

「あ～……後3センチ右に飛んだら完璧に避けられたんですけどねぇ～」

「……っ」

左腕を押さえながら苦い笑みを浮かべる輝矢。そんな輝矢を見て、目を細める鉄汰。

「愚かだねっ！ボクを助けるくらいなら鬼人に攻撃をっ……！」

「私はっ……」

「……っ」

鉄汰の言葉を遮り、輝矢が強い眼差しを鉄汰に向ける。

「私は別に、アナタと争うために鬼人を退治するわけではありません」

「……っ？」

輝矢の強い瞳に、鉄汰が眉をひそめる。

「我が師・桃タローの教えはただ1つ……」

輝矢が鉄汰へ笑みを向ける。

「“誰かを守るためだけに戦え”……と……」

「……っ！」

鉄汰に走る衝撃。

「グアアアアアアッッッ！！！！」

『……っ！』

そんな輝矢と鉄汰に、飛びかかっていく鬼人。

『輝矢っ……！！』

桜時とモンキが助けに入ろうとする。

「下がっとくだぁぁ～」

『へっ？』

そんな2人に制止を促し、2人の前に出たとある人物。

『クマ二郎っ！！？』

そう、それはクマ二郎であった。

「いっくどぉ～っ？鬼っこぉ～っ！」

――――ボォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！！！――――

クマ二郎の大きな体を、白い煙が包んでいく。

「覚悟はできてっかぁぁっっ！！？鬼人ヤローっっっっ！！！」

『……っ！』

次の瞬間、煙の中から出てきたのは、黒のオカッパ頭に不釣合い

な濃い顔立ちの、大柄の男。オトポリの制服に“金”と書かれた赤い腕章をしており、背中には大きな金色のマサカリを背負っている。

「総長っ！！」
「お兄ちゃんっ！？」

『えええええええええええええええっ！！？』

それぞれに声をあげるゴンと鉄汰。その２人の言葉に、桜時たちがさらに驚く。

「いくぜぇっ……？……っ！」

人間の姿となったクマ二郎が、大きく右手を振りかぶり、背中に背負った金色のマサカリを構える。

「グガアアッッッ！！！！」

「“ゴールド・ラッシュ”っっ！！！」

「……っ！“鬼炎”っっ！！！！」

クマ二郎が鉄汰と同じようにマサカリを振り切ると、マサカリから金の塊のようなものが無数に放たれる。それを見て鬼炎を放つ鬼人。

「さっきの鉄汰みたいに溶かされるんじゃっ……！」

「溶けねぇーよっ……」

不安げに声を出した桜時の言葉に答えるように、クマ二郎が言い放つ。

「俺のゴールドはっ……無敵だっ……！！」

――――バァァァァァーンッッッ！！！――――――

「グガッ……！！」

『……っ！』

無数の金塊が、鬼炎を吸収するように掻き消し、まっすぐに鬼人へと飛んでいく。

「……っ！ギャアアアッッッ！！！！」

クマ二郎のゴールド・ラッシュをもろに喰らい、鬼人が苦しげな悲鳴をあげる。

「私の出番まで取らないで下さいよ、クマ二郎」

「……っ」

輝矢の声に、クマ二郎が振り返る。

「いえっ、金汰」

「ガッハッハッハっ！」

――――ボォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――――

クマ二郎の体を再び白い煙が包むと、次の瞬間、そこには元の黒熊姿のクマ二郎が立っていた。

「すんまねぇ～だぁっ！輝矢さんっ！輝矢さんはぁ～もう動けねぇ～もんだとばっかりっ」

「このくらいの傷で動けなくなるほど柔じゃありませんよ」

「ソイツは失礼すただぁ～っ！！ガッハッハッハっ！！」

「失礼しちゃいますねぇ～」
「あっ……」
鉄汰が不安げに見つめる中、輝矢が火傷を負った左腕を庇うようにしてゆっくりと立ち上がり、右手1本で三日月を構える。

「金汰っ」
「あいだぁぁぁっっ！！」

――――ボォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――

クマ二郎が再び人の姿となる。

「“ゴールド・カーペット”っっ！！」
クマ二郎がマサカリを振り切ると、鬼人へ向けて金でできた道が伸びていく。

「……っ」
そこに飛び乗り、鬼人の元へと駆け滑っていく。

「グっ……！ググっ……！！グっ……！？」

「“月器っ……」
金汰の攻撃にまだ苦しんでいる鬼人へと、三日月を構える輝矢。

「水月”っ！」

――――バァァァァァァーーンッッッ！！！――――

三日月から放たれた無数の水の刃が、鬼人へと放たれる。

「グッ……！ギャアアアアアッッ！！！！」

輝矢の水月を喰らい、激しい断末魔を残し、水の中へと消えていった。

第5章　クマった上司　☆5

「……。うっ……！」
鬼人が砂となって消えたのを確認し、三日月を振り下ろした輝矢が、少し顔をしかめて倒れこむ。

「輝矢っ……！」
倒れこむ輝矢に駆け寄る桜時。

「ううっ……！やっぱ無理っ」
「……。」
やはり輝矢の１m手前で駆け寄ることに挫けてしまう桜時。

「かっぐやぁぁ～んっ！俺の腕ん中に飛び込んでおいでぇぇぇぇ～～～っっっ！！！」
そんな桜時を追い抜かして、モンキが受け止め態勢を取る。

「ああ、けっこう平気でしたっ」
「ぬわあああああああっっっ！！！」
急にシャキっと立ち上がる輝矢に、モンキは空振りして地面に倒れこむ。

「ううっ……」
「平気なはずないでしょ～？ほらっ、見せてみなよ」
倒れこんだモンキを思い切り無視して、由雉が輝矢の左腕を取る。

「“癒羽”」

――――プスっ！！――――

「ううっ……！」
火傷の傷口に、容赦なく黄色い羽根を突き刺す由雉。
「嫌がらせですか……？」
「まぁ見てなよぉ」
「……？」

――――パアアアアーーッッッ！！！――――

「……っ」
傷口に突き刺さった黄色い羽根が光を発すると、光が傷口を包み、見る見るうちに傷を治していった。引いていく痛みに、驚いた表情を見せる輝矢。

「こんなこともできるのですかぁ」
「まぁねっ」
「けっこう見所のあるキジですねぇ～旅に同行することを許して差し上げましょう」
「今更っ？」
今更下りた許可に、由雉が少し呆れた表情を見せる。

「ちょいと由雉クン、そんな力あるんやったらこの前、俺が大怪我した時も使ってくれたら良かったんやっ……」
「バカにつける薬はないってねぇ～」
「がいぃぃぃーーーんっっっ！！！」
冷たく言い放つ由雉に、ショックを受けるモンキ。

「ふぃ～っ」

――――ボォォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！――――

輝矢たちがギャーギャーとやっている中、クマ二郎が一息ついて黒熊の姿へと戻る。

「そっ……そういや何者なんだっ？あのクマっ……」

「あの人はオトポリの正刈金汰総長だっ」

「……っゴンっ」

混乱していた桜時が振り向くと、そこにはいつの間にか人の姿に戻ったゴンが立っていた。

「総長って……」

「長官・副長官の次に偉い人っスよっ！実際、鬼人退治する警官の中では1っ番のお偉いさんスっ！」

「そんな偉いヤツだったのかっ！！？」

続いて解説する羊スケの言葉に、大きく驚く桜時。

「やっべぇーっ、俺“クマぁ”とか言っちゃったよぉ」

「ボクも黒いくせにぃ～とか色々言っちゃったぁ～」

「大丈夫じゃないっスかぁ～？あの人、そういうの気にしない人っスよぉ～」

今更、後悔している桜時と由雉に、羊スケが明るく声をかける。

「ゴンさんがオトポリ、クビにならないで済んでるくらいっスからっ！」

「どういう意味だっ！！こらぁぁぁぁっっっ！！！」

明るく話す羊スケに、ゴンの怒声が飛ぶ。

「けっど輝矢のヤツ、何でんなお偉いさんと知り合いなんだぁ？」

「そりゃ知り合いだろうなぁー」

「へっ？」
桜時の疑問に、当たり前だろうと言わんばかりに頷くゴン。そんなゴンに桜時が首をかしげる。
「総長は１０年前もオトポリにいてな、“桃タロー”と相対して“金タロー”って呼ばれてたんだ」
“桃タロー”と“金タロー”は永遠のライバルって言われてたんスよっ！」
『ライバルっ？』
「んな大層なもんじゃねぇーべさぁっ！桃ちゃんにはいっつも世話になりっぱなしだったべぇ～」
驚く桜時たちに、金汰が謙遜の笑みを向ける。
『桃ちゃんっ！？』
伝説の英雄相手にかなり親しげな呼び方の金汰に、皆が驚きを見せる。
「桃ちゃんは憧れというより、おいらの理想だべさぁ～」
「私が師匠の元で修行している時に何度か金汰は訪ねて来ましてね、それで知り合いなんです」
「そうそう、そういう知り合いだぁぁ～っ！ガッハッハッハっ！」
「初めっからそう説明しとけよっ……」
やっと詳しく話した輝矢と金汰に、桜時が呆れたように呟く。
「おっ……兄ちゃんっ……」
どこか気まずそうに金汰を見る鉄汰。
「あのっ……」
「こんのっ……バカ弟がぁぁぁっっっ！！！！！」
「ぬはあああああああっっっ！！！！」

「あぁ～あっ……」
鉄汰が話を切り出そうとした途端に、金汰が鉄汰の腰を掴み、鉄汰を思い切り投げ飛ばした。地面に叩きつけられる鉄汰を見て、力のない声を出す輝矢。
「自分の力驕ってミスした挙句ぅ～、かっぐやさんにまで迷惑かけおってぇぇ～っ！！このアホぅがっ！」
「ううっ……」
――――ボォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！！！――――
起き上がった鉄汰の体を白い煙が包んでいく。
「んでもぉ～っ！兄ちゃんっ、おいらぁぁ～～っ！！」
次の瞬間、煙の中から出てきたのは、金汰よりもう1サイズ小振りの、金汰とよく似た黒熊であった。
「おいらぁ～っ！精一杯ぃぃ～っ……！」
「問答無用だああっ！帰ったら反省書３０００枚だべっさぁぁっ！」
「ぞんなぁ～～っっ！！」
強く言う金汰クマに、悲しい顔を見せる鉄汰クマ。
「ケケケっ！いい気味だぜっ」
「ってかアイツ、クマやったんや」
「クマのくせにあんな気取ってたのかと思うと腹立つねぇ～」
「ってか何で熊化したらナマるんだっ……？」
そんな金汰と鉄汰の姿を見て、思い思いの言葉を呟くゴン、モンキ、由雉、桜時。

「そんなんじゃいつまで経っても“桃タロー”みたいになれんどぉおっ！かっぐやさんを見習いぃっ！」
「いんやっ……でもっ、おいらぁ別に桃タローみたいになりたいとはっ……」
「もっと桃タローに近づくためだぁぁっ！明日から相撲稽古、倍だべぇっ！覚悟するべさぁぁっっ！！」
「えええぇっっ！！！？」
金汰の言葉に、悲鳴にも似た声を出す鉄汰。

「目指せ、桃タローだべぇっ！ガッハッハッハっハっ！！」
「……だからっ……」
鉄汰が今にも泣き出しそうな情けない顔を上げる。

「だから桃タローなんて嫌いとよぉぉおっっっ！！！！！！！」

鉄汰の悲痛な叫びが、夜の白熊の街に響き渡った。

翌朝。

「ガッハッハっ！ほんだらぁ～かぐやさんっ！桃ちゃんによろしく

だぁぁっっ！！」

白熊の街入口付近に、クマ二郎こと金汰の大きな笑い声が響き渡る。鬼人退治を無事終え、金汰たちオトポリも輝矢たちも白熊の街を出ようとしていた。

「ええ、いつ会えるかわかりませんが、会ったら伝えておきます」

「ガッハッハっ！頼むだぁぁぁっっ！！」

――――ボォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！！――――――

輝矢の言葉にまたしても豪快に笑った金汰が、白い煙に包まれていく。

「じゃあ行くぞ、野郎ども」

『はっ！』

人化して男前に仕切る金汰に、ゴンたちが敬礼をする。

「ある意味、二重人格だな……」

「まぁクマのままカッコつけられても困るけどね」

人間の時とクマの時とでギャップのある金汰に、戸惑いつつも呆れた顔を見せるハチとユキジ。

「おいっ！鉄っ！お前も輝矢さんに礼を言えっ！」

「ええっ！？」

「あんだけ世話かけといて礼言わねぇー気かぁっ！？ほれっ！」

「うわあっっ！！」

嫌がる鉄汰を金汰が無理やり手押しして、輝矢の前へと突き出した。

「……。」

「えっ……えっとっ……」
輝矢が見つめる中、あれこれ考えるように言葉を探す鉄汰。
「次こそボクが君なんかより優れていることを証明してあげるよっ！」
「へっ？」
しおらしく礼を言うどころか、高々と言い放つ鉄汰に、間の抜けたような表情を見せる輝矢たち。
「楽しみにしていたまえっ！！ふわぁーっはっはっはっはっ！！」
「このっ……！」
笑う鉄汰を見て、金汰が拳を握り締める。
――――ボォォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！！！――――
「バカ弟がぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！！」
「ふわぁぁぁぁぁ～～っっっ！！！！！」
――――ボォォォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！！！――――
熊化して拳を振り上げる金汰から、熊化して必死に逃げ惑う鉄汰。
追いかけっこを始めた2頭のクマは、そのまま山の下方へと去り、見えなくなっていった。
「なっ……何だったんだっ……？一体っ……」
クマたちの去っていった方を見ながら、呆然と呟くハチ。
「大体なんであの総長さん、来てたの？」
「あの人はいっつもそうだっ」

『えっ？』
ゴンの言葉に、ユキジたちが振り返る。
「銀汰の時も、銅汰の時も、弟が隊長やる事件になると、すぅーぐ混じってくる……」
「要は兄バカなんですよ」
「なるほどねっ……」
ゴンと輝矢の説明に、呆れた表情で頷くユキジ。
「でもまぁさっすが金汰サンは違げぇーよなぁっ」
感心したような声を出すゴン。
「街人に混ざってたの全然わかんなかったもんなぁー！さっすが俺に潜入捜査の心得を教えてくれた人っ！」
「いやっ……全然、わかったけど？」
「めちゃ怪しまれてたもんねぇ～」
「カエルの弟子はカエルというわけですね」
感心しまくっているゴンに、次々と突っ込みを入れていくハチ、ユキジ、輝矢。
「さぁーてっ、俺らも行くかぁ、羊スケっ」
「おいぃーっスっ！」
ゴンの言葉に、羊スケが車の中から気のいい返事を返す。
「んじゃあ竹取っ、今回も世話になったなっ！」
「いつ奢ってくれるのですか？」
「うっ……！まっまぁ給料日まで待てよっ」
「そんなこと言っちゃっていいんスかぁ～？ゴンさん、点引かれまくってまた給料ないかもぉ～」
「うるせぇっ！」
「ぎゃあっ！！」
茶化すように言った羊スケにゴンの拳が飛ぶ。痛がる羊スケの横

の助手席へと乗り込むゴン。
「ほいじゃっ！またなっ！退治屋とそのペットどもっ！」
「失礼するっスぅ～っ！」
２人が軽く手を挙げると、オトポリのオープンカーは勢いよく山道を下っていった。

「ふぅ～、アイツらが来るといっつもロクなことになんねぇーよなぁ」
「まったくですね」
一息ついたハチの言葉に、輝矢がしみじみと頷く。

「さて、私たちも行きましょうか」
「ああ」
「おうっ！」
「とっとと下ろうよぉ～こんな寒いとこっ」
輝矢の声に返事をするイヌ、サル、キジ。３匹を引きつれ、輝矢が白熊の街を後にし、ゆっくりと山道を下っていく。

「でもさぁ」
「……？」
ハチの声に、輝矢が振り向く。

「俺、けっこうグッと来たっ」
「えっ？私の笑顔にですか？」
「違げぇーよっ！あの桃タローの教えってヤツっ」
「ああ」
どこかがっかりしたように頷く輝矢。

「いいよなぁ～」

――――我が師・桃タローの教えはただ1つっ……――――

「さっすが桃タローっ！お前みたいな弟子がいるから、ちょっと人格疑ってたけどやっぱっ……！」

「あの教えには続きがあるんです」

「へっ？」

輝矢が笑顔を見せると、ハチが目を丸くした。

「“誰かを守るためだけに戦え。そうすれば必ずがっぽがっぽとお礼が入る”とっ」

「えっ……？」

教えの続きに、ハチが思わず固まる。

「今回はお礼に金汰から金塊貰えましたし、いやぁ～退治屋やって良かったなぁって感じですよねっ」

「……。」

金塊を見ながら笑顔を見せる輝矢に、ハチは最早、言葉も出ない。

「カエルの師匠はカエルってね」

「そうだろうなっ……」

「輝矢ぁぁ～んっ！その金塊で俺に一生分のバナナを買っ……！」

「骨っ子一生分買ってあげますからね、ハチっ」

「マジっ！？」

「がいいいいぃぃーーんっっっ！！！！」

「ねぇ～っササミチーズはぁ～？」

何はともあれ、こんな感じで輝矢たちの旅は続いていくのであった。

第6章　シンデレラストーリー　★1

「よく戻りましたね」
その凛と響く高い声に、ゆっくりと顔を上げるのは、派手なピンク頭の印象的な青年。もちろん桜時である。
「桜時……」
「はい」
深々と頭を下げていた桜時が、ゆっくりと顔を上げる。
「ただいま戻りました、孔雀さん…」

そう、俺は今、雀国の朱実の屋敷にいる。
何故かというと、それは昨日の昼に起こった出来事まで振り返らなきゃならない。

――――――――――ということで昨日の昼。
輝矢たちは道途中の小さな宿場町へと立ち寄っていた。
「あああああああああっっっ!!!!!」
小さな宿場町にある小さな食堂に響き渡るハチの叫び声。
「お前っ!今っ!俺の唐揚げ食っただろおっっ!!?」
ハチが強く指差した先にいるのは、暢気な顔のモンキである。
「ん～?いっやぁ～最後まで取ってあるから、よっぽど嫌いなんかなぁ～思て食べてあげたんやんっ?」
「アホかぁぁっ!!大っ好きだからこそ1っ番最後に食べようと、楽しみに取っといたんじゃねぇーかっ!」

「あっ？そうやったんっ？」
モンキが目をパチクリさせて聞き返す。
「1番好きなもん最後に食べるなんて、みみっちいイヌやなぁ～っ」
「ああっ！？」
モンキの言葉に、ハチが顔を歪める。
「てめぇーこそ人のっ……ってかイヌの唐揚げ取るなんてどんだけみみっちいサルなんだよっっ！！」
「なんやてぇぇ～～～っっ！！？」
ハチの挑発に、モンキも顔をしかめる。
「やるんかぁっ！？ああっ！？」
「やってやろうじゃねぇーかよっっ！！」
勢いよく席を立ち、険悪な空気で睨み合うイヌとサル。
「ええ～どっちがみみっちいかなんて、どっちもみみっち過ぎてボク、決められんなぁ～いっ」
『おいっ』
そこに余計な口を挟むユキジを、ハチとモンキが同時に睨みつける。
「あんのぉ～お客さんっ……」
店員らしき男が、言い争う3人と同じテーブルで淡々と食事を進めている輝矢に、遠慮がちに声をかける。
「他のお客様の迷惑となりますので、ペットにもうちょっとお静かにするよう言っ……」
「あっ、月見団子もう一皿」
「えっ？」
店員の注意をまったく無視して注文をする輝矢に、店員が少し間の抜けた顔を見せる。
「いえっ、ですからねっ、ペットにもうちょっと静かにするようっ……！」
「さっさと持って来なさい」
「はいっ！ただいまぁぁっ！！」

もう1度注意をしようとチャレンジした店員であったが、輝矢の冷たい睨みの前にあえなく敗れ去り、月見団子を取りに慌てて厨房へと戻っていく。

「まったくっ……」

「だいたいお前が唐揚げ定食なんて頼むからやなぁっ……！」

「おっ前も唐揚げ定食にしとけば良かっただろーがぁっ！」

「ねぇ～ボクが唐揚げ食べるのってやっぱ共食いになんのかなぁ～？」

『どうでもいいわっっ！！』

輝矢が肩を落としている横で、まだ3人の争いは続いている。

「だいたいお前はっ……！！」

――――ミシッミシっミシっ……――――

「あっ？」

文句を続けようとしていたハチが、何やら上空から聞こえてくる軋むような音に顔を上げる。

「何っ……」

――――バッコォォォーーンッッッ！！！――――

「ぬわあああああああっっっ！！！」

ハチの見上げていた天井が、急に崩れ落ちてくる。降り注ぐ瓦礫に、思わず声をあげるハチ。

「きゃあああああっっっ！！！」

「うわあああああっっっ！！！」

「おわわわわっっ……！！」

「何やっ？何やぁ～？」

「もぐもぐっ……」

輝矢たち以外の客も必死に降り注ぐ瓦礫から逃げ惑う。ハチたち

は机の下へと潜り込んで身を守るが、輝矢だけは左手で落ちてくる瓦礫を砕きながら食事を続ける。
「おっうっちゃあ～～～んっっ！！」
「へっ？」
呼ばれる名と聞き覚えのある声に、ハチが机の下から顔を出す。
「桜ちゃああ～～んっっ！！」

――――ズッシィィィーーンッッッ！！！――――

「ぎゃあああああっっっ！！！！」
大きな声とともに、崩れ落ちて穴のあいた天井から降りてきたのは、何とも巨大なスズメであった。スズメは体長２ｍ近くあり、通常の大きさの２０倍くらいはありそうである。
「って……竹兄っ！！？」
悲鳴をあげて引っくり返っていたハチが、じっくりとその巨大スズメを見て名を呼ぶ。
「ひっさし振りだねぇぇ～～っっ！！桜ちゃんっ！！」

――――ボォォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――

巨大スズメの体を白い煙が包んでいく。
「会いたかったよぉぉぉ～～～んっっ！！」
『……っ』
次の瞬間、煙の中から姿を見せたのは、燃えるような赤毛に真ん丸とした緑色の瞳の、よく整った顔立ちをした青年であった。ゴツゴツしたピアスやネックレスをしており、少しチャラけている。
「輝矢ちゃんも久しぶりぃ～っ！相変わらずカワイイねぇ～っ！」
「どちら様でしたっけ？」
「がっさぁぁぁぁぁーーんっっ！！」
輝矢の淡白な反応に、大きくショックを受ける青年。

「ほらっ、あれだよっ、あれっ！朱実のっ……！孔雀さんの息子っ……！」

「ああ、３バカ兄弟の１人ですか」

小声で教え込むハチに、やっと思い出した様子で頷く輝矢。

「そうっ！朱実家国主・朱実孔雀の次男にして、桜ちゃんの親愛なる従兄の朱実竹人っでぇぇ～～すっ！」

「ちょっとお客さんっ！！」

「んっ？」

そんな竹人に、どこか怒ったような顔つきで詰め寄ってくる食堂の店員たち。

「どうしてくれるんだよっ！ウチの天井、こんなんにしちゃってっ！！」

「ああっ」

物凄い剣幕の店員たちに動じることなく、竹人が懐から財布を取り出す。

「修理代いくらくらいっ？とりあえず１００万チュンでいい？」

『おおぉぉぉーーっっ！！』

財布から分厚い札束を取り出す竹人。

「ありがとうございまぁぁーーすっっ！！ごゆっくりぃぃーーっ！！」

金を受け取り、笑顔となって引き下がっていく店員たち。

「ふぅっ……無駄な争いをせずに済んだっ」

「無駄な金使ってんじゃねぇーよっっっ！！！」

一息つく竹人に、ハチが全力で突っ込みを入れる。

「大体何だって竹兄がここにっ……」

「そぉ～～うっ！！それが大変なんだよぉ～っ！！桜ちゃんっっ！！」

「へっ？」

竹人の言葉に、ハチが目を丸くする。

「大変って……」

「あまりの大変さに巨獣化して、雀国からビュッヒャーンと飛んできたんだよぉ～っ！！」
「あっ、ああっ。で、大変ってっ……」
「もぉ～うそれが大変で大変でっ……！！」
「とっとと言えよっっ！！！」
“大変”しか言わない竹人に、ついにハチが怒鳴りあげる。
「ボクっ……このままじゃっ……結婚させられちゃうんだっっっ！！！」
『……。』
真剣な面持ちで告白した竹人であったが、ハチをはじめとする皆は呆れた表情で静まり返る。
「何だっ……んなことかっ……」
「めでたいやぁ～んっ！なぁ？輝矢ぁ～ん、俺らもこの幸せの波に乗ってっ……！」
「お1匹でどうぞ」
「がいぃぃぃーーんっっ！！」
「懲りないサルだよねぇ～」
竹人の告白に、力が抜けたように呟くハチと、またも無駄に輝矢にアタックして玉砕のあげく落ち込むモンキ。
「月見団子お待ちぃぃ～～っ！」
「あっ」
運ばれてきた月見団子に、輝矢が珍しく目を輝かせる。
「というわけで大変なんだぁ～っ！！とりあえず雀国に戻ろうっ！！桜ちゃんっっ！！」
「へっ？」

――――ボォォォォォォ～～ンッッッ！！！――――

竹人が白い煙に包まれ、再び巨大スズメの姿となる。
「さっ！輝矢ちゃんもその他大勢も行っっくよぉぉ～～っっっ！！

！」
「うおおおおうっっ！！」
「ぬわっ！」
「ふわあああっ」
「ちょっ……！まだ月見団子っ……！」
巨大スズメとなった竹人がハチ、モンキ、ユキジ、そしてまさに今、月見団子に手を付けようとしていた輝矢を無理やりその背に乗せる。
「しゅっぱぁぁぁぁ～～っつっっっ！！！！」
「勝手に出発してんじゃねぇーーっっっ！！！」
「私のっ……私の月見団子っ……！」
輝矢の伸ばした手は、虚しくも月見団子には届かなかった。

と、いうことで今、桜時たちは雀国にいるわけである。
「ただいま戻りました……ってゆーかっ……」
桜時と向き合った孔雀が、不意に口を開く。
「ちょっと戻ってくるの早すぎなんじゃない？まだ１０日くらいしか経ってないわよっ……？」
「いやっ、それはそのっ……竹兄がっ……」
眉間に皺を寄せて問いかけてくる孔雀に、桜時が少し遠慮がちに答える。
「竹人っ？」
「何かっ……結婚させられちゃうとか言ってっ……」
「はぁっ……」
桜時の説明を聞いた孔雀が、深々と溜め息をついた。
「まったく仕方のない子ねっ……」
「ホントなのかっ？竹兄が結婚するって」
「正確には婚約者を決めようとしてるだけですけどね」

「婚約者っ？」
桜時が物珍しそうに聞き返す。
「ええ、松人が燕国主のお嬢さんを婚約者と決めたのも１８の時だったから、竹人もそろそろかと思ってね」
「へぇっ」
国主の息子をもなれば、１８で婚約というのも珍しい話ではない。国と国との繋がりを強めるため、国をより豊かにするため、そんな政治的理由による婚約は当たり前の話だ。
「でも竹人ときたらっ……どこのお嬢さんを連れてきても気に入らないとそればかりっ……」
孔雀が少し眉をひそめる。
「そこで私、決めたのよ」
「へっ？決めた？」
「ええ、千鶴っ」
「はいっ」
「……？」
孔雀に呼ばれ、部屋の隅に立っていた千鶴が、何やら大きな紙を持って孔雀の横へとやって来る。
「題してっ……」

――――バッサァァァァ～～ンッッッ！！！――――

「“朱実竹人の婚約者を決めちゃうぞダンスパーティー☆”を開くことにしたのよっ！」
「……。」
千鶴の広げた紙に書かれたパーティーの巨大広告と、その安易なネーミングに言葉を失う桜時。
「何っ？何か文句でもあるのっ？」
「いえっ……」
孔雀に睨まれるように見られ、桜時がすぐさま俯く。

「パーティーは明日の夜よ。ついでだから貴方も参加して挨拶なさい」
「はぁっ……」
「あとっ、竹人が逃げないよう、くれぐれも頼むわよっ……？」
「……はいっ」
孔雀の圧力のかかった瞳に、桜時は頷くことしかできなかった。

第6章　シンデレラストーリー　★2

朱実の屋敷。中庭側縁側。

「月見団子っ……月見……団子……」

『……。』

縁側に座り込み、魂の抜け落ちたような虚ろな瞳でただ“月見団子”と呟いている輝矢。そんな輝矢を中庭からどこか不安げに見つめるモンキとユキジ。

「ヤバいねっ……いつも負のオーラ出してるけど、いつも以上に負のオーラが出てるっ……」

「月見団子食べ損ねたんがよっぽどショックやったんやろ～なぁ～輝矢んっ」

「月見……団子……」

突然現れた桜時の従兄・竹人にさらわれるように食堂を飛び立ったため、輝矢はせっかく注文していた月見団子を後一歩のところで食べ損ねてしまったのである。

「何やら俺を呼ぶ声が聞こえるなぁっ！！」

『……？』

輝矢を見守っていたモンキとユキジが、後方から聞こえてくるど派手な声に振り返る。

「困り事かぁっ！？それならこの俺っ！警備隊長っ！あっ！警備隊長の銀ペー様に任せておけぇいっ！」

『いよおっ！！アニキぃいっ！！』

『……。』

２人が振り返った先に立っていたのは、ダサいポーズを決めた、ツルツル頭の何とも愛らしいペンギンであった。銀ペーを応援する２頭の子分ペンギン・ペン太とペン吉。

「なぁ～んだっ、“飛べない鳥”かぁ～」

「ぐほおおうっっ！！」

ユキジが口にした禁断の一言に、銀ペーが顔を引きつる。
『アっ……アニキっ……！！』
「だっ大丈夫だっ……！俺はハチお坊ちゃんのお陰で生まれ変わったんだっ！もうその一言で揺るがないっ！」
『おおっ！アニキぃぃっっ！！』
奮えを堪えて誇らしげに笑う銀ペーに、子分たちが目を輝かせる。
「飛べないくせに鳥とか名乗る資格ないよねぇ～」
「何だとっ！！？キジっっ！！こらぁぁっ！！」
『アニキぃぃぃ～～～っっ！！生まれ変わったんじゃなかったんですかぁぁ～～～っっ！！』
ユキジの容赦ない一言に、もう堪えきれず殴りかかろうとする銀ペーを子分たちが必死に止める。
「ふぅっ……いやぁ～君たちっ……」
「切り替え早いなぁ～」
すぐに冷静さを取り戻した銀ペーに、モンキが感心したように声を出す。
「踏みつけ女の機嫌が悪くてお困りのようだねっ」
「踏みつけ女？ああ、そうそう。輝矢の機嫌がすさまじく悪くってビクビクしてるのぉ～」
「ここは警備隊長の俺っ！あっ！警備隊長の俺に任せておきたまえっっ！！！」
「やめといた方がいいんとちゃう～？」
「ハッハッハっ！！見ていたまえっっ！！！」
モンキが不安げに声をかけるが、銀ペーはそれを聞くことなく、自信に満ちた表情で輝矢の元へ歩いていく。
「月見団子……」
「踏みつけ女ぁぁっ！！」
「……？」
まだ月見団子を悔やんでいた輝矢が大きな声に顔を上げると、目の前には銀ペーが立っていた。

「俺の新必殺技を見て元気を取り戻すがいいっ！！行くぞっ！？」
『……っ』
皆が息を呑んで見守る中、銀ペーがモーションに入る。
「見よっっ！！“ペンペン・ツルツル・ハリケーーン”っっ！！」
銀ペーが頭を付いて逆立ちし、そのツルツル頭を回転させて体全体をまるで竜巻のように高速に回していく。
『おおぉぉーーっ！！』
『……。』
歓声をあげる子分ペンギンと、静まり返るモンキ、ユキジ。
「……っ」
輝矢も静かに右足を振り上げる。
――――バシコォォォォォォーーーンッッッ！！！――――
「ふぎゃあああああああっっ！！」
『アニキィィィィィィーーっっ！！』
輝矢に蹴り飛ばされ、塀に激突する銀ペー。その無残な姿に子分ペンギンたちが悲痛な叫びをあげる。
「ううっ……むっ……無念っ……」
「何やってんだぁ～？お前らっ……」
『……っ？』
力尽きる銀ペーを呆れた表情で見ながら、その場へとやって来たのは孔雀への挨拶を終えた桜時であった。
「ハっ……」
「桜時様を無事連れ帰って下さった恩返しをさせてくださぁぁーーいっ！！」
「……っ」
桜時の方を見る輝矢であったが、桜時の後方から桜時よりも素早く輝矢も元へと1羽の鶴が駆け抜けてくる。輝矢はすぐさま表情をしかめ、突っ込んでくる鶴をひらりとかわした。

――――ドスッ！ドスッ！ドスッ！――――

「恩返しいいぃ～～っっっ！！！」

「相変わらずなようですね……千鶴……」

壁に何度も嘴を突き刺す千鶴を見て、呆れた表情を見せる輝矢。

――――ボォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！――――

「ふぅ～っ」

桜時がハチの姿へと戻って一息つく。

「桜時ぃぃ～～っっ♪」

「桜時ぃぃ～～っっっ♪」

「あっ？」

聞こえてくるハーモニーに、ハチが振り返る。

『おぉぉぉぉ～～～うぅぅぅ～～～じぃぃぃ～～っっっ♪♪』

「２人だけだと何か微妙だな……」

ハチが振り返った先でハーモニーを刻んでいたのは、３バカ兄弟こと朱実の３兄弟の長男・松人と三男・梅人であった。

「竹人兄さん、婚約者決めることになってからロクにハーモニーに参加してくんなくってさ」

「ハーモニーに参加しないなんて、余程、嫌なんだろうねぇ～結婚するのが」

「何でそんなにハーモニー重要視してんだよっ」

深刻そうに話す松人と梅人に、ハチが呆れた表情で言う。

「あっ！桜ちゃ～～～んっ！」

「……っ？」

そこへ暢気な笑みを浮かべながら、竹人がやって来る。

「どうだったぁ～？お母様っ」

「どうもこうもやる気満々じゃねぇーかっ。婚約者探しのパーティ

ーやるってでっかい広告まで作って」
竹人にどこかうんざりしたような顔を向けるハチ。
「もぉ大人しく婚約したらいいだろ？」
「ええ～っ？」
ハチの言葉に、竹人が不満げな声を出す。
「困るよっ……だってボクっ……」
「……っ」
真剣な表情を見せる竹人に、ハチが何かわけがあるのかと息を呑む。
「まだ遊び足りないんだもんっ！」
「最低な理由だな……」
竹人の悪意なき笑顔に、ハチが軽蔑の瞳を向ける。
「その気持ちわかるでぇっっ！！！タケちゃんっっ！！」
「だっろぉ～っ？さっすがおサルさんっ！」
「気ぃ合ってんじゃねぇぇっっ！！！」
笑顔で手を取り合うモンキと竹人に、ハチが怒鳴りあげる。
「大体もう明日にはパーティー開かれちまうんだろっ？今更、俺にどうしろってんだよっ？」
「そりゃ～パーティーに乱入してボロボロの台無しにしちゃうとかぁ～」
「そんなんやったら、俺が孔雀さんにボロボロの台無しにされちまうじゃねぇーかっ」
竹人の無責任な発言に、呆れたように言い返すハチ。
「無理だっ！無理っ！諦めろっ！」
「ええ～っ！」
ハチが投げ捨てるように言うと、竹人が非難の声をあげる。
「あっ、そうだぁ～輝矢ちゃ～んっ」
「はいっ？」
「……っ？」
急に切り換えて笑顔で輝矢を呼ぶ竹人。そんな竹人を桜時が不思議そうに見る。

「これっ！さっき食べ損なわせちゃったからぁ～っ」
「はぁっ……！」
竹人が輝矢へと差し出したのは、台の上に天井まで届きそうなほどに積み上げられた月見団子の山。これに輝矢は一瞬で表情を輝かせる。
「シェフに頼んで材料あるだけ作らせたんだよぉ～」
「まぁ～た無駄なことをっ……」
「月見団子っ……月見団子っ……月見団子っ……」
ハチが竹人に呆れている中、輝矢が無我夢中で月見団子へと手を伸ばす。
「この月見団子ぜぇ～んぶ輝矢ちゃんにあげちゃうぅ～」
「えっ！？」
竹人の言葉に、珍しく大きくリアクションする輝矢。
「その代わりぃ～」
「その代わり？」
「嫌な予感っ……」
含んだ笑みを浮かべる竹人に、ハチが表情をしかめる。
「明日のパーティーぶっ壊してくんないっ？」
「いいですよ」
「良くねぇっっ！！！ってか竹兄っ！頼む人間選べよっ！！コイツにぶっ壊させたら死人が出るぞっ！？」
「やったぁ～～っ！」
「聞けいいいっっっ！！！」

「はぁっ……」
雀の街を、溜め息をつきながら疲れた背中で歩いていくハチ。

「結局何だかんだで丸め込まれて、パーティーをぶっ壊すことになってしまったっ……」

調子のいい竹人のペースにはめられて、断ることもできないまま、明日の竹人の婚約者選びのパーティーを壊すことを任されてしまったのである。

「大丈夫ですよ。私に任せておいて下さい」

「任せらんねぇーから悩んでんだろーがぁぁっっ！！」

ハチの横を歩くのは月見団子を頬張りながら、満足げな笑顔を浮かべている輝矢。竹人に月見団子を貢がれ、すっかりパーティーを壊す気でいる輝矢に、ハチは頭をさらに悩ませていた。

「はぁ～あ～どうすっかなぁ～……」

「でもさぁ～桜時ってホントに朱実のお坊ちゃんだったんだねぇ～」

「んだよっ？はじめっからそう言ってんだろっ？」

意外そうに言うユキジに、ハチがしかめっ面を向ける。

「だってぇ～今の今まで疑ってたしぃ」

「何で疑うんだよっ！！」

「だってぇ～ねぇっ？」

ユキジがモンキの方を見る。

「せやなぁ～っ！イヌぅ、何か貧乏くさいしっ」

「そうそうっ、ボクの方が高級感あるってゆぅ～かぁ～」

「お前らなぁぁっっ！！」

「きゃっ！」

「へっ？うわあああああああっっっ！！！」

モンキとユキジの方を振り返りながら道の中央へと飛び出したハチと、飛び出したハチのすぐ横から歩いてきていた人間が衝突する。

――――バサバサァァァァッッッ！！！――――

ハチとぶつかった人間が持っていた荷物が、道に散らばる。

「痛たたたたたっ……！」

「んっ……ん〜っ……」
「……っ！！だあああああっっっ！！！おっ！女ぁぁぁっっ！！？」
衝突したらしきすぐ目の前に座り込んでいる人間が女性であることを悟ったハチが、勢いよく後退していく。
「痛たたたたっ……」
顔を深く俯かせたまま、痛そうな声だけを出し、頭を押さえているその女性。
「あっかんなぁ〜っ！イヌはぁ〜っ！」
「あっ？」
「こういう時はなぁ、こうせなあかんねんでっ？」

――――ボォォォォォォォォォ〜〜〜ンっ！――――

そう得意げに言ってモンキが人化する。
「痛たたたたっ……」
「あっ……んん〜っ、あっ、ああ〜」
まだ痛がっている女性に近づいていきながら、発声を整える門貴。
「お怪我はありませんかっ？お嬢さんっ」
妙にカッコをつけて、門貴が女性へと手を差し伸べる。
「あっ……ハイっ……大丈夫ですっ……」
可愛らしい声で答えながら、女性が門貴の手を取り、ゆっくりと顔を上げる。
「ありがとうございますっ」
『……っ！』
顔を上げた女性は、まるでゴリラのようなダイナミックな顔立ちをしていた。女性の姿に、門貴をはじめとする全員が一瞬、固まる。
「お優しいんですねっ。ムフっ、ステキぃ〜〜っ」
「……。」
女性の言葉と笑顔に、門貴はさらに凍りついた。

第6章　シンデレラストーリー　★3

「荷物まで運んでもらっちゃって、ホントにどうもありがとぉ～っ」
『いっ……いえっ……』
先ほどのゴリラ……ではなく女性に満面の笑顔で礼を言われ、素早く女性から目を逸らす桜時と門貴。ハチとの衝突により道に散らばった女性の荷物を、桜時と門貴が拾うのを手伝い、そのついでに女性の家まで運んであげたのであった。
「ついでだからお茶でも飲んでいってぇ～ねぇ～っ？」
『いえっ、結構ですっ』
女性の誘いを、目を逸らしたまますぐさま断る桜時と門貴。
「遠慮せずにほらほらぁ～～っっ！！」
「だあああっっっ！！！触るなぁぁっっ！！！」
「いっやぁぁっっ！！！どうせ飲むならもっとカワイ子ちゃんのお茶がいいぃっ！！」
女性の物凄い力で家へと連れ込まれていく桜時と門貴。２人の悲痛な叫びが近所へと響き渡る。
「何か色々恐るべし……だね……」
「あれには私も敵いません……」
連れ込まれていく２人を見ながら、輝矢とユキジがしみじみ呟いた。

女性の家の中は、いかにも少女趣味な何とも可愛らしい部屋であった。１人暮らしのようで、他に人は見当たらない。リビングへと

通された輝矢たち４人に、女性がお茶を出す。
「私、白鳥の獣人の新出(しんで)レイラってゆぅ～のぉ～っ。よろしくねぇ～っ」
「ほぉ～っ、ゴリラの獣人ですかぁ～」
「輝矢っ、見た目で種族まで決めちゃダメだよっ」
「へっ？」
レイラの自己紹介を無視して勝手な解釈をする輝矢に、ユキジが注意を入れる。
「白鳥のレイラっ……くわあああっ！！俺の妄想では最高の美女ができたのにっ……！！」
「お前、それ、ただの変態だぞ……？」
部屋の隅で苦悩している門貴に、桜時が呆れた表情で突っ込みを入れる。
「あなた、いいわねぇ～こぉ～んなイケメンに囲まれて旅してるなんてぇ～」
「ハチ以外ならあげますよ？」
「いっやぁぁっ！！輝矢んっっ！！それだけは勘弁してぇぇっ！！」
輝矢の無責任な発言に、門貴が必死に声をあげる。
「ううんっ！いいのっ！私にはもうっ…心に決めた人がいるからっ！」
『へっ？』
何やらウットリした表情で話すレイラに、皆が首をかしげる。
「ほぉ～、やはりゴリラの方ですか？」
「だからぁ～輝矢っ、見た目で人のこと決めちゃダメだってぇ～」
ゴリラにこだわりを見せる輝矢に、ユキジが再び注意を入れる。
「その人はねっ……朱実竹人さんってゆぅ～のっ！」
「ブぅっっっ！！！」
桜時が思わず飲んでいたお茶を吹き出す。
「あっ……朱実っ……竹人っ！！？」
「そうっ……あれは忘れもしない去年の春っ……電線の上でハーモ

ニーを刻んでいる彼を見てキュンと来たわっ」
「どんなキュンだよっ」
ウットリ状態のまま出会いを語るレイラに、桜時が呆れた表情で突っ込みを入れた。
「でも彼は国主子息っ……叶わぬ恋と諦めていたのだけど、なんとっ！！」
レイラが大きな広告を取り出して、輝矢たちに見せる。
「明日、彼の婚約者を探すパーティーが開かれることになったのよおぉおっ！！」
「ああっ……知ってるっ……」
「そこでねっ！明日着ていくドレスを作ろうと思って、生地をたぁ～んまり買いこんできたのぉ～っ！」
「それでこの大荷物ですか……」
リビングを隣の部屋を埋め尽くすほどの荷物を見ながら、輝矢が呆れたように呟いた。
「あまりにも美しくってすぐさま婚約者決定ってなっちゃったらどお～しよぉ～～っっ！！」
「タケちゃんて雑食？」
「いや、めちゃ面食いっ」
「はぁ～この上なく可能性ないねぇ～」
桜時の言葉に、両手を横に上げてやれやれといった表情を見せるユキジ。
「“レイラっ……君の美しさをハーモニーにさせてくれっ……”とか何とか言われちゃったりぃ～っ！」
「ないと思います……」
妄想を繰り広げているレイラを見ながら、輝矢がこっそりと呟く。
「ふはぁぁぁぁぁぁっっ！！！」
『……っ？』
急に声をあげる門貴の方を、桜時たちが振り向く。
「んだよっ？サっ……」

「ちょちょちょちょいちょいっ！」
「ああっ？」
桜時を引っ張って、レイラから離れたリビングの隅まで行く門貴。
「ええかっ？あの女を竹人に婚約者に選ばせる。あの女が相手やったらさすがに国主さんも止めるはずやっ」
門貴が小声で桜時に話す。
「そしたらパーティーはパァっ！どやっ？」
「ん～でも竹兄が振りでもレイラを選ぶとは思えねぇーけどっ……」
「結婚させられへんためやぁ～言うて説得すりゃええねんてっ！」
あまり乗り気のしていない桜時を、門貴が明るい口調で丸め込む。
「よっしゃあーっ！俺らが手伝うでぇっ！ドレス作りっ！！」
『えっ？』
門貴の言葉に、レイラだけでなく輝矢やユキジも目を丸くした。

その日、深夜。

――――ビリビリビリィィーーッッッ！！！――――

「きゃっ！このドレス、サイズ小さいぃぃ～～っ！」
「……。」
レイラが着た途端に破れ散った青々とした美しいドレス。その破れ散ったドレスを見ながら唖然とした表情を見せているのは、針と糸片手の由雉であった。
「言われたサイズ通りに作ったんだけど……？」
「ええ～っ？ちゃんとＢ８５Ｗ５６Ｈ８６で作ったぁ～っ？」
「うんっ…ってか明らかにそのサイズじゃないと思うんだけどっ…

…」

レイラの自己申告のスリーサイズに、疑念を抱く由雉。

「由雉」

「……？」

名を呼ばれて由雉が振り返ると、そこには特にドレス作りを手伝う様子もなく月見団子を食べている輝矢の姿があった。

「Ｂ１００Ｗ８０Ｈ１１０で作り直しなさい」

「ラジャっ……」

輝矢の言葉に、由雉がレイラに気付かれないよう小さく頷いた。

「はぁ～っ……裁縫って結構、疲れんだなぁ～」

「頑張れ頑張れっ！イィヌっ！」

「お前が言い出したんだから手伝えよっっ！！！」

地道にドレスを縫っていた桜時が、応援ばかりしている門貴に怒鳴りあげた。

そして翌日、夕方。

『やっ……やっとできたっ……』

疲れきった顔で力なく呟く桜時と由雉。

「きゃあ～っ！私ってばカワイすぎぃぃ～っ！」

『……。』

見事にできあがった美しい青いドレスを身にまとい、満足げな笑みを浮かべているレイラを見て、呆然とする輝矢と門貴。

「まぁゴリラにも衣装ってとこですね」

「そんなことわざあったっけっ？」

輝矢の言葉に、門貴が首をかしげる。

「さぁって、そろそろパーティーに行かないと間に合わなっ…」

「ああぁぁっっ！！！」
「へっ？」
急に声をあげるレイラを、桜時が不思議そうに見る。
「私っ！このドレスに合う靴を持ってないわぁっ！」
「靴っ？」
「どうしよぉ～っ！」
下駄箱から趣味の悪い靴ばかりを並べながら、困った顔を見せているレイラ。
「いくら何でも今から靴は作れねぇーしなぁ」
「もうこれでいいですよ」
「へっ？」
困っているレイラに輝矢がとある靴を差し出す。
「ちょっ……！これっ！作業用の長靴じゃなぁ～いっ！」
「どうせドレスの裾が長くて靴なんて見えませんよ。それなら脱げない長靴の方がいいでしょう」
「ん～っ、まぁこの際、仕方ないわねぇ～」
輝矢の説得に、納得はしきっていないがとりあえず長靴に足を通すレイラ。
「よしっ！とっとと行こうっ！パーティーに遅れちまうっ！」
桜時を先頭に、皆が慌てて家から出る。

「うわっ！もうけっこう日暮れてんなぁ～」
オレンジ色の夕日が沈み始めている空を見て、桜時が少し眉をひそめる。
「こりゃ全力疾走しないとっ……」
「あっらぁ～っ？レイラちゃんじゃなくってぇ～っ？」
『……っ？』
レイラの家の前の道から聞こえてくる甲高い声に、レイラや桜時たちが振り返る。
「ああたも朱実のパーティーに参加するのかしらぁ～っ？」

「うっほぉぉ～っっっ！！」
「ママハッハさん」
振り返った門貴が声をあげる。レイラの家の前にいたのは、白馬に引かれた豪勢な馬車に乗った、豪勢なドレスを身に纏い、タワーのような渦状の頭をした中年女。その両脇には若く美しい2人の女性が座っている。若い女性の方も美しいドレスを身に纏っていた。
「ええ。椿さんと楓さんも参加されるんですか？」
「ええ、私たちなんかじゃ竹人様のお目にも止まらないでしょうけどっ…」
「そんなことないってぇ～っ！何なら俺がもらったるよぉぉ～～っっ！！」
「ちったぁ黙っとけ、サルっ」
謙遜した感じで言う椿に、門貴が軽い言葉を飛ばす。そんな門貴に突っ込む桜時。
「まぁ～レイラちゃんが出るのでしたらウチの椿や楓には勝ち目はないざますわねぇ～っ！」
「あっらぁ～そんなことないですよぉ～ママハッハさんっ」
ママハッハのおだてに、謙遜したことを言いながらも嬉しそうな笑みを浮かべるレイラ。
「ではお先に行っておりますわっ、失礼っ」
「ひひぃぃぃ～～～んっ！」
ママハッハが手綱を引くと、馬が声をあげ、3人を乗せた馬車がレイラの家の前から駆け出していった。
「もぉ～私の美しさったら、ママハッハさんも感服するほどなのねぇ～！私ってば罪な女っ！」
「嫌味で言ってるってこと、まったくわかってないねぇ～」
「いいんじゃないですか。平和で」
自分の美しさに罪を感じているレイラを見ながら、輝矢と由雉が冷めた反応を見せる。
「とにかくとっとと行こうっ！このままじゃ間に合わねぇーっ！全

速力で走るぞっ！」
「ドレスなのに全速力で走れるわけないでしょ～？」
「えっ？あっ、ああっそっか」
レイラに強く言われ、ハッとしたように呟く桜時。
「でもっ急がねぇーと間に合わねぇーしっ……えっと、どうしたらっ……」

――――ゴロゴロゴロゴロッッ……――――

「んっ？」
車の引くような音が聞こえ、桜時が振り返る。
「これで行きましょう」
「へっ？」
隣の家の敷地から軽々と荷車を引いてやって来たのは輝矢である。
「輝矢、それどっからっ……」
「隣の家から奪って来ました」
「犯罪だろっ！それっ！」
サラっと答えた輝矢に、桜時が突っ込みを入れる。
「ゴチャゴチャ言っている暇はありません。荷台に乗りなさい、ゴリラ」
「レイラよっ」
輝矢に名前の訂正をしながらも、レイラが荷車の上へと乗りあがる。

――――ミシっ……ミシっ……――――

「大丈夫なのぉ～？」
レイラが乗った途端に軋む荷車を見て、由雉が不安げな声を出す。
「屋敷までもてばいいんです」
「でっ、馬は？あっ、牛か？」

「いえ、イヌとサルです」
『へっ？』
荷車を引く馬を探していた桜時と門貴が、輝矢の言葉に目を丸くする。
――――ボォォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！！！――――
「何故っ……」
獣化して荷車を引く体勢を取るハチとモンキ。この現状にハチが疑問を抱く。
「さっ、とっとと行きましょう」
「お前も乗るのかよっ！！」
レイラとともに荷車の上に乗る輝矢に、ハチが振り返って怒鳴りあげる。
「よっしゃああっっっ！！！輝矢んの頼みやぁぁっっ！！とっとと行くでぇっ！！イヌぅ～っ！」
「だあああっっっ！！！わかったよっ！！全速力で行くぞっ！サルっ！！」
「おぉぉぉぉーーーうっっ！！！」
気合いを入れて荷車の取っ手を持ち上げるハチとモンキ。
『どりゃあああああああっっっ！！！！！』
物凄い勢いで荷車を引いていくハチとモンキ。
「ちょっと待ってよぉ～」
どんどん突き進んでいく荷車を、ユキジはゆっくりと飛びながら追いかけた。

第6章　シンデレラストーリー　★4

朱実家第2大ホール。“朱実竹人の婚約者を見つけちゃうぞダンスパーティー☆”会場。

「んん～っ」

白のタキシードに身を包み、髪型もばっちり決め込んだ竹人が、パーティー会場の入口付近で浮かない表情を見せながら、会場に入ってくる人々を見つめている。

「あっ！桜ちゃぁぁ～～んっ！」

「……っ？竹兄っ！」

少し息切れをしながら、パーティー会場に駆け込んでくる桜時。

「もぉ何してたのさぁ～パーティーとっくに始まっちゃってるよぉ？」

「悪りぃー悪りぃーっ、全速力で走っては来たんだけどさっ」

不満げに言う竹人に、桜時が苦笑いを向ける。

「まぁいいやっ！でっ？どうやってパーティー壊すのっ？」

「ああ、それなら安心しろっ！孔雀さんでも絶対結婚を反対するほどの相手を連れて来たからっ！」

「ええ～っ？どんな人っ？どんな人っ？」

桜時の自信に満ちた言葉に、竹人が期待して目を輝かせる。

「レイラさんっ」

「はぁ～～いっ！」

「……っ」

桜時の呼びかけに返ってくる可愛らしい声。竹人がゴクリと息を呑む。

「お久しぶりですっ、竹人さんっ♪ウフっ」

「……。」

入口から入ってきたゴリラにも衣装なドレス姿のレイラに、一瞬にして凍りつく竹人。

「思っていた以上の凍りつきようですね」
「まぁ無理もないよぉ～」
レイラの後ろから会場へと入った輝矢と由雉が、呆れたように呟く。
「なっ？レイラさんを選んじゃえばぁ、さっすがの孔雀さんも反対して結婚の話はパァーにっ……！」
「無理ぃぃ～～っ！！」
「あっ！竹兄っ！！」
「竹人さんっっ！！？」
桜時の説明すら最後まで聞かず、レイラの前から猛然と逃げ去る竹人。
「竹人さん待ってぇぇっっ！！！！」
「ひえええっっっ！！！来るなぁぁっっっ！！！」
追いかけるレイラから、必死に逃げる竹人。
「思っていた通りの展開ですね」
「まぁ無理もないよ」
またもや呆れた表情で呟く輝矢と由雉。
「やぁ～っぱ上手くいかなかったよぉ～おいっ！サルっ！どうすっ……！」
「ええ～っ？美雪ちゃんてゆうのぉ～っ？可愛い名前やなぁ～っ！可愛い君にピッタンコやなぁ～っ！」
「あんニャロっ……」
最早、竹人とレイラのことなどすっかり忘れた様子で、パーティーに来ている女の子に声をかけては嬉しそうに鼻の下を伸ばしている門貴。そんな門貴に、桜時が拳を握り締める。
『あっのぉぉ～～～っ……』
「……っ？」
背後から聞こえてくるいくつかの声に、振り返る桜時。
「げっ」
桜時が思わず表情を引きつる。振り返った先にいたのは、色とり

どりのドレスに身を包んだ若い女性たち。
「さっきぃ～竹人様とお話していらっしゃいましたけどぉ～もしかして朱実の方ですかぁ～？」
「えっ！？あっ！いやっ！まぁっ！」
至近距離までやって来る女性たちに、少し後ずさりながらぎこちなく答える桜時。
「きゃあああ～～っ！やっぱりぃ～っ！良かったら私と踊ってもらえませんっ？」
「いえっ！是非、私とっ！」
「私と踊ってくださぁぁ～～いっ！」
「えええぇぇ～～っっ」
次々と伸びてくる手に、困った顔を見せる桜時。
「それはちょっとっ……」
『私とっ……！！』
「ううっ……！」
桜時がもう後のないところまで追い込まれていく。
『さぁっ！』
「……っ」

――――バッコォォォォーーンッッッ！！！――――

その時、桜時と女性たちのすぐ横の壁が急激に砕き割れた。
『へっ……？』
唖然とした表情となる桜時と女性たち。
『……？』
桜時と女性たちとの間を通り抜け、壁を砕き割った1本の足。
「ウチのハチと一緒に踊ろうなんて……1億光年早いですよっ、お嬢さん方……」
『……。』
足の持ち主・輝矢の有無を言わさぬ圧力を感じさせる冷たい笑顔

に、凍りつく女性たち。
『しっ……失礼しましたぁ～っ』
女性たちが逃げるように去っていく。
「ふぅっ」
「たっ……助かったぁ～……」
足を下ろして一息つく輝矢の横で、ホッとしたように肩を落とす桜時。
「さっ、じゃあ踊りましょうか」
「ばっ……！おっ……踊るわけねぇーだろーがっ！！」
「助けて差し上げたというのに、何の報奨も払わないおつもりですか？」
「悪徳詐欺師かぁっっ！！ってか近づくなぁぁぁっっ！！！ぎゃあああっっっ！！！」
輝矢に攻められ、桜時の悲鳴がパーティー会場に響き渡る。
「あぁ～あ～どっちもこっちも本来の目的忘れちゃってるよぉ～」
女性に声をかけまくっている門貴と、やんやかんやと騒いでいる輝矢・桜時を見て、呆れたように由雉が呟く。
「そういえばレイラ、どうなったんだろぉ～」

「竹人さぁぁ～んっ？あっれぇ～？竹人さぁぁ～んっ？」
「……。」
パーティー会場の人混みの中、必死に竹人を探しているレイラ。
そんなレイラに見つからないよう、息を殺して人混みに隠れる竹人。
「桜ちゃんってばもうっ、冗談じゃないよっ」
人混みに隠れながら、竹人が険しい表情を見せる。
「あんなのと婚約者の振りするくらいなら、それなりに可愛い子と本当に結婚しちゃった方がマシだよぉ～」

「竹人様っ」
「……っ？」
名を呼ばれ、竹人が振り返る。
「あなた、確か朱実御用達宝石店のっ……」
「ママハッハにございます」
竹人が振り返った先にいたのは、椿と楓を両脇に連れたママハッハであった。ママハッハがそのタワーのような頭を深々と竹人へ下げる。
「来てくださってたんですかぁ～」
「ええ」
「そちらは？」
「わたくしの娘ですわぁ」
ママハッハの紹介を受け、椿と楓が一歩前へ出る。
「椿にございます」
「楓にございます」
「竹人様の婚約者にどうかと連れてきたのですが、この子たちじゃあ竹人様とは釣り合いませんわねぇ～」
「いえいえっ、さっきのに比べたら全然～」
謙遜して言うママハッハに、竹人が愛想のいい笑顔を向ける。
「あっ！竹人さぁぁぁぁぁ～～～んっ！」
「うげっ」
竹人を発見し、大きく手を振ってやって来るレイラに、竹人が大きく顔を歪める。
『竹人様？』
「……っ」
そんな竹人を心配するように顔を覗き込む椿と楓を見て、竹人が何やら思いついたような顔となる。
「えぇ～っと椿さんと楓さん～でしたっけっ？良かったら一緒にベランダにでも出ませぇ～んっ？」
『えっ……？ええっ！喜んでっ！』

竹人の誘いに、椿と楓が嬉しそうに頷く。
「竹人さんっ？」
「……っ」
戸惑うように見つめるレイラに、椿と楓を両脇に連れた竹人が少し皮肉った笑みを向けると、すぐさま背を向け、ベランダの方へと去っていった。
「そんなぁ～～～っ……」
レイラが元気なく呟く。
「あぁ～あ～ダメダメな感じだねぇ～」
「作戦失敗かぁ」
「ああ～っ！タケちゃんっ！椿ちゃんと楓ちゃん、両方持ってくなんてズルいぃ～っ！」
『おいっ』
そんなレイラを見て、難しい表情を見せていた桜時と由雉が、違うところに悔しがっている門貴に突っ込みを入れる。
「……っ」
がっくりと肩を落とすレイラを見て、どこか勝ち誇ったような笑みを浮かべているママハッハ。
「……。」
そんなママハッハを見て、輝矢は少し目を細めた。

「よぉ～しっ、もう追って来ないなぁ～」
ベランダに出た竹人が、パーティー会場の方を覗き込みながら、ホッとした様子で笑顔を見せる。
『竹人様っ？』
「んっ？あっああ～何でもないよぉ～っ！何でもないないっ」

そんな竹人を不思議そうに見る椿と楓に、竹人が笑顔を向けた。
「ずっと何かお気になさってるようですが」
「何かおありになったのですか？」
「えっ？んっんん～っとねっ」
竹人が少し慌てたように言葉を詰まらせる。
「椿さんか楓さんかどっちかを婚約者にしちゃおっかなぁ～なんてっ、思ってたんだぁ～っ」
「まぁっ！」
「本当ですのぉっ！？」
「うっうん～」
喜ぶ椿と楓に、竹人があまり気乗りしない様子で答える。
「でもまぁさっきのと結婚するくらいならねぇっ」
「嬉しいですわっ……竹人様っ……」
「光栄ですわっ……竹人様っ……」
「へっ……？」
急にトーンの下がる椿と楓の方を、竹人が戸惑いがちに振り返る。
椿と楓は先ほどまでの華やかな空気がなく、どこか負のオーラを出しながら、深く俯き笑っている。
「あっのぉ～っ……」
『一緒に雀国を……支配しましょうっ？』
「へっ……？」

――――パァァァーーンッッッ！！！！――――

「いいいいえええええっっっ！！！？」
椿と楓の体を強い光が包むと、２人は見る見るうちに巨大な禍々しい桃色の鬼へと姿を変えた。目の前に立ち塞がる巨大な化け物に、竹人が顎がはずれそうなほど大きな声をあげる。
『おぉぉーーっほっほっほっほっ！！！覚悟をしぃっ！朱実竹人ぉおぉおっっっ！！！』

2匹の鬼が竹人へと襲いかかる。
「うっ……うわあああああああああっっっ！！！！！」
竹人の悲鳴が響き渡る。

第6章　シンデレラストーリー　★5

『……っ！』

聞こえる悲鳴に輝矢や桜時たちが一斉に顔色を変える。

「今の声っ……！竹兄の声だっ……！」

「ベランダですねっ」

輝矢と桜時がそう言葉を交わし、すぐさまベランダへと走り出していく。

「竹兄っっ！！」

「桜ちゃぁぁぁ～～～～んっっっ！！！」

「……っ！」

桜時がベランダへと飛び出すと、ベランダには桃色の鬼の手に全身を掴まれた竹人の姿があった。竹人が桜時に助けを求めるように手を伸ばす。

「鬼人っ！？」

「レベル２．５・桃鬼ですね」

驚く桜時の横で、輝矢が冷静に呟く。

「椿さんと楓ちゃんがっ…！鬼人だったんだよぉぉ～～～っっ！！」

「……っ」

「あの２人がぁぁっ！？」

「がいいいぃぃーーっっんっっっ！！！」

必死に教える竹人の言葉に、輝矢と桜時が驚き、門貴がこれ以上ないほどにショックを受ける。

「何の騒ぎっ！？まぁっ！竹人っ！」

「竹人くんっ！」

「竹人兄さんっ！！」

「お母様ぁぁぁ～～っっっっ！！！お兄ちゃぁぁ～～んっっっ！梅ちゃぁ～～んっ！」

遅れてベランダへとやって来た孔雀や松人・梅人が、鬼人に捕まっている竹人を見て驚きの表情を見せる。竹人は今にも泣きそうな顔で孔雀たちに助けを求める。

「まぁ～た鬼なのっ!?警備隊っ!!」

「はっっ!!」

『……っ?』

孔雀の声に、上空から勇ましく登場するのは、朱実の警備隊長・銀ペー。

「行くぞっ!鬼人っ!」

――――ボォォォォ～～ンッッッ!!!――――

白い煙に包まれて、銀ペーがペンギンの姿となる。

“ペンペンっ!!スライディーグっっっ!!!ジェッッット気流”ぅぅっっっ!!」

――――ビュゥゥゥゥーーーンッッッ!!!――――

その場に寝転がった銀ペーが、ツルツル頭を地面に滑らせるようにして、物凄い勢いで鬼人の方へと頭から突っ込んでいく。

「楓……」

「ええ」

竹人を捕まえている鬼人・椿に言われ、楓の方が一歩前へ出る。

“鬼石”っ」

楓が巨大な右腕を、ベランダの床へとつけた。

「ぬっ?」

――――バァァァァーーンッッッ!!!――――

「ぬはっっ!?あっぎゃあああっっっ!!!!」

銀ペーの滑っていた辺りのベランダの床だけが急に崩れ落ち、銀ペーが下方へと降下していく。
『アニキぃぃっっっ!!!!』
「銀ペーっ!!」
降下していく銀ペーを見て、思わず叫ぶ子分ペンギンたちと桜時。
「そういえば桃鬼は“石力”を使うんでしたねぇ～」
「もうちょい早く言えよぉっっ!!」
思い出したように言う輝矢に、桜時が突っ込みを入れる。
「いっやぁぁっっっ!!何っ!あのペンギンっ!弱すぎぃぃっっっ!!!!」
あっさりとやられた銀ペーを見て、心配はしないが嘆く孔雀。
「こうなったら何とかしてっっ!!破天荒女っ!!」
警備隊も頼りにできなくなった孔雀が、ついに輝矢に頼み始める。
「え～」
「愛しい息子の命が懸かってるのよっっ!!」
面倒臭そうに声を出した輝矢に、孔雀が必死に懇願する。
「もう婚約者探すのも面倒だし、死なせとけばいいじゃないですかぁ～」
「いっやぁぁぁ～っっ!!輝矢ちゃんっ!!ヘルプミィィィーーっっっ!!!!」
竹人のことをあっさり見捨てようとする輝矢に、竹人が鬼人の手の中から必死に助けを求めた。
「コイツを殺されたくなかったら大人しく私たちに国を渡すことねぇっ!」
「ひっやぁぁぁっっっ!!!!」
「竹兄っ!!」
竹人を今にも握りつぶそうとする椿に、桜時が身を乗り出して竹人の名を呼ぶ。
「クッソっ……!村雨まっ……!」
「竹人さんっっ!!!」

「へっ？」
鬼人の方へと飛び出し、村雨丸を抜こうとした桜時の横を駆け抜けていく1つの影。
「れっ……レイラさんっ！？」
「竹人さんにっ……」
桜時よりも早く鬼人の方へと駆け出して行ったレイラが、勢いよく右足を振り上げる。
「何するのよぉぉっっっ！！！！！」

――――ドッヒュウウウウゥゥーーンッッッ！！！――――

力強く振り切ったレイラの右足から、物凄い勢いで放たれたのは、輝矢が適当に説得して履かせた、あの作業用の長靴。
「何っ…！？きゃあああああっっっ！！！！」
「へぇっ！？」
レイラの飛ばした長靴が見事に椿の顔面を直撃し、倒れこんだ椿の手の中から竹人が飛び出す。
「うっ……！うわあああああっっっ！！！」
ついでにベランダからも飛び出して、勢いよく降下していく竹人。
「竹兄っっ！！」
「……っ」

――――ボォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！！――――

「えっ？」
落ちていく竹人を助けるため、飛び出そうとした桜時の横で、白い煙が巻き起こる。
『・・・っ！』
白い煙の中から飛び立っていくのは、姿美しき白鳥。
「うわあああああああああっっっ！！！」

「……っ」
「って、あれっ？」
降下しながら叫びまくっていた竹人が、空中で急に止まる自分の体に目を丸くする。
「大丈夫ですか……？」
「……っ？」
すぐ近くから聞こえてくる可愛らしい声に、竹人がゆっくりと顔を上げる。
「竹人さんっ……」
「……っ」
竹人の体を支えて飛ぶ、白い羽根を広げた美しい白鳥・レイラが、竹人にそっと笑いかけた。その笑みに、竹人が思わず目を見開く。

「うわぁ～獣化姿のんが全然いいじゃ～ん」
「ずっと白鳥のまんまでおってって感じやな」
地面へゆっくりと降り立つ竹人とレイラの姿を見ながら、門貴と由雉がしみじみと呟く。
「ゴリラの獣人じゃなかったんですねぇ～」
「はじめっからゴリラとは一言も言ってねぇーよっ」
まだレイラがゴリラの獣人だと思っていた輝矢に、桜時が呆れた表情を見せる。
「うっ……！ううっ！あっのゴリラ女ぁぁぁぁ～～～っっ！！！」
長靴の当たった顔面を押さえながら、怒りの溢れる形相で起き上がる椿。
「さてとっ……一応の人質も解放されたことですし……鬼退治と参りますかぁ」
輝矢が右耳のピアスへと手を伸ばし、素早く弾き飛ばす。
「“月器・三日月”っ」
『……っ！』
三日月を目覚めさせる輝矢に、椿と楓が警戒するように構えを取

る。
「やれやれだねぇ～」
「やったんでぇっっ！如意棒っ！」
「村雨丸っ！」
桜時、門貴、由雉もそれぞれに武器を構えて戦闘態勢を取る。
「チっ……！楓っ！」
「ええっ！」
椿と楓が同時に床へ右手を付ける。
『“鬼石”っっ！！！』
『……っ！』

――――バァァァァァーーーーンッッッ！！！――――

鬼人たちの言霊とともに、ベランダが一斉に崩れ始める。
「きゃあああっあああっ！！」
『うわわわわわわっっ！！』
「孔雀さんっ……！松兄っ！梅人っ！」
足場を失い、慌てる孔雀やその他の人々。
「ハチと由雉は皆さんをっ」
「わかったっ！」
「はぁ～いっ」
輝矢の言葉に従い、崩れゆくベランダから会場内へと人々を避難させていく桜時と由雉。
「門貴は私と一緒に降りますよっ」
「喜んでいっ！」
崩れていくベランダから飛び降り、遥か下の地面へと降り立つ鬼人たちを追いかけるように、降下していく輝矢と門貴。

第6章　シンデレラストーリー　★6

「んっ……んんっ……！」
先ほど楓の鬼石を喰らい、ベランダから落下して地面にめり込んでいた銀ペーが、やっと起き上がる。
「ふぅっ……何とか生きてっ……んっ？」

――――ドッスゥゥゥーンッッッ！！！――――

「ぐへはあああああっっっ！！！！」
やっとの思いで起き上がった銀ペーの上へと、勢いそのままに着地する輝矢。
「あっ、すみません」
「お前……いつか殺してやるっ……」
まったく気持ちを入れずに謝る輝矢に、銀ペーが弱々しくも憎しみを込めて呟いた。
『オーッホッホッホっ！！喰らいなさいっ！“鬼石流”っっ！！』
椿と楓が輝矢へ向かって手を掲げると、輝矢たちの近くに落ちている崩れ落ちたベランダの瓦礫が浮き上がり、一斉に輝矢たちに向かって飛び出していく。
「……っ」
「ほえっっ？だあああああああっっっ！！！！」
銀ペーを蹴り飛ばし、向かってくる瓦礫の外へと放り出す輝矢。
「“月器・水月”っ」

――――バァァァァァァァーーーーーンッッッ！！！――――

輝矢が水の刃を放ち、八方から飛んでくる瓦礫をすべて打ち砕く。
『チっ……』
「お前らの敵はぁっ……輝矢だけちゃうでぇぇっっ！！！」
『……っ！』
鬼石流を打ち砕く輝矢を見て顔をしかめていた椿と楓に、横から飛びかかっていき如意棒を振り上げる門貴。
――――ボォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――
『キャアっ！』
「へっ？」
椿と楓が、白い煙に包まれて、先ほどまでの人間の姿へと戻り、か弱い悲鳴をあげる。その声に思わず手を止め、2人のすぐ前へと着地してしまう門貴。
「怖いわぁ～っ！椿っ」
「怖すぎて楓、泣いちゃうぅ～」
「えっ！？あっ！いっやぁ～！ごめんなぁ～っ！女の子に如意棒向けるなんて、俺ってば男ちゃうわぁ！」
『……っ』
怖がる2人を見て、必死に謝る門貴。すると怖がっていた2人が怪しげに微笑み、右手を地面へ付ける。
『“鬼石”っっ！！』
「へぇっ？うわあああああああっっっ！！！！」
再び鬼人化し、鬼石を放つ椿と楓。油断しまくっていた門貴は、あっという間に鬼石に飲み込まれ、吹き飛ばされる。
『ウフフっ……バカな男っ……』
吹き飛ばされた門貴を見て、微笑む椿と楓。
「うわっちゃ～っ！あのサル、アイツらのワナにどっぷりはまりまくってんなぁ～っ！」
「人選をミスりましたね」

輝矢に蹴り飛ばされたはずなのに、いつの間にか輝矢の横に立って言う銀ペーの言葉に、輝矢が少し呆れたような顔を見せた。
「ううっ……輝矢んっ……ごめんっ……俺にあんなカワイ子ちゃんはっ……倒せへんわっ……」
「はいはい。もういいですから、大人しくやられていて下さい」
体を引きずってやって来る門貴に、輝矢が冷たく言葉を放つ。
「後は私がやりますから……」
『……っ』
目つきを鋭くする輝矢を見て、余裕の笑みを浮かべる椿と楓。
「“鬼爪・天回”っ！！」
「……っ」
「うわわわわっ！」
楓が放つ１０本の鬼爪を、輝矢が素早く飛び上がってかわし、銀ペーは転がるようにして必死に避ける。
「“鬼石”っっ！！」
「……っ！」
飛び上がった輝矢に、今度は椿が鬼石で瓦礫を向ける。
「三日月っ……！」
輝矢が空中で三日月を操り、向かってくる瓦礫を１つずつ粉砕していく。
「ウフっ、“鬼爪”っ」
「……っ！」
鬼石を粉砕している輝矢に、後方から鬼爪が突っ込んでくる。
「……っ！ううっ……！」
空中では身動きが取れず、右肩に鬼爪を受ける輝矢。
「……っ！あああ……っっ！！」
「輝矢っ！！」
鬼爪を受けた輝矢に、さらに鬼石が押し寄せ、輝矢が地面に叩きつけられるようにして落下する。
「うっ……ううっ……」

『オーッホッホッホっ！！』
地面に落ち、苦しげな声を出す輝矢を見て、高々と笑う椿と楓。
「踏みつけ女っ！！」
「完璧な連携やっ……あれじゃあいっくら輝矢でも1人じゃどうにもできんっ……」
「そんなっ……！」
門貴の弱気な言葉に、銀ペーが険しい表情を見せる。
「クソっ……！相手がカワイ子ちゃんにさえ変身せんかったらっ……！」
「それ、真剣な顔で言うことか……？」
これ以上ないくらい厳しい表情で苦悩するように言う門貴に、銀ペーが少し呆れた顔を向けた。
「ふぅ～っ、痛っ」
起き上がった輝矢が、少し顔を引きつりながら、右肩に刺さった鬼爪を抜く。地面に滴り落ちる赤い血。
「はぁ～ちょっとキツいですねぇ～」
立ち上がった輝矢が、悩むように呟く。
「せめてどちらかの動きが封じられれば…」
「はいはいはぁぁぁ～～いっ！」
「えっ？」
聞こえてくる場違いに明るい声に、輝矢がゆっくりと振り返る。
「はぁぁぁ～～いっ！」
「……。」
輝矢が振り返った先にいたのは、先ほどレイラとともに降下した竹人であった。無駄に明るく手を振っている竹人を見て、輝矢が静まり返る。
「今、忙しいので、また今度にして下さい」
「だっびぃぃーーんっっっ！！！！」
すぐさま竹人から目を逸らす輝矢に、竹人が激しくショックを受ける。

「ひどいよぉ～輝矢ちゃ～んっ」
「だから今、アナタと遊んでいる余裕はっ……」
「ボクだって一応、朱実の雀人なんだからねぇ～っ？」
「えっ……？」
自信ありげな笑みを浮かべる竹人に、輝矢が目を丸くする。
「……っ」
椿と楓へ両手を向ける竹人。
“縛竹”っっ！！！」

――――ヒュウウウウーーンッッッ！！！――――

『んなっ……！！？』
竹人が言霊を唱えた途端に、椿と楓の立つ地面から無数の枝が伸び、2匹の体に絡みついて動きを封じる。
“花力”っ……」
「すっごいでしょ～っ？」
「きゃあああああっっっ！！竹人さん、カッコイイーーーっっっっ！！！」
目を見開く輝矢に、自慢げに笑みを向ける竹人。その横でレイラが狂ったように黄色い声援を飛ばす。
「このっ……！」
「こんな枝っ……！」
竹人の縛竹を払い飛ばそうと、全身に力を入れる椿と楓。
「そうはさせるかよっ！」
「竹人さんの作ったチャンスっ！無駄にはさせないわっ！」
そう言ってその場に寝転がる銀ペーと、ドレスのまま高々と左足を振り上げるレイラ。
“ペンペンっ！！スライディーーグっっっ！！！ジェッッット気流”ぅぅっっっ！！！」
“長靴ぅぅーーっっシューティング”っっっっっ！！！！」

『何っ……！？うあああああっっっ！！！！』
縛竹から逃れようとしていた椿と楓にそれぞれ、銀ペーの頭突きとレイラの飛ばした長靴が直撃する。
「今だぁぁぁっっ！！踏みつけ女っっ！！」
「やっちゃえぇぇぇ～～っっ！輝矢さんっ！！」
「……っ」
叫ぶ銀ペーとレイラを見て、輝矢が少し笑みをこぼす。
「三日月っ」
改めて三日月を構えた輝矢が、動きを封じられ、先ほどの攻撃で苦しんでいる鬼人たちの方へ飛び出していく。
「いいこと教えて差し上げましょうか？お嬢さん方っ」
『……っ？』
輝矢の言葉に、怪訝な顔を見せる椿と楓。
「女の価値を決めるものは“外見”ではありませんっ」
輝矢が三日月を振り上げる。
「“根性”ですっ」
『うっ……！』
「……っ」
輝矢が笑顔からすぐさま表情を鋭くし、顔をしかめた鬼人たちに飛び込んでいく。
「……っ！」
『ううっ……！！』
椿と楓に向かって、素早く三日月を振りきる輝矢。
『きゃあああああっっっ！！！！！』
激しい断末魔を残して、椿と楓が消えていく。
「……っ」

断末魔を残し、砂となって掻き消えていく椿と楓をパーティー会場から見下ろしていたママハッハが、表情をしかめ、その場を去ろうと振り返る。

「……っ！」

『……。』

振り返ったママハッハを待ち受けるように立っているのは桜時と由雉。

「どこへ行かれるんです……？ママハッハさん」

「娘たちが鬼人だったのに、あなただけが人間～なんてバカな話はないでしょ～」

「クっ……！」

――――パァァァァァーーーーンッッッ！！！――――

桜時と由雉の言葉に顔をしかめたママハッハが、全身から光を放つ。

「こうなったら貴様らだけでもっ…！！」

桃鬼へと姿を変えるママハッハ。

「“鬼石”っっ！！」

「“左翼・滅羽”っ」

ママハッハが向けてきた瓦礫に、由雉が赤色の羽根を放つ。

――――パァァァァァァーーーーンッッッ！！！――――

「なっ……！」

由雉の羽根を受けた瓦礫は、その場で自動的に崩れ去る。驚きの表情を見せるママハッハ。

「クっ……！はっ……！」

「“瞬花っ……」

表情を引きつったママハッハが気配に気づき顔を上げると、上空

には村雨丸を構えた桜時。
「ううっ……！待っ……！！」
「終刀”っっ！！」
「うぐっ……！ぎゃあああああっっっ！！！！」
「……。」
村雨丸に切り裂かれ、ママハッハが桜の花びらとなって掻き消えた。

第6章　シンデレラストーリー　★7

「おぉーいっ！」
「生きてるぅ～？」
『……？』
ベランダから落下し戦いを終えて、朱実の敷地内の地面に座り込んでいる輝矢や銀ペーたちの元へ、パーティー会場から桜時や由雉が駆けつける。
「あちらも終わったようですね……」
「あちら？」
少し笑みをこぼしながら言う輝矢の言葉に、銀ペーが首をかしげる。
「そっちは終わったのか？」
「ええ、ペンギンとゴリラのお陰で」
「レイラだってばぁ～」
「あっれぇぇ～～っ？輝矢ちゃんっ、ボクはぁぁ～～っ？」
桜時の問いかけに笑顔で答える輝矢に、レイラが突っ込みを入れ、竹人が悲しげな声を出す。
「竹人っ！？竹人はっ！？ああっ！！竹人ぉぉぉぉっっっ！！！」
「孔雀さんっ」
そこに遅れるようにして、孔雀が現れる。無事な竹人の姿を見て、孔雀が安心したような笑みを浮かべる。
「まぁ良かったんじゃないですか。いい感じでパーティーぶっ壊れたし」
「そうだなぁ～婚約者探しどころじゃなくなったし、これで竹兄もっ……」
「決めたよぉぉぉぉぉ～～んっっっ！！！！」
「へっ？」

急に大きな声を出す竹人に、桜時や孔雀たちが首をかしげるようにして竹人を見る。
「ボクぅ～っ！この人と結婚しまぁぁ～～～っすっ！」
「えっ？」
そう言って、竹人が掴んだのはレイラの手。
「へっ？」
「はぁっ？」
『えぇぇぇぇぇっっっっ！！！！？』
皆がこれ以上開かないほどに口を開き、目玉も飛び出そうなほど大きく目を開いて叫ぶ。
「けっけけけけけけけけけけけけけけけけ結婚て竹兄っ……」
「相手間違えてるんじゃない？それとも急に失明したとかっ……」
「ううん～っ！間違えてないないよぉぉ～っ！」
引きつった顔で問いかける桜時と由雉に、竹人が笑顔で答える。
「ボクを助けた時のあの勇ましい姿っ……鬼をも圧倒する素晴らしきパワーっ……もう最高さぁぁ～っっ！！」
「まぁ～っ！そんなに言われると照れちゃうわぁ～っ！」
竹人の言葉に、レイラが顔を赤らめながらも嬉しそうな笑顔を見せる。
「一生、ボクを守っておくれぇぇ～～っ！マイスワン～～～～っっっ！！！！」
「嬉しいっ……！竹人さんっ！！」
『……。』
皆が呆然と見つめる中、熱々で手を取り合う竹人とレイラ。
「どっ……どうすんのっ……？お母様っ……」
「どっ……どうって……」
唖然とした表情のまま問いかける梅人に、孔雀も唖然とした表情のまま言葉を詰まらせる。
「まっ……まぁいいんじゃ……ない？竹人も気に入ってるようだしっ……一応、トリ……みたいだしっ……」

引きつった顔のまま、ぎこちなく笑う孔雀。
「嫁はっ、丈夫なのが何よりよねっ！オホホホホぉぉ～～っ！」
「自分に言い聞かせてるね……あれは……」
「ん～あれが姉になるのか……」
引きつった笑いを続ける孔雀を見ながら、複雑な表情を見せる松人と梅人。

「よくわかんねぇーけど、まぁいいかっ……とりあえず色々うまくいったわけだし」
「そうですねぇ」
「あっ？」
何となく心から笑えない状況の中、妥協するように頷く桜時と輝矢。その時、桜時が輝矢を見て、何かに気づいたような表情となる。
「んだよっ？まぁーた怪我したのかっ？」
「へっ？」
桜時が、鬼爪が刺さって負傷した輝矢の右肩を見て、徐に輝矢の右手を取る。右手を取られ、目を丸くする輝矢。
「おぉーいっ！由雉っ！輝矢の傷、見てやってくれぇっ！」
「あっ……あのっ……」
「何だぁ～？痛むのかぁ？」
由雉を呼んでいた桜時が、珍しく遠慮がちに声をかけてくる輝矢の方を振り向く。
「いえっ……痛みよりも……驚きの方がっ」
「へっ？」
輝矢の言葉を聞いた桜時が、輝矢の右手を掴んでいる自分の手を見る。
「……。」
一瞬、固まる桜時。
「ふぎゃあああああっっっ！！！！！」
桜時が悲鳴をあげて輝矢から手を離し、猛スピードで後退してい

く。
「触んなっつってんだろぉぉーーがぁぁぁーーっっっ！！！！」
「いえっ、ハチが自分からっ……」
「うおおおおおおっっっ！！！何やってんだっっ！！俺ぇぇぇぇぇっっ！！」
苦悩するように激しく頭を抱える桜時。
「ちょっと面白くなってきたねぇ～」
「いやいやいやっ！まだまだ輝矢んは渡さへんでぇぇぇっっ！！！」
「サル、まったく相手にされてないじゃん」
「がいいいいいぃぃぃーーんっっっ！！！！」
そんな輝矢と桜時の様子を見ながら、門貴と由雉が漫才のような会話を繰り広げる。
「今日を記念日にしましょうねっ、ハチっ」
「だっから何でもかんでも記念日にすんじゃねぇーよっっ！！お前はぁぁっっ！！！」
「“初めてのタッチ記念日”っと……」
「その誤解を生みそうなネーミングやめろぉぉおおっっっ！！！！」
楽しげに笑う輝矢に、怒鳴りまくりの桜時。
「レイラっ♪」
「竹人さんっ♪」
こうして、雀国で繰り広げられたシンデレラストーリーは、無事、ハッピーエンドに終わった。

翌朝。
「じゃっ！元気に旅立って行ってねぇ～っ！さぁっ！デートに行こうかぁ～っ！レイラっ！」
「ええっ！竹人さんっ！」

『……。』

輝矢たちを適当に見送って、さっさとデートへと出かけて行ってしまう竹人とレイラ。

「私たちにまったく感謝していませんね、あれは」

「勝手に連れてきたんだから元居たとこまで送ってけって感じだよねぇ～」

「まぁ勘弁してくれよっ、元々あーゆー無責任な人なんだっ、竹兄っ」

不満げに言う輝矢とユキジに、ハチが苦い笑みを向けながらフォローを入れる。

「まぁハチが優しく微笑んで“愛してるよ”と言ってくれるなら、勘弁してあげてもいいですが」

「言うかぁぁぁっ！！！そんなことするくらいなら勘弁せんでいいわぁぁっ！！！！」

無理な条件を突きつけてくる輝矢に、ハチが強く怒鳴り返した。

「……っ？あっ、孔雀さん」

屋敷の中から、千鶴や銀ペーを連れた孔雀が現れる。

「今回も世話になったわね、破天荒女」

「まぁ朱実を助けると、たっぷり礼金が貰えるんでいいですよ。いつでも呼んで下さい」

「そうね、警備隊があまり頼りにならないようだから、また呼ぶかもね」

「うっ……！」

孔雀のトゲのある言葉に、顔を歪ませる銀ペー。

「竹人のことも、まぁ何とか収まったし、とりあえずは礼を言っておくわ。ありがとう」

「とりあえず受け取っておきます」

「……っ」

互いに笑顔を見せる輝矢と孔雀。

「それと桜時」

「えっ？あっああ～、今度は１０日やそこらで帰って来ないから心配なっ……！」
「たまには顔くらい見せなさいよ……」
「えっ……？」
孔雀の言葉に、ハチが戸惑うように目を丸くする。
「……っああっ！」
ハチが笑顔を作り、大きく頷いた。
「桜時様ぁぁぁっっっ！！！！お気をつけてぇぇっっっ！！！！！」
「じゃあなぁ～っ！！踏みつけ女どもぉぉ～っっ！！！！」
「おぉぉぉーーーうっっっ！！！」
千鶴や銀ペー、孔雀に見送られながら、輝矢たちは再び雀国を後にした。

「レイラぁぁぁぁ～～～♪君の笑顔はぁぁ～～太陽ぉぉぉ～～～～♪」
「きゃっ！竹人さんったらっ！照れちゃうけど最高に嬉しいぃぃ～～っ！」
「ボクの心でぇ～輝き続けてぇぇぇ～～～♪マイスワン～～～～～っ♪」
その後、竹人とレイラは周囲が少し引き気味の中、幸せに暮らしていくのであった。

第6章　シンデレラストーリー　★7（後書き）

6章終わりましたぁ～。
ホント、こんなロマンスのカケラもない、シンデレラストーリーですみません（・・；）
シンデレラファンの皆様に、深くお詫び申し上げます。

第7章　狙われたハチ　☆1（前書き）

またまた新キャラ登場です。
有名なおとぎ話のあのお姫様…
というか、最初の部分読めば、丸わかりですね…。

第7章　狙われたハチ　☆1

『ハイホーっ……ハイホーっ……しぃ～ごぉぉっとが嫌いぃ～っ……』

暗闇の中から歌が聞こえる。

「鏡よ……鏡……」

歌に紛れて美しく響く、1つの女の声。

「この世で1番、美しいのは……だあれっ……？」

――――パアアアアアーーーッッッ！！！――――

暗闇の中で光を放つのは、楕円形の美しい装飾の施された掛け鏡。

＜それは貴女様です……白雪様……＞

「ウフフっ……」

鏡の答えに、女が微笑む。

「知ってるわっ……」

『ハイホーっ……ハイホーっ……声ぇぇ～を合っわせずぅ～っ……』

暗闇の中から歌が聞こえる。

とある街。とある午後。

「グアアアアアッッッ！！！！！」

『きゃあああああっっっ！！！！』

『うわあああああっっっ！！！！』
突如、現れた緑の鬼・鬼人に、街の人々が逃げ惑う。
「グへへへへへっっ！！逃げろ逃げろぉぉぉっっ！！脆弱な人間どもめぇぇっっ！！！」
必死に逃げる街人たちを見て、鬼人はどこか愉快げに笑う。
「グへへへへへっっ！！んんっ？」
逃げる街人を追いかけまわしていた鬼人が、目の前に立ち塞がるようにして立つ人影に、表情を曇らせる。
「何だぁぁ～～っ？逃げろというのが聞こえなかったのかっ？」
「いえっ、聞こえましたよ？バカでかい知性の欠片もなさそうな声が」
「何っ……！？」
目の前に立った人間の言葉に、鬼人が顔をしかめる。
「けどっ……逃げる必要もないかと思いましてっ」
笑顔で顔を上げたのは、竹取輝矢であった。
「貴様っ……！」
輝矢の笑顔に怒りを見せた鬼人が、拳を強く握り締める。
「余程死にたいようだなぁぁーーっっっ！！！！」
「……。」
爪を振り上げ、飛びかかってくる鬼人を見ながら、冷静な表情で右耳のピアスへと手を伸ばす輝矢。
「死にたいのは……アナタの方でしょう……？」
輝矢がピアスを弾き飛ばす。
「“月器・三日月”っ」
「何っ！！？」
三日月を目覚めさせた輝矢が、大きく爪を振り上げた鬼人の懐へと素早く飛び込む。
「……っ！」
「うぐぅぅっっ！！！ぎゃあああああっっっ！！！！」
輝矢が三日月を振り切ると、胴体を見事に横一線に切り裂かれた

鬼人が、激しい断末魔を残し、あっという間に砂となって消えていった。
「おおぉ～っ！早っ！」
「今日も出番なかったねぇ～」
「まっ、緑鬼1匹じゃ張り合いねぇーだろっ」
圧倒的な強さで鬼人を粉砕した輝矢を、後方からのんびりと見つめているのはイヌ、サル、キジの3人衆。
「ふぅ～っ、ハチっ、ご褒美のチュ～をっ」
「しねぇーよっっ！！」
三日月をピアスへと戻し、一息ついて戻ってくる輝矢に、ハチが怒鳴りあげる。
『助けていただいてありがとうございましたぁぁぁぁっっっ！！！！』
『へっ？』
輝矢たちの周りへと集まってくる多くの人々。
「退治屋の竹取輝矢様ご一行さんですよねぇぇっっ！！？」
「噂通りの強さだわっっ！！さすがオトポリも認めるほどの退治屋っっ！！」
「是非お礼をさせて下さいっっっ！！！！」
『へっ？へっ？へっ？へぇ～っ？』
次々と押し寄せる人々の波に、輝矢たちは困惑の声をあげた。

数時間後……。
「ぐっ……ぐぷっ……さすがにもう食えへんわっ……」
大きく膨れた腹を摩りながら、どこか苦しげに呟くモンキ。
「お前もちったぁ持てよぉっ！」

そんなモンキの後方から、大荷物を抱えたハチが文句を言う。
『また来てくださいねぇぇぇぇぇ～～～～っっっ！！！！！』
『ううううっ……』
鬼人を退治した輝矢一行は、街人から豪勢な料理を振る舞われた上、食料やら何やらお礼の品を多く貰い、街の出口まで手厚く見送られて旅立ったのであった。腹に入りすぎたご馳走と、持つには重過ぎるお礼の品の数々に、手厚く持て成されたわりに苦しげな表情を見せている一行。
「日が暮れるまでに次の街へ行けるといいですねぇ～」
「いやっ、無理だろっ……」
「無理やわっ……」
特に荷物を持つことなく、手ぶらで先頭を歩く輝矢の後方で、ハチとモンキが苦しげに呟く。
「でもさぁ～ちょっとおかしくないっ？」
『えっ？』
両羽根に荷物を持ち、苦しげに飛んでいるユキジの言葉に、ハチとモンキが振り返る。
「何かっ……最近妙に歓迎されるってゆーかっ……名が知れてるってゆーかっ……」
「確かにそうだよなぁ～。前は行くトコ行くトコで“怪しい”だの“鬼人じゃないか”だの言われてたのに」
「そんだけ俺らも有名になったっちゅ～こっちゃろぉ～」
「そんな有名になることしたかぁ～？」
「あっ」
『……っ？』
あれやこれやと意見を交わしていた3人が、輝矢の声に前を見る。
「どうした？輝矢」
「これを」
『……？』
道の途中で立ち止まった輝矢が指差しているのは、道の脇に立っ

ている看板。３人がその看板を覗き込む。
「何々っ？“か弱い市民の味方、御伽界のニューヒーロー、退治屋・竹取輝矢一行っっ！！”」
「“桃タローの弟子である彼女は、師から受け継いだ力でお供とともに次々と鬼人を粉砕っっ！！”」
「“あのオトポリも認定済みっっ！！鬼人が出たら輝矢を呼ぶべしっ！”」
ハチ、モンキ、ユキジが一行ずつ看板に書かれている言葉を読んでいく。
「って、何だっ！！こりゃあああああああっっっ！！！！」
読んでから思わず大声を出すハチ。
「これのせいだったんだねぇ～最近の熱血歓迎っぷりはぁ～」
「オトポリに認定なんてもろとったかぁ～？」
「別にか弱い市民の味方をしてやる気なんてありませんけどねぇ」
看板の内容に、皆が表情を曇らせる。
「一体誰がこんな看板っ……って……」
道の先を見たハチがさらに目を大きく開く。
「この看板、５０ｍごとに立ってんぞぉぉっっっ！！！」
驚きの表情で叫ぶハチ。確かに道の遥か遠方、見えなくなる辺りまでビッシリと５０ｍ感覚で同じ看板が、並んで立てられている。
「うぅわぁ～ホントだぁ～」
「こんなぎょーさん、よう作るわぁ～」
ある意味、感心といった様子で見つめるモンキとユキジ。
「とにかく看板の続いている方を行ってみますか。誰が立てたのかわかるかも知れませんし」
「あっああっ」
ということで、看板の立ち並ぶ道を進んでいく輝矢たち。
「んっ……？」
しばらく歩いた道の先で、ハチが何かを見つける。
「よっこらしょっ！トントントォォォーンっとっ！」

道の先にいるのは、大量に看板の載った黒のオープンカーから看板を1つ運び、道の脇へと立てている羊スケ。
「お前かぁぁぁーーっっっ!!!!」
「ぎゃあああっっっ!!!!」
看板を立てていた羊スケに、ハチの飛び蹴りが炸裂する。
「痛ててっ……いきなり何すっ……って、あっれぇ〜？ハチくんじゃないっスかぁ〜っ」
「じゃないっスかぁ〜じゃねぇーよっ!!何だよっ!!この看板はっっ!!!」
暢気に顔を上げた羊スケに、ハチが強く怒鳴りつける。
「看板っ？ああっ、見てくれたんスねぇ〜っ！どうっスぅ〜？気にいったっスかぁ〜っ？」
「気にいるわけねぇーだろーがっっ!!!」
「へっ？」
思い切り怒鳴りあげるハチに、目を丸くする羊スケ。
「何でっスか？」
「何でじゃねぇーよっ!!この看板のせいで異常に歓迎されまくって大変なことになってんだからなっ！」
「おぉ〜そんな盛況なんスかぁ〜」
「喜んでんじゃねぇーっっ!!!」
満足そうに笑う羊スケに、またもやハチの怒声が飛ぶ。
「羊スケ、何でまたこのような看板を？」
「えっ？とっ、それはぁ〜」
眉をひそめて問いかける輝矢に、羊スケが笑顔を向ける。
「輝矢さんたちがすげぇー有名になればぁ、オトポリで一早く知り合いになった俺も出世できるかなぁって」
「己のためですか……」
出世目当ての羊スケに、呆れた顔となる輝矢。
「アホかぁっっ!!んなもんに俺ら使うんじゃねぇーよっ!!」
「ハチくんたちにはわかんないんスよぉ〜っ!!俺の苦労なんてっ

！！」

「うえっ？」

文句を言おうとしたハチが、凄い勢いで訴えてくる羊スケに押し負ける。

「ゴンさんと組まされてるせいでロクに出世できないんスからっ！」

必死に訴え続ける羊スケ。

「もーあの人ときたら、すぐケンカ売るわ、問題起こすわで俺ら、いつまで経っても地方巡回なんスよっ！？」

「そっ……そりゃまぁちょっとは同情すっけどっ」

熱く訴える羊スケに、思わずフォローを入れてしまうハチ。

「あぁーんな問題キツネと組んでたら、一生出世なんてできないっスよぉぉ～～っっ！！」

「だぁ～れが問題キツネだって？」

「へっ？」

すぐ後ろから聞こえてくる声に、表情を引きつりながらゆっくりと振り返る羊スケ。

「ゴっ……ゴゴゴゴゴゴっ……ゴンっ……さんっ……」

「……。」

羊スケが振り返った先にいたのは、いつも以上に目つきを悪くしたゴンであった。

「なぁーにが問題キツネだぁぁっっ！！出世どころか生きてられなくしてやろうかぁっっ！！ああっ！！？」

「うっぎゃあああああっっっ！！！！！」

「うわっちゃ～っ」

「口は災いの元ってねぇ～」

怒り狂ったゴンの餌食をなっていく羊スケを見ながら、苦い表情を見せるモンキと冷静に呟くユキジ。

「ううっ……」

「くだんねぇーことしてねぇーで、とっとと見回り行くぞぉぉっっ！！」

「ういっ……ス……」
ゴンに引きずられるようにして羊スケが車に乗り込み、2人を乗せた車があっという間に見えなくなる。
「何やったんやぁ～？一体っ」
「さぁ～？」
「ああっ！！ってか看板っ！！回収していけよぉぉぉぉっっっ！！！！」

「くっそぉぉ～～～看板回収のせいで無駄に時間食っちまったなぁ～」
「今日は久々に野宿やなぁ～」
道を行きながら話すハチとモンキ。空はすっかりオレンジ色に染まり、間もなく日が落ちようとしていた。
「あっ」
『……っ？』
上空で声を出すユキジに、ハチとモンキが顔を上げる。
「どないしたぁ～？ユッキー」
「街……」
『何っ！！？』

『……。』
やっと辿り着いた街の入口へと立った輝矢たちが、唖然とした表情を見せる。

『南国の街……トロピカーナ…？』

“南国の街・トロピカーナ”と書かれた看板の先に広がっているのは、深く雪の降り積もった白一色の街。南国というよりも北国のような寒さが身に沁みてくる。

「どこがっ……？」

「トロピカルな要素は１つも見当たりませんけどね」

「でも確かこの街って、年中温暖な気候の続くフラミンゴたちの街だとか何とか聞いた気がすっけど……」

「フラミンゴぉ～？フラミンゴなんて１匹もおらへんでぇ～」

その雪の降り積もった街を見渡し、輝矢たちが首をかしげる。

――――キィ～～キキィィ～～～ッッ！！――――

「おおっ！ここだねっ！」

『……っ？』

車のブレーキ音と声に、輝矢たちが振り返る。

『……っ』

「おやっ？君たちはっ……」

黒い高級車から降りてくる、黒い制服にオカッパ頭の大きなマサカリを背負った青年。それは、鉄汰であった。

『げぇぇ～～っ』

「何だいっ！！揃いも揃ってその反応はっ！！」

正刈鉄汰。熊人であり、オトポリの若き隊長でもある。桃タローのライバルと称される“金タロー”こと正刈金汰を兄に持ち、その金汰に幼い頃から桃タローを目指した修行を強制されてきたため、桃タローを嫌っている。そんなわけで桃タローの弟子の輝矢とは、一悶着起こした仲なのであった。

「相変わらず失礼な連中のようだねっ」

「相変わらず頭悪そうですね」

「ムキぃぃぃぃぃぃ～～～～っっ！！！」

輝矢の笑顔の一言に、怒りを剥き出しにする鉄汰。
「今日は兄グマいないのぉ～？」
「金汰兄さんは別件で出張中さっ！今回はさすがに来れないよっ」
鉄汰の兄・金汰は、オトポリの総長というとても偉い人なのだが、バカがつくほどの弟想いで、弟たちが取り仕切る事件には必ず付いて来てしまうのである。
「ってか鉄汰がこの街に来たってことは、この街なんかあったのか？」
「ふんっ！だぁーれが君たち何かに教えっ……！」
「竹取輝矢様ご一行さんですかぁぁぁっ！！？」
「のおおぅっっ！！」
ハチの問いかけに悪態づこうとした鉄汰を蹴り飛ばし、鉄汰の車の中から出てきた1人の少女。柔らかい質感の桃色のショートカットに、大きく済んだ緑色の瞳をしている。年は15，16といった頃だろうか。何故か左足を上げて、1本足で立っている。
「何故にケンケン？」
「さぁ？」
「ずっきゅぅぅーんっっっ！！！！」
皆が少女の1本足立ちに首をかしげている中、その少女にいつもの如くハートを射抜かれるモンキ。

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――

モンキが素早く人化して、少女に駆け寄る。
「お嬢さんっ……ボクと一緒に愛の雪だるまを作っ……」
「竹取輝矢様ご一行ですよねぇぇぇっっっ！！！」
「ゴフっっ！！！」
カッコをつけた門貴を上げている左足で蹴り飛ばし、少女が1本足で飛びながら輝矢の前へとやって来る。
「えっえええっ、まぁっ……」

少し呆れながら、少女に頷く輝矢。
「やっぱりいいっっ！！！看板見ましたっっっ！！！」
「まだあったのか……あの看板っ……」
少女の言葉に、肩を落とすハチ。
「お願いしますっっ！！私たちの街に出た鬼人を退治して下さいっ！！！」
『えっ……？』
これが、この度の事件の始まりであった。

第7章　狙われたハチ　☆2

そんなわけで輝矢たちは、鉄汰とともに、今は雪国の南国の街・トロピカーナに住んでいるというその少女の家へと案内された。
「申し遅れましたぁぁぁっっ！！私、フラミンゴの獣人のゴラミといいますぅぅーーっっ！！」
「ゴラミちゃんかぁ～可愛い名前やなぁ～っ！」
「そうか……？」
ゴラミに笑顔を向けるモンキの横で、少し首をかしげるハチ。
「それで1本足だったわけですね」
「すみませぇ～んっ！！これクセなんですっ！！！」
「どうでもいいですけど、もう少し小さい声で話せないんですか……？」
「ええっっ！！？」
笑顔を見せながら大声で話すゴラミに、輝矢が少し耳を塞ぎ気味に言い放つ。
「お陰で右足だけに筋力集中しちゃってっ！！」
「いやいや、左足のキック力はなかなかのものだったよ……」
ゴラミに蹴られた腰を押さえながら、鉄汰が少し引きつった表情で呟いた。
「桜時の他にもいるんだねぇ～無駄に派手なピンク頭の人って」
「悪かったなっ」
ユキジの言葉に、顔をしかめるハチ。ゴラミの鮮やかな桃色の髪は、確かにフラミンゴを思わせる。
「ってかこの家、家ん中だってのに寒くなぁ～い？」
部屋の中を見渡しながら、ユキジが文句を言う。確かにゴラミの家は壁や窓も薄い造りで、あらゆるところからすきま風が入り込み、外と変わらぬ寒さであった。

「すみませぇぇぇーーん！！！！！」
「うわっ！」
大声で謝るゴラミに、文句を言っていたユキジが少し驚く。
「この家は元々、中が涼しくなるように造られているものでぇぇっっ！！！」
「えっ？」
ゴラミの言葉に、ユキジが目を丸くする。
「うちの家だけじゃないんですよぉぉっっ！！！この街の家はみんなそうなんですっっ！！！」
ゴラミの表情が曇り始める。
「この街は元々、年中温暖な気候の続く、私たちフラミンゴ一族の住みやすい暖かな街だったんですっ！！！」
『……っ』
ゴラミの言葉に、皆が眉をひそめる。
「でも1週間ほど前、急に雪が降り始めてっっ！！！それからちっっっとも雪が止まないんです！！！」
「止まないっ……？」
輝矢が少し驚いた表情で問いかける。
「はいっ！！街を少し離れたら晴れているのにっ！この街だけっ！！ずっと雪が降り続けていますっ！！！」
「異常気象っ……いかにも怪しいねっ！よしっ！ここはボクが“鉄汰スペシャル”でっ……！」
「ちょっと静かにしてもらえません？」
「はいっ……」
張り切って懐から鉄汰スペシャルを出そうとした鉄汰に、輝矢が冷たく言い放つと、鉄汰が大人しく頷いた。
「あの女っ……いつか痛い目見せてやるっ……」
「無理だって」
陰でこっそり憎しみを募らせる鉄汰に、ハチが冷静に一言。
「この雪の中では飛び立てませんし、この寒さに体を壊してしまう

街人も出てきてしまってっ……！！」
「確かに堪えるよねぇ～この寒さはっ」
ユキジが窓の外で、深々と降り注ぐ雪を見て気難しい表情を見せる。
「しかし異常気象が鬼人の仕業とはどうにもっ……」
「それだけじゃないんですっ！！！！」
「……っ？」
今まで以上に声を張り上げたゴラミに、輝矢が首をかしげる。
「それだけじゃないって？」
「……っ雪が降り始めてからっ……街の人間が1人っ！また1人とっ！！行方不明になっていてっ……！」
「行方不明っ……」
ゴラミの話に、皆が表情を曇らせる。
「はいっ……！！！もう5人も……！！いなくなっています……！！」
「それは怪しいねぇ～っ！よぉ～しっ！ボクが“鉄汰スペシャル”でっ……！」
「ちょっと静かにしててもらえません？」
「はいっ……」
またしてもでしゃばろうとした鉄汰が、輝矢の一言に大人しく頷く。
「あの女っ……いつか復讐してやるっ……」
「だっから無理だって」
こっそり呟く鉄汰に、ハチが再び一言。
「で、その行方不明になっている方々というのは、どのような……」
「それがっ……」
ゴラミが再び表情を曇らせる。
「若くてカッコ良くて爽やかな美青年ばっかりなんですっっ！！！！」
「若くて」

「カッコ良くて？」
「爽やかな」
「美青年？」
ゴラミの言葉を一言ずつ繰り返すハチ、モンキ、ユキジ、そして鉄汰。
「どぉ～しよぉ～っ！！こんな可愛らしいボク、狙われちゃう～っ」
「困ったねぇーっ！自分の身を守りつつ捜査しないとぉっ！」
「いっやぁ～っ！美女に罠かけられたら一発ではまってまうわぁ～っ！」
「なんで全員、狙われる気満々なんだよっ……」
一斉に自分の身を心配し始めるモンキ、ユキジ、鉄汰に、ハチが呆れたように呟く。
「ハチのことは私が守ってあげますから安心して下さいねっ」
「はぁ？別に俺は狙われねぇーだろっ」
「またまたっ、まぁそういう所が好きなんですけどねぇ～」
「すっ……すすすすす好きってっ……！んななななっ……何言ってんだよっ！お前はっ！！」
輝矢がサラッと言った言葉に、思い切り動揺するハチ。そんなハチを見て、輝矢がさらに笑顔を見せる。
「ゴラミお姉ちゃんっ」
『……っ？』
聞こえてくる幼い声に、ゴラミや輝矢たちが一斉に振り返る。
「芹っ！！」
家の奥から皆のいる部屋へとやって来たのは、まだ幼い少年であった。サラサラと流れるような金色の髪に、深く大きな紫色の瞳の美しい、愛らしい顔立ちの少年である。まだ１２，１３歳ぐらいであろう。
「お客さん？」
「ええ！！芹も見たでしょ！？あの看板に書いてあった、すっごい退治屋の人っ！竹取輝矢さんたちよっ！」

「あの看板のっ？」
「どんだけ立てたんだよっ、羊スケのヤツっ」
看板と聞いて目を輝かせる芹に、ハチがまたしても肩を落とす。
「じゃあお兄ちゃんを探してくれるんだねっ！」
「お兄ちゃん？」
目を輝かせる芹に、ハチが首をかしげる。
「この子のお兄さんの鈴白さんも、３日前、行方不明になってしまったんですっ！！」
『……っ』
「……。」
ゴラミの言葉に、皆が表情を曇らせ、芹が悲しげに俯く。
「お願いしますっ！！鬼人を退治して、雪を止ませて、消えた街人を取り戻して下さいっ！」
「けっこう図々しいですね」
輝矢に頭を下げて頼むゴラミ。その頼みごとの多さに、輝矢が思わず突っ込む。
「ふわはっはっ！こんな変な退治屋に頼むより、オトポリのとっても優秀な隊長っ！この正刈鉄汰にっ……！」
「お願いしますっ！！輝矢さんっ！！」
「無視っ！！？」
鉄汰を完全に無視して、輝矢に頭を下げ続けるゴラミ。
「私は別に看板に書かれているような正義の味方をするつもりはありませんからねぇ」
輝矢が面倒臭そうな表情を見せる。
「ぶっちゃけ面倒臭いですしぃ」
「賛成～」
「そんなぁっ……！！！」
やる気のない輝矢とそれに賛同するユキジに、ゴラミ悲しげな顔を見せる。
「愛しのゴラミちゃんのためやねんよぉぉっ！！頼むわぁぁっっ！

！輝矢んっ！！」
「嫌です」
「ううっ……」
モンキの説得も、あっさり断る輝矢。
「お兄ちゃんっ……」
「……っ」
悲しげに俯く芹を見て、ハチが眉をひそめる。
「いいじゃねぇーかっ、探してやろうよっ！コイツの兄ちゃんたちっ！」
「わかりました、探しましょう」
『ええぇぇぇぇーっっっ！！！？』
ハチの言葉にあっさり承諾する輝矢に、モンキとゴラミが驚きの声を出す。
「探すったってさぁ～一体、どうすんのさぁ～」
「とりあえずこの街の周囲の捜索をします。アナタたちが」
「ええ～っ」
「ゴラミちゃんと輝矢んのためやぁぁ～～っっ！！頑張るでぇぇぇっっ！！！」
輝矢の言葉に、不満げな声をあげるユキジとやる気を見せるモンキ。
「ふわぁーはっはっはっはっ！！」
『……？』
急な笑い声に、輝矢たちが振り返る。
「ちょぉぉ～っと名が知れたからって調子に乗らないことだねっ！！竹取輝矢っ！！」
「別に調子にならいつも乗ってますけど」
「鬼人はこのボクがっ！このボクが必ず、君より先に退治してみせるよっ！！ふわぁぁーはっはっはっ！！」
高々とした笑い声を残して、鉄汰がゴラミの家を去っていく。
「相変わらず対抗意識剥き出しだねぇ～」

「まぁ気にせず調査を始めましょう」
鉄汰のことはまるっきり気にせず、やる気を見せて立ち上がる輝矢。
「さぁ探しに行ってきて下さい」
「喜んでぇぇ～～っっ！！」
「行かないんなら立ち上がんなくていいじゃん」
立ち上がったものの、探しに行こうとはせず、モンキたちに指示だけ出す輝矢に、ユキジが突っ込みを入れる。
「ボっ……！ボクも行っていいっ！？」
「えっ？」
意を決したように声を出す芹に、輝矢が少し戸惑った表情を見せる。
「そりゃあまぁ別にいいですけど……」
「ホントっ！！ありがとうっ！！」
輝矢の言葉に、芹が満面の笑顔を見せる。
「ハチは狙われたら危ないので、私とここにいましょうねっ」
「えっ？」
笑顔で言う輝矢に、ハチが目を丸くする。
「いやっ、俺も探してくるよっ」
「わかりました、一緒に行きましょう」
『……。』
ハチの一言に、率先して家を出て行く輝矢を見て、モンキとユキジは呆れたように肩を落とした。

第7章　狙われたハチ　☆3

「そぉぉぉ〜〜〜うなのよぉぉぉ〜〜〜っっ！！ウチの可愛いフラッゴ君がっ！！フラッゴ君がっ！！」

聞き込みのため、いなくなった美青年のうちの1人の自宅を訪れた輝矢、ハチ、芹の3人。

「私に似て顔も良くて頭も良くて運動神経も良くて性格も良かったから、きっとさらわれたんだわぁ〜っ！」

『……。』

そこで3人が出会ったのは、イカつい顔立ちをした派手なピンク頭のオバサンであった。行方不明となった美青年の母親のようだが、悲しみのあまり豪快に泣き叫ぶ。そのあまりの豪快さに、言葉を失う輝矢たち。

「今頃、ママが恋しくて泣いているに違いないわぁぁ〜〜っっ！！うおぉぉぉぉ〜〜〜んっっ！！」

「あっ……あのっ……それでっ……息子さんがいなくなった時の状況というのは……」

泣きじゃくる母親に、遠慮がちに問いかける輝矢。

「急によっ！急にっ！2時のおやつには降りてきたのに、2時半のおやつには降りてこないからっ……！！」

「何回、おやつあんだよっ」

「2階のお部屋を見に行ったら、パッタリいなくなってたのよぉぉっっ！！もうパッタリよぉぉっっ！！」

ハチに突っ込まれながらも話し、またしても泣きじゃくる母親。

「あ〜それでぇ、そのいなくなった時に妙な物音とか声とかしませんでした？」

「うおぉぉぉぉ〜〜〜んっっ！！フラッゴくぅぅぅぅ〜〜〜んっっっ！！！！」

「……。」
輝矢の問いに答えることなく、母親は泣き続ける。
「ダメですね。次行きましょう、次」
「あっ、そういえばぁぁ～」
「……っ？」
輝矢が諦めて立ち上がろうとした時、母親が思い出したように口を開く。
「歌が聞こえたわ」
「歌っ……？」
母親の言葉に、眉をひそめる輝矢。
「ええ、確か“ハイホーハイホー”とかって」
「ハイホー？」
そのフレーズを口にし、ハチが首をかしげる。
「他に何かっ……」
「うおぉぉぉぉ～～んっっ！！思い出したらまた泣けてきたわぁぁ～～っ！！フラッゴくぅぅ～んっっ！」
「……。」
それ以上、何も聞けなかったのは、言うまでもない。

1時間後……。
「街中調べ回って、結局わかったのは消えた時にハイホーって歌が聞こえたってことだけかぁ～」
街の中央に設置されたかまくらに集まり、聞き込み調査の結果を報告しあう輝矢たち。輝矢たちが聞き込みに行った家だけでなく、モンキとユキジが行った家でも息子が消えた時に歌が聞こえたそうだ。
「けど歌って……」

その唯一の共通点に、難しい表情を見せるハチ。
「芹のお兄さんが消えた時も聞こえたのですか？」
「えっ？」
輝矢の不意な問いかけに、芹が少し驚いたような顔をする。
「あっ、うっう～んとっ……どうだったかなっ……」
「……？」
「兄貴が消えちまったんだっ。動揺してそんなん覚えてなくても無理ねぇーよっ」
引きつった表情で曖昧な発言をする芹に、輝矢が少し眉をひそめる。そんな芹を庇うように、ハチが優しい笑顔でフォローを入れた。
「歌と行方不明事件とホントに関係あんのかなぁ～」
「わかったでぇぇぇっっっ！！！」
「へぇっ？」
首をかしげていたユキジの横で、ひらめいた様子で元気よく立ち上がるモンキ。
「犯人はぁっ！“歌唱力”を持った鬼人やぁぁぁっっ！！！」
『……。』
モンキの言葉に、一瞬にして白ける一同。
「んでなっ！人をさらう度に自慢の喉を披露してんねんっ！この雪は歌の深みを増すための演出じゃっ……！」
「勝手に言ってろ、アホザルっ」
「ギャグとしても面白くないし最低だよねぇ～」
「もういっそ消えて下さい」
「ぐっはぁぁぁーんっっっ！！！！！」
仲間から次々と寄せられる突っ込みに、大きなショックを受けるモンキ。
「ううううっ……」
「でぇ？歌以外に何か手がかりになるようなものはないのかいっ？」
「そっれが特になくってさぁ～って、んっ？」
聞こえてきた問いかけに、ハチが答えながら眉をひそめ、ゆっく

りと振り向く。
「何だいっ、ないのかぁ～使えないねぇっ」
「……。」
ハチが振り向いた先にいたのは、偉そうに肩を落とした鉄汰。
「何でお前がここにいんだよっっっ！！！」
「通りかかったかまくらに入ったら、ちょうど君達がいたんだよ。奇遇というやつさっ」
「ああっ！？」
鉄汰の言葉に、顔をしかめるハチ。
「そっちはどうだったのさぁ～？鉄汰スパークルの成果は出たのぉ～？」
「“鉄汰スペシャル”だよっ！間違えないでもらえるかなっ、君っ！」
「そんなこと聞くまでもありませんよ、由雉」
「えっ？」
鉄汰に問いかけたユキジが、輝矢の言葉に首をかしげる。
「私たちが掴んだ情報を聞きに来ている時点で、自分では何も成果があげられなかったに決まっています」
「あっそっかぁ～」
「そっそそそそそんなことないよっ！！適当なことを言うのはやめてくれたまえっ！竹取輝矢っ！」
ユキジが納得する中、鉄汰が思い切り動揺しながら輝矢に言い放つ。
「成果はもっもうバッチグーさっ！ふわぁーはっはっはっはっ！！」
「負けず嫌いやなぁ～」
「バレバレだけどな」
無理やり笑う鉄汰を見て、呆れた表情を見せるハチとモンキ。
「さっ！じゃあ鬼人を捕まえに行ってこようかなっ！ふわっはっはっはっ！！」
「はいはい、とっとと行って下さい」

「ふっふんっ！言われなくても行ってやるよっ！！」
鬼人の居場所などわかっていないのだろうが、後には引けなくなり、仕方なくかまくらを出て行く鉄汰。
「あぁ～あ」
そんな鉄汰を見送り、ユキジが少し肩を落とした。
「でも鉄汰が何も掴めてないってことは、鉄汰スペシャルに反応がなかったってことかぁ～」
「また仮死状態なんとちゃう？」
「それはないでしょ～5人が消えたのってこの1週間のうちだよっ？」
「じゃあ今さっき仮死状態に入ったばっかとかっ！」
「んな都合よく寝る鬼人いんのかぁ～？」
「そもそもっ……」
『……っ？』
いつになく真剣な表情で口を開いた輝矢に、ハチ・モンキ・ユキジが視線を寄せる。
「今回の事件……本当に鬼人の仕業なのでしょうか……」
『えっ……？』
輝矢の言葉に、3人が眉をひそめる。
「どういうことだよ？鬼人の仕業じゃないってんなら誰がこんなことっ……」
『ハイホー……ハイホー……』
『……っ！！』
聞こえてくる歌声に、皆が一斉に顔を上げる。
『ハイホー……ハイホー……』
「歌っ……！！？」
「ハイホーってこれっ……」
「うわあああっっっ！！！！」
「……っ！」
「鉄汰の声だっ……！！」

外からする悲鳴に、急いでかまくらを飛び出す輝矢たち。
「鉄汰っ……！！鉄汰っ……！！……っ！」
いち早く飛び出していったハチが、道の途中で急に足を止める。
「どないしたんやっ！？イヌっ！」
「これっ……」
後ろからやって来たモンキの言葉に、深刻な表情で呟くハチ。
「鉄汰の……マサカリ……」
『……っ』
ハチのすぐ目の前の雪道に落ちていたのは、鉄汰がいつも背負っているマサカリであった。マサカリが落ちているというのに、近くには鉄汰の姿はもちろん、足跡さえない。皆が表情を険しくする。
「鉄汰が……消えた……？」
輝矢も驚きの表情で呟く。
『……って、あれが“若くてカッコ良くて爽やかな美青年”っ！！？』
「そこかよっっ！！！」
声を揃える輝矢、モンキ、ユキジの3人に、ハチが力強く突っ込みを入れる。
「だってこのボクを差し置いて大問題じゃない？」
「そうそうっ！俺もおったっちゅーのにっ」
「犯人の趣味を疑いますね」
「だっからそういう問題じゃねぇーだろぉーがっっ！！」
鉄汰がさらわれたことよりも、鉄汰が“若くてカッコ良くて爽やかな美青年”を見なされたことに、かなり衝撃を受けている輝矢たちに、ハチが唯一まともに怒鳴りつける。
「今は鬼人にしろ、鬼人でないにしろ、犯人を見つけることが先決だろっ！！」
「そりゃそうだけどさぁ～」
「ホンマに歌が聞こえただけで、後はさっぱり人影も何もなかったしぃ」

「あっ……」
『……っ？』
急に声を出す輝矢に、３人と芹が振り返る。
「いい作戦を思いつきました」
『いい……作戦……？』
首をかしげたハチたちは、誰１人としていい予感がしていなかった。

『……。』
雪の降るトロピカーナの街の中央に立っているのは、人化した門貴と由雉。
「名づけて“オトリ作戦”ですっ」
２人の前に立ち、何やら誇らしげに言い放つ輝矢。
「まぁ大して新鮮味のない作戦だよねぇ～」
「輝矢ぁぁ～んっ！！ついに俺が“若くてカッコ良くて爽やかな美青年”と認めてくれたんやなぁっ！」
「鉄汰でもさらわれるくらいですから、このくらい妥協してもオトリにはなるでしょう」
「よっしゃあああああっっ！！！頑張るでぇぇぇっっ！！！！」
「貶されたの、わかってないでしょ？」
張り切って声を出す門貴に、呆れた表情を向ける由雉。
「俺もオトリやった方がっ……」
「ハチにそんな危ないことはさせられません」
「ボクらはいいのね」
笑顔でサラッと答える輝矢に、由雉が不満げにこっそり呟く。
「じゃあボク、街の東側回るからぁ～」

「俺は西やなっ」
「消されても死んでも私たちに犯人の手がかりを残すんですよ？いいですね？」
「はいはいっ」
「まっかせといてぇぇっっっ！！！！」
輝矢の言葉に返事をして、門貴と由雉がそれぞれ東と西に分かれて歩き去っていく。
「アイツら、大丈夫かなぁ～？」
「まぁ消えたら消えたで次の作戦、考えます」
「鬼っ……」
門貴と由雉のことをまるで心配していない輝矢に、ハチがこっそりと呟く。
「……っ」
「……？」
振り向いたハチが、塞ぎこむように俯く芹に気づく。
「心配か？兄ちゃんのことっ」
「えっ……？」
ハチの問いかけに、ゆっくりと顔を上げる芹。ハチは芹に穏やかな笑顔を向けた。そんなハチの笑顔を見て、芹が少し目を細める。
「お兄ちゃんには……兄弟……いる？」
「えっ？」
不意な芹の質問に、少し目を丸くするハチ。
「兄弟っつーか兄弟みたいな感じでずっと一緒に育ってきたヤツらはいるぜぇ？ホントは従兄弟だけどなっ」
ハチが芹に笑顔で答える。
「ハーモニーうるせぇーし、自由奔放ってゆーか自分勝手っつーかでいっつも振り回されっけどっ」
――――おぉぉぉ～～～うぅぅぅ～～～じぃぃぃ～～～っっっ♪♪――――
――――だあああああっっ！！！うっせぇぇっっ！！！――――

「まっ、一緒にいんのは楽しいかなっ」
「そうっ……」
ハチの答えを聞いて、芹が少し笑顔を見せる。
「ボクもね、お兄ちゃんといるのは、すごく楽しかったよ……」
芹が思い出すように、悲しげな笑みを浮かべる。
「だからお兄ちゃんがいないのは……すごく寂しいし、すごく辛い……」
「芹っ……」
やがて笑みを失う芹に、ハチが眉をひそめる。
「だぁぁーいじょうぶだってっ！！俺たちが絶対、兄ちゃん見つけてやっからっ！なぁっ？」
「ええっ」
相づちを求めたハチに、笑顔を向ける輝矢。
「大丈夫っ……」
「……？」
輝矢が芹にも笑顔を向ける。
「私は約束は守りますよ」
「……っ」
輝矢の笑顔に、少し目を見開く芹。
「……うんっ」
そして笑顔となり、大きく頷いた。
「ぎゃっぼおおおおおんっっっ！！！！」
『……っ！』
遠くから聞こえてくる悲鳴に、輝矢やハチが顔を上げる。
「門貴の声だっ！！」

――――ボォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――

「現れましたかねっ！“月器”っ」
ハチが素早く人化し、輝矢がピアスを弾いて月器を目覚めさせる。

「ハチは芹を連れて一旦、ゴラミのところへ戻って下さいっ！」
「わかったっ！」
「……っ！」
三日月を右手に、雪道を走り出していく輝矢。
「……っ」
遠ざかっていく輝矢の背中を見つめ、厳しい表情を見せる桜時。
「よしっ、ゴラミんとこに戻ろうっ」
輝矢が見えなくなると、桜時が芹の方を振り返る。
「さぁっ！行こうっ！」
「……。」
「……？」
慌てた様子で芹に手を伸ばす桜時であったが、いつまでも掴んでくる手がなく、少し戸惑うように顔を上げる。
「芹っ……？」
桜時が芹の方を見ると、芹は黙ったまま深く俯いていた。
「どうしっ……」
『ハイホー……ハイホー……』
「……っ！この歌はっ……！」
桜時が芹に手を伸ばそうとしたその時、またしてもあの歌が聞こえてくる。どこからともなく聞こえてくる歌に、顔を上げ、辺りを見回す桜時。しかしどこにも人影はない。
「一体、どっからっ……！」
『ハイホー……ハイホー……』
頭の中に直接響くように、どんどん大きくなっていく歌声。
「んっ……！」
何か痛みのようなものを覚え、桜時がこめかみに手を当てる。
「何かヤベぇなっ……芹っ……！とりあえずこっからっ……！」
「フフフっ……」
「……っ！」
頭を押さえながら苦しい表情で振り向いた桜時の先で、どこか冷

酷な笑みを浮かべている芹。そんな芹を見て、桜時が驚くように目を見開く。

「芹っ……！まさかお前っ……！ううっ……！！」

『ハイホー……ハイホー……』

さらに大きく響く歌声に、頭に走る痛みが激しさを増し、桜時がその場に膝をついてしまう。

「ううっ……ううううっ……！！くっ……そっ……」

頭に走る痛みに耐え切れず、ゆっくりとその場に倒れこんでいく桜時。表情を歪ませながら、桜時が力尽きるように瞳を閉じていく。

「ごめんねっ……」

『ハイホー……ハイホー……』

歌声が小さくなっていく中、倒れた桜時を見下ろし、冷たい表情を見せる芹。

「お兄ちゃんっ……」

「……。」

雪道に倒れた桜時に、白い雪が降り注いだ。

第7章　狙われたハチ　☆4

「ぎゃっぼおおおおんっっっ！！！！」
「サルっ……！」
門貴の悲鳴の聞こえてくる方へと急いで駆けて行く輝矢。
「輝矢っ！！」
「由雉っ」
走っていた輝矢の元へ、逆方向からユキジが飛んでくる。
「ボクを差し置いて門貴が狙われたのかなっ！？」
「わかりませんが急ぎましょうっ」
「うんっ！」
輝矢とユキジが門貴の元へと急ぐ。
「門貴っ……！」
「あっ！！輝矢ぁぁぁーーんっっっ！！！！」
雪道の真ん中に立っていた門貴が、やって来た輝矢たちを見つけ、必死に手を振る。
「何があったのですっ？犯人はっ……！」
「右足が雪に埋もれてもて動かれへんねぇーんっっ！！助けてぇぇーーっっ！！！」
『はっ……？』
門貴の言葉に、大口を開けて固まる輝矢とユキジ。
「走っとったらさぁ、いきなりズッボンってはまってもてさぁっ！ズッボンていったんよぉ～？ズッボン！」
「……。」
右足が埋もれた状況を話す門貴を見ながら、表情を無くしていく輝矢。
「いっやぁ～でも輝矢んが助けに来てくれるって俺、信じてっ……！」

「紛らわしいっ」
「ふっぎゃあああああっっっ！！！！」
笑顔を見せていた門貴を、輝矢が容赦なく蹴り飛ばす。景気よく舞い上がり、雪道へと落下していく門貴。
「右足抜けたっ……でも痛いっ……」
落下した門貴が、力なく呟く。
「まったくっ……」
「人騒がせなサルだよねぇ～」
輝矢とユキジが呆れたように肩を落とす。
『ハイホー……ハイホー……』
『……っ！』
そこへ聞こえてくる歌声に、輝矢とユキジが表情を一変して顔を上げる。
「歌っ……！？なんでっ……！」
『ハイホー……ハイホー……』
どこからか聞こえてくる歌声に、警戒するように辺りを見回す輝矢たち。
「また誰かがさらわれるっちゅーことかっ！？」
「……っ」
門貴の言葉に、輝矢が何かに気づいたような表情となる。
「まさかっ……ハチっ！！」
「あっ！輝矢っ！」
血相を変えて飛び出していく輝矢を、門貴とユキジが慌てて追いかける。
「ハチっ！ハチっ……！！」
慌てて先ほどハチたちといた場所まで戻る輝矢。
「ハチっ……！！……っ」
しかし輝矢が戻ったその場所に、ハチの姿はなかった。残っているのは不自然に途切れた犬の足跡のみ。輝矢が表情を凍りつかせる。
「輝矢んっ！どないしたんやっ！？」

「まさか桜時がっ……！？」
そこへ駆けつける門貴とユキジ。
「ハチっ……」
こうしてハチは、輝矢の前から姿を消した。

その日、夜。ゴラミの家。
「吹雪が……増してきたね……」
窓の外を見つめながら、どこか気難しい表情で呟く由雉。
「そんなぁぁっっっ！！！ハチさんや鉄汰さんっ！芹までもが消えてしまったなんてぇぇぇっっ！！！」
「今、シリアスムードなんだから、もう少し声小さくしてくんない？」
相変わらずの大声で騒ぐゴラミに、由雉が少し呆れた表情を向ける。
「まさか3人とも鬼人の手にっっ！！？」
「せやろなっ……消えた時に例の歌聞こえとったし、街中一通り探したけど見つけられんかったっ……」
「そんなぁぁぁぁ～～～っっっ！！！！」
「……。」
珍しく深刻な表情で話す門貴に、ゴラミは悲痛な声を出し、輝矢は元気なく俯く。
「すまんっ……輝矢っ……俺のせいでイヌコロや芹までっ……」
「別にアナタだけのせいではありません」
辛い面持ちで頭を下げた門貴に、輝矢が声をかける。
「あの時、2人から離れた私のミスです……」
「輝矢っ……」

自分が間違っているなどとこれっぽっちも思っていなさそうなあの輝矢が、自分を責めるようなことを言う。そんな輝矢を、目を細めて見つめる門貴。

「輝矢んっ……！そんなに辛いんなら俺の胸の中で泣っ……！」

「問題はハチたちがどこに連れて行かれたのか、ということですね」

「ううっ……」

勢いよく立ち上がり手を広げて受け入れ態勢を整えた門貴であったが、輝矢にあっさりと無視され、悲しみに暮れる。

「そうだよねぇ～あんな短い時間でいなくなっちゃうんだから、そう遠くではないと思うけどぉ～」

――――バッリィィィィィィーーーーンッッッ！！！――――

「へっ……？」

由雉のすぐ傍の窓ガラスが急に砕け割れ、外から何かが飛び込んでくる。

「矢ぁ～？」

部屋の中へと飛び込んできたのは、何やら紙のようなものが括り付けられた1本の矢。

――――ズシュッッ・・・！！！！！――――

「のおおおうっっっ！！！！」

中へ飛び込んできた矢が、見事に門貴の後頭部に突き刺さる。

「ああっっ！！窓ガラスがぁぁっっ！！！」

「窓ガラスよりまず俺の頭ちゃう～？ゴラミちゃ～～～んっ」

「張り変えるの、けっこうお金かかるのにぃぃっっっ！！！！」

「……。」

頭から血を流す門貴のことなどまるで気にせず、割れた窓ガラスを悔やむゴラミ。

「矢文ですかね」
「今時、古風だねぇ～」
「よっ」
「ぬっきゃあああああっっっ！！！！」
輝矢が門貴の後頭部に刺さった矢を、荒っぽく抜く。第2の痛みが門貴を襲う。
「えぇ～っと、何々？」
矢に括り付けてあった手紙を取り、開く輝矢。
「“消えた街人を返して欲しくば、街の北はずれにやっとこさ造った『雪鏡の城』まで来るべし」
「雪鏡の城？」
「ああ、そうそう。来るのは退治屋・竹取輝矢とその一味のみの限定ねっ”だそうです」
「俺ら限定？」
「鬼人にしては情緒溢れるお手紙ですねぇ」
手紙の内容に首をかしげる由雉と門貴。読み終えて手紙を閉じる輝矢が、目つきを鋭くする。
「街の北はずれに城なんてっ……建ってるぅっっ！！！！」
家の北側の窓を見たゴラミが驚きの声をあげる。確かに窓の景色を独占するかのように、吹雪の中に佇む大きな白一色の城。雪景色の中に紛れながらも、不気味な空気を醸し出している。
「おっかしいわねぇーっ！確かに昨日まではなかったのにっ！！」
「本当に出来たてホヤホヤのようですね……」
「……？」
窓の外に見える城を見ながら、すっと立ち上がる輝矢。そんな輝矢をゴラミが戸惑うように見る。
「行きますよ、サル、キジ」
「おうよぉっ！！」
「はぁ～いっ」
「ええっっ！！？」

呼びかける輝矢と迷わず返事をする門貴・由雉に、大きく驚くゴラミ。
「行くんですかっっ！！？敵の罠ってわかりきってるのにぃぃっっっ！！！」
「当然です」
驚いて問いかけるゴラミに、輝矢が鋭い表情を向ける。
「私からハチをさらった罪……死んで償わせます……」
「すごい気迫っ……！！」
「おおっ、マジやっ」
「いつもより迫力3割増しだねぇ～」
殺意のこもった冷たい瞳を見せる輝矢に、ゴラミは思わず圧倒され、止めようとした手を引っ込めた。そんな殺意溢れる輝矢を冷静に見ながら、輝矢の後へと続いて部屋を出て行く門貴と由雉。
「あっ……！」
「心配せんといてぇ～っ！ゴラミちゃ～んっ！俺はすぅ～ぐ戻ってくるからっ！ゴラミちゃんの元へっ！」
「美味しいものでも作っといてぇ～」
「……っ」
ゴラミが止める隙もなく、輝矢たちは雪鏡の城へと旅立っていく。
「どうか……お気を付けてっ……」
吹雪が激しさを増す外の景色を見ながら、ゴラミが祈るように呟いた。

第7章　狙われたハチ　☆5

「んっ……んんっ……」
暗がりの中、ゆっくりと目を覚ましたのは桜時であった。
「ここ……はっ……？痛っ……！」
倒れこんで気を失っていたらしき桜時が、辺りを見回しながら少し体を起こすと、桜時の頭に痛みが走った。歌が流れてきた時の痛みが残っているようである。
「クっ……」
「鏡よ、鏡っ……」
「……っ？」
同じ空間から聞こえてくる女の声に、桜時が戸惑いがちに振り向く。
「この世で1番美しいのは……だあれ……？」
そこにいたのは、蝋燭の灯りに照らし出された1人の女。灰色がかった白く長い髪に、大きな青色の瞳をしていた。青と黄色の艶やかなドレスを身にまとい、髪には真っ赤なリボンを結わえている。大人びたところはあるが、まだ16，17の少女に見えた。
――――パアアアアアアアーーーーッッッ！！！――――
少女の問いかけに答えるように光を放つのは、少女のすぐ傍の壁に掛けられた、楕円形の美しい装飾の施された1枚の鏡。
＜それは貴女様です……白雪様……＞
鏡の中から響く低い声。鏡は白雪と呼んだその少女の問いかけに答える。
「フフフっ……」
鏡の答えを聞き、白雪が笑みを浮かべる。

「知ってるわっ！オォォーっホッホッホっっ！！！オォォーっホッホッホッホっっ！！！」
「げぇぇ～っ」
「んっ……？」
「あっ、ヤベっ」
高々と笑う白雪に、思わず不快な声を漏らしてしまう桜時。そんな桜時の声に反応して、白雪が桜時の方を振り向くと、桜時が少し表情を引きつった。
「あらっ？お目覚めっ？」
「……っ」
椅子から立ち上がり、白雪が怪しげな笑みを浮かべて桜時の元へと歩み寄ってくる。表情に緊張感を走らせながら、体を起き上がらせる桜時。
「桜時様っ」
「……っ！なんで俺の名前っ……！……っ」
自分の名を呼ぶ白雪に驚きを見せる桜時であったが、白雪の後方に立っている芹を見て驚きを消す。
「そうかっ……お前がっ……」

――――ごめんね……お兄ちゃんっ……――――

薄れていく意識の中でかすかに覚えている、芹の冷たい瞳。
「兄貴がさらわれたってのも全部ウソかよっ……大した役者だなっ！」
「……。」
桜時の皮肉った言葉に、芹は顔色1つ変えることなく黙ったままであった。
「じゃあてめぇーが街に雪降らせたりっ、街の人たちをさらったんだなっ！って、ううっ……！！」
「そうよっ？」

勇ましく白雪を問い詰める桜時であったが、白雪との距離が１ｍを切った途端に怯み始める。
「ちょっ……！近っ……！」
「見たい？私のコレクションっ」
「コレクション？」
桜時の怯みも気にすることなく、白雪はさらに桜時へと近づいてくる。その白雪の言葉に、眉をひそめる桜時。
「コレクションてっ……」
「芹っ」
「はい、白雪様」
「……っ？」
白雪が芹の名を呼ぶと、芹が壁にあったスイッチのようなものを押す。芹がスイッチを押すと、蝋燭の灯りだけに照らされていた部屋に、急に天井から光が降り注いだ。どうやら電灯のスイッチだったようである。天井の豪華なシャンデリアが光輝く。
「……っ！！」
明るく照らされた部屋を見た途端に、目を大きく見開く桜時。
「鉄汰っ……！！」
鏡の掛けられた壁沿いに、鏡を中心にして並ぶように立っている６つの氷の塊。桜時がその氷の１つの中に、深く瞳を閉じた鉄汰の姿を見つける。
「これはっ……」
「素敵でしょう？私の雪像コレクションっ。全部で６体あるわ」
「じゃあこれみんな、消えた街人かよっ……」
信じられないものでも見ているかのように、氷の中に眠っている青年たちを見回す桜時。
「コイツらをどうするつもりだっ！？」
「そうねぇ～」
「ううっ……！！」
考えるように天井を見上げながら、桜時のすぐ前へとしゃがみ込

み、桜時の目の高さを揃える白雪。至近距離に迫る白雪に、桜時が思わず目を逸らしてしまう。
「特に考えてなかったけど……貴方でちょうど7人目だし……」
「ひいっ！」
桜時の頬に触れる白雪の白い手。手が触れた瞬間に、桜時が背筋を震え上がらせる。
「おっ……おおおおおお俺に触るんじゃっ……！」
「私の小人さんにでもなってみる……？」
「……っ」
白雪の冷たい笑みに、表情を引きつる桜時。
「ううんっ……でもそれじゃあつまらない……」
「えっ……？」
首を振る白雪に、桜時が眉をひそめる。
「竹取輝矢は随分と貴方を大切にしているらしいわねぇ……？」
「輝矢っ……？お前っ……！輝矢と何かっ……！」
「竹取輝矢をもっと苦しませなくちゃっ……」
「……っっ！！」
桜時に伸びていく白雪の手。
「うっ……うわあああああっっっ！！！！」

第7章　狙われたハチ　☆6

トロピカーナの街、北はずれ。
「ここですか……」
“雪鏡の城”へと辿り着く輝矢、門貴、由雉の3人。
「真っ白な城やなぁ～まるで雪で作っとうみたいやっ」
「ううぅ～っ！どうでもいいからさっさと入ろうよぉ～っ！吹雪キツすぎぃ～っ！」
「そうですね。行きましょう」
城を見上げる門貴の横で全身を震わせる由雉の言葉に頷き、輝矢が雪鏡の城の扉へと手をつく。

――――バァァァァァァァーーーーンッッッ！！！――――

輝矢が少し押しただけで、勢いよく開いていく扉。
「ようこそっ！我が雪鏡の城へっ！」
『……っ』
城の中から聞こえてくる女の声に、輝矢たちが表情を鋭くして身構える。
「……っ」
「女の子……？」
扉を入ってすぐにある階段を上がった先の踊り場で、輝矢たちを見下ろしながら、美しくどこか冷たい笑みを浮かべているのは白雪であった。輝矢と由雉が意外そうな顔を見せる。
「鏡よ、鏡っ……この世で1番美しいのはだあれ……？」

――――パアアアアアアアーーーッッッ！！！――――

『……っ？』

白雪の問いかけに、白雪の後方の壁に掛けられている鏡が光を放つ。輝く鏡を不思議そうに見つめる輝矢たち。

＜それは貴女様です……白雪様……＞

「オォォーホッホッホッホっっ！！そうっ！この世で1番美しく、直且つこの城の主、白雪にございますっ！」

『……。』

鏡の答えを聞き、高々と笑う白雪を見て、呆然と固まる輝矢と由雉。

「何……？あれっ……」

「さぁ？思い上がったバカ女じゃないですか？」

「ズッキュウウウーンッッッ！！！！」

輝矢と由雉が呆れ返っている横で、あっさりとハートを射抜かれる門貴。

「白雪ちゃ～～～んっっ！！この俺と結婚を前提にお付き合いなんかぁっ……！！」

「ストップ」

「ぐぎゃんっっっ！！！」

白雪に向かって走り出そうとした門貴を、輝矢が足を引っ掛けて転ばせる。

「なっにぃ～？輝矢んっ、俺が白雪ちゃんに目移りしたことへの嫉妬ぉぉ～っ？」

「違います」

「ううっ……」

いつものように輝矢にあっさりと否定され、転んだ状態のまま悲しみに暮れる門貴。

「あの女の両脇を見てみなさい」

「えっ？」

輝矢の言葉に、門貴が戸惑いながら顔を上げる。

「なっ……！？」
驚き、目を見開く門貴。
「あれはっ……！鉄グマっ！！他のんもっ……！」
「ウフフっ……」
白雪の両脇に並んでいるのは、像のような氷の塊が右と左に3体ずつ。その白雪のすぐ右横の氷の中には、深く目を閉じた鉄汰の姿があった。他の氷の中にも、同じように人間が眠っている。驚く門貴を見ながら、不敵な笑みを浮かべる白雪。
「街人誘拐事件の犯人と見て間違いないようだねぇ～」
「じゃあ街の雪も白雪ちゃんがぁっ！？んっ？」
由雉と言葉を交わしていた門貴が、何かを見つける。
「ああっっ！！芹っっ！！」
「……。」
それは2階へと続く階段から、白雪のいる踊り場へとゆっくりと降りてくる芹であった。芹は無表情のまま、輝矢たちを見下ろす。
「良かったぁ～っ！お前は凍らされんと無事やったんやなっ！！今、助けっ……！」
「……っ」
「……っ？輝矢んっ？」
芹を助けに行こうとした門貴の前に、輝矢が手を出し、それを止める。止めた輝矢に、首をかしげる門貴。
「おかしいとは思っていたんです……ハチと一緒にアナタまでいなくなった時……」
『えっ？』
輝矢の言葉に、門貴と由雉が首をかしげる。
「自分がさらわれる事態になったとしても……ハチであれば、アナタだけは必ず逃がすはずですから……」
「……ご名答っ」
鋭く睨むように芹を見ながら言い放つ輝矢に、芹が少し冷たい笑みを浮かべて白雪の横へと並ぶ。

「じゃあお前っ！はじめっからっ……！！」
「そうっ、ボクは白雪様の忠実なる部下……」
「何やとぉぉぉぉぉっっっ！！！？」
笑って答える芹に、怒りを見せる門貴。
「ひっとの情に漬け込んでっ！何てヤツやぁぁっっ！！！」
「いるんだよねぇ～あ～ゆ～可愛い顔して、平気で人のこと裏切るヤツってぇ～」
「ホントいますよねぇ～この辺りにも」
怒る門貴の横で、自分のことは棚に上げて軽い口調で話している由雉に、輝矢が白い目を向ける。
「そんなことより……」
輝矢が目つきを鋭くし、突き上げるように白雪を睨みつける。
「ハチはどこです……？」
「ンフっ……怖い顔っ……」
そんな輝矢を見て、楽しげに笑う白雪。
「ん～？どうしよっかなぁ～？」
「……っ」
わざとらしく言う白雪に、輝矢が表情をしかめて素早くピアスを弾き飛ばす。
「“月器・三日月”っ」
「……っ」
三日月を目覚めさせる輝矢。白雪が三日月を見て、少し眉をひそめる。
「2度と話せなくなる前に、とっとと答えなさいっ」
輝矢がさらに殺意のこもった目を白雪に向ける。
「今、近づいたら殺されるなぁ～」
「うん。もうちょい離れといた方がいいよぉ」
全身から殺気を放っている輝矢から、身の安全を守るため多少、距離をとる門貴と由雉。
「いいわっ、そんなに会いたいなら会わせてあげるっ」

「えっ？」
「私の王子様にっ……」
――――パァァァァァーーーンッッッ！！！――――
『……っ？』
白雪の言葉に呼応するかのように、輝矢たちのいる階の階段横の大扉がゆっくりと開いていく。開く扉の先を、息を呑んで見つめる輝矢たち。
『……っ！』
輝矢たちが一斉に目を見開く。
「ハ……チ……」
「……。」
開かれた扉の先に立っていたのは、桜時であった。
「良かったっ……無事だったんですねっ、ハっ……」
「村雨丸……」
「えっ？」
「……っ」
「……っ！！」
輝矢が安心した笑みを見せた途端、桜時が鞘から村雨丸を抜き放ち、輝矢へと飛びかかってくる。
――――・・・・・・・・・っっっっ！！！！――――
激しくぶつかり合う、三日月と村雨丸。
『なっ……！！？』
門貴と由雉にも衝撃が走る。
「桜時っっ！！？」
「何やっとんねんっ！！イヌころっっ！！」
「……。」

戸惑うように声をあげる門貴と由雉のその声にも、顔色1つ変えずに村雨丸を握る手に力を込める桜時。

「ハ……チ……？」

三日月で村雨丸を受け止めながら、輝矢が戸惑いの表情を桜時へと向ける。

「何をっ……」

「白雪様に仇なす者は……俺が殺す……」

「えっ……？」

桜時は感情の通わない、冷たい瞳を輝矢へと向けた。

第7章　狙われたハチ　☆6（後書き）

7章終りです。
白雪姫編は8章に続きます。

第8章　かぐや姫ｖｓ白雪姫　★1（前書き）

第8章始まりです～。
物騒な姫ばっかり出てきます。

第8章　かぐや姫ｖｓ白雪姫　★1

「白雪様に仇なす者は……俺が殺す……」
「えっ……？」
現れた桜時は、輝矢に村雨丸を向け、冷たい瞳でそう言い放った。
「ハチっ……一体、どうしっ……」
「“瞬花っ……」
「……っ！」
輝矢が桜時に問いかけようとするが、桜時は村雨丸を握る手にさらに力を込め、村雨丸が淡い桃色の光を放つ。
「終刀”っ……！」
「うっ……！」
村雨丸から放たれる、無数の桃色の花びら。輝矢が表情をしかめ、後方へと飛ぶ。
「“月器・十六夜”っ……！」

――――バァァァァァーーーーンッッッ！！！――――

後ろへと飛びながら三日月を十六夜へと変え、桜時の攻撃を受け止める輝矢。
「ううっ……！！」
『輝矢っっ！！！』
十六夜で受け止めるも、桜時の終刀に押されるようにして吹き飛ばされる輝矢に、門貴と由雉が思わず身を乗り出す。
「あんのクソイヌぅぅっっ！！！如意棒っっ！！！」
「待ちなさいっ！門貴っ！」
「うっ……！」
如意棒を構え、桜時へと飛び出そうとした門貴であったが、輝矢

の強い声に足を踏み留める。
「けど輝矢んっ……！」
「ハチに手を出したら……殺しますよ……」
「はいっ……」
立ち上がりながら睨みつけてくる輝矢に、門貴が大人しく頷いて如意棒を下ろす。
「オォォーーっホッホッホっっ！！！どおっ！？飼い犬に膝を蹴られた気分はぁ～っ！」
「“手を噛まれる”です。白雪様」
「わわわわわかってるわよっ！！わざとよっ！！わざとっ！！」
高々と笑いながら階段を降りてくる白雪であったが、芹の突っ込みにどこか慌てるように言い返した。
「ああ～おっほんっ、紹介するわぁ～」
階段を降りた白雪が、輝矢を攻撃した桜時へと歩み寄る。
「私の……桜時様よっ」
「……っ！」
『ええっ！？』
白雪が桜時の肩へと寄りかかると、輝矢たちの表情に衝撃が走る。
「うっせやろぉ～あのイヌコロがあぁ～んな美少女に触られて騒ぎもせんなんてっ……」
「あの至近距離っ……フツーなら卒倒ものじゃあっ……」
「……。」
女性に半径１m以内に近づかれただけで悲鳴をあげる桜時が、今、白雪に寄りかかられているというのに、顔色１つ変えずに平然としている。その状況に眉をひそめる輝矢。
「ウフフっ……桜時っ」
「はっ」
白雪の呼びかけに、桜時がすぐさま返事をしてその場に片膝をついた。
「貴方は私のものよねぇ？」

「勿論です」
白雪がそっと自分の右手を桜時に差し伸べると、桜時は迷うことなくその白雪の手を取った。
「俺のすべては……白雪様のために……」
桜時の唇が、白雪の手の甲へと触れる。
『……っっ！！！』
その光景に目玉が飛び出しそうなほどに目を開く、輝矢、門貴、由雉。
「どっひゃああっ！！！あのオクテ犬が女の子相手に手の甲キッスをぉぉぉっっ！！？」
「ん～夢でも見てんのかなぁ～」
この上なく驚く門貴と、悩ましげに頭を抱える由雉。
「……っ」
輝矢が表情を引きつって、右足を振り上げる。
――――バッコォォォォォォーーーーンッッッ！！！――――
『ひいっっ！！』
輝矢が右足を振り下ろすと、城の床が砕き割れ、深くヒビが入る。
ヒビを避けながら、怯えるように背筋を震え上がらせる門貴と由雉。
「ハチに……何をしたんです……？」
再び白雪に殺意のこもった瞳を向ける輝矢。
「さぁ？何かしら？」
「三日月」
「……っ」
はぐらかすように笑った白雪に、輝矢が三日月の刃先を向ける。
刃先を向けられた白雪が、そっと笑みを消す。
「あら恐いっ」
もう一度笑みを浮かべる白雪。
「仕方ないわねぇ。教えてあげるわっ」

白雪が桜時から手を離し、ドレスのポケットから何かを取り出す。
「これよっ」
白雪が取り出したのは、1個の真っ赤なリンゴであった。
「リンゴっ……？」
「これはねっ、“惚れリンゴ”といって、これを食べた人間は私の虜になってしまうのっ」
「メロメロロォォォ～～～ンっっ！！あぁっっ！！俺も白雪ちゃんの虜ぉぉぉぉぉ～～～っっっっ！！」
「貴方には食べさせてないわよっ」
目をハートにして白雪の虜を宣言する門貴に、白雪が冷たく言い放つ。
「なるほどっ、そのリンゴを使って無理やりハチを自分のものとしたわけですか」
「あっらぁ～？僻みにしか聞こえないわねぇ～」
輝矢の嫌味に、負けじと言い放つ白雪。
「愛犬を取られたことが、そんなにショックだったのかしらぁ～？」
「アナタこそ、そんなリンゴがなければ男の1人も虜にできないのですか？」
「……っ」
「……。」
一歩も退かない言い合いを繰り広げ、互いに強く睨みあう輝矢と白雪。

「おおっ！凄い迫力やっ！」
「女は恐い生き物だからねぇ～」
その睨み合いを、どこか暢気に見守る門貴と由雉。

「まぁ何にしろ、ハチに手を出した罪は決して許されません……」
輝矢が三日月を構える。
「アナタは私が消します……」

「ウフフっ……さぁ～て、それができるかしら？桜時っ」
「はっ」
白雪が呼ぶと、桜時がすぐさま立ち上がる。
「あの女が私を痛い目に遭わせようとしてるの。何とかしてくれない？」
「勿論です」
白雪の言葉にあっさりと頷き、桜時が輝矢の方を見る。
「白雪様に仇なす者は……俺が殺す……」
「……。」
再び輝矢に殺意と村雨丸を向ける桜時に、輝矢が少し目を細めた。

第8章　かぐや姫ｖｓ白雪姫　★2（前書き）

ついに輝矢と桜時が〇〇です。

第8章　かぐや姫ｖｓ白雪姫　★2

「だああ～っ！まぁ～たあのアホイヌはぁぁっ！」
「でもマズいんじゃなぁい？輝矢は桜時に攻撃なんてできないしっ……」
「オォォーーホッホッホっっ！！発泡スチロールねぇぇっっ！！！」
「八方塞がりです、白雪様」
「わっ……わわわわわかってるわよっ！わざとよっ！わざとっ！！」
言葉の訂正を入れてくる芹に、白雪が少しムキになって言い返す。
「大事な愛犬に殺されるといいわぁぁっっ！！桜時っ！！」
「……っ！」
白雪が右手を振り上げると、桜時が村雨丸を構えて輝矢の方へと飛び出していく。
「マズいっ！」
「輝矢んっ！！」
不安げに身を乗り出す門貴と由雉。

「“瞬花っ……」
「ちゃんと歯を食いしばって下さいねっ」
「えっ……？」
「……っ」
飛びかかってくる桜時に少し笑顔を向け、すぐさま目つきを鋭くして輝矢が勢いよく右足を振り上げる。
――――バギコォォォォォォォォーーーーンッッッ！！！――――
「ガハぁぁっ……！！」

『いいいっっっ！！！？』

村雨丸を振り上げた桜時の腹部に、輝矢の右キックが見事に炸裂する。

――――バァァァァァァーーンッッッ！！！――――

「へっ……？」

輝矢に蹴り飛ばされ、壁へと激突する桜時を見て、目を丸くする白雪。

「生きとうか……？」

「死んだんじゃん……？」

「ってかイヌに手出したら殺す言うてたのに……」

「足出したね……」

桜時のぶつかった壁が崩れ落ちるのを見て、門貴と由雉が唖然とした表情で呟く。

「ぐへえええええっっ！！がはあああああっっ！！おえらあああああっっ！！」

『あっ、生きてたっ』

崩れた壁の瓦礫の中で、腹を抱えて苦しそうにしゃがみ込んでいる桜時。

「げっはあああああっっっ！！！！」

――――ポロっ……――――

色々と吐き出す桜時であったが、最後にリンゴの欠片らしきものを吐き出す。
「大丈夫ですか？ハチ」
しゃがみ込んでいる桜時へと歩み寄っていく輝矢。
「大丈夫なわけっ……あるかあああああっっっ！！！！」
「うわっ」
勢いよく怒鳴り上げて顔を上げる桜時。その怒声の大きさに、輝矢が思わず耳を塞ぐ。
「人のっ……！ってか犬の内臓、全部破壊する気かぁぁぁぁっっ！！！！てめぇーはぁぁぁぁっっ！！！」
「足加減はしたんですけど」
「全然できてねぇーよっっ！！！っ痛てぇぇぇぇーーーっっ」
「……。」
痛がる桜時を見ながら、少し首をかしげる輝矢。
「ハチ」
「ああっ！！？ううううっっ！！」
桜時が再び顔を上げると、すぐ目の前に輝矢の顔。
「ぎゃっはあああああああっっっ！！！！！」
桜時が蹴りの痛みを感じさせないほどに素早く動き、輝矢から離れていく。
「俺の半径１ｍ以内に近づくなっつってんだろぉぉーーがぁぁぁっっっ！！！！」
「……っ」
いつも通りに叫ぶ桜時を見て、輝矢が目を見開く。
「どうやら元に戻ったようですねっ」
「へっ？」
笑顔を見せる輝矢に、桜時が首をかしげる。
「戻ったって……」
「お前、さっきまで白雪ちゃんの“惚れリンゴ”にやられて虜にされとってんでぇ～？白雪様～言うて」

「そぉ～うそっ！“白雪様に仇なす者は殺す”とかって、輝矢に村雨丸で攻撃してさぁ～」
「マジっっ！！？」
こちらへとやって来る門貴と由雉の言葉に驚きを見せる桜時。どうやら“惚れリンゴ”で虜にされていた時の記憶は残っていないようである。
「何だぁ～じゃああの手の甲キッスの記憶も残ってないのかぁ～」
「手の甲キッスっっ！！？」
残念そうに言う由雉の言葉に、敏感に反応する桜時。
「そっ……そそそそそそれって……もしやっ……」
「うん～っ！白雪の手を取って、その甲にチュっとっ！」
“俺のすべては白雪様のために……”とか言うてなぁ～！」
「ひいいいいいいいいっっっ！！！！」
どこか悪戯っぽく言う門貴と由雉に、桜時が急に奇声をあげて頭を抱える。
「しっ……信じられんっ……！考えただけで震えがっ……！」
震える全身を押さえつけながら、苦悩するように言う桜時。
『グフフフっ』
「……。」

――――貴方は私のものよねぇ？桜時……――――
――――勿論です……俺のすべては白雪様のために……――――

「……っ」
苦悩する桜時を見ながら楽しそうに笑っている門貴と由雉の横で、先ほどの桜時と白雪の手の甲キッスを思い出し、面白くない顔を見せる輝矢。
「ハチっ」
「ああっ？」
輝矢に呼ばれ、桜時が顔を上げる。

―――――　チュっ　―――――

「・・・・っっっっ！！！！！！」

顔を上げた途端、桜時の唇に触れる、輝矢の唇。桜時が思わず目を見開く。

『おおぉぉぉぉぉ～～～っっ』

感心するように声を出す門貴と由雉。

「ん～満足っ」

輝矢が満面の笑顔を見せ、桜時に背を向けて白雪の方を見る。

「お陰で全力で戦えそうですっ」

「……っ」

鋭い笑みを浮かべる輝矢に、白雪も含んだ笑みを見せた。

「グっ……グプっ……」

「あっ、気絶した」

しゃがんだまま白目を向く桜時を見て、由雉が冷静に一言。

「まぁイヌとしては正常な反応やな」

「王子様はお姫様のキッスで気を失ったのでしたぁ～ってね」

気絶した桜時を特に心配する様子なく、同じように白雪の方を向き、身構える門貴と由雉。

「よっしゃあ～っ！暴れるでぇっ！」

門貴が気合いを入れて如意棒を振り上げる。

第8章　かぐや姫ｖｓ白雪姫　★3

「あの鏡よ女は私がヤります。手出しはしないで下さい」
「しないよ～こっちが殺されそうだからねぇ～」
輝矢の言葉に、由雉が少し顔をしかめて答える。
「じゃあ俺らはぁ？」
「アナタ方はあの猫かぶり坊やと、そこで高みの見物してる方をお願いします」
「そこっ？そこって？」
「そうだねっ」
輝矢の言葉に首をかしげ辺りを見回している門貴の横で、由雉が青い羽根を取り出し、表情を鋭くして構える。
「いつまでそうしてるつもりっ？“右翼・裂羽”っ！」
由雉が青い羽根を放ったのは、階段の上の壁に掛けられている、白雪の問いかけに答えていたあの鏡。

――――ボォォォォ～～ンッッッ！！！――――

「クっ……！」
青い羽根が掛け鏡に突き刺さろうとした瞬間、鏡を白い煙が包み、羽根に砕かれる壁の横から1人の青年が転がるようにして現れる。
金色の髪に鋭い紫の瞳の、１６，１７の美青年。
「おお～あんなとこにっ」
鏡から人となった青年を見て、門貴が感心したように声を出す。
「バレていましたかっ」
立ち上がりながら輝矢たちに爽やかな笑みを向ける青年。
「バレバレです。部下でなければ、白雪がこの世で1番美しいなどと言うはずもないですから」

「それもそうですね……」
「どういう意味よぉぉぉぉーーーっっ！！ってか貴方も何、認めちゃってるのよっ！！鈴白っ！！」
苦笑いを浮かべる青年・鈴白に、輝矢が鋭い指摘をする。そんな輝矢と素直に頷く鈴白に、不満げに怒鳴りあげる白雪。

「お兄ちゃんっ……！」
「へぇ～お兄ちゃんがいるのはホントだったんだっ」
「……っ！」
踊り場で鈴白の方へと飛び出そうとした芹の前へと現れる、青い羽根を構えた由雉。
「クっ…！」
「“右翼・裂羽”っ！」
「うっ……！うわあああああああああああっっっ！！！！」
由雉の羽根で踊り場が崩れ去り、芹が足場を失くして落下していく。

「芹っ……！」
「おおぉ～っとぉ」
「……っ！」
落下した芹を見て、慌てて立ち上がった鈴白の前へと立つのは、如意棒を構えた門貴。
「あんたの相手は、俺やでぇ？鏡青年っ」
「……っ」
目の前に立った門貴を見て、鈴白はそっと眉をひそめた。

「んん～何だか楽しくなってきたわねぇ」
交戦を始める門貴と鈴白、由雉と芹の様子を見ながら、どこか楽しそうな笑みを浮かべる白雪。
「こちらも楽しめると思いますよ」

「……っ」
輝矢の声に、白雪が振り返る。
「アナタが余程、弱くなければ……」
「ンフフっ……なら大丈夫っ」
輝矢の挑発を含んだ言葉に、余裕の笑みを浮かべて答える白雪。
「私は貴女より強いものっ」

――――ヒュウウウウウゥゥゥ～～～ッッッ！！！――――

「……っ」
白雪が右手を振り上げると、城の中だというのに吹雪が吹き、白雪の右手を氷が覆っていく。白雪の右手を包み、さらに長くなっていく氷の塊は、先が鋭くなり、やがて剣のようになった。
「“氷力”……」
その白雪の能力を見て、真剣に呟く輝矢。
「貴女の三日月とどちらが強いかしらねぇ？竹取輝矢っ」
「試してみればいいだけの話です」
「ンフっ……それもそうねっ」
強く見つめあいながら、素早く構えを取る輝矢と白雪。
「……っ“雪剣”っっ！！」
「“月器・三日月”っ……！」
輝矢の三日月と、白雪の雪剣が激しくぶつかり合う。

第8章　かぐや姫ｖｓ白雪姫　★４（前書き）

第8章　かぐや姫ｖｓ白雪姫　★4

「クっ……！」

一方、由雉の裂羽により足場を崩され、落下していく芹が迫り来る地面を見て顔を歪める。

――――ボォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――

「……っ」

落下していく芹の体を白い煙が包むと、次の瞬間、煙の中か小さな1頭の豹が飛び出てきて、軽々と地面に着地した。

「“豹人”っ？」

階段の上から芹を見下ろしていた由雉が、その降り立った獣の姿に眉をひそめる。

「……っ“降雹”っ！」

――――ヒュンッ！ヒュンッ！ヒュンッ！――――

豹の姿となった芹が上にいる由雉へと大きく口を開くと、芹の口から大きな雪玉のようなものが3つ、勢いよく飛び出した。

「……っ！おわぁっとっ！」

飛んでくる雪玉を、スレスレのところでかわしていく由雉。

――――ドッゴォォォォォーーンッッッ！！！――――

「……。」

由雉が避けた雪玉が、後方の壁へと激突し、壁に大きな穴をあけて外まで突き抜けていく。

「豹と雹をカケてるってわけねぇ～それにしても凄い殺傷力……」
雪玉の威力を目の当たりにし、少し呆然とする由雉。
「こりゃ1発でも当たると致命傷だねぇ～」
「……っ」
「……っ！」
その時、由雉のいる上階まで一気に飛び上がってくる芹。芹が由雉に向かって、再び口を開く。
「“降雹”っ！！」
「クっ……！」
またも向かってくる雪玉を見て、由雉が少し表情をしかめながら懐から赤い羽根を3枚取り出す。
「“左翼・滅羽”っっ！！」

――――パァァンッ！パァァンッ！パァァァァンッッッ！！！――――

「……っ」
由雉の投げた赤い羽根が、芹の放った3つの雪玉それぞれに突き刺さると、雪玉はその場で自動的に消えた。消える雪玉に少し眉をひそめる芹。
「ん～ボクってば可愛いだけじゃなくってコントロールもばっっ……」
「“降雹”っ！」
「へっ？」

――――ヒュンッ！ヒュンッ！ヒュンッ！ヒュンッ！――――

「うえええええええええっっっ！！！？」
自分の力に酔っていた由雉に、今度は3つではなく次々と雪玉が飛んでくる。

「さすがに無理っ！」

――――ボォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――

「うわぁっ！」

キジの姿となって飛び上がり、雪玉を避けて階段の下へと降下していくユキジ。

――――ボォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――

「ふぅ～っ」

下の階の床へと降り立ったユキジが、再び人の姿となる。

「……っ」

「……っ？」

そこへ由雉を追うようにして、芹も上の階段から軽い身のこなしで飛び降りてくる。

「やっぱりあの羽根では、たくさんの数を一度に消すことはできないみたいだね」

「うん」

「あっさりバラしたっ！！？」

自分の技の弱点を芹に見抜かれ指摘されたというのに、あっさりと認めてしまう由雉に逆に驚かされる芹。

「だってそんなに1辺に羽根投げられないしぃ～正直、羽根も消耗品とはいえ、もったいないってゆぅ～かぁ」

「……。」

愚痴るようにペラペラと話す由雉に、芹が少し呆れた顔を見せる。

「ちなみにこの赤い羽根が1番高いんだけどぉ」

「お兄ちゃんに恨みはないけどっ……白雪様のためだっ！消えてもらうよっ！」

「……っ」

話を続ける由雉に向かって口を開く芹。身構えた芹に、由雉が表情を鋭くする。
「“降雹”っ！！」
――――ヒュンッ！ヒュンッ！ヒュンッ！ヒュンッ！ヒュンッ！――――
由雉に向かって放たれる、無数の雪玉。
「……っ」
由雉が雪玉を避けるため、上空へと飛び上がる。
「……っ“降雹”っっ！！！」
「……っ！」
由雉が上へと飛び上がって避けることを読んでいたかのように、芹がすぐさま上を向き、空中の由雉に向かって再び無数の雪玉を放った。飛び上がってくる雪玉に、空中で表情を引きつる由雉。
「これならキジになったとしても避けられないっ！これだけの数なら全部消せないしボクの勝っ……！」
「そう思うでしょ～？」
「えっ……？」
この状況に勝利を確信する芹であったが、由雉が逃げ場のない空中で余裕の笑みを浮かべる。その由雉の笑みに、表情を曇らせる芹。
「“両翼っ……」
由雉が両の手をまるで翼のように広げる。
「千滅羽”っ……！」
由雉の両の手から降り注ぐ、無数の赤い羽根。
――――パァァァァァァーーンッッッ！！！――――
「……っ！！」
降り注いだ赤い羽根が、芹の放った多くの雪玉を1つも残すこと

なく消し去った。消えていく雪玉と降り注ぐ赤い羽根に、大きく目を見開く芹。
「……っ！」
「“右翼っ……」
驚きに呆然としていた芹の元へと、青い羽根を構えた由雉が降下してくる。
「ううっ……！」
降下してくる由雉に、最早攻撃することもなく、恐怖に顔を歪ませる芹。
「裂羽っ”」
「ひいっっっ！！！」

――――バアアアアアアアーーーーンッッッ！！！――――

「……っ」
由雉の放った青い羽根が突き刺さったのは、恐怖に頭を抱え込んだ芹のすぐ横の床であった。
「ふぅ～っ」
「……。」
疲れたように肩を回す由雉を、呆然と見つめる芹。
「まさか……全部いっぺんに消せるのに……わざとああ言ってボクにそう思い込ませたんじゃっ……」
「そうだよぉっ」
戸惑うように見つめる芹に、悪意のない笑顔を向ける由雉。
「どうせ可愛い顔して人を騙すんだったら、こんくらいしないとね～あっ、ちなみにこの羽根、1番安いのっ」
「……。」

――――ボォォォォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！――――

由雉の笑顔に、芹が人の姿へと戻り、力なくその場にしゃがみ込む。
「負けましたっ……」
「どうもっ」
そう呟いた芹に、由雉は余裕の笑みを浮かべてそう言った。

由雉が芹に対して勝利を収めた頃、門貴と鈴白。
「おっらぁぁぁぁぁぁっっっ！！！如意棒っっ！！」
「……っ」
門貴が鈴白に向けて勢いよく如意棒を振り下ろす。
“盾鏡”っ」

――――パァァァァァァーーーーンッッッ！！！――――

「……っ！」
如意棒が鈴白を攻撃しようとしたその瞬間、鈴白の前にどこからともなく長方形の鏡が現れ、門貴の振り下ろした如意棒を受け止めた。
「鏡っ？」
「……。」
門貴が鏡から如意棒を離し、一度後方へと下がると、すぐさま鈴白の前に現れた鏡が消える。
「驚きましたか？僕の力はっ……」
「ん～まぁええわっ！もういっちょ如意棒っ！」
「えっ？」

自分の力を自慢げに話そうとする鈴白であったが、門貴は特に鈴白の話を聞くことなく、すかさず如意棒を構えて先ほどと同じように鈴白に向かって大きく振り上げる。
「おっらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」
「少しは人の話を聞いて下さいっ」
――――パァァァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――
「……っ！」
如意棒が鈴白に当たろうとしたその瞬間、またしても鈴白の前に鏡が現れ、如意棒を受け止める。二度も攻撃を防がれたことに、さすがに眉をひそめる門貴。
「凄いでしょう？僕の力はっ……」
「じゃあ後ろからぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」
「あらっ？」
またしても鈴白の話を無視し、門貴が鏡を蹴り上げるようにして鈴白の上へと飛び上がり、鈴白の後方から如意棒を振り下ろす。
「おっらぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」
「無駄ですよっ」
――――パァァァァァァァーーーーンッッッ！！！――――
「ありっ？」
後方からの攻撃を試みる門貴であったが、今度は鈴白のすぐ後ろに鏡が現れ、鈴白へと振り下ろされた如意棒を受け止めた。三度止められる攻撃に、門貴が目を丸くする。
「ですからね、僕の力というのはぁっ…」
「こうなったら五月雨如意棒斬りやぁぁぁぁぁっっっ！！！」
「だはぁっ」
またしても話を聞いてくれない門貴に、鈴白が力なく肩を落とす。

「いい加減に聞いて下さいよっ！僕の力というのはっ…！」
「おりゃあっ！！」
「だからぁ……」
「ふりゃあっ！！とりゃあっ！！おんどりゃあっ！！こんくらぁぁっっ！！はっぷみらぁぁぁっっっ！！！」
――――パァンッ！カァンッ！コォンッ！ソォンッ！スゥンッ！――――
「……。」
あらゆる角度から鈴白への攻撃を試みる門貴であったが、すべて攻撃の寸前で現れる鏡に防がれてしまう。攻撃を止め、如意棒を下ろす門貴。
「ふはぁっ……疲れたわっ……」
「だから最初から僕の話を聞いておけば、無駄な攻撃をせずに済んだんですよっ」
がっくりと肩を落とす門貴に、鈴白が呆れた口調で言い放つ。
「僕の力というのはですねぇっ……！」
「自分へ向かってくる攻撃を寸前で自動的に受け止めてくれる“絶対防御鏡”かぁ～厄介やなぁ～」
「あああああああっっっ！！！言っちゃったぁぁぁぁぁっっっ！！！」
やっと言えるはずだったことを全て門貴に言われ、悲しい顔を見せる鈴白。
「けどそれってぇ～物理攻撃用やんなぁ？」
「……？」
考え込むように顔をしかめていた門貴が、不敵な笑みを浮かべる。
そんな門貴に首をかしげる鈴白。
「こんなんっ……どないするっ？」
門貴が如意棒を少し後ろで構える。

「如意棒・第1の舞っ……」
「……っ」
如意棒の周りを包むように集まっていく空気に、鈴白が眉をひそめる。
「“風力”……？」
「“空”っっっ！！！」
――――ビュウウウウウウンッッッ！！！――――
「……っ！」
如意棒が巻き起こした真空波が、目にも留まらぬスピードで鈴白へと向かっていく。迫り来る真空波に一度は焦りを見せた鈴白であったが、すぐに平静な表情となって真空波へと両手を突き出す。
「“返鏡”っ」
――――パァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――
「何やてっ！？」
鈴白が突き出した両手の先に円形の鏡が現れ、門貴の繰り出した真空波を受け止めた上に、それを門貴へと弾き返す。
「クっ……！」
動揺を見せながらも素早い身のこなしで、弾き返ってきた真空波を避ける門貴。
「ふぃ～っ、危っ……」
「そんなに落ち着いてていいんですか？」
「何っ？」
すぐ後ろから聞こえてくる声に、門貴がすぐさま振り返る。
「……っ！豹っ！？」

と、そこにいたのは紫色の瞳鋭い、金色の豹。
「……っ！」
「ううっ……！！」
素早く飛びかかった豹の牙が、門貴の左腕を切り裂く。流れ落ちる赤い血に、顔を歪める門貴。
――――ボォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――
門貴の腕を切り裂いた豹が、白い煙に包まれて鈴白となる。
「何やっ、獣人やったんかいな。力どうこうよりそれを先言えっちゅーねんっ」
「言ってしまったら楽しみがなくなるでしょう？」
「ちなみにわいは猿人やでぇっ！？」
「知っていますよ……」
自分が何の獣人であるかをアピールする門貴に、鈴白が少し呆れた表情を見せた。
「ともかくおわかりいただけたでしょう？貴方では僕に傷１つ付けられません」
鈴白が強気に言い放つ。
「あちらのキジさんならともかく、貴方のような一方向からの単純攻撃しかできないようなお猿さんは……」
「ああ～そうかぁ」
「……？」
何やら思いついたような声を出す門貴に、鈴白が眉をひそめる。
「要は色んな方向から同時に攻撃すれば、あの鏡じゃ防がれへんてことやろっ？」
「ううっ……！！」
あっさりと見破られる弱点に、鈴白が少し表情を引きつる。
「まっ……まぁそうですけどっ！貴方のような単純ゴリ押し棒術使いっ、わかったところでそんな攻撃っ……！」

「そない思うっ？」
「えっ？」
どこか含んだような笑みをこぼす門貴に、戸惑うように聞き返す鈴白。
「俺ってわりと万能型お猿さんよぉ？」
門貴が少し表情を鋭くして如意棒を構える。
「新しい……構えっ……？」
今までとは異なる構えを取る門貴に、さらに眉をひそめる鈴白。
「如意棒・第２の舞っ……」
空気をまとった如意棒を、門貴が勢いよく地面に突き刺す。
「“浄”っっ！！」
――――ビュウウウウウウウウンッッッ！！！――――
「なっ……！！？」
門貴が如意棒を突き刺した辺りから鈴白の立っているところまでの床に瞬時にヒビが入り、鈴白の周囲から床を突き破るようにして風が巻き上がる。鈴白が驚き、焦りを見せる中、竜巻のように姿を変えて鈴白へと迫り来る風の塊。
「クっ……！“返鏡”っっ！！」
何とか風を押し返そうと、鈴白が円形の鏡を生み出す。
――――パァァァァァァーーーーンッッッ！！！――――
「ううっ……！！」
しかしあらゆる方向から迫り来る風に、鏡は力なく砕け散った。
鏡を失った鈴白へと、風は突っ込んでいく。
「うっ……！うわあああああああっっっ！！！！」
竜巻に呑まれ、吹き飛ばされていく鈴白。

「うっ……ううっ……僕がっ……こんなっ……うっ……」
吹き飛ばされた鈴白が地面に落ちると、そのまま力なく目を閉じた。
「おっしゃあああっっ！！勝ぉぉぉ～～利っ！」
倒れこんだまま目を閉じた鈴白を見て、門貴は力強く如意棒を突き上げた。

第8章　かぐや姫ｖｓ白雪姫　★４（後書き）

ＨＰに白雪さんのイラストも掲載中。
お暇な方、見に来て下さい～

第8章　かぐや姫ｖｓ白雪姫　★5

――――カァァァーーンッ！キィィィーーンッ！パァァァーーンッ！――――

「……っ」

輝矢と白雪が激しく三日月と雪剣を交差させる中、横目で鈴白と芹の敗北を確認した白雪が少し眉をひそめる。

「知ってます？」

「……？」

そんな白雪に声をかける輝矢。

“ペットは飼い主に似る”っていうんですよっ」

――――パリィィィィィィィィーーーーンッッッ！！！――――

「……っ！」

輝矢が強気な笑みを見せた途端、三日月を受け止めていた雪剣が、力に押し負けて砕け散る。

「……っ」

少し表情をしかめながら、後方に飛んで輝矢と距離を取る白雪。

「さすがは“オトポリ認定”の退治屋だけのことはあるわねっ」

「えっ……？」

特に焦った様子もなく笑みを浮かべる白雪のその言葉に、輝矢が首をかしげる。

「なら、こういうのはどうかしら？“雪時雨”っ！」

――――バァァァァァァァァーーーーンッッッ！！！――――

――

「……っ！」

輝矢に向けられた白雪の両手から、激しい吹雪が放たれる。

「“月器・十六夜”っ！」

三日月を十六夜に変化させ、白雪の雪時雨を受け止める輝矢。

「……っ鬼口とは比べものになりませんねっ……」

精一杯力を込めなければ、すぐにでも弾き飛ばされそうなほどの雪時雨の威力に、輝矢が少し顔を歪める。

「あんなのと一緒にしないでよっ」

「……っ！」

いつの間にか輝矢の後方へと現れる白雪。

「“雪剣”っ！」

「“月器・三っ……！うっ……！」

再び構えた雪剣を輝矢へと振り下ろす白雪。輝矢はすぐさま十六夜を三日月へと変えて応戦しようとするが、雪時雨により地面に凍り付いてしまった十六夜が動かない。

「クっ……！」

「残念でしたっ♪」

――――ブシュッッ……！！！――――

「ううっ……！！」

雪剣が勢いよく輝矢の左肩に突き刺さり、その雪剣の氷の結晶から血が滴り落ちた。輝矢の表情が痛みに歪む。

「うっ……」

「ンフフっ……」

苦しむ輝矢を見て、白雪は冷酷な笑みを浮かべた。

「んっ……んんっ……」
その頃、気を失っていた桜時がやっと目を覚ます。
「俺っ……何をっ……」

――――チュっ――――

「……っ！ひいいいいっっっ！！！！」
輝矢とのキッス事件を思い出し、青ざめた表情となって震え上がる桜時。
「ダメだっ……1ヶ月は悪夢に魘されるっ……ってかアイツらはっ……」
苦悩するように頭を抱え込んだ桜時が、顔を上げて状況を確認しようと周りを見回す。
「……っ！輝矢っ……！！」
桜時の目に飛び込んでくる、白雪の雪剣に刺され血を流す輝矢の姿。
「輝矢っ！！」

「……っ」
輝矢が桜時の声に反応し、苦しげな表情のまま横目で起き上がった桜時の姿を確認する。
「ンフフっ……これで終わりねっ！」
白雪が微笑み、雪剣をもう1度輝矢へと振り下ろす。
「ハチの前であまり……恥をかかせないで下さいよっ……！」
「えっ？」
「……っ！」
輝矢が勢いよく右足を振り上げる。

――――バギコォォォォォォーーーーンッッッ！！！――――

「ううううっっ！！きゃあああああっっっ！！！！」
輝矢の蹴りに雪剣を砕かれ、軽々と吹き飛ばされていく白雪。
「ううううううっっっ！！！！」
飛ばされた白雪が、背中を壁に打ち付けてしゃがみ込む。

「白雪様っ！！」
「きょお～れつぅ～っ」
芹が不安げに身を乗り出す横で、笑顔を見せる由雉。

「ハチ～見てくれましたぁ～っ？」
「だあああああっっっ！！！めっちゃ血出てんのに手ぇ振ってんじゃねぇっ！！！！」
笑顔で手を振る輝矢の左肩からドクドクと流れる赤い血に、桜時が少し焦った表情で怒鳴り返した。

「このっ……！」
「とっとと終わらせましょうか」
起き上がった白雪に、氷が溶け動くようになった十六夜を構える輝矢。
“月器・下弦”……」
月器が十六夜から下弦へと欠けていく。
“水月”っ……！」
“水力”っ……？」

――――バァアアアアアーーーンッッッ！！！――――

下弦から無数の水の刃が放たれ、白雪に直撃した。

「白雪様っ……！！」
「意外とあっけなかったねぇ～」

衝風の中に姿を消した白雪の名を思わず叫ぶ芹の横で、あまり面白くなさそうな顔を見せる由雉。
「おおっ、決まったかぁ～？」
「……？」
そこへ鈴白に勝利を収めた門貴がやって来る。
「うん、輝矢の圧勝って感じぃ～」
「やっぱ輝矢んは強いなぁ～まぁ白雪ちゃんの可愛さも捨て難いねんけどさぁ～」
「ふっふっふっ……」
『……？』
どこからか聞こえてくる不気味な笑い声に、門貴と由雉が振り向く。
「あまり白雪様を侮らないで下さいよっ」
『……。』
2人が振り返った先にいたのは、門貴に倒れた状態のまま倒れこんでいる鈴白であった。強い口調のわりに情けないその姿に、2人が少し呆れた表情を見せる。
「あの方の本当の力というのはですねぇっ……！」
「いいでぇ～っ！！輝矢んっ！！」
「その調子ぃ～っ」
「ああっ！！聞いてくれないっ！！」
「お兄ちゃんっ……」
倒れ込んだまま熱く語ろうとする鈴白であったが、門貴と由雉にあっさりと無視され、ショックを受ける。そんな情けない兄に、少し肩を落とす芹。
「随分と和やかですねぇ～」
「フフフフっ……」

「……っ」
門貴たちの方を見て呆れた表情を見せていた輝矢が、晴れていく煙の中から聞こえてくる笑い声に、表情を厳しくして振り向く。
「……っ！」
『なっ……！！？』
晴れた煙の先に広がる光景を見て、輝矢や門貴たちの表情に驚きが走る。

「水が私に通用すると思って？」

輝矢の放った無数の水の刃は、白雪の前ですべて氷付けにされてしまっていた。傷1つ負っていない白雪が、輝矢に余裕の笑みを向ける。

「そんなっ……」
「輝矢んの水月がっ……」
「フッフッフっ！驚きましたかっ！？白雪様の能力というのはですねぇっ……！」
「頑張れぇぇぇっっ！！！輝矢んっっっ！！！」
「そんな変態女に負けるなぁ～っ」
「ああっ！！また聞いてくれないっっ！！」
勝ち誇ったように語ろうとした鈴白を、またしても無視する門貴と由雉。

「誰が変態女よっ」
輝矢に飛び交う声援に、少し表情を引きつる白雪。
「アナタです」
「誰も答えろとは言ってないわよっっ！！」
即答する輝矢に、白雪が怒鳴り返す。
「とにかくっ！これはお返しするわよっ！」

「えっ？」
白雪が右手を振り上げると、氷付けにされた輝矢の水月が、向きを１８０度変えて全ての刃先が輝矢に向く。
「“雪乱雲”っ！！」
「……っ！」
向きを変えた氷の刃が、一斉に輝矢に向かって放たれる。
「クっ……！“月器・十六っ……！」

――――バァァァァァァーーーンッッッ！！！――――

「あああああっっっ！！！！」

『輝矢っっ！！！』
十六夜を構える間もなく、輝矢に降り注ぐ氷の刃。全身に刃を受け、吹き飛ばされた輝矢を見て、桜時、門貴、由雉が皆、身を乗り出して輝矢の名を呼んだ。

第8章　かぐや姫ｖｓ白雪姫　★6

「うっ……ううっ……」
吹き飛ばされ、倒れ込んだ輝矢は、刃により手足を負傷し、全身に雪を浴びて体中に凍傷を負っていた。
「……っううっ！！」
少しでも体を動かせば、激しい痛みが全身に走る。輝矢は起き上がることもできないまま顔を歪めた。

「ちょっとぉ～マズいんじゃないのぉ～これぇ～」
「能力の相性が悪いなぁ…ああっ！俺の輝矢んがあんなボロボロにっ！」
「じゃあ代わりに戦ってきたらぁ？」
「俺に白雪ちゃんを攻撃せいとっ！？」
「どうしたいのよ、君」
どっち付かずの門貴に、由雉が少し冷たい視線を向ける。

「輝矢っ……」
まだ起き上がれずにいる輝矢を不安げに見つめる桜時。

「ンフフっ……そろそろトドメといこうかしらっ……」
「……っ」
楽しげに微笑む白雪に、顔をしかめる輝矢。

――――ボォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！――――

白雪を白い煙が包んでいく。

「この姿でっ……」

『……っ！』

次の瞬間、煙の中から現れたのは、白い毛並みの何とも美しい姿をした1頭の大きな虎であった。

「白虎っ……」

「“虎人”っ……」

「白雪ちゃんも獣人やったんかぁ」

それぞれに驚いた表情で呟く桜時、門貴、由雉。

「いいですよぉぉっっ！！虎昌（とらまさ）さまっっ！！」

「やっちゃえええっっ！！虎昌さまっっ！！」

「下の名前で呼ぶんじゃないっていっつも言ってんでしょーがぁぁっっ！！！」

『ううっ……！』

虎の姿となった白雪に声援を飛ばした鈴白と芹が、返って来た怒声に思わず震え上がる。

「この上なく気にいってないのよっっ！！この名前っっ！！」

「何故ですぅ～？」

「ゴツ可愛くていいのにぃ～」

「どこに可愛い要素があんのよっっ！！？だいたいフツー女の子に“トラマサ”って付けるっっ！！？」

不思議そうに首をかしげる鈴白と芹に、勢いよく怒鳴り返す白雪。

「という感じであまりこの姿では戦いたくなかったんだけどっ……」

気を取り直して白雪が輝矢の方を向く。

「この牙で貴女を切り刻んであげるわっ！」

「うっ……！」

鋭い牙を持って飛びかかってくる虎に、輝矢が全身の痛みを押して何とか起き上がり、月器を持つ。
「……っ！」
「“月器・三日月”っ……！」

――――パァァァァァァァァァンッッッ！！！――――

輝矢が三日月を構えて、白雪の牙を受け止める。
「ううっ……！」
三日月を支える輝矢の両手に走る痛み。
「痛そうねっ……！」
「ううっ……！！ああああっ！！」
白雪がさらに力を強めると、痛みを堪えたまま三日月を構えていた輝矢は一気に押し込まれ、そのまま勢いよく吹き飛ばされた。

――――バッコォォォォォォォォーーーーンッッッ！！！――――

「おわぁっ！」
吹き飛ばされた輝矢が、桜時のすぐ横の壁へと激突する。

「あかんっ……傷を負い過ぎとるっ……」
「圧倒的に輝矢が不利だね」
「そう言ってる間に助太刀してあげたら？」
一方的にやられ始めた輝矢に、険しい表情を見せる門貴と由雉。
そんな2人に芹が声をかける。
「お兄ちゃんたち、あのお姉ちゃんの仲間なんでしょ？だったらっ……」
「助太刀されて勝つような勝負に何の意味があるんや？」
「えっ……？」
自分の言葉を遮った門貴の問いかけに、芹が少し目を丸くする。

「ボクたちに助けられるくらいなら戦って死ぬよ」
由雉がそっと笑みをこぼす。
「ボクらの飼い主さんはっ」
「……っ」
門貴と由雉の見せる笑顔に、芹は戸惑うように目を細めた。

「おっおいっ！輝矢っ！？」
壁に激突して埋もれるように倒れ込んだ輝矢の方を、少し距離を取りつつ覗き込む桜時。
「痛つつつっ……」
「……っ！無事かっ！？」
後頭部を押さえながら上半身を起こす輝矢の姿を確認し、桜時が少し安心した表情を見せた。
「ってかまぁ無事な怪我じゃないだろうけどっ……」
「……？ハチ？」
顔を上げた輝矢が、こちらを覗き込んでいる桜時を見つける。
「すみませんね……情けない所ばかりお見せして……」
「何バカなこと言ってんだよっ！」
ハチを見るなりすぐに笑顔を作り、相当に痛みの走っているであろう体を立ち上がらせる輝矢。そんな輝矢に桜時は少し怒るようにそう言い放った。
「あの虎ンポリン、けっこう強くてっ……」

「“虎昌”よっ！気にいってないけどっ」
輝矢の言葉に、遠くからしっかりと突っ込みを入れる白雪。

「まぁすぐに倒して見せっ……」
「もういいってっ！！」
「……っ？」

床に落ちている三日月を拾おうとした輝矢が、桜時の叫びにその手を止め、不思議そうに桜時を見つめた。
「何でっ……何でここまでして戦う必要があんだよっ！？」
「ハチ……」
必死に叫ぶ桜時を見て、輝矢が少し目を細める。
「鬼人を相手にしてるわけじゃないんだからっ……！別に負けたってっ……！」
「負けられません」
「……っ！」
すぐに答える輝矢に、桜時が驚いたような顔を見せる。
「何でっ……！」
「ハチ……」
「……？」
輝矢が穏やかな笑顔でハチの名を呼ぶ。
「女には……負けられない戦いというものがあるのですよ……」
「えっ……？」
輝矢の言葉に眉をひそめる桜時。
「負けられない戦いっ……？って……」
「でもまぁハチが私のことを気遣って下さるなんて、実に嬉しいことですねぇ」
「べっ……！別に気遣ってなんかねぇよっっ！！」
「……っ」
少し頬を赤く染めて否定する桜時を見て、輝矢がさらに微笑む。
「大丈夫っ……」
三日月を手にし、桜時に微笑みかける輝矢。
「私は勝ちますからっ」

「……っ」
桜時にそう言って、輝矢は白雪の方へと歩いていく。
「“私は勝ちますから”？」
やって来る輝矢を見て、少し不満げな顔を見せる白雪。
「どの口がそんなこと言うのかしらぁ？」
「この口です」
「わかってるわよっっ！！」
「アナタが聞いたのでしょう？」
互いに強い視線をぶつけ合いながら、言葉を交わす輝矢と白雪。
白雪と対峙しながら、輝矢が右手を左手で支えるようにして三日月を持ち上げる。
「もう……片手で武器も持てないようねっ……」
――――ボォォォォォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！――――
白虎を白い煙が包むと、白雪が虎から人の姿へと戻る。
「今、楽にしてあげるわっ」
微笑む白雪の右手を、氷が包み込んでいく。
「“雪剣”っ！……っ！」
「……っ」
雪剣を構えて飛び込んでくる白雪に、輝矢が顔をしかめながら両手で必死に三日月を構える。
「はあああああっっっ！！！」
「ううっ……！」
ぶつかり合う三日月と雪剣。受け止めただけで輝矢の全身を激しい痛みが襲う。
「まだまだっ……！」
「うっ……！クっ……！ううっ……！」
休むことなく攻め込む白雪に、輝矢は何とか受け止めるがどんど

ん追い込まれていく。

「……っ」

白雪のいいように攻め込まれていく輝矢を見て、桜時がどこか悔しげに歯を食いしばる。

「クっ……！」

「……っ」

「なっ……！」

居ても立ってもいられずに、村雨丸を抜こうとした桜時の手を、力強く掴むもう1つの手。

「サルっ……」

「……。」

それは、珍しく真剣な表情を見せた門貴のものであった。

「輝矢のプライドまでボロボロにする気か？お前はっ」

「……。」

桜時が少し辛そうに俯く。

「お前が信じんでどないすんねんっ……アホイヌっ」

「……っ輝矢っ……」

門貴の言葉に桜時は再び顔を上げ、まっすぐな瞳で輝矢の戦いを見つめた。

「ううううっ……！！」

雪剣に三日月を弾き返され、輝矢が少し後退して膝をつく。

「クっ……！」

床に落ちた三日月を拾おうにも、もう手が上がらない。

「甚振る趣味はないのっ。とっとと楽にしてあげるわっ」

そう言って、輝矢に左手を向ける白雪。
「安心して。貴女が死んだ後は、私があのワンちゃんを可愛がってあげるからっ」
「……っ」
白雪のその言葉に、輝矢の顔色が変わる。
「……冗談っ」
「……っ？」
「……っ！」
輝矢が床に落ちていた三日月を、天井目がけて思い切り蹴り上げる。
「なっ……！武器を蹴り上げるなんてっ……！戦意喪失でもしっ……！」
“水月”っ……！」
――――バァァァァァァーーーーーンッッッ！！！――――
「……っ！」
高々と蹴り上げられた三日月を見上げていた白雪に、輝矢が最後の力を振り絞って水月を放つ。白雪へと向かっていく無数の水の刃。
「ンフっ……何を今更っ……！私に水は通用しないと言っているでしょうがっっ！！」
向かってくる水月へ向け、白雪が両手を構える。
「また氷付けにしてお返ししてあげるわっ！！“雪時雨”っ！！」

第8章　かぐや姫ｖｓ白雪姫　★7

――――ビュウウウウウウウウウ～～～ッッッ！！！――――

白雪が水月に向けて、吹雪を放つ。
「これでっ……！何っ……！？」
しかし水の刃は、白雪の吹雪に凍ることなく、白雪に向かい続けてくる。
「どうしてっ……！どうして凍らないのっ……！？」
戸惑う白雪に、迫る水月。
「クっ……！きゃあああああっっっ！！！！」

『虎昌さまっっ！！！』
水月を直撃し、吹き飛ばされていく白雪。鈴白と芹が身を乗り出して、白雪の下の名を呼ぶ。

「うっ……！ううっ……」
全身に傷を負って倒れ込んだ白雪が、戸惑いの顔を上げる。
「何故っ……！」
「本来水は、その水中に含まれる不純物を凝結核として凝固するものっ……」
「……っ？」
輝矢の言葉に、白雪が眉をひそめる。
「よって不純物をまったく含まない超純水であればっ……水は極めて凍りにくくなるっ……」
「まさかっ……水の成分までも変化させられるというのっ……？」
白雪が驚きの表情を見せながら呟く。

「でもいいわっ！氷力が使えないというのなら、また虎化してっ……！」

「いえ、もう終わりです」

「えっ？」

起き上がろうとした白雪に、輝矢がハッキリと言い放つ。

「“月器っ……」

輝矢が右手を振り上げる。

「上弦”っ」

「……っ！まさかっ……！」

白雪が目を見開きながら、輝矢が先ほど三日月を蹴り上げたことを思い出し、上を見上げる。

「ううっ……！！」

白雪の真上には、三日月から上弦へと満ち、勢いよく降下してくる月器の姿。

「うっ……！あああああっ！！」

――――バァアアアアアアーーーーンッッッ！！！――――

落下した上弦に、白雪が押し潰される。

「うっ……ううっ……私がっ……負けるなんてっ……」

上弦の下敷きとなった白雪が、力なく呟いた。

「……。うっ……」

立ち尽くしていた輝矢も、力尽きたようにその場にしゃがみ込む。

『虎昌さまっっ！！！！』
上弦の下敷きとなっている白雪の元へと、不安げな表情で駆け込んでいく鈴白と芹。
「大丈夫ですかっ！？」
「下の名前で呼ぶなっつっってんでしょーがぁぁぁっっ！！！」
『うわっ！』
弱々しく押し潰されているわりに勢いよく返って来る怒声に、鈴白と芹が思わず足を止めて震え上がる。
「だっ……大丈夫そうですねっ……」
「私を助けにくる暇があるくらいなら、さっさとあの女を攻撃しなさいっ！」
「えっ……？」
白雪の言葉に、芹が戸惑うように眉をひそめる。
「今ならあの女はボロボロよっ！貴方たちでも楽勝で倒せるわっ！」
「……っ」
――――助太刀されて勝つような勝負に何の意味があるんや？――――
――――ボクたちに助けられるくらいなら戦って死ぬよ……ボクらの飼い主さんは……――――
「……。」
思い出される門貴と由雉の言葉に、芹が強く拳を握り締める。
「芹っ！アンタの雹でっ……！」
「できないっ！」
「……っ？」
すぐさま否定する芹に、白雪が思わず目を丸くする。
「できないっ……」
「なっ……！何を言うのっ！？芹っ！この私の言うことが聞けないって言うんじゃっ……！！」

「あのお姉ちゃんたちは、助けてもいいのに、それをしないで誇りを持ってこの勝負に臨んでくれたっ！！」

「芹っ……」

怒りに顔を歪めた白雪に、芹は恐れることなく必死に言い返す。

そんな弟の姿を、目を細めて見つめる鈴白。

「虎昌さまはボクが今、攻撃に入ってあのお姉ちゃんに勝って嬉しいのっ！？誇りとかないのっ！？」

「何をっ……芹っ！アンタねぇっ……！！」

「虎昌さま……」

「……っ」

芹に怒鳴りあげようとした白雪を、鈴白が宥めるように名を呼んで止める。白雪が鈴白の方を見ると、鈴白は穏やかな笑顔を白雪に向けていた。

「我々は皆、１対１の勝負に敗れました……この戦い、我らの負けです……」

「……っ」

鈴白の言葉を聞くと、白雪の表情から怒りが消え、白雪がそっと俯く。

「わかったわよっ……」

「虎昌さまっ」

渋々と敗北を認めた白雪に、芹が少し笑みをこぼす。

「ああっ！もうっ！！」

――――バァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――

『へっ？』

上に覆いかぶさっていた上弦をあっさりと弾き飛ばし、勢いよく立ち上がる白雪に、２人が目を丸くする。

「だいたいねぇっ！アンタたちが勝ってたら２対１でコッチの勝ちだったのよっ！？何、負けてんのよっ！」

『うわっ！』
白雪の怒声に、またしても震え上がる鈴白と芹。
「元気だね……」
「戦い続ければ勝てたのではないでしょうかねぇ……」
傷のわりにピンピンしている白雪に、鈴白と芹は呆れるように肩を落とす。
「こんなのだから菜砂も箱ベラもみんな、部下やめちゃったんだろうねっ……」
「僕らもやめましょうかねぇ」
「何か言ったっっ！！？」
『いえっ……』
白雪に睨みつけられ、鈴白と芹がすぐさま下を向いた。

「……っ」
「……っ！」
白雪たちが騒ぐ中、力なく倒れ込んでいく輝矢に桜時が気づく。
「輝っ……！」
「輝矢ぁぁぁぁぁ～～んっっっ！！！」
「だあああああっっっ！！！」
倒れていく輝矢に駆け寄ろうとした桜時であるが、横から駆け込んでいく門貴にあっさりと押し飛ばされる。
「俺の胸に飛び込んでおいでぇぇぇ～～～っっっ！！！」
「ああ、けっこう平気でした」
「ぎゃんっ！」
倒れようとしていた輝矢が急に起き上がり、駆け込んでいった門貴が空ぶって床に滑り込む。
「平気なわけないでしょっ？ほらっ、傷見せるっ」
「はいはい」
由雉が輝矢の横にしゃがみ込み、輝矢の傷の治療に当たる。

――――ミシっ……ミシミシミシっ……――――

『んっ……？』

天井や柱、壁から聞こえてくる、何やら徐々に崩れていくような不吉な音に、輝矢や白雪たちが顔を上げる。

「白雪様っ……これってっ……」

「力を使い過ぎたようね。もうすぐ城が崩れるわ」

『えええええええっっっ！！！！？』

あっさりと答える白雪に、皆が一斉に驚きの声をあげる。

「くっ……崩れるってじゃあっ……！」

「この城は元々、私の力・雪でできてるからぁ」

『大量の雪に生き埋めぇぇぇっっっ！！！？』

門貴と由雉が頭を抱えて叫びをあげる。

「……。」

――――ボォォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！！！――――

「じゃあっ」

「待ていっ」

キジの姿となって城から脱出しようとするユキジの羽根を、門貴が力強く掴む。

「大事な仲間捨てて1人だけ助かろうってかぁぁっ！！？この薄情キジがぁぁぁっ！！」

「だってボク、自分の命が1番大事なんだもん」

門貴の叫びに、ユキジがさらっと淡白に答える。

――――ミシミシッ……ガガガッ……！！――――

『ぎゃあああああっっっ！！！！』
崩れ落ち始める城の天井に、もう逃げる時間もなく、門貴とユキジが悲鳴をあげる。
「何とかしなさい、虎ンプ」
「トラマサよっ！気にいってないけどっ。無理ねっ、どうにもできないわっ」
「そんなぁ～～っ！！白雪さまぁぁ～～っっ！！！」
「僕、白雪様と心中なんて真っ平御免ですぅぅ～～～っっ！！！」
「うっさいわねっ！！こっちだって真っ平よっ！！」
嘆く鈴白と芹に、白雪が強い口調で言い返す。
「月器で何とかっ……」
「……っ」
「……？ハチ？」
助かる方法を模索する輝矢の横を通り、城のちょうど中央辺りに立って、崩れ始める天井を鋭い瞳で見上げる桜時。そんな桜時に輝矢が少し首をかしげる。
「ハチ、何をっ……」
――――ドッバァァァァァァァァンッッッ！！！！――――
『ぎゃあああああああああっっっ！！！！』
一気に崩れ落ちてくる天井や壁に、門貴や鈴白たちが悲鳴にも似た叫びをあげる。
「……っ」
そんな状況の中、冷静に両手を突き上げる桜時。
「……っ“瞬花”っ！」
――――――パァァァァァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――

『……っ！！』

崩れ落ちてきた雪が、一瞬にしてすべて桜の花びらへと変わり、輝矢たちへと降り注いだ。その桃色の支配する美しい光景に、皆が目を見張る。

「大丈夫かっ！？みんっ……！」

「きゃあああああっっっ！！！さっすが私の桜時様っ！かっこいいぃ～～っ！！」

「だあああああっっっ！！！！！」

輝矢たちの方を向こうとした桜時に、後方から勢いよく抱きつく白雪。桜時が奇声をあげる。

「なっ……んななななっ……！何やっ……！触っ……触触触るんじゃっ……！！」

「私、雪国育ちだから桜なんて初めてぇぇ～っ！もう白雪、感動ぉぉ～～っ！このまま結婚しなぁ～いっ？」

「するかぁぁっっっ！！！！！」

勢いよく迫ってくる白雪を、桜時が必死に振り払う。

「あの女っ……」

「はいはい、今動いたら死ぬから大人しくねぇ～」

白雪に憎悪を燃やす輝矢に、由雉が冷静に一言。

第8章　かぐや姫ｖｓ白雪姫　★7（後書き）

白雪編、次回で終わりです！
明日、更新します（＾＾）

第8章　かぐや姫ｖｓ白雪姫　★8（前書き）

白雪編、最終回でぇ～す。

第8章　かぐや姫ｖｓ白雪姫　★8

「だいったいお前ら何者なんだよっっ！！氷付けになってる街人と鉄汰をとっとと解放しろっっ！！」
「ああ、せやったぁ～街に降っとう雪も止ましてもらわなぁ～」
「心配しなくても街人も解放するし、雪も止ますわよっ」
『へっ？』
あっさりと答える白雪に、桜時と門貴が目を丸くする。
「ヤケにあっさりですね」
「元々、街やフラミンゴたちをどうにかしようって気はないものっ」
「えっ？では何故っ……」
「アンタたちをおびき寄せるためよっ」
「私たちを？」
白雪の思いがけない言葉に、輝矢も目を丸くする。
「そっ！アンタと戦ってどっちが強いかハッキリさせたかったのっ」
「何で輝矢と？」
「白雪様は御伽界でも指折りの退治屋とされている方なんですよ」
『退治屋っ！？』
白雪の代わりに答える鈴白に、桜時と門貴が驚きの声をあげる。
「西の方ではけっこう有名なんだよぉ～」
「全国で有名よっ！私はっ！」
芹の説明に、白雪が少し不満げな表情を見せた。
「だっけど何で同業者が輝矢、狙うのさぁ～？」
「それはねっ……あのフザけた看板よっ！！」
『看板っ？』
どこか腹立たしそうに言い放つ白雪に、一斉に目を丸くする輝矢たち。
「なぁにが御伽界のニューヒーローっ！？鬼人が出たら輝矢を呼ぶ

べしですってぇっ！！？」
『あっ……』
そのフレーズに思い出されるのは、羊スケの立てたあの看板。
「あっの看板のせいでねぇっ！こっちはめっきり仕事が減って、商売あがったりだったのよっっ！！！」
「それで輝矢さんより強いことを証明できれば、また仕事も来るだろうと思い、この作戦に至ったわけです」
「まぁ要は僻みだよね」
「芹っっ！！」
「ごめんなさいっ……」
白雪に睨みつけられ、芹がすぐさま頭を下げる。
「何だっ……んなことかよぉ～」
桜時がどこか気の抜けた様子で肩を落とす。
「結局、あの看板に振り回されただけだったんだねぇ～」
「ホント、迷惑なヒツジですね」

「へぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ～～～～っくしょんっっっ！！！！！」
豪快なくしゃみをかます羊スケ。
「ズズズっ……風邪っスかねぇ～？」
「おいっ！！とっとと行くぞぉっ！！！羊スケっ！！」
「うぃぃぃ～～～っスっ！」
鼻水をすすりながら、羊スケはゴンの元へと駆けていった。

白雪との戦いを終え、白雪が何者であるかもわかった輝矢たちは、崩れ去った雪鏡の城跡地から、トロピカーナの街へと戻った。街に降る雪を白雪が止ませ、街には雪こそ積もっていたが、眩しいばかりの太陽が照り付けていた。

「……っああっ！！輝矢さんっ！！皆さんっっ！！」

『……？』

街へと戻ってきた輝矢たちを、ゴラミがいち早く見つける。街は雪が止み、久々に外へと出てきた街人たちで溢れかえっていた。

「ああっ！！ゴラミちゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～～んっっっ！！！！」

モンキが満面の笑顔でゴラミへと手を振る。

「ご無事だったんですねっ！！ハチさんもっ……！」

無事な姿で街へと戻ってくる輝矢たちを見て、安心した笑顔を見せるゴラミ。

「ゴラミちゃぁぁぁぁぁぁぁ～～～～んっっっ！！！街の平和を守った俺に愛のご褒美をぉぉぉっ……！！」

「ゴラミっっ……！！」

「へっ？」

ゴラミに飛び込んでいこうとしたモンキであったが、モンキの横からモンキよりも早くゴラミの方へと駆け込んでいく桃色頭の１人の青年。

「フラッゴさんっっ！！！」

「へっ？」

目を輝かせるゴラミに、モンキがさらに首をかしげる。

「フラッゴさんっ……！！無事だったのねっ……！！会いたかったっ……！！」

「俺もだよ、ゴラミっ……」

「フラッゴさんっっ……！！」

「ゴラミっっ！！」

駆け込んできた青年・フラッゴの姿を見て涙を流すゴラミ。そしてゴラミとフラッゴが強く抱きしめあう。

「ぎゃいいんっっっ！！！！！」

「あぁ～あっ、残念賞っ」

恋人たちの再会を目の前にし、失恋ショックを受けるモンキにユキジが冷たく呟いた。

「父さんっ！！母さんっ！！」

「フラクローっっ！！！」

「ミンゴっっ！！！」

白雪にさらわれていた街の青年たちが、次々と家族や恋人たちの元へと帰っていく。

「さっ！街人も返したし、雪も止ましたから、もういいでしょ？私たちは行くわよっ」

「はぁっ！？お前らなぁっ！こんだけ事件巻き起こしたんだから、街の人たちに詫びの１つでもっ……！」

「じゃあねっ、桜時様っ！」

――――――　チュっ　――――――

「んなっ……！」

「うひいいいっっっ！！！！！」
文句を言い放っていたハチの額に、白雪の唇が触れる。表情を引きつる輝矢と、表情を凍りつかせるハチ。
「また会いましょっ♪」
「がっ……がはっ……」
ショックで固まっているハチに、笑顔を向ける白雪。
「次は負けないわよっ！竹取輝矢っ！！退治屋Ｎｏ．１の座はこの白雪がいただくわっ！！」
「ああっ！待って下さいよぉ～っ！！虎昌さまぁぁ～～っっ！！」
「置いてかないでよぉ～っ！虎昌さまぁぁ～～～っっ！！！」
「下の名前で呼ぶんじゃないわよっっ！！！！」
何やかんやと騒ぎながら、白雪とそれに続くようにして鈴白、芹が、トロピカーナの街を去っていった。
「あの女っ……次に会った時は息の根を止めます……」
「痛ててっ……！毛を抜くなっ！毛をっ！！」
白雪の唇が触れた辺りのハチの毛を毟り取ろうとする輝矢に、ハチが必死に訴える。
「ふわぁぁぁーーはっはっはっはっ！！！退治屋の諸君っ！！」
『……？』
聞こえてくる高々とした笑い声に、輝矢たちが振り返る。そこにいたのは、これまた白雪の氷から解放された鉄汰であった。
『あれっ？まだいたのっ？』
「いたよっっ！！何だいっ！！揃いも揃ってその言いっぷりはっ！

！」

声を揃えるハチたちに、鉄汰が強く怒鳴り返す。白雪たちとの戦いが白熱したため、鉄汰の存在をすっかり忘れてしまっていたのだ。

「まぁ今回は鬼人の仕業ではなかったようだからねぇっ！引き分けということにしておいてあげるよっ！」

「氷付けにされて捕まってただけのクセにっ……」

「次こそは圧倒的な力を見せつけ、君達のような素人は必要ないということを証明してあげるよっ！！」

ユキジの呟きも聞こえていないのか、輝矢に高々と言い放つ鉄汰。

「楽しみにしていたまえっ！！ふわぁぁぁーーーはっはっはっはっはっ！！！」

『……。』

一方的に話し終えると、鉄汰もあっさりと街を後にした。去っていく鉄汰を見ながら、呆然とする輝矢たち。

「同じようなこと言って去ってったねぇ～あの2人っ」

「ロクなヤツと知り合わねぇーなっ…」

呆れた表情で呟くユキジとハチ。

「輝矢さんっっ！！ハチさんっっ！！門貴さんっっ！！由雉さんっっ！！」

『……っ？』

ゴラミの声に、４人が振り向く。

「街を救って下さったお礼にっ……！」

「おやっ、大金ですか？」

「街のみんなでフラダンスを踊りたいと思いますっっ！！！」

『はぁっ？』

“お礼”という言葉に目を輝かせた輝矢であったが、ゴラミの言葉にあからさまに顔をしかめる。

「みんな行くよぉっ！！」

『おおおおおおおおおおおおうっっっ！！！！！』

――――――ボォォォォォォォォォ～～～～～ンッッッ！！！！！！――――

ゴラミの掛け声に街人が皆手を突き上げ、一斉にフラミンゴ化する。

『チャラチャチャチャチャ～～～～～ンっ♪』

『……。』

きれいに列を組んで、1本足で立ちながら腰を器用に振りフラダンスを踊るフラミンゴの集団に、言葉を失う輝矢たち。

「フラミンゴのフラダンス……ねぇ～……」

「もっと腹の足しになるもの、ないのですかねぇ」

「みんな、好意で踊ってくれてんだから有難く受け取ってやろうぜっっ！！なっ！？」

そのお礼に不満げな顔を見せる輝矢とユキジを、ハチが必死に説得する。

「ゴラミちゅわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～～んっ…」

「お前はいつまで落ち込んでんだよっっ！！」

まだ失恋の痛手が癒えないモンキに、冷たく怒鳴るハチ。

「んっ……？」

落ち込んで俯いていたモンキが、何かに気づいた様子で目を見開く。

「雪がっ……」

モンキの目に入ってきたのは、街に積もった雪が空から照らす太陽の光により溶けて消えていく光景であった。フラダンスのリズムに乗るように緩やかに、雪はどんどんと溶けて、やがて街に雪はなくなる。

「“南国の街”かっ……」

『チャラチャチャチャチャ～～～～～ンっ♪』

照りつける熱い太陽。踊るフラミンゴ。流れるフラダンスのリズム。

『……っ』

“南国の街・トロピカーナ”の復活に、輝矢たちは皆、穏やかな笑みをこぼした。

「そういえばさっ」

「……っ？何です？」

フラミンゴたちのフラダンスを見ていたハチが、思い出したように輝矢に声をかける。

「何で……白雪との戦いが負けられない戦いだったんだ？」

「……っ」

ハチの問いかけに、少し目を細める輝矢。

「それは……」

輝矢が少し俯く。

――――貴方が死んだ後は、私があのワンちゃんを可愛がってあげるわぁっ！――――

「それは……私の“１番大事なもの”が懸かっていたからですよ……」

「１番大事なもの……？」

ハチに笑顔を向けて答える輝矢。その輝矢の言葉に、ハチが少し首をかしげる。

「あっ！わかったっ！“退治屋としての誇り”だろっ！？お前って

意外と意地っ張りだからなぁ～」
ハチが思いついたように笑顔を見せる。
「プライド高いのもいいけど、あんま高くしすぎんなよ？そんなのっ、命賭けて守るほどじゃねーんだからっ」

「……っええ」
ハチの言葉に、輝矢が笑顔で頷く。

「肝に銘じておきますっ……」

こうして色々なことのあった、白雪との戦いも何とか終わりを告げた……。

第8章　かぐや姫ｖｓ白雪姫　★8（後書き）

白雪編、終わりましたぁ～。
ここまで読んでくださった方、どうもありがとうございました（＾＾）
次回からのお話にも、お付き合いいただければと思っております。

第９章　猿蟹合戦　☆１（前書き）

ええ～猿蟹合戦編、スタートです。
今回は門貴が主役めです。まぁタイトル見たら、わかりますかね…

第9章　猿蟹合戦　☆1

――――今度、あの木に実が生る時は、きっと笑顔で出逢えるね……

「んっ……」
ゆっくりと目を開くのはモンキ。開いた途端に空から差し込んでくる太陽に、モンキが少し目を細める。
「夢……か……」
「どっひゃあああああっっっ！！！」
「んん～？」
急に耳に飛び込んでくる大きな叫び声に、モンキが眉をひそめて起き上がる。
「何やぁ～？朝っぱらからぁ」
「いつもの感じだよ」
「いつもの感じかぁ～」

「だっから俺の半径１ｍ以内に近づくなって何度言わせたらわかんだよっっ！！お前はぁぁっっ！！」
起き立ての寝ぼけ眼のモンキと、呆れた表情を見せている由雉の見つめる先にいるのは、大声で何やら必死に叫んでいるハチ。
「すみません。ハチの尻尾の触り心地がいいものでついっ」
「ついじゃねぇっっ！！ついじゃあああっっ！！！」
軽い笑顔で答える輝矢に、強く言い返すハチ。いつものように輝矢がハチの尻尾を掴んで寝てしまい、起きた途端にそれを発見したハチが１時間気絶した後、この口論に至ったのである。
「もうお前っ！俺の半径１．５ｍ以内も立ち入り禁止なっっ！！」
「ええ～そんなぁ～」

「当ったり前だろっっ！！お前、この前俺に何をしたと思ってんだよっっ！！！」
「この前？」
ハチの言葉に、輝矢が少し首をかしげる。
「ああ、“接吻”のことですか？」
「ぎゃあああああっっっ！！！日本語で言うんじゃねぇっ！！余計重々しいっ！！」
「じゃあ軽くするためにもう1度しましょうか？」
「するかぁぁぁぁっっっ！！！ボケぇぇっっっ！！！！」
輝矢の一言一言に怒鳴りまくるハチ。朝から元気なものである。

「ああぁ～今日も平和やなぁ～」
「進歩がないってゆーかね……」
そんな2人のやりとりを見ながら、まったりするモンキと呆れたように肩を落とす由雉。
「はぁ～顔でも洗ってこぉかなぁ～」

――――ポロっ……――――

「……っ？」
立ち上がったモンキの服のポケットから落ちる、何かの種のような小さなものに由雉が気づく。
「おっとっ」
モンキはどこか隠すように素早くその種を拾った。
「種？意外だねぇ～君みたいな自然にまったく興味のなさそうな人間がそんなもの持ってるなんてっ」
「まっ……まぁなっ。……っ」
「……？」
由雉の言葉に少し笑顔を見せた後、すぐさまどこか悲しげに俯くモンキに、由雉はそっと眉をひそめた。

御伽界・南東部。“アライグマの街”。
「ギャアアアッッッ！！！！！」
「……“月器”」
鬼人が砂となり消え去ったことを確認し、構えていた三日月を元のピアスへと戻す輝矢。今日も街に現れた鬼人をあっさりと退治する。
「最近やっと落ち着いたよなぁ～看板騒ぎっ」
「そうだねぇ～まぁ落ち着いてみると、何のお礼もされないってのも悲しいもんだね」
ついこの前までは羊スケが無断で作った看板のせいで、あらゆる人々から依頼が来た上、いちいち過剰なお礼を受けていたが、それもだいぶ落ち着いてきた。
「お前も可愛い女の子にキャーキャー言われなくなって寂しいんじゃねぇーのかぁっ？サルっ！」
「……んっ？あっああ、せやなぁ～やっぱバナナの皮は滑りやすいよなぁ～」
「はぁっ？」
からかうようにモンキの方を見たハチであったが、モンキがまったく噛み合っていない言葉を返してくるので、思わず顔をしかめる。
「どうかしたのかぁ？サルのヤツっ……」
「よっくわかんないけど、朝、種みたいなの落としてからずっと変なんだよねぇ～」
「種ぇ？」
由雉の言葉に、ハチが首をかしげる。
「何だよ？種って」

「知らないよ。ボク、花とか興味ないし」
「……？どうかしましたか？」
そんないつもと違う空気を出しているモンキを見ながら、ヒソヒソと会話をしていたハチと由雉の元へ輝矢が近寄ってくる。
「えっ？あっ、いやっ……」
「待てぇぇっっっ！！！！魚介類っっっっっ！！！」
『……っ？魚介類っ？』
輝矢の問いかけにハチが言葉を詰まらせていたちょうどその時、謎の単語が大音量で聞こえてきて、皆が思わず振り向く。
『いっ……？』
驚きに表情を引きつるハチたち。道の向こうから輝矢たちのいる方へとやって来るのは、横歩きで猛スピードを出している真っ赤なカニが2匹。
「確かに魚介類っ……」
「何でこんな山ん中にカニがいんだろぉ～？」
「待てっつってんだろうがぁぁっっ！！！この魚介類がぁっっっ！！！！」
そしてその2匹のカニを追いかけるように、後から走ってくるのは白いハチマキをした3匹のアライグマである。人の言葉を話していることから、この街の住人であるアライグマの獣人であろう。
「クっ……！」
前を行く目のくりくりした方のカニが、後ろを振り返りながら少し表情を歪める。
「ハチ、カニ鍋は好きですか？」
「ええっ！！？食う気っっ！！？」

走　り込んでくるカニを見ながらの輝矢の問題発言に、ハチが大きくリアクションを取る。

「うわあああっっっ！！」

「……っ！どないしたっ！？チョキ三郎っ！」

急に叫び声をあげる、後ろを走る方の小ガニ。前を走っていた目クリクリカニの方が勢いよく振り返る。

「姉ちゃんっ……」

チョキ三郎と呼ばれた小ガニが、深刻そうな表情を姉ガニに向ける。

「いつの間にか縦歩きになってもうたぁぁっっ！！」

「だあああああああああっっっ！！！」

深刻そうに縦歩きをしているチョキ三郎に、姉ガニが思わずコケる。

「んなもんどっちでもええんやぁっっっ！！とっとと走らんかいっっっ！！ボケぇぇっっ！！」

「キャニィィィィッツッ！！！！」

怒った姉ガニに蹴られ、悲鳴をあげて倒れ込むチョキ三郎。

「酷いわぁ～！姉ちゃんっ！そない思い切り蹴らんでもっ……！」

「うっさいっっ！！だいたいアンタがなぁっ……！！」

「捕まえたぞぉぉ～～っっ！！？魚介類っっ！！」

『うっ……！』

カニ姉弟があれこれとモメていると、２匹がいつの間にか追ってきていたアライグマたちに囲まれる。目の前に立ち塞がるアライグマたちに、表情を引きつるカニ姉弟。

「ちょっ……！ちょい待ちやっ！一応逃げたけど、ウチら何も捕まることなんかっ……！」

「この街はなぁっ！山菜でちょ～有名な街なんだよっっ！！」

「おめぇーたちみたいな魚介類にウロチョロされてな、山菜が魚臭

くなっちまったらどうしてくれんだっ？」
　必死に訴える姉ガニに、可愛い容姿とは裏腹に悪そうな表情を向けるアライグマたち。
「人探しとうだけやねんっ！！探したらすぐ出てくから、せやからっ……！」
「ソイツは聞けねぇ頼みだなぁっ！」
「うわあああああっっ！！」
「ねっ……！姉ちゃんっっ！！」
　アライグマの１匹が、姉ガニの足を掴んで持ち上げる。
「何すんねんっ！！アホグマっっ！！ウチは高級食材やぞぉっっ！！？」
「うわっ……！！」
　姉ガニが自分を持ち上げたアライグマに、必死にハサミを振り回す。ハサミを避けるため、思わず姉ガニを手放すアライグマ。
「何だっ！このカニっ！危ねぇーなぁっ！！」
「はんっ！！」
――――ボォォォォォォ～～～ンッッッ！！！！――――
　姉ガニの全身を白い煙が包んでいく。
『……っ』
「ウチら蟹人はなぁっ！誇り高い一族なんやぁっっ！！」
　次の瞬間、煙の中から出てきたのは長い赤毛を２つに束ねた、少しキツそうな大きな黒い瞳の、まだ幼さを残した顔立ちの少女であった。１６，１７に見える。背中には大きなハサミを背負っていた。
「そう簡単に捕まったりなんかっ……！！」
「姉ちゃ～～～んっ！！」
「ああっ？」

泣きそうなチョキ三郎の声に振り返る姉ガニの少女。と振り返った先には、他のアライグマ2匹に踏み倒され、身動きの取れなくなっているチョキ三郎の姿があった。
「って、何捕まっとんねんっっ!!ウチの言葉の説得力ゼロやないかぁっっ!!このアホぉぉおっっ!!」
「だぁってぇぇ〜〜っっ」
怒鳴りまくる姉ガニに、チョキ三郎は潤んだ瞳を向けた。
「弟ガニ踏み潰されたくなかったら大人しくしなぁっ!」
「クっ……!」
アライグマたちの脅迫に、姉ガニが表情をしかめ、背中のハサミを取ろうとしていた手を下ろす。
「よぉーしっ。さぁーて、とっとと追い出すかぁ。それともカニ鍋にでもしちまうかねぇ?」

「……っ」

「へっ?」
嫌らしい笑みを浮かべたアライグマの顔面に飛び込んでくる1本の足。

――――バギコォォォォォォーーーンッッッ!!!――――

「ぐぎゃあああああっっっ!!!!!」

『なっ……!!?』
横から振り上げられた足に蹴り込まれ、チョキ三郎の上に乗っていたアライグマが勢いよく吹き飛ばされる。その光景に他のアライグマや姉弟ガニが驚きの表情を見せる。

「ふぅ〜っ」

『……っ』

少し肩を落としながら、ゆっくりと右足を下ろしたのは輝矢であった。

「てっめっ！いきなり何しやがっ……！」

「……っ」

「ほげえええっっっ！！！！！」

輝矢に飛びかかっていったもう1匹のアライグマも、すぐさま輝矢の右足の餌食となった。

「さて……」

「うっ……！」

最後に残ったアライグマが、輝矢に見られ、思わず後ずさる。

「アライグマ鍋にでも……して差し上げましょうか……？」

「ひいっっ！！遠慮しときますぅぅぅーーっっっ！！！！」

輝矢の冷たい笑みに、全身の毛を振るい立たせたアライグマが、怯えるように必死に逃げ去っていった。

「ふぅっ……口ほどにもないっ」

「あっ……」

チョキ三郎が起き上がりながら、戸惑うように輝矢を見上げる。

「あのっ……ありがっ……」

「ハチぃ～、今夜はカニ鍋ですよぉ～」

「えええええええええええっっっ！！？」

「食うために助けたのかよっっ！！？」

礼を言おうとしたチョキ三郎を持ち上げ、ハチに笑顔を向ける輝矢。チョキ三郎が驚きと怯えの叫びをあげ、ハチが強く突っ込む。

「何やっ……？あの女っ……」

「んん～～っ」
「……？どうしたの？門貴」
戸惑うように輝矢を見ている姉ガニを見て、何やら考え込むように唸り声を漏らしているモンキ。そんなモンキに由雉が不思議そうに声をかける。
「どうせまた“ズキュン”が来たんだろぉ？」
「ああ～またたった1度の恋が始まるわけぇ～？」
「ああっっ！！」
『うわっ』
呆れた表情で言葉を交わしていたハチと由雉が、急に大声をあげるモンキに少し驚く。
「二花（にか）ぁぁぁぁぁっっっ！！！」
「えっ？」
姉ガニを指差し、思い出した様子で叫ぶモンキ。姉ガニが名を呼ぶ声に眉をひそめて振り返る。
「……っ」
モンキの姿を見た姉ガニが目を見開く。
「門貴っ……」
『へっ？』
モンキの名を口にした姉ガニ・二花に、輝矢たちは皆、首をかしげた。
「やぁ～っぱ二花やぁっ！カニん時は判別不能やったけど、その下っ品な話し方でもしかしてって思っ……！」
「このっ……」

二花が背中の大バサミに手をかける。
「クソザルがぁぁぁっっっ！！！！」
「へっ？うわわわわっっっ！！！！」
いきなり大バサミを手に取り、モンキへ向けて思い切り振り下ろす二花。モンキが驚きながらも素早く避けるが、二花は次々とハサミを振っていく。
「いっ……！いきなり何すんねんっっ！！」
「どんだけ人がっ……！ってかカニが探し回た思てんねんっっ！！食われそうになるし、責任とりやぁっ！！」
「はぁっ！？ようわからん理由でハサミ向けんなっ！ボケぇぇっっっ！！！」
「うっさいっっ！！今日という今日はサルの串焼きにしたるわぁぁぁっっっ！！！！」

『……。』
威勢のいい関西弁を飛ばしあいながら、戦いを繰り広げていくモンキと二花。というか二花が一方的に攻撃しているだけなのだが、輝矢たちが呆れた表情で見つめる。
「何々だっ……？一体っ……」
「さぁ……？」
ハチの問いかけに、輝矢は首をかしげた。

第9章　猿蟹合戦　☆1（後書き）

さてさて、謎の蟹ちゃん美少女と、門貴の関係は??

次回もぜひご覧ください～

第9章　猿蟹合戦　☆2

３０分後。アライグマの街・すぐ外の山道。
「痛てててててっ……」
右腕に負った切り傷を見ながら、表情を歪めるモンキ。
「はいっ、塗り薬ぃ～」
「ええっ？“癒羽”はぁ？」
「もったいない」
「ぎゃいいいーーんっっっ！！！！」
キッパリと答える由雉に、ショックを受けるモンキ。
「で、あなた方は一体、どこのどなたなんです？」
「あっ！はいっ！申し遅れましたぁっ！」

――――ボォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！！！――――

輝矢に問いかけられたチョキ三郎の体を白い煙が包んでいく。
「俺っ、蟹人一族の蟹江チョキ三郎っていいますぅっ！」
煙の中から現れたのは、赤毛の短髪に大きな黒目のまだ幼い、１４，１５歳の少年であった。優しい笑顔のよく似合う、小柄な少年。二花同様、背中に大きなハサミを背負っている。
「あっ、こっちは姉の蟹江二花ですぅ～」
チョキ三郎が不機嫌面でそっぽを向いている二花に手を向けながら、笑顔で言う。
「門貴さんとは生まれた村が近くってぇ、まぁいわゆる幼なじみといいますかぁ～」
「まぁ別にサルの生い立ちに興味はありませんが」
「そんなぁぁ～～っっ！！冷たいでぇっ！！輝矢ぁぁぁぁぁ～～～んっ！」

「……っ」
輝矢に泣きつくモンキを見て、二花が少し眉間に皺を寄せる。
「アンタっ」
「……？」
急に立ち上がり、輝矢の方を睨みつけるように見る二花。そんな二花に輝矢が少し眉をひそめる。
「アンタっ……門貴の何やっ？」
「はいっ？」
二花の思いがけない問いかけに、表情をしかめる輝矢。
「何って……」
「そらもちろんっ！恋びっ……！ふぎゃあああああああああっっっ！！！」
「“飼い主”です」
笑顔で答えようとしたモンキを踏みつけ、輝矢がさらりと答える。
「“飼い主”っ……？」
輝矢の答えを聞いた二花が、上を見上げて妄想を膨らませる。

二花の“飼い主”のイメージ。
「ふぅ～っ……今日も長旅で疲れましたねっ……」
夜も暮れた頃、今日の旅を終えて地面に座り込む飼い主・輝矢。
「おみ足をお揉みしましょう。輝矢様」
1日歩き通しで疲れのたまっている輝矢の足を、そっとマッサージするペット・門貴。
「ああ、ありがとうございます。門貴」
「いえっ、輝矢様のお足に触れさせていただけるだけで私は光栄ですから」
「フフっ……アナタは正直ですね……」

門貴の言葉に、輝矢がそっと微笑む。
「今夜は冷え込みますかね……」
「よろしければ私がずっとお傍におりましょう……」
門貴が輝矢の手を取り、輝矢を見つめる。
「貴女が眠りにつくまで……」
「それはいい夢が見れそうですね……」

「ぎゃあああっっっ！！！何が“サルの抱き枕”やぁっ！エロいっ！エロいわぁっ！飼い主とペットっ！！」
「何、想像してんだかね……」
自分の妄想内容に苦悩し、叫び声をあげる二花に、由雉が冷たい視線を送る。
「やめて下さいよ。私はそんなこと、ハチとしかしません」
「しねぇーよっっ！！！」
輝矢の言葉に、ハチが全力で突っ込む。
「ぐうううううううっ……！！おのれっ……飼い主とペットおおおおっっ……！！」
「姉ちゃんっ、姉ちゃんっ！」
「何やぁぁぁぁぁっっっ！！？」
「ひいっ！」
未だ妄想に苦悩する二花にチョキ三郎が声をかけるが、二花に強く睨みつけられ、思わず震え上がる。
「それより早くっ……本題にっ……」
「あああああっっ！！そうやったぁぁぁぁっっ！！！」
チョキ三郎の言葉に、思い出したように叫び声をあげる二花。
「ウチら、アンタを探して遠路遥々“蟹の村”からやって来てんっ

っ！！！」
「蟹の村？」
「俺を探してぇ？」
二花の言葉に首をかしげるハチとモンキ。
「何やぁ？二花、お前結婚でもするんかぁ？あっ、そんなわけないかぁ～誰も貰てくれへんもんなぁ～」
「……っ」
「あっぎゃあああっっっ！！！！」
フザけた口調で話すモンキが、顔を引きつった二花に容赦なく殴り飛ばされる。
「一体っ……何があったんでございまひょ……？」
右頬を大きく腫らして、改めて問いかけるモンキ。

「……“猿蟹合戦”が始まったんやっ！」

「……っ」

『猿蟹合戦～っ？』
輝矢たちが聞いたことのない不可思議な言葉に首をかしげる中、モンキが表情を一変させる。
「何だぁ？それっ」
「サルとカニがパン食い競争するんじゃないですか？」
「何でパン食い競争なのさ…」
「何てこっちゃあああっっっ！！！！」
『うわっ』
輝矢やハチ、由雉が暢気に言葉を交わす中、耳が痛むほどの大声を放つモンキに、皆の視線が集まる。
「そりゃ大変やぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！」
「せやねんっ！とりあえず大変やねんっ！！」
「えっ……？そんな大変なことなのか……？猿蟹合戦て……」

かなり焦った様子のモンキと二花に、戸惑うように呟くハチ。
「さぁっ！そうとわかったら、とっとと蟹の村へっ……！！」
「でもなぁ～」
「へっ？」
気合を入れて走り出そうとした二花が、やる気なく話すモンキに目を丸くする。
「俺、今そういう気分やないってゆ～かぁ～」
「……っ」
モンキの言葉に、二花の血管がブチ切れる。
「つべこべ言っとらんとっ！死にたくなかったら付いて来いやぁぁっっっ！！！！」
「あっきゃあああああっっっ！！！！」
二花に尻尾を掴まれ、無理やり連れ去られていくモンキ。
「あっ！待ってよっ！姉ちゃ～んっ！」

「さらわれていくけど……どうすんの？輝矢」
「んん～っ」
モンキを連れ去っていく二花の後を慌てて追っていくチョキ三郎。
取り残される形となった由雉が、横にいる輝矢に問いかけると、輝矢は少し考えるような声を漏らした。

「まぁとりあえずあのサルのことはキレイサッパリ忘れて、旅の続きをっ……」
「だあああああっっっ！！！！！」
「へっ？」
やけに遠くの方から聞こえるハチの悲鳴に、輝矢が眉をひそめる。

「離せっ！！離せよっ！！クソザルっっ！！」
ハチは二花に尻尾を掴まれ連れて行かれているモンキに尻尾を掴まれ、間接的に連れ去られようとしていた。

「何で俺まで巻き込まれなきゃいけねぇーんだよっっ！！」
「お前でも連れてこな、輝矢が付いて来んやろがっ」
怒鳴りあげるハチに、わりと冷静に答えるモンキ。

「あのクソザルっ……」
「で……どうすんの？」
拳を握り締める輝矢に、由雉が改めて問いかける。
「まぁたまにはペットの里帰りに付き合ってやるのも悪くありませんねっ。行きますよ？キジっ」
「……。」
足早にモンキたちの後を追いかけていく輝矢の姿に、少し呆れた顔を見せる由雉。
「桜時がさらわれなきゃ……絶対、行かなかっただろうな……」
輝矢に遅れるように歩きながら、こっそりと呟く由雉であった。

第9章　猿蟹合戦　☆3

御伽界、南西部・“柿之木山”。
山の中腹に1本だけ、何とも巨大な柿の木が立っていることからその名が付いたと言われている。

柿之木山・中腹。柿の木平原。
「来たぞぉぉっっっ！！！サルたちだぁぁっっっ！！！」
「防衛体制を取れぇぇっっ！！！柿の木より先、山を下らせるなぁぁっっっ！！！」
『うおおおおおおおおおっっっ！！！！！』
中腹に立つたった1本の柿の木を中心として、言葉をしゃべる多くカニたちが列を作るように広がっていく。カニたちの表情は緊張感が走っており、その鋭いハサミを構えていた。
「移貴猿長(うつきさるおさ)っ！」
一方、中腹より頂上側で、列を成していくカニたちを見下ろすのは、こちらも言葉を話すサルの軍団。その軍団の先頭へ、柿の木のカニたちの様子を見ていた子ザルが戻ってくる。
「カニたちはみんな、いい感じに赤色でしたぁぁっっ！！！」
「誰がんな報告しろ言うたんやっ……？猿飛……」
胸を張って報告する子ザルを、冷たく睨みつける1匹のサル。黒ブチメガネをかけ、他のサルとは違い、真っ赤な法被を着たサルである。軍団の先頭に立っていた。
「陣形とか数とかあるやろ？」
「ああ～それならよう見えませんでしたぁっ！」
「……。」
明るく答える子ザル・猿飛に、言葉を失うメガネザル・移貴。
「カニはんなら、柿の木辺りで防衛線張っとうみたいやでぇ？」

『……っ』

移貴の横に立つ、少し目つきの悪いチンパンジーが移貴に笑いかけると、移貴と猿飛が少し表情をしかめた。

「パン児っ、お前、こっからでも柿の木見えるんか？」

「ウチの視力は5．0，5．0どすえぇ？猿飛はんっ」

不思議そうに問いかけた猿飛に、パン児は笑顔で答えた。

「ほなっとっとと行きまひょかぁ～猿長はんっ」

「……。」

不適な笑みをこぼす男を移貴が鋭く見つめ、そして前を向いて高々と右手を挙げた。

「全サルっっ！！合戦用意っっ！！」

移貴が下方に見える柿の木を指差し、強く叫ぶ。

「今日こそカニどもを蹴散らしてやれぇっ！」

『ハイウッキぃぃぃぃーーっっっ！！！！！』

サルたちが棒やら剣やらを構えて、我先にと柿の木の方へ横歩きしていく。

「サルたちが来たぞぉぉぉっっ！！！！迎え撃てぇぇぇっっ！！」

「カニの誇りを見せ付けろぉぉっっ！！！」

『うおおおおっっっ！！！！！』

サルの軍団とカニの大群が、山の上と下から一斉に走り出していき、やがてぶつかり合っていく。

「おりゃあああああああっっっ！！！」

「ぎゃあああああああっっっ！！！」

「こっのおおおおおおおっっっ！！」

カニたちが強くそのハサミを繰り出せば、サルたちは素早い身のこなしでそれをかわす。サルたちが鋭く武器を突き刺せば、カニたちはその硬い甲羅でそれを受け止める。

「……。」

サルの大群の後方から、厳しい表情で戦況を見つめる移貴。

「温いっ……温いなぁっ……」

パン児が、戦況を見ながら冷たい表情を浮かべて呟く。

「どっちも相手を殺さんよぉ～う、気ぃつけて気ぃつけて戦こうてるっ……なんちゅ～退屈な戦いやろかぁ」

鬱陶しそうな表情を見せながら言葉を続けるパン児。

「そう思わはりまへん？猿長はんっ……」

「……っ」

問いかけるパン児に、移貴が少し目を細める。

「わいやったら……一瞬でカニどもみぃ～んな蹴散らしてやりますのにぃ～なぁ？」

「……前へ出ていいぞ、パン児」

「なっ……！」

含んだ笑みを向けてきたパン児に、前線へ出る許可を出す移貴。

移貴のその言葉に、移貴の猿飛が驚きの表情を見せる。

「移貴さんっ……！何をっ……！」

「ありがとうございますぅ～ほなっ」

「あっ……！」

移貴に温かみのまったくない笑顔を向けて、素早く前線へと行ってしまうパン児。移貴に異議を唱えようとしていた猿飛が、去って

いくパン児に表情をしかめる。
「移貴さんっ！なんであんなことっ……！」
猿飛が責めるように移貴を見る。
「アイツがどういうヤツやか移貴さんもわかっとるでしょっ！？アイツまたカニたちをっ……！！」
「堪えろ……猿飛っ……」
「……っ」
移貴の低く重い声に、猿飛が思わず言葉を止める。
「今はとにかく堪えるんやっ……」
「移貴さんっ……」
そう呟いた移貴は、確かに何かを必死に堪えているような厳しい表情を見せていた。

「ぎゃあああああっっっ！！！」
「うがあああああっっっ！！！！」

「……。」
勢いを増すサルたちの攻撃に、カニたちは徐々に押され、サルたちの前に次々と倒されていく。

「これが……猿蟹合戦……かつて“聖戦”と呼ばれ……サルとカニが一族の誇りを持って挑んだ戦いか……」

「がぁぁーはっはっはっはっっ！！きかねぇーなぁっっ！！カニどものちゃっちいハサミなんかぁっ！」
「とっととくたばりやがれぇぇっっ！！！薄汚いカニどもがぁっっ！！！！」

かつては誇りと呼ばれた聖戦も、今はただの醜くて汚い争い。

「今のこの戦いを見たら……お前はどう思うんやろな……」

移貴はどこか遠い瞳で呟いた。

「ぐはあああああああああっっ！！」

サルの飛び蹴りを喰らい、カニがその場に倒れ込む。

「よしっ、次にっ……」

「何言うてはりますのぉ？」

「……っ？」

カニを倒したサルが他のカニと戦いに行こうとした時、そのサルの前へと現れたのはパン児であった。

「パン児さんっ……！」

パン児を見たサルが、少しかしこまって背筋を立てる。

「まだ動けるでっしゃろぉ？そこのカニっ」

「えっ？」

パン児の言葉に、サルが目を丸くする。

「いやっ、でもっ……あれじゃあ、しばらく立ち上がることもっ……」

「甘いどすなぁ～」

サルの言葉を遮り、パン児がゆっくりと首を横に振る。

「もしあのカニが根性で立ち上がって、背中向けたあんさんを後ろから突き刺したらどないするんどすぅ？」

「そっ……それはっ……」

パン児に突き刺さるような瞳を向けられながら問いかけられ、サルは言葉を詰まらせて俯く。

「こういう時はぁ……ちゃんと2度と動けんようにしていかんとっ

「……」

――――ボォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――

パン児が白い煙に包まれると、チンパンジーから茶髪に長身の若い男へと姿を変える。

「……っ」

「……っ！ひぃっ！」

倒れているカニに向け、冷たく笑うパン児。倒れているカニが恐怖に顔を歪める。

「たっ……助けてくれカニっ……！」

「そういう命乞いはっ……」

パン児が腰に下げた長い剣を抜く。

「言葉の通じる人間にするもんどすえっ……？」

「ひいいいいいいっっっ！！！！」

パン児が笑顔でカニに剣を振り下ろす。

――――パァァァァァァーーーーンッッッ！！！――――

『……っ！』

カニへと振り下ろされた剣を止める何か。移貴や猿飛、周囲のサル・カニたちが思わず目を見張る。

「……っ」

少ししかめた表情を上げるパン児。

「随分と活きのええヤツやなぁ～」

そう言ってパン児へと笑いかけたのは門貴であった。パン児の剣

を止めたのは、門貴の構えた如意棒である。

「あんさんは……」

「門貴っっっ！！！？」

「……？」

パン児が眉をひそめて剣を引き、門貴を見つめる中、近くのサルが大声で門貴の名を呼ぶ。

「門貴っ！！！？」

「門貴って……元・猿長のっ……！！？」

カニたちを圧倒していたサルたちが、皆、門貴の名を呼び、門貴の姿に目を見張る。

「何々ぃ～？門貴ってばもしかして凄いおサルさんだったのぉ～？」

「これだけいればカニ雑炊も食べれますね」

「とりあえずカニに食べる以外の用途を持てよ」

門貴に遅れるようにしてその場に現れる輝矢たち。場違いなテンションを醸し出す由雉と、カニを食べることしか考えていない輝矢に、呆れた表情を見せるハチ。

「大丈夫かっ！？アンタたちぃっ！！」

輝矢たちに続いて、二花とチョキ三郎も戦場の最中へとやって来る。

「二花さんっ！！と、チョキ三郎……」

「二花　蟹長（かにおさ）っっ！！と、チョキ三郎っ」

「どうせ俺は姉ちゃんのオマケですよ……」

姿を現した二花に、倒れ込んでいたカニたちが目を輝かせる。がしかし、チョキ三郎には大して感動しないカニたちの様子に、チョ

キ三郎が少し拗ねるように呟いた。

「ウチがおらん時に合戦しかけてくるたぁ、どういうこっちゃっ！？移貴っっ！！」

二花がサルの大群の後方に位置どっている移貴を睨みつける。

「アンタっ！そこまで汚なったんかぁっ！？このクソメガネザルっ！！だいたいアンタはなぁっ……！！」

「そんくらいにしとけやぁ～二花」

「……っ。門貴っ」

戦場の真ん中で怒鳴りまくる二花を、門貴が止めに入る。

「おうっ！ひっさびさやなぁ～っ！移貴っ！」

「門貴……」

門貴が明るく手を挙げると、移貴は少し眉をひそめた。

第9章　猿蟹合戦　☆3（後書き）

メガネザル・移貴と門貴の関係とは…??
次回もよろしくお願いしますっ♪

第９章　猿蟹合戦　☆４（前書き）

８１話です。長くてすみません。

第9章　猿蟹合戦　☆4

「ほぉ～元・猿長さんどすかぁ～」
「……？」
「光栄やなぁ～そないな方とお会いできるなんっ……」
「全サル、退くでぇっ！」
「何っ？」
門貴に含んだ笑みを向けようとしたパン児が、急な移貴の命令に、思わず驚いた表情で振り向く。
「ここまで来て何をっ……！」
「退くもんは退く。猿長命令やっ！全員、とっとと山登りぃぃっ！！」
「……っ」
異議を唱えようとしたパン児を強い口調で黙らせ、再び命令を出す移貴。移貴の言葉に従い、全てのサルが戦いをやめて山を登っていく。
「チっ……」
「……っ」
パン児は舌打ちをすると剣を納め、他のサルとともに山を登っていった。
「ちょい待ちやぁぁっ！！移貴っっ！！話はまだ済んでへんでぇっっ！！！」
「……。」
他のサルたちを従えて、山の頂上に戻って行こうとする移貴を、二花が大声で呼び止める。すると移貴は山を登っていくサルたちの中で1匹足を止め、ゆっくりと二花や門貴の方を振り返った。
「移貴……」

門貴がまっすぐに移貴を見つめる。
「これはどういうこっちゃ？このインテリザルっ」
門貴が少し表情をしかめて言い放つ。
「何でこんな猿蟹合戦をっ……」
「……。」
門貴の問いかけに少し下を向く移貴。
「カニどもグサボロにするなんて、お前のキャラちゃうやろ？勉強しすぎて頭おかしなったんちゃうかぁ？」
「……お前は相変わらず伝染しそうなアホ面だな」
「んやとぉっ！？」
移貴の言葉に、門貴が怒りを見せる。
「だいったいお前、サル山の大将やるガラちゃうやろぉっ！？お前、昔っから俺の後付いてばっかでっ……！」
「村捨てたお前には関係のないことやっ」
「……っ」

「村をっ……捨てた……？」
冷たく言い放つ移貴。その移貴の言葉に、輝矢たちが眉をひそめる。

「2度と俺らの前に姿見せんなっ」
「移貴っ……」
門貴を睨みつけるように見ると、移貴はすぐさま視線を逸らし、他のサルたちの後方から山へと登っていった。
「あっ……！移貴さんっ……！……っ」
猿飛が門貴に一礼して、移貴の後を追って山を登っていく。
「待たんかいっっ！！このクソメガネぇぇぇっっ！！こっちの話は終わってないねんぞぉぉっっ！！！」
「まぁまぁ姉ちゃんっ、とりあえず合戦は終わったんやしぃ、こっちには怪我しとるカニもおんねんからぁ」

山を登っていく移貴に飛びかかりそうな勢いの二花を、何とか必死に宥めるチョキ三郎。
「そうそっ、とりあえず毛ガニ……じゃなくって怪我人、どうにかしようぜっ」
「うわぁ～オヤジギャグ～」
「寒くても愛してますよ、ハチ」
「うっせぇぇなぁっ！！咄嗟に出ちまったんだよっ！！お前らも倒れてるヤツに手貸してやれっっ！！」
近くで倒れているカニを起こしてやりながら、ハチが輝矢と由雉に怒鳴りあげる。
「こんなカワイイボクの手を煩わせるんだから、ちょ～っとイイものお返ししてよぉ～？」
「今晩のおかずになってもいいと言うのなら助けて差し上げましょう……」
『ひぃぃぃぃぃぃ～～～～っっ！』
「そんくらい無償で助けてやらんかぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！」
倒れているカニ相手に強請る由雉と脅迫する輝矢に、またもやハチが怒鳴りあげる。
「ほれぇ～っ、大丈夫かぁ？」
門貴が倒れているカニへと手を差し出す。
「触るなカニっっ！！」
「……っ」
『……っ！』
倒れているカニが強い口調でそう言い放ち、差し出された門貴の手をハサミで勢いよく切り裂いた。輝矢や二花たちが驚いて目を見開く。
「卑怯で汚いサルがぁぁぁっっ！！！」
「そうやそうやぁぁっっ！！お前、前の猿長やろぉぉっっ！！？」
「アイツらの仲間なんちゃうカニぃぃっっ！！？」
「なっ……！」

門貴に次々と冷たい言葉を浴びせるカニたちに、二花が戸惑うように周りを見回す。
「やめぇーやっ！！アンタたちっ！！門貴はなぁっ……！！」
「ええって、二花」
「……っ！」
門貴を庇うように声をあげた二花を止めたのは、穏やかな笑みを浮かべた門貴であった。
「コイツらの言い分も当然やでぇ～俺、サルやしっ、まぁ何せめちゃめちゃ有名な猿長やったからなぁ～」
「……っ何をっ……！」
「ここはお前や輝矢んに任せるわぁ～ついでに輝矢んに茶ぁ～でも出したって。俺は散歩してくるからっ」
「あっ……！ちょっ……！待てやっっ！！門貴っ！！」
「ほんならまたなぁ～輝矢んっ」
「門貴っっ！！！」
二花の話をろくに聞かずに、門貴は笑顔を見せたままあっさりとその場から去っていった。
「もぉ～っ！何なんやっ！！アイツはぁぁっっ！！」
「……。」
怒鳴る二花の横で、輝矢は少し表情を曇らせた。

柿之木山の麓、海にも程近い場所に、二花たち蟹人の村・“蟹の村”があった。
猿蟹合戦でサルに傷つけられたカニたちを村まで運ぶのを手伝った輝矢たちは、そのまま二花とチョキ三郎の家“蟹江家”へと案内された。蟹江家は村でも1番古く立派な木製の屋敷であった。
「あのキジの羽根、凄いなぁ～もうほとんどの怪我人治ってたわっ」

輝矢たちの案内された畳の部屋に、背中のハサミを下ろし、軽装に着替えた二花が入ってくる。
「ええっ、そこだけがペット価値ですから」
「何だっ、ペット価値って……」
笑顔で答える輝矢の横で、呆れた表情を見せているハチ。由雉はカニたちの怪我の治療に借り出され、チョキ三郎とともに兵舎の方に行った。
「これならまたアイツらが合戦仕掛けて来ても防げそうやな……」
『……っ』
暗い表情を見せながら座る二花に、輝矢とハチ眉をひそめる。
「で……“猿蟹合戦”というのは一体、何なのですか？」
「えっ？あっああっ…せやな。まずそっから話さんとな……」
二花が少し笑みを零して頷く。
「“猿蟹合戦”ゆぅんはウチら蟹人である蟹江一族と、猿人である猿川一族が大昔っからやっとる聖戦でな……」
「聖戦っ？」
「随分と大袈裟ですね」
二花の言葉にそれぞれ呟くハチと輝矢。
「毎年、柿之木山の柿の木ぃに実が生っとう間だけ、あの場所で一族の兵士たちが合戦をやるんや」
二花が言葉を続ける。
「蟹軍と猿軍、それぞれの大将を“蟹長”・“猿長”言うてなぁ、今の蟹長がウチ、ほんで今の猿長ってのが……」
「さっきのメガネをかけた、いかにも賢いですよと言わんばかりの男の方ですね」
「せやっ。あのクソメガネは猿川移貴っ。ウチと一緒で今年から猿長になっとる……」
少し表情を曇らせ、ゆっくりと俯いていく二花。
「猿蟹合戦は……一族の誇りを賭けたカニとサルの力比べ……やってんけどなぁ……」

『……。』
悲しげに呟く二花を見て、少し俯く輝矢とハチ。
「やったのに……あんのクソメガネザルがぁぁぁぁっっっ！！！！！」
――――バギコォォォォォォーーンッッッ！！！！――――
「だあああああああああああっっっ！！！！」
怒りのあまり自分の家の壁を肘で砕き割る二花に、ハチが目を見開いて驚く。
「今年んなっていっきなり力比べどころか殺し合いみたいな合戦仕掛けてきよってからにぃぃぃっっ！！」
「今年になって急に……？」
二花の叫び声に、輝矢が眉をひそめる。
――――ドガシャァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――
「何考えとんねんっっ！！あのアホがぁぁぁぁっっっ！！！！」
「まっまぁ落ち着けよっ！」
暴れ散らす二花を何とか止めようとするハチ。
「何か理由があんのかも知れねぇーしっ……！」
「理由っっ！！？」
「うっ……！」
二花に睨みつけられ、ハチが思わず後ずさる。
「理由て何やぁっっ！？急にカニ鍋が食いたくなったとでも言うんかぁっ！？ああっ！？」
「そうかも知れませんねぇ」
「ああっっ！！？」
さらりと答える輝矢に、二花がさらに表情を引きつる。
「おっおいっ！何、火に油的なこと言っ……！」

「もしくはぁ～何者かにそうするよう仕向けられてるとかぁ～」
『……っ』
鋭い瞳で言い放つ輝矢に、ハチと二花が一瞬で表情を固くする。
「仕向け……られてるっ……？」

柿之木山・頂上。“猿の村”（門貴の故郷）。村中央部・“猿川”の屋敷。
「今日はもう出陣することもないやろ。各サル、家に戻ってしっかり休みっ」
『了解っキィィィィーっっっ！！！！！』
屋敷の庭で移貴がそう指示を送ると、サルたちが揃って敬礼し、屋敷を出てそれぞれの家へと戻っていった。その場に移貴と猿飛、そしてパン児が残る。
「猿飛、お前も部屋で休みぃ」
「あっ、でもっ、ちょっと話がっ……」
「おんやぁ～？これは随分とお早いお帰りやのぉ～」
「……っ」
猿飛が移貴に話をしようとした時、屋敷の中から聞こえてきた、間延びした高い声に、移貴が鋭い表情となって振り返る。
「そんなに早くカニどもを片付けられはったんかのぉ？」
「粒栗（つぶくり）っ……」
移貴の振り返った先に立っていたのは、大きな顔に先の尖ったセンスのない髪型をした、麻呂眉にいやらしいたれ目の中年男であった。粒栗の姿を見た移貴は、どこか憎しみのこもった鋭い瞳となる。
「いやはやっ、さすがは天下の猿川一族の猿長さんっ」
「ちゃいますよぉ～粒栗はんっ」
横から口を挟んだのはパン児であった。

「んん？ちゃうとはどないゆうことかのぉ？パン児ぃ～」
「猿長はん、合戦の途中で退いて来たんですわぁ～何でもぉ前の猿長とかいうお人が現れてぇ」
「退いた……？」
パン児の言葉に、粒栗が麻呂眉をひそめる。
「お友達ザルはんとの再会でぇ、気持ちが鈍ったんどすかねぇ～」
「ちゃうっ！」
悪戯っぽく微笑むパン児の言葉に、移貴が思わず声を荒げて否定した。
「蟹長も合流したしっ……あのまま攻め込んでもコッチが戦力消耗するだけや思たからやっ……」
「ホンマでっしゃろかぁ～？」
「……っ」
「パン児っ！！お前っ……！！」
「まぁ良い」
『……っ』
移貴の言葉を疑うように言うパン児に、移貴が顔をしかめ、猿飛が思わず声を出したが、粒栗の言葉に3人が動きを止めて粒栗の方を向いた。
「マロは終わったことに興味はないでなぁ」
粒栗が右手に持っていた扇子を広げ、自分の口元に当てる。
「次はカニども倒してくれるんやろのぉ？猿長はんっ……」
「……。」
試すように笑う粒栗に、顔をしかめる移貴。
「当たり前やっ……」
そう言い放って、移貴が粒栗とパン児に背を向け、屋敷の中へ入って行こうとする。
「気ぃ付けることや」

「……っ」
粒栗の声に、足を止める移貴。
「あんまり勝手されるとぉ、マロたちも勝手なことをやらねばならなくなるからのぉ。ホッホッホっ」
「……っ！」
粒栗の笑い声に、移貴が歯を食いしばり、拳をきつく握り締める。
「わかっとるっ……」
「あっ……！移貴さんっ……！」
言い捨てるようにそう呟き、屋敷の中へと去っていく移貴。猿飛も少し慌てるようにして移貴の後を追って、屋敷の中へと入っていった。屋敷の庭先に粒栗とパン児だけが残る。
「でぇ、様子はどうかのぉ？パン児……」
「あんまりよぅないですねぇ」
改めて問いかける粒栗に、パン児は少し表情をしかめて答えた。
「あの前の猿長とかいうサル……ウチらの計画には少々邪魔かも知れまへん……」
「そうか……可愛いおサルさんたちだけではこの辺りが限界なんかも知れんのぉ……」
粒栗が扇子を閉じ、瞳を冷たく尖らせる。
「邪魔が入る前に……早目に手を打とうかのぉ……」
どこか含んだような怪しげな笑みを浮かべる粒栗であった。

「移貴さんっ……！移貴さんっ！！」
「……。」
猿飛に何度も呼ばれ、猛然と廊下を歩いていた移貴がやっと足を止める。
「何やっ……」

「あっ……」

――――ボォオオオオオオオォ～～～ンッッッ！！！――――

猿飛の体を白い煙が包むと、次の瞬間１４，１５歳くらいの可愛らしい顔立ちの茶髪の少年が煙の中から出てきた。少年は少し周りを気にするようにして、移貴の傍へと駆け寄る。

「門貴さんにアイツらのこと、伝えましょうっ」

「……っ」

猿飛が小声で呟くと、移貴は少し顔をしかめた。

「門貴さんならきっと何とかしてくれっ……！」

「あかんっ！」

「……っ！」

強く否定する移貴に、猿飛が思わず言葉を止める。

「何でですかっ？門貴さんならっ……！」

「門貴には頼らんっ」

「……っ」

移貴が猿飛の言葉をもう１度否定する。

――――ボォオオオオオオオォ～～～ンッ！！――――

移貴の体を白い煙が包むと、次の瞬間、黒いメガネをかけた知的な茶髪の青年が現れた。

「アイツはもぉこの村のサルやないっ……アイツらのことは俺らだけで何とかするんや……」

「でもっ……！」

「このこと、門貴には絶対言うなやっ……ええなっ……」

「……。」

強く睨みつけるように一瞬、猿飛を見て、足早にその場を去っていく移貴。

「何とかなんてっ……もうできへんことくらいっ……わかってはるでしょ……？」
猿飛が泣き出しそうな表情で俯く。
「移貴さんっ……」

――――門貴さんならきっとっ……！――――

「……っ」
猿飛の言葉を思い出し、移貴が苦しそうに胸を押さえて俯く。

――――門貴なら楽勝やろぉっ？俺の代わりに頼むわぁっ！なっ！？――――

――――ったく、しゃーないなぁっ、移貴はぁっ……――――

「あかんっ……」
移貴が強く拳を握り締める。
「俺はもうっ……アイツに頼ったらあかんねんっ……」
まるで自分に言い聞かせるように呟く移貴であった。

第９章　猿蟹合戦　☆４（後書き）

次話もよろしくお願いします（＾＾）

第9章　猿蟹合戦　☆5

「仕向けられてる……か……」
輝矢の意味深な言葉を聞き、初めは驚いた二花であったが、何か思い当たる節でもあるように呟いた。
「確かに……その線はあんねんっ……」
「えっ？」
二花の言葉に、ハチが目を丸くする。
「猿の村に粒栗とかゆー怪しいオッサンが入り込んでから、移貴の様子は明らかに変わった」
「粒栗……？」
「この合戦の始まるちょい前に現れた男やっ。祈祷師とか何とかゆーてたけど、どうなんやかっ……」
「……。」
二花の言葉を聞き、輝矢が少し考え込むように俯く。
「さっきの合戦時、門貴に止められとった目つき悪い男おったやろぉ？あの男も粒栗と一緒に来たんやっ」
「確かにあからさまに怪しいなっ」
ハチが険しい表情で頷く。
「おいっ輝矢っ、一回、そのクリつぶとかゆーヤツを調べっ……」
「あんのクソメガネがぁぁぁっ！！」

――――バギコォォォォォォォォォンッッッ！！！――――

「だあああああああああっっっ！！！！」
またしても急に壁を破壊し始める二花に、ハチが叫び声をあげる。
「こっ……今度は何だぁっ！？」
「いっくら粒栗に利用されとういうたかて、ウチらに言うてくれれ

ばいいだけの話やろぉぉっっ！！？」
「ひいっ！」
問いかけたハチに、強く怒鳴りあげる二花。
「それやのに何も言わんと、利用されるがままにウチら攻撃するなんてどういうこっちゃああっっ！！？」
「いっいやっ……俺に言われてもよっ……」
「そうせざるを得ない事情があるのかも知れませんね……」
「……っ」
真面目な表情で呟いた輝矢に、二花が怒鳴ることをやめて目を見開く。
「事情て……」
「脅迫かぁ人質かぁ爆破予告かぁ核弾頭かぁ」
「どんどん有り得ない方向にいってっぞ……？」
あらゆる可能性を挙げる輝矢に、呆れた表情を向けるハチ。
「門貴やったらこんなことにはっ……」
『……っ』
「あっ……」
思わず呟いた二花が、同時に振り返る輝矢とハチに、素早く口を押さえた。
「悪いっ……今のはっ……」
「サルが移貴の前の猿長だったのですね」
「……っ」
輝矢の言葉に表情を歪める二花。そんな二花を、輝矢はまっすぐに見つめた。
「門貴は村を捨てた……そう言われていましたね。猿長をやめて村を出るほどの何かが門貴の身に起こった……」
「……それはっ……」
拳を握り締め、辛い表情を見せる二花。
「それは……」
「……。」

どんどんと俯いていく二花を見て、輝矢が少し目を細める。
「まっ！まぁいいじゃねぇーかっ！それより今クリつぶってヤツのことを調べようぜっ！」
あまりに辛そうな二花を見ていられなくなったのか、ハチが不自然に声を出す。
「そうですね。サルのことになど興味ありませんし」
「いやっ……」
『……？』
輝矢とハチが立ち上がろうとした時、二花が小さく声を漏らした。
「お前たちには……知っといてもらった方がええんかも知れん……」
『……。』
二花の言葉に、輝矢とハチは真剣な表情を見せた。

「へぇ～門貴がおサルの大将さんだったとはねぇ～」
「歴代猿長ん中でも5本の指には入るってくらい強かったんですよぉ～？」
意外そうに呟く由雉に、チョキ三郎が笑顔で答える。由雉は兵舎でカニたちの傷の手当てを終え、チョキ三郎から輝矢たちと同じように猿蟹合戦のことを聞いていた。
「でもあの頃、門貴さん荒れとって、サル側も手ぇ焼いとったみたいですけどねっ」
「荒れて？あの陽気サルがぁ？」
荒れていた門貴など想像もできず、由雉が不思議そうに首をかしげる。
「なんで荒れてっ……」
「あっ！そうやっ！由雉さんっ、みんなの手当てしてくれたお礼ですぅ～」

「えっ？何々っ？ササミチーズ？」
チョキ三郎の言葉に、目を輝かせる由雉。
「じゃ～～んっっ！！柿のタネっ！！」
「……。」
笑顔のチョキ三郎が由雉の前へと差し出したのは、大きな袋いっぱいに詰まった小さなオカキ・柿のタネであった。あまりにも期待はずれなお礼の品に、由雉があからさまに嫌な顔をする。
「あれっ？ピーナッツも一緒に入っとう方が好きでしたぁ？」
「どうせならカニみそ食べたいなぁ～」
「ええっ！！？それって俺に死ねいうことですかっっ！！？」
「そっ」
「きゃあああああああっっっ！！！！」
笑顔で答える由雉に、悲鳴をあげるチョキ三郎。
「あっ」
悲鳴をあげているチョキ三郎の横で、由雉が何か思い出したように声を出す。
「そういえばあれっ、柿の種だったんじゃ……」
「へっ？」
「いやぁ～今朝、門貴が種っぽいもの落とすトコ見てさぁ～」

――――まっ……まぁなっ……――――

あの種を落としてから、何やら考え込むように明るさを消した門貴。
「あれぇ、柿の種だったんじゃないかなぁ～と思って」
「……っ」
由雉の言葉に、チョキ三郎が表情を曇らせる。
「でもボクってカワイイわりに花とか興味ないからなぁ～柿だか何だかなんてわかっ……」
「いえ、柿です」

「へぇ？」
即答するチョキ三郎に、由雉が目を丸くする。
「まだ持ってたんですね……門貴さん……」

“蟹の村”・西はずれ。海の見える小高い丘の上に、門貴は1人、立ち尽くしていた。
「ただいま……」
丘に佇む1つの墓石を見て、門貴が悲しげに微笑む。
「一花（いちか）っ……」

「あの丘に眠っている者の名は蟹江一花……」
部屋の窓から見える小高い丘を見つめ、悲しげな表情で話し始める二花。
「蟹江……？」
「ウチの姉っ……」
首をかしげたハチに、二花が答える。
「そして……門貴の運命を変えた人やった……」
二花は遠い目で呟いた。

第9章　猿蟹合戦　☆5（後書き）

次話、ついに門貴の過去が明らかに…。
ぜひご覧ください。

第９章　猿蟹合戦　☆６（前書き）

門貴の過去編。
ちょっと長くなっちゃいました。

第9章　猿蟹合戦　☆6

――――1年前。柿之木山の柿の木に実の生る少し前。

“猿の村”。

「おっらあああああああっっっ！！！！」

「ぎゃあああああああっっっ！！！！」

自分の2倍はありそうな大柄の男を、軽々と吹き飛ばす1人の青年。

「ったくっ！弱過ぎるっちゅーねんっ！どいつもコイツもっっっ！！」

猿川門貴、１６歳。猿の村に生まれた、猿人の青年。

「勝者：門貴っ！」

「当ったり前やろぉっ！？こんな弱っちいヤツらに俺がヤラれるかっちゅーねんっっ！！！」

右手を挙げて声を出したサルに、門貴が強く怒鳴りかける。

「ええ～よって本年度の猿長は門貴にっ……」

「おお～うっ！！任しときぃっ！！カニどもなんか俺が1匹残らずグサボロにしてやるわぁっ！」

「グサボロって……」

「やりましたねぇっ！！門貴さんっっ！！」

高々と言い放つ門貴に、呆れた表情を見せるメガネザルと声援を送る子ザル。移貴と猿飛である。

「見事であった……猿川門貴よ……」

「……っ？」

年老いた声に振り返る門貴。そこに立っていたのは全身白い毛の年老いたサル。いかにも偉そうな髭を蓄えており、木の杖をついて

いる。
「おうっ！じじいっ！やぁ～っと俺の力を認めっ……！」
「じゃがな門貴、猿蟹合戦は相手を傷つけるための戦場ではない……」
「ああっ？」
厳しい表情を見せる老ザルに、門貴が眉をひそめる。
「猿蟹合戦というのはっ……グボオオオウっっ！！！ゲハァっ！！ゴホォォっっ！！」
「長老さまっ……！！お薬をっ……！！」
「……。」
真剣な表情そのもので話していた老ザルが急に激しく咳き込み、隣にいたサルが慌てて薬と水を差し出す。その光景に少し呆れた表情を見せる門貴。
「うっううんっ……ああ、門貴……」
呼吸を整え、改めて真剣な表情を門貴へと向ける長老。
「猿蟹合戦というのはな……」
「……。」
門貴も少し息を呑む。
「猿蟹合戦というのは……グガアアアアアアウっっ！！ゴホオオっ！！ゲハァァっっ！！！」
「だあああああああっっっ！！！」
またしても肝心なところで咳き込む長老に、門貴が思わずズッコケる。
「長老さまっ……！！お薬をっ……！！」
「ゲホゲホっっ！！！グホホっっ！！」
「ったくっ！やってやれんわっ！俺、もう行くでぇっ！」
「門貴っ！」
「……っ」
またしても薬と水を飲まされる長老を見兼ね、その場を立ち去ろうとする門貴。しかし強く呼ぶ長老の声に、門貴が足を止めた。

「猿蟹合戦は一族の誇りを賭け、己の力を試すための戦場……むやみやたらにカニたちを傷つけることはっ……」
「戦場は戦場やろっっ！！？」
「……っ」
やっと言えた長老に対し、どこか残酷な笑みを向ける門貴。
「生温いこと言うて人笑わせんといてくれやっ……」
「あっ！門貴さんっ！」
「おいっ、待てやぁ～門貴ぃ～」
「……。」
冷たい表情を長老に向けて去っていく門貴を、猿飛と移貴が慌てて追って行く。門貴の去っていく背中を見ながら、気難しい表情を見せる長老。
「良いのですか……？長老……」
長老の隣にいる薬を構えたサルが、長老へと問いかける。
「よりにもよってあの暴れザルの門貴を猿長にするなんて……」
「今のヤツにはぁ……“出会い”が必要なんじゃよ……」
「出会い……？」
長老の言葉に首をかしげるサル。
「それってどういう……」
「グホホホホ方ウウっっ！！ゲハアアアっっ！！グハアアアアアっっ！！ゴホっ！ゴホっ！」
「ちょっ……！長老さまっ……！！」
またしても咳き込む長老に、慌てて薬を差し出すサルであった。

１０歳の時、猿長だった兄貴が死んだ。
猿蟹合戦で負った傷が元で、弱っていってそのまま死んだ。
母さんは……めちゃくちゃ泣いた。

オヤジは……“アイツはよくやった”と言った。

“バカげてる”……そう思った。

門貴が猿長に決まって間もなく、柿之木山の柿の木に実が生った。猿蟹合戦が始まった。

「おっらぁぁっっっ！！！如意棒っっ！！！」

『ギャニィィィィっっっ！！！！』

門貴は実をつけた柿の木の下、多くのカニを容赦なく傷つけた。

「はっ！蟹江一族も大したことないなぁっ！」

「何だカニっ！？」

倒れ込んだカニの1匹が、罵倒する門貴に倒れたままハサミを向ける。

「……っ」

「……っ！ぎゃあああああっっっ！！！！」

突き出されたハサミを、力強く踏みつける門貴。カニの悲鳴が山に響き渡る。

「弱いゆーとんねんっっ！！」

「うううっ……うううっ……」

「おっおいおいっ、ちょっとヤりすぎじゃっ……！」

ハサミにヒビが入りそうなまでに踏みつける門貴に、移貴が思わず声を出す。

「うっさいっ！！お前も殺されたいかぁっ！？移貴っ！」

「全然ヤりすぎていません」

「すごく情けないよ……移貴さん……」
門貴に睨まれ、すぐに大人しくなる移貴に、猿飛が呆れた表情を見せた。
「あぁ～あっ！」
「ううっ……！」
門貴がカニのハサミから足を下ろし、倒れ込んだカニたちに背を向ける。
「弱っちいカニばっかで全然面んないなぁっ！こんなんやったら猿長にならんで良かったわぁっ！」
そう言いながら、門貴が山を登っていく。
「何か荒れてません？今日の門貴さんっ」
「アイツはいっつも荒れとうやろ」
「おいっ！とっとと帰るでぇっ！もたくさすんなやっ！！」
「あっはいっ！」
門貴に聞こえないようにこっそりと話す移貴と猿飛。そんな2人に門貴が山の上方から怒鳴り声をあげると、猿飛が慌てて返事をした。
「移貴さんっ！」
「ヘイヘイっ……って、ああっ！？」
「えっ？ええっっ！！？」
「……？」
聞こえてくる2人の妙に驚いた声に、門貴が思わず足を止める。
「どうしっ……なっ……！！？」
「隙アリぃぃっっ！！」
振り返った門貴に、大きなハサミを振り下ろす、真っ赤なショートヘアの1人の少女。
――――バッコォォォォォォンッッッ！！！！――――

「……っ！！だあああああああっっ！！」
少女の振り下ろしたハサミが、門貴の頭に炸裂する。
「いっ……痛てえええええっっっ！！！！」
「門貴っ！」
「門貴さんっ……！！？」
頭のてっぺんにたんこぶを作ってしゃがみ込む門貴に、思わず身を乗り出す移貴と猿飛。
「なっ……！何だっつっ……！」
「1本取ったでぇっ！！猿川門貴っ！！」
「……っ」
戸惑うように顔を上げた門貴に、ハサミを下ろした少女は屈託のない笑みを向けた。底抜けに明るいその笑顔に、門貴が少し驚いたように目を見開く。
「……って、いきなり何すんねんっ！！クソ女っっ！！」
門貴が怒り剥き出しの表情で立ち上がる。
「カニ族のヤツかぁっ！？俺に勝負でも仕掛けに来っ……！」
「せやっ！ウチは今年の蟹長の蟹江一花っ！！よろしゅうなっっ！！」
「なっ……！？」
『蟹長っっ！！？』
少女の自己紹介に、大きく驚く門貴、移貴、猿飛。それもそのはず、蟹長というのは猿長同様、村で行われるいわゆる予選大会で村の誰よりも強くなければなれない者。その蟹長が今、目の前にいる愛らしい少女とはとても信じられなかった。
「はっ！何、しょーもないウソっ……！」
「ウソちゃうよぉっ！なぁっ？」
「せやせやっ！！姉ちゃんは蟹の村で1っ番強い、最強のカニなんやぁっ！」
「せやせやぁっ！」
一花の問いかけに答えるのは、後方から一花を応援しているまだ

幼さの残る二花とチョキ三郎。
「なっ？ウソやないやろっ？」
「……マジでっ……？」
笑いかけてくる一花に、引きつった表情を見せる門貴。
「っちゅーわけで記念すべき初手合わせといこかぁっ！猿長っ！」
一花がやる気満々でハサミを構える。
「冗談っ！誰が女なんかとっ」
「待ていっ！」
「だあああああああああっっっ！！！！」
吐き捨てるように言って門貴が一花に背を向けた途端、一花が門貴の後頭部にハサミを振り下ろした。ハサミを喰らった門貴が、頭を抱えてしゃがみ込む。
「おっ前……1度ならず2度までも俺の頭をっ……！」
「蟹長が決闘しょ～言うてんのに断る猿長がどこにおんねんっ」
頭に2個できたたんこぶを押さえながら、門貴が突き上げるように一花を睨むが、一花は少しも恐がる様子なく、口を尖らせて門貴に訴えた。
「一族の誇りを賭けて蟹長と猿長が拳と拳でぶつかり合うっ！それが猿蟹合戦やろっ？」
「かっ！アホらしっ」
「……っ」
熱く語る一花に、煩わしそうに言い放つ門貴。
「俺は猿蟹合戦なんかどうでもええねんっ……」
「えっ……？」
立ち上がりながら言う門貴を、一花が不思議そうに見る。
「俺はどいつもコイツもグサボロにできりゃあそれでええんやっ！」
「……っ」
――――バギコォォォォォーーーンッッッ！！！――――

「がああああああああああっっっ！！！！」
立ち上がり一花を見下ろして、冷たい笑みを向ける門貴。そんな門貴の笑みと言葉に一花が表情をしかめ、またもや門貴の頭にハサミを振り下ろした。
「痛ってぇぇぇぇぇ～～っっ……」
もう全体的に腫れ上がった頭を押さえながら、またしてもしゃがみ込む門貴。
「お前なぁっ……！！」
「そんなに誰か傷つけたいなら……ウチが相手したるわっ！この当てつけハゲザルっ！」
「ああっ！？」
顔を上げた門貴に、一花が鋭い表情で言い放つ。一花の言葉に、顔をしかめる門貴。
「上等やっっ！！このクソカニ女ぁぁぁっっっ！！！」
門貴が如意棒を構え、勢いよく立ち上がって一花に振り下ろす。
――――パァァァァァーーーーンッッッ！！！――――
激しくぶつかり合う、ハサミと如意棒。
「やぁーっとやる気になったなぁっ！よっしゃっ！改めて初手合わせやっ！」
「はっ！後悔すんなやぁっ！クソ女っっ！！」
『いっけぇぇーーっっ！！姉ちゃんっっ！！』
「負けんなやぁーっ！！門貴っ！！」

こうして始まった門貴と一花の戦いは、見つめるサルやカニの観衆がどんどん増える中、空がオレンジ色に染まるまで延々と続いた。

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」
柿の木のすぐ傍に寝転がった門貴が、息を乱しながら、オレンジ色に染まった空を見上げる。
「お前っ……ホンマ女かっ？化けモン並みの力やぞっ」
「はぁっ……はぁっ……あんま嫁の貰い手がなくなるようなこと、大声で言いなやっ……」
柿の木を挟んで横に寝転がっている一花。こちらも激しく息を乱しながら、空を見上げていた。
「けど、さっすが猿長っ！やっぱ強いなぁ～！」
一花が起き上がり、まだ寝転がっている門貴に笑顔を向ける。
「村にはウチと互角に戦えるヤツなんて誰もおらへんもんっ」
「せやろな……」
少し呆れた表情で答えながら起き上がる門貴。
「もう日も暮れるし、そろそろお開きにしよかぁ」
「せやな」
山から見える海に沈んでいく夕日を見つめながら、門貴と一花が言葉を交わす。
「ふぅ～っ今日は楽しかったでっ！」
「……？」
立ち上がった一花がハサミを背中に背負いなおし、門貴の方を見る。
「また明日もやろなっ！門貴っ！」
「……っ」
一花は屈託のない笑顔を見せて、そう言った。

これが俺と一花の出逢いやった……。

「いっくでぇぇぇっっ！！門貴っ！！」
「いつでもかかってこいやぁぁぁぁっっ！！！クソ女ぁぁぁぁっっっ！！！！」
それから毎日、門貴と一花は、柿の木のすぐ横で1対1の手合わせを続けた。
「いってまえぇぇっっ！！！！門貴ぃぃぃっ！！！！」
「アホうっ！勝つんはウチの姉ちゃんやっ！」
「女が門貴に勝てるかいっ」
「何やとぉぉっっ！！？このクソメガネぇぇぇっっ！！！！」
「ああっ！！？」
外野で険悪なムードとなる二花と移貴。
「まぁまぁ姉ちゃん～」
「移貴さん、抑えて抑えてぇ～」
チョキ三郎と猿飛が必死に宥める。

『はぁっ……はぁっ……』

『また互角かぁ～』
毎日、勝負はつかなかった。だが毎日、勝負は続いた。
『いっけぇぇいけいけいけっ！！門貴っ！！サルの実力見したれぇっっっ！！！！』
『一花ちゃんファイトぉぉ～っっ！！！カニの誇り、見せつけたれぇっ！！！！』
日に日に両者の応援のサル・カニは増え、その年の猿蟹合戦はかつてない盛り上がりを見せた。また、サルとカニ、両一族にあった壁のようなものも次第になくなり、両一族は親しくなっていった。
そして、門貴にも変化があった。

「ぐへひゃあああああああああああああっっっ！！！」
“猿の村”深夜。稽古広場に移貴の叫び声が響き渡った。
「無理無理っ！痛い痛いっ！もう俺の負けっ！俺の負けっ！」
「よしっ」
倒れた後起き上がり、必死に負けを訴える移貴の前に立っていたのは、如意棒を構えた門貴であった。
「ほなっ、もういっちょやろかぁっ！」
「えええぇぇぇっっっ！！！？」
これ以上ないくらいに表情をしかめる移貴。
「やる気満々ですねぇ～門貴さんっ！」
「んっ？」
そこに外野から猿飛が声をかけた。
「当ったり前やろっ！女に勝てんまんまでおれるかいっ！」
「それよりも俺の体のことをもうちょい考っ……」
「よっしゃっ！行くでぇっ！移貴っ！」
「えげぇぇぇぇぇっっっ！！！？」
移貴が嫌がる中、もう何度めになるのかもわからない門貴と移貴の手合わせが始まる。

「アハっ、何か変わりましたよねっ、門貴さんっ」
「うむっ」
笑顔を見せる猿飛の横で、深々と頷く長老ザル。
「良い出逢いをしたのじゃろう……うっ！ぐふっ！ゲハゲハゲハっっ！！！グオホホホホンっっっ！！！」
「長老さまっ……！！お薬をっ……！！」
「……長老さまは変わりないよね……」

そうして緩やかに、でも確実に、時は過ぎていった……。

「ふわぁぁぁぁ～～っ！まぁ～た勝ち負け付かずかぁ～っ！」

空がオレンジ色に染まる時間が早くなってきた頃、2人の勝負も少しずつ早く終わるようになっていた。勝負を終えた後の会話の時間が、少しずつ長くなっていた。

「今日、ギャラリーいなくて寂しいねぇ～」

「“柿祭り”の日やからなぁ～みんな準備で忙しいんやろっ？」

「ウチらの勝負より祭りかぁ～やっぱっ」

柿の木にもたれるようにして海を見る一花と、柿の木のすぐ横で寝転がる門貴。2人だけの合戦でない時間が続いた。

「なぁっ……一花……」

「んんっ？」

門貴の呼びかけに、一花が笑顔で振り向く。

「前、言うたやろ……？俺の兄貴のことっ……」

「……っうん……」

少し目を伏せ、一花が小さく頷く。

「兄貴は猿長で、猿蟹合戦の傷が元で死んだ……」

「……。」

空を眺めながら話を続ける門貴の横で、どこか悲しげに俯く一花。

「俺ぇ、兄貴の葬式ん時、オヤジが“アイツはよくやった”言うた意味が全然、わからんかった……」

門貴がそっと目を細める。

「母さんがあんなに泣いてんのに、猿蟹合戦なんかのために死んだ兄貴が、ようやったなんて思えんかった」

「門貴……」
一花が顔を上げ、門貴を見つめる。
「猿蟹合戦が何やっ、何で一族の誇り守るために死ななあかんねんって……思とった……ずっと……」
門貴がゆっくりと起き上がる。
「今までは……」
「まで……？」
少し笑みをこぼして呟いた門貴の言葉に、一花が少し首をかしげる。
「今は……少しわかる気がすんねんっ……」
海に沈んでいく夕日を、まっすぐに見つめる門貴。
「兄貴が命賭けてまで戦った理由も、オヤジがようやった言うた意味も、この合戦の誇り高さも……」
「……っ」
門貴の言葉に、一花がそっと笑みをこぼす。
「だから俺も……一族の誇りと俺の命を賭けてこの合戦に臨もうと思えるようなったっ」
「……。」
一花が少し目と閉じ、俯いて微笑んだ。
「門貴っ、ウチのハサミ喰らいまくっとうからなぁ～っ！案外、アッサリ命失うかも知れへんでぇ～？」
「ああっ！？」
悪戯っぽく言った一花の言葉に、門貴が表情をしかめる。
「アホかぁぁっ！そんなに喰らってへんわっ！」
「そうかぁ～？１００発は喰らった思うでぇ～？」
「それはお前がブンブン振り回すからやろぉっ！」
「門貴がもっと素早く避ければええやろぉ～？おサルさんやねんからっ！」
「んやとぉぉぉっっ！！？」
強く睨み合う門貴と一花。

『……プっ！アハハハハハっ！！』
　睨みあったのも束の間、すぐさま両者に笑いがこぼれた。
「……もう柿の季節も終わるな……」
「……っ」
　不意に笑みを消して呟く一花。その言葉に、門貴もそっと笑みを消す。“柿祭り”は今年最後の柿を食べる時に開かれる祭り。柿の季節の終わりを意味し、そして猿蟹合戦の終わりも意味する。
「こうして毎日……勝負もできんようになるかと思うと……少し寂しいな……」
「ああ……」
　一花の言葉に、門貴は素直に頷いた。いくら猿と蟹の一族が親しくなってきたとはいえ、長年争ってきた一族同士に変わりはない。猿蟹合戦が終われば、２人にはそう会う機会もなくなるだろう。
「寂しい……な……」
「……門貴……」
「んっ？」

「約束しよう。来年の猿蟹合戦も、猿長と蟹長としてここに来るって」

「一花っ……」
　一花は右手の小指を差し出し、門貴に穏やかな笑みを向けた。
「……っ」
　門貴もゆっくりと笑顔を作る。
「ああ……約束するっ……」
　２人は小指と小指を交わらせ、固い約束を交わした。

「今度、この木に実が生る時はっ……きっと笑顔で出逢えるねっ……」

「ああっ……」
2人は柿の木を見上げ、笑いあった。

そして、俺たちは猿蟹合戦を終え、少しの別れの時を迎えた……。
次に会う日の来ることを信じて……。

柿の季節も終わった冬。猿の村。
「“御伽腕相撲選手権”の猿の村代表選手ぅ～？」
「せやねん～っ！」
猿蟹合戦を終えても鍛錬を怠らないでいる門貴の元へ、困り顔の移貴がやって来た。
「でもそれ、お前が予選勝ち残ってやっと代表になったやつやろ？」
「せやねんけどさぁ～俺、最近どぉ～にも腱鞘炎で右手、めっちゃ調子悪くてさぁ～」
移貴が右手を回しながら表情をしかめる。
「これでボロ負けしたら、後で長老に何言われるかわからんやろっ？だから門貴、代わりに行ってくれんっ？」
「んん～っ」
懇願する移貴を前に、少し考え込む門貴
「門貴なら楽勝やろぉっ？俺の代わりに頼むっ！なっ！！？なっ！！？」
「わかった、わかった」
「ホンマかぁっ！？」
「ああっ」

目を輝かせる移貴に、門貴が笑顔を向ける。
「ったく、しゃーないなぁっ、移貴はぁっ」
「サ～ンキュっ！帰ってきたらバナナ奢っからよぉっ！」
「１０本なっ」
「えっ！！？あっ、５本にしねぇっ！？」

こうして俺は移貴の代わりに御伽腕相撲選手権に出るために出かけ、しばらくの間、村を空けた。
帰ってきたのは、春も近づく冬の終わり。

「ふぅ～っ、やぁ～っと着いたぁ～んっ？」
久々に戻り、柿之木山を登った門貴が見つけたのは、村の入口に1人佇む移貴の姿であった。
「移貴ぃぃぃ～～っ！」
「……。」
門貴が深く俯いている移貴の元へ、笑顔で駆け寄っていく。
「ちゃぁ～んと優勝してきてやったでぇ？ほれっ！これっ、優勝トロフィーっ！」
「……。」
「……？」
トロフィーを差し出した門貴が、まったく反応のない移貴に少し首をかしげる。
「なっ何やねんっ！もうちょい反応してくれたかてっ……」
「門貴っ……」
「んっ？」
移貴が力なく門貴の名を呼び、ゆっくりと顔を上げる。

「一花がっ……」

「えっ……？」

震えた声で呟く移貴に、門貴の表情が凍りついた。

案内されたのは、蟹江の家ではなく、蟹の村の西はずれにある丘の上だった。

「1週間前……風邪をこじらせて……そのまま……」

そう言って二花が門貴に見せたのは、一花の姿ではなく、1つの墓石だった。

「……。」

門貴は少しの表情も無いまま、その墓石の前に立ち尽くした。

「一……花っ……？」

呼びかけたところで、返って来る声などない。

「一花っ……？」

だが門貴はもう1度、その名を呼んだ。

「ウソやろっ……？一花っ……なぁっ！！一花っっ！！！」

「門貴っ……！！」

墓石に向かって必死に叫ぶ門貴を、移貴が後ろから押さえる。

「こんなんっ……！こんなんウソやろっっ！！？なぁっっ！！何とか言えよっっ！！一花っっ！！一花っ！！」

「門貴っ……！！！」

「門貴さんっ……」

押さえる移貴と見つめる猿飛の瞳から、涙がこぼれる。

「なんでっ……！！なんでっ……！ううっ……！！」

門貴の瞳から涙が溢れ、門貴が力なくその場に座り込む。

「なんでこんなっ……」

『……っ』

墓石の前に座り込んだ門貴を見て、皆、涙を流し、遣り切れない表情で俯いた。

「門貴……これっ……」

「……？」

座り込んだ門貴の前に、二花が差し出したものは、一粒の種であった。

「柿の……種っ……？」

「姉ちゃんがアンタに……“最期の言葉”やって……」

「最期の……言葉……？」

門貴が二花から柿の種を受け取り、それを見つめる。

「最期っ……」

門貴が種を握り締め、天を仰ぐ。

「あああああああっっっ！！！！！」

『……っ！』

天へと突き上げた門貴の声に、二花が移貴が、皆が泣いた。

「あああああああああっっっ！！！！！」

――――今度、この木に実が生る時は……きっと笑顔で出逢えるね

……――――

雪が溶け、花の芽吹き始めた春。俺は、1人になった……。

第９章　猿蟹合戦　☆６（後書き）

第１０章に続きます。

第１０章　最期の言葉　★１（前書き）

いよいよ１０章。
猿蟹合戦編、後半です。

第１０章　最期の言葉　★１

「……。」

二花から門貴と一花の話を聞き終えたハチは、痛みにも似た、言いようのない思いを抱えながら、蟹江家の縁側で庭の木を見つめていた。

「……柿……か……」

「ああぁ～いたいたぁ～っ」

「……？」

そんなハチの元へとやって来たのは由雉であった。

「由雉っ……もうカニたちの手当て終わったのか？」

「まぁねぇ～お礼に柿のタネなんてゆ～くだらないもの貰ったんだけど食べるぅ～？」

「柿のっ……タネっ……」

「……っ」

由雉の差し出した小さいオカキのたくさん入った袋を見て、少し悲しげな表情を見せるハチ。そんなハチを見て、由雉が眉をひそめる。

「柿のタネ見たくらいでそんな反応するってコトは桜時たちも聞いたんだねぇ～一花さんのことっ」

「えっ！？あっ！いやっ！俺はっ……！」

「別に誤魔化さなくたっていいでしょ？ボクもチョキ三郎から聞いたしぃ」

「……っそ……そうかっ……」

納得しつつも、どこか元気のない様子で俯くハチ。

「やっとわかったよぉ～今朝、門貴があの種落としてから元気なくなっちゃった理由がぁ～」

「そうだな……」

隣に座りながら話す由雉の言葉に、ハチが小さく頷く。

「で、輝矢はぁ？」
「行った……」
「……そっ」
ハチの言葉に、短く答える由雉。
「珍しく……置いてかれたねっ」
「そうだな」
「淋しい？」
「さっ！淋しいわけねぇーだろーがぁぁぁぁぁっっ！！！」
「冗談だよぉ～そんなムキになんないでよぉ～」

蟹の村・西はずれの丘の上。一花の墓の前。
「……一花……」
1人になった春から半年の時が流れたが、門貴は未だ変わらず返事の返って来ることない墓石に呼びかける。呼べば呼ぶほど、悲しみが増すことを知っているというのに。
「いくら繊細さには縁遠い野猿とはいえ、そのままでは破傷風くらいにはなるんじゃないですかぁ～？」
「へっ……？」
聞き覚えのある凛とした声に、門貴が戸惑いながらゆっくりと振り返る。
「輝矢んっ……」
蟹の村の方から、門貴の元へと歩み寄ってくるのは輝矢であった。
「それっ」
「それっ？おおおおうっ！！せやったっ！！カニちゃんにハサミでぶった切られたんやったぁっ！！」
輝矢に指差され、門貴が自分の左手を見ると、左手は大きな切り傷を負っており、流れ出た血がもう固まってしまっていた。

「ううぅ～気づくと急に痛いっ」
「よくこれほどの傷を忘れ去れたものですね」
「……っ」
傷ついた門貴の左手に、輝矢がそっとハンカチを巻いた。少し驚いたように目を見開く門貴。
「あんがとぉぉっ！！輝矢んっ！！キレイに洗ってついでに愛も込めまくって返っ……！」
「使い終わったら捨てちゃっていいですから」
「がいいいいいぃ～～～んっっ！！」
冷たく言い放つ輝矢に、門貴がショックを受けてその場にしゃがみ込む。

「……ここに来たゆーことは……二花たちから聞いたんやろ……？」
しゃがみ込んで俯いたまま、静かな口調で問いかける門貴。

「一花の……こと……」

「……。」
門貴の声に、輝矢が表情を曇らせる。
「次は山育ち系の動物に生まれてきたいからと言って、海ではなく山にお墓を作っていただいたそうですね」
輝矢が門貴の横を通り、一花の墓石の前へと立つ。
「ユニークなカニさんではないですか」
「……ああ」
「……。」
輝矢がそっと目を閉じ、手を合わせて、そこに眠る一花に祈りを送った。祈りを送る輝矢の後方で門貴がゆっくりと立ち上がり、輝矢の横へと並ぶ。

「一花が死んだ時に死んだんや思うわ……」

「……？」

門貴の声に、輝矢が目を開いて振り向く。

「俺も……一緒に……」

「……。」

悲しげな笑みをこぼして呟く門貴を見つめ、輝矢は少し眉をひそめた。

「一花死んで……この場所におるんが耐えられんくて、すぐ村出た……」

――――待てやっ！門貴っ！お前は猿長やねんぞっ！？おいっ！！――――

周りの声も耳に入らず、ただ一花といたこの場所から逃げた。

「けど、どこ行っても何もする気起きんくて……」

何をすればいいのかわからない。どこへ行けばいいのかわからない。なんでここにいるのかわからない。

――――お主は人々の役に立つために生まれてきたサルなんじゃよっ……――――

そんな時、差し出された道。

「サイ蔵の……あんな安っぽい言葉にも平気で流された……」

何の迷いもなく、あの悪い手を取った。

「誰かの役に立っとかな…誰かのために存在しとかな…生きてられ

る気がせんかった……」
「……。」
話し続ける門貴の言葉を、黙ったまま真面目な表情で聞く輝矢。
「一花が死んだ時から……俺はずっと死人やねん……」
「……っ」
輝矢は少し目を伏せ、門貴から目を逸らして、正面に見える海に沈んでいこうとしている夕日を見つめた。
「私、慈愛の精神というものがサッパリ無いんですよ」
「へっ？」
いきなりまったく関係のないことを言い始める輝矢に、門貴が思わず目を丸くする。
「そりゃ知っとるけどっ……って、ちゃうちゃうっ！なんでいきなり、そんな話っ……」
「万民に振り撒くほどの優しさも持ち合わせていません」
「んん～っ？」
意味不明な言葉を続ける輝矢に、どんどん混乱した表情となっていく門貴。
「あっのぉ～言いたいことがサッパリ見えてこぉ～へんのですけどぉ～」
「知ってます？幽霊の類は、慈愛の精神や万民に振り撒くほど優しさを持ってる人にしか見えないんですよ？」
「……っ」
輝矢の言葉に、門貴が少し眉をひそめる。
「そうでない人間には、姿を見せたところで助けてはくれないと、幽霊たちはわかっているのですかねぇ」
輝矢がゆっくりと門貴の方を振り返る。

「だから私に死人は見えません……ですが……」
門貴に笑みを向ける輝矢。
「私に……アナタは見える……」
「……っ！」
大きく目を見開く門貴。
「アナタは生きていて……そして、私たちと出会った……」
「……っ」
門貴はどこか泣き出しそうな表情を見せ、すぐさま俯き、歯を食いしばった。
「……せやな……」
俯いた門貴が、ポツリと小さな声を落とす。
「今まで見たこともない柔らかな輝矢んの笑顔を見れたんもっ、俺が生きてるからこそやもんなぁ～！」
明るい笑顔で、顔を上げる門貴。
「まぁ作り笑いですけどね」
「ぎゃいいぃ～～～んっっ！！」
輝矢の冷たい反応に、いつものようにショックを受ける。
「さぁ、では生き返ったところで、死人さんっ」
「いやっ、生き返ったんやから死人ちゃうやろぉ～」
振り返り、墓石に背を向ける輝矢に、門貴が少し突っ込みを入れる。
「猿の村に入り込んだ粒栗とかいう男を、調べついでにもしかしたら吹き飛ばしに行きます」
「粒栗ぃ～？」
首をかしげる門貴を、少しだけ振り返って見る輝矢。

「付いて来なさいっ、サルっ」

「……っ」

そう言って歩き去っていく輝矢の背中を見て、門貴がそっと笑みを浮かべる。

「喜んでぃっ！」

門貴は一花の墓石に背を向け、しっかりとした足取りで輝矢の後を追った。

第１０章　最期の言葉　★１（後書き）

次回もよろしくお願いします。

第１０章　最期の言葉　★２

日も暮れた頃。柿之木山・柿の木すぐ傍。
「何っ……！！？」
驚きの表情を見せるのは、１匹のメガネザル。移貴である。
「今から蟹の村に夜討ちを仕掛けるやてっ……！！？」
「そんなっ……！！」
「へぇっ」
怒りに震えるような声をあげた移貴と猿飛に、不敵な笑みで頷いたのはパン児であった。
「何、アホなことをっ……！！」
「アホなことちゃいますよぉ～もう手っ取り早くカニはんたち皆殺しにしてまおぉ～言うとるんどすぅ」
「皆殺しやとっ……！？」
パン児の言葉に、移貴が目を見開く。
「何をっ……！」
「蟹の村の土地が手に入ればっ……！カニたちは追い出すだけでええってっ……！！」
「カニはんたち、早々簡単に出て行かはりまへんでっしゃろ～？ほんなら殺してもた方が早いって話どすわ」
『なっ……！！？』
パン児の冷酷な笑みに、言葉を詰まらせる移貴と猿飛。
「お前ぇぇぇっっ！！」
「猿飛っ……！」
――――ボォォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――

「だあああああああああっっっ！！！！」
移貴が手を伸ばす中、猿飛が人の姿となって怒り全開にパン児に殴りかかっていく。
「……っ」
「ぐあああああっっ！！」
「猿飛っっ！！！」
猿飛殴ろうと突き出した右手をパン児に軽々と掴まれ、体ごと捻り上げられる。痛々しい声を出す猿飛に、思わず身を乗り出す移貴。
「今更、ゴタゴタ言わんといて下さいなぁ～」
「ううっ……！！」
弱った猿飛を体ごと投げ飛ばすパン児。
「ううっ……」
猿飛は力なく地面に倒れ込んだ。
「これは決定事項どすえぇ～？」
「誰がんなことっ……！！」
「貴方はんに選ぶ権利はないんだのぉ、猿長はん……」
「……っ」
パン児の言葉に逆らおうとした移貴にそう言い放ったのは、頂上から柿の木へと降りてくる粒栗であった。
「粒栗っ……。……っ！何やっ？そいつらはっ……」
粒栗の背後には、十数匹のチンパンジー。
「マロの可愛い手下たちだのぉ」
「何っ……！？」
「ううっ！！」
「猿飛っ……！！」
チンパンジーの１匹が倒れていた猿飛を容赦なく踏みつける。
「お前らっ……いつの間にっ……！」
扇子で口元を隠して微笑む粒栗に、移貴が表情を歪める。

「こやつらの仲間が村で待機しておる……マロが合図すれば、すぐにでも人質どもの首が飛ぶのぉ……」
「……っ！」
粒栗の脅迫に、顔をしかめる移貴。
「貴方はんは……マロの要求に“イエス”と答えるしか道はないんだのぉ……ホッホッホっ」
「外道っ……」
「……っ口を慎んだ方がサルたちのためだのぉ……」
粒栗を睨みつけながら呟いた移貴に、粒栗が扇子を閉じて冷たい目を向ける。
「さてとぉ～ほなっ、サルはんたち呼び出してとっとと夜討ちといきまひょかぁ～猿長はんっ」
パン児がそう笑いかけ、移貴の肩に手を置く。

「……っ！」

「あっ？」
肩に置かれたパン児の手を、強く振り払う移貴。
「酷いどすなぁ……」
パン児が振り払われた手を見て呟く。
「確かに……みんなの命守るためや思て……一族の誇りも何もかんも捨ててお前らに従った……」
拳を強く握りしめ、少し震えた声で言い放つ移貴。
「けどなぁっ……！！」

――――ボォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！――――

移貴が顔を上げた途端、移貴の体を白い煙が包む。

「己の誇りまでっ……捨てる気はないっっ！！！」

人の姿となった移貴が、腰に差していた棒を伸ばし、粒栗へと飛びかかっていく。

「粒栗ぃぃっっ！！！」

「……っ」

――――パァァァァァァァァァンッッッ！！！！――――

「……っ！」

粒栗に振り下ろした移貴の棒を、粒栗の手前でパン児の剣が止める。

「クっ……！」

移貴が後方へ飛び、パン児と距離を取って再び棒を構える。

「愚かなおサルはんっ……ウチが天国まで送って差し上げましょ……」

「……っ」

微笑んで剣を構えるパン児に、移貴が目つきを鋭くする。

「だあああああああっっ！！！」

移貴は全力でパン児に向かっていった。

その頃、蟹の村。蟹江家・二花の自室。

「……。」

灯りもつけていない暗い部屋に立ち尽くす二花の手の中には、１年前の門貴たちと二花たちの写った写真があった。写真の中、門貴の横で穏やかな笑みを浮かべている一花。

「姉ちゃん……」
写真の中の一花に、そっと呼びかける二花。
「門貴な……まだあの種、持っとんねんて……」
一花が門貴に託した、ただの柿の種。1年経っても、村を出ても、門貴は手離すことなく大事に持ち続けていたのだろう。
「持っとると思たわっ……アイツ、意外と女々しいトコあるしっ」
二花が写真の一花に、無理に作ったような笑顔を向ける。
「アイツ……ホンマのホンマに……姉ちゃんのこと、好きやったんよっ……？」
写真に写る門貴は、隣にいる一花の方を見つめ、笑っていた。
「それは……私が1っ番知っとるっ……」
写真に写る二花は、そんな門貴を見て、あまり楽しくなさそうな顔をしていた。
「だからなっ……姉ちゃっ……」
「姉ちゃぁぁぁーんっっ！！！」
「だあああああっっっ！！！！」
いきなり大声を出して、全力で襖を開いて、部屋の中へと入ってくるチョキ三郎に、二花が思わず驚く。
「姉ちゃんっっ！！！もお門貴さんたち行っ……！」
「ノックくらいしてから入って来いやぁぁぁぁっ！！」
「ぎゃあああああああっっっ！！！」
部屋に駆け込んできたチョキ三郎が、二花の飛び蹴りで部屋の外まで吹き飛ばされる。
「襖でノックてそない難しいこと言うたかてぇ～」
「ノックの問題ちゃうわいっ！空気読めっちゅーこっちゃっ！空気っ！！」
「空気っ？って、そんなことより姉ちゃんっ！門貴さんたち、もう猿の村に行っちゃっ……！」
「わかっとるっっ！！」
チョキ三郎に強く答え、写真を懐にしまって、壁にかけてあった

ハサミを背中に背負う二花。
「あのアホのせいで色々考えとったら、色々腹立ってきてもたんやっ」
拳を鳴らし、二花が部屋を出る。
「一暴れしに行くでぇぇっっ！！チョキ三郎っっ！！」
「うんっ！！」
二花の声に、チョキ三郎は大きく頷いた。

「がああああああっっっ！！！！」
パン児の剣に切り裂かれ、倒れ込む移貴。
「うっ……ううっ……！」
すでに棒は砕かれ、全身に傷を負い、移貴はもう立ち上がることも困難な状況であった。
「猿長はん言うても……大したことありまへんなぁ～」
「クっ……！」
ゆっくりと近づいてくるパン児に、移貴が顔を引きつる。
「そろそろ終わりにしまひょか……」
「……っ」
冷酷な笑みを浮かべて剣を振り上げるパン児。移貴には最早、受け止める力も避ける力も残されていない。

「移貴さんっっっ！！！」
チンパンジーに動きを封じられている猿飛が、移貴の名を呼び、助けに行こうと必死にもがく。
「移貴さんっっっ！！！！」

「ほなっ……」
パン児の振り上げた剣が、宙で止まる。
「さいならっ」
「……っ！」
振り下ろされる剣に、覚悟を決める移貴。
「第1の舞……“空”っっ！！！」
「……っ！何っ……！？」
――――ビュウウウウウウウウンッッッ！！！――――
剣を振り下ろそうとしたパン児に、横から吹き込んでくる真空波。
「がああああああああああっっっ！！！！」
「なっ……！」
吹き飛ばされていくパン児に、移貴が目を見張る。
「今の技は……」
「猿長ともあろうもんが何ちゅ～ザマやぁっ！」
「……っ！」
聞こえてくる明るい声に、戸惑いの表情を浮かべていた移貴が勢いよく振り返る。
「修行が足りてへんのとちゃうかぁ～？移貴っ！」
「門貴……」

移貴が振り向いた先に立っていたのは、明るい笑みを浮かべ、如意棒を構えた門貴であった。

第１０章　最期の言葉　★3

「門貴さんっ……！！」
門貴の姿に、猿飛も目を輝かせる。
「うっ……ううっ……！あんさんはっ……確かっ……」
門貴の放った風力に少しダメージを受け、膝をつきながら、睨みつけるように門貴を見るパン児。
「よぉーうっ！活きのええチンパンジーっ！こっからは俺が相手になったんでぇっ！」
「クっ……！」
余裕の笑みを浮かべる門貴に、パン児が少し表情をしかめる。
「待っ……！待つんだのぉっ！！」
「……？」
間延びした声に、振り返る門貴。門貴に言い放ったのは粒栗であった。
「そう勝手な振る舞いをすると、マロが合図して村にいるマロの仲間たちに人質である村の連中をこっ……！」
「ほぉーうっ……」
「……っ」
山の上方から聞こえてくる声に、粒栗やパン児たちが一斉に顔を上げる。

「“マロの仲間たち”というのは……この方々ですかぁ？」

「……っ！なっ……！？」
『うっ……ウホっ……ううっ……』
粒栗たちの見上げた先に立っていたのは、ボコボコになった2匹のチンパンジーを容赦なく踏みつけている輝矢であった。その脇には由雉の姿もある。

「“瞬花っ……」
「……っ」
「ううっ……！？」
猿飛の上に乗っているチンパンジーの後方へと現れる桜時。
「終刀”っ……！！」
「ぎゃあああああっ！！！」
「うわっ！」
桜時が村雨丸を振り切り、チンパンジーを吹き飛ばして猿飛を解放する。
「大丈夫かっ？」
「あっはっはいっ」
差し伸べられた桜時の手を、少し戸惑いがちに取る猿飛。

「チっ……！どいつもこいつも役立たずだのぉっ……！」
輝矢に踏まれているチンパンジーと桜時に吹き飛ばされたチンパンジーを見て、粒栗が顔を歪める。
「さてと……」
輝矢がチンパンジーたちから足を下ろし、鋭い瞳を粒栗へと向ける。
「そろそろ本当の合戦と行きましょうか……粒あんさんっ」
「粒栗だよぉ～」
「あっ、そうでしたっけ？」
「おのれっ……！」
由雉と間抜けな会話を繰り広げる輝矢を見ながら、粒栗が強く拳を握り締める。
「やってやるんだのぉぉっ！！お前たちっっっ！！！！」
『ウホっ！！』

――――バァァァァァーーーンッッッ！！！！――――

『グワアアアアアアッッ！！！』

『なっ……！？』

粒栗の合図に、チンパンジーたちが一斉に光を放って、濁った緑色の皮膚に金色の角を持つ鬼へと姿を変えた。移貴と猿飛が驚いた様子で目を見開く。

「うっわぁ～緑鬼のオンパレードじゃんっ……」

「柿のタネで膨らんだお腹を減らすのにはちょうどいいのではないですか？キジ」

「減りすぎちゃうでしょ～明らかに」

輝矢の言葉に不満げな表情を見せながら、由雉が懐から色とりどりの羽根を取り出す。

「アイツらっ……やっぱ鬼人やったんかっ……」

「なぁ～んかここら一帯、支配するために、お前ら利用して猿も蟹もどっちも潰そうとしてたみたいやでぇ～」

呆然と呟いた移貴に、門貴が答える。

「まっ、村の連中は全員、無事やから安心しぃっ！」

「……っ」

明るく笑いかける門貴に、移貴が辛そうに俯いた。

「すまんっ……俺が不甲斐ないせいでっ……」

「反省会は後でじ～っくり付き合ったるわぁっ！」

俯いた移貴の横を通り抜け、門貴がゆっくりと歩を進める。

「アイツを……ぶっ飛ばした後でなぁっ！！」

「ふんっ……くだらんことをっ……」

門貴が如意棒を構えたその先にいるのはパン児。

「調子に乗るんやっ……ないどすえぇぇぇぇぇぇっっ！！！」

――――バァァァァァーーーーンッッッ！！！――――

パン児は怒り狂ったように叫び声をあげ、その姿を黄鬼へと変える。パン児の持っていた剣も体とともに巨大化し、まるで柱のような大きさまでなる。

「……っ」

門貴は表情を鋭くして、如意棒を構えた。

「“瞬花っ……終刀”っっ！！」

「“右翼・裂羽”っ！」

『ギャアアアアッッッ！！！！！』

桜時の村雨丸と、由雉の青い羽根に、激しい叫び声を残して緑鬼が2匹一斉に消えていく。

「ふぅ～っ」

『グワアアアアアッッッ！！！！！』

「げっ……」

一息ついた由雉であったが、まだまだいる多くの緑鬼に、うんざりした表情を見せる。

「いくら雑魚だっていっても多すぎじゃなぁ～いっ？」

「文句言ってる間にとっとと倒せよっ！」

やる気なく言い放つ由雉に、桜時が怒鳴りかける。

「ボク昼間、カニさんたちの傷治したお陰でけっこう疲れてんだけどぉ～」

「だっからそう言ってる間にとっととっ……！」

「グワアアアアッッッ！！！！！」

「……っ！」

「桜時っ……！」

由雉を注意していた桜時の背後へと迫る緑鬼。桜時が顔をしかめ、

由雉が羽根を構える。

「“カニカニスラァァーーっっっシュ”っっっ！！！！！！」

「ギャアアアッッッ！！！！！」

『……っ！』

桜時の背後から桜時へ爪を振り下ろそうとした緑鬼が、見事なまでに縦に真っ二つに切り裂かれて消えていく。その光景に大きく目を見開く桜時と由雉。

「大丈夫かっっ！！？」

「……っ！二花っ」

消え去った緑鬼の後方に立っていたのは、大バサミを構えた二花であった。

「……と、チョキ三郎」

「どうせ俺は姉ちゃんのおまけですよっ……」

桜時の言葉に、二花の後ろにいたチョキ三郎が少し悲しげに俯く。

「何とか間に合ったようやなぁっ！って……」

笑顔を見せていた二花が、急に眉をひそめる。

「誰や？アンタっ」

「だあああああっっっ！！！！」

首をかしげる二花に、思わずコケる桜時。

「ほらっ、ボクらと一緒に白いイヌがいたでしょ～？あれが化けてんのぉ」

「化けてねぇーよっ！」

「ああ～っ！あのイヌかぁ～っ！」

「つーか、認識してねぇーのに助けたのかよっ」

「そんなんノリやんっ？ノリっ」

呆れた表情で立ち上がる桜時に、適当な笑みを向ける二花。

「二花っ……」

「……っ？」
自分の名を呼ぶ声に、二花が振り返る。
「移貴っ」
二花が振り返った先にいたのは、猿飛に支えられ、何とか立ち上がった移貴であった。
「二花……俺っ……」
「……。」
どこか申し訳なさそうに俯く移貴を見て、二花が厳しい表情を見せる。
「このっ……クソメガネがあああっっっ！！！！」
「ぎゃあああああああっっ！！！」
『えええぇぇぇっっ！！！？』
「うっ……移貴さんっっ！！！？」
パン児にヤラれてすでにボロボロの移貴を、二花が寸分の迷いもなく殴り飛ばす。吹き飛ばされていく移貴を見て驚いた表情を見せる桜時、由雉、そして猿飛。
「ううっ……うっ……パン児の攻撃よりきいたっ……」
「こんなこっちゃろーとは思っとったわっ！まんまと鬼なんかの言いなりになりよってっ！！」
「……っ」
真っ赤に膨れ上がった頬を押さえながら起き上がった移貴が、二花の鋭い言葉に辛そうに目を細めた。
「村を預かる猿長ともあろうもんが何やっとんねんっ！！アホっ！ボケっ！マヌケっ！！メガネっ！！」
「まぁまぁ姉ちゃ～んっ」
まだまだ殴り足りないと言わんばかりに怒鳴る二花を、チョキ三郎が後ろから必死に宥める。
「移貴さんだけのせいちゃうねんから、そんな言い方っ……！」
「アンタは黙っときやっ！！チョキ三郎っっ！！」
「……。」

二花とチョキ三郎の会話を聞きながら、力なく目を閉じ、深く深く俯く移貴。
「本当に済まなかっ……」
「なんですぐウチらに言わんかったんやっ！！アホウっっ！！！」
「えっ……？」
謝ろうとした移貴が、思いがけない二花の言葉に戸惑うように顔を上げる。
「すぐウチらに言うてくれればっ！協力し合ってあっちゅー間に鬼どもなんか倒せたやろっっ！！？」
「二花っ……」
「なんですぐ言わへんねんっ……！」
二花がどこか悔しげな表情を見せ、拳を強く握り締める。
「何でも言いやっ……移貴っ……」
まっすぐに移貴を見つめる二花。

「ウチらっ……“仲間”やろっ……？」

「……っ」

二花の問いかけに、移貴がそっと目を細めた。
『……っ』
その2人のやり取りに、桜時や由雉、猿飛とチョキ三郎も笑みをこぼす。
「すまんかった……二花……」
移貴が二花に頭を下げる。
「じゃあ早速言うけどっ！！俺と付き合っ……！！」
「断るっっっ！！！！！」
「ううっ……」
「場は弁えた方がええですよ、移貴さん」
言い終わる前に一瞬で二花に断られ、落ち込んだ様子で俯く移貴

に、猿飛が冷静に声をかける。

『グワアアアアッッッ！！！！！』

『……っ』

唸り声をあげながら、囲むようにして迫ってくる緑鬼たちに、二花や移貴が表情を鋭くする。

「いつまでも座っとう気ぃちゃうやろなぁっ？猿長っ！」

「アホ言いなやっ！！俺はいつでもいけるでっ！蟹長っ！」

二花の問いかけに、移貴が笑みをこぼし、再び棒を手に取って立ち上がる。

「行くでぇっ！猿飛っ！！」

「はいっ！！移貴さんっっ！！」

「暴れるでぇっ！チョキ三郎っっ！！」

「おうっ！！姉ちゃんっっ！！」

４人が緑鬼に向かって一斉に構え、それぞれ緑鬼へと飛び出していく。

「サボってると見せ場取られっぞぉ～？」

「はいはいっ」

二花や移貴たちに触発されるように、桜時と由雉も再び緑鬼たちに向かっていった。

「クっ……！」

二花たちも加わった戦況を見つめながら、表情をしかめる粒栗。

いかに数で勝るとは言え、あの力の差では時間の問題である。

「ええぇ～いっ！パン児は何をやっておるんだのぉっ！？」

粒栗が苛立ちを表に出す。
「もう少しっ……！もう少しで柿之木山をマロのものにするという計画が上手くいくというのにっ……！」
「上手くなどいくはずがないでしょう？」
「……っ？」
声に反応し、粒栗が眉をひそめて振り返る。
「お前はっ……」
「鬼の企んだロクでもない計画は私がぶっ壊すって、相場は決まっているんですよっ」
粒栗の前へと立ったのは、余裕の笑みを浮かべた輝矢であった。
「小癪なっ……」
輝矢を見つめ、粒栗が表情を歪める。
「マロに生意気な口を聞くんじゃないのぉっ！！小娘ぇぇっ！！」

――――バァァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――

天に両手を突き上げ、叫び声をあげた粒栗の体が強い光を放つ。
とやがて粒栗の体が巨大化し始め、破けた服の向こうから見えてくるのは真っ赤な皮膚。尖った頭からは金色の角が1本生え、鋭い牙と爪が勢いよく伸びる。そこに現れたのは赤き鬼であった。
「……。」
赤き鬼を見つめ、表情を鋭くする輝矢。
「マロの爪で切り裂いてやるんだのぉぉぉっ！！！！」
「“月器……」
輝矢がゆっくりと右耳のピアスに手をかける。
「三日月”っ」

――――パァァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――

輝矢がピアスを弾くと、ピアスは巨大化し、曲剣のような三日月

が輝矢の手に納まる。
「グワアアアアッッッ！！！！」
「……っ」
飛びかかってくる粒栗に、三日月を構える輝矢。
「竹取輝矢っ……鬼退治、いたしますっ……！」
輝矢と粒栗の戦いが始まった。

第１０章　最期の言葉　★３（後書き）

次回は戦闘です～

第１０章　最期の言葉　★４（前書き）

昨日、更新できませんでした。
今後は毎日、更新つづけるようにします。

第１０章　最期の言葉　★４

「如意棒・第１の舞っ……“空”っっ！！！」

――――ビュウウウウゥゥウゥゥンッッッ！！！！！――――――

高々と飛び上がった門貴が、真下にいるパン児に向かって真空波を放つ。

「……っだあああああっっっっ！！！！！」

――――――バァァァァァァァァーーンッッッッ！！！！！――――――

「……っ！」

パン児が巨大な剣を地面に向かって叩きつけ、その衝撃で巻き起こった風で門貴の真空波を弾き飛ばした。少し驚きの表情を見せながら、地面へと降り立つ門貴。

「ちっから技やなぁ～」

「……っ」

「なっ……！」

感心していた門貴の方へ、衝風の中から勢いよく攻め込んでくるパン児。図体のわりに素早い動きに、門貴が戸惑いながらも如意棒を突き出す。

――――――――――――――――――っっ！！！！――――――

「クっ……！」

ぶつかり合う門貴の如意棒と、パン児の巨大な剣。パン児の力の

強さに、受け止めている門貴が少し顔を引きつった。
「……っ」
「……っ？」
不敵な笑みをこぼすパン児に、門貴が首をかしげる。
「“鬼妖剣”……」
「何っ……！？」

――――パァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――

パン児の巨大な剣が、光を放って分裂し、無数の小さな剣となって門貴へと飛びかかってくる。
「クっ……！ううぅっ……！！うわあああああっっっ！！！！！」
何本かは如意棒で弾き返す門貴であったが、すべては弾き返せず、小さな剣を無数に喰らって吹き飛ばされる。
「っ痛ってぇぇぇ～～～っ……」
全身の所々に切り傷を負い、苦しげな表情を見せながら起き上がる門貴。
「変わった武器やなぁ～」
「そうでっしゃろぉ……？」
感心したように言う門貴に、怪しげな笑みを向けるパン児。分裂した小さな剣は、また1つの巨大な剣となってパン児の右手へと戻っていく。
「ウチにはこの鬼妖剣があるゆえ……残念やけどぉ、あんさんに万に一つの勝ち目もないどすえぇ～」
「そんなんっ！やってみなわからんやろっ！？」
「……っ」
明るく笑って立ち上がる門貴を見て、パン児が少し表情をしかめる。
「それに俺かて負けられへっ……！」
「“一族の誇り”……が、かかっとるからどすか……？」

「えっ……？」
パン児の問いかけに、目を丸くする門貴。
「“一族の誇り”て……あんさんたちはサルはんもカニはんも、それればっかりや……」
どこか煩わしそうに言うパン児。
「猿蟹合戦？かぁ～っ！くだらへんっ……！一族の誇りのために命まで賭けて力比べどすかぁ～？」
「……。」
門貴は静かな表情で、パン児の言葉を聞いていた。
「何と愚かっ……実にバカげとりますわぁ～」
「……っ」
門貴がハッとしたように目を見開く。
――――“バカげてる”……そう思った……――――
そのパン児の言葉は、かつて門貴の心の中にあったものと、まったく同じ言葉であった。
「まっ、そのバカさを利用するんは、実に楽しかったどすけどなぁ～ひょっひょっひょっひょっ！」
「……。」
パン児の高々とした笑い声を聞きながら、深く俯く門貴。
――――俺は猿蟹合戦なんかどうでもええねんっ……――――
「……そうか……」
――――俺はどいつもコイツもグサボロにできりゃあそれでええんやっ！――――
「俺は……お前やったんやな……」

「はっ？」
俯いたまま話す門貴の言葉に、顔をしかめるパン児。
「その誇りの意味も知らんままっ……“バカげてる”って否定した……」
くだらない誇りのために死んだ兄を、そんな兄を誇った父を、誇りにすべてを賭ける村を人々を、愚かなものだと下に見て、何もかもを否定した。
「けどっ……」
門貴が切ない笑みをこぼす。
「そんなバカげてると思っとった場所でっ……俺は……1番大切な人と出逢ったっ……」
――――勝負やっ！！猿川門貴っっ！！――――
一花と、出逢った。
「だからっ……今の俺にはちゃんとわかるっ……」
門貴がゆっくりと顔を上げ、まっすぐにパン児を見る。
「“カニカニスラァァーーっっっシュ”っっ！！」
「“ウッキーウッキーホップステップジャンピィィーーング”っっっ！！！！」
『ギャアアアアアッッッ！！！！！』
次々と緑鬼を消し去っていく二花と移貴。

「おっしゃっ！もう一息やっ！移貴っ！」
「おうっ！！」

『おおぉぉーいっ！移貴いいっっっ！！！！！猿飛いいいっっ！！』
『……っ？』
聞こえてくる声に、移貴たちが山の頂上の方を見る。

「みんなっ……！」

『村のサルはみんな無事だぁぁぁっっ！！！』
山の頂上からは猿の村のものたちであろう多くのサルが、移貴たちに力強く手を振りながら、柿の木の方へと降りてきていた。そのサルたちの姿に、目を見開く移貴。
「長老さまもこの通りっ！！」
「移貴……」
「……っ！長老っ！」
サルの群れの中から、白髪の老ザルが前へと出てくる。
「移貴……よく耐えてくっ……グボオオオオウっっ！！！ゲハっ！！ゲハァっっ！！！」
「長老さまっ……！！お薬をっ……！！」
「……。」
相変わらず肝心なところで咳き込む長老に、呆れた表情を見せる移貴。
「……っ」
しかし、すぐさま安心したように微笑んだ。

『おおぉぉーいっっ！！蟹長っっ！！！移貴いいっっ！！！！』
『……っ？』
今度は下から聞こえてくる声に、移貴たちが振り返る。

「なっ……！」

山の麓から柿の木へと登ってくるのは、蟹の村に住む多くのカニたち。移貴が驚いた様子で目を見開く。

「事情は蟹長からだいたい聞いたぁぁぁっっっ！！！！」

「大丈夫かぁぁぁぁっっ！！？サルどもぉぉおっっ！！」

「みんなっ……」

酷い合戦を仕掛けた移貴に、傷つけられたはずのカニたちは皆、明るい笑顔を向ける。カニたちの笑顔に、移貴は少し泣きそうな瞳を見せる。

「行くで、移貴っ」

「……っ」

そんな移貴の肩に手を乗せ、力強く微笑みかける二花。

「……ああっ！」

移貴がしっかりと頷く。

『……っ！』

「ググっ……！！」

最後の1匹となった緑鬼に、同時に飛びかかっていく移貴と二花。

“カニカニスラァァァーーっっっシュ”っっっ！！！！！」

“ウッキーウッキーホップステップジャンピィィィーーング”っっっ！！！！」

――――――――――――――――――――っっ！！！！！――――――

「グっ……！ギャアアアッッッ！！！！！」

移貴と二花の攻撃を受け、最後の緑鬼が煙となって消えていく。

「なっ……！何やっ……！これはっ……！」
山の上と下から、一斉に現れたサルやカニたちの姿に、さすがのパン児も圧倒された様子で声を出す。
「こんなっ……！」
「猿蟹合戦には……この山に生きてきたサルとカニのたっくさんの思いが詰まっとうっ……」
――――じゃがな門貴、猿蟹合戦は相手を傷つけるための戦場ではない……――――
――――戦場は戦場やろっっ！！？――――
――――一族の誇りを賭けて蟹長と猿長が拳と拳でぶつかり合うっ！それが猿蟹合戦やろっ？――――
――――門貴、約束しよう。来年の猿蟹合戦も、猿長と蟹長としてここに来るって……――――
「猿蟹合戦は、この山に生きるすべてのサルとカニの生き様そのものやっ……」
門貴が胸を張って、言い放つ。
「この“誇り”っ……そう簡単には折らせへんっっ！！！」
「……っ」
誇らしく笑う門貴に、パン児が再び顔をしかめた。
「そうかぁ……ほんならっ！誇りと一緒に死になはれぇぇっっ！！

！」
「……っ」
勢いよく飛びかかってくるパン児に、門貴が表情を鋭くして如意棒を構えた。
「だあああああっっ！！！」
「……っ！」
パン児が全力で振り下ろした剣から、高々と宙に飛び上がって身を避ける門貴。
「かかったどすなぁっ！」
すぐさま剣を空中にいる門貴へ向けるパン児。
「串刺しになって死になはれっっっ！！！！“鬼妖剣”っっ！！！」
――――バァァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――
パン児の剣が再び分裂し、無数の小さい剣となって、まっすぐに空中にいる門貴へと飛んでいく。
「ひょっひょっひょっ！随分とあっけない最期どしたなぁぁぁっっ！！！！」
自分の勝利を確信し、高々と笑うパン児。
「……っ」
「んっ……？」
空中で如意棒を構える門貴を見て、パン児が眉をひそめる。
「今更何をっ……！」
「如意棒・第２の舞……」
向かってくる小剣に対し、空中で如意棒を振り上げる門貴。
「……“浄”っっ！！！」
――――パァァァァァァァーーーーーンッッッ！！！！――――

「んなぁぁっっ……！！！？」
門貴の八方から巻き起こった風に、パン児の剣が1本残らず叩き落される。目が飛び出そうなほどに大きく驚くパン児。
「何とっ……」
「……っ」
「ううっ……！！」
門貴の力に圧倒されていたパン児の目の前に、門貴が降りてきて如意棒を振り下ろす。
「“鬼妖剣”っっ！！！」
――――――――――――――――――っっっ！！！！――――
叩き落された剣を元の1本の巨剣へと戻して、パン児が慌てて門貴の振り下ろした如意棒を受け止める。
「クっ……！」
ぶつかり合う剣と如意棒。剣にかかる力に、パン児が額から汗を流す。
「……うっ！」
――――――バリィィィィィィィィィィーーーーンッッッ！！！――――
「なっ……！！」
如意棒を受け止めていたパン児の剣が、ヒビが入っていき、脆くあっさりと砕き割れる。
「鬼妖剣がっ……」
砕け散り、地面へと落ちていく剣に、どこか茫然とするパン児。
「お前のんが……先、折れたなっ」

「……っ！」
そんなパン児に、門貴が素早く如意棒を構える。
「如意棒・第1の舞っ……」
「うっ……！！まだっ……！まだ鬼爪がっ……！」
「……“空”っっ！！！」
――――ビュウウウウウゥゥゥゥゥンッッッ！！！！！――――
「グウウッ……！ガアアアアアアッッッ！！！！」
門貴の真空波を直撃し、パン児が全身を切り裂かれ、吹き飛ばされていく。
「ガハアアアアアアアッッッ！！！」
力なく地面に倒れ込むパン児。
「こっ……こんなっ……」
砂となって消えていき始める自分の手を見ながら、パン児が表情を歪める。
「ウチがっ……“誇り”如きにっ……負けるなんてっ……ううっ……」
――――パアアアアアアアーーーーンッッッ！！！！！――――
「……。」
どこか悔しそうにそう言って、砂となって消えていったパン児の姿に、門貴は少し目を細めた。
「門貴いいいっっっ！！！！！」

「門貴さぁぁぁ～～んっっっ！！」

「……っ？」

聞こえてくる名に門貴が振り向く。そこには笑顔で手を振る二花や猿飛の姿。その隣には、笑みを浮かべた移貴の姿もある。

「……っ」

「へっ」

ピースを向ける移貴に、笑顔を見せる門貴。

「おっしゃあああああっっ！！！！勝ったでぇぇぇっっ！！！！！！」

『うおおおおおおおおおおおおっっっ！！！！！』

雄たけびをあげる門貴に、サルたちもカニたちも皆、両手を突き上げた。

第１０章　最期の言葉　★４（後書き）

次回、輝矢ｖｓ粒栗っ！

第１０章　最期の言葉　★5

「“鬼爪”っっ！！！」
「“月器・十六夜”っ」

――――パンッ！パンッ！パンッ！パァァァァンッッッ！！！――――

「クっ……！」
輝矢の十六夜にあっさりと弾き返される鬼爪に、赤鬼・粒栗が唇を噛む。
「パっ……パパパっ……パン児までっ……！」
門貴に倒されたパン児を見て、顔を歪める粒栗。多くの緑鬼たちも桜時や移貴たちに一掃され、残る鬼は粒栗だけとなっていた。
「こっ……！こうなったら一旦退いて、体勢を整えてからもう1度来るんだのぉっ……！！」
粒栗がサルやカニたちに背を向け、逃げ去ろうとする。
「させると思いますかぁ？」
「うっ……！」
そんな粒栗の前へと回り込み、粒栗に冷たい瞳を向ける輝矢。
「これほどのことをして……今更逃げようなどと……」
「まっ……マロは何もやっていないんだのぉぉっっっ！！！！」
「……っ」
叫ぶ粒栗に、輝矢が眉をひそめる。
「人質には手は出しておらんしっ……！カニたちを傷つけたのは、サルたちとパン児だのぉぉぉっっ！！！」
両手を肩ほどまで挙げて、必死に訴える粒栗。
「マロは誰も傷つけていないんだのぉぉぉっっ！！！！」

「いいえっ……」

「……っ！」

すぐさま否定する輝矢に、粒栗が顔をしかめる。

「アナタは……強く踏み躙りました……」

1度俯いた輝矢がゆっくりと顔を上げ、突き刺すように粒栗を見る。

「サルやカニの誇りを……強く……」

「ううっ…！」

責めるように見つめる輝矢に、粒栗が少し後ずさる。

「万死に値します……」

「クっ……！」

粒栗が唇を噛み締め、拳を握り締める。

「逃げる前に、お前だけは殺していこうかのぉおぉおっっ！！！！！！」

そう叫んで、粒栗が輝矢に向かって大口を開く。

「黒焦げになるんだのぉおっっ！！！！！“鬼炎”っっっ！！！！！」

「……。」

口から輝矢に向けて赤々とした激しい炎を放つ粒栗。炎は輝矢に避ける隙も与えず、迫っていく。しかし、輝矢は顔色1つ変えない。

――――バァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――

鬼炎が輝矢を直撃し、輝矢のいた辺り一帯を燃やしていく。
「ほっほっほっほっっ！！！跡形も残らないんだのぉぉぉっっ！！！」
燃え盛る炎を見て、高々と笑う粒栗。
「ほっほっほっ！！ほっ……？」
妙に早く消えていく炎に、粒栗が眉をひそめる。
「なっ……何っ……」
「ふぅ～暑い、暑いっ」
「……っ！まさかっ……！！」
消えていく炎の中から見えてくる人影に、粒栗が目を見開く。
「跡形なら……だいぶ残りましたけどっ？」
「うっ……！！」
左手を突き出し、自分の前に水の壁を張った輝矢が、傷1つなく粒栗に笑いかける。
「さてっ、“月器・三日月”っ」
右手に持っていた十六夜を、三日月へと変える輝矢。
「待っ……待てっっ！！！マロはっっ……！！」
「待ちませんっ」
「ひいっ……！！」
三日月を構え、飛び出してくる輝矢に背を向け、怯えるように逃げる粒栗。
「マロはっ……！！マロはまだっ……！！」
「残念ですが、容赦はしませんっ」
「ううっ……！！」
逃げる粒栗の、すぐ目の前へと現れる輝矢。
「実は私っ、いつもより少し怒っているのでっ」

「ううううっ……！！！」

「三日月っ……」

「……っっ！！！」

輝矢が粒栗へ向け、三日月を振り下ろす。

「グッ……ギャアアアアアッッッ！！！！」

三日月に切り裂かれ、粒栗が砂となって消えていく。

「地獄で赤鬼のバイトでもして下さいっ……」

風に吹かれていく砂に、輝矢はそっと言い放った。

「終わったみたいだなっ」

「ってか、いっつも容赦とかしてたんだぁ～」

「気持ちの問題だろっ？」

粒栗を倒し終えた輝矢の方を見ながら、笑顔をこぼしつつ暢気な会話をする桜時と由雉。

「さっすが俺の輝矢んっっ！！！ラブラブリィィィーーンっっっ！！！！」

「ちょっとぉ～回想シーンのイメージ壊れるからやめてくんないっ

？」
「まったくだっ」
「へぇっ？」
一花との話の中のクールさは欠片もない、いつものアホ門貴に、由雉と桜時が少しうんざりしたように言う。２人の言葉に首をかしげる門貴。
「あっ、そういや移貴ぃ～お前怪我、ユッキーにぃっ」
「猿蟹合戦に参加した者っ！全員、ここへ集まりぃっ！！」
「……っ？」
門貴が移貴に声をかけようとした時、移貴が集まっていたサルたちにそう言い放った。猿飛をはじめ、猿蟹合戦に参加した若いサルたちが次々と移貴の元へ集まっていく。
『……？』
その光景を、戸惑うように見つめる二花たちカニ。
「揃ったかっ！？よしっ！」
二花たちカニの前に、移貴を先頭にしてサルたちがきれいに並ぶ。
『すみませんでしたぁぁぁっっっ！！！！！』
『……っ！』
一斉に頭を下げて謝る移貴たちに、二花たちカニが少し驚く。
「鬼人に脅されとったとはいえっ……俺らはお前らをたくさん傷つけたっ……」
移貴がサルたちを代表し、頭を下げたまま言葉を発する。
「俺たちがやったんはっ……猿蟹合戦を裏切る行為やっ……」

「移貴……」
言葉を続ける移貴を、目を細めて見つめる二花。
「この償いはっ……」
「せやなっ！償ってもらおかっ！」
「えっ……？」
二花の声に、移貴が戸惑うように顔を上げる。
「二っ……」
「明日っからホンマの猿蟹合戦やろっっ！！！！」
「……っ」
二花の笑顔に、移貴が思わず目を見開く。
「みんなで誇り賭けて戦おっっ！！！それが償いやっ！なっ！？猿長っっ！！！」
「二花っ……」
移貴が笑みをこぼす。
「みんなもそれでええやろっ！？」

『おおぉぉーーっっっ！！！！明日っからは負けねぇーぞぉぉっっっ！！サルどもぉっっっ！！』
『そりゃーーこっちのセリフやぁぁぁっっっ！！！！カニどもぉぉぉっっっ！！！！』

『……っ』
盛り上がるサルとカニたちを見て、移貴と二花がさらに笑う。
「負けへんでっ？移貴っ」
「おうっ……でも二花ぁぁぁぁっっっっ！！！！俺、やっぱりお前のことが好っ……！！！！」
「断るっっっっっ！！！！！」
「ううううっ……」

「懲りへんなぁ～移貴さんも」

またしても一瞬で二花に断られ、悲しむ移貴を見て、猿飛がどこか呆れたように呟いた。
「“めでたしめでたし”といったところですかねぇ～」
「うん～」
「そうだな」
月器を元のピアスへと戻し、こちらへとやって来る輝矢の言葉に、由雉と桜時が笑顔で頷く。
「まぁこれでサルもっ……」

「……。」

「……っ」
輝矢が門貴の方を振り向くと、門貴は憂いを帯びた表情で、静かに風に吹かれる柿の木を見上げていた。そんな門貴を見て、輝矢は声をかけるのをやめる。
「んっ……？」
そんな時、由雉が風に吹かれて目の前を横切る、白いものに気づく。
「何だろぉ～？これっ」
その白いものを思わず手に取る由雉。それはとても薄く、小さい花びらのようなものであった。
「ああ、それはっ……」
「……っ」
由雉に答える桜時の言葉に、輝矢はハッとした表情を見せた。

数時間後。柿之木山頂上・“猿の村”。

「かぁ～っ！やぁ～っぱ自分の生まれ故郷は落ち着くなぁ～っ！」
戦いを終え、輝矢たちを別れて1人、村へと戻った門貴は、移貴・猿飛とともに村で最も高い、長老の家の屋根の上へと並んで座っていた。もう間もなく、長かった夜も明けようとしている。
「久しぶりですもんねぇ～3人でここ来るなんてっ。ねぇ？移貴さんっ」
「おうっ……」
「……？移貴さん？」
返って来る元気のない返事に、猿飛が首をかしげて移貴の方を振り向く。
「まだ気にしてるんですかぁ～？カニさんもみんな、許してくれたやないですかぁ～」
「うぅんっ……」
気を遣うように声をかけた猿飛に、またもや冴えない返事を返す移貴。
「何でも1人で抱え込むからやろぉ～」
そんな元気のない移貴に、門貴が声をかける。
「まぁ巻き込むんが嫌で二花に黙っとったんはわかるけどぉ、なんで俺にすぐ言わんかってんっ？」
「……っ」
門貴の言葉に、移貴が少し顔をしかめる。
「俺が来てすぐ言うといてくれれば、俺や輝矢んがすぅ～ぐ何とかしたのにぃ～」
「ボクもそう言ったんですけどねぇ？移貴さんてば、“門貴にだけは言うなぁ～”って」
「どうせ意地張ったんやろぉ～ったく、昔はすぅ～ぐ何でも頼ってきとったくせにっ」
「だからやろっ！？」
「へっ？」

急に声をあげ、立ち上がる移貴に、門貴が目を丸くする。
「俺っ……！俺がっ……！何でもすぐお前に頼ってばっかやったからっ……！」
「移貴？」

「ばっかやったからっ……一花ん時もっ……」

「……っ」
移貴の口から一花の名が出ると、門貴が少し表情を曇らせた。
「俺があん時っ……腕相撲なんてくだらんこと頼まんかったらっ……！お前、一花のこと看取れっ……！」
「看取れんで……良かったんよっ……」
「えっ……？」
俯いたまま微笑む門貴に、移貴が首をかしげる。

「看取ったりなんかしたら……きっと俺、一緒に死んでもた思うから……」

「……っ」

――――門貴っ……！――――

あの笑顔をもし目の前で失ってしまっていたら、きっと耐えられずに死を選んでしまったと思う。一花の死を目にしていないから、まだどこかで生きているのではないかと、またどこかで会えるのではないかと思い、生きていられたのだと思う。

「門貴っ……」
「だから……良かったんよっ……」
「……。」

笑顔で顔を上げる門貴を見て、移貴は少し辛そうに俯いた。
「そんなこと気にせんと、もっとどんどん頼れやぁ～」
「えっ？」
門貴が立ち上がり、移貴の肩を叩く。
「何年来のダチやねんっ？俺らっ」
「……っ」
門貴の言葉に、移貴も笑みをこぼす。
「ああ～でもあん時の約束のバナナ、まだ奢ってもらってへんかったなぁ～」
「へっ？」

――――ったく、しゃーないなぁっ、移貴はぁっ……――――
――――サ～ンキュっ！帰ってきたらバナナ奢っからよぉっ！――――

「そういやぁっ……」
思い出したように言う門貴。移貴も思い返して頷く。
「じゃっ！バナナ１０本、よろしくっ！」
「はぁっ？５本でええやろっ？」
「あっ！もう日が昇りますよっ！門貴さんっ！移貴さんっ！」
長い長い夜が明け、昇った朝日が久々に笑い合う３人を照らした。

第１０章　最期の言葉　★５（後書き）

次回、猿蟹合戦編、最終回です～。

第１０章　最期の言葉　★６

日も昇った柿之木山。柿の木の前。
「……。」
実の生っている柿の木を見上げ、考え込むように立ち尽くしているモンキ。
「……っ」
顔を下に向けたモンキが、小さな手の中にある、小さな１粒の種を見る。

――――これっ……姉ちゃんがアンタに……“最期の言葉”やって……――――

「……。」
一花が門貴に最期に残した柿の種。
「結局……お前の最期の言葉の意味は……わからんかったな……」
門貴が少し微笑んで、また柿の木を見上げる。
「なぁっ……一花っ……」
「やはりここでしたか……」
「……っ？」
麓の方から聞こえてくる声に門貴が振り返る。
「輝矢んっ」
門貴のすぐ後方へとやって来たのは輝矢であった。
「もう行くんかぁ？ほんなら準備をっ……」
「サルっ……」
「へっ？」
輝矢が呼びに来たのかと思い、旅立ちの支度のために猿の村へと戻ろうとした門貴を、輝矢が呼び止める。柿の木の横を通り過ぎたところで、輝矢の方を振り返る門貴。

「柿の花言葉を……知っていますか？」

「花ぁ？柿に花なんてっ……」

「あるのだそうです……」

不思議そうにする門貴に答えながら、輝矢が少し山を登り、柿の木の幹に手を触れる。

「咲いている時は目立たず、散って初めて花が咲いていたのだと気づかれるような白い花が……」

「散って……初めて……」

門貴が考え深げに輝矢の言葉を繰り返す。

「そして……その花言葉は……」

ゆっくりと柿の木を見上げる輝矢。

「“この美しい自然の中に私を埋めよ”……」

「……っ」

輝矢から伝えられる柿の花言葉に、門貴が思わず目を見開く。

「この……美しい自然の中に……私を……埋めよ……？」

「ええ……まぁすべてハチの受け売りですけどっ」

花言葉を繰り返す門貴の元へ、輝矢が歩み寄る。

「だからこの種っ」

「へっ？うわわわっ！ちょっちょっとっ…！」

門貴の手の中から、一花の柿の種を奪い取る輝矢。門貴が焦ったように輝矢に手を伸ばす。

「かっ……！輝矢んっ……！！その種だけはっ……！！」

「この種に込められた思いは、“後生、大事に持ち歩け”ではありません。ハチっ！」

「おぉぉーーうっ！」

「ほいっ」

「だあああああああああっっっ！！！！」
柿の木のすぐ横へと現れた桜時に、勢いよく柿の種を投げる輝矢。
桜時の横には由雉の姿もある。放り投げられる種を見て、門貴が思わず声をあげる。

「よっ！」
柿の種を右手でしっかりと受け取った桜時が、種に左手を向ける。

「おっおいっ！イヌっ！何をっ……！」
「まぁ見ていなさい」
「えっ？」
焦る門貴に、諭すように声をかける輝矢。

「……っ」
ハラハラと門貴が見守る中、桜時の両手が桃色の光を帯びていく。
「“瞬花”っ！！」

――――パァァァァーーーーンッッッ！！！――――

「……っっっ！！！」

桜時の光を受けた柿の種を、桜時が土へと投げ放った途端、柿之木山の柿の木の横にもう1本、たくさんの実を付けた、立派な柿の木が咲き誇った。
その木を見て、門貴が目を見開く。

「……。」

「種を植えれば新しい命が芽吹く……一花がアナタにあの種を託したのは……」

咲いたばかりの柿の木を見上げて立ち尽くす門貴に、輝矢が後ろから声をかける。

「アナタの手で自分を……新しい命へと送り出してほしかったからではないのですか……？」

「……っ！」

――――姉ちゃんがアンタに……“最期の言葉”やって……――――

「一っ……花……」

やっと辿り着いた、最期の言葉。

「ううっ……！ううううっ……！！」

門貴が涙を流し、その場に膝をつく。

「ううっ……！一花っ……！」

「……。」

涙に暮れる門貴を、静かに見守る輝矢。

『……。』

そして、桜時、由雉。

「輝矢んっ……」

「はいっ？」
門貴が少しかすれた声で、輝矢を呼ぶ。
「輝矢んの胸で泣き暮れていいっ？」
「冗談じゃありません」
「……ハハっ……」
あっさり断る輝矢に、いつもはショックを受ける門貴だが、今回は少し笑みをこぼした。
「釣れへんなぁ～……輝矢んはっ……」
そう言いながら、門貴がゆっくりと顔を上げる。

――――今度っ……

顔を上げた門貴の目の前に咲き誇る、柿の木。

――――今度、この木に実がなる時は……きっと笑顔で出逢えるね……
――――

「やっとっ……」
柿の木を見上げ、門貴が笑う。
「やっと逢えたなっ……一花っ……」

――――そうやね……門貴っ……――――

こうして、サルとカニを巻き込んだ戦いは終わった……。門貴と一花の思い出とともに……。

1時間後。“猿の村”入口。
「もう行くのか？」
「そうですよぉ～もう1日くらいゆっくりして行けばええのにぃ～」
旅立ちの支度を整えた輝矢や門貴たちは、移貴や猿飛、蟹の村から駆けつけた二花たちに見送られ、この柿之木山から旅立とうとしていた。
「すまんなぁ、移貴、猿飛っ……この世界にはまだまだ、俺の助けを必要としてる人たちがいっ……」
「別に残っていただいても全然、構いませんよっ？サルっ」
「そんなぁぁ殺生なぁぁぁ～～っっ！！俺を見捨てんといてやぁぁぁ～～っ！！輝矢ぁぁぁ～んっ！」
『……。』
カッコつけようとしたモンキが、輝矢の笑顔の一言に、一瞬にして激しく泣きつく。そのモンキの情けない姿に、呆れた表情を見せる移貴と猿飛。
『ああっ！移貴さぁぁぁぁ～～んっ！！』
『……っ？』
聞こえてくる黄色い声に、移貴やモンキたちが振り向く。
『今日の猿蟹合戦、見に行きますねぇ～っ♪♪』
振り返った先にいるのは、若くて可愛らしい女の子の3人組。移貴にハートを飛ばしながら、手を振っている。
「ああ、おうっ」
『きゃあああああ～～っっ！！“おうっ”って言われちゃったぁぁぁっ！！』

「……っ？」
妙に盛り上がって去っていく3人娘たちに、首をかしげる移貴。
「おっ……おいおいおいっ、移貴っ！今のって……村のアイドル、“ウキウキ猿っ子3人娘”じゃっ……」
モンキが喰らいつくように移貴を見上げる。
「お前っ……！いつの間にっ……！？」
「へぇっ？」
必死に問いかけるモンキに、移貴が首をかしげる。
「移貴さん、猿長になってから妙にモテるんですよぉ～メガネが誠実さアップ～って好評でぇ～」
「何っ……！！？」
猿飛の言葉に、敏感に反応するモンキ。
「やっ……やっぱ村、残ろうかなっ……アハっ」
「どこが純愛一筋なんだよっ」
「これじゃあ一花さんが生きてたところで愛想つかされただろうねぇ～」
下心見え見えの笑みを浮かべるモンキに、ハチとユキジが呆れきった表情で呟く。
「なぁ～っ？ウッキー、今度合コンせぇ～へんっ？」
「はぁっ？」

「……っ！」
移貴に合コンを迫るモンキを見て、二花が背中のハサミに手をかける。

――――バギコォォォォォォォーーーンッッッ！！！――――

「ぐぎゃあああああああっっ！！」
二花の大バサミがモンキの後頭部を攻撃する。
「何すんねんっっ！！この暴力カニ女ぁぁっっ！！」

「姉ちゃんの代わりに殴ったまでやっ」
「ああっ？」
しかめっ面で答える二花に、モンキが首をかしげる。
「あっ、そうやっ！お前に大事な話があってんっ、二花っ」
「えっ……？」
そう言って二花の肩に飛び乗るモンキ。二花が少し裏返った声を出し、頬を赤くする。
「あんなっ……」
「……っ」
緊張したようにゴクリと息を呑む二花。

「お前、ちゃんと移貴のこと、考えたれよっ？」

「はぁっ？」
想定外の内容に、二花が勢いよく顔をしかめる。

「お前みたいな乱暴下品カニ女、移貴みたいな物好き逃したらもう一生、相手おらへんでぇ～？」
「……っ！」
モンキの笑顔に、二花の堪忍袋の緒が切れる。
「アホオオオオウッッッ！！！！！」
「どわあああああああああっっっ！！！！！」
二花の怒鳴り声に、モンキが肩の上から転げ落ちる。
「どおおおっっ！！！痛っつぅぅぅぅ～～～っっ」
転げ落ちた勢いのまま、地面に思い切り頭を打ちつけるモンキ。
「何やねんっ、いきなりぃ～」
「アンタなんかもう知らんわっ！！はんっっ！！」
「ああ～っ？」
頭を押さえて起き上がったモンキが、怒った様子でそっぽを向く二花を見て、首をかしげる。

「何、怒っとんねんっ？アイツっ……」
「当ったりめぇーだろっ」
「ちょ鈍ぅぅ～っ」
わけのわかっていないモンキに、ハチとユキジがまたまた呆れきった様子で呟いた。
「あっ……おいっ、門貴っ！長老がっ」
「……っ」
首をかしげていた門貴が移貴の言葉に振り向くと、村の奥から村人を数人従えて、白髪の老ザル・長老が入口へとやって来た。
「じじいっ」
長老の姿を見て、門貴が笑顔を見せて立ち上がる。
「行くのか……」
「おうっ！」
「うむっ……」
明るく答えるモンキを見て、しみじみと頷く長老。
「どうやらお主っ……グホホホホホウっっ！！！ゲハっっ！！ゲハァっっ！！グフウっ！！フウっ！」
「長老さまっ……！！お薬をっ……！！」
『……。』
咳き込む長老に、薬と水を差し出すサル。その光景に輝矢たちが呆れた表情を見せる。
「あっはぁ～っ！相変わらずやなぁ～っ！長老はっ」
「あんなので相変わらずとか危なくねぇ～かっ？」
「だぁ～い丈夫やってっ！長老、１０年くらい前からあんなんやけど、未だに生きてるしっ」
「それで大丈夫なのかっ……？」
モンキの笑顔に、思わず突っ込みを入れるハチ。
「うっううんっ……うんっ……あっああっ……」
薬を飲んで、呼吸を整えた長老が、改めてモンキを見る。
「どうやら……また、いい“出会い”をしたようじゃな、門貴……」

「……っおうっ！」
長老の言葉に、モンキが大きく笑みをこぼす。
「俺っ……今回は逃げて出て行くんちゃうからっ……」
長老や移貴たちに、モンキが穏やかな笑みを向ける。
「今回はちゃんとっ……旅立っていくんやっ……」
「門貴っ……」
「だからっ……ちゃんと帰って来るっ！」
『……っ』
モンキの笑顔に、移貴や長老、二花たちが皆、笑みを浮かべる。
「ではそろそろ行きましょうか」
「ああっ」
「うんっ」
「おうっ！！」
輝矢の言葉に大きく頷くハチ、ユキジ、そしてモンキ。
「じゃあっ！行ってくるっっっ！！！！」
大きく手を挙げ、輝矢たちとともに山を降りていくモンキ。
「おうっ！行って来いっ！！」
「たまには返ってくるんやでぇっ！？アホザルっっ！！！」
「またねぇ～っ！！門貴さんっっ！！！」
「ありがとぉぉ～～～っっ！！！みなさんっ！お元気でぇぇぇぇぇぇ～～～っっ！！！！」
移貴や二花、猿飛、チョキ三郎が、大きく手を振り、モンキを見送る。やがて2本の柿の木の間を通り、モンキたちは柿之木山を後にした。
「さっ！猿蟹合戦始めよかぁ～っ！！猿長っ！！」
「ああっっ！！蟹長っっ！！」

モンキたちが見えなくなると、移貴と二花は笑い合った。

「怯むなぁぁっっ！！サルの誇りを見せつけろぉぉおっっ！！」
『うおおおおおおおおっっっ！！！！』
移貴の掛け声に、勢いよく山を駆け下りていくサル軍団。

「来たでぇぇっ！！！どんどん暴れぇぇやっっっ！！！！！カニ一族っっ！！！！」
『いえっさあああああああああっっっ！！！！』
二花の掛け声に、勢いよく山を駆け上るカニ軍団。

秋の空広がる、普通の日。今日も柿之木山で、2本となった柿の木の下、猿蟹合戦が始まる……。

第１０章　最期の言葉　★６（後書き）

猿蟹合戦編・完です。
花言葉あたりについては…あまり突っ込まないで下さい…。

次回のお話もよろしくお願いします♪

第１１章　怪盗〝長靴キャット〟参上！　☆１（前書き）

早いもので９０部。１１章、スタートです。

第１１章　怪盗〝長靴キャット〟参上！　☆１

欠けた月の照らす夜。御伽界・南南東のとある街。とある大きな屋敷。

「おおっっ！！」

驚きと喜びの交じる大きな声を出す、金ぴかの着物を着た、偉そうな１匹のネコ。前に差し出された箱の中身を見て、ネコが目を輝かせる。

「街人から巻き上げたものにございます。お代官様っ」

代官ネコにいやらしい笑みを向けるデブネコ。

「越後屋っ……そちも悪よのぉ……」

「お代官様こそっ……」

箱を挟んで笑い合う代官ネコと越後屋ネコ。

『ニャっハッハッハっハッハッハっ！！』

――――パリィィィィィィィーーーンッッッ！！！――――

『ニャっ……？』

高々と笑い上げていた代官ネコと越後屋ネコが、勢いよく割れる部屋の窓ガラスに眉をひそめる。

「なっ……何だニャっ？」

「あれはっ……！！」

「……。」

割れた窓に佇む、１つの影。

『なっ……！〝長靴キャット〟っっっ！！！？』

「ウフっ……」
月明かりに照らされ、仮面を付けた女が微笑んだ。

「だはぁぁぁ～～やぁぁぁ～っと街だぁぁぁ～っっ……」
間延びした情けない声を出すのは、1匹の白いイヌ。ハチである。
「もうダメだっ……もう歩けねぇっ……」
「だから途中で“抱っこしてあげましょうか？”と言いましたのに」
「んなことされるくらいなら歩けなくなった方がマシだぁっ！！」
横にいる輝矢に、わりと元気よく怒鳴り返すハチ。柿之木山を旅立って数日。野宿の続いた輝矢一行であったが、久しぶりに街に辿り着いたのである。
「でもほぉ～んと疲れたよねぇ～可愛いボクにはいい迷惑っ」
「お前は俺の頭の上、乗っとっただけやろがっ…」
モンキの頭の上で、やれやれと言った表情で言い放つユキジに、モンキが下から冷たい視線を送る。
「ん～っと何々っ？“ようこそっ！猫の街・キャングダムへっ！”だって」
「ネコの街っ？」
街の入口にある看板を読んだユキジに、ハチが表情をしかめて聞き返す。
「ネコかぁ～おしかったなぁ～っ！イヌぅぅ～っ！」
「言っとくけど、別に近かねぇーかんなっ。イヌとネコはっ」
「出たぞぉぉぉぉぉぉぉぉぉっっっ！！！！」
『んっ……？』

街の中から聞こえてくる声に、輝矢たちが反応する。
「出た？」
「まさか鬼人かっ！？」
「行ってみましょうか」
輝矢たちが鋭い表情を見せ、足早に街の中へと入っていく。

「出たぞぉぉぉっっ！！またアイツが出たぞぉぉぉっっ！！」
『ザワザワザワっ……』
街の中央で叫んでいる1匹のネコ。ネコの声が聞こえたのか、家の中から次々と人やネコが姿を現す。
「またアイツが出っ……！！！」
「おいっ……！！」
「……っ？」
叫んでいたネコの元へと、駆けつけるハチ。その後から輝矢たちもやって来る。
「イヌっ？」
「出たって何が出たんだっ！？」
眉をひそめるネコに、ハチが勢いよく問いかける。
「そりゃもちろんっ……」
『あああああああああっっっ！！！！』
『……っ？』
一斉に声をあげる街人に、ハチとネコも顔を上げる。

『……っっ！！！』
顔を上げたハチや輝矢たちが、思わず目を見開いた。

「ウフっ……」

月明かりの下、夜空を華麗に舞い、建物と建物の間を軽々と飛び

移る1人の女。仮面で目は隠しているが、赤い口紅の塗られた唇を美しくも怪しげに微笑ませている。猫の耳と尻尾をつけ、真っ赤なボディースーツに長靴を履いた、何やらコスプレのような格好をしていた。

『かっ……“怪盗・長靴キャット”だあああああっっ！！！』

「怪盗っ？」

「長靴……」

「キャット？」

街人の言葉に、一斉に首をかしげる輝矢たち。

「待ちやがれぇぇぇぇっっ！！怪盗・長干しマットぉぉっっ！！」

『んっ……？』

何やら妙に聞き覚えのある怒鳴り声に、輝矢たちが眉をひそめて振り返る。

「待てっつってんだろうがぁぁっっ！！こんちくしょぉぉぉっっ！！」

『ゴっ……ゴンっっっ！！！？』

街の奥から長靴キャットを追いかけるようにして駆け込んでくるゴンの姿に、ハチやモンキが目を見開く。

「んっ？おおっ！竹取っ！そしてペット大勢っ！」

「誰がペット大勢だっ」

駆け込んできながら軽い笑顔で手を挙げるゴンの言葉に、ハチが少し顔を引きつる。

「ちょうど良かったっ！！アイツっ！捕まえんの手伝ってくれっっ！！」

ゴンが屋根の上に立つ長靴キャットを指差す。
「嫌です」
「だあああああああああああっっっ！！！！」
あっさりと断る輝矢に、ゴンが勢いよく転ぶ。
「何故そんな面倒なことを、何の義理もないキツネのためにして差し上げなければならないのです？」
「アイツ、泥棒なんだよっ！！この先ん家の代官ネコから大事な箱を盗んでったんだっ！」
「箱っ……？」
倒れたまま叫ぶゴンの言葉に、ハチが少し眉をひそめる。
「中身が大金でお礼が9割というなら考えて差し上げてもっ……」
「待てぇぇっっ！！！」
「へっ？」
輝矢がゴンに条件を出している最中に、1匹で長靴キャットを追いに飛び出して行ってしまうハチ。
「あっ……！ちょっ……！待って下さいっ！ハチっ！」
ハチが輝矢の制止も聞かずに、近くの家の屋根へと飛び乗り、逃げ去っていく長靴キャットを追っていく。

「待ちやがれぇぇっっ！！長靴キャットぉぉおっっ！！」
「……っ」
追いかけてくるハチの方を振り返り、少し眉をひそめた長靴キャットが走るスピードを速める。
「うっ……！さすがネコっ……！」
ハチも全力で走るが、2人の距離は徐々に広がり始める。
「こうなりゃあっ……！！」

――――ボォォォォォォォォ～～ンッッッ！！！――――

ハチが白い煙に包まれ、桜時の姿となる。
「“瞬花”っ！」
桜時が、長靴キャットが次に飛び移ろうとしている家の屋根に両手を伸ばした。
――――パァァァァァァァーーーンッッッ！！！！――――
「えっ？」
長靴キャットが屋根に飛び移った途端、その屋根が桜の花びらとなる。
「きゃあああああああっっっ！！！！！」
総崩れしていく足元に、勢いよく落下していく長靴キャット。
「……っ！しまったっ……！」
その時、長靴キャットの持っていた箱が、長靴キャットの手からこぼれ落ちる。
「……っ！あれかっ……！」
長靴キャットの手離した箱を、屋根の上から飛び降り、全力疾走して見事キャッチする桜時。
「とりあえずこの箱をっ……」
「させないわっ……」
「何っ……！？」
桜時がゴンたちの所へ戻ろうと向きを帰るが、その時、背後から聞こえてくる声に慌てて振り返る。
「ウフっ……」
「クっ……！」
振り返ったすぐ先に立っているのは、余裕で微笑む長靴キャット。
先ほどの落下からは抜け出したようである。

「クソっ……！」
桜時がしっかりと箱を抱え、その場から全力で走り去る。

「……っ“手招き”っ」
笑みを浮かべたまま、飛び上がる桜時に向かって左手を手招きさせる長靴キャット。

「ふぇっ？」
走っていた桜時の体が、突然、空中に浮く。
「なっ……何っ……どえええええっっっ！！！？」
体が宙に浮いたまま、何かの力に引っ張られるように、長靴キャットの元へと引き寄せられていく桜時。
「ぐわあああああああああああっっっ！！！！！」

「おいでっ」

「げっ……！！」
引き寄せられていく桜時を迎え入れようと、大きく両手を広げて微笑む長靴キャット。その受け入れ態勢に、桜時が顔を引きつる。
「ぎゃあああっっ！！！無理無理無理っ！１ｍっ！止まれっ！止まれっ！」
「ウフっ」
長靴キャットの引力に逆らおうと必死にもがく桜時を見て、長靴キャットがさらに微笑む。
「うっぎゃあああああああああああああっっっ！！！！！」

――――パシィィィィィィィッッッ！！！！！――――

「……っ」
「ふぇっ？」

空中で急に止まる桜時の体に、長靴キャットが眉をひそめ、桜時が目を丸くする。

「私のハチに、これ以上近づかないでもらえます？」

「輝……矢っ……」

引き寄せられていた桜時の腕を左手で掴み止め、余裕の笑顔を見せた輝矢が、右手に構えた三日月の矛先を長靴キャットへと向けた。

「ってか俺の半径１ｍ以内に近づくな且つ俺に触るんじゃねぇーって何度も何度もっ……！！」

「怖い思いをさせてすみませんでしたねぇ～ハチっ。あんな怪盗、私が瞬殺してあげますからねぇ～」

「人の話を聞けっ！！ってか瞬殺はやり過ぎだろっっ！！？」

笑顔を向ける輝矢に、桜時が突っ込みまくる。

「おおぉぉ～～いっっ！！！竹取ぃぃぃぃっっ！！」

「輝矢ぁぁぁぁぁぁ～～～んっっ！！！」

『……っ』

こちらへとやって来るゴンやモンキたちの声が聞こえ、長靴キャットがさらに眉をひそめた。

「さぁ、観念していただきましょうか。怪盗さん」

「……ウフっ」

「……っ？」

危機的状況にあるというのに怪しげに微笑む長靴キャットに、輝矢が眉をひそめる。

「いいわっ……」

『……っ！』

長靴キャットがそう呟くと、すぐさまその場から姿を消し、一瞬にして輝矢と桜時の目の前へと現れる。あまりに速いその動きに驚

き、戸惑うように固まってしまう輝矢たち。

「今日は私の負けにしておいてあげる！チュっ」

「ういっっっ！！！！？」

「んなっ……！！」

長靴キャットが怪しく微笑みかけ、桜時の額にキスをする。青ざめる桜時と、顔を歪める輝矢。

「また会いましょっ！ワンちゃんっ」

「待っ……！」

「……っ」

高々と飛び上がった長靴キャットが、追いかけようと足を踏み出した輝矢の方へ、懐から取り出したボールのようなものを投げた。

――――ボォォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！！――――

「うっ……！」

地面に当たったボールから大量の煙が発生し、輝矢が思わず手で顔を覆う。

「あっ……」

煙が収まった時、そこに長靴キャットの姿はなかった。

「どこにっ……？……っ」

輝矢が前の道へと駆け出し、すぐ左にある角を曲がる。

――――ガッツゥゥゥゥゥゥゥゥーーーーンッッッ！！！――――

「痛っ！」

「きゃっ！」
勢いよく角を曲がった輝矢が、向こうからやって来た人物と正面衝突し、ぶつかった顔面を痛そうに抑える。
「すっ……すみませんっ……！」
「ああっ、いえっ、こちらこっ……。……っ」
「……？」
輝矢と衝突した勢いで地面へと腰をついていたのは、柔らかそうな長い茶色の髪に、大きな金色の瞳をした、１５，１６歳くらいの愛らしい少女であった。眉をひそめる輝矢に、少女が首をかしげる。
「あのっ……どうかしました……？」
「あっ、いえっ」

「おおぉぉぉぉ～～～いっ！桜時ぃぃぃぃ～～～っ！」

「……っ」
後方から聞こえてくる声に振り返る輝矢。振り返った先ではモンキとユキジが、道端に倒れ込んでいる桜時の顔を覗き込んでいた。
「ぐっ……ぐぷっ……」
「あかんっ……気絶しとうっ」
「はぁっ……デコキッスくらいで情けない……」
白目剥いて気絶している桜時の姿を見て、深々と肩を落とすモンキとユキジ。
「まぁ箱は取り返せたみたいだなぁ～っ」
ゴンが桜時の抱えていた箱を持ち上げる。
「大金ですねっ」
「どわあああああっ！！！」
すぐ横に現れる輝矢に、驚いたように声をあげるゴン。
「お礼は９割ですよ？」
「わぁってるよっ……相変わらず金に汚いヤツだなぁ～そんなんじゃロクな大人になれねぇーぞっ」

輝矢にブツクサと文句を言いながら、ゴンがゆっくりと箱の蓋を開ける。

『おおっ！？おおおおぉぉぉっっ……！！おっ……おっ……？……。』

開いていく箱の蓋に目を輝かせていた輝矢とゴンの表情が、徐々に曇っていく。

「かつお……節っ……？」

開いた蓋の向こうには、箱一杯に詰まったかつお節の山。

「おおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっっっ！！！！！」

そこへ先ほどの代官ネコがやって来る。

「これじゃっ！これっ！街人から巻き上げた、わしの大好物のかつおぶっ……！」

『じとぉぉぉぉぉぉ～～～っっ……』

「うっ……！」

ゴンから箱を取り、嬉しそうな笑みを浮かべた代官ネコに、集まってきていた街人たちの冷たい視線が注がれる。その視線に顔を引きつる代官ネコ。

「ニャっ……ニャハハっ……ニャハっ……！」

「悪代官めぇぇぇぇぇっっ！！！！！」

「捕まえろぉぉぉぉぉっ！！」

「ふにゃあああああああああっっっ！！！！！」

怒った街人たちによりお縄になる代官ネコ。

「何だったんです……？一体……」

「さぁなっ……」

「ねぇ～これ、どうするぅ～？」
呆然とする輝矢とゴンに、気絶した桜時を指差し、ユキジが問いかけた。

第11章　怪盗〝長靴キャット〟参上！　☆1（後書き）

ご感想、お待ちしておりまぁ～す。

第11章　怪盗“長靴キャット”参上！　☆2

翌朝。

「ふぎゃあああああっっ！！やめろぉぉぉおっっ！！長靴キャットおおっっ！！」

勢いよく飛び起きる、ハチ。

「おっ……？」

目の前に広がる部屋の景色に、ハチが少し目を丸くする。そこはベッドの上。どうやらハチはこのベッドの上で眠り、夢に魘されていたようである。

「あれぇ？俺、いつの間にベッドに……」

「やぁ～っと起きたかっ！アホイヌっ！」

「へっ？」

聞きなれた声にハチが振り向くと、部屋のソファーの上にモンキが座っていた。

「気分はどうですか？ハチ」

「輝矢っ……ユキジっ……ゴンまでっ」

ベッドの横には優しく微笑む輝矢の姿もあり、すぐ横の机にはユキジが、モンキの隣にはゴンが座っていた。

「俺……なんでっ……」

「覚えていませんか？怪盗におでこキッスされて気絶したんですよっ」

「でっ……！」

どこか引きつった笑みで話す輝矢に、ハチがすべてを思い出す。

「そうだったっ……」

思い出した途端、また青ざめて俯くハチ。

「おでこキッスした上に“また会いましょうねっ！ワンちゃん”だなんて……」

――――バキバキガッシャァーーーンッッッ！！！！――――

「ひぃっ！」

輝矢がユキジの座っている机に上にあった電灯を握り潰す。

「今度、会ったらただでは済ませませんっ……長靴キャットっ」

「……。」

殺意剥き出しの輝矢を見て、怯えつつも呆れたように固まるハチ。

「ちょっと同情すんなぁ～長干しマット」

「長靴キャットやてぇ～俺も怪盗姉ちゃんにキッスしてもらいたかったなぁ～」

そんな輝矢を見ながら、暢気に言葉を交わすモンキとゴン。

「あっ、お連れのイヌさん、お目覚めになられたんですか？」

「へっ？」

部屋の扉が開くとともに聞こえてきた可愛らしい声に、ハチが振り向く。

「おはようございます」

そこへ入ってきたのは、１匹の茶色いネコ。ネコは普通に人語を話し、ハチに穏やかな笑顔を向ける。

「えっと……誰っ？」

「……っ」

――――ボォォォォォ～～～ンッッッ！！！！！！――――

眉をひそめて見つめるハチに、ネコが少し笑みをこぼすと、ネコの体を白い煙が包んでいく。

「スズと申します」

次の瞬間、煙の中から現れたのは、何とも愛らしい少女であった。

昨日、輝矢が長靴キャットを追っていた時にぶつかった、あの少女である。

「スッズちゃんっ、かわゆぅぅぅ～～いっっ！！」

「え～っとアホは放っておいて、ここはどこで、何でアンタと知り合いに？」
スズにメロメロしているモンキは見なかったことにして、スズに問いかけるハチ。
「昨日、私とぶつかったことが縁で、スズさんのお家に泊めていただいたんです」
「へぇ～」
輝矢の説明にやっと状況を理解するハチ。
「正確には私が住み込みで働かせてもらっているお屋敷の客間なんですけど……」
輝矢の説明に、スズが遠慮がちな笑みを浮かべながら付け加える。
確かにその部屋は高そうな絵などが飾られており、高級感漂う部屋であった。
「あっ、朝食を作ったので、どうぞ召し上がって下さい」
「うおおおっっ！！飯ぃぃぃっっっ！！！」
スズが部屋へと朝食を運び込み、テーブルの上へ丁寧に並べていく。すべてを並べきる前にとっとと食べ始めてしまうモンキ。ハチやユキジもベッドからテーブルの方へと向かう。
「スズちゃんの手料理、めっちゃ美味いわぁっ！！」
「どうもっ」
モンキの言葉に、笑顔を見せるスズ。
「このままもう俺の嫁さんになっ……！」
「この屋敷で働いていると仰っていましたが、シェフとかですか？」
プロポーズしようとするモンキの言葉を遮って、輝矢がスズに問いかける。
「いえっ、ただのメイドです」
スズが笑顔で答える。
「ウチは先祖代々、この屋敷の御主人に仕えさせていただいておりまして」
「へぇ～」

「そういやぁスズさん」
「はいっ？」
朝食を食べながら、ハチがスズを呼ぶ。
「長靴キャットって、随分と有名みたいだったけど、一体どういうヤツなんだぁ？」
「ほぉぉぉぉぉ～～～うっ……気になるのですか……？」
「えっ……！？いっいやっ……！ってってか普っ通に気になるとこだろっ！！？」
鋭く問いかける輝矢に、ハチが少し焦りながら答える。
「長靴キャットは、３ヶ月ほど前から、この街を騒がせている怪盗です」
「怪盗って、一体何盗んだわけぇ～？」
「盗んだものは……えっと、冷蔵庫の中食い荒らすドブネズミとか間違って輸入されちゃったニラとか……」
『はっ……？』
スズの言葉に、表情をしかめるハチたち。
「後、悪い人たちが街人から悪どく巻き上げたものとかっ。その物は後で街人に返してくれるんですよっ」
「フツーにいいヤツじゃんっ……」
「現代のネズミ小僧だねぇ～」
聞かされる長靴キャットの話に、どこか間の抜けた様子で呟くハチとユキジ。
「そういやぁ～昨日のかつお節もあの悪代官ネコが悪どく巻き上げたもんだったらしいなぁ」
「あっはい。かつお節は無事、街人に返されたそうです」
ゴンの言葉に、スズが笑顔を見せる。

「許せませんね……長靴キャット……」
「ひぃやぁっ！どう考えても私情っ！」
どう考えてもいい人な長靴キャットに憎悪を燃やす輝矢。そんな輝矢にモンキが思わず突っ込みを入れる。
「んっ？でも何でゴンが怪盗を追ってたんだっ？」
思い出したように眉をひそめたハチがゴンに問いかける。
「そうですよ。問題起こしすぎて、窃盗課に異動にでもなったんですか？」
「アホっ！オトポリには鬼人課しかねぇーよっ！」
問いかけた輝矢に、しかめっ面を向けるゴン。
「俺はこの街に出た鬼人の正体がアイツじゃねぇーかって噂を聞きつけたからだなぁっ……！」
「鬼人っ……？」
ゴンの言葉に輝矢たちが眉をひそめる。
「この街に鬼人が出たのですか？」
「あっ？何だぁ？お前ら、それ聞いたからこの街に来たんじゃねぇーのかっ？」
輝矢の問いかけに、少し驚いた顔を見せるゴン。
「出たんだとよっ。3日前の夜、この街1番の資産家の屋敷に。資産家の息子が襲われて、怪我人も出てる」
「……っ」
ゴンの話に少し考え込むように俯く輝矢。
「スズさん、長靴キャットが鬼人かも知れないという噂があるのは本当なのですか？」
「あっ……はい。鬼人が出てから……皆、急に長靴キャットが鬼じゃないかって言い出して……」
どこか浮かない表情で答えるスズ。
「私は……彼女は鬼なんかじゃないって思うんですけど……」

「確かにっ……俺もアイツが鬼人だとは思えなかったなぁ～」
「まぁキっスまでした仲ですからねぇ」
「だっからいちいちそれを言うなよっっ！！！」
話を蒸し返す輝矢に、ムキになって怒鳴り返すハチ。
「でっ、どうすんのっ？輝矢っ」
「そうですね……」
ユキジの問いかけに、輝矢が表情を鋭くする。
「とりあえずその街1番の資産家の屋敷とやらに行ってみますか……」
「そうだなっ」
輝矢の言葉に、ハチが気合のこもった返事をする。

「あっ……あのっ……」
『んっ？』
聞こえてくる遠慮がちなスズの小さな声に、輝矢たちが振り返る。
「どうかしましたか？スズさん」
「ここっ……なんですけどっ……」
『へっ？』
スズの小さな声に、輝矢たちが耳を傾ける。
「あっ……そのっ……ここ……なんです……その屋敷っ……」
もう1度、口を開くスズ。

「ここが……街1番の資産家・“招木家”のお屋敷……です」
『へっ……？』
スズの言葉に、皆が目を丸くした。

改めて、キャングダム1の資産家・招木家の屋敷。1階・玄関ホール。
「いっやぁ～灯台下暗しってのはこのことだよなぁ～」
「っつーか何でゴンが知らねぇーんだよっ。普通、被害者んトコに聞き込みくらい行くだろっ」
「昨日街に着いた途端、あの代官ネコに呼び止められて怪盗追ってたもんだからよぉ」
輝矢たちが泊まらせてもらった、スズが住み込みで働いているというこの屋敷こそが鬼人の出た招木家であることを知った輝矢たちは、聞き込みのため朝食を食べ終えると早速、客間を出た。
「お待たせしましたっ……」
『……っ？』
そこへメイド服に着替えたスズがやって来る。
「うおおぉぉ～～っっ！！！スズちゃんっ！萌えぇぇぇぇ～～っっっ！！」
「屋敷内をご案内させていただきます」
萌えているモンキたちにスズが笑顔を向ける。
「仕事がありますので、あまり長くはお付き合いできませんが」
「構いませんよ。というか、その鬼人に襲われたというここの息子さんにお話が聞ければっ」
「ああ、それですかっ……」
「……？」
表情を曇らせるスズに、輝矢が首をかしげる。
「お出かけ中とかですか？」
「いえっ……いらっしゃるにはいらっしゃるのですが……」
気難しげに首を捻るスズ。
「まともにお話して下さるかどうか……」
『はっ？』

『キャアアアアアアアアッッッ！！！！』

『……っ！』

スズの言葉に首をかしげていた輝矢たちが、聞こえてくる悲鳴に表情を鋭くする。

「何だっ！？鬼人かっ！！？」

――――――プシュウウウウゥゥゥゥ～～～ッッッ！！！！！――――――

「のわあああああああああああっっっ！！！！！」

「ゴンっ！！？」

振り返ったゴンが、強い勢いでどこからともなく発射されて来た水を顔面に喰らい、後方に倒れ込む。慌てて倒れたゴンに駆け寄るハチ。

「……って、水っ？」

「うううっ……」

顔面水浸しになっているゴンを見て、ハチが首をかしげる。

「ハッハッハっ！どうだっ！俺の“スーパーハイパージェッター水鉄砲”の威力はっ！！」

『……っ』

玄関ホールに高々と響き渡る声に、輝矢たちが顔を上げる。

「俺の名はっ……！“怪盗・黒猫ヤマァァァーート”だっ！！！」

『……。』

そう言い放ち、シャンデリアの上から飛び降りてきたのは、黒い

マントを翻した、黒髪に紫色の瞳の、まだあどけなさを残す顔立ちをした青年であった。飛び降りてきた怪盗の青年を見て、呆れたように固まる輝矢たち。

「大和様……またっ……」

「……？様ってもしかしてっ……」

頭を抱えるスズに、輝矢が引きつった表情を向ける。

「はいっ……この招木家のご子息、招木大和様にあられます……」

『げっ！？あれがっ！？』

スズの言葉にハチ、モンキ、ユキジが顔を引きつる。

「おいっ！スズっ！何を言っているっ！今の俺は“怪盗・黒猫ヤマアート”だって言っているだろうがっ！！」

「はぁ……」

強く言う大和に、スズが少し呆れながら頷く。

「それにしてもっ……すげぇー惨状っ……」

ハチが長い廊下に途切れることなく倒れている、顔面水浸しになっている使用人の数々と見ながら、少し唖然とした表情で呟く。すべて大和の仕業であろう。

「俺様の“スーパーハイパージェッター水鉄砲”にかかればざぁーっとこんなもんよっ！」

「ただのバカですね」

「はんっ！あ～ゆ～世間知らずのガキにゃあ、俺がいっちょ教育っちゅーもん、施したるわいっ！」

――――ボォォォォォォ～～～ンッッッ！！！！！――――

呆れ果てた様子の輝矢の横から、モンキが人化して大和の方へと

飛び出していく。
「……っ！水鉄砲っ！！」
「喰らうかいっ！！」
向かってくる門貴に水鉄砲を撃つ大和だが、門貴が軽々と飛んでくる水飛沫をかわす。
「そんなちゃっちい攻撃が俺に通じるわけなっ……！」
「あっ、キレイなお姉さんっ」
「えっ！！？どこどこっ！！？」

――――プシュウウウゥゥゥ～～～ッッッ！！！！！――――

「どわぎゃあああああっっっ！！！！！」
大和の指差した方をあっさり振り向き、キレイなお姉さんを探す門貴の顔面に、容赦なく水鉄砲が降り注いだ。水を喰らった門貴が後方へ倒れ込む。

「必殺・“猫騙し”っ」
「おおぉぉ～～～っ」
「ってか何で門貴が女好きだってわかったんだろぉ～？」
「顔に書いてあったんじゃないですか？」
得意げにポーズを決める大和に、感心するハチと、暢気に言葉を交わすユキジと輝矢。
「やっ……やややや大和様っ……！いい加減にっ……！」
「うっせっ！トロスズっ！」
「きゃっ！」
止めようと勇気を振り絞って声をあげたスズに、大和がすぐさま水鉄砲を向けた。スズの顔面に水がかかる。
「つっ……冷たっ……」
「やぁぁ～～っぱとっれぇなぁ～～っ！！ハッハッハッハっ！」

「おいっ！いい加減にしろよっ！！クソガキっっ！！」
「……っ」
水浸しになったスズを見て楽しげに笑う大和、にハチが怒鳴り声をあげると、大和が鋭くハチを見た。
「次はイヌかっ！？」
「うげっ……！」

――――プシュウウウウゥゥ～～～ッッッ！！！！――――

大和がハチへ水鉄砲を撃つ。

――――ピタっっ……！！！！――――

「えっ？」
「……っ」
ハチの目の前で止まり、塊となる水に、大和とハチが目を丸くする。
「なっ……」

「あんまり悪さが過ぎると……水浸しを越えて溺死させますよ……？」

ハチの前に右手を突き出し、水鉄砲から放たれた水を止めて、大和に鋭い笑みを向ける輝矢。
「大和お坊ちゃまっ……」

――――ピュウウウゥゥゥーーンッッッ！！！！！！――――

「……っ！うわわっ！！」
輝矢が指を曲げるとともに、大和の方へと戻ってくる水の塊。大

和が横へ飛ぶようにして、慌てて避ける。
「さすが水力使いぃ～っ」
「っつーかあんなマネして鬼人の話聞けなくなったらどうすんだよっっ！！！」
「それに代えてもハチを水浸しにするわけにはいきませんよぉ」
感心したような声を出すユキジと、怒鳴るように突っ込みを入れるハチ。そんなハチに輝矢がシレっと答える。
「すっ……すげぇっ……」
『へっ？』
床に腰をついたまま目を輝かせる大和に、輝矢やハチたちが首をかしげる。
「大和様っ」
『……っ？』
玄関ホールに響き渡る声に、輝矢や大和が振り向く。
「ペルシヤっ」
そこへ現れたのは黒スーツを着た、白髪・ツリ目の背の高い男であった。大和が男の名を呼ぶ。
「お止め下さい、大和様」
「いぃやぁだぁねっ！」
「これ以上、お戯れが過ぎますと…私も旦那様に報告せざるを得なくなりますが……？」
「うっ……！」
ペルシヤの鋭い言葉に、大和が表情をしかめる。
「わっ……！わぁったよっ！！」

「ではお部屋にお戻り下さい」
「へ～へ～」
ペルシヤに笑顔の圧迫を受け、大和が大人しく2階へと続く階段の方へと去っていく。
「失礼いたしました」
「あっ……はぁっ……」
輝矢たちに深々と頭を下げて、大和の後を追うように階段を昇っていくペルシヤ。
「スズさん、今のは？」
「えっ？あっああっ……執事のペルシヤさんですっ」
ハンカチで顔を拭いていたスズが、慌てて輝矢の問いかけに答える。
「まだお若いのにとても優秀な方で……旦那様の信頼も厚いせいか大和様も頭が上がらなくて……」
「なるほどっ……」
去っていくペルシヤの背中を見つめながら、輝矢がそっと眉をひそめた。

第１１章　怪盗“長靴キャット”参上！　☆３

数分後。大和の部屋。
「だっからとっとと鬼人が出た時のこと教えろっつってんだろーがっっ！！このガキャあっっ！！！」
「だぁ～れがお前みたいな荒れくれポリスなんかに話すかよっ！！」
部屋の中から聞こえてくる激しい怒鳴り合い。
「とっとと出てってくんねっっ？アンタの怒鳴り声で耳が潰れる」
「んだとぉおおおおおっっっ！！！！？」
『確かにっ……』
怒りに震えるゴンの後ろで、頷きながら耳を塞いでいる輝矢たち。
鬼人の話を聞こうと大和の部屋にやって来たものの、大和はまったくゴンを相手にしなかった。
「こら苦戦しそうやなぁ～昼飯でも食い行ってこよかぁ～？」
「はぁっ……」
「……？輝矢？」
呆れたように一息ついて立ち上がり、大和の方へと歩いていく輝矢。そんな輝矢をハチが不思議そうに見る。
「わがまま坊ちゃん」
「んなっ……！何だよっ！？」
目の前に立った輝矢を、大和がしかめっ面で見つめる。
「ほいっ」

――――ポワァァァァァァ～～～ンッッ！！――――

輝矢が右手から小さな水の玉を作り出す。
「ほいっ」

左手からも水の玉を作り、お手玉のように水の玉を動かしていく輝矢。
「アホかっ！なぁ～～にこんな時に水芸やってっ……！！」
「すっげカッケぇぇぇぇぇっっ！！！」
「はぁっ！？」
目を輝かせて水の玉を見つめる大和に、ゴンが表情をしかめる。
「さっきから気になってたけど何もんだぁぁっっ！！？お前っ！！
“水の申し子・ウォータン”かぁっ！？」
「いえ、退治屋です」
よくわからない大和の推測をあっさりと否定する輝矢。
「たっ……たたたたたた退治屋って…」
肩と声を震わせる大和。
「またこれっ、カッケぇぇぇぇぇぇっっっ！！！！！」
「だあああああっ！」
興奮したように叫ぶ大和に、ゴンが思わずズッコケる。
「退治屋って鬼倒すっつーあれだろっ！？いいよな～！俺、何かそういうヒーロー的なもん、好きでさっ！」
「ええ、そういうわけなんで鬼人に襲われた時のこと、教えていただけます？」
「わかったぁぁぁぁぁっっっ！！！！」
輝矢の言葉に、元気よく返事をする大和。
「見事、手なずけたねぇ～」
「さっすが輝矢ぁぁぁぁぁ～～～んっっ！！！」
「小動物の扱いがわかってやがるなっ」
「俺はあんな単純じゃねぇーぞっ」
見事、大和に心を開かせる輝矢に、ハチたちがそれぞれの反応を示す。
「っつっってもあんま覚えてねぇーんだよなぁ～3日前の夜中、屋敷への帰り道に急にでっけぇ鬼が現れてぇ」
考え込むように下を向きながら、話を始める大和。

「必死に逃げた後は、駆けつけた屋敷のヤツらに安全な場所に隠されちまったからさぁ～」
「アナタを発見できずに、鬼人は諦めて去ったというわけですか？」
「いやぁ～っ？何か急に暴れんの止めて去ってったって使用人は言ってたけどっ」
「急にっ……？」
大和の言葉に眉をひそめる輝矢。
「っつーか何でんな夜中に屋敷の外に居たんだよっ？」
「いっやぁ～街に長靴キャットが出たって聞いたからさぁっ！」
『長靴キャットおぉおぉおぉ～～～っっ？？』
笑顔で答える大和に、ハチやゴンが顔をしかめる。
「長靴キャットを見るためだけにかぁ～？」
「当ったり前よっ！！何せ、俺の憧れは“怪盗・長靴キャット”だからなっ！」
どこか誇らしげに言う大和。そういえば先ほども怪盗の格好をして悪戯をしていたが、長靴キャットに影響されたのだろうか。
「憧れ？鬼人と疑われている女怪盗がですか？」
「長靴キャットは鬼人なんかじゃねぇーよっ！！」
「……？」
強い意志を持って言い放つ大和に、輝矢が少し目を丸くする。
「どうしてそう言い切れるんです？」
「彼女はなぁっ！３ヶ月前っ！川で溺れそうになってた俺を颯爽と助けてくれたんだよっ！」
「川で溺れた？ダサっ」
「しゃーねぇーだろっ！！ネコは水が苦手なんだからよっ！！」
「じゃあ人に向けんなよなっ……」
小バカにしたように声を出すハチに、大和が少しムキになって言い返す。その大和の言葉に、呆れたように突っ込みを入れるハチ。
「鬼人なら狙ってた俺を助けるはずないだろっ？だからっ！彼女は鬼人じゃないっ！」

「単純ですねぇ……」
簡単な思考回路の大和に、輝矢が少し呆れた表情を見せる。
「3ヶ月前っつーと、ちょうど街に長靴キャットが出始めた頃だなっ」
「……っ」
ゴンがふと漏らした言葉に、輝矢がハッとしたような表情を見せる。
「もしかしてっ……」

――――パリィィィィィィーーーンッッッ!!!!!――――

『……っ！』
外から飛んで来た2つのカードのような何かが、窓ガラスを割って部屋の中に飛び込んでくる。
「うわっ！」
飛んで来たカードの1つを白刃取りで止めるハチ。
「……っ」
「ぎゃあああああああああああああああああっっっ!!!!」
もう1枚のカードが飛んで来ていた輝矢が、目の前にモンキを突き出す。飛んで来たカードがモンキの額に突き刺さって止まる。
「ううううっ……さすがに痛いでっ……輝矢んっ……」
「ええ～何々っ？」
「ぎゃあああっっ!!」
血の流れるモンキの額から、容赦なくカードを抜いてその表面を読む輝矢。
「“今夜、昨日の借りを返したく、参上いたします。怪盗・長靴キャット”」
『長靴キャットっっ!!?』
カードの内容を読み上げる輝矢に、ゴンと大和が驚いた様子でカードを覗き込む。

「桜時の方には何て書いてあんのぉ～？」
「えっ？えぇ～っとっ」
ユキジに聞かれ、ハチがカードの表面を見る。
「“今夜、いただきにあがります。怪盗・長靴キャット”おぉぉぉ～～っっっ！！？」
読みながら青ざめていくハチ。
「なるほどっ。竹取に借りを返す＝ハチ公を盗むってわけか」
「全然、納得いかねぇーんだけどっっ！！？」
頷くゴンにハチが突っ込む。
「臨むところですっ……怪盗・長靴キャットっ……」
輝矢が冷たい笑みを浮かべ、手に持っていた長靴キャットのカードを握りつぶす。
「返り討ちにしてくれますっ……」

「怪盗・長靴キャットがっ！？」
「ええっ、今夜、ハチを賭けて勝負をすることになりました」
驚いた様子で問いかけたスズに、輝矢がさらりと答える。仕事を終え、昼休憩に入っていたスズの元へ、輝矢が報告に訪れたのであった。
「あっ……でもっ……鬼人の方はっ……」
「キツネたちに見張らせますので大丈夫ですよ。あの坊ちゃんには私の傍に付かせますし」
「そうですかっ……」
「……っ」
安心したように笑みをこぼすスズを見て、輝矢が少し眉をひそめる。

「スズも人がいいですねぇ。あんな身勝手坊ちゃんのこと、普通そこまで心配できませんよ」
「……っ本当は……もっとずっとお優しい方なんです……大和様は……」
「へっ？」
優しく微笑むスズに、輝矢が間の抜けた声を出す。
「あの水鉄砲坊ちゃんがですかぁ？そんな空気、微塵も醸し出してなかったですけどっ」
「私の両親、２人とも招木家に仕えていたんですけど、私が５歳の頃に流行り病で亡くなってしまったんです」
「……っ」
悲しげに話を始めるスズに、輝矢が少し表情を曇らせる。
「１人ぼっちになっちゃって……泣いていた私に、大和様はこう言って下さいました……」
スズが笑顔を上げる。
「“ボクがスズを守るヒーローになってやる”って」
「……っ」
――――俺、そういうヒーロー的なもん、好きでさっ！――――
先ほどの大和の言葉が思い出され、輝矢が少し目を見開く。
「大和様はもう覚えてらっしゃらないでしょうけど……私にとっては一生仕えても、返しきれぬ恩なんです……」
「……。」
そう言って笑ったスズを見て、輝矢は少し目を細めた。

その日・夜。招木家屋敷1階・玄関ホール。
「なぁっ!?俺、変じゃないっ!?変じゃないっ!?」
「……。」
執拗に問いかけてくる、妙にお洒落をした大和に、うんざりした表情を見せるハチ。
「格好決まってるっ!?髪型はっ!?やぁ～っぱタキシードのんが良かったかなぁっ!?」
「別に……どうでもいいと思うけどっ……」
「えぇ～っとカメラよしっ!色紙よしっ!あっ!サインペンがねぇっ!イヌっ!ペン持ってねぇっ!?」
「持ってねぇーよっ!」
「うっわぁぁぁぁ～～っ!これじゃサイン貰えねぇーよぉっ!取りに行ってる間に来ちゃうかもだしなぁ」
憧れの怪盗・長靴キャットが来るということで、お洒落をしたり、カメラや色紙を用意したりと、異常な張り切りを見せる大和に、ハチはかなり呆れ気味であった。
「何でコイツ、連れて来たんだよっ?」
「鬼人が出た時に、私が傍にいた方が安全でしょう?」
不満げに問いかけたハチに、輝矢があっさりと答える。
「一応、サルやキジ、後キツネにも屋敷の周囲は見張らせてますが……まぁ当てになりませんしね」
「俺も何かやった方がいいんじゃっ……」
「ハチはいいんですよ。何もしなくて」
「えっ……?」
輝矢の言葉に、ハチが顔を上げる。
「もし1人で行動してあの怪盗女にさらわれたらどうするんです?

まぁ、全部私に任せておいて下さいっ」

「……っ」

笑顔を見せた輝矢のその言葉が、ハチの胸に痛みのような何かを走らせた。

「そうっ……か……」

ハチがどことなく元気なく俯く。

――――ブチっっ……！！！――――

『……っ！』

その時、玄関ホールの急に照明が消える。表情を鋭くする輝矢たち。

「うっわぁぁぁぁぁ～～っっ！！！何々っ！？もう来てんのっ！？来てんのっ！？長靴キャットっっ！！！」

「ちょっと静かにしててもらえません……？」

騒ぎまくる大和に、輝矢が冷たい視線を送る。

「……っ。お出ましですか……長靴キャットっ」

「ウフっ……」

玄関ホールの天窓が開き、風が吹き込むとともに見えてくる人影。月明かりに照らされ微笑むのは、昨日の晩に遭遇した者と同じ、怪盗・長靴キャット。

「うおおおぉぉ～～っっっ！！！長靴キャットぉぉっ！！！サインくれぇぇっ！！！」

「また会えたわねっ♪ワンちゃんっ」

「うっ……」
大和の叫びを無視して、ハチに怪しげな笑顔を向ける長靴キャット。ハチが少し顔を引きつる。
「ウチのハチに微笑みかけるなんて１００万年早いですよっ……」
「ウフっ……」
ハチの前へと立ち、上にいる長靴キャットを突き上げるように見つめる輝矢。輝矢の鋭い表情を見て、長靴キャットがどこか楽しげに笑う。
「貴女には昨日、盗みを失敗させられた借りがあるわ……」
「お望み通り、お相手してあげましょう。コソ泥さんっ」
そう言って輝矢が右耳のピアスを弾く。
「“月器・三日月”っ……！」
弾かれたピアスが金色の光を放ち、三日月へと変形する。
「カッケぇぇっ！何々っ？その武器、どうなってんのっ！？特殊合金っ！？他にも変形とかすんのっ！？」
「……集中力が乱れますので静かにしててもらえませんか…？」
興味津津で質問しまくりの大和に、輝矢が表情を引きつって答える。
「ウフっ……“手招き”っ」
「……っ！」
「輝矢っ……！」
長靴キャットが輝矢に向かって左手を手招きさせると、三日月を構えた輝矢の体が浮き、天窓に立っている長靴キャットの方へと引き寄せられていく。思わず身を乗り出して叫ぶハチ。
「引力系の力ですかっ……それならっ」

長靴キャットに引き寄せられながら、輝矢が空中で三日月を構える。

「“水月”っ……！」

「……っ！」

長靴キャットに向かっていきながら、輝矢が長靴キャットへ無数の水の刃を放つ。

「うっ……！」

「……っ」

慌てて輝矢の手招きを解き、防御姿勢に入る長靴キャット。

――――バァァァァァァァーーーーンッッッ！！！――――

水月が天窓を直撃し、辺りの壁ごと破壊する。

「うおおおぉぉぉーーっっっ！！！これぞ俺の求めていた究極の戦いっっ！！！」

「お前ん家、破壊されてんぞ……？」

盛り上がる大和に、ハチが呆れた表情で突っ込む。

「ふぅっ」

長靴キャットの引力から解放された輝矢が、身軽に玄関ホールの床へと着地する。

「やるわねっ……」

輝矢に続いて床へと着地する長靴キャット。水月はかわしたようで、まったくの無傷である。

「アナタこそっ」

輝矢が長靴キャットに余裕の笑みを向けた。

「でも、ハチをあげるわけにはいきませんよっ」

「ウフっ……」

『……っ！』

２人が笑い合い、すぐさま笑みを消して同時に飛び出していく。

「おおぉぉぉぉぉぉぉぉぉっっっ！！！！今っ！まさにクライマックスの時っっっ！！！！」

「よくそんなに盛り上がれるよなぁ……」

熱くなっている大和に対し、とても冷めた様子のハチ。

――――バァァァァァァーーーーンッッッ！！！――――

「グワアアアアアアアアッッ！！！」

『……っ！何っ……！？』

その時、玄関の扉を突き破って、玄関ホールに何とも禍々しい巨大な紫色の鬼が入ってきた。背中に大きな翼を生やし、３本の金色の角を持っている。驚き、目を見開く輝矢たち。

「ガアアアアアッッッ！！！！！」

第11章　怪盗〝長靴キャット〟参上！　☆4（前書き）

ハッピーバレンタイン。（本編には何の関係もありません）

第11章　怪盗“長靴キャット”参上！　☆4

「ひいっっ！！」
破壊された扉のすぐ近くにいた大和へと、勢いよく爪を振り上げる鬼人。

「しまったっ……！！」

――――ボォォォォォォ～～～ンッッッ！！！！！――――

ハチが慌てて人化し、村雨丸を抜く。

「クっ……！“水げっ……！」
「大和っっっ……！！！！！」
「えっ……？」
大和の名を叫んで飛び出していく長靴キャットに、輝矢が思わず構えていた手を止める。

「うっ……うわあああああああっっ！！」

――――バァァァァァァァァーーーンッッッ！！！！！――――

鬼人の爪が振り下ろされ、床を砕く。
「……あれっ？」
痛みが走らないことを不自然に思い、固く閉じていた瞳をゆっくりと開く大和。

「あっ……」
目の前には鬼人の砕いた床が広がっており、大和の体を支えるようにして長靴キャットが膝をついていた。どうやら長靴キャットが、爪が振り下ろされる瞬間に、大和を連れ出してくれたようである。
「あっ……ありがとうございますっ……」
目の前にいる憧れの長靴キャットに、かしこまって礼を言う大和。

「グアアアアァァーーーッッッ……」

『……っ』
唸り声をあげる紫鬼に、輝矢や長靴キャットが眉をひそめる。

「“鬼風”っっっ！！！！」
鬼人が座り込んでいる大和と長靴キャットに向け両翼を開き、風の塊を放った。

「どわあああああああああっっっ！！！！！！」
「“月器・十六夜”っ！」

――――バァァァァァァーーーンッッッ！！！！――――

「グガガガッッ……！！」
輝矢が大和と長靴キャットの前に立ち、三日月を十六夜へと変形させて、鬼人の放った鬼風を弾き返す。返って来た鬼風を鬼人が避けると、鬼風は屋敷の壁を突き抜いて外へと飛び出していった。

「かぁぁぁぁ～っっ！！！すっげぇぇぇぇぇっっ！！！！」
「だっからお前、家、破壊されてんぞ……？」
感動している大和に、冷静に一言呟く桜時。

「大和、この前、アナタを襲った鬼はアレですか？」
「へっ……？あっ……ああっ！この前のと同じ鬼だっ……！」
「レベル４・紫鬼っ……飛行型の鬼ですねっ……」
しっかりと大和が頷くと、輝矢は少し眉をひそめた。
「やはりアナタは鬼ではなかったようですね、長靴キャット」
「ウフっ……そういうセリフは、まったく疑ってなかった人が言うものよっ」
振り向いて笑う輝矢に、長靴キャットも笑みを見せる。

「おおぉぉぉーーいっ！！竹取いいいいっっ！！！」
「輝矢ぁぁぁぁーーんっっっ！！！！！」
『……っ』
近づいてくる聞き覚えのある声に、輝矢やハチたちが振り返る。
「グっ……！グガガガっ……！！」
「あっ……！！」

――――バァアアアアアーーンッッッ！！！！――――

その隙をついて空へと飛び上がり、天井を突き破って外へと逃げ去っていく鬼人。

「逃げられましたかっ……」
少し不満げに呟く輝矢。
「竹取っっっ！！！！」
そこへ、屋敷の外からゴン、モンキ、ユキジが駆けつける。
「アイツらが来てんの見えて、勝てないって踏んだのかな」

――――ボォォォォォ～～～ンッッッ！！！！――――

桜時がハチの姿へ戻りながら言う。
「……。」
ハチの言葉に答えることなく、輝矢は天井にあいた穴を見て少し表情を曇らせた。

「鬼人かっ！？鬼人が出たんだなっ！？」
「ええっ、逃げられてしまいましたが……」
「よしっ！周囲の捜索に当たろうっ！おいっ！サルとキジっ！手を貸せっ！」
「ええ～っ？」
そう言うゴンに、不満げな顔を見せるユキジ。

『こっちだぁぁぁぁぁぁっっ！！！』

『……っ？』
聞こえてくる大勢の声と足音に、輝矢たちが一斉に振り向く。

『ここだぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！！』
外から玄関ホールへとやって来たのは、武装した多くの兵士たちであった。

「ウチの警備隊だっ」
「今更な感じですね」
大和の説明に、輝矢が少し肩を落とす。
「おいっ！鬼人ならもう逃げちっ……！」
「鬼人発見っっっ！！！！全員構えぇぇぇぇぇぇぇっっ！！！」
「何っ……！？」
『……っ』
「えっ……？」

ゴンの言葉を無視して、兵士たちが一斉に武器を向けたのその先にいるのは、長靴キャットであった。その兵士たちの行動に、輝矢や大和、そして長靴キャット自身も驚きの表情を見せる。

「何をっ……！」

「かかれぇぇぇっっ！！鬼人・長靴キャットを捕まえろぉぉっっ！！！」

『うおおおおおおおおおおおおおおおっっっ！！！！』

思わず立ち上がる大和であったが、兵士たちは一斉に長靴キャットへ向かって駆け出す。

「クっ……」

「うえええぇっ！？」

顔を歪めて、大和を輝矢の方へと押し出す長靴キャット。

「長靴キャットっっ……！！」

「……っ“手招き”っ！」

『何っ……！！？うおおおおっっっ！！！！』

大和が不安げに身を乗り出す中、長靴キャットが左手で手招きをすると、兵士たちの持っていた武器が全て長靴キャットの方へと引き寄せられていく。

「“手離し”っ」

――――ビュウウウウゥゥゥゥーーーーンッッッ！！！！――――

『どわあああああああああああああっっっ！！！！！！』

長靴キャットの元へと引き寄せられた武器が、くるりと向きを変え、一斉に兵士たちの方へと飛び出していく。飛んでくる武器をし

ゃがみ込んで避ける兵士たち。

「……っ」

兵士たちが避けている間に、長靴キャットは軽々と天井の穴へと飛び上がる。

「矢を放てぇぇぇっっっ！！！！」

屋根の上に立った長靴キャットへ向け、兵士たちが弓を構え、矢を向ける。

「待っ……！！」

「……っ」

――――ヒュウウウウウウーーーーンッッッ！！！――――

大和が身を乗り出し、長靴キャットが焦りの表情を見せる中、矢が放たれる。

「クっ……！」

「……っ」

長靴キャットの方へと飛び出して行こうとする輝矢を見て、ハチが目を見開く。

「……っ！！」

「なっ……！！」

飛び出して行こうとした輝矢の肩を踏み台にし、矢の向けられた長靴キャットの前へと飛び出すハチ。

――――・・・・・・・・・・っっっ！！！！――――

『……っ！！』

矢がハチの前足に突き刺さる。

「ううっっ……！！」

「……っ！ハチっっっ！！！！！」

射抜かれたハチの名を、輝矢が必死に呼ぶ。

「クっ……！」

傷ついたハチを空中でしっかりと抱きとめる長靴キャット。長靴キャットが懐から小さな玉を出す。

「……っ！」

――――ボォォォォォォ～～ンッッッ！！！！！――――

『ううっ……！！』

長靴キャットがその玉を投げると、玉が大量の煙を放ち、辺り一帯を包み込んだ。その場にいた皆が、その煙に思わず口や目を塞ぐ。

『……っ』

煙が収まり、皆が目を開いた時にはもう、長靴キャットとハチの姿は見当たらなかった。

「逃したか……探せっ！全兵、街へ出てヤツを探すのだぁぁぁぁっっ！！！」

『おおおおおおおおおっっっ！！！！！』

兵士長の命令に、玄関ホールを駆け出て行く兵士たち。

「……ハチっ……」

輝矢は天井を見上げながら、どこか不安げに呟いた。

第11章　怪盗〝長靴キャット〟参上！　☆5（前書き）

第１１章　怪盗“長靴キャット”参上！　☆５

３０分後。大和の部屋。
「だっから長靴キャットは鬼人じゃねぇーんだってっ！！俺はこの目で確かに見たんだっっ！！」
「わかっております……大和様」
必死に訴える大和を諭すようにそう言ったのは、招木家の執事・ペルシヤであった。
「私は大和様のお言葉を疑ってなどいません。しかしっ……」
ペルシヤの表情が曇る。
「どうやら長靴キャットが鬼人になるところを見たという情報が流れたらしく……兵士たちはそれを信じて……」
「そんなっ……」
ペルシヤの言葉に、大和が辛そうな顔を見せる。
「彼女が捕まれば、鬼人でないことも証明できましょう……このペルシヤも尽力を尽くします」
「……ありがとう……ペルシヤ……」
「いえっ……では失礼いたします」
大和に深々と頭を下げると、ペルシヤは大和の部屋から出て行った。

「恐らくは……本物の鬼人の仕業だろうな……」
「そうですねぇ」
「えっ……？」
ゴンと輝矢の言葉に、大和が戸惑いながら振り返る。
「長靴キャットを自分の身代わりにしようって企んでんだろう」
「そんなっ……！」
大和が思わず声をあげる。

「彼女はっ……！彼女は俺を助けてくれただけなのにっ……！」
「やはりそうですよねぇ～」
「へっ？」
妙に深々と頷く輝矢に、大和が首をかしげる。
「キツネ、サル、大和をお願いします。キジは私について来て下さい」
『へっ？』
輝矢の言葉に皆が目を丸くする。
「ついてくってぇ～どこへっ？」
「決まっているでしょう？」
不思議そうに問いかけたユキジに、輝矢が笑顔を向ける。
「長靴キャットの所へ、ですよ」

「んっ……んんっ……」
蝋燭の灯りのみに照らされた暗い部屋で、ゆっくりとその瞳を開いたのは桜時であった。
「あれっ……？俺っ……痛つっ……！」
起き上がった桜時の右手に痛みが走る。先ほど長靴キャットを庇った時に、右の前足を矢が突き刺さったのであった。傷は痛むが、右手は包帯で丁寧に止血がされていた。
「これっ……」
「体力を保たせるために、体が勝手に人化したようね……」
「……っ？」
聞こえてくる声に、桜時が顔を上げる。
「長靴キャットっ……」

そこには蝋燭の光に照らされ、長靴キャットが立っていた。
「お前がこれを？」
「一応、助けてもらったしね」
「サンキュっ」
「……っ」
曇りなく微笑み、礼を言う桜時を見て、長靴キャットが眉をひそめる。
「いいのぉ？私にそぉ～んな可愛い笑み向けてっ」
「えっ！？」
桜時の目の前に顔を突き出して微笑む長靴キャットに、桜時が焦ったように背筋をピンと伸ばす。
「ちょっ……！だっ……！俺の半径１ｍ以内に近づくんじゃっ……！！」
「あの滅茶苦茶怖そうな飼い主さんもいないことだしぃ～、私と楽しぃ～いことしちゃうっ？」
「いぃえええええっっっ！！！？」
迫り来る長靴キャットに、手を突き出しながら必死に抵抗する桜時。
「うっぎゃあああああっっ！！やめろぉぉぉっ！！」
「なぁ～んてねっ！ウソウソっ」
「だあああああああああああっっっ！！！」

そう言ってあっさり離れる長靴キャットに、桜時が思わず後ろに倒れ込む。
「残念だった？」
「んなわけねぇーだろっ！！」
勢いよく起き上がり、全力で否定する桜時。

「私にもねっ、飼い主がいるのっ」
「……っ？」

急に話を始める長靴キャットに、桜時が少し目を丸くする。
「その人が私の悲しみを消してくれた……私に生きる喜びを与えてくれたわっ」
どこか懐かしむように、話を続ける長靴キャット。

「感謝してもしきれなかった……何でもいいから、この人の役に立ちたいって思った……」
「それで……怪盗を……？」
「……ええっ」
長靴キャットが少し微笑んで頷く。
「物好きだなぁ～んなことやったせいで鬼人にまで間違われてさぁ」
「うんっ。それはちょっとビックリしたけどっ、でも怪盗になったことは後悔してないかなっ……」
呆れたように言った桜時に、笑顔を見せる長靴キャット。

「何か……何でもいいから、あの人の役に立ちたかったから……」

「……っ」
長靴キャットのその純粋な言葉に、桜時が少し驚いたような表情を見せた。

「初めはね、“傍に居たい”ってそれだけだったし、傍に居られたらそれだけで満足だったの……でもっ……」
温かい笑みをこぼす長靴キャット。
「その人のことが大切になっていく程っ……“傍に居る”だけじゃ足りなくてっ……」
長靴キャットが顔を上げて、桜時を見つめる。

「何かをしてあげたいって……何かの役に立ちたいって……思うようになっていった……」

「……っ」
どこかハッとしたような顔を見せる桜時。
――――ハチはいいんですよ。何もしなくて……――――
――――まぁ、全部私に任せておいて下さいっ――――
あの時、走った胸の痛みの意味。
「……。」
桜時がふと左手を左胸に当てる。
「でも実際はっ……何の役にも立ててないのかも知れないけどっ……」
「いやっ……すげぇーよっ……お前っ……」
「えっ？」
笑顔を見せる桜時に、長靴キャットが首をかしげる。
「俺なんか……何かしてあげたいって思っても、何もできない上に何もしなくてっ……」
――――大丈夫ですよ、ハチ――――
「いっつもアイツに助けられてばっかりで……そんな自分がもどかしくってしょうがなくってっ……」

「ワンちゃんっ……」
長靴キャットがまっすぐに桜時を見つめる。
「お前のその行動力、正直ちょっと羨ましいっ……」
桜時が長靴キャットに微笑みかける。
「お前の飼い主っ、幸せもんだよっ」

「……っ」
屈託のない笑顔を見せた桜時に、長靴キャットの表情が止まる。

「……っ」
「うえええええええっっっ!!!?」
長靴キャットが勢いよく抱きつくと、目玉が飛び出そうなほどに目を開く桜時。
「ぬがっ……!だぎゃっ……!がぼっ……!!のっ……!!」
女に抱きつかれたショックで、桜時が顔をユデダコにし、よくわからない擬音語ばかりを口にする。
「おっ……おいっ……!」

「ありがとっ……」

「……っ」
囁かれたお礼に、桜時は引き離そうとした手を思わず止めた。

「でもっ……貴方の飼い主も大概、幸せ者だと思うわよっ?」
「えっ……?」
小声で呟く長靴キャットに、桜時が首をかしげる。

「随分と仲のよろしいことですねぇ……」
「うぎゃあああああああああああっっ！！！！！」
いきなり目の前に現れた輝矢に、桜時が勢いよく悲鳴をあげて、長靴キャットを引き離す。

「これはお邪魔サマでしたかぁ～～～っ？」
「ちっ……！違っ……！これはそのっ……！何というかっ……！って、てててゆ～かお前、今の話聞いてっ……！？」
「はいっ？」
必死に言葉を繋げる桜時に、輝矢が冷たい目を向ける。
「まったくもって聞いていませんけど？」
「そっそうかっ」
輝矢の答えに、桜時が安心したように胸を撫で下ろす。
「ほぉぉぉぉ～～～っ、そんなに私に聞かれたくないお話をしていたのですかぁ～」
「えぇっ！？いやっ！そういうわけじゃっ……！！」
「ああ～何だかワンちゃんのすべてを知った気分だわぁっ！ウフっ」
「何言い出しちゃってんだよっ！！お前はっっ！！！」
妙に楽しげな長靴キャットの言葉に、桜時が慌てて怒鳴り返す。

「そうですよねぇ～ハチが身を挺してまで庇うくらいですもんねぇ～」
「あれはお前がっ……！」
「へっ？」
「あっ……」
不思議そうに聞き返す輝矢に、思わず口を押さえる桜時。
「何でもっ……ない……」
「……？」
そう言った桜時を見て、輝矢が首をかしげる。
あの時、ハチが長靴キャットの前へと飛び出して行ったのは、そ

うしなければ輝矢が飛び出していったと思ったから。ハチが飛び出して行かねば、輝矢は矢を受けてでも長靴キャットを庇ったと思ったからであった。

「まったくっ……由雉、癒羽をっ」
「はぁ～いっ」
差し出された輝矢の手に、黄色い羽根を乗せる由雉。
「さてと……」
「へっ……？」

――――グサァァァァァァッッッ！！！――――

「だあああああああああああっっっ！！！！」
矢で射抜かれた桜時の右手に、由雉の癒羽を勢いよく突き刺す輝矢。桜時があまりに痛みに悲鳴をあげる。
「これっ……こんな強く突き刺すもんだっけ……？」
「強く刺した方が早く治るんですよ」
「絶対、ウソっ……」
爽やかな中に怒りを感じる笑みを浮かべて言い放つ輝矢に、桜時が力なく呟いた。

「アナタも……ハチにキッスした上、抱きついた代償は払っていただきますよ……？」
輝矢がまっすぐに長靴キャットを見つめる。

「怪盗・長靴キャット……いえっ……」

その頃、大和の部屋。
「あっああ～暇やなぁ～俺も輝矢んと一緒が良かったなぁ～」
「あのぉ～っ……」
「おおっ！！！？」
輝矢たちに置いて行かれ、大和・ゴンとともに暇を持て余していたモンキが、部屋へと入ってきた可愛らしいメイドたちに目を輝かせる。
「玄関ホールの修繕をしてるんですけど人手が足りなくてっ……お2人、手を貸していただけませんか？」
「喜んでいっっ！！」
「おいおいっ！サルっ！俺たちはこのクソガキをだなぁ～」
「行って来ていいぞぉ～」
「あっ？」
大和を警護しておかねばならないと言おうとしたゴンに、大和が軽い口調で言い放つ。
「1階なら全力で悲鳴あげれば聞こえんだろ？」
「まっ……まぁそうだがっ……」
「精々たっぷり働いてきてぇ～っ」
「……っ」
適当に手を振る大和に、ゴンが少し顔を引きつる。
「しゃーねぇーなぁっ……」
「よっしゃっ！行こ行こっ！！」
モンキがメイドたちとやる気満々に出て行くと、ゴンが面倒臭そうに後に続いた。部屋に大和が1人残される。
「はぁっ……」

――――コンっ、コンっ――――

「……？何っ？忘れ物？」

扉をノックする音に、大和が立ち上がり、ゆっくりと扉を開ける。

「お前はっ……」

第11章　怪盗〝長靴キャット〟参上！　☆5（後書き）

後、2話…くらい…です…。

第１１章　怪盗“長靴キャット”参上！　☆６

「怪盗・長靴キャット……いえっ……」
輝矢がまっすぐに長靴キャットを見つめる。

「スズっ……」

「へっ？」
輝矢の言葉に、目を丸くする桜時。
「スズって……」

「……っ」
桜時が戸惑うように見つめる中、長靴キャットがゆっくりと瞳を覆った仮面をはずした。

「すっ……すみませんっ……」

「……っ！！ええぇぇっっっ！！！？」

仮面をはずした長靴キャットは、大人しい声で気弱そうに頭を下げるスズへと姿を変えた。あまりの衝撃に体をひっくり返して叫ぶ桜時。
「由雉っ、お前も知ってたのかっ！？」
「知ってたよぉ～だってここ、招木さん家の客間だもんっ」
「へっ……？」

そう言うと由雉が部屋の明かりをつける。明かりの灯ったその部屋は、確かに桜時たちが昨日、スズに招かれ泊まった、招木家の屋敷の客間であった。

「ホントだ……」

「灯台下暗しですよねぇ～今、街中でアナタを招木家の警備隊が探してますよぉ～」

気の抜けた表情で呟く桜時と、少し感心したように言う輝矢。

「でっ……！でもっ！長靴キャットん時と全然、性格違っ……！」

「私っ……どうもこの格好すると気が大きくなっちゃうっていうかっ……性格変わっちゃうんですっ……」

「……これがホントの猫かぶり……」

「うわぁ～オヤジギャグ～」

思わず呟いた桜時に、由雉が非難の声をあげる。

「あっ……あのっ……いつから気付いてっ……」

「初めからもしかしたらとは思っていたんですけど、先ほど鬼人から大和を助けた時に……」

――――大和っっっ……！！！！――――

大和の名を呼んで、必死に駆け込んでいった長靴キャット。

「確信を持ちました」

輝矢が少し真面目な表情で答える。

「そうですか……すっ……すみまっ……」

「まぁ償いは後でたっぷりしてもらうことにして、とりあえず行きましょうか」

『えっ？』

輝矢の言葉に、桜時やスズが目を丸くする。

「行くって……どこにっ……？」
「決まっているでしょう？」
問いかけた桜時に、輝矢が笑いかける。
「本当の鬼退治に……ですよっ」

「おいっ！」
キャングダムの街をはずれた深い林の中へとやって来た大和が、不安げに周りを見回しながら、前を行くある人物を呼ぶ。
「ホントにここに来れば長靴キャットに会えんのかよっ！？ペルシヤっ！」
「……。」
大和の前を歩いていたペルシヤが、大和の問いかけに足を止める。
「ええ……もう少ししたら会えますよ……」
「……？ペルシヤ……？」
いつもよりトーンの低いペルシヤの声に、大和が首をかしげる。
「……あの世でねっ」

「……っ！！」
大和の方を振り向いたペルシヤは、屋敷で見たことのない、何とも冷酷な笑みを浮かべていた。そのペルシヤの表情に、大和が目を見開く。

「まさかっ……！お前がっ……！」
「ええっ……お察しの通りです……」
――――バァァァァァァァーーーーンッッッ！！！！！――――
「私が鬼人ですよっ！！大和様っっ！！！」
「ううっ……！！」
ペルシヤという人間の皮を破り、目の前に現れる禍々しく巨大な紫色の鬼に、大和の表情が凍りつく。
「貴方にはここで死んでいただきましょうっっ！！！大和様っっっ！！！！」
「うっ……！！」
ペルシヤが大和へ爪を振り下ろす。
「うわあああああああっっっ！！！！」
「……っ！」
「ふえっ？」
浮かぶ自分の体に、深く目を閉じていた大和がゆっくりと瞳を開く。
「あっ……」
「“手招き”っ……」
振り下ろされる爪の下から、大和を手招きで引き寄せ抱きとめる、目元を深く仮面で覆った長靴キャット。
「……長靴キャットっ……」
「良かったっ……」
「えっ……？」

大和がまっすぐに長靴キャットを見つめる。安心したように笑う長靴キャットに、大和は少し首をかしげた。

「また貴方ですかっ……まったくっ……」

現れた長靴キャットを見て、表情をしかめるペルシヤ。

「今回こそ仕留めて差し上げましょうっっ……！！！」

「長靴キャットを自分の身代わりとして退治させ、大和を失った招木家を乗っ取ろうって寸法ですか……」

「……っ」

聞こえてくる声に、ペルシヤが振り向く。

「頭の悪い鬼にしては……よく考えた方じゃないですかねぇ……」

「貴様はっ……」

そう言い放ち、ペルシヤに笑顔を向けたのは輝矢であった。その横には桜時と由雉の姿もある。輝矢たちを見て、眉をひそめるペルシヤ。

「退治屋のっ……」

「ええ、そうです」

輝矢が右耳のピアスに手を触れる。

「“月器・三日月”っ……」

ピアスを弾き、月器を目覚めさせて、三日月を構える輝矢。

「竹取輝矢、鬼退治いたしますっ……！」

「そう上手くっ……いきますかねっ……！！」

輝矢とペルシヤが同時に飛び出す。

「“鬼爪”っっ！！」

「……っ！三日月っ……！」

ペルシヤが放った１０本の爪を、輝矢が三日月ですべて叩き落す。

「はあああああっっ！！！！」

「……っ」

――――・・・・・・・・・・っっっ！！！――――

すぐに再生させた爪を輝矢へと振り下ろすペルシャ。輝矢がしっかりと三日月で受け止める。

「だっ……だだだだだだ大丈夫かなぁ～？」

「……輝矢さん……」

輝矢とペルシャの戦いを、大和と長靴キャットが不安げに見つめる。

「“下弦っ……」

「……っ？」

ペルシャの爪を受け止めていた三日月が、光を放って徐々に満ちていく。

「水月”っ……！」

――――バァァァァァァァーーーーーンッッッ！！！――――

輝矢が変形させた下弦から、無数の水の刃を放つ。

「……っ」

「……っ？」

迫り来る水の刃を見ながら怪しげに微笑むペルシャに、眉をひそめる輝矢。

「グアアアアアァァァァァーーーーーッッッ……」

「……っ！」

唸り声を上げて翼を広げるペルシャに、輝矢が少し焦ったように後方へ飛ぶ。

「由雉っ！2人をっ……！」
「うんっ……！」

「“鬼風”っっっ！！！！！」

「うっ……！」

――――パァァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――

ペルシヤが広げた両翼から風を巻き起こすと、輝矢の放った水の刃が四方へ跳ね返されていく。
「……っ“左翼・滅羽”っ！」
大和と長靴キャットの前に立ち、赤い羽根を放って、2人へと飛んでくる水を掻き消す由雉。

「クっ……！」
「“瞬花”っっ！！」

――――パァァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――

「えっ……？」
輝矢に跳ね返ってきていた水が、桃色の花びらとなって散っていく。
「輝矢っ……！」
「ハチっ……」
輝矢の元へと駆け込んでくる、村雨丸を構えた桜時。
「いきなり出てきたら危なっ……」
「俺もいるからなっ！」
「へっ？」

桜時の言葉に、輝矢が目を丸くする。
「俺もいるんだからっ……！力まずやれよなっ！」
「……っ」
目を逸らしながらそう言った桜時を見て、輝矢が驚いたように目を見開く。
「ハチいいいいいいい～～～っっ……！！」
「そこまで力抜けとは言ってねぇぇーーっっ！！！」
感動のあまり桜時に抱きつこうとする輝矢に、桜時が必死に突っ込みを入れる。
「とにかくっ！アイツに水力はダメだっ！あの風で全部、跳ね返されちまうっ！直接攻撃に絞ろうっ！！」
「えっ、ええっ」
いつもより頼りがいのある感じで言い放つ桜時に、輝矢が少し圧倒されながら頷く。
「はあああああああああっっっ！！！！！」
「“月器・三日月”っ……！」
加速しながら降下し、輝矢へと爪を振り下ろすペルシヤ。輝矢が素早く下弦を三日月へと変形させ、振り下ろされたペルシヤの爪を受け止める。
「おっりゃあああああああっっっ！！！！！」
「……っ！」
輝矢と向き合っているペルシヤへ、桜時が村雨丸を突き出す。
「クっ……！」
ペルシヤが空中へと飛び上がって、桜時の村雨丸を避ける。
「このっ……！」
「三日月っ……！」
「何っ……！？」
空中で向きを変えて、今度は桜時へと爪を振り下ろそうとしたペ

ルシヤに、輝矢が背後から三日月を向ける。
「クっ……！！」
ペルシヤが輝矢も桜時も攻撃が届かないほど上空まで飛び上がる。
「このっ……！“鬼風”っっっ！！！」
『……っ！』
輝矢と桜時に向け、再び風の塊を放つペルシヤ。２人が素早く左右に分かれて避ける。

「フワっハッハッハっ！！直接攻撃に絞った所でっ、上空にいる私は攻撃できまいっ！！」
「クっ……！」
上空から高々と笑うペルシヤに、桜時が悔しそうに顔をしかめる。
「そうだよなぁ～っ。攻撃されるってわかってて、アイツがわざわざ降りてくるわけねぇーしっ……」
「いえ、降りてきますよ」
「へぇっ？」
輝矢の言葉に、桜時が目を丸くする。

「いやっ、いっくら何でも降りて来ねぇーだろぉーっ！」
「降りてきますよ。ねぇっ？長靴っ」
「……っ」
輝矢が長靴キャットと大和の方を振り返り、長靴キャットに微笑みかける。

「長靴で止めないでよ。略すんならせめて“キャット”って呼んでちょうだいっ」
そう言って長靴キャットが立ち上がる。
「ホントに仮面付けてると強気だなぁ～」
「へっ？」

感心している由雉の言葉に、首をかしげる大和。

「あっ！そっかっ！その手があったかっ！」

「私に任せておいてっ！ワンちゃんっ」

「とっととやって下さいっ」

桜時に笑いかける長靴キャットを、不機嫌面で急かす輝矢。

「ハイハイっ」

長靴キャットが上空にいるペルシヤに左手を向ける。

「んっ……？何をっ……そうかっ！クっ……！！」

眉をひそめていたペルシヤが、気づいた様子でその場から飛び去ろうと翼を広げる。

「逃がしは……しないわっ……」

「いっけぇぇぇっっ！！！！長靴キャットおおおっっ！！」

「“手招き”っ！」

大和の熱い声援を受け、長靴キャットが左手を手招きさせる。

「ううっ……！！うっ！！」

飛び去ろうとしたペルシヤが、長靴キャットの強い引力で、輝矢と桜時の待っている地面へと引き寄せられる。

「一緒に行きますよっ……！ハチっ……！」

「おうっ！」
輝矢の呼びかけに、力強く頷く桜時。

「待っ……！待てっ……！」
「“月器・三日月”っ……！」
「“瞬花っ……終刀”っっ！！！」
降下しながら制止を求めるペルシヤに、輝矢と桜時が迷うことなく三日月と村雨丸を突き出した。

――――・・・・・・・・・・・っっっっ！！！！！――――

「ううっっ……！！！」
三日月と村雨丸が、ペルシヤの体を貫く。

「ううっ……うぎゃあああああああっっっっ！！！！！」
ペルシヤは激しい断末魔を残して、灰となり、風の中へと消えていった。

第１１章　怪盗〝長靴キャット〟参上！　☆６（後書き）

次回、１１章最終話ですっ！

第１１章　怪盗“長靴キャット”参上！　☆7

「ふぅ～っ……」
「……月器」
桜時が力の抜けた様子でその場に座り込み、輝矢が三日月をピアスへと戻す。

「すっげ感動したぁぁっ！！！さっすが長靴キャットおおおおっっ！！」
興奮した様子の大和が勢いよく立ち上がり、長靴キャットへと歩み寄る。
「握手して下さいっ！！握手ぅぅっっ！！」
「……っ」
大和が右手を差し出すと、長靴キャットが無言のまま握手をする。
「くぅぅぅぅぅぅ～～っっっ！！！感動っ……！！！！」

――――ポタッ……――――

「へっ……？」

握手している大和の手に落ちるシズク。

「長靴……キャット……？」
そのシズクを零したのは、長靴キャットであった。大和が戸惑うように長靴キャットを見る。

「……っ」
大和が握手していない方の手を長靴キャットの顔へと伸ばし、その目元を覆っている仮面をはずす。

「……スズっ……」

「……っ」

仮面の下で涙を流していたスズは、仮面が取られるとともに力なくその場にしゃがみ込んだ。

「スズっ……」

大和もしゃがみ込み、俯いたスズを見つめる。

「大和様がっ……無事で良かったっ……」

「……っ」

両手で大和の右手を固く握りしめ、涙を流しながら安心したように笑みをこぼすスズ。

「……。」

そんなスズを見て大和が目を細め、左手で涙の伝うスズの頬に触れた。

「スズの方がっ……俺を守るヒーローになっちゃったなっ……」

「……っ」

大和のその言葉に、少し驚いたように目を開くスズ。

――――ボクがスズを守るヒーローになってやるよっ！――――

覚えていてくれた、大事な言葉。

「……はいっ……！」

「……っ」
笑顔で頷いたスズを、大和は強く抱きしめた。

「“あの人”って……大和のことだったのかぁ～」
大和とスズを見て、やっとわかった様子で頷く桜時。
「はい？何の話です？」
「いやぁ、ちょっとコッチの話というか何というかぁ」
「そうですよねぇぇぇ～～っ…おでこキッスと抱擁をした挙句、深い話までしちゃった仲ですもんねぇ～」
「ううえっ！？いっいやっ！だからそれはぁっ…！！」
冷たい視線を向ける輝矢に、必死に弁解する桜時。

こうして、少し変わった女怪盗を巻き込んだ、鬼人騒ぎは終わりを告げた……。

翌朝。招木家・中庭。

『怪盗を続けるっ……！？』

「はっ……はいっ」
驚いたように聞き返した輝矢と桜時に、スズが怪盗・長靴キャットの時とはまるで別人の内気な笑顔で頷いた。

「なんでまたっ？」
「まだまだ街に事件は起こってますしっ……鬼人もまた来るかも知れませんしっ……それにっ」
スズが屋敷の廊下の方を振り返る。

「ハッハッハっ！“怪盗・黒猫ヤマァート”参上っ！！必殺・“猫の手も貸しちゃう”っ！！」
「まぁ～素晴らしいですわぁ～っ！大和様っ！」
「昨日まで水鉄砲撃ってた方とは思えないっ！」
スズが振り返った先にいるのは、怪盗を真似て黒マントを着ながらもメイドたちを手伝って屋敷の掃除をしている大和の姿であった。
生まれ変わったような大和に、感動するメイドたち。

「大和様も続けて欲しいってっ」
『へぇ～……』
嬉しそうに微笑むスズと、呆れたように声を出す輝矢と桜時。

「おおぉ～いっ！スズぅ～っ！」
「……っ」
廊下からこちらへと大きく手を振る大和の方をスズが振り返る。
「皆さんには本当に色々とお世話になりましたっ……ありがとうございましたっ」
『……っ』
スズが輝矢と桜時に深々と頭を下げると、輝矢と桜時が穏やかな笑みを浮かべた。
「ではこれでっ」
「おうっ」
「あっ、そうでしたっ」

「はっ？」
何かを思い出したかのように声を出し、足を止めるスズに桜時が首をかしげる。
「よっ」
『あっ』
スズが懐から取り出した、長靴キャットの仮面を目元に付ける。
「ウフっ」
「うえっ！？」
スズとは思えない怪しげな笑みを浮かべて、桜時の腕を引き、桜時を引き寄せるスズ。
「ワンちゃんも頑張ってねっ！チュっ」
「でぇっ……！！？」
「んなっ……！！」
輝矢に聞こえないように耳元で呟いて、ついでに桜時の頬にキスをするスズ。桜時が青ざめ、輝矢が勢いよく表情を歪める。
「では失礼しますっ」
スズが仮面を取って、笑顔で屋敷の方へと戻っていく。
「性懲りもなくあの女っ……」
「ううっ……」
拳を握り締める輝矢の横で、少し振らつきながら頭を抱える桜時。
「輝矢ぁぁぁ～～っっ！！元気でなぁぁ～～っっ！！またすっげぇ技見せてくれよぉ～っっ！！」
スズが大和の元へと行くと、大和が元気よく2人に手を振った。

「ったく、おかしなヤツらだったぜっ」
「ハチは残念ですねぇ～せっかくあぁ～んな仲のイイお友達ができたのにお別れしなくてはなんてぇ～」
「へっ？」
嫌味っぽく言う輝矢の言葉に、桜時が焦ったように顔をしかめる。
「いっそこの街に残って、怪盗稼業手伝ったらどうですぅ～？」
「いやっ……！だからそのっ……！アイツとは別にっ……！」
白い目を向けて問いかける輝矢に、桜時が必死に言葉を繋げる。

「あのっ……！何というかっ……！そのだなぁっ……！」
「フフっ」
「ふえっ？」
必死に弁解を続ける桜時を見て、輝矢が吹き出したように笑みをこぼした。輝矢の笑みに、目を丸くする桜時。

「困らせてすみませんっ」
「えっ？」

「少し、ヤキモチを焼いてしまいました」

「……っ」

そう言って笑顔を向ける輝矢を見て、桜時が目を見開く。

――――その人のことが大切になっていく程っ……“傍に居る”だけじゃ足りなくてっ……――――

――――何かをしてあげたいって……何かの役に立ちたいって……思うようになっていった……――――

「……。」
桜時の頭に過ぎる、長靴キャットの言葉。
「さぁ、私たちもそろそろ行きますかぁ～」
輝矢が向きを変え、玄関の方へと1歩踏み出す。
「……っ！」
「えっ……？」
歩き出そうとした輝矢の手を、桜時が勢いよく掴み止める。少し戸惑うように振り返る輝矢。
「ハチ……？」
「輝矢っ……！俺っ……！」
「……っ？」
輝矢の目をまっすぐに見つめ、真剣な表情を見せる桜時。
「俺っ……！」
「俺ぇ～？」
「もったいぶらんと早よ言えやぁ～っ」
「だあああああああああああっっっ！！！！」
輝矢の両肩から顔を出すモンキとユキジに、桜時が思わずズッコケる。

「茶かすのではありません。ハチは“俺は輝矢が好きだ”と言おうとしていたんですっ」
「違げぇぇぇぇぇぇぇーーーーよっっっ！！！！！」
確信を持って言う輝矢に、桜時が全力で突っ込む。
「じゃあ何て言おうとしたのっ？」
「ええっ！！？」
ユキジの問いかけに、少し焦りを見せる桜時。
「そっ……それはっ……だなぁっ……“俺は骨っ子が好きだ”ってことをっ……」
「んなこと今更主張してどないすんねんっ」
あれこれとやり取りをしながら、輝矢たちが招木の屋敷を出る。
「んっ？そういえばゴンはどうしたんだ？」
「ああ～何か今回もまったく役に立たなかったことに逆ギレしながら本部に帰ってったよぉ～」
「まったく面倒臭い男ですねぇ」
桜時の問いかけにユキジが答え、輝矢が呆れた表情を見せる。
「さて、では私たちも行きましょうか」
「おぉぉーーうっっ！！」
「はぁ～い」
輝矢の言葉に、モンキとユキジが返事をする。
「ハチ？」
「えっ？ああっ」
――――ボォォォォォォォォ～～ンッッッ！！！！！――――
「ああっ、行こうっ！」
桜時がハチの姿となり、振り返った輝矢に笑顔で頷いた。

第１１章　怪盗“長靴キャット”参上！　☆７（後書き）

１１章終わりました。
次回の１２章で一応、第一部完結となります。

第12章　眠りの森の罠　★1（前書き）

第1部・最終章です。
どうぞ。

第１２章　眠りの森の罠　★１

御伽界・東南東。緑深き森の中、山脈沿いに流れる川のすぐ岸。
「ぷっはぁぁぁぁぁぁ～～～～っっ！！！」
川で水浴びをしていたハチが、気持ち良さそうに岸へと上がってくる。
「ブゥゥゥゥゥゥゥーーーっっっ！！！！」
「うわっ！」
全身を震わせて、体についた水滴を払い飛ばすハチ。飛び散った水滴が、岸で羽根を休めていたユキジに思い切りかかる。
「ちょっとぉ～っ！もう少し周りに気ぃ遣ってよぉぉ～～っ！！」
「あっ、悪りぃ～悪りぃ～っ」
非難するユキジに、ハチが軽い笑みを向けて謝る。
「ったくっ！水はともかく、きったない犬菌が可愛いボクに付いたらどうすんのさぁ～っ！」
「俺、お前のそうゆうトコ、嫌いだわ……」
容赦ない言いっぷりのユキジに、ハチが少し傷ついた表情を見せる。

「すぅー……すぅー……」
「んっ？」
聞こえてくる寝息に、ハチが眉をひそめて振り返る。
「寝てる……」
「すぅー……すぅー……」
ハチがゆっくりと振り返ると、そこには岸の近くの木を背もたれに、すやすやと寝息を立てている輝矢の姿があった。ハチが少し驚いたように輝矢を見る。
「そりゃ寝るでしょ～輝矢だって一応、人間なわけだしぃ～」

「っつーかアイツ、最近寝すぎじゃねっ？今朝だって2時間も寝坊したんだぜっ？」
「じゃあ叩き起こせばぁ？」
「いやぁ、それはちょっと……」
気まずそうに俯くハチ。輝矢を叩き起こそうものなら、後でどんな恐ろしい目に遭うか、想像しただけで震えがきそうである。
「疲れてるんじゃなぁ～い？やっぱ」
「へっ？」
ユキジの言葉に、ハチが目を丸くする。
「疲れてる？」
「ほらぁ～最近、戦い続きじゃない？そりゃ傷とかはボクの癒羽で治してるけどさぁ～」
少し表情を曇らせるユキジ。
「月器や水力使うのって、やっぱそれなりに輝矢の体に負担かけてんじゃないかなぁ～？」

「負担っ……」

「すぅー……すぅー……」
「……。」
深く眠っている輝矢を見て、ハチが少し複雑そうに目を細める。

「おおぉぉぉぉぉぉーーいっっ！！！」

『……っ？』
森の奥から聞こえてくる大きな声に、ハチとユキジが振り返る。

「あぁぁぁっっ！！輝矢ん寝てたんかぁぁっっ！！しまったぁぁっっ！！大きな声出してもたぁぁっっ！！」

「いやっ……その声がすでにでけぇーよ……」
現れたモンキが、寝ている輝矢を見て、少し慌てた様子で頭を抱える。そんなでかい声のモンキに、呆れた表情で突っ込みを入れるハチ。
「でぇ〜？大声出したからには何か街でも見つけてきたんだろうねぇ〜？」
「いっやぁ〜っ！それがなぁっ！俺っ……！」
『俺っ？』
モンキの言葉に、首をかしげるハチとユキジ。
「ある日、森の中、クマさんに出会ってもてんっ！」
「何かどっかで聞いたことある展開だなぁ」
「おおぉぉっっ！！かっぐやさんのお供のイヌさんとサルさんとキジさんでねぇ〜かぁっ！！」
モンキに続いて森の中から現れたのは、体長２ｍほどの大柄な黒クマ。
「ひっさすぶりだなぁっ！！ガッハッハッハっっ！！」
「クマってアンタかっ……」
聞き覚えのある田舎ナマリと大声に、呆然と呟くハチ。この黒クマ、本名・正刈金汰。オトポリの総長というとてもお偉いさんで、あの“桃タロー”とライバル関係にあったほどの方らしい。
「おおっ！！かっぐやさんでねぇーかぁっ！！」
「アホうっ！！んな大声出して輝矢んが起きてもたらどないすんねんっっ！！！」
「ああっ！！しまっただぁぁっっ！！！」
「だからお前ら、すでにうるせぇーって……」
大声で会話をするモンキと金汰に、ハチがさらに冷たい目を向ける。

「でぇ？こんなトコで何やってるわけぇ？バカグマっ」
「お前、相手はオトポリの総長だぞ……？」
偉そうに問いかけるユキジに、少し焦った表情を見せるハチ。
「おんらぁ～鬼人の捜査で来たんだけんどぉ、この森に入った途端、コイツらが眠っちまってぇ～」
「コイツら？」
「ほれっ」

――――ドッサァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――

「おわあああっ！」
背中から勢いよく、背負っていたらしき2人の人間を地面に落とす金汰。

「っつーか、今ので起きんだろぉー」
『ぐぅーっ……ぐぅーっ……』
「んっ？」
地面に叩きつけられたというのに、そのまま地面に寝転がってグッスリと眠っているのは、羊スケと鉄汰であった。これほどの衝撃を受けたというのに、起きる素振りのない2人に、ハチが眉をひそめる。
「おいっ！おおぉぉぉぉーーいっっ！！」
2人に声をかけ、体を揺さぶって無理やり起こそうとするハチ。
「おいっ！！起きろっ！！おいっっ！！」
『ぐぅーっ……ぐぅーっ……』

「……っ」
どんなに耳元で大きな声を出しても、体を揺らしても、深く眠って起きない羊スケと鉄汰。そんな2人に、どこか不自然さを感じ、ハチがさらに戸惑った表情を見せる。

「なっ……何か……変じゃねぇーかっ？」
「何やっても起きないんだぁ～」
「ちょっとどいてぇ」
「……っ？」
ハチを横にどかすようにして、後方からユキジが2人の傍へと降り立つ。
「“癒羽”」
――――プスッッ！！！――――
ユキジが懐から取り出した黄色い羽根を、2人の額へと容赦なく突き刺す。
「やっぱ羽根刺しても起きねぇーかぁ」
「……何か特殊な力をかけられてるね……」
『へっ？』
ユキジの言葉に、ハチや金汰が目を丸くする。
「特殊な力？」
「癒羽はねぇ、ちょっとした呪法や力なら解く力があるんだよぉ～」
「マジかぁっ！！？」
「すっげぇーっっ！！」
「まぁねっ」
目を輝かせるハチとモンキに、どこか自慢げに微笑むユキジ。
「2人は癒羽でも効かないほどの力で眠らされてるってことだねぇ～」
「じゃっじゃあ輝矢が寝てんのもまさかっ……」
「金汰さぁぁぁーーんっっ！！！」

『……っ？』

これまた森の奥から聞こえてくる大きな声に、ハチたちが振り返る。

「ゴンっ」

「あっれぇ？竹取のペットどもじゃねぇーかっ」

そこへ現れたのはゴンであった。

「なんでハチ公どもがここにっ……」

「それよりゴン～、森出る道は見つかっただかぁ？」

「あっ？ああっ！ありましたよっ！この先に道あって、まっすぐ行くと森出てすぐ街がありましたっ！」

「ほんじゃあとりあえずその街に行ってみるだかぁ～」

「そうだな」

金汰の言葉に、ハチたちも大きく頷いた。

ということで、眠ったままの3人を連れて、森の中を歩き出した一行。

「クッソっ……なんで俺がっ……」

眠ったままの鉄汰を背負った桜時が、街の入口へと足を踏み入れながら不満げに呟く。

「んじゃあ、こっちのかっぐやさん背負うだかぁ？」

「遠慮しときますっ」

輝矢を背負ったまま振り返る金汰に、桜時があっさりと首を振る。

「んだよっ。今更照れんなよっ」

「照れてんじゃねぇーよっっ！！！」

羊スケを背負い茶化すゴンに、桜時が本気で怒鳴り返す。
「っつーかお前ら、代われよっ！」
「男背負うんは、俺の辞書ん中にないねんっ。まっ！輝矢んやったら喜んで背負うけどなぁっ！」
「ボク、可愛いからパス～」
「……。」
モンキとユキジによくわからない理由で断られ、桜時が呆れた表情を見せる。
「おっ、抜けたぞっ！街だっ！」
『……っ』
ゴンの声に一斉に顔を上げる桜時たち。森の中の道は途絶え、森を抜けると穏やかな平原が広がっていた。平原の先に、小さな街並みが見える。
「よすぃ～行くだぁ」
金汰を先頭にして、まっすぐに街へと向かう桜時たち。見えているだけあって5分も歩かぬうちに街の入口へと辿り着いた。小さな民家ばかり続く街は、人間の姿が目立ち、獣人は住んでいそうにない。
「えぇ～っと“レム”の街だってぇ」
ユキジが街の入口に立っている看板を読む。
「おいっ」
「……はいっ？」
街へと足を踏み入れたゴンが、道を歩いている若い男に声をかける。
「森ん中で急に連れが眠っちまって起きねぇーんだけど、何か知らねぇーかぁ？」

「眠った……？」
男が眉をひそめて、ゴンに背負われている羊スケの方を見る。
「ひぃぃっっ！！！」
「へっ？」
急に怯えるように震え上がる男に、ゴンが首をかしげる。
「呪いだぁぁぁっっ！！“眠り姫”の呪いだぁぁっっ！！！」
「呪い？」
「眠り姫？」
『きゃあああああああっっっ！！！！！』
『ひえええええええっっっ！！！！！』
――――ドンっ！ガタンっ！バンっ！ガッシャーンっっっ！！！
――――
「へっ……？」
男が悲鳴をあげて逃げ去ると、男の声を聞いた街人も皆、悲鳴をあげ、身を隠すように慌てて家の中へと入っていった。街人のいなくなった街を見回し、戸惑うように目を丸くするゴン。
「何言うたんやぁ～ゴンゴン～」
「変に脅しちまったんじゃねぇーのかぁ？怖がり方、尋常じゃなかったぞぉ？」
「ただでさえ目つき悪いんだから気を付けてよねぇ～」
「俺はフツーにフツーなこと聞いただけだってのっっ！！！」
冷たい目を向けてくる桜時たちに、ゴンが勢いよく怒鳴り返す。

「しっかし困っただなぁ～これじゃあかっぐやさんたちを休ませることもぉ……」

「旅のお方ですか……？」

『……っ？』

街人が家の中に逃げ込んだはずの街中から聞こえてくる声に、困った顔を見せていた金汰たちが振り向く。

「よろしければ……わしらの家へお越し下さい……」

『……っ』

そう金汰たちに声をかけてきたのは、街の住人らしき心優しそうな老夫婦であった。

第１２章　眠りの森の罠　★２

老夫婦の言葉を受け、老夫婦の家へと入れてもらった金汰たちは、眠っている３人を用意してもらった布団に横たわらせ、リビングの椅子へと腰かけた。
「いっやぁ～すまないだぁ」
「へぇっ？」
礼を言った金汰に、老人が大きく耳を傾けて聞き返す。
「いんやぁ～だっからぁ、上がらせてもらってぇすまないだぁとぉ」
「へぇっ？」
「……。」
ゆっくり、ハッキリとした口調で繰り返す金汰であったが、またしても聞き取ってくれない老人に少し呆れた表情を見せる。
「お気になさらないで下さい～」
台所からやって来た老婆が金汰たちへとお茶を出す。
「この人、物凄く耳が遠いんですよぉ。ああ、私はおハナ、この人は六べぇと申します」
「ああ～どんも～おんらぁクマですぅ。こっちがキツネでぇ、あっちがキジさん、サルさん、イヌさんですぅ」
「種族じゃなくって名前紹介して下さい」
おハナに皆を紹介する金汰に、ゴンが少し突っ込みを入れる。
「すまないだねぇ～こんな大人数で上がらせていただいてぇ～」
「いえいえっ、ゆっくりしていって下さいなぁ～」
少し頭を下げる金汰に、おハナが笑顔を向ける。
「もぉ～ゴンが住民全員にメンチ切ったりするからぁ～」
「だっから俺はフツーにものを尋ねただけだっつってんだろーがっっ！！！」
「ゴンゴンのフツーはフツーちゃうねんからぁ～っ」
「どういう意味だよっ！！それはっっ！！」

「街人は皆……怯えているのです……」
『……っ？』
ゴンとモンキ・ユキジが言い合いをしている中、少し曇った表情で呟くおハナ。その言葉に皆が眉をひそめる。
「怯えてる……って？」
眠ったままの3人のすぐ横に座る桜時が、六べぇへと問いかける。
「へぇっ？」
「あっ、間違えた」
耳を傾けて聞き返す六べぇに、思わず言葉を発する桜時。
「怯えてるって？」
桜時が改めておハナに聞く。
「“眠り姫の呪い”に……です……」
「……っ」
おハナの言葉に、眉をひそめる桜時。
「1ヶ月ほど前から……森に入った街人や旅人が急な眠りに襲われるという事件が続きまして……」
「えっ……？」
ユキジが少し驚いたように声を出す。
「眠った者たちは何をしても決して起きることはなく……まるで何かの魔法にでもかかったようでした……」
「羊スケや鉄汰とまったく同じやな」
「ああっ……」
モンキの言葉に、ゴンが真剣な表情で頷く。
「その者たちは夜遅く、眠ったまま導かれるかの如く、森の中にある古城へと歩いて行くのです……」
「古城っ……？」
「はい……その者たちが古城に入ると……城から化け物の叫び声の

ようなものが……」
「ひいいいいいいいいいいっっっ！！！！！」
『……。』
おハナの話のあまりの怖さに、大きな図体を小さく丸めて怖がる金汰。そんな金汰に、皆が真剣な表情から一気に呆れた表情へと変わる。

「金汰さん……」
「あっ、すまないだぁ」
ゴンに冷たい視線を向けられ、金汰が苦笑いで謝る。
「街人は皆、眠り姫が呪いを使い、化け物に人間を喰らわせているのだと信じ……ひどく怯えております……」
険しい表情で話すおハナ。
「だからこそ……関わりたくないと、あのような態度を取ってしまったのでしょう……」

――――ひいいいいいいいいいっっっ！！！！！――――

「……なるほどなっ……」
一斉に逃げ去っていった街人のことを思い出し、納得したように頷くゴン。

「なんだぁ～ゴンの目つきが悪かったからじゃないんだぁ～」
「だっからそう言ってんだろうがっっ！！！」
少し残念そうに言うユキジを、ゴンが睨みつける。
「けど正直、信じらんねぇーなぁ、んな話っ」
しかめっ面を見せるゴン。
「眠り姫だの、呪いだのよぉ」
「眠った者たちが城に行くのは本当です。ただ…誰も城に近づかないので眠り姫を見たという者は1人も……」

「やっぱなぁ」
俯いて声を小さくしていくおハナの言葉に、ゴンがどこか納得したように頷く。
「でもまっ、この辺に鬼人の調査依頼が来てたのは確かだし、鬼が絡んでる可能性はありますね。金汰さん」
「そうとねぇ……」
ゴンの言葉に、真剣に頷く金汰。
「とりあえず古城の捜査に行くだかなぁ～」

「ボクたち、どうすんの？」
「さぁ～？輝矢んが寝とるんじゃ動けへんやろ？」
ユキジの問いかけに、少し困った表情で答えるモンキ。

「っつーか、輝矢んもホンマに眠り姫の呪いにかかってもたんかぁ？」
「ん～正直、かかるとは思えないんだけどねぇ～。あっ、そうだ」
何かを思いついたような顔を見せるユキジ。
「桜時ぃ～、ちょっと輝矢にキッスでもしてみてよぉ～」
「はぁぁぁぁっっ！！？んなっ……！！何言ってんだよっ！！お前はっっ！！」
突然のユキジの言葉に、あからさまに動揺する桜時。
「だってお姫様は王子様のキッスで目覚めるってゆ～じゃないっ？」
「実際、んなもんで目ぇ覚めるヤツがいるかよっっ！！！」
「いいぞぉ～やれやれぇ～っ」
「ただの茶化し入れてんじゃねぇーよっっ！！！」
ユキジとゴンに次々に突っ込みを入れていく桜時。
「誰がんなことっ……！」

――――グイッ……！――――

「へっ？」
急に強く引っ張られる腕に、桜時が目を丸くする。
「ウグっ……！！」
――――ブチュウゥゥゥゥ～～～～ッッ！！――――
『あっ……』
眠っているはずの輝矢に腕を強く引っ張られ、引き寄せられた桜時の唇が、勢いよく輝矢の唇へと触れる。
「ふぅ～っ、ハチのキッスのお陰で目が覚めましたっ」
『ウソをつけっ』
平然と起き上がる輝矢に、全員から突っ込みが入る。
「グっ……グプっ……プっ……」
「1人、半永久的に眠ったでぇ～」
白目を剥いて気絶した桜時を見て、モンキが言い放つ。
「おおっ！！かっぐやさぁぁぁ～～～んっっ！！やっとお目覚めだかぁ～～～っっ！！！」
「てめぇー、どっから起きてたんだよっ？」
“あっれぇ？竹取のペットどもじゃねぇーかっ”あたりからです」
「すんげぇ前じゃねぇーかよっっ！！！」
輝矢の答えに、勢いよく突っ込むゴン。
「ったくっ……じゃあだいたいの事情は飲み込めてんなっ？」
「ええ」
「だったらとりあえずその森ん中にある古城っての調査にっ……」

「夜を待って、羊スケと鉄汰をオトリに使い、直接、城に潜入しましょう」
「へっ？」
調査へ行こうと意気込んで立ち上がろうとしたゴンが、輝矢の言葉に肩を抜かす。
「眠らされた日の夜に城に導かれるんですよね？おじいさん」
「へぇっ？」
「ああ、そうでした。眠らされたその日の夜に城に導かれるんですよね？おばあさん」
「あっはい～っ……今までは全部、そうでしたぁ～」
輝矢が最初に六べぇに問いかけるが、六べぇは相変わらず聞き取れず、輝矢が次におハナに問いかける。輝矢の問いかけに頷いて答えるおハナ。
「では決まりですね。いいですか？金汰」
「あのなぁっ！お前、勝手にっ……！」
「もっちろんとぉぉ～っ」
「だあああああああああああああっっっ！！！！」
輝矢の言葉に迷うことなく１つ返事する金汰に、ゴンが思わずコケる。
「いいんですかぁ～？総長っ！退治屋のガキなんかに捜査一任しちまってぇ」
「かっぐやさんに任せとけば間違いないとぉ～っ！ガッハッハっっ！！！」
「……。」
暢気な笑い声をあげる金汰に、ゴンは少し冷たい視線を向けた。

その日・夜。
「んっ……んんっ……」
気絶していたハチが、やっとのことで目を覚ます。
「俺ぇ……」
「目が覚めましたか？ハチっ」
「うっ……！」
目を開いたハチが、目の前にいる輝矢を見て表情を凍りつかせる。
「ぐぎゃあああああああああっ！！！」
「あれ？」
激しく遠ざかっていくハチに、輝矢が少し首をかしげる。
「どうかしましたか？ハチ」
「どうしたもこうしたもねぇーよっっ！！お前、俺に何したと思ってんだっ！？ああっ！！？」
「ああ、もしかして“接吻”のことですか？しかも二度目」
「ぎゃあああああっっっ！！！日本語で言うなぁぁっっ！！」
平然と答える輝矢に対し、悩ましげに頭を抱えるハチ。
「“セカンド・キッス”っ」
「英語で言えばいいってもんじゃねぇっ！！もう絶対、お前の半径３m以内には近づかねぇーかんなっっ！！」
「ええ～。んっ？」
「あっ？」

何かに気づいたように振り向く輝矢に、ハチもつられてそちらを見る。輝矢の視線の先にいたのは、廊下を歩き、庭へと出て行く六べぇの姿であった。

「……っ」
「あっ、おいっ！」
六べぇの後を追うように庭へと出て行く輝矢を、ハチが慌てて追

いかける。

「……。」

「こんばんはっ」

「……っあんれぇっ？」

庭に立ち尽くし、何やら真面目な表情で森の方を見つめていた六べぇが、横に立った輝矢に気づく。

「老人は早起きなんですから、そろそろ寝た方がいいんじゃないですかっ？」

「へぇっ？」

「……。」

相変わらず聞き取れずに大きく耳を傾ける六べぇを見て、少し呆れた表情となる輝矢。

「まぁいいです。アナタも眠くなったら勝手に寝に行くでしょうし」

「へぇっ？」

輝矢がどこか諦めたように言い、聞き返す六べぇを無視して庭から家の方へと戻っていく。

「……ああ、そうでした」

「……？」

廊下へと入る前にふと足を止める輝矢に、廊下にいたハチが少し首をかしげる。

「あなた方は何故、私たちを招き入れて下さったんです？」

「……。」

森を見つめたまま、指1つ動かさない六べぇ。

「普通なら、眠り姫の呪いが降りかかることを恐れ、他の街人同様に私たちとは関わらないようにするはず……」
「輝矢……？」
言葉を続ける輝矢に、ハチはさらに不思議そうに首をかしげる。
「……。」
鋭い瞳を六べぇの背中へと向ける輝矢。
「まぁこんなこと、耳の遠いアナタに聞いても仕方ありませんね……」
そう言って少し微笑み、輝矢が廊下へ戻ろうと足を上げた。
「娘が……」
「……っ」
六べぇの声に、輝矢が足を止めて振り返る。
「娘が……いましてね……」
『……。』
背中を向けたままの六べぇを、まっすぐな瞳で見つめる輝矢とハチ。
「生まれつき不治の病を抱え……死を待ちながら生きることに疲れ……あの森で自ら命を絶ちました……」
「……っ」
輝矢が少し眉をひそめる。
「もう30年も前の話ですが……わしには……」
六べぇが顔を上げ、悲しい表情で森を見つめる。

「わしには……娘が眠り姫となって……長く生きれる人間たちに復讐しとるように思えてならんのです……」

「……。」

六べぇの話に、輝矢はそっと目を細めた。

その日・深夜。眠っている羊スケと鉄汰を囲い、2人が城に導かれる時を待っている一行。

「ぐがぁぁーっ!!ぐがぁぁーっ!!ぐがぁぁーっ!!ぐがぁぁーっ!!」

「アンタが寝てどうすんだぁぁっ!!しかも鼾がめっさうるせぇぇっっっ!!」

「ぐがあああああああああああああああっっっ!!!!!」

転寝をしていた金汰に、ゴンが激しく蹴りを入れる。

「なっ……何だぁ?地震だべぇ?」

「そうみたいですね」

『……。』

蹴られた頭を押さえて首をかしげる金汰に、平然と答えるゴンを見て、ハチたちが呆れた表情を見せる。

「にしてもまだかぁ〜?もう2時回ってんぞぉ?」

「じゃあハチ、2人で新婚ゴッコでもしましょうか?」

「しねぇーよっっ!!!!!」

――――スゥゥゥゥーーーーっっ……――――

『……っ！』

深く瞳を閉じたまま立ち上がる羊スケと鉄汰に、皆が一斉に表情を険しくする。

『ぐぅー……ぐぅー……』

寝息を立てたまま、部屋を出て、玄関の方へと歩いて行く羊スケと鉄汰。

「では追いかけましょう」

『おうっ！』

輝矢の言葉に、皆がしっかりと頷いた。

「ウフフっ……ウフフっ……さぁ……おいで……」

第１２章　眠りの森の罠　★３

『ぐぅー……ぐぅー……』

「まっすぐに森に入ってったな……」

眠ったまま歩き続ける羊スケと鉄汰の後を歩きながら、少し厳しい表情で呟くゴン。２人は六べぇたちの家を出ると、まっすぐに街の出口へと向かい、昼間の森の奥へと歩いていった。

「一体、どこへっ……」

「みっ……見てみぃっ！あれっ！！」

『……っ？なっ……！！』

モンキの声に顔を上げた皆が、一斉に驚きの表情となる。２人が向かう道の先、森の奥に見えてきたのは、かなり古い要塞のような大きな城であった。蔦が壁中に巻きついており、その歴史を感じさせる。

「あれがっ……眠り姫の古城っ……」

「ここまではおハナさんの話の通りですね」

唖然として呟くハチの横で、眉をひそめる輝矢。

『ぐぅー……ぐぅー……』

「あっ！城の中に入って行っちゃうよぉ～っ！」

「急ぎましょうっ！」

眠っている２人を招き入れるように自動で開く城門。２人を入れ

てすぐ閉まり始める城門に、輝矢たちが慌てて駆け込んでいく。

――――ギィィ～～ガッシャァァーーンッッッ！！！――――

『ふぅっ』

何とか城の中に駆け入り、一息つく一行。

「羊スケたちはっ……」

「“鬼口”っ！！」

『……っ！』

――――バァァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――

城の奥から飛んで来た鬼口を、輝矢たちが左右に分かれてかわす。

城門を突き破り、外へと飛んでいく鬼口。

「グガガガガッ……なかなかに素早いヤツらだなぁ」

「鬼人っ……！」

城の中で待ち構えていたのは、廊下中を埋め尽くすほどの緑鬼であった。

「ぞろぞろとうざったいなぁ～」

「おいっ！お前らっ！羊スケたちをどこへやったっ！？」

ゴンが鬼人たちを睨みつける。

「あいつ等なら眠り姫サマのところだ……そこで我ら鬼の血肉となろう……」

「何っ……！？」

鬼人の言葉に、表情を一変させるゴン。

「ほらっ、聞こえてこないか？鬼どもの餓えた声が……」

――――グガアアアアアァァァっっっ……――――

『……っ！』

鬼人の言葉通り、城の奥から鬼人のものらしき唸り声が聞こえてくる。

「いっやあああああっっっ！！！てっちゃああんっっ！！！」

「情けない声出してんじゃねぇーよっっ！！」

頭を抱えて叫びあげる金汰に、ゴンが思わずタメ口で突っ込みを入れる。

「どうやら急いだ方が良さそうですねぇ」

「むんっ！！」

――――ボォォォォォォ～～～ンッッッ！！！！――――

気合いのこもった声を出し、白い煙に包まれてクマの姿から人化する金汰。

「輝矢さんは先に向かってくれっ！ここは俺が抑えるっ！ゴンっ！お前は輝矢さんと一緒に行けっ！！」

人間の姿となった金汰が、男らしく頼もしい感じで次々と指示を出す。

「鉄のことっ……頼んだぜっ！おっりあああっっっ！！！！」

そう言うと金汰は、背中のマサカリを振り上げ、大量の鬼人たちに向かっていく。

「毎度のことながらあのギャップにはヤラれんなぁ～」
「金汰の言葉通り、私は2人を追います。サル、キジ、金汰を援護して道を開いて下さい」
「ほいほぉぉ～～いっ！」
「ふわぁ～いっ」

――――ボォォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！！――――

輝矢の言葉に軽い返事をして、人化するモンキとユキジ。
“ゴォォォーーールドォォォッ・・・ラァァァァッシュ”ッッッ！！！！」
「如意棒・第2の舞っ……“浄”っっ！！」
「両翼・“十裂羽”っ！」

――――バァァァァァァァーーーーンッッッ！！！――――

「ギャアアアアアッッッ！！！！」
人化した金汰、門貴、由雉がそれぞれの技を繰り出し、城の奥へと続く直線状の鬼人を一掃する。

「行きますよっ！ハチっ！キツネっ！」
「おうっ！」
「俺に指示出してんじゃねぇーよっ！！」
3人が作った道を駆け込んでいく輝矢。その後をハチと、少し不満げな表情のゴンが追っていく。

「頼んだぜっ……輝矢さんっ……」

「グガアアアアッッッ！！！！！」

「……っ！」
金汰は真剣な表情でそう呟くと、向かってくる鬼人に再びマサカリを振り上げた。

一方、金汰たちに鬼人を任せ、城の奥へと突き進む輝矢、ハチ、ゴンの3人
「おいっ！先頭切って走ってやがるが、本当にこっちでいいのかよっ！？竹取っ！！」
「知りませんっ」
「知らないのかよっっ！！」
無責任に答える輝矢に、ゴンが走りながら突っ込みを入れる。
「……っ？何か広い部屋に出るぞっ！」
『……っ』
ハチの声に、輝矢とゴンが表情を鋭くする。

『……っ？』
長い廊下を突き進んでいた輝矢たちは、やがて少し明るい、広く何もない部屋へと出た。

「ここは……」
「何か……招かざる客ってのが来たみたいだねぇ～」

『……っ』
部屋を見回していた輝矢たちが、聞こえてくる声に顔を上げる。

「侵入者とか来たの初めてだからなぁ～こういう時って殺しちゃっていいの？」
「侵入者は眠り姫サマの敵……眠り姫サマの敵はボクらの敵……」
「あっ、そっかぁ～」

「人……間っ……？」
「ああっ……」
部屋のシャンデリアの上から輝矢達を見下ろすのは、２人の人間の男。戸惑うように言葉を発するハチとゴン。

「さらわれた人間か？それとも擬態した鬼っ？」
「さぁ？見た目からは何ともっ……」
ハチの問いかけに、少し困った表情を見せる輝矢。

「じゃあ敵は排除ってことでっ」
『……っ！』
愛らしい顔立ちをした青年が飛び上がり、右手を輝矢たちへ向ける。

「“木檻”っ！」

――――バァァァァァーーーーンッッッ！！！――――

『うっ……！！』
床から勢いよく木が生え、輝矢たちの四方をまるで檻のように囲んでいく。
「“木力”かっ……！」
「どうやらただのヒトというわけではないようですねぇ」
顔をしかめるゴンの横で、輝矢が冷静に呟く。
「ハチっ」

「おうっ！」

――――ボォオオオオォ～～～ンッッッ！！！！！――――――

輝矢に言われ、ハチが素早く人化する。

「“瞬花”っっ！！」

――――――パァアアアアーーーーンッッッ！！！！！――――――

『……っ』

人化した桜時が両手を木檻に触れると、木檻が一瞬にして桜の花びらと変わり、床へと散っていった。その光景に目を見開く青年たち。

「“花力”……」

「へぇっ」

少し眉をひそめる根暗そうな青年と、楽しげに笑ってみせる愛らしい顔の青年。

「よぉぉーしっ！ここは俺らに任せて竹取っ！お前は先に行けっ！！」

「俺らって、お前、そんな戦力になんのかよぉ～？」

「ああっ！？」

どこか不安げに聞く桜時に、ゴンが思い切り表情をしかめる。

「んだとぉっ！？俺はこう見えてもだなぁっ……！」

「まぁ多少の不安はありますが、事態が事態ですからね。ここはそうするしかなさそうです」

「そうかっ。じゃあしゃーねぇーなぁ」

「お前らなぁっ……！！」
輝矢と桜時の気を遣わない言いっぷりに、思わず怒鳴り声をあげるゴン。

「あいつ等……ボクらを喰い止めて1人、眠り姫サマのところへ行かせるつもりらしい……」
3人の会話を聞き、根暗そうな青年の方が小さな声で呟く。
「クロト……ボクが2人を止めておくからあの女を……」
「へっへっ！」
「あっ……クロトっ……！」
根暗そうな青年の言葉を無視し、愛らしい顔立ちの青年・クロトが、シャンデリアの上から勢いよく降下し、桜時の方へと飛び出していく。

「“枝槍”っ！！」
「……っ！村雨丸っ！！」
右手の指から蔓を伸ばし、先を尖らせて槍のように突き出すクロトに、桜時が村雨丸を抜いて応戦する。

「ハチっ……！」
「大丈夫だっ！行けっ！輝矢っ！」
「わかりましたっ！」
桜時の言葉にしっかりと頷き、その場から走り出す輝矢。
「キツネっ！命を投げ捨ててでもハチは守りなさいっ！」
「へいへいっ」
ゴンに強く言い放って、輝矢が部屋の先の扉へと駆け出していく。

「させないよっ……」
「……っ」
扉に行こうとした輝矢に向けて飛び降りていくもう1人の根暗そ

うな青年。輝矢が表情をしかめて、右耳のピアスへ手をかける。

「“狐火・二目”っっ！！！」

――――ヒュゥゥーーンッッ！！ヒュゥゥーーンッッ！！――――

「クっ……！」

どこからともなく飛んで来た2つの火の玉を、空中で素早くかわす青年。

「てめぇーの相手は俺だっ」

「……っ」

着地した青年の前へと立ちはだかるのはゴン。

「チっ……」

青年が、扉から部屋を出て行く輝矢を見て、少し表情をしかめる。

「あっはぁ～っ！まんまと先に行かれちゃったねぇ～っ！シロキっ！」

「お前が人の言うことを聞かないからだ……」

楽しげに言うクロトに、冷たい目線を送るシロキ。

「そうゴタゴタ言わないでよっ」

不機嫌そうなシロキに、無邪気な笑顔を向けるクロト。

「とっととコイツら殺して、後を追えばいいだけの話なんだからっ」

「……っ」

笑顔を浮かべながら鋭い瞳を向けてくるクロトに、桜時は少し眉をひそめた。

古城・最奥部。眠りの間。

『ぐぅー……ぐぅー……』

自動で開く扉を抜けて、眠ったままの羊スケと鉄汰が眠りの間へと入ってくる。

「ウフフっ……ウフフっ……」

高い笑い声が響いてくるのは、眠りの間の奥にある大きな寝台のカーテンの向こう。

「さぁ……おいで……」

『ぐぅー……ぐぅー……』

カーテンの奥から差し伸べられる、白くて細い手に導かれるようにして、羊スケと鉄汰が寝台へと歩いて行く。

「そう……いい子ね……」

カーテンの向こうにいる人物が、少し笑みをこぼす。

「さぁ……私のものに……」

「なりませんよっ」

「……っ？」

寝台へと向かう羊スケと鉄汰の前へと立ち、カーテンの向こうの人物に鋭い瞳を向けたのは輝矢であった。

「こんなんでも一応、いなくなると困る兄や上司がいるので」

「……誰っ……？」

「習わなかったんですか？」

カーテンの向こうから聞こえてくる問いかけに対し、輝矢は右耳のピアスを弾いて言い放つ。

「“名を名乗る時はまず自分から”と」

――――パァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――

月器を目覚めさせると、輝矢が素早く三日月を振り切ってカーテンを切り裂いた。

「ウフフ……」

カーテンの向こうにいた者が、笑みを浮かべながらゆっくりと顔を上げる。

「それもそうね……」

それは金色の長い髪に、大きな青い瞳の、濃緑色のドレスを身に纏った美しい女であった。生きている人間とは思えないほどに白い肌をしている。大人っぽい顔立ちではあるが、１７，１８歳くらいであろう。

「失礼したわ……初めまして。この城の主のオーロラよ……」

オーロラが冷たい笑みを輝矢へと向ける。

「さぁ……今度は貴女の番……」

「……竹取輝矢。退治屋です」

「退治屋……？」

オーロラが少し眉をひそめる。

「そう……退治屋……」

『ぐぅー……ぐぅー……』

「……っ」

オーロラが少し指を動かすと、羊スケと鉄汰が再びオーロラの元へ向かおうと歩き出す。それに気づき、表情を鋭くして左手を構える輝矢。

「“水錠”っ！」

――――バァァァァァーーーンッッッ！！！！――――

『ぐぅっ！』

輝矢の放った水の塊に足を縛られ、羊スケと鉄汰がその場に倒れ込む。

「あらあら……仲間に容赦ないわね……」

「アナタのものにさせるよりは感謝されると思いますけど？」

微笑むオーロラに強気に言い放つ輝矢。

「さぁっ、他のさらった方々も返していただきましょうかっ」

輝矢が表情を鋭くし、三日月の刃先をオーロラへと向ける。

「あら……？ここに来るまでに、もう会ったんじゃないの……？」

「えっ……？」

オーロラの言葉に、眉をひそめる輝矢。

「私の……“作品”たちに……」

「……っ？」

オーロラはどこか怪しく、そしてこの上なく冷たい笑みを浮かべて言った。

第１２章　眠りの森の罠　★４（前書き）

第１２章　眠りの森の罠　★４

「“葉吹雪”っ！」
「“瞬花”っっ！！」

――――パァァァァァーーーンッッッ！！！！――――

クロトの放った無数の葉っぱを、一瞬にして桜の花びらと変えてしまう桜時。

「ん～けっこう面倒だなぁ～“花力”って」
その様子を見て、クロトが少し考えるように呟く。

「さらわれた人間っ？コイツらがっ？」
村雨丸を構えてクロトを警戒しながら、背中合わせに立ち、同じようにシロキを警戒しているゴンへと問いかける桜時。
「眠り姫ってヤツに洗脳されてるってのかっ？」
「ああっ。じゃなきゃっ、俺らと戦うのにいつまでも人間の姿でいるはずねぇーだろっ」
「たっ……確かにっ」
納得するように頷く桜時。確かに今までの鬼人たちは、正体がバレるとすぐに人間から鬼人の姿となって戦いを始めた。鬼人の姿の方が戦闘力も上がるし、２人が鬼人であれば、人間の姿のままいる理由はないだろう。
「じゃっ……じゃあどうすんだよっ？人間相手じゃむやみに攻撃することなんてっ……」
「まっ、適当に粘って、竹取が眠り姫倒すの待つしかねぇーだろっ」
「文句言ってるわりに輝矢任せだよなぁ～」
「んだとぉっ！？」

「いつまでお話してるのかなぁ～っ？」

『……っ！』

飛び込んでくるクロトに、２人が表情を鋭くして構える。

「あぁ～～～んっ」

『何っ……！？』

２人へ向けて大きく口を開くクロトに、桜時とゴンが眉をひそめる。

「あれっ……！まさかっ……！」

「“鬼口”っ！」

『……っ！！！』

――――バァアアアアアーーーンッッッ！！！！――――

クロトが口から放った高密度のエネルギー波が、２人の立っていた辺りの床を直撃し、大きな穴をあける。

『なっ……』

左右に避けた桜時とゴンが、それぞれ驚いた表情で穴を見つめる。

「今のはっ……間違いなく“鬼口”っ……」

「おっおいっ！ゴンっ！コイツらやっぱ鬼人じゃねぇーかっ！」

「……っ」

非難するように叫ぶ桜時に対し、何やら信じられないといった表

情を見せているゴン。

「隙だらけ……」

「……っ！」

そんなゴンに、すかさず鋭く伸びた爪を振り下ろすシロキ。

「ううっ……！！」

「ゴンっ！！」

構えを取ろうとしたゴンであったが、シロキの方が動きが速く、右肩を爪で切り裂かれてしまう。ゴンが血を流して苦しげな顔を見せる。

「クソっ……！」

村雨丸を構えてシロキの方へと飛び込んでいく桜時。

「“鬼爪・天回”……」

「……っ！」

向かってくる桜時に、シロキが鋭く尖らせた爪を飛び道具のように放つ。

「クっ……！」

――――パァァンッ！パァァンッ！パァァンッ！パァァンッ！――――

村雨丸を振るい、すべての鬼爪を叩き落す桜時。

「なかなかやるね……」

そう言ってシロキが再び鬼爪を生やす。

「今のも……鬼人の技っ……」
「ゴンっ！」
唖然として呟く、傷ついたゴンの元へ、桜時が慌てて駆け寄る。
「大丈っ……！」
「人間の姿に擬態したまま…鬼口や鬼爪を使える鬼人なんて、俺は聞いたことも見たこともねぇーっ……」
「えっ……？」
ゴンの言葉に、眉をひそめる桜時。
「お前らはっ……お前らは一体、何者だっ！！？」
『……っ』
ゴンの問いかけに、クロトとシロキはどこか怪しげに微笑んだ。
「どういうっ……どういう意味ですっ……？」
「あら……？わからない……？」
明らかに動揺を見せて聞き返す輝矢に対し、オーロラは笑みを浮かべて寝台から降りる。
「なら見せてあげる……」

「……っ？」

寝台から降りたオーロラが、寝台のさらに奥へと歩いて行く。オーロラの行動を、戸惑うように見つめる輝矢。

「その方が……早いでしょう……？」

「……っ！」

「ぐぅー……ぐぅー……」

寝台の奥で深く眠っている男へと手を伸ばすオーロラ。輝矢は嫌な予感がして、思わず身を乗り出す。

「待っ……！やめっ……！！」

“帰化鬼化”……」

――――パァァァァァァァーーーッッッ！！！！――――――

輝矢が必死に手を伸ばす中、オーロラが両手から放った白い光が、眠っている男の体を包んでいく。

「ぐっ……ううぅぅぅっ……」

眠っていた男が、光に包まれた途端、急に苦しげな声をあげて頭を抱える。

「ううううっ……！グアアアッッッ！！！」

――――――バァァァァァァァァァンッッッ！！！！！――――――

「……っっ！！！」

激しい叫び声をあげて、人間の皮を破るように禍々しい緑鬼へと姿を変える男。輝矢が大きく目を見開く。

「そっ……そんなっ……」

「グアァァァァァァァァァーーーーッッ……」

生まれたばかりの鬼を見上げながら、茫然と呟く輝矢。

「これが私の力……そして彼が……私の“作品”よ……退治屋さんっ……」

「グガアアアアアッッ！！！」

「……っ」

オーロラの言葉に、輝矢は力なく三日月を持つ手を下ろした。

一方、桜時・ゴンＶＳクロト・シロキ。

「俺たちの正体ぃ～？」

人間の姿を保ちながらも鬼人の技を使うクロトとシロキに、戸惑いながらも真剣な表情で問いかけたゴン。そのゴンの問いかけに、クロトがどこか楽しげに微笑む。

「君たちのお察しの通りさぁ～っ」
「何だとっ？」

「ボクらは森の中で眠り姫サマの呪いにかかり、この城へと導かれた人間……」
「人間っ？」
シロキの言葉に眉をひそめる桜時とゴン。

「じゃあなんで鬼口や鬼爪をっ……」
「たっだぁ～眠り姫サマのお力でぇ“人間から鬼人に生まれ変わらせてもらった”んだけどねぇ～っ」
『なっ……！？』
思いがけないその言葉に、桜時とゴンが大きく目を見開く。

「人間から……鬼人にだとっ……？」

「グガアアアアアッッ！！」

「……。」
激しい咆哮をあげる鬼人の前に、茫然と立ち尽くしている輝矢。
人が鬼へと変わるその信じがたい光景を目にした輝矢は、その場から1歩も動けずにいた。

「ガアアアアッッッ！！！！！」
「……っ！クっ……！」
そんな輝矢へと勢いよく爪を振り下ろす鬼人。輝矢が慌ててそれを避ける。

「ダメね……戦闘中にボーっとするなんて……」
「……っ」
笑顔で言葉を投げかけるオーロラを強く睨みつける輝矢。
「グガアアッッッ！！！！！」
「……っ！」
オーロラの方を向いていた輝矢に、鬼人がまたもや爪を振り下ろす。

「三日づっ……！うっ……！」
鬼人に三日月を振り上げようとした輝矢が、思わず三日月を止める。

「ガアアアアッッッ！！！！！」
「あああっっっ！！」
三日月を止めてしまった輝矢に、容赦なく鬼人の爪が振りかかり、輝矢が勢いよく吹き飛ばされる。

「ううっ……」
壁に背中を打ちつけた輝矢が、苦しげな表情を見せる。

「どうしたの……？退治屋さん……目の前に鬼がいるのよ……？早く、退治しっ……」
「元にっ……」
「……っ？」
オーロラの言葉を遮り、立ち上がりながら声を発する輝矢。
「元に戻す方法はっ……！？」
「……。」
真剣な眼差しを向ける輝矢を見て、オーロラが一瞬、笑みを消す。
「そんなもの……」
再び冷たい笑みを浮かべるオーロラ。
「あるはずがないでしょう……？」
「……っ！」
オーロラの言葉に衝撃の走った様子で目を見開く輝矢。
「……。」
立ち上がった輝矢が、力なく俯く。
「グガアアアアッッッ！！！！！」
俯いた輝矢に飛び込んでいき、鋭く爪を振り下ろす鬼人。
「……っ」
――――――・・・・・・・・・・っっっっ！！！！！――――――
「ギャアアアアアアッッ！！」

俯いたままの輝矢が素早く三日月を振り切り、向かってきていた鬼人の胴体を切り裂いた。鬼人は激しい叫び声をあげ、紫色の血を大量に流しながら、後方へと倒れていく。

「うっ……！ううっ……！……っ」

倒れた鬼人は一瞬、元の人間の姿へと戻り、すぐに砂となって崩れ落ちた。

「……。」

俯いたまま三日月を振り払い、鬼人の血を落とす輝矢。

「へぇ……わりと大人ね……。元には戻せないとわかったら、すぐさま殺すなんて……」

「……“水月”」

「……っ！クっ……！」

――――バァァァァァーーーンッッッ！！！！――――

感心したように笑っていたオーロラに、輝矢が無数の水の刃を放つ。不意をつかれたオーロラが慌てて横へと飛び、水月をかわす。水月はオーロラの寝台を破壊し、壁を砕いて外へと飛んでいった。

「……そうでもないみたいねっ……」

壁にあいた穴を見て、苦笑いを見せるオーロラ。

「アナタだけは……」
輝矢が三日月を握る力を強め、ゆっくりと顔を上げる。
「アナタだけは……許さないっ……」
「……っ」
強く睨みつける輝矢を見て、オーロラがどこか楽しげに微笑む。
「さぁ……できるかしら……？」
右手を挙げ、輝矢に問いかけるオーロラ。
「私は……“造り物”とは違うのよ……？……っ」
――――パァァァァァァーーーンッッッ！！！！――――
「……っ」
そう言ってオーロラは白き鬼へと姿を変えた。

第１２章　眠りの森の罠　★４（後書き）

第１２章　眠りの森の罠　★５

「にっ……人間が鬼人になるなんてっ……そんなことっ……」
「……。」
信じられないといった表情で呟く桜時。横ではゴンが厳しい表情を見せていた。

「眠り姫サマの力は偉大……ボクらに尽きぬ命と強き力を与えてくれた……」
「そうゆうことっ」
シロキの言葉を聞き、クロトが楽しげに笑う。
「助けに来たお仲間さんもぉ、そろそろ鬼になっちゃってる頃じゃないっ？」
『……っ！』
「アハハっ！アハハっ！」
動揺している表情を見せる桜時とゴンを見て、クロトはさらに愉快そうな笑い声をあげた。

「惜しかったねぇ～っ！君たちはここで俺たちに殺されるんだぁっ！“葉吹雪”っ！」

「……っ！しゅっ……！“瞬花”っっ！！」

――――パァァァァァーーーンッッッ！！！！――――

あまりに衝撃的なクロトたちの正体に、明らかに動揺していた桜時が、クロトの向けた葉吹雪に対し、慌てて瞬花を唱えて桜の花び

らへと変える。
「“枝槍”っ！」
「……っ！村雨丸っ！」
花びらが散る前に桜時の懐へと飛び込んでくるクロト。桜時が慌てて村雨丸で対応する。
――――カァァンッ！キィィンッ！パァァンッ！――――
桜時の村雨丸とクロトの枝槍が互角の斬り合いを見せる。
「クっ……！」
クロトと距離を取るように後方へと飛び、村雨丸を構える桜時。
“瞬花っ……終っ……！」
――――ボクらは森の中で眠り姫サマの呪いにかかり、この城へと導かれた人間……――――
「……っ！」
思い出されるシロキの言葉に、桜時が思わず刀を止めてしまう。
「隙ありぃ～っ！」
「……っ！」
そんな桜時に、笑顔で斬りかかって来るクロト。村雨丸を構える時間もなく、桜時が目を見開く。
「“狐火・一髪”っ」
『……なっ……！！』

――――バァァァァァァァァァンッッッ！！！！――――

「うわあああああああああああああああああああっっっ！！！！」

「クロトっ……！」

飛んで来た火炎の玉に身を焼かれ、吹き飛ばされるクロト。飛ばされたクロトの下へ、シロキが駆け寄る。

「ゴンっ……！！」

炎を放ったゴンへ、非難するような瞳を向ける桜時。

「何やってんだよっ！？」

桜時がゴンへと駆け寄る。

「聞いてなかったのかっ！？アイツらは人間っ……！」

「前は人間でも、今は鬼人だ」

「……っ」

どこか冷たい瞳で言い放つゴン。いつもとは違うゴンの様子に、桜時が戸惑うような表情を見せる。

「鬼人は倒す……」

「そんなっ……！」

ゴンの言葉に思わず声をあげる桜時。

「そんなのねぇーよっ！！アイツらだってまだっ……！元の人間に戻る可能性があるかもっ……！」

「ハチ公……」

「……っ」

冷静に桜時の名を呼ぶゴンに、桜時が言葉を止める。

「普通に考えて、人間が鬼人になる方法なんてあるはずがねぇー……だがなっ」

ゴンがまっすぐに桜時を見る。

「一度、鬼人になった人間が元に戻る方法の方が、もっとあるとは思えねぇーっ……」

「……っ」

ゴンの言葉に、桜時が表情を曇らせる。

「正解……」

『……っ？』

狐火にヤラれたクロトの体を支えながら、シロキが冷静に言い放つ。

「ボクらを元の人間に戻す方法なんてないよ……」

「そんなっ……」

「まぁもっとも……元の人間に戻ることなんて、ボクらは少しも望んでないけどね……」

「そのとぉ～りっ！」

狐火に焼かれ、顔の一部に火傷を作ったクロトが、気味が悪いとさえ思える笑みを浮かべて立ち上がる。

「もぉ～怒っちゃったもんねぇ～っ！本気で行くよぉっ！シロキっ！！」

「ああ……」

遅れて立ち上がったシロキが、クロトの言葉にしっかりと頷く。

「これが今の俺たちの本当の姿だよぉっ！！」

――――バァァァァァァーーーンッッッ！！！！――――

『……っ！！』

強い光を放って、クロトとシロキがそれぞれ、黒鬼と白鬼へと姿を変える。その禍々しい姿はまさに鬼人そのもの。姿を変えた2人を大きく見開いた目で見上げる桜時とゴン。

「さぁっ！いよいよ死んでもらおうかぁっ！！」

「……。」

そう叫んで爪を立てる黒鬼・クロトに、ゴンが右手を身構える。

「待っ……！待てよっ……！！」

「……っ」

そんなゴンの右手を止めるように掴む桜時。

「やっぱりっ……！やっぱりこんなのっ……！！」

「覚悟がねぇーなら下がってろっっ！！！邪魔だっっっ！！！！」

「……っ！」

ゴンの怒声に、思わず掴んでいた手を離す桜時。

「……。」

戦意を失ったかのように村雨丸をも下げる桜時を横目に、ゴンがたった1人で2匹の鬼の前へと立つ。

「俺たち相手に1人で戦う気ぃ～っ？いくら何でも強気過ぎんじゃないのぉ～っ？お兄さんっ！」

「……悪りぃーが手加減はしねぇーぜっ……」

――――ボォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！！――――

そう言い放ったゴンが白い煙に包まれ、黄金色のキツネへと姿を変える。

「獣化……？」

キツネへと姿を変えたゴンに、首をかしげる桜時。

「アハハっ！今更そんな姿になって何しようってのぉっ？子ギツネさんっ！」

「ああっ……五火からはこの姿じゃねぇーと使えねぇーもんでなっ……」

「何っ……？」

笑っていたクロトが、ゴンの言葉に眉をひそめる。

「“一髪・二目・三耳・四首……」

――――ボォォォォォォォウウウッッッ！！！――――

『……っ！！』

ゴンが何やら言葉を発するとともに、ゴンの尾の横に1つずつ、炎でできた尾が増えていく。激しく赤い炎は、先ほどの火の玉とは比べものにならないほどの力を感じた。

「五臓・六腑……」

「マズいな……クロトっ……！あの技が完成する前にアイツを殺すぞっ……！」

「りょおかいっ！！」
そう言葉を交わしたクロトとシロキが、さらに炎の尾を増やしていくゴンに向けて、同時に大口を開く。
『“鬼口”っっっ！！！』
「……っ！ヤバいっ……！」
技の準備を整えているゴンに向けて、同時に鬼口を放つクロトとシロキ。２つの鬼口は１つとなって、激しい威力でゴンの元へと飛んでいく。その様子に思わず声を出す桜時。
「ゴンっっ！！！」
「七臍……」
桜時が危機を感じて叫ぶにも関わらず、ゴンはそのまま言葉を発し続ける。
「八脚……」
――――パァァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――
『なっ……！！！』
新しく出来た８本目の炎尾が空中で舞い、向かって来た鬼口を一瞬で掻き消す。炎尾のあまりの力に、大きく目を見開く桜時とクロト・シロキ。

「九尾”……」

最後に8本の炎尾を持ったゴンの本物の尾も、赤々とした炎が包んでいく。

「せめて苦しませずに逝かせてやる……」

9つの炎尾がさらに燃え盛り、巨大化していく。

「“九火煉獄”っっ！！！」

――――バアアアアアアアアアアッッッ！！！！！――――

『ううっっ……！！！』

9つの炎尾が、まるで洪水のように、激しい勢いでクロトとシロキに向かっていく。迫り来る巨大な炎に、思わず怯むクロトとシロキ。

「シっ……！シロキっ……！！」

「クロトっ……！！！」

互いに手を伸ばした黒き鬼と白き鬼に、激しい炎は躊躇することなく向かっていった。

――――バァァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――

真っ赤な炎が2匹の鬼と、その周囲をすべて焼いていく。

「あ……れ……？」

炎の中に倒れ込んでいるのは、元の青年の姿へと戻った、かなり弱り果てた様子のクロトであった。

「確か俺……シロキと森に遊びにっ……あれ……？」

「……。」

クロトがすぐ隣に倒れている、こちらも青年の姿に戻った、深く瞳を閉じたシロキの姿を見つける。

「シロキ……？ねぇ……シロキっ……どう……したの……？」

少しも動かぬシロキに、クロトは弱々しく手を伸ばす。

「あれっ……？何だか俺もっ……もう眠いやっ……」

そう呟いて微笑んだクロトの瞳から、一筋の涙が零れ落ちる。

「……っ」

――――――・・・・・・・・・・・っっ――――――

そのまま瞳を閉じたクロトは、隣で眠るシロキとともに、砂となって崩れ落ち、炎の中に消えていった。

「……。」

――――ボォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――――

人の姿へと戻ったゴンが、小さくなっていく炎を見つめ、立ち尽くす。

「……っ」

強く握り締めたゴンの拳からは、炎と同じ赤い血が流れ落ちていた。

「……。」

そんなゴンを、後方から静かに見つめる桜時。

桜時は背負わせただけであった。２人の死を、ゴンに背負わせることしかできなかったのであった。

第１２章　眠りの森の罠　★６

「三日月っ！」
“鬼爪・天回”っ……」
「“水月”っ！」
「“鬼口”っ」

――――バァァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――

「クっ……！」
何を放っても互角以上の力で返してくる白鬼・オーロラに、輝矢が少し表情をしかめた。

「技が感情に呑まれて先走っているわよ……？退治屋さん……」
オーロラは余裕の笑みで輝矢を見下ろす。
「冷静さを忘れてはいけないわ……」
「大きなお世話ですっ」
まるで助言でもするかのように言うオーロラに、強く言い放った輝矢が再び三日月を構える。
「……っ！」
三日月を構え、勢いよくオーロラへと飛び込んでいく輝矢。
「三日月っ！！」
輝矢がオーロラの懐へと入り、三日月を振り切る。

――――・・・・・・・・・・・っっ！！――――

「うっ……！」

空を切る三日月に、輝矢が目を開く。
「そうやって……安易に敵の懐に飛び込む……」
「……っ！」
いつの間にか輝矢の後方へと立っているオーロラ。
「“月器・十六っ……！」
「“鬼爪”……」
「ううううっ……！！！」
輝矢が三日月を十六夜へと変形させる前に、オーロラの爪が輝矢の背中を切り裂いた。

「うあっ……！ううっ……」
血を流した輝矢が、力なく床に倒れ込む。

「……。」
それを見ていたオーロラが白鬼の姿からまた人間の姿となり、倒れている輝矢へと歩み寄った。
「ほらっ……だから言ったでしょう……？」
「……っ」
すぐ傍に立ち微笑みかけるオーロラを、輝矢が痛みをこらえながら睨み上げる。

「そうだっ……貴女も鬼にしてあげましょうかっ？」
「……っ」
オーロラの言葉に、眉をひそめる輝矢。
「そうすれば……ここで私に殺されることもない……永遠に生きることができるのよ……？」
「……冗談じゃありませんっ……」
「……っ」
すぐさま答える輝矢に、オーロラの表情が曇る。

「鬼となって永遠に生きるぐらいならっ……ここでアナタに殺された方がずっとマシですっ」

「……。」

強い瞳で言い放つ輝矢を見て、オーロラが表情から笑みを消す。

「まぁ私はアナタなどに負けたりしっ……」

「……それは……貴女が長く生きることを許された命を持っているからよっ……」

「えっ……？」

少しトーンを落としたオーロラの言葉に、輝矢が少し眉をひそめる。

「でもね……人間の命なんて……いつかは必ず尽きるもの……」

どこか遠い目を見せるオーロラ。

「貴女も……目の前に死が迫ったら……きっと言うわっ……“鬼になってでも生きたい”って……」

「……っ」

妙に気持ちのこもったそのオーロラの言葉に、輝矢は怪訝そうに顔をしかめた。

「だって……みんな、喜んだものっ！鬼人になれてっ……これで死ぬことはないんだって……喜んだものっ！」

「……。」

必死に言い放つオーロラを、輝矢はどこか悲しげに見つめる。

「人でなくなるだけでっ……死ななくて済むのよっ……！？だったらその方がずっとずっといいじゃないっ！」
「オーロラ……アナタ、まさかっ……」
「私はっ……私は死なないっ……！私は永遠に生き続けるのっ……！！」

「……。」
まるで自分の方が追い詰められているかのように、必死に叫ぶオーロラ。そんなオーロラをまっすぐに見つめていた輝矢であったが、やがてどこか諦めたかのように視線を逸らし、俯いた。

「オーロラ……」
「……っ？」
再び三日月を強く握り、傷ついた体を立ち上がらせる輝矢。
「もし……私の命が明日には尽きるほどのものだったとしても……」
痛みをこらえて立ち上がった輝矢が、ゆっくりと顔を上げ、オーロラを見つめる。
「私は……決して鬼として生きる道は選びませんっ」
「……っ」
輝矢の答えに、少し眉をひそめるオーロラ。
「最期まで人として生き、そして死にますっ」
曇りのない表情と堂々とした態度で言い切る輝矢。
「でもまぁ正直、まだ死にたくはないので……」
少し笑みをこぼす輝矢。

「私はアナタを倒しますっ……！」

「……。」
そう言って三日月を構えた輝矢を見て、オーロラがどこか暗い表情で下を向く。

「そう……じゃあっ……」

――――バァァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――

再び白鬼の姿と変わるオーロラ。

「望み通りっ……人として死なせてあげるわっ……！！」

「……竹取輝矢っ……」

鋭い瞳となって、鬼と化したオーロラを見上げる輝矢。

「鬼退治……いたしますっ……！」

「アアアアァァァァァァァッッ！！！」

同時に飛び込んでいく輝矢とオーロラ。

――――・・・・・・・・・・・っっ！！！――――

輝矢の三日月とオーロラの鬼爪が激しくぶつかり合う。

「貴女にっ……貴女に何がわかるのっ……！？」

「……っ？」

輝矢に鬼爪を向けながら、どこか悲しげな声で問いかけるオーロラ。

「生まれながらに死に逝く命を持った人間のっ……何がわかるっていうのっ……！！！」

――――パァァァァァァーーーンッッッ！！！！――――

「ううっ……！」

オーロラの激しい攻撃に、輝矢が持っていた三日月を弾き飛ばされる。

「クっ……」

「ハァっ……！　ハァっ……！　ハァっ……！」

丸腰となった輝矢の前に立ちはだかり、肩で大きく息をするオーロラ。

「貴女にっ……貴女に……何がっ……」

「確かに……私にはわかりません……」

「……っ」

その言葉を繰り返していたオーロラが、三日月を失い、ただ立ち尽くしているだけの輝矢の声に顔を上げる。

「でもっ……わかってくれた人はいたのではないですかっ……？」

「……っ！」

突き上げるようにまっすぐに見つめる輝矢に、ハッとした表情を見せるオーロラ。

――――可哀想に……オーロラ……わしがっ……わしが代わりに死にたいっ……――――

――――ああっ……どうしてあなただけが不治の病になどっ……オーロラっ……――――

「……っ」

思い出される映像を、オーロラが必死に振り払うかのように首を振る。

「鬼になることで帰る場所すら亡くしてっ……それで永遠に生きて、本当に幸せですかっ？」

「私っ……私はっ……！」

「アナタは永遠の命を得る代わりに、たくさんのものを亡くしたんですっ！」

「違うっ！！！」

輝矢の言葉を、頭を抱えて大きな声で否定するオーロラ。

「違うっ……！違うっ！違うっ！私はっ……！！私はぁぁぁっ！！！」

「……っ！」

三日月のない輝矢へと、オーロラが勢いよく爪を振り下ろす。

――――パァァァァァァーーーンッッッ！！！！――――

「……っ！！」

オーロラの爪が輝矢の体を切り裂いた途端に、輝矢の体が水となって弾け飛ぶ。

「水の分身っ……！？うあああああっ！！！」

弾け飛んだ水が刃となり、驚いているオーロラに向かって一斉に飛び出していく。

「ううううっ……！」
全身に水の刃を受け、思わずよろけるオーロラ。
「……っ」
「うっ……！！」
そんなオーロラの目の前に現れる、三日月を構えた鋭い目つきの輝矢。
「これでっ……終わりですっ……！」
「クっ……！！」
三日月を突き出す輝矢と、険しい表情を見せるオーロラ。
「……っ三日月っっ！！」
――――――・・・・・・・・・・・・っっ！！！――――――
「うっ……！ううっ……」
輝矢の突き出した三日月が、オーロラの胸を貫いた。

「いっ……嫌ねっ……」

胸から紫色の血を流していた白鬼が、やがて赤い血を流す人間の女の姿へと変わっていく。

「永遠にっ……生きられるっ……はず……だったのにっ……」

「……。」

輝矢が三日月を引くと、オーロラは力なくその場にしゃがみ込んだ。

「輝矢っっ!!」

「竹取っっ!!!」

そこへ桜時とゴンが駆けつける。

『……っ!』

部屋の中にいる輝矢とオーロラの姿を見て、思わず目を見開く桜時とゴン。

「オーロラ……」

壁にもたれかかるようにしてしゃがみ込んでいるオーロラを、少し細めた目で見つめる輝矢。

「アナタ……やはり人げっ……」

「昔ね……」

「……っ」
弱々しい声で話しを始めるオーロラに、輝矢が言葉を止める。
「昔……生まれつき、不治の病を患った子供がいたの……」
「……。」
オーロラを、輝矢はただまっすぐに見つめる。

「不治の病っ……？」

――――娘が……いましてね……――――

「あっ……」
輝矢とオーロラのやり取りを見ていた桜時が、何か思い当たったかのような表情を見せる。

「生まれながらに死ぬことを宣告されたその子供を……両親はひどく哀れんだ……」

――――可哀想に……わしがっ……わしが代わりに死にたいっ……――――

――――ああっ……どうしてあなただけが……不治の病になどっ……――――

「両親は……毎日言ったわっ……“可哀想な子、可哀想な子”って

……」

「……っ」

そっと俯く輝矢。

「子供は思ったわ……“私は可哀想なんかじゃない”……“もっと……もっと生きたい”……」

オーロラがどこか悲しげに笑う。

「“永遠の時を……生きたい”って……」

「……。」

遠い瞳を見せるオーロラを見て、輝矢はそっと目を細めた。

「んっ……！ううっ……！」

痛みが走ったのか、急に顔をしかめるオーロラ。その体が足元から徐々に砂と化していっている。

「どうやら……本当に終わりが来たみたいね……」

砂となりゆく自分の体を見て、オーロラが笑う。

「アナタを……アナタを鬼人へと変えたのは……？」

死に逝くオーロラに、輝矢が最後の疑問を投げかける。

「……あの方は偉大な方よ……」

「あの方……？」

オーロラの言葉に眉をひそめる輝矢。

「あの方も間もなく動き出す……そうなれば……世界は鬼に満ち、やがて滅びの一途を辿るわ……」

「そのあの方っつーのっ……！あの方っつーのは誰だっ！？」
「ゴンっ」
輝矢の横から顔を出し、必死の勢いでオーロラに問いかけるゴン。
「ウフフ……。……っ」
――――・・・・・・・・・・・っっ――――
「……っ！」
名を明かさぬまま、オーロラは砂となって崩れ落ちていった。
「……。」
風に吹かれ、消えていく砂を、輝矢は神妙な面持ちで見つめていた。

御伽界・とある山奥。

「オーロラの反応が消えました……」
崖の上に立ち、そう言うのは、色素の薄い灰色の髪に、あまり光を感じない紫色の瞳の、まだ若い男。首筋に何やら黒い紋様のようなものが入っている。

「シルク様……」

「……そう」

崖の先に座っているのは、長い白髪の人物。背中しか見えないが、その華奢な体に高く響くその声は、恐らく女性であろう。シルクと呼ばれた女性は、男の言葉に素っ気ない返事をする。

「やっぱりどこまで行っても人間は人間だったわねぇ……」

「オーロラの抜けた穴はどうなさいますか？」

「穴……？」

男の言葉を不思議そうに問い返すシルク。

「どこに穴があいたというの……？諸刃……」

「えっ……？」

諸刃が少し戸惑うような表情を見せる。

「捨て駒を1つ失くしただけよ……私には何の影響もないわ……」

「……っ」

そのシルクの言葉に、諸刃はあまりない表情でそっと眉をひそめた。

「すべては……私の計画通り……」

シルクが座ったまま、その白く細い手を高々と空へと伸ばす。

「やがてこの美しい世界を……醜い鬼が埋め尽くす……」

伸ばした手が、シルクを照らす太陽を隠す。

「フフフっ……アハハハハっ……アハハハハっ……」

高々とした笑い声が、太陽の在る空へと響いた。

第１２章　眠りの森の罠　★７

翌日。眠りの森。オーロラの古城付近。

「……。」

オトポリの制服を着た多くの警官が古城内や周囲を調査する中、輝矢は古城から少しはずれたところに作られた、小さな墓の前に立っていた。

「良かったのか……？」

「……っ」

そんな輝矢の横へと現れたのはハチ。

「六べぇさんとおハナさんに……オーロラのこと伝えなくてっ……」

「……。」

ハチの問いかけに、そっと目を落とす輝矢。

「良かったんですよ……」

輝矢が悲しげに微笑む。

「２人の娘は３０年前にこの森で死んだ……それで……いいんです……」

「……そっか……」

輝矢の言葉に、ハチが小さく頷く。

「……“瞬花”」

――――ポンっ！！――――

「……っ」

ハチが瞬花で花を出し、その花を墓へと手向ける。

「かぁ～っ！墓なんて作ってんじゃねぇーよっ！辛気くせぇーなぁっ！！」

「ゴンっ」

いつも通りの不機嫌面でその場へと現れたのはゴンであった。何とも煩わしそうに墓を見るゴン。

「おいっ！ハチ公っ！お前もなぁ～に花なんか供えてんだぁ～っ？辛気くせぇっ！！」

「何って……」

「情緒の欠片もないキツネですねぇ」

墓や花がとても気に食わない様子のゴンに、輝矢とハチが少し呆れた表情を向ける。

「だいたい俺は花っつーものが昔っから嫌いなんだよっ！」

「それはハチへの侮辱と受け取って、蹴り倒してもいいんですか？」

「何っっでだよっっ！！！」

かなり勝手な解釈をする輝矢に、ゴンが大きく突っ込みを入れる。

「あっ……そういえばっ……」

『……っ？』

何かを思い出したように声を出すハチに、言い争いをしていた輝矢とゴンが振り向く。

「誰に言われたのか忘れたけどっ…こんなこと言われたなぁ～」

「……？何です？」

「うん……“永遠に咲く花を、人は誰も美しいとは思わない”」

「……っ」

――――私は永遠に生きるのっ……！！――――

「……。」

ハチの言葉にオーロラのことを思い出し、そっと俯く輝矢。

「“じゃあどうして、散り逝く花は美しいのか”……」

墓をまっすぐに見つめるハチ。

「“人が花はいつか散るものだと知っているから美しく見える……そうじゃない……”」

穏やかな笑顔で言葉を続けるハチ。

「“花自身が、いつか散ることを知りながら……それでも一生懸命咲くから美しいんだ”ってっ」

「……っ！」

そう言って笑顔を見せるハチに、輝矢が少し衝撃が走ったかのよ

うに口を押さえる。

「でぇも誰に言われたんだっけなぁ？」

「……っ」

考え込み、首を捻るハチの横で、小さく笑顔をこぼす輝矢。

「さっ、ここはオトポリに任せて、私たちはそろそろ行きますかっ」

「へっ？」

「サルぅ～っ！キジぃ～っ！どこですぅ～っ？」

目を丸くするハチを墓の前に残して、足早に古城の方へと向かい、モンキとユキジを探す輝矢。

「何だぁ？アイツ……」

「やっぱすげぇーよっ、お前っ」

「へっ？」

首を捻っていたハチが、ゴンの言葉に振り向く。

「あっ……」

「……っ？」

ゴンの顔を正面から見た途端に、昨日のクロトとシロキとの戦いが思い出され、気まずそうに俯くハチ。そんなハチを見て、ゴンが眉をひそめる。

「ゴン……そのっ……昨日は悪っ……」

「良かったよっ。お前に殺させなくてっ」

「えっ……？」

ゴンの言葉にハチが戸惑うように顔を上げると、ゴンは穏やかな笑みを浮べていた。

「お前はこれから……たくさんのものを背負うアイツを……支えていかなきゃいけねぇーんだもんなっ……」

そう言ってゴンが、モンキやユキジと合流する輝矢を見つめる。

「それってどうゆうっ……」
「まぁ一言で言うと、良き旦那になれってことだっ！」
「だんっ……」
ゴンの笑顔に、固まるハチ。

「って、なるかぁぁぁぁぁっっ！！！」
「アッハッハっ！」

「ハチ～っ！行きますよぉ～っ？」
思い切り怒鳴り返すハチを見て、楽しげに笑うゴン。そんなハチを古城の方から輝矢が呼ぶ。

「ゴンと何の話をしてたんです？」
「何でもねぇーよっ」
やって来たハチに輝矢が問いかけるが、ハチは素っ気なく答える。
「怪しいなぁ～」
「桜時、ゴンゴンに何か脅迫されてんじゃなぁ～いっ？」
「誰がじゃっ！！」
疑いの目を向けてくるユキジに、ゴンが力強く怒鳴りつける。
「おおぉぉ～～～いっ！かっぐやさぁぁぁぁ～～～んっっ！！！」

『……っ？』

そこへ古城の調査を行っていた金汰がやって来た。

「いっやぁぁぁぁ～～っ！ここにおったとですかぁ～っ！」

「金汰さんっ、調査終わったんですか？」

「んんっ？」

――――ボォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！――――

「ああっ……粗方なっ」

「渋っ！」

「ずっと人でいりゃいいのにぃ～っ」

ゴンの問いかけに、人化してカッコよく答える金汰に、モンキとユキジが少し呆れた表情を見せる。

「それで輝矢さん」

「はいっ？」

真剣な表情で輝矢の方を見る金汰。

「今回の件、本部に知らせたら、緊急会議が開かれることになった。オトポリ全員に召集かかっている」

「えっ？俺もですかぁ？」

「まぁ一応なっ」

「一応って……」

金汰の微妙なニュアンスの答えに、顔をしかめるゴン。

「まぁゴンさんがいない方が会議はスムーズに進むと思うっスけどねぇ～っ！」

「……っ」

――――バギコォォォォォーーーーンッッッ！！！！――――

「うううっ……」

現れた途端に要らぬ口を叩いた羊スケに、ゴンの鉄拳が降り注いだ。

「危うく鬼人にされるところだった可愛い部下になんたる仕打ちっ……」

「あ～あ。鬼人にされときゃあ容赦なく燃やしてやったのによぉっ」

「ヒドいっスよぉ～っ！ゴンさぁ～んっ！」

羊スケが泣きそうな顔で訴える。危うく鬼人にされそうだったわりには元気そうである。

「んんっ？羊スケっ、お前が目覚めたということは鉄もっ……」

「ああっ、さっき起きたっスよっ？」

「何いいいいいいいいっっっっ！！！！！？」

羊スケの答えを聞き、大きなリアクションをとる金汰。

――――ボォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――

「待ってるだべぇ～っ！鉄ちゃぁぁ～～んっっ！！兄ちゃんが今すぐ行くだぁぁ～っっ！！」

『……。』

再び熊化した金汰が、物凄いスピードで再び古城の方へと走り去っていってしまう。

「結局……何言おうとしてたんだ……？あのクマ……」

「さぁ？」

呆れた表情で問いかけるハチに、首をかしげる輝矢。

「まぁ要は～会議があるなら情報収集できるし、輝矢さんも来たらどうっ？ってことじゃないっスかぁ？」

『なるほどっ』

代わりに言う羊スケに、ハチたちが納得したように手を叩く。

「そういえばさぁ～オトポリの本部ってどこにあんのっ？」

「“龍国”だ」

ユキジの問いかけに、真面目な表情で答えるゴン。

「龍国……？」

「ああっ……四大国が一、御伽界・最古にして最大の国……」

「どうするんだ？輝矢」

「うぅぅ～～～んっ……」

ハチの問いかけに、考え込むように首を捻る輝矢。

「そうですねっ、じゃあ行きましょうかっ」

「おうっ！」

「私も久々に“里帰り”したいですしっ」

「おうっ！って……へっ？」

勢いよく返事をしたハチが、何やらおかしいと思い、首をかしげる。

『へっ？へっ？』

モンキやユキジらと目を合わせ、首をかしげ合うハチ。

『えええええええっっっ！！！！？』

３匹の大きな声が響き渡った。

つづく。

第１２章　眠りの森の罠　★７（後書き）

これにて第一部完結になります。
第一部だけで８１話とは…本当、無駄に長くて申し訳ないです。
今後、簡単なキャラクター紹介を挟んだ後、第二部を掲載させていただこうかと思っております。
第二部・龍国、輝矢の里帰り編も、ぜひぜひご覧下さい。
最後ではありますが、ここまで読んで下さった皆様、本当にありがとうございました。
引き続き、「鬼斬りかぐや」をよろしくお願いいたします。

第１３章　御伽最大の国　☆１（前書き）

第２部、始まり始まりぃ～。

第１３章　御伽最大の国　☆１

“龍国”。
御伽界東方に位置する、海に面した巨大な国。
“雀国”とともに御伽四大国の１つに数えられ、千年以上前から存在する、御伽界最古にして最大の国である。
その名の通り、獣人最強とされる“龍人”一族に治められ、獣人・人間を問わず、多くの者が暮らしている。

龍国・中央部。御伽警察・本部。
本部最奥に存在する、２０階建てのシンプルな白い塔。この塔の最上階に“長官室”があった。
「うむ……」
渋い表情を見せて頷く、長官席の椅子に座った、水色の髪に真っ赤な瞳の色黒の男。４０歳は超えているだろうが、何とも若々しく凛々しい顔立ちであった。体格のいい体にオトポリの黒制服を身にまとい、その左胸にはオトポリのマークが象られた金色のバッチを付けていた。
「私こそが、オトポリ長官にして龍国主を務める、青守（あおもり）ザクゥゥゥゥゥーーーロである」
「いやっ、知ってますから」
男の言葉に少し呆れた表情で反応するのは、長官席の机の前へと立つ、人間の姿の金汰。
「私こそが獣人最強とされる龍人一族『アオモォォォォーーリ』の血筋であり、その圧倒的な力でぇっ……！」

「いやっ、だから知ってますって」
長々と話を続ける男の言葉を、金汰が思わず途中で遮る。そう、この男こそ、オトポリ長官にして龍国主を務める青守座黒（あおもりざくろ）である。獣人最強とされる龍人一族『青守』は、その圧倒的な力で大国・龍を長年に渡り治め、１０年前の鬼人出没時もオトポリを結成し、その指揮をとった伝統の一族である。
「それよりも今回の件のことを」
「今回の件は私の自己紹介よりも重要か？」
「当たり前です」
「そっそうか……」
金汰にきっぱりと言われ、座黒が少し悲しげに頷く。
「しかし人が鬼人に……なぁ」
「ええ」
座黒の言葉に金汰が深々と頷く。
「その者たちは確かに人間であったのか？ゴン」
「はい……」
金汰の横に立つゴンが厳しい表情で頷く。

――――シロキ……？ねぇ……シロキっ……どう……したの……？
――――

――――あれっ……？何だか俺もっ……もう眠いやっ……――――

クロトとシロキのことを思い出し、ゴンが少し俯く。
「……本人の口からそう聞きましたし、死ぬ間際に人の姿に戻ったのを確認しました。間違いありません」
「……そうか……」
暗い表情で報告するゴンを見て、座黒も気難しい表情で頷いた。

「竹取輝矢の話によると、そのオーロラという女が鬼人化したのは今から３０年も前ということになるな……」
「ええ、世界中に鬼人が出没し、桃タローが英雄となった１０年前よりもさらに前ということになります」
「つまり……鬼人が出没する前から、その人間を鬼人に変える力を持った者は存在した……」
そう言うと座黒は椅子から立ち上がり、窓際の方へと歩いて行く。
「１０年前の鬼人出現も、今回の鬼人復活も……どうやらその者が深く関わっているのは間違いないようだな……」
窓から龍国を見渡し、厳しい表情を見せる座黒。
「お前たち以外からも、鬼人化した人間の報告をいくつか受けていてな……」
『えっ……？』
座黒の言葉に、ゴンと金汰が眉をひそめる。
「北西の地では、とある街の住人がある日突然、全員消え、その後その付近に多くの鬼人が出現した……」
「街人全員が……鬼人化したと……？」
「確証はないがな」
『……。』
座黒が振り返ると、ゴンと金汰は何とも厳しい表情を見せていた。
「その者の動きがここに来て活発化しているのは間違いない。我々も早急に手を打たねばならん……」
「そうですね」
金汰が素早く頷く。
「……ゴンっ」
「……っ？」
座黒が鋭い瞳をゴンへと向ける。
「はいっ？」
少し戸惑うように返事をするゴン。
「この度の件、“あの女”が絡んでいる可能性がある……」

「……っ」
その言葉を聞いた瞬間に、ゴンの表情が凍りつく。
「その辺りは……お前も覚悟してかかるようっ……」
「覚悟って……何ですかっ？」
「……っ？」
言葉を遮り、鋭く問いかけてくるゴンに、座黒が顔を上げる。
「俺はいつだって殺せますっ」
「おっおいっ、ゴンっ」
強く言い放つゴンに、金汰が注意するように声をかける。
「今更覚悟なんて必要ない……」
「ゴン……」
怖いとすら思えるほど冷たい瞳を見せるゴンに、座黒が少し目を細める。
「じゃあ俺っ……まだ報告書残ってるんでっ……」
「あっ！おいっ！ゴンっ！」
金汰が呼び止めるにも関わらず、ゴンはあっさりと座黒に背を向け、長官室を後にした。
「すみません、長官。アイツ、いい年こいてんのに、どうにも子供染みたところがあってっ……」
ゴンの代わりに申し訳なさそうな顔を見せる金汰。
「アイツには後で俺からきっちりっ……」
「いやっ……」
「へっ？」
穏やかな笑みを見せる座黒に、金汰が少し首をかしげる。
「あれはあれで……大人になったんだと思う……。あの頃のゴンに比べれば……」
「長官……」
まるで親のように温かい座黒の表情に、少し目を細める金汰。
「だが……憎しみというものは深い……」
座黒が少し悲しげな表情となる。

「消したくとも……消せないものなのだ……」
「……。」
座黒の言葉に、金汰も少し辛い表情で俯いた。
「それと竹取輝矢のことだが……」
「ああ、はい。早速、今から迎えにっ……」
「いやっ、お前は警務に集中してくれれば良い」
「はっ？」
座黒に背を向けて輝矢を迎えに行こうとした金汰が、座黒の言葉に目を丸くして立ち止まる。
「ですがそれではっ……」
「イチゴ」
「はい……」
「……っ」
座黒が名を呼ぶと、長官室の入口付近に人影が現れる。影となっていて顔はよく見えないが、声からしてまだ若い女性に思える。
「お呼びでしょうか……？お父様……」
「イチゴっ」
入ってきた人影を見て、金汰が少し驚いた顔を見せる。
「竹取輝矢のことはイチゴに任せることにした」
「イチゴにですか？」
「ああ、竹取輝矢とは昔からよく知る仲だしな。それに竹取輝矢のお供に朱実桜時がおるそうではないか」
「えっ？ああ～はいはいっ、ハチ公のことですねっ」
思い出したように答える金汰。ハチが朱実の一族であるという認識が、まだ薄いようである。
「イチゴは彼とも面識があってな。前々からもう1度会いたいと言っておったしな」
「お父様っ……」
笑顔で言い放つ座黒に、人影が少し照れるように俯いた。
「では早速、迎えに行ってくれ、イチゴ」

「はい……」
小さな声で返事をして、人影が長官室から姿を消した。
「お前は会議の準備を頼む、金汰」
「はっ！」
金汰が敬礼をしてしっかりと答える。
「あっ、それと長官っ」
「んっ？」
「輝矢さんから桃ちゃんに今回の件、伝わりますかねぇ？後で報告に行こうかと思ってたんですけど」
「むう……」
金汰の言葉に、座黒が少し考えるように俯く。
「今回の件、桃ちゃんにも伝わっておいた方がいいですよね？桃ちゃんなら何かわかるかもっ…」
「わからんっ」
「へっ？」
座黒の一言に、目を丸くする金汰。
「あの男の考えることはわからんからなぁ……」
「まっまぁ確かに……」
困ったように呟く座黒に、金汰も思わず相づちを入れる。
「でぇ、私の自己紹介の続きなんだがぁ」
「いやっ、だからもういいですって」
真剣な表情をすぐに崩して、またしても自己紹介を始めようとする座黒に、金汰は呆れた表情で言い放った。

長官室を出たゴンは長く続く静かな廊下を1人、歩いていた。
「……。」

――――今回の件、あの女が関わっている可能性がある……――――

――――お前もその辺りは覚悟してかかるようっ……――――

「……っ」

過ぎる座黒の言葉に、ゴンはどこか煩わしそうに首を振った。

「クソっ……！」

収まらない何かを振り切るように、ゴンはすぐ横の壁に拳を打ちつけた。

色々な想いが交錯し、色々な人々が動く中、輝矢たちもその“龍国”へとやって来ていた。

『ふっはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～～っっっっ』

どこまでも広がる街並みと、その向こうに延々と続く真っ青な海に、少し間の抜けた感嘆の声を漏らすのは、１匹のイヌと１匹のサル。ハチとモンキである。

「ここが……龍国っ……」

「かぁぁ～～っ！さっすが御伽最大の国やなぁ～っ！」

「おっきいねぇ～」

丘の上から街全体を一望しながら、それぞれに声を出すハチ、モンキ、ユキジ。これまでも大きな国はいくつか行ったが、龍国はまったく規模が違っていた。家の数も人の数も倍、いやそれ以上である。

「桜時はぁ～？同じ四大国の雀の王子様なんだし、龍国来たことあ

るんじゃないのぉ～？」
「えっ？あっ、いやぁ……それがぁ……小さい頃、孔雀さんに連れられて1回来たことあるらしいんだけどぉ……」
ユキジの問いかけに、気難しい表情を見せるハチ。
「どうにも思い出せないってゆーか、思い出そうとするとこう頭がキーンとなるってゆーか……」
「キーン？」
「来た時に頭でもぶつけたんちゃうかぁ～？」
「んん～っ」
ユキジとモンキの言葉に、ハチがさらに考え込む。
「まぁそのウチ思い出すってぇ～でぇ～？オトポリの本部ってゆ～のはここから遠いのぉ～？輝っ……」
「すぅーっ……すぅーっ……」
『……。』
立ったまま器用に眠っている輝矢を見て、ハチたちが固まる。
「よくこの状態で寝れるよねぇ～ある意味、感心っ」
「ここに来るまでなんか、歩きながら寝とったでぇ？さっすが輝矢んっ！」
「ったくっ！」
感心しているユキジとモンキの横から、ハチが呆れた表情で輝矢の元へと歩み寄っていく。
「おいっ！おおぉぉぉぉーーいっっ！！！」
「んっ……？」
ハチの大声に、輝矢がゆっくりと目を開く。
「いやぁ～っ、懐かしいですねぇ～。若かりし頃が甦るというか、心あらわれるような思いですねぇ～」
「ウソをつけっ！！思いっきり寝てたじゃねぇーかっっっ！！！！」
龍国の街を眺めながら、懐かしそうに微笑む輝矢に、ハチが全力で突っ込みを入れる。
「いやぁ～っ、すみません。あまりの懐かしい香りについウトウト

してしまいましてっ」
「ったくっ！……っ」
笑顔で謝る輝矢に不機嫌な表情を見せていたハチであったが、その表情が不意に曇る。
――――疲れてるんじゃなぁ～い？やっぱ……――――
――――月器や水力使うのって、やっぱそれなりに輝矢の体に負担かけてんじゃないかなぁ～？――――
「……。」
思い出されるユキジの言葉に、ハチが少し目を細める。
「もし調子悪いんならっ……ちゃんとそうっ……」
「別にっ、どっこも悪くないですよぉ～っ」
ハチが言葉を言い終えないうちに、輝矢がハチに爽やかな笑顔を向けた。
「ハチは全然っ、何にも心配しなくて大丈夫ですからっ」
「……っ」
その輝矢の言葉に、少し表情をしかめるハチ。
「またそれかよっ……」
「……っ？」
どこか暗い表情で俯くハチに、輝矢が少し首をかしげる。
「それにしてもぉ～輝矢に故郷があるなんて思わなかったなぁ～っ」
「せやなぁ～」
「確かに……」
「失礼ですねぇ」
ユキジの言葉に深く頷くハチとモンキ。そんな3匹を見て、輝矢が少し表情をしかめる。

「じゃあ私はどこで生まれたと思っていたんです？」
『どこでっ……？』
輝矢の問いかけに一斉に考え込む３匹。
「地獄っ？」
「闇の底とかぁ？」
「ブラックホールっ！」
「……。」

――――バキッ！ボガンッ！ダンッ！バシンッ！ガシャコォンッ！
――――

『ううっ……』
笑顔で答えたモンキとユキジに、輝矢の鉄足が振り下ろされた。
「なんで桜時は蹴らないのさぁ～っ？」
「ハチの言うことなら何でもいいからです」
「ううぅ～差別だぁ～っ」
「俺は輝矢んとの出会いが、ブラックホールから来たくらいの衝撃やったってことを伝えようとぉっ……！！」
「はいはいっ」
「ぎゃあああああっっ！！！！」
下手な言い訳をしようとしたモンキに、再び輝矢の鉄足が振り下ろされる。
「さっ、じゃあまだ会議まで時間はありますが、オトポリ本部へ行きますかっ」
「えっ？お前ん家、行かないのかっ？」
輝矢の言葉に、ハチが少し意外そうに聞き返す。
「何です？ハチ。そんなに私のお家訪問がしたかったのですか？」
「そうじゃねぇーよっ！」
「大丈夫ですよぉ。後でたっぷりお家デートしましょうねぇっ」
「だっからそうじゃねぇーって言ってんだろうがっっ！！！」

1人、ウキウキとしたオーラを放つ輝矢に、ハチがどんどん突っ込む声を大きくしていく。
「そうじゃなくってぇっ！まず家に顔出さなくていいのかって聞いてんだよっ！！」
「そうだよぉ～まだ会議には時間あるんだしぃ、先、家行っちゃえばぁ～っ？」
「家に行くと、会議に間に合わなくなりそうですからっ」
ハチとユキジの問いかけに、輝矢が平然とした表情で答える。
「アナタたちのことを師匠に紹介しなきゃいけませんしね」
『師匠っ？』
輝矢の言葉に3匹が一斉に目を丸くする。
『しっ……師匠って……』
「ああ、“桃タロー”のことですよ」
『桃タローっっ！！？』
3匹が桃タローの名に敏感に反応する。
「もっ……桃タローっ！？そうかぁっ！！俺ら、あの桃タローに会えるんかぁぁっっ！！」
「御伽界を救ったってゆう超スペシャルな英雄をナマで見れるんだねぇ～っ！感激ぃぃぃ～～っ！！」
「おっ俺っ、握手してもらおっかなっ！？」
「まぁそんなに期待しない方がいいと思いますけどね……」
興奮気味の3匹には聞こえないような小さな声で輝矢がそっと呟く。
「まぁとりあえず、先にオトポリに行きますよぉ～」
『はぁ～いっ！！』
桃タローにすっかりテンションの上がった3匹は、輝矢の言葉に素直に手を上げた。

第１３章　御伽最大の国　☆１（後書き）

桃タローさんが出てくるのは、もうちょい先です。

第１３章　御伽最大の国　☆２

と、いうわけで、御伽警察・本部。敷地内出入り口。
『ふっはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～～っっっ！！！！』
その壮大な敷地と、いくつも並んだ高い塔を見渡しながら、感心したように声を漏らすハチ・モンキ・ユキジの３匹。整った設備と高度な技術により造られた建造物の数々は、ハチたちがこれまで１度も目にしたことのないものばかりであった。
「こんなすっげぇートコで働いてんのかよっ……ゴンたちっ……」
「桜時ん家の広さにもビックリしたけど、上には上がいるんだねぇ～」
「さっ、とっとと入りましょうかっ」
「って、おいっ！そんなにドンドン進んでいいのかよっ！？」
「大丈夫ですよ」
不安げにハチが問いかけるが、輝矢は爽やかな笑顔で遠慮することなくオトポリの敷地に足を踏み入れる。

――――ビーっ！ビーっ！ビーっ！ビーっ！――――

「あれっ？」
「ほら見ろぉぉぉっっっ！！！言わんこっちゃねぇぇぇぇぇぇっっっ！！！！！」
輝矢が足を踏み入れた途端に鳴り響く警報音。首をかしげる輝矢にハチが思い切り怒鳴りあげる。
「侵入者だぁぁぁぁっっっ！！！！！」
「どゅおおおおおおおおおおっっ！！？」
中から出てくるたくさんの警官に、ハチが怯えたように叫ぶ。

「どうすんだよっっ！！？」
「あんなヤツらっ……1人残らず倒してみせますっ」
「いっやぁぁぁぁっっっ！！！！絶対、監獄行きだぁぁぁっっっ！！！！」
「おっ……俺は別に怪しいサルちゃうでぇぇっっ！！！？フツーのサルやっっ！！フツーのっっ！！」
「サルがフツーだって言ってる時点でフツーじゃないよ」
焦る者や冷静な者、武器を構えようとする者のいる中、警官たちが入口へと駆け込んでくる。
「貴様らっ！何ヤツだっっ！！？」
『ひいいいいいいいっっ！！！』
周囲を囲む警官たちに、ハチたち3匹が輝矢の後ろへと逃げ込む。
「何奴？まぁアナタ方より偉いことは確かです。とっとと道を開けなさい」
『何いいいっっっ！！！！？』
輝矢の偉そうな発言に、周囲の警官たちが皆、怒りを露にする。
「おっおいっ！何、怒らせてんだよっ！！」
「そうそう、ここは穏便にぃ～っ」
「とっとと開けないと吹っ飛ばしますよ？」
『だあああああああああっっっ！！！！』
穏便とはかけ離れた発言をする輝矢に、ハチたちが皆、ズッコケる。
「吹っ飛ばすだとぉぉ～っっ？むむむぅ～っ、怪しいヤツめっ！捕まえろぉぉっっ！！！！」
『ひえええええええっっっ！！！！！』
一斉に構えを取る警官たちに、震え上がる3匹。
「何の騒ぎっ？」
『……っ』

凛と響き渡る声に、輝矢たちや警官が一斉に振り向く。
「何かあったのっ？」
皆が振り返った先に立っていたのは、水色の長いポニーテールに、大きな力強い真っ赤な瞳の、まだ２０代前半くらいの若く美しい女性であった。オトポリの黒い制服を身に纏い、その左胸にはオトポリのマークの入った銀のバッチを付けていた。
「うっひょぉぉ～～っ！キレイなお姉さんっ！」
「懲りない男だねぇ～」
目を輝かせるモンキに、横のユキジが呆れた表情を見せる。
「……っ？」
何か戸惑うように眉をひそめるハチ。

『副長官殿っっっ！！！』

『えええっっっ！！！？副長官っっっ！！！！？』
他の警官たちの言葉に驚き、思わず大声を出すハチたち。

「こんな真っ昼間から侵入者っ？一体、どこにそんなバカっ……って、輝矢ぁ～っ？」

「久しぶりですね、リンゴ」

『えええええええっっ！！！？しかも知り合いっっっ！！！？』
互いに名前を呼び合う輝矢とリンゴに、３匹がさらに驚きの声をあげる。
「ふっ……副長官殿のお知り合いでありますかっ！！？」
「まっまぁねっ。ってか、何でアンタがここにいんのよっ？」
「金汰にオトポリの会議があるので聞きに来ないかって言われて来たんです」

『そっ……総長殿にいいいいいっっっ！！！？』
輝矢から金汰の名が出ると、警官たちがさらに驚く。
「それなのにこの方々が……」
『うっ……！』
輝矢が鋭い瞳を向けると、周りを囲んでいた警官たちが皆、焦った表情を見せる。
『しっ……！失礼しましたぁぁぁぁ～～っっ！！！』
警官たちが敬礼をして、逃げるようにその場から去っていく。
「まったく……空気の読めない方ばかりですね、ここは」
「そう言ってやらないでよっ。どうせアンタが“１人残らず吹っ飛ばす”とか何とか言ったんでしょっ？」
「私がそんなこと言うはずないじゃありませんか」
「言っただろーがっっ！！！思いっきりっっっ！！！！」

「んんっ？」

『……っ？』
輝矢に突っ込んだハチを見て、リンゴが急に眉をひそめる。そんなリンゴに首をかしげる輝矢たち。
「アンタぁ～……」
「ううっ……」
ハチをじっくりと見つめながらせり寄って来るリンゴに、ハチが表情をしかめて後退する。
「どっかでっ……」
「えっ……？」
考え込むように呟くリンゴに、ハチが戸惑うように目を丸くする。
「何です？リンゴ。私のハチに下手なナンパしないで下さいよ？」
「そんなんじゃないわよっ。ってか、何っ？このイヌ、アンタの男？」
「そうです」

「サラっとウソ言うんじゃねぇっっ！！！」
リンゴの問いかけにあっさりと頷く輝矢に、ハチがまたしても大声で突っ込む。
「じゃ大丈夫よっ。私とアンタ、男の趣味、まるで違うし」
「それもそうですね」
「ってか、ナンパとかじゃなくってぇ、マジどっかで見たことあんのよねぇ～このイヌ」
納得している輝矢の横で、まじまじとハチを見つめるリンゴ。
「桜時はどうなの？」
「いやっ、俺はよくっ……」
「まぁ見たことくらいはあるでしょうね」
『へっ？』
互いに首をかしげていたハチとリンゴが、横から口を挟んだ輝矢の言葉に眉をひそめる。
「それ、どういうことよっ？」
「ハチは雀国の朱実一族なんですよ」
「朱実のっ！？」
輝矢の言葉に、リンゴが驚いたように再びハチを見る。
「でも朱実ってスズメじゃっ……」
「うっ……」
スズメ一族であるのにイヌである自分に相変わらずの劣等感を感じ、ハチが少し俯く。
「イヌの……朱実っ……」
リンゴが深く考え込む。

「あぁぁぁーっ！！思い出したっっ！！！」
『うおっ！』
いきなり大声を発するリンゴに、３匹が驚いて思わず1歩下がる。
「いたいたいたぁっ！スズメ一族なのになぁ～んかイヌに生まれてきちゃった出来損ない王子の桜時っ！！」

「……どうせ俺なんかっ……」
「すっごく落ち込んじゃったけどぉ～？」
「ハチを落ち込ませるようなこと言わないで下さいよ、リンゴ」
「あっ、ごめんごめんっ」
目に見えて落ち込むハチに、リンゴが少し苦笑いを見せる。
「ほらっ！覚えてないっ？アンタがウチ……ってか『青守』の屋敷に来た時にさぁ～っ」
「青守？」
「龍国を治める龍人一族ですよ。リンゴは青守一族、というか今の国主・青守座黒の娘なんです」
「ええっ！？じゃああの人ってば龍国のお姫様ってことっ！？」
「ええ、ガラにもないですけどね」
「アンタに言われたくないわよっ」
驚くユキジに笑顔で答える輝矢。そんな輝矢にリンゴがしかめっ面で突っ込みを入れる。
「で、アンタが派手なオバサンとウチに来た時にさぁ～遊んだじゃないっ？私や私の妹とっ！」
「んん～～～っっ？」
リンゴの言葉に、さらに首を捻って考え込むハチ。
「うっ……！」

――――キィィィィィィィィーーーーンッッッ！！！――――

「痛っ！」
「ハチっ」
走る痛みに、表情を歪めて思わず頭を押さえるハチ。そんなハチを輝矢が不安げに覗き込む。
「大丈夫ですか？」
「ダメだっ……やっぱ思い出せねぇーっ……」

「まぁ無理もないわねぇ～“あんなこと”があったんじゃっ」
「へっ？」
リンゴの意味深な言葉に、ハチが顔を上げる。
「それってどうゆうっ……」
「まぁいっかぁっ」
「いやっ、よくねぇーよっ！！」
勝手に話を完結させてしまうリンゴに、ハチが止めるように手を上げる。
「それよりアンタたち、会議聞きに来たんでしょっ？まだ時間あるけど、会議室まで連れてってあげるわっ」
「って、俺のことは……？」
「リンゴは1度、切り替えしたらそれっきりなんで、またの機会にした方が良いかも知れませんね」
「ったく……」
輝矢の言葉に、ハチががっくりと肩を落とした。
「こっちよっ」
「すみませんね」
「まっ、私もどうせ会議出るからっ。ついでよ、ついでっ」
リンゴに連れられて、輝矢たちはオトポリの門をくぐった。

第１３章　御伽最大の国　☆３

門をくぐった輝矢たちは、リンゴに誘導され、北東に見える大きな塔へと歩いて行く。
『ふわぁぁぁぁぁぁ～～～～っっ……』
敷地内にある稽古場や休憩所を見回しながら、感心したように声を漏らす３匹。
「凄いでしょっ？無駄なことに金かけるの好きなのっ、オトポリってっ」
「それって笑って言っちゃっていいことなの……？」
笑顔で話すリンゴに少し突っ込みを入れるユキジ。
「今回のこと、私も聞いたわっ」
『……っ』
リンゴの言葉に輝矢や、感心の声を出していたハチたちが皆、表情をしかめる。
「人間が鬼人になったってんでしょっ？」
「……。」
歩きながら、どこか悲しげに俯く輝矢。
「まぁこっちもあんまり大した情報は入ってきてないんだけどねぇ」
北東の塔まで辿り着くと、リンゴが右胸のポケットからＩＤカードのようなものを取り出し、扉の横の機械にかけて扉を開ける。
「世界各地で鬼人化した人間の目撃情報が出てるってくらいっ？」
「世界各地っ……？」
塔の中に足を踏み入れながら、リンゴの言葉にハチが表情を曇らせる。
「でっ、アンタも戦ったわけっ？」
「……ええっ……」
その問いかけに、少し俯き気味に答える輝矢。

――――貴女も……目の前に死が迫ったら……きっと言うわっ……
“鬼になってでも生きたい”って……――――
――――人でなくなるだけでっ死ななくて済むのよっ!?だったらその方がずっとずっといいじゃないっ!――――

「朽ち逝く命を嘆き、自らの体を鬼へと変えた女性と…」
オーロラのことを思い出し、輝矢が険しい表情を見せる。
「そうっ……」
「……。」
「……っ」
俯く輝矢を見て、リンゴが少し目を細める。
「ほらっ!」

――――パコンッッ!!――――

「痛っ」
リンゴが輝矢の頭を思い切り小突く。戸惑うように顔を上げる輝矢。
「そう気にすんじゃないのっ!別にアンタが悪いんじゃないんだからっ」
「……っ」
リンゴの優しい笑顔に、輝矢が少し目を見開く。
「アンタは何でも背負い込むクセあるからねぇ～」
「……。」
少し照れるように、リンゴから目を逸らして俯く輝矢。
「けっこう疲れた顔してるわよっ?折角帰って来たんだから少し休

みなっ」
「そうですね……」
「……。」
リンゴの言葉に頷く輝矢を見て、横にいるハチが気難しい表情を見せた。
「まぁ会議で鬼人化した人間の発生地域くらいは絞れるかも知んないから、それでっ……んっ……！」
『……っ？』
急に表情を鋭くするリンゴに、輝矢たちが首をかしげる。
「そこぉおおおおおっっ！！！」

――――バギコォォォォォォーーンッッッ！！――――

『のわあああああああっっ！！！』
塔内の柱に向かって右足を振り切るリンゴ。リンゴの足が当たった途端に、大きく太い頑丈そうな柱が一瞬にして砕け散り、2階の天井が少し傾く。塔崩壊の危機を感じ、思わず叫ぶ3匹。
「ふぅっ……」
「いっきなり何してんだよっ！！アンタはっ！！」
「はぁ～っ……」
『……っ？』
一息ついたリンゴにハチが怒鳴り込んでいる中、崩れ去った柱の方からかすかに小さな声が聞こえてきて、皆が一斉に振り返る。
「ビックリしたぁ～っ……」
『いいいいいっっ！！？』
崩れた柱のすぐ横から姿を現したそのものを見て、大きく目を見開く3匹。
姿を見せたのは、青い皮膚に金色の角を持った、いわゆる1つの“竜”であった。細身ではあるが巨体で、長い首を持っている。その強そうな外見とは裏腹に、可愛らしい声を出す竜。

「ドっ……ドラゴォォォォーーーンっ……？」
「うっわぁ～ボク、龍って初めて見たぁ～」
「すっげぇ迫力っ……」
「えっ？あっああっ……！こっこんにちはっ……」
３匹から集まる視線に、焦った表情を見せながら挨拶をする竜。
「何だぁ～っ、イチゴじゃないっ」
「おっ……お姉ちゃんっ……」
右足を下ろし、間の抜けた様子で竜の名を呼ぶリンゴ。竜も驚いたようにリンゴを見る。
「何だぁ～っ！てっきり侵入者かと思ったぁ～っ！紛らわしくコソコソ隠れてんじゃないわよぉ～っ！」
「ごっ……ごめんなさいっ……」
豪快に笑うリンゴに、小さく謝る竜。
「姉妹っ……？」
「ええっ」
引きつった表情で問いかけるユキジに、輝矢が一言。
「まぁ見ての通り、オシドリ姉妹です」
「見た感じ、種族から違うけど……？」
輝矢の言葉に、ユキジが思わず突っ込みを入れる。
「しかも、もうちょっとでリンゴがあの竜、蹴り殺してたぞっ？」
「リンゴは私の蹴りの師匠ですからね」
「絶対、逆らわないでおこう……」
「あっ……」
「……っ？」
リンゴの蹴りにも危機を感じて呟いていたハチが、自分の方を見て声を出す竜を見て、首をかしげる。
「あっ……あのっ……」
「……っ？」
竜がハチの前へと立ち、勇気を振り絞るように声を出す。

――――ボォォォォォォォォォォーーーーンッッッ！！！――――

竜が白い煙に包まれる。

「えっとっ……」

『……っ』

次の瞬間、煙の中から姿を現したのは、水色の長い髪を２つに束ねた、大きく真っ赤な瞳の、まだ幼さを残す顔立ちをした、美しくもどこか大人しそうな少女であった。１６，１７歳くらいであろうか。オトポリの黒い制服を身に纏い、ミニスカートからは長く細い足が惜しみなく露出されている。その左胸にはオトポリのマークの入った銅色のバッチを付けていた。

「“龍人”っ……」

「彼女も青守一族ですからね」

竜から人へと姿を変えたイチゴに、ユキジが目を見張る。

「うっひょぉぉぉぉ～～～～っっ！！これまた可愛いぃぃぃぃ～～～っっ！！」

「うげっ……！女っ……！」

モンキがテンションを上げる横で、ハチが怯えたように後退する。

「動物の姿の時は近づかれても平気なんだぁ～」

「竜じゃあ女か何かわかんねぇーだろうがっ」

感心したように言うユキジに、ハチがしかめっ面で答える。

「おっお久しぶりですっ……桜時さんっ……あっあのっ……私っ……」

「へっ？」

イチゴの言葉に、ハチが少し困惑した表情を見せる。

「えっと……そのっ……」

「ああ～っ、ダメダメっ！ソイツ、私らのこと、覚えてないわよぉっ」

「えっ……？」

リンゴの言葉に驚いた表情を見せるイチゴ。

「覚えて……ない……？」
「“あんなこと”があったせいで記憶から抹消しちゃったみたいっ」
「だから何だよっ？“あんなこと”って」
「そうですか……」
「……っ？」
リンゴに“あんなこと”の内容を聞こうとしたハチが、前方から聞こえてくる暗い声に顔を上げる。
「覚えて……らっしゃらないんですか……」
「うっ……」
あからさまに悲しげな表情を見せるイチゴに、ハチが困ったように表情をしかめる。
「おっ俺っ、何か悪いことしたかなっ？」
「まぁ覚えてないってのはねぇ～、酷すぎるにもほどがあるんじゃなぁ～いっ？」
「そっ……そうなのかっ？」
煽るように言うユキジに、さらに困った顔となるハチ。
「あっあのよぉっ……！えっとっ……そのっ！覚えてなくて悪かっ……！」
「まぁいいです……」
「いいのかよっっ！！！！」
あっさりと引くイチゴに、謝ろうとしていたハチが勢いよく突っ込む。
「切り替えの早さはこの姉妹の特徴です」
「変な遺伝、受け継いでんじゃねぇーよっ……」
輝矢の解説に呆れた表情を見せるハチ。
「ってか、イチゴぉ～アンタ、こんなとこで何してんのよぉ～っ？」
「えっ……？」
リンゴの問いかけに、イチゴが少し焦ったような表情を見せる。
「えっえとっ……おっ……お父様に頼まれて……輝矢さんたちの道案内にっ……」

「パパにぃ～っ？」
イチゴの答えに、リンゴが眉をひそめる。
「パパって国主やっけぇ？」
「ええ。2人のお父上はオトポリの長官でもあるんですよ」
「それでリンゴさんが副長官なのかぁ～」
輝矢の説明に、ユキジが納得したように頷く。
「パパに頼まれてたんだったら、もうちょい早く来なさいよねぇ～っ」
リンゴが呆れたように言い放つ。
「コイツら、危うく正門で連行されるトコだったのよぉ～？」
「うっうんっ……見てた……」
「はっ？見てたっ？」
俯きながら答えるイチゴに、リンゴが思わず大口を開く。
「でっでも中々、声かけるタイミングがなくって……」
「はぁ～～っ……アンタねぇっ……」
リンゴが深々と頭を抱える。
「イチゴはとてつもなく内気なんです」
「性格はまったく似てないみたいだね」
「俺はどっちもキレイやから好きやぁぁぁぁぁ～～～っっ！！！」
『アホっ』
両手を広げて愛を告白するモンキに、皆から一斉に突っ込みが入る。
「どわあああっっ！！」
『……っ？』
廊下の奥から聞こえてくる大きな声に、輝矢たちが振り向く。
「何だぁっ！？この柱ぁぁぁっ！」
『あっ』
リンゴが蹴りで柱を粉砕したせいで変に傾いてしまった天井に、上へと続く塔の階段から、下りにくそうにして姿を現したのはよく

見覚えのあるゴンであった。
「ゴっ……」
「ゴンっ」
「……っ？」
自分よりも先にゴンの名を呼ぶリンゴに、輝矢が少し首をかしげる。
「ああっ？げっ」
階段を下りきって、輝矢やリンゴの方を見たゴンが少し表情をしかめる。
「おっおうっ！久々だなぁ～っ！リンゴっ！」
「ってかアンタ、今、小さく“げっ”って言ったでしょ？」
皆の方へと歩いてきながら、無理やり作ったような笑顔とともにリンゴに手を挙げるゴン。そんなゴンにリンゴが鋭く問いかける。
「お2人は知り合いだったのですか？」
「えっ？ああっ、同期なのっ。それ以外にも色々と腐れ縁でねっ」
「ほぉ～んと、懲り懲りしてんだよっ」
「何か言った？」
「いえっ」
懲り懲りしていたゴンが、リンゴに鋭く睨みつけられ、すぐさまリンゴから視線を逸らす。確かに親しそうな空気は出ていた。
「……っ」
「……っ？」
少し疲れたように肩を落とすゴンを見て、リンゴが眉をひそめる。
「何かあったの？」
「ああっ？別に何もねぇーよっ」
「……。」
言い捨てるように答えて、そっぽを向くゴンに、リンゴはさらに表情を曇らせる。
「それよかリンゴ、てめぇーまぁたっ、柱破壊しやがったなぁっ」
ゴンが無理に話題を変えるように言い出し、崩れ去っている柱の

方を見る。
「まぁ～た反省文１０００枚決定だなっ。副長官がこれじゃあ、他の警官に示しがつかねぇーぜっ」
「ああっ！！？」
トゲのある言葉を吐いたゴンに、リンゴが勢いよく表情を歪める。
「年間トラブル警官賞のアンタに言われたくないわっ！アンタは１日で反省文１０００枚行くでしょうがっ！」
「んだとぉっっ！！！？」
「まぁまぁ～ここは穏便にぃ～っ」
『うるさいっっっ！！！！』
「ひぃいいいいっっっ！！！！」
仲裁に入ろうとしたモンキであったが、２人に一斉に怒鳴られて、イチゴの陰へと隠れる。
「あぁ～あ～もうっ」
「放っておいて大丈夫ですよ……」
「へっ？」
困った表情を見せたモンキに、イチゴが優しく微笑みかける。
“バカにつける薬はない”って言いますから……」
「イチゴっ……ちゃんっ……？」
大人しい笑顔でわりとキツイことを言うイチゴに、モンキが少し引きつった表情を見せた。
「んっ……」
柔らかな痛みを頭に感じ、思わず頭を押さえる輝矢。
「んんっ……」
眩暈が襲い、景色がかすみ始め、足元がふらついていく。
「……っ」
『……っ？』
力なくその場に倒れていく輝矢に、皆が気づく。
――――グラァァァァァァーーッッッ！！！！――――

『……っ！！』

輝矢が倒れたすぐ近くの柱が、リンゴが柱を破壊した影響で倒れていき、輝矢の真上から覆いかぶさっていく。

「輝矢っ……！！」

「竹取っっっ！！！」

思わず身を乗り出すゴンとリンゴ。

『……っ！！』

ハチ、モンキ、ユキジが表情を鋭くして、その場から飛び出していく。

『……っ』

――――バァァァァァァァーーンッッッ！！！！――――

輝矢の真上へと倒れ込む柱。その衝撃で床が割れ、辺りを衝風が立ち込める。

「あちゃ～……こりゃ反省文２０００枚かもっ……」

煙の晴れた先に広がる悲惨な光景に、気まずい表情を見せるリンゴ。

「って、輝矢はぁっ！？」

『痛つつつつつつっ……』

「……っ！」

リンゴが振り向いた先には、人化して輝矢の前に立ち、身代わりとなって柱を受け止めた桜時、門貴、由雉の姿があった。リンゴが少し驚いたように目を見開く。

「ふぅ～っ……“瞬花”っ」

――――パァアアアアアアーーーンッッッ！！――――

『……っ』

桜時が受け止めていた柱を、桜の花びらへ変えて散らせる。散っていく花びらに、目を見張るリンゴとイチゴ。

「ってか、もっと早くそれやってよねぇ～お陰で可愛いボクまで柱で背中打っちゃったじゃ～んっ」

「悪りぃ悪りぃっ」

「危険なんわかってて自分から出てきたんやろぉ？ユッキーっ」

「そっそれはっ……」

由雉に悪戯っぽく笑いかけながら、門貴が倒れていた輝矢を抱えあげる。

「輝矢っ！！？」

「竹取っ！！」

門貴が抱えあげた輝矢の元へ、ゴンやリンゴが少し焦った表情を見せながら駆け寄ってくる。

「何だっ！？どうしたんだっ！？」

「まさか……お姉ちゃんの蹴りが入ったんじゃ……」

「何っ！？そりゃ致命傷じゃねぇーかっ！」

「何で私が輝矢を攻撃すんのよっっ！！」

「いやぁ～目立った外傷はないなぁっ」

ゴンとリンゴ、イチゴの言い争いを気にすることなく、門貴が輝矢の容態を確認する。

「とっとにかく救護室だっ！」

「そっそうねっ」

ゴンとリンゴに言われ、門貴が輝矢を抱えたまま立ち上がる。

「……っ」

門貴の抱えた、深く目を閉じた輝矢を見て、桜時はどこか不安げ

に目を細めた。

第１３章　御伽最大の国　☆４

数分後。オトポリ本部・救護室。

「んん～っ……」

データ値の多く書かれた紙を見ながら気難しい表情を見せるのは、オトポリの制服の上から白衣を着た男。オトポリの救護員である。

「これはぁっ……“過労”ですねっ」

「過労っ？」

救護員の言葉に、リンゴが目を丸くする。

「ええ。力の使い過ぎか、体に相当な無理が来ています」

救護員が白一色のベッドに眠る輝矢を見ながら言う。ベッドのすぐ横には、眠る輝矢を不安げに見つめるハチ、モンキ、ユキジの３匹が並んでいた。

「まぁ少し休めば問題ないでしょう。目が覚めたら連れて帰られて結構ですよ」

「はっ……はぁ。どうもありがとうございました」

リンゴが深々と頭を下げて見送る中、病室から救護員が出て行く。

「しっかし過労って……」

「まぁ無理もねぇーなっ」

「えっ？」

ベッドの横の椅子に腰かけたゴンが呟く。

「ここんトコ、鬼人との戦い続きだったし、この前の鬼人化事件で精神的疲労も来ちまったんだろう」

「……。」

――――朽ち逝く命を嘆き、自らの体を鬼へと変えた女性と……――――

悲しげに話した輝矢のことを思い出し、リンゴがそっと視線を落とす。

「こりゃ会議がどうのってのより、休息が第一かもなぁ～」

「全部、お姉ちゃんの蹴りのせいで……」

「何で私なのよっっ！！！」

深刻そうに呟くイチゴに、リンゴが病室にも関わらず大声を出す。

「てめぇー、後先考えねぇーからなぁっ」

「私は柱を蹴っただけだってのっ！！だいたい過労なんでしょっ！？」

「……。」

ゴンとリンゴの言い争いを聞きながら、イチゴがゆっくりとベッドの横のハチへと視線を移す。

「輝矢……」

「……っ」

心配そうに輝矢の名を呟くハチを見て、イチゴは少し目を細めた。

「とにかく竹取の目が覚めたら家まで送ってくかぁ～」

「そうねぇ～」

「でも……こんな状態の輝矢さんを見て……“あの人”がどう言うか……」

「そこが問題よねぇ……」

『“あの人”っ？』

イチゴとリンゴのやり取りに、目を丸くする3匹。

「あの人ってだっ……」

――――パッリィィィィィーーーーンッッッ！！！――――

『へっ？』

輝矢のベッドのすぐ横にある窓のガラスが、突然勢いよく割れ、リンゴたちに問いかけようとしていた3匹が目を丸くして振り向く。

『こんにちわぁ～っ♪ご主人様っ！』

「……っ！」

割れた窓ガラスから病室へと侵入して来たのは、満面の笑みを向けたのはメイド服姿の2人の少女であった。どちらも金色の髪に緑色の瞳をしており、よく似ていた。至近距離で微笑む2人にハチが凍りつく。

「なっぎゃあああああああっっ！！！」

「萌えぇぇぇ～～～っ！！」

「何故にメイド……？」

現れたメイド少女に叫ぶハチ、萌えるモンキ、眉をひそめるユキジ。

『じゃっ！そうゆうことでぇ、貴方様がたのご主人様はいただいていきまぁ～すっ！』

『はぁっっ！！？』

そう言って眠っている輝矢を抱えあげるメイド少女たち。ハチたちが大きく口を開けて聞き返す。

「お前ら何言っ……！」

『ではまたのご来店をぉ～っ！』

輝矢を抱えあげたメイドたちが、懐から小さな玉を取り出し、床へと投げつける。

『……っ！』

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！！！――――

床に投げつけられた玉から勢いよく煙が吹き出し、病室中を包み

込んだ。
『ケホっ！ケホっ！』
むせ返るハチたち。やがて窓から煙が出て、辺りが少しずつ晴れていく。
『ああっっっ！！！！！』
煙が晴れた途端に大きく叫ぶ3匹。煙の晴れた病室のベッドからは、すっかり輝矢の姿がなくなっていた。
「あいつらっ……！」
「いっやぁぁぁーーっっ！！輝矢ぁぁーーんっっ！！」
「んっ？」
頭を抱えるモンキの横で、ユキジが天井からゆっくりと落ちてくる紙のようなものに気づく。
「よっ」
『……っ？』
飛び上がって嘴で紙を掴むユキジ。そんなユキジの様子にハチとモンキが目を丸くする。
「何やぁ？それっ」
「何か書いてあるみたい。えぇ～っと……」
器用に羽根を動かし、紙を広げるユキジ。両端からハチとモンキがその広げた紙を覗き込む。

『“ご主人様を返して欲しくば、海岸沿いの私たちの家まで来てねっ！可愛いメイドよりっ”』
きれいに声を揃えて、紙に書かれている内容を読み上げる3匹。

『って、何いいいっっ！！？』
「これはいわゆる誘拐の一種だねぇ～」
驚きのあまり大声を出すハチとモンキの横で、冷静に呟くユキジ。
「でぇ、どうすっ……」
「海岸沿いってくらいだから海目指しゃいいんだなっ！！よしっ！

行くぞっっ！！」
「輝矢ぁぁーーんっっ！！！待っててやぁーっっ！！！すぐ助けに行くでぇぇっっ！！」
「って、聞くまでもないか……」
もうすでに病室を飛び出して行ってしまっているハチとモンキを見て、ユキジが呆れたように言う。
「じゃあちょっと行って来るねぇ～」
「罠かも知れないわよっ？」
羽根を上げたユキジに、リンゴが鋭い表情で問いかける。

「だったらっ？」

「……っ」

“それがどうした”と言わんばかりの笑みを浮かべて飛び去っていくユキジ。遠ざかっていく3匹の姿を見て、リンゴが少し浮かない表情を見せる。
「お姉ちゃん……さっきのメイドさんたち……もしかして……」
「ええっ」
イチゴの問いかけに、リンゴが少し肩を落として頷く。
「ったく、何考えてんだかっ」
「……。」
「……っ？」
立ち上がるゴンを見て、リンゴが眉をひそめる。
「行くの？」
「ああ」
リンゴの問いかけに短く答えて、割れた窓に右足をかけるゴン。
「もうすぐ会議だけど？」
「俺がいねぇー方が進みいいだろ？」
「まぁ確かにっ」

「おいっ！」
素直に頷いたリンゴに、ゴンが少し突っ込みを入れる。
「じゃっ、理由は適当に頼むわっ」
そう言って軽く笑みを浮べて、ゴンも3匹の後を追うように病室を飛び出していった。

「……。」
去っていくゴンの背中を見つめながら、厳しい表情を見せるリンゴ。
「なぁ～んか変なようなっ……」
リンゴが少し考えるように首を傾ける。
「ゴンさん……さっきお父様から言われてたよ……」
「えっ……？」
どこか遠慮がちに俯きながら言葉を発するイチゴに、リンゴが眉をひそめる。

「今回の件は……あの女の人が関わってる可能性があるから……覚悟しておけって……」

「……っ」
イチゴの言葉に、リンゴの表情が凍りつく。
「ねぇ、前から聞きたかったんだけど……“あの女”って……」
「イチゴっ……」
「……っ」
イチゴの言葉を遮るように、強くイチゴの名を呼ぶリンゴ。
「私の前で……2度とその話はしないで……」
「……っ」

怖いと思えるほどの鋭い眼差しなのに、何故か悲しげなリンゴに、イチゴはそっと目を細めた。

「ごめんなさい……」

数十分後。龍国東・海岸沿い。

「一体、何の目的で輝矢んさらったんやろっ？あいつ等、鬼やろかっ？」

モンキの問いかけに、ユキジが突き放すように答える。

「そんなのボクに聞いたってわかるわけないでしょ～」

「そんなことより家探すよぉ～家っ」

「そりゃわかっとうけどなぁ～こんな広さで家なんか見つけられるかぁ～っ？」

「……っ」

モンキの言葉に、隣にいたハチが表情をしかめる。青い海へと続く白い砂浜へとやって来たハチたちは、とりあえず辺りを見回し、家を探していた。しかし南北に大きく広がる海岸は、一通り見るだけでも1日かかりそなほどの巨大さであった。

「だいたい“私たちの家”って何か表現がアバウト過ぎゆうかぁ～」

「あっ……」

『……っ？』

何かを見つけたようなユキジの声に、ハチとモンキが振り返る。

「どうしたっ？ユキジっ」
「それっぽい家、見つけたんかっ？」
「うん、あれっ……」
『……っ』
ユキジが力なく指差すその方に視線を送るハチとモンキ。
『ううっ……！』
――――ドォォォォォォォォーーーンッッッ！！！――――
『……。』
一瞬にして固まるハチとモンキ。ユキジが羽根を差し出した先にあったその家は、“エセお菓子の家”であった。
屋根も壁も煙突も扉も、すべてお菓子に似せて造ってある。凝ってはいるが、何とも悪趣味な家であった。
「こっ……この家じゃねぇーよっ！きっとっ！」
「せやせやっ！きっとちゃうでぇ～っ！別ん家やっ！」
「そっそうだよねぇ～っ！あんな悪趣味な家に誘拐犯が隠れるはずっ……！」
――――ピンポンパンポォォォ～～～ンッ！――――
『……っ？』
無理やり自分に言い聞かせるように笑顔を作って、エセお菓子に背を向ける3匹であったが、その時、エセお菓子の家の方から何やら放送音のようなものが流れてくる。
《竹取輝矢様を預かっているお家はこちらでぇ～すっ！イヌ、サル、キジのお三方、どうぞ中へぇ～！》

『……。』

その親切な放送に、3匹が足を止める。

「……ここに入るのかっ……」

「こんな悪趣味な家の住人だなんて思われたくなぁ～いっ」

改めてエセお菓子の家を見上げ、気難しい表情を見せるハチとユキジ。

「ほっほらっ、桜時っ」

「なっ……！なんで俺なんだよっ！」

「訪問時はイヌからっちゅーのが相場やろぉ～？」

「んな相場がどこにあんだよっ！！？」

モンキとユキジが嫌がるハチを扉へと押し出す。

「お前らが先、入っ……！」

『はいっ！どうぞぉ～っ』

「だあああああああああっっっ！！！」

ハチが押し出された途端に、エセお菓子の家の扉が勢いよく開き、ハチが転がり込むようにしてエセお菓子の家の中へと入っていく。

第13章　御伽最大の国　☆5

「痛つつつつっ……」
転がった時に打ちつけた頭を気にしながら、ゆっくりと起き上がるハチ。
「……っ？」

――――サァァァァァーーーーッツツ……！！――――

「桃っ……？」
ハチが足を踏み入れたそこは、屋内だというのにまるで野原のような、穏やかな自然の広がる大きな空間であった。かすかに風も感じる。
部屋一面に咲いた桃の木から、鮮やかな桃色の花びらがハチへと降り注いだ。
「ここは一体っ……んっ……？」
すぐ目の前にある2人の人間の4本の足に、ハチがゆっくりと顔を上げる。

『いらっしゃいませぇっ！ご主人様ぁぁっ！！』
「……っ！！」
目の前に立つ先ほどの2人のメイドに、またもや青ざめていくハチ。
「ほんぎゃあああああああああっっ！！」
「おおっとっ」
「なあああああああああっっ！！！！」
必死に家の中から逃げ出そうとするハチを、後から入ってきたモンキが力づくで押さえ込む。
「はっ……！離せぇっ！！離してくれぇっ！！俺がこの世で1番苦

手な萌えメイドがぁぁっ！！！」
「かぁ～！見事な大自然っ！ようこんなもん、家ん中に作ったなぁ～っ！」
「違うよっ」
「へっ？」
抵抗するハチを無視して、感心したように声を出したモンキに、ユキジが鋭く突っ込みを入れる。

「外見より明らかに広すぎるでしょ～がっ。空間系の能力か何かなんだよっ」

「ご名答っ」

『……っ？』
部屋の奥から聞こえてくる声に、３匹が顔を上げる。

「ようこそ、我が“桃の苑”へ」

「……っオオカミっ……？」

ハチたちが見つめるその先の野原でゆったりと横たわり、３匹に穏やかな笑みを向けたのは１匹の茶色いオオカミであった。その笑みは気性の荒いイメージのあるオオカミとは程遠い。人の言葉を話しているところから見て、獣人であろう。

「“狼人”っ……？」
メイドが嫌で暴れていたハチも、真剣な表情となって自らの足で地面に下りる。

「気を付けて。狼人は獣人の中でも高い能力を持つってウワサだよ

っ」
ゆったりと起き上がるオオカミを見ながら、ユキジが警戒するように言う。
『……っ』
メイドたちが後方へと飛び、オオカミの両脇へと立つ。
「キレイなもんだろう？桃の苑っていうのも」
オオカミが降り注ぐ桃の花びらに手を伸ばしながら問いかける。
「まぁ、君の“花力”には負けるかな……？朱実桜時クンっ……」
「……っ！何で俺のことっ……」
オオカミの言葉に、ハチが戸惑うように声を出す。
「どうやら……ボクらのこと知ってて輝矢をさらったみたいだね」
ユキジが鋭い表情を見せる。
「輝矢はどこっ？」
「せやせやぁっ！！輝矢んをどこへやったぁぁぁぁっっ！！！？」
「君たちの主人はあの扉の向こうにいるよ……」
『……っ』
ユキジとモンキの問いかけに、オオカミが部屋の最奥にある白く小さな扉を指差し、あっさりと答える。
「僕らを倒せたら通してあげるっ」
「……っ俺たちを試そうってのかっ？」
「うぅ～ん、まぁそんなとこだねぇ」
「……。」
はぐらかすように答えるオオカミに、ハチがさらに表情を曇らせる。
「倒せたらって、何かゲームでもするの？それとも力づくでいいわけっ？」

『もちろん力づくでいいですわっ！……っ』
『……っ？』
そう微笑むと2人がそれぞれ体に似合わぬほどに巨大な鎖鎌と大剣を取り出し、鋭い目つきとなって構える。
『こちらも力づくは得意ですからっ！』
「なるほどね……」
「萌えぇぇぇぇ～～～っ！」
「変態っ」
厳しい表情を見せたユキジであったが、隣で萌えているモンキを見て、すぐさま呆れた表情となる。
「お前らの目的は何だっ！？お前ら鬼人なのかっ！！？」
「それもっ、僕を倒せたら教えてあげる」
「……っ」
オオカミが相変わらずの、穏やかながら何を企んでいるのかわからない笑みを浮べる。そんなオオカミに気難しい表情を見せるハチ。
「フツーに聞いても教えてくれそうにないなぁ」
「まぁもう力づくでいいんじゃない？ちょうど3対3だし、あっちはやる気満々だしっ」
ユキジが肩を落とし、疲れたように呟く。
「ほな、メイドは俺とユッキーに任せて、イヌっころはあのオオカミいけやっ」
「へっ？」
モンキの言葉に、ハチが驚いたように目を丸める。
「何で俺がオオカミなんだ？」
「オオカミはイヌ科やからっ！」
「……。」
「ってのは冗談でぇ、萌えメイド相手やったら、お前ろくに戦えへんやろっ？」
呆れきった表情を見せるハチに、モンキが慌てて付け加える。
「まっまぁっ……」

ハチが少し申し訳なさそうに頷く。
「そういうこっちゃっ！カワイ子ちゃんは俺らに任せときぃ～っ」
「そだねぇ～門貴にしてはまともな策じゃなぁ～いっ？」
「いやっほぉぉぉぉーーっっ！！！ユッキーに誉められたぁぁぁっっ！！」
ユキジの言葉に、両手を突き上げて喜ぶモンキ。
「わっわかったっ」
ハチが仕方なく返事をする。
「オオカミに噛み殺されないでよぉ～？」
「いっやぁ～！爪で切り裂かれるかもっ。痛そぉぉぉぉぉ～～～っ！」
「お前らなっ……」
無駄に脅かすモンキとユキジに、ハチが引きつった表情を見せる。
「ほないっちょ行くでぇ～っ？ユッキーっ！」
「相当、面倒臭いけどねぇ～」
――――ボォォォォォォ～～～ンッッッ！！！！――――
モンキの掛け声にユキジがやる気なく答えると、２匹が一斉に白い煙に包まれて人化する。
「相手が決まったようだね」
人化した門貴と由雉を見て、オオカミがどこか楽しげに笑う。
「少し遊んであげて。ヘンゼル、グレーテル」
『はぁ～いっ！』
武器を構え、一斉に飛び出していく２人のメイド。
「……っ！」

大剣を持った、ショートカットに17，18歳くらいの年上に見える方の少女が、門貴へと向かってくる。
「……っ！“如意棒”っ！」
門貴が如意棒を取り出し、メイドの振り下ろした大剣に向けて振りかぶる。
――――キィィィィィィィィーーーンッッ！！！！――――
「クっ……！」
思ったよりも力のある大剣の少女に、門貴が少し顔をしかめる。
「私の名はヘンゼル……」
「そりゃどうもぉ～っ！俺は猿川門貴やっ！」
「猿川門貴様……お相手致しますっ……！」
「うっ……！」
怪しげに微笑んだヘンゼルがさらに大剣に力を込めると、門貴の如意棒が押され始めた。
「ぐわあああああああっっ！！」
――――バァァァァァァァーーーーンッッッ！！！――――
「……っ！門貴っ……！」
如意棒ごと空間の端へと吹き飛ばされる門貴に、由雉が思わず身を乗り出す。
「余所見などしたらイヤンですわっ！」

「……っ？うっ……！」
振り向いた由雉に、勢いよく飛んでくる鎖鎌。
「“右翼・裂羽”っ！」
――――パァァァァァァァーーーンッッッ！！！！――――
由雉が素早く青い羽根を放って、青い羽根から放たれた衝撃で、鎖鎌を弾き飛ばす。
「ウフっ」
飛ばされた鎖鎌を持ち直し由雉に怪しげな笑みを向ける、ロングヘアに１５，１６歳くらいのヘンゼルよりも年下に見える少女。
「私の名はグレーテル……貴方様のお名前は？」
「由雉っ」
グレーテルの問いかけに、由雉がやる気なく答える。
「由雉様……」
グレーテルが白い手には大きすぎるほどの鎖鎌を構え、由雉に鋭い瞳を向ける。
「お相手っ……致しますっ！」
「……っ」
そんなグレーテルに対し、由雉も鋭い表情で色とりどりの羽根を構えた。

「門貴っ……由雉っ……」
それぞれ戦いに入った門貴と由雉を、どこか不安げに見つめるハチ。

「さてっ、こちらも始めようか」
「……っ」
準備体操のように首を回しながらそう言うオオカミに、ハチが少し警戒するように身構える。
「……。」
ハチがゆっくりと準備体操を続けるオオカミの、その鋭い牙や爪を見つめる。

――――オオカミに噛み殺されないでよぉ～？――――
――――いっやぁ～！爪で切り裂かれるかもっ。痛そぉぉぉ～～っ！――――

「うぐっ……」
門貴と由雉の言葉を思い出し、少し怯えたような表情を見せるハチ。

「まっまぁっ、とりあえず輝矢さえ助け出せば後は輝矢がっ……！」

――――これは過労ですねぇ……体に相当な無理が来てます……――

――

「……っ」

自分に言い聞かせるように無理な笑みを作ったハチであったが、思い出される救護員の言葉に笑顔を止める。

――――ここんトコ、鬼人との戦い続きだったし、この前の鬼人化事件で精神的疲労も来ちまったんだろう――――

疲れていることなど、ずっと前からわかっていた。

――――ハチは全然っ、何にも心配しなくて大丈夫ですからっ――――

あれが、ハチを心配させないための無理な笑顔だということも、わかっていた。

「……今回くらいっ、自分で何とかしねぇーとなっ……」

――――ボォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！！――――

白い煙に包まれ、ハチが人化する。

「……っ」

「うんうんっ……いい眼だっ……」

何かを決意したような表情で顔を上げた桜時を見て、オオカミがどこか満足げな笑みを浮べる。

「さぁ……見せてごらん……」

楽しげに言うオオカミ。

「君の力を……」

「“村雨丸”っ……」

桜時が鋭い表情となって、ゆっくりと村雨丸を抜く。

「……っ！」

そして村雨丸を構え、オオカミへと勢いよく飛び出していった。

第１３章　御伽最大の国　☆５（後書き）

第１４章に続きますです。

第１４章　伝説の男　★１（前書き）

お知らせ。
わたくし千風のホームページ「千風のお部屋」にて、
「鬼斬りかぐや」第２回キャラクター投票を実施中でございます。
気に入ったキャラがおりましたらば、ぜひとも清き一票をお願いいたします。
ご意見・ご感想などありましたら、掲示板に気軽に書き込んでいただければと思っております。
よろしくお願いいたします。

ではでは、１４章のスタートです。

第１４章　伝説の男　★１

御伽界最大の国・“龍国”へとやって来た輝矢たち一行であったが、オトポリ本部を訪問中に輝矢が倒れ、しかも謎のメイドたちに輝矢をさらわれてしまった。

輝矢を取り返すべく敵のアジト“エセお菓子の家”へと赴いたハチ、モンキ、ユキジの３匹であったが、３匹の前に“狼人”らしきオオカミと、２人のメイド・ヘンゼルとグレーテルが立ちはだかった…。

“エセお菓子の家”空間内の“桃の苑”。桜時ｖｓオオカミ。

「お前、人化はっ……？」

村雨丸を抜いた桜時が、鋭い表情でオオカミに問いかける。

「ん～、オオカミのままでキツくなってきたらしようかとは思ってるけどっ……」

穏やかな笑みを口調で話すオオカミ。

「僕の予想では、この姿で十分な感じかなっ」

「……っ」

桜時を挑発するように笑うオオカミに、桜時が表情をしかめる。

「そうかよっ……」

しかめた表情のまま、村雨丸を構える桜時。

「だったらっ……すぐにでも人化させてやるよっ……！！」

「……っ」

勢いよく飛び込んでくる桜時を見て、オオカミは怪しげな笑みを浮べた。

一方、同じく“桃の苑”。門貴ＶＳヘンゼル。

――――カンッ！キンッ！ガンッ！カッキィィィーーンッッ！！――――

「クっ……！」

「うっ……」

如意棒と大剣を激しく交錯させていた門貴とヘンゼルが、それぞれ後方に飛んで、互いに距離を取る。武器を構えなおしながらも肩で息をし始める両者。剣技はほぼ互角である。

「ふぅっ……なかなかやりますわね……」

少し楽しげに微笑むヘンゼル。

「何だか恋に落ちてしまいそうですわっ……」

「マジでぇぇぇぇぇぇぇっっっ！！！！？」

ヘンゼルの言葉に、門貴が本気で嬉しそうに声をあげる。

「じゃあじゃあっ！初デートはバナナ園にバナナ狩りってことでぇっ……！」

「でも残念っ」

「へっ？」

ウキウキにデートプランを提案していた門貴に、ヘンゼルが鋭い瞳を向ける。

「私っ、好きな人には本気で攻撃しちゃうタイプですのっ！」

「へっ……？」

「“微巣決土（ビスケット）”っっ！！」

「……っ！」

――――バァァァァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――

ヘンゼルが大剣を床に突き刺した途端に、門貴の立っている辺りの床に亀裂が入り、所々が盛り上がる。

「うおっ！」

砕ける床に足を取られ、バランスを崩す門貴。

「……っ」

「うっ……！如意棒っ！」

そんな門貴の目の前にヘンゼルが現れ、門貴に向かって大剣を振りかぶる。慌てて如意棒を構える門貴。

「第1の舞っ……“くっ……！」

「ウフっ」

「うぅっ……！！」

目の前で微笑みかけてくるヘンゼルに、門貴が思わず如意棒を止める。

「はいっ、どうぞっ！」

「うっ……！！」

――――ブシュッッッ……！！！――――

「うぐぅぅぅぅっっっ……！！！」

ヘンゼルの大剣が、門貴の胴体を勢いよく切り裂き、門貴の表情が痛みに歪む。真っ赤な血を流しながら、後方に吹き飛ばされていく門貴。

「はいっ」

「うっ……！！」

吹き飛ばされていく門貴の真上へと現れるヘンゼル。

「終わりっ！」

「クっ……！」

ヘンゼルが門貴に大剣を突き出す。

「“右翼・裂羽”っ」

「何っ……！？」

門貴に剣先を突き出そうとしたヘンゼルに、横から向かって飛んでくる青い羽根。

「クっ……！」

――――バァァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――

ヘンゼルがギリギリのところでかわした羽根が、部屋の壁に突き刺さり、大きな穴をあけた。

「勝負はっ……1対1ではなかったのですかっ？」

「あっ、そうなのぉ～っ？」

着地したヘンゼルが、羽根の飛んで来た方向へ鋭い瞳を向ける。

「ごめんごめぇ～ん、聞いてなかったもんだからさぁ～」
「……っ」
そこに立っていたのは嘘臭いほど爽やかな笑みを浮べた由雉であった。そんな由雉にヘンゼルが眉をひそめる。
「グレーテル……」
「ごっ……ごめんなさいっ……お姉さまっ」
由雉の相手をしていたグレーテルが、姉の睨みに申し訳なさそうに俯いた。

「ったく、世話かけないでよねぇ～っ」
「おっおうっ、ユッキー、サンキューなぁっ。助かったわっ」
由雉が呆れた表情を見せながら、深手を負って地面へと倒れ込んだ門貴の元へ近寄っていく。由雉にあまり力のない笑みを向ける門貴。
「押されっぱなしじゃんっ」
「それがな、ユッキー……聞いてくれるかっ……？」
「……っ？」
やけに深刻な表情を見せる門貴に、由雉が眉をひそめる。
「実は……大変なことに気づいてもたんやっ……」
「なっ……ななっ……何っ……？」
つられて真剣な表情となった由雉が、恐る恐る問いかける。

「俺なっ……」
「うんっ……」

「俺っ……あんなカワイ子ちゃんメイドに攻撃できへんわぁぁぁ～～っっ！！」

「……。」
悩ましげに叫ぶ門貴に、凍りつく由雉。

「あんなカワイ子ちゃんメイドに“空”とか絶対絶対できへんもぉおぉ～～～んっ！！」

「……。」

「ああ～～～っっ！！！どないしょっ！！？ユッキーっっ！！！」

「とりあえず死んだら？」

――――プスっ！――――

「ぎゃあああああああっっ！！」

冷たい表情の由雉が、門貴の傷口へ容赦なく黄色い羽根を突き刺す。

「なっ何やっ……“癒羽”かっ」

黄色い羽根が光を放ち、門貴の傷口を塞いでいく。それを見てホッとしたように汗を拭う門貴。

「ったく、桜時に“お前じゃメイドは無理やろぉ～”とか言っときながら、なんてザマだよっ」

「ううぅ～ん……俺っ、自分で思とったより紳士やったみたいっ」

「はぁっ……」

体を起こしながら笑顔を見せる門貴に、由雉が少し頭を抱える。

――――シュウウウウウウウンッッッ！！！――――

「……っ」

その時、横から飛んで来た鎖鎌が、由雉の左手に巻きつく。

「いつまで女性を待たせるおつもりですっ？」
「……。」
由雉に巻きついた鎖鎌の一方の端を持ち、由雉に笑いかけたのはグレーテルであった。そんなグレーテルに由雉が少し表情を鋭くする。

「というわけで、ご使命入っちゃったからこれ以上は手ぇ貸せないよぉ？」
「アホうっ！これぁ俺が受けた勝負やっ！こっちかてなぁ、お前の手なんか借りる気ゼロやわっ！」
「あっそ。じゃあとっととあの大剣メイドさん、倒しちゃってよぉ」
「そんなん、お前に言われんでもすぅぅーーぐになぁっ……！」
門貴が強気に立ち上がり、ヘンゼルの方を見る。

「ウフっ」
「アハっ！」

可愛らしく微笑み手を振ってくるヘンゼルに、何のためらいもなく手を振り返す門貴。

「やっぱ無理かもっ」
「知ぃぃ～らないっ」
「ああっ！！ユッキーっっ！！！」
そんな門貴を見捨てて、由雉は左手に鎖鎌を巻きつかせたまま、端を持っているグレーテルの元へと飛び出していく。
「薄情なキジやわぁ～っ」
「傷はもうよろしいんですか？」
「へっ？」
立ち上がった門貴に、声をかけながらゆっくりと歩み寄って来るヘンゼル。

「ああ～っ！もうすっかりっ！」
そんなヘンゼルに、門貴が癒羽を取りながら笑顔で答える。癒羽のお陰で、ヘンゼルに切り裂かれた胴の傷はすっかり癒えていた。
「そうですかっ。それは良かった」
「ヘンゼルちゃんっ……！」
ホッとしたような笑顔を見せるヘンゼルに、門貴が目を輝かせる。
「そんなに俺のことをぉぉぉぉ～～～っっっ……！！」
「また切り裂いて差し上げますわねっ♪」
「……。」
笑顔で大剣を構えるヘンゼルに、門貴が下に垂れ下がった笑顔のまま固まる。
「せやろなぁ～……」
少し落ち込んだように呟きながら、笑顔を消す門貴。
「どないしょっ……」
門貴は戸惑った様子で、再び如意棒を構えた。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！！」
「よっ」
「たぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！」
「よっ」
「クっ……！」
桜時が全力で振り切る村雨丸を、軽々とかわしていくオオカミ。
幾度も空を斬る村雨丸に、桜時が少し表情をしかめる。

「はぁっ……！はぁっ……！はぁっ……！」

肩で大きく息をする桜時。まだ戦いを始めて１０分程度。その間、オオカミからの攻撃は１度もない。桜時がただ村雨丸を振って、オオカミはただそれを避けているだけだった。

「ちっとも当たんねぇーっ……」

額の汗を拭い、オオカミをまっすぐに見つめながら、桜時が戸惑うように呟く。

「アイツの速さっ……門貴や由雉とも比べもんになんねぇっ……」

野原に立ち、余裕に見える穏やかな笑みを浮べているオオカミに、桜時が眉をひそめる。桜時も犬人であるためスピードには自信があったが、オオカミのそれはまるでレベルが違っていた。

「あのオオカミっ……一体っ……」

「筋はいいよぉ」

「……っ？」

軽い口調で話しかけてくるオオカミに、桜時が戸惑うように顔を上げる。

「でも形が雑だなぁ。刀は自己流かい？」

「……っ何でんなこと、聞くんだよっ？」

オオカミの質問に、桜時が怪訝そうに聞き返す。

「興味があるからさっ。それにっ……」

「……っ？」

「トークででも楽しまないと、君のノロノロした攻撃、避けてるだけじゃ暇だしねぇ」

「……っ！」

挑発するように笑うオオカミに、桜時が村雨丸を握る力を強める。

「これならどうだっ！」

「……っ？」
オオカミに村雨丸の刃先を向ける桜時。
「“瞬花っ……終刀”っ……！！」
「……っ」
――――パァァァァァァァーーーーンッッッ！！！――――
村雨丸の刃先から放たれたピンク色の強い光が、まっすぐオオカミに向かっていく。
「……。」
避ける素振りも見せず、平然とした表情でその場に立ち尽くすオオカミ。
「直撃する気かっ……！？」
「……っ」
桜時が戸惑ったように見つめる中、オオカミが向かってくる光に対し、その尾を一振りさせる。
――――バァァァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――
「……っ！！」
オオカミの小さな尾に、何倍もある大きさの光があっさりと弾き飛ばされ、天井に直撃して大きな穴をあけた。その光景に大きく目

を見開く桜時。

「そっ……そんなっ……」

桜時が天井にあいた穴を見上げながら、信じられないといった様子で呟く。

「尻尾だけでっ……俺の瞬花終刀をっ……？」

「ふぅぅ～～っ……」

尾を左右に振りながら、一息ついたように肩を落とすオオカミ。

「思ったより威力あったねぇ。尻尾の毛が2，3本抜けちゃったよぉ～ツルツル尻尾になっちゃうかなぁ？」

「……っ」

オオカミの軽い冗談に、何の反応も出来ずにただただ茫然とする桜時。

「さてとっ、じゃあそろそろコッチからも攻撃しようかな」

「えっ……？」

「……っ」

まだ茫然としている桜時に対し、オオカミが態勢を低くし、目つきを鋭くする。

「“機微団子弾（きびだんごだん）”っ」

「……っ？」

オオカミの周囲に現れる無数の小さな玉に、桜時が眉をひそめる。

「バッキューンっ☆」

――――バァァァァァァーーーンッッッ！！！！――――

「うっ……！！」

オオカミが声を発した途端に、オオカミの周囲に浮かんでいた無数の玉が、桜時に向かって一斉に飛び出してくる。焦ったように左手を突き出す桜時。

「“瞬花”っ……！！」

――――・・・・・・・・・・・・っっ――――

「……っ！！」

しかし機微団子弾は、桜の花びらとなることなく、まっすぐに桜時に向かってくる。

「そんなっ……！“瞬花”が効かないっ……！？」

戸惑うように声を出す桜時。

「うっ……！！」

そんな桜時に、機微団子弾は迫り来る。

「うわあああああああっっ！！！」

第１４章　伝説の男　★２（前書き）

朝早く起きたので、珍しく朝投稿。
清々しですね、朝って。

第１４章　伝説の男　★２

「……っ。桜時っ……！」
「隙アリっ！」
「……っ！」
桜時の叫び声に気を取られた由雉に、すかさず鎖鎌が襲いかかる。
「うっ……！」
飛んで来た鎌が由雉の右腕をかすめ、由雉が少し表情をしかめた。
「私以外の人を見つめちゃイヤンですわっ」
「……。」
由雉の右腕をかすめた鎌をキャッチして、慣れた手つきで鎖鎌を回すグレーテル。血の流れる右腕の傷を左手で押さえながら、由雉が鋭い目を見せる。
「自己中な女っ……君っ、モテないでしょっ？」
「それは乙女のＮＧワードですわっ……」
由雉の言葉に、グレーテルが少し引きつった笑みを見せながら、鎖鎌を構える。
「……っ？」
今まで見せたことのない構えを取るグレーテルに、少し眉をひそめる由雉。
「“螺無根（らむね）”っ！！」
「……っ！！」
グレーテルの鎖鎌が幾重にも分裂し、無数の鎌が由雉の八方から一斉に襲いかかる。

「串刺しですわっ！」
「……冗談っ！」
楽しげに声を出すグレーテルに、少し焦ったような表情を見せながら懐から羽根を取り出す由雉。
「“癒羽”・“裂羽”っ」
由雉が右手に青い羽根を、左手に黄色い羽根を構える。
「“合翼っ……」
２つの羽根を合わせる由雉。合わさった羽根から光が放たれ、やがて１枚の緑の羽根となる。
鎌の向かってくる上空へと、その緑の羽根を放り投げる由雉。
「包羽”っっ！！！」
――――パァァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――
包羽が光を放った瞬間に、由雉にすべての鎌が降り注いだ。
「やったかしら……？」
巻き起こる衝風の中を、目を凝らして見つめるグレーテル。
「んっ……？」
目を凝らしていたグレーテルが、晴れていく煙の中から見えてくるものに、そっと眉をひそめる。
「あれはっ……」

煙が晴れ、由雉のいた付近に見えてきたのは、大きな緑色の球体であった。よく見れば、無数の緑の羽根で構成されている。その球体が降り注いだグレーテルの鎌をすべて受け止めていた。

「ふぅ～っ……」

球体を構成していた緑の羽根が、頂点から崩れ落ちていく。すると球体の中から由雉が姿を現した。

「“包羽”使ったのに3個も喰らっちゃったよぉ～」

そう言いながら由雉が足や肩に負った傷を見る。確かに傷は負っているが、グレーテルの攻撃の大きさを考えれば、それは無傷に近かった。

「……っ」

少し唇を噛み締めるグレーテル。

「なかなか……やりますわねっ」

「当然っ」

絞りだすように言ったグレーテルに、由雉が余裕の笑みを向ける。

「なかなかやらなきゃっ、輝矢のお供なんて務まんないからねっ」

「……ですが、他の方はそうでもないようですわよ……？」

「えっ？」

「うわあああああっっ！！！」

「……っ！」

グレーテルの言葉に眉をひそめていた由雉が、後方から聞こえてくる叫び声に振り返る。

「門貴っ……！」
由雉が振り返った先では、ヘンゼルの攻撃を喰らい、傷だらけとなった門貴が床に膝をついていた。

「クっ……！」
床に如意棒を突き刺し、傷だらけの体を何とか支える門貴。
「こっ……！今度こそっ……！」
そう言って門貴が鋭い目つきで顔を上げる。
「ウフっ」
「アハっ！」
しかしその鋭い顔つきは、笑顔のヘンゼルと目が合った途端に一瞬で崩れ去る。
「あかんっ……！可愛すぎやっ……！」
再び俯いた門貴が、悩み込むように頭を抱える。
「すぐ楽にして差し上げますわぁ～っ！」
「……っ！」
ヘンゼルが大剣を構え、そんな苦悩している門貴の元へ飛び込んでいく。

――――・・・・・・・・・・っっっ！！！――――

「うがあああああああああああっ！！！！」

門貴の叫び声とともに、真っ赤な血が空に舞った。

「……っ」
再びヘンゼルに切り裂かれ、倒れていく門貴を見つめ、表情をしかめる由雉。
「あのバカザっ……」
――――シュウウウウウウウウウウウンッッッ！！！！――――
「なっ……！」
門貴の方に気を取られていた由雉の胴に、勢いよく巻きつく太い鎖。
「グっ……！」
鎖はきつく由雉を縛り、両手の動きも封じる。
「だから言いましたでしょう……？」
由雉を縛った鎖を持ったグレーテルが、ゆっくりと由雉の前へと歩み寄る。
「私以外を見つめちゃイヤンですわって……」
「……っ」
グレーテルの笑みに厳しい表情を見せる由雉。
「まぁもう……誰も見つめることなんてできないですけど……」
そう言ってグレーテルが鎌の刃先を由雉へ向ける。
「クっ……」
由雉がどこか悔しげに歯を食いしばる。

「安心して下さい。貴方様のお仲間はお兄様がちゃあ～んとっ……」
「“お兄様”っ？」
由雉がグレーテルの言葉に敏感に反応する。
「えっ？あっ……！」
グレーテルが急に焦ったような表情となり、思わず口を押さえる。
「ちっ……違いますわっ！“お姉様”ですっ！“お姉様”っ！」
「ふぅ～ん……そういうことぉ……」
「うっ……！」
見透かしたように笑う由雉に、グレーテルが益々、焦った表情を見せる。
「違っ……！だからっ……！今のはちょっとした言い間違いでっ……！」
「……っ」
「……っ？」
俯く由雉に、必死に言い繕っていたグレーテルが表情を曇らせる。
「“脚翼っ……」
「何っ……！？」
鎖に縛られ両手を封じられている由雉が、不意に右足を上げる。
由雉の右足の靴には、まるで飾りのように青い羽根が付いていた。
それに気づき、一気に表情を変えるグレーテル。
「まさか足にもっ……！？」
「裂羽”っ！！」
「しまっ……！」

由雉が靴に付けていた青い羽根を、門貴を攻撃しようとしているヘンゼルへと飛ばす。

「さぁそろそろ終わりにしましょうねぇっ！」

「はぁ～いっ！って、ちゃうちゃうっ！俺が負けたら輝矢んがぁぁ～～～っっ！！」

大剣を構え門貴ににじり寄るヘンゼルと、ヘンゼルに攻められ、何とかしようと思いながらも苦悩している門貴。どちらもヘンゼルに飛んできている裂羽には気づいていない。

「危ないっっっ！！！！！！」

思わず身を乗り出して叫ぶグレーテル。

「避けてっっっ！！！！！お兄様っっっ！！！！！」

「……っグレーテルっ？」

「お兄様ぁ～っ？」

グレーテルの叫びに、一斉に振り返る門貴とヘンゼル。

「うっ……！」

振り返ったヘンゼルが、自分に飛んできている裂羽に気づく。

「クっ……！！」

ギリギリのところで何とか裂羽をかわすヘンゼル。

――――バァァァァァァァーーーーンッッッ！！！――――

ヘンゼルにかわされた裂羽が壁に直撃し、大きな穴をあけた。

「ふぅっ……あっぶねぇーっ」

素となった表情と先ほどまでとはえらい違いの低い声を出しながら、無造作に額の汗を拭うヘンゼル。

「じぃぃぃぃぃ～～～っ」

「ハッ！」

そんな無造作ヘンゼルが、こちらをじっと見つめている門貴に気づき、我に返る。

「危なかったですわぁぁ～～～っっ！！オホホホホぉぉぉ～～～っっ！！」

「……。」

明らかに不自然な高笑いをするヘンゼルに、門貴がさらに疑いの目を向ける。

「今……グレーテルちゃん、“お兄様”て……」

「聞き間違いですわよぉぉっっ！！私はどう見たってお姉さっ……！」

「門貴ぃぃぃ～～～っっ！！」

ヘンゼルの言葉を遮るようにして聞こえてくる、門貴を呼ぶ由雉の声。

「この2人ぃぃ～～っ、“姉妹”じゃなくって“兄妹”みたいだよぉぉ～～～っっ」

「ちっ……！違いますわっ！！」

由雅の言葉を必死に否定するグレーテル。

「たっ……！確かにお兄様は男ですけどっ……！心は完璧女ですしっ……！いわゆる1つのオカマであって……！！」

『……。』

「って、あっ……」

思い切りヘンゼルの秘密をバラしてしまったことにやっと気づき、固まるグレーテル。

「あっ……えとっ……そのっ……」

「だってぇ～っ」

「おぉぉうっ」

由雅の声に返事をしながら、如意棒を支えにし、ボロボロの体でゆっくりと立ち上がる門貴。

「よぅわかったわっ……」

「うっ……」

顔を上げた門貴は、鋭い笑みを見せていた。そんな門貴に少し動揺した様子で1歩下がるヘンゼル。

「ふっ……バレてしまったものは仕方ありませんわねぇっ」

ヘンゼルが開き直ったように声を出しながら、再び大剣を構える。

「色香で惑わすのもそろそろ飽きてきましたし、終わりにいたしましょうかっ！」

「えっらい甘い夢、見させてもろたわぁ～」
唇の端から流れていた血を拭い、どこか得意げに笑う門貴。
「けどっ、こっから先は思いっきりやらせてもらうでぇ？」
「フフっ」
自信ありげに笑う門貴を、ヘンゼルが軽く嘲笑う。
「今更、そんなボロボロの体で何をしようというんですの？」
「何でもするわぁっ」
如意棒を持つ手に力を込める門貴。
「輝矢んのためならっ」
「笑止っ……」
まっすぐな瞳で答える門貴に、ヘンゼルが冷たい笑顔を見せる。
「すぐにトドメを刺して差し上げますわっ……！！」
ヘンゼルが大剣を床に突き刺す。
「“微巣決土”っっ！！！」
――――バァァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――
ヘンゼルの技にまたしても門貴の周囲の床に亀裂が入り、門貴の足元が崩れ始める。
「これでっ……！」
バランスを崩すであろう門貴の元へと飛び出していくヘンゼル。
「終わりですわっ！！」

「……如意棒・第2の舞っ……」

足元が崩れる中、門貴が冷静な表情で如意棒を構える。

「“浄”っっ！！！」

――――ビュウウウウウウウウウンッッッ！！！！――――

「何っ……！？」

ヘンゼルが門貴に切り込もうとした途端、門貴の周囲に強い竜巻のような風が巻き起こる。

「うわあああああああっっ！！！」

風に勢いよく弾き飛ばされるヘンゼル。

「うっ……ううっ……」

風に切り裂かれ傷ついたヘンゼルが、ゆっくりと痛む体を起き上がらせる。

「……。」

「ううっ……！！」

やっと起き上がったヘンゼルの前に、いつの間にか立っている門貴。門貴の鋭い視線に、ヘンゼルの額から汗が流れた。

「待っ待ってっ……！私っ……！男には生まれてきちゃったけどっ

……！心は超乙女ってゆうかっ……！」
「よぅ覚えときぃっ……」

両手を突き出し、必死に言葉を繋げるヘンゼルに、門貴が言い放つ。

「俺ぁ、女にはめっちゃ甘いけどっ……」

門貴がヘンゼルを見て笑う。

「その分っ、男にはめっちゃ厳しいねんっ！」
「待っ……！！」
「如意棒・第1の舞っ……」

門貴がヘンゼルに向けて如意棒を振り上げる。

「“空”っっっ！！！」

――――ビュウウウウゥゥゥゥゥンッッッ！！！！！――――

「うがあああああああっっっ！！！」

門貴の真空波に吹き飛ばされ、傷だらけとなったヘンゼルが力なく地面に落ちた。

「ううっ……ホントっ……惚れそうなくらい強いわぁっ……ううっ……」

そう呟いて、ヘンゼルはそっと瞳を閉じた。

「ふぃぃ～～っ」

倒れたヘンゼルを確認し、如意棒を下ろす門貴。

「純情男心っ、騙したりするからやっ」

門貴ｖｓヘンゼル、勝者：門貴、勝因：オカマ。

「お兄様ぁぁぁぁっっ！！！」

門貴に敗北したヘンゼルを見て、身を乗り出すグレーテル。

「お兄様っ……」

「あぁ～あ～負けちゃったぁ～」

落ち込むように肩を落とすグレーテルに、鎖に縛られたままの由雉が軽い口調で声をかける。

「君がうっかり口滑らせたりしなきゃ勝てたのにねぇ～」

「……っ」

由雉の挑発めいた言葉に、目つきを鋭くして由雉を睨みつけるグレーテル。

「せめてっ……貴方だけでもっ……」

そう言ってグレーテルが鎌を構える。

「倒しますわっ……！」

「できないと思うよぉ～君にはっ」
「ハッ！その状態で、よくそんな強気な発言ができますわねぇっ！」
鎖に縛られ両手を動かすこともできない状態で、強気な発言をする由雉に、グレーテルが小バカにしたように言い放つ。
「いつまでも私がお間抜けなことばかりやっているとは思わない方がいいですわよっ！」
「君こそ……」
「……っ？」
由雉がグレーテルに鋭い瞳を向ける。
「いつまでもトリを捕まえてられるなんて、思わない方がいいよっ」
「何っ……？」
――――ボォォォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！！――――
「うっ……！！」
「……っ」
由雉がキジに姿を変えて、鎖から逃れる。
「しまったっ……！」
上空に飛び上がったキジの姿を見て、表情をしかめるグレーテル。
「けどっ……」
グレーテルが素早く鎖鎌を構える。
「格好の餌食ですわっ！！“螺無根”っっ！！！」
グレーテルの鎖鎌が再び幾重にも分裂し、無数の鎌が上空を飛ん

でいるユキジを八方から狙い撃ちにする。

「今度こそ串刺しですわっ……！」

「だからっ……」

ユキジが鋭い表情を見せ、その青々とした美しい羽根を広げる。

「冗談じゃないって言ってるでしょっ？……“千滅羽”っ……！！」

――――パァァァァァァァーーーンッッッ！！！！――――

「なっ……！！」

青いキジが巻き放った千の赤い羽根が、グレーテルの鎖鎌を1つ残らず掻き消す。

驚きのあまり、大きく目を見開いて上空を見つめるグレーテル。

「そっ……そんなっ……私のラムネがっ……」

「ああ、ちなみにっ」

「……っ！」

唖然としていたグレーテルの背後に、先ほどまで上空を飛んでいたユキジが現れる。

「いつの間にっ……！」

――――ボォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！――――

グレーテルが振り返った途端に、ユキジが白い煙に包まれて再び人化する。

「ボクは特に可愛い女の子に甘いとかないからっ」

「うっ……！！」
そう微笑んで、由雉がグレーテルに青い羽根を見せる。
「待っ……！」
「“右翼・裂羽”っ」
「……っ！！」
制止を促したグレーテルを完全に無視して、由雉がグレーテルに青い羽根を投げ放つ。
「うっ……！きゃあああああっ！！」
――――バァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――
裂羽に吹き飛ばされたグレーテルが壁に激突し、力なく床に倒れ込む。
「うっううっ……無念っ……ですわっ……ううっ……」
弱々しくそう呟いて、グレーテルはそっと瞳を閉じた。
「ふぅっ」
そんなグレーテルを見て、由雉が一息ついたように肩を落とす。
「いっやぁぁぁぁっっ！グレーテルちゃぁぁぁぁんっっ！！」
「……。」
聞こえてくる門貴の叫びに、由雉が急激に表情を引きつる。

「大変やぁぁぁぁぁっっっ！！！気ぃ失っとぉぉぉっっ！！」
倒れたグレーテルに駆け寄り、困ったように頭を抱え込む門貴。

「ユッキーっ！！早く癒羽をっ！！」
「バカっ……？」
由雉ＶＳグレーテル、勝者：由雉、勝因：根性の悪さ。

第１４章　伝説の男　★３

「へぇっ……」
ヘンゼルとグレーテルにそれぞれ勝利し、漫才のように明るい声で話している門貴と由雉の姿を見て、オオカミがどこか楽しそうに笑ってみせる。
「サル君もキジ君も結構強いんだねぇ～。もしかして……」
オオカミがゆっくりと正面を振り向く。

「君が１番、弱いのかな？」
「ううっ……」

オオカミが振り向いた先には、野原に深々と倒れこんでいる桜時の姿があった。先ほどのオオカミの機微団子弾をもろに喰らい、全身に傷を負い、立つこともできない状態であった。

「イヌ君っ……」
「クっ……」
オオカミの微笑みに、桜時が苦しげな表情を見せながらも目つきを鋭くする。

「……っ」
「……っ？」
倒れたまま目の前に転がっている村雨丸を手にし、刃先をオオカミへと向ける桜時。

「“瞬花っ……終刀”っ！！」

「……っ」

再び瞬花終刀を放つ桜時に、オオカミが笑みを消して目を細める。

「ふぅっ」

――――バァァァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――

またしても尻尾を一振りさせただけで、瞬花終刀を弾き返すオオカミ。

「うっ……！」

弾き返された瞬花終刀が、倒れたままの桜時の元へと飛んでくる。

「うわあああああっっ！！」

自らの技に桜時が吹き飛ばされる。

「うっ……ううっ……！」

床に倒れ込み、頭から血を流した桜時が、力なく村雨丸から手を離す。

「効かないものは効かないのに、あんまり学習能力ないねぇ」

倒れた桜時の元へと歩み寄りながら、オオカミがどこか呆れたように言い放つ。

「がっかりだよ…」

オオカミの表情から穏やかな笑みが消える。

「竹取輝矢のお供だって聞いたから、もう少しやるものかと期待していたのに……」

「……っ」

オオカミの口から輝矢の名が出ると、倒れ込んでいる桜時が少し驚いたように目を見開いた。そのオオカミの言葉は、輝矢を知っているような口振りであった。

「アンタ、やっぱ輝矢のこと知っ……」

「これじゃあ彼女も大変だろうねぇ。そりゃあ倒れちゃうはずだぁ」

「えっ……？」

意味深なオオカミの言葉に、眉をひそめる桜時。そんな桜時を見て、オオカミが冷たく笑う。

「鬼人退治をしなきゃいけない上に、こんな“か弱い子犬”を守ってあげなきゃいけないんだからぁ」

「……っ！」

そのあからさまな挑発に、桜時がまたしても表情をしかめる。

「何だとっ……！？」

「あれっ？僕、間違ったこと言ったかな？」

表情に怒りを見せる桜時を、嘲笑うかのような笑みを浮べるオオカミ。

「じゃあ君、彼女を助けたことはあるかい？」

「……っ」

「彼女に頼られたこと、あるかい？」

「それはっ……」

オオカミの質問にどんどん俯いていく桜時。

――――大丈夫ですよっ、ハチ――――

――――ハチは全然、何にも心配しなくていいですから――――

いつだってそう言って笑う。

少しの心配もかけさせない。少しの助けも入れさせない。少しも頼りにしてこない。

それが輝矢。そして、それが輝矢にとっての桜時。

「それ……は……」

俯いた桜時は、やがて言葉を失くした。

「それで仲間っ？ううん、違う」

オオカミがゆっくりと首を横に振り、鋭い瞳を桜時へと向けた。

「一般にはねっ、そうゆうのをタダの“お荷物”って言うんだよっ」

「……。」

その挑発に、桜時が乗ることはなかった。

「あんニャローっ！！言わせておけばぁぁっっ……！！」
「はいはいっ、落ち着いてぇ～」
ヘンゼルとの戦闘でもうボロボロだというのに、割りと元気そうに怒り全開でオオカミに向かって行こうとしている門貴を、由雉が冷静な表情で止める。
「まともに突っ込んでいって勝てる相手じゃないよっ。ボクらが戦ったメイドたちとはレベルが違う」
「そりゃ種族が違うからなぁ～っ」
「そういう見ため的な話をしてるんじゃなくて……まぁいいやっ」
門貴の惚けっぷりに、由雉が説明を途中放棄する。
「とにかく桜時には荷の重い相手なことは確かだからねっ、ここは1つ、不意打ちといくよっ」
「いっやぁぁぁっ！ユッキーっ！悪い顔ぉぉ～～っ」
鋭い表情で青い羽根を構える由雉に、門貴が茶化すように叫ぶ。

「……っ」

「……っ？」

その時、ふと右手を動かした桜時に、門貴が眉をひそめた。

「“右翼っ……」
「待てっ！」
「……っ？」
オオカミに向けて青い羽根を放とうとしていた由雉を、門貴が大きな声で止める。
「何っ？」
しかめた表情で門貴を見る由雉。

「アイツっ……」
門貴が真剣な表情で桜時を見つめる。
「アイツっ……まだ何かやる気やっ……」
「えっ……？」

「……っ？」
門貴と由雉が桜時を見つめる中、オオカミも桜時の変化に気づき、その表情を曇らせていた。

「クっ……」
倒れたままの傷だらけの桜時が、まっすぐ前を見つめる強い瞳を見せ、必死に目の前に転がっている村雨丸へと手を伸ばそうとしていた。

「ふぅ……」
そんな桜時の姿に、オオカミはどこか呆れたように肩を落とした。
「弱い上に……往生際まで悪いようだね……」
「確かに……」
「……？」

絞りだされたような、その弱々しい声に、オオカミがゆっくりと顔を上げる。

「確かに俺は……今の俺はっ……アイツにとってはただのお荷物で……」

桜時が必死に村雨丸へと手を伸ばしながら、その弱々しい言葉を繋ぐ。

「何の力にもなれねぇーしっ……これっぽっちも頼りになんかされねぇーけどっ……でもっ……」

「……っ」

桜時の手が、村雨丸の柄を掴む。

「それでっ……このままで終わる気はねぇーしっ……」

ゆっくりと片足ずつ膝を立たせ、傷ついた体を奮い起こす桜時。

「この勝負だってっ……」

桜時がやっとの思いで立ち上がり、オオカミの方に向かって顔を上げる。

「このまま終わる気はねぇっ……！」

顔を上げた桜時は、力強く曇りのない瞳を、オオカミへと向けた。

「はぁっ……」

「……っ？」

深々と息をつくオオカミに、桜時が少し眉をひそめる。

「あくまでも足掻くと言うのかい？」

「イヌは足掻くのが得意なんだぜっ？諦めの早いオオカミと違ってなっ」

「……っ」
笑顔さえ見せ、自信を持って言い放つ桜時に、オオカミの表情が今まで見せていた余裕の笑みが消えていく。
「じゃあその足掻きとやらを見せてもらおうか……」
オオカミが鋭い瞳を桜時へと向ける。

「“機微団子弾”」
「……っ！」
オオカミの周囲を取り囲むようにして現れる無数の機微団子弾に、桜時が表情を厳しくする。

「バッキューンっ☆」
――――ビュウウウウウウウーーーンッッッ！！！！――――
オオカミの合図で、一斉に桜時へと飛び出していく機微団子弾。

「桜時っっ！！」
「イヌっっ！！」

「……。」
門貴と由雉が名を呼びながら身を乗り出す中、桜時が向かってくる機微団子弾に向かって村雨丸を振り上げる。

――――私には確かに見えますよ……？――――

お荷物であるのなら、仲間と呼べるほどの存在になればいい。

弱いのなら、強くなればいい。
少しでも助けられるように、少しでも頼られるように。
――――アナタの背に、その翼が……――――
あの笑みに、少しでも応えられるように。

「……っ！！」

桜時が、向かってくる機微団子弾に、勢いよく村雨丸を振り下ろす。

「“瞬花”っ……！！！」

「また同じことをっ……」

瞬花を唱えた桜時に、オオカミが思わず肩を落とす。

「あれほど効かないものは効かないとっ……」

――――パァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――

「なっ……！！」

その瞬間、オオカミの目の前で無数の機微団子弾が無数の桜の花びらと変わり、美しく散っていった。

「僕の機微団子を……？」

――――パァァァァァァァンッッッ！！！――――

「えっ……？」

オオカミのすぐ横に立っていた桃の木が、その音とともに一瞬にして桜の木へと変わる。

――――パァァァンッ！パァァァンッ！パァァァンッ！――――

部屋にあるすべての桃の木が、どんどん桜の木へと変わっていく。

「“桃の苑”がっ……お兄様っ……！」

「ああっ……」

いつの間にか気が付いたらしきグレーテルが驚いたように振り返ると、そこにいたヘンゼルは咲いたばかりの桜の木を見上げながら、思い切り男らしい低音ボイスで頷いた。

「まさかっ……これほどの力のヤツがいるとはな……」

――――パァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――

「はぁぁ～っ、一気に桃園から桜園だねぇ～」

「何々ぃ～っ？みんな、何をそんなに驚いてるんぅぅ～～～っ？？」

「桃と桜の区別も付かないバカは黙っててて」

「がいいいぃぃーーんっっ！！」

由雉に冷たい言葉を投げかけられ、門貴が激しくショックを受け

る。

――――パァァァンッ！パァァァンッ！パァァァンッ！――――

「こんなことが……」

部屋一面、桜の木となった周囲を見回しながら、今までにない険しい表情を見せるオオカミ。

「春だねぇ……」

『落ち着いてる場合じゃありませんわっ！！ご主人様っっ！！！』

桜の木を見上げながらまったりし始めるオオカミに、ヘンゼルとグレーテルが突っ込みを入れる。

「ああ、ごめんごめん。ついぃ～」

オオカミが2人に気の抜けた笑みを向ける。

『ついとか言ってる場合じゃありませんわぁぁぁぁっっ！！！前ぇぇぇぇっっ！！！前ぇぇぇぇっっ！！！』

「前っ……？」

必死に指差すヘンゼルとグレーテルに、オオカミがゆっくりと前を見る。

「……っ！」

「……っ」

オオカミが前を見ると、そこには再び村雨丸を構えた桜時の姿があった。桜の木から散っていくすべての花びらが、まるで桜時に引

き寄せられていくように集まっている。桜の花びらに包まれた桜時は、今までにはない不思議な空気を醸し出していた。

「村雨丸っ……」

桜時がゆっくりと村雨丸を構える。

「……っ」

桜時から発せられるただならぬ力に、オオカミが表情を険しくして身構える。

「これはヤバいかもっ」

『ご主人様っっ！！！』

距離を取るように後方へ飛ぶオオカミに、ヘンゼルとグレーテルが不安げに身を乗り出す。

「……“柔桜（じゅうおう）っ…無塵（むじん）”っっ！！！」

桜時がオオカミに村雨丸を振りきると、桜時を包む桜の花びらが一斉にオオカミへと飛び出していく。

「クっ……！」

向かってくる桃色の花びらの塊に、顔をしかめるオオカミ。

――――バァァァァァァァァーーーーンッッッ！！！――――

巨大な衝撃音とともに、桜時の技がオオカミのいた辺りの野原を一気に吹き飛ばした。部屋中に砂煙が立ち込め、皆の視界を塞ぐ。

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」

肩で大きく息をしながら、砂煙の中に立ち尽くす桜時。

「ご主人様っ！！？お兄様っ！ご主人様がっ……！！」
「まさかっ……ご主人様がっ……」
晴れない砂煙に、不安げな表情を見せるヘンゼルとグレーテル。

「うっ……ううっ……！」

『桜時っ……！！』
力なくその場に座り込む桜時を見て、門貴と由雉が身を乗り出す。
「ダメだっ……！桜時、もう立つ力もっ……！」
「でももうええやぁぁぁ～～んっ！イヌのヤツ、やったんやろぉぉ～っ？」
「……いやっ……」
「へぇっ？」
厳しい表情で呟いた由雉に、門貴が首をかしげて振り向く。

「……っ」
砂煙をまっすぐに見つめていた桜時が、ふと眉をひそめる。
「ああぁ～っ……凄い凄いっ」
「……っ？」
晴れていく砂煙の中から見えてくる人影に、桜時が座り込んだまま身構える。
「まさかホントに人化させられちゃうとは思わなかったなぁ～」
「あっ……」
『なっ……』
晴れていく砂煙の中から現れたその人物に、思わず目を見開く桜時、門貴、由雉。
「今のはホントにビックリしたよぉ～」
『きゃあああああっ！！ご主人様ぁぁぁぁぁっ！！』
黄色い歓声をあげるヘンゼルとグレーテル。
そこに立っていたのは茶色いサラサラ髪に、穏やかな緑色の瞳をした、笑顔の何とも爽やかな長身の男であった。２０代半ばくらいだろうが、物腰柔らかな雰囲気がそれ以上に年上に思わせた。
「もぉぉぉーうっっ！！相変わらず、ご主人様カッコいいぃぃぃーーっっっ！！」
「当然よっ！私に男を捨てさせたぐらいのお人なんだからっ！」

「ってか、アンタが勝手に捨てたんでしょ……？」
人化したオオカミに一気にテンションを上げるヘンゼルとグレーテル。そのヘンゼルの言葉に、由雉が呆れた表情で突っ込みを入れる。
「でもでもぉっ！さっきの戦いで門貴さんにグッと来ちゃったぁぁっっ！！」
「いっやぁぁぁぁっっっ！！！来んでええぇぇぇっ！！」
勢いよく駆け込んでくるヘンゼルから、門貴が死に物狂いで逃げる。

「はぁ～っ、驚いたよっ」
そう言いながら、懐に手を入れるオオカミだった男。
「まさか朱実の王子クンがここまでとはねぇ～」
男が懐から取り出したのは、黒いフチのメガネであった。
「知ってて仲間にしたのかな……？あの子はっ」
「えっ……？」
メガネのレンズを拭きながら漏らした男の小声を聞き取れず、桜時が少し首をかしげる。
「まぁいいかぁ」
「……っ」
メガネを掛ける男の右手の甲を見て、眉をひそめる桜時。

「傷っ……？」

男の右手の甲には、古い刀傷の跡があった。

「さてとっ」

黒いメガネを掛け、さらに爽やかさを増した男が、仕切りなおすように顔を上げ、桜時の方を見る。

「じゃあコッチもちょっと本気でいかせてもらうねぇ～」

「ええっ！？」

笑顔で言い放つ男に、座り込んだままの桜時が引きつった表情で声を出す。

「ちょっ……！」

「“神狼丸”っ」

「……っ！」

男がどこからともなく刀を取り出し、素早く構える。その長く美しい黒刃に、思わず目を見張る桜時。

「じゃあ行くよっ……！」

「うえっ！？ちょっ……！ちょっと待っ……！俺、もうっ……！」

「終わりだよっ、イヌ君っ」

「クソっ……！！」

『桜時ぃぃっ！！！』

振り下ろされる刃に、さすがに諦めの色を見せる桜時。門貴と由雉が必死に叫ぶ。

「……っ！！」

第１４章　伝説の男　★３（後書き）

今回は短めなので、次回で１４章最終話です～。
明日更新します。

第１４章　伝説の男　★４

――――パァァァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――

「へっ……？」

『ああっ！！』

桜時に向かって振り下ろされようとした神狼丸を受け止めた金色の刃。
その刃を突きつけた者の姿に、桜時や門貴、由雉、そしてヘンゼルたちも目を見開く。

『輝矢ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！？』

そう、金色の刃・三日月を構え、男の神狼丸を止めたのは、冷たい表情を見せた輝矢であった。

「どういうこっちゃ～っ？輝矢ん、捕まってたんとちゃうん～？」
「まぁ輝矢は大人しく捕まってるタイプじゃないけどね」
急に現れた輝矢に、門貴と由雉が戸惑った表情を見せる。

「かっ……輝矢っ……お前っ……」

しゃがみ込んでいる桜時も、茫然と輝矢を見上げる。

「んん～っ、どうやらぁ終わりに出来ないみたいだねぇっ」

「……っ」

爽やかな笑みを浮べた男に、輝矢がさらに表情を冷たくする。

「人が寝てる間に……人のペット相手に何をしているんです……？」

キツく男を睨みつける輝矢。

「少し……“悪フザケ”が過ぎるのではないですか……？“タロー”っ」

『へっ？』

輝矢の言葉に目を丸くする桜時たち。

「いっや～っ！輝矢ちゃんがお供連れて帰って来たって聞いたからさ～っ！どんな子かと思って、ついっ！」

『へぇぇぇっ？』

輝矢と“タロー”と呼ばれた男のやり取りに、３人がどんどんと困惑した表情となっていく。

「ついじゃありませんよっ、ついじゃっ」

「だってぇ～フツーに自己紹介したってつまんないじゃないっ？」

睨む輝矢に、タローが満面の笑顔を向ける。

「長く深い付き合いを見据えての自己紹介はぁ、やっぱこう命を張った戦いにしないとぉっ……！」
「だからってハチをこんなに傷だらけにしてもいいと……？」
「あっ、やっぱりごめんなさぁ～いっ」
輝矢からさらに怒りのオーラが発されると、タローが笑ったまま素直に頭を下げる。

「あっあのっ……輝矢っ……」
「……っ？」

タローと言葉を交わしていた輝矢を、遠慮がちに桜時が呼ぶ。

「ソイツは一体っ……」
「ハチぃいいいっ！！！」
「ぎゃあああああっ！！！」

勢いよく抱きついてくる輝矢に、桜時が耳が砕けそうな叫び声を発する。

「こぉんなボロボロになってぇぇ～私の愛で治してあげますからねぇぇ～っっ」
「治るかぁぁっっ！！離れろっ！！ボケぇぇっっ！！」
愛を振り撒いてくる輝矢に、傷だらけの体で必死に抵抗する桜時。
「あのぉ～……お楽しみのところ、大変申し訳ないんですけどぉ～」
２人の元へと歩み寄ってきた由雉が、少し遠慮がちに声をかける。
「後にしなさいっ」
「はいっ！由雉クンっ！どうぞぉっっ！！！」
由雉の進言を許さない輝矢に対し、すかさず進言を許す桜時。
「でぇ、結局のところ、あの人たちは誰なわけぇ？」
由雉が１番気になっている質問をストレートに輝矢に投げかける。

「まっ、戦ってる最中に殺気がなかったから、鬼人関連じゃないってことは察しついてたけどっ」
「ええぇっっ!!?そうなんっっ!?」
「ちょっとバカは黙っててもらえる?」
「ううっ……」
由雉の冷たい言葉に、しゃがみ込んで落ち込む門貴。
「そうだよっ!アイツら一体、何者なんだっ?お前、知ってんだろっ!?」
「はぁっ……」
桜時からも問いかけられ、輝矢が少し肩を落としながら桜時から離れて、タローの方を振り返る。

「タロー」
「はいはいっ」
鋭く見つめる輝矢に、タローが軽い返事をする。

「ヘンゼル、グレーテルっ」
『はぁ〜いっ!』

タローに名を呼ばれるとヘンゼルとグレーテルが元気よく返事をして、右手を天井に突き上げる。

『“解”っ!』

――――パァァァァァァァーンッッッ!!!!――――

「えっ……?」
「うおおおおっっ!!!!」
「何だっ!?」

ヘンゼルとグレーテルがそう言い放った瞬間、今は桜の苑となっていた穏やかな野原の景色が掻き消え、野原よりはかなり狭い、ごく普通の家の中へと姿を変えた。

「どうなっとんやぁ？」

「やっぱり今までの部屋は空間系の能力で作られたものだったみたいだねぇ」

目を丸くする門貴に、冷静な表情で答える由雉。

「改めまして、ようこそっ」

『……っ？』

タローが3人に笑顔を向ける。

「“エセお菓子の家”こと、“輝矢ちゃんの実家”へっ！」

『……へぇっ！？』

一瞬、固まった後、大きなリアクションで聞き返す3人。

「輝矢んの家っ？」

「この悪趣味な家がぁぁ～っ？」

「そぉうっ！そしてぇっ……」

爽やかな笑顔のまま、言葉を続けるタロー。

「僕の名前は桃原太狼(ももはらたろう)っ。人呼んで、“桃タロー”っ」

『えっ……？』

太狼の茶目っ気たっぷりの自己紹介に、先ほどよりもさらに凍りつく3人。

『えええぇぇぇぇっっっ！！！！？』

桜時、門貴、由雉が目玉が飛び出しそうなくらい目を開き、これ以上ないくらいに驚いて叫ぶ。

「もっ……！ももも桃タローってっ……10年前、鬼人を退治して英雄になっちゃったあの桃タローっ……！？」

「うん、そぉ～っ」

「今や伝説とされて御伽界中の子供たちの憧れになっちゃってる、あの桃タローっ！！？」

「うん、そぉ～っ」

「圧倒的な強さで鬼人を退治していき、“神の子”かとまで言われてたあの桃タローかぁっ！！？」

「うん、そぉ～っ」

3人の問いかけに、満面の笑顔で頷く太狼。

『えええぇぇぇっっっ！！！！？』

3人がもう1度声を揃えて、大声で驚く。

「そんなに感激されちゃったら照れるなぁ～っ」

驚いている3人に、何故か照れ始める太狼。

「それはもう太狼様ですものぉぉぉっっ！」

「当然ですわぁぁぁっっ！」

「あっ、やっぱりそぉ～おっ？」

ヘンゼルとグレーテルの言葉に、さらにテンションを上げる。

「おっ……俺っ……桃タローってもっとこうっ、キリっとしてて精悍で誠実で心もキレイそうな感じかとっ……」

「ボクもっ……桃タローはもっと知的で真面目でクールで渋い人だと思ってたのに……」

「俺はもっとがっちりしたゴツゴツの怪力男か思てたぁ～っ」

あまりにイメージと違う桃タローに、少し落ち込む3人。

「だから言ったでしょう？あんまり期待しない方がいいって」

「やぁ～輝矢ちゃんってば、ひどいなぁ～っ」

そんな3人に声をかけた輝矢に、太狼が笑顔で突っ込みを入れる。

「ほっほらっ、桜時っ、握手してもらうんでしょっ？」

「いやっ……何つーかっ……あんだけ戦った後に“握手してくださぁ～い”ってのも言いにくくねっ？」

「ってことはぁ、あんたが輝矢んのお師匠さんてことかぁ？」

「んんっ？」

桜時と由雉が戸惑いながら会話している横から、門貴がふと問いかける。

「そうそぉ～っ、僕は輝矢ちゃんの師匠で、この家で一緒に暮らし

てるのっ。で、こっちがぁっ」
「桃原家の使用人をやらせていただいておりますヘンゼルですわぁっ！」
「同じくグレーテルですわぁっ！」
太狼の紹介に、元気よく自己紹介を始めるヘンゼルとグレーテル。
「何故に使用人が大剣やら鎖鎌を……？」
「それはぁ、まぁ僕の趣味っ？」
『……。』
笑顔満面の太狼の答えに、返す言葉もなく固まる桜時と由雉。

「門貴様ぁぁぁぁぁっっっ！！」
「うげっ！」
ヘンゼルに名前を呼ばれ、一気に顔を歪める門貴。
「これぞ運命の出逢いっ！これを機会に交際を始めましょぉぉぉ～～っっっ！！！！」
「絶対、いやぁぁぁぁぁぁぁっっ！！！」
全力で駆け込んでくるヘンゼルから、全力で逃げる門貴。さすが体は男というだけあって、足の速さは門貴といい勝負である。

「何だか面白いことになってますねぇ～」
「面白いか……？あれっ……」
「桜時、癒羽ぁ～」
「あっ、悪りぃっ」
輝矢の言葉に呆れた表情を見せていた桜時に、由雉が黄色い羽根を差し出す。
「私の愛で治すのとどちらがいいですか？」
「癒羽っ」
輝矢の問いかけに、桜時が即答する。
「またまたハチってば、照れちゃってぇぇぇ～～～っっ」
「照れてねぇーよっっ！！！」

「ぎゃあああああっっっ！！！輝矢ん、助けてぇぇぇぇっっ！！！」

『……っ？』

ヘンゼルに追いかけられ、家中を走り回っている門貴が、助けを求めて声をあげる。その声に振り向く輝矢。

「嫌です」

「即答っっ！！！？」

「門貴さまぁぁぁぁっっっ！！！！！」

「ふぎゃあああああっっっ！！！」

輝矢に助けを断られ、門貴が再び逃げ惑う。

「ったく、あんなに暴れちゃってぇ～まだ傷の治療してないのにっ」

由雉がやれやれといった表情で立ち上がり、癒羽を片手に追い回されている門貴の方へと歩いて行く。

「サルも厄介なものに惚れられましたねぇ」

「まったくだっ」

桜時が輝矢の問いかけに答えながら、由雉からもらった癒羽を自分の右手に突き刺す。癒羽がやわらかな光を放ち、桜時の傷を徐々に治していく。

「……。」

治っていきはしているが、全身傷だらけの桜時を見て、少し目を細める輝矢。

「すみませんでしたね……」

「えっ？」

輝矢の言葉に、桜時が顔を上げる。

「タローが……アナタを傷つけて……」

「ああっ、まぁそんなに気にしてねぇーって。傷も治っていってる

しっ、ほらっ」
「外傷のことではなくて……」
「えっ……？」
少し気まずそうに言う輝矢に、桜時が眉をひそめる。
「ああっ……」
――――一般にはねっ、そうゆうのをタダの“お荷物”って言うんだよっ――――
「聞いてたのかっ……」
桜時が少し笑みをこぼして、目線を下に落とす。
「苦しめて……しまいましたね……」
「いいよっ。間違ったことは言われてねぇーしっ」
今のままの桜時では、輝矢の力にはなれないことを思い知らされた。
「……っ」
「ハチっ……」
どこか元気なく俯く桜時に、輝矢が少し表情を曇らせる。
「ハチっ、私はっ……」
「はいっ、そこまでぇ～っ」
『へっ？』
――――ブサァァァァっっっ！！！！――――

「ぎゃあああああっっっ！！！」

突然、輝矢と桜時の間に手を入れた太狼が、勢いよく桜時の眉毛を抜いた。

「うっ……ううっ……おおぉぉぉぉぉ～～～っっっ……」

体を俯かせ、眉毛を押さえて苦しげな声をあげる桜時。

「あっ、結構抜けたねぇ～ギネスものじゃなぁ～いっ？」

「タローっ」

１０本以上はある、抜いた桜時の眉毛を数えながら、楽しげに笑う太狼。そんな太狼を輝矢が見上げる。

「何してくれてんだよっっ！！アンタはっっ！！！」

左眉だけ異常に薄くなった桜時が、勢いよく太狼に怒鳴り上げる。

「ごめんごめん～ピンクの眉毛なんて珍しいもんだからさぁ～っ、ついぃ～っ」

「ついじゃねぇーよぉっっ！！ピンクの眉ペンなんて、どこにも売ってねぇーんだぞぉっ！！？」

軽く笑って誤魔化す太狼に、桜時の怒りはさらに加熱する。

「ぶわぁっはっはっはっっ！！！何やぁ～っ！イヌぅ～っ！！その眉毛ぇぇぇ～～っっ！！！」

「眉毛だけハゲる家系なのぉ～？」

「うっせぇっっ！！！黙れっっ！！！」

いつの間にか輝矢や桜時の元へと歩み寄ってきていた門貴と由雉が、眉毛の薄くなった桜時を見て大笑いをする。そんな2人にも勢いよく怒鳴る桜時。

「さっ、お部屋に戻ってお休みしよっかぁ～輝矢ちゃんっ」
「えっ？」
『……っ？』

3人が騒いでいるうちに、桜時の眉毛を抜いた太狼が軽々と輝矢を抱え上げてそう言った。太狼の言葉に、輝矢や桜時たちが目を丸くする。

「なっ……！だっ大丈夫ですっ……！私は全然平っ……！」
「はいはいっ」
「……っ」

少しムキになった表情で平気であると言おうとした輝矢の口を、太狼が手でそっと押さえる。

「大丈夫じゃない時ほど、“全然”“何でも”“まったく”って言うんだよねぇ～輝矢ちゃんはっ」
「うっ……」

太狼のその言葉に、思わず表情をしかめる輝矢。

「……っ」
そんな輝矢の様子を見て、桜時は少し驚いたような表情を見せる。

「んっ……」
「……っ？」

またしても頭に痛みが走り、頭を押さえる輝矢を見て、太狼が少し眉をひそめる。

「まったく～安静にしてなきゃいけないのに、無理して起きてきちゃったりするからぁ～」
「誰のせいです……？」
「あっ……アハハぁ～、ヘンゼル～グレーテル～、輝矢ちゃんにお休みの準備してあげてぇ～」
『はぁ～いっ！』

輝矢の鋭い指摘を笑って誤魔化し、太狼がヘンゼルとグレーテルに指示を与える。太狼の言葉に元気よく返事をし、廊下の奥にある階段から急いで2階へと上がっていくヘンゼルとグレーテル。

「さっ、自分の部屋に帰ろうねぇ～」
「で……でもっ……」
「……っ？」

輝矢を抱えて2階に行こうとした太狼を、輝矢が裾を掴んで止める。

「タロー……またっ……ハチたちに……何か……」
「だぁ～い丈夫っ、もう何にもしないよっ。約束するっ」

半分閉じた瞳で弱々しく問いかける輝矢に、笑顔を向ける太狼。

「でもっ……」
「僕が約束、破ったことあるかい？」
「……3回に2回はっ……」
「……。」

輝矢の答えに、太狼が笑顔のまま一瞬、固まる。

「まっまぁとにかくっ、ゆっくりお休みっ……」
「……っ」

太狼の笑顔に少し安心したように微笑んだ後、輝矢はゆっくりとその瞳を閉じた。

「すぅー……すぅー……」
すぐに輝矢の小さな寝息が聞こえてくる。

「凄いっ……あの輝矢がとっても素直にっ……」
「あんな子供っぽい輝矢ん、初めて見たなぁ～」
「……。」

太狼にすべてを任せるように安心して眠った輝矢に、驚いた表情を見せる門貴と由雉。その2人の横で桜時は、複雑な表情でまっすぐに輝矢を見つめていた。

「じゃあちょっと寝かせてくるねぇ～」
太狼が3人にそう言って、階段へと足をかける。

「あっ、そうだぁっ」
『……っ？』

急に足を止める太狼に、目を丸くして顔を上げる3人。

「イヌくぅ～んっ」
「痛てててててっ……！！」

太狼がもう1度、桜時の方へとやって来て、座っている桜時の耳を引っ張りあげる。

「やっ……！やめっ……！何すっ……！」

「まぁた輝矢ちゃんに無理させたらぁっ、今度はぶっ殺すからねっ」

「うっ……！」

耳元で呟かれた太狼の小声に、桜時が凍りつく。

『……っ？』

太狼の声が聞こえなかったため、よくわからず首をかしげる門貴と由雉。

「よっ」

太狼が桜時の耳から手を離し、輝矢を抱えたまま3人を見下ろす。

「輝矢ちゃんの体調くらい見分けらんないとぉ、お供なんてやめさせちゃうよぉ～」

太狼が悪戯っぽく笑う。

「諸君っ」

『うっ……』

急に目つきを鋭くする太狼に、思わず固まる3人。

「もぉ～はもぉぐらのもぉ～♪もぉ～はモスラのもぉ～♪もぉ～はモントリオールのもぉ～♪」

『……。』

すぐにまた爽やかな笑顔に戻って、変な歌とともに太狼は2階へと姿を消していった。

そんな太狼を唖然と見送る桜時たち。

「なっ何やろっ……？あの歌っ……」

「さぁ……？って、問題はそこじゃなくないっ？」

「しっかし……すっごい敗北感やなぁ～っ……」

「桜時、さっき何言われたのぉ～？」

「……俺もうっ……ダメかもっ……」

子供の頃から憧れであった伝説の男・“桃タロー”に、出会ったその日に“ぶっ殺す”宣言を受ける桜時なのであった。

「すぅー……すぅー……」

「……っ」

眠っている輝矢を見つめ、優しい笑みをこぼしながら2階へとやって来る太狼。

「気は済んだんですか？」
「……っ？」

前方から聞こえてくる声に、太狼が顔を上げる。

「ゴンっ」

太狼が振り返った先の2階の廊下に立っていたのは、少し不機嫌そうな表情を見せたゴンであった。

「やぁっ、君がウチに来るなんて珍しいねぇ～何か用かいっ？」
「白々しいこと言わないで下さいよっ。俺が入れないよう、さっきまでヘンゼルたちに結界張らせたでしょ？」
「えっ？何のことぉ～っ？」
「ったくっ」

嘘臭い笑顔で誤魔化す太狼に、ゴンが呆れた表情を見せる。

「全部、アイツらの実力見るために仕掛けたことだったんでしょ？」
「んん～っ、どうかなっ」

ゴンの問いかけに、太狼がはぐらかすように答える。

「えらく強い退治屋がいると思ったら、まさかあの時のガキだったとはねっ……」
「……。」

ゴンの言葉に、太狼は笑顔ながらも神妙な表情を見せる。

「まぁ急にお供なんか連れて帰ってきて心配なのはわかりますけどっ、でも大丈夫ですよっ」

ゴンが太狼の方を見る。

「アイツら、わりとそれなりに強っ……」

「“わりとそれなり”……で大丈夫なのかい？」

「へっ……？」

意味深な太狼の言葉に、ゴンが少し表情を曇らせる。

「これからの戦い……彼らはこの子と共に戦っていくつもりなんだろう……？」

太狼が鋭い表情で、眠っている輝矢を見る。

「この子の背負っているものは……そんなに軽いものじゃないんだよっ」

「……っ」

そう笑って太狼は、すぐ突き当たりにある輝矢の部屋へと入っていった。

「やれやれ……だなっ……」

廊下に1人残されたゴンは、少し疲れたように呟いて肩を落とした。

第１４章　伝説の男　★４（後書き）

１４章終わりました。
タローさん、怪しい人ですみません。

第１５章　ハチともぐら　☆１（前書き）

１５章、はっじめっるよぉ～！（ララライ体操風）

第１５章　ハチともぐら　☆１

龍国、東の海岸沿い。“エセお菓子の家”こと“桃原家”。
ＡＭ８：００。１階、キッチン。
「まずぅカップラーメンにぃお湯を線トコまで注ぎまぁ～すっ」
キッチンのすぐ横にある大きなダイニングテーブルで、カップラーメンに並々と熱湯を注いでいるのは、桃原太狼、２６歳。実は、１０年前、すべての鬼人を倒し御伽界を救った伝説の英雄“桃タロー”である。
「３分間と見せかけて2分５７秒、待ちまぁ～すっ」
爽やかな笑顔でカップラーメンを待つ太狼。
「2分５７秒たったらぁ、フタを開けてぇ、ラーメンの中にお砂糖を約５００杯入れまぁ～すっ」
太狼がカップラーメンのフタを開け、少しメガネを曇らせながら、大きなスプーンで砂糖をどんどん入れていく。麺の上に砂糖が山盛りに積まれていく。
「これぞ“桃ちゃん特製・砂糖ドップリラーメン☆”っ」
最早、ラーメンというより砂糖汁になっているカップ内を見ながら、太狼が満足げな笑顔を見せる。
「さっ、召し上がれっ」
『あっ、いただきまぁ～すっ』
笑顔で差し出されたカップラーメンを受け取るモンキとユキジ。
『って、食えるかぁぁぁぁぁっっ！！！！』
「えっ？」
モンキとユキジの勢いあるノリツッコミに、太狼が心から不思議そうに首をかしげる。
「何で？もしかして朝はパン派なの？」

「そうゆう問題とちゃうわぁぁぁぁっっ！でも朝やねんからご飯かパンにせぇやぁぁっ！！」
「だいたい朝からそんなもの食べたら、血糖値上がりまくって死んじゃうよっ」
「そぉ～おぉ～？」
２匹の厳しい突っ込みに、少しがっかりした表情を見せる太狼。
「じゃっ、僕が食べるねぇ～っ」
『えぇぇぇぇぇっっっ！！！！？』
何食わぬ顔でその砂糖てんこ盛りのラーメンを食べていく太狼に、モンキとユキジが少し引き気味に驚く。
「タロー様っ、“甘さダルダルココア”ですっ！」
『ういっっ！！？』
キッチンからやって来たグレーテルが、太狼に砂糖らしき白い粒の山盛り積まれた飲み物なのか何なのかもわからないカップを差し出す。
「あっ、ありがとぉ～っ」
『えええぇぇぇぇぇぇぇっっ！！？』
ゴクゴクとそれを飲んでいく太狼に、モンキとユキジがまたしても引き気味の大声を出す。
「んん～っ、あまぁ～いっ！やっぱ朝は甘さダルダルココアに限るねぇ～っ」
「舌、おかしいんとちゃうかぁ～？」
「いやっ、おかしいのは頭でしょっ……」
甘さダルダルココアを飲み干し、満足げな笑顔を見せる太狼に、呆れた表情を見せるモンキとユキジ。
「タロー様は未だかつてないほどの甘党ですからっ！」
そんな呆れている２人へと声をかけるのは、ココアを運んできたグレーテル。
「このエセお菓子の家も、甘党なタロー様のご趣味で造られたものなんですわっ！」

「さすがの悪趣味っぷりだね……」
「俺ぇ、とりあえずバナナ食いたいわぁ～」
「バナナですねぇっ！」
「うげっ」
キッチンの方から聞こえてくる声に、モンキがすぐさま表情を引きつる。
「あぁ～んして差し上げますわぁ～っ！！ダーリィィィーンっっ！！」
「のぉおおっっ！！！！さんきゅうぅぅうっっ！！！」
バナナの房を両手いっぱいに持って駆け込んでくるヘンゼルから、モンキが死に物狂いで逃げる。
「いっやぁ～ヘンゼルにいいお婿さんが出来て良かったよねぇ～ホントっ」
「ええっ！私も一安心ですわっ！タロー様っ」
「何かサルが可哀想になってきた……」
爽やかな笑顔で2人を祝福している太狼とグレーテルに、ユキジが思わず呟く。
「あれっ？そういえば桜時はぁ？」
「だぁぁぁぁ～っ……」
「……っ？桜時っ？」
ユキジが振り返ると、そこには朝からかなり疲れきった表情のハチの姿があった。毛並みも乱れ、白い体の所々が黒く汚れている。
「どうしたのぉ？」
「いやっ……ちょっとようっ……」
「あっれぇ～っ？お風呂掃除は終わったのかぁ～い？」
「へっ？お風呂掃除ぃ？」
そんなハチに笑顔で声をかける太狼。太狼の言葉にユキジが首をかしげる。
「おうよっ！見てきてみやがれっ！ピッカピカのツンツルテンにしといたからよぉっ！」

「あっそぉ。じゃあ次はぁっ」
「リアクション薄いってんだよっ！！朝から人のっ……ってかイヌのコト叩き起こしやがってっ！！」
「あっ、お買い物にしようっ」
「聞けっっ！！」
マイペースに話を進める太狼に、ハチが怒鳴りまくる。
「買い出し、けっこうあったよねぇ～グレーテルぅ～」
「はいっ！タロー様っ！」
グレーテルが笑顔で頷き、買い出しリストを書いた紙を太狼に手渡す。
「じゃっ、これっ、昼ご飯の準備までに買ってきといてぇ～」
「こんなのっ、メイドに行かせりゃいいだろうがっっ！！」
「メイドたちだって忙しいんだよぉ」
不満げに怒鳴るハチに、太狼が少し困った顔で答える。
「門貴さまぁぁぁぁぁっ！！！！」
「ぎゃあああああっっっ！！！！！」
「どう見たって暇だろうがっっ！！！あれっっ！！！」
「あれはあれでヘンゼルには必要な時間なのさっ」
家中を走り回り、モンキを追いかけているヘンゼルを指差し、指摘するハチ。しかし太狼は爽やかな笑顔でハチの発言を退ける。
「それともなぁにぃ？僕にかすり傷１つ付けられなかったクセに、タダで世話になろうってのぉ？」
「うっ……！」
太狼の爽やかかつ冷たい笑顔に、ハチが思わず言葉を詰まらせる。
「行ってきます……」
「はぁ～いっ、イイ子、イイ子ぉ～っ」
「お気の毒っ」
仕方なく頷くハチに、ユキジが軽い声をかける。自己紹介決闘で太狼と戦ったハチは、太狼にまったく歯が立たず、それを理由に１匹、ハードな手伝いをさせられているのであった。

「おおぉぉ〜〜いっっ!!桃ちゃん、いるかぁぁぁ〜〜っっ??」
「……っ。この声っ……」
「この声は金ちゃんだね。グレーテルっ」
「はいっ！」
太狼に促され、グレーテルがキッチンから玄関の方へと出て行く。
「おおぉぉぉ〜〜っっ!!!桃ちゃんっっ!!ひっさしぶりだなぁぁぁ〜っっ!!」
「クマっ」
「やぁ金ちゃん、久しぶりぃ〜っ」
グレーテルに案内され、ダイニングへと現れたのは、天井に頭が付きそうなほどに大きな黒クマ・金汰であった。ハチたちが驚く中、金汰と太狼は親しげに挨拶を交わす。
「そういやぁライバル同士とか言ってたっけ？」
「うん。確か桃タローと金タロー」
「んんっ？何だぁ〜、おっ前らもいただかぁ〜っ」
小さな声で言葉を交わすハチとユキジに気づき、金汰が言う。
「じゃあかっぐやさんも帰って来てるんだかぁ〜っ？オトポリで倒れたって聞いてきたんだがぁ」
「うん。帰って来てるよぉ。眠り始めて今日で丸3日かなぁ〜？」
「……っ」
金汰に答えている太狼の言葉に、少し表情をしかめて2階へと続く階段の方を見るハチ。ハチたちが太狼と出会ったあの日、太狼に促されるように眠りについた輝矢は、それから3日経った今も目覚めることはなかった。それほどに疲れが溜まっていたのであろう。
「そうかぁ〜じゃあこれぇ、かっぐやさんが目ぇ覚めたら食わせてやってくんろぉ〜」
『……っ？』
そう言いながら、持ってきた大きな箱の中をあさる金汰。皆が興味を持った様子でそれを見つめる。
「じゃああ〜んっ！おいらが今朝、川で生け捕ってきたばっかしの

ピッチピチの巨大サケだぁぁ～～っ！！」
「おおっ！」
巨大な金汰の手にも余るほどの巨大なピチピチのサケに、ハチが目を輝かせる。
「じゃあ寝てる輝矢に代わって俺がっ……！」
「ダメっ」
「へっ？」
すぐさま否定する太狼に、ハチが少し表情をしかめて振り返る。
「サケは甘くないから嫌いっ！」
「どこのガキだよっ……？アンタっ……」
ツーンと口を尖らせて言い放つ太狼に、ハチが呆れた表情で突っ込みを入れる。
「そうだかぁ……じゃあ仕方ないから持って帰るだよぉ……」
「何、素直に言うこと聞いちゃってんだよっ！！アンタもっ！！」
元気なく肩を落として、大人しくサケを持って帰ろうとする金汰にも、ハチが大声で突っ込みを入れる。
「まぁ輝矢ちゃんはサケ好きだからもらっとこうかぁ～グレーテルっ」
「はぁいっ！有り難くいただきますわぁっ！」
「あっ？そうだかぁっ？」
グレーテルにサケを手渡し、金汰が嬉しそうな笑顔を見せる。
「なっなぁっ！俺っ、輝矢が食う前にサケの試食っ……！」
「僕にかすり傷1つでも付けられるようになったら食べさせてあげるよっ」
「ううっ……」
「……っ？」
何とかサケに有り付こうとするハチであったが、またもや太狼の笑顔攻撃を喰らい、落ち込んだようにテーブルに顔を埋める。そんなハチを見て、少し眉をひそめる金汰。
「それよりこんなトコにいていいわけぇ～？オトポリの総長さんが

っ」
「んんっ？」
急なユキジの問いかけに、金汰が目を丸くする。
「それとも何かわかったのぉ～？」
「ああぁ～、会議は無事終わったけんどぉ、鬼人化した人間についてまだ詳しいことは何にもわがってねぇっ」
「そうっ……」
金汰の答えに、ユキジが少し肩を落とす。
「今ぁ、警官総出で鬼人化した人間の発生地域を絞ってるトコだぁ～っ」
「んな一大事に、アンタがこんなトコいていいのかよっ？」
今度はハチが金汰へと問いかける。
「おいらぁ、難しいことはようわからねぇ～しぃっ、ここは任せっきりだぁぁっ！ガッハッハっっ！！」
「大丈夫かっ……？オトポリっ……」
「なんであの人が総長なんだろう……？」
明るく笑い飛ばす金汰に、ハチとユキジが呆れた表情で呟いた。
「まぁっ！何かわかったら、真っ先に教えに来てやっから心配すんなぁ～っ！ガッハッハっっ！！」
「はぁっ……」
「……っ？」
頼もしいのか頼もしくないのかわからない金汰に、深々と溜め息をつきながらハチがダイニングの椅子から立ち上がる。
「どっか行くのぉ？桜時っ」
「買い出し行ってくる……」
ユキジの問いかけに短く答えて、ハチがベランダから外へと出て行く。
「随分、素直に行ったなぁ～」
出て行くハチの背中を見つめながら、少し表情をしかめるユキジ。
「何かあっただかぁ～？ハチ公っ、元気なかったみたいだけんどぉ」

「出会ったばかりの憧れのヒーロー“桃タロー”さんに、いびられて凹んでるんだよっ」
「いっやぁ～照れるなぁっ」
「皮肉で言ったのっ！」
「いびられてるぅ？」
照れる太狼にユキジが怒ったように言う中、大きく首を捻る金汰。
「桃ちゃん、ハチ公いびってるだかぁ～っ？」
「別にいびっちゃいないよぉ。ちょ～っと虐待してるだけでぇっ」
「余計、悪いわっっ！！」
太狼の答えに、再び怒鳴るユキジ。
「ほどほどにしといてやれよぉ？アイツはぁイヌのわりにナイーブなトコ、あっからなぁ～っ」
「まぁそりゃあクマよりはね……」
「……。」
ハチを庇うように少し優しい笑みを浮かべながら言う金汰に、突っ込みを入れるユキジ。２人の会話を聞きながら、太狼が目つきを鋭くする。
「ナイーブなままじゃ困るから、いびってるんだよっ……」
『へっ？』
意味深な太狼の言葉に、ユキジと金汰は首をかしげた。

龍国の街。東側・海寄り。
「ふっはぁぁぁぁぁ～～～っ……」

――――ぐぅぅぎゅるるるぅぅぅ～～～～っっ！！――――

鳴き叫ぶ腹の虫に、買い出しに出かけたハチが弱々しい声を出しながら、龍国の街を歩いて行く。人通りの多い道ではあるが、誰１人ハチを物珍しそうに見ない。多くの獣人や人間が入り混じる龍国では、イヌなど珍しいものではないようである。

「腹減った……」

今日も早朝から叩き起こされ、風呂掃除をさせられていたため、まだ朝食も取っていないハチを空腹が襲う。輝矢が眠りについてから早３日。輝矢が目覚めるまで行く当てもなく、桃原家に世話になっているハチたちであったが、ハチだけ、妙にキツい扱いを受けているのである。

「俺……何か……嫌われることしたかなぁ……」

「あっれぇっ？ハチ公じゃねぇーかっ！」

「……？」

落ち込むように呟いていたハチが、自分の名を呼ぶ声に顔を上げた。

「ゴンっ」

「奇遇だなぁ～っ」

人通り激しい道でハチの向かいから歩いてくるのは、珍しくオトポリの制服姿ではない普段着姿のゴンであった。ゴンは笑顔を見せ、ハチに軽く手を上げる。

「そろそろ竹取、起きたかぁ～っ？」

「いやっ、まだだけどっ……」

「そっかぁ。まだ寝てんのかぁ」

ハチのすぐ前へとやって来たゴンが、少し考え込むように呟く。

「それよりお前、いいのか？」

「ああっ？」
「今、オトポリ全警官総出で、鬼人化した人間の発生地域絞ってるって聞いたけどっ」
「ああっ！」
ハチの問いかけに、ポンと手を叩くゴン。
「俺ぁ、難しいことはわっかんねぇーから、他のヤツらに押し付けてきたっ！」
「大丈夫かっ……？オトポリっ……」
金汰と同じようなことを言って笑うゴンに、ハチがまたしても呆れた表情を見せる。
「てめぇーこそ、んなトコに1匹で何やってんだよっ？」
「えっ？それはっ……そのっ……」

――――ぐるるぎゅるるるるぅぅ～～～～っっっ！！！――――

「うっ……」

ハチがゴンの問いかけに言葉を詰まらせていた時、再びハチの腹の虫が勢いよく鳴く。その鳴き声を聞き、腹を押さえて俯くハチ。

「あっ？何だっ？腹減ってんのかっ？てめぇーっ」
「まっまぁなっ……」
ハチが弱々しく答える。
「じゃあウチ来るかぁ？」
「へっ？」
ゴンの言葉に、ハチが少し間の抜けた表情で顔を上げる。
「飯くらいは出すぜっ？」
「……けど俺っ……きつねうどんはちょっとっ……」
「誰も共食いはしてねぇーよっっっ！！！！」

第１５章　ハチともぐら　☆１（後書き）

「桃ちゃんの砂糖ドッププリラーメン☆」

※よいこはマネしないで下さい。（自分自身のために）

第15章　ハチともぐら　☆2

龍国・中心街の北はずれ。森に程近い住宅街のはずれに、一軒の小さな家があった。ゴンの家である。

「だっはぁぁ～～っっ！！！食ったぁぁぁ～～っっ！！！」

その家のたった1つの部屋・小さな和室の中央に置かれた、小さなテーブルの前へと座り、満足げに声をあげるのはハチ。テーブルの上にはたくさんの空になった皿が置かれている。

「お前、見かけによらず料理できんだなぁ～っ。エプロンは似合ってねぇーけどっ」

「うっせぇーよっ」

ハチの正面に座り、ハチの言葉に怒鳴るように答えるのは、確かにエプロン姿のとても似合っていないゴン。

「まっ、1人が長げぇーからなぁ。料理できねぇーと餓死しちまうっつーかよっ」

「……っ」

ゴンの言葉に、少し眉をひそめるハチ。確かにこの家はゴン1人で、他に誰も住んでいる気配はない。

「お前、家族はっ？」

「んっ？いねぇっ」

「……亡くなって……？」

「いやっ……」

遠慮がちに問いかけたハチの言葉に、ゴンが少し目線を落とす。

「初めっからいねぇっ……」

「……っ」

どこか寂しげに答えたゴンに、ハチは少し目を細めた。

「そっそうか……」

「……。」

ゴンが顔を上げ、申し訳なさそうに俯くハチを見る。

「しっかしなぁっ」
「……っ？」
「風呂掃除に買い出しとはねぇっ」
ゴンがエプロンをはずしながら、無理やり話題を変えるように切り出す。
「そりゃ、けっこうな扱き使われようだなぁ」
「まぁなぁっ……」
少し笑って言うゴンの言葉に、ハチがテーブルにちょこんとアゴを乗せ、落ち込んだように言う。
「まっ、相手はあの伝説の英雄“桃タロー”だしっ、かすり傷付けらんなくて当然だっ。そう気にすんなっ」
「うん～っ……」
「……っ」
ハチの元気のないカケラもない返事に、ゴンが少し肩を落とす。
「気にしてんのはっ……桃タローに負けたことじゃねぇみてぇーだなっ」
「えっ……？」
ゴンの言葉に、少し驚いたように顔を上げるハチ。そんなハチを見て、ゴンがそっと笑みをこぼす。
「……っ」
ゴンの笑みに、再び俯いていくハチ。
――――一般にはね、そうゆうのをタダの“お荷物”って言うんだよっ……――――
頭から離れない、太狼の言葉。
「前から気にはしてたんだっ……。俺が弱いせいで、アイツの負担になっちまってるってことっ……」
ハチに危険が迫った時、輝矢は必ず助けに来てくれた。だが輝矢

が命懸けの戦いを繰り広げている時、ハチはただ見ていることしかできなかった。

「この前のオーロラん時だって……」

――――覚悟がないなら下がってろっっ!!邪魔だっっ!!!!――――

「俺はお前に、辛い戦い全部押し付けただけだったっ……」

「……っ」

ハチの言葉に、ゴンが少し表情をしかめる。

「門貴や由雉と比べたって……俺はっ……」

「はいっ!ごちそうさまぁっ!」

「へっ?」

ハチの話の途中で、いきなりそう叫んでテーブルの上の食器を片付け始めるゴン。そんなゴンにハチが目を丸くする。

「さてとっ、とっとと片付けちまうかぁ～っ!」

「ちょっ……!おっ……!おいっ!」

重ねた食器を持って立ち上がるゴンに、ハチが少し焦ったように手を伸ばす。

「ああっ?何だよっ?おかわりかぁっ?」

「違げぇーよっっ!!ってか、人が真剣に相談してんだからっ、ちゃんと最後までっ……!」

「そんなもんはっ……相談て言わねぇーんだよっ」

「……っ」

いつも以上に目つきを悪くしたゴンの鋭い言葉に、ハチが思わず言葉を止める。

「俺は負け犬の弱音、聞くほど暇じゃねぇーっ」
「仕事押し付けて、街プラついてたクセに……？」
「それはそれっ！これはこれだっ！」
疑いの目を向けるハチに、ゴンが開き直ったように言い返す。
「だいたいもうタローさんに啖呵切ってきたんだろうがっ！」
「えっ……？うっ……うんっ……」

――――このままで終わる気はねぇっ……！――――

「けどっ……あれは何つーかっ、こう戦いの勢いっつーかぁっ」
「男に二言はねぇっ！！言ったからにはドーンとやってみせやがれっ！！」
「何かスパルタコーチみたいになってきやがったなっ……」
熱く語るゴンに、ハチが戸惑いつつも呆れた表情を見せる。
「心配すんなっ……」
「……っ？」
急に笑みを浮かべ、落ち着いた口調で話しだすゴンに、ハチが少し眉をひそめる。
「お前ならきっとやれっ……」

――――バッコォォォォォォォーーーーンッッッ！！！！――――

「へっ……？」
突如、天井へと飛び出すテーブルに、ゴンが目を丸くする。
「グラァァァァッッッ！！！」
『だあああああっ！！』
テーブルの下の床を突き破るようにして、地面の奥深くから飛び

出してきたとあるものに、ハチとゴンが勢いよく叫び声をあげる。

「ふぅ～っ、やっと出たぁ～っ」

『……。』

床にあいた大きな穴から現れたのは、茶色い毛に覆われた、人間の赤ん坊くらいの大きさの1匹のモグラであった。人の言葉を話しているあたりからして獣人であろうが、モグラを見たハチとゴンは唖然として固まる。

「もっ……もぐらっ……？」

「んっ？」

唖然として呟いたハチの声に気づき、家の上へと這い上がってきたモグラが振り返る。まっすぐに見つめ合うハチとモグラ。

「何だっ、イヌかっ。イヌに興味ないやっ」

「カッチーンっ！」

モグラの言葉に、ハチが少し表情をしかめる。

「それより龍いないの？龍っ」

「ああっ！？おっ前なぁっ……！」

「てめぇーっっ！！！クソモグラぁぁぁっっ！！」

「うおっ」

勝手に話を進めるモグラにハチが怒鳴ろうとしたのだが、横から勢いよく怒鳴り上げてくるゴンに、少し驚く。

「俺がちょ～どイイこと言ってハチ公泣かそうとしてた時に邪魔しやがってっ！！しかも人ん家に大穴！！」

「大穴のんが後なのかよ……」

ゴンの怒鳴りポイントに、ハチがこっそり突っ込みを入れる。

「ああぁ～っ！あのセリフ聞いたら、ハチ公絶対泣いたのによぉっ……！！」

「泣かなかったと思うぞ……？“お前ならきっとやれる”だろっ？」

「なっ……！何でわかったんだっ！！？」

ゴンがとても驚いた様子でハチの方を見る。

「いやっ……けっこう有りがちな上に、あそこまで言ってりゃ大体はっ……」
「大して泣けないねっ」
「うっせぇーっっ！！クソモグラぁぁっっ！！！土に埋めるぞぉっっ！！」
「別に埋めてもらっても死なないけどね」
怒鳴り散らすゴンに、冷静な答えを返していくモグラ。
「むきぃぃぃ～～っっっ！！！ぶっ殺すっっ！！！」
「まっまぁっ！抑えろよっ、ゴンっ！まだ、子供みてぇーだしっ」
モグラに飛びかかっていきそうな勢いのゴンを、ハチが必死に宥める。
「それよりアンタも獣人？何の獣人なの？」
「んっ？」
ゴンの怒りなどは無視してゴンに問いかけるモグラ。ゴンが少し目を丸くする。
「ハッハッハっ！よく聞いたっ！俺はなぁっ、聞いて驚くなよっ？」
――――ボォォォォォォォ～～ンッッッ！！！！――――
わりとノリ気で獣化するゴン。
「なぁ～んとっ……“狐人”だぁぁぁっっ！！！」
キツネになったゴンが、やる気満々でポーズを決める。
「何だ、キツネかっ。がっかりっ」
「むっきゃあああああっっっ！！！！！噛み殺すっっっ！！！！！」
「抑えろっっ！！！ゴォォーンっっ！！！早まるなぁぁぁぁぁっっ！！！！」

深々と肩を落としたモグラに飛びかかろうとするゴンを、ハチが必死に止める。
「それより龍いないのっ？龍っ。ここ、龍国でしょっ？」
『……っ』
ゴンの家の中を見回して龍を探すモグラに、ハチとゴンが動きを止めて眉をひそめる。
「何だよっ？お前っ、さっきから“龍、龍”って、龍に何か用なのかっ？」
「えっ？ああっ」
――――ボォォォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！！――――
『……っ？』
モグラがハチの問いかけに少し笑みをこぼして頷くと、突然、白い煙の中へと包まれていく。白い煙を、少し首をかしげながら見つめるハチとゴン。
「オレはモグラの獣人・グラタンっ」
白い煙の中から姿を現したのは、茶色いツンツン髪に大きな黒目の、まだ９，１０歳くらいの少年であった。
「龍になるのが夢なんだっ！」
『へっ……？』
少年が笑顔で口にした夢に、ハチとゴンは勢いよく表情をしかめた。

数十分後。オトポリ本部・正門前。
「はぁぁ〜〜んっ。それで龍に会うために、わざわざ北の森からねぇっ」
「そっ」
感心するように言ったハチに、短く頷くグラタン。
「もぉー大変だったよっ。父さんと母さんに気づかれないように、龍国までの穴を掘ってさっ」
「それで掘りまくってたらゴン家に繋がっちまったと」
「うんっ」
「はぁっ……」
無邪気に頷くグラタンを見て、ハチが少し疲れたように肩を落とす。
「まぁ仕方ないよっ。これも全部、オレが龍になるためだからねっ」
「いやっ、ってかさぁ、いっくらモグラが“土竜”って書くからってよぉ、龍になるってのはちょっとっ……」
「待たせたな……」
『……っ？』
正門が開き、中からゴンの声がする。
「おうっ、ゴンっ、どうだっ……って、だあああああっっっ！！！！」
「う……ううっ……」
振り向いたハチが、思わず叫び声をあげる。正門から出てきたゴンは相当殴られたのか、ゴンなのかもわからないほどに顔中を腫らしていた。

「ダっ……ダメだったみたいだな……」
「ああ……リンゴに“ちょっとモグラに会ってやってくんない？”って言ったんだけどよぉ……」
ゴンが低いテンションで話し始める。
「“仕事もしないで、このクソ忙しい時に何言ってんだっ！いっぺん死んできやがれっ！”って……」
「……。」
その光景が目に浮かび、ハチまで少し震え上がる。
「ええ～っ？じゃあ龍はぁっ？」
「えっ？あっ、ああ～困ったなぁ。リンゴ以外に龍人なんてっ……」
「よしっ。いっちょ青守長官に声かけてくっかっ」
「それはさすがにやめとけっ」
再びオトポリ本部内に入って行こうとしたゴンを、ハチがすかさず止める。龍人一族はこの龍国の国主にしてオトポリのトップ。今はそう、暇な龍人がいるはずもない。
『ん～っ、困ったなぁっ』
「あれっ……？桜時さん……？」
「へっ？」
自分の名を呼ぶ声に、ゴンとともに考え込んでいたハチが顔を上げる。
「ゴンさんも……どうしたんですか……？こんなところで……」
「イチゴっ」
ハチたちの前に現れたのは、他の警官数名とともに街から戻ってきたらしきイチゴであった。イチゴがハチとゴンに不思議そうな表情を向ける。
『イチゴっ……？ああっっ！！！』
一旦、首をかしげたハチとゴンが、目を合わせて勢いよく声をあげる。

『いたぁぁぁっっ！！リンゴ以外の龍人っっっ！！！！』
「えっ……？」
２人の大声に、イチゴが少し困ったような表情を見せる。
「えっ！？この人っ、龍人なのっ！？」
「ああっ！良かったなぁ～っ！グラタンっ！」
やっと出会えた龍人にテンションを上げるグラタン。そんなグラタンにハチが笑顔を向ける。
「あっあのっ……一体、何の話でっ……」
「おうっ！イチゴぉ～っ！今からちょ～っと付き合ってくんねぇーかぁっ？」
「えっ？あっ、でも今、仕事中でっ……」
「んなもん、いいからよぉ～っっ！！！」
「無茶言わないで下さいよ……ゴンさんじゃないんですから……」
「うっ……」
イチゴのトゲある言葉に、ゴンが声を詰まらせる。
「頼むよ、イチゴっ！ちょっとだけでいいからさっ！」
「えっ……？」
真剣な表情で頼み込むハチに、イチゴが少し頬を赤らめる。
「あっ……おっ……桜時さんがそう仰るならっ……」
少し照れながらイチゴが笑みをこぼす。
「やったぞっっ！！！グラタンっっ！！！」
「うんっっっ！！！！」
「ってか、ハチ公の頼みは聞けて、俺の頼みは聞けねぇーのかよっ……」
喜ぶハチとグラタンを他所に、ゴンが１人、不満げな声を漏らした。

第１５章　ハチともぐら　☆３

１０分後。ゴンの家前。
「へぇ～、じゃあハチ公とお前ら姉妹は面識ありだったのかぁっ」
「はい……でも桜時さん……“あんなこと”があったせいで覚えてらっしゃらないみたいで……」
「そうかぁ。まぁしゃーねぇーなぁ。“あんなこと”があったんじゃっ」
「だから何々だよっ？あんなことって」
ゴンとイチゴの会話に、ハチがリンゴ・イチゴ姉妹と出会った時から何回もしている疑問をまた口にする。
「それより早く龍になってよっ」
「あっ……はいっ、わかりました……」
「偉そうに言うなっ！！クソモグラっ！！コッチが無理言って頼んだんだからなっ！」
「全員で無視したな……」
ハチの問いかけを完全に無視して話を進めるゴン、イチゴ、グラタンに、少しイジけるように呟くハチ。
「じゃあ行きますよ……？」
イチゴが広い場所に立ち、左右を見回してから両手を広げる。
――――ボォォォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！！！――――
「……っ」
イチゴの体が白い煙に包まれる。その様子を息を呑んで見つめるグラタン。

「あっ……！」

晴れていく煙に、グラタンが目を見開く。

「龍っ……」

グラタンの４倍は丈のありそうな巨大な青き龍へと姿を変えるイチゴ。その力強く、神秘的な姿に、グラタンは思わず“龍”と呟いた。

「すっ……凄いっ……！！」

『……っ』

興奮に拳を握り締め、先ほどまでの生意気さは一切ない輝いた瞳を見せるグラタンに、ハチとゴンも思わず嬉しそうに笑みをこぼした。

「さぁっ、ではっ」

『……っ？』

――――バサァァァァァァァァッッッ！！！！――――

『うわっ！』

少し笑みをこぼして勢いよく背中の翼を広げるイチゴ。イチゴが翼を広げただけで強い風が巻き起こり、ハチたちが思わず身を伏せた。

「空中散歩と行きましょうかっ」

「ええっ！？乗せてくれるのぉっ！？」

イチゴの言葉に、グラタンがさらに目を輝かせる。

「やったぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！」
「ああっ！！おいっ！！」
ゴンが止めるのも聞かず、グラタンが足早にイチゴの背へと乗り上げる。
「ったくっ！おいっ、クソモグラぁぁっ！てめぇーっ、少しは遠慮ってものをっ……！」
「いいですよ、ゴンさん。こんな機会もうないでしょうし、折角ですからっ……」
「そうかぁ？」
笑顔を見せるイチゴに、ゴンが少し申し訳なさそうに肩を落とす。
「まぁそう言うことなら遠慮なくっ。おっしっ！俺らも乗せてもらおうぜぇっ！ハチ公っ！」
「そろぉ〜……そろぉ〜……」
「って、ハチ公っ？」
「うっ……！」
静かにこっそりとその場から歩き去ろうとしていたハチが、ゴンに見つかり、立ち止まって背筋を立たせる。
「何やってんだよっ？てめぇーっ」
「いっ……いやっ！俺っ、高いトコはちょ〜っぴし苦手でっ……！」
「何言ってんだっ！とっとと行くぞぉっ！」
「あっぎゃあああああああっ！！！」
嫌がるハチを、ゴンは無理やりイチゴの背へと放り込んだ。

「ふっはぁぁぁぁぁぁ〜〜っっ！！！」
雲に程近い上空を飛ぶ青き龍の背の上で、爪ほどにしか見えない

建物の並ぶ龍国全体を見下ろし、感嘆の声を漏らすグラタン。吹き付ける風を両手を広げて受け止める。
「最っコォォォォォォーーーっっ！！！」
「フフっ……そう言ってもらえると嬉しいですっ……」
喜ぶグラタンに、グラタンを乗せているイチゴが笑みをこぼした。
「ぶるぶるぶるぶるっ……！」
『……っ』
しかし、聞こえてくる謎の震え声に、イチゴとグラタンの表情が曇る。
「ちょっとっ！最高気分、台無しなんだけどっ」
「そっ……！そんなこと言われてもよぉっ……！」
表情をしかめたグラタンの視線の先には、小さく身を丸め、全身を小刻みに震わせているハチの姿があった。
「俺はっ……！うっ……！」
顔を上げたハチの視界に、遥かに遠い地上の景色が入ってくる。
「ひえぇぇぇぇっっっ！！！ぶるぶるぶるぶるっ……！！」
「はぁっ……」
再び身を丸めて震え上がるハチに、グラタンが深々と溜め息をつく。
「ごっごめんなさいっ……桜時さんっ……もう少し高度、落としましょうか……？」
「ええっ！？ダメダメっ！！こんなイヌ、最悪死んでもいいから、このままっ！！このままっ！！」
「お前なっ……」
酷い言い草のグラタンに、ハチが震えながらも鋭い目を見せる。
「しっかしハチ公、てめぇー良かったなぁ～スズメに生まれないでぇっ」
そんなハチに暢気に声をかけるゴン。
「スズメのクセに高所恐怖症なんて赤っ恥もいいトコだぜぇ！まぁイヌでも赤っ恥かぁっ！ハッハッハっ！」

「ニャロウっ……」
高々と笑い上げるゴンに、ハチが強く拳を握り締めた。
「でっ、どうだぁ？クソモグラっ。これで気は済んだかっ？」
「うんっ」
「そうかぁっ」
「益々、龍になりたくなったっ！」
「だあああああああああっ！！」
グラタンの言葉に、ゴンが狭い背中の上で勢いよくズッコケる。
「おっ前なぁっ……」
起き上がったゴンが、少し困った顔で頭を押さえる。
「グラタン君っ……種族は獣人が生まれ持つものです……誰であってもそれを変えることはできませんっ……」
「……っ」
グラタンを説得するようなイチゴの言葉に、身を丸めていたハチが少しハッとした表情を見せる。
「生まれ……持つ……ものっ……」
――――あっらぁっ？なぁ～んでこんな所にイヌがいるのかしらぁぁぁ～っ？――――
それは、ハチが生まれてからずっと戦ってきたもの。
「……。」
ハチが少し目を落とす。
「そうだぞぉっ？今は子供だからイイかも知れねぇーけど、そろそ

ろわかるようになんねぇーとっ……！」
「別に子供だからわかってないわけでもないし、わかってるのにわからない振りをしてるわけでもないよ」
「へっ？」
『……っ？』

妙に大人びた表情で言い放ったグラタンに、ゴンが目を丸くし、ハチとイチゴがそっと眉をひそめた。

「オレがモグラで、龍にはなれないこと、ちゃんと理解してる……」
「だったらっ……！」
「でもっ、だからって“なれない”って決め付けて何もしなかったら、本当に何もかも終わっちゃうでしょ？」
「……っ」

グラタンの真剣な瞳に、ゴンが思わず言葉を詰まらせる。

「自分で終わらせるのって好きじゃないんだっ。最初っから諦めるのもっ」

どこまでも広がる壮大な景色を見つめながら、グラタンが誇らしく笑う。

「どうせ見た夢ならっ、少しでも信じて何かしたいっ！」
「……っ！」

グラタンの曇りのない笑みに、ハチが大きく目を見開き、口を押

さえる。

「ううぅぅ〜〜〜っっ……おおぉぉぉぉ〜〜〜っっ……」

「あっ？」

すぐ傍から聞こえてくる唸っているような怪しげな声に、ハチが眉をひそめて振り返る。

「ゴンっ……？」

「おおぉぉぉぉぉぉ〜〜〜っっ……！」

そこには苦しむように身を伏せ、怪しげな声を漏らしているゴンの姿があった。

「もしかしてお前っ……泣いてんのかっ？」

「なっ……！泣いてなんかねぇーよっっ！！こんちくしょおおおおぉぉぉぉっっっ！！！！」

「ボロ泣きじゃねぇーかっ」

目つきの悪い瞳から、似合いもしない涙を滝のように流しているゴンに、ハチが呆れきった表情を見せる。

「ゴンさんは意外と涙もろいですからね……」

「バカじゃないのっ？」

「くぅぅぅぅ〜〜〜っっ！！泣かすクソモグラだぜぇっ！！」

苦笑いを見せるイチゴと、呆れたように肩を落とすグラタン。ゴンは袖で顔を覆って泣き続ける。

「あれっ……？」

『……っ？』

何かを見つけたようなイチゴの声に、ハチとグラタンが振り返る。

「どうしたっ？イチゴっ」
「あれっ……何でしょうか……？」
「……っ？」
イチゴが首を向けた方向を見つめるハチ。
「煙っ……？」
その方向に見える大きな森の一部から、灰色の煙が立ち昇っていた。その煙にハチが眉をひそめる。
「何か……あったんでしょうか……？」
「あれっ……」
『……っ？』
小さな声を漏らしたグラタンに、ハチとイチゴが視線を送る。
「あれっ……オレの村のある辺りだ……」
『……っ！』
茫然と呟くグラタンに、ハチとイチゴ、そして泣いていたゴンが一斉に険しい表情となる。
「何かあったのかも知れねぇーっ！急げっ！！イチゴっ！！」
「はっはいっ……！！」
ゴンの指示に、イチゴはスピードを速めた。

その頃、桃原家。
「おっそいなぁ～っ……桜時っ……」
もう12時を過ぎた時計を見ながら、ユキジが呟く。
「買い出しに出てそれっきりだよぉ～っ？」
「ついでに散歩でもしてきとんちゃう～？ほらっ、アイツ、イヌやしっ」
少し心配したように問いかけるユキジに、モンキが適当に答える。
「買い出し放っぽり出して散歩なんてとんでもないねぇ～っ。バツとして草むしりでもさせよっかなぁっ」
「……ただ単に帰って来たくないだけかもなっ……」
ハチに何をやらせようかと楽しそうに考える太狼を見て、少し引きつった表情を見せるモンキ。
「何か……あったのかなぁ……？」
時計を見つめ、ユキジが浮かない表情で呟いた。

龍国より少し北にある大きな森の中心部。モグラの獣人たちの村・“モッグランド”。
「これはっ……」
モッグランドのすぐ上空へと飛んで来た、青き龍・イチゴ。イチゴの背に乗っているゴンが、村を見下ろし、険しい表情を見せて呟

く。

「ひでぇっ……」

村の多くの家が無残にも破壊され、所々から火の手があがっていた。道には村人らしきモグラや人間たちが傷つき倒れ込んでいる。その悲惨な光景に、唇を噛むゴン。

「とっ父さんっ……！母さんはっ……！？」

イチゴの背の上から無残に破壊された故郷を見下ろし、必死に両親の姿を探すグラタン。

「ううっ……！！」

「ああっ？」

怯えたようなグラタンの声に、ゴンが振り向く。

「……っ」

「グガアアアッッッ！！！」

「黄鬼っ……」

村の中心で、空に向かい大きな雄たけびをあげているのは、濁った黄色の皮膚に、２本の金色の角を持った禍々しく巨大な鬼であった。

「ガアアアアアッッッ！！！！」

「うわあああああっっ！！」

「きゃあああああああっっ！！」

大きく爪を振るう黄鬼から、必死に逃げ惑う村のモグラや人間たち。

「アイツの仕業かっ……！おしっ！行くぞっ！ハチ公っ！！」
「おえええぇぇぇぇぇぇぇ～～～っっっっ」
「だあああああああっっ！！」
ゴンが振り返ると、ハチが吐き気を催した様子で苦しげに口を押さえ込んでいた。そんなハチにゴンが勢いよくズッコケる。
「何、龍酔いしちゃってんだよっっ！！！てめぇーはぁっっ！！！」
「だってめちゃくちゃ飛ばすからよぉっ……」
ゴンの怒鳴りに、ハチが弱々しい声で答える。
「てめぇーなぁっ……！！」

「グガアアアアアッッッ！！！！」

「……っ！」

再び聞こえてくる黄鬼の雄たけびに、ゴンが怒鳴るのをやめて振り向く。

「しゃーねぇっ！！俺がっ……！！」
「いえっ……」
「へっ？」
立ち上がったゴンが下から聞こえてくる声に、顔を下へと向ける。
「イチゴっ？」
「ゴンさんは桜時さんとグラタン君をお願いします……」

「へっ？」
少し低いトーンで聞こえてくるイチゴの声に、ゴンが少し引きつった表情で首をかしげる。
「アイツは私が……」
「私がってお前、まさかっ……」
「ではっ」
――――ポォォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！！！――――
そう言うと、イチゴが身を翻し、背に乗せている3人を放り出して、黄鬼の方へと飛び去っていく。
「だあああああっっっ！！！やっぱりいいっっっ！！」
「うわあああああああああああっっっ！！！！！」
「おえええぇぇぇぇ～～っっっっ」
それぞれに叫びながら、上空から勢いよく落下していくハチ、ゴン、グラタン。
「クソっ……！！」
――――ボォォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！！！――――
「……っ！」
「うわっ！」
「おえぇぇ～っ」
ゴンが落下の最中に狐化し、同じく落ちて行っていたハチとグラタンを背に拾って、身軽に地面へと着地する。

「はぁ～っ」

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――

「何とか助かったなっ」

地面にハチとグラタンを下ろし、ゴンが再び人化する。

「助かったよ、キツネ」

「何でてめぇーはそう、偉そうなんだよっ」

「ああ～っ、気持ち悪っ」

ゴンとグラタンが言葉を交わす横で、胸を擦って体調を整えるハチ。

「んっ？そういやイチゴはっ？」

「そこだっ」

『……っ？』

ゴンの指差す方向を振り向くハチとグラタン。

――――ドォォォォォォォォォーーーーンッッッ！！！！――――

「グガッ？」

村の中心で暴れていた黄鬼の正面に、大きな地響きを立てて着地するイチゴ。突如、現れたイチゴに、黄鬼が顔を上げて眉をひそめる。

「龍っ……？」

「……っ」

――――ボォォォォォォ～～～ンッッッ！！！！――――

黄鬼が怪訝そうな表情で見つめる中、着地したイチゴが人化する。

「龍人かっ……珍しい客だっ」

「……。」

楽しげに笑う黄鬼を、鋭い表情で見つめるイチゴ。

「だっ…大丈夫なのかぁ？」

向き合ったイチゴと黄鬼を、少し離れたところで見つめるハチが不安げに声を漏らす。

「加勢した方がっ……」

「必要ねぇーよ。大人しく見てろっ」

ハチの言葉に、ゴンが間髪入れずにハッキリと答える。

「けっけどよぉっ……！」

「龍人は獣人最強一族だ。あんなヤツ屁でもねぇっ」

「そうそうっ。龍は凄いんだからっ。イヌは黙って見てなよっ」

「お前なっ……」

偉そうな物言いのグラタンに、ハチが表情を引きつる。

第15章　ハチともぐら　☆4

「1つ、問いかけます……」
「ああっ？」
イチゴの言葉に、黄鬼が少し眉をひそめる。
「何故……このようなことを……？」
黄鬼の周囲に破壊された村と傷つき倒れた人々を見ながら、静かに問いかけるイチゴ。
「はぁっ!?理由なんかねぇーよっ!!ただぶっ壊したかったからなだけだっ!!グワァッハッハッハッ！」
「……そうですか……」
高々と笑う黄鬼に、イチゴはそっと目を閉じ、肩を落とした。
「ならば……手加減は必要ありませんね……」
「ああっ？」
「……っ」
再び瞳を開いたイチゴが、ゆっくりと右拳を構える。
「ああっ!?俺を相手に素手で戦おうってかぁっ!?イカれた女だぜっっ!!グワァッハッハッハッ!!」
「いえっ……戦うつもりはありません……」
「何っ？」
黄鬼が眉をひそめる中、イチゴの右拳に青い光が帯びていく。
「消すだけですっ」
「……っ！」
鋭い表情でそう言った途端、イチゴがその場から消える。

「消えたっ！？どっ……どこへっ……！？」

慌てて周囲を見回す黄鬼。

「……っっ！！」

左右を見回していた黄鬼のすぐ目の前へとイチゴが姿を現す。

「いつの間にっ……！！このっ……！！」

現れたイチゴへと勢いよく爪を振り下ろす黄鬼。

「青き拳っ……龍が如く……」

イチゴが先ほどよりもさらに青い光を放っている右拳を、力強く黄鬼の体へと突き出す。

「“青拳突き”っ……！！」

――――バッコォォォォォォォーーーンッッッ！！！！――――――

「……っ！ギャアアアアアッッ！！」

黄鬼の巨大な胴体が繰り出されたイチゴの拳に風穴をあけられ、激しい断末魔とともに一瞬で砂となって崩れ落ちていく。

「……。」

イチゴは静かな表情で風に吹かれる砂を見つめ、ゆっくりと光を収めた拳を下ろした。

「ひっ……一突きっ……」

その光景を一部始終見つめたハチが、茫然とした表情で呟く。

「すっげぇぇぇぇぇっっ！！！」

茫然としているハチの横で、感激したように大声をあげるグラタン。

「さっすが龍人っっ！！カッコイイぃぃ～～っ！！」

「ってか強すぎだろっ……」

「だから言ったろぉ？アイツのパンチとリンゴの蹴りは、喰らった途端に人生終わるぞぉ～」

圧倒されているハチに、ゴンが冷静に言葉をかける。

「ゴンさんっ……！私、怪我人の治療にあたりますから、本部へ応援要請お願いしますっ……！」

「んっ？あっ、おぉーうっ！」

黄鬼を倒したイチゴは、もうすでに近くに倒れている村人の救護に当たっている。イチゴの呼びかけに、手をあげて答えるゴン。

「えぇ～っと、携帯、携帯っ」

ゴンがポケットから携帯を取り出す。

「オレも父さんと母さん、探さないとっ」

「グラタァァァァーンっっ！！！」

「……っ？」

再び両親を探そうと辺りを見回していたグラタンが、自分の名を呼ぶ声に振り向く。

「おじいちゃんっ？……っ！！父さんっっ！！」

グラタンが自分の名を呼んだ白髪の老人が肩を貸している、傷だらけの男を見て、驚いたように声をあげる。

「父さんっっ！！父さんっっ！！大丈夫っっ！！？」

重傷の男の元へ、慌てて駆けていくグラタン。

「グラタンっ……無事っ……だったかっ……」

「父さんっ……！！」

グラタンを見て安心したように笑みをこぼす男に、グラタンが少し目を潤ませる。

「グラタンっ、コイツは何とか大丈夫だったんだが、ドリアさんがもう1匹の鬼人にっ……」

「……っ！母さんがっ！？」

「もう1匹、鬼人がいるのかっ！？」

老人の言葉に、それぞれ衝撃を走らせるグラタンとゴン。

「……っ。母さんっっ……！！」

「あっ……！待てっ！！グラタンっっ！！ううっ……！！」

「おいっ！大丈夫かっ！？」

厳しい表情を見て、その場から飛び出していってしまうグラタン。
そんなグラタンを止めようとしたグラタンの父親が、傷の痛みに苦しげにしゃがみ込み、老人が慌てて父親を支える。

「あんのクソモグラっ……！！」
「俺が追うっ！！ゴンはここを頼むっ！」
「へっ？ちょっ……！待っ……！」

グラタンの後を追おうとしたゴンを止め、代わりに追いかけて走り去っていくハチ。ゴンが制止を促したが、ハチはあっという間に見えなくなった。

「桜時さん……大丈夫でしょうか……？」
「アイツっ……」
「……っ？」

歩み寄ってきたイチゴが、ゴンの言葉に振り向く。

「丸腰じゃなかったか……？」
「えっ……？」

表情を引きつったゴンの言葉に、イチゴもまた表情を引きつった。

モッグランドから少し西の森。

「グッヘッヘッヘっ！！今日はモグラ鍋が食えるぜぇっ！！」
「うっ……ううっ……」
森を歩きながら、高らかな笑い声をあげる桃色の鬼・桃鬼。その桃鬼は脇に傷つき、弱り果てた茶色いモグラを抱えている。苦しそうな声を漏らしているこのモグラ、グラタンの母・ドリアであった。
「何味にすっかなぁっ？グッヘッヘッヘっ！！！」
「待てぇえぇえぇえぇえっっっ！！！！」
「ああっ？」
どこからか聞こえてくる声に、桃鬼が眉をひそめる。
――――バァアアアアアアアアーーーーーンッッッ！！！！――――
「……っ！」
桃鬼の歩いていた先の地面に穴があき、勢いよく小さなモグラが飛び出してくる。
「母さんを返せっっっ！！！！」
「グラタンっ……！！」
飛び出してきたのはモグラ化したグラタンであった。グラタンの姿にドリアが思わず目を見開く。
「ああっ？このモグラのガキかぁっ？」
「痛い目に遭いたくなかったら、とっとと母さんを離せっっ！！バカ鬼人っっ！！」
「んだとぉっ！？」
「ダメよっ！グラタンっ！！逃げなさいっっ！！」
グラタンの挑発に表情を歪める桃鬼。そんなグラタンにドリアは必死に逃げるよう叫ぶ。
「よっぽど死にてぇーらしいなぁっっ！！クソガキっっ！！！」
桃鬼がドリアを抱えていない方の手を勢いよく振り上げる。

「一瞬で終わりにしてやるよぉっっ！！！“鬼爪・天回”っっ！！！」
「グラタンっっ！！！」
グラタンへ向け、５本の爪を飛ばす桃鬼。ドリアが大きく身を乗り出す。
「……っ“モグ奥義・土中隠れ”っっ！！！」
――――ドォォォォォォォォォーーーンッッッ！！！！！――――
「何っ……！」
グラタンが素早く土の中に穴を掘り、その中に身を隠して鬼爪を避ける。少し眉をひそめる桃鬼。
「これなら攻撃出来っこないっ！！行くぞっ！！」
「……っ！」
土に潜ったまま、穴を掘って桃鬼の方へと突っ込んでいくグラタン。
「“モグ奥義っ」
「ダメよっっ！！！グラタンっっ！！！この鬼はっ……！！！」
「土中から意表を突く頭突っ……！！」
「へっ……」
穴を掘り進め、桃鬼の真下で発射態勢を取るグラタンを見て、桃鬼が不敵な笑みを浮かべる。
「“鬼地”っっっ！！！！！」
「何っ……！？」

桃鬼が地面に勢いよく拳を突くと、辺りの地面が裂け、土が盛り上がる。

――――バァァァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――

「うわあああああああっっっ！！！！！」

「グラタンっっ！！！」

桃鬼が起こした土砂崩れに巻き込まれ、吹き飛ばされ、遠く離れた地面へと倒れ込むグラタン。

「うっ……ううっ……」

倒れ込んだグラタンが、起き上がれないまま苦しげな声を漏らす。

「グッヘッヘっ！」

そんなグラタンを見て、満足げな笑みをこぼす桃鬼。

「ガキモグラじゃあ腹の足しにもならねぇーし、とっとと殺してくかなぁっ」

「……っ！」

そう言って倒れているグラタンの方へと歩いて行く桃鬼に、ドリアが顔色を変える。

「待っ……！待ってっっ！！！」

「ああっ？」

グラタンの方へ行こうとしていた桃鬼を必死に止めるドリア。

「私はどうなっても構わないっ！！塩味でもっ！味噌味でもいいらっ！あの子っ！あの子だけはっ……！！！」

「うっせぇーなぁっ……」

ドリアの必死の叫びに、桃鬼が鬱陶しそうに表情をしかめる。

「俺は醤油派なんだよぉぉっっっ！！！！」

「きゃあああああああっっっ！！！！！」

「……っ！母さんっっ！！！」

倒れ込んでいるグラタンの方へと勢いよくドリアを投げる桃鬼。

「ううっ……」

「母さんっっ！！」

地面に体を打ちつけ、力なく倒れ込んだドリアに、グラタンが何とか起き上がって駆け寄る。

「もうモグラ鍋はいいやぁっ。もっと旨いもんくらい転がってんだろっ」

指の関節を鳴らし、冷酷な笑みを浮かべる桃鬼。

「お前ら2匹とも、ここで死ねぇぇっっ！！！」

「ううっ……！」

桃鬼の言葉に、グラタンの表情が恐怖に歪む。

「グっ……グラタンっ……」

「……っ！母さんっ！？」

弱々しくグラタンを呼ぶドリアに、グラタンが不安げな目を向ける。

「あなたはっ……逃げ……なさいっ……」
「そんなことっ……！……っ」

――――自分で終わらせるのって好きじゃないんだっ。最初っから諦めるのもっ――――

思い出される自分自身の言葉。

――――どうせ見た夢ならっ、少しでも信じて何かしたいっ！――――

「……っ！」
「グラタンっ……！？」
「ああっ？」

グラタンが痛みを押して立ち上がり、倒れているドリアを庇うように立ち塞がる。鋭く睨みつけてくるグラタンに、少し眉をひそめる桃鬼。

「オレはっ……」

両手を横に広げ、グラタンが言葉を発する。

「オレはっ……龍にっ……龍になるんだっっ！！！こんな所で、お

前なんかにヤラれてたまるかぁっっ！！」

必死の表情、大声で言い放つグラタン。

「はぁっ？」

しかしそんなグラタンに、桃鬼は少しバカにしたような表情で聞き返す。

「龍にぃっ？くだらねぇーこと言ってんじゃねぇーよっっ！！」

グラタンの夢を笑い飛ばす桃鬼。

「お前は今、ここでっ！しょっぼいモグラのまま、俺様に殺されるんだぁぁぁっっ！！」

「クっ……！」

グラタンへ向けて大口を開く桃鬼。グラタンが少し唇を噛む。

「死ねぇぇぇぇっっっ！！！“鬼口”っっっ！！！！」

――――バァアアアアアアアーーーーンッッッ！！！！――――

桃鬼の口から放たれる、高エネルギー波。

「ううっ……！！」

向かってくる鬼口に、グラタンが思わず目を閉じた。その時。

「“瞬花”っっ！！！」

――――――パァァァァァァァァーーーンッッッ！！！！――――――

「何っ……！！？」

グラタンの目の前で桜の花びらと変わる鬼口に、桃鬼が驚いたように声をあげる。

「……っ？」

やって来ない鬼口に、グラタンが恐る恐る目を開いた。

「なっ……」

桜の花びらの舞う美しい光景に、思わず目を見張るグラタン。

「ようっ！生きてっかぁ？」

「えっ……？」

聞こえてくる声に振り返るグラタン。

「あっ……！」

グラタンとドリアのすぐ後方に立ち、グラタンに笑顔を向けているのは、グラタンを追ってやって来た桜時であった。
3日前、太狼に抜かれた左眉がまだ生えきっておらず、何となく不恰好であった。

「って、誰っ？片眉のお兄ちゃん」
「俺だよっ！！俺っっ！！さっきまで一緒にいた白いイヌっっ！！！眉毛のことには触れるなっっ！！！」

首をかしげるグラタンに、桜時が勢いよく怒鳴りつける。

「ああんっ？まぁ～た殺され志願者かぁ？」
『……っ』

桃鬼の問いかけに振り向く桜時とグラタン。

「さっきの技っ、ただの人間じゃねぇーみてぇーだなぁっ。何者だっ？」
「お前に名乗る名前なんてねぇーよっ」

一気に警戒態勢を取る桃鬼に、桜時が強気で言い放つ。

「何かちょっとカッコイイね、イヌのくせにっ」
「うっせぇっ！助けてやんねぇーぞっ！」

偉そうなグラタンの言葉に、しかめった表情を向ける桜時。

「こっからは俺が相手だっ！！行くぞっ！村雨まっ……！って、あ

れぇっ？」
『……っ？』
間抜けな声を出す桜時に、首をかしげるグラタンと桃鬼。
「むっ……村雨丸っ……？」
桜時が、いつも肌身離さず持っているはずの村雨丸がないことに気づく。
「やっべぇっっ！！！桃タローん家に置いて来たぁぁぁっっっ！！！」
「えええぇぇぇぇぇぇっっっ！！！？」
焦ったように叫ぶ桜時に、グラタンが驚きの声をあげた。

第15章　ハチともぐら　☆5

その頃、再び桃原家。
「うぅ～んっ……」
リビングの壁に立てかけられた村雨丸を見ながら、唸るような声を出すユキジ。
「遅過ぎるっ！」
ユキジが勢いよくテーブルから飛び上がる。
「何かあったんじゃないかなっ？やっぱ」
「せやなぁ～もう出掛けて6時間くらいになるしぃ」
「大丈夫だよぉ～そんなに心配しなくたってぇ」
不安げに言葉を交わすモンキとユキジに爽やかな笑顔を向ける太狼。
「死んだら死んださっ」
「……やっぱ探しに行こかっ」
「そうだね。村雨丸も持ってってないことだし」
太狼の爽やかで冷たい笑顔に、モンキとユキジが探しに行くことを決意する。
「よいしょっ」
テーブルを立ち、ユキジを肩に乗せて、壁に立てかけられている村雨丸に手を伸ばすモンキ。
「……っ」
「へっ？」
しかし横から伸びてきた手が、モンキよりも早く村雨丸を手にする。
『あっ……』
村雨丸を手に取ったその人物を見て、モンキとユキジは声を揃えた。

戻って、森中の桜時とグラタン。
「要はぁ、その“村雨丸”ってイヌの唯一の武器みたいなもんなわけでしょ？」
「ああっ」
桃鬼を前に、割りと冷静に会話をしている桜時とグラタン。
「つまりそれがないってコトはイヌは最早っ……」
「ああっ」
「能も眉毛もない役立たずってことに……」
「眉毛のことは触れんなっつってんだろうがぁぁっっっ！！！！」
歯に衣着せずに言うグラタンに、桜時が少し左眉を隠し気味に突っ込む。

「いつまで暢気にしゃべっているっ！？“鬼爪・天回”っっ！！！」
「……っ！」

あれこれと話を続けていた桜時とグラタンに、１０本の爪を放つ桃鬼。桜時がそれに気づき、表情を鋭くする。

「アンタっ！モグラだろっ！？今すぐモグラ化しろっ！！」
「えっ？」
倒れているドリアに強く叫ぶ桜時。

「何っ……」
「いいから早くっっ！！」
「はっはいっ！」

――――ボォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！！――――

戸惑うドリアであったが、桜時がさらに必死に言うので、慌てて頷いてモグラ化する。

「あのぉ～これでっ……」
「よしっ！」
「うわっ！」
モグラになった途端に軽々とドリアを抱える桜時。
「お前もっ！」
「えっ？」
続いてグラタンを抱えあげ、桜時が鬼爪を避けるように森の木陰へと飛ぶ。

「お前ら、ここにいろっ！」
『えっ……？』

桃鬼から少し離れた木の陰にドリアとグラタンを下ろす桜時。２匹が不思議そうに桜時を見上げる。

「グヘェッヘッへっ！馬鹿めっっ！！鬼爪はどこまでも貴様を追っていくぞっ！！」
『……っ』

桃鬼の言葉通り、避けたはずの鬼爪が、空中で桜時たちのいる方へと向きを変える。

『ああっ……！』

1人立っている桜時にまっすぐに向かってくる鬼爪に、グラタンとドリアが不安げな声を出す。

「……っ」

グラタンとドリアの不安を余所に、鬼爪へ向けて冷静に右手を突き出す桜時。

「“瞬花”っ」

――――パァァァァァーンッッッ！！！！――――

「何っ……！！」

桜の花びらとなって散っていく鬼爪に、またもや桜鬼が驚きの声をあげる。

「“鬼口”にっ……“鬼爪”までっ……アイツは一体っ……」

桜鬼が少し困惑した表情を見せる。

「飛び道具で来てる分には、“瞬花”だけで何とかなんなぁ～」

「……。」

困惑している桜鬼の様子を覗いながら、余裕ある表情を見せる桜

時。そんな桜時をグラタンは茫然と見つめる。

「後はゴンたちが来てくれるまで何とかっ……」
「ねぇっ」
「あっ？」

グラタンの呼ぶ声に、桜時が振り向く。

「そういえばさぁ、何で母さんにモグラ化させたの？」
「ああっ、モグラだと女かどうかわかんねぇーから触れるんだよっ」
「はいっ？」

笑顔で答える桜時であったが、グラタンはその言葉の意味が理解できず、表情をしかめる。

「あっ、そうだっ。ゴンが来た時用の目印っと」

徐に近くの木へと手を伸ばす桜時。

――――ポォォォォンッッッ！！！！！――――

『だあああああああっっっ！！！！！』

桜時の手が触れた途端、青々とした木が満開の桜の木となり、グラタンとドリアが驚きの声をあげる。

「じゃっ、こっから動くなよぉ～っ」
『……。』

グラタンとドリアをその場に残して、再び桃鬼の前へと出て行く

桜時の背中を見つめながら唖然とする2匹。

「ずっ……随分、変わったお友達ねっ……グラタン……」

「うっ……うんっ。でしょっ？」

引きつった表情で言葉を交わすグラタンとドリアであった。

「森……かっ……」

周囲を取り囲む多くの緑木を見回しながら、少し考え込むように呟く桜時。

「何とかやればイケっかも……」

「何、余裕ぶっこいてんだぁっ！？ああっ！！？」

「……っ！」

そんな桜時に、桃鬼が勢いよく駆け込んできて、鋭く爪を振り下ろす。

「うわっ！」

ギリギリの所で爪をかわす桜時。

「直接攻撃なら花に変えらんねぇーだろっっ！！」

「クっ……！」

次々に爪を繰り出してくる桃鬼に、桜時が少し表情をしかめる。

「うおっ……！」
「……っ」

避けていくうちに少しバランスを崩す桜時を見て、桃鬼が怪しげに微笑む。

「もらったぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！」

「うっ……！」

「イヌっっっ！！！！」

桃鬼が桜時の隙をすかさずついて、桜時に爪を振り下ろす。思わず身を乗り出すグラタン。

「……っ」

――――ボォォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！！――――

「何っ……！？」

爪が振り下ろされようとした瞬間、桜時が白い煙に包まれて犬化し、その場から素早く飛び上がる。

「犬人かっ……！」

飛び上がって桃鬼の後方に着地したハチを、桃鬼が険しい表情で振り返り見る。

「空は苦手だけどっ、地上散歩は得意だぜっ？」

「クっ……！」

余裕の笑みで言い放つハチに、桃鬼が少し表情を歪める。

「調子にっ……乗るなぁぁぁぁっっ！！！」

「……っ！」

怒りを見せた桃鬼が、ハチに突っ込んでいく。

「このぉぉっっ！！！！このぉぉぉぉぉっっっ！！！！このぉぉぉぉぉっっっ！！！！」

「ほっ！よっ！とっ！」

次々と爪を振り下ろす桃鬼の攻撃を、ハチは身軽にかわしていく。

「はぁっ……！はぁっ……！チョコざいなっ……！！」

ハチに攻撃をかわされてばかりの桃鬼が、少し息を切らせ始める。

「うぅ～ん、桃タローと戦った後だからか、鬼人の動きが見えやすいなぁ～」

無駄１つない動きでハチを圧倒した太狼との戦いが、結果的にハチの気持ちに余裕を生ませていた。太狼に比べれば、大振りな動きの桃鬼の攻撃を避けることは容易い。

「でもぜってぇ感謝なんかしねぇーぞぉっっ！！桃原太狼っっ！！」

「お友達っ……1匹で何か叫んでるわよ……？」

「見えない、見えない」

空に向かって悔しそうに叫ぶハチに、見守っているグラタンとドリアが呆れた表情を見せた。

「こんのっ……！クソイヌがぁぁぁぁっっっ！！！！“鬼口”っっっ！！！」

「……っ！」

――――バァァァァァァァァァーーーーンッッッ！！！！！――――

桃鬼がハチに向かって鬼口を放つ。

「クっ……！」

空中に高々と飛び上がり、鬼口を避けるハチ。

「かかったなぁっっ！！！」

「……っ？」

「空中じゃお前も身動き取れねぇーだろうがぁぁっっ！！！“鬼爪・天回”っっっ！！！」

空中にいるハチへと、高らかと笑って桃鬼が１０本の爪を放つ。

『ああっ……！！』

身動き不能のハチに、身を乗り出すグラタンとドリア。

「……っ」

だがハチは顔色１つ変えず、態勢を整えた。

――――ボォォォォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！！――――

「うっ……！！」

空中で回転しながら、ハチが再び桜時の姿となる。桜時が向かってくる鬼爪へ右手を向けた。

「“瞬花”っ……！！」

――――パァァァァァァァァァーーーーーーーンッッッ！！！！――――

「クっ……！！」

またしても花びらへと変えられる鬼爪に、桃鬼が表情を引きつる。

「よっ」

「いいぞぉぉぉ～～～っっ！！！イヌぅぅぅぅ～～～っっ！！！！」

無事、着地した桜時に、グラタンが明るい笑顔で声援を飛ばす。

「このっ……！！！こうなったらっっ……！！」

「……っ？」

腕を勢いよく振り上げ、地面に向けて振り下ろそうとしている桃鬼に桜時が少し首をかしげる。

「あっ……！」

――――“鬼地”っっ！！！――――

先ほどの桃鬼の技を思い出し、グラタンが思わず声を出す。

「イヌっっ！！気を付けてっっ！！ソイツは“地力”を使うんだっっ！！！」

「地力っ？」

グラタンの言葉に、目を丸くする桜時。

「グヘェッヘッヘっっ！！！今度はどこに避けてもどうにもなんねぇーぞぉぉっっ！！！」

「……っ。上手くいくかわかんねぇーけどっ、こうなったら試してみっかっ」

自信ありげに笑う桃鬼に、桜時が少し考えた末に構えを取る。

「喰らえぇぇぇぇぇぇっっっ！！！！！“鬼地”っっっ！！！！」

「“伝光っ……刹花”っっっ！！！！！」

桜時と桃鬼が、同時に地面に右手を突く。

――――――パァアンッ！パァアンッ！パァアンッ！パァアァアンッ！

――――――

「何いいいいいいっっっ！！！！？」

桜時を中心とするようにして、森の木が次々に桜の木へと変わっていく。

「すっ……凄いっ……」

広がっていく桜の木々を、唖然とした表情で見つめるグラタン。

「こんなことがっ……ハッ！それより俺様の鬼地はっ……！？何故、起こらないっ！？」

立ち上がった桃鬼が戸惑うように地面を見る。

「まさかっ……！！」

大きく目を見開き、桜時を見る桃鬼。

「地中に張り巡らされた木の根を操ってっ……俺の鬼地を無効化したってのかっ……！？」

「ふぅっ……やっぱ一斉瞬花出来たなぁ～」

桃鬼がその力に圧倒されている中、桜時は周囲一面に広がった桜の木を見て満足そうに微笑む。

「これも桃タロー戦でつかめたみてぇーだっ」

太狼との戦いの際、桃の苑の桃の木をすべて桜に変えた桜時。そのことが経験となり、一斉に桜の木を咲かせるほどの力を身につけたようである。

「でもでもぜってぇ感謝なんかしねぇーぞぉぉっっ！！！桃原太狼っっっ！！！！」

「また叫んでるわよ……？お友達……」

「見えない、見えない」

再び天に向かって叫ぶ桜時に、再び呆れた表情を見せるグラタンとドリア。

「冗談じゃねぇっ……」

天へと叫んでいる桜時を見ながら、桃鬼が険しい表情を見せる。

「あんなヤツとこれ以上戦ったらっ……下手したら俺が死っ……」

「さっきから何叫んでんのっ？とっとと倒しちゃってよっ、イヌのくせにっ」

「……っ」

そんな桃鬼の視界へと飛び込んでくる、生意気言っているグラタン。

「へっ……」

桃鬼が怪しげに微笑み、その場から姿を消す。

「桜もそろそろ見飽きて来たからさぁっ」
「おっ前、相変わらず偉そうだよなぁ～」
「だいたいイヌのくせにさぁ～っ……」

「……っ」

「何っ……！？」

文句を言おうとしているグラタンのすぐ後方に現れる桃鬼に、桜時が顔色を変える。

「えっ……？うっ……うわあああああああああっ！！」

「グヘェッヘッヘっっ！！！」

「グラタンっ……！！」

桃鬼が振り向いたグラタンの頭を掴み、勢いよく掴み上げる。苦しげな叫び声をあげるグラタンに、思わず身を乗り出す桜時。

「おおぉ～とっ、動くなよっ？少しでも動けばこのガキの頭を握り潰すぜぇっ？」
「クっ……！」

桃鬼の脅しに、桜時が唇を噛んで足を止める。

「汚いマネをっ……！」
「ヘッヘっ」

表情を引きつる桜時を見て、桃鬼が愉快そうに笑う。

「うっ……！ううぅ～っ……！」
「グラタンっ……！！」

強く頭を掴まれ、苦しそうにしているグラタンを見て、ドリアが思わず立ち上がる。

「待っ……！待ってっ！！私っ……！私が代わりにっ……！！」
「ああっ？」

必死に桃鬼の足に掴みかかるドリアに、桃鬼が顔をしかめる。

「薄汚ねぇー手で触ってんじゃねぇーよっっ！！！」
「きゃあああああああああああっっっ！！！！」
「母さんっっ！！！」

「うっ……ううっ……」

桃鬼に振り払われたドリアは遠くの方まで吹き飛ばされ、力なく気を失った。

「母さんっ……このっ！！離せよぉっっ！！！」
「ああっ？うっせぇなぁっ」
「うわあああああああっっっ！！！！」

「グラタンっ……！！」

抵抗するグラタンに、さらに頭を掴む手の力を強める桃鬼。その悲痛な叫びに、桜時が動かないながらも、思わず体を前に出す。

「やめろっっ！！！俺は絶対に動かないっっ！！だからソイツに手を出すなっっ！！！」

「……っ」

「うっ……ううっ……」

桜時の言葉に桃鬼がピタリと手を止める。残る痛みに力なく俯くグラタン。

「よぉぉーしっ……随分と物分りがいいじゃねぇーかぁ、イヌぅ～」

「……っ」

グラタンを掴んだまま、ゆっくりと桜時の前までやって来る桃鬼。
桜時が決して動かないまま、厳しい鋭い表情で桃鬼を見上げる。

「ぜってぇ……動くなよっ……！！」

「……っ！」

「……っ！！イヌぅぅぅぅっっっ！！！」

動かない桜時に向けて、勢いよく爪を振り下ろす桃鬼。グラタンの悲痛な叫びが、天に突き上げられた。

第１５章　ハチともぐら　☆５（後書き）

次話で１５章、ラストです。

第１５章　ハチともぐら　☆６

「……っ」

龍国から北の森の上空を飛んでいたユキジが、前方に何かを見つけ、表情を動かす。

「前方５ｋｍ付近に不自然な桜地帯ぃ～っ」

「やってぇ～っ」

ユキジの言葉を受け、その真下の木を飛び移りながら進んでいるモンキが、前を向く。

「わかりました……」

モンキの前を行く者は、さらに走るスピードを速めた。

「うっ……！ううっ……！」

桃鬼に掴み上げられているグラタンが、辛そうに目を閉じて俯く。

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」

グラタンが思わず目を背けたそこには、全身に傷を負い、血だらけになりながらも、それでも１歩も動かずに立ち続けている桜時の姿があった。

「グヘェッヘッへっ！！そぉぉらぁぁぁっっ！！！もう１発っっ！！！」

―――――・・・・・・・・・・・・っっっ！！！！！―――――

「うううううううぅぅっっっ……！！！」

そんな桜時を、桃鬼がさらに斬りつける。振らつく足を何とか踏ん張り、その場に留まる桜時。地面には桜時の赤々とした血がどんどんと滴り落ちた。

「グゥハッハッハっっっ！！！どうしたぁっ？さっきみてぇーにポンポン花咲かせて見ろよぉっ？」

桃鬼が高らかと笑って桜時を見下ろす。

「まぁ咲かせた瞬間っ、このモグラは死ぬけどなぁっ！！グヘェッヘッヘッへっ！！」

「……っ」

桃鬼の言葉に、グラタンが強く唇を噛む。

「もういいっっ！！！もういいよぉぉぉぉっっっ！！！！」

「……っ」

「ああっ？」

グラタンの叫び声に、桃鬼が眉をひそめ、桜時がゆっくりと顔を上げる。

「オレのことなんてもういいからっ！！どうなってもいいからっ！！だからイヌはっ……！！」

「うっせぇーなぁっ」

「うっ……！」

冷たい表情を見せる桃鬼に、グラタンが震え上がる。

「そんなに言うんならお前からっ……！」

「やめろっっっ！！！」

『……っ』

グラタンに爪を向けようとした桃鬼を止める、桜時の強い叫び。

「ソイツに手ぇ出すなって言ったはずだっ……」

「イヌっ……」

桜時のまっすぐな鋭い瞳に、グラタンが少し目を細める。

「グヘェッヘッヘッヘっ！！イヌは情に厚い生き物だと聞いたことはあるがぁ、まさかここまでとはなぁっ」

桃鬼が再び笑って桜時を見下ろす。

「たかがモグラ1匹のためにここまでよぉっ……！！」

「ソイツは……ただのモグラなんかじゃねぇーさっ……」

「……っ」

「ああっ？」

桜時の言葉に、グラタンが戸惑うように眉をひそめ、桃鬼が表情をしかめる。

「ソイツはっ……俺なんかよりずっとずっと凄げぇんだっ……」

――――もしっ……鳥だったらっ……――――

――――龍になるのが夢なんだっ！――――

「ウダウダ嘆いてばっかの俺よりっ……」

――――弱い俺はっ……アイツにとって負担でしかないんじゃないかって……――――

――――自分で終わらせるのって好きじゃないんだっ。最初っから諦めるのもっ――――

「すぐ諦めて後悔してばっかの俺よりっ……ずっとずっと凄げぇっ……」

「イヌっ……」

言葉を続ける桜時を、グラタンはまっすぐな瞳で見つめる。

「ソイツは夢を叶える努力の出来るでっけぇーヤツだっ……」

――――どうせ見た夢ならっ、少しでも信じて何かしたいっ！――――

「自分を信じれるでっけぇーヤツだっ」

桜時が穏やかな笑みを浮かべた顔をそっと上げる。

「見た目はただのモグラでもっ……俺にとっては誰よりもでっけぇ

龍だっ……！！」

「……っ！」

桜時のその言葉に、グラタンはどこか泣き出しそうな表情で唇を噛み締めた。

「ハッ！このモグラが龍だとぉっ？ヤラれ過ぎて目までイカれちまったかぁっ？」

桃鬼がバカにしたように言葉を投げかける。

「心配すんなっ！！今、楽にしてやるよぉっ！！」

「クっ……！」

「あっ……！！」

爪を振り上げる桃鬼に、桜時が苦しそうに表情をしかめ、グラタンが必死に身を乗り出す。

「やめてっ……」

グラタンが祈るように声を漏らす。

「逃げてっ……！！」

「死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇっつっつ！！！！！！」

「うっ……」

グラタンが叫ぶ中、桃鬼が桜時に向かって爪を振り下ろす。覚悟したように歯を食いしばる桜時。

「桜時いいいいいいいいっっっ！！！」

グラタンが桜時の名を必死に呼んだ。その時。

「“月器・三日月”っ」

――――ブシュッッッ……！！！――――

「がああああああああっっ！！！」

『えっ……？』

グラタンを掴み上げていた桃鬼の腕が勢いよく斬り裂かれ、桃鬼が激しい悲鳴をあげる。その声に戸惑った声を出す桜時とグラタン。

「がああああああああああああああああっっっ！！！！」

「うわっ！」

桃鬼の傷ついた左手から、グラタンが放り出される。

「……っ」

「へっ？」

放り出されたグラタンを受け止める温かな手。グラタンがゆっくりと顔を上げる。

「大丈夫ですか？モグラ」

「……だ……れっ……？」

「……っ輝矢っ……」

首をかしげるグラタンを余所に、弱々しくその名を呼ぶ桜時。グラタンを受け止めたのは、右手に三日月を構えた輝矢であった。

「かぐっ……やっ……？」

「……っ」

戸惑うように見つめるグラタンに、輝矢が優しく微笑みかける。

「ウチのハチを危険に晒してくれちゃって、一体、どうやって落とし前つけさせましょうかぁっ」

「うっ……！」

「輝矢ぁぁ～ん、敵はアッチやでぇ～」

底知れぬ冷たさを秘めた笑みを向けてくる輝矢に、肩を震わせ恐怖するグラタン。そんな輝矢に後方に立つモンキが軽く突っ込みを

入れる。

「門貴っ……！」

「こっちのお母さんモグラも無事だよぉ～っ」

「由雉もっ……！」

モンキと、ドリアの方に駆け寄ったユキジの姿を見て、桜時が驚いたように声を出す。

「なんでここがっ……」

「こんだけ派手に桜咲かせといて、そりゃないやろぉ～っ？」

「あっ……そっか……」

周囲に咲き乱れている桜の木を見て、小さく納得する桜時。

「桜時っ！大丈夫っ！？」

「あっ……」

グラタンが輝矢の手を飛び出して、傷ついた桜時の元へと駆け寄る。

「あっ、ああっ。あんま大丈夫じゃねぇーけどなっ」

駆け寄ってきたグラタンに弱々しいながらも笑みを向ける桜時。

「……っ」

桜時がゆっくりと顔を上げ、グラタンの後方に立っている輝矢の方を見る。

「また……お前に助けられちまったなっ……」

「……。」

どこか元気なく呟く桜時に、輝矢が少し目を細めた。

「ハチ、これをっ……」

「えっ……？」

そんな桜時に輝矢がある物を差し出す。

「……っ。村雨丸っ」

輝矢が桜時へと差し出したのは、桜時が太狼の家に置いてきてしまった村雨丸であった。

「ちょっ……！こんなボロボロの桜時に戦わせるつもりっ！？」

村雨丸を差し出した輝矢を、グラタンが非難するように見る。

「……アナタが倒すと決めた敵……」

グラタンの言葉に答えることなく、まっすぐに桜時を見つめて言い放つ輝矢。

「……アナタが守ると決めたもの……でしょう……？」

「……っ」

輝矢の言葉に、桜時がハッとした表情を見せる。

「……。……っ！」

少し間を置いた後、桜時が輝矢からしっかりと村雨丸を受け取る。

「桜時っ……！」

「見ててくれ、グラタンっ」

「えっ……？」

心配そうに身を乗り出したグラタンに、桜時が穏やかな笑みを向ける。

「俺もっ……少しだけっ……自分を信じてみるからっ」

「桜時っ……」

桜時の迷いのないまっすぐな瞳に、グラタンが少し目を細める。

「……村雨丸っ」

鞘から刀を抜き放ち、桜時が鋭い表情となって村雨丸を構える。

「クっ……！次から次へとぞろぞろとっ……！」

輝矢に斬り裂かれた左腕の傷を押さえながら、桃鬼がしかめた表情で顔を上げる。

「ああんっ？」

刀を構えた桜時を見て、さらに表情をしかめる桃鬼。

「よりにもよってお前が相手かよっ！？」

「……。」

桜時は桃鬼の言葉に顔色1つ変えずに、じっくりと間合いを取る。

「人質がいなくたってなぁっ……！死にかけのてめぇーくらいヤレるってんだよぉっっ！！！」

「……っ！」

同時に飛び出していく桜時と桃鬼。

「おっらぁぁぁぁぁっっ！！！！！」

「……っ」

「何っ！？」

桃鬼が思い切り振り下ろした爪を、桜時が高々と飛び上がって避ける。

「どこにそんな力がっ……！」

「……っ」

驚いた表情で顔を上げる桃鬼を見下ろしながら、桜時が空中で構えを取る。

「“瞬花っ……」

「……っ！！待っ……！！」

「終刀”っっっ！！！！」

「うっ……！！」

――――――バァァァァァァァァーーンッッッ！！！！！――――――

「グッ……！ギャアアアアアアアッッッ！！！」

縦に両断された桃鬼が、激しい断末魔をあげながら、淡い桃色の花びらとなって崩れ去る。

「……っ」

桃鬼を倒した桜時が、地面に着地した。

「……はぁっ」

肩を落とし、力なくその場に座り込む桜時。

「桜時いいいいいいいいっっっ！！！！」

「……っ？」

座り込んだ桜時の元へ、必死に駆け込んでいくグラタン。

「すっげぇカッコ良かったよっっ！！！」

「……っそうかっ」

目を輝かせるグラタンに、桜時が笑みをこぼす。

「まぁイヌのわりにはだけどねっ」

「お前なっ」

「グラタァァァァァーーーンッッッ！！！！」

『……っ？』

グラタンを呼ぶ大きな声に、グラタンと桜時が振り向く。

「父さんっ！！おじいちゃんっ！！」

「ゴンっ」

2人の振り返った先には、ゴン、イチゴと傷の手当てを終えたグラタンの父親と祖父の姿があった。グラタンが笑顔で父と祖父の元へと駆け出していく。

「あっ！母さんはっ！？」
「ああ、こっちは大丈夫ぅ～そっちの傷も見ようかぁ？」

父と祖父の元へ行き、不安げに振り向いたグラタンにユキジが冷静に声をかける。

「おっ、イイトコにいんじゃねぇ～かぁっ！由雉っ！後で村の連中の手当ても頼むよっ！」
「イイけど、お金取るよ？」

軽く言い放つゴンに、ユキジが厳しく答えを返す。

「あっはぁぁぁぁ～～っっ！！こんなところで会うなんて運命的やねぇぇぇっっ！！イチゴさんっっ！！」
「はっはぁっ……」

ユキジがグラタンの父親の治療をする横で、モンキがイチゴにラブ光線を飛ばす。

「……っ」

そんな皆の光景を見ながら、少し笑みをこぼす桜時。

「モグラのお陰でとんでもない目に遭いましたね」
「んっ？」

桜時の傍に立ち、少し曇った表情を見せている輝矢を、桜時が見

上げる。

「うん～っ、でもっ……」

――――すっげぇカッコ良かったよっ！！――――

「……何かちょっと、元気出たかもっ」

ひたむきに龍を夢見るグラタンの姿が、悩んでばかりいた桜時の背中を押してくれたような、そんな気がする。グラタンの輝いた笑顔を思い出し、桜時も心からの笑みをこぼした。

「そうですか……」

「あっ、そういやお前、もう起きてきて平気なのかよっ？」

頷いた輝矢に、思い出したように問いかける桜時。

「ええっ、もうすっかり完全回復ですよっ」

「ホントかぁっ？」

爽やかな笑顔を見せる輝矢に、桜時が疑いの目を向ける。

「お前の“大丈夫”は当てになんねぇーからなぁっ」

そう言って桜時が少し俯く。

「……っ」

そんな桜時を見て、目を鋭くする輝矢。

「何ならっ……」

「へっ？って、ぎゃあああああっっ！！！」

桜時のすぐ横にしゃがみ込み、桜時の顔へ目一杯、自分の顔を近づける輝矢。その至近距離具合に、桜時が叫び声をあげる。

「おっ……！おまっ……！離っ……！！離れっ……！！」

動けない体を引きずるようにして、必死に後ずさる桜時。

「私が元気かどうか……試してみます……？」

後退する桜時に、接近していく輝矢。

「今、ここでっ」

「いっやぁぁぁぁぁっっ！！！けっこうですぅぅぅぅっっ！！」

輝矢の不敵な笑みに、桜時が泣き出しそうな叫びをあげる。

「……迷っても……」

「……っ？」

急に声のトーンを落とす輝矢に、泣きそうになっていた桜時が少し目を丸くする。

「立ち止まっても……構いません……」

「えっ……？」

輝矢の言葉が理解できず、戸惑うように聞き返す桜時。

「輝っ……」

「アナタの思うように……歩んでいってください……」

輝矢が桜時へ、優しい笑みを向ける。

「アナタのすべてが……私の活力ですからっ」

「……っ！」

その言葉に、桜時がまるで衝撃を走らせたかのように大きく目を見開く。

「……っ」

輝矢から目を背けるように、そっと俯く桜時。

「何か俺っ……だせぇーっ……」

俯いた桜時が絞り出したような声で呟く。

「えっ？片眉がないからですか？」

「違げぇーよっっ！！！ってか眉毛のことには触れるなっっ！！！」

生えきっていない左眉を隠すように手で押さえながら、怒鳴りあげる桜時。

「大丈夫ですよっ」

「へっ？」

桜時が顔を上げ、輝矢の方を見る。

「片眉がなくったって、私のハチはカッコイイですからっ」

「……っ」

恥ずかしげもなく笑う輝矢に、桜時が耳まで真っ赤にする。

「傷が痛てぇーっ……」

「私の愛で治しましょうか？」

「治んねぇーよっっ！！！」

「……っ」

勢いよく怒鳴り返す桜時を見て、輝矢はとても楽しそうに笑った。

「何だかんだでっ……」

そんな輝矢と桜時のやり取りを、少し離れたところから見つめるゴン。

「イイコンビなのかもなぁ～あの2人っ」

――――ドスっ！ドスっ！ドスっ！――――

「あっ？」

後方から聞こえてくる不可解な音に、ゴンが眉をひそめて振り返る。

「って、何、木を殴り倒してるんだっ？イチゴ」

ゴンが振り返った先には、その強い拳で木の幹をがむしゃらに殴りつけているイチゴの姿があった。

「何でもありませんっ！」

「……っ？」

怒ったように答えるイチゴに、ゴンはそっと首をかしげた。

翌日。モッグランド。

「さぁさぁっ！寄ってらっしゃいっ！！見てらっしゃいっ！！」
「モッグランドの新名所っ！“桜の森”はコチラだよぉっ！！」
「見学料はお１人様・１５チュンでっすっっ！！！」

『……。』

昨日の戦いで桜時が咲かせまくった桜の木を使い、龍国などから来た大勢の客を呼び込んでいるモグラたちの姿を見て、呆然とするハチ、モンキ、ユキジの３匹。

「すっかり商売に使われとうなぁ。イヌの桜っ」
「壊れた村直すよりも先に金儲けってすごいよねぇ～」
「協力料に儲けの７割、ブン取りましょうか」
「おいっ！！」

良からぬことを言う輝矢に、ハチが勢いよく突っ込みを入れる。

「まっ、村の復旧にはオトポリも協力するみてぇーだし、何とかなんだろぉーっ！」
「すごく他人事ですね……」
横から明るい声を放つゴンに、冷たい視線を送る輝矢と３匹。

「桜時っ！ゴンっ！」
『……っ？』

そこへ笑顔のグラタンが駆け寄ってくる。

「おおぉーうっ！モグラ坊主っ！また龍に乗せろとか言うんじゃねぇーだろうなぁっ？」
「ううんっ！龍になるのはもうやめたっ！」

『へっ？』

明るく言い放つグラタンに、大きく口を開くハチとゴン。

「昨日の戦いを見て……考え直したんだ……」

グラタンが真剣な表情を見せ、再び笑顔を作って顔を上げる。

「オレっ、イヌになるっ！」

『はぁぁぁぁぁぁっっ！！？』

グラタンのその発言に、これ以上ないくらい驚くハチとゴン。

「昨日の桜時っ……マジカッコ良かったしっ！今度、桜の咲かせ方、教えてねっ！じゃあっ！！」

「あっ……！おいっ……！！」

ハチが手を伸ばすも、グラタンは素早く父親や母親のいる方けと駆け出していった。

「何だっ……アイツっ……」

「余程、ハチの勇姿が目に焼きついたのでしょうねぇ。まぁ無理もありませんけどっ」

「ってか、アイツが影響されやすいだけじゃねぇーのかぁ？」

自分自身で納得するように頷く輝矢に、ゴンが水を差すように一

言入れる。

「ってか……アイツに心動かされた俺って一体っ……」

少し落ち込んだ様子で呟くハチ。

こうして、ハチとモグラを少しだけ成長させた事件は、終わりを告げたのでだった。

第１５章　ハチともぐら　☆６（後書き）

１５章終わりました。
次回から１６章に入ります。

第16章　二つの再会　★1

「俺はもうっ……こんなの嫌だっ……！！」

誰かに向かって必死に叫んだのは、少し目つきの悪い、まだ幼い少年。

「俺はっ……一族を抜けるっ……」

少年が辛い表情で俯く。

「良かろう……」

「……っ」

白髪に細い目の老人が少年に向かって言い放つと、少年は少し驚いたように顔を上げた。

「じゃが一族を抜けた所で、お前が見る世界は変わりはせん」

老人は少年に何とも厳しい瞳を向ける。

「人は人を裏切る……それが人の常じゃ……」

「……。」

老人のその言葉に、少年は再び俯いた。

「お前が人を信じた所で、人は誰もお前を信じたりはせんよ……ゴン……」

――――ピピピっ……！ピピピっ……！ピピピっ……！――――

「……っ」
鳴り響く目覚ましの音を聞きながら、ゆっくりと目つきの悪いその目を開いたのはゴンであった。
「夢……」
見慣れた自分の家の天井を見ながら、ゴンがポツリと呟く。
「……最悪っ……」
そう呟いて表情をしかめながら、ゴンがゆっくりと布団から起き上がる。

――――バァァァァァァーーーンッッッ!!!!――――

「ゴンさぁぁぁぁぁぁぁ～～んっっ!!?」
「……最悪っ……」
勢いよく扉を開けて、能天気全開に家の中へと入ってくる羊スケに、ゴンがさらに表情をしかめる。
「あっれぇ?まだ寝てたんスかぁ?もう１０時っスよぉ?」
「てめぇーなぁっ、入る時はノックくらいしろっていっつも言っ……!」
「とりあえずとっとと起きて下さいっ!仕事っス!」
「仕事っ?」
羊スケの言葉に目を丸くするゴン。
「何だぁ?仕事って」
「鬼人化人間の発生地域が絞れたらしくってぇ、俺らは先遣隊として派遣されるらしいっスっ!」
「先遣隊っ……」
ゴンが少し考え込むように呟く。
「でっ、その発生地域ってのは?」
「はいっ!それはぁっ……!」

所変わって、エセお菓子の家こと桃原家。
「だっから何度言わせりゃわかんだよっっ！！お前はっっ！！ええっ！？」
「すみません……」
桃原家のリビングで、ソファーの上に立って怒鳴りあげるハチに、同じソファーに腰を掛けた輝矢が申し訳なさそうに謝る。
「最近はもうハチの気絶する顔が見たくって、ついっ……」
「ついじゃねぇーよっっ！！しかも何、気絶させようとしちゃってんだよっっ！！！」
今朝もハチの眠るソファーの上で、いつの間にか隣に眠っていた輝矢。起きた途端にそれを見たハチは、いつもの通り1時間ほど気絶し、目覚めた途端に、これもいつもの通りの説教が始まっていたのであった。
「だいったいお前は2階に自分の部屋があんだろうがっ！！何でリビングで寝てんだよっっ！！」
「だって私、3日も眠ってたんですよ？」
「はぁっ？」
よく繋がらない輝矢の答えに、少し表情をしかめるハチ。
「眠ってた分、存分にハチとイチャつかないとぉっ」
「どんな理由だよっっ！！ってかそれ以上、近寄るなぁぁぁぁ～～っっっ！！」
笑顔で接近してくる輝矢に、必死の抵抗をするハチ。
「はいっ、そこまでぇ～っ」
「のわあああああああああっっ！！！」
そんな時、ハチの耳を勢いよく引っ張り上げる1本の手。
「タローっ」

手の持ち主は、今日も爽やかメガネの太狼であった。
「痛ててててっ！！痛てぇぇぇっっってっっ！！！」
「あっ、ごっめぇ～んっ。洗濯バサミになりきったつもりで挟んじゃったぁ～っ」
「ニャロウっ……」
わざとらしく謝る太狼に、ハチが拳を握り締める。
「何です？タローっ。今、イイトコっ……」
「何か床に埃溜まっちゃっててさぁ～」
輝矢の言葉を遮り、指についた埃を見せる太狼。
「不快だからハチ君、朝ご飯までに拭いといてくんないっ？」
「えっ！？何で俺がっ……！」
「早くっ」
「はいっ」
太狼の有無を言わさぬ冷たい笑みに、ハチが大人しく頷いて洗面所の方へと歩いて行く。
「あっ、ついでにお2階の床と階段もねぇっ」
「ううっ……」
今日も太狼のイビリに涙するハチ。
「何か最近アイツが、昼ドラとかによく出てくる可哀想な嫁に見えてきたわっ……」
「まぁニュアンス的には合ってんじゃなぁ～いっ？」
そんなハチを見ながら、ダイニングテーブルに座っているモンキとユキジが呆れた表情で言葉を交わす。
「ハチ、手伝いましょうかぁ？一拭き、一チュウでぇっ」
「いらねぇーよっ！！」
輝矢の問いかけを、怒鳴って断るハチ。
「あっ、そういえば輝矢ちゃんっ、金ちゃんが午後から本部に来てくれってさぁ～」
「えっ？金汰が？」
隣に座る太狼の言葉に、輝矢が少し目を丸くする。

「面倒臭いんですけど」
「じゃあ面倒だから行かないって言っておくねぇ～」
『待ていっっ！！！』
自分本意過ぎる輝矢と太狼の会話に、３匹が待ったをかける。
「本部に来てくれってことはっ、もしかして鬼人化事件のことがっ」
「うん～、発生地域絞り終わったんだってぇ～」
『それを先に言えっっっ！！！！』
平然と答える太狼に、３匹が勢いよく突っ込みを入れる。
「今日、先遣隊が出発するらしいよぉ～」
「こりゃあ家でまったりしてられへんなぁっ！輝矢んっ！」
「あっ、２時からこの番組見ましょうかねぇ」
「めっちゃまったりしてるっっ！！！」
発生地域や先遣隊のことなど、特に興味もなさそうに新聞を読んでいる輝矢に、モンキがショックを受ける。
「はいっ、桜時出番っ」
「うぇっ？」
冷静なユキジが、ハチを押し出す。
「あっ、ああぁ～、気になるなぁっ！発生場所とか先遣隊とかっ！」
「今すぐ行きましょうっ」
『……。』
「え～？床の拭き掃除はぁ～？」
素早く新聞を畳んで立ち上がる輝矢に、呆れた表情を見せる３匹と不満げに声をあげる太狼なのであった。

というわけで、オトポリ本部。長官室。

「私こそが、オトポリ長官にして龍国主を務める、青守ザクゥゥゥゥーーーロである」
そんな長官室に待ち構えていたのは勿論この男、御伽警察長官にして龍国主である青守座黒であった。座黒が相変わらず自己紹介を始める。
「私こそが獣人最強とされる龍人一族『アオモォォォォーーリ』の血筋であり、その圧倒的な力でぇっ……！」
「アナタの自己紹介に興味ないんで、とっとと本題入ってもらえませんっ？」
「がっびぃぃぃぃぃーーーんっっ！！」
容赦なく切る輝矢に、座黒がショックを受ける。
「ちょっといいのぉ～？オトポリの長官さんにそんな口聞いてぇ～」
「いいんですよ」
困ったような表情で問いかけるユキジに、輝矢がさらりと答える。
「わっ私の自己紹介より本題の方が大事なのかっ……？」
「ええっ」
「まぁ輝矢ちゃんがそういうなら仕方ないなっ！」
『えぇぇぇぇぇぇぇ～～～っっ？』
輝矢の言うことをあっさりと聞くオトポリのトップ。意外と親しそうな2人に、3匹が驚きの声を漏らす。
「随分、輝矢んに甘いなぁ～」
「長官は桃ちゃんの親代わりみたいなもんだからな。輝矢さんのことも小っちゃい頃からよく知ってんだよ」
モンキの問いかけに、共に長官室にやって来た金汰が答えた。
「でっ？その1週間かかって、やっと絞り出せた鬼人化人間の発生地域というのは？」
「あぁぁ～……それはっ……」
『……っ』
座黒の答えを待ち、皆が少し息を呑む。
「次の3つの内、どこでしょうっ！？1番っ……！」

「とっとと言いなさい」
「虎国です……」
笑顔で選択肢を並べようとした座黒が、輝矢に一睨みされて、すぐさま大人しく答える。
「虎国っ？」
「虎国って……」
「“龍”“雀”と並ぶ四大国の１つで、雪深い西方の国だ。龍国とは御伽界の真逆に位置している」
首をかしげたモンキとユキジに、金汰がすらすらと答える。
「桜時、行ったことは？」
「いやっ……確か、虎国って他国との外交は一切っ……」
「そうっ！その通りっ！さっすが雀国の王子だねぇっ！」
「どっ……どうもっ」
「まぁ私はさっきリンゴちゃんに聞いて知ったけどねっ！！」
「威張るなよ……」
とても偉い人には見えない無駄に明るい座黒に、ハチが呆れきった表情を見せる。
「虎国に鬼人化した人間が多発しているということですか？」
「いや、正確には虎国近隣の街や村だ。虎国のことは、ハチ公の言うように外交がないせいでわかっていない」
「なるほどっ……」
輝矢が金汰の説明に、少し真面目な表情を見せて頷く。
「虎国自体が鬼人に関わっているのか、もしくは鬼人たちが虎国を攻め落とそうとしているのか……」
「どっちにしろ、虎国に行ってみねぇーとわかんねぇーなっ」
「ええ」
考え込んでいた輝矢が、ハチの言葉に頷く。
「ではとりあえず虎国にっ……」
「ちょぉぉぉぉーーーっと待ったっっっ！！！！」
『……っ？』

虎国へ向かうため、素早く長官室を出ようとした輝矢と3匹を、止める大きな声。

「リンゴっ」

その声の主は、勢いよく長官室へとやって来た、不機嫌面のリンゴであった。

「虎国へはオトポリの先遣隊が行くわっ！アンタ達はここで留守番っ！！」

『えぇぇぇぇぇ～～っっ！！？』

リンゴの言葉に、輝矢たちが一斉に不満の声をあげる。

「“え”じゃないっ！！」

皆の不満の声を、リンゴはすぐさま払いのける。

「ちょっ……！ちょい待ってくれやぁっ！！俺らは退治屋として調査にっ……！」

「いくら退治屋とはいえ、一般人は一般人っ！！それに今回はただの鬼人退治とはワケが違うわっ！！」

「うおっ」

言い返そうとしたモンキが、座黒の言葉に1度は押され、輝矢の陰へと身を隠す。

「輝矢ぁぁぁぁぁ～～んっ！」

「はぁっ」

泣きつくモンキに、少し肩を落とす輝矢。

「リンゴ……アナタ、まさか……」

「なっ……何よっ？」

真剣な表情を見せる輝矢に、少し息を呑むリンゴ。

「いつもの如く、全く役に立たないオトポリ警官どもに代わって、私が手柄をあげてしまうのが嫌なのでは……」

「違うわよっっ！！！」

「ではっ……」

「ダメなものはダメっっ！！！」

「……っ」

強く否定するリンゴに、さすがの輝矢も打つ手を失くしてしまう。
「座黒っ」
「へっ？わちゃしっ？」
輝矢に睨まれ、少し焦った表情を見せる座黒。
「えっえっとぉ、そのねぇリンゴちゃ～んっ」
座黒がわざとらしい笑顔をリンゴへと向ける。
「輝矢ちゃんもこう言ってることだしぃ、ここはパァーっと行かせてあげちゃえばぁっ……！」
「……っ」

――――バギコォォォォォォーーンッッッ！！！！――――

『……。』
リンゴが右足を一振りさせて長官室の扉を蹴ると、扉が一瞬の内に粉々になって砕け散った。その光景に笑顔のまま固まる座黒と、静まり返る皆。
「とにかくっ、これは決定事項よっ。反論は一切、聞かないわっ……」
「……はい」
リンゴの言葉に、素直に頷くしかない座黒なのであった。

「はぁぁ～～あぁ～～っ、こんだけ待ってたのに結局、留守番かぁ～っ」
長官室を出た輝矢たちがオトポリの敷地内を出口へ向かって歩く中、ユキジが不満げな声をあげた。

「だいたい初めに鬼人化人間見つけたの、ボクらなのにぃ～」
「まぁ仕方ねぇーよ。リンゴの蹴りは喰らいたくねぇーし」
納得いっていない様子のユキジに、ハチが諭すように言う。
「でもホンマにこのまんま引き下がってええんかぁ～っ？輝矢ぁぁ～んっ」
「んん～っ」
モンキの問いかけに、輝矢が考え込むように声を出す。
「そうですねぇ……んっ？」
そんな時、輝矢がオトポリ駐車場の方を向き、何かを見つけたような表情を見せる。

「ふわぁ～はっはっ！数多いるオトポリ警官の中から、この僕っ！この僕が先遣隊隊長に選ばれたよぉっ！」

大きな声で自慢げに話しながら、今まさに黒いオープンカーに乗り込もうとしているのは、背中に鉄製の巨大マサカリを背負ったオカッパ頭の鉄汰であった。
「まぁそれもこれも僕の溢れんばかりの才能のお陰かなっ？そう思うだろぉ？狐上隊員っ！」
「へぇへぇ。とにかくとっとと行くから、とっとと乗れっ」
オープンカーの助手席に乗っているゴンが不機嫌面で言い放つ。
「ってか何でアイツが先遣隊の隊長なんだよっ？」
「総長の抜擢らしいっスよぉ～」
「ったく、あんの兄バカっ……」
運転席にいる羊スケと、鉄汰に聞こえないような声で会話をするゴン。
「しっかし……よりにもよって虎国とはなぁ……」
ゴンが遠い目でポツリと呟く。
「へっ？」
「何でもねぇーよっ……」

聞き返した羊スケに、ゴンは少し誤魔化すように答えた。
「ではっ！早速行こうかねぇ～っ！」
「失礼っ」
「へっ？」

――――バッコォォォォォォーーーンッッッ！！！！！――――

「あっぎゃあああああああっっ！！」
『へっ？』
オープンカーに乗り込もうとした鉄汰が、横から飛んで来た足に、ものの見事に蹴り飛ばされる。空の星となる鉄汰を見て、目を丸くするゴンと羊スケ。
「運転手さんっ、虎国まで」
「あっ」
そう言ってオープンカーへと乗り込んできたのは、ユキジを抱えた輝矢であった。続いてモンキ、ハチが乗り込んでくる。
「輝矢さんっ」
「捕まるかも知れないので早めにお願いします」
後部座席の戸を閉めて、出発態勢を整える輝矢たち。
「けどぉっ」
「出せっ」
「えっ？」
少し困った顔を見せた羊スケに、ゴンが指示を出す。
「イイんスかぁ～？まぁ～た反省文追加っスよっ？」
「千枚も二千枚もそう変わんねぇーよっ」
「……それもそうっスねっ！」
そう会話を交わしながら、２人がシートベルトを締める。
「じゃっ、行くっスよぉ～っ！」
『おおぉぉぉぉぉぉぉ～～～～うっっっ！！！！』
こうして、輝矢たちを乗せたオープンカーは、虎国へと走り出し

ていった。

第１６章　二つの再会　★１（後書き）

今回はゴンの過去編です。
全３章を予定。
長いですが、どうぞお付き合い下さい。

第16章　二つの再会　★2

再び、オトポリ長官室。
「はぁっ、しかし困ったものだな。お前にも」
長官室の席に座り、少し呆れたように肩を落とす座黒。
「輝矢ちゃんの体調も回復したんだし、そこまで反対することもなかろう？」
「パパは……輝矢を巻き込ませたいのっ……？」
「んっ？」
リンゴの言葉に、少し眉をひそめて顔を上げる座黒。
「あの女が関わってるかも知れないような事に……輝矢を巻き込ませたいのっ……？」
「リンゴ……」
険しい表情を見せるリンゴに、座黒は少し悲しげに目を細めた。
「お兄ちゃぁぁ～～んっっ！！！」
『……っ？』
「鉄っ？」
長官室の扉が破壊されたため、吹きぬけになっている入口から入ってくる1頭の黒クマを見て、リンゴと座黒が目を丸くする。それは獣化した鉄汰であった。

――――ボォォォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！！！――――

「どうしたんだべかぁ？鉄ぅ～っ」
金汰がクマ化し、すぐ前までやって来た鉄汰にナマった口調で問いかける。
「お兄ちゃぁぁ～んっ！輝矢っ、輝矢が僕を吹っ飛ばして、先遣隊と虎国へ行っちまっただぁ～っ！」

「なっ……！」
「何ですってぇっ！！？」
「ぐぼぉぉうっ！」
鉄汰の言葉に、前にいる金汰を押し飛ばして鉄汰の前へと出るリンゴ。
「じゃあ輝矢たちはっ……！」
「もう龍国を出た頃ださぁ～」
「んなっ……！！」
鉄汰の答えを聞き、リンゴが表情を歪める。
「このっ……！！」
勢いよく右足を振り上げるリンゴ。
「役立たずがぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！！」
「あっぎゃあああああっっっ！！！！」

――――バッコォォォォォーーーーンッッッ！！！！――――

リンゴに蹴り飛ばされ、天井を突き破って空の星と消える鉄汰。
「鉄ぅぅぅぅぅ～～っっ！！！」
金汰の悲痛な叫びが、長官室に響き渡る。
「鉄ぅぅぅぅ～っっっ！！！」
「ったくっ！」
金汰が天井にあいた穴へと手を伸ばす中、リンゴが怒りを全面に出しながら右足を下ろす。
「あんのクソバカ弟グマっ……！」
「まぁまぁリンゴちゃんっ、落ち着いてぇ～」
そんなリンゴを何とか宥めようと声をかける座黒。
「ゴンも付いていることだしぃ、輝矢ちゃんならきっと大丈っ……」
「えっ……？」
座黒の言葉に、リンゴの表情が凍りつく。
「ゴンっ……ゴンを先遣隊で行かせたのっ……？」

「えっ？あっ、うん」
「何でよっっ！！！！？」
「ひえええええええっっ！！！」
力強く座黒の胸倉を掴むリンゴに、座黒が怯えきった声をあげる。
「いやぁ～だって彼は外回り慣れてるし、実力も申し分なくっ……」
「そういう意味じゃないっっ！！！」
「ぎゃあああああああっっ！！！」
「落ち着くだぁぁ～～っっ！！！リンゴぉぉぉぉ～～っっ！！！」
あまりに恐ろしいリンゴの形相に、座黒が悲鳴をあげ、金汰が止めようと奮闘する。
「ゴンにとって虎国はっ……！！虎国はっ……」
『……っ？』
急に力を弱め、俯くリンゴに、首をかしげる座黒と金汰。
「とにかく行かせちゃ行けないヤツばっか行かせてんじゃないわよおぉぉっっ！！！」
『ぎゃあああああああっっ！！！』
その後1時間程、リンゴは長官室で暴れまわった。

一方、輝矢一行を乗せたゴンと羊スケのオープンカーは龍国を出て、まっすぐ西を目指し走行を続けていた。出発時は朝だったが、長時間走行に徐々に日も傾き始めていた。
「ううぅぅ～～っ、何か寒くなってきたぁ～っ」
輝矢の膝の上で、ユキジが身を丸めながら呟く。
「確かに肌寒くなって来ましたねぇ。日が傾いて来たからでしょうか？」

「それだけじゃねぇーよっ」
「えっ？」
助手席から口を挟むゴンの言葉に、輝矢が首をかしげる。
「虎国が近づいて来てんだ。あの国は雪深くってクソ寒い国だからなっ」
「まるで行ったことがあるかのような口振りですね」
「……。」
「……っ？」
どこか遠くを見るように目を細めるゴンを見て、輝矢は少し眉をひそめた。
「ううぅ～っ！しっかしこの寒さは堪えるわぁ～っ！バナナ食わんと死んでまうぅぅ～～っ！」
「バナナは関係ねぇーだろっ」
身を震わせるモンキに、軽く突っ込みを入れながら、白く変わる吐いた息に目を見張るハチ。
「でもまぁ確かにちょっと寒っ……」
「ハチっ」
「人肌はいらねぇーぞっ」
笑顔で手を広げる輝矢に、ハチが冷たく断りを入れる。
「はぁっ……」
「あっ、トンネルが見えて来たっスよぉ～っ」
『……っ』
落ち込んで手を下ろす輝矢の前で運転をしている羊スケが声を出す。羊スケの言葉に皆が一斉に顔を上げると、確かに霧がかった道の前方に大きなトンネルが見えていた。
「あのトンネルに入ればいいんスかぁ～？ゴンさんっ」
「ああっ、あのトンネルが虎国へ続く唯一の道だ」
ゴンの答えを聞き、羊スケがハンドルを操作して車をトンネルの中へと進めていく。
「うっ……！！」

車がトンネルへと入ろうとした時、羊スケの表情が急に歪む。
「クっ……！！」
――――キキィィィィィィィィィ～～～～ッッッ！！！！――――
『だあああああああああああああっっ！！』
強くかかる急ブレーキに、皆が前のめりの姿勢となり、ハチが助手席の方へと体を投げ出される。
「いっやぁぁぁ～～っっ！！！急ブレーキの勢いで体が勝手にぃぃっっ！！」
そう解説しながら、わざとらしく輝矢の方へと倒れこんでいくモンキ。
「それは危なぁ～いっ」
――――プスッッ！！！――――
「うっきゃあああああああっっ！！！」
輝矢の膝の上にいたユキジが、倒れこんできたモンキを嘴の先で受け止める。額にユキジの嘴が勢いよく刺さり、悲痛な叫び声をあげるモンキ。
「ったく……それにしても危ないなぁ～可愛いボクが怪我でもしたらどうしてくれるのさぁ～っ？」
「そうですよ、ヒツジ。慰謝料３０００万チュンいただきますよ？」
「ええぇ～っ！？怪我もしてないのにっスかぁ～っ？」
脅すように言う輝矢とユキジに、羊スケが困った顔を見せる。
「痛てててててっ……」
そんな中、後部座席から助手席のゴンの膝元まで転がり落ちたハチが、少し頭を押さえながら起き上がる。
「なんで急に止まったりなんっ……って、これっ……！！！」

『……っ？』
驚いたように声をあげるハチに、後ろにいた輝矢たちが一斉に前方のトンネルを見る。
『なっ……！！』
トンネルの中は溢れんばかりの真っ白な雪が目一杯詰まっており、完全に封鎖されてしまっていた。
「雪っ……？一体、どこからっ……」
寒いとはいえ、辺りには雪などカケラも見当たらない。輝矢が戸惑うように呟く。
「トンネルの向こう側だよっ」
「向こう側っ？」
「向こう側の雪がトンネル伝って、コッチまで出てきちゃっとるってことかぁっ！？」
「ああっ」
驚いた様子で聞き返した輝矢とモンキに、ゴンが冷静に頷く。
「真夏の極わずかな期間を除き、虎国への唯一の道であるこのトンネルは雪で閉ざされてしまう」
隙間なく埋まったトンネルを見ながら、ゴンが話しを続ける。
「これが虎国が他国と一切外交しない理由の１つでもある」
『なるほどなぁ～っ』
ゴンの説明にしみじみと頷く３匹と羊スケ。
「って、じゃあ俺ら、どうやって虎国まで行くんスかぁ～っ！？」
『確かにっ』
焦った様子で問いかける羊スケに、納得したように同調する３匹。
「ああぁ～、俺１人じゃ明日までかかっちまうかと思ってたんだけどっ」
ゴンがゆっくりと後部座席を振り返る。
「お前らがいっから、今日中には着けそうだなっ」
『へっ……？』
何やら怪しいゴンの笑顔に、ハチ、モンキ、ユキジの３匹は首を

かしげた。

「“狐火・二目”っっ！！」
「如意棒・第１の舞……“空”っっ！！」
「“左翼・滅羽”っ」
「“瞬花”っ！！」

――――バァァァァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――

ゴンと人化した桜時、門貴、由雉の４人により、トンネル内の雪を排除する作業が続けられていた。ゴンが“火力”で雪を溶かし、門貴が“風力”で雪を吹き飛ばし、由雉が羽根で雪を消して、桜時が“花力”で雪を桜の花びらへと変えていく。４人が雪を排除しながらトンネル内の道を確保し、その後ろから羊スケと輝矢の乗ったオープンカーがゆっくりとトンネル内を進んでいっていた。

「地道というか、何というか……」
「ゴンさんの思いつきそうなことっスよねぇ～」

力を使いながら少しずつ道を作っていく４人を後方から見ながら、呆れた表情で言葉を交わす輝矢と羊スケ。

「輝矢さんは手伝わないんスかぁ？」
「私の力では雪は溶かせませんからね。それに……」

輝矢が少し言葉を溜める。

「面倒ですしっ」
「ですよねっ」

笑顔で答える輝矢に、羊スケが少し呆れた笑顔を見せた。
「羊スケ……」
「はいっ？」
「ゴンはやけに虎国に詳しいようですが、以前に訪れたことでもあるのですか？」
「えっ？」
輝矢の問いかけに、羊スケが少し目を丸くする。
「あっ……あぁぁ～、すんませんっ。それは俺にもよくわからないんスっ」
ミラー越しに輝矢に笑みを向ける羊スケ。
「ゴンさん、あんまし自分のこと、話さない人っスからっ……」
「……そうですか……」
少し寂しそうに答える羊スケに、輝矢も真面目な表情で目を落とす。
「まっ！別にゴンさんの過去とかまったく興味ないんスけどねぇ～っ！」
「……でしょうね」
本当にどうでも良さそうに話す羊スケに、少し呆れた表情を見せる輝矢。
「でもぉ確かに、虎国への派遣が決まってからは、ちょっとテンションぉ低いっスけどねぇ～」
「……。」
羊スケの言葉を聞き、輝矢が炎で雪を溶かすゴンの方を見ながら目を細める。

「おっ！やぁ～っとトンネル抜けたでぇっ！！」
『……っ』
門貴の声に車の輝矢と羊スケが顔を上げる。すると確かに雪に埋もれていたトンネルが途切れ、光の差す広い空間が見えていた。
皆が一斉にトンネルから出た。

第１６章　二つの再会　★２（後書き）

次回で第１００部です。びっくら。

第１６章　二つの再会　★３（前書き）

記念すべき１００話でございます。

第16章　二つの再会　★3

『ふわぁぁぁぁぁ～～ああ～～～っっ……』

大きく口を開いて、圧倒されたように周囲を見回す皆。そこに広がっていたのは辺り一面の銀世界。深い雪に覆われた、何とも美しく壮大な街並みであった。

「ここが……虎国……」

輝矢が唖然として呟く。

「おっおいっ！！あれ見ろっっ！！余所者がトンネル潜って来てっぞっ！！」

『……っ？』

街から聞こえてくる声に、輝矢たちが振り向く。

「ホントだっ！！トンネルの雪溶かして来たのかぁっ？」

「おおぉぉぉーーいっ！！みんなぁっっ！！！余所者が来てっぞぉぉぉぉ！！！！」

『何々ぃ～っ？』

『ホントにぃ～っ？』

――――ザワザワザワッッ……――――

トンネルを抜けたすぐ前にある、街の入口付近にいた街人らしき男の声に、続々と街の人間が集まってくる。物珍しそうに輝矢たちを見る街人。

「おっおいっ、何かマズい空気なんじゃねぇーかっ？」
「そうっスよねぇ～外交のない国にいきなり侵入して来ちゃってるんスからぁ」
集まってくる街人を見て眉をひそめるハチに、入口付近にオープンカーを止めて降りて来た羊スケが、特に焦った様子なく答える。
「捕まったりしちゃうんじゃっ……」
「きゃあああああっ！！見てぇぇぇぇっ！！トリさんよぉっっ！！」
「へっ？」
不安げな表情を見せていたユキジが、横から聞こえてくる黄色い声に首をかしげる。
「私、トリなんて初めて見たぁぁっ！！」
「羽根触らせてぇっ！！羽根ぇっ！！」
「あぁぁぁーーっ！！ずっるぅぅーいっ！私も私もぉっ！」
「うわあああああああっ！！」
若い女性からの注目を集め、あっという間に囲まれて、その人々の群れの中へと消えていくユキジ。

「随分と人気ですねぇ」
「こんな雪国じゃ普通トリは飛んでねぇーからな」

特にユキジを助けようとはしない輝矢とゴン。

『きゃあああああっ！トリぃぃっ！！』

「ユッキーであの人気ならサルもっ……」

若い女性に生き埋めになっているユキジを見ながら、良からぬことを企む門貴。

「よしっ！」

――――ボォォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！！――――

門貴が白い煙に包まれて獣化する。

「おっ俺なんかサルやでぇっ！！めっちゃ珍しいやろぉっ！？」

サルとなったモンキが、自ら注目を集めるように大きな声を出す。

「まぁホントぉぉおっっ！！！おサルさんだわぁぁっっ！！！」

「可愛らしいぃぃぃっっっ！！！」

「よっしゃっ！来たっ……！」

後方から聞こえてくる女性の声に、モンキが思わず拳を握り締めて喜びを噛み締める。

「せやろぉぉおっっっ！！？俺、めっちゃ珍しっ……！ううっ……！！」

後ろを振り向いたモンキが、笑顔から一転して凍りつく。

「おサルさんなんて、私、初めて見たざますわぁぁ～～っっ！！！」

「まぁっ！奥さんもぉっ？わたくしもなんざぁ～ますわぁ～っ！！」

「初めて見ましたけど、可愛いものですわよねぇぇ～～っっ！！！」

「……。」

モンキの振り返った先にいたのは、化粧の厚い丸々と太ったオバサン軍団。

「抱かせて抱かせてぇぇ～っ！！」

「ずるいですわぁぁんっ！！次はわたくしですわよぉっ！」
「触り心地最高ですわぁぁ～っ！！」
「いっやあああああっ！」

オバサン軍団に揉みくちゃにされ、モンキの悲痛な叫びが辺りに響き渡った。

「ったく、何やってんだっ……アイツっ……」
「おっ！こっちはイヌだぞぉぉっ！！」
「うっ……」
呆れた表情でモンキを見ていたハチの元にも、街人が集まってくる。物珍しそうにやって来る街人たちに、少し後退するハチ。
「イヌって食えるのかぁ？」
「食えねぇーよっっ！！！」
ふとした疑問を投げかける街人に、ハチが思い切り怒鳴り返す。
「何か毛並みとか気持ち良さそうだなぁ～っ！枕にするといいんじゃねぇーかぁっ？」
「俺ぁ、ホウキがいいと思ったけっどなぁ」
「膝かけにしたらどうだぁ？」
「おっ前らなぁっ……！！人をっ……！ってかイヌを何だと思ってっ……！！って、うおっ！？」
急に浮き上がる体に、文句を言っていたハチが言葉を止める。
「かっ……かかかかか輝矢っ……！」
後方からハチの体を軽々と持ち上げたのは、少し引きつった笑顔を見せた輝矢であった。
「ばっ……！おっ……！おおおおお俺に触るんじゃねぇーってっ！何っ……！何回も言っ……！」
「ウチのハチを枕だのホウキだのにしようだなんて……」
輝矢が暴れまわるハチを無視して、街人たちに冷たい目を向ける。

「この国の方々は……礼儀というものを知らないようですねぇ……」

『……っ』

輝矢の言葉に息を呑むように黙り込む街人たち。

「うわちゃ～っ……いきなりケンカ腰っ……」

そんな輝矢にハチが頭を抱える。

「これじゃあ絶対、話とか聞けなっ……」

『アッハッハッハっハぁぁ～っ！！』

「へっ……？」

「……っ？」

勢いよく笑い声をあげる街人たちに、輝矢とハチが目を丸くする。

「余所者怖っえええぇぇっ！！」

「“礼儀というものを知らないようですね……”だってさぁっ！！」

『アッハッハッハぁぁ～～っ！！』

「“月器っ……」

「それは止めとけっ」

バカにするように大きく笑う街人たちに、思わず右耳のピアスに手をかける輝矢。月器を目覚めさせようとする輝矢を、ハチが呆れた表情で止める。

「フランクな街の人っスねぇ～俺じゃあ絶対、あんなこと輝矢さんに言えないっス」

「おいっ、てめぇーっ」

「えっ？」

羊スケが恐ろしいものを見るように肩を震わせる横で、ゴンが近くにいた街人らしき男に声をかける。

「俺ら、オトポリの調査でこの街に来たんだが」

「はぁ？おとぽりって何だぁ？」
「……。」
不思議そうに聞き返してくる男に、思わず固まるゴン。
「オトポリ知らねぇーのかぁぁぁっ！！？」
「聞いたこともねぇーよっ。なぁっ？」
『うんうんっ』
男の問いかけに、周囲にいた街人が一斉に頷く。
「ウッソだろぉーっ……どんだけ隔絶されてんだよっ……この国っ……」
「こりゃ苦労しそうっスねぇ～ゴンさん」
頭を抱えるゴンに、羊スケが軽く声をかける。
「よぉぉ～しっ！お前らっ！！もう十分、見たなっ！！？」
『……っ？』
急に街人全員に声をかける男に、ゴンと羊スケが首をかしげる。
「じゃあそろそろ連行してくぞぉ～～っ！！」

――――ガッシャンッッッ！！！！！！――――

「へっ……？」
笑顔の男が、ゴンに勢いよく手錠を掛ける。掛けられた手錠に目を丸くするゴン。
「えええぇぇぇっっ！！？」

「侵入者？」

「ええ、何でもトンネルの雪を溶かしてわざわざやって来たそうで」
雪の降る街を高い塔の上から見下ろす1人の女。女の問いかけに後方で膝を付いている、家来らしき男が丁寧に答えていく。
「その内、2人は黒い軍服のようなものを着た男で、もう1人は……」
家来が少し躊躇うように間をあける。
「イヌ、サル、キジを連れた、黒髪、着物姿の少女だそうです」
「イヌ、サル、キジを連れた、黒髪、着物姿の女っ……？」
家来の言葉を、女が繰り返す。
「まさかっ……」
女が何か思いついたかのように呟いた。
「ありえねぇーっ……」
「ありえませんね」
「あっりえへんわぁ～」
次々に呟き、首を横に振るハチ、輝矢、モンキ。
『何とかして』
「できるかぁっ！！」
声を揃える輝矢たちに、勢いよく怒鳴り返すゴン。街人に散々珍しがられた挙句、手錠をかけられ、輝矢たちが連れてこられたのは、厚い鉄格子のよくありがちな地下牢であった。
「だいたい何で調査依頼とかしてないわけぇ？それでも警察ぅ？」
「だっから虎国はなっ、外交手段が一切ないんだってっ！お前らも聞いたろ？オトポリも知らないんだぜ？」
「それにしても来てすぐに捕まるなんて……」

「やっぱゴンさんのガラが悪いせいっスかねぇ～っ！アッハっ……！って、ぎゃああっ！！」
陽気に笑い飛ばした羊スケに、ゴンの拳が振り下ろされる。
「とにかくどうすんだぁ？逃げるってんならすぐにでも“瞬花”でっ……」
「そりゃマズいだろ。余計に話なんて聞けない状況になっちまう」
「そっか」
ハチの言葉を、冷静な表情で返すゴン。
「とりあえず街人とかじゃなくってもっとトップの人間と話をしねぇーとなぁ」
ゴンが少し考え込むように首を捻る。
「国主クラスの立場のヤツらなら、いくら何でもオトポリのことくらい知ってるだろうし」
「国主クラスの立場の方が、こんな地下牢に来るとは思えませんけどね」
「うっ……」
輝矢の指摘に、ゴンが少し表情を引きつる。
「まっ、まぁここは辛抱強くだなぁっ……！」
『これはっ……！！姫様っっ！！！』
『……っ』
「姫っ？」
地下牢への通用口にいる見張りたちの声に、輝矢やゴンたちが敏感に反応し、顔を上げる。
「侵入者というのは？」
「はっ！この中ですっ！」

「会わせて」
「えっ？あっ、しかし姫様っ……！」
「いいから」
「はっ！」

見張りの者と、姫と呼ばれている女の会話が聞こえた後、通用口の扉を開ける音がする。

「おおっ！ほれ見ろっ！言った通りだろっっ！？」
「こんな旨いこと行くか？フツー」
「ヒメさんという名のお手伝いさんとかでは？」

得意げに笑うゴンと、あまり期待していない様子を見せるハチと輝矢。そんな会話をしている中、通用口から階段を降りてくる足音が聞こえてくる。

「やっぱり……貴女たちだったのね……」

『えっ……？』

顔を上げ、牢の前へと降り立ったその人物を見る輝矢たち。

『あああっっ！！！』

「ンフっ！」

目を見開くハチ、モンキ、ユキジ。そこに立っていたのは、どこか見覚えのある白髪、青目のドレスを纏った色白の美しい少女。それは白雪であった。

『あああああああああっっ！！』

『……っ？』

白雪とその両脇にいる鈴白、芹の姿に、思わず指を差して大声を出す3匹。そんな3匹の横で、ゴンと羊スケは、状況が呑み込めていない様子で首をかしげる。

「久しぶりねっ……竹取輝矢っ……」

「アナタはっ……」

含んだような笑みを向けてくる白雪を見て、少し真剣な表情を見せる輝矢。

「……誰でしたっけ？」

「だあああああああっ！！」

眉をひそめる輝矢に、気取っていた白雪が勢いよくズッコケる。

「私よっ！！私っ！！西ではけっこう有名な退治屋で、商売敵の貴女に勝負を仕掛けたあの白雪よっ！！！」

「白雪っ？」

身を乗り出して解説をする白雪に、またしても首をかしげる輝矢。

「南国の街に雪を降らせて、若い青年を氷付けにするという、何とも卑劣な手を使った白雪様です」

「おまけにお気に入りのハチお兄ちゃんをさらって、惚れリンゴで同士討ちさせた、汚い汚い白雪様です」

「うっさいわよっっ！！！アンタたちっっ！！！」

笑顔で説明を加える鈴白と芹に、白雪が勢いよく怒鳴りつける。

「ああ、白雪虎昌ですか」

「フルネームで言うんじゃないわよっ！！下の名前、気に入ってないんだからっっ！！！」

やっと思い出した様子でポンと手を叩く輝矢に、またしても白雪が怒鳴りつける。
「お前らの知り合いって、うっさいヤツばっかだなぁ」
「ゴンさんに言われちゃお終いっスよねぇっ！って、ぎゃあああっ！！」
笑顔で余計なことを言う羊スケに、ゴンの拳が振り下ろされた。
「でっ、その虎ンポリンがこんな所で何をやってらっしゃるんです？」
「あっ、桜時様ぁぁぁぁっ！お久しブリ大根っ！」
「おっおうっ……」
「……“月器っ……」
「それは止めときなよぉ」
輝矢の問いかけを無視して、笑顔でハチへと手を振る白雪。そんな白雪に月器を目覚めさせようとする輝矢を、ユキジが軽く止める。
「っていうか、“何してるの？”はコッチのセリフよっ」
『へっ？』
「貴女たちこそ、何してるのよ？私の国で」
「私のっ……？」
「国っ……？」
白雪の言葉に、一斉に首をかしげる輝矢と3匹。
「それってぇ～っ……」
「私の名は白雪虎昌。下の名前は気に入ってないけど、この虎国の国主・白雪虎克の娘よっ」

『えっ……えええええっっ！？』

身分を明かす白雪に、輝矢と3匹がこの上なく驚いた声をあげる。

「ウソだなっ」

「ウソだねぇ」

「そんな現実味に欠けるウソは面白くないですよ？」

「ホントよっっっ！！！！！」

ウソとしか受け取らない輝矢たちに、白雪がかなりムキになって怒鳴り返す。

「ったく、失礼な連中ねぇっ！」

「皆さん、信じたくないでしょうが、これが現実です」

「アンタも大概、失礼ねっっ！！！」

輝矢たちを説得するように言う鈴白にも、白雪が勢いよく怒鳴る。

「そういえば貴方たちっ」

『……っ？』

怒鳴ってばかりいた白雪が、我に返って冷静な表情でゴンと羊スケの方を見る。

「その制服からしてオトポリね？オトポリが来てるってことは、やっぱり鬼人関連か何かでっ……」

「ううっ……！！」

「へっ？」

急に身をかがめるゴンに、白雪が言葉を止めて首をかしげる。

「やっとっ……！！やっとオトポリを知ってるヤツがっ……！！！」

「良かったっスねぇ～ゴンさぁ～んっ」

「……。」

涙ぐむゴンと笑顔を見せる羊スケに、白雪が呆れたように固まる。

「まっまぁとりあえず牢から出してあげるわっ。詳しい話は上でしましょっ。ちょっとっ！」

白雪が階段の上の見張りを呼ぶ。
「桜時様だけお出ししてっ」
『おいっっっ！！！！！』

第１６章　二つの再会　★３（後書き）

１０１話からもよろしくです。

第１６章　二つの再会　★４

虎国、街を見渡せる雪山の山頂。虎国主・白雪虎克の屋敷。１階・応接室。

「ふぅ～んっ……鬼人化した人間ねぇ～っ……」

白雪のお陰で何とか地下牢から出ることが出来た輝矢たちは、客人として応接室へと通され、入れられた紅茶を飲みながら、事の経緯を白雪に話した。

「しかも発生地域が虎国周辺に集中してるってわけ」

「ああっ」

興味深そうに言う白雪に対し、向かいに座るゴンが真剣な表情で頷いた。

「もし何か知ってるか、知ってそうなヤツがいるんだったら教えて欲しい」

「……これでも私は、可愛い姫をやりながら、虎国最強の鬼人退治屋もこなしてる万能少女よっ？」

「鈴白が化けた鏡ばかり見ているから現実を知らないんですねぇ……」

「どういう意味よっっ！！！」

輝矢のトゲのある言葉に、思わず席を立って怒鳴る白雪。

「うっうんっ、だからぁ虎国の鬼人情報は、この国にいる誰よりも詳しいわっ」

白雪が再び席に付き、話を続ける。

「でもっ、この国の人間が鬼人化したって話は聞いたことないし、最近、普通の鬼人だって現れてないわっ」

『うんうんっ』

白雪の言葉に、後方に立っている鈴白と芹が深々と頷く。

「だいたいいくら孤立したこんな国でも、国民が鬼人化なんてしたら、龍国に報告くらい入れるわよっ」

「そうか……」
確かに最もである白雪の話に、ゴンが少し考え込むように俯く。
「まぁっ？貴方たちがどうしてもってゆうならぁ、調査のお手伝いくらいしてあげてもいいけどぉっ」
「じゃあとりあえず国の周囲の散策でもすっか」
「そうですね」
「聞きなさいよっっ！！！」
手伝いをアピールする白雪を無視して話を進め、席から立ち上がる輝矢とゴン。
「ったくっ！勝手に出歩いて、まぁ～た街人に捕まっても知らないからっ！」
「あっ、じゃあ“この方々は私の尊敬する竹取輝矢様ご一行です”ってお知らせしといてもらえません？」
「誰がじゃあっっっ！！！！」
「とっ……とととととととっ……虎昌っ……」
『……っ？』
漫才のような言い合いをしていた輝矢と白雪が、白雪の下の名前を呼ぶ、かすれそうな小さな声に振り向く。
「あれっ？」
しかし、輝矢が振り返った先の応接室の入口付近には、人の姿などない。
「空耳ですかね？」
「ふぅっ……」
「……っ？」
首をかしげた輝矢の隣で、白雪が一息ついた後、ゆっくりと入口付近へと歩いて行く。そんな白雪の背中を見つめながら、またしても首をかしげる輝矢。
「そんな所に隠れてないで、とっとと出て来たら？」
『……っ？』
皆が不思議そうに見つめる中、白雪が応接室の入口付近にある観

葉植物の植木を動かす。
「パパっ、ママっ」
『……っ！』
動かした植木の後ろから姿を現したのは、貴族らしい豪華な服を着た小太りの中年男と、紫色のドレスを身に纏った３０代か４０代くらいの白髪の美しい女性であった。
『ひえええっっっ！！！！』
『えっ……？』
怯えるように再び観葉植物の背後に身を隠すその２人に、輝矢たちが目を丸くする。
「何やってんのよっっ！！とっとと出て来なさいよっっ！！！」
「無理無理無理っっ！！パパっ！あんな知らない人ばっかりの所になんて出られないよっ！虎昌ちゃんっ！」
「そうよぉ～っ！虎昌ちゃんっ！ママたちの代わりにママたちの紹介して来て頂戴っ！！」
「あのねぇっ……！！」
「白雪っ……」
「……っ？」
２人を引っ張り出そうとした白雪が、輝矢の声に振り返る。
「そちらはっ……？」
輝矢が少し怪訝そうな表情を見せて問いかける。
「ああっ、じゃあもう代わりに言うわっ！この２人は白雪　虎克（とらかつ）とマーサ。私の親で、つまり虎国主夫婦よっ」
『どっ……どうも……』
白雪の紹介に、虎克とマーサが聞き取れないほどの小さな声を出しながら頭を下げる。
「あれがっ……国主っ……？」
「ウチの長官より威厳ねぇーなっ」
そんな２人に呆れたような表情を見せるゴンとハチ。
「パパとママは極度のあがり症な上、異常なまでに人見知りが激し

くてねっ……」
両親を見下ろしながら、どこか疲れたように肩を落とす白雪。
「お陰で他国との外交が一切、出来ないのよっ……」
『それでっ!!?』
虎国が他国との外交をしないわけを知り、呆れ驚いたように叫ぶ皆。
「でっ、とっ……とととととと虎昌ちゃんっ……あの方たちっ……虎国にななななな何しに来たのっ……？」
「ああっ、それがねっ」
虎克の問いかけに、答えようとする白雪。
「雀国の王子様である桜時様がぁ、白雪と婚約を結びたいってわざわざっ！」
「ウソをつけぇぇぇぇっっ!!!」
笑顔で答える白雪に、ハチが全力で突っ込む。
「ほっ……ほほほほほほほ本当かっ!?」
「だっからウソだっつってんだろうがっっっ!!!!」
目を輝かせる虎克とマーサに、ハチがもう1度突っ込みを入れる。
「そんなに照れないでよぉ～桜時様っ！将来的な話よぉ～っ？」
「照れてねぇーしっ、将来的にもねぇーよっっ!!!」
「白雪っ……」
ハチが怒鳴りあげている後ろから、輝矢が凍りつきそうなほどに冷たい目を白雪へと向ける。
「あまり調子こいてると……刺しますよ……？」
「あっらぁ？別に軽ぅ～く避けてみせるから、いつ刺していただいても結構よぉ？」
「……っ」
輝矢の脅迫に負けることなく言い返す白雪に、輝矢が表情を引きつる。
「まったく……あんな内気な親から、どうしてこんな図々しい娘が出来たのか……」

「放っといてよっっ！！ってか、貴女だけには図々しいとか言われたくないわっ！！」
どんどんと険悪になっていく輝矢と白雪。
「そういえばぁ……貴女には借りがあったわねぇ……」
「また打ち負かして差し上げましょうかっ？」
「ああっ！？そこまで言うならやってやろうじゃないのっ！！次はコッチが打ち負かしてやるわっ！！」
「私がアナタになど、負けるはずがないでしょう？」
「何をぉぉぉぉ～～っっ！！？」
今にも戦いを始めそうなほど悪い空気となっていく輝矢と白雪。
「まぁまぁ、白雪様っ」
「落ち着けってぇ～輝矢ぁぁぁ～～～んっ」
鈴白とモンキが、それぞれ止めに入る。

「随分と賑やかなことですな……」
『……っ』

応接室の扉が開くとともに入ってくるしゃがれた声に、言い争っていた輝矢と白雪が言葉を止めて振り返る。

「客人ですかな……？」

「……っ」

「……っ！」

そこに入ってきたのは、赤いちゃんちゃんこを身に纏った、小柄な白髪の老人であった。腰を曲げ、杖をつきながらゆっくりと部屋の中へと入ってくる。その横には金髪に細い目の若い青年が立っている。

その2人を見て、眉をひそめる輝矢と目を見開くゴン。

――――じゃが一族を抜けた所で、お前が見る世界は変わりはせん……――――

「……っ」

「……っ？」

老人から勢いよく目を逸らすゴンを見て、輝矢は少し表情を曇らせた。

「おおっ！これは紺染(こんそめ)っ！我が有能な副国主よっ！」

「副国主っ？」

「……っ」

まったく人見知りの様子なく立ち上がり、紺染と呼んだ老人と握手を交わす虎克。虎克の言葉に、輝矢は眉をひそめ、その横の白雪もどこか険しい表情を見せた。

「ギンも、いつもご苦労だなっ」

「有難きお言葉にございます……」

笑顔を向ける虎克に、ギンと呼ばれた青年が深々と頭を下げる。

「それよりも国主、客人ですかな？」

「んっ？あっああっ！……ひえええっっ！！」

『……。』

紺染の言葉に頷き、勢いよく輝矢たちの方を振り返った虎克が、集まる視線に怯えるようにして再び観葉植物の後方へと隠れていってしまう。

「とっ……とととととと虎昌ちゃんっ……紺染たちにも紹介をっ…

…」
「あのねっ……」
そんな虎克に、呆れたように肩を落とす白雪。
「どうやら……この国の方々ではないようですが……んっ？」
輝矢たちを見回していた紺染が、ゴンの所で視線を止める。
「……。」
「……っ」
まるで紺染から顔を隠すように深く俯いているゴンに、紺染は表情を曇らせた。
「私の客人よっ」
「姫様のっ？」
白雪が紺染の前へ出て、どこかケンカを売るような強い口調で言い放つ。
「しかしぃ……いくら姫様のお知り合いとはいえ、そう易々と信用していいものかと……」
『……っ』
どこかトゲのある紺染の言葉に、眉をひそめる輝矢やゴン。
「どういう意味っ？」
白雪が鋭い瞳で聞き返す。
「姫様もご存知のように、鬼人はいつ、どのようにして潜入して来るかもわかりません……」
疑いの目を輝矢たちへと向ける紺染。
「鬼人が擬態している可能性の高い、きな臭い者たちを……早々、信用するわけには……」
「きな臭いっ？そんなの言ったら、貴方の方が余程きな臭いんじゃ

ないっ？」
「……っ」
「虎昌ちゃんっ……！」
挑発するような白雪の言葉に、少し顔をしかめる紺染。そんな白雪を止めるように、虎克が声を出す。
「紺染は副国主だよぉ～？」
「そうよぉ～パパの代わりに国のお仕事あれこれやってくれたり、大助かりなのよぉ～？」
「余所者は余所者でしょっ」
必死に紺染をフォローする父と母に、白雪は厳しい表情を見せた。
「私は貴方のことなんて信用してませんから」
「……わかりました。失礼致しました」
鋭い瞳を向ける白雪に、紺染は少し間をおいた後、ゆっくりと頭を下げた。
「では、私はこれにて失礼いたします。虎克様、失礼」
「あっ、ああっ」
白雪と輝矢たち、そして虎克とマーサにそれぞれ丁寧に頭を下げて、紺染とギンは応接室を後にした。
「とっ……とととととととととにかくっ……」
「何かお話になるんでしたら、もう少し大きな声でお願いします」
観葉植物の裏から、小声で輝矢たちに話しかける虎克に、鋭く要求する輝矢。
「とととととと虎昌ちゃんのお友達を疑いたくはありませんがっ……紺染の言うことも最もですっ……」
「……っ」
虎克の言葉に、輝矢が少し眉をひそめる。
「この国での貴方がたの行動は、せっせせせせせせせ制限させてもらいます……」
「パパっ……！」
白雪が異議を唱えるように身を乗り出す。

「とととととはいえっ……今日はもう遅いっ……ははは話は明日にしましょう……」
「今夜はここにお泊まりになって下さい。また街に出られて、騒ぎになっても困りますから」
『……。』
輝矢たちを警戒するような虎克とマーサの言葉に、皆、どこか険しい表情を見せた。
「ちょっ……！パパっ！ママっ！」
『失礼っ……』
引き止める白雪の言葉を聞くこともなく、虎克とマーサは観葉植物を引きずりながら、陰に隠れたまま応接室を出て行った。
「もうっ！！」
「ぎゃあああああっっっ！！！」
２人が出て行った後、白雪が怒りをぶつけるように鈴白を殴る。
「紺染の言うことなら、何っでも聞くんだからっっ！！！」
「痛つつつつっ……」
「大丈夫っ……？お兄ちゃんっ……」
怒って叫ぶ白雪の横で、頭を抱えてしゃがみ込む鈴白に、心配そうに声をかける芹。
「白雪っ」
「なぁにぃ～っ？桜時様っ！」
「ううっ……」
ハートを振り撒いて聞き返してくる白雪に、呼んでは見たものの一歩下がるハチ。
「あのっ……紺染ってヤツはっ……？」
「ああっ」
白雪が急に表情を鋭くする。
「もう１０年以上も前にこの国にやって来たの。自分では世界を旅してる学者だとか何とか言ってたけどっ」
「学者ぁ？」

「学者面じゃなかったよねぇ～」
白雪の説明に、納得いかない様子で首をかしげるモンキとユキジ。
「あっの政治とかサッパリなパパに代わって国政を仕切ってねっ、パパ達もすっかり気に入ってるけどっ」
表情を曇らせる白雪。
「どぉ～も怪しいのよねぇ～」
「白雪に言われたらお終いですね」
「どういう意味よっっ！！！」
輝矢の漏らした一言に、白雪が勢いよく怒鳴りあげる。
「私の勘ではアイツは鬼人なんじゃないかと思うのよっ！」
「はい、はずれっ」
「さっきから何なのよっっ！！アンタはっっ！！」
いちいち突っかかってくる輝矢に、いちいち怒鳴り返す白雪。これでは会話の進みも遅い。

「んん～でも俺もあのじいさん、相当怪しい思うけどなぁ～」
「まぁ怪しすぎて逆に怪しくないよねぇ」
「どう思いますぅ～っ？ゴンさんっ」

「……。」

モンキとユキジの言葉を受けて羊スケが振り向くと、ゴンはボーっとするように下を向いていた。

「ゴンさんっ？」
「うおっ？」
眉をひそめてもう1度名を呼んだ羊スケの声に、ゴンがやっと気づいたのか、驚いたように声を漏らす。
「あっああ～、とりあえず今日は早く休んでっ、明日っからの調査に備えるかっ！」

「そうっスねぇ～」
どこか作ったような笑顔で言い放つゴンに、羊スケは特に不思議がることもなく素直に頷く。
「ボク、雪溶かすので疲れちゃったぁ～」
「俺っ、めっちゃ腹減ったわぁ～っ」
「すぐに食事と部屋の準備させるわっ。鈴白、芹っ」
『はいっ！』
白雪に指示され、鈴白と芹が素早く応接室を出て行く。
「桜時様は私の部屋で眠るぅ～っ？」
「ノーサンキューでっ」
白雪の誘いをすぐさま断ったハチ。

「……。」

「……っ」

そんなハチの横で輝矢は、俯いたままのゴンを厳しい表情で見つめていた。

第１６章　二つの再会　★４（後書き）

二つめの再会もいよいよ…？
次回で１６章、終了になります。
ご意見・ご感想、お待ちしております。

第16章　二つの再会　★5

1時間後。白雪の屋敷1階・大食堂。
「うっひゃあああああああっ！！」
縦長の巨大なテーブルに所狭しと並ぶ、見たこともない数々の高級料理に、モンキが悲鳴にも似た歓声をあげる。下がりきった口元からは今にも涎が垂れ落ちそうであった。
「生きてて良かったなぁ～っ！羊スケっ！！」
「そうっスねぇ～っ！門貴さんっ！！」
「大袈裟っ……」
固い握手をするモンキと羊スケに、ユキジが呆れた表情を見せる。
「オカワリならいっくらでもあるから、じゃんじゃん食べてねっ！」
「“いっくらでも”はありませんよ、白雪様」
「うっさいわねっ！！細かい突っ込み入れてくんじゃないわよっ！！」
小声で囁く鈴白に、白雪が勢いよく怒鳴り返す。
「じゃあいっただっきまぁーっ……！！」
「あれっ？ゴンは？」
モンキのいただきますを遮って、ハチが羊スケへと問いかける。
確かに大食堂にゴンの姿はなかった。
「さぁ～？トイレじゃないっスかぁ？」
「適当だなっ、お前っ……」
興味なさそうに答える羊スケに、呆れた顔を見せるハチ。
「どうしたんだろっ？さっきまで居たのにっ」
「……っ」
首をかしげるハチの横で、輝矢が少し眉をひそめる。
「じゃあ改めてっ！いっただっきまぁぁーっ……！！」
「ご馳走サマでした」
「早っっ！！！」

再びいただきますを言おうとしたモンキが、そう言って立ち上がる輝矢に思わず突っ込みを入れる。
「せっかくのご馳走やのにもっと食べんでええんか……って、料理ほとんどなくなっとうやんっっ！！！」
大食堂の出口へと歩いて行く輝矢に問いかけようとしたモンキが、テーブルの上の料理が半分ほどなくなっていることに気づき、驚いたように声をあげる。
「何っ？貴女、どっか行くの？」
「散歩です」
「善良な使用人たちに怪我させないでよっ？」
「アナタじゃあるまいし、そんな非常識なことしませんよ」
「誰がよっ！！」
白雪と少しモメながら、輝矢がそそくさと大食堂を後にする。
「ってか、輝矢ん、大食いチャンピオン？」
「どうゆう胃袋してんだ？アイツっ」
「人間離れした食事スピードだったよねぇ」
「口が2つあるんじゃないっスかぁ？」
『口がっ……2つっ……』
羊スケのふとした発言に、口が2つある輝矢をそれぞれに想像するハチ、モンキ、ユキジ。
「かっわゆぅぅ～～いっ！」
「妖怪……」
「ブルブルブルっ」
「あれっ？」
三者三様の反応を示す3匹に、羊スケは不思議そうに首をかしげた。

同刻。白雪の屋敷、裏庭。

「……。」

夜の冷え込みに、暗い空から降り始める雪。雪を見上げ、紺染は少し目を細めた。

「……やはり来たか……」

紺染がゆっくりと顔を下ろし、振り返る。

「ゴン……」

「……。」

紺染の振り返った先には、厳しい表情を見せたゴンの姿があった。

「久しいな……あれからもう12年にもなるか……」

ゴンを見つめ、どこか懐かしそうに微笑む紺染。

「随分と大きくなったものじゃ……」

「じじいは12年経ってもじじいのままだなっ」

「……口の悪さは変わっておらんようだな……」

鋭い瞳を向けるゴンに、紺染が少し肩を落とした。

「アンタがまだ虎国にいたとはなっ。少し意外だったぜっ」

「……っ」

ゴンが紺染に話しかけている頃、大食堂を抜けてきた輝矢が裏庭に着く。

2人に見つからないよう木陰に身を隠しながら、2人の会話に耳を傾ける輝矢。

「もうとっくに捨て去ってると思ってたからよっ」

紺染に笑顔を向けるゴンであったが、その瞳は冷たく、少しも笑っていなかった。

「虎国は四大国に数えられるほどの国……外交はないが、それが逆に過ごしやすくもある……」

ゴンの冷たい目に少しも動じることなく、平然と言葉を続けていく紺染。
「今の所……捨て去る理由もない……」
「……っ」
紺染の言葉に、ゴンが少し眉をひそめる。
「“虎の威をかる狐”ってか……」
鋭く睨みつけるように紺染を見るゴン。
「相変わらずだな、じじいっ……」
「ああ……私は何も変わっておらんよ……」
皮肉ったゴンの言葉を、紺染は素直に受け止めるように頷く。
「お前が見切りを付けた、あの時の私のままじゃ……ゴン……」
「……。」
微笑みかけてくる紺染に、ゴンはさらに厳しい表情を見せた後、そっと目を逸らした。
「他の連中はっ？」
「お前と同じように一族を抜けた者もおるし、他国へ渡った者もおる……今では“狐族（こぞく）”も私とギンのみだ……」
「……そうかっ……」
紺染の話に、ゴンが俯いたまま頷く。
「それは……御伽警察の制服か……？」
「……まぁなっ……」
「お前も少しはわかってきたようじゃな、ゴン」
「あっ？」
ゴンが少し表情をしかめて、顔を上げる。
「龍国は御伽界一の大国。身を隠すには最適の国じゃ」
「なっ……！」
「私達が“虎の威をかる狐”だと言うのなら、お前は差し詰め“龍の威をかる狐”といった所かのぅ？」
「ちっ……！違うっ！！俺はそんなつもりで龍国にいるんじゃないっっ！！」

紺染の言葉に、ゴンが思わず声を荒げる。
「俺はっ……！俺はただっ……！」
「ゴンっ……」
「……っ？」
改めて名を呼ぶ紺染に、ゴンが言葉を止めて振り向く。
「お前が一族を抜ける時、私が言った言葉を覚えておるか……？」
「……っ」

――――お前が人を信じた所で、人は誰もお前を信じたりはせんよ……――――

「……ああっ……」
ゴンが少し俯いて頷く。
「あれが全てじゃ……いずれ龍国の仲間、オトポリの仲間、全てがお前を裏切るじゃろう……」
「……っ」
紺染のその言葉に、ゴンが唇を噛み締め、きつく拳を握り締める。
「でもっ……」
迷うように声を漏らすゴン。

――――俺は、君を信じますよっ……？――――

「でもっ……俺はっ……」
「じゃが、私はお前を裏切らん」
「えっ……？」
思いがけない紺染の言葉に、ゴンが少し驚いたように目を見開く。

「また私の元へ戻って来んか……？ゴン……」
「なっ……！」
手を差し出す紺染に、顔をしかめるゴン。
「何をっ……！誰がお前のところになんかっ……！」
「今のお前なら、必ず私の役に立つ」
「……っ」
強く言い切る紺染に、思わず言葉を止めてしまうゴン。
「我らは数少ない同志ではないかっ……」
「……。」
差し出された手に、ゴンが戸惑うように俯く。
「共に理想の一族を作ろうぞっ……ゴンっ……」
「……っ」

「……。」
ゴンと紺染のやり取りを聞きながら、輝矢はそっと目を細めた。

第16章　二つの再会　★5（後書き）

17章へ続きます。

第17章　裏切りの一族　☆1（前書き）

第17章です。
よろしくお願いします。

第17章　裏切りの一族　☆1

輝矢たちが虎国へとやって来た、翌朝。虎国主・白雪虎克の屋敷。
「はぁぁーーいっっ！！とっとと起きたっ！！起きたぁーっっ！！！」
『んんっ……』
輝矢たちの眠る客間に飛び込んできて、いきなり大きな声を出して手を叩いているのは白雪。その音に、並んだベッドに寝ていた輝矢たちがゆっくりと目を覚ます。
「もう……朝ですかっ……？」
輝矢が目をこすりながら、ダルそうに起き上がる。
「ええっ！5時よっ！」
『早ぇぇぇーーよっっっ！！！！』
寝起きのわりに声を揃えてしっかりと突っ込むハチ、モンキ、ユキジの3匹。
「だってぇ鬼人化の調査に行くんでしょ～？とっとと起きてとっとと動かないとダメじゃないっ！」
「何かめっちゃ仕切ってるねぇ」
「ああいう独りよがりな女ほど、仕切ってみたくなるものなんです」
「うっさいわねっっ！！！」
輝矢とユキジの小声の会話にも、しっかり耳を立てて怒鳴り返す白雪。
「ふわぁ～あ、仕方ねぇ。起きるかぁ」
「あっ、桜時様っ！お目覚めのキッスはどぉ～おっ？」
「いらねぇーよっっっ！！！」
「そうですよ。ハチは私のキッスだけで間に合ってるんです」
「お前のもいらねぇーよっっ！！！」
輝矢と白雪に囲まれ、朝から全開で怒鳴りまくるハチ。

「失礼するっスぅ〜っ」
そこへゴンとともに別室で休んでいた羊スケが入ってくる。
「あれっ？ゴンさん、来てないっスかぁ〜？」
『えっ？』
部屋を見回しながらそう言う羊スケに、寝起きの皆が目を丸くする。
「来てねぇーけど？」
「何やぁ？ゴンゴンのヤツ、おらんのかぁ？」
「はいっ。朝、俺が起きたらもう部屋にはいなくてっ」
「……っ」
ハチたちと羊スケの会話を聞き、少し眉をひそめる輝矢。
「屋敷内で迷子にでもなってるのかしら？鈴白、芹っ」
『はっ！』
白雪が名を呼ぶと、どこからともなく鈴白と芹が現れる。
「屋敷内にはおられません」
「外へお出掛けになったのではないでしょうか」
「ですって」
「お出掛けぇ？」
2人の報告に、羊スケが大きく首をかしげる。
「こんな朝早くからっスかぁ〜？」
「もう調査にいっちゃったんじゃないのぉ〜？あの人、単独行動とか好きそうじゃんっ」
「確かに好きっスけどぉ……行く時はいっつも声かけてから行くのになぁ〜っ」
「……。」
戸惑うようにさらに首をかしげる羊スケの言葉を聞きながら、そっと俯く輝矢。
――――共に理想の一族を作ろうぞ……ゴン……――――

「……っ」
昨夜の紺染の言葉が、輝矢の脳裏に過ぎった。

朝食を終えたハチたちは、白雪の案内の元、鬼人化人間の情報を得るため、街に聞き込みに出た。
「おっ！白雪姫っ！」
『……っ？』
通りを歩いていると沿いにある店の主人らしき男が、軽い口調で白雪に声をかける。
「昨日の侵入者ってのっ、姫のお客だったんだってぇ～っ？手荒なマネしちまって悪かったなぁっ！」
「まったくだわっ」
そんな親しげに話しかけてくる男に、笑顔を向ける白雪。
「おっ！白雪姫っ！そっちのイヌさんっ、雀国の王子なんだってぇ？姫もスミにおけないねぇ～っ！」
「はっ……？」
「結婚披露宴は私たちが盛大にやったげるからねぇ～っ！姫サマっ！」
「はぁっ！？」
次々と白雪に声をかけてくる街人の言葉に、いちいち口を開けて驚くハチ。
「みんなっ、ありがとうっ！白雪っ、幸せになるわぁっ！」
「はぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！？」
幸せの溢れたような笑顔で街人に手を振る白雪に、ハチの表情が歪みまくる。

「お前っ、街人に俺らのこと、なんて説明したんだよっ？」
「えっ？“白雪の婚約者・桜時様とその一行”ってっ！」
「あのなぁっ……」
笑顔で答える白雪に、ハチががっくりと肩を落とす。
「んでぇっ？姫っ！明日の夜は2人で“アレ”を見るのかいっ！？」
「アレっ？」
街人の言葉に、首をかしげるハチ。
「えええ～っ？“アレ”、明日なのぉ～っ？超ラッキーっ！」
「そりゃまた都合のイイ時にぃっ」
「きっと神様が2人を導いて下さってんのよぉ～っ！」
「やっぱりぃ～っ！」
「おっおいっ！」
「……っ？」
街人たちに持てはやされ、浮かれきった笑みを浮べている白雪にハチが声をかける。
「なぁ～にぃ～っ？ダーリンっ！」
「誰がダーリンだっっ！！！ってか、“アレ”って何だよっ？」
「えっ？ああっ♪」
ハチの問いかけに、何やら嬉しそうに微笑む白雪。
「この辺りではねっ、満月の夜、月の光に反射して七色の雪の降る“ムーンスター”って現象があるのっ」
「ムーンスター？」
「そうっ！それを一緒に見たカップルはぁ、必ず結ばれるってゆー素敵な言い伝えまであるのよっ！！」
「へぇ～っ……」
目を輝かせる白雪に対し、まったく興味なさそうに頷くハチ。
「明日はちょうど満月らしいからぁ、一緒にムーンスター見ようねっ！桜時様っ！！」
「見ねぇーよっっっ！！！！！」
白雪の誘いを、ハチが勢いよく断る。

「きゃあああああああっっ！！照れた顔も可愛いっっ！！」
「照れてねぇっっっ！！！ぎゃあああああっっ！！！」
『ヒューっ！ヒューっ！』
白雪に抱きつかれ、ハチが気絶寸前の悲鳴をあげる中、街人たちからは祝福の声が飛ぶ。
「あぁ～あぁ～、輝矢がいないからってやりたい放題だね。白雪っ」
「せやなぁ～って、その輝矢んはどこ行ったん？」
「羊スケと街の周囲の見回りだってぇ～ついでにゴンも探してくるとか言ってたよぉ」
「ああぁ～、そういやゴンゴンも行方不明中やったなぁ」
「ってか、お前らちっとは助けろよっっっ！！！」
『へっ？』
暢気に話していたモンキとユキジの元へ、白雪の手の中からやっとこさ避難してきたらしきボロボロのハチがやって来て、勢いよく怒鳴る。
「ったくっ、人が……ってかイヌがピンチだっつーのに、暢気にしゃべりやがってっ！」
「あっ、ピンチだったのぉ～？」
「俺にとっては代わって欲しいくらい羨ましいこっちゃけどなぁ～」
不機嫌なハチに対し、モンキとユキジはわりと興味なさそうに答える。
「おっ！白雪姫っ！今日はいぃ～い肉が入ったんだっ！持ってかないかいっ？」
「ウチの卵も持ってっておくれよっ！姫っ！」
「こっちもっ！」
「ウチもあげるよっ！姫っ！！」
「ありがとっ！みんなっ、ありがとっ！」
『……。』
街人たちから次々に物を貰う白雪の姿を見て、少し驚いたような表情を見せるハチたち3匹。

「意外と人気あんねんなぁ」
「猫かぶってんじゃないのぉ～？トラだしぃ」
「俺なんか国の人間に顔も知られてねぇーのになぁ」
「それは桜時がイヌで、そのこと朱実が隠してたからでしょ？」
「ううっ……」
ユキジの厳しい言葉に、少し落ち込むハチ。
「まぁ桜時はともかくとしても、一般人とお姫様にしては親し過ぎるよねぇ～」
「あっれが姫様のいい所なんだぁっ」
『……っ？』
あれこれと話をしていたハチたちに、街人らしき中年男が声をかけてきた。
「人見知りの激しいご両親に代わって俺らと交流を深めようと、ああやって何度も街に足を運ばれててなぁ」
「へぇっ」
男の言葉に、感心するように声を漏らすユキジ。
「こんな雪に覆われた何の外交もない国だ。街に問題は度々起こるだがっ」
笑顔で白雪を見つめる男。
「その度に姫様は街の人間の話を親身になって聞いてくれて、国主にその対策を掛け合ってくれたのよっ」
「……っ」
「街の人間にとっちゃあ、姫様は神ってトコだなっ！アッハッハっ！」
「……すげぇなっ……」
ポツリと言葉を漏らすハチ。白雪のやって来たことがどれほど大変なことであるのか、国主を務める朱実家にいたハチにはよくわかる。並大抵の努力でできることではない。
「と、いうわけでぇ、姫様を幸せにしてやってくれっっ！！！」
「それはちょっと……」

目を輝かせて手を取ってくる男に、気まずそうに目を背けるハチ。
「我らが姫様の幸せを頼んだぁぁぁぁぁ～～～っっっ！！！」
「だからぁっ……！！」
「そうそうっ！あぁ～んなコンソメとか何とかゆーヤツより、よっぽど姫様の方が信用できるよなぁ～っ！」
「……っ？」
横から口を挟んできた、まだ若い男の言葉に眉をひそめるハチ。
「コンソメって、あの副国主とかいう？」
「あっ？ああっ！俺はあぁ～んな胡散臭いヤツ、全っ然、信用してねぇーっ！」
「止せっ！国主の耳にでも入ったらっ……」
「うっせぇなぁっ！国主もどうかしてんだよっ！！あんなキツネヤローを信用するなんてっ……！」
「キツネっ……？」
男の言葉に、ハチが少しハッとした表情を見せる。
「あんな“裏切りの一族”っ……！」
「裏切りっ……？」

――――バァァァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――

『……っ！』
突如、聞こえてくる大きな破壊音に、白雪やハチたちが一斉に振り向く。
「なっ……何やぁっ？」
「きゃあああああああっっ！！！」
「うわあああああああっっ！！！」
『……っ！』
「悲鳴っ……？」

破壊音のした方から、尋常ではない悲鳴が聞こえてくると、皆の表情が一斉に強張る。
「クっ……！」
「あっ……！白雪っ……！」
強く拳を握り締め、１人、悲鳴の聞こえた方へと駆け出していってしまう白雪。
「ボクたちも行こうっ！」
「ああっ……！」
ハチたちも急いで、白雪の後を追う。

「ハァっ！ハァっ！ハァっ！」
ドレスの裾を持ち上げ、ヒールの靴を全力で走らせる白雪。
「……っ！」
道の前方に、粉々に破壊された家が見えてくる。
「どうしたのっ……！？うっ……！」
壊れた家の前で止まり、振り向いた白雪の表情が凍りつく。
「どうしたっ！？」
「何やっ！？何やっ！？」
白雪の元へと駆けつけるハチたち。
『なっ……！！』
ハチたちも大きく目を見開く。
「あれはっ……」
「グワアアアアッッ！！！」
「鬼人っ……」
そこには、赤々とした皮膚に金色の角を持った、巨大な鬼が立っていた。

その頃、虎国・北のはずれ。
「どこにもいないっスねぇ～ゴンさぁ～んっ」
雪に覆われた森を見回しながら、羊スケが肩を落とし気味に呟く。
「まったくどこ行っちゃったんだかっ……」
「……。」
「って、聞いてるっスかぁ～？輝矢さぁ～んっ」
羊スケの言葉にまったく答えることなく、森を徘徊しながら何かを探している様子の輝矢に、羊スケが少し不満げな顔で言い放った。
「聞いていますよ。答える必要性を感じていないだけで」
「ヒドい言われようっスねっ……」
切り捨てるような輝矢の言葉に、羊スケはさらに肩を落とした。
「だいたいさっきから何を探してっ……」
「……っ！」
「……っ？」
歩き回っていた輝矢が、何かを見つけたような表情を見せて立ち止まる。その様子に首をかしげる羊スケ。
「これはっ……」
「何かあったんスかぁ～？」
輝矢の見下ろした先に、地面に積もった雪に刻まれたくぼみがあった。
「足跡っ……？」
「……っ！輝矢さんっ！危ないっ！！」
「えっ……？」
「グワアアアアッッッ！！！！」
「……っ！」

危機迫った羊スケの声に輝矢が振り向くと、後方には輝矢に向かって爪を振り下ろしてくる巨大な赤鬼の姿。

「“月器っ……！」

輝矢が素早く右耳のピアスを弾く。

「三日月”っ……！」

目覚めさせた三日月を、赤鬼に向かって勢いよく振るう。

――――・・・・・・・・っっ！！！――――

「ギャアアアアアッッッ！！！！」

三日月に鋭く斬り裂かれ、激しい断末魔とともに砂となって掻き消える赤鬼。

「ふぅっ……」

「グワアアアアアッッッ！！！！」

「……っ！もう1匹っ……！？」

一息ついていた輝矢の後方から、さらに飛びかかってくる赤鬼がもう1匹。

「ガアアアアアアアッッッ！！！！」

「クっ……！」

迫り来る鋭い爪に、輝矢が必死に三日月を構え直す。

「“羊々ボール”っっ！！」

――――ピトッッ……！――――

「グガっ……？」

「……っ？」

横から飛んで来た綿飴のような白い玉が、赤鬼の右手にくっ付き、鋭い爪を覆い隠す。その玉に戸惑いを見せる赤鬼と輝矢。

「今のうちっスよぉ～っ！輝矢さぁ～んっ！」

「羊スケっ」

そう言って輝矢に手を振る羊スケ。

「グガッ……？グガガガッ……！」

「……っ」

羊々ボールを取ることが出来ずに苦戦している赤鬼を見て、輝矢が素早く三日月を構える。

「三日月っ……！」

「グガッ……！！」

―――――・・・・・・・・・・っっっ！！！！！―――――

「ギャアアアアアアアアッッッ！！！！！」

激しい断末魔を残して、もう1匹の赤鬼も砂となって掻き消えた。

「今度こそっ……いないですか？」

輝矢が周囲を見回しながら、月器をピアスへと戻す。

「輝矢さぁ～んっ！大丈夫っスかぁ～？」

羊スケが輝矢の元へと駆け寄ってくる。

「私が赤鬼などに負けるはずがないでしょう？」

「俺の羊々ボールなかったら、ヤバかったっスよね……？」

自信満々に答える輝矢に、呆れた表情を向ける羊スケ。

「でっ、今のヤツらは鬼人化人間っスかっ？」

「いえっ、鬼人化人間なら死ぬ前に1度、元の人間の姿に戻ります。今の2匹はごく普通の鬼人でしょう」

「じゃあ今回の件には関係なさそうっスねぇ～」

「……。」

少し残念そうに呟く羊スケの言葉を聞きながら、先ほどの地面に残る足跡を見下ろす輝矢。巨大で歪な足跡は、おそらくは鬼人のもの。

「……っ」

とある山の山頂付近へと続く足跡を見て、輝矢は少し厳しい表情を見せた。

「とにかく一旦、街へ戻りましょうかっ。ゴンさんも見つからない

っスしっ」

「……そうですねっ……」

第17章　裏切りの一族　☆2

「鬼人っ……」
虎国の街に突如として現れた赤鬼。その現場に駆けつけたハチ、モンキ、ユキジ、そして白雪。
「鬼人化したヤツかっ……！？」
「さぁなっ……！」

――――ボォォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――

ハチとモンキが素早く人化し、それぞれ村雨丸と如意棒を構える。

「ひっ……姫……様っ……」
「……っ？」
弱々しくか細い声に、白雪が振り向く。
「……っ！」
白雪が振り向いた先には、傷つき倒れている数人の街人の姿があった。
「姫っ……様っ……」
「逃げ……てっ……」
「……っ」
傷ついたその状況で白雪の身を案じる街人たち。白雪が唇を噛み締め、拳を握る手に力を込める。
「グハアッハッハァァ～～ッッ！！お前っ、虎国の姫なのかぁ～っ！そりゃあ好都合っ！！」
鋭い爪を日の光に輝かせた赤鬼が、高々と笑い上げる。
「お前を人質に、この国を乗っ取ってやろうっっ！！」
『……っ！』

赤鬼の言葉に、桜時と門貴が表情を鋭くして、村雨丸と如意棒を構える。
「由雉っ、怪我人の手当てをっ！」
「はいはいっ」
――――ボォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！！――――
桜時に言われ、ユキジが人化して怪我人の元へと駆け寄っていく。
「白雪っ、お前は下がってろっ！」
「白雪ちゃ～～～んっっ！！俺が守ってあげるからねぇ～～っっ！！」
「……っ」
2人の言葉を聞いた白雪が、勢いよく顔を上げる。
「があああああああっっ！！」
『うおおおっ！！』
急に獣のような叫び声をあげる白雪に、ビビったように後退する桜時と門貴。
「どっ……どないしたんやっ？白雪ちゃんっ」
「虎化もしてないのに虎になったかっ……？」
「……折角の桜時様のお言葉だけどっ……遠慮しておくわっ」
「へっ？」
「桜時様とサルは下がっててっ」
『えっ？』
そう言って前へ出る白雪に、目を丸くする桜時と門貴。
「でもぉ～白雪ちゃ～んっ」
「いいから下がってろっっ！！！」
「はい……」
白雪の気迫に押され、門貴が大人しく如意棒を下ろして下がる。
「おおっ？姫様、直々のお相手かぁ？光栄だなぁ～っ！」

「よっくも人の国で、こんな騒ぎ起こしてくれたわねぇ……」
余裕の笑みを浮べる赤鬼に対し、鋭く突き刺さるような瞳を向ける白雪。
「死んで償いなさいっっ！！“雪時雨”っっ！！」
白雪が両手から吹雪を放つ。
「グハアッハッハァァ～～ッッ！！雪などこの俺に効くかぁぁっっ！！“鬼炎”っっ！！」
赤鬼が大口を開き、赤々とした炎を放つ。
――――バァァァァァァァーーーーンッッッ！！！――――
白雪の吹雪と赤鬼の炎がぶつかり合う。
「そういや赤鬼は“火力”を使うんだったっ！」
「あかんっ！炎相手じゃ白雪ちゃんの雪も溶かされてまうわぁ～っ！！」
鬼炎に押し負けていく雪時雨に、桜時と門貴が表情を引きつる。
――――シュウウウゥゥゥゥゥゥ～～～ッッッ！！――――
「クっ……！」
やがて白雪の雪時雨は、鬼炎に蒸発して掻き消された。その光景に白雪が少し眉をひそめながら、飛んで来た鬼炎を横に飛んで避け

る。

「グハアッハッハッハァァァ～～～ッッッ！！！残念だったなっ！！俺に雪は効かっ……！」

「貴方こそっ……残念だったわねっ……」

「何っ……？」

白雪の言葉に、赤鬼が眉をひそめる。

「ここは雪の国よっ……」

「グハアッハッハッハァァァ～～～ッッッ！！！それがどうしっ……！！」

――――パァァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――

「んなっ……！！」

赤鬼が笑い飛ばそうとしたその瞬間、赤鬼の足元の雪が、噴き出すように舞い上がる。

「こっ……これはっ……！」

「……“雪柱”っ……」

「ううっ……！！」

――――ピキピキピキピキッッ……！！――――

赤鬼が足元から凍っていき、その危機迫った表情のまま、全身氷付けとなっていく。

「……“天誅”っ」

――――パリィィィィィィーーーーンッッッ！！！！――――

白雪がそう呟いた途端、赤鬼の氷像は粉々に砕き割れ、地面へと崩れ落ちた。

「私の国でっ……暴れたりするからよっ……」

崩れ落ちた赤鬼の氷像を、白雪はそっと踏み砕いた。

『はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～～っっ……』

そんな白雪の戦いっぷりを、唖然として見つめる桜時と門貴。

「強っ！」

「考えてみりゃあ、輝矢と互角で戦ってたヤツだもんな……赤鬼くらいで苦戦するわきゃねぇーよなっ……」

感心する門貴の横で、取り越し苦労に肩を落とす桜時。

「あっ……！みんなはっ……！？」

「もう平気ぃ～っ」

「そうっ……」

振り返った白雪が、由雉の答えにホッとしたように笑みをこぼす。

由雉の癒羽により、傷つき倒れていた街の人たちは、すっかり全快

で立ち上がっていた。
「貴方、けっこう使えるキジね。竹取輝矢と組むのなんてやめて、桜時様と一緒に私の所に来ないっ？」
「んん～っ、待遇次第かなっ？」
「つーか俺っ、お前んトコ行くとか言ってねぇーしっ」
白雪の勧誘に軽く答える由雉と、思わず突っ込みを入れる桜時。
「なぁ～？コイツ、鬼人化人間かなぁ～？」
『……っ？』
氷の破片となった赤鬼を見下ろしながら問いかける門貴に、桜時たちが振り返る。
「そうとは限らないんじゃないぃ～？言動は何となく普通の鬼人っぽかったしぃ」
「倒した後、人間の姿に戻んなかったしな」
「じゃあフツーに鬼人が出ただけかぁ」
「フツーに鬼人がっ……」
門貴の言葉を、白雪が眉をひそめて繰り返す。
「それはおかしいわねっ……国の周りには見張りを付けてるから、街に鬼人なんて入れっこないはずなのに……」
『えっ……？』
白雪の言葉に、桜時たちも眉をひそめる。
「見張りがサボってたんじゃないのぉ？」
「そんなはずはっ……んっ？」
由雉の問いかけに答えようとしていた白雪が、近くの建物の陰に人影を見つける。
「あれはっ……」
「……っ」
白雪と目が合った途端、焦った様子でその場から逃げ去っていくとある人物。

「ギンっ……？」
国の出口側へと去っていくギンに、白雪は表情を曇らせた。

１０分後。白雪の屋敷。

――――――バァアアアアアアアアアーーーーンッッッ！！！！！――――――

「紺染っ！！こらあああああああっっ！！」
屋敷の扉を勢いよく開けて、白雪が玄関で怒鳴りあげる。
「どこだあああああっ！！？紺染ぇぇっ！！おらあああああっ！！！！」
「押し入りじゃねぇーんだからっ……」
「今時、押し入りでももうちょっと丁寧だよぉ」
そんな白雪に呆れた表情を向けながら、ハチたちも屋敷の中へと入ってくる。
「なっ……なななななななな何だぁ～っ、とととととと虎昌ちゃんかぁ～～～っ……」
「……っ」
玄関を入ってすぐの廊下に置いてある観葉植物の後ろから、そろそろと姿を現す虎克とマーサ。
「パパっ、てっきり例の取り立てかと思ってビビっちゃったよぉ～っ」
「パパをビビらせちゃダメよぉ？虎昌ちゃ～んっ」

「ってか、何だっ？例の取り立てって……」
苦笑いをする虎克に、疑いの目を向けるハチ。
「パパっ……」
「はっ……ははははははいっ……！」
負のオーラを醸し出しながら歩み寄ってくる白雪に、危機を感じた虎克が背筋を伸ばして返事をする。
「……っ」
「ひいっっ！！」
白雪の手が肩に乗り、虎克が思わず震え上がる。
「紺染はどこっ……？」
「こっ……紺染っ？」
白雪の問いかけに、戸惑った表情を見せる虎克。
「さっ……さぁ？きょっ……きょきょきょ今日はまだ見てないよ……なぁっ？」
「えっ、ええっ！ええっ！おっ……お部屋じゃないかしらぁ？」
「部屋ねっ」
２人の言葉に、白雪が虎克の肩から手を下ろし、２人に背を向ける。
「ふぅぅ～～っっ」
「大丈夫？パパっ」
力尽きたように座り込む虎克に、心配そうに声をかけるマーサ。

「紺染の部屋は３階よっ」
「あっ……！ちょちょちょっ……！待てよっ！！」
足早に階段を上っていく白雪を、慌てて追いかけるハチたち３匹。
「あんま突っ走んなよっ！」
「そうだよぉ～だいたいまだ紺染さんが関係してるかどうかなんてわかんなっ……」
「現場にギンがいたのよっ！！？紺染の付き人のっっ！！！」

『うおっ！』
勢いよく振り返る白雪に、思わず階段から落ちそうになる3匹。
「あんな街中まで鬼人が侵入するなんて、国にいる誰かが手引きしたとしか考えられないしっ！それにっ……」
『それにっ？』
白雪の言葉に、3匹が眉をひそめる。
「私の第六感が前々から紺染を疑ってたのよっっ！！！」
『……。』
自信満々に答える白雪に、ハチとユキジが呆れた表情で固まる。
「要は勘ってことか……」
「自分のことしか信じないタイプだよねぇ～この人って」
「俺は信じるでぇ～っ！！白雪ちゃぁぁ～～んっっ！！」
「とにかくっ！！紺染の部屋に急ぐわよっっ！！」
あれこれといった言い合いを終え、再び紺染の部屋へと走る白雪とハチたち。階段を3階まで駆け上り、長い廊下の1番奥にある部屋へと飛び込む。

「紺染えええええぇぇぇっっ！！！」

扉を蹴り壊して、中へと突入する白雪。

「って……」
しかし、部屋の中は蛻のからで、紺染の姿どころか、物1つなかった。
「いないじゃないのぉぉぉっっっ！！！！」
「ぎゃぼおおおおんっっっ！！！！！」
白雪が腹いせにモンキを殴り飛ばす。何もない部屋の奥へと、きれいに転がっていくモンキ。
「ううっ……これもっ……愛の試練っ……」
「相変わらずバカ言ってるよぉ」

力尽きるモンキを見て、肩を落とすユキジ。
「どうなってんのよっ！！？」
「ホント何もねぇーなぁ。夜逃げでもしたみてぇっ」
「ハッ！まさか銭湯疲れたんじゃ……！？」
「それを言うなら先手を打たれただろっ」
白雪の言葉の間違いを、冷静に直すハチ。
「まぁそうだろうなぁ」
「きいいいいいいっっ！！！」
ハチがあっさり頷くと、白雪が悔しげな雄たけびをあげながら頭を抱えた。
「んん～っ」
「……？どうした？由雉っ」
考え込むような唸り声を漏らすユキジに、ハチが声をかける。
「なぁ～んか……あからさまだなぁと思って……」
「あからさまっ？」
「だってこれじゃあ、疑って下さいって言ってるようなもんじゃないっ」
「確かにっ……」
ユキジの言葉に、ハチが少し表情を曇らせる。
「まぁとにかく何か仕掛けられる前に、とっとと紺染探さんとなぁ」
モンキが部屋の中を見回しながら、ゆっくりと立ち上がる。
「でもっ……何だって今になって紺染は動き出したのかしらっ……？」
『えっ？』
白雪の言葉に、ハチたちが振り向く。
「もう12年も虎国にいんのよっ？なのに急にっ……まるで桜時様たちが来るのに合わせたみたいっ」
「俺たちにっ……合わせた……？」
その言葉を聞いた途端、ハチの頭に何やら嫌な予感が走った。

「白雪様っ」
「……っ？鈴白っ」
そこに鈴白が現れる。
「この者が昨夜、紺染を見たと……」
「何ですって？」
鈴白が横に立っている使用人らしき若い男を白雪の前に立たせる。
眉をひそめて男を見る白雪。
「でっ？紺染は何をしてたのっ？」
「はぁっ、それがっ……」
「……っ？」
顔色を覗うように少しハチたちの方を見る男に、ハチが眉をひそめる。
「そこの方々と一緒に来られた、目つきの鋭い黒服の方と何やらお話になっておられました……」
「ゴンとっ？」
ハチたちが驚いたように目を見開く。
「はいっ……何やらよく知った仲のような感じでした……」
「ゴンと紺染がっ……知り合いっ？」
男の話に、戸惑ったような表情を見せるハチ。
「そんなはずはっ……！」
「2人が落ち合って何らかの計画を実行したのだとすれば、紺染が急に動き出した理由も説明がつくわね……」
「……っ！」
白雪の言葉に、ハチが顔をしかめる。
「ちょっと待ってくれよっ！ゴンはんなコトするヤツじゃっ……！」
「せやでぇっ！ゴンゴンは悪役顔やけど、ホンマに悪いことするようなヤツちゃうでぇっ！」
「腐ってもオトポリだしねぇ」
「……。」
次々とゴンを庇うハチたちの言葉を聞きながら、徐々に表情を曇

らせていく白雪。
「桜時様……」
「……っ？」
「あの人は……“キツネ”なんでしょ……？」
「えっ……？」
白雪の急な問いかけに、ハチが戸惑ったような顔を見せる。
「何やっ？それがどうかしたんかっ？」
「……やっぱりっ……」
『……っ？』
肩を落とす白雪に、3匹が益々混乱した表情となる。
「ゴンがキツネだってことが何だってっ……」
「やっぱりなぁぁっっっ！！！！！」
『……っ？』
部屋の外から聞こえてくる声に、ハチや白雪が振り向く。
「アンタらはっ……」
部屋の外に立っていたのは先ほど、ハチたちが街で話をした街人たちであった。けっこうな数の街人が、屋敷に押しかけてきたのか、集まっている。
「だっから言ったんだよっ！！キツネなんて信用できねぇーってっ！！」
「キツネっ……」
「アイツらは“裏切りの一族”なんだからよぉぉっっ！！」
「……っ」
――――あんな“裏切りの一族”っ……！！――――

街で聞いた時からハチに引っ掛かっていたその言葉。

「アンタっ、さっきも同じこと言ってたけど、それってどういう意っ……」

「“狐族”という、一族があってね……」

「……っ？」

街人に問いかけようとしたハチの言葉を遮って、白雪が話を始める。

「その一族は特定の故郷を持たないで、他の種族の国に入り込んでは、鬼人などの敵から身を守ったそうよ」

『……。』

白雪の話を、静かに聞くハチたち。

「そして、身を隠しているその国に危害が及べば、迷うことなくその国を捨てたっ……」

「……っ」

厳しい表情を見せる白雪に、眉をひそめるハチ。

「そのことから付いた呼び名が……“裏切りの一族”っ……」

「ゴンがっ……ゴンがその一族だってのかっ！？」

「私の調べた所によれば、狐族以外に狐人はいないわっ。そして紺染とギンも狐人っ……」

白雪が鋭い目つきを見せる。

「2人が知り合いだったことも頷ける」

「……っ」

白雪の話に、言い返す言葉もなく、ハチがそっと俯く。

「へぇ～、“狐族”ですかぁ。よく調べましたねぇ、そんなことっ」

「ええっ、紺染が怪しいなって思い始めてから、散っ々、鈴白たちに調べさせっ……！って……」

すらすらと答えていた白雪が、何かに気づき顔を上げる。

「竹取輝矢っ！！」

「自分で調べたわけでもないのに、よくそんなに偉そうに話せますよねぇ」

いつの間にか隣に平然と立っている輝矢に、白雪がとても驚いた様子で声をあげる。

「ある意味、感心しますよ」

「うっさいわねっっ！！ってか貴女っ、いつの間に現れたのよっ！！」

「今、来ました」

怒鳴りあげる白雪に、輝矢が笑顔で答える。

「かっ……輝矢っ！」

ハチが大きな声で輝矢を呼ぶ。

「ご無沙汰してます、ハチ。寂しかったですか？」

「別に寂しかねぇーよっ！！って、それより大変なんだっ！」

一応突っ込みを入れた後、困った表情を輝矢へと向けるハチ。

「ゴンっ……！ゴンが何か紺染とグルになって虎国に鬼人寄こしたんじゃないかみたいな話になっててっ……！」

「そうみたいですね」

必死に説明するハチに対し、落ち着いた様子で頷く輝矢。

「お前からも何とか言っ……！」
「私も見ましたよ～昨晩、ゴンと紺染が話してるところっ」
「へっ？」
思いがけない輝矢の言葉に、目を丸くするハチ。
「“私の元へ来い”だの“一緒に理想の一族を作ろう”だの言われてましたよっ」
「やっぱりアイツもグルだったのかっ！！警察だとか何とか言って騙しやがってっっ！！」
「ほれ見ろっ！！キツネなんてどいつもコイツも一緒なんだよっっ！！」
輝矢の話を聞き、ゴンへの不信感をさらに高める街の人々。
「おいっ！！何っ、ゴン悪人説を強めちゃってんだよっっ！！！」
「私は真実を述べただけですよ？」
怒鳴るハチに、平然と答える輝矢。
「こうなったら羊スケっ！お前、ビシっと言ってやれっ！！お前の上司がどんなヤツかってことをっ！！」
「へぇっ？」
輝矢に見切りをつけたハチが、輝矢とともに来た羊スケへと振る。
「ああぁ～っ、でも俺、まだゴンさんと付き合い浅いっスからぁ～何とも言えないっスねぇ～」
「だあああああああああっっ！！」
特にゴンを庇おうとはしない羊スケに、ハチが勢いよくズッコケる。
「もういいっ！！とりあえずまた鬼人が街に入らねぇーように街中の男共で警戒態勢取ろうっっ！！」
『おおっっ！！』
「あっ……！おいっ！！」
ゴンを敵と認識したまま、街人たちは警戒態勢を取るため、気合いを入れてその場を去っていった。必死に手を伸ばしたハチの声にも、最早止まることはなかった。

「あぁ～あぁ～行っちゃったぁ～」
「白雪っ……！」
ユキジが諦めたように肩を落とす中、ハチが訴えるように白雪の方を振り向く。
「いくら桜時様のお知り合いとはいえっ……この状況で彼を信用することはできないわっ」
「……っ」
厳しい表情で言い放つ白雪に、ハチが表情を険しくする。
「私は紺染を探すわ。鈴白、貴方は皆に指示をして国周辺の警戒を」
「はいっ！」
「……。」
ハチが何も言い返せず俯いて黙り込んでいるうちに、白雪と鈴白も素早く紺染の部屋を後にした。
「ったくぅ～輝矢が妙なこと吹き込むからぁ～」
「だから私は聞いたことをそのまま述べただけですって」
非難するように言うユキジに、輝矢がまたもや平然と答える。
「でっ、ゴンはぁ？」
「ゴンゴンのヤツ、ホンマに紺染と手ぇ組んだんかぁ？」
「そんなこと私に聞いて、わかるはずがないでしょう？」
『えっ！？』
輝矢の答えに驚いたように声を揃えるモンキとユキジ。
「なんでぇっ？いっつも輝矢ならそういうの予知能力みたいな感じでわかるじゃんっ」
「せやせやぁ～っ！ゴンゴンの心ん中とか透視とかしたみたいに見透かしてなぁっ！」
「私はエスパーではありませんので」
「……。」
輝矢とモンキたちの会話を聞きながら、そっと視線を落とすハチ。

――お前、家族はっ？――――

――――いねぇっ……初めっからいねぇ……――――

「……裏切りの一族……か……」

ゴンの言葉を思い出し、ハチはどこか悲しげに呟いた。

第17章　裏切りの一族　☆3

――――物心がついた頃、俺は、住んでいた小さな街を自分の“故郷”だと思っていた。

「おうっ！ゴンちゃんっ！お遣いかいっ？偉いねぇっ！」

「うんっ！」

何の特色があるわけでもなく、昔からその土地に住むいくつかの家庭が集まっただけの小さな街。

そんな街でも、温かくて優しい人ばかりで俺は大好きだった。

でもある日、事件は起こった。

『グワアアアアッッッ！！！！！』

「きゃあああああああああああっ！！！」

「うわあああああああああああっ！！！」

俺が6歳の頃、御伽界に謎の化け物“鬼人”が現れ始めた。

鬼人たちは無差別に街や村を襲い、多くの人間が犠牲となっていた。そんな鬼人どもが俺たちの街も襲ってきた。

「ゴンっ！急げっ！ゴンっ！！」

「はぁっ……！はぁっ……！はぁっ……！」

鬼人が街を破壊する中、俺は一族の大人たちに手を引かれ、必死に走った。

「急げっ！川を下って逃げるぞっ！！」
「ああっ！！」
「……っ？」

俺の走り着いた、逃げ道の確保された避難場所には、俺たち一族の姿だけしかなく、他の街の人間の姿は1人も見当たらなかった。

「ねっねぇっ！他の人たちはっ！？」
「ああっ？」

必死に喰らいつくように問いかけた俺に、一族の人間はこう言った。

「他人の命まで面倒見切れっかよっ」

「……っ！」

その日初めて、俺は“裏切り”を知った……。

それから色々な街や村に住みつき、鬼人に襲われる度に、街の人間を見捨てて逃げた。

「助けてぇぇぇっっ！！！お願いっっ！！！助けてぇぇぇっっ！！！」

「……っ」
「助けるなっ！！一族の者だけが助かればそれでいいっっ！！」
“助けて”と伸ばされた手を、何度も振り払った。助けられた命を、何度も見殺しにした。
「裏切り者ぉぉっ！！」
「裏切り者っ……裏切り者ぉぉっ！！！」
「ううっ……！！」
投げかけられるその言葉に、何度も耳を塞いだ。
そうして俺は、何度も何度も“裏切り”を重ねた。一族の為なのだからと割り切って。
でも、どんな街に住んでも、俺が“故郷”と思うことは2度となかった。
いつだったか、一族の大人に問いかけたことがあった。
“俺の両親はどうしたのか”と。
それを聞いたその大人はこう言った。
「さぁなっ。どっかの街、逃げる時に死んだんじゃねぇーのぉ？んなのっ、いちいち覚えてらんねぇーよっ」
冷たい言葉だった。
俺がたくさんの人を傷つけてまで守った場所は、こんなにも冷たいものであったことを知った。

そして数年後、桃タローが鬼人を倒して、世界に平和が戻り始めた頃。

「虎国へっ……？」

「ああ、鬼人の騒ぎも落ち着いたことじゃし、次はゆっくりと住める拠点がいいと思ってのぅ」

たくさんの裏切りの果て、一族の数も減った。

生き残りの1人で、その頃の一族で最も権限のあった紺染が、ある日、俺にそう言った。

「虎国なら寒さはキツいが、四大国でもあるし、いざという時に困らんじゃろう」

「……っ」

“いざという時”の言葉に思い出されたのは、俺がこれまでに捨ててきた街の人たちの顔だった。

「じじいっ……」

「……っ？」

「俺はもうっ……こんなの嫌だっ……！！」

「ゴンっ……」

「俺はっ……一族を抜けるっ……」

１０歳の俺が、やっと口にした自分の意志だった。

「良かろう……じゃが一族を抜けた所で、お前が見る世界は変わりはせん……」

「……。」

希望なんて持ったわけじゃない。

今まで散々、人を裏切ってきた俺に、希望が見えるはずがない。

「人は人を裏切る……それが人の常じゃ……お前が人を信じた所で、人は誰もお前を信じたりはせんよ……ゴン……」

そんなことはわかっている。何かを期待してるわけじゃない。

「わかってるっ……」

そう言って俺は、一族を抜けた。

紺染の言葉を胸に秘めて。

でもっ…

――――行く所がないんですか？じゃあ一緒に俺の国に行きましょうよっ！――――

「……っ」

過去の夢から目を覚まし、ゴンがゆっくりと起き上がる。
そこは蝋燭の灯りしかない、暗く小さな山小屋の中であった。焚いている火の前でいつの間にか眠ってしまったようである。

「随分と眠っておったようじゃな、ゴン」
「……っ？」
小屋の戸が開くと、吹雪いてきた外から紺染が入ってきた。
「疲れておるのではないか？」
「ああっ……お陰で最近、夢見が悪りぃんだっ……」
起き上がったゴンが、少し不機嫌な表情で言い放つ。
「2日連続、アンタが出てきた」
「それは光栄じゃなっ」
ゴンの言葉に、紺染は皮肉めいた笑みを浮かべた。
「計画は順調に進んでおる。そろそろヤツらの元へ移動するぞ」
「ああっ……」
紺染の言葉に頷いたゴンが焚いていた火を消し、ゆっくりと立ち上がる。
「案ずるな。この計画が無事に終われば、お前の夢見も良くなろう……」
「計画……ねっ……」
ゴンと紺染が山小屋を出る。そこは激しく吹雪く、虎国に程近い森の奥深くであった。
「そうじゃ。この計画が上手くいけば、我ら念願の国が持てるかも知れんぞぉ？」
森の中を歩きながら、ゴンに笑みを向ける紺染。

「今度こそ、我らだけの国、故郷じゃっ」
「故郷っ……」
その言葉に、ゴンは先ほど見た過去の夢を思い出す。
「これでお前ももう彷徨わずに済むのぅ」
「じじいっ……」
「んっ？」
吹雪に掻き消えそうな小声で呼ぶゴンに、紺染がゆっくりと振り返る。
「何で鬼人の現場にギンをっ……？わざと白雪たちに目撃させて」
「ああっ……」
紺染が不敵な笑みを浮かべる。
「ギンにすべての罪を被ってもらうためじゃよっ……」
「被るっ……？」
紺染の言葉に、ゴンが眉をひそめる。
「そうじゃ。鬼人と組み、虎国を襲ったのはすべてギンの仕業ということにする」
すらすらと、何の迷いもなく言葉を続ける紺染。
「私はただ囚われていただけということにすれば、国主一家を失った虎国は自動的に私のものじゃっ」
「……っ」
少し眉をひそめるゴン。
「“虎国”改め、“狐国”とでも名づけるか？国主は私で、副国主がお前じゃっ」
「……んな話っ、早々国民が信じるはずっ……」
「その為にっ……お前がおるんじゃろう……？」
「……っ」
紺染の笑みに、ゴンの表情が一瞬にして曇る。
「国民どもは姫派じゃからなっ、私の言うことなどまず信じないとは思うが、鬼人が出ればオトポリが動く」
ゴンが身に付けているオトポリの腕章を指差す紺染。

「オトポリの連中なら、外交もない国の世間知らずな国民より、一隊員の言葉を信じるじゃろう……？」
「……。」
紺染の言葉を聞きながら、ゴンは何を言うでもなく、そっと目を細めた。
「お前は本当に役に立つヤツじゃよ。ゴンっ」
そう言って、ゴンに微笑みかける紺染。
「共にっ……我らが故郷を作ろうぞっ……」
「……故郷っ……」
紺染の囁きに、ゴンはそっと俯いた。

日も落ち、気温も下がって辺りが吹雪き始めた頃。虎国入口・トンネル付近。
「探し回ったのに全っ然、見つからないのよっっ！！！」
虎国へとやって来たオトポリの黒オープンカーの周りに座っている輝矢たちに、そう怒鳴りあげるのは白雪。
「どうしてっっ！！？」
「知りませんよ。そんなこと」
問いかける白雪に、冷たく答える輝矢。
「アナタの方がこの辺りの地理にはお詳しいでしょう？」
「だっから怪しいと思う所は全部、探したんだってばっっ！！」
「お得意の第六感とやらはどうしたんです？」
「第六感っ？あっ、その手があったわねっ！」
輝矢の適当な返しに、ひらめいたとばかりにポンと手を叩く白雪。

「むむぅぅぅぅぅぅぅ～～～～っっっ……！！！」
「単純～っ」
「ああなったら人間、終わりですね」
「すっげぇ言いっぷりっ……」
輝矢の言葉通りに第六感を働かせようとする白雪に、冷たい言葉を投げかける輝矢とユキジ。そんな2人にハチが少し呆れた表情を見せる。
「にしても寒いなぁ～っ」
空から落ちてくる雪を見上げながら、体を震わせるモンキ。
「おぉ～いっ、羊スケ、まだかぁ～っ？」
「それでぇ～何かゴンさんが敵ぃ～みたいな感じになっちゃったんスよぉ～っ！ハッハぁ～っ！」
『……。』
モンキが振り向いた先では、羊スケが運転席に座り、無線を片手に暢気な口調で話をしていた。その軽いしゃべりっぷりに、皆が一斉に呆れた表情を見せる。
「あんなんでいいのかねぇ～報告ってぇ」
「ってか適当なわりに長いわぁ～」
「はぁっ……」
モンキとユキジの会話を聞きながら、深々と肩を落とすハチ。
「どうかしましたか？ハチ」
「どうかって……」
問いかける輝矢に、ハチはさらに肩を落とす。
「お前も羊スケも……薄情だよなぁ……」
「生まれつきです」
「ちったあ否定か反省かしろよっっ！！」
笑顔で答える輝矢に、思わず突っ込みを入れるハチ。
「ったくっ……ゴンがっ……ゴンが鬼人と手を組むなんてことする

はずないのによぉ……疑うなんてっ……」
「私は別に、ゴンを疑った覚えはありませんよ？」
「へぇっ？」
何食わぬ顔で答える輝矢に、ハチが勢いよく顔をしかめる。
「だってさっきっ……！」
「だから言ったでしょう？私は聞いたままを述べただけで、別にゴンが怪しいどうこうは言ってませんよぉ」
「でっでもあんなこと聞いたら誰だってっ……！」
「聞いても疑わないのが仲間でしょう？」
「……っ」
輝矢の笑顔に、ハチがハッとした表情を見せる。
「ハチはどうです？私の話を聞いて、ゴンを疑いました？」
「うっ疑うわけっ……ねぇーじゃんっ……」
「……っ」
少し俯き気味に呟くハチを見て、輝矢が穏やかに笑う。
「そういうことですよっ」
「……っ」
輝矢の言葉に、ハチの表情から不安の色が消える。

＜バッカじゃないのかぁぁ～～～いっ！？＞

『……っ？』

無線の向こうから聞こえてくる聞き覚えのある声に、一斉に振り向く輝矢たち。

＜僕を差し置いて勝手なことばっかりするからだよぉぉ～～～っっ！！！＞

「この声は……」

「鉄グマだ、鉄グマっ」

話し方や言動からして、その声の主は間違いなく鉄汰であろう。
本来、この先遣隊の隊長として来るはずだった鉄汰を、輝矢が吹き飛ばして、代わりに虎国まで乗り込んできたのである。

「それはまぁ１００歩譲って謝るっスから～、こっちはこのまま俺らに任せて隊長は鮭でも取ってて下さい～」
「まったく謝る気ねぇーだろっ……」
適当な受け答えをしている羊スケに、ハチが少し突っ込みを入れる。

＜冗っ談じゃないよっっ！！！今すぐゴーバックっ！！ゴーバックっっ！！＞
「ええっ？だってゴンさんがぁ～っ」
＜そんな敵になっちゃったかもわからないヤツ、構ってたって仕方ないよっっ！！＞
「……っ」
無線から聞こえてくる鉄汰の言葉に、羊スケの表情が止まる。
＜とにかく今すぐ部外者の竹取輝矢一味を連れて戻って来るんだっ！！その後、虎国へは僕が行くからっ！＞
「無線を通しても頭悪そうな声ですね、アナタは」
＜んなっ！？その声はもしやっ……！憎っくき竹取輝矢かっ！？そうだねっ！？そうなんだねっ！？＞
「うるさいから切りますよぉ」
＜待て待て待ていっっっ！！！＞
助手席に座り、無線のボタンを消そうとする輝矢を、鉄汰が無線の向こう側から必死に止める。

＜とにかくっ！君たちは余計なことは一切するなっ！今すぐゴーバ

ックだよっ！いいね！？羊スケ君っ！＞
「だから私たちはぁっ……」

「嫌っス」

「えっ……？」
＜へっ……？＞

何とか鉄汰を丸め込もうと試みる輝矢であったが、その前に羊スケがあっさりと断りを入れる。羊スケの答えに、間の抜けた声を出す輝矢と鉄汰。

＜いっ嫌っ……？＞

無線から、鉄汰の聞き返す声が聞こえてくる。

＜何を言っているんだいっ！？羊スケ君っ！！これは上司命令でっ……！！＞

「俺の上司はっ……狐上ゴンだけっスからっ」

誇らしい笑顔で言い放つ羊スケ。

＜んなぁぁっっ……！！！何をっ……！！よっ……！！＞

「……っ」

――――プチっ！――――

鉄汰の文句が返って来る前に、羊スケが素早く無線の電源を切る。

「……。」

「羊スケっ……」

運転席で茫然と座り込む羊スケを、ハチたち3匹は少し意外そうに見つめる。

「……首っスかねぇっ？」

「首でしょうね」

少し引きつった表情で問いかける羊スケに、輝矢が情け容赦なくハッキリと答える。

「やっぱそうっスかぁ～はぁっ……おふくろ、泣くかなぁ～」

「けどっ……」

「……っ？」

輝矢の声に、俯いていた羊スケが顔を上げる。

「少し見直しましたっ」

「……っ」

笑顔を見せる輝矢に、羊スケが目を見開く。

「俺もっ！見直したでぇっ！」

「俺もっ」

「うん。それにぃ、今頃、鉄汰がどんな顔して切れた無線に文句言

ってるのかって想像しただけで笑えるしね」
「プっ！そりゃ確かに笑えるっスねぇ～っ！」

ユキジの言葉に、思わず吹き出す羊スケ。

「ねっ？こういうことですっ」
「ああっ」

そんな羊スケに、輝矢とハチが笑顔で頷き合う。

「さてとっ、ではそろそろウチのキツネを迎えに行きましょうか」
「えっ！？場所わかんのかっ！？」
「まぁ何となくは」
「それを早く言えよぉ～っ」

輝矢の言葉に、疲れたように肩を落とすハチ。

「むむむぅぅ～～っっ！！！ふわあああああああっっ！！！」

第六感を働かせようと瞑想に入っていた白雪が、何かが降りてきたかのように突然、大きな声をあげる。

「見えたわっ！！連中は南側の海沿いよっ！！」
「さっ、行きましょう。向かうは北側の山沿いです」
「って、人の意見、聞きなさいよっっ！！！」

完全に白雪を無視して素早く歩き去っていく輝矢たちに、白雪は勢いよく怒鳴り声をあげた。

第17章　裏切りの一族　☆4

虎国北側。雪山山頂。
「ここじゃっ」
「……っ」
紺染の案内の元、吹雪の中、森を抜け、登った山の上に広がる景色に、ゴンは少し驚くように目を見開いた。
「城っ……」
雪山の山頂に佇んでいたのは、巨大なまだ真新しい城であった。
激しい雪に白く覆われているが、その壮大な姿はやはり目が留まる。
「随分と大層なもん、作ったなっ」
「後々、私の居城になるからのぅ……」
「……そうかよっ……」
紺染の不敵な笑みに、表情をしかめるゴン。

――――ギイイィィィィィィィッッ……！！！――――

「……っ？」
その時、大きな城門が2人を出迎えるように自動的に開き始めた。
「門がっ……？」
「お待ちしておりました。紺染様、ゴン様」
「……っギンっ」
開いた城門の中から姿を現したのは、ギンであった。
「ご苦労じゃったな、ギン。それで、あの方は？」
「あの方っ……？」
紺染の言葉に、ゴンがふと眉をひそめる。
「中にいらっしゃいます。どうぞ」
「ああっ」

2人が通ると再び城門は閉じ、城門の内側へと入ったゴンたちは、ギンに案内され、城の正面口へと続く1本道を歩いた。正面口に3人が着くと、城内部へと続く扉も自動的に開く。ゆっくりと開いた扉の中へと、足を踏み入れるゴン。

「ここはっ……？」

城に入った途端に広がっていたのは、薄暗く何もない大きな部屋。ゴンが少し眉をひそめる。

「お2人をお連れしました、澪様」

「ミゾレっ？……っ」

ゴンがギンの言葉に首をかしげていると、急に部屋の明かりがついた。

「遅かったわねぇ……紺染……」

「……っ！」

部屋の奥にある玉座に座っていたのは、藍色の短い髪に、大きな赤い瞳の、どこか怪しげな空気を持った、まだ若い女であった。

「待ちくたびれたわ……」

「女っ……？」

「申し訳ありません。澪様」

ゴンが戸惑いの表情を見せる横で、紺染が澪に向かって深々と頭を下げる。

「まぁいい……で？そっちは？」

「我らが狐族の同胞、狐上ゴンにございます」

「そう……お前が……」

澪が鋭い瞳をゴンへと向ける。

「見たところ、その服からして忌々しい我らの敵、御伽警察の者のようだけど……？」

「これは我らの味方です。それにゴンがおれば、後々オトポリを利用することも可能となってきましょう」
「……っ」
「それもそうね……」
紺染の揚々とした言葉に、ゴンは少し視線を落とすが、霎は特に疑いもせずに頷いた。
「して、計画の方は？」
「順調よ。何の障害もないわっ、ギン」
「はい」
「……っ？」
霎に促され、ギンが部屋の隅に行き、何やら電灯のスイッチのようなボタンを押す。

――――グイイイィィィィィィーーーンッッッ！！！――――

「……っ」
すると霎の後方にある大きな壁が中央で縦に大きく割れ、機械音を立てて左右にゆっくりと開いていった。

「……っ！！」

壁の向こうに広がる光景に、目を見開くゴン。

「これはっ……」

『グワアアァァァーーーッッッ……』

どこまでも続く薄暗く広い空間を、埋め尽くすように立っていたのは、様々な色の鬼人の集団であった。これまで見たこともない数の鬼人に、ゴンは思わず言葉を失う。

「どう……？九千の鬼の軍勢は……」
「九千っ……？」
「素晴らしいっ……！素晴らしいですよっ！霙様っ！！」
ゴンが圧倒されたように呟く中、紺染は喜びに震え上がるように両手を突き上げる。
「これならっ……！これなら虎国を確実に滅ぼせますぞっ……！ハハハハハっ……！！」
「まぁ虎国周辺の街や村から造りだした人間あがりの鬼も少し混ざっているけどね……」
「何っ……？」
霙の言葉に、ゴンが表情を一変させる。
「本当はもっと造って一万の軍勢にするつもりだったんだけど、オトポリにけっこう倒されちゃってね……」
「……っ」
怪しく微笑みかけてくる霙に、ゴンが少し表情をしかめる。
「でっでは霙様っ……！早速っ……！」
「そう慌てないでよ……」
『……っ？』
急かす紺染に微笑みかけながら、霙が懐から何やら赤いスイッチのようなものを取り出す。
「このボタンを押せば……鬼人たちのいる部屋の向こう側の扉が開くわ……」
霙がゴンの方を見て言う。
「扉が開けば、鬼人たちは自動的に山を下り、その下にある虎国を襲う……どう……？素敵な仕掛けでしょう？」
「……っ」
霙の言葉に、ゴンがさらに表情を険しくする。
「はっはいっ！では早速お願いしますっ！霙様っ！」
「そうねっ……」

紺染の声に押されるようにして、霎の指がゆっくりとスイッチに伸びていく。

「……っ！」

その時、ゴンは表情を鋭くし、右手を霎に突き出した。

「“狐火・一髪”っ！」

「何っ……！！？」

紺染が驚きの表情で振り返る中、ゴンが霎の持つスイッチに向かって炎の玉を放つ。

「クっ……！」

――――バァァァァーーンッッッ！！！！――――

霎が炎の玉を避けてスイッチを手放すと、炎の玉がスイッチを燃やし尽くした。燃えかすが力なく床に落ちる。

「……っ」

「虎国になんて下ろさせてたまるかよっ」

振り向いた霎に、鋭い笑みを向けるゴン。

「てめぇーらはっ……1匹残らず、俺が連行するっ！」

そう言ってゴンは素早く構えを取った。

「ゴンっっ！！貴様っ！！裏切る気かっ！！？」

「ああっ？」

必死に叫ぶ紺染に、鋭い瞳を向けるゴン。

「初めっから信じてねぇーのにっ、裏切るもクソもあるかよっ」

「何だとっ……！！？」

ゴンの挑発めいた言葉に、紺染がさらに表情を引きつる。

「わっ……！私は本気でお前を信用してっ……！！」

「最後の仲間であるギンさえ平気で犠牲にするアンタが、俺を本気で信用するはずなんてねぇーだろっ」

「クっ……！」

強く言い放つゴンに、さすがの紺染も返す言葉もなく唇を噛む。

「フンっ！こんなことになるだろうとは思っておったわいっ！お前は出来損ないのキツネじゃからなっ！」

紺染が開き直ったかのようにゴンを謗る。

「裏切り者じゃっ！！そいつを捕まえろっ！！ギンっっ！！」

「……そうですね」

「……っ！」

紺染の言葉に頷くギンに、ゴンが身構える。

「……っ」

―――――・・・・・・・・・・っっ！！！―――――

「何っ……！！？」

驚きの声をあげて振り向くゴン。

「ギっギンっ……？」

素早く動いたギンが背後に回り、その首元にナイフを突きつけたのは、ゴンではなく、紺染であった。戸惑うようにギンの名を呼ぶ紺染。

「一体、何のつもりじゃっ！！ギンっ！！」

「うるさいなぁ……」

「……っ」

紺染の言葉を煩わしそうに払いのけるギン。

「いつまで……僕に偉そうな態度を取る気ですか……？紺染さんっ……」

「何っ……！」

「……っ」

冷たく問いかけるギンを見ながら、ゴンが静かに右手を構える。

「動かないで下さいっ」

「うっ……！」

右手から炎を放とうとしたゴンが、ギンの鋭い視線に動きを止めた。

「少しでも動いたら……この男の首を切り裂きますっ……」

「クっ……！」

ギンの脅迫に、ナイフを突きつけられている紺染が険しい表情を見せる。

「おっおいっ……！ゴンっ！ここは私のためじゃと思ってどうか１つっ……！」

「別にアンタの命とかどうでもいいしっ」

「そんなこと言わないでぇぇぇっっ！！！」
冷たく答えるゴンに、紺染が少し泣きそうな表情を見せる。

「ギンっ……てめぇーもちったあ考えてから人質選べよっ。俺がそんなクソじじいのこと守るはずっ……」
「いえっ、貴方は見捨てませんよ」
「……っ」

言い切るギンに、少し眉をひそめるゴン。

「例えこんな男でもねっ……」
「ううっ……！」
近づくナイフの刃に、震え上がる紺染。
「何を根拠にっ……」
「僕はまだ幼かったので覚えていませんが、貴方のことは一族の方からよく聞かされました」
「……。」
バカらしいと笑い飛ばそうとしたゴンであったが、ギンの言葉にその表情を曇らせる。

「人を裏切ることに耐えかね、一族を抜けた、優しい優しい貴方は……もう決して誰も見捨てはしない……」
「……っ」

ゴンのことを見透かすように笑うギンに、ゴンが目をさらに鋭くする。

「……っ」
少し考え込んだ後、ゴンがゆっくりと右手を下ろす。
「ゴンっ……」

「フフっ……」
そんなゴンに目を細める紺染と、どこか楽しげに微笑むギン。
「霙様」
「ええっ」
「……っ？」
ギンの呼びかけに、玉座の上の霙が右手をゴンへと向けた。
「“氷縛”っ」
霙の右手から、無数の氷の粒が放たれた。

――――ピキッ！ピキッ！ピキッ！ピキッ！――――

「うっ……！！」

ゴンの手足を直撃した氷の粒たちは、やがてゴンの手足を凍りつかせた。足が床ごと凍り付いており、ゴンは動くこともできない。
凍りついた両手を見て、表情をしかめるゴン。

「お前の言う通り、紺染を信用しなくて良かったわ、ギン」
「ええ、この人の人望のなさは折り紙付きですからね……」
「……っ貴様らっ……！初めからグルかっ……！」
２人の会話を聞き、紺染が険しい表情で言い放つ。
「ええ、そうですよ……？僕はもう随分と前から、霙様の部下です。貴方の部下ではなくてね……」
「ギンっ……！貴様っ……！！」
「“汚いぞ”……とでも仰るつもりですか……？」
声を荒げる紺染を嘲笑うギン。
「僕のやったことは、貴方のいつもやっていることですよっ……？」
「クっ……！」
ギンの最もな言葉に、紺染が悔しげに唇を噛む。

「裏切り者の末路なんてこんなものねっ」
そんな紺染を見下ろしながら、霎がゆっくりと玉座から立ち上がる。
「お前も……私たちを連行出来なくて残念だったわねぇ……」
「……っ」
振り向き笑う霎に、ゴンが鋭い表情を見せる。
「だがスイッチは燃やしたっ！てめぇーらの計画はもうっ……！！」
「言ったでしょう？初めから紺染など信用していなかったと……」
「何っ……？」
霎の言葉に、眉をひそめるゴン。
「そんな紺染が連れて来たお前に、みすみすスイッチを見せると思う……？」
「……っ！まさかっ……！」
ゴンが大きく目を見開く。
「ニセモノかっ……！？」
「ハズレっ……」
「えっ……？」
「元々スイッチなんてないのっ……だってあの壁は……」
霎　が微笑みながら、ゆっくりと右手を突き上げる。
「私の“氷力”で出来ているのだから……！」

――――バァァァァァァーーーーンッッッ！！！！！――――

「……っっ！！」

霎の右手が白く光った途端、鬼人で埋め尽くされた部屋の向こう側の壁が、一気に崩れ落ちる。

『グアアアアアアッッッ！！』

崩れ落ちた壁から溢れ出すように外へと出て、山を下っていく九千の鬼人たち。

「待っ……！！ううっ……！！」

身を乗り出したゴンが、足が床に凍り付いているため、前のめりになって倒れこんでしまう。

「これで虎国は終わりねっ……」

「クっ……！！」

霙の言葉に、倒れこんだまま鋭く霙を見上げるゴン。

「そして……狐族も終わりにしてあげるわ……」

ゆっくりと右手を下ろす霙。

「“氷柱”っ……」

「……っ！」

霙の右手を氷が包み、鋭い刃となる。

「可哀想な裏切りキツネ……最期も1人で死になさいっ……！！」

「クっ……！！」

身動きの取れないゴンに、鋭い氷柱が放たれた。

第17章　裏切りの一族　☆4（後書き）

18章に続きます。
次章で虎国編は終わりです。

第１８章　信じる　★１（前書き）

１８章です。
よろしくお願いします。

第18章　信じる　★1

「これで虎国は終わりねっ……そして、狐族も終わりにしてあげるわ……」

霙が右手をゆっくりと、足を凍らされて動けないで倒れているゴンへと向けた。

「“氷柱”っ……」

「……っ！」

霙の右手を氷が包み、鋭い刃となる。

「可哀想な裏切りキツネ…最期も1人で死になさいっ……！！」

ゴンに、鋭い氷柱が放たれる。

「クっ……！！」

まっすぐに向かってくる氷柱に、ゴンが思わず表情を引きつった。

その時。

――――パキィィィィィィィーーーーンッッッ！！！――――

ゴンに突き刺さる寸前で、氷柱が勢いよく砕け散った。

「何っ……？」

『……っ』

「なっ……！」

霙、ギン、紺染、そしてゴンが、驚きに大きく目を見開く。

「まだこのキツネに死なれては困るんですよっ」

「……っ」

聞き覚えのある声に、ゴンが目を見開き、ゆっくりと顔を上げていく。

「“今度奢る”ともう3回は言われたのに、まだ1回も奢られてないですからっ」

「……っ竹取っ……」

ゴンが見上げたすぐ先に立っていたのは、三日月で氷柱を砕き割った輝矢の姿であった。ゴンが少し目を細めて、力なく輝矢を呼ぶ。

「何者っ……？」

輝矢を見つめ、霙が少し眉をひそめる。

「動かないでっ……！！少しでも動けばコイツの首を吹き飛ばしま

すよっ……！」
「ひえええぇぇぇぇぇ～～っっ！！」
「……っ」
現れた輝矢に戸惑いながらも、ギンが紺染に突きつけているナイフを見せて言い放つ。ギンの言葉に、少し表情をしかめる輝矢。
「私が代わりに首飛ばしましょうか？」
「待っていっっっ！！！！」
三日月を構える輝矢に、ゴンが全力で突っ込みを入れる。
「てめぇーなぁっ……！！それでも人かっっ！！？」
「だってあんなの、助ける気しませんもんっ」
「あのなぁっ……！いっくらあんなんでも一応、一般市民なんだから、命は守るってのがっ……！」
「“オトポリの使命”っスもんねっ！」
「そうそうっ！って、へっ？」
1度は頷いたゴンが、代わりに答えたその声に気づき、目を丸くする。
「“羊々ボール”っ！」
「何っ……！？」
ナイフを持ったギンの元へ、どこからともなく飛んで来る、綿飴のような白い玉。
――――ピトっ……！――――

「ううっ……！」

白い玉が、ナイフを持っていたギンの右手を包み込む。

「大丈夫っスかぁ～？ゴンさんっ」

「羊スケっ！」

両手から羊々ボールを発生させながら、ゴンへと笑みを向ける羊スケ。羊スケの姿に、ゴンが驚く。

「クっ……！クっ……！何だっ！これはっ……！」

「……っ！」

「あっ……！！待てっ……！！」

振っても引っ張っても取れないその玉に、ギンが苦戦していると、その隙をついて紺染が逃げ出す。

「今の内にっ……！」

紺染がそのまま城の出口へと駆け出していく。

「“水月”」

――――バァァァァァァーーーンッッッ！！！――――――

「どわあああああっっっ！！！！」

そんな紺染の目の前を無数の水の刃が横切り、そのまま壁を貫通して城の外へと消えていく。思わず腰をついて驚く紺染。

「アナタにも後でじっくりと落とし前つけていただきますから……」

紺染へ左手を構えている輝矢が、紺染を鋭く睨みつける。
「ここが片付くまでそこを動かないように……」
「……はいっ……」
輝矢の凍りつきそうな視線に、紺染は大人しく頷いた。
「大丈夫かっ？ゴンっ」
「ハチ公っ！お前までっ……」
「今、氷消してやっからっ。“瞬花”っ！」
倒れているゴンへと駆け寄ったのは桜時。桜時は瞬花を唱えて、ゴンの手足を凍りつかせている氷を桜の花びらへと変え、起き上がるゴンへと手を貸した。
「お前らっ……何でっ……」
「アナタが……“呼んだ”のでしょうっ……？」
「……っ」
戸惑うゴンに、輝矢は曇りのない笑みを向ける。
「何故っ……何故ここがわかったんですっ……？」
「……っ？」
そんな輝矢に、やっと羊々ボールをはずしたギンが問いかけた。
「いえねっ、お昼間にこちらの山へと続く、鬼人のものらしき足跡を見つけたもので」
「足跡だとっ……？バカなっ……！年中、吹雪のこの国でそんなものが残るはずっ……！ハッ……！」
言葉の途中、急に何かに気づいたような表情となるギン。
「まさかっ……“火力”でっ……！？」
「……っ」
勢いよく振り向いたギンに、ゴンが不敵な笑みを向ける。

「さっすが“火力”使いの狐族っ！よくわかったなっ」
「“脚火”っ……敵の足の裏にかすかな熱を持たせ、地面に焼け跡を残す追跡用の炎ですかっ……」
「ああっ、紺染が虎国に鬼人を送る時に、ちょっと仕掛けさせてもらった」
「クっ……！」
得意げに笑うゴンに、表情をしかめるギン。
「申し訳ありませんっ……霙様っ……」
「終わったことを責めても仕方ないわっ……それにしても……」
頭を下げたギンに冷たく答えて、霙が輝矢に視線を送る。
「いくらそのキツネの合図に気づいたとはいえ、よくまぁノコノコとやって来たものよね……」
少し感心したように言い放つ霙。
「そいつは裏切りキツネよ？本当にお前たちを裏切って、罠でも仕掛けてたかも知れないじゃない？」
「……っ」
霙の言葉に、表情をしかめるゴン。

「俺はっ……！」
「確かにこのキツネはぁっ」
「……っ？」
ゴンの反論を遮るように言い放つ輝矢に、ゴンが少し眉をひそめて振り向く。
「目つきはどう見たって悪役ですし、ケンカっ早くて問題ばかり起こして、救いようもないバカですけどっ」
「おいっ！！」
輝矢のあまりの言いように、思わず突っ込むゴン。

「でもっ……決して仲間を裏切ったりはしないキツネですっ……」

「……っ」

　襲に向かってまっすぐに言い放つ輝矢に、ゴンが目を見開く。

「それにっ……」

　輝矢が少し笑みを浮かべた。

「私はゴンを……信じていますからっ」

「……っ！」

――――俺は君を信じていますよっ……？――――

「……っ」

　重なる光景に、そっと俯くゴン。

「竹取っ……」

「はいっ」

「へっ？」

　顔を上げたゴンに、差し出される輝矢の左手。

「このくらい言ってもらえれば満足でしょう？」

「金取られるくらいなら信じてもらわんでいいわいっっ！！」

　発言料を取ろうとする輝矢に、全力で怒鳴りあげるゴン。

「えぇ～輝矢さん、いいなぁ～っ！俺も何かいいこと言うんで金くださいっスぅ～ゴンさぁ～んっ」

「てめぇーらなぁっ！！」

　輝矢に便乗しようとする羊スケにも、ゴンが怒鳴り声を飛ばす。

「これだけいいこと言って差し上げたのに、お礼もしないとは、何て男でしょうねぇ」
「そうっスよねぇ～っ！」
「礼を言おうとした俺に金を請求したのはお前だろうがっっ！！！」
「……。」
輝矢や羊スケと騒々しく口論を続けるゴンを、静かな表情で見つめる紺染。怒鳴ってはいるが、生き生きとした何とも楽しそうな表情を見せるゴンに、紺染は少し目を細めた。
「ああっ！！こんなことしてる場合じゃねぇーんだっ！！早くしねぇーと虎国に鬼人の群れがっ……！！」
「ああっ、それならっ……」
焦るゴンに、冷静な表情を向ける輝矢。
「まだまだ粘ってくれてると思いますよ？」
「へっ？」
輝矢の笑みに、ゴンが少し首をかしげた。
霙の城の雪山中腹。虎国へと続く山の斜面。
『グワアアアアッッ！！！』

山頂の城から九千の鬼人が、群れを成して下ってくる。
「姫様っ！来ましたっ！」
その光景を見ながら、男が振り返って叫ぶ。
「ええっ……」
冷静に返事をしたのは、ドレスから動きやすい服へと着替えた白雪であった。
「敵が来たわよっ！！みんなっ！準備はいいわねっ！？」
『おおおおおおおおうっっ！！！』
そう叫んだ白雪の後方には、武装した虎国の街の男が数多く集まっていた。白雪の言葉に、皆が気合いを入れて拳を突き上げる。

「よっ……よよよよよよ良くないよぉ～っ……こここここ怖いよぉぉぉぉ～～っ……ブルブルブルっ」
「虎昌ちゃんっ！パパの準備がまだだわっ！」
「だったら初めっから来んじゃないわよっっ！！」

街人たちの１番端に隠れるようにして震えている虎克に、白雪が思わず突っ込みを入れる。

「ああ～とにかくっ！」
場を仕切りなおして前を見据える白雪。

「九千の鬼人っ……相手にとって味覚なしっ！！」
「不足です、白雪様」
「わっ……！わかってるわよっ！！」

白雪の横に立つ鈴白がさらりと訂正すると、白雪は少し焦りながら怒鳴り返した。

「鬼人は１匹たりとも国に入れないっ！！私たちの国は私たちが守

るのよっ！！いいわねっっ！！？」
『おおおおぉぉぉーーうっっ！！！』
白雪の言葉に、さらに闘志を高める街人たち。
「先頭を切るわっ！付いてらっしゃいっ！鈴白っ！芹っ！」
『はいっ！』
右手に雪剣を作り出して、白雪が鋭く構えを取る。白雪の呼びかけに大きく返事をする、両脇の鈴白と芹。

『お供致しますっ！虎昌様っ！！』
「だっからっ……下の名前で呼ぶんじゃないって言ってんでしょうがぁぁっ！！」

「ギャアアアアッッッ！！！！」

怒鳴りついでに、降りてきた鬼人の1匹を、あっという間に倒す白雪。

「姫様に続けぇぇぇぇっっ！！」
『うおおおおおおおおっっ！！』
街人たちも一斉に鬼人の群れへと飛び込んでいく。

『グワアアアッッッ！！！！』
『うおおおおおおっっっ！！！！』

「かぁぁぁぁぁぁ～～～っ！」

始まった白雪率いる街人と鬼人の戦闘を、街人たちの後方から暢気に見つめ、感心したような声を出す門貴。

「虎国の人間は勢いがちゃうなぁ～っ！」

「感心してないでとっとと行かないと出番なくなるよぉ～？」
「へっ？」
しみじみと呟いている門貴に、少し前方から由雉が声をかける。
「ボクも白雪たちと先頭出るねぇ～」
「あっ！ちょっ……！」
羽根を構えて、鬼人たちの群れの中へと飛び込んでいく由雉。
「にょっ……！如意棒っ！置いてかんといてやぁ～っ！ユッキーっ！」
如意棒を出して、門貴が慌てて由雉の後を追った。

「そうかっ……白雪たちがっ……」
「ええ。ですからしばらくは大丈夫かと思いますが……」
ゴンに状況の説明をした輝矢が、少し表情を曇らせる。
「何せ相手は九千です。いくらサルたちや白雪が粘っても、状況はかなり厳しい……」
『……っ』
輝矢の言葉に、険しい表情を見せるゴン、桜時、羊スケ。
「ともかくゴンたちはオトポリに援軍を要請した上で、一刻も早く皆の援護に向かって下さいっ」
「えっ？でもここはっ……？」
「ここは私が抑えます」
「……っ」
迷いなく答える輝矢に、少し眉をひそめる桜時。

「わかったっ」
「ゴンっ……」
「……っ？」
深く頷いたゴンを呼び、笑顔を向ける輝矢。
「疑われた分っ、しっかりと汚名返上して来て下さいっ」
「……おうっ！」

輝矢の言葉に、ゴンも笑顔を見せて頷いた。

「よしっ！行くぞっ！！」
「はいっスっ！！」
ゴンの呼びかけに羊スケがしっかりと答え、2人が城の出口の方へと駆け出していく。
「……っ？」
その場から動こうとしない桜時に、眉をひそめる輝矢。
「ハチもゴンたちと一緒にっ……」
「俺は残るっ」
「えっ？」
桜時の言葉に、輝矢が首をかしげた。
「相手は2人だ。俺も一緒に戦う。いいなっ？」
「ハチっ……」
強い意志を感じさせる表情で言い切る桜時に、輝矢がそっと目を細める。

「そんなに私と離れたくないのですねっ」
「違げぇぇぇーーーよっっ！！！」

感極まった様子でしみじみと呟く輝矢に、桜時が勢いよく突っ込む。

「あっ！！そうだっ！！」
「……っ？どうしたんスかぁ？ゴンさんっ」
ゴンが出口の前で急に立ち止まり、また城の中へと逆戻りして行く。
「竹取たちの邪魔になっからアンタも来いっ！」
「ふえええええっ！？」
輝矢の言いつけを守って大人しく座り込んでいた紺染を引っ張り、再び出口の方へと急ぐゴン。

「逃がしませんっ……！“狐火・銀牙”っ！」
出口へと駆けて行くゴンたちに、炎の刃を放つギン。
“水月”っ」

――――パァァァァァァーーーーンッッッ！！！――――

「何っ……！」

横から飛んで来た水の刃に、相殺されて消える銀牙。ギンが驚いたように目を開く。

「……止めさせませんっ」
「クっ……！」

前へと立ちはだかり、不敵な笑みを浮かべる輝矢に、ギンは表情をしかめながら身構えた。

「……仕方のない子ね……」
輝矢に止められているギンを見ながら、少し眉をひそめる霙。

「……“氷柱”っ」

霙が右手をゴンたちへと向け、鋭い氷の刃を放つ。

「“瞬花”っ！」

――――パァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――

「……っ」

突然、氷柱が桜の花びらへと変わり、散っていく。その光景に思わず目を見張る霙。

「アンタの相手は俺だっ！」
「……“花力”……？」

立ちはだかった桜時を見て、霙が眉をひそめる。

「何者っ……」

「行くぞっ！！」
「ウイッスっっ！！」

「……っ」

ギンと霙が輝矢と桜時にそれぞれ止められている間に、ゴン、羊スケ、そして紺染の3人が無事に城の中から逃げていく。

「チッ……」

ゴンたちを逃がしてしまったことに、舌打ちをする霙。

「まぁいいわっ……何人集まろうとも九千の鬼人に勝てるはずはっ……」

「うぅわっ！やっべぇっ！相手、女じゃんっ！！ああーっ！！大人しく輝矢に任せときゃ良かったぁっ！！」

「なっ……何なのっ……？」

いきなり頭を抱えて叫びだす桜時に、霙は少し呆れた表情を見せた。

第１８章　信じる　★２

一方、白雪率いる虎国軍団ｖｓおよそ九千の鬼人の軍勢。

「グワアアアッッ！！“鬼口”っ！！！」

「鬼口が来っぞぉぉぉっ！！！」

「……っ！」

街人に向けて鬼口を放つ緑鬼に、鈴白が素早く街人たちの前に出て両手を構える。

「……っ“逆鏡”っ！」

――――パァアアアアアーーンッッッ！！！――――

鈴白が目の前に巨大な鏡を出し、鬼口を見事に弾き返す。

『グアアアアアッッッ！！！』

弾き返ってきた鬼口が直撃し、苦しげな声をあげる数匹の鬼人。

「芹っ！」

「うんっ！」

鈴白の呼びかけに、芹がその苦しんでいる鬼人たちの真上へと飛び上がる。

――――ボォオオオオオオオオォ～～～～ンッッッ！！！！――――

空中で豹化する芹。

「“降雹”っっ！！」

――――バァァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――

『ギャアアアアアアアアッッッ！！！！』

豹化した芹が降らせた雹により、後方にいた鬼人が一気に１０匹ほど消えていく。

「ううううっ……！こここここ怖いっ……！怖いよぉぉ～～っ……！ブルブルブルっ」

「ママも怖いわぁ～っ！！パパぁぁ～～っ！！」

『……。』

皆が必死に戦っている横で、ただ震えているだけの虎克とただ甲高い声を発しているだけのマーサ。何の役にも立っていないどころか、皆の気を散らせていた。

「グワアアアアアアッッ！！」

「……っ！国主様っっ！！」

そんな虎克に、後方から勢いよく爪を振り下ろす鬼人。街人たちが身を乗り出す。

『国主様っっっ！！！！』

「……っ」

街人たちが必死の叫びをあげる中、虎克が急に鋭い表情となって

両手を地面へ突く。

「“雪崩”っ！！」

――――バァァァァァァァァーーーーンッッッ！！！！！――――

虎克の声に呼応するように、辺りの雪が一斉に噴き上がる。

『ギャアアアアアッッ！！』

勢いよく流れ込む雪に、虎克を攻撃しようとしていた鬼人を初め、多くの鬼人が巻き込まれて消えていく。

「はぁぁぁぁぁ～～～っ！怖かったぁぁ～～っ！」

「頑張ったわねぇ～っ！！パパっっ！！」

「……何々なんだっ……？あの人はっ……」

「考えるな。この国一番の謎なんだから」

肩を落とす虎克と笑いかけるマーサを見て、街人は皆、唖然とした表情を見せた。

「“雪時雨”っっ！！」

「如意棒・第2の舞っ……“浄”っっ！！」

「“右翼・十裂羽”っ！」

『ギャアアアアッッ！！』

白雪、門貴、由雉は、街人たちの先頭に立って、次々と鬼人を蹴

散らしていく。

「ふわぁ～っ……もうけっこう倒した思うのに、全然減ってへんなぁ～」

続々と山を降りてくる鬼人を見て、門貴が少しうんざりしたように言う。

「ボク、疲れたから休憩して来ていいぃ？」

「ダメに決まってんでしょーがっっ！！人の国の一大事に何、暢気なこと言ってんのよっ！！」

「ちぇ～っ」

白雪に怒鳴られまくった由雉が、少し拗ねたように口を尖らせる。

「んでも確かに街人たちにも疲れは出て来とうし、状況はけっこう厳しいよなぁ～」

「……っ」

門貴の言葉に、表情を険しくする白雪。

「このままやとどう踏ん張ってもっ……」

「何だぁ～っ？随分と弱気なコメントじゃねぇーかっ！」

『……っ？』

どこからか聞こえてくる、聞き覚えのあるガサツな声に、一斉に振り向く門貴、由雉、白雪。

『フンギャアアアアアッッ！！』

『……っ！』

3人が振り返った途端、前方の鬼人が激しい炎に勢いよく吹き飛

んでいく。

「お前らそれでもっ、竹取輝矢のお供かっ！？ああっ！？」
「ゴンっ！」
「ゴンゴンっ！！」

吹き飛ばされた鬼人たちの後方から現れたゴンに、門貴と由雉が笑顔を見せる。

「無事やったんやなっ！！」
「お陰様でなっ」
「輝矢と桜時はぁっ？」
「ギンと鬼人共の親玉の女と戦ってる」
そう会話を交わしながら、門貴たちの元へと合流するゴン。
「ってか、私は竹取のお供とかじゃないしっ」
嬉しそうに話す門貴たちを横目に、ゴンの言葉に、不機嫌そうに顔をしかめて呟く白雪。

「んっ？」
「よいしょっ」
「……っ！」
そんな白雪が、羊スケに連れられながらこちらへとやって来る紺染を見つける。

「紺染ぇぇぇっ！！てめぇぇっ！！この野郎ぉぉっっ！！」
「ひえええええっっ！！」
怒りの形相で駆け込んでくる白雪に、紺染が思わず悲鳴をあげる。
「ごめんなさぁぁ～～いっっ！！！」
「ゴメンで済むかぁぁっっ！！今、ここで息の根、止めてやらぁぁぁっっ！！」

「きゃあああああっっ！！」
「白雪さぁ～んっ、今は紺染さんに体力使ってる場合じゃないっスよぉ～っ」
紺染の息の根を止めようとする白雪を、何とか宥めようと声をかける羊スケ。
「それよりほらっ！あんなに鬼人がいるんスからぁ～っ」
「クっ……！」
まだまだ山を下りてくる鬼人たちの姿に、白雪が何とか踏みとどまる。

「そうだっ！紺染のことは後にして、今はとにかく鬼人を倒すことだけ考えろっ！」
「……っ」
そんな白雪に、ゴンが冷静に言い放つ。
「本部への連絡もした。朝には援軍が到着する。それまで何とか俺たちだけで粘るんだっ！」
「……。」
そんなゴンを見つめ、眉をひそめる白雪。

「貴方の言葉は……信用できるの……？」

「……っ」

「白雪ちゃんっ……！」

白雪の厳しい問いかけに、眉をひそめるゴンと、思わず身を乗り出す門貴と由雉。

「何言ってんのさぁっ！この状況見たらわかるでしょっ？ゴンは初めからボクらを裏切ってなんかっ……！」

「そういう振りをして油断させて、私たちを攻撃するつもりなのかも知れないわっ」
「なっ……！ゴンさんはそんなことっ……！！」
「私にはこの国を守る義務があるのっ！！」
「……っ！」

思わず前へ出た羊スケに、白雪が強く叫ぶ。白雪の強い意志に押されるように、思わず言葉を止める羊スケ。

「例え誰をどんなに傷つけてでもっ……国を失わせるわけにはいかないっ！！」

『……っ』

「……。」

白雪の必死の言葉に、門貴たちは皆、反論の言葉を呑み込んで俯き、ゴンはそっと目を細めた。

「確かに俺はっ……」
「……っ」
言葉を放つゴンの方を振り返る白雪。
「今までたくさんの人間を裏切ってきた……」
「……。」
ゴンの言葉に、白雪が目を細める。
「信じられないのも無理ないし、“信じてくれ”なんて大層なことは言えないっ……。けどっ……」
ゴンが真剣な表情を見せて顔を上げ、まっすぐに白雪を見つめる。

「俺をここに送ってくれた竹取と、俺を信じてくれるコイツらのことはっ……信じて欲しいっ」

「……っ」

ゴンのその言葉に、白雪が少し目を見開く。

「ゴンゴンっ……」

「……っ」

門貴と由雉が穏やかな笑みをこぼす。

「……。」

そっと俯き、ゴンに背中を向ける白雪。ゴンが少し不安げに白雪を見つめる。

「……っ全員っ！！注目っっ！！」

『……っ？』

先頭に立つ白雪が大声を出すと、門貴たちを初め、すべての街人が白雪の方を見る。

「明日の朝にはオトポリの援軍が来るわっ！！それまで何とか私たちだけで粘るわよっっ！！！」

『うおおおおっっ！！』

「……っ」

白雪の言葉に、一斉に気合の声をあげる街人たち。この光景にゴンが少し目を開く。

「さっ！アンタらもとっとと戦った戦ったっ！！」
「はぁ～いっ」
「白雪ちゃんっ！喜んでぇ～っ！！」
振り返って言い放つ白雪に、それぞれ返事をする門貴と由雉。

「アンタもっ！」
「……っ」
そう言ってゴンを見る白雪に、ゴンがふと笑みをこぼす。

「よっしゃあああっっ！！やってやんぜぇぇぇぇっっ！！」
「じゃあボクの分も頑張ってぇ～っ」
「何言ってやがるっっ！！とっとと働きやがれっっ！！トリっっ！！」
こうしてゴンたちを加えた白雪軍団は、さらに勢いを増して鬼人の軍勢と相対した。

山頂の城。桜時ＶＳ霙。

「“氷柱”っ……」
「“瞬花”っ！」

――――パァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――

霙の放った氷柱を、桜の花びらへと変える桜時。

「村雨丸っ」

桜時が鞘から素早く村雨丸を抜く。

「“瞬花っ……」

村雨丸を構えて、霙を見つめ、狙いを定める桜時。

「終っ……！うっ……ううっ……！」

その構えが徐々に崩れていく。

「だあああああっ！！ダメだっ！！これ以上、直視できねぇっっ！！！」

敵とはいえ女である霙を前に、狙いを定めるどころか、思わず目を逸らしてしまう桜時。

「あぁぁぁぁぁぁ～～っ！一体、どうしたらっ……！」

「“氷柱”っ」

「……っ！」

再び飛んでくる氷柱を、悩んでいた桜時が慌てて避ける。

「“瞬花っ……終刀”っ！」

「……っ」

村雨丸から放たれる桃色の一閃。

――――バァァァァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――

「……。」

しかし、瞬花終刀が直撃したのは、霙のすぐ横の壁であった。壁にあいた大穴を横目に、少し目を細める霙。

「当てる気が……ないのかしら……？」

「クっ……」

霙を直視することが出来なければ、狙いなど定められるはすもない。霙の言葉に、桜時は険しい表情を見せた。

「……。」

その桜時の様子を、どこか不安げに見つめる輝矢。

「余所見をしている暇があるのですか？」

「……っ」

「“狐火・銀牙”っ！」

そんな輝矢へ向けて、炎の刃が飛んでくる。

「“月器・十六夜”っ」

――――パァァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――

輝矢が三日月を十六夜へと変形させ、向かってくる銀牙を放ったギンへと弾き返す。

「……っ」

弾き返ってきた銀牙を、横に飛んでかわすギン。

「“水月”っ」
「……っ！」

そこへ無数の水の刃が飛んでくる。

「クッ……！」

――――バァァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――

水月を直撃し、爆風の中に消えていくギン。

「ハチっ」

輝矢が爆風から目を逸らし、霎との戦闘を続けている桜時の方へと目をやる。

「“鬼爪っ……」
「えっ……？」
爆風の中から聞こえてくる声に、輝矢が再び振り向く。
「炎舞”っ……！！」
「……っ！」
まだ収まらない爆風の中から飛び出してくるのは、炎に包まれた１０本の爪。
「鬼爪っ……？」
輝矢が戸惑いながらも、後方へと飛び上がる。
「“月器・三日月”っ！」
――――パァァァンッ！パァァァンッ！パァァァンッ！――――
変形させた三日月で、素早く飛んでくる鬼爪を払い落としていく輝矢。
「ううっ……！」
しかし1本だけが落とせず、かすかに輝矢の右腕をかすめた。
「クっ……！」

爪に切り裂かれ、爪がまとっていた炎に焼かれ、輝矢が少し表情を歪めて三日月を下ろす。

「“鬼炎”っ」
「……っ！」

そこへさらに巨大な炎の塊が飛んでくる。

「うっ……！」
「輝矢っ……！！」

何とか三日月を上げて、十六夜に変形させようとする輝矢。しかし傷の痛みに動作が遅れる。その状況に気づき、桜時が輝矢の前へと駆け込んでいく。

「“瞬花”っ！」

――――パァァァァァァァーーーンッッッ！！！！――――

輝矢の前へと出た桜時が、飛んで来た鬼炎を桜の花びらへと変える。

「大丈夫かっ？」
「すみません、ハチ」
振り返った桜時に笑みを向けながら、輝矢が三日月を拾う。

「へぇっ……貴方の“花力”って炎でも何でも桜に変えてしまうんですね」
『……っ』
聞こえてくる冷静な声に、厳しい表情で振り返る輝矢と桜時。
「実に興味深いです……」
そこに立っていたのは、輝矢の水月を直撃したにも関わらず傷1つない、余裕の笑みを浮かべたギンであった。
「いくら興味を持たれても、ハチはあげませんよっ」
「今のセリフはそういう意味じゃねぇーだろっ！！」
輝矢の言葉に、思わず突っ込みを入れる桜時。
「それに私にはアナタの方が余程、興味深いですねっ」
「えっ？」
「……っ」
表情を鋭くして言い放つ輝矢に、桜時は目を丸くし、ギンは少し眉をひそめる。
「“鬼爪”といい“鬼炎”といい、もしやアナタはっ……」
「……っ！鬼人化人間っ……！？」
輝矢の言葉を聞き、桜時がハッとした表情でギンを見る。
「ええっ……僕はもうすでに、人ではありません……」

『……っ』

ギンが不敵な笑みを浮かべて、輝矢たちに話す。ギンの言葉に、輝矢と桜時は顔をしかめた。

第18章　信じる　★3（前書き）

昨日は小説を更新しませんでした。
理由はほらっ、昨日、エイプリルフールだったでしょっ？
そんな日に「信じる」って題名の小説を更新するのって、どうなのぉ？と思いましてっ！へへっ！へへっ…
あっ…すみません、やっぱり嘘です…。
昨日、忙しくてサボりました…。
すみません…。

ではでは改めて、スタートですっ！

第18章　信じる　★3

――私はっ……私は死なないっ……！私は永遠に生き続けるのっ……！！――――

「……。」

輝矢の脳裏に、オーロラの姿が過ぎる。

「じゃあっ……アイツもっ……？」

桜時が戸惑うように霙を見る。

「冗談っ。私をそんな“中途半端な鬼”と一緒にしないでよっ……」

「……っ」

「霙様は我らに力を与えて下さった偉大なお方です」

「じゃあお前がコイツらを鬼人にっ……！？」

「フフフっ……」

厳しい表情で問いかける桜時に対し、霙はどこか楽しげに笑ってみせる。

「言う気なしかっ……」

「無理やり言わせるしかないようですね」

少し肩を落とす桜時に、輝矢が強気に言い放つ。

「鬼人化の方はオトポリに引き渡せば、また人間へ戻すことが出来るかも知れません……」

「……っ」

小声で囁く輝矢の言葉に、桜時が少し驚いたように目を見開く。

「じゃあとりあえずあの女をっ……」

「ええ、秒殺して口を割らせましょう」

霙やギンに悟られないよう構えながら、作戦をやり取りする輝矢

と桜時。
「よしっ……！って、ダメだった……！！」
「……っ？ダメ？」
村雨丸を構えようとした桜時が、がっくりと肩を落とす。その様子に首をかしげる輝矢。
「アイツ、女だからさぁ、３秒以上直視出来なくて、どうにも狙いがっ……」
「浮気ですか？」
「何でだよっっ！！！」
悩みを打ち明けた桜時であるが、輝矢の反応に勢いよく突っ込む。
「嘘ですよ。ハチは私一筋ですもんね」
「いやっ……それもまぁ違げぇーんだけどよっ……」
「大丈夫です」
「へっ？」
あっさりと答える輝矢に、桜時が目を丸くして振り向く。
「私がハチでも攻撃出来るようにして置きますので、ハチはその間、あのキツネを押さえておいて下さい」
「へっ？そんなこと出来っ……」
「では、行きますよっ」
「えっ？あっああっ、わっわかったよっ」
輝矢の言葉をいまいち呑み込めないまま、輝矢と桜時がそれぞれ表情を鋭くして構えを取る。

「……人間であったお前に情けをかけて、狙いを私に絞ってくるでしょうね……」
「そう簡単には絞らせませんよ」
２人の作戦を読み、不敵に微笑む襲に、ギンも笑顔で強気に言い放つ。

「行きますよっ」
「おうっ！」
輝矢と桜時がそれぞれに三日月と村雨丸を構えて飛び出していく。

「“瞬花っ……終刀”っ！」
「“水月”っ！」

――――バァァァァァァァーーーンッッッ！！！！――――

『……っ』

霙とギンに対し、２人が水月と瞬花終刀を放つ。飛んでくる２つの技に、左右に分かれて避ける霙とギン。

「……っ」
分かれた霙の方へと、まっすぐに駆け込んでくる輝矢。

「……予想通りねっ……」

「“水月”っ！」

そう言って微笑む霙に、輝矢が再び水月を放つ。

「でもっ……私とは能力の相性が悪すぎるんじゃないっ……？小娘さんっ……」

霙が向かってくる水月の方へ、両手を掲げる。

「“化鬼氷（かきごおり）”っ……！」

水月に向けて、無数の氷の粒を放つ霙。

「フフっ……なっ……！」

余裕の笑みを浮かべていた霙の表情が、急に変わる。

「凍らないっ……！？」

霙の放った化鬼氷に氷結することなく、水の刃のまま霙へと飛んで来る水月。

「うっ……！」

――――バァァァァーンッッッ！！！！――――――

「うあああああああっっ！！」

水月が霙へと直撃する。

「霙様っ……！」

「“瞬花終刀”っっ！！」

「……っ！“狐火・銀牙”っ！」

――――パァァァァーーンッッッ！！！！――――

瞬花終刀と銀牙が激しくぶつかり合って相殺する。

「お前は俺が押さえるっ！」

「……っ貴方ごときに押さえられますかね……」

まっすぐに言い放つ桜時に、ギンは今まで以上に鋭い瞳を見せた。

「クっ……！ううっ……」

水月を受け、体のところどころに傷を負った霙が、苦しげな表情を見せながら起き上がる。

「何故っ……水が凍らないなんてっ……」

「前に、アナタと同じような能力を持った、変な女と戦ったことがありましてね……」

戸惑うように言う霙に、輝矢が少し笑みを浮かべて答える。

「でもまぁっ、あの虎ンプの方が、アナタよりも全然強かったですけどっ」

「……っ」

輝矢の挑発に、勢いよく表情を引きつる霙。

「いいわっ……そこまで死にたいのなら見せてあげる……」

霙が俯き、低い声で呟く。

「私の本気をねぇぇぇぇぇっっ！！」

――――パァァァァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――

「……。」

全身から白い光を放ち始める霎を、静かな表情で見つめる輝矢。

「……作戦通りっ」

輝矢が冷静にポツリと呟く。

「……っ！そうかっ！鬼人の姿にっ……！」

「“鬼爪・炎舞”っ！」

「……っ」

光を放つ霎を見て、思いついたように言葉を発していた桜時に、ギンが炎に包まれた１０本の爪を飛ばす。

「村雨丸っ！」

桜時が村雨丸で１本ずつ鬼爪を払い落としていく。

「……。」

桜時がギンと激しい戦闘を繰り広げる中、霎を包んでいた白い光が徐々に収まり、中から人ではない巨大な影が見え始める。目を凝らして、それを見つめる輝矢。

「……っ！」

突然、輝矢の表情が変わる。

「後悔してもっ……もう遅いわよっ……？」

「あっ……“藍鬼”っ……」

白い光の中から現れたのは、頭部に金色の角を3本輝かせた、深い藍色の肌をした、真っ赤な瞳の鬼であった。鋭い牙と爪、その容姿はまさに鬼人そのものである。

「レベル8の鬼人っ……こんな所にっ……」

鬼人となった霎の姿に、明らかな動揺を見せる輝矢。

輝矢たちが今まで戦ってきた鬼人は精々、レベル1~3。藍鬼である霎は、その鬼人たちとは5段階以上もレベルが違う。

「レベル6以上の鬼人には、早々お目にかかれないとタローから聞いたことがありますが……」

「そりゃそうよっ」

藍鬼が怪しげに笑う。

「会った途端、死ぬんだからっ」

「……っ！」

そう言うと、霎が素早く輝矢の元へと飛び込んでくる。

「速いっ……！」

「はあああああああっ！！」

「三日月っっ！！」

――――――・・・・・・・・・・・っっ！！！――――――

「クっ……！」

振り下ろされる爪を、三日月で受け止める輝矢。

「フフっ……」

「……っ？」

「はあああああっっっ！！！」

「うっ……！あああああっっ！！」

霙が三日月に受け止められていた爪を、力で勢いよく振り切り、三日月ごと輝矢を壁際へと吹き飛ばした。

――――バァァァァァァーーーーンッッッ！！！――――――

「輝矢っ……！」

壁に激突する輝矢に、思わず身を乗り出す桜時。

「……っ“水月”っ！」

「……っ」

輝矢がすぐに壁から出て、霙へと水月を放つ。

「こんなものっ……」

――――メキメキメキっ……！！――――――

「何っ……？」

水月を振り払おうと霙が右手を振りかぶった時、霙の立っている辺りの床にヒビが入り始める。

「“下弦”っ……」

――――バァアアアアーーンッッッ！！！！――――

「うっ……！ウアアアアアアッッ！！」

床から飛び出して来た下弦が、霙を下から勢いよく突く。

「うっ……！」

下弦を受けた霙を、さらに水月が襲う。

――――バァアアアアアアアアーーンッッッ！！！！――――

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」

少し息を乱しながら、爆風を見つめる輝矢。

「……っ！」

しかし見つめていた輝矢の表情が、驚愕の表情へと変わる。

「今のは少し……効いたわね……」
「……っ」

爆風の中から姿を現したのは、ほぼ無傷の霙であった。

「強えぇっ……」
あれほどの輝矢の攻撃を直撃したというのに、平然としている霙を見て、桜時が思わず呟く。
「当然です」
「……っ？」
ギンの声に、振り返る桜時。
「霙様はレベル８の藍鬼……貴方がたが今まで相手にしてきた低レベルの鬼人とは次元が違う……」
「……。」
ギンの言葉に、桜時は厳しい表情を見せた。

「はぁっ……はぁっ……これではハチに任せるどころか、私でも倒せるか危ういですね……」
下弦を手元に戻しながら、少し額に汗をかく輝矢。
「どうしましょうか……」
「じゃあ今度はこっちから行くわよ……？」
「……っ」
霙の言葉に、輝矢が身構える。
「多分、これで終わりだと思うけど……」
「えっ……？」

「……っ」
輝矢が眉をひそめる中、霙が天井へ向けて高々と両手を突き上げる。
「“氷駕”っっっ！！！」
――――ピキピキピキピキッッッ……！！！――――
『……っ！』
霙を中心に、床や天井が凍り始める。
「ううっ……！」
広がっていく氷の領域に、足を凍らされてしまうギン。
「みっ……霙様っ……！！」
ギンが助けを求めるように、霙を見る。
「霙様っっ！！！」
「フフっ……」
足から徐々に凍っていく体に、必死に霙の名を叫ぶギン。だが霙はギンを助ける様子も見せず、ただギンへ冷たい笑みを向けた。

「霙様っっ！！霙様っっ！！霙様ぁぁぁ～～っっ！！」

――――パリィィィィィーーンッッッ！！！――――

「……っ」

悲痛な叫びを残して、全身を凍らされてしまうギン。危機迫る表情のまま、氷の像へと姿を変えた。

「無差別かよっ……！」

そんなギンの姿に少し表情をしかめながら、迫り来る氷の領域に、村雨丸を収めて両手を構える桜時。

「“瞬花”っっ！！」

桜時の体を桃色の花びらが包んでいく。

「クっ……！」

輝矢もまた、迫り来る氷の領域に、厳しい表情を見せていた。

「“月器・十六夜”っ！」

下弦を十六夜へと変形させて、氷を受け止める輝矢。

「……っ！」

十六夜を掻い潜って、氷が輝矢へと向かってくる。

「防ぎっ……きれないっ……！！」

輝矢が険しい表情で唇を噛む。

――――パァァァァァァァァーーーンッッッ！！！！――――

第18章　信じる　★4

「……。」

静かになった空間に、1人佇む霙。

「氷の世界……」

霙の見つめるその先に広がっていたのは、確かに一面見渡す限りの氷の世界であった。先ほどまでの城の一室の面影はなく、天井も壁も床も、そこにあるもの全てが凍りついていた。

「何度見ても美しい……んっ……？」

自らが作り出した氷の空間に酔いしれていた霙が、ふと眉をひそめる。

「んっ……んんっ……」

「ううっ……うっ……」

「……生き残りが2人……」

氷の中に目立って見える、桃色の花びらの集まりと、半分凍った金色の丸い盾。

「ふぅ～っ……」
花びらが崩れ落ちると、中から桜時が現れた。
「寒っ！」
広がる氷に、桜時が少し体を震わせる。

「“氷駕”を喰らって無傷とは……やはりお前の“花力”は興味深いわね……」
「……っ」
霙の不敵な笑みに、すぐさま表情を鋭くする桜時。

「でも……もう1人は瀕死のよう……」
「えっ……？……っ」
霙が振り向いた先を、桜時が同じように振り向いて見る。

「輝矢っ……！！」

「うっ……ううっ……」

力なく床に落ちた十六夜の向こうから現れたのは、足を凍りつかされ、体中に凍傷を負った輝矢であった。苦しげな表情を見せる輝矢の元へ、桜時が慌てて駆け寄る。

「大丈夫かっ！？輝矢っ！！」
「ハチっ……いえっ、残念ながらあまりっ……」
駆けつけた桜時に、輝矢が弱々しい笑みを向ける。
「ハチは……？」
「俺は風邪は引きそうだけど、何とか平気だっ！」
「そうですか……」

そう言う桜時に、輝矢が少し安心したように笑う。
「あの……キツネはっ……？」
「……。」
輝矢の問いかけに、表情を曇らせる桜時。
「あそこに……」
「……っ」
桜時が指差した先にあったのは、氷の像と化したギンの姿であった。氷の中のその苦しげな表情に、輝矢も眉をひそめる。
「……押さえる必要もなくなりましたね」
「ああ……」
厳しい表情で言葉を交わす輝矢と桜時。
「残るはあの女をっ……ううっ……！」
「輝矢っ……！！」
立ち上がろうとした輝矢が、痛みに表情を歪める。凍りつかされた足を無理に動かそうとしたからであろう。下手したら骨が折れてしまう。
「クっ……」
動かぬ足に、険しい表情を見せる輝矢。

「フフフっ……どうやら生き残りは1人だったようねっ……」
「……っ」
「……。」
挑発するように笑う霎と、霎の言葉に悔しげな表情を見せる輝矢を見て、どこか静かな表情となる桜時。

「仕方ありません。私が何とかあの女を引きつけますので、ハチはすみませんがゴンか由雉を呼っ……」
「輝矢はちょっと休んでてくれ」
「えっ……？」
突然、そう言って立ち上がる桜時を、輝矢が戸惑うように見上げ

る。

「俺がお前でも攻撃できるようにしてくっからっ」

「なっ……！」

村雨丸を抜いて笑みを向ける桜時に、輝矢が驚く。

「だっダメですっ……！藍鬼の相手はまだハチにはっ……！」

「言ったろっ？“一緒に戦う”って」

「しかしっ……！」

「輝矢っ……」

「……っ」

静かに名を呼ぶハチに、言葉を止める輝矢。

「俺を……信じてくれっ……」

「……っ」

まっすぐな瞳で言い放つ桜時に、輝矢が大きく目を見開く。

「……アナタには敵いませんね……」

「へっ？」

俯いて、桜時には聞こえないような小声で呟く輝矢。桜時が少し首をかしげる。

「いいでしょう……」

輝矢がゆっくりと顔を上げる。

「アナタを信じます……」
「……っ」
穏やかな笑みを向ける輝矢に、桜時も笑みをこぼした。
「よっしゃっ！」
桜時が気合いを入れて輝矢の前に立ち、村雨丸を構える。
「話し合いはもういいの……？」
「ああっ」
「……そうっ……」
挑発するように問いかけた霎に対し、迷いなくハッキリと答える桜時。桜時の返答を聞いて、霎がどこか怪しげに微笑む。
「じゃあ天国でも寂しくないように……2人揃って天国へ送ってあげるわ……」
「……。」
鋭い爪を見せるようにして微笑む霎に、桜時が表情を曇らせる。
「今更、鬼爪で攻撃するなんて、さらに薄ら寒みぃーこと言うなよっ……？」
「何っ……？」
桜時の言葉に、霎が眉をひそめる。
「お前が出せる最高の力っ……さっきの技で来いっ！」
「……っ」

桜時の思いがけない誘いに、少し驚いた表情を見せる霙。

「さっきの技を……誘った……？」

そんな桜時に、輝矢が少し戸惑うように呟く。

「……誘っているのは勝算があるから……？そんなはずはないわねっ……」

何かを企んでいるのであろう桜時に惑わされながらも、桜時の勝算はないと肩を落として笑う霙。

「いいわっ……そこまで望むのなら死なせてあげる……」

桜時の誘いに、負けることはないと確信し、あえて乗る霙。

「私の氷の世界でねぇっっ……！！」

「……っ」

霙の声に身構える桜時。霙が高々と挙げた両手を勢いよく床に突く。

「“氷駕”っっ！！！」

――――バァァァァァァァァーーーーンッッッ！！！――――

先ほどよりも巨大な氷が、速いスピードで天井や床の氷の上をさらに張っていく。

「言っておくけどさっきの“氷駕”は7割くらいの力に抑えてたのよっ！これがＭＡＸっ！」

広がっていく氷に、勝ち誇ったように言い放つ霙。

「今度はあのちゃっちい花びらなんかで止められやしないわっ！！」

「……。」

霙の言葉に動揺することなく、桜時が静かに村雨丸の構えを取る。

「……っ」

向かってくる氷を見ることなく、ゆっくりと瞳を閉じ、感覚を研ぎ澄ませる桜時。

「ハチ……」

輝矢が祈るように桜時を見つめる。

――――パキパキパキパキッッ……！！！――――

桜時の直前に氷が迫った時、桜時が大きく目を開く。

「……っ！」

“縦桜っ……」

村雨丸を振りかぶる桜時。

「無塵”っっっ！！！！」

――――パァァァァァァァァーーーンッッッ！！！！――――

「んな……っっ！！」

桜時が村雨丸を振り切った途端、桜時に向かって来ていた氷や天井や床を凍らせていた氷が、一瞬にしてすべて桜の花びらとなって散った。その光景に大きく目を見開く霎。

「私のっ……私の氷の世界がっ……」

桃色の花びらと化して散っていく氷たちに、霙が激しい動揺を見せる。

「こんなっ……！！」

「冬の後には……春が来る……」

「……っ？ううっ……！！」

顔を上げた霙の周囲を取り囲むように舞って来る花びらたち。

「……“瞬花終刀”っ……！！」

桜時の言葉を合図に、花びらたちが一斉に霙へと飛んでいく。

「クっ……！」

――――バァァァァァァァーーーンッッッ！！！！――――

「ギャアアアアアアッッ！！！」

降り注ぐ花びらに、全身を切り裂かれる霎。

「輝矢っ……！！」

「……っ」

桜時が振り返ると、そこには足を氷から解放された輝矢の姿。

「“月器・三日月”っ」

輝矢が凍傷を負っている足を奮い立たせ、十六夜を三日月へと変形させて構える。

「……っ！」

鋭い表情で苦しんでいる霎の元へと飛び込んでいく輝矢。

「はあああああっっ！！」

桜時に負わされた傷により、動くこともままならない霎に、輝矢が勢いよく三日月を振り下ろす。

「ううっ……！！」

恐怖に歪む霙の表情。

――――・・・・・・・・・っっっ！！！！――――

「ウアアアアアッッ！！！」

三日月が霙の胴体を斜めに斬り裂き、緑色の血が吹き出るとともに、霙が激しい悲鳴をあげた。

「アアアッ……アッ……」

ゆっくりと後方へと倒れ込んでいく霙。

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」

倒れる霙を、肩で息をしながら見つめる輝矢。

「……っ」

しかし輝矢も力尽きたのか、三日月を落とし、力なく後方へと倒れていく。

「おっとっ」
「……っ」

倒れ込んだ輝矢を支え、そのまましゃがみ込む桜時。そんな桜時を、輝矢は少し驚いたように見つめる。

「ハチっ……」
「大丈夫かよぉ？」
「……。」

輝矢をしっかりと支え、心配そうに問いかけてくる桜時をまっすぐに見つめる輝矢。

「ハチぃいっっ！！」
「だあああああっっ！！んな元気があんなら自分で立てぇぇっ！！」

抱きつこうとする輝矢を、桜時が勢いよく引き離す。

「ウッ……ウウッ……」
「……っ」

倒れたまま、苦しげな声を漏らす霙の方を振り向く桜時。

「生きてるっ……」

「急所はハズしました」

「へっ？」

桜時に答えながら、座ったまま霙の顔が見える位置へと、体を引きずるようにして移動する輝矢。桜時も目を丸くしながらも、輝矢の後に続いて移動をする。

「さぁ、教えていただきましょうか。何故、人間を鬼人に？それに、どうやってそんな力を手にしたのです？」

「……。」

問いかける輝矢に、目を細める霙。

「……知らないわっ……」

「……っ」

思いがけない霙の答えに、輝矢が眉をひそめる。

「知らばっくれたってっ……！」

「私は……あの方の指示に従ったのみよ……」

「あの方っ？」

「……っ」

――――あの方は……偉大なお方……――――

輝矢の頭に、オーロラの言葉が過ぎる。

「虎国周域に住む人間たちを鬼人へと変えたのは、全てあの方……

私じゃないし、私にそんな力はないわ……」
「あの方とはっ……」
輝矢が霙に鋭い表情を見せる。
「あの方とは誰ですっ……？」
「……。」
輝矢の問いかけに、ゆっくりと目線を天井へとやる霙。
「あの方とは……」
――――ブシュッッ……！！！！――――
「ウウッッ……！！！」
『なっ……！』
あの方の名を口にしようとした霙の喉元に、突然、ナイフが勢いよく突き刺さる。衝撃を走らせる輝矢と桜時。
「アッ……アアッ……」
――――・・・・・・・・・・・・・っっ――――
霙はそのまま、砂となって崩れ落ちた。

「誰だっ！！」

輝矢と桜時がナイフの飛んで来た方を勢いよく振り向く。

「お前っ……！！」

「……。」

２人の振り返った先に立っていたのは、冷たい表情を見せたギンであった。

「なんでっ……」

「桜時の“花力”で氷から解放されたのでしょう……」

「別に、貴方の力を借りずとも、あんな女の氷からくらい、簡単に逃れられましたよ？」

「何っ……？」

ギンの言葉に、２人が眉をひそめる。

「負けた上に、敵に君主の情報を与えようとするとは……何とも愚かな女でした……」

「まさかアナタっ……」

「そう……僕の本当の君主は紺染でもなくその女でもなく、“あの方”っ……」

「……っ」

そう言って笑うギンに、険しい表情を見せる輝矢。

「しかし、今日のところは退かせてもらいますよ。今の状況ではこちらが不利ですしね」

「……。」

不利と言いながらも、どこか自信を覗かせた表情を見せるギンを、輝矢は少し警戒するように見つめる。

「貴方がたのことは覚えておきますよ……竹取輝矢、朱実桜時……」

2人にゆっくりと背を向けるギン。

「また……お会いしましょう……」

――――・・・・・・・・・・っっ――――

少し振り返って2人に微笑みかけると、ギンはそのまま、どこへともなく姿を消した。

「アイツっ……二重で裏切ってやがったのかっ……」

「……。」

桜時の言葉を聞きながら、輝矢はそっと目を細めた。

第１８章　信じる　★４（後書き）

後二話ほど続きます。

第18章　信じる　★5

『だあああああっっ！！』
『グガアアアアッッ！！』

夜明けを間近に控えた薄闇の雪山では、まだ白雪軍団と鬼人の軍勢との戦闘が繰り広げられていた。

「如意棒・第2の舞っ……」
その先頭で如意棒を振り上げるのは、もうボロボロの状態の門貴。

「“浄”っっ！！」

――――シィィィィィィィィ～～～～ンッッ……――――

「ありっ……？」

勢いよく如意棒を振り切る門貴であったが、風がまったく起こらず、思わず目を丸くする。

『グワアアアアアッッ！！』
「うっきゃあああああっっ！！」

そんな門貴へ、数匹の鬼人が一斉に襲いかかってくる。大きく悲鳴をあげる門貴。

「“狐火・三耳”っ！」

――――バァァァァァァァーーーンッッッ！！！！！――――

『ギャアアアアッッ！！』

門貴に襲いかかろうとしていた鬼人たちが、横から飛んで来た炎に焼かれて消えていく。

「ったくっ！何やってんだよっ！」

「ゴンゴォォ～ンっ！！」

「どわあああっっ！！！抱きつくんじゃねぇっ！！鬱陶しいっっ！！」

泣きついてくる門貴を、足蹴にして押さえるゴン。

「“風力”が切れてもてぇ～んっ……」

「ええっ！？じゃあ門貴さんってばもうただのサルっスねっ！」

「お前、人のこと言えんのかっ？」

「へへっ」

門貴に刺々しい言葉を吐いた羊スケに、ゴンが突っ込みを入れると、羊スケはボロボロになった羊々ボールを見せながら苦笑いを浮かべた。羊スケもすでに戦える状態ではない。

「うっ……ううっ……」
「“癒羽”っ……」
ゴンたちのいる遥か後方では、由雉が鬼人に傷つけられた街人たちの治療に当たっていた。

「由雉さんっ！こっち、お願いしますっ！」
「由雉さんっ！あっちにもっ！」
「由雉さんっ……！」
「ああぁーーっ！もうっ！！わかってるよっ！1人ずつしか治せないんだから、1人ずつ呼んでっ！」
『はいっ……』

次々と名を呼んでくる街人に、由雉がかなりお怒りの様子で言い返す。そんな由雉に大人しく頷いて、順番待ちをする街人たち。

「はぁっ……」
由雉が深々と溜め息をつきながら、今の治療を続ける。

「癒羽は後10枚っ……こりゃ絶対、足りないなぁっ……」

由雉が天を仰ぎながら、ボヤくように呟いた。

「“雪崩”っっ！！」

――――バァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――

『ギャアアアアアアッッ！！』

相変わらず、怖がりながらも圧倒的な雪力で、一気に数匹の鬼人を倒していく虎克。

「はぁぁぁぁぁぁ～～～っっ……」
「パパぁぁぁっっ！！？」
急に力なく座り込む虎克に、マーサが慌てて駆け寄る。
「パパ、もう限界ぃ～っ……」
「パパぁぁぁぁぁぁっっ！！！」
そう言って虎克は力なくその場に倒れ込んだ。

「うわあああああああああっっ！！」
「うあああああああああっっ！！」

「鈴白っ！芹っ！」
それぞれ力尽き、鬼人の前に倒されていく鈴白と芹の方を不安げに振り返る白雪。

「グガアアアアアッッ！！」
「……っ！」
振り返っていた白雪に、背後から爪を振り下ろす鬼人。白雪が右手にまとった雪剣を、素早く振りかぶる。
「“雪けっ……！」

――――パリィィィィィィィーーーンッッッ！！！！――――

「……っ！！」

白雪が右手にまとっていた雪剣が、いきなり粉々に割れて崩れ落ちる。

「“氷力”がっ……！」

「ガアアアアアアアッッ！！」

「……っ！！きゃあああああああっっ！！」

雪剣を失った白雪が、鬼人の爪に勢いよく吹き飛ばされる。

「虎昌様っ……！！」

傷だらけで倒れ込んでいた鈴白が、必死に起き上がる。

「ううっ……！！」

飛んで来た白雪を、全身で何とか受け止める鈴白。

「グガアアアアアアッッ！！」

「“狐火・一髪”っ！！」

「……ッ！ギャアアアアアアッッ！！」

さらに白雪へ向かって行こうとした鬼人が、横から飛んで来た火の玉に焼かれ、消えていく。

「大丈夫かっ！？」

「うっ……ううっ……」

鈴白の手を借りて何とか起き上がる白雪に、鬼人を倒して駆け込んで来たゴンが声をかける。

「“氷力”が尽きたわっ……」

「白雪ちゃんだけやない。もうみんな限界やっ……」

「由雉さんの治療も追いつかないっスし……」

「朝まで……もちそうにありませんね……」

「……っ」

暗い表情で次々に言う門貴、羊スケ、鈴白の言葉に、そっと俯いて唇を噛む白雪。

「バンジーシューズね……」

「それを言うなら“万事休す”です。虎昌様」

「わっ……わかってるわよっっ！！」

この緊急事態でも、いつも通りの会話を繰り広げる白雪と鈴白。

「でもこのままじゃ確実に全滅だわっ……」

『……っ』

辛い表情を見せる白雪に、皆、何を言うことも出来ずに俯いた。

『グガアアアアッッ！！』

『……っ！！』

皆に諦めの色が出始めた頃、山頂からさらに鬼人の軍勢が駆け下りてきた。

「クっ……！」

皆の中で唯一力の残っているゴンが、皆を庇うように前に出る。

『グガアアアッッ！！』

「“狐火っ……！」

「“アイアン・スウィング”っっっ！！！」

――――バァァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――

『ギャアアアアアアッッ！！』

「えっ……？」

ゴンが炎を放つ前に、どこからか飛んで来た巨大な鉄の塊に、向かってきていた鬼人が一斉に吹き飛ばされていく。その光景に目を丸くするゴン。

「九千の軍勢ってのも大したことないねっ」

「……っ！鉄汰っ……！！」

ゴンたちと鬼人が向き合っている山の中腹の横から姿を現したのは、大きな鉄製のマサカリを持った、雪山にオトポリの黒制服を目

立たせた、オカッパ頭の鉄汰であった。ゴンが大きく目を見開く。

「お前っ……！」
「貴方って人はぁぁぁっっ！！」
「うおおおっ！」

勢いよく駆け込んでくる鉄汰に、思わず後ずさるゴン。

「何を考えているんだいっ！！？上司を置いてった上に、命令違反しといて援軍寄こせって何だいっ！！？」
「いやっ、まぁそれには色々と事情があってよぉっ……」
物凄い勢いで突っかかる鉄汰に、ゴンが思わず目を背ける。

「僕をっ！この僕をこれだけコケにしてっ！覚悟は出来ているんだろうねぇっっ！！？」

「……アイツが一瞬、救世主に見えた自分を呪いたい……」
「同じくっス……」
ゴンに攻め寄っている鉄汰を見ながら、門貴と羊スケが呆れた表情で呟いた。

「だいたい君はねぇっ……！！」
「ああ～もうウザイっ！」
「ぎゃあああああっっ！！」
「あっ……」
後ろからやって来た人物に蹴り飛ばされ、雪山の向こうへと消えていく鉄汰に、ゴンが唖然とする。

「ったくっ！」

「リンゴっ」

鉄汰を蹴り飛ばして現れたその人物は、リンゴであった。リンゴの後方には１００を超える多くの黒制服の者たちが整列している。オトポリの警官たちだ。

「援軍っ……？」

「どうやら僕たち、助かったようですね……」

現れたオトポリの警官たちに、少し圧倒される白雪と、安心したように笑みをこぼす鈴白。

「来てやったわよっ！」

少し茫然としていたゴンに、リンゴが笑みを向ける。

「……っ遅せぇーよっ」

「……っ」

笑顔を見せるゴンに、リンゴはさらに微笑んだ。

「でっ？コイツらの頭はっ？」

リンゴがすぐに真剣な表情となってゴンに問いかける。

「竹取が叩いてるはずだ」

「じゃあ残るはこの残党どもだけってことね。鬼人化した連中も？」

「ああ、混ざってる。鬼人化した連中だけ重傷の状態で生かしてあるから、そっちの回収も頼む」

「わかったわっ」

ゴンの言葉にしっかりと頷き、１００の警官たちの方を振り向くリンゴ。

「今から我々は鬼人残党処理に当たるっ！中には鬼人化した人間も混ざっているから注意するようにっ！！」
『はっ！！』
リンゴの言葉に一斉に敬礼する警官。
「1～6班は鬼人退治っ！7，8班は鬼人化人間の回収っ！9，10班は怪我人の治療に当たりなさいっ！！」
『はっ！！』
もう1度敬礼をして、警官たちはその場からそれぞれに動き出していく。

「ふはぁぁぁ～～っ、丁度、癒羽切れっ」
街人の治療を終えて、力尽きた様子で寝転ぶ由雉。
「助かったでぇ～っ！俺らぁぁっ！！」
「生きてて良かったっスねぇぇぇっっ！！」
「……っ」
喜びを噛み締めるように抱き合う門貴と羊スケを見て、ゴンが笑みをこぼす。

「紺染だなっ！来いっ！」
「……。」
警官の1人に立たされ、すっかり大人しくなった紺染が連行されていく。
「……っ」
そんな紺染を見つめ、ゴンは少し神妙な表情を見せた。

「かっぐやさぁぁぁぁぁぁぁ～～～～んっっ！！」
『……っ』
丁度その頃、輝矢たちのいる山頂の城にも、大きな黒クマ・金汰と数名のオトポリ警官が駆けつけていた。
「金汰っ」
「ゴンが呼んだ援軍が来たのかっ」
「大っ丈夫だべっかぁぁぁ～～～っっ？？」
金汰がボロボロの状態で座り込んでいる輝矢と、そのすぐ横に立っている桜時の元へと歩み寄ってくる。
「敵の大将さんはどうしただぁぁ～～っ？」
「大将は倒しましたが、スパイの方には逃げられました」
「そうだかぁ～っ」
「それより虎国っ……！みんなはっ！？」
輝矢の言葉に何度も頷く金汰に、桜時が身を乗り出して問いかける。
「今、リンゴや鉄汰たちが向かってるだよぉぉ～～っ」
「鉄汰っ……」
鉄汰の名に、少し表情をしかめる輝矢。
「オトポリ警官１００人動員したかんなぁ～～っ、今頃、すっかり片付いてるだよぉぉ～～っ」
「そっ……そうかっ」
「一安心ですね」
金汰の言葉に、ホッとしたように肩を落とす輝矢と桜時。

「おおぉ〜いっ！医療班っ！かっぐやさんの治療を頼むだぁぁぁ〜〜っ」
『はいっ！』

こうして輝矢たちは金汰らにより救助され、鬼人の軍勢の方も昼を迎える頃には、オトポリの圧倒的戦力を前に殲滅させられた。
輝矢たちや傷ついた街人は虎国に運ばれ、オトポリの治療を受けた。
また鬼人化した人間の回収と調査は、戦いが終わった後も続けられた。

第１８章　信じる　★５（後書き）

１１１部。これでなんと、読了時間、栄光の９００分超えですっ！！
もうここまでいくと、自分を笑うしかないですね。
本当に長い話です。
１０００分目指して、頑張ります（笑）

第18章　信じる　★6

同日・夕方。虎国入口、トンネル付近。
「じゃあ俺は先にコイツを本部へ連行するから、後は頼んだぞ、リンゴ副長官」
「ええ」
人間の姿となった金汰の言葉に、しっかりと頷くリンゴ。金汰の隣には、深く俯いた紺染の姿があった。紺染は鬼人と組み、虎国を侵略した罪で、オトポリ本部に連行されようとしていた。
「じゃあっ……」
「じじいっ」
『……っ』
金汰が紺染を車に乗せようとした時、街の方からその場へと現れたのは、ゴンであった。
「ゴン……」
紺染が顔を上げ、ゴンを見つめる。
『……。』
ゴンが紺染の元へと歩み寄ると、金汰とリンゴは少し気を遣うように2人に背を向けた。
「じじいっ……そのっ……」
「……因果なものじゃな……」
「えっ……？」
少し迷うように言葉を発しようとしたゴンの前に、紺染がポツリと呟く。
「人を裏切ることに耐えかね、一族を抜けたお前は……たくさんの仲間に信じられ……」
紺染が俯き気味に言葉を続ける。

「散々、人を裏切って来た私は……最後の仲間に裏切られた……」
「……。」
ゴンがそっと目を細める。
「これが……“報い”というヤツかも知れんなっ……」
紺染が力ない笑みを浮かべ、そっと天を仰いだ。
「違げぇーよっ……」
「……っ」
小さな声で否定するゴンに、紺染が眉をひそめながらゴンの方を見る。
「一族を抜けたからって、俺のやって来たことが帳消しになるわけじゃない……“報い”はいつか俺も受ける……」
「ゴン……」
鋭い目で言うゴンに、紺染が少し目を細める。
「俺がっ……俺が仲間に信じてもらえたのは……」
ゴンがゆっくりと顔を上げる。
「俺が……仲間を信じたからだっ」
「……っ」
そう言って優しい笑顔を見せるゴンに、大きく目を見開く紺染。
そのゴンの言葉に、背を向けている金汰もリンゴも、そっと笑みを浮かべた。
「……そうかっ……誰も信じぬ私が、誰かに信じてもらえるはずは、なかったんじゃなっ……」
少し俯いて、笑みを浮かべる紺染。
「本当に……大きくなったな、ゴンっ……」
「……っ」
ゴンと紺染が、穏やかな笑顔で笑い合う。
「では行きましょうかのぅ、総長殿……」
「ああっ」
紺染が穏やかな笑顔のままそう言うと、金汰が振り向き、紺染とともにゴンに背を向け歩いて行く。

「じじいっ！」
「……っ」
ゴンの声に、車のすぐ手前で立ち止まる紺染。
「たまにはっ……顔出すわっ！」
「……っ」
笑顔で言い放つゴン。その言葉に、紺染が少し驚いた表情を見せたが、すぐに口元を緩ませ、微笑んだ。
「……油揚げ持って来るんじゃぞっ」
「……っ」
背を向けたままそう言い、紺染は金汰とともにオトポリの車に乗りこんだ。
「……共食いかよっ、クソじじいっ」
虎国を発車して行く車を見つめながら、ゴンがそっと呟く。
「終わったわね……」
「ああ……」
リンゴの言葉に、深々と頷くゴン。
「終わった……」
こうして、虎国での戦いは終わった。ゴンの過去への決着とともに……。

同日・夜。白雪の屋敷。
「桜時様ぁぁぁ～っ！あっれぇ～っ？？桜時様ぁぁ～っ？」
屋敷を歩き回りながら、桜時を探している様子の白雪。
「もぉ～うっ！どこ行っちゃったのかしらぁ～っ？もうすぐ“アレ

”が始まっちゃうのにぃ～っ！」
「虎昌様っ」
「下の名前で呼ぶんじゃないわよっ！！」
「すみません……」
やって来た鈴白が、いきなり白雪に睨まれて、深々と俯く。
「街の方々の治療、オトポリの協力もあって無事、終わりました。皆、命に別状はないそうです」
「そうっ、それは何よりだわっ」
辺りを探しながら、鈴白の言葉に答える白雪。
「じゃあ次は街の壊れた家の修理とオトポリの皆様の食事等の世話と私の部屋の大掃除とっ……」
「少し休ませてもらえません……？」
次々と命令を出す白雪に、少し冷たい表情を向ける、戦いの傷がけっこう酷い鈴白。
「ねぇ～っ！それより桜時様、見なかったぁ～～っ？」
「ハチ様なら先ほど、輝矢様とともにお出掛けになられましたが？」
「なっ……！！」
白雪の表情が歪む。
「何ですってぇぇっ！？」

その頃、白雪の屋敷近くの雪原。
「もう傷はいいのか？」

「ええっ」
一面に広がった雪の地面に並んで座るハチと、手足や首に包帯を巻いた輝矢。
「由雉が癒羽を使い切ってしまっていたのですが、芹に凍傷によく効く薬をいただきましたので」
「そうかっ……」
輝矢の言葉に、少し安心したような笑みをこぼすハチ。
「毎回毎回、ボロボロになるまで戦うなぁ～お前もっ」
「今回はマシな方ですよ」
「へっ？」
少し首をかしげて振り向くハチ。
「ハチに助けていただきましたからっ」
「えっ……？」
笑顔を浮かべる輝矢に、ハチが少し戸惑った表情を見せる。すると輝矢がゆっくりとハチの方を振り向いた。
「強くなりましたね、ハチ……」
「……っ」
輝矢の言葉に、大きく目を見開くハチ。

――――前から気にはしてたんだっ……俺が弱いせいで、アイツの負担になっちまってるってことっ……――――

それは、ハチの悩みを吹き飛ばす笑顔であった。
「……っ」
輝矢から目を逸らすように、そっと俯くハチ。
「そりゃどうもっ……」
「……っ」
照れくさそうに礼を言うハチを見て、輝矢がさらに笑う。

「けど、今回も結局、“あの方”の正体は掴めませんでしたね……」
「ああ……」
そう言葉を交わしながら、互いに表情を曇らせていく輝矢とハチ。
「なんでっ……」
「……っ？」
切り出すように呟くハチに、輝矢が振り向く。
「なんで人はっ……人を裏切るんだろう……？」
「……あのキツネのことですか……」
「うん……」

――――僕の本当の君主は紺染でもその女でもなく、“あの方”……
――――

紺染を裏切り、霎を裏切って姿を消したギンのことが、ハチの心に強く引っ掛かっていた。
「人が人を裏切って……何か得られるものなんてあんのかなっ……？」
「……。」
ハチの問いかけに、そっと俯く輝矢。
「……私はその問いかけへの答えを持ちません……」
「……っ」
輝矢の言葉に、顔を上げるハチ。
「まぁそりゃそっ……」
「ですがっ……」
「……っ？」
頷こうとしたハチに、さらに言葉を続ける輝矢。ハチが少し首をかしげて輝矢を見る。
「人が人を裏切るからこそ……信じてくれる仲間がいることは、と

ても幸せなことなのでしょうね……」
「……っ」
穏やかな笑顔で話す輝矢に、目を見開くハチ。
「……っ」
少し下を向いたハチも、そっと笑みをこぼす。
「……そうだなっ……」
笑顔を見せた2人は、ゆっくりと顔を上げ、夜空に浮かぶ真ん丸とした満月を見つめた。
「あれっ……？」
満月の輝く空から、舞うように落ちてくる小さな粒。
「雪っ……？」
降り注ぐ雪が、満月の光を受けて光を帯びていく。
『あっ……』

「何っ？これっ？色のついた雪っ？」
降り注ぐ色とりどりの雪を見上げ、驚いたように言うリンゴ。
「エルニーニョじゃねぇーのっ？」
「適当なこと言ってんじゃないわよっ」
特に空を見上げることもなく、興味なさそうに言うゴンに、リンゴが少し呆れた表情を向ける。
「キレイねぇ～っ」
「美味そうだなぁ」
「……。」

違う感想を抱きながらも、ゴンとリンゴが空を見上げる。

「キレイねっ……パパっ……」

「そうだね、ママっ……」

観葉植物に隠れながら、窓から降り注ぐ七色の雪を見つめる虎昌とマーサ。

「パパと出会ったあの日を思い出すわっ……」

「ああっ……一緒にこの雪を見た時、ママと結婚しようと思ったんだっ」

「パパっ！」

「ママっ……！」

人見知りの激しいラブラブ夫婦にも、七色の雪が降り注ぐ。

「あぁぁぁーっ！もう降って来ちゃったじゃないっ！！」

屋敷のベランダから、舞い降る七色の雪を見て、頭を抱える白雪。

「あっ、“ムーンスノー”ですね。今日、満月なんですかぁ」

白雪の隣で、鈴白も七色の雪を見上げる。

「もおおおっ！とっとと桜時様探さなきゃあああっ！！」
「あっ、待って下さいよぉ～虎昌様ぁ～っ」
「下の名前で呼ぶんじゃないっ！！」

「七色の雪ですかぁ。満月の光が反射してるんでしょうかねぇ」
「満月の……光っ……？」

――――この辺りではねっ、満月の夜、月の光に反射して七色の雪の降る“ムーンスター”って現象があるの――――

「あっ……」
降り注ぐ雪を見ながらの輝矢の言葉に、昨日の白雪の言葉を思い出すハチ。

――――そうっ！それを一緒に見たカップルはぁ、必ず結ばれるってゆー素敵な言い伝えまであるのよっ！！――――

「……っ！」
白雪の言葉の続きが、ハチの頭を過ぎる。

「ふわあああっ！！」
「へっ？」
急に変な声を出すハチに、顔をしかめて振り向く輝矢。
「しまったっ……」
「……っ？ハチっ？」
俯いたまま呟くハチに、輝矢は怪訝そうに首をかしげる。

平穏の戻った虎国と、穏やかな時間を過ごす虎国の人々に、七色の雪が静かに降り注いだ。

御伽界・辺境。
「そうっ……失敗したの……」
「はい。申し訳ありません……」
深々と頭を下げたギンの前に立つのは、謎の女・シルクであった。
「ギンっ」
「何でしょう？」
シルクの横に立っている男・諸刃が、ギンの名を呼ぶ。
「何故、あの2人を殺さなかった？お前なら容易く殺せただろう」

「……っ」
諸刃の問いかけに、どこか怪しげに微笑むギン。
「面白くなりそうだったからですよ……」
「何っ……？」
ギンの言葉に、諸刃が眉をひそめる。
「面白いだとっ……？」
「ええっ」
ギンが諸刃に微笑んだ後、ゆっくりと背中を向けているシルクの方を見る。
「ご理解いただけますよねぇ？シルク様っ……」
「……そうねっ……」
「……っ」
頷くシルクに、諸刃が少し顔をしかめる。
「楽しくなりそうよっ……」
シルクがゆっくりと、空に浮かぶ満月を見上げる。
“月の少女”と……“桜の青年”……」
深い深い夜の闇に、月は一層、輝きを増した。

翌日。白雪の屋敷前。
「俺たちは調査もあっから、しばらく虎国に残るけどっ」
「では私たちは先に帰らせていただきます」
「ちょっとぉ～っ、アンタ、大丈夫なのっ？」

ゴンにはっきりと答えた輝矢に対し、どこか疑うような目を向ける、ゴンの隣のリンゴ。
「まだ傷治ってないんでしょ？もうちょいゆっくりしてけばっ？」
「いえっ……」
リンゴの言葉を否定した輝矢の表情が曇る。
「桜時様ぁぁぁ～～っ！」
「ぎゃあああああっ！！」

「一刻も早く、この国を出たいんです」
『……。』
ハチを追い掛け回している白雪の声に、これ以上ないくらい不機嫌な表情となって言い放つ輝矢。そんな輝矢にゴンとリンゴは呆れたような表情を見せる。
「まぁ仕方ないかっ。龍国帰ったらちゃんと休むのよ？」
「ええ、龍国に帰りながら休みます」
「帰ってから休みなさいっ！！」
よくわからない輝矢の言葉に、勢いよく怒鳴りあげるリンゴ。
「ねぇ～っ！もうちょっと虎国にいましょうよぉ～っ！桜時様ぁっ！！」
「だからぁっ……！」
「そろそろ黙らないと刺しますよ？虎ンプ」
「虎昌よっっ！！気に入ってないけどっ！！」
脅迫めいた発言をする輝矢に、いつも通りのパターンで言い返す白雪。
「何よっ！ちょっと桜時様と“ムーンスノー”見たからって調子に乗らないでよねっ！」
「ムーンスノー？」
「うげっ！」
白雪の言葉に、首をかしげる輝矢。それを見て思わずマズいとい

った表情を見せるハチ。
「何です？ムーンスノーって」
「それはっ」
「だあああああっ！！何でもねぇっ！！絶対、何でもねぇっ！！」
「……っ？」
説明しようとした芹の言葉を必死で遮るハチに、輝矢が首をかしげる。
「とぉーにぃーかぁーくぅーっ！次会った時こそ、完っ璧に打ち負かしてやるわっ！竹取輝矢っ！」
「はいはいっ」
「何よっ！！その適当な返事はっっ！！」
軽くあしらう輝矢に、白雪が怒りの声をあげる。
「もういいわっ！！今、ここで倒してあげるっ！！」
「アナタには無理ですよ」
「何ですってぇぇっ！？」
『あぁぁ～あっ……』
どんどん険悪になっていく輝矢と白雪に、頭を抱えるハチたち３匹と、鈴白・芹。
『……っ』
互いに冷たい表情を見せて、詰め寄っていく輝矢と白雪。

「……ありがとっ」

「……っ」

白雪の突然の言葉に、輝矢は驚いたように目を開いた。

「貴女に借りが出来たわっ。だから今度、貴女がピンチの時は、私が助けてあげるっ」
「白雪っ……」

笑顔を見せる白雪を、まっすぐに見つめる輝矢。
「アナタごときに助けられたりしませんよ」
「やっぱりここで倒ぉぉーすっ！！」
『あぁぁ～あっ……』

こうして虎国での戦いが終わり、輝矢たちは虎国を後にしたのであった。

第１８章　信じる　★６（後書き）

１８章、虎国編、無事、終わりました。
ここまで読んでいただいた方、どうもありがとうございました。

ちなみに「ムーンスノー」は私のでまかせです。
似たような現象があるのかも、特に調べておりません。
すみません、適当で。

第１９章　ニセ桃タロー事件　☆１（前書き）

第１９章です。
今回は軽い感じですので、楽しんでいただければ幸いです。

第１９章　ニセ桃タロー事件　☆１

「あなたの存在は、朱実の恥でしかないわっ！」
呪いのように浴びせられた言葉。存在を否定され続けた幼い頃。
「かっこいいよねぇ～！“桃タロー”って！」
「……っ？」
中庭で“桃タロー”という人物の話をしている松人や竹人を見つけ、幼い頃の俺はそっと立ち止まって、その話に耳を傾けた。
「世界を救った英雄なんだろっ？かっこよくて当たり前だってぇ～」
「いいなぁ～会ってみたいなぁ～！」
「世界中の子供がそう言ってるよっ」
目を輝かせる梅人に、松人が穏やかな口調で答える。
「彼は全世界の誰もが憧れる存在なんだからね……」
「全っ……世界のっ……」
否定の言葉を浴びせられたことしかない俺にとって、その言葉は何とも不思議で、何とも眩しいものだった。
「桃……タロー……」
ただ憧れた。誰からも否定されることのない、その存在に。
子供心から来るものよりも、もっと深く、鮮烈に。

なのに…。

「どぅおらあああっ！！」
龍国東海岸沿い、エセお菓子の家こと『桃原家』の廊下から響き渡ってくる雄たけび。

「はぁっ……！はぁっ……！はぁっ……！」
その雄たけびの声の主は、ハチこと朱実桜時であった。その片手には、水に湿った雑巾が一枚。
「よしっ！」
桜時がバケツで雑巾を洗ってから、もう1度しっかりと搾り、廊下の端に雑巾を構えて発進態勢を取る。
「どぅおらあああああっ！！」
廊下の端から端を、物凄い勢いで拭いていく桜時。
「はぁっ……！はぁっ……！よしっ！」
桜時が額から流れる汗を拭って、満足げに微笑みながら立ち上がる。
「これでっ……！」
「どれどれぇ～」
「……っ？」
と、桜時の拭いた廊下へと現れたのは、メガネをかけた爽やか男・桃原太狼。こんな風に見えて、実は十年前、世界を救った伝説の英雄。
「すらぁぁぁ～～～っとっ」
スリッパを脱ぎ、靴下を履いた右足で、桜時拭きたての床を一滑りする太狼。
「んん～っ」
太狼が、一滑りさせた靴下の裏を見る。
「うわぁ～っ、こぉ～んなに微生物がいっぱぁ～いっ」
「へっ……？」
真っ白な靴下の裏を見て、わざとらしい声を出す太狼に、桜時が思わず表情を引きつる。
「もう一回やり直しっ」
「ええっっ！！？」
笑顔で言い放つ太狼に、不満げな声をあげる桜時。
「もう何周目だと思ってんだよっ！！だいたい靴下っ！キレイだろ

うがぁっっ！！！」
「僕には見えるの、微生物どもがうじゃうじゃ～っと」
「どうなってんだよっ、そのメガネ」
「んっ？別に裸眼でも見えるよぉ～」
「じゃあ何でメガネかけてんだよっっ！！」
「“爽やかお兄さんキャラ”で行きたくてっ」
「……。」
気持ちのいい微笑みで適当な答えしか返して来ない太狼に、段々と怒鳴る気も失せてくる桜時。会話というよりは一方的に遊ばれているような雰囲気である。
「だいたい何で俺が床の拭き掃除なんかっ……」
「だぁ～れが輝矢ちゃんに怪我させたのかなぁ～？」
「アイツが怪我したのは、アイツが無茶したからであって、ただの自業自とっ……！！」
「誰が……怪我させたのかな……？」
「……すみませんっ」
言い返そうとした桜時が、太狼に凍りつきそうな冷たい笑みを向けられ、大人しく頭を下げてしまう。
「じゃっ、もう一回やり直しねぇ～っ」
「はい、賢まりました」
太狼の言葉に素直に頷き、桜時が再びバケツで雑巾を搾る。
「ったく、何で俺がぁっ」
その鮮烈に憧れていた“桃タロー”に出会えたと思ったら、いきなり戦うハメになり、敗北した挙句、宣戦布告され、現在は早朝からこってりコキ使われている始末の桜時。
「だいたい何で輝矢の怪我が俺のせいなんだよっ……」
「何か言ったぁ～？」
「いえっ、何でもありません」
振り向く太狼に、素早く答える桜時。この桃タロー、妙に輝矢を溺愛しており、その輝矢に溺愛されている桜時を、また妙に目の敵

にしてくるのである。

「あの光景も見慣れたなぁ～」

「確かにぃ」

縁側で寝転がったまま、他人事のように話すモンキに、横にいたユキジが特に興味なさそうに頷く。

「ああっ！ご主人サマサマぁぁ～っ！こんな所にいらっしゃったのねぇぇっ！！」

「ぎゃあああああああっ！！」

「この光景も見慣れたよねぇ……」

突如、現れたヘンゼルから、猛然と逃げるモンキを見て、同様に興味なさそうに呟くユキジ。

「まぁ頑張って、ハチデレラぁ～」

「せやっ！イヌの根性見せたれっっ！！」

「ちったあ手伝おうとか思わねぇーのかよっっ！！お前らはあれかっ！？意地悪な姉かっ！？ああっ！！？」

他人事オーラ全開で暢気に手を振るモンキとユキジに、激しく怒鳴りあげる桜時。

「はぁっ……はぁっ……」

怒鳴りすぎたのか、桜時が少し疲れたように肩を落とす。

「もう限界だっ……もう拭けねぇっ……」

弱音のようにポツリと呟く桜時。

「だいたい何で俺がっ……」

「床の拭き掃除ですか？」

「見りゃわかんだろっ！って、んっ？」

息切れ気味だった桜時が、後方から聞こえてくる問いかけに乱暴に答えるが、その聞こえてきた声に聞き覚えがあり、少し目を丸くして振り返る。

「……っ輝矢っ」

「おはようございます、ハチ」
桜時が振り返った先に立っていたのは、優しい笑みを浮かべた輝矢であった。その手足にはまだ包帯が巻いてあり、霙との戦いの傷が癒えていないことがわかる。
「手伝いましょう」
「へっ?あっ、いいってっ!!」
「えっ……?」
そう言って雑巾を手に取ろうとした輝矢を、桜時が強く止める。すると輝矢は少し不思議そうに振り向いた。
「傷も治ってねぇーんだしっ……あんま無理すんなっ……」
「ハチっ……」
輝矢を気遣う言葉を放つ桜時に、輝矢が少し驚いたような表情を見せる。
「お前が無理したら……俺が死んじゃうから……」
「えっ……」
俯き気味に話す桜時に、輝矢が戸惑うように目を見開く。

「桃タローに殺されてっ」
「そうですね……」
追い詰められた表情で訴える桜時に、輝矢は少し力が抜けたように肩を落とした。
「でもホント無茶すんなよっ……?」
「へっ?」
肩を落としていた輝矢が、目を丸くして顔を上げる。

「心配くらいっ……してんだからよっ……」
「……っ」

そっぽを向きながら、どこか照れくさそうに言う桜時に、輝矢が再び目を開く。

「ハチ……」
「ああっ？」
「好きです」
「だぎゃあああああああっ！！」

――――パリィィィィィィィィィンッッ！！！――――

輝矢の突然の告白に、大声を放った桜時が勢い余って、廊下にある窓のガラスを叩き割る。
「あぁ～あっ、ガラスの弁償代、５００万チュンっとぉ」
「高けぇぇーよっ！！」
リビングから二人の様子を観察しながら電卓を打っている太狼に、桜時が突っ込みを入れる。
「だいたいお前が急に変なこと言うからだなぁっ……！」

――――カサカサカサッッ……！――――

「んっ……！」
桜時が輝矢に文句を付けようとしていた時、輝矢が割れた窓ガラスの向こうからする物音に、その目つきを鋭くさせて振り返る。
「何者ですっ！？」

――――バギコォォォォォォォーーーンッッ！！――――

「だっぎゃあああああっ！！」

そう叫んだ輝矢が右足を振り切り、割れた窓ごとその壁一面を粉砕する。崩れ落ちる壁に、頭を押さえて必死に身を守る桜時。

「あぁ～あぁ～、ホントに５００万チュンくらいかかっちゃうねぇ～これはぁっ」
「育て方間違ったんじゃない……？」
少し困った表情で電卓を叩く太狼に、ユキジが呆れた顔を向ける。
「もう絶対、心配しねぇーっ……」
「誰です？」
座り込んだまま、言い聞かせるように呟いている桜時の横で、崩れ去った壁の向こうにある木陰の方を見つめ、強気に言い放つ輝矢。
「そこにいるのはわかっているんですよ？」
「ぶっ……ブヒっ……」
「ブヒっ？」
木陰から聞こえてくる声に、眉をひそめる輝矢。
『あっ』
「しっ……死ぬかと思ったブヒっ……」
木陰から姿を現したのは、大きく丸々と太った肌色のお肌の一匹のブタであった。崩れた壁に唖然としているブタを見て、何やら驚いたような声をあげる輝矢と桜時。
「あのブタ、どっかでっ……」
「豚シャブ・豚カツ・ブタロースっ……」
「すでにメニュー考えてるしっっ！！」
もうブタを食べる気でいる輝矢に、桜時が驚いたように声をあげる。
「何々ぃ～？」
「どないしたんやぁ～？」

二人の元へ、ヘンゼルにしがみ付かれたモンキと、ユキジがやって来る。
「いえね、このブタをどうやって調理するかでモメていまして」
「調理方法でモメた覚えはねぇーよっ！！」
「ブッヒィィィッ！！」
『へっ？』
モメていた内容について輝矢と桜時がモメていると、突然ブタが大声を出して立ち上がる。そんなブタに、目を丸くして振り返る輝矢たち。

「やっと見つけたブヒよっ！」
立ち上がったブタが勇ましい表情で、力強く指差す。

「門貴っ！！」
「へっ？」
『えっ？』

モンキを指差し、名を呼ぶブタに、輝矢たちや指を差されたモンキ自身も首をかしげる。

「ここで会ったが百年目っ……！ブヒが味わった屈辱を晴らしてくれるブヒっ！！」
「え～っと、どこの誰やっけ？」
「ブッヒィィィィーーッ！！」
モンキの言葉を受け、勢いよくズッコケるブタ。
「ブヒブヒうるさいブヒ」
「うつってるぞ……？」
ブタの語尾がうつっている輝矢に、桜時が冷たい目を向ける。
「覚えてないブヒっっ！！？」
「俺、不細工な野郎ほど、興味のないもんないからぁ～」

「ブッヒィィーーッ！！」
必死に突っかかるブタに、あっさりすっぱり答える笑顔のモンキ。
その言葉に屈辱を受けたのか、ブタが天を仰いで叫び声をあげる。
「おいっ、アイツ、あれじゃねぇーか？サイ蔵一味でカッパや門貴と一緒にいたっ」
「ああ、十戒とかいう」
「九戒ブヒっっ！！勝手に増やすなブヒっっ！！」
「九戒っ……？」
九戒と輝矢たちの会話に、何かを思い出したように眉をひそめるモンキ。
「もしかしてっ……」
「やぁ～っと思い出したブヒかっ！！」
「やっぱ知らんわっ」
「ブッヒィィィーーッ！！」
モンキの答えに、九戒が再びズッコケる。
「鬼人をでっち上げてすんごい退治屋きどった挙句、お前も騙したサイ蔵の弟子だった九戒ブヒっっ！！」
「ああ～っ！あの九戒かぁ～っ！」
「お前っ！絶対、最初っから覚えてただろうブヒっっ！！」
「でぇ、あのブタさん、誰なのぉ？」
モンキと九戒の会話を聞きながら、ユキジが桜時へと問いかける。
ユキジはサイ蔵事件の時はまだ仲間になっていなかったので、九戒のことは知らないのである。
「敵？味方？対象外？」
「食料品です」

「いやっ！！違うだろっっ！！せめて対象外くらい言ってやれよっ！！」

輝矢の答えに、桜時が突っ込みを入れまくる。

「んでぇ？お前、こんなトコで何しとんやぁ～？確かサイ蔵と一緒にオトポリに連れてかれたはずやろぉ？」

「ブヒはニセ鬼人作りに関与しただけだったブヒっ、すぐに釈放されたんだブヒっ」

モンキの問いに、険しい表情で答える九戒。

「でもブヒっ……逮捕歴のあるブタを誰も雇ってなどくれずっ……路頭に彷徨う毎日を送ってるブヒっ……」

「まぁ自業自得でしょう」

「そうだねぇ～」

落ち込んだように言う九戒に、さらに追い討ちをかけるように言う輝矢とユキジ。

「それもこれもすべてっ……お前のせいブヒっ！！門貴っ！！」

「そうかぁ？」

再び力強く指差す九戒に、何か納得しきれない様子で首をかしげるモンキ。

「どっちかっちゅーと輝矢んのせいのような気ぃするけど」

「あの化け物女とは初めっから戦う気ないブヒっっ！！」

「まぁ得策だねぇ」

九戒の言葉に、ユキジが賛同するように頷く。

「ここで会ったが百年目ぇっ……！！ブヒが受けた屈辱、晴らしてくれるブヒっ！！」

「それよりブタ」

「ブヒィィィッ！！」

モンキに向かって決めポーズを取ろうとした九戒が、空気を読むことなく呼びかけてくる輝矢に、肩すかしを食らってしまう。

「なっ……何だブヒっ？」

「アナタ、門貴に会いにここへ来たのですか？」
「違うブヒっ」
「だあああああっ！！」

あっさりと答える九戒に、今度は桜時がズッコケる。

「じゃあ何でんなトコにいんだよっ？」
「ブヒっ！桃タローに会いに来たブヒっっ！！」
『桃タローっ？』
九戒の言葉に、輝矢たちが一斉に首を捻る。
「そうだブヒっ！！ここに桃タローがいるんだろうブヒっ！！」
「いやっ、そりゃあ……いるにはいるけどよっ……」
力強く問いかけてくる九戒に、どこか気まずそうに答えながらゆっくりと振り返っていく桜時。

「んん～っ、甘ぁぁ～～いっ！グレーテルぅ～、甘さダルダルココア、もう一杯ぃ～っ」
「かしこまりましたぁっ」

「あれだぞ……？」

桜時が振り返った先にいたのは、甘さダルダルココアを飲み干し、満足げな笑みを浮かべている太狼であった。その暢気過ぎる光景に、顔を引きつる桜時。

「あんなのが桃タローだぞっ！あのっ！桃タローっ！ああぁーっ！俺の憧れって一体ぃっ！」
「ダメだよぉ、ちゃんと目を背けなきゃあ」
頭を抱えて叫ぶ桜時に、ユキジが冷静に声をかける。

「お前が桃タローブヒねっ……？」
「んん～？」
俯き気味に静かに問いかける九戒に、ココアのおかわりを貰っていた太狼が振り向く。
「そうだけどっ？」
「よくもカワイイ弟たちの家をっ……！！」
「へっ？」
急に背負っていた鍬を振りかぶり、暢気にココアを飲んでいる太狼の元へと飛びかかっていく九戒。
「覚悟するブヒぃぃっ！！」
「やめなさいっ」
――――バァァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――
「ぎゃあああああブヒぃぃっ！！」
太狼に飛び掛ろうとした九戒が、勢いよく輝矢の右足に踏みつけられ、床にめり込む程に潰される。
「タローに何をするつもりですかっ」
「ブっ……ブヒっ……」
今にも殺しそうな鋭い目つきで言い放つ輝矢の足元で、白目を剥いて生死を彷徨う九戒。
「いっやぁぁ～～っ！輝矢ちゃ～んっ！僕、怖かったよぉぉ～～っっ！」
「ほざけっ……」

ウソ臭く怖がる太狼に、桜時が呆れきった表情でこっそりと呟く。

「今、弟たちの家がどうとか言ってなかったぁ～？」

「せやなぁ。おいっ、九戒ぃ～。お前、何かあったんっ……」

「ブっ……ヒ……」

「あかん……話聞ける状態とちゃうわ……」

モンキが問いかけようと覗き込んだ時には、九戒はすでに意識を失っていた。

第１９章　ニセ桃タロー事件　☆２（前書き）

ちょい長め、７５００字超になっちゃいました。
すみません。

第19章　ニセ桃タロー事件　☆2

二時間後。

「ブヒィィっ！！」

桃原家リビングのソファーで、鳴きながら勢いよく飛び起きる一匹のブタ・九戒。

「って、痛たたたたっ……！背中が割れるように痛いブヒっ！！」

「そりゃそうやろぉ～輝矢んに踏まれたんやからぁ～」

「ホントに割れたりしてねぇ～」

「まぁ湿布は貼っといたからよっ」

「湿布でどうにかなる問題じゃないブヒっ……」

次々に声をかけるハチ、モンキ、ユキジに、九戒が背中を押さえながら厳しい表情で呟く。

「でっ、ブタっ」

「ひぃぃブヒィィっ！！」

突然現れた輝矢に、九戒が痛い背中を感じさせないほどに素早い動きで、モンキの後ろへと隠れる。

「失礼ですね」

「まぁ無理もねぇーだろ……」

顔をしかめる輝矢に、ハチが呆れた表情で答える。

「でっ？お前、桃タローと何かあったのか？」

「ブヒっ？」

怖がられている輝矢の代わりに、ハチが九戒に問いかける。

「弟たちの家がどうとか言ってたけどっ」

「そうだブヒっ！！」

ハチの言葉に、思い出したようにモンキの後ろから出てくる九戒。

「桃タローっ！！」

「んんっ？」

向かいのソファーにゆったりと座ってココアを飲んでいる太狼を、九戒が力強く指差す。
「よくもブヒのカワイイ弟分の家を吹き飛ばしてくれたブヒねぇっ！！」
「へっ？」
『吹き飛ばした？』
九戒の言葉に、目を丸くする太狼とハチたち三匹。
「んなひでぇーことしたのかよ？あんた」
「最低ぇぇ～～」
「仮にも御伽の英雄やねんからさぁ～」
「失礼しちゃうなぁ～」
軽蔑するような視線を向けてくる三匹に、しかめっ面を見せる太狼。
「僕がそんなことする人間に見えるぅ～？」
『見える』
「輝矢ちゃ～んっ！」
「桃タローに家を吹き飛ばされたとはどういうことです？もっと詳しく話しなさい」
三匹に即答され、輝矢に泣きつく太狼であったが、輝矢はそんな太狼を無視して九戒に問いかける。
「釈放されてから数日っ……誰からも相手にされなかったブヒに声を掛けてくれた二匹の子ブタがいたブヒ……」
九戒が、落ち着いた口調で話を始める。
「あいつら……トン吉とブー助はブヒを兄貴と慕い、ブヒたちは三匹で平和にやって来たブヒっ……でもっ……」
『……っ？』
突然、曇る九戒の表情に、皆が首をかしげる。
「ある日、狼の獣人がやって来て……」
「狼の獣人？」
輝矢が少し眉をひそめる。

「いきなりトン吉の藁の家を激しい息で吹き飛ばすと、今度はブー助の丸太の家まで吹き飛ばしたブヒっ」
「息でぇ？」
「どないな肺活量しとんねんっ」
九戒の話に、驚くモンキとユキジ。
「この辺で狼の獣人といえば桃タローしかいないと聞いたブヒっ、ブヒは弟分の無念を晴らそうとっ……！」
「おいおいっ！ちょっと待てよっ！」
桃タローに怒りを向けるように話を続ける九戒を、ハチが思わず遮るように止める。
「いっくら獣人が珍しいからって、狼の獣人＝桃タローだなんてことはっ……！」
「だなんてこと、あるよぉ～」
「へっ？」
九戒を諭そうとしていたハチが、太狼の思いがけない発言に、目を丸くして顔を上げる。
「“だなんてことある”？」
「うん。この広ぉぉ～い御伽界、いっくら探したって狼の獣人は僕だけっ」
「なんでっ？だってお前の一族とかっ……」
「だからっ、僕だけなのっ」
「……っ」
太狼はいつもの爽やかな笑顔のまま言い放ったが、その言葉の意味を察したハチは、少し目を開き、何も言えないままそっと俯いた。
「……。」
そんな二人のやり取りに、輝矢も少し目を細める。
「狼の獣人がタローしかいないなら、じゃあやっぱりタローが吹き飛ばしたわけぇ？」
「だから違うってぇ～」
「じゃあ一体、誰がっ……」

「“ニセモノ”……ですか……」
『えっ……？』
輝矢の言葉に、三匹の表情が変わる。
「ニセモノってっ……」
「前例がないわけではないのですよ。“桃タロー”は世界の英雄ですからね」
「いっやぁぁ～～っ！ニセモノに僕の名誉とかその他モロモロ、傷つけられちゃったらどうしよぉ～～っ！」
「……あの人に救ってもらった世界に生きていることを恥じたい……」
『同じくっ……』
わざとらしく困る太狼に、ユキジが呆れた表情で言い放ち、ハチとモンキが深く頷く。
「タローの名を語られているのでは無視するわけにもいきませんね。で、今、トン骨とブースカはどこに？」
「トン吉とブー助だブヒ。今はブヒの造った“レンガの家”に避難してるブヒっ」
「では一先ず、そこへ行ってみますか」
「そうだな」
「ええ～っ」
輝矢の提案に、いつものように賛成するハチと不満げな声を漏らすユキジ。
「じゃっ、みんなっ、僕の名誉を守ってきてねっ」
『あんたは行かねぇーのかよっ！！』
調子よく手を挙げた太狼に、三匹からの突っ込みが飛んだ。

龍国西。とある小さな集落のはずれ。小さなレンガの家。
「兄貴の弟分第一号のトン吉だトントンっ！」
「九戒兄貴の一っ番最初の弟分のブー助だブーっ！！」
訪れた輝矢たちを出迎えたのは、二匹の丸々とした、まだ小さな肌色の子ブタであった。
『ムっ！』
同じような自己紹介をしたトン吉とブー助は、同時に表情をしかめて互いを睨みつける。
「トンが最初だトントンっ！！」
「ブーが最初だブーっ！！」
「トンだトントンっ！！」
「ブーだブーっっ！！！」
「ええ～、とりあえずうるさいので、どちらも丸焼きでいいですかね」
「どういう流れっ！？」
“トン”やら“ブー”やら激しく言い合うトン吉とブー助に、煩わしそうな表情を見せて言い放つ輝矢。そんな輝矢にハチが焦った表情で突っ込みを入れる。
「どっちも一番ブヒっ。とにかく客にお茶でも入れるブヒっ」
『はいっ！兄貴っ！』
九戒の言葉に言い争いを止め素直に頷き、素早く台所へと駆け出していくトン吉とブー助。
「トンが先にお茶を入れるトントンっ！」
「ブーが先に入れるブーっ！！」
またしても同じような言い争いをしながら、二匹が必死にお茶を入れる。
「かぁ～っ！サイ蔵にヘーコラ言ってばっかやったお前も、すっかり兄貴かぁ～っ！世も末やなっ」
「まだヘーコラやってるお前よりマシブヒっ」

「俺は輝矢んに魂捧げとうからええねぇ～んっ」
九戒にからかうように声を掛けながら、無造作に家の床へと腰を下ろすモンキ。
「でも結構、本格的な造りだねぇ～」
壁や天井を見回しながら、ユキジが感心したように呟く。
「大工の才能あるんじゃなぁ～い？」
「ブヒは物造りには自信があるブヒ！サイ蔵の悪事が上手くいったのも全てブヒの鬼人造りのお陰ブヒっ！」
「そんなん自慢すなっ、アホっ」
胸を張って言い放つ九戒に、モンキが口を尖らせて突っ込む。
「まぁこれだけ頑丈に造ってあるブヒ、いくらあの狼人が激しい息を吹きかけて来てもビクともしなっ……！」

――――バァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――

「ブヒィィッ！？」
『ぎゃあああっ！！』
突如、レンガの家を大きな衝撃が襲い、九戒が驚いたように目を見開いて、台所でお茶を入れていたトン吉とブー助が激しい悲鳴をあげる。

――――バァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――

「うわっ！」
「どうやらそうでもなかったようですねぇ……」
「へっ？」

レンガの家を襲う揺れに、必死にバランスを取っているハチが、輝矢の言葉に顔を上げる。すると輝矢は、鋭い表情で窓の外を見ていた。

「何がっ……あっ……！」

窓枠へと飛び上がり、窓の外を見たハチが目を見開く。

「すぅぅぅーーっ……」

窓から見えるのは、レンガの家の正面に立ち、体を反らして勢いよく息を吸っている一匹の黒いオオカミ。

「ぷっはあああああっ！！」

オオカミが勢いよく息を吐く。

――――バァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――

「うおおっっ！！」

再び走る衝撃に、ハチが飛びついた窓枠から落ちる。

「おっとっ、大丈夫ですか？」

「ぎゃあああああっ！！」

輝矢に抱きかかえられ、悲鳴をあげるハチ。

「とっとりあえずあのオオカミをっ……！」

「あっ」

ハチが無理やり輝矢の手を振り払い、素早く家の外へと出て行く。

「あっ！待てっ！イヌっ！俺も行くっ！」

モンキもハチの後を追い、家の外へと出て行く。

「すぅぅぅーーっ……」

再び息を吸い始めるオオカミ。

『待てっっっ！！！』

「ぅぅーっ……んっ？」

息を吸い続けていたオオカミが、家の中から飛び出してきた声に、吸うのを止めて顔を上げる。

――――ボォォォォォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！――――

「そこまでだっ！エセオオカミっ！！」

「観念しいやっっ！！」

レンガの家から飛び出してきたのは、人化した桜時と門貴であった。二人は鋭い表情をオオカミへと向ける。

「君たち……」

「村雨丸っ」

「如意棒っ！」

オオカミが戸惑うように二人を見る中、桜時は村雨丸を、門貴は如意棒をそれぞれ構える。

「あのっ……」

「覚悟しいやぁっ！！」

オオカミが何かを訴えかけようと手を伸ばすにも関わらず、すぐさま構えを取る二人。

「如意棒・第一の舞っ……！」

「村雨丸……“瞬花終っ……！」

「何だぁっ!?アイツらっっ!!あの泥棒ブタどもの仲間かぁっ!?」
『へっ……?』
しかし、オオカミの後方から聞こえてくる声に、今にも技を繰り出しそうになっていた二人の動きが止まる。
「きっとそうに違いねぇっっ!!構わずやっちまって下さいよぉっっ!!」
「そうだそうだっっ!!泥棒ブタの仲間は一人残らずやっつけちゃってっっ!!」
『えっ?えっ?』
オオカミの後方、集落の入口付近には、その集落の住民であろう多くの人々が、まるでオオカミを見守るように立ち並んでいた。口々に言葉を発する住民を、戸惑いながら見回す二人。
『そっそのっ、泥棒って……』
「あの家のブタどもはなぁっ!毎日のようにウチらの畑の作物、たんまり食っちまったんだよっ!!」
「おまけに勝手に住み着きやがってコッチはいい迷惑だぜぇっ!!」
「とっとと出てけぇっ!ブタどもぉっ!!」
『……。』
九戒たちに向かって大ブーイングを起こす住民たちの話を聞き、桜時と門貴が少し固まる。
『九戒っっ!!!こらあああああっ!!』
「ぎゃあああっ!!許してブヒぃぃぃっ!!」

数分後。
「ブヒっ……」
桜時と門貴の一斉攻撃に遭い、あっさりとやられてしまった九戒が、縄で木にくくりつけられ、少し落ち込むようにがっくりと俯く。
「トンが最初に兄貴と一緒に捕まったトントンっ！！」
「ブーが一っ番最初に九戒兄貴と共に捕まったブーっっ！！」
九戒と同じように縄で木にくくりつけられ捕まりながらも、くだらない言い争いは続けているトン吉とブー助。
「ったく、お前は反省っちゅー言葉を知らんのかぁ？」
「ブヒはサルじゃないブヒっ」
「あのなぁっ」
呆れたように言い放つモンキに、九戒はどこか開き直ったように答える。二度目の捕獲後もまったく反省のない九戒に、さすがのモンキも頭を抱える。
「いい加減にしななぁっ……！」
「いいですよ、サル」
「……っ？輝矢んっ？」
九戒に説教をしようとしたモンキを、輝矢が横から冷静な口調で止めた。
「金汰に連絡は取りました。後できっちりと厳しい罰を受けさせますから……」
「ブっ……ブヒっ……」
輝矢の冷たい笑みに、開き直っていた九戒もさすがに元気を失くして、力なく俯いた。

「泥棒退治の協力ありがとう」
『……っ？』
聞こえてくる爽やかな声に、輝矢やモンキが振り返る。
「お陰で助かったよ」
輝矢たちのすぐ傍まで寄ってきながら、そう言って笑みをこぼしたのは、先ほどの黒いオオカミであった。オオカミが爽やかな笑顔を輝矢たちに向ける。
「君たちはっ……」
「桃タロー様っ！！」
「……っ」
「桃タローっ……？」
輝矢たちに話しかけようとしていたオオカミが、後方から聞こえてくる住民の声に振り返る。その住民の呼んだ言葉に、眉をひそめる輝矢。
『ありがとうございましたっ！！桃タロー様っ！！』
「いやぁ、俺は何もっ」
「いえっ！コイツらを捕まえられたのは、桃タロー様が藁や丸太の家を吹き飛ばしてくれたからですよっ！」
「そうそうっ！！すっごい強い息で今日もレンガを揺さぶったしねっっ！！」
「アハハっ」
次々と話しかけてくる住民たちに、笑顔を向けるオオカミ。
「また何かあったら何でも言ってくれていいから」
『はいっ！！本当にありがとうございましたっ！！』
住民の誰もが、オオカミを桃タローと呼び、礼を言ってオオカミに深々と頭を下げる住民たち。
「桃タローって……」
「ああ、まだ言ってなかったね」
表情を曇らせて問いかけた輝矢の方を振り返り、笑顔を見せるオ

オカミ。

――――ボォオオオオオオ～～～ンッッッ！！！――――

オオカミが白い煙に包まれていく。

「俺の名はモモ太郎。世間では一応、“英雄”なんて呼ばれてるかなっ」

『……。』

「あれっ？」

白い煙の中から現れたのは、黒い短髪に色黒の頑丈そうな体つきをした、二十代半ばあたりの男であった。その男・モモ太郎の自己紹介にまったく反応せずに茫然としている輝矢たちに、モモ太郎が首をかしげる。

「おかしいな？これを言うと、みんな大抵、大声で“え～”って叫ぶんだけどっ」

「いやっ、だってあんた……」

そんなモモ太郎に、思わず口を開くハチ。

「ニセモノだろっ？」

「えっ……？」

『はあああああっ！！？』

「うおっ！」

ハチの不意な言葉に、周囲の住民から一斉に上がる声。その声に、ハチが少し怯えたように驚く。

「何、バカなこと言ってやがんだっ！！イヌぅっ！！」

「そうだそうだっ！！天下の桃タロー様に向かって失礼なこと言ってんじゃねぇーっっ！！」

「けっけどよぉっ……！」

『んんんんっっ！！？』

「うっ……」

住民のあまりの勢いに、言い返すことも出来ずに俯くハチ。
「ハチへの口の聞き方も知らないようですね……少し教育して来ますか……」
「余計、立場悪くなっちゃうからやめてぇ～」
鋭い表情で拳を鳴らす輝矢を、ユキジが呆れた表情で止める。
「ちょっと押さえて、みんな」
『……っ』
殺気立っている住民たちを宥めたのは、他ならぬモモ太郎であった。そんなモモ太郎を、少し驚いたように見る輝矢とユキジ。
「けど桃タロー様っ……！！」
「彼らも言い分も聞いてあげないと。泥棒を捕まえてくれたんだ。悪い人たちとは思えないし」
『桃タロー様っ……！！』
寛大な態度を示すモモ太郎に、感心するように目を輝かせる住民たち。
「何かめっちゃコッチが悪役やなぁ～」
「まぁ実際、ブタさんたちと悪巧みしてたサルもいるしねぇ」
「がびぃぃーーんっ！！」
ユキジの容赦ない言葉に、激しくショックを受けるモンキ。
「で？どうして僕がニセモノだと思ったんだい？」
「……っ」
悪意など微塵も感じられない笑顔で問いかけてくるモモ太郎に、少し表情をしかめる輝矢。
「率直に言います。私たちは、“本物の桃タロー”を知っているからです」
「……っ」
『本物ぉぉぉぉぉっ！！？』

輝矢の言葉に少し眉をひそめるモモ太郎と、驚いたように声をあげる住民たち。
「なるほどっ。それで僕がニセモノだと……」
「……。」
すぐさま元の笑顔に戻るモモ太郎を、まっすぐに見つめる輝矢。
「安心して下さいっ！桃タロー様っ！そんなヤツらの言うことなんて誰も信じやしませんっっ！」
「そうそうっ！そいつらの言う“桃タロー”の方がニセモノに決まってらあっ！」
「何やとぉっ！！？輝矢んを批判する気かっ！？お前らぁぁっっ！！」
「人を大嘘つきみたいに言っちゃってさぁ～、超心外なんだけどぉ～」
住民たちから飛ぶ声に、しかめた表情で言い返すモンキとユキジ。
「やんのかっ！？ああっっ！？」
「やってやろうやないかぁっっ！！」
「ちょっ……ちょっと待ってっ！」
『……っ』
今にも暴動を起こしそうな空気に包まれた住民とモンキたちを、割って入って止めたのはモモ太郎であった。
『けど桃タロー様っ……！！こいつらっ……！！』
「一先ず押さえて。俺にはこの子たちがウソをついているようには見えないんだよ」
「……っ」
輝矢たちを庇う発言をするモモ太郎に、眉をひそめる輝矢。
「何か事情があってのことかも知れない。ちゃんとそれを確かめなきゃ」

『桃タロー様っ……』
モモ太郎の説得に、収まる住民たち。
「どうかな、君たち」
『……っ？』
振り返るモモ太郎に、輝矢たちが首をかしげる。
「君たちの言う“本物の桃タロー”と俺とで、どちらが本物の桃タローかってことを勝負するっていうのは」
『えっ……？』
「勝負の内容や判定は、君たちと住民の方に任せるからさ」
「……っ」
モモ太郎からの提案に、少し考え込むように俯く輝矢。
「どうするのぉ～？輝矢」
「そうですね……」
「やるっ！！」
「へっ？」
気難しい表情で悩み込んでいた輝矢の横から聞こえてくる、勢いのいい承諾の返事。
「絶対やるっ！！その勝負乗ったっっ！！！」
「ハチっ」
返事をしたハチを、少し戸惑うように見る輝矢。
「あのですねっ、ハチっ」
「決まりだね。明日の正午、この場所で待ってるよ。じゃあ」
「おうっ！！」
「あっ……」
ハチに声を掛けようとした輝矢であったが、すでにハチとモモ太郎の交渉が終わり、モモ太郎は笑顔を残してその場を去っていってしまった。
「よっしゃっ！これで白黒付けられんなっ！！」

「ハチ……」
「んっ？」
モモ太郎が去り、やっと輝矢の呼びかけに振り返るハチ。輝矢がハチに、少し困ったような表情を向ける。
「太狼が勝てると……お思いですか……？」
「へっ？……っ」

――――ん～っ！甘さダルダルココアって最高ぅぅ～～っ！――――

「……。」
ハチもその存在を疑った、この上なく軽い太狼のことが頭を過ぎり、ハチが顔を引きつる。

「まっまぁっ！大丈夫だろっ！アイツ、本当に桃タローなわけだしっ！」
「そうやとええけどなぁ～」
「無理じゃないのぉ？」
「はぁっ……」
「……。」
ハチの言葉に、輝矢たちは誰一人として協賛せず、ハチの表情がさらに引きつっていく。

「……で、ブヒたちはどうなるんだブヒ……？」
「どうなってもトンが最後まで付いていきますトントンっ！！」
「ブーが最後の最後まで付いてくブーっっ！！」

こうして事件の展開は、明日へと持ち越された。

第１９章　ニセ桃タロー事件　☆３

そんなわけで翌日。無事、九戒たちも捕まった、昨日の小さな集落。
「揃ったようだね。それじゃあ始めようか」
集まった輝矢たち、そして住民たちを見回し、モモ太郎が笑顔で言い放つ。
「ふわぁぁ～あぁ～っ……」
『……。』
大きな欠伸をして、面倒臭いオーラを全開にしている“我らが桃タロー”の太狼に、不安なような呆れたような視線を送る輝矢やハチたち。
「勝負は五種目。題目は住民の皆さんに決めてもらったから」
「はいはいっ！」
モモ太郎がそう話すと、集まった住民の中から何やら楽しそうに中年の小柄な男が出てきた。
「え～っ！まず最初はぁっ、桃タローとしての基礎中の基礎っ！基礎体力測定でぇ～すっ！」

――――パァアンッ！パァアンッ！パァアンッ！――――

『いえぇぇぇぇーいっ！！』
仕切り始めた男の司会に合わせて、住民たちがクラッカーを鳴らし、モモ太郎への歓声をあげる。
「うっわぁ～何か楽しそうだねぇ。何のお祭りっ？」
「朝っ、説明しただろうがっ！！」
まったく状況を理解していない太狼に、ハチが勢いよく突っ込む。
「ではまず初めの題目はぁっ！畑耕しで基礎体力調べちゃおうぜぇ

～の巻きでぇ～すっ！」
『いえぇぇぇーーいっ！！』
盛り上がる住民たちが、荒れ果てた広い畑を段取りよく指し示す。
「では早速ぅ～っ、よぉ～いはじめっ！！」
「……っ」
――――ボォォォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！！――――
司会のスタートコールとともに、モモ太郎が素早く狼化して、荒れた畑へと駆け出していく。
「よっ！ほっ！よっ！ほっ！」
四本の足の鋭い爪を使って、素早く見事に畑を耕していくモモ太郎。
「おおっ！！これは凄いですっ！！モモ太郎っっ！！見事な手捌きっ！いえ足捌きですっ！！」
『いいぞぉぉっ！！桃タロー様ぁぁぁっ！！』
司会の解説を受け、多くの住民がモモ太郎へ歓声を飛ばす。
「さて一方の桃原太狼はぁっ……！！？」
「ふぅ～っ、たまには田舎の空気吸うのも悪くないねぇ～」
「だあああああっ！！」
畑を耕すことなどまったくせずに、草原に腰を下ろし、まったりとしている太狼に、ハチがズッコケる。
「おおっとぉっ！これはどういうことだぁっ！？桃原太狼っ！ゆっくり寛いじゃってますぅぅぅっ！！」

「何やってんだよっ!!あんたはっっ!!!」
司会が驚きの声をあげる中、寛いでいる太狼へと声をかけるハチ。
「んんっ？」
「“んん？”じゃねぇーよっっ!!畑を耕せよっ!!畑をっっ!!!」
「これ、何の畑？」
「へっ？」
ハチの怒鳴り声を無視して、司会をしている男に問いかける太狼。
「レタス……ですが？」
「レタス甘くないから耕さなくていいやっ」
「どんな理由だよっ!!」
当たり前のように言う太狼に、ハチがまたしても強く怒鳴りあげる。

「ええ～っ、桃原太狼っ、どうやらレタスが甘くないという理由でこの勝負を放棄するようですがっ……」
「ふぅ～っ」
「んっ？おっ!ここでモモ太郎っ!畑を耕し終えましたぁぁっ!!」
太狼がまだ耕す志も持たないうちに、モモ太郎の方が効率よくこなし、すべての畑を耕し終えてしまう。
「第一の種目：畑耕しは文句なしでモモ太郎の勝利でぇぇっすっ!!」
「よしっ」
『いえぇぇぇぇーいっ!!』
司会の勝利宣告に、モモ太郎が笑顔で右手を突き上げ、住民たちが歓声をあげる。
「だはあああああっ!!」
モモ太郎の勝利に、大きく口を開いてショックを受けるハチ。

「あぁ～あっ」

「勝負にもならんなぁ～こりゃっ」
「先が思い遣られます……」
輝矢、モンキ、ユキジも、それぞれに頭を抱えた。

「では続いて二種目めっ！！続いても基礎体力測定っ！！薪割りぃぃっ！！」
「僕、斧とか金ちゃんみたいで嫌だから持てなぁ～いっ」
「だあああああああっ！！」
「勝者、モモ太郎っっ！！！」

「三種目めっ！！長距離走っっ！！！」
「僕、今日の靴、足にジャストフィットしてないから無理ぃ～」
「だあああああああっ！！」
「勝者、モモ太郎っっ！！」

「第四種目っ！！桃タローなら知ってて当たり前っ！！常識クイズ大会っっ！！！」
「あぁぁ～、糖分が足りな過ぎて、何にも考えらんなぁ～いっ」
「……。」
「勝者、モモ太郎っっ！！」

「はぁっ……」
突っ込み、ズッコケまくっていたハチは、四種目が終わる頃にはすっかり力尽きてしまっていた。
「あぁ～、疲れたっ」
「こっちのセリフだぁっ！！」
疲れきった様子で肩を落とす、特に何もやっていない太狼に、ハチが勢いよく怒鳴りあげる。
「糖分、糖分っとぉ～」
ハチの怒声に特に反応はせず、ポケットから取り出したペロペロキャンディーを嬉しそうに食べ始める太狼。
「あんたっ！勝つ気あんのかっ！！？勝つ気っ！！」
「んん～っ？」
問い詰めるように言うハチに、太狼がキャンディをナメながら振り返る。
「勝つ気？別にないかなぁ」
「えっ……？」
太狼の思いがけない答えに、ハチが目を丸くする。
「それって……」
「ではいよいよ最終種目ですっ！！」
『……っ』
司会の声に、ハチと太狼が振り向く。
「最終種目はぁっ！桃タローに憧れる子供たち三十人っ！！どちらが人気を集められるか勝負でっすっ！！」
『うわぁぁぁ～～いっ！！』
「子供っ……？」
集まっていた住民たちの中から、まだ小さい子供たちが太狼とモモ太郎の元へ飛び出してくる。

「……っ」

――――ボォオオオオオオオ～～～ンッッッ！！！――――

モモ太郎が白い煙に包まれ、再び人の姿となる。

「ほらぁっ！チョコレートあげるぞぉっ！」

『うわぁぁぁ～～いっ！！』

モモ太郎がポケットから小さなチョコレートをたくさん取り出すと、多くの子供たちがモモ太郎の方へと駆け集まっていってしまう。

「だあああっ！マズいっ！！こっちも何とかして人気をっ……おいっ！タローっ！んっ？」

一気に人気を稼ぐ桃タローに焦りを見せ、太狼の方を振り向いたハチが、突然、目を丸くする。

「ねぇねぇお兄ちゃんっ」

子供の一人が、太狼のすぐ前へとやって来て、声を掛ける。

「んん～っ？」

「そのアメさん、頂戴っ」

『……っ』

太狼のナメているキャンディを指差し、強請る子供に、それぞれ表情を変えるハチと太狼。

「そうかっ！目には目をっ！菓子には菓子をだっ！よしっ！タローっ！もっとキャンディをっ……！！」

「あげるわけないでしょっ」

「何いぃいぃいっっ！？」

今までにないような冷たい表情で言い放つ太狼に、ハチがこの上なく驚く。

「欲しいものは自分で稼いで買うんだねぇ」

「バっ……！お前っ……！何つーことをっ……！」

「うっ……ううっ……」
「ぎくぅうっ！！」
聞こえてくる啜り声に、表情を引きつるハチ。

「うわぁぁぁぁぁ～～んっ！！」
「なあああああっっ！！」
激しい声で泣き出す子供に、ハチが焦ったように頭を抱える。

「おおっとぉっ！これは大人げないっ！桃原太狼っ！アメちゃんをあげずに子供を泣かせてしまったぁっ！」

「何やってんだよっ！！」
「だってココアの次にキャンディが好きなんだもんっ」
「あのなぁっっ！！」

「うわぁぁぁぁ～～んっ！！」
「ひえええ～～っっ！！」

子供の泣き声はさらに激しさを増し、住民たちや他の子供の注目を集める。どうにもならない緊急事態に、険しい表情で頭を抱えるハチ。

「うわぁぁぁぁぁぁ～～んっ！！」
「はいっ」
「うわあああっ……！！あっ……？んっ？」
泣きじゃくっている子供の前に差し出される、一個の小さなチョコレート。
「んっ……？」
「キャンディじゃないけど、これで我慢してくれる？」
「……っ」

チョコレートを差し出し、泣いている子供に何とも優しい笑顔を向けたのは、モモ太郎であった。チョコレートを受け取り、子供の涙が止まる。

「ありがとうっ！！お兄ちゃんっ！！」

「いいえっ」

笑顔を見せる子供に、さらに微笑むモモ太郎。

「何て素晴らしい展開っ！！この最終勝負っっ！！！文句なしでモモ太郎の勝利でっすっっ！！」

『いえぇぇぇぇーーいっ！！』

涙ながらの司会者の勝利宣告に、住民たちは、大地が震えるほどの歓声をあげた。

「やっぱり桃タロー様が桃タロー様よぉぉぉっ！！」

「桃タロー様っっ！！万歳っっ！！」

『うおおおおおっ！！』

「ありがとうっ、みんなっ」

盛り上がる住民たちに、快い笑顔を向けるモモ太郎。

「あっ……あっ……」

「めでたしめでたしといった感じですねぇ」

「めっちゃ完敗やったなぁ～」

「何かボクも向こうの方が桃タローって気がして来ちゃったよぉ～」

茫然とするハチの横で、諦めたように口々に呟く輝矢たち。

「あれぇ～？もう帰っていいのぉ？じゃあココア飲みたいし帰るよぉ～」

「あっ！待ってくれっ！」
「……っ？」
素早く帰ろうとした太狼を呼び止めたのは、モモ太郎であった。
「何っ？」
太狼がモモ太郎の方を振り返る。
「勝負ではこういう結果になったが、君がどうしても桃タローだと言い張るなら、言い分があれば聞こう」
「っつーか言い分も何もコイツがぁっ……！！」
「……っ」
「うえっ？」
太狼をニセモノとして哀れむような声を掛けてくるモモ太郎に、怒鳴り返そうとするハチであったが、そんなハチを止めるように目の前に手が差し出された。
「タロー……？」
その手の持ち主は、他ならぬ太狼であった。
「言い分なんて別にないよっ。君が本物でオールオッケェ」
「えっ……？」
太狼の思いがけない言葉に、ハチが目を見開く。
「そっそうか……」
「じゃあ僕は帰るよぉ～」
モモ太郎が少し戸惑うように頷くと、太狼はモモ太郎にあっさりと背を向け、歩き出した。
「あっ！おいっ！」
ハチが太狼を呼び止めようと声を出す。
「ちょっと待っ……！」
「何だぁぁっ！？あの態度っ！！桃タロー様の名をかたっといて詫びの一つもなしかよっっ！！」
「あんなヤツ、警察に突き出してやればいいんだっ！！」
「二度と桃タロー様の振りなんかすんじゃねぇーぞぉっっ！！ニセ

モノぉぉっっ！！！」
「……っ！」

ハチが追いかけようとした太狼の背に、次々と飛ばされる罵声。
その罵声に、ハチが大きく目を見開く。

「っつーかニセモノならもっとそれっぽくしろってのぉっ！！」
「蚊ほども似てなかったよなぁっ！！」
『あっはっはっはぁ～～っ！！』
「クっ……！」
「あっ！ハチっ……！」

住民たちが高々と笑い声をあげる中、ハチが唇を噛み締めて、太狼の去っていった方へと走り出していく。

「あんま熱くならんとええけどなぁ」
「桜時だから無理じゃなぁ～い？」
走り去っていったハチを見つめ、モンキとユキジが言葉を交わす。

「桃タロー様っ！この度は災難でしたねぇっ！」
「あんなニセモノが出てっ！」
「いえっ、俺は別にっ」

「……。」
相変わらず住民に持てはやされているモモ太郎を見て、輝矢はそっと目を細めた。

「ちょっとっ……！ちょっと待てよっ！！桃原太狼っっ！！」
「……っ」
後を追いかけてきながら、必死に叫ぶハチの声に、足早に歩いていた太狼が足を止めて振り返る。
「何っ？僕、早く帰ってココア飲みたいんだけどぉ」
「はぁっ……！はぁっ……！はぁっ……！」
不満げに言う太狼に対し、やっと太狼の目の前へと辿り着き、呼吸を整えるハチ。
「なんでっ……なんでだよっ……？」
「えっ？カフェオレよりココアが好きな理由？」
「違げぇぇーよっっ！！」
太狼の問い返しに、ハチが整ったばかりの息で思い切り怒鳴り返す。
「なんでっ！！あいつが本物だなんて言ったんだよっ！？」
「ああっ」
それかと言わんばかりに声を出し、そっとハチから視線を逸らす太狼。
「否定する必要がないって思ったからだよ」
「必要がないって……あいつっ！お前の名をかたってっ……！！」
「僕の名をかたって、悪巧みをしてるってわけじゃないでしょ？」
「……っ」
飄々とした笑顔で言い放つ太狼に、ハチは言い返そうとした言葉を詰まらせてしまう。
「鬼人でもなさそうだし、やってることは人助けばっかり」
「でっ……でもっ……」
太狼の言葉は最もであったが、ハチはどうしても納得することが

できず、俯いたまま小さな声を漏らす。

「でもっ……！」

「これで“桃タロー”の評判上げてくれるんなら、ニセモノ万々歳じゃないっ？」

「……っ！」

顔を上げたハチの表情が、太狼の言葉に凍りつく。

「まぁ評判下げるってんなら、困るけどさぁ～」

「何だよ……？それっ……」

「へっ？」

深く俯いたまま問いかけるハチに、太狼が首をかしげる。

「ああっ、僕が何でカフェオレよりココアを好きかってこっ……」

「何だよっ！！それはっ！！」

「……っ」

突然顔を上げ、太狼を責めるように怒鳴るハチに、太狼が少し驚いたように目を見開く。

「お前なんかっ……お前なんかっ！俺の憧れてた“桃タロー”じゃねぇーよっ！！」

「えっ……？」

「……っ」

強い声でそう言い放って、ハチがその場を走り去っていってしまう。

「……。」

一人その場に取り残され、そっと俯く太狼。

「彼は……いつもあんなにいちいち一生懸命なわけ？」

どこへともなく問いかける太狼。

「輝矢ちゃんっ」

「……ええっ」

その問いかけに答えたのは、ハチと入れ違うようにしてその場へとやって来た輝矢であった。

「最高でしょうっ？」

「……ホント、最低っ」

誇らしげな笑顔で問いかける輝矢に、太狼は少し苦い笑みをこぼした。

第19章　ニセ桃タロー事件　☆4

「あぁぁぁぁーーーっ！！！イライラするっっ！！！」

太狼の元から去り、森の中を一匹で足早に歩くハチ。その表情、言葉、空気、すべてから怒りが醸し出されていた。収まらない怒りを、全身から発生させているようである。

「何っだよっ！！何っだよっ！！あいつはっっ！！」

――――これで“桃タロー”の評判上げてくれるんなら、ニセモノ万々歳じゃないっ？――――

ハチを怒らせたのは、太狼のあの言葉。

「評判上げてくれるだぁ～っ！？桃タローはんなセコいこと考えるような人間じゃねぇーよっっ！！！」

誰にともなく叫ぶハチ。

「桃タローはっ……！俺の憧れてた桃タローはもっとこうっ……！！……っ」

ハチが言葉を不意に止め、どこか悲しげに俯く。

「俺の……憧れてたっ……」

――――雀国の王子がイヌだなんてっ、飛んだ恥さらしねぇっ！――――

生まれながらに“自分だけがイヌ”というコンプレックスを持つこととなった桜時にとって、“桃タロー”というのは英雄そのものだった。

――――桃タローは世界の英雄さっ！誰からも認められる、素晴らしい人だよっ！――――

――――桃タロー……かぁ……――――

「憧れ……か……」

人の縁とは不思議なもの。あんなに憧れていた人と出会い、今はこうしてモメるほどまでに近い所にいる。

「憧れ過ぎたから、こんなに現実が酷く思えんのかなぁ～」

ボヤくように呟きながら、立ち止まって首をかしげるハチ。

「あれっ？君っ」

「へっ？」

聞こえてくる声に、ハチが顔を上げる。

「あっ、あんたっ……」
「どうしたんだい？こんな所に一人で」
そこへ現れたのはモモ太郎であった。モモ太郎がハチに穏やかな笑顔を向ける。
「他の人たちとは一緒じゃなかったのかい？」
「あんたこそっ……んなトコで何やってんだよっ？今頃、街で本物祝賀会でもやってんのかと思ってたけどっ」
ハチがそっぽを向き、少し不機嫌そうに言い放つ。
「祝賀会は開いてくれると言われたけどね、そうゆっくりもしていられないんだよ」
「へっ？」
「今はまた鬼人が出現して、混沌とした時代になってる……俺もまた、少しでも多くの人を助けなきゃ……」
「……っ」
真剣な眼差し、立派な志。桜時が太狼に出会う前までにイメージしてきた桃タローに近い。

「はぁ～あ……ホント、あんただったら良かったのに……」
「えっ？」
「グガアアアッ！！」
『……っ！』

聞き覚えのある雄たけびに、ハチとモモ太郎が表情を鋭くして顔を上げる。

「鬼人っ……！」
「“紫鬼”っ……！レベル5かっ……！」

上空に飛んでいる大きな羽根を持った紫色の皮膚の鬼に、ハチとモモ太郎がそれぞれ言う。

「グアアアァーーッッ……“鬼風”っっ！！」

『……っ！』

上空の紫鬼が、真下にいるハチたちへ向け、大口を開き、巨大な風の塊を放った。

「クっ……！」

――――ボォォォォォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！――――

ハチが白い煙に包まれ、素早く人化する。

「“瞬花”っ……！！」

――――パアアアアアアアアアアアーーーンッッッ！！！――――

桜時が向かって来ていた鬼風を、桜の花びらへと変えて散らせる。

「“花力”……？」

「村雨丸っ」

モモ太郎が驚いたように桜時を見る中、桜時が腰に下げていた村雨丸を抜く。

「グアアアアアァァーーッッ……」

「くっそぉっ！あんだけ上だと、技も届かねぇーなぁっ」

遥か上空の紫鬼を見て、少し困ったように言う桜時。

「前、倒した時は長靴キャットの手招きで無理やり落としたからなぁ～どうすっかなぁ～」

「君はここで待機していて」

「へっ？」

モモ太郎の言葉に、桜時が目を丸くする。

「あいつは俺が何とかするからっ」

――――ボォォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！！！――――

モモ太郎が表情を鋭くして紫鬼を見ると、素早く狼化する。

「……っ！」

「あっ！おいっ！」

狼化したモモ太郎が地面を蹴り上げ、高く飛び上がる。飛び上がったモモ太郎を、戸惑うように見上げる桜時。

「グアァァーーッッ……“鬼爪・天回”っ！！」

「……っ！」

上空から紫鬼の放った１０本の鬼爪をかわしながら、森の大きな木を身軽に上っていくモモ太郎。やがて木の頂上に立ち、飛び上がる態勢を取る。

「あそこから飛ぶ気かっ……！？」

「……っ！！」

桜時が戸惑い見つめる中、モモ太郎が木の頂上から上空にいる紫鬼の元へと勢いよく飛び上がる。

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――――

紫鬼のすぐ真上まで飛び出した所で、空中でもう一度人化するモモ太郎。

「二鉢っ……」

「グガっ……！！」

モモ太郎が腰から太鼓を叩くような、２本の鉢を取り出し、手を交差させて構える。そのモモ太郎に、少し怯むような声を出す紫鬼。

「“轟音”っっ！！」

「グっ……！」

――――――バァァァァァァァァァーーーンッッッ！！！！――――――

「ギャアアアアッッ！！」

モモ太郎の鉢が紫鬼の頭部に炸裂し、激しい悲鳴をあげながら、紫鬼が力なく地面に落下する。

「へぇっ、結構強いんだっ」

降りて来るモモ太郎を見ながら、感心したように声を漏らす桜時。

「あれなら本物って言っても信っ……」

――――“機微団子弾”っ！バッキューンっ☆――――

本物の強さを知らなければ、モモ太郎が桃タローであると信じられたかも知れない。

「……。」

しかし、桜時には、モモ太郎の強さはどうしても物足りなく感じてしまう。

「うわぁぁぁぁ～～んっ！！」

「へっ？泣き声っ？」

考え込んでいた桜時が、どこからか聞こえてくる子供のものらし

き泣き声に、辺りを見回す。

「あっ……！」

「うわぁぁぁ～～んっ！！」

桜時や紫鬼のいるすぐ近くの木陰で、泣きじゃくっている一人の子供。

「あのガキはっ……」

――――そのアメ、頂戴っ――――

その子供は、太狼にアメをおねだりして、見事に断られたあの子供であった。集落を出て迷子にでもなってしまったのだろうか。鬼人にも気付かずに泣いている。

「グガアアアアアッッ！！」

「二鉢っ……」

地面に落とされ、やっと立ち上がった紫鬼に、地面へと着地したモモ太郎が素早く鉢を構える。

「“無限音”っ！！」

――――ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！――――

「げぇっっ！！！」

鉢をその場で振り回し、空気との振動により無数の音を生み出して、紫鬼へと向けるモモ太郎。しかしその紫鬼の立っている向こうの木陰には、先ほどの子供の姿がある。

「見えてねぇーのかよっ！クソっ！」

子供の元へと、慌てて飛び出していく桜時。

「ううううっ……！うっ……！」
「おいっ！！」
「へっ？」

泣いていた子供が、後ろから聞こえてくる声に振り返る。

「伏せろっっ！！！」
「へっ……？」
「……っ！！」

桜時が飛び出し、子供を庇うようにして地面に倒れ込む。

――――バァァァァァァァァーーンッッッ！！！――――

「グッ……！グガアアアアッッ！！」

モモ太郎が飛ばした無数の音が、紫鬼の体に当たり、衝撃を与える。どんどん飛んでくる音に、少し体を反り返らせる紫鬼。

「うぅぅわっ！！」

――――――バァアアアアアアアーーンッッッ！！！――――――

子供の上に覆いかぶさりながら、紫鬼を逸れて飛んでくる音を避ける桜時。

「うわぁぁぁぁ～～んっっ！！」
「って、伏せとけってっ！！」
「うぐっ！」
泣きじゃくる子供を、桜時が必死に押さえ込む。

「ふぅ～っ」
音を飛ばし終え、鉢を下ろし一息つくモモ太郎。

「グっ……グっ……グガアアアアッ！！」
「……っ」

モモ太郎の無限音をかなり食らったというのに、紫鬼は倒れることなく、再び雄たけびをあげた。その紫鬼の様子を見つめ、モモ太

郎が少し眉をひそめる。

「やっぱり紫鬼相手は荷が重いっ……か……」

気難しい表情で呟くモモ太郎。

「ふぃ～っ！何とか収まったなっ」

「もう泣いていいぃ～？」

「えっ？あっ、いやっ、もうちょい我慢しとけよっ」

子供の問いかけに、少し困ったように答えながら、桜時がゆっくりと立ち上がる。

「君っ」

「ああっ？」

紫鬼の向こうから二人の元へとやって来るモモ太郎に、桜時が不思議そうに振り返る。

「ああっ！！チョコレートのお兄ちゃんだぁぁっっ！！」

やって来るモモ太郎に、嬉しそうな声を出す子供。

「あのぉ、さっきはチョコレートありがっ……！」

「手伝ってくれないか？俺、一人じゃどうにも荷が重いんだ」

「えっ？あっああ」

礼を言おうとした子供を素通りして桜時の元へとやって来るモモ太郎に、桜時が少し戸惑いながら答える。

「君も、今度はもう少し安全な所にいてくれよ」

「えっ……？」

モモ太郎の言葉に、桜時の表情が止まる。

――――見えてねぇーのかよっ！クソっ！――――

「知ってて……？」

桜時が戸惑うように呟く。

「とりあえず君が“花力”で陽動しておいて、隙を狙って俺がっ……」

「知ってて撃ったのかよっ……？」

「えっ？」

桜時の突然の言葉に、目を丸くして振り向くモモ太郎。

「コイツがいるって知ってて、あんな無茶な技撃ったのかよっ！？」

「何をムキになっているんだっ」

強く問いかける桜時に、モモ太郎が少し呆れたような表情を見せる。

「君が助けるだろうと思ったから撃ったんだよ。それに子供のことより、鬼人を倒すことの方が先決だろう？」

「はぁっ？」

モモ太郎の言葉に、顔をしかめる桜時。

「鬼人が村へでも出たら、それこそ子供一人の命じゃ済まなくなる」

「……っ」

桜時がゆっくりと俯いていく。

「とにかく今は鬼人のことをっ。とりあえず君が陽動でっ……」

「やっぱお前、ニセモノだわっ……」

「はっ？」

俯いたまま呟く桜時に、眉をひそめるモモ太郎。

「あのねぇっ、今、そんなことを議論してる場合じゃっ……！」
「俺の憧れてる桃タローはっ！！お前みたいなヤツじゃねぇーよっ！！」
「……っ」

桜時の勢いに押され、モモ太郎は思わず言葉を飲み込んでしまう。

「グガアアアッッ！！」
『……っ！』

そこへ爪を振り上げ、駆け込んでくる紫鬼。

「うっ……！うわぁぁぁぁ～～～んっっ！！」
「あっ……！」

迫り来る紫鬼に、子供がその場から必死に逃げ出す。

「待てっ！俺たちから離れるんじゃっ……！」
「“鬼風”っっ！！！」
「しまっ……！」

逃げ去る子供へと、鬼風を放つ鬼人。

「うっ……！ううっ……！」
「クソっ……！」

桜時が必死に手を伸ばすが、鬼風は桜時の前を通り過ぎ、まっすぐに子供の元へと飛んでいく。振り返った子供の表情が、恐怖に歪む。

「うわあああっっ！！」

――――パァァァァァァァーーーンッッッ！！！！――――

第１９章　ニセ桃タロー事件　☆４（後書き）

早いもので、次回で１９章終わりです。

第19章　ニセ桃タロー事件　☆5

その時、子供に当たる寸前で突如、鬼風が消え去る。

「なっ……！」
「グガっ……！？」

戸惑うように声を出す桜時と紫鬼。

「ふぅ～っ、やれやれぇ」
「あっ……」

子供の前へと現れた人物に、桜時が思わず目を見開く。

「あそこまで言われちゃあ、出て来ないわけにも行かないでしょ～っ」

「タっ……タローっ……」

子供の前に立っていたのは、軽く右手を挙げ、いつものように爽やかな笑みを浮かべている太狼であった。どうやら右手1本で、紫鬼の鬼風を破壊したようである。

「ねぇっ？僕にすんごい憧れてるハチ君っ」

「ぬがっ……！！」

からかうような笑みを浮かべてくる太狼に、桜時が耳の先まで真っ赤にして顔を引きつる。

「あっ……！あれはっ！そのっ！売り言葉に買い言葉っつーかっ、めっちゃ大袈裟な表現を加えてだなぁっ！」

「太一ぃいいっ！！！」

「あっ！！パパぁぁぁぁっっっ！！！」

桜時が必死に言い訳をしていると、そこへ集落の住民を連れた輝矢たちが駆けつけた。太一と呼ばれた先ほどの子供が、太狼の元から住民たちの元へと駆け出していく。

「そのだなぁっ！！」

「グガアアアアアアアアッッッ！！！」

「ああっ！！」

桜時が太狼の言葉に動揺している隙に、紫鬼が翼を広げて上空へと飛び立っていってしまう。

「クッソっ！せっかく叩き落としたってのに、これじゃまた攻撃出来ねぇーっ！！」

「いぃやっ、問題ないよっ」

「へっ？」

桜時が困ったようにそう言う横で、太狼は静かに言い放ち、ゆっ

くりと掛けている黒メガネを取った。

「“神狼丸”っ」

太狼がメガネを胸ポケットにしまうと、左手を挙げて、どこからともなく黒い鞘に入った刀を出す。鞘から抜かれた刀の刀身も、深く光る、美しい黒色をしていた。

「グガアァァーーッ……」

空中で大きく口を開き、狙いを定めながら、力を溜める紫鬼。

「……桃源流刀法……」

力を溜める紫鬼に焦ることなく、ゆっくりと神狼丸を身構える太狼。

「グガアアアアッッ!!“鬼ふっ……!!」

「“狼刃（ろうば）”っっ……!!」

――――・・・・・・・・・・・・・っっっっ!!!――――

太狼が神狼丸を振り切ると、光の線のようなものが舞い上がり、目にも留まらぬスピードで、上空にいる紫鬼の体を駆け抜けていく。

「ガッ……ガ……」

技を繰り出さないまま、上空で動きを止める紫鬼。

「グギャアアアアッ！！」

紫鬼の体が縦に真っ二つに斬り裂かれ、激しい断末魔を残して、空中で砂と化して消えていく。

『すっ……すげぇっ……』

一瞬で消え去った紫鬼に、圧倒されたように声を揃えて呟く住民たち。

「手の甲の刀傷……鋭く光る金色の目に、黒い刀……」

太一を抱えた、太一の父親らしき男が、まっすぐに太狼を見ながらふと呟く。

「間違いない……彼こそが本物……」

「パパ？」

茫然と呟く父親を、不思議そうに見つめる太一。

「世界の英雄……“桃タロー”っ……」

「桃……タローっ……」

父親の言葉を繰り返しながら、太一はとても純粋な瞳をまっすぐに太狼へと向けた。

「見えたかぁ？今のタローの刀」

「全然っ」

「やっぱぁ？俺も光がチカチカってなるとこしか見えへんかってんっ！」

暢気な会話を交わしながら、桜時の元へと駆け寄っていくモンキとユキジ。

「おぉ～うっ！イヌぅっ！無事やったかぁっ！？」

「……。」

「んっ……？」

返って来ない反応に、モンキが首をかしげる。

「おぉ～いっ！イヌぅ～？……っ！」

「……っ？」

桜時の顔を覗き込んだモンキが、大きく目を見開く。

「どうしたの？」

「コイツっ……」

問いかけるユキジに、真剣な表情を見せるモンキ。

「魅入られとるっ……」

「えっ……？」

モンキの言葉に首をかしげながら、ユキジも桜時の顔を覗き込んだ。

「タローの強さに魅入られてもとうわっ、コイツっ」

「……。」

二人が覗き込んだ桜時は、紫鬼のいた辺りの空を見上げたまま、大きく目を見開いて固まっていた。そんな桜時に、モンキが少し笑みをこぼす。

「ええ～っ？ハチ君ってば、僕の戦いっぷりにそんなに感動しちゃったのぉ～っ？」

「まぁ確かにあのギャップには固まりそうになるけどね……」

「ああ……」

刀をしまい、メガネを掛けて、いつものテンションに戻る太狼に、

呆れたように頷き合うモンキとユキジ。

「私以外のものに魅入られるとは面白くありませんねぇ～」

『……っ？』

そんな桜時の元へ、輝矢もやって来る。

「“水球”っ」

――――ポワァァァァァァ～～ンッ！――――

『あっ……』

輝矢が桜時の顔に右手を向けると、桜時の顔全体を丸い水の塊が取り囲んだ。

「……ぐっ……ぐぷぷぷっ……ぷっ……」

徐々に苦しげな顔となっていく、水球の中の桜時。

「がぱあああぁぁぁぁっ！！」

桜時が水球の中から、勢いよく顔を出す。

「あっ、正気に戻りましたぁ？」

「殺す気かぁぁっ！てめぇーはぁぁっ！！」

笑顔を向ける輝矢に、勢いよく怒鳴りあげる桜時。

「ああ、それからそこのモモ太郎さんっ」
「ううっ……！！」
こっそり逃げ去ろうとしていたモモ太郎が、輝矢の冷たい声に表情を引きつって足を止める。
「逃げようだなんて思わないで下さいねぇ？私、逃げていく者にはっ……」
輝矢がこの上なく冷たく笑う。
「余計に手荒なマネ……したくなっちゃうんですよっ……」
「ひいいぃぃ～～っっ！！」
輝矢の言葉に、震え上がるモモ太郎。
「すみませんっ！！」
――――ボォォォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！！！――――
土下座したモモ太郎の体を、白い煙が包んでいく。
「桃タローの振りをしてっ、ちょっと英雄気分を満喫したかっただけなんだポンっ！！」

『ああっ！』

晴れた煙の先で土下座をしていたのは、頭に緑色の葉っぱを乗せた、一匹のタヌキであった。

「ほんの出来心だったポンっっ！！許して欲しいポンっっ！！！」

「さぁ～て……」

頭をこすり付けて謝るタヌキの元へと、歩み寄っていく輝矢。

「タローの名をかたった罪とハチを危険な目に合わせた罪っ……」

「ポンっ……？」

「どう償っていただきましょうかねぇ……？」

「ひえええぇぇポンっ！！」

視線だけでも殺されそうなほどに殺気立っている輝矢に、タヌキが尋常ではないくらいに震え上がる。

「竹取輝矢……ニセモノ退治、いたしますっ」

ピアスに手をかけ、月器を目覚めさせる輝矢。

「うっぎゃあああっ！！」

そのタヌキの断末魔は、鬼人のものよりも大きく響いた。

「うわっちゃ～」

「あそこまで行くと、相手に同情しちゃうよねぇ～」

輝矢の餌食と化すタヌキに、思わず目を背ける桜時たち。

「んっ？」

桜時が逸らし見たその先では、キャンディをナメながら一息ついている太狼の元へと、太一が駆け寄っていっていた。桜時がまっすぐにその光景を見つめる。

「桃タローのお兄ちゃんっっ！！」

「んん～っ？」

キャンディをナメながら、太一の声に振り返る太狼。

「さっきはありがとうっっ！！」

「ああ～、別にいいよぉ～」

笑顔で礼を言う太一に、太狼も爽やかな笑顔を向ける。

「それでねっ、そのキャンディっ……！」

「あげないよっ」

「……。」

爽やかな笑顔のまま、即答で答える太狼。

「うわぁぁぁぁ～～んっ！！」

「あれっ？」

泣きじゃくる太一に、太狼が首をかしげる。

「……っ」

そんな太狼を見ながら、桜時はそっと笑みをこぼした。

「ほっらぁ～っ、庭の雑草、全部ちゃっちゃか抜いちゃってぇ～っ」

「へぇ～いっ……」

ニセ桃タロー事件の翌日。あのタヌキも無事に捕まり、太狼の疑いも晴れて住民からの謝罪も受け、すべて終わった翌日。今日も朝早くから叩き起こされ、庭の草むしりをさせられている桜時。

「クッソ……何だって俺がこんなことっ……」
「憧れの桃タローさんの頼みでしょ～？」
「ぬがっ……！！」
太狼の言葉に、またしても表情を引きつる桜時。
「だっからあれは売り言葉に買い言葉でぇっ……！！」
「ほらほらっ、いいからとっとと抜く抜くぅ～っ」
「うっ……！わっわかったよっ」
すっかり太狼のペースに流され、桜時はとにかく必死に草むしりを続ける。

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」

全身に汗を掻きながら、広い庭のすべての雑草を抜ききる桜時。

「だっはぁぁぁぁ～～っ！！終わったぁぁぁ～～っ！！」
桜時が力なく、庭に倒れ込む。
「もぉ～無理っ！もぉ～動けねぇっ！」
「ん～っ、庭全面の雑草抜きが二時間十一分かぁ～まぁまぁかなぁ～」
「へっ？」
時計を見ながら何やら意味深なことを呟いている太狼に、桜時が横たわったまま目を丸くする。
「そろそろ基礎体力はついてきたかぁっ」
「何のはなっ……」
「はいっ」
「痛っ！！」
振り向きざまに、桜時のおでこに突き刺さる棒状のもの。
「痛ってぇぇぇ～～～っ……んっ？ホウキ？」

おでこを赤く腫らせた桜時が起き上がると、目の前に木製のホウキが落ちていた。どうやらこのホウキが、桜時のおでこに突き刺さったもののようである。

「何っ……」

「じゃあこれから庭、全面の掃き掃除ねぇ～」

「はぁぁぁぁぁっっっ！！！？」

すでに限界に来ている桜時が、物凄い勢いで驚きの声をあげる。

「何言っ……！」

「全面掃きをぉ～最低百回は繰り返してねっ」

「ひゃっ……！」

太狼の笑顔に、固まる桜時。

「それまで朝食はなしだからぁ～」

そう言って、太狼が家の中へ戻ろうと足を踏み出す。

「……ちょっと……ちょっと待てぇぇっ！！こらぁぁぁっ！！」

桜時が勢いよく飛び上がり、ホウキを太狼へ向けて振り下ろす。

――――パァァァァァーーーンッッッ！！！！――――

「……っ」

どこからか出してきたもう一本のホウキで、桜時の振り下ろしたホウキを受け止める太狼。

「振りが大きぃ～いっ」

「……っ！」

太狼の言葉に、桜時が後方へ飛んで距離を取る。

「人が大人しくしてりゃあっ、散々、好き勝手なこと言いやがってぇぇぇっ！！」

「腰が入ってなぁ～いっ」

「このエセ英雄がぁぁぁっ！！」

「狙いが不正確ぅ～っ」

「俺の憧れを返しやがれぇぇぇっ！！！」

「もう何か才能なぁ～いっ」

あれこれと言い合いながら、ホウキでの戦闘を繰り広げていく桜時と太狼。

『……。』

そんな二人の様子を、家の縁側から見つめるモンキとユキジ。

「気のせいかなぁ～？あれ、剣術のお稽古に見えるんだけどぉ」

「俺にもそう見えるわっ」

「……っ」

二匹の会話を聞きながら、ソファーの上でココアを飲んでいる輝矢がそっと笑みをこぼす。

「覚悟しろぉぉっっ！！桃原太狼っっ！！」

深く、鮮烈に憧れた桃タローに、毎日コキ使われる日々を送っている桜時。

しかし、桜時の桃タローへの憧れは、さらに大きくなっていくのであった。

第１９章　ニセ桃タロー事件　☆５（後書き）

１９章終わりました。
次回はユキジくんファンには必見のお話。
せひご覧ください。

第２０章　シアワセ家族　★１（前書き）

ついに２０章です。
この章でたぶん、栄光の１０００分超えします。

……すみません。

第２０章　シアワセ家族　★１

龍国・中央商店街。
「売り切れっ？」
とある店の店頭で、目を丸くして聞き返す由雉。
「ああ～っ！最近、鬼人が各地で増えてんだろぉ～？それで妙に需要が高まっちゃってねぇ～っ」
そんな由雉に答えるのは、店頭に立つ気の良さそうな中年男。
「たぶん他の店も同じじゃないかぁ～」
「んん～っ……」
少し気難しそうに考え込む由雉。
「どうしても急ぐってんなら、産地の『幸ノ街』まで行ったらどうだいっ？」
「幸ノ街……ねぇっ……」
こんな所から、今回の事件は始まるのである。

御伽界・南東部。穏やかな平原の続く、自然と気候に恵まれた土地。ここに幸ノ街があった。
「あぁぁ～っ！俺ってばなんて幸せなんだぁぁぁぁ～っ！！」
「私もこの上なく幸せよぉ～っ！！誰かに分けてあげたいくらぁ～いっ！！」

「ニャ～ンっ！」
「ワンワンっ！！」
『……。』
幸ノ街では、行き交うすべての人はもちろん、道端のイヌやネコまでもが幸せオーラを醸し出していた。その光景を見て、呆然とする輝矢たち。
「相変わらずどいつもこいつも、幸せそうな街だな……」
「相変わらず他人の幸せは鼻につきますね」
少し引きつった表情で呟く輝矢とハチ。幸ノ街は、“幸力”を持つコウノトリの獣人が住み着き、街人たちを幸せにするため、別名“幸福の街”とも呼ばれていた。
「やはりキジじゃなくてコウノトリを仲間にするべきでしたね……」
「今更、失礼なこと言わないでよ」
「人が実家でのんびりしている時に、いきなり里帰りしたいなどと言い出す始末ですし…」
「仕方ないでしょ～っ？癒羽が龍国で売り切れだったんだからぁ～」
しみじみと呟く輝矢に、冷たい目を向けるユキジ。
「それともボクがカワイイだけのただのキジになっちゃってもいいわけぇ～？」
「確かに仕方ありませんね、ペットとしての価値がなくなってしまう」
「……。」
輝矢がはっきりと言い放つと、ユキジが少し引きつった表情で固まる。虎国の戦いで癒羽を使いきったユキジは、龍国で買うことも出来ず、結局、全員揃って幸ノ街にやって来たのであった。
「まずミチルさんに顔見せるんやろぉ～？」
「うん。輝矢たちも少し休みたいでっ……」
「ありがとうございまぁぁぁーーすっ！！」
『……っ？』
聞こえてくる大きな声に、振り向く輝矢たち。

「お陰で初めてくじ引きでティッシュ以外のものを当てることが出来ましたぁっ！！」
「いえいえ、コウノトリとして当然のことをしたまでですから」
輝矢たちが振り返った先にいたのは、感動した表情で礼を言っている男と、その男に笑顔を見せている一羽の青い鳥であった。
「ではまたお願いしますっ！！」
「はいっ、いつでも呼んで下さいねっ」
深々と頭を下げて、男がコウノトリの前から去っていった。
「ふぅ～っ」

――――ボォォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――

「今日のお勤め、終了～っ」
『ああっ！！』
「えっ？」
コウノトリから姿を変えた青髪の少女が、聞こえてくる声に振り向く。
「……っ！ユキっ……！」
「さっちこちゃあああんっ！！」
「げっ」
勢いよく飛び込んでくるモンキに、顔を引きつる少女。
「ゆっ……！由雉っ……！！」
「ぎゃあああっ！！」
飛び込んできたモンキをかわして、ユキジへと駆け寄る少女。かわされたモンキが勢いよく地面に転がる。
「幸コっ」
「戻って来てたのねっ！輝矢さんたちもっ！」
その少女は、由雉やミチルとは昔からの付き合いであるコウノトリの獣人・幸コであった。輝矢たちが前にこの街を訪れた時、色々と世話になったのである。

「どうしたの？」
「うん」

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――

「“色羽”の買い付けにね」
幸コの問いかけに、人化して答える由雉。
「そうなんだぁっ」
「丁度、今から家に帰ってミチルさんに顔出す所なんだけどぉ」
「ミチっ……！」
「……っ？」
あからさまに顔を引きつる幸コに、輝矢が少し眉をひそめる。
「幸コも一緒にっ……」
「さあぁっ！！とっとと色羽の買い付けに行きましょーーっ！！」
「へっ？ちょっ……ちょっとっ！幸コっ！？」
「ゴーゴーっ！！」
「ああーっ！！待ってぇぇっ！幸コちゃあああんっ！」
由雉を無理やり引っ張るようにして、街の中へと駆け込んでいく幸コ。そんな二人をモンキが追っていく。
「何か……変じゃないか？幸コのヤツ」
「そうですねぇ……」
ハチの言葉に、輝矢は少し表情を曇らせた。

幸ノ街・中心部。羽根専門店・『羽根屋』。
「さぁ～っ！寄ってらっしゃい見てらっしゃいっ！！安いよ安いよぉ～っ！！」
「何、店員になりきってんのさっ」
大声で羽根を売りさばく幸コに、由雉が呆れた瞳を向ける。
「ほらほらっ！由雉っ！こぉ～～んなに癒羽がいっぱいあるわよぉ～～っ？」
「専門店なんだから当たり前でしょっ。たくっ……」
両手いっぱいに黄色い羽根を持って、必死に由雉に売りつける幸コ。そんな幸コに、由雉は少し呆れたように肩を落とした。
「だいたい羽根買うの、そんなに急いでないし、一回家に帰って休んでから来たって良かったのにさぁ」
「いっ一回休んでから来た時には、泥棒が入ってて全部、羽根盗まれちゃってるかも知れないわよっ！？」
「こんな幸せ満開の街に泥棒なんて出るわけないでしょっ」
不満げな由雉を何とか説得しようとする幸コであるが、その言葉には無理があった。

「ふぅ～ん……色んな羽根があんねんなぁ～っ」
店頭に並んだ色とりどりの羽根を眺め、感心した表情を見せるモンキ。
「羽根をお探しかぁーいっ！？モンキーっ！」
「……っ？」
羽根を見ていたモンキの元にやって来たのは、真っ白なスーツに金色の髪の、何やら派手な男であったその身に付けている装飾品の数々からして、かなりの金持ちのようである。
「げっ！」
「……っ？」
モンキに声をかけたその男を見て、あからさまに顔をしかめる幸コに、輝矢が少し首をかしげる。

「じっくり見ていくといいっ！この店には全種の“色羽”が揃っているからねぇっ！」
「はぁっ……」
愛想のいい笑みで勢いよく話しかけてくる男に、少し困った表情を見せるモンキ。
「この白色の羽根かいっ！？」
「へっ？」
いきなり胸ポケットに入っていた白い羽根を突き出してくる男に、モンキが少し焦ったような表情を見せる。
「この羽はねぇっ！どんな色の羽根にも変えられ、かつ繰り返し使える万能品なんだよっっ！！」
「はっはぁっ……」
「つまぁーりっ！これ1枚あれば、大量の羽根を持ち歩かずとも済むんだよっ！まぁまだ試供品だがねっ！」
「はっはぁっ……」
勢いよく羽根の説明をする男に、モンキはただ押されて頷く。
「使ってみるかいっ！！？」
「えっ？」
「ほらっ！！羽根を掴んで今、自分が1番欲しいと思っている羽根を念じればいいんだよっ！！」
「念じっ……？わっ……わかったわぁ～」
男に押されるままに、白い羽根を受け取ってしまうモンキ。
「んんっ……んん～～～っっ！！！」
モンキが羽根を両手で持ち、目を閉じて真剣に念じる。
「んん～～～っっっ！！！！」
――――シィィィィィィィィ～～～ンッッッ……――――
「んんっ？」

何も起こらない羽根に、モンキが目を開けて眉をひそめる。
「何も起こらんでぇ～っ？」
「何いぃいぃっ！？」
「うおおっ！」
まったく色の変わる気配のない白い羽根をモンキが差し出すと、男がひどく慌てた様子で羽根を手に取る。
「故障かっ！？はぁぁっ！！まさか僕の計算に狂いがあったのかっっ！！？」
「ハヤテさんっ、ハヤテさんっ」
「くわああっ！！早く精密検査しなくてはっっ！！！」
「ハヤテさんってばっ！」
「んんっ？」
横から男の名らしきものを呼ぶ、店員らしきまだ若い青年の声に、ハヤテがやっと気付いて振り向く。
「おおっ！幸之助クンっ！大変なんだよっ！！“染羽”の試作品が故障したようなんだっ！！」
「そりゃあ無理もないですよ。彼、おサルさんなんですから」
「へっ？？」
冷静に答える幸之助に、ハヤテが目を丸くしてモンキを見る。
「おおぉぉぉ～～っ！確かにこれはこれはっ！モンキーってばおサルさんだったねぇっ！！」
「自分でモンキーっつってんじゃねぇーかよっ……」
「これまた変なのが出て来ましたねぇ」
今更モンキがサルだったことに気付くハヤテに、横から見ていたハチと輝矢が呆れた表情を見せる。
「“色羽”ってサルには使えんの？」
「ええっ、鳥類の獣人のみが使えることになっております」
「ちぇ～っ、俺には使えんのかぁ～」
冷静に答える幸之助に、残念そうに口を尖らせるモンキ。
「それ、貸してっ」

「んんっ？」
羽根を見て安心したような笑顔を見せていたハヤテから、その白い羽根を奪い取る手。それは由雉であった。
「ボーイっ？何をっ……」
「“彩”っ」

――――パァァァァァーーーーーンッッッ！！！――――

「……っ！」
由雉が染羽を持った瞬間に、染羽が光を放ち、黄色の彩を帯びていく。
「輝矢、手っ」
「えっ？あっ、はい」
輝矢が、まだ霙との戦いでの傷のために包帯の巻いてある右手を由雉へと差し出す。
「“癒羽”っ」
由雉が黄色く染まった羽根を輝矢の右手に軽く刺す。輝矢が包帯をはずしてみると、傷が見る見るうちに癒えていっていた。
「ペット価値上がった？」
「まぁまぁですかね」
傷の治った右手を動かしながら、輝矢が素っ気なく答える。
「ふぅ～ん、使い切ると元の白羽根に戻るんだぁ～」
白色に戻った羽根を輝矢の右手から抜き、興味深そうに呟く由雉。
「面白いね、これ。早く商品化してよぉ」
「……。」
そう言って染羽を差し出す由雉を、唖然とした表情で見つめるハヤテ。
「素晴らしいよっっ！！ボーイっっ！！！」
「うわっ」
声を張り上げて由雉の手を取るハヤテに、由雉が少し後ずさる。

「これほどまで完璧に僕の羽根を使いこなした人はいなかったよっ！！ああっ！！感動したっ！！」
「それはどうもっ……」
目を輝かせるハヤテに、どこか呆れたように礼を言う由雉。
「ええなぁ～ユッキー、鳥類やから使えてぇ～」
「鳥なら誰でも使えるというわけでもありませんよ」
「へっ？」
横から口を挟む幸コに、不思議そうに振り返るモンキ。
「由雉みたいに、鬼人を倒すほどに羽根の力を高めたり、羽根同士を合成させたり出来る人は稀ですからっ」
「ふぅ～んっ、ユッキーって実はすごいトリやったんやぁ～っ」
「まっ、ボクって可愛いだけじゃなくって才能もあるからねぇ～」
「それで性格が良ければもっと良かったんですがね」
「輝矢にだけは言われたくないよ」
自慢げに話す由雉に輝矢が鋭く突っ込むと、由雉は冷たい瞳で突っ込み返した。

「トリのみに……かぁ……」
「……っ？」
どこか神妙な表情で羽根を手に取るハチに由雉が気づく。
「使ってみたら？」
「嫌味で言ってんのかよっ」
由雉の言葉にハチが少し顔をしかめる。
「だって半分は入ってるんでしょっ？トリの血っ」
「入ってたってイヌはイヌだよっ」
「……っ」
羽根を元の棚の上に返しながら、ハチは少し拗ねたように言い返す。そんなハチに、目を細める由雉。
「ボク、桜時のそういうウジウジクヨクヨメルメルしたトコ、すっごく嫌ぁぁ～いっ」

「俺はお前のそういう所が嫌いだってのっ！！だいたい何だぁ～っ！？メルメルってっ！」
「私はメルメルしたトコも好きですよ」
「だっからお前はいちいちそういうコト言うなってっ！！そしてメルメルって何だよっっ！！」
包み隠さず言う由雉と、便乗して告白してくる輝矢に、ハチが怒鳴り返しまくる。

「おおっ！！コウノトリガールっ！！」
今度は幸コへと勢いよく話しかけるハヤテ。
「この素晴らしいボーイはコウノトリガールのお知り合いかぁいっ！！？」
「えっ？えっ、ええ、まぁっ……」
「何っ？幸コ、この変な人と知り合いなの？」
「えっ？えっ、うん、まぁっ……」
「……っ」
由雉とハヤテ、どちらからの問いかけにも妙に言葉を濁す幸コに、輝矢が少し眉をひそめる。
「で、アナタはどちらの変人なんです？」
「んっ？」
輝矢が不意にハヤテに問いかける。
「ちょっとっ！確かにハヤテさんは変人ですけどっ、そんな言い方しないで下さいよっ！！」
「おおっ！！幸之助クンっ！！僕のためにそこまで熱くなってくれるのかいっ！！？」
「っつーか、変人っつってたぞっ……？」
ハヤテを庇うようで庇っていない幸之助の発言に、ハチが呆れた表情でこっそりと突っ込みを入れる。
「ハヤテさんはこの店の主人で、御伽界で初めて“色羽”を作り、羽根事業を拡大させた方なんですよっ！」

「色羽をっ……？」
幸之助の説明に、輝矢たちが皆、目を丸くする。
「別名“ハネキング”と呼ばれている程物凄いっ！世界有数の事業家なんですからっ！！」
「“ハネキング”……ねぇ」
その何とも言えないネーミングに、白い羽根を見ながら少し呆れたような表情を見せる由雉。
「まぁいいやぁ。とりあえず癒羽１００枚くらい頂戴っ」
「１００枚ですかっ？」
由雉の注文に、驚いたように聞き返す幸之助。
「そんなに何に使うんです？」
「そうですよ、無駄遣いは止めて下さい」
「主に君の傷、治してるんだけど？」
幸之助と同じように問いかけてくる輝矢に、由雉が冷たい視線を向けた。
「後ぉ、裂羽５０枚に、滅羽３０枚ねぇっ」
「は…はぁっ……」
由雉が何をしているトリなのかを疑いつつも、注文をメモする幸之助。
「支払いは現金でぇ」
「そんなに金あるんか？ユッキー」
「この前、虎国でお礼にたんまり貰ったからね」
「ええっ！？俺、そんなに貰ってへんでっ！？」
「働き度によるんじゃない？」
「がいいぃぃーーんっ！！」
モンキにショックを受けさせながら、由雉が財布の厚い札束を数える。
「羽根は街はずれのミチルさんて女の人の家に届けてくれればいいからぁ～」

「ミチルっ？」
ミチルの名に敏感に反応するハヤテ。
「ヤバっ……！」
「えっ？」
思わず言葉を漏らす幸コに、ハチが首をかしげる。
「おおっ！！ボーイっっ！！君がもしかしてウワサの“ユキジくん”かぁぁぁ～～～いっっ！！！？」
「へっ？」
自分の名を知っているハヤテに、由雉が驚く。
「そっ……そうだけど？」
「おおっっ！！そうだったのかぁ～いっっ！！」
「ヤバいっ……！！」
笑顔で手を叩くハヤテの元へ、慌てて駆け寄っていく幸コ。
「ハヤテさんっ！ちょっと待っ……！！」
「僕がミチルの結婚相手のハヤテさぁ～っ！！よろしくっ！！マイソンっ！！」
「へっ？」
「あちゃ～～～っ……」
ハヤテの思いがけない発言に、大きく目を見開く由雉と、深々と頭を抱える幸コ。
「けっ……！結こぉぉぉぉぉ～～～んっ！！？」
由雉の叫び声が、ハヤテの店に響き渡った。

第２０章　シアワセ家族　★１（後書き）

ミチルさんが結婚っ??
由雉に人生最大のピンチです。

第２０章　シアワセ家族　★２

幸ノ街はずれ。ミチルの家。
「ふんふふんふふぅぅ～～～んっ♪」
森に程近い広い庭で、のんびりと洗濯物のシーツを干している一人の女。由雉の養母・ミチルである。
「いい天気ねぇ～」
ミチルが不意に晴れ渡った空を見上げる。
「由雉……今どこでどうしているのかしら……」
少し寂しそうに呟くミチル。
「きっと楽しくやってるわね。輝矢さんたちと一緒だものっ」
自分に言い聞かせるように呟き、優しい笑みを作る。
「さっ！さっさと干し終わらなきゃっ！って」

――――ズリッッ……！――――

「あらっ？」
ミチルが振り返った瞬間に、干し立てのシーツの端っ子を踏んでしまう。
「きゃあああああっ！！」

――――ドッスゥゥゥゥーンッッッ！！！――――

シーツに見事な勢いでからまり、ミチルがその場に激しく転倒する。
「痛たたたたたっ……」
地面に落ちたシーツの下から顔を出す、少し痛みに表情をしかめたミチル。

「またやっちゃったわぁ～っ」
起き上がってシーツを手に取りながら、ミチルが自分自身に呆れきったように呟く。
「由雉がいたらまた、“ミチルさんっ！”って怒られちゃうわねぇ」
「ミチルさぁぁぁんっ！！」
「そうそうこんな感じでっ……って、えっ？」
しみじみと呟いていたミチルが、聞こえてくるタイムリーな声に、目を丸くして振り返る。
「由雉っ？」
「ミチルさぁぁぁんっ！！」
「……っ」
街の方から高速で飛んでくる1羽の青いキジに、驚きの表情を見せるミチル。

――――ボォォォォォォォ～～～ンッ！！――――

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」
「由雉っ……！」
人化してミチルの前へと降り立った由雉が、全力で飛んで来たためか少し息を切らせる。ミチルはシーツを置いて、そんな由雉に駆け寄った。
「どうしたの？いきなり戻って来た上に、そんなに慌てて……」
「どうしたもこうしたもないよっ……」
「えっ？」
下を向いたまま呟く由雉に、ミチルが首をかしげる。
「どういうことなのっ！？」
「どういうっ……？」
「へぇぇぇ～～いっ！！ミチルっ！！マイハニィィーーっ！！」
「あれはどういうことって聞いてるんだよっっ！！」
「ああ……」

由雉に遅れるようにしてやって来る、大きく手を振った笑顔のハヤテを見て、由雉が不機嫌この上ない表情で問いかける。少し呆れたような表情で頷くミチル。一瞬で状況を飲み込んだようである。
「やぁっ！マイハニーっ！元気かいっ！？ちなみに僕は今日も絶好調さっ！！」
「はっはぁ……」
目の前にやって来て勢いのいい挨拶をしてくるハヤテに、ミチルが少し押され気味に答える。
「絶対、反対っ……」
「えっ……？」
小さく呟く由雉に、首をかしげるミチル。
「由雉っ……！」
「ふぅ～っ、やっと着きましたねぇ」
そこへ幸コと輝矢たちがやって来る。
「絶対絶対の反対の反対で、最高級に反対でその上にこれまた反対で反対の反対は反対ぃぃぃっっ！！」
「ええっ？」
叫びまくる由雉に、ミチルが戸惑いの表情を見せる。
「あちゃ～っ……遅かった……」
「ってか反対言い過ぎて、何が言いたいのかわからん……」
「とりあえず物凄く反対なのでしょう……？」
幸コが思わず頭を抱え、輝矢たちは少し呆れた表情を見せた。

数分後。ミチル家・リビング。
「むぅぅぅ〜〜っ……」
『……。』
この上なく不機嫌な表情を見せている由雉を見て、少し困った顔を見せるミチル、幸コ、そして輝矢たち。
「いっやぁ〜っ！“奇遇”とはまさにこのことだねぇーっ！」
そんな中、一人空気の読めていないハヤテが、明るい声で話を始める。
「聞いておくれよっ！ハニーっ！！今日は何とねぇっ！我が店にマイソン・由雉がやって来たのだよっ！！」
「誰がソンだっ」
「親子の縁だろうねぇっ！！」
「あんたと親子になった覚えなんて微塵もないよっ！！」
肩を組んでくるハヤテの手を、由雉が必死に払いのける。
「照れるなっ！照れるなっ！マイソンっ！！早速パパと呼んでくれていいのだよっ！！」
「呼ばないよっ！！バカじゃないのっ！？」
ハヤテが何か言うたびに、由雉の眉間の皺が増えていく。
「どうするん？仲裁するん？」
「見ておきましょう。身内同士のモメ事に口を挟む趣味はありません」
「面倒臭いだけだろ、お前……」
モンキの問いかけに真面目に答える輝矢に、ハチがこっそりと突っ込みを入れた。
「でぇっ！どういうつもりなわけっ！？ミチルさんっ！！」
「えっ？」
ハヤテを争うのを止めて、改めてミチルの方を見る由雉。ミチルが少し目を丸くする。
「どういうつもりって……？」
「こんな金持ってるだけが取り柄の、見るからに頭の軽そうな男と

結婚するなんてっ！！」
「えっ……？」
由雉の言葉に、ミチルが驚いた表情を見せる。
「そんなに父を誉めてくれるなっ！マイソンっ！」
「誰が父だっ！！だいたい何一つ誉めてないよっ！！」
「困ります、ハヤテさん」
『へっ？』
ミチルの声に、由雉とハヤテが振り向く。
「結婚のこと、まだ私は何のお返事も……」
「えっ？そうなのっ？」
「いいやっ！ハニーっ！！君は僕と結婚するのさっ！！それはもう決まっているのだよっ！」
「なんっでだよっ！」
高々と言い放つハヤテに、目を丸くしていた由雉が鋭い目つきとなる。
「ミチルさんはまだ同意してないって言ってるじゃないかっ！！」
「いいやっ！！ハニーと僕が結婚するのはもう決まったことなのさっ！！」
「だから何でだよっ！？」
「それはだねっ……」
「……っ」
急に真剣な顔つきとなるハヤテに、由雉が思わず息を呑む。
「ハニーのドジっぷりに僕がぞっこんしちゃってるからさっ！！」
「何の理由にもなってないよっ！」
「初めて会った日のあの溝へのハマリっぷりっ……もうこれ以上はないほどのドジだったっ……」
昔を懐かしむように熱く語るハヤテ。
「君は最高のハニーなのだよっ！！ミチルっ！！」
「何萌えだよっ！ってかそれは結婚する理由になってないしっっ！！」

とことん自分の世界を生きているハヤテに、由雉が大声で突っ込みまくる。
「あのユッキーが振り回されとるなぁ～」
「強烈っ……」
いつも落ち着いている由雉のペースを、どこまでも狂わせるハヤテに、モンキとハチは感心したような呆れたような表情で呟いた。
「とにかくとっとと帰って二度とボクらの前に現れないでっ！！いいっ！？」
「由雉、何もそんな言い方っ……」
「だってミチルさんは結婚する気なんてさらさらないんでしょっ！？」
「さらさらってわけじゃっ……」
「えっ……？」
「あっ」
思いがけないミチルの答えに、由雉の表情が一気に曇る。
「あのっ……！そのっ……！そりゃ今すぐ結婚って気はないけどそのっ……！いつかは……なんてっ……」
「……っ」
少し照れるようにして答えるミチルに、由雉がショックを受けたように目を見開く。
「ハヤテさんはとてもいい方よ？私なんかにはもったいないくらいっ……」
「そんなことはないよっ！！ハニーっ！！君は僕にとって最高の人さっ！！」
「まっまぁ確かにああゆう口振りは軽そうに思えるけど、本当に優しいし面白い方で一緒にいて楽しいし……」
「……。」
穏やかな笑顔を見せるミチルに、暗い表情となって徐々に俯いていく由雉。
「だからね今回のこと、私は前向きに考えたいと思ってるの……」

「……っ」

――――あなたのような立派な息子がいて……私は幸せ者ね……――――

思い出されるミチルの言葉に、由雉が力強く拳を握り締める。

「いらないっ……」

「由雉っ……？」

「ボクはこんな人、いらないっ！！」

「由雉っ……」

ハヤテを指差して言い放つ由雉に、ミチルが少し眉をひそめる。

「家族なんてボクとミチルさんで十分でしょっ！？ミチルさんはもう十分幸せでしょっ！？」

「それはっ……」

「だったらこの男なんて必要なっ……！」

「由雉っ！」

「……っ」

強く呼ぶミチルに、由雉が思わず言葉を止める。

「家族のことも幸せのことも、それは、あなただけで決めることじゃないわ……」

「……っ」

厳しい表情で言い放つミチルに、由雉の表情が曇る。

「だからね、由雉……」

「そうだね……」

「えっ……？」

俯いたままポツリと落とした由雉の言葉に、ミチルが目を丸くする。

「ボクなんかが決めていいことじゃなかったね……」

「由雉っ……？どうしっ……」
「どうせっ……」
由雉がミチルの言葉を遮って、勢いよく顔を上げる。
「どうせボクなんてっ……！本当の子供でも何でもないんだからさっ！！」
「……っ」
由雉の言葉に、ミチルが大きく目を見開く。
「由雉っ！そんな言い方なっ……！！」
幸コが思わず身を乗り出した、その時。

――――パァァァァァァァーーーーーンッッッ！！！――――

「へっ？」
『……っ』
響き渡った平手の音に、身を乗り出そうとした幸コや輝矢たちが皆、驚いたように目を開く。
「……っ」
「……。」
由雉の頬を平手で勢いよく叩いたのは、厳しい表情を見せたミチルであった。叩かれた由雉自身も、手で頬を押さえながら、相当驚いたような表情でミチルを見つめる。
「ミチルさんがっ……由雉を……」
「……。」
幸コが驚きの表情で呟く中、ハヤテはどこか冷静な表情で二人を見つめていた。
「……ごめんっ」
ポツリと謝って、玄関を飛び出していく由雉。

「あっ！由雉っ……！」
「……っ」
「……っ？輝矢さんっ？」
追おうと立ち上がった幸コの前に手を出して止める輝矢。
「私が行きます」
「あっ、はいっ」
「寂しがらないで下さいね、ハチ」
「がらねぇーよっ！！とっとと行けっ！！」
輝矢の強い瞳に幸コは大人しく頷き、ハチに送り出されるようにして、輝矢は去っていった由雉の後を追って、ミチルの家を出て行った。
「……っ」
ミチルは厳しくも、どこか悲しげな表情を見せていた。

数分後、ミチルの家の前。
「すみませんでした、ハヤテさん」
ハヤテへ向かって深々と頭を下げるミチル。
「大したお構いもせずに、お見苦しいところまで見せてしまって…」
「……。」
申し訳なさそうな表情を見せるミチルを、ハヤテがまっすぐに見つめる。
「いいものだねっ」

「えっ……？」
ハヤテの言葉に、ミチルが少し目を丸くして顔を上げる。
「母親というものはっ……」
「……っ」
ミチルが顔を上げたその先では、ハヤテがとても穏やかな表情で笑みをこぼしていた。
「ボクは益々、君のことが好きになったよっ！ハニーっ！」
「えっ……？」
ハヤテのストレートな言葉に、ミチルが思わず頬を赤く染める。
「そっそんなっ……！私なんてそのっ……！えっとっ……！」
照れたミチルが、ハヤテの前から素早く後ろ向きに下がっていく。
――――ズリッッ……！！――――
「ふえっ？」
後退していたミチルが、地面に落ちている石に躓く。
「きゃあああああっ！！」
石に躓き、頭から勢いよく転ぶミチル。
「そのドジっぷりも大好きだよっ！！ハニーっっ！！！」
「そっそんなっ！私なんてっ……！きゃあああああっ！！」
「ハッハッハっ！君は最高さっ！！ハニーっっ！！！」
倒れたミチルを見て笑顔を見せるハヤテに、再び倒れ込むミチル。
そんなミチルを見て、ハヤテはとても幸せそうな笑みを浮かべた。
「ふぅ～んっ」
倒れたミチルへと笑顔で手を差し伸べるハヤテの様子を家の窓から見つめ、少し笑顔をこぼすモンキ。
「何やぁ～軽くてうっさいだけのオッサンか思とったけど、わりか

しええヤツやんっ」
「そうなんですよねぇ……私も最初は反対してたんですけど、何かハヤテさんいい人で」
「ってことは残る問題はっ……」
モンキと幸コの言葉を受け、ハチがゆっくりと顔を上げる。
「あの頑固キジだけか」
ハチがそう呟いて、少し目を細めた。

幸ノ街はずれの森。
「ああぁぁっ!!もおぉぉっ!!」
湧き上がる怒りをぶつけるように、腹の奥深くから声を出す由雉。
「なぁ〜にがマイハニーだよっっ!!あのバカハネキングっっ!!!」
「あまり騒ぐと近所迷惑ですよ?」
「うわっ!」
いつの間にかすぐ背後に現れる輝矢に、由雉が少し驚いて振り返る。
「まぁ近所にいるとしてもシカくらいですかねぇ」
「なっ何しに来たのさっ?」
暢気な口調で周りを見回す輝矢に、しかめた面を向ける由雉。
「ボク、励ましとかそうゆうの、すごく嫌いなんだけど?」
「まったく励ます気はないですから大丈夫です」
「……そうだったねっ」

爽やかな笑顔で答える輝矢に、由雉が少し呆れ気味にそっぽを向く。
「母親の結婚相手に嫉妬するなんて、意外と思春期なんですね、キジ」
「その言われ方、何か不快っ」
そんなやり取りをしながら、二人がその場に座り込む。
「別にミチルさんが結婚すること自体に反対してるわけじゃないよっ。あの男だから反対してるだけっ！」
「どうしてです？」
「どうしてって、見ればわかるでしょっ？あんな金ばっか持ってるだけの軽そうな男っ……！」
「見ただけではわかりませんよ」
「えっ……？」
輝矢の声に、由雉が言葉を止めて顔を上げる。
「見た目だけで言えば、アナタはただの可愛いキジですし、私はただの美しく気立ての良さそうな少女です」
「それ、自分で言う？」
自分を美化する輝矢に、思わず突っ込みを入れる由雉。
「人間、相手を見ただけでは何1つ理解することなど出来ません……」
輝矢が穏やかな笑みを浮かべ、ゆっくりと由雉の方を見る。
「まずは一度向き合って、話すくらいしてはどうですか？」
「あんな脳みそ軽い男と話す気になんてなれないよっ」
「ただの金持ちで脳みその軽い男を、ミチルさんが選ぶとも思えませんけどね」
「……っ」
輝矢の一言に、少しバツが悪そうに俯く由雉。
「そうだねっ……結婚もその相手もっ……全部、ミチルさん一人が決めることだよっ」
「……。」

口を尖らせて話す由雉を見つめ、輝矢が少し目を細める。
「ボクが口出ししていいことじゃなっ……」
「聞いていなかったのですか？思春キジ」
「だからその言われ方、不快だってばっ」
輝矢の微妙な言い回しに、嫌そうな表情を見せる由雉。
「ミチルさんは“あなただけで決めることじゃない”と仰ったのですよ？」
「そうだよっ。だからボクが決めていいことじゃなっ……」
「何を聞いていたのです？思春キジ」
「だからその言い方、やめっ……！」
「“あなただけではなく、二人で一緒に決めよう”……あの言葉は、そういう意味でしょう？」
「……っ」
輝矢の言葉に、由雉が少し驚いたように目を見開く。
「二人で……一緒に……」
「まぁ悩むだけ悩んで、しっかりと見極めて下さい、思春キジ」
「しつこいなぁ～」
立ち上がりながら言い放つ輝矢に、由雉が顔を上げて突っ込みを入れる。
「大事なのは、アナタが誰の“幸せ”を望むかです」
「えっ……？」
「では」
由雉が言葉の意味を図りかねている中、輝矢はあっさりとその場を後にしていった。
「誰の……幸せ……」
由雉は考え込むように、そっと呟いた。

第２０章　シアワセ家族　★３（前書き）

この話でついに５０万字超え、栄光の１０００分超えです。
もう、ホントに長いですね…苦笑いするしかないくらい長いですね…
こんな長い話を読んで下さっている方に、心より御礼申し上げます。
ちなみにまだまだ先は長いです…
これからもお付き合いいただければ、幸いです。

第２０章　シアワセ家族　★３

その日・夜。再び羽根専門店・『羽根屋』。
「ただいまぁっっ！！幸之助くんっっ！！」
勢いよく扉を開けて店へと戻ってきたのは、渦中の人・ハヤテ。
「遅くなって済まなかったねぇっ！！マイソンとハニーのことで初めての親子喧嘩をしてしまってさっ！」

――――しぃぃぃぃぃぃぃぃ～～～～んっっ……――――

「あれっ？」
返って来ない返事に少し首をかしげるハヤテ。店の中は明かりがついておらず、どこかひっそりとしていた。
「幸之助クン？帰ったのかいっ？」
暗い店内を見回しながら、ハヤテがゆっくりとした足取りで店の奥へと踏み込んでいく。
「んんっ？」
店の奥に何やら倒れている人影。
「……っ！幸之助クンっ！！」
そこに倒れていたのは、大怪我を負い血を流している幸之助であった。ハヤテが焦った様子で慌てて駆け寄る。
「幸之助クンっ……！！幸之助クンっ！？」
ハヤテが幸之助を抱え上げ、必死に呼びかけるが、深く目を閉じた幸之助は少しの返事も返さない。
「とっとにかく医者をっ……！」
「……っ」
「えっ……？」

立ち上がろうとしたハヤテの背後に迫る黒い影。
「……っ！」
――――・・・・・・・・・・・っっっ！！！！――――
「ううっ……！！」
影が何かを振り下ろすと、ハヤテの後頭部に激しい痛みが走った。
「クっ……」
ハヤテが力なくその場に倒れていく。
「……っ」
倒れ込み、深く目を閉じたハヤテを見て、その黒い影は怪しげな笑みを浮かべた。

翌朝。ミチルの家。
「……。」
黙ったまま、ひたすら朝食を食べる由雉。
「……。」
黙ったまま、ひたすら朝食の準備と片付けを続けるミチル。
――――しいいいいいいいいい～～～んっっ……――――
『……。』
その静まり返った何とも気まずい空気に、朝食の味さえもわから

なくなりそうなやりにくさを感じるハチとモンキ。空気のせいか、箸もあまり進まない。
「あぁぁ～っ……俺、こうゆう空気、苦手やわぁ～」
「お前、深刻さとは縁遠いもんなっ」
困り顔を見せるモンキに、ハチが冷たく一言。昨日のハヤテの一件以来、由雉とミチルは気まずい状態となってしまい、あれから1度も口を聞いていないのである。
「っつーか昨日、由雉を説得しに行ったんじゃなかったのかよっ？」
「えっ？」
ハチが少し非難するように、隣に座っている輝矢を見る。
「何の解決もしてねぇーじゃんかよっ」
「別に私は家族の仲を取り持つ仕事を請け負っているわけではありませんから」
「けどよぉっ」
「家族の問題というのは、他人が解決出来るものではないのですよ」
「えっ……？」
妙に真剣な口調で言い放つ輝矢に、ハチが少し目を丸くする。
「家族の問題というのは、あくまで家族同士で解決しないと……」
輝矢が笑顔を浮かべ、ハチの方を見る。
「アナタになら、わかるのではないですか？ハチ」
「……っ」
輝矢の問いかけに、ハチがハッとしたような表情を見せる。

――――いつでも帰って来なさいっ、桜時……――――

「……。」
輝矢の出現がきっかけになったのは確かだが、桜時と孔雀が歩み寄ることが出来たのは、桜時と孔雀がそれぞれに自ら歩み寄ろうと

したからであった。家族とは、そういうものなのである。
「そうだなっ……」
「……っ」
納得したように笑顔を見せるハチを見て、輝矢もそっと笑みをこぼした。
「ですからハチも私と幸せな家庭をっ……」
「大変よぉぉぉっ！！」
「どわあああああっ！！」
ドサクサに紛れてプロポーズしようとした輝矢の言葉を遮り、窓から勢いよく飛び込んでくる一羽の青い鳥。その大きな声に、ハチが思わず飛び上がって驚く。
「幸コっ？」
「あっ！さっちこちゅわぁぁぁ～～んっ！！」
「はぁっ……！はぁっ……！はぁっ……！」
――――ボォォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！――――
由雉とモンキが少し驚いたように名を呼ぶ中、息を切らせた青い鳥が白い煙に包まれて人化する。
「大変っ！大変っ！大変なのよぉぉっ！！」
人化した幸コが、かなり焦った様子で“大変”という言葉を繰り返す。
「大変って何がぁ？」
「それがねっ……！」
「私のハチへのプロポーズを遮っておいて、これで大して大変でなかったらタダでは済みませんよ？」
「えっ？じゃっじゃあやめておこうかな……」
「言えっ！！」
輝矢の脅しを受け、すぐに挫ける幸コに、由雉が勢いよく突っ込む。

「大変なのよっ！！ハヤテさんのお店がっ……！！」
『えっ……？』
幸コの知らせに、皆の表情が曇った。

幸ノ街・中心部。ハヤテの店・『羽根屋』。
「これはっ……」
幸コの知らせを聞き駆けつけた輝矢たちを待っていたのは、昨日とはまったく違う姿と化した羽根屋であった。扉やショーガラスは粉々に砕かれ、店の床にはガラスの破片が散らばっていた。その光景に輝矢たちが皆、唖然とした表情を見せる。
「朝、街の人が見つけた時には、店中の羽根が盗まれてたそうです……」
「羽根泥棒か……」
幸コの説明に、真剣な表情で呟くハチ。
「……。」
由雉が少し厳しい表情を見せて俯く。

――――一回休んでから来た時には、泥棒が入ってて全部、羽根盗まれちゃってるかも知れないわよっ！？――――
――――こんな幸せ満開の街に泥棒なんて出るわけないでしょっ――――

「昨日の幸コの言葉通りになっちゃったってわけかぁ」
「わっ私が盗んだんじゃないわよっ！？」
「わかってるよっ」
少し焦ったように言う幸コに、由雉が呆れたような表情を見せた。
「うわぁ～んっっ！！ハヤテさぁぁ～んっ！！」
『……っ？』
聞こえてくる大きな叫び声に、輝矢たちが一斉に振り返る。
「ハヤテさぁぁ～～んっ！！」
皆が振り返った先にいたのは、かなりの重傷を負った包帯だらけの泣きじゃくっている幸之助であった。
「幸之助さんっ」
「……っ？ああっ！！ミチルさぁぁ～～んっ！！」
泣きじゃくっていた幸之助が、ミチルを見つけ、大きな声を出して駆け寄ってくる。
「大変なんですぅ～っ！！ハヤテさんがっ……！ハヤテさんが羽根のついでに誘拐されちゃったんですぅ～！」
「えっ……？」
「ハヤテさんがぁっ！？」
幸之助の言葉に、衝撃を走らせるミチルと幸コ。
「ハネキングよ、永久に……」
「勝手にハヤテさんを殺さないで下さいっ！！ハヤテさんは生きてますっ！！」
店に向かって手を合わせる由雉に、幸之助が少し怒った顔で突っ込みを入れる。
「きっと唯一の取柄である羽根の発明能力を散々利用されて、挙句ボロ雑巾のように捨てられるんですぅ～っ！」
「それって殺されてるって考えるより残酷じゃない？」
自分の想像に頭を抱える幸之助に、由雉が少し冷たい目を向ける。

「ハヤテさんっ……」
「ミチルさん……」
「……っ」
不安げに両手を組むミチルに、駆け寄る幸コ。そんなミチルの様子を見て、由雉が少し目を細める。
「鬼人の仕業やろかぁ？」
「鬼人じゃ羽根盗んでも使えねぇーだろーがっ」
「ええ、あのバカキングをさらっていったことも気になりますしね……」
それぞれ真面目な表情で言葉を交わす輝矢、ハチ、モンキ。
「ああっ！！そうだぁっ！！」
「うわっ！」
急に大声を出す幸之助に、すぐ横に立っていた由雉が驚く。
「なっ何っ？」
「これっ！！俺のポケットに入ってたんですっ！！」
「……っ？」
そう言って幸之助が由雉に差し出したのは、小さなオレンジ色の羽根であった。
「見たことない羽根だけど」
「これは“思念羽”と言って、ハヤテさんの試作段階の羽根の一つなんです」
「思念羽……？」
「持っていた人のメッセージを保存して他者に伝えることが出来るんです」
「じゃあハヤテさんが伝言入れて、お前に残したかも知れんてことかぁ？」
「はいっ！」
横から口を挟んだモンキの言葉に、大きく頷く幸之助。
「でも何せ試作品ですから、並みの力しかない鳥人には読み取れなくてっ……」

「そこでキジの出番というわけですか」
「そうですっ！！由雉さんほどの力の持ち主ならきっとっ……！」
「お断りっ」

――――パァァンッ！――――

「えっ……？」
羽根を差し出した幸之助の手を、あっさりと振り払う由雉の手。
オレンジ色の思念羽が力なく地面に落ちる。
「由雉っ！何してっ……！」
「別にボク、あの人を助ける義理なんてないもん。むしろいなくなって清々してるし？」
「なっ……！！」
由雉のあまりの態度に、幸コが顔をしかめる。
「まぁ羽根買えなかったのは残念だけどねぇ～他の街まで行くしかないかなぁ～」
「由雉っっ！！あなたっ……！！」
「幸コちゃんっ」
「ミチルさんっ！だって由雉っ……！！」
由雉に食ってかかる勢いの幸コを、ミチルが必死に宥め止める。
「じゃあボク、朝飛行にでも行ってくるからぁ～適当に泥棒探しでも何でもしといてぇ～」

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――

「ああっ！！」
白い煙に包まれてキジ化した由雉が、青々とした空へと飛び立っていく。
「ったく、薄情なキジやなぁ～」
「素直じゃないだけですよ」

「へっ？」
横から口を挟む輝矢の言葉に、非難していたモンキが目を丸くする。
「ねぇ？ミチルさん」
「ええ……」
輝矢の問いかけに、穏やかな笑顔で頷くミチル。
「不器用な子ですから……」
ミチルは笑顔のまま、そっと呟いた。

――――ヘイっ！マイソンっ！僕は街はずれの大倉庫に拉致られるそうだっ！父を助けに来ておくれっ！――――

思念羽に入っていたメッセージ。初めから由雉に残したかのような言葉。

「……誰が父だよっ、バカ男っ」
面倒臭そうに呟くユキジ。
「ったくっ……！」
ユキジは街はずれの大倉庫へと、羽根を広げて速度を速めた。

街はずれの大倉庫、内部。
「僕はお腹が空いてしまったよっ！！何か食べるものを出してくれないかいっ！？泥棒諸君っ！！」
倉庫の柱に縄で括り付けられ、思い切り囚われの身の状態だというのに、いつもと変わらぬハイテンションっぷりのハヤテ。
「だあああああっ！！うっせぇなぁっ！！」
そんなハヤテに苛立ったような声を出す、いかにも泥棒らしい黒マスクを付けた男。
「ボスっ！何でこんなん一緒にさらって来たんですっ！？」
マスク男が、ボスと呼んだ同じくマスクの男の方を振り向く。
「ソイツは金のなる木、いや羽根のなる木さ。次々と色んな羽根を生み出させりゃ、もっと儲かる」
マスク男に冷静に答えるボス男。
「何せ天下の“ハネキング”様だからなっ」
「ハッハッハっ！！そこまで誉められると照れちゃうねぇっっ！！」
「別に誉めてねぇーよっ」
「僕が今、考えている羽根の効力かいっ！？それはねぇっ！！」
「聞いてねぇーよっっ！！！」
捕まっているというのに泥棒たちのペースをすっかり乱しているハヤテ。ある意味、大した器である。

「あぁ～あ……何やってんだか……あの男は……」
そんなハヤテの様子を、屋根裏から見つめる呆れた表情の由雉。
キジの姿であっさりと窓から倉庫内へと入り込んだのであった。
「まぁとりあえずあの男に泥棒たちの気を引きつけといてもらって、その内に羽根を……」

由雉が盗まれた羽根を探そうと、屋根裏から倉庫内を見回す。

「んんっ？」

その時、ハヤテがふと天井を見上げ、羽根を探している由雉の姿を見つける。

「おおっっ！！！マイソンっっ！！父を助けに来てくれたのだねっっ！！！」

「げっ」

『何っ！！？』

ハヤテの大声に、由雉が勢いよく顔をしかめ、下にいた泥棒たちが皆、天井の由雉の方を見る。

「バカ男っ！何言っ……！！」

「撃てぇぇぇっ！！」

「いいえぇっ！？」

ハヤテに怒鳴ろうとしていた由雉に向けて、泥棒たちが下から一斉に衝撃弾を放つ。

「うわわわっ！！」

――――バァァァァァァァァーーーーンッッッ！！！――――

「痛っつぅぅぅぅ～～～っ……」

破壊された天井から、勢いよく床へと落下する由雉。打ち付けた背中を押さえ、ゆっくりと起き上がる。

「捕まえろっ！！！」

「へっ……？うわあああああっ！！」

第２０章　シアワセ家族　★３（後書き）

次回で２０章、ラストです。

第２０章　シアワセ家族　★４

数分後。
「……。」
ハヤテと背中合わせになるようにして柱に縄で括り付けられている由雉。その表情からはかなりの負のオーラが漂っていた。
「助けに来ておいて捕まるとは不甲斐ないなぁ～っ！マイソンっ！！」
「誰のせいで捕まったと思ってるんだよっ！！」
互いの顔が見えない状態で会話をする由雉とハヤテ。
「ったくっ！」

「おいっ！一応、他に仲間がいないか見回っておけっ！！」
『はいっ！！』
二人の周囲にいた黒マスクの泥棒たちが、警戒するように四方へと散っていく。柱に括り付けられた状態でその場に二人だけが残る。

「何とかならないのかい？マイソンっ」
「捕まる時、“色羽”全部取られちゃったから無理っ」
「意外と無能だねっ！マイソンっ！」
「うるさいよっっ！！」
威勢のいい会話を続ける二人。二人になっても捕まっているという自覚は薄いようだ。
「あぁ～あっ！こんなことになるんなら、助けになんて来るんじゃなかったよっ！」
「それでも助けに来てくれたんだろう？」
「それはっ……」

「父は感動だよっ！！マイソンっ！！」
「誰が父だっ！！ソンって言うなっ！！」
パターン化したやり取りを繰り返す由雉とハヤテ。
「……っ」
由雉が怒鳴るのを止め、そっと俯く。

――――ハヤテさんっ……――――

ミチルの不安げな表情が、脳裏を過ぎる。

「あなたを……」
「んっ？」
「あなたを助けに来たのは…ミチルさんがすっごく心配してたから……だから……」
「……。」
先ほどまでの威勢はなく、静かな口調で聞こえてくる由雉の言葉に、少し真剣な表情を見せるハヤテ。
「それだけ……だから……」
「マイソンっ」
「だからソンって言うなって言っ……！」
「僕はね、母親というものを持ち合わせていなかったのだよ……」
「えっ…？」
いつもとは違うまったく軽くない口調で話しを始めるハヤテに、由雉が思わず怒鳴ろうとしていた声を止める。
「僕が物心つく前に、病気で亡くなってね……」
「……っ」
ハヤテの話に、由雉が少し目を細める。
「父は資産家だったからね、たくさんの使用人に囲まれて、母親の

いない不自由を感じたことはなかった……」
　ハヤテが少し遠くを見るような目で笑う。
「だが……決して満たされない何かがあったんだよ……ずっと……」
「……。」
　その言葉にそっと俯く由雉。満たされない何か。本当の家族を知らず、コウノトリの群れの中にたった一羽のキジとして存在してきた由雉には、その何かが少しわかるような気がした。
「そんな時ハニーに、ミチルに出会った……」
「……っ」
　由雉が少し驚いたように、ハヤテの方を振り向く。
「彼女はいつも君の話をした……優しい笑顔で君のことを語った……」
「えっ……？」
　ハヤテの言葉に、由雉が戸惑うように声を漏らす。
「僕が新作の羽根を見せればいつも、“由雉が見たら喜びそうだ”と優しく笑ったよ」
「……。」
　昨日ミチルに放った心無い言葉を思い出し、由雉がどこか悲しげに俯く。
「彼女は僕の思い描いていた母親像そのもの……そして君たちは僕が思い描いていた親子像そのものだ……」
　ハヤテが穏やかに微笑む。
「君たちと……家族になりたいと思った……」
「……っ」
　ハヤテのその言葉が、由雉の胸に小さな衝動を走らせた。
「そっそのっ……」
「まぁ君が嫌なら無理強いはしないさっ！安心してくれたまえっ！」
「えっ……？ちょっと待っ……！」
「羽根を運び出すぞぉっ！！」
『……っ』

泥棒たちの声に、由雉とハヤテが同時に振り向く。倉庫の大きな扉が開き、荷車に積まれた大量の羽根が、外に待つトラックへと運び込まれようとしていた。
「ああっ！僕の大事な羽根さんたちがっ……！！」
「……っ」

「さてとっ……」
嘆くハヤテと厳しい表情を見せる由雉の元へ、ゆっくりと先ほどのボス男がやって来る。
「こっちも運び出さないとなぁっ」
「羽根をどうするつもりなわけ？」
マスクの奥から少しだけ見える口元を怪しげに笑わせるボス男に、由雉が鋭く問いかける。
「なぁ～にっ、鬼人退治に躍起になってる連中に高値で売りつけるのさっ」
「そういうの、悪徳商法っていうんだよ？」
「知ってるさっ。さてっ」
『……っ！』
ボス男が懐からナイフを取り出す。光る刃先に、少し表情を曇らせる由雉とハヤテ。
「ハネキング様は今度の商売のために生かしておくとして……そっちの坊やにはここで死んでもらおうかっ」
「……っ」
向けられるナイフに、厳しい表情を見せる由雉。
「待てっ！！」
『……っ？』
そう言って強くボス男を止めたのは、ハヤテであった。
「マイソンには手を出すなっ！！殺すのなら僕を殺せっ！！」
「……っ！」
ハヤテの必死の言葉に、由雉が大きく目を見開く。

「ハヤっ……」
「って一度言ってみたかったんだよねぇ～っ！！」
「言ってみたかっただけかっ！！」
言った自分に陶酔するハヤテに、由雉が怒りを全開にして怒鳴りあげる。

「じゃあまぁ、満場一致で殺していいみたいだなぁっ」
「クっ……！」
ナイフを構えて歩み寄ってくるボス男に、険しい表情となる由雉。

「ああ～っ！！このままではマイソンがぁ～っ！！」
「んっ？」
慌てふためいているハヤテのズボンのポケットから、何かが少し顔を出した。
「あっ……！」
その何かを見て、思いついたような表情となる由雉。

「ちょっとっ！！左足思いっきり上げてっ！！」
「へぇっ？だがマイソン、今はコザックダンスをしてる場合じゃっ……」
「いいから早くっ！！」
「わっわかったよ、マイソンっ」
由雉に急かされ、ハヤテが高々と左足を上げる。

――――パサッ……――――

『んっ？』
ハヤテが左足を上げると、ズボンの左側のポケットから何やら薄

っぺらいものが地面へと落ちた。ハヤテとボス男がそれぞれ目を見張る。

「あっ！！」

「白い羽根っ……？」

そう、地面へと落ちたのは、一枚の白い羽根であった。

「……っ！」

由雉が何とか動く右手を、落ちた白い羽根へと伸ばす。

――――この羽はねぇっ！どんな色の羽根にも変えられ、かつ繰り返し使える万能品なんだよっっ！！――――

「“染羽”……」

右手でしっかりと白い羽根を掴む由雉。

「チっ……！クソっ……！」

羽根を掴んだ由雉を見て、ボス男が慌ててナイフを由雉へと振り下ろす。

「“彩”っ……！！」

「何っ……！？」

白い羽根が、徐々に赤く染まっていく。

「“滅羽”っ！！」

赤く染まった羽根を、由雉が括り付けられている柱へと突き刺す。

――――バァアアアアアーーーンッッッ！！！！――――

「うわあああああっ！！」

強い光を放って消える柱に、ボス男が思わず吹き飛ばされる。

「うっ……ううっ……」

「ふぅ～っ」
「……っ？」

吹き飛ばされたボス男がゆっくりと起き上がると、消えた柱のすぐ近くの辺りに、縄から解放された由雉とハヤテが立っていた。

「ああ～窮屈だったっ」
「素晴らしい“染羽”の使いっぷりだよっっ！！マイソンっっ！！」
「はいはいっ」
目を輝かせているハヤテを、由雉が面倒臭そうにあしらう。

「クソっ……！！」
「……っ」
ナイフを捨て、衝撃銃を構えるボス男。由雉が目つきを鋭くして、再び染羽を構える。

「“彩”っ……“裂羽”っっ！！」
「……っ！」

今度は青く染まった染羽を、由雉がボス男へと投げ放つ。

――――バァァァァァァァーーーーンッッッ！！！――――

「うわあああああああっ！！」

裂羽を直に受け、力なく後方へと倒れていくボス男。

「うっ……うぐっ……」

倒れたボス男が、白目を剥いて気絶する。

「ふぅっ」
「やっぱり君は最高だぁぁっ！！マイソンっっっ！！！」
「ソン言うな。ってかうるさいっ」
テンション上がりまくりのハヤテに、由雉は少し冷たい瞳を向けた。

「ボっ……ボスがヤラれたっ……！」
「逃げろぉぉーっ！！」
ボス男が倒されたのを見て、子分の泥棒たちが倉庫の外へと逃げ去っていく。

『ういっ！？』
「……。」

外へ飛び出した泥棒たちを出迎える、一つの人影。

「どうもっ」
それは三日月を構えた、爽やか笑顔の輝矢であった。

「どけぇぇぇっ！！女ぁぁぁっ！！」
「どかなきゃ殺すぞぉぉっ！！」
ナイフや銃を構えて、輝矢へと向かってくる泥棒たち。

「竹取輝矢っ……」

輝矢が怪しげに笑う。

「泥棒退治、いたしますっ」

『へっ……？』

輝矢が素早く泥棒たちの方へと飛び出していく。

『うっぎゃあああああっ！！』

次の瞬間、泥棒たちの悲痛な叫びが響き渡った。

「あぁ～あ……不幸ぅ～っ」
輝矢に無残なまでにやられていく泥棒たちに少し同情するように呟きながら、由雉がボス男のすぐ近くに落ちていた染羽を拾い上げた。

――――パァァァァァァーーーーンッッッ！――――

「うわっ！」
由雉が持ち上げた途端、染羽が粉々になって砕け散る。
「バラバラになっちゃったぁ」
「三回しかもたなかったかぁ。もうちょっと強度を上げないとなぁ」
砕け散った染羽の一部を拾いながら、冷静な分析を行うハヤテ。
「次はもっといいものを渡せるように頑張るよっ！」
「……っ」
優しい笑顔を見せるハヤテに、目を見開く由雉。
「あっあのさっ……」
「由雉っ！！」
「……っ？」
ハヤテに何かを言おうとした由雉が、名を呼ばれて振り向く。
「ミチルさんっ」
「由雉っ！！」
倉庫の外から由雉の元へと必死に走ってくるのはミチルであった。
「ちょちょっと待ってっ！そんなに走ったらっ……！」
「あらっ？」
必死に走ってきていたミチルが、何もない床に躓く。
「きゃあああああっ！！」

――――ドッスゥゥゥゥゥゥゥゥーーーーンッッッ！！！――――

「あっちゃ～っ……」

「相変わらず最高だぁぁっ！！ハニぃぃーーっ！！」

顔面から勢いよく転ぶミチルに、由雉が思わず頭を抱え、ハヤテが黄色い声を出す。

「だから言わんこっちゃないっ。大丈夫？」

転んだミチルの元へと駆け寄り、手を差し伸べる由雉。

「由雉っ！！」

「うわっ！」

勢いよく起き上がるミチルに、由雉が少し驚かされる。

「怪我はないっ！！？」

「ミチルさんよりはないよっ……」

額に大きな擦り傷を作りつつも問いかけてくるミチルに、少し呆れた表情で答える由雉。

「良かったっ……」

「……っ」

ホッとしたように穏やかに微笑むミチルに、由雉がそっと目を細める。

「ハヤテさんもご無事でっ……」

「ハッハッハっ！マイソンの活躍のお陰でピンピンしてるよっ！！」

「良かった……」

「……。」

ミチルとハヤテのやり取りを見つめ、由雉が意を決したような表情となる。

「ハヤテさん……」
「へっ？」
初めて呼ばれる名に、ハヤテが少し意外そうに由雉を見る。
「ハッハッハっ！マイソンっ！！照れずともパピーと呼んでくれればっ……！」
「ミチルさんを……幸せにしてあげて下さい……」
「……っ」
「由雉っ……」
深々と頭を下げる由雉に、驚いた表情を見せるハヤテとミチル。
「由雉……」
「……。」
幸コや輝矢たちも、倉庫の外からその様子を見守る。
「……顔を上げてくれたまえ……」
「……。」
目の前に立って言うハヤテに、由雉がゆっくりと顔を上げた。
「一緒に幸せになろう……由雉……」
「……っ」

穏やかな笑顔を浮かべたハヤテから、差し出される右手。由雉が少し戸惑うようにハヤテを見る。

「……うんっ」

すぐに笑顔となり、由雉はそのハヤテの手を取った。

「大好きだぁっ！！マイソぉぉーンっ！！」
「ぎゃあああああっ！！やめろぉぉぉっっ！！」
「フフっ」

勢いよく抱きつくハヤテに、必死に嫌がる由雉。そんな二人を見て、ミチルが優しく笑う。

「めでたしめでたしぃ～やなっ」
「ええっ」

出来立てホヤホヤのシアワセ家族に、輝矢たちも皆、笑顔をこぼした。

その後、泥棒たちは街の警備隊に逮捕され、幸ノ街に再び、平穏が戻った。

翌朝。幸ノ街中心部・『羽根屋』。
「これが“電羽”といっていつでも電気の使える羽根っ！これが“合羽”といって雨避けになる羽根っ！」
「……。」
「で、これがぁ“マッ羽”といって足が超高速になる羽根だぁっ！！」
「……。」
次々と色とりどりの変わった形の羽根を取り出し、一つずつ解説していく何とも楽しそうな『羽根屋』の主人・ハヤテ。その目の前でどこかうんざりした表情を見せているのは由雉である。
「まぁすべて試作品だけどねぇっ！！あっ！それからぁっ……！！」
「まだあるわけっ……？」
またもや店奥から何かを出してくるハヤテに、さらにうんざり顔となる由雉。並んでいる羽根の数からして、もうかなりの羽根の説明を受けてきたのであろう。
「幸之助クンっ！」
「はいはぁ～いっ！！」

――――ドッスゥゥゥゥゥゥゥーーーンッッッ！！！――――

「これっ！注文を受けていた“裂羽”千枚に“滅羽”千枚に“癒羽”三千枚ねぇっ！！」
「はっ？」
目の前にてんこ盛りに積まれる赤、青、黄色の羽根を見て、由雉が大口を開ける。
「なっ何っ……？この羽根っ……」
「へっ？だからぁ、注文を受けていただねぇっ」

「ボクが注文したのは“裂羽”五十枚に“滅羽”三十枚に“癒羽”百枚でしょっ!?全然数合ってないよっ!」
「そんな生半可な数じゃ足りないよっ!!マイソンに何かあっては困るからねっ!!」
「ってかこんなに大量な羽根っ!!どうやって持ち歩くのさっ!!」
すでに親ばかモード全開のハヤテと、うんざりした表情で言い争う由雉。

「微笑ましい限りやねぇ～」
「今は少し、父親に逆らってみたくなるお年頃ですからね」
「どこの年寄りだっ、お前ら……」
由雉とハヤテの様子を見てまったりと語り合っている輝矢とモンキに、ハチが呆れた表情で突っ込みを入れる。

「持ち歩きのことなら平気さっ!!マイソンっ!!」
「へっ?」
「君にはあぁ～んなにたっくさんの荷物持ちがいるじゃないかっ!!」
『えっ……?』
ハヤテが指差したのはもちろん、輝矢、ハチ、モンキの3人。
『何ぃっ!?』
ハチとモンキが思わず叫び声をあげる。
「あっ、それもそっかぁ～」
『おいっっ!!』
意外とノリ気の由雉に、勢いよく突っ込みを入れるハチとモンキ。
「マイソンが何一つ苦労しないよう、マイソンのこと、しっかりと頼むよっ!!ガールたちっっ!!」
「……っ」

偉そうに肩を叩いてくるハヤテに、輝矢の表情が一気に凍りつく。
「ほうっ……」
『げっ……！』
冷たさを感じる輝矢の声に、危険を感じて表情を引きつるハチ、モンキ、由雉。
「私に上から目線でモノを頼むとは……イイ度胸ですねぇ……ハネキング……」
「へっ？」
輝矢から溢れ出る怒りのオーラを、ハヤテもさすがにキャッチして顔を引きつる。

「二度と羽根など造れなくして差し上げましょうか……」
「ひえええっ！！」
「ああ～～っっ！！！ハヤテさぁぁぁ～～んっっ！！」
「待ってぇ～っ！！輝矢んっ！！ユッキーの幸せがぁぁ～～っ！！」
「落ち着けぇぇっ！！輝矢ぁぁっっ！！」

輝矢の殺意に、悲鳴をあげるハヤテ。幸之助も悲鳴をあげ、ハチとモンキが必死に輝矢を止める。

「あぁ～あ、もうっ……」
そんな飼い主と父親の攻防に、疲れきった様子で肩を落とす由雉。
「良かったねっ」
「えっ？」
由雉が振り向くと、そこには笑顔の幸コが立っていた。
「家族が増えてっ」
「……うるさいだけだよっ」
「またまたぁ～素直じゃないなぁ」
素っ気なく答える由雉に、幸コが笑顔を向ける。

「ありがとうねっ、幸コ」
「えっ？」
急に礼を言う由雉に、幸コが目を丸くする。
「何が？」
「うぅ～ん……何か色々っ？」
「……っ」
穏やかな笑顔を見せる由雉を見て、幸コが少し目を細める。
「……あっあのねっ、由雉」
「んっ？」
どこか改まったように切り出す幸コに、由雉がハヤテたちの方を見たまま聞き返す。
「私、ミチルさんとハヤテさん見てて思ったんだっ。私もあんな風に幸せになれたらなぁ～って……」
言葉を続けながら、幸コが徐々に頬を赤く染めていく。
「出来ればっ……由雉と一っ……！」
「あっ！ミチルさぁ～んっ！！」
「だあああっ！！」
幸コの言葉の途中で、やって来たミチルの方へと駆けて行ってしまう由雉に、幸コが勢いよくズッコケる。
「……そうよね……私ってこうゆうキャラっ……」
落ち込んだように呟く幸コ。
「俺がおるでぇっ！！さっちこちゃぁ～んっっ！！」
「ううんっ！！諦めずに頑張らなくちゃっ！おぉーうっ！！」
「あれっ？さっちこちゃ～～んっ？」
モンキのアピールを無視して、幸コは強く気合いを入れる。

「ミチルさんっ！」
「はい、これっ。お弁当のササミチーズ」
「ありがとっ」

ミチルから大量のササミチーズを受け取り、笑顔を見せる由雉。
「気をつけてね」
「うん」
「寂しくなったらすぐに会いに行くよっっ！！僕がっっ！！」
「来なくていいよ……」
大きな声で言い放つハヤテに、由雉がうんざりした顔で答える。
「ミチルさんのこと、頼むからねっっ？」
「父にどぉーんと任せておきたまえっっ！！マイソンっ！！」
「じゃあっ……」
由雉がミチルとハヤテの方をまっすぐに見つめる。

「行ってきますっ。父さん、母さんっ」

『……っ』

由雉の言葉に、驚いた様子で大きく目を見開くミチルとハヤテ。

「うおおおぉぉっ！！愛してるよぉっ！！マイソンっ！！」
「だあああぁっっっ！！やめろぉぉっ！！」

抱きついてくるハヤテに、必死に抵抗する由雉。

父と母に見送られ、由雉は再び幸福の街を旅立った。

第２０章　シアワセ家族　★４（後書き）

２０章終わりです。
ありがとうございました。

第２１章　恋人は親指姫　☆１（前書き）

２１章でっす。

第２１章　恋人は親指姫　☆１

『重ぉぉ～いっ……』

幸ノ街から龍国へと続く、とある道の途中。その言葉通りの重々しい声が二つほど聞こえてくる。

「だっはぁぁ～っ、俺、もう無理やぁ～っ」

「俺も……」

それは大きな荷物を抱えた一匹のイヌと一匹のサル。ハチとモンキであった。

「ほらっ、ちゃっちゃと運んでよぉ～っ」

『お前の羽根だろうがっっ！！！』

前を飛びながら偉そうに言い放つユキジに、ハチとモンキが一斉に怒鳴りあげる。ハチとモンキが抱えているのは、幸ノ街で由雉がハヤテから貰った山ほどの色羽であった。

「自分のもんくらい自分で運べやっ！アホキジっっ！！」

「そうだそうだっ！！なんって俺らがお前の羽根、運ばなきゃなんねぇーんだよっっ！！」

「えっ……？」

ユキジがゆっくりと二匹の方を振り返る。

「君たちって、荷物持ちじゃなかったっけ？」

『ぶっ殺すっっ！！』

平然と言い放つユキジに、荷物を放り出して殺意を剥き出しにするハチとモンキ。

「とっとと降りて来いやぁっ！！このクソキジっ！！」

「そうだぁっ！！丸焼きにしてやるぅっ！」

「そっちが上がってきたらぁ～？サルさんっ、イヌさんっ」

『にゃにおぉぉ～～～っ！！？』

「まぁまぁ落ち着いて下さい、三匹とも」
『……っ』
空と地面で言い争う三匹を制するように割って入ってくる落ち着いた声。
三匹が振り返ると、そこには木陰でまったりとしている輝矢の姿があった。

「あんまり騒ぐと……黙らせますよ……？」
『……。』
輝矢の冷たい笑顔に、凍りつく三匹。

「さっ！ちゃっちゃか歩こうっ！！」
「うんっ、やっぱりボクも持つよぉ～羽根っ」
「ああ～っ！何だか今日はどこまでも歩けそうな気分だなぁ～っ！」
「よろしい」
互いに協力し合って足早に進んでいく三匹を見て、満足げな笑みを浮かべながらゆっくりと立ち上がる輝矢。
「さて」
「ゲロぉぉ～っ……」
「んっ……？」
立ち上がった輝矢が、どこからかかすかに聞こえてくる弱々しい声に首をかしげる。
「今、何か……」
「おぉ～いっ！輝矢ぁ～っ！どうしたぁ～っ？行くぞぉ～っ？」
「えっ？あっ、はいっ！」
先を行くハチに振り返られ、輝矢が少し慌てながら答える。
「空耳ですかね……気にせず行っ……」

――――グニャっ……――――

「ゲロぉぉぉっっ！！」
「へっ……？」
輝矢が一歩足を踏み出したその時、右足に何かやわらかなものを踏んだような感覚が走り、そして悲痛な叫び声が地面の方から聞こえてくる。
輝矢が恐る恐る自分の足元を見る。

「ゲロぉぉぉ～～っ……」
「……。」

輝矢の右足の下にいたのは、干からびた声を漏らした一匹の緑色のカエル。自分の右足に踏み潰されかけているカエルを見て、輝矢が固まる。

「おいっ！何やってんだよっ！？輝矢っ！」
いつまでも立ち止まっている輝矢に、ハチが見かねて戻ってくる。
「いえね、それがぁ～……」
輝矢が自分の足元を見ながら、少し困った表情を見せる。
「カエルを踏んでしまいましてぇ」
「カエルっ？」
輝矢の元へとやって来たハチが、聞き返しながら輝矢の足元へと目をやる。
「おっ、ホンマやぁ～」
「ボク、カエルとかってちょっと苦手なんだけどぉ」
ハチに続いてモンキとユキジも戻ってきて、皆で輝矢の足の下のカエルを覗き込む。
「とっ……とりあえず早く足をどけてほしいゲロっ……」
『えっ？』

踏み潰されているカエルから聞こえてくる、やや弱々しい人語に、皆が目を丸くする。
「しゃべったっ!?」
「“蛙人”ってことぉ～?」
「ますます珍しいですねぇ～」
「でも何でこんなとこに蛙人がおるんや?」
「だからとりあえずとっととその足をどけるゲロっっ!!」
『あっ……』
ついに怒鳴りだしたカエルに、輝矢たちはやっと気づいた様子であった。

「ふはぁ～っ……酷い目に遭ったゲロっ……」
その後、やっと輝矢の重力から解放されたカエルは、少し薄くなった体を起こし、疲れきった様子で木陰に座り込んだ。そんなカエルを不思議そうに見つめる輝矢一行。

「ホント、足の裏から何やら腐った水の臭いがしてきて不快この上ないです」
「あんたには謝罪の精神というものはないゲロ……?」

踏み潰しておいて謝る気のまったくなさそうな輝矢に、カエルが呆れた表情を見せる。

「んっ?あれっ?何かお前、怪我してねっ?」
その時、ハチがカエルの左前足から流れている赤い血に気付く。
「輝矢の重みがズシンときちゃったんじゃなぁ～いっ?」

「殺しますよ……？キジ……」
「すみません……」
軽口を叩いたユキジが、輝矢の一睨みに深々と頭を下げる。
「ああ、違うゲロよ。この傷はさっき夢中で“カエルの唄”を輪唱してたらコケちゃったゲロ」
「どんだけ夢中で歌ってんだよっ」
「ちゅーか一匹で輪唱って……？」
カエルの説明に突っ込みまくるハチとモンキ。
「おぉーい、由雉、癒羽っ……」
「あっれぇ～？どこの荷物にしまったっけぇ～？」
「……。」
羽根ばかり入った山程ある荷物の中から、癒羽を探しているユキジ。そんなユキジを見て、ハチが少し呆れたように肩を落とした。
「しゃーねぇー。これでも巻いてろっ」
「ゲロっ？」
ハチが持っていた白い布を切り裂き、怪我をしているカエルの左前足に器用に巻きつける。
「何もしてねぇーよりはマシだろっ」
「あっ……ありがとうゲロっ……」
ハチの優しさに、少し照れくさそうに礼を言うカエル。

「で、何故、蛙人が私の足の下に……」
「発けぇぇぇんっ！！」
『……っ？』
「げっ！」

川の方から聞こえてくる大声に、一斉に振り返る輝矢たちと、勢いよく顔をしかめるカエル。

「ついに見つけたぞぉぉっ！！クソガエルぅぅっ！！」
「どわあああああっ！！」

振り返った途端にハチが、後ろから駆け込んできた人物に踏み倒されてしまう。

「ハチっ」
「ぐうぅぅ～っ！！」
「私をさらいやがれぇぇっ！！クソガエルぅぅっ！！」
『はぁっ？』

ハチを踏みつけ、その場に現れたのは、近づきたくないほどのしかめっ面をした、金色のショートカットに気の強そうな紫色の瞳の、その言葉遣いとは似つかわしくない豪勢なドレスを身に纏った、十八，十九の美少女であった。その腰元にはドレスに合わない、薄汚い小槌のようなものを下げている。

「おいっ！クソガエルっ！！とっとと私をさらいやがれっ！！」
『はぁっ？』

その少女のまたしても意味不明なその言葉に、モンキやユキジが眉をひそめる。

「じょっ冗談じゃないゲロっ！誰がお前みたいな暴力女っ……！」
「んだとぉぉっ！？」
「ひえぇぇぇゲロっ！！」

言い返したカエルが、少女に勢いよく睨まれ、怯えるように頭を抱える。

「つべこべ言わずにとっとと私をっ……！」
「とっととそこをどいて下さい」
「へっ？」

――――バッシィィィィィーーーーンッッッ！！！――――

「だあああああっっ！！」

輝矢の蹴りに、少女が勢いよく吹き飛ばされる。

「まったく、いつまでハチを踏んでいる気ですかっ。大丈夫ですか？ハチっ」
「お前な……相手は人間なんだからよっ……」

ガラの悪さはともかく、ドレスを纏った美しい少女相手に、本気の蹴りをかました輝矢に、助けられはしたが、困った表情を向けるハチ。

「まったく、生き物を踏みつけるなんて、最低の女ですね」
「さっきまでカエル踏んでたけどね」
自分のことを棚に上げきっている輝矢に、ユキジがこっそりと一言。

「っ痛つつつっ……何だぁ？あの女っ……って、ああっ！！」
「ゲロゲェ～ロゲロっ！！」
輝矢の蹴りを喰らったというのに、わりと平気そうに起き上がった少女が、ぴょんぴょんと飛び跳ねながら、森の茂みの中へと逃げていくカエルを見つける。
「かぁ～えぇ～るぅ～のぉ～うぅ～たぁ～がぁ～っ♪」
「ちょっと待っ……！！」

「かぁ～えぇ～るぅ～のぉ～うぅ～たぁ～がぁ～っ♪」
少女が必死に叫んで身を乗り出すも、カエルは一匹でカエルの唄を輪唱しながら、あっという間にその場から飛び去っていってしまった。

「あぁ～あっ」
「っちゅーかホンマに一匹で輪唱しとったなぁ～あいつぅ～」
逃げ去ったカエルを追う素振りも見せず、ユキジが興味なさそうに、モンキが関心するように声を出す。
「輝矢、どうすっ……」
「では、一連のことはなかったことにして、先を急ぎましょうか」
「だあああああっっ！！」
相変わらずの無責任発言に、ハチが思わずズッコケる。
「お前なぁっ……！」
「どうしてくれんだぁぁっ！！こらぁぁっ！！」
「うおっ！」
無責任な輝矢を注意しようとするハチであったが、後ろから勢いよく怒鳴りこんでくる少女のあまりの大声に、背筋を震え上がらせる。

「クッソガエルに逃げられちまったじゃねぇーかっ！！どうしてくれんだっ！！？ああっ！？」
「えっ……？」
怒鳴り上げる少女に、輝矢がまん丸とした瞳を向ける。

「別にっ……どうもっ？」
「あああっっ！？」
平然と答える輝矢に、少女がさらに怒りの表情を濃くする。
「てめぇっ！！いっぺん、死ねぇぇっ！！」
「何故、私が死ななければならないのです？アナタが死になさい」

「あぁぁぁんっ！？」
「おっおいっ！あんま刺激すんなよっ！」
少女を怒らせるような挑戦的な発言しかしない輝矢に、ハチが注意するように必死に叫ぶ。
「ほらっ、お得意の美少女だよぉ～何とかしなよぉ～」
「二花と同じ臭いがするから無理っ……」
ユキジの言葉に、モンキがうんざりした表情で答える。

「姉上ぇぇっ！！」
「へっ？」
ユキジが背後の川の方から聞こえてくる、妙にか細い声に振り返る。

「……っ！！」

振り返った途端、大きく目を見開くユキジ。

「なっスゥっ！！？」
「ユッキー？何、変てこてこりんな声出してっ……」
怪しげな声を出すユキジにつられ、同じように振り返ったモンキも、振り返った途端に大きく目を見開く。
「ほぉぉっっしゃあああっっ！！？」
「二人して何やっ……うっ……！！」
同じようにハチが振り返ると、同じように目を見開いた。
「ぴゃっぽおおうっ！？」

「ハチ？どうしたんでっ……」
「姉上っっ！！」
「……っ」

最後に振り返った輝矢も、大きく目を見開く。

川を流れてくる、一個の小さな漆塗りの茶碗。その中に立ち、小さなスプーンで茶碗を漕いでいるのは、背丈およそ十センチの、人形のような手のひらサイズの人間であった。よく見ると黒い長髪を一つに束ねた、まだ大きな黒目が幼い、十三，十四歳くらいの少年であった。背中にまるで剣のように、細い針を背負っている。

「こっ……小人っ……？」
「一寸っ！」
「へっ？」

川岸へと流れ着いたその小人の少年の元へ、先ほどの乱雑少女が何やら親しげに歩み寄っていく。その光景を首をかしげながら見つめる輝矢たち。

「どうでしたでござるっ？カエルに無事、さらってもらえたでござるかっ？」
「さらわれたんならココにいるわけねぇーだろうがっ！！ケンカ売ってんのかっ！？ああっ！？」
「そっ……それもそうでござるねっ……すまんでござるっ……」
物凄い剣幕の乱雑少女に、一寸と呼ばれた小人の少年が少し怯えながら謝る。

「お前らのせいでとんだ無駄足踏んじまったじゃねぇーかっ！！」
「アナタが勝手に踏んだだけでしょう？それよりその不快極まりない大声、やめて下さい」
「あああぁぁっ！？」
「まっまぁまぁ姉上っ！！」

一寸が必死に何十倍もの大きさのある乱雑少女を宥める。
「まっまた、次があるでござるよっ！」
「冗っ談じゃねぇっ！！絶好のチャンスを邪魔されたんだっ！！お前らにはちゃんと責任取ってもらっ……！」
「さっ、先を急ぎましょうか」
「待ていっ！！」
一寸が必死に宥めるも、怒りの収まりきらない様子の乱雑少女。
しかしそんな少女をすっかり無視して、輝矢一行は先を急ごうとしていた。

「ああゆうのには係わらないが勝ちだよ」
「俺も同感っ」
「いっくら美少女でもあのガラの悪さはなぁ～っ」
ハチたち三匹も口々に話しながら、そそくさと輝矢の後に続く。

「待てっつってんのに待てねぇーんならっ……」
そう言って、腰に下げていた小汚い小槌を手に取る乱雑少女。

「“小さくなぁ～れ”っ！」

――――シャンっ！シャンっ！シャンっ！シャンっ！――――

少女が輝矢たちに向かって小槌を振る。

『へっ……？』

――――スウウウゥゥゥーーッッ……――――

『いいいいっっ!?』

小槌を振られると、輝矢たちの体がどんどん小さくなっていく。
変わっていく景色に、目玉が飛び出そうなほどに驚き、ただただ叫ぶハチたち。

「よぉ～っしっ！」
『……っ!?……っ!?』

輝矢が一寸と同じくらいの大きさ、三匹がちょうど一寸サイズの人間のペットくらいの大きさになった所で、少女が小槌を振るのを止める。
巨大になった森や川の景色に、驚いたように周囲を見回すハチたち。

「小さくなっとうぅぅっ!!」
「すっげぇっっ!! 俺ぇぇっ!!」
「ハチはすごいですねぇ」
「別にハチが凄いわけじゃないって」

驚き叫ぶハチとモンキ、何故かハチを誉める輝矢に対し、ユキジが冷静に突っ込みを入れる。

「この小槌は“打出の小槌”といって、人間の大きさを自在に変えることの出来る代物なんだっ」
「打出の小槌っ……？」
少女の言葉に、輝矢が興味を示す。
「さぁてとっ……」
『うっ……！』
小人化した輝矢たちを、大きく見下す少女。
「私がカエルにさらわれんのを邪魔した責任、取るよなぁ？」
少女が、脅しのような冷たい笑みを輝矢たちに向ける。
「もし取らないってんならっ……」
『ううっ！！』
輝矢たちの上空へとやって来る、少女の大きな足底。一人平然としている輝矢を除き、ハチたちは皆、焦った表情となる。
「別に取る必要なんてなっ……」
「だあああっ！！取ります取りますっ！必死に取りますっ！！」
「僕たちに、あなたがカエルにさらわれるためのお手伝いさせてくださぁ～いっ！！」
「俺ら、何っでもしますからっ！！」
断ろうとした輝矢の言葉を必死に遮り、この上ない愛想笑いを少女へと向けるハチ、モンキ、ユキジ。

「よぉ～しっ、じゃあ決まりだなっ！」
少女がどこか楽しげに微笑み、ゆっくりと輝矢たちの上空にあった足を下ろす。
「協力な助っ人もできたことだしっ、一旦、街へ戻るぞっ！一寸っ！」
「いや、姉上、でもっ、今のはいくら何でも単なる恐喝じゃっ……」
「あああああぁぁぁんっ！？」
「いえ、すぐ街へ戻るでござる」
少女に一睨みされ、一寸が大人しく街へ戻る準備を始める。
「お前らもとっととついて来いっ！とろとろ歩いてきやがったら殺すぞっ！！」
『……。』
少女の殺人的発言に固まるハチたち。
「あぁ～あっ……面倒くさい展開っ……」
「私は知りませんからね」
深々と肩を落とす三匹に、輝矢は冷たく言い放った。

第２１章　恋人は親指姫　☆１（後書き）

またまた新キャラ登場。
さてさて暴力お姉ちゃんの正体は??
ヒントはこの章のタイトルです。（めっちゃわかりやすいよっ）

第２１章　恋人は親指姫　☆２

数分後。

『小人族ぅぅ～っ！？』

声を揃えて叫ぶハチ、モンキ、ユキジの三匹。

「そうでござるっ！」

屈託のない笑顔で答える先ほどの小人の少年・一寸。

半強制的に、謎の乱雑女がカエルにさらわれるのを手助けすることとなった輝矢たちは、その少女と一寸の住む街とやらへの道を進んでいた。先ほどの打出の小槌で、とりあえず元の大きさに戻してもらい、小人の一寸はちゃっかりハチの頭の上に乗っている。

「一部の獣人には、手のひらサイズの人間の姿になる種族がいるでござるよっ」

「じゃあお前も獣人なんか？」

「はいでござるっ！」

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――

モンキの問いかけに大きく頷き、一寸が白い煙に包まれていく。

「拙者、燕国出身の燕人っ！小谷（おや）一寸と申すでござるっ！！」

次の瞬間、煙の中から現れ、ハチの顔の前へと飛び出したのは、紺色の羽根に赤い模様の目元の、スマートな一匹のツバメであった。人間の時の姿より少し大きい。

「燕国っ？どっかで聞いたことあるような……」

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――

ハチがそう言って首を捻る中、一寸が再び人間の姿へと戻り、ハチの頭の上へと収まる。

「でっ、あちらが拙者の姉の小谷　油火（ゆび）でござるっ！」

「ふんっ」

仏頂面で腕を組んで先頭を歩く、まったく愛想のない油火を一寸が指差す。

「っつーかお前ら、獣人のクセに小人族のことも知らねぇーのかよっ！死ねっ！」

『……。』

油火の容赦ない言葉の暴力に、言い返す気力もなくす三匹。

「輝矢んとはまた違った殺傷力やな……」

「ボク、輝矢がマシに思えてきたよ……」

「誰が何ですって？」

『何でもありません』

モンキとユキジがげっそりした表情で呟き合う。しかし前を歩く輝矢に振り返られ、あっさりと知らない振りをする。

「んでっ、あのカエルとは知り合いか？」

「ああ、あれは我が燕国と長年、敵対している蛙国の連中でござるよっ」

「蛙国っ？」

「結婚相手っ？」

「そうでござる！奴らは国主の殿様の結婚相手を探すため、若い女子を次々とさらっているのでござるっ」

一寸の説明に、輝矢たちが目を丸くする。

「燕国の女子も何人かさらわれていて、皆困っているでござる……」

「そうなのかっ……」

深刻そうな顔を見せる一寸に、ハチも表情を曇らせる。

「ええなぁ～女の子さらいまくりなんてぇ～」
「……っ」
「ぎゃあああっ！！」
視点の違うモンキの顔面を、ハチの爪が襲う。
「ううっ……」
顔面に見事な爪痕をつけられ、涙に暮れるモンキ。

「んっ？でもじゃあ何で、あんたはカエルにさらわれたがってたりなんかっ……」
「ああっ！？」
「いえっ……何でもありません……」
油火に睨まれ、詮索を断念するハチ。
「……。」
そんな油火を見て、輝矢が少し目を細める。
「まぁでもそれが本当だとしたら、鬼人が絡んでる可能性あるかもねぇ～」
「ああ、まんざら無駄でもなかったなっ」
ハチとユキジが前向きな言葉を交わす。
「お前らはただ私がカエルにさらわれんのを手助けしてりゃーいいんだよっ！」
「へぇーへぇー」
「……。」
カエルにさらわれることに妙に固執して見える油火に、眉をひそめる輝矢。
「何故、そこまでカエルにっ……」
「んっ……？」
「えっ？」
前を歩くハチの声に、輝矢が下を向く。

「どうしました？ハっ……」

「あれっ……」
『……っ』

目を見開いているハチに輝矢が声をかけようとしたが、ハチの声に輝矢たちが一斉に前方を見る。

『ふっわぁぁぁ～～っ……』

川沿いを歩くこと三十分。
川の終わりに見えて来たのは、まるでミニチュアのような、家も店も道も、何もかもが小さな小人たちの国であった。
一度で見渡せる大きさの街に、一寸と同じように小さな人間たちが多く行き交っている。
その信じがたい光景に、輝矢と三匹は目を見張らせた。

「あれが私らの国っ！燕国だっ！」
「うっわぁ～ホントに来ちゃったよぉ～小人さんたちの国にぃ～」
「可愛い小人の女の子たちの人気の的になったらどないしょ～っ！」
「なんねぇーよっ」
初めて見る小人の国に、少し浮き足立った感もある三匹。

「本当、一瞬で消せそうですね……」
『何する気っ！？』
浮き足立っていた三匹が、輝矢の一言に一気に凍りつく。

「さっ！」
一寸がハチの頭から降り、街の入口にある小さな門の前に立つ。

「入るでござるっ！！」
『入れるかぁぁっ！！』

いくら獣化して人間よりは小さな姿とはいえ、二十センチほどの高さしかない門を潜るように進められ、三匹が一斉に突っ込みを入れる。

「だいたい俺らがズカズカ入ってったら、街人や街、踏み潰しちまうだろうがっ！」

「私は構いませんけど？」

「お前以外はみんな構うんだよっ！！」

「それもそうでござるかぁ」

ハチの最もな意見に、しみじみと頷く一寸。

「まぁそうゆう時のためにこれがあんだよっ」

「へっ？」

再び、腰に下げている小槌を取り出す油火。

「ああ、それで小さくなんのかっ」

「ああっ！便利だろっ？なんせ、この小槌はなぁっ……！」

「油火っ」

『……っ？』

街の方から聞こえてくる油火の名を呼ぶ声に、ハチたちが一斉に振り返る。

「おかえりなさい、油火」

「あっ……！」

そう言って街から門の外へと出て来たのは、燃えるような赤毛に黒いメガネがトレードマークの、いかにも優しそうな笑顔の小人の青年。青年を見て、ハチが思わず目を見開く。

「んん～っ？何やろっ？何か俺、あの兄ちゃん、どっかで見たような……」
「モンキも？ボクもだよぉ～」
「松にっ……！」
「松人さんっっ！！」
「ぎゃあっ！！」

モンキとユキジが首をかしげる中、身を乗り出そうとしたハチの頭を勢いよく踏みつけて、油火が輝くばかりの笑顔で、出てきた青年の元へと駆け寄っていく。

「迎えに来て下さったのですわねぇっ！！」
『へっ……？』

先ほどまでとはエライ違いに丁寧な言葉遣いを見せる油火に、顔をしかめる三匹。

「うん。帰りが遅いから、少し気になっちゃって」
駆け寄ってきた油火に、笑顔を向ける松人。
「そうなんですのっ……！出先でまたもや蛙国の者たちに遭遇してしまいましてっ……！」
「蛙国の？」
「ええっ！またしてもカエルにさらわれそうになってっ……！油火っ！とっても怖かったですわっ……！！」

『……。』

先ほどとはまったく違うか弱い少女キャラとなった油火が、どこかウソ臭い言葉を吐きながら松人に抱きつく。そんな油火に、表情引きつりまくりの輝矢たち。

「それは大変だったね……それで、この方たちはっ……って、あれっ？」
「……っ？」
ハチたちの方を見上げた松人が、驚いたような表情を見せる。
「松人さん？」
「おっ……！桜時クンっっ！！？」
「えっ……？」
ハチの名を呼ぶ松人に、油火が少し首をかしげる。
「桜時クンじゃないかぁっ！久しぶりだねぇっ！」
「ちょっと見ねぇー間に随分と縮んだじゃねぇーか、松兄っ……」
笑顔で親しげに手を挙げてくる、随分と小型化した実の従兄に、少し呆れた表情を見せるハチ。
「輝矢さんもご無沙汰してるねぇ」
「えぇ～っと、どなたでしたっけ……？」
「がびーんっ！」
眉をひそめる輝矢に、青年がショックを受ける。
「ほらっ、あれだよっ。俺の従兄でいつもハーモニー刻んでる、三人兄弟の長男のっ……」
自　分よりも小さい従兄に違和感を覚えつつも、輝矢にその人を説明するハチ。
「ああっ！どっかで見たことある思たら、朱実の三バカ兄弟の一人かぁっ！」
「松って確か長男だっけ？」
やっと思い出したように言い放つモンキとユキジ。
そう、その青年は雀国主・朱実孔雀の息子の一人、通称・“三バカ兄弟”の長男にして桜時の従兄の朱実松人であった。
「そんな人いましたっけ？」
「がびーんっ！」

それでも思い出さない輝矢に、松人はさらにショックを受ける。

「思い出したっ……“燕国”って確か、松兄が婚約した国主令嬢のっ……」

「そうそう、紹介するよ。この人は燕国の国主令嬢で、僕の婚約者の小谷油火さん」

「国主令嬢っ!?あれでっ!?」

「世も末だねぇ～」

油火の意外な正体に、顔を引きつるモンキとユキジ。

「あのさぁ、松兄っ」

「んっ？」

「その女なんだけどっ……」

「まぁっ！これはトンだ偶然ですわぁっ！！」

ハチが松人に油火について訴えようとしたその時、ハチと松人の間に勢いよく割って入ってくる油火。

「カエルにさらわれそうになった私を助けて下さった方が、松人さんの従弟さんだったなんてぇ～っ！」

「はっ……？」

物凄い作り話を連ねる油火に、ハチが大きく口を開ける。

「これからもどうぞ末永くよろしくですわぁ～～っ！！」

――――ズドォォォォォンッッッ！！！！――――

「うぎっ……！！」

しとやかな笑顔を見せながら、油火がハチの前足を強く踏み潰す。

走る痛みに、一気に顔を引きつるハチ。

「こっこちらこそっ……」

「ええっ！」

痛みに引きつった笑みを見せるハチに、油火は満足そうに微笑んだ。

「いつの間にか仲良くなっちゃったみたいで、安心したよ」

「知らぬが仏ってヤツやなぁ」

「うん……」

嬉しそうな笑顔を見せる松人の横で、こっそりと呟くモンキとユキジ。

「ハチ、仕返しは任せておいて下さい」

「せめて松兄のいないところでしてくれっ……」

冷たい表情で言い放つ輝矢に、ハチが痛みを堪えながら必死に頼み込む。

「そっそういやぁこの国の人間も何人かさらわれてるって一寸から聞いたけどっ……？」

とにかく空気を変えるため、ハチが松人に問いかける。

「うん。若い女の子でさらわれてないのは、もう油火だけくらいじゃないかなぁ」

「やっぱりなぁ～」

「……っ」

――――ドスっ！！――――

「ぐほへはぁぁぁっ！！」
しみじみと頷いたモンキの足元に、油火のエルボーが炸裂する。
「いつも松人さんが油火を守っていてくださるから、油火はさらわれずにすんでいるのですわっ！」
エルボーに苦しむモンキを横目に、存分に可愛子ぶる油火。
「でなきゃ真っ先に狙われてるはずですものぉっ！ねぇ～っ？一寸っ！」
「へっ？」
「ねぇっ……一寸っ……」
「はっ……！はいでござるっ！その通りでござるっ！」
悪魔のように冷たい笑顔で再び問いかけた油火に、一寸は命の危機を感じて必死に頷いた。
「あれはもう恐喝だねぇ～」
「……。」
呆れたように呟くユキジの横で、何やら考え込む輝矢。
――――私をさらいやがれぇぇぇっっっ！！！クソガエルぅぅぅっっっ！！！――――
先ほどの油火の言葉を思い出す。
「まさかそれで……？」
輝矢が気難しい表情で呟く。
「でぇっ？どこにさらわれたのかとかわかってんのか？」
「えっ？あっうん～ここ燕国からちょっと南に行ったところにある、“蛙国”のカエル御殿だって噂だけどぉ」
ハチの問いかけに、松人が答える。

「えっ？桜時クンたち、さらわれた人たちを助けてくれるつもりなの？」
「まさか、誰がそんな面倒なこっ……」
「まっ！まぁ一応なっ！」
松人の問いかけに、輝矢の答えを遮って、ハチが答える。
「さっすが桜時くぅ～んっ！困ってたんだよぉ～僕は油火を守らなきゃだから、助けに行けないしぃ～」
「守る必要なんてないんじゃっ……」
「……っ」

――――ドスっ！！――――

「ぐほへはぁぁぁっ！！」
再び余計なことを呟いたモンキの足元に、油火のエルボーが炸裂する。

「さっすが便利屋っ！」
「退治屋ですけど……」
松人の言葉に、顔を引きつる輝矢。
「じゃあ早速っ……！あぁ～でもどうかなぁ？一寸」
「直に日も暮れるでござるっ！夜に蛙国に乗り込むのは危険かと思われるでござるよっ！兄上っ！！」
「そうだね。救出に行くのは明日にした方が適策かな」
一寸の言葉に、大きく頷く松人。
「じゃあ今晩は四人とも、油火の家にお世話になるといいよ。油火っ」
「ええっ、松人さんっ」
松人の言葉に油火が笑顔を見せて、打出の小槌を取り出す。

「“小さくなぁ～～～れ”っ！」

――――シャンっ！シャンっ！シャンっ！シャンっ！――――

油火が輝矢たちと自分に向かって小槌を振る。

――――スウウウウウウウウウーーーーッッ……――――

徐々に小さくなっていく輝矢たちと油火。そして、松人や一寸と同じくらいの大きさになったところで、油火が小槌を振るのをやめる。

「やぁ～っぱ何か変な感じするなぁ。小さくなるって」

「慣れるまではね」

戸惑うハチに、松人が笑顔を向ける。

「それにしても、やっぱり桜時クンはこの大きさが落ち着くねぇ～」

「へっ？」

やっといつも通りの比率となったハチを、軽々と抱え上げる松人。

「何かみみっちくてっ」

「悪かったなっ……」

悪気のない笑顔を見せる松人に、ハチがかなりのしかめっ面となる。

「さぁ、改めましてようこそ、燕国へ」

松人が皆へ入口の門を進める。

「どうぞ、お入り下さいっ」

松人と油火に案内され、門の中へと入っていくモンキ、ユキジ。

「あのっ、輝矢」
「はい？」
外に残っているハチが門を潜ろうとしている輝矢へ声をかける。
「ごめんなっ……でも、さらわれた人を放っとくわけにはっ……松兄のこともあるしっ……そのっ……」
「構いませんよ」
鬼人が関与しているわけでもない事件に首を突っ込もうとしていることを謝罪するハチであったが、輝矢はそんなハチへ穏やかな笑顔を向けた。
「それに……」
少し曇る輝矢の表情。
「少し……気になることもあるので……」
「えっ……？」
輝矢のその言葉に、ハチはそっと首をかしげた。

第２１章　恋人は親指姫　☆３

その頃。燕国から南に十キロ程。森のとある池のほとりに造られた、同じく小さな国・蛙国。
蛙国中央・国主の住まい“カエル御殿”。

「ふぅ～っ……」

その大きな御殿へと足を踏み入れ、疲れきった様子で肩をどっしりと下ろしたのは、先ほどのカエル。輝矢に踏みつけられ、一寸に倒されようとしていた、あのカエルであった。

「ヒドいめに遭ったゲロ……」
輝矢のことを思い出し、カエルがしみじみと呟く。

「遅かったゲコねぇ……ゲロロ……」
「ゲロっ！」
背後から聞こえてくる低く圧のある声に、ゲロロと呼ばれたカエルが、表情を引きつってゆっくりと振り返る。

「とっ……殿様っ……」

ゲロロの振り返った先に立っていたのは、ゲロロよりももう一回り大きい、橙色の皮膚の、チョンマゲをしたトノサマガエルであった。

「んでぇ？プリチーな女の子は見つけられたゲコぉ？」
「いっ……いえっ……それがっ……」

鋭い視線で問いかけてくる殿様に、言葉を濁して俯くゲロロ。

「まさかっ……一っ人も見つけられなかったとか言うんじゃないゲコねぇ……？」

「うっ……」

その言葉に、ゲロロは青い顔色を益々青くする。

「そうかゲコっ……」

殿様がゆっくりと頷く。

「プリチーな女の子一人見つけられずに、よくノコノコと帰って来れたゲコねぇっ！！」

「ひぇぇ～っゲロっ！」

顔を上げ、一気に怒鳴りあげる殿様に、ゲロロが頭を抱え込む。

「もぉ～う今日という今日は丸焼きにしてお釜の中にポーンとっ……！」

「ちっ……違うゲロっ！ちゃんとプリチーな女の子は見つけたゲロよっ！！」

「何ゲコっ？」

ゲロロの言葉に、殿様が太い眉毛をピクリと動かす。

「嘘をつけゲコっ」

「ほっ本当ゲロよっ！旅人風の（かなり）気の強そうな（悪意ある）笑顔の似合う女の子だったゲロっ！」

「気が強そうで笑顔の似合う……？うぅん……確かにワシ好みゲコっ」

ゲロロの少し偽造された女の子の特徴を聞いて、興味を示す殿様。

「んでぇ？なんでその気の強そうな笑顔の似合う女の子を連れてきてないゲコ？」
「そっそれはっ……」
再び言葉に詰まるゲロロ。
「あっ！あいつに邪魔されたゲロっ！おいらたちにさらわれたがってる、油火とかいう燕国主の娘っ！」
「油火ゲコぉ～？」
油火の名に、殿様が表情を曇らせる。
「まぁ～たアイツゲコか……」
「そっ……そうなんゲロっ！まんまと邪魔されて、旅のプリチーガールさらって来れなかったゲロっ！」
自分から逃げたくせに、嘘八百なことをいうゲロロ。
「旅のプリチーガールは今頃、燕国ゲロかねぇ？」
「まったくいっつもいっつも迷惑な奴ゲコ……ワシはあんな乱暴な女、好みじゃないというのにゲコ……」
必死に言葉を繋げているゲロロを特に疑う様子もなく、気難しい表情を見せる殿様。

「んっ……そうゲコっ……」
「……っ？」
何やら怪しげな笑みを浮かべる殿様に、ゲロロが首を傾げる。
「ワシが自ら出向いて、その娘をさらってくるゲコっ！」
「えっ！？」
殿様の言葉に、驚くゲロロ。
「とっ……殿様自らゲロっ！？」
「お前の見つけた旅のプリチーガール、是非とも手に入れたいゲコからねぇ……」
「うっ……」
その言葉に、ゲロロが勢いよく顔を引きつる。

「そっそれはですねぇっ……！殿様っ……！」
「そうと決まればとっとと燕国へ行くゲコぉ～っ！」
「でっでもっ！あの迷惑女がさらわれたがって、やって来るかもっ……！」
「そんなの無視ゲコっ」
「あっ……！」
ゲロロが止める隙もなく、殿様はノリノリにジャンプをしながら、カエル御殿を飛び出していく。

「だっ……大丈夫かなゲロっ……」
不安げに呟くゲロロであった。

戻って、燕国。国主のお屋敷（油火・一寸の実家）。客間（現在は松人の部屋）。
「へぇ～“桃タロー”に会ったんだぁ」
「ああ」
松人の言葉に、大きく頷く桜時。打出の小槌により小型化した輝矢たちは、燕国の小さな門をくぐり、油火と一寸の家へと案内された。夕食ができるまでの少しの間、桜時は松人の部屋で、これまであったことを色々と話していた。
「こっれがさぁ～死ぬほど甘党で、滅茶苦茶適当で、そのくせ俺には鬼姑のように厳しくてさぁ～っ」
これまであったこと、というよりは、ほとんどが“桃タロー”・

太狼のことであった。太狼との出会いは、桜時にとって、何よりも印象深いことだったのである。
「色々コキ使われて、まじやってらんねぇーよっ」
「ふぅ～んっ」
「まぁでもっ……」
しかめっ面だった桜時の表情が、ふと笑みになる。

「強さは本物かなっ……」
「……っ」
子供のような幼い笑みを浮かべる桜時を見て、松人は穏やかな笑みを浮かべた。

「あっ、悪りぃっ！何か俺、自分の話ばっかりっ……」
「いいよっ」
ふと気付いたようにそう言った桜時に、松人は笑顔を向ける。
「ウチにいた頃とはエライ違いだねぇ」
「えっ……？」
「イキイキしてるっ」
「……っ」
松人の言葉に、桜時が少し照れくさそうに下を向く。
「元気そうで安心したっ……」
「松兄っ……」
松人の優しい笑顔に、桜時は家族の温かさを感じた。

「ありがっ……」
「ほぉ～んと僕らがからかいまくってた頃とはエライ違いっ！」
「そうだっ……色々と酷いこと言われまくってたんだった……」
礼を言おうとした桜時であったが、松人たちにイヌであることで散々バカにされていたことを思い出し、お礼の言葉を一瞬で終う。

「どんぎゃあああああっ！！」
『……っ？』
桜時と松人が、どこからか聞こえてくる大きな声に振り向く。
「まぁ～た何、騒いでやがんだかっ、あのサルっ」
「そろそろ晩御飯もできてるだろうし、僕らも広間へ行こうかぁ～」
「おうっ」

国主のお屋敷（油火・一寸の実家）。大広間。
「んん～っ！こぉ～んなに可愛い小人ちゃんたちに囲まれて、俺ってば幸せぇぇ～っ！」
大広間から聞こえてくる、頭の悪そうなモンキの声。
「って、言うはずやったのになんでやっ！？」
「知らないよっ」
一気に険しい表情となって勢いよく問いかけてくるモンキに、冷たく答えるユキジ。
「なんで出てくる仲居、出てくる仲居、みんなオバちゃんなんやぁ～～っ！！」
「おかわりいりませんかぁ～？」
嘆いているモンキのもとへ、ご飯のおかわりを尋ねに来るオバちゃん仲居。輝矢たちは、油火・一寸とともに大広間で豪勢な夕食をいただいていたのであった。

「言っただろうがっ！若い女はみんなカエルどもにさらわれたんだってっ！」
「アナタを除いて……」
「うっせぇーなっ！！」
モンキの嘆きに、油火が呆れたように答えると、輝矢が鋭く一言を放った。
「私はそんなに魅力がねぇーかっ！？カエルにさらいたいと思わせるほどの色気がこれっぽっちもねぇーってーのかっ！？ああっ！？」
「ないんじゃないですか？」
「にゃにをぉぉっ！？」
今にも乱闘が始まりそうな空気となる輝矢と油火。
「てめぇっ！やっぱ殺っ……！」
「随分と賑やかだねぇ～」
「あらっ！松人さんっ！」
『だあああっ！！』
大広間に松人が入って来た途端に、キャラを早替えする油火に、モンキとユキジが思わずコケる。
「何の話をしてたんだい？」
「輝矢様たちのこれまでの旅のお話を聞いていたのですわぁ～」
隣に座る松人に、嘘くささこの上ない美しい笑顔を向ける油火。
「とっても面白かったですわぁ～っ！」
「でしょ～？うちの国なんてもう二回も輝矢さんたちに救ってもらっちゃってるからねぇ」
嘘八百の油火に、優しい笑顔を向ける松人。
「このみみっちい桜時くんが、ここにいられるのも全て輝矢さんのおかげっ」
「みみっちい言うなっ」

調子よく話す松人を、冷たく睨みつける桜時。
「きっとカエルたちを倒して、この国も救ってくれるさっ」
「まぁ！それは頼もしいですわね！」
『……。』
二人の会話を聞きながら、呆れたような表情を見せる輝矢たち。

「知らぬが仏っちゅーやつやな」
「結婚詐欺に引っ掛かったな、松兄っ……」
「ご愁傷様」
「まぁどうせ他人事ですから」
油火の二重人格ぶりと、松人の騙されっぷりに、口々に呟く輝矢たちなのであった。

そして、夜。
「んん～っ……小人の女の子たちぃぃ～っ……」
「ささみっ……チーズっ……」
「ったくっ」
満腹となってすっかり眠りこけてしまったモンキとユキジを客間の布団に寝かせ、少し疲れたように肩を落とす桜時。
「俺らも寝るかぁ～」
「一緒にですか？」
「別々にだよっ！！」
「別々ですかぁ」

真顔で問いかける輝矢に、桜時が必死に怒鳴り返す。その答えに、少しがっかりした様子の輝矢。

――――ボォォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――

「ふぅ～っ！」

桜時がハチの姿となり、モンキ・ユキジの横に並んでいる布団へと入る。

「あっ、そういえばさぁ」

「……？」

思い出したように声を出すハチに、輝矢が不思議そうに振り返る。

「さっき言ってた、“気になること”って何っ……」

「おおおぉぉぉ～～いっ！！」

「だあああああっっ！！」

大きな声を出しながら、輝矢たちのいる部屋へと入ってくる油火。その声にハチが思わず枕に沈む。

「ちったぁ気ぃ遣えよっ！！夜だぞっ！！夜っ！！」

「てめぇーらが起きようが、知ったこっちゃねぇーしっ」

「……。」

自分勝手この上ない油火に、ハチは言い返す気もなくす。

「出ましたね、二重人格女」

「誰が二重人格だっ！！」

輝矢の言葉に、勢いよく言い返す油火。

「好きな男の前ではブリブリっとしちまうのが乙女心ってもんだろうがっっ！！」

「アンタのは度が過ぎる……」

熱く語る油火に、冷たい目を向けるハチ。

「っつーかコッチはてめぇーと、んな話しに来たわけじゃねぇーんだよっ」

「じゃあ何しに来たんだよっ……」

ハチが疲れたように聞き返す。

「明日っ！」

「……っ？」

「明日の蛙国っ！私も一緒に行くからなっ！」

『はぁっ？』

油火の思いがけない言葉に、大口を開けて顔をしかめる輝矢とハチ。

「何でアンタがついてくんだよっ？」

「そりゃお前もちろんっ！どさくさに紛れてカエルどもにさらわれちまおうって寸法よぉっ！」

ハチの問いかけに、楽しげな笑顔で答える油火。

「んでぇ松人さんに助けてもらったりなんかぁっ……！？くぅぅ～っ！！」

「……。」

妄想を膨らませる油火に、固まるハチ。

「……松人に助けてもらいたいから、カエルにさらわれたがっているのですか……？」

「えっ……？」

「あっ？」

輝矢の問いかけに、眉をひそめるハチと、顔を上げる油火。

「そうだっ」

「……っ」

あっさりと頷く油火に、ハチが少し驚いたように目を開く。

「さらわれた姫を助けに来る王子っ……！！くぅ～っ！！これぞベストオブ女の理想っっ！！」

「ベストオブ愚かな女ですね」

「うっさいわぁぁっっ！！」

意外とロマンチックな面を見せた油火に対し、軽蔑するかのような冷たい目を向ける輝矢。

「女はそういう生き物だろうがっっ！！」

「女の価値を下げるのはやめてください。ベストオブ愚かな女。略してベオ愚」

「略すんじゃねぇっ！どんだけ人のこと否定する気だっ！？こらぁっ！！」

「……。」

輝矢と油火の言い合いの続く中、ハチの表情が少しずつ曇っていく。

――――元気そうで安心したっ……――――

あんなにも優しい人を、心配させようとしている油火。

「とにかく明日っ！お前ら何とか上手いことやって私がさらわれるように援っ……！」

「それってっ……」

「あっ？」

「ハチ？」
油火の言葉を遮るハチ。
「それって……何か不謹慎っ」
「……っ！」
責めるようなハチの言葉に、油火が大きく目を見開く。
「ベストだか何だか知らねぇーけどっ、んなただの理想のためだけに松兄を心配させようなんてっ……！」
「うっせぇぇぇっっ！！」
「ぎゃあああああっっ！！」
説教じみたことを言おうとしたハチであったが、油火の怒鳴り声に一瞬で退く。
「とにかくっ！お前らは私がカエルにさらわれんのを手伝えばいいんだよっ！！わかったなっ！！」
「うわっ！」
一方的にそう怒鳴って、油火が輝矢たちの部屋を出て行く。

「……。」

輝矢たちの部屋の襖を勢いよく閉じた後、そっと俯く油火。

――――それって……何か不謹慎っ……――――

「……クソっ……」

油火はどこか悲しげな表情で呟いた。

「はぁっ…何だよっ、アイツっ…」

「・・・。」

深々と溜息をつくハチと、少し考え込むような表情を見せる輝矢。

「姉上も…」

「あっ？どわあああああああっっっ！！！」

いつの間にか横に座っている一寸に、ハチが驚く。

「っつーかお前、どっから現れたんだよっ？」

「姉上も、不謹慎なことくらいわかっているのでござるよっ…」

「えっ…？」

真面目な表情を見せる一寸に、ハチが少し戸惑うように声を出す。

「姉上はこの小さい国を守るために、小さい頃から1人で必死に戦

ってきたでござるっ…」
『・・・っ』
「たくさんのものを、たった1人で守ってきたのでござるっ…」
――――“打出の小槌”っ！“大きくなぁぁぁぁぁぁ～～れ”っ！――――
――――おっらぁぁぁぁぁぁぁっっ！！ぶっ飛ばすぞぉぉおおっっ！！――――
「・・・。」
あの乱雑さはあり得ないと思ったが、あの乱雑さでなければ、国を守ることができなかったのかも知れない。
「だから余計に、“守られる”ことに理想を抱いてしまっているのでござるよっ…」
「そっか…」
「まったく迷惑この上ない女ですね」
「お前なぁ～」
一寸の話にも特に何も感じていない様子の輝矢に、ハチが呆れた表情で振り向く。
「んっ？」
ハチが振り向くと、そこには立ち上がった輝矢の姿があった。
「どっか行くのか？」
「ちょっとお散歩に。淋しいのでチュ～していきましょうか？」
「いらねぇーよっ！！」
「そうですかぁ…」
ハチにあっさりと断られ、少し淋しそうにしながら、部屋を出て行く輝矢。
「・・・っ」
閉まる襖を見ながら、ハチが少し笑みをこぼす。
「あんな姉上ですまぬでござるっ…」
「いいよっ」
申し訳なさそうにする一寸に、優しい笑顔を向けるハチ。

「一応、俺にとっても“姉上”になっからなっ」
そう言ってハチは、温かな笑顔を浮かべた。

第２１章　恋人は親指姫　☆４

「はぁっ……何だよっ、アイツっ……」
「……。」
深々と溜息をつくハチと、少し考え込むような表情を見せる輝矢。
「姉上も」
「あっ？どわあああああっ！！」
いつの間にか横に座っている一寸に、ハチが驚く。
「っつーかお前、どっから現れたんだよっ？」
「姉上も、不謹慎なことくらいわかっているのでござるよっ……」
「えっ……？」
真面目な表情を見せる一寸に、ハチが少し戸惑うように声を出す。
「姉上はこの小さい国を守るために、小さい頃から一人で必死に戦ってきたでござるっ……」
『……っ』
「たくさんのものを、たった一人で守ってきたのでござるっ……」

――――“打出の小槌”っ！“大きくなぁぁぁぁぁぁぁ～～っれ”っ！――――

――――おっらぁぁぁぁぁぁぁっっ！！ぶっ飛ばすぞぉぉおっっ！！――――

「……。」
あの乱雑さはあり得ないと思ったが、あの乱雑さでなければ、国

を守ることができなかったのかも知れない。
「だから余計に、“守られる”ことに理想を抱いてしまっているのでござるよっ……」
「そっか……」
「まったく迷惑この上ない女ですね」
「お前なぁ～」
一寸の話にも特に何も感じていない様子の輝矢に、ハチが呆れた表情で振り向く。
「んっ？」
ハチが振り向くと、そこには立ち上がった輝矢の姿があった。
「どっか行くのか？」
「ちょっとお散歩に。淋しいのでチュ～していきましょうか？」
「いらねぇーよっ！！」
「そうですかぁ……」
ハチにあっさりと断られ、少し淋しそうにしながら、部屋を出て行く輝矢。
「……っ」
閉まる襖を見ながら、ハチが少し笑みをこぼす。
「あんな姉上ですまぬでござるっ……」
「いいよっ」
申し訳なさそうにする一寸に、優しい笑顔を向けるハチ。

「一応、俺にとっても“姉上”になっからなっ」

そう言ってハチは、温かな笑顔を浮かべた。

「んん～っ……あの愚か女、一体どこへ行ったのでしょうか…」
そう言いながら、油火たちの屋敷のただっ広い庭を歩いている輝矢。ハチには散歩と言って出てきたが、結局のところ、油火を探しているのであった。
「私に手間取らせるとは、ますます迷惑な女ですねぇ……」
勝手に探しておいて、文句ばかりを口にする輝矢。

「かぁ～えぇ～るぅ～のぉ～うぅ～たぁ～がぁ～っ♪」
「んっ……？」

庭奥の暗闇から聞こえてくる不気味な歌声に、輝矢が足を止めて振り向く。

「きぃ～こぉ～えぇ～てぇ～くぅ～るぅ～よぉ～っ♪」
「……。」

輝矢が見つめる暗闇から、徐々に近づいてくる歌声。

「ケロケロケロケログワッグワッグワッ！」
「……。」

輝矢が見つめる中、暗闇の中から現れたのは、オレンジ色の皮膚に、チョンマゲ頭の恰幅のいいカエル。殿様ガエルであった。

「こんばんはゲコ……可愛いお嬢さんっ……」
「……。」

輝矢を見て、不気味に微笑む殿様。そんな殿様を、輝矢は真顔で見つめる。

「歌、下手ですね」

「ゲコォォォ～っっ！！」

輝矢のいきなりの暴言に、勢いよく前方へ倒れ込む殿様。

「とっ殿様っ！大丈夫ゲロっ！？」

「……っアナタはっ……」

輝矢が殿様に駆け寄るゲロロを見て、目を見開く。

「おい！ゲロロっ！あの女っ！確かに顔はワシ好みだゲコがっ、失礼極まりないゲコっ！！」

「ギクっ！ゲロっ！」

殿様が輝矢を指差し、勢いよくゲロロへと言い放つと、ゲロロがかなり焦ったような表情となる。

「とっ殿様がカッコ良すぎて照れてるだけゲロっ！ホントは心の美しい女子ゲロっ！！」

「照れてるぅ～？」

必死に言い繕うゲロロに、疑いの目を向ける殿様。

「本当ゲコかぁ～？」

「ホントゲロっ！ホントゲロっ！」

「その面白い顔、整形ですか？」

「ぬがっ！！」

ゲロロのフォローを一瞬にして無駄にする、輝矢の発言。

「なぁぁ～にゲコぉぉ～～っ！！」

「照れですっ！照れですっ！殿様っ！！」
怒りの爆発しそうな殿様をゲロロが必死に抑える。
「あの女子はものっそい照れ屋なんゲロっ！！」
「むっ……むぅぅぅ～～～っ」
ゲロロの必死の訴えに、再び踏み止まる殿様。

「いまいち気乗りしないゲコっ」
殿様が腕組みをして、気難しい表情を見せる。
「殿様っ、今までさらってきた子たちも顔が気に入らないだの何だのでダメダメ言ってきたゲロぉ～っ」
ゲロロが、殿様が今までダメダメ言ってきた女の子たちの顔写真を並べた巻き物を提示する。
「燕国の女子も、あの暴力姫くらいしか残ってないゲロ。暴力姫とそこの女子とどっちがいいゲロぉ～？」
「むっむぅゲコっ……」
ゲロロの言葉に、殿様が険しい表情を見せる。

「しっ……仕方ないゲコっ！顔は一番好みだから、お前で妥協してやるゲコっ！」
「……っ」

――――バッシィィーンッッッ！！！――――

「うっぎゃあああああっ！！」

輝矢の右足に、強く踏み潰される殿様。

「“妥協”とは何です……？」
「すっ……すみませんゲコっ……」

冷たく問いかける輝矢に、殿様が大人しく謝る。

「まったくっ」
「ぐっぐふっ……」
「とっ……！殿様っ！」

輝矢の足が降ろされ、力なく地面に伏した殿様に、ゲロロが不安げに駆け寄る。

「大丈夫ゲロかっ！？あの踏みつけ女の踏みつけ力は相当っ……！」
「ゲロロぉぉ～～っ……」
「うっ……！」

ゆっくりと起き上がる殿様の放つ、怨みがましい声に、背筋を震え立たせるゲロロ。

「ゲロロぉぉっ！これじゃあ、あの暴力姫の方がまだマシなくらいじゃないかゲコぉぉっ！」
「ひえええっ！！！すみませぇぇ～んゲロぉぉぉ～っっ！！」

もう照れ屋だという嘘では誤魔化せなくなり、怒り狂う殿様に、ゲロロが頭を抱えて謝る。

「お前っ！帰ったらカエル鍋の刑ゲコっ！！」
「ひえええっ！！それだけは勘弁をぉ～～っっ！！」

「まぁとにかく、これでわざわざカエルの国に行く手間が省けました」

『へっ……？』

右耳のピアスを弾く輝矢。モメていた二匹が、丸い目で輝矢の方を振り返る。

「“月器・三日月”っ」

三日月を目覚めさせ、輝矢が身構える。

「さぁ～てっ……さらった少女たちを返していただきましょうかっ……」

『うっ……』

輝矢の冷たい視線に、怯む二匹。

「竹取輝矢っ……カエル退治、いたしますっ……！」

『ひっ……ひえええええええっ！！』

「何だってんだぁっ！？人が寝かけてる時に、人ん家の中庭でギャースカとっ！」

「……っ」

『……っ？』

その時聞こえてきた、品の欠片もない声に、輝矢と殿様たちが、それぞれ振り返る。

「ベオ愚っ」

「その意味わかんねぇー略名で呼ぶなっ！！ってか、てっめぇっ！殿様ガエルっ！！」

輝矢の呼び方に思いきり文句を言った後、油火が殿様とゲロロの存在に気付く。
「人ん家で何してやがるっ！？」
「ゲコっ！えぇ～っとぉ、それはつまりぃ～ちょっとした真夜中散歩というゲコぉ？のぉっ？ゲロロっ」
「そうゲロ、そうゲロっ！あんまり月がキレイだったんで足がぷらぁ～っとっ！ねぇっ？殿様っ」
「嘘つくんじゃねぇっ！！」
『はいっ！すみませんっ！！』
油火の怒声に、殿様とゲロロが一瞬で謝る。
「嘘ついても犯罪になんねぇーのは、可愛い乙女のみなんだよっ！覚えとけっ！！ボケっ！！」
「じゃあアナタは犯罪ですね」
「私のどこが可愛い乙女じゃねぇってんだよっ！？」
「すべて」
「ああんっ！？」
『……っ』
輝矢と油火のよくわからない言い合いが続く中、殿様とゲロロが目を合わせ、そっと頷き合う。

『そろぉ～っ……そろぉ～っ……』
足音を立てないようにしながら、その場を去ろうとする殿様とゲロロ。

「待てぃぃっ！！」
『ひぃぃぃぃっ！！』

こっそり逃げ去ろうとした殿様たちであったが、油火の大声に、背筋を震え上がらせ足を止める。

「逃げられるとか思うなよっ！！こらぁっ！！」
そう言って、油火が腰元の打出の小槌を構える。
「私の国で何かしようってんなら容赦しねぇっ！！」
『ひえええええっっ！！』
油火の睨みに、恐怖の声をあげる二匹。

「……あっ」
その時、輝矢がふと何か思いついたような表情となる。
「そうしましょう」
勝手に思いつき、勝手に決めた様子の輝矢。

「覚悟しやがれぇぇぇっ！！」
『ひぃぃぃえええええっっ！！』

小槌を構えた油火が、殿様たちへと勢いよく飛び出していく。

「ちょっと待ちなさい」

――――バッコォォォォォーーーーンっっ！！――――

「ぐへぇぇぇぇっっ！！」

『へっ……？』

殿様たちに向かって行こうとした油火に、輝矢が容赦なく三日月を振り下ろした。力なく倒れ込む油火に、戸惑いの表情を見せる殿

様とゲロロ。

「アナタ方も少し待っていなさい」

『えっ……？』

輝矢がそう言って、殿様とゲロロに背を向け、屋敷の方へと歩み出す。

「殿様っ……今のうちゲロっ……」

「そっ……そうゲコねっ……」

輝矢に聞こえないように、小声で会話をし、そろりと足を踏み出す二匹。

「わかっていると思いますが……」

『うっ……！』

その途端に聞こえてくる輝矢の声に、２匹が踏み出そうとしていた足を空中で止める。

「逃げたりなどしたら……明日はないと思いなさい……」

『はいっ……』

振り返った輝矢の凍りつきそうな冷たい視線に、二匹は本当に凍りついて頷いた。

数分後。

「痛つつつっ……」

頭を押さえながら、やっと起き上がる油火。

「あぁ～まだ景色が分裂してやがるぅ～あの女、脳に障害が起こったら責任取らせねぇーとっ……」

そう呟きながら、油火がゆっくりと立ち上がる。

「あっ？」

「ゲっ……ゲコっ……」

「ゲロっ……」

油火が顔を上げると、そこには引きつった表情で、何もしないでただ突っ立っている殿様とゲロロの姿。

「何やってんだぁ？お前らっ」

「お待たせしました」

「……っ？」

怪訝そうに殿様たちに問いかけていた油火が、後方から聞こえてくる声に振り返る。

「てっめっ！んっ……？」

油火が振り返った先にいたのは、輝矢と、その輝矢に抱えられている、眼鏡をかけた一羽のスズメ。

「まっ……松人さんっ！？」

「やぁ、油火っ」

そのスズメ、というか松人が、驚いている油火に笑顔を向ける。

「なっ……何故、松人さんがここにっ？」
いきなり上品モードとなり、焦りを隠しながら、松人に問いかける油火。
「いっやぁ～輝矢さんがとりあえず一緒に来いってゆ～から、有無を言わさず連れて来られちゃった♪」
「はぁっ？」
笑顔で答える松人に、油火が思わず顔をしかめる。
「てっめっ……！何考えっ……！」
「おっやぁ～っ？私を睨んでいる方がいらっしゃいますよぉ～？松人～」
「うっ……！どっ……！どこのどなたかしらぁ～っ？うちの大事な客人を睨みつけるなんてぇ～っ！」
輝矢を問い詰めようとした油火であったが、輝矢とともに松人がいるため、地を見せることができない。
「クっ……！」
「……っ」
輝矢もそれをわかっているようで、悔しがる油火を見て、どこか楽しげに笑う。

「さぁカエル、行きましょうか」
『へっ……？』
油火の横を通り抜け、殿様とゲロロのもとへと歩いて行く輝矢。
その輝矢の言葉に、二匹が目を丸くする。
「いっ……行くって……？」
「アナタ方、私をさらいに来たのでしょう？」
「えっ！？」
『えぇぇっ……！？』
輝矢の発言に、油火もカエルたちも思いきり驚く。

「いっ……いやっ！それはやっぱりやめたというか、ノーサンキュ

ー的なっ……！」

「さらいに……来たのでしょうっ……？」

「そうでございますゲコっ」

必死に否定しようとした殿様であったが、輝矢のひと睨みに、あっさりと敗れて頷く。

「では参りましょうかっ」

殿様が頷くと、一気に笑顔となる輝矢。

「ちょぉっと待てぃぃっっ！！」

『……っ』

さらわれようとしていた輝矢たちが、その大声に振り返る。

「油火っ……？」

「はっ！！」

振り返った松人の戸惑うような声に、ハッとした表情を見せる油火。

「ちょっ……ちょっとお待ち下さいなっ！」

油火が慌てて、おしとやか方向へ軌道修正する。

「なっ……何故、私を差し置いてその失礼女をっ……！じゃなくて！何故、松人さんまで連れて行くのです！？」

「それはですねぇ～」

「うっせぇーなぁ。何かあったのか？」

『……っ』

油火の問いかけに輝矢が答えようとした時、そこに寝むそうに瞼

を擦りながらハチが現れた。

「ハチ」

「輝矢っ……って、カエルっ！？」

――――ボォォォォォ～～～ンっっ！！――――

中庭にカエルの姿を見つけ、ハチが素早く人化する。

「カエルが何だってこんなとこにっ……！」

「おいっ」

「えっ？ううっ……！」

村雨丸を構えようとした桜時が、呼ばれた声に振り返ると、そこには鬼のような末恐ろし形相の油火がいた。松人に見えないようにしながら、桜時を睨みつける油火。

「なっ何だよっ……？」

少し怯えながら、桜時が問いかける。

「何だよじゃねぇーよっ！お前の飼い主が、私を差し置いてカエルにさらわれようとしている上に、松人さんまで連れてこうとしてんだよっ！！」

「えぇっ！？」

油火の言葉に、さすがに驚いた表情を見せる桜時。

「松兄っ！」

「やぁ、桜時クンっ」

名を呼ぶ桜時に、松人が暢気な笑顔を向ける。

「輝矢っ！お前、何考えっ……！」

「ハチっ」

「……っ？」

少し非難するように問いかけようとした桜時に、輝矢が穏やかな笑顔で呼びかける。

「ちょっと行ってきますねっ」
「ちょっとってっ……おいっ！輝っ……！」
「さぁ、では行きましょうか。カエルども」
「はいゲコっ……」
輝矢の声に、げっそりとした表情で返事をする殿様。

「すぅぅぅぅぅぅ～～～～っっ」
殿様が大きく息を吸い込み、口をいっぱいに膨らませる。

「待ちやがっ……！じゃないっ！お待ち下さいっ！せめて私も一緒にさらっ……！」
「ゲコゲコゲェ～～～コっ！」

――――ポォォォォォォ～～～～ンっっ！！――――

『うっ……！』

油火が何とか止めようとする中、殿様が口から大きな水の玉を放つ。水の玉が地面に当たると、激しく水しぶきが飛び散り、桜時と油火は思わず身を屈めた。

「まっ……待ちっ……！！」
「かぁ～えぇ～るぅ～のぉ～うぅ～たぁ～がぁ～っ♪」
「かぁ～えぇ～るぅ～のぉ～うぅ～たぁ～がぁ～っ♪」

聞こえるカエルの歌の輪唱が、徐々に遠ざかっていく。

「クっ……！松人さんっ……！？」

やっと水しぶきが収まり、油火が勢いよく顔を上げた。

「……っ！」

しかしすでに中庭に、輝矢と松人、そしてカエルたちの姿はなかった。

「松人っ……さん……」

「……。」

茫然と立ち尽くし、松人の名を呼ぶ油火に、横にいる桜時が少し目を細める。

「おいっ、大丈っ……」

「どういうこったぁぁぁっ！！こりゃあああっ！！」

「うおおおおぅっ！」

声をかけようとした桜時が、勢いよく叫び出す油火に、思わず押されて後方へと倒れ込む。

「さらわれて助けられる予定だったのに、松人さんがさらわれちまったじゃねぇーかよっ！！」

「そっ……そうだなっ……」

松人がさらわれてショックを受けているというよりも、自分がさらわれて助けられる計画が打ち破られたことの方を問題視している様子の油火。

「だあああっ！！もぉぉうっ！どうすんだよぉぉ～～っ！！」

「……。」

そんな油火に、少し呆れた表情を見せる桜時。

「ったくっ！お前んとこの飼い主のせいだかんなっ！！」

「……っ」

油火の言葉に、桜時がそっと下を向く。

「輝矢っ……」

どこか気難しい表情を見せた桜時は、そっと輝矢の名を呼んだ。

第２１章　恋人は親指姫　☆４（後書き）

無理やりさらわれた輝矢と松人の行方はっ？
２２章に続きます。

第２２章　花嫁はかぐや姫？　★１（前書き）

早いもので２２章にもなります。

第２２章　花嫁はかぐや姫？　★１

翌朝。小人たちの国・燕国。国主の屋敷（油火・一寸の実家）。
「いっやぁぁ～んっっ！！俺の輝矢んがぁぁぁっっ！！」
朝っぱらから大きく取り乱し、大広間で叫んでいるのはモンキ。
何故かというと、昨夜、モンキがぐっすりと寝ている間に、輝矢が松人とともにカエルたちに連れさらわれてしまったからである。
「ちったぁ落ち着けよっ！！うっせぇーなぁっ！！」
そんなモンキに、ハチが呆れた表情で言い放つ。
「きっとさらってある他の小人の女の子ちゃんたちと一緒に、カエル囲まされてるんやでぇ～っ！かぁ～っ！羨ましいなぁっ！カエルっ！！」
「視点ズレてんぞっ……？」
嘆くモンキに、突っ込みを入れるハチ。
「ホントっ……」
そこへユキジが口を挟む。
「よく心配する気になれるよねぇ～あの輝矢がカエルなんて囲むわけないじゃん」
「お前もある意味、視点ズレてんな……」
モンキとは正反対に、まったく心配している様子でないユキジにも、ハチが呆れた表情を向けた。
「だあああああっ！！なんであの失礼女がさらわれて、私がさらわれねぇーんだあああっ！」
「まぁ一番ズレてんのは、アンタだけどよっ……」
夜が明けても直、自分がさらわれなかったことを悔しがっている油火に、ハチはもう呆れきった表情。
「あっ姉上っ……それよりも兄上のご心配をっ……」
「なんっでお前らの飼い主がさらわれて、私はさらわれねぇーんだ

よっ！！」

油火が一寸の言葉を無視して、ハチたちに怒鳴る。

「私はあの失礼女よりさらいたくねぇーかっ！？あの失礼女より魅力に欠けてるってぇーのかっ！？」

「まぁ僅差でっ……」

「輝矢ん、こないうるさくないしなぁ～」

「とりあえず自分を見つめ直した方がいいと思うよぉ～っ」

「……っ」

遠慮なく本音を口にする三匹に、油火の顔が歪む。

――――ダァァンっ！グシャァァンっ！ガコォォォンっ！――――

『ホント何でしょうねっ……カエルの見る目、腐ってますよっ……』

「だろっ？」

油火の暴力行為により、ボロボロになった三匹の無理やり吐き出した言葉に、油火がどこか満足げに微笑む。

「でっでは姉上っ、そろそろ兄上の心配をっ……！」

「よっしゃっ！決めたぁぁっ！！」

「へっ……？」

再度、松人の心配をするよう促しにかかった一寸であったが、何かを思いついた様子の油火に、またもその声は届かない。

「題してっ、“助けに行ったつもりが大ピンチっ！逆に助けて、松人さん”作戦だっ！！」

「センスのカケラもないネーミングでござるねっ……」

「あぁぁぁっっ！！？」

「なっ……！なんと素敵な作戦でござろうかっ……！」

油火の睨みつけに、呆れた表情を見せていた一寸が、瞬時に目を輝かせる。

「もちろんっ！お前らも強制参加だからなっ！」
「待っててやぁぁっ！！輝矢ぁぁ～んっっ！！今助けに行くでぇ～っっ！！」
「はぁっ……」
強く言い放つ油火に、とりあえず行く気満々のモンキと、深々と溜息をつくユキジ。

「輝矢なんて助けに行かなくても、勝手にカエル倒して帰ってくると思うけどなぁ～」
「まぁなぁ……」
「ホントに助けに行くのっ？」
ユキジがあからさまに面倒臭そうな表情で、ハチに問いかける。

「うん……」
ゆっくりと頷くハチ。

「そんなに輝矢と離れてたくないのぉ～？」
「違うわっ！！」
からかうようなユキジの言葉に、ハチが勢いよく怒鳴り返す。
「たぶんっ……」
ハチがふと真剣な表情を見せ、油火の方を見る。

「よっしゃあぁっ！！そうと決まりゃあ、早速出発だあぁっ！！」
そこには、張り切って拳の突き上げている油火の姿。

「このままじゃっ……ダメなんだよっ……」
「……っ？」
ハチの言葉に、ユキジはそっと首を傾げた。

その頃。蛙国中央・国主の住まい“カエル御殿”。

「んっ……んんっ……」

その一室で、ゆっくりと目を開くのは輝矢。

「んんっ……ハ……チぃ～っ……」

目の前にある人影に、輝矢がゆっくりと手を伸ばす。

――――ペチョっ――――

「へっ？」

ハチのふわふわとした毛並みとは明らかに違う感触に、寝ぼけまなこだった輝矢が一気に目を覚ます。

「目が覚めたゲコ？」

「……。」

すぐ目の前に存在している、オレンジ色にチョンマゲ頭の巨大なカエルに、思わず固まる輝矢。

――――ドン！グシャン！ズキャン！バシコォォンッッ！！――――

「ぎゃあああああっ！！」

輝矢の蹴りやら拳やらが次々と炸裂し、殿様が勢いよく吹き飛ばされる。

「とっ殿様っ！？どうしたゲロっ！？」

殿様の悲鳴を聞きつけて、ゲロロが部屋の中へと駆け込んでくる。

「殿様っ！！？」

ボロボロになって倒れている殿様を見て、驚いた表情を見せるゲロロ。

「いきなり何するんだゲコっ！！」

「いやぁ～っ、すみませんっ」

ボコボコにされた顔を上げて、怒鳴ってくる殿様に、ベッドから起き上がりながら謝る輝矢。

「ハチとのあまりの可愛さの違いに、つい手がっ……」

「ついじゃないゲコっ！！可愛くなくて悪かったなゲコっ！！」

あまり謝っているように聞こえない輝矢の言葉に、殿様が勢いよく怒鳴り返す。

「ゲロロっ！ワシはもうこんな失礼女、耐えきれないゲコっ！」

「落ち着いてゲロ、殿様……あの女の言う通りにしていないと、おいらたちは間違いなく消されるゲロ……」

「うっ……」

ゲロロのどこか危機迫った説得に、取り乱していた殿様が、少し怯んだ表情を見せる。

「耐えていればきっと、あの女を追いだすチャンスもあるゲロっ」

ゲロロが輝矢に聞こえないよう、小声で殿様に言う。

「とにかく今は、あの女には逆らわないようにするゲロっ……」

「そっそうゲコねっ……」

ゲロロの説得に応じ、殿様もこっそりと頷く。

「で、ここはどこです？」
今更ながら、周囲を見回して問いかける輝矢。やたら豪華なシャンデリアに家具、輝矢が寝ていたベッドも、まるで姫が眠るようなゴージャスなものであった。

「カエル御殿の特別ルームだってぇ～」
「へぇ～っ……って、えっ？」

すぐ近くから聞こえてくる声に、輝矢が不思議そうな表情で振り向くと、輝矢の右肩の上に、ちょこんと可愛らしい雀が立っていた。松人である。

「松人っ、何故、ここにっ？」
「一応、君に半強制的に連れてこられたんだけどっ……」

勝手に連れて来たわりに松人の存在を忘れきっている輝矢に、松人が呆れた表情を見せる。

「ああ、そうでしたね」
「でも何だって僕をっ……」

「“ヒカルちゃん”っ！！」
『……っ？』

勢いよく扉の開く音と、大きな甲高い女の声に、輝矢や松人、殿様たちが一斉に振り返る。

『うげっ……』
同時に表情を引きつる輝矢と松人。

「ヒカルちゃんっ！！」

大きな声とともに部屋へと入って来たのは、紫色の皮膚をした、殿様とほぼ同じ大きさの、恰幅のいいカエルであった。大きな口に、べったりと真っ赤な口紅を塗っている。両生類だがメスらしい。

「怪物にしか見えませんね」

「一度見たら絶対忘れない顔だねぇ」

しみじみと語る輝矢と松人であるが、内容はかなり失礼なものである。

「で、“ヒカルちゃん”とは誰のことです？」

「殿様ゲロっ」

「えっ！？」

ゲロロの答えに、大きく驚く輝矢。

「その顔で“ヒカル”とは、よく言えたものですね」

「うるさいゲコっ！大きなお世話ゲコっ！！」

失礼極まりない輝矢に、殿様ことヒカルが勢いよく怒鳴り返す。

「何か用ゲコ？ママっ」

「殿様のお母様ゲロ」

「まさにカエルの子はカエルって感じっ」

ゲロロの説明に、少し上手いことを言って、満足げに笑う松人。

「ヒカルちゃんっ……ママは嬉しいゲコっ……！」

「へっ？」

何故か感極まった様子のママガエルに、殿様が目を丸くする。

「ついにっ……ついに結婚相手を決めてくれたゲコねっ！！」
「……はっ……？」
ママガエルの言葉に、少し固まる殿様。
「はぁぁぁぁっっ！！？」
一瞬の間の後、殿様が目玉が飛び出しそうなほどに大きく驚きの声をあげる。
「けけけけけけけけけっ……結婚っ！！？」
「ええゲコっ！」
驚いている殿様に、ママガエルは笑顔で頷く。
「今まで散々、燕国の女の子たちをさらわせてきたゲコ、ヒカルちゃん、どこ子もダメだったでしょゲコ？」
苦労話でも語るかのように話すママガエル。
「でっもっ！」
「……っ」
ママガエルが輝矢を指差すと、輝矢はすぐさま表情をしかめた。
「やぁ～っとヒカルちゃんのお眼鏡にかなう子が現れたゲコねっ！」
「えっ……？」
「はっ……？」
「げっ……」
そのママガエルの言葉に、輝矢、殿様、ゲロロがそれぞれに表情を引きつる。

「ちっ違うゲコ、ママ。この女はっ……」
「さぁ～っ！そうと決まれば、急いで式の準備をするゲコぉぉぉ～～っ！」
「えええぇぇぇぇっっ！！？」
誤解を解こうとする殿様であるが、浮かれたママガエルに殿様の言葉は通じない。
「だっだからママっ……！違うゲっ……！」
「みんなぁ～っ！！ヒカルちゃんの結婚相手がやっと決まったゲコぉ～っっ！！」
「あっ……！」
そう叫びながら、ママガエルが特別ルームから踊るように出て行く。

「急いで式の準備をするゲコぉぉ～っっ！！」
『ゲロゲぇぇぇ～～ロぉぉぉぉ～～っっ！！！』

そのママガエルの呼びかけに、御殿中のカエルが顔を出し、声の揃った返事をする。

『……。』
部屋に残され、茫然とする輝矢と殿様。
「……っ」

「あっははぁ～っ！輝矢さん、カエルと結婚だってぇ～っ！」

――――バシィィィィィィーーーンっ！！――――

「ううっ……」

楽しげに笑い飛ばした松人が、輝矢の平手を喰らい、輝矢の肩の上から転げ落ちて、ベッドに倒れ込む。

「これは困りましたねぇ」
「どっ……どうしてゲコぉぉぉ～っっ！！」
「うわっ」
さすがに困った顔を見せる輝矢に、至近距離まで迫って怒鳴り上げる、半泣き状態の殿様。
「お嫁さん探して苦節十三年っ……！それなのにっ……！それなのにっ……！なんでお前のような失礼女とっ……！」
涙を流しながら、殿様が必死に訴える。
「これなら他のさらってきた女の子、もう誰とでもいいから結婚した方がマシゲコぉ～っっ！！」
「失礼ですねっ」
「げこぉぉっ！！」
「とっ殿様っ……！！」
そんな涙の殿様を、容赦なく蹴り飛ばす輝矢。

「まったくっ、泣きたいのはこっちですよっ」
輝矢が少し疲れたように、肩を落とす。

「私にはハチというものがあるというのに……」

「ぶふぇっくしょぉぉ～んっっ！！」

鼻の形も変わりそうなほどに豪快なくしゃみをするのはハチ。

「うぅ～っ」

「すっごいくしゃみやなぁ～っ」

「すっごい噂されてんじゃなぁ～い？」

鼻をすすっているハチの前方を歩くモンキとユキジが、振り返りながら言う。

「弛みきったくしゃみしてんじゃねぇーよっ！士気が下がっだろうがっ！！」

「生理現象にまで文句付けんなよっ……」

後ろから怒鳴ってくる油火に、ハチが少し疲れた表情で呟いた。

ハチたちが歩いているのは、燕国と蛙国の間の森。油火の逆に助けられる作戦を実行するべく、朝早くに燕国を出発したのであった。

「一寸～、蛙国までってどんくらいあるん～？」

「燕国から南に十キロほど行ったところの池のほとりにあるでござるっ！」

「十キロかぁ～じゃあ昼前には着けるねぇ～」

一寸を先頭に、モンキ、ユキジ、ハチ、油火の順で蛙国へと歩き進む。

「じゃあ作戦を話すぞっ？まずお前がカエルの餌になるだろっ？」

「まずの段階からおかしいんだよっ」

一番後方から、今回の逆に助けられる作戦の説明を始める油火に、ハチがうんざりした表情で言い返す。

「それでだなぁ、居ても立ってもいられない心清い私が助けに入る」

「誰が心清いだっ」
「だが逆に捕まってしまうっ。そこにっ！いよいよ松人さん、登場だっ！」
「そない都合よく、松人来るかぁ～？」
「お前らが呼んで来るに決まってんだろっ！」
「やっぱそういう流れねぇ～」
三匹の突っ込みを受けながら、作戦を話しきる油火。

「どうだっ？完璧だろっ？」
「……っ」
得意げに微笑む油火の方を振り返り、少し表情を曇らせるハチ。

「アンタさぁ～っ、松兄のこと心配じゃねぇーのっ……？」
「あっ？」
ハチの問いかけに、少し眉をしかめて油火がハチの方を見る。

「何言ってんだよっ。お前だって従弟なんだから知ってんだろっ？あの人はああ見えて意外としぶとっ……」
「いくら強さがわかってたって、本当に大切な人なら、“もし何かあったら”って思っちまうもんじゃねっ？」
「……っ」
ハチの言葉に、油火が少し目を開く。

「少なくとも俺はっ……そうだけどっ……」
そう呟いて、ハチは歩を早め、油火の先へと歩いて行く。

「本当にっ……大切な人っ……」

――――油火っ……――――

「……。」

浮かぶ松人の優しい笑顔に、油火はそっと俯いた。

第２２章　花嫁はかぐや姫？　★１（後書き）

第２２章　花嫁はかぐや姫？　★２

数時間後……。
「遠っ！！」
「まだ着かないわけぇ～？」
「もうとっくに十キロ以上は歩いとるやろぉ～」
太陽が真上に登った日中となっても、ハチたちは蛙国には辿り着けなかった。
「まだまだ半分くらいでござるよ？」
『ええっ！！？』
一寸の言葉に衝撃を受ける三匹。
「んなバカなっ……！！朝っぱらから歩き通してんのに五キロしか進んでないなんてっ……！」
「あっ、もしかしてっ……」
「んっ？どないしたんや？ユッキー」
ショックを受けているハチの横で、何やら思いついたらしき表情を見せるユキジ。
「ボクたちさぁ～、今現在、小人なんだよねぇ？」
『おうっ』
「つまりフツーに歩いても、いつもより相当に歩幅が小さいからぁ～同じ距離を歩くのに倍、時間がかかる」
『何っ……！！？』
確かに、皆が小さいのであまり違和感を持ってはいないが、周りに見える木らしきものはすべて草。大岩と思えるものはすべて小石。それくらいハチたちは縮小化しているのである。
「ピンポーンっ！！ズバリっ！！大正解でござるっ！！」
「大正解でござるじゃねぇーよっっ！！！」
「ぎゃあああっっっ！！！」

笑顔で正解コールをした一寸を、思い切り殴るハチ。
「だったらあの小槌で元の大きさに戻ってから来た方が、時間も労力もかけずにすんだじゃねぇーかっ！！」
「それもそうだったなぁ～っ！」
ハチの最もな意見に反応を示したのは、打出の小槌を持っている油火であった。
「すっかり忘れてたぜぇ～っ！」
「忘れてたで済む問題じゃっ……！！」
「忘れてたんだから、しゃーねぇーだろっ……？」
「そうですよねっ……」
ハチのすぐ目の前にしゃがみ込み、声のトーンを落として脅しをかける油火に、ハチが大人しく頷く。
「まぁとにかくちょい休憩しようやなっ……」

――――カサカサカサっっ……――――

「んんっ？」
近くの草の根元に座り込んだモンキが、背後から聞こえてくる不審な音に振り返る。
「何っ……」

「フシャアアアアッ！！」
「ほっぎゃあああああっ！！」

草を掻き分けるようにして現れた、巨大な黒い化け物に、思わず叫び声をあげるモンキ。

「何っ！？あれっ！！」

「化け物かっ！？」
ハチとユキジも焦ったような声を出す。
「ひっ……！ひえええええっ！！とりあえず逃げっ……！！」
「アホかっ」
「ほぎゃあああああああっ！！」
突如、現れた謎の化け物から逃れようと、やって来た道へと逆走しようとしたモンキを、油火が勢いよく蹴り飛ばす。
「よく見ろっ。ありゃーただのアリだっ」
「へっ？」
『アリっ？』
油火に言われ、改めて化け物を見上げるハチたち。その三つの節に分かれた体に、頭には二本の触覚、何本もの足のあるその姿は、ハチたちのよく知る“アリ”そのものであった。
「ほんまにアリやっ……」
「大きくなると印象って変わるものだねぇ～」
「フシャアアアアッ！！」
その巨大なアリを見て、感心したように言うモンキとユキジ。
「とっとにかく何とかっ……！」
「……っ」
「……っ？」
アリを退けるため人化しようとしたハチの前に手を出し、制止を促したのは油火であった。
「何っ……！」

「下がってろっ」
「えっ……？」
そう言って打出の小槌を構える油火。

「フシャアアアッッ！！」
「……っ」
こちらへと駆け込んでくる巨大アリに、油火が小槌を構えて勢いよく飛び出していく。

「だりゃあああああっ！！」

――――バシコォォォォォォーーンッ！！――――

「……っ！フッシャァァァ～～ンッッ！！」

油火の振り下ろした小槌が、見事にアリの額に直撃する。

「私らを蛙国まで乗せてけっ！いいなっ！？」
「フッシャァァァ～～っ……」
油火の言葉に、弱々しく頷くアリ。
「一寸っ！道案内してやれっ！」
「はいでござるっ！姉上っ！」
油火の指示に、素早くアリの頭の上へと駆け登って行く一寸。
「すっごい力技っ」
「輝矢んの上を行くかもなぁ～」

「んっ……？」
感心しているユキジとモンキの横で、ハチがふと何かに気づく。
「クっ……」
アリの背に登ろうとしている油火であるが、背にかけた右手に力を込めると、その表情をどこか苦しげに歪ませていた。どうやら右手を痛めているようである。
――――だりゃあああああああっっっ！！！――――
強く小槌を握っていた、あの右手。
「……。」
ゆっくりと登ろうとしている油火の元へと歩いて行くハチ。
「無茶っ……したんじゃねぇーのっ？」
「あんっ？」
ハチの問いかけに、登ろうとしていた油火が下を向く。
「別にっ……」
油火がハチから視線を逸らす。
「すべては私の逆に助けられ作戦を実行するためだっ！大したことねぇーよっ！よっ！」
そう言い放って、油火が左手も使って何とかアリの背中の上に、駆け登る。
「ったくっ……」
そんな油火を見上げながら、少し顔をしかめるハチ。
「仕方のない姉ちゃんだなっ……」

ハチはそう呟き、その白い耳を疲れたように少し折った。

「お前らは走ってついて来いよっ！」

「……。」

相変わらずの油火に、さらに固まるハチなのであった。

その頃。蛙国・カエル御殿。

「はぁっ……」

深々と溜め息をついたのは、カエルに無理やりさらわれ、自ら囚われの身となった輝矢。

「はぁっ……」

その格好は、何故かいつもとは違う、純白の花嫁衣裳であった。

「コンコンっ！入るよぉ～っ？」

「……？」

花嫁衣装の輝矢が振り向くと、控え室に黒タキシードを決め込んだ松人が入って来た。

「おおぉ～っ！輝矢さんっ！きっれぇいだねぇ～っ！僕も結婚式ハミングを歌い甲斐があるってもっ……！」

――――バッコォォォォーーーンっ！！――――

「何、ノリノリになってるんですっ……？」
「ごっごめんなひゃいっ……」
結婚式への意欲を見せている松人に、輝矢が純白の花嫁衣装で蹴りを入れる。
「イベントごとって好きなもんだから、ついっ……」
「何がついです。私がハチ以外の者と結婚するかも知れないというこの危機にっ」
「それを危機だと思ってることが、桜時クンにとっては危機っ……」
「何か言いました？」
「いえ、何もっ……」
輝矢の鋭い睨みに、松人は素早くそっぽを向く。

「いぃぃ～やぁぁ～だぁぁ～ゲェェェコォォォォ～～っっ！！」
『……？』
部屋の外から聞こえてくる声に、輝矢と松人が振り返る。

「ほぉぉ～らっ！殿様っ！」
「むうぅぅ～っ！」

輝矢と松人が見つめる中、輝矢の控え室へと入ってきたのは、ゲロロと、ゲロロに無理やり引っ張られるようにしてやって来た、袴姿に扇子を持った、恰幅のいいちょんまげ中年チョビ髭男であった。

『……。』

「んっ？」
男を見て呆然としている輝矢と松人に、男が眉をピクリと動かす。
「ゲロゲロロっ！きっと殿様の人化姿のあまりのカッコ良さに言葉

も出ないんだゲロっ！」
「そっそうかっ？ゲコゲコっ」
ゲロロの言葉に、男が喜びを隠しきれない様子で微笑む。
「あっ、人化してたんですか？カエルの時と大して変わらないんで、気付きませんでしたぁ」
「ゲコぉぉぉぉっっ！！」
輝矢のトゲのある言葉に、人化しているらしき殿様が怒りを露にする。
「ゲロロっ！ワシっ！やっぱりコイツ、嫌いゲコっ！！」
「ここまで来て無茶言わんで下さいゲロっ」
泣きそうな顔で訴える殿様に、冷たい反応を示すゲロロ。
「結婚なんて日々我慢なんですからゲロっ」
「うおおおおぉぉぉっ……！！何か哲学的ゲコっ……！！」
「タダ単に押し付けてるだけじゃないのぉ～？」
感動している殿様の横で、呆れた表情を見せる松人。
「殿様っ！ゲロロ様っ！お式の準備が整いましたぁーっ！！」
「ほらっ、行きますよゲロぉ～っ」
「ううぅ～っ！嫌だゲコぉぉ～～っ！」
ゲロロに背中を押され、嫌々ながら式場へと歩いて行く殿様。
「お前も諦めてとっとと来るゲロっ」
ゲロロが振り向いて、輝矢に言い放つ。
「はぁっ……」
再び、深々と溜め息をつく輝矢。
「こうなったら力づくですかねぇ……」
「あはは～っ！面白そう～っ！」
良からぬことを考える輝矢に、何故か楽しげに笑う松人であった。

「フッシャアアアッ！！」

一方、アリに乗って猛スピードで蛙国を目指しているハチたち。

「……っ！見えたでござるよっ！蛙国っ！」

『えっ！？』

一番前に座る一寸の言葉に、後ろに乗っていたハチたちがこぞって身を乗り出す。確かに湖のような巨大な池のほとりに、小さな街が見えて来た。

「……っ！あれは何だケロっ！？」

「侵入者だカエルっ！！警備班っ！！出動だカエルっ！！」

『げろげろげろっ！！！』

ハチたちの乗ったアリを発見し、外門にたくさんのカエルたちが出てくる。

「もう見つかってしまったでござるっ！不覚っ！」

「こんな目立つもん乗ってりゃ、そりゃ見つかるだろ……」

“しまった”と言わんばかりの顔を見せる一寸に、ハチが呆れた視線を送る。

「おいっ！アリっ！お前はこのまま突っ込んでって見張り蹴散らせっ！」
「フッシャァァァァ～～～っ？」
「文句を言うなっ！」
「フシャっ！」
油火の命令に不満そうな声を出したアリであったが、強い睨みにすぐさまイイ返事をする。

「おいっ、アリを突っ込ませてどうする気っ……」
「こん中で飛べる奴っ！」
「はっ？」
「はぁ～いっ」
「はいでござるっ！」
油火の問いかけに、ハチが首をかしげる中、ユキジと一寸が手を挙げて返事をする。
「よぉ～しっ、飛べねぇーのはお前ら二匹だなっ？」
『へっ……？』
その油火の言葉に、ハチとモンキは何となく嫌な予感がして顔を引きつった。

「一寸っ！」
「はいでござるっ！」
油火に呼ばれ、一寸がアリの背の上で元気よく立ち上がる。

「よいしょっとっ！」
「……っ？」
一寸が背中に剣のように背負っていた針を、ゆっくりと抜き、右手に構える。

「では行くでござるよっ？桜時殿っ！門貴殿っ！」

『へっ……？』

ハチとモンキに向かって針を構える一寸。ますます嫌な予感を膨らませる二匹。

「“針剣殺法っ……」
「ちょっ……！」
「ちょっと待っ……！」

「ハリケェェェェーーーン”ッ！！」

――――ビュウウウウウウウウーーーーンッッッ！！！――――

『だあああああああっっ！！』

一寸が針剣で巻き起こした竜巻に飲まれ、街の中心部へとまっすぐに吹き飛ばされていくハチとモンキ。激しい叫び声が、遥か彼方へと消えていく。

「あぁ～あ……大丈夫かなぁ……？」
飛んでいったハチとモンキを見ながら、不安げに呟くユキジ。
「よしっ！お前ら行くぞっ！」
「はいでござるっ！」
「はぁ～いっ」

油火の掛け声に、立ち上がるユキジと、針剣を終う一寸。

――――ボォォォォォ～～～ンっ！――――

油火と一寸は燕化し、雉のユキジとともに、その翼を広げ、吹っ飛んでいったハチとモンキの後を追った。

「フッシャアアアアッッ！！」

皆を見送ると、アリはカエルの群れの中に飛び込んで行った。

第２２章　花嫁はかぐや姫？　★３

蛙国・中心部。

「ふぎゃあああああっっ！！！」

へと落ちてくる、イヌが一匹。

「クっ……！クソっ……！」

――――ボォォォォォォォォ～～～ンッッッ！！！――――

迫り来る地面に焦りの表情を見せ、ハチが人化する。

「“瞬花”っ！！」

素早く人化して、桜時が地面へ瞬花を放つ。

――――パァァァァァァァァーーーーンッッ！！！――――

「ぶふぅぅっ！！」

桜の花びらと化した地面に、埋もれるように着地する桜時。

「ぷっはぁぁ～っ！危なかったぁ～っ！」

桜時が桜の花びらの山から顔を出す。

「どわあああああああっ！！！」
「へっ……？」
少しホッとしている桜時の上から降ってくる叫び声。
「どひゃあああああああんっっ！！」
「だあああああああっっ！！」
――――バァァァァァァァーーーーンッッ！！！――――
上空から重力も借りて勢いよく降下してきたモンキが、思いきり桜時の上へと落ちる。桜の花びらの中へ、激しい音とともに沈む桜時とモンキ。
『うっ……ううっ……』
「よっとぉっ！」
花びらの中から苦しげな声が漏れる中、そのすぐ傍へ二羽の燕と一羽の雉が降りてくる。
――――ボォォォォォォォォ～～～～ンッッッ！！！――――
人化して、地面へと着地する、油火、一寸、由雉の三人。
「よしっ！全員、無事だなっ！」
『どこがじゃいっっ！！』
満足げに言い放った油火に、桜時とモンキが花びらの山から勢いよく顔を出して、怒鳴り上げる。

「ったく、死ぬとこやったわぁ～」
「お前もちったぁ手加減しろよなっ！」
「すっすまないでござるっ」
桜時に責められ、申し訳なさそうな表情を見せる一寸。
「無茶しすぎるのは姉譲りでっ」
「んなもん、譲られんなっ」
「さぁーてっ！カエルはどっちだっ！？ああっ！？」
やっと蛙国に降り立ち、益々気合いの入った様子の油火。
「カエルならいっぱいいるよぉ～」
「何っ！？どこにっ！？」
由雉の言葉に、油火が勢いよく振り返る。
「あそこに」
「……っ？」
振り返った油火が、眉をひそめる。

『ざわざわざわっ……！！』

油火の振り返った先では、色とりどりの多くのカエルが、大きな建物の前に集まっていた。皆、あまり落着きがない様子で、ざわついている。

「何やぁ？あのでっかい建もんっ」
「あれはカエル御殿でござるっ！」
「カエル御殿？ってゆ～ことは、あそこに輝矢や松人がぁ？」
「そうだっ」
「あっ！おいっ！」
そう言ってどんどんとカエルの群れの方へと歩いていく油火を、桜時が少し焦りながら追いかける。

「どこ行くんだよっ!?」
「何の騒ぎだか気になんだろーがっ」
「けっけど、カエルたちに見つかったらヤバいんじゃっ……」
「なぁなぁっ」
「フツーに話しかけてるしっっ!!!」

桜時の不安を余所に、群れの最後尾にいるカエルへと普通に声をかける油火。

「んっ?……っ!何だっ!?お前たっ……!!」
「……っ」

――――ドスっ!!――――

「ぐほおおおおおうっっっ!!!!」
「……。」

不審な油火たちに身構えたカエルであったが、その恰幅のいい腹に油火の右ストレートが炸裂し、カエルは思わず長い舌を口から飛び出して苦しむ。その様子を、呆れた表情で見つめる桜時。

「これは何の騒ぎだっ?ああっ?」
「とっ……殿様と余所からやって来た輝矢とかいう娘が、今から結婚式を挙げるんですっ……」
『結婚式っ!!?』

瀕死で繋げるカエルの言葉に、驚く桜時、モンキ、由雉。

『輝矢がっ……カエルとぉぉぉぉぉっ……！！？』

三人は大きく見開いた目で、カエル御殿の方を振り返った。

そのカエル御殿・第一式場。

「ああ、殿様ガエル」
「はいゲコっ」

神父の格好をしたカエルに名を呼ばれ、返事をする袴姿の一応は人化している殿様。多くのカエルが見つめる中、真っ赤な絨毯の先に立つ、殿様と花嫁衣裳の輝矢。シチュエーションはまさに、結婚式そのもの。

「貴方はこの暴力的で言動もキツい小娘・輝矢を妻とし、健やかなる時も何ちゃらかんちゃら誓いますか？」
「んん～っ……どうしようかなゲコっ……」

神父の微妙な言い回しに、誓いきれずに悩み始める殿様。

「ああ、では竹取輝矢」
「はいっ？」

神父が今度は殿様の横に立っている輝矢の名を呼ぶ。

「貴方はこのデブでわがままでもうすぐ三十八歳の殿様を夫とし、以下同文で誓いますか？」
「無理です」

神父の問いかけに、あっさり否定の言葉を吐く輝矢。

「じゃあ二人の誓いが確認できたところで、誓いのキッスをっ」
『ええぇぇぇっっっ！！！？』

無理やりの進行を見せる神父に、見守るカエルたちからざわめきの声が飛ぶ。

「無理だと言っているでしょうが」
「まだ悩んでるゲコぉ～っ」
「とっとと誓いのキッスをっ」

文句を言う輝矢と殿様の言葉を受け入れず、とりあえず誓いのキスをさせようとする神父。

「むぅぅ～っ……さてはママの仕業ゲコねっ……」
「うっふっふっゲコっ……」

殿様が困惑した表情で親族席を振り返ると、先ほどよりもさらにド派手な口紅に、真っ赤な着物を着たママガエルが、何やら企んでいる様子で微笑んだ。

「しっ……！仕方ないゲコっ！ここは腹をくくって……！」
意を決したように輝矢の方を振り返る殿様。
『……っ』
皆が見つめる中、十字架の前で、輝矢と殿様が向き合った。

輝矢が今、まさに誓いのキッスをするかしないかの瀬戸際である、その頃。

『どわあああああああっ！！』

桜時たちは、カエル御殿内のただっ広い廊下を、全力疾走で駆け抜けていた。

「侵入者カエルっ！」
「捕まえるカエルっ！！」
その後方には、追いかけてくる、たくさんの色とりどりのカエル。

「クッソっ！このクソ忙しい時にぞろぞろと追いかけてきやがってっ」

「アンタが無防備にカエルに話しかけたりすっからだろうがっ！！」
面倒臭そうに言う油火に、怒鳴り上げる桜時。そう、せっかく蛙国に侵入できたというのに、油火がいきなりカエルに話しかけた上に、暴力行為を振るったため、結局カエルたちにバレて、追われる羽目となってしまったのである。
「どさくさに紛れて御殿に侵入できたまでは良かったけどねぇ～」
「俺が足止めでもしよかぁ～？」
「そうだなっ」
先頭を走る桜時が、後ろからの門貴の言葉に頷く。
「ここは一先ず、二手に分かれっ……」
――――パコォォォォォ～～～ンっ！――――
その時、桜時たちの走っている廊下の床が、突然、抜ける。
「てっ……？」
突如、無重力状態となる桜時たち。
『どわあああああっっ！！』
しかしその無重力は一瞬で、すぐさま真っ逆さまに先の深い穴の中へと落ちて行く。
『だあああああああ～～ああああ～～っ！！』
――――バアアァァァァァァーーーーンっっ！！――――

桜時たちが、深い深い穴の先、勢いよく地面に落下する。

「痛ててててっ……」

打ちつけた顔面を押さえながら、苦しそうに起き上がる桜時。

――――ひゅるるるるるぅぅぅぅ～～～っ！！――――

「へっ……？」

何かが落ちてくる音に、桜時が少し顔を上げる。

――――バアアァァァァァァーーーーンっっ！！――――

「だしゃあああああああっっ！！！」

見事に桜時の真上へと落ちてきた油火と一寸により、桜時が地面にぺっしゃんこに倒れ込む。

「下敷きになっていただいて忝いでござるっ！桜時殿っ！」

「お前もたまには役に立つな、クソ犬っ」

「ううっ……お前らっ……いつか痛い目見せてやるっ……」

まったく悪びれた様子のない油火と一寸に、下敷きの桜時はこっ

そりと殺意を燃やした。

「それよりここはっ……」
「ここは地下通路だゲロ」
「あっ……！」

やっとのことで立ち上がった桜時の、まだ終わらない問いかけに答えたその人物に、桜時が驚いたように目を見開く。

「お前はっ……！」
「……。」

落下してきた桜時たちの目の前に立っていたのは、いつになく真剣な表情を見せたゲロロであった。

『……っ』

ゲロロを見て、門貴が如意棒を、由雉が色羽を素早く構える。

「お前が俺達をここにっ……」

桜時も警戒しながら、村雨丸を構える。

「松人さんはどこだっ！？」
「さらった燕国の女子たちを返すでござるっ！！」

油火と一寸が、それぞれゲロロに強く言い放つ。

「……。」

二人の問いかけに、少し黙り込むゲロロ。地下通路に沈黙が流れる。

「さらった女子たちはこの先の地下女の子ルーム、松人とかいう奴はこの階段を上った先の結婚式会場にいるゲロっ」

『えっ……？』

あっさりと油火と一寸の問いかけに答えたゲロロに、桜時たちが戸惑った表情を見せる。

「行きたければとっとと行くゲロ。結婚式の方はもう始まってるゲロっ」

「……っ？」

どこかやる気なさそうに言うゲロロ。居場所を教えただけならともかく、侵入してきた桜時たちを止める気も、さらさらないようである。

「よしっ！一寸っ！お前は女どもを助けに行けっ！私は松人さんのところへ行くっ！」

「はいでござるっ！」

そう会話をして、一寸が地下通路の先の廊下、油火が正面の上階段へと、それぞれ駆け出して行く。

「桜時っ！俺らもっ……！」

「なんでっ……」

門貴の声を遮り、桜時がゲロロの方を見る。

「なんでっ……俺達をっ……？」

戸惑うように問いかける桜時。ゲロロが一瞬、桜時の方を見た後、すぐにそっぽを向く。

「別にっ……ただ、あの失礼女が殿様と結婚しちゃったら、国が潰れると思ったからゲロっ」

「確かにねぇ～」

ゲロロの答えに、由雉がしみじみと頷く。

「それにっ……」
「……っ？」
そう言ってゲロロが、桜時に向けて、何かを投げた。桜時が不思議そうな表情を見せながら、それを受け取る。
「これっ……」
それは、少し血のついた、布の切れ端であった。
――――これでも巻いとけっ……――――
――――あっ……ありがとうゲロっ……――――
昨日、桜時が、怪我をしたゲロロに巻いてあげた布切れ。
「カエルにだって……感謝の心くらいあるゲロっ……」
「……っ」
少し照れくさそうに、ゲロロが呟く。
「……さんきゅっ」
そんなゲロロに、桜時は穏やかな笑みを向けた。
「よしっ！俺は油火を追うから、お前らは一寸とさらわれた奴らを助けてくれっ！」
「喜んでぇぇぇぇぇいっ！」
桜時の言葉を聞き終わらないうちに、一寸の後を駆け抜けていく門貴。

「待っててねぇ～っ！小人の可愛子ちゃんたちぃ～っ！」
「ちょっと待ってよぉ～っ」
物凄い勢いで駆け抜けていく門貴を、由雉が呆れた表情を見せながら追っていく。

「よしっ！」
桜時も少し気合いを入れ、油火の後を追って、上階段を駆け上っていった。

戻って、第一式場。
『……。』
会場内は皆、誓いのキッスを今か今かと待ち望んでいる。

「しっ……！仕方ないゲコっ！」
その空気に押され、輝矢の方を向き直る殿様。
「今さらジタバタしても仕方ないゲコっ！ここは腹をくくって……！とりあえずブチュっとっ……！」
「しません」

――――バギコォォォォォ～～ンッッッ！！！！！――――

「ぎゃばあああああゲコぉぉぉっっ！！」

意を決した殿様が輝矢の方を振り向いた途端、輝矢が殿様を勢い

よく殴り飛ばした。吹っ飛んだ殿様が、勢いよく式場の象徴である十字架にぶつかり、十字架が崩れ落ちる。

『とっ殿様ぁぁぁぁぁっっ！！？』

「ヒっ……ヒカルちゃんっっ！！？」

「あぁ～あっ……やっちゃったっ」

吹き飛ばされた殿様に驚きの表情を見せる観衆と、驚き、思わず立ち上がるママガエル。そのママガエルの横で、松人が“やっぱりな”といった表情で肩を落とす。

「うっ……ううううっ……ゲコっ……」

輝矢に殴られた殿様は、倒れこんですでにノックアウト状態である。

「私、ハチ以外とはチューしないって決めてるんですよっ」

何故か自信満々に言い放つ輝矢。

「なっ……何をしてくれるんですゲコっ！！あなたはっ！！」

「へっ？」

ママガエルが指を差して怒り狂う中、輝矢が間の抜けた声を出す。

「何って、別に自分の思うがままに生きてるだけですが？」

「思うがままに生きていきすぎますゲコっ！！」

まったく悪びれた様子もないマイペース輝矢に、ママガエルの血管が浮きあがる。

「もういいゲコっ！誰かっ！！この女を牢屋に入っ……！！」

――――バァァァァーンッッッ！！！！――――

「ゲコっ……？」

怒鳴り散らしていたママガエルの後方の御殿の壁が、突然、まるで外から大きな力を加えられたかのように大きく崩れ落ちる。落ちてくる瓦礫に、目を丸くするママガエル。

「グガアアアアアアアッッ！！！」

「……っ！！」

『……っっ！！』

壁を突き破って御殿の中へと入ってきたのは、天井よりも高い背丈の巨大な深緑色の皮膚をした鬼であった。頭に金色の角を光らせ、鋭い牙のある口で大きな咆哮を放つ。

「ぎゃあああああああゲコぉぉぉっっ！！！」

『ぎゃあああああゲロぉぉぉぉ～っっ！！！』

大きな悲鳴をあげてその場に座り込むママガエルと、一斉に逃げ惑う会場内のカエルたち。

「鬼人っ！？」

親族席にいた松人が立ちあがり、表情を険しくして身構える。

「グガアアアアアアアッッ！！」

「……これはまたっ……願ってもない展開ですねぇっ……」

吠える鬼人に、輝矢はそっと微笑んだ。

第２２章　花嫁はかぐや姫？　★４

『ゲロゲロぉぉ～～っ！！ゲロゲロぉぉぉ～～っっ！！』
「……っ？」

溢れかえるように大量に駆けてくるカエルの群れに戸惑いながら、輝矢や松人のいるカエル御殿の式典会場へと足を進める油火。

「何かあったっぽいなっ」
「……っ」
そこへ桜時が追いついてくる。
「何かってっ？」
「さぁなっ。でもこの様子じゃあ、とんでもねぇーことじゃねぇのっ？」
「……。」
桜時の言葉に、油火が眉をひそめる。
「松人……さんっ……」
油火は、どこか不安げな表情で、松人の名を呟いた。

「痛つつつつつつっ……」
殴られた顔面を押さえながら、ゆっくりと起き上がる殿様。
「くぅぅぅぅ〜〜〜っ」

――――ボォォォォォォォォォォ〜〜〜〜ンッッッ！！！――――

「もっぉぉぉぉ〜う許さないゲコっ！！」
殿様が不意に蛙化し、怒りを全面に押し出した表情で立ち上がる。
「ママっ！！ワシ、この失礼女とだけは絶対、結婚しなっ……！！」
『ぎゃあああああ〜っ！！』
「ゲコっ……？」

ママガエルに結婚しない意志を伝えようとした殿様であったが、周りから聞こえてくる激しい悲鳴を不思議に思い、ゆっくりと顔を上げる。

「グガアアアアッ！！」
「……っ！」

見上げたその先にいるのは、巨大な鬼。

「ひえええゲコぉぉぉっっ！！」

殿様がこれ以上ないくらいの、恐怖の悲鳴をあげる。

「へぇ～あれがウワサに聞く、小人界の鬼人・“小鬼”ですかぁ～私、初めて見ましたぁ～」
「あっはっはぁ～っ！何か楽しいねぇ～っ」
「ちっとも楽しくないゲコっっ！！」
感心したように暢気に話している輝矢と楽しげに笑っている松人に、殿様が思わず突っ込みを入れる。
「ひっひっひっ……ヒカルちゃんっ！！」
「ママっ！」
突っ込んでいる殿様のもとへ、息も絶え絶えの様子のママガエルが、少しよろめきながらやって来る。
「鬼人がっ……鬼人がっ……！」
「うんうん、見ればわかるゲコよっ」
少し混乱している様子のママガエルを、宥めるように話しかける殿様。
「このままではカエル御殿がっ……カエル御殿が潰れてしまいますゲコっ！」
悲しげな瞳で必死に訴えかけるママガエル。
「総建築費・五億チュンもかけたゲコにぃぃ～っ！！」
「あっ、そこゲコっ？」
ママガエルが嘆いているのはお金の部分と知り、心配していた殿様が少し間の抜けた表情を見せる。
「うぇ～っ！五億もかかってんのぉ～？うちの朱実の屋敷ですら三億なのにぃ～」
「無駄に派手な造り、してるからじゃないですか？」
「ヒカルちゃんっっ！！」
「うえゲコっ？」
顔を上げたママガエルが、勢いよく殿様の着物の襟元を掴む。
「なっ何ゲコっ……？」
「とっとと鬼人を倒して、このカエル御殿を守るのですゲコっ！」

「えっ！？」
ママガエルの言葉に、殿様が大きく目を見開く。
「んな無茶なゲコっ……」
「あなた、この御殿の殿様でしょうゲコっ！？」
「息子の命と御殿とどっちが大切なんだゲコっ！！」
「御殿ゲコっ！！」
「即答するなゲコっ……」
ゲコゲコと親子の言い争いを繰り広げる殿様とママガエル。
「とにかくっ！何とかするゲコっ！」
「うわっ！とっとゲコっ！」
鬼人の方へと、無理やり殿様を押しだすママガエル。

「むっ無理ゲコっ！わっワシはただのカエルの中のカエルであってっ……！」
「そこで提案なんですけどっ」
「へっ……？」
人差し指を立てて笑顔を向けてくる輝矢に、殿様が少し首をかしげる。
「てっ提案っ……？」
「何ゲコっ？」
殿様の後ろから、ママガエルが聞き返す。

「私があの鬼を倒したら、花嫁も牢屋も見逃してくれませんっ？」
『えっ……？』

輝矢の言葉に、二匹が目を丸くする。

「そっ……それはいい案ゲコっ！」
「ダメゲコっ！！」
「……っ」

輝矢からの提案に、大賛成をする殿様と、気難しい表情で否定するママガエル。
「あなたは我が一族に泥を塗ったゲコっ！牢屋行きは絶対、譲らなっ……！」
「まぁこのまま御殿がぶっ潰れてもいいんなら、それでいいんですけどね」
「わかりましたゲコ」
「だあああああっ！！」
あっさり承諾するママガエルに、思わずズッコケる殿様。

「交渉成立ですねっ」
輝矢は満足げな笑みを浮かべ、頭に被っていたヴェールを取る。

「ではっ」
輝矢が小鬼の方を向き、右耳のピアスを弾く。

「“月器・三日月”っ」

――――パァァァァァーーンッッッ！！！――――

ピアスを弾き、三日月を目覚めさせる輝矢。

「竹取輝矢っ、鬼退治いたしますっ」

「グガアアアアッッ！！」

「……っ！」

爪を振り上げる小鬼の懐へと、三日月を構えた輝矢が飛び出していった。

一方、式場を目指して長い廊下を走る、桜時と油火。逃げ惑っていたカエルの群れが止むと、廊下の先に大きな扉が見えてくる。

「あれかっ！？」

「たぶんっ」

「よしっ！！」

桜時の答えを受け、油火が勢いよく扉の向こうへと入っていく。

――――ドッガァァァァァーーーーンッッッ！！！！――――

「のわあああああっ！！」

桜時が入った途端に、すぐ横の壁に勢いよく何かが飛んできて、壁に大きな穴をあけた。その衝撃音に、桜時が思わず驚きの叫び声をあげる。

「ふぅぅぅぅぅぅぅ～～～っ」

「……っ？」

崩れた壁の穴の中から聞こえてくる声に、桜時が眉をひそめる。

「よっこいしょっとっ」
「んなっ……！！？」

穴の中から出てきたその人物に、桜時が目を見開く。

「かっ……かかかかかかっ……輝矢ぁぁぁっっ！？」
「えっ？」

それは、花嫁衣裳をすっかり黒く汚し、ところどころボロボロになった輝矢であった。桜時の叫び声に、輝矢が振り向く。

「ハチっ……」
「おっ前、何つー格好してっ……！」
「ハチぃぃっ！！」
「ぎゃあああっ！！！」

勢いよく抱きついてくる輝矢に、桜時が悲鳴をあげながら必死に抵抗する。

「半日会えなくて寂しかったですよぉ～っ」
「どうでもいいからとっとと離れろぉぉぉ～っっ！！」

輝矢の言葉に、危機迫った叫ぶ桜時。

「おいっ！」
「……っ？」

聞こえてくる声に、輝矢が不思議そうに顔を上げる。

「見せつけてくれてんじゃねぇーよっ！」
「……。」
輝矢が顔を上げたその先には、しかめっ面の油火が立っていた。
輝矢が油火を見つめて少し固まる。
「アナタも来ていたのですか、ベオ愚」
「ベオ愚言うなっっ！！！」
輝矢の言葉に、油火が勢いよく突っ込みを入れる。
「何故、ハチやベオ愚がここに？」
「それはっ……」
「ずばりっ！助けに来たはずが逆に松人さんに助けられちゃおう作戦を実行するためだっ！！」
輝矢の問いかけに、桜時の言葉を遮り、自信満々に言い放つ油火。
「相変わらずの愚かっぷりですね。いよっ、愚かっ」
「うるせぇぇっっ！！女のくせに女のロマン、否定してんじゃねぇーよっ！！」
バカにしきっている輝矢の言葉に、油火が思い切り怒鳴り返す。

「んでぇ、肝心の松人さんとバカ殿カエルはどこっ……！」
「グガアアアアッッ！！！」
『……っ！』

辺りを見回そうと振り向いた油火の目の前にいるのは、鋭い爪を振り上げ、式場を破壊している、巨大な鬼。その鬼に、桜時と油火が驚きの表情を見せる。

「鬼っ……鬼人っ！？」
「ありゃあ小人族の鬼人・“小鬼”だっ！」
小鬼の姿に、桜時と油火が一気に険しい表情となる。
「それでお前、んなボロボロなのかっ」
「ええ、あの小鬼、意外としぶとくて」

「……っ」

鬼人を目の前にしても、落ち着いて話す輝矢と桜時の横で、ふと表情を曇らせる油火。

「おいっ！松人さんっ……！松人さんはっ！？」

「えっ……？」

必死に問いかける油火に、輝矢が少し驚いた表情を見せた。

「松人さんはどこだよっ！！？」

「……っ」

今まで見たこともないほどに必死な油火。その瞳には不安の色が濃く出ている。

「……すみませんっ……」

「えっ……？」

急に深く俯き、声のトーンを落とす輝矢に、油火が眉をひそめる。

「私がっ……力不足なばかりにっ……」

「かっ輝矢っ……？」

妙にしおらしい輝矢に、少し気味悪がるように表情を引きつる桜時。

「松人をっ……松人をっ……！ううっ……！」

「まさかっ……」

手で瞳を拭う輝矢に、油火の表情が青ざめる。

「松人さんっ……！」

油火が、勢いよく小鬼の方を振り返る。

「グガアアアアアッッ！！」

「てっめぇっ……」

大きく咆哮をあげ、爪を振り上げる小鬼を見て、拳を握りしめる油火。

「松人さんにっ……何しやがったああっっ！！クソ鬼がぁぁっ！！」

――――バコォォォォォーーーンっっ！！――――

「グギャアアアアアッッ！！」

怒り狂った油火が、打出の小槌を思い切り振りきり、小鬼の巨体を吹っ飛ばした。小鬼は激しい叫び声をあげながら、御殿の壁に直撃して倒れ込む。

「すっげっ……」

「まぁまぁやりますねぇ～」
そんな油火に、感心したように声を出す輝矢と桜時。

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」
小槌を下ろした油火が、険しい表情のまま肩で息をする。

「油火っ？」

「えっ……？」
聞き覚えのある声に、大きく目を見開いて、振り向く油火。

「松……人……さんっ……？」

「やっぱり油火だぁ」
油火が振り返ると、崩れた壁の瓦礫の上に、暢気な笑顔を浮かべた松人が、ゆったりと座っていた。油火が振り向くと、松人が軽く手を挙げる。

「どうしてこんなとこにいっ……」

「松人さんっ！！」

「うえっ？」
暢気な笑顔で話しかけようとした松人であったが、勢いよく駆け込んでくる油火に、少し驚く。

「無事かっ!?怪我はっ!?」
松人に駆け寄った油火が、不安げな表情で松人の全身を見回す。
「外傷っ……!ないっ……?じゃあどっかブツけっ……!」
「むっ……無傷だけどっ……?」
「へっ?」
戸惑うように答える松人に、油火が少し固まる。
「てっめぇっ!!クソ女っ!!騙しやがったなっ!!」
眉間に皺を寄せ、輝矢の方を振り返る油火。
「何のことですぅ~?」
「てっめぇっ……!!」
「心配で、胸が張り裂けそうでした?」
「あっ?」
惚ける輝矢に、益々表情を引きつる油火であったが、輝矢の問いかけに、少し眉をひそめる。
「心配で心配で、死にそうになりました?」
「なっ何をっ……」
「アナタが松人にさせようとしていたことですよ」
「……っ」
輝矢の言葉に、油火がハッとしたような表情を見せる。

――――さらわれた姫を助けに来る王子っ…！！くぅ～っ！！これぞベストオブ女の理想っ！――――

――――松人さんっ……！松人さんはっ！？――――

助けられることを望んでいた。自分を死ぬほど心配する松人を望んでいた。

「……。」

“心配する”ということが、こんなに“痛い”ことだと知らぬまま。

「油っ……火っ……？」

「……っ！」

背後から聞こえてくる戸惑うような松人の声に、ハッとした表情で振り返る油火。

「あっ……」

油火が、松人の前ですっかり地の自分を見せてしまったことに、やっと気づく。

「あっ……あぁ～っ！おかしいですわぁ～っ！私っ……！何かに取り憑かれたかのように乱雑な言葉をっ……！」

すぐにしとやかモードとなり、その場を何とか取り繕おうと言葉を繋ぐ油火。

「ホントっ、どうしちゃったのかしらぁ～っ！私っ……！」
「油火……」
「……。」
もう一度松人に名を呼ばれ、油火は作り笑いをやめてそっと俯いた。
「……ごめん、松人さんっ……」
地の声でポツリと言葉を落とす油火。
「私っ……間違ってたっ……」
「……。」
そう呟いた油火を見て、松人が少し目を細める。
「……っ？」
俯いた油火の頬に触れる手。油火がゆっくりと顔を上げる。
「松人さっ……」
「好きだよ……」
顔を上げた油火に、穏やかで優しい笑みを見せる松人。
「飾らない君が……何よりも……」

「……っ」

そんな松人に、油火は大きく目を見開く。

「松人さんっ……」

そして、心から嬉しそうな笑みを見せた。

「ほらっ、ハチっ」

「お前は何も飾ってねぇーだろーがっ」

松人と同じセリフを求めてくる輝矢に、桜時が冷たく言い放った。

「松人さんっ……」

「油火……」

互いに見つめあい、互いの名を呼び合う松人と油火。

「松人さっ……」

「グガアアアアァァァァーーー……」

「だあああああああっ！！！」

気分の盛り上がってきたところに聞こえてくる唸り声に、油火が思わずコケる。

「ったくうっせぇーなぁっ！！今、折角イイとこっ……！！」

「“鬼拡”っ！！」

「へっ……？」

油火が鬱陶しそうに振り向くと、立ち上がった小鬼が何やら叫び、

高々と両手を突き上げた。

――――パァァァァァーーーンッッッ！！――――――

「うげっ……！！」

『なっ……！！？』

見る見るうちに巨大化していく小鬼に、皆が目を大きく見開く。

「グガアアアアアッッ！！！！」

やがて小鬼はカエル御殿の天井を突き破り、体長二メートル、つまり本来の鬼人と同じような大きさまで巨大化した。

第２２章　花嫁はかぐや姫？　★５

『小鬼じゃねぇーじゃんっっ！！！』
「そういう問題ぃ～？」

声を揃える桜時と油火に、松人が少し暢気に突っ込みを入れる。

「そういえば小鬼は通常の鬼人の大きさに巨大化できる特殊な力を持っていると聞いたことがありますねぇ」
「それを早く言えよっっ！！」
「いえぇ～、何せ私も小鬼を見たのは初めてなものですからぁ～」
勢いよく突っ込みを入れる桜時に、暢気に答える輝矢。
「とはいえ、これで終わりですね、蛙国も」
『ちょっと待てゲコぉぉぉ～～っっ！！』
輝矢の諦めきった言葉に、思わず止めに入る殿様とママガエル。
「約束が違うゲコっ！！お前があの鬼を倒すと言ったゲコっ！？」
「そうざますゲコっ！！約束を破ったら、即・牢屋か花嫁ですからねゲコっ！！」
「はいはい、わかってますよぉ～」
二匹に急かされると、面倒臭そうな表情の輝矢が持っていた三日月を地面に突き刺し、ボロボロとなった大きく膨らんだスカートの裾を、動きやすくするために短く破り始める。
「何だよ？お前、鬼を退治してやる約束でもしたのか？」
「ええ、退治したら牢屋行きも結婚もしなくていいって契約にしてもらったんですよ」
「まぁ～たそのパターンかよっ」
スカートを短くし、再び三日月を持つ輝矢に桜時が少し呆れたよ

うな表情を見せる。

「呆れましたか？」

「もう慣れたっ」

「……っ」

素気なく答える桜時に、輝矢がそっと笑みを浮かべる。

「さてとっ」

仕切り直すように三日月を構え、小鬼の方を見る輝矢。

「鬼退治の続きといきましょうかっ」

「グガアアアアアッ！！！」

「……っ！」

表情を鋭くした輝矢が、巨大化した小鬼の元へと走り出していく。

「グガアアアアアッ！！“鬼爪”っ！！」

――――ドスンっ！！ドスンっ！！ドスンっ！！――――

『どわあああああっ！！』

巨大化した小鬼の柱のように巨大な鬼爪が、式場の壁に突き刺さ

り、まるで地震でも起こったかのような振動を響かせる。その振動に、ふらつく桜時や油火たち。

「クっ……！」

小鬼の方に駆け込んで行こうとしていた輝矢も、少しバランスを崩す。

「三日月っ」

バランスを崩しながらも、三日月を構える輝矢。

「“水月”っ……！」

――――バァァァァァァーーーンッッッ！！！――――

輝矢の放った無数の水の刃が、小鬼の顔面へと直撃する。

『やったゲコっ！？』

思わず身を乗り出す殿様とママガエル。

『……っ！』

「グガァァァァーーっっ……」

しかし、衝風が止むとそこには、輝矢の水月を直撃したというの

に、まったく堪えた様子のない小鬼が立っていた。輝矢たちが皆、表情を厳しくする。

「きっ……きいてねぇっ」

桜時の額から汗が流れ落ちる。

「どうすんだよっ!?輝矢っ!」

「万事休すじゃないですか?」

『いやだゲコぉぉぉ〜〜っっ!!!』

「万事休すって……」

さすがの輝矢も手の打ちようのないこの状況に、殿様の叫び声を聞きながら、気難しい表情を見せる桜時。

「んん〜、さすがの輝矢さんもお手揚げみたいだねぇ」

「……っ」

その様子を見ながら、こちらも厳しい表情を見せている松人と油火。

「まぁあれだけ大きさが違っちゃねぇ」

「……っ?大きさっ……?」

松人の言葉に、何かを思いついたような表情となる油火。

「ああぁぁぁぁっ!!」

「うわっ」

突然、大きな声を出す油火に、松人が思わず耳を塞ぐ。

「どっ……どうしたのっ?油っ……」

「そうだっ!大きさだっ!!」

「……っ?」

油火の言葉に、松人は目を丸くした。

「グガァァァーっっ……」
『……っ』

少し屈んで、口にエネルギー波を溜め始める小鬼。

「鬼口っ……」
「マズいぞっ！輝矢っ！あの大きさで鬼口を撃たれちゃ、みんな一瞬で塵になっちまうっ……！」
「いやだゲコぉぉ～～っっ！！結婚するまで死にたくないゲコぉぉぉ～～っっ！！」
輝矢と桜時の言葉に、もう混乱した様子で頭を抱え込む殿様。

「どうすればっ……」
「構えろっ！！クソ女っ！！」
「……っ？」

どうすることもできないでいる輝矢に、聞こえてくる乱雑な声。

「愚か女っ……？」
「……っ」

輝矢が振り向くと、そこには、打出の小槌を構えた油火の姿があ

った。

「あっ！そうかっ！」

それを見て、桜時も何か気付いたように声を出す。

「輝矢っ……！」

「ええっ」

桜時の呼びかけに頷き、輝矢が小鬼を見上げ、三日月を掲げる。

「“月器っ……」

三日月を構え、目つきを鋭くする輝矢。

「“鬼口”っっ！！ガアアアアアアアッッ！！」

『……っ』

そこへ、ついに小鬼が鬼口を放つ。

「……っ打出の小槌っ……！」

小槌を高々と掲げる油火。

「“大きくなぁぁぁ～～れ”っっ！！」

――――スゥウウウウウウウウウっ……！――――

「グガっ……！？」

油火が小槌を振ると、輝矢がどんどん巨大化していく。

「十六夜”っ！」

――――バァァァァァァァァーーーンッッッ！！！――――

「グガァァァッッ！！」

巨大化した輝矢の十六夜が、大きな鬼口を、小鬼へと跳ね返す。

「グっ……グウっ……！」

「“月器・三日月”っ」

「ウウっ……！？」

鬼口を喰らい、小鬼が苦しんでいる中、輝矢が十六夜から再び三日月へと変形した月器を構える。

「竹取輝矢っ……鬼退治いたしますっ……！」

三日月を構えた巨大輝矢が、小鬼の懐へと駆け込んでいく。

「グっ……！」

「……っ！」

怯む小鬼に、輝矢が三日月を振り下ろす。

――――・・・・・・・・・っっっ！！！――――

「……っ！ギャアアアアアッッ！！」

三日月に斬り裂かれ、巨大小鬼は、激しい断末魔をあげながら、煙となって掻き消えた。

「……。」

消えていく煙を確認し、輝矢がゆっくりと三日月を下ろす。

「ハチぃ～っ！見てくれましたぁ～？私の雄姿ぃ～っ！」

「だあああっ！！走んなっ！！今、お前、巨人なんだからなっ！！」

桜時よりも何十倍もある大きさのまま、駆け込んでくる輝矢に、必死に静止を促す桜時。

「ったくっ」

「あんな強暴女、ワシの手には負えないゲコっ……」

「……っ？」

疲れたように肩を落とす桜時の横で、殿様も疲れた表情を見せながらそう呟く。
「お前に返すゲコぉ～っ」
「……っ」
そう言って、殿様が桜時の横を去っていく。
「仕方ねぇっ」
そっと微笑む桜時。

「返されといてやるかっ……」
「ハチぃぃぃ～～～っ！」

そう言って、桜時は巨大輝矢を見上げた。

「姉上ぇぇぇっ!!兄上ぇぇぇぇっ!!」
「……っ？一寸っ」
油火が輝矢を元の小人の大きさへと戻していると、そこへ一寸がやって来た。
「ご無事でっ!?」
「うん～」
「国の連中は？」
「皆、無事助け終えたでござるっ！」
「そうかっ」
一寸の答えに、油火がホッとしたように笑う。

「輝矢ぁぁぁ～～んっっ！！」
「んっ？」
一寸とともに、さらわれた燕国の女の子たちを助けに行っていた門貴と由雉も、一寸より少し遅れて、式場へと現れる。
「輝矢んっっ！！俺のために純白の花嫁衣裳をっ……！！今、俺がしっかりと連れ去っていっ……！！」
「誰がですかっ」
「ぎゃんっっ！！」
駆け込んできた門貴を、元の大きさに戻った輝矢が、容赦なく踏み潰す。巨人のままであれば、大惨事となっていただろう。
「あぁぁっ……純白衣装で踏み潰されるのもまた格別っ……」
「それ、ただの変態コメントだから」
輝矢に踏み潰されながら呟いている門貴に、由雉が軽蔑したような目を向ける。
「ってかこれ、何？どうなってんのぉ？」
到るところが破壊された、ひどい有り様の式場内を見て、戸惑うように問いかける由雉。
「まぁ色々とありまして」
「何？結婚やめさせるために暴れたの？」
「人聞きの悪いことを言わないで下さい」
「半分くらい当たってんじゃねぇーかっ」
シレっと答える輝矢に、軽く突っ込みを入れる桜時。

「はぁぁぁ～っ……助かったはいいもののっ……結局、御殿はボロボロゲコっ……」
「ママっ……」
がっくりと座りこむママガエルに、そっと駆け寄る殿様。
「まぁまぁお二匹ともっ」
『……？』

明るい声に二匹が振り返ると、そこにはゲロロが立っていた。
「生きていれば御殿くらい何度だって立て直せるゲロっ！そう悲観しちゃダメゲロっ！」
「そうゲコねっ……」
「そうだゲコなっ……」
ゲロロの言葉に、しみじみと頷く殿様とママガエル。

「って、何、偉そうに言ってるざますゲコぉぉぉっっ！！」
「そうだゲコっ！！だいたいお前、今までどこにいたゲコぉぉっ！！」
「ひえええぇぇぇ～ゲロぉぉぉ～～っっ！！！」
怒った殿様とママガエルに追いかけられ、逃げ惑うゲロロ。

「やぁ～っと終わったねぇ～」
「ああっ！」
「……っ？？」
松人の言葉に、しとやかになることなく頷く油火を見て、一寸が少し首をかしげる。

「……っ」
そんな三人の様子を横目に見ながら、そっと笑みを浮かべる輝矢。

「お前っ、油火を心配させるために、松兄連れて、わざとさらわれてったろっ？」
「何のことです？」
「……たくっ……」
惚ける輝矢に、少し呆れた表情を見せながら、その場に座る桜時。

「心配する側の気持ちをわからせるには丁度いいかと思いましてっ」
桜時の横へと座り込む輝矢。
「……お前こそ、わかってんのかよっ……」
「えっ……？」
小さく呟かれた桜時の言葉に、輝矢が少し目を丸くする。
「心配させました？」
「うえっ！？あっ！いやっ！そういう意味じゃっ……！」
「ただいまっ……」
「……っ」
輝矢の言葉に、必死に否定しようとしていた桜時が、言葉を止めた。
「ただいま戻りました、ハチっ……」
「……っ」
輝矢の笑顔に、俯く桜時。
「……おかえりっ……」
こうして、輝矢たちの小さな国での大冒険が終わった。

翌朝。燕国入口の門前。
「えぇ～っ？もう行っちゃうのぉ～っ？桜時くぅぅ～～んっ」
そう言って悲しげな表情を見せるのは松人。その横には油火と一寸の姿もある。三人は、旅立つ輝矢たち一行を見送ろうとしているのである。
「そうやそうやぁ～っ！もうちょいおろうやぁ～っ！輝矢ぁぁぁ～～んっ！」
松人と同じように悲しげな顔を見せているのはモンキ。
「せっかく可愛い小人ちゃんたちが燕国に帰って来たっちゅ～のにぃ～」
「どうぞお一匹でお残り下さい」
「ぎゃびぃぃぃーーんっ！」
淡白な輝矢の反応に、モンキが大きくショックを受ける。
「そういえば蛙国との仲はどうなったのぉ～？」
「今回のことですっかり反省したみたいで、きちんと謝って和解を申請してきたでござるよっ！」
「ふぅ～ん」
嬉しそうに話す一寸に、聞いておきながら、興味なさそうに頷くユキジ。
「もっと桜時クンでからかって遊びたかったのにぃ～」
「さっ、とっとと行こっ」
心から残念そうにしている松人に、旅立ちの決意を強くするハチ。
「松兄っ」
「ん～っ？」
ハチの呼びかけに、松人がしゃがみ込んでハチと目の高さを合わせる。
「頑張れよっ」
「へっ？」

ハチの言葉に、目を丸くする松人。
「あんな家族じゃっ、心配かけられっぱなしだろうけどさっ」
「国を救ってやったんですから、謝礼金くらい出したらどうです？」
「鬼人倒せたのは、私の小槌があったからだろうがっ！！」
ハチの見つめる先には、輝矢と何やら険悪なムードになっている油火の姿があった。
「まぁとにかくっ、頑張れよっ！」
「うんっ」
もう一度頑張れと言ったハチに、松人が笑顔で頷いた。
「けどぉ～っ……」
「……っ？」
言葉を付け足す松人に、ハチが首をかしげる。
「“こっちの家族”もぉ～心配なんだけどなぁっ」
「えっ……？」
優しく微笑んだ松人の手が、ハチの頭を撫でる。
「松兄っ」
「気を付けてねっ」
「……うんっ……」
家族の温もりある言葉をくれた松人に、ハチは少し照れながら小さく頷いた。
「さて、そろそろ行きますか」
『おぉ～っ』
輝矢の言葉に、三匹が頷く。
「もう二度と来んじゃねぇーぞっ！クソ女っ！」

「金輪際、私の前に現れないで下さいねっ、愚か女っ」
「ハっ！」
「……っ」
互いに毒づき合いながら、やがて笑顔を向け合う輝矢と油火。
「打出の小槌っ」
油火が打出の小槌を構える。
「“大きくなぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～～れ”っっ！！」
――――シャンっ！シャンっ！シャンっ！シャンっ！――――
小槌に振られ、輝矢たちが元の大きさへと戻っていく。
「皆さぁぁ～んっ！お達者でぇぇ～っ！」
「桜時くぅぅぅ～んっ！たまには雀にも帰って来るんだよぉぉ～～っ！」
「じゃあなぁ～～っ！クソ女ぁぁぁぁ～～っ！」
去っていく輝矢一行を、油火たちは大きく手を振って、見えなくなるまで見送った。
「さてっ、帰ろうか」
「おうっ！一寸っ！」
「はいでござるっ！！」
三人は寄り添い合いながら、門を潜り、燕国へと戻っていった。

第２２章　花嫁はかぐや姫？　★５（後書き）

明日から田舎に帰りますので、５月５日まで更新をお休みさせていただきます。
皆さまも良いゴールデンウィークを。

第２３章　砂漠の蜃気楼　☆１（前書き）

ゴールデンウィークも終わり、更新再開です。

第２３章　砂漠の蜃気楼　☆１

御伽界・西部。

「結局っ、鬼人化した人間のことっ……何もわからなかったわねっ……」

広い草原を走る黒いオープンカーの運転席に座っているのは、水色の長い髪を風になびかせたリンゴ。

「ああ……」

リンゴの言葉に答えたのは、助手席に座るゴンであった。二人は虎国での鬼人化人間の調査を終え、輝矢たちに遅れるようにして龍国へと戻る道の途中なのである。

「鬼人化した人間を元の人間に戻す方法もっ……まだ見つかってないみたいっ」

「ああ……」

「……っ」

適当な返事しか返さないゴンに、リンゴが少し眉をひそめる。

「ちょっと！さっきから“ああ”“ああ”って、人の話、ちゃんと聞いてんのっ！？」

「ああ……」

「……。」

またしても適当な返事を返すゴンに、リンゴは諦めたように肩を落とす。

「はぁっ……もういいわっ」

そう呟き、前を見て運転に集中するリンゴ。

「……。」

――――ゴンさん言われてたよっ？今回の件、あの女が関わってい

るかも知れないって……――――

「……っ」

思い出されるイチゴの言葉に、リンゴが少し目を細める。

「ねぇっ、ゴンっ……」

「ああっ？」

「……何でもないっ……」

「何だよっ、そりゃっ」

複雑な心を抱えた二人を乗せるオープンカーは、龍国への道を走り続けた。

その頃。御伽界・南南東部。『御伽砂漠』地帯。

御伽界唯一の砂漠地帯にして、かの大国・龍国をも凌ぐ面積を誇る御伽砂漠。そこは季節に関係なく、年中太陽が日を射す、どこの南国よりも熱い場所であった。

『あぢぃぃぃぃぃ～～～っ……』

その御伽砂漠で、干からびたカエルのように潰れた声を出す、一匹のイヌと一匹のサル。

「あかんっ……俺はもう無理やっ……」
「門貴っ……！」
膝をついたサルに、不安げな表情のイヌが駆け寄る。
「ダメだっ！諦めるなっ！ほらっ！立てっ！」
「俺のことはもうええっ……お前だけでも生き延びろっ……桜時っ……」
「門貴っ……」
まるで最期を悟ったかのようなサルの言葉に、イヌは悲しげな瞳を見せる。
「そんなっ……！門貴っ……！」
「すまんなぁっ……桜時っ……」
イヌの必死の訴えに、サルは弱々しい笑みを向けた。
「せめてっ……せめて一滴でも水を飲めればっ……」

――――ザッパァァァァーーンっ！！――――

『……。』

そんな一滴の水を望んだサルに、勢いよく降り注ぐ大量の水。ズブ濡れになったサルの姿に、それを見ていたイヌとサル自身が固まる。

「これでいいですか？」

そう、どこか呆れた表情で問いかけたのは、輝矢であった。

「まったく、水が飲みたくなるたびに、変な小芝居うつのはやめて下さい」
「ぷぅ～っ！生き返ったぁ～っ！」
全身に水を浴びたサル、というかモンキは、本当に生き返ったように笑顔で大きく伸びをする。
「飲みたいのなら飲みたいと、そう言えばいいでしょう？そうすればいつでも水くらい差し上げますから」
「輝矢んっ！もう一杯っ！」
「却下」
「うおっ！いきなり前のセリフ翻したっ！！」
「ハチには口移しで差し上げますからねっ」
「いらねぇーよっ！！いや、いるけどっ……とにかく普通に水をくれっ！！」
笑顔を向ける輝矢に、断りつつも水は要求するイヌ、というかハチ。そう、輝矢たち一行は、松人や油火のいる小人たちの国・燕国を旅立ち、龍国に戻るつもりが、何故か御伽砂漠に来しまったである。

「“水月”っ」

輝矢が小さな水月を二つ生みだし、それぞれを“ハチ用”“サル用”と書かれたお椀の中へと入れる。水のたっぷり入ったお椀を受け取るハチとモンキ。

「ゴクゴクゴクゴクっ……！ぷっはぁぁぁ～っ！」
「この世に水というものが存在したことを、俺は神に感謝するでぇっ！」
「大袈裟だろっ……」
飲み干したお椀を片手に天へと向かって叫ぶモンキに、ハチが冷ややかな視線を送る。

「でもまぁ確かに、今日初めてお前に感謝した」
「随分と時間がかかりましたねぇ～」
ハチの言葉に、軽い笑みを浮かべる輝矢。

砂漠を彷徨い始めてもう三日になる。手持ちの水はもちろん底をつき、輝矢の“水力”がなければ、ハチたちはとっくに干からびていたであろう。

「かっぐやぁぁぁぁ～～んっ！やっぱりお前は俺にとっての天女様っ……！！」
「水分補給もしたことですし、とっとと進みますよ、サル」
「ううっ……」
モンキの軽口をあっさりと無視して、先の見えぬ砂漠へと足を進める輝矢。
「進むって……ホントにこっちで道あってんのかよっ……？」
「さぁっ」
「適当かいっ！！」
右も左も、前も後ろも、見渡せど見渡せど砂漠が広がっているばかり。方角すらわからないこの状況で、ズカズカと何の根拠もなく進んでいく輝矢に、ハチは勢いよく突っ込みを入れた。
「ったくっ、何だってこんなことにっ……」
「そうですよ。誰です？こんな砂漠になんか連れて来たのはっ」
「えぇっと……」

――――三日前。
「えっ？龍国ってこっちの道じゃねぇーのっ？」
「いえ、この砂漠を抜け出た方が近道になるんです」
目を丸くして問いかけたハチに、自信満々の笑顔で答える輝矢。

「そっそうなのかっ……？」
少し疑うように聞き返すハチ。
「ええっ、というわけで砂漠へ向かいましょうっ」

「……って、お前じゃねぇーかっ！！」
「あっ、そうでしたっけ？」
三日前の出来事を鮮明に思い出したハチが、輝矢に勢いよく怒鳴り上げる。その声に、とぼけた表情を見せる輝矢。とにかくまぁこういった状況で、輝矢一行は砂漠を遭難中なのである。

「おぉ～いっ」
『……っ？』
「おっ！ユッキーやっ！」
輝矢とハチが振り返り、モンキの指差した上空を見る。すると、何も遮るもののないキレイな青空の中から、一羽の青いキジが、こちらへと下降してくる。
「ふぅ～っ！」
「ご苦労様です」
砂漠へと降りっ立ったキジに、先ほど同様、水をお椀に入れて差し出す輝矢。
「ゴクゴクゴクっ……！ぷはぁぁぁ～っ！」
水をたらふく飲んだキジ、というかユキジが満足げな笑みを浮かべる。
「で、何か見つかりましたか？」
「うぅ～ん～っ、何にもなかったぁ～っ」
輝矢の問いかけに、ユキジが即答する。

「使えないキジですね。飲んだ水を吐き出しなさい」
「無茶言わないでよっ……」
輝矢の横暴極まりない言葉に、ユキジが勢いよく表情をしかめた。
「けっこう探し回ったんだよぉ？それでもないもんはないんだからしょうがないでしょっ」
ユキジが少し怒ったように言い放つ。
「はぁぁ～っ……俺、まだ絶世の美女ともお知り合いになってへんのに、こんな砂漠で干からびて死ぬんかぁ～」
「サルよ、安らかに眠れっ……」
「えっ！？ここって“諦めずに頑張りましょう”とか言うとこちゃうのんっ！？」
「私たちは諦めずに頑張りますので」
「いっやぁぁ～っ！俺も頑張るから見捨てんといてぇぇぇ～～っ！！」
「はぁっ……」
輝矢とモンキのくだらない掛け合いを聞きながら、深々と肩を落とすハチ。
「このクソ熱ちぃー中、元気なもんだぜっ……」
「ホント、繊細に出来てなくって羨ましい限りだよねぇ～」
そんな二人を横目に、呆れたように言葉を交わすハチとユキジ。
砂漠を彷徨い始めて三日。いくら水分の補給はできるとはいえ、皆の体力はもう限界にきていた。
「そろそろ本当に何とかしないと、このままじゃ俺達、砂漠で野垂れ死んじまうぞっ？」
「これぞホンマの“犬死に”やなっ」
「うっせぇーぞっ！サルっ！！」
「大丈夫ですよ、ハチ。必ず二人で生き延びましょう」

「二人ほど数に入ってないんだけど……？」
限界は近いというのに、当の本人たちにはまるで緊迫感がない。
これがこの状況を打開できない原因の一つでもある。
「まぁとにかく先に進っ……」
――――ドドドドドドドドドっ……！！――――
「んっ？」
無音のはずの砂漠地帯で聞こえてくる、激しく走る足音。輝矢たちが不思議そうに振り返る。
『って、うえぇぇぇぇぇぇっっ！？』
砂漠の果てから、輝矢たちのいる方へと猛然と駆け抜けてくるのは、背中の二つのコブが特徴的な、妙に切羽詰った表情を見せている一頭の“ラクダ”。
「んっ……？なっ……！！」
ラクダがやっと前方に立っている輝矢たちに気づく。
「ちょっ……！どくだぁっ！らくだぁっ！どくだぁぁぁっっ！！！」
もう勢いを殺しきれないのか、ラクダが必死に輝矢たちに避けるよう叫ぶ。

『うわぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～っ！！』

一斉に避難する三匹。

「……。」

しかし、輝矢はその場からまるで動こうとしない。

「かっ輝矢っ……！？」

避難したハチが、焦るように輝矢の方を振り向く。

「どくだぁっ！らくだぁっ！どくだぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

動こうとしない輝矢に焦りながらも、真正面から突っ込んでいくラクダ。

「ふぅっ……」

輝矢がゆっくりと右足を振り上げる。

「まさかっ……」

嫌な予感を感じ取るハチ。

「よっ」

――――ドッガァァァァーーーーンっ！！――――

「らくだあああああああああっ！！！」

輝矢の振り下ろした右足に、勢いよく突っ込んで来ていたラクダが、一瞬でスピードを殺され、苦しげな叫び声とともに、砂漠の海へ深々と沈み込んだ。

「つかぬことをお聞きしますが、砂漠を出るにはどっちへ行けばいいですかね？」

「……つかぬことを聞く態度じゃないだっ……」

輝矢の問いかけに、ラクダは弱々しく呟いた。

数分後。

「痛ちちちちっ……」

「はい、これで良しっ」

輝矢に踏み潰され、三つになってしまったラクダの背中のコブの一つに、湿布を貼るユキジ。力なく砂漠に座り込んでいるラクダは、まだ痛むようで表情をかなり引きつっていた。

「まったくっ……どういう教育してるんだぁっ？」

『いや、ホントすみません』

非難するように言い放つラクダに、素直に頭を下げるハチとモンキ。

「ちょっと道を聞いただけじゃないですか」

「どこがちょっとなんだぁっ！危うく死にかけただぁっ！」

平然と言い放つ輝矢に、ラクダが思いきり怒鳴りつける。
「とにかくもう一度砂漠に沈められたくなかったら、とっとと道をっ……」
「だあああ！まじホント悪かったっ！俺、桜時っ！んで、こっちが輝矢に門貴に由雉っ！みんなで退治屋して回ってんだっ！」
道を脅し聞こうとする輝矢の言葉を遮り、何とか誤魔化してラクダに気安い笑顔を向けるハチ。

「退治屋っ……？」
「……っ？」

退治屋という言葉に妙に敏感に反応するラクダに、輝矢が少し眉をひそめる。

「お前はっ？」
「……っ」

――――ボォォォォォォ～～～ンっ！――――

ラクダが少し表情をしかめた後、その体を白い煙に包ませる。

『……っ』
目を見張るハチたち。

「おいら、アリババ。ラクダの獣人だぁ」

次の瞬間、白い煙の中から現れたのは、茶色く長い髪を後ろで束ねた、力強い真っ赤な瞳の印象深い、まだ十三，十四歳くらいの幼い少年であった。民族のような派手な柄の軽装に、額には手ぬぐいを巻き、そして腰には少し剣先の曲がった短刀をつけていた。

「そっそうか！アリババ！実は俺達、砂漠で迷っちゃって、それでだなぁっ」
「もうじき日も暮れるだぁ。夜の砂漠は余計に迷うから、今夜はおいらたちの村で泊まって行くといいだよ」
「へっ？」
輝矢の暴力に怒っていたアリババを説得しようと試みたハチであったが、アリババがあっさりと欲しがっていた答えをくれたので、少し間の抜けた声を出す。
「明日、日が昇ったら、おいらが砂漠の出口まで道案内するだぁからよ」
「そっそうかっ！？サンキューっ！」
「助かったでぇ～っ！アリバっちっ！！」
アリババの親切な言葉に、嬉しそうな笑顔を見せるハチとモンキ。
「何か……上手くいきすぎじゃない？」
「……ええ」
小声で呟くユキジの言葉に、輝矢が真剣な表情で短く頷いた。
「じゃあとっとと行くだぁ。おいらの村はすぐ近くだぁから」
「すぐ近くっ……？」
アリババの言葉に、ユキジが眉をひそめる。
「ウっソだぁ～っ、さっきこの辺り一帯は空から見て回ったけど、村なんて一つもっ……」
「普通の人間には見えないようになってるだぁよ」
「えっ？それってどういうっ……」
「まぁ付いてこれば、わかるだぁよっ」
「……っ？」
目を丸くするユキジに、アリババはどこか得意げな笑みを浮かべた。

ということで、アリババの案内の下、砂漠を歩くこと数分。

「着いただぁよっ」

明るい声とともに、足を止めるアリババ。

『へっ？』

一斉に間の抜けた声を出すハチたち。

「着いたって……何もねぇーじゃねぇーかっ！！」

思わず声をあげるハチ。

それもそのはず、アリババの指差した先に広がっているのは、今までと何ら変わりのない一面の砂漠地帯。村どころか、人っこ一人見当たらない。

「ほらねぇ～言ったでしょ？村なんて一つもなかっ……」

「言っただぁろ？普通の人間には見えないようになってるだぁって」

「えっ……？」

ユキジに再びそう言い放ち、アリババがまるで見えない壁にでも

触れるかのように、両手を前へと突き出す。すると、アリババの両手から赤い光のようなものが放たれ始めた。

「“開け……ゴマ”っ！」

――――ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴっっ……！！――――

『なっ……！！？』

アリババが呪文のような言葉を放つと、何もなかったはずのそこに、岩で出来た巨大な壁が現れ、その壁が道を開けるように、左右へゆっくりと開いていく。その光景に、目を見張る輝矢たち。

「こっこんなことがっ……」

「さっ、入るだぁよ」

唖然としているハチたちに、アリババが開いた岩壁の先に続いている道を進める。戸惑いながらも、その道に順に足を踏み入れていく輝矢たち。

「“閉じろ、ゴマ”っ」

――――ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴっっ……！！――――

『……っ』

全員が中に入ると、最後にアリババが中へと入り、振り返って、再び岩壁へと呪文を唱える。すると、岩壁は先ほどとは逆の動きで、ゆっくりと閉じていった。岩壁が閉じると、周囲の砂漠地帯の景色

が消え、暗い何もない空間が広がる。

「さっ、こっちだぁよ」

素早く松明に火を灯し、輝矢たちに道を示すアリババ。

「この空間……結界系か何かの力で作ったものですね……？」

「えっ？あっ、まっ、まぁそんなとこだぁ」

輝矢の問いかけに、アリババが少し上ずった声で答える。

「随分と手が込んでいますが……そこまで警戒しなければならないようなことでもあるのですか……？」

「べっ別にっ、単なる砂嵐避けだぁよっ」

「……。」

どこか白々しい笑顔を見せるアリババに、輝矢はそっと目を細めた。

「あっ！着いただぁっ！」

『……っ？』

アリババの声に、輝矢たちが一斉に前方を見る。

『……っ！』

大きく目を見開く輝矢たち。

「こっこれはっ……」

長く暗い空間を抜けた先に広がっていたのは、大きくて美しいオアシスの広がる、小さくも穏やかな村の風景であった。真っ青な空に、ヤシの木も緑がよく映えている。砂漠地帯とはまるで違う、どこかの楽園か何かのようであった。

「結界の中にこんな村がっ……？」
『ようこそ、おいで下さいましたっ！！』
「んっ……？」
戸惑いながら村を見回していたハチたちが、その大きな声に振り向く。
『砂漠の楽園・オアシスの村“ラクダット”にようこそっ♪』
「うっひょおおおぉぉぉぉぉ～～～っっ！！！」
輝矢たちを出迎えたのは、オアシスの中や、その周囲に腰を下ろしている、美しい水着美女の集団。その光景に、モンキが奇声をあげる。
「ここそまさにっ……！俺の描いてた楽園そのものやぁ～～っ！！ばんざぁぁぁ～いっ！！」
「あっ！おいっ！」
「ひゃっほぉおおおおおお～～～うっ！！」
ハチが止めるのも聞かず、モンキはあっという間にオアシスの中へと飛びこんでいってしまう。
「あのバカザルっ……」
「バカは放っておくのが一番ですよ、ハチ」
呆れた表情を見せているハチに、冷たい笑顔でキッパリと言い放つ輝矢。
「ホントホントぉ～ズズズぅ～っ」
「とか言いつつ、何ヤシの実ジュースいただいちゃってんだよっ！お前はっ！！」

水着美女の一人から、割りたてのヤシの実ジュースを貰い、満足そうな笑顔で飲んでいるユキジに、ハチが怒鳴りあげる。
「犬コロには骨っこもあるよぉ～っ！」
「おっ！まじっ！？」
モンキやユキジを非難していたハチであったが、村の少年たちが差し出した骨っこに、一気に顔色を変える。

「やれやれっ……」
「アリババ」
『……っ？』
三匹の単純さに肩を落としていた輝矢が、アリババを呼ぶ声に、アリババとともに振り向く。

「兄さんっ！」
「兄さん？」
「おかえり、アリババ」
「おかえり」

輝矢の振り返った先に立っていたのは、ターバンを巻いた青年と、片手に金色のランプを持った青年。二人とも瞳の色や顔つきがアリババとよく似ていた。

「ただいまだぁっ！兄さんっ！」
「アリババ、そちらは？」
ターバンの青年が、輝矢の方を見て問いかける。
「ああ、こちらは竹取輝矢さんだぁ。退治屋をしながら世界中を旅してるらしいだぁ」
「退治屋っ……」
「……っ」
アリババ同様に、退治屋という言葉に敏感に反応するターバンの

青年とランプの青年。
「……。」
その二人の様子に、輝矢はまたしても眉をひそめる。
「初めまして、アリババの兄のシンドバッドと申します」
「同じく、アラジンです」
「どうもっ……」
自己紹介をするターバンの青年・シンドバッドと、ランプの青年・アラジンに、あまり愛想のない返事をする輝矢。
「砂漠を歩いてさぞお疲れでしょう。今日はこの村でゆっくり休んでいくといい」
シンドバッドが輝矢へ笑顔を向ける。
「この村は、誰もが楽しい夢を見られる“楽園”……ですから……」
「……っ」
どこか意味深な言葉を笑みを見せるシンドバッドに、輝矢は怪訝そうに目を細める。
「アナタ方はっ……」
「ラクダット名物っ！“月見団子”っ！おいしいですよぉ～っ！」
「月見団子っ！？」
三兄弟に何かを問いかけようとした輝矢が、オアシスの方から聞こえてくる声に、敏感に反応する。
「月見団子っ……！私の月見団子はどこですっ……！？」
必死の表情で、輝矢がオアシスの方へと向かっていく。

『……。』

入口に取り残される、アリババたち三兄弟。

「単純な奴らだっ……ホントにあいつら退治屋なのかっ？アリババ」

「本当だぁよっ！しかも桃タローの弟子のっ！超有名な奴らだぁよっ！」

「桃タローの弟子っ？」

「それはいいっ……」

アリババとアラジンのやり取りを聞いていたシンドバッドが、冷たく微笑む。

「あの御方もっ……さぞお喜びになるだろうっ……」

オアシスで楽しむ輝矢たちを見ながら、シンドバッドが呟く。

「うっひょぉぉぉ～～～っ！！水着美女さいこぉぉぉぉ～～～っ！！」

「ズズズゥ～っ、ヤシの実ジュース、もう一杯ぃ～」

「骨っこっ！骨っこっ！」

「私の月見団子っ……」

オアシスの楽園に浮かれきった輝矢たちに、危機が迫ろうとしていた。

第２３章　砂漠の蜃気楼　☆１（後書き）

２３，２４章は続きものとなります。
第２部、最後のお話です。
次回もよろしくお願いします。

第２３章　砂漠の蜃気楼　☆２

その日・夜更け。
月明かりの照らす、夜の楽園“ラクダット”。

「んん～っ……幸せっ……」
水着美女に膝まくらをしてもらいながら、緩みきった笑みですっかり眠りこけているモンキ。
「もう一杯ぃ～っ……」
「もうっ……食べれねぇっ……」
オアシスのすぐ横の砂浜では、それぞれヤシの実と骨っこを抱えたハチとユキジが、気持ち良さそうに眠りについていた。
「月見……団子……」
まだ両手に山程の月見団子を持ちながら、ヤシの木に寄りかかるようにして眠っている輝矢。

「よく眠ってる……楽しい夢でも見てるみてぇだな……」
「きっとこの楽園の続きを夢見てるんだぁよっ」
オアシスで眠る四人の様子を見ながら、怪しく微笑むアラジンとアリババ。
「そうか……ならば現実の“楽園”は、ここまでとしよう……」
二人の中央に立つシンドバッドが、そう言って指を鳴らした。

――――スウウゥゥゥゥゥゥゥ～～～～っっっっ……――――

シンドバッドの指の音が合図になっていたかのように、モンキに膝枕をしていた美女が、ユキジの抱えていたヤシの実が、ハチの持っていた骨っこが、そして輝矢の月見団子が消えていく。それどころか、村やオアシスさえも消え、消えたそこには、一面の砂漠地帯が広がっていた。

「よし、アラジン、アリババ、金目の物を奪ったら、こいつらをあの御方の元へっ……」

「一応言っておきますけど、金目の物なんて持っていませんからね」

「何っ……？」

『……っ！』

聞こえてくるはずのない声に、シンドバッドや、アリババたちが驚いたように振り返る。

「お前っ……！」

「ふぅ～、たらふく食べたあの満腹感も幻ですかぁ」

三兄弟が振り返ると、何もなくなった砂漠地帯の真ん中に、腹部を擦りながら、残念そうな表情を見せている輝矢の姿があった。

「あっ、一応言っておきますけど、“金目の物なんて持ってない”というのは、自慢ではないですよ？」

『わかっとるわっ！！』

付け加える輝矢に、三兄弟が一斉に突っ込みを入れる。

「それにしても……随分と美味しい蜃気楼を見させていただきました……」

『……っ』

輝矢が睨みつけるように見ると、三兄弟は少し怯むように一歩退く。

「何でっ……！」
「何でぇ～っ？ってゆ～か、人の騙し方、下手すぎぃ～っ」
『……っ！』
そう言って起き上がるユキジに、三兄弟がまたも驚きの表情を見せる。
「どうせ騙すんなら、ボクみたいに可愛くそれとなぁ～く、やんなきゃっ」
「それはそれで悪質だけどなっ……」
『なっ……！！』
ユキジに突っ込みを入れながら、呆れた表情で起き上がるハチ。
「いっイヌまでっ……」
「当ったり前だろっ！だいたい、こんな初歩的な罠に引っ掛かる奴なんてっ……」
「んん～っ……！水着美女ぉぉぉぉ～～っっ……！」
「いたよっ……」
まだばっちり夢の中のモンキに、ハチが少し頭を抱える。
「おいっ！起きろっ！バカザっ……！」
「とっとと起きなさいっ」
――――バギコォォォォォォォォーーーンっっ！！――――
「ぎゃあああああああああああっっっ！！！」
ハチがモンキを起こそうと大きな声を出したが、横から割って入って来た輝矢が、眠っているモンキを勢いよく蹴り上げた。激しい悲鳴とともに砂漠の夜空に舞い、そして落下してくるモンキ。
「ぐぷっ……！！」

落ちたモンキが、力なく砂漠に沈む。

「お前なぁ～っ、門貴が死んだらどうすんだよっ？」
「それまでの男だったということです」
「ホントに永眠したんじゃなぁ～い？」
沈んだモンキを、輝矢たちが見つめる。

「ぷっはぁぁぁぁぁぁぁ～～～っっ！！！」
『……っ』
口から砂を吐き出して、勢いよく起き上がるモンキ。
「やっぱ輝矢んのモーニングキックは爽快やなぁ～っ！！って、あれっ？」
意外と平気そうなモンキが、辺りを見回し、目を丸くする。
「水着美女は？オアシスの楽園は？」
『はぁっ……』
心底、不思議がっている様子のモンキに、輝矢たちは深々と溜息をついた。

「まぁバカは放っておいてっ……」
輝矢が気を取り直して、アリババたち三兄弟の方を見る。
「アナタ方、彷徨う旅人を狙いとしている、砂漠の盗賊といったところですか？」
「ご名答っ」
輝矢の問いかけに、シンドバッドが微笑んで答える。
「何も盗られたわけではありませんが、私の月見団子への純粋な思いを踏みにじってくれた罪っ……」
「何だよ、月見団子への純粋な思いって……」
「償っていただきますっ」
ハチに突っ込まれながらも言葉を続け、右耳のピアスを弾く輝矢。
「“月器・三日月”っ……！」

ピアスが三日月へと変わり、輝矢が三日月を構える。

「竹取輝矢、盗賊退治いたしまっ……！」

――――バァァァァァァァーーーンっ！！――――

「なっ……！？」

輝矢が決め台詞を言い放とうとした瞬間、輝矢の足元の砂が、輝矢の足を呑みこむように動き出す。

「これはっ……？」

一気に腰まで砂に呑み込まれてしまう輝矢。

『輝矢っ！』

――――ボォォォォォォォ～～～ンっ！――――

三匹が白い煙に包まれ、一斉に人化する。

「クっ……！」

首まで呑まれた輝矢は、三日月を振るうこともできず、ただ苦しげな表情。

「輝矢っ！“瞬花”っ！」

「如意棒・第一の舞“空”っ！」

「“左翼・滅羽”っ！」

人化をした桜時・門貴・由雉の三人が、輝矢を呑みこんでいく砂へ、一斉に必殺技を放つ。

――――バァァァァァァァーーーンっ！！――――

激しく巻き起こる砂煙。

『あっ……！』

しかし、砂煙が止んだ時、すでにそこに輝矢の姿はなかった。

「輝矢っ！？」

「いっやぁぁぁぁぁ～～っ！！輝矢ぁぁぁぁぁ～～～んっっ！！」

「お前らっ！輝矢をどこへやったっ！？」

桜時がアリババたちの方を見て、責めるように言う。

「別においらたちは何にもやってないだぁ」

「んだとっ！？」

「嘘こけぇっ！！」

「嘘じゃないだぁ～今のはあの御方がやったんだぁ～」

「あの御方っ……？」

アリババの言葉に、由雉が眉をひそめる。

「あの御方って、誰っ？」

「あの御方に選ばれもしなかったお前たちには、知る必要もないことだ」

シンドバッドが冷たい笑顔を浮かべて答える。
「力づくで聞いた方が早そうだねっ」
『おうっ！』
由雉の言葉に大きく頷き、それぞれやる気満々に村雨丸と如意棒を構える桜時と門貴。
「フっ……それはどうかなっ……？アラジンっ」
「ああっ」
『……っ？』
威勢の良い桜時たちを少し見下すように微笑み、シンドバッドがアラジンの名を呼ぶ。名を呼ばれると、アラジンは片手に持っていた金色のランプを、もう一方の手で擦った。
「出ておいで、ジャスミンっ」
――――ボォォォォォォォォォ～～～～ンっっ！！――――
『……っ！』
アラジンがランプを擦ると、ランプの吹出口から、モクモクと紫色の煙が発生し、煙は空中で集まるようにしてまとまっていき、やがて人の形を作った。
「お呼びでしょうか？ご主人様っ……」
『なっ……！』
紫煙から作られたのは、美しい黒髪に、艶やかな黒肌の女性。空中に浮いている足元は煙のままで、実体ではないのか、後ろの景色が透き通って見えた。
「あれはっ……」

「“ランプの精”萌えぇぇぇぇぇ～～～っっ！！」
「アホっ」
ランプから出てきた女性に萌えている門貴に、桜時が冷たい瞳を向ける。

「ジャスミン、彼らにイイ夢を見せてあげて」
「了解しました、ご主人様っ」
アラジンの言葉に、笑顔で頷くランプの精・ジャスミン。
「ゆっくり眠りなさいっ……」
「はぁ～いっ！」
「はいじゃねぇーよっ！！」

「すぅぅぅぅ～っ……」
「……っ」

大きく息を吸うジャスミンに、由雉が眉をひそめる。

「気をつけてっ！アイツ、何かする気っ……！」
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～っっ！！！」
『……っ！』

ジャスミンが大きく口を開くと、ジャスミンの口から大量の紫煙が吐き出され、モクモクとあっという間に桜時たちを包み込んでいく。

「こっこれはっ……！」
「ううっ……！」
「門貴っ！由雉っ！クっ……！！」

広がっていく煙の中に、互いを見失い、桜時たちは個々に煙に包

まれていく。

「フフフっ……さぁ、永遠の眠りにつくがいいっ……」

煙の中に消えた桜時たちに、シンドバッドは怪しく微笑んだ。

――――――――――……

「んっ…」

澄んだ青色の瞳を、ゆっくりと開いたのは桜時であった。

「ここっ……はっ？……っ！そうだっ！砂漠っ！」

事態を思い出し、桜時はぼんやりしていた意識を目覚めさせ、素早く起き上がった。

「って、あれっ……？」

しかし起き上った桜時が周囲を見回すと、そこは一面の砂漠地帯などではなく、何とも穏やかで、何とも美しい、緑溢れる草原であった。

「あれっ？おっかしいなっ……」
頭を掻きながら、戸惑う桜時。
「桜時様ぁぁぁぁぁぁ～～～っっ！！」
「へっ……？」
どこか聞き覚えのある声がして、桜時が振り返る。
「桜時様っ！！」
「千鶴っ！？」
桜時の元へと駆けてくるのは、長い黒髪に白い肌の美しい女性。
そう、桜時の世話係の千鶴であった。
「なっなんで千鶴がここにっ！？」
「はぁっ？何を仰っているのです？桜時様」
「だってここ、砂ばっ……！」
『おぉぉぉぉ～～～うぅぅぅ～～～じぃぃぃぃぃぃ～～～っっ♪♪』
「……っ」
今度は聞き覚えのあるハーモニーが聞こえてきて、戸惑っている桜時が振り向く。
「……っ！松兄っ！竹兄っ！梅人っ！」
桜時が振り返ると、そこにはキレイに並んでハーモニーを刻んでいる三羽のスズメの姿があった。
「なっ何でっ！？だって松兄、燕国にいたんじゃっ……」
「はいぃ～？いきなり何一人でテンパってんのぉ～？桜時くぅ～ん」
三日前まで燕国で一緒であったはずの松人が、雀国にいるはずの

竹人や梅人とともにいる。
「へっ？へぇっ？」
どんどんと混乱していく頭を抱える桜時。
「どうかしっちゃったのかぁ～いっ？桜時クンっ」
「犬が頭おかしいのは前からだよ」
「うっせぇっ！！」
混乱しながらも、桜時は梅人の暴言にしっかりと突っ込みを入れる。

「夢っ？それにしちゃリアルすぎるようなっ……」
「どうしたの？」
「……っ」

さらに聞こえてくる声に、桜時の表情が止まる。

「随分と騒がしいわね……」
『桜時がおかしくてぇぇぇ～～～♪♪』
「おかしい……？」
三兄弟のハーモニーに首を傾げながら、桜時の元へとゆっくりとした足取りでやって来る女性。

「……孔雀サンっ……」

そう、それは桜時の伯母・孔雀であった。

―――――――――……

「あぁ～あ～もう服が砂まみれだよぉ～」

服についた砂を払い落しながら、文句を呟きつつ、とぼとぼと道を歩くのは由雉。

「いつの間にかよくわかんない森にいるしさぁ～」

由雉が面倒臭そうな表情の顔を上げる。周囲に広がっているのは、砂漠どころか、鬱蒼と生い茂った大森林。何故、こんなところにいるのか見当もつかないため、とりあえず歩き出したのであった。

「はぁっ……何かお腹も減ってきたしっ……」

「じゃあ帰ってご飯にしましょうかっ」

「えっ……？」

由雉の言葉に、答えるように返ってくる優しい声。

「……っ」

由雉がゆっくりと前方を見つめる。

「……っ！」

「今日はあなたの好物、ささみチーズづくしよ」

大きく目を見開いた由雉に、温かく微笑みかける女性。

「さぁ帰りましょう……？」

ゆっくりと由雉へ手を伸ばす女性。

「由雉っ……」

「ミチル……さんっ……」

由雉の前に姿を現したのは、ミチルであった。

――――――――――……

「おぉ～いっ！桜時ぃぃぃ～～っ！ユッキぃぃぃ～～っ！」

こちらも砂漠ではない、どこまでも広がる平原を、大きく桜時と由雉の名を呼びながら歩いているのは門貴。

「おぉ～いっ！桜時のイヌコロぉぉ～～っ！どこやぁぁぁ～～っ！？」

――――しいいいいいい～～～～んっ……――――

しかしいくら呼んでも、返ってくる声どころか、物音一つ、聞こえては来なかった。

「おっかしいなぁ～どこ、ほっつき歩いとんやぁ？あいつらっ」

足を止め、少し疲れたように肩を落とす門貴。

「はぁっ……とりあえずちょい休けっ……」

「……っ」

「……っ！」

背後から気配を感じ、門貴が素早く如意棒を振り上げる。

――――カッキィィィィィィィーーーンっ！！――――

ぶつかり合う金属音が、無音の平原に響き渡る。

「……っ！お前っ……！」

背後から攻撃してきたその人物を見て、門貴の表情が凍りつく。

「さっすがやなぁ～っ！これくらいの不意打ちじゃあ、喰らわへんかぁっ！」

如意棒を重なり合う、銀色の大バサミ。風に揺れる、真っ赤な髪。

「さぁっ！今日も猿蟹合戦始めようやないかぁっ！門貴っ！」
「一花っ……」
そこにいたのは、門貴が一度失った少女であった。

第２３章　砂漠の蜃気楼　☆３

その頃、一人、砂に呑み込まれた輝矢は……

「んっんんっ……ケホっ、ケホっ」

呑み込まれた時に口に入ってしまった砂を吐き出しながら、輝矢がその黒い瞳を開ける。

「……？ここは……？」

起き上がった輝矢が辺りを見回すと、そこは巨大な空洞のような場所であった。天井も高いが日の光は差し込んでいない。おそらくは砂漠の遥か地下であろう。整った造りの空洞は、偶然できたというよりも、どこか人為的なものを感じた。

「……っ」

輝矢が目の前に落ちていた三日月を拾い、周囲を警戒しながら立ち上がる。

「そこにいるのは……誰ですっ……？」

前方を鋭く見つめ、問いかける輝矢。

「アナタが私を呼んだのでしょう……？それで隠れるのは、おかしいのではないですか……？」

「……フフっ」

「……っ」

前方の暗闇から聞こえてくる女の高い笑い声。輝矢が三日月を握る手に力を込めた。

「別に隠れてたわけじゃないのよ？ちょっと遠くから見てただけっ……」

暗闇から、輝矢の元へとやって来る人影。

「だって離れてないと……あなたが起きる前に、殺しちゃいそうだったんだものっ……」

「……。」

現れたのは、紫色の長い髪を、後ろで三つ編に束ねた、鋭い金色の瞳の、妖艶な女性であった。真っ赤な唇が、少し血を連想させる。女性の怪しげな微笑みに、目を細める輝矢。

「ラクダどもが作ったにしては、出来の良すぎる蜃気楼だと思っていました……」

――――“開け……ゴマっ”！――――

あの時、あの岩壁の中へと足を踏み入れた瞬間から感じていた、何か。

「アナタがラクダどもの裏で糸を引いていたのですね……」

「フフフっ……」

女性は真っ赤な唇で笑う。

「そうよっ……私があのラクダたちを利用して集めさせてたのっ……」

「集めるっ……？」

「そう……」

女性が少し俯いた後、再び輝矢の方を見る。

「私の餌となるっ……力を持った人間をねぇっ……！」

――――ボォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

そう叫び、白い煙へと包まれていく女。

「……っ！」

煙が晴れると、輝矢の表情が強張った。

「さぁっ……」

そこには鋭い尾と爪を持った、鋼鉄のような紫色の皮膚の、体長三メートルはありそうな巨大なサソリ。

「私に生き血を捧げるがいいわっ！小娘っ！」

「サソリっ……」

目の前に現れた巨大なサソリに、輝矢の額から汗が流れ落ちた。

――――――――――……

「孔雀サンっ……」

一面の砂漠地帯から、どこか見知らぬ草原へと来てしまった桜時の前に現れた、千鶴、朱実3兄弟、そして孔雀。目の前に立つ孔雀を、桜時が戸惑うように見つめる。

『お母様ぁぁ～～♪桜時がおかしいぃぃ～っ♪♪』

「おかしい？」

三兄弟のハーモニーに、眉をひそめる孔雀。

「当たり前でしょう？桜時はイヌなのですから」

「だあああああああっっ！！」

キッパリと答える孔雀に、思わずコケる桜時。

「アハハっ……相変わらずの口っぷりっ……」

一人イヌである桜時に、とことん蔑みの言葉を投げかけてきた人。
和解した今も、急に優しくなることはなく、孔雀は至って今まで通りであった。

「さっ、そんなくだらないこと言ってないで、とっとと行くわよっ」
三兄弟や千鶴に、偉そうに言い放つ孔雀。

「さっ、桜時、あなたもっ……」
「ホント、よく出来てるっ」
「えっ……？」

孔雀が桜時の言葉に目を丸くした、その瞬間。

「村雨丸っ」
「……っ！」

――――――……っっ！！――――――

桜時が素早く鞘から村雨丸を抜き、孔雀へ向けて振り切った。

「うっ……！」

派手な着物を斬り裂かれ、後退しながら引きつった表情を見せる孔雀。

「桜時っ……！何をっ……！」
「ホント、イイ出来だと思うよ。でも残念っ」
焦る孔雀に、鋭い瞳と剣先を向ける桜時。

「孔雀サンはもうちょい、化粧が濃いんだっ」
「クっ……！」

――――ボォォォォォォォォ～～～～ンっっ！！――――

得意げに微笑んだ桜時に、孔雀が表情をしかめると、孔雀と、千鶴や三兄弟、周囲の草原を、紫色の煙が包んでいく。

「……っ」

紫煙が晴れると、そこは元いた一面の砂漠地帯であった。

「ご主人様っ」
「大丈夫だ、ジャスミン」
「……。」

そして孔雀は、アラジンと、そのランプの精・ジャスミンへと姿を変えていた。不安げに声をかけたジャスミンに、少し腹部を斬り

裂かれているアラジンが、弱々しい笑顔を向ける。

「まさか化粧の濃さでバレるとはなっ……」
「孔雀サンにとってはそこ、一番重要だからなっ」
苦笑いを見せるアラジンに、平然と言い放つ桜時。

「この世で一番苦手な顔だったから、記憶もだいぶ鮮明だしっ」
「フっ……人選ミスかっ……」
「……どうするっ？」
少し俯いたアラジンに、桜時が剣先を向け直す。

「降参するか？砂漠のコソ泥っ」
「……誰がっ」
「……。」
すぐさま否定するアラジンに、桜時が少し眉をひそめる。

「俺はお前の大事な奴らの幻を作れたんだぞっ……？」
ゆっくりと顔を上げるアラジン。その表情は、降参どころか、勝ちを見据えた笑みをこぼしている。

「お前の苦手なものぐらい、わかってんだよっ！！」
「えっ……？」
「ジャスミンっ！」
「うっ……！」

アラジンがジャスミンの名を呼んだ途端、やっと自分の苦手なものを理解して顔を引きつる桜時。

「了解いたしましたっ、ご主人様っ」

「げっ……！ちょっ……！」

怪しく微笑んで、桜時の方へと飛び出してくる、美しきランプの精・ジャスミン。

「さぁっ、私と一緒に遊びましょうっ」

「だあああああっっ！！無理ぃぃっ！！」

やって来る敵から、全速力で逃げる桜時。

「クッソっ……！」

逃げているばかりではどうにもならないと、桜時が村雨丸を構え、後方を見る。

「フフフっ……」

「……っ」

桜時がすぐさま前方を向き直す。

「直視も無理ぃぃっ！！」

攻撃は諦め、とにかくひたすら逃げる桜時。

「ハッハッハっ！いいぞぉっ！ジャスミンっ！」
そんな桜時の間抜けな姿に、心から楽しげな笑い声をあげるアラジン。

「そいつがこの砂漠で野垂れ死ぬまで、とことん追い回してやれっ！！」
「はいっ、ご主人様っ」

アラジンの命令に大きく頷き、ジャスミンはひたすら桜時を追いまわす。

「クッソっ！んなとこで野垂れ死んだら、門貴たちに“犬死に”って笑われちまうだろうがっ……！」
逃げ惑いながら、厳しい表情を見せる桜時。

「何とかっ……！んっ……？」
「ハッハッハっ！！」

走り回っている桜時の視界に入ってくるのは、高々と笑い声をあげているアラジンの右手に、大切そうに握られている金色のランプ。

――――出ておいで、ジャスミン……――――

「……っ」

あのランプをアラジンが擦り、そうしてジャスミンが現れた。

「もしかしたらっ……よしっ！」

何かを思いついた様子の桜時が、意を決した表情で頷く。

「……っ」

「……っ？」

「何っ……？」

急に立ち止まる桜時に、眉をひそめるアラジンとジャスミン。

「“瞬花っ……終刀”っ！！」

――――バァァァァァァァーーーンっっ！！――――

『……っ！』

桜時が地面の砂漠に向かって、瞬花終刀を放つと、大量の砂が一気に上空に巻きあがった。巻きあがった砂が、ジャスミンに降りかかる。

「ハッハッハッハっ！それで足止めでもしたつもりかっ！？」

その光景を見て、再び高々と笑うアラジン。

「ジャスミンにそんな子供騙しが通じるとでも思っ……！」

「“伝光っ……」

巻きあがった砂に、左手を向ける桜時。

「……刹花”っっ！！」

――――パァァァァンっ！パァァァァンっ！パァァァァンっ！――――

「何っ……！？」

巻きあがっていた砂がすべて、桃色の桜の花びらへと変わり、ジャスミンを包み込む。

「きゃあああああああああっっっ！！！」

「ジャスミンっ……！」

「よっ」

「あっ……！」

ジャスミンの悲鳴に、アラジンが思わず身を乗り出していると、その隙を突くようにして、桜時がアラジンから金色のランプを奪った。

「おっお前っ……！」

「もう一度擦りゃ、元に戻んのか？」

「ああっ……！！」

焦るアラジンを余所に、ランプをキュキュッと二度擦る桜時。

「うっ……！ううっ……！！」

すると、桜の花びらに埋もれていたジャスミンが、再びその体を紫色の煙へと変え、ランプの吹出口へと吸い込まれていく。

「ごっご主人様ぁぁぁぁっっ！！」
「ジャスミンっ！！」

アラジンが必死に手を伸ばすも届かず、ジャスミンがランプの中へと戻っていく。

「おいっ」
「ひぃっ！」

ジャスミンを封じ込めたランプを左手に、桜時がアラジンへ村雨丸を向ける。目の前に迫る刀に恐怖し、その場にしゃがみ込んでしまうアラジン。

「ジャっジャスミンっ……！」
「ランプの中の女が唯一の武器か？情けねぇー奴っ…」

ジャスミンに助けを求めるような声を出すアラジンに、桜時が少し呆れた表情を向けた。

「おいっ」
「ひぃっ！！」

桜時がさらにドスのきいた声を出すと、アラジンは背筋を震え上がらせた。

「殺されたくなかったら、輝矢のとこまで案内しろっ」

「はっははははっはいぃ～っ！」

桜時ｖｓアラジン。勝者・桜時。

――――――――――――……

「ミチルさん……」

どこかもわからない大森林の中を歩く由雉の前に現れたミチル。

ミチルは“家に帰ろう”と、由雉にその手を差し出した。

「……。」

「どうしたの？由雉……」

その場に立ちつくして動こうとしない由雉に、ミチルがもう一度

問いかける。

「もうっ……」

そう声を漏らして、由雉のもとへと駆け込んでくるミチル。

「ほらっ」

由雉の前まで駆け込んできたミチルが、全然動かそうとしない由雉の手を無理やり取る。

「早く帰りましょっ」

「そうだね……」

ミチルの言葉に、やっと声を発する由雉。

「帰る場所は……牢獄かな……？」

「えっ……？」

「もちろん君一人で、だけどねっ」

由雉が、ミチルに掴まれていない右手で、青い羽根を構える。

「ゆっゆきっ……！」

「“右翼・裂羽”っ！」

「……っ！うあああああああああっっっ！！！」

由雉の至近距離から放った裂羽が、ミチルを直撃する。ミチルのものとは思えない、品の悪い叫び声をあげながら、吹き飛んでいくミチル。

――――ボォォォォォォォォォ～～～～ンっっ！！――――

「クっ……！」

吹き飛んだミチルが、アリババの姿になると、周囲の大森林も、あっという間に元の砂漠へと姿を戻した。

「あぁ～あ～また砂漠っ」

広がる一面の砂漠に、どこかうんざりした表情を見せる由雉。

「なっ何でっ……！」

「んっ？」

「何でわかっただぁっ！？」

由雉が振り返ると、そこには全身を裂羽に斬り裂かれ、ところどころから血を流している、どこか戸惑った表情を見せたアリババ。

「おいらのっ……おいらの蜃気楼は、本物と瓜二つだったぁはずっ……！」

「何でぇ～？そんなの、聞くまでもないよっ」
「えっ……？」

由雉の言葉に、アリババがさらに眉をひそめる。

「ミチルさんが、一回も転ばずに僕の元へなんて、走ってこれるわけないでしょっ？」
「うっ……」

自信満々の笑みで言い放つ由雉に、思わず気迫負けしてしまいそうになるアリババ。

「こうなったらっ……！」
「……っ？」

追い詰められた様子のアリババが、傷ついた体を起こして、その両手を力強く砂漠の地面に着ける。
「お前もあの御方の餌食になるだぁっ！」
叫ぶアリババの両手を、赤い光が帯びていく。

「“アリ地獄”っ！！」

――――バァァァァァァァーーーンっっ！！――――

「……っ！」

アリババの声とともに、突如、由雉の立っていた周囲の砂漠が凹み、由雉が砂の穴の中へと呑み込まれていく。

「クっ……！」

唇を噛みしめた由雉の姿が、砂の中へと消えていく。

「ダッハッハっ！！」

砂の中に由雉が消えたことを確認すると、アリババが急に元気になったように立ち上がり、大きく両手を開いて笑い声をあげた。

「勝ったっ……！勝っただぁっ！ダッハッハっ！ダッハッハっ！！」
「はぁっ……」
「……っ！」

背後から聞こえてくる溜息に、アリババが笑い声を止める。

「やることも頭悪けりゃ、笑い声も頭悪そうだね」
「……っ」

アリババが振り返ると、そこには呆れきった表情を見せる一羽の雉が飛んでいた。

「そうかっ……！鳥化してっ……！」

「……。」

――――ボォオオオ～～～ンっ！――――

白い煙に包まれ、再び人化する由雉。

「だいたい、アリ用の罠に、トリが引っ掛かるわけないでしょっ？」

そう言って、由雉が青い羽根を構える。

「ちょっ！ちょっと待っ……！」

「“右翼・裂羽”っ」

「うっ……！！」

制止を促すアリババをあっさりと無視し、由雉がアリババへ裂羽を投げる。

――――バァアアアアアアーーーンっっ！！――――

「うわあああああああああああああっっっ！！！」

裂羽に斬り裂かれ、吹き飛んでいくアリババ。

「ぐっ……ぐぷっ……」

砂漠へ落下すると、そのまま倒れ込み、起きあがることはなかった。

「ふぅ～っ、まぁた砂だらけになっちゃったよぉ～」

一息つきながら、服についた砂を払い落す由雉。

「あっ、そういえば輝矢のこと聞くの忘れちゃったぁ～」

今更ながら思い出したように言う由雉。しかしアリババを見ると、すっかりノビていて、とてもじゃないが輝矢の居場所を聞けるような状態ではない。

「まっ、いっかぁ～」

由雉ＶＳアリババ。勝者・由雉。

第２３章　砂漠の蜃気楼　☆４

――――――――――……

「……。」

――――今度、この木に実が生る時はっ…きっと笑顔で出逢えるねっ……――――

平原で桜時や由雉を探していた門貴に、突然攻撃を仕掛けてきたその人物は、門貴が一年前に失った、たった一人の人・一花であった。

「如意棒……」

「……っ」

門貴が如意棒を振り上げると、一花が後方へと飛び上がり、門貴との距離を取った。

「よっしゃっ！じゃあ早速っ……！」

「十秒やっ……」

「えっ……？」

再び大バサミを構えた一花に、門貴が少し低い声で呟いた。

「十秒やるっ……」

如意棒の片先を一花へと向ける門貴。

「その間にその姿をやめろ。でなかったら十秒後に殺すっ」

「……っ」

門貴の凍りついてしまいそうなほどに冷たい視線に、一花が少し怯んだ表情を見せる。

「ちょっ！ちょっと待ってやっ！門貴っ！私はっ……！」

「聞こえんかったか……？」

「……っ！」

門貴のあまりの気迫に、一花はそれ以上、言葉を続けることをやめた。

「クっ……！」

――――ボォォォォ～～～ンっ！――――

一花が少し顔を歪めると、一花と周囲の景色を紫色の煙が包んで

いく。

「うおっ！」

紫色の煙が晴れ、周囲の平原が、もといた砂漠へと変わっていくことに、今まで真剣な表情を見せていた門貴が、少し驚いたように声をあげた。

「平原も幻やったんかぁ～」

「やれやれっ……」

「……っ」

聞こえてくる、一花のものとは違う低い男の声に、門貴が再び表情を固める。

「犬や雉はともかく、さっきも最後まで寝てた君くらいは、騙せると思ったんだがなぁ……」

そこに立っていたのは、怪しげに微笑むシンドバッドであった。

「数多の水着美女には騙されても、たった一人の女性には騙されないか……余程、大切な存在のようだ……」

「人のっ……ってか猿の美しい思い出に、土足で踏み込んでくるもんちゃうでっ」

「フフフっ……これは失礼っ」

「……。」

あっさりと幻を見破られたというのに、まったく焦った様子のな

いシンドバッドに、門貴はどちらかというとこちらが追い込まれているような気分となり、少し目を細めた。

「では、そろそろ本気で戦うとしようか」
「……次はどんな夢見せてくれるんやっ？」
「もちろんっ……」

挑発するように問いかけた門貴に、冷たい笑みを浮かべるシンドバッド。

「“悪夢”だよっ」
「……っ」

シンドバッドの言葉に、門貴が如意棒を持つ手に力を込める。

「フフフっ……」
「あっ？」

含んだような笑みを浮かべながら、シンドバッドが懐から取り出した、派手な柄の絨毯を足元に敷く。その絨毯を見て、目を丸くする門貴。

「何や？昼寝でもするんか？」
「まさかっ」

そう答えて、シンドバッドが絨毯の上へと乗る。

「“飛べ”っ」

「……っ！なっ……！」

シンドバッドが“飛べ”と言った途端、シンドバッドを乗せたその派手な柄の絨毯が、ゆっくりと宙に浮き上った。その驚きの光景に、目を見開く門貴。

「うっ浮いたぁっ！？」

「フフフっ……驚いたろう？“魔法の絨毯”といってね、まさに名前通りの魔法の品さっ……」

「欲しいっ！！」

「あげないよ……」

目を輝かせて魔法の絨毯を欲しがる門貴に、シンドバッドが少し呆れたように答える。

「その代わり、これをあげよう……」

「えぇ～っ？何々っ？」

門貴が興味を示す中、シンドバッドが右手を高々と掲げる。

「“砂嵐”っ」

「……っ！」

突如、シンドバッドの飛んでいるすぐ横付近に、巨大な竜巻が発生する。砂漠の砂を巻き上げて、勢いよく回転している竜巻。

「これさっ。どうだい？」

「いやぁ～それはちょっとっ……」

苦笑いを見せる門貴。

「行けっ」

「うぇっ！？」

門貴が苦い顔を見せているのも無視し、シンドバッドが門貴へと竜巻を向かわせる。迫り来る巨大竜巻に、焦りの表情を見せる門貴。

「クっ……！」

門貴に、竜巻が迫る。

――――バァァァァァァァーーーンっっ！！――――

そして、激しい竜巻の中に、門貴の姿が消えた。

「フフフっ……フフフっ！やはりバカはバカかっ」

絨毯の上から竜巻を見ながら、楽しげに笑うシンドバッド。

「他愛もないっ……フフフっ！フフフっ！」

シンドバッドが勝ち誇った笑みを浮かべる。

「フフっ……フっ……？」

しかし突然、その笑い声が途切れ、その表情が曇った。

「んっ……？」

門貴を呑みこんで、役目は終えたというのに、まったく消える気

配のない竜巻。それどころか、竜巻は徐々にシンドバッドの方に向かって来ている。

「まさかっ……そんなはずっ……！」

首を横に振りたい気持ちのシンドバッドであったが、その思いと反して、竜巻はやはりどんどんとシンドバッドに迫って来る。

「クっ……！にっ“逃げろ”っ！」

魔法の絨毯にそう命令し、必死に竜巻から逃げるシンドバッド。

「何っ……！？」

しかし、竜巻は、シンドバッドがどこへ逃げようとも、まるで追いかけてくるように進路を変え、どんどん迫っていく。

「追いかけてくるだとっ……！？俺の砂嵐にそんな効力はっ……！」
「やっほぉ～♪」
「……っ！」

下方から聞こえてくる明るい声に、焦った表情のシンドバッドが振り向く。

「きっ貴様っ……！！」
「どうもぉ～」

シンドバッドの遥か下方、広々とした砂漠地帯にゆったりと座っている、まるで無傷の門貴。明るい笑みを浮かべた門貴が、シンドバッドへ手を振る。

「まさかっ……貴様がっ……！？」

「今度は俺からっ……フォーユぅ～やっ！」

「ううっ……！！」

門貴が右手を上げると、竜巻が速度を上げ、一気にシンドバッドへと迫った。

「ううっ……！うわあああああああああああああっっ！！！」

――――バァァァァァァァーーーンっっ！！――――

激しい竜巻に、さすがの魔法の絨毯も吹き飛ばされ、シンドバッドが竜巻に呑まれる。

「がああああああっ！！ううっ……！」

竜巻に弾き飛ばされ、少し離れた砂漠の地面に落下するシンドバッド。その時、やっと竜巻がどこへともなく消えた。

「どうやったぁ～？俺のプレゼントっ！」
「クっ……！」

笑顔で倒れているシンドバッドのもとへと歩いて行く門貴。傷だらけとなったシンドバッドは、どうにか顔だけ上げて、厳しい表情を門貴に向ける。

「俺に“風力”で勝負仕掛けるなんて無謀やでぇ～」
「そっそうかっ……貴様も風使っ……ううっ……！」

苦しげな声を洩らしながら、何とか体を起こすシンドバッド。

「さてとっ、んじゃまぁトドメといこかっ！」
「うっ……！」

如意棒を構えた門貴に、シンドバッドの表情が青ざめる。

「まっ待てっ！」
「はぁ～っ？待つわけなっ……」

――――ボォォォォ～～～ンっ！――――

「……っ！」

命乞いを見せたシンドバッドは、煙に包まれ、再び一花の姿となった。

「待ってやっ！門貴っ……！」
「……っ」

一花の顔、一花の声で命乞いをするシンドバッド。
その姿に、門貴は如意棒を振り上げた手を止めてしまう。

「……っ“飛べ”っ！」
「……っ！」

門貴が一瞬の隙を見せたその時、一花の姿のシンドバッドが、近くに落ちていた魔法の絨毯に飛び乗り、言葉を放って、再び上空へと浮き上がる。

――――ボォォォォ～～～ンっ！――――

「フフフっ！残念だったなぁっ！サルっ！！」

絨毯の上でシンドバッドの姿へと戻り、門貴を見下して高々と笑いあげるシンドバッド。

「またどこかで会おうっ！フフフっ！フフフフっ！！」
「……如意棒っ……」

遠ざかっていく絨毯に乗ったシンドバッド。門貴が少し俯き、如

意棒を握る手に力を込める。

「第一の舞・“空”っ……」

――――ビュウウゥゥゥゥーーーンっ！――――――

周りの大気を、その長い身に集め出す如意棒。

「フっ……今更何をっ！これだけ離れていては、攻撃のしようもないだろうっ！」

離れていく門貴に、確信の笑顔を見せるシンドバッド。

「……っ」

門貴が鋭い表情の顔を上げ、如意棒を構える。

「伸びろっ！！如意棒っ！！」

――――――……っっ！！――――――

「何ぃぃっ！！？」

絨毯に乗って逃げていくシンドバッドのもとへ、大気を集めながらまっすぐに伸びていく如意棒。

「バっバカなっ……！！」

驚愕の表情を見せるシンドバッドの目前へと迫る、如意棒の片先。

――――バァァァァァァァーーーンっっ！！――――

「ぐはあああああああああぁぁぁぁぁっっっ！！！！」

如意棒がシンドバッドの腹部へと突き刺さると、如意棒のまとっていた大気が、勢いよくシンドバッドの全身を切り裂いた。シンドバッドが絨毯から落下し、砂漠へと倒れ込む。

「まっまさかっ……この俺がっ……ううっ……」

そう呟き、シンドバッドは深く瞳を閉じた。

「……。」

シンドバッドが気を失ったことを確認し、少し肩を落とす門貴。

「戻りぃ、如意棒っ」

門貴がそう言うと、大空まで伸びていた如意棒は、元の長さへと戻っていった。

「あっ、こっちも終わったぁ～？」

「……っ？」

如意棒を戻した門貴が、聞き覚えのある声に振り向く。

「うわっ、何ぃ～？敵さん、随分ボロボロじゃ～ん」

倒れたシンドバッドの横を通り、痛そうな顔を見せながら、門貴の方へと歩いてくるのは、アリババとの戦いを終えた由雉であった。

「ユッキー、そっちも終わったん？」

「うん～。ってか門貴にしては容赦ないねぇ～何かあった？」

「別にっ」

由雉の問いかけに、門貴がそっと微笑む。

「ちょっとっ、おイタが過ぎただけやっ」

「へっ？」

門貴ＶＳシンドバッド。勝者・門貴。

その頃。砂漠下の空洞。

「サソリっ……」

砂に呑み込まれ、砂漠の地下空洞へと呼び寄せられた輝矢の目の前に現れたのは、巨大なサソリ女であった。

「さぁ、小娘っ……私に頂戴っ……あなたの生き血を頂戴っ！！」

「……っ！」

その巨体を素早く動かし、勢いよく輝矢へと向かってくるサソリ。輝矢が素早く三日月を構える。

「はあああぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」

「クっ……！」

サソリが振り切った尾を、上空へと飛び上がって避ける輝矢。

「三日月っ……！」

飛び上った輝矢が、上空で三日月を構えて、落下のスピードそのままに、サソリに三日月を振り下ろす。

――――カッキィィィィーーーンっ！――――

「なっ……！？」

サソリの鋼鉄の皮膚に、何の手応えもなく、ただ金属音だけが響く。

「硬いっ……」

表情をしかめる輝矢。

「ウフフっ……残念だったわねぇっ……！！」

「うっ……！」

少し動揺を見せる輝矢に、上空からサソリの尾が降ってくる。輝矢は素早くそれを避け、空洞の壁際まで移動して、サソリとの距離を取った。

「はぁっ……はぁっ……」

壁にもたれ、少し息を乱しながら、右手に持っている三日月に目を落とす輝矢。

「……。」

少し欠けた三日月に、サソリの皮膚の硬さを改めて感じる。

「物理攻撃は諦めた方が良さそうですね……」

あの硬い皮膚では、いくら三日月で攻撃したところで、かすり傷1つ、つけられないだろう。

「ウフフっ……いつまで休んでいるつもりっ……！？」

「……っ！」

サソリの声に、輝矢が顔を上げる。

「なっ……！」

輝矢に勢いよく振り下ろされる、サソリの鋭い爪。

「“月器・十六っ……！」

爪を受けとめようと、三日月を十六夜にしようとする輝矢。

「……っ？」

しかし、その爪がまとっている、何か禍々しい空気のようなものを感じ、眉をひそめる。

「……っ！クっ……！！」

輝矢が十六夜に変化させるのをやめ、横へと転がって、ギリギリのところで爪を避ける。

――――バァァァァァァーーーンっっ！！――――

空洞の壁を抉り取る爪。

「……これはっ……」

抉り取られ、崩れ落ちた壁の一部が、まるで強い酸にでも溶かされたかのように泥状となり、脆く、粉々になって消えていく。

「避けて正解だったわねぇ」

「……っ」

サソリの声に、振り向く輝矢。

「私の爪は猛毒っ」

爪をもう一度振り上げ、サソリが楽しげに笑う。

「毒っ……？」

「そうっ！この爪にかすっただけで、あなたは死ぬっ！」

「……っ」

サソリの言葉に、厳しい表情を見せる輝矢。先ほど、爪から禍々しい空気を感じたのは、間違いではなかったようである。

「さぁっ！精々、足掻いて頂戴っ！小娘っ！！」

「クっ……」

輝矢に、かつてない危機が訪れようとしていた。

第２３章　砂漠の蜃気楼　☆４（後書き）

２４章へ続きます。

第２４章　桜時、開花　★１（前書き）

この章で、第２部も終わりになります。

第２４章　桜時、開花　★１

御伽界・南東南、『御伽砂漠』中央。

「何でっ……」

星の照らす美しき御伽砂漠に、目つきの悪い男が一人。

「何っで龍国に帰るはずが、こんな砂漠のド真ん中に来ちまってんだよっ！！」

砂漠の中心で不満を叫ぶ、狐上ゴン。二十二歳。

「道に迷っちゃったんだから仕方ないでしょっ！！」

そんなゴンに強く言い返したのは、黒いオープンカーの運転席で、大きな地図とにらめっこをしているリンゴ。地図をくるくると回しているところを見ると、方向はまったくわかっていないようである。

「道に迷ったって、お前一体、何年龍国に住んでんだよっ！！？それで迷うとか、頭おかしいだろっ！！」

「うっさいわねっ！！そもそもアンタが運転してくれてれば、こんなことにはなんなかったのよっ！！」

「アホかっ！俺が運転したら砂漠どころの騒ぎじゃなくなるだろーがっ！！」

「何、自信満々に言っちゃってんのよっ！！バカじゃないっ！？」

いい大人二人が、くだらない争いを、夜の砂漠に響き渡らせる。

虎国での調査を終え、龍国に戻ろうとしていた二人であったが、見事道に迷い、この御伽砂漠へやってきてしまったのであった。

「だいたいアンタがねぇっ……！！」
「それならお前だってっ……！！」

砂漠へ踏み込んだだけならまだしも、どんどん進んだせいで迷子となり、今に至っているのである。

『はぁっ……はぁっ……はぁっ……』

さすがに息の切れてきた二人が、長い口論を終え、やっと黙る。

「とっとにかく日が昇る前に進みましょっ……日が照って暑くなったら厄介だわっ……」
「そっそうだなっ……」

何とか和解し、黒のオープンカーが再び砂漠を走り始める。

「そうだっ！夜空の星を目印に方角を割り出すってのはっ……！」
「そんなロマンチックなことができるようなタマかぁ～？俺やお前がっ」
「……。」

ゴンのもっともな意見に、さすがのリンゴも反論できずに黙り込む。

「はぁ～っ、どっかに道聞けるような奴でも落ちてないかしらねぇ

～」
「こんな砂漠のド真ん中に落ちてる奴がいるかよっ」
「わっかんないでしょっ！砂漠なんだからラクダの一匹や二匹っ…
…！」
「らくだあああああああああああああっっっ！！！」
「そうそうっ！“らくだああ”とか叫びながらっ！って……へっ？」

ゴンに言い返すために余所見運転をしていたリンゴが、前方から聞こえてくる叫び声に首をかしげ、やっと前を向く。

「んなっ……！！？」

勢いよく走る黒のオープンカーの前方に、かなり焦った様子のラクダが一頭。

「ちょっ！ちょっ！ちょっ……！」

急いでブレーキを踏むリンゴ。

「うおっ！！」
「らくだあああああああああっ！！」

――――キキィィィィィーーーーっっ！！――――――

急ブレーキにゴンの上体が浮き上がり、ラクダが目を閉じて叫ぶ

中、激しいブレーキ音が砂漠に響き渡る。

「……っ。あれっ……？」

思わず目を閉じていたリンゴであったが、全然来ない衝撃に、ゆっくりと目を開ける。

「おぉ～いっ！ユッキーっ！ヒッチハイク成功したでぇ～っ」

「へっ……？」

リンゴが目を開けると、そこには、ラクダを車の直撃コースから上空へと持ち上げた、茶髪の青年の姿があった。

「もっもう嫌っ……だぁっ……ううっ……」

青年の持ち上げているラクダが、そう呟くと、白目を剥いて気絶する。

「意外と早かったねぇ。ラクダを仕掛けた甲斐あったかなぁ～」

茶髪の青年のもとへ、青髪の少年がやって来る。

「あっ……！」

その二人の姿に、大きく目を開くリンゴ。

「サルっ！キジっ！お前ら、竹取のペットどもじゃねぇーかっ！！」

リンゴが言おうとした言葉を、すべて代弁して驚きの声をあげる助手席のゴン。

『へっ？』

その声に、二人が振り返る。

「おおっ！リンゴさぁぁぁ～～んっ！！と、ゴンゴンっ」

「誰かと思えば、オトポリの問題狐じゃなぁ～いっ」

「誰が問題狐だっ！ってか何でお前らがここにっ……？」

「へぇ～砂漠の盗賊にねぇっ」

御伽砂漠で偶然出会った門貴と由雉から、この砂漠で起こったことを聞き、関心したような声を出すゴン。その視線の先には、黒のオープンカーに繋がれた、気絶中のアリババたち3兄弟の姿があった。

「そういえば聞いたことあるわね。砂漠に迷った者を狙った盗賊三兄弟がいるって噂っ」

「俺はねぇーなぁっ」
「アンタは聞いてもすぐ忘れるからでしょっ」
「んだとっ……！？」

ちょっとしたことで、すぐに険悪なムードとなるゴンとリンゴ。

「でぇ？ゴンたちは何で砂漠にいるわけぇ～？」
「あっ？」

由雉の問いかけに、ゴンが振り向く。

「あぁ～そりゃこのアホリンゴが道に迷っ……！」
「黙れ」
「ぐほぉぉぉうっ！！」

本当のことを言おうとしたゴンの腹に、リンゴがエルボーを喰らわせて黙らせる。

「ちょぉぉ～っと鬼人が出たっていう情報を聞きつけてねぇ～っ！ホホホホホっ！」
『……っ？』

嘘臭い笑みを浮かべるリンゴに、門貴と由雉が少し引きつった表情で首をかしげる。

「でもじゃあ“あの御方”って、もしかして鬼人のことだったのかなぁ？」
「あの御方っ？」

由雉の言葉に、眉をひそめるゴンとリンゴ。

「あの御方って？」

「ラクダたちの親玉っぽいのがいるらしいんだよねぇ～輝矢だけ連れてかれちゃってさぁ～」

「輝矢をっ？」

「そういやハチ公の姿も見えねぇーなっ」

「桜時も輝矢ん追ってったんちゃうかなぁ～戦っとったっぽいランプ男は砂漠に倒れとったのに、どこにもおらへんしぃ～」

『……っ』

門貴と由雉の説明に、ゴンとリンゴが少し厳しい表情となって顔を見合わせる。

「んでっ？竹取たちは今、どこにっ？」

「たぶん、この辺～」

「あっ？」

地面を指差す由雉に、ゴンが顔をしかめる。

「この辺って……」

「うん。この砂漠の下ぁ～」

その砂漠の下。地下の空洞。

「ウフフフっ……！そらそらそらぁぁぁぁぁっっ！！」

「クっ……！」

交互に向かってくるサソリの左右の爪。輝矢はそれを必死に避ける。

――――ガラガラガラっ……――――

「……っ」

輝矢の避けた爪が、空洞の壁を次々と抉り、その猛毒に溶かされては崩れ落ちる。軋み始めた天井を見つめ、輝矢がその表情を曇らせる。

「あまり後先考えない攻撃はやめた方が良いのではありませんか……？」

輝矢がサソリの方を見て言う。

「ここは恐らく砂漠の下に作られた空洞。壁が崩れれば、大量の砂が流れ込み、ここは埋め尽くされる」

天井の軋み具合から考えても、そう遠い時間の話ではない。

「そうなればアナタだって……」
「ウフフフっ……！アハハハハっ……！！」
「……っ？」

輝矢の警告を、勢いよく笑い飛ばすサソリ。その様子に、輝矢が眉をひそめる。

「だから何ぃ～っ？もうちょっと大人しい攻撃でもしろってゆうのぉっ？……っ！」
「……っ！」

言っているそばから、勢いよく尾を振り上げ、輝矢へと向けるサソリ。

「うっ……！」

――――バァァァァァーーーンっ！！――――

輝矢の避けた尾が、壁へと突き刺さり、その壁が勢いよく崩壊する。

「だいたいっ、砂漠のサソリが砂に埋もれたくらいで死ぬわけないでしょぉっ！？」

尾を戻し、サソリが強く言い放つ。

「死ぬのはお前だけよっ！！」
「……っ」

サソリの言葉に、顔をしかめる輝矢。

「まぁ砂に生き埋めになる前にっ……お前は私に殺されるんだけどねぇっ！！」

そう言って、サソリが右爪を振り上げる。

「やれやれっ……“砂で危ないので大人しくしましょう”作戦は失敗しましたかっ……」

爪を振り上げたサソリに対し、輝矢は冷静な表情を見せる。

「では私も……思いきり暴れてとっとと終わらせましょうかねっ」

三日月を構え、輝矢が目つきを鋭くする。

「ウフフっ……！！さぁっ！死になさぁぁーいっ！！」
「“月器っ……」

振り下ろされる爪に、輝矢が三日月を掲げる。

「望月”っ……！」

――――パァァァァァーーーンっ！！――――

三日月が大きな球体へと変化し、振り下ろされたサソリの右爪を包み込む。

「何っ……！？」

望月に包まれた右爪は、動きを止められ、それ以上振り下ろすことができなくなる。動かぬ右爪に、焦りの表情を見せるサソリ。

「なっ！何っ！？これはっ……！！」

「……っ」

初めて焦りの表情を見せるサソリを見ながら、輝矢が両手を構える。

「……“新月”っ……！」

「うっ……！」

右爪を包み込んでいた望月が、真っ黒な空間となり、サソリの右爪を呑みこんでいく。

――――バァァァァァーーーンっ！！――――

「ぎゃあああああああああああああっっっ！！！」

新月とともに右爪が消え、引き千切られたかのように血が飛び散り、サソリは激しい叫び声をあげた。

「痛いっ！痛いっ！痛いいいいいいいっっ！！！」

流れる緑色の血に、狂ったように叫ぶサソリ。

「“月器・下弦”っ……」

飛び散る血にも、サソリの叫び声にも、顔色一つ変えずに、輝矢が再び月器を構える。

「“水月”っ！」
「何っ……！？」

――――バァァァァァーーーンっ！！――――

「ううっ……！きゃあああああああああっ！！！」

地面から突き上げた無数の水の刃が、サソリの硬い鋼鉄の皮膚を

貫通し、その体を切り裂いた。サソリの巨体が吹き飛び、後方の壁へと背中を打ちつける。

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」

少し息を乱しながら、サソリを見つめる輝矢。

「うっ……ううううっ……」

倒れ込んだサソリが、苦しげな声を漏らす。

「わっ私がっ……まさかっ……こんなっ……」

「鋼鉄の皮膚といえど、水力までも防ぐことはできなかったようですね……」

傷だらけの自分を信じられないといった表情のサソリに、輝矢が冷静な表情で言い放つ。

「直にここは崩れ落ちます……砂漠の地下で永遠に眠りなさい……」

輝矢がサソリに背を向ける。

「私は脱出させていただきます……」

輝矢がその場からゆっくりと歩き出していく。

「少しっ……」

遠ざかっていく輝矢の背中を見ながら、小さな声を漏らすサソリ。

「油断しすぎじゃないのぉぉっ！！？小娘ぇぇぇっっ！！！」

「えっ……？」

サソリの声に、輝矢が振り向く。

「“鬼爪・天回”っっ！！」

「なっ……！」

飛んでくる五本の爪。輝矢が大きく目を見開く。

「三日月っ！」

輝矢が三日月を振るい、五本の爪を叩き落とす。

「きっ鬼爪っ……？」

「ウフフフっ……」

「……っ！」

戸惑う輝矢が顔を上げると、そこには引き千切られた右爪から、明らかにサソリのものではない、細長い腕を生やし、怪しげな微笑

みで起き上がっているサソリの姿があった。

「その姿っ……アナタ、まさかっ……」

「そうよぉ～っ！私は最早、ヒトでもサソリでもないっ！！」

――――パァァァァァーーーンっ！！――――

水月を喰らった鋼鉄の皮膚が崩れ落ちていき、その下から紫紺の皮膚が姿を現す。大きな爪は人に近い、五本の爪を持つ、長い腕へと変わり、新たに生えた二本の足で、サソリはゆっくりと立ち上がった。サソリの尾はそのままに、頭から金色の角が二本生える。

「……っ」

サソリのその姿に、表情を険しくする輝矢。

「鬼っ……」

「ウフフっ……そぉっ！私は鬼っ！鬼に生まれ変わったのよぉっ！！」

「鬼人化っ……人間っ……」

輝矢の前にまたしても、鬼人化人間が立ち塞がった。

第２４章　桜時、開花　★２

戻って、砂漠の上。

「じゃあ竹取とハチ公の援護は俺らに任せて、お前らはここでラクダどもでも見張ってろっ」
「うっうん～まぁそれはいいけどぉ……」

強気で言うゴンに、由雉が少し眉をひそめる。

「言ったよねぇ？輝矢たちはこの砂漠の下にいるってぇ」
「せやせやっ！援護は任せとけって、どないして輝矢んとこまで行くんやぁ？」
「あっ？それはだなぁ」

戸惑う門貴と由雉に、自信のありそうな笑顔を見せるゴン。

「狐化して、地面を掘るっ！！」
「一生かかるわっ！！アホぉぉぅっ！！」
「ぐはぁぁぁぁっ！！」

勢いよく答えたゴンを、リンゴが勢いよく蹴り飛ばす。

「ったくっ」
「まぁゴンが考えそうなことだけどねぇ～」
「んっ？掘るんの、何があかんのやっ？」
「バカは黙っててもらえる？」
「がびぃぃーーーんっ！！」

疑問を抱く門貴に、由雉の容赦ない一言が降りかかり、門貴がショックを受けてその場にしゃがみ込む。

「まぁこうなったら地道に待ってっ……」

「援護には行くし、地面も掘るわよっ」

「へっ？」

リンゴの思いがけない言葉に、由雉が目を丸くする。

「一緒に行動しすぎてゴンのバカさがうつったの？それとも元から……」

「うっさいわねっ！！大人しく見てなさいっ！！」

――――ボォォォォォ～～～ンっ！――――

由雉に怒鳴り返して、リンゴが白い煙へと包まれていく。

『……っ』

白い煙の向こうに見えてきたそれに、由雉と門貴が目を見張る。

「よいしょっと」

そこにいたのは、人化していつもよりは大きい状態の門貴と由雉よりも、遥かに巨大な青色の竜であった。壁のような巨体に、滑れそうな長い尾。鋭い爪と牙を持ち、その鋭い瞳は、見られただけで、

多くの動物が逃げだすだろう。

「龍っ……」

「そういえば青守って“龍人”だったんだっけぇ～」

猿や雉とはスケールの違う獣化したその姿に、二人が少し圧倒される。

「私、地竜なの。イチゴは翼竜なんだけどねっ」

「すってきやなぁぁぁっ!!リンゴさんっ!!俺は一生、あなたに付いていっ……！」

「その姿なら確かに、掘ってでも輝矢たちのところへ行けそうだね」

門貴の言葉を勢いよく遮り、由雉が冷静に言う。

「ええ。ほらっ、ゴンっ！一緒に行くならとっとと乗りなさいっ！」

「痛てててっ……って、んっ？わっわあったよっ！」

リンゴに蹴られた脇腹を押さえていたゴンが、リンゴの言葉を聞き、少し慌てた様子でリンゴの大きな背へと飛び乗った。

「じゃあラクダどもを頼むぞっ！」

「そっちこそねぇ～」

リンゴの背に乗ったゴンに、由雉がやる気なく手を振る。

「よっしゃっ！行けっ！リンゴ竜っ！」

「仕切ってんじゃないわよっ！！」
「どわあああああっっ！！」

リンゴが怒りながら勢いよく上体を振り上げると、ゴンが振り落とされそうになり、必死にリンゴの背中を掴んだ。

「行くわよっ！」
「うおっ！」

――――バァァァァァーーーンっ！！――――

『うわっ』

激しい砂飛沫をあげて、砂漠の下へと潜っていくゴンを乗せたリンゴ。砂漠上に残された二人に、勢いよく砂が降りかかり、二人は思わず身をかがめた。

「もぉ～砂だらけになっちゃったじゃなぁ～いっ」

かなり不機嫌そうに服の砂を払う由雉。

「……。」
「……っ？」

砂にあいた大きな穴を見つめ、いつになく神妙な表情を見せている門貴に、由雉が少し眉をひそめる。

「何っ？どうかしたのっ？」
「へっ？あっあぁ～いやっ、ちょっとっ……」
由雉の問いかけに、門貴が少し焦ったような苦笑いを見せた。
「何か……嫌な予感がしてなっ……」
「……っ」
門貴の言葉に、由雉が少し目を細める。
「まっまぁ気のせいやと思うんやけどなっ！」
「気のせい、気のせいっ！サルの勘ほど当たんないものなんてないんだからぁ～」
「そこまで言うぅ～？」
「……っ」
口をすぼめた門貴を横目に、由雉もまた、湧き上がる予感にそっと俯いた。

「鬼人化っ……人間っ……」

――――貴女もきっと言うわっ！生きたいってっ！鬼になってでも生きたいってっ！！――――

輝矢の前に再び現れた鬼人化人間。そしてそのサソリの姿が、輝矢に、かつて戦った鬼人化した女・オーロラのことを思い出させた。

「そうっ！私はやっと手に入れたのっ！究極の力をっ！何者にも負けない力をっ！！」

サソリは、両手を大きく広げ、喜びに打ち震えるかのように声をあげる。

「この力さえあればっ……！」
「誰ですっ……？」
「……っ」

言葉を遮って問いかけてきた輝矢に、サソリが少し表情をしかめる。

「はぁっ？」
「アナタを鬼人化したのはっ……誰ですかっ……？」

――――あの方はっ……偉大なお方っ……――――

――――あの方というのはっ……――――

いつも鬼人化人間の裏にちらつく影。恐らく、輝矢が倒さねばならない最大の相手。

「それはねぇっ……」

サソリが少し俯く。

「知ぃぃ～～らないっ！！」

「……っ」

“鬼口”っ！！」

サソリが大きく口を開き、輝矢へ鬼口を放つ。

「“月器・十六夜”っ！」

三日月を十六夜へと変え、向ってくる鬼口へと構える輝矢。

――――バァァァァァーーーンっ！！――――

「うっ……！」

輝矢が十六夜で鬼口を受けとめる。

「まぁっ！知っててもお前になんか教えないけどねぇっ！“鬼口”っ！！」

「なっ……！！」

サソリが後方から、もう一発鬼口を放つ。

――――バァァァァァーーーンっ！！――――

「うあああああああっ！！」

二発分の威力となった鬼口を、十六夜では受け止めきれず、輝矢が後方へと吹き飛ばされる。

「ううっ……！」

背中を壁にぶつけ、力なく床に落ちる輝矢。

「もっとよっ……」

「うっ……ううっ……」

十六夜を支えに何とか起き上がる輝矢を見ながら、怪しく微笑むサソリ。

「もっと私を楽しませて頂戴っ！！小娘ぇぇぇっっ！！」
「クっ……！」

厳しい表情を見せる輝矢に対し、余裕の笑みを浮かべているサソリ。まだ本気も出していないのだろう。ただ輝矢との戦いを楽しんでいる。

「ねぇっ！！？」

立ち上がれてもいない輝矢の元へと、駆け込んでいくサソリ。

「ねぇっ！！！」
「うっ……！十六夜っ！！」

振り下ろされた鬼爪に、十六夜を突き出す輝矢。

――――――……っっ！！――――――

十六夜と鬼爪が、勢いよくぶつかり合う。

「クっ……！」
「受けとめちゃっていいのぉ？」
「えっ……？」

サソリの重い攻撃に必死に踏み堪えていた輝矢が、サソリの問いかけに眉をひそめる。

――――ジュッ……――――

「なっ……！」

鬼爪と接触している十六夜の一部分が、酸に触れたかのように溶け出す。

「げっ……！“月器・三日月”っ！」

輝矢がすぐさま十六夜を三日月へと変え、鬼爪をかわして、サソリの背中側へと移動する。

「ウフフっ……」

少し微笑みながら、ゆっくりと振り向くサソリ。

「気をつけるのね。私の爪は、鬼の姿となっても猛毒のままよぉっ」

「……っ」

つまり、かすり傷一つでも負えば、輝矢は死んでしまうということにも、変化はないということ。圧倒的不利のこの状況に、さすがの輝矢も表情を曇らせる。

「それとももう諦めるぅ？」
「誰がっ」
サソリの言葉を強く否定し、三日月を前へと突き出す輝矢。
「“月器・下弦”っ」
三日月が下弦まで満ちていく。
「“水月”っ！！」
「……っ」
サソリが立っている辺りの地面から、無数の水の刃が、サソリに向かって突き上げてくる。
「さっきと同じ技っ？芸がないわねぇっ」
そう言って、サソリが勢いよく尾を振るう。
「私が二度も同じ技をっ……喰らうはずがないでしょぉぉぉっ！！？」
「なっ……！」
サソリが尾を振るうと、サソリに向かってきていた無数の水の刃が、風圧に方向を変え、一気に輝矢へと向かって飛んでくる。

「水月を跳ね返したっ……？クっ……！」

弾き返ってくる自らの水の刃たち。少し顔を引きつった輝矢が、その場から高々と飛び上がり、水月を避けようとする。

「“鬼爪・天回”っ！」

「……っ！」

飛び上った輝矢へと、向ってくる十本の鬼爪。

「猛毒の爪を受けるか、自らの水を受けるかっ……さぁっ！どうするっ！？小娘っ！！」

「クっ……！」

楽しげに言うサソリの言葉に険しい顔を見せながら、輝矢が空中で体の上下を逆にし、天井を蹴りあげて、再び地面へと降下していく。

「……っ」

降下した輝矢に、向ってくる水月。

――――バァァァァァーーーンっ！！――――

「あああああっっ！！！」

自ら放った水月を全身に受け、輝矢が後方へと倒れ込む。

「自らの水を受けることを選んだか……まぁ賢明な判断ねぇ……」

十本の鬼爪を両手に戻しながら、サソリが呟く。

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」

地面に手をつきながら、何とか必死に体を起こす輝矢。肩でしなければいけないほどに乱れた息。鬼口と水月を喰らい、体も相当ガタがきている。

「そろそろ諦める気になったぁ？」

「……誰がっ……」

傷は痛むが、輝矢は強くサソリを睨みつけた。

「大丈夫よぉ～死んだって淋しくないわぁ」

ゆっくりと輝矢のもとへと歩み寄って来るサソリ。

「お前のお仲間たちが、きぃ～っと先に行って待ってるからぁっ」

「仲間っ……？」

サソリの言葉に、ハチたちの顔が頭を過ぎる。

「そぉ～うっ！きぃっとラクダたちの夢の中で、永遠の眠りについてるんじゃないかしらぁ？ウフフっ」

「……。」

ゆっくりと俯いていく輝矢。

「……そうですか……」

輝矢がかすかに聞こえる声を漏らす。

「ならば……急がねばなりませんね……」

「……っ？」

輝矢の言葉に、サソリが眉をひそめる。

「なぁ～にぃ～っ？急いで助けにでも行こうってわけぇ？」

サソリが見下したような笑みを浮かべる。

「でも残念ねぇ～っ！お前はここで私がっ……！」

「いえっ……」

「……っ？」

キッパリと言葉を遮り立ち上がる輝矢に、サソリが表情を少し引きつる。

「あまり待たせては餌を要求されますので、急がねばと言ったんです……」

「何っ……？」

「ラクダなんて、もうとっくに倒して、暇しているでしょうからねぇっ」

「……っ」

自信に満ち溢れた笑顔を見せる輝矢に、サソリの表情が初めて曇る。

「そうっ……」

サソリが短く声を出す。

「ならっ……本当にいないかどうかっ……！死んで確かめてくるといいわぁっ！！」

「……っ」

サソリの言葉に、表情を引き締める輝矢。

「三日月っ……」

輝矢が三日月を握る右手に、さらに力を込める。

「私に力をっ……あの者を倒せるだけの力をっ……」

――――……っっ！！――――

輝矢の言葉に答えるかのように、三日月が金色の光を放ち始める。

「さぁっ！そろそろ終わりにしましょおっ！！小娘ぇぇぇっっ！！！」

「……っ」

向かってくるサソリに、輝き始めた三日月を構える輝矢。

「竹取輝矢っ……鬼退治、いたしますっ……！」

輝矢とサソリの、最後の攻撃が始まろうとしていた。

第２４章　桜時、開花　★３

「何でっ？」

またまた目つきの悪いこの男・狐上ゴン。二十二歳。

「何っで勢いよく地下に潜ったのに、いつの間にか地上に出て来ちゃってんだよっ！！？」

思いきり怒鳴り声をあげるゴン。そう、そこは一面に広がる砂漠の上であった。

「仕方ないでしょっ！地下じゃ方向感覚狂っちゃうんだからっ！」

ゴンに怒鳴り返すのは、何とも巨大な青色の竜。リンゴの龍化した姿である。

「元々、お前に方向感覚なんてもんはねぇーだろっ！！」

「うっさいわねっ！じゃあアンタが誘導してくれれば良かったでしょっ！？」

「バカ野郎っ！！俺が誘導したら地底火山まで行っちまうだろうがっ！！」

「だっから何、自信満々に言ってんのよっ！！」

砂漠で繰り広げられる二人の口論。

砂漠の下へと連れていかれた輝矢を救出するため、門貴と由雉を置いて、意気込んで出てきた二人であったが、結局はこのザマである。

「だいたいお前はなぁっ……！」
「それならアンタだってっ……！」

――――ゴゴゴゴゴゴゴっ……！――――

『……っ？』

どこからともなく聞こえてくる、地響のような音に、ゴンとリンゴが口論を止めて、眉をひそめる。

「なっ何っ？この音っ……」
「……下、からだなっ」

ゴンが耳を澄まし、そう呟く。

「じゃあまさか輝矢っ……！」
「ああっ」

リンゴの言葉に、真剣な表情で頷くゴン。

「急いだ方が良さそうだっ……」
「ええっ……」

――――ゴゴゴゴゴゴゴゴっ……！――――

「……っこの音はっ……？」

ゴンたちと同じようにその音を聞きつけ、ふと足を止めたのは、桜時であった。桜時はアラジンから聞き出した地下通路を通り、砂の地下に消えた輝矢のもとを目指していた。

「……っ」

地下通路の天井にヒビが入り、そこからパラパラと、上の砂漠の砂が落ちて来ていた。

「急がねぇと……やべぇことになりそうだなっ……」

感じる危険に、桜時が表情を曇らせる。

「よしっ……！」

桜時は、先を急ぐ足を、さらに速めた。

「“鬼爪・天回”っ！！」
「三日月っ！」

飛んでくる鬼爪を、三日月で払い落す輝矢。

「……っ！」

道を開いた輝矢が、そのまま三日月を構えて、サソリの懐へと飛び込んでいく。

「甘いっ……！」
「うっ……！」

飛び込んでいく輝矢に、勢いよく尾を振り下ろすサソリ。

「クっ……！」

輝矢が後方へと飛び、サソリとの間に距離を取る。振り下ろされた尾は、勢いよく地面に突き刺さり、床に大きなヒビを入れた。

「……っ」

尾の刺さった床が溶けていくのを見て、輝矢が眉をひそめる。

「あぁ～っ、ちなみに私の尾も猛毒よぉっ」

どこか楽しげに笑うサソリ。

「さぁっ！逃げてばかりいないでぇ、とっとと私を退治して見せてよぉっ！！小娘ぇぇっ！！」

「言われなくてもっ」

サソリの挑発に、輝矢がさらに表情を鋭くして、三日月を構える。

「……“水月”っ……！」

「……っ」

三日月を構え、今度は正面から無数の水の刃を放つ輝矢。

「またまた同じ技っ……」

向かってくる水の刃に、サソリが少しうんざりした表情を見せる。

「もう飽きたって言ってんのよぉぉぉっ！！」

サソリが尾を翻し、水の刃を輝矢へと弾き返す。

「……っ」

自らが放った水の刃から逃れるために、上空へと飛び上がる輝矢。

「思ったより学習能力のない小娘ねぇっ……！“鬼爪・天回”っ！！」

サソリが先ほどと同じように、飛び上った輝矢に十本の鬼爪を飛ばす。先ほどと同じように、鬼爪を喰らうか、水を喰らうかの選択を迫られる、上空の輝矢。

「……っ！」

輝矢が天井を蹴り、水の刃の向かってくる地面へと降下していく。

「さっきとまったく同じっ……つまらない女ねっ……」

「“月器・上弦”っ……」

サソリが呆れきった表情を見せる中、自らの水へと向かっていきながら、輝矢が三日月を上弦に変える。

「“水月”っ……！」

「えっ……？」

呆れきっていたサソリの上空から、降り注ぐ無数の水の刃。

「うっ……！」

サソリが大きく目を見開く。

――――バァァァァァーーーンっ！！――――

弾き返された水月が輝矢に、降り注いだ水月がサソリに、それぞれ同時に直撃する。空洞内に激しい水飛沫が飛び散った。

「ううっ！」

水月を喰らった輝矢が、壁に背中を打ちつけ、その場に力なく座り込む。

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」

ボロボロの体で息を乱しながら、まっすぐに水月を喰らったサソリの方を見つめる輝矢。

「ウフフっ……」

「……っ」

聞こえてくる笑い声に、輝矢の表情が曇る。

「ウフフフっ……」

落ち着いた水飛沫の向こうから、見えてくる影。

「今の……なぁにっ……？」
「なっ……！」
そこに立っていたのは、まったく無傷の、余裕の笑みを浮かべたサソリであった。
「そっそんなっ……」
まったく水月がきいていない様子のサソリに、輝矢は驚きを隠せない。
「素晴らしいわっ……これが鬼の力っ！私の力っ！」
自分の力に、感動したように言葉を放つサソリ。
「これが私の求め続けてきたものよっ……！！やっと手に入れたっ！！やっと手に入れたわっ！！」
「……っ」
そのサソリの様子に、輝矢が眉をひそめる。
――――貴女だって言うわっ！生きたいってっ！鬼になってでも生きたいってっ！！――――

思い出されるオーロラの言葉。形は違えども、自らの欲望を叶えるために、鬼となったことだけは、オーロラもサソリも同じであった。

「愚かなサソリ……」
「……っ」

輝矢の呟きに、サソリが言葉を止め、笑みを消す。

「何ですって……？」
「そんな破壊することしかできない強さになど…何の意味もないというのに……」

そう言いながら、輝矢がゆっくりと立ち上がる。

「そんな無意味な強さを手にするために……ヒトを捨てるとは……」

輝矢が鋭い瞳でサソリを見つめる。

「愚かな女……」
「……っ！」

輝矢の言葉に、サソリが初めてその表情に怒りの色を見せる。

「死に損いのクセにっ……ごちゃごちゃと煩いのよぉっ！！小娘ぇぇっ！！」
「……っ」

怒りを剥きだしに、勢いよく輝矢の方へと駆け込んでくるサソリ。
輝矢が素早く三日月を構える。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」

大きく両腕を振りかぶるサソリ。

「クっ……！」

サソリが両腕を振り下ろすことを予測して、輝矢が上空へと大きく飛び上がる。

「ウフフっ……！かかったわねぇっ！！小娘っ！！」
「えっ……？」

飛び上った輝矢に、まっすぐ向かっていくサソリの尾。

――――――……っっ！！――――

「うっ……！」

尾が、輝矢の上体を貫通する。

「……っ」

勝利を確信した笑みを浮かべるサソリ。

――――パァァァァァーーーンっ！！――――

「なっ……！！」

尾が貫通した輝矢の体が、水となって辺りに飛び散った。

「水分身っ……！？」

降り注ぐ水に、焦りの表情を見せるサソリ。

「本物はどこにっ……！？あっ……！」

「……。」

サソリが辺りを見回すと、サソリから少し距離を取ったところに立ち尽す輝矢の姿。

「見つけっ……！」
「……っ」
輝矢がサソリに右手を向ける。
「何っ……？……っ」
その様子に少し戸惑うサソリであったが、周囲でまだ降る水が、ほんのりと光を放っていることに気づく。
「まさかっ……！」
「……“水爆”っ……！」
「……っ！！」
――――バァァァァァーーーンっ！！――――
サソリの周囲に降っていた水、落ちていた水、そしてサソリの体についていた水の、その一粒一粒が一気に爆発した。
「あああああああああああああああっっっ！！！」

無数の爆発がサソリを直撃し、サソリが叫び声をあげる。

「うっ……！ううううっ……！」

爆風の中、血の流れる全身を、何とか踏み留まらせるサソリ。

「こっこんなことっ……！私は最強の力を手に入れたはずっ……！」

「言ったはずです……」

「……っ！」

吹き荒れる爆風の中、いつの間にかサソリの目の前に立っている、鋭い表情の輝矢。

「破壊することしかできない強さになど……何の意味もないと……」

「……っ煩いっ……煩いっ！煩いぃぃぃっ！！！」

「……っ！」

サソリが大きく爪を振り上げる中、輝矢が素早く三日月を振るった。

――――――――――――――――――――っっ！！――――――

『……。』

空洞内に、一瞬訪れる沈黙。

「うっ……あああああああああああああああああああっっっ！！！」

飛び散る血飛沫とともに、激しい断末魔をあげたのは、サソリの方であった。

三日月に胴体を大きく斬り裂かれ、サソリがゆっくりと後方へ倒れ込んでいく。

「こっこんなっ……私っ……」

途切れ途切れの声で呟くサソリ。

「私はぁぁぁぁぁぁっっ……！！うっ……」

悔しげな声をあげて、そのまま、サソリはゆっくりと床に伏した。

「……。」

サソリが倒れたのを確認すると、輝矢は少し遣り切れない表情で俯いた。

「おぉーいっ！輝矢ぁぁっ！！」

「……っ？」

聞こえてくる声に、輝矢が振り返る。

「ハチっ」

「やぁ～っと見つけたっ」

大きく手を振りながら、輝矢のもとへと駆けてくるのは桜時であった。どうやら無事に地下通路を抜けて来れたようである。

「愛しの私が心配で、こんなところまで助けに来てくださったのですか？」

「違うわぁぁぁっ！！！」

相変わらず調子のよい輝矢に、ハチが勢いよく突っ込みを入れる。

「それよりラクダどもの親玉はっ？倒したのかっ？」
「ええ、たった今」
「よしっ！じゃあとっととココ出っぞっ！さっきからミシミシいってて、何かやべぇっ」
「そうですね」

そう言葉を交わすと、二人は足早に地下通路へと続く出口へと歩いて行く。

「クっ……」

その時、倒れていたサソリの表情がかすかに動く。

「おのれっ……！……っ！」

――――ブシュっ……！！――――

「うっ……！」

背後から向かってきたサソリの尾が、去ろうとしていた輝矢の上体を貫通する。

「なっ……！！？」

大きく目を見開く桜時。

「かっ……」

飛び散る赤い血に、桜時の表情が凍りつく。

「輝矢ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！！」

「……んっ……？」

ふと何かを感じ、振り向いたのは、龍国・エセお菓子の家でのん

びりしている太狼であった。

「どうかしました？タロー様」

「あっ……いやっ……」

問いかけたグレーテルに、太狼が少し戸惑ったように答える。

「今……何か……」

第２４章　桜時、開花　★４

「……あっ……あっ……」

ボタボタと赤い血を流し、その場に倒れていく輝矢。

「輝矢っ！！」

桜時の声が空洞内に響く。

「アッハッハッハっ！！最後の最後に油断したわねぇっ！！小娘ぇぇっ！！」

尾を戻しながら高々と笑いあげる、倒れたままのサソリ。

「私は負けはしないっ！！お前も一緒にここで死ぬのよぉぉぉっっ！！！」

「このっ……！」

桜時が村雨丸を抜き、瀕死のサソリのもとへと飛び出していく。

「“瞬花っ……終刀”っ……！！」

「うぐっ……！ぐはあああぁぁぁっっっ！！！」

桜時が村雨丸を、サソリの胸へと思いきり突き刺す。

「クっ……！ここまでっ……のようねっ……」

四肢から砂へと化し始めるサソリの体。

「でもっ……私の尾は猛毒っ……数分ともたずにっ……あの小娘も死ぬわっ……」

「毒っ……？」

サソリの言葉に、表情を曇らせる桜時。

「そうっ……ウフフっ……ウフフっ！ううっ……」

「……っ」

最期まで楽しげに笑って、サソリは、完全に砂と化して、そして消えていった。

「……あっ！輝矢っ……！！」

桜時が村雨丸をしまい、慌てて倒れた輝矢のもとへと駆け寄る。

「輝矢っ……！！」

「うっ……！」

血まみれの輝矢の上体を支え上げる桜時。輝矢が苦しげな声を漏らす。

「今、由雉のところへっ……！」

「ううっ……！！」

「……っ！」

桜時が輝矢を動かそうとするが、その途端に、輝矢がさらに苦しそうな声をあげた。その声に、桜時は動かそうとしていた手を止める。

「ダメだっ……下手に動かしたら毒の回りが早まるっ……」

険しい表情を見せる桜時。

「由雉たちが来てくれるまで待つしかっ……」

――――ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴっ……！――――

「……っ」

先ほどと同じように聞こえてくる、地響のような音に、桜時が天井を見上げる。

――――ミシっ……ミシっ……――――

軋んだ音を出している天井。

「崩れ落ちんのもっ……時間の問題かっ……」

輝矢たちの激しい戦闘により、空洞の壁や天井は、すでに崩れ始めている。この上は砂漠。空洞が崩れ落ちて、ここが砂で埋め尽くされるまで、もうそう時間もない。

「でもっ……逃げるったってっ……」

一刻を争うような脱出を、今の輝矢ができるはずもない。

「どうしたらっ……！」
「ハ……チっ……」
「……っ？」

頭を抱えた桜時を、弱々しい声が呼ぶ。

「ハチ……」
「輝矢っ……」

いつもよりも顔色の青い、弱々しい表情の輝矢が、桜時を見つめる。

「しゃべんなっ！毒の回りがっ……！」
「行って……下さい……」
「えっ……？」

輝矢の言葉に、桜時が大きく目を見開く。

「私を置いて……ここから脱出して……下さい……」
「何をっ……！」

思いがけない言葉に、桜時が思わず声を荒げる。

「んなことできるわけっ……！！」
「そんなに愛しの私と……一緒に心中したい……ですかっ……？」
「だっ！誰がっ……！！」
「……っ」

勢いよく否定する桜時を見て、輝矢がそっと微笑む。

「ならっ……行って……下さいっ……」
「……っ！」

輝矢の言葉に、唇を噛みしめる桜時。

「……行かないっ……行かないっ！！」

まるで意地を張った子供のように、桜時が必死に否定する。

「まだ……やりたいことが……たくさんあるでしょう……？」

「……っ」

そんな桜時を諭すように、聞こえてくる声。

「色んな人間と出会って……色んなものを見たいでしょう……？」

輝矢の血まみれの手が、輝矢の肩を支えている桜時の手に重なる。

「父親だって……探したいでしょう……？」

「それはっ……」

輝矢の言葉に、何を言い返していいのかわからず、桜時は思わず俯く。

「アナタは……こんなところで死んでは……いけない……だからっ……」

「……ならお前もっ……！！」

「私は……ここまで……のようですのでっ……」

「んな弱気なこと言うなよっ！！お前らしくないだろっ！！？」

叫ぶ桜時の瞳が、潤む。

「言えよっ！！いつものお前らしくっ！！自信満々に“こんなの何ともない”って言えよっ！！」
「……ハチっ……」
必死に叫ぶ桜時に、輝矢が目を細める。
「言えよっ……！」
「……すみ……ません……ハチ……」
俯く桜時に、謝る輝矢。
「もっと……旅……したかった……ハチや……サル、キジ……みんなで……」
輝矢が桜時の手を握る。
「もっと……ずっと……一緒に……いたかった……」
「輝矢っ……」
桜時も、もう一方の手で輝矢の手を握りしめる。

「ハチ……」

輝矢がそっと微笑む。

「楽しかっ……」

「……っ！！」

ゆっくりと落ちていく輝矢の手。ゆっくりと閉じていく輝矢の瞳。

「輝矢っ……？」

桜時の呼びかけに、輝矢はもう答えはしない。

「輝矢っ……」

目の前で冷たくなっていく輝矢に、桜時の声が、肩が、全身が震える。

「嫌だっ……輝矢っ……死ぬなっ……」

輝矢の手を、強く握りしめる桜時。

「死ぬなぁぁぁぁぁぁぁっっ！！！」

叫ぶ桜時の体から、強い白色の光が発せられた。

――――――パァァァァァァァァーーーンっっ！！！――――――

「あれはっ……！」

砂漠から天へと突き上げるように伸びていく白く強い光を見て、リンゴが大きく目を見開く。

「ゴンっ……！」

「ああっ！行くぞっ！リンゴっ！」

リンゴの言葉に頷きながら、ゴンがリンゴ竜の背に飛び乗る。

「ええっ……！」

二人は、白い光のもとへと急いだ。

――――――ドォォォォォォォーーーーンっっ！！――――――

「うおっ！！」

突然、大きく揺れる地面に、門貴が驚いたような声を出しながら、必死にバランスをとる。

「なっなんやっ！？」

「地下で何か起こってるみたいだね」

焦る門貴の横で、冷静に呟く由雉。

「何かって何がっ……んっ？」

由雉に問いかけようとした門貴の足元の砂が、徐々に盛り上がり始める。

「なっ何やっ……！？」
「これはっ……」
盛り上がっていく砂に、門貴と由雉の体が持ち上げられていく。
『うわあああああああああああっっっ！！！』
「あそこよっ……！」
――――ボォォォォォォ～～～ンっ！――――
天へと突き上げている白い光のもとへと辿り着いたリンゴが、ゴンを地面へと降ろして、人化する。
「……っ！これはっ……！」
「何っ！？これっ……！！」

駆け付けたゴンとリンゴが、目を見開く。

『……っ』

二人の目の前に広がっていたのは、まるで隕石でも落ちたかのような、大きな穴であった。恐らくは、あの強い光に突き上げられ、上の砂漠が吹き飛んだのだろう。普通では考えられないほどの、強大な力である。

「んっ？あっ……！」

穴の中央部に、ゴンが白い光に包まれた人の影を見つける。

「ハチ公っ……！？」

ゴンが慌てて、穴の中央部へと駆け降りていく。

「ハチ公っ……！！」

「……っ」

ゴンの声に、穴の中央部で座り込んでいた桜時が、ゆっくりと振り返る。

「ゴンっ……」

駆け寄るゴンに、力のない表情を向ける桜時。桜時の体を包んでいた白い光が止み、天へと突き上げていた光も消えていく。

「お前っ……」

少し戸惑うように、桜時を見つめるゴン。

「ゴンっ……輝矢がっ……」

「何っ……？」

桜時の言葉に、ゴンが眉をひそめる。

「輝矢がっ……」

「……っ！！」

ゴンが、桜時の抱えている、血まみれで深々と瞳を閉じている輝矢に気づく。

「竹取っ……！！」

輝矢のもとへと駆け込むゴン。

「サソリの……毒にやられてっ……」

「毒だとっ！？」
「それで……俺っ……俺っ……」
「わっわかったっ！リンゴっ！！」
「ええっ！！」

ゴンが振り返ってリンゴを呼ぶ。穴を駆け降りてきて、慌てて輝矢の傍へとしゃがみ込むリンゴ。

「こっちへっ……！」

リンゴが、桜時の手の中から輝矢を動かす。

「輝矢っ……輝矢っ……」
「大丈夫っ！絶対助けるからっ！」

必死に輝矢に手を伸ばす桜時にそう言い、リンゴが輝矢を地面に寝かせ、上体の傷口に両手をかざす。

「輝矢っ……」
「任せたぞっ、リンゴっ！」

輝矢から離れた桜時を支え、リンゴに呼びかけるゴン。

「“龍掌”っ」

リンゴの両手が、青い光を放ち始める。

「“浄化”っ……！」

――――パァァァァァァーーーーっっ！！！――――

リンゴの両手の光が、輝矢の全身に広がり、包んでいく。

「クっ……！」

リンゴがさらに両手に力を込めると、青い光が強くなり、輝矢の体から紫色の煙のようなものが出てきて、空へと舞い上がっていった。

「ふぅ～っ、毒は抜けたわっ！後は傷の応急処置をしないとっ」

「それならキジんとこに行った方がいいな」

「ええっ」

冷静に言葉を交わすゴンとリンゴ。

「……。」

「……っ？」

リンゴが、まだ不安げな表情を見せている桜時に気づく。

「傷は酷いけど、もう大丈夫よっ」

桜時へリンゴが笑顔を向ける。

「輝矢は死なないわっ」

「……っ」

リンゴの言葉に、桜時が大きく目を見開く。

「良かっ……」

――――ボォォォォォォ～～～ンっ！――――

イヌの姿となり、力なく後方へ倒れ込んでいくハチ。

「桜時っ……！？」

倒れ込んだハチを、リンゴが心配した表情で覗き込む。

「すぅーっ……すぅーっ……すぅーっ……」

「……っ」

リンゴが覗き込むと、ハチは安心した様子で、すやすやと寝息を立てていた。

「だいぶ力使ったんだろっ……竹取もボロボロだが、こいつも相当、ボロボロだっ……」

眠ったハチを抱え、穏やかな笑顔を見せるゴン。

「寝かせといてやろうっ……」
「そうね……それにしても……」

リンゴが、穴の上を見上げる。

「ここ、砂漠……だったわよね……？」

リンゴが見上げた先には、一面の桜並木が広がっていた。

「さっ桜ぁ？」

周囲を桜の木に取り囲まれた門貴と由雉が、戸惑うように桜を見上げる。

「なんで砂漠に桜が……？」

「さぁ～？」

舞い散る桃色の花びら。灼熱の砂漠は、一気に春色。

「おぉ～いっ！ペットどもぉ～っ！！」

『……っ』

聞こえてくるゴンの声に、門貴と由雉は振り返った。

その後、リンゴの応援要請で駆けつけたオトポリの援軍により、ラクダ三兄弟は連行された。

輝矢たちが倒したサソリの回収も行われた。

輝矢は、由雉の癒羽により傷を癒やしたが、輝矢も桜時も意識は戻らず、一行はオトポリの車で、龍国へと戻っていった。

そして、その日、広大な御伽砂漠は姿を消し、桜の園へと姿を変えたのであった。

この出来事が、後に大きな波紋を呼ぶことを、今はまだ、誰も知

らない……。

第２４章　桜時、開花　★５

丸一日が経過した夜更け。龍国・エセお菓子の家こと、桃原太狼の家。

「なるほどねぇ～」

甘い香りのムンムン漂うコップを片手に、ゆったりとした口調でそう言うのは、この家の主人・桃原太狼。太狼はリビングの大きなソファーに腰をかけていた。

「砂漠のサソリ、かぁ～」
「はい」

太狼の言葉に、真剣な表情で頷くゴン。ゴンは、太狼の座るソファーの正面の椅子に腰かけていた。その隣の椅子には同じようにリンゴが座っている。

「すみませんでした、太狼さん」

ゴンが少し俯きがちに言葉を放つ。

「俺たちがもっと早く駆けつけていれば、竹取をあんな危険な目に遭わせることはっ……」
「いいよぉ～そんなことぉ全然気にしてないからぁ～」

少し責任を感じている様子のゴンに、太狼が穏やかな笑顔を向ける。

「太狼さんっ……」

そんな太狼の優しさに触れ、少し目を細めるゴン。

「君たちが道になんか迷わずに、まっすぐ輝矢ちゃんのもとに駆けつけてれば、こんなことにはならなかったぁ～なんて、ちっとも思ってないからぁ～」

「へっ……？」

太狼の言葉に、ゴンが固まる。

「どうせ道迷って砂漠まで行ったんなら、輝矢ちゃんの盾にくらいなってこいよぉ～なんて、ちっとも思ってないからぁ～」

『……。』

穏やかな笑顔の奥に潜む、ただならぬ威圧感に、ゴンとリンゴが顔を引きつる。

「タロー様ぁっ！何してらっしゃるんです～？」

「輝矢様のお傍に付いていて差し上げないとぉ～」

「ああ～ごめぇんごめぇ～んっ」

ヘンゼルとグレーテルに呼ばれ、太狼がその場を立ち、リビングから二階へと上がっていく。

「絶対、思ってんな……」

「思ってるでしょ、どう見ても……」

太狼がいなくなったところで、こっそり呟き合うゴンとリンゴ。

「まぁ今回はそう思われても仕方ねぇーなっ。竹取にあんな酷い怪我させちまったんだしっ」

「……っ」

ゴンの言葉に、リンゴの表情が曇る。

「怪我なんてっ……そんなレベルの話じゃなかったわっ……」

「えっ……？」

リンゴがそう呟くと、ゴンが目を丸くして、リンゴの方を見る。

「私たちが駆けつけた時、サソリの毒はもう、輝矢の体全体に広がってたっ……」

「……っ」

ゴンが眉をひそめる。

「普通なら……輝矢はとっくに死んでたはずよっ……」

「でっでもっ、竹取はっ」

「そう、生きてた。それは毒は全身に回ってるのに、体の細胞はほとんど死んでなかったからよ……」

「えっ……？」

リンゴの言葉に、ゴンが戸惑いの表情を見せる。

「だからこそ私の解毒もすぐに効果を発揮して、輝矢の体内から毒をすんなり追い出すことができた……」
「それって……」
「誰かが、死滅し続ける輝矢の細胞を、再生し続けたからこそ、輝矢は死を免れたのよっ……」
「誰かって……」

あの時、そんなことが出来た人物は、一人しかいない。

「ハチ公がっ……」
「そう、そんなことができたのは、朱実桜時だけ……」

あの時、天へと突き上げた白い光。恐らくは、桜時の放ったあの光が、輝矢の細胞を再生し続け、蝕むサソリの猛毒から、輝矢の身を守ったのだろう。

「人体の細胞の再生っ……それはもう、神の領域に程近いわっ……」

リンゴが険しい表情を見せる。

「それにあの桜っ……」

龍国と同じくらいの広さのある、一面の御伽砂漠を、一瞬にして桜の木で埋め尽くしてしまったあの力。

「ねぇっ、ゴンっ……」

リンゴが、ゴンに鋭い視線を向ける。

「あの子の力はっ……本当に“花力”っ……？」

エセお菓子の家二階・輝矢の自室。

『……。』

ベッドで眠る輝矢を、どこか不安げな表情で見守るモンキとユキジ。解毒と治療を終えた輝矢であったが、一日経った今も、まだ意識を戻さずにいた。

「嫌な予感っ、当たっちゃったね……」
「せやなぁ……」

ユキジの言葉に、モンキがポツリと答える。

「予感はしても……俺はいつも、ここぞって時に間に合わへんっ」
「……っ」

そっと微笑むモンキを見て、少し俯くユキジ。

――――一花っ……？一花ぁぁぁっっ！！――――

「……。」

モンキが何のことを言っているのか、わかるからこそ、ユキジは返す言葉を見つけられなかった。

「門っ…」
「門貴さまぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっ！！！」
「ぎゃあああああああああああああああっっっ！！！」
「……。」

部屋へと駆け込んできたヘンゼルから、物凄い勢いで逃げるモンキ。一瞬にして掻き消えるしんみりムードに、ユキジは思わず顔を引きつる。

「はぁっ……」
「あっれぇ～？君たち二匹だけかぁ～い？」
「……っ？」

ユキジが深々と溜息をつく中、部屋の中へとやって来たのは、リビングから上がってきた太狼であった。

「もう一匹、薄汚い貧相そうなイヌ、いなかったっけぇ～？」
「一言一言に悪意を感じる……」

太狼のさりげない言葉に、少し呆れたような表情を見せるユキジ。

「そういや桜時のやつ、さっきから見かけへんなぁ～？」
「桜時なら意識戻ってすぐ、どっか行っちゃったよぉ」
「ふぅ～んっ……」

モンキの問いに答えるユキジの言葉に、聞いてきたわりに興味なさそうに答える太狼。

「黄昏にでも行ったのかなぁ～？」
「へっ……？」

太狼の言葉に、ユキジはそっと首をかしげた。

龍国・海岸沿い。

「……。」

輝矢より一足先に意識を取り戻したハチは、輝矢に付き添うことなく、波の打ち寄せる夜の海の見える白い砂浜に、神妙な面持ちで座り込んでいた。

「……っ」

ハチがふと、自分の前足に視線を落とす。

――――死ぬなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！――――

無我夢中だった。ただ輝矢を助けたかった。

「あの……力……」

体の奥底から込み上げてきた力。今まで感じたこともない力。今

まで使ったどの力よりも、強大な力。

「あの力は……“花力”……？」

ハチ自身も、リンゴと同じ疑念を抱いていた。

「それにあの光っ……」

崩れ落ちる空洞自体を吹き飛ばし、天へと突き上げた白い光。

「あれも……俺の力っ……？」

ハチは、何とも不安げな表情で、自分自身に問いかける。

「俺はっ……」

そっと俯くハチ。

「俺は一体っ……」
「知りたいですか……？」
「えっ……？」

ハチの言葉に答えるように返ってくる、聞いたことのない女の声に、顔を上げるハチ。

「……っ」

ハチが声のした方を振り向く。

「……っ？」

「……。」

ハチが振り返った先に立っていたのは、短い白髪に、意志の強そうな紫色の瞳の、整った顔立ちをした、まだ十八，十九歳くらいの少女であった。その横には、長身に体格のいい黒髪の男。そちらは二十三，二十四歳くらいであろうか。少女は、毛皮の温かそうな服を着ているが、細く白い両手足を露出している。その背には、真っ白な槍のようなものを背負っていた。男も腰に大剣を差している。

「……っ」

武器を持った不審な二人に、眉をひそめるハチ。

――――ボォォォォォォォ～～～ンっ！――――

『……。』

二人が静かな表情で見つめる中、ハチが白い煙に包まれ人化する。

「何者だっ!?お前らっ!この国の人間かっ……!?」

村雨丸を抜き、警戒した様子を見せる桜時。

「いえ……」

桜時の問いかけに、少女が短く答える。

「じゃあ一体っ……!」

「我々は……貴方を知る者……」

「えっ……?」

少女の言葉に、桜時が大きく目を見開く。

「貴方のその疑念に……答えることのできる者……」

「……っ」

まっすぐに向けられる少女の瞳に、桜時は戸惑いの色を深くする。

「我々は貴方の仲間です……」

「なっ何をっ……!」

桜時が戸惑いを振り払うように、村雨丸の剣先を少女へ向ける。

「……っ」

そんな桜時を見て、長身の男の方が剣の柄に手をかける。

「やめろ」

「……ハイ」

少女の一言に、男は素直に手を下ろす。見た目とは異なり、少女の方が力関係では上のようである。

「信じては……もらえませんか……？」

「当ったり前だろっ！いきなり出て来て仲間だなんてっ……んなこと、誰が信じるかよっ！！」

「そうですか……」

強く拒絶する桜時に、少女は少し肩を落とした。

「この姿を見ても……ですか……？」

「えっ……？」

――――ボォォォォォォォ～～～ンっ！――――

桜時にそう問いかけ、白い煙に包まれていく少女。

「……なっ……！！」

煙の晴れたその先に立っているその動物の姿に、桜時が驚愕の表情を見せる。

「いっ犬っ……？」
「……。」

そこに立っていたのは、つぶらな瞳に美しく整った白い毛並みの、少し小柄な一匹のイヌであった。

「“犬人”っ……」

――――ボォォォォォォォ～～～ンっ！――――

桜時が驚きを隠せないでいる中、イヌが再び白い煙に包まれ、もとの少女の姿へと戻る。

「これでもまだ……我々を仲間と信じてはくれませんか……？」
「……っ」

――――朱実の名に、泥を塗る姿っ……――――

――――犬は犬らしく、お家の庭を駆け回っていればいいのっ！――

――

雀の家に生まれ、自分だけがずっと犬という異種の存在だった。

「……そんっ……なっ……」

それが今、自分と同じ、自分の同族が目の前にいる。

「我々は貴方の仲間……」

力なく村雨丸を下ろした桜時に、少女が再び言葉を発する。

「我々は貴方の居るべき場所を知る者……」

少女がゆっくりと、右手を桜時へ差し出す。

「我々とともに行きましょう……朱実桜時……」

「……っ」

差し出されたその手に、桜時はただ戸惑いの瞳を見せていた。

完

第2部・

第２４章　桜時、開花　★５（後書き）

第２部終わりました。
ついに色々とお話が動き出してきましたが…。
第３部・ハチ出生の秘密編も、頑張りますので、
今後ともよろしくお願いいたします。

第２５章　海からの依頼　☆１（前書き）

第３部の始まりです。

第２５章　海からの依頼　☆１

御伽砂漠での戦いから数日後。

龍国・エセお菓子の家こと桃原太狼の家。

「おはようございまぁーすっ」

朝の早い時間帯から、桃原家へとやって来たのは、いつものオトポリ制服姿のリンゴであった。その手には、大きな籠を抱いており、籠の中には色とりどりの果物が詰まっていた。

「……っ？」

チャイムを鳴らしても応答がないので、リンゴは少し首を傾げた後、玄関の扉を開ける。

「おはようございまぁーすっ。輝矢のお見舞いに来っ……」

“月器・三日月”っ……！」

玄関の扉を開くと、そこには何故か家の中で月器を目覚めさせている輝矢。

「必殺っ……」

輝矢が真剣な表情で、三日月を振り上げる。

「“猿回し”っ……！」
「うっきゃあああああああああっ！！！」

輝矢が手のひらの上で器用に三日月を回し、先端にしがみ付いているモンキが勢いよく回転させられる。目を渦巻き状にしたモンキは、高い声で叫んでいた。

「うぅ～んっ、我が案ながらっ、素晴らしい必殺技っ」
「さすがですわっ！ご主人様っ！」
「わっ私の門貴様がっ……」
「ってかあの技が何の必殺になるわけぇ～？」

その輝矢の猿回しを見て、満足げに微笑む太狼と、太狼を褒め称えるグレーテル。ヘンゼルは少しモンキを心配した様子で、ユキジは呆れきった表情を見せていた。

「んっ？」

猿回しをしていた輝矢が、玄関から入って来たリンゴに気づく。

「ああ、リンっ……」
「ちったぁ大人しくしとけやぁぁっ！！見舞いに来たこっちが恥ずかしいわぁぁっ！！」
「うおっ」

勢いよく怒鳴りこんでくるリンゴに、さすがの輝矢も驚いて、猿回しをやめて小さくなる。

「だってもう治ったんですもん」
「だからって病み上がりがいきなり猿回しして遊んでんじゃないわ

よっ！！はっちゃけすぎよっ！！」

シレっと答える輝矢に、さらに怒鳴り上げるリンゴ。

「ったくっ！ほんの数日前に死にかけてたってゆうのにっ！！」

「ごめんねぇ～リンゴちゃ～んっ、僕が付いていながらぁ～」

「ホントです」

謝っているのかもよくわからない軽い口調の太狼に、リンゴが厳しく答える。

「でぇ、それっ、お見舞いの品っ？」

究極の甘党・太狼が一番興味を示しているのは、リンゴが持っている籠の中の果物。

「ええ、そのつもりでしたけど、怪我人はいないようなので見舞いは必要ありませんねっ」

「そんなぁ～っ」

受け取ろうとした太狼の手を軽くかわし、リンゴが見舞いの品を持ったまま、玄関を出ていく。去っていく果物に、悲しい顔を見せる太狼。

「じゃっ、私、これから仕事だからっ」

「リンゴ」

「……っ？」

去ろうとしたリンゴが、輝矢の声に振り返る。

「先日はありがとうございました」

振り返ったリンゴに、輝矢は深々と頭を下げ、そして穏やかな笑顔の顔を上げた。

「アナタがいなければ、私は今頃、天国でお花でも摘んでいたでしょう」

「天国に行けると思ってんのぉ？」

「キジっ？」

「すみません」

ユキジの茶々に、一睨みをする輝矢。ユキジがすぐさま謝る。

「アナタには本当に感謝してっ……」

「アンタを救ったのは桜時よっ」

「……っ」

輝矢の言葉を遮るようにして言い放つリンゴ。その表情は何故か、とても曇っていた。

「感謝なら桜時にすんのねっ」

「そりゃあもう、ハチにはたっぷりと愛のお礼をっ……」

「アンタさっ……」

「……っ？」

ふざけた口調の輝矢に、リンゴは真剣で、どこか責めるような瞳を向けた。

「アイツから手、離さない方がいいわよっ……」

「えっ……？」

「じゃっ」

その言葉を残して、リンゴは玄関から出て行った。

「うぅ～っ……甘々果汁の果物ぉぉ～っ……」

「リンゴさん、今日は少し様子が違いましたねぇ」

「……。」

首を傾げるグレーテルの横で、輝矢は少し考え深げに俯いた。

龍国・海岸沿い。

「……。」

白い砂浜に、その体を溶け込ますように座っている、白いイヌ。

ハチであった。ハチは神妙な面持ちで、打ち寄せる波を見つめていた。

――――我々は貴方の仲間です……――――

「……っ」

ハチが少し眉間に皺を寄せ、先日現れたあの者たちのことを思い出す。

――――我々とともに行きましょう……朱実桜時……――――

――――数日前。

「……っ」

そう言って差し出された、桜時と同じ“犬人”の少女の手。その手に、桜時は逆らうこともできず、何も言えぬまま、ただ戸惑いの表情を見せていた。そのまま一分程の時間が過ぎた。

「いきなりすぎましたか」

「……っ？」

そう言って少女は、桜時に差し出していた手を下ろした。

「そう簡単に答えは出ないでしょう……今日のところは退かせていただきます……」

少女と男が、桜時に背を向け、歩き始める。

「あっ……おっおいっ……！」

去っていく二人を、桜時は思わず呼び止める。

「お前らっ！一体っ……！」

「また来ます……」

「……っ」

桜時の問いかけに答えを出すことはなく、少女は立ち止まってゆっくりと振り返った。

「その時までに……答えを出しておいて下さい……」

「……。」

こうして謎の二人組は、桜時の前から去っていった……――――

あれから数日。まだ、あの少女たちは、答えを聞きには来ない。

――――その時までに……答えを出しておいて下さい……――――

「……答えって……」

聞きに来られたところで、今のハチには答えを出すことなど出来ないのであった。

――――この姿を見ても……ですか……？――――

目の前に現れた、自分と同じ“犬人”。桜時が初めて見た、同種族。

――――我々は貴方を知る者……――――

あの言葉は真実だろうか。しかし、同じ“犬人”というのであれば、真実である可能性は高い。

――――父親を探す……手がかりになるかも知れないわね……――

――

あの者たちとともに行けば、まだ見ぬ父に近づくことができるかも知れない。そんな予感もする。

「けどっ……」

――――ハチっ……――――

あの手を取れば、桜時はもう、“ここ”にはいられない。帰ってはこれない。そんな気がしてならない。

「俺はっ……どうすればっ……」

考えても考えても答えの出ない、まるで無限に続く迷路を彷徨うような、そんな気分であった。ハチが塞ぎ込むように深々と俯く。

「どうかしましたか……？」

「……っ」

聞くだけで落ち着くその声に、ハチがパッと顔を上げる。

「輝矢っ……」

ハチが顔を上げると、すぐ目の前に、穏やかな笑顔を浮かべた輝矢がしゃがみ込んでいた。

「あまり潮風に当たりすぎると、毛が荒れますよ？」

「……。」

そう言ってハチの頭を撫でる輝矢。いつもなら“触るな”“近づくな”と大いに騒ぎたてるハチであるのに、今日は抵抗一つしないで大人しく撫でられている。

「ハチ……？」

そんないつもとは違うハチの様子に、輝矢が少し首を傾げる。

「輝矢……俺……」

ぐるぐるとただ彷徨っているだけの心の内を、輝矢に話そうとするハチ。

「俺っ……」

「桜時様ぁぁぁぁっっ！！」

「だあああああっっ！！」

しかし次の瞬間、ハチは横から突進してきた何かに、勢いよく吹き飛ばされた。

「痛てててっ……一体、何っ……」

砂浜に転落したハチが、背中を押さえながらゆっくりと起き上がる。

「って……」

目の前にいる、とある人物に、目を丸くするハチ。

「千鶴っ！！？」

「桜時さまぁぁぁぁぁぁぁっっ！！！」

「どわあああああっっ！！触るなぁぁっ！！離れろぉぉぉっ！！一メートルぅぅぅっ！！」

抱きついてくるその女に、必死に抵抗するハチ。そう、その長い黒髪に白い肌の美しい女性は、雀国でのハチこと朱実桜時の世話係、千鶴であった。

「ちっ千鶴がなんでここにっ……？」

「色々とお噂をお聞きしましたよぉ、桜時様ぁ～また大変な目に遭われたようでぇ～」

ハチからやっと離れた千鶴が、ハンカチ片手に涙を拭いながら話す。

「御伽砂漠を一面、桜並木に変えちゃったとかで、もぉ雀国に砂漠に生きる皆さんから苦情が殺到してっ」

「嫌味かっ……？」

「千鶴はもぅ、心配で心配でぇ」

「……。」

涙を拭う千鶴に、ハチは引きつった表情を見せる。

「はぁっ……」

そんなハチと千鶴の様子を見ながら、少し離れた場所にいる輝矢が、深々と溜息をつく。

「んっ！そこにおわすは輝矢さんっ！？」

「げっ」

千鶴に見つかり、あからさまに嫌そうな顔を見せる輝矢。

「今まで桜時様を守って下さった分っ……！」

――――ボォォォォォォォ～～～ンっ！――――

立ち上がった千鶴が、白い煙に包まれていく。

「恩返しさせて下さぁぁぁぁぁ～～いっっ！！！」

「はいはいっ」

鋭い嘴を突き出して突進してくる一羽の鶴を、輝矢が慣れた様子であっさりとかわす。千鶴は恩返しが大好きな“鶴人”なのである。

『おぉ～いっ！』

「……っ？」

そこへタイミングがいいのか悪いのか、モンキとユキジがやって来た。

「あれっ？」
「あっ！千っ鶴ちゃぁぁ～～～んっ！」
千鶴の姿を見つけ、首を傾げるユキジと嬉しそうに手を振るモンキ。
「お二方もっ……恩返しさせて下さぁぁぁ～～いっっ！！！」
「よっ」
――――プスっ！――――
千鶴が突き出した嘴を、ユキジは飛び上がって軽々と避けるが、ユキジの避けた嘴が、勢いよくモンキの額に突き刺さった。
「ぎゃあああああああっっ！！！」
額を押さえて後方に倒れ込むモンキ。
「ううっ……これが恋の痛みっ……」
「バカっ？」
痛みを堪えながら呟くモンキに、ユキジが呆れきった表情を向けた。
「んでぇ？結局、何しに来たんだよ？千鶴っ」
「はっ！」
千鶴のもとへと歩み寄りながら、ハチが問いかける。ハチの問い

かけに、ハッとした表情となる千鶴。

――――ボォォォォォォォ～～～ンっ！――――

千鶴が再び人の姿となる。

「そうでしたっ！私、ただ恩返しに来たわけではありませんでしたっ！」

「ただ恩返しに来ただけだったら、ぶっ飛ばすところですよ」

「はぁっ……」

隣で怖い発言をしている輝矢に、ハチが深々と溜息をつく。

「実はっ……私の姉が輝矢さんたちに、どうしてもお頼みしたいことがあるというのでっ……」

「姉っ？」

「千鶴、姉なんかいたのか？」

「はい」

輝矢とハチの問いかけに、千鶴が大きく頷く。

「頼みごとってのは何なわけぇ？輝矢にってくらいだから鬼人退治とかぁ？」

「それは直接、姉の方からっ……」

ユキジにそう答え、千鶴が海の方を見る。

「もうすぐ来ると思いますので」

『へっ？』

海を見る千鶴に首を傾げながらも、輝矢たちも皆、視線を海の方へと移す。

――――ザッパァァァーーーンっ！――――

『……っ』

高々と波が打ち寄せ、砂浜にいる輝矢たちに水飛沫が飛んだ。皆が飛んでくる飛沫に少し目を細めた。

「フッフッフっ……」

『……？』

聞こえてくる不気味な笑い声に、皆が首を傾げる。

「フッフッフっ……」

海底からゆっくりと上がってくる、ズブ濡れの長い黒髪の女。頭から徐々に姿を見せ、やがてその全貌が明らかとなる。

「フッフッフっ……」

『ぎゃあああああああああああっっっ！！！』

女のあまりに不気味な微笑みに、少しの間を置いた後、ハチとモンキが互いを抱き締め、甲高い悲鳴をあげる。

「妖怪っ！？海中怪人っ！？」
「出ましたねっ！ワカメ女っ！！」

輝矢が三日月を目覚めさせ、ユキジとともに警戒態勢を取る。

「姉さんっ！」
『へっ？』

千鶴の呼びかけに、目を丸くする輝矢とユキジ。

「フフフ……水も滴る……いい女っ……」
『いやっ……？』

濡れた全身から水を滴らせながら、ゆっくりと砂浜へと上がってくるその女の言葉に、輝矢とユキジが否定するように同時に首を横に振る。

「姉さんっ」
「久し振りね……千鶴……」

駆け寄る千鶴へ、その女が不気味に笑いかける。その女は、水に濡れて垂れ下った髪で顔はよく見えないが、鋭い真っ赤な瞳が不気味に光っている。ズブ濡れだが、青い着物を着ていた。

「あっ姉っ……？」
「妖怪とかじゃなくって……？」

抱き合いながら、まだ震えている体で、恐る恐る問いかけるハチとモンキ。

「ええ、私の姉のっ……」

――――ボォォォォォォ～～～ンっ！――――

千鶴が説明しようとする中、不気味な女が白い煙に包まれていく。

『……っ』

「どうも……千鶴の姉の万亀（まき）……と申します……フフフ……」

白い煙の中から姿を見せたのは、六角模様の硬そうな甲羅から、長い首と短い手足を出した、大きな一匹のカメであった。

「“亀人”っ……？」

「千鶴は“鶴人”なのにぃ？」

「ええっ」

首を傾げるユキジに、千鶴が笑顔を向ける。

「それは私たちの父がナマコの獣人で、母がメジロの獣人だからですわっ」

「がぁぁぁーーんっ！どっちもまったく関係ないっ！」

「聞いたボクがバカだったよ……」

千鶴の答えにショックを受けるモンキと、少し落ち込んだように

呟くユキジ。

「えっえぇ～っと、ではアナタですか。私に頼みたいことがあるというのは……」

誤って出してしまった三日月を元のピアスに戻しながら、輝矢がカメになった万亀へと問いかける。

「ええ……私です……フフフっ……」

「いちいち怪しいなぁ～」

「で……？頼みというのは何なのです？」

まだ万亀を警戒している様子のハチの横から、少し表情を引きずって問いかける輝矢。

「それは……私の連れの方から……」

「連れ？」

万亀の言葉に、皆が目を丸くする。

「連れって……」

「とりゃあああああああああっっっ！！！」

『……？』

岩場の方から聞こえてくる大きな声に、輝矢たちが一斉に振り返る。

「来た来た来たぁぁぁっっ！！必殺っ！！マグロ一本釣りっっ！！」

輝矢たちが振り向いた先にいたのは、細い釣り竿で、自分よりも巨大なマグロを一本釣りで勢いよく釣り上げている、長い黒髪を一つに束ねた青年であった。日焼けした肌に、短い袴から膝下を出し、腰には餌入れらしき小さな壺を吊るしている。いかにも釣り人といった風貌の青年であった。

「いよっしっ！！大量大量っ！！んっ？」

釣ったマグロを地面へと下ろした青年が、やっと自分に注がれる視線に気づく。

「あっ！どうもぉっ！」

日焼けした顔に白い歯を光らせ、人懐こそうな笑顔を皆へと向ける青年。

「俺っ！浦島玉之介っていいまっすっ！よろしくっ☆」
「まさか連れって……」
「あれです……フフフっ……」
「君とは対照的に陽気そうだねぇ」

不気味に微笑む万亀に、ユキジが思わず思ったことを口にする。

「あっ！これっ！お近づきのシルシですぅっ」
「おおぉ、あんがとーっ！」

モンキに、今釣ったばかりの巨大マグロを差し出す浦島。

「ほっ」

――――ドスゥゥゥゥーーーンっ！――――

「ぐはあああああああっっっ！！！」

浦島が手を放した途端に、モンキが巨大マグロの下敷きとなる。

「いやぁ～どうもどうもっ」

「えっ？あっ、ああっ」

腰を折って右手を差し出してくる浦島に、少し戸惑いながらも前足を出して握手をしようとするハチ。

――――ビリビリビリっ！――――

「ぎゃあああああああっっっ！！！」

浦島と握手をした瞬間、ハチに電気が走り、全身の毛が一気に逆立つ。

「ぐっぐふっ……」

「ハチっ！」

感電したハチは、その場に力なく倒れ込む。そんなハチに駆け寄

る輝矢。

「あっ！すんませぇ～んっ！俺、電気クラゲの獣人なの、忘れてましたぁ～っ！」
「んっんなことっ……忘れんなよっ……」

陽気に微笑む、何も悪びれた様子のない浦島に、ハチがどこか恨みのこもった表情で呟く。

「玉之介……オチャメさん……」
「てへっ☆俺ってばオチャメさんっ！」
「オチャメで済むかぁっ！！」

軽く微笑みあう万亀と浦島のやり取りに、感電していたハチが、思わず怒り爆発で起き上がる。

「えぇ～、じゃあまぁとりあえずっ……」
『……？』

その場を仕切り直すように、言葉を発する輝矢。

「帰ってくれません？」
「ええぇぇぇぇっっ！！？」
「フフフ……玉之介……びっくり……」

輝矢の言葉に、大きく驚く浦島と、万亀が相変わらず怪しく微笑んだ。

第２５章　海からの依頼　☆２

「そんなぁっ！俺っちのお願いごと、聞いてくれよぉ～っ！」
「百害あって一利なしな気がしますので、丁重にお断りします」
『賛成っ』

泣きつく浦島を、ばっさりと切り捨てる輝矢。輝矢の言葉に、珍しく皆で賛成する３匹。

「そっそこを何とかっ……！輝矢さんっ！」

傍で見ていた千鶴が、思わず見かねて声を出す。

「桜時様っ！」
「んん～っ……」

懇願する世話役に、ハチが少し悩み込む。

「頼むよぉ～っ！お願いごと聞いてくんないと、俺、もうマグロ釣れないっ！！」
「やっぱ却下だな」
「うっ……」

浦島の言い分に、呆れた表情で言い放つハチ。千鶴は、浦島のいい加減さにも、少し困った表情を見せる。

「ではこの話はなかったということで、帰りましょうか」
「そうだねぇ～」

「帰ろ帰ろっ」
「えっ？あっ！ちょっ……！皆さんっ！」

千鶴の願いも届かず、砂浜から撤退していく輝矢一行。

「昔々……一人の青年が……とある海で……カメと出会いました……」
『……？』

急にその不気味な口調で何かを話始めた万亀に、その場を去ろうとしていた輝矢たちが、足を止めて振り返る。

「何をっ……」
「カメは言いました……“どうか私を助けて下さい”……と……」
「……。」

万亀は話を続けることをやめず、輝矢たちは仕方なくその話に耳を傾けた。

「しかし青年は……“忙しい”と言って、カメの願いをあっさりと断りました……」

波の音も加わり、さらに不気味さを増す、万亀の話。

「そしてその次の日の朝……青年が起きてみると……」
『……っ』

ごくりと息を呑む、ハチとモンキ。

「青年が寝ていた布団の周囲に……無数のカメの……死骸がっ……」
『ぎゃあああああああああああああっっっ！！！』

万亀の話が終わらないうちに、ハチとモンキは悲鳴をあげ、震え上がって、耳を覆い、頭を抱えた。

「無理ぃっ！無理ぃっ！俺、こういう話、無理ぃっ！」
「あかんっ！絶対、夜一人でトイレ行かれへんっ！！」
「バカっ？」

異常に怖がるハチとモンキに、呆れた表情を向けるユキジ。

「まぁ……ただの昔話ですから……貴方がたが私たちの頼みを断るのは勝手……ですけどね……フフフっ……」
『ううっ……！！』

万亀の微笑みに、さらに青ざめる二匹。

「輝矢んっ！こいつらの頼みっての、聞いたろうやぁっ！マグロももらったことやしっ！！」
「そっそうだそうだっ！いいことは、いくつしたっていいんだぞっ！？」
「はぁ……まぁハチがそう仰るなら……」

まったく気乗りはしていないが、ハチに頼まれ、心を動かす輝矢。

「よっしゃあっ！！じゃあ決まりぃっ！！とっとと行こうぜぇっ！海底都市へぇっ！」
「海底っ？」

浦島の言葉に、輝矢が表情を変える。

「万亀っ！皆さんをお乗せしろっ！」

「ええ……フフフっ……」

「ちょっちょっと待って下さいっ！海底って……！」

「うわぁ～っ！俺、海底都市行くん、初めてやぁ～っ！」

「俺もっ」

「海底って、可愛いボクが行っても大丈夫かなぁ～？」

輝矢が少し焦ったように声を出すが、海底都市という言葉に興味を示してしまった三匹は、輝矢の言葉を聞くことなく、どこか嬉しそうに、大きな万亀のその甲羅に乗っていく。

「……っ」

その様子に、気難しい表情を見せる輝矢。

「……すぐ戻るようにすればっ……大丈夫でしょうかね……」

「えっ……？」

自分に言い聞かせるように呟いた輝矢の言葉に、すぐ横でたまたま聞いていた千鶴が首を傾げる。しかし、千鶴が問いかける前に、輝矢は皆や万亀の方へと歩いていってしまった。

「よぉ～しっ！全員乗ったなっ！」

輝矢たちが皆、万亀の甲羅の上に乗ったことを確認し、大きな声を出す浦島。

「じゃあ俺もっ……！」
「定員オーバーだから……玉之介……ここに残って……」
「えええぇっ!?それ、意味ねぇーじゃんっ！！」
「ウソウソ……」
「なんだぁ～っ！ウソかぁ～っ！万亀のオチャメさんっ☆」
「お前らのオチャメ会話、よくわかんねぇーっ……」

笑顔で甲羅へと飛び乗る玉之介を見ながら、呆れた表情で呟くハチ。

「じゃあまたね……千鶴……フフフっ……」
「ええっ、姉さん、元気でっ！桜時様もお気をつけてっ！間違っても海底に桜なんて咲かせてこないで下さいよっ！」
「わあってるよっ！」

ハチが千鶴の呼びかけに答える中、万亀がゆっくりと砂浜を進み、海の中へと入っていく。

「では皆さん……できる限りの息を吸って……そして止めて下さい……」
「えっ!?こうゆうのって海中でも息ができるようなシステムになっとるんとちゃうのっ！？」
「世の中そんなに甘くありません……フフフっ……」
『げえええぇぇぇぇっ!!?』

万亀の微笑みに、焦りまくるハチたち三匹。

「レッツゴーっ！ゴーっ！」
「ちょっ……！待っ……！」

空気の読めない浦島の掛け声で、万亀が一気に海中へと潜っていく。

『だあああああああああああああっっっ！！！』

――――ザッパァァァァァーーーーンっ！！――――

色々と騒ぎたてながら、皆を乗せた万亀は、海の中へと姿を消していった。

一人、砂浜に残った千鶴が、どこか不安げに呟く。

「……大丈夫でしょうか……？」

「輝矢様ぁぁぁぁーーーっ！！皆さぁぁぁ～～～んっ！！」

「門貴様ぁぁぁ～～っ！！輝矢さまぁぁ～～～っ！！」

「……っ？」

聞こえてくる声に千鶴が振り返ると、街の方からやって来るヘンゼルとグレーテルの姿があった。輝矢たちを探しに来たようである。

「あっあのっ……」

初対面のヘンゼルとグレーテルに、少し緊張しながら声をかける千鶴。

「輝矢さんたちなら……私の姉の依頼を受けて……海底都市へ行かれましたけどっ……」

『海底都市っ！？』

その言葉に、大きく反応する二人のメイド。

「輝矢様が海底都市にだなんてっ……！大変ではございませんかぁ～っ！？お兄様っ！」

「ええっ！すぐにタロー様にお知らせしましょうっ！！」

「へっ……？」

二人の会話に、千鶴は意味もわからず、ただ首を傾げた。

一方、海中。

『ん～っ！ん～っ！ん～っ！』

潜り始めて一分半。徐々に苦しくなってきた息に、三匹が危機迫った表情を見せる。

『ん～っ！ん～っ！ん～っ！んっ……』

「へぇ～やはりキレイですねぇ～海の中というのは」

『だあああああああああああっっ！！！』

透き通る青緑色の海と、そこに生きる色とりどりの魚たちを見回し、まったりとしている輝矢に、必死に息を止めていた三匹が、思わずズッコケる。

「なんっでお前は普通にしゃべってんだよっ！！って、んっ？」

輝矢に勢いよく突っ込みを入れたハチが、普通に大きな声で話せている自分自身に気づく。

「あっれっ！？俺、息してるっ！！」

「んっ？あっ、ホントぉ～息できるねぇ～」

そのハチの様子を見て、ユキジも息ができることを確認する。

「でもなんでっ……」

「海中に存在する微量の空気を、ここに集めたんですよ」

『えっ？』

輝矢の言葉に、目を丸くするハチとユキジ。確かに周囲を見回すと、輝矢たちの周りだけに、何やら透明の気体の塊が集まっているのが確認できた。

「へぇ～輝矢ってこんなこともできるんだぁ～」

「大いに感謝しなさい」

「まぁ、ちょっとくらいはするけどぉ……んっ？」

「んーっ！んーっ！んーっ！」

「……。」

ユキジがふと横を向くと、まだ息ができることに気づかずに、必死に息を止めているモンキの姿があった。そんなモンキに、ユキジが少し呆れた表情を見せる。

「まっ、いっか」

「ぐっぐぷっ……もう無理っ……」

息ができることを教えずにユキジが放置しておくと、やがてモンキは息が尽きてその場に倒れ込んだ。

「はぁ～っ！水ん中で息ができるとはなぁ～っ！さっすが水使いっ！」

「……。」

「……っ？」

息ができると知り、急に余裕の表情となって海の景色を楽しんでいたハチが、輝矢を褒めるように笑顔を向ける。すると輝矢は、どこか浮かない表情で、海を見つめていた。そんな輝矢に、ハチが眉をひそめる。

「どうか……したのか？」

「えっ……？」

ハチの問いかけに、少し驚いたように振り向く輝矢。

「いえっ？何も」

輝矢がすぐさまハチに笑顔を向ける。

「とっとと終わらせて、とっとと帰りましょうね、ハチ」

「……？」

いつもと同じに見える輝矢であったが、ハチはどこか違和感のようなものを感じていた。

「浦島クンは海中でも息、できるわけぇ～？」

ユキジが倒れているモンキは放ったまま、海中でも平気そうにしている浦島へと声をかける。

「俺はクラゲの獣人だからなっ！陸でも海でも、どっちでも呼吸はできるんだっ！」

「へぇ～っ、海系の獣人て、そういうとこ便利だねぇ～」

「てへっ☆俺ってばそんなに褒められると照れるぜっ！」

「玉之介……シャイボーイ……」

「言ってくれちゃうなよっ！万亀っ！」

「君たちのテンションはよくわかんないけど……」

浦島と万亀のやり取りに、ユキジが呆れた表情を見せる。

「まぁ……海底都市に着けば息もできるから……安心して下さい……」

「つーか、輝矢が空気操作できなかったら、俺たち溺死してたぞっ？どうするつもりだったんだよっ？」

「さぁ……フフフっ……」

「うっ……」

万亀の不気味な笑いに、ハチが寒気を覚える。

「でぇ、そろそろ聞かせていただけませんっ？私たちへの頼みごと

……アナタの願いってやつを」
「んっ？あっ、ああっ！」
輝矢の問いかけに、浦島が大きく頷く。
「俺と一緒に“竜宮城”に行ってほしいんだっ！」
『竜宮城っ？』
浦島の言葉に、輝矢やハチたちが目を丸くする。
「竜宮城って？」
「海底都市を統治されている……“乙姫様”の……お住まいです……フフフっ……」
「乙姫様っ……！？」
美女っぽい名前に反応したのか、気絶していたモンキが勢いよく起き上がる。
「行こうっ！！」
「何、起きた途端に張り切っちゃってんのさっ」
「心配しなくても行きますよ……フフフっ……」
急にやる気を見せるモンキに、ユキジと万亀がそれぞれ突っ込みを入れる。
「その竜宮城に何をしに行くんだっ？」
「そぉ～れは行ってからのお楽しみよぉ～っ！」
「……っ？」
陽気に答える浦島に、何となく嫌な予感を感じながら、首をかし

げるハチ。

「おっ！海底都市だっ！」

『……っ？』

浦島の声に、輝矢たちが前方を見る。

『ふわぁぁぁぁぁ～～っ……』

深い深い海の底、透き通る海底に広がる、美しい街並み。龍国に比べれば、もちろんその規模は小さいが、果てしなく青い海をバックに広がるその街は、何とも美しかった。古い時代の和風な建物のデザインに似た家が並んでいた。陸では空の上方には、無数の魚が行き交っている。

「さすがにキレイやなぁ～」

「芸術に疎いモンキでもキレイに見えるなんて相当だねぇ」

「うんうんっ……って、がびぃぃぃーーんっ！！ユッキーっ！ひどぉっ！！」

「……っ？」

モンキとユキジのくだらないやり取りが繰り広げられている横で、輝矢が街の包むようにして覆っている、ドーム状の膜のようなものに気づく。

「あれが街を包んでいるので……海底都市では空気呼吸が可能なのです……」

「……っ」

輝矢の疑念に、問いかけられる前に答える万亀。

「獣人の力か何かですか？一体、誰が……」

「乙姫様です……乙姫様の一族が……代々その力を受け継ぎ……街に空気をもたらしているのです……」

「成程っ……」

万亀の説明に、輝矢が少し興味深そうに頷く。

「では参りましょうか……その、乙姫様とやらのところへ……」

「はい……フフフっ……」

輝矢の指示の下、万亀は海底都市内をゆっくりと進み、海底都市最奥にある竜宮城へと向かった。

第２５章　海からの依頼　☆３

――――竜宮城――――

『ぷっはぁぁぁぁぁぁぁ～～～っ！』

“海底都市最奥にある”と言うよりは、“海底都市の三分の一を占めている”と言った方が正しいかも知れない。広大な海底に建てられた、広大な城。高さはないが、端から端が見渡せないほどに広い。赤と白を基調とした造りが、海の景色によく映えていた。

「朱実のお屋敷にちょっと似てるねぇ～」

「そうだな」

高い建物の並ぶ龍国よりは、どちらかというと雀国の屋敷の造りに近い。ハチは竜宮城を見上げ、少し懐かしさにも似た思いを持った。

「よいしょっと」

大きく竜宮城と書かれた城門の前で、城を見上げている三匹に遅れるようにして、万亀の背を降りてやって来る輝矢。

「では……私はここで……」

「おうっ」

「……っ？」

城門前で足を止める万亀と、万亀に軽く手を挙げる浦島の姿に、輝矢が首を傾げる。

「不気味なカメは中には入れないのですか？」
「フフフっ……さぁ……どうでしょうね……」
「別に万亀が面倒臭がってるだけだってっ！」

何か裏でもありそうに微笑む万亀であったが、浦島があっさりと真相を話してしまう。

「ここで待ってるわね……玉之介……」
「おうっ！三十分くらいで戻ると思うわっ！」

万亀にそう言い、浦島が竜宮城の城門を開く。

「たのもぉぉぉぉっっっ！！！」
「道場破りかっ」

大声を出しながら勢いよく門を開ける浦島に、ハチが思わず突っ込みを入れる。

「たのもぉぉぉぉぉ～～～っっ！！！」
「おいっ、もうちっと大人しくっ……」
「おおっ！これはこれはっ！浦島様っ！」
「んっ？」

静かな城の玄関先で騒ぐ浦島に、注意をしようとしたハチが、浦島の名を呼ぶ声に振り向く。

「……。」

そこにいたのは、白い着物に水色の袴を身に纏った、巨大な魚。

「なあああああああああああああっっっ！！！」

ハチが思わず悲鳴をあげる。

「おうっ！ヒラメさんっ！」

「ようこそいらっしゃいました、浦島様」

浦島はその着物を着た巨大魚・ヒラメに普通に話しかけると、ヒラメは丁寧に浦島に頭を下げた。

「さっ魚がっ……魚がっ……」

「自分だってイヌでしょ～？いちいち驚くのやめなよぉ～」

「うっ……」

ユキジの言葉に、思わず小さくなるハチ。あまり雀国以外のことを知らないハチにとっては、魚人などは、とても新鮮なものなのであった。

「浦島様、こちらの方々は？」

ヒラメが、輝矢たちを見て、少し戸惑うように問いかける。

「ん～っ？この人たちはぁ～あれっ！助っ人っ！」

「助っ人？」

浦島の言葉に、少し眉をひそめる輝矢。

「そうでございますかっ！ではどうぞ中へっ！乙姫様もさぞ、お喜びになるでしょうっ」

笑顔となった、のかはよくわからないが、少し良くなったように見えるヒラメが、浦島や輝矢たちを、城の中へと案内する。

「ついに乙姫ちゃんとご対面やなっ！！」

「魚人かもよぉ～？」

「人化した姿がプリチーであれば良しっ！！」

ヒラメ、浦島の後を、ウキウキと付いて行くモンキと、呆れた表情でその横を飛ぶユキジ。

「んっ？」

その後を続くハチが、ふと廊下から中庭の方へと目をやる。

「今日は肌のツヤがいいのぉ～っ！」

「ほんとぉ～っ！ピッチピチっ！」

「……。」

中庭で会話をしている女らしきキレイな着物を着た魚人たちに、ハチが思わず顔を引きつる。

「いつもピチピチしてそうだけどっ……」

「ピチピチなのは若いうちだけですよ。魚も人も」

「深いなっ……」

後ろから口を出す輝矢の言葉に、ハチが少し現実的になり、肩を落とす。

――――我々とともに行きましょう……――――

「……っ」

その時、ハチがふと今朝まで考え込んでいたことを思い出した。

「……なぁ、輝矢っ……」

「はいっ？」

少し歩くスピードを遅らせ、モンキたちとの間隔を取り、ハチが輝矢の名を呼ぶ。

「もし……俺がっ……さっ……」

「おぉ～いっ！とっとと来いっ！」

『……っ』

前方から輝矢とハチを呼ぶ浦島の声に、二人が顔を上げる。

「ふぅっ」

「ハチ？」

少し肩を落としたハチを、上から覗き込むように見る輝矢。

「やっぱいいや。終わってからちゃんと話すっ」
「そうですか」

そう言って互いに微笑み合い、輝矢とハチが浦島たちの元へと駆けていく。

「こちらが乙姫様のお部屋になります」

全員が集まると、ヒラメが廊下の奥にある大きな扉を開いた。

『……っ』

開いていく扉に、少し息を呑む輝矢たち。

「ふわぁっ」

扉の向こうに広がるのは、立派な部屋。壁が一面水槽となっており、色とりどりの魚が鑑賞できる。その中央に大きな玉座があり、玉座に続くように、真っ赤な絨毯が敷かれている。

「乙姫様っ」

その絨毯の途中に立っている人物に、ヒラメが声をかける。

「んん～っ？なぁにぃ～っ？」
『……っ』

ヒラメの声に、ゆっくりと振り返るその人物。赤とピンクの愛らしい着物に、透明色に輝く羽衣を纏い、その長い黒髪を、頭の上に輪っかが2つできるようにまとめた、真っ赤な瞳の美しい、十六，十七歳の少女であった。

「おおぉうっ！めっちゃタイっ……！」
「きゃあああああっ！！浦島様ぁぁぁ～～っ！！」
「へっ……？」

いつものように一目惚れしようとしたモンキであったが、黄色い声をあげて勢いよく、浦島の元へと駆け込んでいく乙姫に、少し拍子抜けしたように目を丸くする。

「乙姫に会いに来て下さったのですわねぇ～っ！乙姫、感激っ！」
「あっ、あっはっはぁ～っ！俺も嬉しいよぉ～あっははぁ～っ！」
『はぁっ？』

乙姫に抱きつかれ、蕩け落ちそうな締まりのない笑顔を見せる浦島を見て、輝矢やハチたちが顔をしかめる。

「あっれぇ～？浦島様ぁ～、この方々はぁ～？」

乙姫が輝矢たちの姿を確認し、不思議そうに問いかける。

「ああっ、この人たちは俺の助っ人でっ」
「えええ～っ!?じゃあこの人たちも乙姫の大切な“玉手箱”を探してくれますのぉ～っ!?」
『はぁっ？』

乙姫の言葉に、大きく口を開く輝矢たち。

「そうだよっ！あっははぁ～っ！」
『はぁっ!?』

調子のいい笑みで答える浦島に、だんだん険しくなっていく輝矢一行の表情。

「乙姫ちゃんの大切な玉手箱は、きっと俺が見つけてくるからっ！」
「きゃあああ～～っ!!浦島様っては頼もしいぃぃ～～っ!!」
「あっははぁ～っ！」
『……。』

嬉しそうな笑顔を見せる乙姫に抱きつかれ、さらに鼻の下を伸ばす浦島。そんな浦島の様子に、最早驚くこともなく、呆れきった表情を見せる輝矢たち。

「おいっ！浦島っ！これはどういうっ……！」
「じゃっじゃあっ！俺たち、早速、捜査に行ってくるからぁっ!!」

さすがに怒りを表に出し、浦島を問い詰めようとしたハチであったが、浦島がハチを慌てて抱え込み、口を押さえて話せないようにする。

「もう行っちゃうんですのぉ～っ!?乙姫、淋しいぃ～っ!!」

「一刻も早く見つけてくるよっ！それまで待っててっ！あっははぁ～っ！」
「はぁ～いっ、乙姫、ずぅっと待ってますわぁ～っ！！」

笑顔の乙姫に見送られ、ハチを抱えたまま慌てて部屋を出て行く浦島。仕方なく、輝矢たちも浦島に続いて部屋を出て行く。扉が閉まるまで、乙姫は笑顔で手を振り続けた。

――――パタンっ……――――

「……。」

扉が閉まった途端、乙姫が笑顔を消し、手を振るのを止める。

「これで良いのですか……？乙姫様……」
「ええっ……」

ヒラメの問いかけに、乙姫は短く、冷たく答える。

「順調よっ……すべて計画通りだわっ……フフフっ……」

乙姫は、どこか怪しく微笑んだ。

「んでぇっ！どういうことだよっ！？」

乙姫の部屋を出た浦島を待っていたのは、ハチの厳しい問い詰めであった。

「あっ……あっははぁ～っ……」

睨みつける一行を前に、浦島が視線を逸らし、下手な空笑いを浮かべている。

「せやせやっ！お前っ！乙姫ちゃんとどういう関係やねんっ！！」
「そういうこと話してんじゃないでしょ～」
「出会って一目惚れしてから、もうすぐ一ヶ月ですっ！」
「別に答えなくっていいよっ」

モンキの問いかけにしっかりと答える浦島に、ユキジが思わず突っ込みを入れる。

「奇遇ですねぇ～私がハチに一目惚れしてからも、ちょうど一ヶ月くらいっ……」
「だあああああっっ！！でぇっ！？助っ人ってっ！？玉手箱ってっ！？どういうこと何だよっ！？」

相変わらずサラっと告白しようとする輝矢の言葉を、ハチが慌てて遮る。

「いやぁ～実はねぇっ、乙姫ちゃんが大切な玉手箱を盗まれちゃったって言うからぁ、俺、頑張って探したんだけどぉ、これがどうに

も見つからなくってっ」
「それで俺らにも一緒に探させようって連れてきたわけか」
「そうそうっ」

ハチの言葉に、浦島が陽気な笑顔で頷く。

「その玉手箱とは何なのです？」

ハチの後方から、浦島へと問いかける輝矢。

「んん～俺も詳しくは知らないんだけどぉ、何か乙姫ちゃんが海底都市に膜張るのに重要なアイテムみたいっ」
「あの空気呼吸ができるようにしているという膜ですか……」
「重要アイテム言われてもなぁ、何かパっとせんなぁ～」

浦島の答えに、少ししかめた表情を見せる輝矢とモンキ。

「どうでもいいからとっとと帰ろうよぉ～」
「せやなぁ～人の恋路、応援する義理ないしぃ」
「ああ～まったく無駄足踏んだぜっ」
「帰っておやつでもいただきましょうか」
「えっ？ちょっ！ちょっと待ってくれよぉ～っ！」

何の躊躇いもなく去っていく輝矢たちを、浦島が慌てて引き止める。

「頼むよぉ～っ！俺っ、乙姫ちゃんが最後の恋だって信じてんだよぉ～っ！！」
「フンっ！俺だって信じとったわいっ！」
「そういう問題じゃないでしょ～っ」

「っつーか自分が引き受けたんだろぉ～っ？自分で何とかしろよっ」

泣きつく浦島に、冷たく言い放つハチ。

「まぁ最後の恋は、せいぜい自分の力で叶えるのですねぇ～」

「そっそんなぁっ……」

遠ざかっていく輝矢たちに、浦島が力なくその場に膝をつく。

「ふぅ～っ！無駄に疲れたっ」

「せっかくやから海底都市の美人魚人でも見物してから帰らへんっ？」

「美人魚人はどうでもいいけど、観光くらいはしたいなぁ～っ」

「とっとと帰りますよ」

『ええぇ～っ！？』

海底都市に名残り惜しさを感じているモンキとユキジに、輝矢はあっさりと言う。輝矢の言葉に、少し不満げな表情を見せる二匹。

「そんなに居たいのなら一生居るといいですよ」

「いやぁ～んっ！置いてかんといてぇ～っ！輝矢ぁぁ～んっ！」

「……っ？」

先を歩いて行く輝矢を必死に追いかけるモンキを見ながら、ハチが少し不思議そうに首を傾げる。

「さてとっ……とっとと地上へっ……」

「フフフっ……」

「んっ？」

竜宮城の城門を出て、地上を目指すように輝矢が上を見上げていると、どこからともなく不気味な声が聞こえてきた。

「昔々っ……」

「ううぅわぁっ！」

輝矢の横にいたハチが、突然現れた巨大不気味カメ・万亀に、勢いよく驚く。

「一人の青年が……とある海で……カメと出会いました……」

「どっかで聞いたことあるなぁ～っ」

「何か嫌な予感っ……」

不気味に話し始める万亀に、ハチとモンキが顔を引きつる。

「カメは青年に言いました……“どうか私とともに箱を探して下さい”……と……」

万亀が話を続ける。

「しかし青年は……忙しいと言って、カメの願いをあっさりと断りました……」

辺りの静けさも加わり、さらに不気味さを増す、万亀の話。

「そしてその次の日の朝……青年が起きてみると……」

『……っ』

ごくりと息を呑む、ハチとモンキ。

「青年が寝ていた布団の周囲に……無数のカメの……死骸がっ……」
『ぎゃあああああああああああっっっ！！！』
ハチとモンキが、先ほどの話と同じ結末にも関わらず、勢いよく悲鳴をあげて震えあがる。
「まぁ……ただの昔話ですから……貴方がたが私たちの頼みを断るのは勝手……ですけどね……フフフっ……」
「だあああああっっ！！今すぐ探そうっ！！玉手箱ぉぉっっ！！」
「どこやぁっ！？玉手箱ぉぉっっ！！」
万亀の不気味な微笑みに、必死に玉手箱を探し始めるハチとモンキ。
「バカっ？」
「はぁっ……」
呆れた表情を見せるユキジの横で、輝矢が深々と溜息をつく。
「ん～っ？あっれぇ～？万亀ぃ～」
そこへ、輝矢たちに遅れるようにして、浦島が竜宮城から城門の外へと出て行く。
「今、こいつらにさぁ～助っ人の件、断られっ……」
「大丈夫よ……玉之介……」
「へっ？」

落ち込んだ様子で話す浦島に、万亀が、安心させようとしているのだろうが、不気味にしか見えない笑みを向けた。

「時代はすでに……私たちに傾いているわ……」
「まじでっ!?すっげぇーっ!!」
「フフフっ……玉之介……嬉しそう……」

笑顔となる浦島を見て、万亀も満足げに微笑む。

「どこやぁっ!?玉手箱っ!!」
「ほらっ!とっとと探すぞっ!お前らっ!!」
『……。』

万亀の怪談話作戦にやられ、すでにやる気満々の二匹に、呆れた表情を見せる輝矢とユキジ。

「めちゃくちゃ踊らされてるじゃ～んっ」
「やれやれ……ですねぇ……」

こうして輝矢たちは、望みもしないまま、浦島の玉手箱探しを手伝うこととなった。

第２５章　海からの依頼　☆４

海底都市・街中央部。

「で、その玉手箱とやらの大きさは？」
「わかんないっ」
「色は？」
「わかんないっ」
「形は？」
「わかんないっ」
「模様は？」
「わかんないっ」
「……。」

“わかんない”しか答えを返さない浦島に、輝矢が質問をするのをやめる。

「アナタは何故、この世に生を受けたんですか？」
「ええぇっ！？いきなり生命倫理っ！？」

いきなり質問の種類を変える輝矢に、浦島が大きなリアクションで驚く。

「いえっ、アナタの存在に意味を見出せなかったもので……」
「うえぇ～っ！？万亀ぃぃ～っ！！」
「玉之介……ショック……」

輝矢の冷たい言葉に深く傷つき、万亀に泣きつく浦島。そんな浦

島を、万亀は温かく（？）見守る。

「とりあえず手がかりはないに等しいですね」
「手当たり次第、探すしかねぇ～かぁ」

何の手がかりもない現状に、輝矢やハチが気難しい表情を見せる。

「ねぇハチ、やっぱり帰りません？」
「だっダメだっ！カメに呪われたら、どうすんだよっ！！」
「ですよねぇ……」

万亀の怪談話を信じ切っているハチに、輝矢が少し諦めたように肩を落とした。

「ではまぁ、とりあえず手分けして探しますか」
「そうですね……フフフっ……」

輝矢の提案に、不気味に頷く万亀。

「ではハチとサルとキジ、私とカメとそこの人の二つに分かれましょう」
「種族も言ってもらえなかったよぉ～っ！万亀ぃぃ～っ！」
「玉之介……ドンマイ……」

落ち込む玉之介に、ガッツポーズを突き出す万亀。

「まぁしゃあねぇっ！とっとと探しに行くかっ！」
「せやなぁっ！！」
「よぉーっしっ！みんなぁ、頼むぜっ！！」

やる気を見せるハチとモンキに、浦島がポンと手を触れた。

――――ビリビリビリっ！！――――

『ぎゃあああああああああああああああっっっ！！！』

「あっ……」

ハチとモンキの感電から、玉手箱探しはスタートした。

玉手箱捜索隊。輝矢・万亀・浦島チーム。

「ここが海底商店街です……フフフっ……」

「へぇ～っ」

万亀たちに案内され、輝矢は海底都市で最も多くの人間の集まる、海底商店街へとやって来ていた。規模は龍国の方が何倍もすごいが、さすがに海底だけあって、目を引くような珍しい物を置いている店が多い。しかし輝矢は、そのどれにも特に興味を示さなかった。

「うっおっ！海底都市オリジナルルアー第七十八弾だっ！万亀っ！あれっ、買っていいかっ！？」

「いいわよ……はい……」
「よっしゃあああっ！！」

目を輝かせる浦島に、万亀が何の躊躇いもなく金を手渡す。万亀からお小遣いを受け取り、上機嫌でルアーを買いに行ってしまう浦島。

「はぁっ……」

玉手箱を探す気があるのかも疑わしい浦島に、輝矢が深々と溜息をついた。

「少しばかり……甘やかし過ぎなのでは？」
「愛ゆえ……フフフっ……」

呆れたように問いかける輝矢に、万亀が不気味に答える。

「うわあああああっっ！！万亀ぃぃぃぃっっ！！」
『……っ？』

ルアーを買いに行ったはずの浦島の叫び声が聞こえ、輝矢と万亀が振り返る。

「玉之介……どうしっ……」
「あっあれぇっ！！」
『……っ』

どこか驚いたような表情で前方を指差す浦島。輝矢と万亀がその指差された方向へと目をやる。

『ああっ！！』

大きく目を見開く輝矢と万亀。浦島の指差す方向には、人混みの中を歩く一人の若い男がおり、その片手には抱え込むようにして、大きく“玉手箱”と書かれた黒い長方形の箱を持っていた。

「たっ玉手箱っ……？」

「あんなにわかりやすく書いてあるもんですかねぇ？」

「とっとにかく見失わない内にっ……！」

暢気に首を傾げる輝矢と万亀に、浦島が少し焦ったように声をあげる。

「追っかけてくれっ！！」

「自分で追いなさいよ」

他力本願な浦島に、輝矢が思わず突っ込みを入れる。

「俺はちょっとルアー買ってくっからさっ！」

「あのですねぇ……」

「待っていて……玉之介……」

「あっ」

まったくやる気のない浦島に、輝矢が呆れた表情で注意をしようとしたが、万亀がその横から玉手箱を持っている男をゆっくりと追いかけていく。

「頑張れぇ～っ！万亀ぃぃ～っ！俺のためにぃっ！」

「はぁっ……」

万亀に大きく手を振る浦島に、深々と頭を抱える輝矢。

「仕方ないですねっ」

そう言って、輝矢も万亀とともに、玉手箱を持つ男を追った。

一方、ハチ、モンキ、ユキジチーム。

『ざわざわざわざわっ』

「……。」

周囲からの浴びるほどの視線を感じ、少し表情を引きつるハチ。

「何か……めちゃ見られてんなっ……」

「みぃ～んな俺の魅力に首ったけやねんてぇ～っ！！」

『それはないっ』

「ううっ……」

ハチとユキジに同時に否定され、モンキが落ち込むようにその場に膝をつく。

「やっぱ珍しいんじゃない？海中にイヌ・サル・キジなんて」

「海系の獣人以外、見当たんねぇーもんなぁ。人間はけっこういるみてぇーだけどっ」

膝をついたモンキを振り返ることなく、視線を気にしながらも、人混みを歩いていくハチとユキジ。

「でぇ？どうやって探すぅ～？」

「そうだなぁ～、“玉手箱”ってでっかく書いてある箱を持ってる奴が歩いてたりなんかするわけねぇーしっ……って、んっ？」

そうボヤいていたハチの視界に入ってくる、大きな“玉手箱”の文字。

「あああああああああああっ！！」

「えっ？」

ハチの大声に、ユキジが振り向く。

「いたぁぁぁぁぁぁ！！」

「へっ？ああっ！！」

二匹の視線の先には、人混みの中を歩く1人の若い男。その片手には抱え込むようにして、まさに、大きく“玉手箱”と書かれた黒い長方形の箱を持っていた。

「玉手箱ぉぉっ！？」

「見つけたっ！おいっ！門貴っ！」

ハチが後方を振り返り、まだ膝をついているモンキの方を見る。

「捕まえっぞっ！カメに呪われる前にっ！」
「せやったっ！！」
「はぁっ……」

ハチの言葉に、ハッとして勢いよく立ちあがるモンキ。カメの呪いを信じまくっている二匹に、ユキジは深々と溜息をついた。

――――ボォオオオオ～～～ンっ！――――

素早く人化するハチとモンキ。

『待てぇえええええっっ！！！』

白い煙の中から、桜時と門貴が、玉手箱と書かれた箱を持つ男を追いかけていく。

「……っ！クっ……！」
『あっ……！』

追いかけてくる桜時と門貴に気づき、慌てて走り去っていく玉手箱を持った男。

「逃げやがったっ！」
「ますます怪しいなぁっ！ユッキーっ！」
「はいはぁ～いっ」

門貴に呼ばれたユキジが、青い羽根を広げ、高々と空、というか海中へと舞い上がる。

「ちょっと失礼ぃ～っ」

上空から、逃げている男へ向け、青い羽根を投げつけるユキジ。

「んっ……？」

走っている男のすぐ前に、ユキジが投げた青い羽根が突き刺さる。

――――バァァァァーーーーンっっ！！――――

「うわあああああああっっっ！！！」

勢いよく割れる地面に、男がバランスを崩し、前方へと倒れ込む。

「クっ……！」

「だっりゃあああああああああっっ！！」

「……っ！」

起き上がった男のすぐ上に、如意棒を振り上げた門貴の姿。

――――バギコォォォォォーーーーンっっ！！――――

門貴の振り下ろした如意棒が、男の頭にクリーンヒットする。

「なはぁっ！！」

男は間抜けな声を出しながら、白目を剥いて、その場に倒れ込んだ。

「しょぉぉ～～りぃぃぃ～～っ！」

高々と玉手箱を掲げ、誇らしい笑顔を見せる門貴。

「アホっ、何、気絶させてんだよっ」

「とてもじゃないけど、話は聞けそうにないねぇ～」

白目を剥いて倒れている男を見て、ユキジはやれやれといった表情で呟いた。

「待ちなさいっ！」

「クっ……！」

一方、こちらも玉手箱を書かれた箱を持っている男を追いかけ中の輝矢と万亀。男は、人の多い商店街を、必死に逃げる。

「あぁぁ～っ、もうっ……」

ただでさえ人混みがあまり好きではない輝矢は、もう苛立ちを堪

えきれなくなったようで、商店街のど真ん中でピアスを弾き、月器を目覚めさせる。

「待てと言うのがっ……」

三日月を構えるのではなく、大きく振り上げる輝矢。

「聞こえないのですかぁっ！」

輝矢がまるでブーメランのように、三日月を男へと投げる。

「うわあああああっっ！！」

「きゃあああああっっ！！」

勢いよく飛んでくる巨大ブーメランに、商店街の人々が、悲鳴をあげながらしゃがみ込む。

「んなっ……！？」

人々を通り抜け、男へとまっすぐに飛んでいく三日月。

「だあああああああああああああっっっ！！！」

――――バァァァァーーーーンっ！――――

男は悲鳴をあげたが、避けることもできずに、飛んできた三日月を顔面にもろに喰らった。

「ぐっぐぷっ……」

倒れ込んだ男の手から、玉手箱が零れ落ちる。

「ふぅ～っ」

「わりと無茶しますね……フフフっ……」

戻ってきた三日月を掴む輝矢を見ながら、万亀は不気味に微笑んだ。

「いやぁったぁっ！玉手箱ぉぉっ！！」

輝矢たちが持ち帰った玉手箱を受け取り、何とも嬉しそうな笑顔を見せる、ルアーの買い物を終えた浦島。

「サンキュー！さっすが万亀っ！」

「フフフっ……照れるわ……玉之介……」

「捕まえたのは私ですけどね」

浦島と万亀の明るいやり取りを聞き、横から思わず口を挟む輝矢。

「まぁ誰かが気絶させちゃったから……詳しい話は聞けなかったけ

ど……」
「箱が戻ってこれば、話など聞かなくてもいいでしょう」
万亀の嫌味に、輝矢が開き直ったように答える。
「じゃあ早速開けてみっかっ！！」
「何故、何もしていないアナタが開けるんです？」
「へっ？」
玉手箱の蓋に手をかけた浦島に、冷たく言い放つ輝矢。浦島が間抜けな表情で顔を上げる。
「こういうのは普通、箱を取り戻した本人が、よくやったねということで開けるものでしょう」
「えぇ～っ？でも俺、こういうの、先頭に立って開けるの、好きだしぃ」
「私より先頭に立つと……？」
「うっ……」
輝矢に冷たく睨まれ、浦島が小さくなる。
「どうぞっ……」
「よろしい」
玉手箱を輝矢へと手渡す浦島。
「ううっ……万亀ぃ～っ！」
「フフフっ……譲ったの……玉之介、大人……」
「そっかぁっ☆俺ってば、大人の階段、のぼってたのかぁ～っ！」
「うおっほんっ！とっとと開けますよっ！」

万亀の励ましに、浦島がすぐさま笑顔となる。間接的に子供っぽいと言われている輝矢は、少し恥ずかしそうに咳ばらいをしながら、玉手箱の蓋へと手をかける。

『……っ』

万亀と浦島が見つめる中、輝矢が玉手箱の蓋を開ける。

「さてとっ……」

取り返した玉手箱を地面に置き、それを取り囲むようにして三方向に立つ、イヌ・サル・キジ。

「んじゃあ、誰が開ける……？」

少し緊張した面持ちで問いかけるハチ。

「やっやっぱここはイヌやろぉっ！ほらっ！一番初めにアイツ見つめたん、イヌやしっ！」

「こっここはサルだろぉっ！ほらっ！捕まえたのお前だしっ！」

何故か互いに譲り合うハチとモンキ。

「じゃっじゃあここは二人同時にっ……」
「そっそうだなっ……！」

二匹が頷き合い、同時に玉手箱の蓋に手をかける。

「開けたらカメの呪いにかかったりしてぇ～？」
『ぎゃあああああああああああっっっ！！！』

ユキジの一言に、ハチとモンキがすぐさま玉手箱から手を離し、勢いよく玉手箱から遠ざかる。

「やっやっぱジャンケンだっ！ジャンケンっ！」
「せやなっ！恨みっこなしやぞっ！」

戦いの時よりも気合いの入った様子で拳を構えるハチとモンキ。

『じゃ～んけぇ～んっ……ぽんっ！！』

モンキが出したのは、ブイサインマークのチョキ。ハチが出したのは、可愛らしい肉球のよく見えるパー。

「だあああああああああああっっ！！」
「よっしゃあああああああっっ！！」
「バカ過ぎ……」

頭を抱えるハチと大喜びするモンキの姿を見て、ポツリと呟くユキジ。カメの呪いが降りかかるはずもないし、ユキジが開ければ済むだけの話なのだが、二匹はまったくそれに気づいていないようである。

「しっ仕方ねぇっ！開けるぞっ！」

覚悟を決め、玉手箱に手をかけるハチ。

「イヌっ！生まれ変わっても、俺ら、友達やでっ！」

「意味深なこと言うなっ！余計怖いだろうがっ！！」

とても離れたところから声をかけるモンキに、ハチが勢いよく怒鳴りあげる。

「クっ……ううっ……」

「早くぅ～っ」

「わっわあってるよっ！」

うんざりした表情で、躊躇うハチを急かすユキジ。

「……っ」

ハチがごくりと息を呑み、玉手箱の蓋を開ける。

――――パカっ……――――

輝矢とハチの手により、同時に開かれる玉手箱。

『えっ……？』

――――ボォォォォォォーーーンっ！！――――――

開けた途端、玉手箱から勢いよく白い煙が舞い上がる。

「うっ……！」

「うわあああああああああっっっ！！！」

白い煙が、蓋を開けた輝矢とハチを、一気に包み込んだ。

第２５章　海からの依頼　☆４（後書き）

次章に続きます。

第２６章　玉手箱☆パニック　★１

様々な波紋を残した、御伽砂漠の一件。
死の淵から目覚めた輝矢に、千鶴の姉・万亀とその連れ・浦島から、新たな依頼が入る。
海底都市へと赴いた輝矢たちは、乙姫の大切なもの“玉手箱”を、浦島とともに探すこととなってしまった。
分かれて玉手箱を探していた輝矢たちとハチたちであったが、それぞれに“玉手箱”と大きく書かれた箱を持つ男を捕まえ、取り戻した玉手箱を、輝矢とハチが開封した。

――――ボォォォォ～～～ンっ！――――

開かれた玉手箱から勢いよく噴き出した白い煙。

『……っ』

あまりの煙量に、少し身を屈めていた万亀と浦島が、ゆっくりと顔を上げ、目を開く。

「大丈夫……？玉之介……」
「おうっ、それより竹取さんはぁっ」

万亀と浦島が、白い煙に包まれた輝矢の方を見る。徐々に晴れて

いく煙。

『あっ……』

「うぅわっ！もうっ！何々だよぉ～っ？」

玉手箱から噴き出した白い煙を、煩わしそうに振り払うユキジ。

「どないしたんやぁっ！？」

そこへ、遠くで待機していたモンキが駆け込んでくる。

「はっ！まっまさかっ……！カメの呪いっ！？」

「んなわけないでしょっ……」

真剣な表情で言うモンキに、ユキジが冷たく否定の言葉を投げかける。

「それより桜時はっ？」

「イヌっ！？」

モンキとユキジが見つめる中、徐々に白い煙が晴れていく。

『……へぇっ！！？』

思わず大きく目を開けるモンキとユキジ。

「ふぅ～っ」

晴れた煙の先、開けられた玉手箱の前に座っていたのは、キジのユキジでも抱えられそうなほどに小さな体の一匹の“ネズミ”。真っ白な体に、長い尾を持ち、前歯が鋭く出ている。

「ボク、何か異常に嫌な予感っ……」

「奇遇やなっ……俺もやっ……」

そのネズミを見つめ、顔を引きつりまくるモンキとユキジ。

「あっ！おいっ！由雉っ！別に全っ然っカメの呪いなんて降りかかんなかったじゃねぇーかぁっ！」

「いやっ……十分、降りかかってるけど……」

「あちゃ～っ！やっぱイヌコロかぁ～っ！」

「はぁっ！？」

頭を抱える二匹を見て、そのネズミは、眉を引きつり、首を傾げる。

「お前らっ、何ワケわかんねぇーこと言っ……！」

「はいっ」

「……っ？」

ネズミの前に、鏡を突き出すユキジ。

「鏡ぃ～っ？一体、何を見ろっつっ……」

怪訝そうにしながら、鏡を覗き込んだネズミが、鏡に映る自分の姿に、口を大きく開く。

「ぬっきゃあああああああああああああっっっ！！！」

ネズミの叫び声が、海底都市に響き渡る。

「あぁ～あ～、イヌがまさかネズミになるなんてなぁ～ほんま開けんで良かったぁっ」

「リスとかに変身して女の子人気上がったかもね」

「うおおおぉぉっ！！もう一個ないかぁっ！？玉手箱ぉぉぉっっ！！」

ユキジの一言に目覚め、玉手箱を探し始めるモンキ。

「んっ？」

モンキが玉手箱探しをし、ネズミとなったハチが落ち込んでいる中、ユキジは煙がすべて出た玉手箱の中に入っている、小さな白い紙きれを手に取った。何も書かれていない面から、裏を向ける。

「……“ハズレ”」

紙に書かれているのは、“ハズレ”の三文字。

「ハズレっ？」

「玉手箱にハズレとかあるんかぁっ？」

ユキジの持っている紙を覗き込み、ハチとモンキがそれぞれ呟く。

「……。」

二匹の間抜けなコメントを聞きながら、ユキジが気難しい表情を見せる。

「とにかく一回、輝矢たちと合流しよっかぁ～」

ハズレの紙を持ち、足を立てるユキジ。

「今回の件、ただの箱探しってわけじゃなさそうだしっ……」

『へっ？』

ユキジの言葉に、モンキとネズミとなったハチは、目を丸くして首を傾げた。

『……。』

しかし、輝矢たちと合流した三匹を待ち受けていたのは、もっと衝撃的な光景であった。

「そうですか、アナタたちの玉手箱にもハズレ紙が……」

そう言うのは、長い黒髪にあどけない大きな黒目の、六，七歳くらいの一人の少女。幼いわりに、妙に大人びた、落ち着いた口調をしている。

「どうやら、私たちの玉手箱探しを、邪魔しようとしている者がいるようですね……」

『……。』

「……っ？」

少女を見つめ、呆然としている三匹に、少女が少し眉をひそめる。

「何ですか？人が珍しく真面目にお話してあげているというのに」

「ああぁ～っ、さらに異常に嫌な予感っ……」

「奇遇やなぁ～っ、俺もやっ……」

「かっかかかかかかっかぐっ……輝矢っかっ……？」

頭を抱えるモンキとユキジの横から、恐る恐る問いかけるネズミのハチ。

「はぁっ？」

少女が勢いよく顔をしかめる。

「何を言っているのです？当たり前でしょう？」

「ええぇぇぇぇぇぇっっ！！？」

「はぁっ……やっぱりっ……」

「ちっこい輝矢んもかぁ～わいいぃ～っ！」

「そういう問題じゃねぇーだろっ！！」

少女の答えに、目が飛び出そうなほどに驚くネズミハチと、深く頭を抱えるユキジ。暢気に目をハの字にするモンキに、ネズミハチが勢いよく怒鳴りつける。

「んっ？」

そのネズミを見て、眉をひそめる少女というか輝矢。

「そのネズミは何です？それにハチが見当たらないようですがぁ」

そう言って、徐に見慣れないネズミに手を伸ばす輝矢。

「ぎゃあああああっっ！！俺に触るんじゃねぇぇぇっっ！！」

「あっ、ハチっ」

勢いよく後退しながら怒鳴るネズミを見て、輝矢がハチであることを認識する。

「でも何故、ハチがネズミに……？」

「はいっ」

「んっ？」

首を傾げる輝矢へと、ユキジが鏡を差し出す。

「何です？キジ」

「見ればわかるよ。桜時がネズミになった理由っ」

「……っ？」

ユキジの言葉に戸惑いながらも、輝矢がゆっくりと鏡を覗き込む。

「……。」

映し出された幼い少女の姿に、輝矢が少し固まる。

「おお、誰です？こんな所に、こんな愛らしく、気立ての良さそうな美少女を連れてきたのはっ」

「自分てわかった上で言ってるでしょ、それっ……」

輝矢の言葉に、呆れた表情を向けるユキジ。

「でも何で俺がネズミになって……」

「輝矢んが子供にぃ～っ？」

「フフフっ……」

『うっぎゃあああああああっっっ！！』

輝矢とハチを襲った変化に疑問を抱いていたハチとモンキが、背後から不気味な笑い声とともに現れた万亀に、悲鳴をあげ、慌てて輝矢とユキジの後ろに隠れる。

『ブルブルブルっ！カメぇっ！カメぇっ……！怖いぃ～っ！』

「バカっ……？」

後ろで震えるハチとモンキに、呆れた表情を見せるユキジ。

「ってか、いたんだ……」

「フフフっ……ええっ……貴方がたが来た時からずっと……フフフっ……」

「あっそう……」

いちいち不気味な万亀に、ユキジはどこか疲れたように肩を落とした。

「でぇも何で私が子供になって、ハチがネズミになど……」

“弱ガス”……というものがありましてね……」

「……っ？」

首を傾げていた幼い輝矢が、万亀の言葉に反応する。輝矢と同じように、三匹も一斉に万亀を見た。

「弱ガス……？」

眉をひそめる輝矢。

「ええ……フフフっ……それを吸った者は……自分の何かしらを弱められてしまうとか……フフフっ……」

「弱められてっ……？」

輝矢とハチがそれぞれ、相手の姿を見る。確かに子供は大人より弱く、ネズミはイヌより弱い。

「あっ！じゃあまさかっ……！ハズレ玉手箱から噴き出したあの煙っ……！」

「弱ガスであった可能性が高いですね……フフフっ……」

思いついたように言うハチに、万亀が不気味に頷く。

「それでかぁ～っ」

「ハチ、人化はできるのですか？」

「いやっ……それが……」
「出来ないのですね」

桜時の姿になれなければ、花力も村雨丸も使うことが出来ない。確かに弱らされている。

「まぁ……時間が経てば……弱ガスの効果は切れるはずですから……フフフっ……」
「それまではネズミのまんまで我慢するしかねぇーってことかっ……トホホっ……」
「ネズミになっても好きですよ、ハチ」
「だあああああっっ！！うっせぇぇぇっっ！！」

がっくりと肩を落としたハチに、さらりと告白する輝矢。輝矢の告白に、ネズミは顔を真っ赤にして怒鳴り返す。少女とネズミの姿になっても、この光景に変わりはない。

「なぁ～なぁ～っ！」
『……っ？』

呼ばれる声に、輝矢たちが振り返る。

「そんなことよりぃ～っ、とっとと本物の玉手箱、探してくんなぁ～いっ？」
『……。』

そう言い放ったのは、空のような上方の海に釣り竿を伸ばしている、何とも暢気な浦島。釣りを楽しみながら、まるで他人事のような態度を取っている。

『お前が弱ガス吸えば良かったのにっ』
「えええぇっ!?万亀ぃぃ～っ！何かヒドいこと言われてるぅぅ～っ！！」
「フフフっ……玉之介……ショック……」
泣きつく浦島の頭を撫でながら、不気味に微笑む万亀。
「これからどうする?輝矢っ」
「もう一回分かれて玉手箱探すしかねいでしょうね」
ハチの問いかけに、輝矢が肩を落としながら答える。
「えぇ～っ?」
「私も嫌なんですから我慢しなさい、キジ」
非難するような声をあげるユキジに、輝矢が説得なのか強制なのわからない言葉を言い放つ。
「カメ、そのバカのお守りはアナタがしなさい」
「バっ！バカぁっ!?万亀ぃぃ～っ！」
「フフっ……バカのお守り……了解っ……」
輝矢の厳しい言葉に悲しむ浦島の横で、しっかりと頷く万亀。
「ハチはキジと、サルは私と来なさい」
「あれっ?珍しい組み合わせだねぇ～」
輝矢の割り振りに、少し目を丸くするユキジ。
「私とハチはこの状態ですからね。何かあった時用に、戦力は分散

しておきます」
「なるほど」
「私と一緒にいられないからって、チューチュー泣かないで下さいね、ハチ」
「泣かねぇーよっ！！」

何となく波乱の予感もしながら、玉手箱捜索二回戦が始まった。

第２６章　玉手箱☆パニック　★１（後書き）

ネズミ年ってことで、ネズミにしちゃいました。

第２６章　玉手箱☆パニック　★２

玉手箱捜索隊。ハチ・ユキジチーム。

「ふぅ～っ」

海底都市の上方、空のように広がる海。乙姫により張られたという膜のすぐ下を、一羽のキジが羽根を広げ、飛んでいる。

「やっぱ海中だからかなぁ～、なぁ～んか飛びにくいやぁ～」

動かす羽根に少し不自由さを感じながら、海底都市上空を徘徊するユキジ。

「まぁでも桜時がネズミになったお陰だねぇ～こうやって上から捜索できるのはぁ～」

ユキジの背の上には、小さな小さな一匹の白いネズミ。

「何か見つけたらすぐ言ってよぉ～っ？桜っ……」

「ブルブルブルブルっ」

「……桜時っ？」

上空から玉手箱を探すどころか、小さな体をさらに縮ませて、身を包めているハチに、ユキジが眉をひそめる。

「もしかしてぇ～っ……高所恐怖症っ？」

「ブルブルブルっ！高いの怖ぁ～いっ！高いの怖ぁ～いっ！」

「……。」

答えを聞かずともわかるその反応に、ユキジが思いきり表情を引きつる。

「はぁっ……降りよっ」

こうして空からの捜索は、あっさりと断念されたのであった。

一方、輝矢・モンキチーム。

「はぁ～あぁ、まぁた箱探しかぁ。めんどいなぁ」

見るからにダルそうに人混みを歩くモンキが、疲れたように声を漏らす。

「そんなに面倒なら、お一匹で海の藻屑となっていただいて結構ですよ？」

「いっやぁぁ～～んっ！輝矢んになら、どこまででも付いてくでぇ～っ！！」

前方を歩く幼い少女・輝矢に冷たくあしらわれるが、モンキは明

るい笑顔で輝矢の後を追いかけていく。

「それにぃ～今のミニミニプリチーな輝矢ん、一人にして、誘拐でもされたら大変やしぃっ！」

「アナタに保護者などしてもらわなくても、私は誘拐などされませっ……」

――――ドンっ！――――

「あっ」

「輝矢んっ！！」

輝矢が多く行き交う人々の中の一人の男とぶつかる。幼い輝矢は大人の体に押され、少し前に倒れそうになるが、足に力を入れて何とか踏みとどまる。

「どっこ見て歩いてんだっ！気ぃ付けろっ！！」

「はぁっ……？」

不機嫌そうに言い放つ、ぶつかってきたその男に、勢いよく眉を引きつる輝矢。

「私にそんな口を聞いてっ……ただで済むと思っ……！」

「ホンマすんませぇ～んっ！この子ぉ、まだ子供やしぃ、大目に見たって下さいぃ～っ！」

「ケっ！」

ケンカを売ろうと、というな殴りかかりでもしそうな勢いの輝矢の口を押さえこみ、深々と頭を下げるモンキ。輝矢とモンキに悪態づきながら、男はとっととその場を歩き去っていった。

「ふぅ～っ、命拾いしたなぁ～あの男っ」
「一般市民相手なんですから、ちゃんと手加減くらいしますよっ」
「輝矢んなら手加減したってあの世行きやでぇ～っ！でも、まっ！」
――――ボォォォォォ～～～ンっ！――――
モンキの体を白い煙が包んでいく。
「ほいっ！」
「えっ……？」
煙の中から現れた門貴が、爽やかな笑顔で、幼い輝矢の体を軽々と抱え上げる。
「サルっ！何をっ……！」
「今日は滅多にないチャンスですからお守りしますよぉ～っ！かぐや姫っ！」
「はぁっ？って、ああっ！！」
「うぎゃんっ！！」
何かを見つけたらしき輝矢が、門貴の頭を下に押さえ込み、勢いよく身を乗り出す。
「痛いっ！痛いっ！痛いっ！かっ輝矢んっ！首がっ！首がもげるぅ～っ！！」
「玉手箱っ！」
「へぇっ！？」
輝矢の言葉に敏感に反応し、門貴がもげそうになっている首を必

死に動かして、輝矢の指差している方に顔を向ける。

「んんっ？……あぁぁぁっっ！！！」

輝矢の指差した方向には、混み合う人々の中で、またもや“玉手箱”と大きく書かれた箱を持っている男。男を見つけ、門貴が大きく声を出して首を立てる。

「ホンマに玉手箱やぁ～」

「しかし、またハズレかも知れませんね……」

目を見開く門貴に対し、表情を曇らせる輝矢。

「サル、一先ず、あの玉手箱の確保をっ……！」

そう言って、輝矢が門貴の腕の中から飛び降りる。

「かっ輝矢んっ……」

「何ですっ？早くしないと、玉手箱を見失ってしまっ……」

「あっあそこっ……」

「へっ？」

門貴が指差した方を輝矢が見る。

「なっ……！！」

その方向には、人混みの中に、またもや“玉手箱”と書かれた箱を持った男。

「もっもう一人っ……？ではどちらかがハズレでっ……」

「ああっ！あそこっ！そこっ！ああっ！あっちにもっ！」
「はぁっ！？」

次々と指を差していく門貴に、戸惑うように声をあげる輝矢。しかし、確かにその一方向、一方向、到るところに“玉手箱”と書かれた箱を持った男が歩いている。

「そっそんなっ……」

その状況に、呆然と呟く輝矢。

「どっどないなっとんねぇ～んっ！！」

思わず頭を抱える門貴。

「どれが本物っ！？一体、どいつを狙ったらっ……！」

――――バギコォォォォォーーーンっっ！！――――

「へっ……？」

聞こえてくる破壊的な音に、門貴が頭を抱えたまま、ゆっくりと振り返る。

「ふぅっ」
「きゅうぅぅぅ～～っ」
「……。」

門貴の振り返った先には、かなりノビきった様子の男と、玉手箱を手にした輝矢。

「とにかく全部、回収しましょう」
「……子供になっても、強さに変わりはなしってことかぁ……」
控え目に問いかける輝矢を見ながら、門貴が少し呆れた表情で肩を落とした。
「やっぱお守りできそうにないわぁ～かぐや姫っ」
「はぁっ？」
門貴の言葉に、輝矢はまたもや首を傾げた。
「ふっはぁ～っ！これで全部かぁっ！」
――――カランカランっ！カランっ！――――――
そう言って門貴が、山積みになっている玉手箱の上に、さらにもう一個、玉手箱を投げ上げる。
「ったく何個あんねぇ～んっ！」

門貴が疲れきった様子で、その場に倒れ込む。それもそのはず、集めた玉手箱は百個以上。行き交う人々の五人に一人は玉手箱を手にしており、それを一つ残らず回収するのは、かなりの労働であったのだ。

「さすがにこの量は、作為的なものを感じますね」

玉手箱の山を見上げながら、真面目な表情で呟く輝矢。

「また弱ガスが噴き出してくるかも知れませんから、むやみやたらに開けるわけにもいきませんしっ……」

「弱ガスっ!?」

輝矢の言葉に、門貴が素早く反応する。

――――リスとかに変身して、女の子人気上がったかもねぇ～――――

思い出されるユキジの言葉。

「ヌフフっ……女の子人気っ……女の子人気っ……」

あまり品の良くない笑みを浮かべながら、ゆっくりと玉手箱の一つに手を伸ばす門貴。伸ばした手が、山積みの玉手箱の一つを掴む。

「よしっ……！」

「何をやっているのです?」

「どはあああぁぁっ！！！」

背後からの輝矢の声に驚いた門貴が、そのまま勢いよく玉手箱の山の中へとダイブする。

――――ドンガラガッシャンバァァーーーンっ！――――

景気よく崩れ落ちる、玉手箱の山。

「痛たたたたっ……」

「痛い……ったくっ、何をやってくれているのですかっ」

輝矢と門貴は、玉手箱の崩落に巻き込まれ、玉手箱の中に埋め尽くされていた。二人が頭を痛そうに押さえながら、ゆっくりと起き上がる。

「ああっ！ごっめぇ～んっ！輝矢んっ！大丈夫かぁ～っ？」

立ち上がった門貴が、玉手箱に埋まっている輝矢の小さな体を、再び軽々と持ち上げる。

「アナタとハチを組ませなくて良かったですよっ……」

「アハハっ！貧弱なネズミやったら即死しとうかもやもんなぁ～っ！」

「貧弱で悪かったなっ！」

「んっ？」

聞き覚えのある怒声に、輝矢と門貴が同時に振り返る。

「あっ、ハチぃ～っ！」

振り返った先には一羽のキジと、その頭に乗った一匹のネズミ。
そのネズミに向い、輝矢が門貴に抱っこされたまま、嬉しそうに手を振る。

「うわぁ～っ、何か運動会の親子みたいだよぉ～っ」
「いやんっ！ユッキーっ！そこは禁断の匂いチラリの素敵な年の差カップルって言ってくれなっ！」
「誰がですかっ」

ノリノリでユキジにダメだしをする門貴を睨みつけながら、輝矢が地面へと降りる。

「ったくっ……」

ユキジの頭の上で、肩を落とすネズミハチ。

「お気楽なもんだぜっ……」
「ああぁ～っ！そう言うけどなぁっ！俺ら、ちゃ～んとたんまり玉手箱をぉっ……！」
「玉手箱見つけて来たよぉ～“担羽”っ」

――――ドサドサドサっ！！――――

「へっ……？」

ユキジが茶色の羽根を上に向い投げると、舞い上がった羽根から、次々と玉手箱が落ちてくる。輝矢と門貴の集めた山積み玉手箱の横に、さらに高い山を築いてどんどん積み上がっていく玉手箱に、門貴の目が点になる。

「ざっと百五十個ってとこかっ？」
「集めるの、苦労したんだからぁ～っ」
「うっウソやろっ……？」

見渡す限りの玉手箱に、唖然と立ち尽くす門貴。

「フフフっ……見つけたっ……」
「ぎゃあああああああああっっっ！！！」

またしても背後から、不気味に微笑んで現れる万亀に、門貴が飛びあがって、すぐさま輝矢の後ろに逃げ込む。

「カメ」

そこには、浦島と万亀の姿。

「と、ただのバカ」
「万亀ぃぃぃぃ～～～っっ！！！」
「フフフっ……玉之介……ドンマイ……」

輝矢の心ない言葉に傷つき、泣きつく浦島を、万亀が不気味に励ます。

「そんなことより……」
「えっ！？そんなことっ！？」
「玉手箱……見つけてきましたよっ……フフフっ……」
「へっ？なっ何か嫌な予感がっ……」

傷ついている浦島を無視して進める万亀の言葉に、門貴が顔をしかめる。

――――ドサドサドサァァっ！！――――

「やっぱりっ……」

案の定、玉手箱の山が二つから三つになった。万亀と浦島が持ってきた玉手箱も加えると、最早、何個あるのかもわからない。

「どっどないなっとんねぇ～んっ……」

門貴がもう疲れた様子で、その場に座り込む。

「持ってた人さぁ～、“これを持って街を歩くよう、金を貰い頼まれた”って皆、口を揃えて言ってたよぉ～」

「誰に頼まれたかはわからないと言っていましたよっ……フフフっ……」

「どうやら……私たちの玉手箱探しを、邪魔したい方がいらっしゃるのは確かなようですね……」

ユキジと万亀の言葉に、輝矢が気難しい表情を見せる。

「とにかく、コイツらん中に本物があんのか確かめないとなぁ～」

「桜時、開けてみてよぉ～次はミジンコくらいになっちゃうかもっ」

「絶対、開けねぇーっ！」

ユキジの言葉に、開けないことを強く誓うハチ。

「でぇも開けねぇーとハズレかどうかわかんねぇーしなぁ～」

「フフフっ……私に任せて下さいっ……」

「へっ？って、どわああっ！！」

ハチが振り返ると、妙にゴツいガスマスクを装着した万亀の姿があった。

「どっどっからそんなの、持ってきたんだよっ……？」

「フフフっ……企業秘密です……」

「あ、そう……」

ハチの素朴な疑問に、万亀が不気味に微笑み返す。その答えに、特に突っ込もうとはせず、とりあえず流していくハチ。

「うおおおっ！！かっけぇっ！！万亀っ！俺もそれ欲しいっ！！」

「いずれ……時が来れば貴方に継承するわ……玉之介……」

「やったぁっ！！」

「もう勝手にしろっ……」

ガスマスクに目を輝かせる浦島と、ガスマスクを重要アイテムかのように語る万亀。ハチは最早、突っ込む気にもなれずに、頭を抱えてそのやり取りを見守った。

「ふぅ……」

――――ボォォォォ～～～ンっ！――――

『のおおおおおおおおおおおっっっ！！！』

いきなり無造作に玉手箱を開ける万亀。吹きあがる白い煙に、門貴とユキジが、輝矢とハチを引っ張り、必死にその場から離れる。

「ガス吸うとこやったやないかぁっ！あっぶないなぁっ！！」

「開けるなら、ちゃんと開けるって言ってよっ！！」
「“ふぅ”って……言いましたが……？」
『全然、“開けます”の合図になってねぇーっ！！』

自分のペースで生きる万亀に、ハチと門貴が勢いよく怒鳴りあげる。

「“ハズレ”……次ね……」

二人の怒鳴りを気にすることもなく、次の玉手箱へと手を伸ばす万亀。甲羅から短い手をゆっくりと伸ばし、やっと山積みの玉手箱の一つを取り、それをゆっくりと自分の手元に近づけては、またさらにゆっくりとした動きで、玉手箱の蓋を開ける。

――――ボォォォォ～～～ンっ！――――

「“ハズレ”……」

またしてもハズレと書かれた紙を見つけ、万亀が繰り返し、玉手箱を開けていく。

「このスピードで、あの玉手箱を全部、開けていくわけっ……？」
「おぉ～いっ！もうちょいスピードあげられねぇーのかぁっ？」

顔を引きつるユキジに代わり、ハチが万亀を少し急かす。

「それは無理っ……」
『へっ……？』

即答する万亀に、目を丸くする三匹。

「だって私は……カメ……だから……フフフっ……」
『……。』
万亀の最もな答えに、反論することもできずに三匹が固まる。
「気長に待ちますか」
『はぁ～～っ……』
輝矢の言葉に、三匹は一斉に深い溜息をついた。
「……。」
肩を落とす三匹の横で、幼い輝矢はどこか浮かない表情を見せていた。

第２６章　玉手箱☆パニック　★３

数時間後。

海中なので太陽が沈んだかどうかはわからないが、もう夜が来たのだろう。外を歩く街の人々も徐々に減り始めていた。そんな中、万亀の玉手箱開けはまだ続いていた。

「“ハズレ”……」

――――ボォォォォォ～～～ンっ！――――

「“ハズレ”……」

「ふわぁ～あぁっ」

繰り返される万亀のハズレコールと、玉手箱から煙が噴き出す音を聞きながら、少し眠そうに欠伸をするハチ。

「ぐがぁっ！ぐがぁっ！」

「うるさい」

「ぐぎゃあああああああっ！！」

少し離れたところで居眠りをしているモンキを、輝矢が蹴って無理やり起こす。

「はぁっ……ねぇ～っ、後何個くらいぃ～っ？」

深々と溜息をつきながら、ユキジが万亀へと問いかける。

「残念ながら……まだまだです……フフフ……」
「そうっ……」
「後三個ですから……」
「すっげぇラストスパートっ！！」
「どこがまだまだっ！？」

万亀の言葉に、ハチとユキジが思わず立ち上がりながら、突っ込みを入れる。

「っつーか何で、んな早いんだっ？あんなにあったのにっ」
「フフフ……それはですね……」

――――ボォォォォォ～～～ンっ！――――

「あっ！ハズレぇ～っ！」
『へっ……？』
「玉之介が手伝ってくれたから……フフフっ……」

万亀の横には、玉手箱開けを手伝っている、ガスマスクも何も装着していない無防備の浦島の姿。蓋を開け、思いきり白い煙を被っている。

「おいおいおいっ！あれじゃあ思いっきり弱ガス吸っちまうんじゃっ……！」
「さてっ、次ぃ～っ！」
「んっ？でもその割に、何も変わってないようなっ……」

いつもと何ら変わりない様子で、次の玉手箱を開けようとしている浦島を見て、ハチが眉をひそめる。

「あっ！またハズレぇ～っ！」
「フフフ……玉之介は元々弱いから……」
「これ以上、弱らせようがないので、弱ガスが効かないというわけですか」
「ええぇ～っ！？ある意味、強いじゃねぇーかっ！」
万亀と輝矢の言葉に、ハチが驚いたように声をあげる。
「防御は最大の攻撃なりぃってなぁっ！」
「それ、何かちょっと違くないっ？」
輝矢の蹴りから立ち直ってやってきたモンキに、ユキジが呆れた視線を向ける。
「万亀ぃ～っ！こっち全部、ハズレだったぞぉ～っ！」
「そう……お疲れ様……玉之介……」
「いっやぁ～っ！それほどでもぉ～っ！」
万亀に労いの言葉をもらい、浦島が上機嫌となっている中、万亀がゆっくりと振り向き、目の前に置いてある玉手箱と向き直る。浦島が二個の玉手箱を開けた。これが最後の一個。
「ではっ……」
その最後の一個に、手をかける万亀。
「いよいよ最後の一個ですか……」
「うんっ……」
『……っ』

輝矢たちが、蓋の開かれる最後の玉手箱を見つめる。

――――ボォォォォォ～～～ンっ！――――

噴き上がる白い煙。

「……。」

万亀が煙の出た玉手箱から、小さな紙切れを取り出す。

「……“ハズレ”……」

『だっはぁぁぁぁぁ～～～っ！！』

読み上げられるその文字に、一気に肩を落とすハチと門貴。

「結局……全部、ハズレでしたね……フフフっ……」

万亀が不気味に微笑みながら、装着していたガスマスクをはずす。

「あぁ～んなに集めたのに全部ハズレぇ～っ！？」

「もうっ！どないしたらええねぇ～んっ！」

「はぁっ……何かこう、一気にやる気なくしたっ……」

「ですねぇっ……」

これだけ集めて全部ハズレだったのなら、もう一生アタリなど見つからないような気がして、輝矢たちは諦めきった様子でその場に

座り込んでしまう。

『はぁっ……』

一気に暗くなる、その場の雰囲気。

「諦めるなっ！！お前らっ！！」

『……っ？』

聞こえてくる威勢のいい声に、暗いムードだった輝矢たちが、眉をひそめ、顔を上げる。

「諦めなければきっと必ず道は開くさっ！」

『……。』

挫けていた輝矢たちにそう声をかけたのは、きらきらと瞳を輝かせた、ハツラツとした表情の浦島であった。そんな浦島を見て、皆が固まる。

「さぁっ！またゼロからのスタートだっ！」

目を輝かせた浦島が、夜空のように光る上方の海を指差す。

「もう一度、玉手箱を探してくれっ！！」

『お前が探せやぁぁぁぁーーーっっ！！！』

「ぎゃあああああああああっっっ！！！」

勝手すぎる浦島に、さすがにキレた面々がそれぞれに浦島を攻撃した。ハチに噛みつかれ、モンキに殴られ、ユキジに嘴で突かれた浦島であったが、やはり輝矢の蹴りが一番強力だったようで、道の

かなり端の方まで吹き飛ばされていった。

「ぎゃふんっ！」

「玉之介……ＫＯ……フフフ……」

倒れ込んだ浦島を見て、万亀は特に心配する様子もなく微笑む。

――――カランカランっ！カランっ！――――

『……っ？』

浦島が倒れ込むと、浦島の持っていた大きな餌ツボの中から、何かが勢いよく地面へと転がり落ちた。

『んっ……？』

落ちたものへと目をやる輝矢たち。それは、光沢の美しい、金色の模様の施されている、黒い小箱。輝矢たちが小箱の近くへと駆け寄っていく。蓋の表面には、金色の墨でこう書かれていた。

『たっ……“玉手箱”おぉぉっっっ！！！？』

その文字に、ハチとモンキが大きく目を見開く。

「なんで浦島の餌ツボから玉手箱がぁっ？」

「さぁ～っ？」
「またハズレとちゃうんかぁ～っ？」
「んん～っ」

戸惑い疑いながらも、その小さな玉手箱を手に取る輝矢。

「万亀」
「はい……フフフっ……」

輝矢からその玉手箱を受け取り、再びガスマスクを装着した万亀が、ゆっくりとその蓋に手をかけた。

『……っ』

――――パカっ……――――

皆が息を呑む中、玉手箱の蓋が開かれる。

――――しぃぃぃぃぃ～～～んっ……――――

しばらく流れる、沈黙。

「ガス……出ぇへんなっ……」
「うん～中身はっ……これはっ？」
『……っ？』

煙の出なかった玉手箱を覗き込んだユキジが、少し驚いたように目を見張る。そのユキジの様子に、続けて玉手箱の中を覗き込む、輝矢たち。

『……石っ……？』

玉手箱の中に入っていたのは、ほんのりと光る赤い原石であった。採掘されたところのような歪な形ではあったが、その光は何とも美しい。その石が秘めているパワーのようなものを感じさせる。

「これって……」
「フフフっ……」
『うっぎゃあああああああっっっ！！！』

至近距離で微笑んでくる万亀に、驚き飛び上がるハチとモンキ。

「聞いたことがありますね……乙姫様の家系に……先祖代々伝わるという……“空気石”……」
「空気石っ……？」

万亀の言葉に、輝矢が眉をひそめる。

「その石の力を借りて……乙姫様は海底都市に膜を張り……我らに空気をもたらすそうです……フフフっ……」
「空気をっ……」

――――じゃあこの人たちも乙姫の大切な“玉手箱”を探してくれ

ますのぉ～っ！？――――

「本当に大切なものだったのですね……」

乙姫の言葉を思い出し、輝矢が少し考え込むように呟く。

「やったぁぁっ！ついに念願の玉手箱ゲットぉぉぉっ！！」

「あっ」

輝矢の手から玉手箱をかすめ取り、嬉しさ全開で掲げる浦島。

「これでぇっ、きっと乙姫ちゃんもぉ～っ！グフフっ！」

玉手箱を抱え、浦島があまり品の良くない笑みを見せた。

「良かったわね……玉之介……」

「うんっ！早速、乙姫ちゃんのところにっ……！」

「ちょい待ちぃ～っ！！」

「へぇっ？」

早速、竜宮城の乙姫の元へ玉手箱を届けようと、万亀の背中に乗り込もうとした浦島を、モンキが勢いよく呼びとめた。浦島が間の抜けた表情で振り返る。

「何ぃ～っ？」

「どう考えてもおっかしいやろっ！」

「そうだっ！何で盗まれたはずの玉手箱が、お前の餌ツボの中に入ってたんだよっ！？」

「そっそれはぁ～っ、泥棒が俺の餌ツボに隠したぁ～からっ？とか

っ！」
「いくら灯台下暗しとは言っても、餌ツボの中に箱が入ってて気づかないなんて有り得ないでしょ～っ」
「んっんなこと言われてもっ……」
鋭い瞳を向けてくるハチ、モンキ、ユキジに、最初は軽い笑みで答えていた浦島であったが、徐々に気まずそうに俯いていく。
「本当は……アナタが盗んだのではないですか……？」
「えっ……？」
向けられる輝矢の鋭い瞳に、浦島が戸惑うように声を出す。
「せやせやぁ～っ！乙姫ちゃんにええとこ見せるために、自作自演したんやろぉ～っ？」
「ボクたち呼んだのも、見つけたっぽくするためだったんじゃないのぉ～？」
「とっとと白状しろっ！」
「えっ？えっ！？」
次々と向けられる三匹の言葉に、戸惑いから焦りの表情となる浦島。
「ちっ違うっ！！俺は何もっ……！」
「きゃあああああああああああああああっっっ！！！」
『……っ！』
聞こえてくる悲鳴に、一斉に振り返る輝矢たち。

――――バァァァァァァーーーンっ！！――――

『なっ……！？』

輝矢たちが振り返った途端、近くに並ぶ家の一軒が粉々に崩れ去った。

『グガァァァァァァァっっっ！！！』

『……っ！』

崩れ去った家から、輝矢たちのいる広い道へと姿を見せる、巨大な生き物たち。

「きっ“鬼人”っ……！？」

それは、背中からまるで羽根のように、禍々しい鰭を生やした、青色の皮膚の５匹の鬼であった。

「レベル五・青鬼っ……」

輝矢が五匹の鬼を見上げながら、厳しい表情で呟く。

「青鬼っ！？五匹もぉっ！？」

――――ボォオオオオオオ～～～ンっ！――――

素早く人化した門貴が、如意棒を構えながら、少し焦ったように声を出す。

「ひいやあぁぁぁぁぁぁっっ！！万亀いいいいっっっ！！！」
「フフフ……玉之介……パニック……」

玉手箱を抱いたまま、涙を滲ませ、頭を抱える浦島に対し、特に動じた様子のない万亀。

「輝矢んっ！」
「とにかく場所を変えましょうっ！ここで戦っては街に被害が出るっ！」
「りょ～かいっ！」
「へっ？」

輝矢の指示にヘラヘラとした笑みで頷くと、門貴が素早く輝矢を抱え上げた。

「またアナタはっ……！」
「今日の俺は輝矢んのお守り役やからねぇ～っ！」
「誰がお守り役ですっ。この道を抜けたところに広い草原がありました！そこまで行きましょうっ！」
「了解っ！」

門貴が左手に輝矢を抱えたまま、右手で如意棒を構える。

「如意棒・第一の舞っ……“空”っ！！」

――――ビュウウゥゥゥゥウンっ！――――

『グガァァァァァっっ！！』

門貴の放った一陣の風が、五匹の青鬼たちの間を駆け巡り、注意を誘う。

「“鬼さんこっちらぁ～♪”やでぇっ！」

青鬼たちの注意を引き、草原への道を駆け出す、輝矢を抱えた門貴。

「ユッキーっ！」

「了解ぃ～っ、振り落とされないでねぇ～桜時ぃ」

「まっまた空中飛行かよっ！」

小さな体を縮めながら、かなり不安げな表情を見せて、ユキジの頭の上へと乗り込むハチ。ユキジが羽根を広げ、上方へと飛び上がる。

「はぁっ……と、いうわけで、乗せる余裕なさそうなんだけどぉ～

っ？」

飛び上ったユキジが、万亀とその後ろで震えている浦島へと声をかける。

「えぇぇぇぇぇ～っ！？乗せてってくれないのぉっ！！？」

「大丈夫ですよ……フフフっ……」

焦る浦島に対し、どこか自信のある素振りで、不気味に微笑んで見せる万亀。

「私の走りはチーターよりも速いですから……フフフ……」

「とてもそんな風には見えないけど……」

スピードに自信を覗かせるカメに、呆れた表情を見せるユキジ。

「じゃっ、知らないよぉ～っ」

「ああっ……！！」

鬼人の元へと駆けていくユキジに、浦島が救いを求めるように手を伸ばした。しかし手は届くことなく、ハチを乗せたユキジは門貴や輝矢の元へと行ってしまう。

「万亀ぃぃ～っ！」

「フフフ……大丈夫よ……玉之介……」

泣きつく浦島に、優しい微笑みを向ける万亀。

「貴方が私の盾になるから……フフフっ……」
「ああ、そっ……！って、いっやぁぁぁぁっっ！！よく聞いたら逆うううっっ！！！」

万亀の言葉に、頭を抱える浦島。

「冗談よ……フフフ……」
「なんだぁっ！冗談かぁっ！万亀ってばオチャメさっ……！」
「グガァァァァァァァァァっっっ！！！」
「ひえええええぇぇぇぇぇぇ～～～っっ！！！」

迫りくる青鬼の吠声に、浦島が全身を震わせて、万亀の甲羅の後ろへと逃げ込む。

「背中に乗って……玉之介……」
「へっ？」
「早く乗らないと……死ぬ……わよっ……？フフフ……」
「ひえええぇぇぇぇぇ～～～っっ！！」

浦島が涙を流しながら、万亀の背中に乗り込む。

「フフフ……さてと……」

甲羅の上に浦島が乗ったことを確認すると、万亀が頭と手足を甲羅の中へと引っ込める。

「必殺っ……“回転カメカメ”っ……」
「へぇっ？って、どうえええぇぇぇぇぇぇっっ！！？」

浦島を乗せた甲羅が勢いよく回転を始める。

「フフフっ……」

「のわあああああああああああっ！！」

回転の力を利用し、物凄い速さで青鬼から遠ざかっていく万亀。

しかし甲羅に乗った浦島は、高速回転による風圧を受けながら、振り落とされまいと必死に頑張っていた。

「あっ、ホント、チーター並みぃ～っ」

「死んじまうんじゃねぇーかっ？浦島のヤツっ……」

あっという間に抜かしていく高速回転甲羅を見ながら、ハチとユキジがそれぞれ呟いた。

第２６章　玉手箱☆パニック　★４

海底都市のはずれ。ただっ広い草原。

「おっしゃあぁっ！一番乗りぃっ！」

そこへ意気込んでやって来るのは、幼い輝矢を抱えた門貴。

「フフフ……それはどうですかね……」

「ぎゃあああああああっ！！」

どこからともなく現れる万亀に、門貴が悲鳴をあげる。

「ひぃぃぃぃっ！カメ怖いぃ～っ！」

「万亀、随分と早いですね」

震えて体を縮める門貴の手から、輝矢が地面へと降り立つ。

「ええ……私が本気を出せば……ざっとこんなもんですよ……フフフ……」

「ぐっぐふっ……」

「甲羅の上で一人、死んでますけど……？」

得意げに微笑む万亀の甲羅の上で、目をぐるぐると回し、倒れている浦島。そんな浦島を見て、輝矢が少し引きつった表情を見せる。

「ふぅ～っ」

「……っ？」

上から聞こえてくる声に、輝矢が顔を上げる。

「よいしょっとっ」

――――ボォォォォォォ～～～ンっ！――――

ハチを頭の上に乗せて飛んできたユキジが、白い煙に包まれながら降下してくる。

「とうちゃ～くっ」

「ふぃ～っ、怖かった……」

地面へと降り立つ由雉と、由雉の手の中で、ホッと胸を撫で下ろしているネズミ。

「ハチ、私が怯えきったその心に、愛の祝福をっ……」

「いらんわっ！！どっかの宗教かっ！お前はっ！」

両手を広げる輝矢に、ハチが勢いよく怒鳴り返す。

『グガァァァァァっ！！』

「おっ、お出ましみたいだねぇ」

『……っ』

そこへ予定通り、誘い出されてやって来る五匹の青鬼。皆が表情を鋭くする。

「ほいっ」
「のわあああっ！」

由雉が手の中のハチを、万亀の上に倒れている浦島の背の上へと投げる。少し驚きながらも、何とか浦島の背に着地するハチ。

「由雉っ！」
「か弱いネズミさんは、そこで見学っ」

振り向いたハチにそう言って笑いかけ、由雉が懐から取り出した色羽を構える。

「“月器っ……」

子供の姿の輝矢が、耳に付けているピアスを弾く。

「三日月”っ」

月器を目覚めさせ、三日月を構える輝矢。

――――ズシっ……――――

「……？」

三日月を構えた輝矢の右手が、いつもよりも重みを感じる。少し表情を曇らせる輝矢。

「輝矢んっ？」
「……っ」

門貴に名を呼ばれ、輝矢がハッとした表情となって三日月を構え直す。

「とっとと終わらせますよっ、サル、キジっ」
「了解ぃぃ～っ！」
「はいはいっ！」

輝矢の言葉に頷き、門貴と由雉がそれぞれ、如意棒と色羽を構えて、青鬼の元へと駆け込んでいく。

「おっりゃあああっ！！如意棒っ！！」
「“左翼っ……滅羽”っ……！」

門貴と由雉が、青鬼へ攻撃を開始する。

「……っ」

そんな二人の後方で、輝矢がどこかぎこちない動きで、三日月を持ち上げる。

「“鬼爪っ……天回”っ……！！」
「……っ！」

そんな輝矢に向け、放たれる十本の鬼爪。

「三日月っ……！」

飛んでくる鬼爪を、三日月を振るって叩き落とす輝矢。

「クっ……！」

いつもより重みを感じる三日月は、いつものように自由に振りきることができない。輝矢が少し苦しげな表情を見せた途端、三日月を持っていた手がガクっと落ちる。

「……っ！」

払い落せなかった鬼爪の一本が、輝矢の顔面に迫りくる。

「うっ……！」

厳しい表情で、唇を噛みしめる輝矢。

「輝矢んっ！！」

――――パァァァンっ！――――

横から割って入り、輝矢に迫っていた鬼爪を、如意棒で叩き落と

す門貴。

「大丈夫かぁっ！？」
「すっすみません……」

門貴の呼びかけに、輝矢が少し申し訳なさそうに頭を下げる。

「子供の体やからなっ！普通より力がないんはしゃーないでぇっ」
「月器を操るのは厳しいかもねぇ」
「……。」

門貴と、二人の元へとやって来た由雉の言葉に、輝矢は少し気難しい表情を見せる。月器が振るえなければ、輝矢の力は半減、いやそれ以上である。ハチも戦えない上、鬼人が五匹もいるというのに、この状況は予想していたよりも厳しい。

「今はイヌコロもチューチューやし、俺らだけで何とかしよかっ！ユッキーっ！」
「輝矢は万亀とか浦島とかその他もろもろをフォローしててぇ～っ」
「えっ……？あっ！ちょっ！サルっ！キジっ！」

『……っ』

門貴が如意棒を、由雉が色羽を構え、二人は五匹の青鬼の元へと駆け出していく。

「待っ……！……っ」

輝矢は止めようと伸ばした手を下ろし、もどかしげな表情で遠ざかる二人の背中を見つめた。

「“右翼っ……」

青い羽根を構えた由雉が、青鬼たちの上方へと飛び上がる。

「裂羽”っ……！」

由雉が青い羽根を、下方の青鬼たちへ投げつける。

――――バァァァァァァーーーンっ！！――――

『グギャアアアアアアっっ！！』

体を切り裂かれ、数匹の青鬼が悲鳴をあげる。

「よしっ……！もう一個っ……」

「“鬼水”っ！！」

「えっ……？ううっ……！！」

「ユッキーっ！！」

降下していきながら、もう一枚羽根を出そうとしていた由雉を、青鬼の放った水の塊が捕える。

「ぐっ……！ううっ……！」

上方に浮かぶ水球に、全身を包まれ、その中で苦しげな表情を見せる由雉。呼吸ができないのであろう。

「そういえば青鬼は“水力”を使うんでした」
「お前はいっつもいっつも言うのが遅せぇーんだよっ！！」
「すみません」

外野から怒鳴ってくるハチに、輝矢が大人しく謝る。

「とにかくっ……！」

ハチと輝矢の会話を振りきり、素早く如意棒を構える門貴。

「ユッキーを助けんとっ！如意棒・第一の舞っ……“空”っ……！！」

門貴が、由雉を捕えている水球へ向け、風の一陣を放つ。

――――パァァァァァンっ！！――――

『あっ……！』

水にあっさりと弾き返される風に、思わず声を漏らす輝矢と門貴。

「あっかんっ！海中じゃ水に比べて、風の力が弱過ぎるっ……！」
「ううっ……！！」
「クっ……！」

水球の中で苦しげな表情を見せている由雉の姿に、輝矢が少し顔をしかめ、素早く三日月を構えた。

「“月器・上弦”っ」

輝矢が三日月を上弦へと満ちさせる。

「“水げっ……！」

――――ズキンっ……！――――

「うぅっ……！」

水力を使おうとした途端、輝矢の頭に痛みが走り、輝矢がそのまま頭を抱えてしゃがみ込む。

「輝矢んっ！？」
「……っ？」

しゃがみ込む輝矢に、駆け寄る門貴と眉をひそめるハチ。

「こっこんな時にっ……！」

しゃがみ込んだ輝矢が、頭を押さえながら、どこか悔しげに唇を噛む。

「輝矢んっ……？」

「“鬼水”っ！！」

『……っ！』

しゃがみ込んだ輝矢に向かい、青鬼の一匹が、水の塊を放つ。向かってくる水球に、目を見開く輝矢と門貴。

「“月器っ……！」

上弦を持ち上げる輝矢であるが、防御が間に合わないのは、もう目に見えていた。

「クっ……！」

輝矢が表情をしかめる。

「……。」

「なっ……！」

その時、輝矢の前に、輝矢の壁になるようにして立つ人影。

「サルっ！何をっ……！」

前に立った門貴に、輝矢が思わず声をあげた。

「……っ」

門貴がゆっくりと輝矢の方を振り返る。振り返った門貴は、穏やかな優しい笑みを浮かべていた。

「今日はお守りしますぅ～言うたやろぉ～？かぐや姫っ」

「バカなことをっ！早くそこをどっ……！」

「……っ」

――――バァァァァァァーーーンっ！！――――

「……っ！！」

輝矢の叫び声も虚しく、輝矢の目の前で水の塊が門貴を直撃し、門貴が水球の中に捕えられていく。

「門貴っ……！！」

「ぐっ……！ううっ……！」

門貴を捕えた水球が、上方へと舞い上がっていく。水球の中で、苦しげな表情を見せる門貴。

『ううっ……！』

「サルっ……キジっ……」

水の中に捕えられ、呼吸を封じられ、苦しげな表情を見せている門貴と由雉。しかし、今の輝矢には、月器も水力も使えず、二人を助ける力はない。

「この姿のままではっ……クっ……！」

悔しげな表情を見せた輝矢が、強く強く拳を握り締める。

「どうやら全滅くさいわね……フフフ……」
「ええぇ～っ！？アイツら死んだら、誰が俺を守るんだよぉ～っ！？万亀ぃ～っ！」
「……っ」

万亀と浦島の思いきり他人事な会話を聞きながら、浦島の上で強く歯を噛みしめるハチ。

「クソっ……！」
「あっ……！」

居ても立ってもいられなくなったのか、ハチがその小さな体で、浦島の背の上から、輝矢の元へと飛び出していく。甲羅の上で思わず起き上がる浦島。

「おいっ……！！」
「追ったら死ぬわよ……玉之介……」

「成仏しろよっ！！」
「フフフ……」
すぐさま手を合わせる浦島に、万亀が不気味に微笑む。
「こっのっ……！」
戦場へ駆け出たネズミが、自分の体のもう一体何倍あるのかもわからないほど巨大な青鬼へ向け、小さな前足を勇んで突き出す。
「“瞬花”っ……！！」
桃色に光る、ハチの前足。
――――ポスンっ！――――
「……。」
しかし、前足から放たれたのは、桜の花びら四，五枚ほどであった。その寂しい景色に、ハチが固まる。
「“鬼水”っ！！」
「げぇっ！？」
無力なネズミハチに、青鬼が容赦なく鬼水を放つ。

「ハチっ……！」

鬼水を向けられたハチの元へと、必死に駆け込んでいく輝矢。

『クっ……！』

――――バァァァァァァァーーーンっ！！――――

『うっ……ううっ……！』

地面に当たり、弾け飛んだ水の塊のすぐ横から、転がるようにして出てくる輝矢と、その輝矢の手の中に収まっているハチ。水球に捕えられることこそ防いだが、水飛沫を受け、2人は傷を負っていた。

『……っ』

そんな輝矢とハチを、水球の中の門貴と由雉が、苦しみながらも、どこか心配そうに見つめる。

「かっ輝矢っ……」

「今触るなとか……言わないで下さいよっ……正当防衛ですからねっ……」

「わかってるって……ってか、正当防衛の使い方、おかしくね……？」

少し呼吸を乱しながら、輝矢とハチがあまり緊迫感のない会話をする。

「それよりっ……このままじゃマズいぜっ……？」

「ええっ……とにかく弱ガスの効果が切れないことには……」

「“鬼水”っ！！」

『……っ！』

倒れたままの輝矢とハチに、青鬼はまたしても鬼水を向ける。

――――バァァァァァァーーーンっ！！――――

『うあああああああああああああっっ！！』

水飛沫とともに、二人の叫び声が散った。

第２６章　玉手箱☆パニック　★５

「ううぅ～っ！」

戦況を見つめ、両手を組み、どこか不安げな表情を見せる浦島。

「マズいよマズいよ、万亀ぃ～っ！このままじゃアイツらっ……！」
「全滅……フフフっ……」
「いっやぁぁぁぁっっ！！全滅したら、次は俺らっ！？まじ勘弁～っ！」

万亀の不気味な微笑みに、浦島は頭を抱え、必死に首を横に振る。

「フフフっ……じゃあ……助けに行く……？」
「はぁっ！？あり得ないっ！あり得ないっ！」
「そう……言うと思った……」

いつものように不気味ではあるのだが、どこか悲しそうにそう呟き、万亀はそっと肩を落とした。

「グガアアアアアっっ！！」
『……っ！』

その時、万亀と浦島の背後から、青鬼が現れる。

「しまったっ……！」
「ううっ……！」

二人へ向けて爪を振り上げる青鬼の姿に、倒れたままの輝矢とハチが表情を険しくする。

「ぎゃあああああああああああっ！！」
「ガアアアアアアアァァァっっ！！」
「クっ……！」

悲鳴をあげる浦島を強く押さえ、万亀が素早く青鬼の爪を避ける。

――――パァァァンっ！――――

「あっ……！」

その時、浦島の手の中から、浦島がずっと抱え込んでいた本物の玉手箱がこぼれ落ちた。

「玉手箱っ……！」
「玉之介っ……？」
『……っ！』

こぼれ落ちた玉手箱を拾うため、万亀の甲羅の上から飛び降りていく浦島。万亀が少し焦るように振り返り、見つめていた輝矢とハ

チが、驚いたように目を開く。

「あのバカっ！」

「戻ってっ……！玉之介っ……！」

思わず声を出すハチと、珍しく声を張って浦島を呼ぶ万亀。

「玉手箱っ……！」

しかし浦島は足を止めず、必死に玉手箱の方へと駆け出していく。

――――乙姫の大切な“玉手箱”を探してくれますのぉ～っ！？――――

――――浦島様っては頼もしいぃぃ～～っ！！――――

「乙姫ちゃんの大切なものっ……やっとっ……やっと見つけたんだっ……！」

「……っ」

まっすぐな瞳でそう言って、玉手箱の元へと駆けていく浦島に、万亀が少し目を細める。

「……っ！やったっ……！」

落ちた玉手箱を拾い、思わず笑顔をこぼす浦島。

「“鬼水”っ！！」
「えっ……？」

しかし、笑顔を見せたのも束の間、やっと玉手箱を掴んだ浦島に、無情にも鬼水が向けられる。

「うっ……うわあああああああああああっっ！！」

「浦島っ……！！」
「クっ……！」

恐怖に満ちた叫び声をあげる浦島に、思わず身を乗り出すハチと、必死に月器を構えようとする輝矢。

『……っ！！』

皆が諦めかけた、その瞬間。

――――パァァァァァァーーーンっ！――――

浦島に当たる寸前のところで、鬼水が粉々に飛び散った。

「……えっ……？」

『……っ』

戸惑うように顔を上げる浦島と、思わず目を見張る輝矢とハチ。

「これ……はっ……」

浦島の前で、浦島を守るようにして浮かんでいるのは、赤い光を放つ原石。

「乙姫ちゃんの……空気石っ……？」

そう、それは、本物の玉手箱の中に入っていた空気石。乙姫の一族が、海底都市に空気をもたらすために使うとされているものであった。

「すっげぇっ……何だ？あの石っ……」

「……。」

唖然としているハチの横で、輝矢が少し表情を曇らせる。

「そっかぁ～っ！乙姫ちゃんの愛が俺を守ってくれたんだなぁ～！ありがとうっ！乙姫ちゃっ……！」

――――スカっ……！――――

「あれっ？」

抱きつこうとした浦島の手を擦りぬけ、さらに上方へと浮き上がっていく空気石。

――――パァァァァァァァーーーンっ！――――

浮き上った空気石が、さらに強く赤い光を放つ。

――――パァァァンっ！――――

「うおっ！！」

「うわぁ～っ」

「……っ！門貴っ！由雉っ！」

空気石が光を放った次の瞬間、門貴と由雉を捕えていた水球が弾け飛び、二人が解放されて地面へと落ちた。

「助かったぁ～っ」
「ふぃ～っ！もう溺死寸前やったわぁ～っ！」
「あ、そう。それはおしかったね」
「がびぃぃーーんっ！ユッキーっ！それ、どういう意味っ！？」

地面に座り込んだまま、会話をする門貴と由雉。普通に元気そうである。

「すっげぇなぁ～あれもあの石がやったのかぁ～？」
「何にせよ、そろそろ石よりイイところを見せないといけませんね……」
「へっ？って、お前っ……！」

ハチが振り返ると、そこには子供の姿ではない、元の輝矢が笑顔で立っていた。

「元にっ……？」
「いっやぁ～っ！輝矢んはやっぱ、その姿が一番可愛ええぇ～っ！！」

戸惑うハチの向こうから、門貴が黄色い声援を飛ばす。

「おっ俺はっ……！？俺も元にっ……！」
「ちゃんと立派なネズミだよぉ～っ」
「なんでぇっ！！？」

由雉が向けてくれた鏡に映るネズミの姿に、ハチが苦悩するように頭を抱える。

「輝矢は元に戻ってんのにっ……なんで俺だけっ……」
「一生、このままネズミなんとちゃう～？」
「いやだぁぁぁぁぁぁっっ！！」

「とにかくっ……」

叫びまくっているハチの横で、輝矢が軽々と、落ちていた月器を拾い上げる。

「“月器・三日月”っ……」

輝矢が月器を三日月へと変化させ、その感触を確かめるように、何度か回転させる。

「竹取輝矢、鬼退治いたしまぁ～すっ」

笑顔で三日月を構える輝矢。

「グウゥゥっ」
「……っ！」

浦島へ鬼水を放った青鬼の元へ、輝矢が勢いよく駆け込んでいく。

――――・・・・・・・・っ！――――

光りのように、走る一閃。

「ギャアアアアアアアアアアアっっ！！」

次の瞬間、横に一直線に斬り裂かれた青鬼は、激しい断末魔をあげて、砂となって掻き消えた。

「ふぅっ、さて後四ひっ……」

「必殺・“シルバァァァーーーァァァーーーックス”っっ！！」

『ギャアアアアアアアアアっっ！！』

残り四匹の青鬼と対峙するべく、振り返った輝矢であったが、横から飛んできた銀色に輝く物凄い衝撃波に、四匹の青鬼が一気に消えていく。

「へっ……？」

その光景に、思わず間抜けな声を出してしまう輝矢。

「グマッハッハッハっ！諸君っ！見たかっ！今のが私の必殺技“シルバーアックス”だよっ！」

『……っ』

衝撃波の飛んできた方から聞こえてくる、ガサツそうな大声に、輝矢たちが一斉に振り返る。

『はっ！勉強になりますっ！正刈隊長っ！』
「正刈っ……？」
「そうかそうかっ！グマッハッハッハっ！！」

多くの黒制服集団の先頭で、豪快な笑い声をあげているのは、黒のオカッパ頭が印象的な、眉毛の太い、どこかで見たことのある顔立ちの男。黒い制服を身に纏い、背中には大きな銀色の斧を背負い、左手には“銀”と書かれた腕章を付けていた。

「なっなぁっ、もしかして、あれぇ～っ」
「絶対、あの兄弟の一人じゃ……」
「んん～っ？」

門貴とハチのコソコソ話を聞きつけ、オカッパ男がハチたちの元へとやって来る。

「おいっ！お前たちっ！そこで何をやっているっ！」
「なっ何って言われてもっ」
「特にそこの“イヌ”っ！！」
「へっ……？」

オカッパ男に強く指を差され、ハチが大きく目を見開く。

「イっイヌっ……？」
「そうだっ！お前だっ！イヌっ！何故、イヌがこの海底都市にいる

のだっ！？」
「イっ……イイイイイヌってっ……」
「ほいっ」

少し震える声をもらすハチに、由雉が再び鏡を向けた。

「……っ」

そこに映るのは、まぎれもない一匹のイヌ。

「もっ……戻ったぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」
「はぁっ？」

元のイヌの姿に戻り、飛び跳ねて喜んでいるハチを、オカッパ男が怪訝そうに見つめる。

「それより輝矢ぁ～あの男って」
「金汰と鉄汰の間とみて間違いないでしょうね」

鏡を片付けながらこっそりと問いかける由雉に、どこかうんざりとした表情で答える輝矢。

「面倒なことには関わりたくありません。適当に誤魔化して下さい」
「了解っ」

輝矢の言葉に、由雉がどこか悪戯っぽく微笑む。

「おいっ！イヌっ！私の話を聞っ……！」
「ボク達、海底都市見学ツアーにやって来た、健全な陸上市民なんですぅ～っ！」
「んんっ？」

ハチを問い詰めようとしていたオカッパ男の前へと、しゃしゃり出てくる由雉。

「でも見学途中に鬼人に襲われちゃってっ……ああっ！怖かったぁ～っ！」
「そっそうだったのかっ」

由雉のブリブリ演技に、あっさり納得するオカッパ男。

「そいつは大変だったな。オトポリの署の方で詳しい話をっ……」
「ああ～っ！自由行動の時間終わっちゃうぅ～っ！早くバスのところに戻らなきゃ～っ！」
「へっ……？」

まだ喜んでいるハチを抱え、輝矢や門貴とともに、すぐさまオカッパ男に背を向ける由雉。

「おっおいっ！お前たちっ……！」
「うっわぁ～っ！またバスガイドさんに怒られちゃうかなぁ～っ！！」
「……。」

オカッパ男が止める間もなく、由雉たちは、あっという間にその場から走り去っていった。

「なっ何だったんだっ……？」

ちなみにこの男、正刈銀汰。二十四歳。オトポリ・海底都市支部の隊長を務めている。

「ふぅ～っ！」

銀汰から逃げるようにして走って来た輝矢たちは、人気のない草原から、元の海底都市中心部まで戻って来ていた。もうすっかり夜更けなので、出歩いている人間はいない。

「助かりましたね」

「さっすがユッキーっ！舌先三寸っ！」

「まぁねっ。あれっ？そういえば万亀と浦島はぁ～？」

由雉が辺りを見回しながら問いかける。

「置いてきてもたんと違うかぁ～？」
「フフフ……それはどうですかね……」
「ぎゃあああああああああっっ！！！」

またもや背後から不気味に現れる万亀に、懲りもせずに同じように驚き、輝矢の後ろへと逃げ込む門貴。

「いたわけねっ」
「ええ……フフフ……大丈夫……？玉之介……」
「ううぅ～っ……何とかっ……」

目を回している様子の浦島が、万亀の甲羅からゆっくりと降りる。どうやらあの高速回転甲羅で、輝矢たちの後を追ってきたようだ。

「それより、これ……」
「んっ……？ああっ！！」

万亀が浦島に差し出したのは、空気石であった。空気石を見て、浦島が一気に目を覚ます。

「乙姫様に渡しに行くのでしょう……？しっかりとしまっておかないと……」
「うんっ！ありがとぉーっ！万亀ぃぃ～っ！」
「フフフ……」

万亀から空気石を受け取った浦島は、大事そうに空気石を玉手箱の中へとしまう。嬉しそうな笑顔を見せる浦島を見て、どこか満足げに微笑む万亀。

「そういやさぁ～っ」

「……？」

やっとイヌに戻った喜びの落ち着いたハチが、少し戸惑ったような表情で輝矢の元へとやって来る。

「結局、あのハズレ玉手箱は誰の仕業だったんだぁっ？」

残ってしまった疑問を、輝矢へと向けるハチ。

「あの様子見て……」

――――乙姫ちゃんの大切なものっ……やっとっ……やっと見つけたんだっ……！――――

「浦島が盗んだんじゃないってのは、わかったしさぁ」

危険も顧みずに玉手箱の元へと駆け出していった浦島。本当に玉手箱を探していたことは、もう輝矢たちには十分わかっていた。

「そういやそうやなぁ～一体、誰がっ……」

「では行きましょうか……」

『へっ？』

輝矢の言葉に、ハチと門貴が目を丸くする。

「この一連の事件……すべてを仕掛けた、黒幕さんのところへ……ね……」

そう言って輝矢は、どこか怪しげに微笑んだ。

第２６章　玉手箱☆パニック　★５（後書き）

２７章へ続きます。

第２７章　鯨国襲来　☆１（前書き）

２７章始まりです。

第２７章　鯨国襲来　☆１

龍国。エセお菓子の家こと“桃原家”。

「輝矢ちゃんが海底都市にぃ～っ？」

そう言って振り向いたのは、いつものように甘さダルダルココアを飲みながら、ソファーでゆっくりまったりとしている桃原太狼。こう見えて世界の英雄。

『はいっ！タロー様っ！』

太狼の問いかけに、揃って頷くヘンゼルとグレーテルのメイド兄妹。二人は千鶴の頼みにより、輝矢たちが海底都市へと旅立ったことを知り、慌ててそれを太狼に知らせに戻ったのであった。

『どうしましょうっ！？』

「うぅ～ん、どうしよっかなぁ～」

「ガァッハッハッハっ！！」

『……？』

豪快な笑い声に、振り向くヘンゼルとグレーテル。すると、太狼の座る向かいのソファーに、一頭の黒クマが腰かけていた。オトポリの総長のわりに、朝から暇そうに太狼のところへと遊びに来た金汰である。

「大丈夫だぁよぉ～っ！かっぐやさんなら、海底都市でもどうってことねぇ～っ！」

金汰は豪快にココアを飲みほしながら、明るい笑みを浮かべる。

「そっれにいざとなったらあれだぁっ！オトポリの海底都市支部には、おいらの弟の銀汰がいっからぁっ！」

「出掛けるよぉ～準備してぇ、ヘンゼル、グレーテル」

「へっ？」

『かしこまりましたっ！タロー様っ！』

立ち上がる太狼に、目を丸くする金汰と、準備をするため慌ててリビングを出ていくヘンゼルとグレーテル。

「桃ちゃ～ん、今聞いてなかっただかぁ？銀汰もいるし、かっぐやさんなら大丈夫だってぇ」

「銀ちゃんじゃ役不足っ」

「ぎゃあぁぁぁぁぁぁーーーんっっ！！」

弟を役不足と言われ、大きくショックを受ける兄バカな金汰。

「と、いうのは冗談でぇ～まぁちょっと本気でもあるけどぉ」

まだショックを受けている金汰に、太狼があっさりと背を向ける。

「間に合うといいけどっ……」

太狼はどこか気難しい表情で、意味深にそっと呟いた。

再び戻って、海底都市。

山程ばら撒かれていた、ハズレ玉手箱。その中に仕掛けられていた、弱ガス。浦島の餌ツボの中にあった、本物の玉手箱。その中にあった空気石。そして、その空気石が、浦島や門貴・由雉のピンチを救った。

――――この一連の事件……すべてを仕掛けた、黒幕さんのところへね……――――

“黒幕のところへ行く”という輝矢の言葉を頼りに、ハチたちと浦島は、とある場所へと来ていた。

「乙姫様……」

「何っ……？ヒラメ……」

袴を着た魚人・ヒラメに名を呼ばれ、海底の姫はゆっくりと振り返った。

「浦島様が、お連れ様方とともに、お越しにございます」

「そうっ……来たのね……」

ヒラメの言葉を聞き、乙姫はどこか怪しげに微笑む。

「通して……ヒラメ……」
「かしこまりました、乙姫様」
ヒラメは深々と頭を下げた。

「なぁ～んで竜宮なんだぁっ？黒幕のところ行くっつってたのにっ」
「知らないよぉ～輝矢が言うんだから仕方ないでしょ～」
首を傾げながら竜宮の廊下を歩く、無事にイヌの姿へと戻ったハチ。ハチの問いかけに、すぐ隣を飛ぶユキジが少し面倒臭そうな表情を見せながら答える。
「玉手箱ぉ～っ♪玉手箱ぉ～っ♪これで乙姫ちゃんとっ！グフフっ！」
浮かれきった笑みで、スキップをしながら、ハチたちの前を行く浦島。その両手には、しっかりと本物の玉手箱が握られていた。
「ええなぁ～浦島のヤツぅ～。あれで乙姫ちゃんとランデブゥやねんでぇっ」
「大して働いてもいないクセにねっ」

「まぁいいじゃねぇかっ！アイツはアイツなりに頑張って、玉手箱守ったんだしっ！」

不満げに浮かれた浦島を見るモンキとユキジを、説得するように笑って声をかけるハチ。

「そういや、輝矢はっ？」

ハチがふと思い出したように、後ろを振り返る。

「……。」

スキップで進む浦島、そのすぐ後ろを歩く三匹とは、かなり距離のあいた後方で、ゆっくりゆっくりと廊下を歩く輝矢。深く俯き、浮かない表情を見せていた。

――――ズキンっ……！――――

「……っ」

頭に走る痛み。青鬼との戦闘で初めて走った時から、徐々に痛みは増していく。もう時間がないことを、教えているかのように。

「もう……少し……」

輝矢が胸を押さえ、どこか願うように呟く。

「もう少し……だけ……」
「何がもう少しなんだぁっ？」
「……っ」

問い返してくるその声に、輝矢がハッとした表情となって顔を上げる。

「あっ……」
「……？」

輝矢が顔を上げると、輝矢のすぐ足元に、不思議そうに輝矢を見つめるハチの姿があった。

「輝矢？」

ハチがまっすぐに輝矢を見る。

「なぁ何っ……」
「そう……もう少し……」
「……？」

少し声のトーンを下げ、どこか怪しげに微笑む輝矢。

「もう少しだけっ、ハチに近づきたいなぁ～っと思いましてっ」
「ぎゃあああああああっっ！！十分近けぇぇぇぇっっ！！」

その場にしゃがみ込み、ハチのすぐ目の前まで顔を突き出してくる輝矢に、ハチが勢いよく怒鳴りあげる。

「ったくっ！ちゃんと一メートル離れっ……！」
「大丈夫……」
「えっ……？」

そっと俯いた輝矢の漏らした声に、ハチは思わず言葉を止める。

「大丈夫……ですから……」
「……っ」

輝矢はそう言うと、立ち上がり、ハチを抜かしてモンキやユキジたちのいる前方へと足を進めていく。

「輝……矢っ……？」

そんな輝矢の背中を振り返るハチ。

――――大丈夫……ですから……――――

「……。」

まるで、自分に言い聞かせているようだった。輝矢の背中を見つめ、ハチが少し目を細める。

「おぉ～いっ！何やっとんねんっ！イヌぅ～っ！」
「部屋入るよぉ～っ」

「うぇっ！？あっ！ちょっ！待ってくれよぉっ！」

開かれた扉の前で呼んでいるモンキとユキジの元へ、ハチが慌てて駆けていく。

――――バタンっ……！――――

大きな音を立てて、閉ざされる扉。竜宮城へとやってきた輝矢たち四人と浦島が通されたのは、この竜宮城の主人・乙姫の部屋であった。

「きゃあああああああっっ！！浦島様ぁぁぁ～～っっ！！」

不快なほど黄色い声とともに、入口の扉付近へと駆けてくる、赤い瞳の愛らしい少女。

「乙姫ちゃ～んっ！」

大事そうに玉手箱を抱いた浦島が、駆けてくる少女の元へと走っていく。

「会いたかったですわぁっ！浦島様と会えなかったこの八時間二十四分五十二秒、乙姫、ちょ～淋しかったぁ～っ！」

「俺も俺もぉ～っ！この八時間二十四分五十二秒、超超淋しかった

ぁ～っ！！」

ブリブリと体をくねらせる乙姫に、鼻の下をこれ以上ないくらい伸ばし、締まりのない笑みを浮かべる浦島。

「うざっ」

「ってか誰が計ってたんだよ、時間っ……」

「うぅ～っ！乙姫ちゃ～んっ！！」

そんな浦島と乙姫に、呆れきった表情を見せるユキジ・ハチと、悔しげにハンカチを噛んでいるモンキ。

「それでぇっ、浦島様っ……」

乙姫が少し、黄色い声のトーンを落ち着かせる。

「ん～っ？なぁにぃ～っ？」

緩みきった笑顔で問いかける浦島。

「乙姫の大切なものぉ～……はっ？」

「ああっ！」

少し遠慮がちに問いかける乙姫に対し、浦島が大きく頷いて、大事に抱えていた玉手箱を見せる。

「この通りっ！見つけてきたよぉ～っ！乙姫ちゃんの大切な玉手箱っ！！」

「まぁぁぁぁぁぁ～～～っっ！！」

浦島の差し出した玉手箱に、乙姫が目を輝かせる。

「ありがとうございますぅ～っ！！さすが浦島様っ！乙姫、すっごく嬉しいっ！！」

「でへへぇ～っ！乙姫ちゃんにそう言ってもらえて、俺、すっごく嬉しいぃ～っ！」

乙姫の笑顔に、浦島がさらに締まりのない顔になっていく。

「さぁっ！早くそれを乙姫にぃっ！」

「うんっ！」

両手を出した乙姫に、浦島がゆっくりと玉手箱を差し出す。

「……っ」

少し不気味に微笑む乙姫。その時。

――――パシィィっ！――――――

『……っ！』

乙姫に玉手箱を渡そうとした浦島の手首を、力強く掴んで止める

手。

「たっ竹取さんっ……？」

戸惑うように顔を横に向ける浦島。そう、浦島の手首を掴んだのは、鋭い表情を見せた輝矢の手であった。

「なっ……何ですのっ？」

一瞬、表情を曇らせた乙姫が、すぐさま笑顔となって輝矢の方を向く。

「せっかく浦島様が、乙姫の大切なものを渡してくれようとっ……」
「理由を話していただいたら、すぐにでもお渡ししますよ」
「理由っ……？」

輝矢の言葉に、乙姫が眉をひそめる。

「そう……大量のハズレ玉手箱を仕掛け、浦島の餌ツボに本物の玉手箱を隠した理由を、ね……」
「えっ……？」
『ええっ！！？』
「……っ」

思いがけない輝矢の言葉に、浦島は戸惑うように輝矢を見つめ、三匹は大きな声を出して驚き、乙姫は眉をぴくりと動かして、その

愛らしい笑みを消した。

「乙姫ちゃんがハズレ玉手箱を仕掛けってっ！なっななな何言ってっ……！」

「黙らされたくなければ、黙ってなさい」

「はいっ」

必死に抗議しようとした浦島であるが、輝矢の一言に、すぐさま頷いて両手で口を塞ぐ。

「フフフっ……」

「……っ」

小さな笑い声をこぼす乙姫に、輝矢がさらに瞳を鋭くして振り向く。

「乙姫が仕掛けたぁ～？何ですのぉ、それぇ～？ちょ～面白ぉ～いっ」

どこか小バカにしたような、軽い口調を放つ乙姫。しかしその声は、先ほどまでの飛び跳ねるような黄色さを失い、どちらかというと嘲笑うかのような、そんな口調であった。

「話すも何もぉ、乙姫がそぉ～んなくだらないことをする理由なんてぇっ」

「では特別に、理由も当てて差し上げましょうっ」

「……っ」

乙姫の言葉を遮り、不適に微笑む輝矢。その言葉に、微笑んでいた乙姫の表情が止まる。

「だっだっからぁっ、理由なんてっ……！」

「恐らくは、浦島を試すため」

「……っ」

「へっ？」

もう一度笑みを作ろうとした乙姫に、そう言い放つ輝矢。その言葉に、乙姫は表情を引きつり、口を押さえていた浦島が思わず声を漏らす。

「いえ、浦島を強くするため……と言った方が正しいでしょうかねぇ」

「浦島を……」

「強くするため？」

後方で聞いていた三匹が、少し混乱したように首を傾げる。

「そうでしょう？乙姫様……いえっ」

輝矢が乙姫を見つめ、少し声のトーンを落とす。

「お待ち下さいっ！それ以上はっ……！」

「いいわっ、ヒラメ」

「乙姫様っ！ですがっ……！」

必死に輝矢の言葉を遮ったヒラメを、今度は乙姫が遮る。乙姫に、何か訴えるような瞳を向けるヒラメ。

「この方は……もうすべてわかってらっしゃる……」
「乙姫様っ……」
「乙姫ぇ～っ……ちゃんっ？」

軽い口調から、丁寧な口調へと変わり、穏やかな笑みを浮かべて肩を落とす乙姫。そんな乙姫に、ヒラメは目を細め、口を押さえていた浦島は、どこか戸惑うように、いつもと違う乙姫を見つめた。

「さすがですね、竹取輝矢……」
『……っ？』

浦島と三匹が戸惑いの表情で見つめる中、乙姫がゆっくりとした動作で、髪をまとめ上げている紐を解いた。長い黒髪が、一気に垂れ落ちる。

「千鶴から聞いた通りでした……フフフっ……」

「へぇっ！？」
「んなっ……！？」
「のおぉっ！？」

一気に変わるその口調と、その笑みに、目玉が飛び出しそうなほどに目を開くハチ、モンキ、ユキジ。

「まっ……！」

浦島も大きく目を見開く。

「万亀いいいいいいいいいっっっ！！！？」

「フフフっ……」

天井を突き破りそうなほどに大きな声を出す浦島。垂れ落ちた長い髪は、少し不気味に表情を隠し、つぶらだった真っ赤な瞳は一気に怪しく輝く。浦島たちの前に立っているのは、美しい着物を纏ってはいるが、確かに万亀、そのものであった。万亀がいつものように不気味に微笑む。

「ハロウ……玉之介……フフフ……」

「……。」

小さく手を挙げる万亀に、固まる浦島。

「乙姫ちゃんが万亀でっ……万亀が乙姫ちゃんっ……？グフっ！」

かなり混乱した様子で呟いていた浦島が、急激に白目を剥いて、その場に倒れ込む。

「あっ、死んだ」

「まぁ無理もねぇっ……」

「やなぁっ……」

倒れた浦島を見て、しみじみと頷くハチとモンキ。

「フフフ……何故……おわかりに……？」

倒れた浦島の横にしゃがみ込みながら、万亀が輝矢に問いかける。

「ハズレ玉手箱を仕掛けたのは、規模などからして、乙姫ではないかと、元々思っていたんです」

万亀の問いかけに、輝矢が詰まることなく答える。

「でも、本物の玉手箱に空気石が入っていて、それが乙姫に重要なものだと知った時、こう思いました……」

輝矢が言葉を続ける。

「“いくら浦島を試すためとはいえ、そんな重要なものを手放すだろうか”と……」

「……。」

白目を剥いている浦島の頬に手を添えながら、万亀が輝矢の言葉を聞く。

「それで思いつきました。乙姫は、常に空気石に目が届くところ、つまり浦島の近くにいる者なのではないかと……」

「見事です……フフフっ……」

輝矢の答えを聞き終え、万亀が満足げに微笑む。

「じゃっじゃあ、あの時、空気石が浦島や俺らを助けたんもっ……！」

「ええ、万亀がやったのでしょう」

モンキの言葉に、あっさり頷く輝矢。

「空気石はこの海底都市、“亀国”の宝……国主である私には、一時でもそれを手放すことは許されないものですから……フフフ……」

万亀が浦島の持っていた玉手箱を手に取り、その蓋を開けて空気石を見る。

「だったら何でこんな危険なことをっ!?石がなくなる可能性だってあったんだぞっ!?」

「そうそうぅ～っ、一歩間違えば、青鬼に踏み潰されてたかもぉっ」

「そうなったら、そうなったです……フフフ……」

『ええぇ～っ!?それでいいのぉっ!?国主っ!!』

万亀の投げやりな言葉に、ハチたちが驚きながら突っ込む。

「すべては愛ゆえ……フフフっ……」

「愛のムチというやつですか?甘やかしたり、試したり、忙しい方ですねぇ」

「……玉之介はっ……」

「……っ？」

呆れた表情を見せていた輝矢が、何かを話し始めた万亀に、耳を傾ける。

「玉之介は昔から……何でもすぐ投げ出して、いつもやる気がなくて……何に対しても真剣になれない人でした……」

そう話しながら、万亀がそっと浦島の髪を撫でる。

「そんな時……乙姫の姿で玉之介と出会う機会がありまして……」

――――初めましてぇ～っ！乙姫っ、乙姫っていいますぅ～っ！――――

――――はっ！ははははははは初めましてっ！おっ俺っ！浦島でっすっ！――――

久々に見せた、輝く瞳。

――――万亀ぃぃ～っ！俺っ、今日も乙姫ちゃんに会いに行くわぁっ！――――

やっと見せた、自分の意志。

「玉之介があんまり乙姫に夢中になるもんですから……」

万亀が、穏やかに微笑む。

「これを利用してやらない手はないと思いまして……フフフっ……」

「うっわぁ～っ、冷めたぁ～っ」

「俺、涙ポイントか思て、ハンカチ用意してもたわぁ～」

やはり不気味に微笑む万亀に、一気に冷めた表情となり、肩を落とすモンキとユキジ。

第２７章　鯨国襲来　☆１（後書き）

文字数の関係で、中途半端なところで終わってます。
すみません。

第27章　鯨国襲来　☆2

「んっ……んん～っ……」

白目を剥いて倒れていた浦島が、やっと黒目を見せて、ゆっくりと起き上がる。

「おはよう……玉之介……フフフ……」

「まっ万亀ぃぃ～っ？いやっ、乙姫ちゃんっ？ううぅ～っ」

すぐ目の前にいる万亀を見て、浦島がまた混乱したように少し頭を抱える。

「玉之介っ……」

万亀が、混乱している浦島を、そっと呼ぶ。

「ありがとう……」

「へっ？」

礼を言って微笑む万亀に、浦島が顔を上げ、目を丸くして万亀を見る。

「万っ……」

「あの時……玉手箱を守ってくれて……」

――――乙姫ちゃんの大切なものっ……やっとっ……やっと見つけたんだっ……！――――

危険も顧みず、必死に玉手箱に手を伸ばしてくれた。

「とても……嬉しかった……」

「万亀っ」

いつもの不気味さのない、穏やかで、優しい笑みを浮かべる万亀に、浦島が少し目を細める。

「万亀ぃぃ～っ！じゃあもういっそ、今後は乙姫ちゃんの姿で、ずっと俺の傍にぃっ……！」

――――ボォォォォォォ～～～ンっ！――――

「ふぅっ……やはりカメの姿が一番、落ち着きますね……フフフ……」

「ううっ……」

浦島の願いを聞き届けることなく、あっさり亀化する万亀に、浦島は悲しげに涙をすすった。

「さて、めでたしめでたしということで、とっとと帰りましょうか」

「もう帰られるのですか……？」

三匹に帰ることを指示する輝矢に、万亀が少し目を丸くする。

「ええ。陸まで送ってもらえます？」

「もちろんお送りしますが……その前にヒラメのヒップホップダンスでも……」

「結構です」

万亀の誘いを、すっぱり断る輝矢。

「さっ、帰りますよっ」

「ええぇ～っ？ボク、眠いぃ～っ」

「俺も何か食わんと動けっ……」

「帰りますよ……？」

『はいっ』

輝矢の脅迫でしかない氷の笑みに、ユキジの眠気とモンキの空腹感が吹っ飛ぶ。

「……っ」

そんな輝矢の様子を見ながら、少し眉をひそめるハチ。

「残念ですね……それではヒラメ……竹取さんたちにお土産を……」

――――バァァァァァーーーンっ！――――

『……っ！』

その時、突如、乙姫というか万亀の部屋の天井が、崩れ落ちた。

「うえぇぇぇぇ～～～っ！！？」

「玉之介っ……！」

落ちてくる瓦礫に逃げ惑う浦島を、万亀が伏せさせ、庇うようにその上に乗る。

――――ボォォォォォ～～～ンっ！――――

同時に白い煙に包まれる三匹。

「“瞬花”っ！」

「如意棒っ！」

「“左翼・滅羽”っ！」

素早く人化した桜時、門貴、由雉が、それぞれの技で落ちてくる瓦礫を消し去る。

「“月器・三日月”っ」

輝矢がピアスを弾き、三日月を目覚めさせる。

「ほっ」

輝矢が三日月を振りきり、万亀と浦島の上に落ちようとしていた瓦礫を粉々に砕く。

「しっ死ぬかと思ったぁ～っ」

「助かりました……フフフっ……」

起き上がった万亀が、輝矢に不気味な笑みを向ける。

「一体、何がっ……」

眉をひそめた表情で、輝矢が三日月を下ろす。

「アッハッハっ」

『……っ？』

衝撃風の向こうから聞こえてくる笑い声に、輝矢や万亀たちが振り向く。明らかになっていく景色の中に、見えてくる、いくつかの人影。

「アッハッハっ」

『……っ』

崩れ落ちた瓦礫の上に立ち、輝矢たちを見下すようにして笑い声をあげているのは、少し巻いた感のある金髪に、鋭い青の瞳の、一人の青年。青年の背後に、同じような年頃の青年が、三人立っている。

「貴方がたは……“鯨国（げいこく）”のっ……」

「鯨国っ……？」

万亀の言葉に、眉をひそめる輝矢。

「コイツはしかと貰い受けたよぉ～っ？亀国の姫っ」

『あっ……！』

そう笑って金髪の青年が万亀たちに見せたのは、青年の右手にしっかりと掴まれた玉手箱であった。

「玉手箱っ……！」

倒れ込んでいた浦島が、勢いよく起き上がる。

「何のつもりです……？」

「言わなくてもわかるんじゃ～っ？」

険しい表情で問いかける万亀に、どこか試すような笑みを向ける青年。

「返してほしかったら、我ら鯨国に海中政権を譲りなぁっ」
「……っ」

脅しとも取れる青年の言葉に、万亀が眉をひそめる。

「答えを待ってるよぉっ！じゃあねんっ！」
「逃がすかっ……！」

背を向ける青年に、桜時がすかさず村雨丸を抜く。

「渦礼（かれい）っ」
「ああ」

青年がそう名前らしきものを呼ぶと、後ろにいた黒い短髪の青年が前へと出た。前へと出た黒髪の青年が、村雨丸を構えようとしている桜時へ、右手を向ける。

「“単渦（たんか）”……」

――――バァァァァァァーーーンっっ！！――――

黒髪の青年の右手から、小型の水の渦が放たれる。

「なっ……！」

驚いたように目を開く桜時。

「ハチっ！“水月”っ……！！」

渦の向けられた桜時に、輝矢が焦った様子で左手を構え、水の刃を放った。

――――パァァァァァァーーーンっっ！！――――

「うわっ！」

二つの水がぶつかり合い、部屋中に大量の水飛沫が飛び散る。至近距離で飛んでくる水に、思わず目を閉じ、その場で身を屈める桜時。

――――ズキンっ……！――――

「うっ……！」

頭に痛みが走り、輝矢が思わず三日月を地面に突く。

「輝矢んっ！あいつらっ……！」

「……っ」

門貴の声に、苦しげな表情の顔を上げる輝矢。激しい水飛沫が収まると、瓦礫の上に立っていたはずの青年たちの姿が、玉手箱とと

もになくなっていた。

「たっ玉手箱がぁ～っ……」

「……。」

情けない声を出す浦島の横で、万亀は厳しい表情を見せていた。

十分後。

「では海底都市っ……いえ、この亀国と、その鯨国というのは……」

「かつては海中政権を巡り争ったそうですが、亀国が政権を握ってからは、表舞台から姿を消しました」

輝矢の問いかけに答える、袴を纏った魚人・ヒラメ。ヒラメは、長椅子に座る輝矢たちにお茶を出している。先ほどの襲来により、乙姫の部屋が崩れたため、輝矢たちは別の部屋へと通され、先ほどの者たちの詳細についてを聞いていたのであった。

「しかし、十年前の鬼人が出現し始めた頃に、密かに動いているという噂が流れ出しまして……」

「鬼人出現により、亀国の安定が乱れたのを見計らって、政権を奪

おうという魂胆ですか……」
「恐らくは……」

お茶を配り終えたヒラメが、輝矢の言葉に浮かない表情を見せる。

「乙姫様が、万亀様として姿を変えられたのも、元は鯨国から身を隠すため……」
「今はすっかり気に入って、乙姫の姿でいる方が少ないですけどね……フフフ……」
「そんなぁ～っ！ここは乙姫ちゃんに戻っとこうよぉ～っ！万亀ぃぃ～っ！」

不気味に微笑む万亀に、浦島が真剣にお願いする。

「ってゆうか亀国ってぇ～君たちの両親、ナマコとメジロって千鶴、言ってなかったぁ？」
「祖父が亀人なんです……私はいわゆる隔世遺伝っ……フフフ……」

ユキジのちょっとした疑問に、不気味に答える万亀。

「ちなみに千鶴は……母方の祖父の隔世遺伝……フフフ……」
「あっ、そう……」

万亀から提供される情報に、興味なさそうに返事をするユキジ。

「でっ？先ほどの男は？」
「鯨国主・蒸田帆盾（むしたほたて）の息子・泡美（あわび）でしょう……一度、会ったことがあります……フフフ……」
「国主子息ですか……」

万亀の答えに、輝矢が少し気難しげな表情を見せる。

「でっでもどうすんだよっ？万亀っ！政権譲れぇ～とか言われちゃってさぁっ」

「……。」

浦島の問いかけに、万亀がそっと俯く。

「……譲る……しかないでしょうね……」

「えっ！？」

「……っ」

万亀の言葉に、浦島が大きく目を見開き、輝矢が少し眉をひそめる。

「そっそんなっ……！」

「空気石がなければ……私は膜を張り続けることができない……亀国に空気をもたらす膜も時期に消える……」

訴えるように見る浦島を遮り、深刻そうに話す万亀。

「そうなれば多くの民が死ぬ……それだけは……防がなければならない……」

万亀が唇を噛みしめる。

「例え……政権を失っても……」

「万亀っ……」
「乙姫様っ……」

無念そうに俯く万亀に、浦島が目を細め、ヒラメが少しそのギョロっとした瞳を潤ませる。

「ヒラメ……鯨国へ……」
「そうですね、鯨国まで案内してもらいましょうかっ」
「えっ……？」

自分の言葉に重なるようにして聞こえてくるその声に、ヒラメの方を向いていた万亀が、少し驚いたように振り返る。

「要はその鯨国っての奴らをぶっ飛ばしてぇ、玉手箱を取り返してこりゃいいんだろっ？」
「ボクたち、そういう破壊系の作業はぁ～箱探しより得意分野だよぉ？」
「おっしゃあああっ！！任しといてぇ～っ！！」
「皆さんっ……」

次々と声をかけ、万亀へ微笑みかけるハチ、モンキ、ユキジの三匹。そんな三匹の言葉に、万亀が思わず目を細める。

「……っ」

そしてゆっくりと輝矢の方を振り向く万亀。

「膜が消えてしまうまで時間がないのでしょう?早く案内して下さい」

偉そうなことを言いながらも、輝矢はそっと万亀に笑いかける。

「フフフっ……」

諦めの表情を見せていた万亀が、不気味な笑みを取り戻す。

「ヒラメっ、鯨国へ向かうわ……すぐに準備をっ……」

「はいっ!」

ヒラメは万亀の指示に頷くと、すぐさま部屋を出て行った。

「いってらっしゃ〜いっ!」

「貴方も行くのよ……玉之介……」

「えぇぇっ!!?」

「フフフ……」

こうして、輝矢たちは、鯨国へと向かうこととなった。

準備を整え、すぐに竜宮城を出た輝矢たちは、浦島とともに万亀の背に乗り、鯨国へと向かった。一時間も経たないうちに、海底都市を包む膜の終わり、つまり亀国の国境へと辿り着いた。

「ここが亀国と鯨国の国境……膜の向こう側はもう鯨国の領域です……フフフ……」

万亀の説明を聞きながら、輝矢たちが万亀の背から降りる。

「そっかぁ～鯨国行くには膜を出なきゃいけないんだぁ～」

「えっ!?じゃあ空気どうすんだよっ!?空気っ!!」

焦ったように声を出すハチ。海底都市に張られた膜が、空気をもたらしているのだから、この膜の外では、ハチたちは空気呼吸をすることができないのである。

「念力でどうにか……」

「できるかぁっ!!」

万亀の言葉に、ハチが勢いよく突っ込みを入れる。

「私は自分の呼吸だけは確保しますから」

「いっやぁ～んっ!輝矢んっ!見捨てんといてぇ～っ!!」

切り捨て宣言をする輝矢に、モンキが泣きつく。

「おいっ!どうにかしろよっ!万亀っ!」

「……。」

強く言い放つハチに、万亀が少し考え込むように俯く。

「……昔々、一人の青年が……とある海で……カメと出会いました……」
「時間がないのでしょう？」
また何か物語を話しだそうとする万亀に、輝矢が鋭い一言を放つ。
「……これはミニ空気石と言いまして……」
自分の中ではかなり物語を省略したのであろう万亀が、輝矢たちに小さな赤い石ころを差し出した。
「ミニ空気石……？」
「ええ……フフフ……空気石ほどの力はありませんが……これを持っていれば、鯨国でも呼吸は可能です……」
「へぇっ、便利なものですねぇ」
そんな会話をしながら、輝矢たちが一人ずつ、万亀からミニ空気石を受け取る。
「あっ……玉之介の分だけないわ……」
「ええぇぇっっ！！？俺ってば、一人で溺死コースっ！？」
「冗談よ……フフフっ……」
「何だ、冗談かぁ～っ！万亀ってば、オチャメさんっ！」
「お前ら、俺らより緊張感ないな……」
敵地を前に、時間も追い詰められているというのに、まったくいつもの通りの万亀と浦島に、横からハチが呆れたような視線を送っ

た。

「では行きますよっ」
『おうっ！』
「ええ……フフフっ……」

しかと頷き合って、輝矢たちは海底都市の膜を出て、鯨国へと足を踏み入れた。

――――鯨国。国主・蒸田帆盾の屋敷――――

「これが空気石とやらかぁ～」

真っ赤に光る原石を高々と掲げ、不適な笑みを浮かべている一人の男。金色の髪と髭に、少し濁って見える、細く鋭い青の瞳。頭には貝を模った王冠を被っている。ド派手な赤色のマントを纏ったこの男こそ、この鯨国の国主・蒸田帆盾であった。

「思っておったほど美しくないのぅ」

「我々が期待しすぎてしまったのですよぉ～父上っ」
「泡美っ」

そう軽く微笑んで、帆盾に声をかける青年。竜宮城で玉手箱を奪い去った、あの青年であった。帆盾の息子・鯨国主子息の蒸田泡美である。

「焦がれる時間が……あまりにも長かったですからっ……」
「フっ……それもそうだな」

泡美の言葉に微笑み、帆盾がそっと掲げていた手を下ろす。

「よくやった、泡美」

帆盾が改めて、泡美を称える。

「これで海中は我らのものも同然っ……」
「失礼いたしますっ！！」
「……っ」

帆盾の言葉を遮るようにして、兵士が一人、勢いよく部屋へと駆け込んできた。

「我が国領土内に、侵入者を確認っ！！亀国の者と思われますっ！！」
『……っ』

兵士の言葉に、帆盾と泡美の表情が同時に曇る。

「亀国の姫君っ……早々聞き分けは良くもないらしい……」

帆盾が不適に微笑む。

「泡美」

「えぇぇっ」

帆盾に名を呼ばれ、ソファーに座っていた泡美がすぐに立ち上がる。

「勝ち取って来ましょうっ、我らの海をっ……」

泡美は冷たく微笑み、帆盾に背を向け、歩き出していった。

第27章　鯨国襲来　☆3

鯨国とはいっても、そこにあるのは大きな屋敷一つであった。その屋敷も竜宮城ほどに巨大な建物であったが、広大な敷地をあり余らせている。

政権を亀国が握ってから、鯨国の民は皆、海底都市へと移住したそうだ。今、鯨国に住んでいるのは、国主とその家来のみ。

「あれが鯨国主・蒸田帆盾の屋敷です……フフフっ……」
「じゃあ、あそこに玉手箱が？」
「恐らく……フフフ……」

ハチの問いかけに、万亀が怪しく頷く。

「“恐らく”ではなく、“確か”なようですよ」
「えっ？」

輝矢の言葉に、ハチが顔を上げると、輝矢は鋭い瞳で前方を見つめていた。そんな輝矢につられるようにして、ハチも前方を見る。

「あっ！」
「アッハッハっ」

輝矢たちの前方、屋敷へと続く黒く巨大な門の前に立ち並んでいる、四人の青年。他の三人より一歩前に立ち、輝矢たちに含んだような笑みを向けてくるのは、先ほど、万亀から玉手箱を奪った男・泡美であった。

「蒸田泡美っ……」

万亀が表情を厳しくし、泡美の名を呟く。

「ようこそぉ～我が鯨国へぇ～？亀国の姫っ」

泡美が万亀に、少し頭を下げる。

「政権を譲ることを、わざわざ伝えに来てくれたのかなぁ～？」

「……っ」

泡美の言葉に、万亀が顔をしかめる。

「冗談っ。私たちは玉手箱を取り返し、かつアナタたちをぶっ飛ばしに来ただけですっ」

「私が言おうと思ったのに……」

「まぁいいじゃないですか」

少し残念そうに俯く万亀に、輝矢が呆れた表情を見せながら言う。

「そぉ～残念っ」

『……っ』

冷たく変わる泡美の笑みに、輝矢と万亀が振り向く。

「じゃあ無理やり権利書書いてもらうしかないかなぁ～っ？アッハッハっ」

『……。』

泡美の言葉に、輝矢と万亀は一気に鋭い表情となった。

「じゃっじゃあ俺はここでっ……！」
「フフフっ……どこへ行くの……？玉之介……」
「いやあああぁぁぁぁっ！！！」

逃げ去ろうとした浦島を、万亀が力強く掴み止める。必死に体を動かしながら、何とか逃げようとする、何とも情けない浦島。

「彼らは玉手箱を持っていないようですね」
「恐らくは国主・蒸田帆盾の元でしょう……フフフ……」
「あの屋敷の中ということですかっ……」

輝矢が前方の屋敷を見上げ、少し考え込むように首を捻る。

「相手は四人、丁度いいですね。私たちで抑えましょう」
「おうっ！」
「ガッテンっ！！」
「ええ～っ」

輝矢の指示にいつも通り、大きく頷くハチ・モンキと、不満げな声をあげるユキジ。

「というわけで、ここは私たちが引き受けますから、アナタは屋敷へ行って、玉手箱を取り返しなさい」

とりあえずユキジの不満げな返事は無視して、輝矢が次は万亀に

言い放つ。

「あっ、そのバカは連れていくように」
「またバカって言われたぁぁっ！！万亀ぃぃ～っ！」
「輝矢さん……」

泣きつく浦島を無視して、万亀が輝矢の方を見る。

「大丈夫……ですか……？」

どこか不安げに問いかける万亀。

「誰に向かって言ってるんですっ？」
「……っ」

自信満々に微笑む輝矢に、万亀の表情から不安の色は消えた。

「フフフ……了解しました……玉之介……」
「うわあああっ！！」

不気味に微笑んで頷いた万亀が、勢いよく浦島を引っ張り、無理やり甲羅の上へと乗せる。

「行くわよ……玉之介……」
「いっいっやぁ～俺っ、そろそろ門限がぁ～っ……」
「“高速回転カメカメ”っ……」
「ぎゃあああああああああああっっっ！！！」

万亀が高速で回転し、その円心力を使って、凄まじいスピードで門の方へと進んでいく。甲羅の上で勢いよく回転し、振り落とされ

ないよう必死に万亀に掴まりながらも、悲鳴をあげている浦島。

「入れるかよぉっ！」
「……っ」

突っ込んでくる万亀に、泡美の後ろにいる青年たちがそれぞれ身構える。

「“瞬花っ……終刀”っ……！」
「如意棒・第二の舞っ……“浄”っ！！」
「“右翼・裂羽”っ！」

『……っ！』

しかし、身構えた青年たちの元に、桃色の一閃と、無数の風の陣と、青い羽根が飛んでくる。

――――バァァァァァーーーンっ！！――――

『……っ』

飛んできた三つの力を、泡美と他の青年たちが、高々と飛び上がって何とか避ける。

「ぎゃあああああああああっっっ！！！」
「あっ……！」

しかし泡美たちが避けている間に、万亀と浦島は門を抜け、屋敷への道を突き進んでいった。浦島の叫び声が、徐々に遠ざかっていく。

「チっ！入られたっ！」
「追うか？泡美」
「いやぁっ」

青年たちの一人の問いかけに、泡美が軽く手を挙げて首を横に振る。

「追うっちゃ追うけどぉ、まずは邪魔者を排除してから……かなぁっ？アハハっ」
「……。」

試すような笑みで、輝矢の方を振り向く泡美。目を細めた輝矢の両側には、人化した桜時・門貴・由雉の三人が、それぞれに武器を構えて立っていた。

「障害は多い方がっ、勝ち取った後の喜びに繋がるし……ねぇっ？」

一方、高速回転カメカメで、屋敷へと突っ込み中の万亀と浦島。

「うわああっ！！」
「うおおおうっ！！」
「ぎゃあああああああああああああっ！！」

そのスピードは、見張りの兵をまったく寄せ付けず、侵入を防ごうとした兵は、悲鳴をあげて次々と吹き飛ばされていった。しかしどの兵よりも、乗っている浦島の悲鳴が一番大きかった。
勢いそのままに、万亀が玄関の扉をブチ破り、屋敷内へとあっさりと侵入する。

「ふぅ……着いた……」
「ううっ……死んだっ……」

屋敷に入り、回転を止めた万亀の甲羅の上で、軽く死にかけている浦島。

「……？」

死にかけている浦島をそのままに、玄関からゆっくりと屋敷を見回す万亀。屋敷の中は薄暗く、外と違って見張りの一人もいない。とても静かで、どこか不気味な空間であった。

「あまりいい予感はしないわね……」

その屋敷の様子に、万亀が少し眉をひそめる。

――――ボォォォォォ～～～ンっ！――――

「うおっ」

急に白い煙に包まれる万亀に、浦島が甲羅の上から転げ落ちる。

「乙姫ちゃんっ！？」

「フフフ……」

「じゃっ、ないっ……」

期待を込めて振り返る浦島であったが、晴れた煙の向こうから現れたのは、妖怪を見間違いそうな不気味な女であった。浦島ががっくりと肩を落とす。

「フフフ……玉之介はここにいて……」

「えっ……？」

万亀の思いがけない言葉に、目を丸くする浦島。

「戦いになると思うし、危険だから……フフフ……」

「万亀……」

不気味に微笑んで見せる万亀に、浦島が少し目を細める。

「じゃあ……」

「ダメだっ！」

「えっ……？」

一人で行こうと背を向けようとした万亀の手を、浦島が力強く掴む。

「ダメだっ！一人になんて出来ないっ！！」

万亀にまっすぐな瞳を向ける浦島。

「俺をっ！！」

「そうね……じゃあ一緒に行きましょうか……フフフっ……」

「うん～っ！」

万亀と浦島は、二人並んで、薄暗い屋敷の奥へと進んでいった。

再び戻って、屋敷の外。

「無事、屋敷の中に入れたみたいだねぇ～」
「浦島は無事じゃねぇーだろうけどなっ……」
屋敷の方を眺めながら、言葉を交わす桜時と由雉。
「んでぇ～？誰がどいつの相手するぅ～？」
「そんなもの適当に決めればっ……」
「“単渦”っ」
「……っ！」
門貴の問いかけに答えようとしていた輝矢に、水の渦が飛んでくる。
――――バァァァァァァァーーーンっ！――――
「輝矢っ……！」
飛び散る水飛沫に、輝矢の名を呼んで振り返る桜時。
「……十六夜っ……」
水飛沫が止むと、そこには十六夜を構えた輝矢の姿があった。素早く月器を目覚めさせ、十六夜を構えて渦を防いだようである。
「……。」
「女、貴様、水使いだったな……」

輝矢が渦の飛んできた方を振り返ると、そこには輝矢に右手を向けた、黒髪の青年がいた。先ほど竜宮城でも渦の攻撃を見せた、渦礼と呼ばれていた青年である。

「来いっ」

そう言い放ち、渦礼がどこかへと歩きだしていく。

「随分、手荒な指名ですねっ……」

渦礼の背中を見つめながら、どこか疲れたように肩を落とす輝矢。

「というわけで、指名が入ったので行ってきます。ハチ、嫉妬ですか？」

「まったくしてねぇよっ！！」

「大丈夫、私は神に誓ってハチ一筋です」

「だからしてねぇーってっ！！」

自分の都合のいいように話を展開させていく輝矢に、桜時が突っ込みを入れまくる。

「では、行ってきますね」

三人に軽く手を挙げ、輝矢が渦礼の後を追うようにして、その場を去っていく。

「……。」

遠ざかっていく輝矢の背中を、まっすぐに見つめる桜時。

――――大丈夫……ですから……――――

桜時の頭に過ぎるのは、竜宮城での、どこか不安げで弱々しかったあの輝矢。

「輝矢……」

桜時が、心配そうに輝矢の名を呼ぶ。

「そんなに輝矢んと離れたくないなら、追いかけてってええでぇ～っ？」

「そうそうぅ～ボクら、頑張って三人相手するからぁ～っ」

「うぇっ！？」

背後から聞こえてくる、からかうような2つの声に、桜時が一気に顔を赤く染めて振り返る。

「ちっ違げぇーよっ！！」

『アハハァァ～っ』

「ったくっ！」

からかい笑いを止めない門貴と由雉を少し睨んで、桜時が村雨丸を構え直しながら、泡美たちの方を見る。

「さぁっ！こっちもとっとと始めっ……！」
「見ったぁ～っ？今のっ！顔なんて赤くしちゃって、超かぁ～わいいぃ～っ！」
「へっ……？」

他の二人の青年相手に、先ほどとは打って変わった“お姉口調”でキャピキャピと話している泡美に、村雨丸を構えた桜時が、思わず目を点にする。

「程よくついた筋肉っ……整ったりりしい顔立ちっ……ピッチピチのお肌っ……もう超、俺好みぃ～っ！」
「へぇっ！？」

何やら熱い視線を送ってくる泡美に、桜時の表情が一気に青ざめる。

「僕的にはあのおサルさんかなぁっ。何かやんちゃな感じでいいよねっ」
「うぇっ？」

桜時にうっとりしている泡美の横で、紺色の髪に細い瞳の青年が、門貴の方を見てそっと笑う。その微笑みに、顔を引きつる門貴。

「なっ何かっ……」
「嫌な予感っ……」
「もしかしてぇ～っ……」

青ざめる二人の横で、何か思いついたような顔を見せる由雉。

「鯨国だけにっ……ゲイっとかっ？」

『正解ぃぃ～っ♪』

『ぞおおおぉぉぉぉぉぉ～～～っっ！！』

由雉の言葉に、笑顔で頷く泡美ともう一人の青年。その答えに、桜時と門貴が背筋を震え上がらせる。

「おっおいっ！門貴っ！お前行けっ！お前、ヘンゼルであいうの慣れてっだろっ！？」

「アホかぁっ！何が悲しくてあんなんばっか相手せなあかんねんっ！お前行けっ！桜時っ！これも人生経験やっ！！」

「んな人生経験、必要ねぇーよっ！！」

あれこれとモメながら、押し合いへし合いをする桜時と門貴。

「さぁ～っ！俺と遊ぼうぅ～っ！」

「ぎゃあああああああああああっっ！！」

「僕を楽しませてよっ！おサルさんっ！」

「のおおおおおおおおぉぉぉぉぉうっ！！」

泡美と青年に追いかけられ、物凄い勢いで左右に分かれて逃げていく桜時と門貴。

「あぁ～あっ……」

勢いよく遠ざかっていく桜時・泡美と、門貴・青年の四人。結局、門の前には、由雉と、青年のうちの最後の一人、坊主頭の体格のいい青年だけが残る。

「ぬぅっ……どうやら私の相手は主のようだなっ」

「そうみたいだねぇ～」

ゴツい見た目とは少しギャップのある、丁寧なしゃべり方の青年の言葉に、由雉がどこかやる気なさそうに答える。

「私の名は岩士(いわし)っ」

両手で武道家のような構えを取りながら、自分の名を明かす岩士。

「無骨な顔ではあるが、いたって普通の女の子好きだ。安心しろっ」

「そりゃどうもっ……」

岩士の自己紹介に、由雉が呆れきった表情を見せる。

「ちなみに好きな女の子のタイプはっ……」

「こっちも忙しいからさぁっ」

岩士が好きな女の子のタイプを話そうとする中、由雉が素早く青

い羽根を取り出す。

「くだらない話には付き合ってらんないんだよねっ……！“右翼・裂羽”っ！」

青い羽根を、岩士へと投げる由雉。

「清楚で可憐でかつっ……んっ？」

好みを話し続けていた岩士に、容赦なく裂羽が直撃する。

――――バァァァァァァーーーーンっっ！！――――

岩士の周囲に巻き起こる、衝激風。

「はぁっ」

衝撃風により舞い上がっている砂煙を眺めながら、疲れたように肩を落とす由雉。

「あっけな……」

そう呟くと、由雉は手に持っていた色羽を懐へとしまい、万亀と浦島が入っていった屋敷の方に目をやる。

「あっちに助太刀に行った方がいいかなぁ～？」
「……。」
「……っ！」」

屋敷へと足を踏み出そうとした由雉が、感じる気配にふと足を止め、振り向く。

「ぬぅ……」

晴れていく砂煙の中に、立っている人影。

「なっ……！？」

砂煙が晴れ、そこに立つ者の姿をしっかりと確認すると、由雉は大きく目を見開いた。

「私の名は岩士……」

そこに立つのは、岩士。

「ちなみに私の能力は……“岩力”っ！！」

皮膚を頑丈な岩に変化させ、まったくの無傷で立っている岩士であった。

「……っ」

その岩士の姿に、由雉の表情が曇った。

第２７章　鯨国襲来　☆４

「のおおおおおおおおおおうっっ！！」
「待ってよっ！おサルさんっ！」

一方、紺色髪に細目の、どうやらゲイらしい青年に追いかけられている門貴は、全速力で逃げているうちに、いつの間にか屋敷の横側まで来てしまっていた。

「だあああぁぁ～～っ！！もうっ！！逃げとったって何にもならへんっ！！」

門貴が意を決した様子で立ち止まり、追いかけてくる青年の方を振り返る。

「僕の愛に応えてくれる気になったのかいっ……？おサルさんっ」

青年も立ち止まり、門貴の方を見て微笑む。

「追いかけられるんはヘンゼルで十分っ！」

門貴が真剣な表情となって、如意棒を構える。

「俺はっ……追いかける方が性に合っとんねんっ！！第一の舞っ！“空”っ！！」

門貴が、青年に、一陣の風を放つ。

「……っ」

向かってくる風を、避けようともせず、余裕そうに微笑んで、風に向かって右手を突き出す青年。

「……っ？」

その青年の様子に、門貴が眉をひそめる。

「……“凪（なぎ）”っ」

――――パァァァァァァーーーンっ！――――

「なっ……！！」

青年が何かを呟いた瞬間、門貴の風が、どこへともなく突然と消え去る。突如、消えた風に、驚いた様子で大きく目を見開く門貴。

「風がっ……消えたっ……？」

「驚いた……？」

「……っ」

茫然としていた門貴が、青年の声にハッとなって顔を上げる。

「お前っ！一体、何をっ……！」

「お前じゃなくて、宇凪（うなぎ）だよっ、僕の名前っ」

「ウナギっ……？」

「そうっ」

門貴に名を呼ばれ、宇凪が満足げに微笑む。

「そして、僕の力は“凪力”……」

満足げな微笑みを、どこか怪しげな微笑みへと変える宇凪。

「すべての風を無力にする力さっ」

「何っ！？」

宇凪の言葉に、門貴は衝撃を走らせる。

「風使いだなんて……」

宇凪がゆっくりと門貴を指差す。

「ホント、僕好みだよっ……おサルさんっ！」

「クっ……！」

細い瞳を大きく開く宇凪に、門貴は厳しい表情を見せながら、再

び如意棒を構えた。

「ぎゃあああああああああっっ！！」

こちらも、泡美から全速力で逃げている桜時。こちらはすでに屋敷の裏側まで走ってきてしまっていた。

「ぎゃあああああっ……！！って、あれっ？」

桜時が追いかけてくる足音が聞こえないことに気づき、ふと足を止めて振り返る。

「……。」

振り返って後ろを見ると、そこに泡美の姿はなかった。

「逃げきったのか……？それとも他に好みの男でも見つけたか……」

眉間に皺を寄せ、首を捻る桜時。

「まぁとにかく助かっ……！」

――――ザッパァァァァァーーーンっ！！――――

「へっ……？」

近くで聞こえる、大きな水の打つ音に、桜時が少し引きつった表情で振り返る。

「……。」

振り返った先にいたのは、体長二メートルはくだらない、何とも大きなクジラ。そのクジラのキョロっとした大きな瞳と、目が合う。

「ぎゃあああああああああああっっっ！！！」

目が合った瞬間に、頭を抱えて悲鳴をあげる桜時。

「くぅぅぅぅぅぅぅぅ～～～っ……」

「あっ……？」

唸るような声を出すクジラに、悲鳴をあげていた桜時が不審がるように首を傾げる。

「何っ……」
「じらぁぁぁっっ！！」
その巨大な尾を、クジラが桜時へ向けて勢いよく振り下ろす。
「何いいいいいいいっっっ！！？」
振り下ろされる尾に、思わず叫ぶ桜時であったが、その巨大さは、もうどうすることもできない。
「だあああああああああああああっっっ！！！」
――――バァァァァァァァァァーーーーンっ！！――――
「昔々あるところに……人魚のお姫様がいました……」
「んっ……んんっ……」

全身に走る痛みを堪えながら、どこからともなく聞こえてくる話声に、桜時がゆっくりと目を覚ます。

「ある日、人魚姫は……海で溺れていた王子様を助けました……」

「あっ……？」

妙に至近距離から聞こえてくる話声に、桜時がぼんやりしていた頭を、無理やり起こして、視界をはっきりとさせる。

「目覚めた王子様に……人魚姫は恋をしてしまいます……」

「……。」

目の覚めた桜時の目の前にいるのは、うっとりとした表情で、何やら物語を話している泡美。倒れた桜時は、泡美に膝枕をされていた。桜時の表情が徐々に引きつっていく。

「そして王子様もっ……自分を助けた人魚に一目で恋にっ……」

「落ちるかぁぁぁぁっっ！！！」

「あぁぁ～っ」

桜時が勢いよく立ちあがり、泡美の話す物語を強く否定する。

「だいったい誰が人魚だっ！！お前、クジラだろっ！？」

「やっだぁ～？バレてたぁ～っ？」

桜時の指摘に、悪戯っぽい笑みを浮かべる泡美。

「海で溺れていた王子をって、元はお前が攻撃してきたんだろうがっ！！」
「だってぇ～そうでもしないと王子様、溺れないじゃなぁ～いっ？」
「溺れさせられてもいねぇーよっ！！全身、打ち身なだけだっ！！」
どこか不満げな表情で話す泡美に、桜時が間髪入れずに突っ込みを入れていく。

「ああぁ～もうっ！相手してられっかっ！！」
桜時が村雨丸を構える。

「こんな奴、とっとと倒して万亀たちの加勢にっ……！」
「万亀っ……？」
「……っ？」
桜時の口から万亀の名が出た途端に、泡美が顔色を変える。声のトーンを落とし、深く俯きながら立ち上がる泡美に、桜時が眉をひそめる。

「俺の目の前でっ……他の女の名前を口にしたなっ……？」
「はっ？」
泡美の言葉に、桜時が大きく口を開き、顔をしかめる。
「何をっ……」
「俺の目の前でっ……他の女の名前を口にしたなぁぁぁぁっっっ

！！！」

――――バァァァァァァァァーーーンっ！！――――

「うえっ……！？」

泡美が顔を上げ、思いきり叫んだ途端に、泡美の全身から強い何かが噴き出したようで、周囲に衝撃が走り、桜時が戸惑いながら少し身を屈める。

「“泡沫（うたかた）”っ……！！」

泡美が両手を桜時へと向け、シャボン玉のような無数の泡を、桜時に放つ。

「クっ……！」

桜時が表情をしかめ、泡を避けるように横に飛ぶ。

――――バァァァァァァァァーーーンっ！！――――

「……っ」

桜時の避けた泡沫が、屋敷を囲む塀を直撃した。泡沫の直撃した

塀は、粉々に崩れ去っており、その力の強さを表していた。桜時が少し表情を曇らせる。

「鯨国主子息・蒸田泡美っ……」

「……っ？」

名を名乗る泡美に、桜時が少し戸惑うように振り向きながら、ゆっくりと立ち上がる。

「その能力はぁっ……“泡力”っ」

「泡っ……」

「さぁっ、俺の王子様ぁ～っ！」

泡美が高々と両手を掲げる。

「ボっロボロにして、無理やり俺のお部屋に飾ってあげるよぉ～っ！！アッハッハァ～っ！！」

「えっらい物騒な人魚姫だなっ……！」

立ち上がった桜時が、笑う泡美に村雨丸を構える。

「“泡沫”っ……！！」

「“瞬花っ……終刀”っ……！！」

桜時と泡美の、激突が始まる。

その頃、薄暗い屋敷内を進む万亀・浦島の二人。

「こっ怖いなぁ～っ……暗いしっ……」

人化した万亀の両肩を掴み、ぴったりと後ろにくっつくようにして歩く浦島は、薄暗い廊下を見回しながら、不安げな表情で呟く。

「何か出そうだなぁ～っ……なぁ～万亀ぃぃ～っ」

「昔々……ある青年が……不気味な屋敷で……女と出会いました……」

「へっ？」

助けを求めるように万亀の名を呼ぶ浦島であったが、すぐ前を歩く万亀から聞こえてくるのは、前にも聞いたことがあるような、何かの話。

「青年は……女に連れられるままに……その不気味な屋敷の奥へ……」

「まっ万亀っ……？」

浦島が戸惑うように万亀の名を呼ぶ。

「その時、ふと……女が足を止めました……」

「へっ……？」

話の通りに足を止める万亀に、浦島が目を丸くする。

「まっ万亀、どうしっ……」
「青年は女に問いかけます……“どうかしたのか”……と……」
浦島が問いかけようとした、まさにその通りの展開に、進んでいく話。
「“ええ”……と言って頷き……女がゆっくりと振り返ると……」
万亀が話を続けながら、ゆっくりと浦島の方を振り返る。
「女の顔は……」
振り返った万亀が、顔を隠すように垂れ落ちている前髪を掻き上げる。
「のっぺらぼうっ……」
「……っ！！」
髪を掻き上げた万亀の顔は、まさにのっぺらぼう。浦島の顔が、一気に青ざめる。
「ぎゃあああああああああああああああっっっ！！！」
不気味な屋敷に、響く浦島の悲鳴。

「どう……？驚いた……？玉之介……」

そう言いながら、万亀がのっぺらぼうのお面をはずし、その不気味な微笑みを現す。

「ぐっぐぷっ……ぷっ……」

「あれ……？気絶……？フフフっ……」

白目を剥いて倒れている浦島を見て、万亀はさらに不気味に微笑んだ。

――――ギィィィっ……――――

「……っ？」

その時、二人の歩いてきた廊下の先にある扉が、人の気配もないのに自動的にゆっくりと開く。扉の開く不気味な音に、万亀が眉をひそめてゆっくりと振り返る。

「あれは……」

扉からこぼれる光を見て、万亀が倒れている浦島の足を引っ張りながら、廊下を進み、扉の先へと足を進めていく。

「……。」

白目を剥いたままの浦島とともに、万亀がゆっくりと扉の向こうへ、足を踏み入れた。

「これはっ……」

そこに広がっていたのは、高い天井に、何とも巨大な部屋であった。壁も天井もすべて透明で、外の海がよく見える。部屋の中にいるのに、まるで海の中にいるような、そんな感覚を覚えた。

「よく来たなぁ……」

「……っ」

部屋の奥から聞こえてくる声に、天井を見上げていた万亀が視線を落とす。部屋の最奥、大きな玉座に腰をかけた、一人の男。

「亀国の姫よっ……」

「蒸田……帆盾っ……」

それは、鯨国主・蒸田帆盾であった。帆盾は万亀を見て、試すように笑う。

「歓迎しよう……」

「あまり歓迎されているようには……見えませんけど……フフフっ……」

右手を挙げる帆盾に、万亀は不気味に微笑んで見せる。

「見たまえよ、亀国の姫……」

「……っ」

そう言って帆盾が懐から出し、万亀に見せたのは、赤く光る原石であった。

「空気石っ……」

空気石を見た万亀が、少し顔をしかめる。

「こんなちっぽけなもののために、我々が薄暗い海を生きなければならなくなったと思うと……実に心苦しい……」

「……。」

首を横に振りながら微笑む帆盾を、万亀がまっすぐに見つめる。

「空気石は……海を生きる人々、皆を守るもの……」

万亀が纏っていた羽衣を取り去り、右手に持つ。

「その価値がわからぬ者に……海を統べることなど出来はしませんよ……フフフっ……」

――――パァァァァンっ！――――

羽衣は、万亀が一振りさせると、緑色のムチへと姿を変えた。

「空気石……返していただきます……フフフ……」
「さぁてっ……できるかのぅ……？」
「ぐっぐぷぅ～っ……」

浦島が白目を剥いたままの中、万亀と帆盾の戦いが始まろうとしていた。

またまた屋敷の外。渦礼に指名された輝矢は、先を歩く渦礼の後を大人しくついていき、国境からも屋敷からもかなり離れた、何もない海底地帯へと来ていた。

「ここまで来れば……泡美のバカたちに戦いを邪魔されることもない……」

渦礼が立ち止まり、輝矢の方を振り向く。

「さぁ……始めるか……」

「私が言うのも何ですけど、マイペースですよねぇ」

手荒に輝矢を指名し、泡美たちの輪を離れて移動をして、自分のタイミングで戦いを始めようとしている渦礼に、輝矢が少し呆れた表情を見せる。

「俺の名は渦礼……」

「私の話、聞いてます？」

「もうわかっていると思うが」

輝矢の話を聞く素振りはまったく見せず、渦礼が輝矢へ右手を向ける。

「“単渦”っ」

「……っ！」

渦礼の右手から、水の渦が放たれた。

「“十六夜”っ」

――――パァァァァァァーーーーンっ！！――――

輝矢が十六夜を構え、渦を防ぐ。十六夜に当たり、周囲に捲き散

る水飛沫。

「俺の力は……“渦力”……」
「……っ」

渦礼の言葉に、輝矢が十六夜を下ろしながら、少し眉をひそめる。

「貴様の力は水力だろう……？興味がある。見せてみろ」
「……。」

その要求に、少し厳しい表情を見せる輝矢。

「……誰がっ」
「……っ？」

そっと微笑んだ輝矢に、渦礼が眉をひそめる。

「アナタなど、水力を使うまでもなっ……」
「“双渦”っ」
「……っ！」

余裕の笑みで話そうとした輝矢の元へ、今度は二つの渦が、互いに交差するようにして、まっすぐに輝矢へと向かってきた。

「いっ十六夜っ……！」

少し焦った様子で、渦に十六夜を突き出す輝矢。十六夜が、二つの渦を受けとめる。

「ううっ……！」

しかし、一つの時は砕けた渦も、二つになって力も倍となり、輝矢の構えた十六夜が徐々に押され始めた。後退していく己の足に、輝矢が少し苦しげな表情を見せる。

「うっ……うぅっ！あっ……！」

十六夜を弾いて、輝矢へと向かってくる二つの渦。

「クっ……！“水月”っ！！」

輝矢が左手を突き出し、向ってくる渦へ、無数の水の刃を放った。

――――パァァァァァァァーーーーンっ！！――――

二つの力がぶつかり合い、またしても激しい水飛沫が辺りに飛び散る。

「ハァっ……ハァっ……」

――――ズキンっ……！――――

「ううっ……！！」

肩で息をしていた輝矢に走る、先ほどよりも強い痛み。輝矢が苦しげに自分の胸を掴み、少し身を屈める。

「水の刃……」

「……っ」

渦礼の声に、輝矢が身を屈めたまま、顔だけを上げる。

「やはり、俺や泡美の能力とは違うみたいだな……純粋に水を操る力……」

「ハァっ……ハァっ……」

胸を押さえながら、冷静に分析する渦礼を、鋭い瞳で見つめる輝矢。

「もっと見せてみろ……女……」

「私が言うのも何ですけどっ……マイペースですねぇっ……」

輝矢が乱れた息のまま、先ほどと同じ言葉を呟き、少し笑みを浮かべる。しかしすぐに笑みは消え、まったく余裕のない、苦しげな、輝矢らしからぬ表情へと変わっていく。

「まだっ……」

ぐっと、胸を掴む手に力を込める輝矢。

「まだっ……出て来ないで下さいよっ……」

輝矢が真剣な表情で言う。

「もう少し……もう少しだけっ……」

どこか祈るように輝矢が呟く中、輝矢と渦礼の二人の戦いが、始まろうとしていた。

第２７章　鯨国襲来　☆４（後書き）

２８章へ続きます。

第２８章　暴走　★１（前書き）

２８章です。

第２８章　暴走　★１

――――――・・・・・・・

「トロトロ歩いてっからこういう目に遭うんだよぉっ！！このカメがぁっ！」

「うっ……ううっ……」

「おいっ！！お前らっ！！」

「んっ……？」

「やめろっ！！可哀想だろうがっ！！」

・・・・・・――――――

「んっ……んんっ……」

長い夢を見ていたような、そんな気持ちで、浦島がゆっくりと目を覚ました。

「おっ俺っ……」

浦島が戸惑いながら、少し頭を重そうにして起き上がる。

「目が覚めた……？玉之介……」

「万亀っ？ういっ……！？」

「フフフっ……」

万亀の声に振り返った浦島の目の前には、長い黒髪の、のっぺらぼう女。

「ふんぎゃぼおおおおおおぉぉぉうっっ！！！」

「なんちゃって……」

泣き叫ぶ浦島の前で、万亀がゆっくりとのっぺらぼうのお面を取る。

「まっ万亀ぃぃっ！！？」

やっとのっぺらぼうが万亀だったことに気づき、泣き叫ぶのをやめる浦島。

「もう脅かすなよなぁ～っ！万亀ぃぃ～っ！オチャメすぎだぜぇ～っ！」

「フフフ……ごめん……玉之介……」

気の抜けた様子で肩をがっくりと落とす浦島に、万亀が不気味な

微笑みを向ける。

「あっ、そういや玉手箱っ！空気石はっ…！？」

思い出したように真剣な表情となって、万亀へと問いかける浦島。

「それはまだ……」

万亀が少し声のトーンを落とし、ゆっくりと振り向く。

「少し……苦戦をしてしまっていてね……」

「なっ……！！」

浦島も万亀が振り向いた先へと視線を移すと、その光景に驚愕し、大きく目を見開いた。何とも巨大な帆盾の部屋だというのに、それを埋め尽くすほどの兵が立ち並んでいる。二人の周囲には、万亀が倒したのであろう多くの兵が倒れているが、それでも十分の一にも満たない数だ。

「こっこれはっ……」

「おやぁっ？お連れクンがお目覚めかのぅ？」

「……っ」

部屋に響く声に、浦島が兵士たちの向こう、部屋の最奥にある玉座を見る。

「空気石っ……！」

玉座の上にいるのは、空気石を持った、怪しい笑みの帆盾。

「あれがっ……鯨国主って奴かっ」

「そうよ……」

浦島の問いかけに、万亀が少し厳しい表情で頷く。

「おいっ！てめぇっ……！」

「玉之介っ……？」

帆盾を力強く指差し、勢いよく立ちあがる浦島を、万亀が少し戸惑うように見上げる。

「きったねぇーぞっ！！たった二人相手に何だぁっ！？この兵の数うっ！！」

――――カチャっ……――――

「ぎゃあああああああああっっ！！すんませぇ～んっ！！」

勇ましく叫んでみた浦島であったが、近くの兵たちが剣を構えた途端、深く腰を折って謝り、素早く万亀の後ろへと身を隠す。

「玉之介……ダサい……」

後ろで震えている浦島に、万亀が少し呆れた表情を見せる。

「汚いっ？アッハッハっ！其方の連れは面白いことを言うのぉ。亀国の姫よっ」

『……っ』

帆盾の言葉に、同時に振り向く万亀と浦島。

「我々はどんな汚いことでもするぞぉ？この海を手に入れられるというならなぁっ」

「そっそうですよねぇ～っ」

「……。」

帆盾の不敵な笑みに、愛想笑いで頷く浦島と、鋭い表情を見せる万亀。

「膜が薄くなってきておるなぁっ……」

「えっ？」

少し横を向いて、そう呟く帆盾。その言葉に、浦島は少し焦った様子で横を向く。透けた壁から見える海底都市。確かに海底都市を包むその膜は、いつもよりも薄くなっているように見えた。

「もう左程、時間はないのではないかぁ？亀国の姫よっ……」

「……っ」

再び前を向いた帆盾は、万亀に試すような笑みを向ける。

「千を超える民の命か、この海の政権か……さぁっ、どちらを取る？」

空気石を持ち上げ、万亀を追い詰めていく帆盾。

「まっ万亀っ……！」

海底都市にはヒラメたちや、浦島の両親だっている。膜がなくなればどうなるのか、二人には考えたくもないことであった。浦島が不安げに万亀を見る。

「フフフ……大丈夫よ……玉之介……」

不安げな顔を見せる浦島に、万亀はそっと微笑みを向けた。

「この海も空気石も……あんな奴に渡したりはしないわ……フフフ……」

「万亀っ……」

「玉之介……」

万亀の左手が、浦島の頬に触れる。

「笑っていて……貴方だけは“大丈夫だ”と……笑っていて……」

「万亀っ……」

万亀の笑みは、隠されてはいたが、不安の色を持っていた。浦島だけではない。万亀も不安なのだ。万亀の方が不安なのだ。万亀がそっと告げたその願いに、浦島は瞳を閉じ、少しだけ俯いた。

「……おうっ！」

「……っ」

顔を上げた浦島が、万亀に精一杯の笑顔を向けた。浦島の笑顔に、万亀もさらに微笑む。

「ありがとう……玉之介……」

「あっ」

離れていく万亀の手に、浦島が思わず声を漏らし、手を伸ばすが、その手は、万亀を掴むことなく下ろされた。

「さぁ……始めましょうか……フフフ……」

ムチを構えた万亀が、不気味な笑みで、山程の兵の中へと飛び出していく。

「万亀っ……」

その万亀の背を、見つめる浦島。

「……っ？」

その時、浦島が、自分の着物の懐から少しだけ顔を出しているある物に気づき、ふとそれを手に取った。

「これ……」

それは、鯨国へ入る前に、万亀が浦島や輝矢たちに配った、ミニ空気石であった。ミニ空気石の赤い光りは、もらった時よりも弱くなっているように見える。

「万亀っ……」

浦島はミニ空気石を両手で握りしめ、祈るように万亀の名を呼んだ。

屋敷門前。由雉ＶＳ岩士。

「……っ」

海の中を、高々と飛び上がる由雉。

「“百裂羽”っ……！！」

上方で由雉が大きく両手を広げ、下にいる岩士へ向け、百枚の青い羽根を放つ。岩士は避けようともせず、両手を広げ、むしろ受け入れ態勢を取った。

――――バァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

百の裂羽による衝撃風が、岩士の周囲に巻き起こる。

「……。」

地面へと着地し、まだ収まらない砂煙を、厳しい表情で見つめる由雉。

「フハハハハっ……！！」

「……っ」

砂煙の中から聞こえてくる笑い声に、由雉の表情が曇る。

「無駄無駄無駄無駄ぁぁぁぁっっっ！！！」

そう叫びながら姿を見せる、全身を岩へと変えた岩士。皮膚が岩となった顔面は、岩に目や鼻が付いているみたいで、少し気味が悪い。岩士の能力“岩力”で、もう何度も由雉は、攻撃を防がれていた。

「百枚くらいぶつければ砕けるかなぁ～とか思ったけどっ、ホント、無駄使いだったなぁっ」

まるで無傷の岩士を見て、由雉が少し肩を落とした。

「例え何枚投げようともっ、主の脆弱な羽根では、私の“岩丈（がんじょう）”ボディーに傷一つつけることはできんよっ！」

「岩だけに岩丈っ……うまいこと言うねぇ～」

自信満々に笑う岩士に、感心するというよりも少し呆れたような口振りで呟く由雉。

「ボクっ、桜時や門貴と違って、ああゆう暑苦しいの、苦手なんだよねぇ～」

由雉が嫌そうな表情で、溜息まじりに呟く。どちらかというと知能戦を得意とする由雉は、岩士のような、“力だけが物を言う”といったような相手は、苦手であった。

「まだゲイ相手の方が良かったかなぁ～」

「次はこちらからいくぞっ！！」

「……っ」

ボヤいていた由雉が、そう言って両手を突き出す岩士に、表情を鋭くする。

「“岩盤突出”っ！！」

――――バァァァァァァァーーーーンっ！！――――

「……っ！！」

岩士がそう叫ぶと、岩士の足元から由雉の方へと、地面から次々に鋭い岩が突き出してくる。

「クっ……！！」

――――ボォォォォォォォ～～～ンっ！！――――

由雉が白い煙に包まれ、キジの姿となって上方へと飛び上がる。

「ふぅ～っ、危うく串刺しになるとこだったぁ」

先ほどまで由雉の立っていた場所に突出する鋭い岩を、上から見つめてホッとした表情を見せるユキジ。

「まだまだいくぞっ！！“岩石落下”っ！！」
「……っ！」

今度は両手を高々と挙げる岩士。すると、飛んでいるユキジよりも遥かに上方から、またしても鋭く尖った岩が、今度は下向きに、どんどんと降ってくる。

「今度は上からっ……！？」

厳しい表情を見せながら、羽根を広げ、降ってくる岩を素早く避けていくユキジ。

「でもっ……」

ユキジが瞳を鋭くする。

「こんな重々しい攻撃で、トリを捕まえられるなんて思わないでよねっ……！」

どこか自信ありげにそう言い放ち、ユキジが素早く辺りを舞う。降り注ぐ岩は無数にあるが、ちっともユキジを捉えられない。やがて降り注ぐ岩が止む。

「ふぅっ」

上方でやっと落ち着くユキジ。

「ちょっとトリの力を見くびってたんじゃなぁ～いっ？」

ユキジがまさに上から目線で、岩士に言い放つ。

「ボクの攻撃は君に効かないかもしれないけどぉ、君の攻撃もボクにはっ……」

「主こそっ……少し見くびりすぎではないのかっ？」

「えっ……？」

不適な笑みで顔を上げる岩士に、ユキジが眉をひそめる。

「何っ……うっ……！」

――――ズシィっ……！――――

いきなり全身を襲う重みに、ユキジの顔が歪む。

「なっ何っ……？羽根が重っ……！うっ……！」

急に重くなる羽根に、ユキジは突然自由が利かなくなり、上方を不自然な動きで緩やかにふらつき始める。

「ここが大空か何かと勘違いしていたのではないか……？主よっ……」

「なっ……にっ……？」

岩士の言葉に、ユキジがふらつきながら顔を向ける。

「ここは海底だぞ……？」

「……っ」

――――やっぱ海中だからかなぁ～、なぁ～んか飛びにくいやぁ～――――

「あっ……」

岩士に言われ、ユキジは自分自身の言葉を思い出した。万亀のミニ空気石のお陰で呼吸できてはいるが、ここは空気のない海。水圧の中を飛べば、羽根に負担がくるのは当然だ。

「さっき岩を避けたのでっ……一気に負担がっ……？」

高速で飛んでいた時は気付かなかったが、止まって初めて負担が来たのだろう。ユキジが表情を険しくする。

「まずったぁ～っ」

「ここは薄暗く重い海底っ……」

安易に飛びまわってしまったことをユキジが悔いている中、岩士が再び、高々と両手を挙げる。

「……っ」

岩士の行動に、額から汗を流すユキジ。

「空を翔けるトリの生きるところではないっ!!“岩石落下”っ!!」

「うっ……!」

羽根の自由の利かないユキジに、再び降り注ぐ鋭い岩石。

「うわあああああああああああっっっ!!!」

羽根に、体に岩石が突き刺さり、ユキジが叫び声をあげて、下へと降下していく。

「フハハっ」

しかし、降下していく地面には、これまた突出した鋭い岩。

「ううっ……!!」

ユキジが鋭い岩に羽根をかすり、真っ赤な血を飛び散らせながら、岩の隙間の地面へと落ちる。

――――ボォォォォォォ～～～ンっ！！――――

「うっ……！」

白い煙に包まれ、自動的に人化する由雉。あまりの傷に、体が勝手に反応したのであろう。

「かはっ！くっ……うぅっ……」

倒れ込んだ由雉は、口から血を吐き、傷の痛みに体を捩る。

「さぁてと……」

「……っ」

岩士が右手を軽く挙げると、突出していた岩が引っ込み、元通り平坦な地面が広がった。平坦な地面を歩き、ゆっくりと由雉の元へと歩み寄って来る岩士。

「私の手で、大空へと帰してやろう……脆弱なトリよっ！」

「クっ……」

近づいてくる岩士に、由雉は強く唇を噛んだ。

第２８章　暴走　★２

屋敷横。門貴ＶＳ宇凪。

「如意棒・第一の舞っ……“空”っ！！」

門貴が如意棒を振り上げ、一陣の風を放つ。

「……“凪”っ」

――――パァァァンっ！――――

宇凪が軽く左手を挙げると、門貴の風はいとも簡単に消え去った。

「……っこれならどうやっ！如意棒・第二の舞っ……！」

消え去る風に少し表情をしかめる門貴であったが、すぐさま先ほどとは違う形で如意棒を構えた。

「“浄”っ！！」

門貴が如意棒を振りきると、宇凪の四方に、先ほどよりも強い風

が巻き起こり、一斉に中央にいる宇凪へと向かっていく。

「……。」

宇凪は少し眉をひそめたが、すぐに余裕の笑みをこぼして、両手を左右に大きく広げた。

「“凪”っ」

――――パァァァァァンっ！！――――

「なっ……！！」

四方を包むほどの風を、宇凪は一瞬ですべてかき消してしまった。その光景に、大きく目を見開き、構えていた如意棒を下ろしてしまう門貴。

「言っただろう……？僕に風は効かないって……」

冷たい笑みを浮かべ、宇凪がゆっくりと振り返る。

「もう諦めて、僕の物になっちゃいなよっ……？おサルさん……」

「誰がっ！俺は輝矢んに魂そそいどんねんっ！！」

「あの黒髪の子……どっちかっていうと、イヌさんを気に入っているように見えたけど……」

「あちゃ～っ！それは言ったあかんとこやでぇっ！」

宇凪の鋭い指摘に、眉間に皺を寄せて目を瞑る門貴。“あちゃ～”と左手を突き出すところは、いまいち緊迫感に欠けている。

「けど、お前に風が効かんゆぅ～んは、よぅわかったっ」

「……っ？」

そう言いながらも如意棒を構える門貴に、宇凪が少し首をかしげる。

「けどっ、こんなんはどないするぅ？」

――――ビュウウゥゥゥンっ！――――

「……っ」

如意棒に風を纏わせていく門貴。宇凪の表情が少し曇る。

「飛んでくる風は消せてもっ……これやったら消せんやろっ！？」

門貴が如意棒を振り上げ、真正面から宇凪に突っ込んでいく。

「おっらぁぁぁぁぁっっ！！！」

「……っ」

風を纏った如意棒を、勢いよく宇凪へと振り下ろす門貴。

――――・・・・・・・・・っ！――――

「なっ……！！」
「はぁっ……」

門貴が力一杯振り下ろした如意棒を、宇凪は右腕1本で軽々と受け止めていた。門貴はショックを受けたような表情で大きく目を見開き、宇凪は少しがっかりしたように肩を落とす。

「微弱な風だね……」
「そっそんなっ……！……っ？」

全力を込めた如意棒を止められ、驚きを隠せない門貴であったが、自分の右手に握られている如意棒を見て、少しその表情を曇らせる。

「これはっ……」

如意棒の纏う風が、門貴が纏わせた時よりも弱くなっており、今も少しずつ弱くなっていった。

「そう……ここが風の届かぬ深い海底じゃなければ……」

宇凪が、如意棒を受けとめていた手とは逆の手で如意棒を掴み、受けとめていた手の上から下ろす。

「僕にかすり傷くらいは、負わせられたかも知れないのにねっ……」
「クっ……！」
――――あっかんっ！海中じゃ水に比べて、風の力が弱過ぎるっ……！――――
「……っ」
風力が弱まっていることは、わかっていたはずなのに。門貴が少し唇を噛む。
「ああ、そうだ。大したものじゃないけど……」
「……っ？」
如意棒から解放された右手を、至近距離にある門貴の顔面へと向ける宇凪。
「“コレ”っ……返すよっ……」
「……っ！」
宇凪の右手から、巻き起こる風。
「うっ……！！」
――――バァァァァァァーーーンっっ！！――――

「うわあああああああああああああっっっ！！！」

宇凪の放った風により、門貴が全身を切り裂かれ、吹き飛ばされる。

「第一の舞っ……とか言ったっけっ……？」

「クっ……！俺のっ……風っ……？」

倒れ込んだ門貴が、弱々しい声で戸惑うように呟く。宇凪が放ったのは、門貴が先ほど放ち、宇凪に消されたものであった。

「言うの忘れてたけど……僕、消したものを出すことも出来るんだっ」

「それを早よ言えよっ……」

笑顔を見せる宇凪にそう言い放ち、表情をしかめながら、傷だらけの体をゆっくりと起き上がらせる門貴。

「おサルさん～っ……思ってたより弱いねっ……」

がっかりしたように言う宇凪。

「僕、弱い男に興味ないからぁ～っ……」

宇凪がまだ立ち上がっていない門貴に、ゆっくりと右手を向ける。

「殺しちゃおっかなっ……？」
「……っ」

冷たく微笑む宇凪に、門貴の表情が険しくなる。

「第二の舞の方も返すね……」
「クっ……！」

風の巻き起こる宇凪の右手に、門貴はさらに険しい表情で如意棒を握り締めた。

屋敷裏。桜時ｖｓ泡美。

「どっ……」

万亀や、門貴・由雉がそれぞれ苦戦を強いられている中、桜時はというと……

「どわあああああああああああああああっっっ！！！」
「くぅぅぅ～～じらぁぁぁ～～っ！！」

クジラに、追いかけられていた。

「クッソっ……！汚ねぇーぞっ！ちゃんと人化して正々堂々戦えっ！！」

少し後ろを振り返り、追いかけてくるクジラに非難するように叫ぶ桜時。桜時は別にクジラと追いかけっこをしているわけではない。鯨国主子息の蒸田泡美と戦っているのだ。しかし鯨人の泡美は、鯨化して、その巨大な体で桜時を追い詰めていく。

「くぅぅぅぅぅぅぅ～～～っっ……！！」

「うっ……？」

急に追いかけるのをやめ、その場に蹲るような態勢となって、唸り声を漏らすクジラに、桜時が足を止め、戸惑うように振り返る。

「何となく嫌な予感がっ……」

「じらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」

――――パァァァァァァーーーーンっっ！！！――――

「げぇっ……！！？」

クジラが声とともに体を突き上げると、その頭頂から、勢いよく大量の泡が飛び散った。

「うっ……！！」

顔を歪めた桜時に、降り注ぐ無数の泡。

――――――バァァァァァァァーーーーンっっ！！――――――

「うわあああああああああああああああっっっ！！！」

降り注いだ泡が、桜時に当たった瞬間に爆発した。

「昔々あるところに……人魚のお姫様がいました……」

「んっ……んんっ……」

全身に走る痛みを堪えながら、どこからともなく聞こえてくる話声に、桜時がゆっくりと目を覚ます。桜時の体や皮膚は、爆発を受け、所々黒く汚れていた。

「ある日、人魚姫は……海で溺れていた王子様を助けました……」

「あっ……？」

妙に至近距離から聞こえてくる、どこかで聞いたことのある話とその声に、桜時がぼんやりしていた頭を、無理やり起こして、視界をはっきりとさせる。

「目覚めた王子様に……人魚姫は恋をしてしまいます……」

「……。」

目の覚めた桜時の目の前にいるのは、うっとりとした表情で話している泡美。倒れた桜時は、泡美に膝枕をされていた。桜時が表情を一気に引きつる。

「そして王子様もっ……自分を助けた人魚に一目で恋にっ……」

「だから落ちるかって言ってんだろうがぁぁぁぁっっ！！！」

「ぎゃあっ！！」

二度目のシチュエーションに、桜時の怒りも絶頂となり、勢いよく足を振り上げ、膝枕して微笑んでいた泡美の顎を、思いきり蹴り飛ばした。

「ったくっ……！」

振り上げていた足を戻し、飛び上がるようにして立つ桜時。

「うっううっ……ヒドいっ……王子様っ……」

蹴られた顎を押さえながら、苦しげに体を起こす泡美。

「おっ乙女の顎を蹴るなんてぇっ……」

「誰が乙女だっ」

責めるように言う泡美に、桜時が冷たく一言。

「親父にも蹴られたことないのにぃぃぃぃぃっっっ！！！」

「フツーねぇーよっ！！！」

勢いよく立ち上がる泡美に、桜時も負けない勢いで突っ込みを入れる。

「もぉ～う怒ったっ！！」

「……っ」

確かに怒った表情の泡美が、高々と両手を掲げる。少し戸惑うように、泡美を見つめる桜時。

「死骸だけお部屋に飾れればいいやぁっ！」

「だから物騒だって、お前っ」

泡美の怖い発言に、桜時が顔をしかめる。

「“泡沫”っ……マァァァァァ～～～ックスっっ！！」

「なっ……！！」

泡美がそう叫ぶと、先ほどクジラが放った泡よりもさらに大量の

泡が桜時を包み、その視界を埋め尽くすほどに広がっていく。その光景に、目を見開く桜時。

「マジかよっ……」

桜時が少し顔を引きつる。

「ちょっとヤりすぎちゃったなぁ～死骸も残らないかもぉ」

「おいっ……」

大量すぎる泡を見つめ、暢気に呟く泡美に、桜時が冷たい視線を送る。

「まぁいいかぁ～っ」

泡美が冷たく微笑み、桜時の方を見る。

「バイバイっ、王子様っ」

「……っ！」

泡美がそう言って手を振った瞬間、無数の泡が、一斉に桜時に向かって飛び出してくる。

「クソっ……！」

険しい表情で村雨丸を構える桜時。

「無駄だよぉ～何をやったって、この量の泡じゃあっ」

「“伝光っ……」

泡美が勝ち誇った笑みを浮かべる中、桜時が勢いよく村雨丸を振り上げる。

「……刹花”っっ！！」

桜時が白い光を放った村雨丸を、自分の足元に強く突き刺す。

その瞬間。

――――パァァァァァァァァーーーーンっっっ！！！――――

「なっ……！！？」

村雨丸の突き刺さった地面から、一瞬にして巨大な桜の木が咲き誇り、桜時へ向かっていた大量の泡は、一つ残らず桃色の桜の花びらへと姿を変えた。

「こっこんなっ……」

愕然とした表情で、海中に咲いた桜の木を見上げる泡美。

「ここは空気もないっ……日の光りも届かない海中だよっ……？」

泡美は信じ難いといった表情で、その肩を少し震わしながら、誰に問いかけるでもなく呟く。

「花なんてっ……咲くはずがないっ……！」

目の前に広がる光景を、必死に否定しようとする泡美。しかし、咲き誇った桜は、確かに泡美の前に存在している。

「あぁ～あっ、海に桜咲かしちまったぁ～っ」

自らが咲かせた桜の木を見上げながら、地面に突き刺した村雨丸を抜き、桜の木の前、泡美側へと移動していく桜時。

「千鶴に怒られっかなぁ～」

桜時が困ったような表情で、少し頭を掻く。

「まぁいっかっ！咲かせなきゃ死んでたって言おっ」

自分の中で区切りをつけ、桜時が泡美の方を向いて、再び村雨丸を構える。

「さぁっ！続きといこうぜっ！」

「……アハハっ」

「……っ？」

俯いたまま笑い声を漏らす泡美に、桜時が少し眉をひそめて首をかしげる。

「アハハっ！アハハハハぁぁ～っっ！！」
「うぇっ……？」

顔を上げ、何が楽しいのか高々と笑いあげる泡美に、桜時が少し気味悪がるように顔を引きつる。

「だっ大丈夫かぁ？お前っ……」
「面白いっ……面白いよぉっ！王子様っ！」

泡美が大きく目を見開き、楽しげに言い放つ。

「俺はますます王子様の虜になっちゃったみたいだよぉ～っ！！アッハッハッハぁ～っ！！」
「げぇっ」

笑う泡美の虜発言に、桜時はあからさまに表情を引きつった。

第２８章　暴走　★３

戻って、屋敷内。

「ううっ……！」

「万亀っ……！！」

飛び散る鮮血。多くいる兵の一人が振り下ろした剣に、万亀が左手を斬り裂かれ、その体を後退させる。戦いを見守る浦島は、傷つく万亀の姿に、思わず身を乗り出した。

「クっ……！」

痛みを堪えながら、何とかその場に踏み止まる万亀。

「ハァっ……ハァっ……」

万亀が肩で大きく息をする。手や足を所々斬り裂かれ、痛々しく赤い血を流している。倒した兵は百人あまり。まだ立っている兵は三百人あまり。万亀の体力は、すでに限界にきていた。

「随分と苦しそうだなぁ……亀国の姫よ……」

「……っ」

苦しい万亀の戦いを、まさに高みの見物している帆盾。帆盾の言葉に、万亀が少し眉をひそめる。

「いい加減、諦めてはどうだぁ？」

帆盾が万亀にいやらしい笑みを向ける。

「多勢に無勢だっ……君がどう足掻こうとも、君の敗北は変わりはせぬよっ」

「……。」

万亀が、鋭い瞳で帆盾を見る。

「ならばそれ以上、傷つかぬうちにとっとと我らに政権をっ……」

「嫌です……」

「……っ」

すぐさま否定する万亀に、余裕の笑みを浮かべていた帆盾が、すっと笑みを消す。

「強情な姫だ……」

少し呆れたような冷たい瞳を、万亀へと向ける帆盾。

「君がそこまで政権に固執するとは思わなかったよっ」

「別に……政権など、どうでもいい……」

「何っ……？」

万亀の言葉に、帆盾が少し眉をひそめる。

「元々、政治なんてヒラメに任せっきりです……私は政権になんて興味はない……」

「ならばっ……！」

「ただっ……」

万亀が強くまっすぐな瞳を、帆盾へと向ける。

「この“海”を……貴方に譲ることは出来ないっ……」

「……っ」

その言葉に、帆盾が少し目を細める。

「何だとっ……？」

強張らせた表情で、帆盾が静かに万亀に問う。

「皆の生きるこの海を……皆の大切なこの海を……貴方などに渡すことは出来ないっ……！」

いつもか細い声しか出さない万亀が、声を張り上げて必死に叫ぶ。

「万亀っ……」

そんな万亀を、真剣な表情で見守る浦島。

「ハハハっ！言ってくれるではないかぁっ！小娘がっ」

「……っ」

急に表情を険しくする帆盾に、万亀が少し怯む。

「ではその大切な海で死なせてやろうっ……！！いけぇっ！！」

『……っ！』

「うっ……！」

一斉に剣を振り上げ、万亀へと向かってくる兵士たち。万亀が、もうほとんど限界に近い体で、必死にムチを構える。

「クっ……！」

「万亀っ！！」

「……っ？」

万亀の前に、勢いよく飛び出してくる人物。

「たっ玉之介っ……？」

「万亀をっ……」

万亀の前へと飛び出した浦島は、万亀を庇うように大きく両手を広げ、大きく口を開ける。

「万亀をっ……これ以上傷つけるなぁぁっっ！！！」

「……っ」

必死に叫ぶ浦島に、万亀が大きく目を見開く。

“声も…肩も…足も…全身、震えてる……

怖いんでしょう……？

弱いくせに……無茶をする……

あの時と……同じ……

――――昔々、海に住む一人の少年がおりました。

「ふんふふぅ～んっ♪今日もマグロ一本釣りしよっかなぁ～っ」

少年はいつものように、釣り竿を片手、餌ツボを腰に下ろし、海へ釣りへと出掛けました。

「んんっ？」

そこで少年は、とあるものを見つけます。

「おらおらっ！トロトロ生きてっからこうゆう目に遭うんだよぉっ！」

「もっと俊敏に動いてみろってんだぁっ！ああぁっ！？」

少年の見つめる先には、三人の少年にいじめられている、一匹のカメがいました。体をひっくり返され、甲羅が地面につくようにされ、身動きの取れない状態のまま、少年たちに棒で叩かれたり、蹴られたりしています。

「うっ……ううっ……」

「……っ」

苦しそうな顔をしているカメを見て、釣りに来た少年は唇を噛みしめます。

「おいっ！お前らっ！！」

『ああっ？』

勇ましい少年の声に、カメをいじめていた三人の少年が振り向きました。

「やめろっ！！可哀想だろうがっ！！」
「……っ」

そう言ってやって来た少年の姿に、カメは大きく目を見開きます。

「ああぁっ？何だぁ？コイツっ」
「やっちまえっ！」
「へっ……？」

カメをいじめていた三人は、勢いよく少年に殴りかかってきます。

「ぎゃあああああああああああああっっっ！！！」

「あっ……」

カメの見つめる中、少年はあっさりと負けてしまいました。

「ケっ！弱すぎだってのっ！」
「無駄な時間使ったぜぇ～っ」
「うっ……ううっ……」

ボロボロになって倒れ込んでいる少年にそう吐き捨て、三人はその場を後にしていきました。

「んっ……んっ……！」

カメが何とか無理やり、体の態勢を元に戻し、倒れ込んでいる少年の元まで、ゆっくりと歩いていきます。

「あっあの……」

カメは恐る恐る、少年に声をかけます。

「大丈夫でっ……」

「ああぁ～っ！！カメさんっ！！大丈夫かぁっ！？」

「へっ……？」

問いかけようとしたカメの言葉を遮り、勢いよく起き上がって問いかけてくる少年に、カメは少し驚いたように目を丸くしました。

「あっ……はっはいっ……」

「そっかぁ～っ！！良かったぁっ！」

「……っ」

そう言って、日だまりのように笑った少年に、カメは大きく目を見開いたのでした。

あの時と同じだね……玉之介……〟

「はぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」
「ぎゃあああああああああああああああっっっ！！！」
「玉之介っ……！」

兵の一人が、前へ出た浦島へ向け、勢いよく剣を振り下ろす。勇んで出たわりに、死にそうな悲鳴をあげる浦島に、万亀が慌ててムチを振るった。

――――・・・・・・・・・っっ！！――――

「がはぁぁっ……！！」
「ぎゃあああああああああああっっっ！！！」

万亀の振るったムチに、浦島に斬りかかろうとしていた兵士が勢いよく吹き飛ばされる。兵士の剣にほんの少し右手を斬られただけだというのに、狂ったように泣き叫び、その場に倒れ込む浦島。

「玉之介っ……」

万亀がしゃがみ込み、倒れた浦島に駆け寄る。

「まっ万亀ぃっ……おっ俺はどうやらっ……ここまでのようだっ……」

「随分と簡単に死ねるのね……玉之介……フフフ……」

ただ切り傷を負わされただけだというのに、何故か死を覚悟している浦島。そんな浦島を見て、万亀がまったく緊迫感なく不気味に微笑む。

「すっすまないっ……万亀ぃっ……おっお前を一人で戦わせっ……」

「じゃあ一緒に戦ってみる……？」

「へっ……？」

――――プシュウウウウウーーーっっ！！――――

「ぐへはぁぁぁぁっっ！！！」

どこからともなく噴霧式のスプレー缶を出してきた万亀が、浦島の顔面に勢いよくガスを噴射する。

「まっ万亀っ！一体、何っ……！ううっ……！！」

ガスが目に入ったのか、目を細めながら、万亀に訴えかけようとしていた浦島が、突然目を見開き、その場に倒れ込んだまま動きを止める。

『……。』

部屋にしばらく沈黙が訪れる。

「ぬぅぅぅぅぅぅぅぅぅ～～～～っっ……」

『……っ？』

謎の唸り声をあげながら、深く俯いたまま静かに立ち上がる浦島を、戸惑うように見つめる兵士たち。

「ぬがあああああああああああああああああっっっ！！！」

『ひえええぇぇぇぇぇっっ！！？』

獣のような雄たけびをあげて、両手を高々と広げる浦島。上げられたその顔は、先ほどまでとは打って変わった、何とも攻撃的な表情である。

「ぬぅぅぅぅ～～っっ……」

唸る浦島が、ゆっくりと腰に差していた釣り竿を構える。

「必殺っ……“狂喜乱舞・釣り竿”おおおおおおおっっっ！！！」

『ぎゃあああああああああああああああっっっ！！！』

浦島が勢いよく釣り竿を振り回しながら、部屋を駆け巡っていく。浦島の無茶苦茶に振られた釣り竿に、次々と吹き飛ばされていく兵士たち。

「フフフっ……」

浦島の様子を見つめ、万亀が不気味に微笑む。

「“強ガス”……吸った者を強くするガス……」

“強ガス”と書かれたスプレー缶を片手に、誰にともなく呟く万亀。

「普段弱い者ほど……効果は強いのよね……フフフっ……」

「おっらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっ！！！」

『ぎゃあああああああああああああっっっ！！！』

強ガスにより強化された、普段弱々の浦島は、どんどん釣り竿を振り回し、目にも見えぬ速さで兵士たちを圧倒していく。超人的な強さを見せる浦島に、あっという間に一掃されていく部屋中の兵士。

「なっ何だとっ……！？」

驚きの声をあげる帆盾。

「まっまさかっ……！こんなっ……！」

やっと玉座から立ち上がった帆盾の前に広がるのは、部屋一面に倒れた兵士たち。もうこの広い部屋で立っているのは、帆盾と万亀・浦島の三人だけであった。

「こんなことがっ……！」

「後は貴方だけですね……フフフ……」

「ぬがあああああああっっ！！」

「うっ……！」

万亀の不気味な微笑みと、浦島の獣のような雄たけびに、帆盾が思わず顔を引きつり、後ずさる。

「さぁ……玉手箱を返していただきましょうか……」

「クっ……！」

手の伸ばす万亀に、帆盾が玉手箱を抱え込む。

「誰がっ……！」

――――ボォォォォォォォ～～～ンっっ！！――――

白い煙に包まれていく、帆盾の体。

『……っ』

「ハッハッハッハッハァっ！！」

白い煙の中から現れたのは、この広い部屋をも埋め尽くすほどの、巨大な1頭のクジラであった。鯨化した帆盾はその大きな瞳を吊り上げ、高々と笑う。

「フンっ！！」

大きな尾を翻す帆盾。

『……っ！』

――――バァアアアアアアアーーーンっ！！――――

「うっ！」

「おわぁっ！」

翻された帆盾の尾が、部屋の壁を直撃すると、透き通ったその壁はいとも簡単に崩れ去り、外の海へと続く大きな穴が出来た。

「ハッハッハッハッハァっ！！さらばだっ！！亀国の姫っ！！」

「えっ……？」

「あっ！！」

その出来た穴から、鰭に小さな玉手箱を引っ掛けたクジラが、身をするりと動かして外の海へと出ていく。

「玉手箱は渡さぬっ！海はっ……海は我らの物だっ！！」

尾を動かし、二人から遠ざかっていく帆盾。

「玉之介っ……！」
「ああっ！！」

万亀に名を呼ばれるその前から、浦島は釣り竿を構え、出来た穴の方へと駆け込んでいっていた。

「いくぜっ……！！」

穴まで辿り着いた浦島が、逃げていく帆盾に向け、釣り竿を振り上げる。

「クジラっ……一本釣りっっっ！！！」

そう叫び、思いきり釣り竿を放つ浦島。

「んっ……？何っ……！？」

伸びた釣り竿が、見事に逃げようとしていた帆盾を捕える。動かない体に、少し焦るように、その巨体を揺する帆盾。

「こっこのっ……！」

「どっ……りゃあああああああああああああああっっっ！！！」

「ううっ……！！」

浦島が地面に足を思い切り踏ん張って、勢いよく釣り竿を振り上げると、帆盾の巨体が海底へと向かっていく。

「うっ……！うわあああああああああああああっっっ！！！」

迫る地面に、叫び声をあげる帆盾。

――――バァァァァァァァァァーーーーンっっ！！！――――

海底へとその巨体を押しつけられる帆盾。その衝撃の大きさに、辺りに振動が走った。

「うっ……ううっ……」

――――ボォォォォォ～～～ンっ！――――

「ぐっぐぷっ……」

地面に押しつけられた帆盾は、人の姿へと戻り、白目を剥いて気絶した。

「フフフっ……」

上方からゆっくりと舞い落ちてくる、帆盾からこぼれ落ちたのであろう玉手箱を、浦島のすぐ横まで歩いてきた万亀が、ゆっくりと受けとめる。

「おかえり……」

玉手箱から空気石を取り出し、万亀がそっと微笑む。

――――パァァァァァーーーっっ！！――――

すると空気石は、万亀の声に反応するように赤く光り始めた。

「これで……海に平和が戻る……フフフっ……」

元の厚さを取り戻した、海底都市を包む膜を見つめ、安心したように微笑む万亀。

「あっあれぇ～っ……？」
「……っ？」

その時、浦島が、先ほどの攻撃的な表情から、元の間抜け面へと戻り、持っていた釣り竿を力なく下ろした。

「おっ俺ぇ～っ……何をっ……？」

“強ガス”の効果が切れたのであろう。強化されていた時のことも、覚えていないようである。

「フフフ……」
「万亀っ？」

微笑む万亀に、浦島が戸惑うように振り返る。

「やっぱり貴方は最高ね……玉之介……」
「へぇっ？」

万亀の言葉に、浦島は目を丸くして首をかしげた。

「さてと……後は輝矢さんたち……」

首をかしげた浦島をそのままに、万亀が高々と空気石を掲げた。

「“与気包膜”っ……」

――――パァァァァァァーーーーンっ！――――

空気石が赤く輝くと、そこから上方高くへ突き上げた赤い光が、膜となって鯨国を包むように広がっていった。

第２８章　暴走　★４

「んっ……？」

上方に現れる赤い光の膜に、由雉にとどめを刺そうと歩み寄っていた岩士は、ふと足を止めた。

「膜っ……？空気石を取り返されたのか……」

膜を見上げた岩士は、万亀たちの手に玉手箱が戻ったことを察する。

「まぁいい……私が行って、また奪い返せばいいだけのこと……」

岩士が顔を下ろし、前方で倒れ込んでいる由雉に視線を戻す。

「すでに勝利は……目前なのだからな……」

「……。」

血だらけで倒れている由雉は、岩士の声にピクリとも体を動かさない。

「“岩々手刀”っ……」

全身岩人間の岩士の右手が、まるで剣のような鋭い岩へと形を変える。冷たい笑みを浮かべながら、ゆっくりと倒れている由雉の元

へと歩いていく岩士。

「さらばだっ……」

由雉の前に立った岩士が、高々と右手を振り上げる。

「脆弱なトリよっ……！！」

そして、由雉へと振り下ろされる右手。

――――――バァァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――――

「何っ……！？」

しかし、岩士の右手が砕いたのは、由雉ではなく地面であった。

「どこにっ！？……っ！」

焦ったように顔を上げた岩士が、思わず目を見開く。

「ここっ、だよぉ～っ」

岩士が見上げた先を飛んでいる、一羽のキジ。青い羽根を血で染めて、少し引きつった表情を見せながらも笑うユキジが、岩士の上方を飛んでいた。

「バカなっ！いくら空気膜が出来たとはいえっ！あの傷で飛べるはずがっ……！」

「飛んでみせるさっ……」

驚いている岩士に、ユキジが上からそっと笑う。

「“海”だってっ」

「クっ……！」

そう言って笑うユキジに、岩士は俄然リードしているというのに、少し追い詰められたような表情となって、慌てて両手を挙げる。

「ならば主の羽根を刈りっ、空すらも飛べなくしてやろうっ……！！」

ムキになったように必死に叫ぶ岩士。

「“岩石落下”っ！！」

岩士が叫ぶと、上方からユキジめがけて、無数の鋭い岩石が降ってくる。

「……っ」

ユキジはその瞳を鋭くし、傷ついた羽根を思い切り広げた。

「当たらないよっ……」
「なっ……！！」

羽根を広げたユキジが、素早い身のこなしで次々を岩を避けていく。先ほど避けた時と同じ、いやそれ以上のスピードだ。

「バカなっ！何故飛べるっ！？あの傷っ……！って、傷っ？」

ユキジを見つめていた岩士が、ふと目を細める。

「傷がっ……ないっ！？」
「えへっ」

大きく驚く岩士を見ながら、使い終わった黄色い羽根を下へと落とし、悪戯っぽく微笑むユキジ。そう、ユキジは、すでに癒羽で岩士から受けた傷を治していたのである。

「主っ……！苦しげな表情を作って、わざとっ……！」
「うまかったぁ～っ？ボクの演技っ！」

――――ボォォォォォ～～～ンっ！――――

すべての岩を避けたユキジが、地面へと降下しながら、白い煙に包まれていく。

「なかなかのもんだったでしょうっ？」
「クっ……！」

人化した由雉の笑みに、顔を引きつる岩士。

「さてとっ……じゃあそろそろ終わらせようかぁっ」

そう言って由雉が、二枚の青い羽根を両手に構える。

「ハっ！例え私の攻撃を避けられたとしてもっ！主の脆弱な羽根では、私の岩々ボディーにはっ……！」

「“裂羽”“裂羽”っ」

岩士が必死に叫ぶ中、冷静な面持ちで左右の裂羽を重ね合わせる由雉。

「傷一つ、つけることなどっ……！」

「“重翼っ……」

合わさった二枚の青い羽根が、普通の羽根よりも一回り大きい、少し濃い青の羽根へと姿を変える。

「出来っ……！！」

「……っ」

由雉が出来たばかりの羽根を右手に構え、岩士へと飛び込んでいく。

「んんっ！！？」

「……重裂羽“っ！！」

――――ブシュっっ……！！――――

岩士の額へと、羽根を突き刺す由雉。

「ハッハッハっ！！こんな羽根などっ……！」

――――ピキピキピキっ……――――

「何っ……！？」

砕ける音に、高々と笑っていた岩士が目を見開く。岩士の岩となった体は、由雉が羽根を突き刺した部分からヒビが入り、そのヒビが顔から全身へと広がっていく。

そして。

――――パァァァァァァーーーンっっ！！！――――

「がはあああああああああああああああっっっ！！！」

岩は砕け散り、全身から血を流した岩士が、激しい叫び声とともに後方へと倒れ込んだ。

「うっ……ううっ……」

「やっぱり……顔の岩壁は一番薄かったみたいだねぇ」
「なっ何っ……？」
由雉の言葉に、倒れた岩士が少し目線を動かす。
「分厚い岩に覆われてたらぁ、あんなにしゃべれないもんねぇっ」
「……っ」
微笑んでそう言う由雉に、驚いた表情を見せる岩士。
「みっ見事だっ……海をも翔ける強きトリよっ……」
岩士が由雉に笑みを向ける。皮肉った笑みではない。己の敗北を認め、相手を称えた、爽やかな笑みだ。
「ちっちなみに初めに言っていた私の好きな女の子のタイプはっ……ぐっぐふっ！」
「あっ……」
最初に戻って好きな女の子のタイプを話そうとした岩士であったが、その途中で力突き、気を失った。
「まぁいっかぁ～好きな女の子のタイプとかどうでもいいしぃ～」
適当な笑みを浮かべ、由雉がその場にしゃがみ込む。
「はぁっ……」
力なく、その場に横になる由雉。由雉が深く目を閉じる。

「寝まぁ～すっ」

由雉ｖｓ岩士。勝者：由雉。

「ぐはあああああああああっっっ！！」

四方を包む風に切り裂かれ、全身から血を流した門貴が、ゆっくりと後方へ倒れていく。

「うっうぅっ……」

倒れた門貴の右手から、こぼれ落ちる如意棒。

「どうだい……？自分の風に八つ裂きにされた気分は……」

そう言って笑うのは宇凪。凪力を操る宇凪は、門貴の風を悉く消し去り、さらに消した門貴の風を、また門貴へと放った。その宇凪

の能力に、門貴は手も足も出ない状況となっていた。

「それじゃ……そろそろ……」

倒れた門貴へ、ゆっくりと近づく宇凪。

「とどめといこうかっ……おサルさっ……」

「……っ」

「何っ……！」

宇凪が門貴へ手を伸ばそうとしたその時、倒れていた門貴がカッと目を開き、すぐさま如意棒を握りしめて、立ち上がる。

「おっりゃあああああああっ！！」

宇凪へ向け、勢いよく如意棒を振り下ろす門貴。

「またその貧弱な棒で攻撃かいっ？無駄なことをっ……！」

――――ブシュっっ……！！――――

「なっ……！？」

先ほどと同じように腕で門貴の如意棒を受けとめた宇凪であったが、先ほどとは異なり、受けとめた宇凪の腕から、赤い血が流れ落ちた。

「なっ何故っ……ハっ……！」

宇凪が、如意棒の纏っている強い風に気づく。

「まさか空気石をっ……」

そう言って眉をひそめ、上方を見上げる宇凪。上方には赤く光る膜が張られていた。

「使えない国主だねっ……まったくっ……！」

「うおっ」

空気石が取り返されたことを察し、宇凪が表情を険しくする。宇凪が傷ついた手を勢いよく振り払うと、門貴ごと如意棒が押し返された。

「何やようわからんけどぉ、さっきよりは風を感じるなぁっ」

「君たちのお仲間が、空気石を取り返したようだからね……」

生き生きとした笑顔を見せる門貴に、少し低いトーンで答える宇凪。

「ほんならっ……ホンマの風をお見舞いしたるわいっ！」

門貴が再び如意棒を構える。

「如意棒・第一の舞っ……“空”っ！！」

門貴が勢いよく如意棒を振り下ろし、宇凪に先ほどよりも勢力を

増した一陣の風を放った。

「……。」

眉一つ動かさずに、向ってくる風に右手を向ける宇凪。

「“凪”っ」

――――パァァァァンっ！！――――

「うっ……！」

しかし勢力を増したはずの門貴の風は、またも宇凪にあっさりと消し去られてしまう。

「どんなに強い風だろうと……僕の凪に消せないものはないよ……」

「クっ……」

余裕で言い放つ宇凪に、門貴が少し唇を噛む。

「ほんなら如意棒で斬りまくるまでやぁっ！」

如意棒に風を纏わせ、宇凪に勢いよく飛びかかっていく門貴。

「単純だねっ……おサルさんっ……」

大きく飛び上がり、如意棒を振り上げた上方の門貴へと、宇凪が

右手を挙げる。

「そういうのは嫌いじゃないけどっ……命取りだよっ……！」

宇凪が先ほど消し去った門貴の風を、降下してくる門貴へ向けて放とうとする。

「と見せかけてぇっ！第一の舞っ！“空”っ！！」

「何っ……！？」

宇凪のすぐ上で、如意棒を振り上げた門貴が、直接攻撃と見せかけて、再び風の一陣を放つ。

「クっ……！」

「……っ？」

その表情を焦らせた宇凪が、向ってくる風に右手を向け、先ほど消し去った門貴の風を放った。その宇凪の行動に、少し眉をひそめる門貴。

――――パァァァァァーーーンっっ！！――――

『ううっ……！』

二つの風がぶつかり合い、その衝撃で、門貴と宇凪がそれぞれ後ろへと押し返される。

「ふぅっ」

踏みとどまった宇凪が、少しホッとしたように肩を落とした。

「……。」

そんな宇凪を、まっすぐに見つめる門貴。

「なんで……消さんかった……？」

門貴が、宇凪には聞こえないような小さな声で呟く。門貴が放った風を、宇凪は凪力で消すのではなく、門貴の風を放って相殺させた。宇凪が凪力を使わなかったのは、今回が初めてだ。

「いや……消せんかった……」

真剣な表情で呟く門貴。

「そういうことかっ……」

門貴が宇凪には見えないよう、俯いたまま笑みをこぼす。

「ふぅっ……不意打ちとは少し驚いたけど、やはり君の風は僕には効かなっ……」

「……っ」
「何っ……！？」
宇凪の言葉を聞くことなく、勢いよく宇凪へと突っ込んでくる門貴。
――――バシィィっ！！――――
「……っ？」
突っ込んできた門貴は、宇凪に攻撃するわけでもなく、その左手で強く宇凪の右手を掴み、宇凪のすぐ目の前に立った。宇凪が戸惑うように、門貴を見る。
「何だいっ……？今になって僕の愛に応えたくなったのかいっ……？」
「お前の凪力は、ある程度、距離が離れてへんと使えへんっ……」
「……っ！」
門貴の言葉に、余裕の笑みを浮かべていた宇凪が、大きく目を見開く。
「つまり至近距離からの風は消されへんっ……そうやろっ？」
「クっ……！」
門貴の言ったことが正しかったことを伝えるような、宇凪の焦った表情。

「当たりぃ～やったみたいやなぁっ……じゃあっ！」
「……っ！？」

門貴が高々と如意棒を持った右手を挙げる。

「バカなっ！こんな距離で風を使えばっ……！君だってっ……！」
「ああっ！そうやぁっ！我慢比べといこうやないかぁっ！」
「何っ……！？」

自分も風を受けることを覚悟の上で、大きく笑う門貴に、さらに目を見開く宇凪。宇凪の額から汗が流れ落ちる中、門貴の掲げた如意棒が強い風を纏っていく。

「如意棒・第二の舞っ……」
「ううっ……！！」

宇凪の冷静だった表情が、焦りに歪む。

「……“浄”っっ！！！」

――――バァアアアアアアアアーーーーンっっ！！！――――

「うがあああああああああああああああああっっっ！！！」

四方から巻き起こる風に切り裂かれ、叫び声をあげて倒れていく宇凪。

「クっ……！」

門貴も自分の風に全身を裂かれるが、血を流しながらも、何とかその場に踏み止まる。

「ぼっ僕が負けるなんてっ……」

倒れていく宇凪が、薄れる瞳で門貴を見つめる。

「やっぱり君は……僕好みだよ……おサルさんっ……うっ……」

倒れた宇凪は、そう言って微笑み、力なくその瞳を閉じた。

「最近、男にコクられてばっかやなぁ～っ」

そうボヤきながら、門貴がその場に座り込む。

「だはぁっ！」

力なくその場に横たわり、瞳を閉じる門貴。

「腹っ……減ったっ……」

門貴ＶＳ宇凪。勝者：門貴。

1997

第２８章　暴走　★５

「“泡沫”っ！！」
「“瞬花”っ！！」

――――パァァァァァーーーンっ！！――――

泡美の放つ大量の泡を、一瞬にして桜の花びらへと変える桜時。

「ふぃ～っ！どんどん撃ってきやがってぇ～これじゃキリがねっ…
…んっ？」

少し伸びをするように両手を挙げ、上を向いた桜時が、上方に張られている赤色の膜に気づき、眉をひそめる。

「あれっ……」
「亀国の姫の仕業だろうねぇ」
「えっ？」

その声に、桜時が顔を下げて泡美を見る。

「父上は負けたようだぁ～っ」
「じゃあアイツらが空気石をっ……！」
「ああぁ～っ、これで海は安泰っ！俺たちの野望もここまでさぁ～」

泡美が肩を落とし、“やれやれ”といった表情で首を横に振る。

「じゃあもう俺とお前が戦う理由もっ……！」

「後は王子様を俺の部屋に飾るって野望を叶えるだけだねぇっっ！！」

「げぇっ！！」

笑顔を見せた桜時であったが、そう叫んで再び両手を構える泡美に、またもや勢いよく表情を引きつる。

「“泡沫”ぁぁっ！！」

桜時に大量の泡を放つ泡美。

「ったくっ！“瞬花”っ！！」

――――パァァァァァーーーンっ！――――

桜時へと向けられた泡が、桃色の花びらとなって海に散る。

「いい加減、諦めろよっ！お前がいっくら泡飛ばしたって、俺が全部花にするだけっ……！」

「俺がただ闇雲に泡飛ばしてるだけだと思ってたぁ？王子様っ」

「えっ……？」

どこか冷たく微笑む泡美に、桜時の表情が曇る。

「……“幻泡”っ」

「……っ！」

泡美がそう呟いた瞬間に、桜時の周囲に突然、多くの泡が現れる。七色にも見えるその不思議な泡は、すでに桜時の周囲を埋め尽くしていた。

「何っ!?うっ……!!」

泡が桜時の全身に纏わりつき、桜時の動きを封じる。一気に表情を険しくする桜時。

「この見えない泡を……“泡沫”と混ぜて飛ばしてたんだよぉ～っ？気付かなかった？」

「クっ……！」

動きを封じられた桜時の前に立ち、楽しげに笑う泡美に、桜時が表情を引きつる。

「アハハっ！イイ顔っ……」

泡美が、引きつられた桜時の頬に触れる。

「もっとっ……歪ませてみてよっ……？王子様っ」

「……っ」

怪しげに笑う泡美に、桜時はその言葉通りとなる形で、さらに表情を引きつる。

「アハハっ！！いいよぉ～っ！これで王子様はもう、俺の人形同然っ……！」

「お前こそっ……気付かなかったかっ……？」

「何っ……？」

高々と笑っていた泡美が、静かに言い放つ桜時に、その表情を曇らせる。

「見てみろよっ……お前の手っ」

「手っ？うっ……！！」

――――パラパラっ……――――

桜時の頬に触れている泡美の手からこぼれ落ちる、桃色の花びら。

「クっ……！」

泡美が思わず後ろへ飛び、桜時との間に距離を取る。

「何だっ！？どうなっているっ！？」

桜時から離れたというのに、まだまだ花びらのこぼれ落ちる泡美の手。やがて手だけではなく、泡美の全身から、大量の花びらがこぼれ落ちていく。自分の体からこぼれ落ち、足元に溜まっていく桃色の花びらを見て、気味悪がるように引きつった表情を見せる泡美。

「何をっ……！俺に何をしたっ！？」

「なぁ～にっ」

泡美の動揺からか、崩れ落ちていく泡の中から、解放される桜時。

「二回目の膝枕の時にっ、お前の服にコレを入れさせてもらったんだっ」

「……っ？タネっ？」

桜時の取り出した小さな種に、首をかしげる泡美。

「さくらんぼのタネだよっ」

「……っ！」

笑う桜時に、泡美が目を見開く。

「服に種を入れるなんてっ……」

俯き、少し暗い声で呟く泡美。

「いっやぁぁぁ～んっ！王子様っ！意外と破廉恥ぃぃ～っっ！！」
「誰がじゃいっ！！」

妙に頬を赤くして、桜時に向かって手のひらを上げたり下げたりする泡美に、桜時が力一杯突っ込みを入れる。

「とにかくっ！そろそろ終わりにさせてもらうぞっ！」
「うっ……！」

こぼれ落ちた桜に足の動きを封じられている泡美へ向け、鋭い表情を見せた桜時が村雨丸を構える。

「待っ待って！王子様っ！やっぱりもう俺たちが戦う理由なんてっ……！」
「これ喰らって、ちったぁ根性、入れ直して来いっ！」

必死に両手を突き出し、戦いの終止を求める泡美であったが、桜時は容赦なくその言葉を遮り、泡美へ向けて高々と村雨丸を振り上げた。

「“柔桜っ……」
「ひぃっ……！」
「……無塵”っ！！！」

顔を引きつった泡美に、まっすぐに飛んでいく桃色の一閃。

――――バァァァァァァァァーーーーンっっ！！！！――――

「うあああああああああああああああああっっっ！！！！」

桜時の攻撃が泡美を直撃し、泡美は胸を大きく縦に斬り裂かれ、青い海に真っ赤な血を飛ばして、後方へと倒れ込んでいった。

「ハハハっ……これが失恋の痛みっ……」

倒れた泡美が、力ない笑みで上方を見上げる。

「王子様に応えてもらえなかった人魚姫はっ……泡となって……消えるのでした……ぐふっ」

「はぁっ……」

物語口調にそう言って、泡になるというか口から泡を吹いて気を失った泡美を見て、桜時が村雨丸を鞘に戻しながら、深々と溜息をつく。

「言ってろっ……」

桜時ｖｓ泡美。勝者：桜時。

「さてとっ」

桜時が気を取り直した様子で言い、倒れた泡美にあっさりと背を向ける。

「空気石は取り返したっつってたし、万亀んとこに加勢に行く必要もねぇーかぁ。後はっ……」

――――バァァァァァァーーーンっっ！！――――

「……っ」

聞こえてくる衝撃音に、桜時が顔を険しくして振り向く。

「水のっ……音っ……」

遠くから聞こえてくる水のぶつかり合うような音。戦いが行われている。

「輝矢っ……」

――――大丈夫……ですから……――――

桜時の脳裏を過ぎる、輝矢の言葉。

「……っ！」

桜時は勢いよく、その音のした方へと駆け出していった。

蒸田の屋敷から少し離れた広地。輝矢ｖｓ渦礼。

「“双渦”っ！」

「……っ“月器・十六夜”っ……！」

迫り来る二つの渦に、金色の盾を突き出す輝矢。

――――バァァァァァーーーーンっっ！――――

十六夜が、双渦を受けとめる。

「うっ……！」

しかし、徐々に渦に十六夜が押され、輝矢の足が後ろへと下がっていく。両手にくる重みに、輝矢が少し表情をしかめた。

「……ううっ！あああああああっっ！！」

渦の勢いに負け、輝矢が十六夜ごと吹き飛ばされていく。

「うっ……ううっ……」

地面へと倒れ込む輝矢。輝矢のすぐ横に、力なく十六夜が落ちる。

「クっ……」
「何故だっ……」
「……っ」

すぐに体を起こし、十六夜に手を伸ばそうとする輝矢に問いかけるのは渦礼。

「何故、貴様……水力を使わないっ……？」
「……。」

不満げな表情を見せる渦礼に、厳しい表情で顔を上げる輝矢。

――――ズキンっ……！――――

「うっ……！」

顔を上げた輝矢を、またも襲う痛み。輝矢が頭を押さえ、苦しげな表情で深く俯く。

「ダメっ……まだっ……」

少し荒い呼吸で、輝矢が必死に呟く。

「まだっ……」

「もういい……」

「……っ？」

どこか見切りをつけたかのように冷たく言い放つ渦礼に、輝矢が少し眉をひそめて顔を上げる。

「そんなに使いたくないなら……」

ゆっくりと、倒れたままの輝矢に右手を向ける渦礼。

「使わなければならなくしてやろうっ……」

「……っ」

「“縦渦”っ」

――――バァァァァァァーーーンっっ！！――――

輝矢の倒れ込んでいる辺りの地面が突き上がると、その下から竜巻のような大渦が巻き起こり、倒れていた輝矢の体を包んだ。

「ううっ……！！」

縦渦の中で立った姿勢となり、塞がれた呼吸に苦しげな表情を見せる輝矢。

「くっ……うぅっ……！」
「さぁっ……水を使えっ……」

苦しむ輝矢に、渦礼が冷酷な表情で言い放つ。

「水を使わなければ死ぬぞっ……？」

脅迫の言葉を囁き、渦礼がそっと笑う。

「さぁっ……！」
「……っ」

渦礼の強要に、渦の中で厳しい表情を見せる輝矢。

――――ズキンっ……！ズキンっ……！――――

全身を包む水に、痛みが増す。

「だっ……めっ……」

自分の中の何かが、自分を蝕んでゆく。

「もうっ……」

薄れゆく意識が、呑み込まれる。

「……っ」

輝矢は、渦の中で深く瞳を閉じた。

「……。」

縦渦の中で目を閉じた輝矢を見て、渦礼が顔をしかめる。

「終わりか……くだらん……」

少し残念そうに肩を落とす渦礼。

「少し……期待し過ぎたようだな……」

そう呟き、渦礼が渦の中にいる輝矢に背を向けた。

その時。

「……っ！」

渦の中にいる輝矢が、赤く輝くその瞳を、大きく開いた。

――――バァァァァァァァァーーーーンっっっ！！！――――

「何っ……！？」

水の砕け散る音に、振り返る渦礼。

「なっ……！！」

「……っ」

渦礼の振り返った先には、渦礼の縦渦を内から破壊し、自由となった輝矢の姿があった。水飛沫の飛び散る中、輝矢は赤く染まった瞳を輝かせ、どこか怪しく笑う。

「……？」

その輝矢の笑みが、先ほどまでの輝矢とはどこか別人のように見え、渦礼は少し眉をひそめた。先ほどまでの輝矢も冷たい笑みを浮かべはしたが、今の輝矢が浮かべているのは、もっと冷酷で、見つめられただけで何故か怯えてしまうような、そんな笑み。

「貴様っ……一体っ……」

「私の水がぁ……見たいとか言ってたよ……ねぇっ？」

「……っ」

顔を上げた輝矢の視線に、渦礼の全身から噴き出すように汗が出た。意識ではなく、本能で感じる。渦礼の中の何かが、目の前にいる女の危険性を伝えているようだ。

「じゃあっ……見せてあげるっ」

「えっ……？」

輝矢がそう言って微笑み、軽く右手を上げた。その瞬間。

――――バァァァァァァァァーーーーンっっ！！！――――

「うっ……！」

渦礼の周囲のすべての水が、渦礼へと一気に襲いかかった。抵抗する間もなく、渦礼が水に呑まれる。

「うわあああああああああああっっっ！！！」

全身に水を受けた渦礼は、高々と舞い上がり、そして力なく海底に落下した。

「うっ……ううっ……」

地面へと倒れ込んだ渦礼が、苦しげな声を漏らす。

「なっ何だっ……？この力はっ……」

「アハハっ……」

「……っ」

聞こえてくる無邪気な笑い声に、渦礼が顎を地面に擦るようにして顔を上げる。

「アハハハハっ……！」

「……っ！」

そこにいるのは、海中に浮き上がり、何とも楽しげに笑う輝矢。
その輝矢の周囲の水は、渦を作り、輝矢を中心にして回る。その光景に、渦礼が目を見開く。

「海を……喰らっているっ……」

輝矢から放たれている何か禍々しいまでのオーラが、徐々に広がり、周囲をいや、この海全体の水を呑み込んでいくようであった。

「……っ」

その輝矢を見つめ、渦礼が表情を険しくする。

「化け……物っ……」

「アハハハハっ……！」

輝矢が、上方を高々と見上げ、笑う。

「アハハハハハハハっっ……！！」

輝矢の笑い声が、暗い海の底に響き渡った。

2015

第２９章　別離　☆１

――――もう少し……もう少しだけ……――――

「アハハハハハ！アハハハハハっ……！」

渦巻く海の中心で、無邪気に笑う赤い瞳の少女。変貌した輝矢から溢れ出る禍々しいオーラが、この広い海に伝わり、まるで呑み込んでいくかのようであった。

「……っ」

笑う輝矢を険しい表情で見つめる、傷だらけで倒れ込んだままの渦礼。

「あの女は一体っ……」

「……っ」

「うっ！？」

渦礼の目が、突然、輝矢の姿を見失う。

「消えっ……」

「アハハっ」

「何っ……！？」

すぐ近くから聞こえてくる笑い声に、渦礼が勢いよく顔を上げると、そこには倒れた渦礼のすぐ傍に立つ輝矢の姿があった。

「いつの間にっ……！」

移動もまったく見えなかったし、笑い声が聞こえるまで気配も感じなかった。

「ねぇ～っ？いつまで寝てるのぉ？」

「ううっ……！！」

輝矢が、倒れている渦礼の顔を踏みつける。渦礼が顔を歪め、苦しげな声を漏らした。

「もっと……遊ぼうよっ……？」

「うあっ……！」

囁くようにそう言って、渦礼の顔を踏みつけたまま、渦礼の右手を持ち上げる輝矢。腕を捻られた状態となり、渦礼がさらに表情を歪める。

「痛いぃ……？じゃあっ、痛くないようにしてあげるねっ……」

「うっ……！」

渦礼の右手を掴む手に、輝矢がさらに力を込めた。

――――ボキっ……！！――――

「うあああああああああああああああああああっっっ！！！」

辺りに響くほどに大きな、骨の折れる音。渦礼が悲痛な叫びをあげる。

「ううっ……」

「アハハハハっ……」

変な方向に曲がった渦礼の右手を離し、そっと微笑む輝矢。

「アハハハハハハハハハっ……！！」

輝矢は、無邪気に、残酷に、笑う。

「じゃあぁ～次はぁっ、左手っ……」

「クっ……！」

今度は渦礼の左手へと手を伸ばす輝矢に、渦礼が目付きを鋭くし、掴もうとした輝矢の手に、左手のひらを向けた。

「“単渦”っ……！」

「……っ」

――――バァァァァァァァァーーーーンっ！――――

渦礼の左手から放たれた渦が、輝矢を直撃した。

「うっ！ううっ……！」

渦の中に輝矢の姿が見えなくなっている間に、必死に体を立ち上がらせ、その場から逃げる渦礼。震える全身を何とか動かし、危機迫った表情で逃げる。

「アハハっ」
「……っ」

聞こえてくる笑い声に、必死に走りながらも後ろを振り返る渦礼。

「うあっ……！」
「アハハハハっ」

渦礼が振り返った先には、渦礼の放った渦を操作するように手元で回し、無傷で笑っている輝矢。その輝矢を見て、渦礼が表情を恐怖に歪める。

「うわあああああああっ！！」

怯えた表情で、逃げ去る渦礼。

「……逃げるんだぁっ」

遠ざかっていく渦礼を見つめ、輝矢が少し目を鋭くする。

「逃がさないよっ……？」

輝矢が渦礼の渦を一瞬で消し去り、逃げていく渦礼に右手を向けた。

「アハハっ」

――――ビュウウゥゥゥンっ！――――

輝矢の右手から、数本の水の刃が放たれる。

「ううっ……！うあああああああああああっ！！」

飛んできた水の刃に両足を切り裂かれ、激しく血を流した渦礼は、力なくその場に倒れ込んだ。

「うっ……ううっ……」

「なんで逃げるかなぁ～っ？もっと遊んでくれなくちゃあ……つまんないよっ……」

「ううっ……！」

折れていない左手を軸にして何とか体を起こし、微笑む輝矢に恐

怖する瞳を向ける渦礼。

「頼むっ……！殺さないでくれっ……！」

「……っ」

必死に左手を突き出す渦礼に、輝矢の笑みが消える。

「殺さないでくれっ……！！」

「……。」

懇願する渦礼を、まっすぐに見つめる輝矢。

「……アハハハハハハハっ！！」

「……っ！」

またも楽しげに笑い出した輝矢に、渦礼が涙の溜まった瞳を大きく見開く。

「それってぇっ、殺してほしいってことぉっ！？」

「ひいっ……！！」

右手を向ける輝矢に、渦礼の表情が凍りつく。

「大丈夫ぅ～っ！」

輝矢が渦礼に明るく微笑む。

「一瞬で死ねるからっ……」

その笑みが、冷たく変わった。

「……っ！」

――――バァァァァァァァーーーーンっっ！！！――――

輝矢の周囲から集まった水が、大波を形成して、一気に渦礼へと押し寄せる。

「うっ……！うわあああああああああああああっっっ！！！」

迫りくる大波に、どうすることもできず、ただただ必死に叫ぶ渦礼。

「アハハっ！アハハハハハっ……！」

楽しげに笑う輝矢。

「ハ……ハっ……？」

不意に、輝矢の笑みが止まる。

「……っ」

大波の迫りくる、渦礼のすぐ前へと立ちはだかる人物。

「……。」

それは、どこか悲しい目をした、桜時であった。

「うっ……！！」

現れた桜時に、大きく目を見開く輝矢。

「やっ……やめてっ……」

見開かれた輝矢の目が、赤色から、黒色へと変わる。口からこぼれ出る、震えた声。

「やめてえええええええええええええええええっっっ！！！！」

――――バァァァァァァァァーーーーンっっっ！！！――――

「うっ……！」

海全体を震わせるような衝撃と、打ちつける豪雨のように激しく飛び散る水飛沫に、桜時は思わず身を屈めた。桜時に迫ってきていた大波が、自ら砕け散ったようである。

「あっ……ああっ……うっ……」

「……っ」

桜時のすぐ後ろで、気絶する渦礼。張り詰めていた糸が切れたのであろう。そんな渦礼の姿を確認し、桜時は再び前を見た。

「輝……矢っ……」

不安げな面持ちで、輝矢の名を呟く桜時。やがて激しい水飛沫が収まり、徐々に前方の景色が明らかとなっていく。

「あっ……！」

見えてきた景色に、大きく目を見開く桜時。

「タローっ！！」

「……。」

そう、そこには、気を失っているのか、深く瞳を閉じた輝矢を抱え上げ、厳しい表情を見せている、太狼の姿があった。

「タローがっ……何で海にっ……」

「……っ」

桜時が戸惑うように見つめる中、太狼が瞳を閉じている輝矢の額に右手を当てた。

「……“玄印……封命”」

――――パァァァァァァァーーーーっっ！！――――――

輝矢に触れた太狼の手が黒い光を放ち、輝矢の全身を包み込んで、一瞬強く輝いた。かと思うと、次の瞬間には、その光は消えていた。やがて輝矢を覆っていた禍々しいオーラが消え、海に平穏が戻った。

「……？」

その様子を見つめ、少し混乱したような表情を見せる桜時。

「ごめんね……輝矢ちゃん……」

太狼が、眠る輝矢の頬に手を当て、少し悲しそうに目を細める。

「遅くなって……ごめんね……」

太狼は輝矢の頬を撫で、もう一度そっと謝った。

「……っ」

そんな輝矢と太狼の姿に、桜時は複雑な表情を見せていた。

その後、ヒラメの通報により駆けつけた、正刈銀汰率いるオトポリ・海底都市支部により、戦いは鎮圧。

鯨国主・蒸田帆盾は息子・泡美とともに降伏を宣言。亀国に和解を申し出、万亀はこれを了承した。

岩士や宇凪たちもオトポリによる救助を受けたが、渦礼だけは、傷を治しても直、激しく怯え、どうすることも出来ない状況であったという。

眠りについた輝矢は、太狼とともに陸へと戻り、桜時もそれに同行した。

戦いに疲れ、眠っていた門貴と由雉は、そのまま竜宮城へと運ばれ、その夜をゆっくりと休んだ。

こうして、玉手箱を巡る、海中での騒動は、やっと終焉を迎えた……。

2026

そして、翌日。龍国海岸。

「では……確かに陸までお送りしましたので……フフフっ……」

今日も不気味さ全開で微笑む一匹の巨大カメ。もちろん、万亀であった。

「おうっ、ありがとっ……」

「どうもっ……」

万亀の背から砂浜へと降り立ち、あからさまに元気のない様子で礼を言うモンキとユキジ。

「……。」

そんな二匹を見て、万亀が目を細める。

――――やめてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっっっ！！！――――

昨日、輝矢に起こった出来事は、モンキやユキジはもちろん、万亀にも伝わっていた。輝矢・桜時は、太狼とともに昨日のうちに陸

へと戻り、戦いで疲れ切っていたモンキとユキジのみが、一日竜宮城で休み、今日、万亀により陸へと送られてきたのであった。

「お土産っ、ありがとうなっ……」
「ヒラメさんたちにも……よろしくね……」

元気のまるでない状態で軽く手を振り、エセお菓子の家へと砂浜を歩きだしていくモンキとユキジ。

「……貴方がたが、そんな調子でどうするんです……？」
『えっ……？』

万亀の言葉に、二匹が立ち止まり、振り返る。

――――ボォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

白い煙に包まれ、人化する万亀。

「貴方がたは……輝矢さんの仲間……」

人の姿となった万亀が、いつもは不気味に輝く赤色の瞳を、まっすぐ二匹へ向けた。

「貴方がたが輝矢さんを支えなくて……誰が支えるんです……？」

『……っ』

万亀の言葉に、モンキとユキジが考え込むように俯く。

「うん、そうだね……ごめん……」
「ありがとうな、万亀っ……」
まだ本調子ではないが、少しだけ笑みを見せる二匹。
「輝矢さんによろしくお伝え下さい……フフフっ……」
「ああっ」
「うん」
不気味に微笑んだ万亀の言葉に頷き、モンキとユキジはその場から立ち去っていった。
「……。」
二匹が去ると、万亀がどこか気難しい表情を見せる。
「万亀ぃ～っ！見て見てぇ～っ！！」
そこへ駆けてくる、ちゃっかり付いてきていたらしき浦島。こちらはいつも通り、陽気である。
「タコ釣ったっ！タコぉっ！」
釣り竿にかかった大きなタコを持ち上げながら、浦島が嬉しそうに万亀の元へと駆け寄っていく。
「今日はタコヤキにしようなぁ～っ！万亀っ！」
「……。」

「……？万亀ぃ～っ？」

まったく反応のない万亀に、浦島が首をかしげ、万亀の顔を覗き込む。

「どうしたんだよぉ？万亀ぃ～怖い顔してさぁ～っ」
「水を……自在に操る力……」
「へっ？」

浦島が目を丸くして見つめる中、万亀はどこか遠い目で呟く。

「あの人は……もしかしたら……」

万亀がそっと眉をひそめる。

「万亀ぃ～っ？」
「えっ……？あっああっ、そうね……玉之介……」

やっと覗き込む浦島に気づいた様子の万亀が、浦島に穏やかな笑みを向ける。

「今日はイカ焼きにしましょう……フフフ……」
「ええっ！？俺っ、タコしか釣ってねぇーよぉっ！？」

そんなやり取りをしながら、万亀と浦島は、平和となった海へと戻っていった。

龍国・オトポリ本部。隊員鍛練塔。

「ゴンさんっ！」

少し慌てた様子で鍛練室へと駆け込んできたのは、羊スケであった。

「さっきっ！銀汰さんから連絡があってっ……！」
「もう聞いた」
「ふぇっ？」

駆け込んできた羊スケにそう言い放ち、羊スケの横を通って鍛練室を出ていく、今日も目付きの悪いゴン。その表情は、いつも険しいが、いつもより険しい。

「ちょっ……！どこ行くんスかぁっ！？ゴンさんっ！」

廊下を足早に歩いていくゴンを、必死に追いかける羊スケ。

「どこに行こうが俺の勝手だろうがっ」
「待って下さいよぉ～っ！」

追いかけてくる羊スケを気にする素振りなく、ゴンが鍛練塔を出

た。

「輝矢ならまだ起きてないわよっ？」
「あっ？」

鍛練塔を出たゴンが、横から聞こえてきた声に、通り過ぎた後に振り返る。

「リンゴっ」

鍛練塔の入口横に立っていたのは、リンゴであった。

「ちなみにお見舞いに行っても、太狼さんに“面会謝絶ぅ～”って笑顔で断られるからっ」
「んだよっ？もう行ったのか？」

リンゴの口振りは、まさに今、見舞いに行って太狼に断られてきたといった感じの口振りであった。そんなリンゴを見て、ゴンが少し顔をしかめて問いかける。

「お前、結構ヒマなんだな」
「うっさいわねっ！！アンタにだけは言われたくないわよっ！！」

小バカにしたように言い放つゴンに、リンゴが勢いよく怒鳴りあげる。

「ったくっ……！」
「でもぉ～っ、輝矢さんに一体、何があったんスかねぇ～っ？」

「……っ」

戸惑うように呟いた羊スケの言葉に、怒っていたリンゴがすぐにその表情を曇らせる。

「……御伽砂漠の一件から、何か……色んなものが動き出してるような、そんな感じね……」

浮かない表情で呟くリンゴ。

「いやっ……」

「……っ？」

リンゴの言葉を否定するゴンの声に、リンゴは少し顔を上げた。

「もっと前から動き出してるさ……」

ゴンが厳しい表情を見せる。

「“世界は”、な……」

「……。」

鋭い目で呟くゴンに、リンゴは考え込むように深く俯いた。

オトポリ・長官室。

「……以上で、今回の件の報告を終わります」

読み上げていた資料を下ろし、そう言うのは、オトポリの総長・正刈金汰。人化した姿で黒制服をビシっと決め、黒クマとは思えない勇ましさを感じさせる。

「どうですっ！？我が弟・銀汰の報告書はっ！」

一気に緩む、金汰の勇ましい顔。

「すっばらしいでしょっ！？すっばらしいでしょっ！？」

「ああぁ～わかった、わかった」

弟の報告書をゴリ押ししてくる兄バカ丸出しの金汰に、呆れた表情を見せたのは、青守座黒。龍国主にしてこのオトポリの長官である。

「それにしても……」

金汰に背を向け、長官室の窓から、龍国の街を見渡す座黒。

「竹取輝矢……か……」

座黒が遠い目をして、輝矢の名を呟く。

「お前はあの少女を……どうするつもりなのだ……？」

気難しい表情で問いかける座黒。

「太狼……」

第２９章　別離　☆２

その頃、エセお菓子の家こと桃原家。二階、輝矢の部屋。

「……。」

ベッドで深い眠りについている輝矢を、その横の椅子に座り、心配そうな表情で見つめる桜時。

「輝矢っ……」

桜時が、輝矢の名を呼ぶ。

――――――・・・・・・・

暗い、暗い海の底。光さえも届かない、重苦しい水の世界。

「うっ！ううっ……！」

蝕まれる。呑み込まれる。深い深い水の奥底に、意識が沈んでいく。

「アハハハハハハハっ！！」

そして生まれる、自分の中の赤い狂気。

「アハハハハハっ！！アハハハハハっ……！！」

無邪気で残酷な笑みが、意識を、体を、支配する。

「輝矢っ……」

聞き慣れた、優しい声。

「輝矢っ……」

沈む意識の中で、その声を必死に聞き分ける。

「どうしてっ……」

振り返った先に、見えるもの。

「どうしてっ……俺を……殺したの……？」

それは、血塗れとなって問いかける、桜時。

「……っっ！！！」

見える悪夢に、大きく目を見開き、輝矢が勢いよくベッドの上で起き上がった。

「あっ……」

急に起き上がった輝矢に、少し驚いた表情を見せる、横に座っていた桜時。

「ハァっ……ハァっ……ハァっ……」

「輝矢……」

両手で自分の肩を抱き、乱れた呼吸をする輝矢に、桜時が名を呟く。

「良かった……」

輝矢が目覚めたことに安心し、ホッとした笑みを浮かべる桜時。

「やっと気がつっ……」

「タローっ……？」

「えっ……？」

桜時の言葉を遮り、弱々しく太狼の名を呟く輝矢。そんな輝矢に、桜時が少し戸惑うように声を漏らす。

「輝っ……」

「タローっ……タローはっ……？」

「……っ」

桜時の方を振り向き、太狼の居場所を問いかけるかのように、太狼の名を口にする輝矢。その瞳は虚ろで、いつもの輝矢の力強さはまったくなかった。

「タローっ……？タローっ？」

布団から体を出し、部屋を必死に見回して、太狼の姿を探す輝矢。

「かっ輝矢っ？どうしたんだよっ？」

そんな輝矢に、戸惑いながら問いかける桜時。

「タローっ……？タローっ……！！」

「おっおいっ！」

ベッドを飛び出していこうとした輝矢を、桜時が思わず手を掴んで止める。

「ちったぁ落ち着けよっ！タローなら普通に下にっ……！」

「タローっ！！タローっ！！！」

桜時の言葉も聞かず、必死に叫び、手を動かして、桜時の手を振り払おうとする輝矢。

「輝矢っ……！！」

「タローっ！！！」

「なぁにぃ～っ？大きな声出してぇ～」

『……っ』

その時、部屋の扉が開き、少し顔をしかめた太狼が入って来た。

太狼の姿に、輝矢が大きく目を見開く。

「ご近所迷惑でっ……」
「タローっっ！！！」
「……っ」

掴まれていた桜時の手を勢いよく振り払い、入って来た太狼の元へと駆け込んでいく輝矢。横を駆け抜けていく輝矢を、桜時が開いた目で追う。

「あっれぇ～？輝矢ちゃん、起きっ……」
「タローっ！！」
「うわぁっ！」

飛び込んできた輝矢に体を持っていかれ、太狼が部屋の外の廊下へと、輝矢ごと倒れ込む。

「痛たたたたたぁ～っ」

廊下の壁に打った頭を押さえながら、ゆっくりと起き上がる太狼。

「もぉ～っ、輝矢ちゃん、危なっ……」
「タローっ……タローっ……！！」
「……っ」

太狼に強くしがみ付き、その顔を胸に埋めて、必死に太狼の名を呼ぶ輝矢。そんな輝矢の姿に、太狼が少し目を細める。

「大丈夫だよっ……輝矢ちゃんっ……」

太狼は優しく微笑み、そっと輝矢を抱き締める。

「僕はここにいる……」

太狼が輝矢の耳元でそっと呟く。

「僕は……輝矢ちゃんの傍にいる……」

「……っ」

そっと瞳を伏せる太狼。太狼の声に安心した表情を見せた輝矢も、その腕の中でそっと瞳を閉じた。

「あっ……」

そんな二人に、少し右手を伸ばす桜時。

「……っ」

しかし、その手はすぐに下ろされ、桜時がゆっくりと俯いていく。

「……。」

太狼の腕の中で震えるその少女は、桜時の知っている輝矢ではなかった。

「ふんふふぅ～んっ♪お掃除っ、お掃除ぃ～っ♪」

エセお菓子の家の一階では、ヘンゼルがホウキ片手にリビングの掃除をしていた。

「私は乙女ぇ～っ♪キレイ好きぃ～っ♪」

ヘンゼルがオカマだと知っている者が見たら、相当気持ち悪く感じる歌を歌いながら、踊るように体を動かして、リビングをキレイにしていくヘンゼル。

「んっ？」

「……。」

「あっ！ハチさぁ～んっ！」

二階からゆっくりと降りてくる桜時に、ヘンゼルが掃除の手を止めて声をかける。

「ねぇっ、ハチさんっ！今日は門貴様っ！とまぁ由雉も……帰ってくることですしっ、御馳走にしようと思うのですけれどぉ～っ」

「……。」

深く俯いたままの桜時に、キャピっとしたオーラ全開で近寄って

いくヘンゼル。

「ご希望のお料理とかありますぅ～っ？主に門貴様の好物でぇっ！」
「別に……何でもいい……」
「そうですわよねぇ～っ！門貴様ならきっと、“私の作った料理なら何でもいい”って言って下さっ……！」
「……。」
「あらっ？」

妄想を膨らませていたヘンゼルが、玄関へと歩いていく桜時に首をかしげる。

「お出掛けですのぉ～っ？ハチさんっ」
「ちょっと散歩……」
「いってらっしゃいませぇ～っ！」

振り返りもせずにそう言って、玄関から出て行ってしまう桜時を、ヘンゼルが明るく手を振って送り出す。

「……。」

扉が閉まった途端に、その表情を曇らせるヘンゼル。

「あれぇ～？誰か出掛けましたのぉ？お兄様っ」

その時、扉の閉まる音を聞きつけたのか、グレーテルがキッチンから顔を出した。

「大丈夫かしらっ……？」

「えっ？」

首をかしげるヘンゼルに、首をかしげるグレーテル。

「壊れてしまうそうな……お顔でしたわ……」

ヘンゼルは少し目を細め、そっと呟いた。

「これで良しぃ～っと」

「……。」

輝矢を再びベッドに寝かせ、満足した様子で笑う太狼。横たわった輝矢は、先ほどよりは落ち着いているが、まだどこか、浮かない表情を見せていた。

「輝矢ちゃん、寒くないぃ～っ？眠れなそうだったら、甘々ぁ～なダルダルココアでもっ……！」

「タローっ……」

「んん～っ？」

弱々しく呼びかける輝矢に、太狼が軽い笑みを向けた。

「私は……いつか……」

輝矢が天井を見つめ、呟く。

「いつか……ハチさえも……殺すのでしょうか……？」

「……っ」

その輝矢の問いかけに、太狼の笑みが少し止まった。

「眠りなぁっ、輝矢ちゃんっ」

「……。」

再び笑みを動かした太狼は、輝矢のその問いかけに答えることなく、横たわる輝矢の前髪をそっと撫でた。

「ゆっくり休めば……悪夢も覚めるよ……」

「タローっ……」

輝矢に、優しい笑みを向ける太狼。

「……はい」

輝矢は頷きはしたが、その浮かない表情を変えることはなかった。

「……。」

散歩に出た桜時は、深く俯き、前も見ないで、ゆっくりと進む自分の足ばかりを見ていた。

――――タローっ……？――――

弱々しい顔。震えた声。泣くかと思った。あの、輝矢が。

「俺っ……俺は……」

伸ばそうとして、下ろした右手を、桜時が見つめる。

「俺は……」

「あっ！桜時さんっ！」

「……っ？」

呼ばれる自分の名に、桜時はゆっくりと顔を上げた。

「こっこここっ……こここんにちはっ！」

「イチゴ？」

桜時が顔を上げた先に立っていたのは、少し頬を赤く染め、妙に

上ずった声で挨拶をするイチゴであった。両手で抱えた籠には、美味しそうな苺が大量に入っている。

「ちょっ丁度良かったですっ……今、苺を持って輝矢さんのお見舞いに行くところだったんですっ……」

「……そう」

「……？」

力なく答える桜時に、笑顔を見せていたイチゴが、戸惑うような表情で桜時を見る。

「桜時さっ……」

「輝矢なら、さっき目ぇ覚めたからっ……今行けば、会えるんじゃないかな……」

「あっ……はっはい」

イチゴの顔を見ようともせず、そう言って少し微笑む桜時。

「ありがとうございます……」

そんな桜時に戸惑いながらも、イチゴが礼を言って頭を下げる。

「じゃあっ……」

「あっ……」

イチゴが呼び止める間もなく、どこか逃げるようにしてその場を歩き去っていってしまう桜時。

「桜時……さん……？」

遠ざかっていく桜時の背中を見つめ、イチゴは少し首をかしげた。

桃原家。輝矢の部屋・外。

「ふぅ～っ」

輝矢が眠りについたのを確認し、太狼が輝矢の部屋から出てくる。
輝矢の部屋を出た太狼は、どこか疲れたように深々と肩を落とした。

「タロー様ぁ～っ！」
「んん～っ？」

一階から聞こえてくるヘンゼルの声に、廊下を歩きながら答える太狼。

「お客様ですわぁ～っ！」
「はいはぁ～いっ」

太狼が返事をしながら、少し足早になって階段を降りる。

「はぁ～いっ、お待たせしましたぁ～っ」
「あっ……こっこっこっこっこんにちはっ」
「あっれぇ～っ？イチゴちゃんじゃなぁ～いっ」

太狼が一階へと降りると、玄関先にはイチゴが立っていた。イチゴを見て、太狼が爽やかな笑顔を見せる。

「ひっさしぶりだねぇ～っ」
「はっはいっ……」

歩み寄って来る太狼に、控え目な笑顔を向けるイチゴ。

「あっあのぉ～っ……」
「んん～っ？」
「輝矢さん……は？」
「ああ、ごっめぇ～んっ。今、また眠っちゃったとこなんだぁ～っ」
「あっ、そうですか……」

太狼の言葉に、イチゴが残念そうに俯く。

「まぁ上がって上がってぇ～」
「あっいえ、もうここで。仕事もありますから……」
「そぉ～おっ？」

か細い声で断るイチゴ。

「あと、これっ……」
「んっ？おおぉっ！！」

イチゴが差し出した、籠一杯の苺に、太狼が一気に目を輝かせる。

「うちの畑で採れたものです……」
「あっりがとぉ～っ！ヘンゼルぅ～っ！練乳～っ！」
「はぁ～いっ！」

玄関に充満する苺の甘い香りに、かなり酔いしれた様子の甘党・太狼。ヘンゼルに練乳を持って来させ、早速食べる気満々のようである。

「皆さんで……食べて下さい……」
「うん～っ！一人で食べるねぇ～っ！」
「えっ……？」

イチゴの言葉はまるで無視の太狼に、イチゴが少し目を丸くする。

「あっあぁ、そうだっ、あとっ」
「んっ？」

何かを思い出したように声を出すイチゴに、早速苺を頬張っている太狼が顔を上げる。

「お父様が……輝矢さんの様子が落ち着いたら、オトポリ本部まで来るようにと……」
「座黒さんがっ？」

イチゴの言葉に、苺を食べる手を止める太狼。

「そうっ……」

どこか鋭い瞳を見せ、太狼は再び苺を口の中へと入れた。

その日、夕方。桃原家。

『だっはぁぁぁぁぁぁぁぁ〜〜〜っ』

玄関から入って来たのは、かなり疲れきった表情のモンキとユキジであった。

「おかえりなさいませぇ〜っ！」

二匹を出迎えるように、キッチンから出てくるグレーテル。

「随分と遅かったのですねぇ〜っ！亀国の方のお話では、朝一番に送っていくということでしたのにぃ〜」

「ホント、信じられないよっ。あの亀姫っ」

グレーテルの言葉に、物凄く不機嫌な表情を見せるユキジ。

「龍国は龍国でもこっから十キロは離れた海岸で降ろされてもてさぁ～っ！そっから歩いてきてんっ」
「まぁっ」
不機嫌なユキジの代わりに事情を説明するモンキ。モンキの話に、グレーテルが驚いたような表情を見せる。
「そんな無理して歩かなくても、帰って来なくて良かったのにぃ～っ」
『……。』
リビングから聞こえてくる陽気な声に、モンキとユキジが同時に表情を引きつる。
「あぁ～んっ！んん～っ！甘ぁ～いっ！」
リビングのソファーの上には、真っ赤な苺を頬張り、とろけそうな顔を見せている太狼の姿があった。イチゴが持ってきた苺である。太狼の前に置かれた籠の中の苺は、もうすでに半分の量まで減っていた。
「そういやコレ、竜宮城のお土産っ」
「何々～っ？海の海産物で作ったパフェ～っ？」
「そんな不味そうなもの、入ってるわけないでしょ……？」
モンキがグレーテルにお土産の袋を渡すと、太狼が興味津津にリビングからやってきた。目を輝かせる太狼に、呆れた表情を向けるユキジ。

「えぇ～っと……」

太狼の期待が膨らむ中、グレーテルが袋を開ける。

「“亀は万年・激苦・良薬ジュースの詰め合わせ”」

「……。」

お土産の名をグレーテルが読み上げると、太狼の表情が止まった。

「もう一回海行って、お土産、パフェと交換してきてっ」

『誰が行くかぁぁぁっ!!』

爽やか笑顔で言い放つ太狼に、モンキとユキジは勢いよく反発した。

「ったく、人がっ……ってかキジが疲れて帰ってきてるってゆうのにさぁ～っ」

「せやせやぁっ!ちったぁ歓迎せいっ!」

「門貴様ぁぁぁぁ～～～っ!!ウェルカムっ!ウィーアースウィートホームっっ!!」

「ぎゃあああああっ!!お前の歓迎はいらん～っ!!」

キッチンからヘンゼルが飛び出してくると、モンキが勢いよく逃げ去る。

「ぎゃあああああああああっ!!」

「そういえば輝矢と桜時はぁ?」

逃げ惑うモンキを無視して、グレーテルに問いかけるユキジ。

「ハチさんは散歩に出られて、それをお伝えすると輝矢様もお出掛けにっ」
「えっ？二人ともいないの？」
「はいっ」
「ったく、人がっ……ってかキジがせっかく帰ってきたっていうのにぃ～」

大きく頷くグレーテルに、ユキジはその表情を少ししかめた。

第２９章　別離　☆３

「……。」

桜時は砂浜に座り込み、海を見つめていた。午前中に出掛けたというのに、もう夕日が地平線に沈もうとしている。

いつの間にこんなに時間が経ったのか、何かをしていた記憶はまったくない。

ただ、色々なことを考えていた。

そう、色々なことを。

――――とっとと終わらせて、とっとと帰りましょうね、ハチ――――

――――ねぇハチ、やっぱり帰りません？――――

――――さて、めでたしめでたしということで、とっとと帰りましょうか――――

「そういやアイツっ……すっげぇ帰りたがってたなっ……」

何度も“帰ろう”と口にした輝矢を、どうして不思議に思わなかったんだろう。

――――大丈夫……ですから……――――

初めて不安を見せた輝矢に、どうして気付いてあげられなかったんだろう。

「気付いてやれなかったのはっ……俺なのにっ……」

――――タローっ……？――――

太狼の名を呼んだ輝矢に、どうしてこんなにも心がザワつくんだろう。

「……っ」

桜時が数回首を横に振り、立てた膝に顔を埋める。

「ハチっ」
「……っ」

その声に、桜時が大きく目を見開いて、すぐさま顔を上げる。振り返らなくてもわかる、その人だけが呼ぶ桜時のもう一つの名。

「輝矢っ……」
「ハチっ」

道沿いから、桜時の座る砂浜へとやってくるのは、穏やかな笑みを浮かべた輝矢であった。

「やはりここでしたかぁ～最近、ハチは砂浜にばかりいますねぇ」

「……。」

いつもと同じ落ち着いた口調。一点の曇りもない、強い瞳に、穏やかな笑顔。先ほど、太狼の腕の中で震えていた少女とは、まったくの別人であった。

「今度はザリガニにでも生まれてきたいのですかぁ？」

トボけた口調でそう言いながら、輝矢が桜時のすぐ横に立つ。

「ああ、でもサソリに生まれるのはやめておいた方がっ……」

「輝矢っ……」

「……っ」

俯いたままの桜時が輝矢の名を呼ぶと、輝矢はその陽気な言葉を止め、少し下を向いた。

「……すみません……」

輝矢がポツリと謝罪の言葉を漏らす。

「先程はっ……お見苦しいところをお見せしました……」

輝矢が夕日の沈む海を見つめながら、どこか曇った笑みで呟く。

「……忘れて下さいっ」
「えっ……？」
思いがけない輝矢の言葉に、俯いていた桜時が顔を上げる。
「私、ちょっとどうかしてたんですっ。あれですよ、“弱ガス”の効果がまだ残ってたんですよっ、きっとっ」
「輝矢……？」
無理やり作ったような笑みで、ガラにもなく不自然に言葉を繋げ、見上げる桜時の目に、一瞬も目を合わそうとしない輝矢。
「輝矢っ……！」
「だから忘れて下さいっ」
「……っ」
思わず立ち上がった桜時に、輝矢は強制するかのように強く言葉を放った。桜時が目を細める。
「さぁっ、早く帰りましょうっ。そろそろ晩御飯がっ……」
「誤魔化すなよっ……！！」
「……っ」
立ち去ろうとした輝矢の手を、桜時が力強く掴み止める。
「何だよっ！？何を隠してるんだよっ！？」
大きく声を怒鳴りあげ、少し責めるように輝矢に問いかける桜時。

「わっ私は別に、隠してなんてっ……」
「嘘つけよっ！！」
桜時から顔を背けたまま話す輝矢に、桜時がすぐさま反論する。
「俺はっ……俺は見たんだっ……！」
――――アハハハハハハっ……！！――――
無邪気に、残酷に微笑む輝矢を。必死に命乞いをする渦礼を、平気で殺そうとした輝矢を。
「お前っ！アイツを殺そうとしてたじゃないかっ……！！」
「……っ！」
桜時の言葉に、大きく目を見開く輝矢。
――――輝矢……――――
悪夢を見た。
――――どうして……俺を……殺したの……？――――
狂気に呑み込まれた自分が、桜時を殺す悪夢を見た。

「……っ」

輝矢が少し怯えるように自分の服を握り締め、深々と俯く。

「何かあるんだろっ!?言えよっ!!」

俯いた輝矢に、桜時は強く問いかける。

「言えよっ……!!」

責めるように問いかける桜時も、ひどく辛そうな表情を見せていた。

「……言えませんっ……」

「……っ」

ポツリと落とされた輝矢の答えに、桜時が思わず、掴んでいた輝矢の手を離す。

「なっ……」

――――タローっ……?――――

太狼には、あんなに必死に頼っていたのに。

――――タローっ!!――――

太狼の前では、あんなに弱く震えていたのに。

輝矢から離れた手を、強く握りしめる桜時。

「何でっ……」

「何でっ……！」

「ハチには関係のないことですっ！！」

「……っ」

問いかけようとした桜時に、輝矢は強い瞳を向け、今までにないくらいに声を張り上げて叫んだ。輝矢の強い瞳を見つめ、桜時が表情を曇らせていく。

「かっ関係ないって……」

輝矢から少し視線を落とし、動揺を隠せない声で呟く桜時。

「何だよっ！？それっ！！」

再び顔を上げた桜時が、刺すような瞳で輝矢を見る。

「俺たちは仲間っ……！」

「私はっ……！」

「……っ」

遮る輝矢の声に、桜時が思わず言葉を止める。

「私はっ……！アナタを“仲間だ”といった覚えは一度もありませんっ！！」

「……っ！」

その輝矢の言葉に、桜時が大きく目を見開く。

「あっ……」

言ったすぐ後、咄嗟に手で口を覆う輝矢。

「そう……だよなっ……」

「……っ？」

小さく震えた声を漏らした桜時に、口を押さえていた輝矢が、ふと顔を上げる。

「元はと言えば俺がっ……お前の旅に勝手に付いてきただけだもんなっ……」

辛さの伝わってくる、無理やり作られた笑みで笑いながら、桜時が震える声を繋げる。

「……。」

そんな桜時の言葉を、俯いたまま、唇を噛みしめて聞く輝矢。

「わかった……」

桜時が一歩後ろに下がり、輝矢との距離をあける。

「もういい……」

「……っ」

背を向けて駆け出していく桜時に、輝矢が思わず顔を上げる。

「あっ！おぉ～いっ！」

「おったおったぁ～っ！」

そこへやって来るのは、大きく手を振ったモンキとユキジの二匹。

「何、海辺で青春しとんねぇ～んっ！もうすぐ晩飯っ……！」

「……っ」

「あっ？」

からかいの笑みを浮かべたモンキの横を勢いよく素通りし、桜時がどこかへと駆けていってしまう。

「ちょっ……！」

――――ボォォォォォ～～～ンっ！――――

「イヌコロぉぉぉ～っ！？」

モンキが人化し、走り去っていく桜時を、少し戸惑う表情で追いかける。

「……。」

遠ざかっていく桜時と門貴を、気難しい表情で見つめるユキジ。

「輝矢……？」

「……っ」

問いかけるように振り返ったユキジに、輝矢はそっと俯いた。

「ハァっ……！ハァっ……！ハァっ……！」

龍国の海岸線沿いを、必死に走る桜時。

「ハァっ……！ハァっ……！」

――――私はっ……！アナタを“仲間だ”といった覚えは一度もありませんっ！！――――

「うっ……！」

思い出される輝矢の言葉に、桜時が足を止める。

「ううっ……」

込み上げてくる痛みに唇を噛み締め、桜時がその場に力なく膝をつく。

「うっ……」

「……。」

「えっ……？」

俯いていく桜時の前に差し出された、一本の細く白い手。

「……っ」

桜時がゆっくりと顔を上げる。

「お前……はっ……」
「……。」
桜時に手を差し出していたのは、短い白髪に紫色の瞳の少女。
「あの時……の……」
――――我々は貴方の仲間……――――
その少女は、サソリとの戦いの後に桜時の前に現れた、あの“犬人”の少女であった。少女の後方には、あの時もいた長身の男が立っている。
「おわかりになったのでは……？」
「えっ……？」
少女の問いかけに、桜時は戸惑うように聞き返す。
「ここが……貴方の居場所ではないことが……」
「……っ」
少女の言葉に、桜時はまるで胸を突き刺されたような、そんな気持ちになり、そっと表情を曇らせた。
――――ハチっ……――――

居場所だと思っていた。

――――ハチには関係のないことですっ！！――――

思って、いたのに。

「……。」

力なく俯く桜時。

「貴方の本当の居場所は……我々が知っています……」

「えっ……？」

少女の言葉に、桜時が戸惑いながら顔を上げる。

「そこへ行けば……貴方が辛い想いをすることは、もう二度とありません……」

「……。」

少女の瞳が、まっすぐに桜時を見つめる。鋭くて、強くて、でもどこか優しい瞳。偽りには見えないこの瞳が、桜時の心を揺れ動かす。

「我々とともに行きましょう……」

そう言って、少女が改めて桜時に手を差し出す。

「……っ」

桜時が少しだけ右手を上げる。

――――桜時っ！――――

――――イヌコロぉっ！――――

――――ハチ公っ！――――

「……っ！」

思い出される門貴や由雉、ゴンの顔に、上がった右手が少し止まる。

――――ハチっ……――――

「……。」

しかし、思い出される輝矢の笑顔に、桜時は再び悲しい顔となった。

「……っ」

桜時の右手が、差し出された少女の手を取る。

「では……参りましょう……」

手を取った桜時を見て、少し満足した表情で笑う少女。

「おぉ～いっ！桜時ぃぃぃ～～～っっ！！」

『……っ』

聞こえてくる声に、少女と男が、鋭い表情となって振り向く。

「どぉ～こ行くねんっ！って……あっ？」

「門貴っ」

そこに現れたのは、桜時を追いかけてきたらしき門貴であった。

門貴が桜時の傍にいる少女と男の姿を見て、その表情を曇らせる。

「何やぁ～っ？お前らぁっ！」

すぐに如意棒を出し、身構える門貴。

「……っ」

「待って下さい、犬仁（いぬひと）」

背中に背負っている槍へ手を伸ばそうとした少女を、“犬仁”と呼んで男が止める。

「犬義(いぬよし)っ……」

犬仁と呼ばれた少女が、男の方を見る。

「俺がやります……」

そう言ってどこか不適に笑い、門貴の方へと一歩出る犬義。

「まっ待てっ！アイツに手を出っ……！うっ……！！」

「桜時っ……！」

門貴の方へと出た犬義を止めようと身を乗り出した桜時であったが、犬仁の手刀が桜時の後頸を攻撃し、桜時は意識を失った。

「……。」

深く瞳を閉じた桜時を、小柄ながら軽々と持ち上げる犬仁。

「殺すなよ……」

「努力はしましょう……」

犬仁の言葉に、そっと微笑む犬義。

「……っ」

犬義の答えに少し肩を落とすと、犬仁は桜時を抱えたまま高々と飛び上がり、大きなジャンプを繰り返すようにして、その場から去っていく。

「あっ！ちょっ……！待っ……！」
「聞いてなかったか……？」
「うっ……！」

追いかけようとした門貴の前に立つ、犬義。

「お前の相手は俺だ……」
「クっ……！」

門貴が表情を険しくし、犬義へ向けて如意棒を構える。

「お前ら、何者やっ！？桜時をどこへ連れてったっ！？」
「教えてやろう……」

微笑みながら、犬義が腰に差してある大剣を抜く。

「俺に勝てたなら……」
「……っ臨むところやっ！」

挑発するような犬義の言葉に、門貴は少し楽しげな笑みで答えた。

『……っ！』

それぞれ構えた門貴と犬義が、同時に相手に向かって飛び出して行った。

「遅いですわねぇ～っ！門貴様っ！とハチさんっ」

明らかにハチをおまけ扱いしながらも、キッチンから顔を出し、今か今かと玄関を見つめ続けるヘンゼル。すでに夕食の時間も過ぎ、ダイニングには少し冷えた御馳走が並んでいた。

「まったくぅ～どこをほっつき歩いてるんだかっ」

箸を片手に、少し怒ったような声を出す太狼。

「こうなったら晩御飯抜きだぁっ！」

「それじゃ待ってる意味なくない……？」

見当違いなバツを言いだす太狼に、隣に座るユキジが呆れた表情を向けた。

「でも本当に遅いですわねぇ～どうかなさったのでしょうかぁ？」

「……。」

首をかしげるグレーテルの横で、辛そうな表情で俯く輝矢。

「……っ」

そんな輝矢を見つめ、ユキジは少し目を細めた。

――――ガチャっ……――――

『……っ』

「門貴様ぁぁっっ！！？」

扉の開く音に、皆が顔を上げ、ヘンゼルが玄関へと飛び出していく。

「門貴様ぁぁっ！！」

開いていく扉の向こうに、門貴の姿。ヘンゼルが嬉しそうに笑う。

「門貴さっ……！」

「……っ」

「えっ……？」

完全に扉が開いた途端に、ヘンゼルの方へと門貴が倒れ込んでくる。

「門貴様っ！やだっ！玄関先で恥ずかしっ……！……っ？」

少し頬を赤く染めながら、倒れ込んできた門貴をしっかりと受けとめるヘンゼル。しかし、門貴の体に触れたヘンゼルの手に、何か液体のつく感触があった。

「えっ……？」

ヘンゼルの手についたのは、真っ赤な血。

「……っ」

ヘンゼルが大きく目を見開き、倒れ込んだ門貴を見る。門貴は全身を斬り裂かれ、大量に血を流していた。その体は、もうすでに冷たくなりかけている。

「門貴様っ……！！」

「どうしたのぉ？」

「何々～？」

大きく響いたヘンゼルの声を聞きつけ、輝矢やユキジ、太狼たちが玄関へと出てくる。

『なっ……！！』

出てきた皆も、ヘンゼルに倒れかかっている血だらけの門貴の姿に、大きく目を見開いた。

「サルっ……！！」
「門貴っ……！」

思わず駆け寄る、輝矢とユキジ。

「グレーテルっ！ソファーを寝台にしてっ！ヘンゼルっ！リビングに運んでっ！」
『はっはいっ！！』

太狼の指示に大きく頷き、ヘンゼルとグレーテルがそれぞれ、素早く動く。

「いっ今っ！癒羽をっ……！」

ヘンゼルに抱えられ、リビングへと運ばれていく門貴の横に付きながら、ユキジが慌てた様子で黄色い羽根を取り出す。

「かっ……ぐやんっ……？」

薄く瞳を開け、小さな声で輝矢を呼ぶ門貴。

「門貴っ……！？」

輝矢がヘンゼルの横に付きながら、門貴の顔を覗き込む。

「黙っていなさいっ！今、キジが羽根をっ……！」

「輝矢んっ……ごめんっ……」

「えっ……？」

突然謝る門貴に、輝矢が戸惑いの表情を見せる。

「桜時っ……桜時をっ……」

「……っ」

輝矢が眉をひそめ、弱々しい門貴の声に必死に耳を傾ける。

「……。」

「ハチ君がどうしたんだいっ？」

「……っ」

桜時の名を口にすることを躊躇う輝矢に代わり、横から太狼が問いかけた。

「変な奴らにっ……連れてかれっ……てっ……」

「えっ……？」

『……っ！』

門貴の言葉に、皆が表情を険しくする。

「ごめんっ……輝矢んっ……」

傷つき、ボロボロの門貴が、輝矢に何とも申し訳なさそうな顔を見せる。

「俺っ……ごめんっ……うっ……」

「門貴様っ！！」
「早く寝かせてっ！キジくんっ！治療をっ！」
「うっうんっ！！」

太狼が必死に指示を飛ばし、ヘンゼルがソファーに門貴を寝かせ、ユキジが門貴に癒羽を施す。

「……。」

その様子を見ながら、茫然と立ち尽くす輝矢。

「ハチっ……？」

別離は、ひどく突然に、二人を引き裂いた。

第２９章　別離　☆３（後書き）

２９章終わりです。

第３０章　堕とされし大国　★１（前書き）

ついに３０章。
ついにハチの出生の秘密が明らかに。

第３０章　堕とされし大国　★１

龍国・桃原家リビング。午前九時。

「……。」

由雉は、カーテンを閉め切った薄暗いリビングの中で、ソファーで眠る門貴を、向かいのソファーに座り、厳しい表情で見つめていた。

“桜時が連れていかれた”と言い、大怪我を負って戻って来た門貴は、由雉の癒羽で一命を取り留めたが、あまりにひどい傷であったことと、死の一歩手前の状態であったため体力が残っていなかったことにより、傷の治りは遅く、まだ意識は戻っていなかった。

――――コン、コン――――

「……っ？」

ノックの音に、由雉が振り向く。

「コーヒーをお持ちしました」

リビングへと入って来たのは、右手に持つおぼんにコーヒーを乗せ、力ない笑みを浮かべたヘンゼルであった。

「ありがとっ」

「いえ」

由雉の礼に少し微笑み、ヘンゼルがテーブルにコーヒーを置く。

「私がお代わりしますから、由雉さんも少しは休まれたらどうです？」

コーヒーカップを手に取った由雉に、ヘンゼルが心配するような表情で声をかけた。

「昨日から……一睡もされていらっしゃらないのでは……？」

「うぅ～んっ」

由雉が少し腫れた目で、小さく頷く。

「門貴様のことは私がちゃ～んと看てますからぁ～っ！」

「何か……オカマの下心が見えるんだけど…」

親切な言葉ではあるものの、何となく裏のありそうな笑みを浮かべているヘンゼルに、由雉が冷たい視線を送った。

「まぁ、気持ちはもらっとくけどっ……でもいいやぁっ」

「チっ……」

断る由雉に、ヘンゼルがこっそりと舌打ちする。

「眠れそうにないしっ……」

「……っ」

その由雉の答えに、ヘンゼルが少し目を細める。

「由雉さん……」

「“ない”って……思ってたのかも知れないっ……」
「えっ……？」

ヘンゼルが少し首を傾げる。

「“壊れることなんてない”って……信じ切ってたのかも知れない……」

由雉がコーヒーカップをテーブルに置き、再び眠っている門貴を見る。

――――ハチぃ～っ！――――

――――だあああああああっっ！！触るなぁぁぁっっ！！――――

「あの二人は……」
「由雉さん……」

悲しい笑みで微笑む由雉に、ヘンゼルはかける言葉を見つけられなかった。

「輝矢……はっ？」
「……っ」

由雉の問いかけに、ヘンゼルがそっと俯く。

「お一人で……どこかへ行かれてしまいました……」

辛そうな表情で呟くヘンゼル。

「……。」

――――貴方がたが輝矢さんを支えなくて……誰が支えるんです…？――――

「そう……」

万亀の言葉を思い出し、由雉もそっと俯いた。

龍国・海沿いの砂浜。

「……。」

寒い風の吹きつける砂浜で、長い黒髪をなびかせ、輝矢は一人、海を見つめていた。その場所は、昨日桜時と別れた場所。最後に、桜時といた場所であった。

――――アンタ、あいつの手、離さない方がいいわよっ？――――

“離すな”と言われていたのに、離した。

――――私はっ……！アナタを“仲間だ”と言った覚えは一度もありませんっ……！！――――

自らの手で、離した。

「……。」

――――何だよっ！何を隠してるんだよっ！？――――

――――元はと言えば俺がっ……お前の旅に勝手に付いてきただけだもんなっ……――――

――――もういい……――――

「……っ」

悲しそうな、辛そうな顔しか思い出せない。

「ハチ……」

返事の戻ってくるはずのないその名を、輝矢はそっと呟いた。

龍国・オトポリ本部　長官室。

「……。」

長官席に座り、これ以上ないくらい不機嫌な表情を見せているのは、オトポリ長官・青守座黒である。

「えぇ～いっ」

長官室の客用ソファーに腰かけているのは、出されたコーヒーに砂糖皿の上に乗っている角砂糖を全部投入している、爽やか笑顔の太狼。

「ん～っ、まだ甘さが足りないなぁ～」

コーヒーを一口飲んだ太狼が、その味に少し顔をしかめる。

「座黒さぁ～ん、もっと角砂糖ありませぇ～んっ？」

「ないっっ！！！」
「うわっ」

すごい勢いで否定してくる座黒に、太狼が少し驚いた様子で肩をビクつかせる。

「ご機嫌ナナメですかぁ～？糖分、足りてないんじゃありませぇ～んっ？」
「誰のせいだと思っておるっ！」
「えぇ～っ？自分自身っ？」
「お前だっ！！」
「僕ぅ～っ？」

座黒に指を差され、心底、不思議そうに目を丸くする太狼。

「なんでですぅ～？ちゃんと言われた通りに、やって来たっていうのにぃ～」
「そのことではないっ！！朱実桜時のことだっ！！」
「……っ」

座黒の言葉に、太狼がピクリと眉を動かす。

「朱実ぃ～っ？ああぁ～ハチ君のことですかぁ～」

すぐさまいつもの軽い笑みを浮かべ、白々しく言う太狼。

「そう言えば、そんなような名前でしたねぇ～」
「お前が付いていながら何という失態だっ！！」

トボける太狼に、座黒は思わず席を立ちあがり、強く怒鳴りあげ

る。

「“犬国（けんこく）”の者に朱実桜時を連れ去られてしまうなどっ……！！」

「……。」

座黒の口から“犬国”の名が出ると、太狼の笑みが一瞬だけ曇ったような気がした。

「ふぅっ」

少し興奮気味だった座黒が、自分を落ち着かせるように一息つく。

「お前の力をもってすればっ、容易に止められたはずだっ……」

座黒が太狼に鋭い瞳を向ける。

「お前は何を考えているっ……？太狼っ……」

「……。」

真剣な表情で問いかける座黒に、太狼はその軽い笑みを、どこか含んだような、不適な笑みへと変える。

「べっつにぃ～っ」

コーヒーカップを手で動かしながら、太狼が言う。

「僕としてはぁ～カワイイカワイイうちの輝矢ちゃんに近づく、薄

汚いイヌがいなくなってくれてラッキーってゆうかぁ～」
「ならば何故、近づけた……？」
「……っ」

座黒の問いかけに、太狼がその軽い口調を止める。

「何故、竹取輝矢と朱実桜時を出会わせた……？」
「……。」

太狼が、コーヒーカップを動かしていた手を止める。

「彼は……自分のことを何も知らない……」
「何っ？」

軽い口調ではない、少し低いトーンで話し始めた太狼に、座黒が少し眉をひそめる。

「自分の力が何なのかを知らないままっ……その力を使う……」

――――ご主人様の桃園がっ……――――

――――御伽砂漠一面に桜をっ……？――――

「自分が何者なのかを知らないまま……世界を動かしていく……」

――――あの子の力は……本当に花力っ……？――――

――――海底に花などっ……咲くはずがないっ！！――――

「彼は知るべきなんですよっ……」

太狼が遠くを見る目で、笑う。

「自分は世界を動かす人間……その一人であるということを、ねっ……」

「……。」

意味深に微笑む太狼に、座黒は少し疲れたように肩を落とした。

――――大丈夫ですか？ハチ――――

――――見た目で名前つけんじゃねぇっ！！――――

夢を、見ていた。

――――お前は一体、何々だよっ！？――――

――――私は竹取輝矢といいます――――

初めて出会った日の、夢を見ていた。

「んっ……んんっ……」

ゆっくりと開かれる、澄んだ青色の瞳。深い夢から目覚めた桜時は、後頸に走る痛みを少し我慢して、その体を起こした。

「ここ……は……？」

起き上がった桜時が、周囲を見回す。そこは、広い畳の部屋。百人くらいは入れるであろう広い部屋の中央部に、桜時は座り込んでいた。前方には、偉い人間が座るのか、一段高くなったスペースがあり、そこに座布団と肘掛けが置かれていた。

「気付かれましたか……？」

「えっ……？」

見回した時は誰もいなかったというのに、妙に近くから聞こえてくる声に、桜時が少し戸惑うように振り返る。

「お前っ……」

桜時が振り返ると、桜時の横に、膝をつき、深々と頭を下げている白髪の少女・犬仁の姿があった。

「手荒なマネをいたしました。申し訳ございません」

「えっ？あっあああっ」

謝罪する犬仁に、桜時は思い出したように自分の後頸に触れる。

「べっ別にいいよっ。それより、ここはっ……」

「そいつが噂の“朱実桜時”って奴かぁ～っ？犬仁っ！」

「……っ？」

またしても聞こえてくる声に、桜時が振り向く。

「イヌっ……？」

犬仁がしゃがみ込んでいる方とは逆側の部屋の端に、五匹の種類も色も違うイヌが並んでいた。犬仁に声をかけたのは、その中央にいる黒い大型犬のようだ。人の言葉を話したことから、その黒犬も犬仁同様、“犬人”であることがうかがえる。

「口を慎め、犬忠（いぬただ）」

犬仁が、犬忠と呼んだ黒犬に鋭い瞳を向ける。

「へぇ～へぇ～っ！これは失礼しましたぁ～っ」

「犬忠っ！」

「うぅ～おっほぉぉぉ～～んっ！」

『……っ』

軽い笑みを浮かべながら、まったく気持ちの入っていない謝罪を見せる犬忠に、犬仁が少し膝を浮かせて立ち上がろうとしたその時であった。前方から聞こえてくる大きな咳払いに、犬仁・犬忠、そして桜時が一斉に前方を見た。

「……っ」

「……。」

先ほど見た、一段高いスペースに置かれていた座布団の上。皆が気づかぬうちにそこに座っていたのは、白い老犬であった。小さな体をさらに丸め、見た目ではまったく強さを感じないというのに、何か逆らえないオーラのようなものを醸し出していた。

「あっ……」

思わず声を漏らす桜時。老犬のその鋭い瞳が、何故か妙に懐かしく感じたからであった。

「何を……騒いでおる……？」

『申し訳ございません』

老犬の一言に、犬仁と、先程まで大きな態度を見せていた犬忠が

深々と頭を下げる。犬忠の横に並んでいる犬たちも、老犬に深々と頭を下げた。

「お前が……朱実桜時か……」

「……っ」

老犬がゆっくりと桜時へ視線を移す。桜時もまた、まっすぐに老犬を見つめた。

「よく似ておる……」

「えっ……？」

「いささか……髪色は派手じゃがなぁ……」

「……？」

懐かしそうな瞳で話す老犬に、桜時が戸惑いの色を濃くしていく。

「貴方……は……？」

少し遠慮がちに、老犬に問いかける桜時。

「我が名は里見八房（さとみやつふさ）……」

「里見っ？」

「この“犬国”を統べる者……」

「犬……国っ……？」

次々と入ってくる新しい言葉に、桜時は少し混乱したように老犬

の言葉を繰り返す。

「けっ“犬国”の国主がっ……俺に何のよっ……」

「お前の本当の名は……朱実桜時ではない……」

「えっ……？」

問いかけようとした桜時に、八房がさらなる衝撃を与える。

「俺がっ……朱実桜時じゃっ……ないっ……？」

「そう……お前の本当の名は……」

「……っ」

八房の鋭い瞳に、桜時が大きく息を呑む。

「里見　犬孝（いぬたか）……」

「里見っ……犬孝っ……？」

告げられた名の一文字一文字を、丁寧に繰り返す桜時。

「やがてこの犬国を統べる者……」

八房が桜時をまっすぐに見る。

「我が孫じゃっ……」

「えっ……！？」

桜時が大きく目を見開く。

「まっ孫っ……！？」

桜時を、かつてない衝撃が襲った。

第３０章　堕とされし大国　★２

「“犬国”か……」

長官席についた座黒が、気難しい表情でその国の名を呟く。

「かつて、“龍”“雀”とともに四大国に数えられた国……」

「そして、三国により、四大国を“堕とされた”国……」

「……っ」

太狼の言葉に、座黒が表情をしかめる。

「その言い方はやめろ……」

どこか煩わしそうに、座黒が太狼に言い放つ。

「どうしてですぅ～？事実でしょ～？」

俯く座黒に、太狼はどこか試すような笑みを向ける。

「三国は恐れた。彼らの力を……神の領域に程近い、彼らの力を……」

「……。」

話を続ける太狼の言葉に、座黒は表情を険しくしていく。

「だから四大国の称号を剥奪し、その権力を奪った……違います？」

「……人は、己より強き者を恐れる……」

座黒が真剣な表情で呟く。

「己より強き者を……排除しようとする……」

「……。」

席から立ち上がり、遠い瞳で窓からの景色を眺める座黒の言葉を、太狼が薄い笑みを浮かべたまま聞く。

「今更、数百年も前の祖先の行いを責める気など、毛頭起きんが……」

座黒がそっと俯く。

「彼らはまだ……我々を恨んでいるのだろうな……」

「……。」

どこか悲しげに言う座黒に、太狼もそっと目を細めた。

「まっ孫っ……？」

桜時の前に現れたその老犬は、桜時を“朱実桜時”ではなく、“里見犬孝”であると言い、そして桜時のことを“自分の孫”だと言った。

「孫って……」

「……。」

八房に見つめられながら、少し混乱したように俯く桜時。信じられないその言葉を、桜時は否定することができなかった。目の前にいる老犬は、確かにどこか懐かしく、他人ではない何かを感じる。

「じゃあっ……貴方は俺の……」

「祖父じゃ……」

「……っ」

初めて出会った、“雀人”でない家族。

――――朱実の名に泥を塗る姿っ……――――

初めて出会った、“犬人”である家族。

「あっ……」

色々な思いが体の奥底から溢れ出てきたが、桜時はそれを言葉にすることが出来なかった。ずっと探し求めていたものに、やっと辿り着いた。そんな気がした。

「……っ」

桜時が拳を握り締め、思わずその場で立ち上がる。

「じゃあっ……じゃあっ！俺の父親っ……！」

――――父親だって探したいっ……！――――

「俺の父親はっ……！？」

必死に八房に叫ぶ桜時。それこそが、桜時が一番知りたかったこと。父親を探すために、桜時は雀を飛び出し、ここまでやってきたのだ。

「……。」

しかし、必死に問いかける桜時の姿に、八房はゆっくりと俯いた。

「お前の父は……もうこの国にはおらぬ……」

「えっ……？」

俯いたまま話す八房に、桜時が少し眉をひそめる。

「いっいないって……」
「お前の父、五十四代・里見犬孝は、すでにこの“犬国”を追放された……」
「つっ追放っ……！？」

桜時が大きく目を見開く。

「追放ってっ……！」
「お前はっ」
「……っ」

勢いよく顔を上げ、睨みつけるように強く桜時を見る八房に、桜時が思わず言葉を止める。

「お前は、追放された父に代わり、五十五代・里見犬孝として、この“犬国”を統べるのじゃっ」
「えっ……？」

八房の力強い言葉に、桜時が戸惑うように声を漏らす。

「すっ統べるって……」
「八犬士を従え、“犬国”を御伽界最強の国にするのじゃっ、よいなっ？犬孝っ」
「あっ……！」

どこへともなく消えていく、八房の姿。

「ちょっと待ってっ！まだ聞きたいことがっ……！」
「後は任せたぞ、犬仁……」
「はっ！」

「待っ……！」

犬仁が深く頭を下げる中、桜時は必死に手を伸ばしたが、八房は忽然と部屋から姿を消してしまった。

「……っ」

少し混乱した様子で、額を押さえる桜時。確かに父親には近づいた。だが、新たな謎が、桜時の頭の中を掻き乱していく。

「犬孝様……」

「……っ」

告げられたばかりの名を呼ばれ、桜時がゆっくりと振り向く。

「色々と思うところはお在りと思いますが」

桜時のすぐ横に立ち、そう言うのは犬仁であった。

「一先ず、我々の紹介をさせて下さい……」

「紹介……？」

「皆っ」

桜時が首をかしげる中、犬仁が並んでいる五匹のイヌの方を見る。

「一人ずつ、犬孝様に名を……」

「はいはぁ～いっ！」

犬仁の言葉に、長い耳を垂れ下げた、小型の茶色いイヌが、短い前足を挙げる。

――――ボォォォォォォォ～～～ンっ！――――

「……っ」

白い煙に包まれていくイヌに、目を見張る桜時。

「ボクっ、八犬士が四、第五十三代・犬信（いぬのぶ）っ！よろしくねぇ～っ！犬孝様っ！」

白い煙の中から現れたのは、肩よりも少し長い茶色の髪に、つぶらな黒い瞳の、十五，十六歳くらいの青年であった。背中には弓を背負っている。

「ああっ、ちなみにぃ～ボクを呼ぶ時は“シンちゃん”って呼んでもらえるかっ……」

「……っ」

「なぁぁぁぁぁぁっ！！！」

「うぇっ？」

桜時に陽気な笑みを向けていた犬信が、横にいたイヌに、鋭い爪で思いきり顔を引っ掻かれる。苦しげな声を出す犬信に、思わず少し驚く桜時。

「何すんのさぁ～っ？レイレイっ！」

「お前のしゃべりに吐き気を感じた……」

爪跡の残った顔で振り向いた犬信に、冷たい言葉を吐き捨てたのは、灰色の細身のイヌ。イヌであるのに何故か眼鏡をかけ、前足で本をめくっている。

「うわぁ～っ！全否定っ！ひどいと思わなぁ～いっ？コーちゃんっ！」

「コっコーちゃんっ？」

意見を求めてくる犬信に、桜時が戸惑いの表情を見せる。

「黙れ……犬信……」

――――ボォォォォォォォ～～～ンっ！――――

眼鏡をかけた灰色のイヌを、白い煙が包んでいく。

「お前の声で犬孝様のお耳が腐る……」

白い煙の中から姿を現したのは、灰色の短髪に黒ブチ眼鏡の、いかにも知的な青年であった。年は犬信より二つ三つ上くらいだろうか。本を片手に、犬信に厳しい言葉を吐く。その背中には、立派な薙刀を背負っていた。

「ひっどぉ～いっ！レイレイ～っ！」

「その呼び名もやめろ……俺の名が腐る……」

怒る犬信を無視し、レイレイを呼ばれている青年が、桜時の前で膝をつく。

「八犬士が八、第五十四代・犬礼（いぬまさ）にございます……」

犬礼がゆっくりと桜時を見上げる。

「以後、お見知りおきを……犬孝様……」

「はっはぁっ……」

礼儀正しい犬礼に、少し戸惑いがちに頷く桜時。

「よぉ～しっ！次はおんれぇだなぁっ！！」

「あのでっかいのが八犬士が五、第五十二代・犬悌（いぬやす）です。犬孝様」

「あっでぇっ！！」

気合いを入れて立ち上がった、顔つきもゴツい大型のイヌが、さっさと紹介を終わらせてしまう犬仁に、勢いよくズッコケた。

「せっめて人化くらいさせてぐれたってぇ～っ……」

「元気出して下さい、ヤスさん」

落ち込む犬悌に、隣にいる小さくて愛らしい茶色のイヌが、励ますように声をかける。

「で、横の小さいのが八犬士が七、第五十三代・犬智（いぬとも）です」

「えぇっ！？私もっ！？」

またもや勝手に紹介をすませる犬仁に、励ましていた犬智も大き

くショックを受ける。

「ううっ……一言スピーチ、寝ずに考えたのにっ……」

「元気だせぇ～、トモぉ～っ」

落ち込む犬智を、今度は犬悌が励ます。

「そしてっ……」

急に鋭い瞳となり、まだ紹介の終わっていない最後の一匹の方を振り向く犬仁。

「へっ」

――――ボォォォォォォ～～～ンっ！――――

先程、犬仁とモメていた黒いイヌが、少し小バカにしたように笑い、素早く白い煙に包まれていく。

「八犬士が三、第五十四代・犬忠っ」

煙の中から現れたのは、黒い髪に鋭い黒い瞳の、十九，二十歳の青年。忍者のような、黒い装束を着ている。

「よろしくなぁっ！犬孝サマっ！」

「……っ」

バカにしたような笑みを向けてくる犬忠に、桜時が少し眉をひそめる。

「犬忠っ」

そんな桜時の様子を察してか、犬仁が刺すような瞳で犬忠を見る。

「へぇ～へぇ～っ！ちゃ～んと誠意を持ってお仕えしますよぉ～っ！犬孝サマっ！」

「犬忠っ！」

「ハッハッハっ！」

ナメたような口調をする犬忠を、犬仁が注意するように名を呼ぶが、犬忠はそのまま大きな声で笑いながら、部屋を出ていった。

「申し訳ありません。犬孝様」

「えっ……？」

頭を下げる犬仁に、桜時が目を丸くする。

「見ての通り、アイツは八犬士一、最低の、どうしようもない腐れ外道なものでして……」

「そっそこまで言うか……？」

犬仁のあまりの言いようにに、さすがに犬忠に同情する桜時。

「そして、申し遅れましたが……」

「……？」

その場に膝をつき、頭を下げる犬仁。

「私は、八犬士が六、第五十五代・犬仁であります」

「あっああ……」

犬仁の自己紹介に、桜時が少し歯切れ悪く頷く。

「あのぉ……さぁ……」

「何でございましょう？」

桜時の声に、犬仁が顔を上げる。

「まったく覚えられねぇーんだけどっ」

「……。」

桜時の言葉に、少し固まる犬仁。ただでさえ、犬国だの里見犬孝だの言われて混乱している時に、一気にこんな人数の、しかも同じような名前の者たちを紹介されても、覚えられないのも無理はない。

「わかりました、では……」

「……？」

「私以外は覚えなくて結構です」

『ええぇぇぇぇぇぇぇぇぇっっ！！？』

犬仁のさらりと言い放った自己中発言に、他の四匹が勢いよく不満の声をあげる。

「そりゃないよぉ～っ！ジンちゃ～んっ！」
「何と愚かしい発言だ……耳が腐った……」
「おんれもぉ～犬孝様に覚えられたいだぁ～っ！」
「私、寝ずに自己紹介用あいうえお作文作ったんですよぉ～っ！」

「あれらは全て透明犬とお思い下さい」
「えっ……？」

犬信たちの声を勢いよく無視する犬仁に、桜時が少し表情を引きつる。

「やっやっぱ覚えるよう努力をっ……」
「……っ」
「……？」

急に鋭い瞳となって立ち上がり、部屋の入口の方を振り返る犬仁に、桜時が首をかしげる。

「どうしっ……」
「帰ってきたのなら、お前も犬孝様にご挨拶をしろ」
「えっ……？」

犬仁の言葉に、桜時が入口の方を振り返る。

「あっ」
「はいはい」

桜時の振り返った先、部屋の入口付近に立っていたのは、黒い髪に長身の男。犬仁とともに二度、桜時の前に現れた、あの男であった。男がその場でゆっくりと膝をつく。

「八犬士が二、第五十四代・犬義にございます」
「お前っ……！」
「犬孝様っ」

犬仁が少し止めるように名を呼ぶが、険しい表情を見せた桜時が、入口付近で膝をついている犬義の元へと歩み寄っていく。

「門貴っ！門貴はどうしたっ……！？」
「……。」

桜時の言葉に、犬義がゆっくりと顔を上げる。

「さぁ……？生死は確認しておりませんので……」

犬義が桜時へ、冷たい笑みを向ける。

「生きておられるといいですが、ねぇ……」
「てっめぇっ！」

「……。」

桜時が声を荒げると、犬義が少し俯き、そっと立ち上がった。

「何を怒っていらっしゃるのです……？犬孝様」

高くなった目線で、桜時を見下す犬義。

「貴方は我々の手を取った……あの者たちの仲間ではなくなったのでしょう……？」

「……っ！」

犬義の言葉に、大きく目を見開く桜時。

――――私はっ……！アナタを“仲間だ”と言った覚えは一度もありませんっ……！！――――

「……っ」

桜時が辛そうな表情でそっと俯く。

「ならばっ、怒る必要など、ないのではありませんか……？」

「犬義っ」

桜時に冷たい笑みを向ける犬義を、犬仁が注意するように呼ぶ。

「言葉を慎っ……」
「俺は犬孝様にご自分の立場を理解していただきたいのですよぉっ、犬仁」
「……っ」

犬仁の言葉を遮る犬義に、犬仁が少し眉をひそめる。

「お聞きになられたでしょう？貴方の名は里見犬孝っ……」

桜時に鋭い瞳を向ける犬義。

「八犬士が一、第五十五代・犬孝……我ら八犬士の長たる存在……」
「長っ……？」
「そうっ……」

戸惑うように聞き返した桜時に、犬義が笑顔で頷く。

「貴方は別に……単なるお客としてこの国へ来たわけじゃない……」

犬義が桜時の顔の目の前に人差し指を突き出し、左右に揺れ動かす。

「貴方の役目は、我ら七犬を率いて戦うこと……」
「戦う……？」

「そう、四大国を倒し、犬国に再び“大国”の称号をもたらすことですよっ……」

「えっ……？」

桜時の表情が一気に曇る。

「四大国を……倒す……？」

「……っ」

戸惑いながら犬義の言葉を繰り返す桜時を見て、犬仁はそっと俯いた。

第３０章　堕とされし大国　★２（後書き）

八犬士は、可能な限りで覚えて下さい（笑）
ＨＰに個々のイラスト掲載中ですので、参考にぜひ。

第３０章　堕とされし大国　★３

龍国。桃原家リビング。

「サルの様子は？」

「……っ」

そう問いかけながら輝矢がリビングへと入ってくると、朝と同じように眠る門貴の向かいのソファーに座っていた由雉が振り返った。

「大丈夫、傷の治りは遅いけど、峠は越えた。死ぬことはないよ」

適当な言葉ではあるが、由雉の表情はどこかホッとしたような笑みを浮かべていた。

「このサルも基本、しぶといからねぇ～」

「……そうですね」

由雉の言葉に、輝矢もそっと微笑み、由雉の横に腰掛けた。

『……。』

リビングに少しの沈黙が訪れる。

「……キジ」

どこか気まずそうな表情となり、静かに由雉を呼ぶ輝矢。

「私は……」
「ボクは別にっ、君が何を隠してようとぜぇ～んぜん気にしないし、どうでもいいけどさぁ」
「……っ」
輝矢の言葉を遮り、話し始める由雉。由雉の言葉に、輝矢が少し表情を曇らせる。
「でもっ、桜時は……ボクらとは違うじゃんっ」
由雉が真剣な表情で言葉を続ける。
「あんだけ好き好き言っといて、正直こっちが引くくらい大切にしといて……」
由雉が鋭い瞳を見せる。
「それで、今更、突き放すなんて……輝矢はズルいと思うっ……」
「……っ」
その言葉に、思わず目を細める輝矢。
「“らしくない”……って思うよっ」
「由雉っ……」
まっすぐな瞳で振り向いた由雉に、輝矢はそっとその名を呼ぶ。

「このまま桜時さらわれて、大人しくしとくんも輝矢ん“らしくない”って思うなぁ～っ」
『えっ……？』

聞こえてくる、聞き覚えのある声に、輝矢と由雉が同時に振り向く。

「サルっ」
「門貴っ！」
「おはようさんっ！」

そこには、ソファーの上で体を起こし、いつもの明るい笑みを浮かべた門貴の姿があった。

「俺もっ、こぉ～んなボッロボロにされたまんまなんは、正直イヤやしぃっ？」
「門貴っ……」

少し右手を上げて微笑む門貴に、輝矢が目を細める。

「……っ」

『……？』

輝矢は少し俯くと、勢いよく顔を上げ、ソファーから立ち上がった。立ち上がった輝矢を、門貴と由雉が少し不思議そうに見つめる。

「……明日早朝、ハチ奪還のため、旅立ちます」

まっすぐな、強い瞳で、言い放つ輝矢。

「体を休め、準備を整えなさいっ。サル、キジっ」

『……っ』

いつも通りの偉そうな態度で言い放った輝矢に、門貴と由雉が笑みをこぼす。

「喜んでぇ～っ！」

「えええぇ～っ？」

門貴と由雉は笑顔で、いつも通りの返事を返した。

「……っ」

二人の返事を聞き、こちらも笑みを浮かべた後、輝矢がリビングの入口へと歩いていき、その扉を開けた。

「……。」

扉を開けたその時、ふと足を止める輝矢。

『……？』

背を向けたまま立ち止まっている輝矢を、二人が見る。

「……ありがとう」

『えっ……？』

「……っ」

そう呟いて輝矢はリビングを後にし、その扉はゆっくりと閉まった。

「いっ今っ、輝矢んっ、“ありがとう”言うた……？」

「明日の天気は、ヤリ、かもねぇ……」

輝矢の思わぬ一言に、呆然とさせられてしまう門貴と由雉なのであった。

犬国。里見家屋敷。

「この部屋をお使い下さい」

「ふわぁ～」

色々なことがありはしたが、とりあえず広間での顔合わせを終えた桜時は、犬仁に、今後桜時が使うこととなる部屋を案内された。そこは、先程の広間よりは狭いものの、一人で使うには広すぎる和室。殺風景だが、大きな窓から、周囲の景色が見えた。桜時が窓へと駆け寄っていく。

「雪っ……」

「犬国は御伽界の北西に位置する雪深い国ですので」

一面に広がる銀世界に、桜時は思わず息を呑んだ。これまでの旅でも何度か雪国は訪れたが、やはり南国育ちの桜時には、何度見ても新鮮なものだった。

「“雀”には……雪が降らないのでしたね……」

「えっ……？」

犬仁の言葉に、桜時が振り返る。

「なんで雀のことっ……」

「先程は犬義が申し訳ありませんでした」

「えっ？」

――――さぁ？生死は確認しておりませんので、生きておられるといいですねぇ……――――

「あっああ……」

犬義の冷たい笑みを思い出し、桜時が少し表情を曇らせて俯く。

「別に気にしてなっ……」

「後で半殺しにしておきますので、お許し下さい」

「えっ!?そこまですんのかっ!?」

怖い発言をする犬仁に、桜時が思わず顔を引きつる。

「今日はゆっくりお休み下さい、犬孝様」

犬仁が桜時へ、温かな笑顔を向けた。

「後で世話の者を寄こしますので、何かありましたらそちらに」

「あっああ」

丁寧な案内をしてくれる犬仁に、戸惑い気味に頷く桜時。

「ではっ」

「あっあのっ……!」

「……?」

背中を向けた犬仁を、桜時が思わず呼び止める。

「何でございましょう?」

犬仁が振り返り、優しい笑顔で問う。

「そのっ……」

少し躊躇うように頬を掻きながら、ゆっくりと顔を上げる桜時。

「ありがとうなっ、色々とよくしてくれて……」
「……っ」

どこか照れくさそうに礼を言う桜時に、犬仁が少し目を見開く。

「……いえっ」

犬仁はすぐさま笑顔となり、少し首を横に振った。

「それが“犬仁”の、私の……役目ですから……」

「えっ……？」

遠くを見るような目でそう言った犬仁の、その言葉の意味が理解できず、桜時は少し首をかしげた。

「では、失礼します」

深々と一礼して、犬仁は桜時の部屋を後にした。

「はぁっ……」

部屋の扉が閉まると、桜時は途端に深々と溜息をついた。短時間であまりに多くのことを知ったため、色々と頭が混乱しているようである。

「……。」

無造作に部屋の畳に腰を下ろし、桜時が背に背負っていた村雨丸を鞘に入ったまま手元へと持ってくる。

――――かつてあなたの父親が、妹・雲雀に送った刀……――――

――――父親を探すというのなら、少しは手がかりになるかも知れないわね……――――

孔雀が与えてくれた、父が母に送った刀。

「やっと、父さんに近づいたよ……」

村雨丸を握り締め、桜時が小さな声で呟く。

「母さん……」

「きゃあああああああああああっっっ！！！」

――――ベリベリィィっっ！！――――

「はっ？」

聞こえてくる激しい悲鳴と、何かが勢いよく破れる音に、桜時は思いきり顔をしかめて振り返った。

「あぁ～あっ、またやっちゃったぁ～っ」
「うっ……」

桜時が振り返った先に立っていたのは、茶色く長い巻き毛に、大きな青い瞳の愛らしい、小柄の可愛らしい少女であった。その少女の前には、あり得ないほどにボロボロになって倒されている、部屋の入口にあったはずの襖。少女は襖を見て、困った表情を見せている。

「またヒトちゃんに怒られちゃうよぉ～」
「っつーか、何をやったらあんな状態に……」
「あっ！犬孝様っ！」
「へっ？」

思わず立ち上がった桜時に気づき、少女が勢いよく部屋の中へと駆け込んでくる。

「先程はどうもでしたっ！私っ……！」
「うううぅぅぅっっ！！一メートルっ！！」
「えっ？」

勢いよく近づいてくる少女に、必死に両手を突き出す桜時。

「一メートルっ……！！」
「あっ、はっはいっ！」

理由のよくわかっていない状態で、少女はとりあえず大きく頷き、桜時の一メートル手前で止まる。

「さっ先程って、じゃあアンタ……」
「あっはいっ！先程は犬化した姿のまま失礼いたしましたっ！」

一メートルの距離はあるものの、まだ逃げ腰の桜時に、少女は曇りない笑みを向ける。

「犬孝様の世話役を仰せつかりました、八犬士が七、犬智にございますっ！」
「女だったのか……」
「はいっ！現・八犬士では私とヒトちゃんっ……あっ！犬仁の二人だけが女性ですっ！」
「わかった……気を付ける……」
「はっ？」

桜時の言葉に、犬智が目を丸くする。

「って、世話役？」
「はいっ！」

思い出したように問いかけた桜時に、大きく頷く犬智。

「八犬士のアンタが？」
「はいっ！って、はぁっ！！もしかして犬孝様っ！！私ではご不満ですかぁっ！？」
「いっいやっ……そうゆうわけじゃねぇーけどっ……」

今にも泣きそうな表情を見せる犬智に、少し焦ったように言葉を繋げる桜時。

「世話役くらいっ……八犬士じゃねぇー普通の従者にやらせてもっ……」

「里見家に八犬士以外の従者はおりません」

「えっ……？」

犬智の言葉に、桜時が顔を上げる。

「他の従者は遠い昔、犬国が四大国の称号を剥奪された後、百年の間に皆、犬国を捨てました」

「……っ」

その言葉に、少し目を細める桜時。

――――我々が薄暗い海を生きなければならなくなったと思うと……実に心苦しい……――――

それは、海中政権争いに敗れ、暗い海を生きなければならなくなった鯨国の話と、よく似ていた。

「そう……か」

桜時がどこか、悲しげな表情で頷く。

「では早速っ！先程、ご披露できなかった、昨日寝ずに作ったあいうえお作文をっ……！」

「へっ……？」

そんな桜時の気持ちを察することなく、明るい自己紹介を始める犬智。

「まず犬智の、いっ！いつも笑顔でっ！犬智のぬっ！ぬか漬けはそこそこ好きっ！」

「それ……自己紹介かっ……？」

犬智のあいうえお作文に、一気に呆れた表情へと変わる桜時。

「犬智のとっ！豆腐は木綿っ！犬智のっ……！」

「犬智っ」

「ええっ！！？」

「へぇっ？」

犬智のあいうえお作文を遮り、不意に声をかける桜時。犬智が予想外に大きな声を出したので、桜時も少し驚いた様子で声を漏らす。

「あっ、ああ、ごめんっ。やっぱあいうえお作文は最後まで聞くべきっ……」

「今っ、犬智とっ……？」

「はっ？」

とりあえず謝ろうとした桜時であったが、震えるような犬智の声に、少し眉をひそめる。

「犬智と……仰られました……？」

「へっ？あっ、おっおうっ」

犬智の問いかけに、桜時が控え目に頷く。

「いっやあああぁぁぁっ！！」
「うおっ！」
「犬孝様に名前を呼んでいただけるなんてぇ～っ！！何という幸せぇ～っ！！」
「はぁっ！？」

感動した様子で天を仰いでいる犬智に、桜時が勢いよく顔を引きつる。

「この犬智っ……！もう思い残すことはありませんっ……！」
「何か……ノリが千鶴に似てるような……」

大げさな犬智の言葉に、母国の恩返し鶴のことを思い出す桜時。

「例えこのまま天に召されようともぉ～っ……！」
「だあああああっ！！待て待て待て待てっ！！」

空へと両手を伸ばす犬智に、桜時が思わず制止を求める。

「聞きたいことがあるんだっ」
「はいっ！なんなりとぉっ！」
「切り換え、早ぇなっ……」

すぐに天に召されることをやめ、桜時の問いかけに答える態勢となる犬智に、桜時が少し呆れたように肩を落とす。

「あっ！もしかして先代・犬孝様のっ……お父上のことでございま

しょうかっ？」
「いやっ……」
桜時が、急に真剣な表情となる。
――――四大国を倒し、犬国に再び“大国”の称号をもたらすことっ……――――
「……犬国という国と、その歴史について……」
「えっ……？」
桜時の言葉に、犬智は少し目を丸くした。
「……そして、“犬国”は他の三国により四大国の称号を剥奪、代わりに“虎国”が四大国入りを果たしました」
「……。」
犬智が語る犬国の歴史を、桜時は静かな表情で聞いていた。
かつては“龍”“雀”とともに四大国に数えられたほどの国であ

ること。そして、四大国でなくなったことを。

「そう……だったのか……」

犬智の話を聞き、しみじみと頷く桜時。

――――八犬士を従え、“犬国”を御伽界最強の国にするのじゃっ、よいなっ？犬孝っ……――――

八房の言ったこと、犬義の言ったことの意味が、やっとわかったような気がした。

「とは言っても、もう四百年以上も前の話です」

犬智が少し細めた目で、窓の外に広がる雪国を見つめる。

「私は八犬士ではありますが……正直、戦いがあまり好きではありません……」

「犬智……」

悲しげに話す犬智に、桜時が少し顔を上げる。

「だから、四大国を倒して、また大国となろうとしている、皆の考えには……少しついていけなくて……」

犬智が桜時の方を振り返り、そっと微笑む。

「みんなで幸せに暮らしていければっ、それだけでいいと思っちゃ

うんですっ……」
「……うん」

少し俯き、犬智の言葉に頷く桜時。

「でもっ……」
「……？」

先程の犬智と同じように、遠い瞳で、広がる雪の世界を見つめる桜時。その悲しげな表情に、見つめる犬智は少し首をかしげた。

「悲しかったんだと思う……」
「えっ……？」

桜時の言葉を、犬智はそっと聞き返した。

「大国でなくなって、たくさんの民が国を出て行って……きっと、悲しかったと思う……」
「犬孝様っ……」

桜時を見つめ、犬智は少し目を細める。

「今も……悲しいんだと思う……」
「……。」

それが、単なる憐れみの言葉ではないことが、犬智には見て取れた。心から犬国を思い、犬国にいた者たちのことを思い、そして八房や八犬士のことを思いながら、桜時は話している。

「……犬孝様は、お優しい方ですね」
「へっ？」
微笑んで呟いた犬智の言葉に、桜時は少し目を丸くした。
「今度は私から、お聞きしてもよろしいでしょうか？」
「へっ？あっあああっ」
犬智の問いかけに、桜時が戸惑いつつも頷く。
「犬孝様は何故、犬国へいらしたのですか？」
「えっ……？」
「居場所もあって、お仲間も……おられたのでしょう……？」
「……っ」
犬智の問いに、桜時がそっと俯く。
「あっ！あっ！すみませんっ！」
俯いた桜時を見て、焦ったように謝る犬智。
「犬孝様がお仲間を捨てるような方とは思えなくて、ついっ……！出過ぎたことをっ……！」
「俺が……バカだったんだ……」

「えっ……？」

ポツリと落とされた桜時の言葉に、犬智はそっとその表情を曇らせた。

「俺にはいつも……影ばっかり落ちてたっ……」

「影っ……？」

「うん……」

聞き返す犬智に、桜時がそっと頷く。

――――朱実家の王子がイヌだなんてっ！――――

――――まぁっ！何と汚らわしいっ！あの姿っ！――――

物心がついた時から、自分だけが違う存在であった。そのことを笑われ、蔑まれた。一切の明るさのない、影。世界は桜時に影ばかりを落とすと、そう思っていた。

「俺にはもう影しか落ちてこないって、そう、思うようになってた、そんな時……」

――――急に落ちてくると危ないですよ？ワンコさん――――

「俺に……光が落ちてきた……」

桜時が目を細め、そっと微笑む。

「その光は、どんな時でも決して曇らない……」

――――お金は要りません。その代わりっ、彼をいただけませんっ？――――

――――別にアナタのことはついでですよっ。私は私の仕事をやるだけです――――

「どんな時でも、何よりも強く輝く……」

――――“月器・三日月”っ――――

――――竹取輝矢、鬼退治いたしまぁ～すっ――――

「何よりも強く輝いて、俺を照らしたっ……」

――――私には見えますよ……？アナタの背に、その翼が……――

「影ばっかりの俺をっ……照らしてくれたっ……」

「犬孝様っ……」

笑っているのに、何とも悲しそうな桜時を、犬智は切ない表情で見つめていた。

「だから俺はついっ、信じちまった……」

桜時が少し、自分の拳を握り締める。

「その光は完璧で、絶対的で、揺るぐことなんて決してないって……」

桜時が雪空に浮かぶ、薄い三日月を見つめる。

「あいつだって普通の人間で……」

――――大丈夫……ですから……――――

「たった一人の……女の子だったのに……」

「……。」

月を見つめる桜時を、犬智は後ろから見つめることしか出来なか

った。

第３０章　堕とされし大国　★４

オトポリ本部。御伽資料室。

「“犬国”……御伽界北西に位置……龍国からだと結構、遠いですねぇ」

分厚い本をめくり、少し考え深げに呟く輝矢。それは古い御伽界の歴史書であった。まだ犬国が四大国であった頃の書を見れば、その位置も書かれているだろうと輝矢は踏んだのである。

「二日か、三日くらいでしょうか……」

「ここっ、オトポリ隊員以外、立ち入り禁止の区域だぞぉ～？」

「……っ」

考え込んでいた輝矢が、聞こえてくる声に振り返る。

「キツネ」

「ちなみに無断拝読は、一週間の懲役の刑だっ」

輝矢が振り返ると、資料室の入口からゴンが入ってきた。ゴンはそう言いながら、ゆっくりと輝矢のいる方へと歩み寄ってくる。

「そうですか……」

本を閉じ、真剣な表情で頷く輝矢。

「なら、笑って見逃しなさい」
「ハッハッハっ！って、見逃がすかぁぁぁっっ！！！」

偉そうに言い放つ輝矢に、ゴンは思いきりのいいノリツッコミをしてみせる。

「ったく、お前はっ！」
「犬国の位置はもう調べました」

輝矢が閉じた本を、元の棚の中へと戻す。

「後は適当に逃亡します。ハチを連れ戻したら、懲役くらい受けてあげますから」
「待てっ……！」
「……っ」

素早く立ち去ろうとした輝矢の肩を、ゴンが後ろから掴み止めた。

「セクハラで訴えますよ？」
「肩掴んだくらい、別にいいだろうがっ！！」

鋭い瞳で振り返った輝矢に怒鳴りつつも、とりあえず肩からは手を離すゴン。

「だいたいっ！犬国の位置ってっ、ハチ公を連れ去った奴らが犬国の連中だって確証はどこにもっ……！」
「“犬国の人たちで間違いないよぉ～”って、タローが笑って言ってました」

「あの腐った大人っ……余計なことをっ……」

輝矢の言葉に、ゴンが横を向いてこっそりと呟く。

「だからってなぁっ……！」

ゴンが再び、目つきの悪い瞳を輝矢に向ける。

「わかってんのかっ！？相手は犬国っ！国だっ！鬼じゃねぇっ！！」
「国と鬼の違いくらいわかりますよ。ゴンじゃあるまいし」
「うっせぇっ！！っつーか、人の話を真面目に聞けっ！！」

真剣な表情で、輝矢に怒鳴りあげるゴン。

「いくら剥奪されたとはいえっ、犬国は元・四大国っ！その力は強大だっ！！」

必死に手を動かし、ゴンが言葉の重さを伝えようとしている。

「お前でどうにか出来る相手じゃねぇっ！！」
「……。」

ゴンの言葉に、輝矢は少し厳しい表情をして俯いた。

「ハチ公のことはっ……長官に頼んで、何とか犬国と交渉をっ……」
「ケンカを……」
「あっ？」

輝矢の小さな声に、ゴンが眉をひそめる。

「ケンカを……してしまったんです……」

「……っ」

視線を下に落とし、低い声で話す輝矢に、ゴンが少し表情をしかめながら、その言葉に耳を傾ける。

「いえっ、ケンカと呼ぶには、あまりに一方的……」

輝矢が、少し目を細める。

――――言えませんっ……！――――

――――ハチには関係のないことですっ……！！――――

「知られることを恐れて……知られて嫌われることを恐れて……」

――――私はっ……！アナタを“仲間だ”と言った覚えは一度もありませんっ……！！――――

「自分の都合で……突き放したっ……」

「……。」

話を続ける輝矢を、ゴンはまっすぐに見つめる。

「あんなにも優しいハチに……」

――――もういい……――――

「あんなにも悲しい顔をさせてしまった……」

「竹取……」

悲しい顔を見せる輝矢に、ゴンが少し目を細める。

「だからっ……」

輝矢が勢いよく顔を上げる。

「だから謝りに行きますっ」

一切の曇りのない、力強いまっすぐな瞳。

「ハチに二度とあんな顔はさせませんっ……」

顔を上げた輝矢が、そっと笑う。

「私のハチを誰にも譲りはしませんっ」

「……っ」

迷いのない笑顔。ゴンは少し見つめた後、目をそらすように俯く。

「では」

「……。」

ゴンに背中を向け、資料室を出て行く輝矢。だがゴンは俯いたままその場に立ち尽くし、出て行く輝矢を止めようとはしなかった。

やがて、輝矢が去り、資料室の扉が閉まる。

「……。」

資料室に訪れる、少しの沈黙。

「だあああああっっ！！」

ゴンが少し頭を掻きながら、勢いよく顔を上げる。

――――ダァァァァァンっっ！！――――

「クソっ……！！」

近くの机を勢いよく叩き、ゴンが輝矢を追って資料室を出て行こうとする。

「ダメよっ！！」

「……っ！」

聞こえてくる強い制止の声に、ゴンは思わず足を止めた。

「追っちゃダメっ」
「リンゴっ」

そう言って、本棚の影から出てきたのは、厳しい表情を見せたリンゴであった。

「盗み聞きか？悪趣味だな」
「アンタがバカなことしないか見張りに来ただけよっ。案の定、来といて良かったわっ」

表情をしかめるゴンに、リンゴが冷静に言う。

「輝矢たちと犬国へ行くなんてバカなマネ、されたら困るからねっ」
「……っ」

ゴンが眉をひそめる。

「けどっ……！あいつらだけに行かせたらっ……！」
「アンタはオトポリの隊員でしょっ！？」

ゴンに負けぬ大声で、リンゴが強く言い放つ。

「アンタがこの戦いに介入すればっ、それを理由に最悪、龍と犬の戦争にだってなり兼ねないのよっ！？」
「……っ」

リンゴの言葉に、少し目を開くゴン。

「感情で動かないでっ！！オトポリの隊員ならっ、自覚を持って行

動してっ！！」
「……。」

リンゴの強い言葉はすべてが正しく、ゴンは少し唇を噛みしめた。

「……っ」
「ゴンっ！！」

資料室を出て行こうとするゴンを、リンゴが強く呼び止める。

「わかってるっ……俺はオトポリ隊員だっ。犬国には行かねぇーっ」

背中を向けたままそう言い、ゴンは資料室を後にした。

「……はぁっ」

ゴンが去り、扉が閉まった途端に、深々と溜息をつくリンゴ。

「ったくっ……」

リンゴが腕組みをし、少し表情をしかめる。

「アンタもだからねっ！」

資料室の、どこへともなく声を放つリンゴ。

「……。」

資料室の奥の奥、本棚の影に、もたれかかるようにしてしゃがみ込んでいるのは、イチゴであった。

「桜時……さんっ……」

しゃがみ込んだイチゴは、不安げな表情で桜時の名を呟いた。

翌日・早朝。龍国、エセお菓子の家こと桃原家前。

「ホントに行っちゃうのぉ～？輝矢ちゃ～んっ」

朝からヘビーな砂糖ドップリココアを片手に、玄関先で少し悲しそうな表情を見せているのは太狼である。

「ええっ」

そんな太狼に、迷いのない返事と笑顔を向ける輝矢。

「あんな薄汚いうるさいだけのイヌ、イヌの国に返しっぱなしにしとけばいいのにぃ～っ」
「ヒドい言われようっ……」
「本気やから怖いよなぁ～っ」

軽い口調で毒を吐く太狼に、輝矢の横で引きつった表情を見せるモンキとユキジ。

「タローっ」
「んっ？」

呼びかける輝矢に、太狼が爽やかな笑みを向ける。

「私、強くなりますっ」
「……っ」

大きな笑顔を見せる輝矢に、太狼は少し驚いたように目を見開いた。

「悪夢を……消し去れるようにっ……」
「輝矢ちゃんっ」

――――私はいつか、ハチさえも……殺すのでしょうか……？――――

二日しか経っていないというのに、その表情はまったく違う。あ

んなにも絶望していたというのに、今は希望さえ感じるほどに明るく輝いている。

「なれるさっ、君ならっ……」
「……っ」

微笑む太狼に、輝矢はさらに明るく笑った。

「門貴様ぁぁぁっっ！！どうかご無事なお姿で私の元へぇぇぇっっ！！」
「無事には帰りたいけど、お前の元には帰りたくない……」

涙を流しながら見送るヘンゼルに、少し引き気味のモンキ。

「皆様、どうかお気をつけてっ」
「ええっ」
「うん～」

願うように言うグレーテルに、輝矢とユキジが笑顔を向ける。

「では、行ってきます。タロー」
「うん」

太狼、ヘンゼル、グレーテルに手を振り、輝矢、モンキ、ユキジの三人がエセお菓子の家を旅立っていく。

「門貴様ぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～っっ！！！」

「お兄様っ！お気を確かにっ！！」

泣き崩れるヘンゼルを、必死に介抱するグレーテル。

「行っておいで……輝矢ちゃん……」

遠ざかっていく背中を見つめ、太狼が呟く。

「君も……世界を動かす人間、その一人なのだから……」

「ねぇ～っ！犬国って御伽界の北西にあるんでしょ～？」

旅立って数分。まだ龍国の出口にも着かない辺りで、ユキジが輝矢に話しかける。

「歩いていくのって遠くなぁ～い？」

「そうなんですよねぇ」

ユキジの最もな言葉に、しみじみと頷く輝矢。

「そこで私、思いついたことがあるんです」
「おっ！何々っ？」
「嫌な予感っ……」

思いついたと言う輝矢に、興味津津の笑顔を向けるモンキと、少し引きつった表情を見せるユキジ。

「私の乗った荷台を、アナタたちが引いて、全力で走るっ」
「おっしゃ～っ！！俺が輝矢んの立派な荷車になってみせっ……！」
「却下っ」

張り切るモンキの横で、素早く却下するユキジ。

「何故です？」
「理由を話すまでもないよっ！」

不思議そうに問いかける輝矢に、ユキジが思わず怒鳴る。

「それにぃ、あんなマヌケ面で笑ってはいるけど、あのサル、まだ怪我治りきってないんだよぉ～？」
「別に荷車で息絶えても、私は構いませんが」
「いっやぁぁぁ～～～んっ！！輝矢んっ！！重要戦力がぁぁぁ～～っっ！！」

冷たく言い放つ輝矢に、モンキが必死に訴える。

「まぁ冗談はさておき」

「あっ冗談やったん？」
「ここで時間を食うのは痛出でっ……」

――――プっ！プゥ～っ！――――

『んっ？』

聞こえてくるブザー音に、輝矢たちが一斉に振り返る。

『あっ……』

振り返った輝矢たちが、皆、目を開く。

「輝矢さぁぁぁぁ～～～んっ！こっちこっちぃ～っ！」
「……。」
「ゴンっ、羊スケっ」

龍国の出口で待つ、一台の黒いオープンカー。その運転席で大きく手を振っている羊スケと、助手席で目つきの悪い顔を見せているゴン。輝矢たちがオープンカーの元へと歩いていく。

「どうしてっ……」
「犬国・ハチ公奪還行き、間もなく発車しますよぉ～っ」

戸惑いの表情で問いかけようとした輝矢に、ゴンはやる気のない

口調でそう言う。

「代金はキツネうどん一杯でぇ～すっ」

「……っ」

そう言って笑いかけるゴンを見て、輝矢も笑う。

「随分と目つきの悪いバスガイドさんですねぇ」

「放っとけっ」

輝矢の言葉に、ゴンが少し顔をしかめる。

「では乗車させていただきましょうかっ、サル、キジっ」

「おうっ！」

「うん～っ！」

輝矢たちが車の後部席へと乗り込む。

「よぉ～しっ！じゃあ行くっスよぉ～っ？」

「っつーかホントにお前も行くのかぁっ？」

「へっ？」

エンジンをかけ、ハンドルを握る羊スケに、再確認するようにゴンが問いかける。

「お前まで行かなくてもっ……」

「だってゴンさん、車、運転出来ないじゃないっスかっ」

「……。」

羊スケの言葉に、ゴンが固まる。

「よしっ、出せっ」
「はいっスぅ～っ！」

ゴンの指示に羊スケが大きく頷くと、五人を乗せたオープンカーが動きだし、龍国を出て行く。

「ハチっ……」

走る車から、遥か西を見つめる輝矢。

「今、行きます……」

こうして輝矢たちは、ゴン・羊スケとともに、龍国を後にした。

「……。」

遠ざかっていく黒のオープンカーを、龍国の出口に立ち、一人見送るイチゴ。

「どうか……ご無事で……」

イチゴは両手を組み、祈るように呟いた。

その頃、オトポリ本部。副長官室（リンゴの部屋）。

「……。」

机に置かれた二枚の白い封筒を見つめ、リンゴは厳しい表情を見せていた。

「ったく……」

二枚の封筒の表には、汚く書かれた『辞表』の文字。

「バカなんだからっ……」

リンゴは天井を見上げ、悲しげな表情で呟いた。

第３０章　堕とされし大国　★４（後書き）

３０章終りです。

第３１章　いざ犬国　☆１（前書き）

原作版の投稿も始めました。
原作の方が進みは早いですが、一話がとても長く、手直しもまったくしておりません。
特に携帯からは非常に読みにくくなっております。
それでも良い！というかたは、ぜひに。
そんなの耐えられん！というかたは、引き続きこちらをどうぞです。

第３１章　いざ犬国　☆１

犬国。国主・里見八房の部屋。

「……。」

白い毛並みの老犬は、厳しくもどこか悲しげな表情を見せ、部屋の奥にある大きな仏壇の前へと座っていた。

「犬孝の息子が戻ってきたよ……」

仏壇に飾られている１枚の写真を見つめ、八房が呟く。

「伏（ふせ）……」

その写真には、まだ若く美しい、白髪青瞳の女性が写っていた。

龍国・オトポリ本部。

「リンゴぉぉぉ～～っ！イチゴぉぉぉ～～っ！」
『……？』

後ろから聞こえてくるナマリ口調の大声に、オトポリ敷地内の道を並んで歩いていたリンゴ・イチゴ姉妹が同時に振り返った。

「おおぉぉぉ～～いっ！！」
「金汰っ」

大きく手を振り、その巨体を走らせて地面を揺らしながら、二人の元へとやって来るのは一頭の黒クマ。もちろん、金汰である。

「どうしたんですぅ？そんなに走って」

二人のすぐ前までやって来た金汰に、リンゴが不思議そうに問いかける。

「ゴンと羊スケ、見なかっただかぁ？」
「うげっ」
「ゴホンっ！ゴホンっ！」
「んっ？」

金汰の問いかけに、勢いよく表情を引きつるリンゴと、思わず咳込むイチゴ。そんな二人に、金汰が少し目を丸くする。

「どうかしただかぁ？」
「いっいえっ、三日前から風邪気味でっ」
「そうだかぁ～っ！無理しちゃダメだぞぉ～？」
「はっはいっ……」
「あっあのぉ～っ、金汰ぁ～さんっ？」

両手で口を覆うイチゴを心配するように見ている金汰に、リンゴが無理やり作ったような笑顔で声をかける。

「んっ？」
「なっなんで、ゴンと羊スケをお探しなんですっ？」
「ああ～っ」

リンゴの問いかけに、金汰が笑顔で頷く。

「そっりゃあウチの鉄がぁっ」
「ふわぁ～っはっはっはっはっ！！」
「げっ」

笑い声だけでその存在を察知し、またもや顔を引きつるリンゴ。

「それはだねぇっ！この僕っ！この僕っ！オトポリの若き隊長・正刈鉄汰の次の任務に、彼ら二人が同行することになっているからだよぉ～っ！！」

そこに現れたのは、背中に巨大なマサカリを背負った、オカッパ頭の濃ゆい顔の青年。鉄汰であった。

「二人が見つからなくて、なかなか出掛けられずに困っているんだぁ～っ！」
「鉄ぅ～っ！おいらが絶対、探してやっからぁ～っ！」
「部下くらい、自分で探せやっ……」
「何かっ？」
「いえっ」

横を向いてこっそり毒を吐いたリンゴであったが、鉄汰に声をかけられると、すぐさま清々しいまでの笑みを向けた。

「それでぇ、お前ら、あの二人がどこ行ったか知らないだかぁ？」

「えっ？あっあぁぁ～っ」

金汰の問いかけに、妙に裏返った声を出すリンゴ。それもそのはず、ゴンと羊スケは輝矢たちとともに、桜時を助けるため、犬国へと行ってしまったのである。これがオトポリにバレれば、二人の首は確実。それ以上の処分だって与え兼ねられない。

「ゴンならぁ～山へ芝刈りにぃっ」

「よっ羊スケさんはっ、川へ洗濯にっ……」

咄嗟にどこぞのおとぎ話のようなフレーズを並べるリンゴとイチゴ。

「山へ芝刈り？」

「川へ洗濯？」

金汰と鉄汰が、同時に目を丸くする。

「むっ無理かしらっ……？」

「お姉ちゃんが変な言い訳しか思いつかないからっ……」

「あっアンタだってノって来たじゃないのっ！」

金汰と鉄汰に聞こえないように小さな声で、ひそひそと言葉を交わすリンゴとイチゴ。

「それなら仕方ないねぇ～っ！お兄ちゃんっ！」
「そっれなら仕方ないだなぁ～っ！鉄ぅっ！」
『はっ……？』

聞こえてくる納得の声に、リンゴとイチゴが顔をしかめて振り返る。

「新しい同行者、付けておくれよぉ～っ！」
「兄ちゃんにまっかせとくだぁ～っ！鉄ぅ～っ！百人は付けてやるぞぉっ！」
「そんなにいらないよぉ～っ！僕には百人の力をも凌ぐ実力があるからねぇ～っ！」
「そうだったなぁっ！ガッハッハっ！」
『……。』

二人が呆然と立ち尽くす中、平和な会話をしながら、仲良く肩を組んで歩き去っていく金汰と鉄汰。

『バカで良かった……』

そんなクマ兄弟の後ろ姿を見ながら、リンゴとイチゴは同時に呟いた。

「リンゴぉぉ～っ！イチゴぉぉ～っ！」
「パパっ？」
「お父様っ？」

クマ兄弟が去ったかと思うと、今度は2人の父・座黒が大きく手

を振りながら、二人の元へとやって来た。その手には何やら、資料のような紙を持っている。

「今、警備の者から連絡があってなぁ～？何でも、今朝早くにオトポリの黒オープンカーが龍国を出て行ったらしい」

「うげっ」

「ゴホンっ！ゴホンっ！」

警備からの報告書であろうその紙を座黒が読み上げると、またしてもリンゴは顔を引きつり、イチゴは咳込んだ。

「そんな報告は受けておらんしぃ、お前たちちょっと行って調べっ……」

「あっあぁぁ～っ！パパっ！今日はイイ天気ですし、林檎狩りにでも行きませんことぉ～っ？」

「えっ？別にそんなに晴れてもいないようなっ……」

「いっ苺狩りもいいと思いますっ……！」

「むっむぅっ、そうかぁ？」

引きつってはいるが笑顔で狩りを勧めてくる二人の娘に、徐々に流されていく座黒。

「じゃあ行っとくかぁ～っ」

「行きましょっ！行きましょっ！」

「えっえぇえっ……！」

座黒を引っ張るようにして、どこかへと歩いていく二人。

『はぁっ……』

ゴンと羊スケの首を繋げるため、苦労をさせられてしまうリンゴとイチゴなのであった。

犬国・里見家屋敷。

「犬義っ」

「……？」

廊下を歩いていく犬義を呼び止めたのは、少し険しい表情を見せた犬仁であった。

「何です？犬仁」

振り向いた犬義が、犬仁に笑顔を向ける。

「犬孝様には生死は確認していないと言っていたが、お前、あの者をちゃんと生かしたのだろうな？」

「あの者っ……？」

――――何やぁ～っ？お前らぁっ！――――

「ああっ」

犬義が門貴の姿を思い浮かべ、笑顔のまま少し頷く。

「一応、瀕死の状態で止めといたんですがねぇ～その後、野垂れ死んでたら仕方ないですねぇ～」

「……っ」

楽しげに笑って言う犬義に、犬仁の表情が曇る。

「無駄な血をっ……」

どこか煩わしそうに呟く犬仁。

「終わったことを責める気はない。だが、犬孝様への口のきき方にはもう少し気を遣え」

「……。」

犬仁の言葉に、犬義がピクリと眉毛を動かす。

「あの方は今、不安定な状態だ。我々が支えて差し上げねばっ……」

「犬仁は本当に思っているのですかぁ？」

「……？」

犬義の問いかけに、言葉を止めて顔を上げる犬仁。

「あの方がこの国を治め、四大国を倒して“大国”の称号をもたら

してくれるなどとっ」
「何っ……？」

犬仁が眉をひそめる。

「当たり前だろう。それに、それはお前自身が犬孝様に言ったことではなっ……」
「俺は無理だと思いますよ」
「なっ……！」

あっさりと答える犬義に、犬仁が驚いたように目を開く。

「何をっ……！」
「あの方は何ともお優しい性分のようですし、それに実力的にも我らの上に立てるとはっ」
「口を慎めっ！犬義っ！」
「……っ」

桜時をバカにしたように話した犬義に、思わず声を張り上げる犬仁。そんな犬仁に、犬義は言葉を止め、その表情から笑みを消した。

「我々の長は、あの方以外に考えられない」

まっすぐな瞳で、言い放つ犬仁。

「“犬孝”の血を受け継ぐあの方しかっ……」

強く拳を握り締める犬仁は、その言葉に何か強い思い入れがあるように見えてならなかった。

「……貴女は、“犬孝様”に固執し過ぎている」
「……っ！」
犬義の言葉に、大きく目を見開く犬仁。
「固執で曇ったその目では、冷静な判断など出来ませんよ……」
犬仁に少し冷たい笑みを向け、その場から静かに歩き去っていく犬義。
「……っ」
深く俯いた犬仁は、強く唇を噛みしめ、拳を握り締めた。
――――お前は“犬孝様”をお守りするためだけに…生まれてきたんだよ……？――――
思い出される、過去の言葉。
「犬孝様っ……」
まるで救いを求めるかのように、犬仁は犬孝の名を口にした。

「ふぅっ……」

廊下の角を曲がり、犬仁にその姿が見えなくなったところで、少し肩を落とし、息をつく犬義。

「見ぃ～ちゃったっ！見ぃ～ちゃったっ！」
「……？」

聞こえてくる明るい声に、犬義が振り向く。

「お前ら……」

犬義が振り向くと、犬義の歩くすぐ横の部屋の襖が開き、畳の部屋に三匹のイヌが並んでいた。明るく話したのは犬信、後の二匹はメガネ犬・犬礼と、大型犬・犬悌であった。

「ヨッシーってば、まぁ～たジンちゃんイジめちゃってぇ～っ」
「別にいじめた覚えはない。俺は本当のことを言っただけだ」

非難するように言ってくる犬信に、犬義が少し笑って答える。

「あんな温室育ちの王子様に、何も出来やしないとな」
「仮にも我らの主君だぞ？そのような言い方はやめろ……俺の耳が腐る……」
「それは失礼っ」

眼鏡を光らせて鋭く言う犬礼に、犬義は軽く謝った。

「そうかなぁ～っ？ボクは結構、好きだけどぉ～？コーちゃんっ！」
「その軽々しい呼び名もやめろ……犬孝様の存在が腐る……」
「えぇ～っ？レイレイよりはイイと思うんだけどなぁ～っ」
「じゃあそれをまずやめろ……俺の存在が腐る前に……」
「ふぅっ」

犬信と犬礼の相変わらずの言い合いに、犬義が少し呆れたように肩を落とし、三匹のいる部屋を見回す。

「お前ら三匹だけか？犬忠と犬智はどうした？」
「トモは犬孝様の世話役だでぇ～お傍に付いてるだぁ～」
「チューチューがいないのはいつものことじゃ～ん？」
「そうか」

犬悌と犬信の言葉に、納得したように頷く犬義。

「困ったものだな。犬忠にも」
「あいつはすでに性根が腐っている……」

犬義の言葉を受け、犬礼が冷たく言い放つ。

「仕方ない。お前らだけ、先に準備をしておけ」
「準備っ？」
「何の準備だぁ？」
「歓迎会でもやるのか？」
「まさかっ」

不思議そうに問いかけた三匹に、犬義は不適に笑って背中を向ける。

「……。」

三匹に背を向けた犬義は、三匹に見えないよう、自分の右腕の裾をまくり上げた。その下から見えてきたのは、激しい切り傷。

――――如意棒・第二の舞っ！“浄”っ！！――――

傷を負った時のことが思い出される。勝ちはしたものの、決して圧倒的勝利ではなかった。これほどの傷を負わされるなど、犬義にとってはもう久方ぶりのことであった。

「……っ」

裾を元に戻し、犬義がそっと微笑む。

「“戦い”の準備だっ」
『えっ……？』

振り向いて言い放った犬義に、三匹が戸惑うように声を出す。

「戦いぃ～っ？」
「誰か来るのか……？」
「ああっ」

犬礼の問いかけに、犬義は楽しげに笑って大きく頷く。

「久々にっ……面白い戦いが出来るぞっ……」
『……っ』
犬義の言葉に、笑う者、曇る者、三匹はそれぞれ違った表情を見せていた。
「うぅ～んっ……」
ハンドルを握りながら、気難しい表情を見せる羊スケ。
「ダメっスねぇ～これ以上は進めないっス」
「仕方ねぇな」
「雪深くなってきましたからね」
羊スケの言葉を受け、ゴンと輝矢がそう言いながら、それぞれ車を降りる。道に深く積もった雪に、車のタイヤは埋もれ、これ以上は進めない状況となっていた。
「まぁいい。もうすぐそこから犬国の領土だ」

龍国を出て数時間。西へ進むほどに気温は下がり、やがて雪が舞いだした。そして輝矢たちは、雪深い犬国のすぐ手前まで辿り着いたのである。

「国って言っても、なぁ～んか雪と森しか見えないけどぉ？」
「四大国を退いてからは、ほとんどの国民が出てって、今じゃ五十にも満たない数の人間しか住んでないからな」
「五十っ！？ウチの村より少ないやぁ～んっ」

ゴンの言葉に、モンキが驚きの表情を見せる。

「でもこんなに雪が降ってるのに、森も鬱蒼としてるって変くない？」
「ああ、確かにっ」

雪で白く色づいてはいるものの、森の木々は決して枯れているわけではなく、雪の下でむしろ青々と生い茂っている。ユキジの指摘に、モンキが気付かされた様子で頷く。

「この国は年中、雪が降ってんだよっ。実際の季節は龍国と同じ初夏っ」
「ああ～だから木ももっさりしとんのかぁ～っ」
「犬国の植物は大抵、雪ん中でも育つようになってんだよっ」

モンキやユキジに、次々と解説を入れていくゴン。

「随分と詳しいのですね」
「一族柄なっ」
「なるほど」

ゴンの一族である狐族は、“裏切りの一族”とも呼ばれ、他種族の国に身を寄せてはまた移り住むといった習慣を持つ一族であった。

「それに犬国は虎国のすぐ上。気候なんかもほとんど同じだ」

そういった国の情報には、ゴンはある意味、誰よりも精通しているのかも知れない。

「油断すんなよ。国主に仕える“八犬士”ってのは、相当な強さらしいからなぁ」

「それは身をもって体験したサルがいます」

「はいはぁ～いっ！」

「んっ？あっああ、そうだったな」

輝矢がの言葉に、元気よく手を挙げるモンキ。そのモンキを見て、ゴンが思い出したように頷く。

「門貴さん、大丈夫なんスかぁ～？まだ傷、治りきってないんじゃっ」

まだ犬義から受けた傷の治りきっていないモンキを、運転席から降りてきた羊スケが少し不安げに見る。

「ハチを私の元へ返すためなら、命を賭しても構いません」

「そうそうっ！って、えぇ～っ！？輝矢んっ！俺は輝矢んのためなら、命を賭しても構わんのやでぇ！？」

「どっちでもいいよ」

輝矢とモンキの会話に、冷たい突っ込みを入れるユキジ。

「じゃあとっとと行っ……」
「ああ、待って」
「あっ？」

ゴンが先頭をきって犬国の領土へ向かって歩き出そうとしたのを、ユキジが呼び止めた。

「何だぁ～？ビビってんのかぁ？クソ生意気キジにしては珍しっ…」
「んなわけないでしょ？ヘッポコギツネ」
「ニャロウっ……」
「まぁまぁ押さえて、ゴンさぁ～んっ」

怒りに拳を握り締めるゴンを、隣から羊スケが宥める。

「コレ、念のため一人一枚ずつ配っとくよぉ」
『……？』

そう言ってユキジが皆に差し出したのは、黄色の羽根であった。

「癒羽？」
「うん。コレ持ってれば、ボクがいなくても回復できるでしょ？」
「なっるほどぉ～っ！さっすがユッキーっ！」

ユキジの言葉に、モンキが感心した様子で言いながら、黄色い羽根を懐へとしまう。ゴンと羊スケも同じように、もらった癒羽を、オトポリ制服の胸ポケットへとしまった。

「輝矢は三枚ぐらいっ」

「何故です？」

皆より多くの癒羽を差し出してくるユキジに、少し眉をひそめる輝矢。

「桜時のことになると、自分の怪我も見えなくなるからっ」

「それは警告ですか？」

「それもあるっ」

「……っ」

嫌味っぽく微笑むユキジを見て、輝矢もそっと笑みをこぼし、もらったばかりの三枚の黄色い羽根を、大事そうに懐にしまった。

「竹取っ」

「ええ」

振り向いたゴンに、輝矢が大きく頷く。

「行きますよ。サル、キジ、キツネ、ヒツジっ」

『おうっ！！』

「ええ～っ」

こうして輝矢たちは、ついに、桜時のいる犬国へと足を踏み入れた。

第３１章　いざ犬国　☆２

里見家屋敷。桜時の部屋。

「……。」

朝から降り続ける雪を、ハチはその前足をガラス窓につけ、そこから延々と見つめていた。里見家に来て一日が過ぎた。色々なことを知った。だが頭の中は混乱しておらず、妙に冷静であった。混乱の限界を越えてしまったのだろうかとも思う。だが、それは……

――――ハチっ……――――

もっと気になっていることが、他にあるからなのかも知れない。

「はぁっ……」

ハチの吐いた溜息で、窓ガラスは少し曇った。

「失礼いたします」
「……？」

声とともに襖が開く。ハチが振り返ると、犬仁が部屋へと入って来た。

「あっ、悪いっ！今っ……！」
「そのままのお姿で結構ですよ」
「えっ……？」

慌てて人化しようとしたハチを、犬仁が止める。

「ここは犬国、皆、イヌです。イヌ以外の姿でいる必要など、どこにもありはしない」
「あっ、そっか……」

犬仁の言葉に、思いだしたように頷くハチ。

――――私の前に出る時は人化しなさいと、何度言えばわかるのっ？――――

「……。」

イヌである自分の姿を隠すように人化をした。その癖はもう体に染み込んでいる。だが、この国に居ればその必要はない。ハチを必要としてくれる国。ハチを受け入れてくれる国。ここは、ハチがありのままの姿でいられる国なのだ。

――――四大国を倒し、この国に再び“大国”の称号をもたらすことっ……――――

「……っ」

思い出される犬義の言葉に、ハチはその表情を曇らせた。

「犬智から聞きました。犬国とその歴史についてをお聞きになったそうですね」

「えっ？あっ、ああっ」

部屋の中に入り、襖を閉め、ハチの方へと歩いていくる犬仁。その言葉に、ハチが小さく頷く。

「意外でした……お父上のことより先に、国のことを聞かれるなんて」

「ああぁ～っ」

犬智にも同じようなことを言われたことを思い出し、少し耳を前後させるハチ。

「父さんのことはっ……あの人に直接聞きたいなぁ～とか思って」

「……？八房様ですか？」

「ああっ……」

少し俯き、ハチが笑う。

――――お前の祖父じゃっ……――――

初めて出会った、犬人の家族。八房が言葉を濁して消えたのは、桜時の父に何かがあったからだろう。他の者からではなく、八房か

ら聞いて、しっかりと受け止めたい。
「そうですか……わかりました」
ハチの姿を見て、犬仁が穏やかに微笑む。
「ならば私も、何も語りません」
「……ありがとう」
「いえ」
礼を言うハチに、犬仁が少し首を横に振る。
「犬仁は優しいな……」
「そんなっ」
ハチがそっとこぼした言葉に、犬仁は少し照れたように顔を俯かせる。
「犬智も優しいし、八犬士のみんなも、まぁ色々問題はありそうだけど……」
「申し訳ありません。問題のあった連中はしばき倒しておきますので」
相変わらず仲間に容赦のない犬仁。
「みんな、明るくて楽しそうだった……」
「犬孝様……？」
再び窓の外を眺め、遠い目を見せるハチに、犬仁が少し首をかし

げる。

「ここでは誰も、俺を“スズメじゃない”って蔑んだりしない……」

「……。」

言葉を続けるハチを、犬仁は後ろからまっすぐに見つめる。

「ここは、きっと俺にとって……一番居心地のいい場所……でもっ……」

ハチの前足が、窓ガラスに触れる。

「でもっ……」

「……。」

ハチはその先の言葉を、口にはしなかった。犬仁はそっと目を細め、ハチを見つめていた。

「失礼いたします」

ハチの部屋を出て、犬仁が襖を閉める。

「……っ」

廊下を曲がり、少し俯く犬仁。

――――でもっ……――――

なんと、悲しい顔をするのであろう。
ここが居場所のはずなのに、ハチ自身も一番居心地のいい場所と言っていたのに、どうしてあんな顔をしていたのであろう。

「何かが足りないのか……？何が……」

考え込むように、呟く犬仁。

「あっ！ヒトちゃ～んっ！」
「……？」

前方から聞こえてくる明るい声に、犬仁が顔を上げる。

「犬智」

廊下の向こうから犬仁の方へとやって来るのは、明るい笑顔の茶髪の少女・犬智であった。犬智は大きく手を振りながら、犬仁の前までくる。

「犬孝様のところへ行くのか？」
「うんっ！昨日、寝ずに作った、あいうえお作文第二段を聞いてい

ただこうと思ってっ！」
「そっそうかっ……」

曇りのない笑顔で言う犬智に、少し引きつった表情を見せながら頷く犬仁。

「ヒトちゃんも聞きたいぃ～っ？まずぅ、いぬとものいっ！イカはスルメでっ！いぬとものっ……！」
「まっまぁっ！とにかくっ！」
「……？」

犬智のあいうえお作文を遮るように、勢いよく声を出す犬仁。

「これ以上、襖は破くなよっ」
「うっ」

襖のことを言われ、少しその表情を引きつる犬智。犬智は昨日、桜時の部屋の襖を、詳細は不明だが、ビリビリに破いてしまったのである。

「今日破いたら、晩飯抜きだからなっ」
「そんなぁ～っ！ヒトちゃん、厳しいぃ～っ！」

冷たく言い放つ犬仁に、泣きそうな表情で訴える犬智。

「じゃあ私は、八房様に呼ばれているから……」
「あっ」

犬智の横を通り過ぎ、その場を歩き去って行こうとする犬仁。

「ヒトちゃんっ……！」
「……？」

去ろうとした犬仁を、犬智が思わず呼び止めた。不思議そうに目を丸くして、犬仁が振り返る。

「何だ……？」
「あっあのっ……」

振り返った犬仁に、少し躊躇うように俯く犬智。

「あの人はっ、本当に、ここにいていいの……？」
「……っ」

犬智の言葉に、犬仁の表情が曇る。

「“あの人”……犬孝様のことか……」
「うん……」

少し桜時の部屋の方を向き、目を細める犬仁。犬智が俯いたまま、小さく頷く。

「当たり前だろう。あの方は我々の長たるべき存在、五十五代・犬孝様だぞ？」
「それはっ……ここにいる理由になるっ……？」
「……っ」

その犬智の、シンプルな、だが深い問いかけに、犬仁は少しハッとしたような表情を見せた。

「なっなるに決まっているっ……！」

どこかムキになったように、少し声を張る犬仁。

「あの方は里見犬孝様っ！この犬国こそがあの方の居場所だっ……！」

「じゃあなんであの人は、あんなに悲しそうな顔しかしないのっ！？」

「……っ！」

声を張り上げた犬仁に、犬智も同じように大きな声を出して、必死の表情で問いかけた。犬仁が大きく目を見開き、出そうとしていたすべての言葉を呑み込む。

――――でもっ……――――

悲しそうな顔をしていた。本当に。

――――ううっ……！！――――

連れてくる時も、悲しそうだった。今にも潰れてしまいそうな、そんな状態だった。

――――我々とともに行きましょう……――――

ここに連れてこれば、あんな悲しそうな顔をさせることはないと、そう思っていたのに。

「……っ」

犬仁が拳を握り締める。

「ねぇ、ヒトちゃん。あの人はやっぱりっ……」

――――ワンワオォォォォ～～～ンっっ！！！――――

『……っ！』

遠くから聞こえてくるイヌの吠える声に、犬仁と犬智が同時に振り返る。

「この鳴き声は番犬のっ……」

「侵入者かっ……まさか犬孝様をっ……？」

遠吠えの聞こえた方を見つめ、犬仁が表情を曇らせる。

「犬智っ！お前は犬孝様のお傍に付けっ！片時も離れるなよっ！いいなっ！？」

「あっ！ヒトちゃんっ……！」

犬智にそう指示を飛ばし、犬仁がすごい勢いでどこかへと駆けていってしまう。犬智は呼び止めるように手を伸ばしたが、犬仁は振り返ることなく、その場から去っていった。

「ヒトちゃんっ……」

廊下に取り残された犬智は、不安げに犬仁の名を呟いた。

「八房様っ……！！」

犬仁が、最初に桜時を連れてきた大広間へと駆け入る。

「遅いぞ、犬仁」

「はっ！申し訳ございませんっ」

最奥で座る八房に言われ、犬仁がすぐにその場に膝をつき、深々と頭を下げる。すでに他の五匹は揃い、部屋の端で整列していた。

「番犬のお声をっ」

「聞いた。侵入者のようじゃな」

「はっ」

八房の言葉に、犬仁が大きく頷く。

「四大国の奴らか……？」

「いっいえっ！それはっ……！」

「違いますよ」
「……っ」

冷たい表情で問いかけた八房に、犬仁は慌てて否定しようとしたが、横から代わりにあっさりと否定したのは犬義であった。

「犬義っ」

そんな犬義を、犬仁は少し驚いたように見つめる。

「恐らくは犬孝様の元・お仲間の連中でしょう。龍国には身を置いていたようですが、四大国の者ではありません」
「そうか……」

冷たかったその表情が、少し落ち着いた様子となる八房。

「犬孝を取り戻しに来たか……」
「随分と人気がおありなんですねぇ～犬孝様はっ」
「さっすがコーちゃんっ！！」
「口を開くな……皆の耳が腐る……」

犬義の横で明るく声をあげる犬信に、その隣の犬礼が不快そうに言い放つ。

「ハッハッハっ！！面白くなってきたぜぇ～っ！！」

――――ボォォォォォ～～～ンっ！！――――

そう言って笑った犬忠を、白い煙が包んでいく。

『……？』

皆が戸惑うように見つめる中、白い煙の中から出てきたのは人化した犬忠。

「俺が全員っ！血祭りにしてきてやるよぉぉっっ！！」
「おっおいっ！犬忠っ！」

狂ったように開いた目で笑い、広間を飛び出していく犬忠。犬仁が慌てて立ち上がり、出ていく犬忠の背中を目がけて、大きく名を呼ぶ。

「犬忠っ！！」
「よいっ、犬仁っ」
「……っ」

追いかけて行こうと足を踏み出した犬仁を呼び止めたのは、八房。

「八房様っ！しかしっ……！」
「奴の力はワシも信頼しておる。殺すことはあっても殺されることはあるまい」
「“殺す”……」

八房の言葉に、少し表情をしかめて俯く犬仁。その可能性があるからこそ、止めねばならないのではないか。犬仁はそう思ったが、八房に進言することはなかった。

「犬悌、“安房の森”入口にて、侵入者どもを迎え討て」

「はいだぁっ！！」

八房の指示に、大きく頷く犬悌。

「犬信・犬礼、里見家・安房の森中間部にて、侵入者どもを待ち構えよ」

「はいはぁ～いっ！」

「もっとマシな返事をしろ……俺の耳が腐る……」

「レイレイも準備万端でぇ～すっ！」

「その呼び名はやめろ……俺の存在が腐る……」

相変わらずの言い合いをしている犬信と犬礼だが、とりあえず指示には頷いているようである。

「犬仁・犬義は、屋敷周辺にて待機せよ。侵入者が屋敷に入ることを防ぐのじゃ」

『はっ！』

八房の指示に、同時に頭を下げる犬仁と犬義。

「まぁ屋敷周辺まで辿り着くこともないと思うがな……」

「……っ」

意味深な八房の言葉に、犬仁が眉をひそめる。

「行けっ！八犬士よっ！侵入者は一人残らず捕えるのじゃっ！！」

『はっ！』

その言葉に、五匹は一斉に返事をした。

数分後。里見家屋敷前。

「犬悌は？」

「もう行った。犬忠に追いつかねばならんからな……」

犬義の問いかけに、人化した犬礼が眼鏡を拭きながら、冷静な表情で答えた。

「ヤッスゥもチューチューなんかが相方で大変だよねぇ～っ！」

「俺も大変すぎて脳が腐る……」

「えぇ～っ？レイレイの脳ってば腐ってんのぉ～？」

「……。」

相変わらずの暢気な声を出す、こちらも人化した犬信。犬信の言葉に顔を引きつりながら、犬礼が拭き終わった眼鏡を掛け直した。

「俺たちもそろそろ待機しに行くぞ……犬信……」

「うぅ～んっ！」

犬礼の言葉に、犬信が明るく頷く。

「ジンちゃんとヨッシーの出番、なくしちゃったらゴメンねぇ～っ！」
「ぬかるなよ」
悪戯っぽく笑いかける犬信に、犬仁は厳しい表情を向けた。
「奢りは刃を曇らせる……」
「わかってるっ」
犬信のクリクリとした瞳が、急に鋭く光る。
「ボクはいつでも全力投球さっ……」
「……。」
悪意のない無邪気な笑みから、悪意のない冷酷な笑みへと変わる犬信に、犬仁は少し表情をしかめた。
「お前の武器は弓だろう……刃でも投球でもないじゃないか……腐れ小僧……」
「レイレイってばひっどぉ～いっ！！」
犬礼の突っ込みに、犬信がまたいつもの陽気な表情へと戻る。
「じゃっ！行ってくるねっ！」
「ああ」
『……っ』
犬仁と犬義に軽く手を振ると、犬信と犬礼は高々と跳び上がり、そのまま目にも留らぬ速さで、森の中間部へと移動していった。

「さて、じゃあ俺は念のため、もう少し前まで出ておきますかねぇ」
「犬義」
「はい？」

森の方へと歩いて行こうとした犬義を、犬仁が呼び止める。犬義はゆっくりと振り返った。

「何故、言わなかった……？」
「はいっ？」

犬仁の問いかけに、困惑したように眉をひそめる犬義。

「番犬の報告では、侵入者の中に御伽警察の者が二名混ざっている……」
「……。」

真剣な表情を見せる犬仁に、少し目をそらすように下を向く犬義。

「それを八房様にご報告すれば、八房様はまず間違いなく、龍に戦争を仕掛けると仰るであろう……」

犬仁も犬智と同じように、戦いは好きではなかった。無益な血を流すことには、何の意味もないと思うからだ。だからこそ、御伽警察の者がいることを隠そうとした。

「お前も、実は四大国を倒すということに反対なのではっ……」
「奴らを捕えれば、いずれ知れること。そう思ったから言わなかっただけですよ」

「えっ……？」

犬仁の言葉を遮り、犬義は冷たく言い放った。

「俺は無駄なことはしない主義ですから」

「……。」

そう言って笑う犬義に、犬仁が少し目を細める。

「しかしっ……！龍国に戦争など仕掛ければっ……！」

「今はそれより侵入者っ、でしょう？」

「……っ」

犬仁のすぐ前に人差し指を突き出す犬義。犬仁が、強く訴えようとしていた言葉を止める。

「もう俺は行きますよ。貴女は屋敷前で待機して下さい」

「あっああ……」

頷いた犬仁を見て、犬義が犬仁に背中を向ける。

「貴女は……色々なことに心を痛めすぎる……」

「えっ……？」

その言葉を残し、犬義は森へと去っていった。

「……っ」

取り残された犬仁は、その場に立ち尽くし、深く深く俯いた。

第３１章　いざ犬国　☆３

犬国・安房の森入口。

「ふんぎゃあああああああああああああっっっ！！！」

雪降る森の木々の間を、死にそうな形相で必死に駆け抜けているのは、一匹のサル。こんなイヌの国にいるサルといえば、モンキくらいであろう。

「バウワウっ！！バウワウっ！！」
「ワンワンっ！！ワンワンっ！！」
「助けてぇぇぇぇぇ～～～っっっ！！！」

モンキは何故か、三十匹ほどのイヌに、ひたすら追いかけ回されていた。獰猛そうなイヌたちが、口から少しよだれを垂らしながら、怖い形相でモンキだけを追いかけていく。

「番犬ってやつかなぁ～？」
「見事にサルしか追いかけていかねぇーな」

追い回されているモンキを見ながら、落ち着いた様子で話しているユキジとゴン。その両隣には、同じように落ち着いている輝矢と羊スケの姿があった。あれだけたくさんイヌがいるというのに、全部が全部モンキを追いかけ、他の四人には誰も目をくれていない。

「さすが犬猿の仲ですね」
「いっやぁぁぁぁ～～っっ！！輝矢んっ！！助けてぇぇぇ～～っっっ！！！」

冷静に分析している輝矢に、モンキが必死に助けを求める。

「しかし鬼人でもない、罪なきワンちゃんたちを吹っ飛ばすわけにもいきませんしぃ」

「ここ乗り越えんかったら、桜時んとこ行かれへんでぇっ！！」

「八つ裂きにしますかっ」

「まぁ待て、まぁ待て」

モンキに乗せられ、ただのイヌに殺気を放ちまくりながら、右耳のピアスに手を伸ばす輝矢を、とりあえずゴンが止める。

「オッホンっ！ここはだなっ」

真剣な表情を見せるゴン。

「サルを見捨てて、俺たちだけで先へ進もう」

『賛成っ』

「ええぇぇっ！？何いっ！？その満場一致っ！！」

ゴンの無茶案に誰も反対しない皆に、イヌに追いかけられながらショックを受けた表情を見せるモンキ。

「頼むから何とかしっ……！」

――――――・・・・・・・・・っ！――――――

「んっ？」

追いかけられていたモンキが、遠くから飛んでくる何かに気付く。

「クっ……！」

少し表情をしかめ、木々の陰へと飛び込むモンキ。

――――――バァアアアアアアアーーーーンっっ！！！――――――

「うおぉっ！」

「サルっ！」

モンキが飛び込んだ途端、先程までモンキのいた場所と多くのイヌがいるその付近に、巨大な炎の塊が飛んできて、そこの雪を溶かし、地面を勢いよく焼いた。

「白い炎っ……？」

森を焼く白き炎に、少し表情を曇らせるユキジ。

「あっぶなっ……」

『ぎゃうううぅ～～～っっ！！！』

『きゅうううぅ～～～っっ！！』

「うっ……！」

ホッとした表情で起き上がったモンキの視界に、白い炎に焼かれるイヌたちの姿が飛び込んでくる。

「ヤバっ……！」

――――ボォォォォォォォ～～～ンっ！――――

「……っ」

すぐさま人化するモンキと、素早く右手を突き出す輝矢。

「“水月”っ」

「如意棒・第二の舞っ、“浄”っ！！」

二人の放った水と風が、互いに互いの力を取りこみ、さらに勢力を増して、イヌたちを包み込んでいる白い炎を消し去った。

『クっ……クウゥゥ～～ンっ……』

「ひでぇっ……」

炎が消えると、そこには火傷を負ったイヌたちが倒れ込んでいた。その悲惨な光景に、羊スケが少し表情をしかめる。

「でも一体、誰がっ……」

「ハッハッハッハっ！！」

『……っ！』

聞こえてくる笑い声に、輝矢たちが身構えて一斉に振り返る。

「お前たちかぁっ？“侵入者”っつーのはっ」

『……っ』

輝矢たちの振り向いた先にある1本の木。その木の枝の上に立ち、高々と輝矢たちを見下しているのは、一匹の黒いイヌであった。

「イヌっ……？」
「“犬人”っ……」

桜時と同種族のそのイヌの姿に、輝矢が少し眉をひそめる。

「やぁ～っと見つけたっ！」
「八犬士ってやつぅ？」

ゴンへと問いかけるユキジ。

「その通りっ！」

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

ユキジの問いかけに頷いたイヌを、白い煙が包んでいく。

「俺は八犬士が三、第五十四代・犬忠っ！」

白い煙の中から出てきたのは、黒髪黒目の黒い装束を身に纏った青年。犬忠であった。

「おいっ！お前っ！！」

名を名乗った犬忠に、勢いよく怒鳴りあげる門貴。

「お前もイヌやろっ！？なんで同じイヌの仲間に、こんなことっ……！！」
「……。」
「んんっ？」

門貴が熱く訴えかけているというのに、犬忠はまったく門貴の方は見ておらず、立ち並んでいる輝矢たちを一人ずつ、舐めるように見つめている。そんな犬忠に、少し首をかしげる門貴。

「おいっ！聞いとんかぁっ！！お前っ……！」
「決めたぁっ！！」
「へっ？」

さらに訴える門貴の言葉もあっさりと無視し、犬忠が枝の上から飛び上がり、輝矢たち四人の方へと急降下してくる。

「お前だぁっ！！」
『……っ！』

四人の中の一人へ向けて、右手に装着した鉄の爪を振り上げる犬忠。

――――・・・・・・・・っっ！！――――

「クっ……！」

「ゴンっ！」

「ゴンさんっ！！」

犬忠がその鉄爪を振り下ろしたのは、ゴンであった。ゴンは左手で犬忠の右手を掴み止め、ギリギリのところで鉄爪が体を切り裂くのを防いでいた。

「ううぅっ……！！」

犬忠の力が相当に強いのだろう。受けとめるゴンの足が、どんどん後ろへと下がっていく。

「お前っ」
「あっ？」

ゴンを押しながら、小さく言葉を発する犬忠に、ゴンが少し眉を吊り上げる。

「お前っ、あん中で一番強いって気がするっ」
「……っ」

犬忠の言葉に、表情を曇らせるゴン。

「ヒャッハっハっ！」
「イカれ野郎がっ」

狂ったように楽しげに笑う犬忠に、少し表情を引きつるゴン。

「ゴンっ！」

「お前らは先に行けっ！！」

もうだいぶ距離のあいてしまった輝矢たちに、ゴンが大きく叫ぶ。

「このクレイジードッグの相手は俺がするっ！！」

「ヒャッハっハっ！！」

――――――バァァァァァァァーーーーンっっ！！――――――

「ゴンさんっ！」

犬忠がさらに笑うと、ゴンの押されるスピードは速まり、そのまま二人は森の出口の方まで、勢いよく遠ざかっていってしまった。羊スケが思わずゴンの名を呼んだが、もう二人の姿は確認できず、声が届いたのかも定かではなかった。

「ゴンさんっ……」

羊スケが不安げにゴンの名を呟く。

「あっ！ユッキーっ！このイヌどもの火傷っ……！」

「ええぇ～？治すのぉ？」

門貴が犬忠の炎に焼かれたイヌたちの前に立ち、ユキジへと声をかける。門貴の言葉に、あからさまに面倒臭そうな表情を見せる、慈愛の精神に欠けたユキジ。

「だってヒドい奴のんはヒドいでぇ？このまま放っておいたらっ…

…」
「大丈夫だぁ～」
「へっ？」

背後から聞こえるナマった声に、門貴がゆっくりと振り返った。

「こうして薬草塗っとけばぁ～明日にはよくなるだでぇ～」
「……。」

門貴が振り返ると、顔を体もゴツい、身長二メートルは軽くあるであろう大男が、倒れているイヌたちの間にしゃがみ込んでいた。しゃがみ込んでいても、普通に大きい。その見た目は正直恐ろしい大男は、大きな指で小さな塗り薬を、器用にイヌの傷の部分に塗ってあげていた。

「後で包帯も巻いてやろうさねぇ～」
「えっえと……」

イヌの手当てをしている大男を見ながら、少し困ったように頬を掻く門貴。

「あのぉ～」
「んんっ？」

困った様子の門貴に、やっと気づく大男。

「ああっ！」
「うおっ」

その場でゆっくりと立ち上がる大男。その巨体に見下され、門貴

が少し肩を上げる。

「さっきはすっまなかっただねぇ～っ！タダの奴ぁ、いっつもあんな感じでさぁ～」

「はっ？」

大男が門貴に妙に気安い笑顔を向ける。

「相方のおんれもぉ、いっつも困らされとるんだわぁ～」

「そっそうですかぁ」

しみじみと話す大男に、とりあえず頷く門貴。

「で、アナタはどこの誰なんです？デカブツ」

「君に恐れるものはないの……？」

自分より五十センチは身長の高い大男を見上げながらも、まるで見下しているかのような偉そうな態度をとる輝矢に、ユキジが少し呆れた表情で呟く。

「おんれぇ？おんれはぁ～八犬士が五、第五十二代・犬悌だぁ～っ」

「犬悌……」

「また八犬士ぃ～？」

輝矢の偉そうな物言いにも、嫌な顔一つせずに、笑顔で名乗る犬悌。

「そうだぁ～おんれぇ、侵入者を捕まえにきただぁ～」

『……っ』

犬悌の言葉に、輝矢たちが皆、捕まえる気なのかと身構える。

「でぇ、お前たちぃ、ここいらで“侵入者”っぽい、怪しい奴らを見なかっただかぁ？」

『だあああああああっっ！！』

輝矢たちを捕まえるどころか、輝矢たちに侵入者を見かけなかったかと問いかけてくる犬悌に、門貴とユキジが一斉に倒れ込む。どうやら、輝矢たちを侵入者だとは思っていないようである。

「あ痛たたた……」

「ものすごい勢いで節穴ですね」

腰を押さえながら起き上がる門貴の横で、ある意味関心したように言い放つ輝矢。

「見たよ」

同じく起き上がったユキジが、犬悌へさらりと言い放つ。

「ええっ！？ほんとだかぁ！？」

「うん。怪しげな黒マスクの十一人組が、あっちの方にスキップしていった」

「おおぉっ！！」

ユキジから与えられるニセ情報に、感動したように目を輝かせる犬悌。

「何かウソ、いつもより手抜きちゃう？」
「相手が相手だからでしょう」
門貴の指摘に、輝矢が冷静に答える。
「十一人かぁ～報告よんりだいぶ多いだぁ～これは一回、ヒトに伝えに戻った方がぁ」
「輝矢さんっ、俺、死なれたら困るんでゴンさんの後、追うっスねぇ～」
「ああ、はい。ご自由にどうぞ」
「……っ」
悩んでいた犬悌が、羊スケと輝矢の会話を聞き、その顔色を変える。
「じゃあ行ってきまっ……」
「ダメだぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」
「へっ……？ぎゃあああああああああああっっっ！！！」
ゴンの後を追おうとした羊スケを、犬悌が高々と持ち上げ、勢いよく放り投げた。
『はっ……？』
遠くの空のお星様となって消える羊スケに、呆然とする輝矢たち。
「タダの戦いになんかぁ～手ぇ挟んだらぁ、殺されてしまうだよぉ

～っ！！」
「もう死んだんじゃん……？」
羊スケもいないのに熱弁する犬悌に、呆れた表情を見せるユキジ。
「あんの少年を止めねばぁっ！とりゃあああああああっっ！！」
『あっ……』
自分で投げ飛ばした羊スケを追い、その場から勢いよく駆け出して行く犬悌。輝矢、門貴、ユキジだけがその場に残される。
「なっ何やったんやろ……？」
「さぁ？」
唖然とする門貴の横で、あまり興味がなさそうに言い放つ輝矢。
「では先に進みましょうか」
「えっ？ゴンたち、放っておいていいのぉ？」
さらに森の奥へと進もうとする輝矢に、ユキジが目を丸めて問いかけた。
「あの二人、名ばかりのオトポリだから、ヤラれちゃうかもぉっ」
「相手は八犬士……」
輝矢が真剣な表情を見せる。
「名の通り八匹いるのなら、一人一匹ずつ倒したところで足りません」

「……っ」

輝矢の言葉に、ユキジが少し表情を曇らせる。

「振り返っていては、この勝負、勝てはしない……」

『……。』

今までの戦いにはない、どこか緊迫した表情を見せる輝矢に、門貴とユキジも真剣な表情となる。

「アナタ方には、私がハチを助けるための踏み台になってもらいます」

「だろうと思った……」

「輝矢んの踏み台っ！喜んでぇ～っ！」

あっさりと言い放つ輝矢に、いつものように溜息をつくユキジと、元気よく返事をする門貴。

「とにかく……」

輝矢が少し後ろを振り返る。

「今はあの二人を信じるしかありません……」

その頃、安房の森入口。

「クっ……！」

森の入口付近まで後退してきたゴンは、今だに左手で犬忠の鉄爪を止め、少し苦しげな表情を見せていた。

「こっ……のっ！」

止める左手は、大きく震えている。

「ハッハッハっ！！おっらあああああっっ！！」

「うっ……！」

そこへ犬忠が、鉄爪にさらに力を加えた。

「うわあああああああああっっ！！」

――――バァァァァァァーーーーンっっ！！――――

森のすぐ手前にある山の岩肌へと、吹き飛ばされていくゴン。犬忠の前で、赤い血が宙を舞う。

「へへっ」

下ろした鉄爪の先についた赤い液体を見て、どこか楽しげに笑う犬忠。

「ヒャッハッハッハっ！！」

犬忠が狂ったように、大きく笑う。

「もっとだぁっ！俺にもっと面白い戦いをさせろぉっ！！」

天へと吠えるように叫びあげる犬忠。

「ヒャッハッハッハっ！！」

「そう粋がんなよっ」

「ハっ……？」

崩れた岩肌の方から聞こえてくる声に、犬忠がその笑い声を止めた。

「……。」

崩れ落ちた瓦礫の中から姿を現すのは、制服の破けた左肩から赤い血を流しているゴン。しかしゴンは痛そうな表情は少しも見せず、犬忠に鋭い笑みを向ける。

「仕方ねぇ」

吊り上がった細い目で、犬忠を睨みつけるゴン。

「俺が相手してやるよっ、小僧犬っ」

「……っ」

強きに言い放つゴンを見て、犬忠はさらに楽しげに笑った。

その頃、安房の森のどこか。

「んっんん～っ？」

雪の積もった茂みのど真ん中に墜落したような状態となっている羊スケが、ゆっくりとその目を開く。

「あれぇ～？俺っ……」

茂みの上で、頭を押さえながらゆっくりと起き上がる羊スケ。

「そうっスっ！あの大男に投げ飛ばされてっ……！」

犬悌に、お星様になる勢いで放り投げられた羊スケ。普通ならば全身骨折であっただろうが、どうやらこの雪と茂みが下敷きになってくれたお陰で無傷で済んだようである。

「いっやぁ～っ！生きてて良かっ……！」

「ぬおおおおおおおぉぉっっ！！！」

「んっ……？」

遠くから徐々に近づいてくる大きな声に、何となく嫌な予感がして、少し表情をしかめながら、羊スケがゆっくりと振り返る。

「ぬおおおおおおおおぉぉぉっっ！！！」

「ういっ……！？」

羊スケの元へと勢いよく駆け込んでくるのは、あの大男・犬悌。

「いっやあああああぁぁぁぁぁぁぁっっ！！」

「ああっ！！待つだぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」

茂みを飛び出し、必死に逃げる羊スケ。そんな羊スケを、犬悌はさらにスピードを上げて追う。

「犬忠の元には行っちゃダメだぁぁぁよぉぉぉぉ～～～っっ！！」

「なんでこうなるんスかぁぁぁぁっっ！！！？」

羊スケは誰にともなく、必死に叫んだ。

第３１章　いざ犬国　☆４（前書き）

お詫び

昨日、間違えて次章の内容を投稿してしまいました。
読者さまを混乱させてしまって申し訳ありませんでした。
今回は間違いなく３１章の終わり部分です。
失礼いたしました。

第３１章　いざ犬国　☆４

その頃。里見家屋敷。ハチの部屋。

「んん～っ！骨っこうめぇ～っ！」

テーブルいっぱいに積まれた骨っこ。骨っこを両手に、頬を膨らませて楽しそうにしている一匹の白犬。もちろんハチである。

「もうサイコぉ～っ！」

「そう言っていただけると嬉しいですっ」

骨っこを頬張り、とても幸せそうに笑うハチの姿に、しっかりと一メートル離れたところに座っている犬智も、どこか幸せそうに笑った。

「朝から作った甲斐がありましたっ！」

「ええっ！？これ全部、犬智が作ったのかっ！？」

「ハイっ！」

山積み骨っこを見ながら、ハチが大きく驚く。

「すっげぇなぁ」

「台所、五か所もダメにしちゃいましたっ！」

「どうやってっ！？ってか、そんなに台所、あんのかよっ！！」

愛らしい笑顔で言い放つ犬智に、勢いよく突っ込みまくるハチ。

「フフフっ」
「ふぇっ？」

突っ込むハチを見て、堪えていた笑いを思わずこぼしてしまったような、そんな笑いを見せる犬智。ハチが少し首をかしげる。

「んだよっ、そんなにおかしいか？俺のツッコミっ」
「いえっ」

犬智は笑いながら、そっと首を横に振る。

「犬孝様が明るくなって下さって良かったなぁって思って」
「……っ」

犬智の言葉に、ハチが目を見開く。

「昨日は、とても悲しそうでしたから……」
「……。」

ハチが骨っこを食べる手を止め、少し俯く。

「物で釣ってみて良かったですっ！」
「その言い方、失礼じゃね？」
「ああっ！すみませんっ！」

何の悪びれもなく答える犬智に、しかめた表情を向けるハチ。そんなハチを見て、犬智が慌てた様子で必死に頭を下げる。

「私ったらまた余計なことをぉ～っ！ううぅ～っ！ヒトちゃんに半殺しにされちゃうぅ～っ！」

「……。」

犬智が犬仁の脅威に怯える横で、しかめた表情を穏やかな笑顔へと変えるハチ。

「……？」
「犬孝様？」

ふと窓の方を見るハチに、犬智が少し首をかしげる。

「どうかなさいました？」
「いやっ」

窓から白い雪の積もる安房の森を見つめるハチ。

「今、何か……」
「……っ」

ハチがそう呟いた途端に、犬智の表情が曇る。

――――侵入者っ……まさか犬孝様をっ……――――

「……。」

思い出される犬仁の言葉。すでに犬智以外の六匹は、侵入者を迎え討つべく、森へと行ってしまったことを犬智は知っている。だが、それをハチに告げてはいけない。

「何か……」
「……っ」

外の様子が気になっている様子のハチに、少し目を細める犬智。

「犬孝様っ」
「んっ？」
「……。」

振り向いたハチを、犬智が真剣な表情でまっすぐに見つめる。

「実はっ……」
「失礼します」
『……？』

襖の開く音とともに聞こえてくる声に、ハチと犬智が同時に振り向く。

「ヒトちゃん？」
「犬仁」
「……。」

二人が振り向いた先には、厳しい表情を見せた犬仁が立っていた。

「ああ～っ！」

雪に埋もれた地面を、歩きにくそうに進みながら、大きな声を出す門貴。

「行けども行けども森ばっかやなぁ～っ！」

「ほぉ～んとっ、雪はやまないし、ヤんなっちゃうっ」

羽根にうっすらと積もった雪を払い落しながら、本当に嫌そうな表情を見せるユキジ。

「私がハチのところまで瞬間移動できるような羽根ありませんか？キジ」

「んなものあるわけないでしょっ」

もう雪道を歩くことに飽きたのか、都合のいい羽根を求める輝矢に、ユキジが冷たく言い放つ。

「あのバカキングにそこまで求めるのは酷でしたね、はぁっ」

「何かちょっとイラっとくるんだけど……？」

深々と溜息をつく輝矢に、ユキジが表情をしかめる。

「まぁとにかく歩くしかなっ……」

「ああぁぁ～っ！！！」

『……？』

門貴が改めて足を踏み出そうとしたその時、上の方から妙に陽気な少年のものらしき声が聞こえてきた。輝矢たちが一斉に顔を上げる。

『……っ』

木の枝元に見える二つの人影。

「もしかしてぇ～侵入者さんたちですかぁ～っ？」

「その吐き気のするしゃべり方はやめろ……耳が腐る……」

枝に座っている、弓を背負った茶髪の少年と、その隣に立っている、本を片手の眼鏡の青年。

「八犬士ですか……」

「うん、そおぉ～っ！ボク、八犬士が四、第五十三代・犬信ってゆぅ～のっ！よろしくねぇっ！」

眉をひそめる輝矢に、明るく右手を挙げて名を名乗る犬信。

「あっ！ちなみにボクを呼ぶ時は“シンちゃん”って呼んでねっ！」

「しっしんちゃんっ……？」

陽気すぎる犬信の口調に、門貴が少し調子を狂わされる。

「えぇ～っとぉ、君たちは“侵入者”だからぁ～っ……シンちゃんっ……？」

考え込んでいた犬信の首が、どんどんと傾いていく。

「被っちゃったっ！！どうしようっ！？レイレイっ！！」

「そのまま死ね……世界が腐る前に……」

真剣な表情で問いかける犬信に、この上なく冷たく言い放つ眼鏡の青年。

「八犬士が八、第五十四代・犬礼だ。よろしく」

悩んでいる犬信は無視して、犬礼が輝矢たちに名を名乗る。

「なぁ～？今、何匹目やったっけぇ～？」

「四匹目でしょ？」

「まだ半分かぁ～っ！これ以上増えたら、絶対覚えられへんわぁ～っ！」

「私なんて最初から覚える気ないですよ？」

「……。」

犬礼の自己紹介はあっさりと無視して、何やら緊張感なく会話を繰り広げている輝矢たち。そんな輝矢たちの姿に、犬礼が少し呆然とする。

「あっはっはぁ～っ！レイレイってば、完全無視だぁ～っ！」

「耳の腐った奴らめ……」

楽しそうに笑う犬信の横で、少し拳を握り締める犬礼。

「とにかっくっ！」

『……っ？』

犬信と犬礼が木の上から飛び降り、輝矢たちの前へと立ちはだかる。

「こっから先は通さないぞぉっ！」

「もっと威圧して言えないのか……腐った口め……」

「ええぇ～っ？ボクってば、そういうキャラじゃないしぃ～っ」

『……っ』

こちらもあまり緊張感なく会話をしている犬信と犬礼。そんな二人に、やっと警戒したように、身構える輝矢たち。

「仕方ないねぇ～門貴っ」

面倒臭そうに息をついたユキジが、門貴の方を振り向く。

「ここは君とボクでっ……」

「……。」

「……っ」

ユキジが振り向くと、門貴は犬信と犬礼の二人を見ながら、まるで期待でもはずれたかのような、物足りなさそうな表情を見せていた。

「……。」

ユキジが少し俯き、そっと目を伏せる。

――――ボォォォォォォォ～～～ンっ！――――

「へっ？」

隣で白い煙に包まれていくユキジに、門貴が少し目を丸くする。

「ふぅっ」

白い煙の中から、人化した由雉が姿を見せる。

「さてとっ」
「ああ、せやな」

懐から色羽を出す由雉を見て、門貴も続くように如意棒を構える。

「ここは俺とユッキーで抑えるから、輝矢んは先にっ……」
「門貴っ」
「……？」

輝矢に先に行けと言おうとした門貴を、由雉が呼ぶ。少し不思議そうにしながら、由雉の方を振り返る門貴。

「何っ……」
「あの二人は“戦いたい相手”とは違うんでしょっ？」

「……っ」

由雉の言葉に、門貴がハッとしたように目を見開く。

「……。」

その二人の会話を見つめ、少し目を細める輝矢。

「それはっ……」

少し俯く門貴。門貴の脳裏に過るもの。

――――俺を……倒せたなら……――――

桜時をさらわれたあの夜、刃を交えたあの男。

「……っ」

悩み込むように俯いている門貴を見て、由雉がそっと笑みをこぼす。

「輝矢、ここはボクが抑える。門貴と先に行ってっ」

「えっ！？」

「……っ」

由雉の言葉に、勢いよく顔を上げる門貴と、眉をひそめる輝矢。

「二人を相手にすると？」
「うん～」
「それは無茶では？」

何の躊躇いもなく頷いた由雉に、輝矢は静かな表情で問いかけた。

「輝矢言ったよね、一人一匹倒したって足りないって」
「ユッキーっ」

由雉が笑みを浮かべたまま、ゆっくりと輝矢の方を見る。そんな由雉を、門貴はまっすぐに見つめる。

「振り返ってたらこの勝負には勝てないって」
「……っ」

由雉のあまりにまっすぐな瞳に、輝矢がただ目を細めるだけで、それ以上、言葉を口にすることが出来なかった。

「なら行って。振り返らずに」
「由雉っ……」

相手とて弱くはない。一対一でも勝てるかどうかもわからないというのに、由雉は二人と戦おうとしている。門貴を戦いたい相手の元へ送るために。輝矢を前に進めるために。

「わかりました……」

「……っ」

そう言って笑った輝矢を見て、由雉もまた笑みをこぼした。

「聞いたぁ～？レイレイっ。あのトリさん、ボクらを一人で相手する気らしいよぉ～っ」

「愚かな考えだ……俺のすべてが腐る……」

そう会話を交わしながら、犬信が弓を、犬礼が薙刀を、それぞれに構える。

『……っ』

武器を構えた二人に、緊迫した表情を見せる輝矢、門貴、由雉。

「行くよっ……！」

「ええっ」

「おうっ！」

由雉の声に、輝矢と門貴が大きく頷く。

「……っ！」

由雉がその場で高々と飛び上がり、上空で大きく両手を広げた。

「“千裂羽”っ……！！」

広げた両手から、犬信と犬礼へと降り注がれる、千枚の青き羽根。

「行きますよっ！サルっ！」

「おうっ！！」

二人を青い羽根が襲うその間に、輝矢と門貴がその場を駆け出して行く。

「まったく……目が腐りそうな作戦だ……」

降って来る千枚の青い羽根を見上げながら、少し呆れたように言い放つ犬礼。その表情に危機感はまったくとない。

「犬信……」

「うんっ！」

犬礼に名を呼ばれた犬信が、降って来る羽根に向かい、弓を構えた。

「弓っ……だけっ……？」

弓を構えただけで、いっこうに矢を構えようとしない犬信に、上空の由雉が少し首をかしげる。よく見れば、犬信は弓は背負っていたものの、初めから矢は背負っていなかった。

「何をっ……」

「……っ」

戸惑う由雉を見ながら、犬信がそっと笑う。

「射ぬけっ、“白矢（びゃくや）”っ……」

犬信が矢のない弓を引き、そして放った。

――――パァァァァァァァァーーーーンっ！！！――――

犬信の周囲から、無数の光る白い矢が現れたと同時に、勢いよく上空へと放たれていく。放たれた無数の矢が、降り注ぐ由雉の羽根を、次々と射抜いた。

「なっ……！」

一つ残らず射抜かれる千枚の羽根に、由雉が衝撃を走らせる。

「そんなっ……！うっ……！」

焦っている由雉の元へと、飛んでくる光の矢。

「クっ……！」

――――ボォォォォォォォ～～～ンっ！――――

「ううっ……！」

由雉がキジの姿に戻り、必死に翼を広げて動き、何とかギリギリのところで飛んできた矢をかわす。

「あぁ～あっ、獲り逃がしちゃったっ」

弓を下ろし、少し冷たく笑う犬信。

「ユッキーっ！！」
「……っ」

由雉の危機を察知し、先へ行こうとしていた輝矢と門貴が思わず後ろを振り返る。

「うっ……！！」
「ホント……腐りそうだ……」

振り返った二人のすぐ目の前へと降下してくる、薙刀を構えた犬礼。

「逃げられるはずなどないのに……」
「クっ……！」

薙刀を振りかぶる犬礼に、輝矢が顔をしかめ、右耳のピアスへと手を伸ばす。

「“月器・三日づっ……！」

――――ピキィィィィィィーーーンっ！！――――

「……っ？」

「何っ……！？」

三日月を目覚めさせようとしていた輝矢が、思わずその手を止める。輝矢たちへと振り下ろされようとしていた犬礼の薙刀が、勢いよく凍りついたのだ。

「こっこれはっ……！？」

少し焦ったように、凍りついた薙刀を持ち上げる犬礼。

「氷っ……？」

「オォーホッホッホッ！！」

『……っ！』

聞こえてくる甲高い笑い声に、輝矢たちや犬礼が一斉に振り返る。

「あっ……アナタはっ……」

振り返った輝矢が、大きく目を見開く。

「こぉ～んな無茶苦茶で、失礼極まりなくって、ムカついてしょーがない女の手助けなんてしたくもないけどねぇ～っ！」

長く白い髪に、真っ赤なリボンのよく映えた、鋭い青の瞳を輝かせた、ドレス姿の一人の女。

「あっ……」

「あれはっ……」

その女の姿に、門貴と由雉も驚きの表情を見せる。

「その女には借りがあんのよっ！でっかい借りがねぇっ！！」

「しっ……白雪っ……！！」

「ウフフっ」

そう、そこに現れたのは、白雪であった。

第３２章　その力の名　★１（前書き）

今日から３２章です。

第３２章　その力の名　★１

「しっ白雪っ……」
「久し振りねっ」

驚きの表情で見つめる輝矢に、自信満々の笑みを向けるその女性。

「竹取輝矢っ」
「……っ」

ピンチの輝矢たちの前に現れたのは、白雪であった。

「ねぇ～っ、お兄ちゃん」
「んん～っ？」

金髪紫目のまだ幼い少年が、同じく金髪紫目のよく似た顔立ちをした青年へと声をかける。二人は雪深い森の中を、一歩一歩足跡をつけながら、ゆっくりと歩き進めていた。

「白雪様ぁ～、どこ行っちゃったんだろうね」

「さぁ……あの人が本能のままに突き進んで、道に迷うのはいつものことだから」

少年の問いかけに、少し呆れた表情で答える青年。そう、この二人、白雪の部下である鈴白・芹兄弟である。

「まぁ、しぶとい方だから死ぬことはないと思うけど」

「待つだぁぁぁぁ～～～っっっ！！！」
「イヤっスぅぅぅぅ～～～っっっ！！！」

『んっ？』

森の向こうの方から聞こえてくる二つの大声に、鈴白と芹が同時に振り向く。

「タダのところなんてぇ、行っちゃダメだぁぁぁぁ～～っ！！」
「わかったっスっ！行かないっスから、もう追って来ないで下さいっスぅぅ～～っ！！」

深い森の奥から飛び出してくるのは、羊スケと、羊スケを追いかけている大男・犬悌。犬悌は、ゴンと犬忠の元へ行こうとしている羊スケを、必死に止めようとしているのである。

「考え直すだぁぁぁぁぁぁぁ～～～っっ！！！」
「だあああああああっっ！！誰か何とかして下さいっスぅぅ～～っっっ！！」

羊スケが、誰にともなく必死に助けを求めた。その時。

「“降雹”っ！」
「……っ！」

追いかけている犬悌に飛んでくる、数個の巨大な雪の玉。

「クっ……！」

犬悌がその場に立ち止まり、両手を顔の前で交差させた。

――――バァァァァァァァァァーーーーンっ！！――――

雹が犬悌に直撃し、粉雪のような細かい雪の粒が辺りに舞い上がり、犬悌の姿を隠した。

「へっ……？」

やっと走る足を止め、少し戸惑った様子で後ろを振り返る羊スケ。

「大丈夫ですかっ！？」
「へっ？」

声に羊スケが振り向くと、羊スケの元へ鈴白と芹が駆け寄って来た。

「あっありがとうっス。あなた方は確かっ……」

「あなたは確か……」

互いを見合う、羊スケと鈴白・芹。

「誰でしたっけ？」
「誰っスかぁ？」

そして三人は、同時に首をかしげた。両者、虎国でも戦いの時に顔を合わせているのだが、どうもお互いの印象が薄かったようで、どちらも記憶に残っていないようである。

「芹、覚えてるか？」
「うぅ～んっ、何となく見覚えはあるんだけどぉ……」
「誰でしたっスかねぇ～？」

三人は必死に首を捻り、思いだそうと考え込む。

「ぬおおおおおおおおおおうぅっ！！」
『……っ！』

雄たけびのような大声をあげ、辺りに舞い散っていた雪を払いのけ、姿を見せる犬悌。そんな犬悌に、三人が表情を険しくし、身構える。

「やぁぁぁぁぁっと見つけただぁぁぁよぉぉぉっ！！侵入者っっ！！」
『へっ？』

犬悌の大きな指を差され、目を丸くする鈴白と芹。

「侵入者の手から今、助けるだぁぁぁよぉぉぉっっ！！あんさぁぁぁんっ！！」

『ぎゃあああああああああああああっっ！！』

「だあああああっっ！！だから違うって言ってるっスぅぅ～～っっっ！！」

羊スケ・鈴白・芹は、またもや勘違いして追いかけてくる犬悌から、必死に逃げた。

「奇遇ですね」

目の前に現れた白雪に、驚いていた輝矢が表情を戻して声をかける。

「どちら様でしたっけ？」

「貴女っ！今っ！“奇遇ですね”っつったじゃないっ！！さっき“白雪”って呼んだしっ！！」

とぼける輝矢に、白雪は勢いよく突っ込みまくる。

「ああ、白雪虎昌ですかっ」

「フルネームで呼ぶんじゃないわよっ！！下の名前、気に入ってないんだからっ！！」

フルネームを呼ぶ輝矢に、またしても勢いよく怒鳴りあげる白雪。

そう、この女、本名を白雪虎昌。本人曰く西ではけっこう有名な退治屋のようで、輝矢をライバル視して戦ったこともある。こう見えて虎国主の娘であったりもするのだ。

「白雪ちゃ～んっ！！」

「何で白雪がこんなところにいるのぉ～？」

門貴が白雪に嬉しそうに手を振る中、犬信の攻撃を避け、地面へと降りてきた由雉が問いかける。

「フフフっ、それはねぇっ……！」

「また悪趣味な美少年集めでもしているのですか？」

「ちっがうわよっ！！」

輝矢の言葉を、全力で否定する白雪。

「龍国から匿名通信があったのよっ！」

「匿名通信っ？」

「そうっ！」

聞き返した輝矢に、白雪が大きく頷く。

「桜時様が犬国の連中にさらわれて、あんた達が助けに行ったから手助けしてやってほしいってっ」
「……っ」
白雪の説明に、輝矢が少し驚いたように目を開く。匿名通信で虎国に連絡を取ることが出来るのは、恐らくオトポリにいる者くらいであろう。それも、かなりの身分を持った者。
――――アンタ、あいつから手、離さない方がいいわよっ？――――
「……。」
輝矢の頭を過ぎる、リンゴの顔。
「ふえぇ～？誰がそないなことぉ～？」
「……っ」
首をかしげている門貴の横で、輝矢は俯き気味に少しだけ笑みをこぼした。
「というわけでっ！ここは私が引き受けるわっ！」
「えっ……？」
強く言い放つ白雪に、輝矢が少し戸惑いの表情を見せる。
「言ったでしょっ？あの時っ！」

鬼人に攻め込まれた虎国を、輝矢たちが戦い、何とか守りきったあの時。

――――貴女に借りが出来たわっ。だから今度、貴女がピンチの時は……――――

「“私が助けてあげる”ってっ！」
「白雪っ……」

笑顔を見せる白雪に、輝矢が少し目を細める。

「別にアナタごときに助けられなくても、私は全然平気でっ……」
「だあああああっ！！一回目言った時と同じこと言うんじゃないわよっ！！相変わらずな女ねっ！！」

白雪に助けられようとすることを拒む輝矢であったが、白雪が大声を出して輝矢の言葉を無理やり遮る。

「助けてあげるったら助けてあげるっつってんのよっ！！」
「だから助けなどいらないと言ってるでしょう？しつこい女ですね」
「何ですってっ！？」
「ですから私は、アナタなどに助けられるくらいならですねぇっ」
「まぁまぁ輝矢ぁ～んっ」
「……？」

久々に会ったというのに、やはり険悪な空気になってしまう輝矢と白雪。白雪に負けじと言い返そうとした輝矢を、門貴が宥めるよ

うに呼ぶ。

「何です？サル。私は今、機嫌が悪いので、触れると火傷しますよ？」

「いっやぁぁぁ～～んっ！！輝矢んの愛の炎で溶かされるんなら本望やわぁぁ～～っ！！」

「バカっ」

「うぎゃっ！」

火傷本望の門貴を突き飛ばし、輝矢の前に少し不機嫌そうな表情の由雉がやって来る。

「輝矢もっ！今は白雪と争ってる場合じゃないでしょっ？」

「だってこの女が生理的に無理なんですもん」

「何、全否定してくれちゃってんのよっ！貴女っ！！」

輝矢の言葉に、すかさず文句をつける白雪。

「だいたいこの女の助けを借りるなんて、私のプライドが傷つきます」

「……っ」

白雪に背を向けるようにして腕を組み、そっぽを向いてしまう輝矢に、由雉が顔をしかめる。

「あのねぇっ！」

「……。」

「えっ？」

輝矢に訴えかけようとしていた由雉の前に、制止を促すように手

を差し出したのは白雪であった。由雉が少し戸惑うように白雪を見る。

「竹取輝矢っ……」
「何です？白雪虎昌」
「フルネームで呼ばなくていいわよっ！！下の名前、気に入ってないんだからっ！！」

わかっていて言っている輝矢に、通例通りの突っ込みを見せる白雪。

「貴女……」

しかし白雪がすぐさま真剣な表情となり、まっすぐな瞳を輝矢に向ける。

「プライドと桜時様と、どちらが大事なんですのっ？」
「ハチです」
「早っ！」

即答する輝矢に、問いかけた白雪が思わず驚く。

「だったらとっとと行きなさいっ」

少し呆れたように肩を落とし、改めて輝矢の方を見る白雪。

「とっとと行って、とっとと敵ぶっ倒して、とっとと桜時様取り返

していらっしゃいっ！」

「……っ」

白雪にしては珍しい、嫌味のない穏やかな笑みに、輝矢は少し驚いたように目を見開いた。

「そして桜時様を私のお婿さんに頂戴っ」

「絶対やりません」

付け加えられた言葉を、一瞬で断る輝矢。

「……。」

少し肩を落とし、俯いた輝矢が、そっと笑みをこぼす。

「わかりました。ここは任せます」

「そうこなくっちゃっ！」

「まぁハチはあげませんけどね」

『……っ』

笑顔で白雪を見る輝矢に、白雪が張りきったように右手を挙げる。

二人の様子を見て、門貴と由雉も笑顔をこぼす。

「白雪っ」

「何よっ？」

輝矢に呼ばれ、振り返る白雪。

「仮にも私の仲間として戦うのですから、不甲斐無い戦いはしないようにお願いしますよ」

「カッチーンっ！いちいちムカつくこと言う女ねっ！」

遥か上から目線の輝矢に、白雪が勢いよく表情を引きつる。

「誰に向かって言ってんのよっ！」

「……っ」

引きつった顔を見せながらも自信を覗かせる白雪に、輝矢が少し笑みをこぼす。

「では今度こそ行きますよ、サルっ」

「おうっ！」

輝矢の言葉に、門貴が大きく頷き、二人が先へと駆け出して行く。

「あぁ～っ！輝矢ぁ～っ」

「……？」

駆け出して行く輝矢を、少し呼び止める由雉。輝矢が走りながら、振り返る。

「桜時に伝えといてぇ～っ」

由雉が輝矢に笑顔を向ける。

「“ボク、桜時の、そういうウジウジクヨクヨメルメルしたとこ、大っ嫌ぁぁ～い”ってっ！」

「……っ」

由雉の言葉を聞き、輝矢が少し笑みをこぼす。

「わかりました」

「じゃあ私も“この世で一番愛してますわぁ～桜時様ぁ～”ってっ！」

「却下っ」

「何でよっ！！」

白雪の言葉を一瞬で却下し、輝矢が背を向けて再び走り出していく。

「うっわぁ～っ！人を散々、放置しといた挙句、また逃亡ぅぅ～っ？」

いきなり現れた白雪との会話を、延々と横で聞かされていた上に、またもや先へ進もうと駆け出して行く輝矢と門貴に、犬信が非難するように声をあげる。

「腐ったことを言っている前に奴らを止めろ……犬信……」

「はいはいっ！」

犬礼の言葉に、遠ざかっていく輝矢と門貴目掛けて、弓を構える犬信。

「“白矢”っ！」

犬信の矢のない弓から、またもや無数の白光の矢が放たれる。

「逃がさないって言ってるでしょっ！」

輝矢たちへと飛んで行く矢を見ながら、得意げに笑う犬信。

「……“氷壁”っ」

――――バァァァァァァァァーーーーンっ！！――――

「……っ！！」

地面から突如、突き上がってきた巨大な氷の壁が、犬信の放った矢をすべて受けとめた。

「なっ……！！」

思わずずっと浮かべていた笑みを消し、驚きの表情を見せる犬信。

「貴方たちは私が引き受けるって言ってるでしょっ……？」
「……っ」

氷の壁の前に立ち、得意げに微笑む白雪の姿に、犬信の表情が歪む。

「どうしよぉ～～っ！？二人も逃がしちゃったぁ～っ！！レイレイ～っ！！」
「うるさい……耳が腐る……」

歪んだ表情から一気に子供のような泣きそうな表情を見せる犬信に、冷たく耳を塞ぐ犬礼。

「こうなってしまったことはもう仕方ない……あの二人は犬仁と犬義に任せ、俺たちはこの二人をやる……」
「うんっ！わかったぁっ！」

犬礼の冷静な言葉に、犬信が満面の笑顔で頷く。

「ボク、頑張って侵入者やっつけるねっ！」
「……っ」

無邪気な笑顔の中に、鋭い瞳を見せる犬信を見て、白雪が少し眉をひそめる。

「さぁっ！やるわよっ！キジっ！」
「そう仕切られてもねぇ～」

やる気を見せる白雪に、由雉はかなり面倒臭そうな表情を見せた。

「犬仁……」

「……。」

その頃、ハチと犬智のいる桜時の部屋に、厳しい表情を見せた犬仁がやって来ていた。いつもとどこか違う空気を醸し出している犬仁を、ハチと犬智が少し戸惑うように見つめる。

「ヒトちゃんっ？一体、どうしっ……」

「犬国に数名の侵入者が入り込みました」

「……っ！」

「えっ……？」

犬仁の思いがけない言葉に、犬智は大きく目を見開き、ハチは少し戸惑うような声を出した。

「ひっヒトちゃんっ……！」

「侵入者……？」

「はい」

犬智が止めるように名を呼ぶが、犬仁は聞き返したハチに大きく頷いた。

「侵入者は御伽警察の者二名、サル一匹、キジ一羽、そして……」

犬仁がまっすぐにハチを見つめる。

「黒髪の少女……」

「……っ！」

ハチが大きく目を見開く。

「輝矢っ……」

突き出たように、その名を口にしてしまうハチ。

「輝矢がっ……？」

――――私はっ……！アナタを“仲間だ”などと言った覚えは一度もありませんっ……！！――――

「そんなっ……はずはっ……」

ハチが戸惑うように俯く。あんなにもはっきりと拒絶されたのに、

仲間ではないと言われたのに、来るはずなどない。

「そんなっ……」

来るはずなどないと思いながらも、胸の中から何かが込み上げた。

「……。」

そんなハチの様子を見ながら、犬仁が少し目を細める。

「すでに他の五犬が応戦中です」

俯いたままのハチに、犬仁が言葉を続ける。

「私も今から参ります」

強い意志を感じさせる瞳で言い放つ犬仁。

「それだけです。失礼しました」

「あっ！ヒトちゃんっ……！」

ハチに一礼して部屋を出て行く犬仁を、犬智が慌てて追いかける。

「……っ」

部屋に一人残されたハチが、ゆっくりと森の見える窓の方を振り返った。

「みんな……が……」

第３２章　その力の名　★２

「待ってっ！待ってっ！ヒトちゃんっ！！」

縁側から庭へと降り、屋敷の入口へと歩いて行く犬仁を、必死に追いかける犬智。

「何だ、犬智」

庭で犬仁が足を止める。

「犬孝様のお傍に付いていろ。晩飯抜きにするぞ？」

「どうしてっ……どうしてっ！？」

振り返らない犬仁の背中に、必死に問いかける犬智。

「どうして犬孝様にあんなことをっ……！？」

「……。」

犬智の問いかけにそっと俯く犬仁。侵入者のことは、八房により、ハチには伝えないという指示が出ている。いつも決して指示に背いたりしない犬仁が、それを破るなど、犬智には信じ難いことであった。

「あんなこと言ったりしたら犬孝様っ……！」

「確かに……」

犬智の言葉を、遮る犬仁。

「確かに、お前の言う通りだったのかも知れない……」
「えっ……？」

こぼれ落ちた犬仁の言葉に、犬智が少し首をかしげる。

「あの方が里見犬孝だということは、あの方がここにいる理由にはならない……」
「ヒトちゃん……」

少し拳を握り締めた犬仁に、犬智がそっと目を細める。

「あの方の居場所は、あの方自身が決めることだ」
「……っ」

どこか辛そうに見える犬仁に、犬智は悲しげに目を細め、ただ見つめる。

「だがっ……」

目つきを鋭くし、顔を上げる犬仁。

「侵入者に犬孝様を渡すわけにはいかないっ」

犬仁が強い瞳で、言い放つ。

「行ってくる。犬孝様を頼んだぞ、犬智っ」

「あっ……！」

そう言うと、犬仁は高々と跳び上がり、屋敷の塀を軽々と飛び越えて、戦いの地へと赴いていった。

「ヒトちゃんっ……」

庭に残された犬智は、悲しげな表情で犬仁の名を呟いた。

白雪の加勢により、犬信・犬礼から逃れることの出来た輝矢と門貴は、安房の森のさらに奥へと急いでいた。

「……っ」

「……？」

隣を走る門貴の表情が突然変わり、輝矢は少し首をかしげ、前方を見た。

「……っ」

前方を見た輝矢が、その場で足を止める。門貴も輝矢の隣に立ち

止まった。

『……。』

二人の見つめる先に見える人影。

「来たか……」

先にある大きな木の幹にもたれかかっている、黒髪長身の男。

「随分と早かったな、加勢でも加わったか」

涼しげな表情を見せた男は、やって来た輝矢と門貴を見ながら言う。

「やはり四犬では厳しかったか……」

「……っ」

その男の姿に、門貴が表情を鋭くする。

「アナタは……？」

「八犬士が二、第五十四代・犬義だ」

輝矢の問いかけに、木にもたれかかっていた背を起こし、輝矢と門貴の方へと向き直りながら犬義が答える。

「あれが……」

名を名乗った犬義を見つめながら、門貴へと声をかける輝矢。

「あれが“戦いたい相手”というやつですか？サル」

「……ああっ」

輝矢の問いかけに、門貴が小さく頷く。

「輝矢んっ……」

「はい？」

どこか遠慮がちな、門貴にしては珍しい声に、輝矢が素気なく返事をする。

「俺、一回、アイツに負けてもてん……」

――――輝矢んっ……ごめんっ――――

桜時をさらわれたあの日、傷だらけの瀕死の状態で帰って来た門貴。

「ボっロボロに負けてもてん……」

「……。」

少し笑みを見せて話す門貴に、輝矢が目を細める。死の手前にまで追い込まれた相手。門貴はもう一度戦うことを望んではいたが、やはり不安を感じているのかも知れない。

「そうですか」

輝矢が肩を落とし、そっと呟く。

「なら、今日は勝ちなさい」

「……っ」

偉そうな言葉。その投げやりなようにも聞こえるシンプルなたった一言に、門貴は目を開き、そしてゆっくりと微笑んだ。

「了解っ！」

大きく答えた門貴の笑顔に、もう不安の色はなかった。

「……っ」

門貴の返事を聞き、輝矢も笑みをこぼす。

「では行きます」

「おうっ！輝矢んも気ぃ付けてなっ！」

門貴が軽く右手を挙げる。

「それから桜時にっ」

少し間をあける門貴。

「“一匹で考え込み過ぎなんやぁっ！アホイヌぅっ！”ってっ！」
「……っ」

笑顔で言葉を託す門貴に、輝矢も笑みをこぼす。

「……確かにっ」

門貴の言葉に短く頷き、輝矢は犬義の横を通り、森のさらに奥へと駆け出して行った。

「……。」

去っていく輝矢を、犬義が落ち着いた表情で見送る。

「何やぁ？えっらい簡単に見逃してくれるんやなぁ～っ！」
「別に、逃げるものを追いかける趣味はない」

笑顔で問いかける門貴に、犬義もそっと微笑み、どこか余裕を感じさせる口調で答える。

「向かってくる者を、叩き潰す趣味はあるがな……」
「……っ」

皮肉った笑みを浮かべる犬義に、どこか楽しげな笑みを浮かべる門貴。

「行っくでぇっ！」

「来いっ……！」

門貴と犬義の、二度目の戦いが始まった。

「“白火（びゃくび）”いいっ！！」

「狐火・一髪っ！！」

激しくぶつかり合う、白い炎と赤い炎。

――――パァァァァァァーーーーンっ！――――

「チっ……！」

相殺する二つの炎を見て、ゴンが少し表情をしかめる。

「へっ」

しかめた表情のまま言い放つゴンを見て、どこか楽しげな笑みを浮かべるのは八犬士の一人・犬忠。

「“白火”ぃぃっ！！」
「……っ！」

犬忠はすぐさま両手をゴンに向け、休むことなく次々と白い炎を放った。

「ヒャッハッハッハっ！！燃えろ燃えろ燃えろぉぉぉっっ！！」
「うっせぇーなぁっ」

大声を出す犬忠に、不機嫌面となるゴン。

「しゃらくせぇっ！！」

――――ボォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

ゴンがさらに目つきを鋭くし、白い煙に包まれていく。

「……っ」

白い煙の中から現れた、狐化したゴンに、犬忠が少し眉をひそめる。

「一髪・二目・三耳・四首っ……」

向かってくる白い炎に向け、狐化したゴンがその長い尾を翻した。

「“五臓・六腑”っっ！！」

ゴンの翻した尾から、六つの炎の塊が放たれる。

「これでっ……！」

威力を増して飛んでいく炎に、ゴンが勝利を確信したように言う。

「……っ」

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

しかし犬忠は不適な笑みを浮かべ、その体を白い煙へと包ませていく。

「何っ？」

その様子に、眉をひそめるゴン。

「……。」

白い煙が晴れ、そこに現れた黒い犬が、大きくその尾を振り上げた。

「“白炎（びゃくえん）”っっ！！！」

「……っ！」

先程の白火よりもさらに強い炎が、ゴンの放った六つの炎玉を、次々に消し去っていく。

「クソっ……！」

ゴンの六火をすべて消し去り、さらに勢いを増してゴンのもとへと飛んで来る白炎。ゴンは表情をしかめ、その狐の体を身軽に動かして、白炎を避ける。

――――バァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

「……っ」

ゴンの避けた白炎により、森一帯が広く焼かれた。そのあまりの威力に、ゴンが少し圧倒される。

「あいつも獣化した方が力が増すのかっ……」

「ヒャッハッハッハっ！！」

「……っ」

焼ける森を見て、また狂ったように笑う犬忠に、気難しい表情で考え込んでいたゴンが、軽く表情をしかめ、犬忠の方を振り返った。

「こりゃっ、九尾を使うことになるかもなっ……」

そう呟いたゴンは、厳しい表情を見せていた。

『ひぃぃぃぃぎゃあああああああああああっっっ！！！』
「待つだぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」

こちらは未だに勘違いして追ってくる犬悌から、全力で逃げている、羊スケ・鈴白・芹の異色三人組。もうすでに1時間は森を駆け回っている。

「待つだぁぁぁっっ！！侵入者ぁぁぁっっ！！とっととその人を解放するだぁぁぁっっ！！！」

羊スケを、侵入者にさらわれた一般人だと思っている犬悌。

「わかりましたっ！解放しますっ！」
「だから僕らは逃がして下さいっ！！」
「ええぇ～っ！？それって、俺を囮にする気じゃないっスかぁぁっ！！？」

羊スケを置いて、自分たちだけ逃がしてもらおうとしている鈴白と芹に、羊スケが非難するように必死に叫ぶ。

「とりあえずこのままじゃ、いつか捕まっちゃうよぉっ！お兄ちゃんっ！！」
「そっそれもそうだなっ」

最もな芹の言葉に、鈴白が少し考えるように俯く。

「あのぉ、どなたか忘れましたが、そこの方っ」
「何っス？誰か忘れたっスが、どこかの兄弟の兄っ」

互いに誰であったかを忘れた状態で、何とか会話をする羊スケと鈴白。

「どなたか忘れましたが、ここは協力して、あの大男をどうにかしませんか？」
「おお、それはイイっスねっ！どこかの兄弟の兄っ」
「では決まりですねっ」

互いの名も思い出せない状態ではあるが、何とか話はまとまる。

「芹っ」
「うんっ！」

鈴白の呼びかけに大きく頷く芹。三人は互いに目を配り合い、頷き合って、一斉に犬悌の方を振り返った。

「んん～っ？」

振り返った三人に、立ち止まり首をかしげる犬悌。

「何っ……」

「行きますよっ！そこの方っ！」
「イイっスよっ！どこかの兄弟の兄っ！」

羊スケ・鈴白・芹が、一斉に両手を犬悌に向ける。

「“降雹”っっ！！」
「“雪鏡”っっ！！」
「“羊々ボール”っ！！」

芹が雹を、鈴白が鏡のように周囲を映す氷の結晶を、羊スケがふわふわの羊毛ボールを、犬悌に向けて同時に放った。

「うっ……！」

飛んでくる三つの技に、思わず目を見開き、その場で身構える犬悌。

――――バァアアアアアアーーーンっっ！！――――

素早い動きとは縁遠そうな大きな体の犬悌は、向ってくる三つの技を、避けることもなく見事に直撃した。巻き起こる衝風に、犬悌の姿が隠れる。

「やっやったっスかねっ？どこかの兄弟のお兄さん」
「どうでしょうね……」

羊スケと鈴白が、真剣な表情で薄れていく衝風を見つめる。

「ぬうううううう～～～っ……」
『……？』

聞こえてくる唸り声に、三人が表情を曇らせる。

「ぬおおおおおおおおおおおおおぉぉぉうっっ！！！」
『……っ！！』

雄たけびで周囲の風を吹き飛ばし、姿を見せた犬悌は、三つとも直撃したというのにまったくの無傷であった。

『ういいいいいっっ！！？』

その犬悌の姿に、大きく驚く羊スケたち。

「さては侵入者に情が移っただなぁ？」
「へっ？いやっ、だからぁっ」
「こうなったら力ずくで目を覚まさせてやるだぁぁぁぁぁぁっっ！！」
『ひいいいいぃぃぎゃあああああああああああああああっっっ！！！』

表情に怒りを見せた犬悌に、羊スケ・鈴白・芹は、またもや全力で逃げ去った。

「射抜けっ、“白矢”っっ！！」

無数の白き光の矢を放つ犬信。

「フフっ」

向かってくる矢を見ながら、白雪が余裕の笑みで両手を構える。

「“雪乱雲”っ！！」

――――パリィィィィィィーーーーンっっ！！――――

白雪の放った吹雪が、向ってきた無数の矢を、一本と残すことなく氷付けにしてしまった。凍らされた矢が、力なく地面に落下していく。

「ぷぅ～っ！」

その様子を見て、犬信が悔しそうに両頬を膨らませる。

「無能め……」

「ひっどいっ！レイレイっ！！苦戦してる相方に、優しい言葉とか

掛けられないわけぇっ！？」
「掛けれん……俺の口が腐る……」
非難するように訴える犬信に、動じることなく冷たい言葉を吐く犬礼。

「ふぅ～っ！やぁっぱ雪が多いと戦いやすいわねぇ～っ！」
雪の降る空を見上げながら、白雪がどこか楽しそうに笑う。
「さぁ～っ！とっとと畳み掛けるわよっ！キっ……！」
「ぶるぶるぶるぶるっ」
「だあああああああああっ！！」
横で半分凍りながら震えている青いキジの姿に、白雪が勢いよく雪の中にズッコケた。

「なぁ～に貴方まで氷付けになっちゃってんのよっ！！」
「君が所構わず吹雪かせるからでしょっ……？」
起き上がって突っ込む白雪に、ユキジが震えながらも鋭い視線を送る。

「ったく、ひ弱ねぇ～っ！」
「仕方ないでしょっ。トリは南国育ちなんだからぁ～」
羽根で体を擦りながら、白雪に断固として訴えるユキジ。

「寒さとか全然平気な、雪国育ちの無繊細人間とは違うんですよぉ

～」

「どういう意味よっ！？」

嫌味の込めまくられたユキジの言葉に、勢いよく怒鳴りあげる白雪。

「いつまで遊んでいる気だ……？」

『……っ』

聞こえてくる声に、ユキジと白雪が表情を鋭くして振り返る。

「俺の貴重な一日が腐ってしまう……」

『……っ！』

薙刀を振り上げながら降下してくる犬礼に、ユキジと白雪の表情は険しくなった。

――――キィィィィィィィィーーーーンっ！！――――――

雪の降る森に、響き渡る金属音。

『……っ！』

如意棒を構えた門貴と、大剣を構えた犬義が、それぞれ同時に後ろへと飛び、交差していた武器が離れる。

「動きが鈍いな」

大剣を構え直しながら、門貴へと笑みを向ける犬義。

「この前の怪我が治りきっていないのではないか？」

「お前こそっ！右手、庇っとうみたいやったけどぉ？」

犬義の問いかけに、門貴も笑顔で言い返す。

「フンっ」

「へっ」

互いに笑い合う、門貴と犬義。

『……っ！』

そして再び、両者は相手の元へと駆け込んでいった。

第３２章　その力の名　★３

「……っ」

その頃、一人、ひたすらに森を駆け抜ける輝矢。

「ハチっ……」

走りながら、輝矢は思わずハチの名を呼ぶ。

「ハチっ……！」

――――ハチっ……！――――

「……っ」

どこからか聞こえてくる声に、桜時がふと顔を上げる。

「……。」

桜時は窓ガラスに手を当て、窓の向こうに広がる森を見つめていた。かすかだが、森から数回、衝撃音が聞こえてきた。恐らくは皆と八犬士たちが戦っているのだろう。

「……っ」

森を見つめる桜時が、その瞳を鋭くする。

「失礼します」

そこへ、犬仁を追いかけて外へと出て行った犬智が、部屋へと戻って来る。

「……っ」

人化して窓の向こうを眺めている桜時に、犬智が少し目を細める。

「席をはずしてしまって申し訳ありませんでした。犬孝様」

「いやっ」

変えた表情を元に戻し、深々と頭を下げる犬智。桜時は振り返ることなく、少し首を横に振った。

「さっさぁっ！骨っこの残りをいただきましょうっ！」

犬智が無理やり作った明るい笑みを浮かべ、桜時へと話しかける。

「犬智っ……」

「あっ！そうだっ！私っ！あいうえお作文の第三弾考えてきたんですよっ！？」

振り返って名前を呼んだ桜時に返事をすることなく、犬智が必死に話を続ける。

「では早速、披露してっ……！」

「ごめんっ、犬智っ」

「……っ」

桜時から“ごめん”という言葉が出ると、犬智は何とか繋げようとしていた言葉を、あっさりと止めてしまった。犬智の表情から笑顔が消える。

「……。」

「俺……」

笑顔を消した犬智を、桜時がまっすぐに見つめる。

「俺……行かなくちゃ……」

「……っ」

ついに告げられたその言葉に、犬智は目を開いた。

「……。」

犬智が衝撃を走らせた表情をもとに戻し、静かな表情で桜時を見る。

「どちらへ……行かれるのですか……？」
「仲間の元へ……」
犬智の問いかけに、少し笑みを浮かべて答える桜時。
「帰らなくちゃ……」
「……。」
まっすぐな瞳で言う桜時に、犬智は今度は少し目を細めた。
「帰る……？」
「うん……」
聞き返した犬智に、桜時はしっかりと頷く。
「自ら出て来たのに……ですか……？」
「……っ」
鋭い瞳を見せて問いかけた犬智に、桜時は思わずその表情をしかめた。
――――我々とともに行きましょう……――――
差し出された犬仁の手を、取ったのは桜時自身。
「自らここへ来たのに……ですか……？」

「……。」

犬智の問いかけに、桜時は少し俯いた後、穏やかな笑みを浮かべた。

「確かに、ここへ来たのは俺自身が選んでのことだ」

――――ハチには関係のないことですっ……！！――――

「辛いことがあって、どこでもいいから逃げてしまいたくて……それで、犬仁の手を取った」

「……。」

話を続ける桜時を、犬智が静かに見つめる。

「そんな俺に、犬仁も犬智もすごく優しくしてくれて、俺は、すごく居心地良かったし、楽しかった……」

桜時が犬智に笑顔を向ける。

「でもっ……」

桜時がまっすぐな瞳を犬智へ向ける。

「ここは……俺の居場所じゃない……」

「……っ」

まっすぐに突き出されたその言葉に、犬智は目を細めた。

――――あの方が里見犬孝だということは、あの方がここにいる理由にはならない……――――

「……。」

先程の悲しげな犬仁の姿を思い出し、そっと俯く犬智。

「貴方の居場所は、貴方を取り返しにやって来た、あの者たちのところなのですか……？」

「……わからない」

「えっ……？」

笑って答えた桜時に、犬智が少し眉をひそめる。

「帰っても、またケンカとかしないとも限んないし……」

――――私はっ……！アナタのことを“仲間だ”と言った覚えは一度もありませんっ……！！――――

「戻っても……“仲間だ”って言ってくれるかも、わかんない……」

一度は拒絶されたのだ。取り返しに来てくれたのだとしても、仲

間だと思ってくれるという自信はない。また拒絶されてしまったらどうしようと考える、そんな不安がないわけではない。

「でもっ……」

拒絶されることを怖がって、ずっとここに居たのでは、何も変わらない。少しも進まない。

「だからっ……」

桜時がまっすぐな瞳で微笑む。

「俺っ、帰らなくちゃっ」

「……っ」

まっすぐに前を見据える瞳。その瞳は、まるで犬智の心を突き刺すようであった。

――――俺が……バカだったんだ……――――

昨日まではあんなに悲しんでいたというのに、今日はどこまでも前を見つめている。前に進もうとしている。それはきっと、仲間が助けに来たことを知ったから。

「……。」

それはきっと、犬仁や犬智がどう頑張っても出来ないこと。

「私……知っていました……」

「えっ……？」

呟かれた犬智の言葉に、桜時が少し目を丸くする。

「ここが……貴方の居場所ではないこと……」

「犬智……」

少し笑みをこぼしながら呟いた犬智に、桜時が目を細める。

「だって犬孝様っ、ここに来てから悲しそうなお顔しかされてなかったから……」

――――ならどうしてあの人はっ、あんな悲しそうな顔しかしないのっ！？――――

きっと初めからわかっていたのだと思う。ここが桜時の居場所ではないこと。犬仁も、きっと。

「行って下さい……」

笑顔を見せた犬智が、ゆっくりと顔を上げて桜時の方を見る。

「貴方の笑える場所へっ……」
「犬智っ……」

どこか泣きだしそうな、そんな笑みを浮かべた犬智を見て、桜時も少し切なげな笑みをこぼす。

「ありがとうっ……」

桜時は犬智へ向け、少し頭を下げると、窓ガラスから手を離し、犬智の横を通り抜けて、与えられたその自分の部屋を出た。

「あのっ……！」

廊下を歩き去ろうとした桜時を、振り向いた犬智が思わず呼び止める。

「……？」

廊下の先で、不思議そうに振り返る桜時。

「私っ……私っ……！」

少し迷うように俯いていた犬智が、勢いよく顔を上げた。

「貴方が“犬孝様”でっ……良かったですっ……！！」
「……っ」

大きな声でそう言い放った犬智に、桜時は少し驚いたように目を開いた。

「……ありがとうっ」

驚いた表情を見せていた桜時は、すぐに笑顔を見せ、犬智に礼を言うと、廊下の曲がり角の向こうへと姿を消していった。

「……。」

桜時のいなくなった部屋の前に、一人立ち尽くす犬智。

「ご武運を……」

桜時の去った廊下の先を見つめ、犬智が呟く。

「朱実桜時様……」

犬智は、桜時の犬孝ではない名を呼んだ。

「……っ」

森の中をひたすらに駆け抜けていた輝矢が、ふと何かに気付いて足を止める。

「アナタ……は……？」

輝矢の止まった道のすぐ先に立つ、一人の人物。

「……。」

白髪に強い紫目の少女が、ゆっくりと輝矢の方を振り返った。

「八犬士が六、第五十五代・犬仁……」

振り向いた犬仁は、まっすぐに輝矢を見つめ、自らの名を名乗った。

――――――――――・・・・・・

「八房……八房……」

それは、遠い過去。貴女は静かに私の名を呼んだ。

「国とは……大国とは……何なのでしょう……？」

貴女は静かに、私に問いかける。

「私のこの力は……何のためにあるのでしょう……？」

私では答えられないことばかりを、貴女はいくつも問いかける。

「私は……何のために生きているのでしょう……？」

私は今も、その問いかけの答えを探している。

・・・・・・・・・――――――――

「伏……」

里見家屋敷、八房の部屋。八房は仏壇の前に座り、仏壇に飾られた女性の写真を眺めていた。かつてその写真の中の女性が言った言葉を思い出し、八房が少し目を細める。

「……っ」

写真を見つめていた八房が、ふいに表情を曇らせ、少し後ろを振り返る。

「……八犬士には、部屋から出さぬよう伝えたはずだが？」

後ろを振り返った八房が、誰にともなく問いかける。

「こんなところで何をしておる……？」

急に鋭くなる八房の瞳。

「犬孝……」

「……。」

襖を開き、八房の部屋へとゆっくりと足を踏み入れたのは、真剣な表情を見せた桜時であった。

「最後に、貴方に聞いておきたいことがある……」

桜時が八房をまっすぐに見つめた。

「八犬士……」

輝矢が少し目を鋭くする。

「……。」

輝矢の前に現れた犬仁は、ゆっくりと輝矢の方に向き直り、まっすぐに輝矢にその紫色の瞳を向けた。

「貴様、名は……？」

「私っ……？」

不意に名を問いかけられ、輝矢が少しキョトンとした表情となる。

「私は竹取輝矢です」

「竹取……輝矢……」

――――輝矢がっ……？――――

それは、あの時、桜時が呼んだ名。

「そうか……」

犬仁が顔を下へと向ける。

「貴様が……」

「……？」

噛み締めるように呟いた犬仁に、輝矢はその真意がわからず、ただ怪訝そうな表情を見せた。

「貴様は、何をしにこの犬国へ足を踏み入れた……？」

「……っ」

犬仁の問いかけに、少し表情をしかめる輝矢。

「そんなの決まっているでしょう？」

その場で腕組みをし、輝矢が堂々と言い放つ。

「私のハチを、返してもらうためです」

「私のっ……？」

自信満々の輝矢の言葉に、犬仁が少し眉をひそめる。

「返せと……」

「ええっ」

少し低い声で呟いた犬仁に、輝矢が遠慮なく大きく頷く。

「そうか……」

だが犬仁はすぐに静かな表情となり、まっすぐに輝矢の方を見た。

「我は、犬孝様を守る者……」

「犬孝っ……？」

桜時のもう一つの名を、輝矢は知るはずもなく、戸惑うように首をかしげた。

「犬孝様はこの国に必要な御方っ……」

犬仁が、背中に背負っていた白い槍を右手に取る。

「貴様に渡すわけにはいかぬっ……！」

「……っ」

槍を構え、厳しい表情を見せる犬仁に、輝矢も表情をしかめる。

「“月器っ……」

厳しくした表情で、右耳のピアスを弾く輝矢。

「三日月”っ……！」

輝矢は月器を目覚めさせ、犬仁と相対するのであった。

第３２章　その力の名　★４

八房は、桜時の言葉の、その単語だけを繰り返した。

「最後……？」

「最後じゃと……？」

「ああっ」

静かに問いかけた八房に、桜時は真剣な表情でしっかりと頷く。

「俺は、里見犬孝にはなれないっ……」

「……っ」

桜時の放った言葉に、少し目を開く八房。

――――俺は里見犬孝にはなれねぇっ！！――――

「……。」

思い出される過去が、今の桜時の姿と重なり、八房は思わず目を細めた。

「俺は、この国にはいられないっ……」

「……。」

その言葉を聞き、八房は一度そっと目を伏せると、またすぐに開いて、ゆっくりと桜時の方に向き直った。

「同じ顔、同じ目で、同じことを言う……」

「えっ……？」

桜時の方へと体を向けた八房が、低くどこか重い声で呟いた言葉に、桜時は少し眉をひそめた。

――――ボォォォォォォォ～～～ンっ！――――

「……っ」

白い煙に包まれていく八房に、目を見張る桜時。

「本当に……」

徐々に晴れていく白い煙。

「その派手なピンク頭でなければ、見間違うところじゃっ……」

「……っ」

晴れていく煙の中から姿を現したのは、紺色の着物を纏った、白髪白髭の老人であった。薄く開かれた緑色の瞳は、少し相手を威圧するような、強い力を持っている。背中を丸めた小さな老人ではあったが、肌を刺すような力を感じ、かつての老人がいかに強かった

かを容易に想像させた。

「……。」

だが、やはりどこか懐かしい。桜時は少し目を細めた。

「そう言ってこの国を出た、そなたの父とな」

「父さんっ……？」

桜時が、驚いた様子で大きく目を見開く。

「本当によく似ておる……これが血というものなら……」

八房の瞳が、ふいに鋭くなる。

「何と……煩わしきものかっ……」

「……っ」

忌々しそうに言葉を放った八房の表情はとても冷たく、桜時は怖いとさえ感じ、思わず表情をしかめた。まるで血の繋がりを憎んでいるような、そんな言葉だった。

「国をっ……出たって……」

少し八房の言葉に動揺しながらも、桜時が問いかけをする。

「とっ父さんは国を追放されたってっ……！」
「それは追放されるよりも、もっと前の話じゃ」
「えっ……？」

八房の答えに、桜時がまたも戸惑う。

「あやつがそう言って国を飛び出して行ったのは、今のお前よりももう少し上の年の頃じゃったか……」

少し思い出すようにしながら、八房が言葉を続ける。

「反抗期の家出のようなものかと、特に捜索はしなかったが、それが仇（あだ）となった……」
「……？」

悔やむように言う八房に、桜時はまたもや首をかしげる。

「あっ……」

何かを思いついたかのように声を漏らす桜時。

「母さん……」
「そうじゃ」

桜時の呟いた言葉に、八房はすかさず頷いた。

「国を出たあやつは、お前の母と……四大国・雀の娘と、恋に落ちた……」
「……っ」
八房の言葉に、桜時が少し目を細める。
――――雲雀っ、愚かな妹っ……鳥でないだけならまだしも、よりにもよって他種の獣人の男に騙されてっ……――――
思い出される、孔雀の言葉。
「そう……か……」
桜時がゆっくりと頷く。
「やっとわかった……」
「……？」
そう呟いた桜時に、八房が少し不思議そうに眉をひそめた。
「朱実がいくら鳥以外の獣人を嫌うっつっても、そこまでして引き裂くなんて……何かおかしいって前から思ってたんだ……」
国には鳥系の獣人が多いものの、勿論、他の種族の獣人だって暮らしていた。龍や虎との同盟も結んでいるし、やって来る他種族の者は快く迎えていた。

「何で父さんだけが追い出されたんだろうって、ずっと思ってたけど……」

桜時がゆっくりと八房を見る。

「犬国とその歴史を聞いて……やっとわかった……」

「……。」

言葉を続ける桜時に、八房が少し目を細める。

「父さんは、追い出されたんじゃなくって……連れ戻されたんだな……」

「ああ、そうじゃ……」

桜時の言葉に、八房がどこか重く深く頷く。

「わしが八犬士とともに連れ戻した……」

「……っ」

桜時が腰に差した村雨丸に目を落とし、八房の話に耳を傾ける。

「我らを大国から堕とした四大国、その雀の者と共になるなど、この犬国の主の息子として、決してあってはならないことじゃった……」

八房が、過去を懐かしむように、遠くを見つめる。

「じゃが、連れ戻したあやつは、わしにこう言った……」

――――父上っ……！父上っ！俺はっ……！――――

思い出される、白髪の青年の顔。

「“自分には雀は倒せない、四大国を恨むことなど出来ない、だからこの国にはいられない”と……」

どこか悲しく映る、八房の姿。

「“里見犬孝にはなれない”、と……」

「……っ」

桜時が少し表情をしかめる。それはまさに、桜時が先ほど、八房に向かって言った言葉そのものであった。桜時は知らぬうちに、父と同じ言葉を口にしていたのである。

「だからわしは奴を追放した……」

「……。」

桜時がそっと俯く。母を想い、自らの国を捨てた父と、四大国を

恨み、自らの息子を追放した祖父を思うと、桜時の胸は、ただただ痛んだ。どちらが悪いなどとは、桜時には言えない。どうしようもないことであったのかも知れない。

「まさか……子供がいたとも知らずにな……」
「えっ……？」

続けて放たれた八房の言葉に、桜時が目を丸くする。

「しっ知らなかったのかっ……？俺のことっ……」
「あやつは黙っておったからな」

八房が静かに答える。

「知れば雀に攻撃を仕掛けてでも奪ったであろうことを、あやつは察したんじゃろう……」
「……。」

桜時が少し辛そうに目を細める。父は守ってくれたのだ。雀の平和と、幼い桜時の未来を。

「じゃあ、どうして俺のことっ……」

――――貴方の居場所は、我々が知っています……――――

存在さえ知れていないはずの桜時の元へ、迎えにやって来た八犬士たち。

「どうやって……」
「御伽砂漠の一件じゃ……」
「えっ……？」

またもや桜時が戸惑うように聞き返す。

「御伽……砂漠っ……？」
「ああ……」

八房が振り向き、鋭い表情で桜時の方を見る。

「御伽砂漠で強い白光が放たれた後、その一面に桜の木が咲いた……」
「あっ……」

八房の言葉に、何か思い出したかのように声を漏らす桜時。

――――死ぬなぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！――――

サソリの毒に侵され、輝矢が死にかけたその時、輝矢を助けるため、無我夢中で放ったあの白い光。

――――あの力は……一体っ……――――

今までに感じたことのない強大な力。桜時自身も、自分のその力に疑念を抱いていた。

「……。」

桜時が考え込むように俯き、その表情を曇らせる。

「あの光、あの力を見て……犬孝に子がいたのではないかと思い、八犬士に捜索させたのじゃ……」

俯いた桜時に、八房が言葉を続ける。

「そして、お前を見つけた……」

「……っ」

まっすぐに向けられた八房の瞳に、顔を上げた桜時が少し目を細める。

「あの……力って……」

「お前も、気付いておるじゃろう……？」

呟いた桜時に、静かに問いかける八房。

「お前のその力は、“花力”ではない」

「……っ」

告げられる真実に、目を見開く桜時。花力に、毒に侵された輝矢を救える力はない。花力ではないもう一つの力が、自分の中にあることを、桜時は確かに気付いていた。

「“花力”じゃ……ない……？」
「そうじゃ」
確かめるように聞き返した桜時に、八房が大きく頷く。
「その力こそ、この犬国、里見家に与えられた力……」
八房が少し後ろを向き、仏壇の上の写真の女性を見つめる。
「犬国が四大国を、堕とされる原因となった力……」
「えっ……？」
桜時の瞳に、さらに戸惑いの色が灯った。
「射抜けっ」
犬信が笑顔で弓を構える。

「“白矢”っ！！」
「……っ」

またしても放たれる無数の白い光の矢。白雪が後方へ飛んで距離を取り、大きく両手を広げた。

「“氷壁”っ！！」

――――――バァァァァァァァァァーーーーンっ！！――――――

白雪が目の前に巨大な氷の壁を張り、飛んできた矢をすべて受けとめる。

「オォーホッホッホッホっ！何度やったって私にその技は通じなくてよぉぉぉっっ！！」

白雪が味方でも不快になりそうな、高々とした笑い声をあげる。

「レイレイぃ～っ」
「お前がバカの一つ覚えのような攻撃ばかり仕掛けるからだ……」

白雪の笑い声に悔しげに振り返る犬信に、後ろで本を読んでいる余裕の犬礼が、相変わらず冷たい言葉を吐く。

「もっと真面目にやれ……あの笑い声に俺の耳が腐る……」
「うん～あの笑い声には俺の耳も腐りそうだよぉ～っ」

「オォーッホッホッホっ！！」

耳が腐ると言われていることにも気付かず、まだ高笑いを続けている白雪。

「……っ」

その白雪の横で由雉が、氷壁に突き刺さった白矢が、どこへともなく消えていくのに気づき、ふと眉をひそめた。

「うぅ～んっ……」

「んっ？」

唸るような声を出す由雉に、白雪が振り向く。

「何よっ？変な声出しちゃって」

「いやぁ～っ」

白雪の問いかけに、首を傾ける由雉。

「あいつの力って、何なのかなぁ～って思ってぇ」

「力っ？」

由雉の言葉に、白雪が目を丸くする。

「んなもん、決まってるでしょっ」

「えっ？」

当然だと言わんばかりの口調の白雪に、由雉が少し驚いたように

振り返る。

「矢よ、矢っ」

「……。」

白雪の答えに、固まる由雉。

「聞いたボクがバカでした」

「何よっ！！その言い方っ！！」

いかにもバカにしたように深く肩を落とす由雉に、白雪がしかめた表情で怒鳴りあげる。

「だいったい貴方はねぇっ！キジのくせに嫌味ったらしいったらないっていうかねぇっ……！」

「閃光か何かかと思ってたけど、氷に突き刺さっても氷が溶けてない……」

怒鳴る白雪を無視し、由雉がさらに考え込む。

「実体のない……力っ……」

「アハハっ！」

表情を曇らせる由雉に、犬信はいつものように陽気に微笑んだ。

「狐火っ！“五臓”っっ！！」
「ヒャッハっハっ！！“白炎”っっ！！」

狐化したゴンと、犬化した犬忠が、それぞれに赤と白の炎を放つ。

――――パァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

『……っ』

相殺する二色の炎に、表情をしかめるゴンと薄く笑みを浮かべる犬忠。人化時よりも強い炎を放つ二匹は、互角の勝負を繰り広げていた。

「獣化ん時の方が力が強まるのは、獣人の中でも少数派なんだけどなっ」

犬忠を見つめながら、ゴンが呟く。

「それに狐族以外に火力使いがいるとはっ……」

「ヒャッハッハッハっ！！」
「あっ？」

突然笑い出す犬忠に、ゴンが悪い目つきをさらに悪くする。

「ヒャッハッハッハッハっっっ！！！」
「何だぁ？おいっ」

何が楽しいのかもよくわからない状況で、高々と笑いあげる犬忠に、少し気味悪がるように顔をしかめるゴン。

「狂ったかぁ？あっ、前からか」
「感心すんのはっ……早えぇーんじゃねぇーかぁっ！！？」
「何っ……？」

尾を振り上げる犬忠に、ゴンが眉をひそめて身構える。

「ヒャッハっハっ！！“白流（びゃくりゅう）”ううううっっ！！」
「何っ……！？」

笑って犬忠が放ったのは、白い水の激流。細長い渦が、円を描くように回りながら、ゴンの方へと飛んでくる。

「クっ……！七火っ！！“七臍”っ！！」

焦りの表情を見せたゴンが、慌てて尾を翻し、向ってくる白流へ向けて、七つの炎を放った。

――――パァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

「クっ……！」

至近距離で七火をぶつけ、何とか白流を消し去ったゴンであったが、砕け散った白流の水飛沫がかかり、少し身を屈める。

「みっ水だとっ……？」

「ヒャッハッハッハっっ！！面白れぇっ！！面白れぇぜぇっ！！ヒャッハッハッハっ！！」

「……っ」

体を起こしたゴンが、楽しげに笑っている犬忠を見て、眉をひそめる。

「アイツはっ、水力も使うってのかっ……？」

――――“水月”っ！！――――

“水力”という言葉で思い出されるのは、輝矢の姿。犬忠はゴンと同じ火力を持ち、輝矢と同じ水力までもを持つというのだろうか。

「いやっ、そんなのありえねぇーっ」

自分の考えに対し、すぐに否定の言葉がこぼれ落ちた。

「アイツの力はっ、一体っ……」

「ヒャッハッハッハっ！！」

高々と笑う犬忠に、ゴンの表情はさらに曇った。

「犬国が……四大国を堕とされる原因となった力っ……？」

「ああ……」

聞き返した桜時に、八房は重々しく頷く。

「それは、神の領域に程近き力……」

仏壇の写真を見つめていた八房が、ゆっくりと振り返り、まっすぐに桜時を見つめる。

「その名を、しかと心に刻め……」

八房の刺すように強い瞳が、桜時の瞳を捉えて離さない。

「その力の名は……」

「……っ」

桜時がごくりと息を呑む。

「“命力”……」

「……っ」

桜時の青い瞳が大きく開かれた。

第３２章　その力の名　★４（後書き）

これで３２章が終わりです。
この頃、ちょっとスランプ気味だったので、話の運び方が少し変なところがあるかと思われます。
申し訳ないです。
完結後にまた見直し出来ればやりたいなぁ～と思ってるんですけど、私の性格では、きっとしませんっ（笑）
３３章もよろしくお願いしまぁ～す

第３３章　ｖｓ八犬士　☆１

龍国。青守家・庭園。

「あらゆるものを……生み出す力？」

「うむ」

大きなビニールハウスの中で、籠を片手に苺を摘んでいるイチゴが問いかけると、同じように苺を摘んでいる麦わら帽子を被った座黒が深々と頷いた。

「普通、獣人は自然の力を“操る”能力を有する。それも種族により決まっている、限られた一つの力だ」

「……。」

座黒の話に、同じように苺を摘んでいるリンゴも真剣な表情で耳を傾けた。

「だが犬人は違う。彼らは炎を水を光を、あらゆるものを無限に“生み出す”力を持っておるのだ」

いつになく真面目な表情を見せる座黒。

「火も、水も……？」

「ああ」

少し疑うように問いかけるリンゴに、座黒が静かに頷く。

「我らはそれを、“創力”と呼んでいた……」

「創力っ……」

「じゃあ、桜時さんも創力を……？」

顔をしかめたリンゴの横から、イチゴが問いかけた。

「いやっ」

イチゴの問いかけに、座黒がすぐさま首を横に振る。

「朱実桜時の、犬国主・里見の力は、創力ではない」

座黒の表情が、一層に厳しくなる。

「里見に与えられし、その力の名は“命力”」

「命……力っ……？」

イチゴが戸惑うように聞き返す。

「ああ」

またしても深々と頷く座黒。

「その名の通り、あらゆる命を生み出す力、まさに神の力だ」

「神っ……？」
「……っ」

神の名を口にするイチゴの横で、リンゴが少し険しい表情となって俯く。

――――人体の細胞の再生……それはもう神の領域に程近いわ……
――――

毒に侵された輝矢の体の細胞を、再生し続けることで救った桜時。
あの時すでに、リンゴは神の名を口にしていた。

――――あの子の力は……本当に“花力”っ……？――――

「……。」

あの時の疑問の答えが、やっと見えた。

「ああ、命力を前には、獣人最強と謳われる我ら“龍人”も、他の何者も無力に過ぎんっ……」
「それほどの力……」
「ああっ……」

少し圧倒された様子で呟くイチゴに、座黒は大きく頷いた。

「だからこそ、我らの祖先は、犬国を四大国から堕とし、彼らから

権力を奪った……」
「神の力を持つ彼らが、権力をも持って、この御伽界を支配してしまうことを恐れたのね」
座黒の言わんとしていたことを代弁するかのようにスラスラと話すリンゴ。
「うむ……」
「結果、彼らは民を失い、御伽界が支配されることはなかった……」
「でもっ……」
言葉を続けたリンゴに、イチゴが少し訴えるように声を出した。
「でも……犬国の人たちが、悪いわけじゃないのに……」
「……っ」
悲しげに言葉を放つイチゴに、リンゴが少し目を細める。
「そうだな」
座黒がどこか遠い目で、ビニールハウスの向こうに見える空を見つめる。
「確かに彼らは、何一つ悪くなどなかったのにな……」
『……。』
座黒の言葉を、リンゴとイチゴはどこか遣り切れない表情で聞いていた。

「四大国の連中は我らの力を恐れたっ……」

犬国・里見の屋敷では、八房が、座黒がリンゴ・イチゴに語ったものと同じ話を、桜時に語っていた。

「我らの圧倒的な力を恐れ、我らに世界を牛耳られることを恐れっ、そして我らから大国の称号を奪ったのだっ……！！」

「……。」

声を荒げる八房を、桜時はどこか悲しげな瞳で見つめていた。

「奴らの勝手な考えでっ……！この犬国は“国”ではなくなったのだっ……！！」

「……っ」

強く訴えかけてくる八房に、桜時が思わず表情をしかめる。

「それを許せるかっ？許せるはずがないっ……！」

怒りや恨み、憎しみ、あらゆる気持ちのこもった表情で、八房は言葉を続ける。

「お前のその命力はっ、四大国を倒すために持って生まれたものに違いないっ……」

「えっ……？」

八房が、桜時に何かを求めるように、右手を向ける。そんな八房に、桜時は思わず戸惑いの声を漏らした。

「お前はこの世で唯一っ、“命力”を持つ者っ……」

八房の瞳が、桜時を刺すように見る。

「お前はこの世で最もっ、神に近き存在っ……！」

「……っ」

神に近い存在。その言葉をどう受け止めていいのかわからず、桜時が困ったように顔をしかめる。

「八犬士を率いっ、四大国を倒すのだっ！犬孝っ……！！」

「……。」

強く呼びかける八房に、桜時が厳しい表情を見せる。

「そしてっ、再び犬国をっ、大国にっ……！！」
「……。」

八房のその言葉は、決して脅迫めいたものではなく、桜時には必死の願いのように聞こえた。必死に願う八房のその姿が、どこか悲しく見えた。

「……悲しみはわかる……」
「……っ？」

少し俯き、言葉を呟く桜時に、必死に訴えていた八房が少し落ち着き、その眉をひそめる。

「持って生まれただけなのに、“違う”って言われて、別物扱いされる悲しみ……」

――――何故、トリの国にイヌがぁ？――――

――――イヌだなんてっ！汚らわしいっ！――――

自分が何故、犬に生まれてきたのかなど、わからない。わかるはずもないし、どうすることもで出来ないのに、どうして蔑まれなければならないのだろう。何を言われても、犬以外のものにはなれないのに、自分はどうすればいいのだろう。そんな考えを、回り巡らせたこともある。今も、巡らせている。

「その悲しみは……わかるよ……」

犬国の者たちも同じであっただろう。自分たちは好きで神の力を持って生まれたわけではないのに、それを理由に四大国を堕とされ、民を失い、国は廃れてしまった。

「わかる……」

桜時が噛みしめるように、もう一度呟く。

「ならばっ……！」

「でもっ……！」

八房の言葉を遮り、強い声を出して、八房の方を見る桜時。

「それでもやっぱりっ……俺は四大国を恨めないっ……！」

「……っ」

桜時の言葉に、八房が少し目を見開く。

「俺は雀国がっ、龍や虎もっ……みんな好きだっ！住んでいる人たちもみんな好きだっ！」

――――たまには顔くらい出しなさいっ……――――

孔雀や、松人・竹人・梅人、大切な家族の住んでいる雀国。

――――ん～甘さダルダルココア、サイコォ～っ！――――

太狼たちが暮らし、オトポリのある龍国。

白雪が命懸けで守った虎国。

――――誰をどんなに傷つけてもっ……！この国を失うわけにはいかないっ……！――――

「俺には四大国を倒すことなんて出来ないっ！！俺はっ……」

桜時が少し躊躇うように下を向き、意を決した表情で再び顔を上げた。

「里見犬孝にはなれないっ！！」

「……っ」

かつて父の放った言葉と同じ言葉を、もう一度繰り返す桜時に、八房がその表情をしかめる。

「だからっ……」

腰に差した村雨丸の柄に、桜時が手をかける。

「あんたがどうしても、四大国を討つってゆーんならっ……」

桜時が勢いよく村雨丸を抜く。

「俺があんたを止めるっ……！！」

村雨丸の刀先を八房へと向け、真剣な表情で言い放つ桜時。

「……村雨丸か」

八房が桜時の構えた刀を見て、桜時に聞こえないほどの小声で呟く。

「よかろう……ならばわしも……」

仏壇横に置いてあった刀を手に取り、その場でゆっくりと立ち上がる八房。

「お前のその愚かな考えをっ…、払拭してやろうっ……！」

立ち上がった八房が、そう言い放ち、白い鞘から刀を抜いた。

『……っ！』

向き合った祖父と孫は、己の刀を互いに向けた。

「桜時様……」

里見の屋敷の廊下に立ち、雪の降り続く空を見上げる犬智。

「ヒトちゃん……みんな……」

犬智は不安げな表情で、この空の下戦う、仲間たちのことを思った。

第３３章　ｖｓ八犬士　☆２

安房の森入口付近。ゴンｖｓ犬忠。

「ヒャッハっハっ！“白火”っ！！」

「狐火っ！“五臓・六腑”っ！！」

赤と白の炎のぶつかり合いは、まだ続いていた。二色の炎は相変わらず相殺して消えていく。

「ったくっ」

「“白流”っっ！！」

「……っ！」

少し疲れたように肩を落としたゴンに、犬忠が今度は白い水を放った。ゴンが大きく目を見開く。

「クッソっ……！」

ゴンは焦った様子で尾を振り上げるが、水の動きの方が速い。

――――バァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

激しく飛び散る白い水飛沫の中に、ゴンの姿が消える。

「ヒャハハっ……」

その光景を見て、怪しげに微笑む犬忠。

「ヒャハハハハハハハっっ！！」

その狂った笑いは、徐々に大きくなっていく。

「強えぇっ！！やっぱり俺が強えぇっ！！」

高々と顔を空へ向け、自分の強さに酔いしれるように大声を出す犬忠。

「俺が一番強えぇっ！！ヒャハハハハハハっっ！！！」

「あぁ～っ、うっせっ」

「……っ」

聞こえてくるやる気のない声に、犬忠の狂った笑い声が止まる。

「うっせぇー上にうぜぇっ」

やっと止んだ水飛沫の中から姿を現す、不機嫌顔の一匹のキツネ。

もちろんゴンである。犬忠の白流を喰らい、体の所々に傷を負ってはいるが、その表情は落ち着いていた。

「……。」

そんなゴンを見て、犬忠が少し表情をしかめる。

「へぇっ」

しかし、犬忠はしかめた表情を、すぐに楽しげな笑みへと変えた。

「わりとやるじゃねぇーかぁっ」

「てめぇーが選んだんだろっ？」

余裕そうに微笑んだ犬忠に、ゴンも余裕の笑みを浮かべて言い放つ。

「……？」

その言葉に、少し眉をひそめる犬忠。

「一っ番強えぇ、この俺をっ」

「……っ」

強く光る鋭い瞳で、先程犬忠が叫んでいた言葉を嫌味のように真似するゴン。光る瞳と纏う空気が、その言葉が真実であると言い聞かせてくるようであった。もう1度歪んだ犬忠の表情は、今度はそう簡単に笑顔になりはしなかった。

「お前っ、ムカつくなっ……」

「あっ？」

小さく呟かれた犬忠の言葉に、顔をしかめるゴン。

「まじムカつくっ……」

俯いた犬忠が、前足を力強く握り締める。

「だからっ……」

急に変わる、重く冷たい声。

「だから森ごと燃やし尽くしてやるよぉぉぉぉっっっ！！！」

「……っ」

犬忠の背後から舞い上がる、空にも届きそうなほどに強い白炎。

生まれたその巨大な炎に、ゴンは勢いよく表情をしかめた。

「うぇっ」

確かに、この巨大な森でさえも燃やし尽くせるであろう程の威力を感じる、その白炎を前に、ゴンが“勘弁してくれよ”と言わんばかりの顔を見せる。

「ヒャッハっハっ！！灰になりやがれぇぇぇぇっっ！！ヒャッハっハっ！！」

さらに炎の勢いを増させながら、犬忠が今までで一番楽しそうに大きく笑う。

「あぁ～ホント、クレイジードッグだったな……」

笑っている犬忠を見ながら、どこか疲れたように呟くゴン。

「しゃーねぇっ」

ゴンのやる気のない瞳が、急に鋭くなる。

「この技で人、生かしたことねぇーから、どうなっても知らねぇーぞっ」

そう言いながら、ゴンがゆっくりと構えを取る。

「“一髪・二目・三耳・四首・五臓・六腑っ……」

ゴンの言葉とともに、ゴンの体に一本ずつ増えていく、巨大な赤炎の尾。禍々しいまでの力を感じさせながら、犬忠の白炎に負けじと燃え上がる。

「七臍・八脚……」

八本の尾が、ゴンの後ろで燃えたぎる。

「九尾”……」

最後にゴンの尾自体が、赤々とした炎に包まれていく。

「ヒャハハハハハハっっ！！！死ねぇぇぇぇぇぇっっ！！！」

犬忠が、ゴンへ向けて巨大な白炎を放つ。

「……っ」

迫り来る白炎に、さらに目つきを鋭くするゴン。

「“九火っ……煉獄”っ！！」

向かってくる白炎に向け、ゴンが燃え上がった九つの炎の尾を一斉に放った。横に並んで進んでいく九火と、犬忠の白炎が正面からぶつかり合う。

――――パァァァァァァァァンっっ！！――――

「……っ！」

燃えたぎる九火に、白炎が一瞬にして呑み込まれる。

「なっ……！！」

その光景に、高々と笑っていた犬忠が、驚いた様子で目を見開く。

「俺の炎がっ……」

衝撃を受けている犬忠へ、白炎を呑み込み、さらに勢いを増した九火が向かっていく。

「ううっ……！！」

犬忠の表情に、初めて滲む、恐怖の色。

――――――バァアアアアアアアアーーーーンっっ！！――――――

「うがあああああああああああああああああっっっ！！！！」

九火を直撃し、犬忠が勢いよく吹き飛ばされていく。

「そっ……そんなっ……」

――――――ボォォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――――

炎に焼かれ、降下していく犬忠の体を白い煙が包む。

「おっ俺がっ……」

人化した犬忠が、弱々しい声を漏らす。

「俺がっ……一番強ぇぇっ……はずなのにいいいいいいいいいいっっっっ！！！うっ……」

最後にそう叫び、地面に倒れ込むと、犬忠は深々と瞳を閉じた。

「ふぅ～っ」

――――ボォォォォォォォォォ～～～～ンっ！――――

一息つきながら、人の姿へと戻るゴン。

「あんだけ叫べりゃっ、死ぬ心配はねぇーかっ……」

その場に座り込んだゴンが、倒れた犬忠を眺めながら、どこか呆れたように微笑む。

「相手が悪かったなっ、小僧犬っ」

ゴンｖｓ犬忠。勝者・ゴン。

安房の森内。羊スケ・鈴白・芹ｖｓ（？）犬悌。

『ぎゃあああああああああああああああああっっっ！！！』
「待つだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！侵入者ぁぁぁぁぁぁっっっ！！」

互いに誰かも認識出来ていない三人組は、まだ大男。犬悌から逃げ惑っていた。

「いつまでも逃げてても仕方ないんじゃなかったっスかぁ～っ！？どこかの兄弟の兄っ！」
「逃げるが勝ちって言葉もありますよっ！どこかの誰かさんっ！」

必死に逃げながら、何とか言葉を交わす羊スケと鈴白。

「いつまでもちょこまかとっ……」

犬悌がその場で立ち止まり、大きく手を振りかぶる。

「逃げきれると思うなでぇぇぇぇっっっ！！！」

犬悌が右拳を勢いよく地面へとぶつける。

――――バコォォォォォォォォォォーーーーンっっ！！――――

『うっ……！うわあああああああっっ！！』

犬悌の拳の落ちた地点から地割れが起こり、足元の安定を失った三人が、焦った様子で体を傾かせていき、やがてその場に倒れ込んだ。

「ふぅっ、手加減出来たっ」
「ええっ！これでっスかぁっ！？」

立ち上がり、少し額を拭う犬悌に、羊スケが驚きの表情で問いかける。

「痛たたたたたたっ……」
「やぁぁっと追いついたでぇっ」
「……っ」

倒れ込んだ鈴白のすぐ傍へ、立ちはだかる犬悌。

「うっ……！」

鈴白が表情を引きつる。

「おっりゃあああああああああっ！！」
「うわあああああああああっ！！」

ついに捕まった鈴白が、犬悌に軽々と投げ飛ばされる。

「ううっ……！」
「お兄ちゃんっ！！」

力なく地面に落ちた鈴白に、思わず身を乗り出す芹。

「おんれぇは八犬士一の怪力だでぇっ」

倒れたまま起き上がれない鈴白の様子を見ながら、犬悌が誇らしげに言い放つ。

「覚悟しんろぉぉっ！！侵入者ぁぁぁっっ！！！」

「ううっ……！」

やっと上体だけを起こした鈴白の元へ、犬悌が地面を揺らしながら、勢いよく駆け込んでいく。迫り来る大男に、顔を引きつる鈴白。

「もういい加減にしてよぉっ！！」

「……っ？」

「芹っ……！」

そう叫んで鈴白の前へと立ち塞がったのは、両手を大きく広げた芹であった。犬悌が眉をひそめ、鈴白が少し驚いたように芹を見る。

「せっ芹っ……！逃げっ……！」

「僕らは自己中極まりない白雪様に無理やり連れて来られただけなのっ！本当の侵入者はっ……！」

「ギクっスっ！」

芹の視線に、顔を引きつる羊スケ。

「誰だか忘れたけど、あの人だけだよっ！！」

「何いいいっっ！？」
「ひぃっ！」

勢いよく羊スケを指差す芹に、犬悌が羊スケの方を振り向く。犬悌の鋭い視線を向けられ、思わず背筋を震え上がらせる羊スケ。

「ちっ違うっスよっ！？おっ俺は迷い込んだ一般市民でっ……！」
「あいつだけが侵入者だかぁ？」
『そうです』
「あっさり裏切ったっスねぇぇぇぇっっ！！？どこかの兄弟っっ！！」

犬悌の問いかけに声を揃える鈴白と芹に、羊スケが非難するように大きく叫ぶ。

「許せねぇだぁ……」
「うっ……！」

少し俯き、低く響く声を放つ犬悌に、さらに顔を引きつっていく羊スケ。

「よっくも純粋なおんれぇを騙してくれただなぁぁぁぁぁぁっっ！！！」
「だあああああああっっ！！アンタが勝手に勘違いしただけっスぅうううっっ！！！」

突進するように駆け込んでくる犬悌から、羊スケが突っ込みながら、またしても必死に逃げる。

「絶対許さねぇだぁぁぁっ！！」
「ぎゃあああああああああっ！！！」

怒りで足の速さが上がったのか、犬悌があっさりと逃げていた羊スケを捕まえる。オトポリ制服の後襟元を掴まれ、犬悌に軽々と持ち上げられてしまう羊スケ。

「やっやばいかなぁ？お兄ちゃん……」
「成仏するよう祈ってやろう」

少し責任を感じた様子で振り向く芹に、起き上がった鈴白は妙に涼しげな表情で言う。

「息の根止めるだぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」
「ひぃぃぃぇぇぇぇぇぇっっ！！！」

羊スケの顔面へと突き出される犬悌の拳。羊スケが青い顔で、悲痛な叫び声をあげた。

『……っ！』

大きな衝撃音を予想し、鈴白と芹も思わず目を閉じた。が。

――――ピトっ！――――

『へっ……？』

実際に聞こえてきたのは、妙に可愛らしい、何かがくっつくような音。鈴白と芹が、少し首をかしげながら、ゆっくりとその瞳を開く。

『あっ……』

目の前に広がる光景に、二人は思わず声を漏らした。

「なっ何だぁぁぁぁっっ！？」

動かない己の右拳に、戸惑うように声を出す犬悌。

「これはっ！！」

戸惑うように自分の拳に目をある犬悌。犬悌の拳と羊スケの顔面の間には、白い羊毛の球体。

「……羊々ボールっ」

「ヨーヨーぼうるっ……？」

その羊々ボールを両手で突き出し、どこか得意げに微笑む羊スケ。羊々ボールに右拳を埋め、右手を封じられた犬悌が、少し眉をひそめながら羊スケの言葉を繰り返す。

「クっ……！クっ……！このっ……！」

「無駄っスよっ」

必死に羊々ボールから右手を取り出そうとする犬悌に、羊スケが冷静な表情で言い放つ。

「羊々ボールは、一度捕えたものは絶対、逃がさないっスっ」

「クっ……！」

鋭い瞳を見せ、少し振り返って犬悌を見る羊スケ。その言葉に、犬悌の表情が歪む。

「こんのぉぉぉっっ！！」

「うっ……！」

犬悌が大きく右手を振り下ろすと、羊スケが羊々ボールから手を放して、地面へと倒れ落ちた。

「そんなら左手でぇぇぇっっ！！」

「クっ……！」

地面に倒れ込んだ羊スケへ、左手を振り下ろす犬悌。羊スケが厳しい表情を見せる。

「覚悟ぉぉぉぉぉぉぉっっっ！！！」

――――ビュウウウゥゥゥゥゥゥンっ！――――

「何っ……！？」

羊スケへと振り下ろされようとしていた犬悌の左手が、突然、凍りついて空中で止まる。

「……っ！」

勢いよく振り返る犬悌。

“降雹”っ……」

犬悌が振り返った先には、両手を構え、鋭い表情を見せた芹の姿があった。

「侵入者じゃないんじゃ……なかっただかぁ……？」

そんな芹に、犬悌が静かに問いかける。

「侵入者をつい助けちゃう、心優しすぎる一般市民だっているんだよっ」

「ううっ……！何て優しい一般市民なんだぁぁぁぁっっっ！！！」

「えっ……？」

急に涙ぐむ犬悌に、カッコ良く言い放ったつもりだった芹が、少し間の抜けた表情で肩を落とした。

「後で犬国名誉賞あげるだぁからねぇっ！！でもっ……！」

「……っ」

感動の表情から鋭い表情となり、再び羊スケの方を見る犬悌。

「侵入者は許さないだぁぁっっ！！」
「あっ、やっぱりっスか？」
その強面を向けてくる犬悌に、羊スケの淡い期待も崩れ、少し残念そうに呟く。

「両手が動かずともぉ、おんめぇ～倒すくらいなんらぁっ……！！」
「自分に出来る、一番こっわい顔をして下さい」
「へっ？」

両手を塞がれて直、羊スケを倒そうとする犬悌に、どこからともなく聞こえてくる囁き。その声に、犬悌が少し目を丸くして、上を向く。

「こっ怖い顔？怖い顔っ……んん～っ、くおおおぉぉうっ！！」
「……。」

自分に出来る一番怖い顔を作った犬悌の前に、ゆっくりと立つ鈴白。

「……っ」

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

鈴白が白い煙に包まれ、巨大な鏡へと姿を変える。

「どこかの誰かさんっ」
「……っ」
鏡に呼ばれ、羊スケが懐から何かを取り出す。
「ファァァ～～イトっ、アップっっ！！」
羊スケが懐から取り出したのは、小型の懐中電灯。羊スケがライトを点けると、ライトの光が鏡を照らしだす。
「んっ……？」
ライトアップした鏡に、目をやる犬悌。
「……。」
鏡に映るのは、自分に出来る一番怖い顔をした、犬悌。
「ぎぃぃぃぃぃやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！！」
犬悌が激しく悲鳴をあげ、後方へと倒れ込んでいく。
「なっ何と恐ろしっ……ぐぷっ」

倒れ込んだ犬悌が、白目を剥き、泡を吹いて、気を失った。

「ふぅ～っ」

――――ボォォォォォォォ～～～ンっ！――――

鈴白が鏡から人の姿へと戻る。

「何とか終わりましたね」
「たっ助かったっスぅ～っ」

胸を撫で下ろす鈴白の後ろで、ライトを切り、力の抜けた様子で地面に転がる羊スケ。

「お兄ちゃ～んっ！」

そこへ芹が駆け込んでくる。

「やったねっ！」
「ああ」

笑顔を見せる芹に、優しく微笑みかける鈴白。

「でもぉそんなにおっそろしい顔してたんスかぁ～？あいつっ」
「さぁ？」
「へっ？」

首をかしげる鈴白に、目を丸くする羊スケ。

「ライトの光が眩しくて、よく見えませんでしたからっ」
「……っ」

どこか悪戯っぽい笑顔を見せる鈴白に、羊スケは最初、驚いたように目を開いたが、すぐに笑みをこぼした。

「さっすがどっかの兄弟のお兄さんっスっ！」
「貴方もさすがでしたよ、どこかの誰かさんっ」
「わぁ～いっ！勝ったぁ～っ！」

羊スケ・鈴白・芹ｖｓ（？）犬悌。勝者・羊スケ・鈴白・芹、三人組。

第３３章　ｖｓ八犬士　☆３

同じく安房の森内。由雉・白雪ペア（？）ｖｓ犬信・犬礼ペア。

「“雪剣”っ！」

白雪が横に伸ばした右手を雪が覆っていくと、白雪の右手に鋭い氷の刃が作られた。

「いくわよっ！！」

雪剣を構え、犬礼へと駆け込んでいく白雪。

「単純な攻撃だ……俺の目が腐る……」

相変わらずの口調で冷たく言い放ちながら、犬礼が駆け込んでくる白雪へ向け、薙刀を振り払った。

「たあああああああっっ！！」

「……っ」

「うっ……！」

白雪の雪剣をあっさりとかわす犬礼。空を斬る雪剣に、白雪が少し焦った表情を見せる。

「俺の目が腐る前に死ね……」

「……っ！」

そんな白雪の体に、犬礼が容赦なく薙刀の刃を突き出した。

――――パァァァァァァァーーーンっ！――――

「……っ」

犬礼の薙刀が白雪の体を貫いた途端、白雪の体が氷の結晶となって砕け散る。

「何っ……？」

その冷静な表情を、初めて歪める犬礼。

「あんまりぃっ」

「……っ！」

犬礼の背後から聞こえてくる、白雪の声。

「ナメてくれるんじゃないわよっ！！」

「クっ……！」

背後から雪剣を振り下ろす白雪に、犬礼が険しい表情を見せた。

「うっ……！」

雪の積もった白い地面に、二，三滴落ちる真っ赤な血。素早く後方へと飛び、白雪の雪剣を避けた犬礼であったが、雪剣がわずかに犬礼の左腕をかすめ、血が滴り落ちたのであった。

「やるじゃ～ん、シラシラぁ～っ」
「だっれがシラシラよっ！変なあだ名付けんじゃないわよっ！」
「氷分身て、輝矢の水分身のパクリ？」
「私は、あんな失礼女の技をパクったりなんかしないわよっ！！あっちがパクったんじゃないのっ！？」

外野から声をかける犬信と由雉に、白雪が次々と突っ込みを入れていく。

「こんな奴相手に血を流すことになるとは……」

左手の切り傷を押さえながら、小声で呟く犬礼。

「存在が腐っちゃうねぇ～っ！レイレイっ♪」
「うるさい、黙れ。腐れ小僧」
「ぶぅ～っ！」

特に心配する素振りもなく、楽しげに笑いかける犬信に、これ以上ないくらいに冷たく言い放つ犬礼。犬礼に冷たくあしらわれ、犬信が頬を膨らませる。

「だが確かに……こんな奴相手に傷を負ったとなると……」

犬礼が鋭い目つきで、白雪の方を見る。

「俺の名が腐る……」
「ひっどい言いようねぇ～っ！虎国の姫君に向かってっ」
「……っ」

その白雪の言葉に、犬礼の表情が突然、曇った。

「虎……国……？」
「……っ？」

虎国の名を呟く犬礼に、白雪が少し怪訝そうに首をかしげる。

「虎国……だと……？」
「そうよっ！」

もう一度呟いた犬礼に、面倒臭そうな表情で強く言い放つ白雪。

「私の名前は白雪虎昌っ！下の名前は気に入ってないけど、虎国主の娘よっ！」
「……。」

改めて名を名乗る白雪。その偉そうな自己紹介を聞きながら、犬礼は徐々に俯き、冷たい表情すらも無くしていった。

「じゃあ、あだ名はトラトラに変更ぅ～っ！」
「気に入ってないっつってんでしょうがっ！！黙ってなさいっ！クソガキっ！！」

「ううっ……！」

白雪にすごい剣幕で怒鳴られ、無邪気な犬信もさすがに怯える。

「キジぃ～の相方って怖いよねぇ～」

「キジぃっ……」

由雉の方を振り向き、感心したように言う犬信であったが、由雉には犬信の発したあだ名の微妙さだけが引っ掛かった。

「そうか……」

「……っ？」

声のトーンの低くなった犬礼に、白雪が眉をひそめる。

「本当にもう……腐りきってしまいそうだ……」

「はぁっ？」

犬礼の言葉に、白雪が思いきり表情をしかめて聞き返す。

「あんな……犬国の後釜で四大国になったような……」

顔を上げた犬礼が、鋭い瞳を白雪に向ける。

「くだらぬ国の人間を……相手にせねばならんとはな……」

「……っ」

その犬礼の物言いに、しかめっ面を見せていた白雪が、ふと落ち着いた表情へと戻った。

「くだらない……？」

犬礼の言った言葉を確認するかのように、白雪が犬礼へと問いかける。

「ああ、そうだ」

白雪の問いに、犬礼は大きく頷く。

「貴様ら虎国などっ……所詮は我ら犬国の代わりっ……」

犬礼が冷たい表情で、その言葉を続ける。

「犬が四大国を剥奪されなければ、大国にすらなれなかったであろう腐った国だっ……！」

「……っ！」

大きく目を見開き、罵るように犬礼が叫んだその時、白雪の堪忍袋の緒が切れるような音が聞こえた。

「人の国のこと、くだらないだの腐っただの……」

俯いたまま、怒りに震えるような声を発する白雪。

「好き勝手言ってくれてんじゃないわよっ！！クソガキがぁぁぁっっ！！！」

「んなっ……！」

まるで鬼のような形相で勢いよく顔を上げた白雪に、今まで冷静そのものだった犬礼が、初めて驚いたような表情を見せた。

「おっ俺がクソガキっ……？信じられんっ、俺の存在が腐るっ……」

耳を疑うかのように、首を横に振り、白雪の言葉を否定する犬礼。

「そのまま腐んなさいっ！」

「……っ」

強く言い放つ白雪に、犬礼が眉をひそめる。

「おっ俺に腐れだとっ？どこまでも腐った女めっ……！」

犬礼も薙刀を構え、白雪に攻撃する態勢を取った。

「腐ったまま死ねっ……！！」

犬礼が勢いよく薙刀を振り上げる。

「“白閃（びゃくせん）”っ！！」

犬礼の突き出した薙刀から、白い一閃が放たれる。白閃は、目にも留らぬスピードで、まっすぐに白雪へと向かっていく。白雪には避ける時間すらないだろう。

「良しっ」

勝利を確信し、微笑む犬礼。

「ナメんなって……言ったはずだけど……？」
「何っ……？」
「……っ！」

白雪の言葉に犬礼が眉をひそめる中、白雪が白閃に向け、両手を構えた。

「“大雪界（だいせっかい）”っ！！」

――――バァアアアアアアアアアーーーーンっっ！！――――

「……っ！」

白閃が白雪を直撃しようとしたその時、白雪が両手から勢いよく吹雪を放った。強い吹雪が、一瞬にして犬礼の白閃を消し去る。

「なっ……！」

吹雪は空から舞い落ちる雪をも巻き込み、さらに勢力を増して、犬礼へと突っ込んでいく。

「うぅっ……！」

初めて歪む、犬礼の表情。

「うわあああああああああああああああああっっっ！！！」

強い吹雪を、犬礼がもろに喰らった。吹雪の中聞こえてくる悲鳴が、徐々に掻き消されていく。

「あっ……あぁっ……」

吹雪を喰らった体の正面部分から、徐々に凍りついていく犬礼の体。

「腐らぬよう……冷凍保存……かっ……あぁっ……」

――――パキィィィィィィーーーンっ！――――

そう呟きを残し、犬礼が完全に凍りつく。歪めた表情そのままに、犬礼は物言わぬ氷の像と化した。

「はぁっ……」

その氷の像を見つめながら、少し肩を落とす白雪。

「貴方に負けたら、私の名が腐るわっ」

氷と化した犬礼に、白雪は堂々と言い放った。

「うわぁ～っ、やりすぎっ」

氷づけにされた犬礼の姿を見て、敵ながら少し同情したように声を出す由雉。

「血も涙もないよねぇ」

「うっさいわねっ！貴方たちの飼い主だって、大概でしょうがっ！

！」

非難するように声をあげる由雉に、戦いを終えたばかりの白雪が勢いよく突っ込む。

「それに……」

由雉が犬礼のさらに後方を見る。犬礼の後方に広がる森一帯が、白雪の技の影響を受け、犬礼ごと氷づけにされてしまっていた。

「超自然破壊っ」

「うっさいわねっ！すぐにもとに戻すわよっ！」

「アハハハっ！何、あれっ！レイレイってば、超だっさぁ～いっ！」

「……っ」

白雪と話していた由雉が、後ろから聞こえてくる陽気な声に、その表情をしかめながらゆっくりと振り返った。

「アハハハハっ！」

由雉の振り返った先には、楽しげに笑っている犬信の姿があった。

「相方がヤラれたってのに、随分と楽しそうだね」

少し冷たい目線で、由雉が犬信を見る。

「だってぇ、あのレイレイ、笑えなぁ～い？」

「まぁ確かにね」

犬信の問いかけに、あっさりと頷く由雉。

「それにっ、あんだけ偉そうなこと言っといて、あっさり負けるなんてぇっ」

無邪気な笑みを、冷たい笑みへと変える犬信。

「相方としては、恥なだけだよっ」

『……っ』

犬信の言葉に、由雉と白雪が同時に顔をしかめた。

「最低コンビだねぇ」

「ホントっ、即興コンビの私たちの方が幾分かマシねっ」

「それはどうかな……」

「何よっ！！」

白雪の言葉に賛成しかねている由雉に、白雪が思いきり怒鳴る。

「あっ、トラトラ、意外と強いんだねぇ～ボク、感心しちゃったぁっ！」

「トラトラ言うんじゃないわよっ！でも感心サンキューっ！！」

「何なのよっ、君……」

あだ名には勢いよく怒鳴りあげるが、褒められた嬉しさは隠さない白雪に、少し冷たい目を向ける由雉。

「あっ！あぁ～っ！うんっ！」

白雪が軽く咳払いをする。

「んでぇ？どうすんのっ？」

白雪が由雉の方を振り向く。

「手伝うっ？」

「必要ないよぉ」

白雪の問いかけにあっさりと首を横に振り、由雉が一人、犬信に向き直る。

「それに……」

由雉が目つきを鋭くし、笑っている犬信を見る。

「可愛いけど実は強ぉ～い僕美少年キャラ、被ってるし」

「別にそうでもないわよ……？」

由雉の言葉に軽く突っ込みを入れながら、白雪が戦いには参加しないということで少し後ろに退がる。

「さてと……」

「あぁぁ～キジぃ～がボクのお相手ぇ～？」

懐から色羽を何枚か出す由雉に、犬信が笑顔で問いかける。

「そうだよ。何かご不満でも？」

「ううん～っ！全然っ！」

少ししかめた表情で問いかけた由雉に、犬信はさらに笑顔となって答えた。

「ボクっ、トリ狩るの好きだしっ」

「……っ」

再び冷たく笑う犬信に、由雉が少し眉をひそめる。

「そう、ボクも……」

由雉がその表情を鋭く変える。

「イヌ甚振（いたぶ）るの、好きだよ」

「……っ」

挑発を挑発で返す由雉に、犬信はさらに怪しげに微笑んだ。

「アハハハっ！いっくよぉ～っ！？“白矢”っ！！」

犬信がまたしても矢のない弓を構え、由雉に向けて無数の白い矢を放つ。

「……っ」

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

白い煙に包まれ、素早く雉化するユキジ。

「当たらないよっ……！」

青色の羽根を大きく広げ、自由に雪空を舞い、ユキジが無数の白矢を一つ残らずかわしていく。

「逃がさないよっ……」

すべてを避けたユキジを見ながら、不適に微笑み、もう一度弓を構える犬信。

「“白矢網”っ」

「……っ！」

空中にいるユキジを四方八方、全方向から囲むようにして現れる白矢。すべての矢先がユキジの方を向いており、ユキジに狙いを定め、いつでも射抜くといった状態で取り囲んでいる。

「……っ」

取り囲む矢たちに、少し表情をしかめるユキジ。

「キっ……！……っ」

思わず身を乗り出し、助けを入れようとした白雪であったが、考え直したのか、すぐにまた腕組みをした格好に戻り、冷静に状況を見守る。

「あれぇ～？助けないのぉ～？」

そんな白雪に笑って問いかける犬信。

「“必要ない”と、言われたわ」

犬信の問いかけに、白雪が迷いない表情で答える。

「そういう無駄な信頼がっ……仲間を死なせることになるんだよっ！それぇっ！！」

「……っ！」

ユキジを取り囲む白矢が、一斉にユキジの方へと飛び出していく。

「……っ」

――――ボォォォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

少し表情を険しくしたユキジが、白い煙に包まれていく。

「アハハっ！今更、人化ぁ～っ？そんなこととしたって、的が大きくなっちゃうだけでぇっ……！」
「“癒羽”・“裂羽”っ……」
「……っ」

白い煙の中から出てきた由雉が、地面へと降下していきながら、右手の青い羽根と左手の黄色い羽根を重ね合わせる。その様子に、少し眉をひそめる犬信。

「“合翼……」

重ね合わされた二枚の羽根は、少し光を放って、一枚の緑色の羽根へと変化する。

「包羽”っっ！！」

由雉の放った緑色の羽根が、空中で大きく広がり、由雉の体を包み込んでいく。

――――パァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

「……っ！！」

由雉を包み込んだ包羽は、全方向から飛んできた無数の白矢を、すべて弾き返した。あっさりと弾き返される自分の矢に、犬信が大きく目を見開く。

「……っ」

弓を握る手に力を込め、笑みを消して唇を噛み締める犬信。

「ふぅっ」

ゆっくりと降りてきた緑色の羽根の中から、無傷の由雉が地面へと降り立つ。

「なかなかやるねぇ～っ！キジぃ～っ！」

「……っ？」

陽気な声に由雉が顔を上げると、そこにはいつものように笑みを浮かべた犬信の姿。しかしその笑みは、いつもの無邪気な笑みに比べ、少し引きつっているような、無理やり作ったような、そんな笑みであった。

「でもっ……」

犬信が目つきを鋭くし、再び弓を構える。

「ボクの力はまだまだこんなもんじゃっ……！」

「ううんっ」

「……っ」

由雉が少し低く響く声で、犬信の言葉を遮った。

「君の出番は、もう終わりだよ」

「何っ……？」

由雉の言葉に、犬信が眉をひそめる。

「冗談っ！ボクはまだまだ戦えっ……！」

「“滅羽”・“裂羽”っ……」

冷静な表情を見せた由雉が、右手に青い羽根を、左手に赤い羽根を構える。

「“合翼……」

またしてもその二枚の羽根を重ね合わせる由雉。重なった二枚の羽根は、少し光を放って、一枚の羽根へと姿を変えていく。

「……っ！」

現れた一枚の紫の羽根を持ち構え、由雉が犬信の方へと駆け込んでいく。

「クっ……！」

駆け込んでくる由雉の姿に、慌てて弓を構える犬信。

「びゃっ……！“白っ……！」
「……っ」

犬信が弓を構えきる前に、犬信の懐へと入ってくる由雉。

「ううっ……！」

犬信の表情が歪んでいく。

「……“壊羽”っ！！」

由雉が紫の羽根を、犬信の懐へと投げ放った。

――――バァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

「うわあああああああああああああああっっ！！！」

犬信が壊羽をもろに喰らい、全身から血を流しながら、激しい衝撃風とともに、吹き飛ばされていく。

「うっ……ううっ……！」

吹き飛ばされた犬信が、力なく地面に倒れ込む。

「ぼっボクがっ……負けるなんてっ……」

口から血を流しながら、犬信が目線だけをゆっくりと氷づけにされている犬礼の方へと向ける。

「笑っ……ちゃうよね……レイレ……イっ……ううっ……」

犬礼にそっと笑いかけ、犬信はゆっくりとその瞳を閉じた。

「……。」

犬信が気を失ったことを、鋭い表情のまま確認する由雉。

「可愛いのに実は強ぉ～い僕美少年キャラは、ボクだけで十分だよっ」

犬信を見つめながら、由雉は勝ち誇ったように言い放った。

「やったわねっ！キジっ！」

由雉の元へとやって来る、笑顔の白雪。

「ナイスコンビネーションっ！」

「別にコンビプレー1つもやってないでしょ……？」

由雉・白雪ペア（？）ｖｓ犬信・犬礼。勝者・由雉・白雪ペア（？）。

第３３章　ｖｓ八犬士　☆４

同じく安房の森内。門貴ｖｓ犬義。

「如意棒・第一の舞っ……」

飛び上がった門貴が、真っ赤な棒を振りかぶる。

「“空”っ……！」

振り切った如意棒から風の塊が放たれ、下方にいる犬義へと向かっていく。

「……。」

向かってくる風を見ながら、落ち着いた表情で持っている大剣を構える犬義。

「“白斬”っ」

――――パァァァァァァァーーーーンっ！――――

犬義が大剣を振りきると、強い衝撃波のようなものが空中を走り、門貴の放った風が斬り裂かれ、上下に砕け散っていった。

「……っ」

斬られた風に眉をひそめる門貴。

「懲りない奴だな……」

剣を下ろした犬義が、静かな口調で門貴に話しかける。

「何度、俺に風を斬られれば気が済むんだ……？」

「……っ」

犬義が微笑みながら問いかけると、門貴は表情をさらにしかめた。

門貴が風を斬られたのは、これが最初ではない。初めて戦った、桜時のさらわれたあの日も同じように風を斬り裂かれ、結果、門貴は犬義に手も足も出せずに負けたのであった。

「それとも俺の力が未だに理解出来ていないだけか……？」

「まぁそれはちょいあるけどぉ」

嫌味のように言った犬義に、門貴は恥じることなくあっさりと頷く。

「ハハっ」

「んんっ？」

素直なリアクションを取る門貴に、思わず笑みを漏らす犬義。そ

んな犬義に、門貴は不思議そうに首をかしげる。

「面白い男だ……」
「えっ！？」

笑って呟く犬義に、勢いよく顔を引きつる門貴。

「もっもしやっ！お前もゲイっ！？」
「誰がだっ」

引き気味に問いかけた門貴に、犬義は表情に少し怒りを見せながら、冷静に突っ込みを入れる。

「まぁいい。俺の、いや、俺たちの力を教えてやる」
「俺たちっ？」

犬義の言葉に、門貴が目を丸くする。

「そうだ。俺たち“犬人”に与えられし力……」

落ち着いた様子で1つ頷いた後、その表情をゆっくり研ぎ澄ませていく犬義。

「その力の名は“創力”」
「創力？」
「ああ、その名の通り、万物創世の力だ」

犬義がどこか遠い目で言葉を続けていく。

「この力で俺は今、お前の放った風力内に空気を創り出し、その真空状態を斬り裂いたのだ」
「……はいっ？」
「……。」

犬義の説明をまったく理解していない様子で、大きく首をかしげる門貴に、犬義が少し固まる。

「はぁっ……もういい」
「んん～っ」

呆れた表情で犬義が肩を落とす中、まだ唸って考え込んでいる門貴。

「だからもういい。お前にはきっと一生、理解できん」
「ん～っ、でもまぁ何かすっごい力やぁ～ゆうんはわかったでぇっ！」
「……っ」

笑顔で言い放った門貴の言葉に、呆れきっていた犬義の表情が突然曇った。

「……ああ」

俯いた犬義が、小さく頷く。

「確かに、“凄い力”だ……」
「……？」

どこか暗い声で話す犬義に、門貴は戸惑うように首をかしげた。

――――四大国の奴らかっ……？――――

――――しかしっ……！龍国に戦争など仕掛ければっ……！――――

「……。」

思い出される八房と犬仁の言葉に、犬義は少しだけ悲しげな表情で目を伏せた。

「多くのものを、狂わせた……」

「えっ……？」

そっと囁かれた犬義の言葉を、かろうじて聞き取った門貴であったが、その言葉の真意は見えずに、ただ戸惑った表情で聞き返すことしか出来なかった。

――――犬国に再び“大国”の称号をっ……――――

――――お前も、実は四大国を倒すことには反対なのではっ……――――

「本当は、そんなこと、どうでもいいのに……」

大国になることにも、四大国を倒すことにも、特に興味があるわけではない。

――――我々の長は、あの方以外に考えられない――――

「どうだっていいのに……」

“犬孝”の存在を待ち望んでいたわけでもないし、誰が“犬孝”であろうと関係ない。

「なのに俺たちは……」
「あのさぁっ」
「……っ」

急に声を掛けてきた門貴に、犬義が言葉を止め、少し驚いた様子で顔を上げる。

「俺、そんな話、どうでもええねんけど？」
「はっ……？」

門貴のその言葉に、犬義が思わず目を丸める。

「俺はお前と戦いに来ただけやねんからっ」
「えっ……？」

何の躊躇いもなく普通に答える門貴に、さらに戸惑うような表情を見せる犬義。

「そりゃまぁ桜時のこと取り返しに来たぁ～いうんが一応の理由やけどぉ」

少し眉間に皺を寄せ、門貴が言葉を続ける。

「そんなんは輝矢んに任せとけばええやろうし」

門貴がふと笑顔を見せる。

「俺は今日、お前と戦いにここまで来てんっ！」

「……っ」

何の迷いもなく笑顔で答える門貴に、犬義が衝撃を受けたように大きく目を見開いた。

「……。」

そっと俯く犬義。国とか力とか、色々なものを背負って戦っていることが、馬鹿らしくなるほどに短絡的な考え。

――――戦いの準備だっ……――――

だが、犬義自身も、その短絡的な考えで、ここへとやって来た。

先へと進む輝矢をあっさりと逃がしてまで、門貴との一対一の再戦

を望んだ。

「ハハハハっ」
「……っ？」

急に笑い出す犬義に、門貴がまたもや首をかしげる。

「ハハハっ、やはり面白い男だな、お前はっ」
「えっ！？やっぱりゲっ……！」
「違うっ！」

再び疑う門貴に、犬義は強く否定の言葉を投げかける。

「思いだしたのだ。俺も……」

犬義がゆっくりと左腕の裾を捲りあげる。

「この傷の借りをっ、返しに来たということをなっ」
「……っ」

裾を捲りあげた左手を挙げ、笑って門貴へと見せる犬義。左手には、前の戦いで門貴がつけた切り傷の跡が残っていた。

「へっ」

犬義を見て、門貴もどこか楽しそうに笑みをこぼした。

「じゃあ決まりやなっ！」

「ああっ！決着をつけようかっ！」

笑顔を見せた門貴と犬義は、互いを見ながら、再びそれぞれの武器を構えた。

「いっくでぇっ！！如意棒・第一の舞っ！“空”っ！！」

門貴が勢いよく如意棒を振り下ろし、風の塊を放つ。

「風は斬るとっ……さっき説明しただろうっ！“白斬”っ……！！」

――――パァァァァァァーーーーンっ！！――――

犬義が剣を振るうと、白い大気が走り、門貴の風を真っ二つに斬り裂いた。

「ならっ！第二の舞っ！“浄”っ……！！」

「……っ！」

門貴が如意棒を地面に突き刺した途端、犬義の八方から、犬義を

取り囲むように風が巻き起こる。

「無駄だっ！“白旋斬”っ……！！」

犬義が剣を構え、風の中心で一回転する。

――――パァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

風の中心で大きく剣を回し、取り囲む風を横一文字に斬り裂く犬義。

「クっ……！」

砕け散っていく風に、門貴が厳しい表情を見せる。

「今度はこちらからいくぞっ……！」

「……っ！」

犬義の声に、門貴が焦った様子で振り向く。

「“白斬”っ……！！」

「うっ……！」

門貴へ向けて、まっすぐに空中を駆けてくる白い大気。

――――――バアアアアアアアアアーーーンっっ！！――――――

「うあああああああああああああああっっ！！！」

走って来た大気が門貴の腹部を直撃すると、門貴の体が激しい衝撃波でも当たったかのように勢いよく吹き飛んでいく。

「かはっ……！」

口から血を吐き、地面へとうつ伏せに倒れ込む門貴。

「前とまったく同じ展開だな」

倒れた門貴に、犬義が余裕の笑みを浮かべる。

「サルには学習能力というものがないのか？」

「へっ……」

嫌味ったらしく問いかける犬義に、うつ伏せになっている門貴が、少し苦い笑みをこぼした。

「ああぁ～っ、やっぱ強いなぁ……お前っ」

「……っ」

しみじみと呟く門貴に、犬義が少し眉を動かす。

「何だ？白旗か？」
「まさかっ」

犬義の問いかけを、門貴は軽く笑い飛ばした。

「輝矢んにっ、“勝ちなさい”って言われてんねんっ」
「……。」

倒れたまま、ゆっくりと落ちている如意棒へと手を伸ばす門貴。
その門貴の様子に、犬義が少し眉をひそめる。

「だから死んでもっ、負けられへんわっ」

握り直した如意棒を支えに、門貴がその場でゆっくりと立ち上がる。

「それでいいのか……？」

立ち上がった門貴に、犬義が真剣な表情を向ける。

「お前の死ぬ理由は……」
「……。」

犬義の問いかけに、少し笑みをこぼし、門貴がゆっくりと顔を上げる。

「十分っ！」
「……っ」
誇らしげに笑って答えた門貴に、犬義も少し笑みを見せた。
「ならばっ……！」
犬義が再び剣を構える。
「望み通りっ……！ここで死なせてやろうっ！“白斬”っ……！！」
犬義が大きく剣を振り、門貴に再び白斬を放つ。
「……。」
門貴がゆっくりと如意棒を構える。
――――なら……――――
「如意棒……」
――――今日は勝ちなさいっ……――――

「第三の舞っ……」

門貴が表情を鋭くし、如意棒を前に突き出すように構える。

「……“戒”っ！！」

前方に押し出された如意棒の棒先から、高密度の風が放たれる。

――――パァァァァァァァーーーンっっ！！――――――

風は竜巻のように回転し、犬義の放った白斬を斬り裂く。

「何っ……！？」

その光景に、大きく目を見開く犬義。

「空気をっ……斬っただとっ……！？」

白斬を斬り裂いた門貴の風が、まっすぐに犬義に向かっていく。

「うっ……！」

犬義が思わず歯を喰いしばった。

――――バァァァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

「うっ……！うあああああああああああああああああああっっっ！！！」

風が犬義を直撃し、その全身を斬り裂いた。

「うっ……うあっ……あっ……」

血を流しながら、ゆっくりと後方へと倒れていく犬義。

「はぁっ……はぁっ……」

肩で大きく息をしながら、犬義が地面に倒れるのを確認し、門貴はゆっくりと構えていた如意棒を下ろした。

「ふはぁ～っ！」

如意棒を下ろした門貴が、力なくその場に座り込む。

「生きとうかぁ～っ？」

倒れている犬義に、問いかける門貴。

「何とか……なっ……」

「そうかぁっ」

返ってくる苦しげな声に、門貴は少しホッとしたように微笑んだ。

「見事な……風だった……」

雪の舞い落ちる空を見上げながら、遠い目を見せた犬義がそっと呟いた。

「俺の……負けだっ……」

「……っ」

犬義の負け宣告を聞き、門貴が口元を緩める。

「おっしゃあああああっっ!!勝ったでぇぇぇっっ!!輝矢ぁぁぁぁんっっ!!」

天へ向かって高々と叫び声をあげる門貴。

「……バカがっ」

空に響き渡る門貴の大声を聞きながら、犬義が穏やかな笑みを浮かべる。

「ああぁ～っ！面白かったっ！」

顔を下へと下ろし、改めて微笑む門貴。

「またやろなぁ～っ！」

「……っ」

曇りのない笑顔で笑いかけてくる門貴に、犬義は少し驚いたように目を開いた。

「……っ」

門貴から視線を逸らし、そっと笑みをこぼす犬義。

「断る……」

「ええっ！？なんでっ！？」

門貴ＶＳ犬義。勝者・門貴。

第３３章　ｖｓ八犬士　☆４（後書き）

次回から３４章です。

第３４章　輝矢ｖｓ犬仁　★１（前書き）

３４章です。

第３４章　輝矢ｖｓ犬仁　★１

犬国・安房の森内。

「“癒羽”っ」

戦いを終えた由雉は、由雉・白雪にそれぞれ敗れ、気を失って倒れ込んでいる犬信と犬礼の二人に、癒羽を用いて治療を施していた。

「敵の治療ぅ～っ？貴方も物好きねぇ～」

そんな由雉に、白雪が感心しているのか批判しているのか、どちらか微妙な声を掛けた。

「一人はどっかの誰かが加減もせずに氷づけにしたせいで、凍死寸前だったからね……」

「悪かったわねっ！国、馬鹿にされてムカついちゃったんだから仕方ないでしょっ！！」

刺々しく言う由雉に、勢いよく怒鳴りあげる白雪。

『虎昌様ぁぁぁぁ～～っ！！』

「んっ？」

聞こえてくる自分のいかつい名に、白雪が振り返る。

『あっ！虎昌様ぁぁぁっ！！』

そこへ現れたのは、白雪のお供、鈴白・芹兄弟であった。白雪を見つけた二人が、嬉しそうな笑顔で駆け寄って来る。

「やっと見つけたぁ～っ！」
「虎昌さっ……！」
「下の名前で呼ぶんじゃないわよっ！！気に入ってないんだからっ！！」
『うわっ！』

笑顔で駆け寄っていった鈴白と芹であったが、白雪に勢いよく怒鳴られ、近寄っていっていた足を止めた。

「ったくっ！もうっ！」
「はぁ～っ、探さなきゃ良かった」
「あのまま二人で帰れば良かったねぇ～」
「何か言ったっ！？」
『いえっ……』

白雪の怒鳴り声に、探したことを悔やんでいた鈴白と芹であったが、白雪に一睨みされ、暗い表情で首を横に振った。

「あれぇ～？君たちも来てたんだぁ～えっと……」

由雉が、鈴白と芹の方を見る。

「御形と仏の座だっけぇ？」
「まぁニュアンス的にはあってます」
「絶対、スズシロとセリの方が簡単なのにぃ～」

七草違いの間違いをする由雉に、鈴白と芹がそれぞれ呟く。

「貴方たち、今まで何してたわけっ？人が命がけで戦ってたっていうのにっ！」
「こっちだって命賭けてきましたよ……」

少し怒ったように言い放つ白雪に、どこかげっそりとした表情でこっそりと答える鈴白。

「僕たちもどっかの誰かと、八犬士っていうのの一人をやっつけてきたんだよぉ～っ！白雪様っ！」
「あらっ？そうなの？」
「どっかの誰かぁ？」

芹の言葉に、由雉が顔をしかめる。

「うんっ。誰だか忘れちゃったけど、羊々ボール投げる人っ！」
「ああ、羊スケね」
「羊スケ？？」
「そういえばそんな名前でしたねぇ～確か」

由雉の言葉に、やっと羊スケの名前を思い出す鈴白と、まだ首をかしげている芹。名前を聞いても、そうピンと来なかったようである。

「とにかく」

犬信と犬礼の治療を終えた由雉が、ゆっくりと立ち上がる。

「ボクは輝矢たちを追うけど、君たちは？どうする？」
「もうそんなに加勢の必要もないんでしょ？帰るわっ」
「そう」
あっさりと答えた白雪に、あっさりと頷く由雉。
「じゃあボクは行くからぁ」
「ああ、キジ」
「……？」
行こうとした由雉が、白雪に呼び止められ、振り返る。
「竹取輝矢に言っといて」
腕を組んだ白雪が、穏やかに笑う。
「“これで借りはチャラよ”って」
「……っ」
微笑んだ白雪を見て、由雉もそっと笑みをこぼした。
――――ボォォォォォォォォ～～～ンっ！――――
白雪たちに背中を向けた由雉が、白い煙に包まれていく。
「気が向いたら伝えとく～」

「ちゃんと言いなさいよっ！！？」

そう言い残して飛び立っていく青いキジに、白雪は思いきり怒鳴りあげた。

「たくっ！」

見えなくなっていくキジを見ながら、白雪が疲れたように肩を落とす。

「さっ！帰るわよっ！鈴白っ！芹っ！」

『えっ？』

振り向いて言う白雪に、鈴白と芹が目を丸くする。

「ホントに帰るのぉ～？虎昌様ぁ～」

「輝矢さんたちが桜時さんを助けられるかどうか、最後まで見届けていった方がいいのではないですか？虎昌様っ」

「下の名前で呼ぶんじゃないって言ってんでしょっ！！」

『うわっ』

いつもと同じ会話を展開する三人。

「それにっ……」

怒鳴りあげていた白雪が、ふと真面目な表情を見せる。

「竹取輝矢が、負けるはずないでしょっ」

『……っ』

白雪の漏らしたその言葉に、鈴白と芹は大きく目を見開いた。

「ホントに素直じゃありませんねぇ～虎昌様はっ」
「虎昌様、照れ屋照れ屋ぁ～っ！」
「うっさいわねっ！！だから下の名前で呼ぶんじゃないわよっ！！」

戦いの終わった森に、白雪の少し照れたような怒声が響き渡った。

犬国・安房の森入口。

「ふぅっ」
「ゴンさぁぁぁぁ～～～んっ！！」
「あっ？」

地面に座り込み、一息ついていたゴンが、遠くから聞こえてくる自分を呼ぶ名に振り返る。

「おぉ～いっ！ゴンさぁぁ～んっ！」

「羊スケ」

森の方からゴンのもとへと駆けてくるのは、特に傷を負った様子もない元気そうな羊スケであった。羊スケがゴンのすぐ傍までやって来る。

「ふぅ～っ！ご無事でっ！」

「当ったり前だろうがっ」

少し息をつき笑顔を見せた羊スケに、ゴンが相変わらずの不機嫌面を向けた。

「お前は無傷だなぁ～敵に遭遇せずに済んだのかぁ？」

「あっいやぁ～っ、遭遇したっちゃしたっスし、倒したっちゃあ倒したんスけどねぇ……」

「はぁっ？」

犬悌との戦いのことを説明しようとする羊スケであったが、いまいち上手く言葉が繋がらず、それを聞いているゴンはさらに顔をしかめて、首を傾けた。

「まぁいいや。無傷ならお前の羽根くれよ。クソ生意気キジから貰ったやつっ」

「へっ？ああ、癒羽のことっスね」

羊スケがゴンの言葉に頷き、懐から黄色い羽根を取り出す。それは犬国に入る前に、由雉が全員に一枚ずつ配った癒羽であった。

「って、ゴンさん、自分で貰った羽根はどうしたんスかぁ～っ？」

ゴンに癒羽を手渡しながら、羊スケがふと目を丸くして問いかける。

「んっ」
「へっ？」

顎で指し示すゴンに、羊スケが差された方角を振り向く。

「あっ」

そこに倒れているのは、全身に火傷を負って気を失っている犬忠であった。犬忠の胸部には黄色い羽根が突き刺さっており、徐々に犬忠の火傷を回復させている。

「敵にあげちゃったんスかぁ～？」
「いっくら物騒な奴とはいえ、鬼でもない一般市民を見殺しにするわけにはいかねぇーだろうがっ」
「まぁそれもそうっスけど」
「よっ」

羊スケが納得したように頷く横で、ゴンが自分の右腕に癒羽を突き刺した。犬忠の白火や白流により受けたゴンの傷が、徐々に治っていく。

「輝矢さんたちの加勢に行きますかぁ？」
「しばらく動けそうにない」
「へっ？」

ゴンの答えに、羊スケが目を丸くする。

「“九尾”を……？」
「ああ……」

少し表情を曇らせて問いかけた羊スケに、ゴンは素気なく頷いた。

「そうっスか。じゃあアイツ……結構、強かったんスね」
「ああ……」

倒れている犬忠を見つめ、呟く羊スケ。羊スケの言葉に、ゴンがまたもや頷く。性格に問題はあったが、火力と水力を使う犬忠の実力は、かなりのものであった。ゴンが九尾を出さなければ、勝てなかったほどに。

「八犬士の強さ、予想以上だ」

真剣な表情を見せたゴンが、静けさの漂う森を見つめる。

「油断すんなよっ、竹取っ……」

ゴンは輝矢の安否を気遣うように、そっと呟いた。

「いよっとっ」

腕に突き刺していた黄色の羽根を抜き、まだ傷の残る体で立ち上がる門貴。

「ほいっ！半分残しといたでぇ～っ！」

「いらんっ」

笑顔で羽根を差し出す門貴に、倒れたままの犬義が悪態をつく。

「敵に情けをかけられるくらいなら、このまま死んだ方がマシだ」

「はぁっ……」

気位の高いこをを言う犬義に、門貴が呆れたように肩を落とした。

「よっ」

――――ブスゥっ！――――

「のわぁぁぁぁぁっっ！！」

犬義の傷口に、勢いよく癒羽の先を突き刺す門貴。いつも落ち着いている犬義が、クールではない声を出す。

「おっお前っ……」

「ほんじゃあ俺は輝矢んの後、追うわぁ～っ！」

怨みがましい目を向ける犬義に、何も考えていなそうな明るい笑

顔を向ける門貴。

「じゃあなぁ～っ！」

大きく手を振り、門貴がその場から走り去っていく。

「……。」

犬義が癒羽で傷の治り始めた体を起こし、その場に座り込んで、ただまっすぐに門貴の走り去っていった森の先を見つめる。

「犬仁っ……」

名を呼んだその表情は、どこか不安げであった。

安房の森・里見の屋敷程近く。輝矢ｖｓ犬仁。

「“月器・上弦”っ」

輝矢が三日月から満ちさせた半月を、雪空へと高々と放り投げる。

「“水月”っ……！」

空へと舞い上がった上弦から地上へ、無数の水の刃が降り注ぐ。

「……っ」

降ってくる水の刃を見上げ、目つきを鋭くして右手の白い槍を構える犬仁。

「“白雨（びゃくう）”っ……！！」

犬仁が水月の降ってくる空へ向けて、持っている槍を突き出す。

――――バァァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

天へと突き上げられた犬仁の槍から、飛び出すように放たれる、白く輝く雨のような光。上下逆に降る白き雨が、降ってくる水月と衝突し、相殺していく。

「……“月器っ」

すべての水月が相殺したことに少し表情を曇らせながら、落ちて

きた上弦を掴む輝矢。

「三日月”っ」

輝矢が上弦を三日月へと戻し、再び三日月を構えた。

「……。」

犬仁も厳しい表情のまま輝矢を見つめ、ゆっくりと槍を構え直す。

『……っ！』

少しの間見つめあった両者が、同時に互いの元へと飛び出していく。

――――キィィィィーーーンっ！――――

響く金属音。強くぶつかり合う、三日月と白槍。

「……っ」

「うっ……！」

急に槍を後ろへ退く犬仁に、輝矢が少しバランスを崩される。

「“白雨”っ……！」
「……っ！」

輝矢のすぐ目の前から、勢いよく槍を突き出し、先程の白い雨を輝矢へと向ける犬仁。

「“月器っ……！」

輝矢が少し焦った表情で、三日月を自分の前へと突き出す。

「十六夜”っ……！！」

輝矢のすぐ前で、満月に程近い形まで満ちていく月器。

――――バァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

十六夜が、輝矢に向けられたすべての白雨を受けとめる。

「うっ……！」

その威力に、十六夜ごと少し押される輝矢。

「……っ」

「なっ……！」

輝矢が押された態勢を整えようとしていたその時、飛び上がるようにして十六夜の上から姿を見せる犬仁。輝矢が焦りの表情を見せる中、犬仁が輝矢へ槍を突き出した。

「“白刺”っ……！」

「クっ……！」

避けきれぬ槍先に、輝矢が唇を噛む。

――――ブシュっ……！！――――

「ううっ……！」

十六夜を持ったまま体を後ろへと逸らした輝矢であったが、犬仁の槍は輝矢を逃がすことはなく、その左肩を勢いよく突き刺した。血の流れ落ちる左肩に顔をしかめながら、輝矢が後退していく。

「はぁっ……はぁっ……」

犬仁との距離を取り、十六夜を地面へとつけた輝矢が、少し乱れた呼吸をする。

「弱いな……」

地面へと着地し、槍を下ろした犬仁が、輝矢に言い放つ。

「その実力で犬孝様を取り返しに来たなどと、よく言う……」

「……っ」

見下したような言葉を吐く犬仁に、表情をしかめる輝矢。今までの会話から犬仁の言う“犬孝様”が、桜時であることは理解出来ていた。

「貴様の力では犬孝様をお守りすることは出来ぬ……」

犬仁はさらに言葉を続ける。

「貴様は犬孝様に相応しくない……」

「……。」

鋭い瞳で言い放つ犬仁を、輝矢は左肩の傷を押さえながらまっすぐに見つめた。

第３４章　輝矢ｖｓ犬仁　★２

深々と肩を落とし、息をつく輝矢に、少し眉をひそめる犬仁。

「随分と、好き勝手なこと言ってくれますねぇ」

傷を押さえることを止め、十六夜を持ち上げながら、輝矢がどこか呆れたような口調で言う。

「ハチに相応しいのは、私に決まっているでしょう？」

「……っ」

一切の迷いもなく自信満々に答える輝矢。その根拠もない自信に満ち溢れた言葉に、犬仁は表情をしかめた。

「どうやら思い知らせねば、わからぬようだな」

犬仁が表情を冷たくし、再び槍を構える。

「……“月器・三日月”」

輝矢も表情を鋭くし、十六夜を三日月へと変化させ、ゆっくりと構えた。

「ふぅっ」

「……っ？」

「“白雨”っ！！」
「“水月”っ……！！」

両者が一斉に水の刃と白い雨を放つ。

――――パァァァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

二人の丁度中間で、相殺して消えていく二つの力。

『……っ！』

力が消えるとすぐに、その中間地点まで飛び出してきた輝矢と犬仁が、それぞれ三日月と白槍を振るった。三日月と白槍は、激しく斬り結び、静かな森に金属音が何度も響き渡る。

「三日月っ……！」
「白槍っ！！」

輝矢が三日月を、犬仁が白槍を、同時に相手に突き出した。

――――――――――――――――っっ！！――――――

『うっ……！』

三日月が犬仁の左腕を、白槍が輝矢の左脇腹を斬り裂き、血を流

した二人は、顔をしかめながらそれぞれ後方へと引き下がる。

『はぁっ……はぁっ……』

雪の積もる地面に滴り落ちる二人の鮮血。二人の乱れた呼吸が、重なり合う。

「クっ……！」

左腕の痛みを堪えながら、白槍を高々と振り上げる犬仁。

「“白雨”っ……！！」

「……っ！」

向かってくる白雨に、脇腹の傷を押さえていた輝矢が、大きく目を見開く。

「“月器っ……！ううっ！」

慌てて三日月を構えようとした輝矢を、肩を脇腹の傷の痛みが襲う。

「クっ……！」

蹲った輝矢に迫る、白き雨。輝矢が表情を引きつる。

――――バァアアアアアアアアーーーーンっっ！！――――

「あああああああああああああっっ！！！」

白雨が輝矢を直撃し、白雨に打たれた輝矢は、激しく吹き飛ばされた。

「ううっ……！」

近くの木の幹に背中を打ちつけ、輝矢がそのまま前方へと倒れ込む。

「はぁっ……はぁっ……」

溢れ出るように流れる血。痛みで意識が飛びそうになる。

「強い……」

思わずこぼれ出た一言であった。今まで輝矢が戦う相手のことを“強い”などと、思ったことはあっても、口にしたことは一度もなかった。鬼でもない者にここまで苦戦するなど、白雪との戦いの時以来であったが、犬仁は白雪以上の壁を感じる。

――――もういいっ……――――

「……っ」

犬仁の力に圧倒されかけていた輝矢の脳裏に過ったのは、別れの時の、桜時の悲しい顔であった。

「ハチ……」

輝矢が小さな声で、ハチの名を呟く。

「ううっ……！」

「……っ」

必死に痛みを堪えながら、落ちている三日月を握り直し、何とか起き上がる輝矢の姿に、犬仁は眉をひそめた。

「はぁっ……！はぁっ……！クっ……！」

大きく息を乱しながら、三日月を杖のようにして体を支え、輝矢がその場で何とか立ち上がる。

「私はっ、ハチを……迎えに来たんですっ……」

乱れた呼吸で、輝矢が必死に言葉を繋げる。

「こんなところでっ……アナタに負けるわけにはいきませんっ……

！」

「……。」

強い瞳で顔を上げた輝矢を、犬仁はまっすぐに見つめる。

「……おかしなことを言う」

「……っ？」

低く小さな声で呟いた犬仁に、やっと立ち上がった輝矢は、少し眉をひそめた。

「あの時、犬孝様は、とても悲しい顔をしておられた……」

――――うっ……ううっ……！――――

今にも壊れてしまいそうな顔で、一人崩れ落ちるように膝をついた。

――――我々とともに行きましょう……――――

――――……っ――――

「あの時、犬孝様は、ご自分の手で私の手を取った……」

犬仁がどこか震える声で、言葉を続ける。

「そうさせたのはっ、貴様であろうっ……！？」

「……っ」

再び白槍を構え、何とか立ち上がった輝矢の元へと突っ込んでいく犬仁。

「クっ……！」

輝矢が痛みの走る体で、必死に三日月を振り上げた。

――――キィィィィィィンっ！――――

「ううっ……！」

犬仁の振り下ろした白槍を、何とか三日月で受けとめる輝矢。しかし受けとめただけで、激しく全身に痛みが走り、その表情は歪んだ。

「貴様がっ、犬孝様の手を離したのであろうっ……！？」

「……っ」

至近距離で、責めるように問いかけてくる犬仁に、輝矢が唇を噛み締める。

「今更、迎えに来たなどっ……」

犬仁が少し顔を下に向ける。

「虫のいいことを言うなっ……！！」

「……っ！」

犬仁の振り上げた左足が、輝矢を襲う。

「うあああああああああっ！！」

犬仁の蹴りが輝矢の右腕に決まり、輝矢は全身を左側へと吹き飛ばされた。

「ううっ……」

三日月が力なく地面に落ち、輝矢が再び雪の中に倒れ込む。

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」

強く叫んだせいか、少し息を乱している犬仁。険しい表情のままの犬仁が、倒れ込んだ輝矢をまっすぐに見つめる。

「もう立てまい……」

呼吸の整った犬仁が、輝矢を見つめ、言い放つ。

「殺しはせん。動けるようになったら、即刻、この国を出て行け」

そう吐き捨て、犬仁が倒れている輝矢に背を向ける。

「……。」

輝矢に背を向け、里見の屋敷の方へと歩き出していく犬仁。

「だからっ、好き勝手なことばっかり……言ってくれるんじゃありませんよっ……」

「……っ！」

背後から聞こえてくる声に、犬仁が大きく目を見開いて立ち止まる。

「何っ……！？」

勢いよく振り返る犬仁。

「うっ……！」

振り返った犬仁が、驚きの表情を見せる。

「貴様っ……」

「……。」

犬仁の見つめる先には、三日月を持ち、立ち上がっている輝矢の姿があった。

「私はまだ全然、動けますよ？」

「……っ」

その言葉が真実ではないことは容易に見て取れたが、あれほどの怪我を負い、これほどに追い込まれても、曇りのない笑顔を見せている輝矢に、犬仁は表情をしかめた。

「そうか……ならばっ……！」

犬仁が白槍を構える。

「次こそ動けぬようにしてやるっ……！」

「……っ」

駆け込んでくる犬仁に、輝矢が少しぎこちない動きで三日月を構えた。

「白槍っ……！」

「クっ……！三日月っ……！」

突き出される三日月と白槍が、またしても激しくぶつかり合う。

「ううっ……！」

白槍が三日月とぶつかり合った途端に、苦しい表情を見せる輝矢。

「ほら見ろっ！もう受けとめることもっ、手一杯の状態のクセにっ……！」

「……っ」

高々と言い放つ犬仁に対し、輝矢は鋭い瞳を見せ、血の流れる左手で犬仁の右手を握った。

「何っ……？」

犬仁が戸惑うように、輝矢の手を見る。

「“水縛”っ……！」

「……っ！！」

輝矢の左手から溢れ出た水が、白槍を持つ犬仁の右手を捕える。

「クっ……！」

まるで縄のような水に繋がれる、輝矢の左手と犬仁の右手。犬仁が何とか動かそうともがくが、水縛の力は強く、右手は捕えられたまま動かない。

「このっ……！」

「……っ」

「うっ……！」

利き手の動きを封じられた犬仁に、輝矢が三日月を構えた。

「“水月”っ……！！」

「クっ……！」

至近距離で放たれる水の刃に、犬仁の表情が歪む。

――――バァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

「ううっ……」

激しく飛び散る水飛沫に、後ろへと押される輝矢が少し身を屈める。

「……。」

徐々に収まっていく水飛沫を、真剣な表情で見つめる輝矢。

「ハァっ……ハァっ……ハァっ……」

輝矢の見つめる先に見えてきたのは、右手から激しく血を流し、肩で大きく息をしている犬仁の姿であった。

「自らの腕を攻撃してまで水縛を解き、ギリギリのところで水月をかわしましたか……」

犬仁の姿を見ながら、冷静に犬仁のとった行動を分析する輝矢。

「なかなかやりますねぇ」

「……っ」

余裕すら見える表情で言い放つ輝矢に、犬仁はさらに表情をしかめた。

「貴様っ、どこにそんな力がっ……」

「はい？」

戸惑うように呟いた犬仁に、輝矢が軽く聞き返す。

「どこにそんな力が残っていたのだっ……！」

「ああぁ～」

もう一度言う犬仁に、何やら納得したように大きく頷く輝矢。

「この力はですねぇ、ハチへの愛の力です」

「……はっ？」

さらりと答えた輝矢の言葉に、思わず間の抜けた声を出してしまう犬仁。

「あっ愛っ……？」

「そうです」

引きつりまくった表情で聞き返した犬仁に、輝矢が自信満々に頷く。

「私のハチへの愛の力は、無限ですからっ」

「……。」

恥ずかしげもなく言い切り、何やら爽やかな笑みまで浮かべる輝矢に、犬仁が呆然とした表情を見せる。

「貴様、バカか……？」

思わず問いかけてしまう犬仁。

「ええ、バカですねぇ」

「はぁっ……」

あっさり頷いた輝矢に、呆れきった表情で頭を抱える犬仁。

「何をあっさり認めっ……」

「ハチのためなら、いくらだってバカになれるっ」

「……っ」

しかし、次に発せられた輝矢の言葉に、思わず大きく目を見開いた。

「確かに、手を離したのも、ハチに悲しい顔をさせたのも、全部、私です……」

――――何でっ……！！――――

歩み寄ろうとしてくれた桜時を、歩み寄った結果に嫌われてしまうのを恐れ、突き離した。

「虫のいい話とはわかっています。けどっ……」

――――それで突き離すなんて……輝矢はズルいよっ……――――

――――俺もっ！そんなん、輝矢んらしくないって思うなぁ～っ！

――――

支えてくれる、仲間がいた。

――――犬国・ハチ公奪還行きでぇ～すっ――――

――――言ったでしょっ？“今度は私が助けてあげる”ってっ！――

力になってくれる、仲間がいた。

「ここで退くわけにはいきませんし……」

――――輝矢っ……――――

思い出される、優しい笑顔。

「ハチを譲るわけにもいきませんっ……！！」

「……っ！」

強く放たれたその言葉に、犬仁は大きく目を見開いた。

「……っ」

犬仁がその場でそっと俯く。

強い意志の瞳。この瞳の邪魔をすることに、この意志を阻むこと

に、罪悪感すら感じる。自分のしていることが、間違っていると、責められているようであった。

「何故だっ……」

犬仁が唇を噛み締め、強く拳を握り締める。

「何故っ……！」

第３４章　輝矢ｖｓ犬仁　★３

――――“犬仁”。それは八犬士が六に与えられし名。

“犬仁”の役目は、八犬士の副長として、長である“犬孝”を支えること。

“犬孝”の盾となってその身を守り、“犬孝”の剣となってその力となるための戦士。

それが、“犬仁”。

「元気な女の子ですよぉ～っ」

私は、その“第五十四代・犬仁”の一人娘として、生まれてきた。

「お名前はどうなさいます？」

「名？そんなもの必要ない」

「えっ？」

「この子はいずれ第五十五代・犬仁となる子だ。名など犬仁の一つで十分っ」

「はぁ……」

第五十四代・犬仁、私の父は、“犬仁”という役目に、強い誇りを持っている人だった。そのため私には、“犬仁”以外の名は付けられず、私は生まれ落ちたその時から、“犬仁”でしかなかった。

「お前は“犬孝様をお守りするためだけに、生まれてきたんだよ」
「いぬ、たか、さま……」

父は毎日のように、その言葉を繰り返した。幼い私にその意味など理解出来るはずもないのに、毎日毎日、刻みつけるように、繰り返した。

「犬孝様が追放っ！？」
「……？」

私が四歳の頃、その出来事は起こった。

「いっ犬孝様っ……！本当に犬国を出て行かれるおつもりですかっ……！？」
「……？」

父の大声が聞こえてきて、私はこっそりと家の玄関から顔を出した。

「ああ……」
「そっそんなっ！我らはっ……！我ら七犬はどうなるのですっ……！？」

「すまない、犬仁……」
「……っ」

覗き込んだその先で、父に申し訳なさそうな表情を向けていたのは、白髪にとても澄んだ青色の瞳をした、凛々しくて、精悍で、優しそうな人だった。
この人が“犬孝様”なのだと、一目見てすぐにわかった。

「いぬたかさま……」
「……？」

そっと名を呟いた私に気づき、“犬孝様”は私の方を振り返った。

「犬仁っ」
「犬仁？お前の子か？」
「えっ？あっはい」
「……。」

“犬孝様”は、ゆっくりと私の前へと歩み寄ってきて、私のすぐ目の前でしゃがみ込み、小さな私と視線の高さを揃えた。

「あの子より、少し上くらいか……」
「えっ……？」

優しく微笑んだ“犬孝様”の手が、私の頭を撫でる。

「いつか出会ったなら、力になってあげてくれ……」
「……？」

その言葉の真意を、私が知るのは、十年以上も後のこと。

そうして、“犬孝様”は、この犬国を出て行かれた。

「白槍っ……“白雨”っ！！」

それから月日は流れ、私は“犬仁”として成長していった。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！！」
「犬仁の勝ち」
「えええ～っ！？」
「残念だったな……腐れ小僧……」
「ひっどいぃ～っ！レイレイぃ～っ！」
「やったねっ！ヒトちゃんっ！」
「ああ」

八犬士の仲間たちとともに、日々、技を磨き、力をつけた。八犬士の中でも、一番の実力を身につけ、“犬仁”の名に恥じぬよう、努力を続けた。

そして十三の時、父から“犬仁”の名を受け継いだ。

「第五十五代・犬仁、馳せ参じました。八房様」
「うむ……」
八房様に呼ばれたのは、名を受け継いで間もなくのこと。
「犬仁……」
「はっ！」
「今日より、お主が八犬士の長として、他の六犬を率いよ」
「えっ……？」
それは、思いがけないお言葉であった。
「わっ私が、ですかっ……？」
「犬孝無き今、副長のお主が長となるのが定石であろう？期待しておるぞ」
「あっ……はいっ！」
私は大きく頷いた。
今にして思えば、それは犬孝様を失った八房様の苦肉の策。“期待している”という言葉が真実だったのかもわからない。だが、あの頃の私には、飛び上がりそうなほどに嬉しい言葉だった。憧れていた犬孝様の代わりとなれる。
「ちっ父上っ……！」

私は弾む胸を少し抑えるようにして、だが必死に家へと戻っていった。

「私っ……！私っ、八房様から八犬士の長になるよう、言われたんですっ……！」

嬉しさを隠せぬ声で、私は八房様から言われたことを、父に伝えた。

「犬孝様に代わって、他の六犬を率いよと言われたんですっ……！父上っ……！」

“誉めてもらえる”と、思っていた。

犬孝様が国を出て行かれ、明らかに衰弱していった父を、“喜ばせることが出来る”と信じていた。

「それが……どうした……？」

「えっ……？」

返って来たのは、それこそ、思いがけない言葉だった。

「どっどうって……」

「我々は、“犬仁”……」

戸惑う私に、衰弱した父は遠い目で言葉を発した。

「“犬孝様”のためだけに存在し……“犬孝様”のためだけに生きる者……」

父がゆっくりと私の方を向いた。

「“犬孝様”がおられぬなら……存在する必要はない……」

とても冷たい、父の瞳。

「生きている……必要などない……」

「……っ！」

何も言えなかった。ただ大きく目を見開き、しばらくの間、父を見ていた。

その半年後、父はその言葉を実行するかのように、病気で死んだ。

“犬仁”は、私だけとなった。

父に“存在する必要はない”と、“生きている必要はない”と言われた“犬仁”は、私だけとなった。

「ううっ……」

真新しい父の墓の前で、私は泣いた。

「ううっ……！」

泣きたいと思ったわけじゃない。涙が勝手にこぼれ落ちた。

「どうっ……してっ……」

“犬仁”以外に名はない。“犬仁”以外としては生きられない。

「どうしてっ……！」

“犬仁”が必要ないのなら、私は、どうすればいい？どうやって、存在していけばいい？どうやって、生きていけばいい？

父のように、死ねばいい…？

「ううっ……うっ……！」

誰か、教えて。

「ううっ……！！」

教えて。

「犬孝様っ……！！」

私はただ、救いを求めるかのように、その名を呼んだ。

何もわからないまま、少しも先が見えぬまま、時は過ぎていった。

「鬼人再発か……どうせなら四大国の一つでも滅びれば良いのだがな……」

「……。」

四大国を倒し犬国を再び大国にするという、八房様の考えには、正直、昔から賛同出来なかった。犬智と同じように、無駄な争いをすることは、私も嫌いだった。だが、逆らうことは出来なかった。八房様にまで見放されては、本当に存在する意味を失くしてしまうと、怯えていたから。

「ヒトちゃんっ……！」

「んっ？」

それは、突然の出来事。

「八房様がお呼びだよっ！ヨシ君と一緒に来いってっ」
「そうか。わかった」

私にとっては、奇跡のような、出来事だった。

「御伽砂漠に、一面、桜が……？」
「ああ……」

八房様に呼ばれ、私は犬義とともに八房様の部屋を訪れた。そこで八房様に聞かされたのは、御伽界一の広さを誇る広大な御伽砂漠に、一夜にして一面、桜が咲いたという話であった。

「誰かが間違って“花力”でも使ったのではないですかぁ？」
「八房様、それが何か……？」

その話が何を意味するのかをわかっていなかった私と犬義は、八房様に問いかけた。

「“花力”は、雀国が受け継ぎし力……」
『……っ』

“雀国”の名に、私と犬義はすぐさま表情を曇らせた。四大国の一つということもあったが、犬孝様が犬国を追放された経緯を、二

人とも知っていたからであった。

「じゃが、“花力”だけでは御伽砂漠一面に桜を咲かすことまでは出来まい。そして……」

八房様が鋭い表情を見せる。

「桜が咲く前、御伽砂漠から突き上げる白い光が確認されておる……」

「白い……光……？」

「八房様、それはもしや……」

「ああ……」

犬義の言葉に、八房様は大きく頷いた。

「犬孝と雀の娘との間に、子が存在しておるやも知れん……」

「……っ！」

その言葉が、私にどれほどの衝撃を与えたであろう。

犬孝様の子供がいる。犬孝様の血を受け継ぐ者がいる。

「犬孝……様っ……」

救いを求めて呟いていた名を、私が思わず口にする。

「そうじゃ。もし子がおったのなら、その子は新たな“犬孝”となる存在……」

「……っ」

“犬孝様”が存在している。

“犬仁”が存在するために、生きていくために必要な、“犬孝様”がいる。

「犬仁、犬義」

八房様が、真剣な眼差しを私たちに向けた。

「事の真相を調べ、新たな“犬孝”なる者が見つかったのなら、即刻、この犬国へ連れて参れっ」

『はっ！』

そして、私は犬義とともに調査に出た。

御伽砂漠を訪れ、雀国を訪れ、そして知った。

“朱実桜時”の存在を…。

龍国の砂浜。その人は一人座り込み、何やら思い悩んだような表情を見せていた。

「あの力は……一体っ……」

「……っ」

桜のような桃色の髪こそ違えど、その澄んだ青の瞳は、幼い頃一度だけ見た、“犬孝様”の瞳と同じであった。疑いもしなかった。

この者が、この方こそが、“犬孝様”だと、一瞬でそう思った。

「何者だっ……!?お前らっ……!」

「我々は、貴方の仲間です……」

戸惑うその人に、私はゆっくりと手を差し伸べる。

こうして、私は、“犬孝様”と出会った……――――――――

「何故だっ……」

「……っ？」

俯いたまま、震えた声を漏らす犬仁に、輝矢は少し眉をひそめた。

――――お前……はっ……？――――

ずっと、ずっと、探していた。

「やっと……」

――――犬仁は……優しいな……――――

たった一人の、君主。

「やっと……見つけたのにっ……」

震える肩、震える唇で、犬仁は言葉を続ける。

――――ここは……俺にとって一番居心地のいい場所……――――

――――でもっ……――――

悲しい顔。

“でも”の後に来る言葉を、思いつけないわけじゃない。

――――輝矢がっ……？――――

その名を呼んだ時の、生き返ったような瞳。

本当に望んでいる場所を、知らないわけじゃない。

「何故っ……皆っ……」

犬仁が震える声で、強く白槍を握り締める。

「何故っ……！！」

大きく顔を上げた犬仁が、白槍を振り上げる。

「私からっ……！犬孝様を奪うっ……！！？」

「……っ！」

今にも泣きだしそうな弱々しい表情を見せながら、勢いよく駆け

込んでくる犬仁に、輝矢は少し目を細めながら三日月を振り上げた。

――――パァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

犬仁が勢いよく振り下ろした白槍を、三日月で正面から受けとめる輝矢。

静寂の森に、金属音が一際強く響き渡った。

「奪う気などっ……毛頭ありませんっ……」

「……っ」

至近距離で向かい合った輝矢の口からこぼれ落ちた言葉に、犬仁が少し目を見開く。

「ハチが望むというのならっ、“犬孝”として生きることを止めなどしないっ……」

輝矢が三日月を握る手に、より一層の力を込める。

「でもっ……」

鋭い表情で、犬仁を見つめる輝矢。

「それは本当にっ……ハチが望んでいることなのですかっ……！？」

「……っ！！」

輝矢の強い問いかけに、犬仁が大きく目を開く。

「三日月っ！」

「クっ！ううっ……！！」

輝矢が強く三日月を押し切ると、犬仁が白槍ごと後方へ飛ばされる。

「クっ……！」

後方へと飛び、輝矢との距離を取りながら態勢を整える犬仁。

「はぁっ……！はぁっ……！はぁっ……！」

白槍を構え直しながら、犬仁が乱れた呼吸を落ち着かせようとする。その呼吸の乱れの原因は、決して負った傷だけではない。

――――それは本当にっ……ハチが望んだことなのですかっ……！？――――

望んでいないことくらい、わかっていた。それでも手放せなかった。

――――犬孝様っ……！！――――

“犬孝”を失えば、“犬仁”は存在する意味を失くすから。

「……っ！」

犬仁が、噛み締めた口に、拳を当てる。

「私はっ……」

犬仁が、もう一度強く、白槍を握り締める。

「私はぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっ！！！」

「……っ」

再び飛び出してくる犬仁に、輝矢が厳しい表情を見せ、三日月を振り上げた。

『……っ！！』

強くぶつかり合う三日月と白槍。

「うっ……！」

「……っ」

すでに傷だらけの二人には、互いの武器が衝突し合う衝撃でさえも、全身に痛みが走った。痛みに表情をしかめながらも、必死に武器を握り締める、輝矢と犬仁。

「私はっ……八犬士が六っ……“犬仁”っ……」

「……っ？」

小さな声を漏らす犬仁に、輝矢が少し眉をひそめる。

「“犬孝様”のためだけに存在しっ……“犬孝様”のためだけに生きる者っ……」

「……っ」

犬仁の言葉に、輝矢が少し目を細める。

「“犬孝様”がいなければっ……存在出来ないっ……！」

犬仁が、震える声を荒げる。

「生きてはいけないのだっっ！！！」

その叫びに反応するかのように、白槍が白く強い光を発する。

「“白刺”っ……！！」

「……っ！！」

白く輝く白槍の槍先が、三日月を振り切り、輝矢の顔面へと向けられた。

第３４章　輝矢ｖｓ犬仁　★４

――――ブシュっ……！！！――――

地面に降り積もった雪に、真っ赤な血が飛び散った。

「なっ……！」

驚いた様子で声を出したのは、犬仁であった。

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」

輝矢の顔の前に広げられた、輝矢の左手。犬仁の向けた槍先は、輝矢の左手を貫いたところで止まっていた。輝矢の左手から、ボタボタと溢れ出るように血が流れ落ちる。

「うっ……！」
「……っ」
「何っ……！？」

輝矢の左手から槍を抜こうとした犬仁であったが、三日月から手を離した輝矢の右手が、力強く白槍を握り締め、それを止めた。

「貴様っ……！」

大量の血を流しながらも、抜こうとした槍を止める輝矢に、犬仁は驚くというよりも、少し恐怖したような表情を見せた。

「手を放せっ……！このままでは左手が使いものにならなくなっ……！」

「犬孝だかっ……」

「……っ？」

乱れた呼吸の合間に落とされた輝矢の言葉に、犬仁が言葉を止めて、耳を傾ける。

「犬仁だか……知りませんけどっ……」

輝矢の声が、重く深く、響く。

「そんなっ……他人のためだけにしか存在出来ないような命ならっ……」

輝矢が顔を上げる。

「今すぐここで死になさいっ……！！」

「……っ！」

突き刺さるような、強くまっすぐな輝矢の瞳に、犬仁が少し圧倒されたように、体を後ろに反らせる。

「誰かを強く思うことをっ……誰かのために戦うことをっ……否定はしませんっ……」

輝矢は犬仁を見つめたまま、言葉を続ける。

「ですがっ……！」

輝矢が左手に突き刺さっている白槍を、右手で勢いよく抜く。

「“生きる”ことだけはっ……自分の為にするものですっ……！！」

「……っ！！」

槍を抜かれ、後退していく犬仁が、大きく目を見開く。

――――生きている……必要などない……――――

あの日から、ずっと彷徨っていた。

――――どうすればいい……？――――

自分は何のために存在するのか。自分は何のために生きるのか。

考えて考えて、答えが見つからない度に、苦しくて、悲しくて、

死んでしまいたかった。

――――それが私の……“犬仁”の役目ですから……――――

自分は“犬仁”でしかないから、自分の為に生きることなど、許されないと思っていた。

――――貴女は……“犬孝様”に固執し過ぎている……――――

「……っ」

犬義の言葉の通りだったのかも知れない。

――――“生きる”ことだけはっ……自分の為にするものですっ……！！――――

「自分の……為っ……」

輝矢の放った言葉を、犬仁が戸惑いの表情で繰り返す。

「犬孝様っ……」

いつも救いを求めるように呼んだ名を、犬仁が呟いた。

――――犬仁は……優しいな……――――

――――ありがとう……――――

「……っ」

前までは、答えも出ずに、ただ悲しくなるだけだったというのに、今は、桜時の笑顔が過ぎる。

「犬孝様っ……」

きっと“犬孝”でなくても、優しい人。

きっと“犬仁”でなくても、大切に思う。

「……っ！」

犬仁が意を決したような表情を見せ、白槍を握る手に力を込めた。

「私は……自分の為にもっ……あの方を失うわけにはいかないっ……」

「……。」

低い声で言葉を落とす犬仁を、輝矢が真剣な表情でまっすぐに見つめる。

「だから私はっ……！貴様を倒すっ……！！」

「……っ」

そう叫んで白槍を構える犬仁に、輝矢は瞳を鋭くする。

「私も……ハチを譲るわけにはいきませんっ……」

輝矢もゆっくりと三日月を構える。

『……っ』

互いに強く見つめ合う、輝矢と犬仁。

「これが……私の最後の技っ……」

犬仁が槍を縦に長く構え、その槍先を天へと向ける。

「喰らえっ……！！」

白槍が強い発光を放つと、その光が槍先に集中し、そこから勢いよく天へと放たれた。

「“白槍雨”っっ……！！」

犬仁の放った光が上空で広がり、天から、槍のように先の尖った無数の白雨が、地上にいる輝矢めがけて降り落ちていく。

「……っ」

迫り来る槍雨に、輝矢は少し目を細め、三日月を振り上げた。

「“月器・望月”っ……」

輝矢の振り上げた三日月が、徐々に満ちてゆき、輝矢を包み込むようにして、黄金色の球体を作りあげる。

「……。」

望月に包まれた輝矢が、ゆっくりと右手を挙げた。

「……“水漣”っ！」

望月から溢れ出るように舞い上がる、まるで滝のような水の塊。

昇る滝は、降り落ちてくる槍雨を迎え討った。

――――パァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

「……っ！！」

犬仁の目の前で、犬仁の最後の技は、舞い昇る滝に掻き消されていく。

「“月器・三日月”っ……」

「……っ」

最後の技を出し切り、最早、白槍を振り上げる力すらも残っていない犬仁に対し、輝矢は望月を三日月へと変えた。

「“水月”っ……！」

三日月から放たれる、無数の水の刃。

「ああ……」

向かってくる水の刃を見つめながら、犬仁はそっと目を細めた。

――――いつか出会ったなら……力になってやってくれ……――――

「……っ」

今になって思い出される、かつての犬孝の言葉に、犬仁はそっと目を伏せた。

――――バァァァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

「ううあああぁぁっ……！！」

犬仁が輝矢の水月を直撃し、全身から激しく血を流して、後方へと吹き飛ばされていく。

「うぅっ……ぁっ……」

白槍から離れた右手を、どこへともなく伸ばす犬仁。

「犬孝っ……様っ……」

求めるように伸ばした手が、ゆっくりと落ちていく。

「……っ」

雪に埋もれるように倒れ込んだ犬仁は、そのまま力なく目を閉じた。

「……“月器”」

輝矢が犬仁を見つめながら、三日月を元のピアスへと戻した。

「アナタの生き様……確かに見させていただきましたよ……」

そう呟き、輝矢が倒れた犬仁に背を向ける。

「犬仁……」

輝矢は最後に犬仁の名を呼び、その場から歩き去っていった。

――――ワオオォォォォォォ～～～ンっ！――――

「……っ」

里見の屋敷から仲間たちの無事を祈っていた犬智の耳に届く、犬の遠吠え。その遠吠えを聞き、犬智が表情を変える。

「遠吠えっ……」

犬の遠吠えは、犬国では“勝負の負け”を意味していた。

「みんなが……負けた……」

犬智が、茫然と呟く。

「ヒトちゃんっ……」

犬智は力なく、その場に座り込んだ。

「んっ……」

犬仁は、ゆっくりとその大きな紫色の瞳を開いた。

「私は……」

まだ力強さの戻らぬ瞳で、犬仁が軽く挙げた自分の右手を見つめた。

「生きて……いるのか……？」

犬仁が、自分の右手に不思議そうに問いかける。

「まぁ死んではないみたいやなぁ～っ」

「……っ！」

返ってくる声に、犬仁は驚いたように目を開き、勢いよく振り向いた。

「貴様っ……」

「よっ！」

倒れている犬仁のすぐ横にしゃがみ込んでいるのは、明るい笑顔を見せた門貴であった。

「貴様は、あの時……の……」

――――何もんやぁっ！？お前らぁっ！――――

犬仁の脳裏に、桜時を連れ帰った時の情景がよみがえる。

「そうか……」

門貴を見つめ、犬仁はそっと目を細めた。

「犬義も……負けたか……」

犬仁が視線を門貴から空へと移し、そっと呟いた。犬義が、門貴との再戦を心待ちにしていたことは、犬仁も見てとれた。ここに犬義ではなく門貴がいるということは、犬義は負けたのだ。

「貴様……何故、ここにいるっ……」

ゆっくりと起き上がりながら、犬仁が門貴に問いかけた。

「別にぃ～？輝矢ん、追いかけてきたら、アンタが倒れとってさぁ～」

「そうか……んっ……？」

起き上がった犬仁が、自分の両腕に突き刺さっている、三枚の黄色い羽根に気づいた。

「何だ？これは……」

「ああ～っ！ユッキーの癒羽やなぁ～っ！」

「ゆば……？」

犬仁が表情をしかめ、門貴に問いかけた。

「どないな傷も治してくれるねんでぇ～っ！すごいやろっ？」

「どんな……傷もっ……？」

戸惑うように門貴の言葉を繰り返しながら、犬仁がゆっくりと自分の体を見る。確かに負ったはずの傷のほとんどが、もうすでに癒え始めていた。あれほどの傷だ。放置しておけば、犬仁は確実に、あのまま死んでいただろう。

「貴様がやったのか……？」

「いぃ～やぁ～っ？たぶん、輝矢んやろぉ～っ」

「……っ」

笑顔で答える門貴に、犬仁が驚いたような表情を見せた。

「ユッキーが折角、多めにって三枚も渡したのに、ぜぇ～んぶアンタに突き刺していってもたみたいやなっ」

「……。」

穏やかな笑みを見せる門貴に、犬仁はそっと俯いた。

――――手を放せっ……！このままでは左手が使い物にならなくなっ……！――――

「自分とて……ボロボロのくせに……」

犬仁が俯いたまま、そっと呟く。

「余計なことをっ……」

「……。」

そうは言いながらも、何か込み上げるものを堪えるような表情を見せている犬仁を、門貴は笑顔を浮かべたまま、そっと見つめた。

「森の戦いの音が止んだ……」

犬仁が耳を澄ませながら言う。

「だが、八犬の誰もここには来ないところを見ると……」

顔を上げた犬仁が、いつの間にか雪の止んだ空を見る。

「我々は……負けたようだな……」

“負け”を認めた犬仁のその表情は、悔しさに歪むこともなく、

とても落ち着いていた。踏ん切りがついたような、そんな表情であった。

「早く行け。犬孝さっ……いやっ……」

いつも呼んでいたその名を止め、少し首を横に振る犬仁。

「……貴様たちの仲間が待っている」

「……。」

言い直した犬仁を、門貴は少し真剣な表情で見つめていた。

「あの方はどうやら、我々の仲間ではなく……」

少し悲しげな表情を見せる犬仁。

「貴様たちの……仲間だったようだ……」

初めからわかっていたことだったというのに、ずっと前から気付いていたことだったというのに、それを認めることに、長い時間をかけてしまった。

「あの方のことを……頼む……」

「……っ」

そう言って穏やかに微笑んだ犬仁に、門貴はそっと目を細めた。

「こっちの仲間やから、そっちの仲間にはなれへんて……んなことはないやろっ」
「えっ……？」
立ち上がりながら呟いた門貴を、犬仁が戸惑うように見上げる。
「アンタ、ほんまに桜時のこと、大切に思てるみたいやしっ」
見上げる犬仁に、大きく笑顔を向ける門貴。
「“どっちも仲間”って、道もあるっ」
「……っ！」
門貴の笑顔に、犬仁は大きく目を見開いた。
「きっとアイツもそう言うわっ！」
「……っ」
思わず両手で口を押さえ、顔を下に向ける犬仁。
――――四大国を倒し、犬国に再び“大国”の称号をっ……！――――
――
――――我々の長は、犬孝様以外にはあり得ないっ……！――――

その大きな笑顔が、今まで自分が、いかに狭い世界で生きてきたのかを、思い知らせるようであった。

「まったくっ……」

犬仁が少し震えた声を漏らした。

――――優しいな……犬仁は……――――

――――“生きる”ことだけはっ……自分の為にするものですっ……！！――――

欲しかった言葉ばかりをくれる。犬仁がずっと悩んでいた道を、いとも簡単に開いていく。

「何なのだっ……貴様たちはっ……」

「おえぇ～？」

囁かれた犬仁の言葉に首をかしげ、大きく腰を曲げて犬仁の顔を覗き込む門貴。

「あっ……」

門貴が覗き込んだそこには、今にも泣き出しそうな、でも嬉しそうな笑みを浮かべた、犬仁の姿。

「笑てる……」

「んなっ……！！」

門貴の声に犬仁が慌てて顔を上げ、その笑顔を勢いよくしかめっ面に変えた。

「わっ笑ってなどいないっ……！」

「いやぁ～めっちゃ笑ってたでぇ？今ぁ」

「私が笑うかっ！！」

門貴に必死に言い返す犬仁。

「わっ……！私は犬仁だっ！笑うことなどっ……！」

「んなムキにならんでもええやぁ～ん」

思わず立ち上がってまで否定する犬仁に、宥めるように陽気な笑顔を向ける門貴。

「女の子は笑てた方が断然、可愛ええぇでっ」

「んなっ……！！」

門貴の笑顔に、犬仁の顔が真っ赤に染まる。

「なっ……！何なのだっ……！！貴様はっ……！！」
「ん～っ？俺、門貴っ！あっ、呼び捨てでええよぉ～犬仁ちゃんっ！」
「ちゃっ……！」

“ちゃん”付けされた自分の名に、さらに顔を赤くする犬仁。

「何なのだぁぁぁぁぁっ！！一体ぃぃぃっ！！！」

戦いも終わり、静けさの戻った安房の森に、犬仁の叫び声が響き渡った。

第３４章　輝矢ｖｓ犬仁　★４（後書き）

３４章終わりです。
ここまでお付き合いいただき、どうもありがとうございました。

第３５章　国の在り処　☆１

――――ワオォォォォォォ～～～ンっ！――――

「……っ」

犬国・里見の屋敷。桜時ｖｓ八房。安房の森から聞こえてくる犬の遠吠えに、右手に刀を持った八房の表情がゆっくりと曇る。

「負けたか……」

犬の遠吠えは“勝負の負け”を意味する。それは安房の森で戦っていた六犬の敗北を、屋敷にいる八房にまで伝えた。

「やはり、七犬では力不足……」

八房がその瞳を鋭くし、前方を見る。

「やはり犬を大国にするには、お前の力が必要じゃ……」

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」

八房の見つめるその先には、村雨丸を構え、少し息を乱しながらも、まっすぐな瞳を見せている桜時の姿があった。八房の言葉に、桜時が呼吸を整えながら、少し表情を曇らせる。

「お前の……里見犬孝の、“命力”がな……」
「……っ」
何度も繰り返されるその言葉に、桜時が少し眉をひそめる。
「俺はっ……里見犬孝にはならないっ……！」
桜時が鋭い表情となってそう叫び、桜時が村雨丸を構える。
「……。」
村雨丸を構えた桜時を、細目で見つめながら、ゆっくりと持っている刀を持ち上げる八房。
「“瞬花っ……終刀”っ……！！」
桜時が村雨丸を振り切ると、八房の元へと桃色の一閃が走る。
「……っ」
向かってくる桃色の一閃を見つめながら、八房は避ける素振りも見せず、ゆっくりとした動作で右手の刀を軽く振るった。
「脆弱な花よ……」

――――パァァァァァァァンっ！！――――

「うっ……！！」

八房が軽く刀を振るうと、桜時の技がいとも簡単に弾き返され、その桃色の一閃がさらに勢いを増して桜時の元へと戻ってくる。

「しゅっ……“瞬花”っ……！！」

戻って来る自らの技に、桃色に輝く左手を向ける桜時。

「……っ！！」

しかし一閃は、桜の花びらとなることなく、桜時の元へと迫り来る。

「瞬花がっ……効かないっ……！？」

戸惑う桜時に、迫る一閃。

「うわあああああああああああっっっ！！！」

自らの技を受けた桜時が、八房の部屋の障子を突き破り、里見の

屋敷の庭へと吹き飛ばされた。

「うぐっ……！」

雪の積もった庭へと倒れ込む桜時。

「痛つつつつつつっ……」

桜時がゆっくりと起き上がる。

「んだよっ……じじいのクセに桃タロー並みに強えぇじゃねぇーかっ……」

どこか愚痴るように言いながら、桜時が少し引きつった表情を見せる。

「“瞬花”効かねぇーしっ……」

「大口を叩いておったわりには、情けない姿じゃのう……」

「……っ」

突き破られた障子の向こうから、廊下へと姿を現す八房に、桜時が表情を引き締める。

「その程度の力では、わしは止められぬぞ……？」

「クっ……！」

桜時が強く村雨丸を握り締め、立ち上がる。

「俺だってなっ……」

桜時が村雨丸を構える。

「無駄に毎日っ……桃タローにいびられて来たわけじゃねぇーんだよっ！！」

高々と振り上げた村雨丸を、桜時が地面へと勢いよく振り下ろす。

「“伝光っ……刹花”っ……！！」

桃色に光る村雨丸を、地面へと突き刺す桜時。

――――パァァァァァァァーーーンっっ！！――――

桜時が地面に村雨丸を突き刺した途端、庭にある雪で覆われた木が、一本として残ることなく、すべて一気に満開の桜の木へと姿を変えた。白い地面に、桃色の花びらが舞い落ちる。

「桜か……」

桜で溢れる庭を、細い目で見つめる八房。

「見事なものだな。この国で見るのは初めてだ……」

八房はどこか感慨深い表情で呟いた。

「いくらでも咲かせてやるさっ……」

桜時が地面に突き刺していた村雨丸を抜き、その場でゆっくりと身構える。

「俺のこのっ……“花力”でっ……！」

「……っ」

桜時の口から“花力”という言葉が出ると、八房の表情はすぐさま曇った。

「“柔桜っ……無塵”っっ……！！」

桜時が村雨まるを振り下ろすと、咲き乱れた桜から、無数の桃色の花びらが放たれ、空中を美しく舞いながら八房へと接近していく。

「そうか……」

表情を曇らせたままの八房は、ゆっくりとした動作で、持っている刀を構えた。

「ならば、敗北するお前への手向けの花としようかのぉ……」

「……っ」

鋭い瞳を見せる八房に、桜時が少し眉をひそめる。

「“白首（はくしゅ）……割砕（かっさい）っ”……」

八房の刀から放たれる、白い一太刀。

――――パァァァァァァァァァァーーーーンっっ！！！――――

「……っ！！」

その太刀は、目にも留らぬ速さで地面と平行に走り、八房へと迫っていた無数の桃色の花びらを、一枚残らず真っ二つに斬り裂いた。

「なっ……」

桜時が大きく目を見開いたまま、思わずその場で動きを止める。

「そっそんなっ……！」

桜を真っ二つに斬り裂いた白太刀が、まっすぐに桜時へと向かってくる。

「うっ……！！」

――――バァァァァァァァァァァーーーーンっっ！！！――
――――

「うわあああああああああああああああああああっっっ！！！」

桜時に村雨丸を構える時間さえも与えずに飛んできた白の太刀は、桜時を直撃した。腹部を斬り裂かれ、血を飛ばした桜時が、後方へと吹き飛ばされ、咲いたばかりの一本の桜の木へと背中を叩きつけられる。

「ううっ……！！」

背中に走る痛みに、顔をしかめる桜時。

「あっ……！」

しかし、顔を上げた桜時の瞳に、もっと衝撃的な光景が飛び込んできた。

「そんなっ……」

桜時が今、咲かせたばかりの桜が、桜時のすぐ上で枯れ果てていったのであった。

「俺のっ……桜がっ……」

茫然とした表情で呟く桜時。

「言わなかったか……？我らの力は“創力”……」

「……っ」

聞こえてくる八房の声に、桜時が顔を前方へと向ける。

「短期間に大量の空気を当て、植物を風化させることも可能……」

「クっ……」

桜時は唇を噛み締めた。

“柔桜無塵”は、桜時が太狼との戦いの中で見出だした、今の桜時が使える最も強力な技であった。しかし八房はそれを、軽く、そして圧倒的に上回った。桜時の力など、寄せ付けもせずに、打ち砕いた。そして桜さえも、八房を前に咲きはしなかった。

「こんなっ……ことがっ……」

あまりの実力差に、桜時が少し茫然自失の状態となる。

「やはりその程度か……？」

「……っ」

再び八房から挑発のような声をかけられ、桜時の表情が険しくなる。

「犬孝よ……」

「……。」

“犬孝ではない”と否定する言葉が出て来なかった。目の前にいるのは、桜時より五十は上であろう老人であるというのに、まったく勝てる気がしなかった。

「今まで使った力はすべて“花力”……」

「えっ……？」

八房の言葉に、桜時が戸惑うように声を出す。

「まだ自身で“命力”はコントロール出来ないようだな……」

「……。」

少し眉をひそめる桜時。桜時が“命力”を使ったという記憶があるのは、サソリの毒から輝矢を救ったあの一度きり。あの時は無意識のうちにやったことであったし、今の桜時には、どう“命力”を操ればいいのかなど、わかるはずもなかった。

「“犬孝”となれば、“命力”を自在に操れるようになる……」

気難しげな表情を見せている桜時を、まっすぐに見つめる八房。

「“犬孝”となれば、お前はもっと強くなれるぞ……？」

「……っ」

その言葉に、桜時の心は少し揺れ動いた。

――――大丈夫だよ……輝矢ちゃん……――――

強さが欲しい。誰よりも強い英雄を、超えるほどの強さが欲しい。

――――大丈夫……ですから……――――

今度は、この手で支えられるように。

「……。」

考え込むような表情を見せていた桜時が、ゆっくりとその瞳を閉じた。

――――強くなりましたね……ハチ……――――

「……っ」

思い出される言葉に、桜時はすぐさま目を開いた。

「……強くはなる」

「……？」

呟かれた桜時の声に、八房が少し眉をひそめる。

「けどそれは……“里見犬孝”としてじゃないっ……」

ゆっくりと顔を上げ、桜時が強い瞳で八房を見つめる。

「“朱実桜時”としてだっ……！！」

「……っ」

決意を持って放たれた桜時の言葉に、八房の表情は一層に険しくなった。

「俺はっ……朱実桜時だっ……！！」

桜時が誇るように、胸を張って、自分の名を口にする。

「朱実、朱実と……」

静かに桜時の放った名を繰り返す八房。

「煩わしいっ……！！」

「……っ！」

八房が刀を振るうと、先程の白色の一太刀が、桜時へ向けて勢いよく放たれた。

「うっ……！」

――――バァァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

「うわあああああああああああああああっっっ！！！」

飛んできた白の太刀は、まだ起き上がれてもいない桜時を容赦なく直撃した。全身を斬り裂かれ、血を飛ばした桜時が、枯れた木の幹から後方へと吹き飛ばされ、庭の塀へと叩きつけられる。

「ううっ……！」

背中を打ちつけ、その衝撃に表情を歪める桜時。

「クっ……！痛ってっ……」

塀にもたれたまま、苦しげな表情の桜時が斬られた体を押さえる。

「何故わからぬ……」

「……っ？」

聞こえてくる問いかけに、桜時がゆっくりと顔を上げる。

「奴らがこの国に何をしたのか……」

桜時が顔を上げると、そこには、廊下から庭へと降り立ち、何とも冷たい表情を見せた八房の姿があった。

「奴らがどれほどに罪深き者たちかっ……」

その瞳に映るのは、深い憎しみ。

「何故、わからぬっ……！！」

「……っ」

八房に責めるように強く問いかけられ、桜時が眉間に皺を寄せる。

「わかんねぇーのはっ……こっちだよっ……」

「何っ……？」

囁かれた桜時の言葉に、眉をひそめる八房。

「大国を堕とされたって、それはもう何百年も昔の話だろっ……？」

腹部の傷を押さえながら、桜時が塀を支えにしてゆっくりと立ち上がる。

「四大国を責めたってっ……！その時代の人間なんて、もう誰も生きてやしないっ……！！」

「……っ」

叫ぶ桜時に、八房が表情をしかめる。

「そんな昔っ、じじいのあんただって、さすがに生きてなかったんだろっ！！？」

必死の訴えを続ける桜時。

「ならっ！今の四大国の連中にもっ、あんたにもっ！関係ねぇーことじゃねぇーかっっ！！」

「……っ！」

桜時のその言葉に、八房は大きく目を見開いた。

「関係ないだとっ……？」

「……っ」

肩を大きく震わせ、どこか怒りを堪えるような声を漏らす八房に、桜時は少し眉をひそめ、言葉を止めた。

「関係ないものかっ……！！」

「……っ！」

強く叫ぶ八房に、桜時が少し怯えるように肩を揺らした。

「何百年も前の出来事っ……それがどんなに、この国を狂わせたかっ……」

八房が挙げた両手を見つめ、震えた声で呟く。

「どんなにっ……このわしを狂わせたかっ……」

「えっ……？」

桜時が戸惑うように声を漏らす。

「お前にっ……わかるのかっ……！！？」

八房は責めるように、桜時を見つめた。

「じじいっ……」

そんな八房に、桜時は戸惑いの表情を向けることしか出来ない。

「わしはっ……四大国を許しはしないっ……！」

八房が血が流れるほどまでに強く、拳を握り締める。

「決してっ……！許すことは出来ないっ……！！」

必死に叫ぶ八房の瞳からは、深い憎しみとほんの一握りの悲しみが感じられた。

第３５章　国の在り処　☆２

――――――――五十二年前。犬国。

「八房っ！」

「……っ？」

大きな名を呼ぶ声に、庭先に立っていた着物姿に腰に刀を差した青年が、ゆっくりと振り返った。青年は紺色の髪にキレイな緑色の瞳をした、誠実そうな顔をしていた。

「八房っ！！」

「うっ……！」

振り返った青年の顔面に、勢いよく飛んでくる雪玉。

「どわあああああああああっっっ！！！」

雪玉が見事に青年の顔面に炸裂し、青年は勢いよく後方へと倒れ込んだ。

「ううっ……痛ててててっ……」

「情けないですねぇっ。それでも八犬士の長ですかっ？」

「……っ」

倒れた青年が聞こえてくる声に少し顔をしかめながら、ゆっくりと起き上がる。

「何度も申しておりましょう……？」

起き上がった青年が、少し困ったような表情で顔を上げる。

「私のことは“犬孝”とお呼び下さいと……」

青年が見上げる、一人の人影。

「伏姫（ふせ）……」

「うふふっ」

屋敷の縁側を降り、庭先に座り込んでいる青年の元へとやって来るのは、白く長い髪に澄んだ青色の瞳の、まだ幼さの残る美しい少女であった。少女はどこか楽しげに微笑み、青年のすぐ横へと立つ。

「其方の名は八房なのでしょう？では八房で構わぬではありませんかっ」

里見家当主・里見義実の娘・伏。御年・十六歳。

「いえっ、私はあくまで“第五十三代・犬孝”でありましてっ……」

里見に仕える八犬士の長・第五十三代・犬孝。本名・八房。御年・十九歳。

「つべこべ言っていると、雪だるまの中に埋めますよっ？」

「八房でまったく構いません……」

どこか冷たく微笑む少女に、青年は少しげっそりした表情で呟く。

二人は雪深き犬国に生きる、姫とその従者であった。

「はぁっ……」

着物についた雪を払いながら、八房がゆっくりと立ち上がる。

「それより聞いて下さいっ！八房っ！」

「……？」

嬉しそうな声をあげた伏に、八房は少し戸惑うように振り向く。

「父上が、正式に貴方を里見の跡取りとして迎えて良いと言って下さいましたっ」

「えっ……？」

八房が戸惑うように声を漏らす。

「義実様が、ですか……？」

「はいっ！」

聞き返した八房に、伏が嬉しそうな笑顔で大きく頷く。

「……っ」

「何です？その顔はぁ」

気難しげな表情を見せた八房に、伏が少し顔をしかめる。

「嬉しくないのですかぁ？」

「いっいえっ！そんなことはっ！あっ！いやっ……！」

強く否定した八房が、少し頬を赤く染めて俯いた後、またもや気難しげな表情へと戻る。

「しかしっ、私は八犬士……」

八房が少し暗い表情で呟く。

「国に仕える身でありながら、その国の跡取りとなるなどっ……」

「ここはすでに、国ではありません」

「えっ……？」

八房が戸惑った表情で顔を上げると、伏はどこか遠い目で雪の降る空を見つめていた。

「称号も民もない国で、身分を重んじる必要など、どこにありましょう……」
「……っ」
悲しげな表情を見せる伏に、八房はそっと目を細めた。
「伏姫……」
確かに、すでに犬国は国ではなかった。
四大国でなくなってから数百年。民は八犬士一族のごくわずかだけとなり、広大であった領土もほとんどが廃れた。里見家は犬国の国主として存在し続けてはいたが、それも最早、名ばかりの国主となっていた。
「ふっ伏姫っ……！」
「……っ？」
呼ばれる名に、伏がゆっくりと振り返る。
「わっ我々が必ず四大国を倒しっ、犬を再び大国にしてみせますっ！」
「……。」
決意を持ってそう話す八房に、伏は少し目を細めた。
「それは、遠回しに私と結婚したくないと申しておるのですか？」

「へっ？ああっ！いえっ！そんなことはまったくっ……！！ああっ！いやっ！えっとっ……！」

伏の言葉を強く否定した八房が、否定した後に、また顔を赤くして俯く。

「うふふっ」

「……っ？」

伏の楽しげな笑い声が聞こえてきて、八房は顔を上げた。

「八房っ……」

伏は八房の言葉を遮り、八房の名を呼んだ。

「国とは、大国とは……何なのでしょう……？」

「えっ……？」

伏は先程と同じ悲しげな表情で、そっと八房に問いかけた。

「……。」

その伏の問いかけに、八房は答えることが出来なかった。

その後、八房と伏は婚約し、八房は里見家を継いで、その名を“里見犬孝”と改めた。

そして……

「母上っ！」
「……？」

数年後、二人の間に、一人の男の子が生まれた。後に“犬孝”となるその少年は、父と母の愛情を受け、里見家ですくすくと育った。

「どうしました？」
「こいつっ！」

幼い犬孝が伏へと差し出したのは、寒さに凍え、傷だらけで今にも死んでしまいそうなほどに弱った、一羽の鳥であった。

「まぁ、こんな雪国に鳥が……」

伏が犬孝からその鳥を受け取る。

「群れからはぐれ、迷い込んできたのでしょうね」
「治せる？」
「ええっ」

不安げに問いかけた犬孝に、伏は優しい笑顔で頷いた。

「……っ」

伏が左手のひらに乗せた鳥に、覆いかぶせるように右手を当てる。

「“甦花（そか）”っ……」

伏の右手から白い光が放たれると、放たれた光が徐々にその鳥を包み込んでいき、見る見るうちにその傷を治していった。死にかけていた鳥に生気が戻る。

「はい」

「うわぁ～っ！！」

再び元気良く羽根を広げた鳥を渡され、犬孝は大きな目を輝かせた。

「すっげぇっ！母上っ！ありがとうっ！」

「いいえっ」

笑顔を見せる犬孝に、伏も穏やかに微笑む。

「早速、放してくるよっ！」

「貴方は本当に、鳥が好きですねぇ」

「うんっ！」

感心したように言った伏に、犬孝は大きく頷いた。

「僕っ！いつか絶対、“鳥の国”に行くんだっ！」

「そうですか」

「へへっ！」

心から楽しそうに微笑むと、犬孝は鳥を放すべく、どこかへと走りさって行ってしまった。

「鳥の国、ですか……」
「伏っ！」
「……？」

今度は違う声に呼ばれ、伏が後方を振り返った。

「八房」

そこへやって来たのは、犬国主、そして里見家の当主となった八房であった。

「あやつを見なかったか？あやつ、また修行を抜け出しおってなっ」
「少し厳し過ぎるのではありませんか？」

竹刀片手の八房に、伏が少し眉をひそめる。

「あの子に怪我でもさせたら、許しませんよ？」
「ううっ……！きっ気を付けるっ……」

伏に冷たく見つめられ、思わず引きつった表情を見せる八房。国主となった今も、姫と家来であった時の名残りか、伏には頭が上がらずにいた。

「しっしかしなぁ、刀の腕くらいは鍛えねばっ」

八房が不意に真剣な表情を見せる。

「あの子には、“命力”が受け継がれていないのだから」

「……っ」

その八房の言葉に、伏はすぐさま表情を曇らせた。

「まったく残念なことだ。お前は歴代の里見一族の中でも、最も強い“命力”の持ち主だというのに」

「……。」

本当に残念そうな表情を見せている八房の言葉を、伏は曇った表情のまま静かに聞いた。

「あの子はいずれ七犬を率いて、四大国を倒す者、“命力”がない分、少しでもその他の力をっ……」

「八房」

「んっ？」

呼ばれ慣れたその声に、八房が言葉を止めて振り向く。

「何だ？伏」

「“命力”は……」

いつかと同じ遠い瞳で、伏が呟く。

「私のこの力は、何のためにあるのでしょう……？」
「えっ……？」
八房が戸惑うように、首をかしげる。
「そんなの決まっているだろうっ？四大国を倒し、犬国をまた“大国”にするためだっ」
「……っ」
すぐさま答えた八房に、伏はそっと俯いた。
「そうですね……」
流れゆく時に、少しずつ何かが狂い始めていたが、そのことに、まだ誰も気付いていなかった。
さらに一年の時が流れた頃、伏は病に倒れ、寝たきりの状態となってしまった。あらゆる治療を試みたが、回復の兆しはなく、余命幾ばくとされた。
「伏っ……」
八房は、寝たきりの伏の横から片時も動かず、ずっとその白く細

い手を握っていた。

「伏……頼むっ」

伏の手を握り締め、八房は懇願した。

「“命力”をっ……使ってくれっ……！」

「……っ」

こぼれ落ちた八房の願いに、横になったままの伏は、あまり動かないその青白い顔で、少しだけその表情を曇らせた。

「お前の“命力”ならばっ、お前の病を治すことも可能なはずっ……！」

八房は震える声で、必死に願いを続けた。

「頼むっ！伏っ……！」

八房がさらに強く伏の手を握り締める。

「私を置いて逝かないでくれっ……！！」

「八房……」

いつも呼ばれ慣れていたその明るい声ではなく、弱々しく、今にも絶えそうな声で、伏は八房の名を呼んだ。

「私は……何のために生きているのでしょう……？」

「……っ」

伏の問いかけに、八房がそっと顔を上げた。

「私は……何のために……生きてきたのでしょう……？」

「伏っ……？」

八房が見つめる中、伏は天井を見上げ、弱々しい声で言葉を続けた。

「今なら……少しわかる気がするのです……」

「えっ……？」

「この国が、国で失くならねばならなかった理由が……」

「……っ！」

伏の思いがけない言葉に、八房は大きく目を見開いた。

「なっ何をっ……！」

「命は……時の流れの中で生まれ出り（いづ）……時の流れの中で……いつか必ず朽ちるもの……」

「……っ」

必死に否定しようとした八房であったが、伏の言葉がそれを遮った。

「それを操る力など……人には必要ありません……」

伏が悲しい表情で、少しだけ首を横に振る。

「この力は……“命力”は……この世界には必要ない……」
「伏っ……」
ゆっくりと視線を八房へと向ける伏を、八房もまっすぐに見つめ返した。
「だからきっと……ここは……国ではなくなったのです……」
「……っ」
その言葉に、八房は強く唇を噛み締めた。
「私が死ねば……“命力”はなくなる……」
八房が握り締めている手とは逆の手を、伏がゆっくりと八房の方へ伸ばす。
「そうすれば……きっとここも……また国に……」
「……っ」
八房の頬に手を当て、力なく微笑む伏。強く唇を噛み締めた八房の瞳から、涙がこぼれ落ちた。
「そんなことはないっ！！私がっ……！私が必ずっ！お前が生きたままでもっ……！ここを“大国”にしてみせるっ！！」
「八房っ……」
微笑んだ伏が、八房のこぼれ落ちた涙を拭った。

「だからっ……だから生きろっ！！伏っ……！！」
「……っ」

もう一度願った八房に、伏はゆっくりと首を横に振った。

「人の命を永らえさせていいのは……神だけです……」
「お前が神になればいいっ……！！」
「……無茶な人っ……」

少し可笑しそうに笑った伏の瞳から、一筋の涙が落ちた。

「八房……もしこの後、私と同じように“命力”を持って生まれてきた子がいたならば……」

伏が八房に、まっすぐな瞳を向ける。

「どうか導いてあげて下さい……」

願うように呟く伏。

「その子が……“命力”を持って生まれたことを……悔いないように……」
「伏っ……」

その願いが“自分のようにはさせないで”と言っているようで、八房は思わず唇を噛み締めた。

「八房……八房っ……」

伏の冷たい手が、八房の頬を撫でる。

「私の……最愛の人っ……」

涙が溢れる中、伏が必死に笑う。

「貴方に逢えて……良かっ……」

その青い瞳が閉じていき、八房の頬に触れていた手が落ちていく。

「……伏っ……？」

動かなくなった伏を、八房が静かに呼ぶ。

「伏っ……？」

閉じた瞳は、もう開かない。

握り締めたその手は、もう動かない。

「伏ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっっっ！！！！！」

こうして、命の力を持つ姫は、自分の命を救うことなく、死んだ

……――――――――――

第３５章　国の在り処　☆３

「奴らがっ……奴らがいなければっ……」

思い出される過去に、強く唇を噛み締める八房。

――――私が死ねば……“命力”はなくなる……――――

「大国の称号さえっ……失わなければっ……」

――――そうすれば……きっとここも……また国に……――――

「何も失くさずに済んだのだっ……！！」

「……っ！」

声を荒げて叫ぶ八房が、桜時へと刀を振るう。

「“白首っ……割砕”っ……！！」

「クっ……！」

飛んでくる白太刀に、村雨丸を構える桜時。

――――バァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

「ううぅっ……！！」

桜時は村雨丸を縦に構え、真正面から八房の白太刀を受けとめた。しかしそのあまりの力強さに、またもや塀へと叩きつけられ、傷ついた全身から再び血が流れ落ちた。

「はぁっ……！はぁっ……！はぁっ……！」

塀へともたれかかるようにして座り込んだ桜時が、苦しげに呼吸をする。

「お前はっ……“里見犬孝”として四大国を倒し、この国を“大国”へとせねばならんっ……」

少し落ち着きはしたが、まだ荒いでいる声で、八房は言葉を続ける。

――――この力は……“命力”は……この世界には必要ない……――――

「……っ！」

八房が強く拳を握り締める。

「“命力”がっ……この国にっ……世界に必要であることを示すためにっ……！！」

「……っ」

吐き出される言葉に、桜時が少し唇を噛む。

「……何があったのかは、知らねぇーけどっ……」

桜時が小さく声を漏らす。

「こんなのやっぱっ……間違ってるよっ……」

「何っ……？」

桜時の言葉に、眉をひそめる八房。

「あんたが失ったものがっ、どんなに大切なものでっ……どんなに大きなものだったのかも……わかんねぇーけどっ……」

少し震えた声で、桜時は続ける。

「四大国を倒してっ……また“大国”になってっ……！それは本当に戻って来るのかっ……！！？」

「……っ！」

勢いよく顔を上げ、まっすぐに見つめて叫ぶ桜時に、八房は大きく目を見開いた。

「戻って……来るのかよっ……？」

少し泣きそうな表情で、必死に八房を見つめる桜時。

「戻ってなんて来ねぇーんだろっ……！！？」

「クっ……！」

もう一度問いかける桜時に、八房は少し逃げるように顔を背けた。

――――八房っ……――――

何をやっても戻りはしない。最愛の人。

「それなのに四大国を責めてっ……それで一体、何になるっていうんだよっ……！！？」

「では誰を責めろというっ！？」

「……っ！」

すぐさま返ってくる叫び声に、桜時が思わず言葉を止めた。

「ただ嘆けとでも言うのかっ……！？」

感情を表に出した八房が、その必死の叫びを続ける。

「大国の称号を失くし、民すらも失い、国ですらなくなった我らにっ……！」

肩を上下に揺らし、息を荒げて、八房は叫ぶ。

――――八房っ……――――

「この世界で最も大切なものを失くしたわしにっ……」

少し俯き、呟く八房。

「他にどんな道があるというっ……！！？」
「……っ」
その問いかけに、桜時は唇を噛み締め、強く拳を握り締めた。
「そんなもんっ……」
桜時の口からこぼれ落ちる、少し震えた声。
「そんなもんっ……いくらだってあるじゃねぇーかよぉっっ！！」
「何っ……？」
思いがけない言葉に、八房は大きく目を見開いた。
「いっいくらでも……あるだとっ……？」
「ああっ……」
戸惑うように問いかけた八房に、桜時は大きく頷く。
「確かに“大国”の称号はないかも知れないけどっ……」
桜時がどこか悲しい表情で言葉を続ける。
「少なくともここに民はいるっ……！！」
「……っ」

伝えられる言葉に、八房は少し表情をしかめた。

「ここに住んでいる人間がいるんだよっ！それだけで十分じゃねぇーかっ……！」

込み上げる思いを押さえながら、それでも必死に訴えを続ける桜時。

「それだけでここはっ……！！」

「十分なものかっ……！！」

「……っ」

桜時の必死の訴えが、押し負けるほどに強い声で八房は叫んだ。

「残ったわずかな者たちだけでひっそりと暮らしてっ……それこそ、それで何になるっ……？」

八房が震えた声で、言葉を続ける。

「それではっ……失ったものは何一つ戻って来ないっ……！！」

「四大国を倒したって、何も戻って来ないのは同じだっ……！！」

「……っ！」

桜時の叫びに、八房が大きく目を見開く。

「民も国もっ……本当に取り戻したいならっ、他にもっとすることがあるはずだっ……！！」
「クっ……！」
桜時の強い問いかけに、八房が歯を食いしばる。
「何も知らぬ小僧がっ……生意気なことを言うなっ……！！」
再び桜時へと刀を振るう八房。
「“白首っ……割砕”っ……！！」
「……っ！」
塀にもたれかかったままの桜時に、またしても飛んでくる白太刀。
――――バァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――
「うあああああああああああああああっっっ！！！」
八房の放った白太刀が、桜時のもたれかかっていた塀を粉々に粉砕し、桜時はまたもや全身を斬り裂かれ、屋敷の外まで吹き飛ばされていった。

「うっ……ううっ……」

倒れた桜時は、今後はすぐに起き上がることが出来ないほどに、傷ついていた。

「もう……遊びは終わりじゃ……」

「クっ……！」

倒れたままの桜時の元へ、ゆっくりと八房が歩み寄っていく。

「もう一度言う……“里見犬孝”として四大国を倒し、犬を再び“大国”とせよ……」

「……。」

もう一度繰り返された言葉に、桜時は痛みに歪んだ表情を、静かな表情へと変えた。

「俺はっ……朱実桜時だっ……」

「……そうかっ」

桜時の答えを聞いた八房が、ゆっくりと刀を構える。

「残念じゃ……」

「……っ」

向けられる刀先に、桜時の表情が曇る。

「“白首……割砕”っ……」

「……っ！」

起き上がれない体、村雨丸も握れない右手。飛んでくる白太刀に、桜時は覚悟したように強く歯を喰いしばり、そっと目を閉じた。

――――パァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

「何っ……！？」

「……っ」

聞こえてくる驚いたような八房の声に、桜時は閉じた瞳を再び開いた。

「あっ……」

目を開いた桜時が、さらに大きく目を見開く。

「犬……智っ……」

「……。」

倒れ込んでいる桜時の前に立ち、両手を突き出して白い壁のようなものを張っているのは、厳しい表情で八房を見つめる犬智であった。桜時が犬智の名を呟く。

「“白防”……」

犬智は張っていた白い壁を消し、両手を下へと下ろした。

「何のつもりじゃっ……？犬智っ……」

八房が険しい表情で、犬智に問いかける。

「もうおやめ下さい……八房様……」

「何っ……？」

犬智の言葉に、八房は眉をひそめる。

「これ以上、御自分の御家族を傷つけるのは……」

「……っ」

まっすぐな瞳を向ける犬智に、八房の表情は少し歪んだ。

「みんなはっ……他の六犬はすでに敗れましたっ……」

「えっ……？」

犬智により知らされる他の六犬の敗北に、桜時が少し驚いたように声を出す。

「この戦い、すでに我らの敗北は決まっておりますっ……」

「……。」

必死に訴えかけるように見つめる犬智から、どこか煩わしそうに目を背ける八房。

「これ以上、無益な戦いを続けることはっ……」

「それが……どうした……？」

「えっ……？」

八房の発した言葉に、犬智が少し表情をひそめる。

「他の奴らが負けようとも、“犬孝”さえ守れば、この戦いは我らの勝ちじゃっ！」

「八房様っ……」

犬智がそっと目を細める。

「“犬孝”っ……！“犬孝”さえ手に入ればっ……！！八犬で四大国を攻め落とせるっ……！！」

「……っ」

八房の言葉に、犬智は強く拳を握り締めた。

「我らは誰一人、そんなことを望んではいませんっ！！」

「何っ……？」

犬智の叫びに、八房は目を開いて問い返した。

「何っ……だとっ……？」

八房が震える声で、もう一度問いかける。

「我らの望みはっ……今の平安っ……」

――――いいえっ、四大国の者ではありません――――

――――お前も実は、四大国を倒すことには反対なのではっ……――――

「今の……この時間っ……」

――――では私以外は覚えなくて結構です――――

――――えええぇぇぇぇぇぇぇっっ！！？――――

犬智が泣きだしそうな表情を見せながら、唇を噛み締め、必死に言葉を発する。

「“大国”になどっ……ならなくていいではありませんかっ……！」

今にも涙の溢れ落ちそうな瞳を、犬智が八房へと向ける。

「皆で幸せに暮らせればっ……それでいいではありませんかっ……！！」

犬智が必死に叫ぶ。

「……っ」

その犬智の叫びを聞き、倒れたままの桜時も、そっと目を細める。

「くだらぬっ……」

「えっ……？」

しかし、その犬智の必死な叫びに、返って来たのは何とも冷たい言葉であった。

「八房さっ……」
「“白首割砕”っ……」
犬智に名を呼ぶ時間すら与えず、刀を構えた八房は、犬智に太刀を向けた。
「えっ……？」
「犬智っ！！」
向かってくる太刀に、犬智が戸惑うように首をかしげ、倒れていた桜時が必死に身を起こす。
――――バァアアアアアアアーーーーンっっ！！！――――
「きゃあああああああああああああっっっ！！！」
「……っっ！！」
やっと起き上がった桜時の目の前で、犬智は白太刀に斬り裂かれ、血だらけとなって、雪の積もる地面へと倒れ込んでいった。

――――ボォォォォォォォ～～～ンっ！――――

倒れた犬智の体を白い煙が包み、犬智がイヌへと姿を変えた。

「八房……様っ……」

弱々しく八房の名を呼び、犬智が目を閉じる。

「犬智っ……？犬智ぉぉぉぉっっ……！！」

必死に起き上がった桜時が、少し足を振らつかせながら、倒れ込んだ犬智の元へと駆け寄っていく。

「犬智っ……！！」

血を流した小さなイヌは、深く瞳を閉じていた。

「犬智っ……」

桜時が犬智のすぐ横に座り込む。

「それで良いはずが……ないであろうがっ……」
「……っ」
倒れた犬智に冷たい言葉を吐き捨てる八房。その言葉に、桜時の表情が変わった。
「なんでだよっ……」
地面の雪を握り締め、桜時が震えた声で問いかける。
「なんでだよっ……！！」
「……。」
問いかけを繰り返す桜時を、八房は細めた瞳で見つめる。
「犬智っ……言ってたじゃねぇーかっ……」
桜時は悲しい表情で言葉を続ける。
「大国になんてなれなくっても……みんなで幸せに暮らしていければそれでいいってっ……」

犬智を見つめ、込み上げるものを必死に堪えながら、桜時は言う。

「犬智にとって、ここは大切なっ……かけがえのない場所なんだっ……」

桜時が勢いよく顔を上げる。

「犬智にとってっ……ここは確かに“国”なんだよっ……！！」

「……っ」

桜時の口から放たれる“国”という言葉に、八房は思わず顔をしかめた。

「どうしてそれがわからないっ……！」

強く唇を噛み締め、桜時が再び村雨丸を身構える。

「どうしてそれがわからないんだよっ……！！？」

「……っ！」

村雨丸を構えた桜時が、八房の元へと飛び出していく。

「クっ……！！」

飛びかかってくる桜時に、八房も刀を突き出した。

――――パァァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

『……っ！』

強くぶつかり合う、村雨丸と八房の刀。

「どうしてっ……」

刀を構えたまま、桜時が声を漏らす。

「どうしてもっとっ……！！今ここにいる人間を大切にしないっ……！！？」

至近距離に迫る顔で、桜時が突き刺すように八房を見る。

「どうしてっ……！！今ここに生きてる民の幸せを守ろうとしないんだよっ！！？」

声が枯れそうなほどに叫び、八房に訴える桜時。

「“国”を想ってくれる人間を傷つけてっ……これがっ！国主のやることなのかよっっ！！？」

「クぅぅぅっ……！」

村雨丸に、八房の刀が少し押される。

「民を大切にして何になるっ……！」

押される刀に何とか踏み留まりながら、八房が桜時に言い返す。

「ここが国となるためにはっ……！！」

「それが“国”だよっ！！」

「……っ！！」

すぐさま返ってくる言葉に、衝撃を走らせる八房。

「八犬士のみんな、楽しそうに暮らしてたっ……」

――――レイレイぃ～っ！――――

――――死ね……腐れ小僧……――――

――――あいうえお作文っ！作ってきたんですっ！――――

――――犬孝様……――――

「笑ってたっ……」

大国でなくなったこの国を、民の少なくなってしまったこの国を嘆く素振りなど少しもなく、今を楽しく生きている。桜時の瞳には、そう映った。

「それを守ればっ……その笑顔を守ればっ！ここは“大国”だっ！！」

「……っ！！」

あまりの衝撃に、八房の表情が止める。

「なっ何をっ……！」

桜時の言葉に、初めて動揺を見せる八房。

「ここはっ……！」
「ここは“国”だっっっ！！！」

――――パァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

「……っ！」

桜時の強い想いに反応するかのように、村雨丸から白い光が溢れ始める。

「何っ……！？」

白光を帯びた村雨丸に、徐々に押され始める八房の刀。

「こっこの光はっ……！まさかっ……！」

八房が大きく目を見開く。

「“命力”っ……！？」

第３５章　国の在り処　☆４

「……っ！」

「くぅっ……！！」

さらに輝きを強める村雨丸に、八房がどんどん押されていく。

「クソっ……！」

「うっ……！」

「……っ」

八房が桜時の腹部に蹴りを入れ、桜時が傷の痛みに怯んだ隙に、村雨丸から刀を離して、後方へと退がる。

「……っ！」

すぐさま痛みを振りきり、村雨丸を構え直す桜時。

「“命力”……」

村雨丸の放つ白い光を見つめながら、八房が少し目を細める。

「お前も……わしは間違っていると、そう言うのか……？」

八房が、白い光へと問いかける。

――――八房っ……――――

「伏っ……」

桜時の放つ白い光に、伏の幻が見えるようであった。

「俺がっ……あんたを倒すっ……！！」

「……っ」

強く叫ぶ桜時に、顔をしかめる八房。

「良かろう……」

八房がまっすぐに桜時を見つめる。

「来いっ……！！」

「……っ！」

白く輝く村雨丸を構え、向ってくる桜時に、八房はゆっくりと刀を構えた。

『……っっ！！』

二人が同時に、刀を振るった。

――――――パァァァァァァァァァァーーーーンっっ！！！――――

一瞬の光が交差した後、二人は少し離れた場所で、互いに背を向けるようにして立っていた。

二人の間に、しばらく沈黙が訪れる。

「うっ……ううっ……！！」

右肩から大量に血を流し、その場に膝をついたのは、桜時であった。

「……。」

八房が、静かな表情で俯く。

――――パリィィィィィィーーーーンっっ！！――――――

その瞬間、八房の持っていた刀が、粉々に砕け散った。

「……っ」

砕け落ちた刀を見つめ、八房が目を細くする。

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」

息を乱し、右肩の傷を押さえながら、ゆっくりと八房の方を振り

返る桜時。

「……。」

八房もまた、ゆっくりと桜時の方を振り返った。

「さすがは村雨丸」

「えっ……？」

八房の放った言葉に、桜時が少し眉をひそめた。

「さすがは八犬士の長・“犬孝”が代々受け継いできた宝刀じゃ……」

「犬孝がっ……」

桜時が少し感慨深げに右手の村雨丸に目を落とした。

「その刀、どこで……？」

「……っ」

八房の問いかけに、桜時が少し俯く。

――――かつてあなたの父親が、我が妹・雲雀に送った刀……――――

思い出される、孔雀の言葉。

「父さんが母さんに送ったものだって、孔雀さんが……」

「犬孝が……雀の娘に……」

桜時の答えに、静かな表情を見せた八房は、噛み締めるように呟いた。

「そうか……」

「……っ？」

低く響くその声に、少し目を丸くする桜時。

「己の刀を託すほどに、雀の娘を愛しておったのか……」

八房がどこか淋しげな表情を見せる。

「あやつは……」

「……っ」

そんな八房を、桜時は少し悲しげに見つめた。

「……。」
「……？」

桜時がまだ膝をついて立ち上がれないでいる中、八房はゆっくりと歩き、庭に積もった雪に足跡を刻みながら、先程、八房の攻撃で倒れた犬智の元へと歩み寄った。

「……っ」

八房が犬智のすぐ横にしゃがみ込み、そっとその頭を撫でる。

「“皆で幸せに暮らせればそれで良い”、か……」

深く目を閉じた犬智を見つめながら、八房が先程の犬智の言葉を繰り返した。

――――私のこの力は……何のためにあるのでしょう……？――――

――――そんなの決まっているだろうっ？四大国を倒し、犬国をまた“大国”にするためだっ――――

思い悩んでいた伏に、八房が放った、心ない言葉。

――――そうですね……――――

――――この力は……“命力”は……この世界に必要ない……――

――

悲しげな表情を見せていた伏にも気付かずに、伏を追い詰め、そして死なせてしまった。

「狂わせておったのは……わし自身だったのかも知れん……」

「……っ」

悲しげに呟いた八房に、桜時はそっと目を細めた。

「じじい……」

「……っ」

「……っ？」

八房が傷だらけの犬智を抱え、ゆっくりと立ち上がる。立ち上がった八房は、桜時に背を向け、ゆっくりと屋敷の方へと歩いて行く。

「おっおいっ！」

「……。」

屋敷の廊下へと昇る八房を、思わず呼び止める桜時。八房が廊下で足を止める。

「何じゃ……？」

「うぇっ？」

背を向けたまま八房に問いかけられ、桜時が少し困ったような表情を見せた。

「何っつーか、そのっ」

桜時が頭を掻きながら、必死に言葉を探す。

「そのっ、まだっ……四大国を倒す気、かっ……？」

もう少し包み隠して問いかけようとした桜時であったが、良い言葉が出て来ずに、結局ストレートな表現での問いかけとなってしまう。

「……当たり前じゃ」

「えっ！？」

返って来る答えに、少し驚く桜時。

「そっそうかっ……」
桜時が残念そうに肩を落とす。
「じゃが」
「……？」
言葉を付け加える八房に、桜時は少し目を丸くして顔を上げた。
「今の八犬士ではまだまだ力不足。侵入者も防げんようでは、四大国を倒すなど程遠い」
「えっ……？」
八房の言葉に、桜時が目を見開く。
「じゃっじゃあっ……！」
「諦めはせん。先送りするだけじゃっ」
「……っ！」
素気なく返って来るこの言葉に、桜時は大きく笑みをこぼした。
「ハハっ……」
どこか力の抜けた様子で肩を落とし、そっと微笑む桜時。

「……っ」

後方から聞こえてくる桜時の笑い声に、少し笑みをこぼしたかのように見えた八房は、さらに足を進め、自分の部屋の中へと戻っていく。

「あっ！ああぁっ！待ってっ！！もう一つっ！！」
「……っ？」

再び呼び止める桜時に、再び足を止める八房。

「何じゃっ？」
「あっ、そのっ……」

先程よりも面倒臭そうに返って来る問いかけに、桜時が少し申し訳なさそうな表情を見せる。

「そのっ……」

八房の背中をまっすぐに見つめ、真剣な表情を見せる桜時。

「父さんはっ……今っ、どこにっ……？」
「……っ」

桜時からの二つめの問いかけに、八房は少し目を細めた。

「わからぬ……」
「えっ？」
八房の答えに、曇る桜時の表情。
「どこで何をしているのか、生きているのかさえな……」
「……っ」
返って来る答えに、そっと肩を落とす桜時。
「そう……か」
「……。」
背中越しでも伝わってくる桜時の残念がっている様子に、八房も少し肩を落とした。
「じゃが……お前なら、探し出せるかも知れんな」
「えっ……？」
ポツリと囁かれた言葉に、桜時は少し耳を疑うように顔を上げた。
「じじっ……」

「迎えが来たようだぞ」
「へっ？」
「さらばじゃ」
八房が、背を向けたまま、桜時に別れを告げる。
「朱実桜時」
「……っ！！」
「……っ」
桜時が大きく目を見開く中、八房はどこへともなく姿を消した。
「いっ今っ……朱実桜時って……」
茫然とした表情で、確かめるように呟く桜時。あまりの出来事に、頭が真っ白になっていた。
「ってか、迎えとか言っ……」

――――バァアアアアアアアアーーーンっっ！！――――

「のわあああああああああああああああああっっっ！！！」

いきなり粉々に砕け散る、里見の屋敷の門に、近くに座り込んでいた桜時は、思わず大きな声で叫んだ。

「なっ！何っ……！」

「……っ」

「……っ？」

崩れ去った門の向こうから見えてくる人影に、目を凝らす桜時。

「あっ……」

目を凝らしていた桜時が、その目を大きく見開く。

「はぁ……はぁ……」

「かっ輝……矢っ……？」

「……っ」

桜時の見つめる先に立っていたのは、少し息を乱した輝矢であった。桜時の声に、俯いていた輝矢がゆっくりと顔を上げる。

「ハ……チ……」

桜時を見つけ、桜時の名を呼ぶ輝矢。

「おっ前なぁ～、もうちょっと大人しく入って来っ……んっ？」

輝矢を非難するように話していた桜時が、ふと輝矢の全身からボタボタと落ちている赤い血に気づく。

「おっ前！その傷っ……！」

傷だらけの輝矢に、少し驚いたように声を出す桜時。

「一体、どうしっ……！」

「……っ！」

心配するように少し身を乗り出した桜時の元へと、輝矢が駆け込んでいく。

「……っ」

「……っ！！」

勢いよく抱きつく輝矢に、大きく目を見開く桜時。

「ぬなぁぁぁぁぁっっっ！！！」

桜時の顔色が、景気よく赤色に染まる。

「かぁっ！かかかかかかか輝っ……！！」

「ハチっ……ハチ……」

桜時がゆでダコ状態になっている中、強く桜時を抱き締めた輝矢は、愛おしそうに、繰り返し桜時の名を呼んだ。

「会いたかった……」

「……っ」

輝矢の口からこぼれ落ちた言葉に、桜時がゆでダコから冷め、そっと目を細めた。

「輝矢……」

桜時が輝矢の名を呼ぶ。

「俺っ……」

「すぅ～っ……すぅ～っ……」

「ええっ!?もう寝てんのっ!?早っ!!」

聞こえてくる寝息に、起きてしまうという気遣いをすることなく、勢いよく突っ込みを入れる桜時。

「ったく……」

桜時が少し呆れたように肩を落とす。

「ってか、この状態で寝られてもっ……」

「すぅ～っ……すぅ～っ……」

桜時にしっかりと抱きついたまま、気持ちよく眠っている輝矢に、桜時は引き離すことも出来ず、かなり困った表情を見せる。

「……。」

困ったまま、少しの間、流れる時間。

「……っ」

少し考えた後、またしても顔を赤く染め、桜時がおぼつかない右手で輝矢の肩を持った。

「……っ」

輝矢の体を少しだけ引き寄せる。

「ただいま……」

『へぇぇぇぇぇぇぇぇ～～～っ』

「へっ……？」

横から聞こえてくる声に、振り向く桜時。

『……。』

輝矢と桜時のすぐ横から、感心したように二人の様子を見ているのは、モンキとユキジの二匹。

「ぬわあああああああああああああああっっっ！！！」

二匹と目が合うと、桜時は勢いよく叫びながら、すぐさま輝矢の肩から手を離した。

「おっお前らっ！いっいつからっ……！」

「“ただいま……”やってぇ～っ！」
「やぁ～っぱ満更でもないんだぁ～」
「ちっ……！」

からかうように微笑む二匹に、桜時の表情が歪んでいく。

「違っ……！！」
「今更、隠すなよぉ～ハチ公～」
「違うっつってんだろっ！！ってか、お前らもいたのかよっっ！！」

モンキ・ユキジとは逆側に立ち、ばっちり様子を見ていたらしきゴンと羊スケに、桜時が顔を真っ赤にしたまま怒鳴りあげるように突っ込む。

「おめでとうっスぅ～っ！ハチくんっ！」
「これでお前も一人前の男だな」
「ああぁ～俺の輝矢んがぁ～っ」
「ってか、元々サルのじゃないからぁ～」

「……っ」

口々にからかう皆に、桜時の表情はこれ以上にないくらいに引きつっていく。

「だっからっ……！！」

桜時が勢いよく顔を上げる。

「ちっがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーうっっっ！！！」

「すぅ～っ……すぅ～っ……すぅ～っ……」

桜時の叫び声が響き渡る中、輝矢は深い眠りについていた。

こうして、八犬士との戦いは終わりを告げたのであった。

第３５章　国の在り処　☆４（後書き）

次回で第３部八犬士編も最終章です。
長々とお付き合いいただきまして、ありがとうございました。

第３６章　戦いの後に…　★１

犬国で八犬士との戦いに勝利し、無事、桜時を取り戻すことが出来た輝矢一行。

といっても輝矢はすぐさま眠りについてしまったので、その他のお供一行は、羊スケの運転するオトポリのオープンカーで、龍国へと戻った。車の中では皆、疲れ切っていたのか深い眠りにつき、運転手の羊スケは、睡魔と戦いながら必死に車を進めた。

皆が龍国へと戻ったのは、次の日の夜中のことであった。

そして、その深夜。

オトポリ本部・長官室。

「アンタたちっ！一体、自分たちがなぁ～にをやらかしたかっ！わかってるわけぇっ！？」

長官席の前に立ち、鬼のような形相でそう怒鳴りあげているのは、リンゴであった。

「アンタたちのしたことはねぇっ！一歩間違えればっ！この国を戦争に導いてたのよっ！？」

「ふわぁ～あっ」

怒鳴っているリンゴの前に立っている羊スケが、大きな欠伸をする。

「俺、夜通し運転してたんで、めっちゃ眠いんスけどぉ～ゴンさぁ～んっ」

本当に眠そうな表情で、羊スケが隣に立っているゴンの方を見る。

「んなもん、俺に言ったってしゃーねぇーだろーがっ」

ゴンも眠そうにしながら、相変わらずの不機嫌面で言い放つ。

「そういうことは俺じゃなくて、目の前のアイツに言えっ」

「俺に言えるわけないじゃないっスかぁ～ゴンさん、同期でしょ～？」

「アホっ。言えるんだったら、俺だってとっくに言ってるってのっ」

「成程っ」

「ちょっとっ！！聞いてんのっ！！？」

『はいっ……』

リンゴに強く問いかけられ、ゴンと羊スケが眠そうな表情のまま前を向く。

「ったくっ！」

「まぁまぁリンゴちゃ～んっ」

かなり怒っている様子のリンゴに、宥めるように声をかけるのは、長官席に座っている座黒。

「もう遅いし、続きは明日にしないぃ～？」

座黒がリンゴに笑顔を向ける。

「ぶっちゃけパパももう眠いしぃっ！」

「……っ」

座黒の言葉に眉を吊り上げたリンゴが、勢いよく左足を振り上げた。

――――バギコォォォォォォォォーーーーンっ！！――――

「……。」

リンゴの左足が当たり、崩壊する長官室の壁に、座黒が笑顔のまま固まる。

「さっ！続けようかぁ～っ！」

『はいっ』

やる気をもって言った座黒に、ゴンと羊スケは大きく頷いた。

「ったくっ」

その様子を見て、リンゴが少し肩を落とす。

「いいっ！？だいたいアンタたちはねぇっ！常、日ごろからぁっ…
…！！」

こうして、誰も止めることが出来ぬまま、リンゴの説教は朝方まで続いたのであった。

ゴンと羊スケがリンゴの説教を喰らっていたその頃。

龍国・海岸沿いの砂浜。

「……。」

月が浮かび、星の照らす夜空と、それらにより輝く夜の海を眺めながら、輝矢は一人、砂浜に座り込んでいた。珍しく神妙な表情を見せた輝矢が、打ちつける波の音に耳を澄ませている。

「輝矢っ」
「……っ」

波の音の合間に聞こえてきたその声に、輝矢はゆっくりと振り返った。

「ハチ……」
「ここにいたのか」

穏やかな笑みを浮かべながら、輝矢の元へと歩み寄って来るのは、桜時であった。

「ええ」
「傷は？まだ治ってないんだろ？」
「ええ、もう少し……」

輝矢がふと包帯の巻かれた左手に目を落とす。眠ったまま龍国まで戻って来る間に、由雉に治療はしてもらったようだが、犬仁の白槍に貫かれた左手の傷は、まだ完治には至っていなかった。

「ハチこそ、傷はどうなのですか？」
「俺はぁ～まぁもうだいたいっ」

そう答えながら、桜時が座っている輝矢のすぐ横へと立つ。

「そうですか……」
「おう……」

波の音の合間に、どこかぎこちなく続く二人のやり取り。

『……。』

やがて二人の間に沈黙が走り、波の音がより一層大きく聞こえてきた。

二人を黙らせた理由は一つ。

――――ハチには関係のないことですっ……！！――――

――――もういいっ……――――

ここが、二人の心を離れさせてしまった場所であったからであった。

「……っ」

沈黙に耐えきれなくなったのか、桜時が軽く唇を噛む。

「輝矢っ、あのさっ……！」

「ハチっ」

「……っ？」

何かを切り出そうとした桜時の言葉を遮り、輝矢がゆっくりと立ち上がった。そんな輝矢を、桜時が少し不思議そうに見つめる。

「……。」

立ち上がった輝矢は、目線を下方に落としたまま、少しの間、迷うような表情を見せた後、深々と頭を下げた。

「すみませんでした……」

「えっ……？」

頭を下げる輝矢に、桜時が戸惑うように目を丸くする。

「かっ輝っ……」

「私は……自分のことしか考えていなかった……」

「……っ」

桜時が見つめる中、輝矢がゆっくりと顔を上げる。

「自分のことばかり守ろうとして……アナタを傷つけた……」

「輝矢……」

今までに見せたことがないほどに申し訳なさそうな表情を見せている輝矢に、桜時がそっと目を細める。

「でもっ……それでも私は……」

輝矢の瞳が、まっすぐに桜時を見つめる。

「まだ……アナタに、すべてを話す勇気が持てない……」

「……っ」

輝矢の言葉に、桜時がそっと眉をひそめる。

「謝っておいて……すみませんっ……」

またしても目線を下方へと落とす輝矢。

「勝手なこととはわかっていますっ……でもっ……」

「いいよっ……」

「えっ……？」

囁かれた桜時の答えに、輝矢はパっと目を見開き、すぐに顔を上げた。

「今、何……」

「いいよっ」

「……っ」

戸惑うように見つめる輝矢に、桜時は穏やかな優しい笑顔を向けた。

「“まだ話せない”ってことは……いつかは話してくれるって、そういうことだろっ？」

桜時が海の方を見つめながら、笑顔で話す。

「ならいいっ……」

――――言えませんっ……！――――

拒絶されるように、首を横に振られたあの日。

「全然いいっ……」

桜時が噛み締めるように呟く。

「俺っ、待つよっ」

少し俯き、微笑む桜時。

「輝矢が、話してくれる日を待つ」

俯いた桜時が、微笑みを浮かべたまま、そっと目を伏せ、深い思

いを感じさせるようにそう言った。そして、目を開くと、ゆっくりと輝矢の方を見た。

「ずっと……」
「……っ」

そう言って笑う桜時に、輝矢が少し目を細める。

「ハチ……」
「んっ？」

そっと名を呼ぶ輝矢に、笑顔のまま返事をする桜時。

「……。」
「……っ？」

そっと右手を差し出した輝矢に、桜時が少し首をかしげる。

「何っ……」
「私の……」

右手を差し出した輝矢が、そっと微笑む。

「私の“仲間”に、なっていただけませんか……？」

「……っ！」

差し出された手に戸惑っていた桜時が、輝矢の言葉に、思わず大きく目を見開いた。

――――私はっ……！アナタを“仲間だ”と言った覚えは一度もありませんっ……！！――――

それは、あの日の拒絶を、消し去る言葉。

「……っ」

少し俯いた桜時が、嬉しそうに笑う。

「喜んでっ」

「……っ」

笑って手を取った桜時に、輝矢もさらに一層、嬉しそうに微笑んだ。

「では早速っ」

「へっ？」

握手を交わした桜時の手を勢いよく引く輝矢に、桜時が目を丸くする。

「仲間としての絆を深めましょうかっ」
「へぇっ!?ちょちょちょちょっちょっ……!!」

輝矢に手を引かれ、輝矢の方へと引っ張られていく桜時の体。至近距離に迫った輝矢が、桜時に楽しそうに微笑みかける。

「ねっ♪」
「“ねっ♪”じゃねぇっ!!のわあああああああああっっっ!!!」

その距離五センチもあるかないかのところで輝矢に微笑まれ、桜時が勢いよく悲鳴をあげる。

「だふぅあああああああっっ!!ぎゃっふぅ～んっ!!ぐへっ……!」
「あっ……」

悲鳴をあげた桜時が、そのまま気絶して、後方へと倒れ込む。その様子を見て、目を丸くする輝矢。

「まだ何にもしてないのにぃ～」

どこか残念そうな表情を見せながら、輝矢が倒れた桜時のすぐ横へとしゃがみ込む。

「ぐっ……ぐぷっ……」
「……っ」

気絶している桜時を見て、何とも愛おしそうに微笑む輝矢。

「大好きですよ、ハチっ」

微笑んだ輝矢が気絶している桜時にそう告げ、ゆっくりと桜時の顔に、自分の顔を近づけていく。

「……っ」

そして、その唇に口づけを落とした。

第３６章　戦いの後に…　★２

翌早朝。エセお菓子の家こと桃原家。

「うぅ～んっ」

少し眠い目を擦りながら、ハチがゆっくりと二階からの階段を降りてくる。窓からは朝日の光が差し込んでいるが、家の中はまだ人の起きている気配はしていなかった。

「ふわぁ～もうちょい寝とけば良かったなぁ～」

大きく欠伸をしながら、一階へと降りたハチがキッチンへと入る。

「あれっ？」
「んん～っ？」

ハチがキッチンへと入ると、そこには先客がいた。

「あっれぇ～おはよっ。早いねぇ～っ」

先客というのは、早朝からでも文句なしに爽やかな笑顔を見せている、この家の家主・桃原太狼であった。太狼がキッチンに入って来たハチに、笑顔を向ける。

「お前こそ、早えぇーじゃねぇーかっ」
「僕はいっつも五時起きだよぉ～」

「どこのおじいちゃんだよっ」

笑顔の太狼にそう突っ込みを入れながら、ハチがダイニングテーブルの上に飛び乗る。

「早朝に飲む甘さダルダルココアは格別でねっ」

「朝から血糖値上がりまくりそうだな……」

キッチンのすぐ傍に立っている太狼が、得意げな笑顔で甘さのプンプンと漂うコップを見せる。咽(むせ)かえりそうな甘い香りに、ハチは少し表情をしかめた。

「ハチ君も飲むぅ～？」

「結構ですっ」

ハチは太狼の気遣いをすぐさま断った。

「はぁっ」

テーブルの上で落ち着いたハチが、不意に深々と溜息をついた。

「なぁ～にぃ～っ？」

すかさず太狼が声をかける。

「若いうちから溜息ついちゃってぇ～ダメだよぉ～？」

「お前だって大概、若いんだけどな……」

どこぞの年寄り染みたことを言う太狼に、溜息をついていたハチ

は少し呆れた表情を向けた。

「なぁ～んか色々、混乱しちゃった？」

太狼がココアの入ったコップをキッチンに置き、まっすぐにハチの方を見る。

「神の力を持ってるとかって言われてっ」

「……っ」

急にその瞳を鋭くして微笑む太狼に、ハチは少し眉をひそめた。何故、太狼がそんなことを知っているのか、という疑問は出て来なかった。むしろ太狼は知っていたのであろうと、そう自然と認識していた。

「確かに、ちょっと戸惑いはしたけど……」

ハチが少し俯きがちに、素直な答えを呟く。

「混乱、ってわけでもねぇーかなぁ」

「……。」

自分でもわからない様子で首をかしげるハチを、太狼は薄く笑みを浮かべながら見つめる。

「何て言えばいいんだろっ……んん～っ」

「……っ」

真剣に悩み込むハチに、太狼がそっと微笑む。

「スッキリは……したの？」

「へっ？」

太狼の問いかけに、ハチが顔を上げる。

「前の自分と比べて」

「……っ」

そう問いかけられ、ハチがまた考え込むように俯く。

「……うんっ」

そして、どこか満足げな笑みを浮かべ、ゆっくりと頷いた。

「そおっ」

そんなハチを見て、太狼も微笑んで頷く。

「じゃあスッキリ祝いに、僕がお手製ジュースを入れてあげよぉ～っ」

「えっ？」

そう言ってキッチンで何やら作業を始める太狼を、背中越しに戸

惑った様子で見つめるハチ。いつもハチには姑のように厳しい太狼が、今日は妙に優しい。

「あっありがっ……」

「はいっ！“亀は万年・激苦・良薬ジュース”っ！」

「やっぱそうだよな……」

笑顔の太狼が出してきた、灰色とも紫とも言い難い色の、怪しげな煙を放っているジュースを見て、礼を言おうとしていたハチは、一気に冷めた表情となって呟いた。

――――ドタドタドタっ……！――――

「あっ？」

二階から聞こえてくる大きな足音に、ハチがふと顔を上げる。足音は勢いよく階段を降り、徐々に大きくなって聞こえてきた。

「ハチぃぃぃぃぃ～～～っっ！！」

「ぎゃあああああああああああああっっっ！！！」

後ろから勢いよくハチを抱え上げ、強く抱き締める輝矢に、ハチが思いきり悲鳴をあげる。

「放せぇぇぇぇぇぇぇ～～～～っっっっ！！！一メートルうううう～～～っっ！！！」

ハチが手足をバタつかせ、後ろから抱きついている輝矢に必死に抵抗する。

「放せぇぇぇぇぇぇぇ～～～～っっっっ！！！」
「無理ですよぉ～離れていた分、愛を育まないとぉ～っ」
「育むかぁぁっっ！！」

楽しそうな笑顔を見せている輝矢に、白い顔を青くしながら必死に叫ぶハチ。

「アハハ～っ」

そんなじゃれ合っている輝矢とハチを見ながら、太狼が軽く笑う。

「ホントっ」

――――ドバドバドバァァァっっ！！――――――

笑顔を少しも崩さぬまま、先程の激苦ジュースに、山葵やらカラシやらを勢いよく投入していく太狼。

「仲良しだよねぇ～アハハァア～っ」
「んなもん入れても、絶ってぇ飲まねぇーからなっ！俺はっ！！」
冷たい笑顔で言う太狼に、ハチが必死に意志表明をする。

「えっ？飲まないって選択肢なんてないけど？」
「鬼かっ！！」
普通に答える太狼に、ハチが勢いよく突っ込みを入れた。

「ではハチぃ～っ！朝のキッスでもいたしましょうかぁ～っ」
「ぎゃあああああああっっ！！！」

――――ピンポォォォォォォ～～～ンっ！――――

『……っ』

ハチに輝矢の魔の手が迫ったその時、桃原家のチャイムが鳴った。
チャイムの音に、輝矢とハチが動きを止める。

「おはようございまぁ～すっ！」

チャイムとともに玄関から入って来たのは、珍しくオトポリの軍服姿ではないリンゴであった。

「空気の読めない女ですね。帰りなさい」
「何よっ！！朝っぱらから客相手に、この上なく感じ悪いわねっ！！」
キッチンから顔を出して冷たく言い放つ輝矢に、リンゴが強く怒鳴り返す。
「ふはぁぁぁぁ～～っ……」
その頃キッチンの中では、やっと輝矢から解放されたハチが、死にかけた様子でテーブルの上に寝転がっていた。
「あれぇ～？リンゴちゃ～ん、こんな朝早くから何の用～？」
輝矢に続いて、太狼もキッチンから顔を出した。
「もしかしてぇ～甘いお菓子を差し入れしに来てくれたとかぁ～？」
「違いますっ」
「ううっ……」
あっさりと否定するリンゴに、太狼がかなり残念そうに肩を落とす。
「朱実桜時、いるっ？」
「えっ？」
「……っ」

そのリンゴの言葉に、輝矢が目を丸くし、キッチンで寝転がっていたハチが顔を上げた。

「いる、けどっ……」

テーブルから降りたハチが、キッチンから出て、玄関にいるリンゴへと姿を見せる。

「今から私と一緒に私の家に来てくれない？」

「へっ？」

そう言うリンゴに、ハチが目を丸くする。

「私のハチを家に連れ込んで、何をするつもりですか？リンゴ」

「別に何もしないわよっ！！人聞きの悪いこと言うんじゃないわよっ！！」

しかめた表情で問いかける輝矢に、リンゴが勢いよく怒鳴り返した。

「パパが呼んで来てって言ってんのよっ！！パパがっ！！」

「座黒が……？」

「オトポリの長官がっ？」

リンゴの言葉に、輝矢とハチが眉をひそめる。

「何故、座黒がハチを……」

「さぁ？そこまでは聞いてないけどっ」
「今回の件のことでしょ～っ」
『……っ？』

互いに首をかしげていた輝矢とリンゴに、答えるように口を挟んだのは太狼であった。

「国一つ巻き込んでの騒動だったからねぇ～龍国主として話しときたいんじゃないのぉ～？座黒さんもっ」
「成程っ」
「……っ」

太狼の言葉に、頷く輝矢と少し俯くハチ。

「わかった。行く」

ハチが顔を上げ、リンゴのいる玄関へと歩いて行く。

「では私もっ」
「アンタは自宅謹慎中でしょっ！」

ハチについて行こうとした輝矢の顔の前に、勢いよく突き出されるリンゴの右手。

「ええ～っ」
「え～じゃないわよっ！オトポリの資料勝手に見といて、自宅謹慎で済んだだけ有り難く思いなさいっ！！」
「思いません」

「思いなさいよっ！！」

不満げな輝矢に、リンゴが何度も怒鳴りをあげた。

「はぁ～っ！気分悪いっ！とっとと行くわよっ！とっととっ！」

「おっおうっ」

かなり機嫌が悪くなってきたリンゴが、怒鳴り口調でそう言って玄関を出る。そんなリンゴに気圧されながら、続けて玄関を出るハチ。

「じゃあ、行ってくる」

「うん～っ、一生戻って来なくていいよぉ～っ」

「……。」

笑顔で手を振る太狼に、顔を引きつって固まるハチ。

「私が恋しくなったらすぐに戻って来るのですよ、ハチっ」

「まぁ、それはねぇーと思うけど……」

こちらも笑顔で手を振る輝矢に、ハチが目を逸らし気味に答える。

「じゃっ」

「ええっ」

ハチが軽く前足を上げ、リンゴの後について玄関を出ると、玄関の扉はゆっくりと閉まった。

「……。」

扉が閉まった途端に、輝矢の表情が曇る。

「そんな顔しなくても、何も取って食ったりしないよぉ～座黒さんはっ」

「えっ……？」

太狼に明るく声をかけられ、輝矢が少し驚いたように振り向く。

「……そうですよね」

太狼の笑顔を見て、輝矢が少し微笑み、肩を落とす。

「……っ」

そんな輝矢を見て、太狼はどこか鋭い瞳で微笑んだ。

龍国・中央部西より。住宅街から少し離れた、広大な畑の広がる土地に、その巨大な屋敷はあった。

「ここが私の家。龍国主“青守”一族の屋敷よ」

「屋敷、ねぇ……」

大きな黒い門の前に立ち、そう言うリンゴに、少し顔をしかめるハチ。目の前にあるその建造物は、屋敷というよりは、どちらかというと城に近いイメージであった。白煉瓦の壁に、鋭く尖った青の屋根。門から覗く前庭には、噴水も見える。さすがは御伽界最大の国を治める一族の屋敷。朱実や白雪の屋敷と比較しても、それは比べ物にならないほど、荘厳であった。

「こんなでっかい家、俺、初めて見っ……」

――――ズキンっ……！――――

「……っ」

そう言おうとしたハチの頭に、かすかな痛みが走った。

「……？」

急に言葉を止めたハチに、リンゴが首をかしげる。

「何？どうかしたの？」
「……。」
リンゴが問いかける中、大きく目を開いた状態で、まっすぐに青守の屋敷を見つめるハチ。
「俺……ここ、覚えてる……」
「えっ？」
呟くハチに、少し戸惑うリンゴ。
「俺、ここに来た……前にも一度……」
「そうよっ」
「えっ？」
返って来る妙に聞き覚えのあるその声に、ハチは一際、敏感に振り向いた。
「貴方は前にも一度、ここへ来た」
凛と響く高い声。その声の持ち主が、ゆっくりとハチの方へと歩いて行く。
「私と共に、ね」

「孔雀さんっ……」

ハチの振り向いた先に立っていたのは、燃えるような赤髪に、強く光る青色の瞳の、ど派手な着物を着た美しい女性。そう、桜時の実の伯母にして、雀国主の朱実孔雀であった。ハチは大きく目を見開いたが、孔雀は相変わらず笑顔一つ見せない。

「なっ何でっ……孔雀さんがここにっ……」
「パパが呼んだのよ」
「へっ？」

戸惑うハチに答えたのはリンゴであった。

「今回のこと、雀国にも関係のあることだしねっ」
「……っ」

リンゴの言葉の意味を理解し、ハチは少し目を細めた。

「では、どうぞ」
「ええ」

リンゴが黒い門を開け、孔雀を通す。

「桜時」
「……？」

ハチの横を通るその時、孔雀がハチの方を見ることなく声をかけた。

「他国主の屋敷内に入る時は、人化なさい」
「あっ、はっはいっ」

――――ボォォォォォォォ～～～ンっ！――――

孔雀の言葉に頷き、ハチが慌てて人化をする。

「ふぅっ」
「では、どうぞ」

孔雀と人化をした桜時に、リンゴは屋敷への道を指し示した。

「……っ」

桜時はゆっくりと、青守の屋敷に、足を踏み入れた。

第３６章　戦いの後に…　★３

「ここでお待ち下さい」

そう言われリンゴに通されたのは、屋敷の一階、玄関を入った廊下のすぐ突き当たりにある、広い応接室であった。入口側の大きなソファーに、孔雀と桜時が並んで腰かける。

「父を呼んで参りますので」

リンゴは一礼すると、応接室を後にした。応接室には孔雀と桜時の二人だけとなったが、すぐにメイドらしき女がやってきて、二人にお茶を出した。だがメイドは応接室を出ていくのも素早く、部屋はまた孔雀と桜時だけの空間となった。

『……。』

訪れる沈黙に、気まずい表情を見せる桜時。

「少し、顔色が悪いわね」

「えっ？」

言葉を切り出したのは、孔雀の方であった。思いがけない言葉に、桜時が少し驚いたように声を漏らす。

「昨日は、ちゃんと寝たの？」
「えぇ～っと……」

――――ハチぃぃぃ～～っ！！一緒に寝ましょ～～っ！――――
――――ぎゃあああああああああああっっっ！！！――――

思い出される、昨夜の光景。

「いやぁ……あんまり、かもっ」

少し引きつった表情で、桜時はポツリと答えた。

「そう」
「……っ」

素気なく返って来る返事に、桜時が少し視線を落とす。

「――知って、たんだな……」
「えっ？」

今度は桜時が切り出し、孔雀が少し首をかしげた。

「父さん、のこと……」
「……。」

切り出された言葉に、孔雀はそっと眉をひそめた。
八房が桜時の母・雲雀と結ばれた犬孝を連れ戻しに行ったという話が真実であるならば、孔雀は、桜時の父が犬孝であったことも、その父・八房により二人が引き離されたことも、もちろん知っていたであろう。

「あのぉ、さっ」
「何？」

互いに互いの顔を見ぬまま、桜時と孔雀が言葉を交わしていく。

「孔雀さんが、俺を屋敷から出さなかったのって……」

――――イヌはイヌらしく、庭を駆け回っていればいいのっ！――――

必要以上に屋敷内に閉じ込められていた幼少時代。

――――子供がおったとも、知らずにな……――――

桜時の存在を知らなかった八房。

「もしかして……」

抱いてしまったその小さな考えを、桜時が口にしようとする。

「もしかして、さ……」
「私はそんないい人間じゃないわよ」
「えっ？」

桜時が問いかける前に、孔雀の答えは返って来た。

「私が貴方を家から出さなかったのは、イヌの貴方に朱実の名を汚されたくなかったから」

孔雀が感情のこもっていない声で言葉を繋ぐ。

「それだけよ……」
「――うんっ」

言い切る孔雀にそれ以上問いかけることも出来ず、桜時は少し笑みをこぼして頷いた。

「懐かしい話ね」
「……っ？」

少し天井を見上げ言う孔雀に、桜時が少し顔を横に向ける。

「生まれてきたど派手な桃色の髪の子供を見て、二人はよくこう言っていたわ」

天井を見る孔雀が、そっと穏やかに微笑む。

「“父親が白髪で、母親が赤毛だから、ピンク色の髪の子供が生まれてきた”って」

「……。」

桜時は孔雀の方から目を逸らし、少し俯いたまま、唇を強く噛み締める。

「そう言って、よく笑っていたわ……」

孔雀も、どこか噛み締めるように呟く。

「春、ちょうど桜の咲く時に生まれた、桃色の髪の男の子……」

遠い目を見せ、言葉を続ける孔雀。

「だから、“桜時”」

「……っ」

言葉にされる自分の名に、俯いていた桜時が少し目を細める。

「“この子は桜時”と、そう言って笑っていた……」

「……。」

俯いたままの桜時が、そっとその両目を閉じる。

――――お前の本当の名は、里見犬孝……――――

――――俺はっ、朱実桜時だっ……！！――――

自分に名付けられた、そのたった一つの名を守って戦ったことを、今、誇りに思う。

「……っ」

目を閉じたままの桜時は、込み上げるものを堪えるように、強く拳を握り締めた。

「……。」

少し横を向いた孔雀は、そんな桜時の様子を見て、優しい笑みをこぼした。

「すまんすまん。待たせたなっ」

『……っ？』

扉の開く音とその声に、目を閉じていた桜時はその目を開き、孔雀とともに振り向いた。扉から入って来たのは、座黒とリンゴ・イチゴ姉妹であった。

「昨日、遅くまで説教を聞いておったもんでなっ」
「説教っ？」

そう言いながら、桜時と孔雀の座るソファーの向かいにあるソファーへと、腰をかける座黒。そんな座黒の言葉に、桜時が目を丸くする。

「久方ぶりだな、朱実殿」
「そうですわね、青守殿」

顔見知りらしく簡単に挨拶を済ませる孔雀と座黒。

「わざわざ足を運んでいただき、すまなかった」
「いいえ」
「では早速っ」
「……っ」

瞳を鋭くする座黒に、桜時が少し緊張したように息を呑む。

「私の自己紹介をっ！私の名は青守座クゥゥゥーーロっっ！！御伽界最強とされる“龍人”青モォォーーリのっ……！！」
「とっとと本題に入っていただきましょうか」
「はいっ」

張り切って自己紹介を始めた座黒であったが、孔雀の一睨みを受け、すぐさま大人しく頷いた。

「さすがは朱実様……」
「パパの扱いに慣れてるわね」

そんな父の姿に、娘たちは感心したように口々に言う。

「あっあぁぁ～まず今回のことなのだが」
「桜時とその仲間が勝手なことをして、龍国にはとてつもなくご迷惑をおかけいたしましたわ」
「いや、こちらもバカが二人程、同行したようだからな。そちらのみを責める気は毛頭ない」

「……っ」

座黒の“バカが二人”という言葉に反応してか、リンゴは少し疲れたように肩を落とす。

「ぶへぇぇぇぇぇぇ～っくしょんっっ！！」

豪快なくしゃみをしたのは、バカの一人・狐上ゴン。

「ずびっ！」

「嫌っスねぇ～っ！ゴンさんっ、まぁ～た悪いことしたんスかぁ～っ？」

そう声をかけたのは、もう一人のバカ・羊スケであった。

「何で悪いことって決めつけんだよっ！だいたい、何でお前が俺ん家で寛いでんだっ！？ああっ！？」

「へぇっ？」

しかめっ面で言い放つゴンに、気の抜けた返事をする羊スケ。そう、羊スケが寛いでいるのは、ゴンの家の居間。ゴンの方は似合わぬエプロン姿でキッチンに立ち、せっせと朝食の準備をしていた。

「だいったいお前も自宅謹慎中だろうがっ！！」

「俺に自宅謹慎なんかさせたら、一日で餓死っスよぉ～っ」

「自信持って言うなっ」

平然と答える羊スケに、呆れた表情で突っ込みを入れるゴン。

「それより朝飯っ、まだっスかぁ～っ？」

「ご馳走されに来たんだったら、もうちっと謙虚な態度を取りやがれっ！！」

どこまでもマイペースな羊スケに、朝から怒鳴りまくることとなるゴンであった。

戻って、青守家・応接室。

「それで、犬国側の動きは？」
「うむっ」
「……っ」

孔雀の問いかけに、少し気難しげな表情を見せる座黒。その座黒の表情を見て、桜時は眉をひそめた。

「せっ……」
「んっ？」

思わず口を開いたのは、桜時であった。

「宣戦布告してきたっ……とかっ？」
「いやっ？」
「へっ？」

不安げに問いかけた桜時に、座黒が向けたのは、穏やかな笑顔であった。笑顔を向けられた桜時が、キョトンとした表情となる。

「今回の件について、特に何もする気はないそうだっ」

「えっ……」

笑顔で話す座黒に、桜時がさらに混乱した表情となる。

「処分や賠償を求める気も、我らと戦争を行う気も、まったくないとのことだっ」

「そ、れって……」

「まぁ要は何にもなかったことにしてくれたってことだな」

「……っ」

その言葉に、桜時が少し目を見開く。

――――まだ……四大国を倒す気なのか……？――――

――――諦めはせん……先送りにするだけじゃ……――――

別れ際の、八房の背中が思い出された。

「じじいっ……」

桜時がそっと笑みをこぼす。桜時の言葉は、少しだけかも知れな

いが確かに、八房に届いたのだ。

「……っ」

嬉しそうに笑みをこぼしている桜時を見て、孔雀もそっと笑みをこぼした。

「では、犬国は龍国に戦争の意志は示さないと？」

「ああ、それどころか今回の件について、何の要求もなしだっ。寛大なもんだよっ」

青守家で桜時が座黒から話を聞いていた頃、桃原家のリビングでもちょうど同じように、輝矢たちが金汰からその話を聞いていた。

「それはつまりませんね」

「ねぇ～っ、戦争とか一回見てみたかったのにぃ～」

「ガッハッハっ！！それもそうだなぁっ！！ガッハッハっ！！」

「何、この不謹慎な会話っ……」

不満げな輝矢と楽しげに微笑む太狼と、陽気に笑い飛ばす金汰の様子を傍から見ながら、ユキジが何とも呆れた表情を見せた。

「ふいぃ～っ！」

「んっ？」

傍から見ていたユキジの元へ、妙に汗をかいて疲れた様子のモンキがやって来た。

「なぁ～にぃ～？どっか行ってたのぉ？」

「おうっ……ちょっとヘンゼル巻くために中心街までな……」

「それはお疲れ様っ」

げっそりした表情で答えるモンキを、ユキジが労う。昨晩、家に戻ってきてからというもの、しばらく離れていた時間を埋めるためか、ヘンゼルはモンキをひたすら追いかけ回していたのであった。

「んっ？あれぇ？クマ公やぁ～んっ」

「うん～何か龍と犬、戦争しなくて大丈夫っぽくなったみたいだよお～」

「へぇ～っ」

そう告げるユキジに対し、モンキはあまり興味なさそうに答えた。

「そういやぁアイツ……どないしとんやろ」

不意に思い出したように、モンキが呟く。

「えっ？何か言った？」
「んっ？あっあぁ～別にっ！何でもないでぇっ！」
「そう？」

「あああああっっ！！門貴様ぁぁぁぁっっ！！」
「げぇっ！！来たっ！！」

中心街から家へと戻って来たヘンゼルに見つかり、勢いよく表情を歪ませるモンキ。

「レッツラヴっ！！ウィズミィィィィ～～～っっっ！！！」
「のおおおおぉぉぉぉぉぉうっっ！！！」
「お疲れぇ～っ」

突っ込んでくるヘンゼルから必死に逃げ去るモンキに、ユキジは暢気な表情で軽く手を振った。

第３６章　戦いの後に…　★４

後ろから聞こえてくる声に振り返ったのは、犬仁であった。

「犬智」

里見の屋敷のすぐ外に立っている犬仁の元へと駆け込んでくるのは、笑顔を見せ、犬仁で向けて大きく手を振った犬智であった。

「では早速、発表しますっ！あいうえお作文っ！第四弾っ！犬智のっ……！」

「ああぁ～っ！傷はもういいのかっ！？」

「へっ？」

あいうえお作文を発表しようとした犬智の言葉を、故意に強く遮り、犬仁が引きつった笑顔で問いかける。

「うんっ！八房様がよく効くお薬をくれたのっ！」

「そっそうかっ」

上手く話題が変わり、犬仁がホッと一息つく。

「ヒトちゃんはぁ？」

「私は、もう大丈夫だ」

「ヒトちゃんっ！」

「……っ？」

「そぉっ！そんなにすごいんだねぇ～っ！桜時様のお仲間さんの羽根ってやつっ！」
「ああ……」
感心したように言う犬智であったが、犬仁は犬智が自然と口にした“桜時様のお仲間”という言葉に、少し表情を曇らせ、俯いた。
「ジンちゃ～んっ！！」
「……っ？」
またしても聞こえてくる声に、犬仁と犬智が同時に振り返る。
「犬信」
「ホントなのぉ～っ！？八房様が龍国に戦争仕掛けるのやめたぁ～っていうのっ！」
「ああ」
少し不満げな表情で問いかける犬信に、犬仁は穏やかな表情で頷いた。
「信じらんないよっ！ねぇっ！？レイレイっ！！」
「ああ……」
怒ったように振り向いた犬信の横には、いつも以上に鋭く眼鏡を光らせた犬礼の姿。
「あんな腐った奴ら……とっとと滅ぼすべきだ……特に虎国、虎国の腐り姫……」

「そうだよぉっ！レイレイなんて、虎国のお姫様にちょ～お間抜けに氷づけにされちゃったんだからぁ～っ！」
「殺すぞ……？腐れ小僧……」
犬礼が皆に知られたくはないことを、包み隠さずバラす犬信に、犬礼が冷たく殺意を向ける。
「まぁそう言うな。八房様もお考えあってのことだ」
「ただ単に孫への可愛さあってのこととしか思えませんけどねぇ」
「……っ」
またしても違う声が聞こえてきて、犬仁が振り返る。
「犬義っ」
犬仁の後方にある木の幹へともたれかかるようにして立っているのは、どこか不適な笑みを浮かべた犬義であった。犬義の方を見た犬仁が、少し眉をひそめる。
「お前は、そういう口のきき方しか出来ないのか？」
「生まれ持ったものですからね」
少し呆れたように問いかける犬仁に、犬義は笑みを浮かべたまま答えた。
「それよりアレ、どうにかしてもらえません？」
「アレっ？」

犬仁が、犬義が指差した方に目をやる。

「うおおおぉぉぉぉっっ！！絶対、俺が一番強いんだぁぁっっ！！
あのクソ狐ぇぇぇっっ！！！」
「この世にあんな恐ろしい顔の生き物がいっとはぁ～っ……もっと
もっと強くならねばならんだぁぁぁ～～よぉぉぉ～～っっ！！」

「……。」

犬仁が見たその先には、何やら物凄い意気込みで必死に修行して
いる犬忠と犬悌の姿があった。

「なっ何だっ？」

戸惑った様子で、首を傾ける犬仁。

「さぁ～？何やら今回の戦いで感化されたみたいですけどっ」
「感化っ……？」

犬義の言葉に、犬仁がさらに表情をしかめる。

「ええ、何をそんなに刺激されたのかは知りませんけどねぇ」
「フフっ」
『……っ？』

急に笑い声を漏らす犬智に、犬仁と犬義が不思議そうに振り返る。

「そういうヨシ君だって、今朝、一人で思いっきり修行してたじゃないっ」
「えっ？」
「そっ！それはっ……！」

笑って言う犬智に、犬仁が少し目を丸くし、犬義が珍しく焦ったように声を張った。

「こっ今度は不甲斐無い戦いをしないようにだなぁっ」
「それが感化って言うんじゃないのっ？」
「うっ……」

何とか言い繕おうとした犬義に、さらに笑顔を向ける犬智。その笑顔に、犬義が思わず口ごもる。

「みんなっ、戦う前より、いい顔になって戻って来たっ」

必死に修行をしている犬忠・犬悌や、まだ言い合っている犬信・犬礼を見て、犬智が穏やかな笑顔を見せる。

「私はそう思うよっ！」
『……っ』

そう微笑んで振り返る犬智に、犬仁と犬義もそっと笑みを浮かべ、俯いた。今回の戦いは八犬士にとって無駄ではなかった。そのことだけは、確かに言える。

「そういえばぁ、ヒトちゃんもちょっと明るくなった気がするけど、何かいいことでもあったの？」
「えっ？」

――――女の子は笑てた方が、断然可愛ぇぇでっ！――――

「……っ！」

過ぎる言葉に、犬仁が頬を赤く染める。

「なっ！何もないっ！決してないっ！何一つないぞっ！！？」
「えっ？」

必死に否定してくる犬仁に、聞いた犬智の方が驚いた顔を見せる。

「絶対、一切、まったくないぞっ！！？」
「あっ、うんっ……」

あまりに必死な犬仁に、犬智はとりあえず頷いた。

「なっ何かあったみたいだね……」
「嘘のつけない人だからな……」

こっそりと囁く犬智に、犬義は少し呆れたように微笑んだ。

「……。」

顔の熱を冷ませた犬仁が、ゆっくりと歩を進め、広がる安房の森を、犬国の領土を見つめる。

「ここは、いつかまた“国”になる……」

『……っ』

犬仁の言葉に、他の六犬が一斉に顔を上げる。

「今は、確信を持ってそう言える……」

広がる犬国を見つめ、清々しい表情で微笑む犬仁。

「だからっ……」

犬仁が笑顔のまま、皆の方を振り返った。

「我ら七犬、力を合わせ、必ずやここを“国”にしようっ！」

『……っ』

犬仁の言葉を受け、他の六犬も笑みをこぼした。

『おうっ！！』

笑顔の七犬と犬国を、昇ったばかりの朝日が、明るく照らしていた。

「……。」

里見の屋敷の縁側に座り、八房もまた、昇ったばかりの朝日を見つめていた。

「眩しいな……」

八房がそっと微笑む。

「伏……」

その右手には、明るく微笑む伏の写真が、大事そうに握りしめられていた。

「いずれは和解の道も……？」
「ああ、視野に入れていくつもりだ」
孔雀の問いかけに、しっかりと頷く座黒。
「まさかあの犬国と、和解を結ぶ日が来るとは……」
「ああ」
互いに感慨深い表情で呟く座黒と孔雀。
「すべてはお前のお陰だ、朱実桜時」
「えっ……？」
そう言って微笑む座黒に、桜時は少し戸惑った様子で顔を上げた。
「そっそんなっ……俺は別にっ……」
「かつての四大国は、神の力を持つ犬国を恐れ、何とも非情なことをした」
「……っ」

座黒の言葉に、桜時の表情が曇る。見守っているリンゴ・イチゴや、孔雀もまた、その表情を曇らせた。

「私自身、かつて先祖の行いに幾度となく悩まされた。だが、私にはどうすることも出来なかった」

「……。」

桜時が少し目を細める。龍国を背負っている以上、勝手な考えで犬国をどうにかすることなど出来ない。座黒の苦悩した様子が、桜時には十分伝わってきた。

「礼を言う」

ゆっくりと頭を下げる座黒。

「ありがとう……」

「……っ」

頭を上げるとすぐに微笑んだ座黒に、桜時も穏やかな笑みを向けた。

「朱実桜時よ」

「……っ？」

改めて名を呼ばれ、桜時が少し戸惑うように座黒を見る。

「お前の持って生まれた力は、とても強力な力……」
「……っ」
その言葉に、桜時がそっと眉をひそめる。
「いつか、お前自身を苦しめることになるやも知れん、神の力だ」
「……。」
座黒が続ける言葉に、横にいる孔雀もまた、少し表情をしかめた。
「その力を、お前はどう受け止める……？」
桜時をまっすぐに見つめ、問いかける座黒。
「……っ」
桜時が少し考えるように俯く。
――――“命力”がっ……世界に必要であることを示すためにっ……！！――――
思い出される、八房の言葉。
「神に……なろうとは思わない……」
俯いたまま、そっと言葉を漏らす桜時。

「けどっ……」

桜時がゆっくりと顔を上げ、そして、微笑む。

「誰かを救いたいとは、思うっ……」

「……っ」

その桜時の微笑みを見て、座黒は少し驚いたように目を開いた。
しかし、すぐに目を細め、穏やかな笑みを浮かべる。

「――そうかっ」

『……っ』

座黒の横に立つリンゴとイチゴも、どこか嬉しそうな笑顔を見せていた。

「良い甥子を持たれたな」

今後は孔雀の方を見て微笑む座黒。

「孔雀殿っ」

「……。」

笑いかける座黒に、孔雀はそっと目を細めた。

「いえっ」

孔雀が小さく声を出す。

「“甥”と思ったことは、一度もありません」

「えっ……？」

「……？」

まっすぐに前を向き、そう言い放つ孔雀に、戸惑うように首をかしげる座黒と桜時。

「自慢の、“息子”です」

「……っ！」

孔雀から放たれた言葉に、桜時が大きく目を見開く。

「そうか」

そんな孔雀を見て、再び穏やかに微笑む座黒。

「良き母を持ったな」

座黒が深く下を向いている桜時の方を見る。

「朱実桜時……」

「――――はいっ！」

深く俯いた桜時は、かすかに震えた声で、しっかりと頷いた。

一方、その頃。桃原家。

「すっごいなぁ～っ」

「ええ、すごいですっ」

何やら感心したように声をあげるユキジとグレーテル。

「何がどうなってこんな色になってんだろ？」

「煙吹いてますしねっ」

二人が見つめているのは、ダイニングテーブルに置かれた、怪しげな色の煙を吹いているジュース。先程、太狼がハチへ入れた、激苦・良薬ジュースであった。

「どんな味するのかなぁ～」
「試してみましょうか」
「へっ？」
「えっ！？」

あっさりと言い放つ輝矢に、ユキジとグレーテルが少し焦った表情を見せる。

「たっ試すって……」
「サルぅ～っ！このジュース、飲んでみませんかぁ～？」
「んんっ？」
「あっ、やっぱ自分じゃ飲まないんだ」

謎のジュース片手に、廊下でヘンゼルに追いかけられているモンキを呼ぶ輝矢を見て、妙に納得した様子で呟くユキジ。

「輝矢んのジュースぅぅぅ～～っ！？喜んでぇぇぇっっ！！」

モンキが陽気な笑顔でキッチンへとやって来て、ウキウキと輝矢から謎ジュースを受け取る。

『……っ』

「ゴクゴクゴクっ！」

皆が見つめる中、謎ジュースを一気飲みしていくモンキ。

「ううっ……！！」

『おっ』

勢いよくその表情をしかめるモンキを、皆が冷静に見守る。

「ぐへはらあああぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」

「きゃあああああああっっっ！！！門貴様ぁぁぁぁぁぁぁっっ！！」

顔色を緑にし、白目を剥いて倒れ込むモンキに、ヘンゼルが悲鳴をあげて駆け寄った。

「殺傷力は抜群のようですね」

「うん。勉強になった」

「皆さん……お仲間、ですよね……？」

とても落ち着いた様子で言葉を交わしている輝矢とユキジを見て、グレーテルは思わず呟いた。

「門貴様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～っっっ！！！」

「おーおーっ」

キッチンの方から聞こえてくる悲鳴に、少し表情をしかめているのは、リビングのソファーに腰をかけた金汰であった。

「賑やかなこってっ」

「いつもよりは静かな方だよぉ～」

呆れたように言い放つ金汰に、その向かいに座る、甘さダルダルココア片手の太狼は、いつもの爽やか笑顔で答えた。

「それにしてもっ、最近、やたらと色々起こるなぁっ」

少し疲れたように言いながら、ソファーに大きくもたれかかる金汰。

「鬼人再出没っ、鬼人化人間っ、海底での出来事に、今回の犬国騒動っ……」

金汰の表情が、徐々に鋭くなっていく。

「なぁ、桃ちゃんっ……」

「なぁにぃ～？金ちゃんっ」

少しトーンを落として呼びかける金汰に、太狼が陽気な声を返す。

「世界は……動き出しているんだろうか……？」

「……っ」

その金汰の問いかけに、太狼がふと笑みを止めた。

「――――うんっ」

太狼が鋭い瞳で、笑う。

「確実に、ねっ……」

「……っ」

太狼の答えに、眉をひそめる金汰。

「だから僕らも、動き出さなくちゃ……」

窓の外を眺める太狼が、どこか遠い目を見せる。

「新たなる……ステージへ向けてっ……」

遠い目を見せた太狼は、どこか楽しげに微笑んだ。

「まぁ話は以上だ」

そう言って、座黒は今回の件を締めくくった。

「せっかく久々に来たことだし、ゆっくりしていくといい」

「ええ」

「桜時も」

「へっ？」

座黒の言葉に頷く孔雀と、思いきり首をかしげる桜時。

「俺っ、やっぱ来たことあるのか？この屋敷に」

「んんっ？」

桜時の問いかけに、座黒が目を丸くする。

「何だ？お前、覚えておらんのか？」

座黒が少し驚いた様子で、桜時に問いかける。

「桜時ってば、私やイチゴと遊んだことも覚えてないのよっ」

「何っ？」

リンゴの言葉に、座黒がさらに目を丸くする。

「あの時、お前、そんなに小さかったかぁ？」

「いっいやっ、俺に聞かれてもっ……」

「まぁ無理もないわねぇ」

『へっ？』

共に首をかしげていた桜時と座黒が、横からしみじみと言うリンゴの声に振り向く。

「あんなことがあったんじゃねぇ」

「あんなことがあったんですから……無理もないです……」

口々に呟く、リンゴとイチゴ。

「あんなことっ？」

「あっ」

座黒が顔をしかめる中、桜時がふと思い出したような表情となる。

――――あんなことがあったんだし、無理もないわねぇ～っ――――

龍国を訪れ、初めてリンゴ・イチゴに出会った時も、二人は口々に呟いていた。

「そうだっ！思い出したっ！」

桜時が思わず立ち上がって叫ぶ。

「前から聞こうと思ってたんだっ！！一体、何々だよっ！？“あんなこと”ってっ！！」

リンゴとイチゴへ、勢いよく問いかける桜時。

『……。』

二人が気難しげな表情で、少しの間、黙りこむ。

「だっダメですっ……！私の口からはとてもっ……！」

「私も面倒だからパスぅ～っ」

「何だよっ！！それはっ！！」

とても言えないといった様子で、両手で顔を覆うイチゴと、とりあえず面倒臭そうな表情を見せるリンゴ。そんな二人、主にリンゴに、桜時が突っ込みを入れる。

「はぁっ」
「……っ」

聞こえてくる深々とした溜息に、振り向く桜時。

「孔雀さんもっ……！知ってるんだろっ！？」
「えぇっ？」

勢いよく問いかける桜時に、孔雀が少し驚いたように顔を上げる。

「えっえぇ～っ、まっまぁねっ……」

少し言葉を濁しながら、答える孔雀。

「教えてくれっ！！」
「……。」

まっすぐな瞳で願う桜時に、孔雀が少し表情をしかめた。

「急いてまで知ることじゃっ……」
「俺は俺のことをもっと知りたいんだよっ！！」

孔雀の言葉を、桜時が強く遮って叫ぶ。

「これからの道をっ……進んでいくためにもっ……！」

「……っ」

必死に叫ぶ桜時に、孔雀はそれ以上、言い返すことはしなかった。

「はぁっ、わかったわよ」

「えっ？」

どこか諦めたように肩を落とす孔雀に、桜時が目を丸くする。

「教えてあげるわ」

鋭い表情となって、ゆっくりと桜時の方を見る孔雀。

「貴方の、最大の秘密を、ね……」

「……っ」

孔雀に刺すように見つめられ、桜時が眉をひそめた。

「俺のっ、最大の秘密っ……？」

第３６章　戦いの後に…　★４（後書き）

第３部、終了です。
ここまでお付き合い、どうもありがとうございました。

第37章　ハチ、最大の秘密？　☆1

――――貴方の……最大の秘密をね……――――

龍国・エセお菓子の家こと桃原家。

「あれっ？」

目を丸くした輝矢が、ゆっくりと顔を上げる。

「来ていたのですか、派手派手スズメババア」

「だっれが派手派手スズメババアよっ！！」

そんな輝矢に勢いよく怒鳴り返すのは、本当に派手派手しい着物姿の孔雀。

「相変わらず、その性格は直っていないようねっ！破天荒女っ！！」

孔雀が腕組みをし、睨みつけるような瞳を輝矢へと向ける。

「何故、私が性格を直さなければならないのです？アナタが生まれ変わりなさいっ」

「あああぁぁぁぁんっっ！！？」

「まぁまぁ孔雀さんっ！とりあえず座って、座って」

「ふんっ！」

横にいる桜時に宥められ、孔雀が悪態づきながらも、桃原家リビングのソファーへと腰を下ろす。青守家で座黒との話を終えた二人は、桃原家へとやって来ていたのであった。久々に会った輝矢と孔雀は、今日も相性最悪の様子である。

「ああ、ハチ君、おかえっ……あっれぇっ？」
「……っ？」

そこへココア片手にやって来た太狼が、孔雀の方を見て声を漏らすと、孔雀が振り向いた。

「げっ」

太狼の姿を見た孔雀の表情が、勢いよく引きつる。

「これはこれはっ」

どこか腹黒い笑みを浮かべる太狼。

「お久し振りですねぇ、孔雀サンっ」
「えっ？」
「……っ？」

その太狼の言葉に、輝矢と桜時がどちらも首をかしげる。

「知り合い？」
「まぁ、一応ねっ……」

戸惑うように問いかけた桜時に、孔雀は少し頭を抱えながら答え

た。

「昔、愛人だったのぉ～っ」
「全力でウソつくんじゃないわよっ！！」

胸の前で両手を組み、可愛らしい笑顔で言い放つ太狼に、孔雀が全力で突っ込みを入れる。

「ったくっ！相変わらず、その最低な性格は直っていないようねっ！失礼タローっ！！」
「孔雀サンはぁ～っ、シワ、増えましたぁ？」
「殺ぉぉぉぉぉぉすっっ！！！」
「だあああああああああっっ！！」

思わず立ち上がって太狼に飛びかかっていこうとする孔雀を、桜時が後ろから必死に止める。

「なんっでお前らは、師弟揃って、孔雀さんを刺激するようなことばっか言うんだよっ！！」
「なんでだろうねぇ～っ？」
「人類って不思議ですねぇ」
「お前らなっ……」

心から不思議そうに首をかしげている輝矢と太狼に、桜時が呆れた表情を向ける。

「でもなぁんで孔雀サンが僕の家にぃ？」
「ハチの最大の秘密を教えに来たそうですよ」

「ハチ君の最大の秘密ぅ～？」

輝矢の答えに、太狼が少し顔をしかめる。

「全然、興味ないやぁっ」

「だろうなっ」

笑顔で答える太狼に、特に驚いた様子はないが、顔は引きつる桜時。

「けどさぁ～っ」

『……っ？』

そこへ口を挟んだのは、輝矢の横に座っているユキジであった。

「こんだけ出生の秘密が明らかになっといて、今更、桜時の最大の秘密とかあるぅ～？」

「せやなぁ～っ」

そのユキジの言葉に相槌を打ったのは、ユキジとは逆側の輝矢の横に座っているモンキ。

「最大の疑問やった、ド派手なピンク頭の謎も解けたしなぁ～っ」

「俺の最大の謎って髪色か……？」

そのモンキの言葉に、少し呆れた表情で問いかける桜時。

「けどっ、それは俺も思ってたんだっ」

桜時が真面目な表情となって、孔雀の方を見る。

「犬国行って、俺の知りたかったことは結構、全部わかったような気ぃするしっ」

孔雀に、少し戸惑った視線を送る桜時。

「これ以上の最大の秘密とか、思いつきもしねぇーんだけど……」

「それは、ここへ行けばわかるわっ」

「……っ？」

そう言って孔雀が桜時に差し出したのは、地図らしきものの書いてある一枚の紙切れであった。桜時がその紙切れを受け取る。

「自分の目で確かめてくることね」

「孔雀さんは行かねぇーのかっ？」

「ええっ」

桜時の問いかけに、孔雀がすぐさま答える。

「死にたくないものっ」

「えっ……」

あっさり答える孔雀に、桜時が思わず固まる。

「えっ……？」

桜時は、目を丸くして、首を傾けた。

こうして、桜時の最大の秘密を知るべく、地図に書かれた場所を目指し始めたご一行。

「随分、国はずれまで来たなぁ～っ」
「ねぇ～っ、ホントにこっちであってんのぉ～っ？」

都会的な景色から、鬱蒼と生い茂って来た周りの景色に、モンキとユキジが少し戸惑いながら、前を歩くハチへと問いかける。

「ああ、地図ではこっちになってる」

孔雀から貰った紙切れを見ながら、答えるハチ。

「やっぱボク、帰ろっかなぁ～」
「ええっ!?どないしたんっ!?ユッキーっ!!乗り物酔いっ!?」
「乗り物乗ってないでしょ～っ。ってか、桜時の秘密ごときのために、死ぬのとか真っ平ゴメンだしぃ～」
「うぅ～ん、それは確かにっ」

「本当に死ぬわけねぇーだろぉ？」

ハチが少し振り返り、しかめた表情を見せているモンキとユキジに軽く声をかけた。

「あんなの、孔雀さんが大袈裟に言ってるだけだってっ！」

「確かに大袈裟なオバサンだけどさぁ～今回は目がマジっぽかったっていうかぁ～」

「私は死ぬとしても行きますよっ」

「……っ」

ユキジの声を遮るようにして聞こえてくる声に、ハチが顔を上げる。

「ハチのことを知れるなら、命を賭しても構いませんからねっ」

「……。」

迷いなく微笑む輝矢に、ハチが少し呆れたように肩を落とす。

「お前、本当に出て来ていいのかぁ～？自宅謹慎中なんだろぉ～？」

「謹慎なんて、あってないようなものです」

「いや、あるだろっ」

あっさりと答える輝矢に、ハチが突っ込みを入れる。

「おおー、来た来た」

『……っ？』

前方から聞こえてくる声に、一行が一斉に顔を向ける。

「ゴンっ？」
「ったくっ」

一行より少し先の道沿いの木にもたれかかり、相変わらずの不機嫌面を見せているのはゴンであった。ゴンが少し疲れたような表情を見せながら、木から背を離す。

「遅っせぇーんだよっ！お前らっ！！」
「アナタと待ち合わせた覚えは微塵もありませんけど……？」

一方的に怒鳴りあげてくるゴンに、輝矢が冷たい瞳を向ける。

「なんでゴンがこんなところにっ？」
「リンゴに押しつけられたんだよっ！」

歩み寄りながら問いかけるハチに、ゴンが面倒臭そうに答える。

「お前らの案内役をなっ」
「案内役？」

ゴンの言葉に、皆が目を丸くする。

「ああっ！あんのヤローっ、自分で夜通し説教しといて、“私、寝るからぁ～”とか言って押しつけてきやがってよぉっ」
「ちょっちょちょっ！ちょい待ってっ！」

「ああっ？」

言葉を遮るように声を出すハチに、ゴンがその不機嫌面を向ける。

「べっ別に案内とかしてもらわなくっても、孔雀さんから地図もらったしっ」

「せやせやぁ～ゴンゴンなんて、お呼びでないでぇ～」

「謹慎中なんでしょ～？家で大人しく油揚げでも食べときなよぉ～」

「私たちは誰もアナタのガラの悪い案内なんて、必要としてませんから」

「……っ」

口々に言い放つ輝矢たちに、ゴンの表情が徐々に引きつっていく。

「だあああああっっ！！うっせぇなぁっ！！人がせっかく親切で来てやってるってゆーのにっ！！」

「親切って顔っ？」

「逆ギレされてもなぁ～っ」

「この上なく見苦しいですね」

「あのなぁっ！！」

失礼な言動を続ける一行に、ゴンの目つきがさらにさらに悪くなっていく。

「とぉ～にぃ～かぁ～くぅっ！！大人しく案内されとけっ！！」

ゴンが強く言い放つ。

「でないとっ……死ぬぜっ……？」

『……っ』

急にその瞳を鋭くしたゴンに、輝矢たちの表情が一斉に曇った。

「またそれかよっ……」

「一体、何なわけぇ～？」

「怪物にでも会いに行くんかぁ？」

少し肩を落としたハチの横から、モンキとユキジが問いかける。

「はぁっ……」

その問いかけに、深々と肩を落とすゴン。

「怪物の方がっ……まだ可愛げがあるかもなぁ……」

『へっ？』

「……っ」

ゴンのその呟きに、首をかしげる三匹の横で、輝矢はそっと眉をひそめた。

ゴンを案内役として迎えた輝矢たちは、孔雀の地図を頼りに、再び道を進み始めた。龍国中心街を北に歩くこと一時間。森も抜け、もう龍国の国境も間近となったところで、輝矢たちは一軒の屋敷を発見した。

「あれですか？」

「ああ。地図通りだと、あの屋敷で間違いないと思う」

輝矢の問いかけに、地図と見比べながらハチが頷く。目の前にある屋敷は、巨大ではあるが古ぼけた洋風の屋敷で、壁にはコケが生えており、どことなく気味の悪い雰囲気を醸し出していた。醸し出してはいたが、特に何の変わりもない、ごく普通の屋敷である。

「何事もなく、普っ通に着いたなぁ～」

「ねぇ～っ、死の危険なんかまったく感じなかったけどぉ？」

ユキジが少し非難するような目で、ゴンの方を振り向く。

「じゃあキジ、お前、屋敷の屋根にタッチして、ここまで戻って来い」

「えっ？」

「……っ」

ゴンの言葉に、ユキジが目を丸くし、輝矢が少し眉をひそめる。

「なんでボクがそんな面倒臭いことぉ～っ」

「いいから行って来いっ」

「ったくぅ～っ」

強く言い放つゴンに、ユキジが面倒臭そうにしながらも、仕方ないといった表情でその青い翼を広げる。

「一瞬で戻って来てあげるよっ！」

鳥としての誇りに火でもついたのか、ユキジがその瞳を鋭くして、屋敷の方へと飛び立っていく。

「こんな距離、すぐにっ……！えっ……！？」

『……っ』

飛び始めたユキジがすぐに表情をしかめ、見ていた輝矢たちもその表情を曇らせる。

「なっ何っ……？」

進むのを止め、空中で止まるユキジ。

「距離がっ……縮まらないっ……？」

飛んでも飛んでも変わらない屋敷との距離に、ユキジが戸惑いの表情を見せる。

「“結界”っ……」

「ああっ」

鋭い表情で呟いた輝矢に、ゴンは短く頷いた。

「この屋敷には、全体を包むように特殊な結界が張ってあるんだ」

「……っ」

よく知ったような口調でそう話すゴンに、輝矢の表情はさらに曇る。

「何の為に？」

「……。」

問いかける輝矢に、今度はゴンの表情が曇る。

「行きゃあわかるっ」

その問いかけに、ゴンはどこか濁すようにそう答えた。

「もぉ～っ！行けないってわかってて人を……ってかキジを飛ばせないでよねぇ～っ！」

どこか不満げな表情を見せながら、ユキジが輝矢の肩の上へと降り立つ。

「そういうの試させるんだったら、サル走らせとけばいいじゃ～んっ！」

「がびぃぃぃーーんっ！！ひどいわぁっ！！ユッキーっ！！」

ヒドい言いようのユキジに、モンキがショックを受ける。

「でも結界が張ってあんだったら、どうやって中入るんだよっ？」

「大丈夫だ。俺が結界の解き方を知ってる」

少し焦ったように問いかけたハチに、ゴンが自信満々に答える。

「この結界を解くには……」

『……っ』

ゴクリと息を呑む、ハチ、モンキ、ユキジ。

「“結界解いてちょぉぉ～～っっ！！”と叫ぶんだっ」

『……。』

その答えに、一瞬にして固まる皆。

「全然、面白くないですよ？」
「ギャグじゃねぇーよっ！！本当だっ！本当っ！！」
「二点っ」
「だっからギャグじゃねぇーっつってんだろうがっ！！」

呆れきった表情でそう言う輝矢に、ゴンは怒鳴って否定しつつも、少し恥ずかしそうな表情を見せていた。

「誰も結界解くのに“結界解いて”とお願いはしねぇーだろうという、逆転の発想らしい」
「どんな化け物が住んでいるのか知りませんけど、とりあえずバカではあるようですね」

ゴンの解説に、輝矢がさらに呆れた表情となる。

「まぁいいです。とっとと解いて下さい」
「えっ？」

輝矢の言葉に、ゴンが少し顔を引きつる。

「やっやっぱ俺が言うのか……？」
「当たり前でしょう」
「……。」

キッパリと言い放つ輝矢に、ゴンがさらに表情を引きつる。

「なぁ～ハチ公っ、いっせぇ～のぉせぇで一緒にっ……」
「断るっ」

「……。」

ハチに一瞬で断られ、ゴンが少し固まる。

「ああぁ～っ！もうっ！しゃーねぇなぁっ！！」

意を決した様子で顔を上げ、屋敷の方へと顎を上げるゴン。

「……っ」

ゴンが瞳を鋭くし、思いきり息を吸い込んだ。

「“結界解いてちょおおおおお～～～っっ！！！”」

ゴンの声が、静かな周囲に響き渡る。

「“ちょっ”て……」

「うっせぇなぁっ！！決まってんだから仕方ねぇーだろっ！！」

小バカにしたように笑う輝矢に、ゴンは勢いよく突っ込んだ。

「結界が解かれた……」
「侵入者だ……」
「侵入者っ……」

暗い闇の中で響く、無数の声。

「あの方に報告を……」
「報告、報告……」

数個の足音が、どこかへ向けて走り出していき、徐々に遠くなって聞こえなくなっていく。

「侵入者を……迎え討てっ……」
「迎え討つ……」
「迎え討つっ……」

蠢く殺気に、闇はさらに深さを増した。

第37章　ハチ、最大の秘密？　☆2

一方、無事、結界を解くことの出来た輝矢一行とゴンは、蔦のからまった黒い門を通り抜け、長い前庭を歩いて、やっと屋敷の前まで辿り着いた。

「ふぅ～っ、やっと着いたねぇ～」
「ホント、先程のキジでは一生、辿り着けそうになかったですものね」
「そういうの、むし返さないでよっ……」

輝矢の笑顔の言葉に、肩に乗っているユキジが少し表情をしかめた。

「では早速、中へ入りましょうか」
『おうっ』

輝矢の言葉に三匹が返事をし、一行が玄関らしき、少し赤茶けた巨大な扉の前へと立つ。

「いやぁ～まぁ待て待て待てっ」
『……っ？』

何やら得意げに声をあげたゴンに、一行が一斉に振り返る。

「ここでまぁ～た案内役の俺の出番ってわけだなぁ～っ」

腕を組み、少し踏ん反り返った態度を取りながら、得意げな口調を続けるゴン。

「この門はなぁ～っ、“地獄の玄関”って言って、怪力男が千人揃っても開けられないっつーっ……！」

「よっ」

――――ボォォォォォォ～～～ンっ！――――

「あっ？」

ゴンが解説を続けている中、ハチが白い煙に包まれて桜時の姿となる。

「“瞬花”っ」

――――パァァァァァァーーーンっ！――――

桜時がその赤茶けた扉に右手を当てると、その怪力男が千人揃っても開けられないという扉は、あっさりと無数の桃色の花びらとなって散っていった。

「さっ、入ろうぜっ」
「ええ」
「……。」
何てことなさげに屋敷内へと足を踏み入れていく一行を見ながら、ゴンは玄関前で固まっていた。

屋敷内に窓はなく、明かりもついていないので、外はまだ昼だというのに、中はひどく薄暗かった。玄関から続くのは、扉も分かれ道もない、ひたすら長い一本の廊下。外から見た時に、こんなに奥行があっただろうかと疑問を抱きながら、一行が廊下を歩き進んでいく。

「不気味ですねぇ。怖くて仕方ないのでハチ、手を繋ぎませんか？」
「繋ぐかっ！！ってか、お前が怖くて仕方ないってガラかよっ！！」

後ろを歩く輝矢に勢いよく突っ込みを入れながら、桜時が一行の先頭をきって廊下を進んでいく。

「ったくっ」

――――カチっ！――――

「んっ？」

先頭を歩いていた桜時が、足元から聞こえてきたスイッチの入るような謎の音に、ふと足を止める。

――――バァァァァァァァーーーーンっ！！――――

「のわあああああああああああああああっっっ！！！」

「ハチっ……！」

廊下の床と天井から勢いよく突き出てくる、鋭く尖った金属の刃。桜時が後ろに転がりこむようにして、何とかそれをかわす。倒れた桜時に駆け寄る輝矢。

「トラップかぁ～」

「うあぁ～死ぬかと思った……」

ユキジの言葉を聞きながら、ホッとしたように胸を撫で下ろす桜時。

「あぁ～おっほぉんっ！」

そこへ咳払いをしながら、最後尾からしゃしゃり出てくるゴン。

「この廊下はなぁっ、“串刺しの廊下”といってどんな野郎でも決して通ることの出来ないっ……！」

「サルっ」

「あいあいさぁ～っ！」

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

「あっ？」

解説しようとしたゴンの言葉を遮り、輝矢がモンキを呼ぶ。輝矢の呼びかけに答えると、モンキが人化をして如意棒を構えた。

「如意棒・第一の舞っ……“空”っ……！！」

――――バァァァァァァァァーーーーンっ！！――――

門貴の放った風が、天井と床から突き出していた刃を、一本残らず斬り倒した。

「どぉ～うっ！？輝矢んっ！惚れたっ！？ハレたっ！？」

「さっ、とっとと先へ進みますよぉ～」
「輝矢ぁぁぁぁ～～～んっっ！！」

「……。」

スタスタと先へ進んでいく輝矢と、それを必死に追いかける門貴を見ながら、ゴンはまたしても固まった。

その後も、廊下を歩き進める輝矢たちに、次々と難解な屋敷のトラップが降りかかった。

例えば、廊下の途中、先への道を塞ぐ、透明のガラスの壁。

「これはなぁ“電気ガラスの壁”といって、少しでも触れると一瞬で感電死させられちまうっつーっ……！」
「キジっ」
「うん～」

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

「へっ……？」

ゴンが目を丸くする中、輝矢に名を呼ばれ、人化した由雉が電気ガラスの壁の前に立つ。

「“左翼・滅羽”っ」

――――パァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

由雉の放った赤い羽根が電気ガラス壁に突き刺さると、電気ガラス壁は一瞬にして消え去った。

「さっ、行こ行こぉ～っ」

「……。」

進んでいく一行に、またしても固まるゴン。

例えば、燃え盛る炎に包まれた、二階へと続く螺旋階段。

「こいつはなぁっ！“業火の階段”といって、誰であろうと決して

上がることの出来ないっ……！」
「“水月”っ」

――――バッサァァァァァァーーーンっっ！！――――

「あっ……」

解説をしていたゴンの目の前で、輝矢が水月を放ち、業火の階段の業火を、あっさりと消し去った。

「さっ、上がりますよぉ～」

「……。」

ゴンはすでに固まり過ぎて、間抜けな人形のようになっていた。

「はぁっ……俺、帰ろっかな……」

「おぉ～いっ！何やっとんねんっ！ゴンゴォ～ンっ！」

「とっとと上がって来ないと、置いてっちゃうよぉ～っ」

螺旋階段の下で落ち込んだように座り込んでしまっているゴンを、すでに二階へと上がった門貴と由雉が、手すりから身を乗り出しながら呼ぶ。

「どうしたんだぁ？アイツっ」

「男は変にプライドの高いところがありますからね」

ゴンを見下しながら首をかしげている桜時の横で、呆れた表情を見せている輝矢。

「ああいうクダらない男になってはいけませんよ、ハチっ」

「へっ？」

笑顔を向ける輝矢に、言葉の意味はわからないが、何となくゴンがひどいことを言われていることだけは理解し、桜時は少し顔を引きつった。

「ゴンゴンのヤツ、全然、上がって来ぉへんでぇ～輝矢ぁぁ～んっ」

「仕方ありませんね。もう放っておいて、とっとと先へっ……」

『……っ』

「……っ！」

門貴の言葉に答えようとした輝矢が、周囲の気配に気付き、表情を鋭くする。

「侵入者……」
『侵入者っ……』
「迎え討て……」
『迎え討てっ……！！』

『……っ！！』

吹き抜けとなっている三階の廊下から、数個の人影が、輝矢たちの方を目がけて飛び降りてきた。

「なっ何だっ……！？」

『……っ』

「クっ……！」

深々と笠を被った三人の者たちが、戸惑っている桜時たちに向かって、鋭く光る刃を振り下ろす。

「村雨丸っ！」
「如意棒っ！！」
「“右翼・裂羽”っ！」

向かってきた人影に対し、桜時・門貴・由雉がそれぞれ素早く、武器を取った。

――――パァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

「……っ」

上から聞こえてくる衝撃音に、階段に座り込んでいたゴンが、勢いよく顔を上げる。

「何だっ……！？」

少し焦った表情を見せたゴンが、急いで螺旋階段を駆け上がった。

「何者っ……」

交戦している三人の様子を見ながら、輝矢が眉をひそめる。

「……っ！」

そんな輝矢の元へと飛んでくる、石製の笠のようなもの。

「クっ……！」

輝矢が素早く動き、それを避ける。

「甘いわっ……！」

「……っ」

輝矢の避けた石笠をキャッチし、またすぐさま輝矢へと投げつける、一人の坊主老人。再び向かってくる石笠に、輝矢はさらに表情を鋭くした。

「……っ！」

「何っ……！？」

石笠を素早くかわし、老人の元へと突っ込んでいく輝矢に、老人が驚いた様子で声をあげる。

「……っ」

輝矢が老人へ向け、勢いよく右足を振りかぶった。

「フハハハハっ……！小娘の蹴りなんぞっ、この硬い笠でっ……！」

「それがっ、どうしたんです……？」
「何っ……！！」

体の前で盾のようにして、先程投げたものより一回り大きな石笠を構える老人であったが、輝矢は構わず右足を振りきった。

――――バギコォォォォォォォォーーーーンっっ！！――――

「ぐほへはあああああああああああああああっっっ！！！」

輝矢の蹴りが老人の石笠を粉々に砕き割り、老人が勢いよく吹き飛ばされ、体が壁に埋め込むような形で激しく叩きつけられた。

『いいぃっ……！？』

その光景に驚き、他の三人の笠男たちが、戦いの手を止める。

「ふぅっ……」

右足を下ろし、そっと一息つく輝矢。

「痛つつつつつつつっ……」

めり込んだ壁から、何とか起き上がる老人。

「じじい相手に加減というもんを知らんのかっ！！お前はっ！！」
「いきなり石ブン投げてくるようなじじいに、加減の必要性を感じませんでしたので」
非難するように叫ぶ、結構丈夫そうな老人に、輝矢が冷たく答える。

「ったくっ！最近の若いもんはぁ～っ！」
「おいっ！どうしたっ！？」
『……っ？』

老人が最近の若者に怒りを感じている中、螺旋階段を駆け上って二階へとやって来るゴン。そのゴンの声に、輝矢や老人たちが皆、振り返る。

「あっ」
「おっ？」

互いに驚いたように声を漏らすゴンと老人。

「地蔵（ちーぞう）のじじいじゃねぇーかぁっ！」
「おおぉ～っ！お前っ、ゴンかぁっ！」
『へっ？』

互いの名を呼びあげ、どこか嬉しそうな笑みを浮かべるゴンと、地蔵と呼ばれた老人に、輝矢や桜時たちが目を丸くする。

「大きくなったなぁ～っ！ゴンっ！」
「じじいはじじいのまんまだなぁ～っ！」

「なっ何だ……？」
「さぁ？」

懐かしそうに手を取り合う二人の姿に、首をかしげながら輝矢の元へと集まる桜時たち。地蔵とともに向かってきた笠男たちも、大人しくなって壁のすぐ横に並んでいる。

「いきなりどうしたんだぁ？それにコイツらっ……」
「ああぁ～っ！コイツら、俺の連れなんだっ！」
「アナタの方が連れでしょう？」
「うっせぇなぁっ！ちっとは黙っとけっ！！」

ゴンの連れと言われたことに不満げに口を挟む輝矢に、ゴンが勢いよく怒鳴り返した。

「あの人に会わせたくて連れて来たんだけどっ……」
「あの方にかぁ？」

ゴンの言葉に、地蔵が少し表情をひそめる。

「いっくらゴンの連れといってもなぁ～、得体の知れない奴らをあの方に会わせるわけにはっ……」

＜構わないさっ……地蔵……＞

『……っ』

頭に直接響くようにして聞こえてくる女性の声に、輝矢たちは驚いたように顔を上げた。

「声っ……？」
「一体、どっからっ……」

吹き抜けになっている三階まで見回しても、声の主らしき者の姿は見当たらない。皆が戸惑いの表情を見せる。

「だがっ……！」
＜大広間へ……通しな……＞
「わっわかったっ……」

言い返そうとした地蔵であったが、再び聞こえてくる声に素直に頷いた。

「あの方が仰るんなら仕方ねぇな」
「サンキュっ！地蔵のじじいっ！」

少し肩を落とす地蔵に、ゴンが笑顔を向ける。

「こっちだっ！礼儀のなってない若者どもっ！」
『……っ？』

あまり丁寧でない言い方をしながら、地蔵が輝矢たちに指し示したのは、吹き抜けとなっている三階まで続いている、高さのある非常に大きな扉であった。扉には竜をかたどった神秘的な模様が施されている。地蔵がその扉の前に立ち、ドアノブに手をかける。

「あの方の前で失礼なことはするなよぉっ！」
「それは中にいる方次第ですよ」
「……っ」

地蔵の注意に少しも従う様子のない輝矢に、地蔵が顔をしかめながら、ゆっくりとその扉を開いていく。

『……っ』

ゆっくりと開かれていくその巨大な扉に、輝矢たちが皆、息を呑んだ。開かれていく扉の先に広がってくる景色を、まっすぐに見つめる。

『なっ……！』

扉の向こうにいた“その者”に、輝矢たちは一斉に瞳を見開いた。

「竜っ……」

輝矢が思わず呟く。

「……。」

大広間の最奥で、その体を休ませていたのは、深い青色に金色の角の輝く、鋭い紅眼の巨大な一羽の翼竜であった。畳んではあるが見事な翼に、床に広々と広がっている尾、白く光る爪。その姿は見る者すべてを圧倒するほどに、雄々しく、そして美しかった。

「そいつらが……客人かい……？」
「あっあああっ」

ゆっくりと問いかける竜に、地蔵が少しかしこまって返事をする。

「お休みのところをすまなかったなっ、トマトっ」
「とまとっ？」

地蔵の口にした、竜の名らしき単語に、輝矢が少し眉をひそめる。

「構わないさっ……」

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

少し笑みをこぼした竜が、白い煙に包まれていく。

「丁度、今……起きたところだったからねぇ……」

『……っ！！』

白い煙が晴れると、そこには深い青色の髪に強い紅の瞳の、色白の美しい女性が、豪華で大きなソファーの上に寝転がるようにして座っていた。着物の襟元は大きくはだけており、その豊満な胸元がチラチラと見え隠れしている。少し乱れた着物の裾からは、長く細い足が二本、これ見よがしに伸びていた。纏め上げられた髪から、数本の髪の毛がこぼれ落ちており、それがまた妖艶で美しい。

「うっひゃ～っ！色っぽっ！」

その女性の姿に、門貴が思わず声をあげる。

「見とうだけで鼻血出そうやなぁ～っ」

「ボクは君の発言に溜息が出そうだけどねぇ」

そう言って鼻をつまむ門貴に、由雉が呆れた表情を向ける。

「ふぅ～」

――――パンっ、パンっ――――

『……？』

二つほど手を叩くトマトという名の女性に、輝矢たちが首をかしげる。

『ぞろぞろぞろぞろっ……』

「おっ？」

広間の壁にある扉が開くと、そこから続々と若い青年から老人まで、幅広い年齢層の男の集団が、一列となって出てきた。

「髪を梳きます……」

「風を送ろう……」

「足を揉みます」

「爪を磨く」

「ああ……頼むよ……」

男たちは、一人はトマトの髪を梳き始め、一人は大きな扇子でトマトに風を送り、一人はその美しい足のマッサージを始め、一人はその爪を磨いた。大勢の男たちが、それぞれに細かく分かれて、トマトの世話をしていく。

『……。』

その光景に、思わず固まる輝矢たち。

第37章　ハチ、最大の秘密？　☆3

「うっはぁ～っ、これを美女バージョンでやりたいっ」
「悪趣味過ぎて言葉も出ませんね」
「ドン引きぃぃ～～っ」

憧れている門貴と、かなり引いている輝矢と由雉。

「お前たちかい？私の結界やトラップを破って、ここまでやって来たっていうのはっ」

世話をされながら、トマトが、ゆっくりと体を起こし、輝矢たちの方を見る。

「随分とやるじゃないかぁ」

「それはトマト、コイツら、ゴンの連れだからっ」
「だからこのキツネの方が連れですって」
「だからお前、いちいちそこにこだわんなよっ！」

「ゴンっ……？」

輝矢とゴンが少しモメている中、トマトが地蔵の出した名に反応し、その顔を上げた。

「ゴンっ……」

トマトの紅の瞳が、ゴンの姿を捉える。

「ご無沙汰してます……」

ゴンがその紅の瞳に応えるように、まっすぐな瞳をトマトへと向けた。

「トマト先生っ……」

「先生……？」

ゴンのつけたその敬称に、輝矢が少し眉をひそめる。

「ゴンっ……！」

『……っ？』

トマトが嬉しそうな笑顔を見せて身を乗り出した瞬間、トマトの姿がソファーの上から消えた。

「ゴンじゃないかぁっ！」

『えっ……！？』

次の瞬間、トマトがゴンの目の前、輝矢たちのすぐ近くへと現れる。

「早っ！！」
「いっいつの間にっ……」
「……っ」

戸惑うようにトマトを見つめる門貴と由雉の横で、表情を曇らせる輝矢。

「見え……なかった……」

自分の目でも捉えることの出来なかったトマトの動きに、輝矢は少し警戒するようにその表情を険しくした。

「いぃ～い男になったねぇ～！ゴンっ！」

トマトが楽しげに微笑み、ゴンの顎へ手をかける。

「私の二百五十八番目の旦那にならないかぁ～いっ？」
「結構ですっ」

トマトの誘いを、ゴンが瞬殺で断る。

「にっ二百五十八番目っ……？」

しかし由雉が気になったのは、ゴンへのプロポーズよりも、その前の数字。

「トマトには二百五十七人の旦那がいるんだぁ。ちなみにわしゃあ、二百十一番目っ」

「どんだけ一妻多夫制っ！！？」

「ってか旦那だったのっ！？」

地蔵の言葉に、驚きまくる門貴と由雉。

「まぁ半数以上は寿命で死んじまったがぁ」

「あの人、一体何歳なのさっ……？」

「まさに怪物ですね……」

付け加えられる地蔵の解説に、輝矢と由雉が表情を引きつる。

「相変わらず釣れないヤツだねぇ～っ」

少し残念そうな表情を見せながら、トマトがゴンから離れる。

「まぁいいさぁっ！お前の連れの中から目ぼしいのでもっ……んっ？」

「……。」

そう言って輝矢たちの方を見渡したトマトが、トマトの方を見て茫然としている桜時に気づく。

「あれっ？そういえば桜時、さっきから一言も発してなくないっ？」
「どないしたんやぁ～？イヌぅ～っ」

「……。」

由雉や門貴の呼びかけにも答えることなく、ただまっすぐにトマトを見つめ続ける桜時。

「ハチっ？」
「ばっ……」

戸惑うように輝矢が顔を覗き込んだその時、桜時が大きく口を開いた。

「ババアぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！！」

『へっ……？』

トマトを指差し、勢いよく叫ぶ桜時に、輝矢たちが皆、目を丸くする。

「しっ知り合いっ？」
「ばばあってお前っ、こんなキレイなお姉さまに向かって、そない

なっ……」
「思い出したっ……」
門貴と由雉の言葉を遮り、桜時が呟く。
「思い出したっ……！」
「ハチっ……？」
「あれはっ……俺がまだ七才の頃っ……」
輝矢たちが戸惑うように見つめる中、桜時は突如、自分の過去についてを語り出した。
――――あれは、桜時がまだ七才だった頃。
孔雀に連れられ、桜時は龍国主・青守の屋敷を訪れていた。
「これはこれは朱実殿、よくぞお越し下さった」
「この度はお招きいただき、ありがとうございます。青守殿」
孔雀と桜時を迎えたのは、今よりもさらに若々しい頃の青守座黒

であった。その頃は丁度、桃タローが鬼人を倒して間もない頃で、オトポリの隊員として鬼人退治の功績を称えられた座黒は、若くしてすでに龍国の国主となることが決まっていた。新しく国主の座につくとのことで、孔雀は座黒に挨拶に来たのであった。

「そちらが例の？」
「ええ、桜時ですわ」
「……。」

孔雀により、桜時は座黒に紹介された。だがまだ幼い桜時は、仏頂面でそっぽを向き、挨拶などしようともしなかった。

「申し訳ありません。あまり外に出したことがないもので、今一つ礼儀が……」
「いや、構わぬよっ」

そんな桜時に少し表情をしかめる孔雀であったが、座黒は笑って許した。

「こんなところに居てもつまらぬであろう。おいっ、リンゴ、イチゴっ」
「なぁ～にぃ～？パパぁ～っ」
「お呼びでしょうか……？お父様……」
「……っ？」

座黒に呼ばれ、部屋へと入ってくる水色髪の幼い姉妹。リンゴ、十三才・イチゴ、七才。それが桜時とリンゴ・イチゴ姉妹の初めての出会いであった。

「桜時君と遊んであげなさい」

「はぁ～いっ！行こ行こっ！」
「えっ？あっ、ちょっ……！」
「あっ、待ってよぉ～お姉ちゃんっ！」

その頃から活発であったリンゴは桜時の手を引くようにして無理やり部屋から連れ出した。

「ちょっと待っ……！」
「ほらっ」

――――パシィっ！――――

「えっ……？」

慌てて追いかけようとしたイチゴの手を掴む、桜時の手。

「お前も行くんだろっ？」
「あっ、はっはいっ……」

その頃から控え目であったイチゴは、桜時のその言葉に頬を赤く染めた。

「何して遊びたいっ？」
「ぼっ僕は別にっ……」
「じゃあ鬼ごっこねぇっ！」

「ええっ！？決めるの早っ！！」

初対面で戸惑い気味の桜時に対し、まったく動じずにマイペースに話を進めるリンゴ。

「じゃあアンタ、鬼っ！」
「えっ！？ジャンケンとかじゃなくって！？」
「逃げるわよぉっ！イチゴっ！」
「えっ？あっ待ってよぉ～っ！お姉ちゃ～んっ！」
「おっおいっ！！」

桜時の突っ込みをすべて無視し、イチゴを引きつれて早々に逃げていってしまうリンゴ。青守の家の広い庭に、ポツリと桜時が取り残される。

「十秒とか……数えんのかなぁ……？」

わりと真面目に鬼ごっこに取り組もうとする桜時。

「えぇ～っと、いぃーち、にぃーい、さぁーん、よっ……」
「かくれんぼかいっ……？」
「えっ？」

下を向いて数を数えていた桜時が、上から聞こえてくる凛と響くその声に、ゆっくりと顔を上げた。

「坊やっ」
「……っ」

桜時が上を向いた先に立っていたのは、深い青色の髪に紅の瞳の、何とも美しい女性であった。妖艶に微笑む女性に、桜時が思わず目を見開いた後、少し頬を染めて俯く。

「うっうぅんっ……鬼ごっこ」

桜時が俯いたまま、小さな声で答える。

「鬼ごっこ？じゃあお前が鬼かい……？」

「うんっ……」

小さく頷きながら、桜時がゆっくりと顔を上げる。

「そうかいっ……」

「……っ」

顔を上げると、すぐ目の前に女性の穏やかな笑顔があった。幼いながらもその美しさを察してか、桜時の頬がまた赤く染まる。青い髪に赤色の瞳と顔つきが、どことなくリンゴやイチゴに似ていた。

「お姉ちゃんは、リンゴとイチゴの、お姉ちゃん……？」

桜時が少しおどおどとしながら、その女性に問いかける。

「いいやっ」

桜時の問いかけに、笑顔のまま少し首を横に振る女性。

「遠い遠い、おばあさんさっ……」
「おばあ、さん……？」

女性の答えに、桜時が大きく首を傾ける。それもそのはず、女性はどう見ても二十代半ばあたり。“おばあさん”という単語は、似ても似つかなかった。

「坊やっ」
「……っ！」

女性の手が桜時の頬に触れ、桜時が驚いたように目を見開く。

「鬼ごっこなんかやってるより、お姉さんと……もっとイイコト、しないかいっ……？」
「えっ……？」

女性の誘いに、幼い桜時は目を丸くした。

数分後。

「ったくっ！アイツぅっ！全然捕まえに来ないじゃないっ！何やってんのよっ！？一体っ！！」
「お姉ちゃんが無理やり鬼なんてさせるから……」
「えっ！？」

「何でもない……」

あまりにも鬼の桜時が捕まえに来ないので、リンゴとイチゴが桜時と別れた辺りまで戻って来た。機嫌の悪いリンゴに、イチゴが少し困ったように肩を落としている。

『あっ……』

しかし、戻って来た二人は、そこで物凄い光景を目の当たりにした。

「いくよぉっ！“腕ひしぎ逆十字固め”ぇえぇえっっっ！！！」
「ぎゃあああああああああああああああっっっ！！！」

そこにいたのは、広大な庭のど真ん中で、妖艶な美女に勢いよくプロレス技をかけられている少年・桜時。

「とっトマトおばあちゃんっ……？」
「何やってるわけ？あの人は」

その光景を見て、二人が一気に呆れた表情となる。

「どうしたどうしたぁっ！？こんなもんじゃいけないよぉっ！！」

技をかけながら、トマトが楽しそうに声をあげる。

「男は一に顔っ！二にプロレス技っ！今から腕を磨いてっ、将来、私の旦那になりなぁっ！！」
「誰がなるかぁっ！！クソババアぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」
「ほれほれぇ～っ！！いくよぉっ！！“シャイニング・ウィザード”ぉぉぉぉっっっ！！！」
「ぎゃあああああああああああああああっっっ！！！」

青守家の敷地中に、桜時の悲痛な叫びが響き渡った……――――

「あれからというもの……俺は女という女のすべてが恐ろしくなり、一メートル以上接近すると気絶してしまう体質となってしまった……」

『……。』

真剣な表情で語っている桜時であるが、聞いている門貴や由雉は、皆、どこか呆れたような表情を見せていた。

「もしかして、桜時の最大の秘密って……」

「イヌコロがぁ、何で女嫌いかっちゅーことっ？」
「まぁ確かに謎っちゃ謎だったけど……」
「ちゃんと理由があったんやなぁ～」

“こんなのアリか？”という表情を見せながらも、何故か妙に関心してしまう門貴と由雉。桜時がどうしてあれほどまで過剰に女が嫌いだったのか、やっとその謎が解けた。

「ハチが……女嫌いになった原因っ……」

輝矢が少し顔をしかめながら、トマトの方を見る。

「やぁ～っぱあん時のクソガキかいっ！お前っ！」

トマトの方も桜時を認識したのか、桜時を見ながらトマトが嬉しそうな笑みをこぼす。

「てっめぇっ！クソババアっ！俺がお前のせいでどんな目に遭ってきたかっ……！」
「イイ男になるとは思ってたけどっ」
「へっ？」

トマトがまた、ゴンの前からその姿を消す。姿の見えなくなったトマトに、目を丸くする桜時。

「こいつは予想以上だっ」
「ううっ……！！」

次の瞬間、トマトが桜時のすぐ目の前へと現れる。

「ちょっ……！俺の半径一メートル以内に近づくんじゃっ……！」
「お前っ……」

トマトが微笑み、焦る桜時の顎を手に取る。

「ちょっ……！やめっ……！」

「私の二百五十九番目の旦那になりなっ……」

トマトの顔が、桜時の顔へと近づいていく。

――――――　チュっ……　――――――

「……っっ！！！」

「んなっ……！！？」

トマトの唇が桜時の唇に触れると、桜時は大きく目を見開き、輝矢はこれ以上にないくらいにその表情を引きつった。

「がっがふっ……！！」

そのまま白目を剥き、後方へと倒れていく桜時。

「ふぅ～っ！」

気絶した桜時を特に気にすることなく、トマトが満足げな笑顔を見せる。

「二百五十九って、今、俺のこと数に入れただろっ？先生っ」
「まぁ細かいことは気にするなよっ」
「全然、細かいことじゃねぇーけどっ」

適当に答えて微笑むトマトに、ゴンが呆れたような視線を送る。

「よくもまぁ……私の目の前で堂々とっ……」
「んっ？」

怒りに打ち震えるその声に、トマトが不思議そうな表情で振り返る。

「私のハチに手出しをっ……」

「危険やっ！離れろっ！ユッキーっ！」
「オッケィっ！！」

深く俯いたまま、震える拳を強く握り締める輝矢。そんな負のオーラ漂う輝矢の傍から、門貴と由雉が慌てて避難する。

「万死に値しますっ……！」

鬼のような形相で顔を上げた輝矢が、勢いよく右耳のピアスを弾く。

「“月器・三日月”っ……！！」
「……っ」

目覚めさせた三日月を構え、トマトへと飛びかかっていく輝矢。
トマトが少し驚いたように輝矢を見る。

「へぇっ」

しかし、次にどこか楽しげに微笑むと、トマトは避ける素振りもなく向かってくる輝矢の方へと体を向けた。

「……っ！！」

三日月が、トマトへと勢いよく振り下ろされた。

――――・・・・・・・・・っっ！！！――――

『……っ！！』

「なっ……！？」

次の瞬間、門貴・由雉と、輝矢が大きく目を見開いた。

「……。」

輝矢が全力で振り下ろした三日月を、トマトは挙げた右手の小指一本だけで軽々と受け止めていた。

「かっ輝矢の三日月をっ……」

「小指一本でっ……？」

戸惑うように呟く門貴と由雉。

「そっそんなっ……」

「面白い武器を持ってるねぇっ、小娘っ」

「……っ」

信じられないといった表情を見せている輝矢に、トマトが余裕の笑みで話しかける。

「でも武器だけ良くっても……ねぇっ！」

「ううっ！うあぁっ！！」

「輝矢んっ！！」

トマトが軽く小指を払うと、輝矢が三日月ごと大広間の中へと弾き飛ばされた。

「うっ……」

倒れた輝矢が、両手をついてすぐに起き上がる。

「三日月をっ、小指で止めるなんてっ……」

起き上がりながら、険しい表情でトマトの方を見る輝矢。

「あの女は、一体っ……」

「あの人の名は青守トマト」

「……っ」

起き上がった輝矢の元へとやって来ながら、ゴンが真剣な表情でそう言う。

「青守っ……？」

よく知るその苗字に、ゴンの方を見た輝矢が眉をひそめる。

「では、リンゴやイチゴのっ……」

「ああ、“先祖”だっ」

「はっ？」

大きく頷いて答えたゴンに、輝矢が目を丸くし、大きく口を開ける。

「先祖っ？」

親戚か何かという無難な答えを予想していた輝矢にとって、その答えはあまりにも予想外のものであった。その若い容姿と“先祖”という言葉がどうにも結びつかない。

「先祖なわけないでしょう。さらにバカになったんじゃないですか？キツネ」

「誰がじゃっ！！」

あっさり否定する輝矢に、勢いよく怒鳴り返すゴン。

「先祖なもんは先祖なんだよっ！！」

ゴンがもう一度その言葉を繰り返し、トマトの方へ右手を伸ばす。

「あの人は御伽界・最古の獣人っ！」

「御伽界最古のっ……」

「獣人っ……？」

「……っ」

ゴンの言葉に、門貴・由雉が戸惑ったように言葉を繰り返し、輝矢が表情をひそめる。

「そうっ、千年の時を生きるっ、御伽界最初の“龍人”だっ」

「千年っ……？」

「フっ……」

驚きの表情を見せる輝矢を見て、トマトはどこか怪しげに微笑んだ。

第37章　ハチ、最大の秘密？　☆4

「やめろぉぉぉ～～～っっ！！クソババアぁぁぁぁぁ～～～っっ！！！」

勢いよく叫びをあげて、ベッドから飛び起きるハチ。

「って、あれっ？」

目の前に広がる、ごく普通な感じの部屋の景色に、ハチが目を丸くする。

「ふぅっ、夢かっ」

ハチが安心した様子で胸を撫で下ろす。

「気がつかれました……？」

「んっ？」

横から聞こえてくる、どこかかすれたような声に、ハチがゆっくりと振り返る。

『……。』

振り向いたハチのすぐ目の前にいたのは、全身に包帯を巻いた、まさにミイラ男。ところどころに血のついた包帯と纏った男の、その包帯から覗く小さな目と目が合い、ハチが一瞬、固まる。

「ふんぎゃあああああああああああああっっっ！！！」

次の瞬間、ハチの悲鳴が響き渡った。

「おっ、起きたかぁ～っ？」
「随分、気絶してたねぇ～っ」
「門貴っ、由雉っ」

ハチの悲鳴を聞きつけ、ハチのいる部屋へとモンキとユキジが入ってくる。

「みっみみみみみみっ……ミイラ男っ……ミイラ男がっ……」

二匹に怯えきった表情を向け、目の前のミイラ男を指差しているハチ。

「うん～この人もあの千年竜さんの百八十九番目の旦那だってぇ～っ」
「全身火傷を負っているところを、トマトさんに丁寧に包帯巻いてもらったんが二人の馴れ染めやねんてぇ～」
「だっ旦那っ……？こいつもっ……？」

二匹の説明に、ハチが怯えていた表情を引きつった表情へと変える。

「うちのトマトがいつもお世話になってます……」

「あっいやっ、まったくっ」

丁寧に頭を下げ、右手を差し出すミイラ男に、ハチも少しかしこまりながら、その手を取った。

「ってか、俺っ、どうしたんだっけっ？」

「あの千年竜のオバサンにキッスされて気絶したんだよぉ～っ」

「ほんで屋敷の部屋借りて、休ませとったってわけやぁ～っ」

「キッスっ……？」

――――お前っ……私の二百五十九番目の旦那になりなっ……――――

「そうだった……」

トマトの笑顔を思い出し、ハチが深々と頭を抱える。

「あんのクソババアぁぁ～～っ……」

「もう夜になっちゃったし、桜時も起きたんだから、とっとと帰ろうよぉ～」

「んん～っ、でも輝矢んがあの状態やからなぁ～」
「ふぇっ？」
少し困ったように言うモンキに、ハチが目を丸くする。
「輝矢がどうかしたのか？」
『……っ』
「……？」
ハチの問いかけに、少ししかめた表情で黙り込んでしまうモンキとユキジ。それを見て、ハチはさらに首をかしげた。
「何っ……」
「あれです……」
「へぇっ？」
問い詰めようとしたハチに、二匹に代わってミイラ男が答え、部屋にある大きな窓を指差した。ハチが少し眉をひそめながら、窓を覗き込む。
「あっ……」
「“月器・水月”っ！！」

窓から見えるのは、先程までハチたちのいた大広間。どうやらこの部屋は大広間に隣接しているようである。大広間のど真ん中では、室内ということを気にする素振りもなく、輝矢が三日月を構え、トマトに水月を放っていた。

「へぇ～っ、水芸も出来んのかいっ！よっ！」

『どわあああああああああああああっっっ！！！』

トマトの避けた水月が、広間で普通に過ごしていた地蔵と取り巻きの笠男たちの方へと飛んでいき、地蔵たちが慌てた様子で逃げ惑う。

「やるねぇっ、小娘っ」

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」

余裕の笑みを浮かべているトマトとは違い、輝矢は肩で大きく息をしながら、少し苦しげな表情を見せていた。

「でも私に勝つにはっ、後千年くらい必要かもねぇっ」

「千年後まで生きてるおつもりですか？おばばさんっ」

「千年後にはお前もババアさっ、小娘っ」

「……っ」

「フっ……」

挑発を挑発で返され、顔をしかめる輝矢を見て、トマトがどこか

楽しげに笑う。

「いいでしょうっ、無駄に長いその命、私が絶って差し上げます」

輝矢がさらに表情を鋭くし、三日月を構える。

「竹取輝矢、ばばあ退治いたっ……！」

「輝矢ぁぁ～っ！」

「……っ」

いつもの決めセリフを言おうとした輝矢が、聞こえてくる声に、あっさりと三日月を下ろして、勢いよく振り向く。

「なぁ～にやってんだよぉ～っ！」

大広間と隣接している部屋の窓を開け、そこから顔を出して大きく輝矢に呼びかけているハチ。

「人ん家で暴れんなっていっつも言ってるだろぉ～っ？」

「ハっ……！」

「桜時ぃぃぃぃ～～～っっ！！」

「ぐはぁっ！！」

嬉しそうな笑みを浮かべ、ハチの元へと駆け込んで行こうとした輝矢を容赦なく踏みつけ、こちらも嬉しそうな笑顔でハチの元へと

駆け込んでいくトマト。

「げぇっ！！クソバっ……！！」
「桜時ぃぃぃぃ～～～っっ！！」
「ぎゃあああああああああああああああっっっ！！！」

駆け込んでいったトマトが、イヌのハチを勢いよく抱き締める。
大広間に響く、ハチの悲鳴。

「やめろぉぉぉぉ～～～っっ！！放せぇぇぇ～～～っっ！！クソババアぁぁぁぁ～～～っっ！！！」
「まぁ～た二人でプロレスごっこやろうなぁ～っ！」
「誰がやるかぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」

力強く抱き締めてくるトマトに、ハチが必死に抵抗する。

「……っ！」

そんなトマトの元へ、飛んでくる水の刃。

「ひぃぃっ！！」
「よっ！」

ハチが怯えた表情を見せる中、トマトが軽々とそれをかわした。

「危ないねぇ～っ」

怪しげな笑みを浮かべたトマトが、ゆっくりと広間の真ん中の方を見る。

「私の桜時が怪我でもしたらどうするんだいっ？」

「私のハチから手を離しなさい……」

トマトの視線の先にいたのは、表情から怒りの滲み出ている様子の、見ているだけでも末恐ろしい輝矢の姿であった。

「今っ、すぐにっ！」

「……っ」

睨みつける輝矢を見て、トマトが楽しげに微笑む。

「束縛し過ぎる女は嫌われるよっ、小娘っ」

トマトが余裕の笑みで、輝矢を見下すように見る。

「ねぇっ？桜時っ」

「ひいいいいいいいいいいっっっ！！！」

「……っ」

そう言ってハチの頭を撫でるトマトに、輝矢の額の血管がさらに

浮き出た。

「ひぃえぇぇぇ～～っ！輝矢ん相手に、あないなことをっ……！」
「これ以上刺激したら、世界滅ぼすんじゃないっ？」

そのやり取りを、モンキとユキジが冷や冷やしながら見つめる。

「はぁっ……もういいですっ」

輝矢が少し疲れた様子で肩を落とす。

「今日、出会ったばかりの方に、失礼かとは思いますがっ……」

輝矢が鋭くトマトを睨みつける。

「抹殺いたしますっ」
「いやっ！失礼にも程があんだろっ！！」

本気の瞳でそう言い放ち、素早く三日月を構える輝矢に、トマトに抱えられているハチが思わず突っ込みを入れる。

「死んでから後悔しなさいっ！“月器っ……！」
「トマトさぁ～んっ！」
「……っ」

輝矢が必殺技を繰り出そうとしたまさにその時、黒いローブを纏った老人が、早くもない足で走りながら、大広間の中へと駆け込んできた。

「大変ですぅ～っ！大変なんですぅ～っ！んっ？」
「……。」
「ううっ……！」

間抜けな声を出しながら駆け込んできたローブの老人が、こちらを冷たく睨んでいる輝矢に気づき、その表情を凍りつかせる。

「死んで償いなさいっ」
「ひえええぇぇぇぇぇぇぇっっっ！！！」
「待て待て待て待てっっ！！」

会ったばかりの老人に殺意を向ける輝矢を、ハチがトマトの腕の中から必死に止める。

「惨殺と溺死っ、どちらが良いですか……？」
「ある意味、どっちも惨殺ぅぅぅぅっっっ！！！」
「ったくっ！」
「あっ」

老人への脅迫を続ける輝矢を見兼ね、ハチがトマトの腕の中から飛び出していく。

「おいっ！輝矢っ！やめろっ！！」
「やめます」
「早っ！！」

すぐさまやめる輝矢に、止めたハチの方が驚く。

「ふぃ～っ、短い寿命がさらに縮まったっ……」
「おいっ、大丈夫かぁ？」

胸を押さえ、その場に座り込む老人に駆け寄り、心配したように声をかけるハチ。

「お前は、えっと……」
「私の百四十三番目の旦那のっ」
「……っ」

後方から聞こえてくるトマトの声に、ハチが振り返る。

「魔法使いだっ」
「いやっ！それっ、名前じゃなくて職業だろっ！？」

「どうも、トマトさんの百四十三番目の旦那の魔法使いです」
「えっ！？名前っ！！？」

自己紹介をするトマトの１４３番目の旦那の魔法使いに、大きく

驚くハチ。

「いえ、本名はセンシです」
「ややっこしいわっ！！」

本名を名乗るセンシに、ハチが勢いよく突っ込みを入れる。

「それよりトマトさんっ」
「なんだいっ？」

思い出したように進言するセンシに、トマトが首をかしげる。

「マホウの国より、どうしてもトマトさんの力をお借りしたいとの依頼が入りましてっ……」
「魔法の国？」

センシの言葉に、輝矢が少し眉をひそめる。

「マホウの国か、遠いねぇっ」
「断りますか？」

面倒臭そうな表情を見せるトマトを察し、センシが問いかける。

「うぅ～んっ、けど報酬は捨て難いしなぁ……んっ？」
「……っ？」

少し考え込むように首を捻っていたトマトが、輝矢を見て何か思いついたような表情となる。そのトマトの様子に、少し顔をしかめる輝矢。

「小娘っ、お前、私の代わりに行って、依頼をこなしてきてくれないかい？」

「はぁぁぁ～～っ？」

トマトの思いがけない言葉に、輝矢がこれ以上ないくらいに顔を引きつる。

「誰がっ。何で私がそんなことをっ……」

「そうだよねぇ～っ」

不機嫌に言い放つ輝矢に、トマトがすかさず口を挟む。

「小娘に私の代わりだなんて、荷が重過ぎるよねぇ～っ」

「……っ」

小バカにしたような笑みでそう言うトマトに、輝矢の表情が止まる。

「嫌な予感っ」

思わず呟くハチ。

「いいでしょうっ」

「やっぱりっ……」

ムキになった表情で顔を上げた輝矢に、ハチが深々と頭を抱える。

「私がアナタ何かとは比べ物にならないくらい瞬殺で依頼を片付けてきて差し上げますっ」

「へぇ～っ」

強く言い放つ輝矢を見て、トマトが楽しげに微笑む。

「そいつは楽しみだぁ」

「……っ」

小バカにしたようなその笑みに、少し顔をしかめる輝矢。

「ほらっ！とっとと案内なさいっ！ユーシャっ！」

「いえっ、私、ただのセンシでしてっ……」

「おっおいっ！ちょっ……！待てよっ！」

センシのローブを引っ張り、無理やり連れて行く輝矢の後を、ハチが慌てて追いかける。

「ちょっとぉ～っ！どこ行くのさぁ～っ！」
「待ってやっ！輝矢ぁぁぁぁぁ～～んっ！！」
さらにその後を、隣の部屋の窓から出てきたモンキとユキジが追っていく。

「……っ」
輝矢たちが大広間から出て行くと、広間に残ったトマトが、そっと妖艶な笑みを浮かべる。

「ふわぁぁ～っ、よく寝たぁぁ～っ」
そこへ入れ違うようにして入ってくる、大きな欠伸をしたゴン。
「先生、部屋ありがとうございましたぁ～お陰でよく眠っ……あれっ？」
目を擦っていたゴンが、広間を見回し、目を丸くする。

「竹取たちは？」
「代わりに依頼に行ってもらったとこさっ」
「代わりに依頼ぃ～？あの竹取がぁ～っ？」

トマトの言葉に、ゴンが驚いた様子で聞き返す。

「重症だなっ」
「ゴンっ」
「はいっ？」

こっそりと呟いていたゴンを、トマトが呼ぶ。

「何故、あいつらを連れてきた？」
「……っ」

鋭い瞳で問いかけるトマトに、ゴンの表情が引き締まる。

「私に会わせに来たんだろう？あの小娘を」
「……。」

ゴンが少し俯く。

「アイツは、すべての鬼人を倒し、この世界を救う存在」

真剣な表情で、まっすぐにトマトを見つめるゴン。

「そう、俺が思ったからです……」
「……。」

曇りなく言うゴンに、トマトが少し目を細める。

「そうかい……」

トマトがゴンに背を向け歩き出し、奥にあるソファーへとゆっくりと腰かける。

「お前が誰を世界の希望にしようとお前の勝手だけどねぇ」

ソファーに背を預け、トマトがまっすぐにゴンを見る。

「私は鬼人退治なんてもんに協力する気は更々っ……」

「鬼人の背後に、“あの女”が絡んでいるかも知れないと言ってもですかっ？」

「……っ」

鋭く問いかけたゴンの言葉に、トマトは少し表情を引きつった。

「そうかい……」

トマトが険しい表情を見せ、そっと俯く。

「あの女が……」

そう呟いたトマトの表情は、どこか悲しげであった。

第３８章　魔法の国の三人組　★１（前書き）

すみません。久しぶりの更新です。
原作の方にかかりっきりで、こちらの更新ができませんでした。
本編の「鬼斬りかぐや」ですが、全１００章、無事に完結いたしました。
あちらも携帯からでも読みやすいよう改稿中です。
こちらも今後は随時、アップ予定ですので、よろしくお願いいたします。

第３８章　魔法の国の三人組　★１

千年の時を生きているという、初代龍人・青守トマト。
彼女に入った依頼を何故か受けることとなり、輝矢一行は、トマトの百四十三番目の夫・センシとともに、“マホウの国”へと赴くため、トマトの屋敷を旅立とうとしていた。

青守トマトの屋敷・裏庭。
「でっ？」
無駄に広い裏庭へとやって来た輝矢が、無理やり引っ張ってきたセンシの方を振り向く。
「その“魔法の国”とやらはどこにあるんです？ユーシャ」
「いえっ、ですから私はただの一端のセンシでしてっ…」
輝矢に怯えながらも、何とか名前の訂正を入れようとするセンシ。職業・魔法使い。
「魔法の国かぁ～っ」
天を見上げ、モンキが両手を組んで、目を輝かせる。
「とんがり帽子にホウキに乗ったかわゆい魔女っ子ちゃんとお友達になれるやろかぁ～っ？」
「もっ…物を空中に浮かせたり…とかっ？」
目を輝かせているモンキの横で、隠してはいるがワクワクしている様子のハチ。
「トカゲをカエルに変えたりとかぁ～？」
『……。』
「なっ何さっ？」
自分の言葉に顔をしかめるハチとモンキを、ユキジが少し戸惑いながら見る。
「夢がねぇっ」

「ホンマ、なってないわぁ～っ！ユッキーっ！」
「ボクは君たちと違って現実的なんですぅっ！」
ダメだしをするように言い放つハチとモンキに、ユキジが少しムキになって言い返した。
「現実的になってどないすんねぇ～んっ！ユッキーっ！」
「そうそうっ！何てったって魔法の国だぜぇっ？」
「マホウの国は…」
『……っ？』
魔法の国について熱く語っていたハチとモンキが、聞こえてくるセンシの声に同時に振り返る。
「龍国の国境ともなっております…あの御伽山脈の向こう側にありますです」
「御伽山脈のっ…？」
センシの説明に表情を曇らせ、輝矢がパッと顔を上げる。十分に高いトマトの屋敷の塀の上からでも軽々と見える程に高い山の数々。その頂は雲に隠れ、下からでは見ることが出来ない。
「御伽山脈の向こう側ってっ、そんなのどうやって行くのさぁ～っ？」
顔をしかめたユキジが、責めるような口調でセンシに問いかける。
「へっ？登ってけばええやんっ？」
「バカ」
「がびぃぃぃぃぃーーーんっっ！！！」
普通に答えたモンキであったが、ユキジに一言で片付けられ、かなりショックを受ける。
「御伽山脈は…断崖絶壁の巨大な山々の並び…」
「・・・っ？」
真剣な表情を見せた輝矢が、ショックを受けていたモンキに説明するように言葉を発する。
「どの山も、人や動物の足で越えることは不可能です…」
「あの高さじゃ、トリが飛び越えるのも不可能だしねぇっ」

「山脈を越えてく以外に道はねぇーのかっ？」
輝矢とユキジの説明を聞き、状況を理解したハチが、センシへと問いかける。
「んん～～っ、ナイです」
「じゃあどうすんだよっ！！」
あっさりと答えるセンシに、思わず怒鳴ってしまうハチ。
「行けもしないんじゃ、依頼どころの問題じゃっ…！」
「そこで、魔法使いの私の出番なわけです」
『へっ？』
センシの言葉に、目を丸くする一行。
「私の魔法で貴方がたを魔法の国まで送りましょう。あぁ～どっこいしょっ」
『……っ？』
重い腰を動かし、センシが持っていた木製の杖で、裏庭の地面に何やら円形の模様のようなものを描き始める。
「せっせ、せっせっ」
『……。』
円の中に何やら左右対称の不思議な模様を描き入れていくセンシを、真剣な表情で見つめるハチとモンキ。
「こっ…これはもしやっ…魔法陣っ？」
「うおぉぉ～っ！魔法で魔法の国までワープするんやなっ！？」
描かれていく魔法陣らしきものに、二匹が期待を膨らませる。
「ふぅ～っ、出来ましたぁっ」
杖を地面から離したセンシが、額の汗を拭い、腰を伸ばす。
「さぁ、では皆さん」
『……っ』
振り向くセンシに、ハチとモンキが少し緊張した面持ちで息を呑む。
「あちらの方で一ヶ所に集まって下さい」
『だあああああああああっっっ！！！』

描いたばかりの魔法陣とはまったく逆の方向を指差すセンシに、思わず転ぶハチとモンキ。
「魔法陣使わんのぉっ！？」
「ええ」
「じゃあ何で描いたんだよっ！！？」
「何かカッコいいじゃありませんかぁ」
『……。』
どうやら気分的なもので魔法陣を描いたらしいこの魔法使いに、ハチとモンキが呆れきった表情を見せる。
「まともに取り合っても仕方ありませんよ。とにかく集まりましょう」
輝矢の言葉にあまり納得しきっていない表情を見せながら、ハチとモンキがユキジとともに、センシの指差した辺りに立っている輝矢の元へと集まる。
「この辺りでいいですか？」
「ええ」
輝矢の問いかけに、センシが笑顔で頷く。
「あっ、ハグれるといけないので、お互いの体はよぉ～く掴んでおいた方がいいですよ？」
『へっ…？』
センシのその言葉に、皆が一斉に顔をしかめる。
「ではいきますっ！」
力強くそう言い放ち、センシが高々と持っている杖を振り上げた。
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～っっ……」
「……っ」
何やら唸るように声を出しながら、力を溜めていくセンシに、何となく嫌な予感がして表情を引きつる輝矢。
「皆っ、私にしっかり掴まりなさいっ…！」
「えっ…？」
「喜んでぃっ！！ぎゃあああっ！！」

輝矢の生足に飛びつこうとしたモンキが、勢いよく輝矢に踏み倒される。
「ううぅ～っ…」
「ったくっ…」
ダメージを受けているモンキを左手で掴む輝矢。その光景を見てか、ユキジも大人しく輝矢の肩に身を乗せる。
「ハチっ」
「えっ！？いやっ…！ちょっとそれはっ…！」
右手を差し出す輝矢に、焦った表情を見せるハチ。
「ああ、そうだっ！門貴に掴まっ…」
「いいですからっ」
「ぎゃあああああああああっっっ！！！」
輝矢が右手で軽々とハチを抱え上げると、ハチは白い顔を赤くして悲鳴をあげた。
「いきますぞぉっ！！魔法使いセンシっ！必殺っ…！！」
センシがその瞳を鋭くし、輝矢たちへ向かって杖を振り下ろした。
“竜巻マァァキィィィーーーン”っっっ！！！」

――――ビュウウウウウウウウーーーンっっっ！！！――――

『うっ…！』
激しく巻き起こった竜巻が、輝矢たちへと向かってくる。
「その竜巻に吹き飛ばされれば、マホウの国までホントにひとっ飛びですからぁ～」
「ちょっ…！アナタはどうやってっ…！？」
迫り来る竜巻に焦りながら、輝矢がセンシに問いかける。
「私は行きません」
『行かんのかいっ！！！』
シレっと答えるセンシに、皆が同時に突っ込みを入れる。
「じゃっじゃあ依頼の内容はっ…！？」

「町の人に適当に聞いて下さいぃ～っ」
「はぁっ！？」
勢いよく歪む輝矢の表情。
「何を無責任なことっ…！ううっ…！！」
もう怒りだす寸前であった輝矢の手前に、もう寸前にまで迫る竜巻。今からでは避けることも出来ない。
『うわあああああっっ！！』
輝矢たちが、竜巻に呑み込まれていく。
『だあああああああああああああっっっ！！！』
そして勢いのある巨大竜巻に吹き飛ばされ、輝矢たち一行は、軽々と御伽山脈を越えていった。
「うぅ～んっ、今日もイイ出来でしたっ」
その様子を眺めながら、センシはどこか満足げに微笑んだ。

「ぎゃあああああああああっっ！！ぎゃあああああああああっっ！！」
竜巻に吹き飛ばされ、軽々と御伽山脈を越えたはいいが、その後すぐにやって来る重力に、真っ逆さまとなって落ちていっている途中の一行。落下を恐れてか、単に輝矢に抱えられているからか、ハチがひたすら悲鳴をあげる。
「あぁ～もううるさいなぁ～っ」
その悲鳴に、輝矢の肩の上からうんざりした表情を見せるユキジ。
「お前はトリで飛べるからっ、そう落ち着いてられるんだろうがっ！！」
「うん」
「あっさり頷くなっ！！」
「……っ」
ハチとユキジの会話を聞きながら、確実に迫り来る地面に顔をし

かめる輝矢。
「サルっ、風力で何とか勢いを止めっ…」
「ううぅ～っ…」
「……。」
左手で掴んでいるモンキの方を見る輝矢であったが、モンキは弱った様子で目を閉じていた。
「まったくっ、こんな肝心な時に」
「まぁ君が踏んだんだけどね」
怒ったように言い放つ輝矢に、ユキジがこっそり突っ込みを入れる。
「キジっ、ピアスを弾いて下さいっ」
輝矢がそう言って首を傾け、ユキジの顔の前に三日月型のピアスを持っていく。
「了解っ！ほっ！」
嘴を突き出し、輝矢のピアスを弾くユキジ。
「“月器っ…」
弾かれたピアスが光を放ち、巨大化していく。
「望月っ…！」

――――パァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

月器が巨大な金色の球体となり、輝矢たちを包み込んでいく。落下の速度は一気に落ち、球体に包まれたままゆっくりと地面に着地する一行。
「ふぅっ」
輝矢が地面へと足を下ろすと、ハチとモンキを地面に下ろす。ユキジも羽根を広げ、輝矢の肩から離れた。
「はぁぁ～～っ！死ぬかと思った。色んな意味でっ」
輝矢の右手から解放され、地面に降り立って胸を撫で下ろすハチ。
「“月器”」

輝矢が望月を、元のピアスへと戻す。
「んん～っ…？」
倒れていたモンキがゆっくりと目を開ける。
「あれぇ～？俺ぇっ…」
モンキが少し間の抜けた表情で起き上がる。
「ここはぁ…」
「お待ちかねの“魔法の国”っ」
「うぇっ…！？」
ユキジのその声に、モンキが大きく目を見開く。
「せやったっ！！俺の魔女っ子ちゃんっ…！！」
「……には、見えないけどねっ」
「……っ」
言葉を付け加えたユキジが、どこか不適に笑う。楽しげな表情で顔を上げたモンキも、前方を見た途端、その表情を曇らせた。
「まっ…魔法の国…？」
モンキが戸惑うように声を漏らす。
「ここがっ…？」
山脈を越え、地面へと降り立った一行の前に広がっていたのは、見渡す限り一面の広大な畑であった。色々な種類の野菜やら米やらが生っている。どの畑も、中央には妙に個性豊かな案山子。畑の隙間を縫うようにして、藁製の小さな家が、ポツリポツリと建っている。
「どう見ても、ただの農村ですね」
「まったく魔法の国っぽくないよなぁ～」
モンキの横に並び、輝矢とハチも顔をしかめる。
「どうするのぉ？輝矢ぁっ」
「魔法の国だろうと農村だろうと、依頼をこなせれば、それでいいんです。とにかく村人から依頼の内容を聞きだしましょう」
ユキジの問いかけにそう答え、輝矢が足早に畑ばかりの村へと歩いて行く。

「あぁ～あっ、珍しく躍起になっちゃってぇ」
「……。」
呆れたように言うユキジの横で、ハチが少し表情を曇らせる。
「そこの人っ」
「んだぁ？」
畑の間の道へと足を踏み入れた輝矢が、畑で農作業中の麦わら帽子を被った中年男性へと声をかけた。輝矢の声に、男性が鍬を持つ手を止めて、振り向く。
「この村の中で、青守トマトという千年も生きているクソババアに、何やら依頼した方を知りませんか？」
「んだぁ…？ああっ」
輝矢の問いかけに少し戸惑った後、何かを思いついたのか男性が大きく頷く。
「トイレならあっちだぁよぉっ！」
「あらっ」
返って来る、まったく噛み合っていない答えに、思わず肩を落とす輝矢。
「いえ、ですから私はトマトというババアに依頼をした方を探してっ…」
「ああぁ～っ！」
男性がもう一度大きく頷く。
「水飲み場ならあっちだぁよぉっ！」
「……。」
笑顔で答える男性に、輝矢が表情を引きつったまま固まる。
「何だぁ？」
「人語通じないんじゃなぁ～いっ？」
「仕方ありませんね…他の人間にっ…」
「父ちゃ～～んっっ！！」
『……っ？』
聞こえてくる無駄に明るい男の声に、輝矢たちが一斉に振り返る。

「父ちゃ～～んっっ！！」
『……っ』
輝矢たちが振り返ると、藁製の小さな家から出て、男性のいる畑へと駆けてくる一人の青年の姿が見えた。青年は黒色の瞳で明るい笑顔を見せており、麦わら帽子の下からは茶色の髪が覗いている。その右手には鍬を抱えていた。Ｔシャツ、ジーンズ、長靴と、いかにも農民らしい格好である。
「父ちゃんっ！」
「おおっ、お前はっ…！」
青年が、笑顔で男性に駆け寄ると、男性も笑顔を見せる。
「えぇ～っと…誰だぁったっけなぁ？」
『だあああああああああああああああっっっ！！！』
首を傾げる男性に、畑の中へと勢いよく倒れ込むハチとモンキ。
「息子とちゃうんかぁぁいっ！！」
「えっ？息子っ？」
モンキの突っ込みに男性が目を丸くして青年の方を見る。
「お前は俺の息子かぁ…？」
「そういうアンタは俺の父ちゃんっ！？」
「お前、さっき“父ちゃん”っつってたじゃねぇーかっ！！」
聞き返す青年に、ハチが勢いよく突っ込みを入れる。
『アッハッハッハっハっ！！』
『何がおかしいんだよっ！！！』
今までの会話の流れも関係なく、とりあえず楽しげに笑う男性と青年に、ハチとモンキが怒鳴りつけるように突っ込みを入れた。
「はぁっ…何なのですか…一体…」
「ねぇっ、輝矢…」
「・・・？」
ユキジに名を呼ばれ、輝矢が振り向く。
「あっらぁ～っ？こんなところにいたのぉ？パパぁ～っ！」
「わしは婆さんじゃよ、清美サンっ」

「あっらぁ～！そういうお婆さんこそ、私は節子よぉ～っ」
「そうじゃったか？アッハッハっ！！」
「オッホッホっ！！」
男性と青年のように、身内の中であり得ないような間違いをしては、それまでの流れもすべて無視して楽しげに笑い飛ばしている他の村人たち。
「アッハッハッハ～～っ！！」
「オッホッホっホ～～っっ！！」
村中に、何も考えてないような、暢気な笑い声が響き渡っている。
「……ココ、何か変じゃないっ…？」
「……。」
その光景を見ながら問いかけるユキジに、輝矢が少し目を細める。
「そこのバカ親子っ、ここは一体っ…」
「俺の名前は加々鹿男（かかしかお）だっ！」
「いえ、誰も聞いてませんから」
聞いてもいないのに笑顔で名を名乗る鹿男青年に、輝矢が冷たく言い放つ。
「一体、ここはどっ…」
「父ちゃんの名前っ？父ちゃんの名前はぁ～何だっけっ？」
「マトリョー鹿だぁっ」
「変な名前っ…」
「干支かっ？干支は午だっ！！アッハッハっ！！」
「・・・。」
相変わらず会話の噛み合わないマトリョー鹿に、小バカにしたことさえ無駄であったことを知るユキジ。
「お前らっ！名前はぁっ？」
鹿男が明るい笑顔で輝矢たちへと問いかける。
「私ですか？私は竹取輝矢です」
「俺、桜時」
「俺、門貴ぃ～っ！」

「由雉っ…」
鹿男の問いかけに、それぞれ名を名乗る一行。
「父ちゃ～んっ！今晩のオカズ、何だろぉ～っ？」
『聞けよっ！！』
せっかく名乗ったというのに、思いきり無視して、父とともに畑仕事を始めている鹿男に、皆が一斉に突っ込みを入れる。
「そうだなぁ～っ！今朝のさんまはおいしかったなぁ～っ！」
鹿男の問いかけに、まったく噛み合っていない答えを返すマトリョー鹿。
『アッハッハッハっっ！！』
「だからさっきから全然っ、会話成り立ってねぇーしっ！！」
またもや楽しげに笑いだす二人に、ハチが全力で突っ込みを入れる。
「じゃあお前のあだ名は、“ぐぅー”なっ！」
「遅い上に、この上なく不快なあだ名センスです」
輝矢たちの自己紹介に遅れて反応する鹿男に、輝矢が冷たい表情で指摘する。
「お前が“サクサク”で、お前が“ユージー”、んでお前がぁ“ぷぅー”っ！」
「ちょい待てぇぇっっ！！俺だけ明らかに名前と一文字も関係のないあだ名やぞぉっ！！？」
鹿男のあだ名決めに、勢いよく異議を唱えるモンキ。
「まぁいいじゃんっ。“ぷぅー”っぽいしっ」
「そんなんないわぁぁぁっっ！！ユッキーっ！！」
どうでも良さそうに言い放つユキジに、モンキがさらにショックを受ける。
「あぁ～おっほんっ！」
逸れた話題を元に戻すため、大きく咳払いをする輝矢。
「とにかくっ…」
輝矢が少ししかめた表情を見せ、がっちりと腕を組む。

「この村や人間がおかしいのは一体何で、あのババアに依頼した方というのはどこにいっ…」
「そんなこと、この村の人間に聞いたって無駄よ…」
「……っ？」
横から聞こえてくる、この村にしては陽気でないその女の声に、輝矢がゆっくりと振り向いた。
「まともな人間の言葉なんて、通じるわけないもの…」
「……っ」
どこか冷たい口調でそう言い放ったのは、肩まで伸びた艶のある黒髪に、透き通るような青色の瞳の、少し暗い雰囲気を持った、十五，十六歳の知的そうな少女であった。
「アナタ…は…？」
少し戸惑ったような表情を見せながら、輝矢が少女へと問いかける。
「私の名前は…寒鰤（かんぶり）キリコ…」
「寒ブリっ…？」
「種族は“鰤人”…職業はきこり…趣味は…」
キリコの瞳が鋭く輝く。
「“伐採”っ…」
『ぎゃあああああああああああああっっっ！！！』
いきなり斧を振りきるキリコに、ハチとモンキが悲鳴をあげて後ろへと倒れ込む。
「自然を大切にいいいいっっっ！！」
「ってか俺ら、木じゃねぇーしいっ！！」
「斬るのは…どんなものでも構わない…」
『ひぃぃぃええええぇぇぇぇぇっっっ！！！』
冷たく言い放つキリコに、さらに悲鳴をあげる2匹。
「で…貴方たち…」
「……？」
震え上がっているハチとモンキを気にする素振りもなく、キリコ

が輝矢の方を向く。
「こんなところに…一体、何をしに来たの…？」
「はぁっ…やっとまともな会話の出来る人間が出てきたようですねぇ」
「まぁ斧振り回してる時点で、まともじゃないけどね…」
問いかけるキリコに、輝矢が安心したように肩を落とすが、ユキジはまだしかめた表情を見せていた。
「私たちは青守トマトというクソババアの代わりに、依頼を受けに来たんです」
「依頼…？」
「ええ。でもその依頼内容を聞けなかったので、実際に依頼した方を探しているというわけです」
「なるほどね…」
輝矢の言葉に、納得したようにキリコが俯く。
「この人たち…別に怪しい人間じゃないみたいよ…」
『……？』
とある藁の家を見ながら、誰にともなく話しかけるキリコに、輝矢たちが皆、首を傾げる。
「だから出て来たら…？“レオ”…」
「レオ…？」
「何っ！？怪しい奴らじゃないのかっ！？」
「……っ」
大きな声が聞こえてくると、キリコの見ていた藁の家の裏から、一人の青年が出て来た。金色の短髪に、鋭く光る同じく金色の瞳。貴族風の格好をしたその青年は、キリコ同様、明らかに村人たちとは違う空気を醸し出していた。
「あぁ～はっはっはっ！そうかそうかぁっ！怪しい奴らじゃないのかぁっ！」
急に余裕の笑みとなって、レオと呼ばれた青年が、キリコや輝矢たちの元へとやって来る。

「あぁ～っ！焦ったぁ～っ！驚かすなよなぁ～っ！ホントっ」
「別に驚かせた覚えはありませんけど…」
調子のいい声を出すレオに、輝矢が呆れた表情を見せる。
「まぁ怪しい奴らが出たとしてもぉっ？この俺様っ！最強の“獅人(ししと)っ！獅子戸レオがやっつけてやるけどなぁっ！」
「またそんな出来もしないこと、口にして…」
「うっせぇぞぉっ！キリコっ！」
冷たく言い放つキリコに、強く怒鳴りあげるレオ。
「変なのばっかり出てくんなぁ…」
「まったくです」
呆れた表情のハチの言葉に、輝矢は深々と頷いた。
「まぁ話はだいたい聞かせてもらったっ！」
「盗み聞き…？最低ね…」
「怯えて隠れてたら聞こえてきたんだよっ！！」
漫才のような会話を繰り広げるレオとキリコ。
「その何とかって人に依頼した奴を探してるんだよなぁっ？」
「ええ、根性はともかくとして、知能指数はまぁまぁのようですね」
「お前も大概、失礼だなっ！！」
この村で初めて輝矢たちがここに来た理由を理解したレオを、輝矢が誉めつつも貶す。
「おいっ、鹿男っ」
「んん～っ？」
レオが農作業中の鹿男に呼びかける。明るい笑顔で振り向く鹿男。
「お前、一昨日の昼間にレンコン食った？」
『だあああああああああああっっ！！！』
まったく関係のない問いかけをするレオに、ハチたちがまたもや前方へと倒れ込む。
「何、意味わからんこと聞いとんねんっ！！」
「俺たちは依頼した人間をだなぁっ…！！」
「村で他国の人に依頼をした人ぉ～？さぁ～？聞かないなぁ～っ」

『えええぇぇぇぇぇぇぇぇっっ！！？』
返って来るまともな答えに、ハチたちが目玉が飛び出そうなほどに驚く。
「何がどうなってそう…？」
「色々と思考回路があるのよ…」
首を傾げるユキジに、キリコが静かに答える。
「レオぉ～っ！」
「んっ？」
今度は鹿男がレオの名を呼んだ。
「やっぱり熱帯魚はミジンコだよなぁ～っ！」
「ああ」
鹿男の意味不明な言葉に、レオが笑顔を見せて頷く。
「鹿男が、“お前たち、うちで茶でも飲まねぇーか？”だとさっ」
『えええぇぇっ！？今っ、そう言ったのっ！？』
レオの通訳に、またしても大きく驚くハチとモンキ。
「まったく意味がわからない…」
「ここの村人たち…頭がユルいにしても度を越えていると思うのですが…」
理解に苦しんでいるユキジの横から、輝矢も引きつった表情で問いかけるようにキリコを見る。
「この村は一体…」
「ここは鹿国（かこく）…」
輝矢の問いかけに、キリコが無表情で静かに答える。
「バカとボケとマヌケの住む場所…別称…」
キリコがゆっくりと輝矢の方を見る。
「“アホウの国”…」
「アっ…？」
その別称に、輝矢が目を丸くする。
「アホウの国っ…？」
こうして、輝矢一行は、“アホウの国”へと足を踏み入れたので

あった。

第３８章　魔法の国の三人組　★２

二十分後。

「まさかマホウの国じゃなくって、アホウの国だったとはなぁ…」

どこかしみじみと呟くハチ。マホウの国ではなくアホウの国へとやって来てしまった輝矢一行は、畑で知り合った鹿男の家に訪れていた。小さな藁の家の中に、一行と鹿男の父・母、そしてキリコとレオも入り、家の中は満杯である。

「はぁ～いっ！粗茶でぇ～すっ！」

「母さんっ、それお味噌汁ぅ～っ！」

「あらっ、ホントっ！まぁいいじゃないっ！」

「まぁいいよぉ～っ！アッハッハっ！！」

『……。』

鹿男同様に頭のユルい母親により運ばれた味噌汁を前に出され、勢いよく表情を引きつる輝矢一行。そんな輝矢たちに気づくことなく、鹿男一家は陽気に微笑んでいる。

「確かに阿呆の国っ…」

「ううぅ～っ！俺の魔女っ子ちゃんの夢がぁ～っ！」

納得せざるを得ないといった表情で頷くハチの横で、魔法の国ではなかったことに激しくショックを受けているモンキ。

「皆して聞き間違えるとかあるぅ～？わざと言ったんじゃないのぉ～？」

「あのクソババアならあり得ますね」

ユキジの言葉に、あっさりと頷く輝矢。

「まぁまともな言葉の通じる人間なんていない国だっからさぁっ、その依頼したって奴もっ…」

陽気に笑う一家の横から、まともな言葉を放つレオ。

「依頼したこと覚えてねぇーかもよっ？」

「本当にあり得ますね」

「最悪じゃ～んっ」
しかめた表情で頽く輝矢の横で、面倒臭そうに頭を抱えるユキジ。
「って、お前らは?話が通じるってことは、この国の人間じゃねぇーのか?」
『……っ』
ハチのその問いかけに、一気に曇るレオとキリコの表情。
「まっ…まぁなっ…」
「……。」
「……?」
ぎこちなく答えるレオと、そっぽを向いてしまうキリコに、ハチが少し首を傾げる。
「……っ」
二人の様子に、輝矢もそっと眉をひそめた。
「キリコとレオ、俺が拾ったぁ～っ!」
『……っ?』
急に口を挟んでくる、相変わらず陽気な笑顔の鹿男に、輝矢たちが少し目を丸くする。
「こんなバカに拾われるとは…はぁっ」
「溜息をつくなっ!!溜息っ!!」
「言っておくけど、拾われた覚えはないわよ…?」
深々と溜息をつく輝矢に、レオとキリコが必死に弁解をする。
「二人とも俺の大切な友達だっ!!」
『……っ』
続けられた鹿男の言葉と、その曇りない無邪気な笑みに、レオとキリコが少し驚いたように目を見開く。
『……。』
「……っ」
そっと俯き、どこか嬉しそうに微笑んだレオとキリコを見て、輝矢もそっと笑みをこぼした。
「でぇ、どないするん～?輝矢ぁぁ～んっ」

「そうだよぉ～依頼した人が忘れてるかもっていうんじゃさぁ～っ」
「そうですねぇ…」
モンキとユキジの言葉に、少し困った顔を見せる輝矢。
「何を依頼したかなら…心当たりがあるわよ…」
『えっ…？』
キリコの言葉に、輝矢たちが少し驚いたように顔を上げる。
「心当たり…？」
「ええ…」
聞き返した輝矢に、静かに頷くキリコ。
「この国のはずれの屋敷に…“オズ”という名の魔法使いが住んでいてね…」
「オズ…？」
「魔法使いっ？」
キリコの言葉に、輝矢たちが眉をひそめる。
「魔法使いっていったって、まぁ～たどうせエセモノなんじゃっ…」
「違うわ…」
「……っ」
すぐさま否定するキリコに、ユキジが表情を険しくする。
「オズと傍仕えの四人の魔女は…実際に恐ろしい魔法を使って、この村の畑を焼き払ったりしている…」
「魔法…」
その単語を繰り返し、さらに眉をひそめる輝矢。
「逆らえば畑だけじゃ済まなくなるからなぁ～それでここの村人たちもお手上げ状態ってわけだっ」
「そっかぁ」
付け加えるレオの言葉に、しみじみと呟くハチ。
「それでババアに依頼を…」
「ってか、あの千年竜って、何の仕事請け負ってるわけぇ？」
「えっ…？」
今更という感じだが、ハチへと問いかけるユキジ。

「さぁ？困った人は誰でも助ける何でも屋とか言ってたような…」
「あの性格で人助けなどと、ちゃんちゃら可笑しいですねっ」
「まぁお前もそう変わんねぇーぞっ…？」
トマトの話題となり、勢いよく顔をしかめて言い放つ輝矢に、ハチが呆れた表情でこっそりと呟いた。
「まぁとにかく、そのオズという者の屋敷へ案内して下さい」
『へっ…？』
立ち上がりながら言い放つ輝矢に、目を丸くするハチたちとレオ。
「案内って、何する気っ…」
「決まっているでしょう？ぶっ倒すんですよ」
問いかけたレオに、輝矢があっさりと答える。
「おっ…おいおいっ！まだ事実関係だって、よくわかってねぇーんだぞっ！？」
ハチが立ちあがった輝矢を見上げ、少し非難するように声をあげる。
「それに魔法の正体だってわかってねぇーしっ…もうちょっと調べてからの方がっ…！」
「私はとっとと依頼を完了して、あのババアに見せつけて差し上げねばならないんですっ」
「……っ」
鋭い表情で言い放つ輝矢に、ハチが表情を曇らせる。
「とにかく、とっととそのオズという者を倒せばいいんですよっ」
「……。」
言葉を続けた輝矢に、ハチはどこか複雑な表情でそっと俯いた。
「ではとっとと屋敷までの案内を」
「いっやぁ～っ、俺はちょっとっ…」
輝矢の要求に、苦々しい笑みで俯くレオ。
「怖いから無理よね…」
「うっせぇぞぉっ！キリコぉっ！ホントのことを言うなぁっ！」
口を挟んだキリコに、レオが勢いよく怒鳴り返す。

「じゃあぁ〜俺ぇ〜っ！行く行くぅ〜っ！」
「結構ですっ」
「そぉ〜っ？アっハっハァ〜っ！」
名乗り出た鹿男の好意を、一瞬にして断る輝矢。一瞬にして断られたというのに、鹿男はやはり楽しげに笑っていた。
「ここは私かしら…仕方ないわね…」
レオも鹿男も案内出来ないということで、面倒臭そうに名乗りをあげるキリコ。
「もうすぐ伐採の時間なのに…」
「いや、むしろしないでっ」
「それが自然のためやっ」
こっそりと呟くキリコに、ハチとモンキが口々に突っ込みを入れる。
「じゃあとっとと…」
「マトリョー鹿さんっ！！鹿男っっ！！」
『……っ？』
キリコが立ちあがろうとしたその時、鹿男の家へ麦わら帽を被った中年男が、どこか慌てた様子で駆け込んできた。皆が不思議そうな顔で、そちらを振り返る。
『……誰っ？』
『だあああああああああああああっっっ！！！』
一斉に首を傾げる鹿男一家に、勢いよくズッコケるハチたち。
「隣の隣の家の甘吉さんよ…」
「ああぁ〜っ！向かいの左隣の大五郎さんかぁ〜っ！」
キリコの説明に、納得した笑顔を見せる鹿男。
「この場合、甘吉と大五郎、どっちがあの人なんだ…？」
「さぁ？大五郎とちゃう？」
「まぁ限りなくどっちでもいいです」
首を傾げているハチとモンキの横で、輝矢がとても興味なさそうに言い放つ。

「大変なんだぁっ！！」
甘吉もしくは大五郎であるその男が、焦った様子で声を出す。
「サンショウウオが山の麓で団子を作っただぁよぉっっ！！」
『なっ…！何いいいいいいいっっ！！？』
甘吉もしくは大五郎の言葉に、大きく目を見開いて驚く鹿男とマトリョー鹿。
「何と？」
輝矢がレオに通訳を求める。
「えぇ～っと、“オズの仲間の魔女の一人が、畑を焼き払って暴れてる”ってさぁっ」
『へぇぇぇぇぇ～～っっ』
レオの見事な通訳に、感心したように声を揃えるハチたち3匹。
『って……えええええぇぇぇぇぇぇぇっっっ！！！？』
次に大きな驚きの声が、鹿男宅に響き渡った。

鹿国のとある畑の一つが、赤々とした炎に燃え尽くされていく。
「オォ～ホッホッホっ！！オォ～ホッホッホっ！！」
草を実を、すべてを燃やし尽くしていくその巨大な炎を眺めながら、畑の前で高々とした笑い声をあげているのは、黒いとんがり帽子に黒いローブを纏った、怪しげな女。
「燃えなさぁ～いっ！！もっともっと激しく燃えなさぁ～いっっ！！」
女が燃え盛る炎の前で両手を広げながら、何とも楽しげに笑っている。
「あっ！あそこですっ！」
甘吉だか大五郎だかに案内され、鹿男・マトリョー鹿とともに現場に駆けつける輝矢たち。
「……っ」

輝矢が燃え盛る炎を見て、その表情を険しくする。
「オォ～ホッホッホっ！！」
「うおぉ～っ！俺憧れの魔女っ子ちゃんっ！！」
「今はんなこと言ってる場合じゃねぇーだろうがっ！」
畑の前にいる魔女の姿に興奮するモンキ。そんなモンキにハチが非難の目を向ける。
「とにかくあの火をっ…！」
「やめてよぉっ！！」
「……っ？」
火を止めようと両手を突き出した輝矢であったが、どこからか聞こえてくる子供の声に手を止めて、振り向く。
「やめてよぉっ！！」
笑っている魔女のローブを持ち、必死に訴えているのは、まだ幼い少女。
「せっかくっ…！せっかくお父さんたちが毎日、頑張ったのにぃぃっ…！！」
少女が瞳に涙を溜めながら、必死に訴えを続ける。
「なぁにぃ～？このガキっ…」
「ううっ…！」
冷たい瞳で見下す魔女に、少女の顔が強張る。
「気安く私に…触るんじゃないわよっ」
「ううっ！！」
『……っ！』
魔女が、右手を少女へと向けると、輝矢たちが一斉に焦った表情を見せる。
「クっ…！“月器っ…！」
慌ててピアスを弾く輝矢。
――――ボォォォォォォォォ～～～ンっ！――――
「えっ…？」
月器を目覚めさせようとしていた輝矢が、白い煙の中から飛び出

していく、その獣の姿に、思わず動きを止めてしまった。

――――ブシュっ……！！――――

「ううっ…！！」

何か鋭いものが魔女の手をかすめ、魔女が苦しげな表情で少女に向けられていた右手を引っ込める。

「クっ…！」

「……。」

睨むように顔を上げた魔女の視線の先にいるのは、左右に鋭い角を持った一頭のシカ。

――――ボォォォォォォォォォ～～ンっ！――――

「……。」

シカは白い煙に包まれると、初めて鋭い表情を見せた鹿男へと姿を変えた。

“鹿人”…」

そんな鹿男の様子を見ながら、輝矢がひそめた表情で呟く。

「……っ」

少し俯いた魔女が、自分の右手を見る。すると鹿男の角にかすめられた傷から、赤い血が滴り落ちていた。

「このっ…」

「五ヵ年計画っ！！」

「はぁっ！？」

顔をしかめた魔女に、鹿男が勇ましい表情で言い放つ。しかしその意味不明な発言に、魔女はさらに表情をしかめた。

「何と？」

「“この村の人間に手を出すな”よ…」

「毎回思うけど、何の脈絡もねぇーよなっ…」

見事に通訳をこなすキリコに、ハチが呆れた表情で呟く。

「よくもっ…」

またしても俯いた魔女が、少し震えるような低い声を漏らした。
「よくも私にっ…傷をつけたわねっ…！！」
そう叫び、魔女が勢いよく顔を上げる。
「許さないっ！絶対、許さないわぁっ！！」
魔女が右手を掲げると、白い煙に包まれ、１本のホウキが現れた。
魔女は空中に浮かぶそのホウキを手に取り、軽々とホウキの上に乗る。
「オズ様に言いつけてやるっ！！」
子供のように叫ぶ魔女を乗せたホウキが、上空へと浮かんでいく。
「覚悟してなさいっ！オズ様の魔法にかかればっ、こんな村、コッパ微塵よっ！！」
『……っ』
魔女の言葉に、輝矢や鹿男たちの表情が一斉に曇る。
「オォ～っホッホッホっ！！オォ～っホっホッホッホっ！！」
高々と笑いながら、ホウキに乗った魔女は、遠くの空へとその姿を消していく。
「ああぁ～っ！！待ってぇぇぇ～～っ！！俺の魔女っ子ちゃ～～～んっ！！」
「バカっ…」
見えなくなっていく魔女に必死に手を伸ばすモンキに、ユキジが呆れきった表情を見せた。
『……。』
魔女は去ったものの、その残された言葉に、どこか暗い表情を見せ俯く、村の面々。
「輝矢、火をっ」
「えっ？ああ、そうでしたね。“水月”っ」
輝矢が水力を使い、畑で燃え盛っていた火を消火する。
「はぁ…」
そんな中、深々と溜息をつき、近くの家の方へと歩いて行くキリコ。

『……っ？』

そんなキリコを、輝矢たちが不思議そうに見つめる。

「もう終わったわよ…」

キリコが家の裏側を覗き込む。

「ぶるぶるぶるぶるっ…」

「レオ…」

「ふぇっ？」

キリコが声を掛けたのは、家の裏側でしゃがみ込み、背中を丸めて震えているレオであった。キリコに名を呼ばれ、レオが間の抜けた表情で振り向く。

「そっ…そうかぁっ！いなくなったかぁっ！！」

急に元気になって立ち上がり、家の裏側から皆の方へと出て来るレオ。

「さぁ～ては俺の獅子パワーに圧倒されたかぁっ！？ナッハッハッ！！」

「何だ…？アイツっ…」

「気にしないで…ビビりがうつるわ…」

呆れた表情を見せるハチに、キリコが冷たく答える。

「おっ…俺はビビりじゃねぇーぞぉっ！キリコぉっ！ちょっと臆病なだけだぁっ！」

「どっちにしろ、生きてる価値はないわ…伐採してあげましょうか…？」

「やめてぇぇぇぇぇぇっっ！！！」

「はぁっ…」

レオとキリコの会話を聞きながら、少し頭を抱えるハチ。

「ごめん…みんなっ…」

「……っ？」

聞こえてくる鹿男の陽気でない声に、頭を抱えていたハチが少し眉をひそめて振り返った。

「俺が余計なことしたせいで…魔女怒らせちゃって…」

鹿男は、集まっている村人たちに、被っている麦わら帽子を取り、何とも申し訳なさそうな顔を見せていた。
「俺…取り返しのつかないことを…」
「気にすんなっ！鹿男っ！」
「……っ」
その声に、俯いていた鹿男が顔を上げる。
「父ちゃんっ…」
そう声を掛けたマトリョー鹿は、鹿男に優しい笑みを向けていた。
「お前がやらなきゃ俺がやってたとこだぁっ！」
「……っ」
マトリョー鹿のその言葉に、鹿男が少し目を細める。
「そうそうっ！いつまでもオズに怯えて暮らしてたって意味ねぇーしなぁっ！いい機会さぁっ！」
「逆にオズをぶっ倒してやろうぜぇっ！」
『おおおぉおおおおおおおおおっっっ！！！』
「みんなっ…」
次々と声をあげる村人たちに、鹿男は少し泣きそうな表情で微笑んだ。
「何っ…？このまともな会話…」
「ピンチ過ぎて、頭の回転が速くなったんじゃないですか？」
その感動のシーンを目の当たりにしても、鹿国の者たちがまともに会話をしているということにしか注目出来ない輝矢とユキジ。
「本領を発揮したのよ…」
「常日頃から発揮しろよっっ！！」
キリコの言葉に、ハチが勢いよく突っ込みを入れた。
「よっしゃあああああっっ！！やってやろぉおおおおおっっ！！！」
『おおおぉおおおおおおおおおっっっ！！！』
鹿男の掛け声に、村人たちが決起する。
「でぇ？俺らはどないするん～？輝矢んっ」

そんな決起している村人たちを見ながら、モンキが輝矢へと問いかける。
「そうですねぇ…」
少し考えるように、首を捻る輝矢。
「まぁ丁度、オズというのを倒しに行こうと思っていた所ですしっ…」
首をまっすぐにした輝矢が、そっと笑みをこぼす。
「バカの手伝いというのも悪くはありませんねっ」
『……っ』
輝矢のその言葉に、ハチ・モンキ・ユキジも笑みをこぼす。
「ぐぅーっ…」
その言葉を聞いていた鹿男が、感動したような笑顔で、輝矢につけた愛称を呼ぶ。
「ふんころがしっ！！」
「“ありがとう”と言ってるわ…」
「まったく、有り難みありませんね…」
笑顔で少し変わった礼を言う鹿男に、輝矢はがっくりと肩を落とした。
「……。」
その会話を聞きながら、レオは皆と少し離れた場所で、どこか感慨深げにそっと俯いた。

第３８章　魔法の国の三人組　★３

その後も鹿国の者たちの本領を発揮したまともな会話が繰り広げられ、オズが攻めて来る前に、年寄り・女・子供を覗く村の男たちで、オズの屋敷へと乗り込むことが決まった。戦いの支度を整えるため、男たちは皆、一度家へと戻った。輝矢たちも、鹿男・マトリョー鹿とともに、鹿男の家へと戻っていた。

「父ちゃ～んっ！畑耕しに行こぉ～っ！」

『だあああああああああああああっっっ！！！』

身支度を整え、部屋から出て来た鹿男の一言に、勢いよくズッコケるハチたち。

「ちゃうやろっ！！オズ倒しに行くんやろっ！！オズっ！！」

「お前っ、自分で先陣切って言ってたじゃねぇーかっ！！」

「えええぇ～っ？」

ハチとモンキの突っ込みに、目を丸くして首を捻る鹿男。

「鹿男ぉぉ～っ！晩飯の買い出しでも行くかぁ～っ！」

『アンタもかっっ！！』

陽気な声を出すマトリョー鹿にも、二匹が全力の突っ込みを入れた。

「こんなんで大丈夫なのかなぁ～っ」

「まぁ補償は出来ませんね」

そんな鹿男とマトリョー鹿に、不安げな表情を見せるユキジと、呆れきった表情を見せる輝矢。

「さぁ…じゃあ私は伐採にでも出掛けようかしら…」

『へっ？』

そう言って、斧を持って立ち上がるキリコに、ハチたちが不思議そうな顔を見せる。

「何だぁ？お前、行かねぇーのかぁっ？」

「当たり前でしょう…？私はか弱い女の子よ…？」

「どこがっ」
「斧の振り回しっぽりは明らかに戦力になりそうやったけどなぁ」
「っつーか、まず伐採やめろよ」
当然のように答えるキリコに、呆れた表情でこっそりと突っ込みを入れる3匹。
「随分と冷たいんですね」
輝矢がキリコに、どこか刺すような視線を向ける。
「お友達の村が大ピンチだというのに」
「……。」
輝矢のその言葉に、キリコの表情が曇る。
――――お前はいっつも一人っきりっ！死ぬまでずっと一人っきりっ！――――
「……っ」
思い出される、その呪いのような言葉に、キリコは少し唇を噛み締めた。
「私に友達なんていないわ…」
「……っ」
「……。」
冷たく、だがどこか悲しげに言い放ったキリコに、輝矢は眉をひそめ、鹿男はその表情をそっと曇らせた。
「俺も行かねぇっ」
『……っ？』
次に声を出したのは、部屋の端で壁にもたれかかるようにして、やる気なく座り込んでいるレオであった。
「まぁビビりライオンになど、初めから誰も期待してませんけど」
「ビビり言うなぁっ！俺は臆病なだけだぁっ！」
冷たく言い放った輝矢に、レオが立ち上がって必死に訂正を入れる。
「だいったいビビりとかの問題じゃねぇーだろっ！」
「……っ？」

どこか怒ったように声を張り上げるレオに、輝矢が少し表情をひそめる。
「俺はこの村の人間じゃねぇーんだっ！」
声を荒げたレオは、そのまま言葉を続ける。
「あんなぁっ、今はんなこと言っとらんと、とにかくオズっちゅー奴をっ…」
「相手は恐ろしい魔法を使うんだぞっ！？見す見す死にに行くようなもんじゃねぇーかっ！！」
「……っ」
説得しようと試みたモンキが、あまりに必死に言い返してくるレオに、言葉を止めてしまう。
「俺はっ…んなことで死にたくねぇっ…」
少し躊躇うように、俯くレオ。
「俺はっ…この村がどうなろうと知ったこっちゃねぇっ！！」
「……っ」
勢いよく顔を上げ、そう叫んだレオに、鹿男は少し目を細めた。
「お前なぁっ！！そんな言い方っ…！」
「うんっ！わかったっ！」
「えっ…？」
レオに思わず怒鳴りあげようとしたハチが、背後から聞こえてくる陽気な声に、戸惑うように振り向く。
「鹿男…？」
ハチが振り返ると、そこにはいつもの陽気な笑顔の鹿男が立っていた。
「俺たちだけで行ってくるからっ！レオとキリコはウチの畑でも耕しててよっ！」
「私の趣味は伐採よ…？鹿男…」
「そこっ？」
困ったように訴えるキリコに、呆れた表情を向けるユキジ。
「鹿男っ…」

レオが少し厳しい表情で、陽気に笑う鹿男を見つめる。
「さっ！行こ～っ！父ちゃんっ！！」
「おぉーーうっ！！」
鹿男に背中を押され、気合い十分のマトリョー鹿が家を出て行く。
その後に続くようにして、玄関先へと行った鹿男が、その場でそっと足を止めた。
「俺…バカだからさっ…」
『……っ？』
背中を向けたまま言葉を発する鹿男を、キリコとレオが戸惑うように見つめる。
「この村にいて、レオとキリコが楽しかったか、楽しくなかったかなんて、わかんないけど…」
二人が見つめる中、鹿男が言葉を続ける。
「俺は…楽しかったっ…」
そっと微笑んだ鹿男が、ゆっくりと二人の方を振り返る。
「楽しかったよっ！」
『……っ』
鹿男のその笑顔に、キリコとレオはどこか痛むように目を細める。
「じゃあっ！ご馳走様ぁ～っ！！」
「それを言うなら“行ってきます”では？」
挨拶の言葉を間違え、輝矢に突っ込まれるも、気にせずに陽気な笑みを見せながら家から出て行く鹿男。
『……。』
深く俯いたキリコとレオが、鹿男の家に残される。
「おっ…おいっ！いいのかよっ…！？」
そんな二人に、ハチがどこか心配するように声を掛ける。
「鹿男、行っちまったぞっ…！？」
「……。」
ハチの言葉に、レオが少し唇を噛む。
――――弱き獅子などっ…何の役にも立ちはせんっ！――――

「……っ」
レオの脳裏にも、呪いのような言葉が過ぎる。
「鹿男たちだけに戦わせていいのかっ！？」
「せやっ！お前らダチなんやろっ！？せやったらっ……！」
「どうせ俺はっ…勇気のねぇー臆病なライオンだっ…」
『えっ…？』
必死に訴えかけていたハチとモンキが、レオのその諦めたような言葉に、眉をひそめる。
「行ったって…何の役にも立ちゃしねぇーさっ…」
少し辛そうな表情でそう言い放つと、レオはハチたちの横を通り過ぎ、足早に鹿男の家を出て行く。
「おっ…おいっ！」
ハチの声に振り返ることなく、レオは鹿男の家を後にした。
「なんやぁ～っ！アイツっ！冷たいやっちゃなぁ～っ！」
「……。」
怒ったように声を出すモンキの横で、少し目を細める輝矢。
「私も…伐採があるから…」
「……っ」
キリコも斧を持って、レオの後を追うように家を出て行く。
「おっおいっ！鹿男をっ…！」
「私にそんなことを言ったって無駄よ…」
「えっ…？」
レオと同じように、キリコも呼び止めようと声を張り上げたハチ。
しかし、その言葉を遮るように、冷たく言い放つキリコ。
「私に…心なんてないから…」
「……っ」
そう言い放ったキリコのどこか悲しげな表情に、とても感情がないとは思えず、ハチはそれ以上呼び止めることが出来なかった。そのまま、キリコも鹿男の家を出て行く。
「……。」

出て行ってしまった二人に、ハチが少し落ち込むように俯く。
「勇気のないライオンに、心のないきこりねぇ～」
「難しいなぁ～っ」
出て行ってしまったレオとキリコに、モンキとユキジが気難しげな表情で首を捻る。
「輝矢っ…」
「私たちの目的は、オズという者を倒し、この村の誰だかの依頼を完了させること」
「……っ」
少し顔を上げたハチに、輝矢はそうキッパリと言い放った。そんな輝矢の言葉に、ハチがまたしても俯いてしまう。
「一刻も早く終わらせて、あのクソババアを見返してやらねばなりませんしっ」
「そう…だよな…」
さらに続く輝矢の言葉に、どこか落ち込むように呟くハチ。
「ですが…」
「……っ？」
しかし、さらに続いたその言葉に、ハチは少し目を丸くして顔を上げた。
「このままというのはどうも、全身が痒くって仕方ありませんっ」
「えっ…？」
ハチが少し戸惑うように声を漏らす。
「私はビビりライオンと伐採女のところへ行ってきます」
輝矢がまっすぐな瞳で言い放つ。
「ハチ、サル、キジっ」
『……っ？』
名を呼ばれ、ハチ、モンキ、ユキジが輝矢の方を見る。
「鹿男たちの後を追い、バカどもの援護をして下さい」
『……っ』
輝矢のその言葉に、笑顔を見せるハチ、モンキ、ユキジ。

『了解っ！』
笑顔を見せた三匹は、大きく頷いた。
「よぉ～しっ！俺もさっきの魔女っ子ちゃんとホウキデートするぞぉ～っ！！」
「一応、あの魔女、敵なんだけど…？」
妙なやる気で両手を上げるモンキに、ユキジは冷たい瞳を向けた。
――――あの子、子供のくせにピクリとも笑わないのよっ？――――
――――感情がないんじゃないっ？気持ち悪ぅ～いっ！――――
――――見てるだけで不快っ！早くこの町から出てってくれればいいのにぃ～っ！――――
「……。」
思い出される過去に、斧を握り締め、唇を噛み締めるキリコ。
「私に…心なんてないっ…」
キリコはどこか言い聞かせるように呟いた。
――――レオ、あいつはいつも逃げてばかり…――――
――――獅子の国に生まれた男のくせに…何とも情けないっ…――――
――――あんな弱虫ライオンっ、獅子の恥だっ！――――
「怖いんだから…逃げて何が悪いっ…」
思い出される言葉に、言い返すように呟くレオ。

「勇気のないライオンがいてっ…何が悪いんだよっ…」
レオは少し震える声を漏らし、その顔面を両手で覆った。

鹿国はずれ。大魔法使いオズの屋敷。
「クっ…！」
ホウキから降り、屋敷内へと入って来た先程の魔女が、まだ血の止まらぬ右手の傷を見ながら、その表情を歪める。
「あの鹿っ…！」
傷をつけた鹿男のことを思い出し、魔女が鋭く瞳を光らせる。
「可愛いバンビに逆襲されちゃったみたいね、ノース」
「……っ」
後ろから聞こえてくる女の声に、ノースと呼ばれた魔女が、少し顔をしかめて振り返る。
「サウス…」
ノースの振り返った先に立っていたのは、ノースと同じとんがり帽子にローブを纏った女であった。
「ウフフっ…あぁ～痛そうっ」
「……っ」
まったく心配する素振りもなく、どこか楽しげに微笑むサウスに、ノースが眉を引きつる。
「相手を鹿だと思って侮るからよ…」
「イースっ…」
「アハハァ～っ！ノースってば超間抜けぇ～っ！」
「うるさいわよっ！！ウェスっ！」
同じくとんがり帽子にローブ姿の魔女が、後2人現れた。
「私がちょっと油断しただけでっ…！」

「何を…騒いでいる…？」
『……っ』
薄暗い部屋の奥から聞こえてくるその低く重い声に、四人の魔女は一斉に表情を引き締め、慌てて奥を振り返り、膝をついて深々と頭を下げた。
「眠りから醒めてしまったではないか…」
『申し訳ありません、オズ様っ』
どこか不機嫌そうに言うその声の主・オズに、四人は声を揃えて謝った。
「しっ…しかしオズ様っ！聞いて下さいっ！」
ノースが立ち上がり、オズへと訴えかける。
「ヤツらっ…！鹿国のヤツらがっ…！私に傷をつけたのですっ！」
「何っ…？」
「ほらっ！これっ！」
「……っ」
ノーズがオズへ、傷ついた右手を見せる。薄暗いところに居るオズの表情が、かすかに動いたような気がした。
「ノースが油断し過ぎただけじゃないのぉ～？」
「黙りなさいっ！ウェスっ！」
「クスっ」
横からからかうように口を挟むウェスに、ノースは勢いよく怒鳴りあげた。
「鹿国の奴ら、我らを倒そうと、武装してこちらへ向かっているようですわよぉ～？」
「えっ…？」
サウスの言葉に、ノースも少し驚いた表情を見せる。
「我らを…倒すだとっ…？」
オズの声色が、さらに重く変わる。
「小癪なっ…！！」

――――バァァァァァァァァーーーンっ！――――

『ううっ…！』

声を荒げたオズの全身から、その力の強さを示すような衝撃波のようなものが放たれ、四人の魔女が皆、思わず身を伏せる。

「二度と逆らう気など起きぬよう…握り潰してくれるわっ…」

そう言うと、オズと見られる影がゆっくりと立ち上がった。

「くだらぬバカどもを迎え討てっ！我が魔女たちよっ！」

『はっ！』

オズの言葉に、四人の魔女がまた深々と頭を下げた。

「わぁ～いっ！殺戮っ♪殺戮っ♪」

「バンビちゃんたちを燃やせるのね…楽しそうっ」

「今度は油断しないでよ…ノース…」

「わっ…わかってるわよっ！！」

四人の魔女が立ち上がり、それぞれに戦いへの意気込みを見せる。

「この大魔法使いオズの力…見せつけてくれるわっ…」

立ち上がった巨大な影は、不気味に怪しく微笑んだ。

第３９章　獅子に勇気を、鰤に愛を　☆１

――――あるところに、心のない一匹の鰤がいました。
「あの子、子供のくせにピクリとも笑わないのよっ？」
「感情がないんじゃないっ？気持ち悪ぅ～いっ！」
「……。」
鰤は生まれながらに“笑う”ということを知らず、実の家族にさえ、気味悪がられていました。
「見てるだけで不快っ！早くこの町から出てってくれればいいのにい～っ！」
「……。」
鰤が町を歩けば、町の者たちは皆、鰤を見てそう言いました。家族にも愛されず、町人の誰一人にも受け入れられず、鰤にはどこにも居場所がなかったのです。
「お前はいっつも一人っきりっ！死ぬまでずっと一人っきりっ！」
「……。」
聞き慣れた蔑みの言葉。それでも鰤の心は痛みません。
「悲しくなんてない…だって私に…心なんてないから…」
そして鰤は、自らの家族を、生まれ育った村を、捨てました……
――――

――――あるところに、勇気のない一頭の獅子がいました。
「うわあああぁぁぁぁぁぁ～～～っっ！！」
獅子は生まれながらに臆病で、いつも逃げてばかりいました。
「レオ、あいつはいつも逃げてばかり…」
「獅子の国に生まれた男のくせに…何とも情けないっ…」

そんな獅子の姿に、国の者たちは皆、呆れた表情でそう言いました。

「あんな弱虫ライオンっ、獅子の恥だっ！」

「……。」

その言葉に、言い返す勇気さえ、獅子は持っていなかったのです。

「レオ…」

「父上っ…」

獅子国の王である獅子の父は、獅子を呼びだし、こう言い放ちました。

「弱き獅子などっ…何の役にも立ちはせんっ！」

「……っ！」

「この国から出て行けっ！！」

「……っ」

そして獅子は、自らの父の手で、自らの国を追われました……――

――――

――――そして、国を捨てた鰤と、国を追われた獅子は、とある阿呆たちの国に辿り着きました。

「あっれぇ～っ？こんなところで何やってるのぉっ？」

『……っ？』

鰤と獅子に声を掛けたのは、陽気な笑顔の一頭の鹿でした。

「俺ん家の畑、耕していきなよぉっ！」

『えっ…？』

こうして、鰤と獅子と鹿は出会いました……――――

「……。」
鹿男と初めて出会った村の入口に座り込み、神妙な表情を見せたレオが、細めた目で村を見つめていた。
「何を…考えているの…？」
「……っ」
横から聞こえてくる声に、レオがゆっくりと振り向く。すると、そこには、斧を持ったキリコが立っていた。
「んだよっ…伐採に行ったんじゃねぇーのかっ？」
「木が言うのよ…」
問いかけたレオに、キリコが静かに答える。
「“斬らないで”…“斬らないで”って…」
「ひぃえええぇぇぇぇぇぇぇぇっっっ！！！」
不気味に囁くキリコに、レオが恐怖し、震え上がる。
「ビビり…」
「ビビり言うなぁっ！俺は臆病なだけだぁっ！」
ボソっと呟いたキリコに、レオがいつものように言い返す。
『……っ』
いつもの調子で会話を展開していたレオとキリコであったが、その会話はすぐに止まってしまった。訪れる沈黙に、二人がどこか気まずい表情を見せる。
「昔のっ…」
「……？」
言葉を発するレオに、キリコが少し眉をひそめる。
「昔のことを…考えてた…」
「昔…？」
「ああ…」
静かに聞き返したキリコに、レオが少し笑みを見せて頷く。
「俺っ、こう見えて獅国の王子様ってヤツでさっ」

「嘘ね…」
「嘘じゃねぇーよっ！すぐさま否定すんなよっ！！」
すぐに嘘と断定するキリコに、レオが思わず怒鳴りあげる。
「獅国の王子のクセに臆病で、戦いになったらすぐ逃げ出してっ、国のヤツらは皆、呆れてたっ…」
「……。」
その笑みを少し悲しげにするレオに、キリコが目を細めて見つめる。
「んで、国王の親父から“国出てけ”って言われてさっ…そのまま大人しく国出ちまったんだ…」
「そう…」
キリコがレオから視線を逸らし、そっと頷く。
「どっこも行く当てなくて、迷いに迷ってこの村に着いた…」
レオが懐かしそうに微笑み、村を見つめる。
――――あれぇ～っ？こんなところで何やってるのぉ？――――
「んでっ、鹿男と…出会った…」
「……。」
生まれながらに足りないものを持っていて、それで居場所をなくして、迷った挙句にここに辿り着いた。レオの境遇は、キリコとよく似ていた。この村で、鹿男と出会ったことも。
「いきなり畑を耕せと言われたわね…」
キリコも懐かしそうに笑みを浮かべる。
「ああ…言葉を理解すんのに、三ヶ月はかかったなぁ～」
「半年よ…」
「そうだっけ？」
「ええ…」
思い出を振り返り、レオとキリコが徐々に笑顔を大きくしていく。
笑えないような過去しかないと思っていたのに、ここでの思い出は、自然と笑顔にしてくれる。
「……。」

レオがふと言葉を止め、目を細める。

――――この村にいて、レオとキリコが楽しかったか、楽しくなかったかなんて、わかんないけど……――――

――――俺は…楽しかったっ…楽しかったよっ！――――

思い出される、鹿男の言葉。いつも通りの、陽気な笑顔。

「ホント、バカだなぁ…アイツっ…」

「えっ…？」

少し震えるような声で呟いたレオに、キリコが戸惑うように振り向く。

「楽しかったにっ…決まってんのによぉっ…」

「……っ」

泣きそうな笑顔でそう言い放つレオに、キリコが思わず目を見開き、その口元を手で覆った。

――――レオっ！キリコっ！――――

あの何も考えていない陽気な笑顔に、何度、救われただろう。勇気のないレオに、心のないキリコに、鹿男は少しの曇りもなく、いつだって思いきり微笑みかけてくれた。

「レオ…行こう…？」

「えっ…？」

キリコの言葉に、レオが少し驚いたように顔を上げる。

「キリコっ…」

「行こう…？レオっ…」

顔を上げたレオに、キリコが真剣な眼差しでもう一度言う。

「けっ…けどっ…」

それでも勇気の持てないレオが、躊躇うように俯いてしまう。

「私に…心はない…」

「……っ？」
俯いたレオと視線の高さを合わせるように、キリコがその場にしゃがみ込む。まっすぐな瞳を見せるキリコを、レオもまっすぐな瞳で見つめる。
「でも…鹿男が死んだら…私の“ココ”はきっと痛む…」
そう言って、キリコが左手で押さえたのは、自身の左胸、“心”のある場所であった。
「キリコ…」
そんなキリコを見て、レオがそっと目を細める。
「……っ」
少し考え込んだ後、意を決した表情で顔を上げるレオ。
「よしっ！行こうっ！キリコっ！」
「レオっ…」
勢いよく立ち上がり、笑顔でそう言い放ったレオを見て、キリコがそっと笑みをこぼす。
「ええっ」
キリコも立ち上がり、大きく頷いた。
「あぁぁ～でもやぁっぱ怖いなぁ～っ」
「男に二言はないわよ…」
「いっやあぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」
やはり行くことに躊躇うレオであったが、キリコにより強制的に連行されていくのであった。

「ふぅっ…」
そんなレオとキリコの一部始終を、近くの家の陰から見ていた輝矢が、二人が去っていったのを確認し、どこか疲れたように一息つく。
「せっかくわざわざ足を運んで差し上げたというのにっ…」

走り去って行く二人の姿を見ながら、少し顔をしかめる輝矢。
「いらぬお節介だったようですねっ…」
そう呟き、輝矢はそっと微笑んだ。

その頃、オズの屋敷前。
「着いたぞぉっ！あれがオズの屋敷だぁっ！」
『おおぉぉぉぉぉぉーーーうっ！！』
戦いの支度を整えた村の男たちを率いて、オズの屋敷前までやって来たマトリョー鹿と鹿男。マトリョー鹿の掛け声に、村人たちが一斉に拳を突き上げる。臨戦態勢は万端のようであった。
「ところで、鹿男」
「何だいっ？父ちゃんっ！」
呼びかけるマトリョー鹿に、鹿男がまるで緊張感のない笑みを向ける。
「なぁ～んで俺たちは、こんなところに来たんだぁ？」
「さぁ～っ？」
『さぁ～～っ？』
鹿男とともに一斉に首を傾げる村人たち。あんなに燃えていたというのに、ここに来るまでの間に、何をしに来たのか忘れてしまったようである。
『何だったっけぇ～～っ？？』
マトリョー鹿の加わり、村人たちは、オズの屋敷の前で、全員で首を傾げる。
「ウフフ…」
そんな鹿男たちを見ながら、思わずこぼしてしまったような笑み

を響かせたのは、ホウキに乗り、屋敷の上空に浮かんでいるサウスであった。
「ホントにおバカなバンビちゃんばっかりね…」
サウスは首を傾げている鹿男たちを見下しながら、小バカにしたように微笑む。
「これじゃ…殺しても殺されたことに気付いてもらえないんじゃない…？」
「えぇぇ～っ！？ウェス、恐怖に歪みまくった顔が見たいのにぃ～っ」
同じようにホウキで飛んでいるイースとウェスが、それぞれの反応を示す。
「それにしても…」
ふと鹿男たちからすぐ横へと視線を移すサウス。
「どうやったら、あんなバンビちゃん相手に、手傷を負えるのかしら…？」
「……っ」
その嫌味らしき言葉とともに視線を送られ、サウスのすぐ横を飛んでいるノースが、勢いよく表情を引きつる。
「うるさいわねっ！！」
「あらぁ？誰も貴女のこととは言ってなくってよぉ？」
「……っ」
わざとらしく言うサウスに、ノースの表情がさらに引きつる。
「ヤラれた分はっ…ヤリ返すわよっ…！！」
そう強く言い放って、ノースが勢いよく鹿男たちの方へと降下していく。
「ああっ！！ノースってば抜けがけ、ずるぅ～いっ！！」
「やれやれ…」
「ウフフっ…」
ノースを追うようにして、他の三人の魔女も降下していく。
「何だぁ？」

『……っ？』
降下してくるノースたちを、間の抜けた表情で見上げる鹿男たち村人。
「灰になりなさいっ…！」
『……っ』
四人の魔女が、下にいる村人たちへ向け、一斉に右手を向ける。
『“魔炎”っっ！！』
『……っ！』
魔女たちの放った赤々とした四つの炎が、空中で四方向から1つとなり、さらに勢いを増して鹿男たちの方へと向かっていく。
『うっ…うわあああああああっっっ！！！』
一斉に叫び声を上げる村人たち。もうダメだと、目を閉じようとした。その時。
「“瞬花”っ！！」

――――パァァァァァーーンっっ！！――――

『……っ』
鹿男たちに迫り来ていた赤々とした巨大な炎が、一瞬にして大量の桃色の花びらと変わり、鹿男たちのすぐ図上を舞った。あまりに美しい光景に、鹿男たちが目を見張る。
『何っ…！？』
しかし魔女たちは眉をひそめ、その散りゆく花びらを見た。
「ふぅ～っ」
『……っ』
聞こえてくる声に、一斉に振り返る魔女たち。
「何とか間に合ったなぁ～」
「やぁ～っぱ倒しに来たのも忘れてたね。思った通りっ」
「うおぉぉ～っ！！俺の魔女っ子ちゃんたちぃ～っ！！」
村側、鹿男たちの後方からその姿を現したのは、桜時、門貴、由

雉の3人であった。村人たちに少し呆れている由雉の横で、門貴が上空の魔女たちに大きく手を振る。
「何者っ…？彼ら…」
少し表情をしかめたサウスが、上空でノースへと問いかける。
「よくわかんないけど、村人の誰かが呼んだ退治屋とか言ってたわよっ」
ノースが素気なく答える。
「そう…バンビちゃんたちが呼んだの…」
「バカのくせに退治屋に依頼だなんて、超生意気ぃ～っ！」
「見せつけてやった方がいいんじゃない…？」
「そうね…」
イースの言葉に、サウスが怪しげに微笑む。
「退治屋なんて呼んでも無駄だったって…バンビちゃんたちにわからせてあげましょう…？」
『ええっ…』
サウスがそう言って冷たく微笑むと、他の3人も頷いて冷たく微笑んだ。
「おぉ～いっ！俺の魔女っ子ちゃ～んっ！！」
「だからアレ全部、敵だって言ってるでしょ～？」
「オズっちゅ～のに操られてるだけの、ホンマはめっちゃ可愛ゆぅ～い魔女っ子ちゃんかも知れんやろぉ？」
冷静に言い放つ由雉に、門貴が必死に魔女の肩を持つ。
「だいたいとんがり帽子の女の子には、悪い子がおらんっちゅーっ…！」
『ガアアアアアアっっ！！！』
――――バァァァァァァァーーーーンっっ！！――――
「へっ…？」
上空にいた四人の魔女が、ローブを纏った人間を姿を破り捨て、

赤々とした皮膚に、鋭い角を持った、“鬼”と呼ばれるものへとその姿を変えていく。
「あっ…あれ…？」
ホウキもあっさりと捨て去り、上空から大きな地響を立てて地面へと着地する４匹の鬼を見て、まん丸く開いた目をパチクリとさせる門貴。
「誰がオズに操られてるだけのカワイ子ちゃんだってぇ～？」
「だぁ～れがとんがり帽子の女に悪い奴はいねぇーだっ」
「ううぅ～っ…」
桜時と由雉の厳しい指摘に、門貴が悲しげな表情で唇を噛んだ。
「さぁっ…可愛がってあげるわっ…退治屋さんたちっ…」
『……っ』
地面へと降り立った四匹の鬼の一匹、サウスが、三人の方を見て冷たく微笑む。その笑みに表情を引き締める桜時と由雉。
「散るぜっ」
「はぁ～いっ」
それぞれ村雨丸と色羽を構えながら、桜時と由雉が言葉を交わす。
「ううぅっ…」
その二人の間で、まだ落ち込んでいる門貴。
『……っ！』
そんな門貴をあっさりと無視し、桜時と由雉が左右に分かれて駆け出していく。
「私たちを相手にっ…1対1で勝負しようっていうのっ…？」
どこか楽しげに微笑みながら、サウスが巨体を素早く翻し、右に逸れた由雉の方を追いかけて行く。
「甘いわねっ…！」
背中を向けている由雉に対し、大きく口を開くサウス。
「“鬼炎”っ…！！」
サウスの口から、赤々とした炎が放たれる。
「……っ」

――――バァァァァァァァーーーンっっ！！――――

勢いよく飛び出した炎が、少しだけ振り返った由雉を、すぐさま炎の中へと消し去った。

「ウフフ…」

燃え上がる炎を見つめ、サウスが得意げに微笑む。

「口程にもないっ…」

「ホントっ…」

「……っ！」

背後から聞こえてくる声に、勢いよく振り返るサウス。

「口程にもないよねっ…」

サウスの振り返った先に立っていたのは、まるで無傷の由雉。

「お前っ…！」

「“右翼っ…」

少し焦りの表情を見せたサウスに、由雉が素早く青い羽根を投げ放った。

「裂羽”っ…！」

「クゥっ…！！」

かなり焦った表情のサウスが、至近距離から投げ放たれた青い羽根を、ギリギリのところで何とかかわす。

「ハァっ…ハァっ…」

青い羽根をかわしたところで、少し早い呼吸をし、額からゆっくりと汗を流すサウス。

「やっぱり…バンビちゃんたち相手みたいにはいかないようねっ…」

サウスが無理に作ったような笑みで、冷静な表情の由雉に言い放つ。

「でも私たち四人にはっ…！」

「君たちも…残念だったよねぇ～」

「何っ…？」

由雉の意味深な言葉に、サウスが眉をひそめる。
「魔女の姿のまんまだったら…少なくとも二人には勝てたかも知れないのにぃっ」
「えっ…？」
眉をひそめたサウスに、由雉は悪戯っぽい笑みを向けた。

「キャハハハハっっ！！殺戮っ♪殺戮っ♪」
「……っ」
どこか楽しげにそう言いながら追いかけてくる一匹の赤鬼、ウェスの方を振り返り、桜時が少しその表情をしかめる。
「殺しちゃうよぉ～んっ！それぇ～っ！“鬼爪・天回”っ！！」
ウェスが何とも楽しげに、両手の十本の爪を、前を走る桜時の背中を目がけて放った。
「死ね死ねぇっ！」
「誰がっ…！」
ウェスの言葉に逆らうようにそう言い放ち、桜時がすぐさま振り返って、左手を向かってくる鬼爪へと向けた。
“瞬花”っ…！」

――――パァァァァァーーーンっっ！！――――

十本の爪が、桜の花びらとなって地面に散っていく。
「むぅ～っ！またお花ぁ～っ？」
散っていく花びらに、その恐ろしい形相で、どこか子供っぽく頬を膨らませるウェス。
「つっまんなぁっ…！」

――――キィィィィィィィィーーーンっっ！！――――

「……っ」
ウェスがその表情を鋭くし、すぐさま新たな鬼爪を生えさせて、その突き出された刃を受けとめた。
「ウェス、まだしゃべってるんだけどぉ…？」
「……。」
目の前で村雨丸を握っている桜時を、ウェスがどこか不機嫌そうに見る。
「女の姿じゃねぇーんならっ、全然、問題ねぇっ…」
「えっ？」
桜時の呟きに、眉をひそめるウェス。
「覚悟しやがれっ！！鬼っ！！」
「クゥっ…！！」
さらに力の強まる村雨丸に、ウェスの鬼爪はどんどんと押されていった。

「ううぅっ…」
「何…？アイツ…」
まだ魔女っ子ショックを引きずっている門貴を見つめ、表情をしかめる一匹の赤鬼、イース。
「まぁいいわ…とっとと殺そっ…」
そう呟くと、イースが右手を振り上げた。
「死になさいっ…！！」
「……。」
俯いたままの門貴に、振り下ろされる鋭い爪先。

――――ビュウウゥゥゥゥンっっ！！――――

「ううあああああああっっっ！！！」
しかし次の瞬間、イースが苦しげな声をあげ、勢いよく門貴へと振り下ろしたはずの右手を上げた。
「クっ…！クゥっ…！」
上げられたイースの右手から、血が滴り落ちる。よく見ると細かく切り裂かれたような傷ができていた。
「お前っ…！」
イースが表情を険しくし、門貴を睨みつける。
「よっくも俺の…魔女っ子ちゃんの夢をっ…」
「何っ…？」
俯いたままの門貴の、かすかな呟きに、眉をひそめるイース。
「許されへんっ…！！」
「……っ！」
勢いよく顔を上げた門貴が右手を突き出し、どこからともなく現れた如意棒を素早く構える。そんな門貴に、一気に警戒した表情を見せるイース。
「覚悟しぃやぁっ！！鬼ぃぃっっ！！」
「クっ…！！」
怒りの表情で駆け込んでくる門貴に、イースはその理由もわからぬまま、再び鬼爪を振りかぶった。

第３９章　獅子に勇気を、鰤に愛を　☆２

「あぁ～あっ、退治屋みんな、取られちゃったぁ～」
桜時、門貴、由雉と交戦している他の三人を見ながら、取り残された最後の赤鬼、ノースは、どこかつまらなそうな表情でそう呟いた。
「ハズレかなぁ～？んっ？」
「おおっ！すっげぇっ！！」
「何者だぁっ？あいつらぁっ！」
そんなノースの視界に入って来るのは、他の三匹の鬼を圧倒するような戦いを展開している桜時たちを見ながら、感心したような声を漏らしている鹿男たち村人。
「……っ」
村人たちを見つめ、ノースがどこか楽しげに微笑む。
「当たりかなっ…」
そう呟くと、ノースは大きく口を開き、村人たちの方を向いた。
「“鬼炎”っ…！！」
「……っ！」
迫り来る炎に、ふつ振り向いた鹿男が一番に気づき、その表情を強張らせる。
「みんなっ！！」
『へっ…？ううっ…！！』
鹿男の叫び声に振り返る村人たち。向かってくる炎に、一斉に顔を引きつる。
「クっ…！！」
『うわあああああああああああっっっ！！』
やって来た炎を、鹿男たち数名は何とか避けることが出来たが、他の者たちは避けきれず、炎に体を焼かれ、吹き飛ばされてしまう。
『うっ…ううっ…』

火傷した腕や足を押さえながら、倒れたまま苦しそうな声を漏らす村人たち。
「みんなっ…」
その悲惨な光景に、鹿男が眉をひそめる。
「さて…もう一発っ」
「……っ」
再び口を開いたノースに、鹿男が目つきを鋭くする。
「させるかっ…！」
――――ボォォォォォォォォ～～～ンっっ！！――――
鹿男が白い煙に包まれ、その姿をシカへと変える。
「五ヵ年計画っ！！」
「はぁっ！？」
そう叫びながらノースの元へと駆け込んでいく鹿化した鹿男。その謎の言葉に、ノースが開いていた口を閉じ、勢いよく表情を引きつる。
「えぇ～っと“村の人間に手を出すな”だったかしらぁ？」
ノースがその言葉の意味を思い出す。
「上等じゃないっ」
そっと微笑んだノースが、その右腕を振り上げる。
「“鹿威し（ししおど）”っっ！！」
「“鬼爪”っ…！！」
鹿男の突き出した角と、ノースの振り下ろした鬼爪が、勢いよくぶつかり合う。
「まぁ～た貴方なのねっ」
「……っ」
角と鬼爪を接触させたまま、強く睨み合う鹿男とノース。
「この傷の借りっ…返させてもらうわよっ！！」
「うっ…！」
さらに力を込めるノースに、鹿男が表情を険しくする。
「うわあああああああっっっ！！」

ノースの鬼爪に押され、鹿男が勢いよく吹き飛ばされる。角を傷つけられ、ノースから少し離れた地面へと倒れ込む鹿男。

――――ボォォォォォォ～～～ンっ！――――

「ううっ…」

倒れた鹿男が、元の人の姿へと戻る。

「クっ…！」

傷ついた体を、苦しげな表情を見せながら、何とか起こそうとする鹿男。

「さぁてと…」

「……っ！」

そんな鹿男の前に、その大きな巨体をそびえ立たせるノース。目の前に立つノースに、鹿男がその表情を一際険しくする。

「鹿男っ！！」

『クっ…！』

マトリョー鹿の声に、桜時たちが振り向くが、他の魔女と応戦しているため、助けに向かうことが出来ない。

「さぁっ…終わりよっ…！」

「クっ…！」

振り下ろされる鬼爪に、鹿男が覚悟したように歯を喰いしばった。

――――パァァァァァァーーーーンっっ！！――――

「……っ！」

「何っ…！？」

鹿男の前で何かにより受け止められる鬼爪。鹿男が大きく目を見開き、ノースが勢いよく顔を引きつる。

「おっ…お前はっ…！」

「寒鰤キリコっ…」

鹿男の前に立ったキリコが、その斧で鬼爪を受けとめ、ノースに鋭い瞳を向ける。

「キリコっ…」
少し驚いたように、キリコを見上げる鹿男。
「鹿男を傷つけた罪深き鬼を…」
キリコが斧を握る手に力を込める。
「伐採するっ…！」
「うっ…！」
キリコがそう言い放ち、勢いよく斧を振りきった。
「うあああああああああああああっっっ！！！」
振り切った斧に鬼爪を砕かれ、ノースが勢いよく吹き飛ばされた。
「今よっ…！レオっ…！」
ノースが倒れたのを確認し、キリコが横を向き、叫ぶ。
「ぶるぶるぶるぶるっ」
「……。」
しかしキリコが振り向くと、その大きな図体を小さく丸めこみ、全身をぶるぶると震わせている、何とも情けないレオの姿があった。
「ったくっ…」
キリコが少し呆れた表情を見せ、レオの元へと歩いて行く。
「このビビり…」
「俺はビビりじゃねぇっ！ちょぉっと臆病なだけだぁっ！」
いつも以上に吐き捨てるように呟いたキリコに、レオが顔を上げて必死に反論する。
「貴方…男に二言はないと言ったじゃない…」
「言ったのはお前だっ！！」
自分のいいように話を持っていくキリコに、レオが震えていたとは思えない勢いで怒鳴り返していく。
「こっ…のっ…」
二人が何やかんやと言い争っている間に、ゆっくりと起き上がるノース。
「……っ」
「えっ…えっと…」

起き上がったノースの視界に入って来るのは、モメているキリコとレオの様子を見ながら、少し困ったような表情を見せている鹿男。
「お前っ…お前がぁぁぁぁぁっっっ！！！」
「……っ！」
怒りの表情を見せたノースが大きく口を開き、鹿男へ激しい炎を吐く。迫り来る炎に、大きく目を見開く鹿男。
「鹿男っ…！！」
「……っ」
「えっ…？」
身を乗り出したキリコの横から、鹿男の方へと駆け込んで行く人物。
「レオっ…？」
「鹿男っ！！」
キリコが戸惑うように見つめる中、必死に鹿男の名を呼んだレオが、炎の迫り来る鹿男の元へと駆け込んで行く。
「レオっ？」
向かってくるレオの姿を捉え、鹿男が少し眉をひそめる。
「ダメだっ！レオっ！来ちゃっ…！」
「……っ」

――――ボォォォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

鹿男の元へと走っていくレオの体を、白い煙が包んでいく。

「レ…オっ…？」
「……っ」
白い煙の中から飛び出してきたのは、一頭の獣。金色の体に、鮮やかな朱色のたてがみ。その獣はまさしく、百獣の王者・獅子であった。その姿を、鹿男はまっすぐに見つめる。
「レオっ…」

そして、キリコも。
「“獅子舞”っ…」
獅化したレオがその尾を振るうと、ノースの向けた炎が、その尾に巻き取られるかのように吸収され、あっけなく消えていった。
「何っ…!?」
その光景に、ノースが表情をしかめる。
「喰らって死ぬことを光栄に思えっ…」
「クっ…!」
鋭い眼光を向けてくるレオに、ノースが少し恐怖するようにその肩を上げた。そんなノースを目がけ、レオが大きく口を開く。
「“獅子砲”っ…!!」
レオの口から勢いよく放たれる、目にも留らぬ速度の光線。
「ううっ…!!」
獅子砲を避ける術もないノースが、さらに表情を歪める。
――――――バァァァァァァーーーンっっ!!――――――
「うっ…うあああああああああああああああああああっっっ!!!」
白い光線に包まれ、ノースは激しい断末魔だけを残して、跡形もなく消え去った。
「……。」
何もなくなった地面を、静かに見つめるレオ。
――――ボォォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――
「ふぅっ…」
白い煙に包まれ、レオが再び人化する。
「怖かったぁ～っ…」
胸を押さえたレオが、その場で力なくしゃがみ込む。
「死ぬかと思ったっ…」

「レオっ？」
「……っ」
深く俯いていたレオが、前方から聞こえてくる声に、ゆっくりと顔を上げた。
「大丈夫っ？」
レオが顔を上げた先にいたのは、少し心配そうな表情で首を傾げている鹿男であった。
「ああっ…」
レオが鹿男へ、穏やかな笑みを向ける。
「鹿男っ！レオっ！」
「……っ？」
「キリコっ」
そこへ、どこか必死の表情で駆けこんで来るキリコ。
「……っ！」
「うおっ」
「キリコぉ～っ？」
鹿男とレオに勢いよく抱きつくキリコに、二人が少し戸惑うように目を丸くする。
「おぉ～いっ、キリコっ、どうしっ…」
「良かったっ…」
キリコから、ポツリと落とされる言葉。
「二人が無事でっ…良かったっ…」
「……っ」
安心したように微笑みながら、そっと呟くキリコに、少し驚いたような表情を見せるレオ。今まで見たこともないような、その優しい微笑みは、キリコの“心”の証のようであった。
『……っ』
鹿男とレオが目を合わせ、そっと微笑み合う。
「レオ、キリコっ」
『……っ？』

鹿男に名を呼ばれ、顔を上げるレオとキリコ。
「フンころがしっ！！」
『……っ』
それは“ありがとう”の意。
『フンころがしっ！』
レオとキリコは清々しいほどの笑みを浮かべ、その言葉を鹿男へと返したのであった。

「あのバカ女…」
跡形もなく消え去ったノースのいた辺りを見つめながら、サウスが少しその表情を曇らせる。
「あんなバンビちゃんたち相手に…」
「あぁ～あっ、何かいいとこ、ライオンとブリに持ってかれちゃった感じだなぁ～っ」
「……っ」
そのどこかやる気のない声に、サウスが眉をひそめ、振り返る。
「もう面倒だからとっとと終わらせちゃうねぇ～っ」
「終わらすっ…？」
そう言って羽根を構える由雉に、顔をしかめるサウス。
「ちょっと仲間が勝ったからって、余裕出し過ぎなんじゃないのっ？バードちゃんっ…」
サウスがしかめた表情を残しながら、怒りを隠しきれない笑みを浮かべる。
「私はっ…ノースとは違うのよぉぉっ…！？」
サウスが大口を開き、由雉へと向ける。
「“鬼炎”っっ！！」
由雉へ向けて、赤々とした炎を放つサウス。

「そうっ…？」
迫り来る炎にも、由雉は顔色1つ変えない。
「大して変わんないと思うけどっ？」
そう言い放ち、由雉が懐から赤い羽根を出した。
「“左翼・滅羽”っ！」
由雉が迫り来る炎に、真っ赤な羽根を投げ放つ。

――――パァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

「何っ…！？」
赤い羽根に接触し、一瞬にして消え去る炎に、サウスがその表情を歪める。
「私のっ…鬼炎をっ…！」
「ねっ…？」
「うっ…！！」
衝撃を受けていたサウスのすぐ目の前へと現れる、鋭い瞳を見せた由雉。サウスの表情がさらに歪む。
「大して変わんなかったでしょっ？」
由雉がそっと微笑み、青い羽根を構える。
「クっ…！」
「“右翼・裂羽”っ」
「がああああっ…！」
少し後退したサウスの胸部へ、由雉が勢いよく青い羽根を突き刺した。羽根を突き刺した部分から、サウスの体が引き裂かれていく。
「あああああああああああああああっっっ！！！」
体を引き裂かれたサウスは、激しい悲鳴をあげながら、砂と化して、その場へと崩れ落ちた。
「あぁ～あっ、つまんないのっ」
崩れ落ちた砂を見下しながら、由雉は少し物足りなさそうに呟いた。

「クっ…クゥっ！クソっ！クソっ！クソぉぉっっ！！」
次々と休むことなく鬼爪を振るい続けるイース。しかしイースの繰り出した鬼爪は、すべて受けとめられてしまっていた。
「何なのよぉっ…！！」
「……。」
苛立つように叫ぶイースの前には、如意棒を持った門貴が立ちはだかっていた。イースの鬼爪は、一本残らずすべて如意棒に弾き返されている。
「そんなに私が魔女じゃなかったことが腹立ったわけっ！？」
「うん」
「素直ねっ！！」
すぐさま頷く門貴に、イースが思わず突っ込みを入れてしまう。
「じゃあまた魔女の姿に戻ってあげましょうかっ？」
「えっ！？ホンマっ！？」
「……っ」
イースの言葉に、目を輝かせる門貴。その門貴の一瞬の隙をつき、イースが鬼爪を引っ込めて、門貴へ向かって大口を開く。
「ウソに決まってんでしょっ！“鬼炎”っ！！」
「……っ！」
後方へと飛びながら、門貴へ向けて激しい炎を放つイース。
「クっ…！」
――――バァァァァァァァーーーーンっっ！！――――
逆巻く炎の中に、門貴の姿が消えていく。
「アッハッハッハっ！！だぁ～れが二度とあんな小賢しい人間の姿

になるもんですかぁっ！」
「ふぅ～ん…そうかぁ…」
「えっ…？」
炎の奥から聞こえてくる声に、イースが表情を曇らせる。
「じゃあっ…お前を生かしとく価値はまるっきしナイっちゅーことやなぁっ？」
「……っ！！」
炎の中に見える人影に、大きく目を見開くイース。風に体を包まれた門貴は、逆巻く炎を受けることなく、平然とその場に立っていた。
「お前っ…！！」
「じゃあ遠慮なくっ」
「うっ…！」
不適に微笑み如意棒を構える門貴に、イースがその表情を引きつる。
「待っ…！待ってっ！一度くらいならっ…！」
「もう遅いわっ」
必死に両手を突き出したイースに、門貴はどこか冷たく言い放った。
「如意棒・第一の舞っ…“空”っ…！！」
門貴が周りに逆巻くイースの炎をも巻き込んだ、一陣の風を、イースへ向けて放つ。
「うっ…！！」
迫り来る風に、大きく目を見開くイース。
「あああああああああああああああっっっ！！！」
風に斬り裂かれ、イースはその体を砂と化して、吹かれていった。
「ふぅ～っ」
門貴が一息つきながら、如意棒を下ろす。
「魔女っ子ちゃんは、また自分で探すかぁっ」
どこか前向きな笑みを浮かべ、そう呟く門貴であった。

「のっ…ノースっ…」
強い光線の中に跡形もなく消えた仲間の姿に、先程まで“殺戮、殺戮”と楽しげに微笑んでいたウェスも、さすがにその表情を強張らせた。
「まっ…まさか…退治屋でもないあんな奴らにっ…」
信じられないといった表情で、ウェスが鹿男たち三人を見つめる。
「どうしてっ…」
「お前らには一生わかんねぇーさっ」
「何っ…？」
背後から聞こえてくる声に、ウェスが眉をひそめ振り返る。
「“誰かの為に”なんて言葉を知らねぇー、お前らにはなっ…」
「……っ」
余裕の笑みを浮かべ、そう言い放つ桜時に、ウェスが勢いよく表情を引きつる。
「その生意気な口のきき方がっ…」
ウェスが少し俯き、両手の鬼爪を構える。
「気にいらないのよぉぉぉっっっ！！！」
顔を上げたウェスが、両腕を振り上げ、桜時の元へと駆け込んでくる。
「……。」
向かってくるウェスを静かな表情で見つめ、ゆっくりと村雨丸を構える桜時。
「終わりだっ…」
「……っ！」
ウェスが鬼爪を振り下ろすその前に、桜時は桃色の光に覆われた村雨丸を振るった。
「“瞬花…終刀”っっ！！」

「ううっ…！！」
ウェスへと向かってくる、無数の桃色の花びら。
「うわあああああああああああああああっっっ！！！」
桜の花びらに包まれたウェス。
「オズ様っ…オズ様ぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！！」
天へ向かって必死にオズの名を叫んだウェスは、自身の体も桜の花びらとなり、地面へと儚く散っていった。
「……。」
どこへともなく消えていく花びらを見ながら、桜時が村雨丸を鞘へと戻す。
「……っ」
桜時はふとオズの屋敷に視線を移し、その目を細めた。

第３９章　獅子に勇気を、鰤に愛を　☆３

オズの屋敷内・オズの部屋。
「ううぅっ…」
薄暗い部屋に一人残っていたオズが、どこか唸るような声を漏らした。
「我が魔女たちの…反応が消えた…」
巨大な影は、少し眉をひそめる。
「一体、何が…」
「四人の魔女は皆、死にましたよ」
「……っ」
静かな屋敷によく響く足音とともに、オズの部屋へと入って来る人影。その人間の姿に、オズは少し驚いたように体を揺らした。
「残ったのは、アナタお一人です」
オズの部屋へと入って来たのは、輝矢であった。輝矢はオズをまっすぐに見つめ、強く言い放つ。
「大魔法使いさんとやら…」
「……。」
少し皮肉ったように微笑む輝矢に、静かに肩を落とすオズ。
「その言いよう…どうやら我の正体に感づいているようだな…」
「感づくも何もないでしょう？」
意味深に言うオズに対し、輝矢は当然のように答える。
「この屋敷からは、醜い鬼の気配しか出ていない…」
「……っ」
輝矢の言葉を聞き、オズがそっと微笑む。
「その通りっ…」
――――バァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

「……っ」
そう笑い、その巨体に纏った黒のローブを破り、オズが本来の姿を現す。薄暗い部屋の奥からゆっくりと歩いてくるオズに、輝矢が表情を引き締め、身構える。
「よくぞ見破った…」
前へと出てきたオズの全貌が、明らかになっていく。
「……っ！！」
やっと見えたオズの姿に、思わず大きく目を見開く輝矢。
「りょっ…緑鬼っ…？」
次の瞬間、輝矢が間の抜けた表情となる。薄暗い部屋の奥から、輝矢の前までやって来たのは、一匹の緑鬼。鬼人の中でも一番レベルの低い、ただの緑鬼であった。
「ハッハッハっ！！そうだぁっ！！私がオズっ！！」
緑鬼・オズが、高々と笑い声をあげる。
「自称・大魔法使いっ！してその本性はぁっ！魔法など一切使えない、ただの緑鬼であぁぁーーるっ！！」
「……。」
そんなオズの自己紹介に、呆れきって言葉も出ない様子の輝矢。
「四人の魔女たちにも言ってなかったんだぞぉっ！バカにされるからなぁっ！」
その情けない秘話を、オズはどこか自慢げに話す。
「光栄に思えよぉっ！アッハッハッハっ！！」
「何故、鹿国を…？」
「んっ？」
脱力した様子のまま問いかける輝矢に、オズが目を丸くする。
「緑鬼は一番格下ってバカにされるからなぁ～っ！ちょっと威張ってみたかっただけだぁっ！」
「……っ」
明るく言い放ったオズの言葉に、輝矢の表情が曇る。

――――やめてよぉっ！せっかくお父さんたちが頑張って耕したのにぃっ！――――
――――鹿男だけに行かせていいのかよっ…！？――――
――――鹿男が死んだら…私の“ココ”は…きっと痛む…――――

「……。」
村人たちや、レオ、キリコのことを思い出し、輝矢はそっと拳を握り締めた。
「ってなわけでカワイイもんだと見逃がしっ…！」
「いいえっ」
「へっ？」
すぐさま答える輝矢に、明るく笑っていたオズが表情をひそめる。
「気分を害しました。見逃がす気には、なれそうもありません」
下を向いたままそう呟き、輝矢が右耳のピアスに手をかける。
「“月器・三日月”っ」
ピアスを弾き、月器を目覚めさせた輝矢が、ゆっくりとした動きで三日月を構える。
「そっ…そんなっ…！俺はただの緑鬼っ…！」
「鬼は鬼…でしょう…？」
「ひいいいいいいいいいっっっ！！！」
顔を上げた輝矢の何とも冷たい表情に、オズが震え上がる。
「竹取輝矢…鬼退治、いたしますっ」
「ううっ…！！」
向かってくる輝矢に、オズが表情を引きつる。
「……っ」
輝矢がオズへ向け、三日月を振るった。
――――――……っっ！！――――
「……。」

オズの後方に、オズと背中同士を向けるように立つ輝矢が、構えていた三日月をそっと下ろす。
「うっ…！」
少し苦しげな声を漏らすオズ。
「うぎゃあああああああああああああっっっ！！！」
腹部の真一文字に斬り裂かれた傷から、噴き出すように血ふが溢れ出ると、オズは激しい叫び声をあげ、そのまま力なく砂となり、消えていった。
「“月器”…」
輝矢が三日月を、ピアスへと戻す。
「……またつまらんものを斬ってしまった…」
床に積もった砂に目を落としながら、輝矢はそっと呟いた。

「あっ！輝矢っ！」
オズの屋敷から出て来た輝矢の元へ、桜時からイヌの姿へと戻ったハチが歩み寄っていく。
「終わったのか？」
「ええ、もうこの上なくあっさりっ」
「へっ？」
どこか煩わしそうに答える輝矢に、ハチが少し首を傾ける。
「怪我人は？」
「村の連中で火傷したヤツが何人か…でももうほとんど由雉が治療し終えた」
「そうですか」
ハチの言葉に、輝矢は少し安心した様子で肩を落とした。
「輝矢ぁぁぁ～んっ！俺の魔女っ子ちゃんがぁっ…！魔女っ子ちゃんがぁっ…！！」

「ハイハイっ」
倒しはしたものの、やはり魔女ショックを引きずっている様子のモンキを、輝矢がどうでも良さそうにあしらう。
「あっれぇ～っ？」
『……っ？』
どこか間の抜けた鹿男の声に、輝矢やハチたちが振り返る。
「何だろぉ～？これぇ～」
輝矢たちが振り返ると、鹿男が何やらくしゃくしゃの小さな紙を眺め、不思議そうに首を傾げていた。
「どうしたの…？鹿男…」
「これぇ～っ、ポケットの中から出てきてさぁ～」
「ゴミでも入れて忘れてたんじゃね？」
「んん～、でも何か見覚えあるような…」
首を傾げている鹿男の元へ、レオとキリコが歩み寄る。
「あっ、何か書いてあるぅっ！えっとっ…」
紙に書いてある文字に、目を落とす鹿男。
『……っ？』
鹿男の横から、レオとキリコが紙を覗き込む。
『……っ』
その紙に書かれた文字を見て、レオとキリコは大きく目を見開いた。

――――――・・・・・・・
「ねぇ～、レオとキリコは、どうしてここに来たのぉ？」
それは、レオとキリコが鹿国に来て、一ヶ月程の時が流れた頃の出来事だった。
『……。』
鹿男のふとした問いかけに、二人は少し表情をひそめた。

「足りないものが…あったから…かな…」
「足りない…もの…？」
悲しげに言ったレオに、鹿男は少し首を傾げる。
「キリコは？」
「私は…あるものを失くしてしまったからよ…」
「失くしっ…？」
キリコも、問いかけた鹿男に悲しげに微笑む。
「見つからないの…？」
「ええ…生まれるずっと前に…失くしてしまったものだから…」
「……っ」
そんな、出来事だった……――――――

「んん～っ…何て書いてあるんだぁ？」
『だあああああああああああっ！！』
紙を見ながら首を捻る鹿男に、ハチとモンキが勢いよくズッコケる。
「お前っ！自分で書いたんとちゃうんかいっ！！」
「その頃、アラビア語ブームだったからなぁ～っ」
「何語で書いてんだよっ！！」
鹿男に突っ込みを入れまくるハチとモンキ。
「でっ、何て書いてあるんです？」
『……。』
「……っ？」
いつものように通訳を頼む輝矢であったが、紙を見つめたレオをキリコは、どこか茫然としたまま、固まっている。そんな二人の様子に、首を傾げる輝矢。
「ブリ？ライオン？」
「“レオの…」

『……っ』
輝矢の呼びかけに、紙に書かれた内容を読み始めるキリコ。その声に、鹿男やハチたち、皆が耳を傾ける。
「“レオの足りないものと…キリコの失くしたものが…手に入りますように…”」
「えっ…」
読み上げたキリコに、ハチが少し戸惑うように声を出す。
「ああっ！そうだぁっ！」
『うおっ』
いきなり大きな声を出す鹿男に、ハチとモンキが少し驚くように声を漏らす。
「思いだしたぁっ！俺、千年竜に依頼してぇ、依頼内容忘れるだろうからってメモ書きしといたんだったぁ！」
「千年竜っ？」
「依頼内容って…」
鹿男の言葉に、顔をしかめる輝矢とユキジ。
「依頼したのは鹿男だったってことぉっ？」
「しかも内容はオズ退治じゃなかったんだなぁ…」
「はぁっ…」
ハチとユキジの言葉を聞きながら、輝矢がどこか疲れたように肩を落とした。
「まぁ～た無駄な労力使ってしましたねぇっ…」
「ぐぅ～っ！」
「……っ？」
疲れていた輝矢が、鹿男にあだ名を呼ばれ、振り返る。
「ですからそのあだ名はっ…」
「フンころがしっ！！」
「はっ…？」
笑顔でそう言い放つ鹿男に、輝矢が勢いよく表情を引きつる。
「ああぁ～っ…そういう意味でしたねっ…」

その言葉の意味を思い出し、理解したように頷く輝矢。
「俺っ、ちゃんと依頼覚えれてなかったけど、ぐぅ～たち、ちゃんと俺の依頼、叶えてくれたみたいでっ…！」
「それは違いますよ」
「へっ…？」
礼を言い、笑顔を見せた鹿男に、輝矢がそう言い放つ。輝矢の言葉に、鹿男が首を傾けた。
「アナタの願いを叶えたのは…」
輝矢が穏やかな笑みを、鹿男へと向ける。
「アナタ自身です」
「えっ…？俺っ…？」
輝矢の言葉に、戸惑う鹿男。
『……っ』
そのやり取りを見守りながら、ハチたち三匹も笑みを浮かべる。
「俺は何もっ…」
「鹿男ぉぉぉぉぉぉぉっっっ！！！」
「ぐわあああああっっ！！」
輝矢の言葉の意味をまだ理解していない鹿男が、後ろから勢いよく抱きついてくるレオの腕に首を絞められ、苦しげな声を漏らす。
「おぉ～いっ！苦しいよぉ～っ！！レオぉ～っ！」
「ありがとうっ…」
「えっ…？」
絞まる首に顔をしかめていた鹿男が、レオの呟いた言葉に目を丸くする。
「ありがとうっ…！」
「レオ…？」
どこか泣きそうなその声に、鹿男はさらに首を傾げた。
「……っ」
「……っ？」
戸惑っていた鹿男の手の上に、そっと乗る白く細い手。

「キリコ…」
「……っ」
鹿男の手を握り締めたキリコが、鹿男に優しく微笑みかけ、そっと俯く。
「私も…ありがとう…」
「……っ？」
レオと同じ言葉を呟くキリコに、またまた戸惑う鹿男。
「ぐぅ～っ」
鹿男が少し助けを求めるかのように、輝矢の方を見る。
「“ありがとう”って…？」
「……っ」
鹿男の問いかけに、輝矢がそっと微笑んだ。
「“フンころがし”と…いう意味ですよっ…」

こうして、脳のないシカと心のないブリと、勇気のないライオンを巻き込んだ事件は、終わりを告げた…。

第３９章　獅子に勇気を、鯛に愛を　☆４

翌日。
「本当にいらないのかぁ～？依頼のお礼っ」
「ええっ」
少し困ったような表情で問いかけた鹿男に、キッパリと答える輝矢。
「依頼をこなした覚えもありませんし、それにっ…」
輝矢がふと表情をしかめ、目線を横に移す。
「金品ならともかく、農作物ではねぇっ…」
「ウチの米、旨いのにぃ～っ」
荷車いっぱいに積まれた米やら野菜やらを眺めながら、輝矢がどこか不満げに呟く。そんな輝矢に、鹿男は残念そうな表情を見せた。
「では私たちはこれで」
「うんっ！またなぁっ！」
鹿男やマトリョー鹿、その他の村人たちに見送られながら、輝矢一行が鹿国を旅立とうと一歩を踏み出す。
「って、ちょっと待てっ！」
『……っ？』
ハチの声に、一歩踏み出したところで立ち止まる一行。
「何です？ハチ」
「どうやって飛び越えるんだっ！？御伽山脈っ！」
『あっ…』
ハチの指摘に、輝矢たちが思い出した様子で声を出す。
「そういえばそうやった…」
「行きはあのヘンテコ魔法使いの竜巻に吹っ飛ばされて来たんだもんねぇ～っ」
「こういうのはどうです？山を一個、消し去るっ」
「却下っ」

輝矢の物騒な案を、一瞬にして却下するハチ。
「んん～どうしたものかぁ…」
「龍国に帰るんなら、そこのトンネル通ってくといいぞぉ～っ！」
「へっ…？」
腕組みをして、深く首を捻っていた輝矢が、鹿男の陽気な声に、顔をしかめ、鹿男の指差した方を見る。
『……。』
輝矢一行が鹿男の指差した方を見ると、御伽山脈の山の一つに、確かに掘られたキレイなトンネル。
「歩きでも一時間くらいで抜けられるんじゃないかなぁ～っ？」
「……。」
鹿男の言葉に、輝矢の表情がより一層、曇る。
「あんのっ…！エセ魔法使いがっ…！」
「あっ！待ってぇ～っ！輝矢ぁぁぁ～んっ！」
「危険な行動には出るなよっ！？人道は外れるなぁっ！」
「どうもっ、お邪魔しましたぁ～っ」
「はぁっ…」
怒り剥き出しでトンネルの方へと歩いて行く輝矢を、必死に追いかけていくハチ、モンキ、ユキジ。最後尾で飛んで行くユキジの挨拶に、鹿男が少し戸惑いながら頷く。
「どうか…したのかな…？」
「さぁ～っ？」
鹿男の問いかけに、同じように不思議そうに首を傾げるマトリョー鹿。
「まぁいっかぁ～っ」
「鹿男っ」
「……っ？」
すぐにどうでもよくなった鹿男が、後ろから名前を呼ばれ、振り返った。
「レオ、キリコっ」

『……。』

鹿男が振り返ると、そこには旅支度を整えた、レオとキリコの姿があった。

「……っ」

二人の背負った大きな荷物を見て、鹿男が少し眉をひそめる。

「何っ？どっか行くのぉ？」

すぐさまいつもの陽気な笑顔を見せて、レオとキリコへ問いかける鹿男。

「鹿男っ、俺…」

レオが少し躊躇うように俯いた後、ゆっくりと顔を上げる。

「国へ…帰ろうと思う…」

「……。」

まっすぐな瞳でそう言うレオに、陽気な笑顔を見せた鹿男の表情が、少しだけ動いた。

「帰って、国の連中やオヤジと、ちゃんと向き合ってくるっ」

「レオ…」

曇りのない瞳、清々しい笑顔。何かに怯え、俯いてばかりいたレオが、今はこんなにも前を向いている。そんなレオの姿に、鹿男は少し目を細めた。

「私も…国へ帰るわ…」

レオの横から、キリコがそう言う。

「もう一度家族と…家族になれるよう頑張ってみる…」

「キリコ…」

穏やかな瞳、心優しい笑顔。何にも表情を変えず、少しの感情も見せなかったキリコが、今はこんなにも心の底から笑っている。そのキリコの笑顔に、鹿男もそっと微笑んだ。

「うんっ！秋田小町っ！！」

「それを言うなら“いってらっしゃい”よ…鹿男…」

「やぁ～っぱ最後もこれかぁ～っ」

いつもの陽気な笑顔で、いつものように意味の通っていない言葉

を言い放つ鹿男に、二人も大きく笑う。
「また…会えるよね…？」
『……っ』
どこか不安げに囁いた鹿男に、レオとキリコが少し眉を動かす。
「当ったり前だっ！」
その不安を掻き消すように、レオが大きな声で言い放つ。
「俺たちの友情はっ、永久に不滅ですっ！！」
「クサっ…」
「うっせぇぞぉっ！キリコぉっ！こういうのはクサい方がいいんだよっ！ほらっ！」
『……っ？』
そう言ってレオが、三人の真ん中に、手の甲を上に向け、手を差し出した。
『……っ』
鹿男とキリコが微笑み、それぞれ手を差し出す。
三つの手が、三人の真ん中で、しっかりと重なりあった。
「じゃあねぇ～っ！！」
「おうっ！またなぁっ！鹿男っ！！」
「元気でね…」
大きく手を振る鹿男に見送られ、レオとキリコが歩き去っていく。
「じゃあね…」
遠ざかっていく二つの背中を見つめ、もう一度呟く鹿男。
「寂しく…なるな…」
「うん…」
マトリョー鹿のその言葉に、鹿男は少し切ない笑顔で頷いた。

こうして、心を取り戻したブリと、勇気を持ったライオンは、鹿の国から旅立っていった。

数時間後。龍国・青守トマトの屋敷。

「ホントに一時間ちょっとで着いたねぇ～っ」

「あの魔法使いっ…今度会った時は、ふっ飛ばします」

「まぁまぁ知らなかっただけかも知んねぇーしぃっ」

実は存在した御伽山脈のトンネルを通り、一時間とちょっとで元の龍国・トマトの屋敷まで戻って来た輝矢一行。魔法使い・センシに怒りを燃えたぎらせている輝矢を、何とか宥めようとハチが必死にフォローを入れる。

「でも結局、お泊まりまでしたからぁ、そんなに早ようは帰って来れんかったなぁ～っ」

「別に構いませんよ。どうせ依頼をこなしたわけではないのですしっ」

「えっ？」

輝矢の言葉に、ハチが少し目を丸くする。

「ババアに本当のこと言うのか？依頼の内容とか」

「ええ、そうですよ」

ハチの問いかけに、輝矢は迷うことなく自然に答える。

「鬼人退治したことはしたんだし、別にちょっとくらいウソついたって…」

「そんな偽りの勝利になど、何の興味もありません」

輝矢が少し表情をしかめて言い放つ。

「私のプライドに傷がつきますっ」
「……っ」
迷いのない瞳で言う輝矢に、少し驚いたように目を見開くハチ。
「あぁ～あっ、これだからプライドの高い女はっ…」
「そんな輝矢んも好きやぁ～っ！！」
「……っ」
ユキジが呆れ、モンキが愛を叫んでいる横で、俯いたハチがそっと笑みをこぼす。
「さぁて、嫌味を言われる準備でもっ…」
「俺っ、お前のそういうところは好きかもっ」
「えっ…？」
そう呟き、輝矢の横を通って、前へと歩いて行くハチの姿を見ながら、輝矢が固まる。
「……っ」

――――バッタァァァァァァーーーーンっ！！――――

『うおっ！』
何もない廊下で、顔から勢いよく倒れ込む輝矢に、後ろから見ていたモンキとユキジが大きく驚く。
「輝矢んが…コケたっ…」
「この世で一番凄いのはっ…桜時のボケっぷりかもねぇ～っ」
唖然とした表情で呟くモンキの横で、ユキジがしみじみと頷く。
「ちゅーか、俺も好きって言ってんけど？」
「サルの言葉なんて耳にも入らないんでしょっ」
「がびぃぃぃ～～～んっ！」
ユキジの冷たい言葉に、モンキがショックを受ける。
「おぉ～いっ！」
輝矢のそんな状態や、モンキとユキジのやり取りを気にすることもなく、一足先に大広間へと入るハチ。

「戻ったぞぉ～っ！クソババア～っ！」
「おうっ」
「あれっ？」
大広間に入ったハチを出迎えたのは、相変わらずの目つきの悪さを見せたゴンであった。
「あれっ？」
「どうだったぁ？先生への依頼ってぇのはっ」
首を傾げたハチに、やる気なさそうに問いかけるゴン。大広間には、ゴンの姿しか見当たらない。トマトも、その他の旦那大勢もいないようである。
「ババアはっ？」
「トマト先生ならいないぜっ」
「へっ？」
『えっ？』
ゴンの言葉に、ハチと、ハチに遅れるようにして大広間へと入って来た輝矢たちが、一斉に首を傾げる。
「いっ…いないって…」
“イイ男探しの旅に出る”とかって、さっき出掛けた」
「はぁっ！？」
「……っ」
勢いよく顔をしかめるハチの後ろで、その表情を引きつる輝矢。
「あんのっ…クソババアぁぁぁぁっ！！！」

――――バァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

『うわあああああああああああああっっっ！！！』

怒り狂った輝矢は、その後、トマトの屋敷の十分の一を破壊し、旦那数名が怪我を負った。

その頃、龍国・エセお菓子の家こと桃原家。
「本当にもう行かれるんですかぁ？」
玄関先に立った太狼が、前に立つ人物に問いかける。
「ええ…そう雀を空けておくわけにもいかないわ…」
そう太狼に答えたのは、雀国主にして、桜時の伯母・孔雀であった。座黒により龍国へと呼ばれた孔雀は、話も終え、雀国に帰ろうとしていた。
「もうちょっとで帰ってきますよぉ～？一目見てからでもっ」
「もう十分見たわっ。しばらく見たくないくらいっ」
誰のこととも言っていないのに、間髪入れずに答える孔雀。その悪態が、何とも孔雀らしい。
「まぁよろしく言っといてっ」
「本当はぁ～一目見たら帰りにくくなっちゃうからだったりしてぇ～っ」
「違うわよっ！！」
悪戯っぽく言い放った太狼に、孔雀がムキになって怒鳴り返す。
「ったくっ…！貴方って男はっ」
「でもぉ」
呆れている孔雀に、太狼が少し鋭い瞳を向ける。
「なんで今になってぇ、ハチ君をあの千年竜さまにぃ～っ？」
「……っ」
その太狼の問いかけに、孔雀もそっと目を細め、表情を鋭くした。
「別に桜時の秘密なんてどうでも良かったのよっ」
「うわぁ～っ、冷たぁ～いっ」
キッパリと答える孔雀に、煽るように声を出す太狼。

「彼女を、あの破天荒女に会わせたかっただけっ」
「輝矢ちゃんにぃ～っ？なんでまたぁ～っ」
「理由もわかってないのに、貴方が黙って行かせたりする？」
「……っ」
孔雀の言葉に、わざとらしく問いかけた太狼であったが、鋭い孔雀の指摘に、少しその笑みを動かした。
「世界は…動き出したんでしょう…？あの破天荒女と桜時が出会ったことで…」
まっすぐな瞳で、太狼へと問いかける孔雀。
「貴方と…あの人が出会った時のように…」
「……っ」
孔雀の言葉に、太狼が笑みを消し、その表情を曇らせる。
「なら、私も動くわ…」
孔雀が、強い意志を覗かせるかのように、言い放つ。
「世界が動くというのなら…私は進める…自分自身の手で…」
「……。」
その言葉にそっと目を細めた後、太狼が小さく笑みをこぼす。
「強い人ですねぇ、貴女はっ…」
どこか感心するように言い放つ太狼。
「まぁっ、昔からですかぁっ」
太狼が少し肩を落とした。
「旦那さんっ、ハゲてきてませんっ？」
「うっさいわねっ！貴方に関係ないでしょっ！！」
フザけたように言う太狼に、勢いよく怒鳴り返す孔雀。ムキになるところを見ると、どうやらハゲてきているようである。
「でっ、貴方はどうするわけっ？」
孔雀が再び真剣な表情を見せ、太狼へと問いかける。
「動いていく世界を相手に…」
「……っ」
孔雀のその言葉を受け、太狼がどこか不適に微笑む。

「別にっ」
「えっ…？」
短い太狼の答えに、眉をひそめる孔雀。
「僕はなぁ～んにも、しませんよぉ」
「する必要はないと…？」
「いえっ、面倒臭いだけですっ」
「だああっ！」
キッパリと答える太狼に、孔雀が肩透かしを喰らったかのように体を傾ける。
「まったく…喰えない男ねっ…」
「ありがとうございますっ」
「誉めてないわよっ！！」
喜ぶ太狼に、勢いよく怒鳴り返す孔雀。
「ったく、貴方を見てると…甘いのか厳しいのか…よくわからなくなるわっ」
「僕は甘いですよぉ」
太狼が右手に持った甘さダルダルココアに目を落とし、そっと微笑む。
「誰よりも、ねっ…」
「……。」
そのむせ返りそうなほどの甘い香りと、太狼の何を考えているのかわからない微笑みに、孔雀はどこか呆れるように肩を落とした。
「まぁいいわっ、じゃあ私はもう行くからっ」
「ええ、お気を付けて」
「桃原太狼…」
「……っ？」
改まったように名を呼ばれ、太狼が少し不思議そうに顔を上げる。
「桜時のこと…よろしくね…」
「……っ」
真剣な瞳でそう言った孔雀に、太狼は少し驚いた表情を見せたが、

すぐさま爽やかに微笑んだ。
「ええっ」
「……っ」
太狼がしっかりと頷いたことを確認すると、孔雀もそっと笑みをこぼし、そのまま太狼に背を向けて、従者たちの待つ方へと歩き去っていった。
「……。」
玄関に一人残った太狼が、そっと上空を見上げる。
「そう…僕は何もしない…ただ、見守るだけ…」
空に輝く太陽を見て、そっと目を細める太狼。
「あの子が…貴女と同じ…滅びの道を辿ろうともね…」
太狼がココアを持っていない方の手で、太陽を掴むように拳を握り締める。
「“朝日”…」
太陽を掴むことのないその手は、ただ強く、握り締められた。

第４０章　オトポリ志願！　★１

――――俺、オトポリに入るわっ……

今も、その言葉だけが、私の決意。

御伽界・レムの村近く。眠り姫の居城前。

「……。」

古びた巨大な城のすぐ傍に作られた、まだ真新しい小さな墓を見下し、トマトはどこか神妙な表情を見せていた。かつて“眠り姫”の噂で騒がれていた眠りの森も、オトポリによる鬼人化人間の調査が済んでからは、静けさを取り戻していた。

「特に何もなかったね…。次はどこだい？地蔵っ」

「あっあああっ」

トマトに言われ、トマトのすぐ後方に立っている、明らかにトマトの分もあるだろう大きな荷物を抱えた地蔵が、手にしている資料のようなものに目をやる。

「“虎国”だなぁっ」

「虎国か…」

少し目を細め、空を見上げるトマト。

「行くよ、地蔵っ」

「おうっ」

足早に森を抜けて行くトマトを、大きな荷物を抱えた地蔵は、どこか必死そうに追っていった。

龍国・オトポリ本部。副長官室。
「トマト先生がぁっ？」
「ええっ」
驚いた様子で聞き返したゴンに、素気なく答えたのはリンゴであった。
「鬼人化人間の資料をぉっ？」
「ええ。“渡さないと旦那にするよ”って隊員を脅したみたいっ」
「なぁ～にやってんだかっ、あの人はっ」
リンゴの説明を受け、ゴンが少し呆れた表情で肩を落とす。ゴンがトマトの屋敷で輝矢たちの帰りを待っている間に、そのような出来事が起こったようである。説明するリンゴも、冷静ではあったが、やはり少し困っているようであった。
「イイ男探しに行くとか言ってたけど、やぁ～ぱあの女のこと、探りに行ったのかなぁ」
遠くの方を見ながら、ゴンが呟く。
「そうなんじゃないっ？言ったんでしょっ？あの女が鬼人化人間に関わってるかもって」
「ああ」
「トマトおばあちゃん、なんて？」
「別にぃ？“そうかい”って一言だけっ」
「そうっ…」
ゴンの答えに、リンゴは少し考え込むように俯いた。
「まっ、あの人の考えてることは、太狼さんの考えてることの次にわかんねえぇーからなっ」
「そうね。考えるだけ無駄かもね」
「はぁ～あっ、じゃあパトロールにでも出てくっかなぁ～っ」
ゴンが椅子から立ち上がり、伸びをしながらリンゴに背を向け、数歩歩く。
「……。」

椅子に座ったまま、少し視線を下に落とすリンゴ。
「ねぇ、ゴンっ…」
「あっ？」
伸ばしていた体を戻しながら、リンゴの呼びかけに、ゴンが素気なく答える。リンゴが俯いたまま、どこか浮かない表情を見せる。
「あの女が関わってるってことは、やっぱり…もっ…」
「ハァァ～～イっ！！リンゴォォォーーーっっ！！！」
『……っ？』
勢いよく開く扉の音と、それとともに耳に入って来た耳障りな程、陽気で知能指数の低そうな声に、ゴンとリンゴが顔をしかめて振り向く。
「オオォォ～～っ！リンゴォォっ！！今日も何とも美しいねぇ～っ！！」
副長官室へと入って来たのは、腰ほどまで伸びたサラサラの金髪をたなびかせた、長身細身の若い男。深い藍色の瞳に、よく整った顔立ちをしている。二十代半ばあたりに見えるが、それにしては落ち着きのない、大きな動きをしている。オトポリの制服を着ているところを見ると、この男もオトポリ隊員なのであろう。
「君の美しさに僕は眩暈がしてきたよぉ～っ！ああっ！クラクラっ！」
「馬（ば）ロン…」
リンゴが少し頭を抱えながら、その男の名らしきものを呼ぶ。
「そうともっ！僕こそが君の白馬の王子っ！馬ロンさぁ～っ！」
「はぁっ…」
どこかキラキラとしたオーラを放ちながら、大きな動作で髪を掻き上げる馬ロン。その何とも言えないうざったさに、リンゴはさらに頭を抱えた。
「アホらしっ」
「んんっ？」
横で呆れきっているゴンの声に気づき、馬ロンが振り返る。

「ああっ、君もいたのかいっ？ベン君っ」
「ゴンだっ」
ゴンの方を振り向いた途端に、その表情をしかめる馬ロン。名前を間違える馬ロンに、ゴンも目つきの悪い瞳を向ける。
「リンゴぉ、同期だからといってそう無理に、こぉんな問題キツネの面倒を見る必要はないんだよぉ？」
「誰が問題キツネだっ」
「この前も、よりにもよってあの犬国に、ケンカを吹っかけたそうじゃないかぁ～っ」
「うっ…」
嫌味ったらしく言い放つ馬ロンに、ゴンは反論の言葉を失くしてしまう。
「もう謹慎は解けたのかいっ？君が謹慎してくれてる方が、オトポリは平和なんだけどねぇ～っ」
「ああっ！？」
「ゴンっ！」
「……っ」
馬ロンの嫌味に耐え兼ね、その表情をさらにしかめて身を乗り出したゴンを、リンゴが牽制するように見る。
「やめなさいっ」
「コイツが先にっ…！」
「コイツじゃないでしょっ？馬ロンは次長よっ？あんたの上官っ」
「けどお前だってっ…！」
「私は副長官っ」
「うっ…」
堂々と言い放つリンゴに、またしても反論の言葉を失くすゴン。
リンゴはゴンの同期とはいえ、オトポリの副長官。オトポリでは座黒の次に偉い人間なのだ。
「どうせ俺はヒラだよっ…」
「でっ？何しに来たのっ？馬ロンっ」

少し落ち込んだ様子でこっそりと呟いているゴンを無視し、リンゴが馬ロンに問いかける。
「もちろんっ！君の美しい顔を見にさぁ～っ！」
「あんまり軽口ばっか叩いてると、地方に飛ばすわよ？」
「志願隊員の指導に来たのさぁ～っ！」
リンゴの権力を使った脅しに、馬ロンは笑顔のままではあったが、すらすらと本当の理由を答えた。
「志願隊員っ？」
馬ロンの言葉に、ゴンが興味深そうに反応する。
「そういえば、パパが人員拡大するとか言ってたわねぇ～でも全然集まんなかったって」
「ああ、つい今朝方、やっと一人、志願者が出たそうだよぉっ」
「それであんたがそのたった一人の指導を？」
「ああ、そうだよぉ～っ！優秀な人間は常に引っ張りだこでねぇ～っ！」
ゴンの問いかけに、馬ロンが自慢げに答える。
「その点、君はどこからもお呼びがかからなくていいねぇ～っ！実に羨ましいよっ！」
「……っ」
馬ロンの笑顔の嫌味に、ゴンが強く拳を握り締める。
「志願隊員…かっ…」
「……。」
握り締めていた拳を開き、そっと俯いて、どこか悲しげな表情で呟くゴン。そんなゴンを見つめ、リンゴは少し目を細めた。
「新人には出来る限り近づかないでおくれっ！問題キツネがうつるからねっ！」
「ああっ！？」
「お姉ちゃんっ！！馬ロンさんいるっ！？」
『……っ？』
そこへと駆け込んできたのは、走って来たのか息を切らし、どこ

か慌てた表情のイチゴであった。
「イチゴっ？」
「あっ！やっぱりいたっ！」
「やぁ～っ！イチゴぉぉっ！！今日も一段と可愛っ…！」
「すぐにっ…！すぐに来て下さいっ…！！」
「へっ？」
やって来たばかりのイチゴにも軽口を叩こうとした馬ロンの手を、イチゴが勢いよく引く。イチゴに引っ張られ、目を丸くする馬ロン。
「志願隊員がっ…志願隊員が大変なんですっ…！」
『はっ？』
イチゴの言葉に、ゴン、リンゴ、馬ロンの三人は、一斉に首を傾げた。

その頃。龍国・エセお菓子の家こと桃原家。
「そっかぁ～孔雀さん、帰ったのかぁ」
「うん。君に“よろしく”って言ってたよぉ～」
鹿国での鬼人退治を終え、トマトの屋敷に戻った輝矢たちであったが、トマトはすでに屋敷を出た後であり、輝矢たちは仕方なく太狼の家へと戻って来ていた。桃原家へと戻ったハチは、太狼から孔雀が雀国へ戻ったことを聞かされたのであった。
「ふぅ～んっ…」
太狼の言葉に頷きながら、リビングのソファーへと飛び乗るハチ。
「見送りくらいさせてくれりゃあ良かったのにっ」
「あの人も大概、甘いからね…」
「えっ？」
「いやっ…」
ココアを片手に持った太狼の小さな声が聞こえず、ハチは首を傾

けたが、太狼はどこか不適な笑みを浮かべるだけであった。
「それでぇ？どうだったのぉ？千年竜さんはぁっ」
「ああ…」
太狼の問いかけに、ハチがどこか疲れたように肩を落とす。
「もう最低です」
ハチの代わりに答えたのは、キッチンの方からリビングへと入って来た輝矢であった。輝矢はかなり不機嫌な表情を見せながら、ハチの横のソファーに座る。
「私のハチに無理やりキッスをするなんてっ…」
どこか煩わしそうに呟く輝矢。
「ホント信じられませんっ」
「お前だって無理やりしたじゃねぇーかよ」
強くトマトを否定する輝矢に、ハチが少し非難するような目を向ける。
「しかも二回もっ…」
「まぁ三回ですけどね」
「そうか、三回かっ…。って、はぁぁぁぁっ！！？」
回数に訂正を入れた輝矢に、一度は納得した様子で頷いてたハチが、ふと気付き、大きな声を出す。
「いつだっ！？いつやりやがったっ！！？」
「さぁ～っ？いつでしょう？」
必死に問いかけるハチに、輝矢が楽しげな笑みを向ける。
「てっめっ！誤魔化すんじゃっ…！」
「四回目、いっときます？」
「ぎゃあああああああっ！！！」
問い詰めようとしたハチであったが、輝矢に迫られ、あっという間に追い詰められる。
「平和だねぇ～」
「ああ…平和やっ…」
そんな二人のいつもの光景を向かいのソファーで見つめながら、

しみじみと呟くモンキとユキジ。
「三回かぁ～…」
モンキとユキジのすぐ横に座る太狼が、そう呟きながらココアの一口飲む。
「三万回くらいぶっ殺してやりたい気分っ…」
『ひぃっ！！』
冷たく微笑みながら殺意を見せる太狼に、横に座るモンキとユキジが震え上がる。
「おいっ！！竹取っ！！」
『……っ？』
玄関の方から聞こえてくる、聞き慣れた不機嫌声に、ハチに迫っていた輝矢や、太狼に震え上がっていたモンキたちが一斉に振り向く。
「あっ…！ちょっ…！桃原家への出入りは、私かグレーテルを通していただかないとっ…！」
「こっちは急いでんだよっ！！おいっ！竹取っ！！」
止めようとするヘンゼルの声を振りきって、勢いよくリビングへと入って来たのは、少し息を切らした様子の、いつもの不機嫌面のゴンであった。
「ゴンっ？」
「そんなに慌ててどうしたのぉ～？ゴンっ」
リビングへとやって来たゴンに、太狼が爽やか笑顔で声を掛ける。
「オトポリ首になった腹いせで押し入りぃ～？警察に連絡しちゃうよぉ～？」
「そうですよ。悪事は顔だけにして下さい」
「うっせぇぞっ！失礼師弟っ！！」
好き勝手言い放題の輝矢と太狼に、ゴンが勢いよく怒鳴りつける。
「アイツっ！アイツ、お前の知り合いなんだろっ！？何とかしろっ！！」
「はっ？」

ゴンの言葉に、大口を開けて首を傾ける輝矢。
「何言ってっ…」
「いいから、ちょっと来いっ！！」
「へっ？」
ゴンが輝矢の手を引っ張り、リビングから出て行こうとする。
「うわぁ～誘拐ぃ～っ？」
「違いますっ！！」
またしてもフザけたように声を出す太狼に、目つきの悪い瞳を向けるゴン。
「緊急事態なんで説明は後でっ！とりあえず竹取借りていきますからっ！！」
「一秒百万チュンですよ？」
「高けぇーわっ！！」
そんなやり取りをしながら、ゴンが輝矢を引いたまま足早にリビングを出て行く。
「よっとっ」
モンキがソファーを飛び降り、輝矢に迫られたショックで気絶しているハチを担ぐ。
「追いかけるでぇ～ユッキーっ！」
「はいよぉ～っ」
ゴンと輝矢の後を追うようにして、ハチを担いだモンキと、さらにユキジがリビングを出て行く。
「なっ…何の騒ぎでしょう…？」
「さぁ～？」
戸惑うように問いかけたヘンゼルに、太狼はあまり興味なさそうに答えた。

再びオトポリ本部。長官・青守座黒の部屋。
「ったく、何々ですかぁ～っ？一体っ」
「いいからっ！」
ゴンに引っ張られたまま、オトポリの長官室まで連れて来られた輝矢。かなり面倒臭そうな表情の輝矢と、それに続いて、ハチを抱えたモンキ、ユキジの一行が長官室へと入る。
「ううぅ～ここはぁどこぉ？私は…だれぇ～っ？」
部屋に入った頃、ハチが丁度、気絶から目覚める。
「竹取輝矢を連れて来ましたっ！長官っ！」
「うむっ、ご苦労っ」
敬礼をするゴンに、長官席の座黒が労いの言葉を掛ける。
「私を呼び出したのはアナタですかぁ？座黒っ。一体、何のよっ…んっ？」
座黒に文句を言おうとした輝矢が、座黒の前に立っている、とある人物を見て、目を丸くする。
「あぁぁ～っ！！ぐぅ～っ！！」
「しっ…」
『鹿男ぉぉぉっっ！！？』
輝矢の声に振り向き、輝矢の方を見て、陽気な笑みを見せたのは、昨日旅立ったアホウの国こと鹿国の青年・鹿男であった。鹿男の姿に、輝矢の後ろにいたハチたち三匹が思わず声を揃える。
「なっ何故っ…鹿男がここにっ…？」
「オトポリに志願してきたのよ」
『志願っ！？』
座黒の横から答えたリンゴの言葉に、三匹はまたもや大きく驚く。
「ええ、この志願隊員募集の紙を持ってきたから、たぶんそうだと思うんだけどっ…」
徐々に曇っていくリンゴの表情。
「全然、言葉がわかんなくってっ…」

「明日の高麗ニンジン、いと痒かったねぇ～っ！！」
『だろうな…』
陽気な笑顔で意味のわからない言葉を投げかけてくる鹿男に、ハチとモンキが大きく頷いて納得する。
「長官がたぶん鹿国の人間だろうっつうし、お前ら、昨日まで鹿国行ってたから知り合いだろうと思ってさぁ」
「まぁ確かに知り合いだけどよぉっ…」
「ライオンやブリと違って、ボクら、アホウの言葉の通訳なんて出来なっ…」
「“この前は村を助けてくれてありがとう”」
『へっ？』
輝矢の言葉に、困った表情を見せていたハチとユキジが、驚いたように顔を上げる。
「大寒波マジ本気メイクで、俺、牧場に登山で寝袋なんだっ！」
「“私たちが鬼人と戦っているのを見て、自分も鬼人退治の手伝いをしたいと思ったんだ”だそうです」
鹿男の意味不明な言葉を、見事に訳す輝矢。
「おっお前っ、いつの間にアホウ言葉をっ…」
「私に不可能なんてありません」
「……。」
「さっすが俺の輝矢ぁぁぁ～～んっ！」
自信満々に答える輝矢に、ハチが少し呆れた表情を見せ、モンキは嬉しそうに輝矢を誉め称える。
「成程、そういう意味だったのかっ！」
「まったく脈絡ないけどっ…」
感心したように言う座黒の横で、少し疲れたように肩を落とすリンゴ。
「ああ～じゃあ志願動機も明らかになったところで、早速、指導にっ…」
「冗っ談じゃありませんっ」

「何っ？」
『……っ』
その座黒の言葉に、勢いよく声をあげたのは、鹿男のすぐ横に立ち、不機嫌な表情を見せている馬ロンであった。その馬ロンの声に、鹿男や輝矢たちが少し驚いた表情を見せる。
「誰です？」
「オトポリの馬ロン次長っ。ナルで嫌味ったらしくてうざくて、マジ最悪っ」
「ふぅ～ん…」
ふと問いかける輝矢に、ゴンがうんざりした様子で答える。
「こんな普通の人間と会話も出来ないような人間を、どう指導しろって言うのですっ？」
「馬ロンっ…」
非難するように言い放つ馬ロンに、座黒が少し困った表情を見せる。
「いや、しかしだなぁ、せっかく来てくれた貴重な志願者なのだしっ…」
「彼にオトポリ隊員は務まりませんよっ」
「……っ」
座黒の言葉を遮り、はっきりとそう言い放つ馬ロンに、ゴンが思わず顔をしかめる。
「んだよっ！その言い方っ！」
「ゴンっ！」
「コイツは“鬼人退治の手伝いがしたい”って言ってきてくれてんだぞっ！？」
制止を促すリンゴの声も聞かずに、ゴンはそのまま言葉を続けた。
「いい心構えじゃねぇーかっ！それだけで十分、オトポリにっ…！」
「お手伝い精神だけでは、オトポリは務まらないよっ」
「……っ」
振り返り、強く言い切る馬ロンに、ゴンが思わず言葉を止める。

「いい機会だから、君にも言っておこう」
馬ロンが鋭い瞳をゴンへと向ける。
「オトポリ隊員に最も必要なものっ…それは“能力”っ」
「能力っ…？」
「そうっ。彼みたいに人間と話す能力のない者やぁ、君みたいに冷静に判断する能力がない者にはぁ、務まらないってことだよっ」
「んだとぉっ…！？」
「いい加減にせいっ！ゴンっ！」
「……っ」
座黒の出した威厳ある声に、今にも馬ロンに殴りかかりそうだったゴンが、さすがに止まる。
「馬ロン、お前もだっ」
「……。」
座黒にそう言われ、ゴンに少しだけ冷たい視線を送ると、馬ロンは前を向き、再び座黒に向き直る。
「とにかく、指導の件はお断りさせていただきます。失礼っ」
そう言うと、座黒やリンゴに一礼し、馬ロンは長官席に背を向け、輝矢たちの横を通り抜け、長官室を出て行こうとする。
「こちらの問題キツネ君にでも、指導させたらどうですかぁ？ウマッハッハッハッハっ！」
「ああっ！？」
最後までゴンを挑発しながら、馬ロンは長官室を後にした。
「嫌味なヤツっ…」
「ヤな感じだったねぇ～」
馬ロンの去った扉を見つめ、ハチとユキジが思わず呟く。
「上っ等じゃねぇーかよっ…あのウマ野郎っ…」
『へっ？』
どこか怒りに震えるようなゴンの声に、ハチたちが一斉に振り返る。
「あんっなウマより、俺がもぉ～っとイイ指導して、立派な隊員に

してやるっ！来いっ！」
「うえぇっ？」
「あっ！ちょっ…！ゴンっ…！！」
わけのわかっていない様子の鹿男を無理やり引っ張り、勢いよく長官室を出て行くゴン。リンゴが思わず身を乗り出して止める。
「待ちなさっ…！」
「見てやがれぇぇっ！！あのクソウマ野郎ぉぉぉっっ！！」
「あっ…」
リンゴの止める声も耳に入らないほどに怒りながら、ゴンは鹿男を連れ、あっという間に長官室を出て行った。伸ばした手を引っ込めぬまま、リンゴが茫然とした表情を見せる。
「行っちゃったわ…」
「まぁゴンが指導員でもいいかぁ～っ」
「全然良くないわよっ！」
「それより朱実桜時っ」
「へっ？」
怒鳴りあげるリンゴを無視し、座黒が部屋にいるハチの名を呼ぶ。ゴンを見送っていたハチが、目を丸くして座黒の方を見た。
「行ったんだろう？どうだった？青守トマトはっ」
「えっ？あっ、ああっ…」
座黒の問いかけに、疲れたように肩を落とすハチ。
「だっ…だだだだだだ大丈夫っ…でした…かっ…？」
「へっ？」
妙に震えているその小さな声にハチが横を向くと、そこには心配そうな表情を見せたイチゴが立っていた。イチゴもずっと長官室にいたようである。影が薄いので、気付かなかったようだ。
「ああ、大丈夫だっ」
そんな影の薄いイチゴに、優しい笑みを向けるハチ。
「お前たちのことも思い出したよっ。ごめんなっ？せっかく遊んでくれたのに、忘れちゃっててっ」

「えっ！？いえっ！そんなっ…！全然っ…」
ハチの言葉に、頬をほんのりと赤らめて、イチゴはどこか恥ずかしそうに俯いた。
「そんなことよりっ、今はゴンとあの志願隊員の方が問題よっ！」
「そんなことって…」
リンゴの言葉に、軽く傷つくハチ。
「だいたいあのゴンに指導なんて出来るはずっ…！」
「大丈夫じゃないですかぁ～？」
「えっ…？」
不安げなリンゴにそう声を掛けたのは、落ち着いた笑顔を見せた輝矢であった。
「ゴンの指導者としての素養はともかく…あの志願隊員の見どころは保証しますよっ」
「見どころっ…？」
輝矢の笑顔に、リンゴはそっと眉をひそめた。

第４０章　オトポリ志願！　★２

オトポリ本部。隊員待機塔。
「おいっ！羊スケぇっ！」
「……っ？」
待機塔の一室で、何やら鬼人がらみの調査書のようなものを読んでいた羊スケが、部屋へと入って来る、あまり聞き心地はよくないその声に、ゆっくりと振り向いた。
「あっ、ゴンさぁ～んっ」
その聞き心地のよくない声の持ち主は、ゴンであった。
「随分遅かったっスねぇ～そろそろパトロール出ないとヤバっ…」
「聞けっ！ビッグニュースがあるっ！」
「へぇっ？」
大きく胸を張り、どこか誇らしげに言い放つゴンに、顔をしかめ、首を傾ける羊スケ。
「何っスかぁ？あっ、ついにクビとかっ？」
「違げぇーよっ！！」
羊スケの言葉に、勢いよく怒鳴り返すゴン。
「なんとっ！この度、俺の下にもう一人っ！部下がつくことになったのだぁっ！！」
「……。」
自信満々に言い放つゴンに、羊スケが間の抜けた表情で少しの間、固まる。
「んなわけないじゃないっスかぁ～っ！なぁ～に夢、みたいなこと言ってんスかぁ～っ！」
「へっ…？」
大きく笑って、勢いよく否定する羊スケに、ゴンが思わず目を点にする。

「ゴンさんの部下なんて左遷中の左遷もいいところっスよぉ～っ！？」

そんなゴンの様子には気付かず、羊スケが笑顔で言葉を続ける。

「そんなの、長官の大事なツボ割った俺くらいしか回されて来ないっスよぉ～っ！あぁ～っ！おかしっ！」

「……っ」

腹を抱えて笑う羊スケに、目を点にしていたゴンの表情がどんどん引きつっていく。

「そこまで言うなら見せてやるよっ！コイツが今日から俺の部下につくっ…！」

ムキになったようにそう言い放ち、勢いよく振り返るゴン。

「って、あれっ？」

しかしゴンが振り返った先には、誰の姿もなかった。

「あれぇ～っ？」

「ほぉ～らっ、やっぱりいないっ」

大きく首を傾げるゴンの後ろから、予想通りといった表情で言い放つ羊スケ。

「いやっ！絶対いたっ！確かに俺が志願隊員の指導員にっ…！」

「ゴンさんが指導員～～っ！？ないないないっ！絶対ないっ！死んでもないっ！アッハッハぁ～っ！」

「……っ」

勢いよく笑い上げる羊スケに、ゴンの表情が大きく歪む。

「うっせぇっ！」

「いぃぃったぁぁぁっっ！！！」

笑っていた羊スケに、勢いよく振り下ろされるゴンの拳。羊スケが笑みを止めて頭を抱える。

「ひどいっスよぉ～っ、ゴンさぁ～んっ」

「確かにいたもんはいたんだよっ！！」

「絶対、白昼夢っスよぉ～っ」

「ああっ！？」

「いえっ、何でもないっス…」
「ったくっ…」
羊スケをひと睨みした後、また後ろを振り返り、鹿男の姿を探すゴン。
「どぉこ行ったんだぁ〜？アイツっ…」

その頃。オトポリ本部・正門前。
「こっこれはっ！馬ロン次長っ！」
「見張り、ご苦労っ」
正門前に立っているオトポリ隊員に声を掛けながら、正門の外へと出て行く馬ロン。見張りの隊員は、馬ロンにかなりかしこまった様子で敬礼をしている。
「お出掛けでありますかっ！？」
「ああ、前に鬼人の目撃情報が出ていたところへね」
見張り隊員の言葉に、馬ロンが少し足を止めて答える。
「本当は志願隊員を連れて行くつもりだったんだけど…」
「はいっ？」
「いやっ、何でもないよっ」
小さく呟いた馬ロンに、首を傾げて聞き返す見張り隊員であったが、馬ロンはそっと微笑み、その聞き返しを流した。
「さてとっ」
――――ボォォォォォォォォォ〜〜〜ンっ！――――
白い煙の中へと包まれていく馬ロンの体。白い煙が晴れると、そこには白い体に、金色のタテガミのなびく、見るも美しい一頭の白馬が立っていた。これが“馬人”馬ロンの、獣化した姿である。高貴ささえ感じるその獣の姿に、見張り隊員は思わず息を呑んだ。

「じゃあ、行ってくるよっ」
「はっ！お気をつけてっ！」
「……っ」
見張り隊員に見送られ、馬ロンがその場から勢いよく走りだしていく。立派な蹄で地面を蹴りながら、“パカラっ、パカラっ”といい音を立てて、颯爽を龍国の街を駆け抜けていく馬ロン。その美しい白馬に、街人たちはたいてい振り返ったが、馬ロンはチラリとも見ずに前へ進み、あっという間に龍国を出てしまう。
「いい調子だっ…すぐにでも目的地に着きそうだなっ」
自分の走りに満足した様子で呟く馬ロン。
「早急に片付けて、明日こそリンゴとデートをっ…」
「うっわぁ～っ！！すっごぉ～いっ！！」
「はっ…？」
やや上後方から聞こえてくる陽気な声に、走っている馬ロンの表情が引きつる。
「……っ」
何となく嫌な予感を持ちながら、走ったままゆっくりと後方へ首を回す馬ロン。
「いっけぇ～っ！もっともっとぉ～っ！！」
「……。」
馬ロンの振り返った先、馬ロンの白い体の上に乗っているのは、陽気な笑顔を見せた鹿男であった。馬ロンが呆れた表情で見つめる中、鹿男はまるで騎手にでもなったかのように右手を突き上げ、馬ロンにもっとスピードを出すよう、声を出している。
「君っ…何をしているっ…？」
「ふえぇっ？」
後ろを向いて走ったまま、静かに問いかける馬ロン。その声に、鹿男が突き上げていた右手を下ろし、まん丸な瞳を馬ロンへと向けた。
「俺っ！焼そばパンっ！だから馬ロン、ジンジャエールっ！」

「はっ…？」
相変わらずの意味不明用語に、顔をしかめる馬ロン。
「“俺は志願隊員で、馬ロンは指導員”…そんなところか…」
馬ロンが鹿男の言葉の意味を、何となくで予想する。
「残念だが、僕は君の指導員は遠慮させてもらったんだ。とっとと降りてもらおうかっ」
鹿男にそう冷たく言い放つ馬ロン。
「というか“馬ロン”はやめてくれ。とりあえず“次長”か“隊長”と…」
「馬ロンっ！！」
「だからぁっ」
「馬ロンっ！！前っ！！前っ！！」
「前っ…？んっ…？」
鹿男の言葉に顔をしかめ、走っている馬ロンがゆっくりと顔を前方へと向ける。
「ううぅっ…！！」
駆ける馬ロンのすぐ目の前に迫り来る、大きな木の幹。
「うっ…うわあああああああああああっっっ！！！」

――――バッコォォォォォォォォォォーーーーンっっ！！！――――

もう減速することも避けることも出来ずに、馬ロンは勢いそのままに、見事に木へと直撃した。
「うっ…ううっ…」
――――ボォォォォォォォォ～～～ンっ！――――
馬ロンが白い煙に包まれて人間の姿へと戻り、力なくその場に倒れ込む。
「あちゃ～っ…」
直撃する前にちゃっかりと馬ロンの上から飛び降り、傷1つ負うことのなかった鹿男が、少し心配した様子で倒れた馬ロンを覗き込

む。
「大根おろしぃ？馬ロンっ」
「“大丈夫”とでも…言っているのか…というか、“馬ロン”はやめろと言っただろう…」
「ふえぇっ？」
「……っ」
大きく首を傾げる鹿男に、馬ロンが痛みもあってか、かなり顔をしかめる。
「君といると…ロクなことがないということだけはわかった…」
「ふえぇ～っ？」
少し後悔するように呟く馬ロンに、鹿男は暢気な表情を見せていた。

「あの志願隊員がウマ野郎のパトロールについてったぁっ！？」
「ええっ」
しかめた表情で聞き返すゴンに、さらりと答える落ち着いた表情のリンゴ。
「見張り隊員が、馬ロンの背中に乗り込む、見慣れない青年を目撃したって」
「なぁ～に考えてやがんだっ！あのアホウはっ！」
「よっぽどゴンさんの指導が嫌だったんじゃっ…」
「ああっ！？」
「いえっ…何でもないっス…」
調子よく口を挟んだ羊スケであったが、ゴンにひと睨みされ、大人しくなって俯いた。
「場所はっ！？わかってんのかっ！？」
「たぶん、この前、鬼人の目撃情報の出た隣町に行ったんじゃない

かと思うけど」
「隣町かっ。羊スケっ！車回して来いっ！」
「はいっスぅ～っ」
ゴンの指示に頷いて、羊スケが素早く待機室から出て行く。
「何っ？行くわけ？」
「ああっ」
リンゴの問いかけに素気なく答え、ゴンがリンゴに背を向けて、待機室の出口の方へと歩いて行く。
「お節介っ」
「……。」
どこか呆れたように言うリンゴの声を聞き、ゴンがふと足を止めて振り返った。
「俺に教えに来た時点で、お前も十分、お節介だろうがっ」
「……っ」
そのゴンの言葉に、リンゴが少し驚いたように目を開く。
「……それもそうねっ」
そして、どこか穏やかにそっと微笑んだ。
「んじゃあ行ってくるわっ。副長官殿っ」
「頼んだわよっ、ヒラ」
「ヒラ言うなっ！」
敬礼したゴンに対し、素気なく一言を添えるリンゴ。その添えられた一言に、ゴンが勢いよく顔をしかめて怒鳴りあげた。
「じゃっ」
「ええっ」
軽く右手を上げ、リンゴに背を向けると、ゴンは待機室を後にした。
「はぁ～あっ…」
――――お前は何故、そんなにもオトポリに入りたいのだ…？――――

「……。」

不意にかつての父・座黒の言葉が思い出され、リンゴはどこか神妙な表情で少し俯いた。

「……簡単な理由っ…」

リンゴは、どこか自嘲するかのように、そっと呟いた。

その頃。龍国の隣町（ごく普通の人間たちの町）。

「ハァァァーーイっ！そこのお嬢さんがたぁっ！」

『……っ？』

長い金髪を、やたらと大きな動きで掻きあげて、町を行く若い女性数人組へと声を掛ける馬ロン。女性たちが、不思議そうに馬ロンの方を振り返る。

「おおっとぉっ！“私の白馬の王子様”なんて思わないでおくれよぉっ！僕はリンゴの王子様だからねぇっ！」

『はっ…？』

少し困ったように、そう注意を促す馬ロンに、女性たちは皆、明らかに引きつった表情となる。

「君たちが僕に惚れない内にとっとと聞いてしまおうっ！君たち、この辺りで鬼を見っ…！」

「なぁ～にぃ～っ？あっれぇ～っ」

「係わらない方がいいわっ！とっとと行きましょうっ！」

「いるのねぇ～っ！ああいう変な人ってっ」

「あれっ…？」

女性たちから鬼人の情報を聞こうとした馬ロンであったが、馬ロ

ンを強く警戒した女性たちは、勢いよく馬ロンの元から離れて行った。去っていく女性たちの背中を見つめながら、馬ロンが目を丸くする。

「んん～っ？どうしたんだぁ？はっ！さてはすでに僕に恋しかけて、溺れるのが怖くて離れたのだなっ！」

見事なまでに、プラスに捉える馬ロン。

「ウマっハッハッハっ！何という罪深き男なのだっ！僕とはっ！」

額を右手で軽く押さえ、困ったように微笑む馬ロン。近くにいる町人たちも、馬ロンをチラチラと見つめながら引いている。

「んん～っ？そういえば、あのアホウはどこにっ…」

馬ロンが鹿男の姿を探し、周囲を見回す。

「コレっ！俺ん家の畑で作った米ぇ～っ！」

「まぁまぁっ、ありがとうぅ～っ」

「だあああああああああああっ！！」

町のお婆ちゃま方に、陽気な笑顔満面で、小袋に入れたお手製の米を配っている鹿男の姿に、馬ロンが思わずズッコケる。

「何をやっているんだいっ！！君はっ！！」

「へぇっ？」

勢いよく怒鳴りあげる馬ロンに、鹿男が米を配る手を止めて振り向く。

「あっ、馬ロンも欲しいっ？」

「いらないよっ！僕はフランスパン以外、いただかないからねっ！！」

米を差し出した鹿男に、馬ロンが思いきり引きつった表情を向けた。

「だいたい馬ロンはやめろと言っただろうっ。ったく、何度言えばっ…！」

「あっ、さっきのお婆ちゃんが、一週間前、町はずれの広場で鬼人見たってぇ～っ」

「何っ？」

珍しくまともなことを話した鹿男を、その話の内容に、眉をひそめる馬ロン。
「僕より先に情報収集するなんて、まっまぁまぁやるじゃないかぁっ！まっまぁでもまだまだだっ…！」
「さっ、早速行ってみよぉ～っ」
「へっ…？」
先に情報収集された動揺を隠しきれてはいないが、必死に威厳を保とうと言葉を続ける馬ロン。しかし、鹿男はそんな馬ロンを気にすることなく、マイペースに先へと進んで行ってしまう。
「ぼっ…僕より先に行くんじゃないっ…！」
「だって馬ロン、遅いんだもぉ～んっ」
「だから馬ロンはやめろと言っているだろうがっ！！」
あれやこれやと言い合いながら、二人は町はずれの広場へと向かった。

一方、馬ロンと鹿男の後を追い、隣町へと車を走らせているゴン・羊スケのペア。
「ねぇっ、ゴンさんっ」
「ああっ？」
運転席から呼びかける羊スケに、ゴンがいつものように機嫌悪そうな声を出す。
「なぁ～んで馬ロン次長とその志願隊員ってのを追いかけるんスかぁ？」
「だっから志願隊員の指導役は俺だっつってんだろうがっ！」
「まぁ～た、んな白昼夢見ちゃってっ…」
「ああっ！？」

「いえっ…何でもないっス…」
前方を向いて運転をしていながらも、ゴンに睨みつけられていることがわかり、羊スケが大人しく首を横に振る。
「けど、ただパトロールに付いてっただけっスよねっ？」
立ち直り、言葉を続ける羊スケ。
「放っておいたって戻ってくるでしょうしっ、ゴンさん、馬ロン次長のこと嫌いじゃないっスかぁ？」
「ああ、物凄い勢いで嫌いだっ」
馬ロンのことを思い出しているのか、ゴンがかなりしかめた表情で答える。
「だったらもう放っておけばのにっ」
羊スケが、どこか呆れたように肩を落とす。
「ホントっ、お節介っスねっ」
そして、羊スケが、呆れた表情そのままにそっと微笑んだ。
「わぁ～るかったなっ」
走る車から外の景色を見つめながら、ゴンが素気なく答える。
「嫌だったら俺の部下やめろっ」
「……。」
雑に吐き出された言葉を聞きながら、羊スケがさらに口元を緩めた。
「面白いんで、部下のままでいるっスよっ」
「……っ」
羊スケのその言葉に、ゴンが少し目を見開く。
「ゴンさんがクビになるまではっ」
「俺はクビになんかなんねぇーよっ！！」
「そうっスかぁ～っ？もう秒読みだと思うんスけどぉ～」
そんな感じの二人を乗せ、車は隣町へと先を急いだ。

第４０章　オトポリ志願！　★３

龍国隣町のはずれの広場。

「うぅぅ～～んっ…」

どこまでも殺風景な平原の広がる景色を眺めながら、唸るような声を漏らす馬ロン。鬼どころか、人さえいない。何とも静かな場所であった。

「何と味気ないところだっ。白馬の王子・馬ロン様の来るところではないなっ」

馬ロンが少し嫌そうな表情を見せ、そう言い放つ。

「鬼もいないようだし、そろそろ本部へっ…」

「ああっ！！モンシロチョウっ！！」

「おいっ！！」

飛んで行くモンシロチョウを追い、まるで幼い少年のように爽やかに平原を駆ける鹿男に、馬ロンが思わず怒鳴り声をあげた。

「何が“モンシロチョウ”だよっ！まったくっ！そんなもの、君の田舎にいくらでもいるだろうっ！」

「えっ？馬ロンはテントウムシ派なのっ？」

「何派でもないよっ！だから馬ロンはやめろと何度も何度も言っているだろうっ！！」

もう何度言ったかわからない、その言葉を口にする馬ロン。

「はぁっ…」

馬ロンが深々と肩を落とす。

「まったくっ…君といると疲れるよっ…」

馬ロンがうんざりとした表情で言い放つ。

「そうなのぉ？」

「そうだよっ！！」

「俺は馬ロンといると楽しいけどなぁ～っ！」

「……っ」

怒鳴りあげていた馬ロンが、屈託のない笑みを向けてそう言う鹿男に、どこか驚いたような表情を見せた。
「バカは気楽でいいなっ…」
「へっ？」
表情から怒りを消し、そっと呟いた馬ロンに、鹿男が大きく首を傾ける。
「いやっ、何でもっ…」
「ガアアアアアアアアっっ！！！」
『……っ！』
馬ロンが鹿男に答えようとしたその時、突如、赤色の巨大な鬼が現れ、耳の潰れそうなほどに大きな叫び声とともに、二人に鋭い爪を振り下ろした。
『うっ…！』

――――バァァァァァァァァーーーンっっ！！――――

一気に険しい表情となった馬ロンと鹿男が、左右に分かれて鬼の爪を避ける。二人の避けた爪は、激しく地面を抉った。
「鬼っ…鬼人っ…！」
「目撃情報は正しかったようだなっ…！だがっ…！」
少し動揺した様子で声を出す鹿男に対し、馬ロンは腰に下げた鞘から、フェンシングに使うような、刀身の細い剣を抜き、素早く身構えた。
「今回は相手が悪かったようだなっ！鬼人よっ！」
馬ロンが目つきを鋭くし、柄を持った右手を大きく後ろに引く。
「グガアアアアアアっっ！！」
「オトポリのプリンスっ！白馬の王子・馬ロンの技っ！受けてみよっ！」
飛びかかって来る鬼人に、馬ロンは怯むことなく、剣先の狙いを定めた。

「“馬刺し”っっ！！」

――――バァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

「グギャアアアアアアアアアアアっっっ！！！」

目にも留らぬ速さで繰り出された馬ロンの突きにより、鬼人の巨体が勢いよく吹き飛ばされる。叫び声をあげながら吹き飛んだ鬼人は、そのまま少し離れた地面の上へと倒れ込んだ。

「すっ…すごっ…」

馬ロンの技の威力に、鹿男も思わず目を見張る。

「ウマっハッハッハっ！！何とも手応えのない鬼人だなぁっ！」

剣を下ろした馬ロンが、倒れ込んだ鬼人を見て、得意げな笑みを浮かべる。

「まぁ致し方あるまいっ！僕の強さの前には、いかなる者も皆、無力っ！ウマっハッハッハっ！！」

自分の強さに泥酔の馬ロン。

「これこそっ！オトポリのプリンスっ！白馬の王子・馬ロンの馬ロンであるがゆえのっ…！」

「ああっ！！テントウムシっ！！」

「だあああああああああああっっ！！」

まだ泥酔言葉を続けようとしていた馬ロンであったが、それは、鹿男のこれ以上ないくらい陽気な声に勢いよく遮られた。馬ロンが肩透かしを喰らったように、体を大きく傾ける。

「君ねぇっ！水を差さないでくっ…！」

「馬ロンっ、欲しいっ？」

「いらないよっ！！」

テントウムシを差し出す鹿男に、勢いよく怒鳴りあげる馬ロン。

「もう一度言うけどっ、馬ロンと呼ぶのはやめっ…！」

「……っ！馬ロンっ！！」

「だからぁっ…！！」

「馬ロンっ！！前っ！！」
「んっ…？」
いつになく必死の表情で叫ぶ鹿男に、馬ロンが少し眉をひそめ、前を向く。
「うっ…！」
馬ロンの前方には、立ち上がり、馬ロンに向けて大口を開いている鬼人の姿。
「“鬼炎”っ…！！」
「クっ…！」
馬ロンへ向けて放たれる真っ赤な炎。避ける間もないスピードで向かってくる鬼炎に、馬ロンの表情が歪む。
「馬ロンっ…！！」
鹿男が思わず身を乗り出す。
「“狐火・一髪”っ！！」

――――パァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

『……っ！！』
横から飛んできた炎の玉が、鬼炎を直撃し、ぶつかり合った2つの炎が相殺して、馬ロンの目の前で消え果てた。その光景に、大きく目を見開く馬ロンと鹿男。
「炎…？」
「いっくら相手が赤鬼だからってぇ、ちょ～っと油断しすぎじゃありませんかぁ～っ？」
「……っ」
眉をひそめていた馬ロンが、聞こえてくる不機嫌な声に振り向く。
「馬ロン次長殿っ」
「君はっ…」
馬ロンが振り向いた先に立っていたのは、悪い目つきのまま、口元の片端を軽く上げているゴンであった。その横には、暢気な笑み

を浮かべた羊スケの姿もある。
「ベン君っ」
「ゴンだっ！！」
名前を間違える馬ロンに、ゴンが勢いよく怒鳴りあげる。
「はぁぁぁ～～っ」
「あっ？」
深々と溜息をつく馬ロンに、顔をしかめるゴン。
「君に助けられるなんて、このオトポリのプリンス・馬ロン、一生の不覚っ！もういっそ炎に身を焦がした方がマシだっ！はぁぁぁっ！！」
「もういっそ燃やしてやろうかっ！？」
「まぁまぁゴンさぁ～んっ」
無駄な動作たっぷりで大きく頭を抱える馬ロンに、怒りを押さえきれずに右手を向けるゴン。そんなゴンを、羊スケが横から必死に宥める。
「だいたい僕は君になど助けられなくともねぇっ、あれくらいの炎は軽ぅ～く避けられたんだよっ」
「へぇへぇ、余計なことしてすんませんでしたっ」
さらに言葉を続ける馬ロンに、まったく申し訳なくなど思っていなさそうに謝るゴン。
「まぁとりあえず、あの鬼人の退治をっ」
馬ロンが前方に立つ鬼人の方へと向き直り、再び刀身の細い剣を、柄を持つ手を引くようにして構えた。
「もう一度喰らうがいいっ！プリンス・馬ロン、必殺っ…！」
目つきを鋭くし、狙いを定める馬ロン。
「“馬刺し”っっ！！」
馬ロンの剣が、赤鬼へと、勢いよく突き出される。
「グっ…グガっ…」
向かってくる突きを見ることなく、赤鬼がどこか苦しげな様子で深く俯く。

「グっ…グアアアアアアアアっっっ！！！」

――――――バァアアアアアアアアアーーーンっっ！！――――――

「何っ…！？」

激しい雄たけびとともに、赤鬼の体全体から放たれる強い光。そのあまりの勢いに、馬ロンの繰り出した突きも押し返される。

「何だっ…！？」

「グゥゥゥゥっ……」

「なっ…！」

馬ロンの目の前に現れたのは、翼を持った紫色の鬼。馬ロンが大きく目を見開く。

「形態変化っ…！」

「グガアアアアっっ！！」

ゴンや羊スケが焦りの表情を見せている中、変化したばかりの紫鬼が、大きく翼を広げる。

「マズいっ！ウマっ！！」

“鬼風”っ…！！」

紫鬼が何をしようとしているのかを察し、思わず身を乗り出すゴン。紫鬼は禍々しい翼をはためかせ、大きな風の塊を生み出し、馬ロンへとそれを向けた。

「クっ…！」

少し唇を噛み、馬ロンが体を転がすようにして、何とか鬼風を避ける。

「ううっ…！」

避けたものの、風の影響を少し受け、顔をしかめる馬ロン。

「グガっ…！」

「……っ！」

さらに翼を広げ、飛び立とうとする紫鬼に気づき、羊スケが両手を身構える。

「させるかっ！羊々ボールっ！！」
羊スケが紫鬼目がけて、フワフワとした、触り心地のよさそうな白い玉を二つ、投げ放つ。
「ガアアアアっっ！！」
「あっ…！」
羊スケの羊々ボールを素早くかわし、翼を広げた紫鬼が、高々と上空へ飛び上がる。
「クッソっ！炎飛ばしても、風で跳ね返されるしなぁっ」
「どきたまえ、無能キツネ」
「誰が無能キツネだっ！！」
上空の紫鬼を見つめながら、険しい表情を見せていたゴンに、馬ロンがばっさりと言い放つ。
「その目つきの悪い目でよぉ～く見ておくんだねっ。僕と君の実力の差がどれほどあるのかというこっ…」
『きゃあああああああああっっっ！！！』
『……っ！』
不仲そうに言い合っていたゴンと馬ロンが、聞こえてくる悲鳴に、素早く振り返る。
「あれはっ…！」
『きゃあああああああああああっっっ！！！』
悲鳴をあげているのは、先程、馬ロンが声を掛け、引かれてあっさりと逃げられた女性たち。タイミング悪く平原に遊びにでも来たのか、上空を飛ぶ鬼人を見て、怯えた様子で悲鳴をあげている。
「僕の虜になってしまった乙女たちっ…！」
「あんな悲鳴出したらヤツにっ…！」
「グガっ…！」
ゴンの不安が的中し、上空の紫鬼が、女性たちの悲鳴に気付いて、女性たちの方へと顔を向ける。どこか嬉しそうに微笑み、女性たちへ向けて翼を翻す紫鬼。
『クっ…！』

「鬼サンっ！こっちらぁ～っ！！」
『何っ…！？』
「グガっ…？」
紫鬼が女性たちに風を放とうとしたまさにその時、まったく逆の方向から紫鬼を呼ぶ、その暢気で明るい声に、ゴンたちや紫鬼が振り返る。
『あっ…！』
「こっちこっちぃ～っ！！元気ですかぁ～っ！？」
高々と挙げた両手を大きく左右に振りながら、陽気な笑顔で紫鬼を呼ぶかのように叫んでいるのは、鹿男。
「アイツっ…！」
「ちなみに俺は元気ぃぃ～～っ！！」
「グガァっ…」
自分の健康をアピールしている鹿男に、紫鬼が狙いを変えて、翼を広げる。
「あのアホウっ…！一体、何をっ…！」
「まっ…待てっ！」
「……っ？」
飛び出して行こうとした馬ロンを、ゴンが呼び止めた。
「あんだけ余裕で笑ってんだっ。あのアホウに何か秘策があるのかもっ…」
「秘策っ？まさかっ…」
「“鬼風”っっ…！！」
「うわあああああああああっ！！助けてぇぇぇぇぇぇっっっ！！！」
『ないんかいっ！！』
紫鬼が鹿男へ向けて風の塊を放った途端に、間抜けな声で助けを求める鹿男に、少し期待をしてしまっていたゴンと馬ロンは勢いよく突っ込みを入れる。
「ったくっ…！」

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

「うぇっ？」

呆れきった声を出し、白い煙に包まれる馬ロン。次の瞬間、ゴンの横から、一頭の白馬が、美しい姿で鹿男の元へと駆け出していく。風よりも速く草原を駆け抜け、鹿男のすぐ目の前へと辿り着く馬ロン。

「馬っ…！」

「馬ロンはやめろと言っているっ…」

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

名を呼ぼうとした鹿男を遮り、馬ロンが再び白い煙に包まれ、人間の姿へと戻る。

「馬流奥義っ…」

縦に構えた剣を、柄を持つ手を中心に大きく回していく馬ロン。

「“馬李唖（ばりあ）”っっ！！」

――――パァァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

目にも留らぬ速さで回転した剣が、馬ロンの前で円形の壁のようなものを作り出し、その壁が向かってきた風の塊を、勢いよく弾き返した。

「グギャアアアアアアっっ！！」

自らの風を受け、上空で苦しむ紫鬼。

「ググゥっ…グガっ…！」

「あっ…！」
苦しんだ挙句に危機を察したのか、翼を広げて、どこかへ逃げようとする紫鬼。馬ロンの後方から、鹿男が思わず声を出す。
「馬ロンっ！」
「わかっているっ」
鹿男の声に、しっかりと頷く馬ロン。
「逃がしなどっ…するものかっ…」
冷静な表情で、再び剣を構える。
「“馬刺し”っ…！！」
馬ロンの繰り出した剣から突きが放たれ、空を駆けていく紫鬼へと、まっすぐに飛んでいく。
「グっ…！」
紫鬼が少し焦った様子で、下方を見る。
「グっ…！グっ…！グギャアアアアアアアアっっ！！！」
馬刺しに貫かれた紫鬼は、上空で砂となり、風に吹かれて掻き消えた。

「ふはぁ〜っ！強っ！」
「まぁまぁだなっ」
感心している羊スケの横で、しかめっ面のまま腕を組むゴン。
「ふぅっ」
少し乱れた自慢の長髪を掻き上げ、一息ついた馬ロンが、剣を鞘へと収める。
「まったくっ…僕が優秀で有能で素晴らしかったから良かったもののっ…」
「ふぇっ？」
どこか呆れたような表情で振り返る馬ロンに、目を丸くする鹿男。
「一歩間違えば、君は死んでいたんだぞっ！？自分のしたことの無茶っぷりがわかっているのかっ！？」

「へっ？」
「わかっていないな…」
間の抜けた表情で首を傾ける鹿男に、馬ロンが大きく頭を抱える。
「だいたい力もないくせに、あんな行動を取っ…！」
「ありがとぉっ！！」
「……っ」
屈託のない笑みで礼を言う鹿男に、馬ロンが思わず言葉を止めて、驚いたように目を見開いた。
「……。」
「馬ロンっ？」
どこか茫然としたように立ち尽す馬ロンに、鹿男が少し眉をひそめる。
「あれぇ～？“ありがとう”って“フンころがし”の意味じゃなかったのかなぁ？ぐぅから聞いたのにぃ」
「いやっ…」
「へっ？」
馬ロンの声に、首をかしげていた鹿男が振り向く。
「たぶんあってる」
「えっ…」
「あっ…あのぉ～っ…」
『……っ？』
横から聞こえてくる声に、不思議そうに振り向く馬ロンと鹿男。
「おおぉっ！君たちぃ～っ！」
二人の振り返った先に立っていたのは、先程、危うく鬼人に狙われるところであったあの女性たちであった。歩み寄って来た女性たちに、馬ロンが髪を掻き上げ、格好つける。
「無事だったかいっ？怖かったろうっ？」
格好をつけたまま、女性たちに優しく声を掛ける馬ロン。
「いつもはリンゴのものなのだが、今日くらいは僕の胸を貸してあげてもっ…！」

「何っ？あれぇ～っ」
「無視無視っ」
「へっ？」
気取りきっていた馬ロンを、女性たちはあっさりと無視して通り過ぎて行く。
「あれっ？」
目を丸くする馬ロン。
『ありがとうございましたぁぁ～～っっ！！』
「ふぇっ？」
女性たちが一斉にお礼を言ったのは、鹿男であった。鹿男が戸惑うように、首を傾げる。
「私たちの代わりに鬼の標的になってくれてぇ～っ！」
「もう超カッコ良かったですぅ～っ！」
「陽気な笑顔にマジ、キュンキュンしちゃいましたぁ～っ！」
「んなっ…！なっ…！なっ…！」
黄色い声を飛ばしながら、うっとりとした表情で鹿男の元へと駆け寄っていく女性たちに、わなわなと全身を震わせる馬ロン。
「ぼっ…僕がっ…オトポリのプリンスのこの僕がっ…あんなアホウに女性人気で劣るなんてっ…」
馬ロンがショックを隠しきれない様子で、その場にがっくりと膝をつく。
「うぅ～ん～っ！気にしなくっていいよぉ～っ！」
『きゃあああああああああっ！！』
「あんのアホウっ…！」
女性たちに笑顔を振りまく鹿男に、怒り全開で拳を握り締める馬ロン。
「じゃあっ！気をつけてねぇ～っ！」
『はぁぁぁぁ～いっ！』
鹿男が、町へと戻っていく女性たちに大きく手を振る。
「馬ロンっ！俺っ、“ありがとう”って言われたぁっ！」

「そのようだねっ…」
笑顔で鹿男が振り返ると、面白くなさそうな表情の馬ロンが、少しいじけた様子で平原に座り込んでいる。
「すっごい嬉しいっ！！」
「……っ」
大きな笑顔でそう言い放つ鹿男に、またもや驚いたように目を開く馬ロン。
「君のその、誰かを助けたいという気持ちは十分に伝わって来たよ…」
「……っ？」
ゆっくりと立ち上がりながらそう言う馬ロンに、鹿男が少し首を傾げる。
「だがね、気持ちだけでは人は救えない」
「……っ」
いつになく真剣な眼差しを鹿男へと向け、そう言い放つ馬ロン。
馬ロンの真剣さと言葉の意味が伝わったのか、鹿男の陽気な表情がそっと曇る。
「人を助けるには、それなりの力が必要だ。だが今の君に、その力はない」
「……。」
その言葉に、鹿男が少し悲しげに俯く。
「だから…僕が指導してあげるよっ」
「えっ…？」
大きく目を見開き、勢いよく顔を上げる鹿男。
「特別にねっ」
「……っ！」
素気なくそう付け加えた馬ロンに、鹿男が大きく笑顔を見せる。
「ありがとうっ！！馬ロンっ！！」
「だからぁっ！僕を呼ぶ時は“隊長”か“次長”と呼べと言っ…！」
「俺っ！あれ、覚えたいっ！差し歯っ！差し歯っ！」

「“馬刺し”だっ！君になどっ、百万年早いよっ！！」
生き生きとした表情を見せる鹿男に、しかめた表情を向けて怒鳴り返す馬ロン。

「ゴンさんっ」
「ああっ？」
そんな二人の様子を見ながら、羊スケがゴンの名を呼ぶ。
「俺っ、あの二人、イイコンビになりそうな気がするっスっ」
穏やかな笑みを浮かべ、そう言う羊スケ。
「ああっ…そうだなっ…」
その言葉に、ゴンも少し微笑んで頷いた。

「はいっ！馬ロンっ！記念にウチの米ぇっ！！」
「いらないよっ！！僕はフランスパンしかいただかないと言っているだろうっ！！」

こうして、オトポリ志願隊員の巻き起こした事件は、終わりを告げた…。

第４０章　オトポリ志願！　★４

その日・夕刻。オトポリ本部・長官室。
「そうか。馬ロンが指導員にっ…」
「ええっ、志願隊員の熱意にヤラれたみたいっ」
どこか可笑しげに笑って座黒へと報告を入れるリンゴ。報告を聞いた座黒は、少しホッとした様子で、穏やかな笑みを浮かべていた。
「まぁ何はともあれ、一段落だな」
「ええ」
座黒の言葉に、リンゴがしっかりと頷く。
「志願隊員か…」
少し俯いた座黒が、どこか感慨深げにそう呟く。
「ゴンが入隊して…すぐだったか…」
「えっ…？」
「お前がオトポリに入りたいと言ってきたのはっ…」
「……っ」
座黒の言葉に、リンゴが少し眉をひそめて俯く。
「なぁ、リンゴ…」
座黒がゆっくりと顔を上げ、穏やかな瞳でリンゴを見つめる。
「正直、私は、お前にオトポリとして戦うことはして欲しくないと思っている…無論、イチゴに対してもだ…」
優しい顔つきで、リンゴに語りかける座黒。
「単なる娘可愛さではあるがなっ」
「パパっ…」
そっと笑う座黒に、顔を上げたリンゴが少し目を細める。
「……。」
もう一度、俯くリンゴ。
――――なぁリンゴっ…俺…俺さっ…――――

思い出されるのは、あのたった一言。目つきの悪い少年が放った、たった一言。

「……っ」

リンゴが瞳をまっすぐに光らせ、顔を上げる。

「私は戦うわっ」

少しの迷いもなく、リンゴが言い放つ。

「オトポリとして、最期までっ」

「……。」

はっきりとそう言ったリンゴに、座黒が少し目を細める。

「決めたのか…？」

「ええっ」

座黒の問いかけに、リンゴがそっと笑みをこぼす。

「もうずっと前に決めたのっ…」

――――俺っ、オトポリに入るわっ……――――

あの一言だけが、今も、リンゴの決意。

「もうっ…変えられないのっ…」

「……。」

強い決意を覗かせて微笑むリンゴに、座黒は少し肩を落とした。

「なら、仕方ないなっ…」

座黒が穏やかに微笑む。

「イチゴも変えんのだろうなぁ～…まったく、お前たちは母さんに似て、意志が強いというか、性格がキツイというか…」

「あっらぁ？正義感の強さはパパ譲りよぉ？」

「そうかっ」

リンゴの言葉に、座黒が少し嬉しそうに笑う。

「これからも頼むぞ、リンゴ副長官っ」

「……っ」

座黒の命に、リンゴが大きく笑う。
「了解っ！」
大きく微笑んだリンゴは、しっかりと敬礼をし、そう返事をした。

翌日。オトポリ本部・鍛練塔。
「はいっ！“いちたすいち”はぁっ！？」
皆が体を鍛えている横で、黒板に数式を書き、質問を投げかけている馬ロン。眼鏡を掛けてインテリを気取っている馬ロンは、鍛練塔にはどうも場違いである。
「うぅ～んとっ…えぇ～っと…」
そんな馬ロンの前で、学習机に座っている鹿男。
「もやし炒めっ！！」
「まったく違ぁーうっ！次っ！国語っ！」
数字ですらない答えを放った鹿男に、特に驚いた様子もなく、次の教科へと進めていく馬ロン。
「三行目からっ！朗読っ！」
「ロウドクって何ぃ～？」
「ああーっ！もういいっ！！自分で読むっ！！」
朗読の意味を知らない鹿男に代わり、馬ロンが開いた教科書を読み出す。
「“ある日ある日、あるところにおじいさんとおばあさんがっ…」
「うぅ～んっ？」
馬ロンの朗読を聞きながら、どうしていいのかわからない様子で首を傾ける鹿男。

「やれやれ…指導というからどんなものかと見に来てみたら…」
どこか呆れたような声を出したのは、鍛練塔の入口から、馬ロンと鹿男の様子を眺めている輝矢であった。輝矢のすぐ横にはハチ、モンキ、ユキジの三匹、そして、ゴンと羊スケの姿もあった。
「っつーかココ、鍛練塔だろぉ？」
「“まず頭を鍛えないことには、どうしようもない”って馬ロン次長が言ってたっスよっ」
「まぁ一理はあるよなっ」
羊スケの言葉に、思わず納得してしまうハチ。
「この分じゃ、実際、戦いに出んのは三年くらい先かもなぁ～」
「三年でききますかねぇ～」
呆れたように言うゴンの横で、数回首を横に振る輝矢。
「ゴンっ！」
「……っ？」
名を呼ばれ、ゴンが振り返る。
「リンゴっ」
ゴンが振り返ると、そこにはリンゴが立っていた。
「カンガルーの国で鬼人の目撃情報が出たわっ。すぐに向かってっ」
「カンガルーの国っ…了解っ！羊スケっ」
「はいっスぅ～っ！」
リンゴの指示に頷き、ゴンが羊スケの名を呼ぶ。羊スケは頷くと、素早く鍛練塔を後にする。
「では参りましょうか」
「アンタには言ってないわよっ！！」
羊スケの後を三匹に追わせ、自分もカンガルーの国へ行こうとする輝矢。
「鬼人退治はオトポリの仕事なんだからっ、アンタは大人しくっ…！」
「ハイハイハイハイっ。とっとと行きますよぉ～キツネっ」
「輝矢っ…！！」

リンゴの言葉を思いきり無視して、輝矢がスタスタと鍛練塔を出て行く。
「あっの女っ…！」
輝矢の出て行った入口を見ながら、リンゴが力強く拳を握り締める。
「ったくっ！」
「んじゃあ俺も行くわぁっ」
ご立腹のリンゴの横を通り抜け、ゴンも鍛練塔を出て行こうとする。
「輝矢に無理させないでよねっ！」
「俺に止められるようなヤツじゃねぇーだろっ」
「それでもさせないのがアンタの務めよっ！」
「無茶言うなよなぁ～っ」
リンゴの言葉に少し困ったように頭を掻きながら、ゴンが鍛練塔から足を踏み出す。
「ゴンっ」
「……っ？」
もう一度呼ばれる名に、振り返るゴン。
「頼んだわよっ」
「……おうっ」
そう言ったリンゴに少し笑みを向け、ゴンは鍛練塔を出て行った。
「……っ」
鍛練塔に残ったリンゴが、少し笑みを浮かべる。

――――俺っ、オトポリに入るわっ…――――
今も、その一言だけが、決意。

「さっ！仕事するかぁ～っ！」
「ハァァァーーーイっ！！リンゴぉぉっ！！」
「げっ…」

勢いよく駆け寄ってくる馬ロンに、リンゴの表情も勢いよく歪む。
「僕の指導っぷりを見に来たのかいっ！？どうだいっ！？素敵すぎて目が眩むだろうっ！？」
「ハイハイ、眩む眩むっ」
全力で問いかけてくる馬ロンを、軽くあしらうリンゴ。
「どうだいっ！？これから二人で愛のパトロールでもっ…！」
「馬ロン～っ！本読みの続きはぁ～っ！？」
「……。」
大きく呼ぶ鹿男の声に、顔をしかめる馬ロン。
「ほぉ～ら、呼ばれてるわよっ、先生っ」
「たくっ…！」
馬ロンがうんざりとした表情を見せながら、リンゴに背を向け、鹿男の方へと歩いて行く。
「おじいさんとおばあさん、どうなったのぉ～っ？」
「馬ロンはやめろと言っているだろうっ！！」
本の続きが気になっている様子の鹿男に、勢いよく怒鳴りあげる馬ロン。
「……っ」
二人の様子を見つめ、リンゴは穏やかに微笑んだ。

なお、“オトポリの馬鹿コンビ”と称される二人組が、御伽界にその名を轟かせるのは、もう少し先の、話である。

第４１章　ハグレ吸血鬼　☆１

龍国・エセお菓子の家こと『桃原家』の庭。
「“柔桜っ…無塵”っ…！！」
村雨丸を振りきり、桜時が無数の桜の花びらを放つ。
「……。」
桜時が桜を放った先に立っているのは、とても落ち着いた表情を見せた太狼。
「“機微（きび）団子弾”っ」
太狼が右手の親指を人差し指を伸ばし、銃のように形作って、その指先を桜時へと向ける。
「バッキューンっ☆」
そう言って銃を放つように太狼が右手を動かした瞬間に、太狼の周囲に現れた無数の団子のような小さな丸い弾丸が、桜時の放った無数の花びらを一つ残らず撃ち抜いた。
「ういぃっ…！！」
撃ち抜いて直、残った弾丸が、桜時の方へと飛んでいく。
「どわあああああああああああああっっっ！！！」
勢いよく機微団子弾を喰らい、悲鳴だけを残して、巻き起こった衝撃風の中へと姿を消す桜時。
「うっ…ううぅ～っ…」
衝撃風が止むと、そこには身を縮めた一匹のイヌ・ハチが座り込んでいた。どうやら咄嗟に犬化し、機微団子弾を避けたようである。
「ふぅっ…あっぶねぇーなぁっ！」
一息ついたハチが、勢いよく顔をしかめて立ち上がる。
「朝っぱらから何、全力で攻撃してくれてんだよっ！ちったぁ手加減しろっ！！」
「えっ？」
ハチの言葉に、太狼が目を丸くする。

「“手加減”って、何っ？」
「鬼かっ！！」
シレっと答える太狼に、全力で突っ込みを入れるハチ。こんな調子ではあるが、ハチと太狼の手合わせは、毎朝必ずのように行われていた。死さえ感じるイビりはあるが、憧れの“桃タロー”と手合わせ出来ていることは、ハチにとって何よりの喜びであった。
「さっ、一汗さえかいてないけど、甘々ココアタイムにしようかぁ～っ」
「すみませんねっ！汗一つ、かかせらんなくってっ！」
そう笑って家の中へと戻っていく太狼に、ハチが表情を歪める。
「ったくっ…」
「クルッポぉ～っ」
「んっ？」
上空から聞こえてくる声に、ハチが気付いて顔を上げた。
「クルッポぉ～っ！クルッポぉ～っ！」
「あれはっ…」
遠くの空から、まっすぐにハチの元へと飛んでくるのは、一羽の白いハト。その足に何やら丸まった紙のようなものを持っている。
「“雀”の伝書バトっ…？」
ハチがハトを見つめ、少し眉をひそめる。
「クルッポぉ～っ！」
「うおっ！」
ハトが翼を翻し、ハチのすぐ上方までやって来て、持っていた紙らしきものをハチへと落とす。落ちてきた紙を、慌てて前足を上げて受けとめるハチ。
「クルッポッポぉ～っ！」
「あっ…」
ハチに紙を落とすと、ハトはそのまま方向転換し、やって来た方へと飛び去っていった。
「俺にこれを届けに来たのか…？」

少し首を傾げながら、ハチがハトの落していった紙を広げる。
「えっ…？」
紙に書かれたその内容を見て、ハチの表情が曇った。

というわけで、その日の夕刻。雀国。朱実家の屋敷。
「はぁっ…」
玉座に腰を掛け、深々と溜息を落とす、今日も着物はばっちり派手な雀国主・朱実孔雀。
「なんで貴方はそう…名残り惜しく別れた後に限って、すぐ帰ってくるのよっ…」
孔雀がうんざりとした表情で、前を見る。
「桜時…」
「うぅ～んっ…」
孔雀の見つめる先に立っていたのは、こちらもどこか晴れない表情を見せている桜時であった。孔雀の言葉に、桜時が少し考えるように首を傾げる。
「っつーか、孔雀さんが“すぐ来い”っつったんだろうっ？伝書バトで手紙持ってこさせてさぁっ」
「確かに言ったけど、すぐ過ぎるのよっ！」
「何だよっ！！それはっ！！」
まるで子供のケンカのように怒鳴り合う桜時と孔雀。桜時が雀国を旅立つ前の、ピリピリとした空気は、今の二人の間にはまったく存在しなかった。
「何だかぁぁぁ～～～っ♪」
「二人の空気がぁぁぁ～～～っ♪」
「柔らかくなってるねぇぇぇ～～～っ♪」

そんな二人の様子を見ながら、ハーモニーを刻む松人・竹人・梅人のいわゆる三バカ兄弟。

『何かあったのかなぁぁぁぁぁ～～～っ♪』

「うるさいです」

美しくハモる三兄弟に、横に立っている輝矢が冷たく言い放った。

その輝矢の横にはモンキとユキジの姿もある。孔雀に呼び出された桜時に付き添い、輝矢一行も雀国へとやって来ていた。

「ってか松人、燕国から戻っとってんなぁ～」

「あの愚か女に愛想でもつきたのですか？」

「んっ？」

モンキと輝矢に声を掛けられ、三兄弟の長兄・松人がハーモニーを止めて、振り向く。

「ちょっと帰ってきてるだけだよぉ～っ！お陰さまで油火とはラブラブだからぁっ！」

「ああ、そうですか」

笑顔満面で言い放つ松人に、素気なく頷く輝矢。

「ちなみにボクらも負けじとラブラブだよぉ～っ！ねぇ～っ！レイラっ♪」

「ええっ！竹人さんっ♪」

「すみません、興味が持てないです」

幸せオーラ全開で微笑み合う、三兄弟の次兄・竹人と相変わらずゴリラのような竹人の婚約者・レイラに、輝矢がうんざりとした表情で呟く。

「それでっ？」

輝矢が桜時の横に立ち、孔雀と向き直る。

「“鬼が出た”というのは本当なのですか？」

「……っ」

輝矢の言葉に、孔雀の表情が曇る。

「ええ…けどっ…」

「けどっ？」

言葉を付け加える孔雀に、輝矢が少し眉をひそめる。
「出たのは鬼は鬼でも…“吸血鬼”よっ…」
『きゅっ…“吸血鬼”いいいいいいっっっ！！！？』
孔雀の言葉に、輝矢一行は一斉に驚きの声をあげた。

朱実家・応接間。
「最初に吸血鬼が目撃されたのは、三日前の深夜です」
孔雀の部屋から応接間へと移動した輝矢たちは、調査票のようなものを持った千鶴から、“吸血鬼”についての情報を聞いていた。
「町の若い娘さんが倒れていたので、警備の者が駆け寄ると、娘さんの首筋に、牙で噛まれたような小さな二つの傷跡が…」
「吸血鬼に血を吸われたというわけですか…」
「はい…」
厳しい表情で言う輝矢に、千鶴も深刻な表情で頷く。
「その他にも数名の被害者が出ています…吸血鬼とあっては、オトポリの方に協力を求めるわけにもいきませんし…」
「それで私たちに依頼を…」
「はい…」
輝矢の言葉に、千鶴がもう一度しっかりと頷く。
「うぅ～ん、なるほどぉ…だいたいの状況はわかりましたがっ…」
『アニキぃいいいいい～～～っっ！！！』
「んっ？」
聞こえてくる声に、輝矢が振り向く。
「吸血鬼に血を吸われたっ…俺はっ…俺は…吸血鬼になっちまうんだっ…」
応接間の隅っこに座り込んでいる、頭のツルツルとした、人相の悪い一匹のペンギン。朱実家の警備隊長・銀ペーであった。その愛

らしい丸みある頭には、牙で噛まれたような小さな二つの傷跡があった。
「アニキっ！！お気を確かにぃっ！」
「そうですぜぇっ！！まだそうと決まったわけじゃあっ…！！」
「うるっせぇっ！！俺のことはもう放っておいてくれっ…！！」
『あっ…アニキぃぃ～っ…』
励まそうと声を掛ける二匹の子分ペンギンに、どこか自暴自棄になった様子で言い放つ銀ペー。そうして再び深く俯く銀ペーを、子分たちが心配そうに見つめる。
「ペンギン？」
「銀ペーさんは、吸血鬼の調査中にご自身も被害に遭われて…」
首を傾げる輝矢の横で、千鶴も心配そうに銀ペーを見つめる。
「吸血鬼に血を吸われた者は吸血鬼になると言われておりますので…銀ペーさんもひどく怯えられて…」
「他の吸われた人たちはどうなのです？」
「えっ？ああ、同じように怯えてはいらっしゃいますけど、実際に吸血鬼になられた方は今のところは…」
「そうですか」
「……っ？」
千鶴の言葉に頷き、スッとその場で立ち上がる輝矢。立ち上がった輝矢を千鶴が不思議そうに見上げる中、輝矢が応接間の隅っこにいる銀ペーの元へと歩み寄っていく。
「ペンギンっ」
「んっ？」
輝矢の声に反応し、深く俯いていた銀ペーが少しだけ顔を上げる。
「何でぇっ！？踏みつけ女っ！下手な励まし文句ならいらねっ…！」
「ちょっと失礼っ」
「ぐぎゃあああああああっ！！！」
『アニキぃぃぃぃ～～～っっ！！！』
銀ペーの言葉を遮り、落ち込み中の銀ペーを右足で思いきり踏み

つける輝矢。床に埋もれる銀ペーに、子分たちが悲鳴にも似た声をあげる。
「んん～っとっ」
踏みつけていた足を下ろし、輝矢がしゃがみ込んで銀ペーの傷口をまじまじと観察する。
「んん～鬼人が噛んだにしては傷口が小さすぎますねぇ～」
そう分析しながら、少し首を捻る輝矢。
「やはり鬼人とは無関係と考えた方が…」
「てっめぇっ！踏みつけ女っ！この野郎っ！！」
輝矢が考え込んでいる中、潰れていた銀ペーが勢いよく起き上がる。
「今日という今日は絶対、許さなっ…！」
「あっ、歯が伸びてきてますよっ？吸血鬼になりかけてるんじゃありませんっ？」
「ひぃぃぃえぇぇぇぇぇぇぇっっ！！！」
『アニキぃぃぃぃ～～～っっ！！！』
輝矢の言葉に、殴りかかろうとした勢いを一気に失くし、身を丸めて震え上がる銀ペー。そんな銀ペーに子分たちが慌てて駆け寄る。
「さてとっ」
震えている銀ペーにあっさりと背を向け、立ち上がる輝矢。
「ホントに歯伸びてたのぉ～？」
「全然っ」
「……。」
横から飛んできたユキジの問いかけに、一言で答える輝矢。その言葉に、ユキジが少し固まる。
「いい感じで日も暮れてきましたし、とりあえず調べに町へ出てみますか」
「面倒臭いなぁ～」
襖を開け、暗くなりかけている空を見上げて言う輝矢。その横でユキジが少し肩を落とす。

「お願いいたします…」
「ええっ、では出掛けますよっ」
「はぁ～いっ」
「……っ？」
千鶴の言葉にしっかりと頷き、輝矢が言い放つ。ユキジの返事しか返って来ないことに首を傾げ、部屋の中を振り返る輝矢。
「ハチっ？サルっ？」
輝矢が返事のないハチとモンキを探す。
「ううぅぅぅ～～～悪霊退散っ！ドラキュラ退散っ！ううぅぅぅ～～っ！」
「神様仏様お猿様ぁぁぁ～～っ！！俺の血なんか吸っても旨くないですよぉって言うたって下さいぃ～っ！」
『……。』
輝矢が目をやった先にいたのは、銀のロザリオを掲げ、祈りをあげているハチと、にんにくを食べまくり、やはり祈りをあげているモンキであった。二匹の姿に、輝矢とユキジが、勢いよく表情を引きつって固まる。
「何を…やっているのです…？」
「へっ？見りゃあわかんだろっ！ドラキュラ対策のお祈りだよっ！」
輝矢の問いかけに、真剣な顔で答えるハチ。
「輝矢んも吸血鬼避けに、にんにく食べるぅ～っ！？」
「……。」
にんにくを差し出した間の抜けた顔のモンキを、輝矢がまっすぐに見つめる。
「クサいっ…」
「ほんとぉ～っ！臭い移るからコッチ来ないでよぉ～っ！」
「がびぃぃぃぃぃ～～～んっっ！！」
不快この上ない表情で鼻をつまむ輝矢とユキジに、にんにく臭を漂わせたモンキが大きくショックを受ける。
「かっ…輝矢んに嫌われてもたぁっ！にんにくのバカぁっ！」

「バカはお前だっ」
にんにくへ向けて文句を言っているモンキに、ハチが横から冷たく突っ込みを入れる。
「とっとと行きますよ、キジ」
「うん、そうだねぇ～バカどもは放っておいて、とっとと行こぉ～っ」
『ああっ！ちょっと待ってっ！！』
間抜けな二人に呆れた様子で、とっとと行ってしまう輝矢とユキジを、ハチとモンキはロザリオとにんにくを持ったまま、慌てた様子で追いかけた。
「大丈夫でしょうか…」
「ううっ…！！もうダメだぁ～っ！！俺は吸血鬼になるんだぁぁ～～っ！！」
『アニキぃぃぃぃぃ～～～っっ！！！』
不安げに首を傾ける千鶴。その部屋の隅で、吸血鬼になってしまうことに怯えている銀ペーであった。

第４１章　ハグレ吸血鬼　☆２

すっかり日も暮れた雀国郊外。普段は夜であっても賑わっているというのに、町は閑散としていた。皆、吸血鬼に怯えているのだろう。外には人影一つ見当たらない。

「これじゃあ聞き込みは無理そうだねぇ～」

「そうですね」

静かな町を見渡しながら、言葉を交わす輝矢とユキジ。

「悪霊退散っ！ドラキュラ退散っ！」

「ああぁ～っ！神様仏様おサル様ぁぁぁ～～っ！！」

『……。』

輝矢とユキジの後を追うようにして歩いてくるのは、ロザリオを掲げて祈りながら、にんにくを頬張っているハチとモンキであった。二匹の祈りの声に、輝矢とユキジが表情を引きつる。

「もう少し静かにしてもらえませんっ？」

「それにもうちょっと離れてよぉ～にんにく臭いぃ～っ」

輝矢とユキジが振り返り、嫌そうな表情で口々に言い放つ。

「これが静かにしてられるかっ！相手は吸血鬼だぞっ！？ドラキュラだぞっ！？ヴァンパイアだぞっ！？」

「そりゃわかってるけどさぁ～っ」

「せやせやぁっ！備えあれば憂いなしっ！これを見ぃっ！！」

そう言ってモンキが高々と掲げたのは、銀色の大きな杭であった。

「これを胸に突き刺せば吸血鬼は死ぬらしいぃっ！」

「おおっ！やりやがるじゃねぇかぁっ！サルっ！」

「おうっ！俺に任しときぃっ！」

『……。』

盛り上がっているハチとモンキに相対して、盛り下がっていく輝矢とユキジ。

「私たちだけで調査しましょう」

「そうだね…」
呆れきった表情の輝矢の言葉に、ユキジがどこか力なく頷く。
「キジはあちらを、私はこっちを見てきますので」
「うん、わかったぁ～」
輝矢の指示に、分かれ道を右へと飛んで行くユキジ。輝矢は左側の道を進んで行く。
『あれっ…？』
分かれ道の手前に取り残されたハチとモンキは、お祈り道具を持ったまま、その目を丸めた。

「んん～っ、やはり誰もいませんねぇ～」
ユキジと分かれ、ハチとモンキを残し、一人、左側の道を進んだ輝矢。町はずれへと続いて行く一本道である。周りには多くの家が立ち並んでいるというのに、やはり外には人っ子一人見当たらない。その静けさが、何とも不気味であった。
「これはあのペンギンでも使って、オトリ作戦でもやった方が早いですかねぇ～」
首を捻りながら、無茶苦茶な作戦を練る輝矢。
「ふぅっ…」
輝矢がふと立ち止まり、空を見上げる。
「今夜は満月ですか…」
夜空に浮かぶ真ん丸の月を見つめ、呟く輝矢。暗い空に一際輝く満月は、少し赤く見えて、この静けさが醸し出す不気味さを、さらに増していくようであった。
「……。」
輝矢が少し、その表情を曇らせる。
「……っ」

不気味な空気の中に、かすかに感じる気配に、輝矢が感覚を研ぎ澄ませ、周囲を警戒する。
「何がっ…」
――――――――――――――――っ――――
「……っ！」
上空に感じる気配に、輝矢が勢いよく顔を上げる。
「なっ…」
思わず目を見開く輝矢。
「こっ…コウモリっ…？」
満月の輝く空を舞っているのは、鳥のような小さな生物。だが鳥とは異なる薄暗い色の体に、羽根のない翼を広げている。光る赤い瞳に、鋭い二本の牙。初めて見るその生物に、輝矢は少し戸惑いの表情を見せた。
「カァっ…！」
「クっ…！」
こちらへと高速で飛びかかって来るコウモリに、輝矢が瞳を鋭くし、素早く右耳のピアスを弾く。
“月器・三日っ…！」
――――キィィィィィィィィーーーンっ！――――
「ううっ…！！」
頭に響く超高音に、輝矢が思わず頭を押さえ、目覚めさせたばかりの月器を落とす。
「超…音波っ…？」
頭に激しく響くその音に、苦しげな表情を見せる輝矢。
「普通のコウモリにここまでの超音波はっ…これはっ…“獣人”のっ…？」

「カァっ…！！」
「うっ…！」
牙を剥くコウモリに、輝矢は厳しい表情を見せた。

「んっ…？」
一方、輝矢と分かれ、右側の道を飛んでいたユキジが、静けさの中でかすかに聞こえる羽音に、敏感に反応し、後方を振り返る。
「鳥っ…？」
満月に照らされ、よくは見えなかったが、鳥のようなものが遠くの空へと飛び去っていくのがかすかに見えた。
「……。」
ここは鳥の国なのだから、鳥が飛んでいるくらいは当たり前なのだが、何やら無性に胸が騒いだ。
「……っ」
ユキジが羽根を翻し、あの謎の鳥が飛び上がって来た方向へと向かう。
「確かこの辺っ…んっ？」
上空から目を凝らして下方を見つめていたユキジが、ふと何かを見つける。
「あれはっ…」
道端に倒れている、人らしきものの姿。
「輝矢っ…！？」
倒れている人間が輝矢だとわかり、ユキジが大きく目を見開き、慌てて下降していく。
「輝矢っ…！」
――――ボォォォォォォォォ～～～ンっ！――――
ユキジが白い煙に包まれ、人化して地面へと降り立つ。

「輝矢っ…！？」
倒れている輝矢に駆け寄り、輝矢を抱え上げてその名を呼ぶ由雉。
「輝矢っ…！！」
「……。」
深く目を閉じた輝矢の首筋には、牙で噛まれたような小さな傷が二つ、くっきりと残っていた。

一時間後。朱実家・客間。
「ったく、情けないわねぇっ！！」
しかめた表情で呆れたように言い放つのは孔雀。
「大の男が三人も付いていながら、吸血鬼から破天荒女一人、守れないなんてっ！」
「うわぁ～んっ！ごめんなぁっ！！輝矢ぁぁ～んっ！！俺がにんにく臭かったばっかりにぃ～っ！！」
「別にボク、可愛いボクさえ守れればそれでいいしぃ～っ」
叱るように言う孔雀に対し、布団に横たわっている輝矢の方を見ながら、涙ながらに謝るモンキと、シレっとした様子で答えるユキジ。吸血鬼により襲われたらしき輝矢は、ユキジにより朱実家の屋敷へと運ばれたが、まだ目を覚ましていなかった。
「ったく、使えない動物どもねぇっ！」
「まぁまぁお母様ぁ～っ、あんまり強く言わないでぇ～っ」
三匹の不甲斐無さに立腹した様子の孔雀に、松人が宥めるように声を掛ける。
「これ以上言っちゃうとほらぁ～っ、リアルに凹んじゃうからぁ～

っ、桜時クンっ」
「はぁっ…」
「元気出しなよぉ～桜ちゃ～んっ」
「……。」
客間の隅っこで体を縮め、深々と溜息をついているハチを指差す松人。竹人に励まされてはいるが、あからさまに落ち込んでいる様子のイヌに、孔雀が呆れた表情を見せた。
「んっ…んんっ…」
「……っ！輝矢んっ！？」
「輝矢っ…！」
布団に横たわっていた輝矢がゆっくりと目を開くと、モンキとハチが、起き上がる輝矢に慌てて駆け寄った。
「大丈夫かぁっ！？輝矢んっ！」
「……。」
身を乗り出し、顔を覗き込むモンキを、少し虚ろな目の輝矢がまっすぐに見つめる。
「にんにく臭いっ…」
「ぐはぁぁぁっ！！」
顔をしかめて呟く輝矢に、ショックを受けるモンキ。
「にんにくが臭いだなんてっ…！まさか輝矢んっ！吸血鬼にっ…！！？」
「いやっ、吸血鬼じゃなくても十分、臭いから」
焦ったように言い放つモンキの横で、ユキジは冷たい視線を送りながら鼻をつまんでいる。
「けど、吸血鬼に血を吸われたんだからぁ…」
「輝矢も吸血鬼になるかも知れねぇーよなぁっ」
「輝矢んが…吸血鬼にっ…」
三匹が、天井を見上げ、少しの間考え込む。
「まっ、別に大したことねぇーかぁっ」
「恐怖度的には一億が一億とんで一になるってぐらいっ？」

「元々、吸血鬼よりおっそろしいもんなぁっ！」
「何か不快なんですけどっ…？」
口々に言う三匹に、起きたての輝矢は、はっきりとした意識を取り戻し、その言葉たちに顔をしかめた。
「大丈夫ですか？輝矢さん」
「ええ、少し頭はクラクラしてますけど」
「血を吸われたからでしょうね」
千鶴の問いかけに答えている輝矢に、孔雀が鋭い表情で声を掛ける。
「吸血鬼にしてやられたようね、破天荒女」
「ええ、一生の不覚ですっ…」
孔雀の言葉に、輝矢が牙の傷跡のある首筋を押さえながら、引きつった表情で答えた。
「吸血鬼ごときに血をくれてやるなどっ…」
「輝矢の血吸ったりして大丈夫かなぁ～？吸血鬼っ」
「むしろアッチのんが怪物に変身しとうかもなぁ～っ！」
「……っ」
「ぎゃあああああああっ！！」
陽気に笑っていたモンキの頭を、輝矢が勢いよく叩き落とした。
「ううぅ～っ…」
床に倒れ込み、苦しげな声を漏らすモンキ。
「それより派手派手スズメババア」
「だっからやめなさいっ！その呼び名はっ！」
「この国に、コウモリの獣人は住んでいますか？」
「……っ」
「コウモリっ？」
輝矢の問いかけに、孔雀が眉をひそめ、ハチが目を丸くして首を傾げる。
「コウモリがどうかしたのかよ？」
「私の血を吸ったのはコウモリでした」

「えっ…？」
輝矢の言葉に、ハチが眉をひそめる。
「そういやボクも見たなぁ～輝矢の倒れてた辺りから飛び立って行く、鳥みたいな生き物っ」
「そのコウモリは強い超音波を放ってきました。恐らくは獣人の力でしょう」
「うぅ～ん、でもコウモリの獣人なんて、俺は聞いたことっ…」
「……。」
「……っ？」
輝矢とユキジの言葉を聞き、首を捻って考え込んでいたハチが、すぐ横でどこか深刻な表情を見せている孔雀に気づき、首を傾げた。
「孔雀…さんっ？」
「……。」
「いるのですね…」
そんな孔雀の様子を見て、輝矢が厳しい表情で言う。
「コウモリの獣人が…」
「…正確には、“いた”って言うのが正しいのかしらね…」
「いた…？」
孔雀の言葉に、輝矢が少し表情を曇らせる。
「昔…雀国が出来て間のない頃、鳥類の獣人とけものの獣人たちとの間で、戦争が起きたことがあってね」
皆が見つめる中、孔雀が話を続ける。
「どちらに付こうか迷っていたコウモリ一族は、鳥からの誘いには“自分はけものだよ”、けものたちの誘いには“自分は鳥だよ”と言って、どちらの誘いも断ったのよ」
「……。」
輝矢が真剣な表情で、孔雀の話に聞き入る。
「やがて戦争は終わり、平和な時代がやって来た…」
孔雀の表情がさらに曇る。
「コウモリ一族は仲間に入れてもらおうと思って鳥たちのところへ

来たのだけど、鳥たちは皆、そっぽを向き、次にけものたちのところへ行くと、襲われそうになって慌てて逃げ出した…」
「無理ないよっ、そんなどっち付かずの行動しといてっ」
孔雀の話に、ユキジはコウモリたちに同情することはなく、どこか批判するように言い放った。
「そして彼らは、どちらの仲間にもなれず、一族だけで密やかに暮らすこととなった…」
「鳥にもけものにもなれず…か…」
ハチが少し考え込むように俯く。
「もう四百年も前のことだし、まさかまだコウモリ一族が存在してるなんて思ってもみなかったけど…」
孔雀が少し驚いたように言う。
「それで？コウモリ一族の棲家というのは？」
「雀の国はずれにある古城よっ…」
輝矢の問いかけに、孔雀が厳しい表情で答える。
「四百年前と変わっていなければね…」
「わかりました」
孔雀の言葉に頷き、輝矢が布団を横へとどけて立ち上がる。
「行きますよ、ハチ、サル、キジ」
輝矢が鋭い瞳を見せる。
「私の血を吸った罪、死んで償わせますっ」
「やっぱ吸血鬼より怖いねぇ～」
「まぁわかってたことだろっ」
「吸血鬼も可哀想になぁ～輝矢んの血を吸ったばっかりにっ」
「行きますよっ？」
『はいっ！』
冷たい笑顔でもう一度言い放つ輝矢に、あれこれ言っていた三匹は皆、顔を引き締め、大きく返事をした。

「うっ…ううっ…」

窓から差し込む月の光だけが、唯一の明かりとなっている薄暗い部屋。蜘蛛の巣が張り巡らされ、埃を被ったたくさんのものがやたらと床に落ちているその部屋に、どこか苦しげな、低い声が轟く。

「血がっ…血が足りないっ…」

その声の主が、鋭く尖った爪のある手を、何かを求めるように高々と掲げる。

「我に…血をっ…もっとっ…血をっ…！」

――――パリィィィィィィーーーーンっ！――――

掲げられた手が、月明かりの差し込む窓を、砕き割った。

第４１章　ハグレ吸血鬼　☆３

雀国はずれの古城前。

「これが…コウモリ一族の棲家っ…」

厳しい表情で、その古城を見上げる輝矢。壁一面を覆うように生えている緑色の苔。城のところどころに壁の崩れている箇所があり、古城というよりは最早、廃城であった。月に照らされた城は何とも不気味な空気を醸し出しており、確かに吸血鬼でも棲んでいそうな雰囲気である。

「ううぅ～～っ！悪霊退散っ！ドラキュラ退散っ！」

「神様仏様おサル様ぁぁ～～っ！この日頃の行いの良いこのサルにご加護をぉぉ～～っ！」

「……。」

先程よりも更に一層の祈りをしているハチとモンキに、輝矢の真剣な表情も崩れる。

「そんなに怖いのなら、外に残っていてもらっても構いませんが…」

「なっ…！だっ誰が怖いだなんてっ…！おっ俺は全然、平気だからなっ！！」

「無理しちゃってぇ～」

強がるハチに、ユキジが呆れた表情を向ける。

「俺も行くでぇっ！にんにくパワーで今度こそ輝矢んを守るんやからなっ！」

「臭い…」

「がびぃぃぃぃーーーんっっ！！！」

守ろうとしている輝矢にとても嫌そうな顔をされ、モンキが勢いよくショックを受ける。

「では行きますよっ？」

『おっおうっ！』

「はぁ～いっ」

輝矢の呼びかけに、緊張した面持ちで頷くハチ・モンキと、面倒臭そうに返事をするユキジ。
「……っ」
輝矢が苔に覆われた巨大な扉に手を掛ける。
――――ギィィィィィィーーーっ……――――
『……っ』
少し押しただけで自動的にゆっくりと開いていく扉に、一行が息を呑む。
「入りますよ」
「うんっ」
表情を引き締め、輝矢とユキジが古城内へと足を踏み入れる。
「おっお前っ、先に入れよっ！サルっ！」
「こっ今回はしゃーないからお前に譲ったるわぁっ！イヌっ！」
扉の前に残ったハチとモンキが、互いに先頭を譲り合う。
「いやっ！サルがっ！」
「いいやっ！イヌがっ！」
「いいからとっとと入りなさいっ」
「ぎゃあああああああっっ！！触るなぁぁぁぁぁっっ！！」
「あぁぁ～っ！待ってっ！1人にせんといてぇぇぇぇ～～～っっ！！」
輝矢に体を掴まれ、無理やり城の中へと入れられるハチ。扉前に取り残されそうになったモンキが、追いかけるようにして慌てて城の中へと入る。
――――バタァァァァァーーーンっ！――――
「あっ、閉じ込められましたね」
『ぎゃあああああああああっっっ！！！』

一行が全員城に入った途端に、勝手に閉まる城の扉。冷静に言い放つ輝矢の横で、ハチとモンキが悲鳴をあげる。
「玄関ホールみたいですね…」
辺りを見回し呟く輝矢。そこは、二階まで吹き抜けになっている、大きなホールであった。二階の窓から差し込む月明かりだけが、唯一の明かりとなっている。屋敷の細かいところは薄暗くて見えないが、だいたいの広さと、天井の大きなシャンデリアだけは確認できた。
「もうダメだぁっ！俺たち、このまま吸血鬼かドラキュラかヴァンパイアになるんだぁぁぁ〜〜っっ！！」
「全部同じだけどね」
「いっやぁぁ〜っ！どうせなら美女吸血鬼に血と言わず魂まで吸われたいぃぃ〜〜っっ！！」
「都合良すぎっ」
頭を抱えて叫ぶハチとモンキに、ユキジが次々と突っ込みを入れていく。
「どうせ吸血鬼倒すまで出てく気ないんだし、そんなに騒ぐことじゃっ…」
「カァっ…！」
「えっ…？」
怯えるハチとモンキに上空から呆れた表情を向けていたユキジの元へ、二階の方から、物凄い勢いで鳥のような生き物が飛び込んでくる。
「コウモリっ…！？」
「カァっ…！！」
「うっ…！」
飛びかかって来たコウモリの牙に右羽根をかすめられ、少し表情を歪めたユキジが床へと降下していく。
「キジっ！」
輝矢がユキジの方を見ながら、素早く右耳のピアスを弾く。

「このっ…！」
――――ボォォォォォォ～～～ンっ！――――
白い煙に包まれ、人化した由雉が床へと膝をつき、鋭くコウモリを睨みつける。
「可愛いボクにっ…何すんのさっ！“右翼・裂羽”っ…！」
コウモリへ向け、由雉が青い羽根を投げ放つ。
「……っ」
「何っ…！？」
由雉の放った羽根を、素早く身を翻してかわすコウモリ。その動きに、由雉が驚いた表情を見せる。
「“月器っ…」
「……っ！」
羽根をかわしたコウモリの、すぐ後方へと飛び上がる輝矢。コウモリが振り返り、少し眉をひそめた。
「三日月”っ…！」
構えた三日月を、思いきりコウモリへと振り下ろす輝矢。
「ううっ…！」
しかし、輝矢の振り下ろした三日月は、大きく空を斬った。
「……っ」
「カァっ…！」
輝矢が振り向くと、そこには大きく翼を広げて舞っているコウモリの姿。輝矢の三日月も、あっさりとかわしてしまったのだ。
「さすがコウモリっ、動きが速いねっ」
「ええっ」
床へと着地した輝矢に、立ち上がった由雉が声を掛ける。少し厳しい表情を見せて頷く輝矢。
「どうにかしてあの動きを止めねばなりませんね」
「そうだねぇ～っ」
「おっしゃあっ！ついに俺らの出番やでぇっ！イヌぅっ！」
「そうだなぁっ！サルっ！」

『へっ…？』

聞こえてくる威勢のいい声に、輝矢と由雉が顔を引きつって振り向く。

――――ボォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

同時に白い煙に包まれていくハチとモンキ。

「よしっ！いくぞぉっ！サルっ！」

「おうっ！！」

先程まで怯えていたとは思えないほどに勇ましい表情を見せ、声をあげる桜時と門貴。

「見ててやぁ～っ！輝矢んっ！」

『……。』

自信満々の笑みで親指を突きたてた右手を見せる門貴に、輝矢と由雉が引きつった表情のまま固まる。

「はぁっ…やめといた方がいいんじゃなぁ～いっ？」

「期待はしませんから、安心して何でもやって下さい」

「ほぉ～いっ！」

輝矢のやる気ない言葉に、門貴がしっかりと頷く。

「先行けやぁ～イヌっ」

「おうっ！」

門貴の言葉にしっかりと頷き、桜時が一歩前に出る。

「……っ！」

上空を舞うコウモリに向かって、飛び上がる桜時。

「カァっ…！！」

飛び上がって来る桜時へ向け、コウモリも翼を翻し、降下していく。

「必殺っ…！」

牙を剥くコウモリに向け、鋭い表情で構えを取る桜時。

「“ロザリオ掲げ”っ！！」

桜時が勢いよく、先ほどから持ち歩いていた銀のロザリオを突き出す。

「そんなことだろうとは思いましたけど…」
「はぁ～っ…そんなものが本当に効くはずっ…」
「うぐぅぅっっ…！！」
「効いたぁぁぁっっ！！？」
桜時の突き出したロザリオを見た途端、コウモリが苦しげな声をあげ、頭を抱えて動きを止める。その思いがけぬダメージ振りに、大きく驚く由雉。
「門貴っ…！」
降下していきながら、桜時が門貴の名を呼ぶ。
「おうっ…！」
桜時と入れ替わるようにして、苦しんでいるコウモリの元へと飛び上がっていく門貴。
「必殺っ…！」
コウモリのすぐ前へと飛び上がった門貴が、表情を鋭くする。
「“にんにく臭”っ！かはぁぁぁぁぁぁ～～～っっ！！！」
コウモリへ向けて大きく口を開き、そのにんにく臭のきつい息を勢いよく吐き出す門貴。
「ぐうううぅぅっっ…！！」
ロザリオに苦しんでいたコウモリが、その漂ってくる臭いに、さらに表情を歪める。
「ぐはぁぁぁぁっっ！！」
苦しげな叫び声をあげて、力なく降下していくコウモリ。翼を広げることもなく、コウモリが床に倒れ込む。
『いえぇ～いっ！』
床へと降り立った門貴と桜時が、得意げな笑顔でハイタッチをする。
「うわぁ～超意外な展開っ」
「“備えあれば憂いなし”とはよく言ったものですねぇ」
そんな二人とコウモリの戦いぶりに、感心した様子の輝矢と由雉。
「見てくれたぁ～っ？輝矢んっ！」

「臭い…」
「がびいいいいいんっっ！！」
折角活躍したというのに、まだ鼻をつままれてしまい、門貴が悲しげな表情を見せる。
「おっ…己っ…！」
『……っ？』
ロザリオとにんにく臭にやられ、倒れ込んでいたコウモリが、引きつった表情の顔を上げる。
「我の苦手なものを調べてくるとはっ…何と卑怯なのであーるかっ…！」
「卑怯だってぇ」
「すんませぇ～んっ！」
「謝るのかよっ！！」
コウモリの言葉を受け、素直に頭を下げる門貴に、桜時が勢いよく突っ込みを入れる。
「もうっ…！許しはしないのであーるっ…！！」
コウモリが翼を広げ、起き上がる。

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

白い煙に包まれていくコウモリ。

「覚悟するであーるっ…！！」
『……っ』
白い煙が晴れると、そこには黒の燕尾服に、襟の立った表は黒、裏地は赤色のマントを纏った、痩身で背の高い男が立っていた。逆立った黒髪と吊りあがった赤い瞳。その肌は、血が通っているとは思えないほどに青白い。そして、口に収まりきらない程に長い、牙のような歯が二本。それはまさに、皆が思い描く吸血鬼の姿、そのものであった。
『出たぁぁぁぁぁぁっっ！！吸血鬼ぃぃぃぃっっ！！！』

「今更、何言ってんのさぁ～っ」
コウモリが吸血鬼の姿となった途端に、震え上がる桜時と門貴に、由雉がまた呆れた表情を向ける。
「本性を現しましたかっ」
輝矢が少し目を細め、三日月を握る手に力を込める。
「喰らうが良いっ…！！」
吸血鬼が、爪の尖った両手で、勢いよくマントを広げる。
“超♪超音波”っ！！」

――――キィィィィィィィィーーーーンっ！――――

吸血鬼の広げたマントから、甲高い高音が響き渡る。

『ううぅっ…！！』
頭に響くその音に、思わず耳を塞ぎ、その場にしゃがみ込む桜時たち。
「なっ…何っ…！？この音っ…！」
「頭がっ…割れそうやっ…！」
「クソっ…！」
激しく頭にまで響いてくるその音に、苦しげな表情を見せる桜時・門貴・由雉。
「フッハッハッハっ！苦しめっ！苦しめっ！」
力なく蹲っていく桜時たちを眺めながら、吸血鬼が楽しげに笑う。
「我に逆らう者はすべてっ…！」
「……っ」
「何っ…！？」
余裕の笑みを浮かべていた吸血鬼に、勢いよく振り下ろされてくる金色の刃。吸血鬼がその笑みを止め、驚きの表情となる。
「クっ…！」
振り下ろされてきた刃を、後方に飛んでかわす吸血鬼。ベストの

部分を刃がかすめ、少しだけ切り裂いた。切れたベストを見て、吸血鬼が顔を引きつる。
「貴様っ…！」
「……。」
吸血鬼が顔を上げると、そこには三日月を構えた輝矢が立っていた。
「何故だっ…」
吸血鬼が、輝矢へ戸惑いの表情を向ける。
「何故っ、貴様にだけ、我の超音波がっ…！」
「えぇ～っ？何ですってぇ？」
「……っ」
これほど大きな声で話しているというのに、聞き返してくる輝矢に、吸血鬼が眉をひそめる。
「ハっ…！」
何か思いついたような表情となった吸血鬼が、輝矢の耳を覗き込む。
「やはりっ…！」
輝矢の耳をしっかりと塞いでいる、二つの耳栓。
「貴様っ…！！」
“備えあれば憂いなし”とは、本当によく言ったものですよねぇっ」
焦りの表情を見せる吸血鬼に、輝矢は余裕の笑みを浮かべた。
「アイツっ…ちゃっかり自分だけっ…」
「さっ…さすが俺の輝矢んっ…」
「ううぅ～っ…ボクも耳栓欲しいよぉ～っ」
自分だけ耳栓をして無傷でいる輝矢とは異なり、まだ超音波に苦しみ続けているお供たち。
「さぁ～てっ、私の血を吸った罪、その身をもって償っていただき

ましょうかっ…」
「ううっ…！」
冷たく微笑む輝矢に、怯む吸血鬼。
「竹取輝矢っ…」
輝矢が鋭い表情となり、三日月を構える。
「吸血鬼退治、いたしますっ…！」
「……っ！」
三日月を構え、飛びこんでくる輝矢に、顔を引きつる吸血鬼。
「クっ…！」
覚悟を決めたのか、吸血鬼が強く歯を食いしばる。
「うえぇぇぇぇぇぇぇぇぇ～～～んっっ！！！」
「はっ…？」
その場に膝をつき、勢いよく泣きだす吸血鬼に、輝矢が間の抜けた表情で三日月を止める。
「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～んっっ！！！」
「えっ…えとぉ…」
子供のように勢いよく泣き叫ぶ、もうどう見てもいい大人の吸血鬼に、耳栓をはずし、引きつった表情を見せながらも、どうしたらいいのか戸惑う輝矢。
「あぁ～あ～、泣かしちゃったぁ～」
「お前が怖い面で脅すからっ」
吸血鬼が泣きだすとともに超音波が止み、やっと頭痛から解放された桜時たちが輝矢の元へと歩いてくる。まだ音が抜けきらないのか、皆、少し耳を押さえていた。
「別に私は普通に斬り殺そうとしただけです」
「それが怖えぇーんだよっ！」
シレっと答える輝矢に、勢いよく突っ込みを入れる桜時。
「どないしたんやぁ～？吸血鬼ぃ～っ」
「うえぇぇぇぇぇぇぇぇ～～～んっっ！！」
門貴が泣いている吸血鬼に声を掛けるが、吸血鬼は泣きじゃくっ

たまま、まったく泣き止もうとしない。
「うえぇぇぇぇぇ～～～っっ…！」
「いつまでも泣いていても、仕方がないでしょうっ…？」
「すみませんっ」
泣き続けようとした吸血鬼が、輝矢のひと睨みに、すぐさま泣き止む。
「我は…コウモリの獣人でヤモリというのであーるっ…」
「ややこしい名前っ…」
力なく自己紹介をするヤモリに、思わず突っ込むように呟く由雉。
「我の一族、コウモリ一族は…その昔、鳥の獣人とけものの獣人との間で戦争があった時にっ…」
「その話はもう聞きましたので、カットでお願いします」
「むっ？そっそうか。わかったであーるっ」
輝矢に言われ、素直に話しをカットするヤモリ。
「確かに、御先祖様のしたことはヒドいことであーる…我も仲間ハズレにされても、無理はないと思っているのであーる…でもっ…」
ヤモリの表情が、徐々に曇っていく。
「我は…寂しかったのであーるっ…」

――――コウモリなんて、鳥の仲間じゃねぇーよっ！――――
――――あっち行けぇっ！コウモリっ！けものの仲間振るんじゃねぇっ！！――――

思い出される、鳥やけものたちの言葉。どこへ行っても、受け入れてもらえなかった。誰にも仲間として見てはもらえなかった。

――――ううっ…――――

いつも一人、この城に閉じこもっていた。

「寂しかったのであーる…」
『……。』
もう一度その言葉を繰り返し、心から悲しそうな顔を見せるヤモリに、皆が少し俯いた。

――――どうして鳥の国にイヌがいるわけぇっ？――――

「……っ」
特に桜時は、かつての受け入れてもらえなかった自分の姿を、今のヤモリと重ね合わせ、少し悲そうな表情を見せていた。

「寂しくて寂しくてっ…だから…町へ出たのであーるっ…」
「それはわかりましたが、何故、町人たちの血を…？」
輝矢が眉をひそめ、どこか諭すような口調でヤモリに問いかける。
「それはっ…」
表情を曇らせるヤモリ。
「ちょっとお腹が空いてたからであーるっ」
「とっとと派手派手ババアに突き出しますかっ」
「いやぁぁぁ～～っ！！ほんの出来心だったのであーるぅぅぅっっっ！！」
ヤモリの自己中心的な理由を聞き、孔雀の元へ連行しようと、ヤモリの手を引っ張る輝矢。そんな輝矢に必死に抵抗しながら、ヤモリがまたしても泣きじゃくる。
「ちなみに其方の血が、一番、美味であったのであーるっ」
「そうですかっ。では行きましょうかね、監獄へっ」
「いやぁぁぁぁぁであーるぅぅぅぅっっっ！！」
誉めることで何とか逃れようとしたヤモリであったが、逆にさらに輝矢の怒りを買ってしまい、連行を強めることとなってしまった。

ヤモリの涙が、さらに勢いを増す。
「監獄は嫌であーるぅぅっ！もう薄暗いところに一人は嫌なのであーるぅぅぅっっ！！」
「……っ」
ヤモリの必死の訴えに、見つめていた桜時が少し目を細める。
「それが私の血を吸った報いです」
「ひぃぃえぇぇぇぇぇぇ～～～っっ！！！」
「まっ待ってくれっ！」
「待ちましょう」
「だあああああああであーるぅぅぅ～～っ！！」
制止を促す桜時の声に、あっさりと頷いてヤモリの手を離す輝矢。
輝矢にいきなり手を離され、ヤモリが勢い余って顔面から床に倒れ込む。
「ううぅっ…痛いのであーるっ…」
倒れ込んだヤモリが、赤く腫れた鼻を押さえながら、ゆっくりと起き上がる。
「孔雀さんには俺が話通して、何とかするからさぁっ」
「……っ？」
ヤモリのすぐ傍にしゃがみ込み、顔を覗き込んでそう言い放つ桜時。優しい桜時の表情を、ヤモリが少し戸惑いながら見つめる。
「だから、血を吸った人たちには、ちゃんと謝ろうっ？」
「あっ…謝るっ…？」
「ああっ」
「でっ…でもっ…」
笑顔を見せる桜時に、どこか躊躇うように俯くヤモリ。
「えっらい優しいなぁ～」
「桜時はいつものことじゃんっ」
「私の血を吸ったんですから、普通、“絶対許さない”とかゆー展開になりませんっ？」
『いやっ、ならないと思うっ』

呟き合っていた門貴と由雉が、輝矢の言葉を一斉に否定する。

「桜ちゃ～～～んっっ！！輝矢ちゃ～～～んっっ！！」

『……っ？』

遠くの方から聞こえてくる声に、顔を上げる輝矢たち。

「おぉ～いっ！」

月明かりの差し込んでいる二階の窓の外に、小さな羽根をバタつかせている一羽のスズメの姿が見えた。スズメは窓の外から、中の輝矢たちに向かって、何やら必死に呼びかけている。

「竹兄っ？」

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

「よぉっとっ！」

スズメは白い煙に包まれ、竹人の姿となると、閉まっていた窓を開けて、城の中へと入って来た。

「あっ、吸血鬼捕まえたのぉ～？」

「竹兄っ！どうしたんだよっ？」

桜時が立ち上がり、歩み寄って来る竹人へと問いかける。

「ああ、うん。別に大したことじゃないんだけどねぇ～っ」

竹人が身につけているネックレスなどをいじりながら、適当な口調で言葉を続ける。

「町に鬼人が出たんだぁっ」

「めっちゃ大したこと、あるじゃねぇーかよっ！！」

そう言った竹人に、桜時は全力で突っ込みを入れた。

第４１章　ハグレ吸血鬼　☆４

「グガアアアアアアアアっっっ！！！」
「きゃあああああああああああああっっ！！！」
「うわあああああああああああああああっっ！！！」
雀国の町の真ん中を、大きな足音を立てながら進む、一匹の緑鬼。
先程までの静けさとは打って変わり、町は逃げ惑う人々で、かなり混乱した様子であった。
「うわぁぁっ！！」
逃げ惑っていた町人の一人、少し太った中年の男が、道で躓き転んでしまう。
「グウゥゥゥゥっ……」
「ううっ…！」
躓いたその男へ、迫る緑鬼。
「ガアアアアアアアアっっ！！」
「ひいいいいいいいいいいっっ！！」
緑鬼の鋭い爪が、男に振り下ろされる。

――――パァァァァァァァァーーーーンっ！――――

「グガっ…？」
何やら硬い感触とともに、止められる自らの爪に、緑鬼が少し眉をひそめる。
「あっ…」
大きく目を見開いて前を見る、躓いていた中年男。
「ふぅ～っ」
男の前に立ち、振り下ろされた緑鬼の鬼爪を受けとめているのは、三日月を掲げた輝矢であった。緑鬼の大きな腕を細い右手一本で止

めながら、輝矢が少し疲れたように肩を落とす。
「ただでさえ血を吸われて眠いんですからっ…」
瞳を鋭くし、ゆっくりと顔を上げる輝矢。
「少しはっ…空気読んで下さいよっ…！」
「グウゥゥっ…！ガアアアアアアアアっっ！！」
力を込めた輝矢の三日月に押し返され、緑鬼が後方へと吹き飛ばされる。
「ったくっ、こんなに頻繁に鬼人が出るなんてっ、この国、呪われてるんじゃありませんっ？」
「それを言うなら、行く先々で鬼人と出くわすお前の方だろっ…」
疲れと眠気で機嫌が悪くなってきたのか、吐き捨てるように言い放つ輝矢に、桜時がこっそりと突っ込みを入れる。
「緑鬼一匹かぁ～じゃあ大丈夫やなぁ～俺、にんにくの食い過ぎで疲れたから休むわぁ～」
「ボクもさっきの超音波で耳鳴り止まないから寝てるねぇ～」
「お前らっ！ちったぁ真剣に人の国を守れよっ！！」
道端にやる気なく寝転がるモンキとユキジに、桜時が少し怒ったように突っ込みを入れる。桜時の国が襲われているというのに、かなり他人事の態度である。
「アイツらのピンチになっても絶てぇ、助けてやんねぇーでおこうっ」
「ハチ」
固く誓っている桜時を、三日月を構え直した輝矢が呼ぶ。
「私が気を引きますので、トドメは頼みます」
「おっおう、わかった」
輝矢の言葉に、桜時がしっかりと頷く。
「ではっ」
輝矢が桜時に背を向け、緑鬼の方に向き直って、三日月を構える。
「竹取輝矢っ、鬼退治いたしますっ」
表情を鋭くし、輝矢が三日月を地面へと突き刺す。

「“下弦っ…」
地面に突き刺さった三日月が、徐々に満ちていく。
「水月”っ…！」

――――バァァァァァァァァァァーーーーンっ！――――

「グギャアアアアアアアアアっっ！！」
地面から突き上げる無数の水の刃を喰らい、緑鬼が身を屈めながら苦しげな声をあげた。
「ググっ…」
「“月器っ…」
「ウっ…！」
水月の痛みにまだ苦しんでいる緑鬼の元へ、下弦から再び満ちていく月器を構え、飛び掛かっていく輝矢。
「三日月”っ…！！」
「グウウウゥゥっっ！！」

――――パァァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

輝矢の振り下ろした三日月と、緑鬼の突き上げた鬼爪が、激しくぶつかり合う。

「カァァァっ…！」
「……っ」
鬼爪で三日月を受けとめたまま、大口を開く緑鬼に、輝矢が少し眉をひそめる。
「クっ…！」
三日月を少し押し、後方へと飛び上がる輝矢。
「“鬼口”っ…！！」
飛び上がった輝矢へ向け、緑鬼が鬼口を放つ。

「“月器・十六夜”っ…！」
輝矢が三日月を前にして構え、どんどんと満ちさせていく。やがて金色の丸い盾が、輝矢の前に立ち塞がった。
――――バァァァァァァァーーーンっっ！！――――
十六夜が、受けとめた鬼口を、緑鬼へと弾き返す。
「ハチっ…！」
「おうっ！」
弾き返された鬼口を喰らったところの緑鬼を攻撃しようと、輝矢の呼びかけに、村雨丸を構える桜時。
「グウゥゥゥっ…！！」
『なっ…！！』
しかし、緑鬼は素早い動きで、輝矢の弾き返した鬼口を避ける。
――――バァァァァァァァーーーンっっ！！――――
緑鬼の避けた鬼口が、町に立っていた見張り台の柱を直撃する。
「あっ…！」
「しまったっ…！」
一気に焦りの表情となる桜時と輝矢。
「えっ…？」
崩れ落ちていく見張り台の下にいる、若い母親とまだ幼い少女。
落ちてくる見張り台を見上げ、大きく目を見開く。
「クッソっ…！」

「ガアアアアアアアっっ！！」
「ううっ…！」
駆け付けようとする桜時の前に立ちはだかる緑鬼。桜時が厳しい表情を見せる。
「お前らっ…！」
『ぐぅ～っぐぅ～っ』
「お前らぁぁぁっっ！！！」
この一大事に暢気に眠っているモンキとユキジに、桜時が血管を浮き上がらせる。
「何とかしなければっ…」
桜時も身動きの取れない状態となり、空中を降下していきながら、自分もどうすることも出来ない状態で、険しい表情を見せる輝矢。
「何とかっ…！」
「……っ」
「えっ…？」
降下していく輝矢の横を、素早く駆け抜けていく小さな生物に、輝矢が思わず目を見張る。
「コウモリっ…？」
「ヤモリっ…！」
「……っ」
輝矢や桜時の横を通り抜け、まっすぐに見張り台へと飛んで行く一匹のコウモリ。それは、ヤモリであった。

「きゃあああああああああああああああっっっ！！！」
「……っ！」
――――ボォォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――
間近へと迫り来る見張り台に、若い母親が悲鳴をあげる中、ヤモリが白い煙に包まれ、人化する。人化したヤモリが、上空でマントを大きく広げた。

「“超♪超音波”っ…！！」

――――キィィィィィィィィーーーーンっ！――――

「うえっ…！」

「うっ…！」

響き渡る超音波に、顔をしかめる桜時と、素早く耳栓をする輝矢。

――――バァァァァァァァァーーーンっ！！――――

超音波の振動を受け、母子やと降下していっていた見張り台が、粉々に砕け散った。

「……っ？」

いつまで経っても来ない衝撃に、母親が少し戸惑いながら、ゆっくりと目を開く。

「あ…らっ…？」

辺りに散らばっている、見張り台の破片に、少し目を丸くする母親。

「大丈夫であーるか？」

「えっ…？」

着地したヤモリが、穏やかな表情で母親に手を差し出す。

「吸血鬼っ…！？」

「……っ」

しかし母親は、ヤモリの顔を見た途端に、怯えたような表情を見せ、ヤモリの差し出した手を勢いよく振り払った。ヤモリがその表情に衝撃を走らせる。

「わっ…我はっ…！」

「ひいぃぃっ！」
「……。」
手を振り払った母親に、何かを訴えかけようとしたヤモリであったが、怯えたように見つめてくるその母親の表情に、それ以上何も言うことなく俯いた。
「ヤモリっ…」
そんなヤモリを、心配そうに見つめる桜時。
「グアアアアアアアっ！！」
「うえぇっ！？」
ヤモリに気を取られていた桜時へ向け、目の前に立っている緑鬼が、勢いよく鬼爪を振り下ろす。そのことにやっと気づき、一気に焦りの表情となる桜時。
「しまっ…！」
「……っ」
「ギャアアアアアアアっ！！！」
「へっ…？」
焦りの表情となった桜時であったが、桜時に鬼爪が振り下ろされる前に、緑鬼は縦一字に斬り裂かれ、桜時の目の前で、激しく悲鳴をあげながら、砂と化して消えていった。桜時が少し戸惑いの表情を見せる。
「私のハチに手を出すなんて数千万年早いですよっ」
「輝矢っ…」
砂と化して消えた緑鬼の向こう側に立っていたのは、三日月を持った輝矢であった。どうやら輝矢が、緑鬼をぶった斬ったようである。
「大丈夫でしたかっ？ハチっ」
「トドメは俺に任せるっつってたのに…」
笑顔を見せる輝矢に、自分の過失とはいえ、少し不満げな表情を見せる桜時。

「……っ」
「んっ？あっ！おいっ！」
桜時が、どこかへ歩き去って行こうとしているヤモリに気づき、慌てて追いかける。
「どこ行くんだよっ…！」
ヤモリの腕を掴み止め、問いかける桜時。
「今から孔雀さんのとこにっ…！」
「其方がどう言い計らったところでっ！どうせ我はこの国の者たちの仲間にはなれないのであーるっ…！！」
「……っ」
強く叫ぶヤモリに、桜時が思わず言葉を止める。
「見たであろうっ…！？あの怯えた顔をっ…！」

――――吸血鬼っ…！？――――

助けたヤモリに対し、あの母親は、何とも怯えた表情で、その手を強く振り払った。

「何をどうやったってっ…！我は仲間になれないのであーるっ…！我に仲間など出来ないのであーるっ…！！」
「ヤモリっ…」
ヤモリの絶望したような、悲しく輝く瞳を向けられ、桜時はかける言葉もなく、ただヤモリを見つめ返す。
「我に仲間などっ…！」
「本当にそうでしょうか…？」
「えっ…？」
さらに言葉を続けようとしたヤモリが、横から聞こえてくる声に振り返る。

「其方はっ…」
ヤモリの振り返った先に立っていたのは、まっすぐな瞳でヤモリを見つめる輝矢であった。
「……っ？」
輝矢の横にいる小さな少女を見つめ、ヤモリが少し目を丸くする。
それは先程、ヤモリの助けたあの母子の娘の方であった。
「どうぞっ」
「あっ…」
輝矢に背中を押されるようにして、少女がヤモリの前へと出る。
「あっ…あのっ…」
戸惑いがちに、ゆっくりとヤモリを見上げる少女。
「ありがとうっ…！」
「……っ！」
大きく笑ってそう言った少女に、ヤモリが大きく目を見開いた。
そのまま右手で牙の目立つ口を覆い、少し俯くヤモリ。
「ヤモリ…」
「……っ」
少女の後ろに立ち、ヤモリの名を呼ぶ輝矢。ヤモリがゆっくりと顔を上げ、輝矢の方を見る。
「歩み寄ることは…アナタが思うほど、難しいことではないのですよっ…」
「……っ」
穏やかに微笑む輝矢に、ヤモリが再び手で口を覆い、その瞳を細めていく。
「うえぇぇぇぇぇぇぇぇ～～～んっっ！！！」
「はっ…？」
勢いよく泣き出すヤモリに、顔をしかめる輝矢。
「あぁ～あっ、また泣かしたっ」
「私が悪いのですか？」
呆れたように言い放つ桜時に、輝矢は少し戸惑うように問いかけ

た。

こうして、雀国での吸血鬼事件は、終わりを迎えた…。

翌日。朱実家・国主の間。

「じゃあ血を吸った町人には、ちゃんと全員、謝ったのねっ」

「はいなのであーる…」

孔雀の言葉に、小さな声で返事をするヤモリ。国主の前とあって、緊張しているようである。

「でっ？貴方に血を吸われた者はどうなるわけ？」

「へっ？」

孔雀の問いかけに、ヤモリが目を丸くする。

「ちょっと貧血になるのであーるっ」

「そうじゃないわよっ！吸血鬼になっちゃうだとか、そういうこと聞いてんのよっ！」

「ひいぃっ！」

素直に答えるヤモリに、勢いよく怒鳴りあげる孔雀。孔雀に怒鳴られ、ヤモリが背筋を震え上がらせる。

「べっ別に吸血鬼になるとかは、まったくないのであーるっ！」

「あらっ、そうなのっ？」

「それを聞いたら、完全ふっかぁぁぁぁぁぁーーーつっ！！」

『アニキぃぃぃぃぃぃ～～～っっ！！』

ヤモリの答えに、少し拍子抜けした様子の孔雀の横から、勢いよ

く体を立ち上がらせてくる銀ペー。吸血鬼にはならないことがわかり、一気に元気になった銀ペーに、子分たちも大いに喜ぶ。
「ハッハッハっ！これで雀の未来は安泰でっ…！ふぎゃあああっっ！！」
『アっ…アニキぃいいいいいい～～～っっ！！！』
高々と笑いあげていた銀ペーが、上から振り下ろされた足に勢いよく踏み潰され、子分たちが悲鳴にも似た声をあげる。
「なっ…何をするっ…踏みつけ女っ…」
「いえっ、笑い声が不快だったもので、ついっ」
「おっ…おのれぇっ…」
銀ペーを踏みつけながら、平然と言い放つ輝矢に、銀ペーは憎しみを募らせた。
「あっあぁ～うんっ」
孔雀が、話しを戻そうと、ひと呼吸入れる。
「そうっ。じゃあ、まっ、昨日の鬼人退治協力の件もあるし、いいわっ」
一つ頷き、ヤモリの方を見る孔雀。
「貴方を雀国民として認めます」
「えっ…？」
その思いがけない言葉に、ヤモリは大きく目を見開いた。
「雀…国民っ…？我…がっ…？」
「ええっ」
戸惑うように聞き返すヤモリに、しっかりと頷く孔雀。
「でっでもっ…！我はコウモリでっ…！そのっ…鳥でもけものでもなくってっ…！」
「種族なんてどうでもいいわっ」
「えっ…？」
孔雀の言葉に、ヤモリが目を丸くする。
「元々、イヌが王子のこの国よっ？」
「ふぇっ？」

チラリと孔雀に笑顔で見られ、桜時が少し驚いたような顔となる。
「今更、鳥だのけものだのにこだわってたって、仕方がないじゃないっ？」
『その通りいいいいい～～～っっ♪♪』
「……っ」
その孔雀の言葉と、大きく頷く三兄弟のハーモニーに、すぐ横に立っている桜時が、どこか嬉しそうな笑みを浮かべた。
「あっ…ありがとうございますなのであーるっ…！！」
ヤモリも嬉しそうな、泣きそうな笑顔を浮かべ、孔雀へ向けて、深々と頭を上げた。
「けどっ、町人の血は二度と吸わないで頂戴よぉ？」
「代わりに高級赤ワイン補給してくれたら、我慢するのであーるっ」
「何で高級なのよっ！トマトジュースでいいでしょっ！トマトジュースでっ！！」
「えええぇ～っ？なのであーるぅ～っ」
ケチる孔雀に、ヤモリはどこか不満げな声をあげた。

「良かったですね、桜時様っ」
「ああ」
千鶴の言葉に、桜時が心から嬉しそうな笑みで頷く。
「俺も鳥ん中で一人、仲間ハズレだったから、アイツのこと、なぁ～んか自分と重ねちゃって…」
そう言いながら、桜時が少し俯く。
――――雀国の王子がイヌだなんてっ…――――
――――汚らわしいわぁ～っ…――――
「鳥にもけものにもなれなかったっていう、アイツの気持ち…すっごいよくわかってさっ…」

過去の出来事を思い出しながら、桜時が言葉を続ける。
「だから、どうにも放っておけなくてさっ」
「そうですね…」
「へっ？」
横から聞こえてくる声に、桜時が少し不思議そうに振り返る。桜時が振り返ると、そこには、先程まで銀ペーを踏みつけていた輝矢がいた。
「輝っ…」
「どちらにもなりきれないというのは…辛いですよね…」
「えっ…？」
どこか憂いを帯びたような、そんな表情でそう呟く輝矢に、桜時は思わず表情を曇らせた。桜時のことを思い、そう言っているというよりは、まるで自分のことを話しているような、そんな感じであった。
「輝っ…」
「おおぉ～っ！其方っ！」
『……っ？』
桜時が輝矢に問いかけようとしたその時、とても嬉しそうな笑顔を見せたヤモリが、輝矢の元へと歩み寄ってきた。
「其方の血は実に美味であったのであーるっ！」
「それはどうもっ…」
高々と言い放つヤモリに、あまり嬉しくなさそうに礼を言う輝矢。
「血液断ちする前に、ちと、もう一飲みっ…！」
「んっ」
「ふぇっ？」
輝矢の血をもう一飲みしようとしたヤモリに、桜時が勢いよく突き出したのは、銀のロザリオ。目の前に突き出されたロザリオを見て、ヤモリが少し固まる。
「ふぎゃあああああああああっ！！！」
ヤモリが激しく悲鳴をあげ、その場に倒れ込んだ。

「ったくっ…」
「あぁ～あっ…」
「……っ」
呆れた表情でロザリオを懐にしまっていた桜時が、同じように呆れた表情でヤモリを見下している輝矢の、その首筋についたヤモリの牙の痕に目を向ける。

「由雉ぃ～っ」
輝矢に背を向け、部屋の端に立っている由雉の元へと歩いて行く桜時。
「癒羽くれっ、癒羽っ」
「へっ？」
桜時の言葉に、由雉が目を丸くする。
「何っ？どっか怪我でもしたのぉ～？」
黄色の羽根を差し出しながら、由雉が桜時へと問いかける。
「俺じゃねぇーよっ。輝矢の噛まれ痕っ」
「噛まれ痕っ？」
さらに目を丸くし、聞き返す由雉。
「あんなの、別に癒羽で治すほどの傷じゃっ…」
「アイツの噛み痕が残ってんのなんか、面白くねぇーだろっ」
「へっ…？」
桜時のその言葉に、由雉が固まる。
「おぉ～いっ！輝矢ぁ～っ！これ、刺しとけぇ～っ」

「……。」
由雉から癒羽を受け取り、由雉に背を向けて、輝矢の元へと歩いて行く桜時を見つめながら、由雉がしばらくの間、制止する。
「ねっねぇ、門貴っ…」
少し動揺したような口調で、横にいる門貴の名を呼ぶ由雉。
「今の発言ってさぁ…」

「まぁちょっとした問題発言やなぁ」
「だよねぇ…」
門貴の言葉に、由雉がしみじみと頷く。
「うぅ～んっ…これはどうしたもんかぁ～っ…」
「放っとき、放っときぃ～っ」
「へぇっ？」
腕を組んで考え込んでいた由雉が、門貴の適当な言葉に、少し顔をしかめる。
「けどさぁっ」
「放っておいたって、咲く時は勝手に咲くわっ」
門貴は、輝矢と桜時の姿を眺めながら、穏やかな笑顔を見せていた。

「ほれっ、癒羽っ」
「ああ、ありがとうございます。ハっ…」
「ハチ様ぁぁ～っ…！俺に癒羽をぉっ…！」
笑顔を見せる輝矢の言葉を遮り、桜時に必死に手を伸ばす、輝矢に踏まれて半瀕死状態の銀ペー。
「そっそうだな…お前にやった方がいいなっ…」
桜時が思わず、輝矢に渡そうとした手を反転させ、癒羽を銀ペーに渡す。
「ありがとうございますっ！！ハチ様っ！」
「せっかくハチが私にくれようとしていたのに…」
「ううっ…！」
癒羽を受け取り、喜んでいた銀ペーが、背後から聞こえてくる、怨みのこもった声に、思わず顔を引きつる。
「……っ」
引きつった表情で恐る恐る振り返る銀ペー。
「許せませんねっ…」

「ひいいいえええええええええええっっっ！！！」
「だあああああああああっっ！！やめろぉぉぉぉぉっっっ！！！！」
『アっ…アニキいいいいいいいいいいい～～～っっ！！！』
その後、銀ペーは、癒羽でも治りきらないほどの重傷を負ったとさ。

花はまだ、咲きそうもないのであった。

第４２章　カチカチ山の逆襲　★１

あの日の寒さは、今も、思いだすだけで、肩が震える。
「怖い…怖いよっ…お兄ちゃんっ…」
あの日の恐怖は、今も、思いだすだけで、心が軋む。
「大丈夫っ…大丈夫だっ…兄ちゃんが守ってやるからっ…」
「お兄ちゃんっ…」
身を寄せ合って、色々なものを必死に抑え込んだ。そうしなければ、おかしくなってしまいそうだったから。
「どうしたのっ…？」
『……っ？』
少し上から聞こえてきた、その穏やかで優しい声は、まるで天から聞こえてきたようだった。
「僕の家に…来るかい…？」
『……っ』
差し出された手は、まるで神様から差し出されたようだった。

あの日の温もりは、今も、思いだすだけで、涙が出る…。

龍国。エセお菓子の家こと『桃原家』。午前四時。

――――ピピピピっ…！ピピピピっ…！ピピピピっ…！――――

「んっ…んん～っ…」
鳴り響く、甲高い目覚ましの音に、ベッドの奥に深く顔を埋めていたその少女は、ゆっくりと目を開いた。透き通った緑色の瞳は、まだ少し眠そうに光る。
「んん～っ…」
少女が手を伸ばし、まだ鳴り響く目覚まし時計を止めた。伸ばした手をそのままに、もう一方の手も大きく伸ばし、ベッドに寝転がったまま、思いきり伸びをする。
「よしっ！」
伸びが終わると、少女は勢いよくベッドから起き上がった。
「よぉ～っ！！っとっ！」
素早く髪を梳かし、服を着替える。ブラウスのボタンをしっかりととめ、お腹の辺りに大きなリボンのついた、フリフリの真っ赤なスカートを穿く。鏡でその姿をチェックし、少女は自分の部屋を出た。
「お兄様ぁ～っ！」
少女は部屋を出ると、すぐ向かいにある部屋の扉を数回、軽く叩いた。
「朝ですわよぉ～っ！」
「んん～っ…」
ゆっくりと部屋の扉が開くと、部屋の中から、少女と色違いのスカートを穿いた、金色の髪の青年が、眠そうに目をこすりながら出てきた。青年は一目見ると、女性と見間違えそうなほどに整った顔立ちをしていたが、化粧っ気のないその口元には、薄らと髭が生えている。
「ほらぁ～っ！髭を剃って来て下さいぃ～っ！そのままのお姿では、門貴様に嫌われてしまいますわよぉ？」
「フハっ！門貴様っ…！！」
少女の言葉に、青年が急に目覚めたかのように、目を見開き、背筋を伸ばす。

「そうだったわぁ～っ！！今日もキレイな私を門貴様にお見せしなくちゃ～っ！！」
青年がそう叫びながら、洗面台のある方へと走っていく。
「はぁっ…」
そんな青年・ヘンゼルを眺めながら、少女は、グレーテルは、深々と溜息をついた。

桃原家のメイドの、朝は早い。
「グレーテル～っ！」
起床は朝の四時。輝矢たちが起きる時間より、四時間も前である。
「私、庭のお掃除してくるから、朝食の用意、お願いねぇ～っ」
「はぁ～いっ！お兄様っ！」
ホウキ片手に庭先へと出て行く、すっかり髭も剃ったヘンゼルの言葉に大きく頷き、こちらも顔を洗ってキレイサッパリのグレーテルが、キッチンへと入る。家の掃除、朝食の準備と、やることは山ほどあるのだ。
「昨日はお砂糖チャーハンだったからぁ、今日はシュガーライスにしようかしらぁ～」
少し首を捻りながら、朝食のメニューを考えるグレーテル。
「よぉ～しっ、決定っ！」
シュガーライスに決まったのか、グレーテルが早速、準備を始める。早朝から響き渡る、包丁の音、鍋の音。

「ふわぁ～ああっ…」
「あっ！タロー様っ！」

時計が五時を差した頃、大きな欠伸をしながら、この家の家主・桃原太狼がキッチンへと入って来た。
「おはようございますっ！」
「んん～っ」
太狼がまだ少し眠ような目を擦り、ゆっくりとグレーテルの方を見る。
「おはよっ、グレーテルっ」
「……っ」
そう言って爽やかな笑顔を見せる太狼に、グレーテルもどこか嬉しそうに微笑んだ。
「甘さダルダルココア入れてくれるぅ～？」
「はいっ！喜んでっ！」
この家の家主で、ヘンゼル・グレーテルの主人でもある太狼は、無駄に朝が早い。毎日五時には起きてくるので、グレーテルたちはさらに早く起きねばならないのであった。朝の五時から、太狼に甘さダルダルココアを出すことが、グレーテルの毎朝、初めに行う仕事なのであった。

「んん～っ！甘ぁ～いっ！」
ダイニングに座り、ココアを一口飲んだ太狼が、何とも満足げな笑顔を浮かべる。
「やっぱりグレーテルの入れてくれる甘さダルダルココアが一番だねぇ～っ」
「ありがとうございますっ！」
太狼に褒められ、グレーテルも満足げに笑う。
「ああっ！！タロー様っ！！おはようございますぅ～っ！！」
「んっ？」
聞こえてくる大きな声に、太狼がココアを飲みながら振り返る。
太狼が振り返ると、庭の掃除を終えたのか、ヘンゼルがキッチンへ

と入って来た。
「ああ、おはよっ、ヘンゼルっ」
太狼がグレーテルの時と同じように、ヘンゼルに爽やか笑顔を向ける。
「くぅぅぅぅぅ～～～っ…！」
『……っ？』
急に俯き、何やら噛み締めるような声を漏らすヘンゼルに、太狼とグレーテルが首を傾げる。
「ああぁ～っ！今日も何てカッコイイんですのぉ～～っ！！ご主人様ぁぁぁ～～っっ！！」
顔を上げ、その顔を少し手で隠しながら、勢いよくそう叫ぶヘンゼル。手で顔を隠しているのは、太狼を直視することが出来ないからであろうか。
「あまりのカッコ良さに私、動悸・息切れ・気つけですわぁぁ～～っ！！」
「ごめんごめぇ～んっ、自分ではあんまりカッコ良くしすぎないように、気を付けてるんだけどねぇ～っ」
「はぁっ…」
男に目が眩んでいる兄と、軽い口調で適当な答えを返している主人の姿に、グレーテルが少し肩を落とす。

こんな感じで、桃原家の朝は、始まっていくのであった。

桃原家リビング。午前十時。
「へぇ～っ！吸血鬼ですかぁ～っ！」
「ええっ」

少し関心した様子で声を出すグレーテルに、穏やかな表情で頷いたのは輝矢であった。起床し、朝食を済ませた輝矢は、雀で起こったヤモリの事件を、グレーテルに話していたのであった。朝食の片付けを終え、一休みしているグレーテルは、とても興味深そうに輝矢の話に聞き入る。

「それでっ…輝矢様っ、噛まれた首はもう大丈夫なのですかっ？」

「ええ、この通りっ」

輝矢が傷一つない首筋を、心配したような表情を見せているグレーテルへと見せる。

「キジに癒羽を貰いましたので」

「良かったぁ～っ！」

グレーテルが安心したように微笑む。

「輝矢様に吸血鬼の噛み痕なんて残ってたら、タロー様、きっと皆さまを半殺しになさっちゃいますものぉ～！」

「まぁだから戻る前に急いで治したんだけどね…」

何食わぬ顔で言い放つグレーテルに対し、輝矢の横に座るユキジがこっそりと呟いた。

「本当はもう少し残しておいて、皆に吸血鬼に噛まれちゃったぁ～って自慢したかったんですがねぇ」

「何自慢っ？それっ」

少し不満げな顔を見せる輝矢に、呆れた表情を向けるユキジ。

「グレーテルも見たかったでしょう？」

「わっ私はそんなっ…！」

輝矢の問いに、グレーテルが勢いよく首を横に振る。

「聞いただけでも恐ろしいのに、実際に傷なんて見たら、夜、眠れなくなってしまいますわぁっ！」

「ほぉ～んとっ！恐ろしくって夜も眠れないっ！」

怖がっているグレーテルに、乗っかるように言葉を発しながらやって来るヘンゼル。

「だから門貴様っ！怯える私をきつく抱き締めてぇぇぇ～～～っ

っっ！！！」
「絶対いやぁぁぁぁぁぁ～～～～っっっ！！！」
両手を広げて走り込んでくるヘンゼルから、輝矢の横に座っていたモンキが、ソファーを飛び降り、必死に逃げる。
『はぁっ…』
モンキとヘンゼルのいつもの光景に、輝矢、ユキジ、グレーテルは深々と溜息をついた。

「あぁぁ～っ！疲れたっ！」
「ハチっ」
大窓を通って、庭からリビングへと入って来る桜時の方を振り向き、輝矢が嬉しそうな笑顔を見せる。
「おっ前、今日、何かいつも以上に容赦なくなかったかぁ～？」
「んん～っ？」
桜時が振り返ると、庭から続いて太狼が入って来る。桜時と太狼は、今日も朝から、いつもの手合わせをしていたのである。
「うん～っ、なぁ～んとなく、容赦しちゃダメなようようなこと、輝矢ちゃんにされた気がしてぇ～っ」
「ギクっ！」
笑顔で言い放つ太狼の言葉に、思わず顔を引きつる桜時。
「まぁまさかぁとは思うけどぉ…ねぇっ…？」
「……。」
冷たい瞳で見つめられ、桜時は無言のままただ固まる。
「グレーテルぅ～っ、甘さダルダルココアぁ～っ」
「はぁ～いっ！ご主人様っ！」
太狼が桜時から視線を移し、輝矢の横へと座りながら、グレーテルにココアを頼む。大きく返事をして、リビングを出て行くグレーテル。
「あぁぁ～輝矢ちゃんっ、今日、さとうきびの大安売りやってるよぉ～晩御飯、さとうきび丼にしてもらおうかぁ～？」

「さとうきび麺の方が好きです」
「じゃあさとうきび麺ねぇ～っ！グレーテルぅ～っ！」
「……。」
スーパーのチラシ片手に、輝矢と少しおかしくはあるが、他愛もない話をしている太狼を見つめ、唖然とした表情を見せる桜時。
「なっ…なんでバレたんだろっ…」
「噛み痕も治してきたのにね…」
「野生の勘ちゃう…？」
太狼を観察しながら、少し引きつった表情で呟き合う三匹。
「門貴様ぁぁぁぁぁ～～～っっ！！」
「ぎゃあああああああああああああっっっ！！！」
「タロー様っ！甘さダルダルココア入りましたぁ～っ！」
「うわぁぁぁぁぁぁ～～～いっ！」
桃原家は、今日も賑やかである。

「フッフッフっ…」
そんな賑やかな桃原家を見つめながら、不気味な笑い声を漏らす者がいる。庭の茂みに身を潜め、鋭い瞳で桃原家内を観察するその者。
「朝から何とも陽気なものだポンっ…」
不自然につく、少し可愛らしい語尾。
「憎っくき…憎っくき桃原太狼っ…」
憎しみの灯る、その黒色のつぶらな瞳は、賑やかな桃原家の中の、太狼の姿のみを映す。
「あの時の恨みっ…」
茶色の毛並み、少し膨らんだ腹、まん丸い尾っぽ。頭の上には、緑色の葉っぱが一枚、乗っている。そう、その者は、一匹のタヌキであった。

「今こそ晴らしてやるだポンっ…」
そう言って不適に笑うタヌキ。このタヌキ、実はかの有名な“ニセ桃タロー”事件で、太狼の名を語り、村人たちを騙した上、本物の太狼を偽物にしようとした、あの化けタヌキであった。偽証罪で捕えられたのだが、どうにか釈放され、あの時の恨みを晴らすべく、太狼の元へとやって来たのである。
「フッフッフっ…」
タヌキがどこからともなく薪を出し、その薪にマッチで火を灯す。
「家ごとっ…燃え去ってしまうだポンっ…！」
タヌキが、火の点いた薪を、大きく開いた窓から、桃原家のリビングへと勢いよく投げ込む。きれいな放物線を描いて、薪がリビングへと落ちていく。
「フッフッフっ…」
タヌキが、怪しげに笑う。

「んん～っ！甘ぁ～いっ！グレーテルぅ～っ！もう一杯いぃ～っ！」

――――パッコォォォォォォォ～～～ンっ！――――

「へっ…？」
ココアをもう一杯求める太狼の持つ、空になったコップに、落ちていこうとしていた薪が直撃し、火に燃えたまま、キレイにタヌキの元へと跳ね返ってくる。
「ううっ…！」
跳ね返って来た薪がタヌキの頭に当たり、その火が、タヌキの体へと燃え移る。
「ぬわぁぁぁぁぁぁぁっっ……！」

己の茶色い体毛に燃え移った火に、タヌキが顔色の青くする。

――――カチカチカチカチっ…！――――

「んん～っ？」

おかわりしたココアを待つ太狼が、庭の方から聞こえてくる不審な音に振り返る。

「なぁ～んかカチカチって音しなぁ～いっ？」

「カチカチ山のカチカチ鳥ではありませんか？」

「そっかぁ～」

適当に答えた輝矢の言葉に、太狼がすぐさま納得する。

「なぁ～んだっ、カチカチ鳥かぁ～っ」

「甘さダルダルココア入りましたぁ～っ！ご主人様っ！」

「うわぁ～いっ！」

グレーテルに新しくココアを淹れてもらい、太狼は一気にココアへと集中し、カチカチという音など、どうでもよくなる。

「何かぁ…肉の焦げるような臭い、しねぇっ？」

「気のせいじゃなぁ～いっ？」

「んん～っ…」

太狼にすぐさま“気のせい”と言われ、首を傾げながら鼻を動かすハチ。

「ぬわあああああああああっ！！」

その頃、火ダルマのタヌキが、桃原家から海へと、全力疾走で駆

け抜けていっていた。

第４２章　カチカチ山の逆襲　★２

桃原家・ダイニング。正午。
「今日のランチは、グレーテル特製っ！シュガーシュガーバーガーでぇ～すっ！」
「うわぁ～いっ！」
『うわぁぁ～…いっ…』
テーブルに出てきた、ハンバーグ並みの厚みの砂糖を挟んだだけのバーガーに、太狼が喜び、ハチたち三匹は引きつった表情と暗い声を漏らす。喜ぶ太狼と同じ言葉を口にするが、喜んでいないことだけは確実にわかった。
「うぅ～んっ！おいしいぃ～っ！」
三匹が顔を引きつる中、何の迷いもなくシュガーシュガーバーガーを口にし、満足げに微笑む太狼。
「あれぇ～？何してるのぉ～？君たちも食べなよぉ～っ」
『……。』
太狼に促され、三匹がさらに表情を引きつる。
「ダメだっ…こんなの食べたら俺、絶対、明日には死ぬっ…」
「明日までもつ自信もないよっ…」
「ううぅ～っ…見とうだけで血糖値上がりそうぅ～っ」
シュガーシュガーバーガーを前に、死でも迫ったかのような表情を見せる三匹。
「これくらいのもの食べれないと、この家では生きていけませんよ」
迷っている三匹に、輝矢がきっぱりと言い放つ。
「グレーテル、お茶漬け」
『おいっ！！』
シュガーシュガーバーガーを避け、一人無難にお茶漬けを貰おうとしている輝矢に、三匹は勢いよく突っ込みを入れた。

「おっ…おのれぇっ…」
そんな賑やかな桃原家のダイニングを、そのダイニングの窓の外から、こっそりと見つめる一匹のタヌキ。先程の火で燃えてしまったのか、体の所々が禿げており、肌が丸見えである。何とも不格好なその姿で、シュガーシュガーバーガーを頬張る太狼を、怨みがましく見つめるタヌキ。
「桃原太狼めっ…よくもポンに火を点けてくれたポンねっ…」
太狼が火を点けたわけではないのだが、それでもタヌキの憎しみはさらに募る。
「もう絶対、許さないだポンっ…」

「んん〜っ！おいしかったぁ〜っ！」

「むっ…！」
あっという間にシュガーシュガーバーガーを食べ終えた太狼が、空になった皿の横に置いてある、水の入ったグラスへと手を伸ばす。その様子を見て、タヌキが大きく目を見開いた。
「フッフッフっ」
タヌキがまたもや不適に笑う。
「飲むがいいっ、飲むがいいっ…その水の中にはたっぷりと芥子がっ…」

「あぁぁ〜っ！グレーテルぅ〜っ！」

――――ポォォォォォォォォォ〜〜〜ンっ！――――

「へっ…？」
キッチンの方を振り向いた太狼が、持ちあげたグラスを勢いよく放り投げる。
「ぬあっ…！」
放り投げられたグラスは、タヌキが覗いていた窓から飛び出し、覗いていたタヌキの口へと見事に突き刺さる。
――――ゴックンっ！――――
グラスの中の水を、一口で飲み干すタヌキ。
「ぬぐぅぅぅっ…！！」
水を飲んだタヌキの顔色が、一気に変わっていく。
「ぎゃあああああああああああああっっっ！！！」

「んっ？」
どこからか聞こえてくる悲鳴に、ハチが少し顔を上げる。
「僕、シュガーシュガーバーガーの時は、甘さダルダルバナナシェイクがいいんだぁ～っ」
「かしこまりましたっ！すぐにお淹れしますっ！」
そんなハチの向かいに座る、太狼の言葉に大きく頷き、グレーテルが素早く甘さダルダルバナナシェイクを作っていく。
「ありがとぉ～っ」
「よくそれだけ糖分摂取出来るよねっ…」
グレーテルに礼を言っている太狼の横で、こっそりと呟くユキジ。
「今、変な悲鳴みたいなの聞こえなかったかぁ～？」
「さぁ～っ？気のせいじゃないっ？」

「んん〜っ？」
またもや太狼に“気のせい”と言われ、ハチは深く首を傾げた。

桃原家・玄関。午後二時。
『ではタロー様っ、輝矢様っ、行って参りますっ！』
「ええ」
「サトウキビのゲット頼んだよぉ〜？ヘンゼルっ、グレーテルっ」
『はいっ！』
輝矢と太狼は、サトウキビ、というか夕飯の買い出しに中心街へと出掛けて行くヘンゼルとグレーテルを見送った。二人を送りだし、太狼が玄関の扉を閉める。
「さぁ〜て、おやつの時間まで昼寝しながらココアでも飲んでるかなぁ〜」
「どうやって飲むんですか…」
リビングへと戻っていきながら、輝矢が太狼に少し呆れた表情を向ける。
「輝矢ん、オカマ行ったぁ〜？」
「ええ」
「はぁぁぁぁ〜〜っ！」
リビングへと戻った輝矢に、ソファーの上から問いかけるモンキ。
輝矢の答えを聞いた途端、モンキが安心したように一息つき、ソファーへと寝転がる。
「これで落ち着いて昼寝が出来るわぁ〜っ！」
「私の腕の中でお昼寝しますか？ハチっ」
「誰がするかっ！」

モンキの横に座るハチが、輝矢の誘いを、顔を真っ赤にしながら断る。
「じゃあ僕の腕によって永眠するぅ～っ？」
「それもしねぇよっ！！」
今度は顔を青くしながら、太狼の誘いを断るハチであった。

龍国・中心街。路地裏。
「うっ…ううぅっ…」
瓶に入った水を一気に飲み干し、口の中を気にした様子で舌を動かしている一匹のタヌキ。体の所々は禿げて肌が剥き出しになっており、その舌は真っ赤に腫れ上がっていた。
「かっ…辛いポンっ…」
芥子の入った水を一気飲みしてしまったタヌキは、何とか中心街へとやって来て、すぐさま水を購入し、それを飲みながら路地裏で体を休めていたのであった。
「おのれっ…桃原太狼っ…ポンによくも芥子入りお水を飲ませたポンねっ…」
別に太狼が飲ませたわけではないのだが、タヌキの憎しみはさらに募る。
「もう絶対、許さないポンっ！」
タヌキが瞳を鋭くする。
「しかしポンっ…あやつは腐っても御伽界の英雄っ…どうやって復讐すればっ…」

「あぁぁ～っ！見て見てぇ～っ！お兄様っ！」

「んっ…？」
首を捻らせ、考え込んでいたタヌキが、中央通りの方から聞こえてくる、どこか聞き覚えのある明るい声に、振り向く。
「サトウキビっ！売っていますわっ！」
「ちょっと待ってよぉ～グレーテルぅ～っ」
「あれは確か…」
タヌキが振り向いた先の中央通りを横切っていく、メイドの格好をした、見目麗しい姉妹。
「桃原太狼のところのメイドっ…」
そう、それは見目麗しいが、実は兄妹のヘンゼルとグレーテルであった。
「……っ」
二人の姿を眺めながら、タヌキが少しの間、考え込む。
「フッフッフっ…」
何かを思いついた様子のタヌキは、またしても不適な笑みを浮かべた。
「ふぅ～っ！サトウキビ、大量購入ぅ～っ！」
サトウキビの束を抱えたグレーテルが、満足げに微笑み、空いている方の手で額にかいた汗を拭う。大安売りというだけあって、買い物は死闘であった。力強い主婦たちの手から、何とかサトウキビをかっさらって来たのである。
「さっ！お兄様、帰りまっ…！」
「ああぁ～っ！！バナナの安売りやってるわぁ～っ！」
グレーテルの言葉を遮り、大きく叫ぶヘンゼル。

「門貴様に買って帰ってポイント上げなくっちゃっ！ちょっとここで待っててっ！グレーテルっ！」
「あっ！お兄様っ！」
呼び止めるグレーテルの声に振り向きもせずに、ヘンゼルは一目散にバナナの大安売りをしている店へと駆け出していってしまった。
中央通りの片隅に、グレーテルだけが取り残される。
「もぉ～っ」
見えなくなっていく兄の背中を見つめながら、呆れたような声を出すグレーテル。
「オカマって時点で、ポイントなんて上がらないと思うけど…」
一途な兄に対し、妹はわりとシビアであった。
「帰ったらタロー様にココアを淹れて差し上げないとっ…」
サトウキビを見つめながら、薄い笑みを浮かべるグレーテル。

「……。」
その背後に、ゆっくりと迫っていく黒い影。

「タロー様、糖分不足で倒れてないかしらっ…」

「……っ」

「うっ…！」
背後から迫って来た影が、グレーテルの口元を、白い布で覆った。
「うっ…」
白い布に薬品でも染み込んでいたのか、異臭を感じた後、グレーテルの意識が徐々に遠ざかっていく。
「たっ…ろぉ…さまっ…」
太狼の名を呟き、グレーテルは深く瞳を閉じた。

「お待たせぇ～っ！グレーテルっ！」
バナナを山盛り抱えたヘンゼルが、元いた場所へと戻ってくる。
「これで門貴様のハートはいただきよぉ～っ！って、あらっ？」
得意げな笑顔で戻って来たヘンゼルであったが、そこに待っているはずのグレーテルの姿は見当たらない。
「グレーテル…？」
辺りを見回し、妹の姿を探すヘンゼル。
「んっ…？」
周りを探していたヘンゼルが、道端に丁寧に置かれている手紙のようなものに気づく。両手いっぱいに抱えたバナナを地面へと下ろし、その紙を手に取るヘンゼル。
「……っ！これはっ…！」
その文面を読んだ瞬間、ヘンゼルの表情が変わった。

桃原家・リビング。午後三時。
「もうおやつの時間じゃなぁ～いっ」
ソファーの上で寛いでいた太狼が、リビングの時計を見て、声をあげる。
「遅いなぁ～ヘンゼルとグレーテルぅ～っ」

困ったように声を出しながら、太狼がもたれかけていた背を起き上がらせる。
「このままじゃ糖分不足で枯れちゃうよぉ～」
「そのまんま枯れ果ててしまえ…」
「何か言ったぁ～っ？」
「いえっ…」
横でこっそりと呟いたハチであったが、太狼に冷たい視線を送られ、すぐさま首を横に振った。
「何かあったのでしょうかねぇ」
「そんなぁ～っ、僕のサトウキビがぁ～っ」
「心配はそこなわけねっ…」
ヘンゼルとグレーテルの身よりもサトウキビの心配をしている太狼に、ユキジが呆れた表情を見せる。
「ハっ…！」
『……っ？』
ソファーで昼寝をしていたモンキが、急に勢いよく起き上がったので、皆が目を丸くして振り向いた。
「どうしたのです？サル」
「来るっ…！」
「えっ…」
「タロー様ぁぁぁぁぁぁっっ！！」
「来たぁぁぁぁぁっっ！！！」
太狼の名を呼びながら猛然とリビングへと駆け込んでくるヘンゼルに、モンキが怯えるように輝矢の背後へと隠れる。
「ヘンゼルの気配がわかるとは凄いですねぇ」
「悪寒がしたんじゃねぇーのっ？」
誰も察知することの出来なかったヘンゼルの気配を、１人察知したモンキに感心する輝矢と、最もな答えを呟くハチ。
「ああぁ～おかえりぃ～ヘンゼルぅ～」
砂糖不足で枯れそうだった太狼が一気に笑顔となり、帰って来た

ヘンゼルを出迎える。
「サトウキビはどうだっ…」
「くぅぅぅぅぅぅぅぅ〜〜〜っ！」
「んっ？」
買い物の結果を聞こうとした太狼であったが、太狼をまっすぐに見つめたまま、噛み締めるように声を漏らしているヘンゼルに、少し首を傾げる。
「一時間離れていただけなのに、なんてカッコいいんですのぉぉぉ〜〜っ！！ご主人様ぁぁぁっ！！」
『だあああああああああああっ！！』
ヘンゼルの叫びに、思わずズッコケるハチたち3匹。
「あまりのカッコ良さに私、動悸・息切れ・気つけですわぁぁぁぁぁ〜〜〜っっ！！」
「ごめんごめぇ〜んっ、あんまりカッコ良くならないように努力はしたんだけどねぇ〜っ」
『……。』
太狼とヘンゼルの会話を聞き、三匹が引きつった表情を見せたまま固まる。
「はぁっ…」
「よくやるよなぁ〜毎日毎日っ」
「あのままタローに惚れといてくれれば良かったのに…」
三匹が深々と肩を落とす。
「でぇ？サトウキビはどっ…」
「グレーテルはどうしたんです？」
「えっ…？」
太狼の言葉を遮り、ヘンゼルへと問いかける輝矢。輝矢の問いかけに、ヘンゼルが少し口を開ける。
「あぁぁぁぁぁ〜〜〜っっ！！そうでしたわぁぁぁぁぁ〜〜〜っっ！！」
『……っ？』

何やら思い出した様子で叫ぶヘンゼルに、輝矢や太狼たちが皆、首を傾げる。
「タロー様っ！これをっ…！！」
「えっ？僕っ？」
ヘンゼルの差し出した手紙のようなものを、太狼が戸惑いながら受け取る。
「これはっ…」
「……っ？」
手紙を読み、表情を曇らせる太狼に、眉をひそめる輝矢。輝矢が位置を移動し、太狼の持っている手紙の内容を、横から覗き込む。
“憎っくき桃タロー。お前のメイドは預かった。返して欲しくば、一人で裏山の山頂まで来い”…」
『えっ…！？』
輝矢が手紙の文面を読み上げる。その読み上げられた内容に、眉をひそめて立ち上がる三匹。
「そっ…それってっ…！」
「グレーテルちゃんが誘拐っ！？」
「そうなんですのぉぉぉ～～～っっ！！！」
ヘンゼルが泣きそうな表情で声をあげる。
「私が目を放したばっかりにぃ～～っっ！！どうしましょぉぉぉ～～～っっ！！門貴様ぁぁぁ～～～っ！！」
「ぐえええぇぇっ」
妹をさらわれ、不安がっているヘンゼルに抱きつかれ、勢いよく顔を歪めるモンキ。しかしこの危機迫った状況では、蔑にも出来ない。
「かっ輝矢んっ…！とにかく、グレーテルちゃんの救出にっ…！」
何とかヘンゼルから逃れるため、グレーテル救出を訴えるモンキ。
「そうですね…」
表情を引き締めた輝矢が、ソファーから立ち上がる。
「ハチ、サル、キジ、急いで裏山の山頂に向かっ…」

「ちょぉぉぉぉ～～っと待ってぇ～輝矢ちゃぁぁぁ～んっ」
「……っ？」
三匹を引き連れ、山の山頂へと向かおうとした輝矢を呼び止めたのは、太狼であった。
「タローっ？」
輝矢が戸惑うように、太狼を見る。
「まだおやつ食べてないでしょぉ～っ？」
太狼が輝矢に爽やかな笑みを向ける。
「タローっ…」
「あのなぁっ！今はおやつがどうのこうの言ってる場合じゃっ…！」
「それにっ…」
『……っ？』
太狼に呆れた瞳を向けていた輝矢と、反論しようとしていたハチが、付け加えられる太狼の言葉に、少し目を丸くした。
「ご指名はっ…僕だよっ？」
そう言って、太狼は不適に笑った。

第４２章　カチカチ山の逆襲　★３

――――気がついたら、“親”はいなかった。

鬼人はいなくなったけど、まだまだ落ち着きのない大人たちの世界で、まだ幼い私と兄は、細々と生きていた。家はない。親もいない。

私に見えたのは、兄だけ。兄に残ったのは、私だけ。

兄は自分だってまだ子供なのに必死に働いて、得られたささやかなお金で、私のお腹を満たそうとしてくれた。たくさん辛い想いをしているだろうに。

「おいしいかい？グレーテル」

いつも、優しく微笑みかけてくれていた。

「ねぇ、お兄ちゃん」

街で行きちがう、幸せそうな親子を見ながら、私は問いかける。

「んっ？」

「パパとママは、どこにいっちゃったの？」

「……っ」

兄は、あどけないその顔を、たっぷりとひそめた。

「パパとママは…鬼人に殺されたんだよっ…」

「そうっ…」

残酷な答え。

でも、私は、その答えがウソであることを知っている。兄はそう言ったけど、でも知っているの。

パパとママは、本当は、私たちを捨てたんだって。

お金に困って、深い深い森の中に、私と兄を置き去りにしたんだって。

「お星様になって、グレーテルたちのこと、見ててくれてるかな？」

「そうだねっ。きっとそうさっ」

知っているけど、言わない。

それがきっと、兄の為。

捨てられても直、パパとママのことを庇おうとする、優しい優しい兄の為。

「怖い…怖いよっ…お兄ちゃんっ…」

それは、ある嵐の晩のこと。

「大丈夫っ…大丈夫だっ…兄ちゃんが守ってやるからっ…」

古い空き小屋で、兄と二人、必死に身を寄せ合っていた。兄は、震える私の肩をしっかりと抱きしめてくれたけど、その手は、私の肩よりももっと震えていた。

「お兄ちゃんっ…」

兄もきっと怖いんだ。淋しいんだ。哀しいんだ。辛いんだ。

私を守るために必死に強くあろうとしてくれているけど、きっとそう。

ごめんね、お兄ちゃん。
何もしてあげられなくて、ごめんね。

――――バリィィィィィィィーーーンっ！――――

『ううっ…！』
近くに雷が落ちる。音に光に、すべてが震える。
あの雷に撃たれて消えてしまった方が、いっそ楽かと考えた。

「どうしたのっ…？」
『……っ？』

激しい雷雨の中から聞こえてきた、たった一つの穏やかな声。

「僕の家に…来るかい…？」
『……っ』

それが私と兄の、ご主人様との出会い。

雷に撃たれるよりも衝撃的だったことは、きっと言うまでもない
……――――

「んっ…んんっ…」
グレーテルが、閉じていたその緑色の瞳を、ゆっくりと開いた。
「私っ…。……っ？炎っ…？」
自分がどうして瞳を閉じていたのかがわからずにいたグレーテルが、目の前で燃え盛る炎を見つめ、戸惑うように首を傾げる。グレーテルの前にあるのは、焚き木の炎。風に巻き起こされており、勢いはかなり強い。
「……。」
少し俯いたグレーテルが、その表情を曇らせる。グレーテルは焚き火のすぐ前に立つ木の幹に、縄で括りつけられていた。そう、グレーテルは、町の中で何者かに意識を奪われたのだ。今のこの状況からすると、捕まっているのだろう。
「気がついたかポンっ？」
「……っ」
正面から聞こえてくる声に、グレーテルが顔を上げた。
「貴方は…」
焚き火の向こうに見える影に、グレーテルが眉をひそめる。
「ハゲダヌキ…」
「うっるっさいポンねっ！！誰のせいでこうなったと思ってるポンっ！！」
焚き火の向こうに見えるのは、体の所々が禿げ、肌が剥き出しとなっているタヌキであった。的確に表現したグレーテルに、そのタヌキが怒鳴り返す。
「おのれぇっ…！憎っくき桃原太狼っ…！」
「タロー様っ…？」
タヌキの口から出る主人の名に、グレーテルが表情を曇らせる。
「貴方…タロー様に何かしようとしているのですか？」
「その通りだポンっ！」
グレーテルの問いかけに、タヌキが大きく頷く。
「ポンがこんな目に遭ったのも、すべてあの男のせいだポンっ！今

日こそ恨みを晴らしてやるポンっ！」
憎しみのこもった瞳で、タヌキはさらに言葉を続ける。
「今、お前を使ってアイツを呼び出したポンっ！痛い目見せてやるポンっ！」
「そうでございますか」
「だあああああああああああっだっポンっ！」
特に興味なさそうに素気なく答えるグレーテルに、タヌキが思わず倒れ込んだ。
「おいだポンっ！」
「何でしょう？」
起き上がったタヌキに、グレーテルは丸くした瞳を向ける。
「アイツはお前の主人だろうポンっ！？」
「はい」
「もっとこうっ！“ご主人様には手を出さないでっ！私はどうなっても構わないからっ！”とか言えないのかポンっ！？」
「言えませんわね」
「だあああああああああああっだっポンっ！」
あっさりと答えるグレーテルに、タヌキが再び倒れ込む。
「お前ポンねぇっ…！」
「貴方がどう足掻こうと、あの方に傷一つ、つけられるはずがありませんものっ」
「……っ」
グレーテルがそう言って誇らしげに笑うと、起き上がったばかりのタヌキの表情が一気に曇った。
「なっ…！何だとポンっ…！？」
「貴方とて…ご存じでしょう…？」
顔を歪めるタヌキに、グレーテルは試すように微笑みかける。
「あの方は…“桃タロー”ですわよっ…？」
「クっ…！」
かつての英雄の名に少し怯んだのか、立ち上がったタヌキが、足

を一歩後退させる。
「そこまで言うんなら見せてやるポンっ！アイツがポンの前で不様に膝まづくのをポンねぇっ！！」
どこか躍起になったような様子で言い放つタヌキ。
「ごめんくださぁ～いっ」
『……っ』
下方から聞こえてくる、少し間の抜けた声に、グレーテルとタヌキが同時に振り返る。
「来たみたいだポンねぇっ」
「……。」
怪しげに微笑むタヌキの後ろで、少し表情を曇らせるグレーテル。
「お留守ですかぁ～っ？じゃあ帰りまぁ～すっ」
「待てだポンっっ！！」
山頂へと現れた暢気な空気の眼鏡男は、勝手に話を自己解決し、あっさりと背を向けて、また山を下って行こうとした。それをタヌキが叫んで、慌てて止める。
「あっ？いたんですかぁ～っ」
「最初っから居たポンっ！お前の目は節穴より重症だポンっ！！」
惚けた口調を続ける男に、タヌキが眉を引きつる。
「タロー様っ」
「……っ？」
グレーテルの声に、太狼が顔を上げる。
「やぁ、グレーテルっ」
「タロー様っ…」
軽く右手を上げ、グレーテルに爽やかな笑みを向ける太狼。その笑顔に、グレーテルが目を細める。
「よしよしだポンっ…悲しげに助けを求めっ…」
「もう三時を過ぎていますが、糖分不足になられていませんかっ…

！？」

「だあああああああああっだっポンっ！」

グレーテルの言葉に、タヌキが三回目の倒れ込みをする。

「うん～何とかキャラメル食べて補給してるけど、もう砂糖足りなくて死にそうぅ～っ」

「まぁっ！それは大変っ！急いで摂取しませんとっ…！」

「うんっ、だからぁ～っ」

砂糖不足で弱っていた太狼が、再び顔を上げ、グレーテルに力強い笑みを向ける。

「とっとと帰っておやつ食べさせてよ、グレーテルっ」

「……っ」

太狼の言葉に、思わず笑みをこぼすグレーテル。

「ええっ、喜んでっ」

グレーテルが、花のように大きく微笑む。

「だあああああああああっ！！もうっ！何だポンっっ！！？」

タヌキの存在などすっかり消し去ったかのような流れで話を進め、微笑み合う太狼とグレーテルに、耐えきれなくなったタヌキが、思わず大きな声を出す。

「ポンを無視するんじゃないだポンっ！」

「無茶仰らないで下さい」

「どこが無茶なんだポンっ！？」

追い討ちをかけるような答えを放つグレーテルに、勢いよく突っ込みを入れるタヌキ。

「ああぁ～っ！とにかくっ！桃原太狼っ！」

「んん～っ？」

名を呼ばれ、太狼が爽やかな笑顔のままで首を傾げる。

「ポンのことっ…！もちろん覚えているポンねぇっ…！？」

「うん…」

タヌキの問いかけに、少しその表情を鋭くし、静かに頷く太狼。
「誰だっけ？」
「フッハッハっ！正直、そう言うと思ってたポンよぉっ！」
さっぱり覚えていない様子で首を傾げる太狼。太狼のその反応は予想通りだったと言いつつも、どこか傷ついている様子のタヌキ。
「お前と話しても無駄なことはわかってるポンっ！話はここまでっ…！」
「……っ？」
そう叫びながらしゃがみ込み、タヌキが焚き火で燃える焚き木の一本を手に取った。先に炎の灯る小枝を持ったタヌキが、木に括りつけられているグレーテルの横へと立つ。
「メイドを燃やされたくなかったらっ！今っ！この場でポンに膝まづくんだポンっ！！」
「……っ」
「……。」
タヌキのその脅しに、炎を向けられているグレーテルが眉をひそめ、太狼もその表情から、暢気な笑みを消した。
「膝まづく…？」
「ああっ！！そうだポンっ！！」
聞き返した太狼に、促すようにもう一度強く言い放つタヌキ。
「……。」
「どうしたポンっ…？」
動きを見せない太狼に、タヌキが不適な笑みを向ける。
「天下の“桃タロー”様はっ！メイドよりも、自分のプライドの方が大切なのかポンっ…！？」
タヌキが、兆発するように言い放つ。
「まさかっ」
「……っ」
太狼が薄く笑みをこぼし、その場に片膝をつこうとする。
「よしポンっ…！」

勝利を確信し、思わず拳を握り締めるタヌキ。
「でもねっ…」
「……っ？」
地面につこうとしていた太狼の膝が、そのすぐ手前でピタリと止まる。タヌキが眉をひそめる。
「何をしているポンっ！？とっととっ…！」
「ウチのメイドさんはぁ～っ…主人に膝つかせる程、無能じゃないんだよっ」
「何っ…？……っ！」
太狼の言葉にさらに眉をひそめたタヌキが、何かに気づいたような表情となり、勢いよくグレーテルの方を振り向く。
「“螺無根（ラムネ）”っ…」
「なっ…！！」

グレーテルがそう呟いた途端、グレーテルのスカートの中から鎖鎌が飛び出し、グレーテルを括りつけていた縄をいとも簡単に切り裂いた。

「ふぅっ」
「ううっ…！！」
自由になり、鎖鎌を構えたグレーテルを前に、タヌキがその表情を引きつる。
「我が主人に仇なす者は、私が許しませんっ…」
「クっ…！」
グレーテルに刺すような強い瞳で見られ、少し怯むタヌキ。
「ポンに近づいてみろポンっ！この炎でお前をっ…！」
「如意棒・第一の舞っ…“空”っ…！！」

――――パァァァァァァァーーーンっっ！！――――

「へっ…？」

鎖鎌を抱えたグレーテルに、焚き木の火を向けて応戦しようとしたタヌキであったが、焚き木に灯る火は、横から飛んできた風に、一瞬にして消し去られてしまった。ついでに焚き火の炎も、すべて消えてしまう。

「“この炎でお前を”何やってぇ～っ？」

「クっ…！」

タヌキが風の飛んできた方向を振り向くと、そこには如意棒を構えた門貴が、余裕の笑顔で立っていた。

「こっこうなったら逃げっ…！」

「どこへ…行かれるのです…？」

「へっ…？」

逃げようと方向転換したタヌキの前に立ちはだかる、メイド服の可憐な女性。

「ウチの妹にっ…」

可憐なメイド女性は、女性とは思えない低くドスのある声を出し、突き刺すような瞳をタヌキへと向けた。

「何、ナメたマネしてくれてんだぁっ！？ああっ！？」

「ひいいいいいぃぃっっ！！」

その女性・ヘンゼルが、軽々とタヌキを持ち上げると、タヌキは震え上がって悲鳴をあげる。

「覚悟は出来てんだろうなぁぁっ！！クソダヌキぃぃぃっっ！！！」

「ぎゃあああああああああああああっ！！！」

すっかり男モードのヘンゼルに、目も当てられないような目に遭わされていくタヌキ。

「うっわぁ～男前っ」
そんなヘンゼルの様子を眺めながら、門貴はどこか苦々しい笑みを浮かべた。

「ったくっ…！」
「ギャフンだポンっ！」
腫れ上がってもう顔もよくわからない状態となったタヌキが、ヘンゼルの手から放り出される。
「タロー様と門貴様に、ハシタナイお姿をさらしてしまったではありませんのぉっ！もうっ！」
「うっ…ううっ…お前が勝手にやったんだポンっ…」
怒ったように声をあげるヘンゼルに、倒れ込んだタヌキが弱々しく呟く。
「さぁ～てとっ…」
「……っ？」
倒れ込んだままのタヌキの前へと、静かにしゃがみ込む太狼。タヌキが少し戸惑うように、太狼を見上げる。
「僕、今、糖分足りてなくて、とぉ～っても機嫌が悪いんだよねぇ～っ」
太狼がタヌキに、爽やかな笑みを浮かべる。
「機嫌悪過ぎて容赦出来そうもないからぁ…」
開かれた瞳が、冷たく光る。
「今すぐ、ここから…消えてくれないっ？」
「……っ！！」
その冷たい笑顔に、タヌキの全身が凍りつく。
「了解しましたぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」
傷だらけの体を何の抵抗もなく立ち上がらせ、目にも留らぬ速さで、その場を駆け抜け、山を下っていってしまうタヌキ。

「ふぅっ」
太狼が一息つき、その場で立ち上がる。
「門貴様ぁぁぁっ！！さっきの私は、私ではありませんのぉっ！私は生まれながらの淑やか美女でぇっ…！」
「あぁぁ～っ！わかったわかったっ！」
先程の自分を必死に弁解しているヘンゼルと、それを鬱陶しそうに聞いている門貴。
「やれやれっ」
「タロー様っ」
「……っ？」
少し肩を落としていた太狼の元へ、グレーテルが駆け寄ってくる。
「グレーテル、怪我は？」
「ありませんっ！」
「そうっ」
笑顔で答えたグレーテルを見て、太狼も微笑む。
「それは何よりっ」
「……っ」
微笑んだ太狼を見て、グレーテルは何とも嬉しそうな笑顔を見せた。

第４２章　カチカチ山の逆襲　★４

「ぎゃあああああああああああああっっっ！！！」
まだ悲鳴をあげたまま、一気に山を下ってくるタヌキ。

「あぁぁ～、そこのタヌキさんっ」
「……っ？」
麓の草原に佇んでいる黒髪の少女に、タヌキが呼び止められる。

「何だポンっ！？今、急いでっ…！」
「そんなにお急ぎならぁ～、そこにある船を使われてはどうですぅ～？」
「船っ…？」
そう言われ、少女の指差した方に視線を向けるタヌキ。山のすぐ目の前に広がる海岸の一端に、ボートのような灰色の小船が停泊していた。
「使っていいポンっ！？」
「ええ、もちろん」
「助かったポンっ！丁度、ヤツらの手が届かない遠くへ逃げたかったんだポンっ…！」
タヌキがそう言って笑顔を見せ、勢いよく船に乗り込む。
「恩に着るポン～っ！」
「いえいえぇ～っ」
オールで船を漕いで、海へと出ていくタヌキを、右手を軽く振って送り出す黒髪の少女。
「……っ」
振っていた手を止め、少女が怪しげに微笑む。

「ふぅ～ポンっ！海にさえ出れば、アイツらも追ってはっ…！んっ…？」

順調に海へと繰り出していたタヌキが、ふと漕いでいたオールを止める。

「何かこの船…沈んでいっているようなっ…」

徐々に下がっていく視線。徐々に近づいてくる水面。タヌキが違和感を覚え、眉をひそめる。

「まっ…まさかっ…この船っ…」

タヌキが恐る恐る、船を外側の壁に、指を滑らせた。

「どっ…泥っ！？」

水に溶け出している、その軟らかい感触に、思わず目を見開くタヌキ。

「どっ…泥船だポンっ！？」

しかし気付いた時にはすでに遅く、タヌキを乗せた泥船は、もう沈没秒読み状態。

「ぎゃあああああだポォォォォォ～～～ンっっ！！」

海の水に溶けていく泥船。タヌキの体と悲鳴が、海へと呑まれていった。

「あぁ～ららぁ～っ」

海岸からその様子を眺めながら、感心したような声を出す太狼。

「一体、何やったのぉ～？」

太狼がふと横を振り向く。

「輝矢ちゃんってばっ」

太狼の振り向いた先には、先程、タヌキに船を進めた黒髪の少女・輝矢が立っていた。

「いえね、タヌキさんが逃げたいというので、たまたま作っておいた泥船を貸して差し上げたんですよ」

「さっすが輝矢ちゃ～んっ！」
「どこがだよっ」
さらりと答える輝矢に、誉めるように声を掛ける太狼。その横でハチが、こっそりと突っ込みを入れる。
「さっすが僕が育てただけのことはあるねぇ～っ！」
「それは言えてる…」
今度は自分を誉める太狼に対し、ハチはしみじみと頷いた。

「ぶっはぁぁぁぁ～～っだポンっ！！」
『んっ？』
海のど真ん中から上がってくるタヌキの姿に、皆が振り返る。
「まだ生きとったかぁ～」
「しぶとい奴っ…」
感心する門貴の横で、顔を歪めるヘンゼル。

「逃げっ…！逃げるポンっ…！！」
海のど真ん中にいるタヌキは、危機迫った表情を見せながら、何とか逃げようと、傷だらけの体で必死に泳いでいく。

「ついでだし、もう一発ぅ」
輝矢の横を飛んでいたユキジが、そう言って青い羽根を構える。
「“右翼・裂羽”っ」
青い羽根を、泳ぎ去っていくタヌキの方へと投げ放つユキジ。

「へっ…？」

必死に泳いでいたタヌキの元へと、まっすぐに青い羽根が落ちてくる。

――――バァァァァァァァァァーーーンっ！！――――

「ぎゃあああああああああああああああああっっっ！！！」

海を直撃した裂羽は、激しい水飛沫を巻き起こし、タヌキは、大きな悲鳴とともに高々と空に打ち上げられた。

「何もあそこまでやんなくても…」

そんなタヌキの様子に、さすがに哀れになってしまったようで、ハチがふと呟きを漏らす。

「だってあのタヌキ、ニセ桃タロー事件の時のタヌキでしょ～っ？」

ユキジが尖った嘴を、ハチの方へと向ける。

「もう二度と逆らう気が起きないように、痛めつけとかなきゃっ」

「おっ！たまにはいいこと言うねぇ～っ！キジ君っ」

「それでこそ、私のお供です」

「もうこんなヤツらヤだっ…俺っ…」

容赦のない言葉を吐くユキジに、笑顔で賛同する太狼と輝矢。そんな面々に、ハチは深々と肩を落とし、嘆くようにそう呟いた。

「さぁ～てっ！」

太狼が大きく伸びをし、振り返る。

「帰ったらおやつアンドサトウキビ麺にしようかっ！グレーテルっ！」

「……っ」
太狼の振り向いた先に立つのは、笑顔のグレーテル。
「はいっ！タロー様っ！」
太狼の言葉に、グレーテルは大きく頷いた。

――――そこは、お菓子の家。
手を差し伸べてくれた、その人に連れられて、私と兄がやって来たのは、大きなお菓子の家だった。
「あっ、ちなみにエセお菓子の家だからねぇ～間違って食べちゃわないでねぇ～っ」
『はぁっ…』
その人の注意に、私と兄は少し呆れながら頷く。幼い子供を呆れさせるような、独特の空気を、その人は持っていた。
「たっだいまぁ～っ！」
その人が勢いよく、そのエセお菓子の家の扉を開ける。

“ただいま”と言ったことに少し驚いた。誰か他にもこの家に住んでいるのだろうか。
親？兄弟？恋人…？

「……。」
「……。」
玄関先に立っていたのは、私よりもまだ幼いであろう、一人の小さな子供だった。私たちは互いを見つめあったまま、少しの間、静止していた。

「タローっ…」
その子が、その人の名前らしきものを呼ぶ。
「何だ？コイツら…」
少し不機嫌そうな顔と声で、この子はその人へと問いかける。
「ちょ～～っと拾ってさぁ～それより一人でお留守番、大丈夫だったぁ～？輝矢ちゃんっ」
「かっ…ぐや…ちゃんっ…？」
その人の呼んだ、その子の名前らしきものに、私はさらに首を傾げた。
「当たり前だ。留守番くらい何ともない」
「そぉ～っ？なら良かったぁ～っ」
「あのっ…」
「んっ？」
先に声を掛けたのは、私ではなく、兄だった。
「どうしたのぉ～？ヘンゼル君っ」
「そのっ…その子っ…」
「ああ、輝矢ちゃんっ？」
「女の子…なのっ？」
『えっ…？』
私は兄に代わり、思わず続きを問いかけた。
だって、短い黒髪に、とっても意志の強そうな、大きくてまっすぐな瞳。凛々しい顔立ちに、男の子っぽい可愛さもまったくない格好。そして何より、無愛想。
「悪かったな、女に見えなくてっ」
「あっ…」
その子はさらに機嫌を悪くして、そう言った。私は少し、“しまった”と顔を引きつった。
やっぱり男の子に見える。“かぐや”なんて名前を聞かなければ、きっとわからなかったと思う。
「ごめんねぇ～っ！男手一つで育てたもんだから、こぉ～んなガサ

ツに育っちゃってっ！」
「お前に育てられた覚えはないっ」
笑うその人に、かぐやはどこか嫌そうに言い返した。
「おまけにこの前の断髪式で、髪切り過ぎちゃってさぁ～っ！僕がっ！」
「笑って言うことじゃないっ」
「……。」
かぐやはとても怒っているのに、でも何故だろう。
その二人の光景は、とても楽しそうに見えた。
「でぇっ！コイツらは何なんだっ？」
「ああ、こっちの男の子がぁヘンゼル君でっ、女の子の方がぁグレーテルちゃんだってっ」
「名前を聞いているわけじゃない。コイツらは何だと聞いている」
やっと話が元に戻る。
「ああ、うん～そうだなぁ～っ」
その人は、少し首を傾げて考え込んだ。
「じゃあ輝矢ちゃんのお友達ってことでぇっ…！」
「友達なんていらないっ」
その提案を、かぐやはすぐさま一蹴する。
「うぅ～んっ…」
さらに考え込む、その人。

「じゃあぁ～、“家族”でっ」
「……っ」

その言葉に、思わず目を見開いた。

見てはいないけれど、それはきっと、兄も同じだったと思う。
その人は、私たちの方に手を向け、“家族”と言った。
実の親にさえも捨てられた私たちに、その“家族”という言葉が、

どれほど深く響いたのかなんて、計り知れない。

「家族っ…」

「……っ？」

そこにもう一人、“家族”という言葉を深く響かせている人間がいた。

「うんっ、どうかなぁ？」

「……家族ならいいっ…」

「そっ」

ポツリと答えたかぐやを見て、その人はどこか満足そうに微笑んだ。

その時、私は思った。

“この子も、自分と一緒なんだ”と。

家族もなく、この人の元にやって来て、家族というものには敏感で、そして、新しい家族が出来ることに、戸惑いはするけれど、それでもそれ以上に嬉しいんだって。

「じゃっ、決定ぃ～っ！」

こうして、こんな簡単な流れで、私たち四人の、お菓子の家での生活が始まった。

それから数年、穏やかな日々が続いた。

「きゃあああああっっ！！タロー様ぁぁぁぁぁぁっっ！！！カッコイイぃぃ～～っっ！！」

「うん～っ、知ってたぁ～っ」

「バカかっ」

「……。」

四人暮らしが始まって、兄は、いつの間にか、オカマになっていた。

あの、いつも私を守ってくれていた、頼りがいのある、カッコイイ兄が。

最初は多少、傷ついたけど、まぁ今まで私を守って苦労した分の反動がきたんだ、と、必死に自分に言い聞かせた。

私はというと…

「メイドをやりたいぃ～っ？」

「はい…」

何もしないで、ただ世話になるというのも嫌で、そう申し出た。

「うんっ、いいよぉ～っ」

その人は、特に理由を聞くこともなく、あっさりと許可を出してくれた。

理由を聞かなかったのは、もう、この人は、理由なんてとっくに気付いているからだろうと思った。人の考えていることは、すべて見通せてしまう。

そういう、不思議な人だった。

「じゃあまず、鎖鎌の練習でもしようかぁ～っ」

「何故っ…」

本当に、不思議な人。

「ああ、じゃあまず初めにぃっ」

「……っ？」

「甘さダルダルココア、淹れてくれないっ？」
「甘さ…ダルダル…？」

結局、その人の求めるダルダル感あるココアを淹れるまで、三ヶ月もかかった。
今は、その人が満足してくれるココアを、淹れることが出来る。

「んん～っ！甘ぁぁ～いっ！」

満足げに微笑むその人を見て、思う。

「グレーテルの淹れてくれたココアが一番だねぇ～っ！」

メイドになったのは、世話されてばかりというのが嫌だったというのもあるけれど、きっと何か役に立ちたかったんだ。少しでも何かしたかったんだ。

この人の為に。

私と兄に、家と家族をくれた、この人の為に。

「ありがとうございますっ！ご主人様っ！」

その日、私は、この人の為に生きていくことを、心に誓った…―

―――

桃原家・キッチン。午後十時。
「ふんふふぅ～んっ♪」
キッチンでは、グレーテルが、鼻歌を歌いながら、夕食の後片付けをしていた。キレイに何も残っていない皿を見ると、今日のサトウキビ麺の味は、上々だったようである。
「ふぅ～っ！」
そこへ、パジャマ姿に、首にタオルをかけた太狼が入って来た。風呂上がりなのだろうか、髪は濡れており、顔は少し赤い。
「いぃ～いお湯だったっ」
「タロー様っ」
グレーテルが、太狼の方を振り返る。
「ああ、グレーテルっ」
太狼がグレーテルに、笑顔を向ける。
「寝る前に最後の一杯、甘さダルダルココア、淹れてくれるっ？」
いつも通りの、その言葉。
「……っ」
グレーテルが、笑う。
「はいっ！ご主人様っ！」

貴方に、甘いココアと、永遠の忠誠を…。

第４３章　紅薔薇の恋　☆１

御伽界西方・四大国が一、『虎国』。
虎国主・白雪虎克の屋敷内、長女・虎昌の部屋。
「虎昌様っ！」
部屋の扉を開け、金色の髪の美しい青年が入ってくる。
「虎昌様っ、このようなものがっ…！」
「下の名前で呼ぶんじゃないっつってんでしょうがぁぁぁぁっっっ！！！」
「うわっ！」
部屋の中で優雅にお茶を飲んでいた、その部屋の主に怒鳴られ、青年は思わず体を後ろへと反らせ、両手で耳を塞いだ。
「気に入ってないんだからっ！ったくっ！」
不機嫌にそう言い放ちながら、座っていたソファーへと再び腰を下ろす、長く白い髪の少女。この部屋の主・白雪虎昌である。
「はぁっ…」
白雪に怒鳴られ、深々と肩を落とす青年。白雪の従者・鈴白であった。
「大丈夫…？お兄ちゃんっ」
「……？」
肩を落とした鈴白を、どこか心配するように声を掛けてくる、金色の髪の愛らしい少年。こちらも白雪の従者にして、鈴白の弟の芹であった。
「大丈夫だよっ」
鈴白が芹へ、優しい笑みを向ける。
「これくらいで参ってたら、あんな高慢ちき姫のお相手なんて出来ないからねっ」
「全部、聞こえてるんだけどっ！？」

爽やかな笑顔のまま遠慮なく言う鈴白に、白雪が思わず睨むような瞳を向けた。
「でぇっ!?何っ!?」
「えっ?何ですか?」
「貴方っ!何か用があるっぽく入って来たでしょうがっ!!」
「ああ、そうでした」
怒鳴る白雪に、鈴白が思い出した様子で、右手に持っている小さな紙を、白雪へと見せる。
「白雪様に依頼です」
「依頼っ?」
鈴白の言葉に、眉をひそめる白雪。
「依頼って何のぉ〜っ?」
「もちろん、鬼人退治のだよっ」
「ええぇ〜っ!?」
横から問いかけた芹が、鈴白の答えを聞いて、目を見開き、大きく驚く。
「オッホッホっ!この虎国の姫君にして、西では結構有名な退治屋の白雪の力を借りたいという者が、ついに現れたようねぇ〜っ!!」
鈴白から依頼書を受け取った白雪が、誇らしげに高笑いをする。
「最近は輝矢さんたちがすっかり有名になっちゃって、依頼なんて空っきしだったのにっ…」
「輝矢さんたちが忙しすぎて、仕方なくコッチに回ってきたとかかも知れないよ?」
「あっ!そっかぁっ!」
「何か言ったっ!?」
『いえっ』
白雪に一睨みされ、すぐさま目を遠くの方へと逸らす鈴白・芹兄弟。
「フフフフっ…」

ソファーから勢いよく立ち上がった白雪が、どこか楽しそうな笑みを浮かべる。
「さっ！早速、鬼人退治へ向かうわよっ！鈴白っ！芹っ！」

「って意気込んできたのに、何なわけっ！？」
白雪の怒鳴り声が、澄み切った青い空に響き渡る。
「知りませんよっ、そんなものっ…」
その怒鳴り声に、煩わしそうな表情を見せながら、そう言うのは輝矢。
「とりあえず、私の視界内から消えていただけます？」
「貴女が消えなさいよっ！」
至近距離で睨み合う輝矢と白雪の空気が、徐々に悪くなっていく。
「ほぉ～私に消えろと…？」
少ししかめた表情と冷たい瞳で、輝矢が静かに聞き返す。
「あっ！桜時様ぁ～っ！再会の抱擁でもいたしませぇ～んっ？」
「しねぇーよっ！！」
「……っ」
輝矢の聞き返しを聞いている様子もなく、ハチに笑顔で手を振っている白雪に、輝矢のコメカミの血管が浮き出る。
「溺死か惨殺か選ばせて差し上げましょう…」
「貴女こそ凍死か撲殺か選びなさいっ！」
二人は益々険悪なムードとなり、もうまさに一触即発といった空気になっていた。
「そちらにも依頼書が来たのですね」
「おう、お前らんとこにも来たのか？」
「はい」

そんな輝矢と白雪を止めようともせず、まったくの放置状態で、ごく自然に互いの持っている依頼書を見せ合っているハチと鈴白。
確かに文面から何から、すべて同じものであった。
「ってことはつまりぃ、この依頼主さんが俺らと白雪ちゃんと、どっちにも送ったってことかぁ～」
「おかしいと思ったんだよねぇ～白雪様のところに依頼書が来るなんてっ」
モンキの言葉を聞きながら、横でしみじみと呟く芹。
「まぁ…」
「ふわぁぁーっはっはっはっはっ！！」
どこからともなく響き渡ってくる、大きな笑い声。
「鬼人退治なら、この僕っ！若くしてオトポリの隊長も務めてしまっているこの僕っ！正刈鉄汰に任せておいてくれたまえぇぇっ！！」
「……オトポリにも出したみたいだけどねっ、依頼書っ…」
得意げにそう言い放っている、オカッパ頭に巨大マサカリを背負った男を見つめながら、どこか呆れた表情で呟くユキジ。その男は、金汰の弟にして、オトポリの隊長も務めている、正刈鉄汰であった。
「グガアアアアアアアっ！！」
『きゃあああああああああああっ！！』
『……っ！』
そこへ、鬼人の雄たけびと、人々の悲鳴が聞こえてくる。睨み合っていた輝矢と白雪や、ハチたちが一斉に振り向き、表情を引き締めた。
「グガアアアアアアアっ！！」
深い森の奥から町中へと現れ、逃げ惑う人々を追いまわす、禍々しき黄色い皮膚の鬼。金色の二本の角が、怪しく光る。
「出ましたねっ！鬼人っ！」
「やってやろうじゃないのっ！！」
逃げ惑う人々の前に立ち、やって来る鬼人と向き直った輝矢と白雪が、それぞれやる気満々で三日月と雪剣を構える。

「倒すのは私です。虎昌は下がっていなさいっ」
「下の名前で呼ぶんじゃないわよっ！いいえっ！倒すのは私よっ！貴女こそ、どいてて下さらないっ？」
武器を構えた輝矢と白雪は、小競り合いをするように、互いの体を押しのけながら、我先にと必死に動こうとしている。
「私がっ…！」
「私よっ…！」
「ふわぁぁ～っはっはっはっはっ！！」
『えっ？』
鬼人というよりも互いに苦戦している輝矢と白雪をいいことに、二人よりも先に鬼人の前へと出る鉄汰。
「この僕っ！正刈鉄汰が退治してあげるよっ！！」
鉄汰が背中に背負った、鉄製のマサカリを手に取る。
「覚悟するといいっ！！いくよっ！“アイアン・スイっ…！」
『邪魔っ』
「ぎゃあああああああああああああっっっ！！！」
鬼人に必殺技を繰り出そうとしただけの鉄汰が、本気の表情を見せた輝矢と白雪に、技を繰り出す前に両側から勢いよく吹き飛ばされる。
「あああぁぁぁぁ～～～れぇぇぇぇ～～～っっ！！！」
空の星となって消えていく鉄汰。

「あっちゃ～っ…」
「アーメン…」
呆れきった様子で空を見上げるハチの横で、鈴白がそっと目を伏せる。

「グっ…グガっ…」
鉄汰の吹き飛ばされっぷりを見て、二人の方へと突進して行こうとしていた鬼人が、少し怯んだような様子を見せて、その場に立ち

止まる。
「グガァ〜っ…グガァ〜っ…」
二人に背を向け、足音を忍ばせて、その場から去って行こうとする鬼人。
「どこへ…」
「行くのかしら…？」
「グガっ…！！」
背後から聞こえてくる二つの冷たい声に、鬼人が背筋を震え上がらせる。
「グっ…グガァ〜っ…」
恐る恐る、後ろを振り返る鬼人。
「三日月っ…」
「雪剣っ」
「グギっ…！」
冷たい表情を見せた輝矢と白雪が、振り返った鬼人に、目にも留らぬ速さで、それぞれ三日月と雪剣を振り下ろす。
「グギャアアアアアアアアアっっっ！！！」
三日月と雪剣に斬り裂かれ、鬼人はあっという間に砂と化して、消えていった。
「ふぅ〜っ！物足りないわっ！」
「ええ、物足りないです」
『……。』
まだまだ暴れ足りないといった様子の輝矢と白雪を、呆然とした表情で見つめるハチたち三匹と鈴白・芹の兄弟。
「今日ばかりは、鬼人に同情してしまいますねぇ」
「ああ、まったくだ…」
鈴白の言葉に、ハチはしみじみと頷いた。

その頃。

「うっ…うわあああああああああああっっっ！！！」

二人に吹き飛ばされた鉄汰は、未だ遥か上空を舞っていた。元居た場所からかなり離れた空で、鉄汰の体が徐々に下降し始める。

「うっ…ううっ…！！」

近づく地面に、顔を引きつる鉄汰。

――――――バァァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――――

どうすることも出来ず、そのまま鉄汰は勢いよく地面へと落下した。

「うっ…ううっ…！」

草原にうつ伏せになるような形で落下する鉄汰。下が草原だったので傷こそ出来なかったが、全身を打ちつけ、顔を歪める。

「おっ…のれっ…竹取輝矢っ…」

――――ボォォォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

怨みがましく輝矢の名を呼んだ鉄汰の体を、白い煙が包んでいく。煙が晴れると、そこには一頭の黒いクマが倒れていた。痛みに体力が奪われ、勝手に獣化したようである。

「うっ…」

獣化した鉄汰は、やがて自分の意識を手放し、静かにその瞳を閉じた。

「……。」

鉄汰が気絶し、風の音しなしなくなった静かな草原に、ゆっくりと近づく一つの足音。

「あれはっ…」

足音は、草原の真ん中で倒れている鉄汰を見つけ、その歩みを止

める。
「クマ…？」
吹きゆく風に、愛らしい少女の声が乗った。

翌日。龍国・桃原家。
『鉄汰が行方不明っ！！？』
「そうなんだぁ～よぉぉぉぉ～～っっ！！！」
大きく目を見開いて驚く三匹の前で、今にも泣きそうな表情を見せている一頭の黒いクマ。オトポリの総長にして、鉄汰の兄でもある正刈金汰であった。
「昨日、鬼人倒しに行って、それっきり帰って来ねぇーでぇっ…！おまけに何の連絡もないんだぁぁっ！！」
金汰が嘆くように言葉を続ける。
「鉄にっ…！鉄に何かあったのかも知れねぇ～んだぁぁぁ～～～っっ！！！」
「何かって…」
金汰の言葉を受け、少し考え込むように俯くハチ。

――――邪魔っ――――
――――あぁぁぁぁぁ～～～れぇぇぇぇぇ～～～っっ！！！――――

「まさかアレじゃっ…」
「アレで間違いないなぁ～」

「間違いないねぇ～」
輝矢と白雪に勢いよく吹き飛ばされていった鉄汰のことを思い出し、ハチが少し顔を引きつる。そのハチの言葉に、しみじみと頷くモンキとユキジ。
「かっぐやさんたちもぉ鬼人退治の現場にいたって聞いたかんらぁ、何か知らねぇ～かと思ってぇっ…！」
「知りませんね」
「ウソつけよっ！！」
あっさりと答える輝矢に、ハチが勢いよく突っ込みを入れる。
「何か心当たりがあるだかぁっ！？ハチ公っ！！」
「うえぇっ！？」
金汰に勢いよく問いかけられ、ハチが思わず焦る。
「うえぇっとぉ…知ってるつうかぁ～何つうかぁ～っ…」
“輝矢と白雪が吹き飛ばした”とも言えず、金汰から目線を逸らしながら、誤魔化そうとするハチ。
「頼むっ…！頼むだぁぁ～っ！！鉄をっ…！鉄を探してきてくんろおぉ～～っっ！！」
「ぐえええぇぇぇぇっっ！！！」
金汰が大きな両手で、ハチの小さな体を、力一杯握り締める。
「鉄がいねぇ～とっ…おんらぁ～っ…！おんらぁ～～っ…！！」
「ぐっ…ぐおおおぉぉぉっ…！！」
涙を滲ませた金汰に勢いよく握り締められ、ハチが苦しげな声を漏らす。
「このままじゃ桜時が締め殺されちゃうけどぉ～？」
「仕方ありませんねぇ…」
金汰とハチの方を指差しながら言うユキジに、輝矢は少し疲れたように肩を落とした。

「でっ？」
白雪の右眉が、ピクリと吊り上がる。
「なぁ～んで私まで、あのオカッパの捜索に駆り出されなきゃいけないわけっ？」
不機嫌そうに振り返った白雪の視線の先には、とてもやる気のなさそうな輝矢の姿があった。
「アナタが吹き飛ばしたのでしょう？その無駄な馬鹿力で」
「貴女だって吹っ飛ばしたじゃないっ！！」
『はぁっ…』
すぐさま険悪な雰囲気で睨み合う二人。そんな相変わらずの様子を見て、従者の三匹と兄弟は皆、深々と溜息をついた。ハチが締め殺されそうになったこともあり、輝矢一行は仕方なく、行方不明になった鉄汰の捜索に出たのである。白雪にも責任を取らせるため、呼び出したのであった。
「それで、鉄汰さんの行方の見当はついているのですか？」
「ああぁ～」
鈴白の問いかけに、ハチが軽く頷く。
「昨日、鬼人を倒した町より東の町の人が、北に飛んで行くオカッパ頭の男を見たって」
「成程っ」
ハチの言葉に、鈴白が納得した様子で頷く。
「だからここへ来たというわけですか」
「ああ。これ以上行くともう山だし、居るとしたらこの辺りだと思うんだけどなぁ～」
ハチたちが今いるのは、昨日鬼人を退治した村の北東付近。つまり鉄汰が飛んでいったとされている辺りであった。しかしそこは近くに町も村もなく、ただっ広い草原がどこまでも広がっているだけであった。何もないお陰で周りよく見渡せるが、鉄汰の姿は見当たらない。

「山越してったんじゃないのっ？」
「じゃあもう見つけるのは無理ですね」
「そうよっ、とっとと帰りましょっ」
「おいっ！！」
吹き飛ばしておきながら何とも無責任な輝矢と白雪の態度に、ハチが少し厳しい視線を送る。
「輝矢ぁぁぁ～～～んっっ！！」
「虎昌様ぁぁぁぁ～～～っっ！！」
『……っ？』
遠くの方から名を呼ばれ、帰ろうとしていた輝矢と白雪が振り向く。二人が振り向くと、草原の続く少し小高い丘の上から、大きく手を振り、こちらを呼んでいる、モンキと芹の姿があった。
「下の名前で呼ぶんじゃないって言っ…！」
「こっちに薔薇園があるよぉ～っ！」
「薔薇っ…？」
その芹の言葉に、白雪が少し眉をひそめる。
「うぅ～んっ！紅いバラばっかりで超キレイぃ～っ！」
「薔薇園の奥にでっかいお屋敷みたいなんもあるでぇ～っ！」
『……っ』
芹とモンキの言葉を受け、少し考え込むような表情を見せた輝矢と白雪が、互いの顔を見合う。
「薔薇園に屋敷…誰かが住んでることは間違いなさそうね」
「ええ、鉄汰の行方がわかるかも知れません。行ってみましょう」
そう言葉を交わし、輝矢一行と白雪たちは、その紅い薔薇の園へと向かった。

第４３章　紅薔薇の恋　☆２

そこに広がっていたのは、見渡す限りの紅い薔薇であった。
『ふっわぁぁぁぁぁぁ～～～っっ……』
まさに見事としか言いようのないその光景に、皆が思わず目を見張る。どこまでも続く一面の薔薇の園。まるで別世界にでも来たかのような、そんな感覚を覚えた。
「すっ…すげぇっ…」
朱実の屋敷で数々の花の園を見てきたハチさえも、その薔薇の園には驚きを隠せないようであった。これほどの薔薇園、確かに自然には出来上がらないだろう。桜時の花力を用いても、これだけの薔薇園を咲かすことは、恐らく不可能であろう。
「紅い…薔薇…？」
一面の薔薇園を見渡しながら、白雪が少し表情を曇らせる。
「薔薇ですか…」
その白雪のすぐ横から、咲き誇っている紅い薔薇へと、徐に手を伸ばす輝矢。
「迂闊に触れてはなりませんわっ…」
「……っ」
耳に入る、その聞き慣れない愛らしい声に、薔薇へと伸ばされていた輝矢の手は、その寸前で止まった。
「……っ？」
輝矢が手を引っ込め、ゆっくりと顔を上げる。
「美しい花には…棘がございます…」
広い広い薔薇の園の向こうから、ゆっくりと現れる人影。
「気安く触ると…傷つけられてしまいますわ…」
「……っ」
それは見事に赤く、長い巻き髪に、宝石のように光る緑色の瞳をした、美しい少女であった。端正な顔立ちで、年は輝矢より少し幼

く見える。姫のような真っ赤なドレスに黄金のティアラ。ドレスは薔薇をモチーフにしており、何とも華やかで美しい。
「アナタはっ…」
「やっぱり貴女だったのねっ」
「えっ…？」
戸惑うように少女を見ていた輝矢が、横から聞こえてくる白雪の声に振り向く。
「“紅バラ”っ」
「紅バラ？」
少女の名なのであろうか。少女に向かってそう言い放つ白雪に、輝矢は少し眉をひそめた。
「まぁこんだけ紅い薔薇が咲いてる時点で薄々気付いてたけどっ」
「白雪、アナタ、あの者をっ…」
「白雪お姉さまぁぁぁっ！！」
「へっ？」
紅バラと呼ばれた少女の声に、問いかけようとしていた輝矢が言葉を止める。
「おっ…」
『お姉さまっ！！？』
紅バラの発したその単語に、大きく驚く輝矢と三匹。
「ご無沙汰しておりますわぁ～っ！！お姉さまっ！お元気でしてぇっ！？」
「えっええ、まっまぁねっ…」
薔薇の園の向こうから大きく手を振り、問いかけてくる紅バラに、白雪が少し引きつった表情を見せながら答える。
「知り合い…なのかっ…？」
「そうみたいだねぇ～」
「んん～っ」
呆然とした表情で言葉を交わしているハチとユキジの横で、がっちりと腕を組み、何やら真剣に考えている様子のモンキ。

「薔薇園の謎の美少女っ…！ここはやっぱりいっとくべきやろうっ！」

『へっ？』

――――ボォォォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

ハチとユキジが目を丸くして振り返る中、何やら決意した様子のモンキが白い煙へと包まれていく。

「よっ！とっとっ！」

白い煙の中から姿を現すのは、人化した門貴。門貴が素早く咲き乱れている薔薇を摘み、あっという間に立派な花束を完成させる。

「お嬢さぁぁぁ～～んっ！！」

「えっ…？」

大きく声を出す門貴に、紅バラが振り向く。

「もし宜しければっ、僕と薔薇から始まる熱き恋でもどうですかっ？」

作ったばかりの薔薇の花束を掲げ、薔薇園の向こう側にいる紅バラへと、妙に格好をつけながら交際を申し込む門貴。

「あぁ～あっ…まぁ～た始まったよっ…」

「懲りない男だよねぇ～」

そんな門貴に、横にいるハチとユキジが呆れた声を出す。

「赤っ…」

門貴の方を振り向いた紅バラが、門貴が着ている服を見てそう呟き、浮かべていた柔らかな笑みを消して、深々と俯く。

「……っ？」

その紅バラの様子に、少し首を傾げる輝矢。

「マズいわっ…！」

「マズいですっ…！」

「へっ？」

横から口々にそう言い放つ、どこか焦った表情を見せている白雪と鈴白に、輝矢がさらに首を傾げた。

「紅バラちゃ～んっ！俺と清き男女交際の第一歩をぉ～っ…！」

「赤っ…赤っ…赤っ…！！」

――――ボォォォォォォォォォォ～～～～ンっ！――――

「へっ…？」

赤と何度も叫び、勢いよく顔を上げた紅バラの体を、白い煙が包んでいく。目を丸くした門貴は、何となく感じる悪い予感に、少しばかり表情を引きつった。

「赤っ…」

『……っ』

白い煙の中から姿を現したのは、横に伸びた角の何とも立派な、茶色い体を大きな“牛”。

「赤ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっ！！！！！」

「ぎゃあああああああああああっっっっ！！！！」

薔薇園をかきわけ、猛突進してくる牛から、涙目になりながら全力で逃げる門貴。

「うぎゃあああああああああああああっっ！！！！」

『って…』

門貴の逃げる先にいるのは、顔を引きつったハチとユキジ。

「何でコッチに来んのさぁぁぁ～～～っっ！！！！」

「どわあああああああああああああああっっっ！！！！」

「うぎゃあああああああああああああっっ！！！」

「赤ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっ！！！！」

追いかけられる門貴に巻き込まれ、同じように全力で逃げ惑うハチとユキジ。必死に逃亡する三匹を、あっという間に薔薇園を越えた牛が猛然と追う。

「ハチっ！とその他っ！」
「この状況でも差別は忘れないんだね…」
ハチとその他に分けて名を呼ぶ輝矢に、芹が少し呆れた表情を見せる。
「きゃあぁ～っ！どうしましょっ！私の桜時様がっ…！」
「誰がアナタのですかっ」
困ったように身をよじる白雪に、輝矢がすかさず冷たい目を向ける。
「何なのですかっ、あのウシはっ」
「彼女は“牛人”なんです。赤いものを見ると突進してしまうクセがあってっ…」
「赤いものっ？」
鈴白の言葉を聞いた輝矢が、牛に追いかけられている三匹の方を見る。三匹の中で赤いものといえば、門貴が着ている服の色のみ。
「サルっ！」
「ふえぇぇぇぇぇっ！？」
何か思いついた様子で門貴を呼ぶ輝矢。門貴がもう今にも泣き出しそうな情けない表情で、振り返る。
「輝矢ぁぁぁぁ～～～んっっ！！助けっ…！」
「今すぐ獣化しなさいっ！」
「ふぇっ？」
助けを求めようとしていた門貴が、輝矢の言葉に目を丸くする。
「何で獣化なんかぁっ…」
「だあああああああっっ！！来たぞぉぉぉっっ！！」
「ういっ…！？」
「赤ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっ！！！」
ハチの声に門貴が振り返ると、猛牛は三匹のすぐ背後まで迫って来ていた。

「いいから早くっ！」
「あっはっはいっ！」
最早、門貴に考えている余裕はなく、輝矢の言葉に大きく頷いて、体を白い煙に包ませる。
――――ボォォォォォォォォ～～～ンっ！――――
「なったでぇっ！」
小さな茶色い体のサルとなり、地面に着地するモンキ。

「あっ…かっ…？……っ」
『……っ？』
理性を取り戻したかのように目を丸くした猛牛が、ふとその場で足を止める。急に立ち止まった猛牛に、こちらも足を止めながら、戸惑うように振り返る三匹。
「嫌ですわっ…わたくしったらっ…」

――――ボォォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

愛らしい声を出した猛牛が白い煙に包まれていき、元の美しい少女・紅バラの姿へと戻る。

「大変申し訳ございませんでしたっ…！わたくしったら、初対面の方になんてことをっ…！」
その美しい表情を困ったように歪めて、深々と頭を下げる紅バラ。
「本当に申し訳ありませんでしたっ…！わたくしっ！赤いものを見ると、つい猛突進したくなってしまってっ…！」
『はっ…はぁ…』
紅バラの話すその理由に、唖然とした様子で頷く三匹。
「赤いものを見るとって、あの薔薇は？」
「いっつも見慣れてるから平気なんだそうよっ」

「そうですか…」
白雪から聞かされる、そのよくわからない理由に、輝矢が少し呆れたように肩を落とした。
「大丈夫ですか？ハチ」
「輝矢っ」
ハチたちの元へ、輝矢と白雪たちが歩み寄っていく。
「私の腕の中に飛び込んで来ていいですよ」
「いや、いい」
「輝矢ぁぁ～んっ！俺は飛び込みたっ…！」
「まったく、アナタが赤い服なんて着てるから、ハチにまで危険が及んだじゃないですか。この役立たずザル」
「がびぃぃぃぃ～～～んっ！」
輝矢の腕の中に飛び込もうとしたモンキが、輝矢の容赦ない言葉に大きく傷つく。
「でぇ～？この人騒がせな牛サン、誰なわけぇ～？」
追いかけられたことに機嫌を損ねたのか、少し表情をしかめたユキジが、白雪へと問いかける。
「ああ、そうだったわね。紅バラっ」
「はいっ！白雪お姉さまっ！」
白雪が促すように見ると、紅バラが背筋を伸ばし、姿勢を整えて輝矢たちの方に向き直る。
「わたくし、御伽界・北は牛国・国主の娘、紅原牛盛（べにばらうしたけ）と申しますっ！」
「牛国主令嬢っ…？」
「紅バラ…ウシタケっ？」
「はいっ！」
戸惑うように聞き返した輝矢とハチに、大きく頷き、笑みを返す紅バラ。
「白雪お姉さまとは同じ、いかつい名前同志ということで、親しみを込めて“お姉さま”と呼ばせていただいておりますのっ！」

「はぁ…」
笑顔で言い放つ紅バラに、少し引きつった表情で頷く輝矢。
「貴女と一緒にしないでよっ！そんな牛丼大盛りみたいな名前よりかは、私の方が幾らかマシなんだからっ！」
「別に変わらないと思いますけど…」
「何か言ったっ！？」
「いえっ…」
こっそりと呟いた鈴白が、白雪に一睨みされ、大人しく首を横に振る。
「牛国はウチの国が唯一、外交してる国でねっ、私と紅バラは小さい頃からの付き合いなのよっ」
「へぇ～」
「白雪お姉さま、こちらの方々は…？」
「ああっ」
少し戸惑った様子で問いかける紅バラに、白雪が笑顔を見せる。
「この人たちはねぇ～」
「白雪が尊敬してやまぬ伝説の退治屋・竹取輝矢とその一行です」
「誰がよっ！！」
勝手なことを言って、紅バラに自分を紹介する輝矢に、白雪が勢いよく怒鳴りあげる。
「退治屋っ…」
「私のライバルみたいなもんよっ！あぁ～うざったいっ！」
「ライバルっ…？」
煩わしそうに言い放つ白雪の言葉に、目を丸くする紅バラ。
「まぁ～！白雪お姉さまのライバルでございますのぉっ！」
「……っ？」
紅バラが輝矢にキラキラと輝く瞳を向け、戸惑う輝矢の両手を取る。紅バラに手を取られ、少し顔を引きつる輝矢。
「ならばわたくしも親しみを込めてっ…」
輝矢の手を握る手に、力を込める紅バラ。

「“輝矢お姉さま”とっ…お呼びしてもよろしいでしょうかっ？」
「丁重にお断りします」
笑顔で問いかけた紅バラに、すぐさま断りを入れる輝矢。
「そんなぁっ…何故でっ…」
『牛盛様ぁぁぁぁ～～～っっ！！』
「……っ？」
輝矢に姉と呼ぶことを拒否され、悲しげな表情を見せていた紅バラが、薔薇園の方から聞こえてくる声に、ゆっくりとした動作で振り返った。

『牛盛様ぁぁぁぁ～～～っっ！！』
「桔梗（ききょう）、萩（はぎ）…」
薔薇園の間を潜り抜け、紅バラの元へとやって来る、茶色い髪に赤い瞳の青年と少年。どちらも美しい顔立ちをしており、二人はよく似ていた。恐らくは兄弟であろう。鈴白・芹兄弟とそれぞれに年の頃も同じで、雰囲気もよく似ていた。

「どうしたのです…？桔梗、萩…」
「それがですねぇっ…！んっ…？」
紅バラに何やら報告しようとしていた青年と少年が、紅バラの横に立つ白雪と、その後ろの鈴白・芹の方へと視線を向ける。
「鈴白っ…！」
「桔梗っ」
「芹ぃぃ～っ！」
「萩っ！」
互いの名を呼び合って、がっちりと手を取り合う鈴白と桔梗と呼ばれた青年、そして芹と萩と呼ばれた少年。どうやら知り合いのようである。
「相変わらず、互いにっ…苦労するなぁっ…」
「ああっ…」

「聞こえてるんだけどっ…？」
しみじみと呟き合う鈴白と桔梗に、白雪が鋭い瞳を向ける。
「彼らは？」
「紅バラの従者の桔梗・萩兄弟よ。ウチの鈴白・芹とは、昔からの付き合いでねっ」
「成程っ、互いに気違いな主人に振り回されているので、苦労を分かり合えるのですねぇ」
「うっさいわねっ！貴女だって大概じゃないっ！！」
納得した様子で言い放つ輝矢に、白雪が勢いよく怒鳴りあげる。
「それでどうかしたのですか？桔梗、萩…」
『あっ！そうですそうですっ！』
再び問いかけた紅バラに、桔梗と萩が何やら思い出した様子で声を揃え、慌てて紅バラの前で膝をつく。
「あのクマさまがお目覚めですよっ！牛盛様っ！」
「あのクマ起きたのんだよぉ～んっ！牛盛様っ！」
「クマっ…？」
「まぁっ！本当ですのっ！？」
二人の報告に、輝矢が少し眉をひそめる中、紅バラが何やら嬉しそうな笑みを浮かべる。
「それは早速、挨拶に参りませんとっ…！」
「紅バラっ」
「……っ？」
薔薇園の向こうの屋敷へ戻ろうとした紅バラを、輝矢が呼び止める。
「何でしょう？輝矢お姉さまっ」
「その呼び名は止めて下さい…」
紅バラに笑顔で姉を呼ばれ、輝矢がげっそりとした表情を見せる。
「クマというのは…？」
「ああ、それはっ…」
「牛盛様が昨日、そこの草原で拾われたクマのことですよぉ～」

「あのクマ、気絶してぶっ倒れてたから、牛盛様が屋敷まで運んで看病してあげたんだよぉ～んっ！」

『……っ』

紅バラの代わりに説明する桔梗と萩の言葉に、輝矢たちが皆、ハッとした表情を見せる。

「それってもしかしてっ…」

「ええっ…」

「……っ？」

紅バラが首を傾げる中、輝矢とハチは真剣な表情で頷き合った。

第４３章　紅薔薇の恋　☆３

薔薇園の向こうに見えたその屋敷は、紅バラの牛国主一族の別荘の一つであるという。紅バラはここ最近、自国には戻らず、この別荘で薔薇園造りを楽しんでいるそうだ。別荘といっても、軽く普通の家の二十倍はある広さである。その中でも一番豪華な客間へと、輝矢たちは通された。

「おん前らぁっ！おんらに一体、何してくれたんだぁっ！まったくぅっ！」

その豪華な客間の天蓋つきベッドに座っている、妙に言葉のナマった黒クマは、輝矢たちが入って来るなり、勢いよく怒鳴りあげた。

「まだ全身が痛いだぁよぉっ！？どうしてくれるだぁっ！！」

「それだけ怒鳴れれば十分でしょう」

「そうよっ、死ななかっただけ有り難く思いなさいっ」

「おん前らに反省の色というものはないんだかぁっ！！？」

開き直りも甚だしい様子で言い放つ輝矢と白雪に、黒クマはさらに怒りを露にする。この黒クマ、言うまでもなく、輝矢と白雪に吹き飛ばされた鉄汰であった。どうやら二人に吹き飛ばされ、草原を倒れていたところを紅バラに助けられたようである。

「まったくっ…！兄ちゃんに言いつけてやるだぁっ！」

「結局、兄頼りっ…」

拗ねた子供のようにそう言い放つ鉄汰を見て、ユキジが少し呆れた表情で呟く。

「でぇ？ここはどこ何だぁ？」

「紅バラさんの別荘ですよ」

「紅バラ…？」

輝矢の言葉を聞き、鉄汰が眉をひそめる。

「こちらが紅バラさんです」

「紅バラが、気絶した貴方を助けて、看病してくれたんだからねっ

！」
「そうなのかぁ～っ」
鉄汰が紅バラの方を見て頷き、ベッドから立ち上がった。
――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――
黒クマの体を、白い煙が包み、鉄汰が人化する。
「ふわぁ～はっはっはっはっ！！恩に着るよぉ～っ！紅バラとやらっ！」
オカッパ頭の髪をなびかせ、ナマってはいないが妙に鼻につくしゃべり方で、紅バラに礼を言う鉄汰。
「僕を助けるなんてっ、君はなぁ～んて世界に貢献したんだろうっ！素晴しい功績だよっ！」
「人類始まって以来の失敗じゃないですか？」
「うるさいよっ！そこっ！」
茶々を入れるように言葉を挟む輝矢に、鉄汰がピシャリと注意を入れる。
「この礼は後日、改めてしようっ！ふわぁ～はっはっはっはっ！！」
「ああ～うざっ…」
高々と笑う鉄汰を見て、白雪が煩わしそうに顔を引きつる。
「紅バラも残念だったわねぇ～っ！ど～せ助けるなら、もっと清潔美男子の方が良っ…！」
「素敵っ…」
「へっ…？」
白雪が振り向くと、そこには胸の前で両手を組み、うっとりとした表情で鉄汰の方を見つめている紅バラの姿があった。そんな紅バラに、白雪が目を丸くする。
「今、何てっ…」
「サラリとなびくオカッパ頭っ…キラリと光る白い歯っ…ヒラリと響く穏やかな笑い声っ…」
白雪が戸惑う中、うっとりとした紅バラが鉄汰を熱く見つめて、言葉を続ける。

「まさにわたくしの理想通りっ…！！」
「えっ…？」
至近距離まで駆け寄って来る紅バラに、笑いあげていた鉄汰が、少し戸惑った様子で顔を下ろす。
「何っ…」
「わたくしとっ…」
うっとりと鉄汰を見つめる紅バラが、かすかに開いた唇で、小さな声を漏らす。
「わたくしとっ…！結婚していただけませんかっ…！？」
「はっ…？」
『はあああああああぁぁぁぁぁっ！！？』
その紅バラの思いがけない言葉に、驚いたように目を見開く鉄汰であったが、鉄汰よりも周囲の白雪やハチたちの方が、さらに大きく驚いた。
「しょっ…正気っ！？紅バラっ！オカッパよっ！？」
「まずそこなんですね…」
あまりにも信じ難かったのか、白雪が勢いよく紅バラに尋ねる。オカッパを否定した言葉を吐く白雪に、横の鈴白がこっそりと突っ込みを入れた。
「ええっ、毛先の揃い具合がたまりませんわっ」
「はぁぁぁぁっ！！？」
何やら桃色のオーラを放ちながら微笑む紅バラに、白雪の表情がかなり不細工に歪む。
「変わった趣味ですねぇ」
「昔っから変な趣味なところはあったけどっ…よりにもよってオカッパっ…」
落ち着いた様子でしみじみと呟く輝矢の横で、わなわなと少し体を震わせながら呟いている白雪。やはりオカッパに、かなりこだわっているようである。
「鉄汰様…と仰いましたかしら？わたくし、牛国主の娘の紅原牛盛

と申しますのっ！」
　何とも楽しそうな笑顔で、鉄汰に話しかける紅バラ。
「では早速、牛の両親に挨拶に参りましょうかっ！」
『展開早っ！！』
　勝手にどんどんと話しを進める紅バラに、三匹が思わず突っ込みを入れる。
「あっ！その前にこちらっ、愛の証の紅い薔薇っ…！」
「冗談じゃない」
「えっ…？」
　鉄汰へ、どこからか取り出した紅い薔薇を差し出そうとした紅バラが、鉄汰の放った、どこか冷たいその声に、薔薇を差し出そうとしていた手を止めた。
「あっ…あのっ…」
「……。」
　紅バラが、少し戸惑うように、鉄汰の方を見る。紅バラの見つめた先には、笑顔など欠片も見せていない、怖いとさえ思えるほどに冷たい表情の鉄汰がいた。
「僕は、君の茶番に付き合っていられるほど、暇じゃないんだよ」
「……っ」
　突き放すようなその言葉に、紅バラが少し目を見開く。
「世界の皆がこの僕、御伽界の英雄の助けを待っているんでねっ」
「別に誰も待っていないと思いますけどね」
「うるさいよっ！！そこっ！！」
　輝矢の茶々を、再び注意する鉄汰。
「礼は必ずする。だが、それ以上はない」
「……。」
　鉄汰が紅バラへ、再び冷たい瞳を向ける。その鉄汰の言葉を、深く俯いたまま聞く紅バラ。
「では僕はこれで、失礼するよっ」
　そう言うと、鉄汰はあっさりと紅バラに背を向け、客間から去っ

ていった。紅バラは俯いたまま、鉄汰を止めることもなく、ただその場に立ち尽くしていた。

「くぅ～っ！鉄汰のクセに紅バラちゃんを振るなんてぇ～っ…！」

「何か鉄汰がちょっとカッコ良く見えた…」

去っていく鉄汰を見送りながら、悔しげにハンカチを噛み締めるモンキと、いつもとはギャップのある格好良さを感じてしまうハチ。

「ホントホントぉ～超腹立たしいよねぇ～」

「えっ！？腹立たしくなるとこっ！？」

横のユキジの言葉に、ハチが少し驚く。

「まぁ良かったんじゃないですかぁ～あんなクマ、やめておいた方が身のためですよぉ～」

「紅バラっ…」

特に興味もなさそうに適当に言っている輝矢の横から、白雪が少し心配するように紅バラの方を振り向く。深く俯いたままの紅バラを、覗き込むように見る白雪。

「まっまぁ元気出っ…！」

「お姉さまっ…」

「えっ…？」

明るい笑みを作り、励まそうとした白雪が、紅バラの声に言葉を止める。

「わたくしっ…」

紅バラが両拳を強く握り締め、勢いよく顔を上げる。

「わたくしっ…！頑張りますわっ！！」

「はっ…？」

力強く言い放つ紅バラに、表情を引きつる白雪。

「試練あってこそ、燃え上がる恋の炎っ！わたくしっ！この恋を必ず実らせてみせますわっ！！」

「いやっ…だからぁ…そうじゃなくってぇ…」

一人燃える紅バラに、白雪が困ったように言葉を繋げる。

「そうと決まれば早速、準備をしなくてはっ！桔梗っ！萩っ！行き

ますわよっ！」
『はいっ！牛盛様っ！』
やる気満々に右手を突き上げる紅バラ。紅バラの言葉に、桔梗・萩兄弟は、疑問もなく、すぐさま頷く。
「ちょっ…！ちょっと待っ…！」
「待っていて下さいねぇぇぇ～～～っっ！！鉄汰様ぁぁぁぁぁ～～～っっ！！！」
「紅バっ…！！ああっ…」
桔梗・萩とともに勢いよくどこかへと走り去っていく紅バラに、止める声も届かず、白雪は伸ばした手を下ろして、深々と肩を落とした。
「これは少し…困ったことになりそうですねぇ」
「同感っ…」
輝矢の言葉に、白雪はしみじみと頷いた。

翌日。龍国・オトポリ本部。
「鉄汰隊長っ！」
「んっ？」
オトポリの隊員に呼び止められ、鉄汰が足を止めて振り返る。
「何だい？」
「はっ！実は隊長宛てに荷物が届いておりましてっ！」
「荷物っ？」
隊員の言葉に、少し眉をひそめる鉄汰。
「何の荷物だい？」
「そっ…それがですねぇ…」

「……？」
言葉を濁す隊員に、鉄汰は不思議そうに首を傾げた。

「……。」
大きく口を開け、呆然と立ち尽くす鉄汰。
「先程届いたのですがぁ～っ…」
そんな鉄汰に、気まずそうに声を掛ける隊員。
「どう…いたしましょうかっ…？」
「どうって…」
オトポリの正門前に、まるで塔のように高々と積み上げられた、数えきれないほどの深紅の薔薇。空に突き刺さりそうなほどの高さで積み上げられた薔薇は、オトポリの建物とそう変わらない高さである。数える気など毛頭起きないが、百億本は軽くあるであろう。
「鉄汰様ぁぁぁぁぁ～～～っっ！！」
薔薇タワーの後ろから、嬉々とした笑顔で鉄汰の前へと現れたのは、鉄汰が昨日、振ったばかりの女・紅バラであった。
「君はっ…」
紅バラを見て、鉄汰が少し顔をしかめる。
「気に入っていただけましたぁ～っ？わたくしの薔薇っ！」
薔薇タワーを指差し、得意げに微笑む紅バラ。
「ちなみにこの紅薔薇の花言葉はぁ～っ…」
紅バラが少し照れるように俯く。
「“死ぬほど恋こがれています”っ…きゃああ～～っ！わたくしってば、言ってしまいましたわぁ～っ！」
「……。」
顔を赤くして照れている紅バラの前で、鉄汰が徐々にその表情を無くしていく。
「……ぐ…」

「えっ？」
かすかに漏れた鉄汰の声に、紅バラがすぐさま顔を上げる。
「何でしょうかっ！？鉄汰さっ…！」
「今すぐ薔薇を持って、帰れぇぇぇぇぇっっ！！！」
オトポリの正門に、鉄汰の怒鳴り声が響き渡った。

その翌日。
「鉄汰様ぁぁ～っっ！！ご自宅のお風呂を、見るも鮮やかな薔薇風呂にしておきましたわぁぁ～っ！」
「……。」
鉄汰の自宅の風呂を、湯が入っているのかもわからないほどに紅い薔薇で埋め尽くす紅バラ。
「バスタブごと帰れぇぇぇぇぇっっっ！！！」
「きゃあああ～～っ！！」
自宅のバスタブを破壊してまで、鉄汰は紅バラを追い返した。

そのまた翌日。
「鉄汰様ぁぁぁ～っ！！今日は薔薇のケーキをお持ちしましたぁ～っ！」
「……。」
再び隊員に呼ばれ、正門へと赴いた鉄汰を待っていたのは、タワーのように高々と造り上げられた、深紅の薔薇をあしらったケーキであった。
「このケーキでっ、ついでに結婚式っ！なぁ～んてっ！きゃあああ～～っ！わたくしったらぁ～っ！」
「……っ」
一人考えを膨らませ、照れまくっている紅バラを見ることなく、

静かに背中に背負った鉄製のマサカリを構える鉄汰。
「ケーキっ！入刀っっ！！」
「きゃああ～っ！！それは二人の初めての共同作業ですのにぃぃぃ～～っ！」
二人の共同作業とすることなく、鉄汰は一人で、ケーキを横一文字に勢いよく切り裂いた。

そのまた翌日も、さらに翌日も、二人のこの複雑な恋愛模様は続いた。

第４３章　紅薔薇の恋　☆４

そして、一週間後。
「帰れぇぇぇぇぇぇぇっっっ！！！」
「きゃあああああ～～っっ！！」
今日の紅バラは、オトポリの中庭に勝手に薔薇園を作り、またもや鉄汰に怒鳴り返されている。オトポリの皆も慣れてきたのか、その光景を自然と眺めていた。

「よくやるわねぇ～もう一週間よっ？」
「本当に…。どちらもある意味、大したものです」
その二人のやり取りを、木陰で見つめる輝矢と白雪。ちなみにこの二人の鉄汰・紅バラ観察も、一週間目に突入している。
「よぉ～くあのオカッパに、あそこまで熱くなれるもんよねぇ～」
「まぁ趣味は人それぞれですからねぇ」
『ふわぁぁ～～っ…』
じっくりと観察しながら、分析するように言葉を交わす輝矢と白雪の後方で、大きく欠伸をするハチたち三匹と鈴白・芹の兄弟。
「なぁ～もう帰んねぇ？」
「そうですよぉ、白雪様ぁ～っ…」
輝矢や白雪とは違い、特に鉄汰と紅バラの動向には興味を持っていない様子のハチと鈴白が、それぞれ二人に訴えかける。
「あんまり虎国を空けておくのも良くありませんしぃ～」
「帰りたきゃ、貴方だけで帰ればっ？」
「じゃあ遠慮なくっ」
「ちょっと待ちなさいっ！！」
「ほらぁ～そう言うでしょ～？」
帰れと言うわりに帰ろうとすると呼び止める白雪に、鈴白が疲れ

たように肩を落とした。
「なぁ輝矢ぁ、俺も帰っ…」
「帰るのなら、私に帰りますのチュ～をしてから帰って下さいねっ」
「……。」
輝矢に笑顔でそう言われ、すぐさま大人しくその場に座り込むハチ。

「どうしてですのぉ～っ？鉄汰様っ」
『……っ』
聞こえてくる紅バラの声に、輝矢たちが一斉に振り向く。

「紅い薔薇はお嫌いですのぉっ？では早速、ピンク色の薔薇にっ…」
「そういう問題じゃないよっ！」
「えっ…？」
「あぁぁ～っ！もうっ！」
紅い薔薇をピンクの薔薇へと変えようとする紅バラに、勢いよく怒鳴りあげる鉄汰。鉄汰が何故、怒鳴っているのかさえわかっていない様子の紅バラに、鉄汰が苛立ちを全面に押し出して、頭を掻く。
「今日は仕事が立て込んでて忙しいんだっ！君の相手をしている暇はないんだよっ！」
「まぁっ、お忙しいんですのぉっ？」
煩わしそうに言い放つ鉄汰に対し、そっと身を案じるかのように目を細める紅バラ。
「ではわたくしも何かお手伝いをっ…！うっ…！！」
何か手伝いをしようと鉄汰に駆け寄った紅バラが、急にその動きを止める。

「リンゴちゃ～んっ！」
「パパっ」
「畑からリンゴ取って来たよぉ～っ！」
紅バラの視界に入ったのは、座黒がリンゴへと差し出している、真っ赤な林檎。

「結構だよ、君に手伝ってもらうことなんて何もっ…」
「赤っ…」
「えっ？」
断りを入れようとしていた鉄汰が、ポツリと何かを呟く紅バラに、顔を上げる。
「赤っ…赤っ…」
「紅バっ…」
「赤ぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっ！！！」

――――ボォォォォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

赤と激しく叫んだ紅バラの体が、白い煙に包まれていく。

「なっ…」
唖然とした表情で鉄汰が見つめる中、白い煙の中から姿を現したのは、一頭の茶色い猛牛であった。
「ふぅぅぅ～っ…」
少し俯いた猛牛が、態勢を整えるように息をつく。
「赤ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっ！！！」
「うわあああああっっ！！」
鉄汰を跳ね退け、猛牛が一直線に、真っ赤な林檎を抱えている座黒の元へと駆け込んでいく。

『へっ…？』

何やら近づいてくる大きな足音に気づき、少し引きつった表情で振り向く座黒とリンゴ。

「赤ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」

「ぎゃあああああああああああっっっ！！！」

「うっ…ウシっ！？」

猛然と突進してくる牛の姿に、座黒が勢いよく悲鳴をあげ、リンゴが大きく目を見開く。

「赤ぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」

近くの建物の壁、車など、立ち塞がる、あらゆるものを破壊して、猛牛は座黒とリンゴに迫る。

「リンゴちゃ～～～んっっ！！」

「なっ何なのよっ！？一体っ！！」

座黒がリンゴの背後に身を隠す中、向ってくる猛牛に勇ましく構えを取るリンゴ。

「リンゴっ！」

「……っ？輝矢っ？」

猛牛に対して構えを取る中、リンゴが呼ばれる名に振り返ると、立ち上がり、木陰から姿を見せている輝矢の姿があった。

「ウシの狙いは赤いものですっ！赤いものを消し去って下さいっ！」

「赤いものっ…？あっ…！」

輝矢の言葉に少し眉をひそめたリンゴが、何か思いついたかのように勢いよく振り返る。

「これねっ…！」

「ふえぇ～？」

リンゴの目に入るのは、目を丸くしている座黒の抱える真っ赤な

林檎。
「“龍蹴”っ…」
「へっ…？」
林檎を見つめながら瞳を鋭くし、ゆっくりと右足を振り上げるリンゴ。青い光を帯びていくリンゴの右足に、座黒が何となく嫌な予感を感じて、顔を引きつる。
「はあああああぁぁぁっっっ！！！」
「ぎゃあああああああああああああっっっ！！！」
――――パァァァァァァァァーーーンっっ！！――――
リンゴが勢いよく振り切った右足が、座黒の鼻を頭を掠めながら、座黒の抱えていた林檎に直撃する。リンゴの激しい蹴りを喰らい、座黒の腕の中で跡形もなく、無残に砕け散る林檎たち。

「あらっ？」
座黒の手の中の林檎が消えた途端、猛牛が可愛らしい声を出して、その場に立ち止まる。
――――ボォォォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――
猛牛が白い煙に包まれ、再び紅バラの姿へと戻る。
「いっ嫌ですわっ、わたくしったらまたっ…」
紅バラが少し恥じらうかのように、その口元を両手で覆う。

「ひぃっ…ひぃっ…ひぃっ…」
「大丈夫っ？パパっ」
猛牛をリンゴの蹴りの恐怖に、すっかり滅入ってしまった様子で、力なく地面に座り込み、少しおかしな呼吸をしている座黒に、リンゴが軽く声を掛ける。

「……っ」
顔をグッとしかめ、その場で勢いよく立ち上がる座黒。
「鉄汰ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」
座黒が珍しく怒りを露にして、少し離れたところに立っている鉄汰の名を叫ぶ。
「この猛牛はお前の知り合いかぁっ！？この不始末っ！どうしてくれるのだっ！！？」
激しく叫ぶ座黒の指差す先には、猛牛・紅バラにより破壊された、数々のもの。粉々に砕け散った壁や、もう見る影もない車など、それはもう悲惨な光景であった。どれだけの損害が出たかなど、一目瞭然である。
「反省文ごときでは済まされないぞっ！！」
「おっ…！お待ち下さいっ！！」
鉄汰を責めるような言葉を続ける座黒に、思わず口を挟んだのは、当の猛牛・紅バラであった。
「すっ…すべてわたくしが悪いのですっ…！鉄汰様はまったくっ…！」
「まったく関係ありません」

――――ガシャンっ！――――

「へっ…？」
自分の言おうとしていた言葉が聞こえ、金属音とともに、手首に何かが巻きつくような感覚を感じると、紅バラは思わず目を丸め、ゆっくりと自分の手首を見下した。
「……。」
紅バラの右手に絡まっているのは、鉄製のいわゆる手錠。紅バラに手錠を掛けているのは、冷静な表情を見せている鉄汰であった。
「てっ…鉄汰さっ…」
「器物破損の容疑で逮捕する」

「えっ…？」
猛烈なラブアタックの結果、紅バラは、鉄汰に逮捕された。

オトポリ・地下牢。
「はぁっ…」
重い鉄格子に阻まれた、薄暗い地下牢に入れられ、深々と溜息をつく紅バラ。
「うわぁ～んっ！捕まっちゃったよぉ～んっ！」
「どうしましょうっ！？どうしましょうっ！？牛盛様っ！」
紅バラとともに牢へ入れられ、身を寄せ合うように抱き合いながら、泣きそうな表情で叫ぶ桔梗と萩。
「食事は係の者に持ってこさせる」
牢の鍵を懐にしまいながら、鉄格子の向こうに立つ鉄汰は、冷たくそう言い放った。
「では」
「あっ…あのっ…！」
「……っ」
牢から去ろうとした鉄汰を、紅バラが必死に身を乗り出して、呼び止める。鉄汰は少し煩わしそうな表情で、紅バラの方を振り返った。
「もっ申し訳ありませんでしたっ…！」
紅バラが鉄汰へ、必死の瞳を向ける。
「わたくしのせいで鉄汰様のお立場までっ…！」
「別に君は気にする必要ない」

「えっ…？」
すぐさま返って来る声に、紅バラは少し首を傾げた。
「あっあのっ…」
「もう僕に関わらないでくれ」
戸惑うように見つめる紅バラに、冷たい瞳を向ける鉄汰。
「迷惑なんだよっ」
「……っ！」
放たれたその言葉に、紅バラは大きく目を見開いた。
「……っ」
鉄汰は少し表情を曇らせた後、すぐに紅バラに背を向け、牢から去っていった。
「……。」
今までの“帰れ”とは違う、もっと確かな拒絶の言葉に、紅バラは深く深く俯いていった。
『牛盛様っ…』
そんな紅バラを、桔梗と萩が、少し不安げな表情で見つめる。
「鉄汰…様っ…」
紅バラの力ない声が、静かな牢に、そっと響いた。

「ふぅっ…」
地下から地上へと昇って来た鉄汰が、廊下に出てすぐに深々と溜息をつく。
「いいのか？」
「……っ？」
横から聞こえてくる声に、振り向く鉄汰。
「兄さんっ…」

鉄汰が振り返ると、そこには人化した渋い姿の金汰が立っていた。
振り向いた鉄汰に、金汰が軽く笑みを向ける。
「何も牢に入れなくても良かったんじゃっ…」
「これ以上、付き纏われては困ります」
紅バラを擁護するように言う金汰に、鋭く答える鉄汰。いつもはナマリ合っているクマ兄弟なのだが、人化した姿同士だと、何とも真面目な空気である。
「だがなぁ鉄、彼女はお前のことを想ってっ…」
「優しくしたら、優しくした分だけ傷つける…」
鉄汰を宥めるように話す金汰であったが、鉄汰はその言葉を最後まで聞こうとはしなかった。
「これが彼女の為です」
「……っ」
その鉄汰の言葉に、少し驚いたように目を開く金汰。
「鬼人退治の任務がありますので、失礼します」
金汰に深々と頭を下げ、鉄汰はその場を去っていった。
「やれやれっ…」
鉄汰が去ると、金汰は薄く笑みを浮かべ、少し肩を落とした。
「ううっ…！」
金汰の瞳が、急に潤む。

――――ボォォォォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

「気付かぬうちにっ…すっかり大きくなっただぁなぁ～っ！」
熊化したと思ったら、先程までの渋さを一気になくして、激しく涙ぐむ金汰。
「さすが我が弟ぉぉぉ～～っっ！！鉄ぅぅぅぅ～～～っっ！！」
「あぁぁ～っ！うざったいっ！」
「……っ？」
どこからか聞こえてくる声に、金汰が涙ぐむのをやめ、目を丸く

した顔を上げる。
「かっぐやさんっ！！」
「どうもっ」
金汰が顔を上げると、金汰の前には笑顔を見せた輝矢が立っていた。その横には、少し苛立ったような表情を見せている白雪の姿もある。
「ねぇ～白雪様ぁ～帰ろうよぉ～」
芹が白雪のドレスの裾を引っ張り、そう訴える。
「そうですよ、紅バラ様の恋も無事、バッドエンドしたことですし」
「うっさいわねっ！帰りたきゃ勝手に帰りなさいって言ってるでしょっ！？」
『じゃあ遠慮なくっ』
「待ちなさいっ！！」
『はぁっ…』
遠慮なく帰ろうとした鈴白と芹が、またしても白雪に呼び止められ、もう反論することもなく、深々と溜息だけをついた。
「傷心の紅バラちゃんを励ましにっ…！」
「おいっ！」
「懲りない男だねぇ～」
こっそりと地下牢へ行こうとするモンキを、力強く止めるハチ。
そんなモンキを、宙を舞うユキジが呆れた表情で見下す。
「どうしてぇかっぐやさんがここにぃ～っ…」
「協力して下さいよ、金汰」
「へっ？」
輝矢の言葉に、金汰が目を丸くする。
「協力って…誰にだぁ？」
戸惑うような表情で、金汰が輝矢に問いかける。
「もちろんっ…」
輝矢がそっと笑みを浮かべる。
「“恋する乙女に”、ですよっ」

「はぁ～っ？」

輝矢のその言葉に、金汰は大きく首を傾けた。

第４４章　恋せよ乙女　★1

オトポリ本部・駐車場。
「車を出してくれるかいっ？」
「これはっ！鉄汰隊長っ！」
紅バラを牢へと入れ、金汰と別れた鉄汰は、駐車場で鉄汰がいつも使っている黒のリムジンの前に立っている、オトポリ隊員へ声を掛けた。振り返った隊員は、鉄汰を見るなり、慌てて敬礼をする。
「出られるのでありますかっ？」
「ああ、南西の村に鬼人が出たそうだ。運転を頼むよ」
「はっ！賢まりましたっ！」
鉄汰の言葉にしっかりと頷き、隊員が運転手席へと入り込み、車のエンジンをかける。そのエンジン音を聞きながら、助手席の扉を開く鉄汰。
「……っ」
助手席に乗り込もうとした鉄汰が、ふと動きを止める。
「……。」
顔を上げ、少し目を細める鉄汰。その視線の先には、地下牢のあるオトポリの中央塔があった。
「隊長っ？」
「あっ…」
運転手席の隊員に呼ばれ、鉄汰がハッとした表情で、中央塔から視線を逸らす。
「行こうっ」
「はっ！」
そう言って、鉄汰は助手席へと乗り込んでいった。

その頃。オトポリ中央塔・地下牢。
「はぁっ…」
地下牢には不釣り合いな、美しいドレスを纏った紅バラが、地下牢の壁に背をもたれかけるようにして座り込み、深々と溜息をついている。

――――迷惑なんだよっ…――――

「……っ」
思い出される鉄汰の言葉に、紅バラがそっと目を細める。
「わたくしが…間違っていたのでしょうか…」
『牛盛様っ…』
何とも切ない表情を見せる主に、身守る桔梗と萩も、どこか悲しげに目を細めた。
「鉄汰様…」

――――パァァァァァァァァーーーーンっ！――――

「えっ…？」
『うわぁぁっ！！』
その時、突如、地下牢の重たい鉄格子が、思いきりのいい音をたてて、桃色の花びらとなって散っていった。驚いて抱き合う桔梗と萩の前で、紅バラが目を丸める。
「さく…らっ…？」
床に落ちた桃色の花びらを1枚手に取り、そっと呟く紅バラ。
「無事ですか？」
「……っ？」
上から聞こえてくる声に、紅バラが顔を上げる。

「あっ…貴女はっ…」
「助けに来て差し上げましたよっ、紅バラっ」
桜の舞い散る中、鉄格子の無くなった牢の前に立っていたのは、穏やかな笑みを浮かべた輝矢であった。その横には、恐らく花力で鉄格子を桜に変えたのであろう、桜時の姿もある。輝矢の姿を見て、紅バラが大きく目を見開く。
「輝矢お姉さまぁぁっっ！！」
「その呼び方はやめて下さい…」
大きく声をあげる紅バラに、少しげっそりとした表情を見せる輝矢。
「さぁ、とっととこんな所、出ましょう」
「あっ、はっはいっ」
紅バラと桔梗・萩が立ち上がり、鉄格子の無くなった牢から軽々と脱出する。輝矢の後を追うようにして階段を昇り、紅バラがオトポリの廊下へと出る。
「金汰によると、鉄汰は南西の村に鬼人退治に出掛けたそうです」
「……っ」
輝矢から鉄汰の名が出ると、紅バラの表情が少し曇った。
「今、虎ンプが足を手配しているはずでっ…」
「輝矢お姉さまっ…」
「……っ？」
中央塔の出口へと向かおうとした輝矢が、紅バラの元気のない、弱々しい声に、足を止めて振り返った。輝矢が振り向くと、そこには今までで1番暗い表情の、紅バラがいた。
「何です…？」
輝矢が少し目を鋭くし、紅バラに静かに問いかける。
「わたくしは…」
少しの間を挟んだ後、ゆっくりと口を開く紅バラ。
――――鉄汰様ぁぁぁ～～～っっ！！――――

――――帰れぇぇぇぇぇっっ！！――――――

他のものなど一切見ずに、鉄汰だけを追いかけ続けた、この一週間。

「わたくしは…間違っていたのでしょうかっ…？」

「……っ」

その紅バラの言葉に、輝矢が少し眉をひそめる。

「間違っていたから…鉄汰様はっ…」

――――もう僕に関わらないでくれ…――――――

――――迷惑なんだよっ…――――――

「鉄汰様は…」

思い出される言葉に、紅バラが深く俯いていく。あんなに冷たい目を、あんなに冷たい言葉を向けられたのは、紅バラが間違っていたからなのだろうか。間違えなければ、鉄汰は笑いかけてくれたのだろうか。

「……。」

深く考え込む紅バラを、輝矢がまっすぐに見つめる。

「私は…“間違っている”とも“間違っていない”とも、言いませんっ…」

「えっ…？」

その輝矢の言葉に、紅バラが少し戸惑った表情で顔を上げる。

「それは私が決めることではありませんし、今、ここでどちらかと決められるようなことでもありません」

「……っ」

輝矢のまっすぐな瞳に見られ、紅バラがまた少し俯く。

「そ、そう…ですよね…」

「ですが…」

「……っ？」
言葉を付け加える輝矢に、再び顔を上げる紅バラ。
「自分の信じた道を突き進むことを…私は間違っているとは言いませんよっ？」
「……っ！」
そう言って優しく微笑みかける輝矢に、紅バラが大きく目を見開き、思わずその口元を右手で覆う。
「紅バラ…」
「うっ…」
少し目を潤ませ、下を向いた紅バラの口から、かすかな声が漏れる。
「……。」
そんな紅バラの姿に少し目を細め、紅バラへと手を伸ばそうとする輝矢。
「紅バっ…」
「輝矢お姉さまぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」
「うぅわっ」
勢いよく紅バラに抱きつかれ、輝矢が露骨に顔を引きつる。
「何て素敵なお言葉ですのぉぉっっ！！もう一生付いていきますわぁぁぁぁっっ！！」
「付いて来なくていいです…」
感極まった様子で叫ぶ紅バラに抱きつかれながら、輝矢が引きつった表情のまま、こっそりと呟く。
「輝矢お姉さまっ！」
紅バラが輝矢から離れ、輝矢に、先程までとは打って変わったような迷いなき瞳を向ける。
「ですから、その呼び方はっ…」
「わたくしっ…！突き進みますわっ！」
輝矢の言葉を遮り、紅バラが決意を込めて、そう叫ぶ。
「自分を信じた道をっ、このまま、まっすぐにっ…！」

「……っ」
一切の曇りのない、晴れ晴れとした笑顔を見せる紅バラに、輝矢も思わず笑みをこぼさずにはいられなかった。
「ええっ」
輝矢が紅バラにしっかりと頷きかける。
「そうと決まったら早速っ…！」
「えっ…」

――――ボォォォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

輝矢が少し表情を曇らせる中、紅バラが白い煙に包まれていく。

「行きますわよっ！桔梗っ！萩っ！」
白い煙の中から出てきた茶色の猛牛が、桔梗と萩に力強く言い放つ。
「おっりゃあああああああああああああああっっっ！！！」
『ぎゃあああああああああああああああああっっっ！！！』
廊下を歩くオトポリ隊員たちを吹き飛ばして、猛ダッシュで中央塔の出口へと向かっていく猛牛・紅バラ。紅バラに吹き飛ばされた隊員たちの悲鳴が、廊下に響き渡る。
『ああっ！待って下さいよぉ～っ！牛盛様ぁぁぁ～～っ！！』

「……。」
慌てた様子で猛牛を追いかけていく桔梗と萩を見送りながら、輝矢は少し呆れたように肩を落とした。
「鉄汰の反省文が増えそうですねぇ」
「本当に良かったのかぁ？」
やれやれといった表情で呟いた輝矢に、横に立っていた桜時が、少し不安げな表情を見せながら声を掛ける。
「こんなマネしちまって、後で座黒とかに何、言われるか…」

「仕方ありませんよ」
「へっ？」
すぐに返って来る答えに、桜時が少し戸惑うように振り向く。
「女はいつだって、“恋する乙女”の味方ですからっ」
輝矢が明るい笑顔を桜時に向け、そう言い放つ。
「そういうもんなのかぁ～？」
「そういうものですよっ」
まだ納得していない様子で首を傾げる桜時に、さらりと答える輝矢。
「さてとっ、第二段階といきましょうかっ」
そう言うと、輝矢はどこか不適に微笑んだ。

オトポリ本部・中庭。
「はぁ～っ、パトロールかぁ。かったりぃなぁ～」
全身からダルさを出して、そう言い放つのは、目つきの悪い男・ゴン。どう見ても悪人面だが、これでも一応、御伽界の平和を守るオトポリ隊員である。中庭に止まる黒のオープンカーの助手席に座り、今からパトロールへと出掛けるところであった。
「ゴンさんにとって、かったるくないことなんてあるんスかぁ～？」
「えぇっ？うぅ～んっ…」
運転席の羊スケに問いかけられ、ゴンが真剣に首を捻る。
「料理っ…？」
「うわぁ～っ、聞かなきゃ良かったっスっ」
「どういう意味だっ！！おらぁぁっっ！！」
あからさまに気持ち悪がっている羊スケに、ゴンが勢いよく怒鳴りあげる。

「あぁ〜っ、クッソ面倒臭せぇが、とっとと行くかぁ〜っ」
「ちょっと失礼っ」
「あっ？どわあああああああっっ！！」
聞こえてきた声に振り向くと、ゴンはどこからか伸びてきた手に勢いよく引っ張られ、オープンカーの助手席から無理やり、引っ張り下ろされた。
「うわあああああっ！」
羊スケも同じように運転席から、引っ張り下ろされている。
「何しやがっ…！って、てめぇーはっ…！！」
「車っ、借りるわよっ」
助手席から下ろされ、地面に倒れ込んでいたゴンが顔を上げると、そこにはゴンを見下しながら助手席へと乗り込んでいく白雪の姿があった。
「虎国の姫じゃねぇーかっ！虎昌とかいうっ！」
「下の名前で呼ばないで頂戴っ！気に入ってないんだからっ！」
驚いた様子で白雪の名を口にするゴンに、白雪が睨みつけるような視線を向ける。
「あっ！あなたはっ…！」
「犬国の時はお世話になりました。どこかの誰かさんっ」
運転席を引き摺り下ろされた羊スケの代わりに、運転席へと乗り込むのは、羊スケに爽やかな笑顔を向ける鈴白。後部座席には芹の姿もある。
「おいっ！てめぇっ！何のつもっ…！」
「危ないから車から離れた方がいいわよぉ？」
「ああっ？」
白雪を問い詰めようと助手席に駆け寄ったゴンが、忠告するかのように言う白雪に、眉をひそめる。
「何のことっ…！」
「ゴゴゴゴゴゴゴゴンさんっ！！」
「あっ？」

その忠告の意味がわからず、さらに白雪に問いかけようとしたゴンが、妙に焦ったような羊スケの声に、顔を上げる。
「んだよっ？」
「ううううううウシっ…ウシっ…！」
「ウシぃ～っ？」
羊スケの言葉にさらに眉をひそめ、ゴンがゆっくりと羊スケの指差す方を振り向く。
「……っ！」
振り向いた途端、大きく開かれるゴンの瞳。
「ウシぃいいいいいいいいっっっ！！！」
「おっらあああああああああああああっっっ！！！」
叫び声を響かせるゴンの視線の先には、こちらへとまっすぐに突進してくる一頭の猛牛。その背には桔梗と萩と見られる人間を乗せている。
「猛牛ジャァァァァァーーーンプっっ！！！」
「どわあああああああああっっ！！」
「うわあああああああっっ！！」
オープンカーの後部座席目がけて、猛牛が勢いそのままに高々と跳び上がる。降下してくる猛牛に危機を感じ、慌ててオープンカーから離れるゴンと羊スケ。
――――ドッスゥゥゥゥゥゥゥゥーーーーンっっ！！――――
激しい衝撃音をたて、車を大きく揺らしながら、猛牛が後部座席へと乗り込む。
「白雪お姉さまっ…！」

「何も言わなくてもわかってるわよっ」
名を呼ぶ猛牛に、白雪が頼りがいのある素敵な笑みを見せる。
「これで役所は揃ったわっ！」
「それを言うなら“役者は揃った”です、白雪様っ」
「わっわかってるわよっ！」
自信満々に言い放った白雪が、訂正してくる鈴白に、少し恥ずかしそうに顔をしかめる。
「とっとと出発なさいっ！鈴白っ！」
「はいはい」
白雪の指示に頷き、紅バラを乗せたオープンカーを、走らせていく鈴白。白雪・紅バラ一行を乗せた、ゴンたちのオープンカーが、あっという間にオトポリの中庭を抜け、見えなくなっていく。

「なっ…何だったんスかねっ…？」
「さぁなっ…」
取り残されたゴンと羊スケは、唖然とした表情で呟き合った。

第４４章　恋せよ乙女　★2

龍国・南西の村。

「グガアアアアアアアアっっ！！」
『きゃあああああああああああっっ！！』
『うわあああああああああああっっ！！』
小さな村の真ん中で、激しい咆哮をあげる一匹の緑鬼。周囲の家から飛び出してきた村人が、辺りを逃げ惑っている。

――――キキィィィィィ～～～っっ！！――――

『……っ？』
そこへやって来る、村の景色には何とも似つかない黒色のリムジン。村人たちが、戸惑うようにリムジンの方を振り返る。
「あっあれは…まさかっ…！」
「オトポリのっ…！」
「助けが来たんだわっ…！」
リムジンがオトポリのものだと気付くと、村人たちの表情は一気に明るくなり、神でも見たかのように目を輝かせた。
『あっ…！』
開くドアに、村人たちが息を呑む。

「ふわぁぁ～はっはっはっはっ！！待たせたねぇぇっっ！！」

『……。』
リムジンの中から出てきた、高笑いのオカッパ男に、目を輝かせていた村人たちの動きが少し止まる。
「御伽界の英雄っ！この正刈鉄汰が来たからには、もう思いっきり

安心してくれたまえぇっ！！」
どこにそんなに自信があるのかというほど、誇らしげに言い放つオカッパ男・鉄汰。
「ふわぁぁ～っはっはっはっはっ！！」
「あれが本当にオトポリかぁ～？」
「制服着てるし…そうなんじゃない…？」
「まぁどんなでも、鬼人さえ倒してくれればいいよっ」
高笑いを続ける鉄汰に、不審を募らせる村人であったが、この鬼人がすぐそこまで迫った危機では、目の前のオカッパ男を信じる以外に道はなかった。
『頑張ってぇぇぇ～～っっ！！正刈さぁぁぁぁ～～～んっっ！！』
「任せておいてくれたまえっ！」
妥協して声援を送る村人たちに、得意げに右手を上げる鉄汰。
「さぁ～てっ…」
「グガアアアアアアアっっ！！」
敵であることを認識したのか、鉄汰の元へとやって来る緑鬼。そんな緑鬼を見て、細い瞳をさらに細めながら、鉄汰がゆっくりと背中に背負っていたマサカリを構える。
「鬼退治といこうかっ…！」
「ストップ」
「だあああああああああああっっっ！！！」
マサカリを構え、緑鬼の方へと駆け込んで行こうとした鉄汰が、横から出てきた足に引っ掛かり、顔面から勢いよく地面へと倒れ込む。
「誰っ…！君はっ…！！」
「どうも」
鉄汰が少し砂のついた顔を上げると、そこには平静な表情の輝矢が立っていた。鉄汰の足を引っ掛けたのは、間違いなくこの女であろう、と鉄汰は確信する。
「一体全体、何してくれちゃってるんだよっ！！？君はっ！！」

「すみません、足が長くて」
「白々しいことを言うなっ！！」
悪びれもなく答える輝矢に、鉄汰が立ち上がりながら怒鳴り続ける。
「まったく君という人間は、いつもいつも僕の邪魔ばっかりっ…！」
「ちょっと待っていて下さい」
「はぁっ？」
怒っていた鉄汰が、輝矢の言葉に顔をしかめる。
「もうすぐ来るはずですから」
「はぁぁぁぁ～～っっ！？」
鉄汰のお世辞にも整っているとは言えない顔が、さらに歪んでいく。
「何を素っ惚けたことをっ！待てるわけないだろうっ！？」

「グガアアアアアアアっっ！！」

「この状況でっ！！」
話している輝矢と鉄汰にまっすぐに駆け込んでくる緑鬼を指差しながら、鉄汰が熱弁する。ここで待てば、確実に二人とも緑鬼にヤラれてしまうだろう。
「やれやれ…」
「……っ？」
鉄汰の言葉を受け、少し疲れたように肩を落とした輝矢が、ゆっくりと向かってくる緑鬼の方を振り返る。
「“水月”」

――――バァァァァァァァーーーーンっ！！――――

「ギャアアアアアアアアアアアアっっっっ！！！」
輝矢が前触れもなく、緑鬼へと水の刃を放つと、緑鬼は全身を斬

り裂かれ、激しい叫び声をあげて、勢いよく吹き飛んでいった。
「待てと言っているんですよっ…」
「鬼より鬼だなっ…」
倒れ込んだ緑鬼に、刺し殺されそうなほどに鋭い瞳を向けている輝矢に、鉄汰が少し顔をしかめてこっそりと呟く。
「だいたい何をそんなに待っ…」
「竹取輝矢ぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」
「……っ？」
「来ましたねっ」
聞こえてくる大きな声に、鉄汰が戸惑うように振り返り、輝矢がそっと笑みを浮かべる。
「あれはっ…」
少し眉をひそめる鉄汰。

「連れて来たわよぉぉぉ～～っっ！！」
勢いよく村へと入って来る黒のオープンカー。村人たちが轢かれそうになるが、そんなこともお構いなしに、オープンカーが輝矢と鉄汰のところまでやって来る。
「これで役所は揃ったわよっ！」
「だから役者ですって、白雪様っ」
「わっわかってるわよっ！うっさいわねっ！」
オープンカーの助手席で立ち上がる白雪と、運転席に座る鈴白が賑やかに言葉を交わす。
「遅いです、虎ンプ」
「虎昌よっ！気に入ってないけどっ！これでも百キロオーバーで来たんだからっ！」
「……。」
輝矢と白雪が険悪に睨み合っている中、鉄汰がオープンカーの後部座席に目をやる。

「あっ…」
「……っ」
後部座席に控えめに座っている紅バラが、鉄汰の方を見て思わず声を漏らす。そんな紅バラと目が合うと、鉄汰はすぐさま表情をしかめ、目を逸らした。
「君っ…何を企んでいるっ…？」
「別にっ」
鋭く問いかける鉄汰に、不適に微笑んで見せる輝矢。
「あっあのっ、鉄汰様っ」
後部座席で立ち上がり、鉄汰へ少し不安げな瞳を向ける紅バラ。
「先程は大変、申し訳っ…」
「ちょっとごめんなさぁ～いっ」
「えっ…？」
鉄汰に改めて謝罪をしようとした紅バラの腕を、助手席で立ち上がった白雪が力強く握り締める。
「すぅぅぅぅ～～～っ……」
「しっ白雪お姉さまっ？」
ゆっくりと息を吸う白雪に、紅バラが戸惑いの表情を向ける。
「一体、何をっ…」
「おっりゃあああああああああああっっっ！！！」
「へっ…！？きゃあああああああああああっっっ！！！」
『牛盛様っ！！』
紅バラの腕を掴んだ白雪が、力の入った声をあげ、勢いよく紅バラを投げ飛ばす。悲鳴をあげて吹き飛んでいく紅バラに、思わず身を乗り出す桔梗と萩。
「何やってくれちゃってるんだよぉ～んっ！！白雪様ぁぁぁっっ！！」
「気でも狂ったんですかぁっ！？」
「白雪様の気が狂ってるのは、前からです」
「そうそうぅ～」

「うっさいわよっ！！貴方達っ！！」
主人を投げ飛ばした白雪を責め立てる桔梗と萩に、鈴白と芹が言い返すが、特にフォローにはなっておらず、結局、白雪が2人に怒鳴り声をあげる。

「あああぁぁぁぁぁ～～れぇぇぇぇぇ～～～っっ！！ううっ…！」
やがて背中からどこかへと着地する紅バラ。何かの上に落ちたようで、背中にそう衝撃は走らなかった。
「グガっ…」
「えっ…？」
すぐ近くから聞こえてくる声に、倒れ込んでいた紅バラが目を丸くして、ゆっくりと振り返る。
「グガっ」
「……。」
振り返った先にあるのは、紅バラの体よりも大きな鬼の顔。ギョロっとした赤い目を、紅バラの目が合う。紅バラの落ちたそこは、先程の輝矢の攻撃で倒れ込んでいた緑鬼の、肩の上であった。
「グガアアアアアアアアアっっ！！」
「きゃあああああああああああああっっっ！！！」
『牛盛様ぁぁぁぁぁっっ！！』
右手で紅バラの体を掴み、咆哮をあげて立ち上がる緑鬼。危機迫った悲鳴をあげる紅バラに、桔梗と萩の表情がさらに厳しいものとなる。

「何やってんだよっ！！お前はっ！！」
紅バラを緑鬼の方に吹き飛ばした白雪に、思わず怒鳴りあげるハチ。輝矢と一緒に来ていたようである。その横にはもちろん、モンキとユキジの姿もあった。
「あぁ～っ！俺の紅バラちゃんがぁ～っ！」

「敵に見す見す人質あげちゃうなんてぇ～最悪だねぇ～っ」
「いいえっ」
『えっ？』
焦った様子もなく、そっと笑みを零す白雪に、三匹が首を傾げる。
「すべて計算通りよっ、竹取輝矢っ！」
「ええっ」
輝矢の名を呼びながら、助手席から輝矢の横へと飛び下りる白雪。
輝矢も白雪の呼びかけに頷き、二人が鋭い表情となって、立ち上がった緑鬼の方を向き直る。
「“月器・三日月”」
「“雪剣”っ」
輝矢がピアスを弾き、月器を目覚めさせ、白雪が右手を氷で覆わせる。三日月と雪剣をそれぞれ構え、臨戦態勢を取る輝矢と白雪。
『おおぉぉ～っ』
いつもは争ってばかりの二人が、自然と肩を並べたので、三匹たちは思わず驚きの声をあげた。
「いきますよっ、虎ンプ」
「気に入ってないけど虎昌よっ！ええっ！」
お決まりの言い合いをして、二人が同時に紅バラを捕えている緑鬼の方へと飛び出していく。

「加勢すっか？」
「平気ちゃう～？相手は緑鬼やし」
「そうそっ、輝矢と白雪だったら一瞬で終わるよっ」
「それもそうだな」
ハチの問いかけに、やる気なく答えるモンキとユキジ。しかし二匹の言葉は間違ってはおらず、ハチもいくら人質を取られているとはいえ、輝矢と白雪が緑鬼に苦戦するとも思えなかったので、素直に頷いた。
「まぁ一休みでもしてっ…」

「きゃあああああああああっ！！」
『へっ？』
聞こえてくるとは思っていなかった悲鳴に、三匹が少し焦ったように振り返る。

「うっ…ううっ…！」
三匹が振り返ると、そこには、雪剣を砕かれ、地面に力なく座り込んでいる白雪の姿があった。

「やっやられたんかっ！？」
「見てなかったぁ～っ」
「んな強えぇーのかっ！？あの緑鬼っ…！」
少し表情に緊張感を走らせて、三匹が白雪を倒したと思われる緑鬼の方を見る。

「“月器っ…」
すると、緑鬼には、三日月を構えた輝矢が、今まさに攻撃しようとしているところであった。
「三日月”っ…！」
「グっ…！」
鋭く三日月を振り下ろしてくる輝矢に、緑鬼が少し怯んだ表情を見せながら、紅バラを掴んでいない方の手を三日月の方へと突き出す。
「……っ！」
輝矢が緑鬼へ向けて、三日月を振り下ろす。

――――チョンっ…！――――

「ガっ…？」
虫に刺されたよりも軽い感覚しか走らぬ肌に、思わず目を丸くす

る緑鬼。
「あああああああっっ！！」
「グガっ…？」
緑鬼の腕に少し三日月を押し当てただけの輝矢が、緑鬼は何もしていないというのに、勝手に吹き飛ばされていく。その光景に、益々戸惑う緑鬼。
「うっ…ううっ…」
「竹取輝矢っ…！」
勝手に吹き飛ばされた輝矢が、どこか苦しげな表情でゆっくりと起き上がる。そんな輝矢の名を呼びながら、少し輝矢の方へと身を乗り出す、先程倒されていた白雪。

「なっ…なんて強いんでしょうっ…」
「わっ…私たちでは到底、敵わないわっ…！」
『……。』
その思いきり棒読みな言葉を発する輝矢と白雪に、見つめていた三匹と鈴白・芹兄弟が、一気に呆気にとられた表情となる。
「バカか…？アイツら…」
「もう勝手にやらせておきましょう」
顔を引きつるハチに、見切りをつけたように答える鈴白。

「おっ…お姉さまがたっ…！！」
緑鬼の右手に捕えられたままの紅バラは、輝矢と白雪の演技に気づく様子もなく、心配するように倒れた二人を見下ろしている。

「わっ私たちで倒せる敵ではないわっ…！」
「だっ…誰かっ…私たちよりも強い者をっ…」
嘘臭さ全開の棒読みセリフを続けながら、輝矢と白雪が同時に振り返る。
『あっ！いたっ！私たちよりも強い者っ！その名も鉄汰っ！』

「何っ…？」
声を揃える輝矢と白雪に、眉をひそめる鉄汰。
「さぁっ、私たちの代わりに鬼人をっ…」
「紅バラを助けてっ…！お願いっ…！」
二人が目を輝かせ、鉄汰に必死に願う。

「誰がんなベタ過ぎる作戦に引っ掛かっ…」
「ふわぁぁ～～っはっはっはっ！！任せておいてくれたまえっ！！」
「掛かるのかよっっ！！」
やる気満々で笑い声をあげる鉄汰に、思わず勢いよく突っ込んでしまうハチ。輝矢と白雪のわかりやす過ぎる演技にも、どうやら鉄汰は気付いていないようである。
「愚かな君たちにも、ついに僕の偉大さがわかったようだねぇっ！！ふわぁ～っはっはっはっはっ！！」
「えっええ…そうですね…」
「おっお願いするわっ…鉄汰さんっ…」
得意げに言い放つ鉄汰に、作り上げたその笑みを少し引きつりながら、何とか言葉を繋げる輝矢と白雪。腹の底では、鉄汰を吹き飛ばしたいに違いない。
「ではっ、いくとしようかっ」
楽しそうに笑みを浮かべ、いつもよりも大きな動作でマサカリを構える鉄汰。

第４４章　恋せよ乙女　★3

「さぁっ！覚悟するといいっ！鬼人っ！」
「鉄汰様っ…なんて素敵っ…」
そう言い放つ鉄汰に、緑鬼の手の中にいる紅バラがうっとりとした表情を見せる。
「喰らうがいいっ！“アイアン・スイっ…！」
「グガァァァァァーーーっっ……」
「……っ？」
マサカリを振り上げた鉄汰が、突然、低く響く唸り声をあげる緑鬼に、眉をひそめて手を止める。

「何っ…」

「グガアアアアアアアアアアアアアアっっっ！！！」

「何っ…！？」

――――――バァァァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――――

『うっ…！！』
大きく両手を開き、顔を上げた緑鬼が、天へと向かって激しく叫び声をあげた途端、緑鬼の全身から、眩いばかりの光が放たれた。
あまりの強い光に、思わず身を屈める鉄汰や輝矢たち。やがて光が止み、鉄汰たちが皆、ゆっくりと目を開く。
『あっ…！』

大きく目を開き、思わず声を揃える皆。

「グガァァァァァァァァーーーっっ……」

皆が目を開いたその先には、金色に輝く角を二本持ち、鋭い牙と爪を光らせた、真っ赤な皮膚の鬼が立っていた。

「赤鬼っ…」

「また形態変化かっ」

色を変えた鬼に、特に焦りの表情は見せずに、鉄汰が再びマサカリを構える。

「だが赤鬼になったところでっ…！」

「赤っ…」

「んっ？」

マサカリを振りかぶった鉄汰が、ポツリと聞こえてくる、どこか聞き覚えのある言葉と声に、またしてもマサカリを止める。

「赤っ…赤っ…」

「グガっ…？」

真っ赤な皮膚へと姿を変えた鬼をまっすぐに見ながら、ただひたすらに“赤”という言葉を呟く、赤鬼の右手に捕えられたままの紅バラ。

「しまったっ…！」

「マズいっ…！」

この戦いの中で一番、焦った表情を見せる輝矢と白雪。

「赤ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっっ！！――――

「グガっ…！？」
激しくそう叫び、白い煙へと包まれていく紅バラ。それに驚いたのか、赤鬼が思わず紅バラから手を離す。白い煙に包まれたまま空中に解放される紅バラ。やがて、その煙が晴れていく。

「ふぅぅぅぅぅぅぅ〜〜っっ……」
白い煙が晴れると、そこには一頭の猛牛の姿があった。地面へと着地した猛牛が、大きく息をしながら、少し前足を前後に振り、態勢を整える。

「赤ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」
「グギっ…！！？」
猛ダッシュで突っ込んでくる猛牛に、焦った表情を見せる赤鬼。
「猛牛っ…ジャァァァァァァァーーーンプっっ！！」
ダッシュの勢いそのままに、猛牛・紅バラが勢いよく跳び上げる。
「おっらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」
「グガっ…！」
赤鬼の顔面へと、まっすぐに突っ込んでいく紅バラ。

――――バッコォォォォォォォォォォォーーーーーンっ！！――――

「グギャアアアアアアアアアっっっ！！！」
紅バラが赤鬼の下顎へと勢いよく体当たりをすると、赤鬼は何とも痛そうに顔をあげ、声を出しながら、ゆっくりと後方へと倒れていく。
「グっ…ガっ…ガっ…」
地面へと力なく倒れ落ちる赤鬼。

「あっちゃ〜っ…」
「はぁっ…」

赤鬼を見事にノックアウトし、地面へと着地する紅バラを見つめながら、白雪が頭を抱え、輝矢は深々と肩を落とした。

「ふぅっ…」

――――ボォォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

地面に降り立ち、一息ついた猛牛が、白い煙に包まれて、元の紅バラの姿へと戻る。

「あっ！鉄汰さっ…！」

「すっごぉぉぉぉぉぉぉーーーいっっ！！」

「人質にされてたのに、そこから鬼人を倒しちゃうなんてぇぇぇ～～っっ！！」

「可愛らしいお嬢ちゃんなのに、何て強さだぁぁぁぁ～～～っっ！！」

「えっ…？」

鉄汰の方を振り返ろうとした紅バラが、紅バラの雄姿に感動した様子の村人たちに、一気に囲まれる。目を輝かせた村人たちは、鬼から自分たちを救った紅バラを、皆で称えた。

「あっあのっ…」

村人たちに囲まれ、戸惑った表情を見せる紅バラ。

「握手して下さぁぁぁぁ～～いっ！！」

「私も私もぉぉぉぉ～～～っっ！！」

「サインくれぇぇ～～っっ！！」

「あっ、えとっ…はいっ！えへへへっ」

最初は戸惑っていた紅バラであったが、握手やサインを求められ、尊敬の眼差しを送られ、まるで英雄にでもなったかのような気分となり、徐々に笑顔となっていく。

「お強いんですねぇぇぇ～～っ！」
「そんなぁ～っ！まだまだですよぉっ！」
「貴女こそ、御伽界の英雄だわぁっ！」
「そんなぁ～っ！英雄だなんてぇ～っ！」
村人たちの言葉に謙遜した答えを返す紅バラであるが、その表情はかなり嬉しそうである。

「……。」
そんな紅バラの様子を見て、固まる男が一人。マサカリを構えたまま、呆然と立ち尽くしている鉄汰であった。鬼人を倒し、英雄となる気満々だった鉄汰としては、紅バラに手柄を横取りされた形となったのだ。無駄に高いプライドを、かなり傷つけられたことだろう。

「しまったわねぇ～せぇ～っかく私の素晴らしい作戦だったのにっ」
「ええ、形態変化のお陰で私の素晴らしい作戦がブチ壊しです」
「ちょっと待ちなさいよっ！素晴しい作戦を考えたのは私でしょっ!?」
「いいえ、素晴らしい作戦を考えたのは、私です」
「何ですってぇ～っ…!?」
言葉を交わしていた輝矢と白雪が、次第に睨み合い、険悪な空気を醸し出し始める。
「私よっ!!」
「私ですっ」
「どっちにしろ、素晴らしい作戦ではねぇーぞっ…」
一歩も譲らずに言い合う輝矢と白雪を見ながら、ハチがこっそりと呟く。

『またいつでも来て下さいねぇ～っ!!』

「はぁ～いっ」
村人たちが笑顔で手を振りながら、紅バラから離れ、自分たちの家の方へと戻っていく。
「ふぅっ」
村人に解放され、少し肩を落とす紅バラ。しかしその表情は、清々しいまでの笑顔。
「あっ、鉄汰様っ」
「……。」
ふと振り向いた紅バラが、まだマサカリを持って立ち尽くしている鉄汰の元へと駆け寄っていく。
「先程はありがとうございましたっ！わたくしを助けて下さろうとしている鉄汰様の姿っ…この世で一番素敵でっ…！」
「やはり君とは合わないらしい…」
「えっ…？」
頬を赤く染め、先程の鉄汰がいかに格好良かったかを語ろうとしていた紅バラが、小さく落とされた鉄汰の言葉に、少し首を傾げた。
「鉄汰さっ…」
「言っただろう？もう僕に関わらないでくれとっ」
顔を上げた鉄汰が、紅バラに冷たい瞳を向ける。
「迷惑だとっ…何度言えばわかるっ…！」
「……っ！」
怒りに少し震えた鉄汰の声に、紅バラが大きく目を見開く。
「あっ…」
その冷たい瞳と目を合わせておくことがどうにも辛く、紅バラは思わず下を向いた。
「もっ申し訳っ…！」
「もういいよ。君が僕の前から消えないなら、僕が君の前から消え

る」
「あっ…！」
そう言って紅バラに背を向ける鉄汰。紅バラが顔を上げ、思わずその背に手を伸ばす。
「あっ…」
しかし紅バラは、伸ばしたその手で鉄汰の背に触れようとはせず、悲しげな表情で唇を噛み締めた後、ゆっくりと下ろした。
「実に不快な任務だった…」
「……。」
そう言って背にマサカリを戻し、鉄汰がリムジンの方へと歩いていく。少しずつ遠ざかっていく鉄汰の背中を、静かに見つめる紅バラ。

「グっ…グガっ…」
「……っ？」
鉄汰を見送っていた紅バラが、かすかに聞こえてくる声に、少し眉をひそめて振り向く。
「“鬼っ…爪”っ…！」
「……っ！」
倒れ込んでいる赤鬼が、苦しげに右手だけを上げ、背を向けて遠ざかっていく鉄汰へと、その五本の爪を投げ放つ。鉄汰へと飛んでいく鬼爪に気づき、大きく目を見開く紅バラ。

「危ないっ…！！」
紅バラが思わずその場を駆け出していく。

「鉄汰様っ…！！」
「えっ…？」

その声に、鉄汰が振り返った、その時。

――――ブシュっ……！！――――

「ううっ…！」

「……っ！！！」

鉄汰へと向かっていた鬼爪が、鉄汰の前へと駆け込んでいった紅バラの体に突き刺さった。真っ赤な血を流して倒れていく紅バラに、鉄汰が大きく目を見開く。

『紅バラっっ！！』

『牛盛様ぁぁぁぁぁっっ！！』

思わず身を乗り出す、輝矢たち、そして桔梗・萩。

「クっ…！」

振り向いた鉄汰が、必死に両手を伸ばして、倒れ込んでいく紅バラの体を受けとめる。紅バラを両手で支えながら、その場へとしゃがみ込む鉄汰。

「紅バラっ…！！」

「鉄汰…様っ…？」

顔を覗き込み、名を呼ぶ鉄汰の声に反応し、紅バラがゆっくりと顔を上げる。

「ご…無事で…良かったっ…」

「馬鹿なことをっ…！」

そっと微笑む紅バラに、鉄汰が思わず声を荒げる。

「酷いことばかり言ったというのにっ…どうして僕を庇ったりなど

っ…！」
「……っ」
鉄汰の言葉に、紅バラが少し目を細める。
「鉄…汰様っ…これ…をっ…」
「……っ？」
少し血に染まった手で紅バラがドレスのポケットを探ると、そこから一本の紅い薔薇が出てきた。紅バラが紅い薔薇を、鉄汰へと差し出す。
「こんな時に何をっ…！」
「“死ぬほど…恋こがれています”…」
「……っ」
紅バラの言葉に、鉄汰が少し目を開く。

――――紅薔薇の花言葉はぁ～“死ぬほど恋こがれています”…きゃあ～～っ！わたくしってば、言ってしまいましたわぁ～っ！――――

それは、紅薔薇の花言葉。

「鉄汰様っ…」
紅バラがまっすぐに鉄汰を見つめる。
「受け取って…いただけますかっ…？」
「……っ」
微笑む紅バラに、鉄汰が強く唇を噛み締める。
「君には負けたよっ…」
鉄汰はそう呟いて優しく微笑み、紅バラの差し出した紅い薔薇を、紅バラの手ごと、しっかりと掴んだ。
「嬉し…いっ…」
「紅バラっ？」
そう言ってゆっくりと瞳を閉じる紅バラに、鉄汰が浮かべたばか

りの笑顔を消す。
「紅バラっ…？」
鉄汰の呼びかけに、紅バラは少しも動かない。
「紅バラっ…紅バラぁぁぁぁぁぁっっ！！！」
「はいっ」
――――プスっ！――――
「へっ？」
紅バラがもう二度と動かないものかと思い、思わず大声で紅バラの名を呼んだ鉄汰であったが、横からやって来た由雉が、涼しい表情で紅バラの腕に青い羽根を突き刺す。
「あらぁっ？」
「へっ？」
次の瞬間、大きな瞳を、パッチリと開く紅バラ。目を丸くしていた鉄汰が、さらに間の抜けた表情となる。
「凄いですわぁ～っ！傷がどんどん治っていきますぅ～っ！」
「僕の癒羽ってば凄いからねぇ～僕と同じでっ」
「……。」
鉄汰の手の中から軽々と起き上がり、感動したように治っていく傷を見つめる紅バラに、由雉が得意げに話す。その様子を、横で静かに見つめる鉄汰。
「君ねぇっ」
鉄汰が少し顔をしかめ、由雉の方を見る。
「そういう便利なものを持っているなら、もっと前に使いたまえっ」
「ああ、ごっめぇ～んっ。何かぁ～お邪魔かなぁ～と思ってぇ」
「うっうるさいよっ！！飼い主に似て性格悪いんだよっ！！君はっ！」
どこかからかうように笑う由雉に、鉄汰は少しだけ顔を赤くして

怒鳴り返した。

第４４章　恋せよ乙女　★４

「グっ…ガガガっ…」
その頃、先程、鉄汰へ鬼爪を向けた赤鬼が、紅バラに体当たりされた痛みもひいてきたのか、ゆっくりと立ち上がっていた。
「……。」
「グっ…？」
赤鬼が、前へと立ちはだかる人影に気づき、顔を上げる。
「恋する乙女に横槍入れるなんて最低ねぇっ」
赤鬼の前へと立ったのは、どこか冷たい表情を見せた白雪であった。
「お仕置きしてあげないとっ」
「グガっ…！」
右手を向けてくる白雪に、赤鬼が顔を強張らせ、両足に力を入れて、身構える。
「……っ」
白雪が瞳を鋭くする。
“雪乱雲”っ！」
白雪の右手から、赤鬼へ向け、強い吹雪のかたまりが放たれた。
“鬼炎”っ…ガアアアアアアアアアアっっ！！」
赤鬼が大きく口を開き、向ってくる吹雪に対し、赤々とした炎を吐き出す。
――――バァァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――
激しくぶつかり合う、吹雪と炎。しかし吹雪は炎の熱に、徐々に溶かされていく。
「グガっ…！」

溶ける吹雪に勝利を確信したのか、ふと笑みをこぼす赤鬼。
「あらぁ～溶かしちゃうのぉ～？残念っ」
溶けていく吹雪に、白雪が右手を下ろし、肩を落とした。
「私がヤりたかったのにっ」
「グガっ…？」
「……っ」
「グっ…！！」
不適に微笑む白雪に眉をひそめる赤鬼であったが、白雪の前へと出てくる人物に、再びその表情を険しくする。
「竹取輝矢っ…」
白雪の前へと出た輝矢が両手を構えると、炎により溶かされた白雪の吹雪、つまり空中を舞う多くの水が、徐々に形を変えていく。
「鬼退治いたしますっ…！“水月”っ…！」
刃へと形を変えた水たちが、輝矢の言葉に乗り、鬼炎を掻き分け、一斉に赤鬼の元へと飛んでいく。
「グっ…！」
危機迫った表情を見せる赤鬼。

――――バァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

「グギャアアアアアアアアっっっ！！！」
輝矢の水月を全身にもろに喰らい、赤鬼が悲鳴をあげながら、後方へと吹き飛ばされていく。

「鉄汰っ」
「……っ？」
振り向いた輝矢が、治療中の紅バラの横に立つ、鉄汰の方を見た。
「何だ？」
「今日だけ、特別ですよっ」

「……っ」
そう言って、親指を倒れている鬼人の方へと向ける輝矢。その言葉の意味を理解し、鉄汰が少し驚いたような表情を見せる。
「……っ」
しかし次の瞬間、微笑みを浮かべ、鉄汰は背中のマサカリに右手を伸ばした。

「グっ…ググっ…」
体の所々から血を流しながら、少し辛そうに起き上がる赤鬼。
「光栄に思うといいっ…」
「グっ…？」
前方から聞こえてくる声に、赤鬼が顔を上げる。
「僕に倒されて朽ちることをっ」
顔を上げた赤鬼の、上空へと飛び上がっている鉄汰。そう言い放った鉄汰は、高々と振り上げたマサカリを勢いよく振り下ろした。
“アイアン・スイング”っ…！！」
「……っ！！」
巨大なマサカリが、赤鬼を頭から斬り裂く。

「ギャアアアアアアアアアアアアっっっ！！！」
縦一文字に斬り裂かれた赤鬼が、激しい叫び声をあげ、砂と化して消えていく。

「……。」
風に吹かれていく砂の前に降り立ち、ゆっくりとマサカリを下ろす鉄汰。
「ふぅっ」

「鉄汰様ぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」
「うわあああっ！」
一息ついていた鉄汰に、勢いよく飛びつく紅バラ。もう傷が治ったのか、かなり元気そうな様子である。
「きっ君ぃっ！」
鉄汰が少し慌てた様子で、抱きついてきた紅バラを引きはがす。
「素晴らしいマサカリっぷりでございましたぁ～っ！」
両手を組んだ紅バラが、輝く瞳で鉄汰を見つめる。
「さすがはわたくしの旦那様ですわぁぁぁっ！！」
「誰が旦那だっ！！」
「えっ…？」
思わず怒鳴り返した鉄汰の言葉に、目を丸くする紅バラ。
「でっですが薔薇をっ…！」
「受け取っただけだろうっ！結婚するとは言っていないっ！」
マサカリを背中に戻しながら、鉄汰がしかめた表情で突き離すように言い放つ。
「そっ…そうですねっ…」
「……。」
あからさまに落ち込んで、俯く紅バラを、鉄汰が薄目で見つめる。
「申し訳ありませんでした。わたくし、また早とちりをっ…」
「まぁ文通くらいだったら、してやってもいいがっ？」
「えっ…？」
頭を下げようとした紅バラが、鉄汰のその思いがけない言葉に、動きを止める。
「えっ…？」
戸惑いの表情で、顔を上げる紅バラ。
「……っ」
鉄汰が少し頭を掻くと、ゆっくりと、見つめる紅バラに視線を合わせた。

「文通くらいなら、してやってもいいと言ったんだっ！」
「……っ！」
もう一度言い放つ鉄汰に、紅バラが大きく目を見開く。
「ただし薔薇タワーと薔薇風呂と薔薇ケーキは、二度と御免だぞっ…」
「鉄汰様っ…」
そう言いながらそっぽを向く鉄汰を見つめ、紅バラが思わず目を潤ませる。
『ご結婚おめでとうございますぅ～っ！！紅バラ様ぁぁ～～っっ！！』
「ありがとうっ！！わたくし、幸せになりますわぁぁぁ～～～っっ！！」
「だから文通だと言っただろうがっ！！」
主人の結婚を喜ぶ桔梗・萩と、幸せ宣言をする紅バラに、鉄汰は再び怒鳴り声をあげた。

「はぁ～あっ！」
「やれやれですねぇ」
その微笑ましいのか何なのかの鉄汰と紅バラの光景を、少し離れた所で眺めながら、疲れたように肩を落とす輝矢と白雪。
「一時はどうなるかと思ったけどっ、まぁ私の素晴らしい作戦のお陰で何とか上手くいったわねっ！」
「ええ、私の素晴らしい作戦のお陰で、無事、終わりました」
「だっから素晴らしい作戦を考えたのは私だって言ってんでしょっ！？」
「いいえっ、素晴らしい作戦を考えたのは私ですっ」
「はぁぁぁぁぁ～～っ！？」
またしても険悪な空気で睨み合う輝矢と白雪。
「私よっ！」

「私ですっ」
「わかったわっ！こうなったら勝負で白黒つけようじゃないっ！」
「望むところですっ」
激しく睨み合った輝矢と白雪が、それぞれ三日月と雪剣を構える。
『はぁっ…』
そんな相変わらずの主人たちを見て、従者の三匹と兄弟は、深々と溜息をついた。
「っつーか、とりあえず素晴らしくねぇーって…」
「もう放っておきましょう」
呆れたように呟くハチに、鈴白はあっさりとした表情で言い放った。

こうして、恋する乙女の巻き起こしたこの事件は、終わりを告げた。

翌日。オトポリ本部。
「鉄汰様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」
「……っ？」
聞こえてくる大きな声に、中庭を歩いていた鉄汰が、少し眉をひそめて振り返る。
「どわあああああああああああっっっ！！」
振り返った途端、上から降ってきた大量の何かに、押し潰されてしまう鉄汰。
「うっ…ううっ…」

降ってきたものを必死に掻き分け、鉄汰が何とか埋もれた顔を外へと出す。
「なっ…何っ…」
戸惑うように、鉄汰が降ってきたものの一つを手に取る。それは、深紅の薔薇模様の白い便箋であった。
「お手紙書いてきましたぁっ！」
「多いよっ！！」
横からする声に、誰かも確認せずに怒鳴り返す鉄汰。声の主は、満面の笑顔を見せた紅バラであった。鉄汰に降ってきたものは、すべて紅バラから鉄汰宛ての手紙のようである。軽く千通はあるだろう。
「手紙なんてものはねっ！一通でいいんだよっ！一通でっ！」
「一通では鉄汰様への熱き想いを、書ききれませんわぁ～っ」
注意するように言いながら立ち上がる鉄汰に、少し口を尖らせて訴える紅バラ。
「だいたい、手紙を届けに来ていたら、文通にならないじゃないかっ！」
「鉄汰様に一日でもお会い出来ないなんて、耐えきれませんものっ」
「はぁっ…」
笑顔で答える紅バラに、鉄汰が深々と溜息をつく。
「まったく…君はっ…」
「鉄汰様っ」
「んっ？」
名を呼ばれ、鉄汰が少し疲れたような表情で、顔を上げる。
「これをっ」
「……っ」
穏やかに微笑む紅バラが、鉄汰へと差し出したのは、一本の紅い薔薇であった。
「まったくっ…」
鉄汰が、そっと口元を緩める。

「君には敵わないなっ…」
「……っ」
笑顔を見せて紅薔薇を手にする鉄汰に、紅バラはとても幸せそうに微笑んだ。

“死ぬほど、恋こがれています”

「うおおおぉぉぉぉぉ～～～～っっ！！！」
どこからともなく響く、あまり可愛らしくもない泣き声。
「鉄ぅぅぅぅぅ～～～～っっ！！いつの間にか立派になってぇぇぇぇ～～～～っっ！！！」
『……。』
木陰で鉄汰と紅バラの様子を覗き見ながら、泣きじゃくる兄バカ黒クマの金汰。その横で同じように覗き見ていた輝矢たち一行は皆、その泣き声に、呆れきった表情を見せていた。
「さてと、虎ンプたちも虎国へ戻ったことですし、私たちも家へ帰りますか」
「賛成ぃ～っ」
「ううぅ～っ…紅バラちゃ～んっ…」
「ふあぁ～っ、やっと帰れるっ」
輝矢の言葉に片羽根をあげるユキジと、紅バラへの失恋ショックを引き摺っている様子のモンキ、そして疲れきった様子で肩を落とすハチ。
「輝矢ぁ～んっ！傷心した俺を慰めてぇ～っ！」
「どんな痛みも忘れられるよう、葬って差し上げましょうか？」
「いっやぁぁぁぁぁ～～～んっっ！！」

輝矢の冷たい言葉に、思わず悲鳴をあげるモンキ。
「ああ、そうだ。ハチ」
「へっ？」
輝矢に呼ばれ、ハチが顔を上げる。
「これをっ」
「えっ…？」
そう言って、輝矢は懐から取り出した何かを、ハチの頭の上へとそっと置いた。ハチが戸惑う中、足早にその場を去っていってしまう輝矢。
「なっ何だぁっ？」
――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――
ハチが人化し、頭の上に乗ったものに手を伸ばす。
「よっ」
「何々～っ？」
「何もろたんやぁ～っ？」
桜時が手に取ったものを、自分の顔の前へと持ってくる。桜時の両肩に乗り、それを覗き込むモンキとユキジ。
『白い…薔薇っ？』
桜時の手の中にある白い薔薇を見て、モンキとユキジが首を傾げる。
「何で白い薔薇なんやぁ～？」
「さぁ～っ？」
「うがっ！」
『へっ？』
モンキとユキジが両肩で大きく首を捻る中、真ん中の桜時が、声にならない声を出して、勢いよく顔色を赤く染める。そんな桜時に、目を丸くするモンキとユキジ。
「どないしたんやぁ～？桜時ぃ～」
「白い薔薇がどうかしたのぉ～？」
「アイツっ…」

白い薔薇を握り締めた桜時が、モンキとユキジの問いかけに答えることなく、ポツリと言葉を落とす。
「花言葉なんてっ…たいして詳しくねぇーくせにっ…」
真っ赤な顔のまま、前を歩く輝矢の背を見る桜時。

「……っ」
前を歩く輝矢は、少しだけ桜時の方を振り返り、そっと笑みをこぼした。

“わたしはあなたにふさわしい”

その頃、虎国・白雪の部屋。
「白雪様、お花をお持ちしました」
「ああ、ありがとっ」
花瓶を持って部屋へと入って来る鈴白に、白雪がソファーに腰掛け、紅茶を飲みながら、素気なく礼を言う。部屋の奥へと足を進め、窓際に持ってきた花瓶を置く鈴白。
「んっ…？」
置かれた花に、白雪が少し眉をひそめる。
「なぁ～にぃ～？薔薇っ？」
「ええ」
鈴白の置いた細長い水色の花瓶に生けてあるのは、一本の真っ赤な薔薇であった。
「紅バラ様にいただきましたので」

「“死ぬほど恋こがれてます”ってやつでしょ～っ？やめてよぉ～縁起でもないっ」
咲き誇る真っ赤な薔薇を見つめ、白雪が顔をしかめる。
「私は愛するより愛されたいタイプなんだからぁ～っ」
「これは赤い薔薇です。紅薔薇とは花言葉も違いますよ」
「そうなのっ？」
穏やかな笑顔で答える鈴白に、白雪が目を丸くして聞き返す。
「じゃあ赤い薔薇の花言葉は何なわけっ？」
「それはっ…」
口を開いた鈴白に、耳を傾ける白雪。
「……っ」
真っ赤な薔薇を見つめた鈴白が、ふと躊躇うように動きを止め、またそっと微笑む。
「何でしたかねっ…」
「何よっ、それっ」
笑顔で首を傾げる鈴白に、白雪は少し呆れた表情を向けた。

“あなたを愛します”

龍国。エセお菓子の家こと桃原家前。
「ふぅ～っ、やぁ～っと帰ってきたぁ～」
「帰ったら寝よかぁ～」
「さんせぇ～いっ」
落ち着きこそしないが、やっと見慣れた家へと戻ってきたハチた

ち3匹が、少し疲れた様子で伸びをしながら、言葉を交わす。鉄汰と紅バラを観察してから、もう一週間以上の時間が経っているので、かなり久々の帰宅なのである。

「私の腕の中で昼寝しますか？ハチ」

「しねぇーよっ！」

相変わらずの発言をする輝矢に、少ししかめた表情を向けるハチ。

「んっ？家の前に誰かおるぞぉ～？」

『えっ？』

前を歩くモンキの言葉に、輝矢とハチが同時に顔を上げる。

『……っ』

確かに、エセお菓子の家の前に、一つの人影が見えた。目を細めて見つめるが、どうやら太狼でもヘンゼルでもグレーテルでもないようだ。

「んっ…？」

見えてくるのは、お坊ちゃんカットの赤毛に、丸々とした緑色の瞳の、キレイな顔立ちをした青年。いや、まだ幼さを残したその顔は、少年と言ってもいいくらいであろう。徐々にはっきりとしていく青年の姿に、ハチが眉をひそめる。

「あっ…！！」

青年の姿を認識すると、ハチは思わず目を見開き、大きく声をあげた。

「よっ、桜時っ」

青年が、桜時の名を呼ぶ。

「うっ…梅人ぉぉぉぉっっ！！？」

「久し振り。でもないかっ」

驚いた勢いのままに名を叫びあげるハチに、梅人と呼ばれた青年は、どこか素っ気なく言葉を返した。

「どちら様でしたっけ？」

「いい加減、このパターン、慣れなよぉ～」

「朱実三兄弟の三男坊やろぉ～？」
「ああ、三バカ兄弟の末っ子ですか」
首を傾げる輝矢に、嘴を尖らせるユキジと、特に驚いた様子なく答えるモンキ。二匹の言葉に、輝矢が思い出した様子でポンと手を叩く。もうすでに長男・松人、次男・竹人と旅の中で遭遇してきたので、今更驚きもしないようであった。

「なっなんで梅人がここにっ…」
「桜時」
「えっ？」
再び名を呼ばれ、戸惑っていたハチが、梅人の方を見上げる。
「僕、家出してきたからさ、しばらく桜時んとこに泊めて」
「えっ…」
サラリと言い放った梅人の言葉に、ハチが固まる。
「家出ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっっっ！！！？」

新たなる事件の、始まる予感がした。

第４５章　桜時と梅人　☆１

龍国・エセお菓子の家こと『桃原家』。

『……。』

いつも無駄にうるさい桃原家を、虫の羽音一つ聞こえない静かな空気が包み込む。静かなリビングのソファーに座りながら、皆はどこか気まずいこの空気に、その表情を引きつっていた。

「ふぅっ…」

静寂を破るように一つ息をついたのは、赤毛に緑瞳の青年。雀国主・朱実孔雀の三男にして、桜時の従兄弟の梅人であった。

「この家、なんでこんなに静かなわけ？」

『お前のせいだろうがっっ！！』

不思議そうに問いかけた梅人に、ハチ・モンキ・ユキジの三匹が同時に突っ込みを入れた。

「だいったい家出ってどういうことだよっ！？」

ハチが向かいのソファーに座る梅人に、真剣な眼差しを向ける。紅バラと鉄汰の事件を終わらせ、久し振りに桃原家へと戻ってきた輝矢たちの前に突如、現れた梅人は、ハチに“家出したからしばらく泊めて”と言い放ち、桃原家へと上がり込んだのであった。

「何かあったのかっ？」

「……っ」

引き続き問いかけるハチに、少し顔をしかめる梅人。

「孔雀さんにはちゃんと言って来たのかよっ？」

「家出なんだから言うわけないだろっ。バカじゃないっ？」

「ああっ！？」

煩わしそうに冷たく言い放つ梅人に、どこか心配するような表情を見せていたハチが、一気に顔を引きつる。

「お前なぁっ…！」

「まぁまぁ、ハチ」

「……っ？」
梅人に怒鳴り返そうとしたハチを、輝矢が宥めるようにして止める。少し振り向き、輝矢を見る桜時。
「ここは一つ、冷静に…」
輝矢が穏やかな笑みを浮かべる。
「首でも縛りあげて、とっとと雀国に連れて帰りましょう」
「どこが冷静なんだよっ！！」
笑顔で言い放つ輝矢に、ハチが全力で突っ込みを入れる。
「僕は雀になんて帰らないよっ」
『……っ』
漫才のような掛け合いをしていた輝矢とハチが、梅人の声に振り返る。
「しばらくここにいるんだからっ」
「梅人っ…」
口を少し尖らせ、まるで拗ねた子供のように言う梅人に、ハチが少し困ったように肩を落とす。
「ここにいるって言われてもねぇ～」
次に声を出したのは、輝矢の横に座っている太狼であった。その右手には、今日も甘い香り全開のココアの入ったカップが握られている。
「ただでさえ居候が多くて困ってるのに、これ以上増えるのはちょっとねぇ～」
「これ、養い代にひとまず百万チュンと、後それから手土産の角砂糖三年分っ」
「いつまでも居てくれていいんだよぉ～っ」
「おいっ！！」
金と角砂糖を差し出した梅人に、鋭い瞳を向けていた太狼が一気に上機嫌の笑顔となる。あっさりと梅人の居候を認める太狼に、思わず突っ込みを入れるハチ。
「あのタローを納得させたっ…」

「さすがは金に糸目をつけない朱実家…」
横から見守るモンキとユキジが、どこか感心したように梅人を見る。
「あっ、代わりにハチ君が出て行けばいいじゃ～んっ」
「あのなぁっ…！」
「それいいね」
「お前もいい加減にしろっ！」
太狼の言葉に便乗する梅人に、ハチが鋭い視線を送る。
「ったくっ…！」
――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――
少し肩を落として、白い煙に包まれていくハチ。
「なぁ、梅人っ…」
白い煙の中から出てきた桜時が、まっすぐな瞳を梅人へと向ける。
「何かあったのかっ？ちゃんと話してくれよっ…」
「……。」
懇願するようにそう言い放つ桜時に、梅人は少し眉をひそめ、そっと顔を下に向けた。
「別にっ…桜時ごときに心配されるようなことなんてっ、何一つないっ」
「……っ」
冷たく答える梅人に、桜時が顔をしかめる。
「そうかよっ」
どこか吐き捨てるようにそう言って、梅人から視線を逸らす桜時。
「じゃあ勝手にしろっ！」
「最初っから勝手にしてるし」
「ムカっ！」
いちいち人を腹立たせるような言葉を言い返す梅人に、ついに桜時のコメカミ付近の血管が浮き出た。
「お前はいっつもいっつも一言多いんだよっ！ムカつくことばっか言いやがってっ！」

「それは桜時が余計なお節介ばっかり焼くからでしょっ？」
「んだとぉぉ～～～っっ！？」
梅人が何か言う度に、桜時の怒りが増していく。
「松人や竹人と違って、随分、仲悪いみたいだねぇ～」
「性格が合わへんのとちゃう？」
「……。」
ユキジとモンキの会話を聞きながら、静かに桜時と梅人の様子を見つめている輝矢。
「もういいっ！」
睨み合うことにも疲れたのか、桜時が梅人に背を向け、リビングの出入口の方へと歩いていく。
「えっ？出てくのぉ？」
「嬉しそうな顔すんなっ！ちょっと散歩に行くだけだっ！！」
嬉しさを隠しきれていない笑顔で問いかけた太狼にしっかりと突っ込みを入れ、そのまま桜時は足音からも怒りを出して、リビングを後にした。
「チっ…散歩かっ…」
「……。」
桜時が出て行った後で、黒い表情で舌打ちをする太狼に、その横に座っているユキジが、少し顔を引きつる。
「ええんかぁ？輝矢んっ」
「大丈夫、ハチの帰って来る先は、私以外に考えられません」
「いやっ、そういうことちゃうくてっ…」
どこか論点のズレている輝矢に、モンキは少し困ったように頭を掻いた。
「んっ？」
「……。」
輝矢がふと視線を移すと、梅人が険しい表情で、じっと桜時の出て行ったリビングの出入口の方を見つめていた。
「気になるなら追って行ったらどうです？」

「えっ…？」
輝矢の声に、梅人が険しい表情を崩し、振り返る。
「べっ別に気になってなんかっ…！」
「何か…話があって来たのではないのですか？」
「……っ」
そっと微笑む輝矢に、梅人が少し驚いたような表情を見せる。
「別に話なんてないっ」
少し俯いたまま、ソファーから立ち上がる梅人。
「ちょっと龍国観光してくるっ」
「あっ…」
モンキが少し手を伸ばしたが、止める間もなく、梅人はリビングを出て行ってしまった。
「何やぁ～？アイツっ」
「複雑だねぇ～思春期の男の子ってゆうのはぁ～」
「そうですよ、複雑なんです。ねぇ？キジ」
「何でボクに振るのさっ」
輝矢に意味ありげな笑みを向けられ、ユキジは少し恥ずかしそうに嘴を尖らせた。

数分後。龍国・中心街。
「ったくっ…」
多くの人間が行き交う中央道を歩く、一匹の白いイヌ・ハチ。ハチはまだ怒りの煮え切らない、釈然としない表情で、中央道を歩いていた。
「へぇっ、結構人多いねぇ。さすが御伽最大規模の国」

「……っ」
頭の上から聞こえてくる声に、ハチが目を上に向ける。ハチの頭の上には、愛らしい一羽の小さなスズメ。
「なんでお前がついてくんだよっ！」
「別にっ、僕は龍国の観光に来ただけだよっ」
突っ込みを入れるハチに、その頭上のスズメ・雀化した梅人が素気なく答える。
「たまたま足になりそうな小汚いイヌが、近くを通りかかったものだから乗らせてもらっただけ」
「誰が小汚いだっ！」
自分の頭の上に向かって、怒鳴りつけるハチ。
「ったく、お前ってヤツは昔っからいっつもいっつもっ…！」
「ねぇっ、お腹空いたんだけどっ」
「聞けっ！！」
文句を言おうとしたハチであったが、マイペースな梅人にどんどんと振り回される。
「その辺に放り出すぞっ！？」
「いいよっ？イヌにはないこの羽根で、飛んでくからっ」
「こっのっ…！いちいち嫌味なヤっ…！」

「きゃあああああああああっ！！」

「えっ？」
梅人に言い返そうとしていたハチが、町の賑やかな音の中、遠くの方から聞こえてくる悲鳴のような女性の声に、少し振り向く。

『ざわざわざわっ！』

「……っ？」
ハチたちのいる辺りから中央道を少し進んだところに、妙な人だ

かりが出来ている。悲鳴はそこから聞こえてきたようだ。集まった野次馬らしき者たちが、騒ぎたてている。何かが起こっていることは間違いないだろう。その人だかりを見て、ハチが少し眉をひそめる。

「何かあったのかな」

「行くぞっ！梅人っ！」

「えっ？ちょっ…！」

梅人が眉をひそめていると、ハチが梅人を乗せたまま、人だかりの方へと走り出していく。特に興味もないというのに、ハチに連れられて行く梅人。

「痛たたたっ…！」

「すみませんっ！すみませんっ！」

頭上の梅人が当たる体やら洋服やらに痛がる中、ハチが人混みを掻き分けて、集まりの一番前へと身を乗り出した。

「……っ！」

身を乗り出したハチが、広がる光景に大きく目を見開く。

「うわあああああああっ！」

「子供っ…」

人々が群がって見つめる道の真ん中に、尻もちをついて倒れ込んでいたのは、九，十歳くらいのまだ幼い少年であった。幼さを強調する大きな銀色の瞳に、柔らかそうな茶色の髪。倒れ込んだ少年は、どこかにぶつけたのか、少し痛そうに後頭部を押さえている。

「大丈夫っ！？ロムっ！」

「レムっ」

「……っ！」

横から起き上がった少年の元へと駆けつけてきたのは、倒れ込んだ少年とまったく同じ顔立ちをした少年であった。やって来た少年が不安げな表情を見せ、同じ顔をしている少年に駆け寄る。駆けつけたその少年の瞳は金色で、瞳の色こそ違うが、その姿はまさに瓜二つであった。

「双子…」

桜時の横で、梅人がポツリと呟く。

「ちったぁ反省したかっ！？ああっ！？」

『……っ？』

二人の少年の真向かいから聞こえてくる、野太い男の声に、双子に目を取られていた桜時と梅人が振り向く。

「人様ん家のもん、勝手に盗ったりすっからだよぉっ！」

その双子の正面に立っていたのは、体格のいい、正直言って人相の悪い大男であった。双子からしてみれば、見上げるのもやっとの相手であろう。大男が人相の悪い顔で、双子を睨みつけるように見る。

「盗みっ…？……っ」

大男の言葉に眉をひそめたハチが、再び双子たちの方へと目を落とす。すると倒れ込んだロムと呼ばれた少年の手の中に、確かに、二切れの小さなパンが握られていた。

「いい大人になるために、ちゃ～んと教育してやらねぇーとなぁっ」

『ううっ…！』

不適に笑い、双子を見下す大男。その怖い形相に、双子が全身を震わせ、身を寄せ合う。
「すっごくお腹が空いてたんだっ！お金は後で必ず払うからっ…！だからっ…！」
「ウチは前払いって決まってんだよぉっ！！」
「うわあああああああっ！」
「レムっ！」
駆けつけてきた方の少年・レムが、女に首を掴まれ、持ち上げられる。苦しそうな声を出すレムに、倒れ込んでいた方の少年・ロムが思わず身を乗り出す。
「ううぅぅっ！」
「このっ…！レムを離せっ！！」
苦しげな声を漏らすレムに、居ても立ってもいられず、ロムが大男の方へと飛び出していく。
「レムを離せぇっ！！」
「あぁぁ～っ？」
大男の右足に勢いよく喰らいつくロムであったが、幼いロムの力で大男の体が揺らぐはずもなく、どうということもない表情で、大男がロムの方を見下した。
「鬱陶しいんだよっ！」
「うわあああああああっ！」
大男が右足を振り上げ、ロムの小さな体を軽々と蹴り飛ばす。
『あっ…！！』
吹き飛ばされたロムが、まっすぐに近くの石壁へと向かっていく。
このままでは直撃してしまうと、見つめる群衆、皆が息を呑んだ。
その時。
「うわあああああああああっ！」

――――パァァァァァァァーーーンっ！――――

「えっ…？」

ロムがぶつかるはずであった石壁が、一瞬にして桃色の花びらへと変わり、地面へと散り落ちていった。周囲で舞い散る桜の花びらに、戸惑うように目を瞬かせるロム。

「大丈夫かっ？」

「……っ」

地面に落ちようとしていたロムの体が、がっしりと受け止められる。上から聞こえてくる穏やかな声に、ロムはゆっくりと顔を上げた。

「だ…れっ…？」

優しく微笑みかける、桃色の髪の青年に、どこか戸惑うように首を傾げるロム。その青年は、いつの間にやら人化した様子のハチ、つまり桜時であった。

「ああぁ～？何だぁ～？」

「……っ」

眉をひそめる大男に、桜時がロムを抱えたまま、鋭い瞳を向ける。

「ああぁ～っ？」

桜時の刺すような視線に、顔をしかめる大男。

「やろうってのかぁっ？いいぜぇっ！」

挑発的な桜時の瞳を見て、大男はどこか楽しげに微笑む。

「けどなぁっ！少しでもナメたマネしやがったら、もう一人のガキがどうなるかっ…！」

「どうなるわけ？」

「何っ…！？」

妙に近くから聞こえてくる声に、大男が顔をしかめて振り向く。

「……。」

大男の振り向いた先には、涼しげな表情を見せた梅人が立っていた。梅人は表情を少しも動かさぬまま、レムを掴んでいる大男の腕を手に取った。

「ねぇ？」

「ぐあああああっ！痛ててててててぇっ！！」

「うわっ！」

梅人が勢いよく大男の腕を捻り上げると、大男が激しく悲鳴をあげ、思わず捕まえていたレムから手を離した。大男の腕から解放され、地面へと尻もちをつくレム。

「ふぅっ」

「ぐはあああああっ！」

レムが解放されたのを確認し、梅人が大男の腕から手を離す。梅人の手が離れると、大男は腕を上空へと突き上げながら、何とも痛そうな声をあげた。

「相変わらず馬鹿力っ…」

大男の悲鳴を聞きながら、少し引きつった表情で呟く桜時。

「ああ、それとコレっ、あのパン代ねっ」

梅人が大男に札を一枚、投げ放つ。

「足りるっ？」

「足りるに決まってんだろっ！どこに一万チュンもするパンがあんだよっ！！」

「そうなのっ？自分でパンとか買ったことないから、わからないや」

「このお坊ちゃんヤロウっ…」

平然と答える梅人に、突っ込みを入れた桜時が、さらにその表情をしかめた。

「こっ…このっ…！」

しかし大男は、札を受け取ろうとはせず、近くに置いてある酒樽

目がけて、勢いよく足を振り上げた。
「ナメんじゃねぇっ…！！」
「……っ」
まっすぐに飛んでくる酒樽に、梅人は顔色一つ変えずに、右手を掲げた。
「“瞬花”っ」
――――パァァァァァァーーーーンっ！――――
「なっ…！」
酒樽が一瞬にして無数の赤い花びらへと姿を変え、地面へと散っていく。目の前で降り落ちる赤い梅の花びらに、大きく目を見開く大男。
「さっきと同じ…」
散りゆく赤い花びらに、地面にしゃがみ込んでいるロムも目を見張らせる。
「獣人の力かっ！？クソっ！何だってんな奴らが二人もっ…！」
「動くなっ」
「うっ…！」
突如、喉元に突き付けられた刀先に、大男が表情を強張らせ、動きを止める。
「そこまでだっ…」
大男の正面には、村雨丸を構え、射殺すような鋭い表情を見せた、桜時の姿があった。
「……。」
大男に村雨丸を突き付けている桜時を、静かに見つめる梅人。

「何だ何だぁっ!?何やってやがるっ!?」
『……っ』
その時、どこか不機嫌そうな声が、人混みを掻き分けるようにして近づいてきて、桜時と梅人が振り返った。
「って、ハチ公っ!?」
そこへ現れたのは、黒い制服を着込んだ、妙に目つきの悪い一人の男。ゴンであった。どうやら騒ぎを聞きつけ、オトポリがやって来たようである。
「ああっ!ハチ君じゃないっスかぁ〜っ!」
「知り合いっ…?」
ゴンの後方からやって来た羊スケも、笑顔を見せて桜時に手を振る。そんなゴンと羊スケに、不審そうに首を傾げる梅人。
「おっ前、んなとこで何してんだぁ〜っ?」
パッと見ただけでは状況が理解出来なかったのであろうゴンが、桜時へと問いかける。
「刀まで出してぇ、気でも狂ったかっ?」
「まっさかぁ〜っ!ゴンさんじゃあるまいしっ…!」
「……っ」
「痛ってっ!!」
相変わらず余計なことを口にする羊スケに、ゴンの鉄拳が振り落ちた。
「ったくっ…!」
「ゴンっ…」
「あっ?」
桜時に名を呼ばれ、ゴンが少し首を傾げる。
「コイツっ…傷害罪っ…」
「はっ…?」
大男の方に顎を突き出してそう言う桜時に、ゴンはさらに首を傾げた。

第４５章　桜時と梅人　☆２

一時間後。龍国中心街。とある料理屋。
『もぐもぐもぐもぐっ！』
店のテーブルに目一杯に出された料理を、幼い双子は遠慮という言葉など知らないかのように、夢中で平らげている。余程、腹が減っていたのだろう。その食いつきようは、異常とも言えるほどであった。
「ったくっ！冗っ談ねぇっ！」
不機嫌な表情でそう声をあげたのは、双子たちのすぐ横に腰掛けている、ゴンであった。
「俺らはなぁっ！警察とは言っても御伽警察だぞっ！？鬼人退治が仕事で、傷害なんてものはなぁっ…！」
「どんどん食えよぉ～っ」
「聞けっ！！」
ゴンの訴えを勢いよく無視して、双子たちに食事を進めている、双子のすぐ前の席に座っている桜時。そんな桜時にゴンがさらに顔をしかめる。
「まぁいいじゃないっスかぁ～“救えるもんは救っとけ”がゴンさんのモットーでしょ～っ？」
「それはそうだけどよぉっ」
宥めるように言う羊スケに、ゴンはさらに口先を尖らせる。
「ってか、これ、領収書落ちんのかぁ～？俺、今月も給料ほぼなしでっ…」
「問題ばっかで減俸ばっかっスもんねぇっ」
「うっせっ！」
「払っといてあげるよ」
「へっ？」

羊スケの余計なひと言に顔を引きつったゴンが、桜時の横で涼しい表情を見せている梅人の言葉に振り向く。
「まじかぁ！じゃあっ…！」
「その代わり、一生、僕に逆らわないでね」
「何だっ！？その絶対服従的な条件っ！！」
突き付けられた条件に、ゴンが少し驚いたように聞き返す。
「まぁ嫌ならいいけどっ…」
「うっ…！」
そう言って分厚い財布を振り上げる梅人に、ゴンが思わず顔を引きつった。
「乗っ…乗ったっ…」
「どうもっ」
苦々しく了承するゴンを見て、梅人が少し楽しげに笑う。
「お前、性格悪くなったんじゃねぇーか？」
「前からだよっ」
少し眉をひそめて問いかける桜時に、梅人は素気なく答えながら財布をしまった。
「そういや、お前ら名前はっ？」
『えっ？』
桜時の問いかけに、双子が食べる手を休め、まん丸とした目で顔を上げる。
「ああっ！僕、ロムレスっ！で、こっちが弟のレムスっ！」
「ロムとレムって呼んでねっ！」
銀色の瞳の方が兄のロム、金色の瞳の方が弟のレムであるらしい。
二人は眩しいばかりの無邪気な笑顔で、自分たちの紹介をした。
「弟って、お前ら、双子だろっ？」
「うんっ！でもロムの方が、僕よりちょびっとだけ早く生まれたのっ！」
「だから僕がお兄ちゃんなんだっ！」
「ふぅ～んっ…そういうもんなのかぁ…」

桜時が興味深そうに頷く。身内に兄弟こそ多かったものの、双子はいなかったので、あまり詳しいことは知らなかった。
「俺んトコは羊スイのんが兄貴っスよぉ～っ」
「そういや、お前んトコ、双子だったな」
笑顔で言葉を挟む羊スケに、桜時が思い出したように言う。ゴンと羊スケに初めて出会った羊国での事件の時、羊スケは双子の兄・羊スイの振りをして、国主の屋敷に潜入していたのであった。
「んでっ？なんであんなこと、したんだっ？ああっ？」
『このオムライス、おいしぃ～っ！』
「聞けっ！クソガキどもっ！」
ゴンの問いかけを見事に無視して、オムライスを味わっているロムとレムに、ゴンの目つきがさらに悪くなる。
「どうしてパンを盗んだんだって聞いてんだよっ！！」
「子供相手に、脅迫めいた取調べすんなよぉ～」
「そうっスよぉ～っ、ただでさえ顔面が脅迫なんだからぁ～っ」
「うっせぇっ！！」
強く問いかけるゴンを、非難するように声を出す桜時と羊スケ。
「でもっ…ホントに何で盗みなんかっ…」
『……っ』
桜時がロムとレムに戸惑うような瞳を向けると、双子は食べる手を止め、満足げだった笑顔を消して俯いた。
「僕らん家…すっごい貧しくてさ…」
「ろくに食べるものもなくて…お母さんも弱っちゃって…寝たきりで…」
「……っ」
双子の話に、桜時の表情が曇る。
「父親はっ？」
『いない…』
「……そうか…」
声を揃えた双子に、ゴンは少し眉をひそめ、そっと頷いた。

「泥棒が悪いことだってゆうのはわかってたんだけど…」
「このままじゃお母さんが死んじゃうかと思って…それで…」
「……。」
辛そうに話すまだ幼い双子を見て、桜時が目を細める。
「頑張ったなっ…」
『……っ』
そう言って微笑む桜時に、顔を上げた双子は、金と銀の瞳を少し潤ませた。
「くおおおおぉぉぉぉっっ……！！」
「あっ？」
聞こえてくる掠れたような不気味な声に、眉をひそめる桜時。
「うるさいんスけどぉ～っ？そこの人っ」
「うっせぇっ！泣いてなんかねぇーよっ！」
「……。」
桜時が双子の横に視線を逸らすと、そこには双子の話に感極まったのか、涙を流しながらも、必死にそれを隠そうとしているゴンの姿があった。あんな顔のわりに涙もろいゴンに、桜時が少し呆れた表情を見せる。
「でも泥棒は泥棒だろっ？捕まえなくていいわけ？警察っ」
「お前には人情ってもんがないのかっ！」
涙を誘われることなく、冷静に言い放つ梅人に、思わず怒鳴りあげるゴン。
「どうにかしてやりてぇーけどっ…今の俺にコイツらを養う金はねぇーしっ…」
「自分も養えてないっスもんねぇ～っ」
「うっせぇっ！」
「はいっ」
『へっ？』
ゴンと羊スケが相変わらずの言い合いをしていた時、梅人が双子の目の前に、軽々と札束を差し出した。

「これっ、あげるっ」
「おっおいっ！梅人っ！」
「子供に何、大金やってんだっ！」
そんな梅人の行動に、思わず声をあげる桜時とゴン。
「俺にもくれっ！！」
「アホかっ！！」
手を差し出すゴンに、桜時が全力で突っ込みを入れる。
『これって…』
見慣れぬ札束に、戸惑うように触れるロムとレム。それは大人でもお目にかかることが出来ないほどの大金であった。
「君たちが働けるくらい大きくなるまでくらいなら、それで食べていけるんじゃないっ？」
「おっおいっ！梅人っ…！」
「その代わりっ…もう二度と、泥棒なんてしたらダメだよっ」
「……っ」
梅人の言葉に、止めようとしていた桜時が思わず声を出すのを止める。
「君たちが盗んできたものを食べて、飢えを凌いだって、お母さんはきっと喜ばない…」
『……っ』
梅人にまっすぐな眼差しを向けられ、ロムとレムも真剣な表情を見せる。
『うんっ…』
双子は、噛み締めるように、しっかりと頷いた。
「いいこと言うじゃねぇーかぁっ！成金ボウズっ！」
「ひもじい警察よりはねっ…」
「んだとぉっ…！？」
「……っ」
ゴンに悪態を返している梅人の横で、桜時はそっと笑みを浮かべた。

「そういえば、お兄ちゃんたちはぁ？」
「どっちがお兄ちゃんなのぉっ？」
『へっ…？』
ロムとレムにまっすぐな瞳を向けられ、桜時と梅人が目を丸くする。
「お兄ちゃんって…」
「えっ？お兄ちゃんたちも双子じゃないのぉっ？」
「えっとぉっ…双子ではなくってだなぁ…」
さらに問いかけてくるレムに、困惑の表情を見せる桜時と梅人。
確かに桜時と梅人は従兄弟とはいえ、同じ年に生まれたし、顔立ちや雰囲気も少し似ている。幼い頃は今よりももっと似通っており、並んで歩くと、よく双子に間違えられたものだ。
「俺も最初、そうかと思ったっスよぉ？」
「そうだなぁっ、見えなくもねぇーかもなぁっ」
双子に続くように口々に話すゴンと羊スケ。
「まぁ似たようなもんだけど…」
「どこが似たようなものなのさっ」
「えっ？」
妥協するようにそう言った桜時に、梅人がどこか煩わしそうな物言いで口を挟んだ。
「こんなド派手なピンク頭と双子に間違えられるなんてっ、冗談じゃないっ」
しかめた表情で、梅人がはっきりと言い放つ。
「それならいっそ、その辺の牛と双子に間違えられた方がマシだよっ」
「そこまで言うかっ！？」
桜時と双子だと思われたことを、本気で嫌がっている様子の梅人に、思わず驚いたような声を出す桜時。
「だいったいなぁっ！双子じゃないにしても、仮にも血の繋がってる従兄弟にんな言い方っ…！」

「あんまり近寄らないでくれる？ピンク頭がうつりそうだし」
「うつるかぁっ！！」
互いにしかめた表情を向け合う桜時と梅人。先程のゴンと馬ロンのことが批判出来ないくらいに、子供染みた言い争いであった。
「だいたいお前は昔っからっ…！」
『クスクスクスっ』
『……っ？』
向かいの席から聞こえてくる、少し堪えるような、小さく零れた笑い声に、睨み合っていた桜時と梅人が、目を丸くして振り向く。
「なっ何っ…」
『お兄ちゃんたちもっ、仲良しだねっ！』
『……っ』
笑顔を見せるロムとレムに、驚いたように目を見開く桜時と梅人。
「だっ誰がっ…」
「じょっ冗談じゃないっ…」
『クスクスクスっ！』
そっぽを向きあう桜時と梅人を見ながら、ロムとレムはまたもや楽しげに笑い声を零した。

「じゃあなっ、もう盗みなんかすんなよっ」
『うんっ！ありがとっ！桜時お兄ちゃんっ！梅人お兄ちゃんっ！』
しばらくして料理屋を出ると、腹を満たしたロムとレムは、桜時と梅人に大きく手を振り、無邪気な笑顔を見せながら、桜時たちの元を去っていった。
「調書も取らないで、簡単に解放して良かったの？あの二人」

ロムとレムの背中を見届けた後、梅人がゴンの方を振り向き、問いかける。
「まぁ大丈夫だろーまだガキだし、盗みも未遂に終わったことだしなぁ～」
「適当な警察っ…」
「ああっ!?」
「払ってくれる?」
「すみませんっ、逆らいませんっ」
「……。」
梅人に料理屋のレシートをチラつかせられ、一気に頭を深々と下げていくゴン。そのゴンの哀れなような、情けないような姿に、桜時は少し肩を落とした。
「さてっ、じゃあ俺らはパトロールに戻るわぁっ」
「鬼人出たのかっ?」
羊スケはすでに乗り込んでいるオープンカーへと乗り込もうとしたゴンを、桜時が呼び止めるようにして問いかけた。
「いやぁ?単なる見回りだっ」
「そうかっ」
その答えを聞き、桜時が少し安心したような笑みを浮かべる。
「まぁホントに出たって、お前らの力は借りねぇーよっ」
「よく言うぜっ」
「じゃあなぁっ!」
「失礼するっスぅ～っ!ハチ君、梅人君っ!」
そう言って軽く手を上げると、ゴンと羊スケは、オープンカーを走りださせ、パトロールへと出掛けていった。
『……。』
急に静かになった料理屋の前に、桜時と梅人だけが残る。
「何か…ロムとレム見てると、ちょっと懐かしかったよなっ…」
「別にっ」
「……。」

すぐさま返って来る、この上なく素気ない返事に、桜時が思わず顔を引きつる。
「ああぁ～そうですかっ」
どこか投げやりに言葉を放つ桜時。
「そうだよなぁ～っ、お前は俺と双子に間違われるよりも、ウシと双子に間違われた方がっ…！」
「髪の色で判別をつけろって、みんなよく言ってたよね」
「へっ？」
言い返そうとした桜時が、突然、懐かしそうに話す梅人に、少し目を丸くする。
「二人で帽子被って…どっちがどっちでしょうって兄さんたち、困らせた…」
「んなこともあったなっ…」
過去を思い出し、薄く笑みを浮かべる桜時と梅人。
「……帰るかぁ～」
少し間を置いた後、ポツリと呟く桜時。
「それ、誰に言ってるわけ？」
「俺自身にだよっ！！」
わざとらしく問いかける梅人に、桜時は勢いよく怒鳴りあげる。
「決してっ！決してお前に言ったわけじゃないからなっ！」
「ハイハイっ」
さらに怒鳴る桜時を、梅人は適当にあしらった。

第４５章　桜時と梅人　☆３

そんなこんなで、桜時と梅人は、桃原家へと帰宅した。
『げっ』
リビングへ入った途端、二人の表情は同時に、同じくらい引きつられた。
「あっ！桜時クンっ！久し振りぃ～っ！」
「桜ちゃ～んっ！会いたかったよぉ～っ！！」
「松兄…竹兄…」
帰って来た桜時を出迎えたのは、先程のロムとレムに負けんばかりの無邪気な笑顔を見せている、朱実松人と朱実竹人であった。ソファーの上から陽気に手を振る二人の従兄に、桜時が少し疲れたように頭を抱える。
「もちろん、梅ちゃんにも会いたかったよぉ～っ！！」
「梅人くぅ～んっ！こっち向いてぇ～っ！」
「……。」
手を振る二人の兄に、梅人が引きつっていた表情を消す。
「十万チュンあげるから、摘まみ出して」
「わかりました」
「金で解決しようとすんなっ！！そしてそこっ！了承すんなっ！！」
梅人から十万チュンを受け取り、松人と竹人を摘まみ出そうと立ち上がる輝矢。そんな梅人と輝矢に、桜時が勢いよく突っ込みを入れる。
「せっかくお兄ちゃんが迎えに来たのにひどいよぉ～っ！梅ちゃ～んっ！」
「誰も頼んでないしっ」
今にも泣き出しそうな表情で訴える竹人に、梅人が冷たく答える。
「それに僕、帰る気なんてないからっ」
「梅ちゃ～んっ！！」

強く言い放つ梅人に、竹人がさらに瞳を潤ませる。
「ずっとこの調子ぃ～？」
「ああっ…」
問いかける松人に、桜時が困ったような表情で頷く。
「松兄、梅人のヤツ、何かあったのかぁ？」
「うぅ～んっ…」
桜時の問いかけに、松人がどちらとも取れる微妙な声を発する。
「お母様と…ちょっとねぇ～…」
「孔雀さんと…？」
松人の言葉に、桜時が眉をひそめる。
「それってっ…」
「い～やぁ～っ！ここは厳しく言っちゃおぉ～っとっ」
「へっ？」
詳しい話を聞こうとした桜時の言葉を遮り、何か思い立ったようにそう言った松人が、竹人の横を通り過ぎ、梅人のすぐ前まで出た。
「梅人クンっ…」
「なっ…何だよっ…？」
松人にまっすぐに見つめられ、少し眉をひそめる梅人。
「そんなに気にすることないじゃなぁ～いっ」
松人が梅人に、どこか試すような笑みを向ける。
「いくらお母様が梅人クンと桜時クンを比べるようなこと、言ったからってっ」
「……っ！」
「えっ…？」
松人のその言葉に、大きく目を見開く梅人と、困惑した表情を見せる桜時。
「お母様も心配してるよぉ？さぁっ、帰ろっ」
深く俯いた梅人に、松人が笑顔で手を差し伸べる。
「……。」
しかし梅人は、一向に松人の手を取ろうとはしない。深く俯いた

まま、少しの動きも取ろうとしなかった。
「……っ」
そんな梅人の様子に、松人は声は出さずに、肩だけを落とす。
「あのねぇっ、いつまでも意地張るってゆうんなら、こっちだって力尽くでっ…！」
「送ってやる…」
「へっ？」
ついに怒りを見せ、梅人に手を伸ばそうとした松人が、ポツリと落とされた梅人の呟きに、その手を止めた。
「この前、フクロウの女の子にプレゼント貰ってた時の隠し撮り写真っ…油火姉さんのところに送ってやる…」
「うぎっ…！」
低い口調でまるで呪いでもかけているかのように言う梅人に、松人が背筋を震え上がらせる。ただ単にプレゼントを貰っただけではあるものの、そんな写真を婚約者にして暴れ姫の油火に見られたら、松人は一瞬にして天国行きだろう。
「さっさぁっ！お暇（いとま）しようかっ！竹人クンっ！」
「おいっ！！」
あっさりと脅しに負けて、そそくさと帰ろうとする松人に、怒鳴り声をあげる桜時。
「それでも長男かっ！？もうちっと何とかしろよっ！」
「無理無理っ。油火って闇魔サマより怖いからっ」
「まぁそりゃあわかるけどっ…」
必死に首を横に振る松人に、桜時は油火の恐ろしさを思い出し、何となく説得出来なくなってしまう。
「じゃあ竹兄っ！」
「えぇ～っ？俺ぇっ？」
桜時が救いを求めるように、竹人の方を見る。桜時に熱い視線を注がれ、驚きの声をあげる竹人。
「えっえっとぉ、じゃあ梅ちゃんっ！ここはお兄ちゃんと手を繋い

で帰っ…！」
「今までの女性遍歴、洗いざらい、レイラ姉さんに話すよ…？」
「さっ！帰ろうかぁ～っ！松人兄さんっ！」
「おいっ！！」
松人と同じパターンであっさりと負ける竹人に、桜時が再び怒鳴り声をあげる。
「それでも次男かよっ！？」
「じゃあ桜ちゃんは俺とレイラのラブラブぅ～な関係にヒビが入っちゃってもいいって言うのっ！？」
「いっそ粉々に砕き割れればいいのに」
「ひっどぉぉぉぉ～～いっ！輝矢ちゃ～～んっ！」
熱く訴えていた竹人が、口を挟んだ輝矢の一言に、泣きだしそうな表情で叫ぶ。
「ったく、どいつもこいつもっ…！あっ…」
「……っ」
松人と竹人に呆れた表情を見せていた桜時が、ふと梅人と目が合い、思わず言葉を止めてしまった。

――――いくらお母様が梅人クンと桜時クンを比べるようなこと、言ったからって…――――

「……っ」
思い出される松人の言葉に、桜時が少し気まずそうな顔を見せる。
「あっえとっ…そのっ…梅っ…」
「もう一回、観光行ってくるっ」
「えっ…？」
その気まずい雰囲気に、居られなくなったのか、梅人は足早にリビングを出て行こうとする。
「あっ…」
出て行く梅人に、思わず手を伸ばす桜時。

「……っ」
しかしその手は途中で下ろされ、桜時は俯き、梅人はそのままリビングを出て行った。
「……。」
深く俯いた桜時を見て、輝矢は少し眉をひそめた。

数十分後。桃原家・二階バルコニー。
「……。」
結局、梅人を連れて帰ることも出来ないままの松人と竹人が残り、ただ騒がしいだけのリビングから抜け出した桜時は一人、二階のバルコニーへと出ていた。遠くに見せる龍国の街並みを眺めながら、桜時は神妙な表情を見せている。
――――いくらお母様が梅人クンと桜時クンを比べるようなこと、言ったからって……――――
「……っ」
思い出される言葉に、そっと俯く桜時。孔雀は、梅人に何を言ったのだろう。気になるのに、聞けない。知りたいのに、踏み込めない。
――――それならいっそ、その辺の牛と双子に間違えられた方がマシだよっ――――

――――お兄ちゃんたちもっ、仲良しだねっ！――――

こんなに近いのに、こんなに遠くにいる。

「……。」

桜時が少し目を細めた。

「珍しいですね」

「えっ…？」

俯いていた桜時が、後方から聞こえてくる声に振り返る。

「輝矢っ…」

バルコニーへと入って来たのは、いつもの穏やかな笑みを浮かべた輝矢であった。輝矢がサンダルに足を通し、桜時のすぐ横までやって来る。

「リビングに居るとうっせぇからさ、たまにはバルコニーに出るのもいいかと思ってっ」

「場所のことではありませんよ」

「へっ？」

輝矢の言葉に、桜時が少し首を傾ける。

「梅人を追いかけて、行かなかったことです」

「……っ」

桜時の方をまっすぐに見て、そう言い放つ輝矢。輝矢にそう言われた桜時が、少し眉をひそめる。

「いつものハチなら、無駄に必死に追いかけていって、無駄に熱いことばっかり言って、無駄に空回りするのに」

「無駄無駄言い過ぎだろっ！！」

遠慮なく言う輝矢に、思わず怒鳴り返す桜時。

「……っ」

しかし怒っていた桜時の表情はすぐに曇り、桜時は再びそっと俯

いた。
「梅人と俺の仲って…ちょっと微妙でさっ…」
「えっ？浮気ですか？」
「違げぇーよっ！！」
真面目に話し始めた桜時であったが、余計な口を挟む輝矢に、すぐにペースを乱される。
「従兄弟って言っても…松兄と竹兄は、昔っから普通に兄ちゃんって感じだったんだけどさっ…」
桜時が再び、真面目な表情となる。
「梅人は…年も同じで…生まれた時からすっごい近くにいて、一緒に大きくなってってさ…」
――――お兄ちゃんたちも双子じゃないのっ？――――
思い出される、ロムとレムの言葉。
「そう、双子みたいな感じだったんだっ…」
「……。」
昔を懐かしむような、そんな笑みを見せる桜時を、輝矢は横からまっすぐに見つめる。
「でもっ…俺と梅人は“違う”ってことに、俺は少しずつ気付き始めた…」
桜時の表情が、そっと曇る。
――――梅人様っ！梅人様っ！――――
「あいつは朱実の正統な血筋で…周りのみんなに大切にされててっ…」

――――我が愛しの息子・梅人ぉぉぉ～～っ！――――

「孔雀さんにも…愛されてた…」
桜時が少し、悲しげに微笑む。
「イヌって蔑まれてる俺とは違って…愛されてたっ…」
同じ年に生まれ、同じように育ったというのに、梅人は皆から認められ、愛され、それに対して桜時は、ずっと蔑まれ、否定され続けた。
「……。」
桜時がどう育ってきたかを思い、輝矢が少し目を細める。
「子供の俺には、何で梅人だけが愛されて、俺だけがこんなに嫌われてるのか、わかんなかったんだっ…」

――――イヌのくせに、汚らわしいっ！――――
――――朱実の恥よっ！！――――

どうして嫌われているのか、どうして蔑まれているのか、わからない。

「そんなことがただ悲しくて…ただっ…」
桜時が少し躊躇うように、言葉を止めた。
「ただっ…梅人が羨ましかった…」
皆に愛され、誰よりも孔雀に愛されている梅人が、どうしようもなく羨ましかった。
「俺はずっと…梅人になりたかったんだっ…」
「ハチ…」
そう言って微笑む桜時に、輝矢が思わずその名を呼ぶ。
「そんな気持ちもあったからか、どうにも梅人と上手く付き合えなくてっ…」

梅人もその空気を感じ取ったのか、二人でいる時の空気はいつも微妙なものであった。何でもない会話をすることはあったが、深く踏み込んだ話をすることはない。互いに必死に触れないようにしている。そんなような関係であった。

「俺にとってあいつは…一番近くて、一番遠い存在なんだ…きっと…」

「……。」

どこか遠い目を見せて話す桜時を、輝矢は少し眉をひそめて見つめていた。

第４５章　桜時と梅人　☆４

その頃、龍国・町はずれ。

「はぁっ…」

思わず桃原家を飛び出してきた梅人は、歩き慣れてもいない龍国の町を、どこへ行くでもなく、適当に彷徨い歩いていた。

「ここ…どこなんだろ…？」

今、自分のいる場所も見当がつかず、帰れるのだろうかと、少し不安になる梅人。

「まぁいいやっ、いざとなったら飛んで帰ろっ。羽根があるんだしっ」

梅人が開き直ったように言う。

「羽根が…あるんだしっ…」

自分の言った言葉を、もう一度じっくりと繰り返し、梅人が表情を曇らせる。

――――いくらお母様が梅人クンと桜時クンを比べるようなこと、言ったからって…――――

「……。」

思い出される松人の言葉に、さらに曇る、梅人の表情。

「何言われたのか…聞かなかったな…アイツ…」

梅人の脳裏を過ぎったのは、同じ年に生まれた従兄弟のことであった。

「……。」

“変わらないな”と思うし、“変わったな”とも思う。

――――行くぞっ！梅人っ！――――

バカがつくほどお人好しで、誰かのためにすぐ一生懸命になるところは、昔から変わらない。恐らくは生まれ持ったものなのだろう。誇り高き犬人の父親から受け継いだのかも知れない。

――――そこまでだっ！――――

だが、前は、あんなに強い瞳はしていなかった。遥か未来を見つめて、輝く瞳。昔の瞳は、もっと弱々しく、光など一切ないかのように暗く、未来などないかのように絶望していた。

「……っ」

梅人がそっと空を見上げ、過去を思い出そうとその目を細めた。

――――あの頃、僕のすぐ傍には、いつもアイツがいた…。

十数年前。雀国・朱実家。

「梅人ぉ～っ！遊びに行こぉ～っ！」

物心がついた時から、すぐ横にいて、すぐ隣にいて、遊んでいた。

世に言う双子と、そう変わらない日々を送っていたんじゃないだろうか。その頃の僕らにとってお互いは、松兄や竹兄よりも、そう兄弟よりも、もっと近い存在だったんだ。

僕らが同じではないことに気付いたのは、きっと、アイツの方が先。

「……っ？」

四歳だったか、五歳だったかの頃、僕は、朱実の庭の隅っこで、一人ポツンと立っているアイツを見かけた。

「桜っ…！」

「うぅっ…」

「……っ」

名を呼ぼうとして、止まった。その時、アイツは泣いていたんだ。庭の隅っこで、たった一人で、たくさんの涙を流して、泣いていたんだ。

それから僕は、アイツの泣いていた理由を探した。それは意外とあっさりと見つかった。

「どうして朱実にイヌの子などっ…！」

「汚らわしいわっ…！」

アイツに向けられる、蔑みの言葉。どうやら、アイツがイヌであることが原因らしい。

「貴方の存在が、朱実の名に泥を塗るっ…」

僕には死ぬほど甘いお母様も、アイツには、冷たい言葉を吐き捨てた。

「ううぅっ…！」

お母様に冷たい言葉を投げかけられた日は、アイツは決まって、庭の隅っこで人知れず泣いた。誰にも見えないように、誰にも知られないように、ただ泣いていた。

「……。」

僕は、そんなアイツを、ずっと見ていた。見ていたけど、知らない振りをした。

それからというもの、僕とアイツは二人では遊ばないようになった。アイツも僕のことを避けていたし、僕自身もアイツのことを避けていたんだと思う。

自分たちが違うものであることを知って、僕らの距離は開いていったんだ。

「梅ちゃ～んっ！桜ちゃ～んっ！鬼ごっこしぃ～ましょ～っ！」

「やらないよっ、くだらないっ」

「ぎゃあああああーーーんっ！！」

二人の兄を持って、僕は正直、甘やかされ放題に育った。わがままを言って、竹兄を困らせることなど、日常茶飯事だった。

「可愛くないなぁ～っ！梅人クンはっ」

「放っておいてよっ」
「その点、桜時クンは勿論、やるよねぇ～っ？」
「うっうんっ」
「……っ」

松兄の言葉に素直に頷いたアイツを見て、僕は少し顔をしかめる。

「さっすが桜時くぅ～んっ！」
「桜ちゃんっ！大好きだよぉぉぉ～～っ！！」
「うわあああっ！抱きつくなっ！！」
「……。」

アイツは、甘やかされて捻くれに育った僕とは違い、純粋培養のかなり素直過ぎる奴。松兄も竹兄も大のお気に入りだ。

「梅人クンも桜時クンを見習いなよぉ～っ」
「そうそうぅ～っ」
「うるさいなっ、放っておいてよっ」

二人のアイツに対する可愛がりっぷりといったら、もう本当の弟である僕への可愛がりを越すほどのものだった。まぁわがまま放題の僕とは違って、アイツは素直だし性格もいいから、無理もないけど。

「さっ、じゃあ鬼ごっこに行こぉ～っ！桜時クンっ」
「えっ？あっでもっ…」

松兄に連れて行かれようとしたアイツが、少し困ったように僕の方を振り返る。

「梅人はっ？」
「僕はそんなくだらないことはいい。とっとと行きなよっ」
「あっ…うんっ…」

少し残念そうに頷いて、アイツは2人とともにどこかへと去っていった。部屋に一人、残される。

「……。」

どんどん微妙になる、アイツとの関係。

少し大きくなって、アイツは、庭で泣くのをやめたかと思うと、今度は頻繁に家出をするようになった。

「まぁ～た家出っ！？ったくっ！あの子はっ！」
「……。」

そうは言いながらも、お母様が実は心配していることを、僕は知っている。

「桜ちゃんっ！桜ちゃんがぁぁぁぁっっ！！」
「落ち着いてっ！竹人クンっ！」

二人の兄の取り乱しようなんか、弟の僕から見ても、ドン引きするほどだった。

「心配しましたよぉ～っ！桜時様っ！お出掛けになる時は、この千鶴に一言っ…！」

「散歩じゃないっ！家出だっ！家出っ！」
「桜時様に何かあってはっ！千鶴はっ…！千鶴はぁぁぁ～っ…！！」
「だあああああっ！！半径一メートル以内に近づくなっ！！」
あんなに心配してくれるお世話役もいる。僕のお世話役なんて…
「あんな捻くれた方のお世話は出来ませんっ」
何回そう言われて、何回交代したことだろう。
「“瞬花”っ！」
――――パァァァァァァァーーーンっ！――――
「いつ見てもすごいなぁ～桜時様の花力はっ！」
「歴代の朱実でも、あの若さであれほどの使い手はいなかったらしいぞぉ～っ」
「正統血筋の三兄弟様より、イヌの子の桜時様が一番の使い手とはなぁ～っ」
「……。」
見事な桜を咲かせているアイツと、それを見て話している警備隊の奴らを見た。
そして、思った。

蔑んではいるけど、何だかんだでみんな、アイツを認めてきている。
アイツはあの性格だから、僕と違って、慕ってくる人間も多い。
二人の兄は、アイツを溺愛。
お母様だって、冷たい態度を取っているけど、結局はアイツのことを気にしている。

そして、思う。

“僕は、何々だろう…”って。

ただ正統な血筋ってだけ。ただイヌでなく、スズメってだけ。
それ以外は、捻くれだし、わがままだし、人望なんてないし、世話役だって今は空席。

全部、アイツに負けてる。

全部、アイツに敵わない。

“僕より、アイツが正統血筋で生まれてきた方が、みんな、きっと喜んだ”

いつしか、そんな考えを、持った。

そんなこんなでさらに関係が微妙になった頃。

「朱実を出る許可が出たってホントなのっ？」

「ああっ」

アイツは、突然、この屋敷を出て行くと言い出した。お母様の許可も出て、問いかけた僕たちに、アイツは妙に清々しい顔を見せて頷いた。

「ホントなんだ…」

その時の衝撃といったら、もう表せないくらい。

「まぁ他に帰るところがないんなら、仕方ないわねっ…」

「いってきますっ…！」

たくさんの人に見送られて、あの頑固極まりないお母様まで折って、アイツは堂々と旅立っていった。

あの旅立ちは、柄にもないけど、アイツが世界を変えるような、そんな気さえするくらい、どこか運命的な旅立ちだった。

そして僕は、今までずっと一緒に育ってきた片割れをなくし、一人、まだ屋敷の中にいた。

「桜時クンたちが鬼人退治で大活躍だってぇ〜っ！」

「おおっ！すっごぉ～いっ！さっすが桜ちゃんっ！」
「……。」

アイツが旅立ってしばらくした頃、松兄と竹兄が話しているのを聞いた。どうやらアイツは、ウチの屋敷で散々暴れていったあの破天荒女について、鬼退治の旅をしているらしい。あの女が“桃タロー”の弟子ということもあって、かなり世間を騒がせているようだ。

「これで僕らも鼻高々だねぇ～っ！梅人クンっ！」
「別にっ…」

松兄の言葉に、素気ない返事をした。

勝手な話だ。“置いていかれた”と思うなんて。

どんどんと自分の道を切り拓いていくアイツに嫉妬するなんて、本当に勝手な話だ。

ますます自分が、わからなくなる。

なんで朱実に生まれてきたのか、なんでここにいるのか、なんで生きているのか、わからなくなる。

深く、迷い込んだ…。

「梅人っ！」

久々に会ったアイツは、輝くばかりにまっすぐな瞳をしていた。
庭の隅っこで一人泣いていたアイツと、大粒の涙を流していたあの瞳と、同じものなのだろうかと目を疑った。
未来を見据えた、希望に満ちた瞳。

「“瞬花っ…終刀”っ！！」

鬼をも凌駕する力。

「ハチぃぃぃ～～っ！」
「だあああああっ！！触るんじゃねぇっ！！」

たくさんの仲間たち。

「ハハハっ…！」

たくさんのものを得て帰って来たアイツは、心底楽しそうな笑顔で、笑っていた。

「……。」

僕は、そんなアイツを、変わったアイツを、あの頃と同じようにただ見ている。

変わらないのは、僕だけ。
何も見つけられないのは、少しも進めないのは、僕だけ。

やっと気付く。

僕はずっと、アイツになりたかったんだ……――――

龍国近くの森。小さな洞穴。
『お母さんっ！ただいまっ！』
小さな明かりを手に、薄暗い洞穴へと入って来たのは、ロムとレムの双子であった。
「あのねっ、パンは持って帰ってこれなかったんだっ」
「けどっ、優しくて強いお兄ちゃんたちから、いっぱいお金を貰ったんだよっ！」
そう言ってロムが、洞穴の奥で眠る母に、梅人に貰ったばかりの分厚い札束を見せる。

「すっごくいいお兄ちゃんたちだったのっ！」
「お花を咲かせたりも出来てねっ！とってもカッコ良かったんだっ！」
満面の笑顔で桜時と梅人のことを話す、ロムとレム。まるで自分のことのように得意げに、桜時と梅人のことを語った。
「このお金で買い物してくるよっ！」
「お母さんっ！何が食べたいっ？」
「うっ…あぁっ…」
薄暗い洞穴の奥から聞こえてくる、弱々しくも、どこか不気味な声。母と呼ばれる女のものとは思えないほどに、低くて重い。狭い洞穴に、蠢くように響き渡る。
「ロム…レムっ…」
『なぁにっ？お母さんっ』
伸ばされた手に、駆け寄るロムとレム。その手は、ロムとレムなどすっぽりと覆えそうなほどに大きく、指の先についた爪は、人など簡単に斬れそうなほどに、鋭く尖っていた。
「お母さんっ…その…お兄ちゃんたちが食べたいわっ…」
ロムたちの持つ明かりに照らされ、そっと輝く金色の角。
「連れて来てくれる…？」
禍々しいまでの深緑の皮膚。洞穴いっぱいに広がった大きな体。
『うん、わかったよっ…お母さんっ…』
目の前に眠る鬼の言葉に、ロムとレムは冷たく微笑んだ。

第４６章　誘いの二重奏　★１

龍国・エセお菓子の家こと桃原家。二階・バルコニー。

『……。』

自分と梅人の過去とその関係についてを語った桜時と、それを聞いた輝矢が、神妙な表情を見せながら、バルコニーから見える景色を眺めていた。気がつけば日も傾き、赤い色の光を放って水平線の向こうに沈もうとしている。

「もうすぐ…日も暮れるなぁ…」

「ええ…」

二人が静かに言葉を交わす。

「ハチ…」

「んっ…？」

そっと響く自分の名を呼ぶ声に、桜時が少し表情を固くして振り向く。

「このムードに流されてチュ～しません？」

「しねぇーよっ！！」

「そうですか…」

桜時に全力で断られ、少しがっかりしたように肩を落とす輝矢。

「では行きましょうか」

「へっ？」

沈んでいく日に背を向ける輝矢に、桜時が不思議そうに首を傾ける。

「行くって…どこにっ？」

「アナタの成金イトコのお迎えにですよ」

「梅人のっ…？」

輝矢が笑顔で答えると、桜時の表情が少し曇る。

「ええ、その辺迷って野垂れ死なれて、派手派手スズメババアに文句を言われるのは嫌ですからねぇ」

「けどっ…」
「……っ」
すかさず口を挟んだ桜時に、輝矢が視線をやる。輝矢が見ると、桜時は下に視線を落とし、深く迷い込んでいるかのように、困惑した表情を見せていた。
「あっ…」
桜時が顔を上げ、自分を見ている輝矢に気づく。
「ごっごめんっ、そうだなっ！探しに行くかっ！」
「……。」
作ったような明るい笑みを浮かべ、バルコニーを出て行こうとする桜時を、輝矢がまっすぐに目で追う。
「梅人に何かあったら、確かに孔雀さん、うるせぇーしっ…！」
「ハチっ」
「えっ…？」
バルコニーを出ようとした桜時が、輝矢に名を呼ばれ、振り返る。
「何っ…」
「長い時間、考えるよりも、たった一言、言葉を交わす方が…わかることもあるのですよっ…？」
「……っ」
穏やかな笑顔でそう話す輝矢に、桜時が少し目を開く。
「……そうだなっ…」
俯いた桜時が、そう呟きながらそっと微笑む。
――――俺にとってあいつは…一番近くて、一番遠い存在なんだっ…きっと…――――
ひらいた距離を、埋めようとはしなかった。互いを突き離すように距離を置いて、出来る限り触れないようにして、ひらいた距離がどんどんひらいていくことさえ、見て見ぬ振りをした。

「俺たちにはっ…その一言が足りなかったのかも知れないっ…」
「まだ間に合います」
「えっ…？」
悲観するように呟いた桜時に、聞こえてくる晴れやかな声。その声に、桜時が顔を上げる。
「アナタも梅人も…まだ考えている最中なのですから…」
「……っ」
放たれるその笑顔が、いつも、桜時の曇りを晴らしてくれる。
「……そうだなっ」
今度は悲観のない、まっすぐな笑みで、桜時が大きく頷いた。
「じゃあ行っ…」
「おおぉ～っ！おったおったぁ～っ！」
『……っ？』
輝矢と桜時が振り向くと、そこへモンキとユキジがやって来た。
「こんなところにおったんかぁ～」
「ねぇ、そろそろ晩御飯だけど、梅人どっ…」
「丁度良かった。成金イトコを探しに行きますよ、サル、キジ」
『へっ？あっうん』
輝矢の言葉に、少し首を傾げたモンキとユキジであったが、特に異論を唱えることなく、すぐに頷く。
「えぇ～っ？梅ちゃん、探しに行くのぉ～っ？」
そこへ現れる、松人と竹人。
「じゃあ僕たちもぉっ…！」
「何となく邪魔になりそうなので、アナタたちはここで待っていて下さい」
ついて行こうとする松人たちに、冷たく言い放つ輝矢。
「邪魔ってぇ～っ！！ひどいなぁ～っ！輝矢ちゃ～～んっ！」
「僕たちも梅人クンのことが心配なんだよぉぉ～～っ？」
輝矢に対し、松人と竹人が身を乗り出して熱弁をする。
「梅ちゃんがいないとハーモニーがぁ～っ！」

「梅人クンがいないと僕らのハーモニーがぁっ…！！」
「もう二度と唄わなくて結構です」
必死に訴える二人に、心動かされることなく答える輝矢。
『ううっ…！』
「まっ松兄、竹兄っ…」
ハーモニーを否定され、落ち込む兄たちを見兼ね、少し困ったような表情で話しかける桜時。
「梅人は俺たちが必ず探してくっから、二人は心配しないで待っ…！」
「うわぁぁぁ～～～んっ！桜ちゃ～～～んっ！！」
「桜時クンってば、やっぱり優しいぃぃ～～っ！！」
「ぎゃあああああああっ！！抱きつくなぁぁぁっ！！」
瞳を潤ませた松人と竹人が、勢いよく桜時に抱きつくと、桜時は苦しげな声を出した。

日も暮れた頃、龍国はずれの森。
「あぁ～あっ…ホントに迷子になっちゃった…」
闇雲に歩き回っていた梅人であったが、いつの間にか人の気配すらない深い森の中へと迷い込んでしまっていた。日も暮れて辺りは真っ暗になってきており、これはさすがに危機を感じる状況である。
「そろそろ雀化して帰るかなぁ～」
梅人がふと足を止め、獣化しようと空を見上げた。
「お兄ちゃんっ…」
「えっ…？」

獣化しようとしたその時、幼い声に呼ばれ、梅人が振り返った。
「えへへっ」
「君はっ…」
梅人が振り返った先に立っていたのは、茶色の髪に金色の瞳のまだ幼い少年。そう、梅人が昼間に出会ったあの双子の一人であった。
「確かっ…ええっと…」
「レムだよっ」
どちらであるかを迷っていた梅人に、金色の瞳のレムが優しく微笑みかける。
「レムっ…って、何でここにっ？家に帰ったんじゃっ…」
「うん、家に帰ったよっ」
戸惑う梅人に、レムはさらに大きく微笑みかける。
「それでお兄ちゃんから貰ったお金見せたらね、お母さんがお礼が言いたいから、家に連れてきてくれってっ」
「お礼っ？」
笑顔で言葉を続けるレムに、梅人が少し眉をひそめる。
「そうっ…お礼っ…」
レムがどこか楽しげに笑う。
「それで、僕を探してここへ…？」
「うんっ」
「……。」
レムの見せる無邪気な笑顔は、昼間見た時の清く純粋なものとは、少し違って見えた。何かはわからないが、かすかに感じる違和感に、梅人が表情を曇らせる。
「もちろん、来てくれるよねっ？」
そんな梅人に、レムが右手を差し出す。
「ねぇっ…？お兄ちゃんっ…」
「……っ」
その瞳は、梅人の拒みを許さないかのように、強く輝いていた。

龍国・中心街はずれ。
「おぉ～いっ！成金梅人ぉ～っ！」
「どこにいるのぉ～っ？捻くれイトコぉ～っ！」
「あんまり私の手を煩わせると、消しますよぉ～？わがままスズメぇ～っ」
「……。」
好き勝手に呼びながら、梅人のことを捜索している輝矢たちに、少し呆れた表情を見せるハチ。確かにどの呼び名も否定は出来ないが、ここまで言われると、さすがに梅人が哀れである。
「ハァっ…まぁいいかっ。おぉ～いっ！梅っ…！」
「あっぶなぁ～～～いっ！！」
「へっ…？」
梅人を探して道に出たハチに、横から走って来た車が、まっすぐに突っ込んでくる。自分の方へと突っ込んでくる車に、目を丸くするハチ。
「ぎゃあああああああああっ！！」
「うっ…！」
――――キキィィィィィィィーーーっっ！！――――――
ハチの悲鳴とブレーキ音が激しく響き渡る。
「ふぅ～っ」
「へっ…？」

どこか安心したような一息と、いつまでの走らない衝撃に、固く目を閉じていたハチがゆっくりと目を開く。
「あっ…」
ハチへと突っ込んできていた車は、ハチに当たる寸前のところで止まっていた。
「あっぶなかったっスぅ～っ！犬轢いちゃったぁ～になるとこだったっスよぉ～っ」
「うあっ…！」
聞こえてくる声に、思わず大きく口をあけるハチ。ハチに突っ込んできたのは、よく見れば見慣れた黒のオープンカーで、それにはこれまた見慣れた二人組が乗っている。
「これ以上、点引かれたらやべぇーんだから、気ぃつけろよっ」
「俺はそこまで引かれてないっスよぉっ」
「何っ！？まじかっ！？」
「ゴンっ！羊スケっ！」
『んっ？』
オープンカーに乗りながら会話を交わしていた二人が、ハチの声に振り返る。
「おうっ！ハチ公じゃねぇーかっ！」
「今日はよく会うっスねぇ～っ」
「いやっ…お前らまず、轢きそうになったことに対して謝れよっ…」
ごく普通の挨拶を返してくるゴンと羊スケに、少し呆れた表情を見せるハチ。
「キツネ、ヒツジ」
「あっ、輝矢さぁ～んっ」
「何だぁ、今回は竹取も一緒かっ」
ハチの後方から輝矢がやって来る。
「捻くれわがまま成金スズメを見ませんでしたか？」
「あっ？ハチ公のイトコっつーあのガキのことかっ？」
梅人のことをひどい呼び名で言う輝矢であったが、誰のことなの

かはゴンにあっさりと伝わる。
「さぁ？昼別れてから見てねぇーけど…」
「じゃあ今から探して下さい」
「何っでだよっ！！」
さらりと言い放つ輝矢に、ゴンが思わずオープンカーの上で立ち上がって怒鳴り返す。
「今日の昼にハチ公にも同じようなこと言ったけどなぁっ！俺はオトポリであって、その辺の便利屋じゃあっ…！」
「ええやぁ～んっ！困った時のゴンゴンやろぉ～っ？」
「そうそうぅ～唯一の取柄が、その職業に就いてるってことなんだからさぁ～っ」
「うっせぇっ！殴るぞっ！」
何とか丸めこもうとするモンキとユキジであるが、その言いっぷりに逆にゴンの機嫌を損ねてしまう。
「協力しないと、座黒に言ってクビにしてもらいますよ？」
「何だっ！そのタチの悪い脅しっ！！」
輝矢の脅迫に、ゴンがさらに怒鳴りあげる。
「だいたいお前らはなぁっ…！」
「んっ…？」
輝矢たちとゴンのやり取りが続く中、ハチがふと人が行き交う背後の道の方を振り返る。

「……っ」
ハチの目に入ったのは、夜の町の人混みの中を行く、大人に混ざった一人の幼い少年。茶色い髪に銀色の瞳は、かなり見覚えがあった。

「あれはっ…ロムっ…？」
今日の昼に出会ったばかりの双子の少年の姿に、ハチが少し眉をひそめる。

「あっ…」
止めどなく流れる人混みの中に、少しずつロムの姿が小さくなっていく。
「……っ」
ハチは静かにその場を駆け出し、ロムの後を追った。

「ったく、しゃーねぇーなぁっ」
「何だかんだで協力するんスよねぇ～ゴンさんはっ」
「うっせっ！」
その頃、輝矢の脅しに負けたゴンが、梅人探しを承諾する。仕方なさそうに頷き、少し頭を掻くゴンを見ながら、羊スケはどこか楽しげに笑みをこぼしていた。
「ではキツネとヒツジは町全体を、サルとキジは町の西はずれ、で、私とハチは町の東はずれを探しましょう」
素早く皆に指示を出していく輝矢。
「さっ、じゃあ二人でラブラブ捜索に行きましょうかっ！ハっ…」
ハチがいるはずの背後を振り返った輝矢が、笑顔を見せたまま、一瞬、固まる。
「ハチっ…？」
消える笑顔。輝矢が振り返った時、すでにそこにハチの姿はなかった。
「あれぇ～？どこ行ったんやぁ～？アイツぅ～」
「何ぃ～？桜時まで迷子ぉ～っ？」
周囲を見回しながら、モンキが首を傾げ、ユキジが眉をひそめる。
「……。」
「いやっ、俺のせいみたいに見んなよっ…」
鋭い視線を向ける輝矢に、ゴンは少し呆れた表情で突っ込んだ。

第４６章　誘いの二重奏　★２

「ハァっ…ハァっ…」
町で見かけたロムを追い、思わず輝矢たちの元から離れてしまったハチは、いつの間にか人もいない、家も店もない、町はずれまで来てしまっていた。少し息を乱したハチが、その場に足を止める。
「たっ確かっ…この辺っ…」
「お兄ちゃんっ」
「……っ？」
聞こえてくる幼い声に、ハチが勢いよく振り返る。
「あっ…」
「フフっ」
ハチが振り返ると、そこには、無邪気な笑顔を見せた、茶色の髪に金色の瞳の少年が立っていた。
「お前っ…」
――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――
ハチが少年の方に近づいていきながら、白い煙に包まれて人化する。

「ロっ…レムっ…？」

少年の近くに駆け寄った桜時が、“ロム”と言おうとして、“レム”と言い直す。
「そうだよっ、よくわかったね、お兄ちゃんっ」
「あっああっ、目の色、違うからっ…」
微笑むレムに、少し戸惑うように答える桜時。その微笑みは、昼間に見た時の無邪気で眩しい笑顔ではなく、どこか重い、何かに呑み込まれてしまいそうな、そんな笑みであった。

「……っ」
感じる違和感に、桜時がレムを見つめながら、少し眉をひそめる。
「そっそういや、ロムは？一緒じゃないのか？」
桜時がそう問いかけ、少し辺りを見回す。
「さっき町でロムを見かけて、それで追いかけて来たんだけどっ…」
町で見かけた少年は、今目の前にいる少年と瓜二つではあったが、茶色の髪に銀色の瞳だった。
「ロムなら、もう一人のお兄ちゃんと一緒にいるよっ」
「えっ…？」
笑顔で答えるレムに、桜時がさらに眉をひそめる。
「もう一人のお兄ちゃんって…梅人っ？」
「うんっ」
困惑した様子の桜時に、レムが大きく頷く。
「お兄ちゃん、もう一人のお兄ちゃんを探してるんでしょっ？」
レムがそう言って、桜時の方に右手を伸ばす。
「ついてきてっ、連れていってあげるよっ」
「……っ」
差し出された手を見た途端、桜時の胸がそっと騒いだ。

「ねっねぇっ、レム」
「……。」
後ろを歩く梅人の呼びかけに、前を歩いていたレムの足が止まる。
それにつられて、梅人も足を止めた。二人が歩いているのは、梅人が迷い込んでいたところよりも、さらに深い森の奥。夜の闇にすっかり呑み込まれた不気味な森には、人の気配どころか生きている物の気配さえない。

「本当にこっちであってるわけっ…？」
少し曇らせた表情で、梅人が背中を向けたままのレムへと問いかける。
「この辺、そう見たって人の家がありそうな感じにはっ…」
「お兄ちゃん、もしかして…怖いのっ…？」
「だっ誰がっ！」
レムの言葉に、梅人が少しムキになって言い返す。
「僕はただ、本当に道があってるのかが気になっただけでっ…」
「大丈夫だよっ…」
「えっ…？」
返って来るレムの声が、暗く深い森に高く響き、梅人は思わず言葉を止めた。
「……っ」
レムがゆっくりと、梅人の方を振り返る。
「お兄ちゃんは…一人じゃないからっ…」
「えっ…？」
振り返ったレムに、梅人の表情が曇る。振り返ったその少年は、茶色の髪に銀色の瞳をしていた。
「……っ！」
梅人が急に表情を険しくし、少年から距離を取るように後ろへ飛んで、身構える。
「どうしたのっ…？お兄ちゃんっ…」
「君こそどうしたんだよっ…」
微笑んで問いかける少年に、梅人は厳しい表情のまま、鋭く聞き返す。
「ロムっ…」
「……っ」
先程とは違う名を呼ぶ梅人に、少年が唇の端を持ち上げる。

「僕は…レムについて来たつもりだったけどっ…？」
梅人が刺すように少年を、ロムを見つめる。
「よくわかったね…」
「レムは金色の瞳をしてた…でも君の瞳は銀色だ…」
「フフフっ…大正解ってとこかなっ…」
鋭く指摘した梅人に、ロムはさらに楽しげに微笑んだ。
「すごいねっ、お兄ちゃんっ…あんまり誰も気付かないのにっ」
「同じような経験があるからねっ…」

――――赤毛が梅人様で、ピンク色が桜時様よっ！――――

髪色で区別されていた幼少の頃の思い出があるからこそ、ロムとレムの小さな違いが、妙に目についたのかも知れない。

「そっかっ」
「それで？こんな手のこんだことをした目的は？」
「別に目的なんてないよっ」
「えっ…？」
すぐさま微笑むロムに、梅人が眉をひそめる。
「ただっ、この森にお客さんを連れて来るのはレムしか出来ないから、入れ替わっただけっ」
「連れて来る…？」
梅人の表情が曇る。

――――もちろん、来てくれるよねっ？――――

レムの手を取ってから、この深い森へと入り込んだ。生きる物の気配さえしない、どこか不気味な空気を醸し出しているこの森。自然に存在する、ただの森とは思えない、この森。

「まっまさかっ…！桜時もっ…！」

「梅人っ！」

「……っ」

その声は、梅人の予感に答えるように、聞こえてきた。梅人が勢いよく振り返る。

「桜時っ…」

梅人が振り返ると、そこには金色の瞳の少年・レムに連れられた、桜時の姿があった。

「やぁ～っと見つけたっ！みんなで探しまくってたんだぞぉ？」

桜時は少し表情をしかめ、ロムの横にいる梅人の元へと歩み寄っていく。

「さぁ、もう晩飯だしっ、とっとと帰っ…！」

「帰れないんじゃないかな…」

「へっ？」

遮る梅人の言葉に、桜時が首を傾げる。

「そう簡単にはっ…」

「梅人…？」

ゆっくりと並ぶロムとレムの姿を見つめながら、厳しい表情で言い放つ梅人。桜時はそんな梅人を、少し戸惑うように見つめる。

「ねぇっ…？」

『……っ』

ゆっくりとした口調で問いかける梅人に、並んだロムとレムは同じ表情で、同じように微笑む。

「どっどういうことだっ？ロムっ？レムっ？」

「さっき梅人お兄ちゃんには言ったよね」

困惑した様子でロムとレムに問いかけた桜時に、ロムがゆっくりと口を開く。

「この森にお客さんを連れて来ることが出来るのは、レムだけだっ

て…」
「連れて来る…？」
「……。」
ロムの言葉に、初めて聞く桜時は眉をひそめ、二度目の梅人はさらに険しい表情を見せた。
「そしてね、お客さんを、お母さんのところに連れていくことが出来るのは、僕だけなんだっ…」
『えっ…？』
「……っ」
そう言ったロムが、勢いよく右手を振り上げた。

――――パァァァァァァーーーンっ！――――

『……っ！』
ロムが右手を挙げた瞬間、ガラスの破片のようにひび割れ、飛び散っていく森の景色。桜時と梅人が、思わず目を見開いて、崩れ落ちていく景色を見つめる。
「こっこれはっ…」
「空間系の能力ってやつかっ…！？」
驚き惑う梅人の横で、桜時が素早く身構える。
『フフフフっ…』
『……っ！』
完全に崩れ落ちた森の景色。広がる暗闇の空間の中で響く、二重の笑い声に、桜時と梅人が同時に振り向く。
『ようこそっ、お兄ちゃんたちっ…』
桜時と梅人に片手を差し出し、出迎えるような格好を取るロムとレム。
『ここが僕らの家っ…』

ただ広がる暗闇を差し、双子は“家”と微笑む。
『そしてこれがっ…』
ロムとレムが、ゆっくりと後方を振り返った。
『僕らの“お母さん”だよっ…』
「グガアアアアアアアアアアアアアアっっっ！！！」
『……っ！』
咆哮をあげる鬼の形をした彼らの母に、桜時と梅人は、大きく目を見開いた。
「まったく、イヌコロまでおらんようになるとはなぁ～っ」
その頃、輝矢たちは、帰って来ない梅人とともに、突如、いなくなったハチの捜索をしていた。龍国の町内の捜索はゴンと羊スケに任せ、輝矢、モンキ、ユキジは、龍国はずれの森辺りまで、やって来ていた。先頭を行くモンキが、少しボヤくように呟く。
「まったく迷惑なイヌやでぇ～っ！って…」
――――ゴォォォォォォォ～～～ンっ！！――――
「痛っつつぅぅぅぅぅっっ！！」
「……っ？」

深い森の奥へと続く道の途中、壁も何もないところで何かにぶつかり、倒れ込むモンキ。そこには何もないのだが、確かに響いた衝撃音と、額を押さえてしゃがみ込むモンキに、後ろを歩いていた輝矢が、眉をひそめる。

「亜空間っ…？」

前方を見つめ、厳しい表情を見せる輝矢。

「痛たたたっ…輝矢ぁぁ～んっ！腫れたオデコに愛の治療をっ…！」

「キジっ」

「はぁ～いっ」

「二人してすっごい無視っ…」

輝矢の指示に頷くユキジ。まったく相手にされないモンキが、オデコを押さえながら落ち込んでいく。

「よっ」

――――ボォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

「……っ」

白い煙に包まれ、人化した由雉が、懐から素早く赤い羽根を取り出す。

「“左翼・滅羽”っ…！」

由雉が、前方へ向け、赤い羽根を投げ放った。

――――パァァァァァァァァーーーーンっ！――――

『……っ』

投げ放たれた赤い羽根は、前方で一瞬だけ姿を見せた壁のようなものに突き刺さると、そのまま力なく砕け散っていった。その光景に、輝矢たちが眉をひそめる。

「何かがあることだけは、間違いないようだねぇ…」

「嫌な予感がしますね」
由雉の言葉に、険しい表情を見せる輝矢。
「私のハチに何かがあったような…想い合う関係であるからこそ走る、虫の知らせのようなものが…」
「まぁこの状況なら、誰でもそう思うけどねっ…」
真剣な表情で語る輝矢に、こっそりと突っ込みを入れる由雉。
「サル、キジ」
「んん～っ？」
まだ腫れているオデコを押さえながら、モンキが顔を上げる。
「ヘンゼルとグレーテルを呼んできて下さい」
「ええぇっ！？」
「いいから早くっ」
「はいはぁ～いっ！」
出てくるヘンゼルの名に顔をしかめたモンキであったが、輝矢がもう一度強く言うと、大人しく頷き、すぐさま森を駆け出していった。
「あっ、待ってよぉ～っ」

――――ボォォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

由雉が再び雉化し、走り去っていくモンキの後を追っていく。

「……。」
その場に一人、残る輝矢。
「……っ」
前方に立ちはだかる見えない亜空間を見つめ、輝矢はそっと目を細めた。

第４６章　誘いの二重奏　★３

「おっ…鬼っ…」

目の前に現れた、見慣れぬ異形の生物を見て、梅人は唖然とした表情で呟いた。深緑の皮膚に、鋭く尖った十本の爪と二本の牙。頭部から生えた金色の角が、暗闇で唯一の光のように輝く。少年たちが“母”と呼んだその生物は、少年たちとはあまりにかけ離れた姿をしていた。

「母親ってっ…」

桜時が険しい表情で、現れた巨大な鬼を見上げる。

「いらっしゃいっ…」

『……っ』

咆哮を放っていた鬼は、その顔を少し緩ませ、桜時と梅人に低く響く声で囁いた。鬼に出迎えの言葉を向けられ、桜時と梅人が顔をしかめる。

「うちのロムとレムがお世話になったようで…ありがとう…」

鬼は駆け寄るロムとレムに、それぞれ左右の手を伸ばし、その大きな手で双子の頭をそっと撫でた。

「息子たちを助けてくれたお礼がしたいの…だからっ…」

双子を撫でていた手を、ゆっくりと上げる鬼。

「殺してあげるっ…！」

『……っ！』

“鬼爪っ…天回”っ！！」

「クっ…！」
両手の十本の爪を、二人に向けて勢いよく放つ鬼。桜時が表情を険しくする。
「梅人っ！」
「えっ？うわああっ！」
桜時が梅人を強く押し、横へと突き飛ばす。
「桜時っ…！？」
鬼爪の直撃コースからハズれた梅人が、何とかバランスを整え直し、桜時の方を振り返る。
「村雨丸っ…」
鋭い表情を見せた桜時が、素早く腰に下ろしていた村雨丸を抜き放つ。
「“瞬花っ…終刀”っ！」
――――パァァァァァァァーーーンっ！――――
桜時が勢いよく村雨丸を振り下ろし、桃色の一閃が鬼爪の間を走ると、十本の鬼爪が桃色の花びらとなって美しく散っていった。
「クっ…！」
鬼爪を抜け、向ってきた一閃を、鬼が顔をしかめながら、上に飛んで避ける。
「……っ」
「何っ…！？」
上空へと飛び上がった鬼の、すぐ目の前へと現れる桜時。
「村雨丸っ…！」
「クっ…！」
村雨丸を振り下ろす桜時に、鬼が少し顔をしかめながら、素早く新しい鬼爪を生やして応戦する。

――――キィィィィィィィーーーンっ！――――――

空中で激しくぶつかり合う、村雨丸と鬼爪。

「……。」

そんな桜時の戦いの様子を、下から複雑そうな表情で見つめる梅人。

「あんな化け物に…動じもしないで…」

何の躊躇いもなく刀を抜き、あんな化け物にまったく引けを取らない強さで、戦っている。

――――僕はただ、見ているだけ…――――

「……っ」

また見ていることしか出来ない自分に、梅人はそっと唇を噛む。

「ウウっ…！」

桜時の村雨丸に、鬼爪が徐々に押され始める。爪から伝わる重みに、歪んでいく鬼の表情。

「なかなかやるわねっ…」

「……っ」

鬼の言葉に桜時は眉を少し動かしただけで、特に答えようとはせず、刀に力をこめることに集中していた。

「でもいいのかしらっ…？」

「何っ…？」

試すように問いかける鬼に、眉をひそめる桜時。

「私が死んだらっ…あの子たちが悲しむわよっ…？」

「あの子たちっ…？……っ」

桜時が少し視線を落とし、下で並んで立っているロムとレムの方を見る。
「何言ってんだよっ」
すぐさま鬼の方へと視線を戻す。
「どうせお前がアイツらのこと、騙して利用したんだろっ！？」
少し責めるように、鬼を見つめる桜時。
「本当の母親も大方、お前が隠してっ…！」
『違うよっ』
「えっ…？」
下から返って来る答えに、桜時が少し驚いたように声を漏らしながら、再び双子のいる下の方を見下す。
「ロムっ…？レムっ…？」
『……っ』
視線を向けた桜時に、ロムとレムは無邪気に微笑みかけた。
『お母さんは、本当に僕らのお母さんだよっ？』
「お前らは騙されてんだよっ！こいつは鬼っ…！」
『うんっ、鬼になる前はお母さんだったのっ』
「えっ…？」
その双子の言葉に、桜時の表情が止まる。
「鬼にっ…なる前っ…？」
困惑した表情で、双子の言葉を繰り返す桜時。

――――シロキっ…ねぇっ…シロキっ…――――
――――そう…僕はすでに人ではありません…――――

桜時の脳裏を過ぎる、眠り姫の城のシロキとクロト。そして虎国で戦った、狐族の青年・ギン。

「鬼人化っ…人間っ…」
出てくる一つの答えを、桜時が弱々しく口にする。

「そうっ…」
桜時の言葉に、鬼が微笑んで頷く。
「私はかつて人間だった鬼っ…あの子たちの母親だった鬼っ…」
残酷に響く、その言葉。
「正真正銘、あの子たちの母親なのよぉぉぉっ！！」
「うっ…！うわあああああああっ！」
衝撃の事実に少し刀を怯めさせてしまった桜時が、さらに力を入れて爪を振り下ろす鬼に押され、地面へと弾き飛ばされる。
「うあぁっ…！」
地面へと背中を打ちつけ、桜時が苦しげな声をあげる。

「桜時っ…！」
様子を見守っていた梅人が、思わず身を乗り出す。

「ううっ…」
「ウフフっ…アハハっ…！アハハハァっ…！！」
少し表情をしかめながら、ゆっくりと体を起こす桜時。どこまでも広がる暗闇の中で、かつて母であった鬼の笑い声が響き渡る。

『……っ』
そんな桜時と母の姿を見ながら、双子は冷たく微笑んだ。

その頃、亜空間外。

『“解”っ！！』
モンキとユキジの呼んできたヘンゼルとグレーテルが、目には見えない亜空間の前で両手を合わせ、空間を解こうと力を発していた。
『……。』
しかし何も変わらぬ景色に、二人が表情をひそめる。
「ダメなようですね」
『ええっ…』
後方から口を挟む輝矢に、ヘンゼルとグレーテルがしみじみ頷く。
「空間系の能力というものは、力を持つ二人のシンクロが強いほど、強い力を発揮いたします」
「この亜空間を作った者たちは、私たちより遥かに強くシンクロしているのでしょう…私たちの力ではとても及びません…」
いつになく真面目な表情で語るヘンゼルとグレーテル。
「そうですか…」
二人の答えを聞いた輝矢が、さらに表情を曇らせる。ヘンゼルとグレーテルも、桃原家を桃の苑に変えてしまうほどに強い空間系の能力を有する者だ。もしかしたら解けるのではと思ったが、この二人でもどうすることも出来ないというのなら、もう本当にこの空間を解くことは不可能なのだろう。
「お役に立てなくて申し訳ありませぇ～んっ！輝矢様ぁ～っ！」
「こんな有り様では、桃原家のメイドの名が泣きますわぁ～っ！」
「そんなに凄い名でもないでしょっ…？」
一気に真面目な表情から情けない表情へと変わるヘンゼルとグレーテルに、ユキジが呆れた表情を見せる。
「傷心ヘンゼルを慰めてぇ～っ！門貴様ぁぁ～っ！」
「絶対いやぁぁぁぁぁっっ！！！」
「仕方ありませんねっ」
『へっ？』
いつもの追いかけっこを始めようとしたモンキとヘンゼルが、輝矢の言葉に目を丸くして、動きを止める。

「こうなったら力尽くといきましょう」
『えっ！？』
言葉を続ける輝矢に、さらに驚きの表情を見せるモンキとヘンゼル。
「“月器・三日月”っ」
輝矢が右耳のピアスを弾き、月器を目覚めさせ、三日月を構える。
「ちっ力尽くって輝矢んっ？」
「何をなさるおつもりですのぉ？輝矢様ぁ～っ」
「言葉の通りですよ、手伝いなさい、サル、キジ」
「えぇぇ～っ」
「何かよくわからんけど、喜んでぇっ！」
輝矢の指示に、いつも通り嫌そうな声を出すユキジと、よくわかっていないまま大きく手を挙げて返事をするモンキ。
――――ボォォォォォォォォ～～～ンっ！――――
モンキとユキジが白い煙に包まれ、同時に人化する。
「何をなさるのでしょうか…？」
「さぁ…？」
ヘンゼルとグレーテルが首をかしげながら、戸惑うように三人の様子を見守る。
「下がっていて下さい、ヘンゼル、グレーテル」
『えっ？』
輝矢の言葉に、二人が目を丸くする。
「森ごと吹き飛ばしてしまうかも知れませんからっ」
『……えっ…？』
笑顔で言い放つ輝矢に、ヘンゼルとグレーテルが少し固まる。
『……っ』
同時に構えを取る、輝矢、門貴、由雉。
「“月器・下弦”っ…」

「如意棒・第二の舞っ…」
「滅羽・滅羽っ…“合翼っ…」

輝矢が三日月を満ちさせ、門貴が如意棒を地面へと突き立たせ、由雉が両手の赤い羽根を二枚、重ね合わせる。

「“水月”っ…！」
「“浄”っ！！」
「“重滅羽”っ…！」

三人が一斉に、技を放つ。

――――――バァァァァァァァァァーーーーンっ！！――――――

激しい破壊音とともに、吹き荒れる衝撃風。その衝撃風に見えなくなっていた三人の前方の景色が、風がおさまることで徐々に明らかになっていく。

『うわあっ…』

目の前に見える景色に、ヘンゼルとグレーテルが思わず声を漏らす。

「亜空間の壁に…」
「無理やり穴をっ…」

そこに存在するのは、断片のように空中に浮かぶ、真っ暗闇の空間への入口。森の中に浮かび上がるその異質な空間からは、不気味な空気が醸し出されていた。

「まぁ周りの森もちょっとヤラれちゃってるけどねぇ～っ」

空間の入口の左右で、巻き添えを食って薙ぎ倒されている木々を眺めながら、由雉が呟く。
「すべてはハチを助けるためです」
「って言って、この森治すのは、どうせ桜時なんだから…」
「そんな思いきりのいい輝矢んも好きやぁ～っ！」
「では行きましょうか」
輝矢が出来たばかりの、亜空間への入口の前へと立つ。
「二人はここで待機していて下さい」
「あっ、輝矢様っ」
「オトポリの方へご連絡いたしましょうかっ？」
待機を命じた輝矢を、ヘンゼルとグレーテルが呼び止める。
「……いえっ…」
『えっ…？』
少し迷うように俯いた後、そっと答える輝矢に、二人が眉をひそめる。
「少し…予感めいたものがするので…」
『予感っ…？』
意味深な言葉を呟く輝矢に、戸惑いの表情を見せる二人。
「では行きましょうっ、サル、キジっ」
「はいはぁ～いっ！」
「えぇぇ～っ」
いつものやり取りをしながら、輝矢、門貴、由雉の三人が、出来たばかりの亜空間の入口の中へと、足を踏み入れていく。
『あっ…』
三人が入るとすぐに、その入口は塞がっていき、完全に閉じると、再び見えなくなった。
「入口が…」
「輝矢様っ…」
ヘンゼルとグレーテルは、どこか不安げな表情で、消えた入口のあった方を見つめた。

第４６章　誘いの二重奏　★４

「“鬼口”っ！！」
「クっ…！“瞬花”っ…！！」

――――パァァァァァァァァーーーーンっ！――――

かつて人間であり、双子たちの実の母親であったという衝撃の事実を告げた鬼が、大口を開き、桜時へ向けて鬼口を放った。桜時は村雨丸を振るい、鬼口を桃色の花びらへと変えて、散らせる。

「やるわねっ…！」
「村雨丸っ…！」
互いに相手の方へと飛び出していき、村雨丸と鬼爪を交錯させる桜時と鬼。

「母親って…」
その戦いを、茫然と見つめる梅人。
「人が鬼になったって…そんなことっ…」
鬼人化人間のことを知らない梅人にとっては、鬼が告げた事実は、衝撃的過ぎたようであった。思考がついていかないせいか、体も少しも動かせない。

「殺気がないわねっ…！」
「アンタが鬼人化人間だってんなら殺すわけにはいかねぇーっ！」
刀と爪を斬り結びながら、桜時と鬼が言葉を交わす。余裕のよう

に微笑んでいる鬼に対し、険しい表情を見せている梅人。
「アイツらの母親だってんなら尚更なっ…！」
「甘いわねっ…」
まっすぐな瞳で言い放つ桜時に、鬼はさらに唇の端を上げる。
「そういう子は好きよっ…でもっ…」
「……っ？」
声のトーンを下げる鬼に、桜時が少し眉をひそめる。
「怯えている子はもっと好きなのっ…」
「何っ…？」
「……っ」
「なっ…！」
鬼が突然、斬り結んでいた村雨丸を、桜時の体ごと突き飛ばし、桜時を放ってどこかへと駆け出していく。
「……っ！梅人っ…！」
「えっ…？」

鬼がまっすぐに突っ込んでいくのは、鬼人化人間の衝撃に、立ち尽したままの梅人。

「クっ…！」
桜時が急いで、鬼の後を追う。

「もっと恐怖に顔を歪ませてっ…！」
「うっ…！」
勢いよく駆け込んでいき、梅人へと鬼爪を振り上げる鬼。梅人の表情が、鬼の言葉の通りに恐怖に歪み、その恐怖に梅人はその場から動けなくなる。
「アハハハハァァっ…！！」

「クっ…！」
響く鬼の笑い声。梅人が思わず目を閉じる。
――――パッキィィィィィィィーーーンっ！――――
「えっ…？」
響き渡る金属音に、梅人が戸惑うように瞳を開く。
「あっ…」
「……っ」
開いた瞳をさらに大きく見開く梅人。梅人の前へと立ち、振り下ろされた鬼爪を受けとめているのは、三日月を構えた輝矢であった。
「君はっ…」
「輝矢っ…！」
戸惑う梅人の代わりに、輝矢の名を呼ぶ桜時。
「侵入者っ…？」
鬼爪を受けとめる輝矢を見つめ、鬼が少し眉をひそめる。
『僕らの空間に侵入するなんて…』
輝矢の様子を見つめながら、ロムとレムも少し驚いたように声を揃える。
「新しいお客様っ？呼んだ覚えはないけれど、どなたかしらっ？」
「竹取輝矢と申しますっ…」
三日月から鬼爪を離し、後方へと飛びながら、少し険しい表情で問いかける鬼。離された三日月を構え直しながら、輝矢が静かに名を名乗る。
「鬼退治っ…させていただきますっ…！」
「あっ…！」

攻撃態勢を取る輝矢に、桜時が思わず身を乗り出す。
「あっあぁ～っ！あっ！輝矢っ！」
「……っ？」
必死に呼びかける桜時に気づき、輝矢が構えを取ったまま、振り向く。
「ちゃんと愛してますよ、ハチ」
「んなこと聞いてねぇっ！！」
突如、愛の告白をする輝矢に、桜時が頬を赤く染めながら、勢いよく怒鳴り返す。
「そいつっ！鬼人化人間なんだっ！元はあいつらの母親でっ…！」
「母親っ…？」
桜時の言葉に眉をひそめた輝矢が、少し首を回し、戦いを見守るロムとレムの姿を確認する。
「だからっ…！」
「わかりました…」
「へっ？」
桜時がすべてを言い終わらないうちに、大きく頷く輝矢。そんな輝矢に、桜時が少し目を丸める。
「何とか瀕死の状態で留めるよう、努力します」
「すっげぇ不安なんだけどっ！？」
微妙な言い回しをする輝矢に、思わず思ったことを口にして突っ込む桜時。
「瀕死っ？生意気な口をっ…！」
輝矢の言葉が引っ掛かったのか、少し表情を引きつった鬼が、再び鬼爪を振りかぶり、輝矢の方へと突っ込んでくる。
「きくんじゃないわよっ！！小娘さんっ…！！」
「それはこちらのセリフです…」
輝矢がゆっくりと三日月を構える。
「私に生意気な口をきかないで下さいっ…“水月”っ…！」
「何っ…！？」

振り下ろした三日月から、放たれる無数の水の刃。飛んでくる水月に、鬼が思わず足を止め、驚いたように目を見開く。

「ギャアアアアアアアアアっっ！！」

勢いよく突っ込んで来ていた鬼は、避けることも出来ずに水月を直撃し、遥か後方へと吹き飛ばされた。

『お母さんっ…！！』

「おおぉ～っとっ」

「動かないでもらえる…？」

『……っ』

吹き飛ばされた母の元へと駆け込んで行こうとしたロムとレムが、両脇に現れた門貴と由雉がそれぞれ突き出した如意棒と青い羽根に、前へと出ることを遮られる。道を塞がれた双子は、少し悔しげに唇を噛んだ。

「アイツらの前であんま、えげつねぇー攻撃すんなよっ！！」

「私にえげつなくない攻撃が出来ると思います？」

「開き直るなっ！！」

「……。」

戦いの場とは思えない、どこか間の抜けた会話を繰り広げる輝矢と桜時を、梅人が後方から、少し唖然とした様子で見つめる。

「うっ…ううっ…」

二人があれこれと言葉を交わしている間に、水月を受けた鬼が苦

しそうな声を漏らしながら、ゆっくりとその巨体を起こしていく。
「こっ…のっ…！」
『……っ』
鬼が立ち上がったことに気づき、輝矢と桜時が同時に表情を鋭くして、振り向く。
「もういいっ、俺がやるっ！」
「私のために戦ってくれるのですね」
「お前に任せると殺しそうな勢いだから代わるだけだっ！」
勝手な解釈をする輝矢に怒鳴り返しながら、桜時が輝矢の一歩前へと出て、持っている村雨丸を再びゆっくりを身構えた。
「どいつもこいつもっ…生意気な子ばかりねぇっ…！」
怒りの表情を見せた鬼が、水月を喰らってところどころ折れた鬼爪を再生する。
「お説教してあげるわぁっ！」
「村雨丸っ…」
激しく叫ぶ鬼の言葉に動揺することなく、冷静な表情を見せた桜時が、持っていた村雨丸を刀先から思いきり、亜空間の真っ暗な地面へと突き刺す。
「“伝光っ…刹花”っ…！！」
――――パアアアアアアアアアアーーーーンっっ！！――――
ただ暗闇だけが続く空間に、次々と咲いていく、満開の桜の木。
「んなっ…！！」
『これはっ…』
その光景に、周囲を見回しながら、大きく目を見開く鬼と、信じ

られないといった表情を見せるロムとレム。

「こんなっ…」

そして、もう一人、梅人も信じ難いといった表情で、咲いたばかりの桜を見上げていた。

「こんなにすごく…なってたんだっ…」

茫然と呟く梅人に、桃色の花びらが降り落ちる。

「あの子たちの空間に花っ…？あいつは一体っ…」

“柔桜っ…」

「うっ…！」

咲き乱れた桜に戸惑っている鬼へ、桜時が地面から抜いた村雨丸の刀先を向ける。

「……無塵”っっ…！！」

桜時の放った一閃に、咲き乱れた桜の花びらが凝集し、さらに勢いを増して、まっすぐに鬼への方へと飛んでいく。

「クっ…！」

思わず唇を噛み締める鬼。

――――バァアアアアアアアアーーーーンっっ！！――――――

「ギャアアアアアアアアっっっ！！！」

散りゆく無数の桃色の花びらを全身に浴び、紫色の血を激しく飛び散らせて、後方へと倒れ込んでいく鬼。

「ハチもそんなにえげつなく出来てないと思いますけど…」

「うっせっ！」
こっそりと呟いた輝矢に、桜時がしっかりと怒鳴り返す。
「それよりアイツの動きをっ…！」
「ええっ」
桜時の言葉に頷くと、輝矢が下ろしていた三日月を持ち上げる。
「“月器・望月”っ…」

輝矢の言霊に乗り、徐々に満ちていく三日月。やがて金色の球体となると、望月は輝矢の手を離れ、倒れた鬼を包み込むような位置で止まった。

「よしっ、これで一安心だなっ」
桜時が少しホッとしたような笑みを浮かべながら、村雨丸を鞘へと収める。
「カッコ良かったですよ、ハチ」
「だっからお前はいちいち、そういうこと言わなくていいんだよっ！！」

「……。」
穏やかな笑顔を見せる輝矢と、真っ赤な顔で怒鳴り返している桜時を、後方から茫然とした表情のまま見つめる梅人。
「……遠いなっ…」
その言葉は、梅人の口から思わず零れ落ちた。

「そういうことは言葉にせず、心に閉まっておけっ！」
「心で深く思っておけばいいのですねっ」

「やっぱ心で思うのもダっ…！」

――――パァァァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

『……っ！』

言い合いを続けていた輝矢と桜時が、何かが弾けるような音に、一斉に振り向く。

「……っ？月器っ？」

振り返った輝矢の手元へと戻って来るのは、いつの間にかピアスへと戻った月器。

「どうしてっ…」

「あっ…！」

戸惑うように月器を掴んだ輝矢の横で、桜時が思わず声を出す。

『フフフっ…』

包み込んでいた月器がなくなり、倒れ込んでいる鬼のすぐ傍へと立っているのは、ロムとレム。双子はすぐ目の前に母親が倒れているというのに、どこか楽しそうな笑みを浮かべていた。

「サル、キジっ」

輝矢が刺すように、門貴と由雉の方を見る。

「あっれぇ～？あいつら、いつの間にぃ～っ」

「ずっと見張ってたはずなのにっ…」

一瞬で鬼の傍まで移動したロムとレムに、門貴は大きく首を傾げ、由雉はその表情を曇らせる。

「ロムっ…レムっ…」
桜時が戸惑うように、ロムとレムの名を呼ぶ。
「さすが強かったね、お兄ちゃんっ」
「お母さんじゃ、相手にもならなかったみたいっ」
「……っ」
笑顔で言葉を放つロムとレムに、桜時が眉をひそめる。

「うっ…ううっ…」
『……っ』
下方から聞こえてくる、母のものである呻き声に、双子が同時に下を向く。
「ロっロムっ…レムっ…」
傍に立つ二人の息子に、必死に手を伸ばす鬼。

「助けっ…」
『……っ』

「……っ！」
冷たく微笑む双子を見て、桜時が大きく目を見開く。

「やめっ…！」

『“無還”っ…』

桜時が思わず止めようと身を乗り出すが、双子はそれぞれの左右の手を合わせ、そっと言霊を呟いた。

「えっ…？」
鬼の倒れている地面付近に、突如広がっていく広い穴。

「ううぅあっ…！」
白い穴の中に、鬼の体が沈んでいく。
「ロムっ…！レムっ…！何をっ…！！」
『サヨウナラ…お母さんっ…』
「……っ！！」
笑顔で別れを告げる息子たちに、鬼が大きく目を見開く。
「そっそんなっ…！ううぅっ…！！あああああっ！！」
『……っ！』
息子たちの言葉に確かな動揺を見せながら、かつて母であったその鬼は、白い穴の中へと完全に吸い込まれていった。鬼が吸い込まれると、白い穴が自動的に塞がる。
「あの者を…どこへ…？」
『……。』
厳しい表情を見せながら、静かな口調で問いかける輝矢に、ロムとレムがゆっくりと振り返る。
『地獄っ』
「……っ」
『フフフっ…！アハハハっ…！』
双子の答えに輝矢が眉をひそめると、双子はそれを見て、さらに楽しげに笑った。
「やっぱりっ…本当の母親じゃなかったんだなっ…！」
『本当の母親だよっ？』
「えっ…？」
平然と答えるロムとレムに、大きく目を見開く桜時。

「なっならっ！なんでっ…！本当の母親相手にあんなマネっ…！！」
『別にもういらないからっ』
「何っ…！？」
少し怒りを見せながら問いかけていた桜時が、双子の言葉に、さらに険しい表情を見せる。
「いらないってっ…！実の母親っ…！」
『だって、母親なんて、自分を生むまでの間、いればいいだけのものでしょっ？』
「……っ！」
桜時の言葉を遮り、言い放つロムとレム。正す力も湧かないようなその言葉と、悪意なき微笑みに、桜時は何も言い返さないまま、拳を握り締める。
――――パァァァァァァァーーーンっ！――――
『……っ！！』
その時、広がる暗闇の空間が、突如、ガラスの破片のようにひび割れ、崩れ落ち始めた。
「さっきと同じっ…」
「また空間が移動すんのかっ…！」
崩れ落ち始める景色を見ながら、梅人と桜時がそれぞれ言う。
『フフフフっ…』
「……っ！」
崩れいく景色の中で、ゆっくりと空中に浮き上がっていくロムとレム。皆が周囲を警戒しながら、そちらを見上げる。

『“ネバーランド”へおいでっ…お兄ちゃんたちっ…』
「ネバーランドっ…？」
双子の言葉に、輝矢が少し眉をひそめる。
『もっとっ…遊んであげるからっ…』
「あっ…！」
怪しく微笑む双子の後方に、先程、鬼を呑みこんだものをはまた別の、白く光る穴が広がる。
『フフフフっ…』
「待っ…！待てっ…！」
『……っ』
――――ヒュンっ……！――――
『……っ！』
桜時が必死に手を伸ばしたが、不気味に響き渡る笑い声を残し、ロムとレムは白い光の中へと消えていった。双子の消えた穴は自然と塞がり、崩れいく景色の中に、輝矢たちだけが取り残される。
「クソっ…」
俯いた桜時が、少し悔しげに唇を噛む。
「ネバーランドって何だろぉ？」
「ネバーなランドちゃうっ？」

「バカは黙っててもらえる？」
「がびいいいいいーーーーんっっ！！」
この状況でも、特に動じた様子はなく、いつも通りの会話を展開する門貴と由雉。
「輝矢ぁ～っ」
「さぁ？私も知りませんけど、まぁ連れて行ってくれるというなら、行けばいいのではありませんかぁ？」
「結構、適当だね…」
こちらも動じた様子はなく、どちらかと言うと他人事のように話している輝矢に、由雉が少し呆れた表情を見せる。

「輝矢っ、梅人だけでも外にっ」
「……っ」
輝矢にそう訴える桜時の言葉に、梅人が少し目を開く。

「ああ、そうですね」
桜時の言葉に、あっさりと頷く輝矢。
「サル、キジ、先程の要領で空間に穴をあけて、そこから成金スズメを外にっ…」
「必要ないよっ」
「……っ？」
「梅人っ？」
梅人だけでも逃がすため、門貴と由雉に指示を送ろうとしていた輝矢が、それを遮るようにして聞こえてきた声に言葉を止める。遮った梅人を、戸惑うように見つめる輝矢と桜時。
「逃がす必要はない。ネバーランドへは僕も行く」
「なっ…！」
「……。」
きっぱりと言い放つ梅人に、驚いた様子で顔をしかめる桜時と、少し目を細める輝矢。

「何言ってんだよっ！これは観光なんかじゃっ…！」
「行くったら行くんだよっ」
「……っ」
強く言い放つ梅人に、思わず言葉を止めてしまう桜時。
「あのなぁっ…！」
「わかりました」
「……っ！輝矢っ…！？」
代わりに頷く輝矢に、桜時が少し驚いたように振り返る。
「おいっ！」
「まぁ何とかなりますって」
「適当じゃねぇーかっ！」
責めるように見る桜時に、軽く微笑んで見せる輝矢。その楽観的な考えに、桜時はさらに怒りの表情を見せる。
「まぁいざとなったら盾にすればいいじゃないですかっ」
「普通は“いざとなったら盾になる”だろうがっ！！」
「それにっ…」
「……っ？」
突然、その瞳を鋭くする輝矢に、桜時が少し首を傾げる。
「恐らくもう…手遅れです…」
「えっ…？」

――――パァァァァァァァァーーーンっっ！！――――

桜時が声を発した次の瞬間、輝矢たちのいる暗闇の空間が、一気に砕け散った。

御伽界のどこか。

「……。」

草原に寝転がっていた長い白髪の女が、何かを感じ取ったのか、突然、その場で立ち上がる。

「シルク様…？」

立ち上がった女を、背中越しに見つめる一人の青年。

「機は…満ちた…」

立ち上がったシルクが、少し右手を伸ばし、ゆっくりとそう言い放つ。

「行くわよ…諸刃…」

「はっ」

シルクの言葉に、深々と頭を下げる諸刃。

「ネバー…ランドへっ…」

その声は、どこか楽しげに響き、そっと吹く風に乗った。

第４７章　幼き国の神　☆１

すっかり夜も更けた龍国。エセお菓子の家こと『桃原家』。
「おぉ～いっ！竹取っ！」
チャイムも鳴らさずに、乱暴に玄関の扉を開け、遠慮など持ち合わせていない様子で、桃原家へとあがりこむ、目つきの悪い男・ゴン。
「ああぁ～っ！また不法侵入してぇ～っ！」
「警察に突き出しますわよぉ～っ！」
「俺が警察だっ！」
キッチンから顔を出し、非難するように声をあげるヘンゼルとグレーテルに、しかめっ面で言い返しながら、ゴンがずんずんとリビングへ足を踏み入れていく。
「竹取ぃ～っ！町中探したけど、ハチ公のイトコのクソガキなんて、どこにもいなっ…！」
「んん～っ？」
「あれっ？」
ゴンがリビングに乱入すると、リビングにはソファーにゆったりと腰かけ、ココアを飲んでいる太狼の姿しかなかった。太狼と目が合い、ゴンが首を傾げる。
「あれっ？竹取たちはっ？」
「まだ帰って来てないよぉ～」
「へぇっ？」
太狼の答えに、顔をしかめるゴン。
「けっけどっ…町にはあいつらの姿なんてっ…」
『ゲホゲホゲホっ！！』
「あっ？」
少し困惑した表情を見せていたゴンが、廊下の方から聞こえてくる不自然な咳払いに、眉をひそめる。

『ゲホゲホっ！ゲホゲホっ！』
「……。」
廊下に立ち尽くし、ひたすら咳こんでいるヘンゼルとグレーテル。
ゴンがそんな二人をまっすぐに見つめる。
「お前ら…」
ゴンの表情が、疑いの表情となる。
「何か知ってんだろっ？」
『ギっギクゥっ！』
問いかけるゴンに、わかりやすいリアクションを取るヘンゼルとグレーテル。
「なっ何にも知りませんですわよぉ～っ！」
「そっそうですわぁ～っ！」
ヘンゼルとグレーテルが妙に上ずった声で、必死に答える。
「輝矢様たちが亜空間に飛び込んでいって、何か予感がするからオトポリには言うなって言ったなんて、全然まったく知らないですわぁ～っ！」
「何っ？」
「グレーテルっ！」
「あっ！」
洗いざらい話したグレーテルが、ヘンゼルに名を呼ばれ、慌てて口を押さえるが、時はすでに遅く、グレーテルはすでに洗いざらい話してしまっていた。
「何で貴女はそう口が軽いのよっ！！」
「ごめんなさぁ～いっ…お兄様っ…」
ヘンゼルに注意され、がっかりした様子で深々と肩を落とすグレーテル。
「あっあっはっはぁ～っ！」
グレーテルを睨んでいたヘンゼルが、急に無理やり笑みを作り、誤魔化すようなその笑顔を、ゴンへと向ける。
「いっ今のはぜぇ～んぶ、空耳ってことにっ…！」

「出来るかぁぁっ！！」
「ぎゃあああああああああっ！！」
「お兄様っ！！」
空耳として処理しようとしたヘンゼルが、ゴンに景気よく殴り飛ばされる。廊下の奥まで吹き飛ばされていった兄に、慌てて駆け寄っていくグレーテル。
「ったくっ…亜空間だとぉっ…！？」
ゴンがヘンゼルを殴り飛ばした右手で、そのまま頭を掻く。
「クソっ…！」
「どぉ～こ行くのぉ～？」
「……っ」
飛び出して行こうとしたゴンが、背後から聞こえてくる太狼の声に足を止めた。
「どこって…決まってんでしょっ！？竹取たちんとこにっ…！」
「亜空間にいるのに？どうやって？」
「うっ…」
太狼の最もな問いかけに、ゴンが少し顔を引きつる。
「そこは根性で何とかっ…！」
「根性でどうにかなったら、警察なんていらないよねぇ～っ」
「ううっ…」
太狼の言葉に、ゴンの表情がさらに引きつられていく。
「どうにもならないよ。そんな気がする」
ココアを一口飲み、太狼が少し鋭い瞳を見せて、そう呟く。
「大人しく帰りを待とうよ」
「……。」
諭すように微笑む太狼に、そっと俯くゴン。
「何か…嫌な予感がするんです…」
「えっ…？」
どこか浮かない表情を見せるゴンに、太狼が少し眉をひそめる。
「あの時と同じ…」

込み上げる不安を抑えつけるように、そっと自分の左胸に手を触れるゴン。
「あの時と…同じような…」
「……っ」
ゴンの言葉に、太狼は何も言わず、そっとその瞳を細めた。

――――パァァァァァァァァーーーンっ！――――

青い空に、突如開く、真っ黒な穴。

「うわあああああああああああああっ！！」

その穴から降って来る、数名の人間。もちろん、竹取輝矢一行である。

「ぐえええぇぇっ！！」
一行の先頭を切って、地面へと墜落する桜時。背中を打ちつけ、苦しげな声が喉から漏れる。
「痛たたたたっ…んっ？」
「あららっと」
「ぐはあああああっ！！」
何とか体を起こした桜時の体の上へ、勢いよく輝矢が落ちてくる。
押し潰された桜時が、再び苦しげな声を漏らした。

「ふぅ～っ、んっ？」
「臓物がぁっ…」
落ちてきた輝矢が、自分の下敷きとなって苦しんでいる桜時に気付く。
「ハチぃぃぃぃ～～～っ！」
「ぎゃあああああああああああああっ！！」
倒れ込んでいる桜時の上に、笑顔で倒れ込んでいく輝矢。桜時が激しく悲鳴をあげる。
『うわあああああああああああああっ！！』
『へっ？』
ドタバタとしていた二人が、上から降って来る声に顔を上げる。
『うわあああああああああああああっ！！』
空から二人の元へと、真っ逆さまに落ちてくるのは、門貴、由雉、そして梅人の三人。
「よっと」
『うわあああああっ！！』
「ぐへえええええぇぇぇっ！！」
輝矢がさっと横へと避けると、倒れたままの桜時の上へ、見事に三人が墜落した。桜時の押し潰されたような声が響き渡る。
「ふはぁ～っ…助かった…」
「可愛いボクが骨折しちゃうとこだったよぉ～」
「助かったわぁ～っ！イヌぅ～っ！」
そう言いながら、桜時の上から立ち上がっていく梅人、由雉、門貴。
「おっ…横隔膜がっ…痙攣したっ…」
「それ、しゃっくりですよ？」
倒れ込んだ状態のまま、腹部を押さえて放心している桜時に、横で座り込む輝矢が小さく突っ込みを入れる。
「ここはっ…」
桜時の上から立ち上がった梅人が、周囲を見渡す。そこは、どこ

までも広がる穏やかな草原。少し小高い丘になっているのか、真向かいに広大な山々も見える。
「ここも亜空間なわけぇ～？」
「いえっ」
首を傾げた由雉に、答えたのは輝矢であった。
「ここは亜空間ではありません。恐らくは亜空間を通じて、別の場所へと移動させられたのでしょう」
「確かに龍国とは随分、景色がちゃうみたいやもんなぁ～っ」
辺りを見回しながら、そう話す門貴。龍国では見えたはずの海も御伽山脈も、この丘の上からは見えない。龍国からかなり離れた場所まで、飛ばされてしまったのだろう。
「ネバーランドってのは？」
やっと起き上がった桜時が、周囲を見ながら誰にともなく問いかける。
「あっ、下ったところに町っぽいのが見えるよぉ～」
「……？あれがネバーランドか？」
「さぁ～っ？」
「まぁとりあえず行ってみましょう」
そう言いながら、輝矢がゆっくりと立ち上がる。
「行けばわかるでしょう」
『おうっ』
輝矢の言葉に頷き、下ったところに見える小さな町へと足を踏み出す桜時たち。まだ腹の痛む桜時は、門貴の手を借りながら、少し苦しげに草原を下っていく。

「……。」
先を行く三人の背中を見つめながら、少し表情をひそめる梅人。
「怖いですか？」
「えっ？」
横から聞こえてくる声に、梅人が驚いたように振り向く。

「だっ誰がっ！」
問いかけた輝矢に、少しムキになって言い返す。
「なら、いいですけどっ」
「……っ」
そっと微笑む輝矢に、梅人が顔をしかめる。輝矢はすぐに梅人に背を向けると、そのまま三人の後を追うようにして歩いていった。

「……。」
残された梅人は、俯いて少し唇を噛むと、意を決したように、四人の後を追って歩き出した。

丘を下った先にあったのは、穏やかな町並みであった。そう大きくもないが、小さいわけでもない。見た目はごく普通の、平凡な町である。
『太陽の神の治める国…“粘（ねば）っランド”…？』
しかし平凡でなかったのは、その町の入口に大きく掲げられた看板。その看板に書かれた文字を読み、ハチ、モンキ、ユキジの三匹が首を傾げる。
「ネバーランド言うてなかったっけ？」
「ネバーランド…ネバっランド…粘っランド…みたいなっ？」
「太陽の神って感じの名前じゃねぇーけどなっ…」
三匹がどこか呆れた表情で、言葉を交わす。
「まぁとりあえず町へ入りますか」
『おうっ』
輝矢の言葉に頷く三匹。輝矢は特に躊躇うこともなく、その太陽の国へと足を踏み入れた。頷いた三匹、そして一番後方に立ってい

た梅人も、それに続く。
「うわあああああああっっ！！」
『……？』
入った途端に聞こえてくる、どこか幼い悲鳴に、輝矢たちが眉をひそめて振り向く。
『うげっ！』
「どいてどいてぇぇぇぇっっ！！」
輝矢たちのいる方へと転がってくる、大きな白黒体の一頭のパンダ。パンダはまるで大玉のように転がりながら、輝矢たちのいる方へと突っ込んでくる。転がるパンダは必死に手を動かし、輝矢たちに自分から避けることを促す。
「なっなんやぁっ！？」
「パンダぁ～っ？」
「とりあえず避けっぞっ！梅人っ！」
「うぇっ？」
パンダの直線コースから、梅人を引っ張るようにして避けるハチ。モンキとユキジもそれに続く。
「輝矢っ！？」
いつまでもやって来ない輝矢に、ハチが少し慌てた様子で振り返る。
「何やってんだよっ！輝矢っ…！」
「ちょっとっ！どけってっ！どけどけぇぇぇっっ！！」
ハチとパンダが、焦りの表情で必死に叫ぶ。
「どうして私が避けねばならないのです？」
迫り来るパンダにも動じた様子なく、平然と言い放つ輝矢。
「アナタがどきなさいっ」
「へっ！？」
足を振り上げる輝矢に、パンダ目を丸くする。
「よっ」

――――バッコォォォォォーーーンっ！――――

「ぎゃあああああああああああっ！！」

輝矢の振り下ろした足が、向ってきていたパンダを勢いよく吹き飛ばした。高々と空へと舞い上がるパンダ。

「ううっ…！うっぎゃあああああああっ！」

ある程度の高さに突き上がったところで、パンダは勢いそのままに地面へと落下してくる。迫り来る地面に、パンダが追い込まれた悲鳴をあげる。

「やっやべっ！梅人っ！」

「わかってるよっ」

ハチに名を呼ばれ、右手を突き出す梅人。

“瞬花”っ」

――――パァァァァァァァーーーーンっ！――――

「……っ」

梅人の右手が赤く輝くと、パンダが落ちてくる辺りの地面が赤い梅の花びらへと変わる。その光景に、目を見張る輝矢。

「ぶふっ！」

落下してきたパンダが、梅の花びらの山の中に、埋もれるように落ちる。

「ふぅっ」

「ハチと同じ技…」

少し肩を落とす梅人を見ながら、輝矢がポツリと呟く。

「ふはぁ～っ！」

「……っ？」

梅の花びらから顔を出すパンダに、梅人の方を見ていた輝矢が振り向く。

「死ぬかと思ったっ」

顔を出したのは、くりくりとした黒目の愛らしい一頭のパンダであった。パンダはその巨体を重たそうに動かして、花びらになっていない地面へと腰を下ろす。

「大丈夫かぁ～っ？」

「輝矢の前に転がってくるなんて不幸だったねぇ～」

「怪我とかしてないかっ？」

「いっやぁ～っ！転んだら、そのまま止まんなくって困ってたんだよなっ！あんがとっ！」

「どんだけ転がりやすいんだよっ！！」

パンダを心配するように、モンキ、ユキジとともに駆け寄っていこうとしていたハチが、笑顔で頭を掻くパンダに、勢いよく突っ込みを入れる。

「パンダっ」

「んっ？」

輝矢に種族名を呼ばれ、その陽気なパンダが振り返る。

「私の前に転がって来た迷惑代として、百万チュンをっ…」

「どこの悪徳詐欺師だっ！お前はっ！」

パンダに金を請求しようとした輝矢に、ハチが止めるように勢いよく怒鳴りあげる。

「じゃあその百万チュンは僕がっ…」

「意味ねぇーだろっ！！とりあえず金を使おうとすんなっ！！」

何故か財布を取り出す梅人にも、ハチが勢いよく怒鳴りあげた。

「金はねぇーけど笹やるよっ！ほらっ！」

「……。」
何の悪びれもない笑顔のパンダから笹を受け取り、固まる輝矢。
「あっ！そういや自己紹介がまだだったなっ！」
――――ボォォォォォォォォ～～～ンっ！――――
「……っ？」
そう言って白い煙に包まれていくパンダを、少し戸惑うように見つめる輝矢たち。やがて白い煙が晴れ、パンダではない者の姿が見えてくる。
「俺っ、ピーターっ！パンダの獣人なんだっ！」
白い煙の中から現れたのは、黒色の髪にくりくりとした黒色の瞳の、十一，十二歳の少年であった。木の葉のような緑色の服に、同じ色の先の尖った帽子を被っている。色白の肌に妙に大きな黒色の瞳は、先程のパンダを思わせるが、その体格はパンダの頃に比べるとかなり小さい。
「一流大道芸人スーパースターアイドルを目指す少年さっ！」
「面倒そうな夢ですね…」
明るく自己紹介をするピーターに、輝矢が呆れた表情を見せる。
「いやぁ～っ！お姉ちゃん、いい蹴りしてるねぇ～っ！」
「若いくせに親父臭いですね…」
そう言いながら輝矢の手を取る少年を、輝矢がさらに呆れた表情で見る。
「ピーターっ！」
「……っ？」
名乗ったばかりのその名を呼ばれ、ピーターが輝矢から手を放し

て、後方を振り返る。

「どこまで転がって行ってるのよっ？」

『……っ』

そこに現れたのは、赤茶色のおさげ髪に、青い瞳の美しいの女であった。年は輝矢より少し上、二十歳前くらいであろうか。

「ウェンディっ！」

心配そうな表情を見せてやって来たその女を、ピーターはウェンディと呼んだ。

「おおっ！キレイなお姉さまっ！」

ウェンディを見て、モンキが目を輝かせる。

「あっ！でも俺の一番はあくまで輝矢んやでぇっ！？」

「誰も聞いてませんし、一番である必要もありません」

必死に言い繕うモンキに、輝矢が冷たい言葉を投げかける。

「町の入口まで転がったんだぜぇっ！？最高記録っ！すっげぇだろっ！？」

「町の人、轢いちゃったら危ないから、町の中で転がるのはやめなさいって言ってるでしょっ？」

嬉しそうに話すピーターに、ウェンディが少し困った表情を見せる。

「さっ、早く火の輪くぐりの練習しましょっ」

「そっちも十分、危ねぇーわっ！！」

どこからか取り出してきた大きな輪に、マッチで火を点ける笑顔のウェンディ。その行動に、ハチが思わず全力の突っ込みを入れる。

「ピーター…彼女はっ…」

「あっ！紹介が遅れたなっ！ウェンディは俺の姉ちゃんっ！」

戸惑いの表情を見せる輝矢に、ピーターが笑顔を向ける。

「火の輪くぐりが趣味なんだっ！」
「呼び名が“火の妖精”である一流ビューティフルアイドルスター目指しております、ウェンディです」
「面倒臭い姉弟っ…」
穏やかな笑顔で自己紹介をするウェンディに、ユキジが少し顔を引きつる。
「では私たちはこれでっ」
「ああっ！お待ち下さいっ！」
逃げるようにその場を去ろうとした輝矢を、ウェンディが大きな声で呼び止める。
「見たところ、旅の方々のご様子…もしよろしければ、私たちの家でお休みになっていきませんか？」
「うぅ～んっ…」
ウェンディの申し出に、少し考えるように首を捻る輝矢。
「どうすんのぉ？輝矢っ」
「出来るなら、関わりたくない感じの人種ですけど…」
「けど、この町の情報とか聞けるかも知れへんでぇ～？あの双子のこととかっ」
「そうですね…」
モンキの言葉に、輝矢がどこか諦めたように肩を落とした。
「まぁお茶菓子付きなら考えてあげなくもないですよ」
「お任せ下さいっ！スーパーアイドルは茶道もこなせますのでっ！」
輝矢が妥協したようにそう言うと、ウェンディは笑顔でよくわからない答えを返した。
「ではご案内しますっ！どうぞっ！」
ウェンディとピーターに案内され、町のさらに奥へと進んでいく輝矢と、後に続いていくモンキ・ユキジ。
「こんな簡単についていっちゃっていいわけ？」
「まぁいつもこんな感じだっ」
顔をしかめて問いかける梅人に、少し引きつった笑顔で答えるハ

チ。そんな言葉を交わしながら、二人も皆の後に続いていく。

「へぇ、結構、大きな商店街ですね」

町の入口から続いている大きな道を進むと、やがて賑やかな商店街へと入った。

「おっ！ピーターっ！見たぞっ！今日は結構、すっごい転がり具合だったなっ！」

「だろっ！？明日はもっとすっごい転がってみせるぜっ！」

「ウェンディっ！今日はお魚が安いんだけどっ！」

「後で買いにくるわっ！お客様もいるから、多めにとっておいてっ！」

「……っ？」

商店街を歩いていると、店の者たちが次々とピーターとウェンディに声を掛けた。その様子に、輝矢が眉をひそめる。あんな調子なのだから、町で有名なのは不自然ではない。不自然なのは、もっと別のこと。

「子供っ…？」

そう、ピーターとウェンディに声を掛けてきたのは、皆、十代か、それより下の子供ばかりであった。店にいる子供が声を掛けているわけではない。店をやっている者自体が子供なのだ。大きな商店街のどの店を見ても、店頭に立っているのは子供のみ。

「輝矢んっ…」

「この町って…」

その不自然さに気づいたのか、モンキとユキジも眉をひそめて辺りを見回す。

「……っ」

少し厳しい表情を見せ、町全体を見回す輝矢。よく見れば、店だけではない。道を行き交う者も皆、子供である。そして、町に“大人”と呼ばれる者の姿は一切ない。

「子供しか…いないっ…？」

「……。」

戸惑っている梅人の横で、ハチも厳しい表情を見せる。

「ウェンディ、この町はっ…」

「ここは“粘っランド”…」

問いかけようとした輝矢の言葉を遮り、ウェンディが穏やかな笑顔で言い放つ。

「太陽の神のご加護を受ける、子供だけの国ですわっ」

「子供…だけの国っ…」

ウェンディの言葉を繰り返した輝矢は、その表情をさらに曇らせた。

第４７章　幼き国の神　☆２

ウェンディとピーターの家は、商店街を抜けたすぐ先にあった。とても大きな二階建ての家は、大家族が住む用の家に見えた。中に入り、ソファーや椅子の数を見てもやはり、ここにはウェンディとピーター以外にも数名の人間が住んでいるのではないかと思わせた。

「お抹茶です」

煎じたばかりの抹茶を、ダイニングテーブルに並んで座る輝矢とモンキに差し出すウェンディ。

「いっただっきまぁ～すっ！って、ぶはぁっ！まずっ！」

「結構なおマズさで…」

「ありがとうございますっ！」

顔をしかめる輝矢とモンキに、その意味がわかっていないのか、笑顔で礼を言うウェンディ。

「必殺っ！ジャグリングっ！」

「うわあぁ～あっ！」

居間でいきなりジャグリングを始めるピーター。その放り投げた棒の一本が、部屋の中を飛んでいたユキジに当たりそうになり、ユキジが慌ててそれを避ける。

「もぉ～危ないなぁっ！可愛いボクが怪我でもしたらどうすんのさぁっ！」

「俺が一流大道芸人になるためだっ！笹やるから犠牲になってくれっ！」

「なるわけないでしょっ！笹なんていらないよっ！」

笑顔で言い放つピーターに、ユキジが顔を引きつって怒鳴る。

「はぁっ…」

「はぁっっ…」

そんな皆の様子を眺めるように、居間の壁際に立ちながら、深々と溜息をこぼすハチと梅人。

「それでっ…」
すぐに抹茶から口をはずした輝矢が、真面目な表情となって、向かいに座るウェンディを見る。
「何故、この町は子供しかいないのですか？この町の大人たちはどこに…」
「この町に元々、大人はいません」
「えっ…？」
あっさりと答えたウェンディに、輝矢が驚いたように声を出す。
「私もピーターも、この町にいる子供は皆、親に捨てられ、一人彷徨っていた孤児なのです」
「孤児っ…？」
少し悲しげな笑顔でそう話すウェンディに、輝矢が少し眉をひそめる。

「……っ」
「……。」
ジャグリングの手を止め、俯いたピーターを、そっと見つめるユキジ。

「そんな私たちを…天照様(あまてらす)はお救い下さいました…」
「天照っ…？」
「この町を守る、太陽の神様ですわっ」
聞き返した輝矢に、満面の笑みで答えるウェンディ。

――――それは…神の領域に程近き力…――――

「神っ…」
かつて神の力を持っていると言われたことのあるハチは、その言葉にどこか複雑そうな表情を見せた。

「天照様は孤児の私たちを拾い育てて下さり、このような居場所まで作って下さいました…」
窓の外の景色を見ながら話すウェンディ。外に見えるのは、子供しかいない不自然な町で、自然でとても生き生きとした表情を見せている子供たち。孤児とは思えないほどに明るく、悲観している様子は少しもない。
「私たちがここにこうしていられるのは、すべて天照様のお陰なのですわっ」
「天照っ…」
再びその神の名を呼び、輝矢が表情を曇らせる。
「その天照という者はどのようなっ…」
「そんなに気になるなら、お会いになります？」
「えっ…？」
問いかけようとした輝矢が、ウェンディの言葉に、少し驚いたように目を丸くする。
「会えるんかぁ～？」
「神様にぃっ？」
「ええっ」
疑うように聞き返したモンキとユキジに、笑顔で頷くウェンディ。
「いつも天の岩戸の奥深くで瞑想されているのですけど、今日の夜に成人の儀が行われますから、お会いできると思いますよっ」
「成人の儀っ…？」
「ええっ…」
ウェンディが少し俯き気味に頷く。
「この町の子供は成人すると、この町を出て一人立ちするんです。成人の儀はその前に行われる送迎会のようなものですわ」
「成程ねぇっ…」
ウェンディの説明に、納得したように頷く輝矢。
「どうされます？」

「どうするん～？輝矢んっ」
「そうですね…ここが彼らの言っていたネバーランドだというのなら、このままで終わるとも思えませんし…」
ウェンディに続くように横から声を掛けたモンキに、輝矢が少し首を捻りながら答える。
「それに…」
輝矢が少し目つきを鋭くする。
「太陽の神様にも…お会いしてみたいですしねっ…」
「じゃあ決まりですねっ」
意味深に言い放つ輝矢に、含みのない笑みで手を合わせるウェンディ。
「やったぁっ！天照様にジャグリング見せようっとっ！」
「それなら火の輪くぐりの方がいいわよっ？ピーター」
「神様的にどっちもいらないと思うけど…」
乗り気で言葉を交わすピーターとウェンディに、ユキジが呆れた表情を向ける。

「はぁっ…神かぁっ…」
「……っ」
「へぇっ？梅人っ？」
少し複雑そうに呟いていたハチの横を通り、足早に輝矢たちのいる部屋を出て行ってしまう梅人。
「梅人っ…！」
「ハチっ」
梅人を追って部屋を出て行くハチを、輝矢が呼び止めたが、ハチは止まることなく部屋を後にした。

「何やぁ～？あいつっ」
「ウェンディの抹茶がマズかったんじゃねぇーのぉっ？」
「あらっ、やっぱり火の輪くぐりをしながら、煎れるべきだったか

しらっ？」
「どうやって煎れんのさっ…」
皆の会話を聞きながら、輝矢はそっと目を細めた。
「……。」
「おいっ！」
ウェンディとピーターの家を出た梅人を追うように、ハチも家を飛び出した。
「おいっ！梅人！」
「……。」
強く名を呼ばれ、梅人が少し歩いたところで足を止める。
「……っ」
――――ボォォォォォォォ～～～ンっ！――――
梅人の方へと歩いていきながら、白い煙に包まれ、人化するハチ。
「あんま勝手な行動すんなよっ！アイツらがどこに潜んでるかも、わかんねぇーってのにっ」
ハチが桜時の姿となり、立ち尽くす梅人のすぐ傍へと駆け寄る。
「なるべく俺らの傍から離れんなっ」
桜時の右手が、梅人の肩に乗る。
「俺らがちゃんと守ってやるからさっ」
「……っ」
笑顔を見せる桜時に、眉をひそめる梅人。

――――輝矢っ、梅人だけでもっ――――

「……。」

亜空間にいた時もそうであった。桜時は梅人を守ろうとした。とても弱い者を守るように。自分よりもか弱い存在を大切に守るように。

――――梅人っ！遊ぼっ！――――

同じように育ったというのに、今はこんなにも遠い。

「……っ」

梅人は拳を握り締め、俯いたまま強く唇を噛んだ。

「何それっ…」

「えっ…？」

呟いた梅人に、桜時が少し戸惑った表情を見せる。

「何様のつもりっ？」

「……っ」

梅人の肩に乗せていた桜時の右手が、梅人により勢いよく振り払われる。

「うっ梅っ…」

「ちょっと旅に出て、ちょっと強くなったからって…それで僕の上にでも立ったつもりなわけっ？」

「何言っ…！」

「イヌのくせにっ」

「……っ」

梅人の口から吐き出されたその一言に、言い返そうとしていた桜時が、思わず言葉を止めた。

「ただの泣き虫だったくせにっ…家出して逃げてばっかりだったく

せにっ…」
顔を上げた梅人が、睨みつけるように桜時を見る。
「ただの嫌われ者のくせにっ…！」
「……っ！！」
梅人の言葉に、桜時が大きく目を見開く。
「んな言い方、ねぇーだろっ！！俺はお前のことを心配してっ…！！」
「そういうのが全部、迷惑だっていうのがわかんないわけっ！？」
「……っ」
怒鳴ろうとした桜時が、逆に言い返され、すぐに黙り込んでしまう。
「ずっとずっと前からっ…迷惑だったんだよっ…」
少し俯いた梅人が、搾り出すように声を発する。
――――梅人クンも桜時クンを見習いなよぉ～っ――――
母からも兄からも従者からも愛され、慕われる、嫌われ者のイトコ。
――――父さんだって探したいっ！――――
眩しいくらいに一途でまっすぐで、自分の道をどんどん突き進んで行くイトコ。
「……っ」
梅人が拳を握り締める。

「……っお前の存在が迷惑だったんだよっ！！」

「……っ！」

顔を上げてそう叫ぶ梅人に、桜時が険しい表情で目を細めた。

「……っ」

「……。」

そのまま横を向き、そっと俯く梅人。下を向いた桜時は、強く拳を握り締め、きつく唇を噛み締めた。

「輝矢が…話せばわかりあえることもあるっつってたけどっ…」

桜時が俯いたまま、少し震えたような声を発する。

「俺はやっぱりっ…お前とはわかりあえねぇーみたいだっ…」

「……っ」

桜時の吐き捨てた言葉に、少し動く梅人の表情。しかし桜時は、そのまま足早にどこかへと立ち去ってしまった。その場に残された梅人が、立ち尽くしたままゆっくりと顔を上げる。

「……。」

先程まで桜時のいた方を見て、またすぐに、どこか元気なく俯く梅人。

「そんなに落ち込むくらいなら、初めから言わなければいいのに」

「……っ！」

背後から聞こえてくる声に、梅人が驚いた様子で勢いよく振り返る。

「難儀な性格してますよねぇ～アナタも」

「……。」
梅人が振り返った先に立っていたのは、シレっとした表情を見せた輝矢であった。梅人と桜時の後を追ってきたのだろうか。
「盗み聞きっ？破天荒な上に、悪趣味みたいだねっ」
表情をしかめた梅人が、少し責めるように輝矢を見る。
「ハチが話すこと、聞くこともすべて、私のものですからっ」
「あっそっ…」
笑顔で答える輝矢に、梅人が少し呆れた表情となって、そっぽを向く。
「でぇ？何っ？その大好きなハチに暴言吐きまくった僕を、怒りにでも来たわけっ？」
「いえ、殺しに」
「さらっと冗談に聞こえないこと言うなっ！！」
どこか冷たく微笑む輝矢に、梅人が少し怯えながら怒鳴り返す。
「まぁそりゃ、さっきの言い方はちょっとマズかったかなって思うけどっ…」
「じゃあとっとと謝ってきて下さい」
「誰が謝るかっ！」
「何故っ？」
「えっ…？」
勢いよく怒鳴り返した梅人が、自然に聞き返してきた輝矢に、少し戸惑うように目を丸くする。
「マズかったと思っているのに、何故、謝れないのですか？」
「そっそれはっ…」
「アナタは何に…そんなに苛立っているのですか？」
「……っ」
輝矢の問いかけに、梅人が眉をひそめて、そっと俯く。
――――俺らが守ってやっからさっ――――
――――俺はお前のこと、心配してっ…！――――

苛立つ理由など、明らか過ぎる。

「アイツがっ…アイツが遠いからっ…」

「……っ」

小さく落とされた梅人の声に、少し表情を曇らせる輝矢。

「アイツっ…アイツの方が…素直で純粋で、みんなから慕われててっ…兄さんたちも溺愛してててっ…」

少し途切れ途切れになりながら、言葉を続ける梅人。

「母さんも何だかんだで気に掛けててっ…花力も強くてっ…仲間もいてっ…」

「……っ」

梅人の言葉を聞き、そっと俯く輝矢。

――――あいつは朱実の正統な血筋で…周りのみんなに大切にされててっ…――――

――――イヌって蔑まれてる俺とは違って…愛されてたっ…――――

思い出されるのは、そう話していた悲しげな表情の桜時。思い出された桜時の言葉と、今聞いた梅人の言葉は、どこか似ていた。互いに互いの方が、求められているように、愛されているように、見えたのだろう。

「僕よりアイツが…アイツが正統血筋に生まれてた方がっ…みんな喜んだんじゃないかって…」

少し唇を噛み締める梅人。

「ずっと…そう思ってた…」

そう言った梅人は、どこか辛そうで悲しそうで淋しそうであった。

「……。」
そんな梅人を、輝矢はまっすぐに見つめる。
「そんなアイツが…ずっと羨ましくて…」
ひどく遠くを見るような、梅人の瞳。
「僕はずっと…アイツになりたかった…」
梅人がずっと秘めてきた言葉も、今はあっさりとこぼれ落ちた。

「……。」
輝矢が再び、桜時の言葉を思い出す。

――――ただっ…梅人が羨ましかった…――――
――――俺はずっと…梅人になりたかったんだっ…――――

「プっ」
「はぁっ？」
聞こえてくる吹き出すような笑いに、切なげな表情を見せていた梅人が一気に表情を引きつる。
「この状況で普通、笑うっ？」
「すみませんっ」
しかめっ面のまま、責めるように言う梅人に、笑いを堪えたような状態のまま謝る輝矢。
「あまりにも同じことを言うので、ついっ」
「えっ？」
「いえっ」
輝矢の言葉に眉をひそめた梅人に、輝矢は少し誤魔化すように、笑顔のまま数回、首を横に振った。
「前へと突き進んで行くハチに、アナタが焦ってしまう気持ちは少しわかります」
「べっ別に焦ってなんかっ…！」

「いない…？」
「……っ」
輝矢に笑顔で問いかけられると、梅人は必死に否定しようとしていたその言葉を呑みこんだ。
「彼のひたむきさには…私も時々、置いていかれるような、そんな気分になりますから…」
穏やかな優しい笑みで、そう話す輝矢。
「でもまぁ私たちの愛があれば、そんな障害、障害でも何でもありませんけどね」
「そんなことは誰も聞いてないよっ」
しっかりと言葉を付け加える輝矢に、呆れた表情で突っ込みを入れる梅人。
「でもっ…“置いていかれた”からといって、ハチを責めるのは…それはズルい…」
「ずるい…？」
少し声のトーンを落とした輝矢に、梅人の表情が曇る。
「だって…アナタはまだ、何も探していないでしょう…？」
「……っ」
笑顔で問いかける輝矢に、少し目を開く梅人。
「たくさん泣いて、散々迷って…やっと自分の道を見つけたハチと違って、アナタはまだ何も始めていないでしょう…？」
「そっ…れはっ…」
輝矢の問いかけに、否定も肯定もすることが出来ず、梅人はただ言葉を詰まらせた。
「それでハチを責めるのは、ズルいです…」
「……。」
返す言葉も見つけられず、梅人はゆっくりと俯いた。
「……っ」

梅人はずっと、見てきた。

――――ううっ…！――――

――――散歩じゃないっ！家出だっ！――――

誰にも見られないように、家の庭の隅でたくさん泣いている桜時を。何度も何度も家を出て、道を模索している桜時を。ずっと見ていた。ずっと見てきた。梅人は知っている。桜時がどんな思いをしながら、今の道を見つけたのかを。

「……そう…だね…」

「……っ」

呟いた梅人に、輝矢が少し表情を動かす。

「その通りだった…」

顔を上げた梅人は、少し悲しげに目を細めた。

――――僕はただ、見ているだけ…――――

何も探すことなく、何も始めることなく、ただ家の中で閉じこもっていただけの梅人が、自分の道を見つけられるはずもなかったのだ。

「僕は…ずるいねっ…」

「……。」

そう言って微笑んだ梅人に、輝矢が少し目を細める。

「一人だけ取り残されることが不安で…何も見つけられないことに

焦って…ただ桜時に八つ当たりしてた…」

――――……っお前の存在が迷惑だったんだよっ！！――――

胸の中に渦巻くものを、すべて怒りにして、吐きだして、桜時にぶつけた。桜時は何一つ、悪くはなかったのに。

「ホントっ…」

「最低最悪ですね」

「ちゃんと反省してんだから、気くらい遣ってよっ…」

満面の笑顔で言い放つ輝矢に、悲しげな笑みを浮かべていた梅人が一気に呆れた表情となる。

「私に気なんて遣えると思います？」

「思わないね」

輝矢の問いかけに、諦めたように頷く梅人。

「はぁっ…君の言葉に反省した自分が悔やまれるよ…」

「焦る必要など、ありませんよ」

「えっ…？」

自分で自分を悔やんでいた梅人が、横から聞こえてくる輝矢の声に、少し戸惑うように振り向く。

「道を見つける時は、人によって違います…」

穏やかな笑顔で、少し空を見上げながら、そっと話す輝矢。

「早く見つけてしまう人もいれば…長い間、見つけられない人もきっといる…」

「……。」

梅人は真剣な表情を見せ、輝矢の話に聞き入る。

「ハチが道を見つけたからといって…アナタも同じように見つけなければいけない必要はない…」

輝矢がゆっくりとした口調で言葉を続ける。

「だってアナタは、ハチではなく…」
輝矢が梅人の方を向く。
「“朱実梅人”…でしょう？」
「……っ」
そっと微笑みかける輝矢に、梅人が大きく目を見開く。
「……。」
深く俯く梅人。
――――梅人クンも桜時クンを見習いなよぉ～っ――――
――――お優しい桜時様に比べて、梅人様はっ…――――
――――桜時が正統血筋に生まれた方が、きっとみんな喜んだ…――
――
「……やっぱり変わってるねっ…君…」
「……っ？」
呟かれた梅人の言葉に、輝矢が少し首を傾ける。
「そんなこと…今まで誰も言わなかったっ…」
「……そうですかっ…」
少し瞳を潤ませて、少し震えた声でそう言って、そっと笑みを零す梅人。その言葉に輝矢も微笑んで頷き、どこか気を遣うように、

梅人から視線を逸らす。

「なら、私と出会ったことを、神にでも感謝して下さいっ」

「誰がっ…」

輝矢の言葉に悪態づく梅人であったが、その表情には大きな笑みが浮かんでいた。

第４７章　幼き国の神　☆３

「あぁ～っ！クソっ！」
その頃、梅人の前から立ち去った桜時は、収まりきらない怒りを前面に出しながら、かなりしかめた表情で、粘っランドの町を一人、歩いていた。
「梅人のっ…梅人のアホっ！ボケっ！成金っ！坊ちゃんっ！」
誰にともなく怒鳴りあげる桜時。最後の方は悪口なのか何なのかわからない。
「ったくっ…！」

――――……っお前の存在が迷惑だったんだよっ！！――――

「……っ」
思い出される言葉に、桜時が唇を噛みしめて、そっと俯く。胸にこみ上げるのは、怒りではなく、悲しみであった。
「迷惑…かっ…」
幼い頃からいつも傍にいたというのに、ずっと迷惑だと思われていたのだろうか。双子のように育ってきたというのに、一人で生まれてきた方が良かったと思われていたのだろうか。
「……。」
桜時が悲しげに、肩を落とす。
「んっ？」
その時、桜時がふと何かに気づき、顔を上げた。
「あれ…はっ…？」
いつの間にか町の最奥まで歩いてきてしまったようだが、町の最奥に崖のように大きな岩があった。高さもその辺りの家より遥かにあるが、奥行きはどこまであるのか見えないほどだ。道から繋がっ

ている部分は、扉のように形作られているが、今は深く閉じている。
扉があるということは、中に誰かいるのであろうか。
「一体、何のっ…」
――――――……っっ――――
「……っ！」
岩を見つめていた桜時に、突如、走る感覚。走った瞬間、桜時が背筋を震え上がらせる。
「いっ…今のはっ…」
まるで全身を刃物で突き刺されたような、大きな闇に呑み込まれるような、そんな感覚であった。動物としての本能が、危険を察知するような、そんな感覚。
「あっ、ちょっとっ…！」
「へっ？」
戸惑っていた桜時が、横に通りかかった町人らしき青年を呼び止めた。
「何っ？」
「あそこって…何々だっ？」
「はぁっ？」
桜時の問いかけに、青年が顔を引きつる。
「あそこ知らないってお前、何っ？余所者っ？」
「えっえっとっ…今日来たところでっ…」
怪訝そうな表情を見せる青年に、桜時が少し焦りながら説明をする。
「やっぱりなぁ～っ、この町の人間であの場所を知らねぇーやつなんて、いねぇーもんっ」
青年が得意げに笑う。

「あそこは“天の岩戸”っ！」
「天の…岩戸…？」
桜時が少し眉をひそめる。
「我らが天照様のお住まいさっ！」
「天照っ…」
笑顔で話す青年と、再び聞くその名にその表情を曇らせていく桜時。
「神っ…」
桜時は天の岩戸を見つめ、そっとその瞳を鋭くした。

その日・夜。

『ざわざわざわざわっ』

儀式というよりは、何かの祭りのようであった。桜時の見た天の岩戸の閉ざされた入口から、続く大通りに向かって、真っ赤な絨毯が敷かれ、その両端には多くの子供たちが集まっている。恐らく、町中の子供たちが集まってきているのだろう。子供たちは皆、わくわくとした笑顔を見せており、儀式の始まりを、今か今かと心待ちにしている。

「凄い人ですねぇ」
「成人の儀は、この町では一大イベントですから」
周囲の人混みに少し顔をしかめながら言う輝矢に、横から笑顔で

答えるウェンディ。
「ううっ…！踏まれるっ！踏まれるっ！」
輝矢たちの傍にいるハチが、近くにあるたくさんの足に、何度も踏まれそうになる。
「抱っこして差し上げましょうか？ハチ」
「いらねぇーよっ！！」
輝矢の申し出を、勢いよく断るハチ。
「人化しよっ」
「あっ、俺もぉ～」
――――ボォォォォォォォォ～～～ンっ！――――
「よしっと」
白い煙に包まれ、人化して桜時の姿となるハチ。モンキも同じように人の姿となる。
「どうもっ」
「お前なっ…」
人化することなく、キジの姿のまま桜時の肩で休むユキジに、桜時が少し呆れた表情を見せる。
「だって梅人もやってるじゃ～んっ」
「へっ？」
そう言ってユキジが嘴を向けた方を、桜時が見る。
「あっ…」
桜時の向いた先には、輝矢の肩に乗っている一羽のスズメの姿があった。言うまでもなく、雀化した梅人である。
「アイツっ…」
梅人の姿を見て、桜時が少し顔をしかめる。
「何っ？嫉妬ぉ～？」
「違うわっ！！」
横から口を挟むユキジに、桜時が全力で怒鳴り返す。
「おっれも変わろ～っとっ！」

「はぁっ？」

――――ボォオオオオオオオォ～～～ンっ！――――

そう言いながら、同じように白い煙に包まれていくピーター。すでに人の姿であったはずのピーターがそう言ったので、桜時が顔をしかめる。

「おいしょ～っ！」

「どわあああああっ！」

白い煙の中から姿を現したのは、子供ばかりの人混みではかなり面積をとる、巨体パンダ。その巨体に勢いよく押され、少し苦しげな声を出す桜時。

「よぉ～しっ！ジャグリングっ…！」

「やめいっ！！」

パンダ化し、ジャグリングようの棒を取り出そうとするピーターを、桜時が勢いよく怒鳴りあげて止めた。

「火の輪くぐりでもいいわよ？ピーター」

「五人は燃えますよ…？」

笑顔でマッチを構えるウェンディに、輝矢が少し冷たい目を向けた。

「おいっ、輝矢っ」

「はいっ？」

桜時がパンダのピーターを擦りぬけ、輝矢の横まで行く。

「……っ」

「……。」

輝矢の肩の上の梅人と目を合わせ、どこか気まずそうな表情を見

せる桜時。梅人も同じように視線を逸らす。

「どうしました？ハチ」

「あっ」

輝矢に名を呼ばれ、桜時がハッとしたように顔を上げる。

「実はっ…さっき、あの岩見た時にっ…」

『うわあああああああああああああっ！！』

『……っ』

その桜時の声は、周囲からの歓声に一気に掻き消された。その歓声に輝矢たちが皆、天の岩戸の方を振り向く。

――――ゴゴゴゴゴゴゴっ…！――――

誰が開けるわけでもなく、重く響くような音をたてながら、徐々に開いていく天の岩戸。

『……っ』

開く扉に、輝矢たちが皆、息を呑んだ。

『うわあああああああああああああっ！！』

『きゃあああああああああああああっ！！』

歓声響く中、天の岩戸から、ゆっくりと出てくる二つの人影。

「……。」

「……っ！」

その者の姿が見えた途端、輝矢は大きく目を見開いた。

「天照様ぁぁ～っ！！」

「天照様っ！！」

「あの方が、我らが太陽の神・天照様ですわっ」

「……っ」

周囲の歓声でもうわかってはいたが、笑顔でそう輝矢に紹介するウェンディ。輝矢はウェンディの言葉に特に返事を返すことなく、ただまっすぐにその人物を見つめた。

「……。」

長く、透き通るような、白い髪。宝石のような赤色の瞳は、一切の感情もない。整った顔立ちに、髪と同じほどに白い肌は、どこか神秘的で、そしてどこか人ではないと思わせた。人らしくないその女性は、幼くも見えれば、もうずっと長い間生きているようにも見える。そんな掴み得ない空気を醸し出していた。

「あれがっ…神っ…」

輝矢がまっすぐに、その女性を、天照を見つめる。

『天照様ぁぁっ！！』

「……。」

歓声に押されながら、ゆっくりと赤い絨毯の上を進んでいく天照。裾の長い白の着物で足は見えない。その頭と首元には、豪勢な装飾品を身につけており、町人たちが持つ明かりに照らされ、反射して輝く光は、確かに神のように見えた。

「……っ？」

天照にばかり目をとられていた桜時が、その後ろを歩く一人の男に気づく。

「あれはっ…？」

そっとウェンディに問いかける桜時。

「天照様の仕官であられる、須佐（すさ）様ですわっ」

「須佐っ…？」

ウェンディの言葉に眉をひそめながら、再びその須佐という男を見る桜時。薄い灰色の髪に、まったく未来を見ていないような、光のない紫色の瞳。何より目についたのは、首筋の禍々しく黒い紋様と、腰に下げている水晶のような美しい剣であった。

「神の仕官がっ…剣っ…？」

どこか違和感を感じ、桜時がさらに表情を険しくする。

「おっ！出たぞぉ～っ！今日の主役っ！」

『……っ』

ピーターの声につられ、輝矢たちが天照と須佐から目を離し、その二人が向かっている先の方に目をやる。するとそこには、膝をつき、深く俯いた一人の青年の姿があった。顔などはよく見えないが、

体格などから見ると、もう子供というにはかなり大きい。

「彼が今日、成人を迎えた町人ですわっ」

問いかける前に、察したように話すウェンディ。

「今から何をするのです…？」

「町を旅立ち、自立する彼に、天照様から力が贈られるのですっ」

「力…？」

「ええっ」

まるでその成人の青年を羨むように話すウェンディの横で、輝矢がそっと眉をひそめ、ゆっくりと青年の前まで歩み寄っていく天照を見守った。

『……っ』

天照が青年のすぐ前に立ち、足を止めると、それまで散々騒いでいた町中の子供たちが一斉に黙りこみ、その場は静寂に包まれた。

「面を上げよ…」

「はっ」

須佐の言葉に答え、深く俯いていた青年がゆっくりと顔を上げた。

「天照様っ…」

顔を上げた青年は、目の前に立つ神に、どこか眩しそうに目を細めて、思わずその名を呟いた。

「……っ」

そんな青年を見て、天照はそっと微笑む。

「貴方に…」

天照が、青年にゆっくりと右手を伸ばす。

「太陽の神のご加護が…ありますように…」

天照がそう言った、瞬間であった。

――――パァァァァァァァァァンっ！――――

『……っ！』

天照の手から放たれた強い白光に、輝矢たちも含め、その場にいる者は皆、その眩しさに目を閉じた。一瞬だけ輝いた光はすぐに止み、皆がゆっくりと目を開く。

「何だっ…？今の光っ…」

「んっ…？」

戸惑うように呟く桜時の声を聞きながら、神妙な表情を見せていた梅人が、ふと何かに気づき、自分の足元を見る。

「揺れ…？」

かすかに小刻みに動く、梅人の足元。

「輝矢…？」

「……。」

戸惑うように、厳しい表情を見せている輝矢を見る梅人。梅人の足元は、輝矢の肩は、かすかに、だが確実に、震えていた。

「……。」

ゆっくりと青年へと伸ばしていた右手を下ろす、天照。

「……っ」
光を受けた青年が、その場で立ち上がる。
「貴方の今後のご活躍を…お祈りしておりますわ…」
「ありがとうございますっ…！」
天照の言葉に、青年が満面の笑みを浮かべて礼を言う。そして天照に一礼すると、青年は天照に背を向け、大通りを、町の出口へと向かって歩き出していく。

「兄ちゃんっ！元気でねっ！！」
「頑張ってよっ！！」
「おうっ！」
両端から手を振る子供たちに見送られ、町を出て行く青年。

「ああして天照様に太陽の力をいただき、大人になった子供はこの町を旅立っていくのですっ」
青年の背中を見つめながら、ウェンディは少し興奮したような口調で話した。
「私もっ…もうすぐっ…」
「えっ…？」

『ざわざわざわっ！』

『……っ』

急に騒ぎ出した周囲に、ウェンディと輝矢の会話は遮られた。そのざわつきに、振り向く輝矢たち。

『なっ…！』
振り向いた輝矢たちが、驚いたように大きく目を見開く。

「……。」

赤い絨毯を降り、激しい人混みの中を、ゆっくりとこちらへ向かって歩いてくる天照と須佐。集まっていた者たちは、横へと避け、天照へ、輝矢たちの元までの道を作る。

「なっなんでっ…」
「……っ」
戸惑うウェンディの横で、眉をひそめ、少し警戒するように拳を握り締める輝矢。

「天照様っ！」
「天照様っ！！」
やって来る神に、集まっていた子供たちは皆、その場で地面に両膝をつき、深々と頭を下げた。

「あっ！ピーターっ！」
「うっうんっ！」
それに気付き、同じように両膝をついて頭を下げようとするウェンディとピーター。
「あんたたちもっ…！」
『うえぇぇぇっ！？』
「なんで可愛いボクがぁ～っ！」
巨体のピーターに頭を押され、無理やり地面へと押しつけられる桜時と門貴。桜時の肩に乗っていたユキジも地面へと下ろされ、不

満げな声をあげる。
「輝矢さんもっ…！」
地面に膝をついたウェンディが、輝矢にもそうするよう促すように、輝矢を見上げる。
「……。」
しかし輝矢はまったく動かず、ただまっすぐにやって来る天照を見ている。

「輝矢さんっ…！？」

「……。」

「あっ…！」

もう一度、焦ったように輝矢の名を呼ぶウェンディであったが、天照が輝矢の目の前まで辿り着き、反射的に深々と頭を下げた。

「旅の…御方ですか…？」
輝矢の前で立ち止まった天照が、緩やかな笑みを浮かべ、ゆっくりと輝矢に問いかける。
「だったら何かっ…？」
輝矢は鋭い瞳で、そう答える。

「うわっちゃ～っ、神様に何て口っ」
「いいっ？ここは他人の振りよっ？ピーターっ」
「あんだけ名前呼んどいて今更っ…」
深く頭を下げたまま、頭を抱える門貴。ピーターに他人の振りを促すウェンディに、ユキジが少し呆れた表情を向ける。

「ゆっくりしていかれるといいでしょう…」
天照は、輝矢の態度に表情一つ動かすことなく、そのままの笑みで輝矢に言葉を続けた。
「そうすれば…貴女がたにも…太陽の神のご加護がありますわ…」
「……。」
その優しくも冷たい笑みに、その透き通った刺すような瞳に、輝矢の表情が曇る。
「では参りましょうか…須佐…」
「はっ」
天照の言葉に頷き、後方に立っていた須佐が、素早く横に避けて、天照へと道を開ける。その道を進むべく、ゆっくりと振り返り、輝矢に背を向ける天照。

「神よっ」
「……っ」

今まさに歩き出そうとしていた天照が、背後から聞こえてくる声に、再びゆっくりと振り返った。

「……。」
天照が振り返った先には、神に救いを求めるとは思えないほどに強い瞳をした、輝矢の姿。

「何でしょう…?」
天照が再び、輝矢に笑みを向ける。

『……っ』
輝矢と天照の様子を、どきどきとした表情で見守るウェンディとピーター。

「貴女は何を…お救いになるのですか…？」

「……っ」

輝矢のその問いかけに、天照が少し意外そうな顔をし、笑みが一瞬、消える。

「……っ」
しかし再び、笑みが作られる。

「もちろんっ…」
その笑みが、輝矢に向けられる。

「“世界を”…」

「……。」

微笑む天照に、輝矢はそっと目を細めた。

「ではっ…」
そう言って背を向けると、今度こそ止められることなく、歩き出していく天照。そして、天照は須佐とともに元来た道を戻り、絨毯の上へと戻って、天の岩戸の奥へと姿を消していった。

「はぁ～っ…緊張したっ…」
「私もハラハラで心臓が火の輪くぐりしてたわっ…」
正座を崩し、その場で疲れたように足を伸ばすウェンディとピーター。

「輝矢っ…」
立ち上がった桜時が、少し険しい表情で輝矢の方を見る。

「……天照っ…」

厳しい表情を見せた輝矢は、対面したばかりの神の名を、誰にともなくそっと呟いた。

第４８章　神の悪行　★１

太陽の神・天照との対面から、二日ばかりの時が流れた。
「お抹茶です」
「結構なおマズさで…」
輝矢たちはというと、まだ粘っランドの住人・ウェンディとピーターの家に厄介になっていた。天照との対面から、別段変わったことがあったわけでもない。平穏な日々が続いていた。今日もウェンディが煎れた不味い抹茶を飲み、輝矢は顔をしかめている。
「けっど何も起こらんなぁ～っ、あの双子も現れへんしっ」
「やっぱココ、ネバーランドとは違うんじゃないのぉ～？」
どこか暇そうに居間の床に転がりながら、言葉を交わすモンキとユキジ。鬼も出ない、何事もない日々が続き過ぎて、そのような考えも思いつかずにはいられなかった。
「どうするんだ？輝矢っ」
「うぅ～んっ…どうしましょうかねぇ…」
横に座るハチから問いかけられ、深く首を捻る輝矢。ここが双子の言っていた場所と違うのであれば、即刻立ち去り、その場所を探さねばならないが、今はまだ、ここが違う場所という確証もない。

――――もちろん…“世界を”…――――

そして思い出される、太陽の神。

「……っ」
輝矢がそっと眉をひそめる。
「気になってるんだろっ…？」
「えっ…？」
ハチの問いかけに、輝矢が少し目を丸くして振り向く。

「あっ、ええ、ハチのことなら、随分前から気になりまくってますけど」
「違げぇーよっ！！」
平然と答える輝矢に、ハチが少し顔を赤くして怒鳴り返す。
「天照のことだよっ！！」
「ああっ」
怒鳴りながら神の名を口に出すハチに、輝矢がやっとわかった様子で軽く頷く。
「俺もっ…気になってるからっ…」
「えっ？浮気ですかっ？」
「真面目に話を聞けっ！！」
軽く問いかける輝矢に、本当に少し怒ったようで、顔をしかめるハチ。
「あの女、何かっ…何て言っていいのかわかんねぇーけどっ…」
ハチが真剣な表情を見せ、自分自身で戸惑いながら言葉を続ける。
「何かっ…予感がしてっ…」
「……っ」
ハチの言葉に、輝矢が少し目を細める。
「妙に…胸が騒ぐんだっ…」
「……。」
ハチの言葉を聞きながら、輝矢がそっと自分の左胸に手を触れる。

――――太陽の神のご加護が…ありますように…――――

天照の手から放たれた、眩しいばかりの白い光。あれを見た途端、輝矢の肩は震えた。理由はよくわからないが、まるで恐怖するように震えたのだ。

――――何かっ…予感がしてっ…――――

いつもとは違う、心臓の音。予感めいたものなら、輝矢も確かに感じている。

「ふんふふんふんふぅ～んっ♪」

「……っ？」

聞こえてくる、妙に明るい鼻歌に、輝矢は左胸を押さえていた手を下ろし、ゆっくりと顔を上げた。

「ふんふふんふんふぅ～んっ♪」

キッチンで洗いものをしながら、その明るい鼻歌を歌っているウェンディ。

「妙にご機嫌ですね」

「えっ？」

輝矢の言葉に、ウェンディが振り返る。

「やっぱりわかっちゃいますぅ～？隠してたんだけどなぁ～っ！」

「全然、隠せてねぇーけどっ…」

満面の笑顔でうきうきと話すウェンディに、ハチが呆れた表情を見せ、こっそりと呟く。

「でっ？何があるのです？火の輪くぐりの全国大会でもあるのですか？」

「それはそれで嬉しいですけどぉ～っ、もぉ～っと嬉しいことなんですっ！」

「もっとっ…？」

さらに微笑むウェンディに、輝矢が少し眉をひそめる。

「私っ、今日、“成人の儀”なんですっ！」

「えっ…？」

ウェンディの言葉に、輝矢の表情が曇った。

「成人の…儀っ…？」

「はいっ！」

聞き返した輝矢に、大きく頷くウェンディ。

「今日…？」
「はいっ！この町やピーターと離れるのは淋しいけどっ…でもっ…」
ウェンディが窓から、天の岩戸のある方を見つめる。
「天照様のご加護を受けて、旅立って行けるのはっ…それ以上に嬉しいからっ！」
「ウェンディっ…」
「それに天照様とお話できるしっ！今夜は輝矢サンたちも、絶対見に来て下さいねっ！」
「……っ」
何かを言いかけた輝矢であったが、あまりに嬉しそうな笑顔を見せるウェンディに、輝矢は出そうとした言葉をそっと呑み込んだ。
「ええっ…」
輝矢が少し俯き気味に頷く。

「おうっ！おっはぁ～っ！梅人ぉ～っ！」
『……っ』
居間から聞こえてくるモンキの声に、輝矢やウェンディが振り向く。
「んん～っ…」
居間へと入って来たのは、まだ半分くらい寝ているような表情の梅人であった。モンキの挨拶を適当に返しながら、梅人がダイニングの方へとやって来る。
「相変わらず、ゆっくりとした起床ですね。もうおやつの時間ですよ？」
「金持ちの息子は早起きする必要なんてないんだよっ」
輝矢の言葉に答えながら、ダイニングへと入る梅人。
「ミルクもらえる？」
「はいっ！ただいまっ！」
梅人がそう言うと、ウェンディは笑顔で頷き、キッチンでミルクを入れ始めた。

「ふぅ～っ…んっ…？」
「あっ…」
ダイニングの椅子に座ろうとした梅人が、すぐ横の椅子に座っているハチを目を合わせる。
「……俺っ、散歩っ」
「へっ？」
慌てて椅子を飛び降り、部屋から出て行ってしまうハチ。そんなハチを、輝矢は少し目を丸めて見送る。
「……っ」
ハチが出て行くと、輝矢は顔をしかめ、肩を落とした。
「まだ謝っていないのですか？」
しかめた表情のまま、梅人の方を見る輝矢。
「目が合っただけで、向こうが散歩に行っちゃうんだよっ」
ウェンディに入れてもらったミルクを飲みながら、梅人がしかめた表情でそう言い放つ。
「困った方々ですねぇ…」
輝矢がどこか呆れた表情を見せながら、そう呟いた。
「はぁ～っ…気まずっ…」
ウェンディとピーターの家を出たところで、ハチは深々と溜息をついた。

「やっぱ俺から謝るもんなのかなぁ～っ…」

――――……っお前の存在がっ、迷惑だったんだよっ！！――――

思い出される、梅人の言葉。

「謝ったってっ…それはそれでさらに迷惑なのかもっ…」

そう呟き、頭を抱えるハチ。平穏なまま二日が過ぎたが、その間、ハチと梅人はろくに言葉を交わしていない。どちらかと言えばハチが避けているのだが、どうしようもないこの状態は、ハチにとってはある意味、天照の件以上の問題であった。

「はぁっ…」

「とっりゃあああああっっ！！」

「へっ…？」

もう一度深々と溜息をついたハチが、横から聞こえてくる妙に気合いの入った声に、振り向く。

「あっ」

「って…」

ハチのいる方へ、体は横向きに勢いよく突っ込んでくる、一頭の巨体パンダ。もちろんピーターである。ハチとピーターの目が合う。

「どわあああああああああああっ！！」

――――バァァァァァァァァァーーーンっ！――――

突っ込んできたピーターとハチが、勢いよく激突した。

「ふぅ〜っ、痛かったぁ〜」
地面へと倒れ込んだピーターが、ゆっくりと起き上がる。
「あっれぇ〜？桜時さぁ〜んっ？」
「ここだっ…」
「へっ？」
周囲を見回し、ハチの姿を探していたピーターが、下方から聞こえてくる弱々しい声に、視線を落とした。
「あぁ〜っ！発見っ！」
「いいからとっとと、どけっ…」
ピーターの巨体の下敷きとなり、潰れかけているハチ。そんなハチを発見し、明るく笑うピーターに、ハチはかなり冷たい瞳で訴えた。

――――ボォォォォォォォォ〜〜〜ンっ！――――

「よっ」
「ったくっ…」
白い煙に包まれて人化し、幼い少年の姿となったピーターが、軽々とした動きでハチの上からどく。乗っかっていた巨体がなくなり、やっと自由になって起き上がるハチ。
「痛てぇーなぁっ…何やってたんだよっ？」
痛む背中を気にしながら、ハチがピーターにしかめた表情を向ける。
「火の輪くぐりの練習っ」
「家の前で、んなしょーもないことすんなっ！！」
笑顔で答えるピーターに、ハチが思わず怒鳴りあげる。
「最後にウェンディに見せたくてさっ！」
「えっ…？」
ピーターのその言葉に、ハチの表情から怒りが消えた。
「最後って…」

「あれっ？聞いてないっ？ウェンディ、今日が成人の儀だって」
「いやっ、聞いたけどっ…」
ハチが少し戸惑うように答える。
「自立して町を出た子供は、この町には戻って来ないってのが決まりんなんだっ。実際、戻ってきたヤツもいないっ」
「じゃあウェンディとはっ…」
「うんっ。俺が大人になって、この町を出るまでは、もう会えないっ」
「……っ」
そう言って、少し悲しげに微笑んだピーターに、ハチはそっと眉をひそめた。
「ウェンディとは血ぃ繋がってないけどっ、小っちゃい頃から俺のこと育ててくれて、本当の姉ちゃんみたいな存在だからさっ」
ピーターが空を見上げ、明るい笑みを作る。
「最後に目一杯、喜ばせたいんだっ！」
「ピーターっ…」
そう話したピーターの瞳はどこまでの澄んでいて、その子供ながらの一生懸命さのようなものが、ひどくハチの胸を打った。
「それはいい考えだなっ」
「だろっ？」
そっと微笑むハチに、ピーターが得意げに笑いかける。
「ホントはパンダ転がりと悩んだんだけどさぁ～、パンダ転がりが自分じゃ止まれねぇーからさぁっ」
「それは止めとくべきだな…」
首を捻るピーターの横で、しみじみと頷くハチ。
「……。」
――――ボォォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

少し考えるように俯いたハチが、白い煙に包まれ人化する。白い煙の中から現れた桜時は、自分より小さくなったピーターの横に、そっとしゃがみ込んだ。

「なぁっ、ピーター」
「んっ？」
呼びかけた桜時の方を、ピーターが振り返る。
「寂しく…ないのかっ…？」
少し躊躇うように、桜時はピーターに問いかけた。
「ウェンディが…出て行くことっ…」
「……。」
その桜時の問いかけに、空を見上げていたピーターは顔を下ろし、そっと目を細めた。
「もちろん、寂しいよっ…」
「……っ」
自然に答えるピーターに、桜時が少し眉をひそめる。
「ずっと二人で生きてきたのに、いきなり一人になるのは…寂しいっ…」
ピーターが、まっすぐな瞳で、言葉を続ける。
「置いていかれるのは…とっても寂しいっ…」
「置いて…いかれるっ…」
ピーターの発した言葉を繰り返しながら、桜時はそっと俯いた。

――――梅人っ！遊びに行こっ！――――

ずっと二人でいた。ずっと二人で育ってきた。

――――じゃあ行ってきますっ！――――

桜時が旅立った時、梅人はどんな気持ちでいたのだろう。今のピ

ーターと同じように、一人になると、置いていかれると、“寂しい”と、思ったのだろうか。

「寂しくて不安でっ…ウェンディを責めて、ケンカしたこともあったんだっ」

「えっ…？」

ピーターの言葉に、桜時が少し驚いたように振り向く。

「ケンカっ…？」

「ああっ！“ウェンディなんか、初めっからいなければ良かったのに”って言ったりもしたっ」

「……っ」

――――……っお前の存在がっ、迷惑だったんだよっ！！――――

過去を懐かしむように、笑顔で話すピーター。その言葉が、梅人から放たれた言葉と重なって、桜時は少し目を細めた。

「仲直りっ…したのかっ…？」

「もちろんっ！」

「どう…やって…？」

笑顔で頷いたピーターに、桜時がとても興味深そうに問いかける。

「えっ？別にっ？フツーに“ごめんなさい”って言ってっ」

「ごめん…なさい…？」

「ああっ」

眉をひそめる桜時に、ピーターがまたもや大きく頷く。

「だって“家族”って、そういうもんだろっ？」

「……っ」

笑顔で語りかけるピーターに、どこかハッとした表情を見せる桜

時。

「いっくらケンカしたって、いなかったらやっぱり寂しいし、謝ればすぐに元通りに戻れるっ！」

「……。」

そう言ったピーターの笑顔を、しばらくの間、ただ見つめる桜時。

――――イヌのくせに、汚らわしいっ…！――――

――――梅人様っ、孔雀様がお呼びですわっ！――――

ひらいていった距離。

――――行ってきなよっ…――――

――――あっうんっ…――――

埋めるどころか、広げてばかりいた、あの頃。

――――俺はお前のこと心配してっ…！――――

――――そういうのが全部、迷惑だっていうのがわからないわけっ!?――――

そして、今も。

――――だって“家族”って、そういうもんだろっ？――――

桜時も梅人も、信じることが出来ないでいただけかも知れない。

血は繋がっているというのに、ずっと一緒に育ってきたというのに、“家族”だということだけが、この距離を埋めてくれるなどとは、信じることが出来なかったのだ。“家族”ということが、どれほどに強いものなのかも知らないまま。

「……っ」
桜時がそっと俯き、目を伏せる。
「そっか…」
「えっ？」
そっと呟いた桜時に、首を傾げるピーター。
「そうだよなっ…」
再び噛み締めるように言う桜時に、ピーターは少し戸惑った表情を見せた。
「“家族”…だもんなっ…」
「えっ？あっあぁ～っ、うんっ」
よくわからないまま、とりあえず頷くピーター。
「よしっ！謝ってくるっ！」
「へっ？」
ピーターとしては自分のことを話しているつもりだったというのに、突然、何かを決意したかのように立ち上がる桜時を、ピーターが戸惑った様子で見上げる。
「じゃっ、お前は火の輪くぐり頑張れよっ！」
「あっ、おっおうっ」

「ピーターっ！！」
『……っ』
戸惑いながらも頷くピーターに見送られ、桜時が再び家の中に入ろうとしたその時、焦った様子の幼い声が聞こえてきて、桜時とピーターが同時に振り返った。

「はぁっ…！はぁっ…！」
「……っ？」
二人の元へと必死に駆け込んできた、一人の少年。息を切らせたその少年に、ピーターが少し首を傾げる。

「どうしたんだぁ？そんなに急いで」
「町のっ…入口にっ…」
やって来た少年は、乱れた息で必死に言葉を繋ぐ。

「鬼がっ…！！」
「えっ…？」
「何だとっ…！？」

少年の言葉に、桜時とピーターの表情が一変した。

第４８章　神の悪行　★２

「グアアアアアアアアアアっっ！！」
『うわあああああああっっ！！』
『きゃあああああああっっ！！』

粘っランドの入口で、大きな爪を振るい、町の子供たちを攻撃している一匹の灰色の鬼。血を流した子供たちが、あちらこちらに倒れている。

「グウゥゥゥゥゥっ…」
「うっ…！」

ゆっくりと振り返った鬼に、恐怖してその場にしゃがみ込む、一人の少年。腰が抜けてしまったのか、その状態から動けないようである。そんな少年へ向け、灰鬼はゆっくりと両手を向けた。

「“鬼爪”っ…！」
「ひぃっ…！！」

鬼の両手から飛び出す十本の爪に、少年の顔が凍りつく。

「ううっ…！！」
少年が勢いよく瞳を閉じた。

「如意棒・第一の舞っ…“空”っ！！」

――――パァァァァァァァーーーンっっ！！――――

「グガっ…？」

巻き起こった強い風に、高々と吹き飛ばされる十本の爪。その光景に、灰鬼が少し眉をひそめる。

「よっとぉっ！」

真っ赤な如意棒を振り上げ、しゃがみ込んでいる少年の前へと立ったのは、門貴であった。その横には輝矢、桜時、由雉、そして梅人の姿がある。

「ひどいなっ…」

周囲に倒れている子供たちを見て、梅人が顔をしかめる。

「由雉、皆の治療をっ」

「了解っ」

輝矢の言葉にしっかりと頷き、由雉が黄色の羽根を持って、倒れている子供たちの手当てにあたる。

「輝矢ぁ～んっ、あの灰色の鬼、初めて見るけど、レベル何ぃ～っ？」

「知りません」

「へっ？」

問いかけた門貴が、輝矢から返って来た答えに目を丸くする。

「知らへんっ？」

「ええっ」

聞き返した門貴に、輝矢があっさりと頷く。

「灰鬼なんて、見たことも聞いたこともありませんねぇっ」

「それじゃあっ…」

「ええっ…」

眉をひそめる桜時に、輝矢もどこか険しい表情を見せて頷く。

「鬼人化人間の…可能性があります…」
「グガアアアアアアアアっ！！」
輝矢の言葉を遮るように、灰色の鬼は激しい咆哮をあげた。

「ピーター？」
「うおっ！」
玄関から顔を出したウェンディに、こっそりと火の輪くぐりの練習をしていたパンダ姿のピーターが、少し背筋を立たせて振り返る。
「なっ何だよっ、ウェンディっ、いきなり出てくるとびっくりすっ…」
「輝矢さんたちがいないんだけど、どこ行ったか知らないっ？」
大きな背中で火の輪を隠し、少し焦ったように話すピーターの言葉を遮って、ウェンディが問いかける。
「みんななら…町の入口に鬼が出たとかって、慌てて飛び出して行ったけどっ…」
「鬼っ…？」
ピーターの言葉に、ウェンディが眉をひそめる。
「一緒に行かなかったの？ピーター」
「危ないから、ここに残ってろって…」
「そうっ…」
ウェンディが少し不安げな表情で俯く。
「私の成人の儀までに、戻ってきてくれるかしら…」
「特に心配してるわけじゃねぇーんだなっ…」
成人の儀への出席の方を気にしているウェンディに、ピーターが少し呆れた表情を見せる。

「……っ」

『……っ？』

そっと聞こえてきた足音に、同時に振り向くウェンディとピーター。

『あっ…』

そこに立っていた者を見て、二人が少し驚いたような表情を見せる。

「貴方はっ…」

――――トクンっ…――――

「……っ」

自分の耳にまで届きそうな音をたてた心臓に、輝矢が三日月を構えていた右手の動きを止める。

「グガアアアアアアアっ！！」

「チィっ…！鬼人化人間なら、容赦なく攻撃ブチかまされへんなぁっ…！」

動きを止めた輝矢のすぐ近くでは、鬼爪を振り下ろす灰鬼に、如意棒を構えた門貴と村雨丸を構えた桜時が応戦していた。相手が鬼人化人間かも知れないという輝矢の言葉を受けたため、灰鬼に対し、全力の攻撃が出来ず、門貴は少し手間取っている。

「……っ？輝矢っ？」

門貴の横に立った桜時が、急に動きを止めた輝矢に気づき、振り返る。

「どうしっ…」

「ハチ、サルっ、ここをお任せしていいですかっ？」

『えっ…？』

どこか厳しい表情でそう言う輝矢に、目を丸くする桜時と門貴。

「別に構わへんけどぉっ…」

「ではお願いしますっ」

「あっ、おいっ！輝矢っ！」

門貴が頷くと、輝矢はすぐに二人に背を向け、呼び止めた桜時の声にも止まることなく、その場を走り去っていった。とても焦っているような、危機迫った様子であった。

「どうしたんやぁ～？輝矢んっ」

「……っ」

首を傾げる門貴の横で、少し不安げな表情を見せる桜時。

「グガアアアアっ！！“鬼口”っ！！」

『……っ！』

輝矢の走り去っていった方を見つめていた二人が、後方から飛んでくる鬼口に、勢いよく振り返る。

「今はんなこと考えとる場合とちゃうかったなっ！」

左右に分かれ、鬼口をかわす桜時と門貴。
「輝矢んに任されたんやぁっ！きちぃ～んと仕事、こなさんとっ…！」
門貴が態勢を整え、如意棒を構えた。
「如意棒・第二の舞っ…“浄”っ…！！」
――――バァァァァァァァァーーーンっ！！――――
「グガっ…！！」
門貴が地面に勢いよく如意棒を突き刺すと、灰鬼の四方をまるで取り囲むように、竜巻状の風が巻き起こった。風に周囲を取られ、動けなくなった灰鬼が、少し焦ったような表情を見せる。
「風が止んだ瞬間を狙えっ！イヌコロっ！」
「おっおうっ…！」
門貴の言葉に頷き、桜時が村雨丸を構え、風に取り囲まれている灰鬼の方へと駆け出していく。
「グっ…グゥっ…！」
「……っ」
徐々に小さくなっていく風に、桜時が村雨丸を握る手に力をこめる。
「うわぁぁぁぁぁぁ～～～んっ！」
「……っ！」
風が止もうとしたその時、聞こえてくる幼い泣き声。

「……っ？子供っ…？」
桜時が思わず振り向くと、少し離れた場所で、怪我をしたまだ幼い少年が、地面に座り込み泣きじゃくっていた。

「桜時っ…！！」
「えっ…？」
子供に注意を取られていた桜時が、門貴の声に再び前を向く。

「グガアアアアアアアアアアっっ！！」
「……っ！」
すでに風から解放された灰鬼が、振り返った桜時へ向け、鬼爪を振り下ろそうとしていた。

「うっ…！」
村雨丸を突き出す時間さえもなく、桜時が少し表情を引きつった。
その時。

――――バシィィィっっ…！――――

「グガっ…？」
「えっ…？」

桜時へ振り下ろされようとしていた鬼爪が、急に止まった。止まった鬼爪に、戸惑った表情を見せる桜時と灰鬼。灰鬼自らが止めたわけではないようである。

「……。」

桜時の前に立ち、鬼爪を受けとめる一人の人物。

「あっ…」

その者の姿に、桜時が思わず声を漏らす。

「梅人っ…」

「……。」

そう、突き上げた右手一本で、灰鬼の大きな鬼爪を受けとめていたのは、どこか厳しい表情を見せた梅人であった。桜時が戸惑った様子で、梅人の名を呼ぶ。

「梅坊ちゃんてば力持ちぃ～っ」

「腕力、輝矢くらいあるんじゃないっ？」

鬼爪を軽々と受けとめている梅人を見ながら、門貴と由雉が感心したように言葉を交わす。

「梅人っ…」

もう一度、梅人の名を呼ぶ桜時。

「あっありがっ…」

「一回しか言わないから、よく聞いておけよっ…」

「えっ？」

囁かれた梅人の言葉に、桜時が少し首を傾げる。

「ごめんっ…」

「……っ！」

梅人の口から出たその言葉に、桜時が大きく目を見開く。

「この前はっ…言い過ぎたっ…」

鬼爪を受けとめながら、決して桜時の方は見ずに、そう謝罪する梅人。

「……。」

謝る梅人に、桜時がそっと目を細める。

――――いっくらケンカしたって、いなかったらやっぱり寂しいし、謝ればすぐに元通りに戻れるっ！――――

その言葉さえ聞けば、どんなわだかまりも、一瞬で消えてしまう。

――――だって“家族”って、そういうもんだろっ？――――

それが、家族。

「……っ」

桜時の口元が、少し緩んだ。

「グウゥゥゥゥゥゥゥっ……」

『……っ』

唸り声をあげ始める灰鬼に、同時に眉をひそめる桜時と梅人。

「鬼口やっ！イヌコロっ！」

「しんみり和解してる場合じゃないよぉ～っ！」

灰鬼のやろうとしていることを察し、後方から声を掛ける門貴と由雉。

「梅人っ！」

「わかってるっ！」

左手を構えながら梅人の名を呼ぶ桜時。梅人もしっかりとそれに答えながら、鬼爪を受けとめていない方の手を、桜時の左手の横へと突き出す。

「“鬼口”っ！！グガアアアアアアアアアっっ！！」

灰鬼の口から、二人へと吐き出される鬼口。

『……っ』

桜時と梅人が表情を引き締める。

『“瞬花”っ…！！』

並んだ二人の右手から、赤と桃の光が放たれた。

――――パアアアアアアアアアーーーーンっっ！！――――

灰鬼の放った鬼口が、一瞬にして、桜と梅の花びらへと変わり、散っていく。赤と桃の花びらが混ざり合い、空中を舞うその光景は、何とも美しかった。

「グガっ…！？」
花びらへと変わった鬼口に戸惑い、梅人から手を放して、後退する灰鬼。

「村雨丸っ…」
舞い散る二色の花びらの中で、村雨丸を構える桜時。

「グっ…！」
灰鬼が少し焦りの表情を浮かべる。

「“瞬花っ…終刀”っ…！！」
桜時の振り下ろした村雨丸から、放たれる桃色の一閃。その一閃は、まだ降り落ちる花びらをまとって勢力を増し、まっすぐに灰鬼へと飛んでいく。

「ウウっ…！グギャアアアアアアアアアっ！！」
桜時の刃に斬り裂かれ、激しく血飛沫をあげて、後方へと倒れ込んでいく灰鬼。激しい叫び声が、粘っランド中に響き渡る。

「ふぅ〜っ」
倒れた灰鬼を確認し、一息つく桜時。
「やったなぁっ！梅人ぉっ！」

「げぇっ」
何とも嬉しそうな笑顔で、梅人と肩を組む桜時に、肩を組まれた梅人は、あからさまに嫌そうな顔を見せる。
「離せよっ」
「いいだろぉ～っ？俺らっ、イトコなんだしっ！」
そう訴える梅人に、さらに満開の笑顔を向ける桜時。
「ウザったいイヌっ」
「ああっ！？」
梅人の一言に、桜時が一気に笑顔を消し去り、肩を組む手を離して、真逆の怒りの表情を見せる。
「んだよっ！！その言い方はっ！！」
「本当のことだろっ？イヌっ」
「お前はいちいちそうやってだなぁっ…！！」
しかめた表情を向け合い、口喧嘩を始める桜時と梅人。

「はぁ～あっ…学習能力のない人たちっ…」
「ええんちゃう～？放っとけばっ」
呆れたように言い放つ由雉に、門貴が少し苦笑いを見せる。
「それよりっ、やっつけてもたんとちゃうかぁ～っ？」
「ちゃんと手加減したってのっ！」
倒れた灰鬼の方を見て、少し不安げに声を出した門貴に、桜時がはっきりと答えながら村雨丸を下ろす。

「ウっ…ウウっ…」
「ほぉ～らっ！ちゃ～んと生きてっ…！」
「ウっ…ううっ…」
「何っ…？」

倒れたまま、苦しげな声を漏らしていた灰鬼の姿が、白い光に包まれて、徐々に人間の姿へと変わっていく。そんな灰鬼を見つめ、眉をひそめる桜時。

「ううっ…！」

『……っ！』

灰鬼が完全に人間の姿となると、桜時と梅人は大きく目を見開いた。

「何々ぃ～っ？」

「どないしたんやっ？」

二人の様子がおかしいことに気づき、その場に駆け寄っていく門貴と由雉。

『なっ…！』

その人間を見て、門貴と由雉も驚きの表情を見せた。

「こっ…こいつはっ…」

門貴が戸惑うように、声を発する。

「この前のっ…成人の儀のっ…」

――――ありがとうございますっ…！――――

「ううっ…」

そこに倒れている、灰鬼であった青年は、二日前の成人の儀で、皆に見送られながら、この町を旅立っていったあの青年であった。

「どういうっ…ことだっ…？」

戸惑うように呟いた桜時の胸が、先程までよりもさらに騒ぎ出した。

「ウェンディっ…！！」

その頃、灰鬼を桜時たちに任せ、あの場を後にした輝矢は、一人、ウェンディとピーターの家まで舞い戻っていた。輝矢が勢いよく扉を開け、家の中へと入る。

「ウェンディっ！ウェンディっ！！」

「輝矢っ？」

「……っ」

必死にウェンディの名を呼びながら、輝矢がキッチンに入りウェンディの姿を探していると、二階からピーターが降りてきた。

「ピーターっ…」

「どうしたんだよっ？でっかい声出してっ…」

ピーターが少し怪訝そうな表情を見せながら、一階へと降り、輝矢の元へと歩み寄る。

「ウェンディっ！」

「へっ？」

「ウェンディはどこですっ！？」

「……っ」

強く問いかける輝矢に、少し圧されたように背を反らせるピーター。

「どこですっ…！？」

「ウェっウェンディならっ…」

少し気圧されながら、ピーターがゆっくりと口を開く。

「今日は天照様の都合があるから、今から成人の儀をやろうって、さっき須佐様が迎えにっ…」

「……っ！」

ピーターの言葉に、輝矢が大きく目を見開く。

「天の岩戸へ行ったのですかっ…？」

「たぶんっ…」

「……っ！」

「あっ…！輝矢っ…！」

ピーターの答えを聞くと、輝矢はすぐさまピーターに背を向け、

駆け出していった。何が何だかよくわからない状態のまま、走り去る輝矢に思わず手を伸ばしたピーターであったが、輝矢は止まることはなく、すぐにピーターから見えなくなってしまった。

「……っ」

取り残されたピーターが、少し不安げな表情を見せた。

「急にお呼びだてして、申し訳ありませんでしたね…」

薄暗い、聖なる神殿のようなその空間。その最奥の祭壇らしきところに立った太陽の神が、ゆっくりとした動きで振り返る。

「ウェンディっ…」

「いえっ…」

そっと微笑んだ天照の前で、膝をついているのは、ウェンディであった。ウェンディから少し離れたところに、須佐が無表情で立っている。

「天照様のご加護を受けて旅立てる、私はそれだけで十二分に幸せですからっ」

ウェンディは何とも嬉しそうな笑顔を、天照へと向けた。崇拝する神が目の前にいる。そのことしか、今のウェンディには考えられなかった。

「そう言っていただけると、私も嬉しいです…ウェンディ…」
「……っ」
神の微笑みに、ウェンディはさらに笑う。
「さぁ、ではっ…」
ゆっくりと挙げた右手を、膝とついているウェンディの額の方へと向ける天照。

「始めましょうかっ…」

天照が、どこか冷たい笑みを浮かべた。

第４８章　神の悪行　★３

「はぁっ…！はぁっ…！はぁっ…！」
ウェンディたちの家から一目散に駆け出し、天の岩戸の前までやって来た輝矢。大きな岩の扉の前で、輝矢がやっと足を止める。
「……。」
徐に左手を伸ばし、扉へと触れる輝矢。

――――ピリっ…！――――

「……っ」
触れた途端、どこか吸い込まれそうな、妙な感覚が全身に走り、輝矢はすぐさま、その触れていた手を離した。
「亜空間っ…」
輝矢が眉をひそめ、そう呟く。

――――ネバーランドへおいでっ…お兄ちゃんたちっ…――――

「あの双子のっ…？」
覚えのある感覚に、輝矢が少し考え込むように首を捻る。
「三日月っ…」
輝矢が考えるのを止め、岩戸との間に少し距離を取ると、右手に持っていた三日月を、ゆっくりと構えた。輝矢が鋭い表情を見せる。
「“水月”っ…！！」

――――バァァァァァァァァァーーーーンっ！！――――

輝矢の突き出した三日月から、無数の水の刃が放たれた。水月は至近距離で岩戸を直撃し、岩戸を跡形もなく吹き飛ばした。

「……。」

その向こうに広がる、大きな薄暗い神殿。輝矢が厳しい表情を見せ、その中に足を踏み入れる。

「神殿に…扉を吹き飛ばして入って来るなんて…」

祭壇の上に立つ者が、輝矢に背を向けたまま、その高い声を響かせる。

「いささか…神への信仰心が…足りていないのではなくて…？」

「私の神は、私だけです…」

厳しい表情を崩すことなく答えながら、祭壇へと続く赤い絨毯の上を、ゆっくりと歩き進めていく輝矢。

「他人の神にまで、祈る義理はありませんっ…」

「……っ」

「いいわっ…」

「はっ」

向かってくる輝矢を見て、祭壇の横に立っていた須佐が、腰に下げている剣に手を伸ばそうとしたが、その者はゆっくりとした口調で、それを制した。須佐が深々と頭を下げて、少し後ろに下がる。

「……そうっ…」

背を向けたままの神の口元が、そっと緩む。

「ではっ…」

祭壇の上で、ゆっくりと振り返る神。

「私は…貴女を救わなくてもいいと…いうことかしら…？」

「……。」

振り返り、感情の見えない笑みを見せる天照に、輝矢は少し表情を曇らせ、まだ距離のあるその場で足を止めた。
「無論ですっ…」
「そうっ…」
きっぱりと答える輝矢を見て、天照がさらに微笑む。

「それよりもウェンディはっ…」
「輝矢さん…？」
「……っ」
横から聞こえてくる、どこか細い自分の名を呼ぶ声に、輝矢が振り向く。
「ウェンディっ」
「来て…下さったんですね…」
輝矢の立つ絨毯の横に並んだ、礼拝席の一つに座っているウェンディ。深く俯いたウェンディが、そう言いながらゆっくりと椅子から立ち上がった。
「良かったっ…無事っ…」
「輝矢さんにも見せたかったなぁ…」
「えっ…？」
ウェンディの姿を確認し、ホッとした表情を見せていた輝矢が、呟かれたウェンディの言葉に、少し表情を曇らせた。

「私が…太陽の神様の力をもらうところっ…」
「……っ！」

大きく目を見開く輝矢。顔を上げたウェンディは、微笑んではいたが、どこか活力のない、感情のない、そんな笑みであった。

「力っ…まさかっ…」
輝矢の声が、少し震える。

「輝矢さんっ…」
「……っ」
再び名を呼ばれ、ウェンディの方を見る輝矢。
「頭の中でね…声がするの…」
笑みを浮かべたまま輝矢を見つめるウェンディが、そっと右手で自分の頭を押さえる。
「体がね…全身、ちょっと痛むの…」
今度は左手で左胸を押さえるウェンディ。
「とても…深いものに…呑み込まれていくみたいっ…」
ウェンディの声が、肩が震えている。

「ウェっ…ウェンっ…！」
「輝矢さんっ…」
「……っ」

名を呼ぼうとした輝矢の声が、逆に名を呼んだウェンディの声に遮られる。

「これが…太陽の神様の力かなっ…？」

「……っ！」

涙の溢れたウェンディの瞳の色が、青色から赤色へと変わった。

「クっ…！」
それを見て、輝矢が強く拳を握り締め、唇を噛み締める。

「おぉ～いっ！輝矢っ！」
「……っ！」
入口の方から聞こえてくる幼い少年の声に、輝矢は表情を強張らせ、勢いよく振り返った。
「いきなり走ってって、どうしっ…って、ウェンディっ？」
輝矢が岩戸を吹き飛ばした入口から、神殿へと入って来たのはピーターであった。輝矢の後を追って来たのだろう。入って来たピーターが、ウェンディの姿を見つける。

「ピー…ター…」
ゆっくりと振り向き、ピーターの名を呟くウェンディ。

「おいっ！輝矢っ！自分だけウェンディの成人の儀見ようなんてずるっ…！」
「今すぐここから出て行きなさいっ！ピーターっ！」
「はぁっ？」
勢いよく叫ぶ輝矢に、顔をしかめるピーター。
「何だよぉ～っ？見学なら俺もっ…」
「いいから早くっ！！」

「ピーターっ…」
『……っ』
ピーターの名を呼ぶウェンディの声に、少し言い争っていた輝矢とピーターが同時に振り返る。

「どうしたぁ？ウェンディっ」

「ピーター…私ねっ…ううっ…！！」

「……っ」

「ウェンディぃっ…？」

ピーターに何かを語りかけようとしたウェンディが突如、苦しげな唸り声を漏らして、深く俯く。そのウェンディの様子に、険しい表情を見せる輝矢と、首を傾けるピーター。

「ううぅっ…！あっ…ああっ…！」

「ウェンディぃっ…！？」

さらに苦しげな声を漏らすウェンディに、ピーターが不安げな表情となる。

「ウェンディぃっ…！どうしっ…！」

「ううぅっ…！あああああああああっっ…！！」

「ウェンディぃっ…？」

天井を見上げ、激しく叫ぶウェンディ。ウェンディの声にピーターの言葉は遮られる。今まで聞いたことのないウェンディの叫び声に、戸惑った表情を見せるピーター。

「クっ…！」

どこか堪えるように歯を喰いしばり、輝矢がピーターの元へと駆けて行く。

「見てはいけませんっ！ピーターっ！！」

「えっ…？」

困惑した表情を見せるピーターの元へと、必死に駆け込んでいく

輝矢。輝矢がピーターの元へ辿り着こうとした、その一瞬前であった。

「あああああああああああああああああああっっっ！！！」

――――――バァァァァァァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

「グガアアアアアアアアアアっっっ！！！」

白い光に包まれ、弾けるように破れ散る、ウェンディの服と人間の肌色の皮膚。その下から現れる、少し濁った灰色の皮膚。灰色の体は巨体化していき、残った赤茶色の髪の隙間から、二本の金色の角が生えた。血のように真っ赤な瞳が輝き、鋭い牙と爪が勢いよく生える。

「えっ…？」

目に映る光景に、凍りつくピーター。

「ウェン…ディ…？」

「グガアアアアアアアアアアっっ！！」

ピーターがウェンディの名を呼んだそこには、一匹の灰色の鬼が立っていた。

「えっ…？」

「……っ」

もう一度戸惑いの声を漏らすピーターの横で、輝矢が、ピーターの目元を覆うとして間に合わなかったその手をゆっくりと下ろし、きつく唇を噛み締める。

――――アナタを鬼人へと変えたのは…？――――

――――あの方は偉大な方よ…――――

人間を鬼人へと変える能力。

――――まさかアナタっ…――――

――――そう…僕の本当の君主は紺染でもなくその女でもなく、“あの方”っ…――――

鬼人化人間の背後に、いつも見え隠れしていた、その存在。

「アナタ…アナタが…」

輝矢が少し震えた声でそう呟き、ウェンディであった灰鬼の向こう、祭壇の上を鋭い表情で見つめる。

「太陽の神…天照っ…」

睨みつけるように、祭壇上の天照を見る輝矢。

「アナタは一体っ…何者ですっ…？」

「……っ」

輝矢の問いかけを受け、天照がそっと笑う。

「初めまして…月の少女…」

粉々に砕け落ちていく、天照が頭と首に纏っていた装飾品。装飾品がなくなり、自由になった長い白髪が、どこからか吹いた風になびく。真っ白な髪、真っ白な肌、真っ白な着物。生きているものの空気を持たぬ中、赤い瞳だけが不気味に輝く。

「私の名はシルク…牢戸知玖（ろうどしるく）…」

「シルクっ…」

その名に、そっと眉をひそめる輝矢。天照が、シルクが、ゆっくりと両手を広げる。

「世界を…鬼で満たす者…」

「……っ」

シルクのその言葉に、輝矢の表情が一気に曇る。

――――人でなくなるだけでっ…死ななくて済むのよっ…！？――
――

どんなに時が流れても、消えることはないオーロラの叫び。目の前にいる女こそが、シルクこそが、すべての元凶。鬼と悲しみを生み出した人物。

「やっと見つけました…タロー…」
そっと俯いた輝矢が、三日月を握る手に力をこめる。
「私が倒すべき相手をっ…！」
顔を上げた輝矢が、三日月を構えた。

「竹取輝矢っ、鬼退治いたしますっ…！」

輝矢が、素早くシルクの元へと駆け出していく。

「……っ」
「必要ないわ…諸刃…」
向かってくる輝矢に、再び剣を取ろうとした須佐を、諸刃を、先程と同じようにシルクが止める。
「立ち塞がる壁があるものっ…」
シルクが楽しげに微笑む。

「グガアアアアアアアアっ！！」
「うっ…！！」

シルクへと向かっていく輝矢の前に飛び出してくる、灰鬼。輝矢

が思わず立ち止まり、顔をしかめる。

「グガアアアアアアアアっ！！」

「クっ…！」

輝矢へ向け勢いよく鬼爪を振り下ろしてくる灰鬼に、輝矢が三日月を突き出そうを振りかぶった。

「ウェンディっ…！」

「……っ！」

背後から聞こえてくるピーターの叫びに、輝矢の三日月が止まる。

「グガアアアアアアアアっ！！」

「うあぁっ…！！」

振り下ろされた鬼爪に、輝矢が勢いよく横へと吹き飛ばされてしまう。

「うっ…ううっ…」

礼拝席を押し潰すように倒れ落ち、少し左腕から血を流して、苦しげな声を漏らす輝矢。

「輝矢っ…！」

倒れた輝矢に、ピーターが思わず身を乗り出す。

「グガアアアアアアっ！！」

「ああっ…！」

「クっ…！」

まだ倒れ込んだままの輝矢へと、駆け込んでいく元はウェンディ

であった灰鬼。ピーターが焦りの表情を見せ、起きあがろうとしている輝矢が、険しい表情で唇を噛む。

「うぅっ…！」

潤んだ瞳で、歯を喰いしばるピーター。

「やめてよっ！！ウェンディぃっ！！」

「グウゥゥっ…！」

「……っ」

ピーターの叫びに、輝矢を攻撃する寸前のところで止まる、灰鬼の鬼爪。止まった鬼爪に、輝矢が驚いたように目を開く。

「やめてよっ…」

そう願うピーターの瞳から、大粒の涙が零れ落ちる。

「ウウっ…」

そんなピーターの方を、少し見つめ、動きを止める灰鬼。

「ウっ…！ウウゥっ…！ウウゥゥっっ！！」

両手で頭を抱え、ひどく苦しんでいる様子で、体を捻らせる灰鬼。

「えっ…？」

「ウウウウウウウっ…！！」

ピーターが涙の流れる瞳で、戸惑うように見つめる中、苦しみ続ける灰鬼。その姿は必死にもがいているような、必死に戦っているような、そんな風に見えた。

「ウェンディっ…」

そんな灰鬼を見つめ、輝矢が目を細める。

「自我が消えきっていないようね…」
「……っ」
聞こえてくる声に、輝矢が一気に表情を険しくして振り向く。
「仕方のない子っ…」
「……。」
どこか楽しげに笑うシルクに、輝矢が表情を険しくする。

「グガアアアアアアアアアアっっ！！」
「……っ！」
聞こえてくる叫び声に、再び振り返る輝矢。大きく上を向いた灰鬼は、何かを振りきるように必死に首を横に振り、大きく叫んでいた。
「グウゥゥゥゥゥゥっっ…」
少し落ち着いた様子の灰鬼が、ゆっくりと顔を輝矢たちの方へと向ける。
「クっ…」
苦しみから逃れ、再び怪物となった灰鬼に、どこか悔しげに唇を噛み締める輝矢。

「ウェンディっ…」
「グゥゥっ…」
「……っ」
力なくウェンディの名を呼んだピーターの方を、灰鬼が勢いよく振り返る。

「ウェっ…ウェンっ…」
「グガアアアアアアアアアアっっ！！」

「……っ！」

大口を開いた灰鬼が、しゃがみ込んでいるピーターへ向け、巨大な鬼口を放った。

「……っ！ピーターっ…！」

痛む体を何とか起こし、身を乗り出して、ピーターの名を叫ぶ輝矢。

「ウェンディっ…」

向かってくる鬼口に、ピーターが力なく目を細めた。その時。

――――バァァァァァァァァーーーンっっ！！――――

ピーターへ向かうことなく、止まる鬼口。

「“月器・十六夜”…」

鬼口を受けとめたのは、ピーターの前に立ち、三日月から十六夜へと変えた月器を構えた、輝矢であった。

「グガっ…」

戸惑うように声を出す灰鬼。

「かっ…ぐやっ…」
ピーターが庇うように前に立っている輝矢を、力なく呼ぶ。
「自分が何を…傷つけようとしているのか…わかっているのですかっ…？」
十六夜を鬼口で受けとめながら、輝矢が灰鬼へと問いかける。
「この者はっ…アナタのたった一人の家族でしょうっ…！？」
「グガっ…」
そう言い放って、鬼口を天井へと跳ね退ける輝矢。その表情には、怒りと悲しみが混在している。
「……っ」
輝矢の言葉に、涙を堪えるように、必死に唇を噛み締めるピーター。
「ウェンディっ…」
「……？」
輝矢の後ろから、ピーターが灰鬼にそっと呼びかける。
「ウェンディっ…」
噛み締めるように、何度も灰鬼の人間の頃の名を呼ぶピーター。
「もう…帰ろっ…？」
ピーターが、異形の鬼に、優しく微笑みかける。
「一緒にっ…帰ろっ…？」
「グウゥゥゥゥゥゥゥっっ……」

微笑んでそう言うピーターに、灰鬼は攻撃する素振りは見せず、どこか戸惑うような唸り声を漏らしていた。

「俺っ！火の輪くぐり練習したんだっ！今朝っ、くぐれるようになったんだぜっ…！？」

灰鬼へ、必死に笑みを向けるピーター。

「パンダの姿でやるとっ…少し毛が焦げるけどっ…でも大丈夫っ！！」

必死の笑みは、どこか痛々しく、悲しい。

「だからさっ！帰ろっ！」

「グウゥゥっ…」

「二人でっ…帰ろっ…？」

「グウゥゥっっ…！！」

灰鬼の唸り声が、徐々に苦しげになっていく。

「なっ…？ウェンディっ…」

微笑むピーターの瞳から、溢れんばかりの涙が零れ落ちる。

「グウウウゥゥっ…！！」

またもや両手で頭を抱え、先程よりも激しく苦しむ灰鬼。戦っているのだ。わずかに残るウェンディの意志が、ピーターの言葉を受け、必死に灰鬼と戦っている。

「グアアアアアアアアアっっ！！！」

苦しむ灰鬼が、大きく口を広げ、ところ構わず鬼口を放つ。

――――バァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

「……っ！」

暴走する灰鬼の鬼口を受け、神殿の柱が輝矢とピーターの方へと崩れ落ちてくる。

第４８章　神の悪行　★４

「クっ…！“月器っ…！」
「“瞬花”っ」
――――パァァァァァァァァァーーーンっっ！！――――
「……っ」

十六夜の姿を変えようとした輝矢であったが、輝矢がそれをする前に、崩れ落ちてきた柱は、無数の真っ赤な花びらとなって散っていった。舞い散る梅の花びらに、輝矢が思わず目を見張る。

「生きてるっ？」
「成金スズメっ…」
輝矢が後方を振り返ると、そこには相変わらずの仏頂面の梅人が立っていた。

「花っ…？」
舞い散る花びらに、そっと眉をひそめるシルク。

「輝矢っ…！」
「無事ぃ～っ？」
「大丈夫かっ！？輝矢んっ！」
梅人を追い越して、次々に輝矢の元へと駆けつける桜時、門貴、由雉の三人。

「ハチ、サル、キジ…」
輝矢が少し驚いた様子で、三人の方を見つめる。
「どうしてここへっ…」
「さっきの灰鬼、気絶さしたら人間に戻りよってなぁっ」
「それがこの前、成人の儀やってたヤツだったから、もしかしてって思ってよっ」
輝矢の問いかけに、桜時と門貴が答える。

「人間に…戻った…？」
「……っ」
怪訝そうに眉をひそめる諸刃の横で、シルクがそっと口元を緩める。

「グウゥゥゥゥゥゥゥっっ…！！！」
『……っ』
言葉を交わしていた輝矢たちが、聞こえてくる苦しげな鬼の唸り声に、一斉に振り向いた。
「また灰鬼っ…」
前方の灰鬼を見て、少し表情をしかめる梅人。
「ウェンディっ…」
『えっ…？』
灰鬼の名を呼ぶピーターに、桜時や梅人たちの表情が一気に曇る。
「ウェっ…ウェンディってっ…」
「グアアアアアアアアアアっっ！！！」
皆がその表情に衝撃を走らせる中、灰鬼が頭を抱えて、激しい咆哮をあげる。

「本当に…仕方のない子…」
「……っ！」
右手の人差し指を伸ばし、灰鬼へと向けるシルク。そんなシルクに気づき、輝矢が大きく目を見開く。
「やめっ…！」
「フフっ…」

――――パァァァァァァァァンっっ！！――――

シルクの放った細長い白色の光が、突き刺さるように灰鬼に当たる。

「ウアっ…！ウアアアアアアアアっっ！！」
「……っ！」

白い光を受け、激しく叫び声をあげる灰鬼。頭を抱えていた両手を広げ、全身から強い白色の光を放つ。

「グガアアアアアアアアアっっ！！」
『……っ！！』

咆哮をあげた灰鬼が、勢いよく鬼爪を振り下ろした。

『うわあああああああああっっ！！』
振り下ろされた鬼爪に、桜時と由雉が左右に勢いよく吹き飛ばさ

れる。

「ハチっ…！」
「グウゥゥゥゥアアアアっっ！！」
「うっ…！！」
吹き飛ばされた桜時に気を取られていた輝矢に、さらに鬼爪を振り下ろす灰鬼。

「あああああああっっ！！」
「輝矢んっ…！！うあああっ！」
吹き飛ばされた輝矢を受けとめようとした門貴も、輝矢と一緒に神殿の壁際へと打ちつけられた。

「グウゥゥゥゥっ…」
「うっ…！」
「クっ…！」
振り向く灰鬼に、震えるピーター。そんなピーターを庇うように、梅人が前へと出る。

「グガアアアアっっ！！」
「うあああああああっっ！！」
「あっ…！」
しかし暴走する灰鬼に、梅人も勢いよく吹き飛ばされてしまった。
礼拝席の上に倒れ込んでいく梅人の姿を見て、その顔を恐怖で歪ませるピーター。

「グウゥゥゥゥっ……」
「ううっ…！」

最後に残ったピーターの方を見て、唸り声をあげる灰鬼。その唸り声に、ピーターの肩が震えあがる。

「ウェンっ…」

「グウウウゥゥゥゥっっ……」

「……っ」

呼ぼうとした名を止めるピーター。目の前にいるのは、最早、ウェンディではない。ただの化け物。ただの鬼。

「グウウウゥゥゥっっ…！！」

勢いよく振り上げられる鬼爪。

『ピーターっ…！！』

倒れ込んだ皆が、何とかしようと必死に身を乗り出す。

「グガアアアアアアアアアアっっっ！！！」

「……っ！！」

振り下ろされる鬼爪に、ピーターがきつく瞳を閉じた。

――――ブシュっっ……！！！――――

「……っ」

肉の裂けるような、そんな音がした。血の飛び散るような、そんな音がした。

「……？」

だが、体のどこにも痛みはない。ピーターがゆっくりと瞳を開く。

「……っ！！」

瞳を開いた瞬間、ピーターの表情が凍りついた。

「グっ…ググっ…グアっ…」

ピーターの目の前で、苦しげな声を漏らす一匹の灰鬼。

「ググアっ…アっ…」

ピーターに振り下ろされたはずのその鬼爪は、灰鬼自らの胸を、貫いていた。

「……っ」

ボタボタと流れ落ちる紫色の血に、ピーターが目を細める。

「アっ…アっ…」

「……っウェンディっ……！！」

倒れ込む灰鬼に、ピーターは泣きながら駆け寄った。

「アアっ…ア…あっ…ああっ…」

床へと倒れ込んだ灰鬼が、白い光に包まれ、元の人間の姿、ウェンディの姿へと戻っていく。

「ウェンディっ…！！ウェンディっ！！！」

姿を取り戻したウェンディの元へ、必死に駆け寄っていくピーター。

『……。』

その光景を、茫然と見つめる輝矢たち。

「……っ」

桜時がハッとした表情で振り向く。

「由雉っ…！癒羽で傷をっ…！」

「……。」

勢いよく振り向いた桜時に、由雉は静かに首を横に振った。

「……っ」

首を振る由雉に、眉をひそめる桜時。もう癒羽でもどうしようもないのだろう。そのことを理解し、桜時がそっと俯く。

「ウェンディっ！！！」

「ピー…ター…？」

「……っ」

傷だらけのウェンディが、あまり動かぬ唇で、力なくピーターの

名を呼ぶ。名を呼んだウェンディに少し驚きながらも、きつくウェンディの手を握り締めるピーター。
「そこに…いるの…？」
赤色から元に戻った青色の瞳が、虚ろに彷徨う。ピーターの姿も、見えていないようである。
「いるよっ…！」
震える声で答え、さらにきつくウェンディの手を握り締めるピーター。
「ここにいるっ…！」
「……そうっ…」
きつく握り締められた手に、ウェンディは少し嬉しそうに微笑んだ。

「まさか…私の力を二度受けて直…意志を持って自害するとはね…」
『……っ』
祭壇の方から聞こえてくる声に、輝矢たちが振り向く。
「興味深いことっ…色々と勉強になったわ…」
「てっめぇっ…！」
祭壇の上で微笑むシルクに、桜時が思わず声を荒げる。
「人の命を何だとっ…！！」
「……っ」
「……っ？」
シルクに食らいつこうとした桜時を、制するように前に突き出される一本の手。
「輝矢っ…」
それは、輝矢のものであった。
「……。」

鋭い瞳を見せて、祭壇の方を見つめる輝矢。

「さぁ…神よ…」

輝矢がゆっくりと顔を上げ、祭壇の上にいるシルクを睨みつける。

「裁きを始めましょうか…」

「……っ」

落ち着いた口調ではあるが、その瞳は激しい怒りに打ち震えていた。その輝矢の怒りが見えてか、見えないでか、シルクがそっと楽しげに微笑む。

「そうね…」

「シルク様っ…」

「わかってるわ…諸刃…」

頷いたシルクに、注意を促すようにその名を呼ぶ諸刃。そんな諸刃に、シルクが軽く右手を上げて答える。

「受けてみたい気もするけど…でも…」

シルクがゆっくりと口を開く。

「これ以上遊ぶと…殺してしまいそうだから…」

「……っ」

冷たく微笑むシルクに、輝矢が眉をひそめる。

「今日は自己紹介だけで失礼するわ…ロム、レム…」

『はっ』

『……っ！』

シルクが名を呼ぶと、どこからともなくよく似た二人の少年が姿を現した。

「アイツらっ…！」

思わず声を出す桜時。

――――ネバーランドへおいでっ…お兄ちゃんたちっ…――――

それは、輝矢たちのこの地へ誘ったあの双子、ロムとレムであった。

『“開”っ』

ロムとレムが同時に右手をかざすと、シルクの背後に巨大な白色の穴があいた。また違う亜空間への入口なのだろう。開いたばかりの穴の中へと、ロムとレムが入っていく。

「また会いましょう…」

双子に続いて諸刃が穴の中へ入っていくと、穴は最後に残ったシルクを包み込むように広がっていく。

「月の少女…そして…」

シルクが輝矢から梅人へ、ゆっくりと視線を移す。

「花を咲かす者…」

「えっ…？」

シルクの微笑みに、梅人がそっと眉をひそめる。

「フフフっ…」

――――パァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

シルクを呑み込むと、穴は光を放ちながら閉じていった。シルクたちがいなくなったことで天の岩戸の亜空間が消え、周囲の神殿の景色が、一気に草原の真ん中へと変わる。

「これはっ…」

「天の岩戸自体が亜空間やってんなっ…」

周囲を見回しながら、呟く門貴と由雉。

「……。」

輝矢が少し目を細め、ピーターと倒れたウェンディの方を振り返った。

「ピーター…」
弱々しくピーターの名を呼ぶ、ウェンディの声が、ひらけた草原に響く。
「私…成人の儀…したのよ…？」
「……っ」
ウェンディの言葉に、そっと曇るピーターの表情。
「天照様からね…太陽のご加護…いただいたの…」
「ウェンディっ…」
嬉しそうに話をするウェンディ。天照がシルクであったこと、自分が灰鬼となったことを、どうやら覚えていないようである。
「これで…私…旅立っていけるのよね…？」
少し不安げに、ピーターへと問いかけるウェンディ。
「ピーター…」
「……っ」
ピーターが握り締めていない方のウェンディの手が、ピーターの頬にそっと触れる。答えを求めるようなウェンディの言葉に、ピーターは少し俯き、ゆっくりと顔を上げた。
「ああっ…！」
もうあまり目も見えていないであろうウェンディに、ピーターが大きく微笑みかける。
「これでもうウェンディは立派な大人だよっ！どこにでも自由に旅立っていけるっ！」
『……っ』
笑顔で話し続けるピーターに、直視することを避けるように、そっと俯いて、その言葉を聞き続ける輝矢たち。

「俺が言うんだから間違いないよっ！」
「……っ良かったっ…」
「……っ」
微笑むウェンディに、ピーターの瞳が潤む。
「待っててっ…ウェンディっ…」
ピーターが震える声を、何とか繋げる。
「俺もすぐに大きくなってっ…」
頬に触れるウェンディの手に、小さな水滴が落ちた。
「すぐにっ…そこに行くからっ…！」
零れ落ちる涙に、ピーターの笑顔が崩れていく。
「ウェンディのところにっ…行くからっ…！」
「……待ってるね…ピーターっ…」
ピーターの頬に触れているウェンディの手が、さらさらと砂となって崩れ落ちていく。
「ウェンディっ…？」
ピーターの握り締めていた方の手も、砂となって崩れていく。同じように砂となって崩れ始めていくウェンディの体に、ピーターがさらに声を震わせる。

「ウェンディっ…！！」

崩れ落ちていくウェンディの体を、何とか留めようと握り締めるピーター。

「ピーター…」

砂となっていく体。最後に残った口元で、ウェンディがピーターの名を呼ぶ。

「……さよなら…」

――――――――――――――――――――っっ――――――

「……っ！！」

その言葉を残し、ウェンディは完全に砂となって、崩れ落ちる。

「ウェンディっ…？」

ピーターが伸ばした手で、床に零れた砂をすくい上げた。

「ウェンディィィィィィっっっ！！！！」

大きくウェンディの名を叫び、ピーターはウェンディであった砂の上に崩れ落ちた。

『……。』

砂の上に崩れ落ちたピーターを、ただただ見つめる皆。

「……輝矢っ…」

桜時が少し心配するように、輝矢の背中を見つめる。

「……。」

もう消えてしまった祭壇の、シルクのいた辺りを、ただまっすぐに見つめる輝矢。

「牢戸…シルクっ…」

強く握り締められた拳から、真っ赤な血が滴り落ちていた。

第４８章　神の悪行　★４（後書き）

第４部・完結になります。
更新は新年に。
続きが気になる方は「鬼斬りかぐや＜原作＞」をどうぞ。

第４９章　捕縛　☆１（前書き）

あけまして、おめでとうございますっ！！
本年も「鬼斬り　かぐや」をよろしくお願いいたしますっ！！

第４９章　捕縛　☆１

御伽界のどこか。牢戸知玖、居城。
「お帰りなさいなさいませ、シルク様」
「ええ」
諸刃・ロム・レムとともに、粘っランドから輝矢たちとの対面を終えて戻って来たシルクを出迎えたのは、ゴンと同じ狐族の生き残りであるギンであった。
「留守中、変わりは…？」
「特に」
問いかけながら、玉座へと腰を下ろすシルクに、ギンがどこか不適な笑顔で答える。
「暇でしたので、そちらをゆっくりと鑑賞させていただきました」
「そう…じゃあ話さなくてもいいわね」
「はい。それにしても…」
ギンが覗き込むように、玉座のシルクを見上げる。
「どうしてあの町の子供たちを、そのままにしてきたんです？」
「……っ」
そのギンの問いかけに、表情をしかめたのは、シルクの座る玉座の横に立っている諸刃であった。
「どうせなら、全部まとめて鬼にしておけばっ…」
「ギンっ…」
表情をしかめた諸刃は、さらに言葉を続けるギンに、制止を促すようにその名を呼んだ。
「そういう物言いはやめろ…」
諸刃が鋭い瞳を、ギンへと向ける。
「不快だ…」
「そちらこそ、随分とご勝手な物言いですねぇ…」
ギンがシルクから諸刃へと視線を移す。

「重んじてでもいるのですかっ？命をっ」
嘲るような笑みを、諸刃へと向けるギン。
「“仲間殺し”の…貴方がっ…？」
「……っ」
ギンのその言葉に、瞳を冷たくした諸刃が、剣の柄へと手を伸ばした。
「やめなさい…」
『……っ』
シルクが静かにそう言い放つと、諸刃が柄から手を離し、ギンが笑みを消して、諸刃から視線を逸らした。
「ギンってばホント、一言多いよねぇ～っ」
「口は災いの元だよぉ～っ」
「知ってるよっ…」
茶化すように口を挟んだロムとレムに、ギンは涼しい笑顔を向けた。
「それにね…もう子供たちの成長を待って、鬼人化人間を作る必要もなくなったの…」
『えっ…？』
「……っ」
シルクの言葉に、ギンたち三人が戸惑うように顔を上げ、諸刃がそっと眉をひそめる。
「“欲しいもの”が…見つかったから…」
どこか怪しげな笑みをこぼすシルク。
「シルク様…欲しいものとは…」
「シルク様」
『……っ』
シルクに問いかけようとした諸刃であったが、その問いは、部屋へと入って来た、若い女の声に掻き消された。皆が部屋の入口の方を振り向く。
「よく来てくれたわね…薄荷（はっか）…」

「はっ」
部屋へと入って来たのは、深い緑色の髪に、真っ赤なハチマキをした、大きな赤い瞳に勇ましい顔立ちの少女であった。十七，十八歳くらいであろうか。布製の軽装から見える左腕には、紫色の怪しげな紋様が刻まれていた。その薄荷と呼ばれた少女が、その場に膝をつき、シルクへ向けて深々と頭を下げる。
「薄荷たちを龍国へ…？」
「ええ」
少し眉をひそめて問いかけた諸刃に、シルクが短く頷く。
「薄荷…」
「はっ」
薄荷へと視線を投げかけるシルク。薄荷がさらに、頭を下げる。
「私の欲しいものを…獲ってきてくれる…？」
「……。」
薄荷が深々と下げていた顔を、ゆっくりと上げる。
「お任せ下さい」
「……っ」
鋭い瞳で答えた薄荷に、シルクはどこか満足げに微笑んだ。

――――私の名はシルク…牢戸知玖…世界を鬼で満たす者…――――

龍国。オトポリ本部。
「……。」

廊下を厳しい表情を見せながら、足早に歩いているのはリンゴであった。廊下の奥まで歩を進め、その先にある扉をノックをして開ける。

「パパっ」

扉を開いたその先は、長官室であった。

「ああっ…」

長官席には、リンゴと同じように厳しい表情を見せた座黒の姿があった。

「ネバーランドにはっ…？」

「昨夜のうちに金汰を向かわせた。すでに到着し、子供たちの保護、鬼人化人間の調査を始めさせている」

「そうっ…」

座黒の言葉に、リンゴがそっと目を細める。

「あのっ、女はっ…？」

そう問いかけたリンゴの表情は、冷静を装ってはいたが、激しく動揺していた。

「捜索はしているが、今のところは…」

「……そうっ…」

リンゴが頷きながら、そっと目線を落とす。

「このこと、トマトおばあちゃんにはっ…」

「今、旦那の一人に連絡に行かせている。直に伝わるだろうっ…」

そう説明した座黒が、少し眉をひそめ、リンゴを見る。

「ゴンには？」

「……っ」

座黒の問いかけに、リンゴの表情が曇る。

「言ったわ…」

険しい表情で答えるリンゴ。

「今はたぶん…あそこ…」

「そうか…」

遠い瞳で呟いたリンゴに、座黒はそっと俯く。

「“白き魔女”、牢戸知玖か…」
俯きながら、険しい表情でその名を口にする座黒。
「我らの…最大の敵…」
「……。」
座黒の言葉に、リンゴもまた、厳しい表情を見せた。

龍国・“見届けの苑”（墓場）。
「……。」
花畑の中にキレイに並ぶ、いくつもの墓。風に色とりどりの花びらが舞う。その並んだ墓の一つ、まだ比較的新しい墓の前に、ゴンは一人、立ち尽くしていた。
「強く…なったつもりだったのにな…」
俯いたゴンが、いつもとは違う静かな口調で、墓へと話しかける。
「俺は…ちっとも変わってないよ…」
零れ落ちるように、呟かれる言葉。
「あの頃の…俺のまま…」
細む目が、悲しげに輝く。
「お前を死なせた…無力な俺のままだっ…」
ゴンが浮かべたその笑みは、自分を皮肉るような、嘆くような、そんな笑み。
「次狼（じろう）っ…」
その墓に眠る者の名を呼ぶ声が、そっと風に舞った。

龍国・桃原家、太狼自室。

「……。」

神妙な表情を見せる太狼の見つめる先には、一枚の写真が置いてあった。まだ幼い二人の少年の写真。年は少し違うようだが、茶色の髪と緑色の瞳がよく似ている。恐らく、兄弟であろう。

「次狼…」

「なんでだよぉぉぉ～～っ！？」

「……っ」

部屋の外から聞こえてくる騒がしい声に、振り向く太狼。

「ふぅっ」

太狼が少し肩を落として立ち上がり、見ていた写真の入った写真立てを伏せ、部屋を出る。桃原家一階の奥にある太狼の部屋は、出るとすぐにリビングとキッチンに繋がる廊下となっていた。

「何してるわけぇ～？」

『あっ、ご主人様っ』

太狼がリビングへと入ると、困った表情のヘンゼルとグレーテルが振り向いた。

『それがっ…』

その表情をしかめながら、ゆっくりとリビングの中央へと視線を移すヘンゼルとグレーテル。

「早く帰ってハーモニーハモろうよぉ～っ！梅ちゃ～んっ！」

「そうだよぉ。桜時クンとは仲直りしたんでしょ～っ？もうハーモニーしに帰ろうよぉ～梅人ク～ンっ」

「ああぁ～っ…」

無事、粘っランドから戻って来た梅人は、まだ桃原家に残っていた松人と竹人から、帰ってハーモニーを歌うことをせがまれ、深々と頭を抱えていた。
「うざっ…」
『うざいっ!?』
思わず呟いた梅人に、大きく目を見開く松人と竹人。
「お兄ちゃん、ショックぅ〜っ!」
「もう生きていけないよぉ〜っ!」
「じゃあ死んだらっ?」
『がびぃぃぃーーーんっっ!!』
ショックを受けている二人の兄に、梅人は容赦することなく追い打ちをかけた。
「はぁっ…ホントに僕、この二人と同じ遺伝子で出来てるのかな…」
泣き崩れている二人の兄を見ながら、こちらも少し落ち込んだ様子で肩を落としている梅人。
「どうして帰らないのぉ〜?」
「……っ?」
梅人が振り返ると、そこには太狼が立っていた。
「ハチ君とのわだかまりも解けたんだしぃ、もうここには用とかないわけでしょ〜っ?」
太狼が不思議そうな表情を、梅人へと向ける。
「ってゆーか、三人まとめて帰って欲しいしっ」
「それが本音だね…」
遠慮なくきっぱりと言い放つ太狼に、梅人が少し肩を落とす。
「それにっ…」
少し瞳を鋭くする太狼。
「これ以上、ここにいると…また危ない目に遭っちゃうよっ?」
「……。」
その警告めいた言葉に、梅人はそっと表情を曇らせた。
「けどっ…」

梅人が眉をひそめる。

――――また会いましょう…花を咲かす者…――――

思い出される、シルクの不敵な笑み。

「このまま帰ったら…何となく腑に落ちないっていうか…何ていうか…」

「……。」

自分でも少し戸惑っているような、そんな梅人の言葉に、太狼が少し目を細める。

「んっ？」

戸惑うように言葉を探していた梅人が、ふと何かを見つけた様子で大窓の方に目をやる。

「あっ…」

大窓の外、ベランダを通り過ぎて行くのは、どこか神妙な表情を見せた輝矢であった。輝矢は中の様子を見ようとはせず、そのままベランダを歩き去っていく。

「ちょっ…ちょっと出掛けてくるっ…！」

「えっ？ちょっ…！梅人くぅ～んっ！」

「梅ちゃ～んっ！！」

必死に手を伸ばす松人と竹人の声に振り返ることなく、梅人は慌てた様子でリビングを出て行ってしまった。

『このままでよろしいのですか？ご主人様っ…』

「うぅ～んっ…」

少し不安げに問いかけるヘンゼルとグレーテルに、首を捻らせる太狼。

「牢戸知玖…か…」
その名を口にした途端、太狼の表情が鋭く変わる。
「下手に巻き込まれなきゃいいけど…」
そう呟いた太狼は、珍しくどこか浮かない表情を見せていた。

その頃、桃原家・屋上。
『……。』
粘っランドから戻って来たモンキとユキジは、屋根の上に並んで座り、何を話すでもなく、どこか険しい表情で、平和な龍国の町を眺めていた。
「ねぇっ…」
「んん〜っ？」
沈黙を破るように呼びかけたユキジに、モンキが少し気の抜けた声で答える。
「ボクたち…勝てるのかな…？」
「えっ…？」
ユキジの問いかけに、モンキが少し驚いたように振り向く。
「あんな…人を人とも思っていないような連中にっ…」
「ユッキーっ…」
ユキジの言葉に、モンキが表情を曇らせる。

――――ピー…ター…――――
――――ウェンディっっ！！――――

何の罪もない粘っランドに生きる少女・ウェンディは、シルクにより鬼へと変えられ、弟・ピーターの目の前で、自らその命を断った。ウェンディの最期の笑顔と、ピーターの涙は、今もユキジの頭から消えることはない。

「あんなっ…命を命とも思っていないような連中にっ…」

グッと力を入れるように、眉間に皺を寄せるユキジ。

「……。」

怒りか恐れか、どちらとも言えない感情を見せるユキジを横目に見つめ、少し肩を落とすと、モンキは再び前を見て、平和な龍国の町を見つめた。

「けど…俺たちが負けたら…世界は終わる…」

「……っ」

モンキの言葉に、ユキジが少しハッとしたような表情を見せる。

「俺らよりも…ずっと重いもん、背負っとんやろうな…」

左胸を押さえ、険しい表情を見せるモンキ。

「輝矢んっ…」

「……。」

輝矢は砂浜に立ち尽くし、海を眺めながら、吹き荒れる風にその黒髪をなびかせていた。どんなにキレイな空を、キレイな海を眺めても、思い出されるのはたった一人の女の顔のみ。

――――はじめまして…月の少女…――――

「……っ」
輝矢がきつく拳を握り締める。

「えっと…」
砂浜の方へとやって来る、何かを探すように周りをキョロキョロと見回している梅人。
「……っ？あっ…」
梅人が砂浜に立ち尽くす輝矢の姿を見つけ、少し笑顔を浮かべて、駆け寄ろうと足を一歩踏み出す。

「輝矢っ！」
「……っ」

しかし、向こう側から聞こえてきたよく知るその声に、梅人は踏み出した足を止めた。

「……？ハチっ」
「何してんだよ？こんなトコで」
砂浜に立つ輝矢へと、笑顔を見せて駆け寄っていくのは桜時であった。

「……。」
桜時が輝矢の元へ現れたことを確認すると、梅人は身を隠すように、近くの木の裏に体を寄せた。

「少し…考え事を…」
桜時の問いかけに、輝矢が俯きがちに答える。
「考え事？」
「ええ」
聞き返す桜時に、笑顔で頷く輝矢。
「今度はどうやってハチの唇を奪おうかとっ…」
「んなもん、考えんでいいわっ！！」
爽やかな笑顔で答える輝矢の言葉を遮り、桜時が勢いよく怒鳴り声をあげた。
「この前は寝込みを襲ったので、今度はお目覚めのキッスでいこうかと思うんですけど…」
「却下っ！！ってか、どんなシチュエーションでも却下っ！！」
「……。」
「……っ？」
両手で大きくバツ印を作って却下を訴えた桜時に、そっと微笑んで俯く輝矢。そのどこか元気のない微笑みに、桜時がそっと眉をひそめる。
「悔いて…るのか…？」
「えっ…？」
ゆっくりと両手を下ろし、静かな口調で問いかける桜時に、輝矢が戸惑うように顔を上げる。
「ウェンディの…こと…」
「……っ」
桜時の口からウェンディの名が出ると、輝矢が再び俯く。
「悔いずには…いられませんから…」
「……。」
そう呟いて微笑んだ、その辛そうな輝矢に、桜時がそっと目を細

める。
「救えたはずの…命でした…」
顔を上げた輝矢が、とても遠い目で、前方の海を見つめる。
「私がもう少し早く気づいていれば…私がもう少し早く駆けつけていれば…」
――――輝矢さん…これが…太陽の神様のお力なのかな…？――――
輝矢の目の前で、涙を零しながら、その姿を鬼へと変えていったウェンディ。
「胸騒ぎをずっと…感じていたのに…」
――――もちろん…世界を…――――
初めて出会った時から、あの成人の儀を見た時から、危険な何かを感じていた。感じていたのに何も手を打たず、みすみすウェンディを犠牲にしてしまった。
「あの女がただの人間ではないと…気付いていたというのに…」
「輝矢っ…」
自分を責めるように言葉を続ける輝矢を、桜時が少し目を細めて見つめる。
「あっあのさっ…！」
「だからっ」
「えっ…？」
何かを言いかけた桜時の言葉を遮り、強く言い放つ輝矢。そんな輝矢に、桜時が少し驚いたように振り向く。
「あの女は私が退治しますっ」

「輝矢っ…」
曇りのない笑みを浮かべる輝矢に、そっと目を細める桜時。
「絶対にっ…」
「……。」
まるで自分に言い聞かせてでもいるかのような、そんな輝矢に、桜時は何も言うことが出来ず、ただ見つめるだけであった。
「……そうだなっ…」
少しの間を置いた後、桜時がやっと輝矢に微笑みを向ける。

「ああっ！」
「へっ？」
いきなり大きな声を発する輝矢に、思わず目を丸くする桜時。
「いきなり中心街の月見団子が食べたくなってきました」
「ホント、いきなりだな…」
思いついたように言う輝矢に、桜時が少し呆れた表情を向ける。
「というわけで、私、買ってきますね」
「……っ」
そう言って桜時に笑顔を向ける輝矢に、桜時が少し眉をひそめる。
「ではっ」
「待てっ！」
「……っ」
桜時に背を向け、去ろうとした輝矢の手を、思わず掴み止める桜時。歩き出そうとした輝矢が、掴まれた手に、その足を止める。
「輝矢っ…」
真剣な表情を見せながら、輝矢の名を呼ぶ桜時。
「あのっ…」
「大丈夫…」
「えっ…？」
何かを言おうとした桜時の言葉を遮り、輝矢がゆっくりと桜時の方を振り返る。

「大丈夫…ですから…」
「……っ」
そう言って微笑みかける輝矢が、とても大丈夫そうには見えず、それでも桜時は何の言葉も浮かばずに、そっと掴み止めていたその手を離した。
「ではっ」
桜時の手の離れた輝矢が、再び桜時に背を向け、その場を歩き去っていく。

「……。」
やがて輝矢の背中は見えなくなり、その場に桜時だけが残された。
砂浜に立ち尽くす桜時が、深く俯き、輝矢から離れた自分の右手を見つめる。

「いいわけっ？」
「えっ？」
聞こえてくる声に、顔を上げる桜時。
「追いかけなくて」
「梅人っ」
そこへ現れたのは、梅人であった。梅人は木の影に隠れ、二人の様子を一部始終見ていたのだが、そんなことを知らない桜時は、少し驚いたように梅人を見た。
「とても大丈夫そうには見えなかったけどっ」
「……っ」
輝矢の去っていった方を見ながら、少ししかめた表情で言い放つ梅人に、桜時の表情が曇る。
「いっつも…そうなんだっ…」
「えっ？」
俯いたまま呟く桜時に、振り向く梅人。

「普段は迷惑極まりなく近付きまくってくるくせにっ…」
どこか淋しそうな笑みを、浮かべる桜時。
「こっちが近付こうとすると…遠ざかる…」
「……。」
少し俯き、浮かべた笑みをすぐさま消し去る桜時を、梅人がまっすぐに見つめる。
「好きなの？」
「えっ？」
梅人の言葉に、目を丸くして顔を上げる桜時。
「竹取輝矢のこと」
「……。」
その梅人の問いかけに、思考回路がフル回転したのか、桜時の動きがしばし止まる。
「んっ！んなわけねぇーだろっ！！」
一瞬で顔を真っ赤にして、妙にムキになった表情で、勢いよく怒鳴りあげる桜時。
「だっ誰がアイツのことなんかっ…！」
「でも手、掴んでたよね。女がスペシャル嫌いで、半径一メートル以内には近づけないくせに」
「へぇっ！？」
梅人の鋭い指摘に、桜時が声をひっくり返し、間抜けな声をあげる。
「それっはっ…確かにっ…最近、一メートル以内でもあんまり逃げなくなったような気もすっけどっ…そのっ…」
「じゃあ嫌いなの？」
「へっ？」
あれこれと考えながら、よく繋がってもいない言葉を続ける桜時に、さらに問いかける梅人。その問いかけに、桜時が見せていた険しい表情から、またもや目を丸くした。
「嫌いって…わけじゃねぇーけどっ…」

「……っ」
自分でも困惑した様子で頭を掻く桜時に、梅人がどこか煩わしそうな表情を見せる。
「じゃあ何っ？」
「えっ…？」
三度目の問いかけをする梅人に、間の抜けた表情で顔を上げる桜時。
「桜時は竹取輝矢のこと、どう思ってるわけ？」
「どうっ…？」
真剣でまっすぐな瞳を投げかけてくる梅人に、桜時が戸惑うように眉をひそめ、考えるように俯く。
「俺が…輝矢を…？」
桜時が輝矢についてのことを自問したのは、それが初めてであった。

その頃、桜時の元から去った輝矢は一人、ふらふらと桃原家近くの森の中を歩いていた。

――――輝矢っ…あのっ…――――

思い出される桜時の言葉。何か言いたそうだった、あの表情。

「大丈夫…」
足を止めた輝矢が、ポツリと言葉を漏らす。

「私は…大丈夫…」
そう呟き、輝矢はそっと自分の左胸に手を当てた。

第４９章　捕縛　☆２

――――桜時は輝矢のこと、どう思ってるわけっ？――――

「はぁっ…」

先程、自分の口から出たその問いかけを思い出し、梅人は深々と溜息をついた。あの後、桜時はフリーズしたように動きを止めて、考え込んでしまい、そこでずっと桜時を見ているのもあれなので、梅人は一人、その場を離れたのであった。今は桜原家近くの森林を、適当に歩き回っている。

「何であんなこと、聞いたんだろっ…」

その言葉は、不意に口から零れ出た。自分でもどうしてそんな問いかけをしたのか、わからない。

――――どうっ…？――――

バカ正直な桜時を、深く悩ませてしまうことなど、目に見えていたというのに。

――――嫌いって…わけじゃねぇーけどっ…――――

はっきりとしない桜時の心の内。それはたぶん真実なのだろうが、その曖昧な答えが急に煩わしくなり、突発的にあの問いかけが口から出た。

「あいつが輝矢を好きかどうかなんて…どうでもいいはずなのになぁ…」

そんな自分がよくわからずに、梅人は深々と頭を抱えた。

「はぁっ…」

――――ザワザワザワザワっ……――――

「……っ」

風に騒ぐ、木々の葉音。その音に何かを感じ、梅人はその場で足を止めた。少し表情を険しくし、ゆっくりと周りの木々を見回す。特に何ら変わりのない森の景色。

「何っ…」

――――ザワザワザワザワっ……！！――――

「……っ！」

さらに激しく葉音が響くと、梅人は弾かれたように後ろを振り返った。

「あっ…！」

「……。」

梅人が振り向いた先には、一人の少女が立っていた。深い緑色の髪に、赤いハチマキをつけた、勇ましい顔つきの少女。袖から覗く左手には、怪しげな紫色の紋様が入っている。少女は特にない表情と光のない瞳で、まっすぐに梅人を見つめていた。

「だっ誰っ…？」

そう問いかけながら、梅人が少し警戒するように足を一歩、後ろへ退げる。
「私の名は薄荷…」
「薄荷…？」
「私と共に来てもらいましょうか…」
名乗った薄荷が、ゆっくりと、その紫色の紋様の入った左手を上げた。
「“花を咲かす者”…」
「……っ！！」
鋭い瞳を見せる薄荷に、梅人が大きく目を見開いた。

「……っ」
まだ一人、砂浜に立ち尽くし、考え込んでいた桜時が、ふと何かを感じ、顔を上げる。
「梅人っ…？」
騒ぎ立てる左胸。ウェンディの時と同じ、いや、それ以上に嫌な予感がする。
「……っ！」
桜時は表情を鋭くし、その場を勢いよく走り出していった。

――――パァァァァァァァーーーンっ！――――

「んっ？」
同じ頃、桃原家近くの森林を歩いていた輝矢が、静かな森に響き渡るその大きな音に、ふと顔を上げた。
「今の音、どこかでっ…」
輝矢が眉をひそめながら、ゆっくりと顔を上げる。
「あっ…」
どこまでも続く緑色の景色の中に、浮かび上がるように見える赤色。
「あれはっ…」

「梅っ…かなぁ？」
桃原家の屋根の上で景色を眺めていたモンキとユキジは、緑一色の森林の中に、突如咲いた、真っ赤な花の木を見て、首を傾げていた。真っ赤な花に目を凝らし、ユキジが呟く。
「梅ってことは、梅人の花力かっ？」
「そうじゃなぁ～い？でも何であんなとこで、花力なんてっ…」
首を傾げ、考えを巡らせるモンキとユキジ。
『……っ』
考え込んでいた二匹が、ほぼ同時に、その表情を険しくする。
「梅人に何かっ…！」
「あったんかも知れんっ！行くでっ！ユッキーっ！」
「うんっ！」

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

二匹は白い煙に包まれ、人化して、桃原家の屋上から飛び降りていった。

「梅人っ…！！」
砂浜から森林の中へと、勢いよく駆けつける桜時。
「これはっ…」
そこで桜時が見つけたものは、緑色の木々の中に一本だけ咲き誇る、満開の梅の木であった。緑の中で、その赤い花が際立っている。あまりに不自然な光景。誰かが梅を咲かせたとしか思えない。
「梅人っ…」
そんなことが出来るのは、桜時と同じ花力の使い手の梅人のみ。
桜時が不安げに梅人の名を呼ぶ。
「イヌコロっ！！」
「門貴、由雉っ…」
そこへ門貴・由雉が、駆けつけてくる。
「ハチっ」
「……っ？」
さらに聞こえてくる声に振り返る桜時。二人に少し遅れるようにして、その場に駆け込んでくるのは、輝矢であった。
「かっ輝矢ぁぁっ！！」
「何です？化け物を見たみたいな声出して」
いやに大きな声を出して驚いたように輝矢の名を呼ぶ桜時に、輝矢が少し顔をしかめる。
「まぁある意味、化け物…」
「何か言いました？キジ」

「別にぃ〜っ」
こっそりと呟いた由雉が、輝矢に鋭い瞳を向けられ、適当に誤魔化す。
「……っ」
――――好きなの？竹取輝矢のこと――――
そっと俯く桜時。その脳裏をやたら過ぎる、先程の梅人の問いかけ。答えなど、まだまったく出そうもないが、ああ言われた後に輝矢と顔を合わせると、やはり気になってしまう。
「梅、ですか…」
「えっ…？」
桜時の横へと駆けつけた輝矢が、咲き誇る梅の木を見上げ、その眉をひそめる。その声に、考え込んでいた桜時が顔を上げた。
「あっああ…」
「梅人がっ…？」
「たぶんっ…」
厳しい表情で問いかける輝矢に、桜時が浮かない表情を見せながら頷く。
「何かあったんやろかっ？」
「……。」
門貴の問いかけに、輝矢が少し考え込むように俯く。
――――そして…花を咲かす者…――――
やけにあっさりと退いていったシルクたち。去り際のあの一言。
どこか満足げだった微笑み。

「牢戸知玖っ…」
『……っ』
輝矢の呟いたシルクの名に、三人の表情が強張った。
「まさかあの女が梅人をっ…！？」
「可能性は高いでしょう…」
「……っ」
焦ったように声をあげた桜時に、輝矢が小さく頷く。頷いた輝矢を見て、さらに表情を険しくする桜時。シルクにさらわれたとあっては、命の危険はもちろん、鬼へ変えられる可能性もある。
「クソっ…！」
「待てっ！」
走り出して行こうとした桜時を、腕を掴んで止める桜時。
「一人で突っ走るなっ！相手はあの女やぞっ！？」
「けど、梅人がっ…！」
「わかっとうっ！せやからここはとりあえずタローやらゴンゴンやらに連絡をっ…！」
「しに行ってたら、間違いなく成金スズメを見失うでしょうね」
「へっ？」
桜時を説得しようとしていた門貴が、後ろから聞こえてくる輝矢の声に、目を丸くして振り返る。
「じゃっじゃあ誰かが連絡に行って、他の奴らで梅人を追っかけるとかぁ？」
「まぁそれが定石でしょうね」
戸惑うように言う門貴に、再び言い放つ輝矢。
「普通に考えて、この可愛くて空も飛べちゃうボクが、連絡に行くのが一番速いけどぉ」
「癒羽の使える由雉が抜けるとキツいよなっ…」
かなり自慢も入った言葉で言い放つ由雉と、少し考え込むように首を捻る桜時。
「では何の役にも立たなさそうな、そこのサル、ちょっと連絡に行

ってきてもらえますっ？」
「がいいいいーんっっ！！」
輝矢の容赦ない指名に、両手で頭を抱え込んで、ショックを受ける門貴。
「そっそうかっ…そうなんかっ…俺ってそんなに戦力外っ…」
「輝矢っ」
「冗談ですよ」
「へっ？」
注意するようにしかめた表情を向ける桜時に、少し微笑んで答える輝矢。輝矢の言葉を聞いた門貴が、一気に顔を上げて、目を輝かせる。
「冗談ってことは、やっぱり輝矢んっ！俺のことっ…！！」
「まぁ九割強、本音ですけど」
「ううっ…」
「それって最早、冗談じゃなくないっ？」
言葉を付け加えた輝矢に、門貴が再び落ち込む。そんな門貴を落ち込ませている輝矢に、横からこっそりと呟く由雉。
「相手はあの女の仲間の可能性が高いです…悪戯に戦力を分散するのは良くない…」
一気にその表情を厳しくする輝矢。
「“全員で追う”か“全員で連絡に行く”か、選択肢はその二つです」
輝矢が顔を上げ、三人の方を見る。
「どうしますか？」
『……っ』
問いかける輝矢に、真剣な表情を見せる三人。

『全員で追う』
「……っ」
声を揃えて即答する三人に、輝矢が少し驚いたように目を開く。
「そうですかっ…」
だがすぐに輝矢は、笑みを浮かべて頷いた。
「では行きますよ、ハチ、サル、キジ」
輝矢が梅の木の向こう側を見つめ、鋭い瞳を見せる。
「いつも以上に気合いを入れないと、明日には鬼かも知れませんよ」
「笑えないね、それっ」
「鬼になるのは嫌やぁ～っ！」
「とにかくとっとと追おうっ！！」
輝矢の脅しとも取れる言葉に、少し顔を引きつる由雉と、嘆く門貴。そんな二人に少し苛立ちながら、桜時が早く追うことを促す。
「あくまで目的は梅人の確保です。深追い、戦闘は出来るだけ避けるようにして下さい」
『ああっ』
輝矢の言葉に、三人がしっかりと頷く。
「ではっ、行きましょうっ…！」
『おうっ…！』
いつになく緊張感の走る真剣な表情を見せ、四人は梅人の追跡を開始した。

「うっ…！ううっ…！」

布を巻きつかれ、塞がれた口から、必死に声を漏らそうとする梅人。両手は体の後ろ側で縛られており、身動きの取れない状態である。

「ううっ…！ううううっ…！！」

「大人しくしていれば、別に殺しはしないわ」

「……っ」

前に座る少女・薄荷の言葉と冷たい視線に、梅人が思わず顔をしかめる。

「急いで、キャラっ」

「キャラアアアアアアっ！！」

激しい咆哮をあげる、緑色の巨大イモムシ。その三つに分かれた体の、前から二番目の背の上に、薄荷が立ち、そのすぐ後ろに、動きを封じられた梅人が横たわっていた。両足も縛られており、立てないのである。薄荷の声に答えると、キャラと呼ばれたイモムシは、森林を駆けるスピードをさらに速めた。

「薄荷っ」

『……っ？』

上から聞こえてくる声に、薄荷と梅人が同時に上を向く。

「……っ」

少し目を見開く梅人。青い空からキャラの上へと舞い降りてきたのは、全身真っ黒な一羽の鳥、カラスであった。カラスが薄荷の目の前へと降下してくる。

「黒羽（くろば）…」

カラスの名であろうか、その名を呼んで、カラスの方を見る薄荷。

「えらく赤い花が咲いていたが…？」

睨むような鋭い瞳を薄荷へと向け、そう問いかける黒羽と呼ばれたカラス。流暢な人語を話しているところを見ると、“烏人”のようである。

「ごめんなさい。花力を侮っていたわ」

責めるように問いかけた黒羽に、薄荷が少し申し訳なさそうな表情を見せる。

「気付かれた？」

「ああ…四人程、追ってきている…」

「……っ」

黒羽の言葉に、眉をひそめる梅人。その追手の人数に、誰が追って来ているのか、予想がついたからだ。

「四人…？随分少ないわね」

「オトポリに連絡はいってないようだからな」

不思議そうに呟く薄荷に、すらすらと答える黒羽。

「追手は我々で止める。お前はコイツをロムとレムとの合流地点まで運べ」

「ええっ」

黒羽の言葉に、しっかりと頷く薄荷。

「剛也（ごうや）は？」

「もう追手を待ち構えている…」

「随分、気の回ることね」

「ああっ…」

少し頷き、怪しげに口元を緩める黒羽。

「久し振りに…人間の真っ赤な血を見れると思うとっ…気が急くんだろう…」

「……っ」

どこか楽しげに微笑む黒羽を見つめ、その表情を曇らせる梅人。

「では頼んだぞ」
「ええ」
「……っ」
薄荷が頷いたのを確認すると、黒羽はその漆黒の翼を広げ、青い空へと羽ばたいていった。

「……。」
その遠ざかっていく黒い翼を見上げながら、梅人は塞がれた唇を、悔しげに噛み締める。

「そんな不安そうな顔、しなくても大丈夫よ」
「……っ？」
薄荷の言葉に、その意味がわからず、少し戸惑った表情で顔を向ける梅人。
「貴方はこのまま連れて行かれるのだから、見なくて済むわ」
ゆっくりと梅人の方を振り返る薄荷。

「仲間の死ぬところなんてっ…」

「……っ」

その残酷な言葉に、梅人はそっと目を細めた。

第４９章　捕縛　☆３

「輝矢っ！これをっ…！」
「んっ？」
梅人を追いかけ、森の奥へと進んでいた輝矢たち。先頭を行く桜時が立ち止まり、大きな声をあげると、後方の輝矢たちは、皆眉をひそめ、桜時の横へと並んだ。
「これはっ…」
桜時が指差した先にあったのは、地面に大きく刻まれた、足跡のようなものであった。細長い、指などには分かれていない足跡。その数からして足も二本ではないようである。
「何やぁ～？この足跡ぉ～」
「巨大イモムシの足跡ですね」
「おおっ！さっすが輝矢んっ！」
確信を持って言い放つ輝矢に、門貴が感心したように声を出す。
「なんでそんなの、わかるわけ？」
「幼少時代、飼い馴らしていましたので」
『……。』
笑顔で答える輝矢に、少し青い顔となって固まる桜時と由雉。巨大イモムシを飼い馴らしている幼い頃の輝矢を想像するだけで、夢見が悪くなりそうである。
「けど、こぉ～んな目立つ足跡があったら、追跡は楽勝やなっ！」
「これがあるんなら、オトポリに連絡に行ってからでもっ…」
「いえっ…」
『……っ？』
門貴と由雉の言葉を否定する、輝矢の少し力のある低い声。厳しい表情を見せる輝矢に、門貴と由雉が眉をひそめる。
「輝っ…」

「イモムシを使ったのは、これ以上の追跡は出来ないと踏んだからです」
『えっ…？』
輝矢の言葉に、三人が意味を理解していない様子で、首を傾げる。
「そうでしょう…？」
その瞳を鋭くし、ゆっくりと顔を上げ、前方を見る輝矢。

「そうさぁ～っ」
『……っ！』
上方から聞こえてくる声に、三人が勢いよく顔を上げる。前方の大きな一本の木、その太い枝の上に見える、一つの影。
「何故ならっ、お前たちは、俺に殺されて、ココで死ぬんだからさぁ～っ！」
『……。』
そこにいたのは、金にも近い明るい色のたてがみに、少しくすんだ赤い皮膚の、四つ足の獣。太い眉毛にぎょろりとした瞳は、一見恐ろしいが、よく見ると面白い、奇妙な顔立ちをしていた。そのあまり見慣れぬ獣の姿に、輝矢たちが皆、固まる。

「狛犬…？」
「ライオン…？」
「狼…？」

「ジンベエザメ」
『いやっ、絶対違うだろっ』
桜時、門貴、由雉に続いて呟いた輝矢であったが、そのまったく近くもない呟きに、首を傾げていた三人が一斉に突っ込みを入れた。
「俺はシーサーの獣人さぁ～っ！」
――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――
そのシーサーが、白い煙の中に包まれていく。
「名前は剛也っ！好きなものはゴーヤーチャンプルーさぁ～っ！」
白い煙の中から現れたのは、よく焼けた褐色の肌に、目に残る派手なオレンジ色の短髪の、快活そうな真っ赤な瞳の青年であった。
青年が輝矢たちを高々と見下ろし、楽しそうに笑いあげる。
「名前も好物もゴーヤーってわけね」
「俺はあんま好きちゃうけどなぁ～ゴーヤー」
「そういう問題じゃねぇーだろっ」
気難しげに首を捻っている門貴に、桜時が軽く突っ込みを入れる。
「鬼人化人間かなっ…？」
「フツーの人間は、あんな女に手ぇ貸さんやろぉ～っ」
「それもそっかぁ」
ふと問いかける由雉に、愚問だとばかりに答える門貴。門貴の答えを聞き、由雉は納得はするものの、その表情をしかめた。
「足止めってやつかっ…けど一人ならっ…」
「剛也」

『……っ』

桜時が掻い潜る自信を少し覗かせたその時、上方から新たに別の声が聞こえてきて、輝矢たちが皆、またもや顔を上げた。

「カラスっ…？」

「……っ」

大空から、剛也と呼ばれたその青年の元へと、舞い降りてくるのは、漆黒の翼の一羽の鳥。その不気味な姿に、輝矢が少し眉をひそめる。

「おぉ～うっ！黒羽ぁ～っ！」

そのカラスへと、剛也が明るい笑みを向ける。

“そう急かずに奇襲をかけよう”と言うつもりだったが…」

――――ボォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

少し顔をしかめたカラスの体が、白い煙に包まれていく。

「遅かったようだな…」

『……っ』

白い煙の中から姿を現したのは、カラスの翼と同じ、漆黒の長い髪に、切れ長の鋭い赤い瞳の、長身の男であった。全身真っ黒な服を着ており、まさに黒ずくめであった。

「足止めが遠慮して、どうすんださぁ～っ！」

「足止めが急く必要もないだろう…」

笑顔を見せる剛也に、黒羽が少し呆れたように肩を落とす。

「そういうわけでお前らっ、ココで死んでくれださぁ～っ！」
「えっらい不躾なやっちゃなぁ～っ」
「ええ。アナタが死になさいって感じです」
「お前はいっつも不躾だ…」
笑顔で死を宣告する剛也に、顔をしかめる輝矢と門貴。自分のことはすっかり棚に上げている輝矢に、桜時が少し呆れた表情で呟く。
「輝矢んっ」
「はいっ？」
小声で名を呼ぶ門貴に、輝矢が少し振り向く。
「俺とユッキーでアイツら、押さえるっ」
「……っ」
門貴の言葉に、少し眉をひそめる輝矢。
「輝矢は桜時と先に進んでぇ～っ」
「キジっ…」
門貴に続くように声をかける由雉に、輝矢が少し複雑そうな表情を見せる。
「けっけどっ…！」
「桜時っ」
何かを言おうとした桜時の言葉を遮り、笑顔で名前を呼びかける門貴。
「こん中で一番、梅人のこと、心配しとんはお前やっ」
桜時の肩に軽く手を置き、門貴が言う。
「だからお前は行かなあかんっ」
「ボクらじゃそんなに助けたがってないから、助けらんないかも知んないしねぇ～っ」
「門貴っ…由雉っ…」
自分を送りだそうと笑顔を見せている門貴と由雉に、桜時がそっと目を細める。
「イヌコロを梅人んとこまで送ってく役、頼んだでぇ～っ！輝矢んっ！」

「……。」
気難しい表情を見せていた輝矢が、ゆっくりと俯き、またゆっくりと顔を上げた。
「わかりました」
二人の意志に、輝矢がしっかりと頷く。
『……っ』
輝矢の頷きを見て、どこか嬉しそうに微笑む門貴と由雉。
「成金スズメを助けて戻ってきたら、鬼になってたとかはやめて下さいよ」
「縁起でもないっ…」
「輝矢ぁ～んっ！俺のこと、心配してくれるんやねぇ～っ！？」
輝矢の脅迫めいた忠告に、嫌そうな表情を見せる由雉と、心配されていることに感激し、目を輝かせる門貴。
「まぁその時は、容赦なく退治しますから」
「がびぃぃぃぃ～～～んっっ！！」
しかしその淡い期待は、一瞬にして裏切られた。
「では任せましたよ、サルっ、キジっ」
「おぉ～うっ！！」
「まぁ面倒臭いけどねぇ～っ」
輝矢の言葉に頷き、門貴と由雉がそれぞれに構えを取る。

「二人で押さえて、二人を先に…か…まぁ定石だな…」
腕を組み、四人を見下ろしながら、冷静な口調で呟く黒羽。
「俺が先に行こうとしている二人を止めるから、剛也、お前は押さえようとしているあっちの二人を…」
「よっしゃあぁ～っ！勝負ださぁ～っ！」
「ごっ…」
「とぉぉぉぉ～～～っっっ！！」
黒羽の作戦などまったく耳に入っていない様子で、戦いへの気合

いを入れる剛也。黒羽が止める間もなく、四人のいる方へと飛び下りていく。

「はぁっ…」

枝の上に一人残った黒羽が、深々と頭を抱える。

「やはり違う奴を連れてくるべきだったな…」

黒羽は、少し後悔するように呟いた。

「とぉおおりゃぁぁぁぁ〜〜〜っっ！！」

「おっしゃっ！行けっ！輝矢んっ！」

「ええっ」

「ヘマすんなよっ！サルっ！」

「当ったり前やっ！」

門貴の掛け声に、前方へと全力で駆け出していく輝矢たち。少し振り向いて言い放つ桜時に、門貴が大きく笑みを浮かべ、右手を掲げて、どこからともなく如意棒を取り出した。

「とりゃぁぁぁぁ〜〜〜っっ！！」

「狙い打ってくれてっ…言うとるようなもんやなっ…！」

門貴の方へとまっすぐに降りてくる剛也に、門貴が目つきを鋭くして、如意棒を構えた。

「如意棒・第一の舞っ…！」

「“三線（さんしん）”っ！」

如意棒を振り上げた門貴に、飛び下りてきている剛也が両手を広

げた。

――――パァァァァァァァーーーーンっ！――――

「何っ…！？」

振り下ろそうとしたその時、突如、如意棒の動きが止まる。

「これはっ…“糸”っ…？」

門貴が焦ったように如意棒の方を見ると、目にはかすかにしか見えない細い糸が、絡みつくように如意棒に巻きつき、その動きを止めていた。

「……っ」

「捕らえたさぁ～っ！」

門貴が振り向くと、地面に降り立った剛也が、得意げな笑みを浮かべていた。その広げた両手の指の先端から、無数の糸が張り巡らされ、それが如意棒を捕らえている糸を繋がっていた。

「糸使いかっ…」

少し険しい表情で呟く門貴。

「次は首をっ…」

剛也が楽しげに微笑み、操作するように小さく指を動かす。

「絡み捕るんさぁ～っっ！！」

操作された糸が、門貴の首へと向かっていく。その時。

――――バァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

「……っ！」

門貴の周囲で巻き上がった、小さな竜巻のような風の塊に、剛也が伸ばしていた糸が、すべて一斉に叩き切られた。地面へと落ちる糸に、剛也が驚いた様子で、大きく目を見開く。

「けどっ…」

如意棒についていた糸の切れ端を落とし、そっとその口元を緩める門貴。

「糸じゃなぁっ？」

「風っ…」

小バカにするような笑みで剛也を見る門貴に、剛也が初めて笑みを消し、ポツリと呟く。

「風使いっ…おもしろいさぁ～っ…」

「……っ」

再び緩む剛也の口元に、門貴が少し眉をひそめる。

「お前っ！やっぱり俺が殺すさぁ～っ！！」

「……っ！」

笑顔で駆け込んでくる剛也に、門貴は鋭い表情で如意棒を構えた。

「門貴っ…」

後方で剛也と戦う門貴のことが気にかかり、走りながらも後ろを振り返ろうとする桜時。

「振り返ってはいけません」

「えっ…？」
そんな桜時を鋭く止めたのは、横を走る輝矢であった。
「その振り向きは、仲間にとって、侮辱です」
「……っ」
厳しい表情で言い放つ輝矢に、桜時がそっと目を細める。輝矢とて、心配していないわけではないだろう。だが、振り返らないようにしているのだ。門貴の為に。
「今、私たちがすべきことは、仲間を信じ、前へ進むことだけです」
「……ああっ」
桜時が噛み締めるように頷くと、二人は走る速度をさらに速めた。

「逃がすと思うか…？」
先へと走る二人を、枝の上から見下ろしながら、ゆっくりとその懐へと手を入れる黒羽。
「これで…」
「君の相手はボクだよっ」
「……っ」
走り去る二人へ向け、懐から何かを出そうとした黒羽が、背後から聞こえてくる声に振り返る。高々と飛び上がった由雉が、懐から青い羽根を取り出し、黒羽へ向けて構えた。
「……っ！色羽っ…？」
由雉の手の中の青い羽根を見て、黒羽が目を見開く。
「“右翼っ…裂羽”っ…！！」

「クっ…！」
由雉が黒羽へ向け、青い羽根を投げ放った。
――――バァァァァァァァァーーーーンっ！――――
先程まで剛也と黒羽の立っていた枝は、青い羽根の突き刺さると、強い衝撃音をあげて、勢いよく崩れ落ちた。
「……っ」
地面へと着地した由雉が、鋭い表情で顔を上げる。
「……。」
由雉の見上げた先には、枝から飛び上がり、由雉の攻撃を避けた黒羽であった。特に気を乱した様子はなく、冷静な表情でゆっくりと地面へと降りてくる黒羽。
「んっ？」
先へと駆けて行く輝矢と桜時に見向きもせずに降りてくる黒羽に、由雉が少し眉をひそめる。
「意外だね」
由雉が前へと降り立った黒羽に、声をかけた。
「あっちのアホそうな彼と違って、君にはもう少し苦戦させられちゃうかと思ってたんだけどぉ」
「向こうには薄荷もいる…何とかするだろう…」
「薄荷…？」
黒羽の口から出た名に、少し首を傾げる由雉。
「それよりも…俺の興味はお前に移った…」

「えっ…？」
そう言ってどこか楽しげに微笑む黒羽に、由雉の目が丸くなる。
「いくらボクが可愛いからって、それはちょっとっ…」
「そういう興味ではないっ！」
あからさまに気持ち悪がる表情を見せる由雉に、初めて冷静な表情を崩して怒鳴りあげる黒羽。
「先程の羽根…色羽だな…」
「……っ」
黒羽から色羽の単語が出ると、由雉がその瞳を鋭くする。
「ふぅ～んっ、知ってるんだっ。まぁ鳥類の獣人なら珍しくもないのかなぁ」
「その辺りで売っている色羽より、かなり攻撃力が高い…」
崩れ落ちた枝を見た後、黒羽がゆっくりと由雉の方を振り向く。
「作ったのは誰だ…？」
「……。」
突き刺されそうなほどに鋭い瞳で見られ、由雉がその表情を厳しくする。

「……ハヤテっ」
少し間を置いた後、由雉はポツリと答えた。

「そうかっ…」
由雉の答えを聞いた黒羽が、どこか満足げに微笑む。
「まさかこんな所で…あいつの羽根と出会えるとはな…」
「えっ…？」
意味深な黒羽の言葉に、曇る由雉の表情。
「勝負といこうじゃないかっ…」
黒羽が再び、懐に手を入れる。

「お前の羽根と俺の羽根っ…どちらが強いかをなぁっ…！」

「……っ！」

そう言って黒羽が懐から取り出したのは、カラスの翼のように真っ黒な一枚の羽根。その羽根を見て、由雉が大きく目を見開く。

「まっまさかっ…色羽っ…？」

「……っ」

困惑する由雉を見て、黒羽は冷たく微笑んだ。

「キャラアアアアアアアっっ！！」

その頃、薄荷と梅人を乗せた巨大イモムシは、周囲の木々を薙ぎ倒しながら、順調なスピードで歩を進めていた。

「んっ…！」

「……っ？」

何かを察知した様子で突然振り返る、厳しい表情の薄荷に、その後ろで倒れ込んでいる梅人が少し眉をひそめた。

「剛也はともかく…黒羽もいながら何をしているのかしらっ…」

薄荷が煩わしそうに呟きながら、その表情をしかめた。

「まったくっ…！」

「梅人っ！！」
「……っ」

薄荷が勢いよく顔を上げると、遥か上方から飛び降りてくる、輝矢と桜時の姿があった。大きな声で自分の名を呼ぶ桜時に、梅人が驚いたように目を見開く。

「“月器・三日月”っ」
空中を舞いながら右耳のピアスを弾き、月器を目覚めさせる輝矢。

「チっ…！」
輝矢が三日月を手にするのを見ながら、顔をしかめた薄荷が勢いよく左手を横へと伸ばした。

「“繁手（はんしゅ）”っ…！！」

薄荷の左腕に刻まれた紫色の紋様が一瞬輝くと、左腕から細い木の枝のようなものが生え、薄荷の左腕に巻きついて、その先の刃のように鋭く尖らせた。

「“木力”っ…？」
薄荷の姿を見て、桜時が少し眉をひそめる。

――“枝槍”っ！――――
――“木力”かっ…！――――

「……っ」

その時、桜時の脳裏を過ぎったのは、オーロラの城で戦ったシロキとクロトのことであった。

「私があの女を引きつけますっ…！ハチはその間に成金スズメをっ…！」
「あっ、おっおうっ！」
輝矢の言葉に桜時が頷くと、二人は空中で二手に分かれた。

「三日月っ…！」
「クっ…！」
勢いよく下降し、三日月を振り下ろす輝矢に、薄荷が作ったばかりの繁手を突き出す。

――――パァァァァァァァァーーーンっ！――――

三日月と繁手が、激しくぶつかり合う。

「梅人っ…！」

「……っ」
輝矢と薄荷が衝突している隙に、捕らえられている梅人の元へと降りていこうとする桜時を見て、薄荷が少し顔をしかめた。
「そうはさせないっ…！」
薄荷が空いている右手を桜時へと伸ばすと、そこからまた枝のようなものが勢いよく伸び、桜時へと向かっていく。

「“水月”っ」

――――バァァァァァァァァァーーーーンっ！――――

「うっ…！！」

しかし、桜時へと伸びた枝は、飛んできた無数の水の刃に斬り裂かれ、力なく地面へと落ちた。顔を歪めた薄荷が、前方に立つ輝矢を見る。

「私のハチに手出しは無用ですよっ」

「……っ」

余裕の笑みを浮かべる輝矢に、強く顔をしかめる薄荷。

「チっ…キャラっ！！」

「えっ…？」

イモムシの名前を呼びながら、繁手で三日月ごと輝矢を押し、イモムシの背から飛び降りる薄荷。

「キャラアアアアアアアっ！！」

「何っ…！？」

「……っ」

桜時がもう少しで梅人の元へと降り立てたところで、梅人を乗せたキャラが勢いよく進み、桜時と梅人の距離が大きく開く。

「そいつを連れて先へ行ってっ！」

「キャラアアアアアっ！！」

薄荷の声に答えるように大きく声をあげ、その巨体からは考えられない程のスピードを見せて、前へと進んでいくキャラ。

「クっ…」

薄荷と相対している輝矢が、遠ざかっていくキャラに、少しその唇を噛む。

「ハチっ！ここは私に任せてっ、梅人を追って下さいっ！」
「わっわかったっ！」
輝矢の声に頷き、巨大イモムシを追って、その場を駆け出していく桜時。

「そうはっ…！」
「ハチに手出しは無用と言っているでしょうっ…？」
「クっ…！」
力の強まる三日月に、走り去っていく桜時の方を振り返ろうとしていた薄荷は、その隙すら奪われ、顔をしかめる。

「竹取輝矢っ、誘拐犯退治いたしますっ…！」
「邪魔ったいわねっ…！」

輝矢と薄荷の戦いが始まった。

「ハァっ…！ハァっ…！ハァっ…！」
梅人を乗せた巨大イモムシを追い、息を乱しながら全力で走る桜時。

「梅人っ…！！」

その瞳が、強く揺らいだ。

その頃、桃原家。
「おっそいなぁ～輝矢様と門貴様とその他ぁ～っ」
「お兄様…その言いようはハチ様と由雉様と梅人様にかなり失礼では…」
大きく首を捻りながら言うヘンゼルに、少し呆れたような視線を送るグレーテル。二人がいるのは、桃原家の玄関。キッチンには出来上がった晩御飯が並んでおり、二人は輝矢たちの帰りを待っているのであった。
「でも確かに遅いですわよね。皆さん、どこかに行かれるとかは言ってらっしゃらなかったのに」
「何かあったのかしらぁ～」
「ええぇ～っ！！梅ちゃんに何かぁ～っ！！」
「どうしよぉぉ～～っっ！！」
『……。』
騒ぎ出す、まだ桃原家に滞在中の松人と竹人に、ヘンゼルとグレーテルが冷たい視線を送る。
「梅ちゃ～～～んっ！！」
「梅人くぅぅぅ～～～んっ！！」

「……。」

二人の泣き叫ぶ声を聞きながら、リビングのソファーで一人、いつものように甘さダルダルココアを口にする太狼。太狼がその視線を、ゆっくりと大窓の外側へと移した。

「……っ」

降り出した重たい雨に、太狼はそっとその表情を曇らせた。

「雨っ、か…」

墓の前に立ち尽くしていたゴンが、空から降り出してきた雨に、やっとその顔を上げた。

「……っ」

「んっ？」

雨を見上げていたゴンの視界が、差し出された黒い傘に遮られる。

「リンゴ…」

「……。」

ゴンがゆっくりと視線を下ろすと、そこには真っ赤な傘を差し、どこか悲しげな表情を見せたリンゴが立っていた。ゴンがリンゴの差し出した黒い傘を受け取る。

「話は終わった…？」

「……どうだかなっ…」

リンゴの問いかけに、ゴンは曖昧な返事を返す。

「墓も花も嫌いだ…」

再び墓に目を落とし、そっと微笑みを浮かべるゴン。

「弱音ばっか吐きたくなる…」

「……。」

そう呟くゴンを、少し目を細めて見つめるリンゴ。

「それよりどうした？鬼人でも出たのか？」

「いいえっ…」

ゴンがふと問いかけると、リンゴの表情が一気に厳しいものとなった。

「以前、回収した鬼人化人間の、生体検査報告が出たわっ…」

「何っ…？」

リンゴの言葉に、ゴンが眉をひそめた。

「フフフっ…」

降り注ぐ雨を見つめながら、どこか楽しげな笑みを浮かべるシルク。

「早く…私の手の中に…」

暗い空へと、その細く白い手を伸ばす。

「“命咲かす者”…」

御伽界全土に降り注ぐ雨は、さらに勢いを増した。

第５０章　砕かれる刃　★1

――――私とともに来てもらいましょうか…“花を咲かす者”…――――

「梅人っ…！！」

牢戸知玖の手先と見られる薄荷たちと交戦を始めた輝矢たち。仲間に道を作ってもらい、桜時は一人、巨大イモムシにより運ばれていく梅人を追っていた。いつの間にか降り出した強い雨が、激しく桜時に打ちつける。

「梅人っ…！！」

桜時も全力で走るが、巨大イモムシの一歩は大きく、なかなかその距離は埋まらない。梅人の名を叫ぶ桜時の額から、雨に混ざって焦りの汗が流れ落ちた。

「キャラアアアアアアっっ！！！」

激しく咆哮をあげながら、薄荷に言われた通り、森の中の道を突き進む巨大イモムシ・キャラ。

「……っ」

その背の上で、厳しい表情を見せている、両手両足を縛られ、口を塞がれた梅人。

「梅人っ！！」

「……っ！」

聞こえてくるイトコの声に、梅人が目覚めたかのように大きく目を見開く。

「うっ…ううっ…！うっ…！」
口を塞いでいる布を歯で噛み、体ごと動かして強く引き、無理やり引き剥がす梅人。
「ぷはっ…！」
久しぶりに解放された口で、梅人が大きく息を吸う。
「……っ」
一呼吸すると、すぐさまその表情を鋭くする。
“瞬花”っ…！」

――――パァァァァァァァーーーンっ！――――

梅人の両手が赤色の光を放つと、梅人の両手両足を縛っていた縄が、梅の花びらとなって散っていった。拘束の解けた梅人が、イモムシの背の上で立ち上がる。

「桜時っ…！」
「……っ！梅人っ…！」
イモムシの背の上に梅人の姿を確認し、桜時が少し驚いたように目を開く。
「前方っ！五十メートル先を狙ってっ！」
「えっ…？」
前方を指差し、叫ぶ梅人に、桜時が少し戸惑ったような表情を見せる。
「あっ…！」
何かに気付いたような表情となる桜時。
「わっわかったっ…！」
大きく頷き、桜時はすぐさま村雨丸を構えた。
「……っ」
梅人も桜時の方から前方へと視線を動かし、真剣な表情を見せて、両手を構える。

「“瞬花っ…」

イモムシの走っている五十メートル先を狙い、村雨丸を振り上げる桜時。

「終刀”っ…！！」

桃色の一閃が、イモムシの巨体の下をくぐり抜け、五十メートル先へと飛んでいく。

「“瞬花っ…」

イモムシの上から、桜時の放った一閃の飛んでいく先をまっすぐに見つめ、両手のひらを向ける梅人。梅人の両手が赤色に強く輝く。

「終掌（しゅうしょう）”っっ！！」

梅人の両手から放たれる赤色の光のかたまり。まっすぐに降下していく赤光が、飛んで来た桜時の桃色の一閃を合わさり、その先の地面へと直撃した。

――――パァァァァァァァァァーーーーンっ！――――

赤と桃の花びらへと変わる地面。

「キャラアアアアアアアアアっっ！！」

花びらが簡易落とし穴を作り、その花びらで出来た穴の中に、巨

大イモムシが頭から落ちていく。

「……っ」

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

「クっ…！」

白い煙に包まれ、雀化すると、梅人が翼を広げ、落ちていくイモムシの背の上から、少し慌てて飛び立つ。

「キャラアアアアアアっっ！！」

「うわっ！」

勢いよく沈んでいくイモムシの巨体が巻き起こした風に、飛んでいる小さな梅人の体が大きく揺さぶられる。

「梅人っ！」

そんな梅人の姿を確認し、慌てて駆け込んでいく桜時。

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

駆け込んでいく桜時の体が白い煙に包まれると、そこから一匹の白いイヌが飛び出していく。

「よっ」

「うわああっ」

ハチが高々と飛び上がると、揺さぶられていた梅人がキレイにハチの背の上に落ちる。梅人を乗せたまま、ハチがしっかりと地面に着地した。

「大丈夫かぁ～？梅人っ」

「もう背中の上はたくさんだよっ…」
声をかけるハチに、梅人は少しげっそりとした表情で呟いた。

「よしっ！急いで輝矢たちのところへ戻っ…！」

『フフフフっ…』

『……っ！』

背後から聞こえてくる笑い声に、桜時と梅人が勢いよく振り返る。

『フフフフっ…』
「あっ…！」
「お前らはっ…！」
二人の振り返った先の木の枝に座っていたのは、二人のよく似た少年であった。茶色の髪に、唯一の違いとも言える金と銀の瞳。

『また会ったねっ…お兄ちゃんたちっ…』

ゆっくりと微笑んだその者たちは、ロムとレムであった。

『……っ』

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

『……。』

ロムとレムの姿を確認すると、桜時と梅人はすぐさま人化し、鋭い表情を二人へと向けた。

「怖い顔っ…」
「子供にそんな怖い顔、向けちゃダメだよぉ～？」
厳しい表情を見せる桜時と梅人に対し、ロムとレムは何とも楽しげな笑みを浮かべる。彼らがここにいるということは、牢戸知玖が絡んでいるとみて間違いないのであろう。
――――母親なんて、自分を生むまでの間、いればいいだけの存在でしょっ？――――
そして彼らは、桜時と梅人にとっては、因縁めいた相手。鬼となった母親を、自らの手で葬った双子。
『……っ』
桜時と梅人の表情が、さらに厳しいものとなる。
「なんでっ…」
桜時が突き上げるように、双子を見上げる。
「なんで梅人を狙ったっ！？お前らの目的は何だっ！？」
「僕らの…」
「目的…？」
問いかける桜時の言葉を、ゆっくりとした口調で聞き返すロムとレム。
『僕らの目的はただ、シルク様の願いを叶えること』
「シルクっ…」
その名とともに思い出されるシルクの姿に、桜時が少し表情を曇らせる。
「シルク様がソイツを連れて来いって言ったから」
「僕らはソイツを連れてくだけさ」
「あの女が…僕をっ…？」

双子の言葉に、梅人も眉をひそめた。何故、梅人を狙っているのかはわからないが、シルクが梅人を手に入れようとしているのは確かなようである。
「ネバーランドの時はあんまり遊べなかったからねっ」
「今度はたっぷり遊んであげるよっ」
そう言って、木の枝の上で立ち上がる双子。

『お兄ちゃんたちっ』
『……っ』

立ち上がった双子が高々と掲げた、それぞれの右手と左手を重ね合わせる。その様子に顔をしかめ、身構える桜時と梅人。

「また空間移動かっ…！」
双子のその動きには、見覚えがあった。空間を移動する時に、双子は互いの手を合わせていたのである。
「梅人っ！お前だけでもっ…！」

――――さっきは…言い過ぎたっ…――――

「……っ」
粘っランドでの戦いのことが思い出され、桜時は放とうとしていたその言葉をしまった。やっと歩み寄れたのだ。桜時は梅人のことを信用しなければならない。

「何っ？」
「……いやっ…」
問いかける梅人に、桜時が静かに首を横に振る。
「油断、すんなよっ…」
「……っ」

桜時のその言葉に、梅人が少し驚いたように目を開く。
「……うんっ」
しかしその後、少しだけ笑みを浮べ、再び表情を引き締めると、しっかりと頷いた。
『フフフフっ…！！』
『……っ』
双子の笑い声とともに、周囲に広がっていく黒い空間。
――――パァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――
その空間の中に、桜時と梅人は、呑み込まれていった。

「“三線”っ…！！」
剛也の手から、森に張り巡らされる、無数の糸。
「如意棒・第二の舞っ…」
糸の向かう先に立つ門貴が、ゆっくりと如意棒を振り上げる。
「“浄”っ…！！」

――――バァァァァァーーンっ！――――

門貴の周囲に巻き上がった風が、飛んできた糸を、一本残らず、切り落とした。

「糸なんかじゃあっ、風には勝たれへんて言うたやろぉっ！？」

門貴が振り下ろした如意棒を、再び勢いよく振り上げた。

「これでも喰らいぃっ！如意棒・第一の舞っ…“空”っ…！！」

門貴の如意棒から放たれる、一陣の強い風。

「……っ」

その先に立つ剛也が、少し眉を動かす。

“三線”っ！」

剛也が右手を高々と伸ばすと、そこからさらに細い糸を伸ばした。上方へと伸びた糸は、上にあるとある木の枝にしっかりと巻きつく。

「よっさぁ～っ！」

「……っ」

巻きつかせた糸を絡め取り、上空へと浮き上がるようにして、門貴の放った風を避ける剛也。剛也のその様子に、門貴の表情が少し曇る。

「あないな使い方もあるんかいなぁ～っ」

そう言って顔をしかめ、困ったように頭を掻く門貴。

「厄介やなぁ～っ」

「能力の相性が悪いのは、お互い様さぁ～っ！」

「……っ？」

糸で上空に浮かびながら、自信満々に言い放つ剛也に、門貴が少し戸惑うように顔を上げる。
「確かに風で糸は切れるけどぉ、俺は糸で風を避けれるさぁ～っ」
門貴を見下ろすように見ながら、満面の笑みを浮かべる剛也。
「それにっ…」
剛也の口元がさらに緩む。
「お前は鈍チンださっ…」
「えっ…？」
今までと違ってどこか不適に微笑む剛也に、門貴が眉をひそめる。
「いつの間にか、体中に糸が巻きついてることに気付かないほどにっ！“紅糸（べにいと）”っ…！！」
「何っ…！？」
剛也がそう叫んだ瞬間、門貴の視界に、門貴の全身に絡み付いている真っ赤な糸が突然、移り込んだ。
「これはっ…！うっ…！」
その糸が目に見えた途端に、門貴の体が自由に動かなくなる。
「クっ…！」
「その紅糸は、普段は目に見えない透明な色をしていて、俺の合図とともに真っ赤に染まるんさぁ～っ」
「……っ」
何とか体を動かそうとしている門貴の元へ、枝に巻きついていた糸を切り、剛也が降りて来る。紅糸に囚われた門貴に、ゆっくりと歩み寄る剛也。
「戦いながら、お前の体にちょっとずつ巻きつかせていってたんさぁ～」
剛也が、門貴のすぐ目の前へと立ち、そっと微笑む。
「お前、気付かんかったさっ…？」

「……っ」
門貴を嘲笑うかのような笑み。その笑みを目の前に、門貴はそっと唇を噛んだ。
「こないな糸っ…」
門貴が紅糸を睨むように見る。
「さっきみたいに風で叩っ切っ…！うっ…！」
先程同様に、風を巻き起こそうとした門貴であったが、その体は指の一本さえも、一ミリの距離さえも、自由に動きはしなかった。

「無駄さっ…紅糸は普通の三線よりも遥かに拘束力が高いっ…」
「クっ…！」
剛也の言葉に、門貴は唯一動く、表情だけを動かす。

「面白いことっ…してやるさぁ～っ！」
「えっ…？」

「“操糸”っ！」
「えっ…！？」

剛也がそう言った瞬間、紅糸に引っ張られるようにして、如意棒を持つ門貴の右手が浮かび上がった。動かそうとしてもいないのに動いた自分の体を、門貴が戸惑うように見る。
「こっこれはっ…うっ…！」
門貴をさらに驚かせたのは、如意棒を纏うように巻き起こっていく、強い風のかたまりであった。
「そっそんなっ…！俺は何もしてへんのにっ…！」
「面白いさぁ～っ…？ほれっ」
「ううっ…！！」
門貴の意志とは関係なく巻き起こった風が、勝手に動かされた右手と如意棒に勢いよく振り下ろされ、勢いよく放たれる。

「直撃コースさっ…」
「えっ…？……っ」

剛也のその言葉に眉をひそめた門貴が、視線を動かし、風の飛んでいった方を見る。

「……っ！ユッキーっ！」

放たれた風の飛んでいく先にいるのは、黒羽と交戦中の由雉であった。戦いに集中しているのか、風が向かって行っていることには気づいていないようである。

「ユッキーっ！！危ないっ！！」

「へっ？」

必死に叫ぶ門貴の声に、由雉がどうにか振り向く。

「うるさいなぁ～何、ギャアギャア騒いでって…」
振り向いた由雉の視界に入る、勢いのいい風のかたまり。

「うわあああああああっ！」

――――バァァァァァァァーーーーンっ！――――

風に気付いた由雉が、横に転がり込むようにして、慌てて風を避ける。由雉のかわした風は、森の一本の木を直撃し、勢いよくなぎ倒した。

「……。」
なぎ倒された木を見て、少し唖然とする由雉。
「可愛いボクに何してくれてんのさっ！このアホザルっ！！」
「ちゃうちゃうぅ～っ！不可抗力やってぇ～っ！」
強く睨みつけるように振り向く由雉に、門貴が少し泣きそうな表情で弁解する。
「俺ってば今、可哀想なマリオネット状態やねんからぁ～っ！」
「そんなの自分が悪いんでしょっ！」
「ううぅ～っ！ユッキーっ！冷たぁ～いっ」
囚われ状態の門貴に対して、特に心配する素振りも見せない由雉。
それどころか責め立てる由雉に、門貴がさらに泣きそうな表情を見せた。
「だいたい君はねぇっ…！」
「おい、剛也っ…」
「……っ？」
門貴にさらに追い討ちをかけようとした由雉が、横から剛也へと呼びかける黒羽の声に、その言葉を止めて振り向いた。
「人の獲物に手を出すな…」
黒羽が、鋭い黒の瞳を、剛也へと向ける。
「殺すぞっ…」
「ごっ、ごめんさぁ～っ…」
黒羽の突き刺さるような瞳に睨まれ、剛也は少し怯えるような表情を見せて、小さな声で謝った。

「お前のせいで怒られたさぁ～っ！」
「俺のせいではないやろっ！」
八つ当たりする剛也に、思わず言い返す門貴。
「味方同士の殺し合いなんて面白いと思ったけどっ…仕方ないさぁっ」
剛也が気を取り直すように、両手を構える。

「お前っ…」
「……っ？」
再び巻き起こる風。振り上げられる如意棒。

「自分で自分を殺せさぁぁぁっ！！」
「うっ…！！」

振り上げられた如意棒が、門貴自らを目がけて振り下ろされていく。

「うっ…うわあああああああっ！！」

絡む紅糸が、門貴の血で、さらに赤く染まった。

第５０章　砕かれる刃　★２

「……っ！門貴っ……！！」

自らの風に斬り裂かれていく門貴の姿に、先ほどまで怒っていた由雉が、思わず身を乗り出す。

「“右翼・裂っ……！」

「させると思うか…？」

「うっ……！」

剛也へ向け、青い羽根を投げ放とうと右手を振り上げた由雉の前に、素早く黒羽が立ち塞がる。

「喰らうがいい…我が漆黒の羽根…」

黒羽が懐から真っ黒が羽根を取り出し、右手に構える。

「“右翼・襲羽（しゅうは）”っ……！！」

「クっ……！」

飛んでくる黒い羽根に、由雉が構えていた青い羽根の羽根先を変える。

「“右翼・裂羽”っ……！」

黒羽の放った羽根へ向け、青い羽根を放つ由雉。

――――――バァアアアアアアアアーーーーンっ！――――――

二つの羽根がぶつかり合い、周囲に激しい衝撃風を巻き起こした。

「ううっ…！」

由雉の裂羽の威力の方が若干、弱かったのか、衝撃は由雉側に流れ、由雉は思わず身を屈めた。

「“左翼っ…」

「……っ！」

身を屈めていた由雉が、上から聞こえてくる声に、少し焦ったような表情で顔を上げる。

「うっ…！」

由雉の見上げた先には、高々と飛び上がり、またもや真っ黒の羽根を、今度は左手に構えた黒羽。

「消羽（しょうは）”っ…！！」

黒羽が黒い羽根を、下方にいる由雉へと投げ放つ。

「クっ…！“左翼・滅羽”っ…！」

由雉が慌てて赤い羽根を取り出し、向かってくる黒い羽根へと投げつけた。

――――バァァァァァァァァーーーーンっ！――――

二つの羽根がぶつかり合い、再び起こる衝撃。

「うっ…！うわあああああっ！！」

またも押し負けた分が流れてきて、由雉は後方へと弾き飛ばされた。

「うっ…ううっ…」

衝撃が収まった頃、転がるように地面に倒れ込んだ由雉が、ゆっくりと体を起こす。

「裂羽でも…滅羽でも押し負けるなんてっ…」

少し信じられないといった様子で呟きながら、体を起こす由雉。

それもそのはず、由雉は鳥類の中でも、かなりの色羽の使い手であった。自分が色羽で誰かに劣るなど、今までなかったことであるし、考えてもみなかったのである。

「少し…羽根の力に頼り過ぎているのではないか…？」

「……っ」

聞こえてくる声に、由雉が顔を上げる。するとそこには、地面へと降りてきた黒羽の姿があった。黒羽は余裕のある落ち着いた表情を、由雉へと向けている。

「いくら羽根の力が強いといっても…自分の力を磨くことを忘れてはいけないなぁ…」

「……。」

微笑む黒羽に、顔をしかめる由雉。

「ボクにそういう偉そうな口っ…きかないでくれるっ…！？」

「……っ？」

勢いよく立ち上がった由雉が、そのままの勢いで高々と上空へ飛び上がる。

「これでっ…！」

由雉が下方にいる黒羽を見つめ、勢いよく両手を広げた。

「“百裂羽”っ…！！」

上空から百枚の青い羽根を、降らせるように投げ放つ由雉。青い羽根が美しく空を舞い、黒羽目がけて降下していく。

「……。」
向かってくる百枚の青い羽根にも、眉一つ動かさない黒羽。
「“右翼…」
黒羽が懐から、黒い羽根を一枚だけ取り出す。
「襲羽”っ…！！」
――――パァァァァァァァァーーーーンっ！――――
「うっ…！！」
黒羽の投げ放った、たった一枚の黒い羽根が、空から降り注いでいた百枚の青い羽根を、一枚残らず貫き、穴をあけて地面へと撃ち落した。その光景に、由雉が大きく目を見開く。
「そっ…そんなっ…」
地面へと降下していきながら、信じられないといった表情で呟く由雉。
「ボクの百枚の羽根をっ…たったの…一枚でっ…」
「羽根の使い過ぎは資源の無駄だぞ…？」
「……っ」
茫然としていた由雉が、黒羽の声に顔を上げる。
「それとも、大量消費が趣味…なのかなっ…？」
「……っ！」
黒羽のあからさまな挑発に、由雉は冷静を装うことさえも出来ず、その頬を紅潮させた。
「言わせておけばっ…！」
顔をしかめた由雉が、再び懐へ手を入れる。
「それならっ…！」

懐から赤と青の羽根を二枚取り出し、左右の手にそれぞれ構える由雉。

「“滅羽・裂っ…！」

「二種の異なる羽根の合成…」

「えっ？」

胸の前で赤と青の羽根を重ね合わせようとした由雉が、黒羽のその声に思わず手を止めた。

「合翼か…」

「……っ」

今から由雉がやろうとしていることを見透かしている黒羽に、由雉は少し眉をひそめた。

「だから何っ？わかってたところでこれはっ…！」

「それは鳥類の獣人の中でも、特に優れた色羽使いにしか使えない特別の技…」

「……。」

由雉の言葉を遮り、話を続ける黒羽に、由雉が仕方なく言葉を止める。

「自分の他に使っている者を見たことがなかったか…？」

「えっ…？」

黒羽の言葉に、由雉が戸惑いの表情を見せる。

「ならば見せてやるっ…」

「なっ…！！」

取り出した二枚の羽根を、胸の前で重ね合わせる黒羽に、由雉が大きく目を見開く。

「まさかっ…」

それは、由雉しか使えないはずの技。

「合翼っ…！？」

「“襲羽・消羽”…“合翼っ…」

二枚の重ね合わさった黒い羽根が、黒い光を放ちながら一枚の黒い羽根へと姿を変える。

「漆羽（しっぱ）”っ…！！」

「……っ！！」

向かってくる黒い羽根に、由雉は大きく目を見開いた。

――――バァァァァァァァァァーーーーンっ！――――

「すっごい音さぁ～っ」

黒羽の漆羽による衝撃音と、なぎ倒されていく数本の木を眺め、感心したように声を出す剛也。破壊されていく景色を見つめるその表情は、どこか楽しげであった。

「あぁ～あっ…これでホントに同士討ち出来なくなっちゃったさぁ～」

「……っ」

楽しげに微笑みかける剛也の視線の先にいるのは、紅糸に囚われ

たままの門貴。糸に操られ、自らの風を受けて、体のところどころから痛々しく赤い血を流していた。門貴が剛也の言葉に、眉をひそめる。

「黒羽ってば手加減てもの、知らないからさぁ～っ」

「クっ…」

剛也の暢気な笑顔が、少し鋭く変わる。その言葉に、門貴は少し唇を噛んだ。由雉がやられてしまったかも知れないというのに、今の門貴は助けに行くどころか、身動き一つ取ることが出来ない。

「あっ！新しく面白いこと、思いついたさぁ～っ！」

「えっ…？」

再び楽しげに笑う剛也に、戸惑うように顔を上げる門貴。

「先に進んでいった女たちがいたさぁ～っ？ソイツら追ってって、同士討ちさせるさぁ～っ！」

「……っ！」

剛也の言葉に、門貴が大きく目を見開く。

「お前の風で、あの女たちをズッタズタに斬り裂いてやるさぁ～っ！」

どこかワクワクしたように話す剛也。

「どうさぁ～っ？面白いと思っ…！」

「もうええわっ…」

「んっ？」

深く俯いた門貴が、剛也の言葉を遮るように、声を発する。その今までとは違う、低くてどこか重い声に、剛也は少し目を丸くして、言葉を止めた。

「なっ何がもうえっ…」

「ユッキーまでは、まぁ許容範囲やったけどっ…輝矢んまで傷つけようやなんてっ…」

ゆっくりと顔を上げていく門貴。

「このっ、男・猿川門貴が許さへんでぇっ！！」

「……っ」

門貴に気迫溢れる鋭い瞳を向けられ、剛也は少し気圧されるように一歩後ろへと下がった。

「ゆっ…“許さへん”てさぁっ…」

圧されていた剛也は、どこか必死にいつもの笑みを作る。

「今のこの状態で何言ってっ…！」

「こないなもんでっ…」

再び門貴が、剛也の言葉を遮る。

「いつまでも俺をっ…捕まえてられると思うなやっ…！！」

「何っ…！？」

門貴の全身から噴き出すように巻き起こる強い風。その風を正面から受け、剛也が驚いた様子で大きく目を見開く。

「なんでさぁっ…！指一本動かせないはずなのにっ…！」

「風は体で起こすもんやないっ…」

目に見えて焦り出す剛也に、門貴が大きく胸を張る。

「心で起こすもんやでぇぇっっ！！」

「ぬはぁぁぁぁぁっっ！！」

どこか誇らしげに笑い、自信を持って言い放つ門貴のその言葉に、激しく衝撃を走らせる剛也。

「なっ何かっ…死ぬほどカッコイイさぁっ…！」
敵ながら、その誇らしげな姿に、剛也は思わず感動し、胸の前で両手を組んでしまう。

「如意棒・第二の舞っ…」
巻き起こった風が、如意棒を包みこんでいく。

「“浄”っ…！！」

――――バァアアアアアアアアアーーーーンっ！――――

門貴の四方から激しく風が突き上げ、門貴の体を捕らえていた真っ赤な糸を、勢いよく切り落とした。

「……っ！！」

地面に落ちていく紅糸に、大きく目を見開く剛也。

「クっ…！」
糸とともに少し切り裂かれる自らの皮膚に、門貴が顔をしかめながらも、解放されたばかりの右手で、間を置くことなく、如意棒を構えた。
「あっ…！もう一回、紅糸をっ…！」
「ちょっと早いけどっ…終わりにさせてもらうでぇっ…！」
もう一度、紅糸を放とうとする剛也よりも先に、如意棒を振りかぶる門貴。

「覚悟しいやっ！パンサーっ！」
「おっ俺はシーっ…！」
「如意棒・第三の舞っ…」
「うっ…！」
門貴の動作の方が早いことに気付いたのか、剛也の表情が少し歪む。
「……“戒”っ…！！」
振り切られた如意棒から放たれた、より強い一陣の風が、まっすぐに剛也へと向かっていく。
「“三しっ…！ううっ…！！」
その速度は、剛也に糸を伸ばす時間さえも与えなかった。
「クっ…」
――――バァァァァァァァァァァーーーーンっ！――――
「うっ…！うわあああああああっ！！」
風に全身を切り裂かれ、血を流しながら、後方へと倒れこんでいく剛也。

「おっ…俺はシーサーだ…さぁっ…」

そう言葉を漏らし、剛也は力なく倒れこんだ。

「ふぃ～っ！」

剛也が倒れこんだことを確認すると、門貴は少し疲れたように肩を落とし、ゆっくりと構えていた如意棒を下ろした。勝ったとはいえ、自らの風を何回も受けさせられていたので、もうボロボロである。

「しゃーないなぁっ…ユッキーの助けついでに癒羽もらって…」

「……っ」

「……っ！」

どこからか感じる殺気に、門貴が鋭い表情を作って、素早く振り向く。

――――キィィィィィィィーーーーンっ！――――

次の瞬間、強い金属音が、森の中に響き渡った。

「誰やっ…！？」

「……。」

門貴が振り向いた先に立っていたのは、鮮やかな赤色の長髪に、鋭く光る同じく真っ赤な瞳の、無表情の青年であった。青年の持っている、宝石のように輝いた鋭い刃の十字状の武器が、門貴の突き出した如意棒と強くぶつかり合っている。

「醍也（だいや）…」

「醍也っ…？」

青年の呟いた、名らしきその言葉に、門貴が少し眉をひそめる。

「シルク様に仇なす者…俺が殺す…」

醍也と名乗った青年が、門貴に鋭い瞳を向ける。

「ったく、ぞろぞろとっ…」

殺気を放ちまくりの醍也に、少し呆れたように肩を落とす門貴。

「しつこいねんっ…！お前らはぁっ…！」

「……っ」

門貴が如意棒に力をこめ、交えていた醍也の十字刃を勢いよく押し切る。

「クっ…」

醍也は如意棒に押し切られる前に、素早く自分の武器を引き、後ろに飛んで、押された衝撃と軽減した。

「ったくっ…！」

離れた醍也に、しかめた表情を向ける門貴。

「しつこい男はモテへんでぇっ！ほんまにっ！」
「……。」
「んっ？」
門貴の言葉に特に反応を示さずに、ただまっすぐに門貴を見つめる醍也。そんな醍也を不審に思い、門貴が少し首を傾げる。
「なっ何やっ？どないしてんっ？」
思わず問いかけてしまう門貴。
「……報告で聞いてたより強い」
「へっ…？」
少しの間を置いて、醍也がゆったりとした口調で答えると、門貴が目を丸くする。
「報告で聞いてたほど、バカ丸出しの面じゃないし、報告で聞いてたほど、間抜けな発言もしないし…」
首を捻り、何かを思い出すようにしながら、言葉を続けていく醍也。
「報告で聞いてたほどっ…」
「どんだけ報告いってんねんっ！！」
さらに言葉を続けようとする醍也に、門貴が思わず突っ込んだ。
「しかもロクでもない報告ばっかりっ！」
「……。」
あまりの報告内容に、不機嫌さを全開にして言い放つ門貴。そんな門貴を、醍也は特にない表情でまっすぐに見つめる。
「……それは被検体が被検体だからっ…」
「うっさいわっ！！」
「ロクでもない報告になるのは、自然の摂理で…」
「だからうっさい言うてんねんっ！！」
こっそりと呟いた醍也に、門貴が勢いよく怒鳴り声をあげた。
「ったくっ…！何か気の入りにくい相手ばっかりやなぁ～っ！」
「だっ…醍也っ…」

「……っ？」

門貴が戦いにくそうに頭を抱えている中、醍也が、どこからか聞こえてくる弱々しくかすれた声に、ゆっくりと振り返った。

「醍也っ…」

醍也の振り返った先に倒れ込んでいるのは、先程、門貴にやられた剛也であった。剛也が少し薄めた瞳で醍也の方を見つめ、弱々しくその名を呼ぶ。

「ごっ…ごめん…さぁっ…おっ俺っ…」

「……。」

申し訳なさそうに謝る剛也を、特にない表情で、静かに見つめる醍也。

「俺っ…」

「……っ」

特に剛也の言葉には反応せず、表情を作らぬまま、醍也が突如、右手の十字刃を構える。

「へっ…？」

その様子に、頭を抱えていた門貴が、驚いたように顔を上げる。

「敗北者に…」

醍也の十字刃が、赤い光を放ち始める。

「死を…」

「えっ…？」

「……っ！」

剛也へと駆け込んでいく醍也に、戸惑う剛也と、表情を変える門貴。

「なっ…何をっ…！」
「……っ」
またもや剛也の声に少しも反応せず、倒れたままの剛也へと駆け込み、勢いよく十字刃を振り上げる醍也。

「クソっ…！」
少し表情をしかめ、門貴も二人の元へと駆け込んでいく。

「“赤十字”っ…」
「ううっ…！」

醍也が剛也へ向け、勢いよく十字刃を振り下ろす。剛也の表情が、恐怖に歪んだ。

――――パァァァァァァァァァーーーーンっ！――――

「あっ…」
次の瞬間、声を漏らしたのは、倒れ込んでいる剛也であった。

「にょっ…如意棒っ…！」

「……。」

醍也の振り下ろした十字刃を、剛也の前へと駆け込み、如意棒を突き出して受け止めている門貴。そんな門貴を、醍也は特に驚いた様子もなく、静かに見つめる。

「おっ…お前っ…」

自分を庇っている門貴の姿に、そっと目を細める剛也。

「明後日から“兄貴”って呼ばせてほしいさぁ～っ！」

「誰が兄貴やねんっ！しかも何故に明後日っ！！」

目を輝かせて懇願する剛也に、門貴が刃を交えたまま、勢いよく突っ込みを入れる。

「報告で聞いたとおり…」

「んっ？」

目の前から聞こえてくる醍也の声に、門貴が少ししかめた顔を上げる。

「……人に甘い…」

「……っ」

呟く醍也に、門貴の表情が曇る。

「そんなヤツの助けに入らなければ…」

そう言いながら、醍也が十字刃を握る手に力をこめる。

「もう少しだけは生きていられたろうに…」

再び赤く輝く刃。

「“重示（じゅうじ）”っ…」

「……っ！」

十字刃が赤く輝いたその瞬間、受け止めていたその力が、急激に強まった。

「ううっ…！」

重くのしかかる力に、如意棒から門貴の体へと伝わる衝撃。如意棒は一気に押され、門貴の足が後方へと押されていく。

「なっ…何やっ…！？これっ…！」

顔をしかめ、目の前の十字刃を見つめる門貴。

「刃がっ…急に重っ…ううっ…！！」

戸惑う隙もないほどに、押されていく門貴と如意棒。

「あっ…！」

倒れたままの剛也が、不安げに門貴を見上げる。

――――ピキっ…！――――

「ううっ…！」

十字刃を受け止めていた如意棒に、小さな亀裂が入る。

「俺のっ…如意棒がっ…！」

亀裂の入った如意棒を、驚きの表情で見る門貴。

「敗北者に…」
苦しげに歪んでいく門貴の表情を、まっすぐに見つめる醍也。

「死を…」

――――パァァァァァァァァーーーーンっ！――――

十字刃に貫かれ、真ん中で砕き割れる如意棒。

「ううぅっ…！」

如意棒を砕いた十字刃が、そのまま縦一文字に門貴の胸部を斬り裂いた。

「かっ…かはっ…！」

体を縦に大きく斬り裂かれ、門貴の口から真っ赤な血が零れ落ちる。

「クっ…」

血を流しながら、力なく前方へと倒れ込んでいく門貴。

「クっ…ソ…」

そのまま、門貴は、地面の上へと崩れ落ちた。

第５０章　砕かれる刃　★3

「うっ…ううっ…」

傷だらけで全身から血を流した由雉が、そのボロボロの体を、重そうに引きずりながら、必死に起き上がらせる。その表情からは、痛みがにじみ出ていた。

「ううっ…」

「口ほどにもないな…」

「……っ」

前方から聞こえてくる、その落ち着いた口調の声に、由雉が少しかめた顔を、ゆっくりと上げる。

「この程度か…？」

由雉の見上げた先に立つのは、余裕の笑みを浮かべた黒羽。

「ハヤテの羽根は…」

「……っ」

黒羽が再び発するハヤテの名に、由雉が表情をしかめる。

「君は何なの…？」

怪訝そうに問いかける由雉。

「その黒い羽根に、合翼までっ…それにっ…」

戦う前もそうであった。冷静に足止めを考えていたというのに、由雉がハヤテの作った色羽の使い手だとわかると、あっさりと輝矢たちを先に進ませ、由雉との勝負を選んだ。

「ハヤテハヤテって…君はあの男と一体どういうっ…」

「知らないか？“二人の羽根造り”の話を…」

「二人の…羽根造り…？」

「知らないようだな…」

大きく首を傾げた由雉を見て、黒羽は少しがっかりしたように肩を落とした。

「十数年前、御伽界に、二人の色羽造りの天才がいた…」
肩を落とした黒羽は、そのままとある物語を話し始める。
「二人は競い合うように羽根を造り、その度に色羽はどんどんと進化していった…」
「……。」
黒羽が話し出した物語を、由雉は真剣な表情で聞く。
「しかし、やがて世界は、二人の天才のうちの一人のみを選んだ…その者のみを天才と崇めた…」
「……っ？」
どこか恨みがましく話す黒羽に、少し眉をひそめる由雉。
「もう一人の天才は、日陰に追いやられ、歴史にその名を残すことはなかった…」
「それがっ…」
由雉が話の途中で、思わず口を挟む。
「それが何っ？ハヤテの話とその話に一体、何の関係がっ…！」
「わからないかっ…？」
「えっ…？」
不意に問い返され、由雉が少し困ったように口ごもる。
「その世界が選んだ天才…その者こそがハヤテだ…」
「えっ…！？」
思わず大きな声を発する由雉。
――――やぁ～っ！マァ～イソォ～ンっ！――――
「……っ」
思い出される能天気顔のハヤテに、由雉が勢いよく顔を引きつる。
「世界の選んだ天才…？あれでっ…？」
確かに羽根の開発力は認めるが、正直、そんな大層な人物には見

えない。今となっては羽根造りよりも事業家“ハネキング”としての方が有名であるし、黒羽の話はあまりピンとこなかった。

「そしてもう一人の天才の名はウルシ…」

「ウルシ…？」

「俺の父だ…」

「えっ…？」

黒羽の言葉に、由雉の表情が止まる。

「父…親っ…？」

「ああっ…」

ゆっくりと聞き返した由雉に、もう一度深く頷く黒羽。

「父は死んだ…最期までハヤテと世界を憎んで…」

「……っ」

冷たい瞳で語る黒羽を、複雑な表情で見つめる由雉。二人の羽根造りの天才、その息子同士が戦いの場で出会うとは、一体何の因果であろうか。

「父は言った…最期に造り出したこの鬼の羽根っ…」

「鬼っ…？」

黒い羽根を取り出し、そう言った黒羽に、由雉が眉をひそめる。

「この漆黒の羽根でっ…ハヤテの羽根を超えろとっ…！！」

「……っ」

そう言い放ち、黒羽がまだ起き上がってもいない由雉へ、黒い羽根を投げ放つ。

「“右翼・襲羽”っ…！」

「うっ…！」

避ける術もない由雉に、迫る黒き羽根。

「うわあああああああっっ！！」

羽根が由雉を直撃し、さらに真っ赤な血が舞うと、由雉はさらに後方へと吹き飛ばされた。

「あっ…うあっ…」

倒れ込んだ由雉が、苦しげな声を出す。

「他愛も無い…」

倒れた由雉を眺め、少し呆れたように肩を落とす黒羽。

「これが…俺の目指してきた羽根か…」

そう呟き、黒羽はそっと目を細めた。

「はぁっ…はぁっ…」

乱れた呼吸で、ゆっくりと首を動かす由雉。

「……っ？」

由雉が横を向くと、そこには少し血がつき、赤く染まった青い羽根が落ちていた。吹き飛ばされた時に、懐から落ちたのだろう。

「……っ」

由雉がその青い羽根へ、動きの鈍い右手を伸ばす。

「ボクのっ…羽根っ…」

伸ばした右手が、青い羽根に触れる。

――――由雉ほどの色羽の使い手はいないんですよっ？――――

――――やっぱり君は最高だよぉ～っ！マイソォォ～ンっ！――――

「……っ」

思い出される幸コやハヤテの笑顔に、由雉が少し唇を噛み締め、そして強く青い羽根を握り締めた。

「お前っ…」

「……っ？」

由雉が懐に左手を伸ばし、赤い羽根を取り出す。その様子に、黒羽が少し眉を動かす。

「お前の羽根…なんかにっ…！」

左右の手に赤と青の羽根を構え、少しだけ身を起こして、胸の前で二枚の羽根を重ね合わせる由雉。

「“滅羽・裂羽”っ…“合翼っ…」

重ね合わせた赤と青の羽根が、光を放ち、やがて紫色の一枚の羽根となる。

「……壊羽”っ…！！」

由雉が紫色の羽根を、黒羽へと投げつける。

「……。」

向かってくる紫色の羽根を見ながら、冷静な表情で黒い羽根を取り出す黒羽。

「“左翼・消羽”っ…」

黒羽が左手で、向かってくる由雉の壊羽へ向け、黒い羽根を投げ放った。

――――パァァァァァァァーーーンっ！――――

「……っ！」

黒羽の消羽に、あっさりと砕かれる由雉の羽根。由雉が大きく目を見開く。

「ボクのっ…壊羽…がっ…」

由雉の口から、力のない声が零れ落ちた。

「最高の技でこの程度か…」

黒羽がどこかがっかりしたように肩を落とす。

「興醒めだな…」

そう言って黒羽が懐に手を入れ、再び黒い羽根を取り出した。

「ハヤテの羽根を持つ者よ…」

その瞳を冷たくし、黒羽が由雉へ向けて羽根を構える。

「“右翼…」

「……っ」

黒羽が羽根を構える中、その表情からすっかり戦意を消し、ゆっくりと後方に倒れ込んでいく由雉。

「勝てない…」

倒れていく由雉の口から、零れ落ちる言葉。

「勝てないよっ…」

由雉が、上空に広がる真っ青な空を見上げる。

「……父さんっ…」

「襲羽”っ…！！」

力なく父を呼んだ由雉に、黒い羽根が向かっていった。

――――パリィィィィィィーーーーンっ！――――

「おおっ！」

目の前で勢いよく砕け散った羽根に、作業着姿のハヤテは、思わず驚きの声を漏らした。

「どうしたんですかぁ～？ハヤテさぁ～んっ」

「幸之助クンっ」

ハヤテの声を聞きつけて、店先から作業場へと、助手の幸之助が顔を出した。

「いやぁ～造りかけの羽根が突然、砕け散ってしまってねっ！ビックリビックリっ！」

「羽根が突然っ…？」

砕け散った羽根の破片を集めながら、ハヤテは暢気そうな笑顔で

話したが、その言葉に幸之助は少し眉をひそめた。
「そんなことがあるんですねぇ～」
少し感心したように言いながら、幸之助がハヤテの元へホウキとちりとりを持っていく。
「何かっ…ちょっと不吉ですねっ…」
「……っ」
幸之助の言葉に、曇るハヤテの表情。
「そうだねぇっ…」
ハヤテは少し目を細め、その手の中の羽根の破片を見つめた。

その頃、桃原家。
「あぁぁ～っ！やっぱり遅すぎますわっ！！」
玄関先で輝矢たちの帰りを待ち続けていたヘンゼルが、ついに痺れを切らしたのか、勢いよく立ち上がる。もう日も沈んで、早数時間。散歩しているにしては、明らかに遅すぎる。
「こうなったら私が火の中水の中、門貴様を捜索してっ…！」
「待って待ってっ！お兄様っ！ここはご主人様のご意見をっ…！」
飛び出していこうとするヘンゼルを、グレーテルが何とか止める。
「皆様に何かあったのでしょうか？タロー様っ」
「うぅ～んっ…」
廊下からグレーテルに問いかけられ、少し首を捻るリビングの中の太狼。
「来る時が来たのかなっ…」

「えっ…？」
そう呟いてソファーから立ち上がる太狼に、グレーテルが少し首を傾げた。
「行こうかっ…ヘンゼル、グレーテルっ」
『……っ』
太狼のその言葉に、少し驚いた表情を見せるヘンゼルとグレーテル。
『はっはいっ！！』
しかし、次の瞬間、二人は大きく返事をし、準備に駆け出していった。
『よぉ～しっ！』
「へっ？」
横から聞こえてくる、その場面で妙に緊張感のない二つの声に、太狼が振り向く。
「僕たちも準備しようかぁ～っ！竹人クンっ！」
「おうっ！俺たちが梅ちゃんと桜ちゃんのピンチを華麗に救うんだぁ～っ！」
「……。」
太狼の振り返った先には、何故か行く気満々の松人と竹人の姿があった。盛り上がっている二人を見て、太狼が少し固まる。
「あっあぁぁ～君たちぃ～」
『へぇっ？』
呼びかける太狼に、二人が同時に振り返る。
「ちょ～っとお遣い、頼まれてくれなぁ～い？」
「お遣いっ？」
太狼の言葉に、目を丸くする松人と竹人。
「今はそんなことやってる場合じゃあ～っ…！」
「そうだよぉ～っ！僕らは桜時クンと梅人クンを助けにっ…！」
「頼まれてっ…くれない…？」
『うっ…』

一気に冷たく変わる太狼の笑みに、反論しようとしていた二人の言葉が止まった。
『頼んで下さいっ…』
「ありがとぉ～っ！」
がっくりと肩を落とし、頷く二人に、太狼はとても爽やかな笑みを浮かべた。

オトポリ本部・長官室。
「失礼します…」
「おお、イチゴっ」
長官室へと遠慮がちに入ってきたのは、今日も大人しそうなオーラの出ているイチゴであった。やってきた娘に、書類を読んでいた座黒がすぐさま顔を上げる。
「どうした？」
「お父様、お姉ちゃんを知らない…？」
長官席へと歩み寄りながら、イチゴが小さな声で問いかける。
「さっきからどこ探してもいなくて…」
「ああ、リンゴならっ…」
「ちょっちょっと困りますっ！！」
『いいからどいてどいてぇぇ～～っ！！』
『……っ？』
扉の外側から聞こえてくる妙に騒がしい声たちに、座黒とイチゴが会話を止めて、振り返る。
「ここだねぇっ！！」

「ああっ…！ちょっ…！！」
「失礼しまぁ～すっ！！」
必死に止めるオトポリ隊員を振り切り、長官室へと突入してきたのは、かなり焦った表情を見せた松人と竹人であった。
「侵入者ですかっ…？」
『違う違う違うっ！！』
急に表情を鋭くし、構えを取るイチゴに、二人が必死に首を横に振る。
「君たちは確か…朱実のっ…」
「そうですそうですっ！！朱実の嫡男・松人ですっ！」
「次男の竹人でっすぅ～っ！」
「えっ…？」
慌てて名を名乗る松人と竹人に、イチゴが少し目を丸くして構えを解く。
「では桜時様の…」
『従兄でぇ～すっ！』
「ようこそ、おいで下さいました」
「随分と態度、変わるねぇ～」
「ほらっ、桜ちゃんってば人気あるからぁ～っ」
桜時の従兄とわかった途端に、目に見えて丁寧な応対となるイチゴに、二人は少し呆れたような表情で、こっそりと言葉を交わした。
「君たちが何故、ここに…というか、どうしたんだ？」
二人に何とも不思議そうに、問いかける座黒。
「それがっ！うちの桜時クンと梅人クンがいつまで待っても帰って来ないんですよぉ～っ！」
「お仲間の輝矢ちゃんたちも一緒にいなくなっちゃってぇ～っ！」
「えっ…？」
「何っ…？」
二人の言葉に、同時に眉をひそめる座黒とイチゴ。
「桜時さんたちがっ…！？」

「あっうんっ」
勢いよく問いかけるイチゴに、少し驚きながら頷く竹人。
「僕たち、桃タローさんにオトポリに伝えてくるよう言われてっ…」
「太狼にっ…？」
松人の言葉に、座黒がさらに眉をひそめる。
「それで、太狼はっ？」
「へっ？えとっ…たったぶんっ…みんなを探しにっ…」
「……っ」
一気に険しくなる、座黒の表情。
「あの男が自ら…？……。」
「お父様っ…？」
黙り込む座黒に、イチゴが少し首を傾げる。
「相手は牢戸知玖ということかっ…」
座黒が険しい表情のまま、誰にともなく呟く。
「こんなに早くっ…金汰も主力隊も皆、粘っランドだというのにっ…！」
「お父様っ…」
焦りを表情に出し、声を荒げる座黒を、イチゴが少し不安げに見つめる。
「イチゴっ！今いる隊員を掻き集めろっ！」
「はっはいっ！」
座黒の指示に頷き、イチゴが慌てて長官室から飛び出していく。
「なっ何か大変なことになってきたねぇ～お兄ちゃんっ」
「ホントっ、僕ら、家出梅人クンを連れ戻しに来ただけなのにねぇ～っ」
「お前たちっ！」
『はっはいっ！！』
暢気に会話を交わしていた松人と竹人が、座黒に呼ばれ、背筋をピンと立たせて、大きく返事をする。
「もう一度伝言だっ！研究塔へ行ってくれっ！」

『けっ…研究塔っ？』

同刻、オトポリ本部・研究塔。

「こちらへどうぞ」

「ありがとう」

オトポリ内の研究員に案内され、リンゴとゴンは研究塔の最深部へと入っていく。そこはオトポリの中でも、一部の隊員のみしか入れない、特別な場所であり、ここで極秘裏に、鬼人化人間の調査が進められていた。

「いいのかぁ～？俺っ、ヒラ隊員なのにっ」

「大丈夫よ。私、偉いから」

「職権乱用だな…」

きっぱりと答えるリンゴに、少し呆れた表情を見せるゴン。

「それに…アンタも関わったことだしねっ…」

「えっ…？」

「こちらです」

「……っ？」

ゴンがリンゴの意味深な言葉に眉をひそめていると、前方を歩く研究員が立ち止まり、そう言い放った。ゴンが明かりのつけられた、研究員の前のガラスの壁の、その向こう側を見る。

「こっ…これ…はっ…？」

ガラスの向こうの、まるで手術室のような寝台の上。その上に横たわっているのは、深く目を閉じた、長い黒髪の女であった。怪我でも負ったのか、女の体の所々には包帯が巻いてある。

「女っ…？」

その見たこともない女に、眉をひそめるゴン。
「リンゴ、誰だっ？こいつっ…」
ゴンがしかめた表情で、隣に立つリンゴへと問いかける。
「あの女がどうしっ…」
「彼女が唯一人、我々が回収した鬼人化人間の中で、人間の姿に戻った人間よっ」
「えっ…？」
リンゴの言葉に、ゴンの表情が一気に曇る。
「人間に…戻ったっ…！？」
「ええ」
驚き、問いかけるゴンに、リンゴは厳しい表情を見せながら頷く。
「色々と実験をやっても戻らなくて、そのまま経過観察をしていたら、昨日、突然、人間の姿に戻ったそうよ」
「突然っ…？」
リンゴの話に、ゴンはさらに困惑した表情を見せる。
「なんで…こいつだけ…」
戸惑いの瞳で、横たわる女を見つめるゴン。
「こいつはどこで回収したヤツなんだっ？」
「……っ」
ゴンのその問いかけに、リンゴが少し眉をひそめた。
「リンゴっ…？」
少し黙り込むリンゴに、ゴンが首を傾げる。
「……砂漠よ」
「へっ？」
ポツリと答えたリンゴの言葉を、ゴンが顔をしかめて聞き返す。
「この女は、御伽砂漠で輝矢に重傷を負わせた、あの蠍人の女よっ」
「……っ！」
リンゴの言葉が、ゴンにさらなる衝撃を与えた。
「砂漠のっ…サソリっ…？」

――――ゴンっ…輝矢がっ…――――

思い出されるのは、血まみれの輝矢を抱えた、弱々しい表情の桜時の姿。

「あいつだけがっ…人間にっ…？」

その事実は、ゴンをさらに困惑させた。

――――……

「んっ…んんっ…」

桜時がゆっくりと、その青い瞳を開く。

「ここ…は…？」

起き上がったそこは、確かな地面であった。ロムとレムにより亜空間に呑み込まれたかと思ったが、どうやらそうではないようである。

「梅人っ…？」

立ち上がりながら周囲を見回し、梅人の姿を探す桜時。だが、梅

人の姿はない。

「……っ？」

その代わり、妙なことに気付いた。その周囲の景色、どこかの屋敷の庭のようなその景色に、桜時はとても見覚えがあったのである。

「ううっ…ううっ…！」

「……っ？」

聞こえてくる、子供のすすり泣くような、その声に、桜時が振り向く。

「ううぅぅっ…！」

「……っ」

桜時の振り向いた先、その広い庭の片隅で、派手な桃色頭に大きな青い瞳の、まだ幼い少年が、目にいっぱい大粒の涙を溜めて、まだ子供だというのに、とても苦しそうに、泣いていた。

「あれはっ…」

その少年を見つめ、桜時がそっと目を細める。

「俺っ…？」

「んっ…んん～っ…」
少し頭を押さえながら、緑色の瞳を開く梅人。
「ここはぁ～っ…」
「もうやってられませんっ！！」
「……っ？」
ここがどこであるかを把握しようとした梅人であったが、聞こえてきた大きな声に、周囲を確認する前に、思わずそちらを振り向いた。
「まったくっ！！」
梅人が振り向くと、すぐ近くにある屋敷の、縁側の障子が勢いよく開き、そこから赤いふちのメガネをかけた、いかにも知的そうな女が飛び出てくる。
「こんなことならっ…！あの犬王子のお世話役になった方が、全然マシだったわっ！！」
部屋の中へ向かってそう吐き捨てて、女は怒りに体を捻らせながら、早足でその場を歩き去っていった。
「……っ？」
梅人がゆっくりと、開いたままの障子の、その奥を見る。

「そんなになりたいならっ…なればいいじゃんっ…」

部屋の中から、聞こえてくる幼い声。

「アイツの…お世話役にっ…」

「……っ」

部屋にいるのは、どこか悲しげな表情を見せた、赤毛に緑色の瞳の、まだ幼い少年。その少年を見て、梅人は大きく目を見開く。

「僕っ…」

『フフフっ…フフフっ…』

ただどこまでも真っ暗な空間の中に、浮かび上がるロムとレム。

『さぁ…遊ぼうかっ…』

双子が、ただ暗いだけの上方を見上げ、微笑む。

『お兄ちゃんたちっ…』

幼い二つの声が、暗闇の中に響き渡った。

第５１章　終幕の二重奏　☆１

「俺っ…？」

「ううっ…」

梅人とともにロムとレムの作り出した空間に呑み込まれた桜時が、目覚めたその場所は、幼き日の桜時のいる場所、よく見慣れた朱実の屋敷であった。

「ここはっ…」

庭の隅で一人泣く、幼き日の桜時。周りはよく見覚えのある朱実の庭に違いはないが、壁の塗料の落ち具合も、庭の木の育ち具合も、それは、今の朱実のものではない。少し過去の、朱実のものだった。

「俺のっ…過去っ…？」

桜時が、幼き日の自分を見ながら、戸惑うように呟く。信じ難いことではあるが、ここは確かに桜時の過ごしてきた時間、桜時の過去であった。

「これも…あいつらの能力なのかっ…？」

「また屋敷内でイヌの姿になったそうね…」

「……っ」

聞き覚えのある、その凛とした声に、少し俯いて考え込んでいた桜時が、思わず顔を上げる。

「……。」

「あれはっ…」

桜時が顔を上げると、そこはすでに朱実の庭ではなく、朱実の屋敷の大広間であった。いつの間に場面が変わったのか、今度は幼き日の桜時が、広間の玉座の前にしゃがみ込んでいる。

「何度言えばわかるのっ…?桜時っ…」

「孔雀…さん…」

そして、幼き桜時の前で、玉座に腰をかけているのは、今とそう変わりのない孔雀であった。威圧するような、厳しい表情を見せている孔雀に、桜時が少し目を細める。

「この屋敷内でイヌの姿になるのはやめなさいと…そう言ってるでしょう…?」

「……っ」

孔雀の前にしゃがみ込んだ幼い桜時は、見るからに萎縮していて、少しも顔を上げようとはしなかった。

「……。」

桜時は、そんな過去の自分を、まっすぐに見つめる。

「貴方のその姿はね、朱実の恥でしかないのっ」

孔雀の吐き捨てる、その冷たい言葉。

「朱実の名に泥を塗る姿なのっ」

夢に見るほどに聞き慣れていた、その冷たい言葉。

「それが理解出来たなら、早々にこの部屋を出て行きなさいっ…」

立ち上がった孔雀が、まだしゃがみ込んだままの桜時に、背を向ける。

「貴方と同じ空気を吸っていることがっ…不快で堪らないわっ…」

「……っ」

深く俯いた幼い桜時は、何とも苦しげな表情で、強く唇を噛み締めた。何を言い返すでもなく、ただ堪える。放たれた言葉を、その小さな体で、すべて受け止める。

「うっ…ううっ…」

そしてまた、場面は変わる。幼い桜時は、庭の片隅で、人知れず泣く。

「ううぅっ…ううっ…」

「……。」

泣いている過去の自分を見つめていたが、不意に見ていられなくなり、桜時はそっと視線を落とした。

――――貴方のその姿はねっ、朱実の恥でしかないのっ……――――

聞き慣れた言葉。何度も夢で見た言葉。今はもう、孔雀がそんなことを言わないこともわかっているというのに、胸が軋む。思い出される過去が、晴れていたはずの桜時の心を、重く埋め尽くしていく。それが、嫌で嫌で堪らなかった。

「朱実の王子がイヌだなんてぇっ」
「汚らわしいわよねぇ～っ」
「外部の者に知られたら、何を言われることかっ」
「いなくなってくれればいいのにっ」
次々と移り変わる場面。桜時が過去に聞いた、様々な者の声が、一気に耳に入ってくる。

「クっ…」
耳に入ってくるその声たちに、桜時は堪らず耳を塞いだ。これ以上聞いていると、おかしくなってしまいそうだった。闇に呑み込まれてしまいそうだった。
「もう…いいっ…」
耳を塞いだ桜時の口から、思わず零れ出る言葉。
「もうっ…やめてくれっ…」

懇願するその声は、とてもか細く、弱々しかった。

「思い出した…？」
「えっ…？」
耳を塞いだはずなのに、頭の中に響き渡るようにして聞こえてくるその声に、少し怯えているような、弱々しい表情を見せた桜時が、ゆっくりと振り返った。

「お兄ちゃんっ…」
「……っ」
桜時の振り返った先に立っていたのは、茶色い髪に銀色の瞳の少年。ロムであった。

「ちゃんと思い出した…？」
「思い…出す…？」
穏やかな笑顔で問いかけるロムに、桜時が弱々しく聞き返す。
「うんっ…」
ロムが無邪気な笑顔で、大きく頷く。
「お兄ちゃんはねっ、ただの汚らわしいイヌなんだよっ？」
「……っ」
ロムの言葉に、桜時の目が少し見開かれる。
「卑しい卑しい、ただのイヌなんだよっ？」
「……。」
さらに続くロムの言葉に、耳を塞いでいた桜時の手が、力なく下方へと下ろされた。
「誰からも認められない…誰からも必要とされてない…」

「あんな子、生まれてこなければ良かったのにっ」
「いっそ捨て犬として捨ててしまえばいいのよっ」

「……っ」
ロムの声に連動するように聞こえてくる、空間に出来た朱実の景色からの声。肩を震わせた桜時が深く俯き、震える拳を力いっぱい握り締める。

「やめっ…もうやめっ…」
「家を出て、鬼退治の旅をして…それでみんなから認めてもらえるような人になれたとでも思った…？」
願う桜時の言葉を遮り、冷たく微笑むロムは、さらに言葉を続ける。

「勘違いしないでっ」

「……っ！」

ロムの言葉に、桜時が大きく目を見開く。

「お兄ちゃんを認める人なんていないよっ…？どこまでいっても誰一人、そんな人は現れないよっ…？」

俯いた桜時に歩み寄り、その下を向いた顔を、そっと覗き込むロム。

「死ぬまでずっとっ…」

「……っ」

その微笑みに、桜時が両手で思わず頭を抱える。

「ちっ…違うっ…！」

――――私には見えますよ…？アナタの背に…その翼が…――――

必死に否定する桜時の頭に浮かんだのは、輝矢のその言葉であった。

「違うっ…！俺はっ…」

輝矢が桜時を認めてくれた言葉。桜時がまるで縋りつくように、その言葉を思い出す。

「俺はっ…！！」

「認めてないから…お姉ちゃんはお兄ちゃんを頼りにしないっ…」

「……っ！！」

桜時が何に縋り付いていたのかを、まるで見透かしているようだった。何故、その言葉が支えだとわかったのか、そんな疑問は、今

の桜時の頭には浮かんでこなかった。

「何一つ頼ろうとしない…」

「それはっ…」

――――大丈夫…ですから…――――

無理に作られた微笑み。伸ばしたのに、離された手。

「それっ…はっ…」

何も言葉が出て来ず、桜時はその場に力なく膝をついた。

「仲間も家族もっ…本当はだぁ～れもお兄ちゃんのことなんて認めてないよっ…」

桜時が膝をつき、立っているロムと同じくらいの高さとなった桜時の顔に、自分の顔を近づけるロム。

「だぁ～れもお兄ちゃんのことなんて見えてないっ…」

「……。」

最早言い返す気力もなくなった桜時に、ロムの言葉がさらに続く。

「だから…ねぇっ、お兄ちゃん…」

ロムの口端が、そっと吊り上がった。

「死のうっ…？」

花を育てた。名前と同じ、梅の花。生まれて初めて、何かを“育てる”ということをした。いつも何を始めても、何を飼っても、すぐ途中で放り投げてしまっていたのに、初めて“育てた”。

「咲いたっ…」

やっと咲いた、その年初めての真っ赤な花を、まだ幼い梅人は、少し驚いたような表情で見つめた。

「咲いたっ…」

しかし、もう一度言うと、その表情からは自然と笑みが零れた。

「……っ」

梅人はすぐにその花を摘み取った。大切そうに両手で抱え、朱実の屋敷へと走っていった。

「お母様っ…！お母様に見せてあげよっ…！」

捻くれた子供として有名な梅人の表情とは思えないほどに、わくわくとした弾むような子供らしい笑み。それほどにその花を咲かせたことが嬉しく、早くその花を母・孔雀に見せたくて堪らなかった。

「あっ！」

「孔雀様っ」

「んっ？」

梅人が縁側の廊下を歩く孔雀を見つけたその時、歩いていた孔雀が庭先から聞こえる声に、ゆっくりと振り向いた。

「どうしたの？」

「桜時様がまた、お庭の木を桜にっ…！」

「また…？」
庭先にしゃがみ込む従者の言葉に、少し呆れた表情を見せる。
「……っ」
孔雀が従者と話していることに気付き、梅人は少し気を遣うように、距離をとったところで立ち止まった。
「ったくっ…」
孔雀が顔を上げて庭の木を見る。まだ桜の季節には早いというのに、庭には何とも鮮やかな満開の桜の木が一本、見事に咲き誇っていた。
「どうなさいましょう？」
「どうにもならないでしょう？仕方ないから、放っておきなさいっ」
従者の問いかけに、少し突き放すように答える孔雀。
「桜時には後で注意しておくわ」
「はっ」
孔雀に深々と頭を下げると、従者はその場を素早く立ち去った。
縁側の廊下に、孔雀が1人、立ち尽くす。
「あっ」
従者との話が終わったことに気付き、孔雀の元へと歩み寄ろうと足を踏み出す梅人。
「お母さっ…！」
「……キレイね…」
「……っ！」
穏やかな笑みを浮かべた孔雀の落としたその一言に、梅人の足は

止まった。

「……っ」

すぐさま笑みを消し、その場を歩き去っていく孔雀。

「……。」

しかし、梅人の足は、孔雀を追いはしなかった。

「……っ」

表情のなくなった梅人の手から、今日咲いたばかりの梅の花が、力なく零れ落ちた。

「……。」

梅人は、幼き日の自分を見つめる。大事に抱えていた花を落とし、廊下に表情もなく立ち尽くしている、まだ幼かった頃の自分を、どこか遠い瞳で見つめていた。

――――……キレイね……――――

単純に、“負けた”と思ったのだと思う。自分の咲かせた梅よりも、桜時の咲かせた桜の方が、孔雀を喜ばせたのだと思ったのだろう。まだ自分の花を見せてもいなかったというのに、その頃の梅人は、そう思ったのだ。そしてそれは、ただ単純な“負け”よりも、

とても重くて苦しいものであったように思う。

「……っ」

過去の自分の気持ちを思い出し、梅人は少し目を細めて俯いた。

「邪魔だよね…」

「えっ？」

背後から聞こえてくる声に、梅人がハッとした表情で振り返る。

「君はっ…」

梅人が振り返ると、そこには茶色い髪に金色の少年が立っていた。

それはレムであった。

「やっぱりこの空間は君たちがっ…」

レムと向き合った梅人が、少し顔を強張らせて身構える。

「本当に邪魔だよねっ…あのお兄ちゃんって…」

「……っ」

レムの言葉に、梅人が眉をひそめる。

「お兄ちゃんの欲しいもの、ぜぇ～んぶあっちのお兄ちゃんが持っていっちゃうっ」

「……っ！」

自分の心の中を言い当てられたような気がして、梅人は驚いたように目を見開いた。

「母親も兄も従者も、みぃ～んなあっちのお兄ちゃんの方が好きっ」

「……っ」

――――梅人クンも少しは桜時クンを見習いなよぉ～っ――――
――――あの犬王子のお世話役になった方が、全然マシだったわっ！！――――
――――……キレイね……――――

「……。」

少し俯いた梅人が、強く唇を噛み締める。

「みぃ～んな、お兄ちゃんとあのお兄ちゃんが逆に生まれてきてればぁ～って思ってるっ」

レムがどこか含みのある笑みで、俯いた梅人を覗き込む。

「お兄ちゃん、あのお兄ちゃんのこと、いらないって思ってるでしょうっ？」

冷たい瞳で、囁くように問いかけるレム。

「“アイツさえいなければ”って…思ってるでしょうっ…？だからさっ…」

レムが、さらに楽しげに微笑む。

「殺しちゃおうよっ…？」

「……っ」

その誘いに、梅人の表情が少しだけ動いた。

「邪魔なんだから殺しちゃえばいいんだよっ…殺す相手はほらっ…」

「……っ？」

ゆっくりと指を指し示すレムに、俯いていた梅人が顔を上げ、その指の先に目をやる。先程まで見ていた過去の朱実家の景色が消え、白い光が灯ると、そこに二つの人影が見えてきた。

「そこにいるから…」

「……っ」

見えてきたのは、レムの片割れロムと、深く座り込んでいる桜時であった。過去の桜時と同じ、絶望の表情を見せている今の桜時に、梅人が少し眉をひそめる。

「今ならすぐにでも殺せるよっ？あのお兄ちゃん、今っ…」
「くだらないね…」
「えっ…？」
梅人の漏らした少し低い声に、レムが笑顔を消して振り返る。
「邪魔だから殺す？はぁっ…ホントくだらないっ」
「……っ」
先程までの思い詰めていた表情から一転し、どこか余裕すら感じる空気で、呆れた表情を見せる梅人に、レムがその眉をひそめた。
「そんなことをしても、何の解決にもならないよっ」
「何をっ…」
きっぱりと否定する梅人に、レムが表情をしかめる。
「だってっ…！お兄ちゃんは、あのお兄ちゃんが邪魔でしょっ…！？」
梅人から少し距離を取るように後ろに下がったレムが、思わず声を荒げて問いかけた。
「あのお姉ちゃんのことだってっ…！」
「……っ」
その発言に、少し動く梅人の眉。
「あのお兄ちゃんがいなきゃっ、お兄ちゃんがっ…！」

「だからって殺してどうすんのっ？」
「……っ」
梅人がレムの言葉を遮り、鋭く問いかけた。
「そんなことしたら、一生アイツに追いつけないし、一生アイツを追い越せないじゃない」
――――梅人ぉ～っ！遊びに行こぉ～っ！――――
同じ年に生まれたイトコ。双子のように、ずっと傍にいたイトコ。誰にも認められず、誰からも愛されるイトコ。捻くれている梅人とは違い、たくさんのものを得ていけるイトコ。
――――別にっ……――――
そんなイトコを、梅人はただ、何もせずに、ずっと見ていた。何もしていないのに、羨ましがって、嫉妬して、勝手に悪態づいてた。
――――それはズルいっ……――――
そう、ずるかった。
――――アナタはハチではなく…朱実梅人…でしょう…？――――
まるで先の道を照らすように、梅人の心に響いた言葉。
「……っ」
梅人が口元を緩め、顔を上げる。

「僕は、自分自身の力でアイツを越えてみせるっ」

胸に右手を置いた梅人の、その表情には、まったく迷いのない笑みが浮かんでいた。

「だからっ…」

すぐさま鋭くなる、梅人の瞳。

「こんなところで、お前に死なれたら困るんだよっ…！」

横を振り向き、ロムの前で深くしゃがみ込んでいる桜時の方を見つめる梅人。

「桜時っ…！！」

第５１章　終幕の二重奏　☆２

――――桜時っ…！！――――

「……っ」

力なくしゃがみ込み、深く俯いていた桜時が、ふと顔を上げた。

「誰っ…？」

「んっ…？」

顔を上げ、周囲を見回す桜時に、前に立つロムが少し眉をひそめた。

「誰っ…あっ…」

辺りを見回し、誰かを探していた桜時が、まだそこに広がっている過去の朱実の庭の中に、とある人物を見つけ、少し目を見開く。

「うっ…ううぅっ…」

「……。」

庭の片隅で、人知れず泣く幼い桜時を、ただまっすぐに見つめる人間。

「梅人っ…」

泣いている幼い桜時を、今の桜時のいるすぐ近くから見つめているのは、幼い梅人であった。

「なっなんでアイツがっ…？」

桜時と同じように幼い梅人の姿を見つけたロムが、表情をしかめる。

「あんなヤツ、映し出した覚えはっ…！」

「梅人っ…」

ロムが焦る中、桜時は、ただまっすぐに過去の桜時を見つめている過去の梅人を、まっすぐに見つめる。

「ううぅっ…」

「……。」

泣いている桜時を見ている梅人は、別に悲しい表情をしているわけではない。哀れみの表情をしているわけでも、嘲りの表情をしているわけでもない。ただ、曇りのない瞳で見つめている。少しも目を逸らさずに、まっすぐに見つめている。

――――だぁ～れもお兄ちゃんのことなんて見えてないっ…――――

そのまっすぐな瞳は、ただ泣いている桜時を、何の偽りもなく映し出している。

「……っ」

そんな過去の梅人を見て、桜時はそっと目を細めた。

「そっか…」

絶望しきっていた桜時の表情に、ゆっくりと笑みが浮かぶ。

「ずっと…そうやって…俺を見ててくれたんだなっ…」

声など届きはしないが、過去の梅人へと話しかける桜時。

「ずっとお前が…俺を認めていてくれたんだなっ…」
過去の梅人へと、伸ばされる桜時の手。

「梅人っ…」
「……っ」
桜時の呼びかけに、過去の梅人が振り向いた。

――――パシっ…！――――

「……っ！」

過去の梅人へと伸ばしていた桜時の手が、力強く握り返される。

「いつまで座り込んでるんだよっ？」

握り返されたその手の向こう側には、少ししかめた表情を見せた、今の梅人が立っていた。

「ヘボ桜時っ」
「……っ」
そう悪態づいて笑った梅人を見て、桜時も嬉しそうな笑みを浮かべる。
「油断すんなって言ったのは、そっちだろっ？」
「悪い悪いっ」
少し責めるように問いかける梅人に、軽く謝りながら、桜時が握ったままの梅人の手に引っ張られるようにして立ち上がる。
「ちょっとつけ込まれちまったわっ」
「まったくっ、これだから根暗イヌはっ」
「だっれが根暗だっ！」
呆れきった様子で言い放つ梅人に、桜時が顔をしかめて怒鳴りあ

げる。

「ロムっ…！」
「……っ」
梅人の相手をしていたレムが、不安げにロムの元へと駆け寄ってきたが、ロムは険しい表情で二人を見つめたまま、レムの方を振り返ろうとはしなかった。

「桜時っ」
「ああっ」
梅人の呼びかけに、桜時がしっかりと頷く。

『……っ』
一気に真剣な表情を見せて、高々とそれぞれの右手を挙げる桜時と梅人。

『“瞬花”っ…！！』

――――パァァァァァァァァーーーーンっ！――――

舞い散る赤と桃色の花びら。そこに存在していた朱実の過去を映し出していた空間が、一瞬にして花びらとなって散っていく。

「ぼっ僕らの空間がっ…」
散りゆく花びらの隙間から、徐々に見え始める元いた森の景色。

その景色を見回しながら、レムが焦ったように声を漏らす。
「僕らの作った空間がっ…！ロムっ…！」
「……っ」
レムが焦ったように声をかける中、どこか悔しげに唇を噛み締めるロム。

「茶番は終わりだよっ」
「この戦いも、そろそろ終わりにしようか…」
花びらの中、並んで立つ桜時と梅人が、双子に鋭い表情を向ける。

「ロム、レムっ…」
「……。」

静かに、どこか威圧するようにロムとレムの名を呼ぶ桜時に、ロムが少ししかめた表情となって、眉間に皺を寄せた。やがてすべての花びらが地面に落ち、穏やかな森の景色が周囲に戻る。

「ロっロムっ…！」
桜時の鋭い瞳に、少し怯えるような表情を見せて、レムが後ろからロムの服の裾を掴んだ。
「ここは一旦、逃げてまたっ…！」
「シルク様からの命令は…あいつを連れて帰ることだよ…」
「けっけどこの状態じゃっ…！」
「もう戦うしかない…」
ロムが冷静にそう言い放ち、裾を掴んでいたレムの手を取った。
「もう戦うしかないよ…」
「ロムっ…？」
ゆっくりと振り返るロムに、レムが少し首を傾げる。

「レムっ…」

「……っ！！」

名を呼んでレムの額に右手を伸ばすロムに、レムは大きく目を見開いた。

「ロっロムっ…！何をっ…！！」

「あいつらに勝つには…これしかないだろう…？」

「そんなっ…！」

触れるロムの手にあからさまに怯えながら、レムが必死の形相でロムを見つめる。

「ぼっ僕らはまだ完成形じゃないっ…！」

「完成形っ…？」

レムの言葉に、少し眉をひそめる桜時。

「一度あの姿になったらっ…！もう人間の姿には戻れないんだよっ…！？」

「そうだね…知ってる…」

レムの必死の訴えにも表情一つ動かさないロムの、レムの額に触れた右手が、徐々に白い光を放ち始める。

「やめてっ…やめてよっ…！僕はまだっ…！！」

「レム…僕らの命は何の為にあるの…？」

「……っ！」

取り乱していたレムが、ロムの言葉にハッとした表情を見せ、急に落ち着いたように大人しくなる。

「……。」

ゆっくりと俯いていくレム。

「……シルク…様の為にっ…」

「そうだよ…だから、何が何でもあいつを連れて帰らなくちゃ…」

「……っ」

ロムのその言葉に、俯いたレムは、少し迷うように唇を噛み締めた後、ゆっくりと噛み締めた力を抜き、そして、どこか諦めるように、一瞬、その金色の瞳を伏せた。

「……うんっ…」

「いい子だっ…」

頷いたレムに、ロムがどこか満足げに微笑んだ。

「“鬼化帰化”…」

「……っ！」

――――パァアアアアアアアーーーーンっ！――――

『うっ…！』

ロムの手から放たれ、レムの体を包んだ、白く大きな光のあまりの眩しさに、向き合っていた桜時と梅人が思わず目を細め、身を屈める。

「グゥゥゥゥゥゥっ…」

『……っ』

聞こえてくる人ならざるものの声に、桜時と梅人が目を開き、表情をしかめた。

「グゥゥゥゥゥっ…ガアアアアアアアっっ！！」

『……っ！』

ロムの横に立ち、激しい咆哮をあげたのは、灰色の皮膚を持った一匹の鬼であった。頭から生えた二本の銀色の角、鈍く光る金色の瞳。そして巨大な牙と爪。普通の鬼よりも一回り小さい、鬼の子供のようなその鬼。瞳の金色が、どこかレムの瞳の色を思い出させた。

「鬼人化人間っ…」

「……っ」

まだ鬼人化人間の事実になれず、少し唖然としている梅人の横で、一際厳しい表情を見せている桜時。

「お前っ…！双子の片割れをっ…！うっ…！」

「……。」

桜時がロムの方を見ると、そこには自らの額に白く光る手を当て、子供とは思えないほどに冷え切った表情を見せた、ロムの姿があった。

「何をっ…！」

光の増すロムの手に、桜時が思わず身を乗り出す。

「すべては…シルク様の為に…」

ロムの手から放たれた白い光が、ロムの体全体を包んでいく。

「やめっ…！」

「“鬼化帰化”っ…！！」

――――パァァァァァァァァァーーーーンっ！――――

「ううっ…！」

思わず飛び出していこうとした桜時の足が、放たれた強い光に止められる。

「グガアアアアアアアアアアっっ！！！」

「……っ！」

激しい咆哮とともに、白い光の中から現れたのは、灰色の皮膚に一本の金色の角の生えた、銀色の瞳の鬼。ロムと同じ銀色の瞳をした、子供の鬼であった。

「自らっ…鬼にっ…」

「……っ」

茫然と呟く梅人の横で、桜時が強く唇を噛む。

「なんでっ…」

問いかけとともに、強く握り締められる拳。

「なんでっ…あんな女の為なんかにっ…！」
『グガアアアアアアアアアアアっっっ！！！』
桜時の声は、二匹の鬼の咆哮を前に、どこか虚しく響き渡った。

「アハハっ、どっちも鬼になっちゃったっ」
白い壁に映し出されている、桜時・梅人と、ロム・レムとの戦いの様子。それをゆったりと傍観しているギンが、二匹の鬼の姿にどこか楽しげに笑う。
「これは面白い展開ですねぇ～っ」
「ギンっ…」
「……っ」
自分の名を呼ぶ声に、ギンが笑みを止めて、少し眉をひそめ、後方を振り返る。そこにはあまり無い表情で、少し不機嫌さを表している諸刃の姿があった。
「ハイハイっ、不謹慎でしたっ。すみませんっ」
「……。」
まったく気の入っていない謝り方をするギンに、諸刃の表情がさらに引きつられる。
「でも鑑賞は許して下さいよっ」
そう言葉を続け、ギンが再び、戦いの映し出されている壁の方を

見つめる。
「彼らの最期の晴れ舞台なんですからっ…」
「……っ」
そう呟いて冷たく微笑むギン。諸刃にギンの微笑みは見えていないが、微笑んでいることが伝わったのか、その言葉自体にか、諸刃は顔をしかめた。

「諸刃…」
『……っ』

諸刃のさらに背後から響く声に、諸刃とギンが同時に振り返った。

「シルク様…」
二人の振り返った先に立っていたのは、相変わらず髪も肌も服も真っ白の、シルクであった。シルクの姿を確認すると、二人が素早くその場に膝をつく。

「出掛けるわ…付いて来なさい…諸刃…」
「えっ…？」
壁に映し出されている鬼と化したロムとレムの姿になど目もくれず、諸刃にその言葉だけを言って、すぐさま背を向け、歩き出していくシルク。

「シっ…シルク様っ…」
諸刃が立ち上がり、素早くシルクの後を追う。

「どちらへ…？」
「付いて来ればわかるわ…」
諸刃がシルクのすぐ後ろに立ち、問いかけると、シルクは素っ気ない返事を返した。

「……。」

そんなシルクの背中を見つめながら、少し躊躇うように目を細める諸刃。少しの時間を置いた後、諸刃が決めたように顔を上げる。

「ロムとレムの戦いを…ご覧にならなくて良いのですか…？」

諸刃が躊躇っていた問いかけを、シルクへと向ける。

「……。」

その場で足を止め、シルクがゆっくりと振り返る。

「……必要ある…？」

「……っ」

心底不思議そうに聞き返したシルクに、諸刃は少し目を開いた。シルクはすぐに諸刃に背を向け、再び前方へと歩き出していく。

「……。」

遠ざかっていくシルクの背中に、諸刃はどこか悲しげに俯いた。

第５１章　終幕の二重奏　☆３

――――母さんは、僕にそう言った。

「愛してる…愛してるわっ…」

何度も僕にそう言った。

「愛してるのよっ…？ロムっ…！」

何度もそう言いながら、何度も僕を叩いた。

「やめてっ…やめてよっ…」

「愛してるっ…愛してるっ…！愛してるっ…！！」

その言葉を囁けば、その言葉を叫べば、僕を叩くことが許されるとでも思っているのだろうか。僕が“やめて”と叫ぶほど、母さんは僕を叩いた。

「やめてっ…やめてよっ…！母さんっ…やめっ…！！」

「やめてよっ！！」

「……っ」

止めに入ってきたのは、僕の双子の片割れ。

「やめてっ！！ロムをぶたないでっ！！お母さんっ！！」

「レムっ…」

弟の必死の叫びに、僕を叩いていた母さんの手が止まった。

「レムっ…愛してるわっ…」

「えっ…？」

「……っ！」

止まった母さんの手が、弟へと伸びていく。

「愛してるわっ…！！レムっ…！！」

「ううっ…！」

「レムっ…！！」

母さんは僕に対してと同じように、その言葉を吐きながら、僕に対してと同じように、弟を叩いた。何度も何度も、叩いた。

それから僕は、“やめて”と言うことを、やめた…――――

「グゥゥゥゥっ…“鬼口”っ…！！」

「……っ」

向かってくる鬼口に、梅人が目つきを鋭くして、両手を突き出した。

「“瞬花”っ…！」

――――パァァァァァァァァーーーーンっ！――――

真っ赤な梅の花びらとなって舞い散る、梅人に放たれた鬼口。

「クっ…！」

鬼口を放った、かつてロムであった銀目の灰鬼が、散る花びらに、表情をしかめた。

「このっ…！」

ロムが梅人へ向けて、鋭い鬼爪を振り上げる。

「“鬼爪っ…！」

「村雨丸っ…！」

「何っ…！？」

梅人へと振り下ろす前に、鬼爪へとぶつかってくる、一本の刀。

走る衝撃に、ロムがさらに表情を引きつって、勢いよく顔を上げた。

「お前はっ…！」

「……っ」

見上げた先にいるのは、村雨丸を振り下ろした、鋭い表情の桜時。

「ロムっ…！」

桜時からの攻撃を受けているロムの姿に、レムであった金色の瞳の灰鬼が、少し焦った表情を見せて、駆け込んでいこうとする。

「ストップ」

「うっ…！」

ロムの元へと駆け込んでいこうとするレムの前へと、立ちはだかったのは梅人。

「君の相手は僕だよ」

「クっ…！」

鋭い瞳を向けてくる梅人に、レムが唇を噛み締め、勢いよく両腕を振り上げた。

「狙いは自分だからってっ…！攻撃されないとでも思ってるんじゃないのっ…！？お兄ちゃんっ…！」

レムが振り上げた腕の先を、梅人へと向ける。

「こっちは生きていれば虫の息でもいいって言われてるんだよっ…！？“鬼爪っ…天回”っ…！！」

梅人へ向けて、両手の十本の爪を放つレム。

「……。」

梅人が向かってくる１０本の爪を、冷静な表情で見つめながら、ゆっくりと両手を突き出した。

「“瞬花っ…終掌”っ…！！」

――――パァァァァァァァァーーーーンっ！――――

「うっ…！」

真っ赤な花びらとなって散る、十本の鬼爪。レムがその表情を引きつる。

「チィっ…！」

レムが鬼爪を再生させようと、両手を胸の前で交差させる。

「無駄だよ…」

「何っ…！？」

「“梅扇（ばいせん）”っ…」

梅人が服の裾から滑らせるようにして取り出したのは、二枚の扇。

梅人が舞うようにして扇を広げると、そこには鮮やかな梅の花が描かれていた。

「扇っ…？」

「……っ」

レムが戸惑いの表情を見せる中、梅人が二枚の扇を構える。

「“梅雨（ばいう）っ…」

赤く輝き始める二枚の扇を、梅人が高々と振り上げる。

「漸扇（ぜんせん）”っ…！！」

そして勢いよく振り下ろすと、二枚の扇から、無数の赤色の光が、まるで豪雨のように激しく放たれた。

「ううっ…！！」

その光のスピードに、鬼爪を再生させることも、避けることも出来ないレムの、顔が恐怖へと歪む。

「ロっ…ロムっ…！！」

救いを求めるように、片割れの名を呼ぶレム。

――――バァァァァァァァァァーーーーンっ！――――

「ウガアアアアアアアアっっ！！！」

レムが雨のような真っ赤な刃に斬り裂かれ、すでに人間のものではない紫色の血を流して、後方へと倒れ込んでいく。

「レムっ…！！」

倒れていくレムの姿に、刃を交えている最中とはいえ、視線を逸らしてしまうロム。

「クっ…！」
「もうやめろっ…」
「……っ」

何とか村雨丸を振り切ろうとしたロムが、目の前で囁かれたその言葉に、振り切ろうとした手を止めた。

「ロムっ…」

ロムへと真剣な表情を投げかける、村雨丸を振り下ろしたままの桜時。

「……っ」
そんな桜時のどこか哀れむようなその視線に、ロムは煩わしそうに顔をしかめた。

「何っ…？何をやめろって言っ…」
「お前らは“完成形”じゃない…レムがそう言ったな…？」
「……っ」

桜時の言葉に、ロムが少し驚いたように目を開く。

「一度鬼人化したら元には戻れない…不完全な鬼人化人間っ…」
鋭い瞳で、言葉を続ける桜時。

「それはお前らが不完全なわけじゃなく…“子供”を鬼人化させたから、不完全なんじゃないのかっ…？」

「……っ！」

問いかける桜時の言葉に、冷静だったロムの表情が、明らかに動揺した。

「だから粘っランドで子供だけを人のまま残し、成人したその日に鬼人化の儀式を行った…」

――――成人の儀っ…？――――

――――天照様から、太陽の神のご加護をいただくのです…――――

偽りの神・シルクによる、恐ろしき鬼人化の儀式。そう考えると、あの派手な儀式の意味も頷ける。

「お前らの力は、他の鬼人化人間に比べると少し弱い…体も一回り小さいしな…」

どこか余裕すら感じる口調で、言葉を続ける桜時。必死の戦いを繰り広げているように見せて、しっかりとロムとレムの力を分析していたようである。

「違うかっ…？」

「……っ」

問いかける桜時に、ロムは答えることなく俯き、どこか悔しげに唇を噛んだ。その態度を見れば、答えなくとも、桜時の言葉が正しかったことが伝わってくる。

「そうなんだな…」

黙り込んだロムから、確信を感じ取る桜時。

「なら、もうやめろっ…ロムっ…」

桜時が再び、ロムにその言葉を向ける。
「お前らの力じゃっ、俺たちにはっ…」
「“勝てない”って…？」
「……っ」
桜時の言おうとしていた言葉を口にするロムに、桜時が少し顔をしかめた。
「そう…言うつもり…？」
深く俯いていたロムが、ゆっくりと顔を上げる。
「お兄ちゃんっ…」
「……っ」
恐ろしいまでに冷たい表情を見せる異形の鬼。その鬼の低く重い声に、“お兄ちゃん”と呼ばれることに、少し違和感を覚える。
「冗談じゃないっ…あんまり僕らをナメないでよねっ」
ロムが吐き捨てるように、桜時に言葉を向ける。
「僕らは負けない…シルク様のご命令を果たすまではっ…」
「……っ」
シルクの名を出す時に、より一層強く輝く、人の時と同じ銀色の瞳。そのただならぬ意志を感じる瞳に、桜時は少し眉をひそめた。
「なんでだっ…？」
自然と零れ落ちる、問いかけ。
「実の母親を手にかけて…人間の姿を捨ててっ…」
険しい表情を見せる、桜時。
「なんでそこまでっ…あんな女に従うっ…？」

「……。」
桜時の問いかけに、そっと目を細めるロム。
――――愛しているわっ…ロムっ…――――
「……っ」
呪いのように響くその言葉に、ロムは一瞬だけ目を伏せる。
「……。」
ロムがまた、その強い瞳を開いた。
「お兄ちゃんにはっ…一生わからないさっ…」
そう呟いたロムが、そのまま大きく口を開く。
「うっ…！」
大きく開いた口を向けられ、桜時が何かを察したかのように、表情を強張らせる。
「“鬼口”っ…！！」
「クっ…！」
至近距離で放たれる鬼口に、桜時が慌てて鬼爪から村雨丸を離し、勢いよく横へと飛んだ。
「ううっ…！」
横へと避けた桜時の右腕を、放たれた鬼口がかすめる。右腕から血を流しながら、桜時は力なく地面へと着地した。

「桜時っ…！」
傷を負った桜時に、思わず身を乗り出す梅人。

「大丈夫っ…？レム…」
「ロムっ…」

「……っ！」
いつの間にか倒れたレムのすぐ横に現れるロムに、桜時の方を見ていた梅人が、少し驚いたように振り返る。

「何とかねっ…」
「アレは使える…？」
「うん…大丈夫だよっ…」
そう言葉を交わしながら、ロムの手を借りて立ち上がるレム。握り合う二匹の鬼の手を、徐々に白い光が包んでいく。

「何をっ…！」
二匹の様子に何かを察知し、慌てて両手の扇を構える梅人。

『もう遅いよっ』
「……っ！」

梅人が扇を振り上げ、技を繰り出すその前に、ロムとレムは握り合った、その白く輝く手を、傷を負ってしゃがみ込んでいる桜時へと向けた。

『“移次元（いじげん）”っ…！！』

「うっ…！」

「桜時っ…！！」

桜時へ向けて放たれる白い光。桜時が少し顔をしかめ、梅人が横切る光を目で追いながら、必死に身を乗り出す。

「クっ…！」

村雨丸も突き出せぬまま、迫り来る白光に、桜時は少し歯を食いしばった。

――――バァァァァァァァァァァァーーーーンっ！――――

「桜時っ…！！」

ロムとレムの技を直撃し、白い光の中へと、消えていく桜時。

「桜っ…！」

「無駄だよっ」

「……っ」

桜時を包んだ白光の元へと駆けていこうとした梅人が、背後から聞こえてくる声に、足を止めて振り向いた。

「お兄ちゃんは…こことは違う次元へと移された…」

「行ったら最期…もうこちらの次元へ戻ってくる術はないよ…」

「そんなっ…！」

二匹の鬼の言葉に、衝撃を走らせる梅人。

「桜時っ…！うっ…！」

梅人が再び振り返ると、桜時を包んだ白光は、どこへともなく消えてしまった。

「……。」

「もう二度と会うこともないだろうね…」

「残念っ…」

茫然と立ち尽くす梅人に、二匹の鬼はどこか冷たい笑みを向ける。

『さぁ、行こうかっ…』

梅人へと伸ばされる、二匹の鬼の手。

『お兄ちゃんっ…』

「クっ…！」

桜時を消され、一気に不利となったこの状況に、梅人は唇を噛み締めながら両手の扇を構え直し、少し後ろに後ずさりながら、戦う姿勢を取った。

「……っ」

その時、ふと横をひらめく何かに、梅人が思わず振り向く。

「……っ！」

振り向いた梅人が、大きく目を見開く。

「これはっ…」

空中を舞う、雪のような桃色の物体。

「さくらっ…」

舞い散る桜の花びらに、梅人が目を見張る。

――――ピキピキピキっ…――――

「何っ…？」

突如、ヒビの入る森の景色に、ロムが眉をひそめる。

「まさかっ…」

「“伝光っ…」

ロムとレムが険しい表情で見つめる中、景色に入ったヒビの奥から、聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「……っ刹花”っ…！！」

――――パァァァァァァァァァーーーーンっ！――――

『……っ！！』

ヒビから広がるようにして、鮮やかな桃色の花びらが飛び出すと、降り注ぐ花びらの向こうから、異空間に飛ばされたはずの桜時が姿を現した。

「そっそんなっ…！」

「僕らの空間をっ…」
驚きの表情で桜時を見つめるロムとレム。
――――パァァァンっ！パァァァンっ！パァァァンっ！――――
「……っ」
空間そのものを桜に変えて、戻って来たその桜時の力に、まるで呼応するかのように、周囲の青々とした木々が、満開の桜の木へと変わっていく。次々と咲き乱れていく桜の花を見回しながら、梅人は少し圧倒されたように目を細めた。
「それこそっ…次元が違うっ…」
咲いたばかりの一本の桜の木を見上げ、梅人が思わず呟く。
“花力”なんて…レベルじゃないっ…」
梅人が少し困惑するように、その桃色の花を見つめた。
「さぁっ…」
まだ桜の花びらの舞い散る中、この空間へと戻って来た桜時が、地面に突き刺すように下に向けていた村雨丸を、ゆっくりと持ち上げる。
「そろそろ…本当に終わりにしようか…」
「……っ」
村雨丸を構える桜時に、ロムが少し唇を噛む。空間に閉じ込める

ことも出来ない。最早、ロムとレムに、桜時に勝つ術はなかった。

第５１章　終幕の二重奏　☆４

「ロっロムっ…！二人で同時に鬼口をっ…！」
「……。」
「ロムっ…！？」
見えた勝敗に戦意すら失ったのか、レムの呼びかけにまったく答えようとはせず、ただ桜時を厳しい表情で見つめるロム。

「ロムっ…！！」
「〝柔桜っ…」
「……っ」

必死にロムに呼び掛けていたレムが、周囲の桜の花びらを纏いながら、村雨丸を振り上げる桜時に気づき、振り向く。

「……っ無塵〟っ！！」
「……っ！」

振り下ろされた村雨丸から放たれた桃色の一閃が、周囲の花びらを纏って徐々に勢いを増し、大きくなってロムとレムの元へと向かってくる。向かってくる巨大な桃色の光に、表情を強張らせるレム。

「クっ…！」
「……っ！レムっ…！？」

少し唇を噛んだレムが、戦意を喪失し、立ち尽くしていたロムの前へと出る。そんなレムを見て、驚いたように目を見開くロム。

「何をっ…！レムっ…！」
ロムを庇うように前へと立ったレムに、迫り来る桜時の力。
「……っ」
レムが決意したように、そっと目を伏せた。
――――バァァァァァァァァァァァーーーーンっ！――――
「ウガアアアアアアアっ！！」
「レムっ…！！」
桜時の技を直撃したレムが、激しく血を流して後方へと倒れ込んでいく。倒れていくレムに、ロムは必死の表情で駆け寄った。
「レムっ…！レムっ…！！」
「ウウっ…」
「……っ？」
倒れたレムへと駆け寄ったロムが、傷を負ったレムの体を包んでいく、淡い桃色の光に眉をひそめる。
「ウウっ…うっ…」
「これはっ…」
桃色の光に包まれたレムの皮膚が、灰色の鬼の皮膚から、徐々に人の肌へと、崩れ落ちるように変わっていく。苦しげに歪むその表

情も、恐ろしい鬼の顔から、あどけない少年の顔へと変わっていく。
そんなレムの様子に、さらに表情を曇らせるロム。

「俺の刀を受ければ、お前も人間に戻れるっ…」
「……っ」
背後から聞こえてくる声に、レムを抱えながら振り返るロム。ロムが振り返ると、そこには村雨丸を下ろし、ロムに真剣な眼差しを向ける桜時の姿があった。
「人間にっ…？」
桜時の言葉に、ロムが怪訝そうに首を傾ける。

――――欲しいものを…見つけたから…――――

「まさかっ…」
何か思い当たることがあるかのように、そっと俯くロム。

「人間に戻って、やり直すんだっ…」
「……っ」
その言葉に、俯いていたロムが、再び顔を上げた。

「ロムっ…」
「……。」

桜時の曇りのない、まっすぐな瞳。その見るだけで眩しく感じる瞳と向き合いながら、ロムが少し迷うように目を細める。

「ロっ…ム…」
「……っ」
下方から聞こえてくる弱々しい声に、ロムがすぐさま反応し、顔

を下へと向けた。
「レムっ…」
ロムの手の中には、すでに人の姿へと戻った、傷だらけのレム。
「ロム…」
レムが、その小さな肌色の手を、ロムの灰色の鬼の皮膚へと伸ばす。
「手をっ…」
「えっ…？」
レムの思いがけない言葉に、ロムが少し戸惑うように聞き返す。
「爪…を…ロムっ…」
「……っ」
そっと微笑むレムに、ロムが大きく顔をしかめた。
「けっけどっ…！」
「お願い…」
「……っ」
願うレムに、何とも辛そうに歯を食いしばるロム。
「……。」
少しの間を置いた後、ロムはどこか諦めたように目を伏せた。
「……っ」
「えっ…？」
ゆっくりと爪を振り上げるロムに、桜時が表情を強張らせる。
「おいっ…！何をっ…！」
「さようならっ…」

「……っ」

「レムっ…」

そっと微笑んだレムに、振り下ろされるロムの鬼爪。

――――ブシュっ…！！――――

『……っ！！』

飛び散る鮮血。人に戻ったレムの小さな体を、大きく貫いた片割れの鬼爪。その考えてもみなかった光景に、桜時と梅人は大きく目を見開いたまま、少しも動くことが出来なかった。

「先に…逝ってるね…」

自分の体を貫いた鬼爪に、そっと手を触れるレム。その手が、砂となって崩れていく。

「ロム…」

最期に子供のままの穏やかな笑みを浮かべて、レムは完全に砂と化して、ロムの大きな鬼の手の隙間を、さらさらと零れ落ちていった。

「……。」

手の中から零れ落ちた砂を見て、ロムが少し目を細める。

「先に逝ってて…レム…」
そう呟き、ロムがゆっくりと立ち上がった。

「なんでっ…」
立ち上がったロムの背中を見つめながら、困惑した様子で呟く桜時。
「なんでっ…！」
みすみす殺させてしまったことへの悔しさか、桜時が強く拳を握り締めた。

「なんでっ…？」
「……っ」
桜時の言葉を聞き返しながら、ロムが桜時の方を振り返る。その鬼の表情に悲しみの色はない。それどころか、感情一つ、感じられなかった。
「僕らはねっ、お兄ちゃんっ…」
鬼の重く低い声が、子供のように桜時に親しげに話しかける。

「母親よりも…魔女を選んだんだっ…」
「えっ…？」

ロムの言葉に、眉をひそめる桜時。

「魔女を…選んだんだよっ…」

――――何度、夜が来ても、何度、朝が来ても、母さんが僕を叩く日々が、終わることはなかった。

「愛してるっ…！愛してるわっ…！」

今日も響く、その呪いのような言葉。

「愛してるのよっ…！！ロムっ…！！」

「……。」

麻痺したのは、体か感覚か。痛みすら感じなくなった僕は、いつからか抵抗すらしなくなった。

「愛してっ…！うぅぅっ…！！」

「……っ？」

その言葉の途中に、母さんは突然、苦しみ出した。

「ううぅぅっっ…！！」

「お…母さん…？」

「ううっ…ウウウっ…！ウグガアアアアアアアアアっ！！！」

「……っ！」

そして母さんは、僕の目の前で、深緑色の皮膚に、角の生えた巨大な化け物へと、姿を変えた。

「グガアアアアアアアアっっ！！」
「……。」
化け物となった母さんを、唖然と見つめていた。哀しみも恐怖もなかった。目の前から、僕を叩く母さんが消えた、それだけが事実だっだ。
「……っ」
化け物となった母親の後方に立っていたのは、白く長い髪に真っ赤な瞳の、人外な美しさを持った、女の人。
「あなた…は…？」
その美しさに少し圧倒されながら、僕はゆっくりとした口調で問いかけた。
「私の名はシルク…」
「シルク…？」
体全体に響き渡った、その名。
「私と一緒に…来ない…？」
「……っ」
差し出されたその、髪と同じように白く細い手を、僕は何故か、少しも迷わずに取った。母親を化け物へと変えたその手に、少しの恐怖もなかった。
僕は、その人に付いていった。もちろん、レムも一緒に。

「はぁっ…！！」

僕らが付いていって数ヵ月が経ったというのに、僕は毎夜、夢に魘された。悪夢から飛び起きるように、目覚めた。僕の全身から、汗が零れ落ちる。

「はぁっ…！はぁっ…！はぁっ…！」

夢の内容は、いつも同じ。母さんが僕を叩く、“愛してる”と言って僕を叩く、そんな夢。

「はぁっ…」
「また夢…？」
「……っ」

振り返ると、僕の寝台の横に、その人が立っていた。真っ赤な瞳が、僕を捉える。

「何に怯えているの…？」

僕の頬に触れる、まったく体温のない、その白い手。

「貴方を叩く者は…もういないのに…」
「……。」

まったく感情の見えない、その瞳を見つめていると、妙に心が落

ち着いた。

「ロム…」

「……っ？」

名を呼ばれ、僕がゆっくりと振り返る。

「愛してるわ…」

「……っ」

それは、僕の呪いの言葉。

「愛してるわ…ロム…」

その言葉を言われて、叩かれなかったのは、それが初めてだった。

満たされた。ただ、どうしようもないほどに。

何を捨ててもいいと、思えるほどに…――――

叩くばかりの母親の手を捨て、体温のないあの冷たい手を選んだ、

過去の日。

――――愛してるわ…ロム…――――

呪いの言葉。母親からの呪縛。そして今も、ロムの心を確かに満たす、たった一つの呪縛。

「人として生きることよりも…鬼として生きることを選んだんだっ…」

「ロムっ…」

言葉を続けるロムを、桜時が少し目を細めて見つめる。

――――僕らを鬼に…？――――

――――ええ…私の願いを叶えて欲しいの…――――

たった一人の人の願いを叶えるため、人の姿を捨てた。片割れにも、人の姿を捨てさせた。

――――母さんを…？――――

――――ええ…もう必要ないから…殺してきて…――――

鬼となった母親を、手にかけた。

――――先に逝ってるね…ロム…――――

ずっと一緒に生きてきた片割れまでも、手にかけた。

「……。」

ロムが強く、拳を握り締める。

「今更、人としてなんてっ…生きていけないんだよ…」

「……っ」

強い意志を感じる、その銀色の瞳に見つめられ、桜時は何も言葉を放つことが出来なかった。“そんなことはないよ”とか、そんな安っぽい言葉を並べることに、もう意味はないと、そう理解していた。

「だから僕は戦うっ…」

ロムが急に、その表情を鋭くする。

「あの人の願いを叶えるためにっ…！」

「……っ！」

桜時へ向け、大きく口を開くロム。

「“鬼口”っ…！ガアアアアアアアアっっっ！！！」

桜時へと放たれる、ロムの鬼口。

「……。」

「桜時っ…！」

ただ立ち尽くしたままの桜時に、迫り来る鬼口。横から見ていた梅人が、動かない桜時に、少し焦ったように身を乗り出す。

「……っ」

ゆっくりと顔を上げ、向ってくる鬼口を、険しい表情で見つめる

桜時。その時の桜時に、ロムにかける言葉は見つけられず、その時の桜時に、村雨丸を構える以外に道はなかった。

「村雨丸っ…」

桜時が鬼口へ向け、村雨丸を構える。

「“柔桜っ…」

振り上げた村雨丸を、桃色の光が包んでいく。

「……っ無塵”っ…！！」

桜時が村雨丸を振り下ろし、向ってくる鬼口へ、強い桃色の光を放つ。

――――パァァァァァァァンっ！――――

「……っ」

二つの力は一瞬だけぶつかり合い、桜時の桃色の光が、あっという間にロムの鬼口を砕いた。

「ああっ…」

最後の攻撃を砕かれ、自分の方へとまっすぐに向ってくる桃色の光を、ロムが目を細めて見つめる。

「レムっ…」

――――バァアアアアアアアアアーーーーンっ！――――

「ウウっ…！！」

桜時の放った刃が、ロムの体を斬り裂く。

「ウウゥっ…！うっ…！」

流れる血の色が、紫色から赤色へと変わっていき、傷だらけの鬼の体が、小さな少年の体へと変わっていく。

「うっ…ううっ…」

人の姿へと戻りながら、何とか倒れ込まずに、その場に踏み止まるロム。

「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」

乱れた呼吸で肩を大きく揺らしながら、ロムが、まだ人の形に戻っていない、鋭い鬼爪の伸びた大きな右手を、ゆっくりと振り上げた。

「あっ…！」

「……っ」

思わず身を乗り出す梅人と、強く唇を噛み締める桜時。

「……っ！」

ロムは少し食いしばるように表情を固め、自らの体に、勢いよく、その残った鬼の爪を振り下ろした。

――――ブシュっ…！！――――

「うっ…」

ロムの体を貫くと、その鬼爪も元のロムの小さな手へと戻った。激しく血の流れる中、ロムが力なくその場にしゃがみ込む。

「今っ…ならっ…」

少年のあどけない表情の、その口元から血を流しながら、ロムがそっと呟く。その体はすでに砂化を始め、体の下から徐々に崩れ落ち始めていた。

「笑顔でっ…貴女のもとへ…逝けるのかなっ…？」

――――愛してるわ…ロム…――――

「……お母さんっ…」

少し笑みを零して母を呼び、ロムがそっと目を閉じる。

――――パァァァァァァァァーーーンっ！――――

そして、ロムは、砂となって、消えていった。

「あぁ～あっ…」

壁に映し出された映像で、ロムとレムの戦いを閲覧していたギンが、欠伸をするように大きく口を開いた。

「意外とつまらない結末でしたねぇ～っ」

残念そうに細められる、その冷たい瞳。

「さようならっ…」

そっと緩む、ギンの口元。

「愛されなかった双子さんたちっ…」

ギンがそう呟いたその瞬間、壁に映し出されていた映像が、真っ黒な画面へと変わった。

第５２章　魔女の望み　★１

オトポリ・研究塔。

「サソリの女だけがっ…人間にっ…」

ゴンの目の前で眠る、一人の女。それはかつて鬼であった人間であり、突如、人の姿に戻ったという。他にも何人かいるのならまだしも、この女だけが戻ったということが、さらにゴンの頭を混乱させていた。

「単なる偶然かっ…それともっ…」

「ちょっ…！ちょっとっ！困りますっ！！」

『……っ？』

入口の方から聞こえてくる騒がしい声に、気難しい表情を見せていたゴンとリンゴが同時に振り返った。

「通してくんないと、こっちも困るんだよっ！」

「ここは一部の隊員以外はっ…！」

「緊急事態なんだってばぁっ！！」

「お前らはっ…」

入口に立つ警備隊員に必死に食らいついているのは、松人と竹人であった。見覚えのある二人の顔に、ゴンが少し驚いたように目を丸くする。

「確かっ…ハチ公の成金イトコの兄貴どもっ…」

『あっ！不良警官っ！！』

「だっれが不良だっ！！」

声を揃える松人と竹人に、ゴンが勢いよく突っ込みを入れる。

「誰っ？」

「ハチ公の従兄弟だっ。朱実のお坊ちゃんどもだよっ」

「ああ、どおりで見覚えがっ」

問いかけたリンゴが、ゴンの答えに納得したように頷く。

「私の知り合いよ、通してっ」
「はっはいっ！！」
リンゴがそう命じると、警備隊員はあっさりと二人を部屋の中へと通した。
「ふぅ～っ！良かったぁ～入れてっ！」
「折角、全力で走ってきたのに、入れないとか悲しいもんねぇ～っ！」
「全力でっ…？」
ホッと一息ついている二人の言葉に、ゴンが眉をひそめる。
「何だよっ？何かあったのかっ？」
『うんっ、何かあったみたいっ』
「その何かを言えよっ！！」
ゴンの問いかけに、まるで他人事のように興味なさそうに答えを返す松人と竹人に、ゴンが再び勢いよく怒鳴りあげた。
「みんなが帰って来ないんだよぉ～うちの梅ちゃんと桜ちゃんを含めぇ～っ」
「えっ…？」
「輝矢たちがっ…？」
その言葉に、ゴンとリンゴの表情が一気に険しくなる。
「それで桃タローさんが追って行ったって、それを長官さんに言ったら、もうオトポリ中、大騒ぎでさぁ～」
「タローさんがっ！？」
松人の言葉に、ゴンも座黒と同じように大きく驚く。
「あの何にも動じずに、いっつもココアばっか飲んでる人が自ら動くなんてっ…」
「よっぽど緊急事態なのねぇ～一体、何がっ…」
――――白き魔女、牢戸知玖…――――
『……っ』

導き出される一つの答えに、ゴンとリンゴの表情が凍りつく。
「まっまさかっ…」
『へっ？』
明らかに様子の変わった二人を、戸惑うように見つめる松人と竹人。
「報告いたしますっ！」
『……っ？』
そこへ、新たなオトポリ隊員が駆け込んでくる。
「雀国主三男・朱実梅人が、牢戸知玖の手の者により、さらわれたもようっ…！」
『……っ！』
「梅ちゃんがぁぁっ！！？」
「梅人クンがぁぁぁっ！！？」
隊員の報告に、ゴンとリンゴが大きく目を見開き、松人と竹人が狂ったかのような大声を出す。
「竹取輝矢一行がそれを追跡っ…！現在、森で戦闘中のようですっ…！！」
「輝矢たちがっ…」
リンゴが眉間に皺を寄せる。
「うわぁ～んっ！梅人クン、どうなっちゃうのぉ～っ！？」
「梅ちゃんがいなくなったらっ、僕らのハーモニーがっ…！ハーモニーがぁっ…！！」
「ああぁーっ！！もううっさいわねっ！！少し黙ってなさいっ！！」
『……。』
リンゴの鬼のような形相に、泣きついていた松人と竹人が一気に大人しくなる。
「けど確かに、なんであの女が朱実梅人をっ…」
少し眉をひそめたリンゴが、考え込むようにそっと俯く。
「あの女の狙いは“花力”ってことっ…？」
「いやっ…」

「えっ？」
リンゴの言葉に、すぐに返って来る否定の声。その声にリンゴが顔を上げ、振り向く。そこには、同じように考え込むような表情を見せたゴンの姿があった。
「“花力”が狙いなら、他にも該当するヤツはいるはずだっ…」
「僕らとかねぇ～っ」
「そっそれもそうねっ」
暢気な顔で口を挟む松人を見て、リンゴが納得するように頷く。花力は確かに変わった力ではあるが、歴代の朱実家一族、皆が持っている者なのだから、今更、シルクが改めて狙うようなものとも思えない。
「それにっ…花力を狙うんなら、もっと前に桜時を狙ってただろうしっ…」
「……っ」
そのリンゴの言葉に、突然、ハッとした様子で、大きく目を見開くゴン。

――――ゴンっ…輝矢がっ…――――
――――ここ、砂漠だったわよねっ…？――――
――――あの子の力は…本当に“花力”っ…？――――
――――その力の名は…“命力”っ…――――
――――成金イトコが、竹取どもと一緒にネバーランドへぇっ！？
――――
――――なんでこの女だけがっ…人間にっ…？――――

すべての出来事が、一本の線で繋がっていく。

「全隊員はすぐに正門前に集合、隊を結成して、森へ向かうとのことですっ！」
「わかったわっ」

続く隊員の言葉に、しっかりと頷いたリンゴが、ゴンの方を振り返る。

「ゴン、鬼人化人間のことは一先ず置いといて、今はとりあえず集合をっ…」

「……っ！」

「えっ…？」

リンゴの言葉を勢いよく無視し、その場を猛然と駆け出していくゴン。

「ちょっ…！ゴンっ…！？」

リンゴが止める間もなく、ゴンはその部屋を、研究塔を駆け抜けていく。

――――なんであの女が朱実梅人をっ…――――

「違うっ…！」

研究塔を出て、オトポリの中庭を全力で駆け抜けながら、思い出されるリンゴの言葉に、思わず首を横に振るゴン。

「あいつのっ…！」

その表情に浮かぶ、今までにないほどの焦り。

「あの女のっ…！本当の狙いはっ…！」

「……。」

静かな表情で、下方を見つめる桜時。子供が砂場で遊んだ時に作る、砂の山のような小さな墓に、桜時と梅人は、“花力”で咲かせた色とりどりの美しい花を供えた。両手を合わせ、そっと目を伏せる。降り注ぐ雨は、まるで二人の涙のようで、今はただ、二人一緒に安らかに眠れることを、祈るばかりであった。

「これで…良かったのかな…？」

目を開いた桜時が、横に立つ梅人にそっと問いかけた。

「良かったんだよっ…」

同じように、目を開く梅人。

「きっと…」

「……。」

合せていた両手を下ろし、二人は改めて小さな墓を見下ろした。

――――バァァァァァーーンっ！――――

『……っ？』

遠くの方から聞こえてくる何かの衝撃音に、墓を見下ろしていた二人が同時に振り返る。静かな森に響く、戦いの音。桜時たちの戦いは終わったが、皆はまだ戦っている。

「……っ」

その音に、桜時が少し目を細め、厳しい表情を見せる。

「……。」

そんな桜時を、まっすぐに見つめる梅人。

「行きなよっ」

「えっ？」
梅人の言葉に、桜時は驚いた表情で振り向いた。
「行ってきなよっ、仲間のところへっ」
「あのなぁっ」
少し笑みを浮かべながら言う梅人に、桜時が困ったように表情をしかめ、右手をあげて頭を掻く。
「わかってんのかぁっ？今っ、お前はあの女に狙われててだなぁっ…！」
「大丈夫だよっ、他に敵の気配もしないしっ」
必死に訴えかける桜時に、梅人は焦りの表情なく言い放つ。
「桃タローの家に戻ってればいいんだろっ？それくらい一人で出来るよっ」
「けどっ…！」
「忘れたぁ～っ？」
桜時の言葉を遮り、どこか飄々とした表情で桜時の顔を覗き込む梅人。
「さっき桜時のピンチ救ったの、僕だってことっ」
「うっ…」
悪戯っぽく笑みを浮かべる梅人に、桜時が思わず顔をしかめる。
梅人がいなければ、桜時は今頃、過去の闇に呑み込まれていただろう。その言葉には、返す言葉もなかった。
「わっ…わかったよっ…」
桜時が、仕方ないといった表情で頷く。
「ホントに気ぃ付けて戻れよっ！何かあったら梅、咲かせまくれっ！！」
「ハイハイっ」
背を向けて去って行こうとする桜時を、梅人がやる気なく手を振りながら送り出す。
「じゃあなっ！」
「また後でっ」

そう言葉を交わすと、桜時は梅人に背を向け、先程、衝撃音の聞こえてきた方へと駆け出していった。その速度は速く、梅人からはあっという間に見えなくなる。

「ったく、心配症っ」

その場に一人残った梅人が、少し呆れたように笑みを零す。

「あれじゃあ、松兄たちといい勝負っ…」

――――ドクンっ…！――――

「えっ…？」

突如、胸を突く、大きなざわめき。笑っていた梅人が、思わず驚いたように、自分の左胸を押さえた。

「何っ…？今のっ…」

大きな鼓動に、戸惑う梅人。

「桜時っ…」

不安げな表情を見せた梅人が、桜時の去っていった方角を見つめた。

「“繁手”っ…！！」
「三日月っ…！」
桜時・梅人とロム・レムとの戦いに決着がついた頃、輝矢と薄荷の戦いは、まだ終わる気配すら見せずに、繰り広げられていた。薄荷の腕を包んだ木の枝と、輝矢の三日月が激しくぶつかり合う。
「うっ…！」
「……っ？」
急に顔をしかめる薄荷に、輝矢が眉をひそめる。
「……っ」
ふと視線を落とした輝矢の目についたのは、薄荷の左手に刻まれた紫色の紋様であった。輝矢がその紋様を見つめていると、紋様が光を放ち始める。
「“繋手”っ…！！」
「……っ！」
光を放った左腕から枝が伸び、勢いよく輝矢へと向かってくる。
「クっ…！」
ぶつかり合っていた三日月を離し、後方へと飛んで伸びてくる枝から逃げる輝矢。しかし枝はどこまで逃げても、ひたすら輝矢を追ってくる。
「……っ」
三日月を下ろし、代わりに左手を、伸びてくる枝へと向ける輝矢。
「“水月”っ…！」
輝矢の左手から無数の水の刃が放たれると、追って来ていた枝をたくさんの短い破片に斬り裂いた。枝を斬り裂いた水月が、そのまま薄荷へと向かっていく。
「チィっ…！」

顔をしかめ、枝の斬られた左腕を掲げる薄荷。紫色の紋様が、また怪しく輝き始める。

「“木楯”っ…！！」

薄荷の左腕から伸びる無数の枝が、薄荷の前で大きな壁を作り、盾を形成する。

――――バァァァァァァァーーーーンっ！――――

その盾に、輝矢の水月が激しく衝突した。

「……。」

衝突で巻き起こった煙を、まっすぐに見つめる輝矢。

「ハァっ…ハァっ…」

「……っ」

煙が止むと、そこには盾を下ろした薄荷の姿があった。止めるのに力を使ったのか、少し息を切らしている。薄荷は左手を軽く振って、作っていた盾を消した。

「うっ…！」

「……っ？」

再び歪む薄荷の表情。輝矢がまた眉をひそめる。

「クっ…！」

強く痛むのか、押さえつけるように、左腕の紋様に右手を触れる薄荷。

「……っ」

輝矢が思わず目を見張る。薄荷の左腕では、押さえつけた右手から、はみ出るようにして、紫色の紋様が広がっていっていた。

「あれはっ…」
広がる紋様に、表情を曇らせる輝矢。
「ハァっ…！ハァっ…！ハァっ…！」
「……。」
紋様を押さえつける薄荷の表情はさらに歪んだが、それは痛みに歪むというより、どこか怯えるような、何かに恐怖するような歪みであった。そんな薄荷を、輝矢はまっすぐに見つめる。
「ハァっ…！クっ…！」
少し落ち着いたのか、左腕から右手を離し、薄荷が改めて右手を振り上げる。
「“繋っ…！」
「何を…」
「……っ」
薄荷が右手から枝を伸ばそうとしたが、その行為は、輝矢の声によって遮られた。
「何をそんなに…怯えているのですか…？」
「……っ！」
ゆっくりと問いかけた輝矢に、大きく目を見開く薄荷。
「わっ私は別にっ…！」
明らかに動揺を見せた薄荷が、それを隠そうと必死に声を荒げる。

「何にも怯えてなんかなっ…！」
「私の強さに怯えている者を甚振るのならともかく…」
必死に否定しようとする薄荷の声を遮りながら、輝矢が、戦う意志を放棄するように、ゆっくりと構えていた三日月を下ろす。
「他のものに怯えている者を…倒す気にはなれませんっ…」
「……っ」
まっすぐな瞳を、薄荷へと投げかける輝矢。そんな瞳に見つめられ、薄荷が少し逃げるように瞳をそらす。
「……。」
少し俯き、唇を噛む薄荷。
「お願いっ…」
「えっ…？」
零れ落ちた小さな声に、眉をひそめる輝矢。
「お願いっ…竹取輝矢っ…」
震える声が、確かに救いを求めるように、輝矢の名を呼ぶ。
「……っ」
ゆっくりと顔を上げ、少し潤んだ瞳で、輝矢を見つめる薄荷。

「私を…助けてっ…」

「……っ」

零れ落ちた願いに、輝矢はそっと目を細めた。

第52章　魔女の望み　★2

「私、元は…リスの獣人一族の人間だったの…」
「……。」
戦いを停止した輝矢と薄荷は、それぞれの武器をしまい、雨の降り続く中、向き合うようにして、木の根元に座り込んだ。輝矢が見つめる中、薄荷は自分の話をし始める。
「一族で小さな村に住んでたわ…虎国と雀国の間にある森で…」
どこか懐かしむように、穏やかに微笑む薄荷。
「でもっ…ある日っ…」
そんな薄荷の表情が、突然に曇る。
「牢戸知玖…」
「ええっ…」
口を挟んだ輝矢の言葉に、薄荷は深く頷いた。
「みんなっ…変えられていったわっ…」

――――きゃあああああああああっ！！――――――――うわあああああああああっ！！――――

「……っ」
思い出される悲惨な光景に、薄荷がそっと目を伏せる。

「鬼へとっ…」

「……。」
薄荷の言葉を聞き、厳しい表情を見せて俯く輝矢。虎国の周辺で鬼人化人間が多く確認された事件、薄荷の村は恐らくあの時に襲われたのであろう。そしてその村の人間たちは、虎国で白雪たちが戦

った鬼人化人間の一部。
「アナタ…も…？」
「……っ」
躊躇うように問いかけた輝矢に、薄荷はそっと首を横に振った。
「何故、アナタだけが…」
「たぶん、私が…強い“木力”の使い手だったから…」
「木力…？」
「ええ…」
戸惑うように聞き返した輝矢に、薄荷がはっきりと頷く。
「あの人…強い植物系の能力の使い手を探してるみたいだから…」
「植物系っ…」
薄荷の言葉を繰り返し、少し考えるように俯く輝矢。

――――“枝槍”っ！――――
――――“木檻”っ！――――

「……。」
そういえば、オーロラの城で戦ったシロキとクロトの二人の少年も、木力の使い手であった。

――――“瞬花”っ！――――

今回狙われたのは、同じく植物系の能力“花力”の使い手である梅人。

「それで梅人を…？でもそれなら松人や竹人、ハチだって…」
輝矢の頭の中に広がる、疑念の渦。
「何故、牢戸知玖はそんな能力の者たちを…？」
「“鬼人化人間を増やす為”…そう言ってたわ…」
「鬼人化人間を…増やす…？」

困惑の表情で聞き返す輝矢。
「詳しくはわからないけど…鬼人化人間を増やすのに、あの人の力だけじゃ限界があるんだって…」
薄荷が少しひそめた表情で、言葉を続ける。
「もっと…鬼人化人間を増やす為には…その、強い植物系の能力を持った人が必要だって言ってた…」
「もっと…増やす為に…」
輝矢がさらに表情を曇らせる。
「牢戸知玖は、何故、そんなに鬼人化人間を増やそうとしているのでしょう…？」
「……。」
輝矢の問いかけに、薄荷は力なく俯き、そっと首を横に振る。
「……っ」
そんな薄荷の様子を見て、少し肩を落とす輝矢。つい最近、シルクの手の者となった薄荷では、知っていることにも限界があるだろう。シルクの本当の目的を知るためには、シルク本人か、シルクにもっと近い者に聞かねばならない。

「それで？その紋様は？」
「……っ」
話題を変えるように問いかける輝矢。俯いていた薄荷が顔を上げ、少し悲しげに自分の左腕の紋様を見る。
「あの人に力を増幅させられた時の、印みたいなもの…」
「増幅…？」
「うん…その力のことも、よくわからないけど…」
薄荷が浮かない表情で呟く。
「でも、私はこの印に選ばれなかったんだと思う…印を見た後、“またハズレ”って言ってたから…」
「また…ハズレ…」
薄荷の他にも、力を増幅され、紋様を刻まれた者がいたというこ

とだろう。もしかしたらオーロラやあのサソリの女もそうだったのかも知れない。紋様を使って、シルクは何かを探しだそうとしている。そして、それは恐らく、鬼人化人間を増やすことの出来る力を持つ者。

「鬼人化人間を生むのに…必要な力…」

人間を鬼へと変える。その力の謎がわからねば、シルクが手に入れようとしていることもわからぬであろう。

「力を使う度に、この紋様が痛んで…」

「……っ」

聞こえてくる薄荷の声に、考え込むように俯いていた輝矢が、ふと顔を上げて振り向く。

「この紋様が…広がっていくの…」

左腕の紋様を見つめながら、険しい表情を見せる薄荷。

「私、思うのよ…」

ひどく追い詰められたような、その表情。

「いつかこの紋様に呑み込まれて…私は鬼になっちゃうんじゃないかって…」

痛む度に、広がる度に、近づく恐怖。薄荷が輝矢との戦いの時に、怯えていた相手。それは、鬼になってしまう未来の自分。

「村のみんなと同じっ…意志のないただの異形の鬼にっ…」

「薄荷っ…」

そう言って全身を震わせる薄荷を、輝矢は少し目を細めて見つめる。

「大丈夫です…」

「えっ…？」

不安げな表情を見せていた薄荷が、輝矢の迷いなき声に、戸惑う

ように顔を上げる。
「アナタのことは私が助ける…約束します…」
「輝矢っ…」
真剣な表情でそう言う輝矢に、薄荷は初めて微笑んだ。
「では一先ずっ…」
輝矢がその場で、ゆっくりと立ち上がる。
「ハチたちと合流して、オトポリに行きましょう」
立ち上がった輝矢が、向かいでまだ座っている薄荷を見下す。

「オトポリは鬼人化人間の調査をしているはずですから、アナタの紋様を消すのにも何か方法がっ…」
「随分と楽しそうねっ…薄荷…」
『……っ！』

上方から聞こえてくる、その忘れたくとも忘れられない美しい声に、輝矢と薄荷は大きく目を見開き、同時に勢いよく振り向いた。

「……私も混ぜてくれる…？」
『……っ』

二人の振り向いた先に立っているのは、感情のない瞳で冷たく微笑む、白く長い髪に真っ赤な瞳の女性。

「シルクっ…様っ…」
薄荷がどこか怯えるように、その女の名を呼ぶ。

「……。」
同じようにシルクを見つめ、目を細める輝矢。

――――ピー…ター…？――――

――――ウェンディっっ！！――――――

思い出される、ウェンディの最期とピーターの涙。

「牢戸…知玖っ…」

「……っ」

怒りのこもった瞳で見つめる輝矢を見て、シルクはどこか楽しげに微笑んだ。

戻って、オトポリ本部。

「何ぃぃぃっっ！！？ゴンがぁぁぁっっ！！？」

正門前で、集合したオトポリ隊員たちも驚くほどの大きな声をあげたのは、座黒であった。座黒の前には、かなり気難しい表情を見せたリンゴが立っている。

「あやつっ…一人で飛び出していくとはっ…」

「ごめんなさいっ、私のミスだわっ…」

深々と頭を抱えた座黒に、リンゴが申し訳なさそうな表情を見せる。

「あばら砕き割ってでも止めとくんだったっ…」

「お姉ちゃん…それはどうかと…」
後悔したように呟くリンゴに、その横に立つイチゴが少し呆れた表情を向ける。
「えぇ～いっ！もうっ！とりあえず我々も森へっ…！」
「長かぁぁぁぁ～～～んっ！」
『……っ？』
指示を飛ばそうとした座黒の言葉を遮り、その場へと近づいてくる一つの声。
「長かぁぁぁぁ～～～んっ！」
そこへ駆けつけてきたのは、背中に大きなマサカリを背負った、オカッパ頭の大男・鉄汰であった。何やら一枚の白い紙を持って、鉄汰が座黒たちの元へとやって来る。
「長官っ！あのっ…！」
「後にしろ」
「えええぇっ！？まだ何も言ってないのにぃぃっ！？」
座黒の横暴な態度に、突っ込むよりもまず驚いてしまう鉄汰。
「でっ、何なのよっ？二秒で話し終えなさいっ」
「貴女は貴女でかなり厳しいですね…」
話すことは許したものの、かなりの時間制限を付けてくるリンゴに、鉄汰が少しげっそりとした表情で肩を落とす。
「鉄汰さんっ…」
そんな鉄汰を、イチゴが気にかけるように、名を呼ぶ。
「元気出して下さい。鉄汰さんの発言なんて、いつもだってみんな全然、重要視してませんからっ」
「君のが一番、傷つくんだけどっ…」
悪びれのない笑顔で励ますイチゴに、深く傷ついた表情を見せる鉄汰。
「それより、金兄ちゃんから、粘っランドでのとりあえずの報告書が送られてきたんですけどっ…」
「何ぃぃぃぃっ！！？金汰からっ！？」

「どうしてそれを早く言わないのよっ！！もうっ！！」
「あっ」
鉄汰の言葉に驚いた座黒とリンゴが、鉄汰から勢いよく、その手に持たれていた一枚の紙を奪い取った。
「自分たちが言わせなかったんでしょうがっ…」
『……っ』

鉄汰が少し不満げに呟く中、座黒とリンゴがその紙面に目をやる。

「……っ！」
「……っ？」

紙面を見つめていたリンゴの表情が、突如、凍りつく。横に立っていたイチゴが、それに気づき、ふと首を傾げた。

「お姉ちゃっ…」
「……っ」
「あっ…！」

呼びかけようとしていたイチゴの声を通り越し、勢いよくその場を駆け出していくリンゴ。

「お姉ちゃんっ…！？」
イチゴの声に止まることなく、リンゴはそのまま正門を飛び出し、オトポリの本部を出て行ってしまった。

「どうしたのかねぇ～？副長官っ」
「お父様っ、お姉ちゃんまでっ…！」
「牢戸知玖の従者一名…」

『えっ…？』

呆れたように呟いていた鉄汰を、慌てて振り返ったイチゴが、紙面を読み上げる座黒に、少し目を丸くする。

「灰色の髪の長身の男…首に黒の紋様あり…」

「お…父様っ…？」

「……っ」

イチゴが戸惑うように首を傾げる中、座黒は紙面から視線を逸らし、ゆっくりと空を見上げた。その細めた瞳は、とても悲しげであった。

「諸刃っ…」

第５２章　魔女の望み　★３

「……。」
シルクの横に立つ、首に紋様のある男。
「シルク様、朱実梅人が見当たりませんが…」
諸刃が、横に立つシルクへと、静かに問いかける。
「後で探せばいいわっ…」
シルクがゆっくりと、前方に視線を動かす。
「彼女たちとお話した後で…じっくりとっ…」
『……っ』
シルクの見つめるその先に立つのは、警戒するように身構えた、厳しい表情の輝矢と、少し距離を取るように後ろに体を引いた、どこか怯えた表情の薄荷であった。

「ねぇ、薄荷…」
「……っ！」

シルクに名を呼ばれ、薄荷が肩を震え上がらせる。

「随分と打ち解けたようね…月の少女と…」
薄荷を射るように見つめながら、シルクが言葉を続ける。
「ベラベラと何でもよくしゃべってっ…」
「……っ」
微笑むシルクのその笑みの冷たさに、薄荷の表情がどんどんと険しくなっていく。

「さぁ…どうしてくれましょうかっ…」
「うっ…！」

少しだけ右手を上げるシルクに、薄荷がその表情を恐怖で歪めた。

「“月器っ…」

「……っ」

そんな薄荷の前に立ち、右耳のピアスを弾く輝矢。

「三日月”…」

睨みつけるようにシルクを見つめたまま、薄荷の前に立った輝矢が、月器を目覚めさせ、現れた三日月をゆっくりと構える。

「輝矢っ…」

輝矢の背中を見つめ、少し戸惑うようにその名を呼ぶ薄荷。

「私があの者たちを引きつけます。アナタはその間に逃げて下さい」

「えっ…？」

思いがけない輝矢の言葉に、薄荷が大きく目を見開く。

「オトポリ本部へ行って、私の名を出せば、誰かが何とかしてくれるはずです」

「でっでもっ…！」

「言ったでしょうっ…？」

薄荷の言葉を遮り、輝矢がゆっくりと振り返る。

「“アナタは私が助ける”と…」

「輝矢っ…」

振り返り、穏やかな笑みを向ける輝矢に、そっと目を細める薄荷。

「さぁっ、早く行って下さいっ」
再び薄荷に背を向けた輝矢が、シルクたちと向き合って、三日月を構え直す。

「……ありがとう…輝矢っ…」
少し俯き、噛み締めるようにそう呟く薄荷。

「本当に…」

薄荷がゆっくりと、右手を上げる。

「ありがとうっ…！！」

――――ブシュっ…！！――――

「ううっ…！！」

顔を上げ、怪しく微笑んだ薄荷の右手から伸びた鋭い枝が、背中を向けている輝矢の腹部を、勢いよく貫いた。走る衝撃に、輝矢が大きく目を見開く。

「あっ…ああっ…」

「なわけっ、ないでしょっ…？」

声にならない声を漏らす輝矢に、冷たく言い放つ薄荷。

「あっ…」
輝矢が構えていた三日月を力なく下ろし、深々と俯いていく。

「アハハっ…！バカなおっ…！」
「なわけっ」
「えっ…？」

言葉を遮る輝矢の声に、高々と笑っていた薄荷が眉をひそめた。

「ないですよ…ねぇっ？」

枝に貫かれた輝矢が、ゆっくりと顔を上げ、不適に微笑んだ。

――――バァアアアアアアアーーーーンっ！――――

「……っ！！」

水飛沫となって弾け飛ぶ輝矢の体に、薄荷が大きく目を見開く。

「水分身っ…！？」

降り落ちる水飛沫から、慌てて右手の繋手を引っこめ、周囲を見回して輝矢の姿を探す薄荷。

「お互い、結構いい演技でしたね」
「……っ！」
聞こえてくる声に、薄荷が勢いよく振り返る。
「まぁあんなクっサい台詞を言っている自分には、だいぶ笑えましたけどっ」
輝矢が立つその場所は、シルクと諸刃の丁度、間の位置であった。シルクを間近で覗き込みながら、輝矢はどこか楽しげに微笑んでいる。こんなに敵が近くにいるというのに、輝矢の笑みには余裕すら感じられ、一方のシルクも、それほど至近距離に迫った輝矢に対し、特にこれといった反応を見せていなかった。
「……。」
しかめていた表情から、薄荷がゆっくりと笑みを作る。
「よく気付いたわねっ」
「こんなウソ臭いニセモノを出されたら、誰でも気付くんじゃないですかぁ？」
そう言って、輝矢が三日月を振り上げる。
「……っ」
輝矢が瞳を鋭くし、横に立つシルクと諸刃へ向け、それぞれ三日月を振り切った。

――――パァァァァァァァァァーーーーンっ！――――

勢いよく斬り裂かれた二人の体が、白い光を放ちながら、木で出来た人型の人形へと姿を変える。やがて光が止むと、斬り裂かれた木人形は、力なく地面に落ちた。

「まぁアナタの“お願い”も大概、ウソ臭かったですけどっ」
「そうっ？」

嫌味っぽく言い放つ輝矢に、表情をしかめることなく微笑む薄荷。

「それは残念っ、萎らしくし損ねっ」
「ええ、こんな損するだけの茶番劇はとっとと止めてっ…」

薄荷の言葉に一つ頷いた輝矢が、その表情を引き締め、再び三日月を構え直す。

「本当の戦いを始めましょうかっ…」

「……っ臨むところよっ…」

輝矢の言葉に微笑み、薄荷も繁手を構える。

「竹取輝矢っ…鬼退治いたしますっ…！」

「おっかしいなぁ～っ…」
その頃、梅人と別れた桜時は、戦いの音を頼りに、森の中を進んでいた。が、ふと立ち止まり、桜時が少し頭を掻きながら、周囲を見回す。
「確かこの辺だったと思うんだけどっ…」
梅人といた時に聞こえてきた、大きな衝撃音。しかしそれ以降、戦いが終わってしまったのか音が止み、桜時は頼りを失ってしまったのである。

「まぁでも、戦いが終わったんだったら、梅人のところへっ…」

「……。」

「……っ！」

梅人のところへ戻ろうとした桜時が、感じる気配に勢いよく振り返る。

「あっ…」

そこに立つ人影に、桜時が思わず声を漏らす。

「お前っ…はっ…」

「こんにちは…」

森に響く、凛とした声。そっと微笑む、その人物。

「桜の青年っ…」

「牢戸…知玖っ…」

桜時の前に現れたのは、感情なく微笑むシルクであった。

第５２章　魔女の望み　★４

「“月器・下弦”っ…」

三日月を半月まで満ちさせ、その先を地面へと突き刺す輝矢。

「“水月”っ…！！」

薄荷の立つ地面から、無数の水の刃が、逆さから降る雨のように突き上げた。

「クっ…！」

高々と飛び上がり、突き上げた水月から、距離を取る薄荷。

「……っ」

薄荷が目つきを鋭くし、胸の前で両手を構えた。

「“木檻”っ…！！」

薄荷の両腕から伸びた無数の枝が、互いに絡み合い、薄荷の体を包み込むような檻を形成していく。

――――バァァァァァァァァーーーーンっ！――――

その木檻に、直撃する輝矢の水月。

「……っ」

水飛沫が収まると、その向こうから、まったく無傷の木檻が姿を現した。水月を直撃したというのに、傷一つついていない木檻に、輝矢が少し眉をひそめる。

「うふふふふっ…あはははははっ…！」

無傷の木檻の中から、聞こえてくる笑い声。

「知ってるっ？木は水で育つのよっ…？」

木檻が解かれ、その中から薄荷が姿を現す。

「いくら攻撃したって、あなたの水は私の“木力”に栄養を与えるだけっ」

「……っ」

輝矢を見下ろし、余裕の笑みを浮かべる薄荷。輝矢はその薄荷を見た瞬間、その表情を曇らせた。左腕の紫色の紋様が、左腕だけには留まらず、肩から首にかけてまで広がっている。力を使った影響なのだろうか。

――――いつかこの紋様に呑み込まれて…私は鬼になっちゃうんじゃないかって…――――

思い出される、先程の薄荷の言葉。

「アナタの…」

「……っ？」

静かな声を出す輝矢に、薄荷が少し眉をひそめる。

「アナタの先程の話は…どこまでが真実なのですか…？」

もう演技の必要はないというのに、広がっていく紋様。先程のあの言葉も、輝矢にはどうもまったくの偽りとは思えなかった。

「どこまでっ…？」

輝矢のその問いかけに、薄荷が少し眉間に皺を寄せる。

「さぁっ？リスの獣人だってとこまで、くらいかしらっ？」

「“鬼人でない”…というのは…？」
「……。」
鋭い視線を向ける輝矢に、薄荷の表情がまたもや曇る。
「……茶番劇はもう止めにしたんじゃなかった？」
曇らせた表情をすぐさま笑みへと変え、どこか試すように問いかける薄荷。
「なら腹の探り合いなんて止めて、とっとと戦いましょうよっ」
「……。」
戦いを要求する薄荷に、険しい表情を見せる輝矢。
「じゃないとっ…」
薄荷がさらに口の端を吊り上げ、勢いよく両手を振り上げた。
「一方的に殺しちゃうわよっ…！？“繋手”っ…！！」
「……っ！」
伸びてくる繋手に、輝矢が表情をしかめる。
「“月器・三日月”っ…！」
輝矢が下弦を再び三日月へと変え、伸びてくる繋手を、素早く斬り落とした。
「こんな枝で私は斬れませんよっ…」
強きに言い放った輝矢が、三日月を振り上げる。
「“月器・望っ…えっ…？」
四方の森の木から、輝矢の足元へと伸びてくる蔓。

「なっ…！」

その蔓たちが、あっという間に、輝矢の両足を絡め取った。動きを封じられる両足に、輝矢が焦った表情を見せる。

「どうして…森に逃げ込んだかわかる…？」

「……っ」

焦っている輝矢へと、不適な笑みで歩み寄って来る薄荷。

「それはねっ、私の“木力”が最大限に活かせる場所だから…よっ」

「……。」

もう勝利したかのような、そんな得意げな笑みを浮かべている薄荷に、輝矢が少し表情を引きつった。

「足の動きを封じたくらいで、もう勝ったおつもりですかっ…？」

鋭い瞳を、歩み寄って来る薄荷へと向ける輝矢。

「右手さえ動けば、アナタ一人くらいっ…」

「言ったでしょうっ…？」

「……っ？」

三日月を持った右手を動かそうとした輝矢の言葉を遮り、薄荷が再び不適に笑う。

「ここはっ…私の力が最大限に活かせる場所だとっ…！！」

薄荷が紋様の入った左腕を、勢いよく振り上げる。

「“木柱（きばしら）”っ…！！」

――――バァァァァァァァァァーーーーンっ！――――

「なっ…！？」

輝矢のすぐ背後から、地面を突き破って勢いよく伸びる大木。輝矢が大きく目を見開いて、後方を振り返る。

「うっ…！」

生えたばかりの大木が、まるで生物のようにその枝を伸ばし、輝矢の体を、大木の幹へと縛り付けた。両手両足もそれぞれに捕えられ、輝矢が完全に動きを封じられる。

「クっ…！」

拘束された右手から、力なく落ちる三日月。武器を失い、輝矢の表情がより険しくなる。

「うふふっ…あはははははっ…！」

大木へと縛り付けられた輝矢を見て、心から楽しそうに高々と笑いあげる薄荷。

「不様っ…！不様ねぇっ…！竹取輝矢っ…！」

「……っ」

薄荷の高笑いに顔をしかめた輝矢が、ゆっくりとその顔を上げる。

「あははははっ…！」

「……っ？」

しかし、目の前で愉快そうに笑う薄荷の姿に、輝矢は眉をひそめた。

「あはははははっ…！」

先程、左腕から首筋にまで広がっていた紫色の紋様が、薄荷の顔の左側にまで侵食している。顔半分を紋様に覆われたその異様な表情。しかし当の本人は、自分の顔が見えないからか、それに気付いていないようである。

「薄荷…」

「んん～っ？」

輝矢の呼びかけに、薄荷がやっと笑い声を止める。

「アナタの…その、紋様はっ…」

「はぁっ？何っ？まぁ～だ茶番劇を続けたいわけっ？」

その問いかけに、勢いよく顔をしかめる薄荷。

「まぁいいわっ、どうせもうすぐ死ぬんだし、それくらいは教えてあげるっ」

顔をしかめていた薄荷が、輝矢を捕らえて機嫌がいいのか、すぐさま調子のいい笑みを浮かべた。

「シルク様に“木力”を強くしてもらった時に出来た印よっ」

「えっ…？」

――――あの人に力を増幅させられた時の、印みたいなもの…――――

それは、先程と同じ言葉。

「では、先程の言葉は事実なのですねっ…」
「へっ？ああっ、さっきもそんなこと、言ったかしらっ？」
薄荷が少し眉間に皺を寄せ、思い出そうとするように首を傾ける。
「覚えてないわっ、何せ適当にしゃべったもんだかっ…」
「適当に話したからこそ、事実が出たのでしょうね…」
「……っ」
遮る輝矢の言葉に、表情をしかめる薄荷。
「案外、あの女の目的の件も当たってるかも知れないですねぇ」
「……。」
どこか挑発するように微笑む輝矢に、薄荷が完全に笑みを消し、不気味なほど静かな表情を形作る。
「言葉で私を動揺させようって作戦っ…？」
薄荷が冷たい瞳で、輝矢を睨みつける。

「自分の現状が理解出来てるっ…！？今、あんたはねぇっ…！」
「……残念でしたねっ…」
「えっ…？」

低く落ちる輝矢の声に、少し眉をひそめる薄荷。

「今日の天気が雨でさえなければっ…アナタの勝ちだったかも知れない…」
「雨っ…？」
輝矢の言葉にふと表情を曇らせ、薄荷がゆっくりと空を見上げる。
戦いに夢中になってあまり感じていなかったが、薄暗く重い空からは、ポツリポツリと雨粒が落ちてきていた。
「……っ？」
降り注ぐ雨が、徐々に強まっていく気がした。

「……っ！」

強まる雨に、薄荷が何かを察したように、大きく目を見開く。

「まさかっ…！いくら“水力”といったってっ…！」

「知ってます…？」

「……っ」

聞こえてくる輝矢の声に、空を見上げていた薄荷が顔を下ろし、目の前で拘束している輝矢を見る。

「確かに水は…木を育てますが…」

強まる雨の中、俯いていた輝矢が、ゆっくりと顔を上げていく。

「水をやり過ぎると…木は枯れてしまうんですよっ…？」

「クっ…！」

鋭い瞳で笑う輝矢に、薄荷が少し怯んだように唇を噛んだ。

「“月器・上弦”っ…！」

「何っ…！？」

輝矢の右手から零れ落ち、地面へと倒れていた三日月が、金色の光を帯びて満ちていき、半月となった月器が、高々と雨の降る空へと舞い上がっていく。

「……っ」

目つきをさらに鋭くし、薄荷を睨みつける輝矢。

「“雨月”っ…！！」

上空から降り落ちる雨が、近くの雨粒と互いにくっついて、水の

刃を形成し、薄荷の方へと速度を上げて落ちていく。

「ううっ…！」

迫る無数の刃に、逃げ場もなく表情を歪める薄荷。

――――バァァァァァァァァァァーーーーンっ！！――――

「うあああああああああああああああああっっっ！！！」

激しく飛び散る水飛沫の中、薄荷の叫び声が響き渡った。

――――パァァァァァァァァーーーーンっ！――――

「……っ」

輝矢を捕らえていた薄荷の木柱が、雨月を浴び、弱っていくように急速に萎れていく。痩せ細り、力なく落ちる枝から、解放される輝矢。

「……。」

輝矢は力なく枯れ果てた大木のなれの果てを見て、少し目を細めた。

「“月器”」

輝矢がそっと呼ぶと、上空から上弦が落ちてくる。輝矢はそれを、

しっかりと受けとめた。

「こっ…このぉっ…！」

「……っ」

前方から聞こえてくる声に、少し眉を動かす輝矢。

「よくもっ…！」

夥しい量の水飛沫の向こうから、徐々に見えてくる景色。そこには、木檻に包まれた、薄荷が立っていた。しかし木檻は不完全で、半分ほどしか薄荷の体を覆っておらず、薄荷も多少、雨月を受けたのか、体のところどころから赤い血を流していた。

「よくもっ…！私の木柱をっ…！」

輝矢を睨みつけるようにして言い放つ薄荷の顔面の、紫色の紋様が、左側だけであったのに、顔全体へと広がっていく。まるで面でもつけているような顔をなっていく薄荷。

「……っ」

紋様は顔だけではなく、よく見れば薄荷の右腕、両足にまで広がっていた。服で見えないが、恐らく全身にあの紋様が刻まれているのだろう。そんな薄荷の姿に、輝矢は眉をひそめた。

「こうなったらっ…」

少し息を乱した薄荷が、木檻を崩して、外へと出る。

「もう一度っ…！」

「……っ」

再び両手を振り上げる薄荷に、輝矢が表情をしかめる。

「待って下さいっ…！」

「……っ？」

思わず止める輝矢に、眉を引きつる薄荷。

「それ以上、力を使わない方がっ…」
「はぁ～っ？」
自身も確信めいたものがなく、どこか戸惑うように呟いた輝矢に、
薄荷が勢いよく表情をしかめた。
「何っ、それっ？脅しのつもりっ？」
薄荷が輝矢に、嘲るような笑みを向ける。
「そんなものっ…！通じないわよぉっ…！！」
そう叫びながら、薄荷が勢いよく振り上げた両手を下ろす。
「クっ…！」
再び表情を険しくし、手の中の上弦を三日月へと変える輝矢。
“木ばしっ…！」
――――ドクンっ…！――――
「ううっ…！！」
木柱を放とうとしていた薄荷の動きが、急に止まる。
「……っ？」
動きを止めた薄荷に、眉をひそめる輝矢。

「なっ…何っ…？これっ…」

激しく震える左腕を見つめながら、苦しげな低く途切れた声を、戸惑うように漏らす薄荷。

「左っ…腕がっ…」

すでに左腕全体に広がった紋様が、紫色の光を放ち始める。

「動かなっ…ううぅっ…！！」

紋様の刻まれた薄荷の顔が、大きく歪む。

「うあああああああああっ…！！ああああああああっ！！！」

「……っ」

光る左腕が痛むのか、尋常ではない叫び声を放つ薄荷に、輝矢の表情も強張る。

――――ううっ…ウウっ…グアアアアアアアっ…！！――――

輝矢の脳裏を過ぎる、鬼の残像。

「まさかっ…」

胸に灯る一つの可能性に、輝矢が眉をひそめた。

「痛いっ…痛いっ…！痛いいいいっっ…！！」

左腕を突き上げた薄荷が、痛みに耐えかねるように、その場に座り込み、身を捩る。

――――ピリっ…！――――

「えっ…？」

突き上げていた左腕の、肌色の皮膚が、不意に剥がれ落ちる。

「何っ…？これっ…」

剥がれ落ちていく自分の肌を、唖然と見つめる薄荷。

「何なのっ…？」

怯えるように震える声。剥がれ落ちていく肌色の皮膚の下から、徐々に禍々しい紫色の、人ではないものの肌が見え始める。

「……っ！」

指の先から姿を見せる、大きな鋭い爪に、薄荷は大きく目を見開いた。自分が何に変わろうとしているのか、やっと気付いたようであった。

「嘘っ…嘘よっ…」

薄荷が目の前で起こる出来事を否定するように、必死に首を横に振る。

「だってあの人っ…！言ってたものっ…！！」

完全に人の皮膚の削げ落ちた左腕が、徐々に大きくなり、薄荷の細い体とは不釣り合いのサイズとなる。

「力を強くするだけだって言ってたものっ…！！」

誰にともなく、必死に叫ぶ薄荷。

「こんなっ…こんなはずじゃなかったのっ…！！」

「……。」

ただ叫び続ける薄荷を、唇を噛み締めて見つめる輝矢。

「うっ…！」

今度は右腕の皮膚が剥がれ落ちていき、薄荷がさらにその表情を凍りつかせる。

「嫌っ…嫌っ…」

人でなくなっていく自分の右腕を見つめ、全身を震わせる薄荷。

「嫌よぉぉっっ！！！」

薄荷が叫ぶことで、唯一の抵抗を見せる。

「……っ！」

「……っ」

勢いよくこちらを振り返る薄荷に、思わずビクリと肩を上がらせてしまう輝矢。その追い詰められた表情は、見つめられるだけで心が締めつけられた。

「ねぇっ…助けてよっ…」

「えっ…？」

――――お願い…助けてっ…――――

重なる、先程の場面。

「本当に助けてよっ…！！」

座り込んだまま、必死に顔を突き上げ、輝矢へと助けを求める薄荷。

「ねぇっ…！！」

その赤い瞳が、先程よりも遥かに、弱々しく輝く。

「お願いっ…」

急に弱々しくなる声。

「輝矢っ…」

「……っ！」

力なく輝矢の名を呼んだ薄荷の瞳から、一筋の涙が零れ落ちた。

その涙に、輝矢が大きく目を見開く。

「……クっ…！」

強く唇を噛んだ輝矢が、三日月を握り締め、薄荷の元へと駆け込んでいく。

「……っ」

輝矢に考えはなかった。だが、そのまま指をくわえて、立ち尽くしていることは出来なかった。

「薄荷っ…！」

輝矢が、薄荷へ向けて、左腕を伸ばす。

「……っ！」

薄荷も、皮膚の剥がれ落ちていく右腕を、伸びてくる輝矢の左腕へと伸ばした。

『……っ』

二人の手が触れようとした、その時であった。

――――パァァァァァァァァァァーーーーンっ！――――

「グガァァァァァァァァァァっっ！！！」

「……っ！！」

薄荷の体全体を紫色の光が包み込むと、次の瞬間、薄荷は、紫色の皮膚の巨大な、禍々しい鬼へと姿を変えた。伸ばされた輝矢の手は、薄荷に届くことなく、巨大な鬼爪の間を通り抜ける。

「薄っ…」

「カアアアアアアアアアっっ！！！」

「うっ…！」

名を呼ぼうと顔を上げた輝矢に、大口を開き、至近距離から鬼口を放つ紫鬼。三日月を十六夜へと変える時間すらなく、輝矢がその表情を歪めた。

――――バァァァァァァァァァーーーーンっ！――――

「あああああああああっっ！！」

鬼口を直撃し、輝矢が勢いよく吹き飛ばされる。その全身から、

真っ赤な血が流れた。

「ううっ…！」

木の幹に背中をぶつけ、そのまま前方へと倒れ込む輝矢。

「うっ…ううっ…」

傷を負った輝矢が、重そうにしながらも何とか体を起こす。

「グアアアアアァァっっ……」

「……っ」

目に映るのは、先程まで少女であった、物言わぬ鬼の化け物。

――――お願い…助けてっ…――――

――――いつかこの紋様に呑み込まれて…私は鬼になっちゃうんじゃないかって…――――

あの話のどこまでが事実だったかなど、今となってはもうわからない。

――――本当に助けてよっ…！！ねぇっ…！！――――

ただ、薄荷は本当に怯えていて、本当に輝矢に助けを求めていた。

だが、輝矢は助けることが出来なかった。

――――アナタは私が助ける…約束します…――――

この口で、確かにそう、言ったはずなのに。

――――人でなくなるだけでっ、死ななくて済むのよっ…！？――
――

オーロラの時も、そうであった。

――――これが…太陽の神様の力かなっ…？――――

ウェンディの時も、そうであった。

「またっ…私はっ…」

救えたはずのものを、救えたはずの命を、この手から、零れ落としてしまう。

「……っ」

輝矢が悔しげに唇を噛み締め、そっと目を伏せた。

「グガアアアアアアっっっ！！！」

「……っ！」

輝矢が目を開くと、そこには輝矢の元へと駆け込んでくる紫鬼の姿があった。

「ガアアアアアアアアっっ！！！」
「……っ」

勢いよく爪を振り上げる紫鬼に、輝矢が目つきを鋭くし、すぐ横に落ちていた三日月を、素早く拾い上げた。

「竹取輝矢っ…」

体を起こし、膝を立て、三日月を構える輝矢。

「ガアアアアアアアアアアっっっ！！！」
「鬼退治いたしますっ…！！」

鬼爪を振り下ろす紫鬼に、輝矢が思いきり三日月を振り切った。

――――――――――――――――――っっ！！――――――

少しの間、訪れる静寂。

「ウウっ…ギャアアアアアアアアアアっっ！！」

次の瞬間、紫鬼が、激しく緑色の血を撒き散らし、叫び声をあげて、その場に崩れ落ちていった。

「……。」

頬に緑色の血をつけた輝矢が、ゆっくりと立ち上がり、紫鬼を斬り裂いた三日月を下ろす。

「ウっ…ウウっ…」

倒れた紫鬼が、弱々しい声を漏らした。かなりの重傷ではあるが、まだ生きているようである。

「薄荷…」

ゆっくりと振り返り、倒れた紫鬼へ、視線を落とす輝矢。

「オトポリに運べばまだっ…きっと…可能性はっ…」

――――言ったでしょう？“アナタは私が助ける”と…――――

「あの言葉だけはっ…守りますからっ…」

輝矢は、自分に言い聞かせるように、そう呟いた。

「……っ」

輝矢がゆっくりと、未だ雨の降り続ける、薄暗い空を見上げる。

「ハチっ…」

雨空に目を細め、輝矢はそっとハチの名を呼んだ。

「牢戸…知玖っ…」

「こんにちはっ…桜の青年…」

森を歩く桜時の前へと現れたのは、白き魔女・牢戸知玖であった。シルクの横には、いつもの通り、無表情の諸刃の姿がある。シルクが怪しげで、冷たい微笑みを、桜時へと向ける。

「クっ…！」

しばらく茫然としていた桜時が、表情を引き締め、村雨丸を抜く。

「梅人っ…梅人のところへはっ…！」

「あの双子も…最期に一つだけ、いい仕事をしたわ…」

「えっ…？」

素早く村雨丸を構えた桜時が、シルクの言葉に眉をひそめる。

「貴方の方…だったのね…」
「……っ？」

シルクの言葉の意味が理解出来ず、さらに戸惑った表情となる桜時。

「何をっ…！」
「やっと…やっと見つけた…」

シルクが、ゆっくりとその白い右手を上げ、桜時の方へと伸ばす。

「私の…“命咲かす者”っ…」
「……っ！」

その微笑みに戦慄を覚え、桜時は大きく目を見開いた。

第５３章　敗北　☆１

――――やっと見つけた……――――

「“命…咲かす者”…？」

桜時が、目の前に現れた牢戸知玖の言葉を、戸惑いの表情で繰り返す。

「ええ…」

そっと微笑んだまま、ゆっくりと頷くシルク。

「何、意味わかんねぇーことをっ…！」

感じる恐怖を振り払うようにして、桜時が素早く村雨丸を抜く。

「梅人は渡さねぇっ！！」

桜時が村雨丸を構えた。

「“柔桜っ…無塵”っ…！！」

桜時が村雨丸を振り切ると、周囲に桜が舞い降り、桜を纏った桃色の一閃が、シルクへと向かっていく。

「……っ」

何もしようとはせず、ただ微笑んで、向ってくる一閃を見つめるシルク。

「……草薙っ」

シルクの背後に立っていた諸刃が、素早くシルクの前に立ち、腰に下ろしている水晶のような美しい剣の柄に手を伸ばした。

「クサナギ…？」

桜時が眉をひそめる中、諸刃が抜いたばかりの草薙という名の水晶の剣を振り上げる。

「……“春雷”…」

――――バリィィィィィィィーーーーンっ！――――

「……っ！」

諸刃の振り上げた草薙の剣先から放たれた電撃が、シルクへ向かっていっていたすべての桜の花びらを焦がし尽くした。力なく落ちる桜の花びらに、消える一閃。その光景を、桜時が大きく目を見開いて、見つめる。

「“雷…力”っ…」

「……。」

ゆっくりと草薙を下ろす諸刃を見つめながら、桜時が茫然と呟く。その力は、桜時が初めて見るものであった。

「ネバーランドで会った時…貴方たちは言ったわね…」

「……っ」

諸刃が再びシルクの後方へと回り、前へ出たシルクが、桜時へと語りかける。

「“鬼が人間に戻った”と…」

「……。」

ゆっくりとした口調で話しを続けるシルクの言葉に、桜時が少し眉をひそめる。

――――さっきの灰鬼、気絶さしたら人間に戻りよってなぁっ…――

――――

――――それがこの前、成人の儀やってたヤツだったから、もしか

してって思ってよっ――――

そう、ネバーランドで、桜時の攻撃を受けた鬼人化人間は、人間の姿へと戻った。輝矢が攻撃しても戻らなかったというのに、桜時の時だけは戻った。

「あの時…梅の青年が“花力”を使っているのを見たから…てっきり人に戻したのは彼の方だと思ってた…」

――――そして…“花を咲かす者”…――――

別れ際、輝矢と梅人にだけ“また会いましょう”と言ったシルク。シルクの探していたのは、鬼人化人間を人間へと戻した者。

「……。」

やっと出る答えに、桜時が厳しい表情を見せる。

「お前が狙ってたのはっ…梅人じゃなくてっ…」

「そう…貴方よっ…」

シルクの口端が、さらに吊り上がる。

「朱実桜時っ…」

「……っ！」

シルクに名を呼ばれた瞬間、桜時の全身に震えが走った。

「……っ」

震える手が、村雨丸の刃先まで伝わる。必死にそれを消すように、桜時は強く唇を噛み締めた。痛みで恐怖を打ち消したかった。恐怖する自分を隠したかったのだ。

「貴方は…この世で唯一っ…“鬼を人へと変える者”…」

シルクがゆっくりと右手を上げる。

「……。」

シルクの言葉を聞き、そっと俯く桜時。どうして桜時だけが鬼を人へと戻せるのか、といった疑問は浮かばなかった。桜時には、心当たりがあった。

――――その力の名は…“命力”…――――

シルクが狙っているのは、桜時の中に眠る“神の力”。

「そして唯一…」

その上げた右手が、顔を上げた桜時の方へと伸ばされる。

「“私の願いを叶えることの出来る者”っ…」

「願い…？」

「ええ…」

「……っ」

聞き返した桜時に、シルクが小さく頷く。その願いが何なのか、問いかけることが桜時には出来なかった。知りたいとも思ったが、知りたくないという気持ちの方が上回った。知れば、二度と戻ることが出来ないような気がした。

「聞かないの…？」

「えっ…？」
その問いかけに、桜時が思わず顔を上げる。
「私の願いが何なのか…」
「……。」
すべてを見透かしているように冷たく笑う、その血のように赤く、だがまったく血の通っていなそうな、感情の読めない瞳。
「それとも…聞けないの…？」
「……っ」
そっと微笑むシルクに、桜時が唇を噛み締める。どんなに感情を隠したところで、この女には読まれてしまうのであろう。今の桜時の戸惑いも恐怖も、きっとシルクの手の中の小さなものに過ぎない。
「可愛いわね…」
「……っやめっ…！」
伸びてくる白い手に、桜時が左手を振り上げようとした、その時。
――――パシンっ……！――――
「……っ」
「えっ…？」
桜時へと伸ばされたシルクの手が、桜時ではない者の手によって、振り払われた。桜時とシルクが、それぞれ戸惑うように、その手の人物を見る。

「……輝矢っ…」
「……。」

シルクの手を振り払ったのは、桜時のすぐ前へと立ち、シルクに鋭い瞳を向けている輝矢であった。桜時が少し驚いたように、現れたばかりの輝矢を見つめる。

「私のハチに触れようなんてっ、百年早いですよっ…」
「……月の少女っ…」

強きに言い放つ輝矢を見て、シルクはどこか楽しげに微笑んだ。

「はぁっ…！はぁっ…！はぁっ…！」

雨の激しくなる龍国を、ひたすら森を目指して駆けるゴン。その額からは汗か雨か、雫が滴り落ちていた。

――――俺の町へ来ませんか？――――
――――俺はゴンを信じますよ――――
――――ゴンっ…――――

「……っ」

思い出される過去の光景に、ゴンが強く唇を噛み締める。
「頼むっ…！」
必死に駆けながら、零れ落ちる言葉。
「間に合ってくれっ…！」
願うようにそう言い放ちながら、ゴンは輝矢や桜時たちの元へと急いだ。

『……。』

しばらく見つめあったまま、訪れる沈黙。交錯する輝矢の黒い瞳と、シルクの赤い瞳。何を思っているのか、何を探り合っているのか、二人の間に入り込めないような壁を感じ、桜時はただ、見つめ合っている二人の様子を見守った。

「竹取…輝矢…」
諸刃も同じように二人を見つめながら、ポツリと輝矢の名を落とす。

「わりと早めに再会出来たわね…嬉しいわ…」
「私はそう嬉しくもないですけどっ…」

微笑むシルクに、輝矢も少し引きつった笑みを見せて答える。
「でも今日は貴女じゃなくて、貴女の飼い犬さんの方に用事があるのだけれど…」
「……っ」
シルクの言葉に、桜時の心臓がドキリと鳴り、その表情がしかめられる。
「狙いは梅人ではなく、ハチだったということですか…」
すぐにすべてを理解し、納得したように頷く輝矢。シルクの狙いは、梅人の“花力”ではなく、桜時の“命力”だという方が、確かにより具体的であるような気がした。
「ご用件があるなら、まず飼い主を通していただかないと困るのですが…？」
輝矢がさらに前へ出て、シルクから桜時を庇うように、立ち塞がる。シルクをまるで挑発するかのような言葉を吐き、鋭い瞳を向ける輝矢。

「輝っ…あっ…」
輝矢の名を呼ぼうとした桜時が、ふと何かに気づき、視線を落とした。

「……。」
「……っ」
桜時を庇うようにして立っている輝矢の、その強く握られた右手が、小刻みに震えている。震える輝矢の手を見て、桜時はそっと目を細めた。桜時を庇ってくれているが、挑発めいた発言をしているが、輝矢も目の前に立つ女に対し、確かな恐怖を感じているのだ。
「輝矢っ…」
初めて見る、敵に恐怖している輝矢に、桜時が少し険しい表情を見せる。

「そう…」
輝矢の挑発に顔色一つ変えずに、短く頷くシルク。
「じゃあまず飼い主さんを説得しないとね…」
「……。」
シルクのその言葉に反応し、後方に立つ諸刃が、再び草薙の剣を構えた。
「いいわ、諸刃…」
「……っ？」
制止を促すように右手を前へと出すシルクに、諸刃が少し眉をひそめる。
「ここは私が…」
「しかしっ…」
「いいの…」
「……はっ…」
反論しようとした諸刃であったが、もう一度強く言うシルクに逆らうことはせず、大人しく返事をすると、草薙の剣を鞘へと戻し、距離を取るように1歩下がった。

「さぁ…遊びましょうか…」
シルクがゆっくりと、輝矢の方を向き直る。
「月の少女…」
「……。」
微笑むシルクに、輝矢の表情がさらに厳しくなる。

「少し下がっていて下さい…ハチ…」
「えっ…？でっでもっ…！」
「お願いです…」
「……っ」
真剣に願う輝矢の声。目の前にいるのは、輝矢が恐怖するほどの

相手だ。桜時がともに戦ったところで、足手まといになるだけであろう。それに、狙われている桜時がともに戦えば、輝矢の気を散らせてしまう。

「……わかった…」

頷くことしか出来ず、桜時はそっと後ろへ下がった。

「“月器・三日月”…」

輝矢が右耳のピアスを弾き、月器を目覚めさせて、三日月を構える。

「竹取輝矢…」

瞳を鋭くする輝矢。

「鬼退治いたしますっ…！」

「……っ」

輝矢が三日月を振り上げると、シルクがどこか楽しげに両手を広げ上げた。

「シルク様っ…！！」

『……っ』

今まさにぶつかり合おうとしていた輝矢とシルクが、シルクの名を呼ぶその大きな声に、同時に動きを止めた。桜時と諸刃も、声のした方を振り返る。

「鬼っ…？」

振り返った桜時が、そっと眉をひそめる。そこに現れたのは、紫色の肌の、金色の角を持った一匹の鬼であった。腹部にかなり深い刀傷を負っており、ボタボタと人間のものではない緑色の血を流している。

「薄荷っ…？」

「シルクっ…様ぁっ…！！」

驚いたように鬼の方を見る輝矢。傷を抱え苦しみながら、必死にシルクの方へと手を伸ばしているのは、輝矢が先程まで戦っていた薄荷が、鬼人化したあの紫鬼であった。

「追ってっ…？」

傷を負わせて動けないようにし、戦いが終わった後でオトポリに連れていくつもりであったというのに、自力で目覚めて、輝矢を追ってきたようである。輝矢が少し困惑したように、薄荷を見つめる。

「薄荷…？ああ…」

輝矢の言葉に、思い出したように頷くシルク。

「生きていたの…」

シルクが、薄荷の方を振り向く。

「もうとっくに殺されたのかと思っていたわ…」

ゆっくりとした足取りで歩み寄って来る薄荷に、シルクが冷たい笑みを向ける。

「薄荷っ…！下がっ…！」
「シルク様っ…！シルク様っ…」
輝矢の声を遮り、薄荷がシルクを呼び続ける。虚ろなその赤い瞳には、シルクの姿しか映っていないようであった。

「何故っ…何故ですかっ…？」
シルクに近づいていきながら、かすれた声で問いかける薄荷。
「何故っ…私が鬼にっ…？」
鬼のものである、その低く重い声が、どこか悲しげに響く。
「あの紋様はっ…力を強くするためだって…仰ったではないですかっ…」
声が徐々に、震えていく。

「“鬼にはならない”と…仰ったではないですかっ…！」
「薄荷っ…」

心の内を必死に叫ぶ薄荷を見て、輝矢が少し目を細める。それだけを問いたくて、重い体を引き摺りながら、ここまでやって来たのかも知れない。それほどに、薄荷にとっては、鬼にされたということが、重いことだったのであろう。

「何故なんですっ…？」
シルクの前までやって来た薄荷が、その場で力なく膝をつく。
「答えて下さいっ…」
鋭い爪のついた巨大な手を、まるで救いでも求めるかのように、シルクへと伸ばす薄荷。

「答えて下さいっ…！」

伸ばされた手が、大きく震える。

「シルク様っ…！！」

「……。」

答えを求める必死なその瞳を、冷静な表情で見つめ返すシルク。

「……っ」

「シルク様っ…？」

シルクの細く白い手が、薄荷の大きな体へと伸ばされる。伸びてくる細い手に、薄荷が戸惑うようにシルクの名を呼ぶ。

「……くだらない問いかけね…」

「……っ！！」

冷たく言い放たれたその言葉に、薄荷が大きく目を見開く。

「薄荷…」

「……っやめっ…！」

輝き始める薄荷へと伸ばされたシルクの手に、輝矢が大きく身を

乗り出した。

――――バァァァァァァァァーーーーンっ！――――

シルクの手から放たれた白い光線が、薄荷の鬼の体を、勢いよく貫いた。

「……っ！！」

その光景に、身を乗り出そうとしていた輝矢の動きが止まり、その瞳が大きく開かれる。

「うぁっ…あっ…」

光線に貫かれた薄荷の体が、人間の姿へと戻っていく。

「なん…でっ…」

人間の姿に戻ったのも一瞬で、倒れていきながら、薄荷の体が砂と化していく。

「シルクっ…様っ…」

その赤い瞳から一筋の涙を流すと、薄荷の体は完全に砂となって、

崩れ落ちた。

「ごめんなさいね…薄荷…」

シルクがゆっくりと手を下ろし、薄荷が崩れ落ちた小さな砂の山を見下ろす。

「駒を鬼にするのに…いちいち理由なんて考えてないわ…」

そう呟き、微笑んで、シルクはその砂の山を、踏み潰した。

「てっめぇっ…！」

そのあまりの光景に、思わず身を乗り出す桜時。

「人の命を何だと思ってやがるっ…！？」

「“何だと”…？」

桜時の怒鳴るような問いかけに、シルクが不思議がるような表情で振り返る。少し間を置いた後、シルクがゆっくりと口端を吊り上げた。

「ゴミっ…」

「……っ！」

微笑んで答えるシルクに、大きく目を見開く桜時。

「てめぇっ…！！」
怒りを剥き出しにした桜時が、持っていた村雨丸を力強く身構える。
「輝矢っ！やっぱ俺も戦っ…！」
「……。」
「……っ？輝矢っ？」
怒りの勢いで戦いに参戦しようとした桜時が、振り向いたその先で、茫然と立ち尽くしている輝矢に気づき、少し眉をひそめた。
「輝矢っ…？」
「……。」
桜時の呼びかけに答えることもなく、輝矢はただ、シルクの足の下の砂を見つめる。
――――お願いっ…竹取輝矢…――――
――――私を…助けてっ…――――
“助けて”と、願われたというのに。
――――あの言葉だけは…守りますから…――――
“助ける”ことを、自分の中で誓ったというのに。
――――人でなくなるだけでっ、死ななくて済むのよっ…！？――

――

また、助けられなかった。

――――これがっ…太陽の神様の力かなっ…？――――

また、助けられなかった。

――――ズキンっ……！――――

「ううっ…！」

「輝矢っ…！？」

突然、頭を抱え込んでしゃがみ込む輝矢に、桜時が驚いたように目を見開く。

「ダメっ…」

全身が震える。声が震える。

「出て来ないでっ…出て…来ないでっ…！」

苦しげに頭を押さえながら、願うように必死に呟く輝矢。

「輝矢っ…！」
そんな輝矢に、桜時が慌てた様子で駆け寄る。
「どうしたんだよっ!?大丈夫かっ!?」
「ハチっ…」
同じようにしゃがみ込んで、輝矢の顔を覗き込むように見る桜時。
輝矢が桜時を見て、そっと目を細める。

――――どうして俺を…殺したの…？――――

いつか見た、狂気に呑み込まれた自分が、桜時を殺す、悪夢。

「……っ！」
輝矢が大きく目を見開く。

「ハチっ…今すぐこの場から離れて下さいっ…」
「えっ…？」
少し苦しそうに漏れる輝矢の声に、桜時が眉をひそめる。

「何っ…」
「いいから早くっ…！」
「……っ！」

怒鳴りつけるように叫ぶ輝矢の声に、桜時は思わず言葉を止めた。
輝矢のこんな追い詰められたような声は、初めて聞いたからである。

「お願いですっ…ハチっ…」
搾りだすようにそう呟きながら、輝矢がゆっくりと顔を上げる。

「でないとっ…私っ…！」
「……っ」

顔を上げたその輝矢の瞳が、いつもの黒ではなく、真っ赤に輝いていた。

「輝矢っ…その瞳…」
「私っ…ううっ…！」
「輝矢っ…！！」

輝矢が再び苦しみだし、深く頭を抱えて蹲る。

「輝矢っ…！輝矢っ…！！」
「ううぅっ…！ううっ…！」

――――ズキンっ！ズキンっ！――――

激しくなっていく頭の痛み。自分が徐々に呑み込まれていく。

「もうっ…押さえきれないっ…」
輝矢が、どこか悔しげに唇を噛む。

「すみませんっ…ハチっ…」
「えっ…？」

「“月器・望月”っ…！」

――――パァァァァァァァァァァーーーーンっ！――――

「なっ…！！」

金色の球体・望月まで満ちた月器が、輝矢と桜時の間へと入り込む。

「おいっ！輝矢っ！何っ…！」

「……っ」

「……っ！うわあああああっ！！」

輝矢が少し手を動かすと、望月が桜時の体を押し、輝矢の元から勢いよく、桜時を吹き飛ばした。

「ううっ…！」

望月に押された桜時が、近くの木の幹に背中を打ちつけ、そのままもたれかかるように、木の下にしゃがみ込む。

「うっ…輝…矢っ…」

痛みに少し顔を歪めながら、桜時が輝矢の名を呟く。

「はぁっ…はぁっ…はぁっ…三日月…」

桜時が離れたのを確認すると、輝矢が頭を押さえながら、重そうな体を何とか立ち上がらせる。そして望月を再び三日月へと戻し、何とか右手で握り締めた。

――――ズキンっ！――――

「ううっ…うっ…！」

かすんでいく景色。薄れていく意識。痛みに気が遠くなっていく。

「何が…」
「離れていなさい…諸刃…」
「えっ…？」

苦しむ輝矢を、戸惑うように見ていた諸刃が、シルクの言葉に首を傾げる。

「呑み込まれるわよ…」
「……っ」

どこか楽しげに言い放つシルクに、諸刃はそっと眉をひそめた。

「ううううぅっ…ううっ…」

痛みに耐えるように、深く俯いている輝矢。

「……っ！」

輝矢が勢いよく顔を上げると、赤く染まったその瞳が、大きく開かれた。

「あああああああああああっ！！」

――――バァァァァァァァァーーーーンっ！！――――

第53章　敗北　☆2

「……。」

赤色から元の色へと戻った十字刃を下ろした醍也は、静かな表情で、自分の前方を見下していた。醍也の見つめる先には、血だらけの門貴が、深く瞳を閉じて、倒れ込んでいた。意識は失っているが、どうやら死んではいないようである。だが、もう虫の息の状態だ。しばらく放っておけば、死ぬであろう。

「醍也」

「……っ？」

門貴を見下ろしていた醍也が、自分の名を呼ばれ、ゆっくりと後方を振り返った。

「黒羽…」

醍也が振り返ると、そこには黒羽が立っていた。

「来ていたのか」

「ああ…」

黒羽の言葉に、醍也がゆっくりと頷く。

「駒が…役に立たなかったようだからな…」

「うっ…！」

そう言いながら醍也が視線を移すと、その先には、門貴に庇われ、何とか生きている剛也の姿があった。視線を移した醍也に、剛也は

酷く怯えた表情を見せる。

「ああっ…」

そんな剛也の姿を確認し、納得した様子でそっと微笑む黒羽。

「お前は…？敵は倒したのか…？」

「敵…？ああっ」

醍也の問いかけに、黒羽がさらに口元を緩める。

「あれのことかな？」

黒羽が振り返ると、黒羽から少し離れたところに、真っ赤な血を流して、うつ伏せに倒れ込んでいる由雉の姿があった。顔は深く地面に落とされており、指一本動いていない。

「敵と呼ぶには、あまりに微弱だった。数分も転がしておけば死ぬだろう」

黒羽が再び、由雉から目を離し、醍也の方を振り向く。

「お前の方も片付いたのだろう？なら、とっととその役立たずを殺して、シルク様の元へっ…」

「いやっ…」

「何っ…？」

言葉を遮る醍也に、黒羽が眉をひそめる。

「野垂れ死にでは物足りない…」

そう呟いた醍也が、ゆっくりと倒れている門貴の方に向き直る。

「敗北者には…」

醍也が、右手に持っている十字刃を振り上げる。

「俺の手で…死を…」

その感情のない赤い瞳が、倒れている門貴を捉える。

「ふぅっ…」

そんな醍也の様子に、黒羽は少し呆れたように肩を落とした。

「相変わらず…敗者に厳しい男だな…」

「……。」

醍也の振り上げた十字刃が、空中で止まる。

「……っ！」

十字刃が、意識を失っている門貴へ、勢いよく振り下ろされた。

――――バァァァァァァァァーーーーンっ！――――

「何っ…！？」

十字刃が門貴に突き刺さろうとしたその寸前、横から飛んでくる黒色の一閃に、醍也は驚いた様子で振り返り、思わず向けようとしていた刃を止めた。

「クっ…！」

その一閃の強力さをすぐさま察知し、防ぎきれないと悟った醍也が、高々と飛び上がって、それを避ける。

「……っ」

醍也の避けた一閃は、今度はその直線上にいる黒羽の元へと向か

ってきた。黒羽も同じように飛び上がって避けると、一閃は遥か空の向こうへと消えていった。

『……。』

着地した醍也と黒羽が、厳しい表情で、一閃の飛んできた方向を見る。

「……。」

二人の振り向いた先には、黒い刀を構えた、いつになく真面目な表情の太狼が立っていた。太狼が左手で眼鏡をはずすと、その穏やかな緑色の瞳が金色へと変わり、鋭く突き刺すように二人を捉える。

『……っ』

その瞳に、少し怯むように眉をひそめる醍也と黒羽。

「あんな男…報告では…聞いていない…」

太狼を見つめながら、醍也が小さく呟く。

「常識で知ってろ、あれは世界を救った英雄だ」

「英雄…？」

黒羽の言葉に困惑しながらも、醍也が臨戦態勢を整えるように、右手の十字刃を構えようとする。

「やめておけ」

「……っ」

構えようとした醍也の手を止めたのは、黒羽であった。

「何故だ…？」

醍也が不思議そうに、黒羽を見つめる。

「シルク様の許可なく、あの男と戦うのは好ましくない…それに…」

黒羽の表情が、そっと曇る。

「次元が違い過ぎる…今の俺たちでは到底、勝てないさ…」
「……。」
気難しげな表情で、そう呟く黒羽。醍也もその黒羽の言葉に、異論を唱えようとはしなかった。太狼の実力は、向い合っているだけで、二人に十分、伝わって来ていた。
「まぁいい。足止めは出来た。今日のところは退くぞ」
「ああ…」

――――ボォォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

言葉を交わした二人の体を白い煙が包むと、次の瞬間、白い煙から、一羽の真っ黒のカラスと一頭のチーターが森の奥と空へと、それぞれに飛び出していった。

「……。」

獣の姿はすぐさま見えなくなり、その場に残った太狼は、ゆっくりと構えていた刀を下ろす。

「ご主人様っ…！！」
「追わなくてよろしいのですかっ…！？」
少し焦ったような表情で、太狼の元へと駆け寄って来るヘンゼルとグレーテル。どうやら近くの木陰に、身を隠していたようである。
「いいよっ、深追いは危険だし」
眼鏡をかけ、瞳を緑色へと戻して、太狼が二人の方を見る。
「それより今は二人の保護をぉ」
『はっはいっ！！』
太狼の言葉に頷くと、二人はそれぞれ、倒れ込んでいる門貴と由

雉の元へと駆け出していった。

「タローさんっ…！！」

「……っ」

やって来る自分の名を呼ぶ声に、太狼が振り返る。

「イチゴちゃん～」

「いらしてたのですねっ…！」

そこへ駆けつけたのは、イチゴとその他数名のオトポリ隊員であった。イチゴが慌てた様子で、太狼の元へと駆け寄っていく。

「桜時さんたちはっ…！」

「ごっめぇ～ん、イチゴちゃん。今はハチくんより、あっちの二人のこと、頼まれてくんないっ？」

「あっちの二人っ？……っ！」

首を傾げたイチゴが、太狼の指差した方を振り返り、その表情を強張らせる。

「門貴さんっ…！由雉さんっ…！」

ヘンゼルとグレーテルがそれぞれ駆け寄った、傷だらけの門貴と由雉の姿を見て、イチゴが大きく目を見開く。その傷の深さは、一目見れば十分に伝わるほどに酷いものであった。

「オトポリへ運んだげて。ウチじゃあ対処出来なそうだからっ」

「はっはいっ！救護班っ！担架をっ！本部に連絡して、集中治療の準備をさせてっ…！！」

太狼の言葉にしっかりと頷き、イチゴは素早く隊員たちに指示を与えていく。ヘンゼルとグレーテルも手を貸しながら、門貴と由雉がオトポリの担架に乗せられ、隊員たちに運ばれていく。

「彼の保護も頼むよぉ」

「はっ！」

太狼が手の空いている隊員に、しゃがみ込んでいる剛也の方を指差して言い放つ。

「来いっ！」
「ううっ…」
放心状態の剛也が、オトポリ隊員により連行されていく。剛也はもう力尽きたのか、仲間に殺されようとしたショックからか、抵抗は見せなかった。
「……。」
その様子を、厳しい表情で見つめる太狼。

「んっ…？」
見つめていた太狼が、ふと何かに気づき、雨の降り続く薄暗い空を見上げた。
「雨が…動いている…？」
そっと眉をひそめる太狼。空から重力により降り落ちているはずの雨が、集められてでもいるかのように、同じ方向、森のさらに奥へ向かっていっている。それはあり得ない光景であったが、太狼には一つ、心当たりがあった。
「水力の暴走が始まったか…」
太狼がさらに厳しい表情を見せて、雨の集まっていくその先を見つめる。
「輝矢ちゃん…」
太狼は、どこか不安げに輝矢の名を呼んだ。

一方、桜時と別れ一人、太狼の家へと戻ろうとしていた梅人も、その空の異変に気付いていた。

「何だ…？」

雨空だというのに、雨の降り落ちて来ない空を、梅人は戸惑いの表情で見上げていた。

「雨が…集まっていく…？」

すべての雨雫が、一定の方向へ向かって飛んで行っている。重力も自然の摂理も、何もかもを無視したその雨の動きに、困惑する梅人。雨が向かっていくその空の下で、何かが起こっていることは間違いないだろう。

――――何っ…？今のっ……――――

桜時と別れた直後、胸に走った予感。

「桜時…」

その不可思議な空を見上げながら、梅人は不安げに桜時の名を呟いた。

「梅人くぅぅぅ～～～んっ！」

「梅ちゃぁぁぁ～～～んっ！」

「……っ？」

聞き覚えのよくあるその二つの声に、梅人が振り返る。

『無事だったんだねぇぇぇ～～～っっ！！』

「うわあぁっ！」

梅人が振り返ると、どこからか駆け込んできた松人と竹人が、勢いよく梅人へと抱きついた。二人の兄に抱きつかれ、梅人が思いきり顔を引きつる。

「ちょっとぉ～っ！鬱陶しいなぁっ！とっとと離れてよぉっ！」

『鬱陶しいっ！！？』
梅人の言葉に、衝撃を受けた様子で、梅人から離れる松人と竹人。
『お兄ちゃんっ、もう生きていけないっ…！』
「なら死ねばぁ～っ？」
『ぎゃいいいぃ～～～んっっ！！』
落ち込み、その場に膝をつく兄たちに、さらに追い打ちをかける梅人。
「ったく、もうっ」
「ふわぁっはっはっはっ！どうやら無事だったようだねぇ～っ！」
「へっ？」
落ち込み続ける兄たちに呆れていた梅人が、後ろからやってくる更なる声に、また振り返った。
「ふわぁっはっはっはっ！このオトポリの若き隊長、正刈鉄汰が、目標を無事、確保したよぉ～っ！」
「……。」
梅人が振り返ると、そこには数名のオトポリ隊員を連れ、得意げな笑みを浮かべた鉄汰の姿があった。初対面の鉄汰の姿に、梅人が少し固まる。
「誰？この変態オカッパ」
「誰がオカッパだいっ！！」
鉄汰を指差し、松人たちに遠慮なく問いかける梅人に、鉄汰が勢いよく怒鳴りあげる。
「オトポリの若き隊長だと言っただろうっ！わざわざ君を助けに来てやったんだぞっ！」
「別に変態オカッパに助けてもらわなくたって、無事だけどっ？」
「にゃにをぉぉ～～っ！？」
生意気極まりない梅人の発言に、鉄汰の表情がどんどん歪んでいく。
「でも本当無事で良かったよぉ～」
「えっ？」

やっと立ち上がった松人の言葉に、梅人が少し戸惑うように振り向く。
「梅人クン、さらわれたって聞いたからさぁ～っ」
「怪我とかしてないぃ～っ？」
「あっ、うんっ…僕は別にっ…」
不安げに梅人の様子をうかがう兄たちに、梅人がやっと真面目な表情を作って答える。

――――じゃあなっ！――――

「あっ…」
思い出される、別れ際の桜時の姿。
「桜時っ…！桜時たちはっ…！？」
梅人は少し焦るような表情を見せて、鉄汰たちへと問いかけた。

「フフフ…」
集まった雨たちは、巨大な水の球体を作り、雨が降り続くほどにその大きさを増していった。
「フフフっ…」
その水の中心で不気味に微笑むのは、黒く長い髪を振り乱した、

真っ赤な瞳の少女。全身から禍々しいまでの空気を放っている。近づいただけで、その空気と水に呑み込まれてしまいそうであった。

「……輝矢っ…」

木の下にしゃがみ込んだ桜時が、どこか悲しげな表情で、その少女を見つめる。

「アハハハっ…アハハハハっ…！」

楽しげに、そして冷酷に微笑むその姿は、最早、桜時の知っている輝矢の姿ではなかった。

「あの時と…同じ…」

――――アハハハハっ…！アハハハハっ…！――――

今の輝矢は、海底での戦いで、鯨国の刺客である渦礼を殺そうとしていた、あの時の輝矢の様子と、まったく同じであった。

「海底に…この雨…水力が暴走してるのか…？」

雨の集まって来るその空を見上げ、戸惑いの表情を見せる桜時。

「アハハハハっ…！アハハハハっ…！」

「……。」

そのいつもの輝矢ではない輝矢の姿を見つめ、桜時が厳しい表情を見せる。

――――大丈夫だよっ…輝矢ちゃん…――――

あの時、輝矢の暴走を止めたのは、太狼。

「アイツじゃなきゃ…どうにも出来ないっ…」

桜時がそっと目を細める。

「俺じゃっ…どうにも出来ないっ…」

そう呟いて、桜時はどこか悔しげに、唇を噛み締めた。

第53章　敗北　☆3

「シルク様…これはっ…」
水に包まれた輝矢と、まだまだ集まって来る雨を見つめながら、さすがに困惑した表情を見せる諸刃。輝矢の纏うその空気には、諸刃も気圧されるほどであった。
「……この力…どこかで…」
シルクは諸刃の問いに答えることなく、少し考えるように呟く。

「フフフっ…」
「……っ」
楽しげに微笑んでいた輝矢が、シルクの方へと視線を移した。

「お前…」
その赤い瞳が、急に鋭くなる。

「殺すっ…」

そう言って、輝矢がシルクへ左手を向けた。

――――バァァァァァァァァーーーーンっ！！――――

輝矢の左手から放たれる、無数の水の刃。

「強いっ…」
いつもの水月よりも遥かに強さを感じるその力に、桜時の表情が曇る。

「……っ」
勢いよく飛んでくる無数の水の刃に、シルクは少し眉をひそめた。
「クっ…！」
素早くシルクの前へと飛び出し、諸刃が草薙の剣を振り上げる。
“白雷”っ…！！」
――――バリィィィィィィィーーーンっ！――――
草薙の剣から放たれた白い雷が、輝矢の放った水を弾き落とすようにしながら進んでいき、輝矢の左手まで流れた。
「……っ」
「輝矢っ…！」
水を伝った雷が、輝矢の白い手を黒く焼く。見つめていた桜時が、思わず身を乗り出した。
「……。」
しかし輝矢は表情一つ動かさず、今度は三日月を持っている右手を振り下ろした。
――――バァァァァァァァァーーーンっ！！――――
再びシルクと諸刃の方へと向けて放たれる、無数の水の刃。

「無駄なことをっ…」
少し顔をしかめた諸刃が、再び草薙の剣を振り上げる。
「“白雷”っ…！！」
諸刃が輝矢の水へ向け、同じように白い雷を放った。
――――パァァァァァァンっ！――――
しかし今度は、雷が水を流れることはなく、雷の方が逆に水に弾き飛ばされる。
「何っ…！？」
白雷を弾いて向かってくる水の刃に、少し焦ったような表情を見せる諸刃。
「……っ」
「シルク様っ」
シルクが諸刃の前へと出て、向ってくる水の刃へ右手の人差し指を向けた。
「“鬼閃”…」
「……っ！」
シルクの人差し指から放たれた、細く白い光線が、輝矢の水の刃

を一つ一つすべて撃ち抜き、最後に輝矢の右肩を貫いた。

「……っ」

「輝矢っ…！！」

光線に撃ち抜かれ、少し俯く輝矢に、桜時が再び不安げに身を乗り出す。

「……フフフっ…」

しかし輝矢は、すぐさま顔を上げ、またもや楽しげな笑みを浮かべた。左手は雷に焼かれ、右肩からはボタボタと血が滴り落ちているというのに、その表情にはまったく痛みが見えない。

「痛覚が…ないのか…？」

そんな輝矢の様子に、少し気味悪がるように、顔をしかめる諸刃。

「そうかも知れないわね…」

「シルク様…」

諸刃の呟きに、前に立ったシルクがそっと答える。

「申し訳ありません。先程はっ…」

「どうして…二度目の電流が流れなかったか、わかる…？」

「えっ…？」

シルクの問いかけに、眉をひそめる諸刃。

「いえ…」

「二度目の水が、不純物のない百パーセントの純水だったからよ…」

「……っ」

その言葉に、諸刃の表情がさらに曇った。

「百パーセントの純水では…雷力は流れない…」

「ええ…一度目の貴方の攻撃を受けて、瞬時に水の純度を変化させ

た…」

諸刃と言葉を交わしながら、シルクがそっと口元を緩める。

「どうやら…ただの水使いというわけではないようね…」

シルクの赤い瞳に、輝矢の赤い瞳が映る。

「貴方は下がっていなさい、諸刃…」

「……っ？」

「下手したら死ぬわ…」

「……っはいっ…」

シルクの言葉に諸刃は少し驚いたように目を開いたが、すぐさま大人しく頷き、後方へと下がった。あのシルクがそう言うほどに、目の前にいる少女の姿は強大なのである。

「本当に興味深いわね…貴女は…」

諸刃を下げると、シルクがゆっくりと両手を広げた。

「月の少女…」

「……っ」

シルクの微笑みに、そっと目を細める輝矢。

――――私は…可哀想なんかじゃ…ないって…――――

――――ピー…ター…？――――

――――私を…助けてっ…――――

その映像だけが、確かに脳裏に刻みつけられている。

「牢戸…知玖…」

輝矢が静かに、シルクの名を呟く。

「お前を…殺すっ…！！」

「……っ」

三日月を構え、勢いよく駆け込んでくる輝矢に、シルクがそっと右手を上げた。

――――パァァァァァァァーーーーンっ！――――

輝矢の振り下ろした三日月を、右手で掴み止めるシルク。

『……っ』

二人が強く見つめ合う中、三日月を受けとめている、シルクの真っ白なその手から、真っ赤な血が滴り落ちた。

「シルク様に…血を…」

諸刃が、驚いたように呟く。

「赤い…血っ…」

滴り落ちるシルクの血を見て、眉をひそめる桜時。

「人間…なのかっ…？」

自分と同じ色の血を流すシルクに、桜時は少し戸惑うように呟いた。

「殺す…お前を…殺すっ…」

三日月に力を込め続けながら、まるで呪文のようにその言葉を呟く輝矢。力の暴走で意識は手放したようだが、シルクを倒さなければいけないという、その思いだけは、頭の中に強く残っているようだ。余程、薄荷やウェンディのことが、シルクへの怒りとして刻みついているのだろう。

「この武器…」

右手から血を流しながら、シルクも痛みを表情で見せることなく、掴み止めている三日月に目をやる。

「もしかしたら…と思ってたけど…」

シルクがゆっくりとした口調で、言葉を続ける。

「その瞳…あの力…」

シルクの赤い瞳が、再び輝矢の赤い瞳を捉える。

「とっくに死んでいたと思っていたけど…貴女…」

そっと吊り上がる、その口元。

「そうっ…あの時のっ…」

「……っ」

まるで輝矢を知っているかのような口振りで微笑むシルクに、輝矢は少し表情を曇らせた。

「あの時の子供なのっ…面白いわっ…でもねっ…」

急に、シルクの声のトーンが変わる。

「今日は貴女と遊びに来たわけじゃないのよっ」

シルクがそう冷たく呟くと、三日月を掴み止めているシルクの右手が、白く輝いた。

――――パァァァァァァァァーーーーンっ！！――――

「……っ！！」

白く輝いたシルクの右手に、粉々に砕き割られる三日月。

「そんっ…なっ…」

目の前で砕け散っていく三日月に、輝矢が大きく目を見開いた。

「輝矢のっ…三日月がっ…」

信じ難いその光景に、桜時も唖然とした様子で呟く。

「三日…月っ…」

地面へと落ちていく金色の粒を、茫然と見つめる輝矢。

「今日はね…“命咲かす者”に用があって来たの…」

三日月を砕いた右手をゆっくりと下ろしながら、茫然としている輝矢に微笑みかけるシルク。

「だから…貴女に用事はないの…」

下ろしたばかりの右手の人差し指を伸ばし、輝矢の腹部へとつける。

「サヨウナラ…」

「……っ！輝矢っ…！」

立ち上がり、二人の元へ駆けこんで行こうとする桜時。

「月の少女っ…」

シルクの人差し指が白い光を放つと、次の瞬間、輝矢の体を、白い光線が貫いた。

「ううっ…！」

腹部から真っ赤な血を流しながら、輝矢が後方へと吹き飛ばされていく。

「あぁっ…あっ…」

輝矢が力なく、地面へと倒れていく。

「輝矢っ…輝矢ぁぁぁっ！！」

倒れた輝矢の元へ、桜時は必死に駆け込んだ。

第５３章　敗北　☆４

「輝矢っ…！輝矢っ…！！」

駆け込んだ桜時が、傷だらけの輝矢の体を抱き起こす。

「輝矢っ…！！」

桜時の左手が、輝矢の左手を掴むと、先ほど諸刃の雷に焼かれた皮膚が、桜時の手に触れている部分から、徐々に再生を始めた。

「……っ」

その光景に、思わず目を見開くシルク。

「輝っ…！」

「フフフっ…」

「……っ？」

輝矢の名を呼び続けていた桜時が、聞こえてくる笑い声に、そっと顔を上げる。

「フフフフっ…ウフフフフフっ…！」

「……っ」

腹の底から込み上げてくるような、どこか不気味な笑い声をあげるシルクに、桜時が怯えるような、困惑するような表情を見せる。

「素晴らしいっ…！素晴しいわっ！“命咲かす者”っ…！！」

「……っ！」

大きく目を見開くシルクに、桜時の肩が大きく震える。
「その力っ…！その力さえあればっ…！私の願いは叶えられるっ…！！」
どこか興奮したように、叫ぶシルク。

「……。」
そのシルクを、後方から諸刃が、神妙な表情で見つめる。

「さぁっ…私のもとへっ…」
桜時へと、ゆっくりと伸ばされる、シルクの右手。

「“命咲かす者”っ…」
「うっ…！」

伸びてくる手に、桜時の表情が恐怖で歪む。

――――パシンっ……！――――

『……っ』

振り払われるシルクの手に、桜時とシルクが驚いたように目を開く。

「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」
シルクの手を払ったのは、大きく息を乱した輝矢の、再生したばかりの左手であった。
「私のハチにっ…触れようなんてっ…百年早いですよっ…」
「輝…矢っ…」
少し乱れた息遣いで、そう言った輝矢のその瞳は、いつも通りの

黒色であった。口調も空気も、先ほどまでとは違い、いつもの輝矢である。集まって来ていた雨も、いつの間にか収まっていた。

「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」

傷だらけの体で何とか体を起こし、立てないながら、必死に桜時の前へと立ち塞がろうとする輝矢。

「……っ」

突き上げるように見上げてくる輝矢に、シルクが少し煩わしそうに顔をしかめる。

「仕方のない子ね…」

そんな輝矢に、シルクが再び人差し指を向けた。

「“鬼閃”…」

「……っ！ううあああああっっ！！」

「輝矢っ…！！」

シルクの指から放たれた光線が、輝矢の左腿を貫くと、輝矢がその場に前のめりに崩れ落ちた。

「ううぅっ…ううっ…！」

輝矢の足から、地面へと滲んでいく真っ赤な血。蹲った輝矢が、苦しげな声を漏らす。

「輝矢っ…！クッソっ…！」

桜時が表情を険しくし、村雨丸を抜こうとしたその時だった。

「えっ…？」

村雨丸を抜こうと思っているのに、桜時の手は動かなかった。立ち上がろうと思っているのに、桜時の足は動かなかった。

「何…でっ…？」

動かぬ自分の体に、桜時が戸惑いの表情を見せる。

「何でっ…！」

「教えてあげましょうか…？」

「……っ！」

戸惑っていた桜時が、聞こえてくる声に、勢いよく顔を上げる。顔を上げると、そこには、不適な笑みを浮かべたシルクの姿があった。

「お前っ…！俺の体に何かっ…！」

「勘違いしないで…私は何もしてないわ…」

「何っ…？」

すぐさま否定するシルクに、桜時が眉をひそめる。

「じゃあ何でっ…！」

責めるように、桜時が声を荒げる。

「何で俺の体が動かねぇーんだよっ…！！」

「それは…貴方が恐怖してるからよ…」

「えっ…？」

その思いがけない言葉に、桜時の表情が止める。

「何っ…」

「私に恐怖するあまり…貴方の体は動かなくなってしまったのよ…」

「そんなことっ…！」

桜時が否定するように叫び、必死に手を足を、動かそうともがく。

「そんなっ…ことっ…！」

しかし、強く震える桜時の体は、やはりどんなに頑張っても、動かすことが出来なかった。

「クソォっ…！」

俯いた桜時から、悔しげにかすれた声が漏れる。

「もうこれ以上、怖い思いはしたくないでしょう…？」

そんな桜時に、優しい口調で微笑みかけるシルク。

「だから…私のもとへっ…」

「……。」

「……っ」

桜時に歩み寄ろうとしたシルクの前に、立ち塞がるもの。その姿に、シルクの表情が、一気に冷たく変わる。

「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」

立ち塞がったのは、もう足だけで起き上がることも出来ずに、右

手を地面について、何とか起き上がっている状態の輝矢であった。
体はボロボロだというのに、まだ強く輝く瞳を、輝矢がシルクへと向ける。

「輝っ…矢…」
そんな輝矢の姿を見て、目を細める桜時。

「しつこい子ね…」

「……っ！ううあああああああっ！」

「……っ！！」

少し顔をしかめたシルクが、輝矢の右手を鬼閃で撃ち抜く。足を、手を撃ち抜かれ、倒れ込んだ輝矢は、もう完全に起き上がれなくなってしまう。

「ううぅっ…」
それでも、何とか必死に起き上がろうとする輝矢。

「輝矢っ…！クソっ…！」
目の前で輝矢が、あんなに傷だらけになってまで、桜時を守ろうとしているのに、桜時は恐怖で体を動かすことさえ出来ないでいる。

――――強くなりましたね…ハチ…――――

「クソォォォっっ…！！」

強く握り締められた桜時の拳から、血が滲んだ。

「もう少し遊んであげたかったけど…ちょっと邪魔だから…」

「ううぅっ…ううっ…」

シルクが何とか顔だけを上げる輝矢を見下ろす。

「ごめんなさい…」

「……っ」

輝矢の顔面へと向けられる、シルクの人差し指。輝矢が顔をしかめる。

「本当にサヨナラ…月の少女っ…」

「輝矢っ…！！」

「……っ！」

白く輝き始めるシルクの指先に、桜時が必死に輝矢の名を叫び、輝矢がそっと唇を噛んだ。

その時。

「“五臓・六腑”っ…！！」

「……っ」

聞こえてくるその声に、シルクが指先の光を止ませ、少し表情をしかめて、振り向く。すると、その振り向いた先から、シルクへ向け、数個の火の玉が飛んで来ていた。

「……っ」
諸刃がすぐさまシルクの前に立ち、火の玉へ向け、草薙の剣を振り上げた。
「“白雷”っ…！！」
――――バリィィィィィィィーーーーンっ！――――
白い雷が、向ってきた火の玉を弾き落とす。
「……っ」
ゆっくりと草薙の剣を下ろし、火の玉の飛んできた方を見つめる諸刃。
「あっ…！」
そこに立つ人物を見て、桜時は大きく目を見開いた。
「……。」
森の木々の間から現れたのは、いつもにも増して険しい表情を見せたゴンであった。
「ゴっ…」
「ゴンっ…」
「えっ…？」
自分より先にゴンの名を呼ぶ諸刃に、桜時が眉をひそめる。

「諸刃…」

ゴンもまっすぐに諸刃の方を見つめ、諸刃の名を呼ぶ。

「知り合い…？」

「……っ」

そんな二人の様子に、戸惑う桜時。倒れたままの輝矢も、少し表情を曇らせる。

「誰かと思えば…」

シルクが、現れたゴンに、笑みを向ける。

「随分と大きくなったわね…見違えたわ…」

「……。」

ゴンを知っているような口調で、どこか親しげに話しかけるシルク。ゴンは特に答えようとはせずに、怖いとさえ思えるほどの険しい表情で、睨みつけるようにシルクを見つめた。

「何をしに来たの…？」

「お前を殺しに…」

「私を…？つまらない冗談を言うようになったのね…」

確かな怒りを見せるゴンを、嘲笑うかのように言葉を吐くシルク。

「また…仲間の死ぬところを見に来たんじゃないの…？」

再びシルクが、輝矢の方を向き、顔面に向けていた指先を光らせる。

「……っ」

「輝矢っ…！」

同じように、輝矢が顔をしかめ、桜時が輝矢の名を呼ぶ。

「……。」
『……っ！』

輝矢とシルクの間へ、輝矢を庇うようにして、現れるゴン。輝矢と桜時が大きく目を見開く。

「……。」
「そうっ…」

強く睨みつけるゴンに、シルクが少し呆れたように肩を落とした。

「……死にに来たの…」

シルクの冷たい言葉とともに、その指先の光が、強さを増していく。

「ゴンっ…！」
「うっ…！」
「……。」

桜時が名を叫び、輝矢が顔をしかめる中、ゴンは少しも怯むことなく、輝矢の前に立ちはだかった。

「“鬼せっ…」

――――バァァァァァァァァァーーーーンっ！！――――

「……っ！」

シルクがゴンへ鬼閃を放とうとしたまさにその時、シルクのすぐ下の地面が、青い光を放ちながら、勢いよく突き上げた。

「何っ…？」

「シルク様っ…！」

突き上げる地面に、少し戸惑いの表情を見せながら、シルクが諸刃とともに、後方に飛び避ける。

「なっ何っ…」

危機を回避したゴンも、戸惑うように、突き上げた地面を見つめる。

「ふぅいぃ～っ！」

『……っ』

すぐ横から聞こえてくる声に、振り向くゴンと輝矢たち。

「どうやら間に合ったようだねぇ～っ」

『あっ…！』

振り向いた皆が、驚いた様子で、大きく目を見開く。

「よっ！無事かいっ？未来の私の旦那どもっ」

輝矢たちのすぐ傍へと降り立ったのは、着物から惜しみなく肌を

露出し、青い髪をなびかせて、妖艶な姿で微笑んでいる、御伽界最古の獣人・千年竜のトマトであった。

「トマト先生っ！」
「クソババアっ…」
ゴンが驚いたように、桜時が茫然と、トマトの名を呼ぶ。

「フフフっ…」
「……っ」
聞こえてくる笑い声に、トマトが表情を厳しくして、振り向く。

「今日は随分と懐かしい顔にばかり会うわねぇ…」
「シルク…」

どこか楽しげに微笑んでいるシルクを見て、さらに表情を険しくするトマト。その視線が、シルクから、その横へと移される。

「諸刃…」
「……。」

諸刃の姿を見て、そっと目を細めるトマト。諸刃もどこか複雑そうな表情で、トマトの方を見る。

「会いたかったよっ、シルク…随分と探した…」
「それは光栄ね…」
トマトがシルクに鋭い瞳を向けると、シルクも笑顔で、全然笑っていない瞳を向ける。

「さぁ、とっとと終わりにしようかっ」

――――ザザザザザザザザっっ……！！――――

「……っ」

『……っ！』

トマトのその言葉を合図にするかのように、輝矢やシルクたちを中心とするようにして、周囲に多数のオトポリ隊員が現れ、取り囲んだ。その光景を驚いたように見つめる桜時、ゴンと、少しその表情を曇らせるシルクと諸刃。

「動かないでっ…」

隊員たちの中心、シルクの真後ろに立ち、厳しい表情を見せるリンゴ。

「少しでも動けばっ…殺すわよっ…」

「……。」

そのリンゴの言葉を聞き、そっと口元を緩めるシルク。

「ホント…今日は懐かしい顔が多い…」

「……っ」

そのシルクの言葉に、リンゴが顔をしかめる。

「懐かしかったわ…欲しいものが手に入れられなかったのは、少し残念だけどっ…」

「何をっ…！」

「……っ」

リンゴが言い返そうとした瞬間、シルクがそっとその右手を掲げた。

――――バァアアアアアアアアアアアーーーーンっ！！――――

「うっ…！」

シルクと諸刃を包み込むようにして、白い光が地面から突き上げる。

「待っ…！」

「近づくんじゃないよぉっ！」

「……っ！」

その光に近づこうとしたオトポリ隊員を、トマトが強い口調で呼び止める。

「触れたら、即・鬼だよぉっ」

『……っ』

脅迫ともとれそうなトマトの言葉に、一気に怯む四方の隊員たち。

「次こそは私の手に…“命咲かす者”…」

「……っ」

シルクと諸刃を包んだ白い光が徐々に薄くなっていく中、シルクが桜時へ微笑みを向ける。その冷たい笑みに、少し表情をしかめる桜時。

「……っ」

桜時の方を見つめていたシルクが、ゴンの後ろで倒れたままの輝矢へと、視線を移す。

「また遊びましょう…」

「……。」

楽しげに笑ったシルクを、輝矢は厳しい表情で見つめた。

「月の少女っ…」

微笑む口元が、白い光の中へと消えていく。

――――パァァァァァァァンっ！――――

『あっ…！』

最後に強く輝いて、シルク、諸刃とともに、忽然と消える白い光。

何もなくなったその場所に、隊員たちは思わず声を漏らした。

『……。』

それぞれ、神妙な面持ちで、光の消えた場所を見つめるゴン、リンゴ、トマト。

「牢戸…知玖…」
輝矢も小さく、シルクの名を呟く。

「……っ」
そして輝矢は、そっとその瞳を閉じ、その場に深々と倒れこんだ。

「……っ！竹取っ…！？」
倒れた輝矢に気づき、ゴンが少し慌てた様子で駆け寄る。

「竹取…！？竹取っ…！？」
「リンゴっ」
「あっ、はいっ！」

ゴンが必死に輝矢に呼びかける中、トマトがリンゴの方を見る。
トマトに名を呼ばれ、ハッとしたように頷くリンゴ。

「救護班っ！担架急いでっ！その他っ！念の為、周囲を探索っ！敵が残ってないか、確認してっ！」
リンゴが、隊員たちに指示を与えていく。

「腹の傷、絞め上げてでも止血しなっ」
「はいっ！」

トマトに助言を受けながら、気を失った輝矢へ処置を施していく

救急隊員。止血処理を受けながら、もうほとんど生気を失った顔色の輝矢が、担架に乗せられて、運ばれていく。

「……。」

そんな輝矢を、しゃがみ込んだまま、茫然と見つめる桜時。

――――それは…貴方が恐怖しているからよ……――――

――――ううあああああああっ！――――

目の前であんなに輝矢が傷つけられたというのに、恐怖で動かなかったこの体。

「……っ」

桜時が、強く唇を噛み締める。

「おいっ！ハチ公っ！お前も担架にっ…！」

「……っ」

ゴンが桜時の方を振り返ったその時、桜時がその瞳を閉じ、その場に倒れ込んだ。

「んっ？ハチ公っ…！？」

倒れた桜時に、駆け寄るゴン。

「おいっ…！ハチ公っ…！？ハチ公っ…！！」

「……。」

深く瞳を閉じた桜時は、ゴンの呼びかけに動くこともなかった。

その日、輝矢一行は、初めて、“敗北”したのであった…。

第５４章　涙　★１

あの日から、３日が経った。

龍国・オトポリ本部。

「出来たさぁ～っ！」

扉を開けて、勢いよく部屋へと入って来るのは、エプロン姿に陽気な笑顔のシーサーの獣人・剛也。

「剛也特製っ！ゴーヤチャンプルーココアさぁ～っ！」

剛也がテーブルへと出したのは、何やら緑色の物体の浮いている茶色の飲み物。

「んん～っ、どれどれぇ～」

その見るからに怪しいものの入っているコップを、迷いなく手にするのは、ソファーにどっしりと腰を掛けている爽やか眼鏡お兄さんの太狼であった。太狼がコップの中の飲み物を一口、飲み入れる。

「うっ…！」

飲んだ直後、表情を一変させる太狼。

「苦ぁぁぁぁぁ～～～いっっ！！」

「ぎゃあああああああださぁぁぁぁ～～～っっ！！」

まだ熱々のココア入りコップを投げられ、剛也が悲鳴にも似た叫び声をあげる。

「もう一度っ！甘くなるまでやり直しっ！」

「そんなこと言われてもぉ～っ、ゴーヤで甘くするの、難しいさぁ～…」

厳しく言い放つ太狼に、剛也が少し困った表情を見せる。

「不可能を可能にするのが、甘党の醍醐味ってもっ…！」

「人の部屋で何をやっておるんだぁぁぁっっ！！」

「うわあっ」
さらに熱く甘党についてを語ろうとした太狼であったが、部屋へと勢いよく入って来た怒鳴り声に、驚いた様子でソファーに背中を押しつけた。
「これはこれはぁ～青守長官殿ぉ～っ」
「なぁ～にが長官殿だっ！人のおらん間に、グダグダと寛ぎおってっ！」
部屋へと入って来た座黒が、軽い笑みで手を上げる太狼を、鋭く睨みつける。どうやら太狼のいるその部屋は、座黒の部屋、つまりオトポリの長官室のようである。
「座黒さぁ～ん、僕、グダグダなんてしてませんよぉ」
「何っ？」
真面目な表情を見せる太狼に、少し眉をひそめる座黒。
「ゴロゴロしてただけです」
「一緒だっ！！」
笑顔で答える太狼に、座黒が勢いよく怒鳴りあげた。
「お前も捕虜なら捕虜らしくっ、自分の部屋で大人しくしておけっ！でないと牢へ入れるぞっ！」
「ひえええぇぇ～っ！はいさぁぁ～～っ！」
座黒の脅しに怯えるように、剛也は慌てて長官室を飛び出していった。
「ったくっ…！」
剛也が出て行ったのを確認し、どこか呆れたように肩を落とす座黒。
「何、捕虜にココアを入れさせているっ…！」
「だってぇ～ヘンゼルもグレーテルもおサル君たちに付きっきりで、いないんですもぉ～んっ」
「だってじゃないっ！」
口を尖らせて主張する太狼に、呆れたように言い返しながら、座黒が太狼の座るソファーを横切り、長官席へと腰を下ろした。

「この一大事にっ…！暢気なものだなっ…！」
「一大事はもう終わったじゃないですかぁ～」
少し声を荒げる座黒に、太狼が軽い口調を続ける。
「彼っ…」
「んんっ？」
「“鬼人化人間”じゃ…なかったんでしょう…？」
「……っ」
急に鋭い瞳を向ける太狼に、座黒がそっと眉をひそめた。
「ああ、検査の結果ではなっ…」
表情を曇らせた座黒が、小さな声で呟く。
「牢戸知玖の手先だったとはいえ、普通の人間を拘束することも出来ず、今は空き部屋に保護しているっ」
「今後、鬼人化する可能性は？」
「研究班の報告では、“まずない”とのことだ」
「そうですかっ」
座黒の答えに、少し面白くなさそうな表情を見せる太狼。
「何がつまらんのだ？」
「別にぃ～ただ、僕まだ“鬼人化人間”って見たことないもんですからぁ」
「興味本位というわけかっ…」
そんな太狼に、座黒が顔をしかめる。
「不謹慎な奴だな…その“鬼人化人間”の為に、竹取輝矢は酷く傷ついているというのにっ…」
「僕は輝矢ちゃんほど優しくないですからっ」
非難するように言い放つ座黒に、特に悪びれた様子もない笑顔で答える太狼。その笑顔には、感情すらないように見えた。
「竹取輝矢の様子はどうだ？」
「別にっ…」
座黒の問いかけに、太狼がそっと視線を落とす。
「変わりませんよっ、ベッドの上で眠ったまんまっ」

「そうか…まだ目覚めんか…」
座黒が気難しい表情を見せ、そっと机に膝をつき、両拳を顎の下へと持ってくる。
「なぁっ…太ろっ…」
「あのぉ～っ…」
『……っ？』
座黒が太狼に話しかけようとしたその時、遠慮がちな声が聞こえてきて、太狼と座黒が同時に扉の方を振り向いた。
「何だ、まだいたのかっ」
「はいさぁ」
少しだけ扉を開け、その隙間から中を覗き込むようにして見ているのは、先ほど座黒が追い出したはずの剛也であった。
「一つ、聞きたいことがあってさぁ」
「何だ？」
「あのぉっ…」
躊躇うように、言葉を選ぶ剛也。
「俺と戦ったアイツは…今、どうしてるさぁ…？」
「……っ」
どこか心配するように問いかける剛也に、座黒が少し驚いたような表情を見せた。一度自分を倒した敵である門貴のことを、まるで気にしているかのようである。
「どうしてぇ？」
「えっ…？」
太狼に逆に問いかけられ、少し目を丸くする剛也。
「どうしてっ、そんなこと聞くのぉ？」
「それはっ…」
――――クっ…！――――
――――あっ…――――

剛也へと振り下ろされた醍也の刃の前に、立ち塞がった門貴。

「アイツっ…俺が役立たずって殺されそうになった時っ…俺を助けてくれたさぁっ…」

剛也を庇わなければ、門貴があのような傷を負うこともなかった。

剛也を庇わなければ、門貴は醍也に勝つことも出来たかも知れない。

「だからっ…」

剛也がそっと目を細め、軽く拳を握る。

「そうっ…」

笑顔を見せた太狼が、ソファーからそっと立ち上がる。

「行ってあげるといいっ…」

「えっ…？」

すぐ目の前へと立つ太狼に、剛也が少し戸惑いの視線を向ける。

「向こうの塔にいるからっ」

「向こう…？」

「うん…」

頷いた太狼の、声が曇る。

「会話は出来ないと思うけどねっ…」

オトポリ本部。救護塔3階、集中治療室。

『……。』

分厚いガラス壁の向こうに広がる、真っ白な部屋。その中央に並べられた二つの寝台に、深く瞳を閉じた門貴と由雉が、それぞれ横

たわっていた。全身に包帯が巻かれ、口元には酸素吸引、腕には点滴が繋がれている。生きているというよりも、“生かされている”ような、そんな姿であった。

「……っ」

そんな状態の二人を、ガラス壁の向こうから見つめ、そっと眉をひそめるグレーテル。その顔色は悪く、疲労と不安が見てとれた。

「由雉さんの癒羽も…効果なかったんですって…」

グレーテルが、壁に両手をついたまま、ポツリと言葉を落とす。

「無理もないわ…」

その言葉に、そっと返って来る声。

「あの状態じゃ…自己回復する体力なんて、あるはずもないものっ…」

「……。」

グレーテルがそっと表情を曇らせて振り返ると、その先には、廊下の長椅子に腰掛けているヘンゼルの姿があった。頭につけていたレースのヘアバンドをはずし、力なく俯いている。

「でっでも一命は取り留めたんですしっ…！」

暗い表情を見せるヘンゼルに、グレーテルが無理やり作った明るい笑みを向ける。

「きっとすぐに目覚めてまたっ…！」

「目覚めたところで…彼らは、また戦えるのかしら…」

グレーテルの明るい声を、ヘンゼルがそっと遮る。

「体もボロボロで…」

ヘンゼルが、視線を落とす。

「武器さえも…砕かれて…」

視線を落としたその先、ヘンゼルの膝に置かれた両手には、真っ二つに砕き割られ、無残な姿となった如意棒が握られていた。

「また…立ち上がれるのかしら…」

「お兄様っ…」

ヘンゼルの言葉に、グレーテルもそっと表情を曇らせる。

「門貴いいい～～っ！！」
『……っ？』
廊下の向こうからやって来る、場違いに大きなその声に、ヘンゼルとグレーテルが少し顔を引きつって振り返る。
「門貴いいい～～っ！！いるさぁぁぁ～～～っっ！？」
そこへやって来たその大声の主は、太狼から門貴の居場所を聞いた、剛也であった。エプロン姿に陽気な笑顔で、周囲を見回しながら、こちらへとやって来る。
「あっあれって確か…門貴さんと戦っていたっ…」
「あんの野郎っ…」
「ふぇっ！？」
門貴の如意棒を横へと置き、強く拳を握り締めて立ち上がるヘンゼルに、グレーテルが少し焦ったような表情を見せる。
「よっくも抜け抜けとこの場にっ…」
「おっお兄様っ」
門貴を溺愛しているヘンゼルのこと、門貴と戦って、あんな傷を負わせる原因を作ってしまった剛也となど、この場で死闘を起こしかねない。
「お兄様っ！落ち着いっ…！」
「でっかい声出して、門貴様が起きたらどうすんじゃああっっ！！こらあああああっっ！！！」
「あっ、ごめんなさいさぁ～っ！」
「お兄様っ…お兄様の声の方が煩い…」
怒鳴りあげるヘンゼルに、素直に謝る剛也と、こっそり突っ込みを入れるグレーテルであった。

オトポリ本部・研究塔。
「ネバーランドで保護した子供の検査結果はまだっ！？」
慌ただしく動いている研究員たちの中心に立ち、大きな声を出しているのはリンゴであった。機嫌でも悪いのか、その表情はどこかしかめっ面に見える。
「鬼から戻った青年の検査は一番に優先してっ！サソリの女の常時データの取り忘れも注意してっ！」
「頑張ってるなぁ」
「……っ？」
研究員に次々と指示を与えていたリンゴが、背後から聞こえてくる声に振り返る。
「金汰さんっ」
「ようっ！」
入口からリンゴのいる部屋へとやって来たのは、金汰であった。
金汰が軽く手をあげ、リンゴに笑みを向ける。
「ネバーランドから戻って来てたんですね」
「ああ、こっちはこっちで緊急事態だったみたいだからなぁ」
「……っ」
金汰の言葉に、リンゴの表情が少し曇る。
「悪かったなぁ。大変な時に空けちまって」
「別に金汰さんが悪いわけじゃないわっ…」
「……。」
謝る金汰に、リンゴは軽く首を横に振った。そんなリンゴのどこか浮かない笑みを見て、金汰が少し眉をひそめる。
「それに金汰さんがいたって、どうにかなったとも思えないし」
「姉妹揃って、相変わらず毒舌だな…」
さらりとひどいことを言うリンゴに、金汰が表情をしかめて、こ

っそりと呟く。
「ふぅっ」
そっと息を吐く金汰。
「気を紛らわせたいのはわかるが、あまり無茶はするなよ」
「えっ…？」
リンゴが、少し驚いたように顔を上げる。
「今のお前は、無理をしているのが見え見えだ」
「……っ」
真剣な表情を見せる金汰に、そっと目を細めるリンゴ。
「お前の無理は隊員たちに伝わる。人の上に立つ者なら、十分に気をつけることだな」
「……。」
気難しい表情を見せたリンゴが、深く俯く。金汰の言っていることは正しく、リンゴは言い訳することも出来なかった。
「ごめんなさ…」
「まぁお前の気持ちもわかるがな…」
謝ろうとしたリンゴの声を、金汰が遮る。そっと曇る、金汰の表情。
「“御剣諸刃（みつるぎ）”…」
「……っ」
金汰の口から出るその名に、リンゴはさらに険しい表情を見せた。その表情は憎しみと悲しみの混ざり合った、複雑な表情であった。
「会ったんだろう…？」
「ちょっとだけ…だけどっ…」
金汰の問いかけに、少し途切れ途切れに答えるリンゴ。
「ゴンもか…？」
「……ええっ…」
さらに悲しみの色を濃くして、リンゴが頷く。
「そうか…」
その悲しみが伝染したかのように、金汰もどこか複雑な表情を見

せ、その視線を下へと落として、力なく頷いた。
「お前たちの気持ちを無下にするわけじゃないが…」
金汰が再び顔を上げ、まっすぐな瞳をリンゴへと向ける。
「あまり過去に囚われるな」
どこか説得するように、優しく話す金汰。
「“桃原次狼”は…もうこの世にはいないんだ…」
「……っ」
その言葉に、深く俯いていたリンゴの表情が、少し動いた。
「だからっ…」
「まだ…」
「……っ？」
金汰の言葉を遮り、声を発するリンゴ。
「まだっ…受け入れられないだけなのっ…私もゴンもっ…」
顔を上げたリンゴが、遠くの方を見つめながら、小さく口元を緩める。
「次狼が…死んだだなんてっ…」

――――リンゴっ…――――

目を閉じれば浮かんでくる、穏やかで優しい笑顔。

「次狼がもうっ…微笑みかけてはくれないなんてっ…」
「リンゴ…」
悲しい笑みを浮かべるリンゴに、金汰はそっと目を細めた。

龍国。見届けの苑。
「……。」
たくさん並んだ墓石の一つ、“桃原次狼”と刻まれた墓の前に、厳しい表情を見せたゴンは、ただ立ち尽くしていた。花を手向けるわけでも、水で清めるわけでもなく、ただ、その墓を見つめていた。
「あれからもう…六年か…」
「……っ」
背後から聞こえてくる声に、ゴンが振り返る。
「トマト先生…」
「……っ」
ゴンが振り返ると、そこにはトマトが立っていた。トマトはゴンへ少し笑みを向けると、墓の前へとしゃがみ込み、手を合わせ、そっと瞳を閉じた。トマトが祈りを送る間、そこに沈黙が流れる。
「六年なんて…早いもんだねぇ…」
ゆっくりと瞳を開いたトマトが、しゃがみ込んだまま呟く。
「千年生きてる私にとっちゃあ、“一瞬”に等しい…」
「俺には…」
「……っ」
後方から聞こえてくる声に、トマトが耳だけを傾ける。
「俺にとっては…“永遠”にも等しい六年でした…」
すぐそこにある墓石を見つめているというのに、ゴンはとても遠い目を見せ、そう言った。
「その永い時は…今も続いてる…」
「……。」
ゴンの言葉に、トマトが少し眉をひそめる。
「私はねぇ、ゴン…」
トマトがゴンへと呼びかけながら、ゆっくりと立ち上がる。
「次狼のことで、いつまでも立ち止まってほしくないと思ってる…

お前にもリンゴにも…」
「……。」
振り返り、真剣な瞳を向けるトマトに対し、ゴンは目を合わせることはせず、深々と俯いたままであった。
「忘れてほしいとさえ思うくらいさ…まぁそんなことは不可能だろうけどねぇ」
どこか悲しげに微笑むトマト。
「だから、少し嬉しかったよ…」
「えっ…？」
ゴンが少し戸惑うように、顔を上げる。
「お前が諸刃を前にして、命を投げ出してまでアイツらを守ろうとしたことっ…」
「……っ」
トマトの言葉に、ゴンが眉をひそめる。
――――そう…死ににきたのっ…――――
――――ゴンっ…！！――――
何も考えられなかった。ただ輝矢と桜時の前へと飛び出した。あの二人を守ることが、自分の命を守ることよりも大事であると、迷わずにそう思えた。
「昔のお前なら、何を捨ててでも諸刃を殺そうとしただろうからねぇ」
少し肩を落とした後、トマトが改めてゴンの方を見る。
「変わったね…ゴン…」
「……。」
穏やかな笑顔を向けるトマトに、耐えきれないように目を逸らし、俯くゴン。
「俺は…何も変わってませんよっ…」

俯いたゴンが、小さい声を漏らす。
「あの頃の…無力な俺のままっ…」
――――次狼っっ！！！――――
「次狼を死なせたっ…弱い俺のままっ…」
弱々しいその声が、少し震える。
「今回だって…結局、何も守れなかったっ…」
――――牢戸…知玖っ…――――
シルクの前に、倒れた輝矢。
――――……っ――――
――――ハチ公っ！？――――
傷ついた輝矢を目の前に、倒れた桜時。
「アイツらのことっ…守ってやれなかったじゃないですかっ…」
「ゴンっ…」
深く悔いるように頭を抱えるゴンを、トマトはただ見つめることしか出来なかった。

第５４章　涙　★２

オトポリ本部、救護塔五階・簡易治療室。
小さな部屋に置かれた寝台の上には、桜時が横たわっていた。
「んっ…」
『あっ…！』
ゆっくりと開かれる桜時の青色の瞳に、寝台の横に並んで立っていた松人、竹人、梅人が大きく目を見開いた。
「お…れ…」
「桜時ぃぃ～っ♪」
「桜時ぃぃぃぃ～～っ♪」
「桜時ぃぃぃぃぃぃ～～～っ♪」
「うげぇっ」
目を開き、戸惑うように天井を見つめる桜時の声を遮って、勢いよく発声をし始める三兄弟。その声に、桜時が一気に目が覚めた様子で、顔をしかめる。
『おぉぉぉ～～うぅぅ～～じっ…！』
「うるさい」
『ぎゃあああああああああっ！！』
「……っ」
今まさに、ハーモニーを奏でようとした三兄弟が、横から飛んできた拳に、勢いよく吹き飛ばされる。寝台と逆側の壁に、思いきり叩きつけられる三兄弟。そんな三人を桜時が少し驚いたように見つめる。
「ご気分はいかがですか？桜時さんっ…」
「いっイチゴっ…」
心配するように、桜時を覗き込むイチゴ。どうやら三人を吹き飛ばしたのは、イチゴのようである。桜時が少し引きつったままの表

情で、イチゴを見る。
「どこか痛むところなど、ありませんか？」
「いやっ、特にはっ…」
『ううぅ～っ…痛いぃ～～っ…』
「むしろ向こうの方が…」
イチゴの問いかけに、壁際で苦しんでいる三人を見ながら、桜時が小さく呟いた。
「心配したんだよぉ～っ！桜時くんっ！」
「そうそうぅ～っ！桜ちゃんが眠ってた三日間、俺たちってば付きっきりでぇっ…！」
「桜時さんのご気分が悪くなりますので、それ以上、近寄らないで下さい」
『がびぃぃぃぃぃーーーんっっ！！』
「……。」
イチゴの容赦ない発言に激しく傷ついている松人と竹人の姿を見ながら、呆然とする桜時。桜時が少し体を気遣いながら、寝台の上でゆっくりと起き上がる。
「桜時っ」
「梅人っ…」
松人と竹人がイチゴの言葉に傷ついている間に、寝台の傍に梅人が駆け寄って来た。
「無事だったんだな、良かった…」
「……っ」
穏やかな笑顔を見せる桜時に、梅人が少し眉をひそめる。
「相変わらずバカだね、人の心配より自分の心配しろって」
少し呆れたように言いながら、梅人が寝台の横の椅子へと腰を下ろす。
「悪い…」
「……。」
どこか元気のない笑みで謝る桜時に、梅人は諦めたように肩を落

とし、それ以上は何も言わなかった。
「桜時さん、ここはオトポリの救護塔です」
「救護塔…？」
「戦いの後、倒れたんだよ。覚えてないっ？」
「戦いの…後っ…」
梅人の言葉に、桜時が過去を思い返すように俯く。

――――それは…貴方が恐怖しているからよ…――――
――――竹取っ…！竹取っ…！？――――

「……っ」
鮮明に思い出される光景に、桜時はどこか辛そうに目を細めた。
「あのさっ、イチゴっ…」
「はいっ？何でしょうっ？」
桜時に問いかけられ、イチゴが嬉しそうな笑顔で身を乗り出す。
「輝矢…はっ…？」
「……っ」
桜時の問いに、イチゴの表情が少し曇る。
「輝矢さんは、太狼さんの家です」
すぐさま笑顔を作り直し、桜時へと答えるイチゴ。
「傷の処置などはこちらで行ったので、そのままこちらにと思ったのですが、太狼さんが連れて帰られました」
イチゴが説明を続ける。
「まだ、目覚められていないようですが…」
「……そうかっ…」
少し躊躇いがちに付け加えたイチゴに、桜時は視線を落とすようにして頷いた。
「門貴と由雉は…？」
「この塔の三階にいらっしゃいます…」
その問いかけにも、イチゴは少し厳しい表情を見せた。

「お二人とも傷が深く、集中治療室入られてますが、意識はまだ、戻っておりません…」
「……っ」
『……。』
イチゴの言葉に、桜時が眉をひそめる。二人の会話を聞いていた三兄弟も、険しい表情で俯き、部屋全体に暗い空気が流れ込んだ。
「そうか…」
牢戸知玖の前に輝矢が倒れ、門貴と由雉までもがやられてしまった。

「……。」
『……っ』
思い詰めたような表情を見せる桜時を見て、壁際に追いやられていた松人と竹人が、そっと顔を見合わせ、目で頷き合う。

「あぁぁ～っ！俺ってば急激にトイレ、行きたくなっちゃったぁ～っ！梅ちゃん、ついてきてぇ～っ！」
「はぁっ！？何言ってっ…！トイレくらい1人で行っ…！」
「イチゴちゃん、お手洗いまでの道案内してぇ～っ！」
「えっ？この前、教えたはずじゃっ…」
「さっ！行くよぉ～っ！！」
『へぇっ！？』
トイレに行くというのに、妙に張りきった竹人が、かなり無理やりな様子で梅人とイチゴを連れ出していった。部屋に桜時と松人だけが残る。

「何だっ？竹兄のヤツっ…」
「竹人クンは竹人クンなりに気を遣ってるのさ」
「えっ…？」
桜時が首を傾げる中、穏やかな笑みを浮かべた松人が、寝台の横

の椅子に腰を掛ける。
「何か…あった…？」
「……っ」
優しい笑みで、桜時の顔を覗き込むようにして問いかける松人に、桜時が驚いた様子で大きく目を見開いた。
「……俺っ…」
俯いた桜時の口から、弱々しい声が零れ落ちる。
「俺っ…何も出来なかったんだっ…」
「……。」
その少し震えた声を、松人はまっすぐな瞳で真剣に聞く。
「輝矢がっ…必死に戦って、傷ついてっ…俺を守ってくれてたのにっ…」
――――ううあああああああっ！――――
目の前で飛び散った輝矢の真っ赤な血が、今も頭から離れない。
「怖くてっ…体が動かなかったんだっ…」
桜時がふと、自分の両手に目をやる。
「動かなかったんだっ…」
あの時、シルクへの恐怖に震えて、動かなかった両手。
「“強くなる”って…決めたはずだったのにっ…」
「桜時クン…」
唇を噛み締め、そっと目を伏せる桜時を、松人もどこか辛そうな表情で見守る。
「何もっ…何もっ…！」
「守りたかったんだね…」

「……っ」

強く握り締められた桜時の手に、その力を緩めることを促すように、そっと松人の手が乗った。触れる温かい手に、桜時が少し戸惑うように顔を上げる。

「輝矢さんのことを…」

顔を上げた桜時に、優しい微笑みを向ける松人。

「大切なんだね…」

そのまっすぐな瞳が、桜時に注がれる。

「輝矢さんのことが…」

「……っ」

松人の言葉に、桜時が少し驚いたように目を開く。

――――私には見えますよ…アナタの背に…その翼が…――――

――――アナタのすべてが、私の活力ですから…――――

――――強くなりましたねっ…ハチ…――――

「……っ」

思い出される笑顔に、桜時がそっと頭を抱える。

「……わからないっ…」

そのまま、桜時はゆっくりと俯き、小さな声で力なく呟いた。

「ああぁ～っ！そういえばさっき、トイレ行ったとこだったやぁ～っ！」
「何なんだよっ！一体っ！！」
適当な発言ばかりをする竹人に、救護塔内とはいえ、さすがに我慢ならなくなり、思わず怒鳴りあげてしまう梅人。相変わらずの兄に、その表情は引きつっていた。
「行ったのに忘れちゃうことってあるじゃなぁ～いっ？」
「痴呆じゃないですか」
「がびぃぃぃーーーんっ！！イチゴちゃん、俺っ、まだ十八歳よぉ～っ？」
鋭い突っ込みを入れるイチゴに、必死に訴える竹人。イチゴも竹人の適当ぶりに、かなり嫌気がさしているようで、その表情はかなり引きつられていた。
「竹兄、そのテンション、今は最高に場違いっ」
「そうです」
梅人の言葉に、イチゴが深く頷く。
「今、桜時さんは、初めての敗北で、心も体も傷ついてるんです。発言には十分、注意しっ…」
「敗北で傷ついてるわけじゃないよぉ」
「えっ…？」
注意をしようとしたイチゴが、遮る竹人の声に、少し眉をひそめる。
「それって…」

「桜ちゃんが傷ついてるのは、輝矢ちゃんを守れなかったからっ」
『……っ』
竹人の言葉に、イチゴと梅人の表情が、同時に曇る。
「大切な女の子を守れないのって、男にとっては負けるより辛いからっ」
「大切なっ…」
「……。」
少し俯いたイチゴが竹人の言葉を小声で繰り返し、梅人がそっと目を逸らすように、どこか遠くを見る。
「まぁ桜ちゃんもそろそろ自覚しっ…」
「私、桜時さんが目を覚まされたこと、報告してきます」
「ふぇっ？」
竹人の言葉を遮ると、イチゴは深く俯いたまま、足早にその場を歩き去っていった。やがて見えなくなるイチゴの背中を見つめ、竹人が少し戸惑うように首を傾げる。
「思ったより本気だったかぁ～あっちゃ～」
イチゴが見えなくなると、竹人が少し困ったように頭を掻く。
「マズったかなぁ？梅ちゃ～んっ」
「……。」
竹人が振り向くと、梅人はどこか気難しい表情で窓の外を見ていた。
「梅ちゃんっ？」
そんな梅人の様子に、竹人が首を傾げる。
「ホントっ…思ったより本気だったみたい…」
「えっ…？」
「ううんっ…」
梅人がポツリと漏らしたその言葉を、聞き取れなかったのか首を傾げる竹人であったが、梅人はすぐさま首を横に振った。
「何でもないっ…」

――――大切な女の子を守れないのって、男にとっては負けるより辛いからっ――――

頭を巡る、竹人の言葉。

「はぁっ…」

救護塔を出て、長官室へと向かっているイチゴが、深々と溜息をついた。

「わかってた…はずなのにっ…」

そう呟きながら、そっと痛みを押さえるように左胸に手をやる。

「ああぁ～っ！ダメっ！」

――――バッコォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

「ひいっ！」

不意にイチゴが拳を壁へと打ちつけると、壁は一瞬にして粉々に崩れ去った。近くを歩いていた隊員が、それを見て、怯えるような声をあげる。

「今はとりあえず、お父様に桜時さんのことの報告をっ…」
怯えている隊員にも気付かず、粉々にした壁も無視して、イチゴが長官室へと向かう。
「お父さっ…あれっ…？」
長官室から聞こえてくる会話に、イチゴはノックしようとした手を引っ込めた。
「気付いていたんじゃないのか？」
「何がですぅ～？」
剛也の持ってきたゴーヤチャンプルー風ココアに角砂糖を入れ、甘さを調節しながら、長官席の座黒の問いかけに、太狼が適当に聞き返す。
「牢戸知玖の狙いが、朱実梅人ではなく、朱実桜時の方だったということに、だ」
「ああぁ～、まぁ何となくではありましたけどねぇ～」
「……。」
やはり気付いていたか、と、太狼の答えに、座黒が呆れたように肩を落とす。
「そういうことは、ちゃんとオトポリに報告しろっ」

「ただ単に勘で思っただけなのにですかぁ～？そんなぁ～恐れ多いい～っ」
「何が“恐れ多い”だっ」
まるで心のこもっていない太狼の言葉に、座黒が少し悪態をとる。
「牢戸知玖の狙いは、朱実桜時の“命力”か…」
「恐らくはそうでしょうねぇ～」
真剣な表情を見せる座黒に、相変わらず角砂糖を混ぜ合わせ続ける太狼。
「“命力”を使って、すべての人間を鬼人にする気か…」
「それはどうでしょうねぇ」
「何っ…？」
すぐに異議を唱える太狼に、座黒が眉をひそめる。
「それはどういう意味だ…？」
真面目な表情で、太狼へと問いかける座黒。
「おやつにチョコバナナ、出してくれます？」
「出すっ！出すから言えっ！」
「わぁ～いっ」
必死にチョコバナナを出すことを約束する座黒に、太狼が嬉しそうな笑顔を見せた。
「でぇっ、何だっ？」
「いちご大福もつけてくれます？」
「付けるっ！付けるから、とっとと言えっ！」
「わぁ～いっ」
太狼の要求を、ひたすら呑む座黒。おやつごときに振り回されている姿が、少し悲しい。
「牢戸知玖は本当に、すべての人間を鬼人にしたいんでしょうか？」
「何っ…？」
角砂糖を混ぜる手を止め、鋭い瞳を向ける太狼に、座黒が少し戸惑うように首を傾げる。
「だって彼、剛也クンでしたっけ？も、鬼人じゃなかったですしっ」

「それは力が足りないから、鬼人化出来なかっただけじゃないのか？」
「虎国にあんなに鬼人化人間がいたのに、ですかぁ～？」
「……っ」
太狼の指摘に、座黒がハッとしたような表情を見せ、言葉を止める。
「普通の人間をあんなにたくさん鬼人化するんなら、より強い手下を鬼人化させる方が効率いいでしょ～」
「それは…確かにっ…」
思わず納得したように頷く座黒。鬼人化させる力が限られているのなら、もっと選りすぐりの強い者たちばかりを鬼人化させるはずだ。それなのにシルクが鬼人化させ、オトポリで保護した人間には、ネバーランド出の子供を始め、ごく普通の者たちばかり。
「それにそんなに鬼人を増やす必要もないと思うんですよねぇ～」
「人間を減らすため…では？」
「ならただ単に殺した方が早いでしょ～？」
「……っ」
太狼の最もではあるが、何とも受け入れにくい発言に、座黒が少し顔を苦くする。
「太狼、前から言いたかったが、そういう物言いはっ…」
「悪を語るのに、キレイな言葉を並べたって意味はないですよ」
注意をしようとした座黒を、太狼は軽く受け流す。
「今までの牢戸知玖の行動には、無駄が多かった…でもそれが最近、明確になってきた…」
「狙いを絞った…つまり、朱実桜時を見つけたから…というわけか…」
「ええっ」
座黒の言葉に、太狼が短く答える。
「恐らく牢戸知玖は、朱実桜時の“命力”を使って、何かをする気です」

太狼がソファーから立ち上がり、長官室の窓の方へと歩いていく。
「全人類鬼人化計画とはもっと別の…何かを…」
窓の外に広がる龍国の景色を見つめ、太狼がそっと目を細める。
「……。」
そんな太狼を、まっすぐに見つめる座黒。
「その“何か”の見当も、もうついているのか…？」
「……っ」
鋭い表情を見せて問いかける座黒に、太狼が少し眉を動かした。
「さぁ…？どうでしょうね」
「……っ」
振り返り、はぐらかすような笑みを浮かべる太狼に、座黒はそっと肩を落とした。
「喰えん奴だ」
「ありがとうございます」
皮肉として言った座黒に、太狼が笑顔で礼を言う。
「太狼…」
「はいっ？」
「お前は何を知っている…？」
「……っ」
座黒の問いかけに、太狼の穏やかな笑みが少しだけ動く。
「十年前のあの日…一体、何があった…？」
問いかけを続ける座黒。
「お前があの少女…竹取輝矢を拾ってきたあの日に…」
「……。」
座黒の問いかけに、太狼はただ、どこか含んだような笑みを浮かべるだけであった。

「十年前って…」
長官室の扉越しに、太狼と座黒の会話を聞いていたイチゴが、そっと眉をひそめる。
「太狼さんが鬼を倒して、世界の英雄になった頃…？」
少し気難しい表情を見せ、イチゴが首を傾ける。
「その頃、太狼さんが…輝矢さんを拾った…？」

第５４章　涙　★３

その日・夕刻。

「……。」

長い眠りから覚めた桜時は、同じ塔内で眠っている門貴と由雉の元へと行こうとしていた。傷はそう深くはないが、三兄弟からはまだ休むことを勧められた。だが、ただ休んでいるだけも出来ず、結局、出てきてしまっていた。

「集中治療室…ここか…」

桜時が辿り着いた、救護塔三階の廊下を歩き進む。

「……っ？」

『あっ…！』

桜時が廊下を進んでいくと、その先にあるベンチに座っていた者たちが、桜時の方を見て、一斉に立ち上がった。

『ハチ様っ…！！』

「ヘンゼル、グレーテルっ…」

立ち上がったその者たちは、ヘンゼルとグレーテルであった。ろくに食事も睡眠もとっていないのだろう。先ほどまで寝ていた桜時よりも、余程、顔色が悪かった。

「気がつかれたのですねっ！」

「良かったですわっ！」

「ああ、心配かけてごめん」

駆け寄って来る二人に、桜時が安心させようと穏やかな笑みを向けた。

「あいつらはっ…？」

『……っ』

桜時の問いかけに、笑顔から一気に曇った表情となるヘンゼルとグレーテル。

「あちらに…」
「……っ」
二人の視線に促されるようにして、桜時がゆっくりと振り向いた。
「……っ！」
そこに広がる光景に、桜時は思わず目を見開いた。分厚いガラス壁の向こう、大きな寝台に横たわる門貴と由雉。全身に巻かれた包帯、痛々しく繋がれた点滴、深く閉ざされた瞳。
――――可愛いボクに何かあったらどうすんのさぁ～っ――――
――――おっしゃああっ！イヌコロっ！行くでぇっ！――――
いつもの元気な姿の二人は、そこにはいなかった。
「門貴…由雉っ…」
二人の状態に、桜時は思わず茫然と名を呼ぶ。
「一命は取り留めたのですが…中々、意識が戻らなくて…」
「……っ」
ヘンゼルの言葉に、桜時が険しい表情を見せる。
「……っ？」
その時、桜時の目に、ヘンゼルの手に握られているものが映った。
「それ…」
「えっ？ああっ…」
ヘンゼルの手に握られていたのは、真っ二つに砕け割れた、よく見覚えのある真っ赤な棒。
「如意棒です…」
門貴の如意棒であった。
「戦いで、折れてしまったようで…」
「……。」

――――いっくでぇぇっ！如意棒っ！！――――

門貴の唯一にして、最大の武器。桜時にとっての、村雨丸のようなもの。それが砕き割れるほどの戦いを、門貴はしたのだ。

――――三日月っ…！――――

輝矢も三日月を、粉々にされてまで戦った。

「……っ」

桜時がそっと腰に下げた村雨丸の鞘を握り締める。桜時が震えて、ろくに村雨丸も振れないでいた間に、輝矢も門貴も由雉も、武器を、命を失うほどの戦いをしたのだ。

「でも良かった…」

如意棒を見つめていたヘンゼルが、そっと笑みを浮かべる。

「ハチ様だけでも無事でっ…」

「ええっ…」

「……っ」

小さく頷き合うヘンゼルとグレーテルに、桜時が強く唇を噛み締める。

「良くないっ…」

『えっ…？』

「全然良くねぇーよっ…」

桜時の拳が、門貴と由雉のいる部屋との境の分厚いガラス壁を、強く叩く。

「こんなのっ…」
『……。』
何度も何度もガラス壁を叩く桜時に、ヘンゼルとグレーテルは何も言うことが出来ず、ただ見つめていた。

その日・夜。龍国、エセお菓子の家こと『桃原家』前。
「……。」
オトポリを抜け出てきた桜時は、自然と桃原家の前までやって来てしまっていた。輝矢のいる、桃原家の前まで。
「何…来てんだろ…」
桜時が、自分を責めるように、ポツリと呟く。
「輝矢はまだ寝てっ…ってか、起きてたところでっ…」
取り繕うように言い直しながら、桜時が少し頭を抱える。牢戸知玖に恐怖して、輝矢が傷ついている中、動けもしなかった。門貴と由雉があんなにボロボロになってまで戦ったというのに、自分だけはこうして何の怪我もなく立っている。
――――ハチっ…――――
「……っ」
輝矢に会えば、今の自分をどうにかしてくれる気がした。こんな

どうしようもない自分を、光で照らすように、先へと続く道を示してくれる気がした。
「どこまでっ…輝矢に頼れば気が済むんだよっ…」
まるで自分自身に嫌気がさしたかのように、桜時が言い放つ。
「戻ろっ…」
向きを変え、桃原家に背を向けて、オトポリへと戻ろうとする桜時。
「……。」
しかし、その足は、すぐに止まる。
「……っ」
桜時はまた、歩く向きを変えた。

「……。」

月明かりの照らす輝矢の部屋では、輝矢の眠る寝台の横に腰掛けた太狼が、神妙な表情で自分の右手を見つめていた。太狼の右手の中にあるのは、月明かりで輝く、無数の金色の粒。太狼の横のテーブルに、山のように積まれている。

「三日月…か…」
「もう戻りそうにありませんね」
「うわぁあっ」
ポツリと呟いた太狼が、返ってくる声に、驚いたような少し間の

抜けた声を出した。太狼が前を向くと、寝台の上で起き上がった輝矢が、太狼の手の中を見つめている。
「びっくりしたぁ～」
太狼が手の中の金色の粒を、テーブルの上の山の上へと戻す。
「起きてたのぉ～輝矢ちゃ～んっ」
「今、起きました」
太狼の問いかけに、輝矢が少し髪の毛を整えながら答える。
「惜しかったねぇ～後3時間寝てたら、丸四日眠ってたことになって、新記録樹立だったのにぃ～」
「そうですか、それは惜しいことをしましたね」
「……。」
返ってくる気のない返事に、陽気な笑顔を見せていた太狼が、少しだけ眉を動かす。
「ごめんねぇ～今、ヘンゼルもグレーテルもいなくってさぁ～ああ、でも砂糖たっぷり砂糖水くらいなら、僕でも入れられれっ…！」
「タローっ…」
「……っ」
太狼の名を呼ぶその声に、太狼の言葉が遮られる。
「私は…負けたのですね…」
「……。」
少し視線を落として呟く輝矢に、太狼の表情が曇る。
「うん、負けたよ…」
「……っ」
すぐに返ってくる答えに、布団から出されていた輝矢の手が、軽

く握り締められる。

「そう…ですかっ…」

そっと震え始める、その小さな肩。

「ああぁ～っ！やっぱり修行不足ですねっ！」

「……っ」

急に明るい笑顔を作り、不自然なほどトーンの上がった声で、話し始める輝矢。そんな輝矢を目の前に、太狼がさらに表情を曇らせた。

「たまにサボって月見団子食べに行ったりしてたからでしょうかねっ！」

「……。」

笑顔で話しを続ける輝矢を、太狼はいつになく険しい表情で見つめる。

「月見団子を食べた後、昼寝をしたりもしましたからねぇ～っ！」

「輝矢ちゃんっ…」

「ああぁ～っ！やっぱりもう少し真面目に取り組んでおけばっ…！」

「輝矢ちゃんっ…！」

「……っ」

強く呼ぶ太狼の声に、やっと輝矢の言葉が止まった。

「約束…したでしょっ…？」

笑みを消した輝矢の前に、太狼の右手が差し出される。

「僕の前でだけは…“泣いてもいい”って…」
「……っ！」
優しい微笑みを向ける太狼のその言葉に、輝矢が大きく目を見開く。
「うぅっ…！」
潤む黒い瞳から、一滴の水が流れ落ちた。
「ううっ…！」
それは、涙であった。
「ううっ…ううぅっ…！」
今まで堪えてきたものが一気に溢れ出るように、輝矢の両目から止まることなく涙が零れ落ちた。
「タローっ…私っ…私っ…！」
輝矢が震える、弱々しい声を発する。
「守れなかったんですっ…！」

――――お願いっ…私を助けてっ…――――
――――本当に助けてよっ…！！――――

焼きついて離れない、あの必死だった赤色の瞳。

「“助けて”って言われたのにっ…」

――――言ったでしょう？“アナタは私が助ける”と…――――

「“助ける”とっ…約束したのにっ…！！」

――――私は…可哀相なんかじゃないって…――――

「あの時もっ…」

――――これが…太陽の神様の力かなっ…？――――

「あの時もっ…！」

思い出されるオーロラの哀しい笑顔、ウェンディの涙に、輝矢が強く拳を握り締める。

「助けられなかったんですっ…！」

――――ピー…ター…？――――

――――どうしてっ…シルク…様っ…――――

目の前で、失われていった命。

「私にはっ…守れないものが多すぎるっ…！」

「……っ」

全身を震わせ、悔いるように強く歯を噛み締め、そして涙を流す輝矢のその姿に、太狼が目を細める。

「うんっ…」

「……っ」

そっと伸ばされた太狼の手が、震える輝矢の体を、強く抱きしめた。

「うんっ…」

輝矢を抱きしめた太狼が、もう一度頷きながら、震える輝矢の肩に自分の顔を寄せる。

「なら…もっと強くなればいいっ…」

囁きのように、輝矢の耳に届く、太狼の声。
「もっと強くなって…次は全部、守ればいいっ…」
悲しげにひそむ、太狼の表情。

「君はもっと強くなれるよっ…」

太狼が、その悲しみを消さないまま、そっと笑みを浮かべる。

「輝矢ちゃんっ…」
「……っ」

囁かれる名に唇を噛み締めた輝矢の瞳から、さらに涙が零れ落ちた。

「ううぅっ…」
輝矢が涙の零れ落ちる瞳を、そっと伏せ、太狼の胸に顔を埋める。
「ううっ…！」
声にならない、声が漏れた。

「ううああっ…あああああぁぁっ…！！」

輝矢は泣いた。太狼の腕の中で、子供姿、そのままで。

「……。」

輝矢の部屋の扉の外側に、もたれるようにしてしゃがみ込み、桜時はただ、扉の向こうから聞こえてくる、その輝矢の泣き声を、聞いていた。

――――好きなの？竹取輝矢のことっ――――

――――大切なんだね…輝矢さんのことが…――――

「……っ」

思い出される言葉に、桜時がそっと目を細める。

涙を拭う、その指でありたい。

髪を撫でる、その手でありたい。

震える肩を抱く、その腕でありたい。

やっと気付いた。

“輝矢…俺っ…

お前のことが…好きだ…”

第５５章　過去の楔　☆１

“出会い”というものが、運命の糸に手繰り寄せられてやってくる、必然的なものだというのなら、俺は、迷わずその糸を断ち切ったと思う。

たとえアイツとの“出会い”がなかったものになったとしても、断ち切ったと思う。

そう、何の迷いもなく…。

輝矢が目覚めてから、さらに二日の時が流れていた。

龍国・エセお菓子の家こと『桃原家』。

「甘さダルダルココア入りましたっ！タロー様っ！」

「わぁ～いっ！ありがとぉ～グレーテルぅ～っ！」

リビングのソファーの上では、今日も相変わらずの爽やかな笑みを浮かべた太狼が、グレーテルから受け取った甘さダルダルココアを飲んでいる。

「んん～っ！やっぱり甘さダルダルココアは最高ぉ～っ！」

コップのココアを一気に飲み干し、満足げに言い放つ太狼。

「五日も飲んでなかったから、もう僕、“糖死”しちゃいそうだったよぉ～っ」

「んだよっ、“糖死”って…」

太狼の座るソファーの向かいに座り、引きつった表情でこっそりと突っ込んでいるのはハチであった。意識も戻ったので、桃原家へと戻って来たのである。門貴と由雉の意識はまだ戻っていないが、

疲労が溜まっていたこともあり、ヘンゼルとグレーテルも桃原家へと戻された。
「糖分が足りなくなって死ぬことだよ」
「んなもん、真面目に答えてもらわんでもわかるわいっ！！」
真顔で答える太狼に、ハチが思わず立ち上がって怒鳴り返す。
「ったくっ…」
「門貴様っ…」
「ううぅおぉっ！」
背後から聞こえてくる不気味な声に、背筋をピンと伸ばして、勢いよく振り返るハチ。
「へっヘンゼルっ…」
「門貴様っ…」
ハチが振り返ると、そこには見るからにやつれた表情のヘンゼルが立っていた。桃原家に戻って来てからも、門貴のことが心配でろくに眠れていないようである。
「お兄様っ、元気出してっ…」
「そうそうっ、アイツらだって、そろそろ目を覚ますはずっ…」
「こうなったらっ…」
『へっ？』
励まそうと声をかけていたハチとグレーテルが、急に動き出すヘンゼルに目を丸くする。
「私のっ…私の愛を力いっぱい込めて作った、この超特製バナナオレを無理やり飲ませてぇっ…！！」
「重病人に何、飲ませようとしとんじゃいっ！！」
ヘンゼルがどこからともなく持ち出してきたバナナオレを、ハチが全力で否定する。
「そうですっ！お兄様っ！第一、お兄様の愛は、門貴様の症状を悪化させますっ！」
「ぐはあああぁぁっっ！！」
「そこまで言うか…？妹…」

事実ではあるが、あまりにも厳しい突っ込みを入れるグレーテルに、バナナオレ片手に激しく落ち込むヘンゼル。そんな兄妹のやり取りに、ハチが思わず顔を引きつる。

「朝から賑やかですねぇ」

『あっ！輝矢様っ！』

「……っ」

聞こえてくるその声に、ヘンゼルとグレーテルの発するその名に、ハチはすぐさま表情を変えた。

「申し訳ありませんっ！輝矢様っ！」

「起こしてしまいましたかっ！？」

「いえっ、最近寝過ぎだったので、起きられて丁度、良かったですよ」

ヘンゼルとグレーテルの言葉に答えながら、リビングへ輝矢が入ってくる。多少、顔がやつれているが、顔色もよく、体もスムーズに動いているようである。目覚めて、ある程度体力が戻ったので、由雉の癒羽で傷を完全に治したのであった。

「お茶を入れていただけます？」

『はいっ！かしこまりましたっ！』

輝矢の言葉に頷き、ヘンゼルとグレーテルが足早に、キッチンへと出て行った。

「おっはよぉ～、輝矢ちゃんっ」

「おはようございます、タロー」

太狼と朝の挨拶を交わしながら、ソファーの一つへと腰掛ける輝矢。

「ハチも」

「えっ…あっああ…」

笑顔を向ける輝矢に、急いで視線を逸らすように、少し下を向いて頷くハチ。

「どぉ～っ？クマ一頭、軽く捩じ伏せれるくらい、元気になったぁ

～？」
「ええ、ゾウ一頭、軽く片手で持ち運べそうなくらい、元気になりましたよ」
「どういう会話だよっ、それっ…」
輝矢と太狼の他の人間は理解し難い会話に、ハチが少し表情をしかめる。
「まぁ要は私の元気がですねぇ」
「あっ…！うっ…」
「……っ？」
輝矢が振り向き、ハチと視線を合わせたその瞬間、ハチは少し驚いたような表情を見せ、勢いよく輝矢から視線を逸らした。そんなハチのどこか不自然な様子に、輝矢が少し首を傾げる。
「ハチ？」
「なっ何だっ？」
名前を呼ばれても、大きく視線を逸らしたまま返事をするハチ。
「んん～っ？」
そんなハチに、輝矢が眉をひそめ、大きく首を傾げる。
「何ですぅ～っ？」
首を傾げていた輝矢が、すぐさま怪しげな笑みを浮かべる。
「そぉ～んなに私と目を合わせることが、恥ずかしっ…」
「うっ…！」
――――パシンっ！――――
「……っ」
悪戯っぽい笑みを浮かべて、徐にハチへと手を伸ばした輝矢であったが、その輝矢の手は、ハチの前足により、勢いよく振り払われた。手を振り払われ、少し驚いたように、目を見開く輝矢。

「あっ…」
思わず飛び出した前足に、ハチが気まずそうな表情を見せる。
「ごっごめんっ…俺、門貴と由雉んとこ、行ってくる…」
「……っ」
その気まずい空気に耐え兼ねたのか、ハチは弾かれるように、すぐさまリビングを後にした。出て行くハチの背を見送り、太狼が呆れたように、軽く肩を落とす。

「……。」
輝矢は、ハチを止めようとも追いかけようともせず、振り払われたその手をじっと見つめた。
「……嫌われ…たのでしょうか…」
「ふえぇ～っ？」
小さく呟く輝矢に、太狼が間の抜けた声を出した。
「またっ…目の前で水力を暴走させてしまいましたし…怖がられているのかもっ…」
「ああぁ～っ、違う違うっ」
「えっ？」
不安げに話していた輝矢が、あっさりと否定してくる太狼の言葉に、目を丸くして顔を上げた。
「あれは自業自得だよぉ～っ」
顔を上げた輝矢に、大きく右手を横に振って見せる太狼。

「盗み聞きなんてするからっ…」
太狼がその瞳を鋭くし、小さな声で呟く。
「えっ…？」
「うぅ～ん～っ！何でもなぁ～いっ」
「……っ？」

太狼の落したその声を聞き取れず、聞き返す輝矢であったが、笑顔でそう言い放つ太狼に、輝矢はただ首を傾げた。
「あっれぇ～っ？輝矢ちゃ～んっ！お目覚めかぁ～いっ！？」
「げっ」
リビングへと入ってくる無駄に明るい声に、輝矢の表情が勢いよく引きつられる。
「いっやぁ～っ！元気になって良かったねぇ～っ！」
その無駄に明るい声の主は、朱実の三バカ兄弟次男・竹人であった。両脇には松人と梅人の姿もある。まだ雀国へ戻らずに、桜時とともに桃原家へと押しかけてきたのであった。
「ホントっ…良かったぁ～っ♪」
「良かったぁぁぁ～～～っ♪」
「良かったぁぁぁぁぁぁ～～～～っ♪」
ハーモニーを奏でていく三兄弟。
『良かぁぁぁぁったっ…！』
「それ以上歌うと、二度と口さえ聞けない状態にしますよっ…？」
『……。』
輝矢の脅迫と、その本気で鋭い瞳に、三兄弟はすぐさま口を塞ぎ込んで、ハーモニーを中断した。

「ふぅっ…」
ハーモニーを中断させると、輝矢が肩を軽く落としながら、リビングの大窓の方を見る。
「……。」
再び振り払われた手に目を落として、輝矢は少し浮かぬ表情を見せた。

「はぁっ…」
桃原家を出て、とりあえずオトポリ本部へと向かう道を歩きだしたハチが、道の真ん中で深々と溜息をつく。
「……。」
――――ボォォォォォォ～～～ンっ！――――
少し考え込むような表情を見せたハチが、不意に白い煙に包まれた。
「何やってんだろっ…俺っ…」
輝矢の手を振り払った両手に目を落とし、ポツリと呟く桜時。
「……っ」
――――朝から賑やかですねぇ――――
いつもと何ら変わりのない、輝矢であった。その落ち着いた口調も、穏やかな表情も、意志の強さを感じる瞳も、いつもとまったく同じであった。
――――私にはっ…守れないものが多過ぎるっ…！――――
涙を流していた瞳とは、とても同じに思えない。あの弱々しい泣き声を発していた者とは、とても同じに思えない。

――――君はもっと強くなれるよ…輝矢ちゃんっ…――――

太狼の胸の中で泣いたから、いつも通りの気丈な輝矢でいられるのだろうか。太狼にすべてを受けとめてもらえたから、すぐに立ち上がることが出来たのだろうか。

「……っ」

やっと芽生えた思いが、桜時の心を軽く乱す。

「……どうしよっ…」

渦巻く気持ちに、桜時は少し頭を抱え、ポツリと呟いた。

オトポリ本部、救護塔三階・集中治療室。

「あれっ？」

「んっ？」

桜時が門貴と由雉のいる集中治療室を訪れると、そこにはすでに先客がいた。ベンチに腰掛けていた先客は、声に気づき、桜時の方を振り向く。

「ゴンっ」

「ハチ公っ」

その先客は、ゴンであった。
「見舞いか？にしちゃ随分、朝早ぇーなぁっ」
「お前こそ、ここに居ていいのか？」
桜時がゴンの元へと歩み寄っていきながら、怪訝そうに問いかける。
「研究塔の方とか、まだバタバタしてたぞ？」
「俺が加わったら、余計にバタバタすんだよっ」
「威張って言うなよ…」
自信満々に答えるゴンに、少し呆れた表情を見せながら、桜時がゴンの横へと腰を下ろした。

「まだ目は覚めねぇーかっ…」
「ああっ」
前方の分厚いガラス壁の向こうで眠る、門貴と由雉の姿を眺め、桜時とゴンが言葉を交わす。状態は安定してきているそうだが、まだ二人の意識は戻らずにいた。
「竹取は？様子はどうだ？」
「もうすっかりいつも通りな感じっ…」
ゴンの問いかけに、桜時が暗い声で答える。
「そうかっ、って、お前、何かテンション低くねぇーかっ？」
「別にっ…」
「そっか」
「あっさりだなっ！！」
素気なく答える桜時に、特に興味も示すことなく話を終わらせるゴン。そんなゴンの淡泊な反応に、桜時は思わず怒鳴り突っ込んだ。
「んだよぉっ？別にっつったじゃねぇーかぁっ」
「“別に”とか言われたら、逆に気になるもんだろうがっ！！」
「面倒臭せぇヤツだなぁ～」
本当に面倒臭そうに言うゴンであるが、今回ばかりはゴンの言い分も最もである。

「今っ、ここでっ、俺に聞いて欲しいことかっ？」
「えっ…？」
強い瞳を向けてくるゴンに、桜時が少し戸惑うような表情を見せる。
「だったら聞いてやるよっ」
「……っ」
ゴンの言葉に、考え込むように俯く桜時。
「……もうちょい自分で考えて…それでも厳しそうだったら言うわっ…」
「んんっ」
ポツリと答えた桜時に、ゴンが桜時の方を振り向くことなく、素気ない返事を返す。

「はぁ～っ！」
桜時が背筋を伸ばしながら、後方の壁に寄り掛かる。
「お前に頼るなんて情けねぇーなぁっ、俺もっ」
「本当に情けねぇー奴は、自分のことを“情けねぇー”なんて、言えねぇもんさっ…」
「えっ…？」
少し声のトーンを落として言うゴンに、桜時が目を丸めて、振り向く。

「……。」
「……っ」
悲しみを辛さを、必死に堪えているような、そんな表情を見せているゴンに、桜時が少し眉をひそめる。

――――ゴンっ…――――
――――諸刃…――――

――――知り合いっ…？――――

あの戦いの日から、桜時の頭に残っている疑問。互いに互いの名を呼んだ、ゴンと諸刃。その様子は、ただ名前を知っているだけというようには見えず、互いのことをよく知るような、そんな空気であった。

「あっあのさっ…」

桜時が少し躊躇うように、口を開く。

「あのさっ、ゴンっ…」

「御剣諸刃は…昔、俺が“仲間”と呼んでた男だった…」

「……っ」

桜時が問いかける前に口を開いたゴンに、桜時は少し驚いたが、そのままゴンを見つめ続けた。

「どうして…牢戸知玖とともにっ…？」

「……っ」

「あっ…」

桜時の問いかけに、一気に険しくなるゴンの表情。

「わっ悪いっ！言いたくないなら別にっ…！」

「いやっ…」

その問いかけが、強くゴンを傷つけた気がして、桜時は必死に問いかけを撤回しようとしたが、ゴンはそんな桜時の言葉を遮り、そっと目を細めた。

「今、ここで…お前に話しておくべきなのかも知れない…」

「えっ…？」
ゴンの言葉に、桜時が眉をひそめる。
「俺と諸刃…そして、次狼のことを…」
「ジローっ…？」

御伽界のどこか。牢戸知玖の居城。
「愚か双子に剛也、薄荷までっ…」
報告書のような薄っぺらい紙切れを見ながら、ギンがどこか呆れたような表情で言い放つ。
「目標も捕らえられなかったわりに、手痛い出費ですねぇ～」
「あんな役立たずばかり向かわすからだろう…？」
「俺は…勝った…」
そんなギンに、少し不満げに言い返す黒羽と醍也。
「初めから俺たちだけに任せておけば、無駄な出費もなかったと思うが…？」
「敗北者に…死を…」
言葉を続ける黒羽の横で、膝を抱え込んで座っている醍也は、暗示でもかけられているかのように、不気味に呟いている。
「それに…“手痛い”などと、どうせ思ってはいないんだろう…？お前はっ…」
「……っ」

どこか試すように問いかける黒羽に、ギンが口元を怪しく吊り上げた。
「確かに“手痛い”とは思っていませんが、“残念”とは思っていますよっ…？」
ギンが持っていた報告書を、投げ捨てるように手放す。
「彼ら、鬼人化人間の…くだらない苦悩を、もう見れないかと思うとねっ…」
「……っ」
楽しんでいるようにしか見えない笑みを浮かべるギンに、黒羽は少し不快そうに顔をしかめ、肩を落とした。
「同じ鬼人化人間とは思えぬ言い草だな…」
「僕はもう、“人間”と名のつく者ではありませんよ…」
少し皮肉ったように言う黒羽に、ギンは笑みを崩すことなく答えた。
「気に食わん奴だ」
「よく言われます」
「そういえば…」
『……っ？』
探り合いのような会話を続けていたギンと黒羽が、醍也の声に振り向く。
「諸刃…は…？」
「ああっ…」
醍也の問いかけに、ギンが軽く頷く。
「外で黄昏ていますよ…」
そっと細めたその瞳を、鋭くするギン。

「“かつての仲間”との再会に…いささか憂いているようです…」

そう呟いたギンは、何とも楽しそうに、そして残酷に、微笑んでいた。

牢戸知玖・居城。バルコニー。

「……。」

広大な山々を見下ろせるそのバルコニーに一人立ち尽くし、諸刃はかすかになびく風に吹かれていた。戦いの場とはまるで正反対の、静かで穏やかな時間。

――――諸刃っ…――――

「……っ」

戦いの場で出会った、ゴンの姿を思い出し、諸刃がそっと目を細める。

「次狼っ…」

諸刃はどこか悲しげに、その名を呼んだ。

第５５章　過去の楔　☆２

――――俺はっ…一族を抜けるっ…――――

そう、口にした、十歳の頃。

――――お前が人を信じた所で、人は誰もお前を信じたりはせんよ…ゴン…――――

あれから数年。俺はまだ、あの言葉から、逃れられずにいた…。

――――八年前、御伽界・とある村。

「とっとと出て行けっ！この裏切り一族がぁっ！」

「……っ」

村の入口で、体を容赦なく蹴られて、村から追い出される、まだ幼さの残る顔立ちの少年。金色の髪に砂がつくと、少年は鋭い瞳を、蹴った男へと向けた。

「なっ何だっ！？その目はっ！生意気なんだよぉっ！」

幼さは残っているというのに、射殺されそうなほどに鋭い瞳を見せた少年に、多少の恐怖を感じたのか、男はその恐怖を振り払うように、さらに蹴りを加え続けた。

「二度とこの町に来んじゃねぇぞっ！この裏切りキツネがっ！！」
少年の体中が軋み、痛覚が遠のいてきた頃、男はそう言い放ち、村の中へと戻っていった。

「……。」

村の外に取り残された少年が、痛みすら失くした体を起こし、ゆっくりと立ち上がる。振らつく体を何とか立たせ、その場から歩きだしていく少年。

少年の名を、狐上ゴン。
“裏切りの一族”と呼ばれる狐族であったゴンは、一族を抜け、“故郷”と呼べる地を探していた。
しかしどこへ行っても、“裏切りの一族”であったゴンを、受け入れてくれる場所は存在しなかった。

「はぁっ…」
もう何年も彷徨って、数多の町を、村を訪れた。だがどこへ行っても、返ってくるのは“出て行け”の言葉のみ。今まで、たくさんの人々を裏切ってきた“報い”というものなのかも知れない。

「……っ」

――――ボォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

力なく地面に倒れ込んだゴンが、白い煙に包まれて、小さなキツネの姿となる。

「もうきっと…この世界に俺の居場所は…無い…」

倒れ込んだゴンが、弱々しい声で呟く。
「“地獄”になら…あるかもなっ…」
そう呟き、ゴンは自嘲するような笑みを浮かべて、静かに瞳を閉じようとした。

「ああぁ～っ！キツネさんっ！」
「……っ？」
瞳を閉じようとしたゴンが、近くから聞こえてくる、妙に明るい声に、少し顔をしかめて振り向いた。

『……。』

倒れ込んだゴンを、くりくりとした瞳で覗き込んでいるのは、一匹の茶色いオオカミ。凶暴な動物のイメージの強いオオカミであるが、そのオオカミはどこか間の抜けた表情をしており、怖がるようなオーラは一切、放っていなかった。互いに目を合わせたキツネとオオカミが、少し目を丸くして、しばらくお互いを見つめ合う。

「オっ…」
「コンコンコンコンっ！」
「はっ…？」
いきなり口を尖らせ、意味不明の擬音語を発するオオカミに、ゴンが勢いよく表情を引きつる。
「コンコンココココンっ！コンココココォォ～～ンっ！」
「……。」
オオカミはゴンに、何かを必死に訴えかけているようであった。

そんな様子のオオカミを、ゴンが少しの間、呆然と見つめる。
「いやっ…俺、獣人だから…別に人語でいいけどっ…」
「えええぇっっ!!?獣人だったんですかぁぁっっ!!?」
人の言葉を放ったゴンに、オオカミが大きく目を見開いて驚く。
「何だぁ～っ!じゃあ頑張って、キツネ語を話す必要もなかったんですねぇ～っ!」
「まぁしゃべれてなかったけどな…コンコン言ってただけで…」
オオカミの惚けっぷりに呆気を取られたのか、ゴンは、もう動かないと思っていた体を、自然と起き上がらせていた。
「それで獣人のキツネさんはぁ、どうしてこんなところでお昼寝してたんですかぁ?」
「別に昼寝してたわけじゃねぇーよっ」
「えっ?じゃあ二度寝っ?」
「二度寝でもねぇっ!!」
「うわぁっ!」
くだらない問いかけを続けてくるオオカミに、思わず怒鳴りあげるゴン。ゴンの大きな怒鳴り声に、オオカミが思わず耳を塞いだ。

「すっごい音量っ…」
「……。」
「んっ?」
怒鳴った後、茫然としているゴンを見て、オオカミが耳を塞いでいた手を下ろし、首を傾げた。
「どうしたんですかっ?」
「はぁっ…」
ゴンが深々と溜息をつく。
「“もう無理だ”って決め込んだつもりだったけどっ…」
自分の体を見つめ、そっと笑みを浮かべるゴン。

「まだっ…怒鳴るだけの力が残ってたみたいだなっ…」

「えっ…？」
微笑んで呟くゴンに、オオカミはその言葉の真意が理解出来ず、さらに戸惑うように首を大きく傾けた。
「お前のお陰で、俺の居場所探しはまだ続きそうだっ」
そう言い、四本の足を立たせるゴン。
――――ボォォォォォォォ～～～ンっ！――――
「……っ」
白い煙に包まれ、ゴンが再び人の姿となる。姿を変えたゴンを、オオカミは目を見張るようにして見つめた。
「一応、礼は言っとく。サンキューっ」
「……っ」
穏やかに笑って礼を言うゴンに、オオカミが少し表情を曇らせる。
「じゃあなっ」
そう言って、ゴンはあっさりとオオカミに背を向けた。
「あっ！待って下さぁ～いっ！」
「ぐひゃあああああっ！！」
オオカミが前足の鋭い爪で、ゴンの足を引っ掻くと、ゴンが悲鳴のような声をあげて、その場にしゃがみ込んだ。
「てっめっ…！」
軽く血の出た足を押さえたゴンが、怒りに歪めた表情を、オオカミへと向ける。
「何すっ…！」

「行くところがないんですかぁ？」
「えっ…？」
オオカミの問いかけに、少し眉をひそめるゴン。
――――ボォオオオオオオオ～～～ンっ！――――
「……っ」
オオカミを白い煙が包み、次の瞬間、白い煙の中から現れたのは、サラサラとした茶色の髪に、あどけない緑色の瞳の、ゴンと同じ年くらいの少年であった。
「じゃあっ」
少年が、ゴンへ、手を差し出す。
「じゃあ一緒に、俺の国に行きましょうよっ！」
「……っ」
その明るい笑顔に、曇りのない眼差しに、ゴンは大きく目を見開いた。
それが俺と、桃原次狼との、“出会い”であった。

「あっ！俺っ、桃原次狼っていいますっ！ジローって呼んで下さいっ！」
「ジっ…ロー…」
「はいっ！」
少し呼びにくそうに、ゴンが次狼の名を呟くと、次狼は大きな笑顔を見せて頷いた。
「俺、こう見えて“狼人”なんです！」
「いやっ、どう見ても“狼人”だ…」
かなり惚けている次狼に、鋭い突っ込みを入れながら、共に“次狼の国”とやらへの道を進んでいくゴン。

「あっ！着きましたよぉ～っ！」
「……っ？」
そう言って次狼が通り抜けたのは、龍国の入口であった。
「龍国っ…」
入口を通りながら、ゴンが少し目を細める。御伽界に、その国の名を知らぬ者はいないだろう。御伽界最古にして、最大の国。

――――隠れミノにはうってつけだなっ…――――

「……っ」
紺染ならば、きっとそう言うだろう。紺染のあの笑みが思い出され、ゴンは少し悲しげに俯いた。

「そしてっ！ここが俺の家ですっ！」
「えっ…？」

龍国の中心街を抜け、海岸を数分ほど歩いたところで、次狼が立ち止まった。次狼の声に、ずっと俯いていたゴンがゆっくりと顔を上げる。

「じゃぁぁぁぁぁ～～んっ！」

「……。」

次狼が誇らしげに紹介した、その目の前に存在する“お菓子の家”に、ゴンは勢いよく固まった。

「こっこれが…家っ…？」

「はいっ！あっ、でもお菓子の家風にしてるだけで、本当にお菓子ではないんで、食べちゃダメですよぉ～っ」

「食べねぇーよっ！！」

注意する次狼に、ゴンが勢いよく怒鳴りあげる。

「兄貴が甘党なもんで、家まで甘党にしちゃったんですよねぇ～っ！」

「ぶっ飛んだ兄貴だな…」

最早、突っ込む力も湧かないほどにゴンが呆れきっている中、次狼がクッキーで出来た風にみせかけた家の扉を、ゆっくりと開ける。

「ただいまぁ～っ！」

陽気な声を出しながら、家の中へと入っていく次狼。

「さぁっ！どうぞどうぞぉ～っ！」

「……っ」

誰かに家の中へと進められたことなどなく、ゴンは少し戸惑うようにその家の中へと踏み入った。見た目は突拍子もない家だが、中は至って普通の造りであった。

「んっ？」

「……。」

ゴンがふと視線を落とすと、玄関を入ってすぐの廊下に、真っ黒な短髪に大きな黒い瞳の、七，八歳くらいの子供が立っていた。子供が妙に力を感じる、まっすぐで強い瞳を、ゴンへと向ける。

「なっ何っ…」

その瞳に、ゴンが少し怯むように声を漏らした。

「悪人面っ」

「あああぁぁんっ！！？」

初対面にしていきなり暴言を吐くその子供に、ゴンが勢いよく表情を引きつり、声を荒げる。

「何だぁっ！？てめぇーはぁっ…！！」

「こっこらっ！輝矢っ…！」

「本当のことを言っただけだろ」

ゴンが殴りかかりそうな勢いで声を出し、次狼が注意するように手を伸ばすが、その子供は、そう素気なく言い放ち、家の奥へと消えていった。

「何々だよっ！！アイツはっ！！」

「すみません、兄貴が“僕の直感だぁ”とか言って、拾ってきた子なんですけどっ」

「お前の兄貴って何者なんだよっ」

次狼の言葉に、ゴンが少しぐったりした表情で答える。

「最近、頑張って敬語を教えてるんですけどねぇ」

「あれじゃ、ロクな男にならねぇーぞっ」

「一応、女の子なんですけど…まぁいいかっ」

子供のことを男だと思っているゴンに、次狼はあえて訂正をしようとはせず、少し肩を落とした。

「どうぞっ、入って下さい！」

「あっああ」

次狼に促され、ゴンが靴を脱ぎ、玄関へと上がろうとする。

「次狼ぉぉぉぉぉぉぉっっっ！！！」
「ぎゃあああああああっっ！！」

その時、玄関の扉が勢いよく開き、その扉に吹き飛ばされ、ゴンは家の中へと転がり込むようにして、家の中へと上がった。

「お痛ててててっ…」
「やぁ～っと帰ってきたっ！」
「……っ？」
廊下に倒れ込んでいたゴンが、開いた扉の向こうから聞こえてくる女の声に、打った頭を押さえながら、顔を上げた。

「どこ行ってたのよぉっ！」

開いた扉を押さえ、次狼に少し責めるような表情を見せているのは、きれいな水色のショートカットに、真っ赤な瞳の、少し気の強そうな美少女であった。

「リンゴっ」
次狼が、その少女の名らしきものを呼ぶ。

「アンタがカレー食べたいってゆーから、こっちは買い出しに行ってたのよぉっ！？」
リンゴが、よく響く甲高い声で、次狼を責め立てる。
「なのに、帰って来たらいないしっ！！」
「すみませぇんっ」
そんなかなり腹を立てている様子のリンゴに、次狼が穏やかな笑

みを向けた。
「モンシロチョウを追いかけて行ったら、つい遠くまで行ってしまいましてっ！」
「どんだけ少年の心、忘れてないのよっ！！」
とびきりの笑顔で答える次狼に、リンゴが勢いのいい突っ込みを入れる。

「アンタからも何か言ってやりなさいよっ！諸刃っ！」
「……。」

そう叫ぶように言いながらリンゴが振り返ると、そこには灰色の髪に紫色の瞳の、無表情な少年が立っていた。両手に溢れるほどの袋を持っているところを見ると、リンゴの荷物持ちをさせられているようである。リンゴの言葉に、諸刃と呼ばれた少年が、ゆっくりと顔を上げる。

「次狼…」
聞き取るのもやっとな声で、次狼の名を呼ぶ諸刃。

「カレーのルー、激辛で良かったか…？」
「はいっ！激辛でバッチグーですっ！」
「だあああああああああああっ！！」
次狼と諸刃の会話を聞き、リンゴが思わずズッコケる。

「アンタたちねぇっ…！」
「おいっ！！女ぁぁっっ！！」
「……っ？」
二人を怒鳴りあげようとしたリンゴが、家の中から聞こえてくる、自分以上に声の大きな怒鳴り声に、少し顔をしかめて振り返る。

「リンゴだかミカンだか知らねぇーがっ…」
リンゴの振り返ったそこには、廊下に立ち、深く俯いたまま、わなわなと全身を震わせているゴン。

「人のこと、ふっ飛ばしといて、一言の謝罪もねぇーってのは、どういうことだぁっ!?ああぁぁんっ!!?」
「はぁぁぁぁぁ～～～っっ!?」

勢いよく顔を上げ、リンゴを睨みつけながら、ケンカ腰に怒鳴りあげるゴンに、リンゴの表情も一瞬にして歪む。

「なっによっ!!この私に偉そうにっ!!」
靴を脱ぎ捨て、玄関へと上がって、廊下に立つゴンの方へと、近づいていくリンゴ。
「だいたいアンタっ!誰よっ!?」
「お前こそ誰だよっ!?」
「はぁっ!?龍国にいるくせに、私のこと、知らないわけっ!?」
「さっき来たばっかりなのに、知るわけねぇーだろっ!!」
ゴンとリンゴが、激しい言い合いを始める。
「いいわっ!これを機に覚えておきなさいっ!」
ふてぶてしい態度で、腕組みをするリンゴ。
「私はねぇっ、この国の国主・青守座黒の娘、青守リンゴよっ!」
「あっそっ」
「何よっ!?その薄い反応っ!!」
「何で俺がお前の生い立ちで、すんげぇー驚かなきゃいけねぇーんだよっ!!」
「驚きなさいよっ!!そこはっ!!」

「……っ」

廊下の怒鳴り声が聞こえたのか、奥の部屋から、先程、ゴンに暴言を吐いた子供・輝矢が、耳を塞ぎ、顔をしかめながら、ゆっくりと顔を出す。

「どっちも異常に耳障り…」

『はぁぁぁぁぁぁっ!!?』

子供の言葉に、ゴンとリンゴがさらに顔をしかめて、同時に振り向く。

「いっやぁ～すっかり仲良くなったみたいですねぇ～っ！」

そんなゴンとリンゴの様子を見ながら、何故か安心したような笑みを浮かべている次狼。

「いやぁ～良かった！良かった！」

「次狼…」

「んんっ？」

諸刃にポツリと名を呼ばれ、次狼が振り返る。

「あいつ、誰だ…？」

「えっ？」

諸刃の最もな問いかけに、次狼が目を丸くする。

「えぇ～とぉっ…キツネさんですっ！」

「……。」

笑顔で答える次狼に、諸刃は地味に固まった。

「そうですかぁ～っ！ゴンさんというのですかぁ～っ！」
「ゴンでいいっ」
ゴンとリンゴの言い合いがやっと終わった頃、外はもうすっかり日も落ちており、四人はダイニングで、言い合いの間に次狼と諸刃が作ったカレーを食べようとしていた。今になって、やっとゴンの名前を聞いた次狼に、ゴンが少し呆れた表情を見せる。
「じゃあゴンっ！」
「こんなヤツの名前なんで覚える必要ないわよっ、次狼っ」
「ああっ！？んだとっ！？クソリンゴっ！！」
「誰がクソリンゴよっ！！」
「まぁ～まぁ～っ！」
すぐさま険悪な雰囲気となるゴンとリンゴを、緩い笑顔を見せながら宥める次狼。三人の様子を気にする素振りも見せず、諸刃は黙々とカレーを皿によそっている。
「ここはカレーでも食べてっ、楽しい気分になりましょうっ！はいっ！」
「あっ…悪りぃっ」
次狼が、諸刃のよそったカレーを、ゴンへと手渡す。少し戸惑いながら、皿を受け取り、テーブルへと置くゴン。
「いただ…きます…」
言い慣れないその言葉を口にしながら、ゴンがゆっくりとスプーンでカレーをすくい、一口、その口の中へと入れた。
「……っ！」
カレーが口に入った瞬間、ゴンが大きく目を見開く。
「辛れぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっっっ！！！」

「あっはい、そうです。カレーです」
「そうじゃねぇーよっ！！」
笑顔で頷く次狼に、真っ赤に腫れあがった唇で、勢いよく怒鳴るゴン。
「何だっ！この辛さっ！市販のルーじゃ、ここまで辛く出来ねぇーだろっ！！」
「唐辛子二百本使ったからな…」
「何してんだよっ！！お前はっ！！」
普通に答える諸刃に、ゴンがさらに怒鳴る。
「次狼は辛党だ…」
「じゃあコイツのだけ、辛くしろよっ！っつーか辛党にしても、やりすぎだろっ！」
「すみませぇ～んっ、小さい頃から毎日、兄貴がジャンボパフェ食べてるのを見てて、その反動でついっ」
「反動って何だよっ！ってか、お前の兄貴、やっぱおかしいだろっ！！」
諸刃に、次狼に、怒鳴りまくるゴン。

「この家でまともな料理を食べようなんて思っちゃダメよっ」
そう言って、リンゴがどこからともなく出してきた弁当を広げる。
「自分の身は、自分で守らないとっ」
「食事ごときで大袈裟だな…」
マイペースに広げた弁当を食べ始めるリンゴに、ゴンが少し呆れた視線を送った。

「んっ？そういや、あのガキは？」
「えっ？ああっ、あの子の分は、後で俺が部屋まで持っていきますよ」
思い出したように問いかけるゴンに、次狼が笑顔で答える。
「なんで一緒に食べねぇーんだっ？」

「みんなで食事とかは、苦手みたいなんです」
次狼が笑みを浮かべたまま、少しその笑みを曇らせる。
「兄貴以外の人間には…心を開いていないみたいでっ…」
そう言った次狼は、少し寂しそうであった。
「ふぅ～んっ…でぇっ？」
ゴンが、ぐっと眉間に皺を寄せる。
「その、家まで甘党にして、直感でガキ拾って、毎日ジャンボパフェ食ってる兄貴は、どこにいんだよっ？」
「どう聞いても変人ねっ…」
ゴンの問いかけの内容を聞き、横に座るリンゴがポツリと呟く。
「兄貴ならメイドさんたちと一緒に、“伝説の生クリーム”を探しに出掛けていますっ」
「はっ…？」
「いつもはあの子も連れて行くんですけど、今回は非常に危険な旅とかだそうで、預かっておいてくれって頼まれたんですよぉ～っ」
「あっ、そうっ…」
最早、突っ込むことに意味はないと悟り、次狼の言葉を速やかに聞き流すゴン。

「でぇっ、アンタ、いつまでいるわけっ？」
「あっ？」
“早く出て行け”と言わんばかりの表情で問いかけるリンゴに、ゴンが少し顔をしかめる。

「心配しなくても、明日には出てってやるよっ！」
「えええええぇぇぇぇっ！！？」
「うおっ！」
激しく驚く次狼に、逆に驚くゴン。

「そんなぁっ！もっとゆっくりしていって下さいよぉ～っ！せめて

兄貴が帰ってくるまでっ！」
「お前の変態兄貴なんか、見たくもねぇーわっ」
必死に引き止める次狼であるが、その言葉にゴンの心はまったく動かない。
「だいたいこんな普通の飯も出て来ない家に、住んでられっかよっ」
「あっ！じゃあイイこと、思いつきましたっ！」
「へっ…？」
何やら輝く笑顔を見せる次狼に、すでに嫌な予感を感じて、表情を引きつっているゴン。

「“先生”の家に住めばいいんですよぉ～っ！」
「先生っ…？」
次狼の言葉に、ゴンが眉をひそめる。
「おばあちゃんのところにぃっ！？」
「おばあちゃんっ…？」
大きく目を見開いて、思わず椅子から立ち上がるリンゴ。次狼が呼んだ名とは違う名を出すリンゴに、ゴンがさらに戸惑うように首を傾げる。
「じっ次狼っ、それはっ…！」
「いいじゃないですかぁっ！諸刃も住んでますしっ！ねぇっ？諸刃っ！」
「ああ…けどっ…」
「……っ？」
諸刃が少し虚ろな瞳を、ゴンへと向ける。

「“死ぬ”…かも知れないぞ…？」
「えっ…？」

諸刃の脅しのようなその問いかけに、ゴンは意味もわからず、ただ表情を引きつった。

第５５章　過去の楔　☆３

そして、次の日。
「ここが先生の屋敷ですっ！」
ゴンは、次狼、リンゴ、諸刃とともに、龍国はずれにある、ゴンが見たこともないような巨大な洋風の屋敷へとやって来た。屋敷はかなり古い建物のようで、壁にはコケも生えている。正直言って、不気味な空気が全体から流れ出ていた。
「……。」
その不気味な雰囲気に、思わず顔をしかめるゴン。

「じゃあ俺はこれでっ」
「何、言ってるんですかぁ～っ！」
すぐさま帰ろうとしたゴンを、手を掴んで、しっかりと引き止める次狼。

「今日からここが君の家でしょうっ？」
「俺はんなこと、認めてねぇーっ！！」
当たり前のように平然と問いかける次狼に、ゴンが必死に反論する。

「アンタ、もしかしてぇ～っ…怖いわけっ？」
「うっ…！」
リンゴの指摘に、図星と言わんばかりの焦った表情を見せるゴン。
「誰が怖いだっ！んっんなわけねぇーだろっ！」
「じゃあ入れるわよねぇ～っ？」
「うっ…！」
嘲笑うような笑みを浮かべて問いかけるリンゴに、ゴンがさらに

追い込まれる。
「あっあったり前だっ！おらっ！お前らっ！とっとと入っぞっ！」
「無理しまくってるな…」
「バカな奴っ」
先頭を切って歩き出していくゴンに、諸刃とリンゴがそれぞれ呟いた。

「おらっ！何やってんだっ！とっととついて来いっ！」
「ああっ！ゴンっ！それ以上、行くとっ…！」
「へっ？」
次狼が止めようとしたその時、ゴンが屋敷の敷地内に足を踏み入れた。

――――ビリビリビリビリっ！――――

「ぎゃあああああああああっ！！」

屋敷を囲んでいた防御壁に触れ、ゴンの体に激しく電流が走った。
悲痛な叫びが、辺りに響き渡る。

「結界に触れちゃう～って言おうとしたんですけどぉっ、おしかったですねっ！」
「おしいじゃねぇーよ…」
感電し、力なく地面に倒れ込んだゴンが、茶目っけたっぷりの笑顔を見せる次狼に、低い声で呟く。

「すぅぅぅぅ～～～っ……」
「あっ…？」
倒れているゴンのすぐ傍に立ち、大きく息を吸い始める諸刃。

「結界解いてちょぉぉぉぉぉ～～～～っっ！！！」
「いやっ！？お前っ、何言っちゃってんのっ！？」
いきなり柄にもない言葉を叫ぶ諸刃に、ゴンが焦ったように起き上がる。
「こう叫べば、結界が解ける…」
「どういう仕組みなんだよっ！？この結界っ！！」
真顔で答える諸刃に、ゴンは誰にともなく突っ込んだ。
そんなこんなで結界を解き、その不気味な屋敷の中へと足を踏み入れたゴンたち四人。薄暗い廊下の、数々のトラップを潜りぬけ、四人は二階まで吹き抜けになっている大きな扉の前までやって来た。
「じゃあ開けますよぉ～っ」
扉のノブを持ち、他の三人へと言い放つ次狼。
「覚悟しといた方がいいわよ」
「はっ？」
「いつでも逃げれる準備はしておけよ…」
「へっ？」
リンゴと諸刃の言葉に、ゴンの目がどんどん丸まっていく。そして、次狼が、その大きな扉を開いた。
「先生っ！こんにちはぁ～っ！」

目の前に広がる、何もないホールのような巨大なその部屋に、次狼の陽気な声が響き渡った。

『……。』

だが、しばらくして、次狼の声の響きが止んでも、何の返事も返って来ない。

「んだよっ」

ゴンが少しホッとしたように、肩を落とす。

「誰もいないじゃねっ…」

「よぉうっ！次狼っ！」

「うえぇっ!?」

つい一瞬前まで、誰もいなかったはずの次狼の前に、いつの間にか立っている、青髪に赤目の美しい女性。突如、現れたその女性に、ゴンが驚き、大きく目を見開く。

「後四年もして、イィ～イ男になったら、私の二五八番目の旦那にならないかぁ～いっ？」

「にっ…!?」

「あはは～っ！結構ですっ！」

妖艶な笑みを浮かべて誘う女性に対し、満面の笑顔を浮かべてあっさりと断る次狼。その間にも、ゴンはその強大過ぎる数字に、驚いている。

「はぁっ…その断り方っ…二五五番目の旦那に誘ったお前の兄貴と、まったく同じだねぇっ」

「そうですかぁ？」
「だぁ～れも千年も生きてるババアには興味ないってさっ」
「せっ…！？」
「ああぁ～っ？何だいっ、お前も来てたのかい？小娘ぇ～っ」
どこか不機嫌そうな表情を見せて、ケンカでも売るかのように言い放つリンゴ。その強大な数字にまたもゴンが驚いている中、その女性がゆっくりとリンゴの方を振り返る。
「私にたてつくのは、一人くらい男を転がせるようになってからにしなぁ～っ」
「なっ…！」
女性のその言葉に、リンゴが勢いよく顔を引きつる。

「失礼ねっ！私だって、男の一人くらいっ…！」
「よぉ～うっ、諸刃ぁ～っ、イィ～イ男になったら、私の二五八番目の旦那にならないかぁ～いっ？」
「結構です…」
「聞けいっ！！」
リンゴの主張をあっさりと無視し、いつの間にか次狼の前から諸刃の前へと移動して、諸刃に対しても、次狼と同じやり取りをする女性に、リンゴが思いきり怒鳴りあげた。

「おっおいっ、次狼っ！」
「何ぃ～っ？」
「あの女、一体、何者なんだよっ…！？」
「んっ？」
明らかに女性のことを不審がり、次狼へ問いかけているゴン。その声に気付き、女性がゴンの方を振り返る。

「ああっ！あの人は青守トマトっていってっ…！」
「初めて見る顔だねぇっ、坊やっ」

「うげぇっ！？」
不意に目の前に現れるトマトに、ゴンが少し恐怖するように驚く。
「なっ…！なななななっ…！なっ…！」
「お前っ…イィ～イ男になったらっ…私の二五八番目の旦那にならないかぁ～いっ？」
「ひぃっ…！」
トマトの腕が、ゴンへと伸びる。
「今からイイ男になるための特訓だぁっ！ほぉ～れっ！レッツプロレスぅうぅうっっ！！」
「ぎぃぃぃやあああああぁぁぁぁぁぁっっっ！！！」
トマトに激しくプロレス技をかけられ、ゴンの叫び声が、部屋中に響き渡った。

「いやぁ～良かったたっ！もうすっかり打ち解けたみたいですねぇ～っ！」
「どこがっ…？」
「だから逃げる準備をしておけと言ったのに…」
明らかに苦しそうな表情を見せているゴンを眺め、穏やかな笑みを浮かべる次狼と、引きつった表情でひっそりと突っ込んでいるリンゴ、そして無表情で、冷静に呟く諸刃。

「トマトさぁ～んっ、今日からゴン、そいつをここに住ませてあげてくれませんかぁ～っ？」
「ああっ？」
次狼の言葉に、トマトが顔を上げる。

「いいよぉっ、諸刃と同じ、“私の未来の旦那部屋四〇八”に住みなぁっ」
「絶対、嫌だぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～っっ！！！」

こうして、ゴンは、青守トマトの屋敷で暮らすこととなった。

形はどうあれ、俺に、一族を抜けて以来、久々の“家”が出来たのであった。

“私の未来の旦那部屋四〇八”。

「ぶはぁっ…」

トマトのプロレス技にすっかり生気を吸い取られたゴンが、青白い表情で部屋の寝台の一つへと座り込む。その旦那部屋は二人部屋のようで、寝台も二つあり、結構広々とした造りになっていた。

「まぁ適当に使え…俺は何事にもこだわらない主義だ…」

「そうっぽいなっ…」

もう一つの寝台に座り、そう言う諸刃に、ゴンが少し納得したように頷く。

「けど、なんでお前だけ、この家に住んでんだぁ？次狼とリンゴは自分家に戻ったんだろぉ？」

ふと気付いたように、ゴンが諸刃へと問いかける。

「お前ん家だけ、すっごい遠いとかか？」

「……っ」
「……っ？」
無表情の諸刃の表情が、少しだけ動いたような気がして、ゴンは眉をひそめた。
「俺は…赤子の時に…この近くの森に捨てられた…」
「えっ…？」
諸刃の言葉に、ゴンの表情が曇る。
「そこをトマト先生に拾ってもらった…それからはずっとこの家で暮らしている…」
「……っ」
いつもと違い、少し悲しげに見えるその表情に、ゴンが目を細める。
「わっ…悪いっ…」
「えっ…？」
深々と頭を下げるゴンに、少し驚いたように声を漏らす諸刃。
「……お前、口悪いし、声は無駄にデカいな…」
「ああんっ！？」
いきなり放たれる悪口に、ゴンがしかめっ面を、勢いよく上げる。
「けど…優しいヤツだ…」
「えっ…」
付け加えられた言葉に、戸惑いを見せるゴン。
「ありがとう…」
「……っ」

無表情の諸刃が、初めて見せたその笑みに、ゴンは驚いたように目を見開く。

「なっ…！何がっ…！」

少し照れるようにそっぽを向き、ゴンが寝台の上に寝転がる。

「誰がっ…優しいもんかっ…！」

ゴンはそう言い放つと、寝台に深々と顔を埋めた。

その日は、変なヤツとばかり出会った。

“裏切り者”の俺を受け入れる、変なヤツばかり…。

お陰で俺は、その日の夜、久々に、ぐっすりと眠れた…。

第５５章　過去の楔　☆４

それから、数日の時が流れた。

「はぁっ…」

ゴンは一人、その目つきの悪い顔立ちには似合わない買い物かごを持って、龍国の中心街を、ふらふらとやる気なく歩いていた。

「ったくっ、あのクソババアっ…なんで俺が買い物なんてっ…」

ゴンが青守トマトの家で暮らすようになってから数日。居候、というか旦那見習いということで、買い物や掃除などと、色々とこき使われているのであった。

「諸刃も諸刃だよなぁっ、なぁ～にが“俺は朝の瞑想があるから”だよっ！意味わかんねぇーしっ！」

顔をしかめながら、ゴンが独り言を続ける。

「帰ったら文句言ってやっ…！……っ」

ゴンが急に言葉を止め、かごを持っていない方の手で、自分の口を軽く覆った。

「“帰ったら”…」

“帰る”などという言葉を使ったのは、いつ以来であろうか。恐らく、初めての“裏切り”をする前。物心がついた時にいた町を、“故郷”だと思っていたあの町を、裏切るその前。

「“帰ったら”…か…」

もう一度呟き、ゴンがそっと口元を緩める。

「……っ」

どこか楽しそうに微笑むと、その足取りも軽やかに、ゴンはトマトの屋敷へと道を急いだ。

「うわわわわっ！危ねぇっ！！坊主っ！」

「へっ？」

横から聞こえてくる声に、ゴンが振り向く。

「うえぇっ！？」

脇道から飛び出してきたのは、まだ成長期前のゴンの体の二倍はありそうなほどに巨大な、体格のいい男。どうすることも出来ず、ゴンが大きく目を見開いた。

「うわあああああああっ！！」

大男と正面衝突し、ゴンが軽々と吹き飛ばされる。

「ううっ…！」

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

壁に背中を打ちつけたゴンが、白い煙に包まれていく。

「痛ってっ…」

次の瞬間、白い煙の中から出てきたのは、一匹の金色のキツネであった。どうやら背中を打ちつけた痛みで、体が勝手に獣化してしまったようである。

『……っ』

そのキツネの姿に、町を行き交っていた人々の、目の色が変わる。

「んっ…？」

視線の変化に気づき、ゴンがゆっくりと顔を上げる。

「キツネっ…？」

「キツネっ…」

「あっ…」

口々にキツネと呟く町の人間に、ゴンがハッとしたように自分の体を見る。

「やっべっ、早く人化しっ…」

「“裏切りの一族”っ…」

「……っ！」

町人の一人から漏れたその言葉に、人の姿に戻ろうとしたゴンの、動きが止まった。

「キツネを入れた町には…ロクなことが起こらない…」

「卑しい一族がっ…」

「この国まで肥やしにする気っ…？」

「どうせ、その内、この国も裏切るんでしょっ…？」

「ちっ…！」

町人たちの言葉に、ゴンが思わず顔を上げる。

「違うっ…！俺はこの国で静かに暮らしたいだけだっ！裏切ったりなんかっ…！」
「誰が裏切りキツネの言葉なんか信じるかよっ！！」
「……っ！！」

一瞬で否定される、言葉。

「とっととこの国から出て行けよぉっ！！」
「そうだっ！出て行けっ！！」
『出て行けぇっ！！出て行けぇっ！！』

「……っ」

繰り返されるその言葉に、ゴンは力なく目を伏せた。

――――お前が人を信じた所で、人は誰もお前を信じたりはせんよ…ゴン……――――

その通りだ、としか言いようがなかった。
誰も信じてくれない。信じてくれるはずもない。
なら、どこへ行ったって、“故郷”なんて、出来るはずがない。

「……。」

人の姿に戻ったゴンは、トマトの屋敷に戻る途中の森で、木の根元に座り込み、ただ茫然としていた。頭の中で繰り返される紺染の言葉に、その表情は、諦めの色が強くなっていく。

「ゴンっ！」
「……っ？」
聞こえてくる、自分の名を呼ぶ声に、ゴンがゆっくりと顔を上げる。

「ゴンっ！」

そこへ現れたのは、いつものように穏やかな笑みを浮かべた、次狼であった。

「良かったぁ～っ！探しましたよっ！」
ゴンのすぐ傍まで駆け寄り、立ち止まった次狼が、ホッとした様子で胸を撫で下ろす。
「トマト先生が買い物行かせたきり、帰って来ないって言っていましたのでっ」
「……。」
言葉を続ける次狼に、まったく反応を示さないゴン。

「さぁっ！帰りましょうっ！」
「……っ！」

“帰る”という言葉に、ゴンが大きく瞳を開く。

「どこにっ…？」
「へっ？」
返ってくるか細い声に、次狼が少し首を傾げる。
「どこって、トマト先生の家に決まっ…」
「俺に…帰る場所なんて…やっぱりないよ…」
「えっ…？」
次狼の言葉を遮り、ゴンがポツリと呟く。
「ゴン…？」
「だって…誰も…信じてくれなかったんだっ…」
「えっ…？」
ゴンの言葉に、次狼が眉をひそめる。
「俺の言葉なんて…誰もっ…」
少し震える声。
――――誰が裏切りキツネの言葉なんか信じるかよっ！！――――
思い出される町人たちの表情に、ゴンが強く唇を噛み締める。
「俺っ…たくさんっ…たくさんっ、人を裏切ってきたんだっ…」
――――助けてぇぇっ！！助けてぇぇぇっ！！――――
“助けて”と伸ばされた手を、何度も振り払った。救えた命を、何

度も見殺しにした。
――――裏切り者ぉぉぉっ！！――――
放たれたあの言葉に、何度も耳を塞いだ。

「裏切ってきたんだっ…」
「……。」

声を震わせ、肩を震わせ、話を続けるゴンを、次狼が真剣な表情で、まっすぐに見つめる。

「だからっ…もうっ…誰にも信じてもらえないっ…」

ゴンの、噛み締めた唇が震える。

「信じてもらえるっ…はずがないっ…！」

潤む瞳から零れ落ちそうになる雫を、目を細めて必死に堪える。

「信じてなんてっ…もらえないっ…！」

ゴンが深く深く、俯いていく。

「でもっ…」
「……っ」
そっと聞こえてくる声に、深く俯いていたゴンが再び、顔を上げる。

「でもっ…」
目の前にある、穏やかな緑色の瞳。ゴンの前へとしゃがみ込んだ次狼が、まっすぐにゴンを見つめる。

「俺は…君を信じますよ…？」
「……っ！！」

そっと囁かれた言葉に、向けられた穏やかな笑顔に、ゴンは大きく目を見開いた。

「信じますよっ…」

ゴンがずっと求め続けてきた言葉を、次狼がもう一度繰り返す。
「それだけじゃ…君がここにいる理由にはなりませんか…？」
「……っ」

そっと細められたゴンの瞳から、一粒の涙が零れ落ちた。

「ううっ…！」
止めどなく涙を流すゴンが、深く俯く。

「ううぅっ…！」

――――俺は…一族を抜けるっ…――――

あの日から、ずっと、求め続けていたもの。

「さぁ…帰りましょうっ…？」

優しい笑みを浮かべた次狼が、俯いて泣くゴンに、そっと手を差し伸べる。

「ゴンっ…」

「……っ」

ゴンが、その手を取った。

ずっと、欲しいものがあった。

温かい家、温かいご飯、温かい家族、温かい笑顔。

温かい、“故郷”。

ずっと欲しくて、でも絶対、手に入らないものだと思っていた。

「それであの時、お前がさぁ～っ」

「えぇぇ～っ？ゴンだって、そうでしたよぉ～？」

他愛もない会話をしながら、楽しげな笑みを浮かべたゴンと次狼

は、トマトの屋敷へと帰っていった。
「……っ？」
屋敷の前に並ぶ人影に、ゴンがふと足を止める。
『……。』
「あっ…」
屋敷の門の前に立ち並ぶ、リンゴ、諸刃、トマトの三人。どうやら、ゴンたちが戻ってくるのを待っていたようである。そんな三人の様子を見て、ゴンが少し気まずそうな表情を見せながら、ゆっくりと歩み寄っていく。
「あっあのぉ～っ…」
目の前に立つと、少し躊躇うように、言葉を発するゴン。
「えっとっ…」
「心配させんじゃないわよっ！」
「えっ…？」
言葉を選んでいたゴンに、かけられるリンゴの強気な声。ゴンが少し戸惑うように、顔を上げる。
「バカゴンっ！」
「まっ、私の旦那になる男なんだから、多少は遊んでた方がいいけどねぇっ」
「晩御飯出来てるぞ…激辛カレー…」
「……っ」
それぞれに色々と言いながらも、三人は皆、穏やかで温かい笑みを浮かべていた。三人の笑顔に、驚いたように、少し戸惑うように、

目を開くゴン。

「……っ」

そんなゴンの横で、次狼がそっと微笑む。

「よいしょっ！」

「……っ？」

ゴンが首を傾げる中、次狼がゴンの横を通り抜け、トマトたち三人と並ぶようにして、ゴンと向き合った。

「おかえりっ！ゴンっ！」

「……っ！」

次狼が、飛びきりの笑顔をゴンへと向ける。

『……っ』

次狼の横に立つトマトたちも、同じようにゴンへ笑顔を向ける。

「……っ」

向けられる微笑みに、微笑み返すゴン。

「ただいまっ」

やっと、やっと、手に入れた。

「フフフっ…」
風になびく、長く白い髪。
「フフフっ…」
闇夜に輝く、血のように真っ赤な瞳。
「やっと…やっと見つけたわ…」
その女が、怪しく口元を緩める。
「青守トマトっ…」

やっと手に入れたものが、すぐに失われてしまうことを、この頃の俺は、まだ、知らなかった…。

第５６章　絶望の果て　★１

俺が青守トマトの家で暮らすようになってから、一ヶ月の時が流れた。

青守トマト邸・広間。
「いきなっ！地蔵（ちーぞう）っ！」
「はいよぉっ！トマトっ！」
トマトの声に身構える、一人の髪の薄い老人。

「いっくぜぇっ！次狼っ！“笠地獄”っ！！」
「……っ」

地蔵が正面に立つ次狼へ向け、無数の石で出来た笠を投げ放った。
それを見ると、次狼がいつになく真剣な表情を見せ、腰に下げていた刀を抜く。

「“天狼丸（てんろうまる）”っ…」

白い鞘から出てきたのは、何とも美しい白色の刀身の刀。その細身の刀を、次狼が静かに構える。

「“狼刃”っ…！！」

力強く振るった次狼の刀から、放たれる白色の一閃。

――――パァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

それが、地蔵が向けていた石製の笠を、一つ一つ粉々に砕き割った。

「すっげっ…」

その光景に目を見張る、広間の横から見つめているゴン。

「“トマト先生”って、何の先生かと思ったら、戦いのかよっ…」

「なんたって“龍人”は世界最強の一族だものっ！」

「トマト先生は千年を生きる御伽界最古の獣人…この世界にあの人ほどに強い人はいない…」

自慢げに話すリンゴの横で、諸刃が冷静に話す。

「修行をしてもらうには、最高の師だ…」

「はぁぁぁ～～っ！」

諸刃の言葉に、ゴンが感心したような声を出す。午後になり、リンゴとともにトマトの屋敷へと遊びに来た次狼は、広間に入るなり、トマトとその旦那たちと、戦いを始めたのであった。

「でも何だって、この平和な時代に修行なんかっ…」

「あっ」

「んっ？」

刀を下ろした次狼が、真剣であった表情を崩し、ポツリと間の抜けた声を漏らす。その声に振り向くゴン。

「あっ」

次狼の見つめる先で、まったく砕けていない石製の笠が、力なく床へと落下した。

「あっちゃ～っ、一個残ってましたかぁ～っ」

そう言って微笑んだ次狼が、軽く頭を抱える。

「んだよっ、一個くらいっ」

「そうだそうだっ、こんだけわしの笠ぁ、砕けりゃ上出来もいいと

こよっ！」
　次狼の方へと歩み寄っていきながら、ゴンと地蔵がそれぞれに声をかける。次狼は残念そうにしているが、あれだけの笠を砕き割ったのは、凄いことである。ゴンはおろか、同じ年頃の普通の少年では、とても真似出来ない。

「でも兄貴の狼刃に比べたらっ」
「まぁ、まだまだだろうねぇ」
「へっ？」
　次狼の言葉を、代わりに言うように話すトマト。その言葉に、ゴンが目を丸くする。
「何だぁ？お前の兄貴って、そんなに強えぇのかっ？」
「えっ？」
　ゴンの問いかけに、次狼が刀を鞘へとしまいながら、振り向く。
「ええ、まぁっ」
　穏やかな笑顔を作る次狼。
「一応、世界の英雄ですからっ」
「えっ…？」
　笑顔で答える次狼に、ゴンが首を傾ける。
「世界の…英雄っ…？」
　次狼の言葉を、ゆっくりと繰り返すゴン。

「はいっ！俺の兄貴は、世界の英雄“桃タロー”ですっ！」
「桃タっ…って、えええええぇぇぇぇぇっ！！？」
「うわっ」
　大声で激しく驚くゴンに、次狼がしっかりと自分の耳を塞ぐ。眼球が飛び出しそうなくらいに、大きく目を見開いたゴンは、そのままの表情でしばらく固まる。

「家まで甘党にして、直感でガキ拾ってきて、毎日ジャンボパフェ

食ってて、今は伝説の生クリーム探しに行ってるお前の兄貴が、桃タローっ！！？」
「どう聞いても変態ね」
的確に特徴を列挙するゴンに、横からリンゴが鋭く口を挟む。

「はいっ！すっごくその通りですっ！」
「どへえええええぇぇぇぇっっ！！？」
もう一度頷く次狼に、もう一度驚くゴン。

「何だい、お前、太狼のこと、言ってなかったのかい？」
「気持ちでは言ったつもりだったんですけどねぇっ」
「気持ちだけで言ってどうすんだよっ」
惚けた笑顔を見せる次狼に、トマトが少し呆れたように肩を落とす。
「兄貴が桃タローっ…それでそんなに強えぇーのかっ、お前っ…」
「まぁゴンの二十倍くらい、強い程度ですよ」
「んだっ！？そのすっげぇームカつく比較はっ！！」
「アハハっ」
爽やかな笑顔で答える次狼に、ゴンがムキになって怒鳴り返す。

「アンタみたいなバカと次狼を比べること自体が間違ってんのよっ」
そこに、リンゴが再び口を挟む。
「次狼はあっの変態兄よりも強くなるのが目標なんだからっ」
「違いますよ」
「そう、違うのよ」
「何々だよっ、お前っ」
次狼の代弁をしたとばかりに偉そうに言い放ったリンゴであったが、次狼に一瞬にして否定され、すぐさま意見を変えてしみじみと頷く。そんなリンゴに、非難の目を向けるゴン。

「兄貴を越えようとか、そんな気持ちはありません。兄貴は、雲の上の存在ですから」
「変態だけどな」
清々しい笑顔で言う次狼に、ゴンが少し横槍を入れる。

「でもじゃあ、なんでだっ？」
「えっ？」
「なんでババアのとこで修行して、強くなろうとしてんだっ？」
「ああっ」
次狼がまた、穏やかな笑顔を作る。
「俺っ、もう少し大きくなったら、“オトポリ”に入りたいんですっ！」
「オトポリっ…？」
その名には、ゴンも聞き覚えがあった。“御伽警察”の通称・オトポリ。御伽界に鬼が出始めた頃に、龍国で結成された、対鬼人用の武力組織のことだ。

「今更オトポリっ？お前の兄貴のお陰で、もう鬼人もいねぇーんだしっ、オトポリなんて用済みだろっ？」
「鬼人はいなくなってなんかいないよっ」
「へっ？」
聞こえてくる厳しい声に、ゴンが振り返る。

「必ず復活する…必ずねっ…」
「……っ？」
真剣な表情、というよりも怖いとさえ感じるほどに険しい表情を見せているトマトに、いつもとは違う何かを感じ、ゴンは少し眉をひそめた。

「私は寝る。地蔵っ、後はお前が相手しなっ」

「ああ」
地蔵にそう言って、奥の部屋へと去っていくトマト。

「……っ」
「あっ」
素早くトマトを追いかけていく諸刃に、リンゴが思わず手を伸ばす。

「……。」
しかし、リンゴはそっと手を下ろし、どこか悲しげに俯いた。

「何だぁ？今のっ」
「先生にも色々と事情があるんですよ」
首を傾げるゴンに、次狼が冷静な表情で言い放つ。
「でぇっ？お前も鬼人は復活するって思ってるから、オトポリに入りてぇーのかっ？」
「まぁそれもありますけどね」
次狼がそっと口元を緩め、広間の端にある長椅子に腰を掛けた。

「オトポリに入りたいのはっ…少しでも兄貴の役に立ちたいからなんですっ」
「えっ…？」
腰を掛けた次狼の前へと立ったゴンが、次狼の言葉を少し聞き返す。
「兄貴が世界を救っている間っ…俺は兄貴の帰りを待つことしか出来ませんでしたからっ…」
「次狼っ…」
兄に何もしてあげられなかったことを、悔いているような表情を見せる次狼を、ゴンがそっと目を細めて見つめる。

「だからもしっ…また世界の平和が脅かされるような時が来たら…今度は兄貴と一緒に戦いたいっ…」
どこまでも清らかで、まっすぐな瞳。
「俺に救えるものがあるのならっ…一つでも多く、救いたいんですっ」
「……っ」
その純粋な笑顔に、ゴンはどこか眩しそうに目を細めた。ゴンなどでは考えもしないような、高い志。遥か未来を見つめている瞳。次狼にとっては、ゴンもその救えるものの一つだったのかも知れない。
「……そうかっ…」
事実、次狼に救われたゴンが、そっと笑顔を浮かべる。
「頑張れよっ」
「はいっ！」
ゴンの言葉に、次狼は笑顔のままで、大きく頷いた。
「トマト先生っ」
「……っ」
広間を立ち去ったトマトが、後ろから追いかけてきた諸刃の声に

気づき、廊下の真ん中で立ち止まる。トマトが振り返ると、そこには少し不安げな表情を見せた諸刃の姿があった。

「そんな顔、するなっ」
諸刃へ、トマトが笑顔を向ける。
「大丈夫だよっ」
「けどっ…」
「これは私の戦いだっ」
口を挟もうとした諸刃の言葉を、トマトが強く遮り、言い放つ。

「千年前のあの日から続く…私の戦いだっ…」
「先生…」
いつになく険しい表情を見せるトマトに、諸刃がそっと目を細める。トマトにはどこか立ち入ってはいけないような、そんな空気が流れていた。

「心配するなっ」
再び笑顔を作り、その笑顔を諸刃へと向けるトマト。

「お前たちを巻き込んだりはしないよっ、絶対にっ」
「……。」

強い笑顔で言い切るトマトに、諸刃はどこか浮かない表情を見せた。

その日、夜。未来の旦那部屋四〇八。

「二三六っ…二三七っ…二三八っ…二三七っ…二三六っ…」

「戻ってんぞっ！？」

「あっ…」

数を数えながら草薙の剣の素振りをしていた諸刃が、横からのゴンの指摘に、気付いた様子で剣を止める。

「しまった…ついカウントダウン癖が…」

「んだよっ、カウントダウン癖ってっ」

諸刃に呆れたように言い放ちながら、ゴンが自分の寝台へと腰を下ろす。

「しっかしお前も熱心だよなぁ」

今日だけでなく、諸刃は毎晩、寝る前に剣の素振りを欠かさない。そんな諸刃を、ゴンが感心するように見る。

「お前もオトポリにでも入りたいのかぁ？」

「俺にそんな立派な志はない…」

ゴンの問いかけに、諸刃がゆっくりと剣を下ろし、答える。

「俺は成るように成れ主義だ…」

「そうっぽいな…」

「ただ…」

「……っ？」

言葉を付け加える諸刃に、ゴンが少し眉をひそめる。

「あいつを…次狼を見ていると…妙に突き動かされる…」
どこか眩しそうに、そっと目を細める諸刃。

「あいつのひたむきで、まっすぐな姿を見ていると…こんな俺でも何か出来ることがあるんじゃないかと…そう思えてくる…」
「……。」

――――俺っ、もう少し大きくなったら、“オトポリ”に入りたいんですっ！――――
――――俺に救えるものがあるのならっ…一つでも多く、救いたいんですっ…――――

思い出される次狼の言葉、笑顔、瞳。確かに、ゴンの胸の中でも、強く疼く何かがあった。

「うん…」
「……っ」
そっと声を漏らしたゴンの方を、振り向く諸刃。

「……それは…わかる気がする…」

そう呟いたゴンは、とても穏やかで、優しい笑顔を見せていた。
ここに来たばかりの頃では、きっと見せることが出来なかったであろう笑顔。この一ヶ月で、その表情は砕け、とても柔らかくなった。

「そうか…」
そんなゴンの様子を見て、いつも無表情の諸刃も少し笑みを浮かべる。

「なら…お前も一緒に…強くなるか…？」

「えっ…？」

諸刃の問いかけに、戸惑いの表情を見せるゴン。しかしその戸惑いは、すぐに晴れた。

「うんっ…」

そう頷いてから、二年の時が流れ、俺たちは、十六歳になった。

第５６章　絶望の果て　★２

「いっくぜぇっ！？“狐火・一髪”っ！」
「……っ“狼刃”っ！」

ゴンの放った炎の玉と、次狼が天狼丸を振り下ろした一閃が、広間の中央で激しくぶつかり合う。

――――バァァァァァァァーーーーンっ！――――

「きゃっ！」
巻き起こる衝撃に、思わず身を屈めるリンゴ。

「すっごい音ぉ～っ…」
ゆっくりと顔を上げたリンゴが、感心したように、まだ戦いを続ける二人を見つめる。
「もう修行なんて、レベルじゃないわねっ」
「最近はすっかりレベル上がっちまって、俺ら旦那勢の出番もねぇーからなぁっ」
リンゴの横に立つ地蔵が、腕組みをしてボヤくように呟く。二年前は地蔵が相手で十分に事足りた次狼たちも、今となっては、地蔵では相手にならないほどまでに成長していた。
「特にゴンの成長は目覚ましいっ」
「そうなの？」
「ああっ」
不審そうに聞き返したリンゴに、ゆっくりと頷いたのはトマトであった。

「火力使いの狐族は、元々戦闘に優れた獣種ではあるがっ…あいつにはそれ以上のセンスがあるっ」
「ふぅ～んっ…」
ゴンを誉めるトマトに、少し面白くなさそうな表情を見せるリンゴ。
「このままいくと、あいつ、そのうち次狼を越えるかもねぇっ」
「冗談っ！あっのバカゴンが次狼を越えるなんて無理よっ！無理無理っ！」
「お前はホンっト、素直じゃないねぇ」
強く否定するリンゴに、トマトが少し呆れたように肩を落とす。

「実はすっごく気になってるくせに」
「だぁっ…！」
トマトの言葉に、リンゴが顔を一気に真っ赤にする。
「誰があんな奴のことっ…！！」
ムキになって怒鳴りあげるリンゴ。

「私はっ…！」

――――リンゴ…――――

思い出される、無表情の諸刃の姿。

「私はっ…」

――――あっ…――――

思い出される、ただトマトを追いかけていった諸刃の姿。

「……っ」

リンゴがどこか悲しげに俯く。

「何でもないっ…」

「ああっ？」

力なく呟いたリンゴに、トマトは少し首を傾げた。

「そういやぁ諸刃はどうしたんだぁ？」

トマトが広間を見回しながら、思い出したように問いかける。確かに広間に、いつも次狼やゴンと一緒のはずの諸刃の姿がない。

「諸刃なら、さっきジャンケンに負けて、町に買い物に行ったよっ」

「そうかっ」

地蔵の言葉に、トマトは何の疑いもなく頷いた。

その頃、町からトマトの屋敷へと戻る途中の森。

「あっ…豆腐買い忘れた…」

買い物袋を両手に抱えながら、森の中を歩く諸刃が、ふと思い出したようにポツリと呟く。

「まぁいいか…今日、マーボー豆腐だけど…」
それはまずいだろうといった内容なのだが、諸刃は特に気にする様子なく、そのまま森を突き進んだ。

「んっ…？」
諸刃が何かに気づき、目を凝らす。

「あれはっ…」
木の根元に横たわっている、白く長い髪、真っ白な服の女性らしき人影。諸刃がその場に買い物袋を置き、少し足早になって駆け寄る。

「大丈夫か…？」
横たわっていた女性を、諸刃がゆっくりと抱え起こす。

「んっ…」
その、生きているのかを疑うほどに肌の白い女性が、諸刃の声に、反応を示した。
「んんっ…」
ゆっくりと開かれる、その真っ赤な瞳。

「はい…」
「……っ」

女性の真っ赤な瞳に見つめられた瞬間、諸刃の表情が止まった。

「ふぅ～っ！今日も引き分けかぁ～っ！」
「楽しかったですねぇ～っ」
交戦を終えた次狼とゴンは、屋敷の外の水道場で、顔や体を洗っていた。汗の流れたその表情は、どこか満足そうに輝いている。互いの力をぶつけ合うことが、今は何よりも楽しいのだ。

「あっ！諸刃ぁ～っ！」
「……っ」
次狼が門の方を振り向き、大きく手を振る。門からは屋敷の中へと入り、買い物袋を抱えた諸刃が、帰って来ていた。

「どうでしたぁ～っ？買い物っ！今日の激辛マーボーも期待してっ…！」
「……。」
「ありゃっ？」

次狼の言葉をあっさりと無視して、足早に屋敷の中へと入っていってしまう諸刃。そんな諸刃に驚き、次狼が目を丸くする。

「どうしたんでしょうっ…？」
「買い物で疲れたんじゃねぇーのぉっ？」
戸惑うように呟いた次狼に、ゴンが適当に答える。

「けどっ…少し様子がおかしかったようなっ…」
「あいつがおかしいのはいつものことだってっ！ほらっ！いくぞっ

！」

次狼の言葉をあっさりと否定し、ゴンもそそくさと屋敷の中へと戻っていく。

「……。」

その場に一人残った次狼は、どこか浮かない表情で俯いた。

あの時、少しずつ起こる変化に気づいていれば、何も失わずに済んだだろうか。

それから、数日の時が流れた。

「ふぃ～っ！今日も引き分けぇ～っ！」

「本当に強くなりましたね、ゴン」

疲れきった様子で倒れ込んだゴンに、同じように全身に汗をかいた次狼が、穏やかな笑みを向ける。今日もいつも通り行われた修行。今日もいつも通りついた、次狼とゴンの決着。

「……。」

次狼がどこか浮かない表情で、広間を見回す。

「今日も来なかったな、諸刃の奴っ」
「えっ…」
ゴンの言葉に、次狼が少し驚いたように振り向く。今まさに自分の考えていたことを口にされ、ハッとしたのであった。
「最近…毎日、来ないですよね…」
「ああっ、どっか行ってるみたいで、朝、俺が起きた時にはもういないぜぇ？」
「……そうですか…」
「……っ」
不安げな表情を見せる次狼に、ゴンが少し眉をひそめる。
「そんな顔すんなってっ！あいつももうガキじゃねぇーんだしさぁっ！」
諸刃を心配している次狼を、励ますように、ゴンが妙に明るい声をかけた。
「あいつ、いっつも何考えてるかわかんねぇけどっ、きっと修行サボって遊びたくなる時期もあんだってっ！」
「そっ…そうですよねっ…」
「そうそうっ！」
ゴンの言葉に、無理やり作ったような笑みを浮かべて、自分を言い聞かせるように頷く次狼。
「しばらく放っといてやろうぜっ！」
「はいっ…」
少しずつ、少しずつ、狂いだしていく、歯車。

「はぁ～っ！寝坊しちゃったっ！」
龍国の中心街を、必死に駆け抜ける、少し髪に癖のついたままのリンゴ。青守の屋敷を飛び出し、トマトの屋敷へと必死に急ぐ。
「遅れたら、またバカゴンに、グダグダ言われちゃうっ！」
リンゴが少し困ったように言いながら、足を速める。

「あれっ…？」
しかし、急いでいたはずのリンゴの足が、ふと止まった。
「あれはっ…」
中心街の大勢の人の中に、見覚えのある人影。

「諸刃っ…？」
それは、諸刃であった。最近、修行にも参加せずに、朝からどこかへと出掛けてしまっている諸刃が、何故、町中を歩いているのだろうか。リンゴが少し眉をひそめる。

「諸っ…！……っ？」
諸刃の名を呼ぼうとしたリンゴが、諸刃の横に見える人影に、その声を止めた。

「女の…人っ…？」

諸刃の横を歩く、白く長い髪に、真っ赤な瞳の、美しい女性。美しくはあるのだが、その白すぎる肌は、どこか生きている気配がなく、そしてどこか、不気味であった。

「諸刃っ…」

人混みの中へと消えていく諸刃と女性を、リンゴはただ不安げな表情で見送った。

「おっせぇーぞぉっ！クソリンゴっ！」

「……。」

「ああんっ？」

いつものように悪態づいたゴンであったが、何も言い返して来ないリンゴに、少し眉をひそめる。

「どうかしたのかぁ？さては落ちてたものでも食ったかっ？」

「違うわよっ！！」

「うわっ！」

勢いよく返ってくる怒鳴り声に、ゴンが思わず耳を塞ぐ。

「ふぅ～っ、相変わらずうっせっ…」

「ねぇ、ゴンっ…」

「あっ？」
何やら改まった様子でそっとゴンの名を呼ぶリンゴに、耳を塞いでいたゴンが手を下ろし、顔を上げる。
「最近さっ、何か変わった様子とかないっ…？」
「はぁっ？何っ…」
「諸刃っ…」
「……っ」
リンゴの口から諸刃の名が出ると、ゴンの表情が一気に曇る。
「実はっ…さっきねっ…」
「何で俺に、んなこと聞くんだよっ」
「何でってっ…」
面倒臭そうに肩を落としたゴンに、リンゴが眉を引きつる。
「アンタっ、諸刃と同じ部屋に住んでんでしょっ！？」
ゴンを責めるように、怒鳴りあげるリンゴ。
「最近は朝早く出てくし、帰ってくんのも遅せぇーからロクに顔も合わせてねぇーよっ」
「何それっ！？アンタ、それでも諸刃の友達っ！？」
「ああっ！？」
さらに声を荒げたリンゴに、ゴンが表情を引きつる。
「んだよっ！？好きな男が釣れねぇーからって、俺に八つ当たりすんじゃねぇーよっ！！」
「なっ…！！」
ゴンの言葉に、リンゴが驚いたように目を見開く。
「なっ何よっ！それっ！」

「バレバレなんだよっ。お前、単純だからっ」
「……っ」
挑発するように言うゴンに、顔をしかめるリンゴ。

「好きな男一人くらいっ、自分だけで何とかっ…」
「バカっ！！」
「うわあっ！」
激しい怒鳴り声に、勢いよく遮られるゴンの言葉。

「みっ耳痛っ…」
「アンタなんかに聞いた私がバカだったっ…」
「えっ…？」

耳を塞いでいたゴンが、先程とは異なる小さな声に、戸惑うように顔を上げる。そこには強く歯を喰いしばり、少し目を潤ませた、リンゴの表情があった。

「もういいっ…！」
「……っ」

そう言い放つと、リンゴは素早くゴンに背を向け、その場を歩き去っていった。

「……。」
一人取り残されたゴンが、そっと頭を掻く。

「んだよっ…あの顔っ…」
今にも泣きそうな、悲しげな表情。いつも強きのリンゴの表情とは、思えないような表情。

――――けどっ…少し様子がおかしかったようなっ……――――
――――最近さっ、何か変わった様子とかないっ…？――――

「ったく、どいつもこいつもっ…」

思い出される次狼とリンゴの言葉に、ゴンが面倒臭そうに頭を抱える。

「……っ」

ゴンは、頭を抱えたその腕の隙間から、そっと鋭い瞳を見せた。

夜の闇も深くなった時刻、トマトの屋敷の未来の旦那部屋四〇八の扉が、ゆっくりと開いた。

「……。」

足音を忍ばせながら、諸刃が部屋へと入る。

「おかえり」

「……っ！」

急に明るくなる部屋に、自分の寝台へと行こうとしていた諸刃が、

驚いたように大きく目を見開いた。

「ゴンっ…」

「……。」

自分の寝台の上に座り、まっすぐに諸刃を見つめるゴン。

「起きて…いたのか…」

「どっかの不良野郎が、日毎に夜遊び長くなってっからよぉっ」

少し戸惑うようにゴンを見る諸刃に、ゴンは鋭い視線を向けながら言葉を続ける。諸刃はその瞳から逃れるように、そっとゴンから視線を外す。

「お前がどこで何してようとお前の勝手だけどよぉっ、んっ…？」

視線を外した諸刃を見つめていたゴンが、ふと諸刃の首筋に目を移す。

「……っ」

諸刃の首筋に刻まれているのは、黒い、どこか怪しげな紋様のようなもの。その紋様に何かを感じ、ゴンがそっと眉をひそめる。

「諸刃っ…お前っ、その首の模様っ…」

「……っ」

ゴンの言葉にハッとした表情を見せた諸刃が、慌てて首筋を手で覆い、その紋様を隠す。

「別に…ぶつけて出来ただけの、ただの痣だ…」

「アザ…？」

とても痣には見えなかったあの紋様に、ゴンがさらに表情を曇ら

せる。

「おっおいっ、諸刃っ…」
「風呂に入る。お前はもう寝ろ」
「……っ」

呼びかけようとしたゴンの言葉を遮り、諸刃が風呂場の方へと歩き出していく。そんな諸刃に、寝台の上から思わず身を乗り出すゴン。

「諸刃っ！」
「……っ」
名を強く呼ぶゴンに、諸刃の足が止まる。
「お前がどこで何してようとお前の勝手だけどっ…」
少し躊躇うように肩を落としたゴンであったが、決意したような瞳で、ゆっくりと顔を上げた。

「あんまりっ…仲間に心配かけるようなこと、すんなよっ…？」
「……。」

諸刃を心配するような、優しい瞳を見せて言うゴンに、諸刃の無い表情が、少しだけ動いた気がした。そのまま、諸刃は風呂場の扉の向こうへと、消えていった。

「あっ…」
姿の見えなくなった諸刃に、ゴンが少し目を細める。
「……。」

ゴンはどこか浮かぬ表情で、寝台へと寝転がった。

「……“仲間”っ…」

風呂場へと入った諸刃が、全身大の鏡を見つめ、首筋を覆っていた手をそっと離す。見える黒い紋様は、そっと白い光を放ち、首筋全体へと広がった。

「……馬鹿らしいっ…」

諸刃はどこまでも冷たい瞳で、呟いた。

そして、悪夢の朝が来る…。

第５６章　絶望の果て　★３

「んっ…」

ゆっくりと、その鋭い金色の瞳を開くゴン。寝台の上で体を動かし、枕元の時計へと目をやる。

「もう…朝じゃねぇーかっ…」

時計の針は、朝を示す時刻を差している。昨夜、諸刃の帰りを待つために夜遅くまで起きていたせいか、寝坊してしまったようだ。

「その割には随分、暗っ…あっ…」

寝台の上で起き上がり、カーテンを開けたゴンが、広がる景色に目を細める。

「雨…」

朝だというのに暗い灰色の空からは、冷たい雨が降り注いでいた。

「……っ」

しとしとと降るその、どこか陰湿な雨に、いつもの朝とは違う何かを感じずにはいられず、ゴンは少し表情を曇らせた。

「そういや諸刃はっ…」

ゴンが思い出したように、隣の寝台を振り向く。

「やっぱ…いねぇーかっ…」

隣の寝台はすでに蛻の殻で、部屋に諸刃の姿は見当たらなかった。昨夜も結局、諸刃が風呂から出てくる前に眠ってしまい、あれ以上の話をすることは出来なかった。

「諸刃…」
浮かない表情を見せ、ゴンが諸刃の名をそっと呟く。

「うわあああああああああっっっ！！！」
「……っ！」

その時、部屋の外から、大きな悲鳴が聞こえてきた。ゴンは驚いた様子で大きく目を見開き、顔を上げる。

「なっ何だっ…！？」
寝台から立ち上がり、ゴンは慌てて部屋を飛び出した。

「うっ…！」
部屋を飛び出した、ゴンの表情が凍りつく。

「なっ…何だよっ…」
ゴンが少し震えた声で、ポツリと呟く。

「何だよっ…これっ…！」
『うっ…ううっ…』

ゴンの飛び出たその廊下には、血だらけの人間が、廊下の床を埋め尽くすように、何人も倒れ込んでいた。生きてはいるようだが、皆、虫の息である。

「ゴ…ンっ…」
「……っ！地蔵っ！」
倒れている人間たちの中に、ゴンが地蔵の姿を見つける。よく見

れば、倒れている者は皆、トマトの旦那ばかりであった。
「なっ何で地蔵たちがっ…」
さらに困惑の表情を見せるゴン。

「ゴ…ン…逃げっ…」
「あああああああああああああっっ！！」
「……っ！」

ゴンへと必死に手を伸ばした地蔵の言葉を、遮るように聞こえてくる叫び声。

「トマト先生っ…！？」

その声に聞き覚えがあり、ゴンは叫び声の聞こえてきた、広間の方を振り向く。

「トマト先生っ…！！」

ゴンは、広間の方へと、必死に足を走らせた。

「先生っ…！トマト先生っ…！！」

倒れている者たちを幾人も通り過ぎ、広間の大きな扉の前へとや

って来たゴンが、勢いよくその扉を開いた。巨大な扉が、ゆっくりと開いていく。

「……っ！」

広がるその光景に、大きく目を見開くゴン。

「……っ」

全身を血で汚したその男が、ゆっくりとゴンの方を振り返る。

「諸刃っ…」

「……。」

広間の中心には、頬や服に大量の返り血を浴び、右手には血の滴る草薙の剣を持った、諸刃が立っていた。諸刃が何も感情のない冷たい瞳を、ゴンへと向ける。

「ゴっ…ン…」

「……っ」

聞こえてくる弱々しい声に、ゴンが視線を移す。

「ゴンっ…」

「トマト先生っ…」

諸刃の後方で、全身から血を流して倒れ込んでいるトマトが、苦しげに顔を上げ、ゴンの方を見つめる。そんなトマトの様子に、動揺した表情を見せるゴン。

「にっ…逃げっ…」

「何…やってんだよっ…」

ゴンが再び、必死に訴えようとするトマトから、無表情で立ち尽くす諸刃へと視線を移す。自然と震える声、拳。ゴンが震える拳を、強く握り締めた。

「何やってんだよっ…！！」
「やめろっ！ゴンっ！」
「諸刃ぁぁぁっ！！」

トマトが制止するよう叫んだにも関わらず、平静さを失ったゴンは、右手に真っ赤な炎を纏って、諸刃の方へと突っ込んでいった。

「……っ」

向かってくるゴンに、諸刃がゆっくりと草薙の剣を振り上げる。

「“白雷”っ…」
「……っ！」

振り下ろされた草薙の剣から、放たれる白い雷。

――――バリィィィィィィーーーーンっっ！！――――――

「うわあああああああっっ！！」

諸刃の白雷は、あっさりとゴンの炎を砕き、ゴンの体を直撃した。雷撃を直撃したゴンが、少し体を焼いて、その場に力なく倒れ込む。

「ううっ…」
「ゴンっ…！！」
弱々しい声を漏らすゴンに、倒れていながらも身を乗り出すトマト。

「もっ…」
倒れたゴンが、重そうに体を動かし、諸刃の方を向く。

「諸刃っ…」
「……。」

何かを訴えるように、必死に見つめるゴンに、表情一つ変えずに、冷たい視線を送り続ける諸刃。

「フフフ…」
「……っ？」
聞こえてくる、高い声の女の笑い声に、ゴンがそっと眉をひそめる。

「フフフフっ…」
「……っ」

諸刃の横から姿を現わす、白く長い髪に真っ赤な瞳の美しい顔立ちの女。笑い声は、その女のものであった。まるで死んでいるかのように白過ぎる肌に、諸刃以上に感情を感じ取れない瞳。その瞳は、血のように冷たく、そして、どこか不気味であった。女から感じ取れる、怪しげな空気に、ゴンの表情が、瞬時に強張る。

「お前っ…はっ…」

「牢戸知玖っ…」

ゴンの問いかけに、答えるように女の名を呟くトマト。その表情は、今まで見たことがないほどに、厳しく、険しいものであった。

「シルクっ…？」

「……っ」

戸惑うように名を呼んだゴンに、シルクがそっと笑みを向ける。どこまでも残酷な、真っ赤な瞳。それは、すでに人のものではない。

――――鬼は復活するっ…必ずね…――――

「あっ…」

思い出されるトマトの言葉に、ゴンがハッとした表情を見せる。トマトが言っていたのは、この女のことであったのだろう。

――――けどっ…少し様子がおかしかったようなっ…――――

――――最近さっ、何か変わった様子とかないっ…？――――

明らかに変わった、諸刃の様子。

――――お前っ、その首の模様っ…――――

首筋に刻まれた、謎の紋様。

「まさかっ…」

ゴンが大きく目を見開き、その瞳を微笑むシルクへと向ける。

「まさかっ…お前が諸刃をっ…！？」
「フフフっ…」
「……っ！」

頷きとも取れる笑みを浮かべるシルクに、ゴンが強く唇を噛む。

「諸刃にっ…」
ゴンが床に力強く手をつき、素早くその場で立ち上がる。

「諸刃にっ…！何をしたぁぁぁっっ！！」

怒りの表情で、シルクへと飛び出していくゴン。

「……っ」
「うっ…！」

シルクへと向かって行こうとしたゴンの前に、素早く諸刃が立ち塞がる。

「“白雷”っ…」
「うわあああああああああっ！！」
「ゴンっ…！！」

再び諸刃の雷に撃たれ、広間の端へと吹き飛ばされるゴン。

「ううっ…」
二度目の攻撃は体を強く傷つけ、倒れ込んだゴンは、今度は簡単には起き上がることが出来なかった。

「ウフフフっ…」
倒れ込んだゴンを見て、シルクが楽しげに微笑む。
「そろそろトドメを刺しておこうかしら…？諸刃…」
「はい…シルク様…」
「……っ！」

シルクの言葉に素直に頷き、諸刃が倒れたままのゴンへと草薙の剣を構える。そんな諸刃の様子に、衝撃を受けたように目を見開くゴン。

「何っ…やってんだよっ…諸刃っ…」
剣を構える諸刃に、ゴンが戸惑いの瞳を向ける。

――――けど…優しい奴だ…――――

無表情の中に、確かにあった優しさ。裏切りの一族のゴンに、“優しい”と言って、笑顔を向けてくれた諸刃。

「成るよう成れ主義じゃ…なかったのかよっ…」
ゴンのその鋭い瞳が、少し潤む。

「何、そんな女の言いなりになってんだよっ！諸刃っ！！」
「……。」

今にも泣き出しそうな表情で、必死に叫ぶゴンであったが、そのゴンの叫びにも、諸刃の表情は少しも動かなかった。

「無駄よっ…」
諸刃の横から顔を覗かせたシルクが、そっとゴンに笑みを向ける。
「彼にはね…魔法をかけたの…」
「何っ…？」
シルクの言葉に、ゴンが眉をひそめる。
「“仲間”なんて…ゴミだと思える魔法っ…」
その笑みが、さらに冷たく輝く。
「てめぇっ…！！」
「……っ」
「うっ…！」
思わずシルクへと身を乗り出したゴンに、諸刃が素早く草薙の剣を振り上げる。振り上げられた剣に、もう避けることも出来ないゴンは、表情を強張らせる。
「ゴンっ…！！」
剣を向けられているゴンの姿に、必死に体を奮い起こすトマト。
「シルクっ…！！」
膝をつき、何とか起き上がったトマトが、シルクへと右手を突き出した。トマトの右手が、青い光を帯びていく。
「……っ」
「うっ…！」

しかし、シルクの前へと諸刃が立ち塞がると、トマトの表情が引きつり、右手を包んでいた光が、急に止んだ。

「“白雷”…」

「ううっ…あああああああああああっ！！」

諸刃の放った雷に焼かれ、再び倒れ込んでいくトマト。その悲痛な叫び声が、広間に響き渡った。

「うっ…ううっ…！」

「フフフっ…」

苦しげな声を漏らすトマトに、シルクが一層、楽しそうな笑みを見せる。

「情けないものね…千年の時を生きる最古の獣人ともあろう人が…」

シルクが諸刃の前へと出て、ゆっくりと倒れているトマトの方へと歩み寄っていく。

「たった一人の男の前に…こうもあっさり倒れるなんてっ…」

「……っ」

トマトのすぐ前へと立ち、見下した表情で言い放つシルクに、トマトの表情が歪む。

「お前が憎んでいるのはっ…殺したいほど憎んでいるのはっ…私だけのはずだよっ…！」

顔だけを上げたトマトが、強くシルクを睨みつける。

「諸刃やっ…ゴンには何の関係もっ…！」

「そうよ」

声を荒げたトマトの言葉を、シルクが強く遮る。そう言い放ったシルクの表情には、先ほどまでの笑みが浮かんでおらず、確かに憎しみを感じる瞳を見せていた。

「私が憎んでいるのは…貴女だけっ…」

再び微笑みを作るシルク。

「だからっ…私は貴女から、すべてを奪うのっ」

「……っ」

まるで子供のように、無邪気に言い放ったシルクに、トマトは少し驚いたように目を見開く。

「貴女が持ってて、私が持っていないものは…私がすべて奪うわっ…」

シルクがトマトに背を向け、諸刃の方へと戻っていく。

「すべてっ…」

諸刃の横に立ち、諸刃の肩に手を乗せると、シルクが再び振り返り、トマトの方を見て微笑む。

「それでっ…諸刃をっ…？」

「ええっ」
怒りに少し震えた声で問いかけたトマトに、短く頷くシルク。
「だって…ねぇ、トマトっ…」
まるで親しい者に呼びかけるかのように、シルクがトマトの名を呼ぶ。
「この子のこと…大事でしょ…？」
シルクの白い手が、諸刃の首筋の黒い紋様に触れる。
「だってこの子…」
少し落とされる、声のトーン。
「“あの人”に…似てるもの…」
「……っ！」
シルクの言葉に、凍りつくトマトの表情。
「あの人…？」
倒れたまま二人の会話を聞いていたゴンが、“あの人”と聞いて思いつくような人もおらず、戸惑うように首を傾げる。
「さぁ、千年続くこの長い戦いも…そろそろ終わりにしましょう…」
シルクが諸刃の首筋から、手を離す。
「トマトを殺して…諸刃…」
「はい…シルク様…」
「なっ…！！」

シルクの命令に、頷く諸刃。ゴンが大きく目を見開く。

「……っ」
「うっ…！」

静かな表情で草薙の剣を振り上げる諸刃に、トマトは手や足を動かすことはなく、ただ強く唇を噛み締めた。

「……“白らっ…」
「“狐火・一髪”っ…！！」
「……っ」

――――バァァァァァァァァーーーーンっ！！――――

「……。」

今まさに、トマトへと草薙の剣を振り下ろそうとした諸刃が、横から飛んできた炎の玉を避け、攻撃を中止する。剣を下ろした諸刃が、ゆっくりと炎の飛んできた方を、振り向いた。

「ハァっ…ハァっ…ハァっ…」

そこに見えるのは、片膝をついて何とか起き上がっているゴンの姿。相当苦しいのか、肩を大きく揺らせて息をしている。

「ゴンっ…」
そんなゴンの方を見て、目を細めるトマト。

「邪魔な子ねぇ…」
同じようにゴンを見つめるシルクが、少し困ったように眉をひそめる。

「まずはその子から殺しましょうか…諸刃っ…」
「えっ…？」

シルクの言葉に、思わず声を漏らすゴン。

「はい…シルク様…」
「……っ！」

またも素直に頷く諸刃に、ゴンの表情が強張る。

「草薙…」
何の迷いもなく、ゴンへと草薙の剣を構える諸刃。

「やめろっ！！諸刃っ！！」
倒れたまま、動くことも出来ないトマトが、必死に体を動かそうともがきながら、大声で叫ぶ。しかし諸刃は止まることなく、ゆっくりと草薙の剣を振り上げていく。

「クっ…！」
その様子に、唇を噛み締めるトマト。

「逃げろっ！！ゴンっ！！」
今度は、ゴンへと必死に叫ぶ。

「うっ…！」

しかし、ゴンに、すでに逃げるだけの力は残っておらず、ゴンはただ、振り上げられた草薙の剣を見上げる。

「ううっ…！！」

光る剣先に、ゴンの表情が恐怖で歪んだ。

――――――バァァァァァァァーーーーンっ！――――――

その時、広間の扉が、勢いよく開かれた。

「ゴンっ！諸刃っ！」

「おばあちゃんっ！！」

広間へと駆け込んでくる、次狼とリンゴ。

「“黒雷”っ…」

二人が入って来たことに手を止めることなく、諸刃はゴンへと草薙の剣を振り下ろした。

「ううっ…！」

黒い雷を纏った草薙の剣が、ゴンへと振り下ろされる。

「クっ…！」

「ゴンっ！！」
「いやあああぁぁあっ！！」

――――――バリィィィィィィィィィィィーーーーンっっ！！――――――

それぞれの叫び声が響き渡る中、降りた剣。

「あっ…」

大きく目を見開いたゴンが、力なく声を漏らす。

「うっ…うぅぁっ…」

ゴンの目の前で、草薙の剣に胸を貫かれ、真っ赤な血を流しながら、ゆっくりと倒れ込んでいくその人物。

「……っ次狼おおおおおっっ！！」

ゴンの悲痛な叫びが、広間に響き渡った。

「うぁっ…」
「ハっ…！」
胸を貫いていた草薙の剣を抜かれ、後方へと倒れていく次狼に、ゴンが必死に両手を伸ばし、その体を受けとめる。次狼を抱きかかえたまま、その場に座り込むゴン。
「次狼っ！！次狼っ！！次狼ぉぉぉっ！！」
ゴンが、抱え込んだ次狼の名を、何度も何度も必死に呼ぶ。
「ウ…ソっ…」
「……っ」
その光景を、茫然と見つめる、リンゴとトマト。
「んっ…？」
屋敷の外が騒がしくなってきたのを感じ、シルクがふと窓の外に目をやる。窓の外を見ると、トマトの屋敷を取り囲むようにして、黒い制服の集団が立ち並んでいた。
「オトポリっ…」
その者たちを見て、そっと眉をひそめるシルク。
「どうやら今日はここまでのようね…」
シルクがどこか残念そうに呟く。

「帰るわよ…諸刃…」
「……。」
「諸刃…？」
返って来ぬ返事に、シルクが少し不思議そうに振り向く。

「……。」
諸刃は、次狼の赤い血の滴り落ちる草薙の剣を見つめながら、ただ無表情のまま立ち尽くしていた。

「諸刃」
「……っ」
もう一度強めに名を呼ぶシルクに、諸刃がやっと気付いたように顔を上げる。

「帰るわよ…」
「はい…シルク様…」

シルクの言葉に頷くと、諸刃は草薙の剣についた次狼の血を、無造作に振り払い、鞘へと収めた。

「……っ」

少しだけ次狼とゴンの方を振り返った諸刃は、どこか諦めたように目を伏せると、すぐにまた前を向き直し、シルクとともに広間から姿を消した。

「次狼っ！次狼ぉぉぉぉっっ！！」

シルクと諸刃の去った広間に、ゴンの悲痛な声のみが響き渡る。

「次狼っ…！！」

悔しげに俯いたゴンの瞳から、雫が溢れ落ちる。その雫が、血のついた次狼の頬へと落ちた。

「……ゴ…ン…」

「……っ！次狼っ…！？」

弱々しく聞こえてくる声に、ゴンがハッとした表情で顔を上げる。

「次狼っ…！！」

「ゴン…」

大きく名前を呼ぶゴンに、次狼が青白くなった表情で、あまり力のない笑みを作る。

「大丈夫…ですか…？」

「何をっ…！」

まるでゴンの身を案じるような声をかける次狼に、ゴンが少し声を荒げる。この状況では、どう見ても次狼の方が大丈夫ではない。

「ゴン…どうか…」

次狼が血に染まった右手を、少し震わせながら、ゆっくりとゴンの方へと伸ばす。

「どうかっ…生きることを…やめないで下さい…」
「……っ」

ゴンの方に手を伸ばし、そっと願うように呟く次狼に、ゴンが険しい表情を見せる。

「君は…一人じゃありません…」

穏やかに、優しく微笑む次狼。

「だから…きっと…生きていける…」
「次狼っ…！」

ゆっくりと伸びてきた次狼の手を、ゴンがしっかりと掴む。

「俺がいなくても…」
「……っ！」

次狼の言葉に、衝撃を受けるように大きく目を見開くゴン。

「今っ…！ミイラ男さんをっ…！」
「リンゴっ」
「……っ」

広間を出て、怪我の手当ての出来るトマトの旦那の一人、ミイラ男を呼びに行こうとしたリンゴが、トマトの声に呼び止められ、振り返る。

「無駄だ…」
「……っ」

厳しい表情で呟くトマトに、リンゴは驚いたような表情を見せ、

そして、どこか遣り切れない表情で俯いた。

「んなことっ…言うなよ…」

次狼の手を握り締める、ゴンの手が震える。

「んなこと言うんじゃっ…！」

「ゴンっ…」

「……っ」

ゴンの言葉を遮るように、次狼がゴンの名前を呼ぶ。

「ゴン…」

もう一度、ゴンの名を呼ぶ次狼。次狼のまっすぐで曇りのない瞳が、ゴンの瞳を捉える。

「諸刃を…諸刃を頼みますっ…」

「えっ…？」

自分を剣で貫いた男のことを、ゴンへと頼む次狼。

「次狼っ…」

「……っ」

戸惑うように見つめるゴンに、次狼がさらに一層の笑顔を向ける。

「どうか…みんなで…もう誰も戦わなくていい…世界を…」

トマトを、リンゴを見つめ、次狼が願う。

「優しい世界を…」

そしてゴンを見つめ、次狼が願う。

「ゴンっ…」

もう一度優しく、呼びかける次狼。

「……ありがとう…」

「次っ…」

「……っ」

「……っ！！」

ゴンの手の中から、力なくこぼれ落ちていく次狼の手。ゆっくりと閉じていく、穏やかな緑色の瞳。ゴンが大きく目を見開く。

「次狼っ…？」

そっと名を呼んだゴンに、次狼が答えることはなかった。

「……っ」

ゴンの瞳から、涙が溢れ落ちる。

「うあああああああああっ！！」

動かなくなった次狼を抱え、遠く天井へと、突き上げるように叫ぶゴン。

「ううっ…！」

その場に泣き崩れる、リンゴ。

「クっ…！」

悔しげに床に拳を打ちつける、トマト。

「あああああああああああっっ！！」

その日、すべてが終わり、そして、すべてが始まった。

いっそ出会わなければ良かったとさえ、思えるほどの別れ。

次狼に出会わなければ、裏切りの一族である俺が、信じてもらえることは、救われることはなかった。

それでも、俺と出会わなければ、次狼が死ななかったというのなら、俺は、次狼と出会いたくはなかった。

第５６章　絶望の果て　★４

龍国・見届けの苑。

「……。」

次狼の死から六年。どんなに時が流れても、消えない思いを抱えながら、ゴンはこの墓の前に立ち続けている。

――――どうか…生きることを…やめないで下さい…――――

あの次狼の言葉に、生かされているかのように。

「次狼っ…」
「ここにいたのですか」
「……っ」

後方から聞こえてくる声に、振り返るゴン。

「探しましたよ」

――――良かったぁ～っ！探しましたよっ！――――

見える、穏やかな笑顔の次狼。

「次っ…！」
「ゴン」

「あっ…」

笑顔の次狼が、霞のように消えていくと、そこには幻の次狼と同じような、穏やかな笑みを浮かべた輝矢が立っていた。

「竹取っ…」

ゴンが少し力の抜けたように、輝矢の名を呼ぶ。

「ジローの墓参りは…久々ですね…」

そう言って少し微笑みながら、輝矢がゴンの横へと並ぶ。そしてその場にゆっくりとしゃがみ込むと、両手を合わせ、目を閉じて、次狼へと祈りを送った。

「ハチに花でももらってこれば良かったですね…」

輝矢がゆっくりと目を開く。

「すみません、ジロー…」

「……。」

親しい者に言うように、そっと謝る輝矢に、ゴンが少し目を細めた。

「そうか…」

「……っ？」

零れ落ちるゴンの声に、輝矢が振り向き、顔を上へ向ける。

「お前は…全部知ってんだなっ…」

どこか悲しげに微笑むゴン。

「俺たちのことっ…」

「……っ」

それが何のことを意味しているのかを知るからこそ、輝矢はその表情を曇らせた。

「……ええっ…」
少し間を置いて、輝矢が小さく頷く。
「ハチ公には、さっき俺から話した…ダメだったか？」
「いえっ…アナタが話そうと、思ったのなら…」
ゴンの問いかけに答えながら、輝矢がゆっくりと立ち上がる。次狼の墓の前で、並ぶ輝矢とゴン。
「まさかっ…あの愛想の悪りぃガキがお前だったとはなっ…」
――――悪人面っ――――
――――ああぁぁぁんっっ！！？――――
「てっきり男だと思ってたぜっ」
桃原家での輝矢との初めての出会いを思い出し、ゴンが懐かしむように笑みを浮かべる。輝矢と再会した時は、あの時の子供と同一人物などと、思ってもみなかった。
「私はすぐにわかりましたよ？まったく変わってませんでしたからね、その悪人面っ」
「ああんっ！！？」
「ほらっ、変わりない」
あの頃と同じように、輝矢の言葉にすぐに怒りだすゴンに、輝矢が少し呆れたように肩を落とす。
「お前だって性格直ってねぇーじゃねぇーかっ、しゃべり方ばっか丁寧になっただけでっ」
「敬語はジローに教えてもらいましたから…」
「……っ」
輝矢のその言葉に、ゴンの眉がひそむ。

――――今、頑張って、敬語を教えてるんですけど……――――

次狼がそう言っていたことを思い出す。

「そうかっ…そのしゃべり方は次狼仕込みかっ…」

少し力の抜けた表情で、微笑むゴン。

「どうりでっ…」

――――俺は君を信じますよ…？――――

――――私はゴンを…信じていますからっ……――――

その笑顔に、その言葉に、重なった場面。

「どうりでっ…お前としゃべってると…アイツのことばっかり思い出すはずだっ…」

「ゴンっ…」

壊れてしまうそうなほどに悲しげな笑みを浮かべるゴンを横から見つめ、輝矢がそっと目を細める。

――――竹取輝矢っ、鬼退治いたしますっ…！――――

初めて見た時から、似ていると思った。穏やかな笑みを浮かべながらも、遥か先をまっすぐに見据えた強い瞳。自分の信じる強い思いのもと、戦うそのひたむきな姿。ゴンにとっては、何よりも眩しかった、その姿。

――――アイツらをっ…守ってやれなったじゃないですかっ……――

――

だからこそ、守りたかったのかも知れない。輝矢を、そして輝矢が守ろうとしている桜時を。

――――ゴンっ……――――

守れずに零れ落とした、次狼の分も。

「大丈夫だっ…」
「えっ…？」
「大丈夫っ…」
「……っ」

まるで自分に言い聞かせるかのように、その言葉を繰り返すゴンに、輝矢が少し眉をひそめる。

「この戦いは…俺の手で終わらせるっ…」

――――次狼ぉぉぉぉっっっ！！！――――

すべてが終わり、そしてすべてが始まったあの日。あの日はまだ、ゴンの中で今も、続いている。

「牢戸知玖はっ…御剣諸刃はっ…俺が殺す…」

強く握り締められる、ゴンの拳は、少しだけ震えていた。

「お前らのことはっ…俺が必ず守っ…！」

「結構です」
「だぎゃあああああああああああっ！！」

ゴンが誓いのように強く言い放とうとしたまさにその時、輝矢の鋭い肘打ちが、ゴンの脇腹へと直撃した。ゴンが押し潰されたような、苦しげな叫び声をあげる。

「なっ何すんだよっ！！てめぇーはっ！！」
「自惚れないで下さい」
「ああぁぁんっ！！？」
冷たく言い放つ輝矢に、さらに歪むゴンの表情。

「別にアナタになど、守ってもらわなくても、自分の身くらい自分で守ります」
がっしりと腕組みをして、呆れたような表情を、ゴンへと向ける輝矢。
「勿論、ハチの身もっ」
「……っ」
自信満々の笑みを浮かべる輝矢に、何も言い返すことが出来ず、ゴンが少し困ったように頭を掻く。

「それにっ…」
「……っ？」
さらに言葉を付け加える輝矢に、ゴンが少し不思議そうな表情を見せる。

「これは…“私たちの”戦いです…」

浮かべた穏やかな笑みを、ゴンへと向ける輝矢。

「アナタ一人の…戦いではありませんっ…」
「……っ」
向けられる優しい瞳に、大きく開かれるゴンの両目。
――――君は…一人じゃありません…――――
「……っ」
再び重なるその笑顔に、ゴンは噛み締めるように瞳を閉じ、深々と俯いた。
「ったくっ…」
ゴンが、そっと目を開き、次狼の墓を見る。
「生意気なクソガキを育てたもんだぜっ…」
少し緩む、その口元。
「なぁっ…？次狼っ…」
「……っ」
次狼へと語りかけるゴンを見ながら、輝矢もそっと微笑んだ。

その頃、桃原家・リビング。
「んん～っ…甘っ」
桃原家のリビングでは、いつものように太狼が、甘さダルダルココアを飲みながら一人、ソファーに腰かけていた。リビングに輝矢や、朱実3兄弟の姿はない。どうやら出掛けたようである。

「……。」
太狼がコップを持つ手とは逆の手に持っている、写真立て。そこにはまだ幼い太狼と次狼が、笑顔で写し出されていた。

「……っ」
次狼の笑顔に目を落とし、太狼が少し目を細める。

「んっ…？」
太狼がコップを持つ手を止め、少し眉をひそめる。

「これはっ…珍しいお客だっ…」
そっと口元を緩める太狼。

「お久し振りです、トマトさんっ」
「ああっ…」
どこからともなく、太狼の向かいのソファーへと現れたのは、トマトであった。名を呼ぶ太狼に、トマトが軽く頷いて答える。

「次狼の葬式以来…ですかねぇ。貴女がこの家に来るのはぁ」
「ああっ…そうだねぇ…」
太狼の言葉に、真剣な表情を見せながら答えるトマト。

「太狼っ…」
「はいっ？」
改まった様子で太狼の名を呼ぶトマトに、太狼が少し顔を上げる。
「私の二五八番目の旦那になっ…！」
「お断りしますっ」
「……。」
トマトがいつもの台詞を言い終わらないうちに、太狼は爽やかな笑顔で、すぐさま断りを入れた。
「相変わらず釣れない男だねぇっ」
「ありがとうございます」
トマトが面白くなさそうに肩を落とし、ソファーへともたれかかる。そんなトマトに、嬉しそうに礼を言う太狼。
「その断り方っ…兄弟揃って、同じだっ」
「……っ」
トマトの口から“兄弟”という単語が出ると、太狼の笑みが少しだけ曇ったように見えた。
「……。」
そんな太狼の変化に気づき、トマトがそっと目を細める。
「お前には…本当に済まなかったと思っている…」
急に深刻そうな表情を見せ、視線を落とすトマト。
「私の戦いに巻き込んでっ…次狼を死なせてしまったんだからなっ…」
トマトの表情に映る、後悔の念。

「私があの時…諸刃さえ殺せていれば…」

――――うっ…！――――

シルクの手に落ちた諸刃を前に、どうしても動かなかった右手。
諸刃を討つことの出来なかったトマトの弱さが、結果、次狼を死なせてしまった。

「あんな…ことにはっ…」

――――次狼ぉぉぉぉぉっっっ！！！――――

今も耳に残るゴンの叫び声に、トマトが強く拳を握り締める。

「僕に謝る必要なんて、ありませんよっ…」
「何っ…？」
太狼の言葉に、トマトが眉をひそめて、顔を上げる。

「僕はあの子に…“お兄さん”らしいことなんてっ…何一つしてあげませんでした…」
「太狼っ…」
笑いながらも、どこか悲しげに見える太狼を、トマトがまっすぐに見つめる。

「好き勝手やって、家も空けてばかりでっ…一緒にいてあげた記憶なんて、ロクにありませんっ…」

――――お兄ちゃんっ…どこ行くのっ…？――――
――――兄貴っ…出掛けるんですかっ…？――――

「小さい頃から放ったらかしてばかりでしたからっ…」

――――いってらっしゃいっ…――――

寂しさを押し殺して、笑う。太狼を笑顔で見送ろうと、いつも次狼は、無理に笑っていた。太狼に心配をかけまいと、必死に笑顔を作っていた。いつだって手を振って、送りだしてくれた。

「そんな兄とも呼べないような兄だったのに、いつ帰ってきても…あの子は笑ってくれたんです…」

太狼が、遠い目で、天井を見上げる。

「“おかえり”って…笑ってくれたんですよっ…」

「……。」

そう言って微笑む太狼を、トマトは真剣な表情でまっすぐに見つめた。

「もっと…構ってあげれば…愛してあげればっ…」

少し低くなる太狼の声。

「ちゃんと…あの子に向き合ってあげればっ…」

「……っ」

太狼の言葉に、トマトが目を細める。

「なぁ～んてねっ…」

「太狼っ…」

いつものように軽く、爽やかな笑みを浮かべながらも、完全には消せない悲しみを覗かせる太狼に、トマトが少し眉をひそめる。

「だから、僕に謝ったりなんてする必要はっ…」

「太狼っ…」

「……っ？」

太狼の言葉を遮り、トマトが太狼の名を呼ぶ。

「あの子は、世界の英雄である兄を、何よりも誇りに思っていた…」

――――でも、兄貴の狼刃に比べるとっ…――――

――――兄貴は雲の上の人ですからっ…――――

兄の後を追うように、必死に強くなろうとしていた次狼。

「お前が兄であることを、何よりも誇りにしていたっ…」

トマトがまっすぐな瞳を、太狼へと向ける。

「そのことだけは、忘れないでいてやってくれっ…」

「……っ」

次狼の代わりに願うように言うトマトに、太狼はそっと目を伏せる。

「はいっ…」

そして、胸に刻みつけるように、頷いた。

一方その頃、オトポリ本部・救護塔三階。

「……。」

ゴンからすべての話を聞いた桜時は、今も、ベンチの上から一歩も動けずにいた。去っていくゴンにかける言葉も見つけられず、何も言えないまま見送ってしまった。

――――次狼ぉぉぉぉっっっ！！！――――――

どんな思いで、生きる道を選んだのだろう。

――――諸刃っ……――――――

どんな思いで、あの時、諸刃とシルクの前に立ち塞がったのだろう。

「……っ」

どうすることも出来ないもどかしさを抱えながら、桜時はそっと天を仰いだ。

「あっれぇ～っ？」

「……っ？」

入ってくる声に、桜時が少しドキリとした表情で振り向く。

「桜時だけっ？」
「リンゴっ…」
そこに現れたのは、いつものオトポリ制服姿のリンゴであった。
「ゴンいないっ？羊スケと一緒じゃなかったから、ここだと思ったんだけどっ」
「あっ、いやっ…」
ゴンの過去の中にリンゴが出てきていたこともあり、桜時は少し気まずそうな顔を見せながら、少し不自然に言葉を繋ぐ。
「さっきまでいたけどっ…どっか行っちゃってっ…」
「どっかってどこにっ？」
「さぁっ…」
「そうっ」
首を傾けた桜時を見て、リンゴが少し疲れたように肩を落とす。
「ったく、アイツっ！この忙しい時にサボりばっかしてっ！」
「……。」
「んっ？」
顔をしかめてゴンの文句を言っていたリンゴが、浮かない表情で俯く桜時に、少し首を傾げる。
「何っ？随分、シケた顔してるけどっ」
「えっ？」
リンゴの言葉に、桜時が驚いたように顔を上げる。
「輝矢と何かあった？」
「いや別にっ…いやっ、何もなかったわけでもねぇけどっ…今はそれじゃなくてっ…」

「はぁっ？何、ゴチャゴチャ言ってんのよっ！パッとしない男ねぇっ」
「……。」
もどかしい思いを抱えている桜時に、何の遠慮もなく強く言い放つリンゴ。その言い方のあまりの厳しさに、もう傷つくことも出来ずに、桜時が少し呆れたような表情をリンゴへと向ける。
「まぁいいわっ」
「いいのかよっ！」
あっさりと自己解決するリンゴに、思わず怒鳴りあげる桜時。
「私忙しいから、もう行くわねっ」
「あっ」
桜時に背を向けるリンゴに、桜時が思わず身を乗り出す。
「ゴンからっ…！」
「んっ？」
立ち上がり叫ぶ桜時の声に、リンゴが足を止めて、振り返る。
「ゴンからっ…聞いた…」
「えっ…？」
「そのっ…“次狼”のことっ…」
「……っ」
桜時の口から次狼の名が出ると、リンゴの表情が一気に曇った。
「……そうっ…」
少し俯いたリンゴが、短く頷く。

「それでっ…そのっ…」

――――俺と諸刃…そして次狼のことを…――――

思い出されるゴンの悲しい顔。あのぶっきらぼうでガラの悪いゴンが、壊れてしまいそうとさえ思えるほどに、弱く、そして脆く見えた。復讐という言葉に囚われ、自分自身を押し潰してしまうのではないかと、そう不安になった。

「ゴンの…ことなんだけどっ…」
「大丈夫っ…」
「えっ…？」

まだ何も言っていない桜時に、まるで安心させるかのように、その言葉を放つリンゴ。

「ゴンは…私が守るからっ…」
「……っ」

曇りのないそのまっすぐな笑顔に、桜時が大きく目を見開く。

「じゃあねっ」
その笑顔だけを残して、リンゴは足早に、桜時の前から去っていった。

「……。」
ベンチの前に立ち尽くし、桜時がそっと視線を落とす。

――――ゴンは…私が守るからっ…――――

曇りのない、笑顔。曇りのない、想い。

「……っ」

桜時がふと顔を上げ、まだ眠ったままの門貴と由雉の方を見つめる。

――――この誇りっ…そう簡単には折らせへんっ！！――――

――――ミチルさんの幸せはっ…ボクが守るよっ…――――

門貴にも、由雉にも、強い想いがあって、強い想いがあるからこそ強くなれて、何者を相手にも戦ってこられた。

――――私にはっ…守れないものが多すぎるっ…！――――

強い想いがあるからこそ、流す涙もあった。

「俺はっ…俺にはっ…」

強い想いを目の前で見てきたからこそわかる。桜時には、まだその強い想いがない。輝矢や門貴や由雉が持っているほどの、強い想いがない。ただ戦ってきただけ。皆に引っ張られるようにして、何の目的もなく、ただ刀を振るっていただけ。

――――ゴンは…私が守るからっ…――――

強い想いで、守りたいもの。

――――俺…お前のことが…好きだ…――――

「……っ」

桜時は、どこか決意したように、その表情を鋭くした。

「諸刃…諸刃っ…」

真っ暗な闇の中で、名前を呼ぶあの女の声が聞こえる。

「はい…シルク様…」

「諸刃…」

すぐに傍に駆けつけると、あの女の白く冷たい手が、首に回った。

「愛してるわ…諸刃…」

耳元で囁かれる、冷たい声。

「貴方は…私だけのものっ…」

「……はい…」

その言葉に、ゆっくりと頷く。

「シルク様…」

闇は続く。

いつか、かつての友に、胸を貫かれ、命絶える、その日まで。

第５７章　新たなる旅立ち　☆１

輝矢たちが牢戸知玖に敗れてから、十三日。

オトポリ本部・救護塔三階。

「いっやぁぁぁ～っ！よぉ寝たわぁ～っ！」

集中治療室の寝台の上で、勢いのいい大声を出しながら、大きく伸びをするのは、陽気な笑顔を見せた門貴であった。まだ体の所々に包帯を巻いているが、顔色も良くなり、すっかり元気そうである。

「寝過ぎだってのっ…」

そんな門貴に小さく突っ込みを入れるのは、門貴のいる寝台の横に腰掛けている桜時。門貴が目覚め、治療室に入ることが出来るようになったのである。

「もう一生、眠ってくれてた方が、世界からバカが一人減ったのにぃ」

「がびぃぃぃーーんっ！！」

横から聞こえてくる人情の欠片もない言葉に、門貴が激しくショックを受ける。

「ヒドいわぁ～っ！ユッキーっ！」

「ボク、カワイイから許してぇっ」

門貴のいる寝台の、横の寝台では、起き上がった由雉が、傷ついている門貴に適当な答えを返していた。こちらも顔色は良く、もうすっかり体調も回復したようである。

「ったく、人に散々心配かけといて、コレかよっ…」

起きた途端にいつもの調子の門貴と由雉に、桜時が少し呆れたように肩を落とす。

「あっ、そういやぁっ」
「あっ？」
何かを思い出したような表情を見せる門貴に、少し首を傾げる桜時。
「剛也はっ？」
「ゴーヤっ？」
門貴が、どこか不安げな表情で問いかける。
「ああ、お前と戦ってた奴なっ」
桜時が思い出したように頷く。
「大丈夫っ、無事だよ。鬼人化もしたなかったみてぇーで、今はオトポリで保護されてるっ」
桜時が穏やかな笑顔を、門貴へと向ける。
「後で会ってやればいいっ」
「そっそうかっ…」
桜時の言葉に、安心したように笑みをこぼし、そっと肩を落とす門貴。
「死にかけて、やっと起きて、それで敵の心配ぃ～っ？」
横の寝台の由雉が、どこか呆れたような声を発する。
「相変わらず能天気なおサルさんだねぇ～っ」
「わかってないなぁ～っ！ユッキーっ！それが俺のイイとこっ…！」
――――バァアアアアーーンっっ！！――――
『……っ？』
その時、治療室の扉が勢いよく開き、桜時たちが一斉に振り向いた。
『あっ…』
「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」

治療室へ駆けこむようにして入って来たのは、輝矢であった。必死に走ってでも来たのか、その額には汗が浮かんでおり、少し苦しげに肩で息をしている。

「輝っ…」

「輝矢ぁぁぁ〜〜んっ！」

輝矢の名を呼ぼうとした桜時の声を遮り、門貴が勢いよく輝矢に手を振る。

「やっとこさ目覚めた俺に会うために、必死に走ってやってきてくれっ…！！」

「ハチぃぃぃ〜〜っ！」

「ぎゃあああああああっ！！」

目を輝かせた門貴をあっさりと無視して、笑顔の輝矢が勢いよく桜時へと抱きつく。桜時が、治療室に場違いな悲鳴をあげた。

「ずぅっと会ってなかったんで、会いたくて仕方なかったですよぉ〜っ！」

「ウソつけぇぇっっ！！朝会ったとこじゃねぇーかぁっ！！」

輝矢に抱きつかれ、顔を真っ赤にしながら、必死に抵抗を見せる桜時。

「やっぱりねぇ〜っ」

「かっ輝矢ぁぁぁぁ〜んっ」

呆れたように肩を落とす由雉の横から、門貴が頑張って輝矢を呼ぶ。

「輝矢ぁぁぁ〜〜んっ！」

「んっ？」

「ぐっぐふっ…」

一生懸命に呼ぶ門貴の声に、やっとこさ桜時を離し、振り返る輝矢。輝矢から解放された桜時が、その場に力なく倒れ込む。

「輝矢んっ！！十三日振りの奇跡的生還をした俺に愛のメッセージをっ…！！」
「どちら様でしたっけ？」
「ぎゃびぃぃぃーーんっ！」
冷たく言い放つ輝矢に、激しくショックを受ける門貴。

「十三日という期間がっ…輝矢んから俺の記憶をっ…」
「一度、死にかけても変わらないね、そのバカぶりっ」
寝台に両手を突き、悩み込むように呟いている門貴を横目に、由雉がある意味感心しているように言う。

「まっ、ボクの可愛さは変わらないけどねぇ～っ」
「ホント相変わらずですね、キジ」
「……っ」
輝矢がいつもの調子の由雉の方を見て、どこか安心したように微笑む。その笑みを目が合うと、由雉はそっと表情を曇らせた。

「輝矢っ…」
「はいっ？」
小声で名を呼ぶ由雉に、輝矢が少し戸惑うように返事をする。

「そのっ…ごめんっ…」
「えっ…？」
「由雉が謝ったぁぁっっ！？」

由雉の落したその言葉に、輝矢が目を丸くし、倒れ込んでいた桜

時が、勢いよく起き上がって驚く。

「おっお前っ！まだやっぱ体の調子、おかしいんじゃっ…！」

「俺らっ…負けてもうた…」

「……っ」

どこか心配するように由雉に駆け寄ろうとした桜時が、横から呟く門貴の言葉に、声と動きを止める。桜時が目を向けると、そこには、いつになく深刻そうな表情を見せた門貴。

「一回、犬義に負けた時、もう絶対負けへんて決めとったのにっ…」

「門貴っ…」

落ち込むような、思い詰めているような、門貴の表情。そんな門貴の様子を見て、桜時が少し目を細める。

――――戦いの時に…折れてしまったみたいでっ…――――

思い出される、砕かれた如意棒。

「……。」

門貴にどういう言葉を掛けてあげればいいのかがわからず、桜時はそっと俯いた。

「俺もごめんっ…輝矢んっ…」

「……っ」

輝矢へと頭を下げる門貴に、輝矢もそっと目を細め、真剣な表情を見せた。

「私は…牢戸知玖に負けました…」

『えっ…？』

深く俯いていた門貴と由雉が、その輝矢の言葉に、驚いたように顔を上げる。

「輝矢っ」

桜時も驚いた様子で、輝矢の方を振り向く。プライドの高い輝矢が、自分が敗北したことを口にするなど、思ってもみなかったからだ。

「私は…牢戸知玖に勝つその日まで、もう二度と負けません」

輝矢が迷いのない、強い意志を秘めた表情を見せる。

「ですから…アナタたちも約束しなさいっ」

門貴と由雉に、まっすぐな瞳を向け、輝矢が二人の前に右手を、甲の方を上にして差し出す。

「私と共にすべての戦いを終わらせる、その日までっ…もう決して負けはしないとっ」

『……っ』

輝矢の言葉に、大きく目を見開く門貴と由雉。二人は大きく見開いたその目を互いに合わせると、どこか噴き出すように笑みを零した。

「おっしゃあっ！！喜んでぇぇっ！！」

「仕方ないなぁ～っ、約束してあげるよっ」

輝矢の手の上に重なる、門貴と由雉の手。

「よろしいっ」

重なった手と、笑顔を見せる二人を見て、輝矢もどこか満足そう

に笑った。

「輝矢ぁぁ～んっ！やっぱり俺は一生、輝矢んについてっ…！」
「あれっ？どちら様でしたっけ？」
「ええぇっ！？今の会話っ、他人の会話ぁぁっ！？」
不思議そうに首を傾げる輝矢に、再びショックを受けて叫ぶ門貴。
「なぁ～っ！輝矢ぁぁ～～んっ！」
「どちら様でしたっけ？」

「……っ」
繰り返される輝矢と門貴の会話を聞きながら、手を重ね合わせた三人を見守った桜時は、どこかホッとしたように穏やかな笑みを浮かべた。

「笑顔もイィ～イ男だねぇっ」
「うぇっ？」
妙に耳元から聞こえてくる声に、桜時の表情が一気に引きつる。

「こっこの声はっ…」
聞き覚えのあるその声に少し肩を震わせながら、桜時がゆっくりと振り向く。

「会いたかったよぉ～っ？桜時っ」
「……っ！！」

桜時のすぐ横に立ち、桜時の肩に手を乗せて、そっと魅惑の笑みを浮かべるのはトマト。トマトを見た桜時が、勢いよく目を見開く。

「クソババっ…！！」

「私の二五八番目の旦那にならないかぁ～いっ？」
「ぎゃあああああああああああっ！！」

お馴染みのプロポーズとともに接近してくるトマトの顔に、桜時が激しく悲鳴をあげる。

「“水月”」

――――バァァァァァァーーーンっ！――――

「クっ…！」
「のわあああああああああああっ！！」

どこからともなく飛んで来る無数の水の刃。トマトが少し顔を引きつり、それを避けるため、桜時から離れて後方へと飛ぶ。解放された桜時も必死にその場にしゃがみ込み、何とか水の刃を避けた。二人の避けた水の刃たちが、治療室の壁に激突し、外へと続く大胆な大穴をあける。

「お前は治療室で何をやっとんじゃあああっ！！」

起き上がった桜時が、水を放った張本人であろう輝矢に、勢いよく怒鳴りつける。

「ああ、体が勝手に」
「ウソをつけぇぇぇっっ！！」
無理やり誤魔化そうとする輝矢に、さらに怒鳴りあげる桜時。

「危ないねぇ～っ」
「……っ」

後方へと避けたトマトが、再び輝矢や桜時の方へと歩み寄ってくる。

「私の桜時が怪我でもしたら、どうしてくれるんだぁ～いっ？小娘っ」

「前にも言いましたが、私のハチに馴れ馴れしく触らないでいただけますっ？クソババアっ」

挑発するような笑みを浮かべるトマトと、刺し殺しそうなほどに強く睨みつける輝矢。

「火花が見えるっ…」

「女って怖いねぇ～っ」

少し怯えたように呟く桜時の横で、興味なさそうに言い放つ由雉。

「輝矢んっ！やめてっ！俺の為に争うのはっ…！！」

「どちら様でしたっけ？」

「うぅぅ～っ…」

「バカっ？」

ドラマチックに叫んだ門貴に、突き返される輝矢の冷たい言葉。がっくりと落ち込む門貴に、由雉がさらに追い打ちをかける。

「だいたい、なんでこんなところにクソババアがいるんですっ？」

「そうだよ、何か用でもあんのか？クソババア」

かなりの不機嫌面で問いかける輝矢と、目を丸くして不思議そうに問いかける桜時。

「ああっ、そうだったっ」

トマトが思い出したように、軽く手を叩く。

「お前っ」
「……っ？」
顔をしかめたままの輝矢を、強く指差すトマト。
「お前っ、これから一ヶ月、私と二人で修行の旅に出るよっ」
「はっ…？」
誘いではなく、決定事項といった口振りで話すトマトに、思わず固まる輝矢の表情。
「はあああああぁぁぁぁぁぁっっ！！？」
『修行っ？』
大きく驚く輝矢の後ろで、お供の三人は、揃って首を傾げた。

第57章　新たなる旅立ち　☆2

数十分後。桃原家・リビング。

「冗っ談じゃありませんっ！！」

珍しく声を荒げた輝矢が、リビングでも不機嫌な表情を見せている。

「なんでっ！なぁんでっ！私がこんな女と修行になどっ…！！」

「まぁまぁ、輝矢ちゃ～んっ」

怒りを爆発させている輝矢を、宥めるように声をかけるのは、いつものようにソファーに座り、まったりとココアを飲んでいる、笑顔の太狼。

「折角のいい機会だしぃ～、ここは頑張って我慢してぇっ…」

「無理ですっ」

「うわぁ～っ、スッパリっ」

すぐさま断言する輝矢に、太狼がどこか楽しそうに笑う。

「それに修行ならっ…タローがつけてくれればっ…」

「輝矢ちゃんっ」

「……っ？」

ポツリと呟いた輝矢を、まるで諭すように聞こえてくる声。

「僕が君に教えられることは、もう全部、教えたよっ」

顔を上げた輝矢に、太狼が穏やかな笑みを向ける。

「さらに上に行きたいなら、新しい人の下で教えを乞わなきゃっ」

「……っ」
太狼の言葉に、輝矢がハッとした表情を見せる。
――――私にはっ…守れないものが多すぎるっ…！――――
今のままでは、いけない。もっと強くなって、守らなければならない。
――――本当に助けてよっ！！――――
もう二度と、零れ落とす命のないように。
「……。」
厳しい表情を見せ、輝矢が口元に手を当てる。
「心配すんなっ」
「……っ？」
聞こえてくるもう一つの声に、輝矢が戸惑うように顔を上げる。
「トマト先生は御伽界最古の獣人っ、強さは弟子の俺が保証してやるっ」
「ゴンっ」
リビングの壁際に立ち、いつものように悪い目つきで輝矢の方を見ているのは、ゴンであった。
「ゴン～っ、私の二五八番目の旦那にならないかぁ～いっ？」
「まぁ節度に問題はあるけどな」
「……。」
どこからともなく現れ、ゴンに抱きついてプロポーズをしている

トマトに、ゴンの眉が引きつり、輝矢がしかめっ面のまま固まる。

「そんなっ、人間としてどうかと思うような人の下で修行するなんてっ…」

「竹取っ」

「何です？」

言葉を遮ったゴンに、少し眉間に皺を寄せて聞き返す輝矢。

「心配すんな」

輝矢にまっすぐな瞳を向けるゴン。

「んん～っ！グレーテルぅ～っ！甘さダルダルココア、おかわりぃ～っ！」

「お前の師匠は、結構前から人間としてどうかしてる」

「……。」

自信を持って言い放つゴンに、輝矢は何も言い返せずに、再び固まる。

「でっですがっ」

腕組みをして、さらに言葉を繋げる輝矢。

「牢戸知玖が狙っているのはハチですっ」

『……っ』

輝矢の言葉に、太狼とゴンが同時に眉をひそめる。

「狙われているハチを残して、一ヶ月もだなんてっ…」

「オトポリの連中を百人なり、千人なり、つければいいさぁ」

どこか不安げに呟いた輝矢に答えたのは、やっとゴンから離れた

トマトであった。トマトがゆっくりと輝矢の方へと歩み寄ってくる。
「それに太狼もいるっ。お前がついてるよりは、よっぽど安心だっ」
「……っ」
またしても挑発めいた発言をするトマトに、顔をしかめる輝矢。
「今のお前が傍にくっついてたところでっ、すぐに殺されて、桜時をさらわれんのがオチさっ」
「何をっ…！」
バカにしたように笑うトマトに、輝矢の顔がさらに引きつられる。

「タローっ！やっぱり私はっ、こんな女とはっ…！」
「違うかいっ？」
「……っ」

勢いよく太狼の方を振り向いた輝矢が、聞き返したトマトの声に、言葉を止める。

「違うかいっ…？竹取輝矢っ…」
「……。」

もう一度問いかけるトマトの声に、ゆっくりと俯いていく輝矢。

――――さようなら…月の少女…――――

水力を暴走させて挑んでも、まったく歯が立たなかった。今の輝矢とシルクでは、強さの次元が違う。トマトの言うように、今の輝矢が桜時の傍にいたところで、桜時をシルクから守ることは出来ないだろう。

「朱実桜時を守りたいなら、牢戸知玖を倒したいなら、私と一緒に来なっ」

「……。」

トマトの言葉を聞きながら、輝矢が強く唇を噛み締める。

「けぇどトマトさぁ～んっ」

「あっ？」

そこに、場違いなほどに間の抜けた声を挟む太狼。

「何だいっ？太狼。やっと私の旦那になる気になっ…」

「違います」

「……。」

笑顔であっさりと否定する太狼に、トマトが思わずあからさまに表情を引きつる。

「月器はどうするんですぅ～？粉粒なら残ってますけどぉ～」

太狼がリビングの端のテーブルの積まれている、金色の金属のような粉粒の山を見て言う。それは、輝矢がシルクに砕かれた月器の残骸であった。

「そうだな。修行ったって、武器がないんじゃっ…」

「大丈夫。再生方法なら、私が知ってる」

「へっ？再生方法とかあるんですか？」

「……っ」

表情を曇らせたゴンに、冷静に答えるトマト。トマトの答えに、ゴンは驚いた表情を見せたが、太狼はそっと眉をひそめた。

「トマトさん、その方法って…」

太狼が浮かない表情で、トマトの方を見る。

「心配するな。お前が知ってるのとは、別の方法だ」

太狼が何を言わんとしているのかをわかっているような口振りで、トマトが答える。

「あの国との接触は、まだ早い…」
「あの国っ…？」
トマトの言葉に、首を傾げるゴン。

「とにかくだぁ、さぁどうするっ？小娘っ」
太狼との話を切り上げ、トマトが改めて輝矢の方を見る。

「まぁどうしても嫌ってんなら、別にっ…」
「私はっ…」
「……っ」
トマトの言葉を遮るようにして聞こえてくる輝矢の声。トマトが振り向くと、深く俯いていた輝矢が、ゆっくりと顔を上げた。

――――私は…牢戸知玖に勝つその日まで、もう二度と負けません……――――

仲間に誓った、言葉がある。

「私は、牢戸知玖を倒して、ハチを守ります」

顔を上げた輝矢は、迷いのない、まっすぐな表情を見せていた。

「その為の力が手に出来るのなら、腹立たしいクソババアの修行でも何でも、受けて立ちましょうっ」
「フンっ…」

まっすぐな瞳のまま、どこか挑戦的な笑みを浮かべる輝矢を見て、トマトもそっと口元を緩める。

「上等だっ」
『……っ』
笑い合う輝矢とトマトを見て、太狼とゴンは少し安心したような笑みを浮かべた。

その頃、輝矢の水力により軽く破壊された、救護塔・集中治療室。
「修行かぁ～っ」
輝矢とトマトが去り、その場に残った三人は、トマトの残した“修行”という言葉に、それぞれ考え込んでいた。寝台の上の門貴が、ポツリとその言葉を口にする。
「行くんかなぁ～？輝矢んっ」
「行くんじゃなぁ～い？あの千年竜に挑発されて、パァ～っと乗ってさぁっ」
「せやなぁ～っ」
由雉の言葉に、門貴が納得したように頷く。ずっとお供をしてきただけあって、二人とも、輝矢の性格は熟知していた。
「一ヶ月…か…」
そっと真剣な眼差しを見せる、門貴。

「ねぇっ」
「んんっ？」
「もしも輝矢が修行に行くとしたら、その一ヶ月、門貴はどうする？」
「んん～っ」
由雉の問いかけに、門貴が大きく首を捻る。
「どないしょっかなぁ～、とりあえず如意棒、どうにかせんとっ」
少し横に目を移す門貴。門貴のいる寝台の横にあるテーブルの上に、醍也との戦いにより真っ二つに砕かれた如意棒が置かれていた。
「そっか」
「ユッキーはっ？何かしたいことでもあるんかぁ？」
「ボクはっ…」
問い返す門貴に、横の寝台に乗った由雉が、そっと目を落とした。

「ボクっ…一度、幸ノ街に戻ろうと思うっ…」
「えっ…？」
放たれた由雉の答えに、門貴が戸惑うように声を出す。
「何や、ユッキー、ホームシックか？」
「違うよっ！！」
門貴の言葉に、少し頬を赤く染めて、強く言い返す由雉。

「……っ」

――――十数年前、御伽界に、二人の色羽造りの天才がいた……――――

目を落とした由雉の脳裏を過ぎる、黒羽の言葉。黒羽の父・漆と、由雉の父・ハヤテとの関係。

「知りたいことあって…それにっ…」

由雉がその瞳を鋭くして、ゆっくりと顔を上げる。

「ボクっ…もっと強くなりたいんだよっ」

「……そうかぁっ」

強い意志を持って言う由雉に、門貴は最初、驚いたような表情を見せたが、やがて笑みを浮かべ、大きく頷いた。

「でぇ～っ？イヌコロはどないするんやぁ～っ？」

門貴が今度は、治療室の壁際に立ち、窓の外の景色を眺めている桜時へと、問いかける。

「俺っ…」

門貴と由雉に背を向けたまま、声を発する桜時。

「俺っ、決めたことがあるんだっ…」

『へっ…？』

二人が首を傾げる中、桜時は晴れやかな瞳で、青く光る空を見つめていた。

翌日。桃原家前。

「ホントに雀からの迎え、呼ばなくて大丈夫なのかぁ～っ？」
桃原家の玄関の前に立った桜時が、どこか不安げな瞳を前方へと向ける。
「大丈夫だって」
答えを返すのは、桜時の前に立った梅人。
「あの魔女の狙いって、僕じゃなくて桜時だったんだろ？」
「そりゃそうだけどっ…」
「僕よりも自分の心配しときなよっ、子イヌさんっ」
「うっ…」
梅人の身を案じる桜時であったが、梅人の口振りに、いつものように黙らされてしまう。長い間、龍国に滞在していた梅人たち三兄弟であったが、シルクの事件も一段落し、座黒から孔雀への報告を頼まれたこともあり、やっと雀国へ戻ることとなったのだ。
「それに梅人クンには、僕らがついてるしねぇぇ～～っ！」
「そうだよぉ～っ！桜ちゃんっ、安心してぇぇ～～っ！」
「それが余計に不安ですけどね…」
梅人の両脇から顔を出す、今日も何だか楽しそうな二人の兄・松人と竹人に、桜時の横に立つ輝矢が冷たい視線を向ける。
「それじゃあ桃タローさん」
梅人が、少し離れたところに立っている太狼の方を振り向く。
「長い間、お世話になりました」
「はいはぁ～いっ」
爽やかな笑顔を見せ、梅人たちに手を振る太狼。
「もう二度と、家出とかして、僕の家に立ち入らないでねぇ～っ」

「すっごい拒絶っ…」
笑顔のまま冷たく言い放つ太狼に、梅人が思わず呆れた表情を見せる。

「あっ、そっかぁ。そういや元は家出して来たんだったなぁっ」
太狼の言葉に、思い出したようにポンと手を叩く桜時。色々なことがありすぎて、どうしてこの三人が龍国へ来たのかということを、忘れてしまっていたようだ。
「って、そういえばっ…」
桜時が少し首を捻り、眉をひそめる。

「結局のところ、お前、なんで家出したんだぁ？」
「えっ…？」
改めて問いかける桜時に、少し目を丸くする梅人。

「確か松兄が迎えに来た時にっ…」

――――いくらお母様が梅人クンと桜時クンを比べるようなこと、言ったからってっ――――

「とか何とか言ってたけどっ…」
「そっそれはっ…」
松人の言葉を思い出す桜時に、梅人が急に表情を引きつっていく。

「ああぁ～っ！それはねぇ～っ！」
「んっ？」
「ちょっ…！松兄っ！待っ…！」
声を出した松人の方を振り向く桜時と、焦ったように手を伸ばす梅人。

「お母様が、晩御飯に出たニンジンを残した梅人クンにぃ、“桜時クンは好き嫌いしないで食べた”って言ったからだよぉ～っ！」

「……はっ？」

「あぁっ…」

笑顔で言い放った松人に、固まる桜時と、頭を抱える梅人。

「ニっ…ニンジンっ…」

桜時が呆然と呟く。

「おっ前っ！んなしょーもないことで家出してきたのかぁっ！？」

「しょーもないって言うなっ！ニンジンって美味しくないんだぞっ！？」

思わず声をあげた桜時に、梅人が負けじと怒鳴り返す。

「わかるわかるぅ～っ、ニンジンって砂糖入ってないもんねぇっ」

「あんたの基準は砂糖だけなわけっ…？」

端で大きく頷いている太狼に、由雉が呆れた視線を向ける。

「だいたい桜時がニンジン食べれたりするから、こういうことになったんだろうっ！？」

「ああっ！？何だぁっ！？その責任転嫁っ！！」

激しく怒鳴り合う桜時と梅人。

「ガキのケンカやなっ」

「やれやれっ…」

呆れたように言う門貴の横で、輝矢が深々と肩を落とす。

「とにかくっ！もうんなしょーもないことで家出してくんなよっ！？」
「わかってるよっ！それに、もう大丈夫っ…」
荒げた声を、落ち着かせる梅人。
「僕は、朱実桜時じゃなくって、朱実梅人なんだからっ」
「えっ…？」
「……っ」
笑顔で呟く梅人に、桜時は首を傾げるが、その横の輝矢は少しハッとした表情を見せる。
――――アナタはハチではなく…朱実梅人でしょうっ…？――――
それは、輝矢が梅人に言った言葉。
「竹取輝矢っ」
「……っ？」
梅人が輝矢の方を向き、言葉を発する。
「次っ、会う時までに…何か探しとくからっ…」
「えっ…？」
少し躊躇うようにその視線を外しながら、梅人が言葉を繋げる。
輝矢が少し首を傾げる中、梅人がまっすぐな瞳を、輝矢へと向けた。
「僕だけの…道っ…」
「……っ」
――――アイツが…遠いから…――――

それは、道を見つけて進んでいく桜時を、ずっと羨ましいと感じながらも、どうすることも出来ないでいた梅人の、やっと導き出した決意。

「はいっ」

輝矢が頷き、笑みを零す。

「楽しみにしていますっ」

「……っ！」

向けられた輝矢の微笑みに、一気に顔を赤く染めあげる梅人。

「んん～っ？梅人ぉ、お前、何か顔赤くねっ？」

「なっ何でもないよっ！！」

「ああっ？」

梅人の様子の変化に気づいた桜時が、不思議そうに問いかける。

強く否定して、そっぽを向いてしまう梅人を見て、桜時はさらに不思議そうに首を傾げた。

「何だぁ～？アイツっ」

「言えることは、従兄弟揃って、女の趣味が悪いってことだねぇ～」

「へっ？」

隣から口を挟む由雉に、桜時が目を丸くする。

「兄たちの趣味もヒドいしっ、そういう家系なのかなぁ～っ」

「何のこと言ってんだぁ？」

「別にぃ～っ」

由雉の言葉の意味をまったく理解していない桜時に、由雉は少し呆れたような表情を見せながらも、適当に誤魔化した。

「じゃあ桜時クンっ！」

「おうっ！気をつけてなっ！」

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

松人たち三兄弟が笑顔を見せ、桜時に軽く手を上げると、三兄弟の体が白い煙に包まれていく。

『またねぇぇぇ～～～っっ！！』

白い煙の中から、青い空へと飛び立っていく三羽のスズメ。

「おぉぉぉうっ！」

「もう二度と来なくていいですよぉ～っ」

大きく手を振る桜時の横で、輝矢もそうは言いながら、しっかりと手を振って送り出した。やがて三羽のスズメの姿が、青空の彼方へと消えていった。

第57章　新たなる旅立ち　☆3

「ふぅっ」
振っていた手を下ろし、ホっと息をつく桜時。
「いっやぁ～ホント、迷惑極まりないお客だったねぇ～っ」
「悪かったなっ、俺の身内だっ」
笑顔で暴言を吐く太狼に、桜時が少ししかめた表情を向ける。

「さぁ～てとっ」
『……っ？』
どこからともなく玄関前へと姿を見せる、千年を生きる御伽界・最古の獣人のトマト。その横には大きな荷物を抱えた、地蔵など数名の旦那が控えている。これからどこかへ行くようである。

「さぁっ、愛の修行へと旅立とうかぁ、桜時っ」
「ぎゃあああああっ！！違う違うっ！あんたと修行に行くのは、俺じゃねぇーだろうがぁぁっ！！」
桜時の顎を持って、迫るトマトに、桜時が悲鳴にも似た叫び声をあげる。

「クソババアっ…？」
「……っ」
そんなトマトの後方に現れる、吹雪のように冷たい空気を纏った輝矢。その気配に気づき、トマトが振り返る。

「小娘っ、私、やっぱり桜時と愛の修行に行くことにするよっ」
「却下っ」
トマトの言葉を、輝矢が一秒の間もないくらいの速度で却下する。

「私だって、本来ならハチとラブラブウキウキデートをするところを、仕方なくアナタと修行に行くことにしたのですよ？」
「修行行かなくても、ラブラブウキウキデートはしねぇーぞっ！？」
強く言い放つ輝矢に、桜時がすかさず突っ込みを入れる。

「さぁ、遅くならないうちにとっとと行きますよっ」
そう言うと、輝矢は桜時とトマトに背を向け、玄関先に置いてある自分の荷物の方へと歩き出していく。

「あっ…！……っ」

「……っ」

背を向けた輝矢に思わず手を伸ばすが、どこか寂しそうに俯き、手を下ろす桜時。そんな桜時を見て、トマトが少し目を細める。

「よいしょっ」
玄関先に置いてあった荷物を、拾い上げる輝矢。

「おいっ、小娘っ」
「……っ？何でっ…って、なっ…！」
トマトに呼びかけられ、振り返った輝矢が、振り返った途端、勢いよく腕を引っ張られた。大きく体を動かされ、輝矢の手から、持ち上げたばかりの荷物が零れ落ちる。

「何すっ…！……っ？」
「うぇっ！？」

トマトが輝矢を引っ張ってきたそこは、桜時の目の前であった。
勢いよく目が合うと、輝矢も桜時も、少し戸惑ったような表情を見せる。

「別れくらい、しっかり言っときなぁっ」
「えっ？」
二人の横に立ち、輝矢の肩を軽く叩くトマト。輝矢が目を丸くして、トマトの方を振り向く。
「お前が私のきっつい修行であっけなく死んじまったらっ、これが今生の別れになるんだからねぇ～っ」
「はぁっ！？」
相変わらず輝矢を挑発するようなことを言いながら、二人の傍から離れていくトマト。そんなトマトの挑発に、思いきり顔をしかめ、輝矢は去っていくトマトを、しばらく睨みつける。

「ったく、あのクソババアっ…」
「あっあのっ…輝矢っ…」
「……っ」
トマトを睨みつけていた輝矢が、前方から聞こえてくる声に振り向く。

「そのっ…」
輝矢の見つめるその先には、少し俯き、躊躇うように言葉を繋いでいる桜時。照れているのか、頬が多少、赤い。

「……っ」
そんな桜時を見て、輝矢がそっと目を細める。

「きっ…気をつけて行っ…！」
「……っ」

「って、うぎゃあああああああっ！！」

何とか送り出す言葉を贈ろうと、決意したように桜時が顔を上げた途端、輝矢が勢いよく桜時に抱きついた。桜時が激しい奇声をあげる。

「かっ…かかかかかか輝矢っ…！ちょちょちょっ…！はなっ…離れっ…！」

顔から何から全身を真っ赤にして、桜時が必死に輝矢に離れるよう言おうとするが、その声は震えすぎていて、もう何を言っているのかわからない。

「かっ…かかかかか輝っ…！」
「一ヶ月なんてっ…あっという間ですよねっ…」
「えっ…？」

輝矢の漏らした弱々しい声に、桜時の表情が止まり、真っ赤な顔が冷める。

「輝っ…」
「ハチっ」
何かを言おうとした桜時の声を遮り、桜時の名を呼ぶ輝矢。

「私っ…もっと強くなりますっ」

桜時の肩から覗く輝矢の瞳は、とても強い意志のこもった、まっすぐな瞳をしていた。

「もっと強くなってっ…次は絶対、ハチを守りますっ」

「……っ」

耳元ではっきりと聞こえてくる声に、桜時が少し驚いたような顔を見せる。

――――私のハチにっ…触れようなんてっ…百年早いですよっ……――――

いつだって、守ってくれた。強い力で、強い想いで。

――――あああああああっ！！――――――

どんなに、傷ついても。

――――ハチっ…――――――

いつだって、笑ってくれた。優しい笑顔で、強い笑顔で。

――――アナタのすべてが、私の活力ですからっ…――――――

だから、好きになった。

「……。」

桜時がそっと、目を伏せる。

「うんっ…」

「えっ…？」

輝矢の背中に回った桜時の両手が、そっと輝矢を抱き締めると、輝矢は驚いたように目を開いた。

「ハっ…」
「うんっ…」

戸惑った様子で名を呼ぼうとした輝矢の声を遮り、もう一度深く頷いて、輝矢を抱き締める桜時。

「待ってる…」

輝矢の耳元で、桜時の上ずっていない、落ち着いた声が響く。

「俺はちゃんと待ってるから…だからっ…」

目を閉じたままの桜時の口元が、少し緩む。

「安心して…行って来いっ…」
「……っ」

届く声に、輝矢もそっと笑みを零した。

「はいっ…！」

目を伏せた輝矢が、桜時を抱き締めるその手に、さらに力をこめる。

「はいっ！そこまでぇぇぇ〜〜っっ！！」
「ぎゃあああああああああっっっ！！！」

輝矢と抱き合っていた桜時が、どこからか飛んで来た足に、勢いよく吹き飛ばされる。少し離れた地面の上に、転がるように倒れ込む桜時。

「痛ってぇぇぇ〜〜っ！」

桜時が蹴られた脇腹を押さえながら、ゆっくりと起き上がる。

「何すんだよっ！！クソ桃タローっ！！」

「えぇぇ〜っ？」

輝矢のすぐ横に立ち、何喰わぬ顔で桜時の方を見下ろすのは、相変わらずの爽やか笑顔の太狼であった。

「君の脇腹にでっかい蚊が止まってたんだよぉ〜一刺しで君の血なんて、全部一気に吸い取っちゃいそうなほどの蚊がぁ〜っ」

「んなデッカイ蚊だったら、自分で気付くわいっ！！」

「あっ、輝矢ちゃん、これ、荷物ぅ〜っ」

「無視かぁぁぁっっ！！」

桜時の怒鳴り突っ込みをあっさりと無視して、輝矢に先程落とした荷物を渡すしている、笑顔満開の太狼。そんな太狼に、桜時の怒鳴り声はさらにヒートアップした。

「ったく、マジ痛っ…」

「私の愛で治してやろうかぁ？」

「うげぇぇぇっっ！！」

やっと立ち上がった桜時の、すぐ後方へと現れるトマト。またもや急に出現し、太狼に蹴られた脇腹に触れてくるトマトに、桜時が奇声をあげる。

「クソババアっ！！やっやめっ…！！」

「あんな鬼のような姑のいる小娘よりもぉ、私にしとけば安全圏だ

よぉ～？」
「旦那が二五七人もいる奴の、どこが安全圏なんだよっ！！」
アプローチしてくるトマトに、必死に抵抗する桜時。

「“水月”っ」
「ひぃっ！」

どこからか飛んでくる水の刃を、二人が慌てて体を引き離して、何とかかわした。

「物騒な小娘だねぇ～」
「アナタの節度に問題があるからです」
少し顔をしかめるトマトに、水の刃を飛ばした張本人の輝矢が、まったく悪びれた様子なく答える。

「ではタロー、ハチを宜しくお願いします」
「はいはぁ～いっ」
太狼の方を向き、真剣な表情を見せて、太狼に桜時のことを託す輝矢。

「じゃあ、行ってきます」
輝矢が今度は門貴や由雉、ヘンゼル、グレーテルの方を向き、笑顔を見せる。

「うんっ」
「輝矢ぁぁぁ～～～んっ！！俺のこと、忘れんといてなぁぁ～～っ！！」
「どちら様でしたっけ？」
「ぎゃあああああっっ！！もう忘れとるぅぅぅ～～っっ！！」
「バカっ？」

泣き叫ぶ門貴に、冷たい瞳を向ける由雉。

『いってらっしゃいませっ！輝矢さまっ！』

「いってきます」

笑顔で手を振るヘンゼルとグレーテルに、輝矢も笑顔を向ける。

そして皆に背を向け、トマトの方へと歩み寄っていく輝矢。

「……っ」

「あっ」

輝矢が、トマトの横に立つ桜時と目を合わせる。目が合うと、桜時が思わず声を漏らした。

「あっ、えとっ、いってらっ…」

「そういえば」

「へっ？」

言葉を遮る輝矢に、桜時が目を丸くする。

「この前、ハチ、クソババアにチュ～されてましたよね」

「えっ…！？」

輝矢の言葉に、桜時が思わず顔を引きつる。

――――こいつは期待以上だっ…――――

――――やっやめっ…！――――

「うっうん…」

思い出される、あまり思い出したくない思い出に、かなりげっそりとした表情となって、元気なく頷く桜時。

「それが何っ…」

「……っ」
「ふえぇっ…！？」
輝矢に力いっぱい手を引かれ、桜時の体が傾く。
――――チュウウウウウ～～～っっ！――――
「……っ！！」
重なる唇に、大きく目を見開く桜時。
「ふぅ～っ」
唇を離した輝矢が、桜時の方を見上げる。
「上書きっ」
「……。」
これ以上ないくらい満足げに微笑む輝矢を見て、固まる桜時。
「ぐっぐふっ」
桜時はそのまま白目を剥き、ゆっくりと後方へと倒れ落ちた。
「死んだねぇ～」
「久々に見たわぁ～気絶ラブコメっ」
そんな桜時の様子を見ながら、門貴と由雉が、特に心配する様子もなく、暢気に言葉を交わす。

「では行ってきまぁ～すっ！」
『いってらっしゃいませぇ～っ！輝矢様ぁぁ～～っ！！』

太狼やヘンゼル、グレーテルに見送られ、トマトと地蔵他、数名の旦那とともに旅立っていく輝矢。あれだけ旅立ちを渋ったわりには、割りとあっさりとした出発であった。

『行ってしまわれましたねっ…』
「うんっ」
やがてその背中も見えなくなると、ヘンゼルとグレーテルが寂しそうに呟いた。その言葉を受けとめるように、太狼が深く頷く。

「さてとっ」
『……っ？』
ヘンゼルとグレーテルが首を傾げる中、太狼が気絶して倒れ込んでいる桜時のもとへと歩いていく。

「ほいっとな」
「どぐわあああああああああっっ！！」
強く腹を踏みつけられ、潰れたような声を出しながら、その場で飛び起きる桜時。
「何っすんだよっ！！クソ桃タローっ！！」
「君の腹にね、でっかい蚊が止まってたんだよ。君の血なんて、一刺しで一気に吸い取れそうなほどのっ…」
「だあああああああっっ！！もういいっ！！ぜってぇウソっ！！」
先程と同じことを言おうとする太狼を、桜時が怒鳴り声で無理やり黙らせる。

「ったくっ…」
「輝矢ちゃんに言わないままで、本当に良かったの？」
急に落ち着く、太狼の声色。
「君も修行に出るってことっ…」
「……っ」

太狼の言葉に、桜時がそっと表情を曇らせた。

「いいんだっ」
桜時がその曇った表情を振り払うように少し首を横に振り、晴れやかな笑顔を見せる。
「俺が修行に出ることを…俺が強くなろうとしていることを知ったら、あいつはまた、“自分が弱いからだ”って、自分を責めるだろっ？」
「……っ」

桜時の言葉に、太狼が少し目を細める。

「だからいいっ」
澄み切った空を見上げて、桜時が清々しい笑みを浮かべる。

「それに俺、決めたんだっ」
その場ですっと立ち上がり、浮かべた清々しい笑顔を、前に立つ太狼へと向ける桜時。
「俺はっ、輝矢を守るっ」

――――俺…お前のことが…好きだ…――――

大切な、人。

――――私にはっ…守れないものが多すぎるっ…！――――

その人が零した、涙。

「もう二度と、あいつが泣かなくて済むようにっ…」

少し俯いた桜時が、その中に決意をこめるように、しっかりと拳を握り締める。

「だから強くなるっ」

顔を上げた桜時が、もう一度、太狼の方を見る。

「あんたよりも、強くなるっ！」

「……っ」

まったく嘘偽りを感じさせない、誠実な瞳で、大きな笑顔を作る桜時に、太狼は少し驚いたように目を見開いた。

「さてとっ、こっちもそろそろ行くかなっ」

「はいっ、桜時っ」

「おうっ！サンキュっ！」

出発しようと太狼から視線を逸らした桜時に、由雉が荷物を手渡す。そんな由雉自身も、旅に備えた荷物を背負っていた。

「門貴様ぁぁぁ～～っっ！！私も一緒に連れてってぇぇぇ～～っ！！」
「絶対、嫌っ…」
泣きじゃくりながら願うヘンゼルに、しっかりと腕を握られ、どこかげっそりとした表情を見せている門貴のその手にも、長旅用の荷物。
「ダメですっ！お兄様っ！お兄様の存在は、門貴様の修行の邪魔以外の何ものでもありませんっ！！」
「グッサァァァっっ！！」
「俺でもそこまでよう言わんで…？妹っ…」
グレーテルの言葉に突き刺され、大人しく門貴から手を離して、その場に崩れ落ちるヘンゼル。グレーテルのあまりの言いっぷりに、門貴は、解放はされたものの、複雑な表情を見せた。

「おっしゃっ！行きますかっ！」
「おうっ！」
気合いを入れ直して振り返った門貴に、桜時がしっかりと頷く。

「気を付けてよぉ～、一応、僕、輝矢ちゃんに君のこと、頼まれてるんだからぁ～」
「大丈夫だってっ！修行場所は、安全なとこだしっ！」
それなりに心配しているような言葉をかける太狼に、桜時が笑顔を向ける。

「じゃっ！行ってくるっ！」
「行ってくるでぇっ！」
「行ってきまぁ～すっ」
「門貴様ぁぁぁぁぁ～～っっ！！」
「いってらっしゃいませぇ～っ！」

高々と手を上げ、桃原家から旅立っていく桜時、門貴、由雉の三人。泣きじゃくり、今にも追いかけて行きそうなヘンゼルを押さえこんで、グレーテルが三人を見送る。

「はぁっ…」

三人の姿が見えなくなると、やっとすべての人間を送りだした太狼が、どこか疲れたように肩を落とした。

――――あんたよりもっ、強くなるっ！――――

脳裏を過ぎる、桜時の言葉。

「まっすぐな目っ…」

思い出されるあの瞳に、太狼がそっと目を細める。

「ホントにちょっと、負けるかと思っちゃったっ…」

少し困ったような笑みを浮かべながら、太狼は、晴れ渡る空を見上げた。

第５７章　新たなる旅立ち　☆４

その頃、オトポリ本部・隊員控室。

「……。」

“狐上”と書かれたロッカーの前に、神妙な表情を見せたゴンが立っていた。ゴンがロッカーの中から、真っ白な鞘に入った、一本の美しい刀を取り出す。

「……っ」

その刀を見て、そっと目を細めるゴン。

「持っていくのかっ…？」

「えっ…？」

後方から聞こえてくる声に、ゴンが驚いた様子で振り返る。

「長官っ…」

「……。」

控室の入口には、穏やかな笑顔を浮かべた、座黒が立っていた。座黒がゆっくりと、ゴンの方へと歩み寄っていく。

「“天狼丸”…」

「……っ」

ゴンの持つ刀の名を口にする座黒に、少し眉をひそめるゴン。

――――“天狼丸”っ！――――

それは、太狼の“神狼丸”と対となる刀。かつて、次狼が使っていた刀であった。

「はいっ…」

ゴンがしっかりと頷く。

「行くのか…？」

問いかけを続ける座黒。どこに行くのか、ということは言うまでもなかった。初めての敗北を受け、さらに強くなるために旅立っていった輝矢たち。一人だけ何もしないで龍国に残るなど、ゴンに出来るはずもなかった。

「はいっ…」

ゴンがもう一度、しっかりと頷く。

「すみませんっ…オトポリも忙しい時期だってのにっ…」

どこか申し訳なさそうに、俯くゴン。

「構わんさっ」

そんなゴンに、座黒が優しい笑顔を向ける。

「お前がいない方が、オトポリ全体としても仕事がはかどるしなぁっ」

「それは悪ぅござんしたねっ！」

笑顔で答える座黒に、ゴンが勢いよく顔をしかめて言い返す。

「どうせ俺はオトポリ一の問題キツネでっ…！」

「だが、辞めるなよっ」
「……っ」

座黒の言葉に、ゴンの声が止まる。

「絶対に、辞めるなっ」
「長官っ…」

座黒の強制するかのような、強い瞳に、ゴンが少し戸惑った表情を見せる。

「お前は言ったな、オトポリに入る時にっ…」

――――俺っ、オトポリに入りたいんですっ…！――――

思い出される過去の言葉に、座黒がそっと目を細める。

「“友の遺志を継ぐのだ”とっ…」
「……っ」

座黒の言葉に、ハッとした表情を見せるゴン。

「今もその言葉に、偽りはないかっ…？」
「……。」

確かめるように問いかける座黒に、ゴンが少し俯く。

――――俺っ、もう少し大きくなったら、オトポリに入りたいんですっ！――――

かつて、大切な友が口にした、大切な夢。

「……はいっ」

顔を上げたゴンが、まっすぐな瞳で、大きく頷く。

「そうかっ…」

頷いたゴンを見て、座黒がどこか安心したように微笑む。

「ならばっ、最後まで遺志を継ぎ続けろっ…！！」

「……っ！」

声をあげ、強く言い放つ座黒に、ゴンは全身に衝撃を走らせるように、大きく目を見開いた。

――――リンゴっ…俺っ、オトポリに入るわっ…――――

あの日、決めた道。

――――諸刃を…諸刃を頼みます…――――

――――優しい世界を…――――

継がなければならぬ遺志は、他にもある。

「……っ」

少しの間、目を伏せたゴンが、ゆっくりと目を開き、顔を上げると、大きく笑顔を作った。

「はいっ！！」

座黒の言葉に、ゴンはしっかりと頷いた。

「……。」

控室の前に立った座黒が、穏やかな笑みを浮かべて、ゴンの旅立っていった廊下を見つめる。

「良かったのか…？」

誰にともなく問いかける、座黒。

「見送らなくて」

「……。」

座黒のすぐ後ろには、どこか寂しげな笑みを見せた、リンゴが立っていた。

「いいのっ、見送ったって、またギャーギャー怒鳴り合いになっちゃうだけだろうしっ」

「そうか」

どこか諦めたように肩を落とすリンゴに、優しい笑みを浮かべて

頷くだけの座黒。

「私は私のやるべきことをやるわっ」
「そうか」
言葉を続けるリンゴに、座黒はまた頷く。

「だからパパっ」
「んんっ？」
「この書類全部に目通してっ」
「げっ！」
そう言ってリンゴが座黒の前に突き出したのは、天井にも届くほど積み上げられた、書類の塔が十束以上。それを前にして、座黒が勢いよく顔を引きつる。

「りっリンゴちゃ～んっ、これはちょっと多すぎじゃっ…」
「今日中ねっ」
「はいっ…」

リンゴに強い瞳を向けられ、大人しく頷くしかない座黒なのであった。

龍国・入口。

「もう龍国外かぁ～っ」
桃原家を旅立った桜時、門貴、由雉の三人は、龍国の入口へと来ていた。入口を出ると、門貴が少し名残り惜しそうに、龍国の方を振り返る。
「一ヶ月となると、さすがにちょっと寂しいなぁ～っ」
「ヘンゼルに会えないからぁ？」
「それはないっ！絶対ないっ！！」
茶化すように問いかけた由雉に、門貴は胸の前で大きくバツを作って、必死に否定をする。これだけ否定されているヘンゼルも、少し可哀想である。

「由雉っ、お前、幸ノ街行くんだよな？」
「うんっ」
前に立つ桜時の言葉に、由雉が頷く。
「じゃああっちか」
「そうだねぇ～桜時たちは向こうっ？」
「おうっ」
今度は、由雉の言葉に、桜時が頷く。

「じゃあ、ここでお別れだねぇ～」
「ああっ」
「それじゃまぁいっちょっ」
『……っ？』
急にごそごそと荷物を漁り始める門貴に、桜時と由雉が首を傾げる。
「何してんだぁ～？サルっ」
「これやっ！」
「へっ？」
桜時の問いかけを受け、門貴が荷物の中から景気よく取り出したのは、二つに砕かれた如意棒の一方であった。如意棒を出した門貴

を見て、桜時が目を丸くする。

「何？敵の技を前に、あっけなく砕かれちゃった、君の唯一の取り柄だったその棒がどうかしたの？」

「うわぁ～んっ！ユッキーっ！過去の傷、抉りまくりやわぁっ！」

容赦なく言葉を放つ由雉に、門貴が傷ついた様子で涙を流す。

「でぇっ？如意棒なんか出して、何すんだよっ？」

「おうっ」

少し呆れたような表情で桜時が問いかけると、門貴は笑顔で頷いた。

「ちょっと景気づけやっ！」

『えっ…？』

そう言って、門貴が高々と如意棒を掲げる。

「ほらっ！お前らもっ！」

『……あっ』

如意棒を掲げた門貴が、桜時と由雉にも何かを促すように声をかける。初めは困惑していた二人であったが、やっとわかったように声を出した。

「ああぁ～っ、そういうことねぇっ」

「しゃーねぇーなぁっ」

桜時と由雉が笑顔を見せ、その場に荷物を置く。

「よっ」

「よいしょ～っと」

桜時が村雨丸を抜き、由雉が懐から青い羽根を出して、それぞれ

に高々と掲げた。

『……っ』

青い空に突き上げるようにして掲げられる、村雨丸、如意棒、裂羽。

「おっしゃっ！誓いやっ！」

「ボクたちっ、次に会う時までにっ」

「もっと強くなるっ！」

掲げられたそれぞれの武器を見上げ、それぞれに言葉を口にしていく桜時、門貴、由雉。

『そしてもう一度、集うっ』

揃う、三人の声。

『竹取輝矢のもとにっ…！！』

その声とともに、三つの武器が、一斉に重なり合った。

「はぁぁぁ～～～くしょんっ！！」
供に噂をされてか、そうでなくてか、とにかく豪快にくしゃみをする、竹取輝矢。
「ううっ…」
少し身震いしながら、鼻をすする輝矢。輝矢とトマトとその旦那たちは、すでに龍国を出て、修行の場へと足を進めていた。

「風邪かいっ？」
前を歩いていたトマトが、輝矢のくしゃみを聞きつけ、振り返る。
「生意気な小娘は、風邪なんてひかないもんかと思ってたけどねぇ～っ」
「千年も生きてるクソババアよりも、ずっと繊細に出来てるんですよっ」
苛立たせるような言葉をわざと言うトマトに対し、輝矢もケンカを売るような言葉を投げかける。二人の修行はこれからだというのに、何とも雰囲気の悪いことだ。

「やれやれっ…」
そんな二人の先行きを心配しつつも、呆れたように肩を落とす地蔵たち、旦那一同。

「とっとと行くよぉ～日が暮れる前に次の町に着きたいからねぇ～」
「はいはいっ」
トマトの言葉に、面倒臭そうに頷く輝矢。

「……。」
歩く輝矢がふと、上空を見上げる。広がるのは、雲一つない、美しい青空。

「……っ」

その青空を見て、輝矢はそっと微笑んだ。

第５８章　受け継がれる名　★１

龍国を旅立って二日。
「着いたっ！」
桜時は、とある国に辿り着いていた。

「桜時様ぁぁ～～っ！」
「んっ？」
愛らしい声に名を呼ばれ、桜時がふと振り向く。
「桜時様ぁぁ～～っ！」
「お待ちしておりました、犬孝様」
「犬仁っ！犬智っ！」
桜時の振り向いた先に立っているのは、二人の少女。一人は白い短髪の凛々しい顔立ちをした少女で、もう一人は柔らかそうな茶色の髪に、愛らしい顔立ちをしている。それは、八犬士の犬仁と犬智であった。
「では早速ぅ～っ！犬智のぉ～あいうえお作文自己紹介をぉっ…！」
「長旅、お疲れ様です、犬孝様」
「おっおうっ…」
犬智が嬉々として始めようとしたあいうえお作文を、落ち着いた笑顔であっさりと遮る犬仁に、桜時が少し呆れた表情を見せながら頷く。
「というか、ヒトちゃんっ」
「何だ？」
犬智に呼ばれ、振り向く犬仁。

「“犬孝様”っじゃないでしょっ？」
「……っ」
「へっ？」

その言葉に、ハッとした表情を見せる犬仁と、不思議そうに首を傾げる桜時。
「ああ、そうだったな…」
「へっ？」
桜時が首を傾げ続ける中、犬仁が柔らかい笑顔でそっと微笑む。
「ようこそ、お戻り下さいました」
犬仁が、その笑顔を、桜時へと向ける。

「“桜時様”っ…」
「……っ」
“桜時”と呼ぶ犬仁に、驚いたように目を見開く桜時。
「ああっ…」
だが桜時はすぐに嬉しそうな笑顔を作り、優しく犬仁へ向けて頷いた。

「ふっはぁ～っ！久っ々やなぁ～っ！“犬国”っ！」
「……。」
横から聞こえてくる明るすぎる声に、穏やかな笑顔を見せていた桜時が、一気に表情を引きつる。
「相変わらず雪だらけやなぁ～っ！おおぉうっ！寒っ！」
「……。」
空は晴れてはいるが、地面には大量の雪が積もっている。その雪に足を何度も踏みつけて、桜時の横にいる門貴は、楽しそうな笑顔を見せた。
「はぁっ…」
そんな門貴の様子に、桜時が少し肩を落とす。
「おいっ、サルっ」
「んん～っ？」
桜時の呼びかけに、門貴が振り向く。

「何でお前がこっ…」
「何故っ！貴様がここにいるっ！？」
「へっ？」
桜時が問いかけようとしたその問いを、先に口にしたのは犬仁であった。犬仁がしかめっ面を見せながら、力強く門貴を指差す。
「あっ、犬仁ちゃ～んっ！」
「私の名前に“ちゃん”をつけるなっ！！」
軽い笑顔を見せる門貴に、少し頬を染めて怒鳴り返す犬仁。
「何故、貴様がここにいるっ！？修行に来るのは桜時様だけだと聞いていたがっ！？」
「それはっ…」
少し俯いた門貴が、その頬をほんのり赤色に染める。
「犬仁ちゃんに会いたかったからぁっ！」
「んなっ…！！」
茶目っけたっぷりの笑顔で顔を上げる門貴に、犬仁の顔が耳まで景気よく真っ赤に染まる。
「殺すっ！！」
「うわああっ！」
門貴に、犬仁が持っている白い槍を勢いよく振り下ろすと、一気に焦った表情を見せた門貴が、慌てて槍を避ける。
「冗談やってぇ～っ！犬仁ちゃん、頭堅いぃ～っ」
「だからっ！私の名前に“ちゃん”をつけるなっ！！」
「……。」
槍を振り続ける犬仁と、それを避け続ける門貴。そんな二人の会話を聞きながら、唖然とした表情を見せる桜時。
「犬仁って…あんなキャラだっけ…？」
「恋はキャラすら変えてしまいますからっ」
「へっ？」

笑顔で答える犬智に、桜時はその言葉の意味がわからず、不思議そうに首を傾げた。

「では桜時様、里見の屋敷の方へ。八房様がお待ちしております」

「ああっ」

犬智に案内され、桜時が屋敷へと続く森を進んでいく。一ヶ月の修行場所として、桜時が選んだのは、“犬国”であった。それは桜時自身が選んだことで、太狼やトマトも、犬国であれば安全であろうということで許可した。座黒が犬国の国主・里見八房に正式に申し込んでくれたお陰で、実現にいたったのだ。

「しっかしホント懐かしいなぁ～そう時間は経ってねぇ～はずなのにっ」

犬智とともに里見の屋敷へと向かいながら、久々に見る雪国を眺め、桜時が感慨深そうに呟く。桜時の父の生まれた国。

「その間に色々とあったからではないですか？」

「かも知れねぇっ」

犬智の言葉に、桜時が少し肩を落とし頷く。この国で、朱実桜時であるために、祖父・里見八房と戦ってから一ヶ月。その間に、牢戸知玖との出会い、戦いなど、色々とあり過ぎたのかも知れない。

「んっ？」

ふと桜時が、横に顔を向ける。犬国の壮大な森の合間にある、小さな雪原に、それも小さな集落が見えた。数軒の家が立ち並び、人の姿もちらほらと見える。

「人っ…？」

不思議そうに首を傾げる桜時。それもそのはず、かつて、四大国を堕とされた犬国は、多くの民に捨てられ、今では国主・里見家と、八犬士の一族しか住んでいないのである。

「住民の受け入れを始めたんですっ」

「えっ？」
横から聞こえてくる声に、桜時が少し驚いたように振り向く。そこには笑顔の犬智が立っていた。
「鬼人のせいで故郷を失った方々を、どんどん受け入れていこうって八房様がっ」
「じじいがっ…？」
犬智の言葉に、桜時はさらに驚いたような表情を見せる。桜時の祖父・八房は、四大国を激しく恨み、その恨みを晴らすことだけを考えている人であった。国を建て直そうとか、国民を大事にしようとか、そういった考えを持たない人であった。そんな八房が、住民の受け入れを始めたという。

「そうかっ…」
妙に嬉しさが込み上げて来て、桜時はそっと笑みを零した。

「それもこれも桜時様のお陰ですっ！」
「お前らの言葉が通じたんだよっ」
桜時と犬智が、穏やかな笑顔で微笑み合う。

「んん～～～っ」
そんな二人の様子を後方から見つめながら、何やら気難しい表情で唸り声をあげる犬仁。
「どないしたん～？犬仁ちゃんっ」
「私の名前に“ちゃん”をつけるなっ！」
横から問いかける門貴に、犬仁がもうお馴染みとなってきた言葉を言い返す。
「いやぁっ…」
少し戸惑うように、眉をひそめる犬仁。
「確か桜時様、半径一メートル以内に女が近付くと、狂ったように

悲鳴をあげる体質の方ではなかったか？」
　悩み込むような表情を見せた犬仁が、大きく首を捻りながら言葉を発する。前方を歩く桜時と犬智の距離は、確実に一メートルない。だが桜時は取り乱すことなく、何ら平気そうに犬智との会話を楽しんでいる。

「ああぁっ」
　犬仁の言葉に、興味なさそうに頷く門貴。

「あれはやなぁっ、好きな女以外は女に見えてないっちゅー、男として有るまじき病気やっ、病気っ！」
「好きな女っ？ああっ」
　呆れたように言い放つ門貴の言葉に、初めは首を傾げていた犬仁であったが、何か思い当たったことがあったのか、納得したように頷いた。
「そういうことかっ」
　犬仁が、少し呆れたように肩を落とす。

「ホンマもったいないやっちゃよなぁ～っ！世の中にはカワイ子ちゃんが五万とおるっちゅーのにぃっ！」
「門貴さぁ～んっ！ヒトちゃ～んっ！置いていっちゃいますよぉ～っ？」
「はいはぁ～いっ！今すぐ駆けつけるからねぇ～っ！犬智ちゃ～～んっ！」
「……。」

　嘆いていた門貴が、前方を歩く犬智に呼ばれ、笑顔を振りまいて駆け込んでいく。そんな門貴を後方から眺め、さらに呆れた表情となる犬仁。

「女という女、誰にでも軽いアイツも、男として有るまじき病気だなっ…」

後方に一人残った犬仁が、ポツリと呟いた。

数分程森の中を歩くと、里見家の屋敷に辿り着いた。桜時が八房との戦いで壊した外壁も、輝矢が桜時を助けに来た際に壊した正門も、きれいに修繕されていた。

「何かっ…懐かしいなっ…」

捕らえられていたことがあるとはいえ、父の生家である屋敷に、桜時が思わず笑みを零す。

「んでっ、じじいはっ…」

「おぉぉ〜うぅぅ〜ちゃぁ〜〜んっっ！！」

「のわあああああああああっっ！！」

八房の姿を探す桜時の元へと飛び込んできたのは、くりくりとした大きな瞳の、まだ幼さの残る少年であった。

「犬信っ！」

「久し振りっ！犬信じゃなくって、“シンちゃん”でしょ〜っ？桜ちゃ〜んっ」

「ハハハっ…」
相変わらずあだ名にこだわる少年・犬信に、桜時が少し引きつった笑いを浮かべる。
「どけっ」
「ぎゃんっ！！」
桜時に抱きついていた犬信が、どこからか飛んできた足に、勢いよく吹き飛ばされる。
「お前が触れると、桜時様が腐る」
「犬礼っ」
犬信を吹き飛ばしたのは、本を片手に持った、いかにも知的そうな眼鏡の青年・犬礼であった。桜時が少し驚いたように犬礼を見る。
「お久し振りです、桜時様」
「おっおうっ」
丁寧に頭を下げる犬礼に、少し戸惑うような表情を見せる桜時。
“犬孝”とは呼ばれなくなったものの、こういった態度を取られるのは、やはり不慣れであった。
「ひっどいよぉ～っ！レイレイっ！」
「黙れ、俺の耳が腐る」
「……。」
涙目で訴える犬信に、冷たく答える犬礼。そんな二人のやりとりを、桜時が少し呆れた表情で見つめる。

「お久し振りだでぇっ！桜時ざぁ～んっ！」
「ああっ？あのクソギツネは一緒じゃねぇーのかぁっ？」
「犬悌っ、犬忠っ」
そこへ大男・犬悌と、機嫌もガラも悪い犬忠がやって来る。

「相変わらずだな、全員っ」
「すみませんね、貴方がたに負けても、ちっとも成長がなくて」
「えっ…？」

さらに聞こえてくる声に、振り返る桜時。

「犬義っ！」

「どうもっ」

桜時が振り返った先に立っていたのは、黒髪に長身の男。犬仁の相方であり、八犬士の副長を務める、犬義であった。犬義が桜時に軽く会釈をする。

「おうっ！犬義っ！ひっさびさぁ～っ！」

「何でお前までいるんだ？」

どこか親しげに手を振る門貴に、犬義がうんざりとした表情を見せる。

「ついてきてもうたぁ～っ！」

「はぁっ…」

笑顔で答える門貴に、深々と肩を落とす犬義。

「まぁ丁度いい。これで再戦を申し込みに行く手間も省ける」

「へっ？」

犬義の言葉に、門貴が目を丸くする。

「あれから俺は腕を上げた」

「……っ」

どこか自信ありげな笑みを浮かべる犬義に、少し驚いたような表情を見せる門貴。しかし門貴も、すぐに楽しそうな表情を見せた。

「そりゃあ楽しみやっ」

「フンっ」

「おいおいっ！なぁ～にいきなり戦う気満々になってんだよっ！」

すっかり再戦するつもりで、楽しそうに笑い合う門貴と犬義に、桜時が思わず口を挟む。

「だいたいサルっ！お前はんなことより、如意棒をっ…！」

「あっ！八房様っ！」

「……っ」
門貴に話しかけようとした桜時が、横からした犬智の声に、ハッと目を見開いて、すぐさま振り返った。
「……。」
「あっ…」
皆のいる庭先に面する、屋敷の縁側へと現れたのは、白髪の老人。その老人とは思えない眼光鋭い瞳が、まっすぐに桜時を捉える。それは、桜時の祖父、犬国主・里見八房であった。
「じじいっ…」
『……っ』
桜時が八房の方を見る中、八犬士たちは皆、その場に素早く膝をつき、八房へと頭を下ろす。
『……。』
桜時と八房が、しばらくの間、互いを見つめ合う。
「……この間よりは、マシな面構えになったか…」
沈黙を破り、口を開く八房。
「守りたいものが…出来たんだっ…」
そんな八房に、桜時がまっすぐな瞳を向ける。
「だから俺を、強くして欲しいっ」
「……。」

眩しいとさえ思えるほどの、その迷いのない瞳に、八房がそっと目を細める。

――――父上、俺には“守るべきもの”があるのですっ……――――

八房の脳裏を過ぎったのは、そう言ってこの国を出た、桜時の父親の顔であった。

「……っ」

そっと俯いた八房の口元が、緩む。

「修行工程は八犬士に伝えてある。犬仁っ」

「はっ！」

厳しい表情で顔を上げた八房の呼びかけに、俯いたまましっかりと頷く犬仁。

「まずは八犬士全員を相手にし、戦ってみろ」

「八犬士全員をっ…？」

「そうだ」

戸惑うように聞き返した桜時に、八房がもう一度はっきりと頷く。

「全員を相手に全うな戦いが出来るようになったら、今度はわしが直々に相手をしてやる…」

八房がその場でゆっくりと立ち上がる。

「しかと励めよ…」

庭先にいる桜時を見下ろす八房。

「桜時…」
「……っ」

呼ばれる名に、桜時が大きく目を見開く。驚きの表情を見せていた桜時が、すぐに零れんばかりの笑顔を作った。

「おうっ！」
「……っ」

大きく頷いた桜時を見て少し笑みを零すと、八房は、桜時たちに背を向け、そのまま屋敷の奥へと消えていった。

「桜時っ…かっ…」
閉じた襖を見つめながら、桜時が呟く。

「へへっ」
「うぅわっ！きっもぉ～っ！何一人で笑ろてんのぉ～っ？」
「うっせぇーなぁっ！！」
祖父の見せた一面に、こっそりと笑みを零した桜時であったが、その笑みを覗き込んだ門貴にからかわれ、勢いよく怒鳴りあげる。

「だいったいお前は何だってここにいんだよっ！？」
犬国に着いた時からずっと言いたかった問いかけを、やっとのことでぶつける桜時。
「あんな、よくよく考えればこっ恥ずかしい誓いまでさせといてっ！なぁ～にが“もう一度集う”だっ！」
「だってぇ～っ」
責め立てる桜時に、門貴がゆるい声を出す。
「あんなグロ魔女に狙われてる桜時が心配で、ついぃ～っ」

「ほざけっ！！」
明らかにウソとわかる発言をする門貴に、桜時がさらに血管を浮き上がらせる。

「っつーか、お前も由雉みたいに、猿の村に戻れば良かっただろっ！？」
桜時が、門貴の方を指差す。
「そのっ…」
指が下ろされ、桜時が少し気まずそうな表情を見せる。

「墓参り…とかさっ…」
「……っ」

桜時の言葉に、ふと曇る門貴の表情。

「もう早々、村に戻る機会もねぇーだろうしっ…」
「墓の前に立って、何言うのぉ～っ？」
「へっ？」
門貴の問いかけに、桜時が目を丸くする。
“如意棒折れてもぉたぁ～”とかっ？」
「……っ？」
自分を嘲るような、どこか皮肉った笑みを浮かべる門貴。そんな門貴の様子に、桜時が少し戸惑ったような表情を見せる。

「門っ…」
「もうちっと、カッコつけさせてぇやっ」
「……っ」

ふと見せる、悲しい笑み。その笑みに、桜時は思わず言葉を呑み込む。

「さぁ～てとっ、久々の犬国を散歩でもしてこよっかなぁ～っ」
「あっ」
どこか誤魔化すようにそう言って、桜時にすぐさま背を向けると、門貴はそのままその場から去っていってしまった。

「おいっ！待てよっ！門っ…！」
「ヒャッハッハっ！！」
「へっ？」
門貴を追いかけようとした桜時が、後方から聞こえてくる声に振り返る。

「おっらあああぁぁぁぁっっ！！」
「のわあああああああああああっっ！！」

桜時が振り返った途端、勢いよく飛び込んできた犬忠が、右手に装着した鉄爪を、何の迷いもなく桜時へと振り下ろしてきた。桜時が叫び声をあげながら、何とかそれを避ける。

「なっにしやがんだよっ！？気でも狂ったかっ！？」
「ああぁ～んっ？」
責めるように問いかける桜時に、犬忠が顔をしかめる。
「んだよっ？修行すんだろ？修行っ」
「はっ？」
犬忠の言葉に、思わず固まる桜時。犬忠としては修行のつもりだったようだが、桜時から見れば、ただ単に殺しにかかってきているようにしか見えない。
「あんなぁっ、修行するにしたって、せめてちょっと休んでからにさっ…」
「あっ！いったよぉ～っ！桜ちゃ～んっ！」

「へっ…？」
呆れたように肩を落としていた桜時が、またしても後方から聞こえてくる、今度は陽気なその声に振り向く。
「“白矢”がっ」
「げっ！！」
桜時が振り向くと、そこには弓を構えた陽気な笑顔の犬信が立っており、犬信はすでに、桜時へ向けて、白く輝く矢を放った後であった。
「ちょちょちょっ…！ちょっと待てよっ…！！」
もう村雨丸を抜く暇すらないくらい、高速で飛んで来る白矢に、桜時の表情が青ざめる。
「危なぁ～いっ！桜時様ぁぁ～～っ！！」
「のわあああああああああっ！！」
青ざめた桜時を勢いよく吹き飛ばして、その場に駆け込む犬智。
「“白壁”っ」
――――パァァァァァァーーーーンっ！――――
犬智が両手を前に突き出して、白く輝く防御壁を張ると、白矢はその壁に刺さって、きれいに消滅した。
「もぉ～うっ！気を付けてよっ！ノブくんっ！」
「そうだ。桜時様が怪我でもしたらどうする、この腐れ小僧っ」
「えぇ～っ？だって修行でしょ～っ？」

注意する犬智と、冷たく言い放つ犬礼に、犬信は不思議そうに聞き返した。。

「ぐっぐふっ！」

その頃、犬智に吹き飛ばされた桜時が、力なく地面に落下する。

「おっ俺っ…死んじゃうかもっ…」

八犬士との修行に、初っ端から不安を感じる桜時。

「……っ」

その様子を見守っていた犬仁が、ふと思い立ったように顔を上げ、その場を後にした。

第５８章　受け継がれる名　★２

「……。」

里見の屋敷を出て、再び森へと戻った門貴が、ふと立ち止まり、荷物の中から２つに砕き割れた如意棒を取り出す。折れてしまった、門貴の唯一の武器。

――――今後、この木に実がなる時は…きっと笑顔で出逢えるね…――――

猿蟹合戦で、一花と、何度も交えてきた武器。

「一花っ…」

珍しく神妙な表情を見せた門貴が、小さく一花の名を呼ぶ。

「ひっどい砕かれようだな」
「うおぉうっ！」

すぐ後方から聞こえてくる声に、門貴が大きく驚いて、背筋を立たせる。門貴のすぐ後ろには、折れた如意棒を感心するように見つめる犬仁の姿があった。

「びっくりしたぁ～っ」

「その砕かれようじゃ、犬義との再戦は難しいな」
胸を押さえ、呼吸を整えている門貴に、犬仁が言葉を続ける。
「負けたのか？」
「……っ」
犬仁のシンプルな問いかけに、ふと曇る門貴の表情。
「まぁなっ…」
あまり元気のない笑みを浮かべ、門貴が頷く。

「……。」
そんな門貴を見て、少し眉をひそめる犬仁。

「そっそう気を落とすなっ！」
「へっ？」
妙に上ずったその声に、門貴が不思議そうに目を丸くする。
「いくら武器が折れようと、圧倒的強さにけちょんけちょんに倒されようともだなぁっ…！」
「けちょんけちょんまでいった覚えはないけどっ…」
勝手に門貴が圧倒的に負けたと捉えている犬仁に、門貴が少し呆れた表情を見せる。

「とにかくっ！生きていればだなぁっ、そのっ、えっとっ、だからだなぁっ…！」
「門貴いいいい～っっ！！」
『……っ』
どこからともなく聞こえてくる、門貴を呼ぶその巨大な声に、同時に振り返る門貴と犬仁。

「何だ？」
「おっ、来たみたいやなっ」
「えっ？」

誰が来たのか、わかっている様子の門貴に、犬仁が少し首を傾げる。

「門貴いいいいいっっっ！！！」
「うわっ！」

森の木陰から飛び出すようにして門貴と犬仁の前に現れたのは、一匹の真っ赤なカニ。

「かっカニっ…？」
犬仁が少し唖然とした表情で、現れたカニを見つめる。

「やぁ～と着いたわっ！」

――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

カニの体を、白い煙が包んでいく。

「ふぅっ！」
「……っ」
白い煙の中から姿を見せたのは、真っ赤なツインテールの、少し性格のキツそうな目元をした美少女であった。背中に大バサミを背負っている。犬仁が少し驚いたように、その少女を見る。

「まったくっ」
「おぉうっ！二花っ！」
不機嫌そうに腕を組む少女に、軽く手を上げて笑いかける門貴。

「と、チョキ三郎」
「どうせ俺は姉ちゃんのおまけですよっ…」

門貴が視線を横に向けると、少女の後に続くようにして、同じように大バサミを背負った赤髪の少年がやってくる。そう、その二人は、門貴の幼馴染みの二花とチョキ三郎であった。

「ひっさしぶりやなぁ～っ！元気やったかぁ～っ？」
「元気も元気っ、ピンピンしとるわっ」
笑顔で声をかける門貴に、素気なく答える二花。
「人をっ…ってかカニを、こんなサッムいとこまで呼び出しおってっ！」
「すまんすまん～っ」
責めるように言い放つ二花に、門貴が軽く謝罪をする。

「すまんとちゃうわっ！ウチはなぁっ、アンタと違って色々と忙しっ…！」
「門貴さんから連絡きて、もう姉ちゃんったら“すぐ行こう”“とっとと行こう”ってうるさくってぇ～っ！」
「余計なことは言わんでええんじゃああぁっっ！！」
「ぎゃあああああああああっっ！！」
「……。」
二花の言葉を遮って、笑顔でペラペラと話すチョキ三郎の頭上に、二花の大バサミが振り落ちた。その様子を、唖然とした表情で見つめる犬仁。

「ううっ…」
「それで二花、あの人は？」
「ああっ」
頭を押さえて苦しんでいるチョキ三郎に構うことなく、会話を進める門貴と二花。

「ちゃ～んと連れてきたでっ！ほらっ！」

『……っ？』

二花が手を差し出したその先を、門貴と犬仁が振り向く。

「おぉ～っほんっ」

二花の手のその先に立つのは、一匹の年老いた全身白い毛のサル。
偉そうにたっぷりと髭を蓄えており、木の杖をついている。

「ああぁ～久々じゃなっ、門っ…グボオオオウっっ！！ゲハァっ！！ゴホォォっっ！！」
「長老さま…！！お薬を…！！」
『……。』

急に咳込む老サルに、慌てて水と薬を持って駆け寄るチョキ三郎。
その様子を見つめながら固まる門貴と犬仁。

「なっ何々だっ…？」
「相変わらずやな、長老…」

顔を引きつる犬仁の横で、門貴は少し肩を落とした。

門貴と犬仁は、やって来た二花、チョキ三郎、長老とともに、と

りあえず再び、里見の屋敷へと戻った。
「あっれっ？ひっさしぶりじゃねぇーかっ！」
やって来た二花とチョキ三郎を見て、桜時が少し驚きながら声をかける。
「二花と、えっと…？」
「どうせ俺は姉ちゃんのおまけですよっ…」
二花の名前しか覚えていない桜時に、チョキ三郎が悲しげに肩を落とす。

「ここ、アンタん家かぁ～家来もようさん、おるみたいやしっ」
里見の屋敷を、感心したように見回す二花。
「随分と成り上がったもんやなぁ～っ、イヌっ」
「全然、嬉しくねぇっ…」
二花のどこか棘のある言い方に、桜時が少し引きつった表情を見せる。

「しっかしっ…」
桜時がさらに視線を動かす。

「何で死にかけの爺さんサルまでっ…」
「グボオオオウっっ！！！ゲハァっ！！ゴホォォっっ！！」
「長老さま…！！お薬を…！！」
相変わらず咳込んで、薬を与えられている長老を見て、さらに引きつった表情を見せる桜時。

「ウチが門貴に連絡もろて、連れてきたんやっ」
「お前がっ？」
得意げに答える二花に、桜時が眉をひそめる。
「何だ？新手の嫌がらせか？」
「貴様、犬国にジジイ菌でも撒く気か？」

「ちゃうわいっ！！」
口々に失礼なことを言い放つ桜時と犬仁に、二花が少しムキになって怒鳴り返す。

「如意棒見させるために連れてきたんやっ！如意棒、作ったんは、長老やからっ！」
『……はっ？』
二花の言葉に、同時に目を丸くする桜時と犬仁。

「如意棒を…作った…？」
「このジジイザルがっ…？」
「そうやっ！長老はこう見えても、御伽界で随一の武器職猿やねんでっ！」
『……。』
自信満々に言い放つ二花に、桜時たちが少しの間、固まる。

「ウソだろ」
「ウソですね」
「ウソちゃうわいっ！！」
頷き合う二人に、さらに勢いよく怒鳴りあげる二花。

「長老が如意棒作ったっちゅーんは、ホンマやでぇ～っ」
『ええぇぇっ！！？』
笑顔で答える門貴に、大きく驚く桜時と犬仁。

「なぁ～っ？長老っ！」
「うむっ」
門貴が振り向くと、長老がしっかりと頷く。

「あれは…五十年前じゃったっ…」
「……っ」
何かを話し始める長老に、桜時は真剣な表情を見せて、耳を傾ける。

「わしが二十歳の頃っ…グボオオオウっっ!!!ゲハァっ!!ゴホォォっっ!!」
「長老さま!お薬をっ…!!」
「はいっ!やっぱウソっ!!」
すぐさま咳込んで、チョキ三郎から薬をもらっている長老の姿に、やはり御伽界でも随一の職猿と思うことの出来ない桜時。

「何じゃっ?騒がしいっ」
『……っ』
そこへ再び襖が開かれ、屋敷の中から八房が姿を現す。あれこれ騒いでいた声が屋敷の中にまで聞こえていたのか、八房は少し機嫌の悪そうな表情を見せていた。

「じじいっ」
「一体、何の騒っ…んっ?」
桜時に問いかけようとした八房が、ふと、チョキ三郎に薬を飲ませてもらいながら、呼吸を整えている長老の方に目をやる。

「えっ猿蔵(えんぞう)じゃないかっ!」
「へっ?」
驚いたように誰かの名を呼ぶ八房に、目を丸くする桜時。

「ゲホゲホっ、久し振りじゃのぅ、八房っ」
「ふはっ?」

咳をしながら、八房の名を呼ぶ長老に、門貴も目を丸くする。

「しっ…知り合いっ？」

「みたいやなぁ～」

互いの名を呼び合った八房と長老を、桜時と門貴が戸惑った様子で見つめる。

「まだ生きておったのか、爺犬っ」

「それはこっちのセリフだ、爺猿っ」

「ほっほっほっ！」

しかめた表情で言い返す八房に、長老が声高に笑ってみせる。

「わしはこう見えて元気も元気っ…グボオオオウっっ！！！ゲハァっ！！ゴホォォっっ！！」

「どこがじゃっ！！」

元気をアピールしようとした途端に、激しく咳込む長老に、勢いよく突っ込みを入れる八房。いつも平静な八房が、突っ込みを入れたので、桜時や八犬士たちは少し驚いた様子で、それを見つめる。

「じじいがっ…突っ込みをっ…」

「何やぁ～？もしかして五十年来のお友達とかぁ～？」

「猿の村の猿蔵様と八房様は、かつて共に修行し、切磋琢磨し合った仲、とお聞きしております」

「ふぅ～ん」

桜時が唖然として八房を見つめる中、首を傾げた門貴に、横から犬仁が口を挟んだ。その言葉に、感心するように頷く門貴。

「とっととくたばれっ！このクソじじいっ！」

「相変わらず口の減らんクソじじいじゃなぁ～っ」

「の、わりには仲悪そうだけどっ…」
まるで子供のような言い合いをしているクソじじい二人に、桜時が少し呆れた表情を見せる。

「まぁそりゃあしゃーないやろー、イヌとサルは犬猿の仲やねんしぃ」
「何がどうなって、しゃーねぇーんだよっ…」
軽い笑みで勝手に頷いている門貴にも、呆れた表情を向ける桜時。

「それよりっ」
『んっ？』
年寄り二人のことはもう放っておいて、急に桜時たちの方を振り返った二花に、皆が目を丸くする。

「アンタっ！」
「えっ？」
二花が力強く指差したのは、犬仁。

「アンタっ、門貴の何やっ？」
「はっ？」
二花の問いかけに、犬仁が間の抜けた表情になるまで、大きく口を開く。

「妙～に親しげに話しかけとうしぃ、さっきは二人で一緒におったしっ」
鋭い視線を、犬仁へと向ける二花。

「……っ」
そんな二花と見つめ合い、犬仁も軽く顔をしかめる。

「犬仁ちゃんはぁ～っ！俺の心のオアっ…！」
「どいてろっ」
「ぎゃあああああああっ！！」
明るい笑顔と軽い口調で言葉を発しようとした門貴が、犬仁の突き出した手により、横へと吹き飛ばされてしまう。

「貴様こそっ、あいつの何なのだっ？」
「はぁっ？」
鋭い表情で問いかけ返す犬仁に、二花の眉毛が吊り上がる。

「ウチは門貴の幼馴染みやっ！」
「何だっ、ただの幼馴染みか」
「何やとぉぉぉっっ！！？」
まるで二花を挑発するように、“ただの”という部分を強調する犬仁に、今にも飛びかかりそうな剣幕を見せる二花。
「ただはただでも幼馴染みやねんからいいやろっ！？アンタなんか、ただの他人やないかぁっ！」
「何だとっ！？幼馴染みとて他人は他人だろうがっ！！」

「ねっ姉ちゃん～っ…！」
「はぁっ…」
二人の言い争いを聞きながら、心配したような表情を見せるチョキ三郎と、どこか疲れたように深々と溜息をつく桜時。

「何やぁ～？サルとイヌは仲悪いけど、カニとイヌも仲悪いんかぁ～？」
「お前、女好きのくせに、何でそういうとこ、死ぬほど鈍いんだよっ…」
二人を見ながら不思議そうに首を傾げている門貴に、桜時がこっそりと呟く。

「して、門貴」
「んっ？」
首を傾げていた門貴が、後方から長老に呼ばれて、振り返る。
「この如意棒じゃがっ…」
「おうっ、どうやっ？どんくらいで直りそうやっ？」
真っ二つに折れた如意棒を持った長老に、門貴が興味津津に問いかける。
「それがなっ…この如っ…グボオオオウっっ！！！ゲハァっ！！ゴホォォっっ！！」
「チョキ三郎っ、薬ぃ～っ」
またしても咳込む長老に、門貴はもう動じもせずに、薬を要求する。
「ああぁ～っ、この如意棒はっ…もう直らんっ…」
「えっ…？」
『……っ』
その長老の言葉に、門貴や皆が衝撃を走らせた。
「そっそんなっ…！直らんてっ…！」
「二つを繋げることは可能じゃが、もう棒自体の金属にガタがきておる…繋げたところで、元の強度は出せまいじゃろう…」
「そんなっ…」
思わず声を荒げた二花であったが、長老の説明に、険しい表情を見せた。

「……。」

門貴が長老から如意棒を受け取り、それをまじまじと見つめる。

――――また明日もやろなっ！門貴っ！――――

この如意棒を持って、何度も会いにいった。あの、柿の木の下に。

「門貴っ…」

如意棒を見つめる門貴を、桜時が少し心配するように見る。

「……そうかっ…」

ゆっくりと頷く門貴。

「わかったっ…」

「門貴っ…！」

了承する門貴に、驚いたように目を見開く二花。

「何言っとんねんっ！如意棒はアンタにとって大切なっ…！」

「如意棒はようやってくれたっ」

「……っ」

どこか怒ったように必死に訴える二花であったが、穏やかな笑顔を見せて言い放つ門貴に、その言葉を止める。

「もうっ…眠らせたろっ…」

「門貴っ…」

そっと微笑む門貴に、二花が少し目を細める。

「新しく如意棒を作ることは可能なのか？」

桜時が長老の方を振り向き、真剣な表情で問いかける。今の如意棒は諦めるにしても、今後、武器もなく戦っていくのは、門貴にとってかなり厳しいことになるだろう。

「可能は可能じゃが、如意棒は希少な特殊合金を用いて作った棒っ…その合金がなければ、如意棒と同じくらいの強度のある棒は出来んっ…」

「合金かっ…」

「……っ」

気難しい表情を見せる桜時の横で、犬仁は少し考え込むように俯いた。

犬国の見渡せる小高い雪山の頂上、白い雪に力強く突き刺さるようにして、如意棒は眠りについた。

「うぅ～ん、なんか嫌やなぁ。俺の墓みたいっ」

「一緒に眠りについたらどうだ？」

「いっやぁ～っ！俺、寒いとこ、苦手よぉ～っ！」

後方から冷たく言い放つ犬仁に、門貴は泣きそうな表情で訴える。
「けどっ…」
「……っ？」
横から声を発する二花に、門貴が振り向く。二花は強く腕組みをし、どこか不満げな表情を見せていた。
「ホンマにこんなとこが墓でええんかっ？どうせやったら猿の村に戻って、そこでっ…」
「ええんよっ」
「えっ…？」
二花の言葉を、そっと遮る門貴。二花が少し眉をひそめる。
「あそこにこれ以上、墓増やすとっ、ホンマに帰れんくなりそうやしっ…」
「……っ」
「……っ？」
遠くを見るような瞳で笑みを浮かべ、そっと呟く門貴に、二花はハッとしたように目を開き、犬仁はその言葉の意味がわからず、首を傾げる。
「ほんなら戻ろかぁ～っ」
門貴が如意棒に背を向け、里見の屋敷へ戻るため、足早に山を下っていく。少しの間を置いた後、二花も門貴の後を追うように、歩き出そうと足を踏み出した。
「おいっ」
「……っ？」
まだ如意棒の方を向いたままの犬仁に呼び止められ、二花が踏み

出した足をその場に下ろして、振り返る。

「何やっ？」

しかめた表情で聞き返す二花。

「“一花”とは…誰だ？」

「……っ」

犬仁の口からその名が出ると、二花は驚いた様子で、大きく目を見開いた。

「なっなんでそんなこと聞くん…？」

少しの動揺を見せながら、二花が犬仁に聞き返す。

「この棒を見て…」

犬仁が、如意棒に目を落とす。

「あいつが…呼んでいたから…」

――――一花っ…――――

それは、とても悲しそうに。

「……“一花”は…」

「……っ」

俯いたまま口を開いた二花に、犬仁がゆっくりと振り返る。

「あいつが…一番、好きな人っ…」

悲しげな表情を見せ、言葉を続ける二花。

「もう…この世におらん人っ…」
「……っ」

二花の言葉に、そっと曇る犬仁の表情。

――――もうちっと、カッコつけさせてぇやっ…――――
――――あそこにこれ以上、墓増やすとっ、ホンマに帰れんくなりそうやしっ…――――

あの言葉も、悲しい笑みも、すべてはその、もうこの世にはいないという“一花”に向けられたものだったのだろう。

「……そうか」

犬仁が、ゆっくりと頷く。

「……っ」

そして、もう一度、如意棒の方を振り返った犬仁は、何かを決意したような、鋭い瞳を見せた。

第５８章　受け継がれる名　★３

「よしっ！サルっ！合金探しの旅に行くかっ！」
「アホっ」
「痛ってっ！」
門貴が里見の屋敷に戻った途端にそう言い放った桜時に、門貴のでこピンが炸裂した。真っ赤に腫れた額を、桜時が苦しい表情で押さえ込む。
「何すんだよっ！」
「お前がアホなこと、言うからやろぉ～？何が合金探しやっ、修行はどないしてんっ？修行はっ」
「そっそれはっ…」
鋭く問いかける門貴に、思わず口ごもる桜時。
「天下無敵の桃タローに、“あんたより強くなる”って言いくさったくせに、速効投げ出す気かぁ～？」
「投げ出す気はねぇーよっ！けどっ…！」
桜時が真剣な表情を、門貴へと向ける。
「お前っ、武器がなきゃっ、修行も何もっ…」
「だぁ～い丈夫やってっ！」
門貴を心配する桜時に、安心させるような大きな笑顔を見せる門貴。

「如意棒がなくってもっ、俺にはこの熱いハートがあるんやしぃっ！」
「犬礼、すぐに特殊合金のありそうなとこ、調べてくれねぇーか？」
「聞けいっ！！」
輝く笑顔で言い放った門貴をあっさりと無視して、桜時が本を読んでいた犬礼に依頼をする。

「だっから大丈夫やゆうとうやろぉっ！？お前はお前の修行しとけばええねんっ！」
「お前一人に任せといたら、ロクなことになんねぇーだろうがっ！！」
互いを思い合っての言葉だったはずが、徐々に言い合いになっていく桜時と門貴。

「だいたいお前はなぁっ…！」
「お前がそうやからやなぁっ…！」
「おいっ」
『……っ』

二人の言い合いがさらに激しくなりそうになったその時、割って入った声に、二人の言葉が止まった。二人が振り向くと、そこには犬仁が立っていた。

「ちょっと来いっ」
『……っ？』

門貴へ向けて、屋敷の中の方を指差す犬仁に、桜時と門貴は首を傾げた。

犬仁に案内され、桜時と門貴、そして二花たちは、屋敷の奥間へとやって来た。

『ふわぁぁぁぁ～～っ……』

思わず声を出す皆。広い畳の部屋の奥、一段上の床の間に祀るように立てられているのは、一本の美しい槍であった。先端の透き通るような刃と、持ち手の青色が、何とも綺麗で、とても人の作ったものとは思えない。どこか神秘的な力を感じる、そんな槍であった。

「この槍は？」

「代々、“犬仁”の名を継いだ者が、使ってきた槍です」

問いかけた桜時に、犬仁が答える。

「“要仁槍（ようじんそう）”といいます」

「要仁槍っ…」

その槍の名を呟き、どこか感慨深げに槍を見つめる桜時。

「今はもう採れない、御伽界最大の強度を誇った鉱石で出来ています」

犬仁が説明を続ける。

「年代ものではありますが、今もその強度は十分にあるかと」

「爺サルっ」

「うむっ」

桜時に呼びかけられ、皆の後方にいた長老が前へと出ると、ゆっくりとその槍に手を触れた。

「うむっ…」
皆が見つめる中、深々と頷く長老。
「どっどうだっ…？」
桜時が、長老に恐る恐る問いかける。
「グボオオオウっっ！！！ゲハァっ！！ゴホォォっっ！！」
「もういいわぁっ！！」
緊張感高まるムードも台無しにする長老の咳に、全力で突っ込みを入れる桜時。
「ゲホゲホっ、申し分ない。これなら如意棒以上に強い棒を作れるやも知れんっ」
「ホントかっ！？」
「ああっ、ゲホゲホっ」
咳込みながらの長老の言葉に、桜時が嬉しそうな表情を見せる。
「だってさっ！良かったなぁっ！門貴っ！」
「けっけどっ」
嬉々として振り向いた桜時に、門貴が少し困ったように言う。
「これ、代々の犬仁が受け継いできた槍なんやろぉ～？」
「大事ない。私にはこの白槍がある」
困惑したように問いかける門貴に、犬仁が持っている白槍を見せて、強きに言い放つ。
「じゃあお前の後の“犬仁”はどないすんねんっ？」
「……。」
「考えてなかったやろ…」
冷静な表情のまま固まる犬仁に、少し呆れた表情を見せる門貴。

「そっれにあの犬の爺さんが、俺みたいなサルに自分とこの武器なんてくれるはずっ…」
「八房様の許可なら、もう取った」
「ええぇっ!?まじでぇっ!?」
「じじいがっ…」
大きく驚く門貴の横で、桜時も少し意外そうな顔を見せる。

「ともかくっ…」
一息ついた犬仁が、飾られていたその要仁槍を手に取る。

「この槍はその名の通り、“仁”を要する槍…」
「仁っ…」

要仁槍を持った犬仁が、ゆっくりと門貴の前へと立つ。少し戸惑いながら、その目の前に突き出された美しい槍を見つめる門貴。

「貴様が“仁”を持って戦っていくというのなら、先代までの犬仁も、これからの犬仁も、文句は言うまい」
「……っ」

犬仁のまっすぐな瞳を、門貴もまっすぐに見つめ返す。

「受け取れっ」
犬仁から差し出される要仁槍。

「……おうっ!」

門貴は笑みを浮かべ、しっかりとそれを受け取った。

『……っ』
その様子を見て、桜時やチョキ三郎たちが笑みを浮かべる。
「良かったなっ！門貴っ！」
「おうっ！」
桜時が呼びかけると、門貴も嬉しそうな笑みを浮かべて、それに答えた。

「ホンマにありがとうなぁ～っ！犬仁っ！」
「うえぇっ！？」
満面の笑顔で振り向く門貴に、犬仁がその顔を真っ赤にする。
「恩に着るでぇ～っ！もうついでに恋にも落ちちゃうっ！」
「こっ恋っ！！？」
門貴の軽口に、大げさなまでの反応を示す犬仁。

「だっだだだだだ誰が、こっこここここ恋になどっ…！」
「フォーリンラァァァーブっ！」
「ぎゃあああああっ！！それ以上っ、軽口を叩くなぁぁぁっっ！！」
尋常ではないくらい声の震えた、真っ赤な顔の犬仁と、陽気な笑顔全開の門貴の言い合いが続く。

「あぁ～あっ、何やってんだかっ」
「むぅぅぅぅぅ～～～っっ」
「ねっ姉ちゃんっ…？」
呆れたように肩を落とす桜時の横で、どんどんと機嫌の悪くなっていく二花。姉の醸し出す負のオーラに、チョキ三郎がどこか不安げな表情を見せる。

「どへりゃあああああああああっっ！！」
「どわぁ～あっ！」
いきなりよくわからない寄生をあげて、門貴と犬仁の間に割り込む二花に、門貴が驚いた表情を見せる。
「何やぁ～？」
戸惑うように、二花を見る門貴。
「二花ぁ～、お前っ、ついに野生の血が目覚めたかっ？」
「ちゃうわっ！！」
門貴の言葉を、怒りの表情を見せた二花が、全力で否定する。
「こぉぉ～～んな真っ赤な他人の槍使うくらいやったらなぁっ！」
「真っ赤な他人っ？」
二花の言葉に、思わず顔をしかめる犬仁。
「ウチの大バサミ使いっ！ほれっ！」
「ほれって、お前なぁ～っ」
大バサミを差し出してくる二花に、門貴が困ったように頭を掻く。
「愚かなものだな、カニ」
「何やとぉぉぉ～～っ…？」
後ろから聞こえてくる挑発するようなその声に、二花がさらに表情を歪ませて、ゆっくりと振り返る。
「よく考えろ」
腕組みをした犬仁が、二花に冷たい瞳を向ける。
「大バサミから棒を作るより、槍から棒を作る方が簡単だろうが」
「フハっ！！」
犬仁の指摘に、強く衝撃を受ける二花。

「っつーかそういう問題かっ…？」
「はぁぁぁ～～っ」
呆れきった表情でこっそりと突っ込む桜時の横で、チョキ三郎が何とも重そうに頭を抱える。

「んなもん、心意気でどうにかなるわぁいっ！大事なんは、ハートやっ！ハートっ！」
自分の左胸を差し、二花が熱弁を続ける。
「この大バサミにはなぁ～っ、ウチの思いが嫌っちゅーほど、詰まっとんねんっ！！」
「そんな重いものが詰まっていたら、ロクに振るえんな」
「何やとぉぉぉぉっっ！！？」
どんどんと加速していく二花と犬仁の言い争い。
「だいたいアンタっ！真っ赤な他人のくせしてぇっ…！！」
「何だ？ただの幼馴染み」
「きぃぃぃぃえぇぇぇ～～っっ！！」

「ほんなら長老っ、早速頼めるかぁ？」
「うむっ」
言い争っている二花と犬仁を無視して、槍を持った門貴と長老が、打ち合わせをしながら部屋を出ていく。

『はぁっ…』
部屋に残った桜時とチョキ三郎が、深々と溜息をつく。

「武器が見つかったのは良かったですけどっ…」
「むしろこの状況っ…どうにかしてくれって感じだよな…」

「だいたいアンタはなぁっ…！！」

「貴様のそういうところがだなぁっ…！！」

二花と犬仁の言い争いは、その後、日が暮れるまで続いた。

その日・夜。

「ふぅ～っ」

皆が寝静まった頃、里見の屋敷の縁側に座り、明るく輝く月を見上げている長老。その手元には、門貴から預かった要仁槍が握られていた。

「じじいはもう寝る時間じゃぞ？」

「……っ」

後方から聞こえてくる声に、長老がゆっくりと振り返る。奥の部屋から出てきたのは、八房であった。八房が長老の元へと、歩み寄ってくる。

「お前もじじいのくせに夜更かしじゃのぉ～もしやもう起床か？」

「フンっ」

長老の悪態に悪態を返しながら、八房が長老の横へと腰掛ける。

「……っ」

ふと、長老の握っている美しい槍に、目を落とす八房。

「珍しいのぅ」

「何っ…？」
長老の言葉に、八房が少し眉をひそめる。
「お前さんが、我らサルに武器を譲るなどっ」
どこか試すように言い放つ長老に、八房が顔をしかめる。犬と猿は犬猿の仲の一族。その犬の長たる八房が、猿である門貴に武器を譲るなど、普通は考えられないことなのであった。
「それは…」
「ほっほっほっ！さすがのお前も、孫の可愛さには勝てんかったかぁっ」
「誰がじゃいっ！」
からかうように言う長老に、八房が少しムキになって怒鳴り返す。
「なぁ～にっ…」
八房がそっぽを向き、少し口元を緩める。
「あやつらを見てっ…」
――――良かったなっ！門貴っ！――――
――――おうっ！――――
「昔のわしらを思い出しただけじゃよっ」
「ほっほっほっ！門貴よりわしの方が、だいぶ男前じゃがなぁ～っ！」
八房の言葉を聞いた長老が、高々と笑い声をあげる。
「さてとっ」
「……っ？」

ゆっくりとその場で立ち上がる長老。

「やるのか？」

「うむっ、出来るだけ早く、あやつに渡してやりたいからのぅ」

右手に要仁槍を持ち、長老がどこからか鍛冶用の大きな金槌を取り出す。

――――ボォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

白い煙の中に、包まれていく老ザル。

「さてっ…！うっ…！グボオオオウっっ！！！ゲハァっ！！ゴホォォっっ！！」

「お前…若い頃から咳込んでたわりに長生きじゃのぅ…」

咳込むその人影を見て、八房はどこか呆れたように言い放った。

翌日。

「うえぇぇぇっ！？もう出来たんっ！？」

「うむっ」

驚く門貴に、しっかりと頷く長老。長老の話によると、昨日、預けた要仁槍が、もう棒として出来上がったらしい。

「えっらい早いなぁ～っ」
「手抜き作業したんじゃねぇーのかぁ？」
「それはこれを見てからっ…！うっ！グボオオオウっっ！！！ゲハァっ！！ゴホォォっっ！！」
「ああっ！長老様ぁぁっ！昨夜の無茶がたたってぇ～っ！」
『……。』

咳込む長老に、水と薬を持って駆け寄るチョキ三郎。相変わらずのこのパターンに、桜時と門貴はすでに突っ込む気にもなれなかった。

「これじゃっ」
「ああっ…わしが見せたかったのにっ…」
長老が咳込んでいるうちに、横から出てきた八房が、あっさりと布に包まれた、長い棒状のものを、門貴に投げ渡す。その光景に、少し悲しそうな表情を見せる長老。

「ふぅ～んっ、どれどれぇ～」
門貴が受け取ったそれの、布を取り去る。

――――バサァっ…！――――

地面へと落ちる、白色の布。

「……っ！」

布の下から現れたものに、門貴が大きく目を見開く。

「こっこれはっ…」

それは、赤色の輝く美しい、一本の棒。槍であった時の刃の部分は取り外され、両端には金色の丸い装飾が施されている。日の光に照り返るその棒は、年代ものということなどまったく感じさせないくらいに綺麗であったが、槍の頃から持っていた神秘的な空気は、そのままに受け継いでいた。

「へぇ～赤くしたのかっ」
「うむっ」
感心したように声を出す桜時に、長老がしっかりと頷く。槍であった時、その持ち手部分は、鮮やかな青色であった。しかし今は、真逆の赤色。

「やはりお前には、落ち着いた青よりも、熱い赤が似合うっ…」

長老が、ゆっくりと門貴の方を見る。

「門貴っ」
「長老っ…」

優しく微笑む長老に、そっと目を細める門貴。

「そぉやなぁ～っ！俺ってば熱っい男やもんなぁ～っ！」
「まぁ色んな意味でな」
調子良く笑う門貴に、横から桜時がこっそりと呟く。

「ちょっと振ってみぃやっ、門貴っ」
「おうっ」

二花に言われ、門貴が笑顔で頷く。

「……っ」

門貴がその瞳を鋭くし、出来上がったばかりの棒を構える。

「よっ！」

素早く右手を動かし、棒を軽々と数回回して、前後左右に突き出す門貴。

「……っ」

棒を振っていた門貴が、少し驚いたような顔を見せる。その棒は、しっかりしているのにまるで重みを感じず、門貴の右手に吸いつくように合っていた。門貴が持つためにあったのではないかと、そんな錯覚に陥ってしまいそうなくらいに、しっくりきた。

「凄げぇっ…」

門貴が棒を掲げ、思わず嬉しそうな笑みを零す。

『……っ』

そんな門貴の様子を見て、皆も笑みを零した。

「んでぇっ?その棒、名前はどうすんだっ?」

「ふへぇっ?名前っ?」

桜時の急な問いかけに、振り返った門貴が、少し困ったような表情を見せる。

「名前っ…名前かぁ～」

首を捻り、深く考え込む門貴。

「元の槍の名前っ、何やっけ？」
「“要仁槍”だっ！貴様っ、私の言ったこと、まるで聞いてなかっただろうっ？」

名前の意味まで話して託したというのに、すでにその名前すら覚えていない門貴に、犬仁が怒ったように表情をしかめる。

「要仁槍かぁっ…じゃあぁ～棒になったからぁ～“要仁棒”っ？」
『よぉーじんぼぉーっ？』
門貴の口にした名を、皆が声を揃えて繰り返す。

「って、用心棒かよっ」
「いいんじゃないですかぁ～？何か守ってくれそうだしぃ～」
「あかんっ！！」
「へっ？」
適当に頷いていたチョキ三郎が、横から聞こえてくる強い否定の言葉に、目を丸くして振り向く。

「んなゴッツい名前あかんっ！！ダサ過ぎるっ！！」
そう言い放つのは、しっかりと腕組みをした二花。
「別に姉ちゃんが持つわけやないんやし、ええんじゃっ…」
「ああっ！？」
「ひぃっ！」
二花に強く睨まれ、震え上がったチョキ三郎が言葉を止める。

「とにかくあかんもんはあかんでぇっ！！門貴っ！！」
「ええぇ～っ？」
断固として言い張る二花に、門貴がさらに困った表情となる。

「そんなん言うなら、お前考えろや～」

「えっ？ウチがっ？」
門貴の言葉に、二花が目を丸くする。
「じゃっじゃあっ」
少し頬を赤く染めて、顔を上げる二花。
「にっ“二花羅武（にからぶ）ぼっ…！」
「却下っ」
「何でアンタが決めんねんっ！！」
二花が言い終わらないうちに、意見を取り下げる犬仁に、二花が勢いよく怒鳴りあげる。
「貴様もさっき、“要仁棒”を却下しただろうが」
「それはそうやけどやなぁっ…！」
「うぅ～んっ…」
二人を包む空気がまたもや険悪になっていくすぐ横で、首を捻りながら、必死に名前を考え続ける門貴。
「“輝矢ん命☆剣”とかっ！」
「本人に言ったら殺されるぞっ…？」
「しかも棒じゃないですしっ…」
門貴の意見に、呆れきった表情で、口々に意見を述べる桜時とチョキ三郎。
「うぅ～んっ…じゃ～あぁ～っ…」
「“如意棒”で良かろう」

「へっ？」

聞こえてくる声に、門貴が目を丸くして、顔を上げる。門貴が顔を上げたその先には、いつもの仏頂面を見せた八房が立っていた。

「けっけどっ…」

門貴が少し戸惑うように、八房を見る。

「何言ってんだよっ、じじいっ！それじゃあ前と同じっ…！」

「門貴」

『……っ』

八房に意見しようとした桜時の言葉を遮り、長老がそっと門貴の名を呼ぶ。その声に、門貴と桜時が同時に長老の方を振り返る。

「武器はな、人と同じで、一つとして同じものはない…」

「えっ…？」

いつになく真剣な表情で、咳込むことなく話す長老に、少し眉をひそめる門貴。

「じゃが、人と同じで、違うものに同じ名が付くことがある…」

「……っ？」

長老の言わんとしていることが理解出来ず、門貴が困惑したような表情を見せる。

「長老っ、何をっ…」

「そして名は、意志を継ぐ…」

聞き返そうとした門貴の言葉を遮り、言い放つ長老。

「八犬士の長“犬孝”の名が、その意志を継ぐように…」

「……っ」

長老の言葉に、ハッとした表情を見せる桜時。桜時の横では、“犬仁”の名を継いだ犬仁も、どこか感慨深いといった表情を見せていた。

「その棒に“如意棒”と名付ければ、そやつは“如意棒”の意志を継ぐじゃろう…」

「如意棒の…意志っ…？」

「ああっ」

戸惑うように聞き返した門貴に、長老が穏やかな笑みを浮かべて、しっかりと頷く。

「お前の武器としての意志じゃっ」

「……っ」

強く言い放つ長老に、何かを受けとめるように目を見開く門貴。

「……。」

門貴が自分の手に握られたその如意棒を見つめ、そして、きつく握り締めた。

「お前の名はっ…“如意棒”っ…！」

そう言って門貴が、棒を掲げる。

「俺の武器っ…！如意棒やっ！」

『……っ』

声を張り上げ、その名の付いたばかりの如意棒を掲げる門貴を見て、皆が笑みを零した。

「あっ、でもやっぱ、わかりにくいから、“如意棒パートセカンド”にしょっかなぁ～」

「呼びにくいわっ！」

如意棒を下ろし、少し迷うように首を傾げる門貴に、桜時が勢いよく突っ込みを入れる。

「ううっ…！グボオオオウっっ！！！ゲハァっ！！ゴホォォっっ！！！」

「長老様っ…！！」

「あっ、ついにきたか」

「長老にしては珍しく、めっちゃペラペラしゃべっとったもんなぁ～」

ついに咳込みだした長老を、特に心配することなく、冷静に分析する桜時と門貴。

「門貴っ」

「おうっ！」

笑顔で呼びかけた桜時に、門貴がしっかりと頷く。

「やっと、俺の修行の始まりやっ！」

溢れんばかりの笑顔を見せた門貴が、高々と如意棒を振り上げた。

第５９章　受け継がれる羽　☆１

御伽界一幸せな街、“幸ノ街”。
その入口に立ち、街全体を見渡すのは、由雉。

「はぁっ…」
「結婚してくれぇぇっ！！花子ぉぉぉっっ！！」
「きゃあああああっっ！！私、幸せよぉぉっ！！一郎さぁぁ～～んっ！！」
「僕も幸せだぁぁっ！！花子ぉぉぉぉっっ！！」

「……。」
街に入った途端に見えるのは、幸せオーラを振りまきまくっているカップル。由雉がそのカップルを見つめ、思わず固まってしまう。

「ああダメだっ、しばらく離れてたせいで免疫がっ…」
少し困ったように、頭を押さえる由雉。ここ、幸ノ街は、“幸力”を持つコウノトリの獣人たちが住みついており、街人はもちろん、行き交う犬や猫まで、皆、幸せオーラを出しているのである。

「はぁっ…とりあえず家にっ…」
「由雉っ！」
「……っ？」
足を踏み出そうとした由雉が、前方から聞こえてくる声に顔を上げる。

「由雉っ！！」

「ミチル…さんっ…？」

由雉が顔を上げたその先に立っていたその人物は、由雉の養母・ミチルであった。久々に会う母に、由雉が目を丸くする。

「良かったぁ～っ！そろそろかと思って迎えに来たのぉ～っ！」

「あっ！そんなに走ったらっ…！」

とても嬉しそうな笑顔を浮かべて、由雉の方へと駆け込んでくるミチルに、由雉が少し焦ったように右手を伸ばす。

「私にしてはタイミング良くっ…！」

――――ツルっ…！――――

「あらっ？」

駆けていたミチルの足元に、奇跡的に落ちているバナナの皮。バナナの皮を踏み、気持ちよく滑ったミチルの体が、傾いていく。

「あららっ？あららぁ～っ？」

傾いていくミチルの後方に、何でか都合よく広がっている池。

「あぁぁ～～らぁぁ～～っ！」

――――ザッパァァァァァァーーーーンっ！――――

「……。」

勢いよく池へと落ちるミチルに、呆然とした表情を見せる由雉。

「はぁっ…」

由雉は頭を抱え、深々と溜息をついた。

「相変わらずの不幸っぷりだね」

「今日、蟹座十位だったからっ」

呆れ果てた表情で言い放った由雉に、ミチルは特にけなされたとは思っておらず、満面の笑みで答える。

「ごめんなさいね～由雉っ、来て早々、ズブ濡れにしちゃって」

「いいよ…もう…」

池にはまったミチルを助けて、自分も池の中に入ったため、由雉は里帰りして早々、ズブ濡れの姿となって家へと戻ることになった。

「……っ」

水に濡れた上着を脱いだ由雉の首元から覗く、痛々しく巻かれた包帯。それを見つけたミチルが、少し表情を曇らせる。

「ミチルさん？どうかした？」

「えっ？」

振り返り、問いかける由雉に、慌てて顔を上げ、笑みを作るミチル。

「どうもしないわよ？」

「そう？」

そんな会話をしながら、互いにズブ濡れの由雉とミチルが、街の

はずれにある二人の家へと帰り着く。

「ふぅぅぅ～っ、やっと着いたっ」

少し肩を落として、玄関の扉を開ける由雉。

「とりあえずちょっと休っ…うっ…！」

扉が開け放たれた途端、由雉の表情が激しく引きつられる。

「なっ何っ…？これっ…」

目の前に広がっていたのは、悲惨な光景であった。割れた皿や、食べ物だったであろうものの残骸が、床の至るところに落ちている。泥棒が入った後でも、もう少し綺麗であろう。それくらい家の中は、散乱しきっていた。

「由雉が帰ってくるっていうからねっ、張り切って御馳走を作ろうと思ったの」

唖然と立ち尽くしている由雉に、ミチルが横から笑顔で話しかける。

「そしたらこんな風にっ」

「どうなったら、こうなるわけ…？」

引きつった表情で、思わず問いかける由雉。

「はぁっ…」

本日二回目の深い溜息をつく、由雉であった。

「まったくっ…」
とりあえずズブ濡れの体を拭き、着替えた由雉は、休むことなく、散乱した家の掃除をし始めた。床に落ちている物をホウキで掃きながら、疲れたように肩を落とす。

「ボクがいない間、どうやって生きてんだろっ…」
「きゃあああああああっ！！」
「……。」

言ってるそばから聞こえてくる悲鳴に、由雉がホウキを掃く手を止め、またも頭を抱える。

「今度は何したわけっ？」
「ああ、由雉っ」
由雉が台所へ入ると、床に転がっているミチルが、顔を上げて微笑んだ。

「ご飯を炊こうと思ったら、炊飯器が爆発してっ、それでびっくりしたら腰が抜けちゃって」
「……。」

黒い煙を吹いている炊飯器と、笑顔で腰を抜かしているミチルを見て、由雉がその整った表情を一気に歪ませる。

「どうしましょ～？これじゃあご飯がっ」

「ボク、パンの方が好きだし…」

「あっ、ホントっ！？」

困った顔をするミチルに、由雉がポツリと呟くと、ミチルはとても嬉しそうな笑顔を見せた。

「はぁっ…」

その笑顔に力を抜かれるように、由雉は深々と溜息をついた。

「とりあえず粗方片付けたから、ボクもご飯作り手伝うよっ」

「ありがとう」

由雉が、床に座り込んでいるミチルに手を貸し、ミチルが立ち上がる。

「ふぅっ」

とりあえず煙を吹いている炊飯器の前へと立ち、どうしたものかと首を傾ける由雉。

「んっ…？」

そんな由雉の服の中から、何かが落ち、ミチルがそれに気付いて、手を伸ばす。

「あっ…」

ミチルが拾ったのは、真っ赤な血の染みついた青い羽根であった。その血が誰のものなのか、包帯を巻いた由雉を見れば、容易に想像

がつく。ミチルの表情が再び曇った。

「ねぇ、ミチルさん」
「えっ…！？」
突然、振り返る由雉に、慌ててその羽根を背中に回して隠す由雉。

「なっ何っ？」
「……っ？」
誤魔化すような笑みを浮かべるミチルに不自然さを感じ、由雉が少し眉をひそめる。

「ミチルさん、どうかしっ…」
「ハロォォ～っ！！マイソォォ～～ンっっ！！」
『……っ』

その時、玄関の扉が勢いよく開き、妙に響き渡る陽気な声が聞こえてきた。

「げっ」
「ハヤテさんっ」
「会いたかったよぉぉ～～っ！マイソンっ！元気だったかぁぁ～いっ？」

大きく両手を広げながら、台所へとやって来たのは、白いスーツの金髪男。いかにもお金持ちそうなオーラの出た陽気なこの男、ミチルの結婚相手にして、由雉の義父のハヤテである。軽さ全開のハヤテではあるが、こう見えて、由雉の武器・色羽を開発し、御伽界で初めて羽根事業を展開した凄い男なのである。

「そっちも元気そうだね…」

「あぁ～っ！元気も元気っ！マイソンに会ったら、さらに元気になったよぉ～っ！」

少し引きつった表情で呟いた由雉に、本当に嬉しそうな笑顔を見せるハヤテ。

「いっやぁ～っ！大事な得意先との打ち合わせをサボってまで会いに来た甲斐があったよぉぉ～～っ！！」

「帰れぇぇぇぇっ！！」

笑顔で言い放つハヤテに、由雉は思わず怒鳴りあげた。

第５９章　受け継がれる羽　☆２

一時間後。幸ノ街内・ハヤテの店『羽根屋』。

「いっやぁ～っ！悪いねぇ～マイソンっ！」

大きく右手を挙げ、陽気な笑顔でそう言う、この店の店主・ハヤテ。

「幸之助クンが今、丁度、田舎に帰っちゃってるものでねぇ～っ」

「その状況でよく、店ほっぽり出して、ウチとか来るよね…」

笑顔で話を続けるハヤテに呆れきった表情を向けながら、由雉が店の中を動き回り、手際よく商品の羽根を並べていく。

「当ったり前じゃないかぁ～いっ！僕にとって、マイソン以上に大切なものはないんだよぉ～っ！？」

「ハイハイっ…」

熱く述べるハヤテを、軽くあしらう由雉。

「まぁミチルさんの方は、幸コに来てもらったから大丈夫だと思うけどっ…」

「羽根よりもぉ～由雉命のハネキングぅ～っ」

「一応、ボク、その羽根で戦ってるんだけどっ」

ハヤテが俳句を読むような口調で話すと、由雉がすかさず突っ込みを入れた。

「わかってるさっ！マイソンが僕の羽根で、世界を救ってくれたら、僕はもう鼻高々だよっ！」

「……っ」

ハヤテの笑みに、思わず眉をひそめる由雉。

――――弱い羽根だなっ……――――

「……。」

思い出される黒羽の言葉に、由雉はどこか落ち込むように俯く。

「……っ」

そんな由雉を見つめ、ハヤテがそっと目を細める。

「マイソン…」

「……っ？」

ハヤテに呼ばれ、由雉がゆっくりと顔を上げる。

「何か話があるから…戻ってきたんじゃないのかいっ？」

「えっ…？」

ハヤテの言葉に、少し戸惑ったような表情を見せる由雉。

「そっそれはっ…」

由雉が、ハヤテから目を逸らす。

――――ボクの…羽根っ……――――

由雉は負けた。ハヤテの羽根で、負けてしまったのだ。その敗北に、どこか後ろめたさを感じて、由雉がハヤテの方を見ないまま俯く。

「それはっ…」

出したい言葉が、なかなか口から出ていかない。

「心配していたよ」

「えっ…？」
「ミチルが…」
「あっ…」

優しい笑みを浮かべたハヤテが、そう言って由雉の前に差し出したのは、血の染み込んだ、由雉の青い羽根であった。黒羽との戦いの時のものが、ポケットにでも入っていたのだろう。

――――ミチルさん？――――
――――えっ…！？――――

これを見つけたから、ミチルの態度は、少しおかしかったのかも知れない。

「その包帯の傷も、とても心配していた」
「……っ」

ハヤテに指差され、由雉がハッとした表情で、首元を押さえる。服で隠したつもりだったが、気付かれてしまっていたようだ。

「……。」

由雉がハヤテから羽根を受け取り、そっと目を細める。

「何だっ…バレてたんだっ…」
「親に隠し事なんて、無駄な行為だよ？マイソン」
「……。」

微笑むハヤテに、由雉が少しバツが悪そうに俯く。

「隠すつもりとかなかったんだけどっ、心配っ…かけたくなくって…」

「それは無理だ。親というものは、放っておいても心配する生き物だからねぇ～」
「……っ」
すべてをわかっているような口振りで話すハヤテに、由雉が面白くなさそうに顔をしかめる。
「何だよっ、母親というものを持ち合わせていなかったって言うわりに、随分と知ったような口っ…」
「わかるよっ」
「えっ？」
由雉の言葉を遮り、微笑むハヤテ。
「“父親”…だからねっ」
「……っ！」
ハヤテのその言葉に、由雉が大きく目を見開き、思わず頬を赤く染める。
「なっ…！何言ってっ…！」
「おやぁ～っ？照れてるのかぁ～いっ？マイソンっ！」
「誰がじゃあああっ！！」
からかうように問いかけてくるハヤテに、由雉は勢いよく怒鳴り返した。
「……っ」
怒鳴っていた由雉が、少し気持ちを落ち着かせ、ハヤテから顔を逸らして、そっと俯く。

「ボクっ…負けたんだっ…」
「……っ」

由雉の落とした言葉に、そっと眉をひそめるハヤテ。

「ウルシって人が作った羽根に…ウルシって人の息子だってゆー奴にっ…」
「ウルシ…」
その名に、ハヤテが表情を曇らせる。

「あんたの…羽根で…」
「マイソン…」

どこか申し訳なさそうな表情を見せる由雉に、ハヤテが目を細める。由雉は、自分が負けたことよりも、ハヤテの羽根を使って負けてしまったことを悔いている、そんな様子であった。

「ウルシか…息子クンの方も何回が会ったことがある」
「えっ？黒羽にっ？」
「うんっ、彼がずぅ～っと小さい時だけどねぇ」
目を丸くして問いかける由雉に、ハヤテは穏やかな笑顔で頷いた。

「あっあのっ…」
少し躊躇うように、言葉を発する由雉。

「そのっ、あんたとウルシって人はっ…そのっ…」
「ウルシは僕の兄弟子でねぇ」
「……っ」
由雉が問いかけきる前に、ハヤテは自ら、自分とウルシという人

物のことを話し始めた。

「兄弟子っ…？」

「うん、同じ師のもとで、羽根作りを習っていたんだよ」

聞き返した由雉に、ハヤテが笑顔を見せる。

「師が忙しい人ということもあったから、羽根作りの基本は、すべてウルシに教えてもらった…」

少し遠い目を見せる、ハヤテ。

「僕のもう一人の師とも呼べる人だよ」

「……っ」

懐かしげに微笑むハヤテを見ながら、由雉が少し目を細める。

「そして僕ら二人は、次々と羽根を作り出していった…互いに、いつの間にか、師を越えるほどの技術を身につけていった…」

続く話を、由雉は黙ったまま、しっかりと聞く。

「でもねぇ、彼の羽根と、僕の羽根には、“違い”があったんだよ…」

「えっ…？」

少し低くなったハヤテの声に、眉をひそめる由雉。

「違い…？」

「うんっ、小さな…だけど確かな違い…」

ハヤテの表情が、不意に真剣なものとなる。

「その頃、丁度、鬼人が出始めたっていうのもあって、僕は“人を

守るため”の羽根を作った。でも彼は…」
「“人を傷つける”羽根を、作った…？」
「うんっ…」

ハヤテが、少し悲しそうな瞳で頷く。

「彼は“鬼を倒すためだ”と主張していたけど、その羽根はあまりに強力で、使った人さえ傷つけたんだ…」

――――ウルシさんっ…！！これ以上はっ…！！――――

――――うるさいっ！俺に指図をするなっ！！――――

「必死に止めたけど、僕が止めれば止めるほど…ウルシは変わっていった…」
「……。」

辛そうな、悲しそうな表情を見せるハヤテは初めてで、由雉はただ黙って、まっすぐにハヤテを見つめた。

「そして世界は僕の羽根を選び、ウルシの羽根を否定した…」
「……っ」

由雉が少し辛そうに俯く。

「それからすぐにウルシは僕の前から姿を消して、それ以来、ずっと会ってないけどねぇ」
ハヤテが、由雉の方を見る。
「あっ…」
――――父は死んだ…最期までハヤテと世界を憎んで…――――
由雉の脳裏を過ぎる、黒羽の言葉。
「あのっ…えっと…」
ウルシの死を伝えようとするが、なかなか言葉が前に出なかった。
ウルシの死を知れば、ハヤテは悲しむ。それがわかりきっていたから。
「えっとっ…」
「もう、会えないしね…」
「えっ…？」
ハヤテの言葉に、由雉は驚いたように顔を上げる。
「なっなんでっ…」
「マイソンの顔を見てればわかるよぉ～っ、マイソン、単純だしぃ～」
「あんたに言われたくないわぁぁっ！！」
冗談っぽく微笑むハヤテに、勢いよく怒鳴り返す由雉。

「死んじゃったんだねっ…ウルシ…」
「あっ…」
ふと、悲しげな笑みを浮かべるハヤテ。何と声をかけていいのかもわからず、由雉は少し申し訳なさそうに下を向いた。
「それでぇ～？負けて傷ついたマイソンは、パパに慰めてもらいに来たってことかなぁ～っ？」
「違ぁぁぁーうっ！！」
急に陽気な笑顔となるハヤテに、俯いていた由雉が、再び強く怒鳴りあげる。
「ボクはっ、そのっ、新しい羽根を作ってほしくてっ…」
「ああぁ～っ！いいともぉ～っ！ウルシの羽根に負けない、超～強力な羽根を作ってあげるよぉっ！」
「えっ？」
勢いよく声をあげるハヤテに、由雉が眉をひそめる。
「パパにすぅ～べて任せておきなさいっ！」
「簡単に言うなっ！」
「へぇっ？」
「……っ」
不思議そうに振り向いたハヤテに、由雉が少し表情を曇らせる。
「黒羽が言ってたんだっ…これは“鬼の羽根”だって…」
「鬼っ…？」
由雉の言葉に、ハヤテが眉をひそめる。
「ウルシは鬼の力を使って羽根を…」

「うん…たぶんっ…」
表情を曇らせ、呟くハヤテに、由雉がそっと頷く。禁断の力に手を出して、それでもウルシは、ハヤテの羽根を越えて、世界に認めてもらいたかったのだろう。

「鬼の羽根か…それは確かに強力だねぇっ…」
ハヤテが少し困ったように、頭を掻く。

「僕にそれと同等、いや、さらに上のものを作れるかどうか…」
いつになく真剣な表情を見せるハヤテ。

「まぁでも、大丈夫っ」
「えっ？」
「……っ」
戸惑うように顔を上げた由雉に、ハヤテは優しく微笑みかける。

「人の力は、鬼の力より強い」
「……っ」
ハヤテの言葉に、少しハッとした表情を見せる由雉。

「人の力は、鬼の力に負けはしないよっ」
「……。」
由雉が、ハヤテの笑顔をまっすぐに見つめる。

「それは君がよく知っているだろう…？由雉っ…」
ハヤテが由雉の方へと手を伸ばす。

「“鬼の羽根”にだって、ウルシの作った羽根にだって、決して負けはしないよっ」

ハヤテの温かな手が、由雉の頭を撫でる。

「だから絶対、マイソンは黒羽クンの鬼の羽根に勝てるっ」

「……っ」

ハヤテの微笑みに、眉をひそめる由雉。

「……何か違うっ…」

「へっ？」

「やっぱ何か違うっ…」

「はいっ…？」

いつも落ち着いている由雉が、思い立ったように急に叫んだので、ハヤテがかなり驚いた様子で、大きく口を開いたまま固まる。

「マイソン、せぇ～っかくパパが人類の素晴らしさについて熱く語ってるって言うのにぃっ…」

「人類とかは正直っ、どうでもいいっ！」

「えっ…？」

「あっ…」

少し不審がるように眉を引きつったハヤテに、由雉がやっと我に返って、口を押さえる。

「ちっ違う…んだっ…」

声を落ち着かせて、改めて否定する由雉。

「そのっ…ウルシと黒羽がどうとか、鬼の羽根がどうこうの問題じ

ゃなくてっ…いやまぁっ、そりゃ気にはなるけどっ…」
自分でも少し混乱しながら、由雉が言葉を繋げる。
「でもっ…そうじゃなくてっ…」
一番、引っ掛かっていることは、黒羽がウルシの息子であることでも、ウルシがハヤテの兄弟子であったことでも、ウルシの羽根が鬼の力を使ったものであるということでもない。
――――この程度かっ…？ハヤテの羽根は…――――
一番、引っ掛かっているのは、あの言葉。
「ボクはっ…黒羽にも鬼にも…負けたくないんだっ…」
俯いたまま、少し震えた声を発する由雉。
「誰にも負けたくないっ…」
「まぁマイソンが可愛い顔して、負けず嫌いなのは、パパもよく知っ…！」
「違うっ…！」
「……っ」
軽い口調のハヤテの言葉を遮り、由雉が勢いよく顔を上げる。
「あんたの作った羽根だからっ…！負けたくないんだよっ…！！」
「……っ」
まっすぐな瞳を見せ、声を張り上げる由雉に、ハヤテが驚いたよ

うに目を見開く。

「あんたの作った羽根ではっ…誰にも負けたくないっ…！」

由雉が強く、拳を握り締める。

「負けたくないんだよっ…！！ボクはっ…！！」

いつも冷めたところのある由雉が、声を張り上げ、必死に叫んでいる。

「マイソンっ…」

「ボクが負けることでっ…あんたの羽根が弱いって言われるのは耐えられないっ…」

ハヤテが目を細め、由雉を見つめる中、由雉は声を落ち着かせ、少しそっぽを向く。

「だからっ…だからっ…」

「ありがとうっ、由雉」

「……っ」

さらに言葉を続けようとした由雉が、優しく微笑むハヤテに、思わず言葉を止める。

「僕の為に、そこまで言ってくれて…」

ハヤテの手が、由雉の頭の上に乗る。

「……。」

ハヤテに頭を撫でられ、そっと俯く由雉。

「マイソンがそこまでパパのお仕事を誇りにしててくれたなんて、知らなかったよぉ～っ！」

「んなっ…！！」

急にフザけたような口調で話し、軽い笑みを浮かべるハヤテに、由雉が一気に耳まで赤くして、勢いよくその引きつった顔を上げる。

「だっ誰が誇りだっ！ボクはただっ…！あんたの羽根が弱いってのを、ボクのせいにされるのが嫌なだけでっ…！！」

「嬉しいよっ…」

「……っ！」

本当に嬉しそうに微笑むハヤテに、由雉が大きく目を見開いて、言葉を止める。

「早速、羽根作りに入ろうかぁ～っ！うんっ！それがいいっ！」

「あっ、ちょっ…！まだお店の準備がっ…！」

「さぁ～っ！張り切ってこぉ～っ！おぉ～うっ！」

「あっ…」

由雉が止める間もなく、ハヤテは羽根を作るべく、足早に店の奥へと歩き去っていく。

「ったくっ…」

由雉が少し呆れるように、肩を落とす。

「マイソンがいればっ、僕はきっと、何者にも負けない羽根が作れるよぉ～っ！ハッハッハっ！」

「大袈裟っ…」

店の奥から聞こえてくる陽気な声に、悪態づきながらも、少し頬を赤く染める由雉。

「バカ親父っ…」

そう呟いて、由雉がそっと口元を緩める。

「マイソン、出来れば“ダディ”の方がっ…」

「呼ぶかっ！！ってか、人の呟きを勝手に聞くなぁぁっっ！！」

第５９章　受け継がれる羽　☆３

その日・夜。

「ふわぁ～あっ」

ハヤテの店を閉めた後、ハヤテとともに羽根作りをしていた由雉は、かなり夜が更けた頃に、家へと戻ることとなった。月明かりのみが照らす道を、由雉が大きな欠伸をしながら歩く。

「ミチルさん、もう寝たかなぁ～」

そう言いながら、由雉が少し静かに玄関の扉を開ける。

「ふわぁっ！」

「うぇっ？」

由雉が扉を開けた途端に、家の中から出てくる人物。ぶつかりそうになり、２人が大きな声をあげる。

「幸コっ」

「由雉っ！」

家の中から丁度、出てきたのは、由雉の友で、コウノトリの獣人の幸コであった。

「随分と遅かったんだねっ」

「あぁ～ハヤテさんとちょっと羽根作っててっ」

幸コの問いかけに、由雉が頭を掻きながら答える。

「そっちこそ、こんな時間まで何やってたわけ？」
「あぁ～っ、えっと、そのっ、色々と片付けをっ…」
問い返した由雉に、少し言葉を濁す幸コ。

「片付けっ？こんな夜中までっ？」
「ほらっ、そのぉ～っ、片付けてると、ミチルさんが“私も手伝うわぁ”って言ってくれてぇっ…」
徐々に曇っていく、幸コの表情。
「それでぇっ…どんどん片付けるもの、増えるじゃないっ…？」
「ああっ…」
幸コの言葉に、すべてを察した様子で、引きつった表情で頷く由雉。ミチルが手伝うことで、また不幸を巻き起こし、さらに片付けることが増え、それの繰り返しでこんな深夜にまで及んだのであろう。

「ごめんっ…いっつもいっつも…」
「いっいいよっ、ミチルさんは私にとっても家族みたいなもんだしっ」
げっそりと呟く由雉に、気を遣うように笑顔を向ける幸コ。

「家まで送るっ」
「えっ？」
そう言って、再び玄関を出て行く由雉に、幸コが少し驚いたように目を丸くする。

「でっでも疲れてるんじゃっ…」
「んっ？」
「……っ」

ゆっくりと振り返った由雉に、その先の言葉を呑み込む幸コ。

「ううんっ、何でもないっ」
「行こっ」
「うんっ」

再び前を向き、歩き出していく由雉の後を、幸コが嬉しそうな笑顔を見せて、そっと追う。

「羽根作りって、新しい羽根？」
「うん」
短い会話をしながら、二人が夜道を進む。
「どんな羽根作ってるの？」
「どんなって…うぅ～ん、強い羽根っ？」
「強い？」
「うん」

少し目を丸くした幸コに、由雉が短く頷く。

「もっと強くなりたいんだっ、ボクっ」
「……っ」

前方を見据え、意志の強い、まっすぐな瞳を見せる由雉を、横から幸コが少し驚いたような表情で見つめる。

「なんでっ…？」
「へっ？」
幸コのシンプル過ぎる問いかけに、思わず顔をしかめて、振り向

く由雉。

「なんでって…」

「あっ、ごめんっ」

顔をしかめる由雉を見て、幸コが少し慌てた様子で謝る。

「そのっ、由雉ってあんまり、“こうなりたい”とか言わないじゃない？だから珍しいなぁ～と思って…」

「……。」

幸コのその言葉を聞き、由雉が少し固まる。

「確かに…言わないかもっ…」

妙に納得した様子で頷く由雉。

「まぁ“可愛くなりたい”とか“頭良くなりたい”とかは、もう十分過ぎて、思う必要もないからなぁ～」

「“性格良くなりたい”って、思わないの…？」

さりげなく自分を誉める由雉に、幸コが呆れた表情を向ける。

「なんで強くなりたいんだろっ…」

「えっ？」

自分から言い出したことだというのに、不思議そうに首を傾げている由雉に、幸コが思わず顔を引きつる。

「だからぁ～あれじゃないっ？男は強くてなんぼだぁ～みたいなっ！」

「強くてなんぼっ…」

――――そうやぁっ！男は強くってなんぼやでぇ～っ！！――――

「……。」

由雉の脳裏に浮かぶ、能天気な笑顔の門貴。

「冗談っ、あのアホ猿じゃあるまいしっ」

どこか煩わしそうに、首を横に振る由雉。

「じゃあ、大切な人を守るため、とかっ？」

「大切な人っ…」

――――俺は輝矢を守るっ！――――

――――ハチは私が守りますっ…――――

互いに互いのことを守りたいと、そう言って、強くなることを決意した輝矢と桜時。

「……っ」

心から強くなりたいと願うほどに大切な人とは、どんな人なのだろうか。自分の中で思い当たる人物が浮かばず、由雉が少し眉をひそめる。

「ねぇ、幸コ」

「んっ？」

“大切な人”って、何っ？」

「へっ？」

由雉に問いかけられ、幸コが目を丸くする。

「そっそれは、ほらっ、例えばぁ～家族とか恋人とか親友とかっ」

「家族、恋人、親友っ…」

幸コの言葉を繰り返し、どこか考え込むように首を捻る由雉。

「だから由雉でいうと、ミチルさんとかハヤテさんとかっ…後はっ…」

少し躊躇うように言葉を止め、その頬を赤くする幸コ。

「“私”っ…！とかっ…！」

真っ赤に染まった顔で目を伏せ、幸コが思い切って言い放つ。

「えっ？あっ、ごめん、よく聞いてなかった」

「……。」

そっぽを向いて考え事をしていた由雉が、幸コの方を振り向き、まったく悪びれのない様子で、平然と言い放つ。そんな由雉に、一気に赤から白へと顔色を変える幸コ。

「そうよねっ…私ってこういうキャラっ…」

幸コが下を向き、どこか諦めたように呟く。

「でもなぁ～んかそれも違うなぁ～」

由雉が腕を組み、少ししかめた表情で、首を捻る。

「大体、ボクって、誰かのために何かするタイプじゃないしぃ～」

「……っ」
悩むように呟く由雉の言葉に、少しハッとした表情を見せる幸コ。
「じゃあっ…」
「……っ？」
幸コの声に、由雉が振り向く。
「じゃあ、自分のためじゃないっ？」
穏やかな笑顔を、由雉へと向ける幸コ。
「由雉は、自分のために、強くなりたいんじゃないっ？」
「自分のっ…ため…」
大きく目を見開いた由雉が、ゆっくりと幸コの言葉を繰り返す。
「……っ」
繰り返した後、そっと緩む口元。
「うんっ、そうかもっ」
「……っ」
どこか迷いが吹っ切れたように、大きく微笑む由雉を見て、幸コも一層、笑みを深くした。
「ボクって、やっぱボクが一番、大事だしぃ～？」
「それはある意味、問題なんだけどっ…」
いつもの口調に戻る由雉に、一気に呆れた表情となる幸コ。
「幸コ」

「えっ？」
由雉に名を呼ばれ、幸コが顔を上げる。
「ありがとっ」
「……っ」
幸コの方から目を逸らしながら、ポツリと落とされる由雉の言葉。
その一言に、幸コが再び、笑みを浮かべる。
「どういたしましてっ」
由雉の背中を見つめながら、幸コはそっと呟いた。

数日後。ハヤテの店・『羽根屋』。
「見てくれたまえぇ～っ！マイソンっ！」
陽気な声を出して、店の奥から飛び出て来る、今日も元気そうなハヤテ。
「試作品だったのが、ついに完成したんだよぉ～っ！」
「えっ？」
幸之助とともに店の準備をしていた由雉が、ハヤテの方を見る。

「何っ？どんな羽根っ？」
「ふふふぅ～んっ！」
身を乗り出して問いかけてくる由雉に、ハヤテがどこか得意げな笑みを浮かべ、その懐から派手なショッキングピンクの羽根を取り出した。
「“音羽（おんぱ）”といってねぇ～っ！」
「うんうんっ」
ハヤテから、その羽根を受け取り、興味深そうに何度も頷く由雉。
「会話の録音再生を自由に出来る羽根なんだよぉ～っ！」
≪あんたの作った羽根だからっ…！負けたくないんだよっ…！！≫
「……。」
羽根から聞こえてくる自分の声に、由雉がこれ以上ないくらいに固まる。
「これでいつでもマイソンの声を聞くことが出来るぅ～っ！ああぁ～っ！幸せぇ～っ！！」
「……っ」
うっとりとするハヤテに、浮き出る由雉の血管。
「誰がんなもん作れって言ったぁぁぁっっ！！ってか、いつ録音しやがったんだぁぁっっ！！クソ親父ぃぃぃっっ！！」
「ああぁ～っ！せっかくのマイソンボイスがぁ～っ！！」

勢いよく羽根を引きちぎる由雉に、悲鳴をあげるハヤテ。

「あぁ～あっ…」

そんな二人の様子を、店の入口から、少し呆れた表情で見つめる幸コ。

「あんな調子で、本当に出来るのかなぁ～新しい羽根っ…」

「……っ」

「……っ？」

幸コの横に立ったまま、何も言わないでい、優しい笑みを浮かべているミチルを、幸コが少し不思議そうに振り向く。

「どうかしました？ミチルさん」

「えっ？ああっ…」

幸コの問いかけに、ミチルがさらに口元を緩める。

「“幸せだなぁ”と思って」

「……っ」

噛み締めるように呟くミチルに、幸コが少しハッとした表情を見せる。

「幸コちゃんが運んできてくれたのかしらねぇっ」

「いえっ…」

ミチルの言葉を、そっと否定する幸コ。

「たぶんっ…」

笑みを浮かべた幸コが、店の奥の由雉とハヤテの方を見る。

「“幸せの青いキジ”がっ…」

「もういいっ！！ボクらだけで作ろうっ！幸之助さんっ！！」
「えぇ～っ！？パパを見捨てないでおくれよぉ～っ！！マイソン～っ！！」
「誰がパパだぁぁっっ！！」

こうして、由雉の修行が始まった。

第５９章　受け継がれる羽　☆４

輝矢たちが龍国を旅立って数日後。龍国・オトポリ本部。

「ふっはぁ～～っ…」

何とも気の抜けた溜息を吐くのは、隊員室の机に寄り掛かっている羊スケ。周りの隊員たちは忙しそうに動いているというのに、羊スケだけはとても暇そうである。

「ああぁ～暇っ、もう暇で死にそうっ」
「じゃあ働いたらっ？」
「へっ？」
誰にともなくボヤいていた羊スケが、後方から聞こえてくる声に振り返る。

「副長官っ」
「ったくっ」

羊スケが起き上がって振り返ると、そこにはリンゴとイチゴ姉妹が立っていた。見るからにだらけている羊スケを見て、リンゴが眉間に皺を寄せる。

「なぁ～にサボってんのよっ！」
「サボってないっスよぉ～仕事がないだけっス」
「はぁっ！？この忙しいのに、仕事がないわけないでしょっ！？」
「ホントっスよぉ～」
責めるように問いかけるリンゴに、羊スケが口を尖らせてもう一

度訴える。

「俺の仕事って基本、ゴンさんの不始末の後処理でしょ～っ？だっからゴンさんいないと、仕事ないんスよ」

「他の仕事やればいいじゃないっ」

「“お前に任せると仕事が増える”って言われたっスぅ～っ！」

「そういうとこは上司にそっくりねっ…」

笑顔で答える羊スケに、リンゴが呆れきった表情で肩を落とす。

「だっからもう暇で暇でっ」

「ついて行こうって…思わなかったんですか…？」

「へっ？」

イチゴの問いかけに、目を丸くする羊スケ。

「いつもっ…何だかんだでついて行くのにっ…」

「……っ」

不思議そうな表情を見せるイチゴに、羊スケはそっと口元を緩めた。

「付き合いだけは長いっスからねっ」

笑みを浮かべた羊スケが、ふと遠くを見るような目を見せる。

「“ついて行っちゃいけない時”ってゆうのは、何となくわかるんスよっ…」

「えっ…？」

「……っ」

その羊スケの言葉に、イチゴは困惑するように首を傾げ、リンゴはそっと目を細めた。

「さぁ～てっ、暇潰しに散歩でも行ってくるっスかねぇ～」
「待ちなさいっ」
「へっ？」
立ち上がり、隊員室を出て行こうとした羊スケの制服の襟元を、後方から力強く掴み止めるリンゴ。
「そぉ～んなに暇なら、私が暇潰しさせてあげようじゃなぁ～いっ？」
「えっ…」
どこか裏のありそうな、薄気味悪い笑みを浮かべるリンゴに、羊スケが思わず顔を引きつる。
「丁度、昨日、うちの部下が倒れて、人手なくて困ってたのよねぇ～」
「そっそれって、副長官の仕事があまりに厳しくて倒れたんじゃっ…」
「そっ！ちなみに昨日だけで十七人倒れたわっ！」
「うげぇっ」
衝撃的な事実に、さらに歪む羊スケの表情。
「さぁっ！レッツ、ワーキングっ！」
「ひぃいえぇぇぇぇ～～～っ！！」
嫌がる羊スケを引きずるようにして、リンゴが笑顔で隊員室を出て行く。
「……。」
隊員室に一人残され、少し呆然とした表情を見せるイチゴ。

「強いなぁ～二人ともっ」

ゴンが行ってしまったことが寂しくないはずもないだろうに、それを微塵も見せないで、明るく振る舞っている。

「……っ」

――――ようっ！イチゴっ！――――

ふと浮かぶ、桜時の笑顔。

「……私も頑張ろっ」

ポツリとそう呟き、イチゴも隊員室を後にした。

その頃、御伽界西方・四大国が一、“虎国”。

「“雪乱雲”っ…！！」

両手を大きく前に突き出し、激しい吹雪を放つのは、虎国の姫君・白雪虎昌。

「……っ」

白雪の放った吹雪の先に立つのは、険しい表情を見せたゴン。

「“天狼丸”っ」

ゴンが腰に下げていた白い鞘から、素早く刀を抜く。鞘から出てきたのは、刀身も白い、美しい刀。ゴンが天狼丸を振り上げると、天狼丸を真っ赤な炎が包み込んだ。

「……っ“炎刃”…！！」

炎を纏った天狼丸を、勢いよく振り下ろすゴン。振り下ろされた刀から放たれた、強い炎の一閃が、白雪の吹雪と正面からぶつかり合う。

――――バァァァァァーーーンっ！！――――

ぶつかり合った二つの力は、大きな音を立てて、互いに砕け散った。

「ふぅっ…」

「……。」

少し疲れたように刀を下ろしたゴンを、白雪が真剣な表情でまっすぐに見つめる。

「刀を握って二日で…私の吹雪を砕くなんてねっ…」
『虎昌様ぁぁぁぁ～～～っ！！』
「……っ？」

ゴンに聞こえないように、小さく呟いていた白雪が、横から聞こえてくる声に振り向く。すると、白雪の屋敷の方から、鈴白と芹が駆けて来ていた。

『虎昌さっ…！』
「下の名前で呼ぶんじゃないわよっ！気に入ってないんだからっ！」
『ひゃいぃぃ～～っ！！』
勢いよく怒鳴りあげる白雪に、駆けつけたばかりの鈴白と芹が震え上がる。

「白雪様、お茶の準備が出来ました」
「そうっ」
呼び直して要件を伝える鈴白に、白雪が満足げに頷く。

「少し休憩にしましょうか」
「おうっ」

白雪の言葉に、しっかりと笑顔で答えるゴン。輝矢たちと時を同じくして、修行へと旅立ったゴンが、その修行場所として選んだのは、ゴンにとっても紺染との再会などのあった因縁めいた国、虎国であった。

「悪いなっ、俺の修行に付き合ってもらってよっ」
屋敷へ戻り、鈴白と芹の用意した茶を飲みながら、ゴンが白雪に軽く笑みを向ける。

「俺の“火力”を鍛えるには、相性最悪の“氷力”の使い手と戦うのが一番かと思ってさっ」
「いいわっ」
その“氷力”の使い手・白雪も、茶を飲みながら、笑みを浮かべる。
「丁度、仕事も入ってなくて暇だったしねっ」
「いつも暇ですけどね」
「はいっ！？」
「いいえっ」
こっそりと呟いた鈴白を、白雪が勢いよく睨みつけると、鈴白は満面の笑顔を浮かべて誤魔化した。
「でもホント、珍しいよね」
「んっ？」
鈴白の横に立っていた芹が、背延びをして、鈴白の耳元に、白雪に聞こえないようにこっそりと話しかける。少し首を傾かせ、鈴白が芹の声に聞き入る。
「白雪様が人に頼まれたこと、素直に引き受けるなんてっ」
「本当にっ」
芹の言葉に、鈴白が笑顔を浮かべて、しみじみと頷く。
「それにっ」
『……っ？』
言葉を続ける白雪に、こそこそと話していた鈴白と芹が、同時に振り向く。

「私も修行になるから丁度いいわっ」
「えっ…？」
白雪の言葉に、少し目を丸くするゴン。
「だって、竹取輝矢だけ強くなるなんて、癪じゃないっ？」
「……っ」

どこか楽しげな笑みを浮かべて話す白雪に、ゴンが少し驚いたように目を開く。だがすぐにその口元を緩め、穏やかな笑みを浮かべた。

「そうだなっ」
「さっ！とっとと飲んで、とっとと続きやるわよぉっ！」
「ああっ」

白雪が気合いを入れて言うと、ゴンはしっかりと頷いた。

さらにその頃。御伽界・とある道。

「はぁっ…」

鬱蒼とした森の中を歩きながら、深々と溜息をつくのは、竹取輝矢。目尻も肩も垂れ下がっており、どこか辛そうである。

「大丈夫ですかぁ～？竹取さぁ～んっ」

そんな輝矢を、どこか心配そうに覗きこむ、ローブを纏った小柄の老人。トマトの一四三番目の旦那で、魔法使いのセンシである。

「……。」

「……っ？」

センシの問いかけに答えることなく、じっとセンシを見つめる輝矢。そんな輝矢の様子に、センシが少し戸惑うように首を傾げる。

「ジジイより…ハチが見たい…」

「がぁぁぁぁぁ～～んっっ！！」

輝矢のストレート過ぎる発言に、激しくショックを受けるセンシ。

「そりゃあ私はただのセンシですけどっ…」

「はぁっ…」

その場に膝をつき、落ち込んでしまうセンシの横をあっさりと素通りし、輝矢はもう一度深々と溜息をついた。

「情けねぇ～なぁっ！」

輝矢の前を歩く頭のハゲた老人。トマトの二一一番目の旦那の地蔵が、呆れたような表情で、輝矢の方を振り返る。

「まだ三日しか経ってないんだぞぉ？そんな調子で、後二十七日、どうすんだぁ？」
「耐えきれなくなったら、ハチを無理やりさらってきます」
「ちったぁ我慢しろぉっ！！」
何の迷いもなく答える輝矢に、地蔵が思わず怒鳴りあげる。

「竹取さん…」
「んっ？」
名を呼ばれ、輝矢がふと顔を上げる。
『……。』
輝矢の目の前に立っているのは、全身に包帯を巻いた、顔も年齢もまったくわからない男。トマトの一八九番目の旦那のミイラ男である。包帯の隙間からかすかに見えている目と、目を合わせ、輝矢がミイラ男とともに、少しの間、固まる。

「これ…」
「んっ？」
少しの沈黙の後、ミイラ男の差し出した写真のようなものに、輝矢が目を落とす。
「ふはぁぁぁぁぁぁっっ！！」
『うぃっ…！？』
ミイラ男の差し出した写真を手に取り、思わず悲鳴のようなものをあげる輝矢。その悲鳴に、地蔵やセンシが、驚いて振り向く。

「なっ何だぁっ？」
「こっ…！これはっ…！！」
地蔵たちが戸惑う中、輝矢が、写真を持つ手を震わせて、叫ぶ。
「お昼寝ハチの隠し撮りプロマイドっ…！！」
輝矢がミイラ男から受け取ったその写真には、どこかの木の根元に転がり、寝ている桜時の姿が写されていた。
「ああぁ～っ！ハチぃぃ～っ！」
『……。』
写真に頬を擦り寄せている輝矢を、唖然と見つめる地蔵とセンシ。その引きつった表情からは、かなり引き気味であることが滲み出ている。
「しっかしお前、あんな写真、どこで手に入れた来たんだぁ？」
「トマトの部屋に…五万と落ちてた…」
「何ですとっ…！？」
ミイラ男の答えを聞き、擦り寄せていた写真を離して、一気に顔を引きつる輝矢。
「あのクソババアっ…いつの間にっ…」
輝矢が前方を歩くトマトを、怨みがましく見つめる。
「私はこれ以上の隠し撮りをしてやりますよっ」
「撮るんかいっ！！」
隠し撮りで勝負をしようとする輝矢に、地蔵が全力で突っ込みを

入れる。

その頃、犬国。

「ふえぇぇぇ～～くしょんっっ！！」

豪快にくしゃみをする桜時。

「大丈夫ですか？桜時様」
「何や？イヌぅ～、風邪かぁ？」
「ズビっ…いやっ…」
振り向く犬仁と門貴に、桜時が鼻をすすりながら答える。

「何か今…妙な悪寒がっ…」

離れていても、しっかりと危機を感じる桜時であった。

戻って、輝矢・トマト一行。

「ところでババア、私たちは一体、今からどこにっ…」
「着いたよぉ～っ」
「はっ？」

輝矢がどこへ行くのかと問いかけようとしたまさにその時、一番先頭を歩いていたトマトが急に足を止め、そう言い放った。トマトに合わせ、輝矢や旦那たちも足を止める。

「着いたっ…？」
「ああっ」

聞き返した輝矢に、しっかりと頷くトマト。

「ここが私たちの修行場…」

鋭い表情を見せたトマトが、ゆっくりと顔を上げ、前方を見渡すように見つめる。

「“きこりの泉”だっ」
「……っ」

つられるようにして顔を上げた輝矢の前に広がっていたのは、美しい泉であった。向こう側の端が見えないほどに大きく、底まで見えてしまいそうなほどに透き通った水。普通の泉とは違う、どこか

神秘的な空気を持った、その場所。

「きこりの…泉っ…」

輝矢は少し戸惑いながら、目の前に広がる泉を見つめた。

第６０章　月器復活　★１

「きこりの…泉っ…」

修行のため龍国を旅立った輝矢が、トマトに連れられやって来たのは、何とも美しく、何とも壮大な、森の中の泉、“きこりの泉”であった。

「向こう行ったところに村があるから、とりあえずそこに荷物置きに行くよぉっ」

「あっはい」

圧倒されるように泉を見つめていた輝矢が、トマトの声に振り向く。村があるという方へと、森の中を歩きだしていくトマトの後を、輝矢が追うように続く。

――――ガサガサっ…――――

『んっ？』

歩いている道の横の茂みからする不穏な音に、輝矢や地蔵たちが振り向く。

「何だぁ？」

「ちょっと見てみましょうかぁ～っ」

地蔵が首を傾げると、センシが音のした茂みの方へと歩いていく。

「えっとっ…」

「……っ」

「へっ？」

センシが茂みを覗こうとしたその時、突然、茂みから黒い影が立

ち上がった。

――――バァァァァァァーーーーンっ！――――

「ひえええええええええええっっ！！」

影の振り下ろした鋭い刃を、悲鳴をあげながら必死に避けるセンシ。

「センシっ…！」

「何者ですっ…！？」

地蔵が慌ててセンシの元へと駆け寄り、輝矢が少し焦った表情で身構える。

「えっ…？」

しかし、身構えた輝矢が、そのセンシに刃を振り下ろした人影を見て、驚いたように目を見開く。

「アナタはっ…」

「私の名前は寒鰤キリコっ…」

茂みの奥から姿を見せたのは、肩まで伸びた艶のある黒髪に、透き通るような青色の瞳の、少し暗い雰囲気を持った、十五，十六歳の知的そうな少女。

「種族は“鰤人”…職業はきこり…趣味は…」

キリコの瞳が鋭く輝く。

「“伐採”っ…」

『ぎゃあああああああああああっ！！』

「……。」

そう言って再び、右手に持っていた鋭い斧を、センシと地蔵の方へと振り下ろすキリコを見て、輝矢が引きつった表情のまま固まる。

「相変わらずですね、キリコ…」

『へっ？』

頭を抱える輝矢に、目を丸くする地蔵とセンシ。

「知り合いかっ？」

「ええ、まぁちょっと。クソババアの依頼でマホウの国へ行った時にっ…」

地蔵の問いかけに、頭を抱えたまま答える輝矢。そう、それは、輝矢がトマトに頼まれ、というか挑発され、行ったマホウの国で出会った、アホウの鹿男の友達・キリコであった。

「久し振りですね、キリコ」

「貴女は確か…」

少し呆れたような表情を向ける輝矢に、キリコが斧を下ろして呟く。

「おしどり枕…」

「竹取輝矢ですっ！」

惜しいとも言えない名前の間違いをするキリコに、輝矢が思わず声を大にして、訂正をする。

「久し振りね…」

キリコが輝矢へ、暗い表情のまま笑みを向ける。

「鹿男は元気…？龍国でオトポリをやってるって聞いたけど…」

「ああっ…」

キリコの口から鹿男の名が出ると、輝矢がさらに呆れたような表情となる。

「元気…みたいですよっ、上司の馬とは、いっつもモメてるみたい

ですけどっ」
「そう…上司ともウマが合っているのっ…それは良かった…」
「微妙に違っ…ああ、まぁいいか…」
安心したように笑みを浮かべるキリコに、輝矢は訂正を入れようとしたが、面倒になって途中でやめた。

「おぉいっ！何、チンタラやってんだぁ～いっ？」
「……っ？」
そこへ、先頭を歩いていたトマトが、いつまでも輝矢たちが追いついてこないことを気にしたのか、輝矢たちの元まで戻ってくる。

「とっとと村にっ…んんっ？」
「どうも…」
トマトがキリコに気づくと、キリコが軽く会釈をする。
「寒鰤キリコ…趣味は伐採です…」
「その趣味は言わなければならないのですか…？」
とりあえず趣味だけは自己紹介に組み入れてくるキリコに、またしても突っ込みを入れる輝矢。
「お前っ、きこりの村の住人かいっ？」
「きこりの村？」
「ええ」
トマトの問いかけに、輝矢が首を傾げる中、キリコが短く頷く。
「じゃあ…」
そっと腕組みをするトマト。

「私たちに一ヶ月間、衣食住を提供しなっ」
『……。』
何様かと思えるような口調で言い放つトマトに、勢いよく固まる輝矢とキリコ。

「私っ…料理は包丁以外、苦手なんだけどっ…大丈夫かしらっ…？」
「私は月見団子さえ、あれば大丈夫ですよ？」
妙なところを心配するキリコに、さらりと答える輝矢。

「こいつらの会話に…ついていけんっ…」
「同じく…」
「ぬっ…」
地蔵の言葉に、しみじみと頷くセンシとミイラ男であった。

“きこりの村”までは、歩いて十分もかからなかった。泉のすぐ傍にある、村と呼ぶにも小さな集落。木製の家が数軒立ち並び、きこり風の斧を持った男たちの姿が目立つ。きこりたちの家族だろうか、小さな子供が数人で遊んでいる姿もあった。

「へぇ～ここがきこりの村ですかぁ」
村に着くと、輝矢が感心したように辺りを見回す。

「ええ、私の生まれ故郷よ…」
先頭を歩きながら、ゆったりとした口調で答えるキリコ。

「で、アナタは上手くやっているのですか？」
そんなキリコに、輝矢が少し心配するように問いかける。キリコ

は元々、村に馴染めずにそこを出て、鹿男の国へとやって来たからだ。

「ええっ…」

輝矢の問いかけに、しっかりと頷くキリコ。

「もちろん、上手くやっているわよっ…」

「うわぁ～っ！伐採女だぁ～っ！」

「斧振り回されるぞぉ～っ！逃げろ逃げろぉ～っ！」

「……まったく上手くいってないみたいですね…」

キリコの言葉とは裏腹に、キリコの姿を見た途端に逃げ去っていく子供たちの姿を見て、輝矢が呆れた表情で肩を落とす。

「今は遠くても、徐々に歩み寄っていけばいいのよ…」

「とりあえず斧振るのを、やめればいいんじゃねぇーかぁ？」

前向きな発言をするキリコに、後ろの方からこっそりと呟く地蔵。

「ここが…私の家よ…」

『……？』

村の泉よりの小さな木製の家の前に止まり、キリコがポツリと呟いた。輝矢たちも足を止め、その家を見る。

「ただいま…」

そう言って、ゆっくりと玄関の扉を開くキリコ。

『キリちゃ～～～～んっっ！！』

「えっ…？」

キリコが扉を開けた途端に、家の中から勢いよくきこり風の男と、キリコによく似た４０歳前くらいの女と、まだ幼さを残した少年が飛び出てくる。飛びだしてきて、泣きつくようにキリコに縋る三人

に、少し戸惑ったような表情を見せるキリコ。

「どう…したの…？」

『なっ…なななな何かっ…！いきなりっ…！すっごい美女が突入してきてっ…！』

三人が声を震わせながら、必死にキリコに訴える。

『いきなりすっごい偉そうに寛いでるのっ…！！』

「今日から一ヶ月、この家は私のものだぁ～感謝しなぁ～っ」

『……。』

三人が泣きそうな表情で指差した先には、家のリビングの真ん中で、我がもの顔で堂々と横たわっているトマトの姿があった。そんなトマトの姿に、輝矢とキリコが固まる。

「あっの無遠慮クソババアっ…」

「すっかり乗っ取られたわね…」

引きつった表情を見せる輝矢の横で、キリコは落ち着いた表情で呟く。

「私の知り合いなの…一ヶ月くらい、衣食住の世話をしなきゃいけなくなったんだけどいい…？」

『えっ…！？』

突然のキリコの言葉に、驚いた表情を見せる三人。

「そりゃ驚くわなぁ～」

「急には無理じゃろぉ～」

「ぬっ…」

諦めきった表情で、しみじみと頷く地蔵、センシ、ミイラ男。

『もちろん大歓迎だよぉ～っ！！』
『へっ…？』
急に満面の笑顔を見せ、あっさりと承諾する三人に、旦那勢が目を丸くする。

「では遠慮なく」
『どうぞどうぞぉ～っ！！』
『……。』
驚きもせずに、あっさりと家の中へと入っていく輝矢と、それをあっさりと受け入れている三人に、旦那勢はさらに固まる。

「私っ！キリコの父の寒鰤キリオですぅ～っ！趣味は伐採ですぅ～っ！」
「母の寒鰤キリエでっすっ！趣味は伐採でっすっ！」
「弟の寒鰤キリトぉ～っ！趣味は伐採だよぉ～っ！」

「空耳でしょうか…家族全員、趣味が伐採と言ったような…」
「趣味は伐採の血筋なのよ…」
キリコの家族の自己紹介に、顔を引きつる輝矢。

「では早速、お茶を入れまっすねぇ～っ！」
「ああぁ～いいっ」
「へっ？」
茶を入れに行こうとしたキリコの母を、トマトが呼び止める。

「荷物置いたら、すぐに出るよっ、小娘っ」
「えっ？あっはい」
トマトの言葉に、輝矢が少し戸惑いながら頷く。

「どちらへ…？」
「“きこりの泉”だっ」
「泉…？」

キリコの問いかけに、トマトが短く答えると、キリコはそっと眉をひそめた。

「“女神様”に…？」
「ああっ」
「女神っ？」

キリコとトマトの会話を聞き、輝矢が眉間に皺を寄せる。

「女神とは何です？」
「あらっ…マクラは知らないの…？」
「輝矢ですっ」

再び名を間違えるキリコに、輝矢が少し怒りを見せながら訂正を入れる。

「“きこりの泉”にはね…伝説があるのよ…」
「伝説っ…？」
「ええ…」

聞き返した輝矢に頷きながら、キリコが家族三人の方を見る。キリコの視線を受けると、キリコの家族たちは、“待ってました”と言わんばかりの表情で、大きく頷いた。

「昔々、この村のきこりが、きこりの泉に自分の斧を落としてしまったんですよぉ～」

「……っ？」
キリコの家族たちが、輝矢に伝説を話し始める。
「すると泉の中から、きっれいな女神様が現れて、きこりに、“お前が落としたのは、この金の斧ですか？”と聞いたのでっすっ！」
「きこりは“違います”と答えましたぁ～っ！」
「すると次に女神様は、“お前が落としたのは、この銀の斧ですか？”と聞いたのでっすっ！」
「きこりは“違います”と答えましたぁ～っ！」
伝説を語るには少々軽い口調で、話を続けるキリコの母と弟。
「そして最後に女神様はきこりの落した斧を持ってきて、“お前が落としたのは、この斧ですか？”と聞いたのでっすっ！」
「きこりは“それです”と答えましたぁ～っ！」
「きこりの正直さに感心した女神様は、きこりに斧を3本ともあげたのですよぉ～っ！」
「へぇ～っ」
話しを聞き終えた輝矢が、感心するような声を漏らす。

「どう…？泣けるでしょう…？」
「泣ける要素は、まったくなかったですけど？」
キリコの問いかけに、輝矢が一気に呆れた表情となる。

「まさかその泉に月器の破片を投げ入れて、元の月器にしてもらおうだなんて思っていないでしょうねぇ？」
「小娘にしては察しがいいねぇっ」
「本気ですかっ？」
上から目線で口元を吊り上げるトマトに、輝矢が勢いよく眉を引きつる。

「そんなどう考えてもウソ臭い伝説を真に受けるなんてっ」

『ぎゃぁぁぁ〜〜んっっ！！ウソ臭いぃぃぃ〜〜っっ！！？』

輝矢の容赦ない言葉にショックを受ける、せっかく伝説を話したキリコの家族たち。

「冗談じゃありませんっ、今から腕のいい刀鍛冶でも探してっ…」

「腕のいい刀鍛冶でどうにか出来るワケないだろっ？」

「……っ」

トマトに背を向け、家を出て行こうとした輝矢が、トマトの鋭い言葉に立ち止まる。

「それとも、あの国に行くかいっ？」

「……っ！」

そのトマトの言葉に、輝矢が大きく目を見開いて、トマトの方を振り返る。

「なっ…」

「……。」

驚きと戸惑いの表情を見せる輝矢に、まっすぐ突き刺すような視線を向けるトマト。

「行きたくないだろ？」

「あっ…アナタはっ…」

「よいしょっとっ」

輝矢が何かを言いかけたその時、トマトがその場でゆっくりと立ち上がった。

「いいから、大人しく私について来なっ」

「……っ」

トマトのその言葉に、輝矢は従うしかなかった。

第６０章　月器復活　★２

キリコの家を出た輝矢たちは、キリコの案内を受け、村から直結している泉の正面へとやって来た。きれいに整えられた広場の先、泉のほとりには、台座のような白い階段状のものがあった。

「あの台座の上から、泉に向かって物を落とすんです…」
「よぉ～しっ」
キリコの説明を受け、トマトが気合いを入れるような声を出し、台座に上る。

「いいかいっ？私が見本を見せるから、よぉ～く見ておきなぁっ」
「ハイハイ、もう勝手にして下さい」
得意げな笑みで振り向くトマトを、適当にあしらう輝矢。女神の登場など、まったく信じていない様子である。

「来なっ、センシっ」
「へぇっ？」
トマトの細腕に、勢いよく掴み上げられるセンシの老体。体の浮かび上がったセンシが、戸惑った様子で目をまん丸にする。

「いくよっ！」
「へぇっ！？へぇぇぇぇっっ！！？」
センシを掴み、大きく腕を振り上げるトマトに、センシの声がどんどん大きくなっていく。

「ちょっ…！トマっ…！トマトさっ…！」
「ほぉぉぉぉらよっ！」

「ぎゃあああああああああっっっ！！！」

――――ドッポォォォォォォォ～～～ンっっ！！――――

トマトが、泉の中に勢いよく、センシを投げ入れる。悲鳴とともに、激しい水飛沫を上げて、泉の中へと消えていくセンシ。

『あぁ～あっ…』

輝矢と地蔵が、引きつった表情を見せる。

「よぉ～しっ、出て来いっ！女神っ！」

「出て来ませんよっ」

やる気満々のトマトの横に並び、輝矢が呆れた表情で泉の中を覗き込む。

「ジジイが溺死する前に、とっととっ…」

――――パァァァァァァーーーーっ……――――

「えっ…？」

輝矢が覗き込んだ水面が、穏やかな金色の光を放ち始める。その光に、戸惑いの声を漏らす輝矢。

「こっこれはっ…？」

「くるわよ…」

「えっ？」

キリコの声に、輝矢が振り向いた、その時であった。

――――パァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

『……っ！！』

空へと突き上げる強い金色の光とともに、激しく舞い上がる水飛沫。その突き上がった光の中心に見える人影に、輝矢たちが大きく目を見開く。

「……。」

透き通った紺色の髪に、一切の濁りのない青色の瞳。白い服との境界がわからないほどに白い肌と、あまりに美しい出で立ち。持つ空気は柔らかで、妙に心を落ち着かせる。その者が人ではないことは、すぐに伝わって来た。

「女…神っ…」

その言葉は、輝矢の口から意識もせずに、零れ落ちた。目の前に現れたその女性は、“女神”と呼ぶに相応しい女性であった。

「本当…だったのですかっ…」

「貴女が落としたのは…」

輝矢が圧倒される中、女神がゆっくりと右手を上げ、伝説の通りにトマトに問いかける。

「この、ワイルド系イケメンですか？」

「へっ…？」

言葉の通り、ワイルド系なイケメンを水面に上げて、問いかける

女神。その姿とはあまり似つかない単語を口にする女神に、輝矢が少し間の抜けた声を出す。

「それとも、この、インテリ系イケメンですか？」

女神は次に眼鏡をかけた、確かにインテリ系のイケメンを水面に上げ、問いかけを続ける。

「それとも、この、もう死にかけのジジイですか？」

「ううっ…」

「あっ」

次に女神が水面に上げたのは、トマトが先ほど、勢いよく投げ入れたセンシであった。全身ズブ濡れになり、かなり弱っている様子である。

「ってか、死にかけって…」

「女神様は随分と辛口ですねぇ」

呆れた表情を見せる地蔵の横で、輝矢がどこか感心するように言う。

「伝説の通りだと、ここで正直に答えれば三人ともっ…」

「私が落としたのはそのワイルド系イケメンとインテリ系イケメンだっ！ジジイは違うっ！」

『ええぇぇぇぇっ！？』

はっきりと大嘘を答えるトマトに、輝矢たちと渦中のセンシが、思いきり大声をあげる。

「何、大ウソついてるんですかっ！クソババアっ！」

「だってイケメンが好きなんだもんっ」

「好きなんだもんじゃありませんっ！！」

子供のように答えるトマトに、輝矢がさらに表情を歪める。

「そんなぁ～っ！ひどいですぅ～っ！トマトさぁぁ～んっ！」

「貴女は…」

『……っ？』

センシが泣きそうな表情を見せる中、女神が再び口を開いた。

「貴女は、とてもウソつきな人です」

「チっ、バレたかっ」

「バレるわっ！」

悔しそうに舌打ちをするトマトに、勢いよく突っ込みを入れる輝矢。

「そんな人に返すものはありません…」

「あっ…！センシがっ…！」

水面へと沈んでいくイケメン二人とセンシに、地蔵が焦ったように手を伸ばす。

「ですが、私はこんなジジイはいらないので、返します」

「ふえええぇっ！？わあああああっ！」

岸へと、軽々とセンシを投げる女神。

「では」

『あっ…』

――――パァァァァァァァァーーーーンっ！！――――

あっさりと別れを言って、女神は金色の光とともに、泉の中へと戻っていった。

「いっ…いらないって言われたっ…」
「げっ元気だせぇっ！センシぃっ！」
「がっ…頑張れっ…」
女神に投げられ、落ち込むセンシを、何とか必死に励ます地蔵とミイラ男。

「意外とクールな女神でしたね…」
「水の神様だから…」
呆れたように肩を落とす輝矢に、キリコが不適な笑みで答える。

「せっかく…イケメン二人を旦那にするチャンスだったのにっ…」
「自業自得でしょう…？」
悔しげに水面を見つめるトマトに、呆れきった表情を向ける輝矢。

「と、まぁこんな感じで見本は終わりだっ」
「全然、見本になってませんっ！」
得意げに言い放つトマトに、輝矢が全力で突っ込みを入れる。

「まぁいいっ、次はお前の番だ。やってみなっ」
「えっ？あっ」
そう言ってトマトが、懐から粉々に砕かれた、月器の破片の入った袋を取り出す。トマトは袋の紐を解き、何の躊躇いもなく、泉の上で袋を逆さまにした。

「あああぁっ！ちょっ…！」
「よっ」
「あっ…！」

輝矢が止めようとした手も間に合わず、月器の破片がすべて、勢いよく泉の中へと沈んでいく。

「あっ…あぁぁっ…」

泉の奥底へと、消えていく月器の破片に、力なく肩を落とす輝矢。もう破片を集めることは不可能。これで失敗すれば、月器は永遠に復活出来なくなる。

「そう心配すんなっ、大丈夫だよぉっ」

「何を根拠に、そんなことっ…」

――――パァァァァァァァァァーーーーンっ!!――――

「……っ」

自信満々のトマトに、輝矢が呆れていたその時、先ほどと同じように水面から金色の光が突き上がり、その中から先ほどの女神が現れた。

「貴女が落としたのは…」

女神がまっすぐに輝矢の方を向き、先ほどと同じように問いかける。

「この、小麦粉ですか？」

「はっ…？」

その格好には似つかわしくない小麦粉を抱えて、笑顔で問いかける女神に、輝矢が思わず顔を引きつる。

「ちっ違い…ますけどっ…」

輝矢が引きつった表情のまま、とりあえず正直に答える。

「では、このパン粉ですか？」

「はっ…？」

女神が次に出してきたのは、パン粉。

「それともこのお砂糖ですか？米ですか？デンプンですか？薄力粉ですかぁ？」

「……っ」

女神の次々とくる問いかけに、どんどん引きつられていく輝矢の表情。

「どれも違いますっ…！」

「あっ」

輝矢が勢いよく右足を振り切ると、その風圧で、女神の抱えていた砂糖やら米やらが、女神の腕から零れ落ち、一気に泉の中へと落ちていった。

「あぁ～あっ…女神に足出しちゃったよ…」

「こりゃ返って来ないパターンじゃないですかぁ？」

そんな輝矢の行動に、困ったように頭を抱える地蔵とセンシ。

「確かに破片は落としましたがっ、私が落としたのは武器ですっ！粉類ではなく、武器を持って来なさいっ！」

「女神に難癖をつけたわ…」

女神より偉そうに言い放つ輝矢に、どこか楽しそうな笑みを浮かべるキリコ。

「武器…？」
輝矢の言葉に、女神が少し眉をひそめる。
「では、貴女の落したのはこの、出刃包丁っ…」
「違いますっ！」
「あっ」
怒りを表情の全面に押し出した輝矢が、女神の手を振り払うと、女神が出したばかりの出刃包丁が、力なく泉の中へと落ちた。

「貴女は、とても凶暴な人ですね…」
『まったくっ』
女神の率直な感想に、大きく頷く地蔵たち。

「私が落としたのは月器ですっ！私の月器を返して下さいっ！」
輝矢が珍しく真剣な表情を見せ、声を荒げて、必死に女神に訴える。

「私のっ…私のとても大切なものなんですっ…！！」
「……っ」

見た目は女神に突っかかる、ただの凶暴な人間ではあるが、そのまっすぐな瞳と必死の言葉に、女神は少し驚いたように目を見開いた。

「竹取…さんっ…？」
「……。」
いつになく必死な輝矢に、地蔵やキリコたちは皆、少し戸惑うような表情を見せるが、その横でトマトは、そっと笑みを浮かべた。

「……貴女は…」
「……っ？」
再び口を開く女神に、輝矢が少し眉をひそめる。
「貴女は…とても正直な人ですね…」
「えっ…？」
女神が穏やかな笑みを浮かべてそう言うと、輝矢は少し驚いたように声を漏らした。
「良いです…誘(いざな)いましょう…」
女神がゆっくりと右手を上げる。
――――パァァァァァァァっっ！！――――
「なっ…！」
女神が右手を上げると、女神の立つすぐ右の水面に、人一人が通れるくらいの穴があき、そこに泉の奥底まで続く、金色の光で出来た階段が現れた。
「貴女を…貴女の武器のもとまで…」
「月器の…もとっ…？」
女神の言葉に、輝矢が戸惑いの表情を見せる。

「ほらっ、とっとと行って来なぁ～小娘っ」
「……っ」
後方から聞こえてくるトマトの声に、輝矢が振り返る。
「お前の武器が待ってるってさぁっ」
「けっけどっ…」
振り返った輝矢が、トマトに、少し躊躇うように声を発する。
「私はそのっ…」

――――アハハハハハハっっ…！！――――

輝矢の胸を、過ぎる不安。

「水の中へっ…入るのはっ…」
「……っ」
輝矢の言葉に、トマトがそっと目を細める。水の中に入れば、輝矢の力が暴走し、輝矢がもう一人の輝矢になってしまう可能性がある。そうなれば、トマトやキリコたちに害が及ぶのは、必至。輝矢は何としても、それだけは避けたいのであった。

「大丈夫だよっ」
「えっ…？」
悩むように俯いていた輝矢が、トマトの声に顔を上げる。

「ここの水は、神に守られた神聖な水だっ」
トマトが少し泉の方を見た後、まっすぐな瞳を、輝矢へと向ける。
「お前の力を暴走させることはないっ」
「……っ」
輝矢が何を躊躇っているのかを、しっかりと理解しているトマト。
そんなトマトに、輝矢が驚いたように目を開く。

――――それとも、あの国に行くかいっ？――――

「……。」

先ほどのトマトの言葉を思い出し、輝矢が少し厳しい表情を見せる。

「アナタは…」

戸惑いの瞳を、トマトへと向ける輝矢。

「アナタは…何を、どこまで知っているのですか…？」

「……。」

輝矢の問いかけに、トマトが目を細める。

「大体は知ってるさっ、だから安心して、私の言うことをきいときなぁっ」

「……っ」

トマトが手を伸ばし、輝矢の額に軽く触れる。輝矢は、触れたその手に抵抗は見せなかったが、どこか腑に落ちないような、そんな表情を見せた。

「それともぉ～」

「……っ？」

触れた手はそのままに、トマトがどこか不適な笑みを浮かべる。

「怖いかいっ？」

「んなっ…！」

相変わらずの挑発めいた発言に、一気に表情を引きつる輝矢。

「誰がっ！」
「おっとっ」
顔を引きつった輝矢が、額に触れていたトマトの手を、勢いよく振り払った。

「月器は必ず取り戻しますっ！ほらっ！とっとと行きますよっ！女神っ！」
「あっ、はっはいっ」

偉そうな態度で、女神を従え、水面に出来た奥底へと続く光の階段を、足早に降りていく輝矢。そんな輝矢に逆らいもせず、何故か大人しく後をついていく女神。二人が水中へと入ると、水面に出来た穴は、自動的に閉じた。

「行ってしまったわね…」
「ああ…女神を付き従えてな…」
まっすぐに水面を見つめるキリコの横で、地蔵が呆れたように肩を落とす。

「竹取さん、大丈夫でしょうかぁ？」
「さぁねぇっ」
不安げに問いかけるセンシに、トマトが薄く笑みを浮かべながら答える。

「ホントっ、ああいう気位の高いところは、あんたにそっくりだよっ」
トマトが誰にともなく、そっと呟く。
「朝日っ…」

第６０章　月器復活　★３

金色の光で出来た階段は、自動的に動き、輝矢が階段を降りずとも、勝手に輝矢を泉の底へと導いた。

「息が…出来るっ…」

輝矢が、少し驚いたように呟く。水力を使って空気成分を集めることをしなくとも、そこは呼吸をすることが出来た。

「この泉の水は特別なものですから…人間の呼吸も可能なのです…」

「特別っ…」

横に立つ女神の言葉を繰り返しながら、輝矢がふと周囲を見回す。一匹の魚も泳いでいないそこには、ただただ透き通るばかりに美しい水が広がるだけ。

――――ここの水は、神に守られた神聖な水だっ――――

何がどうだからということは言えないが、確かにここの水には“神聖さ”を感じた。包まれているだけで、まるで強く守られているような、そんな安心感を感じる。

「頭痛も…ないっ…」

輝矢がそっと、自分の髪に触れる。水の中に入れば、必ず起こるはずの頭痛が、今はない。

――――お前の力を暴走させることはないっ――――

「確かに…大丈夫そうですね…」

何の根拠もないように聞こえたが、今のところすべて、トマトの言った通りになっている。トマトの言葉に従うことが、徐々に正しく思えてきた。

「あんなクソババアの言うことを聞くなんて、死ぬほど癪なんですけどっ…」

「あそこです…」

「えっ…？」

トマトの発言に従うことに顔を引きつっていた輝矢が、女神の声に、ゆっくりと前方を向く。

「あっ…」

階段の終着地点となっているのは、泉の底に造られた、白い神殿のような建物であった。高さはそうないが、大きさは泉の底の半分を占めるほどに巨大である。造りからして、かなり古いもののようだ。

「神…殿っ…？」

「水の神を祀る神殿です…」

そんな会話を交わしながら、二人が階段を降り、神殿の門の前へと降り立つ。二人が階段を降りると、水面から繋がっていたその階段は、一瞬で掻き消えた。

「まぁ要は私のお家のようなものです」

「家っ…？」

「ええっ、一人暮らしにしては広いでしょう？」

「はぁっ…」

神とは思えぬ、軽い発言をする女神に、少し呆れた表情を見せる輝矢。

「ですが、神様が祀らていているような大層なところ、私では入れないのではっ…」
「貴女は…水の力を宿す者…」
「……っ」

女神の言葉に、輝矢がハッとした表情を見せる。

「貴女ならきっと…会えるでしょう…」
「会える…？」

武器を取りに来たというのに、“会える”という言い回しをする女神に、輝矢が表情を曇らせる。

「それって、どういうっ…」
「では、私はこれでっ」
「あっ！ちょっ…！」

――――パァァァァーンっ！――――

「あっ…」

輝矢に気持ちのいい笑みを向けると、女神はあっさりと金色の光となって、どこへともなく消えていった。神殿の前に取り残され、輝矢が力なく肩を落とす。

「はぁっ…親切なのか不親切なのか、よくわからない女神でしたっ…」

輝矢が少し頭を抱え、そっと呟く。

「さてとっ…」
気を取り直して、目の前の門に向き直る輝矢。
「一体、どうやって中にいっ…」
――――ギィィィっ……――――
「……っ」
輝矢が門の開け方を考えていたその時、まるで輝矢に応えるかのように、神殿の門が自動的に開いた。輝矢が少し驚いた様子で、門を見上げる。
「私をっ…受け入れようというのですかっ…」
門を見上げた輝矢が、そっと鋭い瞳となる。
「いい度胸ですっ…」
輝矢はそう言い放ち、開いた門の中へと足を踏み入れた。

門を抜けると、そこは、長い廊下であった。いくつもの白い柱で支えられた、何もない殺風景な廊下。朱実や青守の、広い屋敷でも考えられないほどに長い。変わらぬ両側の壁を見回しながら、輝矢はひたすらその長い廊下を突き進んだ。

「ったく、一体どこまでっ…」
先すら見えない長い廊下に、輝矢が疲れたように声を出す。
「えっ…！？」
その時、輝矢の目の前に、急に扉が現れた。輝矢が驚きながら、立ち止まる。扉が急に現れたため、輝矢が立ち止まったのは、扉のすぐ手前であった。
「なっ…何故っ…？」
先ほどまではなかったその強固な石造りの扉に、戸惑いながらも手を伸ばす輝矢。
――――パァァァァァァーーっっ！――――
「……っ」
輝矢が手を触れた途端に、扉は金色の光を発し、自動的に開いた。見た目は重い石造りであるというのに、まるで重さを感じさせず、軽々と開いていく。
「このっ…扉は一体っ…」
戸惑いながらも、完全に扉が開ききったので、その中へと足を踏み入れる輝矢。
「グガアアアアアっっ！！」
「えっ…！？」

輝矢が扉の奥へと足を踏み入れた途端、輝矢へと飛び掛かってくる、二本の角の生えた青色の鬼。

「鬼っ…鬼人っ…！？」

「グガアアアアアアアアっっ！！」

「クっ…！」

横へと体を転がすように飛び、鬼人の振り下ろした爪を、何とか避ける輝矢。

「何故っ…！神の神殿に鬼人がっ…！？」

「グガアアアアアアっっ！！」

「……っ！」

起き上がったばかりの輝矢へ向け、さらに爪を振り下ろそうとする鬼人。輝矢が表情を険しくし、素早く両手を構えた。

「“水月”っ…！」

両手を構え、水月を放とうとする輝矢。

「へっ…？」

訪れる沈黙に、輝矢が目を丸くする。

「水が…出ないっ…？」

「グガアアアアアアっっ！！」

「うぅわっ！」

水力が使えないことに戸惑っていた輝矢に、鬼人が勢いよく爪を

振り下ろす。焦りながらも、何とか後ろに跳び上がり、再び爪を避ける輝矢。

「グガアアアアアっ！！」

「うっ…！」

さらに爪を振り上げる鬼人から、輝矢が慌てて逃げる。

「なっなんで水がっ…！というか何故、鬼人がっ…！？」

必死に鬼人から逃げながら、戸惑いの言葉を口にする輝矢。

「まさかあの女神っ…！謀ったんじゃっ…！」

「そうじゃない…」

「へっ？」

どこからか聞こえてくる声に、輝矢が少し驚いたように顔を上げる。だが逃げながら周囲を見回してみても、その声の主らしき人物の姿は見当たらなかった。

「空耳っ…？」

「この部屋は、あなたの心が映し出されたもの…」

「えっ…？」

さらに聞こえてくる声に、眉をひそめる輝矢。

「私のっ…心っ…？」

「そうっ…」

声の主を探すことはせず、戸惑うように聞き返す輝矢に、その声はしっかりと頷き返す。

「冗談っ」
険しい表情を見せていた輝矢が、すぐにその声を笑い飛ばす。
「私の心の中にいるのはハチだけですっ、鬼なんてっ…！」
「あの鬼は、あなたの心の中の不安や恐怖が形となったもの…」
「……っ」
再び、輝矢の表情が曇る。

「私の…不安や恐怖っ…？」
「ええっ…」
鋭く問いかける輝矢に、頷く声も真剣となる。

「私の心にっ、不安や恐怖なんてっ…！」
「“私は本当に…牢戸知玖が倒せる…？”」
「……っ！」

輝矢の声でそう言いながら、どこからともなく現れる鬼。一本の金色の角に、赤色の皮膚。先ほど爪で攻撃してきた鬼とは、また別の鬼である。

「“私は本当に…世界を救うことが出来る…？”」
「“私は本当に…ハチのことを守れる…？”」
「……っ」

輝矢の声を発しながら、次々と現れる鬼。輝矢が、その場で足を止める。

『“むしろ…私自身の存在が…ハチを傷つけるんじゃない…？”』

「……っ！」

声を揃える鬼たちに、輝矢が大きく目を見開く。

「何をっ…！」

「“この前だって…遠ざけようと傷つけたし…”」

「“海底都市の時だって…もう少しでハチを殺すところだった…”」

「“私なんかが…ハチの傍にいるべきじゃないんじゃないかな…”」

「……っ」

輝矢が言い返す前に、次々と返ってくる言葉。その言葉の一つ一つに、輝矢が強く唇を噛み締める。

「あなたの心の中にある不安や恐怖は…鬼という形をとって…さらにあなたを追い立てる…」

深く俯いた輝矢の耳に、再び届くあの声。

「ここで負けては…あなたは…」

「……さいっ…」

「えっ…？」

輝矢が小さく落としたその声を、聞き取れなかったのか、謎の声がそっと聞き返す。

「何っ…」

「うるさいと言ったんですっ！」

「ギャアアアアアアアっ！」

「えっ…？」

顔さえも見えない相手に、偉そう極まりない態度で強く言い放っ

た輝矢が、勢いよく右足を振り切り、すぐ横に立っていた鬼人を吹き飛ばした。その輝矢の行動に、戸惑いの声が漏れる。

「好き勝手なことばっかり言ってくれちゃってっ…」

輝矢がその瞳を鋭くし、周囲に立ちはだかる鬼たちを見つめる。

「冗談じゃありませんっ！」

がっしりと腕を組む輝矢。

「私が倒すと言ったら倒すし、守ると言ったら守るんですっ！」

『ぐがっ…』

輝矢が強い口調で、言葉を続ける。そんな輝矢に、少しずつ押され始める、周囲の鬼人たち。

「不安や恐怖っ？くだらないっ」

その鋭い瞳が、鬼たちを睨みつける。

「そんなものはっ、一切合財、今すぐ消えなさいっ！」

『……っ！！』

――――パァァァァァァァーーーンっ！――――

輝矢が強く言葉を放った途端、周囲を取り囲んでいた鬼人たちが、大きく目を見開き、輝矢のその“消えなさい”という言葉に従うように、一斉に光と化して掻き消えた。

「あっ…」

少し呆然をした表情を見せる輝矢。

「ホントに消えましたねぇ…」

一気に誰もいなくなった部屋に、輝矢自身が少し驚いたように呟く。

「何故っ…」

「ウフフフっ！」

「……っ！」

後方から聞こえてくる笑い声に、輝矢が再び表情を引き締め、勢いよく振り返る。

「何もっ…！……っ」

「ウフフフっ！ウフフっ！」

輝矢が振り返った先に立っていたのは、金色の長い髪に金色の瞳の、まだ幼さを残した顔立ちをした、美しい少女であった。輝矢と同じくらいの年頃であろうか。見た目はそのくらいに見えるが、何かはっきりと年齢を定めにくい空気を持っている。月の浮かぶ夜空を描いた、美しい柄の着物を着ていた。少女は何が可笑しいのか、腹を抱えるようにして笑っている。

「誰っ…」

「ああっ！ごめんなさいっ！可笑しかったから、つい大笑いしちゃったっ！」

「あっ」
少女が慌てたようにそう言う。輝矢はその声に聞き覚えがあり、ハッとした表情を見せた。
――――この部屋は、あなたの心が映し出されたもの……――――
それは先ほど、鬼人から逃げ回っている時に、聞こえてきた声。
「アナタは、先ほどのっ…」
「ええっ！」
輝矢の言葉に頷きながら、やっと笑いを止めた少女が輝矢の方へと歩み寄ってくる。
「あっ！私はあなたの不安や恐怖とかではないから、安心してねっ！」
少女が少し慌てるように、言い加える。
「というか、不安や恐怖は、あなたが力技で消しちゃったしねっ！ぷっ！ウフフフっ！」
「……っ？」
再び笑い始める少女に、輝矢が眉をひそめる。
「ウフフフっ！フフフっ！ああぁ～っ！“消えなさい”って言って、自分の恐怖掻き消した人なんて、初めて見たっ！ああぁ～っ！面白っ！」
「……。」
本当に可笑しそうに笑う少女に、輝矢は少し自分の行動が恥ずかしくなって、バツが悪そうな表情で俯く。
「でっ？」
「へっ？」

輝矢の聞き返しに、目を丸くする少女。

「私の不安や恐怖でなければ、アナタは一体、何なのです？」

「えっ？あっあぁ～っ、まぁっ、あれっ！あなたの心の中の住民っ！」

その問いかけに、少女は少し誤魔化すように答える。

「ハチ以外に、住民権をあげた覚えはないんですがねぇ」

「フフフっ！」

「はっ？」

またもや何とも可笑しそうに笑い始める少女に、輝矢が思わず顔を引きつる。

「何です？」

「いっやぁ～っ！ハチハチってホントにハチ好きだなぁ～って思ってっ！あぁぁ～っ！面白っ！」

「……っ」

腹を抱えて笑う少女に、先ほどは恥ずかしくなった輝矢であったが、今度はだんだんと腹が立ってきて、その眉を吊り上げた。

「好きなものを好きと言って、何が悪いんですっ」

輝矢が少ししかめた表情で、そっぽを向く。

「ううんっ！全然、悪くないよっ！すっごく輝矢らしいっ！」

「えっ…？」

満面の笑みで答える少女に、輝矢が少し驚いたように振り向く。

驚いたのは、“悪くない”と言われたことではなく、その後の“輝矢らしい”という言葉。それはまるで、輝矢のことをよく知っているような言葉であった。

「……。」
輝矢が戸惑うように、少女を見つめる。その金色の瞳は、初めて見るはずなのに、何故か妙に懐かしい気持ちにさせられた。少女のことをよく知っているような、そんな気がしてならなかった。

「アナタっ…まさかっ…」
「本当はねっ、ずっと心配してたんだっ…」
「えっ…？」
少し俯き、声を落ち着かせて呟く少女に、輝矢が眉をひそめる。

「今までの輝矢は、“自分が鬼を倒さなきゃ”ってゆう使命感みたいなもので戦ってた気がしてっ…」
「……っ」

その少女の言葉に、ハッとした表情を見せる輝矢。自分のことを見事に言い当てられたような、そんな気分であった。

「でも、ハチに出会ってから、輝矢は変わったっ」
少女が顔を上げ、嬉しそうな笑顔を輝矢へ向ける。

「私っ、ハチのために戦う輝矢の方が断然、好きっ！」
「……っ」
曇りのない笑みを浮かべる少女を、少し眩しそうに、目を細めて見つめる輝矢。

「輝矢と出会って、輝矢を変えてくれた、ハチも大好きっ！」
「どんなに好きだろうと、私のハチはあげませんよっ？」
「フフフっ！わかってるよっ！」

顔をしかめた輝矢を見て、少女がさらに楽しそうに笑う。

「それに私はっ、輝矢が幸せでいてくれたら、それが一番幸せだからっ…」

「えっ…？」

まるで家族を思うかのような、穏やかな笑みを浮かべる少女に、輝矢が少し戸惑った表情を見せる。

「やっぱりアナタはっ…」

「だからねっ、今が最後だと思うっ」

「……っ？」

何かを言いかけた輝矢の言葉を遮り、少女が輝矢に真剣な眼差しを向ける。

「引き返すならっ…」

「……っ」

少女のそのまっすぐな瞳に、表情を曇らせる輝矢。

「これから先の戦いに進めば、輝矢はきっと、もっと傷つくことになるっ…」

少女が、何とも辛そうな表情を見せる。

「体だけじゃないっ…心もっ…」

「……。」

言葉を続ける少女に、輝矢は少し考え込むような表情を見せ、そっと俯く。

「だから、だからねっ、もしっ、引き返すならっ…！」
「アナタは何年、私の傍にいたんです…？」
「えっ…？」

輝矢の問いかけに、少女が戸惑うように目を丸くする。

「アナタは私の、何を見てきたんです…？」

顔を上げた輝矢が、突き刺さるようなまっすぐな瞳を、少女へと向ける。

「私はっ、中途半端に投げ出す趣味も、途中で引き返す趣味もありませんっ」

輝矢が、堂々と言い放つ。

「私は牢戸知玖を倒して、ハチを守りますっ！これだけは死んでも曲げれませんっ！」
「……っ！」

強く、はっきりと、何の迷いもなく言い放つ輝矢に、少女が大きく目を見開く。

「いくらアナタでも、口応えはっ…」
「ぷっ！ウフフフっ！」
「はぁっ？」

吹き出すように笑い出す少女に、輝矢が再び顔をしかめる。

「今度は何ですっ？私の常にまっすぐ、超ひたむきな姿が、そんなに面白かったですかっ？」
「ええっ！もう死ぬほど、意地っ張りなところが最高に面白っ！ウフフっ！」
「……。」
大きく笑う少女に、何となく貶されているような気がして、輝矢がさらに表情を引きつる。

「ごめんなさいっ」
「えっ…？」
少女の声に、輝矢が不思議そうに振り向く。

「“引き返す”なんてっ、輝矢には愚問だったねっ」
「……愚問も愚問っ、死ぬほど愚問ですよっ」
「ウフフっ！」
少し煩わしそうに答える輝矢を見て、少女が嬉しそうに笑う。

「じゃあっ、私の心も決まりっ！」
「えっ…？」
少女の言葉に、輝矢が少し首を傾ける。

「最後までっ…輝矢と一緒にいくよっ！」
「……っ」

少女の笑顔に、輝矢が目を見開く。そしてそっと俯き、今後は目を細め、そっと口元を緩ませた。

「……ありがとうっ…」

「ウフフっ！」
感謝の言葉を零した輝矢に、少女はさらに嬉しそうに笑う。
「さぁっ！輝矢っ！」
「……っ？」
笑顔の少女が、輝矢へその細い右手を差し出す。
「呼んでっ」
少女がまっすぐに、輝矢を見つめる。
「私の名をっ！」
「……っ」
少女の言葉に、輝矢はそっと微笑み、強く少女の手を掴み取った。
「“月器”っ…！」
「……っ」
――――パァァァァァァァァァーーーーンっ！――――
輝矢が少女の名を呼んだ途端、少女の体が金色の光と化した。

≪輝矢っ…輝矢っ…≫

泉の底に響く、少女の声。

≪月はねっ、誰かに照らされて、初めて、輝けるのっ…≫

優しい声。

≪だからねっ、輝矢っ…あなたの光で、私を照らしてっ…≫

懐かしい声。

≪もっともっと輝いて、私を照らしてっ…！≫

力強く、胸に響く。

≪竹取輝矢っ…！！≫

「……っ！！」

その声に応えるかのように、輝矢が大きく目を見開き、高々と両手を挙げた。

「“月器・三日月”っ…！！」

――――パァァァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

第６０章　月器復活　★４

『……っ！！』

泉の中から突き上げる、強い金色の光に、ほとりに座り込み、輝矢の帰りを待っていたトマトたちが、一斉に立ち上がる。

「なっ何っ…？」
「この光は…？」
「……。」

皆が戸惑うように突き上げた光を見つめる中、トマトは一人、鋭い表情でその光の中心を見る。

「……っ」
『あっ…！』

金色の光に包まれながら、浮かび上がるようにして水面上に現れる人物。その人物を見て、皆が大きく目を見開く。

「マクラっ…」
『竹取さんっ！』
「……。」

そう、それは、輝矢であった。輝矢が光に運ばれるようにして、泉から岸へと降り立つと、泉に突き上げていた金色の光が消える。

「おかえり」
「ババアっ」
輝矢が顔を上げると、そのすぐ目の前にトマトが立った。

「どうやらっ、上手くいったようだねぇ？」
「……ええっ」
少し口元を緩めて頷いた輝矢が、そっと自分の右手に目を落とす。

「……っ」

輝矢の右手には、美しく金色に輝く、三日月が、しっかりと握られていた。砕かれる前とまったく同じ形。だが砕かれる前よりも、輝きを増しているように見えた。

――――輝矢っ……――――

「……。」

思い出される少女の笑顔に、輝矢がそっと目を細める。

「……ありがとうっ…」
輝矢が、もう一度、感謝の言葉を呟く。

「“月器”っ…」

三日月は、その声に応えるかのように、一瞬だけ、強く光った。

「さぁ～てっ、武器も戻ったことだしぃ～っ」
「……っ」

トマトの声に、三日月の方を見ていた輝矢が、顔を上げる。
「とっとと修行を始めようかぁ～っ」
輝矢に背を向け、どこかへと歩いていくトマト。数歩歩いたところでトマトが足を止め、輝矢の方を振り返る。
「覚悟しなっ！小娘っ」
「……っ」
鋭い瞳で微笑むトマトに、輝矢は少し驚いた表情を見せたが、すぐに口元を緩め、笑顔を作った。
「臨むところですっ、クソババアっ」
こうして、輝矢の修行が始まった。

修行開始八日目。虎国・白雪の屋敷付近。
「いくわよっ！“雪剣”っ！」
「来いっ！“炎刃”っ！！」
今日も激しくぶつかり合う、白雪の氷とゴンの炎。

「まぁ～だやってるよぉ～あの二人っ、ほわぁ～あっ」
二人の戦いを横から見守る芹が、そう呟きながら、眠そうに欠伸をする。
「もう夜中だよぉ～？」
「先に寝てな、芹」
「えっ…？」
優しく頭を撫でる兄・鈴白に、芹が少し目を丸くする。
「お兄ちゃんは？」
「うんっ、僕はっ…」
芹の問いかけに、鈴白は言葉を続けながら、戦っている白雪の方を見た。

「……っ」

真剣な、楽しそうな顔を見せている白雪を見て、鈴白がそっと目を細める。

「もう少しっ…」

「どんどんかかってきなさいっ！キツネっ！！」
「臨むところだぁっ！トラぁぁぁっっ！！」

鈴白が見守る中、ゴンと白雪の戦いは続く。

修行開始十三日目。幸ノ街。

「“右翼っ…」

由雉が青い羽根を構え、その瞳を鋭くする。

「裂羽”っ…！！」

由雉が目の前にある石の壁に向け、青い羽根を投げ放った。

――――バァァァァァァァーーーーンっ！！――――――

青い羽根が突き刺さった途端に、粉々に崩れ落ちる石の壁。その欠片の一つ一つは、手で掴めるほどに小さな大きさで、羽根の威力を物語っている。

「すっすごっ…」

「ええっ…」

崩れた石の壁を、茫然と見つめる幸コと幸之助。

「まだ威力が足りないねぇ～」

『ええっ！？まだっ！？』

由雉の横へと現れるハヤテの言葉に、幸コと幸之助が激しく驚く。

「確かに、一枚でこの街ごと、ふっ飛ばせるくらいの力が欲しいな

ぁ～」
「そうだねぇ～っ！もう少し吟味してみるよぉ～っ！」
『……。』
由雉とハヤテの会話を聞き、幸コと幸之助が表情を引きつって固まる。

「なっ何をするつもりなんだろうっ…この親子っ…」
「ですねっ…」
『あっ！三時っ！』
幸コと幸之助が一抹の不安を募らせている中、由雉とハヤテが三時を示している時計を見て、きれいに声を揃える。

「ミチルのところへおやつを食べに行かないとぉっ！」
「ミチルさんがおやつブチまける前に、とっとと帰らないとっ…！」
それぞれにそう言って、二人がこぞるようにして、ミチルの家へと駆け出していく。

「とりあえず…似た者親子だってことは確かね…」
「ええっ…」
走り去っていく二人の背中に、呆れた表情となる幸コと幸之助。

「マイソンっ！おやつが済んだら、滅羽の方の試し投げも頼むよぉ～っ！」
「りょうかぁ～いっ！」
おやつが済めば、由雉の修行は続く。

修行開始十七日目。犬国・里見家屋敷。

「おっらぁぁぁぁぁぁっっ！！」

「村雨丸っ…！」

上空から勢いよく降下しながら、右手に装着した鉄爪を振り下ろしてくる犬忠に、村雨丸を構える、地上の桜時。

――――カキィィィィィィーーーーンっ！――――――

重なり合う村雨丸と鉄爪に、強く響く金属音。

「クっ…！」

上からの攻撃で、有利な状況にあるというのに、鉄爪にかかる強い力に、犬忠が少し顔を歪ませる。

「覚悟するでぇぇぇっ！！桜時ざぁぁぁぁ～～んっ！！」

「……っ！」

犬忠と交戦中の桜時のもとへ、巨体・犬悌が両手を突き出して、突っ込んでくる。

「よっ！」

「あんれぇっ？」
「どわあああああああああっっ！！」
桜時が犬忠の鉄爪を強く押し返し、高々と上空へと飛び上がると、行き場を失った犬悌とバランスを崩した犬忠が、勢いよく正面衝突した。

「ってぇなっ！何すんだよっ！犬悌っ！」
「ごめんだぁぁ～っ」
不機嫌そうに怒鳴りつける犬忠に、犬悌が面目なさそうに頭を下げる。

「その隙にぃ～っ！」
『……っ？』
倒れ込んでいる犬忠と犬悌の前に立ち、弓だけを構え、矢もないのに、矢を射るような格好を取る犬信。

「空に飛び上がるなんてっ…格好の餌食だよっ…！桜ちゃんっ！」
上空に飛び上がった桜時の姿を捉え、犬信が鋭い瞳を見せる。

「“白矢”っ…！！」

犬信が矢のない弓から、桜時へ向けて、白く輝く光の矢を放つ。

「……っ」
向かってくる白矢に、上空で逃げ場もない桜時であるが、特に焦った様子は見せず、白矢へ向け、冷静に左手を突き出した。

「“瞬花”っ！」

――――パァァァァーンっ！！――――

桃色の光に包まれ、一瞬にして桜の花びらとなって散っていく白矢。

「うわぁ～っ、お花になっちゃったっ」

「……っ」

空から降ってくる桜に目を取られている犬信へ向け、上空の桜時が素早く村雨丸を構える。

「“瞬花っ…終刀”っ…！！」

「うえぇっ！？」

まっすぐに向ってくる桃色の一閃に、犬信が一気に焦りの表情となる。

「うわわわわっ！レイレイぃ～っ！」

すでに矢を射る時間もなく、犬信が横に立っている犬礼へと、助けを求める。

「そのまま腐って死ね…腐れ小僧…」

「うわぁ～んっ！レイレイっ！ヒドイぃぃ～っ！」

「……っ」

「あっ！」

犬礼に冷たい態度を取られ、涙目になっている犬信の前に、素早く犬智が立ちはだかる。

「“白壁”っ！！」

――――パァァァァーンっ！――――

両手を突き出し、自分と犬信の前に白く光る壁を作って、桜時の放った一閃を受けとめる犬智。

「ふはぁ～っ…助かったっ…」
「お前はそこで腐っていろっ、腐れ小僧っ」
「同時にいくぞっ、犬礼っ」

犬信がホッと胸を撫で下ろしている中、犬義と犬礼が素早く犬智の前に出て、それぞれに大刀と薙刀を構えた。上空から地面へと降り立ったところの桜時へと、狙いを定める。

「“白閃”っ！！」
「“白斬”っ！」

桜時へ向け、犬義と犬礼が、同時に技を繰り出す。

「……っ」
向かってくる二つの力に、少し表情を曇らせる桜時。

「村雨丸っ…」
『……っ？』
地面に村雨丸の刀先を突き刺す桜時に、犬義と犬礼が眉をひそめる。

「何をっ…？」
「“伝光っ…刹花”っ…！！」

――――パァァァァァァァァーーーーンっ！――――

『……っ！！』

村雨丸の突き刺さった地面から、桃色の光が周囲へ物凄い勢いで走り、その光が一斉に突き上げて、桜時へと向かっていた犬義の白斬と犬礼の白閃を、一瞬にして桜の花びらへと変えた。

「俺たちの技をっ…」

「同時に桜にっ…」

少し圧倒された様子で、犬義と犬礼が呟く。

「白槍っ…！」

圧倒されている二人を飛び越えるようにして、前へと出てくる白槍を構えた犬仁。犬仁は少しも怯んだ様子を見せることなく、桜時へ向けて白槍を構える。

「“白雨”っ…！！」

犬仁が白槍の先を桜時へと向けると、そこから、雨のような無数の白い光の刃が、桜時へ向かって放たれた。

「……っ」

桜時は厳しい表情を見せ、素早く地面に突き刺していた村雨丸を抜き、構えを取る。

「“柔桜っ…無塵”っ！！」

村雨丸から放たれる、無数の桜の花びら。

――――バァァァァァァーーンっっ！！――――

二つの力が、両者の間で、激しくぶつかり合う。

「うっ…！」

しかし徐々に桜が、白い雨を押し始め、やがては白雨を押し返して、犬仁の方へと向かってきた。

「クっ…！」

「ヒトちゃんっ…！」

何とか横へと飛び、ぎりぎりのところで桜時の技を避けた犬仁を、駆けつけた犬智が受けとめる。

「すまないっ…」

「ううんっ」

――――バァァァァァーーンっっ！！――――

『……っ！』

会話を交わしていた二人が、巨大な衝撃音に、目を丸くして振り向く。

『あっ…』

二人が振り返った先には、犬仁が避けた桜時の技により、激しく

抉られ、大穴のあいた地面があった。その光景に、犬仁と犬智が唖然とした表情を見せる。

「何という力だっ…」
「ヒトちゃんっ…当たってたら…危なかったね…」
「あっああ…」
犬智の最もな言葉に、少し表情を引きつって頷く犬仁。

「ふぅっ」

犬仁が表情を引きつっていることなど露知らず、桜時はホッと一息をついて、構えていた村雨丸を下ろした。

「ふっひゃぁ〜っ…」
一連の交戦を横から眺めていた門貴が、感心したように声を出す。
「ホンマに一人で八犬士全員を圧倒しよったわぁ〜イヌコロっ」
「イヌのくせにやりおるなっ」
「猿の村に来た頃とは、別人の強さですねぇ、桜時さんっ」
門貴の横に並び、同じように戦いを見つめていた二花とチョキ三郎は、感心というよりかは、その強さに戦ってもいないのに圧倒されたような、そんな表情であった。

「お見事でした、桜時様っ」
「おうっ、サンキュっ」
そう言って水を差し出した犬仁に、桜時が水を受け取りながら、笑顔を向ける。

「これでやっとじじいとっ…」
「どうやら…第一段階はクリアしたようじゃな…」
「……っ」

聞こえてくるその声に、桜時が反応よく振り向く。

「じじいっ…」
「……。」

桜時が振り向くと、里見の屋敷の縁側に、八房が立っていた。

「では次はっ…」
「ぐほおおぉんっ！げはあぁぁぁぁっ！ごほぉぉぉんっ！」
「咳くらいっ、向こうの方でせんかっ！！」
「ゲホゲホっ！すっ…すまんっ」

八房の言葉を遮り、すぐ横で勢いよく咳込む長老に、八房が思わず全力で突っ込みを入れる。

「ふぅっ」

長老を部屋の中へと押し入れ、ホッと一息つく八房。

「では次は、わしが直々に相手をしてやる…」

八房が桜時へ、鋭い瞳を向ける。

「準備はいいなっ？桜時っ」
「……っ」

向かい合う祖父に、呼ばれる名に、桜時も鋭い瞳を見せて微笑む。

「ああっ！」

八房の言葉にしっかりと頷き、桜時は再び村雨丸を構えた。

「でっ？」

桜時と八房の様子を見守り、穏やかな笑みを浮かべていた犬仁が、ふと眉を吊り上げて、横を振り向く。

「お前はいつから修行を始めるんだ？」

「あっははぁ～っ！」

犬仁の鋭い問いかけに、どこか引きつった笑みを浮かべる門貴。

「まっまぁそれはっ、追々っちゅーことでぇっ…！」

「何が追々だっ！もう期間は、半分以上も経っているんだぞっ！？」

軽く誤魔化そうとする門貴を、さらに強く責め立てる犬仁。

「とっとと強くなって、桜時様を守れっ！私が相手をしてやるっ！」

「うわわわわっ！ちょちょちょっ…！」

槍を向けてくる犬仁に、門貴が焦ったように声を出しながら、必死にその向けられた槍をかわす。

「アンタに相手させるくらいならっ、私が戦ったるわぁっ！！」

「はぁっ！？」

犬仁に対抗し、いきなり大バサミを門貴へと向けてくる二花。

「ちょおっ…！お前らなぁっ…！」

「うっわぁ～いっ！楽しそぉ～っ！僕も混ぜてぇ～っ！」

「黙れ、腐れ小僧っ…俺が混ざるっ…」

「丁度いいっ、この前の再戦といくかっ」

「へぇっ？へぇっ！？へぇっ！！？」

次々に武器を向けてくる犬信、犬礼、犬義に、門貴の顔色がどんどんと青くなっていく。

「うっぎゃあああああああああああっっっ！！！」

こんな感じで、桜時と門貴、それぞれの修行は続いていく。

修行開始十八日目、きこりの村のはずれ。

「手当て…終わった…」

丁寧に包帯を巻いていたミイラ男が、最後にしっかりと包帯を結び止め、そう呟く。

「ああっ、悪いねぇっ、ミイラ男っ」

「ううんっ…」

左腕に包帯を巻かれたトマトが、ミイラ男に笑みを向けると、ミイラ男も包帯の奥でそっと口元を緩めた。

「でも久し振りだね…トマトの傷の手当てをするなんて…」

「そうかぁいっ？」

「トマトに傷をつけられる人なんて…最近は全然、いなかったから

…」

「……っ」

ミイラ男のその言葉に、トマトが少し顔をしかめる。

「今回は油断してただけっ！たまたまだよっ」

「そうっ…」

不機嫌そうに言い放ちながら立ち上がるトマトを見上げ、ミイラ男がそっと目を細める。

「おらぁっ！とっとと続きいくぞぉっ！小娘ぇっ！」

「私は負傷したアナタの手当てを待っていただけで、準備の方は万全ですが？」

「うっせっ！丸焼きにするよぉっ！」

嫌味のように言葉を吐く輝矢に、強く言い返しながら、トマトが輝矢の方へと歩いていく。

「……っ」

そんなトマトの後ろ姿を見て、ミイラ男がそっと目を細める。

「トマトさん、楽しそうですねぇ～」

「ああっ…」

ミイラ男の後方から、同じようにトマトの背中を見つめながら、穏やかな笑みを浮かべるセンシと地蔵が、言葉を交わす。

「トマトのあんな顔は、久々に見るっ…」

――――次狼ぉぉぉぉっっ！！！――――

あの絶望の日から、もう見れることはないと思っていた笑顔。

「感謝するべきなんだろうなぁ…」

地蔵がそっと目を細める。

「竹取輝矢にっ…」

「おぉ～しっ！次は私のスペシャル必殺なプロレス技を教えてやろうっ！」

「結構ですっ」

「ああっ！？何だとぉぉっ！！？」

旦那たちが見つめる中、輝矢とトマトの修行は続く。

こうして、それぞれの一ヶ月は、過ぎていった。

第６０章　月器復活　★４（後書き）

この章にて、第５部終わりになりますぅ～。
次回から第６部です。
第６部もよろしくお願いいたします。

第６１章　再集結　☆１

御伽界中央部・“鬼ヶ島”。

「シルク様…」

木の一本すら生えていない、その荒れ果てた大地の広がる島を、周囲を少し戸惑うように見回しながら歩く諸刃。呼びかける諸刃の前方には、シルクの姿があった。

「ここは一体っ…」

「ここは“鬼ヶ島”…」

諸刃の問いかけが終わらぬうちに、シルクが振り向きもせずに、短く答える。

「かつて…すべての鬼が滅びた地…」

「えっ…？」

シルクの言葉に、諸刃がそっと眉をひそめる。

「何故、このようなところにっ…」

「着いたわ…」

「えっ…？」

そう言って足を止めるシルクに、諸刃も問いかけをやめ、足を止める。

「……っ」

顔を上げた諸刃の表情が、一気に曇る。荒れた大地のその奥、尖った山のすぐ麓に存在したのは、巨大繭のようなものであった。白く細い糸が幾重にも重なり合っており、中がどうなっているのかは見えない。だが虫類の繭にしては大き過ぎる、人でも入れそうなくらいの繭であった。

「シルク様…こっこれはっ…」

諸刃は動揺を隠しきれず、少し声を震わせる。

「さぁ…起きて…」

――――ピキっ……！――――

「えっ…？」

シルクの声に反応したかのように、分厚い繭に突然、鋭い亀裂が入る。繭の中から噴き出した空気は湯気のように白い。そして妙に熱く、その熱が亀裂の部分から、徐々に繭を溶かし始めた。繭の上部分が溶け落ちて、やっとその中身が明らかとなっていく。

「……。」

「人っ…？」

繭の中から見えたのは、一つの人影。その姿に、諸刃が大きく目を見開く。

「いやっ…“鬼”か…」

そう言い直し、諸刃が眉をひそめる。

「さぁ…おいで…」

シルクがそっとその口元を緩め、繭の中から現れたばかりのその者へ、そっと白い手を伸ばす。

「もう一人の私っ…」

「……。」

繭の中から姿を見せたのは、目元までかかる長く白い前髪に、感情のない赤い瞳の、きれいな顔をした少年であった。

「……っ」

シルクの手を取る少年を見つめながら、諸刃は少し、険しい表情を見せた。

鬼ヶ島、隣島・“巌流島”。

「目覚めたか…」

島の沿岸に立ち、鬼ヶ島の方を見つめる一人の男。

「もう、そう時間はないぞ…」

鬼ヶ島を包む不穏な雲に、男が青い瞳を細め、厳しい表情を見せる。

「太狼っ…」

男の白髪が、強い風になびいた。

修行開始三十日目。犬国・里見家屋敷。

「白槍っ…」

鋭い瞳で、白槍を構える犬仁。

「“白雨”っ…！！」

犬仁が白槍を突き出すと、そこから無数の白い光の刃が、横から降る雨のように勢いよく放たれた。

「……っ」

白雨の向かう先に立つのは、門貴。門貴がその表情を引き締め、新しく出来た如意棒を身構える。

「如意棒、第二の舞っ…“浄”っ！！」

――――――バァアアアアーーンっっ！！！――――――

門貴が如意棒を地面に突き刺すと、門貴の四方から強い風が、まるで竜巻のように舞い上がり、門貴へと向かって来ていた白雨を、粉々に斬り裂いた。

「ふぅ～っ」

風が止むと、門貴は一息ついて、構えていた如意棒を下ろした。

「新しい如意棒にも、だいぶ慣れたか？」

「ああっ、結構なぁっ」

同じように構えていた白槍を下ろし、門貴のもとへと歩み寄って来た犬仁に、門貴が笑みを向ける。新しい如意棒で修行を始めて十三日。如意棒が、門貴の手に、やっと馴染み始めていた。

「フフンっ！まぁそれもこれも、ウチみたいな最高の修行相手がおったからこそやなぁっ！」

得意げに声をあげるのは、横から二人の交戦を見ていた、門貴の幼馴染・二花。

「貴様はブンブンと闇雲に大バサミを振っていただけだろうっ」

「何やてぇぇっ！？」

「貴様の後先考えない攻撃のせいで、どれだけ屋敷が壊されたと思っている？金を払え」

「誰が払うかぁぁぁっっ！！」

『はぁっ…』

勃発する二花と犬仁の口論に、呆れきったように肩を落とすチョ

キ三郎と他の八犬士。この口論は毎日、単位時間ごとに繰り返されており、皆はもう止めることもしなくなっていた。

「相変わらず犬蟹の仲やなぁ～アイツらっ」
「へぇ～っ、それが新しい如意棒っ？」
「……っ」

暢気に二花と犬仁の口論を眺めていた門貴が、どこからか聞こえてくる、よく知るその声に、少し目を開いて振り返る。

「良かったじゃ～んっ、唯一の取り柄の如意棒が戻ってきてぇ～」
門貴が振り返った先の木の枝で、羽根を休めているのは一羽の青いキジ。

「それなかったら、ただの役立たずのおサルさんだもんねぇ～、よっ」

――――ボォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

キジが地面へと降下していきながら、その体を白い煙に包ませる。

「ご無沙汰ぁ～っ」
白い煙の中から姿を見せた由雉が、地面に着地し、門貴に軽く右手を上げる。

「久し振りぃ～相変わらず、ボクってば可愛いでしっ…」
「ユッキーっっ！！！」
「どわあああっっ！！」

勢いよく抱きついてくる門貴に、由雉が思いきり顔を引きつる。

「とっとと離れてくれないっ？バカ菌がうつるっ」

「久々の再会やのにひどいわぁぁ～～っ！ユッキーのいけずぅっ！！」

「キモっ」

由雉の両手に力強く顔を押され、引き離される門貴。門貴が涙で訴えると、由雉はさらにその表情を引きつった。

「あっあんたらっ…」

そんな二人の様子を、唖然とした表情で見つめる二花。

「もっもしかしてそういう関っ…！」

「やめて。疑われるだけで、吐き気がするっ」

あらぬ疑いをかける二花に、由雉が心底、嫌そうな顔を見せて、すぐさま止めた。

「ふぅっ」

やっとのことで門貴を引き剥がした由雉が、少し疲れたように肩を落とす。

「でっ？桜時はぁ？」

「んっ？」

由雉からの問いかけに、顔を上げる門貴。

「ああっ、アイツならっ…」

――――バァァァァァーーンっ！！――――

「……っ！」

すぐ近くから聞こえてくる巨大な衝撃音に、由雉が驚いたように大きく目を見開く。

「なっ何っ？今の音っ」

「おぉ～、丁度、終わったみたいやなぁ～」

「へっ…？」

笑顔を見せる門貴に、由雉はゆっくりと首を傾けた。

『……。』

衝撃風の収まった庭に、少しの距離を置いて、背中合わせに立っている桜時と八房。吹き荒れる風の音だけが聞こえる、少しの沈黙。

――――パリンっ……！――――

沈黙を破ったのは、刀の折れる小さな音。

「うむっ…」
右手に握った、先の折れた刀を見た八房が、どこか満足げに深々と頷く。

「見事じゃっ…」
そう言いながら、ゆっくりと振り返る八房。

「桜時っ…」
「ふぅっ」

八房が振り返ると、一息つくように肩を落とした桜時が、ゆっくりと八房の方を向いた。こちらも満足げな笑みを浮かべている桜時の右手には、折れても欠けてもいない、きれいな状態のままの村雨丸がしっかりと握られている。

「今の最後の技、なかなかのものじゃったぞ」
「へへっ」
誉める八房に、桜時が少し照れたような笑みを浮かべる。

「なぁ〜にが“なかなか”じゃ〜っ」
『……っ？』
二人の会話に入ってくる声。

「今日だけで五本も刀折られとるくせに偉そうにぃ〜ゲホゲホっ」
「うっさいわいっ！死にかけジジイっ！」
咳込みながらも八房に厳しい突っ込みを入れる長老に、八房が少しムキになって怒鳴り返す。八房と門貴の村の長老である猿蔵は、昔からの知り合いであるらしく、種族の通りの犬猿の仲なのであった。

「ハハハっ…」
そんな二人の関係を見ながら、空笑いをして、桜時が村雨丸を鞘へと収める。

「おぉ～いっ！イヌコロぉ～っ！」
「……っ？」
聞こえてくる門貴の声に、振り向く桜時。

「……っ！由雉っ！」
「お久しぃ～っ」

桜時が門貴の横に由雉の姿を見つけ、大きく目を見開く。驚いている様子の桜時に、由雉は笑みを向けた。

「何だっ、来てたのかっ」
「うんっ、ついさっき着いたぁ」
門貴と由雉が、桜時のすぐ傍へと歩み寄ってくる。

「んでっ？修行の成果は？いい羽根は出来たのか？」
「うぅ～んっ、まぁねっ」
桜時の問いかけに、由雉は言葉を濁しながらも、どこか得意げな笑みを浮かべた。
「そっちも何か成果あったみたいじゃ～ん？何か見違えちゃったよぉ～？」
「そっそうかっ？」
微笑む由雉に、桜時が少し照れ臭そうな顔を見せる。
「ユッキーっ！！俺にはそんなこと、言ってくれんかったやんっ！！」

「だって見違えてないもん」
「ぎゃぁぁぁぁぁーーんっ！！」
「はぁっ…」
あっさりと言い放つ由雉に、門貴が激しくショックを受ける。由雉の言うように、確かに成長は見られない門貴に、桜時は深々と溜息をついた。

「まぁほんならっ、ユッキーも来たことやし、ちょい早いけど龍国戻ろかぁ～」
「そうだなっ」
立ち直った門貴の言葉に、桜時が頷く。

「修行期間は明日までだけど、こっから龍国まで遠いしねぇ～」
「ああっ、輝矢も帰って来てるかも知れねぇーしっ…」
「何っ？そんなに早く輝矢に会いたいわけっ？」
「んなっ…！！」
由雉の言葉に、桜時が一気に顔色を真っ赤にする。

「べっべべべべ別にそういうわけじゃっ…！！」
「はぁぁぁ～～ちぃぃぃぃ～～っ！！」
「ふぇっ？」

必死に否定しようとした桜時が、どこからか聞こえてくる声に目を丸くする。

「えっと…？」
戸惑った表情を見せながら、声の聞こえてきた上空を、ゆっくりと見上げる桜時。

「はぁぁぁぁ～～ちぃぃぃ～～っ！！」
「うげぇぇぇっっ！！？」

桜時が顔を上げたその視線の先には、遥か上空から満面の笑顔で、こちらへと降下してくる輝矢の姿。

「かっ…かかかか輝矢ぁぁぁぁっ！？」
「ハチぃぃぃ～っっ！！」

驚いている桜時めがけて、まっすぐに輝矢が落ちてくる。

「ちょちょちょっ…！」
「ハチっ！」
「ぎゃあああああああっ！！」

――――バッコォォォォーーンっ！！――――

第６１章　再集結　☆２

桜時が止めようと必死に手を突き出しても、重力に逆らうことは出来ず、輝矢は力強く桜時の上へと落下した。輝矢の落ちたところに、激しい衝撃風が巻き起こる。

「あぁ～あっ…」
「ご愁傷様ぁ～」
巻き起こった煙を見つめながら、門貴と由雉が呆れたような表情で呟く。

「なっ何やっ！？今の音っ…！」
「どうかなさいましたかっ！？桜時様っ！！」
輝矢の落下音を聞きつけ、二花や犬仁たち八犬士が、その場へ駆けつけてくる。

「ぐっ…ぐふっ…」

煙が止むと、その向こうから、地面に仰向けに倒れ込み、今にも死にそうな青い表情を見せている桜時の姿が見えてきた。

「ふぅ～っ」
「うげぇっ！？」

そんな桜時の体の上に、馬乗りになるように、思いきり乗っかっているのは輝矢。無事に着地出来たからか、どこか安心したように一息ついている。そんな輝矢の姿を見て、桜時が潰れたような声を

あげる。

「かっかかかかか輝矢っ…！」
「久し振りですねぇっ、ハチっ」
激しく震えた声で輝矢の名を呼ぶ桜時に、輝矢が楽しげな笑みを浮かべる。

「なっななんで輝矢がここにっ…！」
「ハチっ」
「ういいいいっっ！！」
桜時の上に乗ったまま上半身を倒し、倒れたままの桜時の顔に、自分の顔を近づける輝矢。近づいてくる輝矢の顔に、桜時が怯えるような声を出す。

「いぃ～い度胸してますよねぇ～」
「へっ…？」
鋭い瞳を向けてくる輝矢に、桜時が目を丸くする。

「私に内緒で、こっそり修行に出るなんてっ」
「うっ…！」

輝矢の言葉に、桜時が思わず顔を引きつる。そう、桜時は輝矢に犬国で修行することは黙っていたのだった。だが輝矢がここに居るということは、その隠していた修行が、もうすでに思いきりバレているということ。

「あぁ～それはぁ～そのぉ～っ…」
強く見つめてくる輝矢から視線を逸らし、締まりのない声を繋げる桜時。
「……っ」

しかし特にいい言い訳が思いつかず、桜時が顔をしかめる。

「いっ…いいだろっ！別にっ！俺だって、強くなりたかったんだからっ！」

少しムキになって、怒鳴り返す桜時。

「とっとにかく、さっさとどけってっ…！」

「……っ」

「うえぇっ！？」

赤く染まった顔を隠すように俯きながら、桜時が起き上がろうとしたその時、輝矢が勢いよく桜時の両手を掴んで、起き上がろうとした桜時を、もう一度強く押し倒した。

「ちょっ…！輝っ…！」

さらに顔を赤くした桜時が、焦ったように声を出す。

「恋人間で、秘密を作るなんてダメですよぉ～？ハチぃ～」

「だっ誰が恋人だぁぁぁっっ！！」

「償いとしてっ…」

「ひぃっ！！」

鼻と鼻の先が当たりそうな程まで接近してくる輝矢に、桜時が真っ赤にしていた顔を、一気に青くする。

「ハチの全部を、私に下さいっ」

「のおおおぉぉぉぉ～っ！！」

真面目な顔で言い放つ輝矢に、桜時が死に物狂いの悲鳴をあげる。

「うぅぅ～～んっ…」
そのやり取りを、しっかりと腕組みをして、気難しい表情で見つめる犬仁。
「このままでは桜時様の貞操がっ…助けるべきか、助けないべきかっ…」
「放っておけばいいんじゃないですか？じゃれているだけでしょう？」
本気で悩み込んでいる犬仁に、横から犬義が冷静に答える。

「ぎゃあああああああああっっ！！」

――――ボォォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――

「あっ」

必死の悲鳴をあげ、白い煙に包まれた桜時が、白いイヌ・ハチの姿となって、輝矢の下から逃れる。

「ぜぇっ…！ぜぇっ…！ぜぇっ…！」
輝矢から大きく距離を取ったところで足を止め、その前足で自分の左胸を押さえて、ハチが乱れた呼吸を何とか整える。
「ダっダメだっ…最近やっと慣れてきてたのにっ…好きって自覚しちまったから、さらに心臓がっ…」
「ハチぃ～？」
「うおおおぉぉうっ！！」
ドクドクと鳴る心臓を押さえつけ、ぶつくさと呟いていたハチが、遠くから自分の名を呼ぶ輝矢の声に、背筋をピンと立ち上がらせる。

「もっもうっ！お前っ！俺の半径五十メートル以内接近、禁止っ！！」
「五十メートルも離れてたら、会話出来ないじゃないですかぁっ」
「それでいいっ！！」
「ぶぅっ」
きっぱりと言い放つハチに、輝矢が少し拗ねるように頬を膨らませた。

「輝矢ぁぁぁぁ～～んっっ！！」
「……っ？」
ハチを取り逃がし、見るからに残念そうに立ち上がった輝矢が、後方から聞こえてくる声に振り返る。
「久し振りぃ～っ！どないぃ～っ？俺っ！修行して、一段と男前にっ…！」
「どちら様でしたっけ？」
「ぎゃびぃぃぃ～～んっっ！！」
笑顔で駆け寄って来た門貴に、輝矢が容赦なく冷たい言葉を吐くと、門貴は激しくショックを受けて、その場にしゃがみ込んだ。

「……っ？」
呆れるように門貴を見ていた輝矢が、門貴が右手にしっかりと握りしめている如意棒を見つける。
「……っ」
新しいその如意棒を見て、そっと目を細める輝矢。

「修行で性格は直らなかったみたいだねぇ～」
「……っ？」

落ち込んだ門貴を呆れたように見ていた輝矢が、横からする声に顔を上げる。
「キジ」
「久し振りぃ～」
輝矢が顔を上げると、そこには由雉が立っていた。
「アナタこそ、少しは性格直して来たのですか？幸ノ街に修行に行ってきたのでしょう？」
「ボクは顔が可愛いから、性格悪くってもいいのぉっ」
「それなら私も性格を直す必要はないでしょう」
「お前らなっ…」
輝矢と由雉のロクでもない会話を聞き、思わず顔をしかめるハチ。

――――ボォォォォォォォ～～～ンっ！――――

「ふぅっ」
やっと呼吸の落ち着いたハチが、白い煙に包まれ、再び人化した姿となる。

「んっ？」
目線が高くなった途端に、桜時がふと何かに気づく。
「輝矢っ、それっ…」
「えっ？」
桜時が指差したのは、輝矢の右耳にぶら下がった、三日月型の金色のピアス。

「おおぉ～っ！“月器”っ！」
「戻ったんだぁ～っ」
門貴と由雉も輝矢の右耳を覗き込み、どこか嬉しそうに声をあげた。

「へぇ～っ！良かったなぁ～っ！」
「これで百人力やなっ！輝矢んっ！！」
「輝矢は元々、百人分くらい力あるけどねぇ～」
「ええっ、まぁっ」
まるで自分のことのように喜ぶ三人に、輝矢は少し照れたような笑みを浮かべながら、ピアスを弾いて、復活した月器を目覚めさせる。

「“月器・三日月”」

前よりも強く輝く三日月を、右手にしっかりと収める輝矢。

「互いに実りある時間を過ごしたようですね」
「へっ？」
輝矢が目覚めさせた三日月の先を、門貴の方へと向ける。

「サルっ」
「……っ」

三日月の刃先が向いたのは、門貴が握っている如意棒。穏やかに微笑む輝矢を見て、門貴は少し驚いたように目を見開いたが、すぐに笑みを浮かべた。

「ああっ！」
門貴が差し出された三日月の上に、新しい如意棒をしっかりと重ね合わせる。

『……っ』
その様子を見て、互いに目を合わせ、頷き合う桜時と由雉。

「よっと」
『……っ？』
「最近こうゆうクッサいことばっかやってるよねぇ～」

重ね合わされた三日月と如意棒の上に、それぞれ、村雨丸と青い羽根を乗せる桜時と由雉。武器を乗せた二人が、笑顔を見せる。

『……っ』

その二人に釣られるようにして、笑みを浮かべる輝矢と門貴。

「再集結っちゅーやつやなぁっ！」
「たったの一ヶ月で大袈裟なんだよぉ～」
「ハチ、一ヶ月離れてた分、存分にイチャイチャしっ…」
「結構ですっ！！」

重なった四つの武器を取り囲みながら、四人が明るく言葉を交わす。

「では改めてっ」
輝矢が少し間を取ってから、声を発する。

「私を共に戦いなさいっ、イヌ、サル、キジ」
「おうっ！」
「喜んでぇ～っ！」
「えええ～っ？」

輝矢の偉そう極まりない言葉に、三人はそれぞれ言葉は違うものの、皆、笑顔を見せる。

『……っ』

そんな四人の様子を見守り、笑みをこぼす、八犬士の皆や二花、チョキ三郎。

「アナタたち、修行して少しは使えるようになったのでしょうねぇ？」

輝矢が急に表情をしかめ、三人にそう問いかける。

「使い物にならなかったら、容赦なく捨て去りますからね」

「うっはぁ～っ！厳しっ！」

「まぁいつもの感じじゃなぁ～い？」

「はぁっ…」

輝矢の厳しい言葉に、門貴は思わず額を手で押さえ、由雉は特に気にすることなく笑みを浮かべ、桜時は深々と溜息をついた。

「ほっほっほっ！」

四人の会話を聞いていた長老が、どこか楽しそうに微笑む。

「いいチームじゃなぁっ」

「ああっ…」

長老の言葉に、その横の八房は穏やかな笑顔で、ゆっくりと頷いた。

「ってゆうか、輝矢は何で、ボクらが修行に出てること、知ってたわけぇ～？」

「昨日、早めに修行が終わったので、ババアと一緒に龍国へ戻ったんですよ」

由雅の問いかけに、輝矢がスラスラと答える。
「皆がいなかったので、タローに聞いたら“修行に出たよぉ～”って」
「あの野郎っ…あっさり口割りやがってっ…」
輝矢の言葉に、桜時が思わず顔をしかめ、拳を強く握り締める。

「最初は“秘密ぅ～”って言い張ってたんですけどね、いちご大福あげたら、すぐに口割りました」
「意志弱過ぎだろっ！！」
この場にいない太狼に、つい突っ込みを入れてしまう桜時。

「まぁほんなら、みんな揃ったことやし、龍国戻ろかぁ～っ」
「そうだなっ」
門貴の言葉に、改めて頷く桜時。

「じゃあ俺、準備をっ…」
「ああ、ハチっ」
「んっ？」
龍国に戻る準備をしに、屋敷の中へ行こうとした桜時を、輝矢が呼び止める。

「何っ…って、うおっ！？」

輝矢の両手に両頬を挟み込むように持たれて、桜時が無理やり、顔を横へと向かされる。

「痛いっつっ…！」
「……っ」
「うっ…！」

向かされた桜時の顔へと、迫る輝矢の顔。

――――ぶっちゅうううう～～っ！！――――

『あっ…』

公衆の面前で重なる輝矢と桜時の唇。だが誰も驚いた様子は見せず、どちらかというと呆れたような表情で、その光景を見つめる。

「ふぅ～っ」

「……。」

輝矢が唇を離し、呆然と立ち尽くす桜時の方を見る。

「やっぱり再会のチュ～は定石ですよねぇ～っ」

「ぐっ…ぐふっ…」

「あれっ？」

輝矢が楽しげに微笑みかけるが、桜時は一瞬にして白目を剥き、そのまま後方へと倒れ込んでいった。倒れた桜時に、輝矢が不思議そうに目を丸くする。

「ハチぃ～っ？」

「ぐぷっ…」

『はぁっ…』

気絶した桜時を、覗きこむ輝矢。そんな二人の様子に、その場にいた誰もが、深々と肩を落とした。

三時間後。
「はぁっ…すっかり出発が遅くなってしまいましたねぇ…」
「だっれのせいだと思ってんだよっ！！」
“やれやれ”といった表情で肩を落とす輝矢に、ハチが勢いよく怒鳴りあげる。四人揃い、龍国へと戻ろうとしていた輝矢たちであったが、輝矢のキッスで桜時が2時間も気絶していたため、すっかり出発が遅くなってしまったのである。

「我が孫ながら情けないっ…」
「うっせぇっ！！クソじじいっ！！」
本当に情けなそうに頭を抱えている八房に、ハチが少し顔を赤くして、言い返す。

「そう気に病まないで下さいっ、桜時様っ」
「そうですよぉ～っ！私たちはどんな桜時様でも、常に味方ですっ！」
「その真面目な励まし、逆に落ち込むわっ…」
実の祖父にまで情けないと言われたハチを、必死に励まそうとする犬仁と犬智だが、その必死さが、さらにハチを落ち込ませた。

「ほんなら長老っ、如意棒ありがとうなぁっ」
「うむっ、ゲホゲホっ」
里見家屋敷の入口では、門貴が、猿の村へ戻る長老と二花、チョ

キ三郎の三人を見送っていた。門貴の言葉に、長老は少し咳込みながらも、しっかりと頷く。
「二花っ、長老を頼むでぇ」
「ああっ」
「チョキ三郎っ、移貴や猿飛によろしく言うといてやぁ」
「はいっ！」
門貴の言葉に、二花とチョキ三郎が、それぞれ笑顔で頷く。

「ほんじゃあ気ぃつけてっ…」
「門貴っ！」
「んっ？」
送り出そうとする門貴の言葉を遮って、二花が強く門貴の名を呼ぶ。
「何や？」
「あっ、えぇ～とっ…」
聞き返した門貴に、二花は、自分から呼びかけたものの、少し躊躇うように下を向く。

「そのぉ、たまにはぁ、ホンマに帰ってきぃやぁっ」
「へっ？」
俯いたまま話す二花の言葉に、少し目を丸くする二花。

「結構、寂しがりやからっ…姉ちゃんっ…」
「……っ」

小さな声で躊躇いながら呟いた二花に、門貴がそっと目を細める。

「二花」
「……っ？」
名を呼ばれ、二花が顔を上げる。

「一花に言うといてっ」
「えっ…？」
「“世界救ったら帰る”てっ」
「……っ」

今までのような悲しみのない、晴れやかな笑顔を見せて言い放つ門貴に、二花が少し驚いたように目を見開く。もう一花の死を、引き摺っている門貴はいない。二花がそっと口元を緩める。

「アンタに世界なんて救えるかいっ！アホがっ！」
「口の減らん女やなぁ～っ」
悪態づく二花に、門貴が呆れたように肩を落とす。

「ほんならなぁっ！」
「おうっ」
「アンタらにも世話になったなっ！犬どもっ！」
「ぜってぇ感謝してねぇーだろっ…」
世話になったっわりに言葉が乱雑な二花に、礼を言われたハチたちが皆、少し引きつった表情を見せる。

「とっとと帰れ、カニ女」
「アンタに言われんでも帰るわいっ！」
冷たく言い放つ犬仁に、二花が顔をしかめて強く言い返す。

「ほんならなぁっ！」
「おうっ！」
二花たちが門貴に背を向け、里見の屋敷を出て行く。

「門貴さんっ、皆さんっ！お元気でぇ～っ！！」

「元気でっ…うっ！ゲホゲホゲホっ！！」
「村着くまで死になやぁ～長老っ」

門貴や皆に大きく手を振りながら、歩き去っていくチョキ三郎。
チョキ三郎と同じように手を振ろうとして咳込んだ長老に、二花が素気なく声をかける。そんなこんなをしながら、二花たちは、里見の屋敷を出て、猿の村へと帰っていった。

「ふぃ～っ」
三人を送りだした門貴が、少し肩を落として、里見の屋敷内の方を振り向く。

「じゃあボクらも行くぅ～？」
「そうですね、ハチ」
「ああっ」
由雉の言葉に頷いた輝矢が、ハチの方を見る。輝矢に呼びかけられ、ハチが里見屋敷の前に並んだ八犬士の前に立った。

「みんな、世話になったなっ」
「お気をつけて、桜時様」
「また遊びに来てねぇ～っ！桜ちゃんっ！」
「いつでもお待ちしておりますのでっ」
「おうっ」
次々と声をかける犬仁、犬信、犬智に、ハチが笑顔を向ける。その他の八犬士たちも皆、ハチに笑顔を見せていた。

「おい、竹取輝矢っ」
「はいっ？」
犬仁に名を呼ばれ、輝矢が不思議そうに振り向く。

「桜時様に何かあったら許さないからなっ、しっかりと守れよっ」
「ハイハイ、ハチの心は私だけのものです」
「全然っ、話が噛み合っていないっ！！」
適当にあしらうように答える輝矢に、犬仁がムキになって怒鳴り返す。

「また再戦に来いよっ、門貴っ」
「ああっ」
犬義の言葉に、笑顔で頷く門貴。

「じゃあじじいっ」
ハチが八房の方を見る。
「俺、行くわっ、色々とありがとうなっ」
「うむっ」
笑顔を見せるハチに、大きく頷く八房。

「んじゃあっ」
「ああ、そうじゃ、桜時」
「へっ？」

輝矢たちとともに八房と八犬士に背を向け、里見の屋敷を出ようとしたハチが、呼び止める八房の声に、ゆっくりと振り返る。

「お前、今、桃タローの家に居候しておるんじゃろう？」
「へっ？あっ、そぉ～だけどっ？」
八房の問いかけに、ハチが少し戸惑い気味に頷く。

「なら、あやつに聞いたのか？」
「へっ？聞く？」
戸惑いの表情のまま、八房の言葉を繰り返すハチ。

「聞くって、何をっ？」
「何をって、そりゃあお前の父親のことじゃろう」
「はぁっ？」

八房の言葉に、ハチが大きく顔をしかめる。

「なんでアイツに父さんのことを聞くんだよっ？」
「何じゃっ、お前、聞いとらんのかっ？」
「だから何がだって？」
問いかけの繰り返される会話。互いにしかめた表情で、ハチと八房が見つめ合う。

「お前の父、第五十四代・犬孝は、十年前、桃タローがすべての鬼を退治した時の仲間だったんじゃよっ」
「えっ…？」

八房の言葉に、固まるハチ。

「えええええぇぇぇぇっ！？」

次の瞬間、里見の屋敷に、ハチの絶叫が響き渡った。

第６１章　再集結　☆３

翌日。龍国・エセお菓子の家こと『桃原家』。

「いっやぁぁぁ～～っ、おかえりぃぃ～～っ！」

そのクッキーに似せて作られた大きな玄関の扉を開けると、家の中から爽やかな笑顔を見せ、大きく両手を広げた太狼が姿を現した。

「ぜぇっ…！ぜぇっ…！ぜぇっ…！」

皆の先頭に立ち、大きく乱した呼吸で、太狼を睨み上げているのは、ハチ。

「随分と早かったねぇ～着くのは明日になるかと思ってたけどぉ～っ」

そんなハチを気に留める様子もなく、太狼が言葉を続ける。

「ええっ…それはもう大急ぎで走って帰って来たものですからっ…」

「ボクらは別に急ぎたくなかったんだけどねぇ～」

「イヌコロがどんどん突っ走りよるからさぁ～」

ハチに付き合わされ、犬国から走って龍国まで戻って来たからか、疲れきったようにげっそりとした表情で、輝矢、ユキジ、モンキがそれぞれに呟く。

「門貴様ぁぁっ！！お会いしたかったぁぁっ！！」

「んぎゃあああああっ！！」

玄関は太狼が塞いでいるため、その横のキッチンの窓から、身を乗り上げて飛び出してくるヘンゼル。勢いよく突進してくるヘンゼ

ルから、モンキが死に物狂いで逃げる。

「あぁ～久々の光景ぃ～」

「妙に心が落ち着きますねぇ」

「門貴様ぁぁぁぁぁっ！！」

「ふんぎゃあああああっ！！」

ヘンゼルに追い回される門貴を、特に助けようともせずに、落ち着いた口調で言葉を交わしている輝矢とユキジ。

「あっ！輝矢様っ！お帰りなさいませっ！」

ヘンゼルの飛び出してきた窓から、グレーテルが顔を出す。

「ただいま戻りました、グレーテル」

そんなグレーテルに、輝矢が笑顔を向ける。

「へぇ～そんなに急いで帰ってくるなんて、どうしちゃったのぉ～？ハチくぅ～んっ」

「……っ！」

不思議そうに問いかける太狼を、ハチがさらに強く睨み上げる。

「お前っ…！！」

「へっ？」

ハチの前足を強く向けられ、太狼が目を丸くする。

「お前っ…！！何か俺に言うことはないかっ…！？」

「言うことぉ～？」

ハチの言葉を繰り返し、眉をひそめる太狼。

「あっ、毛先がちょっと乱れてるんじゃないっ？」

「ちっがぁぁぁぁーうっ！！」

ハチの白い毛並みを指差し、軽い口調で言い放つ太狼に、ハチが全力で怒鳴りあげる。

「クっ…！」

――――ボォォォォォォォ～～～ンっ！――――

強く唇を噛み締めたハチが、白い煙に包まれ、桜時の姿となって、近くなった太狼の顔を、また睨みつける。

「お前っ！！何で言わなかったんだよっ！？」

「へっ？」

「昔っ…！俺の父さんと仲間だったってことっ…！！」

「……っ」

桜時の言葉に、太狼が軽い笑みを消し、そっとその表情を曇らせる。

「一緒に鬼退治したらしいじゃねぇーかっ！！なんで、んな大事なことっ…！」

「あぁ～あっ、しゃべっちゃったのぉ～？八房さぁ～んっ」

「えっ…？」

必死の桜時の言葉を遮って、どこか面倒臭そうな声をあげる太狼。

そんな太狼に、桜時が眉をひそめる。

「余計なこと、言ってくれちゃってぇ～」

「余計なことっ…！？」

桜時から目を逸らし、少し冷たく言い放つ太狼に、桜時の表情が勢いよく引きつる。

「余計なことって何だよっ！？」

さらに声を荒げ、桜時が太狼に掴みかかる。

「ハチっ」

「うっせぇっ！！」

「……っ」

掴みかかったハチを、止めようと呼びかける輝矢であったが、桜時は輝矢の声を一蹴する。その桜時の様子に、少し驚いたような表情を見せる輝矢。

「お前だって知ってんだろっ！？俺がどんなに父親を探してたかっ…！！」

「ハチっ…」

必死に訴える桜時に、輝矢が目を細める。

――――父さんだって探したいっ…！！――――

それは、桜時の旅の目的。桜時が雀国を出た、最大の理由。

「……っ」

その父親の行方を知っているかも知れない人物を目の前に、桜時が冷静でいられるはずもない。止める言葉も理由も思いつかず、輝矢はそっと俯いて、拳を握り締めた。

「なぁっ…!?お前、知ってんのかっ!?父さんがどこにいんのかっ…!」

「……。」

詰め寄って問いかける桜時を、鋭い瞳で突き刺すように見る太狼。

「……知ってるよっ…」

「……っ!」

ポツリと落とすように答えた太狼に、桜時が大きく目を見開く。

「教えろっ…!!」

桜時の太狼を掴む手に、さらに力がこもる。

「俺に父さんの居場所を教えろっ…!!」

「……っ」

桜時のその青い瞳が真剣になればなるほど、太狼の表情がどんどんと冷たくなっていく。

「……教えないっ」

「んなっ…!!」

呟くように答えた太狼に、桜時が大きく目を見開く。

「んだとっ…！？」
「教えないったら、教えなぁ～いっ、大体、君に教える義理とかないでしょ～っ？」
「……っ！」
太狼がいつもの軽口を叩くと、桜時の表情がさらに歪んだ。
「はぁ～あぁっ、相変わらず最低な大人だねぇ～」
「そんなん言わんと、教えたればええやぁ～ん」
「タローっ」
呆れたように言い放つユキジとモンキよりも少し前に出て、輝矢が真剣な表情を見せながら太狼の名を呼ぶ。
「ハチは本当に真剣に父親を探しているんです。だからっ」
「だからって、僕が教えてあげる義理はないでしょ～っ？」
「てっめぇっ…！！」
「……痛っ」
太狼の言葉についに怒りが振り切れたのか、桜時が勢いよく太狼の体を押す。すると太狼の背中が強く玄関の扉に押しつけられ、太狼が少し顔をしかめた。
「てめぇにも父親くらいっ、いんだろっ！？」
「……っ」
桜時の言葉に、太狼が少しハッとしたように目を見開く。
「だったらっ、父親に会いたいっつー俺の気持ちくらいっ…！わかるはずじゃっ…！」

「いたよっ…」
「えっ…？」
不意に落ちる太狼の声のトーンに、桜時が思わず言葉を止める。
「“最強の狼人”とか言われててねっ、この世界の英雄だった父親っ…」
「タローっ…？」
少し遠くを見るような瞳で、薄い笑みを浮かべながら話す太狼。
その太狼が妙に悲しそうに見えて、見つめる輝矢は少し眉をひそめた。
「英雄英雄って捲くし立てられてっ、鬼の軍勢にたった一人で立ち向かわされてっ、それで死んだっ」
「えっ…？」
「……っ」
太狼のその言葉に、輝矢と桜時が、それぞれ驚きの表情を見せる。
「そんな父親なら、いたよっ」
「……っ」
桜時の方をまっすぐに見つめ、そっと微笑む太狼。その太狼の言葉に唖然としたのか、力強く太狼に掴みかかっていた桜時の手は、さらりと流れるように下ろされた。
「とにかく、今はまだ話せない。今言えるのはそれだけだからぁ～っ」

そう言い捨てて、太狼は足早に、家の奥へと姿を消した。

「……。」

玄関前に残された桜時が、どこか後悔するような表情を見せ、右手で口元を覆って、そっと俯く。

「輝矢様っ…」

少し不安げに、窓から輝矢の方を見つめるグレーテル。

「初めて…聞きました…」

閉まった玄関の扉を見つめながら、輝矢がそっと目を細める。

「タローの…父親の話なんてっ…」

「……。」

家の中へと入った太狼が、厳しい表情のまま、足早に一階の自室へと入る。

「はぁっ…」

自室に入り、扉を閉めた途端に、どこか疲れたように肩を落とす太狼。

「珍しいこともあるもんだねぇ」
「うわぁ～っ」
すぐ横から聞こえてくる声に、太狼が驚いた様子で、自分の左胸を押さえる。

「驚かさないで下さいよぉ～トマトさぁ～んっ」
「悪いねぇっ、人の部屋に勝手に入り込むのが癖なんだ」

少し困ったような顔で太狼が振り返ったその先には、トマトが立っていた。いつの間に、どこから入って来たのか、ということは、この人を相手には愚問である。

「太狼っ…」
「はいっ？」
真剣な表情で呼びかけるトマトに、軽く返事をする太狼。

「私の二五八番目の旦っ…！」
「お断りします」
「うっ…」
まだ“旦那”という単語も出ていないうちから、笑顔を見せた太狼が、トマトのプロポーズを慣れた様子で断る。一瞬にして玉砕し、顔をしかめるトマト。

「いつまでも釣れない男だねぇ～」
「僕は永遠に釣れないですから、いい加減、諦めて下さいぃ～」
拗ねるように口を尖らせるトマトに軽く答えながら、太狼がトマトの横を通り過ぎ、自室の机の前の椅子へと座る。

「はぁ～ああっ」
「……っ」

椅子に座り、両手を伸ばして伸びをする太狼の背中を見ながら、真剣な表情を作り、目を細めるトマト。

「珍しいねっ…」
「何がですかぁ？」
もう一度その言葉を呟いたトマトに、太狼がいつもの明るいトーンを変えずに聞き返す。

「お前が、感情的になるなんて」
「……っ」

トマトの言葉に、伸びをしようと上げられたまま、高い位置で止まる太狼の両手。

「そんなに気に食わないかい？」
両手の動きを止めた太狼に、トマトが少し試すような笑みを向ける。

「朱実桜時は」
「……。」

どこか挑戦的なトマトの言葉に、太狼はそっとその口元を緩め、上がっていた両手をゆっくりと下ろした。

「ええっ」
笑みを浮かべたまま、短く頷く太狼。
「父さん父さんって、まっすぐに父親を追ってる姿が、まるでっ…」
太狼が少し目を細め、突き刺すようにどこかを見つめる。
――――父さんっ！父さんっ！！――――
思い出される、父親の影を追ってばかりいた、少年の日。
「昔の自分を見ているみたいでっ…不快なこと、この上ないですよっ」
「……っ」
過去の自分を嘲るような笑みを浮かべる太狼に、トマトはそっと目を細めた。
戻って、桃原家・玄関前。
「俺っ…」
扉の前にポツリと立ち尽くしていた桜時が、ふと声を漏らす。

「俺っ…あいつの気に障るようなことをっ…」
「気にすることありませんよっ、ハチ」
「えっ…？」
太狼の口から父親の話を聞き、どこか気に病むような表情を見せていた桜時が、輝矢の声に、戸惑うように顔を上げる。桜時が顔を上げると、そこには笑顔の輝矢が立っていた。

「輝っ…」
「大丈夫です。ハチの父親のことは、後で私がタローの首でも絞めて、聞きだしておきますからっ」
「やめいっ！！」
笑顔で殺人予告を口にする輝矢に、桜時が勢いよく突っ込む。

「いいってっ！アイツが話せないっつーんだから、何かきっと理由とかあんだろうしっ！」
「そうかぁ～？ただのイヌコロへの嫌がらせちゃう～？」
「もしくは糖分が足りてなかったとかぁ」
「……あり得るっ…」
理由があるのだろうと主張はしたものの、モンキとユキジの言葉に、その考えを、あっという間に変えられそうになる桜時。

「けっけど、いくらアイツがただの超甘党で、俺のこと苛めるの趣味みたいにしてるからってっ…！って、やっぱあり得るかなっ…」
「揺れてますね」
何とか太狼にフォローを入れようとするが、モンキたちの意見に流されそうになる桜時。二つの考えの間で揺れる桜時を、輝矢が呆れた表情で見つめる。

「まぁとりあえず、ハチに暴言を吐いた件だけは、私が爪引き剥がしてでも謝らせますのでっ…」

「だからやめいっつってんだろうーがっ！！お前はっ！！」
シレっとした表情で恐ろしい発言をする輝矢に、桜時が少し怯えながらも必死に止める。

「っつーか、謝るんだったら、俺が謝るべきだしっ…」
「えっ？」
少し俯いて呟く桜時に、輝矢が目を丸くする。

「何故、ハチが謝る必要があるのです？さっきのはどう聞いても、三百六十八％、タローが悪いですよ？」
「その数字、よくわかんねぇーっ」
輝矢の微妙な確率に、顔をしかめる桜時。

「けっけどっ…」
桜時が再び、下を向く。

――――そんな父親なら、いたよっ――――

どこか悲しげだった、太狼の薄い笑み。あんな太狼は、初めて見た。

「何かっ…そのっ…辛いっぽい顔してたしっ…」
「……っ」

あれほどに求め続けた父親のヒントが、目の前にあるかも知れないというのに、それを気にする素振りなく、今はただ、太狼のことを心配している桜時。そんな桜時を見て、輝矢が少し目を細める。

「アナタはっ…」

「へっ…？」
桜時の頬に、そっと触れる、輝矢の右手。
「本当に…優しい人ですね…」
「……っ！！」
穏やかに微笑む輝矢に、桜時の顔色が一気に真っ赤になる。
「のおおおぉぉぉ～～っ！！」
真っ赤な顔をしたまま、輝矢の手から逃れるため、勢いよく後退していく桜時。輝矢と距離を離し、閉まった玄関の扉にぴたりと背中を張りつける。
「べっべべべ別に優しいとかじゃねぇーしぃっ！ナハハハハっ…！！」
「ハチっ？」
わざとらしいまでに大きく笑う桜時に、輝矢が少し首を傾ける。
「何かハチ、前より拒絶反応、ひどくなってません？」
「へぇっ！？」
輝矢の鋭い指摘に、思わず声を裏返らせる桜時。
「そっそそそんなことなねぇーぞぉっ！？アハハハハっ…！！」
「うぅ～んっ…」
どうもウソ臭い笑い声を発する桜時に、疑いの目を向ける輝矢。
「アハハっ…ハハっ…！」

輝矢の疑いの目線を感じ、桜時が顔を引きつった。

第６１章　再集結　☆４

「まっまぁっ！とりあえず家ん中にっ…！」
「あっ！そうそぉっ！かっぐやちゃぁぁ～～んっっ！！」
「ぎゃあああああっっ！！」

その時、太狼の明るい声とともに勢いよく玄関の扉が開き、扉にぴたりと背中を張りつけていた桜時が、勢いよく吹き飛ばされた。

「帰ってきたら言うよう頼まれてたこと、すっかり忘れてたやぁ～っ！」
「ぐへぇっ！」
玄関から出てきた太狼が、扉に吹き飛ばされ、力なく倒れ込んでいた桜時の背中を、容赦なく踏みつける。

「あっれぇ～？いたのぉ～？ハチくぅ～ん」
「どう頑張ったら、視界から消せんだよっ！！このクソ桃タローっ！！」
「あんまりにも薄汚くて、眼球が見ることを拒否してたのかなぁ～？」
「ああっ！！？」

わざとらしく言い放つ太狼に、勢いよく怒鳴りあげる桜時。

「すっごい切り替え、早っ」
「さっきのシリアスさはどこへやらぁ～だねぇ」
先ほどまで真剣な言い争いをしていたとは思えないような緊張感のなさで、いつものようにくだらない言い合いを繰り広げる桜時と

太狼に、モンキとユキジが呆れきった表情を見せる。

「もう絶対、謝んねぇーからなっ！！」
「はぁ～？」
強く言い放つ桜時に、太狼が不思議そうに首を傾げる。

「でっ？私に言うよう頼まれてたこととは何なのです？タロー」
「あっ、そうそうっ、実はねぇ～」
「俺の上からどいてから、しゃべれっ！！」
桜時の背中を踏みつけたまま、話をしようとする太狼に、桜時がさらに怒鳴りあげた。

「実はねぇ～」
やっとのことで桜時から降り、改めて話を始める太狼。

「“戻ってきたら、オトポリに来てくれ”って、リンゴちゃんがぁ～」
「リンゴが？」
太狼の言葉に、輝矢が少し眉をひそめる。

「うん～」
「そうですか、では早速、オトポリへっ…」
「ぐぅぅぅ～～っ！！」
『……っ？』

その時、遠くの方からこちらへと近づいてくる、何やら必死な大声が聞こえてきて、輝矢や太狼、皆が振り返った。

「ぐぅぅぅぅぅ～～っ！！」

桃原家へと全力疾走で駆け込んでくるのは、オトポリの黒い制服を着て、その制服には似ても似つかぬ麦わら帽子を被った、短い茶髪にくりくりとした黒い瞳の青年であった。

「鹿男っ」

「ぐぅぅぅぅ～～っ！！」

輝矢の元へと走り込んできたのは、アホウの国こと鹿国出身の鹿人、加々鹿男であった。輝矢と出会ったことに影響を受け、今は龍国でオトポリの志願隊員をしているのである。ちなみに“ぐぅ～”というのは、鹿男が付けた、輝矢のあだ名である。

「久し振りですね」

目の前へと駆け込んできた鹿男に、輝矢が声をかける。

「そういえばこの前、キリコに会いましてね、アナタによろしくと言っ…」

「ぐぅっ！！」

「えっ…？」

キリコからの伝言を伝えようとした輝矢の言葉を勢いよく遮り、鹿男がその両手で、強く輝矢の手を握り締めた。

「鹿男…？」

顔を上げた鹿男は、いつものアホウ全開の陽気笑顔とは違い、妙に真剣な顔をしており、輝矢は少し戸惑うように鹿男を見る。

「一体、どうしっ…」

「俺のっ…！人生の千本ノックっ…！聞いてっ…！！」

「はっ…？」

鹿男の発した、まるで意味のわからない言葉に、輝矢が勢いよく顔をしかめる。

「あっ！そうじゃぁ～なくってぇ、えぇ～っと、何て言うんだっけぇ？瀬戸際の三回転ジャンプだっけ？えぇ～っとっ…」

「相変わらず何言っとうか、サッパリやなぁ～」

正しい言葉を探し、悩み込む鹿男。アホウの鹿男は、普通の人間を同じように会話をする能力に欠けているのだ。そんな鹿男を、呆れた表情で見つめるモンキ。言いたいことを汲み取ってやろうにも、まったく連想も想像もつかない。

「ってか、輝矢ってアホウ語の通訳、マスターしてたんじゃなかったけぇ～？」

「時間が経ったので、忘れました」

「えええぇ～？」

わりと早くに忘れ去った輝矢に、ユキジが呆れた視線を向ける。

「じゃあ誰もわかんないじゃ～ん」

「困りましたねぇ」

ユキジの言葉に、輝矢が少し首を捻らせる。

「えぇ～っと、何だっけぇ～？」

「“一生のお願い”」

「そうっ！それっ！！って、げっ！」

横から聞こえてくる求めていた言葉に、嬉しそうに振り向く鹿男であったが、振り向いた途端、一気に鹿男の表情が引きつられた。

「馬ロンっ…！？」
「……。」

鹿男の振り向いた先に立っているのは、腰ほどまで伸びたサラサラの金髪をたなびかせた、長身細身の二十代半ばあたりの男。そのよく整った顔立ちを、今は不機嫌そうにしかめている。

「“次長”か“隊長”と呼ぶようにと、何度も言っているだろうっ？」
「うっ…」

しかめっ面で鹿男に注意をする馬ロン。馬ロンはオトポリの次長で、志願隊員である鹿男の、指導員をしているのである。上司を目の前にしたからか、鹿男が怯えるように、二，三歩下がる。

「業務時間中に勝手に抜け出さないようにとも、もう何度も言ったはずだがっ？」
「ううっ…」

馬ロンにさらに責められ、鹿男が逃げるように輝矢の後ろへと身を隠す。

「ただでさえ馬面なのに、さらに馬面をしてシカを威嚇するのはやめて下さい、ウマっ」
「んなっ…！！」

鹿男を庇うように立ちながら、馬ロンに冷たく言い放つ輝矢。輝矢の発言に、馬ロンがさらに顔をしかめる。

「うっ馬面っ…！？君っ！このオトポリの白馬の王子・馬ロンに、何という口をっ…！」
「あぁっ！輝矢っ！」

「……っ？」
馬ロンの声を遮って聞こえてくる声に、輝矢が振り向く。
「リンゴ、羊スケ」
「帰って来てたのねぇっ！丁度、良かったっ！」
「うっ…うぇっ…」
輝矢が振り向くと、そこには黒のオープンカーが止まっていた。
助手席にリンゴ、運転席にはとても疲れた様子の羊スケが乗っていた。
「何かげっそりしてね？羊スケっ」
「ここ最近っ…ずっとリンゴさんにコキ使われてましてっ…」
桜時が声をかけると、羊スケは覇気なく答えた。
「おおぉ～～っ！！リンゴぉぉぉ～～っ！！今日も一段と美しっ…！」
「ハイハイっ」
リンゴの美しさを称賛しようとした馬ロンをとっとと押しのけ、リンゴが輝矢の前へとやって来る。
「あんた、いつ帰って来たのよぉ？」
「さっきです」
すぐ前までやって来たリンゴの問いかけに、輝矢が短く答える。
「そういえばリンゴ、タローから伝言を聞きましたが、私に何か用ですか？」
「そうそうっ、そうなのっ」
輝矢の言葉に、リンゴが何度も頷く。

「実は北方で、鬼人が出たってゆー国があってねぇっ」
「鬼人っ…？」
『……っ』

リンゴの口から鬼人の名が出ると、輝矢と桜時たち三人が、表情を厳しくする。

「だけどほらぁ、今、オトポリ内、忙しいじゃないっ？だから人手が足りなくってさぁ」
「指導員の僕に、派遣命令が回ってくる始末なのさっ」
「へぇ～」
二人の言葉に、輝矢があまり興味なさそうに頷く。

「って、ゴンゴンはぁ～？」
「そうだよぉ～こうゆう時の問題キツネでしょ～？」
「うえっ！？」

モンキとユキジから口々に問いかけられ、焦った表情で、上ずった声を出す羊スケ。ゴンが輝矢たちと時を同じくして修行に出たことを、四人は知らないのである。そしてまだ、ゴンは修行から戻って来ていない。

「あっあぁぁ～っ、ゴンさんは確かぁ～お料理を習いに遠くの国までぇ～っ！」
「オトポリがクソ忙しいってゆーのにかぁっ？」
羊スケの下手過ぎるウソに、顔をしかめて問いかける桜時。

「ベン君なら、確か修ぎょっ…ぶほぉっ！」
「オホホホっ！クソ忙しい時だからこそ、追い払ったのよぉ～っ！あの問題キツネ、いると余計に忙しくなるからぁ～っ！」

「ああ、そういうことか」
何かを言いかけた馬ロンを蹴り飛ばして、満面の笑みで言葉を繋げるリンゴ。リンゴの笑みもかなりウソ臭いものではあったが、ゴンの普段の素行が素行なだけに、桜時たちは納得した様子で頷く。

「……っ」
そんなリンゴと羊スケの少しおかしい様子を見て、そっと目を細める輝矢。

「いいですよっ」
「へっ？」
輝矢の声に、リンゴが笑みを止めて振り向く。
「その鬼人退治、私が頼まれて差し上げますっ」
「えっ？あっ、随分とあっさりねっ…まっまぁいいけどっ…こっちはそのつもりだったしっ…」
簡単に返事する輝矢に、少し拍子抜けしたような表情を見せるリンゴ。
「じゃあ頼んだわよっ」
「はい」
リンゴの言葉に、もう一度しっかりと頷く輝矢。

「あっ！言っとくけど、無理はしないようにねっ！あの女が関わってきたら、すぐオトポリに連絡すんのよっ！？」
「気が向いたらします」
「百パーセントの割合で連絡しなさいっ！！」
適当な反応を示す輝矢に、リンゴが親のように怒鳴りつける。

「ではリンゴ、僕は行かなくてもいいかなぁ？」

「ええっ、馬ロンは通常通り、鹿男の教育にっ…」
「イヤだぁぁぁっ！！」
『……っ？』

打ち合わせをしていたリンゴと馬ロンが、勢いよく聞こえてきた怒鳴り声に、一斉に振り向く。二人が振り向いた先にいたのは、輝矢の後ろからやっと顔を出した鹿男であった。鹿男がまるで睨みつけるように、リンゴと馬ロンを見る。

「俺もぐぅ～たちと一緒に、鬼人退治に行くっ！！」
「えっ？」
「はぁっ…」
鹿男の言葉に驚く輝矢と、深々と溜息をつく馬ロン。

「あのねぇ、何度言ったらわかるんだ？」
少し頭を抱えた馬ロンが、呆れた表情で鹿男の方を見る。

「君は志願隊員だ。まだ人語もろくにしゃべれないくせに、鬼人退治なんて五億光年早っ…」
「鬼人が出たのは“獅国”だっ！」
「獅国っ…？」

聞いたことのあるその国名に、輝矢がそっと眉をひそめる。

「獅国はレオのっ…！俺の友達の国だっ！！」
鹿男がアホウとは思えないしっかりとした人語で、必死に言葉を続ける。

「今行かなかったらっ…！何のためにオトポリに入ったのか、わかんないよっ！！」

「鹿男っ…」
「……っ」

その必死な鹿男の言葉に、リンゴが目を細め、輝矢がその表情を厳しくする。

「っつーか、アイツ、人語上手くなったなっ」
「馬ロンさんが必死に指導してたっスからねぇ～」
真剣な言い合いの中、あまり空気の読めていない会話をする桜時と羊スケ。

「ダメなものは、ダメだっ」
「……っ」
強く言い放つ馬ロンに、鹿男が思わず唇を噛む。

「どうせ志願隊員の君が行ったところで、鬼人なんて倒せっこない。お友達の国を救うことなんて不可能っ」
「そんなの、行ってみなきゃわかっ…！」
「わかるっ」
「……っ！」

言い切る馬ロンに、それ以上の言葉を続けられない鹿男。

「とにかく今は諦めたまえっ」
馬ロンが鹿男から目を逸らし、偉そうにがっしりと腕を組む。

「どうしても救いたいんなら、次行けるよう、しっかりと勉強に励むことだっ」

「……っ」
馬ロンの言っていることは、正論である。その正論に言い返す言葉が出て来ないのか、鹿男はただ悔しそうに口をしっかりと閉じ、深く俯いて、拳を握り締めていた。

「……。」
そんな鹿男を見て、輝矢が少し目を細める。

「シカっ」
「へっ？」
輝矢に種族を呼ばれ、鹿男が少し戸惑うように顔を上げる。

「何っ？ぐっ…」
「アナタ、車の運転はっ？」
「へっ？」
急な輝矢の問いかけに、鹿男が目を丸くする。
「出来るよっ、オトポリに入ってすぐに僕が教えたからねぇっ」
戸惑っている鹿男の代わりに答えたのは、馬ロンであった。

「そうですか、では行きますよっ」
「へっ？」
『へっ！？』

そう言って鹿男の手を引き、リンゴと羊スケの乗って来たオトポリのオープンカーの運転席へと、無理やり鹿男を乗せる輝矢。皆が戸惑うように見つめる中、輝矢がその隣の助手席に乗り込む。

「とっとと行きますよ？」
「あっ、おうっ」

「待ってやぁ～っ！輝矢ぁぁ～んっ！」
「ボク、寒いとこ、苦手なんだけどぉ～」
そう言いながら後部座席へと、桜時、モンキ、ユキジが次々と乗り込んでいく。

「ではタロー、ちょっと行ってきますね」
「はいはぁ～いっ」
『いってらっしゃいませっ！輝矢様っ！』
輝矢たちを、太狼とヘンゼル・グレーテルが笑顔で見送る。

「ちょっ…！輝矢っ…！」
「君っ！何をしてっ…！」
「リンゴっ」
リンゴと馬ロンの言葉を遮り、輝矢がリンゴの名を呼ぶ。

「鬼人退治に行ってきてあげる代わりに、この車と運転手、お借りしますねっ」
「えっ？あっ、えとっ…」
「運転手くらい、他にもいるだろうっ！例えばっ、そこのコースケ君とかっ！」
「羊スケっス…」
口ごもるリンゴの代わりに、輝矢を責めるように言い返す馬ロン。
馬ロンに名前を間違えられながら、力強く指を差され、羊スケが少し引きつった表情を見せる。

「コースケでも羊スケでもいいからっ、とにかく彼を運転手にっ…！」
「あっあぁ～っ！俺っ！最近、リンゴさんにコキ使われてるせいで寝てないからっ、今、運転したら絶対、事故るなぁ～っ！」

「何っ！？」
わざとらしく額を押さえ込む羊スケに、馬ロンがさらに表情をしかめる。

「ヒツジもそう言ってることですし、ここはやはりシカに運転していただくしかありませんねっ」
「待て待てっ！」
話をどんどんと進めていく輝矢を、必死に止める馬ロン。

「ならっ、本部に要請して、他の運転手をっ…！」
「そんな暇はありません。事は一刻を争うのです」
「うっ」
強く言い放つ輝矢に、さすがの馬ロンも口ごもる。

「ではとっとと出発しますよっ、シカっ」
「うぅ～んっ！」
嬉しそうな笑顔で大きく頷いて、勢いよくアクセルを踏む鹿男。

――――ブイィィィーンっ！！――――

『ぎゃあああああっ！！』

勢いよく後方へ進む車に、後部座席の三匹が、悲鳴にも似た声をあげる。

「あっ！間違えてバックしちゃったぁ～っ！よっとぉ～っ！」
陽気な笑顔を見せた鹿男が、レバーを操作し、改めてアクセルを踏む。

――――ブイィィィーンっ！！――――

『ひぎゃあああああっ！！』

いきなり最高速度で走り出す車に、またも後部座席から悲鳴が響く。あっという間に走っていく車に、その悲鳴もすぐに聞こえなくなった。

「あぁ～あっ…行っちゃった…」

「俺の車…無事で戻って来るっスかねぇっ…？」

どこか呆れた表情で呟くリンゴと、どこか不安げに車の走り去って行った方を見つめる羊スケ。

「ああぁ～っ！もうっ！」

「……っ」

リンゴが、苛立ちを全面に押し出し、頭を掻いている馬ロンの方を振り向く。

「別に気になるなら、追って行ってくれてもいいわよぉ～？」

どこかわざとらしく声を掛けるリンゴ。

「どうせあんたの仕事は、鹿男が居なきゃ成り立たないんだしぃ～？」

「……っ」

そのリンゴの言葉に、馬ロンの眉間の皺がぐっと寄る。

――――ボォォォォ～～ンっ！――――

『……っ？』

白い煙の中に包まれていく馬ロンを、目を丸くして見つめるリンゴと羊スケ。

「ふぅっ！」

白い煙の中から姿を現したのは、美しい一頭の白い馬。

「ちょっ…！ちょちょちょっと散歩に行ってくるだけだからねっ！間違っても獅国になんて行かないよっ！」

「ハイハイっ」

妙に必死になって言う馬ロンを、リンゴが軽くあしらう。

「私がいなくても、泣くんじゃないよっ！リンゴっ！」

「ハイハイっ、泣かない泣かないっ」

「ではねっ！」

「ハイハイっ、いってらっしゃ～いっ」

蹄のいい音を立てて、その場を走り去っていく馬ロンを、リンゴが適当に見送る。

「素直じゃないっスねぇ～馬ロンさんもっ。心配なら心配って言えばいいのにぃ」

「まっ、いいんじゃないっ？馬ロンが部下の身、案じてるってだけでも、もう奇跡みたいなもんだしっ」

羊スケの言葉に、リンゴが少し疲れたように肩を落とす。

「さっ、私たちも戻って、仕事の続きするわよぉっ！」

「うぃ～っス…」

張り切るリンゴに、羊スケがまったくやる気のない返事を返す。

「さぁ～て、ココアタイムにでもしようかぁ～？ヘンゼルぅ～、グ

レーテルぅ～」
「あっ、はいっ！」
「準備しまぁ～すっ！」
太狼の言葉に頷き、ヘンゼルが家の中へと入り、窓から顔を出していたグレーテルが顔を引っ込め、キッチンでココアの準備を始める。

「さぁ～てとっ」
「あっ！太狼さんっ！」
「ん～っ？」
家の中に入ろうとした太狼が、リンゴに呼び止められ、振り返る。

「何ぃ～？」
「オトポリの本部に、緊急匿名通信が入ってましたよっ」
リンゴが太狼へ、鋭い瞳を向ける。

「“巌流島”からっ」
「……っ」
「巌流島っ？」

リンゴが口にしたその島の名に、太狼はそっと眉をひそめ、羊スケは聞き慣れない様子で首を傾けた。

「そっ」
太狼がすぐに笑顔を作り、短く頷く。

「わかったぁ～後で見に行くぅっ」
「……っ」

いつもの軽い口調でそう言う太狼に、表情をしかめるリンゴ。

「太狼さん」

「んっ？」

リンゴが真剣な表情で、太狼の方を見つめる。

「あなたのことは信用していますし、あなたが何をしているのかを問い質す気はありませんけどっ…」

まっすぐな瞳で、太狼を捉えるリンゴ。

「あの子たちのことだけはっ、守ってあげて下さいねっ…」

「……っ」

その言葉は、真剣で、でもどこか祈るようで、太狼はそっと目を細めた。あの子たちのこと“だけは”。そう強調したリンゴの心に刻まれているもの。

――――次狼ぉぉぉぉっ！！――――

それは、かつて守れなかった、大切なもの。

「……わかってるよっ」

「……失礼します」

太狼がそっと微笑み、頷いたのを確認すると、リンゴは太狼に一礼をした。

「さっ、行くわよ、羊スケ」

「うぃっスっ！」
羊スケを引きつれ、オトポリへと戻っていくリンゴ。

「ふぅ～っ」
桃原家の前に一人残った太狼が、どこか疲れたように肩を落とす。

「緊急…かっ…」
少し鋭くした瞳で、空を見上げる太狼。

「もう本当に…時間がないんですね…」
空を見上げた太狼が、険しい表情を見せる。

「犬孝さんっ…」

その誇り高き名を呼ぶ声は、吹き荒れる風に、掻き消された。

第６２章　人と獣人の境界　★１

“獅国”。御伽界北方に位置する、四大国に次ぐ大国。
獣人の中でも、“龍人”や“狼人”と並行して強いと称される、“獅人”の治める国。
そんな国に、輝矢たちはやって来ていた。

「ふぅ～っ！着いたぁ～っ！」
獅国入口の前でオトポリのオープンカーが止まると、運転席に乗った、最近やっと人語を覚えてきたアホウ民、オトポリ志願隊員の鹿男が、両手を上げて大きく伸びをする。

「やっ…やっと…着いたか…」
「生きてて…良かった…」
「ボク…もう…死にそう…」
後部座席で、枯れ果てた声を出す桜時、モンキ、ユキジ。鹿男の荒過ぎる運転で、叫びまくったため、もう声も心もすっかり枯れ果ててしまったのである。

「何をダラダラしているのです？とっとと行きますよっ」
「なんでアイツは平気なんだっ…？」
「さすが輝矢んっ…」
弱りきっている三人に厳しく声を掛けながら、助手席を立ち上がり、車から出る輝矢。そんな輝矢に、三人は感心するような、呆れたような視線を送る。

「アナタも、付いて来たのなら、私の指示に従っていただきますよ

っ？」
輝矢がふと、自分の後方を振り向く。
「ウマっ」
「んんっ？」
振り返った先に立っているのは、美しい一頭の白いウマ。鹿男の上司・馬ロンの、獣化した姿である。
「なっなぁ～にを言っているのかなっ？君はっ！」
馬ロンが、どこかわざとらしい声をあげる。
「僕はたまったま散歩でこの辺りを通りかかっただけであってっ、決して君らに付いて来たわけじゃあっ…！」
「ハイハイ」
苦しすぎる言い訳をする馬ロンを、呆れきった表情で適当にあしらう馬ロン。散歩などとは言っているが、結局は鹿男のことが心配で、車の後を全速力で追いかけてきたのである。
「ホォ～ントっ、素直じゃないオジサンだよねぇ～」
「オジサンっ！？オトポリの白馬の王子である僕に向かって、何と失礼な口をっ…！！」
口を挟んだユキジの言葉に、馬ロンが大きく顔をしかめる。
「だいたい僕はまだっ、二十七であってだねぇっ…！」
「ボク、十五だから、一回りもちがぁ～うっ」
「……。」
ユキジの年齢を聞き、さすがにショックを受けたのか、その場に立ちつくしたまま、深く俯く馬ロン。

「あぁ～あっ、落ち込んでもたぁ～」
「ウマでも年齢とか気にするのですねぇ」
そんな馬ロンを、特に励ますことなく眺める輝矢とモンキ。

「あぁぁ～っ！馬ロぉぉ～ンっ！」
「だから“次長”か“隊長”と呼ぶようにと、いつもいつも言ってっ…！」
「あれっ、見て見てぇ～っ！」
「んっ？」
いつものように呼び方の注意をしようとした馬ロンが、獅国内を大きく指差す鹿男を見て、その指し示した指の先を振り向く。

「あそこで女の子がっ」
「きゃあああああっっ！！誰か助けてぇぇぇぇっっ！！！」

鹿男の指差したその先には、獅国の入口のすぐ近くの高い木の枝に、両手でぶら下がり、必死に叫んでいる可愛らしい少女の姿。

「何か楽しそうに遊んでるぅ～」
「助けを求めてるんだよっ！！」
陽気な笑顔で、どこか羨ましそうに言い放つ鹿男に、馬ロンが勢いよく怒鳴りあげる。

「ふわあああぁっ！！」
『あっ…！』

そうこうしている内に、枝を掴んでいた少女の両手が滑り落ち、少女が地面へと真っ逆さまに落ちていく。

「きゃあああああああああっっ！！」

「“月器っ…！」
落下していく少女に、輝矢が慌てて右耳のピアスを弾く。
「危ねぇっ…！！」
「えっ…？」
輝矢が月器を目覚めさせる前に、少女の元へと駆け出していく人物。
「ハチっ…？」
まっすぐに少女の元へと向かっていく桜時を、輝矢は少し戸惑うように見つめた。
「きゃあああああああっっ！！」
「クっ…！」
駆け込んでいった桜時が、地面目前の少女へ必死に両手を伸ばす。
「おわあああああっ！」
「きゃっ！」
少女を受けとめた桜時が、少女とともにその場に倒れ込む。
「痛てててっ…」
地面に打ちつけた後頭部やら背中やらを気にしながら、ゆっくりと起き上がる桜時。
「大丈夫か？」
「えっ…？」

桜時が両手に抱え込んだままの少女に声をかけると、きつく瞳を閉じていた少女が、ゆっくりと瞳を開いた。

「えっ！？あっ！はっはいっ！」

今の自分の態勢を確認し、頬を赤く染めて、慌てて桜時の上から立ち上がる少女。ふわふわとした茶色の髪に、くりくりとした黒色の瞳の、まだ幼さの残る顔立ちをした、十五，十六歳くらいの女の子であった。

「あっ…あああっありがとうっ…ございますすすっ…」

「へっ？」

激しく声を震わせて礼を言う少女に、桜時が少し不思議そうに首を傾げる。

「すっごぉ～いっ」

その一連の流れを見て、感心の声を漏らすユキジ。

「あの桜時が女の子をキャッチの上、会話、しかもそれで気を失わないなんてぇ～」

「最近アイツ、結構、女の子平気みたいやでぇ～？犬仁ちゃんや犬智ちゃんとかとも、普通に接しとうしぃ」

「……っ」

ユキジとモンキの言葉に、どんどんと顔をしかめていく輝矢。

「それもこれも俺の、普段からの女の子に対する接し方の指導があったからこそっ…！」

「何故」

「へっ？」

得意げに話そうとしていたモンキが、後方からする重たい声に振り返る。

「なら何故っ、私が触ると、尋常じゃないくらい激しく怯えるわけですかっ？」
「ふへぇっ？」
口を尖らせ、拗ねた子供のような表情で問いかける輝矢に、モンキが思わず目を丸くする。それは、いつもシレっとした表情しか見せない輝矢、らしからぬ表情であった。

「そりゃあ桜時が輝矢んのことをぉっ…！あっ」
「……っ？」
ペラペラと話そうとしたモンキが、急にハッとした表情となって、自らの口を押さえる。そんなモンキを見て、眉をひそめる輝矢。

「ことをっ？」
「えぇ～っとっ…」
自分の口から本当のことを言うわけにもいかず、モンキが少し口ごもる。

「あああっ！イヌコロだけ、ずっこいぞぉっ！俺も可愛ゆい女の子と、お知り合いになりたぁ～いっ！」
「あっ」
モンキが、輝矢から逃げるように、桜時と桜時が助けた少女の元へと駆け込んでいく。
「逃げましたねっ…あのサルっ…」
輝矢が冷たい瞳で、遠ざかっていくモンキの背中を睨みつける。
「とりあえずあの、ハチに馴れ馴れしかった女ともども、半殺しにっ…」
「お願いだから、サルだけで止めといてっ」
一般市民にまで殺意を抱く輝矢を、ユキジが引きつった表情で止める。

「はぁ～いっ！そこの女の子ぉ～っ！イヌコロなんかに受け止められて、怪我せんかったぁっ？」
「えっ？」
桜時に助けられた少女が、そのどこまでも軽く明るい声に、振り向く。
「イヌより俺と仲良くせぇ～へぇ～んっ？」
「サルっ…」
馴れ馴れしく人の言葉を話しながら、歩み寄ってくる一匹のサルの姿を、少女が呆然と見つめる。
「お前なぁっ、そうやって誰にも彼にも軽口ばっか叩くから、後でややっこしいことになんだぞっ！？」
「これが俺の性分やねんから、しゃーないやろぉ～？」
「サルが…しゃべった…」
『……っ？』
あれこれと言い合っていた桜時とモンキが、ポツリと呟いた少女の声に、同時に振り向く。
「ああっ、そうなんだ、コイツはっ」
「俺っ、猿の獣人の門貴ってゆーねぇ～んっ！」
「獣…人っ…」
そう呟いた少女の顔色が、徐々に青ざめていく。
「きゃあああああっ！！獣じぃぃーーんっ！！」

『へっ？』

いきなり悲鳴をあげる少女に、焦った表情を見せる桜時とモンキ。

「何っ！？獣人だとっ！？」
「どこだっ！？どこだっ！？」
『へぇっ！？』

少女の悲鳴を聞きつけたのか、獅国の奥から大勢の町人が、入口へ向かって駆け込んでくる。町人は皆、武器を持っており、妙に殺気立っていた。

「なっ何かっ…」
「嫌な予感っ…」
駆け込んでくる町人に、顔を引きつる桜時とモンキ。

『獣人を捕まえろぉぉぉっ！！』
「ぎゃあああああっ！！やっぱりぃぃぃっ！！！」
「門貴っ…！」
殺気立った町人に一斉に攻め込まれ、捕まってしまうモンキ。桜時が慌てて手を伸ばすが、モンキはそのままどこかへ連れ去られていく。

「うわぁっ！」
「由雉っ」
「なっ何をするんだっ！君たちっ！」
「馬ロぉ～ンっ！」

モンキ同様に町人に捕まってしまうユキジと馬ロン。輝矢と鹿男

が、焦ったように身を乗り出す。

「何をっ…！」

「獣人は全部、捕まえたぞぉっ！」

“獣人”っ…？」

町人に言葉を投げ放とうとした輝矢が、町人の言葉に、そっと表情を曇らせる。

『うわあああああっ！！』

「門貴っ！由雉っ！馬ロンっ！」

網のようなものに捕えられ、国の中へと連れて行かれる三匹の姿に、桜時がその場で立ち上がる。

「てめぇらっ！いきなり何すんだよっ！？」

「お前たちも“獣人”か？」

「えっ…？」

「……っ」

多くの町人たちの中心に立った体格のいい男が、皆より一歩前へと出て、鋭い表情で桜時へと問いかける。その問いかけに、桜時は戸惑ったような表情を見せ、輝矢はそっと目を細める。

「そうだぁっ！俺は鹿っ…うぷっ！」

「いいえっ、私たちは獣人ではありません」

自分が鹿人であることを、高々と言おうとした鹿男の口を強く押さえ込み、輝矢が強く言い放つ。

「輝矢っ…？」
そんな輝矢の方を振り返り、少し首を傾ける桜時。
「獣人と一緒にいたようだが…？」
「人は獣人と一緒に居てはいけないとでも？」
さらに問いかけを続ける男に、輝矢は一歩も引かずに聞き返す。
「あれはただのペットですよ」
「……。」
輝矢の鋭い瞳と、男がしばらくの間、睨み合う。
「……わかった。一先ず、信じよう」
男が、ゆっくりと言い放つ。
「だが獣人とわかればっ…すぐにでも捕まえてやるからなっ」
「……っ」

そう吐き捨てるように言うと、男は周囲の町人を引き連れ、国の中へと戻っていった。その場に輝矢たち三人と、先ほどの少女だけが残される。

「すっすいませんでした。獣人でない皆さんにまで、変な疑いをかけてっ」
「へっ！？あっ！いやっ！」
深々と頭を下げて謝る少女に、実際は獣人である桜時が、少し焦ったように声を出す。
「私はこの国の住人で、凡子（ぼんこ）といいます」

「俺は朱っ…あぁ～っ、桜時」

“朱実”の名を出すと獣人であることがバレてしまうかも知れないと、桜時が咄嗟に苗字だけを隠す。

「桜時サンっ？素敵なお名前ですねっ」

「あぁ～っ、どうもっ」

「でぇっ？」

「うぅわっ！」

親しげに話す桜時と凡子の間を、不機嫌この上なさそうな表情の輝矢が、割って入る。

「きゅっ急に現れんなよなっ！まったくっ！」

「……っ」

どんどんと後退し、あからさまに輝矢から距離を取る桜時に、輝矢がさらに顔をしかめる。

「それでっ？私のペットどもは、どこに連れて行かれたわけですか？」

「えっ？」

不機嫌面のまま問いかけた輝矢の言葉に、凡子が目を丸くする。

「どこへって…取り戻すおつもりですか？」

「まぁ一応、ペットですから」

「無理だと思いますよ？」

『えっ…？』

あっさりと言い放つ凡子に、輝矢と桜時の表情が曇る。

「無理ってっ…」

「この国の町人は、みんな、獣人が死ぬほど大っ嫌いなんです」
「……っ」
その言葉に、眉をひそめる、獣人である桜時。
「だから、逃がすなんてことは絶対、しないと思います。今までもそうだったしっ」
凡子が、落ち着いた口調で、話を続ける。
「今頃、毛を剥がれたり、出汁取られたりして、まぁ最終的には死刑じゃないですかねぇ？」
「えええっ！！？」
さらりと残酷な言葉を吐く凡子に、桜時が焦ったような声を出す。
「大変だっ！輝矢っ！とっとと助けに行かねぇーとっ…！」
「何故、そこまで獣人をっ…？」
皆を助けに行くことを促す桜時の言葉を遮って、輝矢が真剣な表情を見せて、凡子へと問いかける。
「それはっ…」
少し険しい表情を見せ、俯く凡子。
「許せないからですっ…」
「えっ…？」
「……っ」
凡子の瞳が、鋭く光る。

「“獣人”という存在っ…そのものがっ…」

『……っ』

憎しみさえ感じるその凡子の瞳に、輝矢と桜時は表情を曇らせた。

第６２章　人と獣人の境界　★２

一方、獅国内、町のはずれ。罪人牢。

「冗っ談じゃないよっ！」

罪人牢に響く、大きな声。

「何故っ！何ぁぁ～故っ！オトポリの白馬の王子であるこの僕が、こんな所に閉じ込められねばならないんだっ！」

叫んでいるのは、いつの間にか人の姿に戻った馬ロンであった。

牢に入れられたことが、相当、屈辱的だったようである。

「うっさいなぁ～しゃーないやぁ～んっ、捕まってもたもんは捕まってんからぁ～」

「そうそうぅ～」

そんな馬ロンに、面倒臭そうに声をかける、こちらも人化した門貴と由雉。二人は馬ロンと違って、牢に入れられても、落ち着いた様子である。

「輝矢んと旅しとったら、こんなん、しょっちゅうやでぇ～？」

「牢入れられるのとか、結構慣れたよねぇ～」

「僕は慣れていないんだよっ！！」

牢慣れしている門貴と由雉に、馬ロンが勢いよく怒鳴りあげる。

「ふぅっ」

馬ロンが一息つき、腰に下げている剣の柄へと手をかける。

「とにかくこんな牢、とっとと出てっ…」

「獣人特有の特殊能力使って、この牢ブチ壊して、逃げるってかぁ～っ？」
「……っ？」
剣を抜こうとした馬ロンが、牢の外から聞こえてくる声に顔を上げる。
「……っ」
馬ロンが顔を上げると、牢のすぐ外に、茶色の髪に鋭い黒の瞳の、まだ幼さを残した顔立ちをした青年が立っていた。まるで親の仇でも見るような、そんな憎しみのこもった瞳で、青年は馬ロンを見つめる。
「君はっ…」
「獣人はいっつもそうだっ！何かにつけて力を使って、俺たち人間をねじ伏せるっ…！」
「えっ…？」
青年の言葉に、そっと眉をひそめる馬ロン。
「そんなに何の力も持ってない俺たちを甚振るのが楽しいかよっ！？見下して面白いかよっ！？ええっ！？」
「君ねぇっ…」
一方的に怒鳴りつけてくる青年に、馬ロンが少し困ったように頭を掻く。
「何を一人で熱くなってっ…」
「お前たち獣人はそうやってっ…！俺たち人間から何もかもを奪っていくんだっ…！！」

「……っ」

青年の必死でまっすぐで、恨むような憎むような、それでいてどこか悲しそうな瞳。そんな瞳を見せる青年を見て、馬ロンはそっと目を細めた。

「ふぅ～っ」

「……っ？」

馬ロンが剣の柄から手を離し、その場に深々と座り込む。そんな馬ロンの行動に、少し戸惑った表情を見せる青年。

「なっ何だよっ！？大人しくなった振りして、俺たちを油断させる気っ…！」

「僕は何もしないよっ」

「えっ？」

その馬ロンの言葉に、青年がさらに困惑するように眉をひそめる。

「僕は、君から何かを奪う気なんて、さらさらないからねっ」

「……っ！」

馬ロンがまっすぐな瞳を青年へ向け、そう言い放つと、青年は驚いた様子で、大きく目を見開いた。

「獣人の言葉なんかっ…」

そっと俯いた青年が、強く拳を握り締める。

「誰が信じるかよっ…！」

そう吐き捨てるように叫んで、青年は罪人牢の前から走り去っていった。

「……っ」
青年が去っていった方を見つめて、そっと目を細める馬ロン。
「なぁ～んか色々と、きな臭い国みたいだねぇ～」
「ああっ」
表情を鋭くする由雉の言葉に、門貴も真剣な顔で頷いた。

「ハァっ…！ハァっ…！ハァっ…！」
先程の青年が、罪人牢のある町はずれの建物を出て、町の中央部へと必死に足を走らせる。
――――僕は、君から何かを奪う気なんて、さらさらないからねっ――――
「何だよっ…！あの獣人っ…！」
頭から離れようとしない馬ロンの言葉を、何とか振り払おうと、青年が必死に首を横に振る。

「……っ」
だがそれでもその言葉は頭の中から消えずに、青年はその場で立ち止まり、首を振ることもやめた。

「あいつらはっ…」
「凡平（ぼんぺー）っ」
「……っ？」

青年が、横から聞こえてくる自らの名に振り向く。

「あっ、町長っ」
凡平が振り向くと、そこには先程、輝矢に獣人であるかどうかを問いかけた、体格のいい中年の男が立っていた。凡平が町長と呼んだその男の背後には、武器を持った数名の従者が立っている。

「獣人どものところへ行っていたのか？」
「あっ…はいっ…」
少し躊躇いながら、凡平が頷く。
「無暗に近づくなよ？獣人の野蛮さは、お前も知っているだろう…？お前に何かあっては困る」
「はっはいっ…気を…付けます…」
優しい言葉を投げかける町長に、どこか申し訳なさそうに頷く凡平。

――――僕は何もしないよ――――

「……っ」
俯いた凡平の脳裏に、再び先程の馬ロンの言葉が過ぎる。

「あのっ…町長っ…」

「んんっ？」
小さな声で呼びかける凡平に、返事をする馬ロン。
「あいつらはっ…本当にっ…」
「町長っ！」
『……っ？』

何かを言いかけた凡平の言葉を遮って聞こえてくる声に、凡平と町長が同時に振り返る。すると、脇道から、数名の町人と見られる男たちが、町長のもとへと駆け寄って来た。

「獣人どもの死刑ですが、いつにしましょうっ？」
「えっ…？」
その内の一人の言葉に、凡平が眉をひそめる。
「出来る限り早い方がいいな。良し、明日の正午にしよう」
「えっ…！？」
「明日の正午ですねっ！わかりましたっ！」
「あっ…！」

即決する町長にさらに驚く凡平であったが、凡平が何かを言う前に、男たちは足早にその場を去っていった。

「ちょっ町長っ…！」
「んっ？」
凡平が少し慌てた様子で、町長の方を見る。
「あの獣人たちっ、死刑にするんですかっ…！？」
「ああっ」
「……っ！」

すぐさま頷く町長に、さらに驚くように目を見開く凡平。

「でっでもっ…！いくら獣人だからって、別に町人に危害を加えたわけでもないのにっ…！」

「凡平っ」

「……っ？」

思わず大きな声を出した凡平を、町長が宥めるかのように呼ぶと、凡平は繋いでいた言葉を止めた。

「危害を加えていようとなかろうと、獣人は存在するだけで、我々、人間にとっては何よりの脅威だ」

「けっけどっ…！」

「凡平っ」

訴えかけようとした凡平の名を再び呼び、町長が凡平の言葉を遮る。

「獣人どもに何をされたのか…忘れたわけではないだろう…？」

「……っ！」

ゆっくりと問いかける町長のその言葉に、凡平がハッとした表情を見せる。

「……はいっ」

深く俯き、ポツリと頷く凡平。

「なら…わかってくれるねっ…？」

「……はい」

少しの間を置いた後、凡平がもう一度ゆっくりと頷く。

「大丈夫っ」

町長がそっと、俯いたままの凡平の頭を撫でる。

「お前の願いは必ず叶えるよ…」

「……。」

深く俯いたまま、凡平はただ、囁かれるその優しい言葉を聞く。

「すべては私に…任せておけばいい…」

そう呟きながら、町長はそっと冷たい笑みを浮かべた。

町の中央道を一本入ってすぐのところに、凡平の家があった。一階建ての、小さな木製の家。すでに灯りのついているその家に、町長と別れた凡平が帰り着く。

「ただいまぁ〜って、んっ…?」

玄関に並んだ、普段より多くの靴に、凡平がそっと首を傾ける。

「おかえりなさい、お兄ちゃんっ」

「凡子、誰か来てっ…あっ」
「どうも、お邪魔してます」
「……っ」

出迎えた妹・凡子から目を逸らし、凡平が家の中を見ると、リビングのソファーに座っている輝矢、桜時、鹿男の姿があった。輝矢が軽く微笑むと、凡平の表情が曇る。

「あいつら、あの獣人どもと一緒にいた奴らだろっ？凡子、お前、何考えてっ…」
「ごめんなさい、お兄ちゃん。でもあの人たちっ…というか真ん中のピンク髪の人だけなんだけど、私、実は木から落ちそうだった所を助けてもらったのっ」
「木から…？」
「うんっ」
聞き返した凡平に、凡子が笑顔で頷く。

「そういえば凡子、何であんなとこの枝にぶら下がってたんだ？」
「えっ！？」
ふと思い出したように問いかける桜時に、凡子が少し焦ったような声を出す。
「それはぁっ…そのぉっ…」
どこか躊躇うように、俯く凡子。

「ウチにぶら下がり健康機を買う金がないから、枝で代用してたんだろっ？」
「へっ？」
代わりに答えた凡平の言葉に、桜時が目を丸くする。
「ちょっ…！お兄ちゃんっ…！桜時さんの前で、そういうこと言わないでよっ！恥ずかしいっ！」

「なぁ～にが恥ずかしいだっ」
顔を赤くして、責めるように言い放つ凡子に、冷めた視線を送る凡平。

「アハハハっ…」
「……っ」
空笑いを浮かべる桜時の横で、輝矢が不機嫌な表情を見せる。

「妹を助けてくれたことには礼を言う」
靴を脱ぎ、家の中へと上がった凡平が、真面目な表情で輝矢たちの方を見る。

「それに今日はもう遅いから、今晩は泊めてやる」
「お兄ちゃんっ…！」
妥協するように、そう言う凡平に、凡子が嬉しそうな笑顔を見せる。

「だけどっ！明日の朝一っ！即刻っ、家からもこの国からも出て行ってもらうからなっ！！」
「私、朝弱いんで、その条件は呑めませんね」
「ええぇっ！？あっさり拒否したぁっ！！？」
礼を言った上、泊めることまで許可したというのに、あまりにもあっさりと要求を拒否する輝矢に、怒りよりも驚きの反応を示す凡平。

「どんだけ図々しいんだよっ」
「それに、ウチのペットどもを返してもらわないといけませんしねぇ」
「……っ」

輝矢の図々しさに呆れ果てていた凡平が、輝矢のその言葉に、そっと眉をひそめる。

「……無駄だっ」
「えっ？」
ポツリと呟く凡平に、顔を上げる輝矢。

「無駄っ？」
「ああっ、アイツらは明日の正午っ、死刑になるからなっ」
「えっ…！？」
「死刑っ！？」
「……っ」

吐き捨てるように言った凡平の言葉に、桜時と凡子が大きく驚き、輝矢がそっと表情を曇らせる。

「死刑ってっ…ホントなのっ？お兄ちゃんっ」
「ああっ、さっき町長に聞いた」
信じられないといった表情で問いかける凡子に、凡平がしっかりと頷く。

「そこまでするなんてっ…」
「フザけんじゃねぇっ！！」
『……っ』

凡子の言葉を遮って怒鳴りあげる桜時に、凡平と凡子が少し驚いた表情で、振り返る。

「死刑ってっ…！アイツらが何やったってゆーんだよっ！？」
「それはっ…」

まっすぐな瞳で怒鳴りあげる桜時に、少し俯く凡平。

――――でっでもっ…！別に町人に危害を加えたわけでもないのにっ…！――――

それは、先程、凡平も持った思い。

「それはっ…」

――――獣人どもに何をされたのか…忘れたわけではないだろう…？――――

「……っ」

思い出される町長の言葉に、凡平が強く唇を噛み締める。

「アイツらがっ…“獣人”だからだっ…」

「んだとっ…！？」

絞り出すように言い放った凡平に、桜時が大きく目を見開く。

「獣人だってだけでっ、お前らは人を殺すのかっ！？」

「桜時サンっ…！」

凡子が止める間もなく、怒りの表情を全面に押し出した桜時が、勢いよく凡平に掴みかかった。

「フザけんじゃねぇよっ！！お前らっ、一体っ！獣人のことっ、何だと思っ…！」

「ハチっ」
「……っ！」

さらに凡平を責め立てようとした桜時が、後ろから強く名を呼ぶ輝矢の声に、言葉を止める。

「……っ」

桜時がふと後方を振り返ると、厳しい表情を見せた輝矢が立っており、桜時はそっと目を細め、凡平を掴んでいた手を下ろした。

「凡子」
「えっ？」

前へ出て、桜時と並ぶように立った輝矢が、凡子へまっすぐな瞳を向ける。

「先程、アナタは言いましたね。“獣人そのものの存在が許せない”と…」
「……っ」

輝矢から自分の放った言葉を繰り返され、凡子が少し眉をひそめて俯く。

「何故です？何故、獣人が許せないのです…？」

輝矢が凡子へ、問いかけを続ける。

「理由もなく嫌うにしては、度が過ぎているように思えますが…？」
「それはっ…」

俯いたままの凡子が、少し躊躇うような表情を見せる。

「お前らには関係ないことだっ！」
「お兄ちゃんっ」
代わりに言い放つ凡平に、凡子が少し驚いたように顔を上げる。

「凡子、余計なことは言わなくていいぞっ」
「でっでもっ…」
「こんな余所者に、話すようなことじゃあっ…」
「仲間が殺されそうだというのに、その理由さえ、教えていただけないのですか？」
「……っ」

輝矢の鋭い問いかけに、凡平が表情をしかめ、言葉を止める。

「それではこちらも引くに引けませんねぇ」
「……。」

どこか試すような物言いで、凡平を挑発する輝矢であったが、凡平は固く口を閉め、話す意志はまったくないと言わんばかりに深く俯いた。

「……っ」
そんな兄の姿を見て、そっと目を細める凡子。

「……“獅国”は、かつては、“獅人”と“人間”が、共存して暮らす、平和な国でした」
「……っ」
「凡子っ…！」
凡平の代わりに話し始めた凡子に、凡平が思わず声を荒げる。

「お前っ…！何をっ…！」
「でも数ヶ月、急に、国主である獅子戸銃（ししどじゅう）が、卑劣な手段を使って、この国を手中に収めてしまったんですっ…」
「獅子戸っ…？」

凡平が止めようとするが、凡子は負けることなく話を進めた。凡子の言葉に、鹿男が眉をひそめる。

「卑劣な手段というのは…？」
「獣人の力を使って、町の子供たちを人質にっ…」
「なっ…！」

凡子の言葉に、桜時が思わず驚きの声をあげる。

「人質っ…！？国主がっ！？」
「ハイ…」
辛そうな表情で、しっかりと頷く凡子。

「その子供たちの中にはっ…」
「俺たちの弟も入ってるっ」
『……っ』

最後の部分だけを、凡子の代わりに凡平が言い放つ。その凡平の顔には、怒りと憎しみの情が浮かび上がっていた。

「私たちは獅子戸から強制労働をさせられ、それでも人質のために逆らうことは出来ず、まるで奴隷のように毎日を生きていますっ…」
「そうですか…」

声を震わせ、今にも泣き出しそうな表情を見せる凡子を見て、頷

きながら、そっと目を細める輝矢。

「それで町人たちは、獣人に対して過敏になって、あのようなことをっ…」

「ええっ、新たな悲劇を生まないように、早めに対処をしようって町長がっ…」

「これでわかっただろっ？」

凡子の言葉を遮り、凡平が輝矢へ、乱雑に問いかける。

「俺たちが、獣人嫌いな理由がっ」

「……。」

睨みつけるように見つめてくる凡平を見て、輝矢が目を細める。

「ええっ」

短く頷く輝矢。

「けどっ、ウチのペットどもが殺される理由としては、今一つ、納得出来ませんね」

「何っ？」

輝矢の言葉に、顔をしかめる凡平。

「それにっ…」

何か気になることがあるかのように、輝矢がそっと表情を曇らせる。

「違うっ…」

『へっ…？』

割って入ってくるその声に、輝矢や凡平たちが、目を丸くして、

一斉に振り向く。

「違うっ」
「鹿男っ…？」

輝矢たちが振り向いた先には、いつもとは打って変わって真剣な表情を見せた、鹿男の姿があった。“違う”という言葉を繰り返す鹿男に、輝矢が眉をひそめる。

「鹿男、違うとは何のっ…」
「レオもレオの父ちゃんもっ、そんなことは絶対にしないよっ！」
「……っ」

強く言い放つ鹿男に、輝矢が驚いた表情を見せる。

「レオ…？国主の息子か。お前っ、国主の息子と知り合っ…」
「よしっ！！俺っ、レオに聞いて、確かめてくるっ！！」
『へぇっ！？』

凡平の言葉が終わらないうちに、思い立ったように言い放ち、いつもの陽気な笑顔に戻って、凡平たちの家を飛び出して行く鹿男。

「おっおいっ！鹿男っ！ちょっと待っ…！」
「あっ、ハチっ」

鹿男を追って行こうとした桜時の手を、輝矢が強く掴み止める。

「……っ！」

触れる輝矢の手に、顔色を赤く染める桜時。

「うっ…！」

――――パシンっ…！！――――

「……っ」

振り向いた桜時が、勢いよく輝矢の手を振り払うと、輝矢が大きく目を見開いた。

「あっ…」

強く振り払った自分の手を見て、桜時が少し焦ったような表情を見せる。

「わっ悪っ…」

「ハチは何かあった時のために、この場をお願いします…」

「えっ…？」

謝ろうとした桜時の言葉を遮り、そう言う輝矢。桜時が戸惑った様子で顔を上げると、そこには深く俯き、表情の見えない輝矢の姿があった。

「鹿男は…私が追いますのでっ…」

「えっ？あっああっ…」

表情を見せない輝矢の言葉に頷きながら、桜時もゆっくりと俯いていく。

「凡子、獅子戸の家の位置を教えていただけますか？」

「えっ？あっはい、町の一番、北にある、町で一番、大きな屋敷です」

「わかりました」

「あっ」

凡子の答えに頷くと、輝矢は、凡子が止める間もなく、鹿男を追いかけるようにして、凡平たちの家を出て行った。家の中に、沈黙が流れる。

「桜時…サン…？」

戸惑うように、桜時の方を見つめる凡子。

「……。」

深く俯いた桜時は、振り払ったその手を見つめ、どこか悲しげな表情を見せていた。

「ふぅっ」

凡平と凡子の家を出た輝矢が、もう真っ暗な町中を走り、先に出て行った鹿男の姿を探すように、辺りを見回す。

「ったく、あのアホウ、どこまでっ…あっ…」

ふと、額の汗を拭おうと上げた手を見て、輝矢が表情を曇らせる。

「……っ」

“パシン”と強く、桜時に振り払われた手。

――――大丈夫か？――――

躊躇うことなく、凡子を助けた桜時。

――――犬仁ちゃんや犬智ちゃんとかとも、普通に接しとうしぃ――――

女性に対して、普通に接し始めた桜時。

――――うっ…！――――

輝矢を、拒絶した桜時。

「……私…だけ、かっ…」

その手を見つめ、そっと目を細める輝矢。

――――そりゃあ桜時が輝矢んのことをぉっ…！――――

「……“キライ”っ…？」

門貴の言葉に、その単語を三文字を付け足し、輝矢が俯く。

「心当たり…あり過ぎるなぁ…」

そう呟いた輝矢は、ひどく辛そうであった。

第６２章　人と獣人の境界　★３

獅国・北端。獅国主・獅子戸銃の屋敷。

「父上っ…！」

屋敷の長い廊下に、大きな声を響かせるのは、短い金髪に、鋭い金目の青年。見るからに家柄の良さそうな、貴族風の格好をしている。国主・獅子戸銃の息子・レオであった。

「父上っ…！！」

「……。」

レオの声に、前方を歩いていた男が、ゆっくりと立ち止まる。

「何だ…？レオ…」

ゆったりとした口調で振り返る、レオと同じ金髪金目の四十代半ばくらいの男。蓄えられた金色の鬚が、威厳を漂わせており、見るからに身分の高い者であることがわかる。この国の国主にして、誇り高き獅人の王、獅子戸銃であった。

「……っ」

その威厳を漂わせる父に、レオが少し怯むように顔をしかめる。

「あのぉ～っ…えっとっ…」

先程、父を呼んでいた時よりも半分くらいの音量で、小さく言葉を繋ぐレオ。

「そのぉ～っ…いつになったら、町の子供たちを解放する気なのかなぁ～っなんてっ」

レオが茶目っけたっぷりの笑みを浮かべ、銃へと問いかける。

「いつ…だと…？」

「あっあああっ…」

さらに瞳を鋭くする銃に、レオが思わず視線を逸らす。

「さぁなぁ…人間どもが我々に反抗する気をまったく失ったら、解放してやってもいいがっ」

「はぁ…」

残酷とさえ思える、冷たい笑みを浮かべる銃に対し、目も合わせずに大人しく頷くレオ。

「でっでもぉ～っ…」

レオがかなり遠慮がちに、声を発する。

「そのぉ～今まで通り～っ、獅人と人間たちとで、上手くやっていけばいいんじゃないかなぁ～みたいなぁ～」

「レオ…」

「はっはいっ…！」

胸の前で両手の人差し指をツンツンとさせながら、締まりのない言葉を繋げていたレオが、銃に名を呼ばれ、すぐさま背筋を伸ばして、しっかりと返事をする。

「お前は…私のやり方に、文句をつけるのか…？」

「いえっ！まったくつける気はございませんっ！！」

銃の鋭い瞳に睨みつけるように見られ、レオが敬礼をして、大きな声で否定する。

「そうかっ…なら良いな…？」
「はっはいっ！！」
「お休み…」

レオがもう一度頷いたのを確認し、銃がレオに背を向ける。

「我が自慢の息子よっ…」

レオに背を向けた銃は、どこか含んだような怪しげな笑みを浮かべると、廊下を進み、レオの前から歩き去っていった。

「はぁっ…ドキドキしたっ…」

その場に一人残ったレオが、銃がいなくなった途端に、ホっと胸を撫で下ろした。

「あの顔、マジ怖いんだもんなぁ～っ」
「レオ様っ！」
「んっ？」

自分の名を呼ぶ声が聞こえてきて、レオがふと顔を上げる。

「ライっ」

銃の去った方向とは逆の側から、レオの元へと駆け寄ってきたのは、長い金髪に穏やかな緑目の、レオよりは上に見えるが、まだ若

い男。国主補佐で、レオの世話役でもある、ライであった。

「どうでしたっ！？銃様の説得はっ！」
「ダメだった」
「あっだぁぁぁぁっっ！！」

期待の表情で駆け込んできたライが、レオの即答を聞いて、駆け込んできた勢いそのままに、廊下に倒れ込んだ。

「ったく、何をしてるんですかぁ～っ！毎日毎日っ！」
「しゃーねぇだろぉっ！？怖ぇーんだからっ！」
「国に戻るなり、“俺は生まれ変わった”と言い張ったのは、どこのどなたですっ！？」
「あっあれはっ、そのっ、だなぁっ」
ライの鋭い指摘に、レオが思わず口ごもる。

「豹変された銃様を説得し、この国を元の平和な国に戻せるのは、貴方しかいらっしゃらないのですよっ？」
「ううぅ～んっ…」
ライの言葉に、レオが少し悩み込むように、首を捻る。

「まっまぁっ！明日は必ず説得すっからっ！」
「昨日も一昨日も先一昨日も、そう言いました」
「うっ…！」
厳しい突っ込みを入れられ、表情を歪めるレオ。

「ああ、それとっ」
「……っ？」
言葉を付け加えるライに、レオが顔を上げる。

「今日、旅の獣人三名、町人により、捕まえられたそうです」
「またかっ…」

ライの言葉を聞き、レオがどこか疲れたように、深々と肩を落とした。

「わかった。そっちは明日か明後日かに、俺が直接、町長に交渉に行っ…」
「出来れば早めにお願いしたいのですがぁ」
「へっ…？」

この屋敷では聞き慣れない、その凛とした声に、レオが少し戸惑うように、振り返る。

「あっ…」
「でないとウチのペットども、明日の正午には、死刑になってしまうそうなので」

レオが振り返った先には、開かれた窓の下枠に腰を下ろし、レオの方へ笑顔を向けている輝矢の姿があった。輝矢と目を合わせ、レオが少し目を見開く。

「おっお前はっ…」
「レオぉぉぉぉぉ〜っ！！」
「ぎゃあああっ！！」

輝矢の方を見ていたレオが、横から突っ込んできた鹿男に、勢いよく吹き飛ばされる。

「レオ様っ…！？」
「痛つつつつつつっ…」
ライに支えられながら、痛そうに頭を抱えて、起き上がるレオ。

「一体、何っ…って、んっ？」
起き上がったレオの目が、目の前に立つ、陽気な笑顔の鹿男を捉える。

「しっ…鹿男っ！！？」
「久し振りぃ～レオっ！」

激しく驚くレオに、鹿男は陽気に手を振った。

数分後。獅子戸家・応接室。

「はぁぁぁぁ～～～んっ」

応接室の立派なソファーに腰を掛け、感心したように声を出すレオ。

「鹿男がオトポリに…なぁ」

「うんっ！そうなんだっ！」
まだ信じ切れていない様子で呟くレオに、向かいのソファーに座る鹿男が得意げに頷く。鹿男の隣には、輝矢が座っていた。

「ふぅぅぅぅ～～～んっ」
レオがもう一度、感心して頷く。

「世も末だな」
「まぁ反論は出来ませんねぇ」
腕組みをし、きっぱりと言い放つレオに、しみじみと頷く輝矢。

「それで？国主の様子が、急に変わったというのは本当なのですか？」
「ええっ」
鹿男がオトポリに入った話を終わらせ、輝矢が表情を引き締めて、本題を切り出す。輝矢の問いかけに答えたのは、皆に茶を出しているライであった。

「皆の意見をまるで無視して、子供たちを人質に取り、町人たちに酷いことをっ…」
茶を出し終えたライが、その場に立ち上がり、険しい表情を見せる。
「人が変わったようにというか、もう別人としか思えませんっ…」
「……っ」
ライの言葉を聞き、輝矢が表情を曇らせる。
「俺が鹿国から戻って来た時には、もうすでに今の状態だったんだ」
レオが、ライに引き続き、話しをする。

「息子の俺から見ても…今の親父は、俺が鹿国に行く前とは、別人のように思える…」

――――この国を出て行けっ…！――――

臆病なレオに、国を出て行けと言った父。

「確かに、厳しい人ではあったけど…人質とか取るような人じゃなかったしっ…」

「別人…ですか…」

唇を手で押さえ、少し考え込むような表情を見せる輝矢。

「私は鬼人が銃様に成り変わっているのではないかと、考えております」

「……っ」

「おいっ！ライっ！」

ライの急な言葉に、輝矢がふと目を細め、レオが少し焦ったように声をあげる。

「てっててて適当なこと言うなよっ！しょっ証拠もないのに、ききき鬼人なんてっ…んな怖ぇことっ…！」

「いえ、そうかも知れません」

「えええぇぇぇぇっ！？」

輝矢がライの言葉を肯定するようなことを言うと、やけに震えた声で訴えていたレオが、一気に泣きそうな表情を見せる。

「オトポリに鬼人の目撃情報が来ていたようですし」
「また鬼人なのぉぉっ!?俺っ、泣いちゃうっ!」
「大丈夫だよぉ～レオぉ～っ!俺っ、付いてるしぃ～っ!」
「何の慰めにもならねぇーよっ!!」
陽気な笑顔を見せる鹿男に、強く怒鳴りあげるレオ。

「その真偽の程を確かめて欲しいとお願いしたのに、このヘッポコライオン様がっ…」
「うっせっ!怖いもんは怖いんだから、しょーがねぇーだろっ!?」
「はぁっ…」
ライに冷たい視線を投げかけられながらも、必死に怖いことを訴えているレオの姿に、輝矢がどこか呆れたように肩を落とす。

「それでは鹿国に居た時と、何も変わっていないではありませんか」
「うっ…」

勇気を持ち、臆病であった自分から卒業したからこそ、レオは鹿国を出て、自国に戻ったのだ。だが今も持てない勇気に、レオがどこか面目なさそうに顔を下へ向ける。

「それで、竹取様」
「はいっ?」
ライに名を呼ばれ、輝矢が振り向く。
「鬼人が銃様に化けているとすれば、その目的は何なのでしょうか?」
真面目な表情で、問いかけるライ。

「やはり、この獅国…?」
「……っ」
問いかけを続けるライに、輝矢がそっと俯く。

――――お前たちも…獣人か…？――――
――――新たな悲劇を生まないように、早めに対処をしようって町長がっ…――――

思い出される言葉。

「いえっ…」
「えっ…？」
そっと否定する輝矢に、ライが目を丸くする。
「鬼人の狙いは恐らく…“獣人狩り”…」
『獣人狩りっ？』
「ええっ」

声を揃えたレオとライに、輝矢が顔を上げる。

「鬼人にとって、特殊能力を持つ獣人たちは、自分たちを殺す可能性のある脅威の存在です」
厳しい表情で、言葉を続ける輝矢。

「そんな邪魔者たちを、自分の手を汚さず、人間たちが始末してくれるよう、仕組んだのでしょう…」
「じゃあ虐げられた町人たちの、その後の行動を計算してたってことかっ…」
「いえっ…」
「へっ？」
またもや否定する輝矢に、首を傾げるレオ。

「一匹でやっているにしては、事が上手く運び過ぎている…」
輝矢が、鋭い瞳を見せる。
「町に…もう一匹いるかも知れませんね…」
『えっ…？』
輝矢の言葉に、レオとライは眉をひそめた。

その頃、町はずれの罪人牢。
「ぐごぉぉーーっ！ぐごぉぉーーっ！」
「すぅ～っ…すぅ～っ…」
「ったく…」
牢の中から聞こえてくる、二つの寝息と、一つの呆れきったような声。
「この状況でよく寝れるもんだねぇ～ホントっ」
その呆れきった声を出しているのは、牢の壁にもたれかかり、座り込んでいる馬ロンであった。馬ロンが見つめる先には、床に寝転

がり、すっかり寝こけているモンキとユキジの姿がある。

「何という無繊細さっ、育ちの良すぎる僕には逆に羨ましいよっ」

寝ている二人を相手に、馬ロンがぶつくさと一人でしゃべる。

「んっ…？」

その時、牢の外に人の気配を感じ、馬ロンが素早く顔を上げた。

「君はっ…」

「……。」

馬ロンが顔を上げると、牢の前に、少し困惑するような表情を見せた、凡平が立っていた。

「やあっ」

「……っ」

馬ロンが軽く微笑み、挨拶をすると、凡平が顔をしかめ、その場を去ろうと馬ロンに背を向ける。

「待ちたまえ」

「……っ」

呼び止められ、去ろうとした足を止める凡平。足を止めた凡平が、再び馬ロンの方を振り返った。

「少し、話し相手になってくれないか？」

「……。」

馬ロンのその誘いに、凡平はさらに複雑そうな表情を見せた。

「あんたは…寝ないのかっ…？」
「生憎、牢の中でがぁーがぁー寝れるほど、雑に出来てなくてねぇっ」
牢の鉄格子を間に挟み、背を向け合うようにして座り込む馬ロンと凡平。モンキとユキジの寝息が響く中、二人は小声で言葉を交わす。

「君こそ、寝ないのかい？もう夜中だろう」
馬ロンが凡平に聞き返す。

「獣人への怒りが収まりきらなくて、寝れないかい？」
「べっ別にそんなわけじゃっ」
少し口元を緩め、茶化すように問いかける馬ロンに、凡平は馬ロンには見えはしないが、慌てて首を振る。

「ただっ…」
そっと視線を落とす凡平。

――――僕は、君から何かを奪う気なんて、さらさらないからね――――
――――獣人が我々人間に何をしたか…忘れたわけではあるまい…？――――
――――お前らはっ…！獣人ってだけで、人を殺すのかっ…！？――――

頭を巡る、たくさんの言葉。

「色々と…考えてただけでっ…」
「……そうかっ」
凡平の戸惑いを隠しきれないその声に、馬ロンが短く頷く。

「凡平は、“オトポリ”を知っているかい？」
「えっ？」
不意な馬ロンの問いかけに、凡平が少し間の抜けた声を出す。

「ああっ、御伽警察だろっ？正義だの何だの言ってっけど、あんなのどうせ、獣人たちが自分の力を誇示したいだけっ…」
「僕はね、凡平」
「……っ？」

凡平の言葉を遮り、話を始める馬ロンに、凡平が少し眉をひそめる。

「小さい頃に、生まれた村を、鬼人に襲われてしまったんだよ」
「えっ…？」
馬ロンの言葉に、凡平の表情が曇る。
「幸い、家族はみんな無事だったし、運よく大国の龍国に移り住むことが出来たけれど…」
そっと置かれる、短い間。

「でも、生まれた村はなくなってしまった…」
「……っ」
耳を傾けていた凡平が、目を細め、そっと俯く。

「とても、悲しかった…」

言葉の通りに、悲しげに微笑む馬ロン。

「だからね、悲しい思いをする人が少しでも減るようにしたくて、僕はオトポリに入ったんだ」

「……馬ロンっ…」

凡平が少しだけ後方を振り返り、背中合わせの馬ロンを見る。

「もっとも、君たち人間にとっては、鬼人も獣人も、そう変わらない存在なのかも知れないけどねぇ」

「そんなことはっ…！」

「えっ…？」

馬ロンのその言葉に、思わず立ち上がり、声を荒げる凡平。牢の方を向いた凡平を、振り返った馬ロンが、少し驚いたように見る。

「えっ？あっ！いやっ！そのっ…」

凡平が、勢いよく否定した自分自身に、驚いているような顔を見せる。

「俺っ…何言って…」

「……っ」

自分自身に困惑している凡平を見つめ、馬ロンは穏やかな笑みを浮かべた。

「凡平っ」

「……っ？」

また名を呼ばれ、俯いていた凡平が顔を上げる。

「僕は君から何も奪いやしないし、もし君に、獣人のせいで失ったものがあって、それで…」
ゆっくりとした口調で、言葉を続ける馬ロン。
「それで、君が悲しい思いをしているのなら…」
馬ロンのまっすぐな瞳が、凡平を捉える。

「僕は…君を救おう…」
「……っ！」

馬ロンのその言葉に、凡平が驚いたように大きく目を見開く。

「んだよっ！偉そうにっ…！」
凡平が、突いて出たように声をあげる。
「だっ誰がっ…！お前みたいなっ…！」
焦ったように声を張る凡平。

「お前みたいな獣人なんかにっ…！！」
「確かに僕は獣人だが、オトポリとしての誇りは持っている」
「……っ」

濁りのない、まっすぐな瞳に捉えられ、凡平の否定しようとしていたその言葉は、思わず止まる。思わず信じてしまいそうになる、力を貸してと願いそうになる、その瞳。

「俺はっ…」

――――獣人が我々人間に何をしたか…忘れたわけではあるまい…？――――

「俺はっ…！」

――――バァァァァァァァァァーーーーンっっ！！――――

『……っ！』

外から聞こえてくる激しい衝撃音に、馬ロンと凡平が一斉に振り向く。

「んん～っ？」
「何っ？今の音っ」
その音に、寝こけていたモンキとユキジも、目を覚ます。

「外からのようだが」
「町で何か…俺、ちょっと見っ…」
「きゃあああああああああああっ！！」
「鬼人だあああああああああっっ！！」
『……っ！』

凡平が外へと出ようとしたその時、牢の中にまで聞こえてくる、激しい叫び声が響き渡った。

『鬼っ…鬼人っ…！？』

聞こえてくる叫びに、皆が声を揃えた。

第６２章　人と獣人の境界　★４

その頃、凡平・凡子の家。

「うぅ～んっ…」

家の前に立ち、左右を交互に何度も振り向いて、何かを探すような素振りを見せる凡子。

「こんな遅くにどこ、行っちゃったんだろう？お兄ちゃんってば」

凡子が家の前に出てまで待っているのは、輝矢と鹿男が出てすぐに、どこかへとふらっといなくなってしまった兄・凡平であった。

「あっ！もしかして、私が桜時サンと二人っきりになれるように、気を遣ってくれてるんじゃっ…！」

「凡子っ」

「ふわあああぁっ！」

「うわああっ！」

急に後ろから声を掛けられ、大きく驚く凡子に、逆に大きく驚く桜時。

「ごっごめんっ」

「いっいえっ！」

桜時がとりあえず謝ると、凡子は必死に首を横に振った。

「あっあのっ…さっきは悪かったな…」

「えっ…？」

再び謝る桜時に、少し目を丸くする凡子。

「事情も知らないでっ…そのっ、お前の兄貴にひどいこと、言っちまってっ…」
「……っ」

――――お前らはっ！獣人だからってだけで人を殺すのかっ…！？
――――

桜時が謝っているのは、恐らく、先程凡平に掴みかかった、あの時のことであろう。仲間を殺されるかも知れないのだ。桜時の怒りは最もだ。だというのに、桜時は弟を人質にされている凡平と凡子の気持ちを汲み、申し訳なさそうな表情を見せている。

「桜時サンっ…」
そんな桜時の優しさに触れ、凡子は少し頬を赤く染め、穏やかに微笑んだ。

「やっぱり素敵な人っ…」
「へっ？」
「あっ！いえっ！何でもありませんっ！」
思わずうっとりと呟いてしまった凡子が、顔を上げる桜時に、慌てて首を横に振る。

「そっそれにしてもお兄ちゃんっ、遅いですねぇ～っ」
「ああっ、凡平なら、俺が探してくるから、凡子は先に休んでていいぞ？」
「そっそんなっ…！お客様にそんなこと、させるわけにはっ…！」
「凡子…」
『うわあああああっ！！』

玄関先で向かい合って言葉を交わしていた桜時と凡子が、突然、横から聞こえてくる声に、同時に大きく驚く。

「って、町長？」
「……。」

二人が振り向いた先に立っているのは、体格のいい中年の男。

「町長っ…？」
凡子の言葉に、桜時がそっと眉をひそめる。門貴たちが捕まった時に、獣人であるかを問いかけてきたあの男であることを認識し、桜時はさらに表情を曇らせた。

「町長、どうしたんですか？こんな時間に」
「なぁ～にっ…」
不思議そうに問いかける凡子に、町長は薄い笑みを浮かべる。

「少しばかり…獣人臭くてなぁ…」
「えっ…？」
「……っ」

怪しげな笑みを見せる町長に、桜時はそっと厳しい表情を作った。

「レオ様ぁぁっっ！！」
『……っ？』

獅子戸家の応接室で、輝矢やレオたちが話をしていた時、部屋に獅子戸家の従者が、勢いよく駆け込んできた。その表情からは、かなり急いで来たことがうかがえる。

「どっどうしたぁ？」
「何かあったのか？」
そんな従者に、戸惑うように問いかけるレオと、鋭い表情を見せるライ。

「そっそれがっ…！」
従者が、大きく口を開く。

「町に大量の鬼人がっ…！！」
「何っ！？」
「鬼人っ？」
従者の言葉に、思わず立ち上がるレオ。輝矢も、一気に険しい表情となる。

「はいっ！町人たちが襲われておりますっ！」
「レオ様っ！」
「ああっ！すぐに獅子警護団を町に行かせろっ！」
ライの声に大きく頷き、レオが従者に指示を出す。

「しっしかしっ…！銃様の許可がっ…！」
「んなもん、取ってる場合かっ！！」

「はっはいっ！！」
レオが強く怒鳴りつけると、従者はしっかりと頷き、急いで部屋から飛び出して行った。

「警護団というのは、それなりに使えるのですか？」
「えっ？あっまぁ、数人の“獅人”で構成されてるから、それなりに強いとは思うけどっ…」
ふと曇る、レオの表情。

「数が多いとなるとっ、ちょっと対処しきれねぇーかもなっ」
「サルたちは牢、ハチは獣人ではないことになっていますから、力なんて使えないでしょうしっ…」
レオの言葉を受け、輝矢が少し困った表情を見せる。桜時や門貴たちが動けなけい上、その警護団の手に負えなければ、町人たちに大変な被害が出る。

「どうすればっ…」
「ぐぅっ」
「……っ？」

そのあだ名を呼ばれ、輝矢が横に座っている鹿男の方を振り向く。

「何です？鹿っ…」
「町に行って、町の人たちを助けてあげてっ」
「えっ…？」

笑顔でそう言い放つ鹿男に、輝矢がそっと眉をひそめる。

「しかし、国主に化けている鬼が動き出す可能性があります。人質もいることですし、今、ここを動くわけにはっ…」

「ここにはっ、俺がいるっ」
「……っ」

鹿男が自信を持って笑うと、輝矢は少し驚くように目を見開いた。

「バっ…！何、言ってんだよっ！？鹿男っ！相手は鬼だぞっ！？鬼っ！！」

言い切った鹿男に、必死に声を掛けるレオ。

「退治屋に居てもらった方がっ、俺たちの身も安全に決まっ…！」
「ぐぅっ！」

鹿男がレオの言葉を遮り、強く輝矢のあだ名を呼ぶ。

「俺っ、オトポリっ！」
「……っ」

真剣でまっすぐな瞳を見せて、そう叫ぶ鹿男。そんな鹿男を目の前にし、輝矢が少し目を細めた。

――――今行かなかったらっ…！何のためにオトポリに入ったのか、わかんないよっ！！――――

初めから、鹿男はそう叫んでいた。鹿男はここへ、レオを、レオの国を、助けに来たのだ。オトポリの隊員として。

「……わかりました」
「えええぇぇぇっ！？」
「ぐぅ～っ！」

そっと微笑んで頷く輝矢に、レオが困ったような叫び声をあげ、鹿男が嬉しそうに笑う。

「では、ここはお願いしますよっ」

輝矢がそう言って立ち上がり、部屋の窓の方へと歩み寄っていく。

「オトポリ隊員っ！」

「おうっ！」

「……っ」

「ああっ…！」

鹿男がしっかりと頷いたことを確認すると、輝矢は表情を鋭くし、レオが止める暇もなく、開け放った窓から屋敷の外へと飛び出して行った。

「あぁ～あぁ…行っちまったぁ…」

輝矢が居なくなると、その場でがっくりと肩を落とすレオ。

「俺のっ…安全保障がぁ…」

「大丈夫だよっ、レオっ！俺っ、いるしっ！」

「全然っ、少しの“ホッと感”もねぇーわっ！！」

明るく励ます鹿男に、レオが勢いよく怒鳴りあげる。

「それにっ、レオもいるっ！」

「……っ」

屈託のない笑みの鹿男の言葉に、今さっきまで泣きそうになっていたレオが、ハッとした表情を見せ、しばらくの間を置いた後、そっと口元を緩めた。

「やっぱお前にゃっ、敵わねぇーなっ」
「へへっ！」
微笑むレオを見て、さらに大きく笑う鹿男。

「よしっ！行くぞっ！鹿男っ！」
レオが、その金色の瞳を、鋭くする。

「親父に化けたっ…鬼のところへっ…！！」
「おうっ！」

レオの言葉に、鹿男はしっかりと頷いた。

「町に鬼人だなんてっ…」
町に鬼人が出たという驚きで、その真偽を確かめることもなく、牢の前に茫然と立ち尽くす凡平。

「おサルくんっ！」
「おぉ～うっ！」
「へっ？」

――――ボォォォォォ～～ンっ！――――

茫然としていた凡平が、牢の中から聞こえてくる会話と、変身する時の音に、どこか戸惑うように振り返る。

「よっとぉ～っ！」

「……っ」

人化して、素早く如意棒を構える門貴。そんな門貴を見て、凡平が目を見開く。

「いっくでぇ～っ！ニュー如意棒っ！初陣やぁっ！」

「ちょっ…！何してんだっ！やめろっ！！」

「へぇ～っ？」

必死に止める凡平に、門貴が不思議そうに首を傾ける。

「なんでぇ～？町が鬼人にヤラれてもても、ええのぉ？」

「そうじゃないっ！けどっ…！」

凡平が必死な表情を見せる。

「ここで牢から出たりなんかしたらっ…！本当に死刑が免れなくなっ…！」

「なぁ～んやっ、そんなことかぁ～っ！」

「えっ…？」

「如意棒っ！第一の舞っ…！」

必死な凡平の言葉をあっさりと跳ねのけ、門貴が笑顔のまま、瞳だけを鋭くして、如意棒を構える。

「“空”っ…！！」

――――バァァァァァァァーンっ！！――――――

「……っ！」

如意棒から激しく巻き起こった風に、一気に切り裂かれる牢の鉄格子。頑丈な鉄格子が、まるでゴボウのように切り落とされていくその光景に、凡平は大きく目を見開いた。

「こっこれがっ…獣人の力っ…」

凡平が、唖然とした様子で呟く。

「うっわぁ～、無駄に威力上がってんじゃなぁ～い？」

「無駄とか言わんといてぇっ！ユッキーっ！」

どこか引きつった表情を見せるユキジに、泣きそうになりながら訴える門貴。

「きゃあああああああああっ！！」

『……っ』

再び聞こえてくる悲鳴に、暢気な会話を繰り広げていた門貴とユキジが、すぐさま表情を引き締める。

「ユッキーっ！」

「うんっ！」

――――ボォォォォォォォ～～ンっ！――――――

ユキジは白い煙に包まれ、人化すると、門貴とともに牢を出て、

悲鳴の聞こえてきた外へと駆け出して行った。

「さてと、僕も行くかな」
「あっ」
そう言って馬ロンが立ち上がり、二人を追うように、牢の外へと出る。

「なんでっ…！」
「……っ？」

外へと行こうとした馬ロンが、後方から聞こえてくる凡平の声に足を止め、ゆっくりと振り返った。

「なんでっ…！？なんで助けようとするっ！？俺たちはっ…！あんたたちにひどいことしたのにっ…！」

戸惑った表情で、言葉を放つ凡平。

「なんでと言われても、僕はオトポリの隊員だから、鬼人を倒すのが仕事だしねぇ」
馬ロンが少し困ったように、首を捻る。
「それにっ…」
そっと口元を緩める馬ロン。

「僕たちは確かに“獣人”だけど」
馬ロンの穏やかな笑顔が、まっすぐに凡平に向けられる。

「その前に、確かに、“人”なんだよっ」
「……っ！」

その馬ロンの言葉に、大きく目を見開く凡平。もう一度そっと微笑みかけると、馬ロンは凡平に背を向け、門貴と由雉の後を追うように、外へと飛び出して行った。

「……っ」

目を見開いたままの凡平が、馬ロンの去っていった方を見つめる。

「人っ…」

馬ロンの発したその言葉を、凡平は小さく繰り返した。

一方、桜時と凡子。

「じゅっ獣人臭いってっ…」

どこか凍りつきそうな、少しの間を置いた後、凡子が困ったように微笑んで、町長の言葉を繰り返す。

「町長っ、まだ桜時サンのことを疑ってるんですかっ？」
凡子が、少し責めるような視線を、町長へと送る。

「桜時サンは獣人なんかじゃありませんっ！！」
「……っ」
強く言い切る凡子に、桜時がどこか申し訳なさそうに俯く。

「それは…試してみれば…すぐわかる…」
「何っ…？」
「きゃあああああああああっ！！」
「……っ！！」

薄く微笑んだ町長の言葉に、桜時が眉をひそめたその時、すぐ近くから激しい悲鳴が聞こえてきて、桜時は勢いよく振り向いた。

「なっ…！！」
「グガアアアアアアアアっ！！」
「鬼っ…鬼人っ…！？」

町に並ぶ家を壊して、桜時たちの目の前へと現れる、赤色の皮膚に、一本の金色の角の生えた、禍々しい鬼。鬼の姿に、桜時が表情を険しくする。

「どっどうして町に鬼人なんてっ…！」
凡子が声を震わせながら、怯えるように桜時の後ろに身を隠す。

「獣人どもがおびき寄せたのかも知れんなぁ」
「えっ…？」
「お前っ…」

どこかわざとらしい口調で言う町長に、凡子は戸惑うように声を漏らし、桜時は鋭い瞳を町長へと向けた。桜時たちに合わせたかのように、現れた鬼人。そして、鬼人を前にしても、少しも焦った様子のない町長。

「まさかっ…お前がっ…」

「……っ」

一つの考えに行き着いた桜時を見て、町長がどこか楽しげに微笑む。

「グガアアアアアアアっっ！！」

「きゃあああああああああっっ！！」

「……っ！」

聞こえてくる叫び声に、振り向く桜時。桜時が振り向くと、そこには赤鬼に追いかけられ、涙を浮かべながら必死に逃げ惑っている町人の姿があった。

「クっ…！」

桜時が、村雨丸の柄に手をかける。

「戦う気か…？止めておけ」

「何っ…！？」

町長のその言葉に、桜時が柄を持ったまま、少し怪訝そうに振り返る。

「ただの人間が、鬼人と戦ったところで、殺されるだけだ」

試すような笑みを、桜時へと向ける町長。

「“獣人”でもない限り…なぁっ」
「……っ！」

笑う町長に、ハッとした表情を見せる桜時。ここで今、桜時が“花力”を使って鬼人を倒せば、桜時が獣人であることがバレる。あの鬼人は、罠なのだ。

「そっそうですよっ！桜時サンっ！危ないですっ！」
「……っ」
すぐ後ろには、桜時のことを“獣人ではない”と信じ切っている凡子。桜時の身を案じる凡子の声に、桜時はきつく唇を噛み締めた。

「きゃあああああああああっ！！」
「……っ！」
再び聞こえてくる悲鳴に、桜時が再び、強く村雨丸を握り締める。

「ごめんっ、凡子」
「えっ…？」
そっと謝る桜時に、凡子が眉をひそめる。

「桜時サン…？」
「嘘ついて、ごめん」
戸惑う凡子に、桜時がもう一度謝る。
「けどっ…」
桜時がゆっくりと、凡子の方を振り返る。

「この町と、お前らの弟はっ、俺たちが絶対に助けるからっ…！！」

「……っ！」

桜時のその、一切の曇りのないまっすぐな瞳に、凡子は衝撃が走ったかのように、大きく目を見開いた。

「村雨丸っ…！」

凡子から鬼人へと視線を移した桜時が、素早く村雨丸を抜き、鬼人のもとへと駆け込んでいく。

「“瞬花っ…」

「グガっ…？」

向かってくる桜時に、気付いたばかりの鬼人へと、村雨丸を構える桜時。

「……っ終刀”っ！！」

「グっ…！」

高々と飛び上がった桜時が、鬼人へ向けて、まっすぐに村雨丸を振り下ろす。

「ギャアアアアアアアっ！！」

――――パァァァァァーーンっ！！――――

『……っ！！』

村雨丸に縦断された鬼人の体が、一瞬にして無数の桜の花びらと変わり、散っていく。その美しい光景に、見ていた凡子や町人たち

が、大きく目を見開いた。

「桜…？」

「これって…」

鬼人の恐怖からは逃れたものの、降り注ぐ桜の花びらに、町人たちが桜時へ、疑いの視線を向ける。

「特殊能力…」

凡子も、桜を見つめ、茫然と呟いた。

「やはり…“獣人”…」

「……っ」

すぐ近くに立つ町長の言葉を聞き、凡子は思わず、その場にしゃがみ込んだ。

「桜時サンが…獣人っ…」

力の抜け切った様子で、呟く凡子。

「……。」

桜の降る中、着地した桜時が、村雨丸を構えたまま、鋭い瞳で町長の方を振り返る。

「ついに本性を現したなぁ、獣人っ…」

「お前っ…」

どこか楽しげな町長を、桜時が突き刺すように見つめる。

「お前の目的は一体っ…」

「グガアアアアアアっ！！」

「……っ！」

町長へと問いかけようとした桜時の声が、激しい雄たけびに掻き消される。

「クっ…！」

「グガアアアアアアっっ！！」

桜時が空を見上げると、真っ暗な夜空に、巨大な翼を広げた、紫色の鬼が浮かんでいた。

「もう一匹っ…！？」

焦りの表情を見せた桜時が、慌てて村雨丸を構える。

「グガアアアアアアっっ！！」

「えっ…？」

「凡子っ…！！」

翼を広げた紫鬼が、力なくしゃがみ込んでいる凡子の元へと、まっすぐに降下していく。

「クッソっ…！！」

「……っ」

「何っ！？」

凡子の元へと行こうとした桜時の前に、立ち塞がるのは町長。

「てめぇっ…！何をっ…！」

「町人一人くらい死んでおいた方が…お前らを死刑にしやすい…」

「何だとっ…！？」

冷たく微笑む町長に、大きく目を見開く桜時。

「きゃあああああああああっ！！」
「凡子っ…！！」

聞こえてくる悲鳴に、桜時が顔を上げる。

「グガアアアアアアアっ！！」
「いやあああっ！！！お兄ちゃんっ…！！」
目の前へと迫った紫鬼に、凡子は頭を抱え、必死に叫んだ。

「“下弦”っ…」
その時、一つの声が、悲鳴と雄たけびの中に、割って入る。

「“水月”っ…！！」

――――バァァァァァーーンっ！！――――

「ギャアアアアアアアアっ！！」

凡子の周囲の地面から、突き上げるように飛び出した無数の水の刃が、降下してきていた紫鬼を直撃した。激しい断末魔を残して、紫鬼が夜空の中で、砂と化して、消えていく。

「ふぅっ」
「……っ」
凡子のすぐ傍へと、降り立つ人影。
「大丈夫ですか？凡子っ」
「あっ…」
まだ茫然としている凡子がゆっくりと顔を上げると、そこには三日月を構えた輝矢が立っていた。
「輝っ…！」
「獣…人っ…」
「えっ…？」
ホッとしたように笑顔を作り、輝矢の名を呼ぼうとした桜時が、凡子のその呟きに、表情を止める。
「獣人っ…」
怯えるような目で輝矢を見上げ、もう一度、その言葉を繰り返す凡子。
「獣人特有の特殊能力…」
どこか楽しげに笑いながら、町長がゆっくりと輝矢の方を振り返る。
「やはりお前も“獣人”かっ…」
「……。」
微笑む町長に、鋭い表情を見せる輝矢。

「輝矢がっ…」

町長と見つめ合う輝矢を見ながら、桜時が唖然とした表情で呟く。

「輝矢が…“獣人”っ…？」

桜時の声が、力なく落とされた。

第６３章　歩み寄る力　☆１

御伽界には、三種類の生物が存在する。
“人”。“鬼”。そして、“獣人”――。
獣人は、人と動物の姿を持ち、人化・獣化を自由に行い、どちらの姿でも、どちらの言葉も話すことが出来る。
そして、飛び抜けた身体能力の他に、自然の力を操る、特殊能力を持つ。

そんなの、わかりきっていたことだった。
御伽界の者ならば、誰でも知っていること。
なのに、どうして、もっと早くに、気付かなかったんだろう――。
“犬人”である俺が、“花力”を持つように、
『“水力”を持つ輝矢は、“獣人”である』ということに――。

「輝矢が…獣人っ…？」

その言葉を、桜時は頭の中で、何故か強く否定した。水力を操る

のだから、普通に考えて獣人であるはずだ。だが、輝矢は獣人である素振りなど、見せたことがない。ましてや、獣化したことなど一度もない。だからこそ、桜時の頭は、強く否定したのだ。

――――アハハハハハっ…！！――――

「……っ」

ふと俯いた桜時の脳裏に過ぎる、水力を暴走させ、人格さえも豹変させた二度の輝矢の姿。輝矢が獣人であることを示さないのは、あの強大過ぎる力に、何か関係があるのかも知れない。

「輝矢…」

桜時が顔を上げ、どこか不安げな表情で輝矢を見る。

「否定せぬということは、認めたということで良いのかな…？」

「……。」

怪しげに微笑みかける町長を、否定も肯定もせずに鋭く見つめる輝矢。

「獣人っ…」

「獣人…」

鬼人を倒し助けたというのに、町人たちは、輝矢と桜時に、白い目を向けた。鬼人すら圧倒した輝矢たちの力に、怯えてしまったようである。

「うぅっ…！」

「……っ」

凡子は、怯えきった表情で、しゃがみ込んだまま勢いよく後退し、

輝矢から遠ざかっていく。その様子を横目で見て、輝矢はそっと目を細めた。

「皆の者っ！此奴ら獣人がっ、この町に鬼人を呼び寄せたのだっ！」
「なっ…！」
『えっ…！？』
声を大にして言い放つ町長に、桜時が眉をひそめ、周囲にいた町人たちが、一気にザワつき始める。
「けっけど、さっき鬼人を倒っ…」
「それは我々を騙すための罠っ！我々を油断させ、恩義を売って、服従させるつもりなのだっ！！」
疑問を抱く町人の言葉を強く遮り、町長はさらに言い放った。

「誰がんなことっ…！」
「そうだったのかっ！」
「鬼人まで使って、助けた振りをしようとするなんてっ…！」
「さすがは卑劣極まりない獣人どもだっ！」
「……っ」

町長の言葉を否定しようとした桜時の声が、次々に発せられる町人たちの声に掻き消される。町長の言葉をあっさりと信じた町人たちは、皆、険しい表情を見せ、睨みつけるように輝矢と桜時を見た。

「違うっ！俺たちは本当に何もっ…！！」
「獣人めぇっ！！」
「獣人がぁっ！！」
「うっ…」
もう一度否定しようとした桜時が、町人たちの声に、怯むように顔を下へ向ける。

――――イヌのくせにっ…！――――

種族の違いというだけで、認められない悲しみが、桜時の胸を締め付けた。

「さぁっ！勇敢なる町人たちよっ！この獣人どもを捕まえるのだっ！」

町長が両手を広げ、堂々と叫ぶ。

『……っ』

「うっ…！」

町長の言葉に従うように、武器を構え、輝矢と桜時を睨みつける町人たちに、桜時が顔をしかめ、少し逃げるように腰を引く。

「そしてっ、汚らわしい獣人どもに死をっ…！」

「……っ」

楽しげに笑う町長に、輝矢はさらにその瞳を鋭くした。

その頃、町のはずれ。

「如意棒、第一の舞っ…！“空”っ…！」
「“右翼・裂羽”っ！」
「“馬刺し”っ！！」

――――バァァァァァーーンっ！！――――

『ギャアアアアアアアっ！！』

門貴の風に斬り裂かれ、由雉の羽根に撃ち抜かれ、馬ロンの剣に貫かれて、町人たちを襲っていた数匹の鬼人が、あっという間に倒される。

『あっ…』
「ふぃ～っ」
町人たちが唖然とした表情で見つめる中、ふと一息つき、如意棒を下ろす門貴。

「手応えないなぁ～っ」
「これじゃあ修行の成果も試せないよねぇ～」
門貴と由雉が、どこか物足りなさそうに言葉を交わす。

「すっげぇ…」
そんな三人を、後方から呆然と見つめる凡平。
「獣人の力は…やっぱりすげぇ…」
凡平が、圧倒されたような表情を見せる。人間では到底、敵いもしない鬼の化け物を、あっという間に倒してしまったのだから、無理もないだろう。

「ウマァーっハッハッハっ！見たかいっ？僕の華麗なる必殺技“馬

刺し”をっ！」
「ほんまやなぁ～せっかく修行したのにぃ～」
「この技を思いついたのはねぇっ！僕がオトポリに入り立ての頃であってだねぇっ…！」
「ボク、ちょっと町人の怪我、見てくるぅ～」
「ほんじゃあ俺は他に鬼人おらんか、一応、見てくるわぁ～」
自らの必殺技“馬刺し”についてを熱く語っている馬ロンを、終始無視し、門貴と由雉が馬ロンなどいないかの如く話を進める。
「雷に撃たれたかのようにピッカァァーンとひらめきが落ちてきてだねぇっ…！」
「輝矢んたちの様子も気になるしぃ～」
「そうだねぇ～」
「……。」
とことん馬ロンを無視する門貴と由雉を見て、凡平が少し呆れた表情を見せる。

「鬼はどこだぁぁぁっ！？」
「鬼人はどこだぁぁっ！！？」
『……っ？』
聞こえてくる大声と、騒がしい程の無数の足音に、門貴たちが一斉に振り向く。

『んっ？』

門貴たちが振り向くと、そこには金の刺繍の入った紺色の軍服を着た、数名の男たちが立っていた。皆、武器を持っているところを見ると、この町の警護団か何かのようである。

「獅子警護団っ…」

「警護団っ？」
眉をひそめて呟く凡平の声に、門貴が耳を傾ける。
「おっそかったなぁ～もうちょい早く来てくれれば良かったのにぃ～」
「鬼人ならボクらがみぃ～んな、やっつけちゃったよぉ～？」
「何っ？」
警護団の中心に立っている黒鬚を蓄えた男が、由雉の言葉に驚いた表情を見せる。
「鬼人を倒しただとっ？お前たちは一体っ…」
「この二人はただの飼い猿と飼い雉だが、僕はオトポリの白馬の王子様にして、次長も務めあげている男だよっ！ウマァーハッハっ！」
「オトポリっ…では貴方がたは獣人っ…」
「捕まえろ」
『えっ…？』
警護団たちの後方から聞こえてくる声に、皆が振り向いた。
「その者たちを捕まえよ」
「じゅっ…銃様っ！」
「国主様っ…！！」
何やら畏まった様子で警護団たちが左右に捌けると、その間から、一人の男がゆっくりと、門貴たちの方へと歩み寄って来た。威厳ある金色の瞳のその男が、鋭く門貴たちを見る。
「国主…？」
「獅子戸…銃っ…」
少し表情を曇らせる門貴の横で、凡平が憎しみのこもった瞳を、

銃へと向ける。

「銃様、しかし、この者たちは鬼人をっ…」
「その獣人たちが、この町に鬼人を呼び寄せたのだ」
「なっ…！」
「えっ…！？」

その銃の言葉に、門貴や凡平が、驚きの表情を見せる。

「お前っ…！何をっ…！」
「鬼人を倒したと見せかけて、我々からこの町を奪うつもりだったのだろう」
「ボクらはそんなことっ…！」
「そうかっ！そうだったのかっ！」
『……っ』

反論しようとした門貴と由雉が、傍らから聞こえてきた町人の一人の声に、驚いたように振り向く。

「どうりでっ！おかしいと思ったんだっ！獣人が俺たち人間を助けるなんてっ！」
「最初っから鬼人とグルだったんだなっ！」
「私たちを騙すために、全部仕組んだのねっ！」
町人たちが次々と声をあげ、刺すような瞳を門貴たちへ向ける。

「そういうことならばっ…奴らを捕まえよっ！獅子警護団っ！」
『はっ！』
獅子警護団も、門貴たちへ武器を構える。

「クっソっ…！」

「鬼人は罠だったみたいだねぇっ」
「……。」
顔をしかめる門貴と由雉の横で、そっと瞳を鋭くする馬ロン。

「捕まえろっ！！」
『クっ…！』
向かってくる警護団を相手に、戦うことも出来ず、門貴たちが厳しい表情を見せる。

「……違うっ…」

その様子を後方で見つめながら、ポツリと声を落とした凡平が、きつくその拳を握り締める。

「違うのにっ…」

凡平の瞳が、悲しげに揺らめいた。

第６３章　歩み寄る力　☆２

獅子戸家地下。囚人牢。

「グゥゥゥゥ～っ……」

囚人牢の前には、少しでも伸びをすれば、その金色の角が天井に届いてしまいそうなほどの巨体を持った、一匹の緑鬼が立っていた。牢の見張りのつもりなのだろうか。唸るような声を漏らしながら、牢の前にじっと立ち止まっている。

「……っ」

そんな緑鬼を、牢の中から見つめる一人の男。薄汚れた囚人服に、長い金髪を振り乱しているが、その威厳ある金色の瞳は、強く輝きを放っている。その男は、この獅国の国主・獅子戸銃と、瓜二つの顔をしていた。

「我らが捕らえられて数ヶ月っ…国はどうなっているのか…」

男が、不安げな表情で呟く。

――――バァァァァァーーンっ！――――

「グガっ？」

「……っ？」

無音の地下牢に響き渡る、大きな音。緑鬼と男が一斉に顔を上げると、地上からの扉が勢いよく開き、そこから光が漏れた。

「あっ！鬼人発明っ！」
「それを言うなら、鬼人発見だっ」
「……っ！」
開かれた扉から入ってくる二つの人影に、男が大きく目を見開く。
「レオっ！」
「……っ！父上かっ！？」
男がその人影の名を呼ぶ。そう、地下へと飛び込んできたのは、レオと鹿男であった。自分の名を呼んだ男の方を見て、レオも驚いた表情を見せる。
「やっぱりあの野郎は鬼だったんだなっ！」
「やっぱりって、“何でも悪く考えすぎだ”って、レオ言ってたじゃ～ん」
「うっせぇっ！！」
アホウのわりに鋭い突っ込みを入れてくる鹿男に、レオが勢いよく怒鳴りあげる。
「グガアアアアアっっ！！」
「ひぃぃえええぇぇぇぇぇっっ！！」
緑鬼が威嚇するように雄たけびをあげると、激しく怯えたレオが、慌てて入って来た扉を出て、その壁際に身を隠した。
「ぶるぶるぶるっ！あぁ～っ！やっぱり退治屋と来れば良っ…！」
「覚悟しろっ！鬼人っ！」
「はぁぁぁっっ！！？」
身を隠し、体を震わせながら、後悔をしまくっていたレオが、雄たけびをあげている緑鬼を、正面から向き合う鹿男の姿に、思わず

大きな声を出す。

「なっ何やってんだよっ！鹿男っ！」

開いた扉から顔だけを出し、必死に鹿男に呼びかけるレオ。

「殺されちまうぞっ！？お前もコッチ来いっ！」

「イヤだぁっ！！」

「はぁっ！？」

はっきりと断る鹿男に、レオが顔をしかめる。

「あのなぁっ！今はんな子供みてぇなワガママ、言ってる場合じゃっ…！」

「俺はっ、オトポリ隊員としてっ、鬼人を倒しに来たんだよっ！！」

「……っ」

強く叫ぶ鹿男の言葉に、レオの声が遮られる。

「レオの国をっ、助けに来たんだよっ！！」

「鹿男っ…」

鹿男のまっすぐな瞳が、レオの心に突き刺さる。

――――このヘッポコライオン様がっ…――――

――――それでは鹿国にいた時と、何も変わっていないではありませんかっ…――――

持てたからこそ、獅国へ戻って来たというのに、未だに持ち切れずにいる勇気。

「クっ…！」
レオが強く唇を噛み、拳を握り締める。
「だあぁ～っ！もおっ！」
「レオっ？」
身を隠していた扉の後ろからレオが飛び出し、鬼人と向き合っている鹿男の横へと並ぶ。
「お前みたいなアホウだけに任せておけるかってのっ！」
どこか自棄になったように言い放ちながら、レオが目の前の鬼人へ、鋭い瞳を向ける。
「ここは俺の国だっ…！！」
「……っ」
そう叫ぶレオに、牢の中で驚いたような表情を見せる男。
「レオっ…」
男は、本物の銃は、その息子の勇敢な姿に、思わず息子の名を呟いた。
「行くぞっ！鹿男っ！」
「おうっ！」
――――ボォォォォォォォォォ～～～ンっ！――――
互いに頷き合った鹿男とレオが、同時に白い煙に包まれていく。
『……っ』

「グガっ…」

白い煙から現れる一頭のシカと、一頭のライオン。二頭の獣の姿に、目の前に立つ緑鬼が、少し表情をしかめた。

「グガガガっ…！“鬼爪・天回”っ…！！」

大きく両腕を振り上げた緑鬼が、二頭へ向け、十本の爪を投げ放つ。

「……っ！」

その瞳を鋭くし、向ってくる鬼爪の方へと、駆け込んでいく鹿男。

「“鹿威し（ししおど）”っ！！」

――――パァァァァーンっ！！――――

鹿男が鋭く尖った左右の角を振り動かし、緑鬼が飛ばした鬼爪を、すべて一瞬にして叩き落とす。

「グガァァァァ～～～っっ…！」

どこか悔しげな声を漏らしながら、右手の爪を再生させる緑鬼。

「グガアアアアアアっっ！！」

「クっ…！」

勢いよく爪を振り下ろしてくる緑鬼に、鹿男も角を振り上げた。

『……っ！』

鹿男の角と、緑鬼の鬼爪が、激しくぶつかり合う。

「レオっ…！！」
「おうっ！」
「グガっ…！？」

鹿男が緑鬼の爪を受けとめている間に、ライオンの姿となったレオが高々と飛び上がり、緑鬼の方へと降下していく。

「グっ…！」
目つきを鋭くし、降下してくるレオへ、大口を開く緑鬼。

「“鬼口”っ…！！ガアアアアアアアアっっ！！」

口を開いた緑鬼が、降下途中で避けることも出来ないレオへ向け、勢いよく鬼口を放った。

「レオっ…！！」
牢の中で、思わず身を乗り出す銃。

「……。」
鹿男は、銃とは異なり、冷静な表情でレオを見つめる。

「……甘ぇーんだよっ」
「グガっ…？」

目の前に迫り来る鬼口を見ながら、少しも表情を変えることなく呟くレオに、緑鬼が眉をひそめる。

「“獅子舞”っ…！」

そう叫び、その長い尾を振り上げるレオ。

――――パァァァァーンっ！――――

「グガっ…！？」

緑鬼の放った鬼口が、レオの尾に巻き取られるようにして、どこへともなく消えていく。鬼口を消され、焦ったような表情を見せる緑鬼。

「本当の攻撃ってのはっ…」

「グっ…？」

「こういうのを言うんだっ…！！」

戸惑っている緑鬼へ向け、降下中のレオが、大きく口を開いた。

「“獅子砲”っ…！！」

大きく開かれたレオの口から、白い光線のようなものが放たれた。

獅子砲はまっすぐに、緑鬼の顔面へと向かっていく。

「ウっ…！グウゥっ…！！」

迫り来る獅子砲に、恐怖した表情で目を見開く緑鬼。

――――バァァァァーンっ！！――――

「ギャアアアアアアっ！！」

獅子砲を直撃した緑鬼は、激しい叫び声をあげて、光の中で、砂と化して消えていった。

「ふぅ～っ」

――――ボォォォォォ～～ンっ！――――

着地したレオが、一息つきながら、白い煙に包まれて、人化する。

「んん～っ？」

鬼爪とぶつかり合っていた角を振り上げた鹿男が、緑鬼が居た辺りの地面に落ちている、とあるものを見つける。

――――ボォォォォォ～ンっ！――――

「ねぇ～っ、レオっ、見てみてぇ～っ」

「あっ？」

人化して、その落ちていたものを拾い、レオへと見せる鹿男。レオが振り向き、鹿男の手の中のものに目をやる。

「鍵っ？この牢の鍵かっ」

鹿男の手の中にあるのは、一本の少し錆ついた鍵であった。

「鹿男っ、その鍵使って、父上を外に出してやってくれっ」

「おうっ！」

レオの言葉にしっかりと頷き、鹿男が笑顔で牢の方へと駆けて行く。

「後はライかっ…」
「レオぉ～っ！」
「ああっ？」
少し考えるように呟きながら、扉の方を見ていたレオが、後方から聞こえてくる鹿男の声に振り返る。

「んだよっ、父上は出せっ…」
「鍵ってどうやって開けるのぉ～っ？」
「だあああああああああっ！！」

鍵を持ったまま、牢の前で混乱している鹿男に、レオが思わずズッコケる。

「おっ前っ！鍵の開け方もわかんねぇーのかよっ！！」
「だって馬ロンから教わってないしぃ～」
「ああぁ～っ！もう貸せっ！！」
呆れきった表情を見せたレオが、鹿男から鍵を奪い取り、素早く囚人牢の扉を開ける。

「大丈夫かっ？父上っ！」
「あっ、ああっ…」
開いた扉からレオが手を差し伸べると、銃は少し戸惑いながらその手を取った。

「レオ、お前、いつ国にっ…」
「レオ様っ！！」
『……っ』

そこへ、新たな声が、地下へと入ってくる。

「ライっ」
「ご無事でしたかっ！」
地下へと駆け込んできたのは、数名の従者を引き連れたライであった。
「これはっ！銃様っ！！」
「ライ…」
レオのすぐ横に銃の姿を見つけ、ライが驚いた様子で大きく目を見開く。そんなライの名を、銃は少し小さな声で呼んだ。
「銃様もご無事でっ…！」
「ライっ、人質になってる町の子供たちは？」
「人質っ…？」
銃のもとへと駆け寄るライへ、レオが真剣な表情で問いかける。
そのレオの言葉に、そっと眉をひそめる銃。
「はいっ！裏倉庫に軟禁されておりましたので、全員、救出いたしましたっ！」
「そうかっ」
「良かったぁ～っ」
ライの言葉に、鹿男とレオが安心した表情を見せる。
「しかしながら、レオ様っ」
「んっ？」
そっと表情を曇らせるライに、レオが首を傾ける。
「銃様の姿に化けているあの鬼の姿が、屋敷内のどこにも見当たりませんっ」
「何っ？」

「私の姿にっ…？鬼がっ…？」

ライの言葉に、レオが眉をひそめ、銃がさらに困惑した表情を見せる。

「町へ出たのかっ…」

「やも知れません…」

険しい表情で、言葉を交わすレオとライ。

「……父上っ」

「……っ？」

少しの間を置いた後、レオが銃の方を振り返った。

「疲れてるとは思うんだけどっ、少し協力してもらっていいかっ？」

「んっ？あっああっ…」

真剣な表情で問いかけるレオに、銃は戸惑いながらも頷く。

「よしっ！じゃあ早速、町へっ…！」

「その前にっ」

「へっ？」

立ち上がったレオの言葉を、遮るように声を発する銃に、レオが少し不思議そうに振り返る。

「向こうの牢に入れられている者も、助けてやってくれんかっ？」

『向こうの牢っ？』

鹿男とレオが、銃の指差した、もう一つの囚人牢を見る。確かに、

薄暗い牢の真ん中に、座り込んでいる人影が見えた。その人影が、徐々に上を向き、その顔を露にする。

「あっ…！」
「あんたはっ…！」
同時に声をあげる鹿男とレオ。

「町長っ…！？」

その牢の中に座り込んでいたのは、銃と同じ囚人服を纏った、町長であった。

「汚らわしい…？」

町でもう一人の町長の前に立つ輝矢が、ゆっくりと、町長の放った言葉の一部を繰り返す。

「常に人助けのことばかり考えている、心清らかな私に向かって、何と失礼なっ」
「嘘をこけぇぇっ！！」
眉一つ動かさずに、まったく真実味のないことばかりを話す輝矢

に、桜時が、町長の背後から思わず怒鳴りあげる。

「ハっ！町人たちに信じてもらわなきゃいけねぇーのに、思わず否定してしまったっ！」

桜時がハッとした表情となり、左手で口を押さえる。

「あいつがあんまりにも嘘なことを言うから、ついっ」

「それに」

桜時が少し反省する中、輝矢が言葉を続ける。

「アナタには言われたくありませんねぇ」

大きく腕を組み、どこか呆れるように肩を落とす輝矢。

「国主と組んで騙しあげ、善良な町人たちに罪なき獣人を始末させようとするような、そんなっ…」

輝矢の鋭い瞳が、町長へと向けられる。

「汚らわしい鬼などにっ…」

「……っ」

『えっ…！？』

その輝矢の言葉に、笑みばかり浮かべていた町長の表情が曇り、輝矢と桜時を捕らえようとしていた町人たちの動きが止まった。

「おっ…鬼っ…？」

「町長がっ…？」

動きを止めた町人たちが、ざわつき始める。

「……っ」

しゃがみ込んでいる凡子も、戸惑いの表情で町長の方を見る。

「クックックっ…」
「……っ？」
小さく笑い出す町長に、すぐ後ろで眉をひそめる桜時。
「私が鬼だとっ…？何を根拠に、そんなことをっ」
怪しげな笑みを浮かべた町長は、輝矢の言葉に動揺も見せず、むしろ、あっさりと笑い飛ばす。
「獣人の言葉などっ、ここにいる者たちは誰も信じたりはせんよっ…！」
「クっ…！」
勝ち誇ったように言い放つ町長に、桜時が思わず顔をしかめる。
確かに、今の状態でどんなに輝矢と桜時が町長を問い詰めたところで、町人たちは皆、獣人である桜時たちよりも、町長の言葉を信じるであろう。
「クッソっ！どうすればっ…！」
「そんなの簡単です」
「へっ？」
迷う桜時に答えるように、聞こえてくる輝矢の声。
「信じさせれば、いいんですよっ…！“水月”っ…！」
輝矢が勢いよく三日月を振り上げ、まだ正体も明らかとなっていない町長へ向け、迷いもなく一つの水の刃を放った。
「なっ…！？」
「あいつっ…！町長にっ…！」

そんな輝矢に、驚きの表情を見せる桜時と町人たち。

『町ちょっ…！』

「……っ」

――――パァァァァァーンっ！！――――

『……っ！！』

その身を助けようと、思わず身を乗り出した町人たちの予想とは裏腹に、町長は、素早く右手を振り下げ、輝矢の放った水の刃を叩き落とした。その光景に、町人たちが大きく目を見開く。

「やれやれっ…」

「……っ」

深く俯き、低く重い声を発する町長に、三日月を下ろして、眉をひそめる輝矢。

「時間をかけてやって来たことが、すべて台無しだっ…」

町長が、どこか疲れたように肩を落とす。

「やはりお前たちもっ…」

ゆっくりと顔を上げる町長。

「最初から捕まえておくべきだったなっ…！！」

――――バァァァァーーンっ！！――――

顔を上げた町長の瞳がギラリと強く輝くと、町長の体を白い光が

包み込んだ。

「グガアアアアアっ！！」
『……っ！』

人間の皮膚を裂いて、禍々しい藍色の肌が現れると、町長の体は徐々に巨大化し、人とは呼べぬ姿形へと変化した。鋭い爪と牙が生え、頭からは二本の金色の角が生える。激しい雄たけびをあげて、そこに姿を現したのは、一匹の藍鬼であった。

「おっ…鬼っ…！？」
「きゃあああああああああっ！！」
「フハハハハっ！！こうなればっ、私自ら、貴様らを始末してくれるわぁぁっ！！」

町人たちが逃げ惑う中、元は町長であった藍鬼が、高々と笑いあげる。

「藍鬼っ…」
「やっぱ鬼だったんだなっ！」
目を細め、藍鬼を見上げる輝矢のもとへ、鋭い表情を見せた桜時が駆け寄ってくる。

「っつーか、いきなり水月飛ばして、町長が鬼じゃなかったら、どうするつもりだったんだよっ？」
「その時はその時です」
「自分の行動には責任を持てっ！！」
相変わらず無責任な輝矢に、桜時が思わず怒鳴りあげる。

「町長がっ…鬼っ…？」
『……っ』
二人の後ろには、藍鬼を見上げ、怯えた表情を見せている凡子。

「ハチっ、凡子と町人たちを頼みます」
「ああっ」
輝矢の言葉に、桜時がしっかりと頷き、輝矢から離れて、庇うように凡子の前へと立つ。

「……っ」
ゆっくりと前方を向き、藍鬼を見上げ、三日月を構える輝矢。

「フハハハハっ！！来いっ！！獣人っ！！」
「竹取輝矢っ、鬼退治いたしますっ…！」

三日月を構えた輝矢が、藍鬼のもとへと飛び出していった。

第６３章　歩み寄る力　☆３

一方、町はずれの門貴たち。

「鬼人と結託した獣人どもを捕まえよっ！！」

『はっ！』

「うえぇぇ～っ！？」

急に現れた国主・獅子戸銃の言葉により、鬼人を救った英雄から、一気に鬼人と結託した悪者となってしまった門貴たち。武器を構え、捕獲態勢を取る獅子警護団の面々に、門貴が困ったような声をあげる。

「どないしょ～っ？ユッキーっ！」

「どないってっ、警護団さん相手に羽根投げつけるわけにもいかないでしょ～？」

困った表情で問いかける門貴に、答えつつも、こちらも困った表情を見せている由雉。

「それこそ本当の罪人になっちゃうしぃ～」

「そうやなぁ～っ」

「ここは一つっ！」

『……っ？』

首を捻っていた二人が、急に明るい声を出す馬ロンの方を振り返る。

「この僕っ、オトポリの白馬のプリンスっ！馬ロン様の美しさに免

じてっ、見逃がしたまえっ！」
『見逃すかぁっ！！』

キラキラと瞳を輝かせ、自信満々に言い放つ馬ロンに、警護団の面々よりも前に、激しく突っ込みを入れる門貴と由雉。

『捕まえるぞっ！！』
「うげぇぇっ！！来たぁぁぁぁっっ！！」

駆け込んでくる警護団に、門貴が悲鳴にも似た叫び声をあげる。

「まっ待てっ！！」
『……っ？』

必死に声を張り上げ、門貴たちの前に庇うように立ちはだかる人物。

「凡平っ…？」

馬ロンが、少し戸惑うように、その者の名を呼ぶ。

「待ってくれっ！！」

両手を左右に大きく広げ、門貴たちの前へと立ったのは、真剣な表情を見せた凡平であった。立ちはだかる凡平の姿に、警護団が足を止め、戸惑いの表情を見せる。

「こいつらは違うっ！こいつらは鬼人なんかと手を組んだりしてないっ！！」
「凡平っ」

味方するような発言をする凡平に、少し驚くように目を開く門貴たち。

「だがっ…銃様がっ…」
「町の者か…」
「銃様っ」

凡平の必死の叫びに戸惑いの表情を見せていた警護団の者たちが、後方からゆっくりと歩いて来る銃に道を開く。警護団の間を通り抜け、凡平の方へと歩み寄ってくる銃。

「何を根拠に…そんなことを言う…？」
「……っ」

目の前に立ち、静かに問いかける銃に、凡平が瞳を鋭くする。

「根拠なんてないっ…」
「何っ…？」
ポツリと落とされた凡平の答えに、銃がそっと眉をひそめる。

「俺がっ…」

――――僕は、君から何かを奪う気なんて、サラサラないからねぇ――――
――――僕が君を救おう…――――

思い出される、馬ロンの言葉。

――――ここで牢から出たりなんかしたら…！本当に死刑が免れなくなっ…！――――
――――なぁ～んやっ、そんなことかぁ～っ！――――

自分たちの罪が重くなることも顧みず、鬼人から町人を救ってくれた門貴たち。

「俺がただっ…」

凡平が顔を上げ、まっすぐな瞳を銃へと向ける。

「こいつらなら信じられるっ…！そう思ったからだっ！！」
「……っ」

凡平のその言葉に、馬ロンが大きく目を見開く。

「その者たちは、お前たち町人の嫌いな“獣人”だぞ…？」
「獣人だとか人間だとかっ、そんなの関係ねぇっ！！」
銃の試すようなその問いかけを、凡平はすぐさま払いのける。

「大事なのはっ、そいつ自身を信じられるかどうかだっ！！」

必死なその叫びを、続ける凡平。

「だから俺はっ…！お前よりもこいつらを信じるっ！！」
『……っ』

凡平のその言葉に、周囲にいる町人たちも、獅子警護団の面々も、

どこかハッとした表情を見せた。凡平の声に、門貴たちを責めるようであった視線が一気になくなり、皆から戦意が失われていくのがわかった。

「まったくっ…」
「……っ？」
小さな声を発する銃に、凡平が眉をひそめる。

「邪魔な人間めぇっ…！！」
「……っ！！」
一気に歪んだ表情となった銃が、腰に下げていた剣を抜き、勢いよく凡平に振り下ろす。

『凡平っ…！！』
それぞれに武器を構え、凡平のもとへと駆け出る門貴、由雉、馬ロン。

「クっ…！」
振り下ろされてくる剣に、凡平が諦めるように目を伏せた。

「そこまでにしてもらおうかっ！」
「……っ！」
割って入ってくる勇ましい声に、凡平へと振り下ろされていた剣が止まる。

『あっ』
振り向いた門貴と由雉が、少し驚いたように目を開く。
「あいつぅ、確か鹿男の友達のぉっ」
「レオっ」
『レオ様っ』

ライたち数名の従者を引き連れ、その場に現れたのは、レオであった。現れたレオに、門貴や由雉、そして警護団の面々が、戸惑うように声を漏らす。

「……父上っ」

レオが銃へ、鋭い瞳を向ける。

「レオっ…」
レオの姿を捉えた銃が、そっと目を細め、構えていた剣を下ろして、凡平から少し距離を取る。

「何の用だ？私は今、鬼人と結託していた獣人どもに寝返った、町人の始末をするところでだなぁっ」
「貴方に紹介したい人がいてねぇっ」
「何っ…？」

試すように笑うレオに、眉をひそめる銃。

「この人だよっ」

「……。」

レオの後方から、従者たちに道を通されるようにして、前へと出てくる一人の男。

「……っ！！」

『なっ…！？』

その男の姿に、銃が大きく目を見開き、門貴たちや警護団、町人の連中も、皆、驚きの表情を見せる。

『じゅっ…銃様っ！？』

「……。」

そこへと現れたのは、もう一人の銃であった。レオたちが助けた時の囚人服とは異なり、立派な貴族服を纏ったその姿は、今、凡平に剣を振り下ろそうとしていた銃と瓜二つ。目の前に同じ人間が二人いるその光景に、見つめる皆が、混乱した表情を見せる。

「国主がっ…二人っ…？」

凡平も、困惑の表情で、目の前に立つ銃と、少し離れたところに立つ銃を見比べる。

「本物の国主かっ」

「でも何でここにっ…」

「馬ロぉぉぉ～～ンっ！」

『……っ？』

戸惑うように言葉を交わしていた門貴と由雉が、その聞き覚えのある陽気な声に、呼ばれた馬ロンとともに振り向く。

「馬ロぉぉぉ～～ンっ！」

「鹿男っ」
レオの横に立ち、満面の笑顔で馬ロンに手を振っているのは鹿男であった。

「あのねぇっ、何度も言うが、僕のことは“次長”か“隊長”と呼っ…！」
「俺っ！レオと一緒に鬼倒してっ、本物の王様助けたよぉ～っ！」
「何っ…！？」
鹿男の笑顔の報告に、衝撃の走った表情を見せる馬ロン。

「へぇ～っ、凄いやぁ～んっ！鹿男っ！」
「上司のウマが捕まって、牢屋に入ってる間に、よくやったよねぇ～っ」
「うっ…」

馬ロンが、門貴と由雉の言葉に、思わず顔をしかめる。鹿男の保護者のつもりで付いて来たというのに、鹿男ばかりが活躍したのだから、無理もない。

「なっ…何が本物の王だっ…！」
『……っ』

門貴たちがあれやこれやと会話をしていたその時、凡平の前に立つ、もとからいた方の銃が、どこか焦ったような顔で声をあげた。

「あの者こそが偽物だっ！鬼だっ！獅子警護団っ！あの者を捕まえよっ！！」
『……っ』

声を荒げた銃の指示に、戸惑いの表情のまま、動こうとはしない警護団。

「何をしているっ！？とっとと捕まえよっ！！」
「ったく、往生際の悪りぃ奴だなぁ～」
もう一度叫ぶ銃を見て、レオが少し呆れたように肩を落とす。

「おいっ、鹿男っ、俺たちで攻撃しっ…！」
「レオっ」
「……っ？」
鹿男に声をかけ、ともに銃へ攻撃をしかけようとしたレオを、レオの横に立つもう一人の銃が、止めるように名を呼ぶ。
「父上っ？」
「……。」
レオが首を傾げる中、銃は落ち着いた表情で、ゆっくりと前へ出た。

「なっ…何だっ…」
そんな銃に、戸惑うような表情を見せるのも、銃。

「このニセモっ…！」
「我っ！この獅国の長にしてっ、誇り高き百獣の王っ！獅子戸銃なりっ！！」
「…っ！」
『……っ』

“ニセモノ”と叫ぼうとした銃の声を勢いよく遮り、もう一人の銃が、声高く、堂々と言い放つ。その威厳を持った、誇り高き姿に、遮られた方の銃の声は完全に止まり、周囲で見つめる皆も、一斉に圧倒された。

「我を語る悪党よっ！真の姿を見せよっ！！」
「クっ…！」

まさに全ての獣の頂点に立つもの。その鋭い眼光に睨まれた方の銃は、一瞬怯んだ表情を見せ、言い返すことも出来ず、ただ唇を噛み締めた。

「おぉ～っ、かっくいぃ～っ！」
「父上っ」
どこか嬉しそうに笑みをこぼす鹿男とレオ。どちらが本物であるかなど、もう誰の目にも明らかであった。

「クっ…クソっ…！」

――――バァァァァーンっ！！――――

追い込まれ、勢いよく顔をしかめた銃が、全身から白い光を放った。

『……っ！』

「もう少しで厄介な獣人どもを、始末出来たってゆうのによぉっ！！」

白い光が止むと、そこには先程までの銃の姿はなく、巨大な翼を持った、禍々しい紫色の皮膚に、金色の角を持った一匹の鬼が立っていた。

「鬼人っ…！」
「やっと正体見せやがったかっ！」
姿を現した紫鬼に、門貴たちやレオが、臨戦態勢を取る。

「おっ…鬼っ…」
「……っ」
「えっ…？」

茫然と呟いていたすぐ後ろの凡平に、素早く手を伸ばす紫鬼。

「うわあああああああっっ！！」
「凡平っ…！！」

凡平を右手で掴み上げ、紫鬼がそのまま翼を広げて、高々と空へと舞い上がる。紫鬼の腕の中で必死に体を動かし、叫びをあげる凡平に、門貴たちが思わず身を乗り出した。

「ハッハッハっ！！動くなよぉっ！動けばっ、こいつの首を掻っ切っからなぁっ！」
「うぅっ…！」
凡平の細い首元に、鋭い鬼爪を突き付け、笑いあげる紫鬼。

「クソっ…！あれじゃ手出しがっ…！」
「どうしようっ…」
下から見上げるレオと鹿男が、険しい表情を見せる。

「ユッキー、俺が隙作るから、その間に凡平をっ」
「うんっ」

「まぁ待て、ペット諸君っ」
『……っ？』

紫鬼には気付かれないよう小声で、凡平を助ける段取りを組んでいた門貴と由雉が、横から聞こえてくる声に振り向く。二人が振り向くと、そこには馬ロンが立っていた。

「なぁにぃ～？オジサンっ」
「オジサンはやめてくれるかなっ…？」
由雉の呼びかけに、馬ロンは平静に注意をするが、その表情はかなり引きつっていた。

「ここは僕に任せてもらえるかな？」
「へっ？けどっ」
「頼むよっ」

馬ロンがその表情を鋭くし、門貴と由雉よりも少し前へと出る。

「でないとっ、部下に示しがつかないんだっ」
「あっ、そういうことっ」
そっと付け加える馬ロンに、門貴が納得したように頷く。

「……っ」
「ンンっ？」

鋭い瞳を向け、右手に持った細長い剣を構える馬ロンに、上空の紫鬼が眉をひそめる。

「何をしているっ！？動くなと言っているだろうっ！」

下方の馬ロンを、牽制するように強く叫ぶ紫鬼。

「それ以上動くとっ、こいつが死ぬぞっ！？」

「うっ…！馬ロンっ…」

首に当てられる鬼爪に顔をしかめながら、凡平がそっと馬ロンの名を呼ぶ。

「ああ、君はもう、動かなくていい」

「何っ？」

そう言いながら、紫鬼の言葉を聞く素振りもなく、剣を構えようとする馬ロン。そんな馬ロンに、紫鬼の表情がさらにしかめられる。

「……っ」

「チィっ…！」

剣を少し引くように構え、その剣先を上空の紫鬼へと向ける馬ロンに、紫鬼が顔を歪め、大きく舌打ちをする。

「完全無視かよっ！もういいっ！こいつは殺してやるっ！！」

そう叫び、紫鬼が左手を振りかぶった。

「うぅっ…！」

「……っ」

凡平が怯えた表情を見せる中、馬ロンの瞳が、鋭く光った。

「“馬刺し”っ…！」

――――パァァァァーーンっ！！――――

「なっ…何っ…！？」

馬ロンの突き出した剣先から放たれた光線が、紫鬼が凡平に鬼爪を振り下ろす時間を与えることなく、紫鬼へと辿り着く。

「ウウゥっ…！！」

迫り来る光に、目を見開く紫鬼。

「ギャアアアアアアアっ！！」

馬刺しに貫かれた紫鬼は、上空で、砂と化して消えていった。

「ふわあっ！うわあああああああっ！」

紫鬼が消え、解放された凡平が、上空から真っ逆さまに落ちてくる。

「危ねぇっ…！」

――――ボォォォォ～～ンっ！――――

「うぷっ！」
落下してきた凡平が、柔らかい何かの上に落ちる。

「あっあれっ？」
「大丈夫か？」
「あっ…」

凡平が戸惑うように目を開くと、そこは百獣の王・ライオンの、レオの背の上であった。後ろを振り返ったレオが、心配するように、凡平の顔を見る。

「あっ、ああっ…」
少し躊躇いながらも、しっかりと頷く凡平。

「良かったっ！」
「……っ」

嬉しそうな笑みをこぼすレオを見て、凡平がそっと目を細める。

「……ありがとうっ…」

穏やかに微笑んだ凡平は、獣人であるレオに、しっかりとした礼を送った。

「……っ」
その光景を見つめ、微笑む、本物の銃。

「大きくなったものだ…」
「ええ、いつの間にか…」

どこか嬉しそうに呟く銃に、横に立つライも、大きく頷いて、笑みを浮かべた。

「ふぃ～っ、終わったなぁ～っ」
「後は輝矢たちだねぇ」
「ああっ」

門貴と由雉はそう言葉を交わし、町の中心部の方を振り返った。

第６３章　歩み寄る力　☆４

「三日月っ…」

鋭い瞳を見せた輝矢が、三日月を振り上げる。

「“水月”っ…！」

振り下ろされた三日月から、無数の水の刃が放たれた。

「クっ…！」

水月の向かう先に立る藍鬼が、少し顔をしかめながら、水月へ向け、両手を突き出した。

「“鬼氷”っ…！！」

――――パァァァァーンっ！！――――

藍鬼が両手から吹雪を放ち、輝矢の水月を一つ残らず、凍りつかせる。

「フハハハハっ！この私に水などっ…！」

「……っ」

「何っ…！？」

高々と笑いあげようとした藍鬼の前に、素早く現れる輝矢。

「三日月っ…！」
「うぅっ…！」
輝矢は、間を置くことなく、素早く三日月を振るった。
――――ブシュっ…！！――――
「クっ…！！」
三日月に浅く胸部を斬り裂かれ、顔をしかめた藍鬼が、緑色の血を流しながら、輝矢と距離を取るように、後方へと飛び退く。
「さぁっ」
距離を取った藍鬼へ、さらに三日月を構える輝矢。
「そろそろ終わりにしましょうか」
「クっ…！」
余裕の態度を見せる輝矢に、藍鬼が勢いよく顔を引きつる。
「お前たち獣人がっ…！我々、鬼人と何が違うと言うのだっ…！！」
「……っ」
急に荒げた声を出す藍鬼に、輝矢が三日月を止め、眉をひそめる。
「持って生まれた力を使いっ、己より弱き者を倒しっ、自分の強さを誇示するっ…！」
藍鬼は、どこか必死の表情で、さらに言葉を続ける。
「我々と同じではないかっ…！貴様が“汚らわしい”と言った鬼と、何ら変わらぬではないかっ…！！」

「……。」

藍鬼のその叫びを、少し離れた場所で聞き、そっと目を細める桜時。

――――獣人っ…？――――

力を使い、鬼人を圧倒した桜時に注がれた、町人たちの冷たい視線。人間である町人たちにとっては、獣人も鬼人も同じ、強大な力を持った、脅威の対象なのかも知れない。

「……っ」

そんな考えが脳裏に浮かび、桜時が少し悲しげに俯く。

「桜時サンっ…」

俯いた桜時を、すぐ横から、不安げに見つめる凡子。

「……っ」

凡子が少し考えるように下を向いた後、意を決した表情で、勢いよく顔を上げる。

「そんなことないわっ…！！」

「えっ…？」

『……っ？』

急に声をあげる凡子に、すぐ横の桜時や、戦いの最中の輝矢と藍鬼が、戸惑うように振り返る。

「桜時サンはっ、木から落ちそうだった私を助けてくれたものっ…！！」

凡子がまっすぐな瞳で、怯むことなく藍鬼へと叫ぶ。

「鬼人を倒して、町を救ってくれたものっ…！！」

必死に叫び続ける凡子。

「あんたたちとは全然、違うっ！獣人はっ、鬼人なんかとは全然、違うっ…！！」

「凡子っ…」

両拳を強く握り締め、必死になって否定してくれる凡子のその姿に、桜時は思わず笑みをこぼし、目を細めた。

「っだ、そうです」

「ウゥっ…！」

凡子の必死の叫びに、こちらも笑みを浮かべた輝矢が、改めて藍鬼の方を振り向く。振り向いた輝矢に、さらに引きつった表情を見せる藍鬼。

「人間にも、彼ら獣人にも、心がある…」

輝矢がふと笑みを止め、真剣な表情を見せる。

「心がある者同士であれば、わかりあっていけるっ…歩み寄っていけるっ…」

そっと左手を握り締め、自分の左胸に当てる輝矢。

「例え、種族は違っても…」

「クゥゥっ…！」

そのまっすぐな輝矢の瞳に突き刺すように見られ、藍鬼は悔しげに、強く唇を噛んだ。

「まぁこんな話っ…」

輝矢が左手を下ろし、代わりに三日月を持った右手を、ゆっくりと上げる。

「心を持たぬアナタ方、鬼にはっ…到底、理解出来ないでしょうけどねっ…」

「このぉぉぉぉっ……！！」

「……っ！」

怒りの表情を見せ、爪を振り上げる藍鬼に、輝矢は鋭い瞳で、三日月を振るった。

――――――……っ！！――――――

振り下ろされた五本の鬼爪をすべて砕き、三日月が藍鬼の胴体を斬り裂く。

「ウウっ…！！」

藍鬼の胴体から、噴き出すように緑色の血が飛び散り、藍鬼の口からも、同じ色の血が流れ落ちた。

「グっ…！ギャアアアアアアっ！！」

――――パァァァァーンっ！！――――

藍鬼が激しい断末魔をあげ、砂と化して消えた。

「……勝ったっ…」

「勝ったぞっ…」

周囲で戦いを見守っていた町人たちが、ポツリポツリと声を漏らす。

「勝ったぞっ！」

『やったぁぁぁぁぁっ！！』

町人たちが近くの者たちと抱き合い、輝矢の勝利に歓喜する。そこにすでに人間だとか獣人だという境界はなく、皆、輝矢の勝利を、自分のことのように喜んでいた。

「みんなっ…」

「ハハっ」

歓喜する町人たちを見回し、桜時と凡子が笑みを浮かべる。

「……っ」

聞こえてくる笑い声に、俯きながら、そっと口元を緩める輝矢。

「……月器っ」

少し肩を落とした輝矢が、月器の名を呼ぶと、三日月は元のピアスへと戻っていった。

「はぁ～っ、終わった終わったっ」

一息ついた桜時が、ホッとした表情で、右手に構えていた村雨丸

を鞘へと収める。
「……っ」

――――やはりお前も“獣人”かっ……――――

ふと思い出される藍鬼の言葉に、桜時が複雑な表情を見せ、そっと俯く。

「桜時サン…？」
そんな桜時の様子に、首を傾ける凡子。

「おぉ～いっ！輝矢ぁぁ～んっ！」
「桜時ぃぃぃ～～っ！」
『……っ？』
遠くの方から聞こえてくる声に、輝矢と桜時が顔を上げる。

「サルっ、キジっ」
やって来る門貴と由雉の姿を、輝矢が見つける。

「無事かぁ～いっ？退治屋諸君っ！」
「ぐぅ～っ！」
「鹿男っ、無事でしたか？」
「おうっ！無事ぃ～っ！」
「見事に僕だけ無視したね、君…」
馬ロンの前を素通りし、平然と鹿男と会話を続ける輝矢に、馬ロンが引きつった表情を見せる。

「凡子っ！」

「あっ！お兄ちゃっ…！……っ！」

凡平の声に振り向いた凡子が、大きくその目を見開く。

「お姉ちゃ～～んっ！！」

凡平に手を繋がれやって来る、茶色の髪にくりくりとした黒目の、凡平や凡子とよく似た、まだ幼い少年。

「凡太っ！」

「お姉ちゃんっ！！」

駆け込んできた凡太という名のその少年を、凡子が力一杯抱き締める。

「無事だったのねっ…！凡太っ…！」

「うんっ！ライオンのお兄ちゃんたちに助けてもらったっ！」

「ライオンのっ…？」

凡太の言葉に、目を丸くする凡子。

「レオ様と獅子警護団の連中が、鬼の化けてた偽物の国主を倒して、凡太たちを助けてくれたんだっ」

「鬼が化けてた？国主様もっ？」

代わりに答える凡平の言葉に、凡子が驚きの表情を見せる。

『あっ…！』

「……っ？」

急に騒ぎ始める周囲の町人たちに、凡子と凡平が顔を上げる。

「あっ…！」

驚く町人たちと、同じように声を出し、大きく目を見開く凡子。

門貴たちや凡平のやって来た方から、獅子警護団を引き連れた、国主・獅子戸銃がゆっくりと歩み寄って来る。銃の横にはレオと、そして町長の姿もあった。

「町長っ？」
「町長っ…あっ、でもっ…」
「心配するな。本物だよっ」
戸惑いの表情を見せる町人たちに、穏やかに微笑みかける町長。
「町長も、国主もなっ」
「……っ」
そう言って横を向き、微笑みかける町長に、銃も穏やかな笑みを浮かべた。

「人質となっていた子供たちは、すべて我々が救出したっ！安心してくれっ！」
銃が、集まった多くの町人たちへ向け、堂々と言い放つ。

「凡平っ」
「えっ…？」

目の前へとやって来て、名を呼んでくる銃に、凡子・凡太の横に立つ凡平が、驚いた表情を見せる。国の頂点に立つ銃が、ただの町人の一人に過ぎない凡平の名を、呼んだからだ。

「鬼に国主の座を奪われてしまった、不甲斐無い国主ではあるがっ…」
銃がゆっくりと、凡平に右手を差し出す。

「良ければ、もう一度、人間と獅人で共に、国を造っていかせてはもらえないだろうか？」

「……っ！」

差し出されたその手と、銃の言葉に、凡平が大きく目を見開く。

「……っ」

そっと目を細め、凡平がしっかりと銃の手を取る。

「はいっ…！」

凡平は大きく頷き、零れんばかりの笑顔を見せた。

『……っ』

兄の笑顔に、つられて笑う、凡子と凡太。

『よっしゃあああああああっっ！！』

『うおおおおおおっ！！』

町人も警護団も入り混じって肩を抱き合い、皆、手を突き上げて、歓喜の声をあげた。

「これでホンマにめでたしめでたしぃ～やなっ」

「ええっ」

ようやく一つとなり、湧き上がる獅国の町に、輝矢たちも皆、穏やかな笑顔を見せた。

「やったねぇ～っ！馬ロンっ！」

「馬ロンではなく、“次長”か“隊長”と呼べと言っているだろうっ」

馬ロンが、明るく微笑みかける鹿男に、いつものように注意をする。

「俺っ、この国の人じゃないのに何でだろうっ？何かっ、すっごい嬉しいやぁっ！」

「……っ」

本当に嬉しそうな笑顔で、そう言う鹿男を見て、馬ロンが少し目を細める。

――――ポンっ――――

「……っ？」

鹿男の頭の上に乗る、馬ロンの大きな手。

「馬ロンっ？」

鹿男が少し戸惑うように、馬ロンを見上げる。

「よくやったな、鹿男」

「……っ」

そっと微笑む馬ロンに、大きく目を見開く鹿男。

「うんっ！！」

馬ロンのその言葉に、鹿男はこれ以上ないくらいに嬉しそうな笑顔を見せ、頷いた。

こうして、オトポリの馬鹿コンビが初めて出動した、獅国での事

件は、終わりを告げた…。

翌日。獅国入口。

「皆さんには大変、お世話になりました」

オトポリのオープンカーの前に立ち、すでに旅立ちの準備を整えた輝矢一行と、馬ロン、鹿男に、入口の前に立った銃が深々と頭を下げる。銃の横にはレオと、凡平たち兄弟、そしてその後ろにはライたち警護団や、町長を初めとした多くの町人たちが、輝矢たちを見送ろうとやって来ていた。

「いいよいいよぉ～っ！オトポリとして当然のことっ、しただけだしっ！」

「随分と偉そうな口を叩くようになったものだねぇ～」

頭を下げた銃に、景気よく微笑みかける鹿男を見て、馬ロンが横から嫌味のように口を挟む。

「まぁ捕まって牢屋に入ってたウマよりは、役に立ったんじゃないですかぁ～？」

「ちゃんと鬼人も倒したよっ！僕はっ！」

すかさず茶々を入れる輝矢に、馬ロンが強く怒鳴りあげる。

「馬ロンっ」
「……っ？」
輝矢を怒鳴っていた馬ロンが、名を呼ばれ振り向くと、そこには凡平が立っていた。
「そのっ、色々と、ありがとうなっ」
「……っ」
少し照れ臭そうに俯き気味で礼を言う凡平に、馬ロンがそっと口元を緩める。
「オトポリとして当然のことをしたまでだっ、気にする必要はない」
「……っ」
どこか偉そうに、でも優しい笑顔で言い放つ馬ロンに、顔を上げた凡平が、笑みを浮かべる。

「なぁっ、馬ロン」
「んっ？」
「俺も…」
凡平が少し躊躇うように、言葉を繋ぐ。
「俺でもっ、オトポリに入れるかなっ？」
「……っ」
思い切ったように、言い放つ凡平。その凡平の言葉に、馬ロンは、少し驚いた表情を見せた。だがその表情が、すぐに微笑みへと変わる。

「ああ、勿論っ」
「……っ！」

しっかりと頷く馬ロンに、笑顔を見せる凡平。

「だがその時は、馬ロンではなく、“次長”か“隊長”と呼ぶよう

にっ！」
「わぁ～いっ！凡平が入ったら、俺、先輩だねぇ～っ！馬ロンっ！」
「“次長”か“隊長”と呼ぶようにと言っているだろうがっ！！」
「ハハハっ！」

陽気な笑顔を見せる鹿男と、怒鳴りあげる馬ロンを見て、凡平はとても楽しそうな笑みを零した。

「礼金もいただきましたし、とっとと帰りましょうかっ」
「相変わらず最低の性格だねぇ～」
「……。」

銃たちから貰った礼金を片手に、ユキジと暢気な会話をしている輝矢を見て、少し離れたところに立つハチが目を細め、考え込むような表情を見せる。

――――やはりお前も“獣人”か…――――

どうしても離れない、あの時の言葉。

「はぁっ…」
「桜時サンっ」
「んっ？あっ、凡子っ」
ハチが顔を上げると、そこには笑顔の凡子が立っていた。

――――ボォォォォ～ンっ！――――

「良かったなっ、弟も戻って来てっ」
「はいっ！」
人化して、微笑みかけた桜時に、凡子もさらに大きな笑顔を見せる。

「桜時サンたちのお陰ですっ！本当にありがとうございましたっ！」
「こっちこそ、ありがとうな」
「えっ？」
礼を返す桜時に、凡子が目を丸くする。

「あの時の言葉っ…」

――――あんたたちとは全然、違うっ！獣人はっ、鬼人なんかとは全然、違うっ…！！――――

鬼人も獣人も同じと言った藍鬼に、怯むことなく、必死に叫んでくれた凡子。

「すっげぇ嬉しかった」
「……っ」
桜時が笑顔を見せると、凡子がそっと目を細める。

「桜時サンっ」
「んっ？」
改めて名を呼ばれ、振り返る桜時。

「桜時サンにもし、大切な人がいるなら、ちゃんと、言葉で伝えた方がいいと思いますよ」

「へっ？」

いきなり何の脈絡もないことを話し始める凡子に、桜時が戸惑うように目を丸くする。

「凡子っ？何言っ…」

「いくら大切に思ってたって、言葉にしなきゃ伝わらないことって色々とあるしっ」

「……っ」

戸惑った様子を見せていた桜時が、続けられた凡子の言葉に、どこかハッとした表情を見せる。

「桜時サンは色々と我慢し過ぎなんだと思います。もっと何でも話さないとっ！」

「凡子っ…」

まるでアドバイスをくれるように、右手の人差し指を立てて、桜時に微笑みかける凡子。桜時が、輝矢が獣人であるということに悩んでいることを、理解してくれているようであった。

「そうすれば、きっともっと歩み寄れますっ！」

凡子がさらに、大きく笑う。

「この町のようにっ！」

「……っ」

どこか誇らしげに笑う凡子を見て、桜時もそっと笑みを浮かべた。

「ありがとう、凡子っ」

「いえっ！」

そう言葉を交わし、桜時と凡子は、しっかりと微笑み合った。

「じゃあねぇっ！レオっ！」
「おうっ、また遊びに来いよっ？鹿男っ」
「うんっ！」
見送りの先頭に立ったレオが、鹿男と握手を交わす。レオの言葉に、鹿男は大きく頷いた。

「じゃあねぇぇぇ～っ！！」
「またなぁぁ～～っっ！！」
『ありがとぉぉぉ～～っっ！！』
『また来いよぉ～～っっ！！』

オープンカーに乗り、走り去っていく輝矢一行と鹿男、馬ロン。後部座席から大きく手を振る鹿男たちを、町人たちも大きく手を振り返し、見えなくなるまでずっと見送る。

「ふぃ～っ、行っちまったなぁ～」
車が見えなくなると、レオはそう言って、少し肩を落とした。

「レオっ」
「んっ？」
銃に呼ばれ、レオが振り向く。

「勇敢になったな。見違えたよ」
「……っ」

優しく微笑みかける銃に、驚いたような表情を見せるレオ。

――――お前のような臆病者は、即刻、この国から出て行けっ！――――

勇気を持てず、逃げ回ってばかりいて、銃から言われた、あの言葉。

「……っ」

俯いたレオが、そっと笑みを浮かべる。

「大切な友達がっ…勇気をくれたからっ…」

そう呟き、レオは笑顔で、オープンカーが走り去っていった方を見つめた。

「ねぇ～馬ロぉ～ンっ」

ハチ、モンキ、ユキジの三匹と並ぶようにして、後部座席に座った鹿男が、目の前の運転席に座る馬ロンに声をかける。

「鹿せんべぇ食べたぁ～いっ」

「却下っ」
鹿男の言葉をすぐさま却下する、運転中の馬ロン。
「私は馬肉が食べたいんですけど。ウマっ」
「ウマ相手に不謹慎なこと、言うんじゃないよっ！君はっ！」
助手席から意見する輝矢に、馬ロンが勢いよく怒鳴りあげる。
「俺、バナナぁ～」
「ボク、ささみチーズぅ～」
後部座席のモンキとユキジも、何の流れかはわからないが、とりあえず自分の食べたいものを口にする。

「……。」
そんな中、一匹だけ黙り込み、助手席の輝矢を後ろから見つめるハチ。

「……っ」

ハチがそっと、俯く。

――――桜時サンは色々と我慢し過ぎなんだと思います。もっと何でも話さないとっ！――――

先程の凡子の言葉が、頭を巡る。

――――やはりお前も“獣人”か…――――
――――輝矢が…獣人っ…？――――

凡子の言うように、素直に、“輝矢は何の獣人なの？”と問いかければ、少しは楽になれるのだろうか。

――――それでもまだ…私は、アナタにすべてを話す、勇気が持てない…――――

それは、“まだ話せない”と言った輝矢を、傷つけることにはならないだろうか。

――――待つよっ…――――

話してくれるその時を、待つと約束したというのに、それでも、すべてを知りたいと思う。

“これは、俺の我が侭なんだろうか…”

「ふぅ～んっ…」

獅国を走り去っていく、輝矢たちの乗ったオープンカーを、高い丘の上から、じっくりと見下ろす一人の少女。長く黒い髪に、真っ赤なリボンをつけた、十五，十六歳くらいの綺麗な顔立ちの少女だ。その青色の瞳は幼さを残してはいるが、どこか冷たい。ふわふわとした黒いドレスに、白色のエプロンをしている。

「鬼を見に来たつもりだったけどぉ、もっと面白そうなもの見つけちゃったぁっ」

無邪気なその声が、静かな丘の上に響き渡る。

「ねぇっ、内兎（ないと）っ」

少女がスカートの裾をはためかせ、後方を振り返る。

「面白そうなオモチャを見つけたのっ、遊びに行ってもいいでしょっ？」

「あっ、はっはいっ！」

少女の振り返った先に立つのは、肩ほどまで伸びた白色の髪に大きな真っ赤な瞳の、眼鏡をかけた内気そうな青年。白のワイシャツにチェック柄のベストを着ている。少女の問いかけに、内兎と呼ばれた青年は、少し慌てた様子で返事をする。

「すべては、貴女の望むがままにっ」

内兎が右手を左胸につけ、その場でそっと頭を下げる。

「アリス様っ…」

「ウフフっ」

遠ざかっていくオープンカーを見つめ、アリスはどこか怪しく微笑んだ。

第６４章　最後の国のアリス　★１

獅国から龍国に戻って、二日が経った。
志願隊員である鹿男を、無理やり鬼人退治に連れて行った輝矢には、オトポリの長官・青守座黒から、またも自宅謹慎の処分が出た。
鹿男とその上司・馬ロンにも厳重注意の処分が出て、馬ロンはかなりの立腹状態であったという。

龍国。エセお菓子の家こと桃原家。
「ふわぁ～あっ」
「あっ、おはようございますっ！ハチ様っ！」
眠たそうに欠伸をしたハチが、キッチンへと入ると、朝食の準備をしているグレーテルが、笑顔で挨拶を送った。
「おはよっ」
グレーテルに挨拶を返しながら、ハチがキッチンのテーブルの上に飛び乗る。
「コーヒー淹れましょうか？」
「ん～水でいいやっ」
「かしこまりましたっ！」
ハチの言葉に大きく頷き、グレーテルが“ハチ”と書かれた深底の皿に、水を入れていく。
「どうぞっ」
「悪りぃっ」
グレーテルが水の入った皿をテーブルの上に置くと、ハチは礼を言って、早速、皿に口をつける。
「ふぅ～っ、やっぱ水は旨っ…」
顔を上げ、満足そうに微笑んでいたハチが、不意に言葉を止める。

「……っ」
皿に入った水を見つめ、そっと表情を曇らせるハチ。
――――やはりお前も“獣人”か……――――
またも思い出されるのは、水力を使った輝矢に、藍鬼が言い放った、あの言葉であった。
――――アハハハハハハハっ……！！――――
二度の暴走には、すべて水が絡んでいる。輝矢の“水力”とは、一体、何なのであろうか。

「……。」
ハチが神妙な表情を見せ、俯く。

「ハチ様っ？」
「へっ！？あっ、えっ！？」
グレーテルに急に呼びかけられ、ハチは慌てた様子で顔を上げた。
「なっ何だっ！？」
「どうかなさいました？柄にもなく深刻そうなお顔なさって」
「悪かったなっ…深刻が柄でもなくって…」
軽く毒の入った言葉を投げかけてくるグレーテルに、ハチが思わず顔を引きつった。

「べっ別に何でもっ…」
「あっ！おっはよぉ～っ！輝矢ちゃ～んっ！」
「……っ！」

リビングの方から聞こえてくる、太狼の明るい声に、ハチがハッとなって言葉を止める。

「おはようございます、タロー」

太狼に挨拶を返しながら、キッチンの方へと近づいてくる足音。

「おはようございます」

「うぎっ…！？」

そう言いながら、穏やかな笑顔の輝矢がキッチンへと入って来ると、ハチは慌てて、テーブルの上に置かれている花瓶の裏へと身を隠した。

「あっ！おはようございますっ！輝矢様っ！」

「グレーテル、温かいお茶を淹れてもらえます？後、タローに甘さダルダルココアのおかわりを」

「はいっ！喜んでっ！」

輝矢の言葉に、嬉しそうに大きく頷くグレーテル。

「おはようございます、ハチ」

「へっ？あっお、おはようっ…」

「……っ」

花瓶の裏に隠れたままのハチに、特に何を言うでもなく、挨拶だけをすませる輝矢。ハチが少し戸惑うように挨拶を返すと、輝矢はあっさりとキッチンを後にした。

「……っ？」

輝矢の出て行ったキッチンの入口を見つめ、ハチが不思議そうに首を傾ける。

「花瓶の裏で何をなさってるんですか？ハチ様」

「うえぇっ！？」

お茶とココアを淹れ終えたグレーテルに、不審がられるように問いかけられ、ハチが焦った声を出す。
「いや、えっと、その輝矢が、“寝ている間、触れなかった分、存分にイチャつきましょう、ハチぃぃ～”とかって、抱きついてくるかなぁ～と…」
花瓶の裏から出て来ながら、ハチが少し言いにくそうに呟く。
「思って隠れてたんだけど、あっさりだったなぁ～」
また不思議そうにしながら、ハチがキッチンの入口を見る。
「獅国から戻って来てから、どーもボディタッチ率が減ってきたようなぁっ…」
「そりゃあ、いくら輝矢様でも、あそこまで嫌がられたら、さすがに自粛しますよぉ～」
「へっ？」
グレーテルの言葉に、ハチが目を丸くして顔を上げる。
「俺っ、嫌がってるように見えるのか？」
「えっ！？嫌がってないんですかっ！？」
「……。」
グレーテルに驚いたように問いかけられ、ハチがしばらくの間、固まる。
「いやっ、やっぱ嫌がってるなっ」
自分から問いかけたものの、やはり嫌がっていることを認めるハチ。
「ハチ様って、輝矢様のことをお嫌いなんですか？」
「へっ！？」
グレーテルの思いがけない問いかけに、ハチがさらに目を真ん丸にして、グレーテルを見上げる。
「なっなんでっ！？」

「昔は女性ならどなたにでも“ぎゃあ”とか“ひええ”とか言ってらしたのに、最近は輝矢様にしか言わないですしぃ」
「そっそれはっ…！」

輝矢のことが好きだと自覚してから、輝矢ばかりを意識し過ぎて、他の女性への意識が弱くなったのだ。

「とは死んでも言えないしなっ…」
「えっ？」
心の中で思ったことを、思いきり呑み込んだハチに、グレーテルが首を傾げる。
「とっとにかくっ！別に嫌ってるわけじゃっ…！」
「なら、きちんと言葉にして、そうお伝えになった方がいいと思いますよ？」
「えっ？」
急に真面目な表情となるグレーテルに、ハチが戸惑ったように声を漏らす。
「でないと、輝矢様も誤解してしまいますでしょうしっ…」
「誤解っ…」
グレーテルのその、突っ込みようのない最もな言葉に、ハチが表情を曇らせる。

「だからほらっ」
ふと笑顔を見せるグレーテル。

「ヘンゼルお兄様を見習ってっ」

「門貴様ぁぁっ！！大好きですわぁぁっ！！」
「ぎゃあああああっ！！」

「いやぁ…あれはちょっと…」
廊下を勢いよく駆け抜けて行くモンキとヘンゼルの姿を見て、呆れた表情となるハチ。

「……。」
呆れた表情から、ハチがすぐに考え込むような顔となる。

「伝える…かっ…」

俯いたハチが、ポツリと呟いた。

その日・午後。
「はぁっ…暇ですねぇっ…」
リビングのソファーにもたれかかった輝矢が、つまらなそうな顔をして呟く。
「キジ、謹慎は後何日ですか？」
「後八日ぁ～」
「八日っ…長過ぎますっ…」
「まだ二日しか経ってないんだから、当たり前でしょ～っ」
うんざりと首を垂れる輝矢に、呆れた表情を向けるユキジ。座黒から十日の自宅謹慎を命じられた輝矢は、謹慎二日目にして、すでに我慢の限界に来ているようである。

「門貴様ぁぁぁ～っ！！」
「ぎゃあああああああっ！！」

「いいですねぇ～彼らはいつも忙しそうで。暇を持て余している私としては、羨ましい限りですよ」
「ウソをつけっ」
まったく羨ましく思っていなそうな輝矢に、向かいのソファーに座ったハチがこっそりと突っ込みを入れる。
「はぁ～っ、こんな日に限って、タローは金汰に呼び出されて、オトポリに行ってしまうしっ」
垂らした首をもとに戻し、さらにボヤきを続ける輝矢。
「タローと“どうやって一蹴りで相手の命を絶つか”についてを談義したかったんですがねぇ」
『いなくてありがとう、桃タローっ』
その輝矢の言葉を聞き、ハチとユキジが声を揃えて、この場にいない太狼に礼を言った。

「由雉様ぁ～っ」
そこへグレーテルが扉から顔を出し、ユキジを呼ぶ。
「んっ？」
「どうも掃除機の調子が悪くて、“掃羽”貸していただけませんかぁっ？」
「ええぇ～っ？」
グレーテルの言葉に、不満げな声をあげながらも、ユキジは羽根を広げて、素早くリビングを出て行く。グレーテルが顔を引っ込め、扉を閉めて、リビングには輝矢とハチだけが残った。

『……。』
途端に、部屋の中が静まり返る。

「あっとっ…」
その気まずい空気に耐え兼ね、何か話題を作ろうと声を漏らすハチ。
――――きちんと言葉にして、そうお伝えになった方がいいと思いますよ？――――
「……っ」
その時、先程のグレーテルの言葉が頭を過ぎり、ハチがハッとした表情となる。
――――桜時サンは色々と我慢し過ぎなんだと思います。もっと何でも話さないとっ！――――
さらに獅国の凡子の言葉を思い出される。
この騒がしい家で、輝矢と二人きりでゆっくりと話せる時間など、そうありはしない。ましてやいつも邪魔をする太狼がいないのだから、今は絶好のチャンスである。
「あっ…！うっ…」
言いだそうと顔を上げ、また怯むように俯いてしまうハチ。
――――そうすれば、きっともっと歩み寄れますっ！――――
「……。」
凡子の言葉がもう一度頭を掠めると、ハチの表情から迷いが消えた。

「……っ」

――――ボォォォォ～ンっ！――――

ハチが意を決した表情となり、白い煙に包まれて人化する。

「……っ？」

急に人化するハチに、眉をひそめる輝矢。

「あっあのさっ！輝矢っ！」

「はいっ？」

白い煙が収まり、改まった様子で名を呼ぶ桜時に、輝矢が少し不思議そうにしながらも、返事をする。

「はっ…！ははははは話があるんんだっけどっ…！」

不自然に震えた声で、言葉を発する桜時。

「何です？」

そんな桜時に、輝矢はごく自然に聞き返す。

「じっじじじじ実はっ…！」

高鳴る心臓に声を震わせ、こもる力に拳を強く握り締め、俯いていた桜時が、勢いよく顔を上げて、輝矢の方を見る。

「おっおおおお俺っ…！お前のことがっ…！！」

「桜時さぁぁーーんっ！！」

――――パリィィィィィーンっっ！！――――

「うぎゃあああああああっ！！」

リビングの大窓のガラスを叩き割って入ってくるその声に、決死の瞬間の最中であったこともあって、尋常でないくらい驚いた桜時

が、激しく悲鳴をあげる。

「ハァっ…！ハァっ…！ハァっ…！」
「ふはぁ～っ…びっくりしたっ…」
「イっ…イチゴっ…？」

大窓のガラスを叩き割って、リビングへと駆け込んできたのは、どこからか走って来たのか、大きく息を乱したイチゴであった。桜時が自分の心臓を押さえる中、輝矢が戸惑ったようにイチゴの名を呼ぶ。ガラスは粉々だが、イチゴは怪我すらしていないようである。

「どうかしたのですか？イチゴ」
靴も脱がずにリビングへと上がり込んでくるイチゴに、困惑しながら問いかける輝矢。
「あっ、まさか自宅謹慎中の私に、力を借りたいほどの事件がっ…」
「違いますっ！」
「そっそうですかっ…」
少し期待して話しかけた輝矢であったが、鬼のような形相をしたイチゴに強く否定され、珍しく怯むように肩を落とした。

「桜時さんっ！！」
「はっはいぃぃぃ～っ！」
輝矢さえも震え上がらせたイチゴに名を呼ばれ、桜時が思わずソファーから立ち上がって、返事をする。
「本当なんですかっ！！？」
突き刺すような視線を、桜時へと向けるイチゴ。

「婚約するってっっ！！」
『……。』

イチゴの言葉に、思わず固まる輝矢と桜時。

「はっ…？」

次の瞬間、桜時はこれ以上ないくらいの、間の抜けた表情を見せた。

第６４章　最後の国のアリス　★２

オトポリ本部、長官室。
「というわけで、婚約してもらうわ、桜時」
何故か龍国にいる、雀国の国主・朱実孔雀が、何の悪びれもなく、そう言い放った。
「あっうんっ、わかったぁ～っ」
ソファーに腰掛ける孔雀のすぐ横に立ち、満面の笑顔で返事をする桜時。
「って、んなこと言うわけねぇーだろぉぉぉぉっっ！！！」
満面の笑みが一気に崩され、桜時が勢いよく怒鳴りあげる。
「あらっ？私にタテつく気？」
「タテつくも何もねぇーよっ！！」
少し不満げな表情を見せる孔雀に、桜時がさらに不満げな表情で怒鳴りあげる。
「婚約ってどういうこったよっ！？孔雀さんっ！！」
桜時がもっともな問いかけを、ふんぞり返っている孔雀にする。

「どういうことだか、初めっから隅々まで、教えていただきましょうかっ」
「そうですっ！しっかりお話下さいっ！」
孔雀の座るソファーの向かいに、並んで腰を掛けている輝矢とイチゴ。どちらも不機嫌な表情で、突き刺すような本気の眼差しを、孔雀へと向けている。

「どうでもいいが、他の部屋でやってはもらえんだろうかっ…」
「長官の威厳も何もあったもんじゃないねぇ～」
「頑張りぃやぁ～っ、長官っ」
モメ事にはまったく関与していないというのに、部屋を占領され

ている座黒が、弱々しい声で呟く。そんな座黒に、少し同情するように声を掛けるモンキとユキジ。

「はぁっ…仕方ないわねぇっ…」

桜時はともかく、目の前の輝矢とイチゴにまで激しく睨みつけられ、孔雀が諦めるように溜息をついた。

「話せば、長くなるんだけどっ…」

「えっ…？」

急に真面目な表情となる孔雀に、桜時が少し眉をひそめる。

「それは遠い昔っ…我らが朱実家の先祖と、とある国の王族の先祖の、一つの約束…」

『……っ』

真剣なに語り始める孔雀に、桜時や輝矢たちが、皆、息を呑む。

「ウチの先祖がねっ、“ジャンケンで負けた代わりに、子孫を嫁にやる”って約束したのよっ」

「全然長くねぇー上に、ジャンケンかよっ！！」

あっさりと完結する話に、桜時が血管が切れそうなほどに全力で突っ込みを入れる。

「だけどウチ、男ばっかりでしょっ？だから嫁は無理だって言ったら、向こうは娘しかいないから、婿でいいってっ」

桜時の全力の突っ込みにも動じず、話を続ける孔雀。

「丁度、良かったでしょっ？」

「ちっとも良くねぇっ！！」

気持ちのいい笑顔を見せる孔雀に、桜時はさらに怒鳴りあげた。

「だいたい朱実っつっても俺、イヌだしっ、朱実の息子だったら他にもいっぱい、いんじゃねぇーかっ！」

「それはそうだけどぉ、松人と竹人はもう相手が決まってるし、梅人はほらっ」

孔雀がポンと手を叩く。

「知らない国に一人、婿入りさせるなんて、可哀想じゃないっ」
「ほぉ～っ？でっ、俺なら可哀想でないとっ…？」
シレっと答える孔雀に、桜時が引きつった笑みを向ける。
「ええっ」
「“ええっ”じゃねぇっ！！」
あっさりと頷く孔雀に、桜時が怒りのあまり、ソファーの前のテーブルを蹴り飛ばした。
「だってやっぱり息子は可愛いのよ」
「あんたっ！“甥子と思ったことは一度もありません。自慢の息子です”って言ったじゃねぇーかっ！！」
「私がっ？そんなこと言ったかしらっ？」
「こんのぉっ…」
素っ惚ける孔雀に、桜時が怨みがましそうに拳を握り締める。
「とにかく俺は絶対イヤだからなっ！！」
「何でよっ？あなたっ、バカみたいに女嫌いなんだし、別に心に決めた相手とかいないんでしょうっ？」
「ふへぇっ！？」
孔雀のその言葉に、激しく動揺し、声を裏返らせる桜時。
「そっ…！そそそそれはっ…！」
「何？いるの？」
「ええぇっ！？」
もう一度問いかける孔雀に、桜時がさらに動揺する。

「ええ、ハチが心に決めているのは私です」
「違げぇぇぇーよっ！！」
代わりに答える輝矢に、桜時が強く否定する。
「……っ」
「あっ…」
全力で否定した桜時に、一瞬、傷ついたような表情を見せる輝矢。
そんな輝矢の表情を捉え、桜時が思わず手で口を覆う。

「あっ、そのっ…！」
「じゃあ問題ないわねっ、婚約っ」
「ちょい待てぇぇっ！！」

必死に取り繕おうと、輝矢に声を掛けようとした桜時であったが、話を進める孔雀を止めるため、その言葉は中断されてしまう。

「何よっ？心に決めた相手がいないんなら、別に問題ないじゃないっ」
「大アリだぁっ！！んなもんっ！」
「というかねぇっ」
怒鳴り続ける桜時に、孔雀が疲れたかのように肩を落とす。

「この婚約呑まなくて、その国と交友切られたら困るから、とりあえずしてっ」
「思いっきり政略じゃねぇーかっ！それっ！」
だんだん強制的になってきている孔雀に、もう枯れ気味の声で怒鳴り続ける桜時。

「四大国の雀が、交友を切られて困るなんてっ、相手の国は一体っ…」
「我が国ですわぁっ」
『……っ』

イチゴが少し戸惑うように言葉を発したその時、扉の開く音とともに入ってくる、凛と響くその高い声。皆が一斉に、入口の方を振り返った。

「……っ！」

入口の方を見た輝矢が、大きく目を見開く。

「初めましてぇっ、朱実桜時様っ」

「えっ…？」

名を呼ばれ、眉をひそめる桜時。

「四大国が一、“武国（ぶこく）”が国主・玄上武史（くろがみたけし）の娘、玄上アリスですわぁっ」

部屋へと入ってきたのは、長い黒髪に真っ赤なリボンを飾った、冷たい青い瞳の少女であった。

オトポリ本部・通信室。

「いっつもありがとうねぇ～金ちゃんっ」

「ええっでことよぉ～っ！」

通信室から廊下へと出て来るのは、今日も爽やか笑顔満開の太狼と、大きな一頭のクマ、金汰であった。

「んじゃあ僕、帰るから、金ちゃんはどうぞお仕事に戻っ…」

「桃ちゃんっ」

「……っ？」

言葉を遮るように名を呼ばれ、太狼が少し目を丸くする。
「何っ？」
「ああぁ～そんのだなぁっ」
――――ボォォォォォォォォ～～～ンっ！――――
「巌流島への通信のことなんだがっ」
白い煙に包まれ、人化した金汰が、なまりの取れた口調と真剣な表情を、太狼へと向ける。
「……っ」
「あっ！いやっ、別に問い詰める気はないんだっ！」
表情を曇らせた太狼に、金汰が慌てて言い繕う。
「ただっ、もう少し、話してくれてもいいんじゃないかと思ってなっ」
「えっ？」
少し俯きがちに話す金汰に、太狼が眉をひそめ、聞き返す。
「別に桃ちゃんは、一人で世界を背負ってるわけじゃないんだぞっ？」
「……っ」
金汰が顔を上げ、まっすぐな瞳を向けると、太狼は少し驚いたような表情を見せた。
「俺に頼れとまでは言わないが、もっと長官やトマト殿とかにっ…」
「ごめんっ」
「へっ？」
短く謝る太狼に、首を傾げる金汰。

「座黒さんにもよく怒られるんだぁ～“お前は他人を頼らな過ぎる”って」
明るい笑みを浮かべた太狼が、少し遠くを見るような瞳を見せる。
「子供の頃から、人を頼って来なかったもんだからっ、どう頼っていいのか、わからなくってさぁ～」
「桃ちゃんっ…」
どこか皮肉ったように言う太狼を、金汰が目を細め、見つめる。

「いずれ話すよ。約束するっ」
「……っ」

金汰に向けられた太狼の瞳に、嘘偽りなどはまったく感じられず、金汰はしばらくその瞳を見た後、そっと口元を緩めた。

「わかったっ」
「……っ」
しっかりと頷く金汰に、太狼も笑みを浮かべる。
「でも話す時は、一文字一お菓子もらうからねぇ～っ」
「えええぇっ!?」
付け加えられる条件に、金汰が目玉が飛び出しそうなほどに激しく驚く。

「そういえば桃ちゃんっ、さっき話した件なんだがっ」
「んっ？」
急に真面目な表情となり、話題を変える金汰。
「ああっ、“武国”のことねぇ～」
「そうなんだ」
太狼の口から“武国”の名が出ると、金汰は表情を曇らせて、深刻そうに頷いた。

「“武国”…“龍”“雀”“虎”に続く、四大国、最後の国…」
「“武人”の治める国か…」
太狼と金汰が、互いに真剣な表情を見せる。
「思ったより…動き出すのが早かったな…」
そう呟き、太狼は、その瞳を鋭くした。

第６４章　最後の国のアリス　★３

「あっ…り…すっ…」
「……っ？」

大きく目を見開いた輝矢の漏らしたかすかな声に、桜時は、何と言ったのかまでは聞き取れなかったが、少し不思議そうに首を傾ける。

「四大国が一？」
「武国？」
「あなたが…桜時さんのっ…？」
「ええっ、婚約者ですわぁっ」

アリスの告げた国の名に、モンキとユキジが眉をひそめる中、戸惑いがちに問いかけたイチゴに、アリスは笑顔で答えた。

「初めましてぇっ、朱実孔雀様っ」
「えっ？えっ、ええっ」
急に移ってくる視線に、孔雀が少し焦りながらも、頷き返す。

「内兎ぉ～っ！アレを持ってきてぇっ！」
『……っ？』
扉の外に向かって、何者かに声を掛けるアリスに、部屋の中にいる皆が、首を傾げる。
「内兎ぉっ！？」
だがしばらく経っても、誰もやって来る気配はなく、アリスがもう一度、今度は扉から身を乗り出して、その名を呼んだ。

「あっ！はっはいぃ～っ！」
『……っ』

二度目の呼びかけの後、慌てた返事とともに、やっと部屋へと現れたのは、白い髪に真っ赤な瞳の、眼鏡を掛けた、いかにも気弱そうな青年であった。その両手に、キレイに包装された箱を抱えている。

「お待たせしましたっ！アリスさっ…！」
「遅いっ！」
「ぎゃあああああっ！」
『うえぇっ！？』

急いで駆け込んできた内兎を、勢いよく蹴り飛ばすアリス。吹き飛んでいく内兎と、今まで可愛い子であったアリスの豹変ぶりに、皆が大きく目を見開いた。

「私が呼んだらっ、呼んでから三秒後には、必ず来なさいって、いつも言ってるでしょうっ！？」

蹴られた脇腹を押さえ込み、倒れたままでいる内兎へ、アリスが桜時たちに見せていたものとは、まるで違う冷たい表情で、厳しい言葉を投げかける。

「もっ申し訳っ…」
「それが出来ないなら、生きてる価値なしっ！とっとと死になさいっ！」

やっとのことで起き上がり、謝ろうとした内兎に、さらに厳しい

言葉を投げかけるアリス。

「すっ…すごいねっ…」
「輝矢んより…怖いっ…」
そんなアリスの様子を見て、モンキとユキジが引きつった表情で、思わず呟く。

「おっおいっ！何もそこまで言わなくてもっ…！」
「わかりました。死なせていただきます」
「ちょい待てぇぇっ！！」

厳しいアリスに桜時が注意をしようとしたその時、アリスの言葉に頷いた内兎が、元気のない表情のまま、扉を出てすぐの廊下の窓から、身投げをしようと身を乗り出した。

「止めないで下さい」
「早まるなぁぁ～っ！」
身投げしようとする内兎を、慌てて駆け込んでいった桜時が、必死に引っ張り、止める。
「んっ？」
内兎の体を引っ張っている桜時が、ふと何かに気づき、眉をひそめる。

「時計っ…？」

桜時が見つめたものは、内兎のベルトにぶら下がっている、美しい銀色の懐中時計であった。文字盤などのデザインは至って普通の時計なのだが、何やら不思議な力のようなものを感じた。

「アリス様のご命令です。死なせて下さい」
「だっから早まるなっつってんだろうがぁぁっ！」
再度願う内兎に、強く怒鳴りあげる桜時。
「孔雀様ぁっ、こちらっ、武国の名物・“武国まんじゅう”ですわぁっ」
「どっどうもっ…」
内兎の持ってきた箱を孔雀へと手渡し、満面の笑みを見せるアリス。先程の内兎に対しての表情とは、まるで別人である。そして、内兎が飛び降りようとしていることも、まったく気にしていない。そんなアリスに顔を引きつりながらも、孔雀がそのまんじゅうを受け取る。
「お父様っ、“武国”って…」
イチゴが少し曇った表情で振り返り、長官席の座黒の方を見る。
“龍”“雀”“虎”と同じ、四大国の一つだ」
『えっ？』
答える座黒の言葉に、モンキとユキジが目を丸くする。
「じゃあ四大国の残りの一つってことかぁ～っ」
「へぇ～っ、一体、何の獣人の国なんっ？」
「それはっ…」
『……っ？』
モンキの問いかけに、座黒が少し困ったように下を向く。そんな座黒の様子に、モンキたちが不思議そうな顔をした。

「それにしても、本当に久しぶりねぇっ」
「えっ？」
そう言って、横を通り過ぎていくアリスに、まんじゅうをもらった孔雀が首を傾げる。
「……っ」
足を止め、唇の端を吊り上げるアリス。

「輝矢っ」
「……アリスっ…」

微笑みかけてくるアリスに、輝矢がそっと眉をひそめる。

「えっ…？」
「……っ？」
互いの名を呼んだ輝矢とアリスに、身投げしようとしていた内兎と、それを必死に止めていた桜時が、その動きを止め、同時に戸惑うように振り返った。

「あっれぇ～？何やぁ～？輝矢んっ、アリスちゃんと知り合いなぁ～んっ？」
「……。」
「……っ？」
明るい笑顔で問いかけたモンキであったが、何も答えようとはせず、ただ険しい表情を見せている輝矢に、少し首を傾げる。
「輝矢んっ？」
「ええっ、知り合いなのぉっ」
答えない輝矢の代わりに、大きな笑顔を見せて頷くアリス。

「とってもよく知る仲っ…」

アリスが不意に、その青い瞳を鋭くし、ソファーに座ったままの輝矢に、視線を落とす。

「ねぇっ？輝矢っ…」

「……っ」

試すように微笑みかけるアリスに、俯いたまま、強く唇を噛み締める輝矢。

「元気にしてたぁ？輝矢」

アリスがその場で少し膝を折り、輝矢に顔を近づける。

「私ねぇ、輝矢のこと、ずぅ～っと心配してたんだよぉ？」

優しい言葉ばかりを並べるアリスであったが、その声と表情からは、少しも優しさが感じられなかった。

「だってぇ、あんなことがあったんだものっ」

「……っ！」

アリスのその言葉に、輝矢が大きく目を見開く。

「……うっ…」

「輝矢さんっ…？」

両手で肩を抱き、声にならない声を漏らす輝矢に、隣に座ったイチゴが、少し戸惑うような表情を見せる。

「うっ…！」

深く俯き、まるで怯えるように、その肩を小刻みに震わす輝矢。

「……っ」

そんな輝矢の様子に、アリスが満足げに微笑む。

「ねぇ輝矢ぁっ、無理してなぁ～いっ？」
アリスが、さらに微笑みかける。
「無理ならねぇっ、そんなに頑張って…」
輝矢の耳元に、アリスが口を近づける。

「生きなくてもぉ…いいんだよぉっ？」
「……っ！！」

アリスの囁きに、輝矢の表情が凍りつく。

――――バァァァァァーーンっ！！――――

その時、長官室に、大きな音が響き渡った。

「アリス様っ…！」
「……っ」

内兎が不安げに身を乗り出す中、少ししかめた表情で、後ろへ飛ぶようにして、輝矢から離れるアリス。

『……。』

座ったままの輝矢の前には、怖いとさえ思えるほどに厳しい表情を見せた桜時、門貴、由雉の三人が、それぞれの武器を、威嚇するように、アリスに向けていた。

「……っ」

三人の睨みつけるような視線を受け、アリスが少し目を細める。

「やめなさいっ、相手は四大国の国主令嬢よっ」

『……っ』

冷静な孔雀の言葉に、三人がその表情は変えぬまま、武器だけを下ろした。

「ウフフっ」

『……っ？』

小さな笑い声を漏らすアリスに、三人が眉をひそめる。

「随分と忠義の厚いペットさんたちねぇっ」

どこか感心するように言いながら、アリスが三人の間から見える、まだソファーに座ったままの輝矢を見つめる。

「でも彼らっ、知ってるのかなぁっ？」

「……っ！」

『……っ？』

問いかけるアリスに、止まっていた輝矢の表情が、かすかに動く。

二人のそのやり取りに、桜時たち三人が表情を曇らせる。

「あなたのぜぇ～んぶをっ」

「……っ」

肩を震わせたままの輝矢が、アリスの言葉に、さらに深く俯いて

いく。

「輝矢の…全部っ…？」

その言葉に、そっと眉をひそめる桜時。

「ねぇっ、輝っ…」

「あんまりぃ、ウチの輝矢ちゃんを、苛めないでもらえるかなぁ～っ？」

『……っ』

アリスが再び輝矢に呼びかけようとしたその時、部屋に新たな声が入って来て、アリスや皆が、一斉に振り返った。

「アリスちゃんっ」

そうアリスの名を呼んで、長官室へと姿を現したのは、爽やかな笑顔を浮かべた太狼であった。太狼は笑みを浮かべてはいたが、アリスを見るその瞳は、突き刺すように鋭かった。

「桃原太狼っ…」

振り返り、太狼の姿を確認したアリスが、少し表情を曇らせる。

「なんでっ…タローがっ…」

「……っ」

桜時たちが戸惑ったような表情を見せる中、アリスがそっと俯き、その口元を緩めると、先程まで見せていた愛らしい笑顔で、顔を上げた。

「では孔雀様っ、ご挨拶はこの辺りでっ」
「えっ？えっ、ええっ」
孔雀の方を振り向き、輝矢に見せていた冷たい瞳をは打って変わった笑顔で、声を掛けるアリスに、孔雀が困惑しながらも頷きを返す。
「桜時様っ」
「……っ」
振り返るアリスに、桜時が少し強張った表情を作る。
「なっ何だっ？」
「今度ぜひっ、“武国”にいらして下さいっ」
警戒するように問いかけた桜時に、アリスが笑顔で答える。
「父にも紹介したいですしぃっ、桜時様も自分が後々、暮らす国をご覧になりたいでしょうっ？」
「えっ？」
アリスの言葉に、桜時が戸惑いの声をあげる。
「ちょっ…！ちょっと待ってくれっ！俺はまだっ、婚約を認めたわけじゃっ…！」
「破棄するにしても、父の許可が必要ですわぁっ」
「……っ」
必死に訴えようとした桜時の声を、牽制するように言い放つアリス。その表情は笑顔ではあったが、どこか圧し負かされてしまう、力のようなものがあった。
「どの道っ、“武国”には来ていただかないとぉっ」
「……。」
まるで武国に行くことを誘導されているようで、桜時は少し険しい表情を見せた。
「わっわかったっ…」
「……っ」

仕方なく頷く桜時を見て、アリスが楽しげに笑う。

「ではっ、お待ちしておりますわぁっ」

桜時にそう言って一礼すると、アリスが長官室の扉の方へと歩いて行く。

「ああっ、そうだぁっ」

思い出したように立ち止まり、もう一度部屋の中を振り返るアリス。

「勿論っ、仲間の方々も一緒で結構ですわよぉっ？」

仲間をは言うものの、アリスは確実に、輝矢の方を見つめる。

「……。」

その言葉に、顔も上げずに、唇を噛み締める輝矢。

「ではぁっ」

アリスが再び皆に背を向け、長官室の扉を出て行く。

「……。」

「……っ」

扉のすぐ横に立つ太狼が、すれ違い様に、アリスに突き刺すような視線を送ると、アリスはそれを嘲笑うかのように笑みを浮かべ、扉を出た。

「帰るわよっ、内兎っ」

急に声のトーンを落とし、アリスが、廊下に座り込んでいる内兎へ向けて、冷たく言い放つ。
「えっ？あっ、えっとっ…」
「遅いっ！置いてかれたいのっ！？」
「ああっ！待っ…！待って下さいっ！」
強く怒鳴りながら、すたすたと先へと歩いて行ってしまうアリスに、内兎が慌てて立ち上がる。

――――ボォォォ～ンっ！――――

「アリス様ぁぁぁぁ～～っ！」

白い煙が内兎を包むと、その中から白く、真っ赤な瞳に眼鏡をかけた、一羽の小さなウサギが飛び出て、ピョンピョンと跳ねながら、アリスの後を追っていった。

「ウサギ…」
「“兎人”かぁ」
去っていった内兎に、門貴と由雉がポツリと呟く。

「ふぅ～っ」
アリスと内兎が去ったところで、疲れたように一息つきながら、改めて部屋の中へと入って来る太狼。
「まったくぅ、武国の姫君とハチ君を婚約だなんてぇ」
太狼がソファーのすぐ横で立ち止まり、呆れたような表情を浮かべる。
「いっつもいつもロクなことしませんねぇ～貴女はぁっ」
「何よっ！？その言い方はっ！！」

その呆れきった表情を向けられ、孔雀が怒鳴り返しながら、立ち上がる。
「別に私が決めたことじゃないわよっ！？向こうがそんな、大昔の約束出してきてまで、持ちかけてきたんだからっ！」
「……っ」
孔雀のその言葉を聞き、表情を曇らせる太狼。
「向こうって…“武国”が…？」
「そうよっ！」
聞き返した太狼に、孔雀が怒鳴るように答える。
「……まったくっ…」
そっと目を細めた太狼が、冷たい瞳を見せる。
「相変わらず…ロクなことをしない国だっ…」
「えっ…？」
煩わしそうに、吐き捨てるように言い放つ太狼に、孔雀が少し眉をひそめる。
「おいっ、輝矢っ、平気かっ？」
「……っ」
聞こえてくる桜時の声に、太狼が振り向く。するとそこには、ソファーに座り、深く俯いたままの輝矢を、不安げに覗き込む桜時たち三人の姿があった。
「輝矢ぁ～んっ、大丈夫ぅ～？」
「輝矢っ、一体どうしっ…」
「はいはいはいはぁぁ～いっ！」
『……っ』

次々と声を掛ける三人と、輝矢の間に、笑顔で勢いよく割って入る太狼。

「君たちはとっとと帰った帰ったぁ～っ！」
『えっ？』
右手のひらを動かし、帰宅を促す太狼に、三人が目を丸くする。

「いやぁっ」
「けどっ」
「いいから帰ってっ」
『はいっ…』

あれこれを意見をしようとした三人であったが、太狼の有無を言わさぬ力のある笑みに、頷くことしか出来ず、三人は大人しく、長官室を後にした。

「……っ」
三人が出て行ったことを確認すると、太狼がゆっくりと輝矢の方を振り返る。

「輝矢ちゃんっ…」
その場でしゃがみ込み、座っている輝矢と視線を合わせる太狼。

「……。」

しかし輝矢は両腕で肩を抱き、深く俯いたままで、太狼の呼びかけに、ピクリとも反応しなかった。

「はぁっ」

そんな輝矢に、太狼が少し溜息をつく。

「輝矢ちゃんっ！」
「えっ？」

太狼がもう一度、今度は強く名前を呼びかけると、輝矢がやっと気付いたようで、少し驚いたように顔を上げた。

「あっ…タローっ…」
「……。」

小さな声で、太狼の名を呟く輝矢。太狼がこの場に来たことを、今やっと認識したようである。そんな輝矢を見て、太狼が少し目を細める。

「大丈夫っ…？」
「……っ」

太狼がそう問いかけ、輝矢の頭を撫でると、輝矢はまた少し俯いた。

「……はいっ…」

大丈夫ではなさそうな返事を、小さく返す輝矢。

「ふぅっ…」

その輝矢の返事に、太狼が撫でていた手を下ろし、深々と肩を落とした。

「僕らも帰ろう、輝矢ちゃんっ」

太狼が、その場でゆっくりと立ち上がる。

「この部屋はどぉ～も空気が悪いっ」
「悪かったなっ」

太狼の言葉に、長官席の座黒が顔をしかめる。

「太狼っ、武国のことだがっ」
「……っ」
「んっ？」

真剣な表情となり、話をしようとした座黒の前に、太狼が制止を促すように、右手を突き出した。

「そのお話は、また後日っ」

鋭い瞳を見せた太狼が、座黒に反論を許さないように、そう言い放つ。

「さぁっ、帰ろうかぁ～輝矢ちゃんっ」
「はいっ…」

ソファーから立ち上がった輝矢の手を引き、太狼は輝矢とともに、足早に長官室を後にした。扉が閉まると、部屋に座黒、イチゴ、そして孔雀の三人が残る。

「ねぇ、お父様っ」
「んっ？」

ソファーから立ち上がり、真剣な表情を見せるイチゴに、座黒が顔を上げる。

「ごめんなさい。私っ、聞いちゃったの。牢戸知玖の事件の後に…」
「……っ？」
「お父様と太狼さんがっ…輝矢さんのこと、話しているの…」
「……っ」
イチゴの言葉に、座黒が眉をひそめる。
――――何があったのだ？お前が竹取輝矢を拾った、十年前のあの日にっ…――――
「……。」
話していた内容を思い出し、座黒がそっと表情を曇らせる。
「ねぇお父様っ、輝矢さんって、何者なのっ？」
イチゴが困惑した表情で、座黒に問いかける。
「あのアリスって人や武国と、どういう関係があるのっ？」
「……。」
問いかけを続けるイチゴに、険しい表情で俯く座黒。
「それは私にもわからん…」
「えっ…？」
首を横に振る座黒に、イチゴは意外そうな顔を見せた。
「でもっ…」
「太狼はああいう奴だ。肝心なことは何も話さん」
座黒が少し困ったように、肩を落とす。
「竹取輝矢が何者であるかを知るのは、太狼と、竹取輝矢本人くらいかっ」
「……。」
座黒のその言葉に、イチゴは少し考え込むように、下を向いた。

「言えるのは…」
「竹取輝矢には、あの桃タローが言わないほどの秘密がある、ってことくらいじゃないかしらっ？」
『……っ』
不意に言葉を挟む孔雀に、座黒とイチゴが、少し戸惑うように振り返る。
「まぁ私は、あの破天荒女が何者であろうと、どうでもいいけどぉ」
孔雀が、特に興味なさそうに、言葉を続ける。
「……。」
少し視線を下に向け、悩むような表情を見せるイチゴ。
「お父様っ」
「んっ？」
顔を上げるイチゴに、座黒が首を傾ける。
「私も、桜時さんと一緒に、武国に行ってきてもいいですか？」
「何っ…？」
思いがけないイチゴの言葉に、座黒はそっと眉をひそめた。
「オトポリが今、忙しい状態だというのは、理解してます。でもっ、それでも行きたいんですっ」
イチゴが座黒に、意志の強いまっすぐな瞳を向ける。
「何故だ…？」
「えっ？」
「何故、そこまで、武国に行きたい…？」
「……っ」
理由を問う父に、イチゴが少し躊躇うように顔を下げ、そしても

う一度、ゆっくりと顔を上げた。
「確かめたいのっ」
イチゴが、はっきりとした口調で答える。
「輝矢さんがっ…桜時さんに相応しい人かどうかをっ」
「イチゴっ…」
曇りのない想いを、どこまでもまっすぐな想いを、感じさせるそのイチゴの言葉に、座黒はそっと目を細めた。
「わかった。行って来いっ」
「ありがとうございますっ！」
許可を出す座黒に、イチゴが嬉しそうな笑顔を見せる。
「朱実桜時は牢戸知玖に狙われている。その辺りも重々、注意するようにな」
「はいっ！」
座黒の言葉にしっかりと頷くと、イチゴは足早に、長官室を後にした。
「まったくっ…」
イチゴが部屋を出ると、座黒が少し疲れたように肩を落とす。
「竹取輝矢にしろ、あれにしろっ…朱実桜時のどこがそんなに良いのかっ」
「父親としては複雑ですか？」
「まぁなぁ」
少し笑みを浮かべて問いかけてくる孔雀に、困ったような表情で

頷く座黒。
「ウチの娘たちはどうも、惚れた相手の為に、すべてを懸けてしまう所があって困るっ…」
「それが女というものです」
「はぁっ…」
ボヤくように呟いた座黒に、穏やかな笑みを向ける孔雀。孔雀の言葉に、座黒は深々と溜息をついた。
「しかしっ…」
座黒が、不意に真剣な表情を見せる。
「“武国”…か…」
「……っ」
そう呟く座黒に、孔雀もそっと、鋭い瞳を見せた。

第６４章　最後の国のアリス　★４

戻って、桃原家。
「グレーテル～っ、大袋に食料と水、適当に詰め込んでくれねぇ？」
「へっ？」
キッチンの入口から顔を出し、そう言い放つ桜時に、振り返ったグレーテルが、首を傾げる。
「食料とお水って、どこかへお出掛けですかぁ？ハチ様っ」
「ああっ」
不思議そうに問いかけるグレーテルに、しっかりと頷く桜時。
「ちょっと武国までっ」
「武国っ？」
桜時が口にした国の名に、グレーテルが眉をひそめる。
「どこにあるのですか？その国っ」
「えぇ～っとぉ」
グレーテルの問いかけに、桜時が考えるように腕を組む。

「どこだろっ…？」
「はいっ？」
しばらく考えた後、逆に問いかけ返してくる桜時に、思わず顔をしかめるグレーテル。

「場所もわからない国に、行こうとされているのですかぁ？」
「いやっ！そのっ！わかんねぇーけどっ、四大国の一つだってゆうし、聞けばっ…！」
「御伽界の最北だよぉ～っ」
「……っ？」

後方から聞こえてくる明るい声に、桜時が振り返る。

「“玄神山（げんじんざん）”ってゆう、超たっかい山の上ぇ～っ、歩きは結構、厳しいと思うなぁ～」
「タローっ」
桜時が振り返ると、オトポリ本部から戻ってきたのか、明るい笑顔を見せた太狼が立っていた。
「お前、いつ戻っ…」
「ハチ君、お婿入りしちゃうんでしょ～っ？ウチのタンスっ、持っていくぅ～っ？」
「いかねぇーよっ！！」
太狼の言葉を、全力で否定する桜時。
「えっ！？ハチ様っ、本当に結婚なさるんですかっ！？」
「しねぇっ！！」
驚きの声をあげるグレーテルに、またも強く否定をする桜時。
「俺はっ！婿入りしに武国に行くんじゃねぇっ！婚約を破棄しに行くんだっ！！」
「えぇ～っ？破棄ぃ～？」
太狼がどこか残念そうに、声をあげる。
「もったいないよぉ～？せぇ～っかく、四大国の国主様になれるチャンスなのにぃ～っ」
桜時を説得するように、言葉を続ける太狼。
「いいじゃなぁ～いっ！逆玉の輿っ！しかもハチ君が、僕の目の前から消えてくれるし、一石二鳥ぅ～っ！」
「どうせ、それが最大の理由だろっ…？」
楽しそうな笑顔を見せる太狼に、桜時が冷たい視線を向ける。
「んだよっ、あのアリスって奴のことっ、めちゃくちゃ睨みつけてたくせにっ」
「えぇ～？そうだっけぇ～？」
鋭く指摘する桜時に、太狼は誤魔化すように首を傾けた。

「それにっ…」
桜時がふと表情を曇らせ、下を向く。
「俺もっ…あいつはあんまり好きじゃないっ…」
――――ねぇっ？輝矢っ――――
輝矢を嘲笑うかのような言動。輝矢を見る、冷たい瞳。
――――アリスっ…――――
アリスと向き合った時に、輝矢が見せた、まるで怯えるような、そんな顔。
「えぇ～？結構可愛いのにぃ～ハチ君てば、もしかしてブサイク好きぃ～？」
「お前はっ、ちったぁ真面目に話が出来んのかぁっ！！」
調子のいい言動を続ける太狼に、桜時が苛立ちを全開にして怒鳴りあげる。
「大体、お前はっ…！って…」
怒鳴りあげようとした桜時が、ふと言葉を止める。
「そういやぁ、輝矢はっ？一緒じゃなかったのかっ？」
「ああぁ～っ」
「……っ？」
そう頷き、リビングの方を指差す太狼に、桜時が首を傾げる。
「海岸のトコぉっ、ちょっと歩いて来るってぇ～」

「……っ」
太狼の指差した方を振り向き、少し目を細める桜時。
「ちょっと出て来るっ…！」
「あっ！ハチ様っ！結局、食料はどのくらいっ…！」
駆け出していった桜時は、グレーテルが止める間もなく、桃原家の玄関を飛び出して行ってしまった。

「あぁ～あっ…行っちゃった…」
閉まった玄関を見て、グレーテルが少し肩を落とす。

「……。」
「……っ？」
横に立つ太狼の、どこか複雑そうな表情に、グレーテルが戸惑うように眉をひそめる。
「太狼様っ」
「んん～っ？」
グレーテルが呼びかけると、太狼はすぐに笑みを作って、振り返った。

「どうか…なさいましたか…？」
「……っ」
不安げに問いかけるグレーテルに、その作っていた笑みを、そっと止める太狼。

「うんっ…」
グレーテルから目を逸らした太狼が、遠い目をして、そっと微笑

む。

「少しっ…不安なだけっ」

そう言って太狼は、桜時の去っていった玄関を見つめた。

その頃、桃原家の屋根の上。

「大丈夫かなぁ～？輝矢ぁぁ～んっ」

「うんっ…」

モンキの言葉に、少し神妙な面持ちを見せて頷くユキジ。先程の輝矢は、今までモンキたちが見たことがないくらいに弱々しく、そしてひどく怯えていた。

「ねぇっ」

「んんっ？」

「門貴はさっ…気になったりしないのっ…？」

「何がぁ？」

「そのぉ～っ…」

聞き返すモンキに、少し躊躇いがちに声を繋ぐユキジ。

「輝矢っ…のことっ」

「そりゃあ、もうばりばり二十四時間、気になりまくってっ…！」

「そういうことじゃなくってっ！」

緩みきった表情で、嬉々として話すモンキに、ユキジが思わず怒

鳴りあげる。

「輝矢がっ…どこの誰かってことだよっ」

「……っ」

ユキジの言葉に、モンキがふと表情を曇らせる。

「どこの誰か…かっ」

少し考え込むように、ユキジの言葉を繰り返すモンキ。

「別にっ、あんまり気にならへんなぁ～俺、そういうのとか、こだわらん主義やしぃ～」

「まぁ単純おサルは、そうだろうねっ」

「がっびぃぃーんっ！！ユッキーっ！ひどいぃ～っ！！」

冷たく言い放つユキジに、モンキが泣きそうな表情となる。

「ボクも正直っ、自分以外のことなんて、どうだっていいんだけどっ」

「さすがユッキーっ！」

「けどっ…」

強く言い切ったユキジが、少し眉をひそめる。

「これからどうなるんだろうって、気になっちゃうんだっ。桜時はきっと、どうだって良くないだろうからっ…」

「……っ」

ユキジの言わんとしていることが理解でき、モンキがそっと目を細める。

「それにっ、あの女っ…」

――――ねぇっ？輝矢っ――――

輝矢を怯えさせた、冷たい瞳のアリスという少女。

「確かにっ…あの女には注意した方が良さそうやなぁっ…」

ユキジの言葉に、モンキは珍しく真面目な表情で頷いた。

――――だってぇっ、あんなことがあったんだものぉっ――――

あの瞳に、あの声に、すべてに、目を、耳を、すべてを塞ぎたくなる。

――――生きていなくてもぉ…いいんだよぉっ？――――

あの言葉に頷いて、この胸を貫いてしまいそうになる。

「……。」

海岸沿いに一人、立ち尽した輝矢は、どこか不安げな表情を見せて、静かな海を眺めていた。

「……武国っ…」

輝矢がそっと、最後の国の名を呟く。

「輝矢ぁぁっ！！」

「……っ」

よく聞き覚えのあるその声に、輝矢がゆっくりと振り返った。

「ハチっ」

「ふぃ～っ！」

輝矢のもとへと駆け込んできたのは、桜時であった。走ってここまでやって来たのか、少し苦しそうに息を乱している。

「輝矢っ、あのっ」

桜時が、少し上ずった声を発する。

「俺っ、武国に行くことにしたっ」

「……っ」

桜時が発したその国の名に、かすかに表情を動かし、少しの動揺を見せる輝矢。

「あっ！けどっ、婿入りしに行くわけじゃねぇーからなっ！婚約を破棄しに行くんだっ！」

慌てて、桜時が言葉を付け足す。

「って、俺、何を必死に言い訳じみたことをっ…」
「わかりました」
「へっ？」
必死に言い繕う自分自身に疑問を感じていた桜時が、素直に返って来る返事に、驚いたように顔を上げる。

「とっとと婚約破棄していただかないとっ。すぐに出ましょう」
「……っ」

笑顔でそう言い放つ輝矢を見つめ、眉をひそめる桜時。

「早速、準備をしないと。サルとキジにも、言ってきますねっ」
「あっ…」
輝矢が笑顔のまま言葉を続け、桃原家に戻ろうと、桜時の横を通り過ぎる。

「輝矢っ…！！」
「……っ」
強く呼び止められ、輝矢が思わず足を止める。

「何っ…ですかっ…？」

桜時に背を向けたまま、そっと聞き返す輝矢。

「あっ、えとっ、そのっ…」
桜時が少し躊躇うように、俯く。

「もしっ…もし武国に行くことでっ…」

――――あなたのぜぇ～んぶをっ――――

輝矢に、どこまでも冷たい瞳を向けたアリス。

「行くことでっ…お前が傷つくようなことがあるならっ…」

――――うっ…！――――

アリスの言葉に、怯えるように自分の肩を抱いた輝矢。

「お前はっ…行かなくてもいいぞっ…？」

「……っ」

桜時の言葉に、背を向けたままの輝矢が、少し指先を動かす。

「えっ…？」

少しの間を置いた後、輝矢がゆっくりと聞き返す。

「ほっほらっ！今回は別に鬼人退治ってわけでもねぇーしっ！四大国相手じゃ牢戸知玖だって、そう簡単には来ねぇーだろうしっ！サルや由雉もいるしっ！」

不自然なほどに明るく笑顔を作った桜時が、輝矢に迷惑をかけま

いと、必死に言葉を繋げる。

「だから大丈夫っ！」

強く言い切る桜時。

「俺はっ、お前がいなくても大丈夫だからっ！」

「……っ！」

その桜時の言葉に、背を向けたままの輝矢が、大きく目を見開く。

――――生きてなくてもぉ…いいんだよぉっ？――――

アリスの言葉が、頭を巡る。

――――お前は…――――

蘇る、過去。

――――お前の存在は…この世界には必要ない…――――

思い出される言葉は、輝矢の体を突き動かした。

「……っ！」

――――パシンっ…！――――

「えっ…？」

強く掴まれる、桜時の手。

「……っ！」

「……っ」

桜時の手を掴み、振り向いた輝矢は、今にも泣き出しそうな表情を見せていた。そんな表情の輝矢に、桜時が大きく目を見開く。

「あっ、えとっ…」

見たこともないその輝矢の表情に、桜時が戸惑うように声を漏らす。

「輝矢っ…？」

「あっ…」

明らかな動揺を見せる桜時に、輝矢がハッとなって、その泣き出しそうだった表情を消し、慌てて、掴んでいた桜時の手を離す。

「すっ…すみませんっ…」

両手を後ろに回し、少し俯いて謝る輝矢。

「あのっ…輝っ…」

「私は大丈夫ですっ」

「……っ」

話しかけようとした桜時の言葉を遮り、大きな笑顔を作った輝矢

が顔を上げる。無理に作られたということが、見て取れるその笑顔に、桜時が目を細める。

「ちゃんとっ、一緒に行きますからっ、だからっ…」

輝矢がそっと、視線を落とす。

「……お願いっ…」

「えっ…？」

「いえっ」

ポツリと落としたその言葉を、伝えることなく、輝矢は再び、桜時に笑みを向けた。

「さぁっ、では早速、準備をしましょうっ」

そう言って笑い、輝矢が再び桜時に背を向けて、桃原家の方へと足早に歩き去っていってしまう。

「……。」

だが、桜時はその場に立ち止まったまま、輝矢を引き止めることも、追いかけることもしなかった。ただ悲しげな表情で、遠ざかっていく輝矢の背中を見つめる。

――――……っ！――――

今にも壊れてしまいそうだった、振り返った時の輝矢の表情。

「あんな顔見せといてっ…」
桜時が強く、拳を握り締める。
「なんでっ…“大丈夫”だなんて言うんだよっ…」
桜時の悲しげな声が、打ち寄せる波の音に、掻き消された。

「ああっ！お帰りなさいませっ！輝矢様っ！」
「……っ」
「輝矢様っ？」

桃原家へと戻った輝矢は、出迎えたヘンゼルの前を素通りし、足早に二階へと上がって、自分の部屋へと入った。

「……。」
部屋に入った輝矢が、部屋の扉に背中を合わせ、そっと天井を見上げる。

――――お前の存在は…この世界には必要ない…――――
――――生きなくてもぉ…いいんだよぉっ？――――

頭を巡る、“否定”の言葉。

――――輝矢っ！――――

“肯定”をくれる、その笑顔。

――――俺はっ、お前がいなくても大丈夫だからっ！――――

「……っ」

思い出される桜時の言葉に、輝矢が力なく、しゃがみ込んでいく。

「お願いっ…」

俯いた輝矢が、震えた声を漏らす。

「“いなくても”なんてっ…言わないでっ…」

小さな部屋の中で、その声は、切なく響き渡った。

御伽界北方。四大国が一、武国。
「ふぅっ、着いた着いたぁっ」
大きな黒い門の前に、赤色のオートバイが止まると、少し伸びをしながら、アリスが降り立った。
「内兎っ」
「あっ、はいっ！」
オートバイの荷台から、一羽のウサギが飛び降りる。

――――ボォォォォォ～～ンっ！――――

ウサギが白い煙に包まれると、次の瞬間、眼鏡の青年・内兎が姿を現した。

「お茶とお風呂とゲームと花火の用意してぇっ」
「えっ？お茶とお風呂とゲームと花火ですか？」
アリスの言葉を、内兎が目を丸くして、聞き返す。
「そうっ」
「ですがその四つ、どう考えても同時には出来ないようなっ…」
「いいから早くっ！三分以内っ！」
「あっ！はっはいぃぃ～～っ！！」
四つとも一気に準備をしなくてもいいのではないかと、訴えようとした内兎であったが、アリスが強く言い放つと、慌てて頷いて、門の中へと駆け込んでいく。

「ったくっ、ノロマっ…」
「あっ、アリス様っ」
アリスが嫌気がさしたような様子で呟いていると、門の中に入ったばかりの内兎が、思い出したように足を止め、アリスの方を振り返った。

「何っ？」
「あのぉ、そのぉっ…」
「とっとと言いなさいよっ！殺されたいのっ！？」
「はいぃ～っ！アリス様と竹取輝矢さんは、お知り合いなのですかぁっ！？」

躊躇うようにしていた内兎が、アリスに脅され、早口で必死に問いかける。

「そうよぉっ」
「そうだったのですか…知りませんでした」
内兎が少し、意外そうに呟く。
「何っ？あなたに私の知り合いについてを、全部話しておく必要でもあるわけっ？」
「いえっ！そういうことではっ…！」
責め立てるように問いかけるアリスに、内兎が慌てて首を横に振る。

「面白そうなオモチャとは、竹取輝矢さんのことだったのですか？」
「えええぇっ」
「朱実桜時さんと婚約したのは、竹取輝矢さんと会いたかったからですか？」
「さぁっ」

次々と問いかける内兎に、アリスは適当に、短く答えていく。

「アリス様は…竹取輝矢さんがお嫌いなのですか…？」
「……っ」

内兎のその問いかけに、アリスがそっと目を細くする。

「えぇぇっ、そうねぇっ」

ゆっくりと頷くアリス。

「それはもぉっ、殺したいほどにっ」

そう言って、アリスは、とても楽しそうに微笑んだ。

第６５章　かぐや姫のヒミツ　☆１

龍国に、桜時の婚約者となった玄上アリスが現れたその日。
桜時はその婚約を破棄するため、輝矢たちとともに、アリスの国・“武国”へと向かうことを決めた。
そう、四大国、最後の国・“武国”へと…。

龍国・エセお菓子の家こと『桃原家』前。
「さぁっ！どうぞ乗って下さいっ！桜時さんっ！」
「あっ、ああっ…」
満面の笑顔を見せるイチゴに、少し引きつった表情を見せながら頷くハチ。桃原家の前に停まっているのは、オトポリの黒のオープンカーであった。
「でっでもいいのかぁ？婚約破棄なんて、すっげぇ個人的な問題なのに、オトポリの車に乗らせてもらってぇ」
「桜時さんをお守りすることは、オトポリの任務の一環ですからっ」
「ふぅ～んっ…しっかし…」
まだ腑に落ちない表情を見せながら、ハチがゆっくりと視線を移す。
「羊スケまでっ…」
「うぃ～っスっ！」
停まっているオープンカーの運転席には、いつもの軽い口調の羊スケの姿があった。
「私が運転出来ないから、羊スケさんに頼んだんです」
イチゴが微笑みながら、ハチに答えるように言う。
「私が龍化して飛んで行こうかとも思ったんですけど、桜時さんっ、高い所苦手ですしっ」

「それは確かに、車のんが有難いかもっ…」
イチゴの言葉に、ハチがしみじみと頷く。
「それに輝矢さんたちの旅の運転手といえば、俺じゃないっスかっ！」
「そうでしたっけ？」
親指を突き立て、明るく言い放つ羊スケに、輝矢が冷たい視線を送る。
「けぇどイチゴちゃんってことは、まぁ～だゴンゴン、お料理教室から帰って来てへんのぉ～っ？」
「へぇっ！？」
モンキの問いかけに、羊スケがひっくり返った声を出す。
「そっそそそそそうなんスよぉ～っ！なぁ～んか昆布だしに、こっちゃってるみたいでぇ～っ！」
「この忙しい時に迷惑なキツネだねぇ～」
「まぁ俺はゴンゴンより、イチゴちゃんのんが嬉しいけどぉ～っ！」
終始上ずる羊スケの言葉に、何の疑問も持たずに呆れた表情を見せるユキジと、イチゴへ向けて満面の笑みを浮かべているモンキ。

「ではとっとと行きましょうか」
「喜んでぇっ！」
「えええぇ～っ？」
「……。」
『……っ？』

輝矢の声に、返って来る二つの返事。いつも聞こえてくるはずの、もう一つの返事が返って来ず、モンキとユキジが不思議そうに振り向く。

「桜時っ？」
「えっ？あっ、ああ。行くかっ」

『……っ？』

何か悩み込むような表情を見せていたハチが、ユキジの声に顔を上げ、頷く。だがその頷きも、あまり気持ちの入っていない返事で、モンキとユキジはさらに首を傾げた。

「……。」

――――私は大丈夫ですっ……――――

俯くハチの、脳裏を過ぎる、輝矢の笑顔。

「……っ」

俯いたままのハチを見て、輝矢が少し目を細める。

――――俺はっ、お前がいなくても大丈夫だからっ！――――

「……。」

昨日の桜時の言葉を思い出し、輝矢はそっと目を伏せた。

「さぁっ、とっとと乗りますよっ」

「へぇっ？あっ、おうっ」

足早に後部座席に乗り込んでいく輝矢に、その言葉に頷いたものの、どこか戸惑った表情を見せるモンキ。

「何っ？何かあったのぉ？」

「……別にっ…」

少し眉をひそめて問いかけるユキジに、ハチが素気なく答え、後部座席へと飛び乗る。

『……っ？』

残ったモンキとユキジが、目を見合わせ、ゆっくりと首を傾ける。

「……っ」

イチゴもそんな二人の様子に目を細めながら、助手席へと乗り込んだ。

「……。」

家の前から発進していくオープンカーを、キッチンの窓から見つめ、神妙な表情を見せる太狼。

「よろしいのですか？太狼様」

「輝矢様を行かせてしまっても…」

太狼の後方から、ヘンゼルとグレーテルが、どこか不安げな表情で問いかける。

「時が来たのかも知れない…」

『えっ…？』

ポツリと呟く太狼に、二人がそっと眉をひそめる。

「すべてが…明らかになる時が…」

そう言った太狼は、どこか悲しげな瞳を見せていた。

御伽界最北に位置する、巨大な山“玄神山”。
御伽界最高峰のその山は、“かつて神が住んでいた”とされるほど、天に近い。
その山の頂上に、“武国”は存在した。

『ふわあぁぁっ…』

オープンカーから降り立ったハチたち三匹と、羊スケ、イチゴは皆、一斉に声を漏らした。

「すっ…すげぇ…」
「ここが…武国っ…」

目の前に広がっているのは、まさに“王国”であった。同じ形をした、石造りの白い家が立ち並び、行き交う人もまた、同じ民族衣装に身を包み、どこか気品ある口調で会話をしながら、穏やかに微

笑んでいる。入口の門から続く、白い柱の等間隔に並んだまっすぐな道は、国の最奥に見える、大きな黒い屋敷まで伸びている。

“龍”や“雀”は国とは言っても、やはり“町”のような、賑やかで騒々しい所であったが、この国は、国全体を神聖な空気が包んでいるような、そんな感じであった。

「ふっはぁ～っ！何かホンマに神様でもおりそうな感じやなぁ～っ！」

大きく口を開き、間の抜けたような表情で武国内を眺めるモンキ。

「よしっ！」

「……っ？」

急に両手で、毛並みを整え始めるモンキに、横を飛んでいるユキジが眉をひそめる。

「何やってんのぉ～？」

「きっれいな国やからっ、入る前に見た目、良くしとこう思てなぁっ！」

「無駄な努力はやめなよっ」

「がびぃぃぃぃーーんっ！！」

ユキジの言葉に、モンキが激しく傷つき、毛並みを整えていた両手を、力なく下ろす。

「まぁボクはすでに可愛いからっ、努力する必要もないけどねぇ～っ」

「はぁっ…」

自分の可愛さを強調するユキジの横で、深々と溜息をつくハチ。

「イチゴさんは、同じ四大国の青守一族ですしっ、やっぱ武国にも来たこと、あるんスかぁ～っ？」

「いえっ…」

羊スケの問いかけに、イチゴがすぐさま首を横に振る。

「私も来たことはありませんし、お父様も武国には来たことがない

と言っていました」
「へぇ〜？長官でも来たこと、ないんスかぁ〜っ」
意外そうに声を出す羊スケ。ある程度の国交がある上に、同じ四大国であるのだから、国主同士の行き来はあるものだと考えるのは確かである。
「ハチ君はぁっ？」
「俺も初めてっ。そういや孔雀サンも行ったことないとか言ってたっけなぁ」
羊スケの問いかけに答えながら、ハチがゆっくりと首を傾ける。
「へぇ〜っ、じゃあ武国行ったってこと、結構自慢になるんじゃないっスかぁ〜っ？」
「自慢…ねぇっ…」
どこか嬉しそうな笑顔を見せる羊スケに、少し肩を落としながら、ハチがゆっくりと視線を動かし、前に立っている輝矢を見上げる。
「……。」
「……っ」
神妙な表情で武国を見つめている輝矢に、そっと眉をひそめるハチ。
「何か…」
「へっ？」
急に声を出す輝矢に、見つめていたハチが目を丸くする。
「何か来ます」
「何かって…」
――――パァァァーンっ！！――――
「うおぉっ！」

「なっ何やぁっ！？」

大きな音とともに、辺りに飛び散る色とりどりのリボンに、ハチとモンキが思わず声をあげる。

『じゃんじゃかじゃんじゃんじゃぁ～んっ！』

『はっ…？』

周囲にリボンを飛ばしながら、武国の中から出て来たのは、明るい声を揃えた二人の青年。前髪の分け目と服の色こそ違えど、後は瓜二つ。どうやら双子のようである。

「僕の名前は左助（さすけ）っ！」

「僕の名前は右助（うすけ）っ！」

二人が互いの手を取りながら、弾む口調でポーズを決める。

『二人合せてっ、“真正面”っ！！』

「よくわかんないネーミングっ…」

左助と右助の自己紹介に、早速、呆れた表情を見せるユキジ。

「神聖なる武国へようこそぉ～っ！」

「ただいまからぁ～貴方がたが武国に入るのに相応しい人間かどうかぁ～」

二人がポーズを崩し、輝矢たちの方を見る。

『“入国審査”したいと思いまぁ～すっ！』
「審査ぁ～っ？」

勢いよく指を差され、思わず顔をしかめるハチ。いかに四大国といえど、入国を審査するというのは、龍や雀ではないことである。

「入国に審査までいんのかよぉ～？武国ってっ」
「面倒ですねぇ」
驚くハチの横で、輝矢が腕を組む。
「面倒なんで、あの二人をぶっ倒っ…」
「やめいっ！！」
「絶対、不法侵入になりますよ…輝矢さんっ…」
早くも左助と右助を倒そうとする輝矢を、ハチが勢いよく止め、イチゴが呆れたように頭を抱えた。

「龍国主・青守座黒様のご息女、青守イチゴ様」
「えっ…？」
「雀国主・朱実孔雀様の甥子・朱実桜時様」
「へっ？」
真正面の二人にそれぞれ名を呼ばれ、ハチとイチゴが戸惑うように顔を上げる。
『そして竹取輝矢様っ』
「……っ？」
二人が声を揃えて輝矢の名を呼び、輝矢もまた、顔を上げる。
『入国の許可が出ておりまぁ～すっ！どうぞお入り下さぁ～いっ！』
「へっ？許可っ？」
「もう…出たんですかっ…？」
『はいっ！』
二人の言葉に、ハチとイチゴが目を丸くする。

「まぁいいじゃないですか。出たものは出たんですし、とっとと中へ入りましょう」
「そうやなぁ～っ！」
特に許可が出た理由を気にすることなく、武国内へと足を踏み入れていく輝矢に、付いていくようにして、武国内に入ろうとするモンキ。

『お待ち下さいっ』
「のはあぁぁっ！！」
「サルっ！」

輝矢の後を付いていたモンキに、左助と右助が、勢いよく剣を突き出す。立ち止まり、声をあげるモンキに、思わず身を乗り出すハチ。

「我々が入国の許可を出したのは、竹取様、朱実様、青守様の三名のみっ」
「猿川様、由雉様、羊スケに入国許可は、出ておりません」
「へぇっ！？」
「ボクまでぇっ！？」
「ってか、俺だけ“様”付いてないっス…」

二人の言葉に大きく驚くモンキ、ユキジと、こっそり突っ込みを入れる羊スケ。

「なんでぇっ！？なんで俺らはあかんのやぁっ！？」
「そうだよぉ～っ！アホで間抜けなおサルさんはともかく、なんで可愛いボクまでぇ～っ！」
「がびぃぃ～んっ！ユッキーっ！ひどいぃぃ～っ！」
身内モメもしながら、モンキとユキジが、左助たちに必死に問い

かける。

「猿川門貴様っ、猿の村出身っ」
「由雉様っ、幸ノ街出身っ」
『へっ？』
急に出身地をあげられ、目を丸くする二匹。

『もぉ～庶民も庶民っ！庶民の中の庶民っ！』
『んなっ…！？』

まるでバカにするように“庶民”という単語を連呼する二人に、モンキたちが思いきり顔を引きつる。

「何やねんっ！言わせておけばぁっ…！」
「村に居た頃は、誰も手に負えない程の暴れザルっ！善良なカニの皆さんに暴力振るったこと、ありありっ！」
「うっ…！」
言い返そうとしたモンキが、さらに言葉を続ける左助に、思わず黙り込んでしまう。

「由雉様は幸ノ街の住人・ミチル様に拾われたものの、それ以前の生い立ちは不明のハグレキジっ」
「なんでっ…そんなことまでっ…」

「……っ」
右助の言葉に、顔をしかめるユキジ。その横で、輝矢もそっと眉をひそめる。

『羊スケ様のご説明もしましょうかぁ～？』
「俺、傷つきたくないんで、結構っス…」

二人の問いかけを、羊スケが丁寧に断る。

「確かに暴れザルやったんは認めるけどっ、俺らはなぁっ…！」

「わかりました」

「ふへっ？」

さらに抗議を続けようとしたモンキの前に輝矢が立ち、モンキの言葉を遮って、左助たちに同意をする。

「武国へは私たち三人のみで行きましょう」

「ええぇっ！？そないなぁっ！輝矢ぁぁ～んっ！」

頷く輝矢に、不服そうに声をあげるモンキ。

「俺たちも一緒にっ…！」

「庶民の皆さんは、ここで大人しくしていて下さい」

「がはぁっ！！庶民っ！！」

輝矢にまで庶民を言われ、モンキが激しくショックを受ける。

「俺は別に車も見とかなきゃだし、いいっスけどぉ～」

「輝矢っ」

特に問題なく待つことを受けとめる羊スケに対し、ユキジは顔をしかめ、羽根を翻して、輝矢の肩の上に止まる。

「いくら何でもおかしいよっ。ここまでボクらのこと、調べてるなんてっ」

ユキジが嘴を動かし、輝矢の耳元で小声で囁く。

「入国許可とかいって、ボクらを分断しようとしてるとしかっ…」

「だからといって、ここで大暴れするわけにもいかないでしょう？」

険しい表情を見せるユキジに、冷静に言い放つ輝矢。

「また、自宅謹慎になってしまう」
「そこっ…？」
武国がどうこうよりも、龍国に戻ってからの処分を気にしている輝矢に、呆れた視線を送るユキジ。
「大丈夫です。何かあったら、呼びますから」
「呼ぶったって…」
「信用していますよっ、キジ」
「……っ」
穏やかに微笑みかけてくる輝矢に、ユキジは、不安は残るものの、それ以上の言葉を呑み込む。
「輝矢ぁぁ～んっ！俺のことはぁ～っ？」
「ハイハイっ、信用していますよっ、庶民っ」
「だはぁぁっ！また庶民て言うたぁ～っ！」
二度目の庶民コールに、またもショックを受けたモンキが、両手で頭を抱える。
「では行きましょうか、ハチ、イチゴ」
「えっ？あっああ」
「はい」
肩の上からユキジを飛ばせた輝矢が、ハチとイチゴに声を掛ける。
『ああ、お待ち下さい。朱実様っ』
「……っ？」
輝矢とイチゴに続くようにして、武国への門を潜ろうとしたハチ

が、その一歩手前で、左助と右助に呼び止められる。

「何だ？」

『武国内での獣化姿は、出来る限りやめていただきたいのです』

「えっ…？」

『……っ？』

二人の言葉に、ハチをはじめ、皆が一斉に眉をひそめる。

「獣化は…やめろって…？」

『はい』

「何でやぁ～？まっさかこの国も町人が獣人嫌いとかぁ～？」

聞き返したハチに、大きく頷く二人。そんな二人へ、モンキが問いかける。

「そういうわけではありませんよ」

「ただ、あまり町人を驚かせて、騒ぎを起こしたくないだけです」

『えっ…？』

右助の言葉に、目を丸くするハチたち。

「この国で獣人って、そんなに珍しいのかっ？」

『ええっ』

問いかけたハチに、二人が笑顔で頷く。

『何せっ、一人もいないですからっ』

「えっ…？」

『一人もっ？』

二人の言葉に、ハチたちがさらに驚く。昔でこそ、獣人という種は希少なものであったが、時が経つほどにその数は増え、今ではその数は御伽界の人口の半数近くを占める。獣人の住んでいない町と

いうのも、ほとんどなくなってきたはずであった。

「えっ？けどっ…！」

少し輝矢の方を振り向きながら、戸惑いの表情を見せるハチ。

――――やはりお前も“獣人”か…――――

頭を巡る藍鬼の言葉。

――――あんなことがあったんだものぉっ――――

アリスのあの言葉からして、輝矢がアリスと武国に何か関係を持っていることは間違いない。だが輝矢は獣人のはずだ。武国に獣人がいないというのであれば、輝矢は武国の人間というわけではないのであろうか。

「……。」

先頭に立つ輝矢が、そっと厳しい表情を見せる。

「じゃっじゃあっ、武国を治めてる“武人”ってのはっ…！」

「ハチ」

「……っ？」

左助たちにさらに問いかけを続けようとしたハチの声が、輝矢の呼びかけに遮られる。

「彼らの言う通りに」

「えっ…？」

少しだけ振り返った輝矢のその声は、まるで制するかのような、有無を言わさぬそんな声。これ以上の問いかけを許さないと言っているような、そんな声であった。

「……あっああっ」

――――ボォォォォ～ンっ！――――

大人しく輝矢の言うことに頷いたハチが、白い煙に包まれ、人化をする。

「これでいいか？」

『はいっ、結構ですっ』

人化した桜時の問いかけに、満足げに頷く左助と右助。

「では行ってきますので、大人しく待っていて下さい、庶民諸君っ」

「だはぁっ！また庶民て言うたぁっ！」

モンキに再びショックを与えながら、輝矢は桜時、イチゴとともに、左助と右助に促されるようにして、武国内へと入っていった。

「ちぇ～っ」

門の前で取り残されたモンキが、どこか拗ねるように口を尖らせる。

「庶民は入れへんてっ、どっかの高級レストランかいなっ！この国はっ！」

モンキが少し怒ったような口調で言い放つ。

「あぁ〜っ！あるっスよねぇ〜っ！ペット禁止のマンションとかぁ〜っ！」
「君って、例えまで、頭悪そうだよねぇ…」
笑顔で話す羊スケに、呆れた視線を送るユキジ。

『仕方ありませんよ』
「へっ？」
拗ねて座り込んでいたモンキが、上から降って来る声に顔を上げる。
『ここ、武国を治めているのは…』
声を揃えた左助と右助が、どこか遠くを見つめるような瞳で、武国内を眺める。

『御伽界で最も尊く、最も気高い一族ですからっ…』
「……尊いっ…？」
「……っ」

二人の言葉に、モンキとユキジはそれぞれ、表情を曇らせた。

第６５章　かぐや姫のヒミツ　☆２

一方、武国内に入った輝矢たち。

『ざわざわざわざわっ…』

「……。」

周囲から聞こえてくる、あからさまにザワついた声と、降り注ぐ冷たい視線に、桜時が少し顔をしかめる。町へと踏み込んだ途端に、輝矢たち三人は、町人たちの注目の的となっていた。歓迎というよりは、不審がられている感じである。

「獣化姿じゃなくたって、十分、目立つじゃねえーかよっ」

「あれだけ警備が厳重ですからね。来訪者が余程、珍しいのでしょう」

「……。」

前を歩く輝矢と桜時の会話を聞きながら、ふと横の町人たちに目を移すイチゴ。

「ねぇっ、あの黒髪の子っ…」

「まさかっ…あの時の子じゃっ…」

「……っ」

かすかに聞こえてくる話し声に、イチゴがそっと眉をひそめる。

「私たちを見ているというより…輝矢さんだけを見ているような…」

『あっ』

「……っ？」

小声で呟いていたイチゴが、前方を行く二人の声に、顔を上げる。
イチゴが顔を上げると、輝矢と桜時は道の途中で足を止め、前方を見つめていた。

「……っ？あっ」
「お待ちしておりました、朱実桜時様」

イチゴも二人の見ている先へと目をやると、そこには見覚えのある眼鏡の青年が立っていた。

「アナタは確かっ…」
「はいっ、アリス様の従者で、餅月（もちつき）内兎と申します。竹取輝矢様っ」
「……っ」
内兎に笑顔で名を呼ばれ、輝矢が少し驚いたような表情を見せる。

「アリス様の命により、玄上の屋敷まで案内させていただきます。こちらへどうぞっ」
「あっ、ああっ」
穏やかな笑顔を見せ、行く先を手で示して案内をする内兎に、桜時が少し戸惑いながらも頷き、三人が内兎の後へと続いていく。

「んっ…？」
前を歩く内兎の、ベルトにぶら下がっている銀色の時計が、またも桜時の目につく。

「時計っ…」

不思議な空気を感じるその時計を見つめ、そっと目を細める桜時。

「こちらです」
「……っ」

内兎の声に、桜時が顔を上げる。だが、案内といっても、行く先は想像が出来た。門から続くまっすぐな道の先、この国の最奥に見える、大きな黒い屋敷。あれが玄上の屋敷であろうと、桜時には予想がついていたからだ。

「こちらが武国主・玄上の屋敷となっております」
案の定、内兎が三人を連れてきたのは、その黒い屋敷の巨大な門の前であった。

「内兎です。客人を連れて参りました」
内兎が門を軽く叩き、中へ向けて声を掛ける。
「合言葉はっ？」
「……っ？」
門の中から返って来る声に、思わず目を丸くする桜時。
「合言葉まであんのかよっ」
「本当に警備が厳重なんですね…」
桜時とイチゴが、驚いた表情を見せる。

「合言葉はっ…」
内兎が眼鏡を光らせ、真剣な表情を見せる。

「“隣の客はよく柿食う客だ”」
「そりゃっ、早口言葉だろうがっ！！」
「よしっ」
「いいのかよっ！！」

内兎の合言葉に突っ込んでいた桜時が、すんなりと開いていく門に対しても突っ込みを入れる。

「いっやぁ～初めは大変だったんですぅ～っ、僕、滑舌悪いもんだからっ！」

「あっそっ…」

開いた門から中庭を通り、屋敷の方へと歩きながら、笑顔を見せる内兎に、呆れた表情を見せる桜時。門を抜けてみると、その敷地は予想よりも遥かに広く、目の前にある屋敷の他に、何個か別の屋敷も建っていた。

「ウチよりでけぇかなぁ？」

「ウチとは同じくらいですねぇ…」

「皆さん、お金持ちなんですねっ…」

その広大な屋敷に、大して驚いてもいない桜時とイチゴに対し、今度は内兎が呆れた表情を見せる。

「……。」

屋敷を見回し、そっと目を細める輝矢。

「……っ」

ふと正面を向いた輝矢が、一気に険しい表情となる。

「……っ？輝矢っ？」

輝矢の表情の変化に気づき、桜時が少し首を傾ける。

「……アリスっ…」
「えっ…？」

そっとその名を口にする輝矢に、桜時がゆっくりと輝矢の見ている方を見る。

「あっ…」
「お待ちしておりましたわぁっ、朱実桜時様ぁっ」

桜時が視線を移すと、正面の屋敷の入口から、満面の笑顔を見せたアリスが、こちらへと歩いて来ていた。

「待ちくたびれてぇ、七並べを三千四十八回もやってしまいましたわぁっ」
「すっげぇ暇だったんだなっ…」
目の前へと立ったアリスに、桜時が引きつった笑みを浮かべる。

「輝矢も、ようこそっ…」
「……ええっ…」

冷たく微笑むアリスに、そっと目を逸らすように頷く輝矢。

「……っ」
そんな二人の様子を見て、桜時が少し目を細める。

「あっ、アリス様ぁ～っ、ただいま戻りまっ…」
「遅いっ！」
「ぎゃあああああああっ！！」

「えぇぇぇっ！？」
笑顔で駆け寄っていった内兎を、いきなり何の躊躇いもなく、勢いよく蹴り飛ばすアリスに、桜時が目の玉が飛び出そうなほどに驚く。

「痛たたたたっ…」
「私が指定した時間より、二十三秒遅かったわぁっ！」
蹴られた腹部を押さえて、起き上がる内兎に、アリスが冷たく言い放つ。

「もっ申し訳っ…」
「謝ったって許さないっ、もう死んでっ？」
「だっからお前っ！そういう言い方はなぁっ…！」
「わかりました、死にます」
「だっからお前も早まるなっつってんだろうがっ！！」

謝ろうとした内兎に、さらに冷たい言葉を投げかけるアリスに注意をし、そのアリスの言葉にあっさりと従って死のうとする内兎にも突っ込みを入れる桜時。

「アリス様のご命令なんですぅ～っ！」
「命令だからって何にでも従うんじゃねぇっ！！ボケぇぇっ！！」
身投げをしに行こうとする内兎を必死に止めながら、桜時が強く怒鳴りあげる。

「あっ、そうだぁっ」
ポンと手を叩き、何かを思いついたような表情を見せるアリス。

「貴方にはこの後、客人の案内をしてもらわなきゃいけないからぁ、

やっぱり死ななくていいわっ、内兎っ」
「はい、わかりました」
「だはあああぁぁぁっ！」

またも笑顔を咲かせて言い放つアリスに、あっさりと従って、死にに行こうとするのをやめる内兎。必死に止めていた桜時が、力の行き場を失くして、その場に思わず倒れ込む。

「だっ大丈夫ですかっ…？桜時さんっ…」
「俺、もうアイツら、ヤだっ…」
イチゴが心配するように声を掛ける中、ポツリと呟く桜時。

「では桜時様っ、早速で申し訳ありませんけどぉ、私の父と会っていただけますかぁっ？」
「へっ？あっ、おうっ」

アリスの問いかけに、慌てて頷き、桜時がすぐに立ち上がる。アリスの父に会い、婚約を解消してもらうために、わざわざ武国まで出向いたのである。

「ではこちらへっ」
桜時に、正面の屋敷を指し示すアリス。

「内兎はその間、お二人に屋敷内の案内をしてあげてぇっ」
「あっ、はいっ」
アリスの命に、大きく頷く、先程まで死のうとしていた内兎。

「まぁでもぉっ」
アリスがふと瞳を鋭くし、輝矢の方を見る。

「貴女には案内なんて、不要かしらぁっ？」
「……。」
どこか試すように問いかけるアリスに、輝矢が少し眉をひそめる。
「……っ」
そんな輝矢を、心配するように見つめる桜時。

「では桜時様ぁっ、こちらへどうぞぉっ」
「あっ、ああっ」
アリスがそう言って、桜時を招くように、正面の屋敷の入口へと歩いて行く。アリスに頷きを返しながら、桜時が足早に動き、イチゴのすぐ横へと歩み寄る。

「イチゴっ」
「はいっ…？」
小声で呼びかけられ、イチゴが少し戸惑うように顔を上げる。

「輝矢のことっ、頼むっ」
「えっ…？」

思いがけない桜時の言葉に、イチゴが驚きの表情で顔を上げる。

「……っ」
しかし、目の前にある、その桜時の真剣な表情に、イチゴはそっと目を細めた。

「わかりました」

イチゴが、その言葉にしっかりと頷く。

「悪いっ…」

イチゴにポツリと謝罪の言葉を落とすと、桜時はアリスの後を追って、正面の屋敷の中へと入っていってしまった。中庭に輝矢とイチゴ、そして内兎の三人が残る。

「あぁ～っ、ではっ、別邸の方を一つずつ、ご案内しっ…！」
「私は結構ですので、イチゴだけ案内してあげて下さい」
「えっ？」

張り切って案内をしようとした内兎の、出だしの言葉を早速遮り、そう言い放った輝矢が、敷地内の右奥の方へと、どんどんと歩いて行ってしまう。

「あっ！ちょっ…！待って下さいっ！」
内兎が、慌てて身を乗り出す。

「この屋敷っ、バカ広い上に複雑な造りでっ、初めて来た方にはとてもっ…！」
「大丈夫です」
「……っ」

輝矢は穏やかな笑みでそう言い切ると、あっという間に敷地の奥へと、姿を消してしまった。

「あぁ～あっ…またアリス様に怒られちゃうっ…」
「あのっ、内兎さんっ…」
「はいっ？」
困ったように頭を抱えていた内兎が、イチゴに呼びかけられ、振り向く。
「輝矢さんは、この玄上家と、何か関係があるんですか？」
「えっ…？」

そのイチゴの問いかけに、内兎は少し驚くような表情を見せた。
輝矢の仲間であるイチゴが、輝矢を不審がるような問いかけをしたのだから、無理もない。

「すみません。僕はここへ来てからまだ日が浅いもので、竹取様のことはっ…」
「そう…ですかっ…」
言葉を濁す内兎に、イチゴが少しがっかりしたように俯く。

「ですがっ…」
「……っ？」
内兎が言葉を付け加えると、俯いていたイチゴがゆっくりと顔を上げた。

「アリス様は…竹取様が“嫌い”と、そう仰っていました…」
「嫌いっ…」

どこか浮かない表情で話す内兎に、イチゴが眉をひそめた。

イチゴと内兎と別れた輝矢は、玄上家の敷地内を一人、歩いていた。入り組んだ外庭を、迷うことなく進んでいく。まるでよく知る道を、歩むように。

「……。」

渡り廊下を抜け、屋敷に囲まれた広場のような中庭に出ると、輝矢はそこで足を止めた。中庭の中央に、大きな噴水がある。

「変わりませんね…」

輝矢がどこか懐かしむような瞳で、その噴水を見つめる。

――――あの国との接触は、まだ早いっ…――――
――――それとも、あの国に行くかいっ？――――

必死に遠ざけてきた、国。

「遠ざけてきたわりに、随分とあっさり来てしまいましたねっ」

輝矢がふと、皮肉ったような笑みを浮かべる。

「またここに…来る日が来ようとは…」

その声は、どこか悲しげに、響き落とされた。

第６５章　かぐや姫のヒミツ　☆３

「ここが玄上の第一邸っ、国主の間と、他にも客人用のお部屋がいくつかありますわぁっ」
「……。」

アリスとともに門を入ってすぐの屋敷に入った桜時は、廊下を進みながら、アリスの説明を聞いていた。屋敷の外壁は、どれも統一された黒色であったが、中は白を基調としており、明るい雰囲気であった。床には金色の刺繍の入った赤い絨毯が敷かれており、まるで城の中のようである。幅広い廊下の両側にも、高級感漂う骨董品が、いくつも展示されていた。

「ああそれから、見ての通り、年代ものの壺やら絵画やらも、ぜ～んぶこの屋敷にっ…」
「お前さっ」
「……っ」
遮る桜時の声に、アリスが言葉を止めて、振り返る。

「お前っ、あの内兎ってヤツにすぐ、“死ね”とか言うの、やめろよ」
「えっ…？」

その言葉が意外だったのか、アリスは少し驚いたような表情を見せる。

「無理ねっ」
「即答すんなっ！！」

「だって内兎見てるとぉっ、ついつい暴言吐きたくなっちゃうんだものぉっ」
「どんだけサドなんだよっ！！」
一瞬で答えるアリスに、思わず怒鳴りあげる桜時。

「何を言うかと思ったらぁっ…なぁ～んであんなウザウサギのことなんかぁっ」
「お前っ、“いなくなれ”って言われた奴が、どういう気持ちになるか、わかってねぇーだろっ？」

面倒臭そうな顔を見せるアリスに、桜時が鋭い視線を送る。

――――なんでイヌなんかっ…――――
――――この国からいなくなってくれればいいのにっ…――――

何気なく放たれたその言葉に、激しく締め付けられた心。

「言われた本人はっ、お前らが考える以上に、すっげぇ辛いんだっ」

桜時が、責めるようにアリスを見る。

「……。」
そんな桜時に、そっと目を細めるアリス。

「従者なんだろっ？だったら、もっと大事に扱ってやってもいっ…」
「内兎はねぇっ」
「……っ」

今度はアリスが、桜時の言葉を遮る。

「内兎はねぇっ、私が拾ったのぉっ」

「拾った…？」

「そぉっ」

戸惑いながら聞き返す桜時に、満面の笑顔で頷くアリス。

「一ヶ月くらい前かなぁ～ボロボロになって、山の麓の辺りに倒れてたところを、私が助けたのぉっ」

廊下を跳ねるように進みながら、アリスが言葉を続ける。

「それで屋敷に連れ帰ってぇ、玄上の主治医に怪我の治療をさせたぁっ」

「……。」

桜時はその場に立ち止まったまま、廊下を進んでいくアリスを、厳しい表情で見つめる。

「私が内兎を生かしたのっ」

「……っ」

立ち止まり、鋭く桜時を見るアリスに、桜時が少し眉をひそめる。

「だから“生きろ”って言おうが、“死ね”って言おうが、私の勝手でしょぉっ？」

鋭い瞳で、突き刺すように桜時を見るアリス。

「内兎だって納得してるしぃっ、私に言われれば死ねるって覚悟もあるっ」

アリスがそっと口元を緩め、冷たく微笑む。

「あぁ～でもそっかぁ～っ、貴方にはわからないのねぇ～っ、きっとっ」
「……っ？」
どこか試すように微笑みかけてくるアリスに、顔をしかめる桜時。
「貴方は、あの女に“死ね”って言われたって、別に死なないんでしょぉっ？」
軽い口調で、アリスがさらに言葉を続ける。
「まぁそれは無理もないわぁっ、あの女にっ、そこまでの忠義を尽くす価値なんてぇっ…」
「死ねるよっ」
「……っ！」
すぐさま返って来る、そのたった一言の答えに、アリスは驚いたように、大きく目を見開いた。
「……っ」
少し顔をしかめ、桜時の方を見るアリス。
「ただっ、輝矢はお前と違って、絶対にそんなことは言わないだけだっ」
桜時が、曇りのないまっすぐな瞳を、アリスへと向ける。
「輝矢はっ、お前なんかとは全然違うっ！」
「……っ」

強く言い放つ桜時に、アリスがそっと唇を噛む。

「だからっ、もし、お前が輝矢を傷つけようってんならっ…」

桜時が、さらに瞳を鋭くする。

「俺がお前を許さないっ…！」

「……。」

その桜時の突き刺すような言葉に、そっと目を細めたアリスが、桜時から視線を逸らし、目の前にある大きな扉を、思いきり蹴り上げて、開いた。

「ここで待ってらしてぇっ、すぐに父が来ますのでぇっ」

「へっ…？あっ、ああっ…」

急に話を変えたアリスに戸惑いながらも、桜時が、アリスの蹴り開けた扉の中へと入る。

「……っ」

その部屋は、たくさんの絵画の飾られた、きれいな客間であった。

「じゃあぁっ」

「へっ？」

そう言って、廊下から扉を閉めようとするアリスに、桜時が目を丸くして、振り返る。

「おいっ！おっお前はっ…！？」

「私は用事を思い出しましたのでぇっ、これにてぇっ」

「あっ…！」

――――バタンっ…！――――

桜時が止める間もなく、アリスは桜時だけをこの部屋に残して、強く扉を閉じてしまった。

「何だよっ、アイツっ…仮にも婚約者を父親に紹介しようって時にっ」

いなくなったアリスに、桜時が困ったように腕を組む。

「んっ…？」

桜時がふと、壁に飾られた絵画の中でも、一番大きな絵画に目をやる。広い部屋の壁の一面を、埋め尽してしまいそうなほどに、巨大な絵。

「鬼っ…？」

その絵の中には、桜時のよく知る“鬼人”とよく似た生き物が、いくつも描かれていた。絵画の右端からやって来る鬼の軍勢。その向かい、左側からやって来ているのは、武器を構えた人間たち。どうやら鬼と人間が戦っている絵のようである。

「んっ…？」

桜時が、その人間たちの先頭に立つ、とある人間の手に握られているものを見て、眉をひそめる。それは金色に輝く、曲線を描いた、変わった剣。

「これはっ…」

「“御伽神話”の絵を見るのは、初めてかね…？」

「えっ…？」

その描かれた、見覚えのある武器に手を伸ばそうとした桜時が、部屋に入って来た低い声に、振り向く。

「あっ…」

「……。」

アリスの閉じた扉を開き、部屋へとやって来たのは、黒い短髪に、どこまでも深い緑色の瞳をした、穏やかな笑顔の男。四十代半ばくらいであろうが、物腰の柔らかさが、もっと若々しく見せる。黒を基調とした、美しい着物を着ていた。

「……っ？」

その深い緑色の瞳が、誰かの姿と重なり、桜時が眉をひそめる。

「どうかしたかな？」

「へっ？あっ、いやっ…！」

微笑んで問いかける男に、少し慌てて首を横に振る桜時。

「あなた…はっ…？」

桜時が戸惑いの表情を見せながら、男にゆっくりと問いかける。

「私の名は、玄上武史…」

男が、さらに微笑む。

「四大国が一、武国が国主・玄上武史っ…」

「……っ」

桜時の前に、四大国最後の王が、現れた。

「……っ」

一方、桜時と別れたアリスは、引きつった表情で、長い廊下を歩き続けていた。

――――……っ――――

アリスに武器と、突き刺すような瞳を向けた、桜時、門貴、由雉の三人。

――――あんまりぃウチの輝矢ちゃんを、苛めないでもらえるかなぁ？――――

――――輝矢はっ、お前とは全然違うっ！――――

太狼の、桜時の、アリスを責めるような瞳が、脳裏に焼き付いて離れない。

「何よっ…」

ポツリと零れ落ちる、アリスの声。

「輝矢輝矢輝矢輝矢ってっ…」

――――バァァァァァーーンっっ！！――――

アリスが自らの拳を、壁に叩きつける。

「何よっ…！！」

強く唇を噛み締めたその表情からは、憎しみが溢れだしていた。

「玄上…武史っ…」

座黒や孔雀の持つ威圧感とは、また違う。柔らかくて、穏やかで、それでも逆らうことの出来ない力強さ、そんな空気を持った目の前の男を、桜時は少し圧倒されるように見つめた。この男が、アリスの父。そして、この武国の長。

「あっ！おっ俺はっ…！」

「朱実桜時君っ…だろう？」

「えっ？あっ、はいっ」

「娘から話は聞いているよ…」
驚く桜時に優しく答えながら、武史が部屋の扉を閉め、ゆっくりと桜時の方へと歩み寄って来る。そして桜時の横に並び、先程まで桜時が見つめていた、鬼と人間の争っている、その巨大な絵画を眺めた。

「この絵は私が描いたものなんだ」
「えっ！？そうなんですかっ！？」
「いや、ウソだ」
「ウソかよっ！！」
突然、何の意味もない嘘を吐く武史に、桜時が礼儀も忘れて、思わず怒鳴りあげる。

「すまない。初対面の人には、つい茶目っけを見せたくなるものでね…」
「茶目っけ…」
穏やかに微笑む武史に、呆れるように肩を落とす桜時。

「……っ」
再び絵画に視線を移した桜時が、ふと表情を曇らせる。

「あのっ…」
「んっ？」
「さっき言ってた、“御伽神話”って…」
桜時が少し躊躇いがちに、武史へと問いかける。

「ああ、“御伽神話”、聞いたことないかい？」
「はっはいっ…」
「そうかぁ…朱実家では習わないのかなぁ…」
「えっ…？」

不思議そうに首を傾げる武史に、そっと眉をひそめる桜時。

「あっあのっ…俺っ…」

「それともぉ、君が“雀人”ではなく、“犬人”だったから、教えなかっただけかなぁ」

「えっ…？」

その思いがけない武史の言葉に、桜時が戸惑いの表情となる。

「ねぇ？」

ゆっくりと桜時の方を振り向き、そっと微笑む武史。

「元・四大国、犬国が国主・里見八房の孫にして、第五十五代・犬孝でもある、朱実桜時君っ…」

「……っ！」

そっと笑う武史のその言葉に、桜時が大きく目を見開く。

「なっ…なんでそんなことまでっ…」

「……っ」

少し後退し、武史との距離をあけて、どこか警戒するように言う桜時を見て、武史がさらに口元を緩めた。

「娘の婚約者のことだからねぇ…一通りは調べておかないと…」

武史は声のトーンを崩すことなく、冷静に答えて、再び絵画を見つめた。

「この絵はねぇ、“御伽神話”の中で語られている、“玄神（げんじん）”と“鬼神（きじん）”の争いを描いたものなんだ…」

「“玄神”と…“鬼神”っ？」

繰り返したその言葉に眉をひそめ、桜時も絵画を見て、その中に描かれている、鬼人とよく似た異形の鬼の姿を確認する。

「“鬼神”て…“鬼人”と何か関係あるんですかっ…？」

少し遠慮がちに、武史へと問いかける桜時。

「さぁねぇ…関係があると考えている者が多いけれど、実際のところはどうだか…」

首を傾げた武史が、微笑んで答える。

「まぁ“鬼人”という名が、神話の“鬼神”からきているのは、確かなようだよ」

「鬼神…」

改めてその名を口にし、桜時がまっすぐに描かれている鬼神たちを見つめる。

「かつて、人々の神“玄神”は、“神器”を操り、悪の化身“鬼神”を倒して、この御伽界に平和をもたらした…」

「……っ」

桜時が、神話を語る武史の方を振り向く。

「“神器”っ…？」

「ああっ」

聞き返した桜時に、武史が深々と頷く。

「見るも美しい、光輝く変幻自在の武具さ…」
「光輝く…変幻自在のっ…？」

武史の言葉に、桜時が少し考え込むように俯く。

「ほらっ…この絵の中の人間たちが、持っているだろうっ…？」
「……っ」

絵の方を指差す武史に、桜時もハッとした表情となって、再び絵の方を振り向く。一番に目に飛び込んできたのは、人々の先頭をいく人間の、手にしっかりと握られた、金色の美しい曲剣。

――――“月器・三日月”っ…！――――

輝矢の月器と、よく似た武器。

「“神器”っ…」

深まる謎に、桜時がさらに混乱した表情を見せる。

「どういう…ことなんだっ…？」
「……っ」

戸惑い、困惑した様子で、ゆっくりと振り向く桜時を、体の向きを変え、真正面から見つめる武史。

「あんた達と輝矢っ…それにっ、この“玄神”ってのとは一体っ…」
「国主様ぁぁぁっっ！！！」
『……っ』

桜時のその問いかけは、部屋へと入ってくる大きな声に掻き消された。桜時と武史が同時に振り向くと、扉から玄上家の従者と見られる男が、勢いよく駆け込んでくる。

「国主様っ！！」
「何だい？今、客人と話をしているところなんだが…」
「申し訳ありませんっ！ですが緊急のことでしてっ…！」
「緊急っ…？」
従者の言葉に、武史がそっと眉をひそめる。

「一体、何がっ…」
「鬼人ですっ！！」
『えっ…？』
桜時と武史が、同時に表情を曇らせる。

「町に鬼人が現れましたっ！！」
「何だってっ…！？」

その言葉に、桜時がすぐさま険しい表情となった。

第６５章　かぐや姫のヒミツ　☆４

――――バァァァァーーンっ！！――――

「きゃあああああああっ！！」

「……っ」

遠くの方から聞こえてくるその音と声に、ユキジが勢いよく顔を上げる。

「何だろう？今の音っ」

「えっ？何々ぃ～っ？輝矢んからの合図ぅ～っ？」

眉をひそめるユキジに、その後ろから暢気に声をかけるモンキ。

「どう聞いても衝撃音と悲鳴だったでしょ～っ？」

「輝矢んやったら、合図に町人襲うくらい、あり得るやぁ～んっ？」

「まぁ確かにそうだけどぉっ」

「納得しちゃうんスねっ…そこっ…」

モンキの言葉に、反論はせずに頷くユキジを見て、羊スケが少し呆れるように肩を落とす。

『じゃんじゃがじゃんじゃんじゃぁ～んっ！！』

『うぅわぁっ！！』

そんなこんなで話をしていた時、三人の前に、再び色とりどりのリボンを飛ばしながら、派手に現れる左助と右助。

「僕の名前は左助っ！」

「僕の名前は右助っ！」
二人が互いに手を合わせ、ポーズを取る。
『二人合わせてっ、“真正面”っ！！』
「ハイハイっ、そのよくわかんないネーミングはもういいからぁ～っ」
二度目の自己紹介ポーズを決める左助と右助を、ユキジが軽くあしらう。
『どうやら町に鬼人が出たようですよぉ～っ』
『えっ…？』
やっとポーズを崩した二人の言葉に、眉をひそめるモンキとユキジ。
『まぁでも大丈夫ぅ～っ！この国には“武人”がいっ…！』
――――ボォォォォ～～ンっ！――――
『へっ…？』
笑顔で話をしていた左助たちが、目の前で急に白い煙に包まれていくモンキとユキジに、目を丸くする。
「そりゃ大変やぁ～っ！」
「人命救助しに行かないとねぇ～っ！」
『あっ…！』
白い煙の中から門貴と由雉が飛び出すと、勢いよく武国の門を潜り、武国内へと入って行ってしまう。その二人の姿に、思わず声を

あげる左助と右助。

「不法侵入っ！」

「入国許可者以外の入国は我々が許しませんっ…！！」

「うぅえっ！？」

剣を構える左助と右助に、後ろを振り返った門貴が、焦ったような声を出す。

「羊スケっ！そいつら頼むぅ～っ！」

「うへっ！？」

いきなりの指名に、大きく驚く羊スケ。

「なっなんで俺がぁ～っ」

『待てぇぇぇぇいっ！！』

「あっ…！」

あからさまに面倒そうな顔を見せた羊スケが、門貴と由雉の後を追いかけて行こうとする左助たちを見て、少し焦るように身を乗り出す。

「あぁ～っ…もうっ！」

少し悩んだ後、走り出していく左助と右助へ、両手を突き出す羊スケ。

「“羊々ボール”っっ！！」

羊スケの両手から飛び出す、白いふわふわの球体。羊々ボールが勢いよく放たれ、左助と右助の目の前の地面へと落ちる。

――――ピトっ…！！――――

『えっ！？うわあああああっっ！！』

羊々ボールを踏みつけた二人は、羊々ボールから足を離すことが出来ず、そのまま顔面から地面へと、勢いよく倒れ込んだ。

『ううぅっ…うっ…』

「ナイスアシストぉ～っ！羊スケぇ～っ！」

「うぃっス…」

倒れた二人が苦しそうな声を漏らす中、笑顔で手を振る門貴に、元気なく手を振り返す羊スケ。門貴と由雉はそのまま、武国の奥へと走り去っていった。

「おっのれぇ～っ！覚えておけよっ！不法侵入者っ！！」

「協力したお前も同罪だからなっ！」

「ええぇ～っ？」

倒れたまま鋭い瞳を向けてくる右助に、羊スケが困ったように声をあげる。

「今回はゴンさんがいないからっ、反省文書かなくて済むと思ったんスけどねぇっ…」

門の前に一人残った羊スケは、がっくりと肩を落とした。

玄上家第一邸・邸内庭園。

「アリス様ぁぁぁっっ！！」
「……っ？」
庭園に咲く花を眺めていたアリスが、廊下から勢いよく駆け込んでくる声に、ゆっくりと振り返る。すると従者の男が、慌ててアリスの元へとやって来た。
「何ぃ～っ？」
膝をつく従者へ向け、少ししかめた表情で問いかけるアリス。
「町に鬼人が現れたとのことですっ！！」
「鬼人っ…？」
従者の言葉に、アリスがそっと眉をひそめる。

「そぉっ、わかったわぁっ」
「えっ？あっ…！アリス様っ！？」

どこか楽しげに頷くと、アリスは、従者に止める暇も与えずに、その場を駆け出していった。長い廊下を駆け抜け、屋敷を飛び出す。

「あっ！アリス様っ！」
「……っ？」

アリスが屋敷を出ると、そこには内兎とイチゴが、先程、アリスたちと別れた状態のままで、残っていた。屋敷から出てきたアリスを見つけ、内兎がアリスの元へと駆け寄っていく。

「申し訳ありません、アリス様っ！実は竹取様がどこかにっ…」
「付いて来なさいっ、内兎っ」
「へっ？」
「いいから付いて来なさいっ！！」
「あっ！はいぃぃぃ～～っ！！」

アリスの言葉に首を傾げた内兎であったが、もう一度強く命じられ、反論することもなく、玄上家の門を飛び出し、町へと駆けていくアリスの後を、大人しく追っていく。

「……っ？」

遠ざかっていくアリスと内兎の背中を見つめ、戸惑うように首を傾げるイチゴ。

「イチゴっ！」

「えっ…？あっ、桜時さんっ…」

名を呼ばれ、イチゴが振り返ると、そこには焦った様子で屋敷から出てきた、桜時の姿があった。

「何かあったんですか…？」

桜時やアリスの様子の違いを察し、そっと眉をひそめるイチゴ。

「町に鬼人が出たらしいっ！」

「えっ…？」

イチゴが、一気にその表情を曇らせる。

「俺っ…！ちょっと行ってくるっ…！」

「あっ…！私も行きますっ…！」

玄上の門を飛び出していく桜時を、イチゴも慌てて追いかけた。

「グガアアアアっ！！」
「きゃあああああっ！！」
「うわあああああっ！！」

逃げ惑う人々の中で、空へと向かい、激しく咆哮をあげている一匹の赤鬼。その鋭い爪を振るい、武国の整列した白い家を、次々に破壊していく。

「おぅっ！おったおったっ！」
そこへ駆けつける、門貴と由雉。
「ユッキーっ！怪我人の治療をっ！」
「うんっ！」
門貴の言葉にしっかりと頷くと、由雉が癒羽を懐から出し、倒れ込んでいる町人たちのもとへと駆けていく。

「グガアアアっ……」
「さってとぉっ」
気配に気づき、振り向いた赤鬼に、門貴が素早く如意棒を構える。

「ほいじゃあっ！お前の相手は、この俺がぁっ…！」
「ちょっと待ってっ」
「あらっ？」

如意棒を構え、今まさに飛び出して行こうとした門貴が、割って

入ってくるその声に出鼻を挫かれ、思わずその場で転びそうになる。

「なっ何っ…あっ！お前らはっ…！」

「……。」

門貴が顔を上げると、そこには、玄上の屋敷から駆けつけた、アリスと内兎が立っていた。

「アリスちゃんと白ウサギっ？」

「サルっ…！」

「へっ？あっ！イチゴちゃ～んっ！と、イヌコロぉっ」

門貴が振り向くと、アリスと内兎の後ろから、さらに桜時とイチゴが駆けつけてきた。やって来た桜時が、驚いたように門貴を見つめる。

「なんでお前がここにぃっ？」

「入国の許可は出てなかったはずじゃ…」

「アハっ！アハハっ！それはまぁっ、色々あってなぁっ！」

不思議そうに問いかける桜時とイチゴに対し、アリスたちも居る前で、まさか“不法侵入して来た”とも言えず、とりあえず笑って誤魔化そうとする門貴。

「アリス様だっ…！」

「アリス様が来て下さったっ…！」

「……っ？」

周囲の町人たちが、アリスの登場に、急に目を輝かせる。その様子に、少し戸惑うように首を傾げる桜時。

「グガァァァーーーっ……」
「……。」
「へっ？」

唸り声をあげる赤鬼の前へ、躊躇うことなく歩み出るアリスに、門貴が思わず目を丸くする。

「おいおいっ！あんたが戦う気かぁっ？」
門貴が、少し制するように、アリスに声を掛ける。

「あんた、国主令嬢やねんからっ、何かあったらどないすんねんっ？ここは一つなぁっ、俺に任せてっ…！」
「うっさいぞぉっ！！そこの茶髪ぅっ！」
「何も知らない余所者は引っ込んどけぇっ！！」
「へっ？」

周囲から飛んでくる野次に、門貴が戸惑うように振り返る。
「アリス様の邪魔すんじゃねぇーよぉっ！このボケナスがぁっ！！」
「てめぇーみたいな奴はとっとと消えろぉっ！クズっ！！」
「ううぅっ…」

激しくなっていく野次に、門貴が次第に元気をなくし、力なくその場にしゃがみ込んだ。

「助けようとしてクズ呼ばわりなんて、不幸ぅ～っ」
そんな門貴を、町人たちの怪我の手当てをしながら、他人事のように見る由雉。

「はぁっ…」

「……。」
「あっ！おいっ！」
深々と溜息をついていた桜時が、さらに前へと出るアリスに、しゃがみ込んだ門貴に代わって、声を掛ける。
「聞いてたでしょぉっ？町人にボロクソ言われたいのぉっ？」
「うっ…」
振り返って微笑むアリスに、少し顔をしかめる桜時。
「グガアアアアアっ！！」
『あっ…！』
そうこう言っているうちに、鬼爪を振り上げ、アリスのもとへと駆け込んでいく赤鬼。桜時とイチゴが、思わず身を乗り出す。
「雑魚のくせにぃっ」
向かってくる赤鬼の方を見たアリスが、どこか楽しげに笑う。
「内兎っ！」
「あっ、はいっ！えぇ～っとっ…」
「遅いっ！！」
「すっすみませぇ～んっ！！」
アリスに怒鳴られながら、内兎が慌ててアリスに差し出したのは、内兎がベルトにぶら下げていた、少し大きめの銀色の懐中時計であった。
「あの時計はっ…」

前々からあの時計の放つ不思議な空気を気にしていた桜時は、内兎からアリスへと手渡される時計を見て、そっと目を細める。

「……っ」

表情を鋭くしたアリスが、時計を左手のひらに置き、左手を前に突き出して、そのすぐ横へ右手を持っていく。

「“針器（しんき）っ…！」

アリスが右手で勢いよく、懐中時計の針を弾く。

――――パァァァァーンっっ！！――――

目映いばかりの銀色の光を放って、アリスが弾いた時計の針が、徐々に大きくなっていく。

『なっ…！！』

その光に、目を見張る桜時たち。

「……っ六刻（むこく）”っ…！！」

アリスの声に呼応するかのように、まっすぐ対面になるように動く長針と短針。巨大化し、光を止ませたその針の短針の部分を、アリスが右手でしっかりと握り締める。長針と短針が一直線に並んだ

その銀色の針は、まるで一本の剣のようであった。

「あっあれはっ…」
「……。」
驚きの表情を見せているイチゴの横で、険しい表情を作る桜時。
『……っ』
門貴と由雉も、真剣な表情で、まっすぐにアリスと、アリスの構えた六刻を見つめる。

「グガアアアアアアっっ！！」
「……っ」

目の前に立ち、勢いよく鬼爪を振り下ろしてくる赤鬼に、アリスは表情一つ変えずに、構えた六刻を突き出した。

「グゥゥっ…！！」
「……。」

アリスが何気なく突き出した六刻に、軽々と受け止められてしまう鬼爪。

「あの細腕で何て力やっ…」
「いいぞぉ～っ！アリス様ぁぁ～っ！」
驚いたように呟く門貴の横から、町人が声援を送る。

「グゥゥゥゥ～～～っ……！！」

「……“六刻”っ」

赤鬼が何とか押し勝とうと力をこめる中、アリスが静かに六刻の名を呼んだ。

――――パァァァァーンっ！！――――

「グガっ…！？」

アリスの声に応えるように六刻が銀色の光を放つと、赤鬼の鬼爪が徐々に押され始める。

「……っ」

「ギャアアアアアっっ！！」

アリスが軽く六刻を払うと、赤鬼の鬼爪が斬り落とされ、赤鬼は叫び声をあげながら、後退した。

「大したことないわねぇっ」

六刻についた赤鬼の紫色の血を払いながら、赤鬼に、嘲るような笑みを向けるアリス。

「グゥゥっ…！」

そのアリスの笑みに、赤鬼が勢いよく顔をしかめる。

「ガアっ…！」

『……っ！』

アリスへ向け、大口を開く赤鬼に、表情を変える桜時たち。

「鬼口だっ！アリスっ！」
「言われなくても、わかってるわぁっ」
慌てて叫んだ桜時に、余裕の表情で答えながら、アリスがゆっくりと六刻を、自分の体の前へとかざす。

「えっ…？」
その姿に、戸惑いの声を出す桜時。

「“鬼口”っ！！グガアアアアアアっ！！」
『……っ』

大口を開いた赤鬼が、アリスへ向けて、鬼口を放った。

「……“針器っ…」
向かってくる鬼口にも動じず、六刻をかざしたまま、アリスが呟く。

「……っ十二刻（じゅうにこく）”っ…！！」

――――パァアアアーンっ！！――――

『……っ！！』

アリスの声に反応し、六刻が再び銀色の光を放つと、長針と短針が互いに逆方向に回り出し、やがて、アリスの体の前で、銀色の大きな盾となった。

「あれはっ…！」

『……っ』

思わず目を見張る桜時、門貴、由雉。

――――“月器・十六夜”っ…！――――

その銀色の盾は、輝矢の十六夜と、とてもよく似ていた。

「十二刻っ」

アリスが剣から変形した盾を、迫り来る鬼口へ向けて、構える。

――――バァァァーンっ！！――――

「グガっ…！！？」

いとも簡単に跳ね返される鬼口に、大きく目を見開く赤鬼。

「ググっ…！ギャアアアアっ！！」

跳ね返った鬼口が、赤鬼を直撃し、赤鬼が激しい悲鳴をあげた。

「グゥっ…！ウウゥっ…！」

「“針器・六刻”っ…」

赤鬼が苦しげな声を漏らしながら、何とか立ち上がる中、アリスは静かな表情で、その盾を再び、銀色の剣へと変形させる。

「……っ」

「グっ…！」

六刻を構え、飛び出していくアリスに、焦りの表情を見せる赤鬼。

「グガっ…！」

「……っ！」

大きく飛び上がったアリスが、赤鬼が鬼爪を振るう隙を与えることもなく、六刻を勢いよく振り下ろした。

――――ブシュっ……！！――――

地面まで、一気に振り下ろされる、銀色の刃。

「グゥゥっ…！ギャアアアアアっ！！」

体を縦一文字に斬り裂かれた赤鬼は、激しい血飛沫を撒き散らせ、断末魔を残して、砂と化して、消えていった。

『……。』

その強さに圧倒されたのか、皆、声すら出ず、その場に沈黙が走る。

『うっ…うおおおおおおおぉぉぉうっ！！』
『さっすがアリス様ぁぁぁぁぁぁっ！！』
少しの間を置いて、やっと歓喜の声をあげる町人たち。皆、肩を抱き合い、自国の姫を称える。

「ふぅっ」
そんな歓喜の声にどこか満足げに微笑みながら、アリスが構えていた六刻を下ろし、一息つくように肩を落とした。
「“針器”っ」
アリスが再びその武器の名を呼ぶと、六刻は元も小さな針へと戻り、自動的にアリスの持つ懐中時計へと装着された。
「内兎っ」
「ふへぇっ？」
時計を突き出すアリスに、戦いに圧倒されたのか、茫然としていた内兎が、間の抜けた声を出す。
「遅いっ！！」
「あっ！あぁっ！申し訳ありませんっ！！」
怒鳴るアリスに、内兎が慌てて謝りながら、アリスの差し出した時計を受け取る。

「ねっねぇっ、あれって…」
町人たちの治療をしていた由雉が、困惑した様子で、座り込んでいる門貴のすぐ横までやって来る。
「ああ…」
由雉の言葉に、真剣な表情で頷く門貴。

「あれは…」
「輝矢と同じ…」

門貴と由雉がまっすぐに、内兎の持つ銀色の時計を見つめる。

「……っ」

同じように真剣な表情で、アリスと内兎の方を見つめる桜時。

――――見るも美しい、光輝く変幻自在の武具さ……――――

武史の言葉が、桜時の脳裏を過ぎる。

「“神器”っ…」

桜時はどこか不安げに、その単語を呟いた。

「へぇ～っ」

武国のハズレの家の上から、アリスたちの方を見て微笑む、赤毛の青年。

「あっれが黒き神・玄上一族の操る“神器”ってやつ～っ？結構な強さじゃねぇーのぉっ」

相手の強さを認めながらも、青年はどこか楽しげな表情を見せて

いる。
「でも負けちゃったぜぇ～っ？あの赤鬼クンっ」
「バカかっ？あれは単なる様子見だ。それにあんな雑魚、負けるのは当たり前だろう」
問いかけた赤毛の青年を、小バカにするように答えるのは黒い短髪の青年。
「なぁっ？城歌（じょうか）」
「レぇぇ～♪じゃなくって、ええぇ～っ！」
黒髪の青年の問いかけに返って来る、甲高い、まるで歌っているような返事。
「本当はただ、“神器”ってのがどれほどのものかを、下調べしようと思ってただけだけドぉぉ～っ♪」
歌うように言葉を発するのは、金色の髪に赤い瞳の、美しい女性。右頬に、派手な星型のペイントをしている。
「思わぬ収穫があったわねぇ～っ！黒羽ぁぁ～っ！」
「ああっ…」
城歌の歌うような問いかけに、真剣な表情で答えるのは、漆黒の長い髪に、切れ長の鋭い赤い瞳の、長身の男。黒羽の瞳は、赤鬼を倒したアリスではなく、その近くにいる由雉の姿を捉える。
「まさか、こんなところで、殺し損ねたヤツに出会うとは…」
由雉を見つめ、目を細める黒羽。
「なぁ？醍也っ…」
「……。」
黒羽のすぐ横に立つ、オレンジ色の髪に赤い瞳の青年・醍也は、あまりない表情と虚ろな瞳で、由雉のすぐ横に座っている門貴の方を見つめていた。
「敗北者に…死を…」
「ああっ…」
醍也の呟きに、深々と頷く黒羽。

「すでにあの方は動き出している…」

黒羽がそっと目を細め、アリスたちを見つめる。

「俺たちは、作戦を速やかに実行するんだっ…」

「レぇぇ～っ♪じゃなくって、えええぇ～っ！」

『ああっ』

黒羽の言葉に、他の四人がしっかりと頷いた。

その頃、玄上邸内・中庭。

「……。」

鬼人騒動の知らせが届いていない輝矢は、やって来た中庭で一人、まだ噴水を見つめていた。流れ落ちる水の動きを見ながら、どこか考え込むような表情を見せている。

――――お前がいなくても、俺は大丈夫だからっ！――――

桜時の、何気ない言葉に、動揺した。

――――何っ？何かあったのぉ～？――――

――――……別にっ……――――

動揺を隠しきれず、桜時に不自然な態度を取り、仲間を心配させてしまった。

「はぁっ…」

輝矢が、深々と溜息をつく。

「私はいつから…こんなに弱くなってしまったんでしょうねぇ…」

そう呟き、どこか自嘲するような笑みを浮かべる輝矢。

「いえっ…」

だが、輝矢の表情が、ふと曇る。

――――いやあああぁぁっ！！――――

「……っ」

思い出される過去に、そっと目を細める輝矢。

「弱いのは…もっと昔からっ…」

「やはりここだったか…」

「……っ」

右手を自らの左胸に当てようとした輝矢が、後ろから聞こえてく

るその声に、ハッとした表情となって、勢いよく振り返った。

「あっ…」

振り返った輝矢が、驚くように目を開く。

「ここだと思ったよ…」

輝矢に優しく微笑みかけるのは、先程まで桜時と話していた、武国の国主・玄上武史。

「久し振りだね…」

そう言いながら、武史が渡り廊下から、輝矢のいる方へと、ゆっくりと歩み寄っていく。

「竹取輝矢…いやっ…」

武史が輝矢へ、鋭い瞳を向ける。

「“玄上輝矢”っ…」

「……。」

囁かれるその名に、輝矢はそっと眉をひそめた。

第６６章　神の血をひく者たち　★１

――――竹取輝矢…いやっ…“玄上輝矢”っ…――――

「お久し振りです。玄上国主」

その名への動揺を隠そうと、穏やかな笑みを作り、武史へと向ける輝矢。笑みを向けた後、深々と頭を下げ、一礼をする。

「随分と他人行儀だね。少し悲しいよ…」

そう笑いながら、武史が輝矢のすぐ前へと歩み寄った。

「大きくなったね、見違えた…」

「ありがとうございっ…」

「朝日さんによく似ている…」

「……っ」

礼を言おうとした輝矢の声は、武史が口にしたその者の名に、そっと止まった。隠していたはずの動揺が大きく顔に出て、輝矢の表情から笑みが消える。

「……失言だったかな？」

様子の変わった輝矢を見て、そっと微笑む武史。

「いえっ…」

俯いた輝矢が、か細い声で短く答える。

「さっき会ったよ。朱実桜時クン」
「……っ」
武史が桜時の名を出すと、輝矢がかすかに眉を動かした。
「一緒に旅をしているんだって？いい子そうだものねぇ。まっすぐで、純粋でっ…」
少し遠くを見るような瞳を見せる武史。
「でもちょっと…キレイ過ぎるかなぁ…」
「……っ」
その瞳を鋭くする武史に、輝矢が眉をひそめる。
「ああ、今のは顔がってことじゃないよ？心がって意味で。ああ、でも十分、顔もっ…」
「武史さんっ…」
「んっ？」
輝矢に名を呼ばれ、武史がゆっくりと振り向く。
「私に何の用ですか？」
「……っ」
顔を上げ、鋭い瞳を向けてくる輝矢に、武史が少し驚いたような表情を見せる。
「いきなりだなぁ…」
「私を武国に呼び出すためなのでしょう？ハチとアリスを婚約させたのは」
困ったように微笑む武史に、輝矢が鋭く言葉を続ける。

「あんな大昔の先祖の約束まで、引っ張りだしてきて」
「……。」
責めるような輝矢の言葉を聞き、そっと目を細める武史。
「アリスはそのつもりだったようだけどねぇ、私は違うよ」
武史が輝矢へ、穏やかな笑みを向ける。
「朱実桜時クンにも、会ってみたかったんだ。純粋に…」
「えっ…？」
「あの白き魔女が欲している、“命咲かす者”にねっ…」
「……っ！」
不適な笑みを浮かべる武史に、大きく目を見開く輝矢。
「そんなことまでっ…」
牢戸知玖の狙いが桜時であったということなど、輝矢たちと、座黒たち、オトポリの上層部のみが知っていること。それを、遠く離れた国にいる武史が、知っていた。表情を曇らせた輝矢が、どこか警戒するように武史の方を見る。
「御伽警察の情報は、大体、耳に入るようになってるんだ…」
「それは、座黒の許可があってのことですかっ…？」
輝矢が、鋭く問いかけると、微笑んだままの武史が、ゆっくりと輝矢の方を見た。
「さぁ…？どうだろう…？」

「……っ」

はぐらかすように答える武史に、輝矢が眉をひそめる。

「私に何をしようと構いません。ですがっ…」

「……っ？」

強く言葉を発する輝矢に、武史が少し不思議そうに振り返る。

「ハチに、私の仲間に、手を出すことは、絶対に許さないっ…」

「……。」

輝矢が睨みつけるように見ると、武史はそっと目を細めた。

「“許さない”…というのは…？」

「アナタを殺す…ということです」

武史にはっきりと言い放つと、輝矢は武史に背を向け、噴水の前を歩き去っていった。輝矢が屋敷の中へ姿を消すと、中庭に武史だけが残される。

「……“仲間”ねぇっ…」

その場に残った武史が、輝矢が口にした言葉を繰り返し、どこか楽しげな笑みを浮かべる。

「言うことは変わったけれど…それでもあの目は変わらないなぁ…ねぇ？輝矢っ…」

武史が噴水を見つめ、すでにこの場を去った輝矢へと、話しかけるように言う。

「ここで泣いていた…あの頃の君のままだっ…」

そう呟き、武史はそっと微笑んだ。

一方、武史の前から逃げるように、中庭を出た輝矢は、再び渡り廊下を通り、最初にやって来た玄上家の入口のところまで戻って来ていた。

「やはりもうイチゴと内兎はいませんか…んっ…？」

周囲を見回していた輝矢が、開いたままの門から町の方を見て、そっと眉をひそめる。

「煙…？」

白い建物の並ぶ町から、かすかに上がっている灰色の煙。

「何かっ…あっ」

何やら胸騒ぎを感じ、表情を曇らせた輝矢が、門のすぐ横に立っている従者らしき男を見つけ、足早にその者のもとへと駆け寄っていく。

「何かあったのですか？」

「へっ？」

急に話しかけられ、どこか間の抜けた表情で振り向く従者。

「ああっ、貴女は確か、アリス様のご客人のぉっ…」
「町で何かあったのですかっ？三秒以内に答えなさいっ」
「はいぃ～っ！町に鬼人が出たそうですぅ～っ！」
「鬼人っ？」

睨みつけ、半ば脅迫するように問いかけた輝矢に、泣きそうになりながら答える従者。従者の答えに、輝矢がすぐさま表情を険しくする。

「はいぃ～っ！アリス様とご客人の方々も、そちらへ向かわれてっ…」
「……っ」
「あっ…！」

従者がすべてを言い終わる前に、輝矢は門を飛び出し、煙の上がっている方へと駆け出していってしまった。

「はぁぁ～っ…」

恐喝めいた輝矢から解放され、従者がホッとしたように肩を落とす。

「あの怖さっ…アリス様とちょっと似てるなぁ～っ…」

輝矢の去っていった方を見つめ、ポツリと呟く従者であった。

第６６章　神の血をひく者たち　★２

「輝矢と…」
「月器と…同じ…」
「“神器”っ…」

町に出た赤鬼のもとへと駆けつけた桜時、門貴、由雉の三人が見たのは、輝矢の月器とよく似た、変幻自在の武具“針器”で、赤鬼を圧倒したアリスの姿であった。針器を元の時計の針へと戻し、内兎へと手渡しているアリスを、三人が戸惑いの表情で見つめる。

「アリス様ぁっ！！」
「アリス様ぁぁっ！ありがとうございましたぁっ！！」
「べっつにぃ～っ、どぉってことないわぁっ」
駆け寄り、口々に感謝の言葉を放つ町人たちへ、アリスが得意げな笑みを浮かべる。

『さっすがアリス様ぁぁ～～っっ！！』
『ううぅわっ！』
考え込んでいた桜時たちが、すぐ後ろから聞こえてくる声に、思わず驚く。
「なっ何っ…！」
「お前らはっ…！」
「僕の名前は左助っ！」
「僕の名前は右助っ！」
桜時たちが振り返ると、そこにはあの、武国の入口に居た左助と右助が立っていた。
『二人合せてっ、“真正めっ…！』

「もういいって」
二人が自己紹介ポーズを決める前に、由雉が鋭く切る。

「お前ら入口にいたっ…何だって、こんな所にいるんだぁ？」
『不法入国者を捕まえにぃ～っ』
「不法入国者っ？」
『ギクぅ～っ！』
「あっ？」
左助と右助の答えに桜時は首を傾けるが、その横の門貴と由雉は、一気に焦りの表情となる。そんな不自然な態度を見せる門貴たちに、顔をしかめる桜時。
「不法入国って、まさかお前らっ…」
桜時が二人へ、疑いの目を向ける。
「だってイヌコロぉ～っ、鬼人が出たって聞いたら、駆けつけてまうのが俺の性分てもんやろぉ～っ？」
「何が性分だっ！ただ単に入りたかっただけだろうがっ！！」
必死に訴えかける門貴に、桜時が強く怒鳴りあげる。

『とにかくっ、摘まみ出しますっ！』
「ああぁ～っ！ちょい待ってぇっ！話せばわかっ…！」
「いいわぁっ」
『……っ』

摘まみ出そうと、門貴に詰め寄る左助と右助。門貴が焦ったように声を出したその時、一つの声が割って入り、皆がその声の方を振り向いた。

『アリス様っ…！』
「その人たちぃっ、私の婚約者さんのお友達みたいだからぁっ、特別に入国を認めるわぁっ」

左助と右助にそう言い放ったのは、満面の笑顔を見せたアリスであった。

『アリス様のご命令とあらばっ』

左助たちがその場で膝をつき、アリスへ深々と頭を下げる。

「俺のためにあんがとぉ～っ！アリスちゃっ…！」

『アリス様ぁぁぁっっ！！』

「ぐへぇぇぇっっ！！」

緩みきった笑顔でアリスの方へと駆けて行こうとした門貴が、同じようにアリスに駆け寄っていく左助と右助に、勢いよく吹き飛ばされる。

「さっきの戦いぶりっ、拝見いたしておりましたぁっ！」

「相変わらず変わらぬお強さでっ…！！」

「ありがとぉっ」

興奮気味に話しかける2人に、アリスが大きな笑顔を向ける。

『さすがは“神器”を操る“武人”・玄上一族でございますっ！』

『えっ…？』

呆れたように一連の様子を見ていた桜時と由雉、そして二人に吹き飛ばされ、倒れ込んでいた門貴が、その二人の言葉に、ふと眉をひそめる。

「“神器”を操る…“武人”っ…？」

『へっ？』

首を傾けて、聞き返す桜時に、左助たちが顔をしかめる。

「何ですかっ？貴方がたっ、“武人”もご存じないのでっ？」
「武国を治めてらっしゃる一族のことですよね…？」
「それだけではありませんよぉっ！」
眉をひそめ、怪訝そうに問いかける右助。少し遠慮がちに答えたイチゴの言葉に、左助が“甘い甘い”とでも言うかのように、突き立てた人差し指を、左右に動かす。その二人の様子に、桜時たちが皆、目を丸くし、互いに顔を見合わせる。
「“武人”っ、というか玄上一族はぁっ、古の人間たちの神様でっ」
「この世界を救った“玄神”の末裔って言われてるのですよぉっ！」
「神様？」
「末裔ぃ～っ？」
「……っ」
二人の言葉に門貴と由雉が首を傾ける中、一人、ハッとした表情を見せる桜時。
――――“御伽神話”の中で語られている、“玄神”と“鬼神”の争いを描いたものなんだ…――――
思い出される、武史の言葉。思いだされる、客間に飾られた、あの大きな絵画。
「“玄神”っ…」
鬼と戦っていた人間たちの絵を思い出し、桜時が小声で呟く。

「かつて鬼神を倒したとされる、“神器”を操る能力っ！」
「そして神の血を受け継いでおられる、この世界で最も尊くっ、最も気高い一族なのですよぉ～っ！」
「神の…血っ…」
その遠い言葉を、桜時が唖然とした様子で呟く。

「では、“武人”というのは、一体、何の獣人なのです…？」
「……っ？」
桜時たちの横で左助たちの話を聞いていたイチゴが、戸惑いの表情でアリスへと問いかける。イチゴに問われ、アリスは初め、目を丸くしたが、すぐに口元を緩め、笑みを浮かべた。

「私たち“武人”は、獣人ではないわぁっ」
「えっ…？」
『……っ』

アリスの言葉に、大きく目を見開く桜時たち。

「獣人では…ないっ…？」
「ええぇっ、獣化も人化もしない、私たち“武人”は正真正銘っ、人間よぉっ」
聞き返したイチゴに、アリスがもう一度、はっきりと答える。

「ただ、この世で唯一っ、獣人と同じ、特殊な力を持った人間っ」
そう言い放ち、アリスがどこか不適に微笑む。今まで、特殊能力を持った人間がいるなどということは、聞いたこともなかったが、これで、座黒が武人は何の獣人なのかと問いかけられた時に口ごも

ったわけも、この国に獣人がいないと言ったわけも、わかった気がした。

「それが…“武人”っ…」
「ハチっ！」
『……っ』

聞き覚えのあるその声に、桜時やアリスたちが一斉に振り向く。

「輝矢っ」
「輝矢ぁぁ～んっ！」
「サルっ？キジもっ」

そこへ駆けつけて来たのは、先程玄上の屋敷を出てきた輝矢であった。やって来た輝矢が、桜時の横にいる門貴と由雉の姿を見つけ、驚いたように目を丸くする。

「何故、庶民がここに」
「ぐはあぁっ！また庶民て言うたぁっ！」

輝矢のさりげない言葉に、激しく傷つく門貴。

「鬼人が出たって聞いたからさぁ～っ」
「鬼人っ…あっ、そういえば鬼人が出たというのは？」

由雉の言葉に輝矢が表情を険しくし、周囲を見渡しながら、皆へ問いかける。

「出たよぉ～赤鬼が一匹ぃ～」
「けど、ぴゃ～っとアリスちゃんが倒したでぇ～」
「アリスがっ…？」

そっと表情を曇らせた輝矢が振り向き、少し離れたところに立っているアリスの方を見る。アリスの横には、銀色の懐中時計を、大

事そうに抱えた内兎の姿があった。

「……っ」

内兎の持つ時計を見つけ、輝矢が眉をひそめる。

「“針器”…」

――――――……っ――――――

輝矢が針器と呟くと、輝矢の右耳のピアスと、内兎の手の中の時計の針が、同時に金色と銀色の光を放つ。緩やかなその二つの光は、まるで共鳴しているようであった。

「ねぇ見てっ…あれっ、“月器”じゃないっ…？」

「……っ」

周囲にいる町人が、不意に漏らしたその小さな声を、聞き逃がすことなく、眉をひそめる桜時。

「それに今っ…“輝矢”って…」

「じゃあやっぱりあの子が、あの時のっ…？」

『ざわざわざわっ…』

『……っ？』

輝矢とアリスの方を見ながら、急にザワつき始める町人たちに、桜時や門貴が戸惑うように首を傾ける。

「……っ」

その横でそっと、目を細める輝矢。

「まずいですねっ…ハチっ、一先ず、玄上の屋敷へ戻っ…」
「そうよぉっ！あなた達が考えている通りぃ～っ！」
「アリスっ…？」

輝矢が桜時たちに屋敷に戻るよう促そうとしたその時、アリスが輝矢の言葉を遮り、町人たちに向けて、大きな声を発した。アリスの声に、輝矢が戸惑うように振り向く。

「この者こそぉっ、かの“月器”を受け継ぎし者ぉっ！」
「月器を受け継ぎし…？」
「アリスっ…！」

桜時たちが戸惑うようにアリスの言葉を聞く中、輝矢が身を乗り出し、少し荒げるような声でアリスの名を呼ぶ。

「何をっ…！」
「そしてぇっ」

必死に止めようとする輝矢を嘲るかのように、アリスがさらに言葉を続ける。

「玄上本家の血を引きしっ、玄上　武矢（たけや）の娘っ！」
「……っ！」
『えっ…？』

アリスの言葉に、輝矢が大きく目を見開き、桜時たちがその表情を止める。

「玄上本家…？」
「玄上武矢の…娘っ…？」
「……っ」

門貴や由雉が困惑した様子でアリスの言葉を繰り返す中、深く俯いた輝矢が、どこか悔やむような表情で、自らの唇を噛み締める。

「じゃっじゃあっ、やっぱりあの時のっ…」
「えええっ！十年振りにこの国に戻って来てくれたのよぉっ！」
『……っ』
アリスが大きく頷くと、町人たちの、輝矢を見る目が一変する。

「マジかよっ…」
「生きて…たのかっ…」
「なんで今更、この国にっ…」
「……。」

降り注がれる冷たい視線に、輝矢がさらに下を向く。

「……っ」
そんな輝矢を見て、満足げに微笑むアリス。

「でも良かったわぁっ」
アリスが少し足を動かし、深く俯いている輝矢の目の前に立つ。

「武国を治めるのに、私たち、分家の人間だけじゃ心もとないものぉ～っ」
笑みを浮かべ、輝矢に話しかけるアリス。だがその笑みには、一切の優しさもない。

「やっぱりぃ～っ、本家の人間が居て下さらないとぉっ」

「……っ」

囁かれるその声に、輝矢が苦しげな表情を見せる。

「おいっ！」

「……っ」

割って入ってくるその鋭い声に、アリスがゆっくりと顔を上げる。アリスが顔を上げると、そこには険しい表情を見せた桜時が、刺すような瞳で、アリスを見つめていた。

「お前っ！一体っ、何がしたいんだよっ…！？」

「……別にぃっ」

怒鳴るように問いかける桜時に、笑いながら適当に答えるアリス。

「さぁっ、じゃあ戻りましょうかぁっ、内兎っ」

「えっ？あっ、えっとっ…」

「遅いっ！！」

「あっ！はいぃぃ～～っ！！」

いつものように怒鳴りつけた内兎を引き連れ、アリスは、まだ戸惑う町人たちの間を擦り抜けて、玄上の屋敷の方へと戻っていった。

『……っ』

ザワついていた町人たちも、最後まで輝矢に冷たい視線を送りながら、壊れた家の修繕や、怪我人たちの搬送へと戻っていく。静か

になったその場に、輝矢たちだけが残った。

「えっ、えぇ～とぉっ…」

頭を抱えた門貴が、沈黙を破るように声を出す。

「玄上本家っちゅーことは、つまりぃっ？」

「輝矢は玄上家の正統血筋っ、つまりは武国のお姫様ってことでいいんだよねぇ～？」

「えっ？ええっ、恐らくは…」

首を傾げる門貴に答えた由雉が、確かめるように隣に立つイチゴに問いかける。イチゴは戸惑いながらも、由雉の言葉に、ゆっくりと頷いた。

「ほいじゃあアリスちゃんとはぁっ」

「親戚ってとこじゃないっ？同じ力使ってるしぃ。まぁっ」

少し眉をひそめた由雉が、俯いている輝矢の方を見る。

「何であそこまで仲悪いのかは、わかんないけどぉ～っ」

「……っ」

その由雉の言葉に、門貴もそっと目を細める。

――――ねぇっ？輝矢っ…――――

血が繋がっているのだとすれば、余計にわからなくなる。あの、憎悪さえ感じる、輝矢を見るアリスの瞳。

「輝矢っ…」

桜時が、どこか不安げに、俯いた輝矢を見つめる。

「なぁ～んやぁ～っ！輝矢ぁぁ～んっ！」
「……っ？」
「……っ」
門貴のその明るい声に、不思議そうに振り向く桜時と、ゆっくりと顔を上げる輝矢。
「早よ言うてくれれば良かったのにぃ～っ！」
「えっ…？」
口を尖らせる門貴に、輝矢が少し眉をひそめる。
「別に武国のお姫様やってことくらいで驚かへんでぇ～？桜時だって、王子な時代やねんからぁ～っ！」
「どういう意味だよっ！！」
門貴の微妙な言い回しに、思わず怒鳴りあげる桜時。
「まぁお姫様には到底見えないけどぉっ、白雪やリンゴも大概、見えないしねぇ～」
「お姉ちゃんに聞かれたら、殺されますね…」
思いきり失礼なことを言う由雉に、イチゴが横からこっそりと呟く。

「それにそんな生い立ちより、常日頃の行動の方が、よっぽど驚かされてるしぃ～っ？」
「そうそぉ～っ！」
「門貴っ…由雉っ…」
明るい笑顔で微笑みかける門貴と由雉を、輝矢が少し驚いたように見つめる。

「……すっすみませんっ…」
そっと口元を緩め、二人に謝る輝矢。

「私自身、玄上家とは随分前に縁を切ったものですからっ…言うべきことでもないと思いましてっ…」
「ふぅ～んっ、そうなんだぁ～っ」
下に向けた視線で話す輝矢に、由雉はあまり興味なさそうに答える。
「まぁ細かいことはええやんっ！とりあえずレッツっ！玄上のお屋敷ぃ～っ！」
「自分がただ行きたいでしょ～っ？」
「あっ、バレたぁ？」
「……っ」
門貴と由雉のいつも通りの明るいやり取りに、輝矢が穏やかな笑みを浮かべる。
「では庶民のおサルさんは置いて、とっとと戻りましょうかねぇっ」
「いっやぁぁ～～んっ！置いてかんといてぇ～っ！輝矢ぁぁ～～んっ！！」
足早に歩き去っていく輝矢を、門貴が間の抜けた声を出しながら、慌てて追いかけていく。二人の後を追うようにして、由雉も続く。
「……。」
歩き去っていく三人の背中を見つめながら、そっと目を細める桜時。
――――やはりお前も“獣人”か…――――
――――私たち“武人”は、獣人ではないわぁっ――――

輝矢が“武人”だとすると、生じる矛盾。

――――水力が暴走しているのかっ…？――――

――――さすがは“神器”を操る“武人”・玄上一族でございますっ！――――

“月器”が“武人”の能力であったとして、“水力”の方は一体、何の力であろうか。

――――私はまだっ…アナタにすべてを話す勇気が持てないっ……――――

武国主の正統血筋を引いているということだけで、輝矢があんな言葉を発するだろうか。

「……っ」

桜時が考え込むように、そっと俯く。

「桜時さんっ…？」

「えっ？」

名を呼ばれ、桜時が顔を上げると、そこには不安げに桜時の方を覗き込む、イチゴの姿があった。

「どうか…しましたか…？」

「えっ？あっ、いやっ、俺たちも行くかっ」

「はいっ」

イチゴにそう笑みを向けると、桜時はイチゴとともに、輝矢たちの後を追って、玄上の屋敷へと戻っていった。

第６６章　神の血をひく者たち　★３

数分後。玄上第一邸・国主の間。
「そうか…町に赤鬼が…」
国主の間の玉座に座り、少し浮かない表情でそう呟くのは、武国主・玄上武史であった。
「えええっ」
武史から少し距離を取った正面に立つアリスが、武史の言葉にしっかりと頷く。鬼人を倒し、屋敷に戻ったアリスは、国主である父に、報告を入れているのであった。
「でも大丈夫ぅっ、私がちょちょぉ～いと倒しといたからぁっ！」
「さすがはアリスだね」
「当然よぉっ！赤鬼なんて雑魚に、負ける方が難しいわぁっ」
誉める父に、堂々と胸を張り、得意げに言い放つアリス。
「そうか…」
武史が優しい笑みを浮かべ、アリスへと向ける。
「いつもアリスのお陰で助かってるよ…」
「……っ」
その、誰が見ても好印象を持ちそうなほどに柔らかな武史の微笑みに、得意げに笑っていたアリスが、ふと表情を曇らせる。
「じゃあ私っ、戻るわぁっ」
「ああ…報告、どうもありがとう…」
「……。」
優しく笑い、礼を言う父に、どこか不満げな表情を見せて、アリ

スは国主の間を後にした。

「鬼人…か…」

アリスが出て行き、国主の間に残った武史が、笑みを消して、ポツリと呟く。

「国主様」

「……っ？」

横から聞こえてくる声に、振り向く武史。武史が横を向くを、部屋の壁際に、白い着物を着た老人や老女が十数名、一列になって並んでいた。武史とともに武国を支える、国主補佐の者たちである。

「何かな…？」

武史が眉をひそめながら、一番武史寄りの位置に立っている老人へ問いかける。

「本家の輝矢様が、お戻りになったとのことですが…？」

「……っ」

鋭く問いかける老人に、さらに眉をひそめる武史。

「そうだよ…アリスの婚約者の付き添いでね…」

「どうです？これを機会に、輝矢様に武国を継いでいただいては…？」

「……っ」

「何を言いだすかと思えばっ…！」

顔をしかめた武史よりも先に、列の中央辺りに立っている老女が、声をあげた。

「あれは卑しき者の血を引く子っ…！あのような者を武国の主とするわけなどにはっ…！」

「ですが、武国を治める者は、やはり“月器”の使い手でなければっ…！」

「うっ…！」

言い返す老人に、声を荒げていた老女が、思わず黙り込む。
「アリス様もお強いですが、やはり“針器”より“月器”っ！国主様も、そう思われませぬかっ…！？」
「……。」
強い瞳で問いかけてくる老人に、武史がそっと目を細める。
「……そうだねぇ…」
武史が、悩み込むように、声を漏らす。
「それにアリス様ではっ、武国の国主はっ…」
「だがあの輝矢に、務まるともっ…」
「いやっ、やはりアリス様ではっ…」
「……。」
補佐たちの間で繰り広げられる、結論の出そうもない論争に、そっと頭を抱える武史。
「はぁっ…」
論争を聞きながら、武史は深々と溜息をついた。
「……。」
国主の間のすぐ外に、扉に背中をつけるようにして立ったアリスが、中から聞こえてくる会話に耳を澄ませ、そっとその表情を歪める。

――――やはり“針器”より“月器”っ！――――
――――そうだねぇ…――――
――――アリス様ではっ、武国の国主はっ…――――

「何よっ…」
放たれた言葉の数々を思い出し、アリスがポツリと声を落とす。
「何の力もないジジイどものくせにっ…偉そうにっ…」

アリスが、不快そうな表情を見せる。

「アリス様っ！」
「……っ？」
扉の前に立つアリスのもとへ、長い廊下の向こうから、暢気そうな笑顔で駆け寄って来る内兎。
「アリスさっ…！」
「廊下は走るんじゃないわよっ！！」
「ううぅわあぁぁっ！！」
アリスのもとへと駆けつけた内兎が、開口一番に怒鳴られる。
「でもっ、この前っ、アリス様、廊下走ってたようなぁっ…」
「私はいいのよっ。あんたはダメっ！！」
「えぇ～っ！？」
横暴過ぎるアリスの態度に、思わず不満の声をあげてしまう内兎。
「なぁ～にぃ～っ？私に逆らう気ぃ～っ？」
「いえっ…もう絶対、走りませんっ…」
アリスに強く睨みつけられ、内兎は逆らうことなど許されず、泣きそうになりながら、その命を了承する。

「報告は無事に終わりましたかっ？」

内兎が気を取り直して笑顔を作り、アリスへと問いかける。
「……。」
だが内兎の問いかけには答えず、少し険しい表情を見せるアリス。
「……っ？アリス様っ？」
「えっ？あっ、えぇぇ～っ、超面倒だったけどぉっ」
アリスの様子に戸惑い、内兎がもう一度問いかけると、アリスはやっと気付いたように内兎の方を向き、適当な口調で答えた。
「ふあぁ～あっ、無駄につっかれたぁ～っ」
「あっ」
伸びをしながら、ゆっくりと廊下を歩き始めるアリス。廊下を突き進むアリスの後を、内兎が慌てて付いていく。
「あんな雑魚一匹ぃっ、あんたでも倒せたかもねぇ～っ」
「いやぁ、僕はちょっとっ…」
「冗談よぉっ、あんた、激弱だもんっ」
「アハハっ…」
厳しいアリスの言葉に、苦々しい笑みを浮かべる内兎。縦に並んで歩きながら、二人が渡り廊下へと出て、中庭の方へと歩いて行く。
「……。」
アリスを後方から眺め、そっと目を細める内兎。
――――玄上本家の血を引きしっ、玄上武矢の娘っ！――――
「……っ」
思い出される先程のアリスの言葉に、内兎がそっと視線を落とす。
それは、内兎でさえも知らなかった、輝矢とアリスの事実。

「あのっ、アリス様っ…」
内兎が遠慮がちに、アリスの名を呼ぶ。
「先程は何故、あの場であのようなことをっ…」
「さっきっ、あいつの正体バラした時の、町人たちの顔見たぁ～っ？」
「えっ…？」
戸惑いの表情で問いかけようとした内兎の言葉を遮り、アリスがどこか楽しげな笑顔で振り向く。
「超～冷たい目ぇっ！あの女を蔑む目よぉっ？そんな目で見られたあの女の顔ってきたらっ…！」
踊るような口調で、言葉を続けるアリス。
「ホントっ…いい気味っ」
「……っ」
どこまでも冷たく微笑むアリスに、内兎がそっと眉をひそめる。先程のアリスの言葉が真実であれば、輝矢とアリスは血が繋がっていることになる。だというのに何故、目の前にいるこの人は、血の繋がりのある者に、ここまで冷たくすることが出来るのだろうか。内兎の頭に、疑念が生まれる。
「あの女っ、仲間にも、玄上の人間だってことっ、言ってなかったみたいだしぃっ」
アリスが楽しげな笑みを浮かべながら、再び前方を向く。
「案外っ、今頃っ、仲間割れとかしてたりしてぇっ…！」

「待ってやぁ～っ！輝矢ぁぁ～んっ！！」
「……っ」

そのアリスの楽しげな言葉は、屋敷へと入ってくる明るい声に、掻き消された。

「庶民の立ち入りは許可してませんが？」
「そない冷たいことっ、言わんといてやぁぁ～っ！」
「というか、輝矢が門貴に冷たいこと以外、言ったことってあるっけ？」
「ないんじゃねぇーのぉっ？」
「ぎゃびぃぃぃーんっっ！！」

明るい声にアリスが振り向くと、そこには、アリスたちに遅れるようにして屋敷へと戻ってきた、輝矢たちの姿があった。あれこれと言い合いをしながら、騒がしく屋敷の中へと入っていく。

『アハハハハハっ…！！』
「……っ！」

桜時や門貴に囲まれ、満面の笑顔を咲かせている輝矢に、大きく目を見開くアリス。楽しげな笑い声を残して、輝矢たちが屋敷の中へと姿を消す。

「……。」
「騒がしい人たちだなぁ…」
茫然と立ち尽くすアリスの横で、少し呆れたように声を漏らす内兎。

「ねぇっ？アリスさっ…」
振り向いた内兎が、表情を止める。
「アリス様っ…？」
「……っ」
内兎が振り向いたそこには、今にも泣き出しそうな、すぐに壊れてしまいそうな、そんな表情を見せたアリスが立っていた。初めて見るアリスの表情に、内兎が戸惑うように見つめる。
「何よっ…」
強く唇を噛み締めたアリスが、少し震えた声を発する。
「何よっ…！」
――――ねぇっ？輝矢っ…――――
――――アハハハハハハっ…！――――
どんなに奪っても、気付けばまた、笑っている。
――――輝矢は、お前なんかとは全然違うっ！――――
――――やはり“針器”より“月器”っ！――――
どんなに頑張っても、結局は輝矢が選ばれる。
「何よっ！何よぉっ！何よぉっ！何よぉぉっ！！」
両手で頭を抱え込み、行き場のない怒りをぶつけるように、声を

荒げるアリス。

「……っ」

そんなアリスに、驚いたような表情を見せる内兎。

「クっ…！」

頭を抱えていた両手を下ろし、力なく俯いていくアリス。

「何でよぉぉおっ…！！」

誰かに問いかけるようなその声は、広い玄上の中庭に、悲しく響き渡った。

「アリス…様っ…」

そのアリスの悲しみが、何もしないでも伝わって来て、内兎はただ、悲しげな表情で、アリスを見つめる。

「アリスさっ…」

「……っ」

「……っ！」

内兎が俯いたアリスに手を伸ばそうとしたその時、アリスは勢いよく、内兎に抱きついた。

「アリスさ…まっ…？」

「……っ」

戸惑いの表情で内兎がアリスの名を呼ぶ中、アリスは深く瞳を閉じ、内兎の首の後ろに腕を回して、さらに強く、内兎を抱き締める。

「内兎っ…」
「えっ…？」
いつもとは違う弱々しい声に名を呼ばれ、少し顔を動かす内兎。
「内兎はっ…大丈夫よね…？」
アリスが泣いているような、震える声で、静かに内兎へと問いかける。
「内兎はっ…私以外を選んだり…しないよねっ…？」
「アリス様っ…」
何とも不安げなその声に、内兎がそっと目を細める。
「お願いっ…」
アリスが、内兎を抱き締める手に、力をこめる。
「私の傍にっ…」
深く閉ざされたアリスの瞳から、零れ落ちる小さな雫。
「あなただけはっ…私の傍にっ…」
その雫が、ゆっくりと、地面へと降り落ちた。
「お願いっ…内兎っ…」
「……。」
その、弱々しくも、必死の願いに、内兎はそっと、瞳を閉じた。

「はいっ…」
内兎がゆっくりと両手をあげ、アリスの背中へと回す。
「僕は…永遠に貴女のものです…」
背中に回した両手で、内兎が強く、アリスを抱き締める。
「貴女だけのものです…」
内兎が、アリスの肩に、顔を埋める。
「アリス様っ…」
「……っ」
まっすぐに響き渡るその声に、アリスは涙を流しながら、かすかな笑みを零した。

その日・夜。
「……。」
輝矢たちとともに玄上家での夕食を終えた桜時は、用意された寝

室へと向かった輝矢たちと別れ一人、昼間通された、玄上第一邸の客間へとやって来ていた。
「“玄神”…玄上…“神器”…月器」
昼間に見た、あの巨大な御伽神話の絵を眺め、桜時が呟く。
「“鬼神”…鬼人っ…」
鬼の名を呟いた途端に、桜時の表情がそっと曇る。

「余程、その絵が気に入ったようだねぇ…」
「……っ」

昼間と同じように聞こえてくる声に、勢いよく振り向く桜時。

「あっ…」
「やぁっ」

扉を開き、客間へと入って来たのは、国主・玄上武史であった。
武史が穏やかに微笑みながら、桜時の方へと歩み寄って来る。

「何なら譲ろうか？その絵」
「えっ…？」
武史の言葉に、桜時が戸惑ったような表情を見せる。
「と、いうのは冗談だ」
「あなたの冗談っ…ちょっとわかりにくいんですけどっ…」
茶目っけたっぷりに微笑む武史に、桜時が多少、顔を引きつる。

「食事はどうだった？おいしかったかな？」
「あっはいっ」
桜時が慌てて頷き、武史の方を向き直る。
「ありがとうございました。門貴と由雉の不法侵入、取り消してもらった上に、あんな御馳走までっ」

「いやいや、気にすることはないよ」
頭を下げる桜時に、武史が微笑みかける。

「輝矢の友人なら、歓迎するのは当然のことだしねぇ」
「……っ」
武史から輝矢の名が出ると、桜時の表情が曇る。

「あれっ？聞いてなかったかな？輝矢が玄上の人間だってこと」
「あっ、いえっ、町に出た時に、アリスからっ…」
「ああぁ、そうだったねぇ…」
桜時が知った経緯を話すと、武史が少し肩を落とした。

「お陰で町もちょっとした騒ぎになったようだよ…あの子にも困ったものだ」
娘のアリスのことを話し、武史が困ったような笑みを浮かべる。

「やたらと輝矢をライバル視してねぇ…何に対しても、輝矢より自分が優位でないと、気が済まないらしい」
「ライバル視っ…？」
「ああっ…君を婚約者にしたのも、君が輝矢の大事な人だからってところじゃないかなぁ…？」
「……っ」

武史の言葉に、桜時がそっと俯く。

――――輝矢はっ、お前なんかとは全然違うっ！――――

桜時がそう言い放った時に、その表情にかすかな動揺を見せたアリス。輝矢に負けたくないという気持ちの強いアリスは、その言葉

に多少、傷ついたのかも知れない。

「輝矢は本家の人間だから、余計に負けたくないっていうのもあるのかも知れないけどねぇ…」

「本家っ…」

――――玄上本家の血を引きしっ、玄上武矢の娘っ！――――

昼間のアリスの言葉を思い出し、桜時がそっと眉をひそめる。

「あのっ」

「んっ？」

躊躇いがちに声を発する桜時に、武史が振り向く。

「そのぉ～っ、玄上の本家とか分家って、一体、どういう…？」

「ああっ」

桜時の問いかけに、武史がすぐさま頷く。

「同じ“武人”の玄上家といっても、いくつか家系があるんだよ。長い歴史の中で、増えていってね」

絵を眺めながら、話し始める武史。

「一番初めの“武人”の直系なのが玄上本家。直系から派生したのが、我ら分家だ」

武史が振り向き、桜時に笑顔を向ける。

「分家は我々の家系の他にも、いくつか存在する。まぁ本家は一家

系だけだがね」
「……。」
付け加える武史に対し、どこか気難しげな表情で俯く桜時。
「こんなところで大丈夫かな…？」
「あっ」
武史に覗き込むように見られ、桜時が慌てて顔を上げる。
「そのっ、本家の血筋なのが、輝矢ってこと…ですよねぇ？」
「ああっ」
確かめるように問いかける桜時に、武史が大きく頷く。
「でもそれにしちゃっ…」
再び俯く桜時。
――――何で今更っ…この国にっ…――――
輝矢へ向けられた、町人たちの冷たい視線。初代“武人”の血筋である輝矢を見るにしては、あまりにも冷たく、輝矢が歓迎されていないことが伝わって来た。
「町人たちの態度が…おかしかったかな…？」
「えっ…？」
桜時の考えていることを見透かすような発言をする武史に、桜時が少し焦ったように顔を上げる。

「……っ」
桜時が顔を上げると、武史が薄い笑みを浮かべていた。
「君ももう知っての通り、我々、玄上家は、“玄神”の力を受け継ぐ、神聖なる一族だ…」
武史が再び、神話の絵を見上げる。
「少なくともこの国の者たちは、そう考えている…」
「……っ」
どこか意味深な武史のその言葉に、何を言わんとしているのかが理解出来ず、眉をひそめる桜時。
「だが輝矢の母親は、その神聖なる一族の者となるには、少し身分が卑しくてね…」
「卑しいっ…？」
「ああっ…それで輝矢の母親のことを武国側が認めず、輝矢の父・玄上武矢はこの国を出たのさ…」
「……。」
武史の話を聞きながら、桜時が少し気難しい表情を見せる。
「それで本家の者がいなくなって、私が国主になった」
「えっ…？」
「武国は代々、本家の者が国主を務められることになっているからね」
首を傾けた桜時に、武史がそっと笑いかける。
「この国の者たちが輝矢を認めていないのは、まぁそういった理由だよ」

「……っ」
武史が話を終えると、桜時は少し考え込むように俯いた。
――――母親は、その神聖なる一族の者となるには、少し身分が卑しくてね……――――
――――汚らわしいイヌの子がっ……――――
それは、桜時の過去と、通じるところがあった。
「……。」
桜時がそっと、目を細める。
「それでっ、輝矢の父親と母親ってのはっ、今どこにっ…？」
「それは…」
顔を上げ、再び問いかける桜時に、武史が不自然に答えを止める。
「いずれわかること…じゃないかなぁ」
「えっ…？」
武史の言葉に、桜時が首を傾ける。
「君が、輝矢と共に歩み続けるのなら…」
「……っ？」
含んだような笑みを浮かべる武史に、桜時はただ、戸惑いの表情を見せることしか出来なかった。

――――パタンっ…！――――

桜時が客間を出ていき、扉がしっかりと閉じる。

「……。」

笑顔で手を振り、桜時を見送った武史は、扉の閉まる音が響いた途端に、その笑みを消した。

「国主様っ」

どこからともなく、玄上家の従者らしき男が部屋へと現れる。

「竹取輝矢を…武国から一歩も出さないように…」

武史が振り返ることなく、従者に言い放つ。

「絶対に…ね…」

「はっ」

重々しく呟いた武史に、従者はしっかりと頷いた。

第６６章　神の血をひく者たち　★４

「ふぃ～っ」
客間を出た桜時は、見張りもいない薄暗い廊下を進み、屋敷内よりも明るい中庭の方へと出る。
「満月っ…かぁ？」
妙に明るい中庭を不思議に思い、桜時が空を見上げると、そこにはまん丸とした明るい月が浮かんでいた。

「月っ…」
月を見上げた桜時が、ふと表情を曇らせる。

――――“月器・三日月”っ！――――

古の神・玄神が操ったとされる“神器”を受け継ぐ者、“武人”。

――――玄上本家の血を引きしっ、玄上武矢の娘っ！――――

その血を引く、輝矢。

――――君が、輝矢と共に歩み続けるのならっ…――――

「……はぁっ…」
先程の武史の言葉を思い出し、桜時が深々と溜息をつく。

「やっぱあの言葉の意味、聞いとけば良かったかなぁ～っ」
ただ戸惑いの表情を浮かべるだけで、その言葉の真意を聞くことは出来なかったのだが、やはり気になるその真意に、桜時が困ったような顔を見せる。
「でも俺っ、あの国主、どうも苦手なんだよなぁ～っ」
桜時が無造作に、頭を掻く。

「何となく桃タローを思い出すっつーかっ…」

――――やぁっ――――

本心は決して見せない、上辺だけの言葉。その穏やかな表情の下で、一体、何を考えているのか。

「んっ？」
ふと顔を上げた桜時が、何かを見つける。

「あれはっ…」
「よいしょっ！こらしょっ！」

大荷物を抱えながら、桜時が出て来た方とは逆の渡り廊下から、中庭へと出てくるのは、眼鏡を掛けた青年。アリスの従者・内兎である。

「あいつ、何やって…」
「うっ…！」
「あっ」
桜時が不思議そうに見つめる中、内兎が地面に落ちている石に躓

く。

「ふわあああああああっ！！」

――――ドンガラガッシャンバァァァァンっ！！――――

「うわっちゃっ…」

持っていた荷物を盛大にばら撒き、顔面から倒れ込む内兎に、思わず顔をしかめる桜時。

「痛っつぅ～っ…あれっ？メガネ、メガネっ…」

「はぁっ…」

顔を押さえながら起き上がった内兎が、転んだ拍子に落としてしまった眼鏡を探し、手探りをする。その様子を見て、桜時が深々と溜息をついた。

「たくっ」

桜時が内兎のもとへと歩み寄り、内兎の近くに落ちている眼鏡を拾い上げる。

「ほらよっ」

「ああっ、どうもすみませんっ」

「……っ」

眼鏡を手渡した桜時が、内兎の大きな赤い瞳を見て、眉をひそめる。

「ふぅ～っ、見える見えるっ」

桜時から受け取った眼鏡を掛け、安堵の笑みを浮かべる内兎。

「……っ？どうかしましたか？」
「あっ…いやっ」

茫然と内兎を見つめていた桜時に、内兎が声を掛けると、桜時はハッとしたように顔を上げ、慌てて首を横に振った。

「こんなところで、どうかなさったのですか？朱実様」
「あっ、いやっ、ちょっとなっ」
不思議そうに問いかける内兎に、桜時が少し誤魔化すように笑って答える。
「お前こそ、何してんだよっ？こんな大荷物抱えてっ」
「ああっ」
内兎が周囲に散乱している荷物を眺め、苦笑いを浮かべる。

「アリス様が、“北向きの窓のある部屋に移動したくなったから、荷物を動かしといて”と仰ったのでっ」
「はぁぁっ！？」
その、あまりに横暴な命令に、桜時が思わず顔をしかめる。

「何だぁ？それっ！何様のつもりなんだよっ！あの女はっ！」
「アリス様ですっ」
「んなこたっ、わかってるっつーのっ！」
笑顔で答える内兎に、怒鳴りあげるように突っ込みを入れる桜時。

「お前もさぁっ、何でもかんでも言うこと聞くなよぉ？あんなサドスティック横暴自己中女の命令なんかっ」
「アリス様はお優しい方ですよ」
「どこがっ？」

笑顔を崩さずに答える内兎に、桜時が間髪入れずに問い返す。

「んん～っ、んん～っ…んんん～っ…」

「もういいっ」

内兎が必死に考え込むが、なかなか答えは出て来ず、桜時が呆れたように肩を落とした。

「でもホントっ、お優しい方なんですっ…」

再び、笑みを浮かべる内兎。

――――何でよぉぉぉっっ…！！――――

「ただっ…ひどく不器用なだけでっ…」

「……っ」

どこか悲しげにそう呟く内兎から、アリスへの思いが伝わってくるようで、桜時はそれ以上の突っ込みを入れることはなく、そっと目を細めた。

「でっ？どこの部屋へ運ぶんだぁ？」

「へっ？」

そう言って近くの荷物を拾い始める桜時に、内兎が目を丸くする。

「荷物っ！一人より二人で運んだ方が早いだろっ？」

「あっ…はいっ」

笑いかける桜時に、内兎は少し戸惑いながらも頷いた。

数十分後。
「ふぃ～っ！これで全部かぁ～っ？」
「はいっ」
最後の荷物を部屋に入れ、ホッと肩を下ろした桜時に、内兎が笑顔を向ける。
「ありがとうございますっ、朱実様っ」
桜時へ、深々と頭を下げる内兎。
「僕一人で運んでたら、朝になっちゃうところでしたっ！本当に助かりましたっ！」
「いいって。別に暇だったし」
荷物を運び入れた部屋を出て、二人が寝室のある屋敷へ向かうため、再び中庭へと出る。

「お前って、アリスに拾われたんだって？」
「へっ？」
「あっいやぁっそのっ、アリスから聞いてさっ」
「ああっ、そうなのですか」
戸惑いの視線を向けていた内兎が、桜時の言葉に、どこか納得したように笑顔を見せる。
「傷だらけで倒れてたって、聞いたけどっ…」
「はいっ、僕、物心ついた頃から家族も家もなくて…ずっと一人で生きてて…」
内兎が少し俯きがちに、話を始める。
「腕っぷしも見ての通り弱い上に運まで悪かったんで、お金稼いでも、すぅ～ぐ追い剥ぎに遭っちゃったんですっ」

「笑顔で話すなよっ…」
顔を上げ、満面の笑みを見せる内兎に、桜時が少し呆れたような視線を送る。

「アリス様と出会ったのは、僕が丁度、二百十八回目の生き倒れ状態をした時でした」
「いやっ！生き倒れ過ぎだろっ！」
「……っ」

桜時の激しい突っ込みが入る中、内兎がそっと目を細める。

――――何、ぶっ倒れてんのっ？あんたっ――――

冷たい言葉とともに、差し出された温かい手。

「アリス様は、僕に初めて、普通の暮らしを与えて下さった人っ…」

内兎が胸に手を当て、そっと口元を緩める。

「とてもっ…感謝していますっ…」
「……そうかっ」

そんな内兎の様子を見て、桜時も心穏やかな笑みを浮かべる。

「朱実様は、輝矢様とはどのくらい旅を？」
「さぁなぁ～？もう半年くらいじゃねぇーかぁ？」
「半年ですかぁ」

桜時の答えを聞き、感心するような声を漏らす内兎。

――――アハハハハハハハっ…！！――――

「……っ」

アリスを苦しめた、笑顔の輝矢たちの姿を思い出し、内兎がそっと目を細める。

「あのぉ、朱実様っ…」

「んっ？」

遠慮がちに名を呼んだ内兎に、桜時が顔を上げる。

「半年も…一緒に旅を、されているのですよねぇ…？」

「ああっ」

「それなのにっ…どうとも思われないのですかっ…？」

「へっ…？」

内兎の問いかけに、首を傾ける桜時。

「輝矢様が玄上家の者であったことについてっ…そのことを黙っておられたことについてっ…」

「……っ」

その言葉に、桜時はそっと目を細めた。

「どうとも思わないってことはないなっ」

「えっ？」

すぐに返って来る答えに、目を丸くする内兎。

「サルや由雉がどう思ってるかは知らないけどっ、少なくとも俺は、ちょっとショックだったっ…」

「朱実様っ…」

少し淋しげに笑う桜時に、内兎が目を細める。

「ホントはもっと何でも話して欲しいしっ…俺自身っ、輝矢のことを、もっと知りたいっ…」

俯いた桜時が、そっと自分の手を見下ろす。

「でもっ、無理に話させることで、あいつが傷つくならっ…俺は一生、知らないままでいいっ」

「えっ…？」

笑顔で顔を上げる桜時に、戸惑いの表情を見せる内兎。

「あいつが傷つくのは…知らないままでいるより、ずっと痛いっ…」

「……っ」

そのまっすぐな瞳に、内兎は突き刺されたような思いであった。

「たぶんこれはっ、サルや由雉も同じなんじゃないかなぁ～っ」

「……っ」

そっと俯いた内兎が、その口元を緩める。

「とても大切な方、なのですねっ…」

「ああっ…」

内兎の問いかけに、桜時が間を置かずに、すぐさま頷く。

「いいなぁっ…」

「えっ…？」

内兎の零した言葉に、顔を上げた桜時が、戸惑うような表情を見せる。

「僕ももっと…あの人の傍にいきたいなぁ…」

どこか遠くを見つめるような、そんな瞳を見せながら、内兎が笑みを浮かべる。

「内兎っ…？」

そんな内兎を、不思議そうに見つめる桜時。

「だっ大丈夫だってっ！あいつっ！アリスって、俺から見ても、お前にだけは心開いてるっぽいしっ！」

桜時が妙に明るい声を出し、内兎を、まるで励ますかのように、必死に言葉を続ける。

「それにあの蹴りとか暴言もっ…！きっと愛情表現っ！のっ、ハズっ…？」

「アハハっ」

「へっ？」

自らの発した言葉に、すでに自信を持てずに首を傾げ始めた桜時が、聞こえてくる笑い声に、戸惑うように顔を上げる。

「本当に優しい方ですねぇ～桜時さっ…あっ、朱実様っ」

「いいよっ、桜時でっ」

「えっ…？」

名前を言い直した内兎へ、桜時がそっと笑みを向ける。

「なっ？内兎っ」

「……っ」

微笑む桜時に、内兎もゆっくりと笑みを浮かべる。

「ありがとうございますっ、桜時さっ…！」

――――バァァァァーーンっ！！――――

『……っ！』

聞こえてくる大きな音に、桜時と内兎は大きく目を見開き、一斉に振り向く。

「こっこの音はっ…！？」

「町の方からだっ…！」

「あっ…！桜時様っ…！」

内兎が驚き戸惑う中、桜時が鋭い表情を見せて、その場を飛び出し、勢いよく中庭を駆け抜けていく。

「クっ…！あっ…！！」

中庭を抜け、玄上家の門前へと出た桜時が、大きく目を見開く。

「おっ桜時様っ…！待っ…えっ…！？」

桜時の後を追うようにしてやって来た内兎も、同じように目を見開いた。

「これはっ…」

「まっ町がっ…！！」

二人の見つめる先で、武国の美しい町は、激しく燃え盛る炎に包まれていた。

「きゃあああああああっ！！」
「逃げろぉぉぉぉっ！！」
「うわあああああああっ！！」
燃え盛る町の中を、必死に逃げ惑う町人たち。

『グガアアアアアアアアっ！！』
炎に包まれ、咆哮をあげる、無数の鬼人。

「オホホホっ！ホホホぉ～っ！ホホホホホォ～っ♪」
炎に包まれ、夜空の中で赤々と輝く町に、笑い声のような発声練習のような声が響き渡る。
「良い眺めレェ～♪じゃなくて、ねぇ～っ！」
町の建物の中でも一番高い建物の上に立ち、燃える町を眺め、楽しげに笑うのは、金色の髪の少女。
「さぁ～て、でラァっ♪じゃなくって、でハぁっ」
少女が瞳を鋭くする。

「トランプ兵団っ！」

少女が軽く手を挙げると、少女の両側に二人ずつ、計四名の人影が現れる。

「波跡(はあと)っ」

「おぉうっ！」

少女の呼びかけに、明るく返事をする、赤髪の青年。

「術斗(すべと)っ」

「うんっ…」

同じように返事をする、黒髪の青年。

「醍也(だいや)っ」

「敗北者に…死を…」

名を呼ばれた醍也は、返事をする代わりにそっと、鋭い十字刃を構える。

「黒羽(くろば)っ」

「ああっ…」

最後に黒羽が、ゆっくりとその場から立ち上がる。

「そして私っ…」

四人の中央に立ち、少女が怪しげな笑みを浮かべる。

「城歌(じょうか)っ…」

微笑む城歌が、炎に包まれた町の向こうにそびえ立つ、玄上の屋敷を見る。

「さぁっ、とっとと出てきなさぁ～いっ！竹取輝矢とその仲間たちぃ～っ♪じゃなくって、たちぃ～っ！」

城歌が歌うようにそう言い放ち、ゆっくりと両手を広げる。

「地獄のカードゲームのっ…始まりよっ…」

第67章　vsトランプ兵団　☆1

「まっ町がっ…」
「……。」
唖然とした表情で、燃え盛る町を見つめる内兎。その横で桜時は、険しい表情を見せている。
「ハチっ…！」
「……っ輝矢っ」
大きな衝撃音を聞きつけたのか、桜時が振り返ると、輝矢と門貴、由雉、イチゴが、桜時たちと同じように、玄上の門前へと駆けて来た。
「今の音はっ…」
「今の音は何っ！？」
「……っ」
「アリス様っ」
桜時に問いかけようとした輝矢の声を遮り、その場へと駆け込んで来るのはアリスであった。やって来たアリスに輝矢は声を止め、内兎が勢いよく振り返る。

「……っ」
「……。」
互いに少し目を合わせた後、すぐさま視線を逸らす輝矢とアリス。

「アリス様っ！町がっ…！」
「町っ…？なっ…！」
内兎の声に町の方を見たアリスが、その上がる赤々とした炎を見て、大きく目を見開く。
「これはっ…」

「また鬼人かぁっ！？」
輝矢や門貴たちも、驚きの表情を見せる。
「……っ」
町を見つめるアリスが、その瞳を鋭くする。
「内兎っ、時計っ！」
「へっ？」
手を差し出し、言い放つアリスに、目を丸くする内兎。
「時計っ！」
「あっ、えっとっ…」
「遅いっ！！」
「ああぁ～っ！！はいぃ～っ！！」
アリスに怒鳴られ、焦りながら、内兎が必死にベルトに下がっていた銀色の懐中時計を取りはずし、差し出されたアリスの手の上へと乗せる。
「“針器っ…！」
内兎から受け取ったアリスが、素早く時計の針を弾く。

「六刻”っ…！！」
弾いた針が、鋭い銀色の剣となる。

「内兎っ！」
「えっ…？」
アリスが、針のなくなった時計を、内兎へ投げ返す。時計を受け取った内兎が、戸惑うようにアリスを見る。
「あんたはここにいなさいっ！」
「えっ？けどっ…」
「来ても足手まといっ！」
「ああぁっ！はいぃっ！」
不安げな表情を見せた内兎であったが、アリスの怒鳴りに、あっさりと頷く。

「クっ…！」
「あっ…！」
目覚めさせた六刻を持ち、燃えている町の方へと、必死に駆け出していくアリス。内兎は追おうと思わず身を乗り出したが、アリスの言葉に何とか足を踏み止めた。

「アリス様っ…」
遠ざかっていく背中を見つめ、内兎がそっと目を細める。

「輝矢っ！俺たちもっ…！」
「ええっ」
急かすように訴える桜時の言葉に、輝矢がしっかりと頷く。
「こっこここここれは一体っ…」
「……っ」
燃えている町を見て、明らかに動揺した様子の玄上の門番の元へ、真剣な表情で駆け寄っていく輝矢。
「そこの門番っ」
「へっ！？」
輝矢が勢いよく胸倉を掴み、力ずくで門番を振り向かせる。
「玄上国主の所へ行って、すぐに警備隊を町に送るよう伝えて来なさいっ」
「へっ…？」
「三十秒以内っ！」
「はいぃ～っ！！」
目を丸くして、首を傾げていた門番であったが、輝矢の睨みに命の危機でも感じたのか、必死に頷き、すぐさまその場を駆け出していった。

「イチゴっ、オトポリ本部への連絡を頼めますか？」
「あっ、はいっ！」

輝矢の言葉に、イチゴがしっかりと頷く。
「では行きますよっ！ハチっ！サルっ！キジっ！」
『おうっ！』
輝矢の声に、皆が一斉に、町へと駆け出していった。

玄上第一邸・国主の間。
「……。」
窓際に立った武史が、神妙そうな顔で、窓の向こうの炎に包まれた町を見つめる。
「国主様っ！」
そこへ国主の間へと飛び込んできたのは、先程、輝矢に脅され、慌てて駆けていった玄上家の門番であった。
「町に火がっ…！それで輝矢様が警備隊をとっ…！」
「わかってるよ…」
「へっ…？」
門番がすべてを話す前にそう言い放つ武史に、門番が少し目を丸くする。
「警備隊を町へ…町人の救出を最優先とするって伝えて…」
「はっ！」
武史の言葉に大きく頷くと、門番はまた、すぐに国主の間を飛び

出していった。
「ふぅっ…」
扉が閉まると、武史が深々と肩を落とす。
「ついに…始まったか…」
そう呟き、武史は鋭い瞳を見せた。

「グガアアアアアアっ！！」
「きゃあああああああっ！！」
高々と爪を振り上げる緑鬼に、町人の女が悲鳴をあげる。

――――ブシュっ…！！――――

「グゥゥっ…！ギャアアアアアアアっ！！」
「えっ…？」
突然、激しい悲鳴をあげ、砂と化して崩れ落ちていく緑鬼に、悲鳴をあげていた女が、目を丸くし、戸惑うように顔を上げる。
「あっ…」
消えた緑鬼の後ろに見えてくる人影。
「アリス様っ…！」

「……っ」
そこに立っているのは、鬼人の血で濡れた六刻を構え、厳しい表情を見せたアリスであった。
「アリス様っ！ありがとうござっ…！」
「町人たちを集めて、山の下まで避難しなさいっ！」
「えっ…？」
女の礼を遮り、強い口調で言い放つアリス。町人の女は、アリスの満面の笑顔と愛らしい口調した見慣れておらず、思わず目を丸くした。
「えっ…」
「いいから早くっ！！」
「あっ！はいぃぃ～～っ！！」
アリスの怒鳴りに、女は内兎と同じような形で頷き、慌ててその場を駆け出していった。
「ったくっ！」
「グガアアアアアアアっ！！」
「……っ」
肩を落としていたアリスのすぐ後方から、鬼爪を振り下ろしてくる一匹の赤鬼。
「……っ！」
アリスが振り返りながら、鋭く六刻を振るう。
「ギャアアアアアアアアっ！！」
六刻に真一文字に斬り裂かれると、赤鬼は、砂と化して消えていった。
「ふぅっ」
地面に零れ落ちた砂を見つめ、ホッと一息つくアリス。
「ったく、何なのよっ…」
アリスが顔をしかめ、ゆっくりと周囲を見回す。
「この数はっ…！！」

『グガアアアアアアっ！！』

アリスの周囲には、色とりどりの鬼が、溢れんばかりに立っていた。

その頃、龍国・オトポリ本部。

「はぁっ！？武国に鬼人の軍勢がぁっ！？」

『……っ』

研究塔に響く、リンゴの大きな声。その大声に、周囲の研究員たちが、皆、驚きの表情で振り向く。

＜うっうんっ…見張りさんの話だと、結構な数いるみたいでっ…＞

無線の向こうから聞こえてくるのは、少し遠慮がちなイチゴの声。

「でぇっ！？輝矢たちはっ！？」

無線に伝わればいいというのに、研究塔全体に響く大声で、リンゴが強く問いかける。

＜今っ…町に出て鬼人退治にっ…＞

「ああぁ～っ！もうっ！やっぱり私も行けば良かったぁっ！！」

イチゴの答えに、リンゴが深く頭を抱える。

＜お姉ちゃん…それって暗に私を否定してる…？＞

「そっそういうわけじゃないわよっ！」

無線から返って来る暗い声に、リンゴが慌てて言い繕う。

「とにかくっ！今から適当に誰か連れて、そっち行くからっ！あんたは輝矢たちのこと、お願いっ！」

リンゴが真剣な表情を見せ、無線に向かって叫ぶ。
「特に桜時っ…！はぁ、もう気になってるかっ、後、輝矢にも、気を配ってねっ！」
＜わかったっ…！＞
はっきりとした返事を最後に、イチゴからの無線が切れる。

「ったくっ…」
切れた無線を元の場所に戻し、少し困ったような表情で、頭を抱えるリンゴ。
「パパと太狼さんとトマトおばあちゃんと金汰さんに連絡をっ…ええっとそれからっ…」
リンゴが、今からやるべきことを、頭の中で必死に整理する。
「武国に誰かをっ…誰っ…をっ…」
考えを巡らせ、頭を悩ませるリンゴ。
「……っ」
リンゴの表情が、そっと曇る。

「こんな時に…何やってんのよっ…」
誰にともなく、呟くリンゴ。

「バカゴンっ…」

静かになった研究塔に、リンゴの声が小さく落とされた。

「“瞬花っ…終刀”っ…！！」
「如意棒・第二の舞っ…“浄”っ…！」
「“右翼・裂羽”っ…！」
武器を構えた桜時、門貴、由雉が、それぞれの技を繰り出す。

『ギャアアアアアアアっ！！』

三人の力を喰らい、一気に三十匹程の鬼人が、砂と化して消えていく。

『グガアアアアアアアっ！！』
「げぇっ！？」
消えた鬼人の後方から、さらにやって来る鬼人の軍勢に、如意棒を下ろした門貴が、思わず顔をしかめる。
「ったく、キリないでぇ～っ！」
「ボク、もう疲れたぁ～っ」
「まだ羽根一枚しか投げてねぇーだろっ！」
困った顔を見せる門貴の横で、すでに疲れている由雉に、桜時が勢いよく突っ込みを入れる。

「“月器・三日月”っ」
ピアスを弾き、月器を目覚めさせる輝矢。

「“水月”っ！」

目覚めたばかりの三日月から、無数の水の刃が放たれる。

――――バァアアアーンっ！！――――

輝矢が水月を放ち、町を包み込んでいる炎の一部を消し去る。

「“月器”っ…」

「輝矢…様っ…」

そんな輝矢の姿を、茫然と見つめる町人たち。

「……っ」

輝矢がゆっくりと、視線を投げかけてくる町人たちの方を振り返る。

「動ける者たちで消火と怪我人の救助をっ！」

町人たちへ向け、輝矢が堂々と言い放つ。

「間もなく玄上の警備隊が来ますっ！その後は警備隊の指示に従って、避難して下さいっ！」

『……っ』

真剣な眼差しで訴える輝矢に、町人たちはどこか戸惑うような表情を見せてはいたが、皆、自主的に動き、輝矢の指示通り、町の消火活動と怪我人の救助を始める。

「……。」

そんな町人たちの姿に、複雑な表情を見せる輝矢。

「輝矢っ！」

「……っ」

後方から聞こえてくる桜時の声に、輝矢が振り返る。

「鬼の数、多すぎやわぁ～っ！輝矢んっ！」

「分散した方がいいかもぉ～っ」

「そうですねっ」

由雉の言葉に、輝矢が素早く頷く。

「では分散しましょうっ、ハチは町の中央、サルは西、キジは東、

私は北を中心にっ」
『了解っ！』
「ハチっ」
「んっ？」
指示を出した後、輝矢が桜時を呼ぶ。

「牢戸知玖が来ている可能性もあります」
「……っ」
輝矢の言葉に、桜時の表情が一気に険しくなる。確かに、これだけの鬼人がいれば、その親玉であるシルクが、この場に来ている可能性は高い。
「あの女の狙いはアナタです。もし牢戸知玖が現れた時はっ…」
鋭い瞳を、桜時へと向ける輝矢。

「“助けてぇ～っ！愛しの輝矢ぁぁ～っ！”と叫ぶように」
「誰が叫ぶかぁっ！！」
その指示に、桜時が勢いよく突っ込みを入れる。

「まぁとりあえず何か叫べやぁっ」
「桜咲かすとかでもいいしねぇ～っ」
「ああっ、わかったっ！」
「いや、ですからね、“助けて、愛しの輝矢”と…」
「とりあえずとっとと行くかっ！」
門貴と由雉の言葉にはしっかりと頷き、もう一度訴える輝矢を無視して、皆に強く言い放つ桜時。

「ふぅっ…」
輝矢が諦めたように、肩を落とす。

「ではっ、散開っ！」

『……っ！』

輝矢の声を合図に、四人はそれぞれ、町の東西南北へと散っていった。

第67章　vsトランプ兵団　☆2

武国の町・南部。武国入口。
「何だったんスかねぇ～さっきの音はぁ」
車の見張りのため、一人、武国の入口に残った羊スケのところにも、先程の大きな衝撃音は届いていた。羊スケが少し不安げに、入口の向こうに見える町を眺める。
「煙っ…そういやさっきから悲鳴みたいなのも聞こえてくるようなっ…」
空に舞い上がる灰色の煙と、時折聞こえてくる遠くからの悲鳴に、羊スケの表情は、さらに不安の色が濃くなる。
「何か嫌な感じっスねぇ～輝矢さんたちと合流した方がぁっ…あああでも不法侵入になっちゃうっスしぃ～っ」
――――バァァァーンっ！！――――
「ひぃっ！」
町に背を向け、考え込んでいた羊スケが、後方から聞こえてくる大きな音に、思わず背筋を震え上がらせる。
「えっえぇっとっ…何の音っスかね…？」
躊躇いがちに、ゆっくりと後ろを振り返る羊スケ。
「んなっ…！？」
『うっ…うぅっ…』
羊スケが振り返ると、そこには傷だらけになって倒れ込んだ、あの武国の門番・左助と右助の姿があった。苦しげに声を漏らす二人に、羊スケが驚きの表情を見せる。

「だっ大丈夫っスかっ…！？」
羊スケが慌てて二人に駆け寄る。
「一体っ、何がっ…！」
「あのような…者たちの…侵入を許して…しまうとはっ…」
「真正面…一生の…不覚っ…」
「……っ？」
そう呟く左助と右助に、羊スケが眉をひそめる。

「あのような者たち…？」
「あっ、人発見～っ！」
「……っ」

さらに聞こえてくる妙に軽い口調のその声に、羊スケが勢いよく顔を上げる。羊スケが顔を上げると、そこには燃えるような赤毛に、赤色の瞳の青年・波跡（はあと）が立っていた。

「だっ誰…」
「しっかもその制服っ、見たことあんなぁ～っ」
戸惑う羊スケを、波跡が興味深く見つめる。

「あっお前、アレだろぉっ？オトポリっ！」
「……っ」
オトポリを知る波跡に、羊スケの表情がさらに曇る。

「じゃあお前っ…」
波跡がその瞳を鋭くし、そっと笑う。

「俺の敵だぁっ！！」
「うげっ…！」

両手を振り上げる波跡に、羊スケの表情が歪む。

「いっいやっ！俺はただの運転手であってっスねっ！輝矢さんたちとは何の関係もないんスよっ！」

追い込まれた羊スケが、必死に手を横に振り、輝矢たちとは無関係であることを主張する。その姿は、何とも情けない。

「なんでぇっ！ここは一つっ…！」

『ううっ…』

「んん～っ？」

羊スケの主張が続いていたその時、羊スケのすぐ横に倒れ込んでいる左助と右助が、苦しげな声を漏らした。その声に気づき、波跡がゆっくりと二人を方を見る。

「何だぁ～？まだ生きてやがんのかぁ～っ」

『クっ…』

小バカにしたような笑みを浮かべる波跡に、悔しげな表情を滲ませる二人。

「我らっ…真正面っ…」

「武国の門を…守る者っ…」

「……っ」

苦しそうにしながらも、それでも国を守る意志を見せる左助と右助に、羊スケがそっと目を細める。

「はぁっ？その態勢で、何言っちゃってんのぉっ？」

そんな二人を嘲笑うかのように、冷たい言葉を投げ放つ波跡。

「もういいやぁっ！とりあえずお前らから死ねよぉっ！」
波跡が二人へ向け、右手を突き出す。
『……っ』
覚悟するかのように、顔を引きつる左助と右助。
「いっくぜぇっ！？“降っ…！」
“羊々ボール”っ！」
――――ピトっ…！――――
「……っ！」
今まさに技を繰り出そうとした波跡の手に、ぴったりとくっつく、ふわふわとした白い毛玉。その手にくっついたものに、波跡が勢いよく顔をしかめる。
「んだよっ？ただの運転手じゃなかったのかぁっ？」
「……。」
波跡がそう問いかけた先に立つのは、両手に羊々ボールを構えた羊スケであった。
「上司の教えなんスよっ…」
「あっ？」
小さく呟いた羊スケの声に、波跡が首を傾げる。
「“救えるもんは、救っとけ”ってのがっ」
ゆっくりと顔を上げた羊スケが、先程までとは違う、鋭い視線を

波跡へ向ける。

「ふぅ～んっ…」

そんな羊スケに、あまり面白くなさそうな表情を見せる波跡。

「ならっ…」

波跡の声のトーンが落ちる。

「死ねよっ…！！」

「……っ」

両手を振り上げる波跡に、羊スケが厳しい表情となって身構えた。

武国の町・中央部。

「“瞬花っ…終刀”っ…！！」

『グギャアアアアアっ！！』

村雨丸に斬り裂かれ、桃色の花びらとなって散っていく無数の鬼人。

「ふぃ～っ！」

桜時が村雨丸を下ろし、一息つきながら、周囲を見回す。

「粗方、片付いたかぁ～？」

周囲に大量にいた鬼人の姿がなくなったことを確認すると、桜時が少し気の抜けたような声を漏らす。鬼人がいなくなり、町人たち

も避難をしたのか、辺りに静けさが立ちこめた。
「後は消火と、羊スケんとここにも行った方がいいかっ」
桜時が次の場所へと移るべく、足を踏み出す。

「……っ！」
しかし、桜時の表情が突然、険しくなり、踏み出そうとしていた足が、その場で止まる。
「誰だっ…！」
そう叫び、勢いよく後方を振り返る桜時。

「こんにちは…」
「……っ」

そこに立っているのは、黒髪に赤い瞳の青年・術斗。礼儀よく挨拶をする術斗であったが、その冷たい瞳に、桜時は警戒心を強め、持っていた村雨丸を素早く構える。

「お前はっ…？」
「“トランプ兵団”…術斗（すべと）…」
「トランプ兵団っ…？」
術斗の答えに、桜時が戸惑うように眉をひそめる。
「貴方がたには、こう言った方が理解しやすいでしょうかっ…」
そっと瞳を細め、術斗が桜時の方を見る。

「“牢戸知玖の手の者”と…」
「……っ！」

術斗からシルクの名が出ると、桜時の表情が一気に険しくなる。

「……っ」

さらに感覚を研ぎ澄ませ、辺りを警戒する桜時。だが周囲にいるのは、この術斗だけで、どうやらシルクはいないようである。シルクが近くに居れば、嫌でも体が反応するだろう。

「お相手願えますか…？“命咲かす者”…」

「……。」

そう誘う術斗を、桜時がまっすぐに見つめる。

――――俺っ、強くなる…――――

強くなると決めて、修行に励んだ一ヶ月。

「いいぜっ」

桜時が口の端を吊り上げ、少し得意げに微笑む。

「修行の成果っ、お前で試してやるよっ！」

「それは光栄です…」

村雨丸を振り上げる桜時に、術斗もゆっくりと両手を構えた。

武国の町・西部。

「ふぃ～っ！しっかし暑いなぁ～っ！」
炎に包まれた町の中は、相当暑い。門貴は風を巻き起こし、町を包んだ炎を消し去りながら、町の西部を回っていた。炎の勢いの強い地区だったせいか、鬼人の数は少ないようである。
「よっ！第一の舞っ！“空”っ！」
門貴が風の塊を放ち、家を包み込んでいた炎を消し去る。

「んっ？」
「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」
やっと火の消えた家の中で、苦しげな声を漏らし、倒れ込んでいる町の子供。

「おぉ～いっ！大丈夫かぁ～？」
門貴が家へと入り、その子供のもとへと駆け寄っていく。
「トオルっ！！」
「……っ？」
駆け寄っていこうとした門貴の横を、勢いよく通り過ぎ、子供へと駆け寄っていく町の女。
「トオルっ！トオルっ！？」
「おっ…母さっ…」
「トオルぅぅ～～っ！！」
女の必死の呼びかけに、子供が目を開け、弱々しくではあるが母を呼ぶ。その声に母親であるその女は、何とも嬉しそうな笑顔を見せた。

「ふぅ～っ」
その様子に、どこか安心した表情を見せる門貴。

「……っ」
「……っ！」

その時、何かの気配を感じ、門貴の表情が一気に険しくなった。

――――バァァァァーンっっ！！――――

次の瞬間、子供と女のいた家が、何か大きな力を受けたのか、粉々に崩れ落ちる。

「ぅあっ…」

「ふぃ～っ！」

崩れ落ちた家を唖然として見つめる女の手を掴み、もう一方の手でしっかりと子供を抱いた門貴が、崩れた家のすぐ傍へと着地する。家が崩れる寸前に、二人を助けたのである。

「間一髪やったなぁ～ってかぁっ」

門貴がその表情を鋭くし、横を振り向く。

「危ないねんけどぉ？」

「……。」

門貴が振り向いた先には、十字型をした刃を構えた、オレンジ色の髪に赤い瞳の青年・醍也（だいや）が、無表情で立っていた。

「相変わらず…他人に甘いようだな…」

「いっくら物忘れの悪い俺でもっ、お前の顔は忘れられへんみたいやわぁ～っ」

ポツリと呟くように言葉を発する醍也に対し、少し苦々しい笑みを浮かべる門貴。

「一回っ、殺されかけた相手の顔はなぁっ」
「……。」
自分を皮肉ったように言う門貴であるが、醍也は特に反応は示さず、無表情のままで門貴を見つめる。
「子供連れて、どっか安全なところに逃げときぃ～っ」
「あっはいっ…」
まだ少し茫然としている女に、子供を手渡し、門貴が指示を出す。
女は素直に頷き、しっかりと子供を抱いて、すぐにその場を駆け出していった。
「さてとっ」
如意棒を持ち直し、門貴が改めて醍也の方を見る。
「ちょっとお話しに来たってわけではないんやろぉ？」
「この前は邪魔が入ったからな…」
少しふざけたように問いかける門貴に対し、ゆっくりと十字刃を構える醍也。
「今日こそは…敗北者に…死を…」
「……っ」
醍也の言葉を受け、門貴もすぐに如意棒を構える。
「今回は、前みたいに簡単にはぁっ、負けへんでぇっ！」
「……。」
得意げに言い放つ門貴に、醍也はそっとその瞳を鋭くした。

武国の町・東部。
「山の麓へ避難しますっ！こちらへ続いて下さいっ！」
「怪我人はこちらへっ！怪我人はこちらへぇっ！」
「手の空いている者は消火を手伝ってくれぇ～っ！！」
黒い軍服を着た者たちが、大声を張り上げながら、町人たちの誘導や、町の消火活動などをしている。

「へぇ～警備隊、もう来たんだぁ～」
その様子を、少し離れたところから、あまり興味なさそうに眺めている由雉。

「じゃあボク、もう帰って寝ていいかなぁ～フツーに眠いんだけどお」
「暇そうだな…」
「……っ」

どこからか聞こえてくるその声に、由雉がハッとなって振り返る。

「俺も暇なんだが…」
由雉が振り返った先、とある家の屋上に降り立つ、一羽のカラス。

――――ボォォォ～ンっ！――――

カラスが白い煙に包まれると、次の瞬間、白い煙の中から、長い黒髪の男・黒羽（くろば）が現れた。

「俺と一緒に遊ばないか…？」

「……っ」

含んだような笑みを浮かべながら、屋根の上から、黒羽が地面へと降り立つ。そんな黒羽の様子を見ながら、由雉もゆっくりと口の両端を吊り上げた。

「いいのぉ？言っとくけどっ、ボク、高いよぉ～？」

「フンっ…」

挑戦的に言い放つ由雉に対し、黒羽が軽く鼻で笑う。

「相変わらずだな。あれだけの傷を負っても、性格は変わらなかったようだ…」

「なんでボクが変わらなきゃいけないのさっ」

嫌味っぽく言い放つ黒羽に対し、すぐさま切り返す由雉。

「確かに、その性格は死んでも変わらないだろうな…」

黒羽が、少し諦めたように肩を落とす。

「だからっ…」

すっと鋭くなる、黒羽の瞳。

「俺が殺して、いい人間に生まれ変わらせてやろうっ…」

「……っ」

冷たい笑みを浮かべる黒羽に、由雉は少し眉をひそめたが、それもすぐ消え、ゆっくりと笑みを浮かべた。

「結構ですっ」

「……っ」

きっぱりと断る由雉に、黒羽もどこか楽しげに笑う。

「そう言っていられるのもっ…今のうちだっ…！」
「そっちこそっ…！ボクの強さに驚いてっ、泡吹いても知らないよおっ！」
互いに笑みを浮かべながら、由雉と黒羽が、それぞれの羽根を構えた。

第67章　vsトランプ兵団　☆3

武国の町・北部。
「ギャアアアアアアっ！！」
激しい断末魔をあげ、砂と化して消える鬼人。

「ふぅっ」
アリスが六刻を下ろし、疲れたように一息つく。
「ったく、ホントに何匹いっ…」
「アリス様っ！」
「……っ？」
倒しても倒しても減らない鬼人に、嫌気のさした表情を見せていたアリスが、後ろから聞こえてくる大きな声に振り返る。
「警備隊っ？」
「アリス様っ！」
アリスのもとへと駆け寄って来るのは、黒い軍服を着た玄上家の警備隊であった。やって来る警備隊に、アリスが少し眉をひそめる。
「ご無事でっ！？」
「見たらわかるでしょ～っ？っていうかぁ、なんであなた達がここにぃ？」
警備隊を見て、アリスが不思議そうに首を傾げる。

「あっ、内兎が連絡入れたとかぁ？ああ、でもあいつはそんなに気のきく奴じゃっ…」
「いえっ、輝矢様が」
「……っ」
警備隊の口から輝矢の名が出ると、アリスの表情が一気に曇った。

「そうっ…」
アリスがどこか素気なく、返事をする。
「鬼人どもの相手は私がするからっ、あなた達は町人たちの避難をさせてぇっ」
「えっ？いやっ、しかしっ、数も数ですし、我々もお手伝いをっ…」
「いいからっ」
「……っ！はっはいっ！」
アリスに強く睨みつけられると、警備隊の先頭に立つその男は、少し驚いたような表情を見せた後、大人しく頷いた。
「町人たちを避難させるぞっ！怪我人の手当て急げっ！」
『はっ！』
先頭の男の指示に頷き、警備隊の者たちが、辺りに散らばっていく。
「ったくっ…」
散っていく警備隊を眺めながら、少し肩を落とすアリス。
――――いえっ、輝矢様が――――
アリスはただ、闇雲に飛び出して行っただけだったというのに、輝矢は、この国に来たばかりの状況であっても、迅速で的確な判断をし、素早く指示を出した。
「……っ」
悔しげな表情を見せたアリスが、そっと唇を噛む。
「ドレミファソラシドォ～っ♪」

「……っ？」

前方から聞こえてくる、音階を歌うその声に、アリスが怪訝そうに眉をひそめながら、ゆっくりと顔を上げる。

「ドシラソファミレドォ～っ♪」

「……。」

アリスの見つめる先に立つのは、頬に派手な星型のペイントを入れた、金色の髪の少女・城歌であった。何やら楽しげに歌っている城歌に、アリスが少し呆れたような表情を見せる。

「やっぱり歌はいいわレェ～っ♪じゃなくって、ねぇ～っ！」

広げていた両手を下ろしながら、城歌が歌うように言葉を発する。

「あなたもソォ～思わないぃ～っ？」

「誰っ？」

問いかける城歌に、アリスが冷たく切り返す。

「私ぃ～？私はトランプ兵団の城歌ぁ～っ」

「トランプっ…？」

城歌の答えに、アリスが顔をしかめる。

「あんたが、あの山程の鬼人の親玉ってわけぇ？」

「まぁそうなるわレぇ～っ！じゃなくって、ねぇ～っ！」

「そうっ…」

楽しそうに微笑みながら頷く城歌に、アリスが瞳を鋭くし、右手に持った六刻を構える。

「じゃあとっとと倒して、終わりにしてあげるわぁっ！」

「いいえぇ～っ」

「えっ…？」

勢いよく六刻を振り上げたアリスであったが、大きく首を横に振る城歌に、戸惑うような表情を見せる。

「私が戦いたいのは、あなたではないファ～♪じゃなくって、わぁ～っ！」

城歌がまた、歌うように答える。

「私が戦いたいのは、“月器”っ」

「……っ」

城歌の言葉に、止まるアリスの表情。

“月器”を持つ、竹取輝矢よぉっ」

「……。」

そっと微笑む城歌に、深く俯いていくアリス。

――――やはり“針器”より“月器”っ！――――

――――いえっ、輝矢様が――――

思い出される、無数の言葉。

「……そうっ…」

俯いたアリスが、小さな声を発する。

「あんた達でさえ、私より輝矢の方がいいってわけっ…」

アリスがそう呟き、力なく口元を緩める。

「アリスっ？」
「……っ」
聞こえてくるその声に、アリスが表情を歪める。
「あぁ～らっ、噂をすれば影レェ～っ♪じゃなくって、ねぇ～っ！」
「はぁっ？」

アリスの後方から、その場へと現れたのは、月器を持った輝矢であった。楽しげに笑う城歌の言葉に、輝矢が少し顔をしかめる。

「アナタはっ…？」
「さっきも同じこと、聞かれたけドォ～♪トランプ兵団の城歌よぉ～っ！」
「トランプ兵団？牢戸知玖の手の者ですか？」
「まぁそんなところレェ～♪じゃなくって、ねぇ～っ！」
「……っ」
頷く城歌に、輝矢が表情を険しくする。

「アリスっ」
城歌を警戒しながら、輝矢が茫然と立ち尽くしているアリスのもとへと駆け寄っていく。
「アリスっ、大丈夫でっ…」
「……っ！」

――――パシンっ…！――――

「……っ」
アリスへと伸ばされた輝矢の手が、アリスの手により、勢いよく振り払われる。

「触んないでよっ」
「アリスっ…」
冷たく睨みつけるような瞳を向けるアリスに、輝矢がそっと目を細める。

「ご指名よぉ？あの女ぁ、あなたと戦いたいんですってぇ～」
「えっ…？」
「大変ねぇ～っ、“月器”の使い手ともなるとぉ、あぁ～んな連中にまで大人気でぇ～っ」
「……っ」
嫌味たっぷりに言い放つアリスの、その口振りに、輝矢が少し表情をしかめる。
「アリスっ、今はそんなことを言っている場合ではっ…」
「うるさいなぁっ！」
「アリスっ…」
輝矢の呼びかけを、煩わしそうに一蹴するアリス。そんなアリスに、輝矢が少し悲しげな表情を見せる。

「あラァ～♪仲間割レェ～っ♪」
「……っ」
アリスの方を見ていた輝矢が、その歌うような声に、瞳を鋭くして振り向く。

「別に元々、仲間じゃないわっ」
「そうなんだぁ～っ」
吐き捨てるように言い放つアリスに、城歌はあまり興味なさそうに答える。

「どうでもいいかラァ～♪早く相手になってくれないぃ～っ？」
城歌が、輝矢へ笑顔を向ける。
「わたシィ～っ♪あなたと戦いに来たんだけドォ～っ♪」
「……っ」
何の狙いがあるのかわからない、城歌のその笑顔に、輝矢が警戒するように表情を曇らせる。

「仕方ありませんねっ」
ゆっくりと右手に持っている月器を、構えようとする輝矢。

「ハ二ホヘトイロハァ～っ♪」
身構える輝矢を見て、どこかうきうきしたような笑みを浮かべながら、城歌が発声練習を始める。

「輝矢さんっ…！」
『……っ』
さらに後方からやって来る声に、輝矢と城歌が振り向く。

「イチゴっ」
「はぁっ」
どこか慌てた様子で、その場へと駆け込んできたのは、イチゴであった。輝矢のすぐ横で立ち止まったイチゴが、呼吸を整えるように、胸を手で押さえる。

「オトポリへ連絡入れて来ましたっ、お姉ちゃんたちが今からすぐ行くってっ…あっ」
言葉を続けていたイチゴが、輝矢の前に立つ城歌の方を見て、ハッとしたような顔を見せる。

「連絡することっ…まだあったみたいですね…」
「ええ、まぁそれはあの者を倒してからでいいでしょう」
少し眉をひそめるイチゴに対し、輝矢が余裕で言い放つ。城歌に負けることは、考えていないようである。

「あラァ～♪みんなして、町に出てきちゃったのぉ～っ？」
『……っ？』
聞こえてくる城歌の声に、会話をしていた輝矢とイチゴが、同時に振り向く。

「いいのかしラァ～♪」
「えっ…？」
「それはどういうっ…」

――――バァァァァーンっっ！！――――

『……っ！』

城歌の言葉に、イチゴが戸惑いの表情を見せ、輝矢が問いかけようとしたその時、輝矢たちの後方から、大きな衝撃音のようなものが聞こえた。輝矢やアリスが、一斉に後ろを振り返る。

「あっあれはっ…？」
灰色の煙の上がっている方を見て、眉をひそめるイチゴ。
「玄上の屋敷の方ですっ…」
「えっ！？」
イチゴが、輝矢の言葉に、驚きの表情を見せる。

「まさかっ…！私たちをおびき出して、国主をっ…！」
「……っ！」

イチゴの言葉を隣で聞いていたアリスが、その表情を一気に険しくする。

――――アリス様っ！――――

浮かぶ、内兎の穏やかな笑顔。

「内兎っ…」

アリスがポツリと、声を漏らす。

「内兎っ…！！」

「あっ…！」

輝矢が止める間もなく、アリスがその場を駆け出していく。

「アリスっ…！」

「ドォ～は“ドカン”のドォ～っ♪」

「……っ！」

アリスを追いかけて行こうとした輝矢のもとに、城歌の歌声に乗るようにして飛んでくる、大きな衝撃波。

「輝矢さんっ…！！」

「うっ…！」

イチゴに手を引かれるようにして、輝矢が高々と飛び上がる。

――――ドッカァァーンっ！！――――

まさに城歌の歌った通りの音を立て、辺りの地面を砕く衝撃波。

「凄い力ですねっ…」
「ええっ」
城歌の力を目の当たりにし、厳しい表情を見せながら、輝矢とイチゴが砕けた地面のすぐ横へと着地する。

「……っ」
着地した輝矢が、ふと後方を振り返る。もうすでに、駆け出して行ったアリスの姿は見えなくなっていた。もう姿のないアリスに、輝矢が少し、不安げな表情を見せる。

「レェ～？じゃなくて、ねぇ～？私の相手をしてよぉ？」
「……っ」
城歌の声に、再び前を向く輝矢。
「せっかくあなたと戦いにきたんだからァ～♪」
「……。」
歌うような口調とは裏腹に、どこか冷たい瞳を見せる城歌。そんな城歌に、輝矢がそっと眉をひそめる。

「私の“歌力”でっ、あなた達を地獄へ誘ってあげるっ」
『……っ』

城歌の笑顔に、輝矢とイチゴは、そっと表情を険しくした。

「あれはっ…？」
その頃、トランプ兵団の一人・術斗と向き合っていた桜時も、玄上の屋敷の方角から上がる灰色の煙に気づき、同じように険しい表情を見せていた。
「まさかっ…」
――――こうも早くっ、四大国の国主を殺す機会が巡ってくるとはなぁっ！！――――
桜時の脳裏に、かつて朱実の屋敷で孔雀を襲った太鷲の姿が、蘇る。
「国主をっ…？」
「そのようですねぇ」
「……っ」
聞こえてくる声に、桜時が勢いよく振り返る。
「残念っ、貴方がたは皆、我々の罠に嵌ってしまったようです…」
「……。」
そっと微笑む術斗に、桜時が少し顔をしかめる。
「ならっ」
桜時が素早く村雨丸を構える。
「とっととてめぇを倒してっ、罠になんて嵌ってなかったことにするまでだっ！」
「……っ」
強きに言い放つ桜時に、術斗は怯むことなく、むしろ楽しげに笑う。
「さぁ～て、出来るでしょうか…」

「見せてやるよっ…！」
余裕の表情で微笑む術斗に対し、勢いよく村雨丸を振り上げる桜時。
「“瞬花っ…終刀”っ…！！」
振り下ろされた村雨丸から、術斗へ向け、桃色の一閃が放たれる。
「……。」
向かってくる桜時の力に、術斗は動じることもなく、避けようともせずに、ただ微笑んで立ち尽くす。
「直撃する気かっ…？」
「……っ」
「……っ？」
ゆっくりとした動作で、向ってくる一閃の方へと、右手を突き出す術斗。そんな術斗の動きに、桜時が戸惑いの表情を見せる。
「素手で受け止める気かっ…？」
桜時が首を傾げる中、桃色の一閃が、術斗へと迫る。
「“瞬花…」
「えっ…？」
術斗の発したその声に、思わず声を漏らす桜時。
「終刀”っ…」
「……っ！！」

術斗の右手から放たれる、桜時が村雨丸で放ったものとまったく同じ、瞬花終刀。桜時が大きく目を見開く中、二つのまったく同じ技が、ぶつかり合う。

――――バァァァーンっ！！――――

ぶつかり合った二つの力は、威力も同じだったのか、少しも残ることなく、見事に相殺した。

「いっ今のはっ…」

唖然とした表情で、桜時が術斗の方を見る。

“花力”っ…？」

術斗が放ったのは、桜時と同じ技。桜時と同じ、“花力”。

「そんなっ…朱実一族でもない奴がっ…なんでっ…」

桜時が、信じられないといった瞳を、術斗へと向ける。

「いやっ！そんなこと、あるわけがねぇっ！」

自分の考えを振り払うように首を横に振り、桜時が再び村雨丸を構える。

「“瞬花っ…終刀”っ…！！」

「……っ」

再び放たれる桃色の一閃に、術斗はさらに微笑んで、ゆっくりと右手を突き出す。

「“瞬花…終刀”…」

――――バァァァーンっ！！――――

「……っ！」

先程と同じように、術斗の右手から、桜時の技とまったく同じ力が放たれ、ぶつかり合った同じ力の二つが、見事なまでに相殺した。

「そんなっ…」

二度目ともなると、もう疑いようがない。桜時がさらに困惑した表情となる。

「ならっ…！」

その惑いを振り払うため、もう一度、村雨丸を構える桜時。

「これならどうだっ…！“柔桜っ…無塵”っ…！！」

桜時が村雨丸を振り切ると、先程の瞬花終刀よりも強い光の一閃が、術斗目がけて飛んでいく。

「……っ」

「……っ！」

その笑みを崩すことなく、またしても右手を突き出す術斗。

「まさかっ…」

「“柔桜っ…」

桜時が大きく目を見開く中、術斗はそっと呟いた。

「……無塵”っ…」

――――バァァァァァーンっ！！――――

「……っ！！」

柔桜無塵でさえも、術斗は桜時とまったく同じように放ち、向かってきた同じ力に相殺させた。そのあまりにも信じられない光景に、桜時が大きく目を見開いたまま、少しの間、固まる。

「そっ…そんなっ…」

もう疑いようもない。術斗が使ったのは、紛れもなく、桜時と同じ“花力”。

「朱実と同じっ…“花力”使いっ…？」

「……っ」

戸惑う桜時を見て、術斗は、どこか不適に微笑んだ。

第67章　vsトランプ兵団　☆4

「ドォ～は“ドカン”のドォ～っ♪」

――――ドッカァァァァァーーーンっ！！――――

『……っ』

城歌の歌に乗ってやって来る衝撃波を、飛び上がって避ける輝矢とイチゴ。

「うわああっ！」

「ぎゃあっ！」

「……っ」

しかし、衝撃波を受けて地面が砕けると、近くで怪我人の救助や、町人たちの誘導をしていた警備隊の者たちがそれに巻き込まれ、悲鳴のような叫び声をあげた。その声に、輝矢が少し顔をしかめる。

「場所を移した方が良さそうですね…ここでは余計な被害が出てしまうっ」

「……。」

着地をしながらそう言う輝矢の横で、ふと考え込むような表情を見せるイチゴ。

「輝矢さんっ…」

「えっ？」

急に名を呼ばれ、輝矢がイチゴの方を振り向く。

「私…あなたが何者なのか、正直…疑問に思っている部分が多いです…」
「……っ」
イチゴの思いがけない言葉に、輝矢は何を言うでもなく、そっと眉をひそめる。
「桜時さんたちは、あんなにあなたのことを信用しているのに…それでもすべてを話さないあなたを、酷いとも思います…」
「……。」
その言葉を否定することも出来ず、輝矢は少し申し訳なさそうに俯いた。
「だから一つだけっ…聞かせて下さいっ…」
イチゴがまっすぐに、輝矢を見つめる。
「私はあなたを…信じてもいいのですかっ…？」
「……っ」
真剣な眼差しで問いかけるイチゴに、輝矢が少し目を細める。少しの間を置いた後、輝矢がゆっくりと顔を上げた。
「ええっ」
「……っ」
しっかりと頷く輝矢に、イチゴがそっと口元を緩める。
「では行って下さい」
「えっ…？」

そう言って微笑みかけるイチゴに、輝矢が戸惑うような表情を見せる。

「ここは私が引き受けますので、輝矢さんは、アリスさんや玄上国主を」

「イチゴっ…」

イチゴの好意に、輝矢も笑みを零す。

「勝手に話を進めないでくれるかしラァ～っ♪」

『……っ』

聞こえてくる歌声のような話し声に、輝矢とイチゴが表情を鋭くし、同時に振り向く。

「そんなことっ、私が許すはずないでしょ～っ？」

「いいえっ」

「……っ？」

すぐさま答えたイチゴが、輝矢の前に立つように足を踏み出す。

「許すのは、あなたではありません…」

右手を強く握り締め、拳骨を作り、脇腹の横につけるようにして、構えを取るイチゴ。

「私ですっ…」

「何ですって？」

城歌が眉をひそめる中、イチゴの構えた拳が、青色の光に包まれていく。

「青き拳…龍が如く…」

イチゴが青く輝くその拳を、素早く突き出す。

「“青拳突き”っ！」
「うぅっ…！」

イチゴの拳から放たれた、青い光の塊が、物凄いスピードで、まっすぐに城歌に向かっていく。

――――バァァァァーーンっ！！――――

「あらららららラァァァ～～～っ♪」
歌うように叫びながら、その光をもろに喰らい、空の彼方へと飛んでいってしまう城歌。

「では場所を移動しますっ！」
「えっ？あっえええっ」
飛んでいった城歌を、唖然とした表情で見つめていた輝矢が、振り向くイチゴに慌てて頷く。

「気をつけて」
「輝矢さんも、ご武運をっ」

そう微笑みかけると、イチゴは素早く駆け出していき、飛んでいった城歌の後を追っていった。その場に輝矢だけが残される。

「相変わらず…龍人の力は凄いですねぇ…」
イチゴの力を目の当たりにし、思わず呟く輝矢。獣人最強一族の力は、やはり半端ではない。
「と、感心してる場合じゃありませんでしたね」

輝矢がゆっくりと振り返り、未だ、煙の上がっている玄上の屋敷の方を見る。

「武史さんっ…アリスっ…」

胸に走る、妙な予感。

「……っ」

厳しい表情を見せた輝矢は、玄上の屋敷へと急いだ。

一方、イチゴの拳に吹き飛ばされた城歌。

「あらららららららラァァァ～～～っ♪」

まだ歌声のような叫び声を出しながら、悠然と空を舞っている。

だがその高度は徐々に下がり始め、固そうな地面がすぐ目の前に見えてきた。

「仕方無いわレェ～♪じゃなくって、ねぇ～っ！」

どこか余裕すら感じる、いつも通りの歌うようなしゃべり。

「ファ～は“ふわぁっと”のファ～っ♪」
城歌の歌声が、城歌がもう間もなく落下する地面を包み込む。
「……っ」
――――ふわぁぁ～～っとっ！――――
城歌が地面へと落ちると、いかにも固そうな地面が、まるでクッションのように柔らかく、城歌の体を受けとめた。
「ふぅ～っ」
あれだけの高度から落下しながら、怪我一つ負わなかった城歌が、その場でゆっくりと立ち上がる。
「凄いですね…それも“歌力”ですか？」
「……っ」
横から聞こえてくる声に、振り向く城歌。
「これはお早いお着きレェ～♪じゃなくって、でぇ～っ」
「……。」
城歌が振り向くと、そこには城歌の後を追ってきたらしきイチゴの姿があった。
「まぁ～ったく、あなたのせいで台無しだわぁ～っ」
城歌が、困ったような表情を見せる。
「私は“月器”と戦いに来たのよぉ～？なのにぃっ」
イチゴの方を見て、城歌が深々と肩を落とす。
「戦い相手があなたなんてっ…役不足過ぎるファ～♪じゃなくって、

わぁ～っ！」
「……っ」

不満げに言い放つ城歌の言葉に、イチゴが少し眉を引きつる。

「私の名は、青守イチゴ…」
「何ぃ～？いきなり自己紹介ぃ～？」
突然、名を名乗り出したイチゴに、城歌が怪訝そうな顔を見せる。

「ああでもぉ～っ、“青守”ってどこかでっ…」
「我が一族は、御伽界最古にして、最強と謳われる“龍人”一族っ」
「……っ」

イチゴの言葉に、城歌の表情が一変する。

「“龍人”っ…」
急に鋭くなった瞳を、イチゴへと向ける城歌。

「そんな私が相手でも…“役不足”、と…？」
「……いいえぇっ」

城歌がそっと否定し、楽しげな笑みを浮かべる。

「何だかとっても…燃えてきたファ～♪じゃなくって、わぁ～っ！」
「……っ」

楽しそうに歌う城歌に、イチゴはゆっくりと拳を構えた。

その頃、武国入口。

「ぎゃあああああああああっ！！」

必死に逃げている羊スケの後方に、迫り来ているのは、山の上なのに何故か大波。

「ハッハッハっ！！」

高々と笑った波跡が、逃げ惑う羊スケに、両手を向ける。

「“降波薄（フルハウス）”っ！！」

――――ザッパァァ～ンっ！！――――

波跡の両手から放たれる大波。

「げぇっ！？」

前からも大波、後ろからも大波の状態となり、羊スケが頭を抱えて、とりあえず叫ぶ。

「ふぎゃあああああああっ！！」

とりあえず横へと飛び、前後から迫っていた波から、必死に逃げる。

――――バァァァァァーンっ！！――――

「クっ…！」

飛び避けた羊スケの目の前で、二つの波がぶつかり合い、大きな音を立てて崩れ落ちる。周囲に激しい水飛沫が飛び、羊スケも全身に水が降りかかった。

「えぇ～っとっ…」

水と音が止んだところで、羊スケが恐る恐る目を開く。

「ふえええぇぇっっ！？」

羊スケが目を開くと、目の前の地面に、巨大な穴があいていた。深く抉られたようなその穴が、波跡の力の強力さを物語っている。一発でも喰らえば、羊スケなど一溜まりもない。

「ダメっス、逃げるっス」

すぐに決意を固める羊スケ。

「あぁぁ～でもなぁっ」

決意はしたものの、羊スケがすぐに首を捻る。

「輝矢さん達は大丈夫としてぇっ、ここで逃げたらオトポリ、クビになったりしてっ…そしたら職がぁっ…」

「なぁ～にゴチャコチャ言ってんだぁ？」

「げっ…！」

悩みこんでいた羊スケの前へと、現れる波跡。

「いえっスねっ！そのっ！ちょっとっ…！」
「何もしてこねぇーんならぁっ、終わらせちまうぜぇっ？」
「クっ…！」
余裕の笑みを見せ、再び両手を向けてくる波跡に、羊スケが表情を険しくする。
「もうこうなったら覚悟決めるっスっ！」
羊スケが意を決した表情で、立ち上がる。
「“羊々ボール”っ！」
両手それぞれに羊々ボールを作りだした羊スケが、前方にいる波跡目がけて、二個の羊々ボールを、勢いよく投げ放つ。
「“降波薄”っ」
――――ザッパァァァ～ンっ！！――――
「あっ」
波跡の放った大波に、あっさりと呑み込まれる二個の羊々ボール。
波に沈んだ白の毛玉を見て、羊スケが少し間の抜けた声を漏らした。
「やっぱりぃ…そうっスよねぇ～…」
引きつった笑みを浮かべた羊スケのもとへ、大きな波が降りかかる。

――――バァァァァァーーンっ！！――――

「うわあああああああっ！！」

やって来た大きな波に呑まれ、強く吹き飛ばされる羊スケ。

「うっ…！うぅっ…」

背中を打ちつけるようにして地面へと落下した羊スケが、苦しげな声を漏らす。

「痛ってぇぇ～っ…」

全身に走る痛みに、思わず率直な言葉を呟く羊スケ。一回喰らっただけだというのに、体中が軋み、もう立つどころか、動けそうにもない。

「俺、やっぱっ…戦闘向きじゃないっスねぇ～…」

自分を皮肉ったような笑みを浮かべ、羊スケが力なく頷く。

「はぁ～あっ、オトポリだからって期待して損したぜっ」

倒れた羊スケを眺めながら、波跡が疲れたように肩を落とす。

「とっとと倒して、とっとと次の奴でも探しにいくかなぁ～っ」

「……っ」

倒れ込んだままの羊スケに、両手を向ける波跡。向けられた手を横目で見つめ、羊スケがそっと目を細める。

「結構、短かったっスねぇ～…俺の人生っ…」
どこか諦めたように呟く羊スケ。
「おふくろっ…泣くかなぁ…」
羊スケが、力のない笑みを浮かべた。
「とっとと死にやがれっ！“降波薄”っ！！」
――――ザッパァァァ～ンっ！！――――
高々と笑いあげる波跡の両手から、放たれる大波。
「……っ」
迫り来る大波に、羊スケがそっと目を閉じた。
――――――バァァァーンっ！――――――
「何っ！？」
「……っ？」

大きな衝撃音と、波跡の驚いたような声に、目を閉じていた羊スケが、ゆっくりと目を開く。

「あっ…」

すぐ目の前にある人影に、思わず目を見開く羊スケ。

「ゴっ…」

ゆっくりと振り返る人影に、羊スケが声にならない声を漏らす。

「ゴンさんっ…！！」

「よぉっ」

そこに現れたのは、右手に天狼丸を構え、相変わらずの目つきの悪い顔で笑みを浮かべた、ゴンであった。

一方、玄上邸。

「国主様っ！国主様ぁぁぁっっ！！」

煙の立ち込める廊下を、国主の間を目指して、必死に駆ける従者

の男。

「屋敷の至るところから火がっ…！今すぐ避難をっ…！うぅっ…！」

国主の間の扉を勢いよく開き、必死に叫ぶ従者であったが、その叫びが終わる前に、流れてきた不可思議な空気を吸い込み、力なくその場に倒れ込んだ。

「……。」

倒れた従者を、まっすぐに見つめる武史。国主の間内をよく見ると、倒れているのは、今入ってきた従者だけではない。十数名の従者、そして仕官である老人たちが皆、床に力なく倒れ込んでいた。立っているのは、武史だけである。

「状況は…？」

「はっ！」

武史が誰にともなく問いかけると、武史のすぐ後方に、一人の従者が現れた。

「予定通りっ、アリス様を追って、竹取輝矢もこちらへ向かってきておりますっ！」

「そうっ…」

従者の言葉を聞き、武史がゆっくりと頷く。

「後…少しだね…」

武史が、冷たい瞳で呟いた。

第６８章　迫り来る悪意　★１

四大国最後の国・武国を訪れた輝矢たちを、突如襲ったトランプ兵団。
その一人・波跡を相手に、絶体絶命のピンチに陥った羊スケの前へと現れたのは、ゴンであった。

「よぉっ、元気かぁっ？」
「あっ…」
振り向いたゴンに問いかけられ、驚きの表情を見せていた羊スケが小さく声を漏らす。
「見ての通りっ…」
少し声のトーンを落とす羊スケ。

「めちゃくちゃ元気っス」
「嘘つけっ！！見た感じっ、ヤラれまくりだろうがっ！！」

波跡の大波にやられ、倒れ込んだこの状況で、何故か元気であると主張する羊スケに、ゴンが勢いよく突っ込みを入れる。

「はぁ～っ、俺っ、ホントに死ぬかと思ったっスよぉ～っ」
ゆっくりと起き上がりながら、ホッとしたように深々と肩を落とす羊スケ。
「ゴンさんっ、お料理教室長すぎっス」
「はぁっ？」
「いえっ、こっちの設定の話っス」
「設定っ？」
羊スケの言葉に、ゴンが顔をしかめる。修行に行っていたという

のに、料理教室に行っていたことになっているとは、まさか思ってもみないであろう。
「にしてもお前なぁっ、仮にもオトポリなんだから、もうちょい粘れよっ」
ゴンが口を尖らせ、羊スケに注意するように言い放つ。
「俺がそんなに強かったら、ゴンさんの部下なんかで留まってないっスよ」
「それもそうかっ、って、どういう意味だっ!?ああっ!?」
羊スケの言葉に、ゴンが軽快なノリツッコミを見せる。

「おぉ〜いっ!」
「……っ」
前方から呼びかけてくる声に、ゴンがしかめていた表情を冷静に戻し、ゆっくりと振り向く。
「お前もオトポリかぁ〜っ?」
ゴンにそう問いかけるのは、先程まで羊スケと戦っていた波跡。
「だったら何だっ」
「じゃあお前も俺の敵だなぁっ!」
素気なく答えるゴンに、波跡は楽しげに笑い始める。

「アイツはっ?」
「さぁ〜?よくわかんないっス」
「はぁっ?」
首を傾げる羊スケに、顔をしかめるゴン。
「何でんなっ、よくわかんない奴と戦ってんだよっ!?」
「それはっ…」
羊スケが少し目を細め、離れたところで横たわっている左助と右助の方を見る。

「救えるものは、救っとこうと思ったんス」

「……っ」

まっすぐな瞳で、強く言い放つ羊スケに、ゴンが少し驚いたような表情を見せる。

「そうかっ」

だがすぐに、穏やかな笑みを浮かべるゴン。

「上出来だっ、後は任せて、寝てろっ」

「うぃ～っスっ」

ゴンの言葉に大きく頷き、起き上がったばかりの羊スケが、再びその場に力なく横たわる。

「さてとっ」

波跡の方を振り向き、その瞳を鋭くするゴン。

「悪いなぁっ、しょーもないもんの相手させちまって」

「ひどいっスよぉ～ゴンさぁ～んっ」

厳しい言い方をするゴンに、寝転がったままの羊スケが文句を放つ。

「まぁ大目に見てくれよっ」

ゴンが、ゆっくりと右手に持った天狼丸を構える。

「こっからはっ、俺が遊んでやるからさぁっ」

「……っ」

もうすでに勝ち誇っているかのような、そんな余裕の笑みを浮かべて言い放つゴンに、波跡が笑みを見せていたその表情を、かすかにしかめた。

「お前っ！俺の波に沈めてやるよっ！！」

その瞳を鋭くし、両手を構える波跡。

「“降波薄”っ！！」

――――ザッパァァ～～ンっ！！――――

波跡の両手から放たれた大波が、まっすぐにゴンへと迫り来る。

「あの波、干上がらせてやろうぜっ…」

向かってくる大波を見つめながら、ゴンが呟く。

「次狼っ」

そう言って、ゴンは素早く天狼丸を振るった。

「“炎刃”っ…！！」

振り下ろされた天狼丸から放たれる、激しく燃え盛る炎。真っ赤に輝く炎が、迫り来る大波へ、まっすぐに飛んでいく。

――――バァァァァーンっ！！――――

「んなぁっ…！？」

波と炎がぶつかり合うと、激しく逆巻いた炎は、あっという間に

自らよりも大きな波を呑み込んで、水の一滴も残らないまでに、消し去ってしまった。

「そっそんなっ…うっ…！」

あまりの力に圧倒されている波跡のもとへ、ゴンの放った炎が迫る。

「クゥっ…！！」

横へ転がり込むようにして倒れ込み、何とか炎をかわす波跡。

「クソっ…！」

地面に倒れ込んだ波跡が、悔しさに歪ませた顔を上げる。

「凄いっ…」

その光景を見つめながら、こちらも圧倒された様子で呟く羊スケ。

「凄いっス…ゴンさんっ…」

羊スケが驚きの表情で、ゴンと波跡の戦いを見守る。

「これが…修行の成果っ…」

「さぁてっ」

ゴンが振り下ろした天狼丸を、もう一度ゆっくりと持ち上げた。

「遊びの時間は終わりだぜっ？」

ゴンが鋭い瞳を、波跡へと向ける。

「さっき“遊んでやる”って言ったっス…」

「うっせぇっ！細かいとこに突っ込むんじゃねぇーよっ！」
こっそりと指摘する羊スケに、ゴンが勢いよく怒鳴りあげる。

「なぁっ？クソガキっ」
「クっ…！」

挑発的なそのゴンの笑みに、今まで余裕であった波跡の表情が歪んだ。

武国の町・東部。由雉ｖｓ黒羽。
「泡を吹くだと？」
由雉が放った強きの言葉に、黒羽が片眉を吊り上げる。
「大層な口をきくものだな。一ヶ月やそこらで、何かそんなに変わるとも思えんが、まぁいいっ…」
黒羽が、ゆっくりと微笑む。

「俺が試してやろうっ…！“右翼っ…！」
黒羽が、素早く懐へ、右手を入れる。

「……襲羽”っ！」

右手から、真っ黒の羽根を投げ放つ黒羽。

「……っ」

黒羽のが羽根を投げた先に立つ由雉も、すかさず右手から青色の羽根を出す。

「“右翼・裂羽”っ！」

向かってくる黒い羽根へ向け、青い羽根を投げ放つ由雉。

――――バァァァァーンっ！！――――

互いの羽根先がぶつかった瞬間、二つの羽根は大きな衝撃音を立てて、跡形もなく消え去った。

「何っ…？」

相殺された羽根に、黒羽が少し表情を曇らせる。

「相討ちっ…？俺の襲羽と…」

――――裂羽がっ…！――――

以前戦った時は、黒羽の襲羽が軽々と、由雉の裂羽を砕いたはずである。

「ならばっ」

考え込むような表情を見せていた黒羽が、再びその表情を鋭くす

る。

「これはどうだっ…！“左翼・消羽”っ！」

黒羽が左手から、再び黒色の羽根を放つ。

「……っ」

そっと左手を、懐へ入れる由雉。

「“左翼・滅羽”っ！」

由雉が左手で、真っ赤な羽根を投げる。

――――パァァァァーンっ！！――――

先程と同じようにぶつかり合った赤い羽根と黒い羽根は、再び大きな音を残して、互いにきれいに相殺した。

「チっ…」

再び消えた二枚の羽根に、黒羽がそっと舌を鳴らす。

「消羽までっ…」

「あれれぇ～？どうしたのぉ～？」

「……っ」

わざとらしく聞こえてくるその声に、黒羽が顔をしかめて振り向く。

「前、戦った時はもっと強かったと思ったけどぉ～？」

「……。」

試すような笑みを浮かべ、問いかけてくる由雉に、黒羽がそっと目を細める。

「羽根自体の強度が上がっているな…」

鋭い瞳で、由雉の方を見る黒羽。

「以前とは比べものにならん程だ…」

黒羽の眉が、少し引きつる。以前、龍国で戦った時は、黒羽の羽根が由雉の羽根の力を圧倒し、由雉は手も足も出なかったのである。

「この短期間でここまでの強化…お前一人の力ではないな…？」

「まぁねぇ～」

険しい表情を見せる黒羽とは対照的に、余裕の笑みを浮かべる由雉。

「ちょっとパピーのところまで、羽根の改良工事に行ってさぁ～っ」

「パピーっ…？」

由雉の軽い言葉に、黒羽がさらに顔をしかめる。

「“ハヤテ”、だよっ」

「……っ！」

由雉の口から出たその名に、黒羽の顔色が変わる。

「ハヤテっ…ハヤテだとっ…？」

動揺した様子で、その名を繰り返す黒羽。

――――父は死んだ…最期までハヤテと世界を憎んで…――――

御伽界の天才羽根造りであったハヤテと、黒羽の父・ウルシ。しかし世界はハヤテの羽根のみを選び、否定されたウルシは世界に居場所を失くし、そして死んだ。

「ハヤテの息子っ…？お前がっ…？」

由雉のことを、“ハヤテの羽根を受け継ぎし者”として認識はしていたものの、“ハヤテの息子”とは知らなかった黒羽は、その因縁に驚きを隠せない様子であった。

「そうかっ…お前がっ…フフフフっ…フハハハハハっ！」
「……っ？」

突然、笑い始める黒羽に、由雉が少し眉をひそめる。

「何ぃ～？頭イカれた？」
「いやっ、血の因縁に、笑いが込み上げて来ただけだ」
由雉の問いかけに、嬉しそうに微笑んだまま、黒羽が軽く手を横に振る。

「血って…あのぉ、言っておきますけどぉ、パピーといってもボクとハヤテはっ…」
「そう言えばよく似ているなぁっ！今まで気付かなかったのが不思議なくらいだっ！ハハハっ！」
「殺すっ…」

ハヤテと似ていると言って笑う黒羽に、ひっそりと、今までにない程の殺意を抱く由雉。

「誰があんなバカキングと似てなんかっ…」

「丁度いいっ！」

「……っ？」

響き渡るように聞こえてくるその大きな声に、由雉がゆっくりと顔を上げる。

「俺たち、二人で決めようじゃないかっ！」

高々と笑いあげた黒羽が、大きく両手を広げる。

「ハヤテとウルシっ、どちらの羽根が強いのかをなぁっ！」

「……。」

黒羽の言葉に、由雉がそっと目を細める。

――――もう会えないんだねぇ…ウルシ…――――

思い出される、悲しげに笑ったハヤテ。間違った道に進んでしまったウルシを、ハヤテ自身、止めたかったに違いない。それが叶わぬというのなら、代わりに、由雉が黒羽を止める。

「ああっ…決めようっ…」

由雉がゆっくりと頷く。

「どちらの羽根が、間違っていたのか…」

右手を懐へ入れる由雉。

「その為に手に入れた力だっ…！」

由雉が力強く言い放ち、青い羽根を構えた。

武国の町・西部。門貴ｖｓ醍也。

「おっらぁぁぁぁっ！如意棒っ！！」

勢いよく振り上げた如意棒を、思いきり振り下ろす門貴。

「……っ」

如意棒の下ろされようとしている、その先に立つ醍也が、無表情のまま、ゆっくりと持っている十字刃を持ち上げた。

「“軽示（けいじ）”…」

醍也が小さく呟くと、十字刃が青く輝き出した。

「だりゃあああああああっ！」

醍也の持ち上げた青白く光る十字刃に、門貴が勢いよく如意棒を振り下ろした。

「ふへっ？」

しかし、門貴が如意棒を振り下ろした十字刃には、まったく手応えがなかった。

「へっ…？うわわわわっ！」

手応えのなさに、勢いを有り余らせた門貴は、そのまま十字刃を飛び越えて、体ごと、醍也の後ろへと放り出される。

「だぁぁぁぁぁぁっすっ！」

顔面から地面に落ちる、門貴。

「痛ててててぇ～っ…」

門貴が多少、土のついた顔面を押さえながら、その場でゆっくりと起き上がった。

「報告で聞いた通り…」

醍也が振り返り、門貴の方を見る。

「地面に這いつくばっている姿が、よく似合うな…」

「どんな報告、受けとんねんっ！！」

相変わらず、報告をもとにした発言をする醍也に、門貴が勢いよく突っ込みを入れながら、立ち上がる。

「ったくっ、誰が這いつくばってるんが似合うやっ！」

「“重示（じゅうじ）”…」

門貴がぶつくさと文句を言っている間に、醍也が再び呟く。すると醍也の声に反応するかのように、青白く光っていた十字刃が、今度は赤色に輝き始めた。

「……っ」

醍也が赤く輝く十字刃を構え、門貴のもとへと駆け込んでいく。

「んっ？」

土を払っていた門貴が、少し間の抜けた表情で顔を上げる。

「うぇっ！？」

「“赤十字”っ…！」

「にょっ如意棒っ！」

勢いよく十字刃を振り下ろしてくる醍也に、門貴が表情を鋭くし、素早く如意棒を突き出す。

――――パァァァーーンっ！！――――

強い音を立てて、ぶつかり合う如意棒と十字刃。

「“重示”…」

「クっ…！」

醍也の言葉に十字刃がさらに強く赤い光を放つと、十字刃が徐々に如意棒を押し始めた。かかる重みに、門貴が苦しげな表情を見せる。

「せっかく作ってもらったのにっ、また折られてたまるかいっ…！」
「……っ？」
門貴が踏んばるように唇を噛みしめ、如意棒の片先を、地面へと突き刺す。
「如意棒っ！第二の舞・“浄”っ…！！」

――――バァァァァーンっ！――――

「クっ…！」
門貴の四方から巻き起こる風に、醍也が慌てて十字刃を引き、その場から離れるように、高々と後方へと飛ぶ。

「ふぃ～っ！」
如意棒にかかっていた重みから解放され、門貴が一息つきながら、周囲の風を収める。
「さっきはなぁ～んの手応えもなかったくせに、今度は鉄みたいに重いっ…何やねんっ、あの武器っ」
門貴が少し顔をしかめながら、地面へと着地する醍也の十字刃を見つめる。

「……っ」
醍也が地面に着地すると、十字刃はいかにも重そうに、地面へとその刃先をめり込ませた。

「……“軽示”」

その呟きに、めり込んでいた十字刃が、先程よりも数センチ浮き上がる。

「……っ？」

わずかなその変化に、勢いよく眉をひそめる門貴。

「浮いたっ…？」

門貴が俯き、考え込むように首を捻る。

――――ふへっ？――――

何の手応えもなかった、青色の十字刃。

――――クっ…！――――

一度は如意棒を砕かれた、赤色の十字刃。

「……っ」

すべてのことが一本の線となって繋がり、門貴が大きく目を見開く。

「そういうことかっ」

門貴がそっと口元を緩め、勢いよく顔を上げた。

「読めたでぇっ！お前の能力っ！」

「……っ？」

高らかと言い放つ門貴に、醍也が少し眉をひそめる。

「お前の能力はっ、“重力”やなぁっ！？」

「……っ」

門貴の言葉に、醍也の無い表情が、かすかに曇った。

「その十字刃の重さを自在に変えられる力やっ！違うかぁっ！？」
「……。」
問い詰めるように如意棒を突き出す門貴に、少し表情を険しくする醍也。

「報告で聞いていたより…知能指数はあるようだな…」
「当ったり前やっ！どうせ知能指数は本物のおサルさん並みやとか、聞いとったんやろぉっ！？」

醍也の聞いてきた報告に、今度は突っ込みを入れることなく、鋭く指摘をしてみる門貴。

「いやっ…本物のおサルさんの十分の一にも満たないと…」
「誰やぁっ！？報告した奴っ！！」
醍也の言葉に、門貴が報告を入れた者へと怒りを燃やす。

「ったくっ！力のタネさえわかればっ、こっちのもんやでっ！」
「そんなことはない…」
「んっ？」
すぐさま否定の言葉を返してくる醍也に、門貴が顔をしかめる。

「力の正体がわかったところで…貴様の敗北は変わらないっ…」
「あっ」
醍也が、十字刃を構えたまま、高々と空へと舞い上がる。

「“重示”っ…」

下方にいる門貴のもとへと降下をしながら、重みを増させ、十字刃を赤く輝かせる醍也。重くなっていく十字刃に、降下する醍也の

スピードも上がっていく。

「喰らえっ…“赤十字”っ…！」
「……っ」

落下するように下ろされる十字刃に、門貴が険しい表情を見せた。

――――バァァァーンっ！！――――

振り下ろされた十字刃に、辺りの地面が勢いよく抉られ、大量の砂が飛び散るとともに、大きな穴があいた。

「“軽示”…」

あいたばかりの大きな穴を見ながら、醍也がゆっくりと十字刃を持ち上げる。

「やっと終わった…」
醍也がゆっくりと呟き、少し肩を落とす。

「やっと…敗北者に死を…」
「だぁ～れが死んどんねんっ！？」
「……っ！」

後方から聞こえてくる声に、醍也が勢いよく振り返る。

「悪いけどっ、俺ならピンピンしとうでぇ～っ！」
「なっ…！」

醍也のすぐ後ろにある木の枝に座り、下方にいる醍也に向けて、明るく手を振っている門貴。その門貴の笑顔に、無表情の醍也が、珍しくあからさまに顔を引きつる。

「何故っ…」
「何故ぇ～？そんなんっ、当ったり前やろぉ～っ？」
「何っ…？」
門貴の言葉に、醍也がさらに眉をひそめる。

「風に重さはないっ！重力じゃあっ、風は斬れへんでぇっ？」
「……っ」
得意げに微笑む門貴に、そっと唇を噛む醍也。

「さぁっ！とっとと決めよかぁっ！」
門貴が木の上から飛び降りる。

「どっちがっ、敗者かをなぁっ！」

そう言い放ち、門貴は素早く如意棒を構えた。

第６８章　迫り来る悪意　★２

武国の町はずれ。イチゴＶＳ城歌。

「シィ～は“縛り付け”のシィ～っ♪」

燃える町並みの中、響く美しい歌声。

「……っ！？」

城歌と戦っていたイチゴの周りに、突如、光る縄のようなものが現れ、イチゴの体に巻きついた。

「これはっ…！」

巻きつく縄に動きを封じられ、イチゴが少し焦ったように声を出す。

「ホホホホォ～♪ドォ～っ？私の縛り付けの威力ファ～♪じゃなくって、はぁ～っ！」

「あのっ」

「んん～っ？」

少し遠慮がちに声を発するイチゴに、城歌が眉を動かす。

「何かしラぁ～っ♪」

「何故、“ドカン”とか“ふわぁっと”は擬音だったのに、いきなり“縛り付け”なんですか？」

「あラァっ！」

イチゴのその突拍子もない問いかけに、城歌が思わずズッコケる。

「そんなのドォだっていいでしょうっ！？作詞家にも色々とあるのよぉっ！」
「特に理由はないんですかっ…」
怒鳴りあげる城歌に、イチゴが少し残念がるように肩を落とす。
「じゃあもういいです」
「へぇ～っ？」
「よっ」
――――パァァァァーンっ！――――
「んなっ…！？」
イチゴが少し気合いを入れるような声を出すと、その次の瞬間、イチゴを捕らえていた光の縄が、周囲に勢いよく飛び散った。その思いがけないことに、城歌が大きく目を見開く。
「ふぅ～っ」
「……。」
体の動きを確かめるように腕を回しているイチゴを、唖然と見つめる城歌。
「どうなってるのっ…？龍人というのファ～♪ではなくって、はぁ～っ！」
イチゴの力に圧倒されながらも、それでも歌は歌う城歌。
「こうなったらっ…！」
城歌が、その瞳を鋭くする。
「ドォ～はドカンのドォ～っ♪リピートっ！」

両手を広げ、軽やかに歌いあげる城歌。

――――ドカンっ！ドカンっ！ドッカァァーンっ！！――――

「クっ…！」

次々と巻き起こる衝撃波を、イチゴが素早い身のこなしを見せて、すべて避ける。

「ああぁんっ！もぉっ！小賢シィ～っ♪」

そんなイチゴの様子に、城歌が煩わしそうに声をあげる。

「リピートは無駄レェ～♪じゃなくって、ねぇ～っ！」

「……っ？」

そう言いながら、城歌が胸の前に両手を突き出す。今までとは異なる城歌の動きに、そっと眉をひそめるイチゴ。

「ドォ～はドカンのドォ～っ♪」

城歌の歌声から、衝撃波が生まれる。

「フォルティッシモっ！！」

「……っ！！」

衝撃波が城歌の声に大きくなり、勢いを増す。

「これはっ…！」

焦ったように声を出すイチゴ。辺り一面を包み込めそうなほどに巨大なその衝撃波は、今からイチゴがどこへ逃げようとも、当たってしまう。

「ホホホォ～ホホォ～っ♪終わりねぇ～っ！龍人一族っ！」
「クっ…！」
歌うように笑いあげる城歌に、顔をしかめるイチゴ。
「砕くしかありませんねっ…！」
意を決した表情を見せたイチゴが、両の拳を、勢いよく後ろへ引く。
「青き光っ…龍が如くっ…」
引かれたイチゴの両拳が、強い青色の光を放ち始める。
「“龍光弾（りゅうこうだん）”っ！！」
イチゴが両拳を前へと突き出すと、そこから巨大な青色の光の玉が放たれた。イチゴが放った光は、城歌の放った衝撃波へと、まっすぐに飛んでいく。
――――バァァァーーンっ！！――――
「んラァっ！！？」
光に呑み込まれるようにして、あっという間に消え去る衝撃波に、城歌が大きく目を見開く。
「わっ私の歌がっ…ううぅっ！」
衝撃波を砕き、城歌へと迫る青色の光。
「ううぅっ…！！」

焦りの表情を見せた城歌が、必死に体を動かし、飛んでくる光を避けた。

「クっ…！」

横へ飛ぶようにして避けた城歌を、光の玉がかすめ、星のペイントがされた城歌の頬から、真っ赤な血が流れた。

「私がっ…傷をっ…」

地面に滴り落ちる赤い血を見て、城歌が驚きの表情を見せる。

「何っ…なのよっ…？」

歪んだ表情を、イチゴへと向ける城歌。

「何なのっ！？あなたのその力はっ…！」

「……。」

明らかに動揺した様子で問いかけてくる城歌に、イチゴが鋭い瞳を見せたまま、そっと光の止んだ拳を下ろす。

「いいでしょう…意識を失う前に教えて差し上げます…」

イチゴが、凛とした声で言い放つ。

「かつて、天は光りより龍を生んだ…」

「はっ…？」

突然のイチゴの言葉に、眉をひそめる城歌。

「すべての獣人の祖、御伽界最古の獣人・“龍人”っ…」

イチゴがゆっくりと、右手を上げていく。

「すべての獣人の力の起源、それこそが、我ら“龍人”に与えられし力っ…」

イチゴの頭上のさらに上へと、上がっていく右手。

「我ら“龍人”に与えられし力っ！その名も“光力”っ！」

「光力っ…？」

力強く握られる拳に、城歌が少し圧倒されたような表情を見せる。

「覚えておくといいでしょうっ…あなたが敗れる力の名をっ…」

「クっ…！」

イチゴの強い言葉に、額から汗を流し、焦ったように唇を噛みながら、必死に構えを取る城歌。

「覚悟っ…！」

イチゴの拳を、再び、青い光が包んだ。

武国の町・中央部。
「“柔桜っ…」
「“柔桜…」
桜時が村雨丸を、術斗が右手を、同時に構える。
『……っ無塵”っ！！』

同時に放たれる、二つの桃色の光。

――――バァァァァーンっっ！！――――

ぶつかり合った、まったく同じ二つの力が、桜時と術斗の丁度真ん中で、きれいに相殺し、消えてなくなる。

「……っ」
その光景に、顔をしかめる桜時。

「柔桜無塵までっ…」

桜時が、困惑の表情を見せる。桜時が相対したトランプ兵団の一人・術斗は、桜時の技とまったく同じ技を使う、桜時と同じ花力の使い手であった。朱実一族でしか使えないはずの花力を持つ術斗に、桜時が惑わされる。

「アイツの力はっ…一体っ…」
「随分と、混乱されているようですねぇ」
「……っ」
混乱する桜時を、嘲笑うかのような笑みを浮かべる術斗。

「一応言っておきますが、僕の力は“花力”ではありませんよ？」
「えっ…？」
術斗のその言葉に、桜時がまた驚いたような顔を見せる。

「当然でしょう…？」
そっと微笑んだ術斗が、桜時に語りかける。
「僕、ピンク髪じゃありませんし…」
「悪りぃけど、ピンク髪は朱実でも俺だけだっ！！」
髪色だけで朱実一族を判断しようとする術斗に、桜時が思わず突っ込みを入れる。

「けどっ、“花力”じゃないってんなら、一体っ…！」
「いいでしょうっ、教えて差し上げますっ…」
戸惑う桜時に、術斗がさらに微笑みかける。

「僕の力の名は…“模力（もりょく）”…」
「モっ…？」

術斗の言葉に、桜時が顔をしかめる。

「その名の通り…」
「太ももを強化する力か？」
「違います」
桜時の考えを、術斗が冷たい笑顔のまま、あっさりと否定する。

「その名の通り、あらゆる術を模写する力です」
「模写っ…？」
「ええっ」

聞き返す桜時に、術斗が短く頷く。

「どんな獣人のどんな力であっても、余程特殊なものでなければ、僕はそれを模写し、使うことが出来る」

「どんなっ…力でもっ…？」

戸惑いの表情を見せながら、術斗の放った言葉を繰り返す桜時。

「じゃあっ…！」

「ええっ、貴方の“花力”も、模写させていただきました」

「……っ！」

“模力”などという、そんな便利な力は、実に信じ難いが、先程の術斗の手から放たれた、桜時とまったく同じ技をあれだけ見れば、信じざるを得ない。

「そんなことがっ…」

「ちなみに、こんなことも出来ますよ？」

「えっ…？」

「……っ」

桜時が眉をひそめる中、術斗が笑顔で、右手を桜時へと向ける。

「第一の舞…」

「えっ…？」

聞き覚えのあるその言葉に、桜時が思わず目を見開く。

「まさかっ…」

さらに戸惑いの増す中、術斗の右手から巻き起こる力。

「“空”っ…」

――――ビュゥゥゥンっ！！――――

「うっ…！」

術斗の右手から放たれたのは、正真正銘、強い風の塊。桜時がさらに目を開く。

「クっ…！」

必死に横へと転がるようにして飛び、術斗の放った風を避ける桜時。

「あっ…」

桜時の避けた風は、空へと舞い上がり、消えていった。

「今のは…門貴の“風力”っ…」

よく見覚えのある技。見覚えのある力。術斗は、先程は桜時の“花力”を使い、そして今、門貴の“風力”を使った。

「こんなことがっ…」

「ご理解いただけましたか…？」

「……っ」

風の消えていった空を見上げていた桜時が、後方から聞こえてくる術斗の声に振り返る。

「僕の力について…」

「……。」

不適に微笑む術斗に、険しくなる桜時の表情。

「んなのっ…アリかよっ…」

桜時の額から、一滴の汗が流れ落ちた。

その頃、武国・玄上邸。

「内兎っ…！」

屋敷から上がった煙を見たアリスは、鬼人に襲われていた町を駆け抜け、玄上の屋敷へと戻って来た。

「これはっ…」

多くある屋敷のすべてから赤々とした炎が上がっており、その間にある中庭も、火の海と化している。アリスが出ていく前の屋敷とは、まるで姿が違っていた。

「内兎っ…内兎っ…！？」

不安げに内兎を呼んだアリスが、一番近くの第一邸の中へと飛び

込む。

「内兎っ！？うっ…！」

屋敷へと入ったアリスが、廊下に立ちこめる灰色の煙に、思わず顔を伏せ、口を覆った。煙はすでに、屋敷中に充満している。

「内兎っ！？どこにいるのっ！？内兎っ！？」

それでも煙の中で必死に内兎の姿を探しながら、アリスが廊下を先へと進む。

「ウザウサギっ！クソウサギっ！居ても居なくっても、返事しなさいっ！」

無茶なことばかり言いながら、廊下を進んでいくアリス。

「私の言うことが聞けないのっ！？内兎っ！！」

アリスが必死に叫ぶが、やはり内兎の返事はなかった。

「内兎っ…」

その身を案じるように、そっと目を細めるアリス。

「まさかあのバカっ…この火にヤラれちゃったんじゃっ…」

嫌な考えが、アリスの頭を駆け巡る。

「そんなことになってたりしたらっ…殺してやるんだからっ！バカ内兎っ！」

そう言って、アリスが再び、廊下を進み始める。

「んっ？」

廊下を進んでいたアリスが、煙のその先に、何かを見つける。

「あれはっ…」

これほどに一杯に立ちこめている煙が、まるでそこだけを避けるようにしている、一つの大きな扉。その扉からは、何やら不思議な空気が溢れ出ていた。

「国主の…間っ…？」

その空気を感じ取ってか、アリスがそっと眉をひそめる。

「……っ」

少し考え込むように、俯くアリス。

「……っ内兎っ…！」

短い間を置いた後、アリスは勢いよく顔を上げ、その煙すら避けている国主の間へと飛び込んだ。

「内兎っ…！！」

勢いよく扉を開き、アリスが国主の間へと入る。

「……っ」

アリスが扉を開いたそこは、何とも静かな空間であった。外は煙

の立ち込める危機迫る空間だというのに、その部屋には煙一つなく、ただ薄暗く、静まり返っている。その不気味な空気に、アリスはどこか警戒するように、そっと顔をしかめた。

「内兎っ…？」

小さく内兎の名を呼びながら、アリスが部屋の奥へと進んでいく。

「内っ…」

「アリス…」

「……っ！」

薄暗い部屋の奥から聞こえてくる、自分の名を呼ぶ声に、アリスが思わず足を止める。

「……っ」

右手に握り締めた六刻で構えの態勢を取りながら、ゆっくりと声の聞こえてきた方を見るアリス。

「あっ…！」

アリスが、驚いた様子で、目を見開く。

「アリス…」

「ちっ…父上っ…？」

アリスの見た先に立っていたのは、穏やかな笑みを浮かべた父・玄上武史であった。優しく微笑みかける武史に、アリスが戸惑いの表情を見せる。

「父上っ、何でこんなところにっ…」
「さすがだね、アリスは…」
「えっ…？」
武史の言葉に、アリスが戸惑うように眉をひそめる。
「この空気の中で眠らずにいられるなんて…」
「えっ…？んっ…？」
戸惑いの表情を見せていたアリスが、ふと自分の足元にある何かに気づき、視線を下に落とす。
「なっ…！？」
「すぅーっ…すぅーっ…」
アリスのすぐ足元で横たわり、気持ち良さそうに寝息を立てているのは、玄上の従者らしき男であった。アリスがすぐに顔を上げ、国主の間全体を見回す。
「これはっ…」
薄暗い部屋を、よく目を凝らして見回すと、部屋の至るところに横たわり、眠っている人の姿があった。従者から、武国の仕官たちまで、皆、床に倒れ込み、不自然なほどに深く眠っている。
「……っ」
その光景に、さらに表情を曇らせるアリス。
「何っ…？」
アリスがゆっくりと顔を上げ、再び武史を見つめる。
「みんなにっ…何をしたのっ…？父上っ…」

アリスが、鋭い瞳を武史へと向ける。

「ヨーネル草を使ったんだよ…アリスも知ってるだろう？中庭にたくさん生えてる…」

「何のためにっ…！？」

「……。」

一度目の問いかけには穏やかに答えた武史であったが、声を張り上げ、二度目の問いかけをしたアリスに、ゆっくりと黙り込む。

「君もここに居るんだ、アリス…」

アリスの問いかけに答えを出さぬまま、武史がアリスに語りかける。

「そうすれば君は安全だから…」

「……っ」

武史の言葉に、警戒するような表情を見せながら、アリスが改めて部屋に倒れ込んでいる者たちを見回す。床で眠っている者たちの中に、内兎の姿はなかった。

「内兎はどこっ…！？」

「大丈夫、他の場所で眠っているよ」

「どこっ！！？」

武史の答えに満足することなく、アリスはさらに声を張り上げる。

「内兎はどこっ！？私に教えてっ！内兎の居場所を言ってっ！！」

「アリス…」

言葉を続けるアリスに、武史は少し困ったような表情を見せた。

「アリス、内兎のことは私に任せて、君はここに…」
「クっ…！」
「あっ、アリスっ…！」

武史の言葉を無視し、アリスが国主の間から飛び出していく。

「困った子だ…」
アリスが飛び出し、閉まった扉を見て、武史が深々と肩を落とす。

「国主様っ」
「……っ」
そこへ現れる、数名の従者たち。

「すぐに追いかけて、捕まえて…」
『はっ！』
武史の指示に、従者たちが一斉に頷く。

「手遅れに…なる前に…」

そう呟いて、武史はその鋭い瞳を、そっと細めた。

「内兎っ！内兎っ…！！」

国主の間を飛び出したアリスが、第一邸を抜け、炎に包まれた渡り廊下を必死に駆ける。

「どこにっ…どこにいるのよっ…！？」

――――アリス様っ…――――

浮かぶ優しい笑顔が、会いたい気持ちと不安をさらに大きくする。

「内兎っ…！！」

アリスはどこか泣きだしそうな表情を見せながら、必死に廊下を駆け抜けた。

第６８章　迫り来る悪意　★３

「第一の舞…“空”…」
「クっ…！」
向かってくる風の塊に、少し焦りながら、村雨丸を構える桜時。
「“柔桜っ…無塵”っ…！！」
桜時が村雨丸を振り下ろし、風へ向け、桃色の光を放った。
――――バァァァァーンっ！――――
ぶつかり合った二つの力が、大きな音を立てて、相殺する。
「“柔桜無塵”…」
「なっ…！」
桜時に休む暇すらも与えず、放たれる桃色の光。
「うっ…！」
振り切った村雨丸を構える時間すらなく、桜時に光が迫った。
――――バァァァァーンっ！！――――
「うわあああああっ！！」
直撃した桜時が、体から血を流し、激しい悲鳴をあげて、うつ伏せに地面へと倒れ込んだ。

「ううっ…」
地面に顔を向けたまま、桜時が苦しげな声を漏らす。
「どうです…？」
そんな桜時へと、語りかけてくる声。
「自分の技に、ヤラれる気分は…」
「クっ…！」
桜時が唇を噛み締め、食いつくように見上げたその先には、余裕の笑みを浮かべた術斗の姿があった。他の獣人のあらゆる力を模写する能力“模力”の使い手・術斗は、桜時の花力や門貴の風力などを使い、桜時を圧倒していた。
「クッソっ…！」
「怖い顔ですねぇ…」
悔しげに見上げる桜時を見て、術斗がさらに口端を吊り上げる。
「何の力でも使えるなんてっ、ずりぃぞっ！んなもんに勝てるわけっ、ねぇーじゃねぇーかっ！！」
「アハハっ」
「ああっ！？」
子供じみた文句を放った桜時を、小バカにするように微笑む術斗。
そんな術斗に、桜時がさらに顔をしかめる。
「ずるかろうが、せこかろうが、この力こそ、神が僕に与えた能力です」
「神っ…？」
術斗の言葉に、桜時が少し考え込むように、眉をひそめる。

「ここで負けるのなら…それが貴方の運命ですよ…」
そう呟き、術斗が冷たく笑う。

「さぁて、そろそろ終わりにしましょうか…」
「うっ…！」
倒れたままの桜時へ、右手を向ける術斗。

「大丈夫、命までは取りません…」
術斗がそっと、桜時に微笑みかける。

「何せ貴方は…“命咲かす者”ですからっ…」
「命っ…？」

その言葉に、桜時がハッとした様子で、目を見開く。

――――犬国。八犬士との修行を終え、初めて八房との修行に入った日。

「命っ…？」
「うむっ」
首を傾げた桜時に、八房は深々と頷いた。

「言ったであろう…？お前に与えられし力、その名は“命力”じゃ

と」
「それはぁ、聞いたけどっ…」
「牢戸知玖とやらの狙いも、“命力”だそうだな…」
「……っ」

八房がシルクの名を出すと、桜時はそっと表情を曇らせた。やがては倒さねばならぬ相手。だがそのあまりの強さは、今も、思い出すだけで体が震えそうであった。

「“命力”とはその名の通り、命を無限に生み出す力…火を風だけではない。生命を、お前はその手で創り出すことが出来る…」
「生…命っ…」
ゆっくりと自分の両手を見下す桜時。この両手から、命を創り出すことが出来るなど、何度言われても、生み出すまでは、きっと理解出来ないだろう。

「“命力”とは凄まじい力だ…凄まじく、恐ろしい力…」
八房が、厳しい表情を見せる。

「使い方を少しでも誤れば、この世のすべてを滅ぼすやも知れん…」
「……っ」
八房の言葉に、桜時がごくりと息を呑む。

「お前が覚えているだけで良い。お前は今まで何度、“命力”を使った？」
「えっ？」
その問いかけに、桜時が少し目を丸くする。

「えっと…二、三回っ？」
桜時が少し首を傾げながら、曖昧に答える。

「何の為に使った？」
「えっ…？」

さらに来る問いかけに、桜時がまたもや目を丸くする。

「えっと、それはっ…」

――――死ぬなぁぁぁっ！！――――
――――輝矢っ…！！――――

「……大切な人を、守る為にっ…」
「そうか」

答えた桜時に、八房が短く頷く。

「では問う」
「……っ？」
「お前は今、何の為に力を欲しておる…？」
「……っ」

八房の問いかけに、桜時が少し目を細める。だがすぐにその瞳をまっすぐに見据え、真剣な表情を八房へと向けた。

「大切な人を、守る為にっ」
「……良いっ」

迷いなく答えた桜時を見て、八房がどこか満足げな表情を浮かべ

る。

「ではお前に、“命力”の使い方を教えよう…」

「……っ」

ゆっくりと立ち上がる八房に、少し驚いたような表情を見せる桜時。

「お前は、この世で唯一、“命力”を受け継ぐ者…」

桜時を捉える、まっすぐな瞳。

「そのことに誇りを持って戦え…朱実桜時…」

八房はそう言って、桜時に力強く笑いかけた…――――

――――お前は、この世で唯一、“命力”を受け継ぐ者…――――

――――そのことに誇りを持って戦え…朱実桜時…――――

「……っ！」

思い出される言葉に、桜時が勢いよく顔を上げた。

――――パァァァァーンっ！！――――

「何っ…！？」

桜時の体から勢いよく突き上げる、強い白色の光に、術斗が焦ったように声を発しながら、慌てて右手を引っ込め、その光を避けるように後方へと飛ぶ。

「なっ何だっ…？この光っ…」

「……っ」

「なっ…！」

術斗が戸惑うように見つめる中、白い光に包まれながら、桜時がゆっくりと立ち上がった。白い光に包まれた桜時を見て、術斗が驚きの表情を見せる。

「なっ何だっ…？その光はっ…」

「言ったはずだぜっ…？」

焦った様子で問いかける術斗に語りかけながら、桜時がゆっくりと村雨丸を構える。

「修行の成果っ、お前で試してやるって…」

「クっ…！」

鋭い瞳を見せる桜時に、術斗が動揺しながらも、必死に右手を突き出す。

「何の技でも使ってみればいいっ…！すべて、この僕が模写してっ

…！」

「マネ出来るもんならっ…マネしてみやがれっ！！」

桜時が、高々と村雨丸を突き上げた。

「“天地（てんち）っ…神命（しんめい）”っ…！！」

――――パァァァンっ！！――――

「……っ！！」

桜時と村雨丸から突き上げられた白い光が、桜時の頭上で一つの大きな光の塊となって、まっすぐに術斗のもとへと飛び出していく。

「なっ…何だっ…！？この力はっ…！！」

向かってくる白き力に、焦ったように声を出す術斗。

「模写出来ないっ…！この力はっ…！一体っ…！！」

模力を使うことの出来ない術斗に、桜時の白き力が迫った。

――――バァァァーンっ！！――――

「うっ…！うわあああっっ！！！」

桜時の命力を直撃し、術斗が全身から血を流して、倒れ込む。

「こっ…こんな力が…ある…なんてっ…うっ…」

倒れた術斗は、自分の受けた力のことを信じ切れていない表情で小さく呟き、力なくその瞳を閉じた。

「……。」

桜時が、目を閉じた術斗を、まっすぐに見つめる。

「ふぅっ」

少し息をついた後、突き上げていた村雨丸を下ろす桜時。

「へぇ～っ、自由に使えるようになったんですねぇ」

「……っ！」

後方から聞こえてくる声に、桜時が顔を引きつり、勢いよく振り返る。

「“命力”っ」

「お前はっ…！」

桜時が振り返った先に立っているのは、薄い笑みを浮かべた、金色の髪に細目の青年。

――――そう…僕の本当の君主は、紺染でもその女でもなく、“あの方”…――――

それはかつて虎国で、桜時が相対した、ゴンと同じ狐族の男。

「ギンっ…！！」
「……っ」

険しい表情を見せる桜時に、ギンはどこか楽しげに微笑んだ。

「お久し振りですねぇ、朱実桜時」
どこか親しげに、桜時の名を呼ぶギン。
「随分とご無沙汰してしまいました。本当はこの前の龍国の戦い、僕も行きたかったんですがねぇ」
ギンが残念そうな顔を見せる。

「やはりあそこは、諸刃に譲っておくべきかと思いましてぇ」
「クっ…！」

楽しげに話を続けるギンに、桜時が素早く村雨丸を構え直す。

「てめぇっ…！！」
「ああ、すみませんっ」

「あっ？」
刀を構える桜時に、まるで制止を促すかのように右手を突き出すギン。そんなギンに、桜時が思わず顔をしかめる。
「今日は別に戦いに来たわけじゃないんですよぉ」
「はっ？」
そう言って微笑むギンに、桜時が眉をひそめる。
「何言ってやがんだっ！アイツらっ、攻め込ませて来たくせにっ！」
桜時が術斗の方を見ながら、問い詰めるように言い放つ。
「いいえぇ～っ、彼らを連れて来たのも、武国を攻めさせたのも、僕ではありませんよぉ？」
「何だとっ…？」
ギンの言葉に、桜時が表情を曇らせる。
「今日の僕は、その武国を攻めさせた者を、迎えに来たんです」
「迎えっ…？」
「ええっ」
聞き返す桜時に、ギンが笑顔で頷く。
「知りませんでしたぁ？その人、ずぅっと武国に潜入してたんですよぉ？」
「潜入っ…！？」
桜時が驚いたように、大きく目を見開く。
「ええっ、きっと今頃ぉ～っ」
ギンが言葉を続けながら、ゆっくりと右手を上げる。
「あそこにっ」

「……っ」

微笑んだギンが指し示したのは、激しく煙の上がる玄上の屋敷。

「玄上の屋敷っ…！？」

動揺した桜時が、玄上の屋敷の方を見つめた。

その頃、玄上の屋敷。

「アリスっ…！！」

イチゴに城歌を任せ、アリスの後を追って来た輝矢は、やっと玄上の屋敷へと戻って来ていた。炎の立ち込める屋敷を見回しながら、アリスの名を張り上げる。

「アリスっ！！」

必死に呼ぶが、アリスからの返事はなかった。

「仕方ありませんねっ…！」

輝矢が口を手で覆いながら、火の海と化している中庭を進んでいく。

「何て炎っ…“水月”っ…！」

――――バァァァァーンっ！！――――

右手に持った三日月から、無数の水の刃を放ち、中庭に通れるだけの道を作る輝矢。火の中に出来た道を、輝矢が小走りに進んでいく。

「アリスっ！武史さんっ！」

必死に声を出しながら、輝矢が中庭を進んでいく。

「どこですっ！？アリスっ！」

赤々とした炎の中にアリスの姿を探すが、周囲にはアリスどころか、人一人の姿も見当たらなかった。

「皆、どこかへ避難しているのでしょうかっ…？でも屋敷はどれもっ…」

周りに建つ屋敷には、すべて火が回っており、避難出来る状態とも思えなかった。

「一体、どこへっ…」

「……っ」

「……っ？」

その時、火の海の中に出来た道の前方に、人影らしきものが現れ、周囲を見回していた輝矢が、勢いよく前を振り向いた。

「あっ…」

前を見た輝矢が、少し驚いたような表情を見せる。

「アナタはっ…」

牢戸知玖・居城。

「失礼致します」

シルクの部屋へとやって来たのは、相変わらずあまり表情の無い、諸刃であった。

「何っ…？」

部屋へと入って来た諸刃に、奥の寝台に横たわったシルクが、諸刃へ背を向けたまま問いかける。

「ギンの姿が見当たらないのですが…」

「ああっ」

諸刃の言葉に、軽く頷くシルク。

「ギンなら、アレの迎えに行かせたわっ…」

「迎え…？」

シルクの言葉に、諸刃がそっと眉をひそめる。

「迎え、ですか…」

「ええ…」

あまり納得のいっていない表情で呟く諸刃に、ゆっくりと頷きかけるシルク。

「シルク様…」
「何っ…？」
呼びかけた諸刃に、シルクはまたも背を向けたまま、問いかける。

「何故あの者に、あれほどまでの勝手を許すのですか…？」
少ししかめた表情で、静かに問いかける諸刃。

「トランプ兵団を連れだしたり、武国を攻撃したり…いささか勝手が過ぎるかと思いますが…」
「いいのよっ…」
「……っ」

あっさりと答えるシルクに、諸刃がさらに顔をしかめる。そのような勝手を他の者がやれば、シルクは迷いなくその者を殺すであろう。決して勝手を許さないシルクが、その者に対してだけは、いやに寛大なのである。

「しかしっ…」
「いいのっ」
「……っ」
もう一度答えるシルクに、訴えかけようとした諸刃の言葉は遮られる。

「ねぇ、諸刃っ…」

寝台に横たわったまま、ゆっくりと寝返り、諸刃の方を振り返るシルク。

「貴方…私に逆らったことが…ある…？」
「……いえっ」

少しの間を置いた後、諸刃が首を横に振る。

「なら逆らってはいけないわ…」
「えっ…？」
そっと微笑むシルクに、眉をひそめる諸刃。

「アレは…もう一人の私だものっ…」
「……。」

シルクの言葉に、諸刃がそっと目を落とす。

――――おいで…もう一人の私…――――

鬼が島で、繭から孵った、白い髪の少年。シルクとよく似た、赤い瞳の少年。

「……っ」

少年の姿を思い出し、諸刃はそっと表情を曇らせた。

「潜入っ…!?シルクの仲間がっ…!?」
先程まで桜時の居たあの空間のどこかに、牢戸知玖の手先の者がおり、そしてトランプ兵団を率いて、この武国を攻めたという。
「誰っ…誰がっ…」
――ねぇっ?輝矢っ…――――
――――アリス様っ!――――
――――それはいずれ、わかることじゃないかなぁ…――――
次々と浮かぶ、玄上の人間の顔。
「……っ」
だが浮かんだ者たちは、桜時の頭の中で、やがてたった一人の者の顔へと変わった。
「まさかっ…」
俯いていた桜時が再び顔を上げ、炎の燃え上がる玄上の屋敷を見る。
「まさかっ…!」
桜時の表情に、不安の色が溢れた。

「アリスは見つかったか…？」
「いえっ、それがまだっ…」
「……っ」
従者の言葉に眉をひそめる、国主の間の武史。
「急いでくれ…」
武史が、まるで懇願するように言い放つ。
「時間がないんだ…」
その瞳が、どこか不安げに揺らめいた。

「内兎っ…！」
燃え盛る玄上の敷地内を、必死に駆け回るアリス。

「内兎っ…！！」

アリスはその火の中に、必死に、内兎の姿を探した。

「アナタ…はっ…」

火の海に作った道で、輝矢の目の前へと現れたその人物。

「内兎っ…」

「……っ」

そう、それは内兎であった。

「内兎っ…？」

「……。」

内兎を見つめた輝矢が、少し戸惑うように首を傾げる。目の前に立つ内兎は、これまで輝矢が見てきた内兎とは、少し雰囲気が違っていた。

――――アリス様っ！――――

穏やかで柔らかい空気は一切なく、むしろ逆の、どこか突き刺さるような、そんな鋭い空気を纏っている。

「アナタは…」

戸惑いながら、ゆっくりと口を開く輝矢。

「本当に…内兎っ…？」

「……。」

輝矢のその問いかけに答えるように、内兎がゆっくりと顔を上げた。

「……っ！」

いつもの眼鏡を掛けていない内兎の、その鋭い赤い瞳が、輝矢をまっすぐに突き刺す。向けられる赤い瞳に、何かを感じ、輝矢は思わず目を見開いた。

「赤い…瞳っ…白い…髪っ…」

――――月の少女っ…――――

「……っ」

内兎を見つめていると、何故かシルクの姿が浮かんできた。白い

髪と赤い瞳が同じであるから、シルクを思い出したのであろうか。
だがそれ以上に、内兎から、シルクに近い何かを感じた。

「まさかっ…」
輝矢の表情が、一気に曇る。

「まさかっ…アナタはっ…」
「ずっと…」

輝矢の脳裏に一つの考えが浮かんだその時、黙り込んでいた内兎が、やっと口を開いた。

「ずっと…探していたよ…」
「えっ…？」

内兎の言葉に、輝矢が眉をひそめる。

「僕は…ずっと、ずっと…探していた…」

輝矢が困惑した表情を見せる中、内兎はさらに言葉を続ける。

「やっと、やっと…見つけたよ…」

内兎がゆっくりと口端を吊り上げ、どこか不気味な笑みを浮かべる。

「君を…見つけたよ…輝矢…」
「……っ！」

内兎に名を呼ばれたその瞬間、輝矢の体に戦慄が走った。

「さぁっ…」

輝矢へと伸ばされる、内兎の右手。

「おいで…」

右手がゆっくりと、輝矢に迫る。

「僕の…輝矢っ…」

「……っ」

冷たく微笑む内兎に、輝矢の表情が歪んだ。

第69章　追いつめられたアリス　☆1

――――ずっと探していたよ…僕の輝矢…――――

玄上の屋敷へと戻った輝矢が、炎の包まれた中庭で出会ったのは、アリスの従者・内兎であった。

「……っ」

アリスの傍にいた時とは違う、鋭い空気を纏い、あの白き魔女・牢戸知玖を思わせる、白い髪と赤い瞳を持った内兎に、輝矢が警戒するように、厳しい表情を見せる。

「アナタはっ…一体っ…」

輝矢が戸惑いの瞳を、こちらへと歩み寄って来る内兎へ向ける。

「僕は…ずっと見ていたよ…」

右手を輝矢へと伸ばしたまま、内兎はさらに輝矢へと歩を進める。

「君のことを…ずっと見ていた…」

感情の見えない、冷たい笑みを浮かべる内兎。

「もう一人の僕を通して…ずっと…」

「もう…一人の…？」

内兎の言葉に、輝矢がそっと眉をひそめる。

「何をっ…」

「だから…ずっと会いたかった…」

問いかけようとした輝矢の声を遮り、内兎が言葉を続ける。

「目覚めたらすぐに…君に会いに行こうと思ってた…」
「……っ」

何を言っているのか、まったくわからない内兎の言葉に、輝矢が戸惑いとともに警戒の色を濃くする。何かはよくわからないが、何かが必死に、輝矢に危険を知らせているような、そんな気がした。

「ねぇ、輝矢っ…」
内兎が、輝矢のすぐ前まで来たところで、ゆっくりと足を止める。

「輝矢っ…」
上げられた内兎の右手が、輝矢へと近づく。

「僕と一緒に…行こう…？」
「……っ！」

その誘いに、輝矢の全身が震えた。

「うっ…！」
「……っ」
輝矢が勢いよく内兎の手を振り払い、距離を取るように後方へと飛んで、右手の三日月を構える。

「アナタはっ…！一体っ…！」
「……。」
焦りの表情を見せる輝矢に対し、不適な笑みを浮かべる内兎。

「内兎っ…！！」

「……っ」
そこへ聞こえてくる、よく響く高い声。声に反応した輝矢が、内兎の後方から駆けてくる人影を見る。
「内兎っ！！」
「アリスっ…」
火の海に出来た道の向こうから、輝矢と内兎の方へと駆けてくるのは、アリスであった。アリスは汗を滲ませ、必死の表情を見せている。アリスのそんな表情はあまり見たことがなく、輝矢は少し驚いたような表情で、やって来るアリスを見た。
「内兎っ！内兎っ！！」
「……。」
アリスは何度も内兎を呼ぶが、内兎は少しも振り返ろうとはしない。
「内兎っ！良かったっ！」
「あっ、アリスっ…！」
「無事だったのねっ！」
輝矢が止めようと手を出すが、輝矢の声など聞くこともなく、アリスは安心したような笑顔を見せて、内兎へと駆け寄った。
「まったくっ！どこ、ほっつき歩いてたのよっ！？」
アリスが内兎の右手を掴みながら、少し怒ったように言葉を放つ。
「私に心配かけるんじゃないわよっ！あっ、べっ別にあんたのことを心配してたわけじゃないわよっ！？」
焦ったように言葉を繋ぎながら、アリスが内兎の顔を覗き込む。

「……っ？内兎っ、あなた、メガネっ…」
「アリス様っ…」
「……っ？」

いつもの眼鏡を掛けていない内兎に、アリスが首を傾げたその時、内兎がそっとアリスの名を呼んだ。

「……っ」
内兎とアリスのやり取りを、険しい表情で見つめる輝矢。

「何っ？内兎っ」
「アリス様…」
問い返したアリスの名をもう一度呼びながら、内兎が自分の手を掴んでいるアリスの手を、もう一方の手で掴み返す。

「……っ？」
内兎に手を掴まれ、そのかかる強い力に、アリスが少し戸惑うような表情を見せる。

「邪魔なんで、ちょっとどこかへ行っててもらえませんっ？」
「えっ…？」

そう言って、無理やり離される手に、アリスが思わず目を丸くする。

「今、僕、輝矢とお話してるんです」
「内兎っ…？」
内兎が優しく微笑みかけると、アリスはさらに困惑したような表

情を見せた。

「内兎っ…何っ、言ってるの…？」

アリスが少し、震えた声を発する。

「ねぇっ、内っ…」

「もう一度言ってほしいですか？」

再び内兎に伸ばされたアリスの手が、内兎の問いかけにその動きを止めた。

「どこかへ行っていて下さい」

内兎の鋭い瞳が、アリスを捉える。

「貴女は邪魔なんです」

「……っ！」

もう一度放たれたその言葉に、アリスが大きく目を見開く。

「さぁ輝矢っ…僕と一緒に行こう…？」

「……っ」

アリスにあっさりと背を向け、再び輝矢の方を見て、ゆっくりと歩み寄る内兎。近づいてくる内兎に、輝矢が三日月を構え、警戒する態勢を取る。

「なんでっ…」

「……っ？」

力なく言葉を発するアリスに、内兎が足を止め、少しだけ振り返る。

「なんでっ…？内兎っ…」

ひどく震えた声で、ゆっくりと内兎へ問いかけるアリス。

「ねぇっ…」

顔を上げたアリスは、今にも泣き出しそうな、壊れてしまいそうな、そんな表情を見せていた。

「ねぇっ！なんでっ…！？内兎っ…！」

声を張り上げたアリスが、振り返った内兎に縋りつくように、その服を掴む。

「言ったじゃないっ…！？あなたっ、言ったじゃないっ…！！？」

内兎を必死に見上げ、アリスが言葉を続ける。

――――アリス様っ…――――

心をすべて埋め尽くす、あの優しい笑顔。

「あなただけは私の傍にいるってっ…！あなただけは私のものだってっ…！！」

アリスが必死に叫ぶ。

「あなたっ、そう言ったじゃないっ…！！」
「……。」

そんなアリスの必死の声に、表情1つ変えることなく、内兎はただの冷たい瞳を、アリスへと向ける。

「アリス…」
「……っ？」

内兎が、自分の服を掴んでいたアリスの手を掴み、ゆっくりと持ち上げる。“様”を付けることなく、名を呼んだ内兎を、戸惑うように、だが縋りつくように、必死に見つめるアリス。

「僕が欲しいのはね…輝矢なんだ…」
「えっ…？」
「だから君は…いらないなぁ…」
「……っ！！」

内兎のその残酷な微笑みに、アリスの表情が凍りつく。

――――僕は…永遠に貴女のものです…――――

――――貴女だけのものです…――――

――――アリス様…――――

すべてが崩れ落ちる、音が聞こえた。

「……っ」
「アリスっ…？」

深く俯いたアリスが、内兎から手を離し、内兎の横を通り過ぎて、ゆっくりと輝矢の方へと向き直る。そんなアリスの様子に、輝矢が首を傾ける。

「あんたが…いけないのよっ…」
「えっ…？」

囁かれるアリスの声に、眉をひそめる輝矢。

「あんたなんかが…いるからっ…」

――――輝矢は、お前なんかとは全然違うっ！――――
――――やはり“針器”より“月器”っ！――――
――――いえっ、輝矢様がっ…――――

いつだって、選ばれるのはアリスより輝矢。

――――輝矢っ！――――
――――輝矢ぁぁぁ～～んっ！――――

どんなに奪っても、結局は何もかもを手にする。

――――アリス様っ…――――
――――僕が欲しいのはね、輝矢なんだ…――――
――――君は…いらないなぁ…――――

アリスがたった一つ手にしたと思ったものさえ、輝矢が奪っていった。

「あんたさえっ…いなければっ…」
俯いたままのアリスが、六刻を握る右手に、さらに力をこめる。

「あんたなんかっ…」

震えた唇を、噛み締めるアリス。

「あんたなんかぁぁぁっ！！！」
「……っ！！」

顔を上げたアリスは、涙を流しながら、右手の六刻を、輝矢へと振り下ろした。

――――バァァァァーンっ！！――――

「クっ…！」

振り下ろされた六刻を、輝矢が素早く突き出した三日月で何とか受けとめる。激しくぶつかり合った月器と針器は、辺りに強い衝撃を巻き起こし、それぞれ強い金と銀の光を放ち始めた。

「ううぅっ…！！」

「……っ」

強まる六刻の力に、三日月を持つ輝矢の右手が少し震える。

「あっ…アリスっ…！」

何とか六刻を押さえながら、輝矢が必死にアリスに呼びかける。

「アリスっ…！！」

顔を下へ向けたままのアリスへ、もう一度呼びかける輝矢。

「踊らされてはいけませんっ！」

輝矢が、至近距離のアリスへ向け、訴えるように叫ぶ。

「あの者はっ…！内兎はっ…！アナタを利用してっ、私と戦わせようとっ…！」

「ううぅっ…」

「……っ！」

顔を上げたアリスに、輝矢が思わず言葉を止める。

「ううぅぅっ…！」

アリスの大きな瞳から、止めどなく流れ落ちる大粒の涙。その何

とも弱々しい表情に、輝矢は胸が締め付けられるような気持ちであった。

――――内兎っ！――――

アリスにとって、内兎がどれほどに大切な人物だったのか、その顔を見れば、容易に理解出来る。

――――ハチっ…――――

ふと輝矢の脳裏に浮かぶ、桜時の笑顔。大切な人に裏切られた時、輝矢ならどんな気持ちになるだろうか。輝矢が今、何を叫ぼうとも、アリスを止めることは出来ない。

「……っ」

そっと目を細め、悔しげに唇を噛み締める輝矢。

「あああああああっ！！」

「クっ…！」

六刻を振り上げるアリスに、輝矢は険しい表情で三日月を構えた。

玄上第一邸・国主の間。

「国主様っ…！」
慌てた様子で国主の間へと駆け込んでくる、数名の従者たち。
「アリス様と竹取輝矢がっ…！」
「ああっ…」
従者の放つ言葉に、もうわかっていると言わんばかりに頷いて、武史は厳しい表情を見せながら、窓から外の中庭の方を見つめていた。
「間に合わなかったようだね…」
武史がそっと、その表情を曇らせる。
「まんまと彼の作戦に嵌ってしまった…」
悔やむように呟く武史。
「“神器”同士で争うなんて…」
武史の見つめる先には、三日月と六刻を交える、輝矢とアリスの姿。
「アリス…輝矢…」
武史は不安げに、戦う二人の名を呼んだ。
「アリスっ…！！」
「あああああああっ！！」

必死に呼びかける輝矢と、狂ったように六刻を振り続けるアリス。

「……。」

激しいぶつかり合いを始めた輝矢とアリスを、少し離れたところから、まるで高みの見物のように、楽しげな笑みを浮かべて見つめる内兎。

「好きだったよ、アリス…」

内兎がその冷たい赤い瞳に、涙を流しながら六刻を振るうアリスの姿を映す。

「とても不器用で、弱くて…愚かな君が…」

そう呟き、内兎は冷たく微笑んだ。

――――バァァァァーンっ！！――――

「あっ？」

聞こえてくる大きな音に、顔をしかめ、後方を振り返るゴン。

「何だっ…？」

音がしたのは、煙の舞い上がっている武国の最奥。玄上の屋敷であった。灰色の空に突き上げる金と銀の光に、何やら妙な胸騒ぎが起こり、ゴンが眉をひそめる。

「クっ…！」

振り返ったゴンの後方には、全身に火傷を負い、服の所々を焦がして、倒れ込んでいる波跡の姿があった。波跡が苦しげな表情で顔を上げ、煙の上がる玄上家の方を見る。

「やっとかよっ…！クソっ…！」

「……っ」

声が聞こえ、ゴンが振り向くと、素早く立ち上がった波跡が、そう吐き捨てるように言い放ち、波に包まれていく。

「不本意だが助かったぜっ…」

「あっ…！」

波の中に消えていく波跡に、寝転がっていた羊スケが起き上がり、思わず身を乗り出す。

「じゃあなっ！」

――――パァァァァンっ！！――――

波が水飛沫となって弾け飛ぶと、包まれていたはずの波跡は、その場から忽然と姿を消していた。

「……。」
ゴンが気難しい表情で水飛沫の落ち た辺りを見つめ、構えていた天狼丸をゆっくりと下ろす。
「何とか追い払ったっスねぇ～っ」
立ち上がった羊スケが、ゴンの方へと歩み寄っていく。
「さっすがゴンさんっ！」
「いやっ…」
「へっ？」
ポツリと否定の言葉を落とすゴンに、羊スケが目を丸くする。
「マズったな…」
ゴンが顔をしかめながら、ゆっくりと玄上の屋敷の方を振り返る。
「まんまと足止めされちまった…」
玄上家を見つめるゴンは、どこか浮かない表情を見せていた。
「ホホホホォ～っ♪ドォ～やラァ～♪ここまでのようねぇ～っ！」
「えっ…？」
高々と飛び上がる城歌を、拳を構えていたイチゴが、戸惑うよう

に見上げる。

「貴女のお名前は忘れないファ～♪じゃなくって、わぁ～っ！青守イチゴっ！」

イチゴに微笑みかけながら、城歌が大きく両手を広げる。

「ではぁっ、サヨナラァァ～～っ♪」

「あっ…！」

城歌が歌いあげると、イチゴが阻止する間もなく、城歌のその姿は、青い空の中へと、薄くなって消えていった。

「退いた…？何故っ…」

その場に残されたイチゴは、どこか戸惑うような表情を見せた。

「“赤十字”っ…！」

「如意棒っ！！」

醍也が赤く輝く十字刃を、門貴が如意棒を構え、勢いよく互いのもとへと駆け込んでいく。

『……っ！』

距離が迫り、二人がそれぞれの武器を高々と振り上げた。

――――バァァーンっ！！――――

「うおっ！？」

「何っ…？」

互いの武器がぶつかり合おうとしたその時、上空から降って来た何かが、二人の間の地面に勢いよく突き刺さった。門貴と醍也が驚いた表情を見せながら、その場で足を止める。

「んん～っ？」

如意棒を下ろした門貴が、眉をひそめながら、地面に突き刺さったそれを見つめる。

「黒いぃ～っ…羽根っ…？」

地面に突き刺さっているのは、一枚の真っ黒な羽根であった。

「醍也」

「……っ？」

羽根の降って来た上空から聞こえてくる声に、醍也がゆっくりと顔を上げる。

「黒羽…」

黒い羽根を広げ、空を飛んでいるのは一羽のカラスであった。烏化した黒羽である。

「アイツ、確か…」
龍国での戦いの時に黒羽を見ている門貴は、そのカラスを見上げながら、少し怪訝そうに眉をひそめた。

「俺たちの役目は終わった…帰るぞ…」
「役目っ…？」
黒羽の言葉に、門貴の表情が曇る。

「でもまだ、敗北者に死が…」
「すぐに再戦の時は訪れる…今は退くんだ…」
「……っ」

訴えかける醍也であったが、すぐに黒羽に言葉を遮られ、気に食わない表情のままで、しぶしぶ構えていた十字刃を下ろした。

「次こそは…敗北者に死を…」
醍也が門貴の方を振り向き、鋭い視線を送る。

『……っ』
「あっ」

門貴に背を向けると、醍也は上空を飛ぶ黒羽とともに、その場から素早く去っていった。門貴は少し手を伸ばしたが、足はその場に止めたまま、追いかけようとはしなかった。

「何やねんっ、勝手に来といて、勝手に帰りくさってっ」
少し呆れたように、肩を落とす門貴。

「門貴ぃ～っ！」

「……っ？」
遠くの方から聞こえてくる自分を呼ぶ声に、門貴がゆっくりと振り返る。
「ユッキーっ」
空を駆け抜け、門貴のもとへと飛んでくるのは、一羽の青いキジ。
――――ボォォォ～ンっ！――――
「ふぅ～っ」
キジが白い煙に包まれ、由雉の姿となって、門貴の前へと降り立つ。
「どないしたんっ？」
「それがさぁ～戦ってたヤツが、急にどっかへ飛んでっちゃってぇ～っ」
「……っ」
――――黒羽…――――
由雉の言葉を聞き、門貴が黒羽の顔を思い浮かべる。恐らく、由雉が戦っていたのは、黒羽であろう。
「“決着をつけよう”とか言ってたくせにさぁ～、よくわかんないよぉ～もぉっ」
由雉が少し口を尖らせ、文句のように言い放つ。
「俺の戦い相手も、急に帰ってってもたわ」
「あっ？そうなのぉ？何だろっ？就業時間とかあんのかなぁ～？」

門貴の言葉に、考え込むように首を傾ける由雉。

「……っ」

首を傾けている由雉の前で、門貴が少し視線を落とす。

――――俺たちの役目は終わった……――――

気にかかるのは、黒羽のあの言葉。

「とりあえず輝矢と合流しよっかぁ～」

「……。」

「門貴っ？」

「えっ？あっ、おっおうっ！せやなっ！」

慌てて顔を上げた門貴が由雉の言葉に頷くと、二人は輝矢のもとへと駆け出していった。

――――きっと今頃ぉ～っ、あそこにっ――――

「まさかっ…」

ギンの言葉に、過ぎる不安。玄上の屋敷の方に見える金と銀の光に、桜時が険しい表情を見せる。

――――メガネ、メガネっ…――――

――――ほらっ――――

あの時、一瞬だけ目の合った、どこまでも真っ赤な瞳。燃えるように赤いのに、奥底では血のように冷たい。その瞳には、確かな見覚えがあった。

――――命咲かす者っ…――――

それは、白き魔女と同じ瞳。

「まさかっ…内兎がっ…」

――――僕ももっと…あの人の傍にいきたいなぁ…――――

「……っ！」

急に内兎のその言葉が思い出され、桜時の胸の不安を膨れ上がらせた。

「クっ…！」

桜時がその場を飛び出し、玄上の屋敷の方へと駆け抜けていく。

「……。」

走り去っていく桜時の背中を、ギンは特に追いかけようともせずに、涼しげな表情で、見つめていた。

「さぁて…一体、何を企んでいるんでしょうねぇっ」

ギンがどこか楽しげに笑いながら、玄上の屋敷の方へ視線を移す。

「もう一人の牢戸知玖はっ…」

そう呟き、ギンはそっと鋭い瞳を見せた。

第６９章　追いつめられたアリス　☆２

「アリスっ…！！」
「はあああああっ！！」
必死に名を呼び続ける輝矢に対し、躊躇いなく六刻を振り下ろすアリス。

「クっ…！三日月っ…！！」
振り下ろされる六刻に、輝矢が強く三日月を突き出す。

――――パァァァーンっ！！――――

激しくぶつかり合う、金色に輝く月器と、銀色に輝く針器。二つの神器の衝突による衝撃が、強い風となって辺りに広がり、中庭を包んでいた炎は、いつの間にか鎮火していた。

「六刻っ…！！」
「うっ…！」
六刻を握る両手に、さらに力をこめるアリス。押される三日月に、輝矢が少し表情を歪める。

「“水げっ…！」
「……っ」
「クっ…！」

押される三日月に危機を感じ、水の刃を放とうとする輝矢であったが、目の前に涙の跡の滲んだアリスの表情が見えると、思わず強

く唇を噛んだ。

――――あんたなんかぁぁっ！！――――

アリスには、何の罪もない。アリスに、無数の水の刃を向けることなど、輝矢には出来ない。

「何とかっ…動きをっ…」

輝矢が瞳を鋭くし、三日月を握る手に力をこめる。

「“月器っ…」

輝矢の声に答えるように、さらに強く輝き始める月器。

「……っ望月”っ！！」

「うっ…！？」

膨らんだ金色の球体・望月が、六刻ごと、アリスの体全体を包み込む。

「クっ…！」

望月の内側の壁に手を触れ、険しい表情を見せるアリス。狭い球体の中に閉じ込められ、アリスが動きを封じられてしまう。

「ううぅっ…！！」

「しばらくは、望月の中で大人しくしていて下さいっ…」

もがくように壁を叩くアリスに、輝矢がどこか宥めるように言い放つ。

「アリス…」

「……っ」
「……っ？」
壁を叩く手を止め、急に俯くアリスに、呼びかけていた輝矢が眉をひそめる。

「アリっ…」
「“針器っ…」
「……っ！」
アリスの声に反応するように、銀色に輝き始める六刻。

「まさかっ…！」
「……っ一日刻(いちじつこく)”っっ！！」
「……っ！！」

――――パァァァァーンっっ！！――――

望月の中で、球体へと満ちていく針器。やがて銀色の球体・一日刻が、望月の中から溢れ出て、望月を勢いよく弾き飛ばした。

「ううっ…！！」
飛んでくる望月を、少し苦しそうに受け止める輝矢。

「“針器っ…」
「……っ！」
さらに聞こえてくる声に、輝矢が慌てて顔を上げる。

「三刻(みこく)”っ…！！」

アリスが銀色の球体・一日刻を、短針と長針が直角になった三刻へと変え、ブーメランのように輝矢へと投げ放った。

「クっ…！」

向かってくる三刻に、顔をしかめる輝矢。

「“月器・上弦”っ…！！」

輝矢も望月を半月の上弦へと変え、向ってくる三刻へと投げる。

――――パァァァーンっ！！――――

上弦と三刻が激しく衝突し、輝矢とアリスのもとへ、速度を上げて舞い戻ってくる。

「クっ…！」

「うっ…！」

戻って来た武器を、苦しげに何とか受けとめる輝矢とアリス。

「“針器・六刻”っ…！！」

「……っ」

アリスがすかさず三刻を六刻へと変え、輝矢の方へと駆け込んでくる。

「“月器・十六夜”っ！」

「クっ…！」

輝矢も素早く上弦を満ちさせ、金色の盾・十六夜を構えて、六刻を受けとめる。強く止められる六刻に、アリスが少し表情を歪めた。

「“月器っ…」

「……っ」

輝き始める月器に、眉をひそめるアリス。

「……三日月”っ！！」

輝矢が十六夜で力強く六刻を振り切り、すぐさま十六夜を三日月へと変えて、その刃先をアリスへと向けた。

「“針器・十二刻”っ…！！」

「うっ…！」

アリスが振り切られた六刻をすぐに銀色の盾・十二刻へと変え、先程の輝矢と同じように、振り下ろされた三日月をしっかりと受けとめる。

『……っ！』

輝矢とアリスが互いに後方へ飛び、距離を離す。

「はぁっ…はぁっ…“針器・六刻”…」

少し息を乱しながら、アリスが十二刻を、もとの六刻へと戻す。

「はぁっ…はぁっ…」
こちらも、肩で大きく息をする輝矢。
「アリスが…ここまで強かったなんてっ…」
アリスの強さは、正直、予想外であった。息を乱される程の戦いなど、シルクと戦った時以来であろうか。その後にトマトと修行をして、かなりレベルを上げたつもりでいたが、アリスはまったく互角に戦いを繰り広げてくる。
「私とアリスを戦わせることが、内兎の思惑っ…？それとも他に何かっ…」
「輝矢ぁぁぁ～～んっ！」
「……っ？」
内兎のことを考え、眉をひそめていた輝矢が、遠くの方から聞こえてくる、自分の名を呼ぶ声に、ゆっくりと振り返る。
「サルっ…？」
その声は確かに、よく聞き覚えのある門貴の声。
「輝矢っ！」
「輝矢さんっ！」
「竹取っ！」
次々と聞こえてくる声。輝矢が振り返ると、町の方から、門貴、由雉、ゴン、イチゴの四人が、玄上の屋敷へと、駆けて来ていた。
「なんで輝矢んとアリスちゃんがっ！？」
「知らないよぉっ」

戦っている様子の輝矢とアリスに、戸惑いを見せる門貴と由雉。

「キジっ、イチゴ、キツネまでっ…？」

一緒に来ていないはずのゴンの姿まであり、輝矢が少し困惑したような表情を見せる。

「何故、皆がここにっ…」

「随分とたくさん…持ってるのね…」

「……っ」

戸惑いながら皆を見ていた輝矢が、聞こえてくるアリスの声に、再び前を見る。

「アリス…？」

俯いたままのアリスを、ゆっくりと見つめる輝矢。

「仲間も…」

――――あんまりぃ～、ウチの輝矢ちゃんをいじめないでくれるかなぁ～？――――

――――輝矢はっ、お前なんかとは全然違うっ！――――

「大切な人も…」

「……っ」

重く暗い声を発するアリスに、輝矢がそっと表情を曇らせる。

「私には…一つしかないのに…」
「えっ…？」
か細いその声に、首を傾ける輝矢。

「一つしかっ…なかったのに…」

――――アリス様っ！――――

もう戻らない笑顔に、アリスが強く拳を握り締めた。

「どうしてっ…！私のたった一つしかないものまでっ、奪うのっ…！？」
「……っ」

またしても涙を流しながら訴えるアリスに、輝矢が表情を険しくする。

「分家より本家っ…針器より月器っ…選ばれるのはっ…いつだって私よりあなたっ…」
大きく肩を震わせ、声を震わせて、アリスが輝矢を見つめる。
「あなたは私からっ…何もかもを奪っていくっ…！」
「アリスっ…」
必死に叫ぶアリスに、そっと目を細める輝矢。

「落ち着いて下さいっ！アリスっ！私はアナタから何も奪うつもりなんてっ…！」
「じゃあどうして内兎は、あなたを選んだのっ！！？」
「……っ」
アリスの声が、取り繕おうとした輝矢の声を掻き消す。
「どうしてっ…！！どうしてっ…」
徐々に俯いていくアリスの瞳から、涙が地面へと落ちた。
「私はっ…いらないって言ったのっ…？」
「アリスっ…」
その弱々しい姿を見ているだけで、輝矢の胸が締め付けられた。
「あなたのせいでっ…私のすべてが無茶苦茶よっ…」
――――やはりアリス様より、輝矢様の方がっ…――――
他のすべてを惜しんで、ただ輝矢よりも上へ行こうとした。輝矢の名を出したすべての者に、認めてもらおうとした。それでも越えられなくて、聞こえてくるその名は止まらなくて、“輝矢”という名が、アリスの人生を狂わせた。
「あんたなんかがっ…いなければっ…」

俯いたアリスが、そっと声のトーンを落とす。

「あんたなんかっ…あんたなんかっ…」

アリスが、震える声を発するその唇を、強く強く、噛み締めた。

「あんたなんかっ…！いなくなればいいのよぉっ！！」

「……っ！！」

そう叫び、六刻を構えて、勢いよく輝矢のもとへと駆け込んでいくアリス。アリスが放ったその言葉に、輝矢が大きく目を見開く。

――――あんな子、いなければっ…――――

――――生まれて来なければっ…――――

――――あの時、死んでくれればっ…――――

思い出される、否定の言葉。

――――お前がいなくても、大丈夫だからっ！――――

“いなくても”なんて、言わないで。存在を、否定しないで。生きていることを、否定しないで。

「あっ…」

思い出される言葉に、途端に全身を震わせる輝矢。

「六刻っ…！！」
「……っ！」

そこへ駆け込んできたアリスが、輝矢へ向け、勢いよく六刻を振り上げる。

「うっ…！」

輝矢は必死に三日月を構えようとしたが、ひどく震える右手に、その動きが数秒、遅れた。

「はあああああああっ！！」
「クっ…！」
迫り来る刃に、輝矢の表情が歪む。

――――ブシュっ…！！――――

「ううぅっ…！！」

振り下ろされた六刻に、大きく右肩を斬り裂かれ、赤々とした血を流した輝矢が、苦々しい表情を見せる。

「クっ…！」
左手で右肩を押さえ、倒れそうになる体を押し返し、何とかその場に踏み止まる輝矢。

「……っ」

アリスが六刻の血を払いながら、後方へと飛んで、輝矢との距離を取る。

「輝矢っ！！」

「輝矢んっ！！」

負傷した輝矢に、思わず身を乗り出す門貴と由雉。

「クっ…！」

険しい表情を見せた由雉が、懐に手を伸ばし、青い羽根を取り出す。

「ちょいちょいぃ～っ！」

「えっ！？」

羽根を投げ放とうとした由雉の手を、勢いよく掴み止める門貴。

そんな門貴に、由雉が少ししかめた表情を向ける。

「やめいやっ！アリスちゃんに羽根っ、向ける気かっ！？」

「けどっ、このままじゃ輝矢がっ…！」

冷静に言い放つ門貴に、由雉が強く訴えるような瞳を向ける。

「……っ」

二人のやり取りを横から見つめ、そっと厳しい表情を見せるイチゴ。

「輝矢さんはっ…どうして、水力を使わないのでしょうかっ…？」

イチゴが逆隣に立つゴンへ、戸惑うように問いかける。

「水力を使えば…今だって攻撃を押し返せたはずっ…」

「相手の女は、刀しか使ってない」
「えっ…？」
発せられたゴンの言葉に、イチゴが首を傾ける。
「だから竹取も、公平になるように、刀しか使わずに戦っているんだ」
「そんなっ…！今っ、公平とか、そんなことに気遣っている場合じゃっ…！」
「気ぃ遣ってるわけじゃねぇっ」
「えっ…？」
鋭い瞳を見せたゴンが、イチゴの言葉をそっと否定する。
「あいつの、プライドの問題だっ…」
「プライドっ…？」
「……っ」
そのゴンの言葉が耳に届き、羽根を投げようとしていた由雉が、ハッとした表情を見せる。
「プライドっ…」
その言葉に、ゆっくりと構えていた羽根を下ろす由雉。今、羽根を投げて輝矢を助ければ、それこそ、輝矢のプライドを傷つけてしまう。
「……。」
「……っ」
羽根を懐へと戻す由雉に、門貴がそっと目を細める。
「大丈夫やてっ」

門貴が、皆へと明るい笑顔を向ける。
「輝矢んならっ、きっといつものように、勝って、“当たり前です”って、言うてくれるっ…」
『……っ』
門貴の言葉を聞きながら、皆、輝矢とアリスの戦いを、見守ることに集中した。

「はぁっ…はぁっ…」
「……っ」
少し息を乱した輝矢へ、鋭い視線を送りながら、アリスが再び六刻を構える。
「六刻っ…！！」
「クっ…！三日月っ…！！」
向かってくるアリスに、輝矢は血の伝い落ちる右手で、必死に三日月を突き出した。

「はぁっ…！はぁっ…！はぁっ…！」

その頃、術斗を倒し、現れたギンのもとからも駆け出してきた桜時が、やっと玄上の屋敷へと辿り着いていた。門を駆け抜け、衝突音の聞こえてくる中庭へと、足を急ぐ。

「輝矢っ…！！と、アリスっ…？」

「三日月っ！！」

「六刻っ！」

中庭に見えるのは、互いの神器を交える輝矢とアリスの姿。二人とも真剣な表情を見せ、輝矢の右肩からは、激しく血が流れている。とても遊びで戦っているようには、見えない。

「なんでっ…あの二人が…」

桜時が戸惑うように、戦う二人を見つめる。

「こんにちは」

「……っ！」

横から聞こえてくる声に、勢いよく振り向き、振り向くと同時に村雨丸を構える桜時。

「ああ、今はこんばんはかな…」

「内兎っ…！」

桜時が振り向いた先に立っているのは、冷やかな笑みを見せた内兎であった。

「……。」
「……っ」
眼鏡をはずした内兎の、その赤い瞳を、桜時がまっすぐに見つめる。

――――命咲かす者……――――

やはり、牢戸知玖とよく似た、いや同じ瞳。

「やっぱりっ…お前がっ…」
「うん、そうだよ…」
険しい表情を見せる桜時に、内兎がゆっくりと頷きかける。

「気付くなら、君だと思ってた…君とは、一番よくお話したしね…」
「……。」

正体を見破られたことに、何の動揺も見せない内兎。そんな内兎に、桜時が眉をひそめる。動揺も焦りもないということは、もう正体を隠す必要がない、正体を隠してやることは終わった、ということなのだろう。

「……っ」
桜時が少しの間だけ、戦っている輝矢とアリスの方へ視線を移す。

「お前がっ…アリスに何かしたのかっ…？」
「別にっ…」
問いただすように言う桜時に、そっと口元を緩める内兎。
「ただっ、僕が欲しいのは輝矢で、君はいらないよって言っただけ」
「えっ…？」
内兎のその言葉に、桜時が眉をひそめる。
「そしたら、狂ったように泣いて、輝矢に攻撃を仕掛けちゃった」
「……っ」
笑顔で言い放つ内兎に、目を細める桜時。
――――ひどく輝矢を、ライバル視していてね……――――
輝矢とアリスの関係を、桜時は何となくだが理解出来ていた。玄上本家である輝矢に対するアリスの思い、それは、朱実の正統血筋である梅人を羨む桜時の感情と、通じるものがあった。強すぎる憧れや羨望は、時に激しい憎しみとなる。
――――ねぇっ？輝矢っ……――――
アリスが輝矢へ向けていたものは、その、悲しい憎しみだった。
――――内兎っ！あんたはここにいなさいっ！――――
そのアリスが、やっと手にした、輝矢は持っていない、自分だけのもの。それが内兎だったのだろう。それすら奪われれば、アリス

が狂ってしまうのも、無理はない。

「ひどいことをっ…」
「……っ」

非難の目を向ける桜時に対し、内兎は少し嬉しそうに微笑む。

「丁度、良かった。君にも、お話があったんだ」
「えっ…？」
そう言う内兎に、桜時が少し警戒するように、身を固くする。

「輝矢を、僕に頂戴っ…」
「なっ…！」

そのシンプルな言葉に、桜時は思わず動揺を見せる。

「なっ…何言ってっ…！」
「僕、もっと、“あの人”の傍にいきたいんだぁ…」
「あの人っ…？」

桜時がそっと、眉をひそめる。

――――僕ももっと…あの人の傍にいきたいなぁ…――――

二人で話していた時に、内兎が放ったその言葉。あの時、“あの

人”とは、アリスのことだとばかり思っていた。

「じゃああれはっ…輝矢のっ…」
「うんっ」
「……っ！」

まるで桜時の考えをすべて見透かしているかのように、大きく頷く内兎に、桜時がさらに険しい表情となる。

「僕が傍に行くために、輝矢が僕の手を取るためには…君が邪魔なんだぁっ…」
「……っ」

内兎は笑顔を浮かべ続けているが、向けられたその瞳は、ひどく冷たく、鋭い刃で、突き刺されているようであった。

「君は…とてもきれいな人っ…」
「はっ？」
内兎の言葉に、桜時が少し顔をしかめる。

「純粋で、まっすぐで…何の淀みもない…」
「……っ」
続けられる言葉を聞きながら、その言葉たちの意図を探し、桜時が表情を曇らせる。

「でもだからこそ、君にあの人は合わないんじゃないかなぁ…」
「……っ」

鋭い瞳を向けてくる内兎に、桜時は思わず村雨丸を握る手に力をこめる。

「あの人に、君は、キレイ過ぎるよ」

「えっ…？」

放たれた言葉の意味が理解出来ず、困惑したような表情を見せる桜時。

「それって…どういうっ…」

「もうすぐ…わかるよっ…」

戸惑う桜時に微笑みかけ、内兎はゆっくりと輝矢とアリスの方を振り向いた。

第６９章　追いつめられたアリス　☆３

「六刻っ！！」
「三日月っ！」

――――パァァァァーンっ！！――――

強くぶつかり合う、金と銀の、二つの神器。

「うっ…！」

三日月で受け止める輝矢の右肩から、真っ赤な血が滴り落ちる。
先程、六刻に斬り裂かれた傷が、輝矢の右手から力を奪った。

「はあああああっ！」
「うぅっ！！」
その隙を逃さずに、力を強めたアリスに、三日月が振り切られる。

「はあああああっ！！」
「クっ…！」
向かってくる六刻に、輝矢が唇を噛む。

「“月器・下弦”っ！！」
「……っ！」

三日月が素早く半月へと姿を変え、六刻を振り下ろそうとしてい

たアリスのもとへ、飛び上がっていく。

「クっ…！！」

下弦を避けるため、アリスが仕方なく後方へと飛ぶ。

「はぁっ…はぁっ…三日月っ…」

肩の傷を押さえ、荒々しく呼吸をしながら、輝矢が下弦を三日月へと戻す。

「……。」

見るからに苦しそうな様子の輝矢を、少し離れた位置に着地したアリスが、鋭い瞳で見つめる。

「その傷でよく頑張るわねぇっ」

先程までの弱々しかった声とは違い、いつもに近い口調で、アリスが言い放つ。

「けど、もういいんじゃなぁ～いっ？そんなに頑張らなくってぇっ」

「……っ」

アリスの言葉に、輝矢がそっと眉をひそめる。

「私が倒してっ、あんたを楽にしてあげるわよっ」

「……。」

その声を聞きながら、輝矢が目を細める。

「あんたなんか、いなくなれば、すべては丸く収まるのよっ！」

アリスが、少し笑みを浮かべて、強く言い放つ。

「この国もっ…！私もっ…！」

「……。」

笑みを浮かべながらも、少しも余裕の感じられない、必死な様子のアリスを、輝矢は曇りのない瞳で、まっすぐに見つめる。

「……っ」

やがて輝矢は少し俯き、ゆっくりと目を伏せた。

「アリスっ…」

「……っ？」

その呼びかけに、アリスがふと眉をひそめる。

「私は、アナタから何かを奪おうなんて気持ちは…少しもない…」

「何をっ…！」

「私は、アナタよりも私の方が選ばれてるなんて…一度も思ったことはない…」

「……っ」

続けられる輝矢の言葉に、アリスが拳を握り締め、強く唇を噛む。

「嘘よっ…嘘よ嘘よ嘘よっ！！」

その言葉を、必死に繰り返すアリス。

「だってっ…！だってっ…」

――――やはりアリス様より、輝矢様をっ…――――
――――僕は輝矢とお話してるんだぁ――――

「だって…みんなっ…」

唇を噛み締めたアリスが、少し弱い声を漏らし、ゆっくりと俯く。

「アナタは…武国にも、国の人々にも認められてる…凄い人っ…」

輝矢が、ゆっくりと穏やかな笑みを浮かべる。

「そんなアナタが…私には、とても眩しく見えるっ…」

「……っ！！」

微笑んで言う輝矢に、アリスが大きく目を見開く。

「やめてよっ…」

左手で少し頭を抱えたアリスが、懇願するように呟く。

「やめてよっ…！！」

アリスは、震える声で、そう言い放った。

――――初めて出会った時、その子は一人で、泣いていた…。

十年前。武国・玄上家。玄上アリス、六歳。

「ふんふふんふぅ～んっ♪」

その頃、毎日のようにやっていた町の探検から、玄上家へと戻った私は、ご機嫌で中庭を歩いていた。分家とはいえ、国主血筋の玄上家の人間である私は、幼い頃から屋敷の中に閉じ込められて、行儀やら作法やらを習わされて、うんざりしていたから、町の探検は私の、唯一の楽しみのようなものであった。

「明日はジジイどものゲートボールに混ぜてもらっちゃおっかなぁ～っ」

帰って来たばかりだというのに、もう明日のことを考えながら、私は中庭を進んでいた。

「うっ…ううっ…」

「んっ？」

どこからか聞こえてくる、すすり泣くようなその小さな声に、私はゆっくりと振り向いた。

「あっ…」

中庭にある、大きな噴水の前に佇んでいる、私と同じ年くらいの、一人の子供。

「ううっ…うっ…」

深く俯いたその子は、その黒くて大きな瞳から、大粒の涙を流していた。

「……っ」

自分と同じような年頃の子なのに、一体、何がそんなに悲しいのだろう。一体、どんな悲しいことがあったのだろう。そう思って、私はそっと目を細めながら、ゆっくりとその子に歩み寄っていった。

「誰だっ…!?」

「えっ…？」

私の足音を聞きつけ、すぐさま顔を上げ、鋭い瞳を見せるその子に、私は少し怯えるように声を出した。

「あっ、そのっ、えっとっ…」

少し焦ったように、言葉を繋げる。

「どうか、したのっ…？」

「……っ」

私の言葉にハッとしたような表情を見せると、その子は急いで、両目から流れる涙を裾で拭った。涙を見られたくはないようだった。

「別にっ…お前に関係ないっ…」

その子が、涙を拭い去った瞳を、私へ向ける。子供とは思えないような、とても強くて、鋭いその瞳は、まるで、世界のすべてを憎んでいるような、そんな瞳だった。

「……。」

でも、どこまでも真っ直ぐで、透き通っていて、私はしばらく、その瞳から目が離せなかった。

「輝矢ちゃんっ」

「……っ？」

渡り廊下の方から声がして、私はやっとその子の瞳から、目を逸らした。

「行こう、輝矢ちゃん」

「桃、タロー…？」

玄上の屋敷で何度か見たことのある男が、その子の方へと歩み寄っていき、その子へと手を差し伸べた。

「もうここに、用はない…」

「……。」

どこか冷たくそう言った男の手を取って、その子は何も言わずに、私の前から去っていった。静かになった中庭に、噴水の音だけが流れ落ちた。

「か、ぐ、や…」

それ以来、その子を玄上家で見ることはなかった。

それから、数年の時が流れた。

「“針器・六刻”っ！」

私は、“神器”を操ることが、出来るようになり始めていた。

「すっげぇ～っ！」
「さっすがアリス～っ！」
「当然よぉっ」

私の家は、玄上の分家の中でも、本家に次いで力のある家系で、“神器”も、他の分家の子供たちは使うことが出来ず、その頃の私は、かなり得意げだった。羨ましがるその目が見たくて、毎日のように、針器を見せびらかせていた。

「玄上の人間ならっ、これくらい出来て、当たり前だわぁっ」

「俺っ、全然無理ぃ～っ」
「私もぉ～っ」
「フフっ」
皆が大きく首を横に振る姿を見ることが、楽しくて仕方なかった。
「やっぱりアリスは違うわねぇ～、武史おじさま、国主になるんでしょっ？」
「えっ？ええっ」
「凄いよなぁ～っ！本家の代わりだもんなぁ～っ！」
「……っ」

“本家の代わり”、という言葉に、私はそっと表情をしかめた。
その言葉は、確かに事実だった。玄上本家の人間が、結婚相手を認められなかったことで武国を出て、先代の国主が亡くなって、武国主の座は空席となってしまった。後任に選ばれたのが、最も権力のある分家の人間の、私の父。本家の人間がいないので、仕方なく父を国主に置いたのだ。

「分家の人間を国主として、良いものか…」
「しかし空席のままというわけにもいかんだろう…武矢様も輝矢様もおられないのだから」
「武史様はよくやっておられる」
「だが次はどうする？アリス様しかおられぬのだぞ？」
「……。」

そんなような言葉を聞く機会は、子供の頃から、山程あった。聞こえていると知らないのか、聞こえていてもわからないだろうと思っているのか知らないが、仕官のジジイどもの言葉は、耳に届く度に、私の心を不快で充満させた。

「輝矢、か…」

“かぐや”という名のあの子が、玄上本家の人間であると知ったのも、その頃だった。

「何がっ…輝矢よっ…」

不快さから逃れたくて、私はただ、輝矢よりも上へ行こうと、そう、思うようになった。

遊ぶ暇も惜しんで、針器の腕を磨いた。
たくさん本を読んで、勉強をした。
ただ、認めてもらいたくて、ただ、“輝矢”よりも上でいたくて。

「パパぁっ！見てぇっ！私っ、こんなに針器が使えるようになったのよぉっ！？」

いつものように得意げに、父に針器を披露した。

「どおっ！？」

父に、大きく笑いかける。

「ああっ、いつ見ても凄いねっ…アリスはっ…」

「……っ」

父の、その、体裁のいい笑みが嫌いだった。人当たりのいい、穏やかで優しい笑み。父はその笑みを、誰にだって同じように向ける。それが一番、上手くいくから。

本当は“凄い”だなんて、思ってないんでしょう？

そう言って笑っていれば、私は単純に喜ぶと、そう思っているんでしょう？

でも私、そんなに単純じゃない。

「鬼人が復活したらしいっ…」

「武国にも危険が…？ああっ、こんな時に、“月器”があればっ…」

「“針器”ではやはり、力不足っ…」

「やはりアリス様ではっ…輝矢様を探せば良いのでは？」

「馬鹿を言えっ、あれは卑しき者の子ぞ？」

「……。」

聞く度に不快になるその言葉たちは、何年経っても、何をどんなに頑張っても、聞こえなくなることはなかった。

「なんでよっ…」

呟いた自分自身の問いかけに、答えはすぐに浮かんだ。

“輝矢がいるからだ”。

“輝矢”。その名が、私を不快にする。

“輝矢”。その名が、私を否定する。

“輝矢”なんて、いなくなってしまえばいいのに…。

悩むのにも飽きた頃、私はある拾い物をした。

「ウサギっ…？」

国の近くで、ボロボロになって倒れている一羽の白兎。

「ううっ…お腹っ…空いたぁ…」

「“兎人”っ…？」

ウサギのわりに、しっかりと空腹を訴えているソイツに、私は少し眉をひそめる。

「何、ぶっ倒れてんのっ？あんたっ」

「へっ…？」

何の気まぐれかは、わからない。間の抜けた顔を上げたソイツに、私はゆっくりと手を差し伸べた。

「アリス様っ、僕、行くところがないので、このままアリス様の傍に居ても、いいでしょうか？」

気まぐれで拾って、気まぐれで手当てとかしただけなのに、ソイツはいつまで経っても、私の傍にいた。

「かしこまりましたっ！アリス様っ！」

何を言っても、嬉しそうな笑顔で大きく頷いた。

「お供しますっ！アリス様っ！」

どこへ行くって言っても、迷うことなくそう言った。

「内兎っ！」

「えっ？えとっ…」

「遅いっ！」

「はいっ！すみません～～～っ！！」

「……っ」

怒鳴りあげる日々。笑い合う日々。ひどく、居心地が良かった。

「あぁぁ～っ！もう嫌っ！！」

「アリス様っ？」

「輝矢輝矢輝矢輝矢っ！いつまで経っても、輝矢ばっかりっ！」

内兎を拾ってからも、私を不快にするその声は聞こえてこなくなることはなくて、私は内兎の前で初めて、その怒りを爆発させた。ずっと溜め込んでいたから、誰かの前でそんなことを叫ぶのは、初めてだった。

「輝矢の何がそんなにいいわけっ！？私だって、こぉ～んなに強いのにっ！」

「はいっ、アリス様はお強いですっ」

「……っ」

笑顔で答える内兎に、私は少し顔をしかめる。

「私は卑しい血なんて入ってないしっ、私の方が断っ然っ！凄いのにっ！！」

「はいっ、アリス様は素晴らしい方ですっ！」

「……っ」

再び笑顔で答える内兎に、私の表情はさらに歪んだ。

「そんなことないわっ…」
「えっ？」

私は内兎の方から視線を逸らし、ポツリと落とすように呟いた。

「私なんてっ…全然ダメよっ…」
「アリス…様っ…？」

弱気な声が漏れる。弱い言葉を吐く私が相当珍しかったのか、内兎はひどく戸惑った顔を見せていた。

「わかってるのっ…何をやったって、輝矢には敵わないって…」
「アリス様っ…」

そんな私を見て、内兎がそっと目を細める。

「アリス様は、輝矢様に憧れていらっしゃるのですね…」
「はぁっ！？」
「うわっ！」

思いがけない言葉に、勢いよく振り向いた。大きく声を出した私に、内兎も驚きの表情を見せた。

「誰が憧れてるのよっ！！」
「だっだって、アリス様が“敵わない”とか言うくらいだからっ…」
「んなわけないでしょっ！！バカなこと、言わないでっ！！もう出てってよっ！！」

「はっはいぃ～っ！！すみませんっ！！」

怒鳴りあげる私に怯えるようにしながら、内兎は慌てて私の部屋を出て行った。

「たくっ…！何なのよっ…！」

部屋に一人残った私は、その脈打つ心臓を、必死に落ち着けようとした。

――――輝矢様に憧れていらっしゃるのですねっ…――――

「……っ」

思い出される言葉に、唇を噛む。

ひどく、動揺した。その言葉に。

そんなこと、思ってもみなかった。

ううん、違う。気付いていたけど、ずっと気付いていない振りをしてきただけ。

本当は、ずっと、憧れていたの。

――――別に…お前に関係ない…――――

その世界を憎む、まっすぐな瞳を、初めて見た、あの時から。

ずっと、憧れていたの。

この世界で、誰よりも憎い、あなたに……――――

「やめてよっ…」

ずっと閉じ込めてきた思い。誰にも知られたくなくて、必死に隠

してきた思い。

――――そんなアナタがっ…私にはとても眩しく見えるっ…――――

アリスは必死に隠してきたというのに、輝矢はそれを、あっさりと口にした。アリスを認めるような、穏やかな笑みまで浮かべて。

「クっ…！」

アリスには出来なかったことを、輝矢はあっさりとやってのける。

「やめてよっ…！」

余計に、惨めな気持ちになる。敵わないことを、思い知らされる。

「もうっ…あんたなんかっ…」

アリスが、頭を押さえていた左手を、ゆっくりと下ろした。

「輝矢ぁぁぁっ！！」

「……っ！！」

アリスがこの戦いの中で初めて、輝矢の名を叫びながら、六刻を構えて、輝矢のもとへと飛び込んでくる。

「……。」

向かってくるアリスを見つめ、そっとその瞳を鋭くする輝矢。

「アリスっ…」

輝矢が静かに、アリスの名を呼ぶ。

「それでも私はっ…」

――――私は、牢戸知玖に勝つその日まで、もう二度と負けません……――――

仲間に誓った、言葉がある。

――――ハチは私が守ります――――

自分に誓った、言葉がある。

「アナタに負けるわけにはっ…いかないんですっ…！！」

輝矢が勢いよく顔を上げ、素早く三日月を構えた。

「月器っ…！私に力をっ…！」

――――パァァァァァンっっ！！――――

輝矢の呼びかけに応えるように、三日月がさらに強い金色の光を放つ。

「……っ！」
輝きを増した三日月を、向ってくるアリスへと振りかぶる輝矢。

「輝矢ぁぁぁぁっ！！」
「アリスっ…！！」
輝矢とアリスが強く互いの名を呼び合う中、三日月と六刻が重なり合った。

――――バァァァァーンっ！！――――

『ううぅっ…！！』
巻き起こる衝撃波に、身を屈める門貴たち。

「輝矢っ…」
「……っ」
不安げに衝突の先を見守る桜時の横で、内兎が薄く笑みを浮かべる。

「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」

激しく巻き起こった衝撃が止むと、その中心では、立ち尽した輝矢が、大きく肩を揺らして息をしていた。その右手には、光の止んだ三日月が握り締められている。

「……っ」

呼吸を整えた輝矢が、目を細め、ゆっくりと後ろを振り返る。

「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」

輝矢の振り返った先には、輝矢と同じように息を乱したアリスが、地面に座り込んでいた。

「はぁっ…はぁっ…」

息を乱しながら、アリスがゆっくりと自分の前方を見つめる。

「針…器っ…」

そこには、長針の先の部分が折られ、二つに分かれた六刻が落ちていた。

「……っ」
アリスが、ゆっくりと針器に手を伸ばす。

――――やはり“針器”より“月器”っ……――――

折られた針器が、この戦いの答え。アリスの針器は、あの不快な声の通り、輝矢の月器に負けた。

「私っ…私…は…」
二つとなった六刻を抱え、アリスが少し虚ろに言葉を繋ぐ。

「アリスっ…」
「……っ」
横から聞こえてくる輝矢の声に、そっと顔を歪めるアリス。

「アリスっ…私はっ…」

輝矢のその目が、敗れたアリスを、憐れんでいるように見えた。

「……っ」
アリスが強く、唇を噛み締める。

「何よっ…」
「えっ…？」

弱々しい声を漏らすアリスに、輝矢が少し眉をひそめる。

「何よっ…あんたなんかっ…あんたなんかっ…」

「アリスっ…」

「あんたなんかっ…！」

呼びかけようとした輝矢の声を遮り、アリスが勢いよく顔を上げる。

――――あれは卑しき者の血を引く子っ…――――

「あんたなんかっ…！」

アリスが強く、輝矢を見る。

「鬼のくせにぃぃっ！！」

「……っ！！」

アリスの言葉に、輝矢が大きく目を見開く。

『えっ…？』

戦いを見守っていた門貴たちにも、アリスのその言葉が届き、その表情を凍りつかせる。

「輝矢がっ…」

茫然と、言葉を呟く桜時。

「輝矢が…鬼っ…？」

その時、輝矢たちの、時が止まった…。

第７０章　ほどける絆　★１

その言葉が、僕らの時を止めた。

――――鬼のくせにいいいいっっ！！！――――

「いいよっ…アリスっ…」

アリスの方を見つめながら、満足げに微笑む内兎。

「それでいいっ…」

その声が、静まり返った中庭に落ちる。

「うっ…！ううぅっ…」

「……。」

折れた針器を抱いたまま、泣き崩れるアリスの横で、力なく俯く輝矢。

「輝矢が…鬼っ…？」

桜時が茫然と、その言葉を呟く。

「輝矢が…鬼っ…」

「……っ」

もう一度呟いた桜時を見て、内兎がそっと笑みを浮かべる。

「ナイト」

「……っ？」

自分の名を呼ばれ、ゆっくりと振り向く内兎。

「ギン…」

内兎が振り向くと、そこには先程、桜時の前へと現れたギンが立っていた。桜時の後を追い、ギンも玄上の屋敷へとやってきたようである。

「迎えに来てくれたんだね」

「ええ、一応っ」

そっと微笑む内兎に、ギンが含んだ笑みを返す。

「もう気は済まれましたか？」

「うんっ…十分だよ」

ギンの問いかけに、さらに大きな笑みを浮かべて頷く内兎。
「ではそろそろ」
「そうだね、帰ろうか」
「……っ」
内兎の言葉に、少し離れた所に立っていたゴンがハッとした表情となり、素早く天狼丸を構え、内兎とギンの方を振り向く。

「ちょっと待っ…！」
「“水星”…」

――――パァァァァーンっ！――――

「……っ！」

天狼丸を振り上げようとしたゴンの、すぐ横をかすめていく、星のように小さな水の塊に、ゴンが思わず目を見開く。

「みっ…水っ…」
ゴンの横に立っているイチゴが、動揺を隠しきれない表情で呟く。

「“水…力”っ…」

内兎が放ったのは、輝矢と同じ力。

「“天は光りより龍を生み…」
「えっ…？」

先程、自らの口で放ったばかりのその言葉を、内兎が発すると、イチゴは戸惑うように眉をひそめた。

「……海は水より鬼を生んだ…”」

『……っ』

内兎の言葉に、皆が険しい表情を見せる。

「水より…鬼をっ…」

ふと顔を上げた桜時が、ゆっくりと内兎の言葉を繰り返す。

――――アハハハハハハっ…！！――――

――――水力が暴走してるのかっ…？――――

一度目は海底、二度目は大雨。すべて水に関係した場面で、輝矢は豹変し、まるで別人のように恐ろしい力を使った。

「……っ」

眉をひそめた桜時の方を、内兎が振り向き、そっと微笑む。

「御伽神話、最初の一文だよ…」

「……。」

内兎の微笑みに、厳しい表情を見せる桜時。

「じゃあね、桜時…」

「……っ」

――――桜時でいいよっ、なぁっ？内兎っ――――

皮肉ったような笑みを浮かべる内兎に、何も知らずに笑い合っていた時のことを思い出し、桜時がそっと顔をしかめる。

「ギン」
「はい」

内兎の呼びかけにギンが頷くと、二人の姿が霞がかったように、白い霧の中へと見えなくなっていく。霧に包まれながら、輝矢とアリスの方を見る内兎。

「また会おうね…輝矢…」

内兎がそう呟き、輝矢からアリスへと視線を移す。

「いい見せ物だったよ…アリス…」

その残酷な笑みを残し、内兎とギンは、深い霧の中へと姿を消した。

『あっ…』

二人の姿を消した途端に、掻き消えていく霧に、ゴンやイチゴが思わず声を漏らすが、それ以上はどうすることも出来ずに、ただそ

の場に立ち尽くした。

「アリス様っ！」
「アリス様ぁぁぁ～～っ！！」
『……っ？』
聞こえてくる多くの声に、ゴンたちが振り返る。

『アリス様っ！！』

玄上の屋敷の中から出て、中庭へと駆け込んでくるのは数名の玄上の従者たちであった。他にも多くの従者たちが屋敷を出てきて、まだ残る火の消火などにあたっている。

「随分とタイミングよく出てきますね…」
「ああっ…」
イチゴの言葉に頷きながら、ゴンがそっと眉をひそめる。

「まるで、何かが起こると初めから知ってた誰かが、屋敷の人間たちを避難させてたみてぇーだっ…」
「国主様っ！」

瞳を鋭くして言い放ったゴンに、応えるかのように、その場へと現れたのは、武国主・武史であった。厳しい表情を見せた武史は、ゴンたちが見つめる中、従者に誘導されながら、輝矢とアリスの方へと歩み寄っていく。

「ううぅっ…ぅぅっ…」

「アリス…」
泣き崩れたままのアリスのすぐ傍にしゃがみ込み、目を細めた武史が、そっとアリスの頭を撫でる。
「……父…上っ…」
ゆっくりと顔を上げたアリスが、弱々しく武史を見上げた。
「わた…しっ…」
「……。」
「……っ」
武史がアリスの額に手を当てると、アリスは急にその瞳を閉じ、その場に力なく倒れ込んだ。
「アリス…」
倒れ込んだアリスを、抱え上げる武史。アリスの顔には、涙の跡が、痛々しく滲んでいた。
「しばらくの間は…悪夢を忘れて、ゆっくりとお休み…」
武史が、どこか願うように呟く。
「アリスを部屋へ…」
「はっ！」
近くに立っていた従者が、武史の言葉に頷くと、武史からアリスを抱え受け、素早く屋敷の方へと歩き去っていった。
「ふぅっ…」
一息つきながら、武史がゆっくりと立ち上がる。

「アリスが迷惑をかけたね…輝矢…」
「いえっ…」
言葉を投げかける武史に、輝矢が短く答える。
「あっはっはっはぁ～っ！」
『……っ』
聞こえてくる、場違いな程に大きな笑い声に、皆が戸惑うように振り向く。
「あはははっ！あはははははぁ～っ！」
「門貴さんっ…？」
その笑い声を発しているのは、門貴であった。どこか無理やり笑っているように見える門貴の様子に、イチゴが少し首を傾ける。
「アリスちゃんにも、びっくりさせられるわぁ～っ！」
皆が戸惑いの目を向ける中、門貴が妙に上ずった声で言葉を発する。
「まぁ～何かぁっ、めっさテンパってたみたいやから、しゃーないんかなぁ～っ？」
「門貴っ？」
言葉を続ける門貴に、ゴンも眉をひそめる。
「輝矢んが鬼やなんてっ！あっはっはっはっはぁ～っ！」
「……っ」

笑い飛ばす門貴に、そっと厳しい表情を見せる輝矢。

「そりゃ輝矢んはそこいらの鬼人よか、二万倍くらい怖いけどやなぁ～っ、だからって鬼やなんてっ…！」

「……。」

「鬼や…なんてっ…」

ただ俯いたままの輝矢に、門貴のその明るい口調が、思わず止まる。

「ホントっ…なのっ…？」

言葉を止めた門貴の代わりに、由雉が静かに問いかける。

「鬼っ…て…」

「……。」

そのシンプルな問いかけに、輝矢の表情はさらに厳しくなる。

「それはっ…」

「いいです…武史さん…」

「輝矢っ…？」

輝矢の横から前へと出て、答えようとした武史の言葉を、輝矢がそっと遮る。輝矢の方を振り返った武史は、止めた輝矢に、少し眉をひそめる。

「いずれはわかること…」

俯いたままの輝矢が、小さな声で、言葉を続ける。

「隠すことにも…もう疲れました…」

「輝矢っ…」

どこか諦めたように呟く輝矢に、そっと目を細める武史。

「そうです…」

輝矢がゆっくりと、門貴と由雉の方を見つめる。

「アリスの言っていたことは、すべて事実っ…」

揺らめく瞳が、仲間たちを捉える。

「私は…“鬼”、“鬼人”です…」

『……っ』

その輝矢の言葉に、門貴と由雉は、声こそ出さなかったものの、動揺を隠しきれない表情を見せた。

「……。」

――――カランっ――――

同じように、その言葉を聞いていた桜時の右手から、力なく村雨丸が零れ落ちる。

「……っ」

村雨丸の落ちた音に、輝矢が桜時の方を振り向いた。

「ハチっ…」

険しい表情を見せながら、輝矢がゆっくりと桜時の方へと歩み寄っていく。

「ハチっ…あのっ…」

「うっ…！」

桜時の方へと伸ばされる輝矢の手に、桜時が大きく目を見開く。

――――ビクンっ！！――――

「……っ」

勢いよく離れていく体に、輝矢が伸ばしていたその手を止める。

「あっ…」

輝矢から逃げるように、体を離した桜時は、止まった輝矢の手を見て、自分自身驚いたような、そんな表情を見せた。

「あっ、ごめんっ…！」

慌てて謝りながら、桜時は輝矢の方を見ることなくしゃがみ込み、落した村雨丸を拾う。

「ごめんっ…」

村雨丸を拾い上げた桜時が、村雨丸を強く握ったまま、深く頭を抱え込む。

「俺っ…ごめんっ…」

少し震えて聞こえてくるその声は、ひどく混乱しているようであった。

「……。」

しゃがみ込み、頭を抱える桜時の姿を見つめ、輝矢は力なく、その瞳を閉じた。

「桜時さん…」

輝矢を前にして、しゃがみ込んでしまった桜時を、イチゴが心配するように見つめる。

「イチゴ」

「はい…？」
ゴンの呼びかけに、イチゴがゆっくりと振り向く。
「今回のこと、本部に連絡は？」
「あっはいっ、しました。もうお姉ちゃんが、誰かを連れて龍国を出ていると思いますっ…」
「そうかっ…」
イチゴの答えを聞きながら、ゴンが浮かない表情を見せる。

――――この子の背負っているものはっ…そんなに軽いものじゃないんだよっ…――――

思い出される、いつかの太狼の言葉。

「……っ」

ゴンは悲しげに、その瞳を細めた。

牢戸知玖・居城。

「ただいま戻りましたっ」

武国を去ったギンが、牢戸知玖の居城へと戻って来る。

「随分と遅かったわレェ～っ♪じゃなくって、ねぇ～っ！」

すると、一足先に戻っていた城歌たち、トランプ兵団が出迎えた。

城歌の歌うような声が、薄暗い部屋の中に響き渡る。

「ええっ、ナイトがなかなか帰ろうとしてくれなかったもので」

少し皮肉った言い方して、微笑んで見せるギン。

「ふぅ～ん、でっ？そのナイトは？」

「いませんよ」

「はっ？」

あっさりと答えるギンに、城歌が目を丸くする。

「もう少しやることが残っているそうで、先に帰っててと言われたので、そうしました」

「何のために迎えに行ったのよ…」

笑顔を見せるギンに、城歌が少し呆れるように肩を落とす。

「ちぇっ！勝手な野郎だぜっ！俺たちだけ、先に退かせやがってっ！」

城歌の後方にいた波跡が、どこか不満げに言葉を吐き捨てる。

「まるでもうちょっと戦いたかったかのような言い振りだな…」

「当ったり前だろっ！？」
「その割りには…傷だらけ…」
「うっ…！」
黒羽の問いかけに怒鳴るように答える波跡であったが、醍也の鋭い指摘に、思わず口ごもった。波跡の全身には、ゴンの炎による火傷の跡が多く残っていた。

「それより術斗の姿が見当たらないんだけドォ～っ？」
「ああ、彼ならやられましたよっ」
「えっ？」
ギンの答えに、城歌の表情が止まる。

「“命咲かす者”の命力を前にあっさりとっ」
「術斗がっ…」
「……。」
驚いた様子で呟く波跡の横で、黒羽がそっと眉をひそめる。

「それで？お前は術斗がやられるのを、何もせずに見ていたというわけか？」
「……っ？」
鋭い瞳を見せて問いかける黒羽に、ギンが不思議そうに首を傾げる。

「何をする必要が？」
「……っ」

少しも考えることなく、ごく自然に問いかけるギンに、黒羽が表情をしかめる。

「では僕は、シルク様に報告がありますので」

そう言うと、ギンは黒羽たちにあっさりと背を向け、廊下の奥へと消えていった。

『……っ』

残った四人、皆が険しい表情を見せ、考え込むように俯く。

「なっ何なんだよっ！アイツっ！」

『……っ？』

沈黙を破って声をあげたのは、波跡であった。

「それにあのナイトって奴っ！いきなり現れたくせに、偉そうな態度取りやがって、気に食わねぇっ！」

波跡がしかめた表情で、言葉を続ける。

「やめなさい、シルク様に聞かれたら、殺されっ…」

「今回のことだって、何のために武国に行ったのかっ、全然意味わかんねぇーじゃねぇーかっ！」

止めようとした城歌の声を、強く遮る波跡。

「俺らの狙いは、“命咲かす者”のはずだろっ！？なのにそれも完全無視でっ、よくわかんないまま出てっ、よくわかんないまま退かされてさぁっ！」

内兎が武国で何をしたかったのか、結局よくわからないまま、すべてが終わった。

「何にも知らされてないままでっ、色々動かされんのとか面白くねぇーって、そう思わねぇーかっ！？」

『……。』

波跡の問いかけに、三人が厳しい表情を見せる。

「別に…俺は敗北者を殺せれば…それでいい…」

「んなっ…！？」

ゆっくりとした口調で答える醍也に、驚きの表情を見せる波跡。

「……っ」

驚く波跡の横で、黒羽がそっと目を落とす。

――――ああっ、決めよう…どちらの羽根が間違っていたのかをっ……――――

思い出されるのは、父の宿命の相手・ハヤテの息子であり、ハヤテの羽根を受け継いだ者・由雉の言葉。

「俺も…戦いたい奴と戦えれば、それでいい…」

「……っ！」

醍也に続くように言い放つ黒羽に、波跡がさらに顔をしかめる。

「お前らっ…どうにかしてるんじゃねぇーのっ…！？」

少し責めるような口調で、醍也と黒羽に問いかける波跡。

「俺は御免だっ！ただ利用されて死ぬなんてっ！」

そう言い放つと、波跡はそのまま、その場を勢いよく駆け出していってしまった。

「ファっ…じゃなくって、はぁっ…」

波跡の姿が見えなくなると、城歌が深々と溜息をついた。

「困ったものだな…波跡にも…」

「死にビビっちゃったんじゃないの…？」

肩を落とす黒羽に、醍也が冷たく呟く。

「私たちは駒…」

二人に続くようにして、城歌がそっと言葉を放つ。

「戦いに理由を求めるなド…無駄なのにねっ…」

『……。』

諦めたような城歌の言葉に、醍也と黒羽は複雑な表情を見せた。

城歌たちと別れたギンは、シルクの部屋へとやって来た。

「戻りました」

不適な笑みを浮かべ、ギンがシルクの部屋へと足を踏み入れる。

「おかえりなさい…」

奥の寝台に寝転がったまま、ギンに出迎えの言葉を発するシルク。
寝台のすぐ横には、どこか浮かない表情を見せた諸刃が立っていた。

「ギン、ナイトはどうした…？」

ギンの他に誰の姿もないことに気づき、諸刃が静かに問いかける。

「お前はナイトを迎えに行ったのだろう…？」

「ええっ、ちゃ～んと一緒に帰って来ましたよっ？」

眉をひそめる諸刃に対し、ギンは飄々とした口調で答える。

「でも、もう一度行ってしまいましたっ」

ギンが笑顔を見せて、言い放つ。

「何でもお姫様の回収作業があるそうで」
「……っ」
冗談めいて言うギンに、諸刃がさらに表情をしかめる。
「ならば、さっさと追って、連れ戻しっ…」
「いいわっ」
「えっ…？」
遮るシルクに、諸刃が戸惑うように振り向く。
「ですがシルク様っ…」
「子供じゃないのよ？一人で勝手に帰ってくるわ…」
「そういう問題ではなく、これ以上の勝手を許すのはどうかとっ…」
「別にいいんじゃないですかねぇ～？」
「……っ」
シルクに意見をしようとしていた諸刃の言葉が、割って入って来たギンの声に遮られる。
「ギンっ…」
「これが上手くいけば、彼らは崩壊っ、“命咲かす者”も狙いやすくなりますし」
睨みつけるように見る諸刃と、目を合わせることなく、ギンが言葉を続ける。
「ねぇっ？シルク様っ」
「別に…興味がないわ…」

相槌を求めるギンに、シルクは素気なく答えを返す。

「あの子が…何を壊そうと…」

その赤い瞳が、内兎と同じように、冷たく輝いた。

第７０章　ほどける絆　★２

内兎たちが去って数時間。長い夜がやっと明けた。
武国に燃え広がっていた炎はほぼ鎮火され、避難していた町人たちも戻り、全員での怪我人の救助と、町の復旧作業が続けられていた。

武国入口前。羊スケのオトポリ車。

「そっそうなのっ…敵はぁ、みんな退いていったんだけどっ…そのっ…出来る限り、早く来て欲しいって言うかっ…」

車の中ではイチゴが、無線を使って、連絡を取っていた。

＜はぁっ!?敵は退いたんでしょっ!?＞

無線の向こうから返ってくる、リンゴの少し怒ったような声。

＜だったら、そんな焦んなくっていいじゃないっ！＞
「いやぁ…だから、そのっ…」
＜何よっ!?何かあったんなら、はっきり言いなさいよっ！＞
「……。」
返ってくるリンゴの問いかけに、思わず黙り込み、俯いてしまうイチゴ。

＜イチゴっ？イチゴっ！＞
「貸せ」
「あっ」

車の傍に立っていたゴンが、俯いていたイチゴから、リンゴの声の漏れている無線を取り去る。

「いいから、とっとと来いっつってんだよっ、クソリンゴっ」
＜えっ…？その声っ…ゴンっ！？＞
無線から、驚いたようなリンゴの声が返ってくる。

＜何であんたが武国にいんのよっ！？＞
「鬼の出たところにいんのが、オトポリってもんだろうがっ」
＜そうだけどっ…！そうじゃなくってあんた、修行っ…！＞
「とにかく来いっつってんだっ！ちゃんとあの人、連れて来てんだろうなぁっ！？」
＜えっ？ええっ、うるさかったから、力づくで車に乗せてっ…＞
ゴンが不機嫌そうに問いかけると、リンゴが少し戸惑うように答えた。

「じゃあマッハで来いっ！マッハだからなっ！マッハっ！」
＜あっ！ちょっ…！＞
「……っ」

――――ブチっ！――――

リンゴがまだ何かを言おうとしているのだが、ゴンは気にせずに、無線を切った。辺りに響いていたリンゴの声が聞こえなくなる。

「あぁ～うっせっ！アイツとしゃべってると、耳悪くなんなぁ～っ

！」

「向こうもそう思ってるでしょうね…」

「ああっ！？」

こっそりと呟くイチゴに、ゴンが勢いよく顔をしかめる。

「ゴンさん…」

「……っ？」

深く俯いたイチゴが、力なくゴンの名を呼ぶ。

「私…言えませんでした…」

イチゴが、元気のない声を落とす。

「お姉ちゃんに…何があったのか…」

「……っ」

イチゴの言葉に、そっと眉をひそめるゴン。

――――鬼のくせにぃぃぃっ！！――――

目に焼き付いて離れない、あの時の光景。アリスの言葉。

「口に出来るほどっ…受け止めきれてないっ…私っ…」

「……。」

受け止めきれていないと言うイチゴに、何の声を掛けることも出来ず、ゴンはただ厳しい表情を見せ、そっと俯いた。

「ゴンさぁ～んっ！」
「んっ？」
呼ばれる名に、ゴンがゆっくりと顔を上げる。
「羊スケ」
「町人たちの救助っ、粗方終わったっスぅ～っ！」
町の方から入口を抜け、ゴンのもとへと駆け寄って来たのは、羊スケであった。波跡の攻撃で負った傷により、体の所々に包帯を巻いている。だがその割りには元気そうである。
「怪我人の手当ての方は、玄上の警備隊に任せちゃっていいっスかねぇ～？」
「ああっ、こっちの応援が来るのは、もうちょい後になりそうだからな」
「了解っスっ！じゃあ早速、伝えっ…」
「……っ？」
頷いたというのに、急に言葉を止める羊スケに、向い合っているゴンが眉をひそめる。
「どうした？」
「何かぁ…あったんスか…？」
「……っ」
ゴンの顔をまじまじと覗きこみながら、少し躊躇いがちに問いかける羊スケ。その羊スケの問いかけに、ゴンはハッとした表情を見せた。冷静に努めていたつもりだったが、隠しきれていなかったようである。

「……落ち着いたら話す」
羊スケに答えながら、ゴンがゆっくりと玄上の屋敷の方を見る。
「“落ち着いたら”…な…」
玄上家を見つめるゴンは、どこか浮かない表情を見せた。

玄上家・中庭噴水前。

「……。」

昨夜の炎にやられ、水の流れなくなってしまった噴水の前に、神妙な面持ちで立ち尽くす輝矢。

――――俺っ…ごめんっ…――――

拒絶するように、離れていった桜時。

――――鬼のくせにいいいいっっ！！――――

――――私は…“鬼”、“鬼人”です…――――

思い出される言葉が、輝矢に、“当然だろう”と言うようだ。

「……っ」

俯いた輝矢が、悲しげに目を伏せる。

「全部…壊れていくよ…」

「……っ！」

急に聞こえてくる声に、ハッとしたように顔を上げる輝矢。

「あっ…！」

「……っ」

輝矢が顔を上げると、見つめていた噴水の水面に、白髪に赤い瞳の少年・内兎が、映し出されていた。水の中の内兎は、驚くように目を開いた輝矢に、そっと微笑みかける。

「アナタはっ…！」

「輝矢のせいで…みんな壊れていく…」

月器を目覚めさせようと、ピアスに手を伸ばす輝矢に、内兎は緩やかに言葉を続ける。

「仲間たちも…アリスも…」

“月っ…！」

「ぜぇ～んぶっ…鬼である君のせいっ…」

「……っ！」

内兎の言葉に、ピアスを弾こうとしていた輝矢の手が止まる。

「君が存在するから…すべてが壊れてしまうんだ…」

「……っ」

続けられる言葉に、輝矢がピアスを弾こうとしたその手で、そのまま頭を押さえる。ただ苦しげな表情で、血が出るほどに強く、唇を噛み締める。

――――いやあああああああああっ！！――――

目の前で、壊れていったすべて。

「また壊すの…？」

「……っ！」

過去を思い返している輝矢の思考を読むかのように、内兎がそっと問いかける。

「あの時みたいに…すべてが壊れてしまうの…ただずっと待ってるの…？」

「わっ私っ…私はっ…」

内兎の問いかけに、明らかに動揺し、声を震わせる輝矢。

「大丈夫だよ…輝矢…」

大きく肩を震わせる輝矢に、その不安を取り除くかのように、優しく響いてくる声。

「君がいなくなれば…きっとみんな、壊れなくて済む…」

「……っ」

差し出される答えに、輝矢がハッと目を開く。

「きっと…苦しまずに済むよ…」

「……。」

輝矢が水面から目を逸らし、そっと視線を下へ落とす。

――――俺はお前がいなくても大丈夫だからっ！――――

――――あんたなんかっ…！いなくなればいいのよぉぉぉっっ！！

――――

何よりも怖いその言葉が、頭を駆け巡る。

――――お前の存在は…この世界には必要ない…――――

幼い時に放たれた言葉。それが、真実だったのだろうか。

「違うっ…」

輝矢が必死に、自分の中で出てきた答えを否定する。

「違うっ…！私っ…私はっ…！」

「違わないよ」

必死に首を横に振る輝矢に、内兎は諭すように囁きかける。

「君は鬼だもの…」

「……っ！」

内兎が突き付ける事実に、大きく目を見開く輝矢。

「結局、鬼と人なんて、どうやったって相容れないものなんだよ…」

さらに続く、内兎の言葉。

「それは…君が一番、よく知ってるでしょう…？」

「……っ」

――――いやあああああああああっ！！――――

この目に焼きついた、あの悲惨な光景。

「君は鬼…だから、君は鬼とともに歩むべきなんだよ…」

「私っ…」

内兎の言葉に、反論するように、口を開く輝矢。

「私は…鬼と歩んだりなどっ…」

「きっとすぐにわかる…」

水面に映し出された内兎が、徐々に水の奥底へと消えていく。

「すぐに…思い知らされるよ…」

やがて、水面から、内兎の姿が完全に消えた。

「……。」

辺りにまた、静けさが戻る。

――――君は鬼だもの…――――

「……っ」

思い出される言葉に、輝矢は力なくその場にしゃがみ込んだ。

玄上家・国主の間。

「そうか…明日にはオトポリの援軍が…」

「はい」

リンゴとの連絡を取ったゴンは、オトポリの援軍が来ることを武史に伝えるため、国主の間へとやって来ていた。武史の言葉に、ゴンがしっかりと頷く。
「済まないね…色々と迷惑をかけて…」
「いえっ」
謝る武史に、ゴンがそっと首を横に振る。

「娘さんは…？」
「眠ったままだ…まだ目は覚ましていないよ…」
「そうですか…」
その言葉を聞き、少し肩を落とすゴン。

――――アリスっ…――――

昨夜の、内兎とギンが去ってすぐに現れた武史のことを思い出し、ゴンがそっと目を細める。

「あのっ…」
「んっ…？」
声を発するゴンに、武史が薄い笑みを浮かべて、聞き返す。

「気付いて…おられたのですか…？そのっ…あの内兎とかいう者のことっ…」
「何となく、ではあったんだけどねぇ…」
ゴンの問いかけに、武史は微笑んだまま答えた。
「ヨーネル草を使って、屋敷の者たちの避難を…？」
「ああ…アリスと輝矢もそうしようと思っていた…彼の狙いがアリスと輝矢であることは、予想がついていたからね…」
武史がすらすらと言葉を続ける。

「でも結局っ…」
武史の表情が、そっと曇る。
――――内兎っ…！！――――
「止めることは出来なかった…」
アリスは内兎を求めて走り、内兎を求めすぎたために、輝矢に刃を向けてしまった。
「無念でならないよ…」
武史が少し悔いるように呟く。
――――鬼のくせにぃぃっ！！――――
「あんなことに…なってしまって…」
「……。」
武史の言葉に、ゴンも厳しい表情を見せる。
「狐上くん…といったかな…？」
「はい」
名を呼ばれ、しっかりと頷くゴン。
「彼らを…しっかりと見ていてあげてほしい…」
「えっ…？」

武史の言葉に、ゴンが少し眉をひそめる。

「強い絆というのは…時に解けやすいものだから…」

「……っ」

どこか不安げに言う武史に、ゴンはそっと目を細めた。

「解けやすい…か…」

国主の間を出たゴンが、武史の言葉を繰り返す。

――――諸刃っ！――――

――――次狼ぉぉぉぉっっ！！――――

「……っ」

強い絆は解けやすい。そのことを、ゴンは、すでに知っている。

「にしてもあの国主さんっ、だぁ～れかと雰囲気、似てるようなっ…」

「ゴンさんっ！」
「……っ？」
廊下に立ち止まり、首を傾げていたゴンのもとへ、イチゴが駆けてくる。

「どうした？」
「今、羊スケさんと、警備隊を手伝って、怪我人の手当てしてたんですけど、人手が足りなくてっ…」
「わかった、行くかっ」
「いえっ、ゴンさんは居ても居なくても、とりあえず邪魔なんでっ…」
「居なくても邪魔なのかっ！？」
イチゴのあまりの言葉に、突っ込みも出来ずに大きく驚くゴン。

「由雉さんの羽根…お借り出来ないかと思って…」
「ああっ」
その言葉に、ゴンがなるほどと言わんばかりに、ポンと手を叩く。

「借り出しに行くかっ」
「はいっ」
イチゴが大きく頷く。

「何かしてる方がっ、アイツらも気が晴れんだろっ」

第７０章　ほどける絆　★３

玄上家・客間。

『……。』

戦いを終えた桜時、門貴、由雉の三人は、そのまま一睡もせずに、ただ客間のソファーに、離れて座り続けていた。何の会話をするわけでもない。沈黙の時間が、ひたすら流れていた。

「おいっ」

そこへ、ゴンとイチゴが入って来る。

「今、警備隊が町で怪我人の手当てやってっから、お前らも手空いてたら手伝ってくんねぇーか？」

『……。』

三方向に向かい合って座っている三人のもとへと、歩み寄りながら、手伝いを求めるゴン。しかし三人はゴンの言葉に、声を発するどころか、眉一つ動かさなかった。

「……っ」

そんな三人の様子に、ゴンが顔をしかめる。

「おいっ！」

ゴンが一番近くに座っている由雉の前へと、歩いていく。

「おいっ、クソドリっ！お前の羽根で怪我人の治療をっ…」
「うるさいなぁっ」
「ああっ！？」
返ってくる乱雑な言葉に、ゴンが眉を引きつる。

「うるさいって、お前なぁっ…！」
「今っ…頭、混乱してて…羽根とか使えそうにないんだよっ…！」
「……っ」

声を荒げるゴンに対し、由雉が深く俯き、強く怒鳴りあげる。その言葉に、ゴンはハッとしたような表情を見せた。

「トリっ…」
ゴンがそっと目を細める。

「もうっ…わけわかんないよっ…」
由雉が深く頭を抱え、ひどく混乱した声を発する。

「輝矢が鬼退治の旅をしてるからっ、ボクらもそれに付き合って来たんだよっ…？」
険しい表情を見せた由雉が、顔を上げて問いかける。

「それなのにっ…その輝矢が鬼ってっ…何っ…？」

由雉が天井を見上げ、目を細める。

「ボクらはっ…何のために…旅してきたわけっ…？」
『……っ』

桜時と門貴が、その言葉に、険しい表情を見せる。

「……。」

ゴンは掛ける言葉も見つからず、ただまっすぐに、三人の様子を見守った。

「かっ…輝矢んにだって…きっと何か理由があるんやてっ…！」

何とかその場を取り繕おうと、門貴が立ち上がり、明るい声を放つ。

「輝矢んのことやねんからっ！きっとそうに決まっとうやんっ！」

「……っ」

門貴の声に、厳しい表情のまま下を向く由雉。

「なぁっ！？お前もそう思うやろっ！？桜時っ！」

「……。」

門貴が振り向いた先には、座り込んだまま、視点の定まらない虚ろな瞳を見せている桜時。

「思えない…」

「えっ…？」

桜時の言葉に、門貴が戸惑うような声を出す。

「そんないい風には…考えられないっ…」

「……っ！」

弱々しい声でそう呟く桜時に、門貴が勢いよく表情を歪める。

「何やねんっ！それはっ！！」

「門貴っ…！」

由雉が止める声も聞かず、珍しく怒りの表情を見せた門貴が、桜時の胸倉を勢いよく掴み上げる。

「お前が信じたらんで、どないすんねんっ！！お前は輝矢んのことっ…！！」

「信じるとか簡単に言うんじゃねぇーよっ！！」

胸倉を掴み上げられた桜時が、鋭く顔を上げ、睨みつけるように門貴を見る。

「簡単になんか言うてへんっ！！ただっ！俺はお前だけはっ…！！」

「そうやって俺に、全部押しつけんじゃねぇっ！！」

部屋に響く、激しい言い争いを始める2人。

「何か理由があるだとっ！？簡単に言いやがってっ…！お前はいつも、そうやって軽口叩くだけじゃねぇかっ！！」

「んやとぉっ！！？」

門貴の胸倉を掴み返す桜時。互いに掴むその手に、力が入る。

「じゃあお前はっ！輝矢んが鬼やからっ…せやから旅やめるて、仲間やめるて、そう言うんかっ！？ああっ！？」
「んなこと言ってねぇーだろっ！！」
「お前の言うたことはっ、同じことやっ！！」
険しい表情を見せた二人が、一歩も譲らずに言い合いを続ける。

「そういう門貴だってっ…ホントに輝矢のこと、信じ切ってるわけっ…？」
「はぁっ！？」
ソファーに座ったまま、口を挟む由雉に、門貴が歪んだ表情のまま、勢いよく振り向く。

「そんなん決まっ…！……っ」
言い切ろうとした門貴であったが、途中、言葉を止め、悩み込むように俯いてしまう。

「ほらねっ、自分だけいい人振んのとかっ、やめてくんないっ？」
「何やとっ…！？」
鋭く言い放つ由雉に、門貴がさらに顔をしかめる。

「俺は別にいい人振ってるわけやなっ…！！」
「振ってなきゃ言えるわけないでしょっ！？鬼の輝矢を信じるなんてっ…！！」
「……っ」

門貴に言い返す由雉のその言葉に、桜時が眉をひそめる。

「おいっ！由雉っ！そんな言い方っ…！！」

「今更庇う気っ！？あんだけ輝矢のことっ、拒絶しといてっ！！」

「……っ！！」

由雉の言葉に、桜時が大きく目を見開く。

――――うっ…！――――

自分へと伸ばされたその手に、大きく身を離した。輝矢の手として見たわけじゃない。鬼の手が伸びてくるようで、ただ恐怖し、その身を離した。鬼の輝矢を、強く拒絶した。

「……っ」

桜時が唇を噛み締め、深く俯く。

「お前なぁっ！もうちょっと仲間を想ったこと言えへんのかぁっ！？」

「輝矢が鬼なんじゃっ！もうボクらなんて、仲間でも何でもないでしょっ！？」

「お前っ…！」

「いい加減にしろっ！！！」

『……っ！』

言い争っていた門貴と由雉、そして俯いていた桜時が、その部屋

の窓ガラスが震えるほどの大声に、言葉を止め、大きく目を見開いて、動きを止める。

「……っ」

大声を放ったゴンが、遣り切れない表情で唇を噛む。

「いい加減にしろよっ…お前らっ…」

『……っ』

もう一度、今度はそっと言い放ったゴンに、三人は、唇を噛み締め、どこか苦しげな表情で俯いた。

「……。」

その部屋のすぐ外で、扉を開けようと伸ばした手をそのままに、中から聞こえてくる声に耳を傾け、悲しげな表情を見せている輝矢。

――――そうやって俺に、全部押しつけんじゃねぇっ！！――――
――――お前の言うたことは、同じことやっ！！――――
――――もうボクらなんてっ、仲間でも何でもないでしょっ！？―

―――

荒々しく聞こえてきた声。

――――おぉ～いっ！イヌコロぉ～っ！――――

――――うっせぇっ！サルっ！――――

――――ボクっ、可愛いから許してぇ～っ――――

いつもの三人とは、まるで別人。

――――すべて…壊れていくよ…――――

思い出される、内兎の言葉。

「……っ」

壊れていく。輝矢のせいで、壊れていく。

「……。」

輝矢は、悲しげに俯いた。

しばらくして、桜時、門貴、由雉の三人がそれぞれに客間を後にすると、部屋にはゴンとイチゴだけが残った。誰もいなくなったソファーの上に、ゴンが深々と座り込む。

「どうしますか…？」

「……。」

問いかけるイチゴに、険しい表情を作るゴン。

「怪我人の治療…」

「あっ、そっちっ？」

ゴンが思わず、肩をすかして、聞き返す。

「暗い雰囲気だからこそ、おどけてみただけです…」

「お前じゃ、おどけかマジか、わかりにきぃよっ…」

強く主張するイチゴに、ゴンが呆れたように呟く。

「皆さんっ…まるで別人みたいでしたね…」

イチゴが、先程の三人の言い争いを思い出しながら、どこか悲しげに呟く。

「輝矢さんのことだけでっ…あんなに揺らいでしまうなんて…」

そっと目を細めるイチゴ。

「あんなに…バラバラになってしまうなんて…」

「……。」

イチゴの言葉に、ソファーに座ったゴンが、厳しい表情を見せる。

「そうだな…」

ゴンがポツリと声を漏らす。

「そんだけ…アイツらにとって、竹取の存在はでっかいってことだな…」

「……。」

ゴンの言葉に、イチゴがそっと視線を落とした。

――――“幸せ”だから…では、ないのですか…？――――

家族を、幸せをくれた、その言葉。

「……っ」

由雉が、遠い瞳で、暗くなった空を見上げる。

――――アナタの手で自分を…新しい命へと送り出してほしかったからではないのですか…？――――

心を、誇りを取り戻してくれた、その言葉。

「……っ」

門貴が、細めた瞳で、そっと俯く。

――――私には見えますよ…？アナタの背に、その翼が…――――

未来を、進むべき道を示してくれた、その言葉。

「輝矢…」

今は遠いその名を、小さく呟く桜時。

「……っ」

桜時が、力なく、目を伏せた。

壊れていく。すべてが、音を立てて、壊れていく。

「……。」

三人の言い合いを聞いた輝矢は、そのまま部屋へ入ることなく、屋敷を出た。暗くなり始めた空を見上げ、悲しげに目を細める。

「ね…？」
「……っ」

聞こえてくる声に、ゆっくりと顔を下げる輝矢。

「全部、壊れちゃったでしょ…？」

輝矢が正面を向くと、どこから現れたのか、そこには内兎が立っていた。

「……。」

輝矢は今度は月器を構えようとはせずに、ただまっすぐに内兎を見つめる。

「君のせいだよ…？鬼である君のせい…」
「……っ」
その言葉に、輝矢がそっと顔をしかめる。
「君は…ここにいるべきじゃないんだよ…」
内兎が、ゆっくりと輝矢に歩み寄っていく。
「君のためにも…みんなのためにも…」
輝矢のすぐ前へと立ち、足を止める内兎。
「僕といれば…君はきっと幸せになれるよ…」
内兎が、そっと微笑む。
「だから…」
内兎が、輝矢へ向けて、ゆっくりと手を伸ばす。
「だから…ねぇっ、輝矢…」
その手が、輝矢の頬へと触れた。
「僕と一緒に…月へ帰ろう…？」
「……。」

触れるその手に、輝矢はそっと、目を閉じた。

その日・夜更け。玄上第六邸・アリスの部屋。

「……。」

大きな寝台に横たわり、眠ったままのアリスを、そのすぐ横に立ち、まっすぐに見つめる輝矢。武史が眠らせたアリスは、丸1日経った今も、目を覚まさずにいた。

「……っ」

その両頬に、痛々しくついた涙の跡に、輝矢がそっと指を触れる。

「アリス…」

そっとアリスの名を呟く輝矢。

「アリス…すみませんでした…」

輝矢が申し訳なさそうな表情を見せ、謝る。

「たくさん傷つけて…苦しめて…すみませんでした…」

謝罪の言葉を、繰り返す輝矢。

「……っ？」

輝矢が視線をふと横へ移すと、すぐ横のテーブルの上には、輝矢が折り、二つに分かれた針器が、大事そうに置かれていた。従者が置いたのだろう。

「……。」

少し目を細めた輝矢が、そっと針器へと手を伸ばす。

――――パァァァーっ！――――

輝矢の手が針器に触れると、輝矢の手から放たれた金色の光が、折れた針器を包み込んだ。

「……っ」

光が止み、輝矢が手を離すと、そこには元の通り、一本に繋がった六刻があった。

「これからも…アリスを守ってあげて下さいね…」

六刻に触れ、輝矢がそっと笑みを浮かべる。

「……っ」

もう一度アリスの方を見ると、輝矢はゆっくりと、アリスの部屋を後にした。

「……。」

アリスの部屋を出た輝矢が、中庭を抜け、玄上の門の前へと立つ。門前の地面には、復旧活動に疲れたのか、深く眠った門番が寝転がっていた。

「……っ」

ゆっくりと、玄上の屋敷を見渡す輝矢。

――――ぎゃあああああっ！！離れろぉぉ～っ！！一メートルぅう～っ！！――――

――――輝矢ぁぁぁ～んっ！俺の愛を受け取ってぇぇ～っ！！――――

――――可愛いボクに、何言ってんのさぁ～っ――――

思い出される、楽しかった日々。

「……っ」

輝矢がゆっくりと、悲しい笑顔を浮かべる。

「さようなら…」

翌朝。玄上家・客室（桜時たちの部屋）。

「……。」

結局この一晩、門貴と由雉は、自分たちの部屋に戻って来ること

はなかった。一人きりの部屋で、桜時も一睡もすることは出来ず、いつの間にか外は日が昇っていた。

――――鬼のくせにぃぃっ！！――――

――――私は…“鬼”、“鬼人”です…――――

一晩考えても、何も解決することはなく、混乱した頭は、さらに混乱するだけであった。

「はぁっ…」

桜時が深々と、溜息を漏らす。

――――ハチっ！――――

今は、幻とさえ思える、あの笑顔。

――――アナタのすべてがっ…私の活力ですからっ…――――

桜時の、すべてとなった笑顔。

「……っ」

桜時が意を決した表情となって立ち上がり、足早に部屋を出る。廊下へ出て、桜時たちの部屋のすぐ横の部屋への前へと立つ。そこは、輝矢の部屋であった。

「……。」

少し躊躇いながら、ゆっくりと扉に手を伸ばす桜時。

――――コン、コンっ――――

緊張した面持ちで、桜時が扉を二度叩く。

「……っ？」

だが、扉の向こうから、人が出てくる気配はなかった。

「輝矢…？」

桜時が扉に顔を近づけ、そっと輝矢の名を呼ぶ。だが、それでも返答はない。

「輝矢っ？」

――――ガチャっ――――――

「うおっ！」

さらに扉に近づくと、体の重みに扉が勝手に開き、体重を預けていた桜時は、そのまま勢いよく部屋の中へと入ってしまった。

「あっちゃっ！って、あれっ…？」

少し焦ったように顔を上げた桜時が、ゆっくりと首を傾げる。静まり返ったその部屋の中に、輝矢の姿はなかった。

「輝矢…？」

桜時が首を傾げながら、部屋の奥へと進んでいく。

「もう…朝飯に行っちまったのか…？」

部屋を見回し、考え込むように呟く桜時。

「これはっ…」

「んっ…？」

あれこれと移していた視線が、あるところで止まる。

寝台の横のテーブルへと置かれた、小さな金色のピアス。

「“月器”…？」

桜時が、置かれたピアスを手に取る。

「あいつ…月器忘れ…あっ…」

月器のすぐ横へと置かれた、一枚の白い紙。

「……っ」

そこに書かれた短い文字に、桜時が目を移す。

――――“ありがとう”

「……っ！！」

その文字を見て、大きく目を見開く桜時。

「輝矢っ…？輝矢っ…！！」

桜時は月器とその紙を握り締め、すぐさま部屋を飛び出した。

「輝矢っ！！輝矢っ…！！」

静まり返った朝の玄上邸を、大声で輝矢を呼びながら、桜時が必死に駆け回る。

『んっ…』

「輝矢っ…！！」

外で寝転がって眠っていた従者が、その声に目を覚ましていく中、必死に輝矢の名を呼び、その姿を探し続ける桜時。

「あっ…！」

中庭の噴水へと駆け抜け、桜時が大きく目を見開く。

――――ハチっ…――――

「輝っ…！あっ…」

噴水の前に見えた、輝矢の笑顔の幻が、ゆっくりと朝霞の中へと消えていく。

「輝矢っ…？」

茫然と、輝矢の名を呼ぶ桜時。

「輝矢っ…！！！」

桜時の声が、辺りに虚しく響き渡った。

玄上家・ダイニング。

「ふわぁ～あっ」

「あっ！おはよっスっ！ゴンさんっ！」

大きく欠伸をしたゴンがダイニングへと足を踏み入れると、羊スケが笑顔で出迎えた。

「眠そうっスねぇ～どうかしたんスかっ？」

「ちょっと…色々考え事があってよっ…」

「へっ？“自分はこんな目つきなのに、どうして料理が好きなのか”について、考えてたんスかぁ？」

「違げぇーよっ！！」

羊スケの問いかけを、ゴンが勢いよく否定する。

「ったく、フザけたことばっか言ってんじゃねぇっ！」

「だって、ちょっとはフザけないと、やってらんない感じなんスもお～んっ」

ゴンの怒鳴りに、羊スケが口を尖らせ、訴える。

「この空気っ」

『……。』

ダイニングテーブルにすでに着席している門貴と由雉は、明らか

に眠っていない腫れ上がった瞳と青白い表情で、ただ黙ったまま、どこともわからない場所へ視線を注いでいた。

「ああっ…」

その気まず過ぎる空気を察知し、ゴンが少し納得するように頷く。

「やっぱ何かあったんスかぁ～？あんな暗い門貴さんと由雉くん、初めて見たっスよぉ？」

「落ち着いたら話すっつっただろ？」

怪訝そうに問いかけてくる羊スケに、ゴンが肩を落としながら答える。

「今日、応援が来るはずだ。そん時にちゃんとっ…」

「おはようございます」

「あっ、おうっ」

そこへ、イチゴが入って来た。

「あれっ？桜時さんは、まだですか？」

ダイニングを見回し、イチゴが問いかける。

「そうみてぇーだなっ」

「あっ、ハチくんっ」

「……っ？」

答えていたゴンが、振り向く羊スケにつられるように、ダイニングの入口を見る。

「……。」

そこには門貴や由雉と同じく、瞳を腫れあがらせた桜時が、深く俯いたまま、立ち尽くしていた。

「ハチ公…？」
「桜時さん…？」

入口に立ったまま、動こうとしない桜時に、ゴンとイチゴが少し首を傾げる。

「輝矢が…」
「えっ…？」

桜時が、ゆっくりと顔を上げる。

「輝矢が…いない…」

『……っ』

桜時のその言葉に、ゴンや門貴たちが皆、一気に険しい表情となった。

第７０章　ほどける絆　★３（後書き）

第６部終わりになります。
どうもありがとうございました。
第７部もよろしくお願いします。

第７１章　忘れえぬ想い　☆１

玄上家第六邸。玄上アリスの部屋。

「んっ…」

寝台の上で深い眠りについていたアリスが、その青色の瞳をゆっくりと開く。

「私…」

眠りすぎたのか、頭があまり回らなかった。まだ夢の中にいるような、そんな曖昧な意識の中で、アリスがふと顔を横へ向ける。

「……っ？」

アリスが横を向くと、寝台のすぐ横のテーブルの上に、美しい銀色の刀が置かれていた。

「針器…？」

それは、アリスだけの刀。テーブルの上に置かれた六刻に、アリスがそっと手を伸ばす。短針と長針がまっすぐに繋がった、長い一本の刀。

――――輝矢ぁぁぁぁっ！！――――

あの時、確かに折れてしまったはずだというのに。

「なんで…」

六刻に手を触れながら、アリスは少し戸惑うような表情を見せた。

玄上家第一邸。国主の間。
「やはり屋敷のどこにも、輝矢の姿は見当たらないそうだよ…」
「そうですか…」
武史の言葉に、ゴンが厳しい表情を見せる。
「今、警備隊に町の方の捜索もさせているが…」
そう呟きながら、武史が自分の右手に視線を落とす。
「この分ではねぇ」
武史の右手には、一枚の白い紙が握られていた。
「“ありがとう”、かっ…」
その紙に書かれた文字を読み上げ、武史がそっと眉をひそめる。
輝矢の字で書かれた、輝矢の部屋に残されていた紙。
「……。」
桜時がふと、自分の手の中にある金色のピアスに目を落とす。武史の持つ紙とともに、輝矢の部屋に残されていた、輝矢の月器。
――――輝矢っ…？――――
月器と“ありがとう”という言葉を残し、桜時たちの前から姿を消した輝矢。

「……っ」
桜時が眉間に皺を寄せ、そっと目を伏せる。

「だから見ていてあげてほしいと言ったのに…」
「うっ…！」
武史に責めるような視線で見られ、ゴンが思わず顔をしかめる。

「とっとにかく探しに行きますっ！おいっ！お前らっ！」
焦ったように声をあげ、ゴンが勢いよく振り向く。
「せっせやなっ！イヌコロっ！ユッキーっ！」
『……。』
ゴンが振り向くと、門貴が大きく頷きながら横を見る。だが、横に立つ桜時と由雉は、それぞれに深く俯き、気難しげな表情を浮かべたままで、その言葉に頷こうとはしかなった。
「おいっ！」
「あっああ、そうだね。行こうか」
もう一度声を荒げた門貴に、由雉が考え込んでいた表情をハッとさせ、遅れるようにして頷く。

「桜時もっ…！」
「……。」
「……っ」
門貴が強く名を呼ぶが、それでも俯いたまま動こうとしない桜時を見て、顔をしかめる。

「おいっ！桜っ…！」
「もういいよ、門貴っ」
「へっ？」
さらに呼びかけようとした門貴を、由雉が冷静に止める。

「ボクらだけで行こう」
「けっけどっ…！」
「行きたくない人、待ってたって仕方ないって」
「……っ」
桜時に冷たい視線を送りながら言い放つ由雉に、桜時がそっと眉をひそめる。

「はぁっ…」
その三人の様子に、ゴンが深々と溜息をつく。

「お前らなぁっ…」
「確かに、闇雲に探しに出たりしない方が、懸命かもねぇ」
「へっ？」
三人を宥めようとしたゴンが、横から口を挟む武史の言葉に、目を丸くする。

「罠かも知れないし」
「えっ…？」
『……っ』
鋭い瞳を見せ、意味深なことを言う武史に、ゴンと三人が、顔色を変える。

「彼女は鬼だ。鬼たちの側に付いて、君たちをおびき寄せようとしているのかも知れない」
顔色を変えた三人に、武史が言葉を続ける。
「今までのこともすべて、君たちを騙すための演技だったのかも知れない」
武史が、突き刺すように、三人を見つめる。

「そう、思わないかい…？」
「そっそんなことっ…！」
武史の言い方に顔をしかめた門貴が、思わず声を張り上げる。
「そんなっ…ことっ…」
しかしその声はすぐに弱くなり、門貴は力なく俯いた。
「思わないなんてっ…そんなハッキリとは、言えないよっ…」
『……っ』
代表して言う由雉に、桜時と門貴はどこか悔しそうに拳を握り締める。
「何もあんな試すような言い方っ…」
「んん～っ…」
顔をしかめるイチゴの横で、ゴンが考え込むような唸り声をあげる。
「あの意地の悪い、人をおちょくるような言い回しっ…やっぱりどっかの誰かに似てるようなっ…」
「ちょちょちょっ…！お待ち下さいっ！」
「ここから先へ入るには許可がっ…！」
「うっさいわねっ！！私がいいって言ったら、いいのよっ！！」
「あっ？」
首を捻っていたゴンが、後方の国主の間の扉の方から聞こえてくる派手な声に、戸惑うように振り向く。
『うわあああああっ！！』

「ったくっ！」
『あっ』

武国の門を守っていたはずの左助と右助を吹き飛ばし、勢いよく国主の間へと入ってくるとある人物。その人物を見たゴンとイチゴが、同時に声を発する。

「リンゴっ」
「お姉ちゃんっ！」
「……っ？」

ゴンとイチゴの声に、その人物がゆっくりと顔を上げる。

「ああぁっ！いたいたっ！」

しかめた表情を見せていたリンゴが、ゴンとイチゴの姿を見つけ、少しその表情を崩しながら、二人のもとへと歩み寄ってきた。

「ったくっ！私が来るっつってんだからっ、門番くらいどかしときなさいよねぇっ！？」
「あっ、忘れてた…」
「まぁそのしかめっ面で来たら、どう見ても侵入者だよな」
「アンタにだけは言われたくないわよっ！！」

強く腕組みをしたリンゴが、勢いよくゴンに怒鳴り返す。

「人が急いで来てあげたってのにっ！」
「あっ？なんでそんなに急いで来たんだよ？」
「アンタがマッハで来いっつったんでしょうがっ！！」
「はぁっ…」

この状況でも、いつもと変わらないやり取りを始めるゴンとリンゴに、イチゴが少し呆れるように頭を抱えた。

「でぇ？あの人は？」
「ああ、ちゃんと連れてきたわよっ？ほらっ」
「やっほっほぉ～っ！」

リンゴに招かれるようにして、国主の間へと入って来たのは、こちらの力まで抜けそうなほどに暢気な笑みを浮かべた、太狼であった。太狼がゴンたちへ軽く手を振りながら、国主の間の中へと進んでくる。

「でぇ～？御伽界一甘い“幻の金平糖”はどこぉ～っ？」
「……。」
笑顔のままで、周囲をキョロキョロと見回す太狼に、ゴンが思いきり固まる。

「とりあえず言えることは、ここに、んなもんはありませんっ」
「えええぇっ！？」
突き放すように答えるゴンに、大きく驚く太狼。
「そんなぁ～っ！騙したのぉっ！？リンゴちゃ～んっ！」
「そうでも言わなきゃ、アンタ、来ないでしょーがっ」
泣きそうな表情で訴える太狼に、リンゴがこの上なく冷たい表情を向ける。
「ヒドいぃっ！弄んだのねぇ～っ！」
「変な言い方、しないで下さいっ！！」
「はぁっ…」
太狼とリンゴのやり取りを聞きながら、ゴンが少し疲れたように肩を落とす。

――――そう、思わないかい…？――――

誰かに似ていると感じた、武史のあの空気。

「あっ、そういやっ…」
「久し振りだね…」
『……っ』

ゴンが何かに気づいたような、そんな表情を見せたその時、入ってきたその声に、ゴンと、何やかんやと言い合いをしていた太狼、リンゴが、同時に振り向く。

「太狼…」
『えっ…？』

皆が振り向くと、穏やかな笑みを浮かべた武史が、そっと太狼の名を呼んだ。親しげに太狼の名を呼ぶ武史に、ゴンたちが戸惑うような声を出す。

「ホント、お久し振りですねぇ」
武史の方を向き、武史と同じように、穏やかに微笑む太狼。

「叔父上っ」
『ええっ！！？』

太狼が武史のことを“叔父”と呼ぶと、ゴンとリンゴが大きく驚いて、勢いよく太狼の方を振り向いた。

「おっ…叔父ぃぃっ！？」
「うん～っそうだよぉっ」
聞き返したゴンに、太狼は満面の笑みで頷く。

「彼は、私の姉・玄上　唖矢（あや）の息子なんだ。つまり私の甥」
驚く皆に、武史が笑顔で説明を入れる。
「あっ…」
太狼と武史の会話を聞き、桜時が少しハッとした表情を見せる。
――――あっ…――――
誰かと重なった、穏やかで鋭い、緑色の瞳。
――――何となく桃タローを思い出すっつーかっ…――――
似ていると思った、その独特の雰囲気。
「それでっ…」
桜時がどこか納得したように、言葉を漏らす。
「じゃあ、太狼さんも玄上の…？」
「一応そういうことになるねぇ～まぁ“神器”は使えないけどぉ」
「知らなかった…」
「私も…」
唖然とした表情で呟くゴンとリンゴ。太狼が玄上の人間であるということは、つまり、次狼も玄上の人間ということになる。二人は次狼とは長い時間を過ごしたが、そういった話は一度も聞いたことがなかった。

「しっかしどうりでっ、似た空気を感じたはずだっ…」
まだ驚きを消し切れていない表情で、ゴンが太狼と武史を見比べる。
「では太狼さんとアリスさんはっ…」
「うんっ、いとこんにゃくだよぉ～っ」
「イトコなんですね…」
太狼の冗談を完全に無視し、素早く言い直すイチゴ。
「そういえばっ…」
――――アリスちゃんっ――――――
――――桃原太狼っ…――――――
「知り合いっぽい空気出してましたね…」
オトポリ長官室での太狼とアリスの様子を思い出し、イチゴが納得したように頷く。
「じゃあなんでタロー、龍国に住んどんやぁ？」
「そうだよぉ～玄上の人間なら、武国に住んでればいいじゃなぁ～いっ」
「え～っ？」
口々に疑問を投げかける門貴と由雉の方を、太狼がゆっくりと振り向く。
「それはぁ～色々と大人の事情ってものがあるんだよぉ～」
太狼が、どこか誤魔化すように答える。
「国中の砂糖、食い尽くしたとかぁ～っ？」
「国民に毎日、ジャンボパフェ食うように強制したとかっ？」

「そりゃ追い出されるわぁ～っ！」
「君らっ…後で覚えときなよっ…？」
どこか楽しそうに、何故、太狼が武国を出て行ったかについてを議論する門貴、由雉、ゴンの三人に、太狼が冷たい視線を送る。

「それよりぃ～っ」
太狼が笑みを止め、国主の間を見回す。

「ウチの輝矢ちゃんの姿が見えないけどぉ～？」
「そういえばそうねぇ～どっか行ってんのっ？」
『……っ』

太狼とリンゴの問いかけに、その場にいる誰もが、険しい表情を見せた。

第71章　忘れえぬ想い　☆2

数分後。玄上家・客間。
「成程ね…」
ソファーの真ん中にどっかりと座ったリンゴが、低い声で頷く。

「今までの流れはよぉ～く、わかったわっ…」
その低い声を続けながら、リンゴが下を向いたまま、ソファーからゆっくりと立ち上がる。

「リンゴっ？」
立ち上がったリンゴを、向かいのソファーに座りながら、不思議そうに見上げるゴン。

「何やっとんじゃっ！クソボケぇぇっ！！」
「だぎゃあああああっ！！」
『いいっ…！？』

見上げたゴンの顔面へと、勢いよく炸裂するリンゴの蹴り。ソファーの上から吹き飛び、壁へと激突するゴンの姿に、傍から見ていた門貴たちやイチゴが、驚きの表情を見せる。

「おっお姉ちゃんっ…！」
「あんたもっ！」
「うげぇっ！？」
イチゴが止めるのも聞かず、リンゴが並んで立っている門貴たちの方へと歩み寄っていく。
「のぎゃあああああっ！！」
「あんたもっ！」

「えっ！？ちょっ…！ボクのカワイイ顔っ…！うわああっ！！」
門貴の腹に思い切り蹴りを入れ、その横に立ち、焦るように声を発していた由雉にも、門貴よりは緩くであるが、蹴りを喰らわせるリンゴ。

「カワイイボクになんてことをっ…」
「こっこれがっ…愛の試練っ…」
床に倒れ込んだ二人が、苦しそうな声を漏らす

「おいっ！クソリンゴっ！何っ、暴れてっ…！！」
「……っ」
「うっ…！」

腫れた顔面を押さえながら、やっとのことで起き上がったゴンの声を無視し、リンゴが今度は桜時の方を振り向く。リンゴに鋭く睨まれ、かなり怯えた表情を見せる桜時。

「お姉ちゃんっ！！」
桜時に狙いを定めたリンゴに、イチゴが思わず声を荒げる。

「他の人たちは、いくら蹴っても別にいいけどっ…！桜時さんを蹴るのはダメよっ！！」
『おいっ…』
ある意味、蹴るよりも酷いイチゴの言葉に、ゴン、門貴、由雉が同時に突っ込みを入れる。

「わかったわよっ」
「へっ？」
イチゴの言葉に従うように、リンゴが振り上げていた足を下ろす。

「じゃあ殴らせてもらうわっ！」
『へっ…？』
「……っ」

――――バァァァァンっ！！――――

「うあぁぁぁっ！！」
「桜時さんっ…！！」

リンゴが強く拳を握り締め、桜時の左頬を思い切り殴った。その場に倒れ込んだ桜時に、イチゴが焦ったように駆け寄る。

「痛ってっ…」
「桜時さんっ…」
体を起き上がらせながら、頬を押さえる桜時を見て、目を細めるイチゴ。

「お姉ちゃんっ…！！」
イチゴが責めるように、リンゴを見上げる。

「どいつもこいつもバカだけどっ…」
拳を下ろしたリンゴが、静かに言葉を発する。

「あんたが一番、悪いっっ！！！」
「……っ！」

強く言い放つリンゴに、桜時が大きく目を見開く。

「何なのよっ、それはっ…何なのよっ！？それはっ！！」

責めるように大声で問いかけるリンゴ。だがその表情は、責めているわりにはどこか悲しげで、辛そうにも見えた。

「……っ」

そんなリンゴに、桜時はそっと目を細める。

「輝矢が鬼だったからってっ…それが何っ！？」

リンゴが強い瞳で、桜時を見つめる。

「それだけで拒絶するのっ！？輝矢が鬼だってだけで、あんたは輝矢の見方を変えるわけっ！！？」

「だけって…」

「輝矢は輝矢でしょうがっ！！」

少し眉間に皺を寄せ、呟く桜時に、リンゴが強く叫ぶ。

『……。』

そのリンゴの言葉に、蹴りにやられて倒れ込んでいる門貴と由雉も、少し考え込むような表情を見せる。

「最っっ低の男ねぇっ！！ここまで最低だとは、思ってなかったわっ！！」

「……っ」

さらに言葉を続けるリンゴに、桜時がさすがに顔をしかめる。

「んだよっ！拒絶したのも、見方変えたのも、別に俺だけじゃっ…

！」

「輝矢にとって、あんたは特別でしょうがっ！！」

「……っ！」

思わず叫んだ桜時の声を、リンゴが強く遮る。

「あんたにとってもっ…輝矢は特別じゃないのっ…？」

「……っ」

怒鳴り声を落ち着かせ、静かに問いかけるリンゴに、桜時は逃げるように目を逸らし、そっと俯く。

――――ハチっ――――

特別だった。その笑顔が。

――――鬼のくせにぃぃぃぃっっ！！！――――

特別、だったのに。

「あんたに拒絶されることがっ…輝矢にとって、どんなに辛いことかっ、あんた、それわかってんのっ！！？」

リンゴがまた声を張り上げ、強く桜時を責め立てる。

――――うっ…！――――

――――……っ――――

怯えるように体を離した桜時に、輝矢が見せた悲しみの表情。

「……っ」

桜時が苦しそうに、強く唇を噛み締める。

「あんたのやったことはねぇっ…！」

「うっせぇっっ！！」

「……っ」

さらに言葉を続けようとしたリンゴに、桜時が大きく怒鳴り返す。

「うっせぇなっ…もうっ…」

「桜時さんっ…」

何とも辛そうに、頭を抱える桜時を、イチゴが不安げに見つめる。

「俺だってっ…どうしていいのか、わかんねぇーんだよっ！！」

「あっ…！」

桜時がイチゴの手を振りきり、立ち上がって、そのまま勢いよく部屋を飛び出していく。

「桜時さんっ…」

桜時が出て行き、閉まる扉に、不安げな表情を見せるイチゴ。

「どうしていいかわかんないですってぇっ…！？」
リンゴが、桜時の放った言葉を繰り返しながら、見ていられないほどに顔を歪める。
「フザけた口ばっかきいてんじゃないわよぉっ！！あのクソ犬がぁっ！」
――――バギコォォォーンっ！！――――
桜時へと怒りが収まりきらないのか、リンゴが勢いよく足を振り下ろし、目の前に置かれていた客間のテーブルを砕き割る。
「人ん家で暴れんの、やめろよ…とりあえず…」
「もぉっ！こうなったら、私たちだけで輝矢探しに行くわよっ！ゴンっ！」
呆れた表情を見せる、まだ顔を腫らせたゴンに、リンゴが思いきりよく言い放つ。
「ウジウジした奴らなんてっ、待ってる暇ないわっ！本部に行って、もっと応援をっ…！」
「ちょい待ちぃ～っ」
「うがっ！」
急いで部屋を出て行こうとしたリンゴの額に、勢いのいいデコピンが炸裂する。
「なっ何するんですかっ！？太狼さんっ！！」
リンゴにデコピンをしたのは、扉のすぐ横に立つ太狼であった。

「武国の復旧作業が先でしょ～？まだ怪我人の手当てだって、終わってないんだからぁ～っ」
「そっそれはっ…」
太狼の最もな言葉に、リンゴが思わず口ごもる。
「けっけどっ、輝矢がっ…！」
「いいから復旧作業っ」
「……はいっ」
有無を言わさぬその太狼の笑みに、リンゴは大人しく頷き、部屋の扉を開ける。

「全班っ！指示を出すから、玄上家門前に集合してっ！」
無線で隊員たちと連絡を取りながら、リンゴは客間を後にした。

「ふぅ～っ」
開いたままの扉から、去っていくリンゴを覗きながら、太狼が少し疲れたように肩を落とす。

「あのっ、太狼さんっ…」
「んん～っ？」
ゴンに名を呼ばれ、太狼が軽い声を発しながら振り向く。

「何ぃ～っ？」
「そのっ…すみませんでしたっ…」
少し躊躇いながら、ゴンが申し訳なさそうに、太狼に頭を下げる。

「俺が付いていながらっ…そのっ、竹取をっ…」

目を離すべきではなかった。真実を知られ、仲間との間に亀裂が生まれてしまい、精神的に不安定になっていた輝矢を、一人にすべ

きではなかったのだ。

「本当に…すみませんでしたっ…」
「いいよぉ～そんなのぉ～っ」
「えっ…？」
聞こえてくる明るい声に、ゴンが戸惑うように顔を上げる。

「本当に、全っ然、まぁ～ったく、すこっしも、気にしてないからぁ～っ」
「気にしてますね…絶対…」

満面の笑顔の中に、凍りつきそうな冷たさを感じさせる、そんな太狼に、ゴンが少しげっそりした表情で呟く。

「いいのかい…？」
「……っ？」
横から聞こえてくる声に太狼が振り向くと、開いた扉の向こう、部屋のすぐ前の廊下に武史が立っていた。
「武国の復旧作業なら、警備隊もいるし、そこまで優先させなくても…」
「貴方がそうでも、仕官のおじいちゃんたちが黙っちゃいないでしょ～？」
武史の言葉を遮り、太狼が言い放つ。
「後で散々っぱら文句言われても、嫌ですからねぇ」
「それは言えてるかな…」
太狼の最もな言葉に、武史は少し疲れたように肩を落とす。

「だいたい、誰かさんが余計なことして、輝矢ちゃんを武国へなんか呼び寄せるからぁ～」

嫌味のような言い回しで、太狼が武史に冷たい視線を送る。

「アリスのやったことだよ、私は無実だ」

「子供のせいにするなんて、最低ですねぇ～」

すぱっと答える武史に、太狼はさらに冷たい視線を送る。

「だいたいあのウサギ君の正体っ？だって気づいてたんなら、もっと防ぎようがあったでしょ～っ」

太狼が少し、顔をしかめる。

「串刺しにするとか、打ち首にするとか、拷問にするとかぁ～」

「どんだけ物騒なんですかっ！あんたっ！」

あまりに容赦ない太狼の言葉に、ゴンが思わず突っ込みを入れる。

「輝矢ちゃんに危害を加える奴なんて、みんな、そんな感じでいいんだよぉ～」

「そうだねぇ…アリスをあんな目に遭わせるなんて、ホントとっとと惨殺しとけば良かったよっ…」

太狼の言葉に、しみじみと頷く武史。

「似た者叔父甥やな…」

「血の繋がりって、恐ろしいね…」

そんな太狼と武史の様子に、門貴と由雉が引きつった表情で呟き合う。

「だいたい、君もどうして、輝矢を一人で武国へ来させたりしたんだい…？」

「……っ」

武史の問いかけに、太狼が少し眉をひそめる。

「十年前のあの日、“もうこの国には来ない”と言って、輝矢を連れて出て行ったのは、君だろう…？」
『えっ…？』
武史の言葉に、ゴンや門貴が、驚いたような表情を見せる。
「太狼さんが…」
「輝矢んを連れて…」
「武国を…？」
三人がそれぞれ戸惑いながら、太狼を見つめる。
「……。」
武史の問いかけに答えることなく、ただゆっくりと肩を落とす太狼。
「あの子が行くと言ったんですよ…」
太狼が、少し低い声で呟く。
「あの子にとって、武国へ行くということは、ひどく覚悟のいることだったと思います…」
どこか辛そうに、目を細める太狼。
「それでも、彼とともに武国へ行くことを選んだ…」
――――俺は、お前がいなくても大丈夫だからっ！――――
――――お願いっ……――――

「それはもう、ホントに、必死の想いで…」
『……っ』

太狼の言葉に、門貴と由雉が、険しい表情を見せる。

「でもぉっ…だからっ…本当にちょっと、困りましたっ」
「えっ…？」

珍しくその表情を曇らせ、弱音を吐くように言う太狼に、武史が首を傾げる。

――――俺だってっ…どうしていいか、わかんねぇーんだよっ！！
――――

「……っ」
思い出される先程の桜時の様子に、太狼がそっと目を細める。

「受け止めてもらうのはっ…やっぱり無理だったのかなぁ…」
「太狼…」

太狼の言葉に、険しい表情を見せる武史。

「……っ」
『……。』

そっと俯く、ゴン、そして、門貴と由雉。

「……っ」

イチゴも皆と同じように厳しい表情を見せながら、ゆっくりと窓の外に広がる景色を見つめる。

「桜時さん…」

小さく桜時の名を呟くイチゴ。

――――私はあなたを…信じてもいいのですか…？――――――ええっ…――――――

イチゴの問いかけに、まっすぐな瞳で頷いた輝矢が、思い出される。

「……っ」

どこか意を決するかのように、イチゴはゆっくりと顔を上げた。

第71章　忘れえぬ想い　☆3

――――アハハハハハっ…！！――――
――――水力が暴走してるのかっ…？――――

ずっと、胸に抱いていた疑問。

――――私はまだ…アナタに、すべてを話す勇気が持てない……――

そう言われたその時、話してくれる日を待つことを決めた。

――――俺…お前のことが…好きだ…――――

でも、気付いた想いは、焦りばかりを生んで。

――――その力っ…やはり獣人かっ…――――
――――私たち“武人”は、獣人ではないわぁっ――――

焦りは大きな疑念となって、知りたいという気持ちばかりを大きくした。

――――大丈夫…ですからっ…――――

知れば、もっと守ることが出来ると思った。いつでも“大丈夫”と言って、笑う輝矢を。

――――鬼のくせにぃぃっ！！――――

でも、やっと手にした真実は、予想していたよりも遥かに残酷で。

――――輝矢がっ…鬼っ…？――――

知りたいと思っていたのに、すべてを受け止める覚悟もなくて。

――――ハチっ…――――

いつもと違って、不安げに伸ばされたその手を。

――――うっ…！――――

俺は、強く拒絶した。

「……。」

武国の入口前へと立ち、山の下に遥かに広がる御伽界を見つめながら、険しい表情で立ち尽くす桜時。桜時が見つめる自らの右手には、輝矢の残していった金色のピアス、月器が握られている。

――――あんたに拒絶されることがっ…輝矢にとって、どんなに辛いことかっ、あんた、それわかってんのっ！！？――――

――――最っっ低の男ねぇっ！！――――

「……っ」

思い出されるリンゴの言葉に、そっと俯く桜時。

「ホント最低だっ…俺っ…」

弱々しく呟き、桜時が月器を力一杯、握り締める。

「桜時さん…」

「……っ？」

呼ばれる名に、桜時がゆっくりと顔を上げる。

「イチゴっ…」

桜時が顔を上げると、そこには優しい笑みを浮かべたイチゴが立っていた。目の前に立ったイチゴを、桜時が力なく呼ぶ。

「悪りぃ、イチゴっ…俺、今ちょっと一人で居っ…」

「桜時さんっ」

「……っ？」

一人で居ることを望もうとした桜時の言葉を勢いよく遮り、イチゴが再び桜時の名を呼んで微笑みかける。いつもは誰かの言葉を遮るなどということはしない、控え目なイチゴだけに、桜時は少し不思議そうに眉をひそめた。

「桜時さん」

「なっ何っ…」
「もう、忘れましょっ？輝矢さんのことなんてっ」
「えっ…？」

明るく微笑んで言い放つイチゴに、桜時が戸惑うような表情を見せる。

「覚えてたって、辛いだけじゃないですかっ」
「いっイチゴっ…？」

桜時が困惑するように、まだ言葉を続けるイチゴの名を呼びかける。

「何言ってっ…」
「だって、そうでしょうっ？」
「……っ」

イチゴが改めて問いかけると、桜時が思わず口ごもる。

――――鬼のくせにぃぃっ！！――――

いっそ忘れてしまいたい。心を締め付ける言葉のすべてを。

「輝矢さんは皆さんを騙して、利用していただけ…」
「そんなっ…ことっ…」
「“ない”なんて、今は誰にも言えないっ…」
「……。」

はっきりと言い放つイチゴに、桜時が力なく俯く。

「桜時さんは何も悪くない…悪いのは全部、輝矢さんですよっ」
「……っ」
言葉を続けるイチゴに、桜時が唇を噛む。
「だから別に、忘れたって、誰も桜時さんを責めたりしないです」
イチゴが再び、笑みを浮かべる。
「輝矢さんと出会ったこともっ、輝矢さんと旅してきたこともっ、全部忘れてしまえばいいんですよっ」
「えっ…？」
イチゴの言葉に、戸惑いの声を漏らす桜時。
「全部…忘れる…？」
「ええ」
聞き返した桜時に、素早く頷くイチゴ。
――――私は輝矢っ、竹取輝矢といいます――――
――――私には見えますよ？アナタの背に、その翼がっ…――――
先へと進む道を切り拓いてくれた、たった一つの出会い。
――――アナタのすべてが…私の活力ですから…――――
――――強くなりましたね、ハチ…――――
いつだって明るく照らしてくれた、眩しい程の笑顔。

「忘れるっ…？」
「ええ…」

もう一度問いかけた桜時に答えながら、イチゴがゆっくりと桜時の右手の上に、自分の左手を重ねる。

「大丈夫っ、何にも変わりませんよ…」
イチゴが俯き気味の桜時へ、そっと優しく微笑みかける。

「苦しみから解放されるだけ…」
「……っ」
優しいイチゴの声に、桜時は目を細める。

「だからっ」
「あっ」

桜時の右手に重なったイチゴの左手が、桜時が握り締めていた月器を、素早く奪い取る。

「それはっ…！」
イチゴの手に渡ってしまう月器に、桜時が思わず声を大きくする。

「忘れるためには、これは邪魔ですね…」
左手のひらに月器を乗せて、イチゴがそっと微笑む。

「こんなものっ、消してしまいましょうっ…」

イチゴの手から放たれた青い光が、球体となって月器を包み込んだ。

「……っ！」

青い光に包まれた月器に、大きく目を見開く桜時。

――――“月器・三日月”っ！――――

みんなに、桜時に、力をくれた、その光。

「やっ…」

桜時が思わず、声を漏らす。

「やめろっ…！！」

桜時の手が、青い光の中へと飛び込んでいく。

――――パァァァーンっ！！――――

大きく弾けた、青色の光。

「……。」

イチゴが細めた瞳を、少し落とす。

「はぁっ…！はぁっ…！はぁっ…！」

イチゴのすぐ前でしゃがみ込んだ桜時は、無理に光を破り、傷ついて血の流れるその右手で、しっかりと月器を握り締めていた。

「はぁっ…はぁっ…」

桜時が息を乱しながら、手の中にある月器を、確かめるように見つめる。

「クっ…！」

月器の感触を確かめ、苦しげに唇を噛み締める桜時。

「……っ」

そんな桜時の様子を見つめ、イチゴはゆっくりとその場にしゃがみ込んだ。

「桜時さん…」

しゃがみ込んだイチゴが、そっと桜時の名を呼びかけ、その傷ついた右手に、自分の手を触れる。

「ねっ…？」

「イチゴっ…？」

微笑みかけるイチゴを、桜時が戸惑うように見る。

「答えなんてっ…もうとっくに出ているでしょうっ…？」

「……っ」

イチゴのその言葉に、大きく目を見開く桜時。

――――大丈夫っ、何にも変わりませんよ…――――

大丈夫なはずがない。何も変わらないはずがない。

――――もう、忘れましょっ？輝矢さんのことなんてっ――――

忘れられるはずがない。

――――ハチっ…――――

こんなにも、大切な想いを。

「うぅっ…！」

深く俯いた桜時が、月器を握る手に、さらに力をこめる。

「……っ」

そんな桜時を、イチゴは穏やかな瞳で、まっすぐに見つめる。

「何にも、迷う必要なんてありません…」

触れたその手で、そっと桜時の手を握り締めるイチゴ。

「桜時さんの中にある、その答えの通りに…して下さい…」

「……。」

優しく響くその声に、桜時がそっと目を伏せる。

――――ハチっ…――――

いつだって目を閉じて、浮かんでくるのは、あの笑顔。浮かぶ笑顔が、桜時の心を包み込んでいた靄（もや）のような迷いを振り切り、辺りを晴らしていくようであった。

「……っ」

目を開いた桜時が、ゆっくりと顔を上げる。

「イチゴ…」

「はい…」

呼びかける桜時に、返事をするイチゴ。

「……ありがとうっ…」

「……っ」

顔を上げた桜時は、いつもの桜時と同じ、どこまでも前を見据える、まっすぐで曇りのない瞳を見せていた。迷いの晴れた表情を見

せる桜時を見て、イチゴがそっと微笑む。

「いえっ…」
「俺っ、行くっ…！」
イチゴから手を離し、桜時が素早く立ち上がる。

「……はいっ！」
「……っ」

笑顔で頷くイチゴの姿を確認すると、桜時も少し笑みを零して、その場から勢いよく駆け出して行った。

「……。」

一人、しゃがみ込んだまま残る形となったイチゴが、先程まで桜時に触れていた左手に目を落とし、そっとその瞳を細める。

「結局…」

――――お前も行くんだろっ？――――

七歳で初めて出会った時に、すぐに芽生えた想い。何年経っても変わらずに、会う度に寧ろ大きくなっていった、この胸の憧れ。

「言えなかったなっ…」

そう呟いて、イチゴが悲しげな笑みを浮かべる。

「……。」
「……っ？」
背後に人の気配を感じて、イチゴがゆっくりと振り返った。

「お姉ちゃんっ…」
「……。」

イチゴが振り返ると、そこには穏やかな笑みを浮かべたリンゴが立っていた。

「あのクソ犬がまぁ～だウジウジしてるようなら、もう一発殴ってやろうと思って来たんだけどねぇ」
リンゴがそう言いながら、少し肩を落とす。
「私の出番はなかったみたいねっ！」
「……。」
明るく笑いかけるリンゴに、イチゴがそっと目を落とす。

「お姉ちゃん…」
「んっ？」
「私ね…」
イチゴがゆっくりとした口調で、話を始める。

「私ね、本当は…少し本気だったの…」

柔らかく、口元を緩めるイチゴ。

「桜時さんが…輝矢さんのこと、忘れちゃえばいいって…本気で少

し、思ってた…」
「イチゴっ…」
話を続けるイチゴを、リンゴは目を細め、まっすぐに見つめる。
「でもっ、やっぱりダメだったっ」
イチゴがさらに、大きく笑う。
――――やめろっ…！！――――
月器に、まっすぐに伸ばされた手。傷つくことも恐れずに、月器を握り締めた桜時。
「やっぱり…ダメだったよっ…！お姉ちゃんっ…！」
「……っ」
声を震わせ、俯くイチゴに、リンゴが眉をひそめる。
「イチゴっ…」
しゃがみ込み、そっとイチゴを抱き締めるリンゴ。
「あんたっ…イイ女になったよっ…」
イチゴの頭を撫でながら、リンゴが優しく囁く。
「だから…次は、もっとイイ男、捕まえなっ…」

「うっ…！」

目を伏せたイチゴの瞳から、溢れるように涙が零れる。

「ううぅっ…！」

零れ落ちる涙が、武国に吹き荒れる風の中へと、さらわれていった。

第７１章　忘れえぬ想い　☆４

玄上家・国主の間。

「信じられるのですかっ！？オトポリの連中はっ！」
「今は信じるしかないだろう…警備隊だけでは、復旧作業には限界があるっ…」
「元はといえば、龍国が輝矢を武国へ連れて来たりするからっ…！」
「……。」

繰り広げられる仕官の老人、老女たちの言い争いを、国主の玉座に座り、どこかうんざりとした表情で、黙ったまま聞いている武史。

「はぁっ…」
延々と繰り広げられる口論に、武史は深々と溜息をついた。

「父上っ」
「……っ？」
国主の間へと入ってくるその声に、武史がハッとした表情を見せて、顔を上げる。

「アリスっ」
『アリス様っ…？』

部屋へと入ってきたのは、右手に修復された六刻を持った、アリスであった。やって来たアリスに、仕官たちは言い合いをやめる。

「目が覚めたんだね…気分はどうだい…？」
「別に普通だけどっ…」
周囲を何かを探すように見回しながら、アリスが武史のもとへと歩み寄っていく。

「ねぇっ、父上、輝矢はっ？」
「……っ」
アリスのその問いかけに、武史が眉をひそめる。

「屋敷内、結構探したんだけど見当たらなくてぇっ…」
「……。」
「父上っ…？」

厳しい表情を見せる武史に、アリスはそっと首を傾げた。

戻って、玄上家・客間。

「なぁっ！教えてぇやぁ～っ！」
客間に、門貴の大きな声が響き渡る。

「輝矢んの行きそうな場所っ！あんたやったら、見当ついとんやろ

おっ！？」
「うぅ～んっ…」

勢いよく訴えかける門貴の前で、どっかりとソファーに座り、気難しげに首を捻っているのは、どこからか持ってきた甘い香りの漂うココアを飲んでいる、太狼であった。

「ついてないこともないんだけどねぇ～」
ココアを飲みながら、太狼が曖昧な答えを返す。

「じゃあ教えてぇやぁっ！」
「うぅ～んっ…教えてもいいんだけどぉ、おサル君じゃなぁ～」
「へっ？」
微妙に眉をひそめる太狼に、門貴が目を丸くする。

「何か役不足っ」
「がびぃぃぃーんっ！！」

短い言葉ではあるが、すべてを否定しているその太狼の言葉に、門貴が大きくショックを受ける。

「やっ…役不足て…」
『はぁっ…』
床に両手を付き、思い切り落ち込む門貴を見て、横にいる由雉と、壁際に立つゴンが、深々と溜息をつく。

「あのさぁっ」
非難するような目で、ココアを飲んでいる太狼の方を振り向く由雉。
「そりゃあおサルさんが役不足ってのは、正直認めるけどさぁ～」

「がびぃぃぃーーんっ！！ユッキーっ！そこは認めんといてぇ～っ！！」

由雉の言葉に、落ち込んでいた門貴が素早く突っ込みを入れる。

「でも仕方ないでしょ～っ？」

少ししかめた表情を見せた由雉が、口を尖らせ、太狼の方を見る。

「ボクたちだって…桜時と一緒に探しに行きたいけどっ…でもっ…」

「……っ」

言葉を濁す由雉に、門貴も少し元気なく俯く。

「……。」

そんな二人に、そっと目を細める太狼。

「タローっ！！」

『……っ？』

そこへ勢いよく入ってくる声に、呼ばれた太狼と、門貴、由雉が一斉に振り返る。

「桜時っ？」

「イヌコロっ？」

「はぁっ…！はぁっ…！」

部屋へと駆け込んで来たのは、走ってきたのか、少し息を切らせた桜時であった。入ってきた桜時を、門貴と由雉が少し驚くように見る。

「タローっ！！」

部屋の中へと進み、ソファーに座っている太狼のもとへと、歩み

寄っていく桜時。

「輝矢の行きそうな場所っ！教えてくれっ！！」
「……っ」
『えっ…？』

桜時のその言葉に、太狼や皆が、驚いたように目を見開く。

「なんで…？」
「はっ？」
問いかける太狼に、桜時が首を傾げる。

「なんで、教えてほしいの？」
「探しに行くからに決まってんだろうがっ！」
「……っ」
すぐさま答える桜時に、さらに驚いたような表情を見せる太狼。

――――俺だってっ…どうしていいのか、わかんねぇーんだよっ！！――――

つい先程まで、あんなに戸惑ったような表情を見せていたというのに、今は別人のように、晴れやかな表情とまっすぐな瞳を見せている。一体、この短時間で、何があったというのだろうか。

「さっきまでウジウジ虫してたくせにぃ～」
「ウジウジ虫って…」

「どういう心境の変化っ？」
「……っ」
太狼の問いかけに、桜時が少し険しい表情を見せる。
「色々と考えたけどっ…今回のことは、何をどう取っても、俺がすべて、一切合財悪いっ…」
俯いた桜時が、真剣な表情で言葉を連ねる。
「そうだねぇ、じゃあお詫びに死のうかぁ」
「死ぬかぁっ！！」
死を誘導してくる太狼に、真剣さも吹き飛ぶほどに思い切り、突っ込みを入れる桜時。
「だから輝矢を探してっ、思いっきり謝りに行きたいんだっ！！」
「……。」
まっすぐな瞳で訴える桜時に、太狼がそっと目を細める。
「輝矢ちゃんが…鬼でもっ…？」
「……っ」
太狼のその言葉に、桜時が眉をひそめる。
「確かに…驚いた…」
少し視線を落とした桜時が、ポツリと言葉を漏らす。
――――鬼のくせにぃぃぃっ！！――――
時を止めた、衝撃の言葉。

「頭、めちゃくちゃ混乱してっ…受け止めきれなくて、拒絶もしたっ…」

――――うっ…！――――

怯えるように、離した体。

「今、会ったって…すべてを受け止めきれる自信なんてないしっ…また、傷つけるかも知れないっ…」

静かな口調で、桜時が言葉を続ける。

「けどっ…」

ゆっくりと顔を上げる桜時。

「このままでなんてっ…いられないんだっ…」

その口元が、そっと緩む。

「もう…アイツのいない世界ではっ、生きていけそうもないからっ…」

「……っ」

微笑む桜時の、そのまっすぐな言葉に、太狼が少し驚いたような表情を見せる。

――――受け止めてもらうのはっ…やっぱり無理だったのかなぁ…
――――

無理だと諦めていたが、桜時のそのまっすぐな瞳が、無理ではないと、信じさせてくれるようであった。

「……。」

少し下を向いた太狼が、そっと笑みを浮かべる。

「おうじぃぃ～っ！！」

「ぐわああっ！」

晴れやかな笑顔を見せていた桜時に、落ち込みから復活したのか、門貴が横から勢いよく抱きつく。

「よう言うたぁっ！よう言うたぞぉっ！桜時ぃぃ～っ！！」

「んだよっ！暑苦しいなぁっ！とっとと離れろっ！アホザルっ！」

泣きそうな表情で、感極まったように言う門貴に、桜時がかなり煩わしそうな表情を見せる。

「はぁ～あっ…暑苦しくて、環境破壊ぃ～っ」

「うっせぇっ！！」

嫌そうな顔で桜時と門貴を見る由雉に、桜時が勢いよく怒鳴り上げる。

「あっ」

「……っ？」

由雉と目が合った瞬間に、どこか気まずそうな顔を見せる桜時。

「由雉っ…そのっ…」

桜時がそっと俯き、躊躇うように言葉を繋げる。

「昨日はごめんっ…色々と、勝手なことばっか言って…」
「べっつにぃ～っ」
「へっ？」
謝罪する桜時に、返ってくる適当な返事。
「ボク、カワイイから許してあげるぅ～っ」
「……っ」
そう言って笑う由雉に、桜時も、答えるように笑みを浮かべる。
「許すっちゅーか、ユッキーが一番ひどいこと、言うてたようなぁっ…」
「ええぇ～？何のことぉ～？」
昨日のことを思い返し、こっそりと呟く門貴に、由雉が惚けるように首を傾げる。
「っちゅーかユッキーっ！俺のことっ、いい人振っとうとかひどいこと、言うたやんっ！！」
「ああぁ～そうだったねぇ～前言撤回するよぉ～」
「へっ？」
あっさりと撤回する由雉に、門貴が意外すぎて、目を丸くする。
「門貴は“いい人振ってる”んじゃなくって、ただ“おバカ”なだけだもんねぇ～っ」
「がびぃぃぃーんっ！！」
由雉の容赦ない発言に、大きくショックを受ける門貴。
「ひどいわぁ～っ！ユッキーっ！」
「っつーか、とっとと離れろよっ！サルっ！暑苦しいっ！！」
桜時にしがみついたまま、ショックを受けている門貴に、桜時が強く文句を言う。

「俺も輝矢んなしでは生きてけそうもないから、行くでぇ～っ！！」
「ボクは別にぃっ…」
「まったまたぁ～っ！ユッキーの照れ屋さんっ！」
「誰がっ」
茶化す門貴に、由雉が少し顔をしかめる。

「けどまぁっ」
由雉のその表情が、すぐに柔らかくなる。

「君達だけじゃ何かと不安だからぁ～？一緒に行ってあげてもいいよぉ～？」
「偉っそうにっ」
「ユッキーらしくって、ええやんっ？」
偉そうなその言葉に、顔をしかめる桜時。そんな桜時に、門貴が明るく笑いかける。

「ハハっ…」
昨日の言い合いが嘘のように、すっかりいつもの空気に戻った三人の姿を見て、ゴンが少し力が抜けたような笑みを零す。
「やぁ～っぱ、こうでないとなっ」
何だかんだ言いながら笑い合う三人を見て、安心したように呟くゴン。

「よっしっ！俺も行くぞぉっ！竹取捜索っ！」
『ええぇ～っ？』
「んだよっ！！その顔はっ！！」

気合いを入れるゴンに、一斉に嫌そうな顔を向ける桜時、門貴、由雉。そんな3人に、ゴンが勢いよく顔をしかめて、怒鳴り上げる。

「ったくっ！とにかくとっとと準備するぞっ！」

『へぇ～いっ』

ゴンの言葉に、三人が仕方ないと諦めたように頷く。

「太狼さんっ、竹取の行きそうな場所をっ…！」

「ちょい待ってぇ～」

『……っ？』

止める太狼に、桜時たちがゴンが首を傾げる。

「太狼さんっ…？」

「時が来たのかも知れない…」

「時っ？」

太狼の言葉に、桜時が眉をひそめる。

「輝矢ちゃん迎えに行く前に、折角だから、聞いていってよっ…」

少し目を落とし、そっと微笑む太狼。

「ちょっとした、“御伽噺”をっ…」

『えっ…？』

太狼の言葉に、皆が戸惑いの表情を見せた。

「……っ？」

廊下を歩いていたアリスが、桜時や太狼たちのいる客間の扉の前で、足を止める。

「……っ」

部屋の中から聞こえてくる声に、アリスはそっと耳をすませた。

御伽界・中央部。“鬼が島”。

「ただいま…」

何もない荒地の広がる大地に立ち、輝矢がそっと言葉を呟く。

「お父さん…お母さん…」

誰もいないその場所で、輝矢が悲しげに微笑んだ。

「昔々、あるところに、おじいさんとおばあさんがおりましたぁ」
『うんうんっ』
話を始めた太狼の声を、桜時たちは頷きながら、真剣に耳を傾ける。
「あっ、違ったぁ～これ、本当の“桃太郎”のお話だったぁ～」
『だあああああああっ！！』
明るく間違える太狼に、皆が勢いよくズッコケる。
「どうやって間違えんだよっ！！」
「まぁまぁ～っ」
強く突っ込みを入れる桜時を、門貴が横から必死に宥める。
「昔々、あるところにぃ、“玄神”玄上一族と、最強の狼人の血を引いた、一人の善良な少年がおりましたぁ～」
太狼が改めて、話を始める。
「善良っ…？」
「善良っ…」
「善良ねぇっ…」
「まぁ、とりあえず最後まで聞こうぜっ…？」
善良という言葉にとにかく疑問を抱く門貴、由雉、ゴンの三人に、桜時が引きつった表情を見せながらも、説得するように声を掛ける。

「少年は甘いものが大好きでぇ、その血は甘さダルダルココアで出来てるんじゃないかってくらいでしたぁ～」
「絶対、その情報、必要ねぇだろっ！！」
『まぁまぁ～っ』
激しく突っ込みを入れる桜時を、揃って宥める門貴たち。

「その少年はぁ、色々と旅をしていてぇ～、やがて“鬼が島”と呼ばれる島に辿り着きましたぁ～」
「鬼が島っ…？」
「……っ」

その言葉に桜時が首を傾げる中、太狼はゆっくりとソファーから立ち上がり、客間の壁に飾られている大きな絵の前へと立った。

「あっ…」

――――御伽神話の絵を見るのは、初めてかい…？――――

それは、桜時が武史に話してもらった、御伽神話の絵。玄上一族の祖先とされる人の神・“玄神”と、鬼の化け物“鬼神”との争いが描かれた絵であった。

「少年はその島で、一人の女性と出会います…」

その絵を見つめ、太狼がそっと目を細める。

「“鬼神”の血を継ぐ女性…」

描かれた鬼神に、そっとその指を触れる太狼。

「“竹取朝日”と…」

太狼のその瞳が、どこか悲しげに揺らめいた。

それは、一人の少年が、世界の英雄となるまでの物語…。

第７２章　狼少年と朝日　★１

それは、一人の少年が、世界の英雄となるまでの物語。

――――十九年前。四大国が一、“武国”。

「もうすぐだぞ、太狼」

「うんっ…」

柔らかそうな茶色の髪に、まだ幼さの残る大きな緑色の瞳。その瞳は、純粋に、だが力強く輝いている。

少年の名を、桃原太狼。

後に“桃タロー”と呼ばれ、世界の英雄となる彼も、この時はまだ、七歳の幼い少年であった。

「次狼も大丈夫か？」

「うぅ～んっ！」

太狼に手を引かれた、太狼よりもさらに幼い少年が、元気よく返事をする。三歳になったばかりの太狼の弟・次狼であった。

「久し振りだな、武国へ来るのは…」

精悍な顔立ちをした、茶色の髪に鋭い金色の瞳の男。太狼と次狼

の父・桃原　破狼（はろう）は、獣人の中でも強いとされる“狼人”の中で、最強と謳われる程の実力を持った男であった。

そんな、誰よりも強い父が、太狼にとっては、何よりも誇りであった。

「着いたぞ」
「うんっ…」
太狼が、父とともに御伽界最北の国・武国の門をくぐる。

太狼には家も故郷もなかった。物心ついた頃から、父と幼い弟とともに、旅を続けていた。

武国へと着いた太狼たちは、寄り道をすることなく、すぐに、武国一の大きな屋敷・玄上家へと向かった。

「久しいな、桃原殿」
「ご無沙汰しております…」

太狼たちを出迎えたのは、当時の武国主・玄上武雄であった。

「色々と評判は聞いておるぞ。各地で鬼人を倒し、困っている人々を救っているそうではないか」

「そんな大層なことはしておりません…」

国主の言葉に、破狼は謙遜の笑みを零す。実際に破狼は、最近現れ始めた“鬼人”とされる化け物と戦っては人々を救い、各地で“英雄”と讃えられていた。破狼の旅は、鬼人退治の旅でもあった。

「私はただ、一人でも多くの人を守りたいだけです…」

「“守る”か…」

まっすぐな瞳で答える破狼に、国主は少し表情を曇らせる。

「して、今日は何用だ…？」

「はい…唖矢の墓参りをしたいと思いまして…」

「墓参りをっ…？」

国主が、眉をひそめる。

「それは無理な願いだ、桃原殿」

「……っ」

国主がそう言い放つと、破狼の表情が曇った。

「元々、玄上は、獣人である其方と唖矢の仲を認めてはいなかった…それは唖矢が死んだ今も同じこと…」

「……。」

国主の言葉に、太狼もそっと気難しい表情を見せる。次狼を生んですぐに死んだ母・唖矢が、この武国を治める玄上の人間で、父・破狼との仲を反対されていたことは、幼い太狼にも何となく理解出来ていた。

「我らは人間の神…国民に威厳を示すためにも、獣人である其方らを認めるわけにはいかぬのだ…」

「せめて子供たちだけでも、許可いただけませんか…？」
「ならぬ…」
願う破狼に、国主はゆっくりと首を横に振った。

「今は鬼人も現れ始め、国民も獣人に対して過敏になっておる…わかってほしい…」
「……。」

困ったように言い放つ国主に、破狼はそれ以上、訴えることはなかった。

母の墓参りも許されることなく、太狼たちは、玄上家を後にした。

「済まないな、太狼…」
武国の出口へと向かうその道の途中で、破狼はポツリと太狼に謝った。

「母さんに会わせてあげることも出来なくて…」
「別にいいよ。俺と次狼には、父さんがいる」

申し訳なさそうに呟く破狼に、太狼はどこか淡泊に答えた。実際に、母が恋しいと思ったこと、太狼にはなかった。幼い次狼のことを思えば、母がいてくれればと思うこともあったが、太狼は父さえいてくれれば、それで良かった。優しい父さえいれば、寂しくな

どなかった。

「でもっ…あの家の人たちは嫌いだな…」

「……っ？玄上家のことか？」

「うんっ…」

聞き返す破狼に、太狼は少ししかめた表情で頷く。

「何か色々と偉そうなんだもんっ」

太狼が、口を尖らせ、訴える。

「父さんの方が、絶対強いに決まってるのにさっ」

「……っ」

強く言い放つ太狼を見て、破狼は少し困ったように笑った。

「太狼っ…」

「……っ？」

“強さ”というのはね、力の強さばかりを言うのではないんだよ…」

「えっ…？」

破狼の言葉に、太狼はそっと眉をひそめる。

「どういう、ことっ…？」

「もう少し大きくなったら、きっとわかるさっ…」

「……っ？」

幼い太狼は、父の言葉の意味が理解出来ず、ただ首を傾げることしか出来なかった。

「破狼さんっ…！」

「……っ？」
武国の入口を出ようとしたその時、名を呼ばれ、破狼がゆっくりと振り返った。それにつられて、太狼もゆっくりと振り向いた。
「破狼さんっ！」
「武矢君」
そこへ現れたのは、黒い短髪に、透き通るようにきれいでまっすぐな黒い瞳の、二十歳前後の男だった。太狼も何度か見掛けたことがある。先程まで会っていた玄上国主の息子・玄上武矢だ。獣人を忌み嫌う玄上の人間ではあるが、この武矢は、破狼に憧れているらしく、昔から太狼にも、好意的に接していた。
「久し振りだね…」
「話は聞きましたっ！」
少し眉をひそめながら、武矢が破狼のもとへと駆け寄っていく。
「墓参りのこと、すみませんっ…」
「君が謝ることではないよ」
申し訳なさそうに頭を下げる武矢に、破狼が優しく微笑みかける。
「父も頭が堅すぎるんですっ…獣人だからってだけでっ…」
「国を治める者には色々とあるものだ…仕方ないよ…」
「……っ」
宥めるように笑う破狼に、武矢はどこか、もどかしそうな表情を見せた。
「僕が国主になったらっ、きっとこの国を変えてみせますっ！」
「えっ…？」
「僕っ！決めてるんですっ！人間も獣人もっ、鬼もっ！どんな種族

も分け隔てなく生きられる世界を創るってっ！」

武矢がまっすぐな瞳で、明るく話す。

「鬼もっ？ハハハっ」

破狼は最初、驚いていたが、徐々に大きく笑みを零した。

「……っそれは楽しみだっ…」

「へへっ！」

微笑む破狼に、武矢もどこか嬉しそうな笑みを浮かべた。

「その時になったら君もっ、また武国へおいでっ！」

「えっ…？」

向けられる、どこまでも晴れやかなその笑顔に、太狼は少し驚いたような、困ったような顔を見せた。他人にそんな温かい笑顔を向けられたのは、それが初めてだったのだ。

「あっ…うんっ…」

武矢の言葉に小さく頷いて、太狼は、破狼とともに、武国を後にした。

それから、数ヶ月後。

「じゃあ父さんは行ってくるから」
旅の途中で立ち寄った町で、破狼は、太狼と次狼を置いて、出掛けようとしていた。

「いい子にしてるんだぞ、次狼」
「うんっ！！」
「太狼、次狼のことを頼んだぞ？」
「本当に行くのっ…？父さんっ」
「……っ？」

少し不安げな顔をして問いかけた太狼に、破狼は少し驚いたような表情を見せた。

「珍しいな、お前がそんなことを言うなんて…」
「だって敵の鬼はいっぱい、いるんでしょっ？いくら父さんだってっ…」
「大丈夫っ」
破狼の大きな手が、太狼の頭を撫でる。

「父さんが絶対っ、お前たちを守るからっ」
「……っ」

嫌な予感がしていた。だが、太狼はそうとは言えず、笑って出て行く父を、見送ることしか出来なかった。

そして、そのまま、破狼は帰って来なかった。

鬼の軍勢に、たった一人で立ち向かい、約束通り、太狼たちを、町の人たちを、世界の人たちを守って、だが、帰って来はしなかった。

太狼のただ一人憧れた父は、“英雄”として、たった一人で死んでいった。

次狼はまだ三歳で、兄の太狼もまだ七歳だった。父を亡くし、帰る家も持っていなかった幼い二人は、とりあえず父・破狼の友人であった、龍国主・青守の家へと引き取られることとなった。

「まったくっ…武国にも困ったものだな…」

当時、まだ国主子息であった青守座黒は、やって来た太狼たち兄弟を見て、少し困ったように肩を落とした。

「獣人を国に入れるわけにはいかないからと、一方的に押しつけてくるとはっ…」

「まだこんなに小さな子たちを…」

「ふぅっ」

一息ついた座黒が、次狼を連れた太狼のもとへ、ゆっくりと歩み寄ってくる。

「今日からここが君達の家だ…自由に暮らすといいっ…」
「……っ」
温かい笑顔が、太狼たちを迎えた。
「ありがとう…ございます…」
その言葉に、太狼はただ深々と、頭を下げた。

「次狼～っ！こっちこっちぃ～っ！」
「待ってよぉ～っ！リンゴぉ～っ！」

数ヶ月の時が流れて、次狼は、青守家に年の同じリンゴがいたこともあり、すっかり青守の家に馴染んでいた。元々、幼かった次狼は、そう父親のことも覚えておらず、座黒夫婦のことを本当の両親のように慕い、青守家のことを自分の家のように思っていた。

「お兄ちゃ～んっ！リンゴと遊びに行ってくるねぇ～っ！」
「ああっ、気をつけてな」
「うぅ～んっ！」
「……。」

次狼を見送り、青守家に一人、残る太狼。

「はぁっ…」

次狼が青守家に馴染んできた頃、太狼はというと、あまり、この環境に馴染めずにいた。

「ガッハッハッハっ！！この正刈金汰が勝負してやろぉぉっ！！桃原太狼っ！！」

町で出会った変わった少年に、ケンカを売られることもあった。

「……っ」

「だぎゃあああああああっっ！！」

腕っぷしに自信のあった太狼は、すぐに勝利を収めた。

「今日からお前は、俺の親友だぁぁっ！！桃ちゃんと呼ばせてくれぇぇっ！！」

「……。」

よくわからないまま、太狼は、とりあえず友達を得た。

「おかえり、太狼」
「おかえりさない、太狼っ」
「た…ただいまっ…」

優しく迎えてくれる座黒夫婦に、太狼が、未だに慣れない“ただいま”を返す。

龍国は平和な国であった。鬼人により脅かされる危険も少ない。だからこそ、住んでいる人々も皆、優しくて、穏やかで、それが余計に、太狼には馴染みにくかった。

父と旅をして来た頃とは、まるで別世界の生活。こんな平和を目の当たりにすると、何故、父は死んだのかと、疑問に思えてならなくなり、いっそ、次狼のように、父のことを覚えていられない程幼ければ、と思うことも何度かあった。

「はぁっ…」

馴染めないまま、何度も出る溜息。

「……。」

そんな太狼を、気付かれないように、座黒はそっと見ていた。

第７２章　狼少年と朝日　★２

それからさらに時が流れて、太狼は八歳になった。

「どうだぁっ！太狼っ！誕生日プレゼントだぞぉっ！」

「はっ…？」

そう言って座黒が太狼に指し示したものは、龍国の町はずれに建った、大きくド派手な“お菓子の家”だった。

「なっ何ですか…？これっ…」

「そろそろお前たちにも家を建ててやろうと思ってなぁ～っ」

勢いよく顔を引きつっている太狼に、座黒が笑顔で答える。

「お前、甘いもの、好きだろうっ？だから家も甘くしてみたんだっ！」

「はぁ…」

熱弁する座黒に、とりあえず頷く太狼。

「うわぁ～っ！おいしそぉ～っ！」

「悪趣味っ…」

目の前に立つ家に、次狼は目を輝かせ、リンゴは幼いながらにクールな反応を示した。

「どうだっ！？気に入ったかっ！？」

「えっ？」

座黒に勢いよく問いかけられ、太狼は少し眉を引きつる。

「あっ、はいっ…すっごく…気に入りました…」
「そうかそうかぁ～っ！ハッハッハっ！」
途切れ途切れで頷く太狼に、座黒は満足そうに笑った。

「家事なんかの手伝いは、青守の手伝いを寄越すからっ」
「あっ、はい。すみませんっ…」
「少し青守を離れて、兄弟二人でゆっくりと暮してみるといい」
「……っ」

座黒の言葉に、太狼は驚いたように目を開いた。

「座黒さんっ…」

座黒は、気付いていたのだろう。この国に、青守の家に、馴染めていなかった太狼のことに。馴染めずに苦しんでいた太狼に、気を遣って、この家を与えてくれたのだろう。

「ありがとう…ございます…」

また助けられて、太狼はまた、頭を下げた。

それから、その“お菓子の家”での、太狼と次狼だけの、生活が始まった。

「次狼ぉ～っ！遊びに来てやったわよぉ～っ！」
「いらっしゃ～いっ！リンゴぉ～っ！」

お菓子の家に、笑い声が響く。

「太狼様、次狼様、お食事の用意が出来ました」
「うわぁ～いっ！行こっ！お兄ちゃんっ！」
「あっ、うんっ…」

毎日、温かいご飯が、目の前に並べられる。

馴染めない。穏やかな生活。

――――次狼を頼むぞ？太狼…――――

行かないで。

――――大丈夫…――――

行かないで。

――――父さんが絶対、お前たちを守るからっ……――――

行かないで。

「ハっ…！！」

浮かんでは消える、父の笑顔を、太狼は、毎夜のように夢に見た。
“守る”と言って消えていく父に、必死に手を伸ばしては、夢から飛び起きた。

「はぁっ…はぁっ…」
太狼が乱した息で呼吸をし、苦しげに自分の左胸を押さえる。

「また…あの夢っ…」
「お兄ちゃんっ…？」
「……っ」

横の寝台から聞こえてくる声に、太狼は少し驚いたような表情を見せて、振り向いた。

「どうか、したの…？」
「次狼っ…」
兄を心配するように、不安げに問いかける次狼に、太狼がそっと目を細める。

「ううんっ、ごめんっ…何でもないよっ…」
「本当に…？」

「うんっ…さっ、寝ようっ…」
「……うんっ」
どこか誤魔化すように微笑んだ太狼に、次狼は少し寂しそうに頷いた。

「どこか行くの…？お兄ちゃんっ…」
「あ、うんっ…」
そんな夢は毎日続き、数日程経ったある日、太狼は大きな荷物を抱えて、お菓子の家を旅立とうとしていた。

「ちょっと長くなるかも…寂しくなったら、青守の家に行ってればいいからっ…」
「お兄ちゃんっ…」
「んっ？」
不安げに呼んだ次狼に、太狼は穏やかな笑みを向ける。

「いってらっしゃいっ」
「……っ」
寂しさを隠しきれない表情で笑い、見送る次狼に、太狼はそっと目を細める。

「いってきます…」

その時の太狼に、次狼の寂しさを受け止めてやる、余裕はなかった。

行く当てがあるわけではなかった。

ただ、馴染めない、平和で穏やかなあの家から、龍国から、抜け出したかった。

幼い次狼が寂しがることはわかっていたが、それでも抜け出なければ、太狼自身が耐えられそうになかったのだ。

「どこ、行こう…？」

数日程、彷徨い歩いたが、太狼はまだ、行く場所を決め兼ねていた。適当な村や町を訪れても、“早くお家に帰りなさい”と龍国に帰されてしまう。父以外の肉親がいるといえば北の武国だが、あの国には行く気がしなかった。

「うぅ～んっ…あれっ…？」

龍国を出て、まっすぐに西に歩くこと数日。太狼の前に、海と見間違いそうなほどに、大きな湖が広がった。御伽界の中心・御伽湖

である。

「御伽湖っ…そういえば…」

――――御伽湖の中心に…人々が誰も近づいたことのない、“鬼が島”と呼ばれる、小さな島があるそうだ…――――

かつての、父の話が思い出された。

「人が誰も行ったことのない島、“鬼が島”か…」

穏やかに人が暮らす国に、馴染むことの出来なかった太狼が行くには、丁度いいかも知れない。太狼はすぐに、決意したような表情となった。

――――ボォォォォォォ～～～ンっ！――――

太狼の体を、白い煙が包む。

「よっとっ」

次の瞬間、白い煙の中から、一匹のオオカミが現れた。

「泳ぎは得意なんだよなぁ～」

そう言いながら、オオカミの姿となった太狼が、湖の中へと飛び込んでいく。

「せっせっ、せっせっ」

海のように広い湖を、ひたすらまっすぐに、泳いでいく太狼。

「せっせっ、せっせっ」

やがて日が暮れ、辺りが暗くなり始めた。

「せっ…せ…せっ…せぇ…」

泳ぎの速さが徐々に落ち、太狼の顔から疲れが全面に、溢れ始める。

「ないな…島っ…やばいかも…」

泳ぎ始めて数時間。獣人とはいえ、まだ幼い太狼の体力に、限界が来始めていた。このままでは泳げなくなり、この深い湖の底に沈むしかなくなる。

「こんな死に方っ…世間に笑われそうだなぁ…」

そんなことを気にしながら、太狼が少し困ったように微笑む。

「んっ…？」

その時であった。

「あっ…あったっ！島だっ！！」

どこまでも続くと思えた湖の先に、大きな島の海岸が見えた。薄暗い空の中、明々と輝く月に照らされ、その島を、しっかりと目で確認することが出来る。太狼は、大きく目を見開いた。

「あったあったっ！島だっ！」

見える鬼が島に、今までの疲れも吹き飛んで、太狼は必死に泳ぎを続けた。

「ふぃ～っ！」

数分も泳ぐと、すぐに島の海岸へと辿り着いた。

「ぶふぅ～っ！！」

太狼が全身を震わせ、濡れた全身や尾から、水飛沫を弾き飛ばす。

「ここがぁ…人がだぁ～れも来たことのない島っ…？」

動きを止めた太狼が、ゆっくりとその先に広がる島を見つめる。

「別に何にもないなぁ…」

広い海岸がしばらく続き、その先には深い森が広がっている。森の奥にも何かあるのかも知れないが、木が多く、視界は遮られていた。とはいうものの、もっと見たこともないような風景でも広がっているのかと期待していた太狼は、少しがっかりしたように肩を落とす。

「まぁいいやぁ…今日はもう泳げないし、この辺で寝っ…」

「グガアアアアアアアアアっっ！！」

「えっ…？」

その場に腰を下ろそうとした太狼の目の前に、突如現れる、緑色の化け物。頭から生えた二本の金色の角が、月明かりに反射して輝く。

「おっ…鬼っ…？」

「グガアアアアアアっ！！」

「ううううわあああぁっ！！」

唖然として見上げていた太狼に、その鬼は、勢いよく鋭い爪を振り下ろした。太狼が叫びながら、砂浜に転がるようにして、必死にその爪を避ける。

「痛っつ…」

走る痛みに、少し顔をしかめながら、太狼が四本の足を立たせ、

ゆっくりと起き上がる。

「もしかして“鬼が島”って…鬼人の島とかっ…？」
「グウゥゥゥゥゥゥっ……」
「うぅっ…！」
目の前に立つ巨大な鬼に、表情を歪める太狼。

「これがっ…鬼…」
恐怖に震えた声で、太狼がポツリと呟く。

「父さんの戦ってきたっ…鬼っ…」
「グガアアアアアアアっ！！」
「うううぅっ…！！」

再び振り下ろされる爪に、太狼は諦めるように、かたく目を閉じた。

「“水照（すいしょう）”っ！！」

暗闇の中に、凛と響く声。

――――――バァァァァーンっ！！――――――

「ギャアアアっ！！」
「えっ…？」

大きな衝撃音と、激しく響き渡る鬼のものらしき断末魔に、かたく瞳を閉じていた太狼は、戸惑うようにゆっくりとその瞳を開いていく。

「ふぅっ」
「……っ！」

砂と化して崩れ落ちた鬼の向こうに立っていたのは、黒い皮膚に真っ赤な瞳を輝かせ、頭に金色の角を二本生やした、鬼であった。先程の鬼よりも小さく、ほぼ大人の人間と同じ大きさで、人と同じ着物を身につけ、人と同じ言葉を話している。

「ここにまで、奴らがっ…」
「鬼っ…」
「んっ？」

女性のような高い声を発していた鬼が、太狼の漏らした声に気づき、ゆっくりと振り向く。

「うっ…！」
「オオカミの子供っ…？」

振り向いた鬼に、思わず背筋を震え上がらせた太狼を見つめ、鬼がそっと眉をひそめる。

「こんなところまで、泳いで来たのっ？」

――――ボォオオオオオオオォ～～～ンっ！――――

「へっ？」

白い煙に包まれていく鬼に、太狼が目を丸くする。

「あなたっ」

「あっ…」

次の瞬間、白い煙の中から姿を現したのは、艶やかな長い黒髪を風になびかせた、力強い大きな赤色の瞳の、美しい顔立ちをした女性であった。だがまだ、顔に幼さが残っている。二十歳前といった年頃であろうか。先程の黒い鬼と、まったく同じ着物を身に纏っていた。

「鬼が…人間にっ…」

「しかも獣人っ？“狼人”の子供…」

茫然としている太狼に対し、女は冷静に言葉を続ける。

「こんな夜中に、こんな島で、子供が一人で何をしてるの？危ないわよ？」

「……っ」

太狼を気遣うような言葉を発する女に、太狼が少し驚いたような表情を見せる。鬼ではあるが、この女は、先程太狼を襲った鬼とは、どこか違うように思えた。

「うようよと凶暴な鬼がウロついているんだから」
「あっ、えとっ…」
「このまま、ここで大人しく、鬼人どもの餌食になる以外に道はないわねぇ」
「えええぇぇっ!?」

そう冷たく言い放って、あっさりと太狼に背を向ける女に、太狼が驚きのあまり、思わず大きな声を発する。

「ちょちょちょっ…!ちょっと待ってよっ!!」
「何っ?」
必死に呼び止める太狼に、女が面倒臭そうに振り返る。
「フツー、もっと他に言うこととかないっ…?“今日はもう遅いから、ウチにおいでぇ~”とかっ…」
「ウチへっ?」
表情を引きつりながら訴えかける太狼に、女が眉をひそめる。
「んん~っ」
女が考えるように、首を捻る。
「“狼肉”って、おいしいのかしらっ?」
「やっぱり結構です…」

女の問いかけに、明らかに身の危険を感じ、太狼はその場から去って行こうと歩き出す。

「ウフフっ！」
「……っ？」
後ろから聞こえてくる軽快な笑い声に、太狼が眉をひそめて、振り返る。

「ウソよっ、あたしっ、カレーは豚肉派だからっ」
「その言葉、よくわかんないけど…」
「まぁいいわっ」
「……っ？」
どこか楽しそうに微笑んで、女が太狼へ右手を差し出す。

「“今日はもう遅いから、ウチにおいでっ”、狼少年っ」
「……っ」

それが、桃原太狼と、竹取朝日との出会いであった。

第７２章　狼少年と朝日　★３

「森を抜けたところに、あたしの住んでる村“鬼月（おにつき）の村”があるの」
「……。」

暗く深い森の中を、太狼は、出会ったばかりの女の後に続くようにして、進んでいった。女の正体は、鬼である。このまま森の奥へと連れていかれて、食べられるのかも知れない。そうも思ったが、女の醸し出す空気は、不思議と、太狼の心を安心させた。

「ねぇっ…」
「んっ？」
「あんたさ…」
「朝日っ」
「えっ…？」
すぐに返ってくる声に、太狼が少し首を傾げる。
「竹取朝日よっ、あたしの名前っ」
「朝日…」

どこまでも明るく、まっすぐな笑顔を見せる女に、よく似合っている名だと思った。

「朝日は…鬼なのっ…？」
「そうよっ」
「えっ…」

あっさりと頷く朝日に、太狼が少し戸惑うような顔を見せる。

「随分とあっさり認めるんだね…」

「なんで認めないでいる必要があるのっ？何てことはないわっ、あなたと同じ、鬼の獣人ってだけっ」

「鬼のっ…獣人っ…？」

太狼にとって、鬼は異形の生物で、獣人と同じなどという考えはしたことがなかったので、朝日のその言葉は、とても不思議であった。

「そうよ、あたしたちも、あなたと同じ獣人なの」

「けどっ…」

――――お前たちは絶対、守るからっ…――――

鬼人と戦い、死んでいった父の姿が思い出される。

「けど鬼はっ…たくさん物を壊してっ…たくさん人を傷つけるよっ…？」

「……っ」

太狼の言葉に、朝日がその表情を険しくする。

「あれは…“鬼人”なんかじゃないわっ…」

「えっ…？」

鋭い瞳で言い放つ朝日。

「ただの化け物よっ…あいつらの作り出した、ね…」
「あいつら…？」
強い怒りのこもった瞳を見せる朝日に、太狼はそっと首を傾げた。

「あっ、村に着いたわよっ」
「えっ…？」
朝日の声を聞き、太狼がゆっくりと前方を見た。

「……っ」

深い森の奥に広がる、緑豊かな、ただっ広い平地。そこに小さな家が、いくつか建っている。他の土地では見たことのない、不思議な模様の石で出来た家だ。鬼人一族に伝わる、特殊な造りなのだろうか。家の前には、楽しげに話す、人々の姿も見えた。

「ここがあたしの村、鬼月の村よ」
「小さな村だね」
「鬼人一族ってゆうのは元々、結構な大所帯だったんだけどね」
太狼の疑問に答えるように、朝日がそっと微笑む。

「考え方の違いから二つに別れちゃって、その一方が出てっいっちゃったから、人数はそういないの」
「ふぅ～んっ…」
朝日の言葉に、太狼がとりあえず頷く。

「なんで、湖の真ん中の島なんかに住んでるの？不便じゃない？」

「別にわざわざ、この島に越して来たわけじゃないわ」
「えっ…？」
微笑む朝日に、太狼が首を傾げる。

「村のあるこの鬼が島が、海底火山の噴火で浮かび上がっちゃったのよ、鬼人は元々、海で暮らしていた種族なのっ」
「海でっ…？」
「そう、だからほらっ」

――――ポォォォォ～～ンっ！――――

朝日が軽く右手を上げ、その上に水の玉を作り出す。

「水を操る能力を持ってるっ」
「へぇ～っ」
太狼が関心するように、朝日の作り出した水の玉を見つめる。

「じゃあ朝日は昔は、エラ呼吸だったってこと？」
「違うわっ、あなたってバカねぇ～脳細胞、一つもないのっ？」
「そこまで言わなくたって…」
冷たく言い放つ朝日に、太狼が少し顔をしかめる。

「鬼が島が浮上したのは、もう千年も昔の話っ、エラ呼吸してたとしたら、あたしの先祖になるかしら」
「そうなんだ…」
太狼がすべてに納得したように頷く。

「朝日ぃ～っ！」
『……っ？』

村の方から聞こえてくる声に、太狼と朝日が同時に振り向く。

「朝日ちゃんっ！おかえりぃっ！」

家の前に立っていた村人たちが、森を出て来た朝日の姿を見つけ、大きな笑顔を見せて、朝日へと手を振っている。

「ただいまぁ～っ！」

朝日が、村人たちへ、大きく手を振り返す。

「結構、人気者なんだね」

「ほらっ、あたしって美人だしっ、気立てもいいからっ」

「……。」

自信を持って答える朝日に、太狼が少し呆れたような表情を見せる。そんな会話をしながら、太狼と朝日は、ゆっくりと村の方へと足を進めた。

「夜遅くまで、ご苦労だったな、朝日」

「村長っ」

村の入口へと入ると、白髪の小柄な老人が、朝日を出迎えた。朝日の言葉から察すると、この村の村長であるらしい。

「んっ？その獣は？」

「ああ、海岸で拾ったの」

不思議そうに太狼を見つめる村長に、朝日が笑顔で答える。

「向こう岸から泳いで来たみたい」

「泳いでっ…？」

やはり湖を泳いで、この島に辿り着くということは、半端ではないことなのか、朝日の言葉に村長は驚いた顔を見せた。

「そうなの、折角だからペットにでもしようかと思って」

「ペットっ！！？」

「……っ！」

朝日の言葉に大きく驚く太狼であったが、人語を話したオオカミに、村長もまた驚きの表情を見せた。

「じゅっ…獣人っ…？」

「あっ」

眉をひそめる村長に、太狼が思わず前足で口を押さえる。

「本当は犬とか猫の方が良かったけど、まぁオオカミも子供なら結構、可愛いしっ…」

「朝日っ」

「えっ？」

ペットについて語っていた朝日が、村長に名を呼ばれ、目を丸くして振り向く。

「あまり他種族っ、特に獣人と関わることはっ…」

「……っ？」

険しい表情でそう言う村長に、太狼がそっと首を傾げる。

「心配しなくても大丈夫よぉ～っ」

「しかし、朝日っ…！」

「あたしが“大丈夫”って言ってるのに、逆らう気っ？」

「……いえっ」

朝日が有無を言わさぬ冷たい笑顔で、反対していた村長を捩じ伏せる。

「怖っ…」

それを見ていた太狼は、思わずこっそりと呟いた。

「さっ、あたしの家はこっちよっ」

捩じ伏せた村長を置いて、朝日が村の奥へと進んでいく。太狼も、それについていった。やがて、村の一番奥にある、小さな家の前で、朝日が足を止めた。

「ここが竹取家っ！どうぞっ」

「あっ、お邪魔、します…」

扉を開けて中へと進める朝日に、太狼は少しかしこまりながらも、ゆっくりとその家の中へと足を踏み入れた。

「……っ？」

家の中は、真っ暗で、人の気配はなかった。

「ごめんごめんっ、今、明かり点けるからっ」

朝日が素早く家の中へと駆け込んでいき、玄関からすぐの部屋に、明かりを灯した。明かりが点くと、そこはダイニングのようであったが、やはり人の姿はない。

「朝日、親は…？」
「んっ？いないわよぉ～っ」
「そっか…」
明るく答えながら台所へと向かっていく朝日に、太狼がそっと目を細める。

「俺と…同じだね…」
「……っ」
ポツリと呟いた太狼に、少し振り向く朝日。

「……そうっ」
朝日は詳しくを問いかけることはなく、太狼の言葉に頷き、そっと優しく微笑んだ。

「何か飲もうかっ、何がいいっ？“オカ”っ」
「えっとっ…って、“オカ”っ？」
飲み物を考えようとした太狼が、その最後につけられた謎の単語に、首を傾げる。

「何、それっ…？」
「あなたの名前よっ、オオカミだから“オカ”っ」
「勝手に名前つけないでよっ！」
笑顔で答える朝日に、太狼が顔をしかめて訴える。

「しかもすっごい雑なネーミングだしっ…」
「じゃあ何なのっ？」
「えっ…？」

問いかける朝日に、太狼が顔を上げる。

「あなたの名前っ」

「……っ」

微笑む朝日に、少し目を見開く太狼。

「……。」

――――ボォォォォ～ンっ！――――

少し俯いたオオカミが、白い煙の中に包まれていく。

「……太狼っ…」

白い煙から人化した姿で出て、小さく答える太狼。

「よろしくねっ、太狼っ」

「……っ」

朝日が笑顔で名を呼ぶと、太狼は少し照れるように下を向いた。

それからしばらく、太狼は鬼月の村に留まり、朝日との生活を始めた。

「うげぇっ！このココアっ！苦ぁぁ～いっ！！」
「えぇぇ～っ？」

コップに入ったココアを飲み、苦しげな声をあげる太狼に、振り返った朝日が、困ったような顔を見せる。

「苦いっ？砂糖十杯も入れたのよぉ？」
「十杯なんかじゃ足りないよぉっ、三十杯は入れないとっ」
そう言いながら、太狼がコップへと砂糖を山盛り、入れていく。

「太狼は絶対、早死にねぇ～高血糖でっ」
「砂糖で死ねるなら本望さっ」
「ウフフっ！変な子っ」
「……っ」

楽しそうに笑う朝日に、少し顔をしかめる太狼。

朝日との日々は、ただ、楽しかった。

龍国での暮らしと同じように平和で、穏やかで、優しい時間であったが、“馴染めない”と感じることは一度もなかった。
それどころか、“こんな時間が永遠に続けばいい”と、そんな風にさえ思えた。

太狼が鬼月の村へ来て、一週間程の時が流れた頃であった。

「太狼は、そろそろ帰らなくって大丈夫なの？」

「えっ…？」

朝日の問いかけに、太狼は少し驚いたような表情を見せた。

「帰…るって…？」

「住んでる家があるんでしょう？」

「……っ」

太狼が少し目を落とし、あのド派手なお菓子の家のことを思い出す。

「心配してるんじゃない？」

「……親いないし…」

「親じゃなくても、待ってくれてる人がいるんでしょう？」

「……っ」

朝日の言葉に、太狼が深く俯く。

――――いってらっしゃいっ…――――

寂しそうな顔をしながらも、笑顔で太狼を見送った、次狼のことが思い出された。幼い次狼は、太狼がいなくても、ちゃんと元気でいるだろうか。青守の家の座黒やみんなも、心配しているかも知れ

ない。

「なんで出て来たのか知らないけれど、一度、戻ってみたら…？」
俯いた太狼に、朝日が優しく微笑みかける。

「ここへはまた、いつでも来ればいいからっ」
「……父さんがっ…」
「……っ？」
急に話し始める太狼に、朝日が少し目を丸くする。

「父さんが…死んだんだ…」
「……っ」
そっと目を細め、太狼の声に、耳を傾ける朝日。

「俺たちを、みんなを守るために…鬼と戦って…」
「……。」

“鬼”という単語を聞き、朝日が少し、厳しい表情を見せる。

「それから弟と、父さんの知り合いの人に引き取られて…」
太狼が、言葉を続ける。
「すごくいい国で…みんな優しくて…弟もすっごく楽しそうでっ…」
ふと曇る、太狼の表情。

「でも俺っ…馴染めなくてっ…」
「……っ」

悲しげな笑みを浮かべる太狼に、朝日はそっと目を細めた。

「父さんが命を賭けてまで戦ったのにっ…俺たちはこんなに平和に暮らしててさっ…」

――――お前たちは絶対、守るからっ…――――

行かないで、と何度も願い、夢から覚めた。

「何かっ…何の為に父さんは死んだんだろうって…そう考えちゃってっ…」

こんなに平和に暮らせるのなら、破狼は初めから、死ななくても良かったのではないだろうか。破狼の死は、無駄だったのではないだろうか。そんな考えが頭を巡っては、平和に生きることに疑問を感じた。

「だからっ…」

「それは、人に、“死んだ意味”を求めるからよ…」

「えっ…？」

遮る言葉に、太狼がゆっくりと顔を上げる。

「人は、死ぬ為に、生きるんじゃないわ…」

顔を上げた太狼に、朝日が優しく微笑みかける。

「一生懸命生きて、そして、死んでいくの…」
「……。」
言葉を続ける朝日を、太狼が少し戸惑うような表情で見つめる。

「だからっ…人には、“生きた意味”を求めないと…」
「生きた…意味っ…？」
「そうっ」
聞き返した太狼に、朝日が大きく頷く。

「あなたのお父さんは、必死に戦って、必死に生きた…あなたとあなたの弟の幸せのために、未来のために…」
「未来っ…」
戸惑いの瞳を見せる太狼の頬に、そっと朝日の手が触れる。

「あなたたちが生きて、平和に、穏やかに暮らせているのなら…」
触れた手から、朝日の温もりが伝わってくる。

「あなたたちが大きくなって、自分の未来を歩んで行ってくれるのなら…」

――――太狼っ…――――

その温もりは、あの日失った、父の手の温かさに似ていた。

「あなたのお父さんの“生きた意味”は…きっと、あるんじゃない

かな…？」

頬に触れていた朝日の手が、ゆっくりと下りて、太狼の胸をそっと小突いた。

「“ここ”にっ…」

「……っ」

その微笑みに、温もりに、太狼がそっと目を細める。

「うぅっ…」

長い間堪えていた涙が、零れ落ちた。

「ううぅっ…！」

「しっかり生きなきゃ、太狼っ」

涙の溢れた太狼を、朝日はそっと抱き寄せた。

「あなたが、お父さんの“生きた意味”にならなきゃっ…」

「ううぅっ…！ううあああああっ！！」

その日、太狼は、生まれた時以来の、涙を流したのであった。

第７２章　狼少年と朝日　★４

それから、太狼は朝日に見送られ、龍国へと戻った。

「また出掛けるのっ？お兄ちゃんっ」

「うんっ、ちょっとねっ！」

「太狼っ、お前最近いつも、どこへ行っているんだ？」

「ちょっちょっとっ…！」

だが一週間と龍国に滞在することはなく、太狼はすぐにまた龍国を出ては、御伽湖を泳いで、朝日のいる鬼が島へと行っていた。

鬼のいる島に言っているなどと言えば、間違いなく止められるので、行き先は秘密にしていた。出掛けすぎる太狼に、次狼も座黒も、不思議がっていたが、それでも太狼は、行くことをやめなかった。

ただ、朝日に会いたかった。

少しでも長い間、朝日と一緒にいたかった。

「ふぅっ…」
「朝日ぃぃ〜〜っ！！」
「……っ？」

島の海岸沿いに立ち、どこか浮かない表情で肩を落としていた朝日が、大きく自分を呼ぶ声に、ゆっくりと振り向く。

「太狼っ」
「朝日ぃぃ〜〜っ！！」
朝日が振り向くと、湖の向こうから泳いでくる、一匹のオオカミの姿があった。

――――ボォォォォ〜ンっ！――――

「ふぅ〜っ！」

オオカミは岸に上がると、白い煙に包まれて人化し、太狼の姿となった。全身を水に濡らした太狼が、勢いよく首を振り、髪についた滴を落とす。

「また来たの？一昨日、帰ったばかりなのに」
「へへへっ」
少し驚いたように言う朝日に、太狼は嬉しそうな笑みを浮かべる。

「そろそろ食事代貰わないと、バカにならないわねぇ」
「えっ…！？」
「ウフフっ、冗談よっ」
「朝日が言うと、冗談に聞こえないよ…」
そっと微笑む朝日に、太狼が少し引きつった笑みを向ける。

「さっ、早く村に行こっ！」
「お客のくせに、図々しいわねぇ」
先頭を切って、森へと駆け抜けていく太狼に、朝日が呆れたように肩を落とす。

「ほらっ、朝日ぃ～っ！早く早っ…！」
「グガアアアアアっ！！」
「うあっ…！」
「鬼っ…！？」

駆け抜けていった太狼と朝日の間の砂浜から、突き出るようにして姿を現す緑色の鬼。目の前に現れた鬼に、太狼と朝日が顔色を変える。

「グガアアアアアっ！！」
「うわあああああああっ！！」
「太狼っ…！！」
爪を振り上げる鬼に、両手で頭を抱え、恐怖の悲鳴をあげる太狼。
そんな太狼に、朝日が身を乗り出す。

「“水照”っ！！」

――――バァァァーンっ！！――――

「ギャアアアアっ！！」
「……っ！」

太狼に爪を振り下ろそうとしていた鬼が、後方から飛んできた、光線のように鋭い水の刃に、胸を貫かれ、太狼の目の前で、激しい悲鳴をあげて、消えた。

「あっ…」

恐怖から解放された太狼が、少し気の抜けたような声を漏らす。

「大丈夫っ!?太狼っ！」

水を放ち、鬼を倒した朝日が、素早く太狼のもとへと駆け込んできた。

「あっうんっ…ありがとう、朝日っ…」

「良かった…」

礼を言う太狼に、朝日が安心したような笑みを浮かべる。

「最近、多いのよ…」

「えっ…？」

「鬼が」

「……っ」

浮かない表情で話す朝日に、太狼がそっと眉をひそめる。

――――最近、鬼人の出現が多くなっている…あまり一人で遠くへ行くなよ…？――――

出掛け際の、座黒の言葉が思い出された。

「そういえば、座黒さんが言ってた…“御伽界の各地で、鬼人の出現が多くなってきてる”って…」

太狼が思い出しながら、座黒の言葉を、朝日へと伝える。

「龍国ではね、“御伽警察”っていう、鬼人退治用の組織を作るんだってっ」

「そうっ…」

太狼の言葉に、朝日は益々、浮かない表情となった。

「外も…そんなことになっているの…」

「朝日…？」

どこか辛そうな表情を見せる朝日に、太狼がそっと首を傾げる。

「ねぇ、朝日」

「んっ？」

「朝日、前言ったよね？“あれは鬼人なんかじゃない。あいつらが作り出した化け物だ”って」

「……っ」

かつての自分の言葉を繰り返す太狼に、朝日が眉をひそめる。

「あいつらって誰？あの鬼の化け物と、朝日たちって、やっぱり何か関係があるのっ？」

「それはっ…」

鋭い瞳で問いかける太狼に、朝日は少し言葉を濁す。

「言って、朝日、お願い…」
「……。」
願う太狼に、朝日はどこか諦めるように、瞳を閉じた。

「太狼は…“御伽神話”を知ってる…？」
「御伽神話っ…？」
朝日の問いかけに、太狼が少し目を丸くする。

「うんっ…人々の神“玄神”と、鬼の化け物の“鬼神”が、戦ったっていう話でしょ…？」

太狼の母は、その玄神の血を引く玄上一族の者だ。父とともに玄上家に行った時に、御伽神話の絵もよく見ていたし、父から神話の話を聞く機会も多くあった。だから、普通の子供よりは、御伽神話については詳しかった。

「そう…」
朝日が小さく頷く。

「あたしたち鬼人一族はね、その“鬼神”の子孫にあたるの…」
「……。」

そのことに、特別驚きはしなかった。絵に描かれた鬼と、朝日の鬼化した姿はよく似ていたし、太狼自身、そうではないかと薄々感じていた。“玄神”の血を引く自分と、“鬼神”の血を引く朝日が、こうして出会ったことも、何らかの因縁のようなものであったのかも知れない。

「あたしたち鬼人一族は、結構な大所帯だったって…前、言ったでしょ？」
「うん…」
話を続ける朝日に、太狼が真剣な表情を向ける。
「これもすっごく昔の話だけど、その鬼人一族は、考え方の違いから、二つの種族に分かれたの…」
朝日が、遠い瞳で、広がる湖を見つめる。
「一つは、黒い髪と赤い瞳を持つ、“黒鬼（こっき）”一族…」
「黒い髪と赤い瞳っ…？」
太狼がその言葉に眉をひそめながら、そっと朝日を見つめる。黒い髪に赤い瞳は、まるで朝日の外見の特徴を表しているようであった。
「あたしたち鬼月の村に住む者の先祖で、平和を愛し、人との共存を望む一族よっ」
朝日の長い黒髪が、強い風になびく。
「もう一つは、白い髪と赤い瞳を持つ、“白鬼（びゃっき）”一族…」
途端に曇る、朝日の表情。
「古い昔にこの島を出た、殺戮と破壊を好み、鬼だけの世界を創ろうとしている一族…」
「黒鬼と…白鬼…」
「そう…」

繰り返す太狼に、朝日が深く頷く。

「じゃあその白鬼一族が、あの鬼たちを…？」

「ええっ」

朝日が鋭い表情を見せ、短く頷く。

「あれは、白鬼一族を率いる牢戸知玖が、人間たちの世界を侵食するために作り出した、“骸鬼（がいき）”っ…」

「牢戸…知玖っ…？」

初めて聞くその名に、太狼がそっと眉をひそめる。

「あたしたち黒鬼一族は、必死に白鬼一族を説得したわ…人とともに生きる道を選ぼうと訴え続けた…」

朝日の表情が、悲しげに曇る。

「でも、彼らは聞く耳を持たなかった…」

「……。」

悲しみの表情を見せる朝日に、太狼もつられるように下を向く。

「あたしたちが止めることも出来ないまま、彼らは骸鬼を生み出し続け、人の世界を攻め始めた…」

朝日が、見えはしない、湖の向こうにあるはずの御伽界を見つめる。

「これは、あたしたち鬼人が生み出してしまった問題…」

そっと曇る、朝日の表情。

「出来るなら、向こうへ行って、人間たちと一緒に戦いたい、けどっ…」

朝日の言葉が、途中で途切れる。

「朝日たち鬼を…人間たちは受け入れないだろうね…」

朝日が言えなかった言葉を代弁するように、太狼はそっと呟いた。

――――獣人である其方らを、認めるわけにはいかぬのだ…――――

“狼人”である太狼たちでさえ、認めない人間もいるのだ。朝日たち“鬼人”を認め、ともに戦おうと言う人間が、果たして何人いるだろう。協力してともに鬼を倒すどころか、同じ鬼の種族として、攻撃されることすら考えられる。

「そうよね…やっぱり…」

「……っ」

悲しそうに俯く朝日に、太狼の心がかすかに痛んだ。

「朝っ…」

「太狼っ」

「……っ？」

太狼が朝日を呼ぶよりも先に、朝日が太狼の名を呼ぶ。

「あたしね、本当はこの島を出て、もっと色んな処へ行って、もっと色んな人と出会ってみたかったのっ」
叶わぬ夢を語るように、過去形で話す朝日。
「人間でも獣人でもいい…色んな人と知り合って、友達になって、一緒に…生きてみたかった…」
「……。」
朝日の悲しげな背中を、太狼はただ、まっすぐに見つめる。
「だからねっ、太狼に出会えた時は、本当に嬉しかったのっ」
振り返った朝日が、太狼に大きな笑顔を向ける。
「人と獣人と鬼…みんなが、分け隔てなく、一緒に生きていける世界が、あれば良かったのになっ…」
「朝日っ…」
残念そうに微笑む朝日に、太狼がそっと目を細める。
「俺がっ…創るよっ！」
「えっ…？」
思い切って声を出す太狼に、朝日が目を丸くする。
「俺が創るっ！！」

朝日をまっすぐに見て、太狼がもう一度強く、言い放った。

「悪い鬼をやっつけてっ、朝日たちが人間や獣人と、一緒に生きていけるような、そんな世界をっ！！」

「太狼っ…」

純粋な笑顔で、少しの曇りもなく言い放つ太狼に、朝日が目を細める。

「だから待っててっ！朝日っ！」

「ありがとうっ…」

朝日がそっと目を伏せる。

「太狼っ…」

朝日は、どこか噛み締めるように、礼を言った。

「よしっ！」

一旦、龍国へと戻った太狼は、父の遺品の中から、一本の刀“神狼丸”を手に取った。

「おいっ！太狼っ！一人で出歩くのはいい加減にっ…！」
「今、忙しいから、また後で聞くぅ～っ！」
「はぁっ？」
座黒の注意を受け流し、刀を手にした太狼は、またすぐに龍国を後にする。

「何だぁ？あいつはっ」
「でもあの子…」
首を傾げる座黒の横で、座黒の妻がそっと微笑む。

「前よりずっと、いい顔になったわ…」

初めて、強くなりたいと思った。
朝日のために、朝日の願いを叶えるために。

――――強さというのはね、力の強さばかりを言うのではないんだよ…――――

あの時の父の言葉も、今なら少しだけ、わかる気がした。

「朝日ぃぃぃ〜〜っ！！」

神狼丸を持った太狼は、鬼が島の岸に辿り着くと、素早く海岸に上がり、いつものように大きな声で、朝日の名を呼んだ。

「朝日ぃぃ〜っ！俺っ！刀をっ…！んっ？」

すぐに村の方へと駆けて行こうとした太狼であったが、海岸沿いに何かを見つめ、踏み出そうとしていたその足を止めた。

「うっ…」

波打ち際に、一人の男が横たわっている。水と砂にまみれた男は、ひどく弱った様子で、苦しげな声を漏らしていた。

「人っ…？」

首を傾けながら、太狼がゆっくりと、その男のもとへと歩み寄っていく。

「……？あっ…」

男の顔を覗き込んだ太狼が、思わず驚いたような声を出す。

「うぅっ…」

倒れているのは、黒い髪の、きれいな顔立ちをした、まだ若い男。

「この人っ…」

太狼は、その男に見覚えがあった。

――――破狼さんっ！――――

父と武国へ訪れた時に会った、武国主子息・玄上武矢だ。

「なんで…こんな所に…」

「あっ！太狼ぉ～っ？まぁ～た、来たのぉ～っ？」

「……っ」

後方から聞こえてくる声に、太狼が振り返る。

「朝日っ…」

「少しは家でゆっくりして来なさいって、言ったでっ…んっ？」

太狼に注意するように言葉を発していた朝日が、太狼のすぐ後ろに、倒れている男を見つける。

「ひっ人っ…！？」

焦ったような表情を見せ、男のもとへと、慌てて駆け込んでいく朝日。

「大丈夫ですかっ…！？」

強く呼びかけながら、朝日が、その男の体を砂浜の上へと、引っ張っていく。

「太狼っ！村へ行って、誰か力のある男連れて来てっ！」

「あっうんっ」
焦って言う朝日に、太狼が頷き、すぐにその場を駆け出していく。

「大丈夫ですかっ!?大丈夫ですかっ!?」
「……っ」
村へと急ぎながら、太狼が、男に必死に呼びかけている朝日の方を振り返る。

「しっかりして下さいっ…!」
「うっ…」

朝日の声に、かすかに体を動かす男。

それが、竹取朝日にとっての、“運命の出逢い”だった……。

第７２章　狼少年と朝日　★５

海岸に倒れ込んでいた男を、朝日は村人たちの力を借りて、自分の家へと運び入れた。

「んっ…んんっ…」

寝台に寝かせ、丸一日が過ぎた頃、男はやっと、その深く閉じた瞳を開いた。

「ここ…はっ…？」

見慣れぬ天井を見つめ、男がそっと眉をひそめる。

「気が付いた？」

「えっ…？」

横から聞こえてくる声に、男がゆっくりと振り向く。

「玄上武矢さんっ」

「……っ」

寝台の横に座り、男にそっと微笑みかける朝日。朝日が呼んだ名に、男は驚きの表情を見せて、勢いよく寝台から起き上がった。

「なっなんでっ…僕の名前っ…」

「太狼から聞いたの」

「タローっ…？」

「……っ」

「あっ」
朝日の後ろから、こっそりと顔を出した太狼を見て、武矢が目を見開く。

「君は、破狼さんのっ…」
武矢が少し驚いたように、太狼を見た。太狼のことは、覚えていたらしい。

「一応、お医者さんに見てもらったけど、ただの体力の限界ですって」
「ああっ…」
朝日の言葉に、武矢が少し困ったように頭を掻く。

「すみませんっ…泳げばすぐに着ける距離だと思ってたもので…まさかこんなに遠いとはっ…」
「普通の人間には無理よぉっ、体力バカの狼少年でもないとっ」
「うるさいなぁっ」
悪口のような朝日の発言に、太狼が少し顔をしかめる。

「でっ？そんな体力の限界にまで挑戦して、この島に何の用だったわけ？」
「へっ…？」
朝日の問いかけに、武矢が目を丸くする。

「ああっ！そうだっ！！」
『うわっ』
いきなり大きな声を出す武矢に、太狼と朝日が驚いたように体をひく。

「お願いですっ！今すぐっ、御伽界中の鬼人を、退いて下さいっ！」
「はっ？」
「話し合いで解決しましょうっ！！」
「はぁっ？」
「はぁっ…」

まっすぐな瞳で訴える武矢に、朝日は勢いよく顔をしかめ、太狼は深々と溜息をついた。

「黒鬼と白鬼っ…成程っ！そういうわけだったんですかぁっ！」

朝日から、以前に太狼が聞いた話を同じ話を聞くと、武矢はやっとすべてを理解したようで、納得したように大きく頷いた。

「飛んだ勘違いをっ…すみませんっ！」
「別にいいけどっ…」
謝る武矢に、朝日は力の抜けた様子で言い放つ。

「ということはっ、その白鬼一族さんのところへ、話し合いに行けばいいんですねっ！」
「話し合いなんかしたって、無駄なんじゃないかな…」
「というか話し合いに応じないわよ、まずっ」
眩しい程の爽やかな笑顔を見せて、言い放つ武矢に、太狼と朝日は、呆れたような表情を見せる。

「それでもいいんですっ！」
「えっ…」
「僕、ずっと、人も獣人も鬼も、みんなが分け隔てなく暮らせる世界を、創りたかったんですっ！だからっ！」
「……っ」

武矢のその言葉に、朝日が思わず目を見開く。武矢も笑顔は、毒気も抜けるような、そんなまっすぐで純粋な笑顔であった。

――――僕っ！決めてるんですっ！人間も獣人もっ、鬼もっ！どんな種族も分け隔てなく生きられる世界を創るってっ！――――

「……。」
太狼が昔、武国で会った時の、武矢の言葉を思い出す。

――――ハハハっ、それは楽しみだっ――――

父が、楽しみと笑ったあの時。笑顔も言葉もその意思も、あの時から少しも変わっていないようであった。

「私もっ…」
「……っ？」
小さく声を発した朝日に、武矢が視線を向ける。
「私もずっと…そんな世界があればいいって…思ってた…」

「……っ」
穏やかに微笑む朝日に、少し目を見開く武矢。

「じゃあ、一緒に創りましょうっ」
武矢が微笑み、朝日へゆっくりと手を伸ばす。

「みんなが笑って生きられる世界をっ！」
「……っ」
朝日は嬉しそうに微笑み、伸ばされた武矢の手を取った。

「……。」
手を取り合い、微笑み合う朝日と武矢を、太狼はただ、じっと見つめていた。

――――俺が創るっ！！――――
その言葉を言ったのは、太狼の方が先なのに。

「ふぅ～っ！栄養のあるものでも作るかなぁっ」

武矢の休む寝室を出た朝日は、少し気合いを入れるようにして、台所へと立った。

「……。」

同じように寝室を出た太狼が、ダイニングテーブルに座り、朝日の背中を見つめる。

「いいのっ？朝日っ…」

「へっ？」

問いかける太狼に、朝日が振り返る。

「何がっ？」

「玄上武矢のことっ」

太狼が少ししかめた表情で、短く答えた。

「玄上って“玄神”の血を引いた一族だよっ？朝日の一族の“鬼神”と戦ったっ」

「戦ったって、神話の話でしょっ？一体、どれだけ前の話よっ」

「そうだけどさっ」

笑って言い返す朝日に、太狼が少し口を尖らせる。

「でもっ…」

「……っ？」

言葉を付け加える朝日に、太狼が少し首を傾げる。

「“玄神”の血を引くあの人と、“鬼神”の血を引くあたしが、長い時を超えて出会ったなんてっ…」
朝日が、嬉しそうに微笑む。
「何かっ…“運命”って、感じがするよねっ」
「……っ」
微笑む朝日に、太狼がそっと目を細める。
「……。」
太狼はそのまま、ゆっくりと俯く。
出会ったのは、太狼の方が先なのに。
運命が出逢わせた、朝日と武矢の二人は、それが当然のように、互いのことを愛し始めた。
「朝日…」

「武矢っ…」

緩やかに時は流れ、やがて二人は結ばれる。

「……。」

太狼はただ、結ばれる二人を、どうすることも出来ずに、見つめていた。

朝日は、武矢と結婚し、玄上朝日となった。

とはいっても、武矢の家・玄上家は、鬼人である朝日を武矢の結婚相手としては認めず、玄上の者たちに反対された武矢は、次期国主の座を放り、玄上の家から飛び出すようにして、鬼が島へと戻ってきた。

そんな状況での結婚であったが、二人に後悔の色はなかった。

そしてさらに緩やかな時が流れ、太狼も十歳になった頃。

「元気な女の子ですよぉっ」

「女の子っ…」
「よく頑張ったね、朝日っ」
武矢と朝日の間に、子供が生まれた。

「見てっ、太狼っ」
「……っ？」
朝日が、布に包まれた、生まれたばかりのその子を、太狼の前へと差し出す。

「“輝矢”っていうのよっ」
「かぐや…？」
笑顔の朝日が言ったその名に、太狼がそっと首を傾げる。

「もう決めたの？名前っ」
「決めてたのよ」
少し顔をしかめる太狼に、朝日が穏やかに微笑みかける。

「男の子かも知れなかったのに…」
「輝矢なら別に、男の子でも大丈夫でしょうっ？」
「適当だなぁ～っ」
得意げに話す朝日に、太狼が少し呆れたように肩を落とす。

「鬼人たちに伝わるお話の、月のお姫様の名前なんだって」
「へぇっ」
武矢の言葉を聞きながら、太狼が生まれたばかりの、その“輝矢”という名前の子供を見つめる。

「月のっ…」
「そう、私が朝日で、昼を照らすから…この子は月で、夜を照らすのっ」
「照らす…」
朝日の言葉を繰り返しながら、太狼がゆっくりと手を伸ばす。
「輝矢っ…」
生まれたばかりのその命に、太狼はそっと手を触れた。

その頃、武国。

「鬼人の出現は増えるばかり…」
「このままでは本当に、御伽界が鬼に支配されてしまう…」
「国主殿っ…」

困り顔の仕官たちが見つめる先に立つのは、厳しい表情を見せた武国主にして武矢の父の、玄上武雄。

「こうなれば…致し方あるまいっ…」

『えっ…？』

低い声を漏らす国主に、仕官たちが皆、眉をひそめる。

「“黒鬼”一族を使い…“白鬼”一族の力を封印するのだっ…」

生まれたばかりの命に、すでに不穏は、迫り来ようとしていた…。

第７３章　人と鬼の辿りし道　☆１

輝矢がこの世に生を受けてから、早くも六年の時が流れていた。
幼き少年であった太狼も十六歳となり、少年から青年へと成長しようとしていた。

御伽界中心部・“鬼が島”。

「“神狼丸”っ…」
漆黒の刀を構え、穏やかな緑色の瞳を、鋭い金色の瞳へと変える太狼。

「“狼刃”っ…！！」
太狼が勢いよく刀を振り切ると、神狼丸から、強い光の一閃が放たれた。

「うわあぁぁっ！」
一閃の向かう先に立った武矢が、焦ったような声をあげる。

「うわわっ！どうしよっ！？どうしよっ！？えぇっと、月器、月器っ…！」
焦った武矢が、胸元につけていた金色の三日月形のピンを、指で弾き飛ばす。

「“月器・十六夜”っ！」

弾き飛ばされたピンは、自動的に巨大化し、武矢の前で真ん丸に満ちて、盾のように一閃に立ち塞がった。

――――バァァァーンっ！！――――

盾が、太狼の放った一閃を、真正面から受け止める。

「ふぅぅぅ～～っ」

何とか防ぎきり、ホッとした様子で、深々と息をつく武矢。

「危なかったぁっ…」

「ちぇっ」

安心して胸を撫で下ろしている武矢を前に、太狼が顔をしかめる。

「消す気でやったのに、ダメだったかっ」

「ちょっと！太狼くんっ！？何、物騒なこと、言っちゃってるのかなぁっ！？」

悔しげに言い放つ太狼に、武矢が勢いよく突っ込みを入れる。

「だいたい太狼くんっ、消すってっ…」

「次は跡形も残らないよう、頑張るから」

「いやぁぁっ！！頑張らないでぇぇっ！！」

決意を持って言い放つ太狼を、必死に止める武矢。

「タローっ！強ぉぉ～いっ！」

「……っ？」

聞こえてくる幼い声に、太狼が振り向く。

「次こそっ、やっつけちゃえっ！」

そう言いながら、楽しそうな笑顔を見せて、太狼に大きく手を振るのは、長い黒髪に大きな黒い瞳の、まだ幼い少女。

「任せとけっ」

「うんっ！任せたっ！」

「えええ～っ！？そりゃないよぉ～っ！」

自信満々に言い放つ太狼に、少女がさらに大きな笑顔で頷く。そんな少女に、武矢が今にも泣きそうな表情を向ける。

「パパが太狼くんに倒されちゃってもいいっていうかいっ？輝矢ぁ～っ」

「いいっ！」

「えええっ！？」

すぐさま頷く少女に、激しく驚く武矢。少女の名は輝矢。武矢と朝日の間に生まれた娘も、もう六歳になっていた。

「動けなくなるくらいボロボロにされちゃっていいっ！」

「ぐあああーんっ！！」

幼いながらに冷たい言葉を吐く輝矢に、武矢がさらにショックを受ける。

「ううぅっ…輝矢がっ、輝矢がっ…パパよりも太狼くん派にっ…」

「親バカっ…」

地面に両手を付き、激しく落ち込んでいる武矢に、太狼が呆れきった視線を向ける。

「輝矢っ、パパはナイーブなのよ？」
輝矢の横に座る朝日が、輝矢の方を振り向く。
「ひどいこと言うなら、もう少しやんわりと、気付かれないように言うようにしなさい？」
「えぇ～っ？」
注意する朝日に、輝矢が少し不満げな声をあげる。
「気付いて、見るからに落ち込まないと、つまんないっ！」
「そこはひどいこと言わないように注意してよ、ママっ…そして輝矢っ…“つまんない”って…」
そのやり取りを聞き、さらに落ち込んでいく父・武矢。
「六歳にして、この容赦のなさっ…どうなってんだかっ」
「朝日に似たんじゃねぇの？」
「何ですってぇっ？」
口を挟んだ太狼に、朝日が鋭い瞳を向ける。
「あたしほど、口優しい人間がっ…というか鬼が、どこにいるっていうのよっ？」
「ホント、どこにいるんですかねぇっ？口優しい鬼っ」
熱く語る朝日に、太狼が冷ややかな視線を送る。
「まっ、それにしてもっ」
朝日がしかめていた表情を、笑顔へと変えた。
「本当に強くなったわねぇ、太狼っ」

朝日が、太狼にそっと微笑みかける。

「鬼相手にビビりまくって、あたしの後ろに隠れてた頃が、ウソみたいっ」

「後ろに隠れた覚えはねぇーよっ」

朝日の言葉に少しムッとなって、すぐさま言い返す太狼。

「でも本当に強くなったよねぇ～破狼さんを越えたんじゃないかい？」

「そんなっ…父さんに比べたら、まだまだだって」

月器を元のピンに戻しながら言う武矢に対し、太狼が強く首を横に振る。

「まったまた謙遜しちゃってぇ～っ！巷じゃオトポリより、少年剣士“桃タロー”の方が、よっぽど頼りになるって有名よぉっ？」

「どんな巷で聞いて来たんだよっ」

まるで自分のことのように微笑む朝日に、またもやすぐに言い返す太狼。

鬼が島から出たことのない朝日が、どんな巷で聞いてきたのかなど限られているが、朝日の言ったことは、すべて事実であった。

輝矢が生まれてすぐに、太狼は刀の腕を磨くための旅に出て、修行を積んだのである。それから数年、こうして鬼が島に来る回数は減り、太狼は御伽界の各地を転々として、そこに出る鬼を退治していた。そう、かつての父・破狼と同じように。

その結果、最近、龍国で形成された対鬼人用組織・御伽警察こと“オトポリ”よりも、すっかり有名となり、人々から“桃タロー”と呼び名をつけられ、賞賛されるようになったのである。

「世界を救うのは“桃タロー”だって、世界の人はみぃ～んな言ってるってっ」
「凄いねぇっ！太狼くんっ！」
「すごぉ～いっ！タローっ！」
朝日の言葉に、武矢と輝矢が目を輝かせる。

「こんな時代だからね、みんな藁にも縋る思いってやつだろ？別に凄くないって」

太狼が素っ気なく答える。

「クールぅ～っ」
「タローっ！くぅ～るぅ～っ！」
「太狼くんらしいけどね」

口をすぼめて言い放つ朝日の、真似をするように続く輝矢。武矢は穏やかな笑みで、そっと呟く。四人は、太狼も含めて、まるで家族のような、そんな温かい空気に包まれていた。

「それにっ…」
しかし、太狼の声のトーンが急に落ちる。

「いくら骸鬼を倒したって、世界は救えない…」
険しい表情を見せる太狼。

「骸鬼を生み出し続けている…白鬼一族の連中をどうにかしないとっ…」
『……っ』

太狼の言葉に、朝日と武矢も厳しい表情を見せる。

人も獣人も鬼も、分け隔てなく生きていける世界を創ろう、と、朝日と武矢が約束してから数年。二人は鬼月の村の黒鬼一族たちの協力も得て、白鬼一族と話し合いの場を設け、人とともに生きていくことを申し出たが、白鬼一族はそれを受け入れず、二人の試みは失敗に終わった。

それから白鬼一族の生み出した、骸鬼による御伽界侵攻は益々激化し、もう話し合いではどうにもならないところまで、世界は来てしまっていた。

「どうにか、か…」

「……。」

悩むように呟く朝日の横で、武矢がそっと視線を落とす。

「朝日、武矢殿」

『……っ？』

名を呼ぶ声に、朝日と武矢が振り返る。

「村長っ」

二人が振り返ると、そこには鬼月の村の村長が立っていた。

「話がある。私の家まで来てくれ」

『えっ…？』

真剣な表情でそう言い放つ村長に、二人がそっと眉をひそめる。

『……っ』

朝日と武矢は互いの目を合わせ、どこか浮かない表情を見せ合った。

「太狼、輝矢のこと見といてね」

「えっ？あっああ」

朝日は太狼に輝矢のことを頼むと、武矢とともに、村長の家へと向かっていった。

「……っ」

その場に残った太狼が、少し考え込むような顔を見せる。

「何だろっ？」

「……さぁ、何だろうね…」

無邪気に問いかける輝矢に、太狼はそっと表情を曇らせた。

鬼月の村・村長の家。

「武国が白鬼一族と接触っ？」

大きく顔をしかめた朝日が、村長の言葉を繰り返した。

「本当なのっ？それっ」

「ああ…確かな筋からの情報だ…」

「……っ」

深刻な顔を見せて頷く村長に、武矢がそっと俯く。

「父上っ…」

武国といえば、武矢の父が治めている国。朝日を否定したため、武矢が見切りをつけた国であった。

「我らの情報が、白鬼一族に渡った可能性が高い…」

「白鬼一族にとって、あたしたち黒鬼一族が、世界侵攻に一番邪魔な存在だものね」

朝日も村長と同じように、険しい表情を作る。

「ここが…戦場になると…？」

「……。」

その朝日の問いかけに、村長は答えることなく、ただ深々と頭を下げた。

「……っ」

そんな村長を見て、朝日もそっと唇を噛み締め、視線を下に落とす。

「……すみません…」

『……っ？』

そっと呟いた武矢に、朝日と村長が顔を上げる。

「僕が武国に残って…もっとちゃんと話が出来ていれば…」

「そんなっ、武矢のせいじゃないわっ」

「そうですぞ、武矢殿」

武矢が申し訳なさそうな顔を見せると、朝日と村長はすぐさま、武矢の言葉を否定した。朝日に続いた村長が、まっすぐに武矢の方を見る。

「白鬼一族の問題は、元はといえば、彼らを止められなかった我ら、黒鬼一族の責任っ…」

村長が、武矢を見つめるその目を、そっと細める。

「私はむしろ、感謝しております」

「えっ…？」

武矢が、村長の言葉に、首を傾げる。

「貴方のような、“玄神”の血を引く御方に、“人と獣人と鬼、皆が分け隔てなく生きられる世界を創る”と言っていただけたことに…」

「村長さん…」

優しく微笑みかける村長に、少し悲しげな顔を見せる武矢。

「せめてっ…」

二人のやり取りを聞いていた朝日が、そっと声を漏らす。

「せめて…守ってあげたいな…」

朝日が、どこか遠い瞳を見せる。

「あの子のっ…子供たちの未来だけはっ…」

『……っ』

朝日の言葉に、武矢と村長も、考え込むような表情を見せた。

その日の夜、鬼が島に、激しい雨が降り注いだ。

「ううぅっ…うあああああっ！！」

幼い輝矢は、その瞳の色を赤くし、水力を暴走させて、鬼月の村の家を破壊した。

「武矢殿っ！輝矢がっ…！輝矢がっ…！！」

「……っ」

武矢が村人たちに呼ばれ、輝矢のもとへと向かった。

「“玄印封命”…」
「うっ…！あっ…ぁ…」

武矢の放った黒い光が輝矢を包むと、輝矢は暴走を止め、その瞳を元の黒色の瞳へと戻して、武矢の腕の中で、深い眠りについた。
鬼月の村に、静けさが戻る。

「ふぅっ」
「また暴走したのか？」
「……っ？」

一息ついていた武矢が、後ろから聞こえてくる声に振り返る。

「輝矢」
「太狼くん」

武矢の振り返った先に立っていたのは、少し眉をひそめた太狼であった。

「うんっ…」
「最近、雨降ると毎回だな…大丈夫なのか？」

太狼がしかめた表情のまま問いかける。

「村長さんのお話では、輝矢は人と鬼の混血児で、鬼化することが出来ないから、力が内に溜まっちゃうんだって」
「ふぅ～ん」

浮かない表情で話す武矢に、太狼が素っ気ない相づちを返す。

「だから雨の日とか、水が身近にくる日は、水力が暴走しやすくなるみたいっ…」
武矢の表情が、さらに曇る。
「暴走する度にこうやって、玄上の“玄神”の力で抑えてやらないと…輝矢自身の体に負荷をかけてしまうし…」
「玄神の、か…」
恐らくは輝矢の中に流れる玄神の力を強め、鬼神の力を抑え込むという原理なのだろう。人と鬼の血を引いている輝矢は、やはり普通の生活をすることも厳しいのかも知れない。
「暴走って、これからもずっと続くものなのかな？」
少し心配するように、問いかける太狼。
「いやっ…輝矢が一人前になれば、自分で自分の力をコントロールできるようになるはずだよっ」
武矢が、少し考えるような顔を見せながら、太狼の問いかけに答える。
「月器を使えるようになれば、ある程度は抑えられるようになると思うしっ…」
「そっかっ」
「……。」
太狼との会話を続けていた武矢が、そっと目を落とす。
――――ここが…戦場になると…？――――
――――せめて…守ってあげたいな…あの子の…子供たちの未来だけは…――――

村長と話していた、朝日の言葉が思い出される。

「……っ」

どこか意を決したかの表情で、武矢がゆっくりと顔を上げた。

「太狼くん…」

「んっ？」

「もし、僕に何かあったら…その時は、輝矢のことを頼みたい…」

「えっ…？」

真剣な表情で言い放つ武矢であったが、太狼はその突然の言葉に、戸惑うように顔を上げた。

「いきなり何っ…」

「力の暴走を止められるのは、玄上の血を引く者だけだ…」

問いかけようとした太狼の言葉を遮り、武矢が真剣なその言葉を続ける。

「君のお母さんは、玄上分家の人間、君も玄上一族の血を引いている…」

「それはっ…そうだけどっ…」

「他に玄上一族で信用出来る人間なんていない…これは、君にしか頼めないことなんだっ…」

「……っ」

向けられる、あまりにもまっすぐなその瞳に、太狼がそっと目を細める。

「輝矢のことを頼む…太狼くんっ…」

武矢が太狼をまっすぐに見つめたまま、もう一度、願う。

「この子が…一人で生きていけるようになる、その日まで、見守ってあげてほしい…」

腕の中で眠る輝矢の頬を、武矢が愛しそうに撫でる。

「僕の、代わりにっ…」

「……。」

曇りのない、強い意志を感じさせる瞳。そこには迷いなどないかのようで、行き着く先などないかのようで、それなのに、生まれたばかりの子供のようにキレイな瞳。朝日の、愛した瞳。

「……っ」

太狼が、そっと目を伏せる。

「わかった…」

「……っ」

小さく頷いた太狼に、武矢が少し驚くように目を開く。

「ってか、んな心配必要ねぇーだろっ?あんたみたいな天然間抜け

は、絶対無駄に長生きだってっ」

そう言いながら、太狼が武矢に背を向け、どこへともなく歩き去っていく。

「……。」

その場に残った武矢が、眠る輝矢を見つめながら、笑みを浮かべる。

「ありがとう…太狼くん…」

届きはしない礼を、呟く武矢。

「頼んだよ…」

武矢は願うように囁き、そっと目を閉じた。

第７３章　人と鬼の辿りし道　☆２

「ったく、何々だぁ？武矢のやつっ」

武矢と輝矢のもとから歩き去った太狼は、雨の降り止んだばかりの空の下、森を抜け、鬼が島の海岸へと足を進めていった。

「んっ？」
「あれっ？」
太狼が海岸へと出ると、波際に、すでに人影が佇んでいた。

「朝日っ」
「太狼」

海岸に一人立ち尽くし、広がる御伽湖を見つめていたのは、朝日であった。

「どうしたの？」
「ああ、龍国に戻る。鬼退治の依頼、入ったって」
「そうっ」
答える太狼に、朝日が優しく微笑みかける。

「それはお疲れ様ですっ、桃タロー様っ」
「茶化すなよっ」

朝日にしかめた表情を向けながら、太狼が朝日の横へと並ぶ。

「朝日は？こんなところで何してんのっ？」
「んっ？そうねぇ、ワカサギ釣りっ？」
「今考えたと言わんばかりのウソだな」
あからさまな嘘を言い放つ朝日に、太狼が少し冷たい視線を送る。
「今日は何か変だな、朝日も武矢もっ」
「武矢も？」
太狼の言葉に、朝日が目を丸くする。
「武矢が変なのは、いつものことよ？」
「そういうことばっか言ってから、輝矢が影響されんだよっ」
何の悪びれもなく言い放つ朝日に、太狼が呆れるように肩を落とす。
「何？武矢、何かしたの？」
「したわけじゃねぇーけどっ、何かいきなり、“輝矢を頼む”とかマジな顔で言ってくっからっ…」
「……っ」
太狼の言葉に、朝日がそっと眉をひそめる。
――――武国が白鬼一族と接触っ？――――
――――父上っ…――――
自国が白鬼一族と接触したと聞き、責任を感じるような顔を見せていた武矢。

「……。」
そんな武矢を思い出し、朝日が表情を曇らせる。

「嫁にやる前みたいな感じでさっ、参っちゃうよなぁっ」
「そうよねぇっ」
朝日がすぐにひそめていた表情を戻し、大きく頷く。

「輝矢にだって、選ぶ権利くらいあるわよねぇっ」
「俺にだってあるんですけどぉ？」
非難するように言う朝日に、太狼が軽く右手を上げて、自己主張をする。

「何よっ？あたしの娘に不満があるってのぉっ？」
「朝日の娘だから不満なんです」
「何ですってぇっ！？」
太狼のトゲのある言葉に、朝日が思い切り顔をしかめ、殴ろうとする格好だけをしてみせる。

「なぁ～んてねっ」
「……っ？」
朝日がそっと微笑み、上げていた手を下ろす。

「じゃあ変ついでに、あたしも普段言わないことでも言っとこうかなぁ～っ」
「へっ？」
そう言いながら、湖の方を見つめる朝日に、太狼が少し戸惑うように、首を傾げる。

「太狼っ、覚えてるっ？ここで、初めて会った日のことっ」
「えっ…？」

――――鬼っ…――――
――――こんなところまで泳いで来たの？あなたっ――――

どこかへ行きたくて、どこへも行けなくて、太狼はここに辿り着いた。この鬼が島の海岸に泳ぎ着き、そして、朝日と出会った。

「あっ、ああっ…」
太狼が少し詰まりながら頷く。
「本当はね、太狼の他にも結構いたの。この島に泳ぎ着いた人っ」
「えっ？」
朝日の言葉に、太狼が驚いたような顔を見せる。

「溺れて流れ着いちゃった人とかっ、興味本位でやって来る人とかねっ」
穏やかな笑みで湖を見つめながら、朝日が言葉を続ける。

「でもみんなっ、あたしの鬼化した姿を見て鬼人だって知ると、逃げるように帰っていったわ…」
「……っ」
どこか悲しげな瞳を見せる朝日に、太狼がそっと目を細める。

「あたしが鬼だって知っても、普通に話しかけてくれたのは、太狼だけだったっ」

――――朝日は鬼なのっ？――――

怯えることはあっても、逸らされることはなかった、その純粋な瞳。

「普通って…それなりに怖がってたんだけどっ…」

「ウフフっ、知ってるっ」

顔をしかめる太狼を見て、朝日が楽しそうに笑う。

「でもっ、嬉しかったのっ」

「……っ」

本当に心から嬉しそうに笑いかけてくる朝日に、顔をしかめていた太狼が、少し戸惑うように、視線を横へと逸らした。

「普通に話してくれて、普通に笑いかけてくれて、普通に一緒にいてくれてっ…」

朝日が微笑んだまま、言葉を続ける。

「あの日、あたしが“人も獣人も鬼も分け隔てなく生きれる世界があったら良かったのに”って言った時、“俺が創る”って言ってくれた時もっ…」

「……っ」

その言葉に、太狼が驚くように朝日の方を見た。

「すごく嬉しかったっ…」

「……。」

太狼に微笑みかける朝日を、太狼がまっすぐに見つめる。“俺が創る”と言った時のことなど、その後すぐに武矢が現れ、同じようなことを約束していたので、朝日はすっかり忘れているとばかり思っていた。

「あっ…えとっ…」

朝日が覚えていてくれたことに動揺し、少し言葉に詰まる太狼。

「あたしっ、太狼があたしの運命の相手だと思うっ」

「はっ？」

その思いがけない言葉に、太狼が勢いよく顔をしかめる。

「何、アホなこと言ってんだよっ？お前の運命の相手は武矢だろうがっ」

「あらっ？別に恋人や旦那だけが、運命の相手ってわけじゃないでしょっ？」

厳しい指摘をする太狼に、朝日が悪戯っぽく微笑みかける。

「あたしと太狼が出会ったのは、世界の運命だったのっ！絶対っ！」

「はぁっ…」

自信満々に笑う朝日に、太狼が深々と肩を落とした。

「だからっ…ありがとうっ、太狼っ…」

「へっ？」

「あたしと…出会ってくれてっ…」

「……っ」

その朝日の笑みは、出会った頃のままに優しくて、穏やかで、だが、まるで死に別れる寸前のように、どこか悲しみが滲み出ていた。
そんな朝日の笑みを、太狼は少し目を細めて見つめた。

「朝日っ…」
「んっ？」
そっと名を呼んだ太狼に、朝日が首を傾ける。

「絶対、創ろう…」

太狼がまっすぐに、朝日の方を見る。

「人も獣人も鬼も、みんなが笑って生きられる世界をっ」
「……っ」
真剣に言い放つ太狼に、朝日が少し目を見開く。

「……ええっ…」

だが朝日はすぐに笑顔を浮かべ、太狼のその言葉に、深々と頷いた。

その約束は、別れないでいるための、一緒にいられる時間を、少しでも長く繋げるための、太狼の必死の願いであったのかも知れない。

その後、太狼は、鬼退治の依頼のため、鬼が島から龍国へと戻った。

「はぁ～っ、終わった終わったっ」

すぐに依頼の鬼退治を終えた太狼は、エセお菓子の家に戻り、素早く荷物を整えて、鬼が島へ戻ろうとしていた。

「あれっ？兄貴、また出掛けるんですか？」

「……っ」

太狼が玄関を出ようとしていたその時、二階から次狼が降りてきた。次狼も十二歳となり、龍国に来た頃と比べると、すっかり大きくなっていた。

「ああっ、悪いっ」

「別に謝ることないですよっ、今回は？長いですか？」

「あぁ～っ、ちょっとわかんないなっ」

「そうですかぁ」

「悪いっ」

「だから謝らなくていいですってばっ」

家を空けてばかりの太狼は、大きくなったとはいえ、まだ幼い次

狼に、申し訳ないという気持ちを抱き続けていた。常に謝る兄に、次狼が少し困ったような笑みを浮かべる。

「兄貴がいない方が、食生活、砂糖づけにならなくっていいですしっ」

「お前の激辛好きも、体には決してよくないと思うけどな…」

はっきりと言い放つ次狼に、太狼がこっそりとした突っ込みを入れる。

「あっ、新しく友達が出来たんですっ！諸刃っていう奴っ！」

「諸刃っ？」

「トマトさんのところに居候してる奴なんですよっ」

「トマトぉっ？」

その名に、太狼は勢いよく顔をしかめた。

「あの変態バアさんかっ、あんま深く関わんなよっ？」

「大丈夫ですよっ、まだ若すぎるみたいで、四年後にまた旦那になれって言われましたからっ！」

「全然っ、大丈夫じゃねぇーだろうがっ、それっ」

次狼の答えに、太狼が少し呆れたように肩を落とす。

「今度、紹介しますねっ」

「ああっ、楽しみにしてる」

笑顔で話す次狼に、太狼もそっと笑顔を向ける。

「じゃあっ」

「はいっ、いってらっしゃいっ！」

笑顔の次狼に送り出され、太狼はエセお菓子の家を出た。

「……っ？」
家を出た途端に、家の前に待ち構えるように立つその人影に、太狼が思わず足を止める。

「座黒…さんっ…？」
「太狼…」

桃原家の前に立ち、太狼を待ち構えていたのは、いつもとは違い、険しい表情を見せた座黒であった。座黒は、龍国で数年前に組織された、御伽警察に所属しており、その黒い制服を身に纏っていた。

「何です？家にまで来て、何かっ…」
「どこへ行く…？」
「……っ」

鋭く問いかけてくる座黒に、太狼がそっと眉をひそめる。鬼が島のことや、朝日たち鬼人のことを、太狼はまだ、座黒やオトポリの者たちに話していなかった。

「おっ鬼退治ですよっ」
「どこへだ？」
「えっ…えっとっ、北だったかなぁ？あっ、南かっ？いやぁ、東っ、それとも西っ？」
何とか誤魔化そうとする太狼であったが、焦って東西南北をすべて並べてしまう。

「いっやぁ～最近っ、依頼が入りすぎて、もうどこへ行っていいのか、わからなっ…！」

「お前が鬼と関わりを持っているという情報が入ってきた」
「……っ」
座黒の言葉に、太狼がその表情を変える。
「俺が…鬼と…？」
「ああっ」
聞き返した太狼に、座黒が深々と頷く。
「ハっ」
太狼が鼻で笑い飛ばす。
「くだらないっ、誰がそんなことっ…」
「武国だ」
「……っ」
座黒の答えに、太狼がまた顔色を変える。
「武国っ…？」
――――ご無沙汰しておるな、桃原殿っ…――――
その国は、昔から、太狼と因縁の深い国。
――――太狼くんっ！――――
そして、武矢の国でもある。武矢と朝日のことがあったため、武国は鬼人のことも鬼が島のことも知っている。太狼が関わっていることも、知っていてもおかしくはない。

「ロクなことしない国だなっ…」
太狼が煩わしそうに、小声で呟く。

「お前は鬼退治をして“桃タロー”とまで呼ばれているが、本当は鬼と協力して人の世界を侵略する気なのだ、とまで言っていた」
「そんなことっ…！あっ…」

思わず声を荒げる太狼であったが、余計なことまで言いそうになったので、慌てて手で口を覆う。

「だからっ…？俺を取り調べでもしようっていうんですかっ？」
「私は武国のことをそこまで信用はしていない」
探るように問いかける太狼に、座黒がはっきりと言い放つ。

「すべてを鵜呑みにする気はないが、お前が何かを隠していることくらいはわかるっ…」
「……っ」
言い当てられて、太狼は少し気まずそうに、座黒から目を逸らす。

「話せとは言わん…だが、鬼やその戦いとは、あまり深く関わるな、太狼っ…」
「俺、退治屋なんだけどっ…」
「確かに、お前の力は、世界を平和にするためには、必要なものなのかも知れない…だが、お前はまだ若い…」
座黒の鋭い瞳が、太狼を突き刺すように見つめる。

「次狼もいる…」
「……っ」

その言葉に、そっと俯く太狼。

「お前に何かあっては、私も破狼殿に顔向けが出来ん…」

「……。」

座黒は、優しい人である。太狼が隠していることを知りながら、それを話せとは言わず、ただ、太狼のことを思い、次狼のことを思い、太狼の身を案じてくれている。好き勝手ばかりやっている太狼を、いつだって温かく見守ってくれている。まるで、本当の父親のように。

「座黒さっ…」

「とにかく、しばらくの間は龍国に留まれ」

「えっ…？」

何かを言いかけた太狼が、座黒のその言葉に、戸惑うように顔を上げた。

「どうも武国の動きが怪しい…色々と企んでいたようだが、ついに動き出したみたいだ」

「武国がっ…？」

「ああっ」

聞き返した太狼に、座黒は厳しい表情を見せて頷く。

「武国がっ…」

どこか考え込むように、俯く太狼。

――――僕に何かあったら、その時は…輝矢のことを頼みたい…――
――――
――――ありがとう、太狼っ…あたしと、出会ってくれて…――――

いつもと様子の違っていた、朝日と武矢。

「……っ」
太狼がハッとした表情を見せ、顔を上げる。
「下手に巻き込まれるとも限らん…お前は龍国にっ…」
「……っ！！」
「あっ！太狼っ！！」

座黒が言い終わらないうちに、太狼は物凄い勢いで、その場を駆け出していった。

「朝日っ…」

胸に、どうしようもないほどの不安が過ぎる。

「朝日っ…！！」

太狼は、ただ必死に、鬼が島へと急いだ。

第７３章　人と鬼の辿りし道　☆３

一方、鬼が島。

「村長っ！村長っ！！」

鬼月の村の前へと集まった村人たちの、中心に立つ村長のもとへ、どこかへ行っていたのか、村の男が慌てた様子で駆け戻ってくる。

「北の海岸にっ…！白鬼一族がっ…！！」

「やはり来たか…」

男の言葉を受け、村長が厳しい表情を見せる。

「もう…戦うしか、ないのね…」

「……っ？」

同じように厳しい表情を見せ、呟く朝日を、手を繋いで横に立った輝矢が、不思議そうに見上げる。

「その後方には、武国の者たちと見られる人影も多くありましたっ…！」

「やはり…我らと白鬼一族をぶつかり合わせ、我らともども、白鬼一族を封じようという魂胆か…」

「何てことっ…！」

村長の言葉を聞き、朝日と輝矢を挟むようにして立っている武矢が、声を荒げる。

「父上っ…！」

「お父さんっ？」
「武矢…」

苦しげに頭を抱える武矢に、輝矢は戸惑うように首を傾げ、朝日はどこか悲しげに武矢を見つめた。

「そんな顔をなさらないで下さい、武矢殿…」
「えっ…？」
村長の優しい声に、武矢がゆっくりと顔を上げる。

「こうすれば、この世界から“鬼”という脅威はなくなる…あなたのお父上の考えは正しい…」
「……。」
鬼人である皆を前に、かける言葉も見つからず、武矢がそっと俯く。

「それに、前にも申しましたが、このことは、元を正せば、白鬼一族をこの島の外に出した我ら黒鬼一族の責任っ…」
まっすぐに武矢の方を見る村長。

「我ら皆、白鬼一族とともに滅ぶ覚悟は出来ております」
「村長さんっ…」

穏やかに微笑みかける村長に、武矢がそっと目を細める。

「……っ」
そんな村長の笑みを見て、浮かない表情を見せていた朝日も、そっと笑みを浮かべた。

「そうよっ！あたしたちなら、全然大丈っ…！」
「お前は武矢殿とともに、ここに残れ、朝日…」
「えっ…？」
「……っ」
思いがけない村長の言葉に、朝日が戸惑うように振り返り、武矢も眉をひそめる。

「村長、何っ…」
「幼い輝矢には、親が必要だろう…」
村長が穏やかな笑顔で、戸惑うように見上げる輝矢を、見つめる。

「お前たちは生きるんだ…輝矢のためにっ…」
「けっけどっ…！」
朝日が思わず、大きな声を出す。

「あたしだって、黒鬼一族でっ…！」
「だからこそ、だっ」
「えっ…？」
強調するように言い放つ村長に、朝日がさらに眉をひそめる。

「ともに滅びる覚悟は出来ているが、我ら黒鬼一族は、完全に滅びてはならない…」

村長が朝日へ、真剣な表情を向ける。

「もしもこの先、同じようなことが起こった時に、同じ悲劇を繰り返さぬためにもっ…」
「……っ」
その強い眼差しに、朝日が少し目を細める。

「だからお前は生きて、そしてここにいる我ら、全員の意志を継いでくれっ…」
「村長っ…」
「元気でなぁっ！朝日ちゃんっ！」
「今まで色々っ、楽しかったよぉっ！」
「みんなっ…」

周囲の村人たちが、次々に笑顔で声を掛ける。その皆の顔を見回し、そっと唇を噛み締める朝日。

「朝日を頼みましたぞ、武矢殿っ」
「村長さんっ…」
微笑む村長に、武矢も悲しげな表情を見せた。

「朝日」
村長が改めて、朝日の方を見る。

「お前は昔から、ひどいじゃじゃ馬だった」
「じゃじゃ馬って…」
過去を思い返し、困ったように笑う村長に、朝日も小さく笑みを零す。

「人一倍手のかかる娘だったが、お前と過ごした日々っ、楽しかったよっ…」
「村長っ…」

優しく微笑む村長に、朝日がそっと目を細める。

「村長っ！白鬼一族がっ…！！」
「ああっ…」
村人の声に、村長が朝日たちに背を向け、その表情を鋭くした。

「行くぞっ！皆の者っ！」

――――ボォォォォ～～ンっ！――――

村人たちの体を、白い煙が包んでいく。

『うおおおおおおっ！！』

白い煙の中から飛び出て来た、角を持つ黒い鬼たちは、一斉に村を出て、島の北へと駆け出していった。

「みんなっ…」
遠ざかる背中を見つめ、そっと目を細める朝日。

「……っ」

朝日が強く歯を食いしばり、深く俯く。

「ねぇっ、お母さん、みんな、どこへ行ったの？」
朝日の手を握った輝矢が、その手を揺らし、俯いた朝日に問いか

ける。

「ねぇっ、お母さんっ」
「……。」
もう一度問いかける輝矢であったが、朝日は俯いたまま、答えようとはしなかった。

「朝日っ…」
そんな朝日を、武矢が心配するように見つめる。

「朝日っ！！」
『……っ』
そこへ聞こえてくる大きな声に、朝日たちが一斉に振り返った。

「朝日っ！！」
「太狼っ？」
「朝日っ！」

東の森を抜け、村へと駆けつけて来たのは、汗をかき、必死の表情を見せた太狼であった。驚いた表情を見せる朝日を見つけ、太狼がどこか安心したような表情を見せる。

「良かったっ！島の北に煙上がってんの、見えたからっ…！」
少し笑みを見せた太狼が、朝日たちのすぐ前まで駆けてくる。

「あれっ？村のみんなはっ…？」
「……。」

他に誰も姿の見えない村に、首を傾げる太狼の前で、朝日が険しい表情を見せる。

「良かった…来てくれて…」
「へっ？」
ポツリと呟いた朝日に、太狼が眉をひそめる。

「朝日っ、何がどうなってっ…」
「輝矢っ…」

問いかけようとした太狼の言葉を遮って、朝日が輝矢に呼びかけ、輝矢と視線を合わせるように、そっとその場にしゃがみ込む。

「大丈夫よね…？」

朝日が、輝矢の頬を撫でる。

――――お前は生きて、そしてここにいる我ら、全員の意志を継いでくれっ…――――

思い出される、村長の言葉。

「意志はっ…あなたが継いでくれるものっ…」
「お母さん…？」

辛いという感情を隠しきれていない、そんな笑みを向ける朝日に、幼い輝矢はただ、首を傾ける。

「さてとっ…」
「僕も行くよ、朝日…」
「えっ…？」
立ち上がった朝日に、そっと話しかける武矢。驚いた表情を見せた朝日が、素早く武矢の方を振り返る。

「武矢っ？」
「僕も行く」
「けどっ…」
「これは武国が引き起こした問題っ…君たち一族だけに、背負わせるわけにはいかない…背負わせたくないんだっ…」
「……っ」

動かせそうもないまっすぐな瞳で、穏やかに微笑む武矢に、朝日はそれ以上は何も言わず、ただ目を細め、武矢を見つめた。

「おいっ！勝手に話、進めんなっ！」
『……っ』
困惑した様子で声を挟む太狼に、朝日と武矢が振り向く。

「説明しろよっ！一体、何がどうなってっ…！」
「太狼っ」
「……っ？」
太狼の声を遮り、朝日が太狼を呼ぶ。

「輝矢をお願い…」
「えっ…？」

朝日が繋いでいた輝矢の手を、太狼へと受け渡す。小さな輝矢の手を託され、戸惑うように眉をひそめる太狼。

「お母さんっ…？」
太狼と手を繋いだ輝矢も、不思議そうに朝日を見上げる。

「輝矢、これっ」
「……っ？」

朝日の横から前へと出た武矢が、その場にしゃがみ込み、胸につけていた三日月形のピン、月器を手に取る。

「お守りだよ」
「お父さん…？」

月器を手渡し、そっと輝矢の頭を撫でる武矢。武矢のその微笑みを見ながら、輝矢が首を傾げる。

「太狼くんっ」
武矢が輝矢から手を離して立ち上がり、まっすぐに太狼を見つめる。

「約束、頼んだよっ…」
「武矢っ？朝日も、何言ってんだよっ…！？」

ただ微笑む朝日と武矢に、太狼は状況が理解出来ず、ただ混乱して、声を荒げる。

「さっきから何、わけわかんないこと言ってっ…！」
「この子のこと、守ってあげて…お願いっ、太狼っ…」
「……っ」

懇願する朝日に、いつもとは違う真剣な、ただならぬ空気を感じ、太狼が思わず黙り込む。

「いつか…この子が誰かを愛してっ…その人が、この子のことを守ってくれるようになる、その日までっ…」

朝日が、穏やかな笑みを、輝矢へと向ける。

「お願いっ、太狼っ」

もう一度、太狼の方を見る朝日。

「あたしの、“生きた意味”なのっ…」
「生きた意味っ…？」

太狼がその言葉に、そっと眉をひそめる。

――――お父さんの“生きた意味”は、きっとあるんじゃないかな…？ここにっ…――――

――――あなたが、お父さんの“生きた意味”にならなきゃっ……――――

それは、父の死んだ意味を求めていた太狼に、朝日が与えてくれた言葉。

「それってっ…」

だがそれは、死ににいく者の言葉のように思えた。

「朝日っ…！」

太狼が強く、だがどこか縋るような瞳で、朝日を見つめる。

「……っ」

縋るように見つめる太狼に、朝日はただ、満面の笑顔を見せるだけであった。

「あなたに会えて良かったっ…太狼っ…」

「……っ！」

その瞳に涙を溜める朝日の姿に、太狼が大きく目を見開く。

「ありがとうっ…」

「朝日っ…」

笑顔で礼を言う朝日に、太狼がそっと目を細める。

「輝矢っ…」

朝日が再びしゃがみ込み、小さな輝矢の肩に両手を置き、まっすぐに輝矢を見つめる。

「これから何があってもっ…決して泣いてはダメよ…？」

「お母さん…？」

悲しげな瞳で輝矢を見つめ、どこか願うように言い放つ朝日に、輝矢が戸惑いの表情を見せる。

「たった一人の、愛する人のために…強くなるのっ…」

「強く…？」

その言葉は、幼い輝矢にはまだ理解出来ず、輝矢は困惑するように首を傾けた。

「そうっ…」

朝日が、輝矢へ、強く微笑みかける。

「守られるお姫様なんかじゃダメよっ？王子様を守れる、強い女の子にならないとっ」

「おうじ…さまっ…？」

強く言い放つ朝日に、輝矢はまた首を傾げる。

「誰よりもっ…」

朝日が輝矢を抱き寄せ、包み込むように抱き締める。

「誰よりも強くなりなさいっ…輝矢っ…」

「お母さんっ…？」

きつく抱き締め、そっと呟く朝日に、輝矢が戸惑うような声を発する。

「たまには女の子らしくもしてね」

横からやって来た武矢が、少し困ったように微笑みながら、優しく輝矢の頭を撫でる。

「大切な人が出来たら…その人のことを、目一杯、大切にするんだよ…？」

武矢も、どこか願うように言う。

「どうか、元気で…」

「お父さんっ…？」

上から、輝矢と朝日を包むように、武矢が二人を抱き締める。深く目を閉じた父と母を、戸惑うように交互に見回す輝矢。

『……っ』

「お父さんっ…？お母さんっ…？」

ゆっくりと離れていく朝日と武矢を、輝矢が戸惑った表情のまま見上げる。

『さようなら…』

「えっ…？」

背を向ける父と母に、輝矢が思わず声を漏らす。

――――ボォォォォ～ンっ！――――

「……っ」
「あっ…」
白い煙に包まれ、鬼と化して現れた母を、輝矢は少し驚いたように見つめる。

「行きましょう、武矢っ」
「うんっ」
「あっ…！」

互いに頷き合うと、朝日と武矢は、輝矢が止める間もなく、村人たちが駆け出していった方と同じ、島の北へと走り去っていく。

「お父さんっ…！お母さんっ…！」
遠ざかっていく背中に、思わず声をあげる輝矢。

「待っ…！」
「……。」
「あっ…！」

追いかけていこうとした輝矢であったが、その左手は、強く太狼

に握り締められており、輝矢はその場から動くことが出来なかった。

第７３章　人と鬼の辿りし道　☆４

「ねぇっ、タローっ！みんなっ、どこへ行ったのっ？」
輝矢が振り向き、太狼を見上げる。

「私も行きたいっ！お父さんとお母さんのところっ、みんなのところへ行きたいっ！」
「……。」

その呼びかけに答えることはなく、太狼はただまっすぐに、もう見えなくなった朝日と武矢の消えていった方角を見つめていた。

「ねぇっ！タローっ！！」
輝矢がもう一度、強く太狼の手を揺らす。

「タっ…！」

――――バァアアアーーンっ！！――――

『……っ！』

輝矢が太狼の名を呼ぼうとしたその時、北の森の向こうから、大きな衝撃音が聞こえ、太狼と輝矢が一斉に振り向いた。

「水音…？」
それは、鬼人たちの使う水力の音。
――――バァァァァーンっ！！――――
「うあっ…！」
輝矢が振り向くと、すぐに次の衝撃音があがり、北の森から、大きな炎が舞い上がった。上がる炎に、輝矢が大きく目を見開く。
「何っ…？」
空へと突き上げる赤い炎を見ながら、戸惑うように声を出す輝矢。
「何っ…？みんなっ、何をしてるのっ！？どこへ行ったのっ！？ねぇっ！タローっ！！」
「……。」
必死に問いかける輝矢だが、それでも太狼は何も答えず、ただじっとその場に立ち尽くす。
「ねぇっ！タローっ！！？」
「クっ…」
強く呼びかける輝矢に、太狼がそっと唇を噛む。
「きゃあああああああっ！！」
「うわあああああっ！！」

「……っ！」

今度は遠くの方から悲鳴や叫び声が聞こえてきて、輝矢が勢いよく振り向き、険しい表情を見せた。幼い輝矢とはいえ、今、この島で起ころうとしていることは、何となく察しているようであった。

「お父さんっ…！お母さんっ…！」
「あっ…！輝矢っ…！」

輝矢が太狼の手を振り切り、父と母を追って、北の森へと駆け抜けていく。

「ダメだっ！戻れっ！！輝矢っ！！」
「お父さんっ！！お母さんっ！！」

太狼の言葉も聞かず、輝矢は小さな足を動かして、どんどんと先へと進んでいく。深い森を突き進み、炎の突き上げるその下へと向かっていく輝矢。

「ダメだっ！！輝矢っ…！！」
「うぅっ…！」

進んでいた輝矢の左手が、太狼の右手に掴み止められる。

「輝矢っ…！！」
「離せっ！！」

輝矢は大きく声を荒げ、右手に握っていた、武矢からもらった月器を、上へと放り投げた。

「“月器・三日月”っ！」

――――パァァァァァンっ！――――

三日月形のピンが、強い金色の光を放ち、輝矢の手には大き過ぎる大きさまで変形する。

「三日月っ…！！」

輝矢が手に余るほどに大きな三日月を、右手だけで必死に持ち上げ、強い剣幕で、自分の左手を握り締める、太狼の右手へと突き出した。

――――ブシュっ…！！――――

「えっ…？」

三日月に走る感触に、輝矢が思わず声を漏らす。

「……っ」

太狼の右手の甲に、貫通しそうなほどに深く突き刺さった、三日月の刃先。赤々とした血が流れ落ちる中、それでも太狼は、握り締めた輝矢の手を、離そうとはしなかった。

「輝矢っ…」

手から血を流したまま、表情一つ変えずにまっすぐに、太狼が輝矢を見つめる。

「ここにいるんだ…輝矢っ…」
「……っ」

まっすぐで、強くて、だが、輝矢よりも辛そうに見える、その瞳。諭すように、だが弱く震えるように聞こえてくる、その声。そんな太狼に、輝矢はそっと目を細めた。

「あっ…」

輝矢が、持っていた三日月を、力なく落とす。

――――パァァァーーンっ！！――――

『……っ！』

その時、太狼たちの前方に、突如、黒い光が突き上げた。

「これはっ…」

舞い上がっていた炎さえも掻き消し、辺り全体を包んでいく黒い光に、太狼が戸惑いながら目を見張る。

「おのれぇぇぇぇっ！！」

「……っ」

その黒い光の中から聞こえてくる声に、太狼がすぐさま振り向く。

「これは玄神の光っ…！武国めぇっ…！図ったかぁっ…！！」

悔しげに声をあげているのは、長い白髪に、冷たい真っ赤な瞳の一人の女。その周囲立っていた、白い皮膚の鬼たちが、苦しみながら、次々と倒れていく。

「牢戸…知玖っ…」

「……っ」

「うっ…！」

聞いたことだけのあるその名を、太狼が直感的に呟くと、黒い光

の中の女は、鋭く太狼の方を振り向いた。女の赤い瞳を向けられ、太狼が少し怯えるように、背筋を震えあがらせる。

「輝矢っ」
「えっ？」
瞬時に、輝矢を自分の後ろへと隠す太狼。

「玄上の者かっ…」
「……っ」
その女が、睨みつけるように太狼の方を見る。

「黒鬼どもを囮に使うとは、なかなか考えたものだなっ…だが、所詮は無駄なことっ…」
「えっ…？」
女の言葉に、太狼が眉をひそめる。

「この程度の力では、我らを完全に封じることは不可能っ！我らは、必ず復活するっ！！」

「……っ！」
「……っ」
驚く太狼の後ろで、輝矢もそっと表情を曇らせる。

「必ずなぁっ！！フハハハハハハっ…！！」

高らかに笑い声をあげながら、女が黒い光の中へと消えていく。

「……。」

掻き消えた笑い声に、厳しい表情を見せる太狼。

「あっ…！」

「……っ？」

後ろで声をあげる輝矢に、太狼が首を傾げる。

「お父さんっ！！お母さんっ！！」

「えっ…？」

輝矢の声に、驚いたように振り向く太狼。

「あっ…！」

太狼が振り向くと、消えたあの女が立っていた辺りから、少し離れたところに倒れ込んでいる、朝日と武矢の姿があった。二人も、突き上げた黒い光の中にいる。

「お父さんっ！！お母さんっ！！」

太狼の後ろから出て、光の方へと身を乗り出し、必死に父と母を呼ぶ輝矢。

『……っ』

「あっ…！」

その必死の声が届いたのか、倒れたままの朝日と武矢が、ゆっくりとした動作で、太狼と輝矢のいる方を振り向いた。振り向く父と母に、輝矢が大きく目を見開く。

「お父さんっ…！！お母さんっ…！！」

『……っ』

「……っ！」

呼び続ける輝矢に、そっと笑みを浮かべる朝日と武矢。笑顔を見せる2人に、輝矢も大きく笑顔を零す。

「お父さんっ！お母さっ…！」

輝矢が、笑顔で父と母を呼ぼうとした、その刹那。

――――バァァァァーーンっ！！――――

二人を包み込んでいた黒い光は、内から弾け飛ぶように、激しく爆発した。

「……っ！！」

目の前に広がる爆発に、大きく目を見開く輝矢。

「うぅ…ぁっ…ううっ…」

輝矢の口から、声にならない声が、零れ落ちる。

「……っいやあああああっ！！」

輝矢の悲痛な叫び声が、爆音の中へと、掻き消えた。

その爆発は、鬼が島の北部分を吹き飛ばし、その爆風で、森も鬼月の村も、見る影もなくなってしまった。

ただ荒地ばかりの広がるそこで、太狼と輝矢の二人だけが、立ち尽くす。

「……。」

茫然と、何もなくなった目の前の湖を、見つめる輝矢。

「お父さん…お母さん…」

輝矢が震える小さな声で、爆発の中に消えていった父と母を呼ぶ。

「……。」

その横で同じように茫然と、太狼も湖を見つめる。

「朝…日っ…」

――――太狼っ！――――

呼べば浮かぶ。太狼を、すべてから救ってくれた、あの笑顔。

「朝日っ…」

消えてしまった。目の前で。

「クっ…！」

歯を食いしばり、深く俯く太狼。胸に哀しみが込み上げてきて、今にも涙が溢れそうであった。

「……っ？」

だが俯いた太狼の瞳に映ったのは、自分よりも小さな、輝矢の姿であった。

「……。」

「……っ」

輝矢はただ真一文字に口を閉じ、何かを必死に堪えるような、そんな表情を見せている。震える肩の下、きつく握り締めた拳からは、余程強く力をこめたのか、ポタポタと赤い血が滴り落ちていた。

「輝矢っ…？」

目の前で親を、すべてを失ったというのに、涙一つ流さず、叫び声一つあげない輝矢。

――――これから何があっても…決して泣いてはダメよ…？――――

それは、あの時の朝日の言葉を、必死に守っているように思えた。

「輝矢っ…」

こんな小さな体で、必死に耐えている。こんなに幼いのに、必死に堪えている。太狼は今にも泣き出してしまいそうな程に苦しいというのに、同じくらい、いやそれ以上に苦しいであろう輝矢が、必死のその苦しみに耐えているのだ。

「……。」

そっと俯く太狼。

――――輝矢のことを頼みたい…――――

――――輝矢のこと、お願いっ…――――

「……っ」

思い出される言葉に、太狼が唇を噛む。

「クっ…！」

太狼は勢いよく体を横へ向け、その場にしゃがみ込んだ。

「……っ！」
「えっ…？」

悲しみに耐える輝矢を、唇を噛み締めた太狼が、強く抱き締めた。

「タっ…」
「大丈夫っ…」
「……っ？」

強く抱き締め、言い放つ太狼に、輝矢が戸惑うような顔を見せる。

「我慢するなっ…」
「えっ…？」
「俺の前でだけはっ…泣いていいっ…」
「……っ！」

太狼のその言葉に、輝矢が大きく目を見開く。

「うっ…ううぅっ…！」

細めた輝矢の瞳から、止めどなく零れ落ちていく、大粒の涙。

「ううぅぅっ…！！うあっ…！うあああああっ…！！」

輝矢はただ強く太狼にしがみつき、声を枯らして泣き続けた。

「うあああああああっ…！！」
「……っ」

涙に暮れる輝矢を抱き締めながら、太狼がそっと目を細める。

「大丈夫っ…」

輝矢を抱く手に、さらに力をこめる太狼。

「俺がっ…」

太狼が、そのまま目を伏せる。

「俺がもうっ…お前にっ…何も失わせたりしないからっ…」
「ううっ…ううぅぅっ…！」

太狼のその言葉に、輝矢の瞳から、さらに涙が零れ落ちた。

「……。」

広がる空を見上げ、そっと目を細める太狼。

――俺が創るっ！！――――
――――人と獣人と鬼っ、みんなが笑って生きられる世界をっ！――
――

守りたかったのは、世界などではなかった。

――――輝矢っ！――――
――――輝矢っ……――――
――――お父さんっ！お母さんっ！――――

本当に守りたかったのは、たった一つの、幸せな家族。

――――太狼っ……――――

生きていてほしかった。生きる意味をくれた、大切な人。

――――あたしっ、太狼があたしの運命の相手だと思うっ！――――

ずっと一緒にいたかった。

――――太狼とあたしが出会ったのは、世界の運命だったのっ！絶対よっ！――――

この世界でたった一人、愛した人。

「クっ…！」

思い出される朝日の笑顔に、太狼が強く、唇を噛む。

「うぅっ…！」

輝矢を抱き締める太狼の瞳から、一筋の涙が、零れ落ちた。

その後、少年は、残っていたすべての骸鬼を退治し、御伽界から“鬼”と呼ばれる生物を一掃した。

御伽界に平穏が戻り、人々は彼を、“桃タロー”と呼び、そして称えた。

こうして少年は、哀しみと別れを重ね、世界の英雄となった…―

―――

これは、一人の少年が、世界の英雄となるまでの物語。

第７３章　人と鬼の辿りし道　☆５

「めでたし、めでたし…」

すべてを話し終えた太狼が、穏やかな笑みを浮かべながら、御伽噺らしいその言葉で、話を締めくくる。

「何てねっ…」

そう言いながら、少し下を向いた太狼が、右手の甲に刻まれた刀傷を、左手でそっと撫でる。幼い輝矢が、三日月で突き刺した時に出来た傷は、十年経った今も、心に刻まれた傷とともに、消えることなく、ここに残っていた。

「どうだったぁ？」

すぐにその笑みを、冗談めいたものへと変える太狼。

「ちょっと長すぎたかなぁ？退屈したでっ…」

太狼が、その言葉を不自然に、途中で止める。

「……っ」

向かいのソファーに座る桜時を見て、驚いたような表情を見せる太狼。

「……。」

どこまでも透き通った、純粋な瞳を見せた桜時は、そのきれいな瞳から、一筋の涙を流していた。

「……っ」

桜時の涙を見た太狼が、そっと俯く。

――――いつか…この子が誰かを愛して…その人が、この子のことを、守ってくれるようになる、その日までっ……――――

朝日の言葉が、思い出される。

「……っ」

その言葉を思い、太狼はそっと口元を緩めた。

「……っ」

太狼たちのいる部屋の扉のすぐ外に立ち、中から聞こえてきた太狼の話を聞いていたアリスは、驚いたような、戸惑っているような、

そんな混乱した表情を見せていた。

「アリス…」

「……っ？」

名を呼ばれ、アリスが振り向くと、すぐ横には武史が立っていた。

「父…上っ…」

「あまり動き回ってはいけないよ…もう少し休んでいないと…」

「……っ」

優しく言い放つ武史に、アリスがそっと目を細める。

「私っ…知らなかったっ…」

「……っ」

震えたような声を出すアリスに、武史が眉をひそめる。

「輝矢にあんなことがあったなんて…！武国があんなことをしたなんてっ…！私っ、知らなかった…！」

「アリス…」

声を荒げるアリスに、武史が目を細める。

「どうしてっ…！？父上もみんなもっ、輝矢の母親は悪い鬼で、武矢様を騙しただけだって…！武国は悪い鬼を一掃しただけだって…！そう言っ…！」

「そう教えるように、言われていたんだよ…皆にね…」

「えっ…？」

武史の言葉に、アリスが戸惑うような声を漏らす。

「私自身、真実を知ったのは、国主の座について、しばらくしてだったしね…」

「そんなっ…」

アリスの表情が、険しいものとなる。

――――あぁ～んなことがあったんだものっ――――
――――生きていなくてぇ、いいんだよぉっ？――――
――――鬼のくせにぃぃっ！！――――

何も知らないままに、アリスが輝矢へ放った、数々の言葉。

――――ううぅっ…うぅっ…！――――

やっと辿り着いた、初めて出会った日に流していた、涙の理由。

「私っ…輝矢にひどいことっ…」
後悔するように、アリスが両手で、自分の口を覆う。

「なんてことっ…！」
「アリス…」

頭を抱えるアリスの肩を、武史がそっと抱き寄せる。

「輝矢が戻ってきたら、ちゃんと謝ろう…」
武史が優しい声で、諭すように言う。

「すべて…謝ろう…」
「うっ…！」

武史の言葉に、アリスは唇を噛み締め、深く深く、俯いた。

――――私は輝矢っ、竹取輝矢といいます――――

どんな思いで、生きてきたのだろう。

――――いやあああああああっ！！――――

目の前で、すべてを失って。

――――竹取輝矢っ、鬼退治いたしますっ！――――

どんな思いで、戦ってきたのだろう。

――――お父さんっ！！お母さんっ！！――――

共に生きようとした人間に、裏切られて。

――――ハチっ！――――

どんな思いで、笑っていたのだろう。

――――鬼のくせにいいいっ！！――――

人にも鬼にも、なれぬままで。

「……。」

輝矢のことを思い、桜時は涙の流れるその瞳を、深く閉じた。

「なっにぃ～っ？ハチ君ってば、昔の僕のあまりのカッコ良さに、グッときちゃったぁ～っ？」

「……。」

そこへ聞こえてくる、雰囲気をぶち壊すような、陽気で明るい声。

「確かに、あんなまっすぐな少年が、どうやってこんな腐った大人になったのかと思うと、グッとくるな…」

笑顔で問いかける太狼に、桜時は呆れきった表情を見せながら、その零した涙を腕で拭った。

「ハチ公っ」

「桜時」

「イヌコロっ！」

「……ああっ」

次々と呼びかけるゴン、由雉、門貴に、桜時がしっかりと頷く。

「行こうっ」

涙を拭った桜時が、強い意志を感じさせる表情で、顔を上げる。

「鬼が島へっ…！」

その頃、鬼が島。

「……。」

輝矢は立ち尽くす。あの日から、荒地になったままの場所。

――――いやあああああっ！！――――

輝矢が、すべてを失った場所。

「お父さん…お母さん…」

そっと父と母を呼び、輝矢は祈るように目を閉じた。

「どうしたの…？輝矢…」

「……っ！」

背後から聞こえてくる声に、輝矢は眉をひそめ、勢いよく振り向いた。

「悲しい過去でも…思い出していたのかな…？」

そう問いかけるのは、白髪に赤い瞳の少年・内兎であった。

「アナタはっ…」

現れた内兎に、少し驚いたような表情を見せる輝矢。

「アナタがっ…何故、ここにっ…」

「ここは…僕が生まれた場所…そして、僕が滅びた場所…」

「えっ…？」

内兎の答えに、輝矢が表情を曇らせる。

「滅びたっ…？」

――――我らは必ず復活するっ！！――――

「まさかっ…白鬼一族っ…？」

「もう、大丈夫だよ…輝矢…」

「……っ」

考え込むような表情を見せる輝矢に対し、内兎がゆっくりと右手を伸ばす。

「もう…悲しい思いなんてしなくていい…」

伸ばされた右手が、輝矢の方へと向けられて、止まる。

「君はもう…何も見なくていいんだ…」

「えっ…？」

内兎の言葉に、戸惑いの声を漏らす輝矢。

「ここでずっと…僕と一緒に暮らそう、輝矢…」

冷たく微笑んだ内兎が、ゆっくりと右手を上げる。

――――バァァァァーンっ！！――――

「……っ！！」

内兎が右手を上げたその瞬間、輝矢と内兎の立っているその周辺から、水で出来た壁が空へと突き上げ、二人を囲んだ。突き上げた水は2人の上空に天井を作り、細かい形を成していく。

「こっ…これはっ…」

水で作り上げられるその建物を見上げながら、険しい表情を見せる輝矢。

「この…」
「……っ？」
内兎の声に、輝矢が振り向く。

「僕らだけの、水の城でっ…」
「……っ」

内兎の言葉に、さらに厳しい表情を見せる輝矢であった。

第７４章　鬼が島へ　★１

太狼がすべてを話し終えてから、一時間後。武国入口前。

「やっと運転手の俺の出番っスねっ！！」

「出番って…」

入口前に停めてある黒のオープンカーのすぐ横に立ち、張り切ったように声をあげる羊スケに、ゴンが少し呆れた表情を見せる。

「ってゆうかさぁ～、鬼が島って御伽湖のど真ん中にあるわけでしょ～っ？」

「あっ！ホンマやっ！車じゃ行かれへんやんっ！」

「ええぇ～っ！？俺の出番はどうなるんスかぁ～っ！？」

「お前の心配はそれかよっ」

どうやって鬼が島へ行くかよりも、自分の出番がなくなることを心配している羊スケに、さらに呆れた表情となるゴン。

「でも確かに困るよなぁ～っ、バカみたいに泳いでいくわけにもいかねぇーしぃっ」

「それは僕に対する嫌味と取っていいのかなぁ～？ゴ～ン～っ」

「うげぇっ！？」

考え込んでいたゴンが、太狼に冷たく凍りつきそうな笑みを向けられ、勢いよく顔を引きつる。

「違います！違います！そんなつもりは微塵もっ…！」

「ふぅ～んっ…」

ゴンが引きつった笑みを浮かべ、必死に否定するが、太狼は冷たい瞳を向けたままであった。

「この玄神山をまっすぐ南下した先の御伽湖の岸に、武国所有の小船がある…」
『……っ？』
聞こえてくる声に、一斉に振り向く皆。
「それを使うといい…」
『こっ…国主様っ…！』
そこへと現れた武史に、門を守っていた左助と右助は、急にあらたまって、深々と頭を下げた。国主である武史が武国の入口まで出てくるということが、相当に珍しいことなのだろう。
「小船を…？」
「ああ…それを使えば、一時間ほどで鬼が島へ辿り着けるはずだよ…」
眉をひそめ問いかけた桜時に、武史が穏やかな笑みを浮かべる。
「……っ」
武史のその笑みに、さらに眉をひそめる桜時。
「……っ」
戸惑うように問う桜時に、武史がそっと目を落とす。
「何故…俺たちに協力を…？」
「今回のこと、十年前のこと…確かに、武国があの子にしてきたことは…許されるはずもないことだ…」
「……。」

武史のその言葉を聞き、過去を思い返したのか、太狼もそっと俯く。

「船を貸すくらいで許されようとか、そういった気はない…ただっ…」

きっぱりと言い放ち、武史がゆっくりと顔を上げる。

「謝らせてほしい…あの子に直接、頭を下げさせてほしいんだっ…」

「……っ」

武史にまっすぐに見つめられ、桜時が目を細める。

――――思いっきり謝りたいんだっ…！――――

桜時も、輝矢に謝りたいから、鬼が島へ行くことを決めた。武史もきっと、桜時と同じ気持ちなのだろう。輝矢を苦しめてしまったことを詫びたいという気持ちに、偽りはないのだろう。

「わかりました…」

「えっ…？」

頷く桜時に、武史が少し戸惑うように顔を上げる。

「絶対連れて帰って来ますからっ、俺と一緒に謝りましょうっ」

「桜時くん…」

明るい笑顔を見せる桜時に、武史もそっと口元を緩め、その目を細めた。

「私とイチゴは武国に残って、復旧作業を続けるからっ」
皆を見送るべく、入口前へとやって来ていたリンゴが、ゴンへと声を掛ける。

「おうっ、頼んだっ」
「頼むのはコッチよっ！」
軽く返事をするゴンに、強く言い返すリンゴ。

「輝矢のことっ、頼んだわよっ？」
「ああっ」
真剣な表情を見せるリンゴに、ゴンも鋭い瞳で、大きく頷く。

「じゃあとっとと行くぞっ！お前らっ！」
「そう仕切んなやぁ～ゴンゴン～」
「キツネに率いられると、かなりやる気なくすんだよねぇ～」
「どういう意味だよっ！？」
ゴンと門貴、由雉が、軽くモメながらも、次々にオープンカーへ乗り込んでいく。

「桜時ぃ～っ」
「おうっ！」
後部座席に座った由雉に呼ばれ、桜時もオープンカーの方へと歩いて行こうと足を踏み出す。

「ハチくんっ」
「……っ？」
後方から名を呼ばれ、桜時が足を止めて、振り返る。

「何だっ？」
「いやぁ～っそのぉねぇっ…」
桜時が振り返った先には、太狼が立っていた。太狼が少し言葉を選ぶように、空を見上げる。
「がっかりしたんじゃなぁ～いっ？」
「へっ？」
太狼の言葉に、目を丸くする桜時。
「君の憧れの桃タローがさぁっ」
「だっから別に誰も憧れてなんてっ…！」
「ホントは何一つ守れないまんまっ、残った鬼をちょっと倒しただけで、英雄になっちゃった情けなぁ～い奴だったなんてっ」
「……っ」
どこか皮肉ったように言いながら、軽い笑みを浮かべる太狼に、桜時がそっと眉をひそめる。
――――桃タロー…？――――
ただ、憧れた。桜時のなりたかった、誰からも認められる英雄。
「ホントは、英雄でも何でもないんだっ…“桃タロー”なんてっ…」
「……。」
その笑みを悲しげに変える太狼を、桜時はただ、真剣な瞳で、まっすぐに見つめる。

「けどっ…」
「……っ？」
桜時が小さく声を発すると、少し俯いていた太狼が、ゆっくりと顔を上げた。

「けどっ、あんたがいなきゃっ…輝矢はいなかっただろ…？」
「えっ…？」

桜時のその言葉に、太狼が戸惑うような声を漏らす。

――――ダメだっ！輝矢っ！！――――

武矢と朝日の意志を継ぎ、悲しみを乗り越えながら、必死に輝矢を守ってきた太狼。

「輝矢がいなきゃっ…」
そっと微笑んだ桜時が、再び前を見る。

「俺たちはみんな、ここにはいなかったっ…」

前を向いた桜時の視線の先には、すでにオープンカーへと乗り込んでいる仲間たちの姿があった。

『……っ』
門貴や由雉、ゴンたちは皆、桜時へ笑顔を見せている。

――――アナタは生きて、そして、私たちと出会ったっ……――――

最愛の人を失い、生きていることさえ忘れかけていた門貴に、そっと手を差し伸べてくれた輝矢。

――――幸せだから…ではないのですか…？――――

大切な家族の、幸せをわかっていなかった由雉に、その意味を教えてくれた輝矢。

――――私は…アナタを信じますよ……――――

誰からも信じてもらえなかったゴンを、次狼を失ったゴンを、信じてくれると言った輝矢。

――――私には見えますよ…？アナタの背に、その翼が……――――

バラバラに生まれ、バラバラに生きてきた桜時たちが、皆、それぞれに輝矢と出会い、輝矢に心を動かされ、そして、輝矢のもとへ集った。

「……。」

どこか噛み締めるように、少しの間、目を伏せる桜時。

「だから俺はっ…俺たちはっ」

桜時が再び、太狼の方を振り返る。

「人も獣人も鬼もっ、みんなが分け隔てなく生きられる世界を創るっ！輝矢と一緒にっ！」
「……っ！」
どこまでもまっすぐな笑顔で言い放つ桜時に、太狼が大きく目を見開く。
――――俺が創るっ！！――――
それはかつて、太狼が口にした夢。成し遂げることは出来なかった、朝日と武矢の夢。
「そうすりゃっ、あんたは間違いなくっ、この世界の英雄だっ！」
「……っ」
見開いた瞳を、そっと細める太狼。
「やっぱりっ…」
「へっ？」
俯き、声を発する太狼に、桜時が目を丸くする。
「やっぱり嫌いだなぁ～君のことっ」
「うがっ…！」
顔を上げた太狼が、笑顔でハッキリと言い放つと、桜時は勢いよ

く顔を引きつった。

「うっせぇーなぁっ！俺だって、てめぇーのことなんかっ…！」

「頼んだよっ」

「……っ」

微笑む太狼に、怒鳴り返そうとした桜時が、言葉を止める。

「輝矢ちゃんのことっ」

「……。」

桜時が、太狼をまっすぐに見つめる。

――――輝矢のことをっ…お願いっ…――――

それは、ずっと、託されてきた想い。

「ああっ！」

「……っ」

桜時が大きく頷くと、太狼はさらに口元を緩めた。

「よしっ！行くかっ！」

『おうっ！！』

大きな声を出し、桜時がオープンカーへと乗り込んでいく。桜時の掛け声に、皆が勢いよく返事を返した。

「じゃあ行くっスよぉ～っ！」
「頼んだわよぉ～っ！」

リンゴに見送られ、羊スケがアクセルを踏んで、皆を乗せたオープンカーが勢いよく、武国を走り出していく。

「……。」

遠ざかっていくオープンカーを、穏やかな笑顔で、見送る太狼。

「少し似ているよね…」
「……っ」
横に立った武史の声に、太狼がゆっくりと振り向く。

「彼っ、桜時くんっ」
武史が、太狼へ微笑みかける。

「武矢さんにっ…」
「……。」

武史の言葉を聞き、太狼がそっと目を落とす。

――――僕っ！人も獣人も、鬼もっ、みんなが分け隔てなく生きられる世界を創りたいんですっ！――――

どこまでも、純粋な瞳。どこまでも、まっすぐな笑顔。心を突き動かされる言葉。太狼の父・破狼が笑い、朝日が愛した男・玄上武矢。

「やめて下さいよっ…」
「えっ…？」

ポツリと呟く太狼に、武史が少し首を傾げる。

「だから、嫌いなんですからっ」
「……っ」

口を尖らせ、どこか子供染みたような口調で言い放つ太狼に、武史が驚いたように目を丸くする。

「ああ、成程ねっ…」

武史はそっと笑みを浮かべて、納得したように呟いた。

数十分後。御伽湖・武国側海岸。

「船って…」

どこか唖然とした表情で呟くゴン。

「マジ小船だなっ…」

岸に停まっているのは、木製の、かなり古そうな、まさに小船であった。見たところ、今にも沈みそうな傷み具合である。

「全員、乗れるんかぁ～っ？」

「獣化して、みんなで必死に漕ぐしかねぇーんじゃねぇのっ？」

「うぅ～んっ…」

門貴と桜時の会話を聞き、気難しげな表情で首を捻る由雉。

――――ボォォォォ～ンっ！――――

「じゃっ」

「待ていっ！」

雉化し、その青い羽根を広げて、空へと飛び立っていこうとするユキジを、桜時が勢いよく掴み止める。

「ボクっ、ほらアレっ、偵察っ、偵察行ってきてあげるよぉ～っ」

「漕ぎたくねぇーからって、こんな時だけ調子良く、偵察とか言ってるんじゃねぇっ！」

都合のいいことを言って、船漕ぎから逃れようとするユキジに、桜時が厳しい突っ込みを入れる。

「モメてねぇーで、とっとと行くぞぉ～っ」
「せやなぁっ」
ゴンの呼びかけに、門貴が深々と頷く。

「じゃあ羊スケっ、お前はここに残れ」
「へっ？」

思いがけないゴンの言葉に、車を降り、小船に乗り込む気満々だった羊スケは、目を丸くする。

「何言ってんスかぁ～？ゴンさんっ、俺、運転手っスよぉ～っ？」
「船漕ぐのに、運転手はいらねぇーだろうがっ」
「うっ…！」
ゴンの正論に、羊スケが思わず顔をしかめる。

「けっけどぉっ…！」
「考えてみろ。こん中で、獣化姿が一番重いのは誰だ？」
「へぇっ？」
いきなりのゴンの問いかけに、羊スケが勢いよく眉をひそめた。

「重いのぉ？えぇ～っと…」
首を捻り、考え込むような表情を見せながら、羊スケが周囲を見回していく。

「ハチくんはイヌでぇ、門貴さんはサル、由雉くんがキジでぇ、ゴンさんがキツネ、んで俺がヒツジ…」
見回しながら、それぞれの獣化姿を思い描く羊スケ。

「あっ、俺っスねっ」

「だろっ？重量オーバー。お前は居残りっ」
ポンと手を叩いた羊スケに、ゴンがあっさりと言い放つ。

「えぇぇ～っ？じゃあちゃ～んとっ、お土産買ってきて下さいよぉ～っ？」
「売ってたらな…」
不満げな声をあげる羊スケに、呆れたような表情で言い放つゴン。

「んじゃあ行くぞっ！」
『おうっ！』

――――ボォォォォ～ンっ！――――

皆が白い煙に包まれ、それぞれに獣化した姿となって、小船へと乗り込んでいく。

「んじゃあなっ、羊スケっ」
「うぃ～っスっ」

岸に羊スケを残し、獣化した皆が、動物の姿で小船から手や前足を出し、船をゆっくりと漕ぎ進めていく。船は徐々に湖を進み、羊スケのいる岸を離れていく。

「そぉ～れっ、そぉ～れっ」
「お前もちったぁ手伝わんかいっ！！」
小船の横を飛びながら、やる気のない掛け声をかける由雉に、ゴ

ンが強く怒鳴りあげる。

「なんで可愛いボクが、そんなことしなきゃなんないのさぁ～？」

「お前なんか微塵も可愛かねぇーわっ！」

怒鳴りながら、その怒りがゴンの前足の漕ぎに出ているのか、小船は順調に御伽湖を進んでいく。

「その点、ゴンゴンは可愛いとこ、あるよなぁ～っ」

「ああっ！？」

茶化すようなモンキの声に、ゴンがしかめっ面で振り向いた。

「重量オーバーとか言うてぇ、ホンマは羊スケの安全考えて、残したんやろぉ～？」

「……。」

モンキの言葉に、ゴンがそっと目を細める。

「鬼が島に、敵が待ち構えている可能性は高い…」

『……っ』

そっと呟くゴンに、ハチ、モンキ、ユキジが、表情を険しくする。

「今回の何よりの目的は、“竹取の救出”だ…」

ゴンが真剣な表情で、言い放つ。

「アイツの身まで守ってやる余裕があるとは、限らねぇーからなっ…」

「そうだな…」

ゴンの言葉に、ハチも真剣な表情を見せ、深々と頷く。

「その辺はわかってくれてるさっ…アイツも…」

そう呟いて、ゴンはもう遠くに霞んで見える岸の方を、振り返った。

「……。」

一人、岸に残った羊スケが、どこか不安げな表情で、もう小船の見えなくなった湖を見つめる。

「俺は、よく出来た部下っスからね…」

そっと独り言を落とす、羊スケ。

「“重量オーバー”なんて、下手な理由でも、ちゃ～んと乗ってあげるっスよっ…だからっ…」

羊スケが、軽い笑みを浮かべる。

「だからご無事でっ…ゴンさん、みんなっ…」

そして、どこか祈るように、呟いた。

第７４章　鬼が島へ　★２

その頃、鬼が島。

「まぁ～た、あの新入りクンのお供かよぉっ」

鬼が島に造られた水の城の前へと立ち、トランプ兵団の一人、波跡が面倒臭そうに声をあげる。

「俺らは便利屋じゃねぇーってのっ」

「まぁそう言うんじゃないわよぉ～っ♪」

顔をしかめる波跡に、城歌が歌うように宥めかける。

「シルク様の命令に従うことが、私たちの使命なのだからァ～っ♪」

「……っ」

城歌の言葉に、波跡がどこか面白くなさそうに俯く。

「でも奴らっ、本当に来るのかしラァ～っ？」

『……っ』

問いかけるように歌う城歌に、並んで立っていた黒羽と醍也が振り返る。

「実は鬼だった仲間を助けになんレェ～♪っじゃなくって、てぇ～っ」

「来るさ…」

「えっ…？」

すぐさま答える黒羽に、城歌が眉をひそめる。

「奴らは、そういった無駄なことが、大好きだからな…」

冷たく、そしてどこか楽しそうな笑みを浮かべる黒羽。

「黒羽…あのサルも来る…？」

「ああ、必ず…」

「そっか…」

黒羽の答えを聞いた醍也も、そっと笑みを浮かべた。

「ケっ、敵が来るってのに笑いやがって、変な奴らだぜっ！」

そんな黒羽と醍也の様子を見ながら、波跡がどこか吐き捨てるように言い放つ。

「“必ず”ねぇ…」

その波跡の横で、眉をひそめる城歌。

「でも、例え来たところで、彼らがこの鬼が島に上陸することは不可能だファっ♪じゃなくって、わっ」

『……っ？』

城歌の言葉に、黒羽たちが首を傾げる。

「万が一にも…ねっ…」

湖の方を見ながら、城歌は冷たい瞳を見せた。

「ねぇ〜っ、もう三十分以上、漕いでなぁ〜いっ？」

御伽湖のど真ん中、疲れ切ったような声をあげるのは、一羽の青いキジ。

「ああ、お前以外がなっ…」

そう答え、前足で船を漕ぎながら、ゴンが、船のすぐ上空を飛んでいるユキジを、睨みあげる。

「由雉っ、まだ何にも見えねぇーかっ？島影みたいなものはっ」

「全然〜っ」

「そうかっ…」

ユキジの答えを聞き、ゴンと同じように船を漕いでいるハチが、少しがっかりしたように肩を落とす。

「結構骨折れるなぁ〜っ、まぁ泳いでよりはマシやろうけどさぁっ」

手で漕いでいたモンキが、その動きを止めて、だるそうな顔を見せる。

「はぁ〜あっ…人化出来たら、俺の風力で、ドッパァーンと鬼が島まで吹き飛んでくのになぁっ」

「仕方ねぇだろっ？人化したら、俺らの重みで、船沈んじまうしっ」

「第一、このボロ船が、お前の風力に耐えられねぇーよ」

ボヤくように言うモンキに、ハチとゴンも少し肩を落として、漕ぐ足を止めた。

「ちょっと休憩するかぁ〜着いた時にヘトヘトでも困るしな」

「賛成ぃ〜っ！」

ゴンの言葉に大きく手を上げ、モンキが小船の上に寝転がる。

「……。」
「……っ？」
力なくその場に座り込み、どこか神妙な表情を見せているハチに、ゴンが少し首を傾げる。
「大丈夫かっ？」
「へっ？」
ゴンの声に、不思議そうに顔を上げるハチ。
「あんま気負うなよ？力み過ぎても、不利になるだけだからな」
「……ありがとう、でも大丈夫っ」
ハチを気遣うように声を掛けるゴンに、ハチが柔らかな笑みを向けた。
「今はすっげぇ落ち着いてるんだっ…自分でも不思議なくらいっ」
「……そうかっ」
少し遠い目で湖を眺めるハチ。確かにその表情には、焦りも迷いも映っていなかった。太狼の話が、桜時の決意をさらに強くし、迷いを振り切ったのかも知れない。ゴンもそっと笑みを零す。
「あっ」
『……っ？』
上空からのユキジの声に、皆が一斉に顔を上げる。
「由雉、どうした？」
「前方に…」
「おっ！ついに島かっ！？」

「いやっ…」
「へっ？」
勢いよく起き上がったモンキが、首を振るユキジに、目を丸くする。

「前方に…」
かなり曇った表情で、もう一度、その言葉を繰り返すユキジ。

「すっごい数の鬼人っ…」
『グガアアアアアアアっ！！』
『げえええっ！？』

小船の前方の水面から、次々と顔を出す、角を持った禍々しい生き物。それは間違いなく、鬼であった。響き渡るその咆哮に、ハチたちが同時に叫び声をあげる。

「あれはっ…」
「ガアアアアアアっ！！！」

湖から飛び出してくるのは、下半身がまるで魚の尾びれのような形をした鬼。

「鬼人っつーより、鬼人魚だな」
「いっやぁ～んっ！どうせなら美人魚に出くわしたかったぁ～っ！」
「どっちでもいいわっ！んなもんっ！！」
冷静に分析するゴンと嘆くモンキに、ハチが勢いよく怒鳴りあげる。

「とにかくっ！人化してっ…！」
「アホうっ！ここで人化したら、船沈んでまうやろがっ！！」
「あっ、そっか」
戦おうと身を乗り出したハチが、モンキの言葉に、その動きを止める。

「由雉っ！」
「えええぇ～っ？」
上を向き、呼びかけるハチに、ユキジがあからさまに嫌そうな顔を見せる。

「“え”じゃねぇっ！お前が戦ってくんなきゃっ、俺たち、このまま、海の藻屑なんだよっ！」
「いいじゃんっ、それで」
『おいっ！！』
あっさりと答えるユキジに、下にいる三匹から同時の突っ込みが入る。

「ったくっ、仕方ないなぁ～っ」

――――ボォォォ～ンっ！――――

面倒臭そうに声をあげながら、ユキジが上空を舞ったまま、白い煙に包まれ、人化する。

「いくよっ…！」
人化した由雉が、湖一面に顔を出した鬼へ向け、両手を広げた。

「“百裂羽”っ…！！」

由雉の両手から、百枚の青色の羽根が放たれた。

――――バァァァーンっ！！――――

『ギャアアアアっ！！』

激しい水飛沫があがり、羽根の突き刺さった鬼が、次々に消えていく。

「ふぅ～っ、やぁっぱボクって、可愛いだけじゃなくって、強さもすごっ…」

「グガアアアアアアっ！！」

「ふへっ？」

羽根が刺さらず、生き残った鬼が、唸り声をあげる。

「“鬼口”っ！！グガアアアアアアっ！！」

「ううぅえぇっ！？」

顔を出した鬼が、すぐさま由雉へと大口を開き、強い鬼口を放った。

「うわっ！わわわわっ！」

――――ボォォォォ～ンっ！――――

「ふぅ～っ」

すぐさま雉化し、羽根を動かして、何とか鬼口をかわすユキジ。
零れ落ちる汗を、焦った表情で拭う。

「グガアアアアアっ！！」
「うわっ！うわわわっ！」

下から次々と放たれる鬼口を、ユキジが必死にかわしていく。これでは避けるので精一杯で、攻撃をすることも出来ない。その間に、また新たな鬼が、水面から次々と顔を出し始める。

「由雉っ…！」
「あかんっ！数が多過ぎるっ！ユッキーだけやったら無理やっ！」
思わず身を乗り出すハチと、顔をしかめるモンキ。

「船が沈んでも仕方ねぇーよっ！俺たちも戦おうっ！」
ハチが真剣な表情で、ゴンへと訴える。

「だが相手は鬼人魚っ、水中戦になれば、俺たちの方が分が悪いっ」
「せやなっ、桜時はともかく、俺とゴンゴンの力は半減してまうっ」
「……っ」

ゴンとモンキの言葉に、ハチが眉をひそめる。確かに水の中に出れば、門貴の風力も、ゴンの火力も弱まってしまう。これだけの数

の差もあるのだ。水中に出るのは、どう考えても不利である。

『グアアアアアアっ！！』

「……っ！」

水中で移動を始める鬼たちに、大きく目を見開くゴン。

「しまったっ！囲まれるぞっ！」

『うっ…！』

ハチたちの乗る小船の周囲を固めていく鬼たちに、皆が厳しい表情を見せる。

「みんなっ…！うわわっ！」

鬼に囲まれる小船を見下ろし、不安げな声をあげるユキジだが、助ける間もなく、鬼口が襲いかかる。

『グアアアアアっ！！』

「クっ…！」

周囲を取り囲む鬼たちに、ハチが唇を噛み締める。

「ゴンっ…！！」

「ああっ！もう力半減とか、沈没とかっ、考えてる暇はねぇみてぇだっ！」

呼びかけるハチに、ゴンが大きく頷く。

「このままじゃ、どっち道、沈んじまうっ！人化して戦うぞっ！」
『おうっ！！』
ゴンの言葉に、ハチとモンキが大きな返事を返す。

「よっしっ！いくっ…！」

――――バァァァァーンっ！！――――

「ぞっ…？」

ゴンが気合いを入れて叫ぼうとしたその瞬間、小船の周囲の水面から、赤く強い光が、空へと向けて突き上げた。突き上げた赤い光が、小船だけを包み込む。

『グガアアアアアアっ！！』
「うっへぇぇぇっ！！」

複数で爪を振り下ろしてくる鬼に、モンキが悲鳴をあげる。

『グっ…！ギャアアアアアっ！！』
「ふへっ？」

爪が小船を包む赤い光に触れた途端、激しい悲鳴をあげて、体を後ろへと反らせる鬼たち。そんな鬼たちの様子に、モンキが目を丸

くする。

「なっ何やっ…？」
「この光は一体っ…」
「フッフッフッ…」
『へっ？』

どこからか聞こえてくる不気味な笑い声に、戸惑いの表情を見せていたハチとモンキが、同時に振り向く。

「フッフッフッフッ…」
『んんっ？』

笑い声の聞こえてくる、船のすぐ横の水面を、覗き込むように見下ろすハチとモンキ。

――――ザッパァァーンっ！――――

大きな水飛沫が上がり、水面から、何者かが顔を出す。

「呼ばれて飛び出て…じゃじゃじゃじゃ～んっ…」

現れたのは、長く黒い髪を水面に広げ、不気味に微笑む、赤い瞳の女。

『……。』

女を見て、ハチとモンキが、一時、凍りつく。

『ふんぎゃあああああああっ！！』

次の瞬間、激しい悲鳴をあげ、今にも泣きそうな表情で抱き合うハチとモンキ。

「あれはっ…」

上空でハッとした表情を見せるユキジ。

「妖怪っ…？」

水面から現れた女を見ながら、ゴンが少し引きつったような表情で、首を傾げる。

「フフフっ…お久し振りですね…桜時さん、門貴さん…」

『へっ？』

震えていたハチとモンキが、丁寧な挨拶をしてくる女に目を丸くする。

「久し振りって…」

「やっほぉ～っ！元気だったかぁ～っ！？」

『あっ…！』

不気味な女のすぐ横の水面から、顔を出したのは、陽気な笑顔の色黒の青年であった。青年を見て、ハチとモンキが目を見開く。

「お前らはっ…！万亀っ…！それにっ…！」

ハチが驚いた様子で、名前を言い放つ。

「玉島っ！！」

「微妙に間違って覚えられてるよぉ～っ！万亀ぃ～っ！」

「フフフ…玉之介…ドンマイ…」

名前を間違えられ、ショックを受けて泣きつく青年に、女が不気味に微笑みかける。

第７４章　鬼が島へ　★３

「浦島と万亀じゃねぇーかぁっ！」
「覚えていていただけて光栄です…フフフ…」
「ご無沙汰さったぁぁ～っ！」
女がさらに不気味に微笑み、ショックからもうすでに立ち直った青年が大きく手を振る。この二人は、桜時の世話役・千鶴の姉の万亀と、その万亀の相棒・浦島であった。

「もうちょい普通に出て来れへんのかいなぁ…心臓に悪いわぁっ…」
「これが私の普通です…フフフっ…」
「万亀ってば、オチャメさんっ！」
心臓を押さえ、力なくしゃがみ込むモンキに、万亀がゆっくりと微笑みかける。

「この光は？」
「……っ？」
横から問いかけるゴンに、万亀が少し不思議そうな顔を見せる。

「この目つきの悪い、どう見ても妖怪のようなキツネは、どなたです…？」
「お前にだけは言われたくねぇーわっ！！」
妖怪そのものの万亀の言葉に、ゴンが勢いよく怒鳴りあげた。

「俺たちの仲間のゴンだっ、それより万亀、この光って、やっぱお前が…？」

「ええ…私がこの空気石で作り出したもの…光というより、膜ですかね…フフフ…」

問いかけるハチに、万亀が不気味に微笑みながら答える。空気石とは、実は乙姫でもある万亀が、海底都市に空気をもたらすために使っている、特別な石だ。

「そんじょそこらの鬼人は通しません…」

「へぇっ」

ハチが感心するように、小船を包み込んだ赤い膜を見つめる。

「鬼口っ！グガアアアアアアっっ！！」

「うわわわわっ！」

次々と襲い来る鬼口を避けていたユキジが、バランスを崩しながら、突き上げた赤い膜の中へと入り込む。

――――パァァァァンっ！！――――

「……っ！」

ユキジへと向かって来ていた鬼口が、赤い膜に弾き返される。

「すっごいっ、鬼口まで弾くんだぁっ」

「万能膜ですから…フフフ…」

驚いたように呟きながら、降下してくるユキジに、万亀が得意げ

に笑いかけた。

「でも万亀たちがどうして、ここにっ…」
「それは…」
万亀がそっと笑みを止め、真剣な眼差しを見せる。

「未来で屍と化した貴方がたが…私のもとまで助けてほしいと言いに…」
『ひやあああああああっ！！』

万亀の、どう聞いても怪談話な言葉に、またもやハチとモンキが震え上がる。

「んなわけないじゃんっ」
「本当は海に異変を感じて来たんです…」
ユキジが呆れきった表情を見せる中、万亀が本当の答えを言い放つ。

「この御伽湖は、私たちの海と、地底深くで繋がっていますので…」
「成程なっ」
納得したように、頷くゴン。

「なら、助けついでにもう一つ頼みたい。実は俺たちっ…」
「鬼が島へ…輝矢さんを迎えに行くのでしょう…？」
『えっ…？』

事情を把握している万亀に、皆が驚いたような表情を見せる。

「どうしてっ…それをっ…」
「それは…」
万亀がまたしても、真剣な眼差しを見せる。

「貴方がたの背後霊が…私に事の真相を伝えに…」
「はっ…！ははははは背後霊っ！？」
「いっやぁぁっ！悪霊退散っ！！悪霊退散っ！！」
「だから、んなわけないじゃんって、言ってるでしょ～？」
またしても全身を震わせ、怯えるハチとモンキに、ユキジが呆れるを通り越した、冷たい視線を送る。

「本当は…」

――――水の力を操る一族…もしかしたら…あの方は…――――

「前々から、輝矢さんは鬼なのではないかと思っていたからです…」
『えっ…？』
本当の答えを言い放つ万亀に、ハチたちが眉をひそめる。

「水を操る、鬼人一族の伝説は…海底都市に多く、語り継がれておりましたので…」
「そっ…そうだったのか…」

輝矢は海底都市に行った時に一度、水力を暴走させている。万亀が気づいても、おかしくはないだろう。

「じゃあ話が早えぇなっ！頼みってのはっ…！」
「ええ…鬼が島への道でしょう…？フフフ…」
ゴンの言いたいことはわかっているとばかりに、万亀が不気味に微笑む。

「道はこちらで開きます…任せておいて下さい…」
「有難てぇっ！頼んだぞっ！」
「けっけどっ…！」
大きく笑うゴンの横で、ハチがそっと表情を曇らせる。

「開くったってっ、あんな大勢の鬼、どうやってっ…！」
「それはね…ほら…玉之介…」
「ん～っ？何だぁ？万亀ぃ～っ」
万亀に呼びかけられ、浦島が陽気な笑顔で振り向く。

「はい…」

――――プシュゥゥ～っっ！！――――

「ほぎゃあああああああっ！！」

振り向いた浦島の顔面に、万亀が勢いよくスプレーを吹きかける。

「ううぅっ…ぐがあああああっ！！」
『うげっ！？』

スプレーを顔面に食らった浦島が、深く俯き、唸るような声をあげた後、獣の咆哮のような叫び声をあげて、勢いよく顔を上げる。

「どりゃあああああっ！！」
『へぇっ？』

気合いの入った叫び声をあげ、勢いよく水面から飛び上がった浦島が、どういう仕組みか、水面の上に両足をついて立ち上がる。その光景に、思わず間の抜けた声を出すハチたち。

「はあああああああっ！鬼っ！！大漁釣りぃぃっ！」
『ギャアアアっ！！』

浦島が狂ったように声をあげながら、水面の上を駆け抜け、釣り竿を振り回して、周囲に浮き上がった鬼たちを次々と蹴散らしていく。

「フフフ…“強ガス”…普段、弱い者ほど…強く変えてしまうガス…フフフ…」
スプレー缶を持ち、万亀が得意げに笑う。

「なんで水面走れてんの？」
「それは…」
少し引きつった表情で問いかけたユキジに、答えるべく、万亀がそっと上を見上げる。

「強ガスの効果…かも知れません…が、そうでないかも知れません…フフフ…」
「せめて、ちゃんと効果理解した上で、使いなよ…」
曖昧に答える万亀に、ユキジが少し呆れた表情を見せる。

「とにかくっ、あのバカが食い止めてるうちにとっとと行くぞっ！」
「会って数分でバカ呼ばわりですね…フフフっ…」
そう言い放つゴンに、万亀が意味深な笑みを見せる。

「おらっ！てめぇーも漕げっ！トリっ！」
「ええぇ～っ？」
「船のことなら…お任せ下さい…」
『へっ？』

――――ボォォォォ～ンっ！――――

皆が戸惑うように振り向くと、万亀の体が白い煙に包まれていく。

「私が背の上に乗せて…運んでいって差し上げます…フフフ…」

次の瞬間、白い煙の中から姿を現わしたのは、緑色の大きなカメであった。亀化した万亀が水中に潜り、その大きな甲羅の上に、ハチたちの乗った小船ごと乗せる。

「しっかり掴まっていて下さい…」
水面の下から、聞こえてくる声。

「でないと…振り下ろされますよ…？フフフっ…」
『……っ』
その不気味な笑い声に、皆が緊張した面持ちで、ゴクリと息を呑む。

「由雉っ！」
「うんっ」
上空を舞っていたユキジが降下し、ハチの頭の上に、しっかりと陣取る。

「いいぞっ！万亀っ！」
「フフフ…ではっ…行きます…」
『……っ』
万亀の言葉に、皆が表情を硬くした。

『……。』

皆が硬い表情で、しっかりと船に掴まった態勢のまま、しばらくの間、止まる。

『んっ…？』
いつまで経っても動き出さない小船に、ハチたちが一斉に、首を傾げる。

「おぉ～い、万亀っ、もう進んでいいぞぉ？」
改めて了解を取るように、ハチが下へ向けて言い放つ。

「進んでいますよ…さっきから…」
「へっ？」
返ってくる答えに、目を丸くするハチ。

「でも私…カメだから…動くの遅いんです…」
『だあああああっ！！』
その万亀の、最もではあるが、気の抜ける答えに、皆が一斉に小船の上で倒れ込む。

「トロいんならっ、任せろとか言うんじゃねぇーよっ！！」
「もういいっ！とりあえず漕げっ！お前らっ！！」
ハチが万亀に突っ込みを入れる中、ゴンが見切りをつけたように言い放ち、前足で船を漕ぎ始める。

「仕方ありませんね…本気を出しますか…フフフ…」
「へっ？」
皆が漕ぐ中、さらに聞こえてくる声に、ハチが眉をひそめる。

「ちょっ…！ちょちょちょっと待てっ！万っ…！」
「どうなっても…知りませんよ…？」
「へぇっ…！？」
万亀のその言葉に嫌な予感がして、ハチが顔を引きつる。

「フフフっ…」
『ういっ…！？』

急に速度を上げる、ハチたちの小船。

――――ドッパァァーンっ！！――――

『ぎゃあああああああっ！！』

勢いよく駆け抜ける小船に、振り落とされそうになりながらも必死にしがみつき、堪らず叫び声をあげるハチたち。

「船が壊れるぅぅ～っ！！」

「今度は早過ぎだぁぁぁぁっ！！」

ハチたちの叫び声を残し、小船は勢いよく、鬼たちのいる水面を駆け抜けていった。

『どわあああああああっ！！』

高速万亀の甲羅の上に乗せられたハチたちは、まだまだ物凄い勢いで、御伽湖の水面を駆け抜けていた。

「うあああっ！」

一番前に座ったモンキが、大きな声をあげる。

「島やっ！島が見えたっ！」

「何っ…！？」

モンキの後ろにいたハチが、体を横に反らせ、前方を見つめる。

「……っ！」

前方を見たハチの瞳に映る、湖の真ん中に浮かぶ小さな島。

「あったっ…！あれが鬼が島かっ…！」

「けどっ…！」

少し興奮したように叫ぶハチの頭の上で、ユキジが顔を歪める。

「島の前にっ、鬼人の大群がいるよぉっ！！」

『グガアアアアアアアアっ！！！』

ユキジが悲鳴めいた声で叫ぶ。確かにやっと見えた目的の鬼が島の岸には、埋め尽くすほどの色とりどりの鬼人が、立ち並び、皆で咆哮をあげていた。

「おいっ！」

ゴンが少し焦ったような表情で、下へと叫びかける。

「止まれっ！このまま突っ込んだら、奴らの的になっちまうっ！！」

「それは無理です…」

「はぁっ！？」

すぐさま返ってくる答えに、ゴンが勢いよく顔をしかめる。

「なんでだよっ！？」

「勢いつき過ぎちゃって…どう止まればいいのか、わかりません…

フフフ…」
「何ぃいっ!?」
『えええぇっっ!?』

万亀の言葉に、ゴンとハチたちが、これ以上ないくらいに叫びあげる。

「どっ…どどどうすんだよっ!?じゃあっ!」
「このまま鬼人の的ですね…フフフっ…」
『いっやぁぁぁぁっ!!』
特に焦った様子もなく、微笑む万亀に、ハチとモンキが頭を抱え、悲鳴をあげる。

「じゃあっ」
「待ていっ!この薄情トリっ!」
ハチの頭の上から飛び立とうとしたユキジを、後方からゴンがしっかりと掴み止める。

「みんなで犬死により、飛べる可愛いボクは確実に助かるんだから、生き残った方がいいと思うんだ」
「正論ぽく言うな」
真剣な瞳で訴えるユキジに、ゴンが冷たい視線を送る。

「嫌だぁぁっ!離せぇっ!こんなバカどもと、心中なんて御免だぁ〜っ!!」
「お前には仲間と生死をともにしようって覚悟はねぇーのかっ!!」
叫びながら、必死に飛び立とうとするユキジと、説教するように怒鳴りあげるゴン。

「サラサラなぁ～いっっ！！」
「んだとぉぉっ！？」
「うわああっ！もう突っ込んじまうよぉっ！」
「ひっぎゃあああああっ！！」
「フフフ…大パニック…」

とりあえず全員、叫んでいるこの現状で、ただ一匹、ひっそりと微笑む万亀。

『グガアアアっ！！』
『ひえええっっ！！』

爪を振り上げ、大口を開き、ハチたちの乗った小船を、迎え撃つ態勢を取る鬼人たちに、ハチたちが揃って絶望的な悲鳴をあげた。

「……“氷壁”っ…」

――――パァァァーンっ！！――――

『ギャアアアっ！！』
『へっ？』

皆が終わりを覚悟したその時、ハチたちを迎え撃とうとしていた

鬼人たちが、横からやって来た吹雪に、一気に氷づけにされる。

「氷っ…？」
「これはっ…」
戸惑いの表情を見せる、ハチとゴン。

「おっ鬼たちの集中攻撃は受けんで済んだけどっ…！」
一番先頭のモンキが、焦ったように声をあげる。

「氷いいいいっ！！」

鬼人たちを凍らせ、出来た氷山のような氷の塊に、まっすぐに突っ込んでいく小船。

『ふぎゃあああっ！！』

――――バァァァーーンっ！！――――

『……っ』

待機していた黒羽たち、トランプ兵団のもとへ聞こえてくる、大

きな衝撃音。その音を聞き、四人が一斉に振り向く。

「北側の岸の方からだな…」

「来た…」

耳を澄ます黒羽の横で、醍也がそっと楽しげに笑う。

「そんなっ…あれだけの数の鬼を抜けてっ…？」

城歌は、自分が湖に配置した、数々の鬼人を思い返し、その表情をしかめた。

「行こう…黒羽…」

「ああっ…」

醍也に呼びかけられ、黒羽が醍也とともに、北側の岸へ向かおうと歩みだす。

「ちょっ…！ちょっと待っレェ～♪じゃなくって、てぇっ！」

『……っ？』

必死の声を出して止める城歌に、黒羽と醍也が、少し不思議そうに振り返った。

「何だ…？」

「島の入口にも鬼人を山程、配備してるファっ♪じゃなくって、わっ！」

問いかけた黒羽に、城歌が少し眉をひそめながら言い放つ。

「別に私たちが行かなくても、どうせアイツらはっ…」

「来るよ…」

「えっ…？」

遮る醍也の声に、城歌が戸惑うような顔を見せる。

「奴らは絶対来る…」
「鬼人ごときにやられる奴らじゃないさ」
「……っ」
まっすぐな瞳を見せる醍也と、涼しげな笑みを浮かべる黒羽に、少し顔をしかめる城歌。

「じゃあ、先に行くぞ…」
「波跡…」
「あっ？」
醍也に呼びかけられ、城歌の横に立ち、浮かない表情を見せていた波跡が顔を上げる。

「別に怖かったら、来なくていいから…」
「……っ！」

冷たく言い放った醍也の言葉に、波跡は勢いよく顔をしかめる。そのまま黒羽と醍也は、城歌たちに背を向け、岸の方へと歩き去っていった。

「……っ」
残った波跡が、悔しげな表情で、唇を噛み締める。

「クソっ…！」
「……っ？」
苛立ちを吐きだすように声を出して、波跡が歩き出していく。

「行くの？波跡…」
「行くしかねぇーだろっ！」
問いかけた城歌に、波跡は怒鳴るように答え返した。

「俺はもう鬼なんだっ…他に道はねぇーよっ…！」

遣り切れない表情でそう言って、波跡は、黒羽と醍也の後を、ゆっくりと歩き去っていった。

「……。」
その場に一人残り、複雑な表情で、波跡の背中を見つめる城歌。

「もう後には退けないわね…お互いっ…」

そう呟き、城歌はそっと肩を落とした。

第７４章　鬼が島へ　★４

その頃、鬼が島・北の海岸。

「お痛つつつつっ…」

砂浜で粉々になって砕け散った小船の残骸の周りに、力なく倒れ込んでいる動物たちの姿があった。苦しげな声を漏らしながら、動物たちがゆっくりと起き上がる。

――――ボォォォォ～ンっ！――――

「あぁぁ～っ、死ぬかと思ったっ…」

白い煙の中から出てきた桜時が、どこか安心したような表情で、深々と息をつく。

「かわいいボクがぁ～っ…」

「ふはぁ～っ、口が砂に入ったっ」

「それ、逆だよ？」

嘆くように呟く由雉の横で、ゴンが口に入った砂を吐きだす。ゴンの微妙な言い間違いを、しっかりと指摘する由雉。

「あっ、ゴンゴンっ、今の衝撃で目つきが悪くっ…」

「もとからだってんだよっ！！」

からかうように言い放つ門貴に、ゴンが勢いよく怒鳴り返す。

「……っ」
「んっ？」
起き上がった門貴が、そのすぐ横で、どこかをまっすぐに見つめている桜時に気づく。
「どないしたんやぁ？桜時っ」
「向こうにも島があるっ…」
『えっ？』

桜時の声につられ、由雉やゴンも、桜時が見ている方を振り向く。確かに、鬼が島のすぐ横に、木だけしか見えない、小さな島が浮かんでいた。

「ほんまやっ、えっらい小さい島やなぁ～」
「あれも海底から浮いてきた島なのかな？」
「いやっ…」
『……っ？』
後方からする声に、門貴と由雉が振り返る。そこには、同じように小島を見つめるゴンの姿があった。

「あれは恐らく、十年前の爆発で吹き飛んだ、鬼が島の一部だろう…」
「……っ」
ゴンの言葉に、桜時がそっと目を細める。

――――いやあああああっ！――――

輝矢が、すべてを失った爆発。その、名残。

「……。」
桜時はどこか悲しげに、その島を見つめる。
「あの島がどうかしたの?桜時」
「へっ?あっ、いやっ」
由雉の声に、桜時がハッとした表情を見せる。
「何か…誰かがいるような気がして…」
「あんな小さな島にぃ～っ?」
「気のせいだろ。隣の島とはいえ、相当に距離がある。気配を感じ取れるとは思えない」
「そっ…そうだよなっ…」
ゴンの最もな言葉に頷きながらも、桜時はまだどこか、気がかりな表情を見せていた。
「そういや万亀ちゃんはっ…」
門貴が少し心配するように、辺りの砂浜を見回す。
「ここです…」
「ひぎゃあああああっ!!」
すぐ後ろから現れる、いつの間にか人化し、相変わらずの不気味な笑みを浮かべている万亀に、門貴が思わず震え上がった。

「皆さん…無事で良かったですね…フフフ…」
「まぁ無事ではねぇーけどなっ…」
微笑む万亀に、桜時が少し顔を引きつる。

「では早速…輝矢さんの奪還といきましょうか…」
「えっ？」
「万亀ちゃんっ、ついてくんのぉっ！？」
万亀の言葉に、桜時や門貴が、驚いた表情を見せる。

「当然でしょう…？私が行かなくて、誰が行くのです…？フフフ…」
「まるで、メインの仲間です的な言いっぷりだな…」
不気味に微笑む万亀に、桜時が呆れたように肩を落とす。

「でもいいわけぇ？」
「……っ？」
横から口を挟む由雉に、万亀がゆっくりと振り向く。

「湖のど真ん中、しかも鬼どもの群れの中に、浦島置いて来ちゃってさぁ～」
「そういえばっ、ガスの効果とか切れたら、どないするんやぁ？」
「……。」

由雉と門貴からの指摘を受けた万亀が、少し考え込むように俯く。

「では私は玉之介のところへ戻ります…仕方ありませんが…」
「あっああ…」
万亀の言葉に、桜時が少し詰まりながら頷く。

「ご武運を…皆さん…」
皆へそっと微笑みかける万亀。
「死んだら私の守護霊になって下さいね…フフフっ…」
――――ボォォォォ～ンっ！――――
不気味な微笑みを残し、万亀は再びカメの姿へと戻って、浦島のもとへ行くべく、湖の中へと潜っていった。
「お前らの知り合いって、変な奴ばっかだけど、あの女は特別、変だな…」
「まぁ妖怪だからねぇ～」
「しゅっ…守護霊っ…ブルブルっ…」
呆れたような、疲れたような表情を見せている由雉とゴンの横で、門貴が小刻みに震える。
「それにしても、さっきの氷は一体っ…」
「桜時様ぁぁぁっ！！」
「うっ…」
そのどこかで聞いたことのある声に、振り返りながらも、反射的に顔をしかめる桜時。
「桜時様ぁぁぁっ！！」
「しっ…白雪っ！？」
桜時が振り返ると、桜時たちがぶつかった氷山の方から、大きく

手を振りながら歩いてくる、笑顔の白雪の姿があった。

「白雪ぃ～っ？」
「白雪ちゃんっ！」
「やっぱアイツかっ…」
門貴や由雉が驚いた表情を見せる中、ゴンだけが、わかっていたかのような顔を見せる。

「桜時様っ！お久し振りねぇっ！」
「あっ、ああっ…ってか、なんでお前がここにっ…」
「武国へ行ったら、桜時様たちは鬼が島に行ったと言われたので、急いで追いかけてきたのぉっ」
「武国へっ？」
笑顔で答える白雪に、桜時が目を丸くする。

「なんで白雪が武国になんてっ…」
「それは、どっかの誰かが修行の途中で、鬼が出たからって武国へ行ったからよっ」
「うっ…！」
「修行っ？」
白雪の言葉に、ゴンが勢いよく顔を引きつり、桜時は戸惑うように首を傾げる。

「白雪っ！」
ゴンが慌てて、白雪のもとへと駆け寄る。
「修行のことは、あいつらには秘密だっつったろうがっ！」
「まだそんなことにこだわってるわけぇ？貴方っ、カッコつけよう

とし過ぎっ」
桜時たちに聞こえないよう、小声で怒るゴンに、白雪が冷たい視線を向ける。

『グガアアアっ！！』
『……っ！』

勢いよく聞こえてくる叫び声に、桜時たちが一斉に振り向く。

『グガアアアっ！！』

砂浜の砂の下から、次々と沸くように出てくる数多の鬼人。

「さっすが鬼が島ゆうだけのことはあるなぁっ」
「嫌んなっちゃうよねぇ～ホントっ」
門貴が少し引きつったような笑みを浮かべながら如意棒を構え、由雉が面倒臭そうに色羽を手に取る。

「雑魚どもに時間を取ってる暇はねぇーんだけどなぁっ」
ゴンもそう言いながら、腰に下げた天狼丸の柄に手をかける。

「……っ」
厳しい表情を見せながら、桜時もそっと村雨丸の柄を掴む。

「……。」
そんな桜時を、横からまっすぐに見つめる白雪。

「“村雨まっ…」
「“雪乱雲”っ」

――――バァァァーーンっ！！――――――

『ギャアアアアアっ！！』
「……っ」

桜時が村雨丸を抜こうとしたその時、放たれた激しい吹雪に、桜時たちに向かって来ていた鬼人たちが、一斉に氷づけにされ、消えていった。その光景に、桜時が思わず、刀を抜く手を止める。

「桜時様っ」
「白雪っ？」
呼びかける白雪に、桜時が顔を上げ、戸惑うような視線を送る。白雪は消えてしまった鬼人たちの方へ、両手を向けていた。先程の吹雪は、白雪の放ったもののようだ。

「ここは私が押さえるから、桜時様たちは先へ進んでっ」
「えっ…」
『……っ』
その白雪の言葉に、桜時や皆が、驚きの表情を見せた。

「なっ何言ってっ…」
「事情はだいたい、武国で聞いたわっ」
戸惑うように声を漏らす桜時に、白雪は力強く微笑みかける。

「竹取輝矢にもう借りはないけれど、ここで一つ、貸しを作っておくのも悪くはないっ」
「無茶だっ！いくら白雪だって、あの数を一人じゃっ…！」
「一人じゃないわっ」
「へっ…？」
『虎昌様ぁぁぁ～っ！！』
「……っ」

湖の方から聞こえてくる声に、桜時が振り向く。海岸からこちらへと駆けてくるのは、金色の髪の、よく似た青年と少年。

「一人でとっとと行っちゃわないで下さいよぉ～っ、虎昌様ぁ～っ」
「僕たち、湖の真ん中で彷徨っちゃったじゃないですかぁ～っ、虎昌様ぁっ」
「虎昌って呼ぶんじゃないわよっ！！気に入ってないんだからっ！！」
「はいぃ～っ！白雪様ぁぁ～っ！！」
「鈴白っ、芹っ」
それは白雪の家来、鈴白・芹の兄弟であった。

「ねっ？一人じゃないでしょうっ？」
「けどっ…」
「あいつらじゃあ、加わったところで、そう戦力にはならねぇーだろっ」
「うんうんっ」
桜時の言おうとしていたことを、先に言ってしまったゴンに、桜時がしみじみと頷く。

「何か久々なのに、いきなり酷いこと、言われてるねぇ～お兄ちゃんっ」
「いいんだよ、僕ら、そういうキャラだし」
少し悲しい顔を見せる芹に、鈴白が諦めきったように言い放つ。

「せめて、俺たちのうちの二人くらいを一緒にっ…」
「桜時様っ」
「えっ…？」
今度は、妙に鋭く呼びかける白雪に、桜時が戸惑うように振り向いた。

「桜時様はここへ、雑魚の鬼どもと戦いに来たのっ？」
「へっ？」
強い眼差しで、まっすぐに問いかける白雪に、少し目を丸くする桜時。

「いやっ…」
「じゃあ何のためにっ？」
「……っ」
さらに問う白雪に、桜時が眉をひそめる。

――――答えなんて、もうとっくに出ているでしょう…？――――
――――輝矢ちゃんを、頼んだよっ…――――
――――ハチっ…――――

ここへ来た理由は、ただ一つ。

「輝矢を、迎えに」
「……っ」
まっすぐな瞳で答える桜時に、白雪が大きな笑みを零す。
「なら、どんなことをしてでも、進んで行かないとっ」
白雪が人差し指を突き立て、注意するように桜時へ言い放つ。
「例え、ここにいる仲間っ、すべてを置いてでもっ、桜時様は竹取輝矢のもとへ行かないとダメよっ！」
「白雪っ…」
その真剣な眼差しに、桜時がそっと目を細める。
「それにっ、そのくらいの覚悟っ、ここにいる仲間は、みぃ～んな出来てると思うけどっ？」
「……っ」
白雪の言葉に、桜時がハッとした表情を見せ、門貴たちの方を振り向いた。
『……っ』
頷きこそしなかったが、門貴たちは皆、桜時へ、力強い笑みを向けている。門貴たちも、白雪と同じ覚悟でいてくれているのだろう。
「……。」

桜時が少しの間、目を伏せる。

「わかったっ！白雪っ、頼むっ！」
「任せてっ！」
強く言い放つ桜時に、白雪が笑顔で、大きく頷く。

「鈴白っ！芹っ！桜時様たちの道を開くわよっ！」
『はいっ！虎昌様っ！』
「下の名前で呼ぶんじゃないっ！！」
『はいぃ～っ！白雪様ぁぁっ！！』
白雪にどやされながら、鈴白と芹がそれぞれに、前方の鬼人たちへ向け、両手を突き出す。

『“鬼口”っっ！！グガアアアアアっ！！』

前方の鬼人たちの中の数匹が、大口を開き、桜時たちへ向けて、一斉に鬼口を放った。

「……っ」
鈴白が素早く動き、桜時たちの前へ出る。

「“逆鏡”っ…！」

――――パァァァァンっ！――――

鈴白が目の前で大きな鏡を作り、向かってきた鬼口を、鬼人たちの方へと弾き返す。

『ギャアアアアアアっ！！』

返ってきた鬼口を喰らい、激しく悲鳴をあげて、消えていく鬼人たち。

「今よっ！芹っ！」
「はいっ！」
そこへ両手を構えた白雪と芹が、鈴白の前へと、飛び出していく。

「“雪乱雲”っ！！」
「“降雹”っ！！」

――――バァァァーーンっ！！――――

『ギャアアアアっ！！』

白雪が吹雪を、芹が雹を同時に放つと、前方の鬼が一直線上に一掃され、わずかながら先へと進む道が出来上がった。

「桜時様っ！」
「ああっ！行こうっ！」

『おうっ！』

白雪の声に桜時が答え、桜時の呼びかけに、門貴たちが皆、強く頷いて、その出来上がったばかりの、鬼人たちの間の道を駆け抜けていく。

「すぐに両横の鬼たちが来るぞっ！」
「その前に一気に抜けようっ！」
後方からのゴンの声に答えながら、先頭を駆け抜ける桜時。

「グガアアアアアっ！！」
「何っ…！？」
『……っ！』

桜時たちが駆け抜けていたすぐ前の砂浜から、新たな鬼人が溢れ出てくる。焦ったような声を出しながら、桜時たちが慌てて、立ち止まる。

「“雪剣”っ！」
「ギャアアアアアっ！！」

右手に氷の刃を纏わせ、鬼人たちの群れの中、一匹ずつ鬼を斬り裂いていく白雪。

「新しい鬼人っ…！？」

桜時たちが立ち止まったことに気づき、白雪が焦ったように顔を上げる。

「鈴白っ！芹っ！」

白雪が大きく、家来の名を呼ぶ。

「無理ですっ！白雪様っ！」

「周りだけで手一杯でっ、とても道を開きには行けませんっ！」

「クっ…！」

鬼たちの間から聞こえてくる二人の声に、白雪が悔しげに唇を噛む。

「数が多過ぎるっ…！これじゃあっ…！」

『グガアアアアアっ！！』

「げえええっ！どんどん増えてくやぁ～んっ！」

次々に砂浜の下から沸き出てくる鬼人たちに、門貴が少し情けない声を漏らす。

「ここの鬼はいっくら倒しても、無限に出てくるみてぇーだなっ」

「増えてかないうちに、とっとと倒しちゃわないとぉっ」

ゴンと由雉が、少し引きつったような表情を見せながら、鬼人たちを倒すべく、それぞれの武器を構える。

「……っ」
桜時も少し気難しい顔を見せながら、再び村雨丸の柄を手に取った。

「“村雨まっ…！」
「“白刺”っ…！！」
「へっ…？」

またも桜時が村雨丸を抜こうとしたその時、桜時たちの後方から、白い光線のようなものが飛んで来た。

――――バァァァーンっ！！――――

『ギャアアアアアっ！！』

白い光は桜時たちの頭上を越え、桜時たちの前方の鬼人たちへと突き刺さって、その辺りにいた鬼人たちを一気に掻き消す。

『……っ』
その光景を、驚きの表情で見つめる桜時たち。

「いっ…今の技はっ…」
「我が主の刃っ、貴様らごとき無能の鬼を、斬る為に非ずっ」
「……っ」

戸惑いの表情を見せていた桜時が、後方から聞こえてくる、凛としたその声に振り返る。

「あれはっ…？」

『……っ』

同じように戸惑いながら、その声の聞こえてきた方を見る白雪たち。

「我らっ、主の剣となり、盾と成る者っ…」

「……っ！」

鬼人たちの間に見えてくる人影に、桜時が大きく目を見開く。

「あっ…」

並んだ七つの人影に、桜時が思わず声を漏らす。

「犬仁っ！みんなっ…！」

「我が主・桜時様の行く道っ、この七犬が開きましょうっ…！」

『……っ』

桜時の見つめる先に立っていたのは、犬仁たち、里見七犬であった。

鬼が島、すぐ横の小島（十年前の爆発により吹き飛んだ、鬼が島の一部）。厳流島。

「ついに動き出したか…」

湖の向こうに見える鬼が島を眺めながら、白髪に鋭い青い瞳を見せた男が、そっと呟く。

「時が…来たのだな、太狼…」

男が腰に下げた刀の柄に、手を伸ばす。

「ならば、我も動こう…」

ゆっくりと刀を抜き、男が抜いた刀を空へとかざす。

「我、“里見犬孝”の名のもとにっ…！」

その透き通った刃が、太陽の光に照らされ、強く輝いた。

第７５章　大いなる加勢　☆１

万亀たちの助けも借り、やっとのことで鬼が島へと辿り着いた、桜時たちの前に立ちはだかった無数の鬼人。白雪たちの力を借りても、先への道を開くことの出来なかった桜時たちの前に、さらなる救援者が現れた。

「犬仁っ…みんなっ…」

『……っ』

それは犬仁たち、里見七犬の七人であった。

「何であいつらがここにぃっ？」

「グガアアアアっ！！」

「……っ」

門貴が戸惑うように首を傾げていると、門貴のすぐ横に立った鬼人が、門貴へ向け、勢いよく鬼爪を振り下ろした。

「如意っ…！」

「“白斬”っ…」

「ギャアアアアっ！！」

「……っ」

門貴が如意棒を構えようとしたその時、飛んで来た白い真空波に斬り裂かれ、門貴を攻撃しようとしていた鬼人が、周囲の鬼人数匹とともに消えていった。

「これはっ…」

「八犬士が二、第五十四代・犬義っ…」

「犬義っ…！」

「……っ」
大きな長剣を構え、鬼人から門貴を助けた犬義が、名を呼ぶ門貴に、不敵な笑みを向ける。
「ヒャッハっ！“白火”っ！！」
――――バァァァーンっ！！――――
『ギャアアアっ！！』
『……っ！』
飛んで来た白い炎に、一気に数十匹の鬼人が燃え、苦しげな悲鳴をあげて消えていく。その光景に、桜時たちは皆、圧倒されたような表情を見せた。
「八犬士が三っ、第五十四代・犬忠っ！」
「てめぇはっ…」
「よぉっ！クソ狐っ！」
驚くように目を見開いたゴンのすぐ近くへと、飛び上がっていた犬忠が降りてくる。
「とっととこの前の再戦といこうぜぇっ…！！」
「はぁっ！？」
ゴンへ向けて、構えを取る犬忠に、ゴンが勢いよく顔をしかめる。
「ちょっと待てっ！てめぇら、俺たちを助けに来たんじゃっ…！」
「俺はてめぇと戦いに来ただけだぁっ！！」
「はぁっ！？」
飛び出してくる犬忠に、ゴンが焦りながら、天狼丸を抜こうとする。
「“白矢”っ！」

「……っ！」
「どわあああぁっ！」
今にも戦いの始まりそうであったゴンと犬忠の間に、割って入るように白い光の矢が飛んで来て、二人の間を抜けていく。飛んで来た矢に、驚きの声をあげ、大きく体を後ろへと反らすゴン。
「ギャアアアアアっ！！」
二人の間を抜けた矢は、近くの鬼人へと突き刺さり、その鬼を消し去った。
「ダメだよぉ？チューチューっ！今日は僕たちっ、桜ちゃんの助っ人で来たんだからぁ～っ！」
聞こえてくる、陽気な声。
「八犬士が四っ、第五十三代・犬信っ！“シンちゃん”って呼んでねっ！」
「チっ…」
弓を構えたまま、無邪気な笑顔で名を名乗る犬信に、犬忠がどこか煩わしそうに舌打ちをした。
「八犬士が五、第五十二代・犬悌だぁっ！」
「八犬士が六、第五十五代・犬仁」
「八犬士が七っ、第五十三代・犬智でぇ～すっ！」
犬仁と、その両脇に立った、大男・犬悌と、愛らしい少女・犬智が、次々に名を名乗る。
「そして俺がっ…」
最後に残った眼鏡の青年が、ゆっくりと前へと出てくる。
「八犬士が八、第五十四代・犬っ…」

「長ぁぁぁーーいっ！！」
「ぐはあああぁっ！！」
名を名乗ろうとした青年・犬礼が、背後から飛び掛かって来た白雪に、背中を勢いよく蹴り飛ばされる。

「なっ何をするっ…！この腐り姫っ…！」
倒れ込んだ犬礼が、すぐさま起き上がり、睨みつけるように白雪を見上げる。

「長ったるいのよっ！犬貞だの、犬助だのぉっ、八犬士が八だの九だのぉっ！」
「まったく名前、あってませんよ…？白雪様…」
「そして八犬士に九はいないです…白雪様…」
「うっさいわねっ！！」
煩わしそうな顔を見せ、どこか偉そうに腰に両手をあてている白雪のもとへ、鬼人たちと戦っていた鈴白、芹がやって来て、細かい突っ込みを入れる。

「だいったいっ！面白くないのよっ！！」
白雪が、怒りを爆発させるように叫ぶ。

「せっかく人がカッコよく、桜時様たちを送りだそうとしてたのにっ、いいトコ、取っていっちゃってっ！！」
「結局そこかぁっ」
「目立ちたがり屋の面倒臭い性格だから」
「黙らっしゃいっ！！」
呆れたように言い放つ鈴白と芹に、白雪がさらに強く怒鳴りあげる。

「まぁまぁそう怒らないでよぉ～トラトラぁ～っ」

「トラ言うんじゃないわよっ！！下の名前っ、気に入ってないんだからっ！！」
宥めるように声を掛ける犬信であったが、逆に、さらに白雪の機嫌を損ねる。

「やはり貴様だけは許せんっ…俺が腐る前に、倒してやるっ…！腐り姫っ…！」
「ああっ！？やろうってのぉっ！？」
「はぁっ…」
険悪なムードとなり、今にも衝突しそうな白雪と犬礼の様子を見て、桜時が深々と溜息をつく。

「やめろ、犬礼っ」
「……っ」
制止を促す犬仁の声に、犬礼が白雪との睨み合いをやめ、振り向く。

「我々は桜時様の救援に来たのだぞ？くだらぬ争いをしている場合ではない」
「うっ…」
強い瞳で言い放つ犬仁に、犬礼が少し気まずそうに俯く。
「わぁ～いっ、レイレイ、怒られたぁ～っ！」
「黙れ、腐れ小僧っ…」
横で嬉しそうに笑う犬信に、犬礼が冷たく一言を放つ。

「貴様もっ…」
「……っ？」
振り向く犬仁に、白雪が少し眉をひそめる。

「犬礼とじゃれ合いに、わざわざ来たのではないのだろう？怒鳴っ

て無駄な体力を使うくらいなら、一匹でも多くの鬼を倒したらどうだ？」

「うっ…！」

犬仁がどこか試すように言い放つと、白雪の表情が勢いよく歪んだ。

「うわぁ～っ、ごもっともっ」

「どう考えても、間違ってるのは白雪様ですね」

「うぬぬぅ～っ…！」

鈴白と芹の言葉に、白雪の表情がさらに歪んでいく。

「だあああああっ！！わぁかったわよっ！！」

『うわっ』

何かを発散するように叫んだ後、白雪が言い放つ。あまりの白雪の大声に、両脇に立っていた鈴白と芹が、思わず驚く。

「とっとと戦えばいいんでしょっ！？戦えばっ！行くわよっ！！鈴白っ！芹っ！」

『はぁ～いっ』

まだ怒りは収まりきっていないようだが、白雪が鈴白と芹を従え、半ばやけくそ気味に、再び鬼人の群れの中へと飛び込んでいく。

「やれやれっ」

そんな白雪の様子を見つめ、少し呆れるように肩を落とす犬仁。

「犬仁っ」

「桜時様」

桜時の呼びかけに、犬仁が再び振り向く。

「桜時様たちは先へ進んで下さい、あの者たちもいますし、これだけいれば、ここを押さえられるでしょう」

「あっあああっ…けど、何で犬仁たちがここへっ…？」
「犬国へ、桃タロー殿から連絡が入ったのです」
「タローから？」
犬仁の言葉に、桜時が目を丸くする。

「ええっ、“桜時様だけでは、どうも頼りないから、加勢に行ってあげてほしい”と」
「ニャロウっ…」
やはり桜時のことを頼りにしていなかった太狼に、桜時が少し顔をしかめ、こっそりと拳を握り締める。だが、犬仁たちの加勢があれば、確かに助かる。

「じゃあ俺たちは先にっ…」
「あっ、桜時様ぁっ！」
「へっ？」
門貴たちとともに先へと進もうとした桜時が、犬智に呼び止められて、振り返る。
「何となく嫌な予感っ…」
「行く前に景気づけに、聞いていって下さいっ！」
犬智が、顔をしかめる桜時へ満面の笑顔を向ける。

「最新第五弾っ！犬智の自己紹介風あいうえお作文っ！まずはぁっ、犬智のいっ…！」
「桜時様っ！早くっ！」
「あっあああっ！」
明るく自己紹介を始める犬智の言葉を必死に遮り、桜時に行くように促す犬仁。桜時も聞いている時間はないと感じ、犬仁の声に大きく頷いて、前方を見る。

「今度こそ行こうっ！みんなっ！」

『おうっ！』
「桜時様の道を開くぞっ！」
桜時の声に、走りだす門貴たち。犬仁の声に、七犬が前方の鬼たちへ向け、それぞれの武器を構えた。

「“白火”っ！！」
「“白矢”っ！」
「“白刺”っ…！！」

――――バァァァーーンっ！！――――

『ギャアアアアっ！！』
七犬の次々と繰り出される攻撃に、前方の鬼人たちが一気に消され、桜時たちの前に、大きな道が開く。

「よしっ！行けるっ…！！」
開いた道を、まっすぐに駆け抜けていく桜時たち。

「……っ」
最後尾を駆ける門貴が、少し後ろを振り返る。

「気ぃつけてなぁ～っ！犬仁ちゃ～んっ！」
「私の名前に“ちゃん”をつけるなっ！！」
振り返り、笑顔で大きく手を振る門貴に、犬仁が少し頬を赤く染め、強く怒鳴りあげる。

「死んでも桜時様を先へ進めろよっ！！」
「わぁってるっ！」
犬仁の言葉にしっかりと頷くと、門貴はそのまま前を向き、先を行く桜時たちの後を追いかけるようにして、犬仁たちが開いた道を

進んでいった。

「ったくっ…」

門貴の背を見送り、犬仁がどこか疲れたように肩を落とす。

「はぁ～あぁ…また桜時様にあいうえお作文、聞いてもらえなかった…」

「……。」

深刻そうに落ち込んでいる犬智に、一気に呆れ顔となる犬仁。

「……っ」

だが、犬仁の顔が、急に曇る。

「落ち込んでいる場合ではないぞ、犬智」

「えっ…？」

真剣な表情を見せる犬仁の言葉に、戸惑うように首を傾げる犬智。

「この戦いは随分とっ…」

犬仁が瞳を鋭くしながら、右手に持った白槍を構える。

『グガアアアアアっ！！』

「持久戦になりそうだからなっ…！」

鬼人たちが消え、桜時たちが駆け抜けた砂浜から再び、新たな鬼人たちが現れた。

「ふぅ～っ、何とか進めたようねっ」

雪剣で鬼人を蹴散らしながら、無事に進んでいった桜時たちを見届け、白雪がどこかホっとしたような顔を見せる。

「ほとんど里見七犬の皆さんのお陰ですけどね」

「うっさいわねっ！」

白雪と背中合わせになるようにして戦いながら、こっそりと呟く鈴白に、白雪がいつものように怒鳴りあげる。

「ですが白雪様、よろしいのですか？」

「はっ？」

改まって問いかける鈴白に、白雪が顔をしかめる。

「何がよっ？」

「桜時さんを、輝矢さんのところへ行かせる手伝いなんてしてしまって」

「……っ」

鈴白の言葉に、白雪が少し眉をひそめる。

「あれだけ張り合って、桜時さんを取り合ってたのにっ…」

「いいのよっ」

「えっ…？」

あっさりと答える白雪に、鈴白が戸惑うように声を出す。

――――輝矢を、迎えに…――――

思い出されるのは、そう答えたその時の、桜時のまっすぐで曇りのない瞳。

「……っ」

白雪がそっと、口元を緩める。

「いつだって私はっ、“恋する者”の味方なんだからっ！」
「……っ」
大きな笑顔を咲かせて言い放つ白雪に、鈴白もその口元を緩め、穏やかな笑みを浮かべた。
「白雪様って、いつまで経っても結婚出来ないタイプでしょうね」
「うっさいわねっ！！」
こっそりと呟く鈴白に、白雪がまたもや強く怒鳴りあげた。
その頃、御伽湖のど真ん中。
「いっやあああああああっ！！」
に響く、何とも必死な叫び声。
「いっやあああっ！！ひやあああっ！！ぎやあああっ！！」
その叫び声の主は、浦島であった。強ガスの効果が切れたのか、すっかり戦意をなくした情けない表情で、湖に浮かぶ、人一人が立っていっぱいの小さな岩にしがみつき、涙を浮かべながら叫び続けている。
『グガアアアアアっ……』

「いっやあああっ！！」
浦島がしがみついている岩の周辺には、少しの隙間もなく埋め尽くされた、鬼の群れ。唸り声をあげる鬼たちに、浦島がさらに悲鳴をあげる。

「助けてぇぇっ！！万亀いいいっ！！」
浦島が必死に、万亀の名を呼ぶ。

『グウゥゥ……“鬼口”…』
「へっ？」
次々と大口を開け、その開いた口を浦島へと向ける鬼たちに、浦島が表情を引きつる。

「“鬼口”…」
「“鬼口”…」
「“鬼口…」
「へぇっ？へぇっ！？へぇぇっ！？」
周囲全体、隙間なく埋め尽くした鬼が、一匹残らず口を開くと、浦島がさらに表情を歪め、浮かぶ涙をさらに濃くした。

『グガアアアっ！！』
「いっやあああああっ！！」
一斉に放たれる鬼口に、浦島が涙を流し、頭を抱えて、悲鳴をあげる。

「……っ」

――――バァァァーーンっ！！――――

『ギャアアアアアっ！！』
「へっ…？」
浦島がもうダメだと諦めたその瞬間、大きな、強い白の光が水面を駆け抜け、浦島の周囲を回り、鬼口を放とうとしていた数十匹はいる鬼を、一匹残らず掻き消した。

「あっ…」
まったく何もなくなった水面を見つめ、唖然とする浦島。

「今の…光は…」
「はろう…」
「んっ？」
背後から聞こえてくる声に、浦島が振り返る。

「フフフ…」
「……っ！」
浦島の背後の水面から顔を出しているのは、黒い髪を振り乱した、のっぺらぼうの女。浦島の表情が一気に凍りつく。

「ひぎゃあああああっ！！のっぺらぼぉぉっ！！」
浦島が、鬼たちに囲まれていた時並みの大声をあげる。

「フフフ…私よ…玉之介…」
「へっ？」
のっぺらぼうの女が、顔からのっぺらぼうのお面をはずすと、その下から、不気味な笑みを浮かべた万亀の顔が現れた。

「万亀ぃ～っ！驚かすなよぉ～っ！」
安心したのか、気の抜けた声を出す浦島。

「フフフ…オチャメだったでしょう…？」
「オチャメ過ぎだぜぇ～っ」
万亀の言葉に答えながら、浦島がしがみついていた岩の上に座り込む。

「でもあっ、そっかっ、万亀が助けてくれたんだなっ！」
「はっ…？」
「へっ？」
万亀へと笑顔を向けた浦島であったが、万亀が思いきりわけのわかっていなそうな、困惑した顔を見せるので、浦島も思わず首を傾げる。

「万亀じゃねぇーのっ…？さっきの白い光っ…」
「何のこと…？」
「あれっ？」
戸惑う万亀に、こちらも戸惑う浦島。

「じゃあっ…さっきの光は一体っ…」

浦島が首を傾げながら、白い光の駆け抜けていった先、鬼が島を見つめた。

第７５章　大いなる加勢　☆２

「ハァっ…！ハァっ…！ハァっ…！」
万亀、白雪、里見七犬の助けを借り、鬼人の群れを抜けた桜時たちは、順調に鬼が島の奥へと歩を進めていた。何もない荒地を、桜時たちはただひたすら走る。

「結構広いねんなぁっ…！見た目よりっ！」
「村があったくらいだからなぁっ…！」
言葉を交わしながら、門貴とゴンが桜時の後を行く。もう岸から走り始めて十分は経っているが、まだ島の向こう岸は見えてこない。太狼の話では、かつてこの島には、朝日たちの住んでいた村や、森もあったとのこと。荒地ばかりでわかりにくいが、国一つ分くらいの広さはあるのだろう。

「見てっ！あれっ！」
『……っ』
上空を飛ぶユキジの声に反応し、地面を走る三人が一斉に顔を上げた。

「あれはっ…！」
顔を上げた瞬間、大きく目を見開く桜時。桜時たちの走る荒地の、遥か前方に、建物らしきものが見えてきた。

「水のっ…城…？」
桜時が戸惑うように、首を傾げる。前方に見えてくるのは、壁も柱も、すべてが水で出来た、いや、水が作り出した城であった。

「水力で出来てやがんのかっ！？」
「水力でっ…」
そう聞いて浮かぶのは輝矢であるが、輝矢があのような城を作るとも思えない。
――――こんにちは…――――
次に浮かぶのは、内兎のあの、冷たい瞳。
「アイツかっ…！」
桜時が険しい表情で、水の城を見つめる。
「あそこに輝矢んがいるんは、間違いないやろなっ…！」
「よしっ！一気に突入っ…！」
「“降波薄（フルハウス）”っ」
「……っ」
皆に指示を出そうとしたゴンが、横から聞こえてくる声に、その瞳を鋭くする。
「散れっ！！」
『……っ』
ゴンの声に、桜時と門貴が素早く横へ飛び、上空を舞っていたユキジが、さらに上へと飛び上がる。
――――バァァァーーンっ！！――――
『クっ…！！』
先程まで桜時たちのいたところへ、勢いよく落ちる波のような水の塊。余程の衝撃だったのか、荒地が抉れ、大きな穴があいた。
「水力かっ…！？」

「いやっ…」
門貴の言葉をすぐに否定し、ゴンが水の飛んで来た方を振り向いた。

「……。」
桜時たちもゴンにつられるようにして振り向くと、そこには、どこか浮かない表情を見せた、赤毛の青年が立っていた。

「敵かぁっ…！？」
「トランプ兵団、波跡」
「敵みたいやなぁっ…！」
名を名乗った波跡に頷き、門貴が右手の如意棒を勢いよく構える。

「待てっ」
「んんっ？」
如意棒を構えた門貴の前に、言葉とともに突き出されるゴンの左手。
「何やねぇ～んっ、ゴンゴンっ」
少し眉をひそめ、ゴンの方を見る門貴。
「そんなに目立ちたいんかぁ～っ？」
「違げぇーよっ！俺を白雪と一緒にすんなっ！！」
呆れたような顔を向ける門貴に、ゴンが強く怒鳴りあげた。

「アイツは武国で、俺が仕留め損ねた奴だっ、俺が相手をする」
「……。」
振り向き、強い視線を送るゴンに対し、波跡は特に表情を変えることはなく、その定まらない視線でゴンを見つめていた。

「それにっ…」
ゴンがさらに、眉をひそめる。
――――ゴン…さんっ…――――
「部下の借りもっ、返さねぇーといけねぇーしなぁっ！」
気合いを入れて叫び、ゴンが素早く天狼丸を手に取った。
「お前らは先に行けっ！」
ゴンが桜時たちの方を見る。
「サル、トリっ、まだ他にも敵が待ち構えてるだろうがっ、うまくハチ公をあの城まで進めろよっ！」
「おうっ！任せといてぇっ！」
「キツネごときに言われなくたって、それくらい、わかってるってばぁっ」
「へっ」
大きく頷く門貴と、悪態づいて返すユキジを見て、ゴンがどこか安心したように笑みを零す。
「ハチ公っ！」
「えっ？」
桜時へ強い視線を投げかけるゴンに、桜時が少し戸惑うように目を丸くする。
「てめぇーも男だっ！今後こそっ、ちゃーんと決めてこいよっ！」
ゴンの強い瞳が、まっすぐに桜時を捉える。
「でねぇーとっ、今度はリンゴじゃなくて、俺がブン殴るからなっ！」

「ゴンっ…」
強い瞳は睨まれているようにしか思えないが、その喝は、桜時に確かな勇気をくれる。

「……っああっ！」
「……っ」
桜時が笑顔で頷くと、ゴンはニヤリと口元を緩めた。

「んじゃあっ、とっとと行けっ！！」
『おうっ！！』

ゴンの掛け声を合図にするかのように、桜時たちは一斉にその場を駆け抜け、水の城へと向かっていった。

「……。」
遠ざかっていく背中たちを、ゴンがしばしの間、見守る。

「さてとっ」
ゴンが改めて、波跡の方を向き直る。

「よく出て来れたなぁっ、あれだけ俺との力の差を見せつけられて」
「……っ」
余裕のような笑みを浮かべるゴンに、波跡の表情が少し歪む。それもそのはず、武国で戦った時に、修行で更なる力を得たゴンに対し、波跡はほぼ、手も足も出ない状態であったのだ。
「まだ俺に勝てるとでも思ってんのかぁっ？」
「……。」
挑発的に問いかけるゴンに、波跡はそっと目を落とした。

「……思ってない…」
「あっ？」
「俺の力じゃ…どう足掻いたって、お前には勝てない…」
「……っ」
随分とあっさり答える波跡に、ゴンは少し驚いたような表情を見せる。

「んだよっ、出てきたわりには弱気っ…」
「今の俺のままじゃな」
「えっ…？」
意味深な言葉を付け加える波跡に、ゴンが眉をひそめる。

「お前たちに大した恨みがあるわけでもねぇっ…命張ってまでアイツらの命令きく義理もねぇっ…けどっ…」
ゆっくりとした口調で言葉を続けながら、波跡が徐々に顔を上げていく。

「もう…退く道もねぇっ…」
「……。」
波跡の表情は、追い詰められた極限の顔。追い詰められたを通り越して、もう開き直ってしまったような、そんな表情を見せている。
そんな波跡に、ゴンは少し表情を曇らせた。

「だから俺はっ…」
「……っ」
ゆっくりと右手を上げていく波跡に、ゴンが警戒するように、天狼丸を構える。

「人の姿を捨てるっ…！」
「えっ…」

「……っ！」
上げた右手を額に当て、その表情を険しくする波跡。
「“鬼化帰化”っ…！！」
「……っ！」
波跡の赤い瞳が強く輝き、波跡の全身から白い光が放たれ始める。
「待っ…！」
――――バァァァーンっ！！――――
「うっ…！」
波跡の全身から放たれた強い光は、止めようとしたゴンの動きを止めた。あまりの眩しさに、ゴンが思わず目を細め、身を屈める。
「グゥゥゥっ……」
「……っ」
光の向こうから聞こえてくる、けたたましいまでの異形の声。
「グガアアアアアっ！！」
「……っ！」
ゴンが顔を上げると、そこには禍々しい赤い皮膚に覆われ、二本の金色の角を生やした生物が立っていた。鋭い爪、同じように鋭い牙から、唾液が滴り落ちる。闇夜に浮かぶ月のような金色の瞳が、自分の腰の下程度の大きさとなったゴンを、高々と見下ろした。
「鬼人化っ…人間…」
――――クロトっ…？――――
――――シロキっ…――――

鬼と化した波跡を前に、ゴンの脳裏に浮かぶのは、オーロラの城で戦った、鬼と化した2人の少年、クロトとシロキであった。

「相変わらず…悪趣味なことしやがるぜっ…」

怒りからか、少し震えた唇でそう言い放ち、ゴンが天狼丸を握る手に、さらに力を込める。

「牢戸知玖っ…！！」

憎しみの溢れた瞳で、ゴンは目の前に立つ赤鬼を見上げた。

波跡をゴンに任せた桜時、門貴、由雉の三人は、さらに荒地を駆け抜け、まっすぐに水の城へと向かっていた。

『……っ！』

地面を走っていた桜時と門貴が、何かに気づき立ち止まり、そして、上空を飛んでいたユキジも、二人につられるようにして、その場で止まった。

「まさか、あの波跡が…俺たちよりも先陣を切っていくとはな…」

「うん…しかも鬼人化までしちゃってね…」

桜時たちの前方に立つ、二つの人影。

「ホント…笑える…」
「ああっ…」
『……っ』
そこに立っていたのは、冷たく微笑んだ黒羽と、相変わらずの無表情を見せた醍也であった。二人の姿に、桜時たちが皆、険しい表情となる。

「悪いな…三度ともなると、見飽きたか…？」
「ホントにっ…」

――――ボォォォォ～ンっ！――――

上空を舞っていたユキジが、白い煙に包まれる。

「見飽き過ぎて、欠伸が出そうっ」
「……っ」
白い煙の中から、地面へと降り立った由雉が、嫌味のように鋭い視線を送ると、黒羽はそれを楽しむように笑みを浮かべた。

「門貴っ」
「ああっ」
呼びかけるように振り向く由雉に、門貴も真剣な表情を見せて頷く。

「城までまだ結構あるっ…ホンマはもうちょい先まで行って、フォローしたかったけどっ…」
「門貴っ…？」
いつもとは異なる落ち着いた口調で話す門貴に、桜時が少し眉をひそめる。

「あいつら相手じゃっ…俺らが行くしかない…」
「うんっ…」
門貴の言葉に、由雉が大きく頷く。

「悪いけど桜時っ、この先は一人でっ…」
「オォ～ホッホッホッホっ♪」
『……っ』
聞こえてくる歌うような笑い声に、桜時たちが再び振り向く。

「何の相談かしラァ～♪私も仲間に入れてくれなぁ～いっ？」
「あれはっ…」
桜時たちが振り返ると、そこには頬に派手なペイントをした、金髪の少女・城歌が立っていた。

「結構好みのタイプやわっ」
「ってか門貴が好みじゃないって女の子いるわけっ？」
しみじみと呟く門貴に、由雉が呆れた視線を送る。

「お前もトランプ兵団かっ？」
「いかにもぉ～っ♪トランプ兵団の城歌ですファ～♪じゃなくって、わぁ～っ！」
桜時の問いかけに、城歌が両手を広げ、歌うように答える。
「あの青守のご息女はいないのかしラァ～っ？この前の戦いの続きがしたかったのに、残念ねぇ～っ♪」
「イチゴが相手してたのかっ…」
そう呟くと、桜時の表情がかすかに曇る。イチゴの強さは、桜時も理解していた。武国でも戦って、こうしてまた戦場に現れたということは、イチゴと互角以上に戦ったということになる。城歌もまた、そう簡単に倒せる相手ではない。

「まぁいいファ～♪じゃなくって、わぁ～っ！」
城歌がゆっくりと歩み寄り、黒羽や醍也よりも前へ出る。
「丁度三対三だシィ～♪じっくりと楽しみましょ～っ♪」
『……っ』
冷たく微笑む城歌に、三人の表情が曇った。

「仕切るね…城歌…」
「仕切るのが好きなんだ…やらせておいてやれ…」
無表情で呟く醍也に、黒羽が少し呆れたように言い放つ。

「マズいなぁっ…」
首を捻り、考えるように顔をしかめる門貴。
「俺らは醍也らだけで手一杯やろうしっ、あの女の子ちゃんまで相手にするんは、ちょいキツいでぇっ」
「うぅ～んっ…」
門貴の横で、由雉も首を捻る。

「仕方ねぇーよっ、俺も戦うっ」
桜時が明るく笑みを浮かべ、村雨丸に手をかける。

「ええぇ～っ！？じゃあ俺っ、あの女の子ちゃんの相手がいいぃ～っ！」
「お前に相手させたら、間違いなく負けるだろうがっ」
駄々をこねる子供のように言う門貴に、桜時が冷たい視線を向ける。
「あの女は、俺が相手するよっ」
「ええぇ～っ！？」
「大丈夫なのぉ？」

不満げな声をあげる門貴の横から、由雉が気にかけるように問いかける。

「桜時っ、超超女の子恐怖症なんじゃあっ…」

「まぁたぶん、大丈夫っ」

「あ、そっか、輝矢のこと好きってなってから、他の女の子なんてどうでもよくなっ…」

「ぎゃあああああっ！！」

ペラペラと桜時の心の内を話そうとした由雉の口を、桜時が顔を真っ赤にして、必死に叫びながら、勢いよく覆う。

「ドォ～でもいいけドォ～♪誰が私のお相手してくれるのかしラァ～？」

あれこれとモメている三人を見ながら、城歌が少し待ちくたびれたように言う。

「あのトリは俺の獲物だ…手は出すなよ…」

「あのサルは…俺の敗北者…」

「あっラァ～？じゃあもしかしてっ、私の相手は“命咲かす者”かしラァ～っ？」

「……っ」

城歌からの視線を受け、桜時がそっとその表情を鋭くする。

「ああっ、そうだっ！俺がお前の相っ…！」

「いいえぇっ、違うわぁっ」

「へっ？」

城歌の問いに答えようとした桜時であったが、言おうとした答えとは正反対に答える声が聞こえてきて、思わず間の抜けた声を出す。

「あなたの相手は、この私っ」
『……っ』
背後から聞こえてくるその声に、同時に振り返る桜時、門貴、由雉。
『あっ…！』
振り返った桜時たちが、驚いたように、大きく目を見開く。
「玄上アリスよっ」
そこに立っていたのは、銀色の針器・六刻を持った、アリスであった。

その頃、武国。
「国主様っ！」
国主の間へと、駆け込んでくる一人の従者。
「アリス様がっ…！アリス様がっ…！！」
「わかっているよ…いないんだろう…？」
「えっ…？」
冷静に問いかける武史に、報告をしようとしていた従者は、思わず目を丸くした。
「あっ、はっはいっ…」

「行先は目途がついてる…別に捜さなくていいよ…」
「えっ？あっでもっ、しかしっ、あっ、はぁっ…」
思わず反論しようとする従者であったが、国主の言うことに逆らうわけにもいかず、やがて大人しく頷く。

「いいんですかぁ？」
「……っ？」
横から聞こえてくる声に武史が振り向くと、そこには飄々とした表情を見せた太狼が立っていた。

「アリスちゃん、捜さなくってぇ～」
「行先が鬼が島なら捜す必要もないし、下手に捜しに行かせて怪我人が出ても困るからね…」
「ふぅ～んっ」
武史の言葉に、興味なさそうに声を発する太狼。

「意地悪な人ですねぇ～貴方もっ」
太狼が武史から目を逸らし、軽い笑みを浮かべる。

「行くってわかってるなら、いくらでも止めれたでしょうにぃ～っ」
「……っ」
嫌味のように言い放つ太狼に、武史がそっと口元を緩める。

「別に意地悪して、止めなかったわけじゃないよ…」
武史が浮かべる、穏やかな笑み。

「嬉しいじゃないかっ…あの子が、輝矢の為に何かをしようとするなんてさ…」

第７５章　大いなる加勢　☆３

「あっ…アリスっ…」
戦場に現れたアリスを、茫然と見つめながら、桜時が小さくアリスの名を呼ぶ。

「なんでアリスちゃんがっ…」
「鬼が島にぃ～っ？」
桜時の横に並ぶ門貴と由雉も、ひどく戸惑った様子で首を傾げた。

「誰かと思ったラァ～っ♪」
現れたアリスの姿を見て、城歌が歌う。

「ナイトのオモチャじゃないっ」
「……っ」
急に歌うような口調をやめ、冷たく言い落とす城歌に、アリスが少し表情をしかめる。

「てっめぇっ…！」
「別に熱くなってもらわなくって結構っ」
「へっ？」
城歌のあまりの言いようにに、怒鳴りあげようとした桜時であったが、急に目の前にアリスが現れ、言葉を発したので、目を丸くする。
「イヌに同情されるほど、落ちぶれてないわぁっ」
「うがっ…！」
「一応、まだ婚約者なのにぃ～っ」
「すっかり素になっとうな…アリスちゃん…」
アリスが何の躊躇いもなく、平然と冷たい言葉を吐くと、桜時が

勢いよく顔をしかめ、門貴と由雉は少し呆れるように肩を落とした。
以前の、可愛子ぶっていたアリスとは、大違いである。内兎の件で、すっかり吹っ切れてしまったのだろうか。

「本当はあのクソウサギをぶっ飛ばしに来たんだけどぉ…」
その瞳を鋭くし、アリスが城歌を睨みつける。

「まぁ仕方ないから、あなたで我慢したげるわぁっ」
「んなっ…！」
アリスの挑発のようなその言葉に、城歌の表情が歪む。

「何ですっレェ～♪じゃなくって、てぇ～っ！？」
「挑発に乗るな…城歌…」
「乗るだけ体力の無駄…」
歪めた顔で、声を荒げる城歌に、黒羽と醍也が宥めるような、小バカにするような声を掛ける。

「おっおいっ！アリスっ…！」
「いつまでここにいる気ぃっ？」
「へっ？」
戸惑うように呼びかけた桜時に、アリスが逆に問いかける。
「あの女は私が止めてあげるって言ってんだからっ、とっとと行きなさぁ～いっ」
アリスがゆっくりと、桜時の方を振り返る。

「輝矢のもとへっ」
「……っ」
そう言って、穏やかな笑みを浮かべるアリスに、桜時が驚いたように目を見開く。

「アリスっ…」
「クソウサギを吹っ飛ばす役は、あなたに譲ってあげるわぁっ」
そっと口元を緩める桜時に、アリスが素っ気なく言い放ち、再び城歌の方を振り向く。

「いいファっ♪じゃなくって、わぁっ！望み通りっ、私が貴女を地獄へと誘ってあげるぅっ♪」
「あなたと話してる時間が無駄だわっ、とっとと始めましょっ」
「……っ」
城歌の挑発に動じもしないアリスに、城歌が少し眉を引きつる。

「いい度胸っ」
城歌が割り切ったように、冷たい表情を見せる。

『……っ』
「あっ」
強く睨み合ったまま、アリスと城歌は同時に、その場から姿を消した。戦うために、場所を変えたのであろう。

「行っちゃった…」
醍也がポツリと呟く。

「大丈夫かなぁ～？」
「大丈夫やろぉ？輝矢んと互角に戦っとったくらいやでぇ～？」
「それは言えてるかもぉっ」
「他人の心配をしている場合か…？」
『……っ』
暢気に言葉を交わしていた門貴と由雉が、聞こえてくる問いかけに、その表情を鋭くする。二人が振り向くと、そこには冷たい笑み

を浮かべた黒羽が立っていた。

「確かにっ、アリスちゃんのこと、心配しとう場合ちゃうかもなぁ～っ」

「門貴」

「悪いなっ、桜時っ」

軽く笑みを浮かべた門貴が、呼びかけた桜時の方を振り返る。

「他にも色々出てくるかも知れんけどっ、後の道は、一人で何とか行ってくれっ」

並んだ門貴と由雉が、桜時へ笑みを向ける。

「その代わり、あいつらはここでっ、ボクらが押さえるからさっ」

「由雉っ」

任せろと言うかのように、親指を突き立てる由雉に、桜時もそっと笑みを零す。

「ホンマは俺が、輝矢んの迎えに行きたいとこやけどっ」

門貴が桜時から視線を逸らし、軽く頭を掻く。

「まぁ、しゃーないっ！今回はお前に譲ったるわっ！」

「……っ」

桜時へと人差し指を向け、悪戯っぽく笑う門貴へも、桜時が微笑みかける。

「輝矢んのことっ、任せたでっ！」

「……ああっ」

門貴の言葉に、桜時がしっかりと頷く。

「何もうまい言葉、思いつかねぇーからっ…輝矢がここに居たら言

いそうなこと、言うわっ」
微笑んだ桜時が、まっすぐに門貴と由雉の方を見る。

「勝てよっ！」
『……っ』
桜時のその言葉に、門貴と由雉が笑みを零す。

「違うよぉ～っ！輝矢ならぁ、“死んでも勝ってきなさいっ、でないとペットの価値はありません”くらいじゃなぁ～いっ？」
「確かにっ、“負けて帰ってくるくらいなら死んで来い”って感じやもんなぁ～っ」
「それもそうだなっ」
次々と言い放つ二人に、桜時が苦笑いを見せる。

「次会う時はっ…」
「四人でっ！」
「ああっ！」
三人が中央で手を重ね、微笑み合う。

「そんじゃあなっ！」
「おうっ！」
「そっちも負けなよぉ～っ！」
門貴と由雉に見送られ、桜時が勢いよく、さらに前へと駆け出していく。

『……。』
すぐ横を駆け抜けていく桜時を、何食わぬ顔で見送る黒羽と醍也。

「相変わらず、止める素振りも見せないねぇ～っ」
「“命咲かす者”にも“鬼の姫”にも、興味はない…」
少し呆れた表情を見せる由雉に対し、黒羽はどこか得意げに微笑む。

「俺が興味あるのは…ただ、ハヤテの羽根を超えることだけ…」
「そうだったねぇ～っ」
肩を落としながらも、由雉はどこか楽しげな笑みを浮かべた。

「三度目の正直言うしっ、そろそろ白黒ハッキリさせたいとこやなぁっ」
「同感…」
笑顔で言い放つ門貴に、醍也がポツリと呟く。

「さぁ来いっ…！ハヤテの羽根を継ぎし、ハヤテの息子っ…！！」
「ハヤテ、ハヤテ、うるさいなぁっ」
大きく両手を開く黒羽に、うんざりした表情を見せながら、色羽を構える由雉。

「敗北者に…死をっ…」
「だっからそう簡単には、負けへん言うとうやろぉっ？」
十字刃を構える醍也に、如意棒を構える門貴。

三度目の、門貴と醍也、由雉と黒羽の戦いが、始まろうとしていた。

その頃、鬼が島・海岸。

「“鬼口”っ…！グガアアアアアっ！！」

「“白壁”っ！！」

向かってくる鬼口に、両手を突き出し、目の前に白い光の壁を作り出す犬智。

――――バァァァーンっ！！――――

「うぅっ…！」

作り出した白壁で鬼口を受け止める犬智であったが、鬼口が当たった瞬間、白壁が歪み、鬼口に強く押されてしまう。

「ああっ…！」

「犬智っ！」

鬼口に押される犬智に気づき、他の鬼人と交戦中だった犬仁が振り向く。

「クっ…！」

右手に持った白槍を、素早く構える犬仁。

「“白刺”っ…！！」

槍の先から、白い光線が飛んでいく。

――――バァァァーンっ！！――――

「ギャアアアアアっ！！」
白い光に貫かれ、鬼人は砂と化して消えていった。

「大丈夫かっ！？犬智っ！」
「ヒトちゃんっ」
鬼人が死に、犬智に向かっていた鬼口も消え、白壁を消した犬智が、やって来た犬仁へ、少しホッとしたような笑みを向ける。
「ごめんっ」
「気にすることはない」
「何かちょっとっ…力、弱くなってきちゃって…」
そう言いながら表情を曇らせ、犬智がそっと自分の両手を見下ろす。倒しても倒しても復活する鬼人に対し、こちらの力はどんどん減るばかりなのだ。
「……っ」
そっと気難しい表情を浮かべる犬仁。このままでは、全員が力尽きるのも時間の問題なのである。

「どうすればっ…」
「グウゥゥゥっ……」
「あっ…！」
考え込む犬仁の背後に迫る鬼人に気づき、犬智が大きく目を見開く。

「ヒトちゃんっ！後ろっ…！！」
「えっ…？」
「グガアアアアっ！」
「……っ！」
犬智の声に犬仁が振り返った時にはすでに遅く、後方に迫った鬼人は、犬仁へ向け、勢いよく鬼爪を振り下ろした。

「クっ…！」
「ヒトちゃんっ…！！」
迫る鬼爪に、犬仁が険しい表情を見せ、犬智が悲痛な声をあげる。

「……っ」

――――パァァァァンっ！――――

「ギャアアアアアっ！！」
『……っ！』
犬仁が諦めかけたその時、湖の方から飛んで来た白い光の一閃が、犬仁へ鬼爪を振り下ろそうとしていた鬼人の胴体を貫き、その鬼人をあっという間に掻き消した。あまりに速い光の弾頭に、犬仁と犬智が大きく目を見開いたまま、しばらくの間、固まる。

「今の光は…我々、“犬人”のっ…」
「諦めては駄目だ…」
「……っ」
考えるように眉をひそめた犬仁が、背後から聞こえてくる声に、ゆっくりと振り返る。

「敵の頭を倒せば、この無限に増える鬼人たちも消滅する…」
「……っ！」
岸に立つ人影に、大きく目を見開く犬仁。

「それまで…主を、仲間を信じて、戦うんだっ…」
「あっ…」

信じられないといった表情を見せながらも、どこか縋りつくような思いで、犬仁が声を発する。

「久しいな…」
「貴方はっ…」

――――いつか出会ったなら…助けになってあげてほしい…――――

たった一度きりの出会い。だが、忘れることなど一度もなかった、その姿。

「犬仁っ…」

刀を持った白髪の男は、穏やかな笑みを浮かべ、静かに犬仁の名を呼んだ。

『グガアアアアアアっ!!』
「いっやぁ～んっ!!減ったと思ったら、また増えたぁ～っ!」
謎の白い光に、一気に掻き消された鬼たちであったが、水面の中から留まることを知らぬように、次々と顔を出してくる。無限に現れる鬼に、浦島は涙を流しながら、情けない悲鳴をあげた。
「どうしようっ!?どうしようっ!?万亀ぃぃ～っ!」
「“強ガス”…」

――――プシュゥ～っ！！――――

「うがっ…！」

救いを求めるように振り返った浦島に、万亀は何の躊躇いもなく、再び強ガスを吹きつけた。

「うおらあああああっ！！鬼大量釣りぃっ！！」

『ギャアアアアっ！！』

すぐさま目つきを変えた浦島が、勇ましく釣り竿を振り上げ、周囲の鬼をどんどん倒していく。

「力の限り戦うのよ…玉之介…フフフ…」

そんな浦島を眺めながら、自分は戦おうとしない万亀なのであった。

「うっ…ううっ…」

傷を負い、赤い血の流れ落ちる右肩を押さえて、芹が少し苦しげな声を漏らす。

「グガアアアアっ！！」

「……っ！」

その時、芹へと飛びかかってくる鬼人。

「“降ひょっ…！」
「グガアアアアっ！！」
「うっ…！」
芹の傷ついた腕は素早くは上がらず、芹が力を放つ前に、鬼人の鋭い爪が芹へと振り下ろされた。

「ううぅっ…！」
攻撃を覚悟し、芹がきつく目を伏せる。

「“雪剣”っ！」
「ギャアアアアアアっ！！」
「……っ」
聞こえてくる鬼人の悲鳴に、芹は勢いよく目を開いた。

「平気っ！？芹っ！」
「虎昌様っ！！」
右手に纏った雪剣を振り下ろし、強く呼びかける白雪に、芹が安心したような、大きな笑みを見せる。

「下の名前で呼ぶんじゃないわよっ！！」
「うわぁ～っ！ごめんなさぁ～いっ！」
ついつい出てしまった下の名前に怒られ、芹が慌てて謝った。

「怪我したのっ？」
「あっ、はいっ…すみません、不甲斐なくてっ…」
「ホントねっ」
「うっ…」
あっさりと頷く白雪に、芹が少し顔をしかめる。

「こんなことなら、キジからあの回復の羽根、もらっとけば良かったわっ」

そう言いながら、白雪が少し眉をひそめる。鬼人一匹、一匹のレベルはそれほどでもないが、これだけの数がいると、持久戦となり、体力はどんどん失われていく。無傷で戦っていくのは、厳しい。

「鈴白っ！」

「……っ？はいっ？」

白雪に呼ばれ、鬼人の群れの中で戦っていた鈴白が、その場を凌いで、白雪のもとへとやって来る。

「芹の援護を。この状態で一人はキツいわっ」

「わかりました。大丈夫か？芹っ」

「うんっ…ごめんっ、お兄ちゃんっ…」

「お前が謝ることじゃないよ」

申し訳なさそうな顔を見せる芹に、鈴白が優しい笑みを向ける。

「芹は任せたわよっ、鈴白っ」

「白雪様っ」

雪剣を構え、待ち構える鬼人の群れの方へ体を向ける白雪を、鈴白が少し慌てた様子で呼び止める。

「何っ？」

「白雪様も、お力は弱り始めているはずっ…あまり無茶はっ…」

「するなってっ？」

表情を曇らせ、訴えかけようとした鈴白の声を遮り、白雪が軽く問いかける。

「その方が無茶だわっ」

「……っ」

強く言い放つ白雪に、鈴白がハッとした表情を見せる。

「それもそうですねっ…」
「粘るわよっ！最後の最後までっ！」
「はいっ！」

白雪の声に、鈴白は笑みを見せ、大きく頷いた。

「グガアアアアアアアっ！！」
「チィっ…！」
鬼と化した波跡の振り下ろした鬼爪を、ゴンが顔をしかめながら、素早く避ける。

「同情するわけにはっ…いかねぇーんだっ…！」
迷いを振り切るようにそう言い放ち、ゴンがその瞳を鋭くする。

「天狼丸っ…！！」

向かってくる鬼人化人間へ、ゴンが天狼丸を構えた。

「シィ～は“縛り付け”のシィ～っ♪」
「うっ…！」
城歌が歌いあげると、縄状の光が現れ、アリスの体に巻きついて、その動きを封じる。

「ホホホホホォ～♪それでもうっ、手も足も出っ…！」
「くだらないわねぇっ…」
「何っ…？」
「“針器・三刻”っ…！！」
アリスの右手に握られていた六刻が、その角度を変え、三刻へと変化する。アリスが三刻を、勢いよく投げ放った。

――――パァァァンっ！！――――

「んなっ…！！」
空をブーメランのように舞った三刻が、アリスの体に巻きついていた光を、あっという間に斬り落とす。その光景に、城歌の表情が大きく歪んだ。

「私のっ…縛り付けがっ…」
「“針器・六刻”っ…」
城歌が茫然と呟く中、アリスが三刻を受け止め、再び六刻へと変形させる。

「この程度で、“神器”を倒せるなんて、思わないことねぇっ」
「クっ…！」

余裕の笑みを浮かべるアリスに、城歌が唇を噛み締めた。

「“右翼・襲羽”っ…！！」
「“右翼・裂羽”っ…！」

由雉と黒羽の間で、激しくぶつかり合う青と黒の羽根。

「“赤十字”っ…」
「如意棒・第一の舞っ…“空”っ…！！」

十字刃を振るう醍也へ向け、門貴が強い風を放つ。

第７５章　大いなる加勢　☆４

「ハァっ…！ハァっ…！ハァっ…！」
万亀と浦島が、白雪たちが、里見七犬が、ゴンが、アリスが、由雉が、門貴が開いてくれた道を、桜時はただ、ひたすらに走る。皆の想いを託され、輝矢のもとへと急ぐ。

「あっ…！」
桜時がふと、足を止めた。

「水の…城っ…！」
青い瞳で見上げたその先には、すべてが水で出来た、巨大な城が立ちはだかっていた。

「ここにっ…輝矢が…」
そう呟き、桜時が瞳を鋭くする。

「よしっ…！」
一気に城の中へ攻め入ろうと、桜時が足を踏み出した、その時であった。

『グガアアアアっ！！』
「……っ！！」
城の前の荒地から、禍々しい鬼人が、次々と顔を出した。無数に現れる鬼人に、駆け出そうとしていた桜時が、思わず足を止める。

「鬼人っ…！？」

引きつられる桜時の表情。

『グガアアアアアっ！！』

「ここまで来たってのにっ…！」

煩わしそうな顔を見せながら、桜時が鞘から村雨丸を抜く。

「“白首…割砕”っ…」

「えっ…？」

そこへ、聞こえてくる声。

――――――バァァァァァァァーンっ！！――――――

『ギャアアアアアっ！！』

「……っ！」

桜時の後方から勢いよく飛んで来た白い光が、桜時の前に立ちふさがっていた数多の鬼人たちを、あっという間に掻き消した。消えていく鬼人たちに、大きく目を見開く桜時。小さな光であったというのに、その威力は絶大である。

「この技っ…じじいの…」

――――――“白首っ…割砕”っ…！！――――――

かつて戦った、祖父・八房の刃を思い出し、桜時がそっと眉をひそめる。

「……っ」

ゆっくりと、光の飛んで来た後方を振り返る桜時。

「あっ…」

その瞳が、大きく開かれる。

「……。」

そこに立っていたのは、短い白髪に、よく焼けた黒い肌の、鋭い青い瞳を見せた、男が立っていた。四十歳前後であろうか。その精悍な顔つき、頼もしい体格、纏っている空気は、その男が戦士であることを感じさせる。だが、曇りのなくまっすぐで、穏やかな瞳は、どこか懐かしかった。男の右手には、透き通るまでに美しい、一本の刀が握られていた。

「あんたっ…は…」

男を見つめ、桜時が戸惑うように声を漏らす。

――――――――――――――――――――っ――――――

「……っ？」

右手に疼く感覚に、桜時がそっと目を落とした。

「村雨丸っ…？」

桜時の右手に握られた村雨丸が、何かを訴えているような、そんな気がした。まるで、目の前に現れたこの男に、反応するかのように。

「……っ」

そんな村雨丸に、桜時がハッとした表情を見せる。

「まさかっ…」

――――この刀は…貴方の父親が、我が妹・雲雀へと送った刀…――――

思い出される、孔雀の言葉。

「まさかっ…」

戸惑いと、動揺を隠しきれない表情で、桜時がゆっくりと男を見つめる。

「あんたがっ…俺のっ…」

「……っ」

少し震えた声で呟く桜時に、男がそっと口元を緩める。

「大きくなったな、桜時…」

「……っ！」

呼ばれる名に、桜時が大きく目を見開く。

「本当…にっ…」

――――父さんだって探したいっ…！！――――

――――父さんっ…！俺の父さんはっ…！？――――

ずっと、追い求めていた。

「本当にっ…」

目の前にいる、この男を。

「桜時…」

男がゆっくりと歩を進め、桜時のすぐ目の前へと立つ。

「お前に話さねばならぬことが…多々ある…」

「……。」

急に真剣な表情を見せる男に、桜時もつられるように、その瞳を鋭くする。

「だが、今のお前には、一刻も早く、行かねばならぬところがあるはず…」

「……っ」

男に強い瞳を向けられ、桜時はハッとしたような表情を見せた。

――――ハチっ…――――

どうしても、行かねばならない。これまでの道のりで、桜時を進めてくれ、今も、必死に戦っている仲間たちのためにも。

『グガアアアアアっ!!』

「……っ!」

鬼人の消えたはずの荒地から、再び無数の鬼人たちが顔を出す。

「だからこの場は俺に任せ、お前は先へ進め」

再び現れた鬼人に、少し焦ったような表情を見せる桜時に、男が力強く言い放つ。

「この戦いが終わればっ…すべてを話そうっ…」

「……っ」
男が笑顔を見せ、桜時の肩に手を乗せると、桜時は少しその目を細めた。今、この場で出会ったばかりだというのに、ひどく信用出来る、その言葉。とても力強い、その笑顔。

「わかったっ」
桜時が大きく頷く。

「俺っ…絶対、勝ってくるっ」

桜時が男へ、満面の笑顔を向ける。

「もっとあんたとっ…話したいからさっ…！」
「……っ」
その笑顔に、男も零れんばかりの笑顔を見せた。

「行けっ…！！桜時っ…！！」
『ギャアアアアっ！！』
そう言い放ちながら男が刀を振り切ると、その剣圧に鬼人たちが吹き飛ばされ、水の城までの道が出来る。

「ああっ！！」

男の言葉にしっかりと答え、桜時は出来たばかりの道を、駆け抜けていった。

「……勝てよ、桜時っ…」
遠ざかる背中を見つめ、男がそっと呟く。

「その時、お前に…すべてを話そう…」
『グガアアアアっ……』
「……っ」
鬼人たちが群れを成し、たった一人で立つ男のもとへと、取り囲むように近づいてくる。
「“時雨丸（しぐれまる）”っ…」
男が瞳を鋭くし、右手に持った刀を、ゆっくりと構える。
「八犬士が一、第五十四代・里見犬孝っ…参るっ…！！」
気迫ある表情を見せた犬孝が、鬼人の群れへと、飛び出していった。

その頃、内兎の作り出した水の城内。
「白鬼っ…」
険しい表情を見せた輝矢が、額から一筋の汗を流しながら、強く警戒するように目の前に立った内兎を見つめる。
「白鬼一族っ…」
それは、白い髪と赤い瞳を持つ、鬼人一族。輝矢の母・朝日たち

黒鬼一族が、犠牲となってまで封印し、この世界から消し去ったはずの一族。

「何故…白鬼一族のアナタがっ…」

戸惑うように、声を発する輝矢。

「白鬼一族はっ…十年前にこの鬼が島で全員、封じられたはずっ…」

――――いやあああああっ！！――――

十年前、輝矢の目の前で、輝矢の父・武矢、母・朝日とともに。

「随分と今更な質問だね…輝矢…」

そんな輝矢に、内兎がそっと微笑みかける。

「シルクに会った時から…封印が解けてることなんて…気づいてたはずでしょう…？」

「……っ」

内兎の言葉に、輝矢が眉をひそめる。

――――我らは復活するっ！！必ずなぁっ！！――――

幼かったこと、その後に両親を失ったこと、太狼に後ろへと隠されたことなど、色々と理由はあってうろ覚えではあるが、封印のあの瞬間、輝矢が見た白鬼一族の女は、確かに牢戸知玖であった。牢戸知玖も、白鬼一族であるということは、すでに輝矢も気がついていたのである。

「いくら宿敵“玄神”の力とはいえ…あの時の武国主の力は、それほど強いものではなかった…」

内兎が薄い笑みを浮かべながら、その言葉を続ける。

「だからこそ…二年後すぐに、シルクは封印から解き放たれた…」

「……。」
輝矢が少し、視線を落とす。
――――次狼ぉぉぉっ！！――――――
そうして、解き放たれたシルクが、諸刃を操り、そして起こった悲劇。
「まぁシルクも…まだ力の方は…完全には、封印から解かれていないみたいだけどね…」
「完全っ…ではない…？」
その言葉に、曇る輝矢の表情。
――――――“鬼閃”っ…――――――
――――――うぅっ…！！――――――
相対したシルクは、その圧倒的な力で月器を砕き、輝矢はシルクに手も足も出なかった。
「あれでっ…？」
計り知れないほどの力の差を感じたシルクが、あの状態でまだ、完全ではないというのは、信じ難いことであった。
「では…アナタも封印から…」
「ううん…それは違う…」
「えっ…？」
首を横に振る内兎に、輝矢が眉をひそめる。
「僕はもう一人の牢戸知玖さ…正確に言えば、白鬼一族でもない…」
「もう一人のっ…牢戸知玖っ…？」
困惑した様子で、聞き返す輝矢。

「それはどういうっ…」
「さっき言ったでしょう…？シルクの力は…まだ完全には復活してないって…」
「……。」
問いかけようとした輝矢であったが、遮って答える内兎のその話に、真剣な表情で耳を傾ける。

「僕は…その力の一部…」
「えっ…？」
「封印されていたシルクの力が…人の形を成したもの…それが僕なんだ…」
「……っ！」

輝矢が衝撃を走らせるように、大きく目を見開く。力が人の形を成すなど、考えられないことである。

――――輝矢っ…――――

「……っ」

考えられないと思ったその時、きこりの泉で出会った、月器の化身である少女の姿が思い出された。あれは輝矢の心の中だけであったが、シルクの強力な力ともなれば、実体化してこの場に立つことも不可能ではないのかも知れない。

「ここで眠ってたのを…シルクに目覚めさせてもらったんだ…」
「それで…もう一人の牢戸知玖とっ…」
「そうっ…」

輝矢の言葉に大きく頷き、内兎が楽しそうな笑みを浮かべる。

「シルクの聞いてたこと、見てたことは…全部、僕にも伝わる…だから…」

内兎がゆっくりと手を伸ばす。

「だから…ずっと見ていたよ…シルクを通して…君のことをっ…」

「……っ」

――――ずっと見ていた…もう一人の僕を通して…――――

玄上家での内兎の言葉が思い出される。あの言葉の意味が、今、やっと理解出来た。

「アナタがシルクの力の一部というのならっ…」

輝矢がその瞳を鋭くし、戦いを始めるべく、身構える。

「ここでアナタを倒せばっ、少なくとも一部は、シルクの力を失くせるということとっ…！」

「そうだね…」

身構える輝矢にも動じず、内兎が冷静に答える。

「でも残念っ…」

「えっ…？」

――――バァァァァーンっ！！――――

「……っ！」

輝矢の足元の地面から水が突き上げ、輝矢の足を絡め取った。

「これはっ…！」
紐状の水に足を取られ、動きを封じられた輝矢が、焦ったように声を出す。
「鬼人の水力っ…クっ…！」
輝矢が足元の水へ向け、右手をあげる。
“水月”っ…！！」
自らの足元へ、水の刃を放つ輝矢。
――――パァァァンっ！――――
「うっ…！」
だが、輝矢の放った水月は、足元に絡みついた水に、あっさりと弾き飛ばされてしまった。
「そっ…そんなっ…」
同じ水力でも、内兎の水力は、輝矢の水力よりも強いということなのだろう。シルクの力の一部というだけのことはある。
「輝矢…」
「……っ」
厳しい表情で足元を見ていた輝矢が、そっと名前を呼ばれ、顔を上げる。
「僕はね…ここに、君と戦いに来たわけじゃないんだよ…」
「えっ…？」
冷たく微笑む内兎に、眉をひそめる輝矢。

「では何の為にっ…！」
「君を…迎えに…」
「迎えっ…？」
睨みつけるように内兎を見た輝矢が、内兎のその答えに、戸惑うような表情を見せる。

「僕の…僕たちの仲間にならない…？輝矢…」
「えっ…」
「一緒に…人を滅ぼして…鬼だけの世界を創るんだ…」
「……っ！」

輝矢の表情に、大きな衝撃が走った。

第７６章　鬼への誘い　★１

――――　一緒に人を滅ぼして…鬼だけの世界を創るんだ…――――

「なっ…」

大きく衝撃を受け、しばらくの間、固まっていた輝矢が、やっとのことで口を開く。

「何をっ…！」

内兎へ、強い瞳を向ける輝矢。

「一緒に創るっ…！？バカなことっ…！私たち、黒鬼一族が滅びたのはっ、一体、誰のせいだと思ってっ…！」

「うん、確かに君達の一族が滅びたのは、白鬼一族のせいだ…」

声を荒げる輝矢に、内兎は冷静に答える。

「でも、滅ぼしたのは、“人”だよっ…」

「……っ！」

内兎の言葉に、輝矢が大きく目を見開く。

「だからこそ、僕は君の行動が理解出来ない…輝矢…」

少し眉をひそめ、内兎が輝矢の方を見つめる。

「どうして君は…一族の仇である“人”のために、戦うの…？」

「……っ」

不思議そうに、問いかける内兎に、輝矢が唇を噛み締める。

「同胞である…鬼を殺してまでっ…」

「同胞っ…？」

輝矢の眉が、引きつられる。

「何が同胞ですかっ…！アナタたち鬼はっ…！罪もない人間を苦しめてっ、殺してっ…！」

「人だって、罪もない君達一族を、滅ぼしたよっ…？」

「……っ！」

遮って言い放つ内兎に、輝矢が思わず言葉を失う。

「それはっ…！」

輝矢が頭の中で、必死に言葉を探す。

「それはっ…」

だが言葉は見つからず、輝矢は力なく俯いた。

「“人も獣人も鬼も…分け隔てなく生きられる世界を創る”…」

「……っ！」

父と母の夢を口にする内兎に、輝矢が驚いた様子で大きく目を見開き、勢いよく顔を上げる。

「その理想を…先に打ち砕いたのは誰…？」

「……っ」

内兎の問いかけに、輝矢が眉をひそめる。

「そ…れはっ…」

「そう、“人”だ…」

「……っ」

内兎の言葉に、そっと目を細める輝矢。

――――いやあああああああっ！！――――

確かにそれは、輝矢の目の前で打ち砕かれた。白鬼一族ではなく、共に歩もうとしていた、“人”の手で。

「だから僕らも…もう人を滅ぼすしかないんだよ…」
「……っ」
人を滅ぼすという言葉に、ハッとした表情を見せる輝矢。

「滅ぼす…？」
「そう…」
聞き返した輝矢に、内兎がゆっくりと頷く。

「滅ぼすんだ…“人”を殺すんだよ…一人残らず…」
「一人…残らず…殺す…？」
内兎の言葉を繰り返し、輝矢が考え込むような表情を見せる。

「“人”をっ…？」

牢戸知玖・居城。
「おぉ～おぉ～っ」
鬼が島の様子の映し出された壁を見ながら、ギンがどこか楽しそうに声をあげる。
「随分と好き勝手やっていますねぇ～もう一人のシルク様はっ」
「言い方には気をつけろ、ギン」
「……っ？」
背後から聞こえてくる声に、ギンが笑みを消し、ゆっくりと振り

返る。

「あれは確かにシルク様の力の化身…」

ギンが振り返ると、そこには諸刃が立っていた。

「だが人格は同じではない…シルク様とはまったくの別人…」

諸刃がその瞳を冷たく光らせ、壁に映し出された内兎の姿を捉える。

「でなければ…あのような軽はずみな行動、取るはずもない…」

「……っ」

その諸刃の言葉に、ギンが少し目を細める。

「それはそれはっ、失礼しましたっ」

「……。」

謝る気があるのか、ないのか、あまり感心のいかない態度を見せるギンに、諸刃が少し顔をしかめる。

「まぁいいんじゃないですかぁ～？結構、面白い展開になってきましたしっ」

「そういう問題ではっ…」

「そういう問題では、なくなってきたわね…」

『……っ』

部屋へと入ってくるその声に、諸刃とギンが驚きながら、素早く振り向く。

「シルク様っ」

「……。」

そこへやって来たのは、いつものような冷たい笑みを浮かべたシルクではなく、何か考え込んでいるような、そんな表情を見せたシルクであった。

「シルク様…」
「あの島で派手な戦いをするから…里見犬孝まで動き出したわ…」
「里見っ…？」
シルクの言葉に、ギンが少し首を傾げる。
「月の少女のことはともかく…このままでは、いらぬことまで知られる可能性がある…」
「……。」
懸念するようなシルクの言葉に、そっと目を落とす諸刃。
「わかりました、じゃあ僕がもう一度、迎えにっ…」
「……っ」
「えっ？」
立ち上がったギンの前に、制止を促すように右手を突き出すと、諸刃がそのまま、素早く部屋を出て行く。
「あっれぇ～？珍しいなぁ」
そんな諸刃の様子に、驚いたように目を丸くするギン。
「いつもシルク様のお付きで、滅多に単品じゃ動かないくせにぃっ」
「……。」
不思議がるギンの横で、シルクがそっと目を細め、諸刃の出て行った部屋の入口を見つめる。
「相変わらず…読めない子ね…」
そう呟くと、シルクはそっと笑みを浮かべた。
「ナイトを連れ戻すことを理由に…彼らを“殺し”に行ったのかしら…？」
もういない諸刃に、試すような口調で問いかけるシルク。

「それとも…“生かし”に行ったのかしら…？ねぇ？諸刃…」

その赤い瞳が、闇の中で、鋭く光った。

その頃。ゴンｖｓ波跡。

「グゥゥゥゥっ……」

赤き鬼と化した波跡が、少し俯き加減で、低く重い唸り声を発する。

「ガアアアアっ！！“降波薄”っ…！！」

波跡が大口を開き、そこから大量の水を放つ。

――――バァァァーンっ！！――――

「クっ…！」

放たれた水が激しい波を形成し、向き合っているゴンへと、高々と突き上げて襲いかかる。

「鬼人化して威力が上がってやがるなっ…！」

ゴンが少し、険しい表情を見せる。

「だがっ…！」

すぐにその瞳を鋭くし、右手に持っている天狼丸を構えるゴン。

「この程度じゃっ…！ヤラれねぇっ…！！」
振りかぶった天狼丸が、赤々とした炎に包まれていく。
「“一髪（いっぱつ）っ…二目（にもく）っ…”」
刀を包む炎の大きさが、ゴンの言葉とともに、大きくなっていく。
「“三耳（さんじ）っ”…！」
炎の逆巻く天狼丸を、自分のすぐ目の前へと持ってくるゴン。向かってくる大波へ、狙いを定める。
「“四首炎刃（よんしゅ）”っ…！！」
ゴンが天狼丸を振り切ると、刀先から、激しい炎が打ち出され、波跡の放った大波へと、真正面から向かっていった。
――――バァァァンっ！！――――
激しい衝撃音をたてて、ぶつかり合う炎と波。
「グっ…！？」
だが、やがて大波をすべて掻き消した炎が、その勢いを衰えさせることなく、大波の後ろに立つ波跡へと向かっていく。波跡の鬼の形相が、焦りへと変わる。
「グっ…！グアっ…！」
もう一度大波を放とうと、大口を開く波跡であるが、もうそんな時間はない。
「グゥっ…！ギャアアアっ！！」
ゴンの炎をもろに受け、激しい悲鳴をあげながら、後方へと倒れ

ていく波跡。

「グウゥゥゥっ……！」

倒れた後もしばらくは炎が消えず、その禍々しい皮膚を焼かれながら、波跡が苦しげな声を漏らす。

「……。」

炎に包まれ、倒れた波跡を、少し冷たい瞳で見つめるゴン。

「これでわかっただろ…？鬼人化したって、てめぇーと俺の力の差は、埋まらねぇっ」

「……っ」

強く言い放つゴンに、やっと炎の消えたところの波跡の体が、ピクリと動く。

「俺の仲間に、鬼人化した奴を、元の人間に戻せる力を持った奴がいる」

――――なんで、サソリの女だけが人間に…？――――

サソリの女や、粘っランドの青年が人間に戻ったように、桜時の“命力”を用いれば、この波跡を元の人間にすることも可能であろう。

「だからもう、無駄な足掻きはやめてっ…」

「グウゥゥゥっ…」

「……っ」

ゴンが言葉を言い終わらないうちに、波跡はゆっくりと、その火傷だらけの体を立ちあがらせた。立ち上がる波跡に、ゴンがそっと眉をひそめる。

「ウウゥっ…」
「……。」
両手の鬼爪を振り上げ、戦闘の意志を見せる波跡に、ゴンの表情が厳しくなる。
「そうかよっ…」
少し冷たく吐き出すように、そう言い放つゴン。

「ならっ…もう容赦しねぇっ…！」
再びその瞳を鋭くし、ゴンが天狼丸を振り上げる。

「こうなりゃ五火以上で、一気にっ…」
「俺は…」
「……っ？」
次の攻撃の一手を考えていたゴンが、波跡の放った人の声に、戸惑うような表情を見せながら、素早く顔を上げた。

「俺は…鬼人化した時に…たくさんの人を殺した…」
「何っ…？」
波跡の言葉に、ゴンが眉をひそめる。

「鬼人化したばっかりで…自分で自分が制御出来なくて…あの女の言うがままに、たくさん…」
「……っ」
“あの女”という言葉に、曇るゴンの表情。あの女とは言うまでもなく、ゴンが六年間、恨み続けている女のことであろう。

「殺したんだ…自分の家族も…大切な友達も…」
「……っ」

――――次狼ぉぉぉぉっ！！――――

その言葉に、思い出される過去。

「……。」

険しい表情を見せていたゴンが、そっと目を細め、波跡から目を逸らすように俯く。

「いくら鬼人化人間でなくなったって…元の人間に戻れたって…」

鬼と化した波跡の、物言わぬはずの瞳が、どこか悲しげに光る。

「この罪は…消えない…」

「……っ！」

――――ゴン……――――

波跡の悲しげな瞳と、重なるようにして見える、あの紫色の瞳。

「諸刃っ…」

重ねてしまったその人物の名を、ゴンが思わず呟く。

「もう戻れない…救いの道なんて選べない…」

波跡がその重く低い鬼の声で、すべてを諦めるように話す。

「だからっ…！もう戦うしかないっ……！！」

そう叫び、波跡が再びゴンへ向け、大口を開く。

「……っ」

戦いの意志を見せ、身構えた波跡を、険しい表情で見つめるゴン。

「諸刃っ…」

――――もう戻れない…救いの道なんて選べない…――――
すべての言葉が、諸刃が言っているように聞こえてしまう。

「俺に殺せるかっ…？あいつがっ…」
困惑した表情で、自分で自分に問いかけるゴン。

「ガアアアアアっ！！“降波薄”っ…！！」
「うっ…！」
迷いを振り切れないでいるゴンへと放たれる、波跡の大波。

「“天っ…！」

――――諸刃…諸刃をお願いします…――――
思い出される、次狼の言葉。

「クっ…！」
その言葉が、ゴンの天狼丸を止めてしまう。

「うぅっ…！」
刀を止めたゴンへ、迫る大きな波。

――――バァアアアーンっ！！――――

「うわあああああっ！！」

ゴンが、激しい波へと呑まれていった。

第７６章　鬼への誘い　★２

アリスｖｓ城歌。
「ドォ～は“ドカン”のドォ～っ♪」
城歌が美しい声で、高々と歌い上げる。

「リピィートっ！」

――――ドカンっ！ドカンっ！ドッカァァァーンっ！――――

「クっ…！」
次々と起こる衝撃を、アリスが素早く動き、一つ残らずかわしていく。

「さっきからドッカンドッカンばっかりぃっ」
すべてをかわし、やっと着地したアリスが、どこか不満げな表情を見せる。
「他に芸はないわけぇ？」
「……っ」
「えっ…！？」
すぐ後ろに迫る気配に、アリスが驚きの表情を見せた。

――――キィィィーンっ！――――
甲高く響く、金属音。

「クっ…！」
「フフっ…」
向き合ったアリスと城歌の間では、六刻と細身の白い剣が、重な

り合っていた。険しい表情を見せるアリスに、城歌がそっと微笑みかける。

「ソォは“ソード”のソォ～♪」
「……バカの一つ覚えってわけではないみたいねぇっ」
静かに歌う城歌に、アリスもそっと口元を緩める。

『……っ！』
二人が同時に武器を離し、後方へと飛んで距離を取る。

「シィ～は“縛り付け”のシィ～っ♪」
「……っ」
距離を取った城歌が再び歌い、アリスへと縄状の光が数本、向かってくる。

「“針器・三刻”っ…！」
アリスが剣状の六刻を、直角に曲がった三刻へと変え、ブーメランのように投げ放つ。

――――パァァァンっ！！――――

高速で宙を舞った三刻が、城歌の放った縄状の光を、一本残らず斬り落とす。斬り落とした三刻が、器用に回転し、アリスの手元へと戻ってくる。

「どぉっ？その音はもう通用しなっ…」
「ラァ～はっ…」
「えっ…？」
違う音を歌い始める城歌に、アリスの表情が曇る。

「ラは…“乱闘”のラとかっ…？」
何のラであるかを、何となく予想してみるアリス。
「ラァ～は“ラッパ”のラァ～っ♪」
「まんまじゃないっ！！」
楽しげに歌い上げた城歌の手元に現れるラッパ。その様子に、アリスが少し怒ったような表情を見せて、強く突っ込みを入れる。
「すぅぅぅ～っ…！」
大きく息を吸い、城歌がラッパに口を当てる。
「ふぅぅぅっ…！！」
――――パッパラパッパパァーっ！！――――
「ううっ…！！」
城歌がラッパを吹いた瞬間、辺りの地面が揺れるほどの大きな音が、周囲に響き渡った。思わず両手で耳を塞いだアリスの右手から、三刻が零れ落ちる。
「なっ…！何て音っ…！」
「“ソォード”っ♪」
「うっ…！」
いつの間にか、耳を塞いでいるアリスの目の前へと現れ、武器を落としたままのアリスに、笑ってソードを振り上げる城歌。
「クっ…！」
アリスが険しい表情で、振り下ろされるソードを見つめる。
「“針器・十二刻”っ…！！」

――――パァァァーンっ！！――――

アリスの足元で輝いた三刻が、巨大な盾へと形を変え、城歌の振り下ろしたソードを強く受け止める。

「何ですっレェ～♪じゃなくって、てぇっ！！？」

目の前に現れた盾に、焦っているような、焦っていないような態度を見せる城歌。

「ソォ～っ…盾にもなるんだったわねぇ～、“神器”というのファ～♪」

「ええっ…」

耳を塞いでいた手を下ろし、十二刻を持ったアリスが、勝ち誇ったような笑みを見せる。

「言ったでしょぉっ？“神器”をナメるなってぇ」

「言ってたわね…確かに…」

余裕の様子で言葉を続けるアリスに、城歌がそっと俯く。

「だからね、私はこの音を用意しておいたのっ」

「えっ…？」

「……っ！」

顔を上げた城歌が、冷たい笑みを浮かべる。

「レェ～は“劣化”のレェ～っ♪」

「……っ！劣化っ…！？」

城歌の歌に、一気に表情を曇らせたアリスが、十二刻を見下ろす。

――――ジュウゥゥっ……――――

「うっ…！」

アリスが見下ろすと、十二刻が、城歌のソードが触れた部分から、酸に溶かされるように、白い煙を放ち、凹み始めていた。

「クっ…！」

アリスが慌てて飛び上がり、城歌のソードから離れる。

「針器っ…」

少し距離を取ったところに着地し、大きな凹みの入ってしまった十二刻を見つめながら、アリスが険しい表情を見せる。中心部を溶かされてしまっているため、もう盾としては機能しないだろう。

「フフっ」

「……っ」

笑い声を漏らす城歌に、アリスがゆっくりと顔を上げる。

「残念だったわねぇ～これでもう“神器”は使えないファ～♪」

「……。」

今度は城歌が勝ち誇ったように笑うと、アリスがその表情を厳しくする。

「同じ“神器”の使い手だったとしても、やっぱり貴女と竹取輝矢は違うっ…」

城歌の笑みが、冷たく変わる。

「貴女は所詮っ、ナイトのおもちゃよっ」

「……。」

輝矢とアリスが戦いになったこと、その原因を、城歌は知ってい

るのだろう。アリスの痛いところを突き、再び精神的に追い込もうとしている。だがそうとわかっていても、心は揺れ動かされる。

「そうねっ…」
「……っ」
力なく俯くアリスを見て、城歌がさらに笑みを大きくする。

「やぁ～っぱりそうよねぇ～っ！」
「はぁっ？」
急に明るい声をあげるアリスに、城歌が大きく口を開き、えらく間の抜けた表情を見せる。

「なっ何っ？」
間の抜けた表情から、眉をひそめ、困惑した表情を向ける城歌。

「頭でもおかしくなっ…」
「いぃ～いこと言うわぁっ、あなたっ」
「……っ？」
感心したようにそう言いながら顔を上げたアリスは、追いこまれるどころか、ひどく晴々とした笑顔を見せていた。そんなアリスの様子に、城歌はさらに戸惑う。

「私も前から、そう思ってたのよぉっ」
アリスが目を細め、口端を吊り上げる。

「“輝矢と私は違う”ってっ」
「……っ」

――――やっぱり貴女と竹取輝矢は違うっ…――――
アリスが反応したのは、城歌の何気ないあの言葉。

「そうっ、私と輝矢は違うのぉっ」
微笑んだアリスが、大きく頷く。

「だからっ、私は輝矢を目指す必要なんてないっ、輝矢になる必要なんてないのぉっ」
「うっ…！」
自信を持って言い放つアリスに、城歌が少し顔をしかめる。内兎と同じように、輝矢と比較して弱らせるつもりであったが、逆に迷いを振っ切らせてしまったようである。

「ああぁ～っ、スッキリしたわぁっ」
「だっ…！」
「……っ？」
声を発する城歌に、アリスが丸くした目を向ける。

「だから何だっていうのっ！？今更迷いの振り切れたところでっ、貴女の“神器”はもうっ…！」
「ああ、これっ？」
「えっ…？」
城歌がすべてを言い終わらないうちに、アリスは徐に凹んだ十二刻を持ち上げた。

「“針器っ…」
アリスの声に反応し、十二刻が、強い銀色の光を放つ。
「……っ六刻”」

――――パァァァーンっ！！――――

「……っ！！」

強い光を放ちながら、元の美しい剣へと姿を変える針器に、城歌が大きく目を見開く。

「“神器”は変幻自在の武具よぉっ？少し凹んだくらいで、どうにかなるわけないじゃなぁ～いっ」

その輝く美しい剣を構え、アリスが余裕の表情で言い放つ。

「何度、言わせるのぉっ？“神器”をナメるなってっ」

「クっ…！」

挑発するように言い放つアリスに、城歌が悔しげに唇を噛み締める。

「さぁっ、とっておきの音もダメだったしぃ、これからどうするぅ？」

「……っ」

もうすでに勝利を確信したかのように、上から目線で問いかけるアリスに、城歌はそっと俯き、ソードを持っていない方の拳を、強く握りしめる。

「まぁどうするって言ったって、もうほとんど残ってる音なんてっ…」

「私に残ってる音は、後一つっ…」

「……っ」

俯いたまま声を発する城歌に、アリスがその笑みを消し、そっと瞳を鋭くする。

「最後の音は…ミ…」

「ミ…？」

囁かれた音に、眉をひそめるアリス。

「ドレミファソラシドの中で、最も危険な音よ…」
ゆっくりと顔を上げる城歌。

「出来れば、使いたくなかったけれどっ…」
「……っ」
その城歌の瞳は真剣で、今までのような余裕は一切なく、アリスは思わず、ごくりと息を呑んだ。

「そんな危険な音っ…？まさか…“皆殺し”とかぁっ…？」
再びアリスが、音の予想を立てる。

「でも“皆殺し”ったって、私しかいないしぃっ…」
「ミは…」
「……っ！」
歌う態勢を取る城歌に、アリスが厳しい表情を作り、警戒するように身構える。

「ミィ～は“ミラクル”のミィ～っ♪」
「だあああああああっ！！」
城歌の歌に、身構えていたアリスが、勢いよくズッコケる。

「何よぉっ！？その超アバウトな感じはぁっ！」
「アバウトじゃないファっ…」
「えっ…？」
落ち着いた口調で答え返してくる城歌に、激しく突っ込んだアリスが、少し戸惑うような表情を見せる。

「まさに“奇跡”よっ…」
戸惑うアリスに、城歌がどこか悲しげな笑みを浮かべる。

「“人”が“鬼”に変わるんだからっ…」
「えっ…」
「……っ」
城歌が持っていたソードを投げ捨て、自分の額に手を当てる。
「“鬼化帰化”っ…」
――――パァァァーンっ！！――――
「何っ…！？」
城歌の全身から放たれる、強い白光。そのあまりの眩しさに目を細めながら、アリスが必死に城歌を見つめる。
「グゥゥゥゥっ…」
「……っ？」
光の中から、漏れるように聞こえてくる異形の声に、アリスがそっと眉をひそめる。
「グガアアアアアアっ！！」
「……っ！！」
巻き起こった白光を突き破るようにして、そこに姿を見せたのは、黄色の皮膚に、真っ赤な瞳を輝かせた、鋭い金色の角と、牙と爪を持った、巨大な鬼であった。
「鬼っ…？」
戸惑いと畏怖の表情で、鬼を見つめるアリス。
「……っ！あのペイントはっ…」
その鬼の右頬には、その巨体には似合わぬ、城歌と同じ、星形の

ペイントが刻まれていた。
「あの女…なのっ…？」
城歌が鬼と化したことを、まだ信じきれずにいるアリス。
「そうっ！私よぉっ！玄上アリスっ…！！」
「……っ！」
響くその声は、先程まで歌を奏でていた城歌の声とはまるで違う、重みのある、暗い声であった。
「何がっ…！ミラクルよっ…！」
そう言い放ちながら、アリスは険しい表情で、鬼と化した城歌を見上げた。

第７６章　鬼への誘い　★３

由雉ｖｓ黒羽。

「“右翼・裂羽”っ！」
「“右翼・襲羽”っ…！」
由雉の投げ放った青い羽根に対し、黒い羽根を投げる黒羽。

――――パァァァァンっ！――――

二つの羽根はぶつかり合い、きれいに相殺する。

「“左翼・滅羽”っ！」
「“左翼・消羽”っ…！」

今度は赤い羽根を放った由雉に対し、黒羽も再び、黒い羽根を放つ。すると、二つの羽根は先程と同様、二人の間でぶつかり合って、きれいに相殺した。

「……。」
ぶつかり合った衝風が消えると、由雉は冷静な表情のまま、素早く懐に手を入れる。

「いつまで、こんな意味のない攻撃を続けるつもりだ…？」
「……っ」
羽根を取りだそうとした由雉の手が、黒羽の問いかけに止まった。

「認めてやる。お前の羽根は、俺の羽根と同等の力となった」
以前は由雉の羽根を圧倒していた、黒羽の羽根。だが、由雉の修行と、ハヤテの羽根の改良の甲斐あって、その力は、黒羽の羽根の力に追いついたのだ。武国の戦いの時は驚いていた黒羽も、もう認めざるを得ないのだろう。

「だが、だからこそ、羽根のぶつけ合いは無意味だっ…」
黒羽がさらに、言葉を続ける。
「お前と俺の羽根はまったく互角…いくらぶつけ合ったところで、勝敗はつかない」
「……。」
由雉は静かな表情で、黒羽の言葉に耳を傾けた。

「何かあるのなら、とっとと出せ」
「えっ？」
黒羽の言葉に、由雉が少し驚いたような声をあげた。
「お前のことだ。ハヤテのところへ行って、羽根の強化だけをしたはずもないだろう…？」
「……っ」
試すように問いかける黒羽に、由雉が少し眉をひそめる。

「“新しい羽根”を出せ、と、そう言っているんだ…」
「……。」
黒羽は迷いもなく、そう言い放った。由雉が新しい羽根を持っていることを、確信しているのだろう。そして由雉も、そのことについて、否定しようとはしなかった。

「“新しい羽根”、ねぇ～」
由雉が黒羽から目を逸らし、少し考えるように首を捻る。
「もうちょい、勿体ぶりたい気分なんだよなぁ～っ」

「フンっ」
まるで子供のように言う由雉に、黒羽が鼻で笑うような笑みを零した。

「いいのか？勿体ぶっていると、出す前に死ぬかも知れないぞ…？」
「じゃあ死ぬ前にぃ、ちょっといいっ？」
「何っ…？」
黒羽の挑発を受けなかった上に、発言を求める由雉に、黒羽が眉をひそめる。

「何だ…？」
「ハヤテから聞いた」
「……っ」
由雉がハヤテの名を発すると、黒羽が自然と顔を引きつる。

「君のお父さん、ウルシと、ハヤテのことっ」
「……そうか…」
少しの間を置いた後、黒羽がゆっくりと頷く。

「だから何だっ？俺が可哀想だと同情したから、戦いたくないとでも言う気かっ？」
「まさかっ」
黒羽の言葉を、由雉が間髪入れずに否定する。

「ハヤテとウルシ、どっちが間違ってたかって話だけどっ…」
「ああ、断然ハヤテの方が正しいと思う、とでも言う気か？」
「ううんっ」
「はっ？」
またしてもきっぱりと否定する由雉に、今度は黒羽が顔をしかめ、少し間の抜けた声を漏らした。

「ではウルシの方が正しいと？」
「それも、ううんっ」
「……っ？」
再び首を横に振る由雉に、黒羽が困惑した表情を見せる。
「ならば一体っ…」
「話聞いた時だけどっ、正直、“そんなのどうでもいい”って思った」
「なっ…」
由雉の言葉に、黒羽が思わず固まる。
「何っ…」
「世界がハヤテの羽根を選んだのだって、もう何年も昔の話だしぃ、君ら親子が不幸になったのはわかったけど、どうせ他人だしぃっ」
「超自己中心的だな…」
自分を中心に以外は物事を考えていないのであろう、由雉の言動に、黒羽は突っ込む元気も湧かず、ただ呆れた様子で呟いた。
「でも一つだけ…言えることがあるんだ…」
「……っ？」
急に大人びた口調となる由雉に、黒羽がまた眉をひそめる。
「僕は…“ハヤテの羽根”に、誇りを持ってるっ」
柔らかい笑みを浮かべる由雉。
――――ハローっ！マイソンっ！――――

「あんないい加減で、うざったくて、どうしようもないバカキングだけどっ…」

――――聞いてくれたまえっ！由雉っ！この羽根はねぇっ…！――――

「色羽造りに対する姿勢は、いつも真剣で、一生懸命で、ひたむきでっ…」

由雉が、懐から出した青い羽根を、強く握り締める。

「この羽根で戦えるのは、僕の誇り…」

握り締めた羽根を、由雉が自分の左胸に当てる。

「君も、“ウルシの羽根”に誇りを持ってるだろう…？」

由雉が顔を上げ、まっすぐに黒羽を見つめる。

「……。」

まっすぐな由雉の視線を受けた黒羽が、真剣な表情を見せる。

「……ああ」

「……っ」

しっかりと頷く黒羽を見て、由雉がどこか満足げに笑う。

「だったら…」

由雉がゆっくりと口を開く。

「僕が、君ら親子の憎しみに応える術があるとしたら、それは、この誇りを持って、君と全力で戦うことだけっ」

羽根を胸に当て、誇りを持って言い放つ由雉。

「僕の言ってること…間違ってるかな…？」

「……。」

向けられた由雉のまっすぐな瞳を、黒羽は少しも逸らすことなく、まっすぐに見つめ返す。

「それとも…理解出来ないかなぁ？」

「誰がだっ！！」

小バカにするように問いかける由雉に、黒羽が勢いよく突っ込みを入れる。

「フンっ」

黒羽がどこか怒った様子で、鼻を鳴らす。

「……いい度胸だっ」

少し下を向いた後、黒羽が小さく笑みを零した。

「では存分に応えてもらおうっ…！！由雉よっ…！！」

「……っ」

高々と言い放ち、両手を広げる黒羽に、由雉が表情を鋭くし、身構える。

「だが、お前に我が父の誇りとっ…この羽根と戦える程の力があるだろうかなぁっ…！」

黒羽が両手にそれぞれ、黒い羽根を構える。

「“襲羽・消羽”…“合翼っ…！」

二枚の羽根を重ね合わせる黒羽。重なった二枚の羽根が、光を放ちながら、一回り大きい、一枚の黒い羽根へと変わっていく。

「……漆羽”っ…！！」

「クっ…！」

向かってくる羽根を、由雉が高々と飛び上がって避ける。

――――バァァァーンっっ！！――――

「……っ」

黒羽の羽根が由雉のいた辺りの荒地を一面、削り取ると、飛び上がって、それを見下ろしていた由雉は、少し険しい表情を見せた。

「何て力だっ…」

降下していきながら、由雉がポツリと呟く。

「今のはまだ全力ではない。全力でやると、この島ごと、沈めてしまうからな…」

「……。」

不敵に微笑む黒羽を見つめ、着地した由雉が目を細める。

「確かに…島一つくらい、軽ぅ〜く沈められそうだね」

由雉が冷静な表情で、言葉を返す。

「大したものだよっ…」

「当たり前だっ…」

珍しく誉める由雉に、黒羽は強く頷く。

「この羽根はっ…！」

大きく口を開いた黒羽が、さらに言葉を続ける。

「お前の主と同じっ…！“鬼”の力で出来ているのだからなぁっ…！！」

「……っ！」

黒羽の放った言葉に、大きく目を見開く由雉。

――――輝矢が鬼って何っ？――――

――――輝矢が鬼ならっ、もう僕らなんて仲間でも何でもないでしょうっ！？――――

「クっ…！」

由雉の中で、振り切ったはずの迷いが、再燃する。

「さぁっ！勝負だっ…！！由雉っ…！！」

「……っ」

惑う由雉に、黒羽は再びウルシの羽根を放った。

門貴ｖｓ醍也。

「“重示”…」

醍也の小さな声に反応し、赤色の光を放つ、醍也の十字刃。

「“赤十字”っ…！」
赤く光る十字刃を構え、醍也がその瞳を鋭くして、門貴のもとへと飛び出していく。

「三度目ともなるとっ…さすがに見飽きたなぁっ…！」
向かってくる醍也を見つめ、そう言い放ちながら、門貴が高々と如意棒を振り上げる。

「如意棒・第一の舞っ…“空”っ…！！」

――――ビュゥゥゥゥンっ！――――

「クっ…！」
向けられる強い風を避けるため、醍也がその場で高々と飛び上がる。

「……っ」
「なっ…」
だが飛び上がった醍也のすぐ上空に、如意棒を振り上げた門貴の姿があった。驚いた表情を見せる醍也に対し、門貴が軽い笑みを浮かべる。

「だっりゃあああああっ！！」
「チっ…」
振り下ろされる如意棒に、険しい表情で、十字刃を突き出す醍也。

「えっ…」
だが突き出そうとした十字刃は重く、醍也は持ち上げることが出来なかった。

「しまったっ…まだ“重示”がっ…」
「自分の“重力”がっ、仇になったなぁっ…！！」
「クっ…！」
醍也が重示を解く隙も与えず、門貴が醍也へと如意棒を振り下ろす。
「だあああああっ！！」
「……っ！」
――――バァァーンっ！――――
門貴の振り下ろした如意棒をもろに喰らい、醍也が勢いよく、地面へと落下していく。
「うぐっ」
顔から地面へ落ち、醍也が苦しげな声を漏らす。
「くっ…」
「ふぃ～っ」
醍也が両手を突き、素早く起き上がると、その目の前に、上空から門貴が降りてきた。
「割りとやるな…サル…」
「“報告で聞いたより”、やろっ？」
立ち上がりながら言い放つ醍也に、門貴が少し嫌味のように問いかける。
「ああ…今度は俺が報告し直さないと…」
十字刃を持ち直しながら、醍也が真面目な顔を見せる。

「“サルは割りとやりました”って…」
「まんまやないかぁ～いっ！！」
醍也のあまりにお粗末な報告内容に、門貴からの活きのいい突っ込みが入る。
「まぁ、せやけどっ！」
門貴が気を取り直して、如意棒を構える。

「俺はお前に報告させる気はないっ！お前はここで俺が倒すっ！」
「……っ」
強く言い放つ門貴に、醍也がそっと眉をひそめる。
「輝矢んが待ってるんやっ！とっとと終わらせてもらうでぇっ！」
「……。」
まっすぐな瞳を見せる門貴を見つめる醍也は、ひそめたその表情から、どこか戸惑うような顔つきへと変えた。

「……わからない…」
「ああんっ？」
如意棒を構え、戦いの準備を整えた門貴が、醍也がポツリと発した声に、顔をしかめる。

「何やてぇ～っ？」
耳に手を添え、“聞こえない”といった態度を見せる門貴。
「わからない…」
「わからんっ？何がぁっ？」
醍也の言葉を、門貴は素直に聞き返す。

「お前たちが助けに来たのは…あの、“鬼の女”だろう…？」
「……っ」
問いかける醍也に、門貴が眉をひそめた。
――――輝矢んがっ…鬼な…わけ…――――
あの時、受け入れきれなかった事実。
――――じゃあ門貴は本当に、輝矢のこと、信じてるのっ…？――――
――――そっ…それはっ…――――
あの時、信じきれなかった、この心。

「……。」
門貴が少し厳しい表情で、堪らなく俯く。
「どうして助けに来たか…どうして助けに行こうとするか…わからない…」
戸惑いの表情で、言葉を続ける醍也。

「あの女は…お前たちの敵の…鬼なのに…」
「それは…」
何かを答え返そうと、門貴が整理のついていない頭の中を駆け巡り、必死に言葉を探す。

「それはっ…」
「俺の時は…誰も助けになんて…来なかったのに…」
「えっ…？」
答えを探していた門貴が、醍也の言葉に驚き、勢いよく顔を上げる。

「“俺の時”って…お前っ…」
「わからない…」
戸惑うように門貴が醍也を見つめる中、醍也がもう1度、その言葉を繰り返す。

「俺にわかるのは…」
醍也のその赤い瞳が、急に鋭く光る。

「敗北者には死を与える、ということだけっ…！」
「うっ…！」
「……っ」
急に顔つきを変える醍也に、門貴が一瞬、怯む。その瞬間を逃さず、醍也は門貴へ、左手を向けた。

「“重示”っ…！」
「なっ…！」
醍也の左手から放たれた赤い光が、ほのかに包み込むようにして、門貴の体全体へと広がっていった。

「なっ何っ…」
赤い光に包まれた自分の体を、戸惑うように見回す門貴。

「うっ…！」
門貴が大きく目を見開く。

「うがあああああっ！！」
急に体全体に重みを感じ、門貴はその場にひれ伏してしまった。
右手に握っていた如意棒も、力なく地面に転がり落ちる。

「なっ…何やっ…？これっ…」
まるで体のすべてを強く踏まれ、地面に押し付けられているような感覚であった。今までに味わったことのない感覚に、門貴が苦しみながら、戸惑いの表情を見せる。

「報告通り…割りと油断はしやすいな…」
「……っ」
歩み寄ってくる醍也を、門貴が強く睨みあげる。

「お前っ…何をっ…！」
「俺の“重力”が変えられるのは…この十字刃の重さだけじゃない…」
「えっ…？」
醍也の言葉に、門貴の表情が曇る。

「まさかっ…！」
「そう…俺が変えたのは…」
目を見開く門貴に、冷たい視線を投げかける醍也。

「お前の体重だ…」
「……っ」
体中を支配する感覚に説明がいくと、門貴は悔しげに唇を噛み締めた。重い体はまったく言うことを聞かず、起き上がることすら出来そうもない。

「重い風など…何の意味もないな…サル…」
「クっ…！」
そっと微笑む醍也に、門貴が険しい表情を見せる。

「さぁ…これで終わりだ…」
門貴のすぐ傍に立った醍也が、右手の十字刃を、高々と振り上げる。
「敗北者に…死をっ…！」
「うっ…！」
振り下ろされる十字刃に、門貴の表情が歪んだ。

第７６章　鬼への誘い　★４

――――滅ぼすんだ…“人”を殺すんだよ…一人残らず…――――

「殺す…？」

内兎の言葉を繰り返す輝矢。

“人”をっ…？」

――――俺が創るっ！――――

――――守ってあげたいな…あの子の、子供たちの未来だけは…――

――――

太狼が、父が母が、必死に守って来た“人”。

――――この誇りっ…そう簡単には折らせへんっ…！！――――

――――こんな立派な息子を持って…私は“幸せ”ねっ…――――

今までずっと見てきた、たくさんの温かくて、美しい“人”。

――――輝矢っ！――――

大切な、“人”。

「そんなことっ…」

強く唇を噛み締め、輝矢が必死に声を出す。

「そんなことないっ…！そんなことはさせないっ…！！」
輝矢が思わず、声を張り上げる。

「人はっ…人の世界はっ…！私が守ってみせますっ！！」
「……。」
必死に叫ぶ輝矢に対し、そっと目を細める内兎。

「例えっ、アナタたちが何人いようとっ…！何をしてこようとっ…！私はっ…！！」
「じゃあ守ったとして…」
「……っ」
叫ぶ輝矢に、内兎が勢いよくその声を遮る。

「僕を倒して…シルクを倒して…この世界からすべての鬼を倒したとして…」
内兎の冷たい赤の瞳が、まっすぐに輝矢を捉える。

「その後、君はどうするのっ…？」
「えっ…？」
その問いかけに、戸惑いの声を出す輝矢。

「たった一人残った、鬼の君は…どうするわけ…？」
「そっ…それはっ…」
「そして、たった一人残った、鬼の君を…人間たちはどう思うかな…？」
口ごもる輝矢に、内兎はさらに言葉を続ける。

「きっと、こう思うと思うよ…？」
内兎がそっと、口元を緩める。

「“いなくなればいい”…」
「……っ！！」

その言葉に、輝矢が大きく目を見開く。

――――お前の存在は…この世界には必要ない…――――
――――あんたなんかっ…いなくなればいいのよぉぉっっ！！――
――

輝矢を強く揺さぶる、その言葉。

「あっ…」

言葉も出なくなった輝矢が、激しく動揺した表情で、思わず頭を抱える。

「うっ…！ぁっ…」

その言葉を受け入れたくないのか、とにかく否定したいのか、輝矢は小さく声を漏らしながら、必死に首を横に振った。

「ちっ…違うっ…！」

輝矢が必死に、否定の言葉を吐き出す。

「違うっ…！私っ…！」

――――輝矢っ！――――
――――輝矢ぁぁぁ～～んっ！――――

――――輝矢っ――――

誰からも認められなかった輝矢を、皆から“いなくなればいい”と言われた輝矢を、慕い、そして共に歩んでくれた、あの笑顔たち。

「私にはっ…！」
「“仲間”がいる…？」
「……っ」
輝矢が吐き出そうとした言葉を、代わりに言い放ったのは内兎であった。

「どこにっ…？」
「えっ…」
内兎からの問いかけに、輝矢の表情が止まる。

「どこにいるの…？」
「どこっ…？」
戸惑うように、内兎の言葉を繰り返す輝矢。

「“仲間”はみんな…君が壊してきたじゃない…」
「……っ！」
内兎の言葉に、輝矢が大きく目を見開く。

「“仲間”は誰も…鬼である君を、認めてはくれなかったじゃない…」
「……っ」
苦しそうに、下を向く輝矢。

――――そうやって俺に、全部押しつけんじゃねぇっ！！――――
――――お前の言うたことは、同じことやっ！！――――
――――もうボクらなんてっ、仲間でも何でもないでしょっ！？――
――

輝矢の存在が壊した。楽しく、心地よい時間を、居場所を。今までの旅で、ゆっくりと築き上げてきた絆を。

「“朱実桜時”だって…」
「……。」

――――うっ…！――――
拒絶された、その時。
――――輝矢っ！――――
心の奥底で、ほんの少しだけ、受け入れてくれることを期待していた自分に、絶望した。

「……っ」
輝矢が目を細め、辛そうに俯く。

「期待しちゃった…？彼が君を受け入れてくれるって…」
「……っ！」
自分の心を見透かす内兎に、輝矢が大きく目を見開く。

「君はわかっていたはずだよ…？輝矢…」
確認するように、輝矢へと問いかける内兎。

「彼は人間の王子様…誰からも愛される、汚れのない特別な存在…」
内兎が少し、遠い瞳を見せる。

「人にも鬼にもなれない自分への反動なのかなぁ？彼の存在に、君はひどく憧れた…」
「……。」
内兎は輝矢のことを、まるで全てわかっているかのような口調で話す。ひたすらに続く言葉を、輝矢はただ、厳しい表情で、反論もせずに聞いていた。

「でも、それでも所詮、君は鬼っ…」
内兎の瞳が、ふと鋭く変わる。

「彼に君は相応しくない」
「……っ」
突き放すように言う内兎に、輝矢が険しい表情を見せる。

「それを君は知っていた…それでも憧れは止まない…」
固まる輝矢に、内兎が言葉を続ける。

「誰からも愛される彼に…君は強く惹かれ続けたっ…」
「……っ」
そっと俯いた輝矢が、唇を噛み締める。

「だから君は、必死に止めた…自分の中の想いを…」
内兎が少し、目を細める。

「“好きだ”と口にすることで、自分自身に“好きになってはいけない”と言い聞かせたんだっ…」

「……っ」
言葉を続ける内兎に、言葉を無くす輝矢。
――――好きですよっ、ハチっ――――
そう言うことで、自分を止められると思っていた。嫌でも桜時に惹かれていく自分に、“それだけはいけない”と思わせることが出来ると思っていた。
――――俺はイヌだけどっ…もっと羽ばたきたいんだっ！羽ばたいていきたいんだよっ！――――
――――花自身が、いつか散り逝くことを知りながら…それでも一生懸命咲くから、美しいんだって…――――
――――輝矢っ！――――
それなのに、結局、“好き”と言う度に、どうしようも出来ないくらい、桜時を愛した。
「……。」
否定出来ないすべてに、輝矢がそっと目を伏せる。
「可哀想…」
目を伏せた輝矢に、内兎がゆっくりと手を伸ばす。
「可哀想な輝矢…」
伸ばされた手が、深く俯いた輝矢の頭を、優しく撫でた。

「人間に…叶わぬ恋をして…」
「……ぅ…ぃ…」
「……っ？」
囁かれた、本当に小さいその声に、内兎が眉をひそめながら、耳を傾ける。

「もう…いい…」
「……っ」
諦めたように聞こえてくる、その言葉に、内兎が鋭く口端を吊り上げる。

「もう…やめて…」
「輝矢っ…」
小刻みに震え、弱々しく俯く輝矢に、内兎は優しく声をかける。

「輝矢…君は騙されてたんだよ…悪い人間たちに…」
口の端を吊り上げ、輝矢へ微笑みかける内兎。

「ずる賢い人間たちは…自分たちじゃ鬼を倒せないからって…鬼である君を騙して、利用しようとしてただけなんだ…」
輝矢の心を揺れ動かす、その穏やかな口調。

「君が鬼を倒したら…人間たちは君を必要としなくなるよ…？」
悪魔のような囁きが、輝矢の耳に届けられる。

「そして人間たちは…君を殺す…」
内兎の唇が、歪む。

「他の鬼たちを殺すのと同じように…何の躊躇いもなくっ…」
「……っ」
その言葉に輝矢はそっと目を細め、頭を抱えていた両手を、力なく下ろした。

「聞きたく…ない…」
再び、すべてを諦めるようなその言葉を、口にする輝矢。

「何も…聞きたくない…」
弱々しいその声で、光を無くした瞳を見せる。

「もう…何も…見たくない…」
輝矢が、その瞳をゆっくりと閉じた。

「そうっ…」
そんな輝矢を見て、内兎が穏やかに笑う。

「じゃあ…何も見なくていいよ…？輝矢…」

――――パァァァァァンっ！――――

「……っ」

内兎の指の合図に、輝矢の足を絡め取っていた水が舞い上がり、球状となって、少し目を開けた輝矢を、包み込んでいく。周囲へと広がっていく水を虚ろに見つめながら、輝矢は何の抵抗もしようとしなかった。輝矢を包んだ水球が、床の上から少し浮かび上がる。

「さぁ目を閉じて…」
内兎がゆっくりと手を伸ばす。

「輝矢…」
内兎の伸ばされた手が、輝矢を包む水の球体に触れた。

「次にその瞳を開いた時…君が見るのは…鬼だけの世界だよ…」
「……。」

その内兎の言葉に、輝矢はそっと、瞳を閉じた。

「……っ」
水の中でその目を閉じた輝矢を見て、内兎が満足げな笑みを浮かべる。

「やっと…」
球体に触れた手を、そっと動かす内兎。

「やっと…手に入れた…」

内兎の手が、直接触れてはいないが、輝矢の頬を撫でる。

「僕だけの…輝矢…」

水球の壁に、内兎が顔を埋める。

――――――――――――――っ――――――

「……っ」

その時、何かを感じ、内兎がすぐさま、水球から顔を離した。

「来たんだね…」

内兎が少し後ろを振り返り、小さく笑みを零す。

「やっぱり…最後まで僕のことを邪魔するのは…君だったようだね…」

その頃、皆の力を借り、先へと進んだ桜時。

「あっ…！見えたっ…！」

桜時の瞳に、間近に迫った水の城の、入口らしき門が飛び込んできた。

「あそこにっ…！輝矢がっ…！」

水の城の入口を目指して、桜時がさらに足を速める。

――――――パァァァーンっ！！――――――

「何っ…！？」

桜時が門を目指して走っていたその時、周囲の荒地から勢いよく水が突き上げ、桜時のいる辺りから、門までの空間を、あっという間に包み込んだ。

「こっ…これはっ…！」

ドームのように形成されていく水の球体を見つめ、焦った表情を見せた桜時。その場で足を止め、桜時が辺りの水を見回す。

「“水力”っ…」
「こんにちは…」
「……っ！」

眉をひそめていた桜時が、聞こえてくる声に、勢いよく振り向く。

「あっ…！」
「……。」

水の城の門から、桜時のいる水の空間へと出て来たのは、薄く冷たい笑みを浮かべた、白い髪に赤い瞳の青年。その青年の姿に、桜時が大きく目を見開く。

「内兎っ…！」
「また会ったね…桜時…」

二人が、敵だとは知らなかった頃に交わした名を呼び合う。

「この水はやっぱり、てめぇーかっ…！」

そう言い放ちながら、桜時が鋭い瞳を見せ、右手の村雨丸を構える。

「輝矢はっ…！輝矢はどこだっ…！？」

「……っ」
声を張り上げ、問いかける桜時を見て、内兎がそっと微笑む。
「あの城の中にいるよ…よぉく眠ってる…」
後方の城を指差し、呟く内兎。
「人間に…絶望して…」
「……っ！」
内兎の言葉に、驚いたように大きく目を見開く桜時。
「バカ言うなっ…！輝矢が人間に絶望するはずっ…！」
「したさっ…」
桜時の言葉を遮り、内兎が強く言い放つ。
「すべての人間に絶望して…輝矢は“もう何も見たくない”と、その瞳を閉じた…」
「……っ」
言葉を続ける内兎に、桜時が険しい表情を見せる。桜時が見てきた輝矢からは、信じられないような話であったが、内兎が嘘をついているようにも見えなかった。
「そんなっ…輝矢がっ…」
「信じられない…？おかしいな…」
問いかけた内兎が、口端を吊り上げる。
「輝矢に最後の絶望を与えたのは…君たちだろう…？」
「えっ…？」
内兎の言葉に、桜時が戸惑うような声を出す。

「君たちの強い拒絶が…」
その鋭い赤色の瞳が、突き刺すように桜時を見る。
「輝矢から最後の希望を奪った…」
「……っ」
一瞬で笑みを消し、どこか責めるような、冷たい表情を見せる内兎に、桜時が眉をひそめる。
――――ハチっ……――――
――――うっ…！――――
――――……っ――――
たった一つの希望を求めて、伸ばされたその手を、桜時は強く拒絶した。
あの時の、すべてを諦めてしまったような、輝矢の表情。輝矢の小さな希望を奪い、大きな絶望を与えたのは、間違いなく桜時であろう。
「……。」
桜時が厳しい表情で俯く。
「だからね、輝矢は僕が連れていくことにした…」
「えっ…？」
俯いていた桜時が、思わず顔を上げる。
「絶望した人の世界から連れ出して…僕ら鬼とともに歩んでもらう

んだ…」
「鬼とっ…？」
平然と話す内兎に対し、大きく目を見開く桜時。

――――みんなの意志は…あなたが継いでくれるもの…――――

黒鬼一族の意志を、輝矢に託した朝日。

――――太狼…この子をお願いっ…――――

武矢と朝日から、輝矢を託された太狼。

――――輝矢ちゃんを…頼んだよ…――――

太狼から託された、意志。

「そんなことっ…！」
巡ってきた意志のすべてを心に刻み、桜時が強く唇を噛み締める。
「そんなことはさせないっ…！！」
大きく口を開き、桜時が強く言い放つ。
「輝矢はっ…！輝矢はお前たちなんかとはっ…！！」
「そこで相談なんだけど…」
「……っ？」
叫ぼうとした桜時の言葉を遮り、内兎が口を挟む。

「一つ、取引をしない…？桜時…」
「取引…だとっ…？」
内兎の言葉に、桜時が眉をひそめる。
「そう…取引…」
聞き返した桜時に頷きながら、内兎がそっと笑みを浮かべる。
「僕はね…輝矢を連れていくことだけが目的なんだ…」
内兎が少し後ろを向き、輝矢のいる水の城を見る。
「正直…“命咲かす者”である君にも…他の人たちの命にも、興味はない…」
「……っ」
言い切る内兎に、桜時が少し驚いた表情を見せる。牢戸知玖の目的は、命力を持つ桜時のはずである。だがシルクと仲間のはずの内兎は、桜時には興味がないという。シルクと内兎は別に動いているのだろうか。考えを巡らせ、桜時は少し眉をひそめた。
「だから…このまま大人しく輝矢を僕にくれたら…他のみんなは生きたまま、解放してあげるよ…」
「なっ…！」
内兎の出した条件に、桜時が大きく目を見開く。
「どうかな…？悪い条件じゃないと思うけど…」
「誰がっ…！」
問いかける内兎に、桜時が強く言い放つ。

「俺たちは輝矢を助けに、ここまで来たんだっ！そんな条件呑むはずっ…！」

「いいのっ…？」

「えっ…」

鋭く問いかける内兎に、言葉を止める桜時。

「死んじゃうよ…？みんな…」

内兎の声が、冷たく響く。

第７６章　鬼への誘い　★５

御伽湖・中央。
「うっひゃあああんっ！！」
湖のど真ん中に、情けない声が響き渡る。
「万亀ぃぃぃ～っっ！！」
その声の主は、浦島であった。湖に浮かぶ岩の上に、万亀と並ぶようにして立っている。

『グガアアアアアっ！！』
「うひゃあああああっ！！」

二人の立つ岩の周囲には、見渡す限りの鬼の群れが、湖を埋め尽くしていた。唸り声をあげる鬼たちに、浦島が涙を流して、さらに情けない悲鳴をあげる。

「どうしよぉっ！？どうしよぉっ！？万亀ぃぃぃ～～っ！」
涙を流した浦島が、助けを求めるように隣にいる万亀を見る。
“強ガス”も切れたわ…」
万亀が、空になったスプレー缶を、湖に投げ捨てる。
「万事休すね…」
「いっやあああああああああっ！！」
言い切る万亀に、浦島が頭を抱える。

「やっぱ俺っ、お留守番してれば良かったぁぁっ！！」
「今更ね…玉之介…フフフ…」
激しく後悔している浦島を見て、万亀が不気味に微笑む。

「さて…」
『グガアアアアっ！！』
「どうしたものかしら…フフフ…」
微笑む万亀の額に、一筋の汗が流れ落ちた。

鬼が島。海岸沿い。
「グガアアアアアっ！！」
「うわわっ！」
攻め込んでくる鬼人に、慌てて弓を構える犬信。
“白矢”っ…！！」
弓を構え、矢を作り出そうと、右手をかざす。

「えっ…！？」
だが、そこに、矢は生まれなかった。

「やっばいっ！もう“創力”がっ…！」
「グガアアアアっ！！」
「うっ…！」
矢を作ることの出来ない犬信に、鬼人が鋭く鬼爪を振り上げる。

「レイレイぃ～っ！レイレイぃ～っ！！」
犬信が大きな声を出し、犬礼を呼ぶ。
「グガアアアアっ！！」

「うわっ！」
鋭い鬼爪が、犬信へと振り下ろされ、犬信が少し焦ったような声を漏らした。

「……っ」
「ギャアアアアアっ！！」
「……っ？」
鬼爪が犬信に届こうとしたその瞬間、その爪を振り下ろそうとしていた鬼人の胴体が、勢いよく斬り裂かれ、激しい悲鳴をあげて、消えていった。

「まったく…何をしている…腐れ小僧っ」
「あっ！レイレイぃ～っ！」
消えた鬼人の後方から、呆れたような表情を見せた犬礼が現れると、犬信が大きな笑顔を見せる。
「それでも誇り高き八犬かっ？」
「仕方ないでしょ～？“創力”尽きちゃったんだからぁっ」
冷たく言い放つ犬礼に、犬信が少し口を尖らせる。

「……。」
その二人のやり取りを、少し離れたところから、厳しい表情で見つめる犬仁。

「うぅっ…」
「……っ」
犬仁のすぐ横には、犬信と同じように力尽きてしまい、座り込んでいる犬智の姿があった。犬智を横目に、犬仁がさらに険しい表情を見せる。

「皆、限界が近い…」
顔をしかめ、白槍を握る手に力をこめる犬仁。
「このままではっ…」
犬仁の顔から、汗が零れ落ちた。
「グガアアアアアアっ！！」
「“逆鏡”っ…！！」
向かってくる鬼口に気づき、鈴白が両手を突き出して、体の前に大きな鏡を作る。
――――バァァァーンっ！！――――
「ううっ…！！」
「お兄ちゃんっ…！」
鏡で鬼口を受けた鈴白が、大きく後方に押されると、近くでしゃがみ込んでいた、負傷している芹が、思わず身を乗り出した。
「もうっ…弾き返すだけの力がっ…！」
どんどんと押され、鈴白が顔をしかめる。
「クっ…！」
鈴白の鏡に、大きくヒビが入ると、鈴白は強く唇を噛み締めた。
「“雪乱雲”っ…！！」

――――バァァァーーンっ！！――――

「うわっ…！」

横から飛んで来た雪に鬼口が砕かれ、その衝撃で、鈴白が鏡ともども、後ろへと吹き飛ばされる。

「痛てててっ…」

「大丈夫っ！？お兄ちゃんっ…！！」

倒れ込んだ兄のもとへ、芹が駆け寄っていく。

「大丈夫…それより今のは…」

「雪だったから、たぶんっ…」

「……。」

『あっ…！』

煙の向こうから見えてくる人影に、鈴白と芹が大きく目を見開く。

『虎昌さっ…！』

「ハァっ…ハァっ…ハァっ…」

『……っ』

そこに立っていたのは、服のあちこちをボロボロにし、肩で大きく息をした、いつになく弱った様子の白雪であった。顔には、たくさんの汗が浮かんでおり、その表情にまったく余裕は見られない。

「虎昌様…」

「……っ無事っ？あんたたちっ」

声に反応し、振り向いた白雪が、鈴白と芹に問いかける。

「虎昌様が…」

「“下の名前で呼ぶんじゃないわよ”って、言わないなんて…」
汗を拭う白雪を、戸惑いの表情で見つめる鈴白と芹。いつもの怒鳴り声をあげられないほどに、白雪は疲れているのだ。

「グガアアアアっ！！」
「たくっ…！」
止まることなく向かってくる鬼人に、重い体を引きずるように、再び雪剣を構える白雪。

「虎昌様っ…」
「……。」
不安げに白雪の名を呼ぶ芹の横で、鈴白は何とも厳しい表情を見せた。

「みんなっ…」
水の壁に映し出された映像が、桜時に皆の危機を知らせる。戦い続ける皆の限界が近いことが見て取れ、桜時は険しい表情を見せた。

「このままじゃっ…」
「そう…このままじゃ君の仲間は、みんな死ぬ…」

「……っ」
横から聞こえてくる声に、映像を見ていた桜時が振り向く。
「でも輝矢を渡してくれれば…みんなは死なない…」
「……。」
微笑む内兎に、眉をひそめる桜時。

「たった一人の輝矢か…仲間全員の命か…」
二択を表すように、ゆっくりと両手をあげる内兎。

「さぁ…どうする…？」
その両手が、桜時の方に向けられる。

「朱実桜時…」
「……っ」

桜時に、厳しい選択の時が、訪れようとしていた。

第７７章　つながる絆　☆１

鬼が島・水の城内。

「……。」

水球に包まれた輝矢は、その瞳を深く閉ざしたまま、少しも動くことはなかった。

「たった一人の輝矢か…仲間全員の命か…」

「そう…」

内兎の突き出した選択肢を桜時が繰り返すと、内兎はどこか楽しげに微笑みながら頷いた。

「さぁ…どうする…？」

「……。」

もう一度、選択を迫る内兎に、そっと目を細める桜時。映像に映し出されているのは、敵と戦い、苦しげな表情を見せている仲間たち。内兎に輝矢を渡せば、皆だけは助けられる。

「……っ」

少し下を向き、桜時がゆっくりと目を伏せた。

――――ハチっ…――――

浮かぶ、何もかもを与えてくれた笑顔。

「……。」

桜時が再び目を開き、顔を上げて、まっすぐに目の前に立つ内兎を見据えた。

「輝矢は…渡せない…」

「……っ」

ゆっくりとした口調で答えた桜時に、内兎は少し驚くように、眉をひそめた。

「仲間の命は…いらないってこと…？」

「いやっ…」

「……っ？」

すぐさま首を横に振る桜時に、内兎が顔をしかめる。

「仲間の命も…失いたくない…」

「勝手だね…桜時…」

素直に答える桜時に、内兎が笑みを零す。

「そんなワガママ言ってる間に、仲間たちが死んじゃうよ…？」

試すように問いかける内兎。

「それでも…その取引には応じない…」

「……はぁっ…」

迷いなく答える桜時に、内兎が深々と溜息をつく。

「今すぐに決めれば、仲間たちだけは助かったのにっ…」

愚かなものを見るような瞳を、桜時へと向ける内兎。

「君の愚かな選択がっ…死なずにすんだ仲間を殺すんだっ…」
「そうかなっ…？」
「えっ…？」
不敵に笑う桜時に、内兎が少し顔をしかめる。
「俺の仲間たちはみぃ～んなっ、結構シブといぜっ？」

御伽湖・中央。
『グウウウゥっ……』
「うっ…！」
湖に浮かぶ小さな岩場の上で、周囲から、唸り声を漏らし、徐々に距離を詰めてくる鬼の群れに、浦島は怯むような表情を見せた。
「逃げ場もないし…打つ手もない…もう終わりね…フフフ…」
「うえぇぇぇ～んっ！！もうちょい長生きしたかったぁ～っ！！」
不気味に微笑む万亀の言葉に、浦島が大粒の涙を流す。強ガスも尽き、戦う力も残っていない万亀たちには、もうこのまま鬼の餌食となる以外に、道はないのだ。
「なぁっ、万亀ぃ～っ？」
「何…？玉之介…」
弱々しい浦島からの呼びかけに、万亀が振り向く。

「折角なんだからさぁ、最期の時くらい、乙姫ちゃんの姿でぇっ…」

――――ボォオォオォ～ンっ！

「最期くらいカメの姿で死にたいわね…」

「ううっ…」

浦島の願いを無視して、亀化する万亀に、浦島がさらに悲しみの涙を流す。

『グガアアアアっ！』

「うぎゃあああああっ！」

「クっ…！」

一斉に万亀と浦島のもとへと飛びかかってくる鬼たちに、浦島が悲鳴をあげ、さすがの万亀も険しい表情で、唇を噛み締めた。

『……っ！』

諦めるように、二人がきつく目を閉じる。

――――バァァァァーーンっ！

『グガっ…！？』

「へっ？」

「えっ…？」

その時、大きく響く水飛沫の音と鬼たちの戸惑うような声が聞こえてきて、目を閉じていた万亀と浦島は、すぐさま目を開いた。

『あっ…！』

目を開いた万亀たちが、そのまま大きく目を見開く。

「ジラァァ～っ！！」

「クっ…クジラっ…？」

万亀たちの立つ岩場の前に、その大きな体を見せたのは、一頭のクジラであった。巨大クジラを前にしては、鬼たちも小さく見える。クジラが水面に上がってきたことで、湖面は大きく動き、万亀たちの周囲を囲んでいた鬼たちは、その動きを乱されていた。

「ああぁ～っ！亀国のお姫ちゃ～んっ！」

「えっ…？」

妙に甲高い男の声で話しかけてくるクジラに、圧倒されていた万亀が、少し顔を引きつる。

「もしかして鯨国のっ…」

「泡美…？」

顔を引きつった浦島と万亀が、ポツリと呟く。鯨人の知り合いといえば、かつて玉手箱を取り合い、戦った、鯨国の国主子息・蒸田泡美の他にはいない。

「ここの鬼退治手伝ったら、桜時様とおデートできるって聞いてきたんだけど、本当ぉ～っ？」

「僕はおサルさんとのデートの方がいいんだけどぉ…」

「っつーか、絶対ウソだと思う…」

「俺は女の子が好きだぁっ！！」

クジラ・泡美の背中の上で、門貴とのデートを望んでいる宇凪、こっそりと突っ込みを入れている渦礼、女の子が好きだと主張している岩士。皆、泡美の従者で、かつて海底で輝矢たちと戦った面々

である。

「相変わらず、鯨国だけに、ゲイだなぁ～っ」

「私達の悪運の強さも…相当なものね…フフフ…」

感心したように呟く浦島の横で、万亀はどこか嬉しそうに微笑んだ。

鬼が島・海岸沿い。

「グガアアアアアアっ！！」

「……っ！」

勢いよく突っ込んでくる鬼人に、他の鬼人の相手をしていた白雪が、険しい表情で振り返る。

「“雪剣”っ…！」

飛び込んでくる鬼人に、右手を覆った氷の剣を、鋭く振り切る白雪。

「ギャアアアアっ！！」

白雪へと向かっていた鬼人は、雪剣に斬り裂かれ、激しい悲鳴をあげて、消えていった。

「ハァっ…ハァっ…ハァっ…」
雪剣を下ろした白雪が、肩で大きく息をする。乱れ始めた呼吸を、整える間もなく次々と鬼人に攻め込まれ、白雪の体力も限界にきていた。

「んっ…？」
ふと白雪が何かに気づき、右手を見る。

――――パァァァンっ！

「あっ…」
白雪の右手を覆っていた氷の剣が、大きな音を立てて、粉々になり、砕け落ちた。

「“氷力”が…尽きた…」
素手となった右手を見つめ、白雪が険しい表情を見せる。

「クっ…！」
減ることのない鬼人の群れを見つめ、白雪が唇を噛み締める。

「グガアアアアっ！！」
「ううううぅっ…！！」
白雪のいる辺りから、少し離れたところでは、鬼人が振り切る鬼爪を受け止めた犬義が、力を堪え切ることが出来ず、そのまま勢いよく吹き飛ばされた。

「グっ…！」
「ヨシくんっ…！」
吹き飛ばされた犬義に、近くにしゃがみ込んでいた犬智が、慌て

て駆け寄る。

「大丈夫っ！？」

「ああっ、大丈夫は大丈夫だがっ…」

犬智に支えられ、起き上がった犬義が、苦しげな表情を見せながら、すぐ近くに立っている犬仁の方を見上げる。

「このままでは…本当に皆、死んでしまいますよ…？犬仁…」

「……っ」

犬義の言葉に、犬仁が厳しい表情を見せる。

「わかっている…」

犬人特有の創力も、ほとんどの七犬が尽きてきている。力が尽きれば、例え相手が鬼人であっても、満足に戦うことは出来ない。このままでは、七犬が全滅してしまう。

――――主を信じて、戦うんだ…――――

「犬孝様っ…」

ずっと求め続けていた犬孝の言葉が、思い出される。桜時を信じていないわけではない。道を開いて、他の仲間たちの足を引っ張ることはしたくない。だが、七犬の皆の命を守ることも、長である犬仁の使命には違いないのだ。

「仕方あるまいっ…こうなればっ…」

「その槍っ、使わないんなら貸してっ…！」

「えっ…？」

深く考え込みながら、立ち尽くしていた犬仁の白槍を、横から無理やり奪い取ったのは、白雪であった。

「おっおいっ！」
「力が尽きちゃったのっ、悪いわねっ」
「待てっ…！」
「……っ」
犬仁の槍を持ち、すぐに鬼人の群れの方へと戻っていこうとした白雪を、犬仁が強く呼び止める。足を止めた白雪が、ゆっくりと振り返った。

「何っ？」
「これ以上、戦っても死ぬだけだっ！貴様もそれくらい、わかるだろうっ？」
「……っ」
責めるように問いかける犬仁に、白雪がそっとその目を細める。

「ここは一旦退いてだなっ…！」
「逃げたきゃ、あんた達だけで逃げなさいっ、私はこのまま戦うわっ」
「なっ…！」
犬仁の言い分を聞こうともせずに、強く言い切る白雪に、犬仁が驚いた様子で大きく目を見開く。

「バカなことを言うなっ！貴様も力が尽きたのだろうっ！？無駄死にする気かっ！？」
「死ぬ気もないわっ」
「何っ…！？」
きっぱりと答える白雪に、犬仁が眉をひそめる。

「この状況で何をっ…！ここまで頭の悪い女とは思っ…！」
「ここでっ」
「……っ」

遮る白雪の声に、犬仁が思わず言葉を止める。

「ここでもし、逃げたり、死んだりなんかしたらっ…」

少し俯いていた白雪が、拳を強く握り締め、勢いよく顔を上げる。

「私は二度とっ…“竹取輝矢のライバル”って言えなくなるっ…」

「……っ！」

まっすぐな瞳で言い放つ白雪に、大きく目を見開く犬仁。

「まぁ今でも勝手にライバルって言い張ってるだけですけどねっ…」

「うっさいわねっ！！」

遠くの方からこっそりと呟く鈴白に、白雪が勢いのいい突っ込みを入れる。

「だから勝つわっ！プライドの問題よっ、バカって思ってくれて結構っ」

『バカっ』

「あんた達が言うんじゃないわよっ！！」

口を挟む鈴白と芹に、また大きく怒鳴る白雪。体力の限界まできていた白雪が、突っ込みを入れる度に、元気になっていくように見えた。まるで自分自身の言葉に、励まされているようである。

『グガアアアっ……』

「……っ」

囲む鬼人たちの唸り声に、鋭い表情で前を向く白雪。

「さぁっ！とっとと来なさいっ！」
右手に持った犬仁の白槍を、白雪が高々と振り上げる。
「竹取輝矢のライバルっ！白雪虎昌がっ、いっくらでも相手になってあげるわぁっ！」
誇りを持って言い放ち、白雪は再び、鬼人の群れの中へと飛び込んでいった。

「やれやれ…」
そんな白雪を見つめながら、座り込んでいた鈴白がゆっくりと起き上がる。呆れたような声を出してはいるが、その表情には、笑みが浮かんでいた。
「おバカな主を持つと、従者も苦労しますねぇ」
「お兄ちゃんっ、僕もっ」
「ああ、行こうっ」
笑顔で頷き合い、鈴白と芹も白雪に続くように、鬼人の中へと駆け出していく。

「あんなに…ボロボロだった従者までっ…」
「白雪さんの言葉に、一気に元気になっちゃったね」
戦う二人を、犬義と犬智が感心したように見つめる。

「……っ」
同じように白雪たちの戦いを見つめ、そっと目を細める犬仁。

「竹取輝矢の存在が…あの女を突き動かすというのか…」
犬仁が、少し考え込むように呟く。

――そんなっ…他人のためにしか存在出来ないような命ならっ…今すぐここで死になさいっ…！！――

――“生きる”ことだけはっ…！自分のためにするものですっ…！！――

「……。」

かつて刃を交えた時の、輝矢の言葉を思い出し、犬仁がそっと目を細める。

「私も、もう一度…突き動かされてみるかな…」

犬仁の口元が、そっと緩む。

「犬信っ！」

「ふぇっ？」

犬仁にいきなり名を呼ばれ、創力が尽きて座り込んでいた犬信が、不思議そうに顔を上げる。

「何ぃ～？ジンちゃんっ」

「お前の弓を貸せっ」

「へっ？」

犬仁の言葉に、犬信が目を丸くする。

「いいけどぉ～っ、矢、ないよぉ？」

「構わないっ、鬼を殴れれば何でもいいっ」

「ジンちゃんっ…」

笑顔で答え、弓を受け取る犬仁に、犬信が少し目を細める。

「私もまだまだいける気がしてきたっ！一緒に戦うよっ！ヒトちゃ

んっ！」
「犬智っ」
「あの者たちが戦っているのに、誇り高き七犬が逃げ出すわけにはいきませんからねぇ」
「犬義」
犬仁を先頭に、次々と立ち上がる七犬たち。

「行くぞっ！七犬っ！」
『おうっ！』

犬仁の掛け声に七犬は大きく頷き、再び鬼人の群れの中へと飛び込んでいった。

第７７章　つながる絆　☆２

鬼が島中央部。アリスｖｓ城歌。

「ドォ～は“ドカン”のドォ～っ♪」

鬼人と化した城歌が、人であった時と同じように両手を広げ、その禍々しい声を重く響かせ、歌いあげる。

「ふっ…！」

衝撃波が来ることを予想し、その場で高々と飛び上がるアリス。

――ドッカァァァーンっ！

「ううっ…！？」

だがその衝撃波は先程よりも規模が遥かに大きく、飛び上がったアリスのいる上空にまで広がった。

「うあああああっ…！」

衝撃波を受けたアリスが、地面に叩き落とされる。

「うっ…！」

地面に強く背中を打ちつけ、苦しげな声を漏らすアリス。

「気をつけることねぇ～っ！鬼人化した私の音は、威力も数段跳ね上がるかラァ～っ♪」

「……。」

歌うように言い放つ城歌に、アリスが起き上がりながら、そっと

表情をしかめた。

「人間の時はまだ聞けたのにっ…酷いものねぇっ、鬼の歌声ってゆーのはぁっ」

「……っ」

立ち上がりながら、挑発するように言うアリスに、城歌の鬼の顔は、勢いよく歪んだ。

「わかっているわ…そんなこと…」

「……っ？」

急に口調を、歌のような口調から、落ち着いた、どこか冷たいとさえ思える口調に変える城歌に、アリスが少し眉をひそめる。

「こんな醜い声で歌うことが…私にとって、どれほどの屈辱かっ…」

「……。」

声を震わせる城歌を、アリスは真剣な表情でまっすぐに見つめる。

「でも仕方ないじゃないっ…鬼人にされた時っ…私の運命は決まったんだからっ…」

怒りと、かすかに見える悲しみで震わせた声で、城歌が言葉を続ける。

「どんなに抗ったってっ…どうにもならないんだからっ…」

――俺はもう鬼なんだっ…他に道はねぇーよっ…！――

――もう後には退けないわね…お互い……――

退く道はない。鬼である以上、他に行く道もない。

「この醜い声で戦う他にっ…道はないのよっ！！！」

鬼と化した城歌が、人間のように、必死に叫ぶ。

「貴女に私の気持ちがわかるっ…！？鬼としてしか生きられない私の気持ちがっ…！！」

こみ上げる怒りをぶつけるように、アリスに向かって叫ぶ城歌。

「わかるはずもないわっ…！！人間の貴女なんかにっ…！！」

「……。」

叫び続ける城歌を、アリスは目を逸らすことなく、まっすぐに見つめる。

――ううぅっ…ううっ……――

あの日、噴水の前で、泣いていた輝矢。

――あれは卑しき者の血を引く子っ……――

――鬼の血を引く子などをっ、この国に置いておけるものかっ…！

――

鬼として生まれた時点で、輝矢の運命もまた、決まってしまっていたのかも知れない。退く道はない。他に行く道もない。涙を流していた、あの幼き日の輝矢も、今、目の前にいる、この哀しき鬼と同様の苦しみを、抱えていたのだろう。

「そうね…」

「……っ？」
そっと俯き、静かに頷くアリスに、城歌が少し眉をひそめる。
「私は何にも…わかっていなかった…」
――いやあああああああっ！！――
幼い輝矢が見た絶望も。
――そんなアナタが…私には、とても眩しく見える…――
自分の方が、どれほどに恵まれた環境にいたかも。
「何にもわかっていないまま…ただ自分だけが楽になりたくてっ…」
――鬼のくせにぃぃっ！！――
「すべてを壊したっ…」
――サヨウナラ…――
――輝矢が…いない…――
――お前が信じてやらんで、どないすんねんっ！――
――輝矢が鬼って…何っ…？――
アリスのその一言が、輝矢と仲間たちの絆を壊した。
「だから…」
アリスが六刻を握る手に、力をこめる。

「だからっ…私が壊したものは…私が繋ぐっ…！」

顔を上げたアリスが、強い瞳を見せ、まっすぐに城歌を見据える。

「それが私のっ…輝矢に対する唯一の謝罪よっ…！！」

強く言い放ち、六刻を構えるアリス。

「何を訳のわからないことをっ…！！」

叫ぶアリスに、煩わしそうに言い放ちながら、城歌も大きく鬼爪を振り上げる。

「私は勝つのよっ！！もう勝つしかっ…道はないのだかラァっ…！！」

あまりに強い意志に、その目を血走らせ、城歌が大きく振り上げた鬼爪を、アリスへと思い切り振り下ろす。

「……悪いけどっ…容赦はしないわっ…」

振り下ろされてくる鬼爪を見ながら、鋭い瞳を見せるアリス。

「“針器・一日刻”っ…！」

「ナっ…！？」

球体となった針器が、城歌の大きな体を包み込み、動きを封じる。

「こんな壁っ…！」

すぐにその目つきを鋭くする城歌。

「ドォ～は“ドカン”のドォ～っ♪“鬼口”バージョンっ！！」
包み込んだ一日刻の壁に向かい、城歌が大きく口を開く。

「グガアアアアアっ！！」
城歌の口から放たれる、“ドカン”よりかなり凝縮された、強い衝撃波。

――バァァァーンっ！

「……っ」
城歌の放った鬼口が、一日刻の壁を突き破り、丸腰のアリスのもとへと飛んでくる。

「“針器・十二刻”っ…！！」
アリスが言葉を発すると、突き破られた一日刻が、すぐさま銀色の盾・十二刻へと姿を変えて、アリスの前に立ち塞がり、向かってきた鬼口を受け止めた。

「うぅっ…！」
十二刻にかかる重さに、アリスが少し顔をしかめる。

「クっ…！」
グッと手元に力を入れ、何とか鬼口を弾き飛ばすアリス。

「ハアアアアっ…！！」
「……っ！」
そこへすかさず、城歌が攻め込んでくる。

「“針器・六刻”っ…！」
駆け込んでくる城歌へ向け、アリスが十二刻を六刻へと変え、その銀色の刃を突き出した。

『……っ！！』
アリスの六刻と、城歌の鬼爪が、激しくぶつかり合う。

「クっ…！」
「この程度の力でっ…」
「……っ？」
小さく声を発する城歌に、向き合ったアリスがそっと眉をひそめる。

「私を止められると思わないでよねぇっ…！！」

――パァァァンっ！

「……っ！」
城歌が高々と叫びあげた瞬間、アリスの六刻が、響く金属音を立てて、強く弾き飛ばされた。

「うっ…！」
「オホホホォォ～～っ！！」
顔をしかめるアリスに対し、城歌が高々と笑いあげる。

「勝負あったようねぇっ！！」
武器のないアリスへ向け、城歌が再び鬼爪を振り下ろした。

「死ねぇぇぇっ！！」
「……っ」
迫りくる鬼爪に、厳しい表情を見せるアリス。

――ブシュっ……！

「アっ…アァ…」
刃が体を貫くような音とともに、途切れたような苦しげな声を漏らしたのは、鬼人・城歌の方であった。

「なっ…何っ…？」
地面にボタボタと落ちる紫色の血に、城歌が戸惑うように、自分の腹部を見る。

「これ…はっ…」

腹部に突き刺さっているのは、背中から貫いた銀色の長針。背中側には、直角に曲がった短針部分も見えている。

「“針器・九刻（くこく）”…」
血を流す城歌を見つめながら、冷静な表情で呟くアリス。

「いつ…の間に…？……っ！まさかっ…」

――うっ…！――

思い返される、六刻を弾かれた時のアリスの姿。

「初めからっ…この…つもりでっ…」

「ええ…」

アリスの方を見つめる城歌に、アリスがしっかりと頷き、答える。

「“九刻”は…空中変形可能の形…六刻を弾かれた振りをして、後方からあなたの背中を狙ったの…」

「……ソォ…」

説明するアリスの言葉に頷きながら、城歌が背中から、突き刺さった九刻を抜く。九刻を抜いた腹部から、さらに激しく血が流れた。

「ドうやラ…ミラクルも…終わりのようね…」

そっと微笑みを浮かべた城歌の鬼の体が、ほのかな白い光に包まれ、徐々に人間のものへと変わっていく。

「……。」

その、奇跡の終わる光景を、目を逸らすことなく、まっすぐ見つめるアリス。

「見事だったわ…玄上アリス…」

「……っ」

そう言って城歌が九刻を投げると、アリスはそれをしっかりと受け止めた。

「貴女も…紛れもなく、立派な…“神器”の使い手…」

人の姿に戻った城歌が、口から赤い血を流しながら、ゆっくりと後方へ倒れ込んでいく。

「すべての音は使い切ったわ…もう…思い残すこともない…」

「城歌…」
倒れ込んだ城歌が穏やかな笑みを浮かべると、アリスはそっと目を細めた。

「後は…ソォね…」
城歌が上空に広がる、青々とした空を見上げる。

「願わくば…天国で…歌声を…」
穏やかな笑みを浮かべ、祈るように呟く城歌。

「……っ」
そしてそのまま、城歌はゆっくりと、その瞳を閉じた。

「……。」
九刻を下ろしたアリスが、目を閉じた城歌をまっすぐに見つめる。

「歌えるわ…きっと…」
少し悲しげなアリスの声が、戦いの音の止んだその場に、そっと響き渡った。

第７７章　つながる絆　☆３

ゴンｖｓ波跡。

「痛ってっ！」

鬼人と化し、威力の上がった波跡の大波をもろに受けたゴンが、所々傷ついた体を起き上がらせながら、少し顔を歪める。

「……左足が動かねぇーなっ」

そう呟きながら、右足を軸にして、ゴンがゆっくりと立ち上がる。動きの悪い左足には、感覚が走っていなかった。波に呑まれ、神経をやられたのかも知れない。

「ったくっ」

「グウゥゥっ……」

「……っ」

困ったように肩を落としたゴンが、前方から聞こえてくる唸り声に、顔を上げる。

「グウゥゥっ……」

「……。」

目の前に立つ、異形の鬼を見つめ、ゴンがそっと目を細める。

――たくさん殺したんだ…自分の家族も、大切な友達も……――

――元の人間に戻れても…この罪は消えない……――

思い出される、波跡の言葉。

――次狼ぉぉぉぉっ！！――
――ゴンっ……――

大切な者を殺し、もう人には戻れないという、その波跡の姿が、ゴンには、諸刃と重なって仕方がなかった。諸刃も同じように、“戻れない”と考えているのかも知れないと思うと、次狼の刀を振るって、波跡を攻撃することが出来なかった。

「クソっ…！」
「何故…攻撃してこない…？」
「……っ」
攻めきれぬ自分にいきり立っていたゴンが、波跡からの静かな問いかけに顔を上げる。

「鬼でいる道しかない俺に…同情でも…しているのか…？」
「……。」
波跡の言葉を否定も出来ず、ゴンはただ、厳しい表情を見せた。同情したところで、波跡は救われない。そんなことはわかっていた。だがどうしても、ゴンの頭の中に、諸刃の姿がチラつく。

――諸刃を…諸刃を頼みます……――

波跡を倒すことが、次狼のあの言葉に、逆らうことになるような気がしてならない。

「そんな同情は…何の意味もない…」

少ししかめた表情で言い放つ波跡。

「そんな同情は…いらない…」

「クっ…」

そう言って、ゴンへ向けて、大きく口を開く波跡。先程の大波を、再び放とうとしているのだろう。そうとわかっていても動けず、ゴンはそっと唇を噛んだ。

「次狼っ…俺はっ…」

――バァァァァンっ！

『……っ！』

その時、遠くの方から響いてきた衝撃音に、ゴンと波跡が同時に顔を上げた。

「今の音はっ…」

「他の奴らも…派手に戦ってるみたいだな…」

「……っ」

波跡の言葉に、急にハッとした表情を見せるゴン。

「そうだっ…戦ってるのは俺だけじゃっ…」

――これは…“私たちの”戦いです…――

――アナタ一人の…戦いではありません…――

「……っ」
その時、ゴンの頭の中で甦ったのは、輝矢の言葉であった。次狼と似た口調、次狼と重なる発言ばかりする輝矢ではあるが、その言葉は間違いなく、輝矢のものであった。

「……そうだったなっ…」
ゴンが穏やかな笑みを零し、そっと呟く。

「……っ」
「……っ？」
急にその目つきを鋭くし、天狼丸を構えるゴンに、波跡が顔をしかめる。

「何だ…？同情するのは終わりか…？」
「ああっ」
静かに問いかける波跡に、ゴンが短く答える。

「思いだしたんだよっ…」
天狼丸を握る手に、強くこもる力。

「俺は今、俺一人で戦ってるわけじゃないっ…」
その瞳に、強く宿る力。

「俺は今っ、仲間と一緒に戦ってるんだってことをなぁっ…！！」
ゴンが天狼丸を振り上げ、高々と言い放つ。

「仲間…」
ゴンの口にしたその言葉を、縁遠いもののように遠い瞳で呟く波跡。
「今の俺には…関係のない言葉…」
波跡の声が、少し悲しげに響く。
「グガアアアアっ！！」
「……っ」
鬼の咆哮をあげ、大きく口を開く波跡に、ゴンが厳しい表情となって身構える。
「今、ここでアイツを倒せないならっ…」
――ゴンっ……――
「俺は一生っ…諸刃の前になんて立てねぇっ…」
六年前のあの日から、諸刃の前に立つことだけを考え、強くなった。オトポリに入り、“火力”を鍛え、そしてまた、天狼丸を手に取った。
「だからっ…！」
手に取ったその天狼丸を、ゴンが高々と掲げる。
「俺に力を貸してくれっ…！！次狼っ…！！」

天国の友へ呼びかけるように、ゴンがその刃先を、空へと向ける。

「“降波薄”っ…！グガアアアアっ！！」

波跡が大きく開いた口から、激しい大波を放つ。

「“一髪・二目・三耳・四首っ…」

真正面から向かってくる大波に、避ける素振りも見せず、天狼丸を構えたまま、言葉を紡いでいくゴン。

「五臓・六腑・七臍・八脚っ…」

ゴンがゆっくりと、下を向けていた顔を上げる。

「九尾”っ…！！」

鋭い瞳で、ゴンが天狼丸を見上げる。

――……っ！！

天狼丸が、赤々とした激しい炎に包まれると、その炎は派生するように左右それぞれ四つに分かれ、刀を包み込んだ炎と合わせ、九つの炎の刃が出来上がった。

「……っ」

ゴンが一呼吸置いた後、天狼丸を勢いよく振り下ろす。

「“九火っ…煉刃”っ…！！」

振り下ろされた天狼丸から、九つの炎の刃が、一斉に放たれる。
向かってくる大波へと、正面から突っ込んでいく煉刃。

――バァァァーンっ！！

やがて二つの力がぶつかると、煉刃は一瞬にして、波跡の大波を燃やし尽くした。

「ナっ…！？」
そのあまりの力に、波跡が大きく目を見開く。

「何て炎っ…ううぅっ…！」
圧倒されている波跡のもとへと、突っ込んでくる煉刃。

「クっ…！」

もうどうすることも出来ず、波跡は強く、唇を噛み締めた。

「ギャアアっ！！」

煉刃は波跡を直撃し、その鬼の体を、真っ赤に燃やしていく。

「はぁっ…！はぁっ…！」

天狼丸を下ろしたゴンが、少し苦しそうに、肩で大きく息をする。

「やっぱっ…人化したまま九火は、キツいなっ…」

呼吸を整えながら、ゴンがポツリと呟く。

「グウゥゥっ…！！」

「……っ」

唸るような声が聞こえてきて、ゴンはゆっくりと顔を上げた。

「ウウウゥっ…！」

「……。」

炎の中で、人の姿へと戻っていく波跡を、まっすぐに見つめるゴン。

「ウウゥっ…！うっ…あっ…ああ…」

やがて炎は消え、完全に人の姿に戻った波跡が、ゆっくりと後方に倒れ込んだ。

「はぁっ…はぁっ…」

倒れた波跡が、全身に火傷を負った体で、大きく乱れた息をする。

「とどめ…を…」

波跡があまり動かぬ首をわずかにだけ動かし、立ち尽くすゴンの方を見る。

「とどめを…刺せ…」

「……。」

どこか懇願するように言う波跡に、ゴンは少し目を細めた。少しの間を置いた後、ゴンが右手に持ったいた天狼丸を、ゆっくりと鞘へ収める。

「なっ…」
「とどめは刺さねぇっ」
「何っ…だと…?」
はっきりと答えるゴンに、波跡が眉をひそめる。

「また…同情でも…する気かっ…?」
「違げぇーよっ」
波跡がその顔をしかめて問いかけると、ゴンは短く言い放った。

「お前は言ったな、“この罪は消えない”と」
ゴンが真剣な眼差しを、波跡へと向ける。

「悔いる気持ちがあるんなら…お前はもう一度、人になれるっ…」
「……っ」
続くゴンの言葉に、波跡がそっと目を細める。

「死ぬなっ」
波跡へ、強い口調で言い放つゴン。

「生きて、その罪を償えっ」
「……っ!」
ゴンのその言葉に、大きく目を見開く波跡。

「うっ…うぅっ…！」
噛み殺すような声が漏れると、波跡の赤い瞳から、大粒の涙が零れ落ちた。

「ううぅっ…！」
「……。」
涙を流す波跡を、ゴンが穏やかな表情で見つめる。

「“生きて、その罪を償え”か…」
先程、波跡へ向けた言葉をもう一度、小声で繰り返しながら、ゴンがそっと自分の右手を見つめる。

「アイツにも…同じことが言えるのかねぇ…俺はっ…」
ゴンが自問自答するように、どこか不安げに呟く。

「……っ」

――――バァァァーンっ！！

「うあああああああっ！！」
「なっ…！？」
大きな衝撃音とともに、激しい悲鳴をあげる波跡に、ゴンが勢いよく顔を上げる。

「うあああっっ！！あああああっ…！！」
「こっ…これはっ…！」
すでに瀕死の波跡の体を覆っているのは、黒い電撃。
「“雷力”っ…？」
「うっ…あぁ…」
「……っ！おいっ…！！」
眉をひそめていたゴンが、力なく目を閉じていく波跡に、思わず駆け寄る。
「……。」
「クっ…！」
深々とその瞳を閉じ、動かなくなる波跡に、ゴンが強く唇を噛み締める。
「誰だっ！？」
電撃の飛んで来た方角を、力強く振り向くゴン。だが飛んで来た力が電撃であった時点で、そこに立つ人物が誰なのか、ゴンには予想がついていた。
「……。」
荒地に立ち尽くす、灰色の髪に意志無き紫色の瞳の、首に黒い紋様を刻まれた、その男。
「諸刃っ…」
再び現れたかつての友に、ゴンはただ、険しい表情を見せた。

由雉ｖｓ黒羽。

「痛ったぁ～っ」

左腕に掠り傷を負い、少し赤い血を流した由雉が、顔をしかめる。

「カワイイボクに、なんてことをぉ～っ」

口を尖らせてそう言いながら、由雉が傷口に黄色い羽根を突き刺す。すると傷口は優しい光に包まれ、見る見るうちに、回復した。

「……。」

「……っ？」

悠長に由雉の傷が回復するのを待っている黒羽に、由雉が首を傾げる。

「随分と余裕だねぇ～敵が傷治してるの、見てるなんてっ」

「今の一撃は、別に当てるつもりで放ったわけじゃなかったからな」

由雉が話しかけると、黒羽は冷静に答え返した。

「お前があの程度の攻撃を避けきれないとは、少し驚いた…」

「……っ」

そっと口元を緩める黒羽に、由雉がかすかに眉をひそめる。

「意外だな…お前のような超自己中心的な奴が…」
黒羽がどこか楽しむような視線を、由雉へと送る。
「“主が鬼”という言葉に、あれほど動揺するなんて…」
「……。」
もう一度、動揺を誘うかのように言い放つ黒羽に、由雉がそっと目を細める。
「お前にとって、あの“鬼の女”は、余程、特別な存在のようだな…」
「特別、ねぇっ」
黒羽の言葉を繰り返し、由雉が小さく肩を落とした。
「ホントっ、自分でも理解出来ないくらいだよぉっ」
由雉が少し困ったように呟く。
――鬼のくせにぃぃっ！！――
「たった一言に動揺したりっ…」
――輝矢が鬼って…何っ…？――
「自分でいられなくなるほど、混乱するなんてさっ…」
家族の問題、自分の問題でなければ、いつだって冷静でいられた。
他人のことで、あれほどに心を乱す自分がいたこと、自分自身が一番、驚いた。

「特別なんだろうねぇ、実際っ」
ふと一息つき、由雉が仕方ないといった様子で呟く。
「あんまり…認めたくないんだけどなぁ…」
由雉がそっと口元を緩め、遠くを見るような瞳で、空を見上げる。

「“誰かのために”戦う自分なんてっ…」

――じゃあ、自分のためじゃないっ？――
――由雉は、自分のために強くなりたいんじゃないの？――

いつか、幸コが言っていた。自分でもその言葉が、しっくりきた。
いつだって自分のために戦って、自分が勝ちたいから強くなって、
自分のためだけを考えてきた。

「今回もねぇ、ハヤテのこととか抜きにしてぇ、自分のためだけに
戦おぉ～って思ってきたんだっ」
空を見上げていた由雉が、ゆっくりと顔を下ろしていく。

「でも、無理そうっ」
由雉が黒羽の方を見て、明るく微笑む。

「輝矢はボクに、“幸せ”をくれたっ」

――ミチルさんがアナタと一緒に居続けるのは…“幸せ”だからで

はないのですか…？――

素直になりきれない心を、そっと開いてくれた。

――こんな立派な息子を持ってっ…私は“幸せ者”ねっ…――

――母さんっ…――

歩みきれないでいたその一歩を踏み出すために、そっと背中を押してくれた。

「自分は…どうしようもない絶望の中でっ…すべてを失ったってゆーのにさっ…」

――いやあああああっ！！――

由雉には想像の出来ないような悲しみの中で、父と母を、すべてを失った輝矢。

「人の“幸せ”なんてっ…何の得にもならないだろうにさっ…」

目を細めた由雉が、どこか泣きそうな表情を見せる。

「ボクに…“家族”をくれたっ…」

――ハロォォォ～～っ！！マイソンっ！！――

――“ソン”言うなっ！！――

――ふふふっ……――
――笑ってないで、どうにかしてよっ！！ミチルさんっ！！――

輝矢が、繋いでくれた絆。

「“家族”を…くれたんだっ…」

由雉が噛み締めるように呟き、そっと自分の胸に右手を当てる。

「その恩まで無視出来るほどっ、自己中でもなかったみたいだからさぁっ…！」

胸に当てた右手を懐へ入れ、由雉が目つきを鋭くする。

「今日ボクはっ、輝矢のために戦うっ…！！」

強い瞳を見せ、高々と言い放つ由雉。

「……。」

そんな由雉を、まっすぐに見つめる黒羽。

「別にいいさっ…お前が何のために戦おうとも…」

黒羽がそっと呟き、その瞳を鋭くする。

「俺がやるべきことはっ…ただっ、お前と戦いっ、ハヤテの羽根を超えるのみっ…！！」

そう叫び、黒羽が再び両手に黒い羽根を構える。

「桜時やサルみたいに、熱くなるのなんてっ…勘弁だったのになぁっ…」

由雉が少し、困ったような笑みを浮かべる。

「“襲羽・消羽”っ！」

両手に構えた二枚の羽根を、体のすぐ前で重ね合わせる黒羽。

「……。」

その様子を見ながら、由雉が冷静な表情を見せる。

「輝矢が繋いでくれた絆が…造った羽根だっ…」

そう呟き、由雉が懐から羽根を取り出す。

「何っ…！？」

由雉の取り出した羽根を見て、眉をひそめる黒羽。

「……っ」

「三枚っ…だとっ…！？」

由雉が取り出したのは、赤・青・黄色の、三色三枚の羽根。

「“滅羽・癒羽・裂羽”っ…」

「まさかっ…！」

三枚の羽根を重ね合わせる由雉に、黒羽が大きく目を見開く。

「出来るはずがないっ…！三枚の羽根の合成などっ…！」
「“合翼っ…！」
「うっ…！」」

三枚の羽根が、光を放ちながら一枚の羽根となっていくその光景に、黒羽の冷静であった表情が歪む。

「三位(さんみ)っ…一羽(いっぱ)”っ…！！」」

三色の光を放った一枚の光り輝く羽根を、由雉が黒羽へ向けて投げ放つ。

「クっ…！“合翼っ…！」
焦りの表情を見せながら、慌てて両手の二枚の羽根を合成する黒羽。

「……っ漆羽”っ…！！」

一つとなった一枚の黒い羽根を、黒羽が向かってくる由雉の羽根へ向けて、投げ放つ。放たれたそれぞれの羽根は、二人の間で勢いよくぶつかり合った。

――――パァァァンっ！

「ううっ…！！」
だが二枚の羽根がぶつかり合った瞬間、黒羽の羽根は、三色の光

に呑まれるようにして、あっという間に砕かれてしまう。

「そんなっ…！」

黒羽が信じられないといった様子で、大きく目を見開く。

「こんなっ…はずっ…！」

声を震わせる黒羽のもとへ、黒羽の羽根を砕いた由雉の羽根が迫る。

「クっ…！」

目の前に迫る羽根に打つ手もなく、黒羽は強く唇を噛んだ。

――バァァァーーンっ！！

「うがあああああああっ！！」

由雉の羽根が黒羽を直撃し、黒羽の激しい悲鳴が辺りに響き渡った。

第７７章　つながる絆　☆４

門貴ｖｓ醍也。

「うっ…！くっ…！くぅっ…！」

地面に倒れ込んだ門貴が、全身に汗をかき、苦しげな表情を見せながら、必死に右手を伸ばして、すぐ近くに落ちている如意棒を掴もうとしていた。だがその手はまったくと言っていいほど動いておらず、まるで鉛のような重たい動きをしている。

「無理をするな…」

門貴のすぐ横に立ち、十字刃を振り上げた醍也が、静かな口調で門貴に語りかける。

「お前にかけた“重示”は…お前の体重を三、四倍にする…」

「クっ…！」

全身にかかる重さに、苦しげな表情を見せる門貴。

「無理に動くと…骨や内臓が砕け散るぞ…」

「……ハっ」

「……っ？」

この状況下で、笑い声のような声を漏らす門貴に、醍也がそっと眉をひそめた。

「どぉせっ…大人しくしとったって…お前に刺し殺されるだけやろぉ…？」

動かすことも苦しい口を動かし、門貴が必死に言葉を繋ぐ。

「せやったらっ…少々、骨や内臓砕いてでもっ…」
重い首を動かし、醍也の方を見上げる門貴。
「お前に一太刀浴びせた方が、よっぽどええっ…！！」
「……っ」
下手をすれば、怒鳴るだけでも骨の砕ける今の状態で、醍也に向かって強く叫び、まったく諦めていない、鋭い瞳を見せる門貴に、醍也がその表情をしかめる。
「何故…そこまで…」
「さっきも言うとったなぁ…そんなことっ…」
――わからない……――
鬼である輝矢を助けにきた門貴たちに、ひどく困惑したような表情を見せていた醍也。
「お前に理解できるかは知らんけどっ…一応、俺の答えを言うといたるわっ…」
戸惑う醍也の瞳を捉え、門貴が言葉を続ける。
「俺にとって輝矢んはっ…」
「輝矢んは…？」
興味津津に聞き返す醍也。
「輝矢んはっ…」
門貴が少し勿体ぶるように、もう一度言う。

「俺にとって輝矢んはっ…！“女神”やからやっ…！！」
「……。」
自信満々に言い放った門貴に、瞬時に固まる醍也。

「じゃあ…」
「ちょい待て待て待てぇぇ～っ！！」
あっさりと見切りをつけ、振り上げた十字刃を下ろそうとする醍也を、門貴が慌てた様子で必死に止める。

「痛たたたたっ…！」
「バカだ…」
怒鳴った拍子に痛んだ体に、苦しげな声を漏らす門貴を見て、醍也が呆れた表情を見せる。

「真面目に答えろ…」
「俺はいつだって真面目やでぇっ？」
「どこがだっ…」
口を尖らせる門貴に、醍也が冷たく言い放つ。

「何が“女神”だっ…俺の求めてる答えは、そんなんじゃっ…」
「輝矢んはっ…」
「……っ」
そっと笑みを浮かべ、再び口を開いた門貴に、醍也が自分の言葉を止め、耳を傾ける。

「輝矢んはっ…」

――一花ぁぁぁっ！！――

「大切な人を失って、生きる意味すら失くしとった俺にっ…」

――ですが私に…アナタは見える…――
――アナタは生きていて…そして、私たちと出会った…――

「“生きる意味”を…くれた人っ…」

上を見上げた門貴が、柔らかな笑みを零す。

「輝矢んがおらんかったらっ…俺は死人やった…」
門貴が再び、その重い右手を、如意棒へと伸ばす。

「輝矢んがおったからっ…俺は今、生きてられるっ…」
全身にかかる重みを耐え、苦しげに表情を歪ませながら、それでも必死に手を伸ばす門貴。

「輝矢んがおったから…俺は今、誇りを持って戦えるっ…」
動きの悪かった右手が、その重さを振り切るように、一気に伸びていく。

「せやからっ…！！」

――パシっ…！

「なっ…！？」
力強く如意棒を掴む門貴の右手に、醍也が大きく目を見開く。

「輝矢んのためならっ、この命っ…！」
門貴がその瞳を鋭くし、如意棒を握る右手に力をこめる。

「いっくらでも捧げたるわぁっ…！！」

――バァァァーンっ！！

門貴が叫んだ瞬間、強い風が辺りに巻き起こった。

「ううぅっ…！！」

目の前で舞い上がる、竜巻のような強い風に、醍也が思わず身を伏せ、後ろに下がって、その場から離れる。

「“重示”の中でっ…風をっ…！？」

動揺を隠しきれない表情で、醍也が目の前に吹き荒れる風を見つめる。

「そんなことっ…！」

「……っ」

「うっ…！」

風の中で立ちあがる人影に、醍也はさらに目を見開いた。

「……。」

風に包まれた門貴が、その場で立ちあがり、醍也へ突き刺すような瞳を見せる。

「有り得ないっ…」

立ち上がった門貴を見つめ、ポツリと声を漏らす醍也。

「“重示”をかけられて…立ち上がるなんてっ…」

「これが…」

門貴がゆっくりと、口を開く。

「これが…俺の答えやっ…！！」

「……っ」

曇りのない表情を見せ、強く答える門貴に、醍也が少し怯むような表情を見せる。自分の技を破り、立ち上がった門貴に、かすかな恐怖を抱いた。

――わからない……――

恐怖を抱くその隙間で、困惑していた思いに、かすかな答えが見えた気がした。

「それでもっ…」

醍也が迷いを振り切るように、必死に首を横に振る。

「それでもっ…俺にそんな仲間はいないっ…！」

「……っ」

初めてその静かな表情を崩し、険しくした顔つきで叫ぶ醍也に、門貴が眉をひそめる。

「もうっ…敗北者を殺すことでしかっ…生きられないっ…！！」

十字刃を捨てた醍也が、自らの額に右手を当てる。

「“鬼化帰化”っ…！！」

「……っ！」

――パァァァーンっ！

門貴が止める間もなく、醍也は自らの手で、白い光に包まれ、鬼と化していった。

「グガアアアアっ！！」

醍也の体を包んだ白い光を、弾き飛ばすようにして、そこに姿を見せる、赤々とした皮膚の巨大な鬼。辺りに響き渡る咆哮が、どこか悲しく聞こえる。

「敗北者にっ…」

重く低い声を、轟かせる醍也。

「死をっ……！！」

勢いよく鬼爪を振り上げた醍也が、門貴のもとへと駆け込んでいく。

「……っ」

迫り来る巨大な鬼に、鋭い表情を見せる門貴。

「そんな仲間はおらんかった…？」

門貴が、先程の醍也の言葉を繰り返す。

「ならっ…！」
右手に持った如意棒を、強く振り上げる。

「俺がっ…助けたるわいっ…！！」
「……っ！！」
強く言い放つ門貴に、鬼と化した醍也が、その瞳を大きく見開く。

「如意棒・第四の舞っ…」
巻き起こった風がすべて、如意棒に集められ、凝縮されていく。

「……“嵐（らん）”っ…！！」

――バァァァーンっ！！

もう風とは呼べないほどに激しい暴風の塊が、一気に凝縮され、球体となって、門貴へと駆け込んできていた醍也のもとへと、向かっていく。

「グウゥっ…！」
そのスピードは目に見えないほどに速く、醍也は最早、逃げることも出来ない。

「ウウゥっ…！グアアアアアっ！！」

赤き鬼は、逆巻く風に斬り裂かれ、激しい悲鳴をあげた。

「“白首割砕”っ…！！」

『ギャアアアっ！！』

犬孝の時雨丸から放たれた光が、周囲の鬼人を一掃する。

「……っ」

刀を構えなおした犬孝が、遠くに見える水の城を見つめる。

「桜時っ…」

犬孝が祈るように、桜時の名を呟く。

水の城前。

「クっ…」

映像に映し出される戦いの様子に、表情をしかめたのは、桜時ではなく、内兎の方であった。

「こんなっ…」

新たな救援が現れ、追い込まれていたはずの者たちも活力を取り戻し、押していたはずのトランプ兵団も、押し返され始めた。圧倒的に有利だったはずの状況が、一転してしまった。

「こんなことがっ…」

信じられないといった表情で、呟く内兎。

「今日、ここには…たくさんの仲間たちが、駆けつけてくれた…」

「……っ」

後方から聞こえてくる桜時の声に、内兎がゆっくりと振り返る。

「本当にたくさんの人達っ…」

――お久し振りですね…フフフっ……――

――桜時様ぁぁぁぁっ！！――

――七犬っ！桜時様の道を開けっ！――

――行けっ！！桜時っ！！――

駆けつけてくれた皆の顔を思い返しながら、桜時が噛み締めるように笑みを浮かべる。

「……。」

桜時の笑みを、内兎は無表情でまっすぐに見つめる。

「みんなが何で…今日、ここに…駆けつけてくれたと思う…？」
「……っ」
静かに問いかける桜時に、戸惑うような表情を見せる内兎。
「さぁ…？暇だったんじゃないの…？」
「違うさっ…」
内兎が適当に答えると、桜時はそっと微笑んで、首を横に振った。

「みんながここに来てくれたのは…今日という日までの旅の中で、繋いできた絆があったから…」
「絆…？」
「そう…」
困惑した様子で聞き返す内兎に、桜時は深々と頷く。

「駆けつけてくれた人だけじゃない…」

「輝矢っ…」
「輝矢さんっ…」
遠くに広がる空を見つめ、祈るように輝矢の名を呼ぶリンゴとイチゴ。
「輝矢ちゃんっ…」

二人の横で、太狼もそっと輝矢を呼ぶ。

「ここに来れなかった人たちっ…離れてる人たちもみんなっ…絆で繋がってるっ…」

桜時が噛み締めるように呟く。

「そして、いつも…その絆を繋いでくれたのは、輝矢だった…」

桜時が左手を左胸に当て、穏やかな笑みを浮かべる。

――私はアナタを手放す気など、さらさらありませんよっ？――
――同時にいきなさいっ！イヌっ！サルっ！キジっ！――
――最後まで、私と共に戦いなさいっ！――

大きな中心となって、繋いでくれた。たくさんの絆、たくさんの人を。

「今日、ここにいる俺たちは…輝矢がいなきゃっ、誰一人だって、ここにはいなかった…」

桜時が笑みを浮かべたまま、ゆっくりと顔を上げる。

「今の自分には、なれてなかったっ…」

顔を上げ、桜時が内兎の方を見る。

「だからっ…！」

その瞳を鋭くし、桜時が内兎を見つめる。

「いくら全員生きてたってっ、輝矢がいなきゃ、何の意味もないっ…！！」

桜時が強く叫ぶ。

「輝矢と一緒に帰れなきゃっ、何の意味もないんだっ…！！」

「……。」

その曇りのない、どこまでもまっすぐな瞳。

――もう…いい……――

輝矢がどうしようもなく、惹かれた瞳。

「……っ」

内兎は平静を装ってはいたが、どこか煩わしそうな、鬱陶しそうな表情を覗かせていた。

「そうっ…」
少し俯いた内兎が、短く声を漏らす。
「君たちの想いは、よくわかったよ…」
内兎はすぐにしかめていた表情を、笑みへと変えた。
「取引はやめるとしようっ…」
内兎が指を動かすと、水の壁に映し出されていた、皆の映像が消える。
「絆…かっ…」
桜時の発したその言葉を、内兎は少し考えるように繰り返す。
「クダらないねっ…」
「……っ」
どこか怖いとさえ思えるほどに、冷たい表情を見せる内兎。今までの余裕を見せ、真意を隠したような表情ではなく、内兎の本心が垣間見えるような表情であった。
「僕が君を殺して…輝矢を連れていけば…その絆は消える…」
内兎がすぐさま、いつもの冷たい笑みを浮かべる。
「消してあげるよっ…そんな絆、跡形もなくっ…」
「……。」
どこか楽しげに微笑む内兎に、そっと険しい表情を見せる桜時。
「取引とかの方が、性に合ってるんだけどなぁ…」

内兎が感触を確かめるように、手首を回す。

「あんまりガラじゃないけどっ…一対一で戦うことにしようかっ…」

「……っ」

振り向く内兎に、桜時が少し警戒するように身構える。

「君が…お姫様を助けに来た王子様なら…」

内兎が、桜時の方を指差す。

「僕は差し詰め…お姫様を守る騎士（ナイト）ってとこかなっ…？」

「……っ」

冗談めいた口調で話す内兎に、桜時がそっと眉をひそめる。

「さてっ…勝つのは、どっちだろうっ…？」

「……。」

内兎が問いかけると、桜時は鋭い瞳を見せた。

「仲間がっ、命懸けで戦ってんだっ…」

桜時が右手を上げ、静かに村雨丸を構える。

「みんなが進めてくれたのにっ、俺が負けるわけにはいかねぇっ」

強い意志を秘めた瞳を見せる桜時。

「それにっ…」

桜時が、村雨丸の刃先を、内兎へと向ける。

「俺はっ…お前ごときに、アイツをやる気はねぇーよっ…！！」

「……っ」

強く叫ぶ桜時に、内兎はそっと眉をひそめた。

第７８章　この命、懸けて　★１

「諸刃っ…」
「……。」
波跡との戦いを終えたゴンの前へと現れたのは、かつての友・諸刃であった。ゴンと諸刃が、しばらくの間、まっすぐに見つめ合う。

「なんでっ…」
ゴンが倒れたまま、動かなくなった波跡を見下ろし、再び諸刃の方を見る。

「なんでっ…！てめぇーの仲間にこんなことっ…！！」
「仲間にこんなこと…？」
責めるように怒鳴りあげたゴンの言葉を、諸刃が静かな表情で繰り返す。

「今更、そんなことを問うのか…？」
諸刃の紫色の瞳が、ゴンを捉える。

「この、俺に…」
「……っ」
その言葉に、顔をしかめるゴン。

――次狼ぉぉぉっ！！――

六年前、諸刃は、自分の仲間であった次狼を殺したのだ。

「そうだったな…」
ゴンが少し、低い声を漏らす。

「……。」
ゴンを見つめていた諸刃が、ふとゴンの右手に握られている天狼丸に目を移す。

――“狼刃”っ！！――

「……っ」
思い出される過去の記憶に、諸刃が少し目を細める。

「その刀…次狼のものか…」
「ああっ」
ゆっくりとした口調で呟く諸刃に、短く答えるゴン。

「その刀で…俺を殺す気か…？」
「……。」
静かに問う諸刃に、ゴンがその瞳を鋭くする。

「ああっ…」
短く、だがしっかりと頷くゴン。

「そうか…」
諸刃が、あまり興味を持っていなさそうな声で答える。

「次狼の刀で…次狼の弔い合戦か…」
遠い目で呟いた諸刃が、ゆっくりとゴンの方へと視線を戻す。

「くだらないな…ゴン…」
「……っ」
眉一つ動かさずに言い放つ諸刃に、ゴンが勢いよく顔をしかめる。
「くだらねぇーかどうかっ…」
ゴンが右手に持っていた天狼丸を、勢いよく振り上げる。

「喰らって、試してみやがれっ…！！」
強く叫び、ゴンが天狼丸を掲げると、赤々とした激しい炎が、天狼丸を包み込むように逆巻いた。

「“九尾”っ…！！」
天狼丸を包み込む炎が、九つに分かれ、それぞれ、一本の刀のような形となる。

「……っ！」
九つの炎の刀を纏った天狼丸を構え、ゴンが勢いよく諸刃のもとへと駆け込んでいく。

「“九火っ…」
「……。」
向かってくるゴンを見つめながら、至って冷静な表情で、腰に下げた水晶の剣の柄へと手をかける諸刃。

「草薙…」
諸刃が名を呼び、剣を鞘から抜く。

「……っ煉刃”っ…！！」

「……っ」

ゴンが勢いよく天狼丸を振り下ろし、諸刃が素早く草薙を振り抜いた。

――バァァーーンっ！

二本の刀の交錯とともに、激しく巻き起こった衝撃。何もない荒地を、強い風が吹き抜ける。

『……。』

強い風の中に、背中合わせに立ち尽くすゴンと諸刃。

「……うっ！」

次の瞬間、ゴンの右手に刻まれた斬り傷から、勢いよく血が飛び散り、ゴンが痛々しい表情を見せて、その場に膝をついた。

「クソっ…！」

右手の傷を押さえながら、ゴンが悔しげな表情を見せる。

「片足をやられているな…」

「……っ」

後方から聞こえてくる声に、素早く振り返るゴン。

「踏み込みが甘かった…波跡には通じても、俺には通じない…」

「……。」
ゴンの方を振り向きながら、冷静に言い放つ諸刃に、ゴンが少し険しい表情で俯く。

「草薙…」
「あっ？」
草薙を鞘へと収める諸刃に、ゴンが眉をひそめる。

「……っ」
「……っ！おっおいっ！！」
「……っ？」
ゴンにあっさりと背を向け、その場を歩き去って行こうとする諸刃を、ゴンが慌てて呼び止める。ゴンの声に、諸刃が足を止め、不思議そうに振り返る。

「何だ…？」
「どこへ行く気だっ！？」
「向こうに見える…水の城だ…」
「……っ」
すぐさま答える諸刃に、ゴンが顔をしかめ、傷を押さえたまま立ち上がる。

「竹取やハチ公に手出しはっ…！」
「お前の仲間に危害を加えるつもりはない」
「何っ…？」
諸刃の言葉に、眉をひそめるゴン。

「今日は、勝手なマネばかりしているウサギを迎えに来ただけだ…」
「んな言葉っ…！信じられるはずっ…！」

「なら、止めてみるか…？」
「……っ！」
試すような問いかけをする諸刃に、ゴンが思わず言葉を止める。
「……っ」
左足も動かず、右手には深い傷を負っている。ましてや今のゴンが出せる最強の技は、先程、諸刃にあっさりと砕かれてしまった。諸刃は、まったく本気を出していない状態であろうというのに。どう考えても勝機はない。ゴンが悔しげに俯く。
「……。」
俯いたゴンに静かな視線を送り、諸刃は再びゴンに背を向けて、内兎のいる水の城へと歩き去っていってしまった。しずかになったその場に、ゴンだけが立ち尽くす。
「クっ…！」
自分の不甲斐なさに、こみ上げる怒り。ゴンが強く、唇を噛み締める。
「ぅっ…う…」
「えっ…？」
どこからか聞こえてくる、呻くようなその弱々しい声に、戸惑うように顔を上げるゴン。
「……っ」
「うぅっ…」
「あっ…」
ゴンが顔を上げると、倒れたまま、深く目を閉じた波跡が、苦し

げな声ではあるが確かな声を漏らし、傷ついた体をかすかに動かしていた。

「生きて…るっ…？」

困惑した様子で、呟くゴン。諸刃の雷力を受けた時点で、波跡はもう死んだと思ってしまった。それほどに、諸刃の雷力は、強力だからだ。

「殺し…損ねた…？……っ」

そう思ったそのすぐ後、ゴンの表情が曇る。諸刃ほどの者が、相手を殺し損ねるようなヘマをするであろうか。

「初めから…殺す気がなかった…」

戸惑うように呟きながら、ゴンがゆっくりと顔を上げ、諸刃の去っていった方角を見つめる。

「もう、訳わかんねぇーよっ…次狼っ…」

吹き荒れる風に、ゴンはそっと問いかけた。

第７８章　この命、懸けて　★２

鬼が島・中央部。由雉ｖｓ黒羽。

「ハァっ…ハァっ…」

肩で大きく息をしながら、乱れた呼吸を整える由雉。

「痛っ」

全身に走る痛みに、由雉が少し顔をしかめる。

「三枚でも…これかぁっ…」

羽根の合成は、二枚でも相当に力のある羽根使いでなければ出来ない技。三枚の合成ともなれば、体への負担は自然と大きくなる。

「これじゃあ到底、あの合成はっ…」

「ううぅぅ…」

「……っ」

目の前の衝風の中から、漏れるように聞こえてくる苦しげな声に、由雉の表情がすぐさま鋭くなる。

「うっ…うぅ…」

砂煙が晴れると、そこには全身に傷を負い、服もボロボロとなった黒羽が、力なく横たわっていた。黒羽の傷を見れば、由雉の放った羽根の強力さは、一目瞭然である。

「てっきり…新しい羽根だとばかり思っていたんだがな…」

目の前に広がる空を見つめながら、黒羽が呟く。

「まさか…三枚の羽根の合成とは…」
「ホントは僕も、新しい羽根を造ってもらおうと思ってたんだけどねぇ」
呼吸を整えながら、由雉が冷静に話す。
「ハヤテが言ったんだ。“羽根の強度はこれが最大だから、後は合わせて強くするしかない”って」
「ハヤテが…」
黒羽が、そっと目を細める。
「三枚の羽根の合成なら…以前、俺も試みたが…」
首を動かし、空から由雉の方へと視線を移す黒羽。
「あまりの強力さに…羽根自体が砕け散ってしまうはず…」
「うんっ、そう」
黒羽の言葉に、由雉が大きく頷く。
「三枚から一枚にすると、そのあまりの力の強さに、羽根が羽根の形を維持していられなくなって、崩れちゃうんだ」
「ならばっ…どうやって…」
「これさっ」
「……っ？」
そう言って、由雉が懐の中から取り出したのは、一枚の黄色の羽根であった。
「それは…確か傷を治す…」
「“癒羽”だよ」
「癒羽…あっ…！そうかっ…！」
何かがわかったかのように、黒羽が突然、声をあげる。
「攻撃用の羽根三枚ではなくっ…一枚、治癒用の羽根を入れること

で、三枚の合成を可能にっ…！」
「そうっ、“裂羽”を三枚とかだと、羽根が崩れちゃうからねぇ」
「そうかっ…」
黒羽が納得した様子で深々と頷き、再び青い空を見上げる。

「俺には出来ないはずだ…」
そっと目を細める黒羽。

「我が父の羽根に…癒しの羽根など、ないからな…」
「黒羽っ…」
どこか悲しげに映る黒羽の表情に、由雉が思わずその名を呼ぶ。

「俺は…」
空を見つめたまま、黒羽が語るように話し始める。
「俺は…父のように、世界を憎んでいたわけではなかった…」
「……。」
真剣な表情で、黒羽の話に耳を傾ける由雉。

「ただ、ハヤテを、世界を憎む父が…」

――おのれっ！ハヤテめっ！世界めぇぇっ！！――

憎しみでしか出来ていなかった、父の瞳。

「……哀れでしかたなかった…」

遥か遠くまで続く青色を、黒羽が曇りなき瞳で見上げる。

「俺は…父を救いたかった…」

どこか悔いるように、響く声。

「すべての憎しみから…」

「……。」

黒羽の言葉に、そっと目を落とす由雉。父を救いたかったという黒羽の想いは、とても純粋なものであったのだろう。ハヤテという父を得た由雉は、形こそ違えど、黒羽のその気持ちが、わかるような気がしていた。

「だから必死に強くなった…父の羽根で、ハヤテの羽根を超えようと思った…」

――父さんっ！見てて！俺、絶対っ、父さんの羽根で、ハヤテの羽根に勝ってみせるからっ！！――

「そうすることで…父を救えると、そう信じていた…」

幼かった頃の自分を思い返し、黒羽がそっと目を伏せる。

「だが…父は死んだ…」

再び目を開く黒羽。

「俺に残ったのは…“ハヤテの羽根を超える”という目標だけ…」

黒羽が少し寂しそうに目を細める。

「ハヤテの羽根を超えることだけが…俺の生きる理由になった…」

「黒羽っ…」

「だからっ…」
「えっ…？」
傷だらけの体を無理やり起こし、立ち上がろうとする黒羽に、由雉が大きく目を見開く。

「なっ何をっ…！」
「言っただろう…？ハヤテの羽根を超えることだけが、俺の生きる理由だとっ…」
由雉が止めようと手を出すのも構わず、黒羽はふらつく足を片方ずつ地面へとつけ、ゆっくりと立ち上がっていく。

「そんな体じゃっ…！」
「確かに、お前の羽根は強い…」
「……っ」
傷だらけの体とは異なり、まっすぐな、どこか威圧される瞳を見せる黒羽に、由雉が思わず言葉を止める。

「俺の羽根では、どう足掻いても勝てはしないだろう…」
「ならっ…！」
「だが俺には、最後の手段がある」
「最後の…手段っ…？」
強く言い放つ黒羽に、由雉が眉をひそめる。

――グガアアアアっ！！――

「……っ」
そう聞いて思い出される異形の鬼の姿に、由雉はそっと顔をしかめた。

「まさか“鬼人化”とかっ？」
「ふっ」
訝しげに問いかける由雉に、黒羽が軽い笑みを零す。
「安心しろ。俺は鬼人化はしていない」
黒羽が口元を緩めて、答える。
「俺は他の皆のように鬼人化されてシルク様の部下になったわけではなく、自ら望んでなったからな」
「自ら望んで…？」
「ああ」
聞き返す由雉に、黒羽が大きく頷く。
「御伽界を鬼が侵食し始めれば…必ずハヤテの羽根を操る者が出てくると思ったからな…」
「そこまでして…ハヤテの羽根と…」
「ああ…」
由雉が真剣な表情で言うと、黒羽も鋭い表情を見せ、再び大きく頷いた。
「だから俺はっ…！」
「……っ？」
黒羽がボロボロになった上着に手を掛け、勢いよく脱ぎ放つ。
「ハヤテの羽根を超えるためにっ、この命を懸けるっ…！！」
「なっ…！！」
上着を脱ぎ捨てた黒羽に、大きく目を見開く由雉。上半身裸となった黒羽の左胸の辺りの皮膚に、埋め込まれるようにして存在している、一枚の黒い羽根。その羽根に、由雉は驚いてしまったのであ

った。

「その羽根は…一体っ…」

「幼い頃に、父が俺に埋め込んだ羽根だ…」

「父親がっ…？」

思わず顔をしかめる由雉。色羽というのは、それなりに力を持った物体。そんなものを体に埋め込めば、体に危険が起こる可能性はある。

「埋め込まれてから十数年間…この羽根は俺の生命エネルギーを吸い続けてきた…」

「……っ」

黒羽の言葉に、由雉が一気に表情を厳しくする。

「これがどういう意味か…わかるな…？」

「自分の生命エネルギーを吸わせた羽根、か…それが最後の手段ってわけっ？」

「ああ…」

少し引きつった笑みを浮かべて問いかける由雉に、黒羽がしっかりと頷く。

「確かに破壊力は凄そうだねっ…だけど、その羽根を取ったりしたら、君がっ…」

「ああ…もうずっと埋め込まれていた羽根だ…取り出せば、俺は死ぬかも知れない…」

左胸に埋め込まれた羽根にそっと触れ、黒羽が少し目を細める。

「だが、それでも俺は勝ちたい」

「……っ」
顔を上げ、強い意志を秘めた表情を見せる黒羽を、由雉がまっすぐに見つめる。
「このまま大人しく負けるくらいなら、俺は死をも恐れず、この羽根を放つっ…！」
そう叫び、黒羽が勢いよく左胸の羽根を、取り出した。
「はあああああっ！！」
羽根を構えた黒羽が、羽根に溜まった力を高めていく。
「うっ…！」
高まっていく黒羽の羽根の力に、周囲の空気も震え始め、見つめる由雉が少し顔をしかめる。
「何て力っ…下手したら島ごと吹っ飛ぶかもっ…」
まだ力を高め続ける黒羽を見ながら、引きつった表情を見せた由雉が小さく呟く。こうして向かい合っているだけで、黒羽の羽根の威力がどれほどのものなのかは、だいたい予想がついた。
「あの羽根相手には…三枚合成でも、たぶん勝てないっ…」
由雉の表情が、そっと曇る。
――いいかいっ？由雉っ！合成はやっても三枚までだっ！四枚っ！ましてや、あの合成は絶対やっちゃダメだよっ？――
思い出される、修行中の、ハヤテの言葉。

――君の命がなくなってしまうからねっ！――

「……。」

過ぎる言葉に、由雉が険しい表情を見せる。

「でもね、父さん…」

この場にはいないハヤテに、まるで語りかけるかのように呟く由雉。

“命懸け”にはっ…“命懸け”で応えろって…」

――キジっ――

「ウチの飼い主さんならっ…きっとそう言うと思うんだっ…」

あの迷いのない強い笑顔を思い出し、由雉が優しい笑みを零す。

「だからっ…！」

由雉がその瞳を鋭くし、懐から何枚もの色羽を出す。

「“滅羽・癒羽”、“癒羽・裂羽”、“滅羽・裂羽”、“裂羽・裂羽”っ…」

取り出した羽根を二枚ずつ、次々と合成させ、橙、緑、藍、紫の、それぞれ違う色の羽根を造っていく由雉。

「あれはっ…」
羽根を構えた黒羽が、その由雉の様子に気づく。
「そうか…お前も命を懸けてくれるか…」
俯いた黒羽が、口元を緩める。
「ありがとう…と言うべきなのだろうな…」
相手には届かぬ礼を、黒羽はそっと呟いた。

「いくぞっ…！！」
笑みを消した黒羽がその表情を鋭くし、溢れんばかりの力を纏った黒い羽根を、勢いよく構える。

「……“命羽”っ…！！」
黒羽が由雉へ向け、命の羽根を投げ放つ。

「……っ」
向かってくる命羽を見ながら、由雉が懐からまたしても数枚の羽根を取り出し、今造ったばかりの羽根とともに右手に持ち構える。

「“滅羽・橙羽・癒羽・包羽・裂羽・重裂羽・壊羽”…」
由雉の右手にきれいに並ぶ、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫色の、七枚の羽根。

「“合翼っ…！」

由雉が右手を前へと突き出し、その上に左手を重ねて、七枚の羽根を合成していく。強い光を放ち、七枚の羽根は、やがて一枚の羽根となっていく。

「……っ！」

光の止まぬ、生まれたばかりの一枚の羽根を、大きく振りかぶる由雉。

「“七位（しちみ）っ…虹羽（とうは）”っ…！！」

由雉が、虹のような七色の光を放つ羽根を、勢いよく投げ放つ。

『……っ！』

二人が強く見つめ合うその中央で、ぶつかり合う虹色の羽根と、命の羽根。

――バァァァーーンっ！！

あまりにも強力な二枚の羽根のぶつかり合いに、起こった激しい衝撃は、鬼が島全体を震わすまでであった。辺りの荒地を大きく抉

り、空に突きあげるような砂煙を巻き起こした衝撃が、徐々に収まっていく。

『……。』

収まっていく砂煙の中で、表情一つ動かさずに、互いの中央を見つめる由雉と黒羽。

『……っ』

大きく抉られた地面の底には、砕けた黒い羽根と、地面に力強く突き刺さった虹色の羽根があった。

「……っ」

その様子を見て、黒羽がそっと口元を緩める。

「見事だ…」

呟いた黒羽が、ゆっくりと顔を上げていく。

「素晴らしい羽根だった…敗れたことに、悔いはない…」

顔を上げた黒羽が、向かいに立つ由雉へ微笑みを向ける。

「これならば父も…何も言うまい…」

黒羽がそっと目を伏せ、羽根のなくなった左胸に手を当てる。

「由雉…」

目を開き、再び由雉の方を見る黒羽。

「お前と戦えたことを…誇りに思う…」
「……。」
言葉通り、誇らしげに笑う黒羽を、由雉がまっすぐに見つめる。

「……っ」

最後まで笑みを浮かべたまま、黒羽はその瞳を閉じ、力なく後方へと倒れていった。

「……。」
地面に倒れ込んだまま、ピクリとも動かぬ黒羽を見つめ、由雉がそっと目を細める。

「ボクも…君と戦えたことを、誇りに思うよ…」
倒れた黒羽へ、話しかけるように言い放つ由雉。

「黒羽…」

二人の羽根造りの意志を継いだ、その息子たちの戦いは、今、終わりを告げたのである。

「うっ…！」
急に顔をしかめた由雉が、口元を押さえて前方に屈みこむ。

「……っ」
口につけた手のひらには、赤い血が滲んでいた。

「やっぱっ…七枚はキツ…かったかな…」
足元の振らついた由雉の体が、ゆっくりと後方へと倒れていく。

「後は…頼んだよっ…」
広がる青い空を見上げ、微笑む由雉。

「桜時っ…」

そっと桜時の名を呼び、由雉は力なく瞳を閉じて、地面へと倒れていった。

第７８章　この命、懸けて　★３

同じく鬼が島・中央。門貴ｖｓ醍也。

「ハァっ…ハァっ…」

まだ門貴の放った嵐のような風が収まりきらない砂煙の中で、門貴の風を直撃し、大きなダメージを受けた醍也は、鬼から人の姿へと戻り、地面へと倒れ込んでいた。乱れた息をしながら、醍也が未だ吹き荒れている風を見つめる。

――ならっ…！俺が助けたるわいっ…！！――

「……っ」

風を受ける前、確かに聞こえたその言葉に、醍也がそっと目を細める。

「助…ける…？」

戸惑うように、その言葉を呟く醍也。

「俺…を…？」

誰にともなく問いかけた醍也が、どこか自嘲するような笑みを浮かべる。

「こんなところにいる…俺を…？」

――今日も、悲鳴だけが響き渡る。

「ギャアアアアっ！！」

「……。」

鬼にされて、俺が連れて来られたのは、“地獄”。鬼人化人間同士が毎日のように殺し合う、ある意味、地獄よりも最低な所だった。

「シルク様…何故、折角鬼人化した人間たちに、同士討ちなど…？」

「私はねぇ、諸刃…強いモノしかいらないの…」

俺をここへと連れて来た、女が笑う。

「弱いモノなんていらない…強いモノが一つあれば、それでいいわ…」

“モノ”とは、きっと“物”の意。

「だから…貴方も勝つことね…」

「……。」

女が、俺の方を見て、冷たく笑う。

「ここは地獄…敗北者には“死”が与えられる…」

「ギャアアアアアっ！！」

響く悲鳴。飛び散る血。

「生き残りたければ…勝ちなさい…」

「……。」

その言葉だけが、これから地獄を生きる俺の耳に、強く残った。

「君が新入りくんっ？」

「……っ？」

「よろしくねっ！」

その地獄に入れられてすぐ、気のいい奴が俺に話しかけてきた。
名前は、名乗っていたような気もするが、覚えていない。ここでは人の名前を覚えることなど、何の意味もないことだと、そう思えたから覚えなかった。

「来たばかりで、わからないことも多いだろう？何でも聞いてよっ」
来たばかりの俺のことを探ろうとでもしたのか、ただ単に世話好きだっただけなのか、それはわからない。

「他の奴らよりは、親切に教えるからさっ！」
「……。」

けど、そいつの笑顔は、光の差さないこの地獄の中で、ほんの少しだけ光って見えた。

「“赤十字”…」
「グワアアアアっ！！」

ただ毎日やらされたことは、殺し合いだけだった。鬼人化人間を殺させ合って、最後に残った一人、つまり“強いモノ”だけを、手下として残そうとでも考えているんだろう。まるでゲームのように続いた殺し合いの中を、俺は生き残った。

『敗北者に死をぉぉっ！！』
『敗北者に死をぉぉっ！！』

それだけが、ここのルール。

「……っ」

「ギャアアアアっ！！」

今日も、悲鳴だけが響き渡る。

心の中で“助けて”と叫び、心の中で“誰も助けてなどくれない”と諦めた。

「凄いなぁ～っ！醍也っ！また勝ち残ったじゃないかぁっ！」

「そっちだって勝ち残っただろ…？」

「俺は当たりが良かっただけさっ！」

世話ばかり焼く気のいいあいつとは、よく話す中になっていた。別に仲が良くなったわけじゃない。ただ傍に来て、話しかけてくるから答えるだけ。

「そろそろ、ここの人数も減ってきた…」

毎日続く地獄のゲームのお陰で、ここに山程いた鬼人化人間たちも、今となっては数えるほどしか残っていなかった。周りを見渡した、あいつの表情が曇る。

「俺たちが当たるのも…そろそろかもな…」

「……。」

その言葉に、“助けて”と、少しだけ軋んだ胸に、俺は気づかない振りをした。

「次の者っ！前へっ！」
「……。」
今日も、殺し合いの場へ上がる。

「よぉ、醍也…」
「……っ！」

いつもの殺し合いの場で、その日、俺の目の前に立ったのは、あいつだった。

「やっぱり…当たっちまったな…」
「……。」
どこか悲しげに微笑むあいつに、俺はそっと目を細めた。
「……っ」
再び軋む胸を、そっと押さえて、こみ上げる想いを堪えるように、強く唇を噛み締めた。

「始めっ！！」
「……っ！」

なのに、始まりの合図に、あいつの笑みは一瞬で消えた。

「死ねぇぇっ！！醍也っ！！」
「……っ」

殺意のこもった瞳が、俺に向けられる。

“そいつの笑顔は、この地獄の中で、ほんの少しだけ光って見えて”

「グワアアアアっ！！」

飛び散る血飛沫。響く、あいつの悲鳴。俺を殺そうと飛びかかってきたあいつに、俺はただ、自分の刃を突き立てた。

「グゥっ…ウウゥっ…醍…也っ…」

あいつが、苦しげに俺の名を呼んで、必死に俺へと手を伸ばしてくる。

『敗北者に死をぉっ！！』

『敗北者に死をぉぉぉっ！！』

それだけが、ここのルール。

「……“赤十字”…」

「ウウゥっ…！ギャアアアアっ！！」

今日も、悲鳴だけが響く。

「……。」

でも、今日の悲鳴は、いつもよりひどく頭に響いて、俺はきっと、一生忘れることはないだろう。

「おめでとう、醍也…貴方が私の強いモノよ…」
最後の一人まで生き残った俺は、地獄を出て、あの女の手下となった。

「これからは私の為に…もっとたくさんの人間を殺してね…」
「……。」

でもそれは、新しい地獄の始まり。

“助けて、助けて”。

今日も、届くはずのない言葉を、心の中でひたすら叫ぶ……――

「ふぅぅ～っ…」
巻き起こした風の収まってきた頃、門貴はホッと一息つくように肩を落とし、如意棒の構えをといた。
「痛ちちちちちっ…」
腹部を押さえながら、門貴が少し顔をしかめる。

「無理し過ぎたかぁ～っ?絶対、肋骨逝っとうわぁ～っ」

醍也の重力を振り切り、風を起こしたことで、体に相当の負担を与えてしまったのだろう。最中は無我夢中でそう気づきもしなかったが、今になって痛みがこみ上げてくる。

「まぁでも輝矢んの為なら、えんやこらやぁっ！」

理由として成り立っているのかは別として、門貴がもう一度、気合いを入れる。

「せやけど、あいつはっ…」

「……。」

「……っ」

やっと収まってきた砂煙の向こうに、ぼんやりと見えてくる人影に、門貴がそっと眉をひそめる。

「はぁっ…はぁっ…」

そこに立っていたのは、傷だらけの体をして、まだ少し苦しそうに呼吸を乱した醍也であった。鬼人化も、あまりの傷の深さに、元の人間の姿に戻ってしまったのだろう。

「醍也っ…」

「お前は…“俺を助ける”と言ったな…」

「……っ」

醍也の言葉に、門貴がハッとした表情を見せる。

「おっおうっ！イヌコロに頼めばっ、鬼人化人間も人間に戻れんねんっ！せやからっ…！！」

「報告で聞いた通りっ…」

「えっ…？」

笑顔で話していた門貴が、醍也のいつもの発言に、その言葉を遮られる。

「報告で聞いた通りっ…“敵に甘い”っ…！」
「うっ…！」
醍也が鬼人化した時に捨てていたはずの十字刃を構え、勢いよく門貴のもとへと飛び込んでくる。
――パァァァンっ！！
門貴の慌てて突き出した如意棒と、醍也の十字刃が、激しくぶつかり合い、強く響く音を立てる。
『クっ…！』
武器が接触したことによる衝撃に、互いに顔を歪める門貴と醍也。体に残るダメージが、お互い、相当深いのであろう。普通に刃を交えることさえ、厳しい状況なのである。
「懲りない男だなっ…」
「だっ…醍也っ…！」
冷たく言い放つ醍也に、門貴が必死の瞳を向ける。
「前の戦いの時も、敵である剛也に情けをかけたせいで、俺に殺されかけたくせにっ…」
「くっ…！」
醍也の言葉に、門貴が少し唇を噛む。
「醍也っ…！俺は…お前をっ…！！」
「……っ黙れっ…！！」
「ううぅっ…！！」
強く叫んだ醍也が十字刃を振り切ると、門貴は体ごと後方へ、勢

いよく押し飛ばされる。

「クっ…！」

何とか踏みとどまる門貴であるが、腹部に走る痛みに、少し顔を歪めた。

「はぁっ…はぁっ…」

押し飛ばした醍也も、その反動に体が軋み、苦しげな表情を見せる。

「醍也っ…！聞けっ…！」

門貴が勢いよく顔を上げ、真剣な表情を醍也へと向ける。

「俺は鬼人化人間のお前を殺す気もないしっ、出来れば戦いたくもないっ…！だからっ…！！」

「俺はっ…！」

説得するように叫ぶ門貴の声を、醍也が大きな声を発して遮る。

「俺はっ…」

少し震えた声で、醍也がゆっくりと口を開く。

「たくさんのものを殺してっ…壊して…」

――醍…也っ…――

地獄の中にあって、光って見えたあの笑顔。そして、死に顔。今も頭に響く悲鳴。犠牲にしてきた命は、決してあの一つではない。

たくさん殺し合いをして、敗れた者に当然のように刃を突き立てた。

「今…ここに立っている…」

醍也が右手の持った十字刃を、強く握り締める。

「だからっ…そんな俺が…俺を助けてくれるという、お前の手に…飛びつくことなんて…出来ない…」

「……っ」

辛そうに俯く醍也を、門貴は少し目を細め、まっすぐに見つめる。

「そんなことは…許されないっ…」

醍也の悲しげな声が、辺りに響く。

「助けを求めるには…俺は汚れ過ぎた…」

「醍也…」

顔を上げ、少し皮肉った笑みを浮かべる醍也に、門貴が思わず名を呼びかける。

「だから…お前の手は取れない…」

「……。」

醍也の表情には少しの曇りもなく、その悲しい言葉はまっすぐに放たれていて、門貴は何も言い返すことが出来なかった。

「でも…」

「……っ？」

言葉を付け加える醍也に、少し首を傾げる門貴。

――助けて…助けて……――

地獄の中で、ずっと叫び続けた言葉。

――俺が助けたるわいっ…！！――

聞くはずもないと、諦めた言葉。

「嬉しかった…ありがとう…」

「……っ」

穏やかに微笑む醍也に、門貴が驚くように目を見開く。

「醍っ…」

「俺は…地獄を生きてきた…」

呼びかけようとした門貴の声を、再び遮る醍也。

「今更…この生き方は変えられない…」

醍也が、そっと胸を握り締める。

「だから最期まで…地獄のルールに従うっ…！」

浮かべていた微笑みを消し、醍也がゆっくりと右手に持った十字刃を構える。

「敗北者にっ…死をっ…！！」

「……っ」

強い瞳を向ける醍也に、門貴がそっと目を細める。今までの醍也

は、輝矢を助けに来た門貴に終始、戸惑っているようであったが、その迷いも振り切れたようである。

「……。」

醍也をまっすぐに見つめ、少し考え込むような表情を見せる門貴。

――お前の手は取れない……――

まっすぐな瞳。地獄の中を生きてきた、純粋な瞳。

「これでまたっ、“助けたる”なんて言うたら…恥かくんは俺やなっ…」

犠牲にしてきた命を無視して、自分だけが救われることなど、許されないと醍也は言ったが、自分自身がそうすることを許さないのであろう。それは醍也にとっての強い覚悟であって、門貴が何を言おうとも、きっと動かすことは出来ない。門貴が動かしていいものではない。

「鬼の、被害者でもあるあいつと戦うことに…一体、何の意味があるんやろうなぁ…」

目の前で武器を構える醍也を見つめ、門貴が薄い笑みを浮かべる。

「なぁ…？輝矢んっ…」

門貴が少し空を見上げ、輝矢へと問いかけるように言葉を発する。

「けどっ…俺に、この戦いをやめることは出来へんわっ…」

――嬉しかった…ありがとう……――

あんなに偽りなく向き合ってくれた醍也に対して、救いの手を取らず、今も戦おうとしている醍也に対して、この勝負は何の意味もないと、戦う意味などないからやめようとなどと言うことは、門貴には出来ない。

――さぁっ！猿蟹合戦の始まりやぁっ！――

戦いにすべてを懸ける者の気持ちなら、誰よりも知っている。

「今っ、俺が…あいつに出来ることといえばっ…」

門貴がふと、右手に握った如意棒に目を落とす。

「俺の全力でっ…！あいつにぶつかっていくことだけっ…！！」

鋭い表情を見せた門貴が、素早く如意棒を構える。

「そう思うやろぉっ…！？輝矢んっ…！！」

聞こえるはずのない輝矢へと問いかけた門貴が、どこか晴れやかな笑みを浮かべる。

「さぁっ！決めようかぁっ！この勝負の勝者をっ…！！」

門貴が、如意棒の先を醍也へと向ける。

「……っ」
そんな門貴の様子を見て、醍也の口元が思わず緩む。
「やっぱり…変な奴…」
かすかな微笑みを浮かべた醍也が、門貴には届かぬくらいの小声で、ポツリと呟く。
「報告には…なかったな…」
そう呟いて、醍也が零していた笑みを消し、十字刃を振り上げる。
「……っ“最重示”…！」
醍也の声に、今までよりもさらに強く、赤い光を纏う十字刃。
「この一撃…最後の一撃にっ…！俺の命を懸けるっ…！！」
赤く輝く十字刃を構え、醍也が真剣な表情を見せる。
「そうかいっ…」
そんな醍也を、まっすぐに見つめる門貴。
「なら俺もっ…！」
門貴が勢いよく、如意棒を掲げる。
「この風にっ…！俺の命懸けまくったるわいっ…！！」

門貴の周囲から強い風が巻き起こり、掲げた如意棒へと集められていく。

高まる二つの力に、鬼が島の大地が揺れる。

『はあああああああっ…！！』

『……っ！』

同時にその場から飛び出し、前方へと駆け込んでいく門貴と醍也。

「喰らえっ…！！」

「如意棒・第五の舞っ…！」

互いの距離が近くなったところで、門貴が如意棒を、醍也が十字刃を、それぞれ勢いよく振りかぶる。

「“大赤十字”っ…！！」

「“全（ぜん）”っ…！！」

――バァァァーンっ！！

門貴と醍也の、命を懸けた力のぶつかり合いは、鬼が島全体を揺らすほどに大きな衝撃を生んだ。荒地にわずかに残っていた草木は吹き飛び、二人の居た場所には、海にまで達しそうなほどに大きな穴があいた。衝撃が止み、巻き起こった砂煙が収まると、辺りは急に静かになる。

『……。』

大きくあいた穴の中央に立つ、武器を下ろした、門貴と醍也。

――パァァァンっ！

静まり返ったその場所に、何かの砕ける音が響いた。

「……っ」

砕けたのは、醍也の右手に握られていた十字刃。粉々になり、手から零れ落ちていく十字刃に、醍也がそっと目を細める。

「やっと…終わった…」

――生き残りたければ…勝ちなさい……――

あの日から、続いた地獄。

「やっとっ…」

力なく微笑んだ醍也が、ゆっくりとその場へと倒れていく。

「はぁっ…はぁっ…」
しっかりと形として残っている如意棒を持ち、乱れた息をしながら、倒れていく醍也を見つめる門貴。

「うっ…！」
だが門貴の全身にも痛みが走り、門貴も後方へと倒れていく。

「よっとぉ～っ！」
「へっ？」
倒れようとしていた門貴の体を、支えるように伸びてくる手。その手に、門貴が戸惑うように振り返る。

「誰っ…」
「大丈夫さぁ～っ？門貴っ！」
「ごっ…剛也っ…！？」

門貴が振り返った先にいたのは、陽気な笑顔を見せた剛也であった。

「なっなんで、剛也がここにっ…！？」
「俺も桃タローさんに聞いて、駆けつけて来たんさぁ～っ！」
驚きの表情を見せる門貴に、剛也が笑顔で答える。剛也は、かつてはシルクの手先だった男で、門貴に敗れ、醍也に殺されようとした時、門貴が助けて救ったのである。

「そうやったんかぁ～」
「そうさぁっ！」
納得したように頷く門貴に、剛也がさらに大きな笑顔を向ける。

「……っ」
ふとその笑みを消し、門貴の正面で倒れ込んでいる醍也に、目を向ける剛也。

「醍也に…勝ったんさ…？」
「ああっ…」
剛也の問いかけに、門貴が真剣な表情を見せて頷く。

「剛也…」
「んっ？」
「悪いけどっ…俺を醍也んとこまで、連れてってくれるか…？」
「お安い御用さぁ～っ」
門貴の頼みに、剛也は快く答え、傷ついた門貴に肩を貸すと、並んでゆっくりと歩いて、倒れている醍也のもとへと近づいていった。
醍也のすぐ傍で、剛也が手を離し、門貴が地面へと座り込む。

「醍也…」
「うっ…」
呼びかける門貴に、醍也が少し苦しそうな声を漏らしながら、ゆっくりと門貴の方を見る。

「俺の…負けだ…」
ゆっくりとした口調で、そう言い放つ醍也。

「さぁ…敗北者に…死を…」
「……。」
醍也の中のルールに則り、死を求める醍也に、門貴がそっと目を細める。

「これで…やっと…」
上空に広がる青い空を見つめた醍也が、やることをすべてやり終えたような、穏やかな表情を見せる。

「……っ」
「えっ…？」

穏やかに、目を閉じようとした醍也の目の前に差し出されたのは、如意棒の先ではなく、一本の手。門貴の手であった。

「何っ…」
「敗北者には、死を与えるんやろっ…？」
戸惑うように門貴を見上げる醍也に、門貴は優しい口調で語りかける。

「なら俺はっ、“今までのお前”を殺すっ」
「……っ」
門貴の言葉に、醍也が驚いた様子で目を見開く。

「だから…これからのお前は、何の勝負も、何の殺し合いもせんでええっ」
微笑みかけた門貴が、優しい言葉を紡ぐ。

「だからっ…生きぃっ、醍也っ…」
「えっ…？」
門貴の手が、傷ついた醍也の手を取る。

「犠牲にしてきた命があるならっ…その分も生きるんやっ」

「……っ！」

その言葉に、大きく目を見開く醍也。

「誰も助けに来てくれへんならっ、いつでもどこでもっ、俺が助けに行ったるからっ！」

「……っ」

――助けて、助けて……――

ずっと、そう叫んでいた。心の中で叫んでは、無駄なことだと諦めてきた。

「これが勝者命令っ！どやっ！？」

「……。」

笑顔で問いかける門貴に、醍也がそっと目を細める。

「報告で聞いた通り…」

「……っ？」

いつものように聞こえてくる声に、門貴が目を丸くする。

「本当にっ…甘い奴だなっ…」

「……っ」

そう呟いた醍也のその瞳からは、涙が流れ落ちていた。醍也の涙に、門貴がそっと目を細める。

「その甘さ…とっとと捨てろっ…」
醍也が、少し震えた声で、言葉を繋ぐ。
「でないとっ…その甘さに溺れて…いつか本当に死ぬぞっ…」
「かもなぁっ」
忠告のような醍也の言葉に、門貴が少し困ったような笑みを浮かべる。
「けどっ…」
門貴がそっと、言葉を付け加える。
「俺はやっぱり…捨てへんよっ、醍也っ…」
「えっ…？」
すぐさま答える門貴に、少し眉をひそめる醍也。
「いつかホンマに死ぬかも知れんけどっ…でもっ…」
醍也の手を取った自分の手を見て、門貴が穏やかな笑みを零す。
「この甘さで救えた命も…少なからずあるからっ…」
そう言って、門貴が振り向いた先に立っているのは、陽気な笑顔を見せた剛也。
「そうさぁ～っ！」
剛也が、その陽気な笑顔を、醍也へと向ける。
「俺も門貴に救われてっ、今こうしてここにいるさぁ～っ！だからっ…！」
さらに大きな笑顔を咲かせる剛也。

「なんくるないさぁ～っ！醍也っ！」
「……っ」

その笑顔は、光の差さない地獄を生きてきた醍也に、ほんの少しだけ光って見えた。

「……バカな奴らっ…」
言葉では悪態づきながらも、醍也がそっと笑みを零す。

「ありがとうっ…」
『……っ』

小さく落とされた礼に、門貴と剛也も、零れんばかりの笑顔を見せた。

第７８章　この命、懸けて　★４

鬼が島・水の城前。桜時ｖｓ内兎。

「“水星”…」

内兎が突き出した右手から、無数の水の玉を放つ。

「……っ」

水星の向かう先に立っているのは、鋭い表情を見せた桜時。桜時が村雨丸を持っていない、左手を構える。

「“瞬花”っ…！」

――パァァァーンっ！

桜時の瞬花が、内兎の向けた水星を、一つ残らず、あっという間にすべて、桜へと変えてしまう。

「……っ」

桜の舞い散る中、桜時が素早く村雨丸を構える。

「“瞬花っ…終刀”っ…！！」

桜時の放った一閃が、辺りに舞い落ちる桜も纏い、さらに勢いを増して、内兎のもとへと飛んでいく。

「クっ…！」

少し険しい表情を見せ、素早く動いて、桜時の攻撃をかわす内兎。

「僕の水をあっさり桜にするなんて…」
冷静な表情に戻した内兎が、少し細めた瞳で、正面に立つ桜時を見つめる。

「強い花力…いや、“命力”か…」
桜時が命力を操るようになり、桜時の中でも花力か命力かという明確な境界は、消えてしまったのだろう。二つの力が合わさり、より強力な力を得ている。

「下手な水じゃ…花を元気にするだけだね…」
そっと呟いた内兎が、どこか含んだような笑みを浮かべる。

「トランプ兵団の気配も消えた…加勢が来る前に、彼だけでも…」
そう考えを巡らせ、内兎が素早く両手を構える。

「“水生”…」
「……っ」
言葉を囁く内兎に、桜時が警戒を強める。

「……っ？」
だが何も起こらず、内兎の周囲から水が湧き上がる様子もなく、桜時は少し戸惑うような表情を見せた。

「何だっ…？一体、何っ…うっ…！！」
怪訝そうに周囲を警戒していた桜時が、急にその表情を変える。

「うあっ…！」

顔を引きつった桜時が、苦しげに喉元を押さえる。

「苦しい…？桜時…」

「クっ…！」

目の前に立ち、楽しそうに問いかけてくる内兎を、桜時が苦しげな表情で、突き上げるように見る。

「な…にをっ…」

「桜時…君は知ってるかな…？」

睨みつけるような瞳を見せながらも、戸惑いを隠せずにいる桜時に、内兎は穏やかな口調で語りかける。

「人体の六十パーセントは…水で出来てるってこと…」

「……っ！まさ…かっ…」

「そうっ…」

驚きの表情を見せる桜時に、内兎がさらに冷たく微笑みかける。

「体内の水を操れば…君の体内の臓器やら組織やらを壊すことは容易いっ…」

「そんなっ…ことがっ…」

「まぁ水力使いでも、ここまでのことは輝矢には無理だろうねぇ」

「何っ…？」

内兎の言葉に、桜時が眉をひそめる。

「これは…シルクの力の一部である僕だからこそ、出来る技…」

「シルクのっ…力の…一部っ…？」

「ああっ…君にはまだ言ってなかったね…」

困惑した様子で聞き返してくる桜時に、内兎が思い出したように

頷く。

「でも…二回話すのも面倒だなぁっ…」

そう呟いた内兎が、冷たい瞳を桜時へと向ける。

「とりあえずっ…」

内兎がそっと、指を動かす。

「うっ…！」

急に声をあげ、その場へと倒れ込む桜時。

「うあああああっ…！！」

地面にうつ伏せになるように倒れ込んだ桜時が、突然、苦しげな声を漏らす。

「足の筋組織を水で圧迫しといた…無理に動かそうとすれば、組織自体が潰れるよっ…」

「ううぅっ…！」

こみ上げる痛みを堪えるような、そんな声をあげる桜時に、内兎が冷たく言い放つ。

「ホントは一気に心臓を潰したいところだけど…君を殺すと、シルクに怒られちゃうからねぇ…」

内兎がその場でしゃがみ込み、倒れ込んだ桜時に顔を寄せる。

「じゃあね、桜時…」

「ううぅっ…」

桜時へ、あっさりと別れを告げる内兎。

「僕が輝矢を連れていき終わったら、解放してあげるからっ…」
そう言い放つと、内兎は立ち上がり、桜時に背を向けた。

「さてと…」
「待てよっ…」
「……っ」
内兎が歩みだそうとしたその時、後方から聞こえてきた声に、内兎は大きく目を見開き、勢いよく振り返った。

「なっ…」
「……。」
振り返った内兎の前に立っているのは、鋭い表情を見せた桜時。

「バカなっ…どうやってっ…」
「俺は、死んでも、輝矢をお前と一緒には行かせねぇっ…」
信じられないといった表情を見せる内兎を、桜時が強く睨みつける。

「俺を殺さずに、この場を去れると思うなよっ…！」
「クっ…！」
挑発的な発言をする桜時に、内兎が思わず唇を噛み締める。

「もう一度っ…！」
内兎がそう言って、再び桜時へ右手を向ける。

――パァァァァンっ！

「うっ…！」
だが、桜時が倒れることはなく、何かが跳ね返るような、そんな音だけがその場に響き渡った。
「はっ…弾いたっ…？僕のこの技をっ…？」
自問自答する内兎の声が、少し震える。
「そんなはずっ…！」
「もう終わりかっ？」
「……っ」
物足りないとでも言うかのように問いかけてくる桜時に、内兎の冷静だった表情が、勢いよく引きつられる。
「こうなればっ…！」
桜時へ向け、今度は両手を突き出す内兎。
「“水牢”っ…！！」
「……っ？」
内兎がそう叫んだ途端、その場を作り上げていた水の壁や天井が崩れ落ち始める。
「何だっ…？うっ…！」
崩れ落ちた水の破片が、一斉に桜時の方へと飛び出してくる。
「こっ…これはっ…！」
――バァァァーンっ！！

「ううっ…！」

襲いかかる水の群れに、抗う隙もなく、呑み込まれていく桜時。

水が桜時を包み込み、その場に大きな円柱を形成していく。

「ふふっ…」

空へと伸びていく円柱を見上げ、口元を吊り上げる内兎。

「水牢は水の迷宮…迷い込めば、二度と出られることはない…」

冷たく響く、内兎の声。

「その中で…一生、幸せな夢でも見てるといいよ…桜っ…」

――パァァァァンっ！

「えっ…？」

いきなり弾け飛ぶ水の牢に、内兎の表情が止まる。

「そん…なっ…」

空へと突き上げていた円柱が、まるで滝のように、上から流れ落ちてくる。崩壊していく水が、洪水のように地面を濡らし、内兎の足元も水に浸かる。そして崩れ落ちた水の中からは、同じように天へと突き上げる、白い光の柱が見えてきた。

「そんなっ…」

険しい表情を見せた内兎の瞳に映るのは、突き上げる光の柱。辺りの地面を流れていた水がすべて、色とりどりの花へと変わり、そ

の荒地を、あっという間に美しい花畑へと変えた。

「……っ」

何かに気づいたように、自分の足元を見る内兎。内兎の水を変えただけのはずの花が、荒地の中をどんどんと広がっていき、殺風景だった鬼が島を、一面の花畑へと変えていく。

「こんなことがっ…」

天へと突き上げる光、自然と広がっていく花畑は、まるで天界の光景のようであった。

「……っ？」

何かの気配を感じ、内兎がそっと顔を上げる。

「……っ！」

「……。」

内兎の瞳の中へと飛び込んできたのは、光の柱の中に立ち、鋭い表情を見せている桜時の姿。

「……っ」

その桜時の姿に、内兎の全身が震えた。

その頃、御伽湖・中央。

『ギャアアアアっ！！』

『……っ？』

空から降ってきた白い光に包まれ、一斉に消えていく鬼たちに、戦っていた万亀や浦島、泡美たちが皆、目を丸くする。

「なっ何だぁっ？」

鬼たちが消え、急に静まった湖を、浦島が戸惑うように見つめる。

「あんなにウジャウジャ溢れてきてたのにっ、一気に消えちゃったわねぇっ」

「ええっ…」

泡美の言葉に、どこか考え込むような表情で頷く万亀。

「先程の光っ…」

空を見上げた万亀が、光のやって来た方角を見つめる。

「鬼が島、からですか…」

「……っ」

鬼が島の荒地を駆けていたアリスが、ふと足を止める。

「何っ…？これっ…」

アリスの向かう水の城の方から、どんどんと広がってくる花畑に、アリスはそっと、その表情を曇らせた。

「んっ…？」

咲き乱れる花畑の中で、横たわっていた城歌が、ゆっくりと目を開く。

「私っ…何故っ…？」

起き上がった城歌が、自分の手を見つめ、戸惑うように呟いた。

「この力…」

水の城へ向かう道の途中で、ふと足を止める諸刃。

「“命咲かす者”か…」

顔を上げた諸刃の瞳に、突き上げた白い光が映った。

「あの光はっ…」
どこかで見覚えのある白い光の柱を見つめ、ゴンがそっと目を細める。

――ゴンっ…！あれっ…！――
御伽砂漠に突き上げた、あの光と同じ柱。

「ハチ公が…命力を…？」
「んんっ…」
「……っ？」
背後から聞こえてくる声に、ゴンが振り返る。

「んっ…」
傷だらけで倒れている波跡を、優しく包み込むように、輝く光。

「……っ」
その光を見ていたゴンが、そっと眉をひそめる。

「傷が…癒えていく…？」
光に包まれた波跡の傷が、どんどんと癒えていっていた。それは癒えるというには速過ぎて、まるで体の組織が再生していくような、そんな光景であった。

「……。」

信じ難いその光景に、曇るゴンの表情。

「ここまでの…力とはっ…」

『……。』

共に倒れた由雉と黒羽の体も、白い光が包んでいく。

「傷が…治っていく…」

「すんごいさぁ～っ！」

光に包まれ、傷の再生していく自分の体を、戸惑うように見つめる醍也と、その光景を見て、目を輝かせる剛也。

「桜時っ…」

その二人の横で、門貴はどこか不安げに空を見上げる。

鬼が島・海岸。
「あらららららぁ～っ？」
「一気に消えましたねぇ、鬼人たち」

戸惑うように周囲を見回す白雪に、同じように不思議そうな表情を見せた鈴白が話しかける。海岸で白雪たちが交戦していた鬼人たちも、空から降り落ちてきた白い光に呑みこまれ、一瞬にしてすべて、消え去ってしまったのであった。

「なんで急に消えちゃったのかなぁ～？」
「んん～っ、まぁ良しっ！」
「えええ～っ？」

少し考えた後、すぐさま考えることをやめて言い放つ白雪に、芹が驚いたような声をあげる。
「ほらっ、考えるの苦手だから」
「そっかぁ～っ」
「じゃかましいわよっ！！」

好き勝手言う鈴白と芹に、白雪が勢いよく怒鳴りあげる。

「犬仁、これは…」
「ああっ…」

犬仁のもとへと歩み寄ってきて、話しかける犬義に、犬仁がすべて言い終わらないうちに大きく頷く。

「恐らくは、桜時様の“命力”だろう…」
「でも、どうして、無限に復活するはずの鬼人がっ…？」
犬義の横から、犬智が問いかける。
「あれら鬼人はすべて“骸鬼”…骸（むくろ）で出来た体だからこそ、何度倒そうとも復活してきた…だが…」
「命の光を浴びれば…骸は消滅する…」
「ああ…」
代わりに続きを話す犬義に、犬仁がもう一つ、大きく頷く。
「しかし、桜時様の命力が、まさかここまでとは…」
犬仁たちのいる海岸沿いにまで、広がってくる美しい花畑。
「伏様以上か…」
花を見つめ、犬仁がそっと目を細める。
「我が主とはいえっ…“恐ろしい”とさえ、思ってしまうな…」
咲き乱れる花に、犬仁の胸はかすかに騒いだ。
「……。」
同じように鬼人が消えた花畑に、一人立った犬孝が、突き出した光の柱を見上げ、そっと眉をひそめる。

「命力を使い過ぎるな…桜時っ…」
光へ向け、犬孝がそっと語りかける。
「お前の力はっ…世界を動かし過ぎるっ…」

「……。」
光の柱の中に立つ桜時を、まっすぐに見つめる内兎。
「獣人なんて…ものじゃないっ…」
少し震えた声を発した内兎の顔から、汗が滴り落ちる。

「まるで…神っ…」

そっと目を細める内兎。

「これがっ…“命力”っ…」
内兎の表情が、今までで一番、大きく歪む。

「シルクが欲するはずだっ…」
「体内六十パーセントだのっ、水の迷宮だのっ…」
「……っ」
ゆっくりと口を開く桜時に、そっと顔をしかめる内兎。

「小賢しいんだよっ…！」

――パァァァーーン！！

「……っ！」

桜時が強く叫び、村雨丸を一振りさせると、突き上げていた光の柱が、弾け飛ぶ。弾けた光の粒が、内兎のすぐ横をかすめると、内兎の肩がビクリと震えた。

「俺からあいつを奪おうってんならっ…」

桜時の鋭い瞳が、内兎を捉える。

「正面からっ、かかって来いっ…！！」

「クっ…！」

強く言い放つ桜時に、内兎が唇を噛み締める。

「何っ…？今のっ…」

全身を走る、妙に冷たい感覚に、内兎がそっと自分の両肩を抱き、戸惑うような声を漏らす。

「あぁ～ららっ」
映像に映し出される内兎の表情を見たギンが、どこか楽しげな笑みを浮かべる。
「あぁ～んなに戸惑っちゃってっ」
冷たく吊り上がる、口端。

「わからないんでしょうねぇ～っ、あれが“恐怖”という感情だということがっ」
「生まれたばかりのあの子は…恐怖など、味わったことがないでしょうからねぇ…」
ギンの横に腰掛けたシルクが、冷静な表情で言う。

「おやっ？ではシルク様は、“恐怖”というものを、体験したことがお有りでっ？」
「フフっ…死にたいの…？」
「いえっ、今の発言は撤回しましょうっ」
シルクがそっと問いかけると、ギンは笑顔を見せたまま、すぐに前言を撤回した。

「でもよろしいんですかぁ～？」
ギンが口調を変え、まるで試すようにシルクへと問いかける。
「このままナイトくんが負けちゃったらっ、シルク様の力の一部がなくなっちゃいますけどぉ」
「いいのっ…」
「……っ」
すぐさま答えるシルクに、ギンが少し眉をひそめる。

「これでいいのよ…ギン…」

当然のように頷き、満足げな笑みで映像を見つめるシルク。

「すべて私の…思い通りっ…」

その映像へ向け、シルクがゆっくりと右手を伸ばす。

「もうすぐ…私の夢が目覚める…」

「クっ…」

信じ難いほどの命力を放った桜時に対し、こみ上げる未知の感覚を打ち消そうと、内兎が強く唇を噛み締める。

「正面からかっ…そうだね…」

「……っ？」

小さく呟く内兎に、桜時が少し眉をひそめる。

「シルクに気を遣って…出来るだけ君を傷つけないようにしようとしてたけどっ…」

深く俯いていた内兎が、ゆっくりと顔を上げる。

「もう、やめるよっ…」

「……っ」

今まで以上に冷たい表情を見せる内兎に、桜時が顔をしかめる。

「ここから先は…」
内兎の強い瞳が、桜時を突き刺す。

「全力でっ…君を殺しにいくことにするよっ…！！」

――バァァァーーンっ！！

「うっ…！」
内兎の周囲から突き上げる力の圧に、桜時が少し身を屈める。

「さぁっ、始めようかっ…桜時っ…」
高々と右手を上げる内兎。

「“鬼化帰化”っ…！！」
「……っ！」

内兎の体から放たれる白い光に、桜時の表情が険しくなった。

第７９章　告白　☆１

鬼が島・水の城前。桜時ｖｓ内兎。
「あっ…」
白い光に包まれ、変貌を遂げた内兎を、桜時が大きく見開いた瞳で見つめる。

「それが…“鬼化”、なのかっ…？」
「そうっ…」
戸惑うように問いかける桜時に、短く答える内兎。

「驚いた…？」

桜時の前に立った内兎は、腰程までに長くなった白髪の、耳のすぐ上辺りから、二本の金色の角を生やし、その瞳を白目のない真っ赤な色へと変え、明らかに人外のものである真っ白の肌に、鋭い牙と爪を見せていた。風貌は確かに鬼に近いが、今まで桜時が見てきた鬼人とは異なり、巨大化はせずに人の大きさそのままで、人であった頃と同じ服を身に纏ったままであった。

「君の知っている“鬼化”とは、少し違うだろうからね…」
「……っ」
内兎の言葉に、桜時がそっと眉をひそめる。

「お前は鬼人化人間じゃないって…そういうことか…？」
「鬼人化人間というのは…シルクが人間を鬼の姿に変えた者たちのことだろう…？」
桜時の問いかけに、内兎もまた、問いかけで返す。

「あれはただの醜い鬼…骸鬼と一緒で、単なる使い捨てのコマさっ…」

「コマっ…」

その言葉を繰り返し、桜時が少し顔をしかめる。

――今更…人になんて戻れないんだよっ…お兄ちゃんっ……――

鬼へと姿を変えられ、もう人には戻れないと、鬼のまま死んで逝くことを選んだ、幼き双子・ロムとレムの姿が、桜時の頭に過ぎった。

「けど、僕は違うっ…あんな醜い鬼とは、まったく別の存在…」

その青白い口元を吊り上げ、長い爪を持った右手を、そっと掲げる内兎。

「これこそが…正統なる鬼の姿っ…」

内兎が誇らしげに、自分の胸に手を当てる。

「神話に記された…“鬼神”の姿さっ…」

「鬼神っ…」

獣人と同じで、その鬼神の血を正統に継ぐ者だけが、本来の“鬼化”が出来るのだろう。今の内兎の姿は、太狼の話に出てきた朝日の鬼化と同じものと言える。

「君が神の力を使うのであれば…僕も神の力を使わないとね…」

「……っ」

“神”の言葉に、桜時が眉をひそめる。

「さぁ…お見せしようかっ…」

内兎が掲げていた右手を下ろし、ゆっくりと身構える。

「“鬼神”の力をっ…！」

「……っ！」

勢いよく飛び出してくる内兎に、驚いたように目を見開く桜時。

「はっ速っ…！」

「“鬼爪”っ…！」

「うっ…！」

爪を振り下ろしてくる内兎に、桜時は焦りながら必死に村雨丸を突き出す。向き合った2人のすぐ前で、村雨丸と鬼爪が強く重なり合った。

「クっ…！」

村雨丸にかかる重圧に、桜時が顔をしかめる。

「何て力っ…！」

「巨体の骸鬼と同じだけの力が、この体に凝縮されてるんだ…」

驚き惑う桜時に、内兎がそっと微笑みかける。

「骸鬼なんかとはっ…次元が違うんだよっ…！」

「うっ…！」

内兎がさらに力をこめ、鬼爪を振り切ると、桜時が村雨丸ごと、少し後方へと弾き飛ばされる。

「クソっ…！」

空中で態勢を立て直し、地面に着地した途端、すぐに身構える桜時。

「“瞬花っ…終刀”っ…！！」
桜時がすぐさま村雨丸を振り切り、内兎へ向け、辺りに咲いた花を纏った、桃色の一閃を放つ。

「……っ」
迫り来る終刀に焦り一つ見せず、どこか楽しげに笑う内兎。

「“水星”…」
内兎が鬼爪を一振りさせると、無数の水の玉が、桜時の終刀へと向かっていった。

――パァァァンっ！！

「何っ…！？」
内兎の水星を浴びた桜時の花が、一瞬にして、一斉に枯れ果てる。

「俺のっ…花が…」
「“鬼化”した僕の水は…あらゆるものの生命力を奪う…」
唖然とする桜時に、余裕たっぷりに話しかける内兎。

「君も…気をつけた方がいい…」
「えっ…？」
桜時が眉をひそめるが、花を枯らせた水星の残りが、桜時の方へと飛んでくる。

「うっ…！」

慌てて右へ体を反らし、水星を避ける桜時。

「あっ…」

だが弾け飛んだ水星の、小さな水の粒が、桜時の左腕にそっとかかった。

「うっ…！うあああああっ…！！」

粒のかかった左腕に激しい痛みが走り、桜時が思わず叫び声をあげる。

「なっ何っ…」

痛みに歪ませた表情で、戸惑うように左腕を見る桜時。

「……っ！これはっ…！」

左腕の、水の粒のかかった部分の皮膚が黒ずみ、まるでそこだけ腐ってしまったようであった。

「生命力を…奪うっ…」

内兎が先程放った言葉を思い出し、そっと眉をひそめる桜時。水が皮膚細胞の生命力を奪い、死滅させてしまったのだろう。

「あんな水っ…全身に浴びたらっ…」

それだけで、桜時の命はなくなる。桜時の額から、汗が流れ落ちた。

「クソっ…」

顔をしかめた桜時が、村雨丸を握る手に力をこめる。

「出来れば殺したくなかったよ…桜時っ…」
まるで自分の勝利を確信したかのように、余裕の表情で微笑みかける内兎。

「君は…僕が初めて得た、友達だったから…」
「……っ」

――桜時でいいよっ！なっ？内兎っ！――
何も知らずに微笑みかけていた頃の自分を思い出し、桜時が少し眉を引きつる。

「だからせめて…」
内兎が体の前で、静かに両手を合わせる。

「僕のこの手で…葬ってあげるっ…！」
「何っ…！？」
内兎が合わせた両手をまた離すと、長く鋭い両手の鬼爪が合わさり、一本の刀が出来上がった。

「“鬼刃（きじん）”っ…」
その刀を、構える内兎。

「“水流星”っ…！！」

内兎の振り下ろした鬼刃から、言葉通り、まるで流星群のような、先程よりも多い数の水の玉が、先程よりも増したスピードで、一斉

に桜時へと放たれる。

「うっ…！」

迫り来る水の流星に、桜時の表情が歪めながら、桜時が素早く村雨丸を構える。

「クッソっ…！“柔桜…無塵”っ…！！」

桜時の放った、強い桜の塊と、内兎の水の流星が、二人の正面で激しくぶつかり合う。

――バァァァーーンっ！！

水の城・城内。

「……。」

天井や壁の水が激しく揺れ動く中、水球の中で眠った輝矢は、少しも動くことはなかった。

「うっ…！」

揺れる地面に、走っていた足を止め、思わず体を振らつかせるアリス。大きな衝撃音とともに走った揺れは、鬼が島全土を激しく揺さぶるようであった。

「一体っ、どんな戦いをっ…」

アリスが眉をひそめながらも、再び足を動かす。まるで行く道を示すかのように、花の咲き乱れる地面を駆けていくと、水の城が眼前へと迫った。

「あっ…！あそこだっ…！」

城の前に見える人影に、アリスが思わず声を出す。

「あれはっ…桜時…？」

桜時の姿を捉え、アリスが少し眉をひそめる。

「それと…」

目を凝らし、もう一つの人影を見つめるアリス。

「内兎っ…」

口にしたその名に、アリスがそっと表情を曇らせた。

「……。」

一面に咲いていた花が吹き飛び、再び見えた荒地の真ん中に立った内兎が、そっと鬼刃を下ろし、鬼刃を持っていない方の手を前方へと伸ばす。

「キレイなものだね…」

そう微笑み、内兎が少し上を見ると、上方から桃色の花びらが、内兎の手の中へとゆっくりと落ちてきた。落ちてきた桜の花びらが、内兎の手に触れた途端、酸に溶かされるように一瞬で消える。

「儚いものほど…美しく見える…」

桜の消えた手を下ろし、前方を見る内兎。

「君もそう思うだろう…？桜時…」

「クっ…！」

前方を見つめる内兎の瞳に映ったのは、花の吹き飛んだ荒地に、力なくしゃがみ込んでいる桜時の姿であった。桜時はどこか、苦しげな表情を見せている。

「俺の…柔桜無塵が…あっさりとっ…」

内兎が鬼化する前、桜時の花力は確かに、内兎の水力を押していた。その力を取り込み、自らの勢いを増していたというのに今は、鬼化した内兎の水力を前に、あっさりと砕かれてしまった。

「鬼化がこんなに…強いなんてっ…」

目の当たりにする鬼の力に、桜時が険しい表情を見せる。

「咄嗟に避けて、全身に浴びることは免れたようだけど…」
桜時を見る内兎の瞳が、冷たく光る。

「水を浴びた…その右腕っ…」
「……っ」
内兎の言葉に、桜時の表情が曇る。しゃがみ込んだ桜時の右腕は、先程、水の粒のかかった左腕同様黒ずみ、村雨丸を地面に置いたまま、力なく垂れ下がっていた。

「それじゃあもう…刀も握れない…」
「クっ…！」
歩み寄ってくる内兎に唇を噛み、桜時が左手で村雨丸を取る。

「左腕だけで…最後まで足掻く…？」
左手で村雨丸を持ち、必死に構えようとする桜時。だが利き手でない左手では、やはり村雨丸は上手く扱えず、苦戦してしまう。そんな桜時の前に立ち、内兎が鬼刃を振り上げる。

「さすがは人間だね…桜時…」
「うっ…！」
鬼刃を振り上げる内兎に、桜時が村雨丸を離し、左手を内兎の顔の方へと向けた。

「これならっ…どうだっ…！」
桜時の左手が、白い光を帯びていく。

「“天地っ…」
「……っ」

帯びていった白い光が、桜時の左手の前で丸い塊のようになっていくのを見ると、内兎がすぐさま鋭い瞳となった。

「神命”っ…！！」
「“化鬼氷”…」
「何っ…！？」

命の光を放とうとした桜時の左手を、内兎の左手が強く掴み止めると、内兎に掴まれた部分から、桜時の左手が凍りついていく。

「こっこれはっ…！」

――私の氷の世界で死になさいっ…！！――
思い出されるのは、虎国で戦った霙という名の鬼の姿。

「藍鬼のっ…！？」
「“藍鬼の”じゃない…この技は元々、僕ら白鬼一族のものだよ…」
「白鬼っ…？」
太狼の過去に出て来たその名に、桜時がそっと眉をひそめる。

「やっぱりお前らはっ…！」
「……。」
「うっ…！」

両手の動かぬ桜時に、内兎が再び鬼刃を構える。振り上げられる鬼刃に、今度は村雨丸を拾うことも叶わず、桜時が険しい表情を見せる。

「ごめんね…もう少し、お喋りを楽しみたかったけど…」

もう足掻くことも出来ない桜時を見て、内兎が冷たく微笑む。

「これで…お終いっ…！」

「クっ…！」

桜時に、容赦なく鬼刃を振り下ろす内兎。

――パァァァァンっ！！

次の瞬間、辺りに響く金属音。

「……っ」

「えっ…？」

内兎の鬼刃を止めたそれに、桜時も内兎も驚きの表情を見せる。

「“針器・十二刻”…」

鬼刃を止めたのは、銀色に輝く、巨大な盾。

「ア…アリス…」

目の前に立ったその人物の名を、桜時がそっと呼んだ。

第７９章　告白　☆２

「……。」

十二刻を構え、桜時を庇うようにその前に立ち、鬼刃を受け止めたアリスが、目の前に立つ内兎へ、厳しい表情を向ける。

「これはこれは…」

現れたアリスの姿に表情を曇らせていた内兎が、すぐに笑みを浮かべ、アリスへと向ける。

「君も来てたんだ…」

「……。」

「……？」

微笑みかける内兎を、厳しい表情で見つめ続けるアリス。そんなアリスに、内兎が少し首を傾ける。

「ああ…もしかして誰かわからないのかな…？姿が変わっちゃってるからね…」

内兎が両手を横に広げ、アリスに親しげな口調で話しかける。

「僕はっ…」

「内兎でしょっ、わかってるわ」

「……っ」

素早く答えるアリスに、内兎が意外そうな表情を見せる。

「へぇ…この姿になっても、僕ってわかるんだ…」

内兎の口元が、再び緩む。

「さすが…僕のアリスっ…」
「……っ」
優しく微笑む内兎に、アリスが表情をしかめる。

「アっアリスっ…！」
内兎と向き合ったアリスの精神面を案じるように、どこか心配するような表情で、身を乗り出す桜時。

「……っ」
「えっ…？」
だがアリスは身を乗り出した桜時の前に、まるで制止を促すように手を差し出した。

「アリス…？」
まだ不安の消えない表情で、桜時がアリスを見上げる。

「どういう心境の変化なのかな…？」
内兎が、試すような口調で問いかける。

「あんなに嫌ってた輝矢を…助けに来るなんてっ…」
「……。」
内兎が突き刺すようにアリスを見るが、アリスは眉1つ動かさなかった。

「別に、輝矢を助けに来たわけじゃないわっ」
「え…？」
はっきりと答えるアリスに、少し眉をひそめる内兎。

「輝矢が仲間のもとを出ていく原因を作ってしまった私が、輝矢を助けるとか言う資格なんてないっ」
「アリスっ…」
強く言い放つアリスに、桜時がそっと目を細める。
「じゃあ何…？」
内兎が問いかけを続ける。
「君を騙したこの僕を…殺しにでも来たっ…？」
「……っ」
まるで挑発のようなその発言に、再びアリスがその表情をしかめる。
「別に…あなたのせいだとは思ってない…」
「……っ」
「えっ…？」
少し俯き、小さな声で呟くアリスに、内兎が眉をひそめ、桜時が戸惑うような声を漏らす。
「あんなことになったのはっ…」
――鬼のくせにぃぃっ！！――
アリスが強く、自分の拳を握り締める。
「いつまでも輝矢を越えられないってっ…ただ嘆いてばかりいた、私自身のせいよっ…！！」

勢いよく顔を上げ、アリスが真剣な表情を見せて叫ぶ。

「だから私はっ…自分自身の責任を取りにここへ来たっ…」

アリスの構えた十二刻が、銀色の光を放ち始める。

「あなたを倒してっ…！私は私の責任を取るっ…！」

「……っ！」

強く輝く十二刻に、思わず顔をしかめる内兎。

「“針器・六刻”っ…！！」

「クっ…！」

内兎の鬼刃を押し切り、その隙にすぐさま十二刻を、銀色の剣・六刻へと変形させるアリス。押された態勢を整えながら、内兎が再び鬼刃を構える。

「やっやめろっ！アリスっ…！」

動かぬ両手の痛みを堪え、必死に身を乗り出す桜時。

「お前じゃっ…！今のそいつにはっ…！」

「はあああああっ！！」

「フフっ…」

桜時の制止の声も届かず、アリスが勢いよく内兎のもとへと飛び込んでいく。向かってくるアリスを見つめ、不敵な笑みを浮かべる

内兎。

「六刻っ…！！」
「鬼刃…」

――パァァァンっ！！

アリスの六刻と、内兎の鬼刃が、激しくぶつかり合う。

「いつ直ったの…？針器…」
強いぶつかり合いをしながらも、内兎が余裕の表情を見せて、向き合ったアリスへと問いかける。

「輝矢に折られたはずじゃなかったっけ…？」
「あなたに関係ないわっ」
「……っ」
内兎を睨みつけるようにして答えるアリスに、内兎がさらに口元を吊り上げる。

「冷たいね…アリス…」
鬼刃を握る手に、力をこめる内兎。

「前は何でも…話してくれたのにっ…」
「うっ…！」

内兎の言葉に、アリスの表情が歪む。

――アリス様っ……――

「……っ」

浮かんでくる、優しかったあの笑顔に、アリスが唇を噛み締めた。

「ねぇっ…？アリスっ…！」

「クっ…！」

力を入れた内兎に、アリスの六刻が弾き飛ばされる。

「ダメだっ…」

戦うアリスと内兎を見つめ、呟きを漏らす桜時。

「これ以上っ…アリスとあいつを戦わせちゃっ…」

――あんたなんかぁぁっ…！！――

アリスが内兎に裏切られ、輝矢を攻撃してから、まだそう時間も経っていないのだ。アリスの心の整理も出来ていないままに、内兎と戦わせては、またアリスを精神的に追いつめてしまう可能性がある。

「輝矢がいないんだっ…輝矢の代わりに、アリスをっ…！」

責任を取りにここへ来たというアリスを、守らなければならない。

「動けっ…！」

細胞が死に耐え、黒ずんだ右腕と、氷に覆われた左腕を、何とか必死に動かそうとする桜時。

「動けよっ…！！クソっ…！！」

動かぬ両腕に、桜時は悔しげに唇を噛んだ。

「うっ…！うっ…！うぅっ…！」

どんどんと繰り出されてくる内兎の鬼刃に、最初の勢いはなく、押されてばかりいるアリス。受け止めるのがやっとといった様子のアリスの表情には、まったく余裕の色がなかった。

「どうしたのっ…？アリス…」

そんなアリスへ、正反対に余裕の笑みを浮かべた内兎が、問いかける。

「それでも…“神器”の使い手っ…？」

「クっ…！」

アリスが何を言われれば動揺するのか、内兎はアリスよりも心得ている。そんな内兎の言葉に心を揺さぶられ、六刻の力も出しきれないまま、一方的に押されていくアリス。

「……っ」

「うあっ…！」

鬼刃に振り切られたアリスが、後方へ押され、地面へ腰をついてしまう。

「もう神器のことで悩まなくていいように…僕が粉々に砕いてあげるっ…」

「うっ…！」

座り込んだアリスの目の前に立ち、鬼刃を振り上げる内兎。

「クっ…！」

険しい表情を見せたアリスが、鬼刃を受け止めようと、頭上に六刻を突き出す。

「無駄だよ、アリス…君の六刻じゃ、僕の鬼刃は止められない…」

六刻を突き上げたアリスに、冷たく微笑みかける内兎。

「サヨウナラ…」

内兎が鬼刃を握る手に、力をこめる。

「アリスっ…！！」

「うっ…！」

勢いよく鬼刃を振り下ろす内兎に、アリスの表情が歪んだ。

「アリスっ…！！」

必死に身を乗り出す桜時。

――パァァァァァンっ！

「えっ…！？」

だが次の瞬間、桜時の表情が驚きに変わった。

「何っ…？」

内兎も思わず、眉をひそめる。

「あっ…」

内兎の振り下ろした鬼刃を、しっかりと受け止めているアリスの六刻。内兎の攻撃を耐えきった六刻に、一番驚きの表情を見せたのは、六刻を構えたアリス自身であった。

「針器にここまでの力があったなんて…」

そう呟き、表情を曇らせる内兎。

「違う…」

その内兎の呟きに答えるように、アリスも小さな声を漏らした。

「私の針器にここまでの力はっ…んっ…？」

戸惑うように六刻を見ていたアリスが、何かに気づいたような表情を見せる。

「これはっ…」

アリスの構えた六刻が纏った、ほんのりと輝く金色の光。

「この…光は…まさかっ…」

思いついたその考えに、アリスがそっと目を細める。

「そうか…」

アリスと同じように、六刻が纏った金色の光を見つめた内兎が、どこか納得したような声を漏らす。

「針器を復活させたのは…君だったんだね…」

内兎がその視線を、水の城の方へ移す。

「輝矢っ…」

六刻を包むこの金色の光は、間違いなく月器のもの。この光がなくとも、針器を復活させることの出来る力を持った者など、限られている。

「僕からアリスを守るためかな…？でも…」

内兎が水の城から、アリスへと視線を戻す。

「無駄、だったね…」

「えっ…？」

鬼刃を持っていない左手を、アリスの方へと向ける内兎。

「“水流星”…」
「……っ！」

内兎の手から放たれる水に、アリスが大きく目を見開く。

――バァァァーンっ！！

「きゃあああああっ！！」

内兎の放った水流星を全身に浴び、アリスが痛々しい悲鳴をあげながら、遥か後方へと吹き飛ばされていく。

「アリスっ…！！」
吹き飛ばされたアリスの名を、必死に呼ぶ桜時。

「うっ…うぅ…」

全身に水を浴び、体の至るところの細胞が死滅したアリスは、力なく地面に倒れ込み、ところどころ黒ずんだ体で、苦しげな表情を見せていた。

「フフっ…」
「うっ…」

もう立つことも出来ないであろうアリスのもとへ、ゆっくりと歩み寄っていく内兎。

「やめろっ！！」

「……っ」

横から聞こえてくる声に、内兎がそっと足を止める。内兎が振り向くと、そこには動かぬ両腕を垂れ下げたまま、苦しげに立ち上がった桜時の姿があった。

「お前の相手はっ…！俺がっ…！」

“水杭”…」

――バァァァーンっ！

「うあああああっ…！」

立ち上がった桜時の両足を、二本の水の刃が貫通する。苦しげに叫び、その場に膝をつく桜時。

「そう慌てないでよ…桜時…」

身動きの取れなくなった桜時に、微笑みかける内兎。

「アリスの後に…じっくりと、殺してあげるから…」

「クっ…！」

四肢の自由を奪われた桜時が、アリスの方へと歩いていく内兎を、

歯を食いしばるようにして見つめる。

「さてと…」
「うぅっ…」
倒れ込んだまま、苦しい表情を見せているアリスのすぐ前へと、
立ちはだかる内兎。

「クっ…！」
少し顔を上げたアリスが、睨みあげるように内兎を見る。

「強い瞳だね…アリス…」
そう呟きながら、内兎がその場にしゃがみ込み、睨みあげるアリ
スとの高さを近づけていく。

「前の…弱い瞳の頃の方が…好きだったな…」
「えっ…？」
その内兎の言葉に、アリスが一気に戸惑いの表情となる。

「あの頃の君は…とても弱い瞳をしていて…」

――こんなところで何してるわけぇ？あなたっ――

倒れていた内兎へ、差し出されたアリスの手。

「その弱さを隠そうと…必死で…」
過去の出来事と重なるように、今度は内兎が、倒れているアリスへと手を伸ばす。

「いつも…姿も見えない輝矢の影に…怯えていた…」
「……っ」
内兎の手がアリスの頬に触れると、アリスは顔をしかめ、そっと目を細めた。

「内っ…」
「ホントっ…愚かしくて、好きだった…」
「……っ！」
急にその微笑みを冷たくする内兎に、アリスが大きく目を見開く。

「愚かしい君が…“使える”と、僕はすぐにそう思ったよ…」
「うっ…！」

内兎が頬に触れていた手を動かし、アリスの服の襟元を掴んで、アリスの顔を無理やり上に向かせる。動くだけで痛みの走る体に、顔を歪めるアリス。

「君のその劣等感を使って…輝矢を仲間たちから引き離す策を思いついた…」
「うぅっ…」
苦しげな表情を見せているアリスに、内兎は構うことなく言葉を続ける。
「でも…劣等感だけじゃ、まだ足りない…」

「……っ？」
声のトーンを落とす内兎に、アリスが少し眉をひそめる。
「それだけじゃ君を…完全には追いつめられない…そう思った…」
内兎がまっすぐに、アリスを見つめる。
「だからっ…」
内兎の口端が、急に吊り上がる。
「僕は君に取り入ったっ…」
「……っ」
どこか楽しげに、冷たく微笑む内兎に、アリスが険しい表情を見せる。
「君が僕だけを支えとするように…僕だけを心の拠り所とするように…」
「うっ…うぅっ…！」
続く言葉から、何とか逃れようと、必死に体を動かし、かすかな抵抗を見せるアリス。
「君は…面白いくらい、僕の思う通りになった…」
「くっ…！」
アリスが、微笑む内兎を見ないように目を閉じ、強く唇を噛み締める。
「輝矢とのあの戦いも…僕の想像以上の出来栄えだったよ…」
内兎がさらにアリスの襟元を引き、アリスの耳元へ、自分の口を

近づける。

「君は本当に…僕の最高のコマだった…」

アリスの耳元で、囁かれる言葉。

「アリス…」

「うっ…！」

力一杯閉じたアリスの瞳から、一筋の涙が流れ落ちる。

「泣いているの…？アリス…」

アリスの流す涙を見て、内兎がさらに楽しげに笑う。

「その涙…消してあげるよ…」

内兎が地面に鬼刃を置き、右手をアリスの顔の方へと向ける。

「君ごとっ…」

冷たく囁いた内兎の右手が、白い光を帯びていく。

「クっ…！」

「“水流星”…」

アリスが諦めるように顔を伏せる中、内兎がアリスへ向けて水を放つ。

――バァァァァァァァーーンっ！！

第７９章　告白　☆３

「何っ…！？」

内兎がアリスへ水を放とうとしたその瞬間、内兎とアリスの間の地面から、突き上げるようにして何かが伸び上げ、内兎は思わずアリスから手を離し、鬼刃を拾って後ろへと後退した。

「うっ…」

内兎の手から逃れたアリスが、力なくその場に倒れ込む。

「こっこれはっ…」

自分よりも遥かに大きく突き上げたその物体を、戸惑うように見上げる内兎。

「桜の木っ…？」

内兎が見上げたそれは、桃色の花びらを纏った、見事に満開の桜の木であった。

「……っ！」

桜の木を見て、すぐに何かを思いついた表情となった内兎が、素早く振り向く。

「……。」
「なっ…！」

内兎の振り向いたその先には、地面に静かに立つ桜時の姿。立ち上がっている桜時を見て、内兎が驚いたように目を見開く。

「バカなっ…さっき水杭をっ…」
桜時の両足を貫通したはずの水の刃は消えており、服に血は染みていたが、今、血が流れている様子はない。傷が塞がるにしても、早過ぎである。

「まさか命力を…？んっ…？」
考えを巡らせていた内兎が、さらに何かに気づいたような表情を見せる。

「……。」
「あれはっ…？」

桜時の一番の特徴とも言える派手な桃色の髪が、重力に逆らうように逆立ち、白髪へと変わっていく。透き通っていた青い瞳も、まるで獲物を狙う獣のような、鋭いものとなっていく。耳の先は尖り、その歯もまるで牙のように鋭くなっていった。

「何…？あの変化っ…」
桜時の変化に、戸惑いを見せる内兎。

「“獣人”はっ…獣化と人化以外の姿なんて、持っていないはずっ…」

「いい加減にしろよっ…」

――パリィィィンっ！

「……っ！」

桜時の声に反応するようにして、一瞬で砕け散る、桜時の左腕を封じていた内兎の化鬼氷。桜時は何もしていないというのに、まるで氷が自ら砕けたようであった。その光景に、内兎がさらに表情をしかめる。

「人の心を…どれだけ弄べば気が済むんだっ…」

深く俯いた桜時が、少し震えた声を発する。

「怒ってるの…？桜時…」

そんな桜時に対し、一瞬見せてしまった焦りの表情をすぐに笑みへと変え、試すような口調で問いかける内兎。

「怒ってるかだと…？」

いつもよりも低く重い声で、聞き返す桜時。

「……っ」

桜時が強く、唇を噛み締める。

「当たり前だああっ！！」
「うっ…！」

顔を上げ、勢いよく叫ぶ桜時に、内兎の表情が再び歪む。

「なんて…威圧っ…」

向き合った桜時の方から、ピリピリと体に感じるほどにやって来る圧力。桜時の怒りが、実際の重さとなって、内兎に圧し掛かってくるようであった。

「……っ」
「何っ…！？」

左手に持った村雨丸を、右手へ持ち変えようとする桜時に、内兎が驚いたような表情を見せる。

「無駄なことっ…！僕の水を浴びた右腕で刀なんてっ…！」
「村雨丸っ…！」
「……っ！！」

内兎の水を浴び、細胞が死んで黒ずんでいたはずの桜時の右腕が、一瞬にして元の肌色の腕へと戻り、素早く村雨丸を握り締める。

「高速再生っ…！？」
「“柔桜っ…」

内兎が驚きの表情を見せる中、桜時が一瞬の間もなく、村雨丸を構える。

「……無塵”っ…！！」

桜時が振り切った村雨丸から、桜の花びらの塊が、内兎へ向かって飛んでいく。

「鬼刃っ…！」

向かってくる桜時の桜を見ながら、内兎が表情を鋭くし、鬼刃を構える。

「“水流星”っ…！」

先程と同じ、無数の水の流星を、桜時の桜へと放つ内兎。桜と水が、勢いよくぶつかり合う。

――バァァーンっ！！

「うぅっ…！」

巻き起こる激しい衝撃に、倒れたままのアリスが吹き飛ばされそうになる。

「このままじゃ吹き飛ばされっ…！えっ…？」

急に感じる衝撃が減り、戸惑うように首を傾けるアリス。

「何っ…」
アリスが動かない体を何とか動かし、自分の前方を見る。
「あっ…！」
そこに立つのは、何とも立派な桜の木。
「守ってくれてるのっ…？私をっ…」
不思議な空気を発する桜の木を、アリスが戸惑うように見上げる。
「……っ？」
すると、この衝撃風に、舞い落ちて来た花びらが、風に乗ってくるのではなく、自らの意志でやって来るかのような、そんな動きを見せて、倒れているアリスの上へと降り落ちて来た。
「これはっ…」
内兎の水を浴び、黒ずんでしまった体の至るところに、桜の花びらが降り落ちた途端、アリスの体が元の通りに再生されていく。
「治ってく…」
痛みまで引いていく体を、少し躊躇うように見つめるアリス。
「何て…凄い力なの…」
あっという間に動くようになった体を起こし、アリスがそっと振り向く。
「朱実桜時っ…」
アリスは少し戸惑うような瞳で、桜時の方を見つめた。

「……。」

今までとは異なる、鋭く刺すような瞳を見せた桜時が、落ち着いた表情で前方を見つめる。

「ハァっ…！ハァっ…！ハァっ…！」

桜時の見つめる先には、ひどく呼吸を乱した内兎が立っていた。

「クっ…！」

内兎が少し引きつった表情で、自分の左腕を見下ろす。左腕は肩の部分から手の先まで激しく傷つき、ボタボタと紫色の血が滴り落ちていた。激しくぶつかり合った桜時の桜と内兎の水であったが、やがて桜時の桜が打ち勝ち、水を掻き消して、内兎に直撃したのであった。

「血っ…？」

地面に染み込む自分の血を見て、内兎がさらに顔を歪める。

「鬼化した僕が…血を流すなんてっ…」

常に冷静だったその表情は崩れ、動揺と悔しさが滲む。

「さっきまでとは力の桁が違うっ…」

内兎の額から、流れ落ちる汗。

「あの、姿のせいかっ…」
「……。」
髪色を変え、獣のような鋭い瞳を見せた桜時を見つめ、内兎がそっと顔をしかめる。

「終わりだっ、内兎」
「……っ」
桜時の放った言葉に、内兎が勢いよく顔をしかめる。

「終わり…だとっ…？」
少し震えた声で、聞き返す内兎。

「調子にっ…乗るなぁぁぁっ！！」
「……っ！」
内兎が桜時へ向け、大きくその口を開く。

「“鬼口”っ…？」
「ガアアアアアっ！！」
「……っ」

あれ程までに“醜い”と、“コマ”だと卑下するように言っていた骸鬼と、同じ技を使う内兎に、桜時が少し顔をしかめながらも、素早く村雨丸を構える。

「村雨丸っ…！」

――パァァァァンっ！！

「……っ！」

桜時が村雨丸を軽く一振りさせただけで、内兎の放った鬼口はあっさりと掻き消える。

「ううっ…！」

その光景に、信じられないといった様子で、大きく目を見開く内兎。

「このっ…！」

「……っ？」

内兎が右手に持っていた鬼刃を、体の前で横向けに構え、分解させて、また元の鋭い鬼爪へと戻す。戻った鬼爪を、桜時へ向けて構える内兎。

「“鬼爪…天回”っ…！！！」

「また骸鬼の技かっ」

十本の爪を投げ放つ内兎を見て、桜時がどこか呆れたように言い捨てながら、左手を構える。

「“瞬花”っ…！」

――パァァァァーンっ！

「うあっ…！」

一瞬にして桜の花びらへと変えられ、散っていく鬼爪に、またも

唖然とした表情を見せる内兎。

「こっ…こんなっ…」

「今更、こんな骸鬼の技ばっかりっ、俺に通じるとでも思ってんのかっ？」

「うっ…！」

あまりの力の差に、茫然としていた内兎が、強きに問いかけてくる桜時に、さらにその表情をしかめた。しかめるというよりは、どこか怯えているようにも見えた。

「勝敗は決したわね…」

二人の様子を見つめるアリスが、ポツリと呟く。

「さすがのお前も…もう打つ手がないみてぇだなっ…」

「クっ…！」

桜時の言葉が、図星であったのだろう。内兎はただ悔しげに唇を噛み締めただけで、何も言い返そうとはしなかった。

「なら、とっとと終わりにさせてもらうぜっ…！」

強く言い放ち、桜時が村雨丸を構える。

「お前を倒してっ、俺は輝矢と、みんなのところへ帰るっ…！！」

「輝矢っ…」

桜時が輝矢の名を口にすると、ふと思い出したような表情となる

内兎。

「輝矢っ…」

内兎がもう一度輝矢の名を呼び、輝矢の眠る水の城の方を見つめる。

――もう…いいっ…――

すべてを諦めるように力なく、その瞳を閉じた輝矢。

「……っ」

輝矢の表情を思い出し、内兎がそっと唇を噛む。

「連れて帰って…それでどうするつもりっ…？」

「えっ…？」

荒げていた声を、元の落ち着いた口調に戻し、ゆっくりと問いかける内兎。その内兎の問いかけに、桜時が少し戸惑うように眉をひそめる。

「輝矢にまた…苦しみを、絶望を…与えるつもりっ…？」

「……っ」

――鬼のくせにぃぃぃっ！！――

鬼であることを知られ、鬼である自分を仲間たちに拒絶されて、

仲間たちの元を去り、一人、この島へとやって来た輝矢。

「私たちはっ…！」
『……っ』
桜時の代わりに答えるように叫ぶアリスに、桜時と内兎が同時に振り向く。

「私たちはもうっ…！鬼だからってだけでっ、輝矢のことを拒絶したりなんかっ…！」
「それは君たちが、輝矢の仲間だからだろうっ…！？」
「うっ…！」
勢いよく問いかけを返してくる内兎に、アリスが思わず口ごもる。

「でもっ、世界の人間っ、みんながそうなわけじゃないっ…！」
「……っ」
強く言い放ちながら、再び桜時の方を見る内兎に、桜時がそっと顔をしかめる。

「君にだって、それくらいわかるだろうっ？桜時っ」
「えっ…？」
「人間はっ、犬と雀の違いだけでも、人を差別し、蔑むんだっ」
「……っ！」
内兎の言葉に、大きく目を見開く桜時。

――犬のくせに…汚らわしいっ……――

幼少の頃の桜時を、支配し続けて来た、その言葉の数々。

「……。」
桜時が険しい表情を見せ、そっと俯く。
「ましてや輝矢は鬼っ…！人間たちの世界に戻ったところで、輝矢を待つのは蔑みと苦しみだけっ…！」
「うっ…！」
内兎のその言葉は正しく、アリスも言い返すことが出来ずに、ただ悔しげに唇を噛んだ。
「輝矢はこのまま、僕ら鬼と来た方がいいっ…！来るべきなんだっ…！」
内兎が両手を広げ、熱く叫びを続ける。
「僕らとともにあった方がっ、輝矢は幸せになれるんだよっ…！！」
「……。」
叫び続ける内兎の声を聞きながら、険しい表情を見せた桜時が、そっとその瞳を閉じる。
――ハチっ……――
浮かんでくる、あの笑顔。どうやったって、消えはしない。

「……村雨丸っ」
「……っ」
目を開き、再び村雨丸を構える桜時に、叫んでいた内兎が思わず眉をひそめる。
「はぁっ…」
そんな桜時を見て、深々と溜息をつく内兎。
「君もわからない人だなぁ…桜時…」
内兎が、少し困ったような瞳を、桜時へと向ける。
「どうして、僕の言ったことがわからないのかっ…」
「わかるさっ」
「……っ」
すぐさま答える桜時に、内兎の表情が曇る。
「えっ…？」
まっすぐに桜時を見つめ、ゆっくりと確かめるように、問いかける内兎。
「散々、犬だからって軽蔑されてきたんだっ、お前の言っていることが正しいってことくらい、わかるっ」
人は人を差別する生き物であるということ、それがどんなに些細なことであっても、差別は生まれるということを、桜時は知っている。鬼である輝矢を人の世界に戻しても、いくら桜時たちが訴えたところで、輝矢のことを認めない人は出て来る。

「輝矢もそう、考えたからこそ…俺たちのもとを去ったんだっ…」

拒絶に怯えて去ったわけではない。鬼である輝矢とともにいることで、桜時たちがあれこれと言われてしまうことを恐れ、輝矢は桜時たちのもとを去ったのだろう。

「そこまでわかってるならっ…！」

「だけどっ…！」

「……っ」

内兎の言葉を、強く遮る桜時。

「それでも俺はっ、輝矢と一緒にいたいっ」

「……。」

噛み締めるように言う桜時に、内兎が少し目を細める。

「わがままだね…桜時っ…」

そっと口元を緩め、桜時へ微笑みかける内兎。

「ああっ、これは俺のわがままだっ」

「そんなわがままで輝矢を苦しめることはっ…！」

「だからっ、あいつの苦しみはっ、俺が全部、受け止めるっ…！！」

強く訴えようとした内兎の声を、同じく強い声で遮る桜時。

「あいつへの蔑みはっ、俺が全部消すっ…！！」

桜時がまっすぐな、偽りのない瞳を、内兎へと向ける。

「あいつが幸せに生きられる世界をっ、俺が創ってみせるっ…！！」

「……っ！」

桜時から伝わってくる気迫に、思わず言葉を失う内兎。

「これが俺のっ…！」

村雨丸を構える桜時。

「最後の力だっ…！！」

構えた村雨丸が、強い白色の光を帯びていく。

「“天地っ…神命”っ…！！」

桜時が勢いよく振り下ろした村雨丸から、思わず目を伏せそうになるほどに輝いた、命の光が放たれる。

「うっ…！」

向かってくる命の光を見つめながら、どうすることも出来ずに顔を引きつる内兎。

「輝矢っ…」

内兎がどこか、救いを求めるように、輝矢の名を呼ぶ。

「輝矢っ…僕…僕はっ…！」

何かを言いかけた内兎に、命の光が襲いかかる。

「うっ…！うわあああああっ！！」

――バアアアアアーーンっ！！

――ガタガタガタガタっ……

外の衝撃に、全体が大きく揺れる水の城。

「……。」

輝矢が眠る水球も、その振動にかすかに揺れる。

「……っ」

その揺れに気づいてか、輝矢の表情が少しだけ動いた。

第７９章　告白　☆４

――　十年前・四大国が一、“武国”。国主・玄上武雄の屋敷。

「ひえええええええっ！！」

国主の間に、激しい悲鳴が響き渡った。

「鬼のっ…！鬼の子だああっ！！」

「やめんかっ！仮にも武矢様の娘っ、玄上国主の孫娘だぞっ…！？」

「……。」

鬼が島での悲劇から、鬼人一族としてただ一人生き延びた輝矢は、太狼とともに初めて、父・武矢の実家である玄上家を訪れていた。輝矢の姿を見て、悲鳴をあげた仕官の一人を、幼い輝矢が、少ししかめた表情で見つめる。

「みっ見ろっ！あの冷たい目をっ！鬼の目っ…！鬼の目だっ！！殺されるぞっ！！」

「落ち着けっ！！国主様の前だぞっ…！！」

年甲斐もなく取り乱す男を、必死に宥める横の仕官。そうは言っているものの、その場にいる仕官の皆が、輝矢に冷たい視線を送りつけていた。

「はずさせろ」

「はっ！」

「ひえええええええっ！！」

国主・玄上武雄の命により、取り乱した男が、国主の間の外へと連れ出されていく。

「……。」
輝矢はそれを、横目にそっと追った。

「済まなかったな」
「いえ…」
表情を少しも崩すことなく詫びる武雄に、静かな表情で膝をついた太狼が、短く答える。

「さて…その子、輝矢といったか…」
「……っ」
初めて見る祖父に名を呼ばれ、輝矢が勢いよく顔を上げる。

「残念だが、其方をこの武国へ置くことは出来ない」
「えっ…？」
「……っ」
武雄の放った冷たい言葉に、輝矢が戸惑うような声を出し、太狼が思わず顔をしかめる。

「玄上国主っ」
「お前とお前の父の、鬼人退治の功績は評価しているよ、太狼」
何かを訴えるように、鋭い瞳を向けた太狼に、武雄は一分の隙もなく切り返す。

「お前の頼みは聞いてやりたいが…それとこれとは別の問題だ」
「別の問題っ…？」
太狼がついていた膝を伸ばし、立ち上がって、武雄に鋭い瞳を向

ける。

「それを言うなら、功績の方が別問題なのでは？俺の頼みがどうとかではなく、輝矢はあなたの孫でっ…！」

「私に鬼の孫などおらぬよ」

「……っ」

太狼の言葉を、有無を言わさぬ力強さで遮る武雄。

「……。」

武雄の言葉に、輝矢がそっと目を落とす。

「いつ、鬼の力が暴走するとも限らぬ、危険なだけの子供を、我が国に置くわけにはいかない」

「危険なだけの…子供っ…？」

武雄の言葉を繰り返し、その表情を引きつる太狼。

「言ったでしょうっ…！？玄上の力があればっ、輝矢の暴走は抑えられるんですっ…！」

太狼が両手を広げ、武雄に必死に訴えかける。

「何もずっと見てくれと言ってるわけじゃないっ！ただっ、俺が残ってる骸鬼を片付けるまでの間だけっ…！」

「ならぬ」

「……っ」

すぐさま答える武雄に、太狼がさらに顔をしかめる。

「……輝矢っ」

「……っ？」

名を呼ぶ太狼に、輝矢が少し戸惑うように振り向く。

「何…？」

「少し外に…出ていてくれないか…」

「えっ…？」

太狼の言葉に、輝矢が眉をひそめる。

「この人たちと…もうちょっと話がしたいんだ…」

「タロー…」

「頼むよ…」

「……っ」

いつもよりも低い声の太狼は、笑ってはいたがどこか怖く映り、輝矢は少し不安な気持ちを抱いたが、それでも太狼の言葉に従うことしか出来なかった。

「わかった…」

「あまり遠くへ行かないようにな…」

「うん…」

太狼の注意にしっかりと頷くと、輝矢は太狼に背を向けて、国主の間の出口の方へとゆっくりと歩いていく。

「輝矢」

「……っ？」

「……っ」

輝矢が出て行こうとしたその時、武雄が輝矢の名を呼ぶと、輝矢は足を止め、戸惑うように武雄の方を振り返った。太狼も、輝矢を呼び止めた武雄に、怪訝そうな視線を送る。

「お前は…」

振り返った輝矢の、まだ幼い大きな瞳を、まっすぐに見つめる武雄。

「お前の存在は…この世界には必要ない…」

「……っ！」

武雄の言葉に、輝矢が大きく目を見開く。

「玄上国主っ…！！」

「そのことを、しっかりと覚えておくといい…」

責めるように名を叫ぶ太狼を無視し、武雄が輝矢へさらに言葉を続けた。

「……。」

突き刺すような瞳で見つめてくる武雄に、そっと目を細める輝矢。

「失礼…します…」

深々と頭を下げ、力なくそう呟いて、輝矢は国主の間を出て行った。

「輝矢っ…！」

「太狼」

「……っ」

輝矢の後を追いかけようとした太狼が、同じように武雄に呼び止められる。

「何ですかっ…？」
睨みつけるような瞳で、太狼が武雄の方を振り返る。
「情を捨て、見切りをつけろ」
武雄が太狼へ、冷たく言い放つ。
「あれは鬼の子だ。鬼など、この世界には必要ない」
「……っ」
武雄の言葉に、太狼が顔をしかめる。
「俺はっ…あなたに、あの子以上の必要価値があるとは到底、思えませんけどっ…？」
「……っ」
喧嘩を売るかのような太狼の発言に、武雄が眉を引きつる。
「なっ何ということをっ…！！」
「国主様に対して失礼なっ！！」
「いくら分家の血筋の者とてっ、そのような態度は許されませんぞっ…！！」
周囲の仕官たちが、太狼へ一斉に非難の声を浴びせる。
「お望み通りっ、もうこの国には二度と来ませんよっ」
そんな数々の非難の声を無視し、太狼が武雄へ、さらに冷たい視線を送る。
「あの子は俺が育てるっ」

「……っ」
強い瞳で言い放つ太狼に、そっと目を細める武雄。
「あなたにも誰にも…手出しはさせないっ…」
警告のような言葉を残して、太狼は国主の間を後にした。

「ほらぁっ、あの子よっ！例のっ！」
「鬼の子なんですってっ！？汚らわしいっ！」
「近づいちゃ危ないわっ！逃げましょっ！」
「……。」

国主の間を出た輝矢が玄上家内を歩くと、玄上一族や従者、皆が輝矢を卑しい者を見るように見つめ、冷たい言葉を投げかけた。その言葉に何も言い返せず、輝矢はただ唇を強く噛み締め、拳を握り締めたまま、玄上家の中を歩き続ける。

「あの時っ、他の奴らと一緒に、死んじゃえば良かったのにっ」
「……っ！」

聞こえてくるその言葉に、輝矢が大きく目を見開く。

――輝矢っ……――

目の前で、消えていったすべて。

――いやあああああっ！！――

許されるのなら、一緒に死んでしまいたかった。

「……っ」

中庭の噴水の前に辿り着き、輝矢がそっと頭を抱える。

「うっ…うぅっ…！」

堪えていた涙は、自然と零れ落ちた。

「ううぅっ…！」

「どうか、したの…？」

「……っ？」

横から聞こえてきた声に、涙に暮れていた輝矢が振り向く。するとそこには、輝矢と同じ年頃の少女・アリスが、輝矢を心配するように見つめていた。

「……っ」

玄上の人間であろうか。輝矢とは違い、誰からも蔑まれることなく、生きているのだろう。そう思うと、目の前の少女が、何故かとても羨ましかった。

「別にっ…お前に関係ないっ…」
こみ上げる羨望と嫉妬を堪えるように、輝矢が素っ気ない答えを返す。

「輝矢ちゃん」
「……っ」
聞こえてくる太狼の声に、輝矢がゆっくりと顔を上げる。

「行こう、輝矢ちゃんっ…」
穏やかな笑みの中に、こみ上げている怒りを隠し切れていないような、複雑な表情を見せている太狼。

「もうここに…用はない…」
「……。」

父の母国であるこの国に、受け入れられる日は来ないのだと、幼い輝矢はその日、そう悟った。

武国に留まることを許されなかった輝矢と太狼は、今の太狼の住まいのある“龍国”へとやって来た。

「おっおいっ！太狼っ！あの子は一体っ…！」

「残りの鬼退治してくるんでっ、とにかく座黒さんっ！その子のことっ、お願いしますっ！」
「おっおいっ！太狼っ！！」

龍国に来てすぐ、太狼は輝矢を置いて、残った骸鬼退治の旅へと出てしまった。鬼を一掃せねば、朝日や他の黒鬼一族の者たちの死が無駄になる。太狼が必死に出掛けていった理由も、わからなくはなかった。だが太狼と離れ、知らない者たちの中に残るのは、輝矢にとって不安であった。

「お願いしますったって…」
「兄貴には困ったものですねぇ～」
「……。」
困った表情を見せる座黒や次狼の姿に、少し表情を曇らせる輝矢。

――お前の存在は…この世界には必要ない……――

そんなようなことを思われているかも知れないと思うだけで、激しく胸は軋んだ。

「とりあえずこの子は、ウチに連れて帰りますっ」
「ああ、頼む。次狼」
「さっ、じゃあ、そういうことだから行きましょうかっ」
次狼が笑顔を見せ、輝矢へそっと手を差し伸べる。

「えぇ～っと、“輝矢”でしたっけ？」
「……っ」

次狼が見せる笑みに、ただ不安だけが走った。今はこうして笑いかけていてくれたとしても、輝矢が鬼と知ればきっと、嫌い、蔑み、いなくなればいいと思うに違いない。

――あの時っ、他の奴らと一緒に、死んじゃえば良かったのにっ――

そう言われるに違いない。そう思うと、急に怖くなった。

「気易く名前を呼ぶな…」
「へっ？」
鋭く突き刺すように答える輝矢に、次狼が目を丸くする。

「呼ぶなですって」
「変わった子だな…」
「……。」

さらに困った表情を見せる座黒と次狼に、輝矢はただ、険しい表情で俯いた。

どうせ失うくらいなら、初めから何も得なくていい。その時の輝矢は、そうすることが精一杯だった。

こうして輝矢は、次狼に連れられ、太狼兄弟の家・エセお菓子の家で暮らすこととなった。

「やっほぉ～っ！次狼っ！遊びに来てあげたわよぉ～っ！」
「あっ、リンゴっ」
エセお菓子の家で暮らすこととなった翌日、桃原家にリンゴが遊びに来た。

「あんたんとこのアホ兄貴っ、得体の知れない子供を拾ってきたんですってぇ～っ？」
「えっ？あっ、はい、まぁっ…」
歯に衣着せぬリンゴの言葉に、次狼が少し困ったように頷く。

「まったくっ、世界の英雄になる前に、犯罪者になるんじゃないのぉ～っ？」
「かも知れませんねっ…」
「……。」
「んっ？あっ！この子ぉっ？」
リンゴが次狼の後ろに、どこか隠れるようにして立っていた輝矢を見つけ、勢いよく駆け寄る。

「あっ！そのっ！リンゴっ！この子はっ…！」
「私はねぇっ、この国で一っ番偉い青守座黒の娘のリンゴよぉ～っ！」
何かを言おうとした次狼の言葉を無視し、リンゴが自慢にしか聞こえないような自己紹介を、輝矢にする。

「どうしてもってんならっ、私があんたと遊んであげてもっ…！」
「なんでお前なんかと遊ばなきゃいけないんだ」
「へっ？」

返って来る声に、リンゴが思わず目を丸くする。

「お前、声がでかくて耳障りだ。とっとと帰れっ」

「はあああああっ！？」

輝矢のあまりの言いように、これ以上ないくらいに顔を引きつるリンゴ。

「なぁ～によっ！このクソガキはっ！私の蹴りでっ、その腐った根性蹴り倒してっ…！！」

「うわぁ～っ！リンゴっ！落ち着いて下さいっ！！」

蹴りかかろうとするリンゴを、次狼が必死になって宥める。

「もう土下座したって遊んであげないからっ！！フンっ！！」

「あっ…！あぁ～あっ…」

怒りを全開にして、勢いよく桃原家を出て行くリンゴ。強く閉まる玄関の扉を眺め、次狼はどこか困ったように、肩を落とした。

「フンっ、こっちだってお断りだっ」

「……っ」

しかめた表情で言い捨てる輝矢を見て、次狼がそっと目を細める。

「輝矢、ダメですよぉ」

次狼がその場にしゃがみ込み、輝矢と目の高さを揃えるようにして、輝矢に注意するように語りかける。

「確かに、リンゴの自己紹介は鼻につくかとは思いますが…」

「よくわかってるじゃないか」

「でも、折角遊んであげようと、親切にしてくれようとした人に、

あんな言葉遣いはよくありません」
「……。」
真剣な表情で言う次狼に、輝矢は少し気まずそうに俯く。
「もっと丁寧に接しないとっ、あっ、そうだっ！」
「……っ？」
何かを思いついたような声を出す次狼を、輝矢が不思議そうに見る。
「敬語を覚えましょうっ！輝矢っ」
「敬語っ…？」
輝矢が眉をひそめ、次狼の言葉を聞き返す。
「ええっ！僕が教えますからっ！」
「そんなもの必要ないっ、敬語を話したところで、別に何が変わるわけでもっ…」
「そんなこと、ありませんよぉっ」
「えっ…？」
優しい笑顔で、大きく首を横に振る次狼に、輝矢が戸惑うような声を出す。
「君が敬語を使って、周りの人たちにとても丁寧に接して、その人たちをとても大切にしたならっ…」
次狼の穏やかな瞳が、輝矢に向けられる。
「みんなきっとっ、君を好きになってくれますよっ！」
「好きにっ…？」
その言葉を、少し見開いた目で繰り返す輝矢。

――お前の存在は…この世界に必要ない…――
――鬼の子なんですってっ！汚らわしいっ！――

世界に必要ないと言われた輝矢が、汚らわしい鬼の血を引く輝矢が、誰かに好きになってもらえるなど、輝矢には、どうしても信じられない言葉であった。

「そんなことっ…」
「じゃあ早速、練習しましょうっ！まずっ、“ありがとうございます”っ！」
「へっ？」
否定しようとした輝矢の声を掻き消して、すぐに敬語講座を始めてしまう次狼。そんな次狼に、輝矢が目を丸くする。

「おっおいっ…」
「はいっ！リピートっ！」
「えっ？」
強い瞳を向けてくる次狼に、輝矢が少し困った表情を見せる。

「あっ…ありがとう…ございます…」
「よくできましたぁっ！」

慣れない様子で呟いた輝矢を見て、次狼は大きな笑顔を見せた。

それから一年程の時が流れた。残った骸鬼をすべて退治した太狼は、やっと龍国へと戻って来た。だが、人々が英雄“桃タロー”として祭り上げるのにうんざりしたようで、またしてもよく家を空けては、どこかへ行っていた。

「まったくっ…困ったものだな。太狼にも…」
「兄貴らしいといえば、兄貴らしいですけどねぇ」
そんな頃、輝矢は、次狼に連れられ、龍国主・座黒の家へとやって来ていた。

「それで、兄貴に何か用だったんですか？」
「大国の国主たちが集まっての国主会があってな、それに出てもらおうと思ったんだが…」
「あぁぁ～そういうの、嫌いそうですからねぇ」
座黒の言葉に、次狼が少し笑みを浮かべて答える。

「では、太狼が戻って来たら、ここへ来るよう伝えてくれ」
「はい、わかりました」
そう託(ことづけ)られて、次狼は輝矢を連れ、座黒の部屋を後にした。

「じゃあ僕、リンゴのところへ寄っていかないといけないので、一人で帰れますか？輝矢」
「うっ…あっ、はいっ…」

「ハハっ、いい調子ですよっ」

“うん”と答えようとして、“はい”と言い直した輝矢を見て、次狼が嬉しそうな笑顔を見せる。次狼が教えた敬語を、輝矢は少しずつだが、覚え始めていた。

「では気をつけて」

「はい」

こうして輝矢は次狼と分かれ、広い青守家の中を一人、歩き始めた。

「えぇ～っと…出口どこだっけ…」

あまり来たことがない上に、普通の町くらいありそうな広さの青守家の中は、輝矢にとっては迷路のようなものであった。

「やっぱり次狼に、出口まで連れてってもらえば良かったな…んっ…？」

屋敷の中を歩きまわっていた輝矢が、ふと、何かを見つける。

「噴水っ…」

輝矢が振り向いた先にあったのは、中庭の中央に造られた、大きな噴水であった。

「……。」

輝矢がそっと目を細める。その噴水は、武国の玄上家内にある噴水を、思い出させた。

――お前の存在は…この世界には必要ない……――

――そのことを…覚えておくといい……――

噴水とともに思い出される、実の祖父の冷たい言葉。誰からも存在を認めてもらえなかった、悲しい記憶。今、次狼や座黒は皆、輝矢を受け入れてくれてはいるが、輝矢が鬼であることを知れば、武国の者たちと同じように、輝矢に冷たい視線を投げかけるに違いない。

「お父さん…お母さん…」

そう思うと怖くて、不安で孤独で、仕方がなかった。

「はぁ～っ！あっのクッソババアっ！散々っ、プロレス技かけやがってっ！」

「……っ？」

後方から聞こえてくる声に、噴水を見ていた輝矢がゆっくりと振り返る。

「あぁ～体中痛てぇっ！あのクソババアには、もう二度と近づかないでおこうっ！」

「……っ」

輝矢が振り返ると、青守の屋敷の中から、何とも派手なピンク頭の少年が出て来た。輝矢と同じ年頃だろうか。澄んだ青色の瞳に整った顔立ちをしているが、今はその顔を、ひどくしかめている。

「いやっ、もう女には全体的に近づかないようにしようっ！うんっ！それがいいっ！」

ピンク頭の少年は、何かを決めているようで、一人で必死に叫んでいる。

「半径一メートル以内には寄らないようにしようっ！って、んっ？」

「あっ…」

その少年も、輝矢に気づいたのか、二人の目が勢いよく合う。

「女っ…！？いっいやっ、男かっ…？」

輝矢を見て、思わず身構える少年であったが、すぐにその構えを解いた。その時の輝矢は、長く伸びていた髪を太狼が切り過ぎてしまったばかりで、一見、男の子のように見えたのである。

「ようっ！」

「派手な頭…」

「うっせぇなぁっ！生まれつきだっ！」

近づいてきた少年に、輝矢が思わず呟くと、少年は勢いのいい突っ込みを返した。

「お前もどっかの国主の子供かなんかかぁ？」

「……。」
「あっ？」
その問いかけに、何も答えようとはせず、ただ不機嫌そうに俯く輝矢に、少年が少し首を傾げる。
「こんなとこで何してんだぁ？」
「別に…お前に関係ないっ…」
「むっ…！」
武国でアリスに答えた時と同じように、素っ気なく返事をする輝矢。輝矢の言葉に、少年が思わず顔をしかめる。
「何だよっ、変な奴っ」
「……。」
不機嫌そうに聞こえてくる少年の声に、俯いた輝矢はそっと目を細めた。これでいいのだ。いつか、鬼だということを知られて、どうせ離れていかれるのなら、初めから嫌ってもらえばいい。親しい人間を作らなければ、それだけ、傷つかなくて済む。
「腹の具合でも悪いのかぁ～っ？」
「何でもないから、とっととどっかにっ…」
「あっ、そうだっ！」
「えっ…？」
何かを思いついたような声を発し、中庭の端の方へと駆けていく少年に、輝矢が戸惑うように顔を上げる。
「よぉ～く見てろよっ！」
「……っ？」

中庭の端に生えた、大きな木の横に立ち、笑顔を見せる少年を、輝矢が怪訝そうに見つめる。その時、季節は冬で、少年の横にある木は、葉が枯れ落ち、寂しい姿を見せていた。

「よっ」

少年の手が、木の幹に触れる。

――パァァァァーンっ！！

「……っ！！」

その瞬間、枯れ果てた木は、満開に咲き誇る桜の木へと姿を変えた。

「あっ…」

その美しい光景に、大きく目を見開いた輝矢は、自分の目を疑うような、そんな気持ちであった。風に舞う桃色の花びらが、何とも美しい。

「こんな…ことが…」

「どうだぁっ？元気出たかぁっ？」

「……っ」
桜を咲かせた少年が、大きな笑顔を見せて、再び輝矢のもとへと駆け寄ってくる。

「桜っ！俺と同じ名前のっ、俺が一番大好きな花だっ！」
「さくら…」
少年の笑顔を戸惑うように見つめながら、輝矢がその花の名を呟く。

「ほらっ！」
「えっ…？」
そう言って、少年が輝矢に手渡したのは、一枚の桜の花びらであった。

「さすがに木はやれないからなっ！それっ、お前にやるよっ！」
「……。」
少年からもらった花びらを、ただじっと見つめる輝矢。

「あっ…」
「んっ？」
「ありがとう…ございます…」
「……っ」

次狼から教えてもらったその言葉を、慣れない様子で呟く輝矢を見て、少年が少し目を丸くする。

「どういたしましてっ！」
「……っ」

だがすぐに、少年は、大きな笑顔の花を咲かせて、そう答えた…

――

第79章　告白　☆5

「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」

すべての力を出し切った桜時が、やっと衝撃の止んだ荒地で、大きく呼吸を乱す。

「はぁっ…はぁっ…」

地面に杖のように村雨丸を突き刺し、体の支えとする桜時。乱れた呼吸を繰り返す中で、桜時の髪色はピンク色へと戻り、目も耳も牙も、もとの桜時の姿へと戻っていった。

「朱実桜時…」

そんな桜時の様子を、アリスがひっそりと見守る。

――ガタガタガタっ……

「……っ？」

確かな揺れと、何かが今にも崩れそうな音が聞こえ、桜時が眉をひそめて振り向く。

「あっ…！水の城がっ…！」

先に声を出したのは、アリスの方であった。

「……っ」

水の城が、整った形を保てなくなったのか、揺れに不安定に形を変えながら、今にも崩れ落ちそうになっている。

「輝矢っ…」

水の城の中にいる輝矢を案じ、桜時が不安げにその名を呟く。

「内兎が倒されたから…制御を失って…」

「クっ…！」

アリスの言葉を聞きながら、桜時が地面に突き刺した村雨丸を抜き、振らつく体を必死に動かして、今にも崩れ落ちそうな水の城へと向かっていく。

「アリスを守れっ…！」

「えっ…？」

アリスの横に立つ、満開の桜の木に桜時がそう言い放つと、木はそれに応えるように、大きくその花を揺らした。それを確認した後、桜時が水の城へと駆け出していく。

「ちょっ…！桜時っ…！」

「……っ！」

止めるアリスの声も届かず、桜時は今にも崩れ落ちそうな水の城の中へと、駆け込んでいった。

「……輝矢っ…」

アリスも不安げな表情を見せ、水の城を見上げる。

「……っ」

ふと水の城から視線を逸らし、アリスが、桜時と向き合っていた内兎の立っていた辺りを見つめた。大きな穴のあいたそこに、もう内兎の姿はない。

「サヨウナラ…」

大穴を見つめ、そっと目を細めるアリス。

「内兎っ…」

その声が、どこか悲しげに響き渡った。

――満開に咲き誇ったあの時の桜が、私の心を支配して、消えない。

「花を咲かせる能力ぅ～っ？」

「うんっ」

龍国へと戻って来た太狼に、私は花を咲かせる能力を持った者について問いかけた。あの時、桜を咲かせたあの人を、私の心の中に

花を咲かせてくれたあの人のことを、知りたくて仕方がなかった。

「雀国の朱実さんのとこじゃないかなぁ～？あそこの一族の能力は“花力”だからぁ～」

「雀の…朱実…」

その名を、強く心に刻んだ。

「お久し振りですねぇ～孔雀さんっ」

「あなたは相変わらずプラプラしてるみたいねぇ～太狼っ。で？今日は何の用なのっ？」

「ああぁ～今日はこの子の紹介にぃ～って、あれっ？輝矢ちゃ～んっ？」

それから数年の時が流れ、太狼とともに修行の旅に出掛けた私は、旅の途中で、雀国へと立ち寄った。朱実の屋敷に入った私は、こっそりと太狼のもとを抜けだした。

「えっとっ…」

広い屋敷の中、たった一人の、その人を探した。

――どういたしましてっ！――

私の心に、花を咲かせてくれた、その人を。

「派手なピンク頭っ…派手なピンク頭っと…」

――パァァァァーンっ！！

「……っ！」

庭をうろついていた私は、聞こえてきたその大きな音に、勢いよく振り返った。

「あっ…」

振り返った私の視界を、またも支配する、一面の桃色。

「桜っ…」

満開に咲き誇る桜の木に、私は思わず目を見張る。

「んっ…？」

その木の下に、小さな人影が見えた。

「あっ…！」

それは、あの時の、派手なピンク頭の少年。私は嬉しくて、思わずその人のもとへ、駆け込んでいこうとした。

「ううぅっ…！」

「……っ」

でも、その人の流す涙に、私の足は止まった。

「うっ…！」

「……。」

悲しみを、苦しみを抱え込んでいる瞳。噴水の前で泣いていた、私の姿と重なった。

「見てぇ～っ！あの子よぉっ！例のイヌのっ！」

「……っ？」

屋敷の方から聞こえてくる声に、私は戸惑いながら振り向いた。

「雀国の王子が、イヌじゃねぇ～っ」

「汚らわしいっ！出て行ってくれないかしらぁ～っ！」

「……。」

その人へ注がれる、冷たい視線。蔑みの言葉。

――鬼の子なのよぉっ！――

それは、私が武国で受けた扱いと、よく似ていた。

「雀人と犬人の間に生まれた?」

「うん～っ」
雀国からの帰り道、私は太狼から、その人の生い立ちを聞いた。
「父親が雀を出て、母親が死んでからは、あの子も結構、ひどい扱いを受けてるみたいだよぉ～」
「……。」
太狼の言葉に、そっと俯く。
“似ている”と、そう、思った。
「あれぇ～？輝矢ちゃんはぁ～っ？」
「えっ？輝矢様なら確かぁ～」
「ちょっと雀国まで散歩してくると仰ってましたわぁ～っ！ご主人様っ！」
「また雀国～？修行の途中だっていうのにぃ～」
それからまた数年経って、私は太狼との修行の合間に度々、雀国へ行くようになっていた。“似ている”と思ったその人のことが気になって、その人の様子を、こっそりと見に行った。
「えっとっ…」

警備の人に見つからないようにしながら、朱実家の高い塀を登る。

「どこかなっ…」
「桜時様っ！！」
「……っ」
その人の名を呼ぶ声が聞こえてきて、私は慌てて身を屈め、塀から目から上だけを覗かせるようにして、身を隠す。

「あっ」
「何度も言わせないで下さいっ…！」
獣化した犬の姿をしたその人が、世話役の女の人と一緒に、中庭を歩いていた。

「孔雀様との謁見の時は人化をっ…！」
「俺はイヌだっ…！！」
世話役の注意を振り切って、その人が勢いよく叫ぶ。

「父さんと同じっ、イヌであることに誇りを持っているっ…！！」
犬の姿であっても、人の時と変わらない、まっすぐな瞳。

「それを隠す必要がどこにあるっ…！！」
「……っ」

その強い言葉が、私の胸に、突き刺さるようだった。

“似ていない”と、そう、思った。

蔑まれて、すべてを諦めてしまった、私とは違う。

嫌われることを恐れて、鬼であることを必死に隠そうとする、私とは違う。

どこまでもまっすぐで、とても強い人。

ひどく、眩しかった。

「じゃあ鬼退治の旅っ、頑張ってねっ、輝矢ちゃんっ」

『気をつけていってらっしゃいませぇ～っ！輝矢様っ！』

「はいっ、いってきますっ」

さらに時が流れて、再び鬼人が復活し始めた頃、私は太狼との修行を終え、一人、鬼退治の旅に出た。父と母の、すべての黒鬼一族の意志を継ぎ、鬼と人との戦いを、終わらせるために。

「その前に、もう一度だけ寄っていきましょうか」

鬼退治の旅は、きっと命の危険を伴う。だから、いつ死んでも後悔のないように、私はもう一度だけ、その人の姿を、その目に焼き

付けておくことにした。

「久し振りですねぇ～雀も」

その人のいる、雀国の屋敷へと向かう。

「いたかっ！？」

「いやっ！いないっ！」

「……っ？」

覗きに行こうとした屋敷の中から、妙に慌ただしい警備の人たちが出てきて、私は少し首を傾げた。

「桜時様にも困ったものだっ！」

「また家出とはっ…！三日前に戻られたばかりだろうっ…！」

「家出っ…？」

警備の人たちの会話から、その人が家出をしている最中であることを知った。

「じゃあ…家の中にはいないのですか…」

屋敷へ行こうとした足の向きを変え、私は雀の町中を適当に歩いた。

「困ったなぁ…」

町から少しはずれた森の中で、少し横になる。

「もう一度だけ…会っておきたかったのにっ…」

草の上に横たわり、そっと目を閉じる。

――どういたしましてっ！――

――隠す必要がどこにあるっ…！！――

心を支配して消えないあの笑顔を、ひどく眩しかったあの瞳を、もう一度、見たいと思う。

「はぁ～あっ…」

もう一度だけ、会いたいと、思う。

「待てぇぇぇっ！！花咲かワンコぉぉぉっ！！」

「……っ？」

遠くの方から聞こえてくる叫び声に、私はゆっくりと、目を開いた。

――パァァァァーーンっ！！

「……っ！！」

目を開いた途端、目の前に広がる、一面の桜。

「うわあああああっ！！」
「……っ」

満開の桜の中から落ちてくる、一匹の小さな、白いイヌ。

もう一度だけ、会いたいと、そう思っていた。

「痛ちちちちちっ…」
「……っ」
頭を押さえるその人を見て、私は笑う。

「急に落ちてくると危ないですよ？ワンコさんっ」
「へっ…？」

微笑みかけた私を、その人は戸惑うように見上げた。

あなたはいつもそうやって、私の心に、花を咲かせてくれる。

私の、たった一人の人……――

「ハチっ…」

水球の中で目を開いた輝矢が、そっとハチの名を呟く。

――パァァァーンっ！！

「……っ！！」

輝矢が目を開いたその瞬間、水で出来ていた城の天井が柱が壁が、輝矢の体を包み込んでいた水球が、一瞬にしてすべて、桜の花びらへと変わる。

「あっ…」

空から降り注ぐ桃色の花びらが、輝矢の視界を支配する。

「輝矢っ…！！」

「……っ」

自分を呼ぶ名が聞こえ、輝矢がゆっくりとその声のする方を見る。確かめなくてもわかる。この光景は、初めて出会った時と、再び出

会った時と同じ。

――あなたはいつもそうやって、私の心に、花を咲かせてくれる…

――

「ハチっ…」

「輝矢っ…！！」

今はもう桜の花びらへと変わった城の入口から、勢いよく駆け込んでくる桜時。

「好きだっ…！！」

「……っ！」

桜時の叫びに、輝矢が大きく目を見開く。

「好きだっ！！輝矢っ！！」

幼い頃と少しも変わらないまっすぐな瞳で、桜時がその声を響かせる。

――きっと…君のことを好きになってくれるよっ！――

そんなことはないと、そう、思っていた。

「この世界で一番っ！お前のことが好きだっ…！！」
「……っ」

届くその言葉に、輝矢が見開いていた目を細め、口元を手で覆って、そっと俯く。

「嫌ですねぇっ…」
「……っ？」
小さく呟く輝矢に、桜時が少し首を傾げる。

「輝っ…」
「ハチの前でだけはっ…泣きたくなかったのにっ…」
「……っ」
輝矢が落としたその言葉に、桜時がそっと目を細める。

「バカなこと、言うなよっ」
そう言って桜時が、そっと口元を緩める。

「いくらでも泣けばいいっ」
穏やかな、優しい微笑みを、輝矢へと向ける桜時。

「俺が全部っ、受け止めてやるっ！」
「うぅっ…！」

さらに細めた輝矢の瞳から、小さな涙が、零れ落ちる。

「うっ…！」

「……っ」

その場に泣き崩れる輝矢を、桜時は、崩れ落ちる前に、力一杯、抱き締めた。

“アナタに愛されて、私は初めて、生きることを許される…”

第８０章　今ここにあるすべて　★１

静まり返った鬼が島、水の城のあったその場所に、止めどなく降り注ぐ桜の花びら。

『……っ』

降り止まぬ桜の中で、地面に座り込み、強く抱き締め合っていた輝矢と桜時が、互いにゆっくりとその体を離す。

「輝っ…」

「……っ」

「えっ…？」

輝矢の名を呼ぼうとした桜時であったが、目の前に突き出される輝矢の手に、戸惑うように声を漏らす。

「輝矢…？」

「……。」

桜時が顔を下ろし、腕の中にいる輝矢の方を見ると、輝矢は険しい表情を見せ、水の城の入口のあった方をまっすぐに見つめていた。

「……っ？」

表情を曇らせた桜時が、輝矢と同じ方向を見る。

「あっ…」

そこに、ある人物の姿を見つける桜時。

「内兎っ…！」

「うっ…うぅっ…」

桜時の見つめる先にいたのは、内兎であった。桜時の技をまともに喰らったため、全身傷だらけになったその体を、這うようにして、輝矢たちの方へと近づいてくる。激しく血を流しており、その姿も鬼化した姿ではなく、もとの人の姿に戻っていた。ダメージが大きく、鬼化していられなくなったのだろう。

「輝っ…矢…輝…矢…」

「……。」

もういつ死んでもおかしくはない状態だというのに、必死に地面を這いながら、求めるように輝矢の名を呼び続ける内兎に、輝矢が険しい表情のまま、そっと目を細める。

「あいつまだっ…！」

桜時が鞘に納めた村雨丸の柄に、再び手をかける。

「トドメをっ…！」

「……っ」

「えっ…？」

村雨丸を抜こうとした桜時の前に、制止を促すかのように差し出される輝矢の手。

「かっ輝矢っ！何をっ…！」

「ハチ」

戸惑うように声を出した桜時の言葉を、輝矢が強く遮る。鋭い瞳を見せた輝矢が、ゆっくりと桜時の方を振り返った。

「月器を…持ってきていただいてますね…？」
「えっ…？」
ゆっくりと問いかける輝矢に、驚きの表情を見せる桜時。桜時がすぐに見開いた目を細め、真剣な表情を輝矢へと向ける。
「いやっ…！あいつは俺がっ…！」
「お願いします、ハチっ…」
自らが行こうとする桜時に、輝矢が強く願う。
「自分の手でっ…決着をつけたいんです…」
「輝矢っ…」
ここまで強く、自らの意志を示す輝矢は初めて見たので、桜時は少し驚きながら、そのまっすぐな瞳を、まっすぐに見つめ返した。輝矢は内兎との決着とつけることで、鬼と人との間で揺れる自分自身にも、決着をつけようとしているのだろう。
「……わかった」
少しの間を置いて、桜時がゆっくりと頷き、自分の懐に手を入れる。
「これを…」
「……っ」
桜時が懐から、三日月形の金色のピアスを取り出し、輝矢へと手渡す。輝矢が手紙とともに武国に残していった月器を、桜時は戦いの間も、大事に持ち続けていたのである。
「“月器っ…」

輝矢の手の中に戻った月器は、まるで喜びを表すかのように、自然と金色に輝き始める。

「……三日月”っ」

――パァァァァンっ！

いつもより強い金色の光を放って、輝矢の手の中に目覚める三日月。

「……。」

右手に三日月を持った輝矢が、その場にゆっくりと立ち上がり、這いつくばってこちらへとやって来ている内兎の方へと歩み寄っていく。

「輝矢っ…」

輝矢の背中を見つめ、少し不安げな表情を見せる桜時。

「……。」

「輝っ矢…輝…矢…」

歩み寄って来る輝矢を見て、内兎は這っていた体を止め、輝矢をまっすぐに見上げて、再びその名を呼ぶ。

「輝矢っ…」

血に染まった右手を、力のない動きで輝矢へと伸ばす内兎。

「ダメ…だよっ…輝矢っ…」
もう光を失い始めた赤い瞳で、内兎が必死に輝矢を見つめる。
「あいつの…手を取っちゃ…人間の手を取っちゃっ…」
「……。」
内兎のすぐ目の前で、足を止めた輝矢が、内兎を厳しい表情で見下ろす。
「人とともに歩めばっ…君は必ず…不幸になるっ…」
目の前に立った輝矢へ、必死に右手を伸ばす内兎。
「君はっ…傷つくことになるっ…」
「……っ」
続く内兎の言葉に、輝矢がそっと目を細める。
「僕と…一緒においでっ…輝矢…」
以前と同じ誘いを、内兎がもう一度繰り返す。
「僕とともに歩めばっ…君…はっ…」
「内兎…」
「……っ」
言葉を遮るように名を呼ぶ輝矢を、内兎が少し戸惑うように見上げる。
「私は…人が、鬼である私を、決して受け入れてはくれないことを知っています…」

――お前の存在は…この世界には必要ない……――
――鬼なんですってぇっ！――
――あの時っ、他の奴らと一緒に、死んじゃえば良かったのにっ――
幼い頃に浴びた言葉は、今も棘のように、この心に突き刺さっている。

「幸せにはなれないかも知れない…傷つくこともあるかも知れない…」
真剣な、でもどこか悲しげな表情で、言葉を続ける輝矢。

「でもっ」
輝矢の瞳が、強く輝く。

「それでも私は…人が好きですっ…」

そっと口元を緩め、輝矢が優しく微笑む。

――言えばいいじゃないっ！幸せも呼ばないっ、ただのキジなんかいらないってっ…！！――

「不器用でっ…」

――次狼ぉぉおっ！！――

「脆くてっ…」

――この誇りっ…！そう簡単には折らせへんっ…！！――

「でも、強くてっ…」

仲間たちの姿を思い出し、噛み締めるように言葉を繋げながら、
輝矢が左手でそっと自分の胸に触れる。

――輝矢っ！――

「私の心に…いつだって花を咲かせてくれる…」

胸を押さえ、瞳を閉じる輝矢。

「輝矢っ…」

そんな輝矢を、桜時は後方から、まっすぐに見守る。

「仲間たちが…人に絶望した私に、人の美しさを教えてくれたっ…」

輝矢が再び瞳を開き、穏やかに笑う。

「だから私は、人を守るっ」

急に鋭い表情となった輝矢が、強い瞳で内兎を見つめる。

「だから私はっ…アナタの手を、取りはしない」

そう言い放ち、輝矢がゆっくりと右手の三日月を振り上げた。

「……。」

上がっていく三日月を見つめ、内兎がそっと目を細める。

「……そうっ」

短く声を発した内兎の口元が、少しだけ緩む。

「それは…残念だっ…」

「三日月っ…！」

力なく微笑んだ内兎に、振り下ろされる三日月。

「……っ」

――パァァァァーーンっ！！

三日月が内兎の体に振り下ろされると、内兎の体は白い光の塊となり、やがて粉々に弾け飛んで、消えていった。

「……。」

消えた光に目を細め、輝矢がゆっくりと三日月を下ろす。

「サヨウナラ…内兎…」

敵とはいえ、同じ鬼の一族であり、そして強く輝矢に固執した内兎の消滅に、輝矢は清々しい表情を見せることはなく、どこかやるせない表情で目を落とした。

「終わったな…」

「ええ…」

横に並ぶように立つ桜時の言葉に、輝矢が小さく頷く。

「これでやっと…うっ…！」

「ハチっ？」

急に表情をしかめ、その場にしゃがみ込む桜時に、輝矢が眉をひそめる。

「大丈夫ですかっ？」

桜時のすぐ横にしゃがみ込み、不安げな表情を向ける輝矢。

「ああっ、大丈夫大丈夫っ、ちょっと力使い過ぎただけだからっ」

そんな輝矢に、桜時が少し引きつった笑みを見せる。

「無茶をしてはいけませんよ？」
「無茶してばっかのお前には言われたくねぇーなっ」
真面目に注意をする輝矢に対し、桜時はどこか暢気に微笑んで答える。

「ハチ、そういうことを言っている場合ではなくてっ、アナタの力はっ…」
「輝矢っ」
「……っ？」
言葉を遮って名を呼ぶ桜時に、輝矢が少し首を傾ける。

「何っ…」
「ごめんっ…」
「えっ…？」

ポツリと謝罪の言葉を落とす桜時に、輝矢が思わず目を丸くする。

「俺っ…」
下を向いたまま、深刻そうな顔を見せる桜時。

――うっ…！――

救いを求めるように伸ばされた輝矢の手を、ひどく拒絶したあの時。

「そのっ、色々と…お前を傷つけた…」
「ハチっ…」

申し訳なさそうな表情を見せる桜時を、輝矢は少し目を細めて見つめる。

「謝って…許されることだとは思ってない…」

低い声、ゆっくりとした口調で、桜時が言葉を続ける。

「でもっ…それでもやっぱり、謝っておきたくてっ、だからっ…」

「ハチ」

「えっ？」

名を呼ぶ声が聞こえ、俯いていた桜時が顔を上げる。すると、そこには、穏やかな笑顔を見せた輝矢の姿があった。

「輝っ…」

「私がハチを、“許さない”なんてことが出来ると、お思いですか？」

「えっ…？」

試すように問いかける輝矢に、桜時が目を丸くする。

「そんなの無理ですよ、だから謝らないで下さい」

「けっけどっ…」

「傷つかなかったと言えば、嘘になりますっ…」

輝矢が微笑んだまま、桜時から目を逸らし、まだ降り注ぐ桜の花びらを見上げる。

「色々とっ…言いたいことがあったような気もするんですけど、でもっ…」

降りしきる桜を見つめ、輝矢がさらに口元を緩める。

「先程の言葉っ…」

――好きだっ！世界で1番っ！お前のことが好きだっ！！――

「あの言葉を聞いたらっ…あんまり嬉しくてっ、考えてたことぜぇ～んぶっ、吹き飛んじゃいましたっ」

「あっ…」

再び桜時の方を見つめ、笑う輝矢に、桜時がしばしの間、固まる。

「うあああっ！！」

「へっ？」

やっと先程、自分が口走った言葉を思い出したのか、その頬を真っ赤に染め上げる桜時。

「いっいやっ！違うっ…！違うんだっ！あれはっ…！！」

顔を真っ赤にした桜時が、必死に首を横に振り、両手を左右に動かして、訴える。

「俺が言いたかったのはぁっ…！“世界で一番のススキっ、どこにあるぅ～？”みたいな感じでっ…！！」

「前言撤回は許しません」

「お前さっきっ、“私がハチを許さないなんてことが出来るとお思いですか”っつったじゃねぇーかっ！！」

「前言撤回です」

「おおおいっ！！」

相変わらず自分勝手な輝矢に、桜時の突っ込みが炸裂する。

「……っ」

「んっ？」

徐に手を差し出す輝矢に、桜時が少し首を傾げる。

「あっ…」

差し出された輝矢の手のひらに、上空から降り落ちてきた桜の花びらが、そっと乗った。

「……っ」

手の中の桜の花びらを見て、輝矢が穏やかに微笑む。

「ありがとうございました…ハチ…」

「あっ…」

礼を言う輝矢に、笑顔を向けようとした桜時が、ふとその動きを止める。

――ありがとう…ございます……――

目の前の光景が、いつかの過去と重なる。

「あれっ…？」

何かを思い出しそうになり、桜時はそっと自分の頭に手を触れた。

「前にも…こんなことっ、あった…？」

「えっ…？」

戸惑うように問いかける桜時に、輝矢は最初、目を丸くしたが、

すぐに大きな笑みを作った。

「さぁっ？どうでしょうっ？」

「へっ？」

笑顔を見せる輝矢に、桜時が益々、戸惑ったような表情を見せる。

「輝矢ぁぁぁ～っ！！」

『……っ？』

輝矢を呼ぶ声が聞こえ、輝矢と桜時が同時に振り返る。

「輝矢っ！！」

『あっ』

降り続く桜の中を、青い羽根を広げて飛んでくるのは、一羽の青い鳥。

「由きっ…」

「輝矢っ！」

――ドスっ！――

「ぐはああぁっ！！」

「輝矢ぁぁっ！！」

羽根を翻した青い鳥が、桜時の額に勢いよくその嘴を突き刺し、呼びかけようとした桜時をその場に倒れ込ませて、輝矢のもとへと飛び込んでいく。

「由雉っ」
左手を上げて、肩に乗り込んでくるユキジを、笑顔で受け止める輝矢。

「無事だったんだねぇ～っ！」
「そちらは随分とボロボロのようですが？」
「誰のせいだと思ってんのさっ」
試すように問いかける輝矢に、ユキジがさらに嘴を尖らせる。

「痛てててててっ…」
嘴を刺され、赤く腫れあがった額を押さえながら、桜時がゆっくりと起き上がる。

「おいっ！由きっ…！」
「輝矢ぁぁ～んっ！！」
「どわあああああっ！！」
ユキジに文句を言おうとした桜時が、今度は、後方から勢いよく駆け込んできた1匹のサルに、思い切り踏み倒される。

「輝矢ぁぁぁ～んっ！！」
『あっ』

桜時を踏み倒したサルが、笑顔全開で、大きく両手を広げ、輝矢のもとへと駆け込んでいく。そんなサルに気づき、振り向く輝矢とユキジ。

「輝矢ぁ～んっ！貴女のおサルが、助けに来たでぇ～っ！さぁっ！熱い抱擁をぉっ…！！」

――バァァァァンっ！！

「ぎゃうううぅぅっ！」

輝矢に抱きつこうとしたサルの上に、輝矢の右足が容赦なく振り落ちる。

「ううぅっ…！」

「ああ、門貴っ」

苦しむモンキを見て、わざとらしい声を出す輝矢。

「すみません、鬼の残党と間違えました」

「うわぁ～っ、明らかにめっちゃ凄いウソぉ～っ」

白々しく答える輝矢に、モンキが目を細め、大きく首を横に振る。

「ああっ、でも久々のこの踏みつけられ感っ…いいっ…！」

「バカも、ここまで来たら変態だねぇ～」

輝矢の足の下でしみじみとしているモンキに、ユキジがこれ以上ないくらいの冷たい視線を送る。

「っつーかっ、お前らっ！！」

モンキに踏みつけられた桜時が、しかめっ面で勢いよく起き上がる。

「ちったぁ俺の心配もしろよっ！！」

「あれぇっ？イヌコロぉ～っ」
「桜時、いたのぉ～？」
「おいっ！！」
わざとらしく言い放つモンキとユキジに、桜時が勢いよく怒鳴りあげる。

『アハハハハハっっ！！』

だがすぐに言い争いは止み、４人に笑顔が咲き乱れ、大きな笑い声が響き渡った。

「……へっ」
四人の様子を、城の入口のあった辺りに立ち、優しい笑顔で見守るゴン。

「どうやら上手くいったようだな…」
「良かったぁ～っ！」
「さっすが桜ちゃ～んっ！！」
ゴンのさらに後ろから、その場へとやって来る七犬たち。安心したように言う犬仁に、隣に立った犬智や犬信、皆が嬉しそうな表情を見せる。

「んっ？白雪たちはどうした？」
先程まで共に戦っていたはずの白雪たちの姿が見当たらず、犬仁が犬義に問いかける。

「ああ、あの方たちなら、“上手くいったんならそれでいい。顔なんて別に見る必要もない”とか言って、帰っちゃいましたよ」
「何っ？」
犬義の言葉を聞き、犬仁が眉を引きつる。
「まったくっ」
犬仁が、呆れたように肩を落とす。
「意地っ張りな奴だなっ、すぐ動けるほどの傷ではないだろうに」
「あの腐り姫らしいといえば、らしいが…」
「トラトラっ、無駄に頑固だからねぇ～っ」
呆れた表情で言い放つ犬仁に、続くように言葉を発する犬礼と犬信。言葉では呆れているものの、その顔には、穏やかな笑みが浮かんでいた。
「だが、さすがに…」
犬仁も桜の降り注ぐ空を見上げ、笑う。
「竹取輝矢のライバルを名乗るだけのことはあったな…」
「ふわぁぁ～っくしょんっ！！」
御伽湖の真ん中、虎国専用の小船に乗った白雪が、豪快なくしゃみをする。
「ズルズルっ、ああぁ～っ」

鼻をすすり、白雪がどこか気の抜けた表情を見せる。

「虎昌様っ、風邪ぇ～っ？」

「無駄に氷力使いまくったからじゃないですかぁ～？」

「うっさいわねっ！！下の名前で呼ぶんじゃないわよっ！！ってか、無駄って何よっ！無駄ってっ！！」

『うわっ！』

勢いよく怒鳴りあげる白雪に、同じように小船に乗っている鈴白と芹が、思わず自分の耳を塞ぐ。

「疲れてんだから、早く帰るわよっ！とっとと漕いだっ！漕いだっ！！」

「こっちだって疲れてるのにぃ～」

「そんなに言うんなら、白雪様も漕ぐの手伝って下さいよ」

「ああんっ！？」

『いえっ、何でもありません』

睨みつける白雪に、大人しく頷くことしか出来ず、傷だらけの体でひたすら小船を漕ぐ鈴白と芹。

「でも本当によろしかったのですか？白雪様」

「何がよっ？」

改めて問いかける鈴白に、白雪が眉をひそめる。

「竹取様が無事のところを、ご覧になられなくて」

「そうだよぉ～っ、僕、久々に輝矢さんに会いたかったなぁ～っ」

「いいのよっ！」

二人の言葉を、強く切り返す白雪。

「あのしぶとい女のことよぉ～っ？確認しなくたって、無事に決まってんだからっ！」

そう言い放って、白雪が、ふと遠ざかる鬼が島の方へと、視線を移す。

「これで貸し一つよっ、竹取輝矢っ」

呟いた白雪の表情に、晴れやかな笑みが浮かんだ。

その頃、御伽湖・中央。

「ふぅ…」

湖に浮かんだ大きな岩の上に、ゆっくりと座り込んだ万亀が、落ち着いた様子で息を吐く。

「どうやら…終わったようね…フフフ…」

万亀の見つめる先には、戦いの音が止み、桜の降りしきる鬼が島が浮かんでいた。

「えぇ〜っ!?じゃあじゃあっ、桜時様とのおデートはぁっ!?」

「僕はおサルくんとがいいんだけど…」

「万亀ぃ〜っ!見てみてぇ〜っ!!大王イカ釣ったぁぁ〜っ!!」

「……。」

あれこれと好き勝手に主張する泡美、宇凪、浦島の3人に、さすがの万亀も思わず固まる。

「さぁ…帰るとしましょうか…フフフ…」
「えぇぇ～っ!?おデートはぁっ!?」
「万亀ぃぃ～っ!!大王イカぁ～っ!!」

戦いを終えた御伽湖に、穏やかな風が吹き渡った。

「さぁ～てっ、こんなとこに長居してもしゃーねぇなぁ」
天狼丸を納めたゴンが、負傷した左足を引きずりながら、気分を改めるようにして言い放つ。
「とっとと帰るかぁ～」
「狐上殿」
「あっ?」
名を呼ばれ、振り向くゴン。そこには、真面目な表情を見せた犬仁が立っていた。

「ここに来るまでに倒れていた連中、一応、回収してきましたが、どうしましょうか?」
犬仁が指差したその先には、犬忠と犬悌が立っており、大柄の犬悌が両手に城歌、黒羽を、犬忠が波跡を抱えていた。

「こっちにもいるさぁ～っ!」
その横には、醍也に肩を貸している剛也の姿もある。

「置いて帰るわけにもいかねぇーしっ、連れてくしかねぇーかぁ」
少し頭を掻きながら、ゴンが疲れたように肩を落とす。
「この大人数じゃ、応援呼ぶしかねぇーなぁ。今、オトポリに連絡取っからっ」
「すみません」
携帯を取り出すゴンに、犬仁が軽く頭を下げる。

「んっ？」
犬仁たちを話していたゴンが、後方で聞こえていたはずの、輝矢たち四人の笑い声がなくなったことに気づき、不思議そうに振り返る。

「何だぁ？随分静かじゃっ…」
『すぅーっ…すぅーっ…すぅーっ…』
「あっ」

ゴンが振り返ると、その先で、地面に横たわった輝矢と、輝矢を囲むようにして倒れ込んだイヌ・サル・キジの三匹が、気持ち良さそうに寝息を立てて、深く眠りについていた。よく眠っている四人の姿を見て、ゴンが少し目を丸くする。

「あ～ららっ、こりゃ運ぶ奴らが増えちまったなぁ～」
「戦った桜時様たちはともかく、竹取まで…」
「まぁ、そう言ってやるな」
呆れたような表情を見せる犬仁に、ゴンが軽い笑みを浮かべる。

「色々と安心したら、気が抜けたんだろっ、今は寝かせといてやろう」

「……そうですねっ…」
ゴンの言葉に、犬仁もそっと笑みを零す。

「んっ？」
輝矢たちを見ていたゴンが、ふと何かに気づき、顔を上げる。

「竹取なら無事だぞぉ～っ」
「……っ？」
急に、城の入口のあった方へ向けて叫び出すゴンに、横に立っている犬仁が戸惑うような顔を見せる。

「いつまでも、んなとこ突っ立ってないでっ、お前も運ぶの、手伝えぇ～っ」
「……。」
ゴンの声が向けられたその先には、咲いた桜の木の後ろに、隠れるようにして立つアリスの姿があった。

鬼が島・はずれ。
――パァァァァンっ！

どこからか集まってきた白い光の粒が、合わさり合い、人の形を作っていく。

「うっ…うぅっ…」

やがて白い光の塊は、人の姿・内兎へと変わった。地面にうつ伏せに倒れ込んだ内兎が、苦しげな声をあげる。

「うっ…？」

目の前に人の気配がして、内兎がゆっくりと顔を上げた。

「……。」

「諸…刃っ…」

内兎が顔を上げた先に立っていたのは、まったく感情のない無の表情を見せた諸刃であった。その右手には、水晶の剣・草薙が握られている。

「……っ」

その草薙を見つめ、そっと眉をひそめる内兎。

「こっ…殺さ…ないでっ…」

「……っ」

息も絶え絶えに繋がる内兎の言葉に、諸刃の表情がかすかに動く。

「殺さ…ない…でっ…諸刃っ…」

「……。」

縋りつくような瞳で、必死に願う内兎のその姿に、諸刃がそっと目を細める。

「殺しはせんさ…」
諸刃が草薙を鞘に納め、その場にしゃがみ込んで、内兎の体に手を触れる。

「お前が死ねば…シルク様の力が失われてしまうのだからな…」
白い光の中に包まれ、倒れたままの内兎とともに、諸刃の姿が、鬼が島から消え去った。

「……。」
戦いの終わった鬼が島の大地に立ち尽くし、静かに辺りを見回す犬孝。時雨丸を鞘へと戻し、少しホッとした様子で、その肩を落とす。

「戦いは終わった…だがこれは、次の戦いへの始まりに過ぎない…」
犬孝が真剣な表情を見せ、上に広がる空を見上げる。

「間もなくだ…間もなく、すべてが目覚める…」
どこか浮かぬ顔を見せる犬孝。

「今こそすべてを話そう…桜時…そして…」

その青い瞳が、鋭く光る。

「竹取輝矢…」

その後、ゴンの連絡により、オトポリ本部からの応援が鬼が島へと到着し、輝矢たち一行は、トランプ兵団の面々共々、龍国へと運ばれた。

犬仁たち七犬は、オトポリへと輝矢たちを運び終えると、鬼が島からそのまま犬国へと戻っていった。

知らせを聞いた太狼やリンゴたちは、武国復旧を別のオトポリ隊員たちに任せ、龍国へと戻った。

そして、一日が過ぎた。

第８０章　今ここにあるすべて　★2

龍国・オトポリ本部。隊員休憩用塔。

「むぅ～んっ…」

休憩用塔に置かれた、机の前に座り込み、気難しげな表情で首を捻っている門貴。

「よっしゃあっ！秘技っ！“オセロの端っこ取ったろう”やぁ～っ！！」

門貴が勢いよく手を振り上げ、机の上に置かれたオセロ盤の端っこに、黒のオセロを強く置く。

「フハっ！！」

「フッフッフ…」

怪しく微笑む門貴の手により、どんどんと黒へと変わっていく盤上のオセロに、門貴の向かいに座っている醍也が、大きく目を見開く。

「どうやら、勝敗は決まってもたみたいやなぁっ…」

「クっ…」

得意げに微笑む門貴に、唇を噛み締める醍也。

「……っ」

「あっ？」

突然、十字刃を構え出す醍也に、門貴が目を丸くする。

「敗北者に…死をっ…」
「うわああっ！待て待てっ！早まるなぁ～っ！！」

オセロに敗北したため、十字刃を振り上げて自害しようとする醍也を、門貴が盤をひっくり返して、必死に止める。

「あははぁ～っ！門貴と醍也っ、楽しそうさぁ～っ！」
「どこが…？」
こちらも楽しそうに笑う剛也の横で、引きつった表情を見せている波跡。

「ドレミファソラシドォ～♪ドシラソファミレドォ～っ♪」
その横には、机の上に立ち、高々と歌い上げている城歌の姿があった。

「うぅ～んっ！今日は一段と素晴らしい美声っ！そう思うでソォ～♪じゃなくって、しょ～っ？黒羽っ！」
「俺に振るな…」
「黒羽も結構っ、苦労してんだねぇ～っ」
城歌に歌の感想を聞かれ、げっそりとしている黒羽の横で、由雉が感心するように呟く。

「ったくっ」
その休憩塔の様子を見回し、しかめた表情で声を発するリンゴ。

「どうすんのよっ！？あんなにたくさんっ！連れ帰ってきてっ！！」

リンゴがしかめた表情のまま、勢いよく振り向く。

「このクソ忙しい時にっ、うるさくって仕方ないじゃないっ！！」
「しゃーねぇーだろぉ？」
怒鳴りあげるリンゴに、困った表情を向ける、隣に立ったゴン。

「他に連れてくとこがなかったんだからよぉっ」
「何でもかんでも助けてくるからよっ！見捨ててくればいいじゃないっ！敵なんてっ！」
「お前、やっぱ性格最低だな」
「うっさいわねっ！！」
改めて言い放つゴンに、リンゴがさらに強く怒鳴る。

「まぁまぁ、いいじゃないか」
『……っ』
そこへ、リンゴを宥めるようにして、座黒が割って入ってくる。

「検査結果では、彼らは鬼人化人間ではなかったんだ。普通の人間を、オトポリが見捨てるわけにもいかんだろう」
「だけどねぇ～っ」
「……っ」
座黒の言葉に、まだまだ顔をしかめたままのリンゴの横で、ゴンがそっと眉をひそめる。

「あいつらは…確かに鬼人化人間だった…」
『……っ』
真剣な表情を見せて呟くゴンに、リンゴと座黒が同時に振り向く。

――グガアアアアっ！！――

ゴンの目の前で、その姿を鬼へと変えた波跡。門貴たちの話から、城歌や醍也も、鬼人化人間であったことは明らかだ。だがオトポリ本部に連れ帰り、検査を受けさせてみたところ、波跡たちはただの人間になっていた。いや、ただの人間に戻っていたのだ。

「鬼が島から龍国へ来る間に、人間に戻ってしまったということか…不思議だな…」

「負けたら人間に戻るようになってたんじゃないのぉ～？」

「いやっ…」

リンゴの言葉を、ゴンがすぐに否定する。

――あれは…ハチ公のっ…――

鬼が島に突き上げた、御伽砂漠の時と同じ、白色の光の柱。

「たぶん…ハチ公の命力の光を浴びたからだっ…」

『……っ』

ゴンの言葉に、座黒とリンゴが眉をひそめる。

「朱実桜時に斬られた者だけが、人間に戻っていたという事実があるしな…確かにその可能性は高い…」

「頼もしいことじゃないっ！」

厳しい表情を見せる座黒とは異なり、リンゴが明るい声をあげる。

「桜時がいればっ、いっくら鬼人化人間がいても、みぃ～んな元に戻せるってことなのよぉ？」
「……確かになっ…」
明るく言うリンゴの言葉に頷きはしたが、ゴンはどこか浮かない表情を見せた。
「けどっ…何つーかっ…」

――まさか…これほどとはな……――

桜時の力を目の当たりにした時、胸にかすかに抱いた恐怖。

「そう使い過ぎると、よくねぇー気がすんだよっ…あの力…」
「えっ？」
「……っ」

ゴンの言葉に、リンゴは目を丸くし、座黒はそっと眉をひそめた。

龍国・エセお菓子の家こと『桃原家』。

「うっ…んっ…」
「あらっ？」
廊下の掃除をしていたグレーテルが、少し苦しそうに頭を押さえながら、階段を降りてくる桜時に気づき、顔を上げる。
「お目覚めですかっ？ハチ様っ」
「ああっ、おはよう、グレーテルっ」
「良かったですわぁ～っ！」
軽く微笑んで見せる桜時に、グレーテルが安心したような笑顔を見せる。
「皆さんはすぐにお目覚めになられたのに、ハチ様は起きられなくてっ、皆さん、すごく心配なさってたんですよぉ～っ」
「悪いっ」
グレーテルの言葉に答えながら、桜時が階段を降りきる。
「みんなは？」
「門貴様と由雉様は、オトポリ本部に行ってらっしゃいますっ」
桜時の問いかけに答えながら、グレーテルが持っていた箒を片付ける。
「何か飲まれます？ハチ様っ」
「ああ、じゃあ水をっ…ううっ！」
「……っ！？ハチ様っ！？」
キッチンへ行こうとしたグレーテルが、急に苦しげに表情を歪め、その場にしゃがみ込む桜時に、慌てて駆け寄る。

「大丈夫ですかっ!?ハチ様っ!」
「平気平気っ、ちょっと体が痛むだけだからっ」
体を支え、必死に問いかけるグレーテルに、桜時がどこか力のない笑みを向ける。

「痛むっ…?傷は由雉様の癒羽ですべて、治ったはずなのですがっ…」
桜時の言葉に、表情を曇らせるグレーテル。

「まだ傷が残ってっ…?」
「いやぁ、傷がどうこうの話じゃないんだっ…たぶんっ…」
「えっ…?」
「これはっ…」
しゃがみ込んだままの桜時が、そっと自分の胸に手を触れる。

――まるで…神っ…――
――何…?あの変化っ…――

「たぶんっ…」
思い当たる答えに、桜時が眉をひそめる。

「ハチ様っ?」
「あっ」
戸惑うように名を呼びかけるグレーテルに、考え込んでいた桜時がハッとした表情を見せる。
「あぁ～っ、とにかく大丈夫っ!それよりグレーテルっ」
大きく作った笑顔を見せ、話題を変える桜時。

「輝矢はっ？」
「えっ？ああっ」
急な桜時の問いかけに、目を丸くしながらも、頷くグレーテル。

「輝矢様も、まだ目覚められてないんです」
「えっ…？」
少し元気のない表情となって答えるグレーテルに、桜時の表情も曇る。

「目立った外傷があったわけではないのでっ、大丈夫だとお医者様は仰ってたんですけどっ…」
俯き気味に、グレーテルが言葉を繋げる。

「今は、太狼様が付き添っておられます」
「そっかっ…」
「……っ」
頷きはするものの、輝矢を心配するような表情を見せる桜時に、グレーテルが少し眉をひそめる。

「ハチ様っ」
「へっ？」
グレーテルの呼びかけに、桜時が戸惑うように顔を上げる。

「今から太狼様に、朝の甘さダルダルココアをお持ちするのですが、一緒に行かれませんかっ？」
「えっ…？」
笑顔で問いかけるグレーテルに、少し目を丸くする桜時。

「ああっ」

だがすぐに、桜時は笑顔となって、大きく頷いた。

第８０章　今ここにあるすべて　★３

――ずっと、死んでしまいたかった。

「いやあああああっ！！」

目の前で、大切なものをすべて失ったあの日から、大きな、抱えきれないほどの悲しみを持って、何故、自分だけが生きていかねばならないのか。

ずっと、そう思っていた。

「あの時っ、他の奴らと一緒に、死んじゃえば良かったのにっ」

その言葉を、何よりも強く思ったのは、自分自身。

皆と一緒に死ねたなら、どんなに楽だっただろう。

十年前。太狼が残った骸鬼を退治し、英雄“桃タロー”となって、龍国へと戻って来てから数ヶ月。

「うあああああああっ！！」

ある雨の夜、まだ幼い輝矢は降りしきる雨に影響され、その水力を暴走させた。

「兄貴っ…！輝矢が水力の暴走をっ…！」
「今行くっ…！」
次狼に呼ばれ、太狼が急いで、輝矢のもとへと駆けつける。

「“玄印封命”っ…」
「ううぅっ…！！あぁ…ぁっ…」
太狼が玄上の力で水力を抑え込むと、輝矢はそのまま気を失った。

「ふぅっ…」
気を失った輝矢を抱え、太狼がホッと息をつく。

「大丈夫ですか？兄貴」
「ああ、うんっ」
不安げに問いかける次狼に、太狼がそっと笑みを向ける。

「町の…被害は…？」
「大波起こしちゃいましたからねぇ、浸水やらは結構あったと思いますけど、怪我人はいないと思いますよ？」
「そっか…」

次狼の答えを聞き、太狼が安心しらように胸を撫で下ろす。輝矢の力は、危険なもの。まだ力の不安定な輝矢では、いつ龍国の者たちに被害を及ぼすか、わからない状態であった。

「うぅ…んっ…」
「気がついたぁ？輝矢っ」
「タローっ…」
暴走から数時間後。部屋で眠っていた輝矢がゆっくりと目を開くと、付き添っていた太狼が、目覚めた輝矢へ笑顔を向けた。

「私っ…また力を…」
「大丈夫っ、ちゃ～んと抑え込んだからっ」
不安げに呟く輝矢に、安心させようと穏やかに微笑みかける太狼。

「タローっ…やっぱり私、この国から出ていった方がっ…」
「何言ってんのぉ～っ？ここはもうとっくに君の故郷なんだよぉ～？」
「でもっ、これ以上いたらっ…タローやジローに迷惑がっ…」
「大丈夫っ」
太狼たちを気にかける輝矢を宥めるように、太狼がその頭を撫で、優しい笑みを浮かべる。

「輝矢のことは俺が守るっ…絶対にねっ」
「……っ」
強い瞳を見せる太狼に、輝矢はどこか不安げに、その瞳を細めた。

それから数日。

「輝矢ぁ～っ！ちょっとお遣いに行ってきてもらえますぅ～っ？」
「ああっ…」

輝矢は次狼に頼まれ、町はずれにあるエセお菓子の家から、龍国の中心街へと買い物に出掛けた。

「えっと…次は…」
「見てぇ～っ！あの子よぉっ！」
「……っ？」

聞き慣れた、その蔑むような声に耳が鋭く反応し、輝矢がゆっくりと振り返る。

「例の武国から追い出されて、やって来たっていう子っ！」
「あのガキがぁっ？この前の大波もっ、あのガキがやったっていう噂じゃないかぁっ！」
「気持ち悪ぅ～いっ！とっとと出てってくれないかしらぁ～っ」
「……。」

輝矢へと冷たい視線を送りながら、次々と蔑みの言葉を投げかける町人たちを見て、輝矢がそっと目を細める。それは、武国でも経験した光景。多少、胸が痛みはしたが、慣れてしまったといえば慣

れてしまっていた。

「はぁっ…」

深々と息を吐き、輝矢がその場から立ち去ろうと踵を返す。

「あんなガキを連れてくるなんてっ、何考えてんだかなぁ～っ？桃タローの奴もっ！」

「……っ！」

町人の一人の男の口から、太狼の名が出ると、その場を去ろうとした輝矢の足が止まる。

「鬼退治し過ぎてっ、頭おかしくなったんじゃねっ？」

「元々、変人なのさっ！でなきゃっ、鬼を一掃なんて出来るもんかっ！」

「違いねぇっ！アッハッハッハっ！！」

「……っ」

続く言葉の数々に、輝矢が唇を噛み締め、強く拳を握り締める。

「うっ…うあああああっ！！」

『なっ…！！』

輝矢は、太狼への蔑みの言葉を吐いた町人たちを全員、勢いよく殴りつけた。

その後、輝矢は町人たちに通報され、国主・青守座黒の屋敷へと連れていかれた。

「七歳のくせに、大の男殴りつけるなんて、凄いわねぇ～あんたっ」
「……。」
感心したように言い放つリンゴに、輝矢は不機嫌な表情で俯いたままでいる。

「うっわぁ～っ！相変わらず無愛想ぉ～っ」
その輝矢の様子に、顔をしかめるリンゴ。

「何をくだらんことを言っているっ！お前はとっとと出て行けっ！リンゴっ！」
「はぁ～いっ」
座黒に怒られると、しぶしぶと頷いて、リンゴは輝矢のいる部屋から出て行った。

「まったくっ…」
リンゴが出て行き、閉まる扉を見つめながら、座黒がどこか呆れた様子で肩を落とす。

「さて、竹取輝矢…」
「……っ」
振り向く座黒に、輝矢がさらに険しい表情を見せる。

「追い出して…ください…」

「えっ？」
輝矢の呟きに、座黒が眉をひそめる。
「私を…龍国から…追い出して…」
切れ切れに言葉を繋ぐ輝矢。
「誰にも迷惑かけたくない…もう誰も…傷つけたくないんだ…」
「……。」
願うように呟く輝矢に、座黒の表情が曇る。
「この国を出て行くことが、誰も傷つけないことに、誰にも迷惑をかけないことになるのか…？」
「それはっ…」
その場にしゃがみ込み、幼い輝矢と目の高さを合わせて、まっすぐな瞳で問いかける座黒に、輝矢が少し考え込むように俯く。
――大丈夫っ――
輝矢を不安にさせまいと、いつだって優しい笑顔を向けてくれる太狼。
――何考えてんだかなぁっ？桃タローの奴もっ！――
そんな太狼が、輝矢のせいで、救った人々にさえ悪く言われる。
「だって…そうしなきゃ…タローがっ…」
「お前がこの国を出て行くことが…太狼のためだと思うか…？」
「……っ」
またしてもゆっくりと問いかける座黒に、輝矢がきつく唇を噛み

締める。

「思うに決まってるだろっ…！！」

声を荒げ、輝矢が座黒に、強く叫ぶ。

「私がっ…私なんかがいるからっ…！タローが悪く言われるんだっ！！」

――もうこの国に…用はない……――

武国の時も、本来なら英雄として出迎えられるはずだったというのに、輝矢を連れて帰ったために、まるで追われるように、武国を出た。

「私がいない方がっ…！タローは幸せになれるんだっ！！」

「……。」

必死に叫ぶ輝矢を見て、座黒がそっと目を細める。

「お前はまだ…自分が一人で生きていると、思っているんだな…」

「えっ…？」

座黒のその言葉に、輝矢が少し首を傾げる。

「今日はもう帰れ…竹取輝矢…」

立ち上がった座黒が、輝矢の頭に大きな手を乗せ、そっと呟く。

「そして…お前が今、何故、生きているのかを考えろ…」

「何故…生きて…？」

その時の輝矢に、その時の座黒の言葉の意味を、理解することは出来なかった。

座黒の言葉の意味を理解出来ぬまま、輝矢は何の咎めを受けることなく、桃原家へと帰った。

「……っ」

輝矢が浮かない表情で、ゆっくりと玄関の扉を開ける。

「あっ！やぁ～っと帰ってきたぁ～っ！」

「……っ？」

玄関の扉を開けると、すぐ目の前に、太狼の姿があった。

「帰りが遅いから心配しちゃったよぉ～っ」

太狼が、玄関前に立つ輝矢のもとへと、歩み寄ってくる。

「おかえりっ、輝矢っ」

「……っ」

零れんばかりのその笑顔に、ひどく泣きそうになった。

「……っ！」

「えっ？輝矢っ…！？」

帰ってきたはずの家の前から、勢いよくどこかへと駆け出して行く輝矢に、太狼が慌てた声を発する。

「はぁっ…！はぁっ…！はぁっ…！」

「ちょおっとぉっ！輝矢ぁっ！どこ行くのぉっ！」

「うっ…！」

海岸沿いを必死に走り抜けていた輝矢を、後ろから追ってきた太狼が慌てて捕まえる。太狼に右手を取られ、その場に足を止める輝矢。

「君はお家に帰って来たんでしょ～がぁ～っ。それとも何っ？忘れ物っ？」

「ううっ…」

「へっ？」

「ううぅっ…！」

「えっ？えっ？」

堪えていたものを吐き出すかのように、突然、勢いよく涙を流す輝矢に、太狼が焦ったような声を出す。

「どっどうしたのかなぁ～っ？輝矢っ」

その場にしゃがみ込み、太狼が焦った表情のまま、泣きじゃくる輝矢の顔を覗き込む。

「町で誰かにいじめられたとかぁ～っ？」

「んなわけないだろっ！」

「あっ、そぉ」

泣いているわりにはハッキリと答える輝矢に、太狼が少し呆れたように頷く。

「耐えられないんだっ…」

「へっ？」

小さく声を漏らす輝矢に、太狼が不思議そうに首を傾ける。

「自分のことは…どんなにひどいこと言われたって、耐えられるのにっ…」

輝矢が両手で必死に涙を拭いながら、唇を噛み締め、言葉を続ける。

「私のことでっ…タローが悪く言われるのは、耐えられないっ…！」

「輝矢っ…」

「耐えられないんだっ…！」

「……っ」

声を震わせ、叫ぶ輝矢に、太狼はそっと目を細める。

「なぁ～んだぁ～っ、そんなことかぁっ」

「そんなことっ…！？」

力の抜けたような笑みを浮かべる太狼に、輝矢が勢いよく顔をし

かめる。

「あいつらっ…！タローのことっ、“変人”とか言ったんだぞっ！？」

「まぁ俺っ、変人っちゃ変人だと思うしぃ～」

「タローがいたから、今っ、平和に暮らせてるくせにっ！」

「そんなに大層なことはしてないよぉ～っ」

「……っ！」

次々と受け流していく太狼に、輝矢の顔がどんどんむくれていく。

「だぁから、そんなに怒る必要はぁ～っ」

「あるっ！だから全員っ、ブン殴ってきたっ！！」

「ええぇ～っ！？」

勢いよく答える輝矢に、太狼が大きく驚く。

「うわっちゃ～っ、それで遅かったわけぇっ？まさか龍国追放とか言われてないよねぇ～っ？」

「追放になった方が良かったじゃないかっ…！」

心配するように顔を覗き込む太狼に、輝矢の瞳から再び涙が溢れ出る。

「私なんかがいるからっ…！タローまであんな風にっ…！」

「輝矢っ」

「ううぅっ…！」

「輝矢っ…」

涙を流し、深く俯く輝矢の頭を撫でながら、太狼が優しく、何度も輝矢の名を呼びかける。

「輝矢は…優しい子だね…」

「うっ…」
太狼が輝矢の両手に手を当て、その涙を拭いながら、ゆっくりと俯いた顔を上げさせる。

「俺、嬉しいよ…？輝矢が俺のために泣いてくれてっ…」
「だってっ…！タローがあんな風に言われるのはっ、私のっ…！」
「でもたぶんっ、俺もそうだと思う」
「えっ…？」
太狼の言葉に、顔を上げた輝矢が、戸惑うような瞳を、太狼へと向けた。

「俺もっ、自分のことより、輝矢のことを悪く言われる方が、きっと耐えられないと思う」
「……。」
優しい笑みを浮かべ、まっすぐな瞳を向ける太狼を、輝矢もまっすぐに見つめ返す。

「輝矢のこと、悪く言う奴がいたらっ、きっと刀で斬っちゃうよぉっ」
「それ、マズい…」
「アハハっ！ホントだねっ」
思わず呟く輝矢に、太狼がその笑みを大きくして答える。

「だからさっ、輝矢っ」
太狼が頬に触れていた手を下ろし、輝矢の小さな両手を、大きな両手で包み込む。

「そうやって生きていこうよっ、俺たちっ」

「そうやって…？」
「うんっ」
戸惑いながら聞き返した輝矢に、太狼が大きく頷く。

「俺が悲しい時は、輝矢が泣いてっ」
穏やかな緑色の瞳が、輝矢の瞳だけを映す。

「輝矢が悲しい時は、俺が泣くからっ」
「……っ！」
続けられる太狼の言葉に、目を細めた輝矢の瞳から、さらに涙が溢れ出る。

「そうやってっ…ずっと一緒に生きていこうっ…」
「ううぅっ…！」
「輝矢…」
「うっ…！」
優しい言葉。温かい言葉。その笑顔に、いつだって泣きたくなる。

「うんっ…！」
「……っ」
涙を流しながら抱きついた輝矢を、笑顔の太狼はしっかりと抱き締めた。

一人では生きていないことを知って、ずっと胸の中にあった、“死にたい”という気持ちを、失った。

第８０章　今ここにあるすべて　★４

それからは、穏やかな日々が続いた。

「よぉ～っしっ！これから輝矢の断髪式を始めたいと思いまぁ～すっ！」

「ちょちょっ…！兄貴っ…！髪なら俺が切っ…！」

「じゃっきぃーんっ！！あっ、切り過ぎた」

「これじゃあ、どう見ても男の子ですねぇ～」

「タローっ！！」

「うわぁっ！ごめんごめぇ～んっ！」

明るい日々。

「輝矢ちゃ～んっ」

「何だ？急に“ちゃん”なんか付けて」

「いやぁ～っ、見た目どう見ても男の子だからさぁ～っ、呼び方だけでも可愛らしくいこうと思ってっ！」

「ふぅ～んっ…」

楽しい日々。

「見てみてっ、輝矢ちゃ～んっ！ヘンゼルとグレーテルをメイドさんにしてみましたぁ～っ！」

「ヘンゼルって…男じゃなかったか…？」

「そういうのはっ、気にしないしなぁ～いっ！」
「いや…するだろ…」
「ついでに大剣と鎖鎌の練習も始めさせてるんだぁ～っ！」
「何故に…？」
「そういうのはっ、気にしないしなぁ～いっ！」
「……。」

温もりのある、日々。

でも、幸せな日ばかりは続かない。

数年後。輝矢、十歳の冬。

「ジっ…ロー…」

次狼が、死んだ。もう動かない次狼を目の前に、輝矢はただ、茫然と立ち尽くした。

「次狼様っ…うぅっ…！」
「どうしてこんなっ…！」
いつも笑ってばかりのヘンゼルもグレーテルも、泣いていた。無駄に明るいリンゴも、そのリンゴと怒鳴ってばかりの悪人面のキツネ男も、泣いてこそいなかったが、魂の抜けたような表情を見せて

いた。

「すまなかった…太狼…」
「いえっ…」
「……っ」

リンゴによく似た女に頭を下げられ、軽い笑みを浮かべている太狼を見て、輝矢はそっと目を細めた。

「……。」

葬儀を終えた太狼は、後片付けを皆に任せ一人、次狼の部屋の寝台の上に座り込んでいた。

「タロー…」
「……っ輝矢ちゃん」

部屋の扉をノックする音とともに、部屋に輝矢が入ってくる。

「ごめんねぇ〜輝矢ちゃんにまで、色々と手伝ってもらっちゃってぇ〜」
「いやっ…」

明るい笑顔を作って言い放つ太狼に、輝矢は少し目を逸らしながら答える。

「はぁ〜あぁ〜っ」

「……っ？」
突然、大きく息を吐いて、次狼の寝台に横たわる太狼に、輝矢が少し首を傾げる。
「僕と違って、性格ばっかり良かったからなぁ～ほぉ～んとっ」
どこかボヤくように呟いて、太狼がそっと目を細める。

「だから…兄貴より早く、逝っちゃったのかなぁっ…」
「……っ」

ポツリと呟かれたその声に、輝矢が表情を曇らせる。

「太狼っ…」
「誰も…いなくなっちゃったや…」
寝台からゆっくりと起き上がり、太狼がそっと笑う。

「家族っ」
「……っ」
太狼の悲しいその笑みに、輝矢の心はひどく傷んだ。

「なら私が…タローの家族になるっ…」
「えっ…？あっ…」

戸惑うように顔を上げた太狼が、その笑みを止め、少し驚いたような顔を見せる。目の前に立つ輝矢の瞳から、大粒の涙が零れ落ちていたからである。

「輝矢ちゃんっ…」
「タローは一人になった私の家族になってくれたっ…だから私もタローの家族になるっ…」
涙を流しながら、震える声で、言葉を続ける輝矢。
「約束したからっ…タローが悲しい時は、私が泣くっ…！」
「……。」
必死に言葉を繋げる輝矢に、目を細める太狼。
「タローが悲しいならっ…私も一緒に受け止めるからっ…！」
「……っ」
輝矢の言葉にわずかに口元を緩め、太狼が強く、輝矢の小さな体を抱き締めた。
「ありがとうっ…」
強く輝矢を抱き締めて、太狼がそっと呟く。
「ありがとう…輝矢っ…」
呟かれたその声は、かすかに震えていた。
「……っ」
だから輝矢は、太狼を強く、抱き締め返した。

どうしようもない悲しみも、一人じゃなければ、乗り越えていけると、そう信じた。

「見てみてぇ～輝矢ちゃ～んっ、僕っ、眼鏡を掛けてみたんだけどぉ～っ」
「えっ？」
『きゃあああっ！素敵ですわっ！タロー様ぁぁっ！！』
「何ですか？急にっ」
「それが突然っ、爽やかお兄さんキャラでいきたくなってさぁ～っ」
「はぁっ…そうですか…」

悲しみは、消えることはないけれど、笑うことが出来れば、少しずつ薄れていく。

「タロー様ぁぁっ！御伽界南西に、伝説のグラニュー糖があるらしいですわよぉ～っ！」
「何だってぇ～っ！？それは早速探さないとっ！グレーテルっ！」
「はいっ！旅の準備をいたしますっ！」
「行くよぉ～っ！輝矢ちゃんっ！」
「はいはいっ」

一人じゃなければ、笑って、生きていくことが出来る。

笑うことも、泣くことも、共に悲しみを乗り越えていくことも、共に生きていくことも、すべて、その人が教えてくれた。

その人がいたから、生きてこられた。

その人がいたから、今、ここに、立っていられる。

「ただいま戻りましたぁ～」
「おかえりっ、輝矢ちゃんっ」

その言葉を聞けば、今も、泣きそうなくらい、嬉しくなる。

今、ここにある、すべてをくれた。

大切な、大切な、家族……――

桃原家二階・輝矢の部屋。

「んっ…」

長い夢から覚めて、輝矢がゆっくりと、その大きな黒い瞳を開ける。瞳を開くと、その先には、よく見慣れた自分の部屋の天井が広がっていた。

「鬼が島から…戻って来たのですか…」

桜時たちと再会し、喜び合い、笑い合ったその後、記憶がない。ホッとしたら、急に気が抜けて、強い眠気に襲われたので、そのまま眠ってしまったのだろう。眠っている間に、自分の部屋まで運んでもらったようである。

「ふぅっ」

輝矢が寝台から、ゆっくりと起き上がる。

「えっと…あっ…」

ふと横を振り向いた途端、輝矢の表情が固まる。

「すぅーっ…すぅーっ…」

「……。」

輝矢が見つめるその先には、寝台のすぐ横にある椅子に腰掛け、壁にもたれるようにして眠りこけている、太狼の姿があった。

「た…ろう…」
「んんっ…」
小さく名を呼んだ輝矢の声に反応するように、太狼が少し声を漏らし、ゆっくりとその瞳を開く。

「あっれぇ～っ？寝ちゃってたぁ～？ごめんごめんっ」
瞳を擦りながら、太狼が明るい声を出す。

「最近寝てなかったもんだから、ついぃ～っ」
「……。」
「……っ？輝矢ちゃんっ？」
反応のない輝矢に、太狼が首を傾げ、その顔を覗き込む。

「どうしたぁ～っ？」
太狼が優しく微笑み、俯いたままの輝矢の頭を撫でる。ゆっくりと顔を上げる輝矢に、太狼は大きな笑顔を向けた。

「おかえりっ、輝矢ちゃんっ」
「……っ！」
いつだって泣きそうになる、その言葉。

「ううっ…！」
輝矢の瞳から、勢いよく涙が零れ落ちる。

「うっ…！」
両手で口元を覆い、涙の流れる瞳を細めて、声にならない声を、
そっと漏らす輝矢。

「ごめんなさいっ…」
輝矢が震える声で、言葉を繋ぐ。

「ごめんなさいっ…！」
「……っ」
謝罪の言葉を繰り返す輝矢を見つめ、太狼が笑みを浮かべたまま、
その瞳を細める。

「言葉が違うよぉ？輝矢ちゃんっ」

太狼が両手で輝矢の頬を押さえ、涙に滲んだその顔を上げさせる。

「おかえりっ」
「……っ！」
もう一度その言葉を囁く太狼に、輝矢が強く唇を噛み締める。

「ただいまっ…」

ただ一人、輝矢にその言葉を、言わせてくれる人。

「ただいまっ…！タローっ…！」
「……っ」
勢いよく抱きつく輝矢を、太狼はしっかりと受け止め、きつくきつく抱き締めた。

「……。」
その輝矢の部屋の扉の前に立ち尽くしたグレーテルが、薄い笑みを浮かべながら、どこか感慨深げな表情を見せている。

「いいのか？」
そのグレーテルの横から、小声で問いかける桜時。

「せっかくのココア、冷めちまうぞ？」
桜時がグレーテルが大事そうに持った、太狼の甘さダルダルココアを指差し、問いかける。

「いいんですっ…」
ココアを持ったまま、グレーテルが優しく微笑む。

「どんなに…世界が広くても…」
グレーテルが、輝矢の部屋の扉を、まっすぐに見つめる。

「あの方の泣ける場所は…あそこしかないですから…」
「……。」

グレーテルの言葉を聞き、目を落とした桜時も、そっと笑みを浮かべる。

「ホントっ…」
少し困ったように、肩を落とす桜時。

「厄介なライバルがいるもんだよなぁ～っ、お互いっ」
「フフっ、そうですねっ」

そう言葉を交わしながら、二人は部屋の前を後にし、再び一階へと降りていった。

その頃、牢戸知玖・居城。

「シルク様」
自室の寝台に横たわっているシルクのもとへ、諸刃がやって来る。

「何…？」
ゆっくりと体の向きを変え、諸刃の方を振り向くシルク。

「ナイトを連れ帰って参りました」
「うぅっ…！」

無表情のままそう話し、諸刃がシルクの前に勢いよく、傷だらけの内兎を突き出す。もう立つ力も残っていない内兎は、シルクの目の前の床に、力なく倒れ込んだ。

「しっ…シルクっ…！」
「……。」
必死の瞳を向ける内兎を、シルクはまるで冷めきった瞳で見つめ返す。

「僕にっ…もう一度…力を頂戴っ…！」
ろくに体の動かぬ内兎が、シルクへ向け、必死にその右手を伸ばす。

「そしたら次はっ…次こそは僕…輝矢をっ…！」
「……。」
内兎を見つめていたシルクが、寝台からゆっくりと立ち上がり、倒れ込んだ内兎のもとへと歩み寄っていく。

「シルク…？」
近づいてくるシルクを、戸惑うように見つめる内兎。

「ナイト…」
「……っ」
内兎の伸ばした手を取るシルクに、内兎が嬉しそうな笑みを見せる。
「シルっ…！」
「貴方はもういいわ…」
「えっ…？」
シルクの言葉に、内兎が戸惑いの表情を見せた、その瞬間。
――パァァァァァンっ！
内兎の体は、白い光となって、粉々に砕け散った。
「所詮、貴方は…私の力のほんの一部…」
砕け散った内兎であった光の破片が、次々にシルクの体へと吸収されていく。
「少し…遊ばせ過ぎたみたい…」
すべての光がシルクへと吸収されると、内兎は、その跡形すら残さず、この世から消え去った。
「あぁ～ららっ、ウサギちゃんも最期は結構、あっけなかったですねぇ～っ」
「……っ」

どこかがっかりしたように言い放つギンの横で、諸刃が少し顔をしかめる。

「……。」

シルクが、先程まで内兎に触れていた右手を、ゆっくりと部屋の壁の一方へと向ける。

「“水星”…」

――バァァァーンっ!!

そう呟いた瞬間、シルクの右手から無数の水の玉が放たれ、部屋の壁に大穴をあけた。

「うぅんっ…」

少し感触を確かめるように、右手のひらを開閉するシルク。

「シルク様、水力がお戻りに…？」

「ええ…ナイトの力を取り込んだからかしらね…」

問いかけた諸刃に、シルクが落ち着いて答える。

「でもまだ本来の半分の威力も出せていないわ…」

どこか不満げな表情を見せるシルク。

「でも…それも後少し…」

シルクの口元が、ゆっくりと緩んでいく。

「もうすぐよ…もうすぐ…」

天井を見上げたシルクが、楽しげな笑みを浮かべながら、その両手を広げる。

「私の…すべての力が目覚める…」

「……っ」

「……。」

微笑むシルクに、ギンはどこか怪しげな笑みを浮かべ、諸刃は浮かない表情でそっと目を落とした。

第８０章　今ここにあるすべて　★４（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。
この章にて、第７部は終わりとなります。
次回からは第８部です。
「鬼斬りかぐや」も残り２０章。
話も徐々に終盤です。
今後とも、よろしくお願いいたします。

第８１章　父との対面　☆１

鬼が島での戦いが終わり、輝矢と桜時が目覚めたその日、午後。

龍国・エセお菓子の家こと『桃原家』。

「たっだいまぁ～っ！！」

オトポリ本部で醍也たちと遊んでいたモンキとユキジが、桃原家へと帰って来た。

「輝矢んとイヌコロが起きたってホンマぁ～っ！？」

『しぃぃ～っ！』

モンキが玄関の扉を開け、その無駄に大きな明るい声で、誰にともなく問いかけると、キッチンから出て来たヘンゼルとグレーテルが、厳しい表情で同時に鼻の前に人差し指を突き立て、モンキに静かにするよう訴える。

「ふへっ？」

「……っ？」

二人の仕草に、不思議そうに首を傾げるモンキとユキジ。

「何っ？輝矢たち、まだ寝てんのぉ～？」

「いえっ、起きられたことは起きられたのですが…」

ユキジの問いかけに、グレーテルが眉をひそめる。

「今、リビングに、ハチ様のお父様がいらっしゃられていて…」

「太狼様や輝矢様、そしてハチ様と、お話になられてるんです」

『えっ…？』

ヘンゼルとグレーテルの言葉に、モンキとユキジも眉をひそめる。

「輝矢たちが…」
「桜時の親父さんとぉ？」

桃原家・リビング。
「本当にお久し振りですねぇ」
ソファーの腰掛け、右手に甘さダルダルココアを持った太狼が、向かいのソファーへと笑顔を向ける。

「犬孝さんっ」
「ああ、六年振りくらいか…懐かしいな…」

太狼の笑みに答えるのは、一匹の白いイヌ。その姿はハチによく似ているが、体は一回り程大きく、その青い瞳はハチよりも鋭く、強い。人語を話していることからして、そのイヌが“犬人”であることがわかる。太狼が呼んだ名からも明らかな通り、このイヌこそ、桜時の追い求めた桜時の実の父・第五十四代・里見犬孝であった。

「……っ」
太狼の向かいの横広のソファーの端っこに、そこ小さな体をちょこんと置いたハチが、緊張した面持ちで、太狼と犬孝の会話を聞く。犬孝とは鬼が島で一度、対面しているものの、戦いが落ち着き、こうして身近で改めて父を見ると、心が妙に高ぶった。

「お元気で？」
「まぁ何とかな…そちらも元気そうだな…」

「ええぇ～っ、僕は元気だけが取り柄ですからぁ～っ」
犬孝に明るく答えながら、太狼が右手のココアに口をつける。
「お二人は、かつて共に戦った仲とお聞きしましたが…？」
「うんっ？ああっ…」
太狼の向かい、ハチの隣に座った輝矢が、いつもとは違い、少し遠慮がちに問いかけると、犬孝が頷きながら、そっと目を落とす。
「それも懐かしい話だ…もう十年も前になる…」
「犬孝さんは、僕が鬼が島を出て、“桃タロー”として名をあげるまでの骸鬼退治の旅に同行してくれてね」
犬孝の言葉の後に、太狼が口を挟む。
「骸鬼の残党退治も、手伝ってくれたんだよ」
「へぇっ…」
太狼からの話に、感心したような声を漏らす輝矢。
「でも何故、里見の、犬国の人間であるアナタが、タローと鬼退治の旅など…？」
輝矢が少し下を向き、不思議そうに問いかける。
「それはっ…」
「ちょっ…！ちょっと待ってっ…！」
「んっ？」
問いかけに答えようとした犬孝が、横から止めてくるハチの声に首を傾げ、ゆっくりと振り向く。
「何だ…？桜時…」
ハチへ、穏やかな表情を向ける犬孝。
「すべてを聞く心の準備は出来ていないか…？」

「いやっ、心の準備はばっちりなんだけどっ…」
少し引きつった表情で、ゆっくりと犬孝の方を見るハチ。
「何つーかっ…ちょっと言いたいことがあるってゆーかっ…」
「んんっ？」
ハチの言葉に、犬孝が目を丸くする。
「何だ？何でも言ってみろ、桜時」
「そのぉ～…」
気まずそうな表情を見せたハチが、自分の横を見つめる。
「その態勢で真面目な話すんのっ、やめてくんねぇっ？」
「んっ？」
ハチが見つめるその先には、ソファーに座った輝矢の膝の上で、のんびりと座り込んでいる犬孝の姿があった。輝矢の膝の上から、犬孝がハチの方を見る。
「何だ？嫉妬か？お前、結構心の狭い男だなぁ」
「違げぇよっ！そういうこと言ってんじゃなくってっ、話に集中出来ねぇーっつってんだよっ！」
呆れたように言い放つ犬孝に、ハチが思わずソファーの上で立ち上がり、勢いよく怒鳴りあげる。
「いいじゃないかっ、義理の娘になるかも知れないんだしっ」
「だっ！だだだだだ誰が娘っ…！」
犬孝の言葉に、ハチが体中を真っ赤にし、激しく動揺する。
「っつーか、そういう問題じゃないっつってっ…！！」
「よろしくお願いします、お義父さんっ」

「お前も何っ、ノリノリで呼んじゃってんだよっ！！」
膝の上の犬孝へ向け、満面の笑顔で父と呼ぶ輝矢に、ハチが激しい突っ込みを入れる。

「まぁそう固いことを言うなぁ～」
犬孝がその場に横たわり、輝矢の太ももの肌に、その頬を寄せる。

「ずっと一人で島暮らししてたんだぁ、たまには若い子のお肌に触ってだなぁっ」
「さぁっ、とっとと本題に入りましょうかぁ～っ、犬孝さんっ」
「ぬぎゃあああああっ！！」
輝矢の生太ももに顔を寄せていた犬孝が、笑顔の太狼に、首を絞められるようにして持ち上げられ、危機迫った叫び声をあげる。

「ぐるじいっ…！ぐるじいぞぉ～っ！太狼ぉぉっ！！」
「あぁ～あっ…」
窒息死寸前の犬孝を眺め、どこか呆れたような声を出す輝矢。

「言わんこっちゃねぇなぁっ、っつーか、どうしようっ…」
輝矢の横で、ハチが悩み込むように首を捻る。

「思ってたより、かなりひどいっ…」
「父親なんて、そんなもんだよぉ～っ」
「ユッキーが言うと、説得力あるなぁ～っ」
「門貴っ、由雉っ」
げっそりと呟くハチの上方、ソファーの背もたれの上から、モンキとユキジが顔を出す。

「ぜはぁっ…！ぜはぁっ…！ぜはぁっ…！」

「うぅ～んっ、今日もココアがおいしぃ～っ！」
ココアを飲んでまったりとしている太狼の膝の上で、青白い顔を見せた犬孝が、必死に息を整えている。

「ハチの女嫌いは、遺伝ではないようですねぇ」
「んっ？ってか、言っただろう？」
しみじみと語る輝矢に、ハチが少ししかめた表情を見せる。

「俺の女嫌いはっ、あのクソババアの死期迫るプロレスごっこのせいであってだなぁ～っ！」
「呼んだかぁ～いっ？」
「えっ…？」
忘れたくても忘れられない、そのトラウマのような声が聞こえ、ハチが恐る恐る振り返る。

「よぉ～うっ、桜時ぃ～、私の二五八番目の旦那にならないかぁ～いっ？」
「うっ…！」
突然、どこからともなく、ハチの座るソファーの肘掛けの上に現れるトマトに、ハチがその顔色を変える。

「うぎゃあぁっ！！出たぁぁっ！！」
「クソババアっ」
勢いよく後退してくるハチを受け止めながら、輝矢が少し驚いたようにトマトを見る。

「失礼だねぇ～っ、人を、ってか龍を幽霊みたいにっ」
軽く顔をしかめながら、トマトがソファーの、先程までハチの座っていた辺りに腰掛ける。

「何故、クソババアがここに？」
「暇だったから、寄ってみたんだよっ」
「暇ぁ～っ？」
短く答えるトマトに、輝矢の膝の上に乗ったハチが、勢いよく顔をしかめる。
「何だよっ！暇ってっ！俺たち、鬼が島ですっげぇー大変だったのにぃっ！」
「そういえば、このおばあちゃんだけ、手助けに来てくんなかったよねぇ～」
「八犬士とか、みぃ～んなっ、来てくれたのになぁ～」
ハチに続くようにして、モンキとユキジも、トマトを非難するように言葉を浴びせる。

「はぁっ…」
そんな三匹を前に、深々と溜息をつくトマト。

「たかがシルクの分身相手に、私の助けを借りてるようじゃ、とてもシルクの相手なんて出来やしないっ」
トマトがその瞳を鋭くして、ハチたちの方を見る。

「そう思ったからっ、わざと助けに行かなかったのさっ」
「とか何とか言って、昼寝してたとかじゃないんですかっ？」
「鋭いねっ、小娘っ」
「昼寝かよっ！！」
輝矢を誉めるトマトに、ハチが強く突っ込みを入れる。

「まぁいいじゃないかぁ、うまくいったんだろっ？お前らっ」
「へっ？」

からかうように微笑むトマトに、ハチが目を丸くする。

「いっいやっ！別にまったく、これといって、うまくいったなんてことは、一切なっ…！」

「ええ、もう心も体も許し合いました」

「誤解を招くようなこと、言うんじゃねぇっ！！」

必死に否定しようとするハチとは正反対に、満面の笑顔でシレっと答える輝矢に、ハチが振り返って、勢いよく怒鳴りあげる。

「ふぅ～んっ…そぉ～、心も体もねぇ…」

「嘘だっ！冗談だっ！ハッタリだからなっ！なっ！？」

温かみの一切ない笑みを浮かべて、妙にドスのきいた声を放つ太狼に、ハチが必死に弁解する。

「お久し振りです」

「んっ？」

向かいから聞こえてくる声に、トマトが振り向く。

「トマト先生」

「おうっ、犬孝っ、久し振りだねぇっ」

『へっ？』

親しげに言葉を交わすトマトと犬孝に、輝矢やハチたちが皆、目を丸くする。

「知り合い、なのか…？」

「ああ、俺の師匠だっ」

『ええっ！？』

あっさりと答える犬孝に、ハチたちがさらに大きく頷く。

「また弟子ぃ〜っ？」
「一体、何人、弟子おんねんなぁ〜」
「まぁ旦那だけで二五七人いるくらいですからねぇ」
顔をしかめ、首を捻るモンキとユキジに、輝矢はどこか落ち着いた口調で言い放つ。

「で、ハチの父親は、旦那に勧誘しないのですか？」
「私はコブつきには興味ないのさっ」
「コブっ…」
トマトのその発言に、ハチが少し顔をしかめる。

「まぁ犬孝が弟子だった頃は、散っ々、勧誘したけどねぇ〜」
「っつーか何年生きてんだよっ…」
「千年さっ」
疲れたように肩を落とすハチに対し、トマトは得意げに笑って見せる。

「もう二十年くらい前になるかねぇ〜、犬孝と、太狼と次狼の父・破狼は、私のもとで修行してたのさっ」
「えっ？タローの父親もっ？」
「ああっ」
聞き返したハチに、トマトに代わって頷く犬孝。

「修行といっても、朝から晩まで二人で戦わされてばかりだったけどなぁ」
「私の修行は、実戦が基本なんだよっ」
苦い笑みを零しながら言う犬孝に、トマトが少し顔をしかめて答える。

「何度も戦ったが、何度戦っても勝てなかった…」
犬孝が太狼の膝の上に乗ったまま、過去を思い出すかのように天井を見上げ、そっとその瞳を細める。

「神狼丸と天狼丸…二本の刀を使う破狼さんは、まさに敵なし、この世で最強の人だと、そう思えた…」
『へぇ～っ』
その話に、ハチやモンキが感心の声を漏らす。

「その破狼さんが、鬼人との戦いで死んだと知った時は…ひどく驚いたもんだ…」
「……っ」
「……。」
犬孝の言葉に、そっと目を落とす太狼を、輝矢がどこか心配するように見る。

「雀国から犬国に連れ戻されて、その後も結局、オヤジ振り切って犬国を飛び出してなっ」
「……っ」
それを聞いていたハチが、ハッとした表情を見せる。

――お前の父…第五十四代・犬孝は…この国にはおらん……――

そう、どこか悲しそうに言った、祖父・八房の顔が思い浮かんだ。

「あちこち点々としてた時に丁度、太狼と会ってっ」
少し上を見上げ、太狼の方を見る犬孝。

「十歳やそこらのガキが、一人で鬼人退治の旅してるっつーから声掛けてみればっ、破狼さんのせがれだって言うじゃないかっ」
「それで共に旅を…？」
「ああっ、破狼さんの残した息子を、死なせてやりたくもなかったしな」
問いかけた輝矢に、犬孝が大きな笑顔を向ける。

「そんなわけで、僕の鬼退治に付き合ってたから、犬孝さんは雀国に戻れなかったんだよ、ハチくん」
「えっ？」
急に太狼から言葉を振られ、ハチが戸惑ったような声を出す。

「雀国に戻ったら、犬国の八房さんたちに、せっかく隠してた君の存在がバレちゃうかも知れなかったしねぇ」
「あっ…」

犬孝は、雀国主の娘・雲雀との間に、桜時という息子が生まれたことを、父・八房に隠していたのである。もし桜時の存在がバレてしまえば、八房が桜時を、無理やりにでも犬国へ連れ帰り、第五十五代・犬孝とすることは明らかであったからだ。

「それでっ…」
父は決して、桜時を見捨てたから、会いに来なかったわけではなかった。ハチが、それでもまだどこか戸惑ったような視線で、そっと犬孝の方を見る。

「よせっ、太狼」

「……っ？」
ハチに微笑みかけていた太狼に、犬孝が止めるように名を呼ぶ。
「どんなに言い繕ったところで、俺が桜時を放ったらかしにしていたことは事実だっ…」
少し俯きがちに話す犬孝が、厳しい表情を見せる。
「雲雀のことも…看取ってやれなかったしな…」
「……っ」
どこか悲しげに呟く犬孝に、ハチがそっと目を細める。
「そんなことよりですねぇ」
「俺の重大な家族問題を、“そんなことより”っつったな…お前っ…」
割って入る輝矢に、ハチが冷たい視線を送る。
「太狼が骸鬼を殲滅するまでの詳細はわかりましたが、それ以降、十年前から今までは、一体どこで何を？」
ハチの呟きを通り越し、輝矢が犬孝へ不思議そうな顔を向ける。
「さっき島がどうこうと仰ってましたが…」
「ああ、十年前から今まで、俺は“巌流島”と呼ばれる島にいたんだ」
「巌流島っ？」
「お前たちも見たんじゃないか？鬼が島のすぐ横に浮かぶ小島だ」
「あっ…」
犬孝の答えを聞いたハチが、何か思いついたような声を出す。

――あれは恐らく、十年前の爆発で吹き飛んだ、鬼が島の一部だろう……――

――何か…誰かがいるような気がして……――

鬼が島から見た隣島から、確かな気配を感じた桜時。ゴンからは気配を感じ取れる距離じゃないと言われたが、父の気配を、桜時は本能的なもので感じ取ったのかも知れない。

「あぁ～あったなぁ～、あの島かぁっ」

「あんなとこに一人で、十年も何してたわけぇ～？サバイバル演習ぅ～っ？」

「無人島体験ツアーちゃうっ？」

「もの好きなオヤジですねぇ」

「お前たち…揃いも揃って失礼だな…」

明るく話す輝矢や、モンキ、ユキジに、犬孝が呆れた表情を見せる。

「見張っていたんだよ、鬼が島を」

『見張りっ？』

「ああっ」

聞き返したモンキたちに、犬孝は短く頷いた。

第８１章　父との対面　☆２

「お前は聞いたんじゃないか？竹取輝矢っ」
「えっ？」
「餅月内兎…いや、ナイトが、牢戸知玖の封印されていた力の一部が、人の形を成したものあるということを」
「……っ」
「えええぇっ！？そうやったんっ！？」
犬孝の言葉に険しい表情を見せる輝矢の横で、モンキが大きく驚く。

「力の一部ぅ～っ？あれでぇ？」
「人の形を…そんなことが…」
顔をしかめるモンキの横で、ユキジもそっと眉をひそめる。

「ええ、確かに内兎本人から、そう聞きました」
「それなら俺も聞いたぞっ？確かに“自分はシルクの力の一部だ”って言ってたっ」
輝矢に続くように、ハチも言い放つ。

「内兎は、“鬼が島で眠っていたところを、シルクに目覚めさせてもらった”と…」
「ちょっと待ってぇっ」
言葉を続けた輝矢に、ユキジが口を挟む。

「シルクだって、十年前、鬼が島で、玄神の力に封印されちゃったんじゃないのぉっ？」
「内兎は、“あの封印は、そう強いものではなかったので、牢戸知

玖の封印自体はすぐに解けた”とも…」
「そんなっ…」
黒鬼一族皆の命を犠牲にした封印も、そう意味のあるものではなかった。そう思うと、犠牲になった者たちの命が悔やまれ、ユキジは少し表情を曇らせた。

「その十年前の時点で、その内、白鬼一族が蘇ってしまうことを、俺たちはある程度、予想していたんだ」
『えっ…？』
犬孝の言葉に、輝矢たちが皆、戸惑いの表情を見せる。

「トマト先生から助言を受けてな」
「当時の玄上国主の力じゃ、シルクの力を抑え切るのは不可能っ、すぐにでも復活すると思ったからねぇ」
少し微笑んだ犬孝に、トマトが素っ気なく答える。

「それでトマト先生っ、“鬼は必ず復活する”とか言ってたんだなっ」
『えっ？』
部屋の中に新たに入って来る声に、皆が一斉に顔を上げる。

『ゴンっ！』
「よぉっ」
軽く手をあげ、リビングへと現れたのはゴンであった。

「また警務を放っぽって来たのですか？不良警官っ」
「うっせっ！お前らの様子、見にくんのも警務の一環なんだよっ！！」

呆れきった視線を向ける輝矢に、ゴンが勢いよく怒鳴り返す。
「っつーか大事な話すんなら、ちゃんと俺も呼べよなぁ～っ」
「呼ぶ必要性を感じませんでしたので」
「お前っ、もっ一回、鬼が島行って来いっ！！」
あっさりと答える輝矢に、ゴンがさらに食ってかかる。

「ゴォ～ンっ、お話の邪魔するなら、出てってもらうよぉ～っ？」
「えっ！？あっ！すっすんませんっ…」
太狼に牽制するように言われ、怒鳴っていたゴンが小さくなり、ひっそりと輝矢たちの座るソファーの横へと立つ。

「情けない姿ですねぇ～」
「うるせぇっ」
輝矢の言葉に、ゴンが小声のまま、悪態づく。

「それでぇ？復活を予想してたから、イヌパパが厳流島で見張ってたゆうんかぁ～？」
「その通りっ」
話を戻そうと問いかけたモンキに、犬孝が少し笑顔を見せて、大きく頷く。

「見張り役は僕がやるって言ったんだけどねぇ～」
「太狼には、竹取輝矢を育てるっていう、大事な役目があったからなっ」
「……っ」
太狼を見て微笑む犬孝の言葉に、輝矢が少し眉をひそめる。

「予想通り、二年後、牢戸知玖が復活した…」

『……。』
話をする犬孝につられるようにして、皆が一斉に険しい表情となる。
「その強大な力は封じられたまま…生身の人間とほぼ同じ状態でな…」
「戦ったのかっ？」
「いやっ、すぐに見失ってしまったからな」
「ほぉ～んとっ、肝心なとこ、役立たないですよねぇ～」
「お前ねっ…」
しみじみと言い放つ太狼に、犬孝が少し困ったような表情を向ける。
「でぇ、僕は犬孝さんから、龍国への緊急通信を受けて、すぐに牢戸知玖を探しに出たんだっ」
太狼が犬孝に続くようにして、話を進める。
「犬孝さんは、牢戸知玖の力の方の見張りをしなきゃいけなくて、厳流島を離れられなかったからねぇ」
「でも…牢戸知玖は見つからなかった…」
「うんっ…」
輝矢の言葉に、太狼が少し表情を曇らせて頷く。
「封印から解かれたばかりで、体の感覚を戻してたのかもねぇ。実際に、牢戸知玖が現れたのは…」
「そのさらに二年後だった…」
今度は太狼に代わって、トマトが口を開く。
「力の封印は解かれてなかったから、油断してたのかもねぇっ…」

トマトがそっと、眉をひそめる。

「まさかっ…他人を操って、攻撃を仕掛けてくるなんて…」

「……っ」

トマトの言葉に、曇るゴンの表情。

――次狼ぉぉぉっ！！――

力のない状態であるシルクが選んだのが、諸刃であり、そして、シルクに操られた諸刃は、次狼を殺した。

「その一度、現れたきりで、それから数年間、牢戸知玖はぱったり姿を見せなくなった」

話し手が、犬孝へと戻る。

「だが、最近になって…」

「御伽界各地に、骸鬼が現れた…」

「ああ…」

代わりに答える輝矢に、犬孝が厳しい表情で頷く。

「数年間の間に多少、力を戻したんだろう…再び鬼が現れて、世界は急速に動いていく…」

――グガアアアアアっ！！――

――鬼になるだけでっ、死なずに済むのよっ！？――

「骸鬼、鬼人化人間、そしてついにはっ…」

――こんにちは…月の少女…――

「牢戸知玖自身が…姿を見せた…」

『……。』

思い出されるシルクの姿に、輝矢やハチが、険しい表情を見せて俯く。

「牢戸知玖が表立って姿を見せ始めたのは、やはりハチの“命力”を狙って…？」

「ああ、たぶん、そうだろう」

「……っ」

頷く犬孝に、ハチがごくりと息を呑む。

「では牢戸知玖は何の為に、ハチの命力を…？」

「イヌコロの力を使ってっ、自分の力の封印を解こうとしとるとかぁっ？」

「いやっ」

モンキの言葉に、犬孝がすぐさま首を横に振る。

「真の目的はわからないが、力の封印を解く為ではないと思う」

「えっ？」

「なんでぇ？」

「ナイトは、命力がなくても、勝手に復活したからだ」

『……っ』
犬孝の答えに、皆が眉をひそめる。
「力の一部であるナイトが目覚めたということは、つまり…」
「牢戸知玖のすべての力の封印が…解かれようとしている…」
「……っ」
言葉を続けた輝矢へと、犬孝が真剣な表情を向ける。
「ああっ…」
『……っ！』
頷く犬孝に、衝撃を走らせるハチたち。
「けどっ、ナイトは桜時が倒したんでしょっ？じゃあシルクは力の一部は失ったってことなんじゃあっ…」
「ナイトがシルクの力の、どんくらいの割合を占めてたかによるけどなっ…」
「そっかっ…」
明るい表情を見せようとしたユキジが、ゴンの言葉に一気に浮かない表情となる。
「すんごい大部分占めてたかも知れへんでぇ～っ？」
「ほんの一部って可能性もあるけどねぇっ」
「うっ…！」
トマトの一言に、顔を引きつるモンキ。力のない状態であったシルクにも敗北し、ただの力の一部であった内兎にもあんなに苦戦を強いられたというのに、すべての力が復活したシルクの強さなど、想像も出来なかった。
「なっ何かっ…眩暈してきたっ…」

「奇遇だなっ、俺もだ…」
頭を押さえるモンキに、ゴンが苦い笑みを浮かべる。

「だが一つ、気にかかることがある…」
『えっ…？』
表情を曇らせる犬孝に、皆が首を傾ける。

「俺が見た時…ナイトは鬼が島にあった、巨大な繭の中から生まれた…」
「巨大な眉毛ぇ～？」
「繭だよぉ、バカっ」
首を捻るモンキに、ユキジが冷たい視線を送る。

「繭っ…？」
「でっかい繭って、鬼が島に、んなもん見当たんなかったぞぉっ？」
首を傾げる輝矢の下から、ハチが戸惑うように訴える。

「そう、俺が探した限りでも、鬼が島に他の繭、それどころか力の眠ってそうなもんは、一つもなかった」
気難しげな表情で、頷く犬孝。

「ナイトがシルクの力のすべてなのかとも思ったが、本人が一部だと公言していたようだしな…」
「だとすれば、その他の力はどこにっ？って話だよねぇ～」
笑みを浮かべた太狼が、暢気な口調で言い放つ。

「シルクがどっかに持ってっちゃったんじゃないのぉ～？」
「それはない。俺は十年間、毎日、鬼が島を見張っていたんだから

な」
「せやけど、そんだけ長かったらっ、ちょっとくらい余所見しとった日かてあるんちゃうのん～？」
「それはぁっ…まぁ、三六五日中一一八日くらいはっ…」
「結構な率じゃねぇーかよっ！！」
少し口ごもって答える犬孝に、ハチが勢いよく突っ込みを入れる。

「でもホントにそれはないと思うよっ」
『……っ？』
口を開いたトマトに、皆が同時に振り向く。

「何故です？クソババア」
「動かす意味がないからさっ。犬孝に見られて、私や太狼に連絡がいったところで、力が目覚めることに変わりはない。今回のことがいい例だっ」
「確かに」
「けど、じゃあ他のシルクの力ってのは、どこにっ…」
『うぅ～んっ…』

リビングにいる皆を、戸惑いと困惑の空気が包み込んだ。

数分後、桃原家二階・ベランダ。

「牢戸知玖の…封印された力の居所かぁ…」

ベランダに立ち、龍国の景色を見つめながら、桜時がポツリと呟く、あまり考え過ぎても仕方がないので、リビングでの話は一旦、終わりにすることとなったのだ。外の空気を吸って、頭を働かせるため、桜時はベランダへとやって来たのである。

「クソババアが知らないんじゃ、孔雀さんとかに聞いてもわかんないだろうしっ…」

ベランダの手すりに肘を付けながら、桜時が大きく首を捻る。

「うぅ〜んっ…って、痛っ！」

悩み込んでいた桜時の全身を、一瞬、激しい痛みが襲う。

「またかぁ〜っ、傷は全部治ってんのにっ、どうも体が痛むんだよなぁ〜っ」

少し引きつった表情を見せた桜時が、困惑したように自分の体を見回す。由雉の癒羽で傷は癒えたというのに、たまに全身に走る痛みは、体が砕け散ってしまいそうな、そんな痛みであった。

「……っ」

自分の右手を見つめながら、桜時がそっと眉をひそめる。

——何…？あの変化っ……——

鬼化した内兎さえも圧倒した、桜時の力。

――何だったの？あの姿っ――

戦いを終えた後、戦いを見ていたアリスは、桜時に問いかけた。

――髪も白かったし…人間ではあったけど、ちょっと犬が混ざったような…そんなだったわよ？――

「人と犬の混ざった姿…」

桜時が見せた、その変化。

「やっぱり…あの姿が…」

「原因だろうねぇ～っ」

「うわあああああっ！」

耳元で囁かれる声に、桜時が背筋を震えあがらせる。

「タっタローっ！！」

「やっほぉ～っ」

桜時が勢いよく振り返ると、そこには笑顔を見せた太狼が立っていた。

「あっあのなぁ～っ！いきなり現れて、驚かすんじゃっ…！」

「はいっ、お口、あぁ～んっ！」

「へっ？あっ、あぁ～んっ」

戸惑う桜時であったが、とりあえず太狼に言われるがままに、大きく口を開く。

「ぽいっ」
「うがっ！？」
太狼が大きく開いた桜時の口へ向け、何か小さなものを投げ入れる。

「うっ…！ごっくんっ！」
吐き出す間もなく、思わず飲み込んでしまう桜時。

「うえぇぇ～っ！苦げぇ～っ！！」
飲み込んだ物の、あまりの苦さに、桜時が勢いよく顔を歪める。

「何、飲ませたんだよっ！？」
「痛み緩和薬～」
睨みつけるように問いかける桜時に、太狼はいつもののんびり口調で答える。

「ちなみに僕のお手製ぃ～っ」
「ほぉ～っ、でっ？どんな毒を入れたんだっ？」
「失敬だなぁ～っ、毒なんて入れてないよぉ～」
桜時の言葉に、太狼が口を尖らせる。

「それに僕、ハチくん殺すんなら、毒殺なんて甘っちょろい手段は選ばないしぃ～っ」
「どんだけ恨んでんだよっ！俺のことっ！！」
何食わぬ顔で言い放つ太狼に、桜時が勢いよく怒鳴りあげる。

「龍国二十個分くらいっ？」
「恨み、果てしねぇーっ！！」

太狼が素直に答えると、桜時が驚きの叫びを放つ。

「んっ？けど、さっきより痛みが引いてきたようなっ…」
「“人獣化（じんじゅう）”っていうんだよぉ」
「へっ？」
体の変化を感じ取っていた桜時が、太狼の言葉に、目を丸くする。

「人っ…？何だぁ？それっ」
「君が鬼が島でなった姿のことっ」
「……っ！」
太狼の言葉に、桜時が衝撃を走らせる。

「アリスに聞いたのかっ…！？」
「ううん～っ」
「へっ？」
あっさりと首を横に振る太狼に、桜時が少し間の抜けた声を出す。

「じゃあなんでっ…」
「今の君の状態を見てたら、一目瞭然さぁ～っ」
戸惑う桜時に、太狼がそっと微笑みかける。

「痛むんだろぉ～っ？全身が、砕け散りそうなくらいにぃ～っ」
「……っ」
桜時の体の異変を言い当てる太狼に、桜時が驚きの表情を見せた。

「それが後遺症みたいなもんなんだよっ、“人獣化”した人には、誰だって出るっ」
「へぇ～…って、何でお前がそんなことっ…あっ」
感心の声を漏らしていた桜時が、ふと戸惑うように顔を上げる。

「もしかしてお前っ…」
「“人獣化”っていうのは、人の形を取ったまま、獣の力を持つことの出来る、獣人最強の姿だからねぇ」
何やら思いついたような表情を見せた桜時の言葉を遮り、太狼がさらに話を続ける。

「でもその分っ、リスクは高い」
「……っ」
急に真剣な表情を見せる太狼に、桜時が思わず息を呑む。

「一つだけ言うよ、ハチくん」
太狼がハチへ、鋭い視線を送る。

「もう二度と、“人獣化”はしない方がいい…」
「えっ…？」
強く言い放つ太狼に、眉をひそめる桜時。

「でないと、前線で戦えなくなるよっ」
太狼が鋭い瞳で、突き刺すように桜時を見つめる。

「僕みたいにねっ」
「……っ！」

太狼の言葉に、大きく目を見開く桜時。

「まっまさかっ…お前っ…！」
「まぁ僕が言いたかったのは、それだけぇ～」
思わず声をあげた桜時に、太狼は笑顔を見せて、その場を去ろうと背中を向ける。

「また痛むようだったら言いなぁ～お薬あげるからぁ～」
「おっおいっ…！！」
桜時が必死に呼び止めるのも聞かず、太狼はそのまま軽く手を振りながら、ベランダを出て行ってしまった。

「タローっ…」
「度重なる鬼との戦いで、あいつは何度も“人獣化”をしてねぇ…」
「えっ…？」
すぐ傍から聞こえてくる声に、桜時が勢いよく振り向く。

「よぉっ」
「どわあああああああっ！！」
桜時のすぐ横に、その体を寄せるようにして立っているトマトに、桜時が悲鳴にも似た叫び声をあげながら、勢いよく、くっついていた体を引き離す。

「おっ俺の半径一メートル以内に近づくなっ！クソババアっ！！」
「そう警戒すんなってぇ～、小娘のもんになっちまったお前を、本気で旦那勧誘したりしないよぉっ」
必死に訴える桜時に、トマトが少し困ったような視線を送る。

「私は人のもんには、手ぇ出さない主義だからねぇっ」
「さっき二五八番目の旦那にならないかって勧誘してきたじゃねぇーかよっ」

「あれは、私にとっての挨拶みたいなもんだっ」
「けっけど、ゴンには勧誘してんじゃねぇーかっ、リンゴいんのにっ」
「あいつらはダメだっ、進み具合は、お前ら以下だよぉっ？」
「そっ…そうなのかっ…？」
嘆くように言い放つリンゴに、桜時が少し呆れた表情を見せる。

「あっ！それよりタローの話っ…！」
「んっ？ああぁ、そうそうっ」
思い出したように、トマトが頷く。

「あいつ、“人獣化”し過ぎてっ、今じゃ長時間、ろくに戦ってられない体になっちまったのさっ」
「……っ」
桜時の表情に、衝撃が走る。

「そっそう…だったのかっ…」

ずっと疑問に思っていた。圧倒的な強さを誇る太狼が、何故、輝矢との旅に同行せずに、龍国でのんびりと暮らしているのか。太狼ほどの強さがあれば、桜時たちが苦戦してきた敵も、難なく倒せるはずなのに。

「それで…タローはっ…」
「ああっ」
桜時が考えていることを見通しているのか、俯いた桜時にトマトが大きく頷きかける。

「でなきゃアイツが、命より大事な小娘だけ戦わせてっ、自分はの

んびり暮してるはずがないだろうっ？」
「……っ」
トマトの言葉に、表情を曇らせる桜時。
「アイツは今でも悔いてんのさっ、小娘とともに戦えないことを、ずっとねっ…」
「……。」
太狼の気持ちを思い、桜時はどこか悲しげに俯く。
「お前に人獣化するなと言ったのも、お前に何かあれば、小娘が悲しむから」
「えっ…？」
曇らせた表情を見せるトマトに、桜時が戸惑うように首を傾げる。
「あいつはいつだって…竹取輝矢を中心に、自分の世界を回してんのさっ…」
その曇らせた表情のまま、トマトが口元だけを緩める。
「器用振ってるけどっ…大概、不器用な奴なんだよっ、あいつもっ…」
「……っ」
その言葉に、桜時は何も言うことが出来なくなり、そっと目を落とした。

第８１章　父との対面　☆３

「ふぅぅ～っ」
「あっ！太狼様っ！」
「んっ～？」
二階から降りてきた太狼に、玄関先に立っているヘンゼルが明るく声をかける。

「どうかしたぁ～？ヘンゼルっ」
「はいっ、実はお客様が参られていてっ…」
「お客～っ？」
一階の廊下へと降りた太狼が、少し眉をひそめる。

「でも今っ、この家にしては、かつてないくらいの取り込み中なんだよねぇ～」
「私もそう申したのですがっ、お客様たちがどうしても輝矢様がたとお話がしたいとっ」
「どうしてもぉ～？」
ヘンゼルの言葉に、太狼がさらに困ったような顔を見せる。

「どうかしたのですか？」
「何やぁ～？誰か来たんかぁ～？」
そこへ、リビングから輝矢とモンキが顔を出す。

「きゃあああっ！！門貴様っ！会いたかったぁぁっ！！」
「ぎゃあああっ！！さっき会ったとこやろがぁぁっ！！」
「……。」

顔を出したモンキのもとへ、ヘンゼルが突進するように駆け込んでいき、モンキの小さな体を潰さんばかりに強く抱き締める。モンキが悲鳴のような叫び声をあげる中、その光景を少し引きつった表情で見つめる輝矢。

「タロー、一体、何がっ…」
「どうかしたのかぁ～？」
「……っ」
輝矢が太狼へ問いかけようとしたその時、二階から桜時が降りてくる。

「お客さんが来たんだってぇ～」
リビングから顔を出した輝矢と、二階から降りてくる桜時に、同時に言い放つ太狼。

「お客っ？」
「客って一体、誰がっ…」
「私です…」
「へっ？」
階段を降りていた桜時が、背後から聞こえてくる不気味な声に、ゆっくりと振り返る。

「フフフっ…」
「……。」
桜時のすぐ背後に立つのは、長い黒髪の不気味な女。怪しげに微笑む女に、桜時の表情が凍りつく。

「ふぎゃあああっ！！」
激しく悲鳴をあげ、勢いよく階段を転げ落ちる桜時。

――ドンガラガッシャーンっ！

「痛てぇぇぇっ！！」

「はぁっ…」

階段から転げ落ち、言葉の通り痛そうな表情を見せる桜時に、輝矢が深々と溜息をつく。

「万亀っ」

「フフフっ…」

注意するように名を呼ぶ輝矢に微笑みかけながら、階段に立っていた女がゆっくりと一階へと降りてくる。

「まだ家の中にお通しした覚えはありませんが？」

「壁をすり抜けてきてしまいました…フフフ…」

「壁をっ…！？」

万亀の輝矢の問いへの答えを聞いて、頭を押さえながら起き上がった桜時が、顔を引きつる。

「フフフ…もう三度目なんですから、いい加減、慣れて下さいよ…桜時さん…」

「お前が普通に出てくりゃいいだけの話だろうがっ！！」

微笑みかける万亀に、強く怒鳴りあげる桜時。

「輝矢ちゃ～んっ、この子はぁ～？」

「妖怪・万年呪い亀です」

「さらりと嘘言いましたね…フフフ…」
「ああぁ～そっかぁ～」
「そして、さらりと受け入れましたね…フフフ…」
シレっと嘘を言った輝矢と、何の疑いもなく笑顔で頷いた太狼に、万亀がそれぞれ不気味に微笑みかける。

「初めまして…万亀といいます…趣味は亀国の乙姫になることです…フフフ…」
「趣味だったのかっ…」
太狼の方を向き、自己紹介をする万亀に、桜時がこっそりと突っ込みを入れる。

「亀国のお姫ちゃんが、うちに何の用ぉ～っ？」
「いえっ…用があるのは私ではなく…」
太狼の問いかけに答えながら、万亀が部屋の入口の方に目をやる。

「彼らが…」
『へっ…？』
「きゃあああっ！！桜時様ぁぁっ！！」
「うげぇっ！？泡美ぃぃっ！？」

そう黄色くもない悲鳴をあげながら、勢いよく桃原家へと駆け込んできたのは、鯨国主の息子・泡美であった。満面の笑顔で走り込んでくる泡美に、桜時が思いきり顔を引きつる。

「御伽湖での鬼退治手伝ったからぁっ、桜時様っ、泡美とデートしてぇっ！！」
「するかぁぁっ！！」

「モテるねぇ～っ、ハチくんっ、さっすがぁ～っ」
「ゲイにモテても、嬉しかねぇーわっ！！」
デートを迫る泡美と、何やら嬉しそうに親指を突き立てる太狼に、桜時が次々と突っ込みを入れていく。

「おサルくぅ～んっ！」
「げっ！宇凪っ！」
泡美に続くようにして桃原家へと入って来る宇凪に、ヘンゼルに抱っこされたままのモンキが、勢いよく顔を引きつる。

「おサルくぅ～んっ！僕とデートしに行かないかぁ～いっ？」
「ああんっ！？」
モンキをデートに誘う宇凪の発言に、ヘンゼルが男に戻ったような低い声を出し、顔をしかめる。

「私の許可もなしにっ、門貴様になぁ～に親しげに口きいてんのよぉっ？あんたっ」
「んんっ？君こそっ、僕のおサルくんに、馴れ馴れしく触らないでくれないかぁ～いっ？」
「あああぁぁんっ！！？」
モンキを挟んで向かい合ったヘンゼルと宇凪の間に、激しい火花が散る。

「女の戦いならぬ、男の戦いですね…」
「うわぁ～っ、全然羨ましくなぁ～いっ」
男ばかりの三角関係を、輝矢と太狼は、冷めた目で見守る。

「桜時様ぁ～っ！泡になるまでっ、泡美を愛してぇ～っ！！」
「いっやあああああっ！！」
アプローチというよりは、飛びかかって来る泡美に、桜時が頭を抱えてしゃがみ込み、激しい悲鳴をあげる。

「私のハチに近寄らないで下さいっ」
「ぐはあああっ！！」
輝矢が軽くあげた右足が、桜時に飛びかかろうとしていた泡美の腹部に、直撃する。

「ぐっぐぷっ…」
「へっ？」
その場に倒れ込む泡美に、目を丸くして顔を上げる桜時。

「あっ、用件聞く前に気絶させちゃいましたぁ～っ」
「お前ねっ…」
茶目っけたっぷりに言い放つ輝矢に、桜時が冷たい視線を送る。

「ひぎゃあああっ！やっぱり化け物だぁぁっ！！」
「ああっ！待ていぃ～っ！！渦礼っ！！」
「……っ？」
泡美、宇凪に続いて桃原家へと入って来ていた渦礼が、悲鳴をあげて玄関を飛び出していくと、玄関に入ろうとしていた岩士が、それを追っていく。

「何ですぅ～？人を“化け物”呼ばわりして、失礼なっ」
渦礼たちの出て行った扉の方を見ながら、輝矢が少し顔をしかめる。

「私が一体、何をしたって言うんですかっ」
「お前…一回、アイツ、殺しかけたからな…」
文句を言い放つ輝矢の横で、ひっそりと肩を落とす桜時。

――アハハハハハっ…！！――

海底都市で、その水力を暴走させた輝矢は、意志を失い、戦っていた渦礼をもう少しのところで殺すところだったのである。

「まぁあの反応は無理もねぇーよっ…」
桜時がどこか、渦礼を同情するかのように呟く。

「それで？話というのは何なのですか？」
「えっ…？えぇ～っと…」
改めて輝矢に問いかけられ、万亀が少し困ったように周囲を見回す。

「ぐっぐふっ…」
「だから門貴様は私のものであってぇっ…！」
「いつからおサルくんが、君のものになったっていうんだいっ…！？」
「……。」
輝矢に攻撃され、倒れてしまった泡美、ヘンゼルとモンキを取り合っている宇凪、そして渦礼と岩士は、先程部屋を出て行ってしまった。

「はぁ…仕方ありませんねぇ…では、私から話しますか…」
「それなら、あの人たち、連れてくる必要なかったんじゃないのぉ？」
深々と肩を落とす万亀を見ながら、太狼が呆れたように問いかけた。

改めて、桃原家・リビング。
「うぅ～んっ…」
ソファーに座った万亀の膝の上へと乗った犬孝が、固く腕組みをし、気難しげな表情を見せる。

「やっぱり俺は輝矢ちゃんの膝の上の方がいいなぁっ、というわけで、輝矢ちゃ～んっ！」
「……っ」
「ぐほおおおうっ！」
輝矢のもとへ飛び込んでくる犬孝を、輝矢が突き出した右手で思い切り吹き飛ばす。

「ぐっぐふっ…！見事なパンチっ…」
「はぁっ」
床に倒れ込みながらも、輝矢のパンチを誉め称える犬孝を見なが

ら、桜時が深々と溜息をつく。

「会えないままの方が幸せだったかも知れない…」
「ハチがアナタに似てなくて良かったと、心の底から思います」
「うわぁっ…何か地味に傷つくなぁっ…お前たちっ…」
しみじみと呟く桜時と輝矢に、犬孝がショックを受けた表情を見せる。

「じゃあ万亀ちゃんっ、お話どうぞぉ～っ」
「わかりました…フフフ…」
太狼に笑顔で振られ、万亀が不気味に微笑みながら頷く。

「フフフ…では早速…昔々、あるところに…」
「万亀、私たちが聞きたいのは、怪談話ではありません」
「ああ…そうでしたね…フフフ…」
輝矢の指摘を受け、万亀が、怪しげな笑みを浮かべながら、ゆっくりと話を始める。

「実は鯨国の方々が…鬼が島の真下の海域で…おかしなものを見たと言っていましてね…」
「おかしなものっ？」
「鬼が島の真下の海域っ…？」
万亀の言葉に、皆が眉をひそめる。

「ええ…それが…私も見に行ったのですが…どうも国か町の跡のようでして…フフフ…」
「国か町の跡っ？」
「相当に古く、すっかり廃墟と化して人影もありませんでしたが…

かなり大きな都市だったと思われます…」
「大きな都市の廃墟っ？海底にぃ？」
続く万亀の話に、桜時が少し混乱したように首を傾ける。

「それって…」
「何か思いつくことでもあるのか？太狼」
「ああぁ～はい、まぁ」
犬孝に問いかけられた太狼が、少し躊躇いがちに頷く。

「タロー、思いつくことって…」
「うんっ、たぶん、それっ」
同じように何かを思いついたような表情を見せる輝矢に、太狼が今度は大きく頷く。

「何だよっ？一体、何だってっ…」
「それはたぶんっ、鬼人一族たちの都市の跡だよぉっ」
『えっ…！？』
太狼の言葉に、皆が驚きの表情を見せる。

「鬼人一族の都市跡だってっ…！？」
「うん、たぶんっ…ってゆうか、結構間違いないと思うぅ～」
動揺しながら聞き返した桜時に、太狼がのんびりと答える。

「何故、そう思うんだっ？」
「昔、朝日から聞いたことがあるんですよぉ～」
問いかける犬孝に、太狼が笑顔を向ける。

「鬼が島は海底火山の噴火で御伽湖に浮かんだ島であって、それまで鬼人一族は海底で暮らしてたってっ」

「そっそっかっ！噴火で都市の一部だけが、地上に上がってっ…！」
「その時、共に上がってきた一部の鬼人一族が、黒鬼一族や白鬼一族の祖先となったということか…」
太狼の言葉に、桜時や犬孝が納得したような表情となる。

「しかし鬼が島が浮上したのは、千年以上も前のことだと言われています…」
気難しい表情を見せた輝矢が、そっと口を開く。

「そんなに長い間、しかも海底で…都市の跡が残っているなんてっ…」
「確かに考えにくいねぇっ」
「鬼が島海深部は…海を生きる我々にとって、“聖域”とされている場所です…フフフ…」
「……っ？」
輝矢が首を捻っていたところへ、万亀が不気味に口を挟む。

「海は非常に穏やかな上…海の生物は何ものであっても一切、近づきません…フフフっ…」
「千年前の都市の跡が残ってても、おかしくねぇーってことかっ」
万亀の言葉を聞き、桜時が呟く。

「っつーか、んな“聖域”とやらに、お前ら、何しに行ったんだよっ？」
「えっ？」
桜時の問いかけに、ソファーの後ろで、まだヘンゼルと、モンキをかけた睨み合いをしていた宇凪が、目を丸くして振り向く。

「いやぁ、泡美が、“聖域にはきっと聖域を守るイケメンがいるに

違いないから探しに行こう”ってっ」
「はぁっ…」
「とんでもなくバチ当たりな奴らだなぁっ」
宇凪の答えに、桜時が深々と溜息をつき、ゴンが呆れきった声を出す。

「ゲイどもと聖域を見に行った時に丁度…御伽湖上で鬼に囲まれてる桜時さんたちを発見いたしまして…」
「それで、助けてくれたってわけかっ」
「ええ…フフフっ…」
微笑みかける桜時に、万亀も得意げに笑ってみせる。

「そのお礼に…貴方のお命…いただけませんか…？」
「ひぎゃあああああっ！！」
不気味な空気を纏って問いかける万亀に、桜時がまた激しい悲鳴をあげる。

「でぇ～？その都市跡を見つけたってだけが用件なのぉ～？」
「だけってお前…」
「いえっ…」
「……っ？」
太狼の問いかけに、一気に曇る万亀の表情。今まで見せたことのない万亀の表情に、桜時が少し眉をひそめる。

「その都市跡付近に…さらにおかしなものを見ましてね…」
万亀が真剣な表情を見せ、少し低くした声で呟く。

「おかしなもの…？」
「それは…一体っ…」
皆が万亀へ、戸惑いの視線を送る。

「数えきれない程多くの…“巨大な繭”です」
『……っ！』

その答えに、走る衝撃。

「きょっ…巨大な繭って…まさかっ…」
「牢戸知玖の…力の一部っ…」
「数えきれない程だとっ…？内兎一人相手でも、あんなに苦戦したってのにっ…」
「……。」
皆が声や肩を震わせ、その額から汗を流す中、険しい表情を見せた輝矢が、そっと目を落とす。

「そうかっ…封印の爆発の時に、封じた力が海底へと落ちて…」
犬孝が眉をひそめ、言い放つ。

「盲点だったなっ」
「そうですかぁ～？結構、ありふれた感じですけどぉ～」
厳しい表情で呟く犬孝に対し、太狼が明るい口調で首を傾げる。

「その繭が…何やら蠢いていたとでもいいますか…」
『……っ』

言葉を続ける万亀に、皆が顔を上げる。

「もうすぐ生まれるような…そんな胎動をしていたんです…」

さすがの万亀の額からも、一筋の汗が流れ落ちる。

「その影響かはわかりませんが…穏やかだったはずの聖域の海が…最近、やたらと荒れていて…」

「封印が解けるのも目前ってわけかぁ～」

「クソっ…！」

暢気に言う太狼とは対照的に、ゴンが強く拳を握り締めた。

第８１章　父との対面　☆４

「今でも勝てねぇーってのにっ…！力なんか復活しやがったらっ…！」
「だが、これはチャンスでもある」
「へっ？」
強く拳を握り、険しい表情を見せていたゴンが、聞こえてくる声に目を丸くし、首を傾げる。

「トマト先生っ！」
ゴンが振り向くと、そこには、またしても、いつの間にか現れたトマトが立っていた。

「クソババア、チャンスとは？」
輝矢が、戸惑うようにトマトの方を見る。

「場所が知れたんだっ、力の封印が解ける前に、その力を消し去ることも可能だろうっ？」
「あっ、そっかっ」
「けどバアさんっ、相手は牢戸知玖の力やでぇ～？早々、簡単に消し去れんやろぉ～っ」
「そうですよ、トマト先生。第一、それが出来てたら、ナイトの時にやって…」
「……っ」
「へっ？」
トマトが犬孝の言葉を遮り、とある方向を指差す。

『えっ…？』

差された指の先には、戸惑いの表情を見せた輝矢と桜時の姿があった。

「そうかっ！輝矢んの月器とっ…！」
「ハチ公の命力っ！」
「ああっ、こいつらの力なら、シルクの力を吹っ飛ばすことも可能なはずだ」
「おっ俺っ…？」
「……っ」
一斉に皆の視線を受けて、桜時が少し困惑した様子を見せ、輝矢がそっと目を落とす。

「この二人が海底に行って、シルクの力を、封印が解ける前に消し去ればいいっ」
差した指を引っ込め、トマトがはっきりと言い放つ。

「繭の場所まで、案内できるかい？亀の姫様っ」
「ええっ…フフフ…」
トマトの言葉に、万亀がしっかりと頷く。

「お言葉ですが、トマトさぁ～んっ」
「あっ？」
口を挟む太狼の方を、振り向くトマト。

「シルクが狙ってるハチくんを、わざわざシルクが来るかも知れないような危険なところに行かせるのは、どうかと思うんですけどぉ～」

「シルクの力が復活しちまえば、誰の手にも負えなくなるっ」
トマトが軽く笑みを浮かべ、強く言い放つ。

「そうすりゃ、どっちみち桜時の力はあの女に奪われるっ」
「……っ」
トマトの言葉に、桜時が少し眉を引きつる。

「だったら少しでも、足掻いた方がマシだろうっ？」
『……っ』
その微笑み、その言葉に、険しい表情を見せていた皆が、一気にハッとした表情となる。

「決めんのはお前だがぁ…どうするっ？桜時っ」
「へっ？」
急に問いかけられ、桜時が目を丸くする。

「……っ」
少し俯いた桜時が、考え込むような表情を見せる。

「もっ勿論やるっ！やるさっ！俺も何が何でも足掻くっ！！」
「よし、さすがは私の旦那候補だ」
「誰が旦那候補だっ！！」
満足げに微笑むトマトに、桜時が勢いよく突っ込みを入れる。

「さてっ、問題はお前だねぇっ、小娘っ」
「……っ」
次にトマトの視線が輝矢へと向くと、輝矢が少し顔をしかめる。

「かっ輝矢はダメだろっ！海中なんか行ったりしたらっ…！」
「わぁかってるよっ」
必死に訴える桜時に、トマトは冷静な表情を見せる。
「誰も、水力が暴走する小娘を行かせやしないよっ」
「……っ」
トマトの言葉に、眉を引きつる輝矢。

「いえっ、私も行きます」
「はぁっ！？」
強い表情で言い放つ輝矢に、桜時が驚きの声をあげる。
「なっ何言ってんだよっ！？輝矢っ！ババア相手にムキになってる場合じゃっ…！」
「別にムキになっているわけではありませんよ」
「えっ？」
冷静に答える輝矢に、首を傾げる桜時。

「今回は何となくイケそうな気がするんです」
「すんげぇー曖昧っ！！」
その適当な答えに、桜時は大きく目を見開いて驚く。

「大丈夫です。いざとなったら、愛のパワーで乗り切りましょうっ、ハチっ」
「乗り切れるかぁっ！！観測でものを言うなっ！！」
「はぁ～あっ…」
輝矢と桜時の会話を聞きながら、ユキジが呆れたように溜息をつく。

「ダメだねぇ～あれじゃあっ」
「せやなぁ～」
「けどっ、ハチ公一匹よりは、玄神の力を持った竹取も行けた方がいいだろうしなぁ…」
「んん～っ…んっ？玄神っ？」
『……っ？』
唸っていたモンキが、ふと何か思いついたような顔を見せると、隣にいたユキジとゴンが同時に振り向く。

「玄神っ…玄上…」
「んだよっ？サっ…」
「そうやぁぁっ！！」
「どわあああっ！！」
問いかけようとしたゴンが、いきなり大声を出すモンキに、激しく驚く。

「んだよっ！！いきなり大声出すんじゃねぇーよっ！！びっくりすんだろうがっ！！」
「ゴンにだけは言われたくないよねっ…」
「太狼やっ！！太狼っ！！」
『へっ？』
『……っ？』
声を張り上げるモンキに、二人や皆が首を傾げる。

「太狼が一緒に行けばいいんやっ！そしたら輝矢んの力も抑えられるからっ、輝矢んも行けるやろっ！？」
「あっ、そっかぁ～っ」
「サルにしては名案だなぁ～」
「やろっ！？」
感心したように言うユキジとゴンに、モンキが得意げに笑いかけ

る。

「なぁっ！？ええやろっ？太っ…！」
「……。」
「太狼っ…？」
浮かない表情で俯いている太狼に、モンキが戸惑ったような表情を見せる。

「太狼っ、どないかしたんかぁ～っ？」
「言っとくけど、“海水はしょっぱいから嫌ぁ～”とかはなしだからねぇ～っ？」
俯いたままの太狼に、モンキとユキジが次々と声をかける。

「あっ…」
その時、桜時が思い出したように声を漏らす。

――人獣化し過ぎてっ、今じゃ長時間、ろくに戦ってられない体になっちまったのさっ……――

先程トマトから聞かされた、太狼の事実。

「……っ」
桜時がそっと、眉をひそめる。

「おっおいっ！よせっ！タローはっ…！」

――パァァァーンっ！

「へっ？どわあああああっ！！」

『……っ』

リビングの大窓のガラスが、勢いよく砕け散り、桜時が驚きの声をあげる。割れたガラスに、皆が一斉に窓の方を振り向く。

「……。」

「あっ…」

大窓を砕き割って、部屋の中へと入って来るその人物に、目を見開く輝矢。

「アっ…アリス…？」

「……。」

輝矢が見つめるその先には、どこか近寄り難い顔つきを見せたアリスが立っていた。そんなアリスを、輝矢が少し戸惑うように見つめる。

「ホントに客の多い家だなぁ～」

「またガラスが…」

感心する犬孝の横で、どこか悲しげに呟く太狼。

「アリスっ…？」

輝矢がもう一度戸惑うように名を呼ぶ中、窓を砕き割って入ってきたアリスが、輝矢のもとへと歩み寄ってくる。

「アリスちゃんも龍国に来てたんだぁ～？」
「ええ、オトポリと一緒に竹取たちを運んで…」
太狼の問いかけに、ゴンが答える。

「もう武国に帰ってるかと思ってたんですけどっ…」
「……。」
「アリス…」
すぐ近くの距離で向かい合い、まっすぐに見つめ合う輝矢とアリス。

『……っ』
見守る皆が、どこか不安げに息を呑む。

「アリス、家にあがる時は、靴を脱いで下さい」
『だあああああっ！！』
アリスの足元を指差し、注意する輝矢に、皆が気の抜けた様子でズッコケる。

「それもそうねぇっ」
『素直だなっ！！』
あっさりと靴を脱ぐアリスに、皆が同時に突っ込みを入れる。

「輝矢っ…」
今度はアリスが、鋭い瞳を見せながら、輝矢に呼びかける。

『……っ』
再びゴクリと息を呑む皆。
「話はすべて聞かせてもらったわぁ」
「盗み聞きですか？感心しませんねぇ」
「聞こえるように話す方が悪いのよぉ」
『だあああああああっ！！』
輝矢の言葉に、またしても皆がコケる。
「ついこの前、殺し合いみたいなことしてたってゆーのにっ、すっごい緊張感のなさぁ～っ」
「っつーか、また神器同士で喧嘩おっぱじめんじゃねぇーかぁっ？あいつらっ」
床に転んだユキジやゴンが、呆れきった表情で輝矢たちを見る。
「月器を出しなさぁ～いっ」
「えっ？」
アリスの言葉に、輝矢が目を丸くする。
「もう一度戦う気ですか？ならせめて、家の外で…」
「違うわよぉっ！！いいから、とっとと月器を出しなさぁ～いっ！」
「そういう責めるような口調でしか、ものが言えないのですかぁ～？アナタはぁ」
輝矢が呆れたように言いながら、右耳のピアスに手をかける。
「“月器・三日月”っ」

ピアスを弾き、月器を目覚めさせる輝矢。

「出しましたけどぉ？」

「……っ」

「……っ？」

輝矢が三日月を持ったことを確認すると、アリスが懐から何かを取り出す。

『あっ』

それは、銀色の懐中時計。

「“針器・六刻”っ」

アリスが時計の針を弾き、輝矢と同じように、針器を目覚めさせる。

「ちょっとぉ～っ！針器出しちゃったよぉ～っ！？」

「やっぱもう一回戦う気かっ！？あいつっ…！」

「……っ」

『へっ？』

警戒するように身構える桜時たちに、制止を促すように手を差し出す太狼。

「針器っ」

「えっ…？」

アリスが目覚めさせた六刻を、輝矢の持つ三日月へと重ね合わせる。

――パァァァっ！

「……っ！」

二つの神器が重なり合った途端、月器と針器が、強い金と銀の光を発する。その光に、驚いた表情を見せる輝矢。

「アリスっ…！何をっ…！」

「いいから、黙って見てなさぁ～いっ」

戸惑うように問いかけようとした輝矢に、アリスが強く言い放つ。

『うっ…！』

月器と針器を包む光が徐々に強まり、あまりの眩しさに、輝矢や皆が思わず目を伏せる。

――パァァァァンっ！

やがて大きな音がすると、強い光は止んだ。

「……っ？」

光が止んだことに気づき、輝矢が閉じていた瞳を、ゆっくりと開ける。

「あっ…！」

『……っ？』
驚いたような輝矢の声に、他の皆も目を開く。
「こっこれはっ…」
自分の右手に握られた武器を、ゆっくりと掲げる輝矢。それは、三日月と同じ曲線を描いた剣であったが、持ち手の部分は針先のような形に変わっており、刃の色も金と銀が混ざり合っていた。美しく輝くその武器を、輝矢が戸惑うように見つめる。
「いっくらあなたの月器より弱いとはいってもっ、針器も立派な玄神の神器よぉっ」
「……っ？」
輝矢がその武器から、口を開いたアリスの方へと視線を移す。
「それで玄神の力も強まるでしょうからぁっ、少しは水力の暴走を抑えられるんじゃなぁ～いっ？」
「えっ…？」
アリスの素っ気ない言葉に、輝矢が驚きの声を漏らす。
「大切に扱いなさいよぉっ、じゃあねっ」
「あっ」
「……っ」
輝矢が止める間もなく、アリスは、割って入ってきた窓を再び通って、家の外へと出て行った。
「……。」

アリスの出て行った窓を、輝矢が少し茫然と見つめる。

「何だぁ～？あいつっ」

一瞬で帰っていったアリスに、輝矢の横に立った桜時が、顔をしかめる。

「っつーかあいつっ、お前にちゃんと謝ったのかぁっ？」

「えっ？いえっ…」

「はぁ～っ？謝るために一緒に龍国来たんだろうにっ、何やってんだかっ！」

「……。」

呆れたように言い放つ桜時の横で、そっと目を落とす輝矢。

「……いいんです…」

「へっ？」

ポツリと呟く輝矢に、桜時が首を傾げる。

「謝ってもらうより…これの方が、ずっと嬉しいですからっ…」

月器と針器から出来たその武器を見つめながら、輝矢は本当に嬉しそうな笑みを浮かべていた。

「……そうかっ」

そんな輝矢を見て、桜時も笑う。

「よぉ～しっ！これで竹取の問題も解決したしっ、ちったぁ希望が

見えてきたなぁっ！」
「せやなぁ～っ！要は、二人がシルクの力消し去るまでの間っ、俺らが守り切ればええんやろぉ～っ？」
「もしシルクが現れてもっ、ボクらで束になってかかれば、そのくらいの時間稼ぎはっ…！」
「お前たちは留守番だよっ」
『へっ？』
放たれたトマトの言葉に、しばしの間、固まるモンキとユキジ。

『えええぇぇっ！？』
「うるさいねぇ～」
激しく不満げな声をあげる二匹に、トマトが勢いよく顔をしかめる。

『なっなんでっ！？』
「海中じゃあ力が半減しちまうお前らなんか、行ったって仕方ないだろうがっ」
トマトが、理由を求める二匹に、冷たく言い放つ。
「だったらコイツらっ、海中に慣れてる奴らが行った方がマシだよっ」
万亀や、倒れている泡美の方を指差すトマト。

「そっそんなぁ～っ」
「俺ら、結構、強なってんでぇっ！？」
「鬼人でもない奴ら相手に死にかけてるようじゃあ、シルク相手に、時間稼ぎも出来やしないよっ」
『うっ…』
トマトに言い負かされ、ついに言葉を無くすモンキとユキジ。

「そうだそうだっ、お前らは大人しく留守番しとけぇっ！」
「お前もだよっ、ゴン」
「えええぇっ！？」
『うわっ』
二匹と同じようにトマトに言い放たれ、大きく目を見開いたゴンが、驚きを強く表現した叫び声をあげる。その大声に、周囲にいた皆が一斉に、耳を塞いだ。

「なんでっ！？」
「火力使いなんか、一番いらねぇーだろうがっ、当ったり前だろうっ？」
「そんなぁ～っ！！トマト先生っ…！！」
「お前は大人しく、オトポリ業務でもこなしてなっ」
子供っぽく泣きつくように声を出すゴンに、トマトが容赦なく冷たく言い放つ。

「クッソっ…！じゃっじゃあリンゴに言って、オトポリから水にも耐えられる精鋭部隊をっ…！」
「んなにゾロゾロで行ったって、無駄に目立つだけだよぉっ、死人がズラズラ出て運ぶのも面倒だしねぇ～」
「そっそうかっ…」
トマトから返ってくる正論に、ゴンが少し元気をなくしたように、肩を落とす。

「けどっ、俺もユッキーもゴンゴンも行かへんのやったらぁ、他に誰が行くんやぁ～っ？」
「そうだよぉ～っ、二人だけじゃ敵が現れた時に厳しいよぉ～っ？」
「それなら問題ないっ」
問いかける二匹に、トマトが得意げに答える。

「この二人とはっ、私が行くっ」
『へっ？』
トマトの答えに、固まるモンキとユキジ。
『えぇぇぇっ！？』
二匹に桜時やゴンも混ざり、驚きの声をあげる。
「腐ったものでも食べたんですか？クソババアっ」
「失礼だねぇっ、そんなに私が行くのがおかしいってのかいっ？」
「だって出不精だし…」
「自分に利のないことなんて、死んでもしなそうだしぃ～」
顔をしかめるトマトに、桜時たちが次々に呟く。
「利…ねぇ…」
「……っ？」
少し表情を曇らせて呟くトマトに、輝矢が眉をひそめる。
「けどバアさん、大丈夫なんかぁ～っ？」
「問題ないねぇっ、私、お前らより三百倍は強いしっ」
「三百倍っ…」
「否定出来ねぇーところが怖ぇーっ…」
トマトの言葉に、モンキとゴンがげっそりとした表情を見せる。

「けど、さすがにもう一人くらい戦える奴が欲しいねぇ～」
「あっ！それなら、俺が行きますよぉっ！」
周囲を見回すトマトに、犬孝が手をあげて、名乗りをあげる。

『ええぇぇぇ～っ？』
「冷たい反応だなぁ～お前たちっ」
あからさまに嫌そうな顔をする輝矢と桜時に、犬孝が少し悲しげに微笑む。

「俺でいいでしょうっ？トマト先生っ」
「そうだねぇ、お前の創力なら海中でも問題ないしぃっ」
犬孝の言葉を、トマトはあっさりと受け入れる。

「まぁホントはもっと若くて、活きのいい好青年が良かったんだけどねぇっ」
「悪かったですねっ、オヤジでっ」
ひっそりと呟くトマトに、犬孝が少し顔をしかめる。

「じゃあメンバーも決まったことだし、とっとと行くよぉっ、準備しなぁっ」
「おうっ」
「はい」
トマトの呼びかけに、輝矢と桜時が返事をする。

「お前たちは海岸で待っててくれ」
「わかりました…フフフ…」
振り向くトマトに、不気味に頷く万亀。

「これが最後の戦いになるようっ、気合い入れていくよっ！お前らっ！」
『……っ』
トマトの掛け声に、皆、緊張感迫った表情を見せた。

御伽界のどこか。牢戸知玖・居城。シルクの部屋。
「フフフ…フフフ…」
部屋の中に、響き渡る笑い声。

「聞こえる…聞こえるわ…」
寝台に横たわったシルクが、体を仰向けにし、天井へ向けてゆっくりと右手を伸ばす。

「私の…力の…胎動…」
うっとりするように、シルクがその赤い瞳を閉じる。

「もうすぐ…もうすぐね…」
瞳を閉じたシルクが、何かを感じ取るような表情を見せる。

「……っ」
そして再び、赤い瞳は開かれる。

「機は熟したわ…」
寝台の上から立ち上がり、足を進めるシルク。

「私の力を迎えに行く…」
シルクが部屋の出口へと、歩いていく。

「ついていらっしゃい…諸刃…ギン…」
『はい…シルク様…』

出口脇に立っていた諸刃とギンが、部屋を出るシルクへと続いた。

第８２章　深海に眠る力　★１

龍国・海岸沿い。

「はぁぁ…まぁ～た海底かっ…」

砂浜に立った桜時が、何となく乗り気でない声を出す。

「大丈夫だぁ～っ！桜時ぃ～っ！父さんがついてるぞぉ～っ！」

「今度は入った途端、溺死しそうになることはないだろうなぁっ？」

「大丈夫ですよ…空気石はバッチリ持ってきましたから…フフフ…」

得意げに言い放つ、いつの間にか人化した犬孝の呼びかけを受け流して、桜時が万亀と会話をする。

「ふはああっ！息子が反抗期をっ…！輝矢ちゃ～んっ、慰めてぇ～っ！」

「そんなんだから無視されるんですよ…」

今にも泣きそうな顔を見せる犬孝に、輝矢が呆れきった視線を向ける。

「じゃあ行くかぁ」

メンバーが揃ったところで、トマトが仕切るように声をあげる。

「ああっ、そうだ、太狼っ」

『……っ？』

何やら思い出したような声を出したトマトが、見送りに来ている太狼のもとまで歩み寄っていき、周囲に聞こえないようにひそひそと話す。その様子を、戸惑うように見つめる輝矢と桜時。

「じゃあ頼んだよっ」

「はぁ～いっ」
太狼が頷いたのを確認すると、トマトが再び、輝矢たちのもとまで戻って来る。

「何、話してたんだぁっ？」
「私の旦那になれって話だよ」
「んないっつも話してることっ、この状況下で言ってんじゃねぇーよっ！！」
「……っ」
トマトの答えに桜時が勢いよく突っ込みを入れる中、輝矢が少し考え込むように眉をひそめる。

「じゃあホントに行くかぁ」
「はぁぁ～いっ！！」
その言葉に、海の方から、やけに明るい声が返って来る。

「どんどん乗ってぇ～っ！！桜時様ぁぁ～っ！！」
『……。』
海から顔を出している、一匹の大きなクジラを見て、思わず固まる輝矢と桜時。

「ホントに泡美に乗ってくのかぁ～？」
あからさまに嫌そうな表情で、万亀へと問いかける桜時。そのクジラは鯨人・泡美の、鯨化した姿であった。
「私が乗せていってもよろしいのですが…」
万亀がゆっくりと口を開く。

「泡美と同じスピードを出そうと思うと…相当な回転が加わりますよ…？」

「泡美で行こうっ」
「フフフっ…」
あっさりと決断する桜時に、万亀が不気味に微笑む。

「ひえええっ！来るなっ！化け物ぉっ！！」
「うるさいですねぇっ」
輝矢が泡美の大きな頭の上へと乗り込むと、すでに乗っている渦礼が、輝矢を見て、恐怖の叫び声をあげる。

「殺しますよ？」
「ひえええええっ！！」
「それがいけねぇーんだってっ」
脅迫めいたことを口にし、渦礼をさらに怯えさせる輝矢に、呆れた視線を送りながら、桜時も泡美の頭の上へと乗り込む。

「人魚姫は王子様を頭の上へ乗せてっ、天竺へと向かいましたとさぁ～っ！」
「何か…色々違くないっ…？」
桜時が頭の上へと乗り込み、うっとりとしているクジラの泡美へ、宇凪がこっそりと突っ込みを入れる。桜時に続くようにして、万亀、トマト、犬孝が次々に泡美の上へと乗り込んだ。

「んじゃあ行ってくるから、後は頼んだよぉっ」
「はいはいっ、お気をつけてぇ～」
声をかけるトマトに、太狼が軽く手を挙げる。

「心配するなぁっ！太狼っ！二人には、俺がついてるっ！」
「輝矢ちゃ～んっ、気をつけてねぇ～っ」

「ふはあああっ！！太狼まで無視したっ！！」
桜時と同じように犬孝の言葉を完全に無視する太狼に、犬孝が激しくショックを受ける。

「はいっ、いってきますっ、タローっ」
「……っ」
微笑みかける輝矢に、太狼も穏やかな笑みを零す。

「あっ、ハチくんは別に気をつけなくていいからぁ～っ」
「おおおいっ！！」
急に軽い口調へと変わる太狼に、桜時が勢いよく突っ込みを入れる。

「絶対っ、無事に帰って来てやるっ！！」
「そのいき、そのいきぃ～っ」
ムキになって言い放つ桜時に、太狼が適当に言葉をかける。

「……っ」
ふと、その表情を曇らせる桜時。

――あいつは今でも悔やんでんのさっ…小娘と一緒に戦えないことを、ずっとねっ……――

「……。」
トマトの言葉を思い出し、桜時がそっと目を落とす。

「タローっ！」
「えっ？」
急に強く呼びかける桜時に、太狼が少し目を丸くして顔を上げる。

「まっ…任しとけっ！！」
「はっ…？」
桜時が妙に気合いの入った表情で言うと、太狼が間の抜けた声を出す。

「じゃあいっきまぁ～すっ！！」

――ザッパァァーーンっ！

今からどこへ行くのかを認識していないような明るい声を出して、輝矢や桜時、皆を乗せた泡美は、その大きな尾を翻し、辺りに激しく水飛沫を撒き散らして、海の中へと姿を消していった。

「あぁ～あっ、もう冷たいなぁ～っ」
髪や服にかかった水を払いながら、砂浜に一人残った太狼が、少し顔をしかめる。

「それにしてもぉ～」

――任しとけっ！！――
海を見つめた太狼が、桜時の言葉を思い出す。

「何だったんだろ、あれっ…とりあえず、すんごいイラっとしたなぁ…」
引きつった表情で、太狼がしみじみと呟く。

「……っ」
太狼が少し、目を細める。
「また余計なこと言ったのかねぇ…トマトさんってばっ」
そう呟き、力の抜けた様子で肩を落とす。

「太狼さん」
「……っ？」
その時、背後から自分の名を呼ぶ声が聞こえ、太狼がゆっくりと振り返った。

「ゴンっ」
「……。」
太狼が振り返った先に立っていたのは、どこか厳しい表情を見せたゴンであった。

「何だぁ～っ、君も見送りに来たのぉ～？でも残念っ、もうみんな行っ…」
「俺に、“人獣化”を教えて下さい」
「……っ！」
ゴンの言葉に驚き、太狼が大きく目を見開く。

「はぁっ…」
その表情に落ち着きを取り戻し、深々と溜息をつく太狼。

「ハチくんとの会話を盗み聞いてたってわけぇ～？あんまり感心しないなぁ～っ」
「俺っ、人から感心されることって、出来ない性質（たち）ですからっ」

「そうだったねぇ…」
頷きながら、太狼が呆れたように肩を落とす。
「でもなんでっ？輝矢ちゃんたちが上手くやれば、この戦いは終わるっ」
太狼が鋭い視線を、ゴンへと向ける。
「もう力も必要なくなるかも知れないのに、命の危険を犯してまで人獣化する意味なんてっ…」
「いくら力を吹き飛ばしたって、牢戸知玖自体は倒さなきゃならないっ」
ゴンも太狼へ、真剣な表情を見せる。
「それにっ…」
そっと眉をひそめ、俯くゴン。
――波跡には通じても…この俺には通じない……――
天狼丸を手にして、修行をしても、勝てなかった相手。
「俺にはまだっ…越えなきゃならない奴がいるっ…」
「……。」
少し震えた声で言い放つゴンに、太狼がそっと目を細める。ゴンが言っている相手が、諸刃だということがわかったのだろう。弟・次狼の仇をとろうとしているゴンを、太狼は止めることも出来なかった。

「仕方ないなぁ～っ」
「えっ…？」
太狼が発する声に、ゴンが少し焦ったように顔を上げる。
「じゃっじゃあっ…！」
「相当に面倒だけどねぇ～っ」
嬉しそうに笑みを零すゴンに、言葉の通り面倒臭そうな表情を見せる太狼。

「三人も、いっぺんに教えるなんてさぁ～」
「へっ？三人っ？」
太狼の言葉に、ゴンが笑みを止め、眉をひそめる。

「抜けがけはあかんでぇ～っ？ゴンゴぉ～ンっ」
「……っ！」
後方から聞こえてくる声に、ゴンが勢いよく振り返る。

「お前らっ…！」
「久し振りぃ～っ！」
「さっきまで会ってたでしょ～？バカっ」
ゴンが振り返ると、桃原家の方からやって来る門貴と由雉の姿があった。明るく笑いかける門貴に、由雉が呆れきった視線を向けている。

「ゴンだけ強くなるなんて、許さないよぉ～っ？」
「個人的にっ、イヌコロが出来て、俺が出来へんていうのは癪やからなぁ～っ！」
「お前らっ、あのなぁっ…！」

勢いよく顔をしかめたゴンが、二人の方へと歩み寄っていく。

「聞いてたんだろっ！？“人獣化”ってのはっ、命の危険が伴うんだぞっ！？」

「けどっ、ゴンはやるんでしょ～っ？」

「俺には命懸けてでも戦う理由があるんだよっ！！」

「ボクたちに、命懸けてでも戦う理由がないって思ってんのっ？」

「……っ」

鋭い表情で言い放つ由雉に、ゴンが思わず言葉を止める。

「そっ…それはっ…」

少し目を落としたゴンが、言葉に詰まる。

「ボクたちは戦うっ。最後まで」

「竹取輝矢のお供としてっ、命を懸けてなっ」

「お前らっ…」

一切の迷いのない瞳で、笑みを浮かべながら言い放つ門貴と由雉に、ゴンがそっと目を細める。

「やれやれ、だねぇ～っ」

『……っ？』

聞こえてくる太狼の声に、三人が同時に振り向く。

「彼らを止める権利はないよ、ゴンっ」

軽い笑みを浮かべた太狼が、まっすぐにゴンを見つめる。

「君にも僕にもっ…」

「……そうみたいですねっ…」

太狼の言葉に、ゴンは少し肩を落として、ゆっくりと頷いた。

「よっしゃあっ！サルっ！トリっ！完璧にマスターしてやろうぜぇっ！“人獣化”っ！」

「おうよぉっ！ゴンゴンっ！」

「そう仕切んないでよぉ～キツネぇ～っ」

「……っ」

明るく笑い合う三人の様子を見て微笑んでいた太狼が、ふと、海の方へと視線を移す。

「君のペットは、僕がちゃ～んと預かっとくからっ…」

まっすぐな瞳を、海へと向ける太狼。

「君はちゃ～んと、帰って来るんだよっ…輝矢ちゃんっ…」

太狼の小さな声が、果てしなく広がる海へと落ちた。

一方、海底へと潜った輝矢たち。

「はぁ～っ、息出来る、出来るっ」

「フフフっ…この乙姫にお任せ下さい…」

海中で、呼吸出来ることを確かめるように、何度も息の吸ったり吐いたりを繰り返す桜時。安心したように言う桜時に、万亀が不気味ではあるが、得意げに微笑みかける。万亀の持つ空気石により、桜時たちの周囲を赤い膜のようなものが包み、その中を呼吸可能にしているのである。

「何だいっ？桜時っ、お前、海ん中で呼吸も出来ないのかいっ？」
「俺はエラ呼吸にも対応してる妖怪ババアとは違うんだよっ…」
万亀の作った膜の外でも、平然としているトマトに、桜時が少し呆れたような視線を送る。千年生きているというだけあって、もう何でもありの人間である。

「輝矢はどうだぁ？水力は大丈夫そうか？」
「ええ、今のところ、まったく問題ありません」
気にかけるように問う桜時に、輝矢が穏やかな笑顔を向ける。

「コレが、守ってくれてますからっ」
微笑んだ輝矢が、右耳につけた金と銀の二色になった、三日月型のピアスに触れる。アリスが渡した針器が、水力の暴走から、輝矢を守ってくれているのだろう。

「それで、その繭のある場所までは、どのくらいの時間がかかるのですか？」
「さぁ…？泡美の速度によりますが…どう…？泡美…」
輝矢に問いかけられた万亀が、皆を乗せているクジラの泡美へと声をかける。

「全速力で行けば三十分もかからず行けるよぉ～っ！」
海中を泳ぐ巨大なクジラが、明るい声を返してくる。

「でもすんごいスピード出すからぁっ、振り落とされないように、しっかり掴まっててねぇっ！桜時様っ！」
「桜時以外は振り落とされても構わないって感じだねぇ…」
「ではハチ、ここは振り落とされないよう、しっかりと抱き締め合いましょうか」
「合うかぁぁっ！！」
泡美の言葉にトマトが顔を引きつり、輝矢の言葉に桜時が勢いのいい突っ込みを入れる。

「じゃあ桜時ぃ～っ！父さんとぉっ…！」
「泡美っ、とっととスピードアップだっ」
「はぁぁ～いっ！桜時様っ！」
明るく話しかけようとする犬孝を無視して、泡美へと指示を送る桜時。桜時の言葉に頷いた泡美が、さらに尾の動きを鋭くし、海中を進むスピードを上げていく。

「……っ」
背中を向けたままの桜時を見て、微笑んだまま、少し目を落とす犬孝。

「お前も大概、不器用な奴だねぇっ」
「ハハハっ」
呆れたように言い放つトマトに、犬孝が空笑いで答える。

「……。」
そんな犬孝の様子を見て、そっと目を細める輝矢。

「ハチっ、いくら変態バカオヤジとはいえっ」

「誰もそこまで言ってねぇっ」
歯に衣着せぬ輝矢の言葉に、桜時が思わず突っ込みを入れる。

「もう少しちゃんとっ…」
「わかってるっ」
「えっ…？」
輝矢の声を遮って答える桜時に、輝矢が首を傾ける。

「ちょっとっ…」

――もっとあんたとっ…話したいからさっ…！――

話したいことが山程ありすぎて、聞きたいことが山程ありすぎて、
何を話せばいいのか、わからない。

「戸惑ってる…だけっ…」

そう呟いた桜時は、困惑したような表情を見せていた。

第８２章　深海に眠る力　★２

海域を進むこと、二十分。輝矢たちは徐々に、闇の深まる海深部へと近づいていた。明るさが減り、辺りは不気味な雰囲気を醸し出している。地上からは随分と離れたというのに、海の中は、まるで強い風が吹くように、荒れ始めてきていた。

「うぅっ…！」

吹きつける強い波風に、桜時が思わず目を伏せる。

「何かっ…急に荒れてきたなぁっ」

「もうすぐ聖域間近です…フフフ…」

「聖域って言うよりっ、どっちかって言うと“魔の海域”って感じだねぇっ」

万亀の言葉に、トマトがしかめた表情を見せる。

「……。」

そのトマトの横で、静かに海を見つめる輝矢。

「海がひどく騒いでいます…」

そう呟き、輝矢がそっと目を細める。

「まるで…怯えているような…」

『……っ』

輝矢の言葉に、桜時やトマトが険しい表情を見せた。

「うぅ～んっ！荒れがひどくって、思うように進めないなぁ～っ」

皆を乗せた泡美が、困ったような声を漏らす。

「宇凪っ！」

「オッケーっ」

泡美に呼びかけられた宇凪が立ち上がり、泡美の頭の先頭部分へと歩いていく。

「……っ」

目の前に広がる荒れた海へ向け、両手を突き出す宇凪。

「……“凪”っ…！！」

――パァァァァンっ！！

宇凪の手から一瞬、光のようなものが放たれると、荒れた波風の収まった海域が、まるで一本の道のようになって、泡美の前へと広がる。

「へぇ～っ、門貴から聞いてたけどっ、海の荒れまで消せんのかぁ～っ」

「惚れてはいけないよ？イヌくん」

「惚れねぇーよっ！！」

「ハチが惚れてるのは私だけです」

「お前はいちいち、対抗して言わなくていいのっ！！」

感心していた桜時が、好き勝手言う宇凪と輝矢に、次々と突っ込みを入れていく。

「へぇ〜っ、あいつらも結構、やるじゃないかっ」
同じように感心の声を漏らすトマト。

「ゲイとハサミは使いようとは、よく言ったもんだねぇっ」
「誰も言ってないですけどねっ、そんなことは…」
うんうんと頷いているトマトに、犬孝がこっそりと呟く。

「見えたよぉ〜っ！都市跡っ！」
『えっ…！？』
泡美の声に、あれこれと言い合っていた皆が、一斉に泡美の頭の上から身を乗り出す。宇凪が作った荒れのない海の道の先、かすかに見える海底に、石造りの建物が見えてくる。
『あっ…！』

身を乗り出した輝矢たちが、思わず大きく目を見開く。海藻や苔にまみれ、緑色となった石造りの建物が、縦へ横へと、広い海底を、どこまでも果てしなく続いていた。かなり上方から見渡しているというのに、その都市の終わりが見えない。地上のあらゆる大国よりも、遥かに巨大な国である。

「でっけぇーっ…」
「千年も昔に…こんな巨大な都市が、この深海に…」
都市跡を見下ろしながら、桜時と犬孝が、圧倒された様子で呟く。

「ここが…かつての鬼人一族の…国っ…」
遥か祖先の国を見つめ、輝矢がそっと目を細める。

「んっ？」
身を乗り出していた桜時が、波に流され、こちらへと向かってくる何かに気づく。
「何だぁ？あれっ…」
目を凝らして見ると、それは石造りの建物の一部。
「げえええっっ！」
巨大な石の塊の接近に、思わず叫び声をあげる桜時。
「やべぇぇっ！！えっとっ、村雨丸っ…！村雨丸っ…！！」
「むぅぅ～んっ！！」
「へっ？」
慌てて村雨丸を抜こうとした桜時の横から、岩士が現れ、気合いの入った声とともに、鋭く身構える。
「“岩々手刀”っ！！」
岩士の振り上げた右手を、鋭い岩の塊が包んでいく。
「ふぅぅんっ！！」
――バァァァーンっ！
勢いよく振り下ろされた岩士の手刀が、飛んで来ていた石の塊を粉々に砕く。

「大丈夫かっ!?」
「あっ…ああっ、ありがとうっ…」
岩士のパワーに圧倒されながら、桜時が少し放心気味に礼を言う。
「よくあんな怪力に勝ったな…由雉の奴っ…」
礼を言った後、桜時が誰にも聞こえないようにそっと呟く。

「この荒れっぷりで、都市跡も崩壊してきてるみたいだねぇっ」
トマトが都市跡を見下ろしながら、冷静に言い放つ。

「建物が壊されて、その瓦礫があちこちに吹き飛んでやがるっ」
「皆さん…あちらを見て下さい…」
『……っ?』
万亀の声に反応し、皆が万亀の指差した方向を見つめる。その指の先は、都市の中心部を指し示していた。

「んっ?」
その方向を見た犬孝が、少し眉をひそめる。

「何だっ?あそこだけ、ごっそりと建物がなくなっているっ…」
万亀の指差した都市の中央部には、同じように並んでいた石造りの建物が一切なく、何やら他の建物とは異なった造りの白い塔のようなものが五本、東西南北とその中央に立ち並んでいた。

「あそこが鬼が島の丁度、真下です…フフフ…」
「じゃあ建物がないのは、海底火山の噴火で、地上に吹き飛んじまったからかっ」
「しかし、あの塔は一体っ…」
「……。」
戸惑うように呟く輝矢の横で、トマトもそっと表情を曇らせる。

「塔内部のことはわかりませんが…あの中央の塔の周りに…巨大な繭が置かれています…」
「じゃあ、あそこへ行けばっ…！」
「すんませぇぇ～んっ！！」
『……っ？』
真剣な会話の中に割って入る、大きな泡美の声に、皆が足の下の泡美の頭の方を見る。

「何…？泡美…今、私たち取り込み中なんだけど…フフフ…」
「えぇぇ～っ！？俺も桜時様と取り込みたいぃ～っ！」
「くだらねぇーこと言ってんじゃねぇっ！！」
拗ねるような声を出す泡美に、桜時が勢いよく怒鳴りあげる。

「一体っ、何だってんだよっ！？泡美っ！」
「それがさぁ～っ」
泡美が、そのつるつるとした皮膚の眉間に、皺を寄せる。

「海の荒れがひどくって、この大きな体じゃ、これ以上、進めないんだよねぇ～っ」
『えっ！？』
その言葉に、驚きの表情を見せる桜時たち。確かに、先程宇凪の作った道も、泡美のクジラの体では大き過ぎて、これ以上先へ進む

ことは難しそうである。

「もう少しダイエットしとけば良かったかなぁ～っ？」
「いやっ！そういう問題じゃねぇーだろっ！！」
「夜食にラーメン食べたりするからですよ」
「いやっ！だからダイエットから離れろよっ！！」
惚けた発言をする泡美と輝矢に、桜時が次々と突っ込みを入れていく。

「泡美の役立たず…」
「えぇ～っ！？亀国のお姫ちゃんっ、ひっどぉ～いっ！！」
ひっそりと呟く万亀に、泡美が甲高い声をあげる。

「泡美っ、一生懸命頑張ったよねぇ～っ！？桜時様ぁ～っ！！」
「ハイハイっ、頑張った頑張ったっ…」
問いかける泡美に、桜時が少しげっそりとした表情で答える。

「けど、どうするっ？」
「困ったねぇっ」
桜時が振り向くと、トマトが大きく首を捻っていた。

「泳いで行っても、吹っ飛ばされるだけだろうしっ…」
「……。」
トマトの横では、真剣な表情を見せた輝矢が、まっすぐに都市中央部の、五本の塔の方を見つめていた。

「では私の回転カメカメで…」
「荒海に回転まで加わったら、それだけで死ぬわっ」
ひっそりと名乗りあげる万亀に、桜時が冷たく言い放つ。

「……渦礼っ」
「へっ？」
突然、顔を上げた輝矢に名を呼ばれ、渦礼が目を丸くする。
「ひえええええっ！！」
近づいてくる輝矢に、怯えた悲鳴をあげながら、岩士の巨体の後ろへと隠れる渦礼。まだ相当に、輝矢のことを怖がっているようである。
「渦礼っ」
「ひいぃっ！殺さないでぇっ！！」
岩士の後ろを覗き込む輝矢に、渦礼がしっかりと瞳を閉じて、頭を抱える。
「アナタの渦力で、私たちをあの都市跡まで飛ばしてくれませんか？」
「へっ？」
『えっ？』
輝矢の言葉に、渦礼が大きく目を開き、他の皆も驚いた顔を見せた。
「出来ますねっ？」
「えっ？あっ、えぇ～っとっ…」
「出来ますねっ！？」
「はいぃぃ～っ！！」
「脅すなっ」
渦礼を無理やり頷かせる輝矢に、桜時が少し冷たい視線を送る。

「でも危険じゃなぁ～いぃ～？渦で飛んでくなんてさぁ～っ」
「危険なんて、手慣れたもんですよっ」
顔をしかめ、不安げに問いかける宇凪に、輝矢は笑みを向けて見せる。

「万亀たちは、私たちが飛びだしたら、皆で出来る限り、この海域から離れて下さい」
振り向いた輝矢が、万亀へ真剣な表情を見せる。

「ここは危険です…これから先、もっと危険になるかも知れません…」
「……っ」
輝矢の言葉に、万亀がそっと眉をひそめる。

「わかりました…フフフ…ではこれを…」
「……っ？」
そう微笑んで、万亀が輝矢へと手渡したのは、赤い宝石・空気石であった。

「我々は皆…海中でも呼吸可能ですので…これは輝矢さんたちがお持ち下さい…フフフっ…」
「わかりました、お預かりします」
万亀に笑いかけ、輝矢がしっかりと空気石を握り締める。

「では行きましょうっ」
『おうっ！』

輝矢の呼びかけに答え、輝矢、桜時、トマト、犬孝の四人が、泡美の頭の先端部分に並ぶ。その四人の後方に渦礼が立ち、四人へ向けて両手を突き出した。

「思いっきり頼みますよっ、渦礼っ」
「うっ…うんっ…！」
皆が期待して見守る中、渦礼が少し緊張した面持ちを見せる。

「いっ…行くぞっ…！！」
『ああっ！』
渦礼の声に、桜時たちが真剣な表情で、しっかりと頷く。

「じゃあっ…！」
「渦礼っ」
「えっ…？」
渦礼が力を放とうとしたその時、輝矢が渦礼のいる後方を、少しだけ振り返る。

「この間はっ…すみませんでした…」
「……っ」
本当に申し訳なさそうな表情を見せて、そっと謝る輝矢に、渦礼が大きく目を見開く。渦礼にそれだけを言って、輝矢は再び前方を向いた。

「お願いしますっ…！」
「……うんっ！」
強く言い放つ輝矢に、渦礼が笑みを浮かべて、しっかりと頷く。

「行くよっ…！！“単渦”・最大出力っ…！！！」

鋭い瞳を見せた渦礼の両手から、巨大な渦が放たれる。

『……っ！』

――バァァァーンっ！

巨大な渦が四人を巻き込んで、荒れた海を突き抜け、まっすぐに都市跡へと飛び出していく。

「ふぅ～っ」

「気をつけてねぇ～っ！！桜時様ぁ～っ！！」

力の抜けた様子で、肩を落とす渦礼と、その巨大な尾を振り、桜時を見送る泡美。

「……お気をつけて…輝矢さん、桜時さん…」

飛んでいく渦を見下ろし、万亀はそっと呟いた。

第８２章　深海に眠る力　★３

「どっわあああああああっ！！」

その頃、渦礼の最大出力・単渦の前に乗りかかるようにして、荒れた海を突き進んでいる桜時は、渦のあまりのスピードに震えた叫び声をあげていた。

「こりゃジェットコースターなんてもんじゃないなぁっ」

「……っ」

犬孝が感心しながらも、少し引きつった表情を見せているその横で、輝矢は後方の渦へ向けて右手を突き出し、四人と渦との間に、薄い水の膜を張っている。この膜がなければ、四人はこの激しい渦に、とっくに巻き込まれてしまっているだろう。

「随分と危険なマネするねぇっ、小娘っ」

「嫌いじゃないくせにっ」

「ハっ、確かにねっ」

悪戯っぽく微笑みかける輝矢に、トマトもそっとその口元を緩める。

「俺は危険なマネは嫌いなんですけどぉ～っ…」

二人の声を聞きながら、桜時が少し情けない声を漏らす。

「あっ？」

桜時が何かに気づいた様子で、ふと横を振り向く。

「あれはっ…！」

振り向いたその瞳に映ったのは、先程と同じ、都市の石造りの建物の一部であった。

「げえぇぇっっ！また来るぞぉっ！？」

まるで狙いを定めているかのように、石の塊が、輝矢たちのいる渦の先端を目がけてまっすぐに飛んでくる。

「渦の回転が引力になってんだっ」

「今っ、あれと激突なんかしたらっ、渦ごと潰されて放り出されるぞっ！」

「クっ…！」

トマトと犬孝の言葉を聞いた桜時が、その顔をしかめ、村雨丸の柄に手をかける。

「村雨丸っ…！」

桜時が勢いよく、村雨丸を抜き放つ。

「“瞬花っ…終刀”っ…！！」

抜き放った勢いそのままに、向かってくる石の塊目がけて、村雨丸を振り切る桜時。

――バァァァァーンっ！

桜時の刃を受け、石の塊が粉々に砕け散る。

「やっ…！ううっ！？」

喜ぼうとした桜時が、刀を振り切った勢いを殺しきれずに、渦の前から体を弾き出されてしまう。

「うわあああああっ！！」

「桜時っ！！」

「ハチっ！！」

渦から弾かれ、そのまま荒れた海の中へと落ちていく桜時。

「ハチっ…！」

「待てっ！」

「……っ」

追いかけて飛び降りようとした輝矢の手を、犬孝が強く掴み止める。

「俺が追うっ！二人は先にシルクの力のもとへ行ってくれっ…！！」

「えっ…？」

犬孝の言葉に、輝矢が少し戸惑うように眉をひそめる。

「一刻も早く、シルクの力を消し去ってくれっ、頼んだぞっ！」

「……っ」

真剣な表情を見せる犬孝に、輝矢がそっと目を細める。

「トマト先生っ、竹取輝矢をお願いしますっ！」

「そっちこそっ、桜時を頼んだよっ」

「勿論っ」
トマトの言葉に笑顔で頷いて、犬孝が渦の前から飛び出していこうとする。

「犬孝っ！」
「……っ？」
呼ばれる名に、振り向く犬孝。

「これをっ…！」

そう言って輝矢が犬孝に投げ渡したのは、先程、万亀から預かった空気石であった。

「私たちは海中でも呼吸が可能ですっ！それはアナタとハチで使って下さいっ！」
「わかったっ…！ありがとうっ…！」
輝矢に笑顔を向け、犬孝が大事そうに空気石を懐にしまう。

「じゃあまた後でっ！」
「はいっ…！」
「……っ！」

犬孝はその青い瞳を鋭くすると、落ちていった桜時を追うようにして、渦の前から、荒れた海の中へと飛び込んでいった。

「ハチっ…」
犬孝の消えた海を見つめ、輝矢が不安げにハチの名を呼ぶ。

「人の心配してる場合じゃないよぉっ」
「えっ？」
トマトの言葉に、輝矢が目を丸くして振り向く。

「もうゴールは目前だけどぉっ」
徐々に目の前へと迫る都市跡を見て、トマトが表情を曇らせる。

「これっ、どうやって止めるんだいっ？」
後方の渦を指差し、トマトがシンプルな疑問を口にする。

「あっ、考えてなかった」
「やっぱりねぇ…」
間の抜けた表情を見せる輝矢に、呆れたように肩を落とすトマト。

「そう来るだろうと思ったよっ」
「自分の身くらい、自分で守って下さい」
「言われなくてもっ」
輝矢の言葉に素っ気なく答え、トマトがその表情を鋭くして、前方に迫る都市跡へ向け、両手を構える。

「青き光…龍が如く…」
トマトの両手から、青白い光が放たれ始める。

「……っ」
両手から光を放つトマトの横で、輝矢もそっと身構える。

「“青漣光（せいれんこう）”っ…！！」
「“水月”っ…！！」

輝矢の手から無数の水の刃が、トマトの手から青く輝く光が、同時に放たれる。

――バァァァーンっ！

二人が海面へと放った力の威力に押され、都市跡に激突する寸前のところで、渦礼の渦が海中に砕け散る。その衝撃の中で、素早く身を動かし、輝矢とトマトは都市跡の内部へと着地した。

「ふぅ～っ」
ついた膝をゆっくりと伸ばし、トマトがゆっくりと肩を落とす。

「何とか無事、着けたねぇっ」
「ええ、けどっ…」
トマトの横に立った輝矢が、周囲を見回し、少し眉をひそめる。

「千年前の貴重な遺跡を…ボッロボロにしてしまいましたねぇ…」
輝矢の見つめる先には、輝矢とトマトの放った力により、粉々に砕かれた都市跡の景色が広がっていた。美しく立ち並んでいた建物が、あっという間に瓦礫の山へと変わっている。

「正当防衛でいけるんじゃないかいっ？」

「いけないと思いますよ…」
軽く答えるトマトに、輝矢が呆れた視線を送る。

「少し逸れちまったみたいだねぇっ、亀姫の言ってた塔が向こうに見えるっ」
瓦礫となった建物の、さらに向こうに小さく見える塔の先端を指差し、トマトが冷静に言い放つ。

「でっ？お前、水力の方はどうだ？」
「えっ？ああ、そういえばっ…」
思い切り水力を使ったというのに、少しの頭痛もない。ここが海中であるということを忘れそうなほどに、今の気分は良かった。

「順調ですねっ…まさかここまで平気とはっ…」
「そうか、ならいいっ」
驚いたように呟く輝矢に、トマトは素っ気なく答える。

「とっとと行こうっ」
「ええっ…あっ」
「あっ？」
何か思い出したように声を出す輝矢に、トマトが少し顔をしかめて振り返る。

「ハチは大丈夫でしょうかっ…？」
「大丈夫だろっ」
不安げな表情を見せる輝矢に、すぐさま答えるトマト。

「桜時には犬孝がついてるっ、あいつはああ見えても、歴代“犬孝

”の中で最強と謳われる男だ」
トマトが迷いのない表情で言い放つ。

「強さには何の問題もない」
「父親としてもっ…？」
「……っ」
輝矢の問いかけに、トマトが眉をひそめる。輝矢が不安に感じているのは、犬孝の強さではなく、やっと出会えたというのにギクシャクしてばかりの、桜時と犬孝の関係の方であった。

「父親としての力量なんていらないのさっ」
「えっ…？」
あっさりと答えるトマトに、首を傾げる輝矢。

「あいつらは親子なんだ。それだけで何の問題もないっ」
「そういうものですかねぇ…」
「そういうもんさっ」
あまり納得のいっていない様子で首を捻る輝矢に、トマトがそっと笑みを向ける。

「さっ！私たちはとっとと、シルクの力を消しに行くよぉっ！」
表情を引き締めたトマトが、気合いの入った声を出す。

「気ぃ引き締めなっ！小娘っ！」
「……はいっ」

トマトの言葉に、輝矢はしっかりと頷いた。

「うぅ～んっ…」
その頃、荒れた海へと真っ逆さまに落ちた桜時は、一時気を失っていたのか、その青い瞳をゆっくりと開いた。

「ここ…はっ…？」
少し振らつく頭を押さえながら体を起こし、桜時が周囲を見回す。すると周りには、苔の生えた石造りの建物が立ち並んでいた。

「都市の跡っ…無事着けたのか…良かった…」
遥か上方で見たあの都市跡に、何とか無事に降りられたようである。安心した表情を見せて、桜時がホッと肩を落とす。

「おっ！気がついたかぁっ？桜時っ！」
「えっ…？」
見つめていた方とは反対側から聞こえてくる声に、桜時が振り向く。

「あっ、あんたっ…」
「よっ！」
桜時が振り向くと、そこには明るい笑顔を見せた犬孝が立っていた。

「随分、気い失ってたなぁっ？若いギャルに囲まれてる夢でも見たかっ？」
「誰がんな夢みるかっ！」
軽口を叩く犬孝に、桜時が強く言い返す。

「輝矢とババアはっ？」
「そのまま渦で塔へ向かった。俺だけ、お前を追ってきたんだ」
「ふぅ～んっ…って、じゃあ空気はっ！？溺死しちまうんじゃっ…！」
「大丈夫っ、空気石は預かってきた。というかお前、今、呼吸してるだろうがっ」
「あっ、そっか」
自分の呼吸を確かめ、桜時が間の抜けた表情で頷く。

「バッカだなぁ～っ！俺に似たかっ？ハッハッハっ！！」
「ちったぁ悲観しろよっ！！」
思い切り笑い飛ばす犬孝に、桜時が怒鳴りあげる。

「んっ…？」
桜時が、ふと犬孝の右腕に目をやる。犬孝の右手の肘から手のひらへ向けてに、何かに強くぶつけたような傷があり、赤い血が滲んでいた。

「あんた…」
「んっ？」
「……っ」

首を傾ける犬孝を見て、そっと眉をひそめる桜時。海に落下したはずの桜時が、無傷でこの場に着地しており、そして傷を負った犬

孝が共にいる。桜時の頭に、一つの考えが過ぎった。

「その傷、まさかっ…」
「ああっ、これかぁっ？」
桜時の言葉に、犬孝が自分の右手を見る。

「俺を庇っ…」
「これはなぁっ、さっき、突如として出現した、巨大ウツボと対峙した時に出来た傷だっ！」
「ウソ下手だなっ！！」
自信満々に答える犬孝に、思わず全力で突っ込みを入れる桜時。

「もういいっ、これでも巻いてろっ」
呆れた表情を見せながら、桜時が懐から白い手ぬぐいを出し、血の滲んだ犬孝の右手へと丁寧に巻く。

「……。」
巻かれた手ぬぐいを、少し茫然と見つめる犬孝。

「これでちったぁっ…」

――ポンっ――

「へっ？」
頭の上に乗る大きな手に、桜時が目を丸くして顔を上げる。

「優しいなっ…」

「……っ」
そっと微笑む犬孝に、思わず目を見開く桜時。

「別にっ…」

そのまま犬孝を直視し続けることが出来ず、桜時は思わず下を向く。その手の温もりや、微笑みの方が、余程優しく思えた。

「向こうに亀国の姫の言っていた塔が見える」
桜時の頭の上に乗せていた手を動かし、小さく見える白い塔の方を指差す犬孝。

「急ごう、トマト先生たちはもう着いているはずだ」
「……ああっ」

犬孝の言葉に、桜時がしっかりと頷くと、二人は都市跡の中を、白い塔へ向け歩き始めた。

第８２章　深海に眠る力　★４

『……。』

縦に並ぶようにして、前を犬孝が、後ろを桜時が行く。荒れた海の音も届かぬ、静かな海底で、特に会話もなく歩き、二人の足音だけが辺りに響く。

「……っ」

その静けさに、少し気まずそうな顔をしながら、桜時はそっと、前を行く犬孝の背中を見つめる。

――父さんだって探したいっ…！！――

それは、桜時がずっと、追い求めてきた背中。目の前にあるというのに、どうにも信じられず、手を伸ばせばすぐに触れられるというのに、ひどく遠くに見えた。

「竹取輝矢とは、いつ頃から一緒に旅をしてるんだ？」

「えっ…？」

その背中の主の問いかけに、桜時が戸惑ったような声を出す。

「えっと…半年くらい前からっ…」

戸惑いつつも、その問いかけに答える桜時。

「そうか…」

その背中からは、満足そうな返事が返ってくる。

「どうして、一緒に旅を？」
「輝矢が朱実の屋敷に潜んでた鬼を退治してっ、そこに居合わせて、それがきっかけでっ…」
続く問いかけにも、桜時がすらすらと答える。
「あいつが来てくれたお陰で…孔雀さんとの関係も良くなったんだ…」
「そうか…」
同じように返ってくる返事。
「孔雀さんは元気か？」
「うん、元気だよっ…松兄も竹兄も梅人も、みんな元気にしてる…」
「そうか…」
静かな海中で、シルクの力を消さなければならないというこの大事な時に、何てことのない、他愛のない会話が続く。
「どうして“ハチ”と呼ばれてるんだ？」
「それは輝矢が…イヌの俺を見て、適当につけてっ…」
「そうか…」
「……。」
返ってくる犬孝の声に、桜時がそっと目を細める。同じ言葉ばかりが返ってくるというのに、不思議と、聞く度に心が温まった。犬孝が、何てことのないことばかりを問いかけてくることが、ただ嬉しかった。犬孝が、桜時の生きてきた時間のことを知ろうとしてくれていることが、ただ嬉しかった。

「俺からも…話していい…？」
「ああっ」
少し遠慮がちに問いかけた桜時に、犬孝は大きく頷く。
「そのっ…犬国のこと、なんだけどっ…」
「ああっ…」
戸惑いながら口を開く桜時に対し、犬孝はどこか受け止めるような声を出す。
「太狼からだいたいの事情は聞いている」
「えっ…？」
「四大国との和解も視野に、国民の受け入れもやっているらしいなっ…すべてお前のお陰だと聞いた」
「そっそんなことはっ…」
「俺からも礼を言うべきだろうな。ありがとうっ…」
「……っ」
犬孝からの礼に、桜時が思わず顔を俯ける。犬国のことで八犬士に礼を言われたり、座黒に誉められたりしたが、今が一番、嬉しかった。
「あの頑固な父上を相手に、大したものだっ」
「あっ…」
犬孝の言葉を聞き、桜時の頭に八房の姿が思い浮かぶ。
――お前の父、第五十四代・里見犬孝は…この国にはいない…――

そう言った時の、悲しげだった八房の表情。

「あのさっ、じじいのことなんだけどっ…」
「この戦いが終われば、一度、犬国に戻るつもりだ」
「えっ…？」
遮る犬孝の声に、桜時が少し眉をひそめる。桜時が見つめる中、犬孝がゆっくりと桜時の方を振り返った。

「いい年こいて、いつまでも家出してるわけにもいかないからなぁっ」
犬孝が、少し自嘲するような笑みを浮かべる。

「その時、父上ともちゃんと話すつもりだ」
桜時を安心させるように、穏やかな笑みを浮かべる犬孝。

「だから大丈夫っ、そう気を回すなっ」
「……っ」
優しく話しかける犬孝に、桜時がそっと目を細めた。

「そっ…それとっ…」
「んっ？」
「母さんのこと…なんだけどっ…」
少し俯きながら、さらに遠慮がちに口を開く桜時。

「母さんがどうした？」
「母さんとは…」
聞き返す犬孝に、桜時がゆっくりと言葉を繋ぐ。

「どうやって知りあったんだ…？」
「んっ？何だ？お前、輝矢ちゃんがいるくせに、鳥の女の子も捕まえようって気かっ？」
「違うわっ！！」
非難するように問いかけてくる犬孝に、桜時が勢いよく怒鳴りあげる。

「四大国嫌いの犬人なのにっ、なんで朱実の人間と知り合ったのかなって思っただけだっ！」
「ああぁ～そういうことかぁ～っ」
桜時が怒鳴ると、犬孝から明るい声が返ってくる。

「俺は昔からっ、“トリ”ってもんに憧れててなぁっ」
「トリにっ…？」
「ああっ、昔っからずっとっ、大きくなったら“トリの国”に行きたいって、そう思ってた」
「ふぅ～んっ…」
犬孝の話を聞きながら、桜時が感心したような声を出す。トリに憧れるという気持ちは、桜時も幼い頃からずっと持ち続けていたものなので、わからなくはなかった。

「それで十七の時、退屈してた犬国を飛び出して、“トリの国”だっていう雀国へ行ったわけだ」
「ふむふむっ…」
桜時が何度も頷きながら、犬孝の話に聞き入る。

「そしたら雀国の入口辺りで、丁度、お出掛けから帰って来たとこ

ろの雲雀と会ってなぁっ」
「うんうんっ…」
「“とりあえずトリが好きなんで、付き合って下さい”と告白したわけよっ！」
「だあああああっ！！」
犬孝の言葉に、桜時が顔面から、勢いよく地面へと倒れ込む。

「んっ？どうした？」
「どうしたじゃねぇっ！何だっ！？その告白の仕方はぁっ！！」
不思議そうに下を見る犬孝に、立ち上がって強く怒鳴りあげる桜時。

「自分の気持ちを素直に表現しただけだが？」
「素直過ぎるわっ！！」
シレっと答える犬孝に、桜時がさらに顔をしかめる。

「ったくっ！よく、そんなんでオッケーしたよなぁっ、母さんもっ」
「オッケーなんて、されてないぞ？」
「へっ？」
さらりと答える犬孝に、桜時が目を丸くする。

「“フザけんなっ、このクソイヌがぁっ！”と、二十発程、殴られた」
「えっ…？」
桜時の表情が、勢いよく引きつられる。

「かっ…母さんにっ…？」
「すぐに手の出る娘でなぁ…気の強さは孔雀さん以上のものだった

っ…」

「孔雀さん、以上っ…？」

腕組みをしながら、しみじみと懐かしむように語る犬孝。犬孝のその話に、桜時の表情はさらに引きつっていく。三歳の時に死に別れた母親に、勝手ながら心優しいイメージを抱いていたため、孔雀より気の強い母親など、想像することも出来なかった。

「俺の…優しい母親像が…」

「ハッハッハっ！」

唖然として呟く桜時に、犬孝が豪快な笑い声をあげる。

「お前も気をつけろっ？どうもウチの家系は代々っ、気の強い姫君に引っ掛かりやすいみたいだからな～っ！」

「もう手遅れだっての…」

笑いあげる犬孝に、桜時がこっそりと呟く。

「二年間、毎日後を尾けて、毎日付き合ってくれと叫んで、毎日殴られて、それでやっと思いが通じたんだっ」

「半分ストーカーだなっ…」

笑顔で言い放つ犬孝に、桜時が冷たい視線を送る。

「あいつの平手打ちの強烈さはっ…今でも忘れない…」

「……っ」

不意に悲しげな笑みを浮かべる犬孝に、桜時がそっと目を細める。それほどまでに愛した妻・雲雀の最期を、犬孝は看取ることすら出来なかったのだ。

「あっあの…」
「あいつがお前を身籠った時…」
「……っ？」
悲しげな犬孝に、何とか声を掛けようとした桜時が、再び話し始めた犬孝に、戸惑うように顔を上げた。

「正直、俺は…生むことを反対したんだっ…」
「えっ…？」
その言葉に、桜時がそっと眉をひそめる。

「スズメに生まれたとしても、イヌの子であると蔑まれるっ…イヌに生まれたなら、尚更だっ…」
「……。」

――イヌの子だなんてっ、汚らわしいっ！――

目を落とした桜時の脳裏に、かつて受けた蔑みの言葉が蘇る。

「生まれてきたとしても、待っているのは苦しみだけっ…ならば、生んでやらないことがこの子の為だ、と、俺は雲雀にそう言った…」
どこか遠くを見つめる犬孝が、真剣な表情を見せる。

「だが雲雀はっ…」

――　十七年前。雀国・朱実家。

「生むのは止せっ！お前にもわかるだろうっ！？雲雀っ！」

屋敷に大きな声が響き渡る。声の主は、里見犬孝。当時・二十二歳。

「朱実の子が、イヌにでも生まれたりしたらどうするっ！？生んでも、この子が不幸になるだけだっ！」

「“不幸”なんていうものは、あなたが決めることじゃないわっ」

強く言い放ち続ける犬孝の方を、ゆっくりと振り返る一人の女性。真っ赤な長い髪に、大きく開いた緑色の瞳は何とも美しく、そして強い意志を感じさせた。当時の朱実家当主の次女・朱実雲雀。当時二十歳のまだ若い娘であった。

「今から生まれてくるこの子の人生が、幸か不幸かを決めるのは、あなたでも私でもないっ」

雲雀のその強い瞳が、まっすぐに犬孝に向けられる。

「生まれてくるこの子自身が決めることよっ！」

雲雀が自分の下腹部をそっと手で押さえ、迷いなく言い放つ。

「雲雀っ…」

そんな雲雀を見つめ、犬孝がそっと目を細める。

「だからっ、この子自身がそれを決めるまでは、この子の命を絶つ権利なんて有りはしないっ！」
雲雀がさらに、言葉を続ける。
「例え親であるあなたであっても、私であってもっ…」
「……っ」
そのまっすぐな言葉に、言い返すことなど思い浮かばず、犬孝はただ目を逸らすことだけはせずに、雲雀を見つめ続けた。
「私たちに出来るのは、ただ信じることだけよっ…」
少し表情を曇らせた雲雀が、ゆっくりと、新たな命の宿った自分の腹部を見下ろす。
「この子の生きる日々が…少しでも幸せであることを願いながらっ…」
「……。」
祈るように呟く雲雀の言葉を聞きながら、犬孝がそっと目を伏せる。
「そうだな…」
瞳を開いた犬孝は、その口元をかすかに緩め、ゆっくりと頷いた……――

「……。」
犬孝から、そう記憶もない母親のことを聞き、桜時は何かこみ上げるものを抑えるように、そっと右手で口元を覆い、その瞳を細めた。

「今のお前を見れば、雲雀の言うことが、いかに正しかったかがよくわかる…」
同じように目を細めながら、穏やかな笑みを浮かべた犬孝が、まっすぐに桜時を見る。

「俺の選んだ女は最高の女だったと、胸を張って言えるよっ」
「……っ」
満足げに微笑む犬孝に、桜時の口元も自然を緩む。

「ありがとうっ…」
「えっ？」
小さな礼を零す桜時に、犬孝が不思議そうに目を丸くする。

「俺の生きる日々を…諦めないでくれてっ…」
微笑んだ桜時が、噛み締めるようにそう呟きながら、そっと自分の胸に手を触れる。

「あなたたちが諦めないでいてくれたからっ…俺は今ここに、立っていられるんだなっ…」
「桜時…」
言葉を続ける桜時を、犬孝は少し目を細めながら、見つめる。

「イヌだからって酷い目に遭う日も、正直あったよっ…？」

――あなたの存在は、朱実家の恥でしかないわっ……――

冷たい言葉に、傷んだ心。

「生きることを諦めそうになる日もあったっ…」

少し下を向いていた桜時が、ゆっくりと顔を上げる。

「でも今は、諦めなくて本当に良かったと思えるっ」

桜時の微笑みが、まっすぐに犬孝に向けられる。

「あなたとこうして、向き合うことが出来たからっ」

「……っ」

晴れやかな笑みを浮かべる桜時に、少し眉をひそめる犬孝。

「ありがとうっ…俺、今、幸せだよっ」

桜時がもう一度、礼を言い、笑う。

「“父さん”っ…」

「……っ！」

呼ばれる父の名に、犬孝が大きく目を見開く。だが犬孝はすぐに見開いた目を細め、口元を大きく緩めた。

「そうかっ…」

「……っ」

先程と同じように返事をする犬孝であったが、その表情には今にも泣き出しそうな笑みが浮かんでおり、そんな犬孝を見つめ、桜時はさらに微笑みを大きくした。

「さっ！とっととシルクの力消してっ、とっととこの戦い終わらせちまおうぜっ！」

「そうだなっ」

桜時の気合いの入った言葉に、しっかりと頷く犬孝。今度は桜時の方が先頭となって、2人が再び、白い塔の方へと歩き出す。

「輝矢たち、もう消しにかかってんのかなぁ？」

「さぁ、どうだろうな」

静まり返っていた先程とは異なり、前後で会話を交わしながら、桜時と犬孝が先へと進んでいく。

「んっ…！」

その時、犬孝が急に表情を鋭くする。

「危ないっ…！桜時っ…！」

前方の桜時へ向け、勢いよく飛び出していく犬孝。

「へっ…？って、うわあああああっ！」

犬孝に勢いよく押され、桜時が横へと吹き飛ばされる。

――バリィィィィーンっ！

「……っ！！」

次の瞬間、先程まで桜時の立っていた位置に、強い黒色の雷が落ちた。雷の落ちた周囲が黒こげになり、地面に深い穴があく。

「あっ…」

もし自分の上に雷が落ちていたら、どうなったか。それを考え、桜時は思わず茫然とした。

「雷力っ…」

「雷力っ…？」

桜時を庇うようにしゃがみ込んでいる犬孝の言葉を聞き、桜時が一人の人物を思い浮かべる。

「何者だっ…！？」

気配を感じ取ったのか、勢いよく顔を上げ、前方に叫びあげる犬孝。

「……。」

『……っ！』

二人の前方に、どこからともなく一人の男が姿を現す。

「あれはっ…」
灰色の髪、光のない紫色の瞳。表情の無い顔、黒い紋様の刻まれた首筋。そして、その腰に下げられた、美しい水晶の剣。

「ここから先へ…通しはしない…」
「御剣…諸刃っ…」

立ちはだかる諸刃に、桜時はそっと表情を曇らせた。

その頃、輝矢とトマト。

「おっ、塔に到着ぅ〜っ！」
「つまらない洒落ですね」
「洒落のつもりで言ったんじゃないよっ」
相変わらず緊張感のない会話を交わしながら、二人は塔の一本へと辿り着いていた。

「こいつは東西南北に並んでた四本の塔のどれかだろうねぇ〜」
「となると、中央にあった塔はあれですか」

塔の壁に触れているトマトから少し離れたところに立ち、周囲を見回した輝矢が、何本か見えているうちの一本の塔を差し示す。

「なんでわかるんだいっ？」

「あの塔の向こうに、もう一本塔が見えます。直線上に三本塔が並んでいるということは、あれが中央塔ということでしょう」

「ああぁ～成程成程っ」

「絶対わかってないでしょう…？」

適当な口調で頷くトマトに、輝矢が少し呆れた視線を送る。

「とにかく、あれなんだろうっ？ならっ、とっとと行こうっ」

輝矢の指摘を誤魔化し、再び足を進めるトマト。

「一応、時間との戦いなんだっ」

「一応ってまた適当ですねぇ」

トマトの言葉に呆れながらも、輝矢が、中央塔へと向かうトマトの後へと続いていく。徐々に近づいてくる中央塔。シルクの力は、もう目前のところまで来ていた。

「もうすぐ…かっ…」

不意に真剣な表情を見せ、塔を見つめるトマト。

「……っ」

そんなトマトを見て、輝矢がそっと眉をひそめる。

「クソババア」

「ん～っ？」

「一つ、お聞きしてもいいですか…？」

「何だいっ？改まってっ」
いつもとは似合わず、遠慮がちに問いかける輝矢に、トマトが足を進めながら、不思議がるように聞き返す。塔へと向かいながら、二人が会話を続ける。

「アナタは…」
トマトの背中と地面を交互に見ながら、ゆっくりと口を開く輝矢。

「牢戸知玖と…何らかの繋がりがありますよねっ…？」
「……っ」

後方から聞こえてくる輝矢の問いかけに、トマトの表情が止まる。足の歩みこそ止めはしなかったが、トマトの肩は一瞬だけ、強く震えた。

「少なくともシルクが封印される、ずっと以前から…」

真剣な眼差しを、トマトの背中へと向ける輝矢。

「なんで…そう思うんだいっ…？」
平静を装いながらも、動揺を隠しきれない声色で、トマトが振り返らぬまま聞き返す。

「犬孝が言っていましたね…？アナタの助言を受けて、鬼が島を見張ることにしたと…」

――トマト先生の助言も受けてなっ――

「鬼の一族でもないのに、何の関係もないアナタが、シルクの復活を予想出来るのはおかしい…」

いくら千年を生きる龍人とはいえ、知りもしないシルクのことを、そこまで理解するのは不可能だろう。

「アナタは、シルクの力を十分に理解した、それなりの関係…それに…」

鋭い表情を見せた輝矢が、さらに言葉を続ける。

「ジローが殺された時…」

「……っ」

輝矢の言葉に、トマトが少し顔をしかめる。

「シルクは…明らかにアナタを狙っていた…」

「……。」

トマトがそっと俯く。

――お前が憎んでいるのはっ…殺したいほど憎んでいるのはっ…私だけのはずだよっ…！――

それは、トマト自身が口にした言葉でも、明らかなこと。

――だからっ…私は貴女から、すべてを奪うのっ――

――次狼ぉぉぉっ！！――

トマトのすべてを奪うといって、シルクが起こした悲劇。

「アナタを苦しめたいからこそ…御剣諸刃を操り、ジローを殺した…」

――すまない…太狼っ……――

次狼の葬儀の時、トマトは太狼に謝っていた。それは、次狼を巻き込んでしまったと、次狼の死に責任を感じていたからであろう。

「アナタとシルクの間には…何らかの因縁がある…」

輝矢が鋭い瞳を見せ、言葉を続ける。

「シルクがアナタのすべてを奪いたいと思える程の何かがっ…」

「……。」

輝矢の言葉を聞いたトマトが、そっと目を伏せる。

「遠い昔の話さっ…」

瞳を開いたトマトの口から、力なく言葉が零れ落ちる。

「今のお前たちには関係なっ…」

「“相手の戦う理由を知れ”」

「……っ」

言葉を輝矢により遮られ、トマトが少しだけ振り返る。

「母から聞いた、黒鬼一族が戦いの指針とする言葉です…」
「……。」
曇りのない瞳で言い放つ輝矢に、そっと目を細めるトマト。

「ホントっ、私の気に食わなかったとこばっかり、似てやがるっ…」
「えっ…？」
小さく呟くトマトの声が聞き取れず、輝矢が少し眉をひそめる。

「まぁいいさっ、お前にだけは、この機会に話しておっ…」
輝矢と向き合うべく、トマトがしっかりと振り返る。

「……っ！」
「えっ…？」
振り返った途端、表情を変えるトマトに、輝矢が首を傾ける。

「何っ…」
大きく見開いた瞳で、一定の箇所を見つめるトマトに戸惑い、輝矢もトマトの見つめる方向を振り返る。

「うっ…！」
振り返った輝矢が、トマトと同じように表情を変える。

「フフフっ…」
輝矢たちが先程通った塔のすぐ前に、見える一つの人影。

「フフフっ…」
高く響く笑い声が、静かな海中に響き渡る。

「私もぜひ聞いてみたいわねぇ…」
海の中に流れる白い髪。冷たく輝く赤い瞳。

「私が何故…貴女のすべてを奪いたいと思える程に…貴女を憎んでいるのかっ…」
その赤い瞳が、トマトを映し出す。

「貴女と私の間に…どんな因縁があったのかっ…」
「……っ」
強く唇を噛み締め、顔をしかめるトマト。

「シルクっ…」
同じく険しい表情を見せた輝矢が、目の前に立った女の名を呼ぶ。

「牢戸…知玖っ…！」
「フフフフっ…」
輝矢とトマトの前に、牢戸知玖が現れた。

第８３章　再びの魔女　☆１

「牢戸…知玖っ…！」
「フフフ…」
海の深く、かつての鬼人一族の栄えた都市と見られるその跡地に眠る、牢戸知玖の封印されし力を消し去るため、再び海中へと訪れた輝矢たちの前に現れたのは、シルク本人であった。

「久し振りね…トマト…」
親しい者を呼ぶように、シルクがそっとトマトの方を見る。

「シルクっ…」
「フフ…怖い顔っ…」
険しい表情を見せるトマトを見て、シルクがどこか楽しげに微笑む。

「月の少女も…久し振りね…」
シルクがトマトから輝矢へと、視線を移す。

「鬼が島では…私の分身がお世話になったみたいで…」
「……っ」
微笑むシルクに、眉をひそめる輝矢。内兎のことを言っているのだろう。鬼が島での出来事をすべて知っているような口振りだが、それならばシルクは、内兎を見殺しにしたということになる。分身である内兎の死を、悲しんでいる様子など、微塵もない。

「クっ…」
トマトと同じように険しい表情を見せながら、輝矢が素早く右耳

のピアスに手を伸ばす。

「“月器っ…」

勢いよくピアスを弾く輝矢。

「……三日月”っ…！」

弾かれたピアスが、アリスの針器と合わさった、新たな三日月として目覚める。目覚めた三日月を右手に構え、輝矢はまっすぐにシルクと向き合った。

「へぇ…その武器、直ったの…？」

輝矢の構えた三日月を、シルクが感心したように見つめる。

「私が粉々に砕いたのにっ…」

「……っ」

輝矢の心を揺さぶるように、挑戦的に微笑みかけるシルク。その言葉に、輝矢がそっと眉をひそめる。龍国での対峙の時、輝矢は月器を物の見事に砕かれ、シルクに敗北したのであった。

「貴女があの時の子供だったなんて…」

シルクが口端を吊り上げ、輝矢に怪しく微笑みかける。

――我らは復活するっ！！必ずねぇっ！！――

シルク封印のその瞬間に、幼き日の輝矢は立ち会っていた。

「不思議な縁よね…月の少女…」
「……。」
確かに感じる因縁に、輝矢が少し表情を曇らせる。

「黒き鬼と玄(くろ)き神の子…貴女の両親はよく覚えている…」
流れるような、シルクの言葉が続く。

「我ら白鬼一族に…“人と共に歩もう”なんて戯言を言いに来た、愚かな者たちっ…」
「……っ！」
シルクのその言葉に、輝矢が大きく目を見開く。

「クっ…！」
「おっおいっ…！」
唇を噛み締めた輝矢が、トマトが止める間もなく、シルクの方へと飛び出していく。

「挑発に乗るなっ！小娘っ！」
「三日月っ…！」
トマトの叫び声も無視して、怒りの表情に満ちた輝矢が、高々と飛び上がり、上空からシルク目がけて、勢いよく三日月を振り下ろす。

「シルクっ…！！」
「フフっ…」
飛び上がった輝矢を楽しげに見上げながら、輝矢へと人差し指を向けるシルク。

「“鬼閃”…」
シルクの指先から、白く輝く、細い光線のようなものが放たれる。
光線が、飛び上がった輝矢へと、まっすぐに向かった。

「うっ…！！」
放たれた鬼閃が、あっという間に輝矢の左胸を貫く。

「小娘っ…！」
トマトが思わず身を乗り出す。

「フフフ…」
鬼閃に貫かれた輝矢を見て、シルクが楽しげに笑う。

「早く殺し過ぎちゃったかしら…？もう少し遊びたかっ…」

――パァァァァァンっ！

「……っ」
突如、水飛沫となって弾け飛ぶ輝矢の体に、シルクの微笑みが止まる。

「残念ですっ…」
「……っ！」
背後から聞こえてくる声に、眉をひそめた表情となって、顔だけを振り向かせるシルク。

「私ももう少し…遊んでいたかったのに…」
シルクの後方には、シルクの背中に三日月の剣先を付け、鋭い表情を見せた輝矢が立っていた。そう言い放ち、輝矢が三日月を握る手に力をこめる。

「……っ三日月っ！」
輝矢がまっすぐに、三日月を突き出す。

「ううっ…！」
突き出された三日月が、シルクの細い体を勢いよく貫く。

「あ…うぁ…」
「……っ」
苦しげな声を漏らすシルクに、思わず笑みを零す輝矢。

――パァァァァンっ！！

「えっ…？」
しかし次の瞬間、三日月に貫かれたシルクの体は、先程の輝矢と同じように、水飛沫となって辺りに弾け飛んだ。飛び散る水に、戸惑いの表情を見せる輝矢。

「これはっ…水分身…？」
「フフフ…」
「……っ！」
地面に落ちた水を見下ろし、眉をひそめていた輝矢が、後方から聞こえてくる笑い声に、勢いよく振り返る。

「あっ…！」
「フフフフ…」
輝矢が振り返ると、輝矢の立っている位置から少し距離を置いたところに、楽しげに微笑むシルクが立っていた。
「随分と使ってなかったものだから…水分身なんてもの、すっかり忘れていたわっ…」
シルクが目を細め、笑う。
「貴女が使うのを見ていて思い出したっ…ありがとう…」
「水力を…？」
礼を言うシルクに、さらに困惑する輝矢。
「まさか、もう封印がっ…！」
「いやっ、そんなはずはないっ」
不安げに振り向く輝矢に、トマトが険しい表情を見せながらも、はっきりと答える。
「では何故っ…」
「……。」
輝矢が戸惑いの瞳を向ける中、トマトがまっすぐにシルクを見つめる。正面から強くぶつかり合う、トマトとシルクの視線。
「シルク…お前、ナイトを…？」
「ええっ…吸収したら、水力が戻ってきたわっ…」
「なっ…！」
頷くシルクに、輝矢が大きく目を見開く。
「まぁ水力も…すべてが戻ってきたわけではないけれどっ…」
「そんなはずっ…！内兎は確かに私がっ…！」

「“執念”、とでもいうのかしらねぇ…」
反論の言葉を叫ぼうとした輝矢が、シルクのその声に、有無を言わさず言葉を止められる。
「貴女を追い求めるあまり…死んでも死にきれなかったみたいよ…？」
「……っ」

――輝矢…輝矢っ…！！――

シルクの言葉に、必死に輝矢の名を呼んでいた、内兎の姿が思い出された。

「あんな屑でも…その執念だけは大したものだったのねぇ…お陰で助かったけど…」
「……。」
内兎のことを、屑呼ばわりするシルクに、輝矢が表情を曇らせる。例え、自分の力から生まれた者であっても、シルクにとっては、駒の一つに過ぎないのだ。

「それ以上喋るなっ、こっちの性根まで腐っちまうっ」
「……っ」
いつの間にか輝矢の横へと現れたトマトが、輝矢の言いたかったことを代弁するように言い放ち、輝矢よりも少し前へと出る。
「フフフ…相変わらず、口が悪いのね…」
「根性が悪いよりマシだろっ？」

楽しげに笑うシルクに、鋭い視線を向けるトマト。だが二人のその会話は、やはり互いをよく知っているような、そんな言葉に思えた。

「シルク、お前の魂胆はわかってる」
強く腕組みをし、トマトがまっすぐにシルクを見つめる。

「封印されてる力が目覚めるまで、私らを足止めしようってんだろっ？だが、そうはいかないっ」
トマトが鋭く、突き刺すようにシルクを見つめる。

「丁度いいからっ、ここでお前本体も消させてもらうよぉっ！」
腕組みしていた手を下ろし、素早く身構えるトマト。

「いくら水力が増えたとはいえ、今の不完全な状態のお前なら、十分倒せっ…！」
「フフフ…」
「あっ？」
言葉の途中で笑い声を発してくるシルクを、トマトが少し顔をしかめて見る。

「何だいっ？何がおかしいっていっ…」
「そういう…すぐ自分で結論づけちゃうところも…変わってないわね、トマト…」
「何っ…？」
微笑むシルクに、トマトが眉をひそめる。

「私は…足止めのために、ここへ来たのではないわっ…」

「えっ…？」
「……っ？」
シルクの言葉に、トマトも、その横に立つ輝矢も、戸惑ったような表情を見せる。

「私がここへ来たのは…」
「……っ」
ゆっくりと右手を上げるシルクに、輝矢が眉をひそめる。

「クソババアっ…！！」
「えっ？」
強く叫ぶ輝矢に、トマトが首を傾ける。

「“水星”っ…」
「うっ…！」
「クっ…！」
シルクの右手から放たれる無数の水の玉に、表情を歪めるトマト。
その横で、険しい表情を見せた輝矢が、素早く動いて、トマトの前へと出て、向かってくる水星へ向け、三日月を突き出す。

「“水月”っ…！！」
輝矢の突き出した三日月から、無数の水の刃が放たれる。

――バァァァーンっ！

激しくぶつかり合う、輝矢とシルク、二つの水。

「ううっ…！」

前方からかかる重みに、輝矢が表情を歪める。

「ダメっ…！負けるっ…！」

「小娘っ…！」

押されていく輝矢の背中に、庇うように入り込むトマト。

『うあああああっ！！』

輝矢の水月を押し切った水星を受け、輝矢とトマトが勢いよく吹き飛ばされる。二人の痛々しい叫び声が、静かな海に木霊した。

「うっ…！」

強く吹き飛ばされた輝矢が、何かに背中をぶつけ、それが止めとなって、その場に倒れ落ちる。

「ううっ…」

地面に倒れ込んだ体を、ゆっくりと起こす輝矢。

「何っ…」

背中に当たったものを確かめようと、輝矢がゆっくりと振り返る。

「うっ…！」

振り返った途端、輝矢が大きく目を見開く。

「こっ…これはっ…」

輝矢の背後にあるのは、輝矢の身長を軽々と越える程に大きな、白い繭であった。触れてもいないのに、大きく脈打っているのが伝わってくる。その脈が走る度、繭が発するどこか禍々しい空気に、呑み込まれそうになる感覚を覚えた。

「シルクのっ…封印された力っ…」

輝矢から少し離れたところで起き上がったトマトが、同じように近くの繭を見つめながら呟く。その白い繭は輝矢の背後だけでなく、周囲の至るところに置かれていた。すぐ傍には、高々とそびえ立った白き中央塔。ここが、輝矢たちの目指していた場所、その終着点である。

「ねぇ…？聞こえるでしょう…？」

『……っ』

響き渡る高い声に、二人が同時に振り向く。

「私の力の胎動が…」

輝矢たちが吹き飛ばされてきた方から、微笑んだシルクが、こちらへと歩み寄ってくる。

「私がここへ来たのは…」

シルクが、ゆっくりと両手を広げる。

「貴女たちと一緒に…私の力の復活を祝うためよっ…」
『……。』
シルクの微笑みに、輝矢とトマトの額から、同時に汗が流れ落ちた。

「御剣…諸刃っ…」
「……。」
同じくシルクの力を消し去るために、今輝矢たちのいる場所へと向かおうとしていた桜時と犬孝の前に現れたのは、表情無き男・諸刃であった。

「知っているのか？桜時」
「ああっ…」
問いかける犬孝に、桜時が険しい表情を見せながら頷く。

「牢戸知玖の従者だっ…こいつがここにいるってことはっ…」
「シルクもここに来ているということか…」
「……っ」
桜時が言わんとしたことを、言い当てた犬孝の言葉に、桜時がそっと眉をひそめる。この場にシルクがいないということは、すでに力の眠る場所、輝矢たちのいる場所に行っている可能性が高い。

「輝矢っ…」
「トマト先生がついているんだ、そう心配することはない」
「えっ…？」
不安げに輝矢の名を呟いた桜時に、犬孝が間を置かずに話しかける。

「あの人は、この世界で一番の強さを持った人だからな」
「この世界で一番、節操もないけどな…」
自信を持って言い放つ犬孝の横で、桜時がこっそりと呟く。

「……っ」
だがすぐに、再び桜時の表情が曇る。桜時も確かに、トマトの力は信用していたが、シルクが相手となると、否応なしに不安が付き纏った。

「……。」
不安げな表情を見せる桜時を見て、犬孝がそっと目を細める。

「だがまぁっ、ピンチに駆けつけて、輝矢ちゃんにイイとこ見せておくってのも悪かないなぁっ」
「はぁっ！？んな時に何言っ…！」
「なぁっ？桜時っ」
「……っ」
優しく微笑みかける犬孝に、桜時がハッとした表情を見せ、言葉を止める。

「アイツは俺が止めるっ、だからお前は先に行けっ」
「……っ！」
犬孝が急にその瞳を鋭くすると、桜時は驚いたように大きく目を

見開いた。

「そっそんなことっ…！」

「俺に牢戸知玖の力を消し去ることは出来ない」

強く言い返そうとした桜時の言葉を、犬孝がさらに強く遮る。

「この世界の運命が、お前にかかってるんだ、桜時」

「……っ」

犬孝の言葉のその重みに、桜時が思わず表情を曇らせる。

「世界を救いに行って来いっ！」

「父さんっ…」

明るく微笑みかける父に、そっと目を細める桜時。やっと心の通じ合えたばかりの父を残して、先へ進むことはしたくない。だがここで立ち止まっては、何にもならないのだ。すべてはシルクを倒すために、ここまで戦ってきたのだから。

「うんっ！わかったっ！」

桜時が笑顔を見せ、大きく頷く。

「ちょっと行ってくるっ！」

「ああっ」

そう言って、輝矢たちのいる塔の方に体を向ける桜時に、犬孝が力強く頷きかける。

「……っ」

静かに二人の様子を見つめている諸刃の方へ、そっと視線を移す桜時。かうてのゴンの友にして、太狼の弟・次狼を殺した男。少し

だけ諸刃を見て、すぐにまた犬孝へと視線を戻す。

「父さん…大丈夫かっ…？」
どこか不安げに、犬孝へ問いかける桜時。

「俺の心配をするなんてっ、まだまだ早過ぎるんじゃないかっ？桜時っ」
「……っ」
得意げに笑う犬孝に、桜時の顔から不安の色が消える。

「それは失礼しましたっ」
そう言って、桜時が笑みを浮かべる。

「じゃあ頼むっ！」
「ああっ、行って来いっ！」
「……っ！」
犬孝に送り出され、桜時が勢いよく駆け出していく。

「逃がしはしない…」
走り去っていく桜時の背中へ向け、静かに草薙を構える諸刃。

「“白雷”…」
草薙の剣先から、放たれる白い電撃。

「時雨丸っ…」
犬孝がその青い瞳を鋭くし、素早く腰に下げた時雨丸を抜く。

――パァァァァンっ！！

「……っ」

諸刃の放った白雷が、桜時へと向かうその前方で、犬孝の時雨丸に止められる。時雨丸に絡め取られる白雷に、諸刃が少し眉をひそめた。

「俺の息子に、手出しは無用だっ」

「……。」

挑戦的に微笑む犬孝を、諸刃が表情も変えずにまっすぐに見つめる。

「八犬士が一、第五十四代・里見犬孝っ、参るっ…！」

強く言い放ち、素早く時雨丸を構える犬孝。

「“白首…割砕”っ…！！」

「……草薙…」

時雨丸を振り切る犬孝に、ゆっくりと草薙を構える諸刃。

「“黒雷”っ…！」

水晶の剣から、今度は黒い雷が放たれた。

第８３章　再びの魔女　☆２

――ドクンっ…ドクンっ…――

まるで、心臓の波打つような音が、周囲から何個も聞こえてくる。輝矢とトマトのすぐ近くに並ぶ、多くの巨大な白い繭の一つ一つが、強く胎動しているのである。

「力の…胎動っ…」

もう間もなく、この封印された力のすべてが解放されようとしている。そんなことは、シルク本人でなくとも十分に伝わって来た。呟いた輝矢が、険しい表情を見せる。

「これがすべて…シルクの力っ…」

見渡す限りに散らばった無数の巨大な繭。その一つ一つから、身震いする程の何かを感じた。その繭が秘めた強大な力を、体が本能的に感じ取っているのだろう。これがすべて目覚めたら、と考えるだけで、恐ろしくなる。

「何とか繭をっ…」

焦りの表情を浮かべた輝矢が、繭を近くの繭を壊そうと右手の月器を構えた。

――ズキンっ…！――

「うっ…！」
急に頭に走る痛みに、輝矢が顔色を変え、動きを止める。
「クっ…！」
「……っ」
苦しげに頭を抱える輝矢を見て、シルクがそっと目を細める。
「フフっ…」
「あっ？」
軽く笑みを零すシルクに、トマトが怪訝そうな顔をする。
「何っ、笑っ…！あっ？」
睨みつけるようにシルクを見たトマトであったが、その視線の先から、いつの間にかシルクの姿が消えた。
「どこにっ…？」
「随分と無茶をするわねぇ…」
「……っ！」
周囲を見回していたトマトが、聞こえてくるシルクの声に振り向く。
「月の少女っ…」
「うぅっ…！」
トマトが振り向いた先には、苦しげな表情を見せている輝矢と、そのすぐ目の前に現れたシルクの姿があった。
「小娘っ…！？」
いつもとは様子の違う輝矢に、トマトがその場で焦ったような声を出す。

「ただでさえ暴走しやすい海中で…私と戦って、水力を使ったりするから…」
「クっ…！」
嘲笑うように言い放つシルクを、輝矢が歯を食いしばりながら、必死に睨みあげる。

「けどっ…ここは私の力に満ちた場所っ…本来なら、もうとっくに暴走してもおかしくないはずだけど…」
シルクが考え込むように、そっと眉をひそめる。

「んっ…？」
そのシルクの目に、輝矢が右手に強く握り締めた、月器が留まる。

「そうっ…神器を強化して…玄神の力を強めたのね…」
「……っ」
あっという間に見透かすシルクに、輝矢が少し驚いたように目を見開く。

「じゃあ…これが…」
「あっ…！」
シルクが月器の剣先を掴み、輝矢の右手ごと、月器を持ち上げる。

「なくなってしまえば…貴女はただの半端な鬼に成り下がるということね…」
「クっ…！」
月器を持ち上げ、微笑むシルクに、輝矢が表情を険しくし、鋭い視線をシルクへと向ける。

「これはっ…」

――大切に扱いなさいよぉっ、じゃあねっ――

思い出される、アリスの素っ気ない言葉。それでもアリスが力になってくれたということだけで、輝矢はただ嬉しかった。

「これをっ…砕かせるわけにはいきませんっ…！」

輝矢の叫びに反応するように、月器が強い輝きを放つ。

「……っ」

月器の輝きに、掴んでいたシルクの白い手が、焦げ付くように黒く焼かれる。玄神の力が、鬼神であるシルクの体には有効的なのだろう。

「ホントっ、忌々しい玄神の力っ…」

焦げ付いた手を見て、シルクがその表情を曇らせる。

「でも…別に砕かなくってもっ…」

「えっ…？」

そう呟いて、シルクがさらに月器を大きく持ち上げる。

「……っ」

――パァァァァンっ！

「あっ…！」

シルクが勢いよく月器を持ち上げ、輝矢の手を力任せに振り切って、遠くの方へと弾き飛ばす。飛んでいく月器を追おうと、思わず身を乗り出す輝矢。

「フフっ…」
「うっ…！」
月器を追おうとした輝矢を、シルクがその細い首を掴んで、止める。首を覆いきれていない細い手だというのに、その指先からかかる強い力に、輝矢は顔をしかめた。

「こうすれば…もう終わりでしょう…？」
「クぅっ…！」
絞められる首に苦しげな表情を見せながらも、輝矢が鋭い瞳で、シルクを睨み続ける。

「その瞳…」
輝矢の黒々とした瞳を見つめ、少し忌々しそうな顔を見せるシルク。

「その瞳が嫌だわっ…」
「うっ…！」
シルクが首を掴んでいない方の手で、輝矢の髪を引っ張りあげ、強く睨みつけている輝矢の瞳を、大きく見開かせる。

「私と同じ…血の色に変えてあげるっ…」
「……っ！」
シルクの赤い瞳が見開かれ、輝矢の瞳をまっすぐに見つめ、怪し

げな光を放った。

「ううぅっ…！」

その光を受けた輝矢の瞳が、赤色に変わる。

「うぅっ…！うっ…！ううぅぅっ…！」

黒から赤へ、赤から黒へと、色の変化を繰り返す輝矢の瞳。輝矢の中の鬼人の血と玄神の血が、激しく争っているのか、輝矢はさらに苦しげな表情を見せた。

「ううぅっ…！！」

「フフフ…さぁっ、早く自我無き鬼と成り果てなさいっ…」

苦しい顔を見せる輝矢に、シルクが楽しげに微笑む。

「フフフ…フフフフフっ…んっ…？」

笑っていたシルクが、何かに気づいた様子で横を振り向く。

「……っ！」

シルクが振り向いたその先から、先程シルクが投げ飛ばしたはずの月器が勢いよく飛んで来て、輝矢とシルクの間に割って入り、シルクが輝矢の首を絞めていた手を離し、後方へと退き下がる。

「“龍閃”っ…！」

「なっ…」

下がったシルクへと、まっすぐに飛んで来る青い光線。

「クっ…！」
シルクが少し顔をしかめながら高々と飛び上がり、その光線も避ける。

――バァァァァンっ！

避けられた青い光線が、そのまままっすぐに進み、シルクの封印された力である繭の一つに直撃する。

「……っ」
それを見て、飛び上がったまま眉をひそめるシルク。

「うっ…！」
一方、シルクから解放された輝矢が、飛んで来た月器を受け止めながらも、その場に力なくしゃがみ込む。

「はぁっ…！はぁっ…！はぁっ…！」
しゃがみ込んだ輝矢が、大きく息を乱しながら、縋りつくように戻ってきた月器を抱き締める。シルクにより赤く変えられていた瞳は、ゆっくりと黒色を取り戻した。

「ふぅっ…」
飛び上がっていたシルクが、地面へと降りてくる。

「不意打ちっ…？結構狡いのね…」
「お前にだけは言われたくないねぇっ」
振り向いたシルクに、答える声。右手を突き出し、シルクに鋭い瞳を向けているのは、トマトであった。

「私の弟子に、二度と手出しはさせないよっ…！」
「ば…ババアっ…」
しゃがみ込んだ輝矢が、弱々しくトマトの方を見る。

「二度と…？」
トマトの言葉を、ゆっくりと聞き返すシルク。

「それは…あの死んだ子のことを言っているのかしら…？それとも…」
シルクの赤い瞳が、冷たく輝く。

「諸刃の…ことかしら…？」
「……っ」
シルクの口からその名が出ると、トマトが思わず顔をしかめる。

「相変わらず…人の気持ちを逆撫でるのが上手いねぇっ…」
「フフフ…」
口元では笑みを零しながらも、睨みつけるような瞳を見せるトマトを見て、シルクが楽しげに微笑む。

「力の暴走してしまうかも知れない月の少女を連れて来たのは…月

の少女じゃないと私の力を消し去れないから…」
海中に響く、シルクのその高い声。
「貴女のその読みは正しいわ…」
シルクがまるで、トマトのことを誉めるかのように笑う。

「けど、どうするの…？肝心の月の少女は、あの状態っ…」
「はぁっ…はぁっ…」
まだ息を乱している輝矢が、横目でこちらを向き、微笑むシルクに、そっと眉をひそめる。

「とても力を消し去れる状態じゃないっ…」
シルクが再びトマトの方へと、視線を戻す。

「かと言って…」
「……っ？」
そっと手を伸ばし、シルクが人差し指で、右方向を指差す。

「貴女の力では、私の力は消し去れないわっ…」

シルクの指差した先にあるのは、先程、トマトの放った龍閃が直撃した繭。真正面から受けたというのに、繭には傷一つついておらず、以前と変わらぬ様子で胎動している。

「……っ」
その繭を見て、トマトがそっと眉をひそめる。

「もう貴女たちに、私の力を消し去る術は…」
「力、力って…何か勘違いしてるんじゃないかいっ？」

「えっ…？」
遮るトマトの言葉に、シルクが少し首を傾げる。
「私は別に、お前の力を消し去りにここへ来たんじゃないっ」
トマトがその紅色の瞳を、鋭くする。
「私はここにっ…」
そのトマトの両拳が、青い光を帯びていく。
「お前自身を倒しに来たんだよっ…！！」
「……。」
素早く構えを取るトマトを、シルクが静かな表情で見つめる。
「そう…」
そっと俯き、小さく口元を緩めるシルク。
「私たちの長い歴史にも…終止符を打つ時が来たのかしらね…」
シルクが右手を前方に出し、トマトと同じように構えのような態勢を取る。
「ああ、今日で終わりにしよう…シルク…」
シルクの言葉に大きく頷くトマト。
「私たちの…千年の因縁をっ…！」
トマトがシルクへ向けて、強く言い放った。

「千…年っ…？」
しゃがみ込んだままの輝矢は、向かい合った二人を見ながら、戸惑うように呟く。

『……。』
「……っ」
向き合う二人から伝わる闘志に、輝矢が緊張した面持ちで思わず息を呑む。

「……“水星”…」
右手を突き出し、シルクがトマトへと無数の水の玉を放つ。

「青き拳…龍が如く…」
向かってくる水星を見つめながら、トマトが落ち着いた表情で、青く輝く右拳を構える。

「“青拳突き”っ…！！」
トマトが勢いよく、拳を繰り出す。

――バァァァーンっ！

繰り出されたトマトの、その拳の拳圧により、シルクの水星の一

粒一粒が砕け散る。

「……っ」

すぐにその場から、姿を消すトマト。

「青き脚…龍が如く…」

「……っ」

トマトが現れたのは、シルクのすぐ後方。

「“龍蹴”っ…！！」

「……っ！」

拳と同じように青く輝いたトマトの右足が、シルクへ向けて振り切られ、シルクが大きく目を見開く。

――パァァァァァンっ！

「なっ…！」

トマトの右足がシルクの体に当たった途端、シルクの体が水飛沫となって弾け飛ぶ。

「水分身かっ…！」

弾け飛ぶ水飛沫に、顔をしかめるトマト。

「んっ…？」

弾け飛んだ水が、徐々に集まり、形を成していくのに気づき、ト

マトが眉をひそめる。水飛沫はそのまま巨大な水となり、トマトの足を捉えようと動く。

「クっ…！」

その水から逃れるため、高々と飛び上がるトマト。

「フフフっ…」

「何っ…？」

水分身がいた方向と真逆の位置から、飛び上がったトマトへ向けて、人差し指を突き出すシルク。

「“鬼閃”っ…」

「……っ！」

空中で自由のきかないトマトへ向け、シルクが白い光線を放つ。

「チっ…！」

向かってくる光線に顔をしかめながら、トマトも人差し指を突き出した。

「“龍閃”っ…！」

トマトの人差し指から、青い光線が放たれる。

――バァァァーンっ！！

シルクの鬼閃とトマトの龍閃は、まったく互角の強さで進み、激しくぶつかり合って、大きな音をたてながら相殺して消えていく。

「ふぅっ」
トマトが右手を軽く回しながら、地面へと降りてくる。

「水分身後の水を避けたのは正解だったわね…」
「捕まったら、どうなってたんだいっ？」
「さぁ…？体の跡が残ればいい方じゃない…？」
「ハっ！そんなこったろうと思ったよっ」
互いにどこか余裕すら感じられる笑みを浮かべながら、トマトとシルクが言葉を交わす。

「そろそろ本気でいくとしようかっ」
「フフフ…そうね…」

挑戦的に言い放つトマトに、シルクは楽しげに頷いた。

第８３章　再びの魔女　☆３

「何て…戦い…」

月器を抱えながら、座り込んだままの輝矢は、そのトマトとシルクの戦いを見つめ、圧倒された表情を見せていた。

「ババアの蹴りもパンチも…それぞれ、リンゴとイチゴの遥か上をいっている…」

蹴りはリンゴが、拳はイチゴがそれぞれ最強であると思っていたが、トマトはそのどちらもで、二人の遥か上の威力を示していた。二人の力では恐らく、シルクとあそこまで対等に戦うことは不可能だろう。リンゴやイチゴだけではない。輝矢とて、トマトのように、シルクと戦うことは出来はしない。

「戦いの…レベルが違う…」

そう呟いた輝矢の体が、二人のあまりの力に身震いする。

「ババアがここまで強かったなんて…」

共に修行はして、実戦形式で対戦していたが、トマトが本気の強さを見せたことはなかった。輝矢のレベルに合わせていたのだろう。

「さすがに、ハチの父親やゴンの師であるだけのことはある…」

太狼も強いが、トマトにはそれ以上の強さを感じた。今まで輝矢が見てきた者たちの中でも、圧倒的に強い。

「これなら…いけるかも知れない…」

同じく圧倒的な強さを見せたシルクに対しても、勝機さえ見えて

きた。

「今の内に…一つでも多くの繭をっ…」

輝矢がその表情を引き締め、抱えていた月器の鞘を持って、周囲に散らばる繭を破壊しようと、ゆっくりと膝を立ち上がらせる。

「三日づっ…！」

「そうはいかないですよっ？」

「えっ…？」

振りかぶった三日月が動かず、後方から聞こえてくる声に、輝矢が戸惑うように振り返る。

「あっ…！アナタはっ…！」

「どうも、お久し振りです」

「ギンっ…！」

輝矢の背後に立ち、輝矢が振りかぶった三日月を手で掴み止めているのは、軽い笑みを浮かべたギンであった。

「貴女とは虎国以来ですねぇ～っ」

まるで親しい者と話すように、ギンが輝矢へと笑顔を向ける。

「武国での戦いは僕も行ったんですが、貴女はそれどころではなかったようですしぃ」

「武国へっ…？」

「ええっ、ナイトくんを迎えにっ…」

「……っ」

内兎の名を出し、その笑みを冷たいものへと変えるギンに、輝矢が少し眉をひそめる。

「ホントっ…」

「うっ…！」
ギンが細い体からは考えつかない程の強い力で、掴んでいた月器を引き、輝矢の体をギンの方へと向かせる。振り返った輝矢の前髪を引っ張り、輝矢の顔を上へ向かせるギン。

「あのウサギくんも物好きですよねぇ～」
上へ向かせた輝矢の顔を、ギンがまじまじと見つめる。

「こんな中途半端な鬼の、どこがそんなに良かったのかっ…」
「……っ」
棘のある言い方をして微笑むギンに、輝矢が顔をしかめる。

「でも貴女には…もう少し大人しくしておいてもらいたいのでっ…」
「えっ…？」
そう呟いたギンの、その金色の瞳が、赤色へと変わり、赤い瞳が輝矢の瞳を捉える。

――ズキンっ…！

「うっ…！」
ギンの赤い瞳に見つめられた途端、輝矢の頭に激しい痛みが走り、輝矢の瞳が再び、黒から赤への変化を示す。

「ううぅっ…！」
苦しみだした輝矢が、ギンの手から落ち、その場に崩れ落ちる。

「こっ…これはっ…」

変化する瞳を見せ、痛む頭を押さえながら、輝矢が少し驚いたような表情を見せる。

「先程のシルクと…同じっ…」

――私と同じ…血の色に変えてあげる……――

シルクの赤い瞳に見つめられていた時と同じ感覚が走り、輝矢が疑問を抱く。ギンは元々、ゴンと同じ狐族の者であった。例え鬼人化したとしても、輝矢に影響を及ぼすほどの力が得られるとは思えない。

「……っ」

しゃがみ込んだままの輝矢が、ゆっくりと顔だけを上げ、ギンを見上げる。

「何っ…者…？」

「……っ」

戸惑いの表情を見せる輝矢を見下ろし、楽しげに笑うギン。

「少し黙って…見ていて下さいよ…」

ギンが輝矢の頭を掴み、輝矢の顔をトマトとシルク、二人が向き合っている先へと向ける。

「こんなに面白い戦いは…二度と見られませんから…」

「……。」

抵抗する力もない輝矢が、目を細め、ギンに言われるがままに、二人の様子を見つめる。

「こんなっ…」

ギンの赤い瞳も、輝矢と同じように、トマトとシルク、二人の姿を映す。

「この世界で最も強い者同士の…最もくだらない戦いはっ…」

そう呟いて、ギンがそっと口元を緩めた。

「……。」

ギンに掴まれ、こちらを見ている輝矢を横目に、トマトがそっと眉をひそめる。

「いいのかしら…？余所見なんてして…」

「……っ」

正面から聞こえてくる声に、トマトがゆっくりとシルクの方を見る。

「そんなに気にしなくても平気よ…ギンには“まだ殺すな”って言ってあるからっ…」

「お前の言葉なんて信じると思うかいっ？」

「思わないわねっ…」

トマトの問いかけにすぐに答えながら、シルクが少し笑みを浮かべる。

「けどね…私は今、月の少女も命咲かす者も…どうでもいいのっ…」

「何っ…？」

シルクの言葉に、トマトが怪訝そうな表情を見せる。

「今の私には…貴女と戦えることが何よりの喜びっ…」

右手で左胸を押さえ、その鼓動を確かめながら、シルクが噛み締めるように呟く。

「さぁっ…私をもっと楽しませてっ…トマト…」

シルクがゆっくりと両手を広げ、さらに大きく口端を吊り上げる。

「貴女の…その命でっ…」

「……っ」

微笑むシルクに、歪むトマトの表情。

「望み通りっ…！いっくらでも楽しませてやるよっ…！！」

目付きを鋭くしたトマトが、シルクへ向け、勢いよく両手を突き出す。

「“青漣光”っ…！！」

突き出されたトマトの両手から、無数の光の玉が放たれる。

「……“水星”っ…！」

向かってくる光の玉へ向け、同じように水の玉を放つシルク。

――バァァァァーンっ！

二つの力が激しくぶつかり合い、海中に小さな渦が巻き起こる。

「……んっ…？」

その場に立ち尽くしていたシルクが、何かに気づき、顔を上げる。

「はあああああっ！！」

どこからともなく現れ、シルクへと、青く輝く拳を突き出すトマト。

「“鬼爪”っ…」

シルクの細く白い指先から、鋭い爪が伸びる。

『……っ！』

至近距離に迫った二人の間で、青き拳と鬼爪が、勢いよくぶつかり合う。一歩も譲らぬ力が押し合いながら、険しい表情を見せるトマトとシルク。

「“水纏”…」

「えっ…？」

シルクが呟いたその瞬間、シルクの鬼爪が水を纏っていく。

「“水爪（すいそう）”っ…」

「……っ！」
その水を纏った鬼爪を、シルクがすぐ目の前のトマトへ向けて放つ。シルクの手から飛び出す鬼爪に、大きく目を見開くトマト。

「クっ…！」
トマトが素早く拳を退き、体を反らせるようにして、飛んでくる鬼爪を避ける。

――ブシュっ…！

「うっ…！」
だが一本の鬼爪だけが避けきれず、トマトが右頬に鬼爪をかすってしまう。細く斬れた白いその頬から、真っ赤な血が流れ落ちた。

「チっ…」
流れる血を手で拭いながら、トマトが少し顔をしかめる。

「フフフっ…」
そんなトマトの様子を見て微笑みながら、シルクが指先から新たな鬼爪を生やす。

「“水爪”っ…！」
シルクが再び鬼爪に水を纏わせ、トマトへと放つ。

「何度も同じ手食うかってんだっ…！」
トマトが向かってくる水爪を見ながら、青く輝く右足を振り上げ

た。

「“龍蹴”っ…！！」

青く輝く右足を素早く振り切り、トマトが向かって来ていた水爪を、一本残らず叩き落とす。

「……っ！」

叩き落としたその勢いのまま、シルクの方へと駆け込んでいくトマト。

「正面攻撃っ…？」

向かってくるトマトを見つめ、シルクが少し意外そうに呟く。

「珍しいわね…」

そう言って微笑みながら、シルクがそっと人差し指をトマトへと向けた。

「……っ」

駆けていくトマトが、鋭く瞳を光らせ、両手をシルクへと突き出す。

「“光刃”っ…！！」

「えっ…？」

――パァァァァァンっ！

「うっ…！」
トマトの両手から放たれる、強い白色の光。その眩しさを直視したシルクが、思わず目を眩ませてしまう。

「“龍閃”っ…！」
「なっ…」
そこへ放たれる、青い光線。

「ううぅっ…！」
目が眩み、トマトの龍閃を避けきることが出来なかったシルクが、左肩に直撃を受けてしまう。貫いていく光に、シルクの落ち着いた表情が歪んだ。

「うっ…」
シルクがやっと感覚の戻ってきた瞳で左肩を見下ろすと、赤い血が白い服に染み渡り、ポタポタと地面へと滴り落ちていた。

「……っ」
流れ落ちた自らの血に、シルクが少し顔をしかめる。

「目眩ましか…」
シルクがしかめていた表情を平静に戻し、ゆっくりと顔を上げた。

「姑息な貴女の得意技だったわね…忘れていたわ…」
「姑息は余計だよっ」
微笑むシルクに、トマトも微笑みで返す。互いに傷はついていた

ものの、まだ力をすべて出しきってはいないような、どこか余裕が感じられた。

「懐かしいわ…トマト…」

少し俯いたシルクが、しみじみと呟く。

「こうして戦っていると…あの頃のことばかり思いだすっ…」

懐かしむように、いつになく穏やかに微笑むシルク。

「戻れるはずもない…あの頃のことばかりを…」

「……。」

急に声のトーンを落とすシルクに、トマトがそっと表情を曇らせる。

「シルク…」

トマトが真剣な表情を見せ、まっすぐにシルクを見据える。

「千年前、お前の身に起こった出来事は…確かに私にも責任がある…」

「……っ」

トマトの言葉に、少し顔をしかめるシルク。

「お前の受けた悲しみも…わかっているつもりだ…」

「だから何…?責任あるし、同情もしてるから、私の力の復活を見過ごしてくれるとでも言うのかしらっ…?」

「まさかっ」

聞き返すシルクの言葉を、鼻で笑い飛ばすトマト。

「責任もあるし、同情もするっ…だがお前はっ…」
憎しみのこもった強い瞳で、トマトがシルクを睨みつける。

「私がこの世で最も愛した者の命を奪ったっ…」
少し声を震わせ、言葉を繋ぐトマト。

「愛した…者っ…？」
そのトマトの言葉を、輝矢が戸惑いの表情で繰り返す。

「そしてっ…」

――諸刃っ…？――
――次狼ぉぉぉっ！！――

次狼を殺した諸刃の姿が、泣き崩れたゴンとリンゴの姿が、脳裏に刻みついて離れない。

――トマト先生っ！――

「私の大切な弟子たちの…穏やかな時間をっ、明るい未来を奪った…！！」

険しい表情を見せ、強く叫ぶトマト。

「私だけじゃないっ、関係のない者たちを多く巻き込んだっ」
トマトが強く唇を噛み締め、拳を握り締める。

「そんなお前を許しはしないっ…」
トマトが強い叫びを続けながら、再び拳を構える。

「許しはしないよっ…！シルクっ！」
「……。」
憎しみを露にするトマトに対し、特に動じることもなく、落ち着いたままの表情で、静かにその声を聞いているシルク。

「“許しはしない”…？」
シルクがゆっくりと、トマトの言葉を繰り返す。

「それは、こちらの台詞よっ…」
「……っ」
急に冷たくなるシルクの表情に、向き合っているトマトが少し眉をひそめる。

「私は貴女を許しはしないわっ…トマト…」
それこそトマト以上に憎しみのこもった声で、シルクがゆっくりと言葉を繋ぐ。

「私はすべてを無くした…貴女のせいで、すべてを…」
俯いていたシルクが、その顔を上げる。

「決して許しはしないっ…」

トマトとは異なり、力強さのない声で呟くシルクであったが、その声はかすかに震えていた。それは、まるで、こみ上げる憎しみに震えているようであった。

「だから私は…貴女からすべてを奪うっ…！私が持っていなくて、貴女の持っているものは、すべてねぇっ…！！」

「……。」

声を荒げるシルクを、トマトは厳しい表情で見つめた。

「……っ」

いつも落ち着いているシルクが、憎しみを露にし、荒々しく叫ぶその姿に、輝矢は思わず息を呑んだ。シルクの纏った静かな空気も不気味で、恐ろしいが、あれほどまで明らかな感情を示したシルクも、身震いするほどに恐ろしい。

「あの二人に…一体、何が…」

輝矢が頭に走る痛みを堪えながら、戸惑うように呟く。

「あの二人の関係は…一体っ…」

「見ます？」

「えっ…？」

上から聞こえてくる声に、輝矢が眉をひそめながら、顔を上げる。そこには、どこか退屈そうな表情を見せたギンの姿があった。

「見る…？」
「ええっ」
聞き返した輝矢に、ギンがすぐさま頷く。

「あの二人…青守トマトと牢戸知玖の千年の因縁を…」
ギンがその瞳を細くし、向き合った二人を見つめる。

「因縁っ…」
ギンのその言葉を、輝矢はゆっくりと繰り返した。

「見るとは…どうやって…」
「僕は、“憶力（おくりょく）”という力も持っていましてね…」
「も…？」
微笑んで答えるギンに、怪訝そうな顔を見せる輝矢。桜時のような例外はあるが、本来、獣人の持っている力は一つである。狐族であるギンは、ゴンと同じように火力を持っていたはずだが、その他にも力を持っているというのは、おかしな話であった。

「ある人間の思考を、別の人間に、脳波を通じて直接的に見せることが出来るですよ」
「脳波でっ…？」
ギンの言葉に、輝矢がさらに戸惑うような表情を見せた。その力は、自然の力を操る獣人のものとは、少し異質なもののように思えた。

「だから貴女に直接、青守トマトの過去を見せることも可能、というわけです…」

「……っ」
意味ありげな微笑を浮かべるギンに、輝矢が少し眉をひそめる。

「私には真っ赤な他人のクソババアの過去を、覗き見する趣味などっ…」
「見せなっ」
「えっ…？」
「……っ」
横から聞こえてくる声に、輝矢とギンがどちらも驚いた様子で振り向く。

「ババアっ」
声の主は、トマトであった。

「何を言い出すんですっ？私はクソババアの過去になど、全然興味はっ…」
「見なっ、小娘。命令だよ」
「なっ…！」
偉そうに言い放つトマトに、輝矢が思わず顔をしかめる。

「ババアっ…！私はっ…！」
「知りたいんだろっ？戦う理由をっ」
「……っ」
思わず声を荒げた輝矢であったが、トマトの冷静な言葉に、ハッとした表情を見せる。

「私の過去を見れば、全部わかるっ…私の戦う理由も…」
徐々に険しくなっていく、トマトの表情。

「シルクの…戦う理由もねぇっ…」
「ババアっ…」
まっすぐにシルクを見つめて言い放つトマトを見ながら、輝矢がそっと目を細める。

「決まりのようですね」
「……っ」
少し楽しげに聞こえてくるギンの声に、振り返る輝矢。

「では…ご覧下さい…」
輝矢の額の前にかざされた右手が、白い光を放ち始める。

「御伽界創生の物語を…」
白く輝く光が、輝矢を包み込んだ。

第８３章　再びの魔女　☆４

――　千年以上もの、遥か昔。
この世界に“御伽界”という名がつくよりも以前。
後に御伽界となるこの世界には、“人間”と呼ばれる生物と、様々な種類の動物たちが暮らしていた。
まだ“獣人”と呼ばれる生物が誕生していないこの頃、人間は、この世界の王であった。

世界の果て、“象国（ぞうこく）”。

「“光拳（こうけん）”…」

ゆっくりと右手を掲げ、鋭い表情を見せる、青く長い髪に紅の瞳の美しい少女。少女がそう呟いた途端、少女の拳を、ほのかな白い光が包んでいく。

「……っ」

光りを放つ拳を構え、少女が狙いを定めるように目を細くする。

「はあああっ！！」

――バァァァァァンっ！

少女が拳を繰り出すと、目の前にあった大きな岩が、粉々になって砕け散った。

「ふぅっ」

砕け散った岩を見下ろしながら、少女が一息をつくと、拳の光りも消える。

「まっ、こんなもんかっ」

「苫都(トマト)ぉぉ～っ！！」

「……っ？」

呼ばれる名に振り返る少女。

「苫都っ！」

「何だいっ？そんな大声出してっ」

少女の名は苫都。年は、十五歳。この象国で暮らす、普通の少女であった。

「知玖(シルク)っ」

「はぁぁ～っ」

苫都のもとへと駆けつける、白い髪に真っ赤な瞳の、まだ少し幼さを残した少女。苫都と同じく、象国を生きる少女・知玖。年も苫都と同じ、十五歳であった。

「あっ！まぁ～た“光力”使ったのぉ？岩なんか砕いてぇ～っ」

「私の勝手だろっ」

非難するように言う知玖に、苫都が少しうんざりとした表情を見せる。

「お前だって無駄に“水力”使ってんだろうっ？」
「私はお花に水やりしたり、してるだけっ！」
非難をし返す苫都に、知玖が少しムキになって言い返す。

「それより何の用だいっ？」
「用ってわけじゃないけど…」
問いかける苫都に、知玖が表情を曇らせる。

「また習い事サボったでしょっ？先生っ、すっごく怒ってたんだからぁっ」
「生け花なんて、かったるくって、やってらんないよっ」
「今日の習い事は茶道だよっ？」
「どっちでも同じさっ」
間違いを正す知玖に、苫都は興味なさそうに適当に答える。

「だいたい何で、毎日毎日習い事なんかっ…」
「未琴（ミコト）様は色々と学んで、素敵な女性になれって」
「生け花や茶道なんか出来なくったって、私は百人や二百人くらい、旦那を捕まえてみせるさっ」
「苫都らしいですねぇ」
『……っ』
横から聞こえてくる声に、苫都と知玖が同時に振り向く。

「未琴様っ！」

二人の振り向いた先で、穏やかに微笑む美しい女性。流れるような桃色の髪と、その髪によく生える緋色の瞳をしている。どこまでも白く透き通った肌は神秘的で、人成らざる者のようにさえ見えた。二十代後半くらいであろうか。大人の女性の魅力を、醸し出していた。

「未琴っ」
「未琴“様”でしょっ？苫都っ！国主様相手に失礼よっ！」
「様なんて、面倒っ」
「もぉ～っ！」
「フフっ」

ぶっきら棒な苫都に、口を尖らせる知玖。そんな二人の様子を見ながら、未琴が柔らかな笑みを浮かべる。未琴はまだ若い女性ながらに、この象国の国主であった。それは、彼女しか持ち得ない、特殊な力を持っていたからである。

「……っ」
『……っ？』

先程、苫都が砕いた岩の方へ行き、しゃがみ込む未琴に、二人が戸惑うように首を傾げる。

「可哀想に…」

未琴が少し悲しそうな顔を見せながら、岩の下に下敷きとなって潰れてしまった、地面の花や草へと手をかざした。未琴の手を、柔らかな白い光が包んでいく。

「“瞬花”っ…」

――パアアアアンっ！

『……っ！』

未琴の手から放たれた白い光が、地面を包んだ瞬間、砕かれた地面の辺り一帯に、あっという間に美しい花が咲き乱れた。その美しい光景に、苫都と知玖が大きく目を見開く。

「凄いっ…」

「何度見ても美しいわっ…未琴様の“命力”っ…」

唖然とする苫都の横で、知玖がうっとりするように呟く。

「無暗に物を傷つけては駄目ですよ…？苫都…」

立ち上がり、振り返った未琴が、穏やかな笑みで苫都を見下ろす。

「私たち、“象人”は…祖先から引き継いだ、この特別な力で、人間たちを守っていくことが使命なのですから…」

「五万と聞いたよっ、その話っ」

「苫都っ！」

「フフっ」

不機嫌そうにそっぽを向く苫都と、そんな苫都を注意する知玖。

そんな二人を見て、未琴はまた楽しそうに笑い声を漏らす。

「ごめんなさいっ！未琴様っ！苫都ってば、いっつもこうでっ…」

「苫都はしっかり者ですから、話は一度聞けば十分なんですよね？」

「そうそうっ」

「適当に返事しないのっ！」

適当に返事をする苫都に、知玖がまた怒鳴るように声をあげる。

「あっ！未琴様っ！私っ、もう一度、あの話が聞きたいですっ！」

「話はもういいってっ」

「苫都は黙っててっ！」

流れを変えようと、明るく話題を持ち出す知玖。口を挟む苫都を、知玖が少し睨むように見て、黙らせる。

「あの話とは、どの話のことですか？知玖…」

「あっ、えとっ…」

優しく微笑みかける未琴に、少し照れるようにしながら、知玖が口を開く。

「私たち“象人”の祖先の“御伽噺”ですっ！」

「ああ…」

知玖の言葉に、未琴がゆっくりと頷く。

「かつて、我々“象人”の祖先は…人ではなく、“光力”や“水力”を持った、特殊な生命体であったと言われています…」

その場にしゃがみ込み、ゆっくりと話し始める未琴。未琴につられるようにして、苫都と知玖もその場に座り込む。

「数えきれない程の時を経た後…その生命体の一つが、“人間”と呼ばれる生物に恋をしました…」

未琴が口元を緩め、穏やかに微笑む。

「すると、その瞬間…その生命体は“人間”へと姿を変えたのです…」
「……っ」
続く物語を聞きながら、楽しげな表情を見せる知玖の横で、苫都が少し表情を曇らせる。

「こうして…特別な力を持った人間、我々の祖先が誕生しました…」
微笑んだ未琴が、苫都と知玖の方をまっすぐに見つめる。

「愛した者に形を変えたことから…その人々は“象人”、象り人（かたどりびと）と呼ばれるようになったのです…」
「ふわぁ～っ…」
話が終わった途端、知玖が感動したような声をあげる。

「何度聞いても素敵な話ぃ～っ！」
「そうかぁ？」
「苫都は感性が鈍いのよっ」
「どういう意味だよっ？」
「フフっ」
互いを少し睨むようにしながら会話を続ける苫都と知玖を、未琴が穏やかに見守る。

「じゃあ未琴様っ」
「何でしょう？」
不思議そうな瞳を向ける知玖を、未琴が優しく見つめ返す。

「今、私が人間じゃない者を愛したら、私は人間じゃないその者に姿を変えられるんでしょうか？」
「そうですねぇ」
知玖のその問いかけを聞き、未琴が少し遠い瞳を見せる。
「確実とは言い切れませんが…可能性は十分にあると思いますよ」
「ふわぁ～っ！」
力強く微笑む未琴に、知玖が目を輝かせる。

「人間じゃない者って、イヌにでも恋する気かぁ～いっ？」
「もうっ！苫都ってば、夢がないんだからぁっ！」
「フフフっ」

愛する者へと形を変える、特別な力を持った“象人”に生まれた少女たち。

だがこの時、少女たちはまだ、ごく普通の少女であった。

それから数日。象国入口。

「ちょっ、ちょっとっ！苫都っ！」

「あっ？」
焦ったような知玖の声が響き、苫都は少し顔をしかめて振り返った。

「何だい？」
「ほっ本当に行く気なのっ？象国の外へなんてっ」
「ああっ、もう生け花も茶道も沢山だ。この国にいても暇だし、外の世界を見てくる」
「でっでもっ…！」
迷いなく答える苫都に、知玖がさらに困った表情を見せる。

「未琴様は力のことがバレるから、絶対に象国の外に出ちゃいけないってっ…！」
「力を使わなきゃいいだけの話だろうっ？なぁ～んの問題もないさっ」
「使わなきゃって…」
国の中でも習い事をサボっては散々、力を使いまくっている苫都のその言葉は、知玖にとってはまったく信用ならないものであった。

「とにかく私は行くから、後はよろしくねぇっ！知玖っ！」
「あっ…！ちょっ…！苫都っ…！」

知玖が止める間もなく、苫都は足早に象国を飛び出して行った。
遠ざかっていく背中は、この国を出る覚悟のない知玖には、追えそうもない。

「苫都っ…」
思わず伸ばした手を下ろし、知玖がどこか不安げに名を呼ぶ。

「そう気に病むことはありませんよ、知玖…」
「えっ…えっ！？」
声に振り向いた知玖が、驚いたように大きく目を見開く。
「みっ…未琴様っ！？」
「フフっ」
知玖のすぐ横に立ち、穏やかに微笑んでいるのは、未琴であった。
「未琴様っ！こっこれはっ…！そのっ…！あのっ…！えぇっとっ…！」
「あの子、苫都は…穏やかな象人の中にあって、熱い心を持った子…」
「えっ…？」
上ずった声を出し、焦りを全開にする知玖の言葉を遮って、未琴がゆっくりと言葉を繋ぐ。
「外の世界を知るというのも、いい経験になるかも知れません…」
「……っ」
微笑む未琴に、そっと目を細める知玖。
「でもっ…」
知玖が表情を曇らせ、苫都の去っていった方角を見つめる。
「何だか…もう戻れないような…そんな気がするんです…」
知玖の声が、不安げに響き渡った。

一方、象国を飛び出した苫都は、行く当てもなく、道もわからず、ただただ、広い世界を歩き続けていた。

「ったく、歩いても歩いても、ちっとも人間なんていないじゃないかぁっ」

ひたすらに広がる新緑の大地。変わらぬ景色の中を歩き続けるが、苫都の視界に人と呼ばれるものの姿は見えてこない。どうやら、あまり人の暮らしていない土地に、来てしまったようだ。

「かといって動物もいないし…外の世界って意外とつまんないんだねぇっ」

苫都が象国を出たのは、特別な力を持っていない、象人以外の生き物に会ってみたかったからである。光力を持っていることが特別と言われてきたが、皆が持っている象国の中では、それが当たり前過ぎて、特別という実感が湧いていなかった。

「はぁ～あっ…歩くのも疲れてきたなぁ～…」

苫都が足を止め、その場に寝転がる。

「ちょっと休んだら、大人しく象国に帰るかぁ…」

そう呟いて、苫都がゆっくりと目を伏せた。

――……っ――

「んっ…？」

その時、頭の中にかすかに響く、誰かが呼んでいるような声がして、苫都は閉じた瞳をもう一度、開いた。

「誰だ…？」

起き上がった苫都が、戸惑うような表情を見せながらもすぐに立ち上がり、頭に響く声に導かれるようにして、自然と足を進めていく。

――……っ――

「呼んでる…声がする…」

足が進めば進むほど、大きくなっていく頭の中の声が、何度も何度も、強く強く、苫都のことを呼ぶ。

「誰…？」

鬱蒼と生い茂る森の木々を掻き分け、苫都は開けた小高い丘へと辿り着いた。

「……っ！」

丘の上を見た瞬間、苫都が大きく目を見開く。

「龍っ…」

丘の上に休むように座り込んでいるのは、日の光りにきらきらと輝く、青い鱗を纏った、大きな体の一匹の龍であった。その背からは、鱗と同じ青色の翼が生えており、金に輝く二本の角と、鋭い牙を持っている。自分の何倍もの大きさのその生き物を前にしても、苫都に恐怖の感情は湧いてこなかった。苫都をまっすぐに見つめるその深緑色の瞳が、ひどく優しかったからである。

「これが…龍…」
「こうして人に会うのは何年振りか…」
「えっ…？」
その龍から聞こえてくる低く、だが穏やかな声に、苫都はハッとした表情で龍を見上げた。

「今、しゃべっ…」
「我が声が聞こえるのか…？娘よ…」
「えっ…？」
龍の言葉に、さらに戸惑うように声を出す苫都。

「どうやらお前も…ただの人間というわけではないようだな…」
「……っ」

そう言われ、苫都が少し眉をひそめる。象人は、あらゆる生き物と心を通わすことが出来ると、前に未琴から聞いたことがあった。

だから、他種族の生物の言葉も、理解出来るのだろう。

「お前…は？」

苫都が少し躊躇いがちに、龍へと問いかける。

「我が名は…セイシュ…」

「セイ…シュ…？」

「そう…青守（セイシュ）…」

青守と名乗った龍が、ゆっくりとその体を起こし、小さく仕舞い込んでいた、その青き翼をゆっくりと広げる。

「我、青き守（も）り神なりっ…」

――バァァァァンっ！

「……っ！」

青守が翼を広げた瞬間、辺りに強い風が巻き起こった。強い風を正面から受けたというのに、苫都は大きく目を見開いたまま、立ち尽くしたその足を、一歩も動かそうとはしなかった。

「……。」

その大きな紅の瞳で、苫都はただまっすぐ、目の前で翼を広げた青き龍を見つめる。

「何て…キレイなんだ…」

苫都の心は、初めて見るその青き龍の、あまりに美しい姿に奪われていた。

「ありがとう…」

「えっ…！？」

穏やかに微笑み、礼を言う青守に、苫都がうっとりとしていたその表情を崩し、焦ったように声をあげる。

「あっ…！いやっ！今のは口が勝手にっ…！」

「お前も美しいぞ…娘よ…」

「……っ！」

青守の言葉に、驚いたように、大きく目を見開く苫都。

「娘では失礼か…お前…名は…？」

名を問いかけながら、青守がゆっくりと、その鋭い爪の大きな手を、苫都の方へと伸ばす。

「と…苫都…」

ポツリと落とすように、自分の名を呟く苫都。

「トマトっ…」

「……っ！」

青守に名を呼ばれると、苫都の心臓の鼓動が高鳴った。

「……っ」

伸びてきた青守の手に、苫都が自然と手を伸ばす。

手と手が触れあった、その瞬間。

――パァァァァーンっ！！

天まで突き上げる白い光に包まれて、苫都は、青き龍へと姿を変えた。

こうして、少女は愛した龍へと姿を変え、人間が王のこの世界に初めて、“獣人”の存在をもたらしたのであった。

第８４章　ふたりの女　★１

千年以上もの遥か昔。
まだ御伽界という名のつく前のこの世界を生きる、“象人（かたどりびと）”と呼ばれる者たち。
“象人”は自然の力を操る能力を持ち、愛した者へと姿を変えるという御伽噺を持った種族であった。
象人の少女・苫都（トマト）は、象国の外で“青守（セイシュ）”という名の龍と出会い、恋をして、その姿を龍へと変えた。
これが、この世界最古の獣人、初代龍人の誕生の瞬間であった。

苫都が龍と化して数日。世界の果て・“象国”。

『ふっわぁ～っ……』
国で一番の広場に集まった象国の人々は、皆、大きな口を開き、一様に上方を見上げていた。大きく見開かれたその瞳はすべて、同じ生物を映し出している。

「どうだいっ？すっごいだろうっ？」

人々の視線の先で、得意げな表情を見せるのは、一匹の巨大な青き龍。

「翼だってあるんだよぉっ」
『すっごぉ～っ！』
背中にある大きな翼を広げる龍に、人々がさらに歓声をあげる。
「フフンっ」

歓声を聞き、龍がさらに得意げに口元を緩める。

「苫都っ！」

「げっ」

聞こえてくる声に、勢いよく顔をしかめる龍。

「何やってるのっ！？またこんなところに皆を集めてっ！」

広場へと現れたのは、不機嫌さを全面に押し出した、知玖であった。巨体の龍へ向け、何の恐れもなく怒鳴りあげる知玖のその声を聞き、集まっていた人々は、巻き込まれることを恐れてか、自然と解散していく。

「あぁ～あっ…」

――ボォォォ～ンっ！――

残念そうに肩を落とした龍が、白い煙に包まれていく。

「皆、帰っちゃったじゃないかぁ～いっ」

次の瞬間、煙の中から出てきたのは、龍と同じように残念そうな顔を見せた苫都であった。

「次は飛んでるところを披露しようと思ったのに」

「そんなのしなくていいよっ！」

呟く苫都に、知玖が口を尖らせる。

「まったくっ、非常識にも程があるよっ？勝手に飛び出して行って、戻ってきたかと思ったら龍になってるなんてっ」

「別に故意でやったわけじゃないさっ、私だって驚いてるんだ」

「楽しんでるようにしか見えないけど…」
「まぁ九十九パーセントは楽しんでるねぇっ」
「はぁっ…」
本当に楽しそうに笑う苫都に、知玖が深々と溜息をつく。
「だいたい、あんな得体の知れない龍まで一緒に連れ帰ってきてっ…」
「あっ、そうだっ！青守っ」
知玖の言葉に、苫都が思い出したように声をあげる。
「私っ、ちょっと青守のところに行ってくるっ！」
「あっ！苫都っ！未琴様が宮殿に来てくれってっ…！」
「後でちゃんと行くよぉっ！」
「あっ…！」
知玖の言うことも聞かずに、苫都は広場を駆け抜け、知玖から見えなくなるところまで、あっという間に走り去っていった。
「はぁっ…」
その場に残った知玖が、再び深々と溜息をつく。
「恋人出来ると友達付き合い悪くなるって聞いたけど…本当だったんだっ…」
苫都の去っていった方角を見ながら、知玖がしみじみと呟く。
「恋人じゃなくって、恋龍か…」
知玖がそっと、その表情を曇らせる。
「何だろう…この不安っ…」
自分でも戸惑うように、知玖は自分の胸に手を触れた。

「青守〜っ！青守〜っ！」
「んっ…？」
深い森の奥で、その体を休めていた龍は、聞こえてくる声に、ゆっくりと顔を上げた。

「はぁ〜っ！」
「トマト…」
目の前に立ち、少し走り疲れたように息を切らせる苫都を、青き龍・青守がそっと呼ぶ。

「はぁ〜っ、ちょっと遠いねぇっ」
苫都が少し困ったような顔を見せながら、辺りの森を見回す。

「もう少し村の近くに来たらどうだいっ？ウチの家の裏側でも、それくらいの広さはっ…」
「お前の国の者たちは…とても物珍しそうに俺を見る…」
説得するような苫都の言葉を遮り、青守が静かに答える。

「その視線が…少しばかり痛くてな…」
「皆、お前に見惚れてるのさっ」
そう言って笑いながら、苫都が青守の巨体に、背を向けるようにしてもたれかかる。

「今日、広場で龍化を見せてやったんだ。皆、凄い歓声をあげていたよぉっ？今度、お前も一緒にどうだっ？」
「遠慮しておこう…」
「釣れない奴だねぇっ」
そう言い放ち、苫都が少し苦い笑みを浮かべる。

「……。」
そんな苫都を見つめ、そっと目を細める青守。

「トマト…」
「んっ？」
「本当に…良かったのか…？」
「えっ…？」
低い声で聞こえてくる問いかけに、苫都が顔を上げ、戸惑うように青守の顔を見上げる。

「お前は人と獣の姿を持つ、人類の新たな種族を、この世界に生み出した…」
「……。」
真剣な眼差しを向ける青守を、苫都もまっすぐに見つめ返す。

「このことは恐らく…今後の世界を大きく揺れ動かすこととなるだろう…」
今後の世界を、懸念するような顔を見せる青守。

「そうなればお前は…そのすべての責任を負うこととなる…後悔する前に今一度、考えっ…」
「しないさっ、後悔なんて」
青守の言葉を強く遮り、苫都は笑顔で言い切った。

「私は今、嬉しいんだ」
少し俯いた苫都が、大事そうに左胸に手を当てる。
「お前と同じ姿になれたこと…お前と出会えたことが、何よりも嬉しい…」
俯いていた苫都がゆっくりと顔を上げ、再び青守を見つめる。

「だから後悔なんてしない。例え、どんなに世界が揺れ動いてもっ…」
「トマト…」
曇りなく微笑む苫都に、青守がそっと目を細める。

「変わった娘だな…」
「よく言われるっ！アハハハっ！」

優しく微笑む青守に、苫都は幸せそうな笑顔を見せた。

だが、後に起こる世界の揺らめきは、苫都の考えを大きく超えるものとなる。

その頃。象国・国主宮殿。

「龍化・人化を自在に行い、龍・人のどちらの言語も理解出来る…」

国主の間には、象国の者たちとは違った風貌の、研究者のような男たちが数名、訪れてきていた。
「人化時には、通常の人とは比べ物にならない程の身体能力を計測っ…」
書類を読み上げながら、楽しげな表情を見せる、研究者の男の一人。
「加えて、象人固有の特殊能力を持ち得るっ…」
男が書類を伏せ、さらに大きく口元を歪める。

「素晴らしいっ！実に素晴らしい存在ですよっ！苫都さんはっ！」
「……。」
高ぶる感情に声を荒げる男と、玉座に座る未琴は、どこか複雑そうな表情で向き合っていた。

「“龍人”、いえっ、今回は龍人でしたが今後、様々な動物たちと触れ合うことで多くの“獣人”を生み出せればっ…」
男が瞳を輝かせ、まっすぐに未琴を見つめる。

「この世界に革命的な変化が訪れるに違いありませんっ！！」
「革命的…」
男の言葉を繰り返し、未琴が浮かない表情を見せる。

「ええっ！この変化には“象人”の協力が必須っ！是非とも賛同いただけませんかねぇっ！？未琴殿っ！」
「……。」
その誘いに、眉をひそめる未琴。

「象人は、強き“獣人”を生み出すための道具ではありません…そのような協力はっ…」
「貴女も知っておいででしょう？“玄神”の存在は」

「……っ」
男の口から出るその名に、未琴の表情が曇る。
「神の血を引き、“神器”を操る玄神一族…その力を持って君臨する、今のこの世界の王です」
「……。」
続く男の言葉を聞きながら、未琴が厳しい表情を見せる。人間が王の世界で、人間たちは皆、平等に暮らしているわけではなく、神の力を受け継いだ玄神一族が、その圧倒的な力で権力を掌握し、他の人間たちを支配していたのであった。
「独裁的な政治こそしないものの、玄神一族の力は絶大…我々には、逆らうことすら許されません…」
どこか悔しげに歯を食いしばる男。
「皆が平等に生きる為にもっ、我々、人間にはもう一つの強き力が必要なのですっ！」
男が大きく両手を広げ、声を荒げる。
「玄神に匹敵する程の力っ…！“獣人”の力がっ…！！」
「……。」
熱弁する男を前に、困ったように表情を曇らせる未琴。獣人を生み出すことに賛成は出来なかったが、人間を守るべき象人の国主としては、この男の言葉を拒絶するわけにもいかなかった。
「……わかりました…」

「おおっ！未琴殿っ…！」
「ただしっ」
「……っ」
強く言葉を付け加える未琴に、男が一瞬、怯んだような顔を見せる。

「象人を強制的に獣人にすることは、絶対にしないと約束していただきたいのです」
未琴が強い瞳で、男を見つめる。

「あくまで自然の流れに任せると…」
「わかりました。約束いたしましょう…」

こうして、未琴は、人間たちの申し入れを受け入れた。

新たな人間の種族“獣人”を生み出す為に、象人は皆、生まれて初めて象国の外へと出て、人間たちの導きにより、運命の出会いを、更なる進化を求めて旅立った。

そして、知玖にも、旅立ちの時が訪れていた。

「まだ信じられない…この国を出る日が来るなんてっ…」
国の出口から、今はもう人も少なくなってしまった象国を眺め、

知玖が感慨深い表情を見せる。

「象国を出る時っ、苫都もこんな気持ちだった…？」

「ん～っ…」

知玖の視線の先に立っているのは、どこか浮かない表情を見せた苫都。知玖の問いかけに、悩むように首を捻る。

「どうだったかねぇっ、もう忘れちゃったよっ」

「そんなに前のことでもないでしょっ？もう、忘れっぽいんだからっ」

適当に答える苫都に、知玖が少し呆れたように笑う。

「象人誕生の御伽噺を聞いた時…私、とても素敵なお話だと思ったわ…」

小さな笑みを浮かべたまま、知玖が遠い瞳で空を見上げる。

「ロマンチックだなぁって憧れもした…けどっ…」

知玖の笑みが、徐々に曇っていく。

「実際、“自分が物語のようになれ”って言われると…結構、複雑だね…」

「知玖っ…」

少し声のトーンを落とす知玖を、苫都が目を細めて見つめる。

「べっ別に獣人になるのは、強制じゃないんだっ！お前が嫌なら、この国に残ればっ…！」

「ううんっ」

「えっ？」

すぐさま首を横に振る知玖に、苫都が目を丸くする。

「私、行くわっ」
知玖が笑顔を見せ、苫都の方を振り返る。
「けど、お前っ…」
「だって、苫都だけ愛する人を見つけて、私はこの国に閉じこもり～なんて悔しいじゃないっ？」
不安げな表情を見せる苫都に、知玖が明るく微笑みかける。
「見てなさいっ？苫都よりもぉ～っとカッコイイ人っ、捕まえてきてやるからっ！」
人差し指を突き立て、知玖が強く言い放つ。
「あっ、カッコイイ獣かっ」
「知玖っ…」
言い直す知玖に、苫都もゆっくりと笑みを浮かべる。
「じゃっ、私行くねっ、苫都っ」
「ああ、またな。知玖」
苫都に見送られ、知玖は象国の外の世界へと旅立っていった。
「……。」
象国の入口に一人残った苫都は、どこか神妙な表情を見せながら、知玖の去っていった方角を、いつまでもまっすぐに見つめていた。
「後悔、していますか…？」
「……っ」

背後から聞こえてくる声に、苫都がゆっくりと振り返る。

「未琴っ」

苫都が振り返ると、そこには真剣な表情を見せた未琴が立っていた。

「この世界に“獣人”の存在をもたらしたこと…」

「……。」

未琴の言葉に、苫都がそっと目を細める。

「未琴は…？」

再び知玖の去っていった方角を見つめた苫都が、背中を向けたまま、未琴に小さく聞き返す。

「未琴は後悔してるかい…？“獣人”を生み出す為に、象人をこの国から解放したこと…」

「……っ」

苫都の問いかけに、未琴が悲しげに目を落とす。

「まだ、わかりません…」

「……私もだ…」

首を横に振る未琴に、苫都もそっと目を落とした。

その後、外の世界へと解放された象人たちは、あらゆる獣と出会い、あらゆる“獣人”を誕生させた。

数多くの獣人が生まれ、その獣人がまた獣人の子を宿し、世界に

は獣人が溢れるようになった。
これは、当初の人間たちの予想を大きく上回る結果となった。

そして知玖にも、運命の出会いが訪れる。

世界の片隅。とある海の底。

「キレイ…」
海底を泳ぐ知玖は、上方の光の差す海面を見上げ、見惚れるような表情を見せていた。

「水力があれば海の中でも呼吸が出来るのね…」
外の世界を旅し、知玖が辿り着いたのは、この海であった。呼ばれるように海の中へと入った知玖は、ゆっくりと海の中を進み、初めて見る景色に目を見張った。

「こんなにキレイなところなら…ずっと暮らしていたいくらいっ…」

――……っ――

「えっ…？」
ふと、頭の中に声が響いたような気がして、知玖が戸惑うように振り向いた。

「誰…？」
そう問いながらも、泳ぐ足が、導かれるように勝手に動いていく。

「あれはっ…」

泳ぎ進む知玖の視界に、やがて大きな岩の塊のようなものが見えてきた。整った造りは自然に出来たものとは思えず、海底にそびえ立つ、建物のようにも見える。その入口の付近に降り立ち、知玖は戸惑うように建物を見上げた。

「一体っ…」

――……っ――

「……っ」
再び頭の中に声が響き、知玖はハッとしたように目を開いた。

「この中に…いるの…？」
問いかけながら、知玖がゆっくりと建物の中へと足を踏み入れる。恐怖もあったが、足はまたしても勝手に動いた。

「誰っ？誰かいるのっ…？」
少し腰を引き気味にしながら、ゆっくりと建物の中へと進んでいく知玖。

「ここはっ…」

中はそう広くもなく、短い廊下はすぐに終わって、薄暗い空洞へと辿り着いた。空洞のその先に、格子で遮られた部屋が見える。

「牢…？」

「……っ」

「……っ！誰っ…！？」

牢のようなその部屋の奥に人影が見え、知玖が思わず身構えて、声を張り上げた。

「……。」

「えっ…！？」

格子のすぐ前までやって来て、知玖へとその姿を見せる、その人影。明らかとなった姿を見た瞬間、知玖が大きく目を見開く。

「鬼っ…？」

牢の中にいるのは、透き通る程真っ白な肌に、暗闇で輝く二本の金色の角を持ち、牙と爪を鋭く尖らせた、まさに“鬼”と呼ばれる生物そのものであった。物語などに出てくるその生物の名を知ってはいたが、その目で見るのは、知玖は初めてのことであった。その存在は否定こそされてはいなかったが、肯定する者も誰もいなかったのだ。

「鬼っ…鬼…」

怯えた表情を見せた知玖が、牢の前からゆっくりと後ずさる。

「逃げなきゃっ…」
「やっと…来てくれた…」
「えっ…？」
鬼が発する、自分と同じ言葉に、知玖は思わず足を止め、戸惑うような声を漏らす。
「ずっと…ずっと待ってた…君を…」
「……っ」

白い肌の中に際立って輝く赤色の瞳が、知玖を捉える。その恐ろしい程に冷たく輝く瞳に見つめられた瞬間、知玖はその瞳から、目を離せなくなった。どこまでも冷たいその瞳は、知玖が見てきた誰の瞳よりも美しかったのだ。

「貴方が…」
目を離せぬまま、知玖がゆっくりと口を開く。
「貴方が…私を…ここへ呼んだの…？」
「そうだよ…」
鋭い牙の覗くその口元を緩めて、知玖へと微笑みかける鬼。
「君の…名前は…？」
「名前っ…？」
名を問われ、知玖が少し眉をひそめる。
「知玖…」
「シルク…キレイな名前だね…」
「……っ」

自分の名を呼び微笑む鬼を、戸惑いながら見つめる知玖。先程まで胸にあった溢れる程の恐怖が、徐々になくなってきているのを感じた。この鬼のことを、知りたいとさえ思う。この鬼の名を、呼んでみたいとさえ思う。

「貴方の…貴方の名前は…？」

その問いかけは、口から自然と零れ落ちた。

「僕の名は…」

鬼がゆっくりと口を開く。

「牢戸（ロード）…」

「牢…戸っ…」

「そう…ねぇ、シルク…」

戸惑いながらも鬼の名を呼ぶ知玖に、牢戸と名乗った鬼は、格子の間から手を伸ばし、鋭い爪の伸びた白いその手で、ゆっくりと知玖の頬をなぞった。

「僕を…ここから出して…」

「……っ」

頬から伝わるその手の冷たさに、知玖はゆっくりと頷いた。

第８４章　ふたりの女　★２

それから、二十年程の歳月が流れた。

獣人で溢れるようになった世界を、どこかの国の王が“おとぎ話のような世界”と称し、この世界はいつしか『御伽界』と呼ばれるようになっていった。

人間の王として世界に君臨していた玄神は、獣人誕生によりその鳴りを潜め、その人口を増やし、勢力を拡大していった“龍人”・“雀人”・“犬人”とともに御伽界の四大勢力となった。

四つの種族がそれぞれに治める、『武国』『龍国』『雀国』『犬国』は、四大国と呼ばれ、御伽界の中心的国家となった。

――御伽界、四大国が一『龍国』。

初代龍人として龍国を治めることとなった苫都は、立派な国主宮殿で、伴侶である青守と、その青守との間に儲けた子供たちとともに暮らしていた。

「苫都っ」

「んっ？」

国主の間で国務をこなしていた苫都が、呼ばれる名にゆっくりと顔を上げる。

「未琴っ！」

「久し振りですね、苫都っ」

苫都のもとへとやって来たのは、未琴であった。多くの獣人が生

まれるようになり、象人はそのほとんどが象国を出て、事実上、象国はなくなって、未琴も国主の任を終えたのである。

「ホントに久し振りだねぇっ、今はどこで何をしてるんだいっ？」
「犬国主の下で国務の手伝いを」
「犬国っ？何だいっ、言ってくれればウチの国に招いたのにっ」
「フフっ、大丈夫です。犬国での暮らしも気に入ってますから…」

国主の間を離れた二人は、応接間へと場所を移し、久し振りの会話を楽しんだ。未琴は、その穏やかな微笑みこそ変わらなかったが、二十年の歳月で、やはり年を取っていた。

「貴女はあの頃と…変わりませんね、苫都…」
「あっ、ああっ…」
それに比べて苫都は、もう三十五歳にもなるというのに、どう見ても十代後半か二十代前半にしか見えなかった。二十年の間に、ほとんど年を取っていないのである。

「初代の龍人というのは、どうも、そのまま龍の寿命を受け継ぐらしいっ」
苫都が軽く、口元を緩める。

「青守の話じゃっ、心臓を貫かれるまでは百年でも千年でも生きられるそうだ」
「それは素晴らしいお話ですね」
「どうかねぇっ、自分の子や孫より長生きってのは、ちょっとっ…」
明るく笑う未琴に、苫都が少し言葉を濁す。

「それは確かにそうかも知れませんね…」
苫都の言葉を受けた未琴が、少し残念そうに目を落とす。

「まっまぁ平気さっ！私には青守がいるしっ…！」
「そうですね…」
辛気臭くならないよう、明るく微笑んで見せる苫都に合わせ、未琴もそっと笑みを浮かべる。

「ですが…それ程に長い時を生きられるというのなら、苫都…」
「えっ…？」
急に真剣な表情を見せる未琴に、苫都が戸惑ったような声を出す。

「貴女が…この世界の行く末を、見届けてはくれませんか…？」
「行く末を…？」
「ええ…」
聞き返した苫都に、未琴は大きく頷く。

「私たち二人は…この世界を大きく揺れ動かしました…」
「……っ」
未琴の言葉に、苫都がそっと眉をひそめる。苫都が獣人の存在をもたらし、未琴が獣人の誕生を促したことで、この世界は名すら変える程に大きく変わったのである。

「これが本当に正しかったのか、それを見極めてほしいのです…」
未琴がまっすぐに、苫都を見つめる。

「私はもう二、三十年と持たずに朽ちる命…行く末を見届けることは出来ません…」
「未琴っ…」
昔とは異なり、老いを感じる未琴の姿。未琴は獣人でもなければ、

龍でもない。苦都とは違う時の流れの中で、生きて、そして死んでいくのだ。

「……っ」

苦都がそっと、目を伏せる。

「わかった。約束する」

「苦都っ…」

大きく目を開き、ゆっくりと頷く苦都を見て、未琴が嬉しそうに目を細める。

「ありがとうございます…」

未琴が、噛み締めるように礼を言う。

「すみません…貴女にばかり、こんなことを押しつけて…」

「平気さっ、元々は私が巻き起こしたことだしっ」

「それもそうですね」

「おいおいっ、そりゃないよぉっ」

「フフっ」

顔をしかめる苦都を見て、未琴が楽しそうに笑う。

「そういえば、知玖はどうしているのでしょう?」

「えっ?知玖っ?」

久々に聞くその名に、苦都が目を丸くする。

「さぁねぇっ、連絡の一つも寄越してこないから、獣人になったのかどうかさえわかんないよっ」

「そうですか」

首を傾げる苦都に、未琴が少し残念そうな顔を見せる。

「まぁ大丈夫だろっ?適当に生きてるさっ、きっと」
「知玖はしっかり者ですからね」
「私と違ってか?」
「フフっ」

試すように問いかける苫都に、未琴はそっと微笑むだけであった。

この日が、苫都と未琴の、最後の対面となった。

それから、さらに二百年の時が流れた。
龍ほどに寿命の長い獣はおらず、かつて象人と呼ばれる存在であった者たちは、苫都だけを残し、皆、死んでいった。
苫都は、かつての友人・知人と死に別れ、自らの子や孫に先立たれると、子孫に龍国主の座を譲り渡し、青守とともに、龍国のはずれの屋敷でひっそりと暮し始めた。
そこで、未琴に言われた通り、この世界の行く末を見守っていた。

「“鬼人”っ?」
「はい」

その日、苫都の屋敷を訪れたのは、武国を治める玄神の流れを汲む、玄上一族の血を引く男であった。

「獣人なのかい？」
「恐らくは…」
『……っ』
玄上の言葉を聞くと、苫都と青守は顔を見合わせ、互いにその表情を曇らせた。

「“鬼”と呼ばれる生物が実在すると…聞いたことはあったが…」
「鬼っ…？」
「鬼は人間に害を及ぼす存在として、我らの祖先である玄神が、海の底深くの牢に閉じ込めたと聞いております…」
小さく呟いた青守の言葉に、苫都が首を傾げていると、玄上が詳細をつけて返した。

「それを象人の誰かが見つけて、愛した上に、牢から出しちまったってことかいっ」
「牢から出した後、愛したのではないか…？」
「今はんなこと、どうでもいいんだよっ！」
細かい順番を気にする青守を、苫都が睨みつけるように見る。

「にしても、一体誰がっ…」
象人であれば、苫都が知らない者はいない。少なくとも、苫都の知っている誰かが、その海底深くの牢にいた鬼を愛したということになる。

「鬼人はそれ程に勢力を拡大してきているのかいっ？」
「いえ、鬼人の数はそれ程多くはありません…しかしっ…」

玄上の表情が、一気に険しくなる。

「鬼人の生み出したと見られる“骸鬼”と呼ばれる生物が、御伽界各地で暴れ回り、無差別に人を襲っています…」

「骸鬼…」

「何てことっ…」

眉をひそめる苫都の横で、青守は悲しげに俯いた。

「それでっ？龍国に、その骸鬼退治に協力してほしいってことかいっ？」

「いえっ…」

「あっ？」

すぐさま首を横に振る玄上に、苫都が少し顔をしかめる。

「今日は、貴女に同意していただきたくて、ここへ参ったのです」

「同意っ？何に？」

“鬼人　殲滅（せんめつ）”にです」

「なっ…！殲滅っ…！？」

玄上の言葉に、苫都は驚き、思わず大きな声で聞き返した。

「馬鹿なっ…！そこまでする必要がどこにっ…！」

「鬼人は極めて危険な存在…数の多くない今の内に殲滅するのが適策かと…」

「それは鬼の話だろうっ…！？鬼人になったのは、象人やその子供たちでっ…！」

「鬼も鬼人も危険なことに、違いはありません」

「うっ…！」

強い瞳で言い切る玄上に、苫都が思わず言葉を詰まらせる。

「だがっ…」
いくら危険な存在とはいえ、かつて同じ国で生きた者や、何の罪もなく生まれてきた鬼人の子供たちを殲滅するということを、苫都は認めたくはなかった。

「やはり殲滅はっ…」
「お忘れですか？苫都殿」
「えっ…？」
鋭く名を呼ぶ玄上に、苫都が少し眉をひそめる。

「この世界に“獣人”をもたらしたのは貴女…“鬼人”を生み出したのも貴女ということになる…」
「……っ」
玄上の言葉に、曇る苫都の表情。

「その鬼人が、何の罪もない人間を傷つけ、殺した…」
「……。」
険しい表情を見せ、苫都がそっと俯く。

「貴女には、責任を取っていただく必要があるのですよ…苫都殿…」
「クっ…」
「トマト…」
悔しげに唇を噛み締める苫都を、青守は心配するように見つめた。

「わかった…同意しよう…」
「ありがとうございます」
苦々しく返事をする苫都に、玄上が深々と頭を下げる。

「ただし、私と青守も同行させてもらうよっ」

「勿論、構いませんよ。こちらとしても、貴女がたが居て下さった方が心強いですからね」
「そんなに強いのかい？鬼人っていうのは」
「ええ…」
ひそめた表情で問いかける苫都に、玄上はゆっくりと頷く。
「彼らの持つ“水力”は、象人たちの特殊能力の中でも、かなり強力な方と思われます…」
「水力っ…？」
玄上の言葉に、苫都が敏感に反応する。
――苫都っ！――
水力を使う象人と聞いて、苫都が思い出すのは、たった一人であった。
「……っ」
苫都が険しい表情を見せ、考え込むように俯く。
「どうした…？トマト…」
「へっ？いっいやっ…」
青守が苫都の様子の変化に気づき、声を掛けるが、苫都はすぐに首を振って答えた。
「まさか…なっ…」
そんなことがあるはずがないと、苫都はそう自分に言い聞かせた。

第８４章　ふたりの女　★３

御伽界中央部・“鬼国”。

「あれから二百年あまり…」

この時代、他の国に比べて、高度に発展した都市を創り上げた鬼人たちの国、鬼国。

「見てごらん…」

海底の牢獄から解き放たれた鬼・牢戸は、二百年以上もの時の中で死ぬことなく生き続け、王として鬼国を治めていた。

「ここが…僕らの夢の始まり…」

広い都市の中央に立ち、上方を見上げる牢戸。

「これが…僕らの夢を叶えてくれる…」

牢戸の赤い瞳の見つめる先には、高くそびえ立った五本の白い塔が、東西南北とその中央に、それぞれ建ち並んでいた。その塔を見上げ、牢戸が満足げな笑みを浮かべる。

「美しいだろう…？シルク…」

「ええ…とても…」

問いかけた牢戸のすぐ横に立ち、穏やかに微笑みながら頷く一人の女性。それは、知玖であった。

「もう完成しているの…？」
「いや…まだ足りないものが一つだけある…」
知玖が聞くと、牢戸は少し表情を曇らせた。

「だが…それさえ手に入れれば…」
「私たちの理想が…現実のものとなるのね…」
牢戸の微笑みにつられるように、知玖もゆっくりと口元を緩めた。

「ああ…もうすぐだ…もう後少しで…」
「グガアアアアっ！！」
『……っ？』
どこからか聞こえてくる激しい悲鳴に、知玖と牢戸が、険しい表情となって同時に振り向く。

「今の悲鳴はっ…？」
「牢戸様っ！！知玖様っ！！」
知玖が戸惑いの表情で辺りを見回す中、鬼人と見られる男が1人、知玖たちのもとへと焦った表情で駆け込んできた。

「何事だ？」
「そっそれがっ…！」
冷静に問いかける牢戸に、男が必死の表情で口を開く。

「玄神共がっ…！人間共がこの鬼国に攻め入って来ましたっ…！！」
「何っ…！？」
「そんなっ…！」
男の言葉に、知玖と牢戸が大きく驚いた。

一方、玄上率いる武国の者たちと共に、苫都と青守も鬼国へとやって来ていた。

「ギャアアアアっ！！」
「グガアアアっ！！」
「……。」

いきなり都市を襲われ、何の抵抗もすることの出来ない鬼人たちが、武国の者たちによって、次々と殺されていく。その凄惨な光景を、苫都は厳しい表情で見つめていた。

「これが“行く末”というものか…」

苫都が獣人というものを生み出さなければ、流れることのなかった血。

「未琴っ…」

辛さを噛み締めた表情で、苫都はそっと未琴の名を呟いた。

「トマト…」
「……っ」

後方から青守に呼びかけられ、戦場を見つめていた苫都がゆっくりと振り返った。

「やはりお前は…見ない方が…」
「前に言ったことがあるだろう…？青守…」
青守が言い終わる前に、苫都が鋭く答えを返す。

「私には…この世界の行く末を見届ける義務があるんだよっ…」
どんなに悲惨な光景が広がったとしても、目を逸らすことは許されない。

――この世界の行く末を…見届けてはくれませんか…？――
――貴女には、責任を取っていただく必要があるのですよ…苫都殿……――

それが、この世界に獣人をもたらした、苫都の義務。

「例え…お前と出会ったことを…後悔する日が来たとしても…」
「……。」
険しい表情を見せる苫都に、青守がそっと目を細める。

「国主と見られる鬼の居場所を発見致しましたっ！」
「……っ」
武国の兵士の一人の声に、苫都や、そこに居る者たちが一斉に振り向く。

「よしっ！一気にカタをつけるぞっ！」
「わっ…私も行くっ…！」

士気を高める玄上たちに、苫都は必死にそう言った。

「何故、人間が私たちをっ…！」
「骸鬼を使って、人を襲ったことか…」
「えっ…？」
ポツリと呟く牢戸に、知玖が眉をひそめる。

「だが、それだけで腰の重い奴らが動くとも思えぬし…」
俯き、考え込んでいた牢戸が、再びゆっくりと五本の塔を見上げる。

「まさか…この事が…」
牢戸がそっと、眉をひそめる。

「けどっ、骸鬼で人を襲ったのはっ、私たちの理想を叶える為に仕方なくっ…！」
「奴らに、そんなことを言っても無駄だよ…シルク…」
「そんなっ…」
落ち着いて答える牢戸に、知玖が険しい表情を見せた。

「じゃっじゃあっ、私たちの理想を話してっ、玄神たちにも理解してもらえばっ…！」
「人間共は、鬼の言うことなど聞かないさっ…」
必死に考える知玖であったが、牢戸は静かにその言葉を否定した。

「でなければ僕は…深海の牢へ閉じ込められることなどなかったよ…」
「牢戸…」
どこか悲しげに呟く牢戸に、知玖はそっと目を細める。

「人と鬼は…どこまで行っても相容れぬ存在だった…」
塔を見つめながら、牢戸が遠い瞳を見せる。

「だからこそ、これを完成させることで…人と鬼の争うことのない、理想の世界を創りたかったんだけど…」
「牢戸っ…」
「残念だな…後、ほんの少しだったのに…」
「……っ」
俯いた牢戸が、力なく笑みを零す。その笑みに、知玖の方が辛い表情を見せた。

「まだ諦めないでっ…！牢戸っ！」
「シルク…？」
声を張る知玖に、牢戸が戸惑うように顔を上げる。

「ここで生き延びればっ…！まだきっと機会はあるわっ…！」
「けどっ…」
「貴方の夢はっ…！私が叶えてみせるっ…！」
「シルクっ…」
まっすぐな瞳で牢戸を見つめ、強く叫ぶ知玖を、牢戸もまっすぐに見つめ返した。

「ありがとう…シルク…」
再び、今度は柔らかな笑みを浮かべた牢戸が、知玖へと礼を呟く。
「僕は君と出会えて…本当に良かった…」
「牢戸っ…」
噛み締めるように呟く牢戸に、知玖も嬉しそうに笑みを零す。
「牢戸っ…私も貴方に出会えて、本当に良かったと思ってるわ…」
「ありがとう…シルク…」
微笑んで答え返す知玖に、牢戸がそっと礼を言う。
「居たぞっ!!鬼が居たっ!!」
『……っ』
遠くの方から聞こえてくる声に、知玖と牢戸が一気に険しい表情となる。二人が振り向くと、その場へ武国の兵士と見られる男が数名、駆けつけてきていた。
「玄上様っ!こちらですっ!」
「玄神…?」
男の言葉に、知玖がそっと眉をひそめる。
「ああ…」
「……っ」
兵士たちに道を開けられるようにして、その場へと現れる黒髪の男。その右手には、金色に輝く槍のような武器を持っている。ただの槍ではなく、どこか不思議な力を纏った槍だと、知玖はすぐに察

した。

「神器を操る玄神一族だ…」
「あれが…神器…」
小さく呟く牢戸に、知玖はさらにその槍へと目を見張る。

「玄神相手では分が悪いな…」
牢戸の表情が、そっと曇る。

「シルク、君だけでも逃げるんだ…」
「えっ…!?」
玄上たちに悟られないよう、小さく囁く牢戸であったが、その言葉に知玖は大きく驚いた。

「嫌よっ…!牢戸を置いていくなんてっ…!」
「ここで二人とも死んでは、誰が僕らの理想を叶えるんだ…?」
「死ななければいいのよっ…!」
問いかける牢戸に、知玖が強く言い返す。

「あんな奴らっ…!ここで私が全員っ…!」
「おいっ!玄上っ!」
「……っ」
知玖が玄上たちの方を振り向いた途端、そこに、聞き覚えのある懐かしい声が割って入って来た。

「何でしょうっ?苫都殿」
「苫都…?」
聞き覚えのある名に、知玖がさらに眉をひそめる。

「勝手に進むんじゃないよぉっ！私も同行するというのが、条件だったはずだろうっ！？」
「……っ！！」

そこへ現れた、青き龍を連れた青い髪に紅の瞳の女に、知玖が大きく目を見開く。

「だいたい、骸鬼はともかくっ、無抵抗の鬼人にまで手を掛けるなんてっ……！」
「苫都…」
「えっ…？」
玄上に強く意見をしていたその女が、知玖の声に戸惑うように振り向く。

「……っ知玖…」

振り向いたその女・苫都は、その瞳に知玖の姿を映すと、ひどく驚いた表情を見せた。

――じゃっ、私行くねっ、苫都っ――
――ああ、またな。知玖……――

そう言って別れた、二百年以上もの昔。

「お前が…」
苫都が茫然と、知玖を見つめる。

「お前が…鬼を愛した象人っ…」
「……。」

戸惑いながら見つめ合う苫都と知玖。かつての友との再会は、これ以上ない程に思いがけず訪れたのだ。

「知り合いなのですか？」
「えっ？あ、ああっ、あいつも元・象人だ」
隣の玄上に問いかけられ、苫都がハッとなって答える。

「成程っ、では彼女が初代鬼人というわけですか」
「……っ」
玄上のその言葉に、苫都が眉をひそめる。深海の牢から鬼を復活させ、人間を襲う骸鬼を生み出した象人。水力を使うと聞いて、まさかとは思っていたが、本当に知玖であったとは、どうにも信じ難かった。

「玄上」
真剣な表情を見せ、苫都が玄上を呼ぶ。

「知玖と…あいつと二人で話をさせてくれないか？」
「話？」
「ああ、少しの時間でいい」
「……。」

苫都の申し入れに、玄上が少し考え込むように俯く。

「わかりました、いいでしょう」

「くっ玄上様っ…！今はそのような状況ではっ…！」

「構わんさっ…」

声を荒げる兵士に、玄上は柔らかく答えた。

「今となってはたった二人の象人っ…積もる話もあるでしょうし…」

「……っ」

意味深に微笑む玄上に、苫都は少し顔をしかめた。

「いいか？知玖」

「……ええっ」

振り向いた苫都の問いかけに、知玖が間を置いた後、大きく頷く。

「シルクっ…」

「心配しないで、牢戸」

不安げな瞳を向ける牢戸に、知玖は穏やかに微笑みかけた。

「彼女は昔からの親友なの。私たちの理想もきっとわかってくれるわ。私が話をつけてくるから」

「……。」

そう言って苫都とともに去っていく知玖を、牢戸は細めた瞳で見送った。

玄上や牢戸たちのいる場所から少し離れたところまで歩き、苫都と知玖は二人きりのその場所で足を止めた。

「二百年以上振り…か…」

知玖と目を合わせぬまま、鬼国の都市を見回しながら、苫都がどこかしみじみと呟く。

「何だか懐かしいを通り越すねぇ…」

「……。」

苫都の言葉を聞きながら、少し口元を緩めた知玖が、そっと目を落とす。

「もう、死んでるかと思ってた…」

「私もさ。まぁ人間だったら、普通死んでるよ」

「龍も鬼も…寿命の長い種族なのね…」

「……っ」

知玖の口から鬼の言葉が出ると、苫都は少し眉をひそめた。まだ頭のどこかで、知玖が鬼人であることを否定したがっている自分がいた。

「他の象人は…もう皆、死んじゃったんでしょうね…」

「ああ…未琴も、随分前に死んだ…」

「そう…」

ゆっくりとした、少し低い声での会話が続く。

「知玖…」
「何…？」
名を呼ぶ苫都に、知玖が顔を上げる。

「お前が本当に…あの鬼を…？」
「……っ」
戸惑いを押し出して問いかける苫都に、知玖が少し顔をしかめる。

「ええ、そうよっ…私が牢戸を、閉じ込められていた深海の牢から解き放った…」
「何故…そんなことをっ…？」
「何故っ…？」
苫都の問いかけを、知玖が不思議そうに聞き返す。

「随分と簡単なことを聞くのね…」
少し目を落とした知玖が、そっと笑みを零す。

「彼を愛したからよ」
「……っ」
まっすぐな瞳を向けて答える知玖に、苫都が眉をひそめる。

「鬼なのに、か…？」
「この世界で初めて、獣を愛した人の言葉とは思えないわねぇ」
苫都が真剣な表情を見せて問いかけると、知玖は少し呆れたように笑う。

「それとも…鬼と龍では別、かしら…？」
「知玖っ…」
試すように言う知玖に、少し目を細める苫都。

「だがあいつは…骸鬼というものを生み出して、何の罪もない人間を襲った…」
「牢戸だけが悪いみたいに言わないで。それは私や他の鬼人も合意の上でのことよっ」
苫都の言葉を、知玖が鋭く突き返す。

「合意…？」
「ええっ」
「罪もない人間たちを殺すことにっ、お前は合意したって言うのかっ…！？」
「……っ」
声を荒げる苫都に、知玖がゆっくりと顔を上げた。

「ええっ…」
「……っ」
突き刺すような、鋭い瞳を向けて頷く知玖に、苫都が小さく唇を噛む。

「お前はっ！人間を守る“象人”なんだよっ…！？」
「……フフっ」
「……っ！」
知玖がそっと笑みを零すと、苫都が顔をしかめる。

「何がおかしいっ！？」

「別にっ、いつも象人の掟を破ってばかりいた貴女に、そんなこと言われる日が来るとは思ってなかったからっ」
怒鳴るように問いかける苫都に、知玖が微笑んだまま、軽い口調で答える。
「それにっ…」
知玖が笑みを消し、そっと目を細める。
「私はもう象人じゃない…鬼人なのよっ…」
「……っ」
再び向けられる鋭い瞳に、苫都の表情が曇った。
「変わったな…知玖…」
「二百年以上経ってるのに、変わらない方がおかしいわっ…」
少し悲しげに呟いた苫都に、知玖は冷たく答えた。
「鬼人になったから人間はいらない、か…」
「そうは言ってないわ。骸鬼に襲わせたのも、私たちの理想を叶える為に仕方なくやったことよ」
「理想だとっ…？」
「ええ」
眉をひそめた苫都に、知玖が微笑んで頷く。
「ねぇ、苫都っ、私たちの理想を叶えるのに、協力してくれない？」
「何っ…？」
知玖の言葉に、苫都が顔をしかめる。

「貴女だけは、他の人間と違って、特別扱いにしてあげるっ」
何の悪意もない、穏やかな笑みを浮かべる知玖。

「牢戸には私から話すわ。何ならあの龍が一緒でもっ…」
「ふざけるな」
「……っ」
遮る苫都の強い声に、知玖が眉をひそめて、言葉を止める。

「龍になっても、私は象人だ。そのことに変わりはない」
「……だから、人間たちを守ると…？」
「ああ…」
静かに問う知玖に、深く頷く苫都。

「例え…お前たちと敵対することになったとしても、私はっ…」

――バァァァァーンっ！

『……っ』

苫都の声を掻き消す程の大きな衝撃音が聞こえてくると、苫都と知玖は同時に振り返った。振り返った先に見える、五本の塔の中央付近から、灰色の煙が舞い上がっている。

「何だっ…？」
「中央塔の方…？」
「トマトっ！！」
「……っ」
二人が戸惑いの表情を見せていると、そこへ青い翼を広げ、青守

が飛んで来た。

「青守…？」

「玄上たちがっ…！鬼人に攻撃をっ…！」

「何っ…！？玄上がっ…！？」

「えっ…？」

青守の言葉は理解出来ていなかった知玖だが、驚き、聞き返した苫都の声に、その表情を凍りつかせる。

「牢戸っ…牢戸っ！！」

「あっ！待てっ…！！知玖っ…！！」

苫都が止める間もなく、知玖はその場から駆け出していった。

第８４章　ふたりの女　★４

――ずっと…ずっと待ってた…君を……――

海の底深くで、知玖だけを待っていてくれた鬼。

――僕は君と出会えて…本当に良かった……――

たった一人の、愛する鬼。

「牢戸っ…牢戸っ…！！」

今にも泣き出しそうな表情を浮かべながら、知玖が必死に煙の上がる中央塔へと急ぐ。

「牢戸っ！！」

やがて先程までいた中央塔のすぐ傍へと戻り、知玖は足を止めた。

「……っ！」

足を止めた知玖が、大きく目を見開く。

「こっ…んな…」
そこにはひどく傷つけられ、血まみれになった鬼人たちが、大勢、横たわっていた。倒れた鬼人たちは皆、ピクリとも動かない。そのあまりに悲惨な光景に、知玖の表情が青ざめる。

「シ…ルクっ…」
「……っ」
どこからか聞こえてくる、知玖の名を呼ぶ弱々しい声。それに気づき、知玖がゆっくりと振り向いた。

「……っ！」
振り向いた知玖が、さらに大きく目を見開く。

「シル…ク…」

中央塔のすぐ横に、倒れている一匹の鬼。その左胸には深々と槍が刺さっており、そこから人間とは違う紫色の血が流れ落ちている。今にも光を失いそうな、弱々しい赤い瞳が、知玖へと向けられていた。

「牢…戸っ…？」
倒れている鬼を、茫然と見つめながら、知玖がゆっくりと牢戸のもとへと歩み寄っていく。

「牢戸っ…！」
「うっ…うぅ…」
涙を流しながら駆け寄り、倒れ込んでいた牢戸の体を、支え上げる知玖。口からも紫色の血を流した牢戸が、ゆっくりと自分の胸に

突き刺さった槍の先へと手を伸ばし、それを掴む。

「ううっ…！」

「牢戸っ…！！」

自ら勢いよく槍を抜くと、牢戸は苦痛にその表情を歪めた。そんな牢戸に、知玖が不安げに身を寄せる。

「ううっ…はぁっ…！はぁっ…！はぁっ…！」

荒々しく呼吸を乱しながら、牢戸がゆっくりと知玖の方を見る。

「シル…クっ…ううっ…！」

「話してはいけないわっ…！牢戸っ…！！」

口を開いた牢戸に、知玖が注意するように強く言い放つ。

「シルク…」

涙の溢れ落ちる知玖の頬に、牢戸はそっと、その血まみれの手を置いた。

「君は…生きてっ…君だけは…」

「牢戸っ…」

かすれきった、弱々しい声が、願いを紡ぐ。

「生きて…僕の理想っ…僕らの夢を…現実のものにっ…」

鋭さを失った赤色の瞳が、徐々に細くなっていく。

「どうか…頼っ…」

「……っ！」

そっと閉じられる、赤い瞳。知玖の頬から、零れ落ちていく冷たい手。

「牢戸っ…？」

知玖の呼びかけに、目を閉じた牢戸は答えない。

「牢戸っ…」

冷たくなったその体は、もう動かない。

「……っ」

知玖が、唇を噛み締める。

「牢戸ぉぉっ！！」

その叫びは、天を貫くような、悲しみに充ち溢れた声であった。

「やったっ！やったぞっ…！国主とみられる鬼を倒したっ…！！」

「……っ」

牢戸の体に顔を埋めていた知玖が、聞こえてくる声に、ゆっくりと顔を上げた。

「さすがは玄上様の神器だっ…！！」

「神器…」

男たちの言葉に、知玖がそっと眉をひそめる。

「“槍器”…」

武国の兵士たちの先頭に立った玄上が、言葉をそっと呟くと、地面に落ちていた、牢戸の体を貫いた槍が自然と浮き上がり、持ち主のもとへと戻っていくように、玄上の手の中へと納まった。

「あの女っ、確かっ…」
「元・象人の初代鬼人でしたね」
「ああ…倒すならば、あいつも心臓を貫かないとなっ…」
「知玖っ…！！」
『……っ』

そこへ、知玖に遅れるようにして、苫都と青守が駆けつける。

「これはっ…！」
そこに広がる光景に、大きく目を見開く苫都。

「玄上っ！！貴様っ…！！」
苫都が怒りの瞳を、玄上へと向ける。

「話すことは許しましたが、その間に攻撃しないとは、言っていないでしょう…？」
「何だとっ…！？」
「……そうっ…」
「……っ？」
俯いたまま小さく声を漏らす知玖に、苫都が少し眉をひそめて、振り返る。

「知玖っ…？」
死んだ牢戸を抱えたまま、深く俯いている知玖に、苫都が首を傾げる。

「貴女…初めからそのつもりで…」
「……っ」
呟く知玖に、苫都が表情を曇らせる。

「違うっ…！知玖っ！話を聞けっ！私はっ…！」
「貴女たちが、いつ私たちの話を聞いたのっ…！？」
「……っ！」

顔を上げ、涙の跡の消えぬ表情で怒鳴りあげる知玖に、苫都が思わず言葉を止める。

「知玖っ…」
「言葉がいらぬというのなら…それでいいわっ…」
牢戸を地面に横たわらせ、知玖がその場でゆっくりと立ち上がる。

「言葉がいらぬというのなら…私はっ…人間でいることをやめるっ…！！」

――パァァァァンっ！

『……っ！』

白い光の中へと包まれていく知玖に、苫都や玄上たちが、一斉に警戒態勢を取る。

「あっ…」
「……。」

白い煙の中から姿を見せたのは、長い白髪の中から二本の金色に光る角を覗かせた、真っ白な肌に、鋭い牙と爪を持った、一匹の鬼。先程までの知玖と同じ服を着ており、その大きさも人間の頃と変わりない。だが、その赤色の瞳は、人間の頃よりも、ただ冷たく輝いた。

「“鬼人”っ…」
知玖のその姿に、苫都が思わず呟く。

「鬼めっ…！“槍器”っ…！」
「まっ待てっ…！！玄上っ…！！」
槍を構える玄上を、苫都が声を張り上げ、必死に止める。

「待つはずないだろうっ…！！この状況でっ…！！」
「だがあいつはっ…！！」
「……っ」
苫都と玄上が言い争っている間に、知玖はその場から、忽然と姿を消す。

「いくら貴女の知り合いの象人でもっ…！今となってはただの鬼でっ…！」

「……。」
「うっ…！！」
「なっ…！」
苫都に強く言い返していた玄上の目の前に、急に姿を見せる知玖。
目の前に現れた知玖に、玄上が大きく顔を引きつり、苫都が目を見開く。

「……っ」
「ひっ…！」
鋭い爪を振り上げる知玖に、玄上が表情を歪ませる。

「ぎゃあああああっ！」
次の瞬間、激しく赤い血が捲き散り、玄上の悲鳴が響き渡った。

「玄上っ…！！」
「うぁっ…」
正面から体を斬り裂かれ、倒れ込んでいく玄上に、苫都が思わず身を乗り出す。

「玄上様っ…！！」
『ひぃぃぃ～っ！！』
倒れた玄上の姿に、他の武国の兵士たちが震え上がる。

「……。」
「……っ」
その兵士たちへと、そっと視線を移す知玖に気づき、苫都が思わ

ず顔をしかめる。

「にっ…逃げなっ！！お前らっ…！！」

『うわあああああっ！！』

苦都の声を合図とするようにして、兵士たちがその場から逃げだしていく。

「……っ」

その瞳を鋭くし、再びその場から消える知玖。

「……っ」

『ひいぃぃ～っ！！』

逃げていた兵士たちの目の前に、知玖が姿を見せる。

「……っ！やめろっ…！知玖っ…！！」

知玖に気づき、必死に叫ぶ苦都。

「“鬼口”…」

だが苦都の声に知玖が止まることはなく、知玖はそっと口を開き、その開いた先を兵士たちへと向けた。

――バァァァーンっ！！

『ぎゃあああああああっ！』

「……っ！！」

鬼口の中に、消えていく兵士たちとその悲鳴。その悲惨な光景を目の当たりにし、苫都が大きく目を見開く。

「クソっ…！」

唇を噛み締めた苫都が、その表情を鋭くする。

「知玖っ…！！」

拳を青く光らせた苫都が、知玖のもとへと飛び出していく。

「……っ」

「何っ…！？」

飛び掛かってくる苫都に薄い笑みを向けると、知玖がその場から姿を消した。誰もいなくなった地面に着地し、苫都が焦るように周囲を見回す。

「どこへっ…！？」

「うっ…！」

「えっ…？」

聞こえてくる青守の声に、戸惑うように振り向く苫都。

「フフっ…」

「……っ！」

苫都が振り向くと、青守のすぐ目の前へと姿を見せた知玖が、楽しげに微笑みながら、その右手の鬼爪を振り上げていた。

「やっ…！」

青ざめた表情を見せた苫都が、すぐにまたその場から飛び出す。

「やめろっ…！！知玖っ…！！」

「……っ！」

苫都の叫び声に止まることなく、振り下ろされる知玖の鬼爪。

――ブシュっ…！！

「うっ…！！」

青守の大きな巨体の、その左胸部分を、知玖の鬼爪が深々と貫いた。

「うぁ…ぁあっ…」

知玖が貫いた爪を抜くと、激しく血が飛び散り、青守がゆっくりと後方へと倒れ込んでいく。

「……っ」

倒れていく青守に、凍りつく苫都の表情。

「せっ…青守っ！！」

苫都の叫び声が、その場に響き渡った。

「青守っ…！青守っ！！」
知玖の横を通り過ぎ、苫都が倒れた青守のもとへと駆け寄る。
「青守っ…！！」
「……トマト…」
薄く目を開いた青守は、涙を流す苫都の頬を、その大き過ぎる手で何とか拭った。
「すまな…かったな…」
落ち着いた口調でそう呟き、青守がそっと笑みを浮かべた。
「我と出会ったことで…お前に辛い想いを…」
「謝るなっ…！！」
青守の言葉を遮り、涙を流す苫都が強く叫ぶ。
「私が勝手にお前を愛してっ…！私が勝手に龍になったんだっ…！！お前が謝ることなんて、何一つないっ…！」
「トマト…」
必死に叫ぶ苫都を、青守が穏やかに見つめる。
「お前が…我と出会ったことを…悔いる日が来ても構わない…」
「……っ」
頬に触れていた青守の手を、苫都が両手で力一杯、握り締める。
「だから…どうか許してほしい…」
「えっ…？」
その言葉に、苫都が少し戸惑ったような声を漏らす。
「お前と出会えたことを…それでも嬉しく思う我を…」

「青守っ…」
青守の言葉に苫都が目を細めると、さらに涙が溢れ落ちた。
「青き守り神を継いでくれ…トマト…」
小さくなっていく声で、青守がそっと願う。

「そして…いつか…この世界に…本当の平和を…」
「……っ！」

その言葉を最期に、青守が瞳を閉じ、トマトの握り締めていた手が、力なく地面へと落ちていく。

「青守…？」
動かなくなった青守に、苫都がそっと呼びかける。

「青守っ…」
返ってくることのない返事。

「……っ」
苫都の瞳から、さらに涙が零れ落ちた。

「青守ぅぅっっ！！」

苫都の悲痛な叫びが、天へと突き上げた。

「ううっ…！うっ…！」

「フフっ…」
「……っ」
青守の体に顔を沈めて泣いていた苫都が、背後から聞こえてくる笑い声に、その涙を止めて顔を上げる。
「……っ」
「フフ…」
苫都が振り返ると、青守の血をつけた爪を振るいながら、知玖が苫都の方を見つめて、冷たく微笑んでいた。
「これで“おあいこ”ねっ…苫都っ…」
「……っ！」
知玖の言葉に、苫都の表情が歪む。
――トマト……――
奪われた、優しい笑顔。
「……っ」
苫都が強く唇を噛み、拳を青く光らせ、立ち上がる。
「知玖ぅぅっ！！」
「苫都っ…！！」
涙を流して向かっていく苫都に、知玖もその爪を振り上げた。

――じゃっ、私行くねっ、苫都っ――
――ああ、またな。知玖……――

別れたあの時は、こんな日が来るとは思ってもみなかった。

――今日も習い事サボったのぉ？苫都っ！――
――うるさいなぁ、知玖はっ…習い事なんて、かったるいんだよっ
――

どうして、変化を望んでしまったのだろう。

どうして、不変を望まなかったのだろう。

――苫都っ！――
――知玖っ――

あんなにも穏やかで、あんなにも幸せだったのに…。

「ハァっ…！ハァっ…！ハァっ…！」
「ううぅっ…！」

苫都と知玖の激しい戦いはしばらく続き、互いに傷ついたその体は、もう限界寸前のところまできていた。

「シっ…ルク…」
「トマ…トっ…」
体は限界を感じながら、それでも憎しみの消えない瞳で、互いを睨み合う苫都と知玖。

「都市ごと海へ沈めるっ…！！退避しろっ！退避しろぉっ！！」
『……っ』
そこへ聞こえてくる、玄上の声。

「苫都殿っ！こちらへっ…！」
「あっ…」
「……っ」
武国の兵士に連れられ、苫都だけがその場を離れる。

「……。」
その場に一人、取り残される知玖。苫都との戦いに力を使いきった知玖には、もうその場から逃げる程の体力も残っていなかった。

――バァァァーーンっ！

玄上の力により、鬼人たちの都市が、その大陸ごと、海へと沈められていく。

「……っ」

武国の者たちに支えられながら、苫都は、海の中へと沈んでいく鬼国を、まっすぐに見つめていた。

「あっ…」

苫都が、何かに気づいたように声を出す。

「知玖…」

「……。」

沈んでいく都市の上で、倒れた鬼人たちの中、ただ一人立ち尽くしている知玖の姿。

「奪ってやる…」

立ち尽くした知玖が、苫都の方を見上げ、そっと呟く。

「何度でも蘇って…全部奪ってやる…」

光の差さぬ、虚ろな瞳を見せた知玖が、さらに言葉を続ける。

「お前の大切にするものっ…！お前にあって、私にないものはすべてっ…！私が奪ってやるっ…！！」

「知玖っ…」
その叫びに、苫都がそっと目を細める。

「奪ってやるっ…！！」

その言葉と、憎悪の瞳を最後に、知玖は鬼国とともに、海へと沈んだ。

「……。」
鬼国の消えた海を、苫都が茫然と見つめる。

「……っ」

その紅の瞳から、一滴の涙が零れ落ちた。

第８５章　永遠に咲く花　☆１

それは、世界創生の物語と呼ぶには、あまりに人間らしく、愚かで、そして物悲しいものであった。

「その後、二人は千年の永い時の中、互いの憎しみを消すことなく、戦い続けましたとさ…」

輝矢に過去を見せたギンが、そう言葉を付け加える。

「めでたし、めでたし…」

「……。」

口元を緩め、話を締め括るギンの声を、輝矢が静かな表情で聞く。

「ババアとシルクに…そんな過去が…」

輝矢がそっと、永い時を経て今も直、向き合っているトマトとシルクの方を見る。

――苫都っ！――

――知玖っ――

元は、互いに微笑み合う関係であった二人。

――もう戻れるはずもない…あの頃のことばかり思い出すわ……――

先程のシルクの言葉の意味が、やっとわかったような気がした。

「そしてここが…千年の昔、大陸ごと海底へと沈められた鬼国の跡地ですよ…」
「……っ」
ギンの言葉を聞きながら、輝矢がゆっくりと周囲を見回す。大昔の鬼国の跡。この場所でトマトとシルクは互いの愛する者を失い、そして永い戦いを始めた。

「海底に沈められた後も…シルク様は少数の生き残った鬼人と共に、この海でひっそりと暮らし続けた…」
物語の続きを話すギン。

「青守トマトを殺す為に…」
ギンが口元を吊り上げ、冷たく微笑む。

「しばらくして…海底火山が噴火した…」
「それで都市の一部が上昇して…鬼が島になった…」
「ええっ…」
輝矢の言葉に、大きく頷くギン。まるでその様子をすべて見ていたかのような、事情をよく知っているかのような、そんな口振りであった。

「まぁこのことはシルク様にとっても、計算外だったようですねぇ…」
「えっ…？」
ギンの言葉に、輝矢が少し眉をひそめる。

「結果的に、青守トマトや地上の人間たちに…鬼が生きているという事実を知られてしまいましたから…」
「……っ」

輝矢が少し考え込むように、表情を曇らせる。

「本当はもう少し準備を整えてから、地上に上がるつもりでっ…」

「ギンっ…」

「……っ」

遮るように名を呼ぶシルクに、ギンがそっと言葉を止める。

「それくらいにしておきなさい…少ししゃべり過ぎよ…？」

「申し訳ありません、シルク様…ついっ…」

注意するように言うシルクに、ギンは頭を下げながら、不敵に微笑む。

「では…武国で語られている御伽神話というのはっ…」

「玄上が牢戸たちを攻め入った時のことが伝えられたものですよっ…」

ふと呟いた輝矢に、ギンがすぐさま答える。

「まっ、倒しきれずに海に沈めたというのに、楽々、善戦したといった感じで描かれているようですけどねぇ」

「……っ」

ギンの言葉に、輝矢が眉をひそめる。確かに輝矢の知る御伽神話、そして玄上家に飾られたその神話の絵を見ても、人々を襲う悪い鬼神を玄神が退治したと、単純にしか描かれていない。苫都や知玖のことはずべて、当時の玄上の者が、自分には都合の悪いことであると、消し去ってしまったのだろう。

「“天は光より龍を生み、海は水より鬼を生んだ”…」

「えっ…？」
さらに続くギンの声に、輝矢が戸惑うように顔を上げる。
「御伽神話、最初の一文です。武国でナイトが言っていたでしょう…？」
「最初の一文っ…」
その一文のことは、輝矢も知っていた。太狼に神話を聞かされた幼い頃から、神話は玄神と鬼神の話だというのに、何故、龍と鬼なのかと、ずっと疑問に思っていた。
――鬼なのに、か…？――
――この世界で初めて、獣を愛した人の言葉とは思えないわねぇ――
だがトマトとシルクの過去を垣間見て、今、輝矢は、その一文の意味を理解した。
「まさかっ…」
「そう…あの一文は、人間と鬼人の永きに渡る戦いの幕を開けた、あの二人のことを表しているのですよ…」
「……。」
神話にまでなった二人が、今、目の前で相対している。理解は出来ていても、輝矢の頭はなかなか追いついていかなかった。
「龍とっ…鬼…」
輝矢が眉をひそめ、そっと俯く。
「鬼人も他の獣人も…同じ象人から生まれたもの…」

「そうよ…」
小さく呟いた輝矢の声に、輝矢の方を見ながら、微笑んで頷いたのはシルクであった。

「もっと言えば…象人も元は人から生まれたもの…私たちは皆、同じ人から生まれたということになる…」
「……。」
続けられるシルクの言葉を、輝矢は真剣な表情で聞き入る。

「本当に愚かなものよね…人なんて…」
輝矢を見つめるシルクの口元が、さらに吊り上げられる。

「互いに同じ人から生まれたというのに…玄神だから、玄上だからと己を誇示し…」

――私に鬼の孫など、おらぬよ…――
――鬼のくせにぃぃぃっ！！――

「互いに同じ人から生まれたというのに…鬼だから、人間だからと争い合う…」

――皆の意志は…アナタが継いでくれるものっ…――
――いやあああっ！！！――

「……っ」
シルクの言葉に、過去の出来事を思い出し、輝矢はそっと目を細めた。

「他者を劣と、悪としなければ…己を正統化出来ないのよ…」

「……。」

鬼の血を引くからか、シルクの言うことがわかるような気がして、輝矢は少し俯いた。

「元は同じ象人でありながら、こんな戦いを続けている私たちが、言えたことかいっ？」

「フフっ…それもそうね…」

口を挟むトマトに、シルクが視線を移しながら、笑顔で頷く。

「まぁそれも…私たちが“人である”という証、かしら…？」

「洒落たことを言うもんだねぇっ」

シルクの言葉に、トマトも少し口元を緩める。

「まぁお前は、昔っからそうだったかっ…」

「フフ…」

懐かしむように言い放つトマトに、シルクもどこか楽しそうな笑みを浮かべる。

「……。」

親しみさえ感じるトマトとシルクの会話を聞き、輝矢が険しい表情を見せる。同じ種に生まれ、長い時を共に生きた二人が、何故戦わねばならないのか。

――知りたいんだろっ？戦う理由を……――

知りたかった。何故、二人が、千年もの永い時の中を戦い続けているのか。戦い続けていられるのか。

――牢戸ぉぉおっ！！――
――青守ぅぅぅっ！！――

だが、二人の戦う理由は、世界を巻き込むにはあまりにも小さな理由で、だが、この世界中の誰にも、どうすることも出来ない理由であった。

「ババア…」
「……っ」
戸惑うような輝矢の視線を感じてか、トマトがシルクと向き合ったまま、視線だけを輝矢へと移す。

「呆れたかい？小娘っ」
少し口元を緩め、輝矢へと問いかけるトマト。

「男を殺されたくらいで、世界を巻き込んで、千年以上も戦ってる私たちにっ」
「……。」
トマトの言葉に、輝矢がそっと眉をひそめる。

「けどねぇ、私たちにとっては、それが十分過ぎる理由なんだ」
再び視線を、シルクの方へと戻すトマト。

「そして、どっちかがどっちかを殺すまで、やめることなんて出来ないのさっ…」
「フフっ…」
トマトのその言葉に、同意するかのように、シルクが微笑む。

「そうね…その通りだわ、トマト…」
微笑んだシルクが、ゆっくりと両手を広げる。
「だからここで終わらせましょう…私たちの永い永い歴史を…」
シルクの赤い瞳が、鋭く輝く。

「私が貴女を殺すことでっ…！！」
「……っ！」

強く叫ぶシルクに、トマトも厳しい表情を作って身構えた。

「……。」
再び戦いを始めるトマトとシルクを、険しい表情で見つめる輝矢。

「止めないのですか？」
「止められません…」
ギンの問いかけに、輝矢がすぐさま答える。

「私があの二人であったなら…同じ道を選ぶでしょうから…」

輝矢は少し悲しげな瞳を見せながら、ただまっすぐに二人の戦いを見守った。

その頃、桜時を先へと進めた犬孝は、諸刃との戦いを繰り広げていた。

「“白首っ…割砕”っ…！！」

犬孝が時雨丸を振り切り、諸刃へと白色の一閃を放つ。

「……っ」

少し後方へと飛び、犬孝の一閃から距離を取る諸刃。

「草薙…」

諸刃が無表情のまま、ゆっくりと草薙を振りかぶる。

「“黒雷”っ…」

草薙から放たれる、黒い雷。

――バァァァーンっ！

二つの力が正面からぶつかり合い、周囲の地面が激しく揺れ動く。

「うっ…！？」

諸刃の放った黒雷の一部が、犬孝の一閃をすり抜け、犬孝のもとへとやって来る。

「チっ…！」

少し顔をしかめながら、素早く時雨丸を突き出す犬孝。

「うっ…！」

時雨丸で黒雷を受け止めたものの、その電撃は犬孝の右手にまで走り、その痺れに犬孝は思わず顔を歪めた。犬孝の手首に、黒い焦げ跡が刻まれる。

「クソっ…！何て力だっ…！」

まだ痺れの取れない右手を軽く振りながら、犬孝が険しい表情で諸刃を見る。

「あいつの力っ…獣人の域を超えている…」

「……。」

犬孝が、表情一つ変えない諸刃を見つめながら、眉をひそめ呟く。

「あいつも…もう人間じゃないのか…？」

――次狼ぉぉぉぉっ！！――

目の前に立つ男が、かつてはトマトの弟子であったこと、仲間を殺してシルクの側についたことは、犬孝も聞き及んでいた。敵ではあるものの、どこかで鬼人化していなければ、と思う気持ちもあった。

「同じ人の弟子だってのにっ…」

犬孝がやっと動くようになった右手で、再び時雨丸を構える。

「遣り切れねぇーぜっ…！まったくっ…！」

「草薙っ…」

時雨丸を振り上げる犬孝に、諸刃もゆっくりと草薙を構えた。

「ハァっ…！ハァっ…！ハァっ…！」

犬孝により先へと進められた桜時は、必死に五本の塔の中央を目指して、都市跡の中を走り続けていた。

――バァァァーンっ！

「……っ」

塔のある方から聞こえてくる衝撃音。揺れる地面に、桜時の表情が曇る。

「戦いのっ…音っ…」

誰かが戦っている音が、塔の方から聞こえてくる。

「クソっ…！急げっ…！急げっ…！！」

その音に焦りを感じながら、桜時はさらに足を速めた。

第８５章　永遠に咲く花　☆２

「“水星”…」
「“青漣光”っ…！」
水の玉と光の玉が衝突し、激しい爆発を起こす。

「“龍閃”…！！」
「“鬼閃”…」
正面からぶつかり合う、二本の光線。

「……っ」
光線が消えた途端、シルクは右手の鬼爪を振り上げ、素早く動いてトマトの方へと向かっていく。

「“鬼爪”っ…」
「……っ」
爪を振り上げ、向かってくるシルクに気づき、トマトが構えた右手を青色に光らせていく。

「“光拳”っ…！」
「……っ！」
シルクが鬼爪を振り下ろす前に、トマトの光る拳が鬼爪を突く。

――パァァァンっ！

「うっ…！」

シルクの鬼爪が、トマトの拳に砕かれる。

「もらったぁぁっ！！」

爪を砕かれ、一瞬の隙を見せるシルクに、すかさず青く輝く右足を振り切るトマト。

「クっ…！」

「何っ…！？」

顔を歪めたシルクが、攻撃を仕掛けようとしているトマトへ、開いた口を向ける。

「“鬼口”…」

「うっ…！」

シルクの口から放たれる、白く輝く鬼口。

「クソっ…！」

トマトが振り切ろうとしていた足を下ろし、何とか避けようと必死に体を動かす。

――バァァァーンっ！！

鬼口が放たれ、辺りの地面が吹き飛んだ。

「……っ」

砂煙の巻き上がる戦場を、少し不安げに見つめる輝矢。

「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」
やがて砂煙の中から、少し息を乱したトマトの姿が見えてきた。
先程の鬼口をかすったのか、着物の破れた右肩から、赤い血が流れ落ちている。

「チっ…」
自分の血を見ながら、少し顔をしかめるトマト。

「フフフ…」
「……っ」
トマトの正面の砂煙も収まり、そこから、楽しげに微笑んでいるシルクが姿を見せた。

「フフっ…」
微笑むシルクの、その左腕からも、赤い血が流れ落ちている。

「あの状況でよく…攻撃し切ったわね…」
「転んでも、ただじゃ起きない性格でねぇっ」
感心するように言うシルクに、トマトもそっと笑みを向ける。

「そうね…貴女は昔からそうだった…」
シルクがそう言いながら、血の流れる左手を一撫ですると、流れ落ちていた血が止まり、撫でた手の下から傷一つない左手が現れた。

「……っ」
一瞬で傷の消えたシルクに、トマトが眉をひそめる。

「穏やかな象人の中にあって…強い情熱を持った人…未琴様もそう言っていたわ…」
きれいになった左手を動かしながら、シルクが言葉を続ける。
「情熱を持った貴女だから…国を飛び出して、他種族を愛するなんて、大胆なことが出来たんでしょうね…」
「……。」
シルクの言葉を聞いていたトマトが、その顔をしかめる。
「だから何だい？」
シルクの言わんとしていることがわからず、怪訝そうな顔を見せるトマト。
「そのせいでお前は不幸になったって、またそんな話を蒸し返そうっていうのかいっ？」
「いいえっ…」
トマトの問いかけに、シルクがゆっくりと首を横に振る。
「私はね…そんな貴女に、憧れていたのよ…」
「……っ」
思いがけないシルクの言葉に、トマトが少し驚いたような顔を見せる。
「あれこれと注意してばかりいたけど…自由で、奔放な貴女に、ずっと憧れていた…」
「……。」
微笑むシルクを、まっすぐに見つめるトマト。険しい表情を見せてはいたが、その顔は、シルクの言葉への困惑が隠し切れていないようであった。

「だから…不安もあったのに、無理に象国を出たのかも知れない…」

――じゃあ私、行くわっ――

トマトの後を必死に追うように、象国を出て、自らの愛する者を探した。

「貴女のように…なりたくて…」

「……っ」

微笑むシルクに、眉をひそめるトマト。

「何を今更っ…」

トマトが迷いを振り切るかのように、笑みを浮かべる。

「煽(おだ)てたって、何も出やしないよっ」

「でも…今はそんなこと、微塵も思いはしないわっ…」

「微塵っ…」

シルクのあまりの言いように、トマトが思わず顔をしかめる。

「おちょくってんのかいっ？」

「だって…」

「……っ？」

さらに言葉を続けるシルクに、トマトがまた眉をひそめる。

「だって貴女は…あんなに愚かな人間たちと…共に歩む道を選んだんだものっ…」

シルクの口調が、少し鋭くなる。

「何をっ…」
トマトも、鋭くした表情で答えを返す。
「共に歩むだぁ？あのねぇっ、私たちは元々、人でっ…」
「違うわっ」
「あっ…？」
すぐさま否定するシルクに、トマトが首を傾げる。
「私たちは元は人間であったけれど…でも今は違うわ…」
「……っ？」
シルクの言葉に、戸惑いの表情を見せるトマト。
「私たちは…人にはない強い力を…永遠の時を生きられる命を手に入れた…」
そっと両手を広げ、シルクが冷たく微笑む。
「もう私たちは人とは違う…特別な存在よ…」
「……っ」
その言葉に、トマトが表情を曇らせる。
「だから世界は…あんな愚かな人間共じゃなくて、私や貴女のような者が治めた方がいい…」
シルクが自分の胸に手を当て、自らを主張するように言い放つ。
「いいえ、治めるべきなのよ…それに見合う力を、永遠の命を持っているのだから…」

語りかけるように、トマトへと言うシルク。

「それが自然の摂理だわ…」

自信を持って、微笑むシルク。

「でも貴女はそうしようとはしない…だから私がっ…」

「違うねぇっ」

「……っ？」

今度はトマトが、シルクの言葉を強く否定する。

「違う…？」

「ああっ、だいぶ違うっ」

聞き返したシルクに、トマトがゆっくりと頷く。

「確かに認めよう。私たちは人にはない強い力も、永遠に続く命も持ってる。もう人とは程遠い存在だ」

トマトがシルクの方へ右手を差し出し、その言葉の一部を認める。

「そして…」

そっと視線を下へと向けるトマト。

「そして人は愚かだ…」

そう呟いたトマトの声は、いつもよりも少し低かった。

「くだらない差別や争いをする…」

「……っ」

トマトの言葉を聞き、そっと俯く輝矢。

――貴方の姿は、朱実の恥でしかないのっ…！――
――狐族だっ！裏切りの一族だぁっ！――
――鬼のくせにぃいっ！！――

互いに同じ人から生まれながら、イヌであるから、キツネであるから、鬼であるからと、人は人を蔑む。“あいつは違う”と、“自分とは違う”と線ばかりを引き、相手を傷つけては、自分を正統化する。

「そのくせ寿命は百年となくて…千年を生きる私たちから見りゃ、そりゃあちっぽけなもんだよっ…」
皮肉ったような笑みを浮かべるトマト。
「あっさりと死んじまうっ…」
――次狼ぉぉぉぉっ！！――
「本当に…あっさりと…」
思い出される光景に、少し顔をしかめ、どこか悔やむようにトマトが呟く。
「けどねぇっ…」
俯いていたトマトが、ゆっくりと顔を上げる。
「永遠に咲く花を、人は誰も美しいとは思わない…」
「えっ…？」

そのどこかで聞いたことのある言葉に、戦いを見守っていた輝矢が、驚いたような表情を見せる。

「花は、花がいつか散り逝くことを知りながら…それでも一生懸命咲くから美しいんだっ…」

紅色のまっすぐな瞳で、トマトがシルクの瞳を捉える。

「そんな刹那を生きる人間たちが、生きるからこそ…この世界は美しく在り続けるっ…」

トマトが口元を緩め、穏やかな笑みを浮かべる。

「……。」

その言葉を聞き、噛み締めるように瞳を閉じる輝矢。

――やっと逢えたなっ…一花っ……――

――こんな立派な息子を持って…私は幸せ者ねっ……――

やがて朽ち果てる命だからこそ、悲しみもあれば、幸せもある。

――好きだっ…！この世界で一番っ！お前のことが好きだっ…！！

――

永遠ではないからこそ、大切に思うことが出来る。刹那を生きる人間の美しさを、仲間たちは何度も、輝矢に教えてくれた。

「この世界は、そんな人間たちのものさっ」
どこか誇らしく、胸を張るトマト。

「永遠の時の中で、性根まで枯れ切った私たちに、この美しい世界は扱いきれないっ…」
少し俯いたトマトが、その笑みを悲しげに見せる。

「だからお前は、この世界からとっとと消えなぁっ！」
トマトが笑みを消し、青く輝く拳を、シルクへと突き出す。

「私も一緒に…逝ってやるからさぁっ…」
「……っ」
再び微笑むトマトに、シルクが表情を曇らせる。

「……。」
その言葉を聞きながら、そっと目を細め、トマトを見つめる輝矢。

――永遠に咲く花を、人は誰も美しいとは思わない……――

オーロラとの戦いの後、輝矢の心を救ってくれた、桜時の言葉。

――あれっ？でも、誰から聞いたんだっけなぁ？――

「アナタ…だったのですね…」
輝矢の大事にしてきた言葉を、桜時へと教えてくれた人。
「青守トマトっ…」
輝矢はまっすぐにトマトを見つめ、そっとトマトの名を呼んだ。

「貴女はどこまでも…人間たちの味方をするというのね…」
「それが象人の役目だろう?」
少し低い声で言い放ったシルクに、トマトが微笑んで答える。
「それにねぇ…」
微笑んだトマトが、言葉を付け加える。
「私の名は青守(あおもり)トマトっ…青守(セイシュ)から青き守り神の名を継いだっ…」
トマトが左胸に手を当て、噛み締めるように呟く。
「だから私はっ…!人間たちを守るのさっ…!!」
大きく微笑み、トマトが高らかと言い放つ。

「……。」
そんなトマトをまっすぐに見つめ、顔をしかめるシルク。
「それなら私もそうだわ…」
少し俯いたシルクが、ゆっくりと口元を緩める。

「私の名は牢戸（ろうど）シルク…牢戸（ロード）の遺志を、牢戸の理想を…私は叶えるっ…！」
「……。」
トマトと顔を上げたシルクが、互いに厳しい表情で見つめ合う。
「……っ」
その様子を、息を呑んで見つめる輝矢。
『……っ！』
二人が再び戦いを開始しようと、飛び出していこうとした、その時。
「輝矢っ…！！クソババアっ…！！」
『……っ』
その場に響き渡るようにして入ってきたその声に、その場にいた皆が動きを止めて、一斉に振り向いた。
「ハチっ…」
振り向いた輝矢が、すぐさま呟く。

「ハァっ…！ハァっ…！」
必死に駆けつけてきたのか、息を乱してその場に現れたのは、額から汗を流した、桜時であった。

「牢戸知玖っ…！それにっ…」
シルクの姿を確認し、厳しい表情を見せた桜時が、続いて、輝矢のすぐ傍に立っているギンの方へと視線を移す。

「ギンっ…！」
「……っ」
眉をひそめ、名を呼ぶ桜時を見て、ギンがどこか楽しそうに微笑む。

「桜時っ…」
「命咲かす者…」
トマトとシルクが現れた桜時を見ながら、同じように呟く。

「諸刃が敵を逃がすなんて珍しいわね…」
「諸刃もここへっ…？」
シルクの呟きを聞いたトマトが、思わず顔をしかめる。

「……っ」
諸刃の名を聞き、動揺しているトマトを横目に、シルクが静かに付近の繭へと視線を移す。

「逃がしたのではなく…私のところへ導いたのかしら…」
「何っ…？」
シルクの意味深な言葉に、トマトが一気に険しい表情となる。

「……っ」
「クっ…！」
桜時へと右手を向けようとしたシルクへ、トマトが慌てて向かっていき、その右手首を掴み止めた。

「……。」
右手を掴まれたシルクが、不機嫌そうにトマトを見つめる。

「ババアっ…！！」
立っていたその場から、思わず身を乗り出す桜時。
「桜時っ！周りの繭を壊すんだっ…！！」
「えっ…？」
一歩、足を踏み出した桜時が、トマトの叫びに、戸惑うようにその足を止める。

「お前の命力なら壊せるはずだっ！繭を壊せばっ、シルクの力も消えるっ…！！」
「繭っ…？」
トマトの言葉に戸惑いながら、桜時が周囲を見回す。

「あっ」
中央塔の付近に集まった白い繭を見つけ、桜時が声を出した。

「あれかっ」
「封印が解けるまで、そう時間がないっ…！急げっ…！！」
「わっ…わかったっ…！！」

トマトの必死の言葉に急かされ、桜時が村雨丸を抜いて、繭の集まっている付近へと駆けていく。

「……っ」

駆けていく桜時を見て、眉をひそめるギン。

「そうはさせっ…」

「そうはさせませんよっ…」

「……っ！」

桜時のもとへ行こうとしたギンの首元に、突き付けられる鋭い刃。

「私のハチに手出しは無用ですっ」

「……っ」

しゃがみ込んだままの輝矢が、鋭い瞳を見せ、ギンへと三日月を向けている。そんな輝矢を見て、ギンは一瞬だけ表情を曇らせた。

「まったく…どこにそんな力が残っていたんだかっ…」

すぐに笑みを浮かべたギンが、余裕を感じる口調で呟く。

「すみません、シルク様。王子様は止められそうにないです」

ギンが軽い笑みを浮かべたまま、トマトに捕まっているシルクの方を見て言い放つ。

「……。」

「これで八方塞がりだねぇっ、お前もっ」

静かな表情を見せたままのシルクに、勝利を確信したかのような

笑みを向けるトマト。

「封印されてる力さえ消せばっ…後のお前を倒すことは容易いっ」

トマトの鋭い瞳が、シルクを捉える。

「さぁっ！これでっ…！」

「フフフ…」

「……っ」

シルクの零す笑い声に、トマトが言葉を止める。

「フフフっ…」

「何だいっ…！？何を笑ってっ…！」

「一つ…いいことを教えてあげるわ…トマト…」

問い詰めようとしたトマトの言葉を遮って、シルクが冷たく微笑みかける。

「あの子…諸刃はね…」

赤い瞳が、まっすぐにトマトに向けられる。

「私に負となることは…絶対にしないのっ…」

「……っ！」

その確信に満ちた瞳を見て、トマトが一気に表情を険しくする。

「しまったっ…！」

トマトがシルクから手を離し、勢いよく振り返る。

「繭から離れろっ…！！桜時っ…！！」

「村雨丸っ…！」

だがすでに大量の繭の中心部へと駆けつけていた桜時には、トマトの声は届かず、桜時はただ繭を破壊しようと、村雨丸を振り上げていた。

「“天地っ…神命”っ…！！！」

桜時が村雨丸を振り切り、命の光を繭へと向ける。

『……っ』

皆がその光の行きつく先を見つめていたその時、光の当たる寸前で、周囲の繭が一斉に割れた。

「えっ…？」

「しまっ…！」

戸惑いの声を漏らす桜時と、必死にその場から駆け出していくトマト。

――パァァァァーンっ！

「うっ…！！」

発せられる強い光に、桜時が思わず顔を伏せる。

「フフフフっ…」

「えっ…？」
前方から聞こえてくる高く響く笑い声に、光に目を細めていた桜時が、少しずつ顔を上げていく。
「なっ…」
「フフフフ…」
割れた繭から次々と白い光が放たれると、その光は桜時のすぐ目の前へと集約していき、やがて一つの個体を作り、その姿を明らかとしていく。
「牢戸…知玖っ…？」
白い光が形成したのは、シルクの姿であった。
「封印が…解かれた…？」
同じように、その光から作られたシルクの姿を見つめる輝矢が、戸惑いながら呟く。
「間に…合わなかったの…？」
ただ茫然と、輝矢は光を見つめる。
「クッソっ…！！」
「……っ」
「うっ…！」
桜時のもとへと駆けていこうとしたトマトの手が、シルクにより勢いよく掴み止められる。

「どこへ行くの…？トマト…」
振り返ったトマトへ、そっと微笑みかけるシルク。

「クっ…！」
「さぁ…一緒に祝いましょう…」
トマトが険しい表情を見せる中、シルクがさらにその笑みを大きくする。

「私たちの…夢の完成を…」
シルクが喜びに酔いしれるように、上方を見上げた。

「なっ…なんでっ…牢戸知玖が…」
突如、目の前に現れたシルクに動揺してか、桜時が村雨丸を下ろしたまま、無防備な態勢でその場に立ち尽くしてしまう。

「フフフフ…」
そんな桜時へ向けて、微笑みながら手を振り上げる、もう一人のシルク。

「……っ！」
その様子を見て、輝矢が大きく目を見開く。

「逃げろっ！！桜時っ！！」
シルクに掴まれながら、トマトも必死に叫ぶ。

「えっ…？」
「……っ」
戸惑うように顔を上げた桜時へと、シルクが勢いよく右手を突き出す。

「やめてぇぇっ！！」

輝矢の叫び声が響いた、その瞬間。

――ブシュっ…！！

「うぅっ…！！」

シルクの右手が、勢いよく桜時の胸を貫いた。

「……っ！！」
その光景に、輝矢の表情が凍りつく。

「ハ…チっ…？」
震える声で、桜時の名を呼ぶ輝矢。

「いやあああっ！！」

輝矢の悲痛な叫びが、突き上げた。

第85章　永遠に咲く花　☆3

「……っ」
「んっ？」
ふと動きを止めた諸刃に気づき、戦っていた犬孝も、振りかぶろうとしていた時雨丸を止めた。

「……。」
「何だぁ？」
戦いの最中だというのに、一定の方角をまっすぐに見つめている諸刃に戸惑いながらも、犬孝も諸刃の見つめている先へと視線を移す。

「……っ」
視線を移した犬孝の視界へと飛び込んでくるのは、見える五本の塔の中心付近から、突き上げている強い白光であった。光を確認し、犬孝が眉をひそめる。

「何だ…？あの光は…」
海底から光など、突き上げるはずもない。明らかに誰かが起こした光であろう。

「桜時の命力か…それとも…」
考えられる可能性に、犬孝の表情が曇る。

「シルク様っ…」
「あっ…！」

光を見つめていた諸刃が、犬孝の存在など無視するかのように、あっさりとその場を後にして、光の突き上げた方へと走り出していく。

「おっおいっ…！」

犬孝の声に止まることなく、どんどんと遠ざかっていく諸刃。

「チィっ…！読めねぇー奴だなぁっ…！」

困惑するかのように、犬孝が頭を掻く。

「……っ」

すぐに厳しい表情へと戻った犬孝が、再び突き上げた光を確認する。

「俺も行くかっ…」

犬孝も諸刃の後を追うようにして、塔へと向かった。

「う……あ…」

シルクの右手に胸を貫かれた桜時が、声にならない声を落とす。

「ハチっ…」

その桜時の姿に、大きく目を見開く輝矢。

「ハチぃぃぃっ！！」

「おおっとっ」
「うっ…！」
ハチのもとへと飛び出していこうとした輝矢の右手を、ギンが掴み止め、右手に握られている、ギンへと向けられていた三日月の刃を、逆に輝矢の顔へと当てるようにする。

「貴女はもう少しここで大人しく…」
「ハチっ…！ハチぃっ…！！」
「……っ」
突き付けられた三日月の刃など見えていないかのように、ハチへと必死に身を乗り出す輝矢。その頬が傷つき、赤い血が流れる。

「ハチぃぃぃぃっ！！」
血が流れることも気にせず、輝矢はハチのもとへと行こうとし続ける。

「はぁっ…」
そんな輝矢を見て、呆れたように溜息をつくギン。

「面倒な人ですねぇっ」
「ううっ…！」
ギンが自由な方の手で、輝矢の前髪を掴み上げ、輝矢の顔をギンの方へと向かせる。

「大人しくしてろって言ってるんですよっ」
「……っ！」
再び赤く染まったギンの瞳が、輝矢の瞳を捉える。

「うっ…！」

激しい頭の痛みとともに、赤くなる輝矢の瞳。

「ううぅっ…！！」

頭を抱え込んだ輝矢が、その場にしゃがみ込んでしまう。

「小娘っ…！」

ギンにより鬼の力を強められ、しゃがみ込んでしまった輝矢を見て、トマトが心配するように声を出す。

「チィっ…！」

「フフっ…」

トマトの目の前にはシルク、そして輝矢もあの状態とあっては、桜時を助けることなど出来ない。

「うあああああっ！」

「……っ！桜時っ…！！」

桜時の叫び声が聞こえてきて、トマトが勢いよく振り向く。

「あっ…！」

「う……あぁ…」

胸を貫いていたシルクの手が抜かれ、桜時が目を細めながら、力なくその場へと倒れていく。

「フフフ…」

「……っ？」

桜時の胸を貫いた、もう一人のシルクの右手に握られている、白く輝く光の玉のようなものを見て、トマトが眉をひそめる。

「桜時っ…」
よく見れば、シルクの右手には血一滴滲んでおらず、倒れた桜時の胸にも外傷のようなものは見当たらない。
「あれはっ…？」
「命力の結晶よ…」
「……っ」
トマトの問いかけに戻ってくるシルクの声に、トマトが眉をひそめて振り返る。
「命力の…結晶っ…？」
「ええ…」
聞き返したトマトに、シルクが微笑んで頷く。
「私が求め続けてきた…未琴様の力…」
「未琴っ…！？」
シルクの言葉に驚き、トマトが大きく目を見開く。
「未琴だとっ…！？」
「そう…象人を治めるに値する…象人の中で最も強力で…最も尊い力…」
「だが未琴は死んでっ…！」
「犬国に渡った彼女は…やがて犬人と恋に落ちた…」
「犬人っ…？」
――今はどこで何をしてるんだいっ？――
――犬国主のもとで国務の手伝いを…――

「……っ」

未琴との会話を思い出し、トマトが少し考え込むように俯く。

「その犬人の名を…」

俯いたトマトを見ながら、シルクがさらに、話を続ける。

「“里見”…」

「……っ！」

その名に、トマトがさらに驚いた表情を見せる。

「里見っ…だとっ…？」

トマトがその名を知らぬはずもなかった。犬国を治める一族の名。命力を受け継ぐ、桜時や犬孝の一族。

「彼女は獣人にこそならなかったものの…その力は犬人、里見一族に受け継がれていった…」

シルクがゆっくりと、もう一人の自分へと視線を移す。

「そして…今も…」

もう一人のシルクの右手の中で、その光の玉は闇を照らすように輝く。

「桜時の力が…未琴から受け継がれてきたものだったなんてっ…」

――何度見ても素敵ねぇ～！未琴様の命力っ！――

考えたことがないわけではなかった。他の力ならともかく、命力などという珍しい力を持つ者は、そうはいない。だが未琴は獣人にはならなかったと知っていたからこそ、獣人である桜時の力と、未琴を繋ぐことが出来なかったのだ。

「お前の狙いは…初めから未琴の力だったってことかっ…」

「ええ…」

トマトの問いかけに、シルクがゆっくりと頷く。

「初めはわからなかったわ…」

――もう完成しているの…？――

――いや…まだ足りないものが一つだけある…――

「牢戸が言っていた…後の一つが何なのか…」

シルクがふと上げた自分の右手に、視線を向ける。

「それが命力だとわかるまでに数百年…それから未琴様の力を持った者を探すのに…また数百年…」

「気付いたのは…御伽砂漠の一件か…？」

「それもあるけど…ギンに犬国での戦いを見ていてもらっててね…」

「……っ」

監視を付けられていたことを知り、トマトが眉をひそめる。

「なら何故っ、龍国で小娘と戦った時、奪わなかった？」

トマトが鋭い視線を、シルクへと向ける。

「あの時のお前なら、容易だったはずだっ」

「……。」
トマトの指摘に、シルクが落ち着いた冷静な表情を見せる。
「桜の青年の力は…龍国で戦った時点では未完成だった…」
――クソっ…！――
シルクが自分に恐怖し、座り込んだまま動けなくなっていた時の桜時の姿を思い出す。
「未完成のままでは…あの結晶は取り出せない…」
「……っ」
シルクの言葉に、トマトが眉をひそめる。
「だから私は…」
「ナイトを使った、か…」
「そう…その通り…」
代わりに答えたトマトに、シルクがどこか満足げに微笑む。
――俺はっ、お前ごときに、あいつをやる気はねぇーよっ！！――
シルクの分身である内兎を、凌駕する程に強力となった命の力。
「ナイトと戦うことで…桜の青年の力は、より確かなものとなった…」
口端を吊り上げ、シルクが笑う。
「それでナイトをすぐには吸収せず、しばらくの間、泳がせたって

わけかっ…」
「ええっ…」
シルクが笑顔で、大きく頷く。
「本当に役に立ってくれたわ…あんな屑でも…」
「……っ」
その言い回しに、トマトが顔をしかめる。

「そして…あの力が…私と牢戸の理想を叶えてくれる…」
「何っ…？」
そっと目を伏せて呟くシルクに、トマトが表情を曇らせる。
――私たちの理想を叶える為に仕方なくっ…！――
千年も前の、シルクの言葉が思い出された。

「前も言ってたねぇっ、そんなことっ…」
シルクの言葉を思い出し、怪訝そうな顔を見せるトマト。

「お前らの理想ってのは、一体っ…！」
「うっ…うぅっ…」
「……っ！」
問いかけようとしていたトマトが、かすかに漏れてくる弱々しい声に気づき、再び勢いよく振り向く。

「うぅ…」
「桜時っ…！！」
命力の結晶を抜かれ、倒れ込んでいる桜時が、苦しげではあるが、

確かに声を漏らしている。

「生きてっ…！」

「生きてるようねぇ…」

「クっ…！」

思わず笑顔を零したトマトであったが、後方から聞こえてくるシルクの声に、すぐさま険しい表情を作った。

「“花力”と“命力”…二つの力を持っていたからかしら…？」

「……っ」

シルクの言葉に、トマトが少し眉をひそめる。桜時の中に残った桜時の花力が、桜時の命を繋いだ可能性は、十分にある。

「でも…命力の結晶が手に入れば…もう桜の青年は用済みね…」

「何っ…！？」

冷たく言い放つシルクの言葉に、トマトの表情が険しくなる。

「殺して…」

「ええ…」

「……っ！！」

シルクの言葉に、桜時の前に立っているもう一人のシルクが頷き、倒れたままの桜時へと、ゆっくりと手を振り上げる。

「やめっ…！！」

「行けると思う…？」

「クっ…！」

飛び出して行こうとするトマトの前に、立ち塞がるシルク。

「うぅ…」
かすかに上を見上げた桜時も、目の前で手を振り上げるシルクに、厳しい表情を見せる。

「……。」
その光景を、静かに微笑んで見つめるギン。

「お別れのようですね…王子様…」
「……。」
ギンのその冷徹な声が、苦しみ、しゃがみ込んだままの状態の輝矢の耳に落ちる。

「ハチ…」
弱々しい声で、ハチの名を呟く輝矢。

「ハチが…死ぬっ…？」
鬼の力に支配されたままの赤い瞳が、虚ろに光る。

「ハチが…」
――桜っ！俺と同じ名前のっ、俺が一番好きな花だっ！――
――俺はイヌだけどっ…もっと羽ばたきたいっ！羽ばたいていきたいんだっ！！――
――いくらでも泣けばいいっ…俺が全部、受け止めてやるっ！――
いくつもの救いをくれた、その言葉。

「ハチがっ…」

――輝矢っ！――

数えきれない愛をくれた、その笑顔。

「……っ」

俯いていた輝矢が、強く唇を噛み締め、三日月を握る手に力を込める。

「そんなことっ…！」

赤い瞳を強く輝かせ、輝矢が勢いよく顔を上げる。

「させないっ…！！」

――バァァァーンっ！！

「何っ…！？」

逆巻くように突き上げる周囲の水に、ギンが焦るように振り返る。

「この状況でっ…！水力をっ…！？」

「……っ！！」

「うっ…！」

戸惑うギンの目の前を、逆巻く水を纏いながら、輝矢があっという間に通り抜けていく。強い水の力に押され、思わず身を屈めるギン。

「何て…力…」

体を起こしたギンは、茫然と遠ざかっていく輝矢の背中を見送った。

「クっ…！」

桜時へととどめを刺そうとしていた方のシルクが、向かってくる輝矢に、どこか危機を感じるような表情を見せながら、桜時へ向けていた右手を、輝矢へと向け直す。

「“水星”っ…！」

「……っ」

向かってくる無数の水の玉を見つめ、輝矢がその瞳を鋭くする。

「三日月っ…」

輝矢の振り上げた三日月が、周囲で逆巻いている水を纏っていく。

「“水月”っ…！！」

振り下ろした三日月から、いつもよりも一回り大きい水の刃が、勢いよく飛び出していく。シルクの放った水星と、輝矢の放った水月が、正面から勢いよくぶつかり合う。

――バァァァーンっ！

「うっ…！！」
水星が、輝矢の水月にあっという間に砕かれる。
「あああああっ！！」
突き抜けた水月を直撃し、シルクが勢いよく吹き飛ばされる。叫び声が、深い海に強く響き渡った。
「……っ」
分身が攻撃を受けたからか、トマトの前に立っている方のシルクが、少し顔をしかめる。
「私の水星に…打ち勝った…」
落ち着いた表情は見せながらも、鋭く光る瞳で、三日月を下ろした輝矢の姿を捉えるシルク。
「暴走した水力を…玄神の神器で操るなんてね…」
シルクの口元が、ゆっくりと緩む。
「やっぱり貴女は興味深いわ…月の少女…」
「……。」
そのシルクのすぐ後方で、輝矢の力に圧倒されたような表情を見せているトマト。
「小娘っ…」

動揺を隠しきれない表情で、トマトが輝矢を見つめる。

「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」
「輝…矢っ…？」
「……っ」

三日月を下ろし、乱れる呼吸を必死に整えていた輝矢が、聞こえてくる小さな声に、ゆっくりと顔を上げる。

「輝矢っ…」

輝矢が顔を上げた先では、少しだけ体を起こした桜時が、苦しげな表情を見せながらも、しっかりと輝矢の方を見つめていた。

「ハチっ…」

桜時の名を呼びながら、輝矢がゆっくりと桜時の方へと歩み寄っていく。

「ハチ…」

輝矢が桜時のすぐ横に座り込み、桜時へとその手を伸ばす。

「輝矢っ…」
「……っ」

輝矢の伸ばした手に、桜時がゆっくりと動かした手が触れると、二人は互いに穏やかな笑みを浮かべた。

第８５章　永遠に咲く花　☆４

「フフフ…」
そんな輝矢と桜時の様子を見て、シルクが冷たい笑みを浮かべる。
「ああいう姿を見ていると…思い出さない…？トマト…」
「何っ…？」
シルクの問いかけに、トマトが怪訝そうな表情を見せる。
「自分とは違う姿を持つ者に…恋い焦がれた昔の自分を…」
「……っ」
その言葉に、トマトが顔をしかめる。
「月の少女が桜の青年を失った時…人と鬼、どちらに付くのか見物ね…」
「……。」
楽しげに微笑むシルクに、トマトは眉をひそめた。

「うっ…うぅっ…」
先程、輝矢の水月に吹き飛ばされた方のシルクが、地面に倒れ込んでいた体を、ゆっくりと起き上がらせる。多少、体が痛むのか、その表情は、かすかに歪んでいた。
「クっ…！」
シルクが再び攻撃しようと、手を握り合っている輝矢と桜時へ向け、鬼爪を伸ばした右手を向ける。

「“龍光柱”っ」
「えっ…？」
鬼爪を向けようとしたシルクの上方から、六本の光の柱が降りてきて、シルクの体を六方から囲み込む。
「何っ…？これはっ…」
柱に囲まれたシルクが、戸惑うように周囲を見回す。
「トマト…」
捕らわれたシルクを見た本体の方のシルクが、ゆっくりとトマトの方を振り返る。
「何を…」
――パァァァァァンっ！
「……っ」
シルクがトマトを振り返った途端、シルクの上方からも光の柱が降り落ちて、もう一人のシルクと同じように、その中に捕らわれてしまう。囲う柱を見て、眉をひそめるシルク。
「トマト…」
「これ以上っ、私の弟子と旦那候補に手出しはさせないよぉっ」
もう一度名を呼ぶシルクに、トマトは鋭い表情を向けた。
「うっ…！」

「……っ」
聞こえてくる声にシルクが振り向くと、そこには二人のシルクと同じように柱に囲まれた、ギンの姿があった。

『……っ』
捕らわれたシルクとギンに、戸惑いの表情を見せる輝矢と桜時。

「ババアっ…」
「お前は桜時を守ってなぁっ、小娘っ」
問いかけるように名を呼んだ輝矢に、トマトがすぐさま答える。

「私の大事な旦那候補だっ」
「誰…がっ…」
言い切るトマトに、桜時が苦しげな表情を見せながらも、かすかな突っ込みを入れる。

「こいつらは私が始末するっ」
「えっ…？」
トマトの言葉に、輝矢が戸惑いの声を漏らす。

「でっですがっ、シルクの力は、私の月器かハチの命力でなければっ…！」
「もう封印は解けちまったっ」
「……っ」
封印は解けたという事実に、輝矢の表情が曇る。

「こうなった今、お前の月器じゃ消しきれないっ…」
「……。」

自分の力が及ばぬことを悔やむように、輝矢がそっと視線を落とす。

「桜時の命力も今はあそこだっ」

トマトが、柱の中に捕らわれた、もう一人のシルクが握り締めている、桜時の命力の結晶を見て、言い放つ。

「だが…封印は解けたが、あいつはまだ一個体にはなっていない…」

鋭く目を細め、二人のシルクを見比べるトマト。

「今のこの状態なら…私の全光力を使えば、消滅させられるはず…」

そう言いながら、トマトが横目でシルクを見る。

「フフ…的を射ているわ…」

「……っ」

余裕の笑みで答えるシルクに、トマトが少し顔をしかめる。

「全っ…光力…？」

トマトの言葉に、眉をひそめる桜時。

「そんなことをしたら、アナタがっ…！」

「言っただろうっ？」

強く言い返そうとした輝矢が、トマトの声に、勢いよく言葉を遮られる。

「“永遠に咲く花を、人は誰も美しいとは思わない”って」

「……っ」

「えっ…？」

トマトのその言葉に、輝矢がそっと目を細め、倒れたままの桜時が、その聞き覚えのある言葉に、驚いたような表情を見せる。

「あの言葉っ…もしかして…」

「……。」

戸惑うように呟く桜時に、輝矢がそっと頷きかける。

「永遠の時を生きる私とシルクは、この世界に存在するべきじゃない…」

トマトが遠い瞳で、真剣な表情を見せる。

「共に消えることが世界の為…そしてっ…」

噛み締めるように、唇を閉じるトマト。

――この世界の行く末を、見届けてはくれませんか…？――

――いつか…この世界に…本当の平和を……――

託された、願い。

――貴女たちが、いつ私たちの話を聞いたのっ…！？――

――奪ってやるっ！！！――

擦れ違ってしまった、想い。

「それが…私の責任さっ」

「ババアっ…」

優しく、だがどこか悲しげに微笑むトマトに、輝矢が目を細める。

「さてとっ…」

輝矢に微笑みかけたトマトが、その表情を引き締め、目の前で柱に捕えられているシルクの方を振り向く。

「共倒れ覚悟っ…？相変わらずの無鉄砲ね…」

「これが性分さっ」

焦った様子なく微笑みかけるシルクに、トマトもそっと微笑む。

「ここまで来たんだっ…とことん腐れ縁で、共に逝こうじゃないか…」

トマトが素早く、右手を突き上げる。

「ねぇっ？シルクっ…！」

上げたトマトの右手が、強い青色の光を放ち始める。

「“龍光”っ…！！」

――パァァァーンっ！！

トマトの右手から眩いまでの強い青光が放たれ、海面に届きそうな程に突き上げられたかと思うと、上方で分かれて、シルクたちとギンを囲んでいる光柱へと降り注ぐ。

「クっ…！」
「ううっ…！」
柱へと落ちた青光が、シルクたちとギンの体を包み込むと、結晶を持った方のシルクとギンが、それぞれに顔を歪め、苦しげな声を漏らした。

「……。」
そんな中、トマトのすぐ前に立つシルクは、青光に包まれても、表情1つ変えることなく、まっすぐにトマトを見つめている。

「シルクっ…」
そんなシルクをまっすぐに見つめ返し、何度も呼び続けてきたその名を呟くトマト。

「もう終わりにしようっ…シルク…」

――じゃあ私、行くねっ、苫都――
――ああ、またな、知玖……――

あの日、別れた道。

――お前が…鬼を愛した象人っ……――
――貴女…初めからそのつもりでっ……――

再会した時には、もう戻れずに。

――知玖っ！！――

――苫都っ…！！――

互いに愛する者を失って、互いを殺し合った。

――何やってんだよっ…！！諸刃っ…！！――

――次狼ぉぉぉぉっ！！――

憎しみばかりの二人の争いに巻き込み、その命を奪った。その手を血に染めさせた。

「私たちは…たくさんのものを巻き込み過ぎた…」

トマトが少し震えた声で、目の前のシルクへと囁く。

「世界を動かし過ぎたっ…」

掲げていない左手を、トマトが強く握り締める。

「だから共に逝こうっ…！シルクっ…！」

「……。」

トマトの声を聞きながら、シルクが青い光に包まれたままのその体で、そっと天を仰ぐ。

「ううっ…！！」

「クっ…！」

強まる青い光の中に、徐々に呑み込まれていく、もう一人のシルクとギン。

「これでっ…」
「これで本当に…」
あまり動かぬ体で身を乗り出した輝矢と桜時が、祈るような想いで見つめる。

「終わるっ…！」

その光力を緩めることなく、手を突き上げ続けるトマトが、確信するように言い放つ。

「これでっ…！」
「……っ」
叫ぶトマトの目の前で、徐々にその赤い瞳を閉じていくシルク。

――苫都っ！――
――知玖っ…――

永い永い、歴史の終わり。

「すべてっ…！！！」

トマトの声と共に、シルクが消滅しようとした、その一瞬。

――ブシュっ……！！

「うっ…！」

トマトの表情が止まり、右手から放たれていた青い光が止む。

『……っ！！』

衝撃の光景に、大きく目を見開く輝矢と桜時。

「……あぁっ…」

口から赤い血を流したトマトが、その瞳を下へ向け、ゆっくりと自分の胸元を見下ろす。

「……うぅ…ぁ…」

トマトの見下ろした先には、トマトの左胸を貫いた刃のその先が見えており、その刃先からは、トマトの真っ赤な血が、止まることなく流れ落ちていた。

「……っ」

そっと目を細めたトマトが、首だけを動かし、自分の後方を振り返る。

「……。」
そこに立つ人物を見て、トマトがさらに目を細めた。

「諸…刃っ…」
「……。」

トマトの後方から、トマトの左胸へと刃を突き立てたのは、無表情の諸刃であった。その頬には、トマトの返り血が滲んでいる。

「シルク様に仇なす者は…俺が殺す…」
「……っ」
諸刃の言葉に、トマトの表情が曇る。

――先生っ…！トマト先生っ！――

笑顔ばかりを向けてくれたその顔に、自らの血が滲むことになるなど、思ってもみなかった。

「これが…報い、か…」
諸刃から視線を逸らし、再び前方を見るトマト。

「ねぇっ…？次狼っ…」

そして、トマトは力のない笑みを浮かべた。

「……っ」
「うっ…！」

諸刃が突き刺さった草薙を勢いよく抜き放つと、トマトが顔を歪めながら、ゆっくりとその場に倒れ込んでいく。

「……。」

青い光が止み、囲んでいた光柱が崩れ落ちると、シルクが閉じていた瞳をゆっくりと開く。

「はぁっ…！はぁっ…！」

そこへ、諸刃に少し遅れるようにして、駆けつけてくる犬孝。

「何がっ…うっ…！」

倒れていくトマトの姿が視界に飛び込むと、犬孝は大きく目を見開いた。

「あっ…ああ…」

同じように大きく目を見開いた桜時が、あまりの衝撃に、言葉にもならない声を漏らす。

「……っ」

そんな桜時の横で、目を細めた輝矢が、数回、軽く首を横に振る。

「……っトマトおおっ！！」

輝矢の叫び声が、深い海の底に響き渡った。

第８６章　目覚める絶望　★１

「トマトぉぉっ！！」

海の底に響き渡った、輝矢の悲痛な叫び。

「う…ぁっ…」

左胸を貫かれたトマトが、真っ赤な血を流しながら、ゆっくりとその場に倒れていく。

「ごめんなさいね…トマト…」

倒れていくトマトを、開いた瞳でまっすぐに見つめるシルク。

「一人で勝手に…逝って頂戴…」

シルクの冷たい声が、そっと落ちる。

「……っ」

地面へと倒れ込んだトマトが、強い光を失った、その紅色の瞳を、そっと細めた。

――知玖が鬼国とともに海へ沈んで、御伽界に仮初めの平和が訪れた。

「さすがは玄上様っ！玄神の力を受け継いでいらっしゃるだけのことはあるっ！」

鬼を倒したとして、玄上は英雄に祭り上げられ、その英雄伝は『御伽神話』となって語られることとなった。玄上ばかりを正義と描いたそれは、真実とは裏腹に、世界中へと広まっていった。

「はぁっ…」

そんな中、苫都の胸の中には、言いようのない、だが確かな不安が込み上げていた。

――奪ってやるっ…！！！――

あのままで終わるはずがない。知玖は必ずもう一度、苫都の目の前に現れるだろう。人間に、苫都に、復讐するために。

「……青守っ…」

不安の込み上げる苫都に、すでに頼れる者は存在しなかった。

それから数年。鬼が復活したという話を聞かぬまま、苫都は龍国

を出て、一人、旅に出ることにした。

「う…うぅっ…ひもじい…」

「……。」

旅に出た苦都が目にしたのは、獣人たちによる勢力争いの中で、飢えに苦しむ者たちであった。龍人や雀人が国を大きくし、自らの種族を増やしていく中で、少数しかいない種族の獣人や、力を持たぬ人間たちは、居場所を失ったのである。

「ひも…じいっ…」

「……っ」

苦しむ者を見て、苦都がそっと目を細める。

「おいっ、お前っ」

「へっ…？」

痩せ細った男に、苦都は素っ気なく声を掛けた。

「お前っ、私の二番目の旦那にならないかいっ？」

「……はっ…？」

それは、気まぐれと言えば、気まぐれであった。

「そこのお前とお前もっ、私の三番目、四番目、五番目の旦那になれっ」

『へっ…？』

数人を旦那にして養うようにしたところで、世界中の飢えに苦しむ者、すべてを救えるわけではない。それは、自分に都合のいい慈

善活動で、自分に都合のいい報いであった。

――この世界の行く末を…見届けてはくれませんか…？――

――そう…貴女…初めからそのつもりで…――

――それでも…お前と出会えたことを…嬉しいと思う我を…――

たくさんのものを巻き込んできた、自分自身の罪への報い。

「このまま餓死したくなきゃあっ、とっとと付いて来なっ！」

『はっ…はいっ…！！』

だが、その頃の苫都には、そうすることでしか、自分自身の過ちを、償えなかったのである。

「私はセンシっ、職業は魔法使いですっ」

「ああぁ～っ！もうややっこしいねぇ～っ！だから旦那にしてやるよぉっ！」

「えっ!?ややっこしいからですかっ!?」

「ぜっ…全身火傷した…いっ…痛い…」

「あぁ～っ！もうっ！包帯巻いてやるから、旦那になりなぁっ！」

「うっ…うん…」

「俺の名は笠掛地蔵。雪国を流離う旅人でっ…」

「あぁ～っ！話はいいから旦那になりなぁっ！」

「えっ！？話、いいのっ！？」

苫都は人とは異なる永い時を生きながら、その旦那の数を、どんどんと増やしていった。時の流れの中では、寿命に死に逝く者もいたが、苫都の周りには、常に旦那が溢れかえった。

それから数百年。

海底火山の噴火により御伽湖に浮上した島に、“鬼人”と見られる者の姿が確認される。

そして、さらに数十年。

御伽界に、再び骸鬼が現れ始めた。

「俺の両親は鬼に殺されたっ…！だから俺はっ、もっと強くなって、皆を守りたいんだっ！！」

苫都の元へ、鬼に親を殺されたという少年がやって来た。

「もっと強くなってっ、鬼をやっつけたいんだっ…！！」

「……。」

苫都が獣人など生み出さなければ、苫都が知玖を止めることが出来ていれば、この少年は、何も失わずにすんだのだろうか。そんな考えが、苫都の頭を過ぎった。

「わかった…弟子にしてやろう…」

こうして苫都は、初めて弟子を取ることとなった。これも、苫都の報いの一つであった。

餓えた者には裕福な暮らしを、弱さを嘆く者には強さを与えた。与え続けた。

それでも、胸の罪は消えなかった。

「……。」

何百年の時が流れても、この罪の意識から解放されることはない。

「トマト先生…？」

「えっ…？」

声を掛けられ、振り向いた先には、苫都が拾い上げ、育てた少年が立っていた。喜怒哀楽を示さぬ表情、意志を見せぬ紫色の瞳。どこまでも鋭く、そしてどこか危なっかしい、その様子から、少年には『諸刃』と名付けた。

「どうかしたんですか…？」

「いやっ、別にっ」

「……。」

すぐさま笑みを作って答える苫都に、諸刃はそっと目を細める。

「ふぅっ…」
「んっ？」
一息つくと、諸刃は何も言わぬまま、苫都のすぐ横へと腰を下ろした。そんな諸刃に、苫都が戸惑うように首を傾げる。
「どうしたっ？」
「別に…部屋からここへ来るので、少し疲れただけです…」
「そんなに距離、ないだろっ？」
「……。」
「……っ」
黙り込む諸刃を見て、苫都がそっと笑みを浮かべる。
「ハハっ」
「……っ？」
笑い声をあげる苫都を見て、諸刃は怪訝そうな表情を見せた。
口数の少ないところ、大した表情を示さないところ、それでも優しさが滲み出ているところ、傍に居てほしい時にそうしてくれるところ。
少しずつ、似ていた。
――トマト……――
苫都がかつて、愛した龍に。

「ありがとう…諸刃…」

幸せだった。幸せだったのに。

――次狼ぉぉぉっっ！！――

すべて、壊れていった。

「そうやって罪に報いることだけが、アナタの責任じゃないはずよっ…？」

そう言ったのは、誰だっただろう。

「この美しい世界を守っていくことが…アナタの責任になるはずよっ…」

責めるような、でも清々しい程にまっすぐな、強い赤い瞳。

「ねぇっ、トマトっ…」

……――――

「ババアっ…」
「……っ」
過去を見ていたトマトが、過去の場面と重なるように聞こえてくる声に、ゆっくりとその瞳を開く。

「んっ…」
その紅の瞳が、ゆっくりと前方を見る。

「小…娘っ…？」
「ババア…」

血だらけのトマトの体を、あまり動かさぬよう少しだけ抱き上げ、そっと呼びかけるのは、輝矢であった。いつもの強い輝きを失った紅の瞳が、輝矢へと向けられると、輝矢は鬼人の力に支配され、赤く染まったままの瞳を、まっすぐにトマトへと向けた。

「トマト…先生っ…」
犬孝がその場に茫然と立ち尽くしたまま、輝矢とトマトの方を見つめる。

「ふぅっ…」
「……。」
トマトが倒れ、シルクと同じように青い光と光柱から解放された、ギンともう一人のシルクが、少しホッとしたような表情を見せる。

「よくやったわ…」
体の動きを確かめるように手を数度、動かしながら、シルクが顔の向きを変える。

「諸刃…」
「いえ…」
シルクの振り向いた先には、草薙についたトマトの血を払っている諸刃の姿があった。

「……。」
諸刃が頬についた返り血を、左手でそっと拭う。その手に、赤い血が滲んだ。

「……っ」

手についた血を見た後、諸刃が倒れたトマトへと視線を移し、そっと目を細める。

「ババアっ…」
桜時が顔をしかめながら、ゆっくりとその体を起こす。

「ババっ…うっ…！」
「桜時っ…！？」
体を起こした桜時であったが、全身に痛みが走り、顔を歪めて、

再びその場に倒れ込んでしまう。そんな桜時の様子に気づき、立ち尽くしていた犬孝が、慌てて駆け寄る。

「大丈夫かっ…！？傷をっ…！？」

「いっいやっ…傷は…」

桜時のすぐ傍にしゃがみ込み、体を支え起こす犬孝に、桜時が苦しげな表情を見せながら答える。

「ただ…命力を取られちゃって…」

「何っ？」

桜時の言葉に、犬孝が眉をひそめる。

「命力をっ…？」

「俺は大丈夫だからっ…だから、クソババアをっ…」

「……っ」

「父さん…？」

訴える桜時に対し、厳しい表情を見せて俯く犬孝。そんな犬孝に、桜時が表情を曇らせる。

「恐らく…あれではもうっ…」

「……っ！」

俯いて呟く犬孝に、桜時が大きく目を見開く。

「クソババアっ…」

桜時は動かぬ体で、トマトの方へと身を乗り出した。

「ババアっ…」
トマトの体を支えながら、輝矢がもう一度、トマトに呼びかける。
「はぁ…」
乱れた呼吸を整えるように、トマトが上方を見て一つ、ゆっくりと息をつく。
「嫌…だねぇ…」
「えっ…？」
小さく落とされるトマトの声に、輝矢が少し戸惑ったような表情をする。
「千年以上も…生きてきたっていうのに…」
トマトが、遠くを見るような瞳を見せる。
「やっぱっ…死ぬのは…嫌なもんだよ…」
「ババアっ…」
柔らかな笑みを向けてくるトマトに、輝矢がそっと目を細める。
「この千年…本当に色んなことがあったけど…」
トマトが過去を懐かしむように、輝矢から上方の海面へと視線を移す。
「何か…悔いたことしか…思い出せないっ…」
「……っ」
そう呟いて、どこか悲しげに笑うトマトに、輝矢も少し視線を落とす。
「幸せな時間も…確かにあったはずなのにっ…」

――苫都っ！また習い事、サボったわねぇっ！？――
――本当にお前は変わった娘だな…トマト…――
――トマト先生っ！――

「笑顔を…向けていてくれた頃も…あったはずなのに…」

――奪ってやるっ…！！――
――いつか…この世界に…本当の平和を…――
――シルク様に仇なす者は…俺が殺す…――

「憎しみの顔しか…悲しい顔しか…思い出せないっ…」

笑顔の思い出は、憎しみの思い出へと変わってしまった。過ごしてきた幸せな時間は、血に染まった別れとともに終わってしまった。

「何っ…やって来たんだろうねぇっ…私は…」

上方を見上げ、遣り切れない笑みを浮かべるトマト。

「こんなに長い時間を…生きてきたっていうのにっ…」
「……。」

後悔の様子を見せるトマトに、輝矢もどこか悲しげに俯く。

「アナタは…」
「……っ？」

声を発する輝矢に、トマトがゆっくりと振り向く。

「アナタは…無駄に千年も生きてる龍で、この世界初の獣人…」

「えっ…？」
まるで語りかけるように、急に話を始める輝矢に、上を向いていたトマトが、少し戸惑いながら輝矢の方へと視線を戻す。
「旦那も弟子も山程居て、男と見ればすぐに旦那勧誘して、殺しても死なないクソババア…」
輝矢がトマトを見つめ、ゆっくりとした口調で言葉を続ける。
「私のハチにチューして、私より強くて、最高にムカついて…けど誰よりも強いクソババア…」
「輝矢っ…」
言葉を続ける輝矢を、桜時はまっすぐに見つめる。
「それがアナタ…青守トマト…」
輝矢の瞳が、トマトを捉える。
「悔いる必要が…どこにあるのです…？」
「……っ」
穏やかに微笑みかける輝矢を、トマトが目を細め、見つめる。
「アナタがこの世に獣人をもたらしたからこそ、人は、自分と違う者と、歩み寄る力を手に入れた…」
――ならっ、俺の国に行きませんかっ？――
孤独なキツネへと、差し伸べられた手。
――俺っ、この国に帰ってきてもいいかなっ！？――

――他に行くところがないんじゃ、仕方ないわねっ――

蔑まれたイヌへ、示された居場所。

「人は…自分と違う者を、愛することが出来ると知った…」

――好きだっ…！この世界で一番っ！お前のことが好きだっ！！――

存在すら許されなかった鬼へ、向けられた愛。

「たくさんの種族が生きるこの世界…アナタがどう思っているかは知りませんが…」

輝矢がトマトへ、まっすぐな笑みを向ける。

「私は…“美しい”と、そう思いますよっ…？」

「……っ」

輝矢のその言葉に、トマトが少し驚いたような表情を見せる。

――私はこの世界が、とても美しいと、そう思うわっ！――

同じように、かけられた言葉。

――ねぇ、トマトっ……――

同じように、向けられた瞳。

「フっ…」

輝矢から視線を逸らし、そっと俯いたトマトが、思わず零すように笑みを浮かべる。

「そうかいっ…」

繋いできた輝矢の言葉を受け止めるように、微笑んで頷くトマト。

「……っ」

「……っ？」

ゆっくりと上げられた、トマトの血だらけの冷たい手が、そっと輝矢の頬に触れる。輝矢のその輪郭を確かめるように、数度、頬を撫でるトマト。

「ババアっ…？」

「ホントっ…よく似てる…」

「えっ…？」

トマトの言葉に、輝矢が戸惑うように眉をひそめる。

「……っ」

困惑する輝矢を見ながら、トマトはそっとその口元を緩めた。

第８６章　目覚める絶望　★２

――骸鬼出現からしばらくの時が流れた。
未だに知玖は、苫都の前に姿を見せては来なかったが、骸鬼を率いている鬼の名が牢戸知玖であるという噂は、トマトの耳にまで届いていた。

「トマトぉ～っ！」
「……っ？何だいっ？」
「玄上武矢って奴が、お前に会いたいって来てるぞぉ～？」
「玄上っ…？」

その名は、よく聞き慣れた、御伽界の英雄の名であった。

「あっ、どうもこんにちはぁ～っ！」
「……っ」
客間へ行った苫都を待っていたのは、その黒髪と黒い瞳こそそうだが、苫都の知る玄上とは似ても似つかない、雰囲気の穏やかな、明るい笑顔の男であった。

「玄上武矢っていいます！以後っ、お見知りおきをっ！青守トマトさんっ！」
「あぁ…」
笑顔で挨拶をする武矢に、苫都が呆れたような視線を送る。

「まぁあれなら、お見知りおきをと言わずにぃっ」

「へっ？」
苫都があ、明るく微笑んでいる武矢の手を取る。
「この際っ、私の二三八番目の旦那にっ…」
「ちょぉ～っと待ったぁっ！！」
「あっ？」
いつものように旦那勧誘をしようとした苫都と武矢の間に、勢いよく割って入って来る、一人の女。
「私の武矢にっ、馴れ馴れしくしないでよねっ！！」
武矢からトマトの手を振り払ったその女は、強くまっすぐな赤色の瞳を、トマトへと向ける。
「……っ」
――苫都っ！！――
その瞳は、トマトに、かつての親友の姿を思い出させた。
「あぁぁ～んっ？何だい？小娘っ」
「何よっ！？クソババアっ！」
すぐに険悪な雰囲気となる、トマトとその女。
「朝日っ」
トマトに敵意を剥き出しにする女に、武矢が宥めるように声を掛ける。
「何だい？それっ、お前の彼女かいっ？」
「いえ、妻ですっ！」

「妻っ！？」
笑顔で答える武矢に、大きく驚くトマト。
「はいっ！ちなみに娘も一人いますっ！輝矢っていって、こっれがまった可愛いんですよぉ～っ！」
「むっ…娘っ…」
親バカ全開で娘のことを語っている武矢に、トマトが唖然とした表情を見せる。
「コブつきに興味はないよぉっ、帰んなっ」
「ええぇっ！？そんなぁ～っ！まだ何のお話もしてないですよぉっ！？」
冷たく言い放つトマトに、武矢がどこか泣きそうな表情を見せて訴える。
「私はコブつき男の言う事聞いてられる程、暇じゃあっ…」
「私たちっ、アナタに聞きたいことがあって、来たのよっ」
「……っ？」
客間を出て行こうとしたトマトの前に、鋭い表情の朝日が立ち塞がる。
「牢戸知玖のことでっ」
「……っ」
朝日の発したその名に、トマトが眉をひそめる。
「お前…」
トマトが、朝日の赤い瞳を見つめる。
「お前…鬼人、かっ…？」

どこか躊躇うように、ゆっくりと問いかけるトマト。

「そうだって言ったら…話を聞いてくれるっ…？」

「……。」

こうしてトマトは、知玖以外の鬼人の女と、出会うこととなった。

「成程っ…黒鬼一族と白鬼一族ねぇっ…」

トマトは朝日から、鬼人一族が考え方の違いから黒と白、二つの種族に別れたこと、そして知玖の率いる白鬼一族が鬼が島を出て、骸鬼を生み出していることを聞かされた。

「んで、牢戸知玖の居場所を知りたくて、私のところに来たってわけかっ…」

「ええっ」

トマトの言葉に、朝日が大きく頷く。

「アナタと知玖は因縁の中だと聞いたわ…アナタの名を出せば、知玖もきっと姿を見せっ…」

「見せさせて、で、どうする気なんだいっ？」

「えっ…？」

遮って問いかけるトマトに、朝日が少し眉をひそめる。

「戦うのかいっ…？」

「……っ」

鋭く言い放つトマトに、朝日の表情が鋭くなる。

「戦う気はないわ。話し合いがしたいのっ」
「話し合いっ…？」
「ええっ、鬼が、人と共存して生きていくことを提案したいっ」
「ハっ！」
朝日の真剣な言葉を、トマトは思わず笑い飛ばした。
「あいつが、んなことに納得するわけないだろうっ？」
――奪ってやるっ…！！！――
あんなにも人を、トマトを憎んだ知玖が、人と共に生きる道などを選ぶはずがない。
「だいたい話し合いにだって、応じるはずがないさっ」
「話し合おうとしたの？」
「えっ？」
すかさず問いかけてくる朝日に、トマトが戸惑ったような声を漏らす。
――貴女たちがいつ…私たちの話を聞いたのっ…！？――
「……っ」
思い出される知玖の言葉に、トマトが悲しげに目を細める。
「いやっ…」
トマトが俯き、そっと首を横に振る。
「だったら、話し合ってみる価値は十分にあると思うわっ」
「……っ」

迷いの一切ない、明るい笑みを浮かべる朝日が、トマトにはとても眩しく見えた。

「何故…そこまでするんだいっ…？」
「えっ…？」
トマトの遠慮がちな問いかけに、朝日が少し首を傾げる。

「あいつらは…何の関係もない人たちを傷つける悪い奴らだっ…話し合いなんてせずに、倒してしまえばっ…」
「何かを悪と決めつけて…それを皆で倒すことは容易いわ…」
「……っ」
遮る朝日の言葉を、トマトが顔を上げて、真剣に聞き入る。

「でもその悪が倒されて、なくなれば…人は次の悪を探す…倒すという行為で、他者と共に歩む為に…」
「……。」
トマトがそっと、その表情を曇らせる。

「そんな繰り返しに、何の意味もない」
「ええ、だから人は、倒す以外に、他者と共に歩む方法を見つけなければならないっ…」
武矢の言葉に続けて、朝日が話す。

「獣人が生まれたことは、チャンスだと思うのよっ」
「チャンス？」
「ええっ」
聞き返したトマトに、朝日が大きく頷く。

「自分とは違う者と、歩み寄る力を得るためのチャンスっ…」
朝日が笑顔を見せ、武矢の方を振り向く。

「自分とは違う者を、愛することが出来たんだからっ…」
「うんっ…」
微笑みかける朝日に、武矢もそっと笑って頷く。

「だから私たちは創りたいっ」
朝日が再び、トマトの方を見る。

「人も獣人も鬼も、皆が笑って生きられる世界をっ」
「……。」

その赤くまっすぐな瞳は、目を逸らすことが出来ぬほどに、輝き、遥かな未来を見据えていた。

その後、トマトの協力もあって、朝日と武矢の二人は牢戸知玖との接触に成功したが、その思いも虚しく、話し合いは失敗に終わり、共に歩む道は閉ざされた。

「武国が動き出したらしいねぇ…」
「ええ…私たち黒鬼一族を使って、白鬼一族をまた海の中に封印するつもりよ…」
武国が白鬼一族と接触し、動きだしていることを知ったトマトは、鬼が島の朝日のもとを訪れた。

「どうする…つもりだ…？」
「どうにも出来ない…わかってるでしょう？」
「……っ」
微笑みかける朝日に、トマトは思わず顔をしかめて俯いた。いくらトマトでも、武国の決定を覆す程の力はない。それに共に歩む道が閉ざされた今、そうやって知玖を倒す以外に、道はなかった。

「……済まないっ…」
「どうしてアナタが謝るの…？」
「私がっ…」

――何て…キレイなんだ……――
戸惑う程に見惚れた、美しい青色の龍。

「私が…この世界に獣人を生み出したりしたから…」

そのことで、どれだけ世界が動いたのだろう。何人の者が、不幸となったのだろう。まだ幼かったトマトの浅はかな行動が、すべてを狂わせてしまったのだ。

「後悔…してるの…？」
「……っ」
朝日の問いかけに、トマトが少し顔を歪める。

――後悔していますか…？――
――後悔しないか…？トマト……――

未琴に、青守に、同じように言われた問いかけ。

「それは…」
「愛した人を悔いるのは、女にとって最大の恥よっ？」
「えっ…？」
朝日の言葉に、トマトが戸惑うように顔を上げる。

「私は絶対に後悔しない…武矢を愛したこと…」
遠くを見つめる朝日が、そっとその瞳を細める。

「どんな…結果に終わったとしても…」
「朝日…」
悲しげに微笑む朝日に、トマトも少し目を細めた。武国の動きも見えて、どんな結果に終わることになるかを、朝日も薄々、感づいているのだろう。

「それにねっ？武矢を愛さなかったら、輝矢はこの世界に存在しなかった、そう考えると前向きになれるのっ」
朝日の笑みが、不意に明るくなる。

「後悔するようなことがあったとしてもっ、それはきっと、後悔ばっかりじゃないのよ」
輝きを失わない赤色の瞳が、トマトへと向けられる。

「トマトっ、アナタは確かに、この世界に獣人を生み出して、色々と後悔することがあったかも知れない…」

朝日がまっすぐに、トマトを見据える。

「けどっ、それだけじゃないでしょうっ？」

「えっ…？」

その言葉に、トマトが思わず眉をひそめる。

「人と動物の姿を持つ、獣人たちの暮らす世界…おとぎ話のような世界、だから御伽界っ…」

朝日が、どこまでも広がる青い空を見上げる。

「アナタがどう思ってるかは知らないけれど…」

空を見上げていた朝日が、再びトマトの方を見る。

「私はこの世界が、とても美しいと、そう思うわっ！」

「……っ」

清々しいまでの大きな笑みを浮かべ、微笑む朝日に、トマトがハッとしたような表情を見せる。

「だからっ…ねぇ、トマト…」

朝日が真剣な表情を見せ、そっとトマトに語りかける。

「そうやって罪に報いることだけが、アナタの責任じゃないはずよっ…？」

朝日の手が、トマトの手を取る。

「この美しい世界を守っていくことが…アナタの責任になるはずよっ…」

「朝日っ…」

トマトがそっと、目を細める。

「守る…」

俯いたトマトが、朝日の言葉を繰り返す。

「そう…」

ゆっくりと、頷きかける朝日。

「そして…その世界の片隅で生きるあの子のことも…出来れば、見届けてあげてっ…」

「えっ…？」

願うように呟いた朝日に、トマトが戸惑うように顔を上げる。

「置いてっ…逝く気なのかっ？あの子のことっ…」

「連れては逝けないものっ…」

戸惑いながら問いかけたトマトに、朝日が悲しい笑みを浮かべながら答える。

「すべてを…背負わせるのか…あんな幼い、自分の娘に…」

「だから今、こうして、アナタにお願いしてるのっ」

険しい表情を見せるトマトに、朝日がそっと笑いかける。

「どうかっ…」

取ったトマトの手を、強く握り締める朝日。

「どうか…あの子を導く、光になってあげてっ…」
「朝日っ…」
トマトの手を、俯いた自分の額へと当て、強く願う朝日。その震えた声に、トマトは責めることなど、出来るはずもなかった。
「ああ…わかった…」
それが、トマトと朝日の、最後の会話となった……――
その流れるような漆黒の髪も、前を見据えた強い瞳も、まるで生き写しのようだ。
「……。」
「ババア…？」
輝矢の頬に手で触れ、ただじっと輝矢を見つめているトマトに、輝矢が少し戸惑ったように呼びかける。
「悪いね…最後まで…見届けてやれなくてっ…」
「えっ…？」
かすかなその声を聞き取りきれず、輝矢が首を傾げる。
「私までお前に…全部、背負わせることになっちまって…」
「ババア…？」
言葉の意味を理解出来ず、輝矢がさらに戸惑った顔を見せる。

「けどっ…」
「……っ？」
輝矢の頬に触れていたトマトの手が下ろされ、トマトの腹部の上に置かれていた、輝矢の右手を握り締める。
「光だけはっ…置いてくからっ…」
「えっ…？」
「……っ」
トマトがそっと目を閉じると、輝矢の手を取ったトマトの手から、強い青色の光が放たれた。
「……っ！」
強い青色の光は、一瞬だけ輝き、輝矢の右手に流れたかと思うと、すぐにそのまま消えてしまった。
「……？」
今はまったく光っていない自分の右手を見下ろし、輝矢が首を傾げる。
「ババア、今のは…」
「その内わかるさっ、小娘っ…」
戸惑う輝矢に、トマトがそっと微笑みかける。
「ああ…最期くらい、名前で呼ぶかな…」
「えっ…？」
「……っ」
微笑んだトマトが、そっと目を細める。

「輝矢っ…」
「……っ！」
初めて呼ばれる名に、大きく目を見開く輝矢。
「ハっ…やっぱ、小娘の方が…しっくりくるやっ…」
「……っ」
微笑むトマトを見つめ、輝矢が開いた瞳をゆっくりと細めて、少し俯く。
「ト…マト…」
「……っ？」
輝矢の口から発せられる、震えた小さな声に、トマトが少し不思議そうな顔を見せる。
「トマト…先…生っ…」
「……っ」
不器用に放たれた呼びかけに、トマトが穏やかな笑みを浮かべる。
「お前に“先生”って呼ばれるなんてっ…気色悪いねぇっ…」
「悪かっ…！」
「けど、貰ってくよっ…ありがとう…」
「……っ」
言い返そうとした輝矢が、礼を言うトマトに、言葉を止める。

「小娘っ…」
トマトの瞳が、まっすぐに輝矢に向けられる。

「世界を…頼んだよっ…」

そう微笑んだのを最期に、トマトの紅の瞳が、静かに閉じられる。

「……っ！」

閉じられた瞳に、大きく目を見開く輝矢。

「ババアっ…？」
握り締めていた手はそっと落ち、輝矢の呼びかけだけが、その場に響き渡った。

「ババアぁぁぁぁっ！！！」

「……っ」
突然、ハッとした表情を見せ、ゴンが勢いよく顔を上げる。

「……っ？」

そんなゴンの様子に気づき、向かいに立っていた太狼が、不思議そうに首を傾げる。

「ゴン？」

「えっ？」

太狼が呼びかけると、ゴンは少し驚いたように振り向いた。

「どうかぁ～したっ？」

「あっ、いえっ…ただ…」

「……？」

俯き、自分でも戸惑うように言葉を繋げるゴンに、太狼がさらに不思議そうな表情を見せる。

「ただっ…」

そう呟いて、ゴンはどこか、浮かない表情を見せた。

第８６章　目覚める絶望　★３

「クソ…ババアっ…」
「クっ…！」
輝矢の腕の中で、その瞳を閉じたトマトを、桜時が茫然と見つめ、犬孝が言いようのない怒りをぶつけるように、地面を叩く。

「……。」
動かなくなったトマトを、静かに見つめるシルク。

「シルク様…」
「……っ」
後方から諸刃に呼びかけられ、シルクがゆっくりと顔を上げる。

「この世界で一番、目障りな女も死んだ…」
シルクが口端を吊り上げ、冷たい笑みを浮かべる。

「そして…」
微笑んだシルクが、ゆっくりと振り向く。

「私はすべてを…手に入れた…」

『……っ！』

シルクが振り向くと、そこには、桜時から抜き取った命力の結晶を持った、もう一人のシルクが立っていた。傍に寄り合う二人のシ

ルクに、桜時と犬孝が、その表情を険しくする。

「一つにはさせんぞっ…！！」

犬孝が素早く時雨丸を抜き、二人のシルクのもとへと飛び出していく。

「時雨丸っ…！」

「……っ」

「うっ…！」

シルクへ向け、時雨丸を振りかぶろうとした犬孝の前に、草薙を構えた諸刃が現れる。

「グっ…！」

「“白雷”っ…」

動揺し、隙を見せた犬孝に、諸刃が迷うことなく、白い雷を放つ。

「うあああああっ！！」

「父さんっ…！！」

白雷に撃たれ、倒れていく父の姿に、思わずその身を起こす桜時。

「クソっ…！」

「おっとっ」

「……っ！」

村雨丸へ伸ばそうとした桜時の手が、勢いよく掴み止められる。

「動かないで、もらいましょうかっ…」

「クっ…！」

桜時の手を掴み、そっと微笑むギンに、桜時は険しい表情を見せ

た。

「フフフっ…」

諸刃とギンにより、それぞれ攻撃を封じられた桜時と犬孝を見て、シルクがどこか楽しげに微笑む。

「さぁ…」

もう一人のシルクへと、ゆっくりと手を伸ばすシルク。

「おいでっ…」

「……っ」

もう一人のシルクも手を伸ばし、二人のシルクの手が、ゆっくりと触れ合う。

――パァァァーーンっ!!

『ううぅっ…!!』

強い白色の光が発せられ、桜時たちは思わずその瞳を伏せた。

その頃、地上。

「なっ何やっ！？あれっ…！！」

遥か西方から、天高く突き上げられる白い光に、桃原家の前に立っていた門貴が、思わず声を上げる。

「御伽湖の方からじゃっ…」

「輝矢んたちに何かあったんかっ…！？」

横で眉をひそめる由雉に、門貴が焦ったように声を出す。

「太狼っ…！！」

「……っ」

門貴が振り返ると、二人の後方に立っている太狼は、突き上げた光を見つめながら、そっと目を細めた。

「間に…合わなかったか…」

そう呟いた太狼の表情が、曇る。

「輝矢ちゃんっ…」

太狼は不安げに、輝矢の名を呼んだ。

「……。」
放たれた強い光が止むと、そこには、二人から一人になったシルクの姿があった。

「ふぅ…」
シルクがゆっくりとその赤い瞳を開き、一息つく。

「あっ…」
そんなシルクの様子を見つめていた桜時が、思わず声を漏らす。

「……っ」
見た目は今までのシルクと、何ら変わりはないというのに、今まで震えていなかった体が、急に激しく震え始めていた。手も足も、震えが強過ぎて、思うように動かせなかった。

「感じますか…？」
「えっ…？」
手を掴み止めているギンからの問いかけに、桜時が戸惑うように顔を上げる。

「あの方の強さを…」
「……っ」
冷たく微笑むギンに、桜時の表情が曇る。

「恐怖出来るのは、君がそれなりに強くなった証ですよ…桜時クン…」

「……。」
ギンの言葉に何も言い返すことが出来ず、桜時は厳しい表情を見せたまま、シルクを見つめた。

「はぁ…」
一人になったシルクが、自分自身を確かめるように、上方を見て瞳を閉じる。

「やっと…やっと戻ってきた…」
噛み締めるように呟いたシルクが、ゆっくりと瞳を開く。

「ここまで…」
シルクが顔を下ろす。

「クっ…」
「……っ？」
視線を落とすと、そこにはトマトの亡骸を抱えたまま、右手で三日月を握り締め、シルクに鋭い瞳を向けている輝矢の姿があった。

「フフっ…」
そんな輝矢を見て、シルクが嘲けるような笑みを零す。

「少し待っていてね…月の少女…」
「えっ…？」
「……。」
輝矢にそっと呟きかけると、シルクがゆっくりと右手を上げ、体を回転させるようにして、周囲に振り上げた。

――パァァァンっ！

「……っ！」

シルクの手が振り上げられた途端、周囲に残っていた、まだ開いていなかった繭が、一斉に解放される。解放された繭から、放たれる光。その光に、輝矢が大きく目を見開く。

「まだ力がっ…！？」

「いえっ…」

「えっ…？」

焦ったように声を出した桜時が、否定するギンの声に、眉をひそめる。

「あれは…僕らの同胞ですよ…」

「僕ら…？」

ギンの言葉に、桜時が戸惑いの表情を見せる。

「ふぃ～っ！」

「……っ！」

新たに聞こえてくる声に、ギンから素早く視線を移す桜時。

「あぁ～あっ」

「ふぅっ」

解放された繭から放たれた光は、先程、もう一人のシルクを生み出した時と同様に一点に集まり、やがて人のような二つの形を作っ

た。形はやがて実体化し、地面に降り立つ。

「なっ…！」

それを見て、桜時が大きく目を見開く。

「窮屈だったぜぇっ」

「本当に」

繭から生まれたのは二人、いや、二匹の鬼人であった。赤い髪の鬼は一本、青い髪の鬼は二本の金色の角を生やしている。どちらも鋭く輝く金色の瞳に白い肌、そして尖った爪と牙を持っていた。服を纏い、人と同じ大きさをしているところから、彼らが骸鬼ではなく、本物の鬼人であることがうかがえる。

「白鬼…一族っ…」

二匹を見つめながら、輝矢がそっと眉をひそめる。

「おはよう…」

『……っ？』

聞こえてくる声に、二匹が同時に振り向く。

「緋鬼（ヒキ）、蒼鬼（ソウキ）…」

『シルク様っ』

それぞれ緋鬼、蒼鬼と呼ばれると、二匹が素早くその場に膝をつ

き、シルクへ向けて深々と頭を下げた。

「シルク様が目覚めさせて下さったのですね…ありがとうございます…」

青い髪の鬼人・蒼鬼が、顔を上げ、シルクへと笑みを向ける。

「ほんっと助かったぜぇ～っ！あん中っ、マジ窮屈でさぁ～っ！」

「言葉遣いに気をつけろ、緋鬼っ」

雑なしゃべり方をする緋鬼に、蒼鬼が注意をする。

「ケっ！長いこと繭ん中入っててても、相変わらずだなぁ～っ！お前はっ！」

「フフ…二人とも元気そうで何よりだわ…」

『はっ！』

微笑むシルクに、言い争っていた二匹が、深々と頭を下げた。

「我らが眠っている間に…新顔も増えたようですね…」

「……。」

顔を上げた蒼鬼が、シルクの横に立つ諸刃に視線を送る。

「いささか人間臭いようですけど…」

「……っ」

試すような笑みを浮かべる蒼鬼に、諸刃が少し眉をひそめる。

「おっ！あっちはちゃ～んと鬼の臭いがするぞぉっ！」

「……っ？」

緋鬼の声につられ、蒼鬼が後方を振り返る。

「しかも、俺の大好物のっ、黒鬼一族の臭いだっ」
「……っ」
刺すような瞳を向けてくる緋鬼に、その視線の先にいる輝矢が、表情を曇らせる。挑発するような瞳ではあったが、緋鬼から感じる力は強く、今の輝矢には向かっていくことも出来なかった。

「黒鬼っ…」
輝矢の姿を確認し、蒼鬼が少し目を細める。

「始末いたしましょうか…？シルク様…」
「いいえっ…」
問いかけた蒼鬼に、シルクはすぐさま首を横に振る。

「あの子たちは大事な観客なの…」
「観客…？」
「それよりも…四方の塔の解放を…」
『……っ』
シルクの言葉に、緋鬼と蒼鬼が、少し驚いた表情を見せる。

「では、ついに後の一つをっ…」
「ええ、ここに…」
蒼鬼の言葉に頷きながら、シルクが左手を二匹の前に差し出す。その白い手の中には、桜時の中から取り出された、命力の結晶が輝いていた。

「だから早速、お願い出来る…？」
『はっ！』
シルクの言葉に頷くと、二匹が素早く立ち上がり、互いに背中を

合わせるように体の向きを変えて、その両手を目一杯、広げた。

『“解”っ！』

――パァァァーンっっ！

二匹がそう言い放った途端、周囲にあった四本の白い塔から、互い違いになるようにして、赤と青の光がそれぞれ、突き上げられる。

「……っ？」

「なっ…何だっ…？」

光の突き上げた塔を、戸惑うように見回す輝矢と桜時。

「フフフ…」

突き上げた赤と青、二つずつの光に、シルクが満足するように微笑む。

「……っ」

――パァァァァンっ！！

「……っ！」

シルクが右手を掲げると、輝矢たちから一番近い位置にある、中央の白い塔から、他の四塔と同じように、白い光が突き上げられた。光る目の前の塔を、輝矢が戸惑いながら見上げる。

「一体…何をっ…」

――ゴゴゴゴゴゴっ…！

「なっ…！？」

輝矢が戸惑っていたその時、輝矢の座り込んでいた地面、というか海底が、地の底から沸き上がるように、激しく揺れ始める。聞こえてくる地響きに、顔を引きつる輝矢。

「何をっ…！」

「フフフっ…」

鋭い瞳を向ける輝矢に、シルクはただ微笑みを見せた。

「さぁ…」

高々と海面を見上げたシルクが、突き上げる5本の光を見ながら、大きく両手を広げる。

「夢の…完成よっ…」

シルクが、左手に持っていた命力の結晶を、ゆっくりと中央塔へと投げ放った。

「あっ…！」
「……っ」
輝矢たちが厳しい表情で見守る中、命力の結晶が、白く輝く中央塔の中へと吸収されていく。

『……っ！』

――バァァァーーンっ！！

同刻・亀国内海域。

「うわあああぁっ！」
亀国中を走る、大きな揺れと地響きに、海中だというのにバランスを崩す宇凪。

「なっ何だぁっ！？」
宇凪が焦ったような表情で、辺りを見回す。

「地震っ…？」
「海底火山の噴火ではないか？」
万亀と岩士が、それぞれに眉をひそめる。

「そんなカワイイもんじゃないくらい、揺れてるようなっ…」
「いっやぁ～んっ！怖いっ！桜時様ぁぁ～っ！！」
「……。」
ここにはいない桜時へ向けて叫んでいる泡美に、怪訝そうな表情を見せていた渦礼が、さらに怪訝な表情となる。

「輝矢さんたちに何かあったんじゃ…」
「えっ…！？」
万亀の言葉に、固まっていた渦礼が、焦るように振り向く。

「確かに、御伽湖の海域の方から揺れとるだぁっ」
「そんなっ…！助けに行かなきゃっ…！」
「助けに行くったって、それじゃあこっちの身の安全がっ…」
「ぬおおおうっ！！」

――ボォォォ～ンっ！

「へっ…？」
急に叫び出し、白い煙に包まれて鯨化する泡美に、助けに行くことを批判しようとしていた宇凪が、口を大きく開いて振り返る。

「待っててねぇ～っ！！桜時様ぁぁっ！」
「いっやぁぁっ！せめて一匹で行けぇぇっ！！」

鯨化した泡美は、有無を言わさず皆を乗せ、御伽湖の海域へと急いだ。

同刻・龍国オトポリ本部内。

「なっ何なのっ！？この揺れっ…！！」

海の底から放たれた衝撃は、御伽界の大地をも激しく揺さぶっていた。オトポリ本部内にいるリンゴは、壁にしがみつきながら、必死にその揺れから耐える。

「何なのよっ！？」

「私にキレられたって…」

怒鳴りあげてくるリンゴに、困ったように呟く、その隣で同じように壁にしがみついているイチゴ。

「地震なんてレベルじゃないわよっ！？これっ！あっ…！」

焦るように声を張り上げていたリンゴが、ふと何か思いついたような表情を見せる。

「まさか輝矢たちに何かっ…！」

「うむっ…」

リンゴが振り向くと、長官席に座ったままの座黒が、ぐっとその眉をひそめた。

「失礼しますっ…！」

『……っ』

まだ揺れの続く中、何とかバランスを取りながら、オトポリ隊員の男が、長官室へと駆け込んでくる。

「御伽湖中央にっ…！島と見られる大地が浮上っ…！！」
『えっ…！？』
隊員の言葉に、リンゴとイチゴが大きく目を見開く。
「島だとっ…！？」
座黒が長官席を立ち、窓を見ようと後方を振り返る。
「まさか鬼国がっ…！」
『島っ…！？』
「グハッ！」
窓から外を見ようとした座黒が、後方から駆け込んできたリンゴとイチゴに、容赦なく押し潰される。
『……っ！！』
開いた窓の遥か先に見える御伽湖を見て、リンゴとイチゴが、その表情に衝撃を走らせる。
「島なんてっ…ものじゃない…あれはっ…」
「大…陸っ…」
リンゴの言葉に続くように、ポツリと呟くイチゴ。広い御伽湖の、そのわずかな外周だけを残して、大きな大地に埋め尽くされていた。
「桜時…さんっ…」
イチゴがその大陸を見ながら、不安げに呟く。
「輝矢っ…」

リンゴも輝矢の名を呼びながら、浮かない表情を見せた。

第８６章　目覚める絶望　★４

「……っ」

激しい衝撃と、揺れ動く大地に、思わず瞳を伏せていた輝矢は、揺れが収まったことを感じ取ると、ゆっくりとその瞳を開いた。

「えっ…？」

輝矢の黒い瞳の向こうに広がるのは、真っ青な海ではなく、真っ青な空。

「空っ…？海上に…上がった…？」

かつて鬼国であった都市跡が、トマトとシルクが戦った時の、海へと沈む前と同じように、御伽湖へと浮き上がったのだろう。海中でなくなった影響からか、輝矢の瞳も黒色へと戻り、激しい頭痛もなくなっている。

「空…」

桜時も同じように空を見上げ、茫然と呟く。

「フフフ…」

上を見上げ、両手を広げていたシルクの視界にも、どこまでも続く空が広がる。

「フフフフっ…」

「……っ」

微笑み続けるシルクを見つめ、輝矢がそっと眉をひそめる。

「何を…」
「……っ？」
聞こえてくる声に、シルクがゆっくりと顔を下ろす。

「何を…しようとしているんです…？」
顔を下ろしたシルクを、輝矢がまっすぐに見つめる。

「何を…したんです…？」
「……っ」
戸惑いと恐怖の入り混じった、そんな表情で問いかける輝矢を見て、シルクが口端を吊り上げる。

「フフっ…」
「えっ…？」
輝矢の視界から、シルクの姿が消える。

「知りたい…？」
「……っ！」
次の瞬間、笑顔のシルクが、輝矢の目の前に現れた。

「クっ…！」
「……っ」
輝矢が警戒するように三日月を握り締める中、シルクが輝矢の腕の中で眠るトマトに目を落とす。閉じたまま、開くことのない瞳を見て、シルクがそっと目を細める。

「邪魔ね…」

――パァァァンっ！

「あっ…！」

シルクの指から白い光が放たれると、トマトの体が遠くの方へと弾き飛ばされた。

「何をっ…！」

「……。」

「うっ…！」

輝矢が勢いよく顔を上げると、そのすぐ目の前にシルクの鋭い瞳があり、輝矢が思わず口ごもった。

「ねぇっ…月の少女…」

シルクの赤い瞳が、まっすぐに輝矢へと向けられる。

「最後に一度だけ…チャンスをあげる…」

「チャンス…？」

その言葉を、戸惑いながら聞き返す輝矢。

「私たちと共に来て…人間を滅ぼさない…？」

「……っ！」

シルクのその問いに、輝矢が大きく目を見開く。

「なっ…何をっ…」

「貴女は鬼だもの…共に来る資格は十分にあると思うわ…」

「……っ」
微笑むシルクに、輝矢が唇を噛み締める。

「シルク様…」
「少し黙ってて、諸刃…」
「……。」
注意するように呼びかける諸刃であったが、そっと言い放つシルクに逆らうことは出来ず、浮かぬ表情を見せたまま、ゆっくりと俯いた。

「……っ」
「輝矢っ…」
楽しげに微笑むギンの横で、桜時が不安げに輝矢を見つめる。

「そんなっ…こと…」
「……？」
口を開く輝矢を、覗き込むように見つめるシルク。

「そんなことっ…！絶対にしないっ…！！」
輝矢が迷いのないまっすぐな瞳を、突き上げるようにシルクへと向ける。

「私はアナタたちの味方になんかつかないっ…！！人間たちを滅ぼ

したりしないっ…！！」

――俺はイヌだけどっ…もっと羽ばたきたいっ！羽ばたいていきたいんだっ！！――

――この誇りっ…そう簡単には折らせへんっ！！――

――母さんっ…――

仲間たちが教えてくれた、人間の美しさ。この世界の、美しさ。

「私はっ…！この世界をっ、この美しい世界をっ…！！」

――世界を…頼んだよっ…――

トマトの、最期の言葉。

「守ってみせるっ…！！絶対にっ…！！」

輝矢が強く声を張り上げ、シルクへと挑戦するように叫ぶ。

「アナタたちを倒してっ、私は人間を守るっ！！」

「……。」

決意のこもった瞳で叫ぶ輝矢を、シルクは特に微笑みもせずに、ただまっすぐに見つめ返す。

「……そう…」
短く頷いたシルクが、折っていた膝を伸ばし、輝矢との距離を離す。
「……っ」
「えっ…？」
輝矢から視線を逸らし、そっと右手を掲げるシルク。
――パァァァーンっ！！
「……っ！」
シルクが右手を掲げた途端、五本の塔から、再び白い光が突き上げられた。周囲の四本の塔から上がった光が、中央の塔へと集まり、その強さを増した一本の光となり、天高くへ突き上げる。その光景に、輝矢が眉をひそめる。
「何をっ…！」
「四本の塔から放たれる鬼力の光が…」
「……っ」
輝矢が問いかけようとしたその前に、シルクがゆっくりと口を開く。
「あの塔の命力の結晶を糧に…その力を幾重にも増大する…」
中央の塔を指差すシルク。

「突き上げられた光は…しばらくの間、集約されて…」
シルクが、塔からその光の先へと、指を動かす。

「やがて…世界中に放たれる…」
「……っ」
その言葉に、曇る輝矢の表情。

「放たれたら…」
「……。」
小さく声を発する輝矢の方を、振り返るシルク。

「世界は…人間たちは…どうなるのです…？」
「……っ」
輝矢の問いかけに、シルクがそっと目を細める。

「光を浴びた人間たちは…皆、その姿を骸鬼へと変えるっ…」
「……っ！」
「なっ…！！」

微笑んで答えるシルクの言葉に、輝矢が、桜時が、大きく目を見開く。

「骸鬼へ…変わるっ…？」

「そう…」
シルクの言葉を繰り返した輝矢に、そっと頷きかけるシルク。
「私の手で鬼人化させるんじゃない…人間たちはね、自ら勝手に鬼へと変わるのっ…」
その微笑みが、さらに残酷に向けられる。
「これで世界は…鬼だけの、平和な世界へと変わるわ…」
「……。」
続けられるシルクの言葉を、茫然とした表情で聞く輝矢。瞳を開き、視線を落としたまま、輝矢は指一本、動かそうとはしなかった。
「そん…なっ…」
桜時も、あまりの衝撃からか、必死に起き上がらせた体を、再び地面へと伏せてしまう。
「……っ」
掴んでいた桜時の手を離し、ギンがそっと笑う。
「貴女が同じ鬼である私たちに…どうしても敵対するというのなら仕方ないけれど…」
シルクが再び視線を下ろし、茫然としている輝矢の方を見る。
「で…貴女は何の為に…戦うんだったかしら…？」
嘲笑うかのような表情で、そっと問いかけるシルク。

「私…はっ…」
俯いたままの輝矢が、少し震えた声を発する。
「私はっ…人間を…守る為に…」
「その守るべき人間は…もうすぐ物言わぬ鬼と化すわっ…」
「……っ！」
シルクの言葉に、再び走る衝撃。
――輝矢ぁぁぁ～んっ！――
――輝矢っ！――
――輝矢ちゃんっ…――
たくさんの笑顔が、浮かんでは消えていく。
「あっ…」
小さな声を発した輝矢の右手から、力なく三日月が零れ落ちた。
「もう塔は動きだしたわ…私を殺したって、止まりはしない…」
光の突き上げる中央塔を見て、満足げに微笑むシルク。
「それとも…頑張って私を殺して…トマトの仇だけでも取るっ…？」

「……。」
挑発するようなシルクの問いかけに、少しの反応も見せずに、俯いたまま言葉を発さず、ただ絶望した表情で固まる輝矢。

「フフっ…」
そんな輝矢を見て、シルクがそっと笑う。

「輝矢っ…」
同じように輝矢を見つめ、悔しげに目を細める桜時。

「クソっ…！」
桜時が拳で強く、地面を叩きつける。

「ここまで…かっ…」
諸刃の白雷に倒れた犬孝も、諦めるように声を漏らす。

「……。」
「戦意喪失、といったところかしらっ…？」
固まったまま動かない輝矢を見て、シルクが少し肩を落とす。

「案外、つまらない結末だったわね…」
どこか残念そうに呟くと、シルクが輝矢へと鬼爪の生えた右手を振り上げた。

「……っ！」
振り上げられる鬼爪に、桜時が大きく目を見開く。

「やめっ…！」
「サヨナラ…月の少女っ…」

桜時が必死に叫ぶ中、シルクの鬼爪が輝矢へと振り下ろされた。

「“双渦”っ…！！」
「……っ」
鬼爪が輝矢に当たろうとしたその時、輝矢の頭上を擦り抜けて、シルクへと二つの渦の塊が飛んでくる。

「渦っ…？」
眉をひそめながら、後方へと飛んで、渦を避けるシルク。

「輝矢っ…！！」
「……。」
そこへ現れた渦礼が、焦ったような声を発しながら、動こうとしない輝矢の体を持ち上げる。

「渦礼っ…？」
「宇凪っ！そっちをっ…！」
「わかってるっ！」
「……っ？万亀…？宇凪…？」

桜時が渦礼の姿に戸惑っていると、同じように現れた万亀と宇凪が、それぞれにトマトと犬孝を抱え上げた。

「おやおや、雑魚がぞろぞろとっ…」

「“岩々突出”っ！！」

「……っ」

桜時のすぐ横で、現れた万亀たちを感心するように見ていたギンが、突如、地面から突き上げる鋭い岩に、高く飛び上がる。

「桜時さんっ…！！」

「岩士っ…」

ギンが離れたところで、どこからか現れた岩士が桜時のもとへと駆けつける。

「皆っ！こちらへっ…！」

「万亀っ…？」

桜時と岩士のもとへ、輝矢たちを抱えた万亀たちが集まってくる。

「泡美っ…！」

――バァァァーンっっ！！

「はぁぁ～いっ！！」

「うわっ！」

桜時たちの居た辺りの地面を突き破って、海面から巨大なクジラ・泡美が姿を見せる。

「桜時様ぁぁ～っ！無事で良かったぁ～っ！！」
「泡美っ…」
「いいから、とっとと逃げろっ！バカっ！」
桜時の無事を喜んでいる泡美に、宇凪が思わず怒鳴りあげる。

「逃げるって、万亀っ…！」
「ここは一旦、退きましょう…桜時さんっ…」
「……っ」
冷静に言い放つ万亀に、桜時がそっと目を細める。

「二日、ですよ」
『……っ？』
後方から聞こえてくる声に、桜時と万亀たちが一斉に振り返る。

「ギンっ…」
「光が集約して、世界に放たれるまで二日…」
桜時たちの振り向いた先に立っているギンが、二本指を突き立て、そっと微笑む。

「精々、頑張って下さいっ…」
「……っ」
冷たい笑みを浮かべるギンに、桜時はそっと眉をひそめた。

「行くよっ！！」
「急げっ！！」
「……っ！」

――ザッパァァーンっ！！

泡美が背中に桜時や輝矢を乗せて、突き破って現れた地面の穴から、再び海の中へと潜っていく。大きな巨体が翻り、辺りに勢いよく水飛沫が散った。

「はぁ～あっ…」

ギンが溜息をつきながら、服についた水飛沫を払う。

「あっいつらっ、俺ら相手に逃げ切れると思ってんのかぁ～っ！？」

「追いますか…？シルク様…」

「いいわ…」

「へっ？」

蒼鬼の問いかけに、シルクが首を振ると、追いかける気満々でいた緋鬼は、思わず間の抜けた声を漏らした。

「追わないんですかぁっ！？」

「ここで無理に殺さなくても…どうせ2日後には鬼に変わる運命なのよ…」

非難するように問いかける緋鬼に、シルクがそっと微笑む。

「なら最期のわずかな時を…人間として過ごさせてあげてもいいじゃない…？」

『……っ』

嘲笑うようなシルクの言葉に、緋鬼と蒼鬼が眉をひそめる。

「貴女がそう…仰るのならっ…」
「ちぇっ！殺したかったなぁっ！」
頭を下げる蒼鬼に対し、緋鬼はどこか残念そうな顔を見せた。

「貴女も…わずかな時を…人間たちとゆっくりと過ごすといいわ…」
シルクが輝矢たちの去っていった、地面の大穴を見つめる。

「月の少女っ…」

その声が、冷たく響き渡った。

「……。」
敵がいなくなり、やっと警戒を緩めた諸刃が、ゆっくりと握り締めている草薙を持ち上げる。

「……っ」
その刀身に滲んだ赤い血を見て、そっと目を細める諸刃。

――諸…刃っ……――

諸刃が奪った。次狼に続いて、トマトの命までもを。

「悔やんでおられるのですかっ？」

「……っ」

背後から聞こえてくる声に、諸刃がゆっくりと振り返る。

「師の命を奪ったことをっ…」

「……。」

試すように微笑んでいるギンを見て、諸刃が少し顔をしかめる。

「別に…」

感情のない声が、静かに風に乗った。

第87章　希望のカケラ　☆1

輝矢たちが、海面に浮上した鬼国から、万亀たちの手により龍国へと戻った翌朝。
青守トマトの葬儀が行われた。

龍国はずれ・青守トマトの屋敷前。

「トマトっ…！」
「トマトさんっ…！！」
「ト…マトっ…」

死装束である白の着物を纏わされ、軽く化粧を施されたトマトの姿に、屋敷に残った百十八人の旦那、皆が泣いた。もう動くことのないトマトの周囲を、白い花が、そして、百十八人の旦那が囲んだ。

「トマトお祖母ちゃんっ…！」
「……。」
涙を流すイチゴの肩を、隣に並ぶ座黒がそっと抱く。

「……っ？」
イチゴの逆隣で厳しい表情を見せていたリンゴが、ふと何かに気づいたように顔を上げる。

「ねぇっ」
「へっ？」
リンゴが振り返り、後方に並んでいる羊スケへと声を掛ける。
「ゴンはっ？」
「へっ？」

リンゴの問いかけに、目を丸くする羊スケ。
「あっれぇ～？そういやいないっスねぇ～」
羊スケが辺りを見回しながら、困ったような顔を見せる。
「朝、俺が家に迎えに行った時はいなかったんで、てっきり先に来てると思ったんスけどっ」
「……。」
羊スケの言葉に、リンゴが表情を曇らせる。

「こんな大事な時にどこ行ってんスかねぇ～あの人はっ」
「……っ」
「へっ？」
困ったように肩を落とす羊スケの横を通り抜け、リンゴが参列から抜け出て行く。

「ちょっ…！リンゴさんっ…！？」
「行かせてやってくれ」
「えっ？」
追おうとした羊スケを止めたのは、座黒であった。

「色々と…あるようだからっ…」
「長官っ…」
悲しげな表情を見せる座黒に、羊スケがそっと眉をひそめる。

「ゴンさんっ…」
俯いた羊スケは、どこか不安げにゴンの名を呼んだ。

「……。」
オトポリ関係者の参列の方を見ながら、いつもとは違う黒服に身を包んだ由雉が、そっと表情を曇らせる。

「輝矢んも…来んかったな…」
「……っ？」
由雉の横で、門貴がポツリと呟くと、由雉がゆっくりと振り向いた。
「まだ寝てるんじゃない？昨日の今日だし」
「……せやな…」
少し間を置いて、門貴が小さく頷く。
「……っ？」
視線を落としていた門貴が、ふと視界に入る桃色の物体に手を伸ばす。
「これっ…」
「えっ？」
門貴の手の中に収まったそれを、由雉が覗き込む。
「あっ…」
それを見た由雉が、目を見開く。
「桜の…花びらっ…」
それは、淡い桃色の、桜の花びらであった。
『……っ』
二人が顔を上げると、空からゆっくりと、まるで春のその季節のように、桃色の花びらが降り注いでいた。
「これはっ…？」

「桜…？」
降り注ぐ桜に、旦那たちや参列者からも、戸惑った声が漏れる。
「……っ？あっ」
周囲を見回していた由雉が、何かを見つけた様子で声を出す。
「“瞬花”…」
――パァァァーンっ！
そこには、トマトの屋敷近くの森の木に手を触れ、冬の寒さに枯れ切ったその木を、満開の桜の木へと変えている桜時の姿があった。
「桜時…」
「あいつっ…」
桜時の様子を見つめ、門貴と由雉がそっと目を細める。
「まったくっ…」
二人と同じように桜時を見つけた太狼が、呆れたような声を出し、その肩を落とした。
「ただでさえ命力取られてフラフラだってゆうのにぃ、あんなに花力を使ってぇっ…」
困ったような顔をしながら、太狼が桜時のもとへ行こうと、その足を一歩踏み出した。
「止めないでやってくれないか…？」
「えっ…？」
後方から聞こえてくる声に、太狼が足を止め、戸惑うように振り

返る。

「頼むっ…」

「犬孝さん…」

参列者の一番後方で座り込み、悲しげに願う犬孝に、太狼はそっと目を細めた。

「……っ」

止めるために上げていた手を下ろし、太狼が再び、桜時の方を見る。

「“瞬花”…」

――パァァァーンっ！

仲間たちが見つめていることにも気付いていない様子で、桜時は次々と桜を咲かせていく。その瞳は少し虚ろで、どこか遠くの方を見ているような、そんな瞳であった。

「“瞬花”…」

桜時の咲かせた桜の花びらが、咲かせたばかりだというのに、風に舞って、散っていく。

「……。」

――永遠に咲く花を…人は誰も美しいとは思わない…――

トマトが教えてくれた、その言葉とは逆に、一瞬の桜は、美しく散っていく。

――世界を…頼んだよっ…――

美しく、散っていく。

「クソババアっ…」

――男は一に顔っ！二にプロレス技っ！今から腕を磨いてっ、将来、私の旦那になりなぁっ！！――

あの頃、たぶん、好きだった。世界中の女が苦手になるほど、鮮烈に。

――私の二五八番目の旦那にならないかぁ～いっ？――

――桜時っ！――

思い出されるのは、どこまでも明るく、どこまでも強い笑みばかり。

「……さようなら…」

桜時の小さな声が、桜とともに空へと散る。

『……。』

季節外れの桜の舞い散る中、たくさんの者たちに見送られ、トマトは火葬された。

その頃、桃原家。

「……。」

皆が葬儀へと出掛けた中、輝矢は一人、桃原家に残り、自室の寝台に座り込んで、すぐ横の窓から、外に広がる龍国の景色を茫然と眺めていた。

「失礼します」

「……っ」

ノックと同時に声がして、輝矢の部屋の扉が開く。

「お茶をお持ちしました、輝矢様」

そう言って、微笑みながら部屋へと入って来たのは、グレーテルであった。両手に持ったおぼんの上には、湯気の上がった湯呑みが置かれている。

「こちらに置いておきますね」
グレーテルが、寝台の横のテーブルに、その湯呑みを置く。
「ありがとう…ございます。グレーテル…」
「……いえっ…」
窓を見たまま、礼を言う輝矢に、グレーテルが少し表情を曇らせながら、そっと答えた。

「では、失礼します」
「はい…」

いつものような会話もなく、グレーテルがすぐに輝矢の部屋を出て行く。廊下に出ると、大きな音が立たないように、そっと扉を閉めた。

「……はぁっ…」
扉が閉まった途端、グレーテルが小さな溜息を漏らす。

「……。」
部屋の中の輝矢の様子を思い出し、そっと目を細めた後、グレーテルが足を動かし、一階へと降りていく。

「ランラランランっ♪私はオカマぁ～っ♪キレイ好きぃ～っ♪」
「……。」
一階へと降りたグレーテルの視界へと入ってくる、スキップをしながら廊下掃除をしている、笑顔のヘンゼル。そのヘンゼルの姿を見て、一瞬固まったグレーテルが、思わず持っていたおぼんを振り上げた。

「うるさい」
「ぎゃんっ！！」
グレーテルの振り下ろしたおぼんが、ヘンゼルの頭部を直撃すると、ヘンゼルはスキップを止め、痛々しい声をあげた。

「痛たたぁ～っ…」
頭を押さえ、少し涙目となるヘンゼル。

「麗しのお姉様に何するのぉっ！？グレーテルっ！」
「人生初なくらい不快でしたのよ、お兄様っ」
姉と言い張るヘンゼルに、グレーテルがわざと兄を強調して言い放つ。

「まったくっ！こんな時に歌なんて歌ってっ…！」
「こんな時にはっ…明るく振る舞うくらいのことしか出来ないものっ…」
「……っ」
急に声のトーンを落とし、その表情を曇らせるヘンゼルに、グレーテルが眉をひそめる。

「お兄様っ…」
「輝矢様は？どうだった？」
「……。」
ヘンゼルの問いかけに、そっと目を落とすグレーテル。
「目に見えて重症…というか…」
「そうっ…」
躊躇いがちに答えるグレーテルに、ヘンゼルが少し肩を落とす。

「大丈夫でしょうか…？輝矢様っ…」

「……。」
不安げに問いかけるグレーテルに、ヘンゼルも眉をひそめる。
「どうかしら…」
ヘンゼルが、気難しい表情でそっと答える。

「悲しみに泣くことが…とても苦手な方だから…」
「……。」
その言葉に、グレーテルが悲しげな表情となる。

「どうして…あの方ばかり、悲しみを背負わなきゃならないんでしょう…？」
「グレーテルっ…」
「あの方は…後、いくつ悲しみを背負えば…解放されるんでしょうか…」
「……。」
答えの出せぬ問いかけに、ヘンゼルもそっと目を落とす。
「そうね…」

「……。」
グレーテルの持ってきたお茶に口を付けぬまま、輝矢はただ、窓の外を見続ける。

――皆の意志はっ…アナタが継いでくれるものっ……――
――世界を…頼んだよっ……――

「……っ」

思い出される言葉に、輝矢がそっと目を細める。

「重たい…なぁっ…」

弱々しい声が、部屋に落ちた。

同じ頃、龍国・見届けの苑。

「……。」

輝矢同様、トマトの葬儀に参列しなかったゴンは、厳しい表情を見せながら一人、次狼の墓の前に立ち尽くしていた。

「ここだと思ったっ」

「……っ」

背後から聞こえてくる声に、ゴンが少しだけ振り返る。

「あんたがいない時は、大抵、次狼のとこだもんねっ」
「……。」
ゴンが振り返ると、そこには笑顔を見せたリンゴが立っていた。
リンゴと目を合わせたゴンは、何も言わないまま再び前を向き、次狼の墓を見下ろす。

「あっ、次狼とお話し中だったぁ？ごっめん、私って昔っからタイミング悪っ…！」
「俺にとって…」
「……っ」
作ったような明るい口調で話していたリンゴが、口を開いたゴンに、その言葉を止める。

「あの人は…“強さ”の象徴だった…」
「……っ」
低く、か細い声を漏らすゴンに、笑顔を消して、耳を傾けるリンゴ。

「誰よりも、何よりも強い…“最強”の存在…」

――誰よりも強くなって、私の旦那になりなぁ～っ！クソガキっ！
――

思い出される、突き上げるような明るい笑顔。

「“絶対”の…存在っ…」

噛み締めるように呟いたゴンが、自分の拳を力強く握り締める。

「俺の中で…あの人の存在は絶対でっ…」

――私の二五五番目の旦那にならないかぁ～いっ？――

「俺の中で…あの人の強さは絶対でっ…」

――ゴンっ！――

「俺の中でっ…あの人以上に強い奴なんていなくてっ…」

ゴンの声が、震えていく。

「だからっ…！」

深く俯いたその肩も、震える。

「だからっ…！あの人がっ…死ぬなんてっ…！」

「……。」

ゴンの背中を見つめ、その声を聞き続けるリンゴが、痛そうに、辛そうに、目を細める。

「死ぬなんてっ…！そんなことっ…！」

「……っ」

覗きこまなくてもわかる、泣いているその声に、リンゴはそっと目を伏せた。

「うんっ…」

目を伏せたリンゴが、頷きながらゴンの背中にもたれかかり、そっとその体重を預ける。

「うんっ…」

もう一度頷いたリンゴのその閉じた瞳から、一筋の涙が流れた。

第87章　希望のカケラ　☆2

トマトの墓は、トマトの屋敷の裏にひっそりと作られた。日も傾き始め、祈りを送る者たちも居なくなった頃、葬儀に参列しなかった輝矢は一人、静かにトマトの墓を訪れた。

「……。」

トマトの墓の前に、そっと立ち尽くす輝矢。

「んっ？」

輝矢の視界に、トマトの横にもう一つ並んだ、古い墓が入ってくる。そこ墓に並べるようにして、トマトの墓が作られたように見える。もう一つの墓を見て、輝矢は少し眉をひそめた。

「クソババアの一番目の旦那のものなんだってさっ」

「……っ」

後方から聞こえてくる声に、輝矢がゆっくりと振り返る。

「その墓っ」

「ハチ…」

その場へと現れたのは、穏やかな笑みを見せた桜時であった。そっと名を呼ぶ輝矢のもとへ、桜時が歩み寄ってくる。

「旦那たちが言ってたんだっ」

桜時が輝矢の横に並び、言葉を続ける。

「口には出さなかったけど、ババアが愛してたのは後にも先にも、一番目の旦那だけだったってっ…」

そっと微笑んだ桜時が、並んだ二つの墓を見下ろす。

「だから…隣で眠らせてあげようって…」

「……っ」

桜時の言葉を聞きながら、目を細める輝矢。

――青守っ！――

――トマトっ……――

「……。」

微笑み合うトマトと青き龍の姿が目に浮かぶようで、輝矢はそっと、刻みつけるように目を伏せた。

「“永遠に咲く花を、人は誰も美しいとは思わない”…」

「……っ」

その言葉に輝矢がハッと目を見開き、桜時の方を振り向く。

「やっと…思い出したよっ…」

振り向いた輝矢へ、桜時が柔らかく微笑みかける。

「俺さっ…俺の咲かせた桜が散っていくのが、すっごい嫌になった時があってさっ…」

桜時がその場にしゃがみ込み、墓に刻まれた名の高さまで、目線を落とす。

「一瞬だけパァっと咲いて、すぐに散っていく桜が…何となく、死

んで逝く人の姿と重なってさ…」

懐かしむように話す桜時が、そっと目を細める。

「この桜が永遠に咲けばいいのに、って、俺がそう言ってた時に、ババアがくれた言葉なんだっ…」

――人が、花がいつか散り逝くことを知っているから美しく見えるとかっ？――

――いぃやっ！違うねぇっ！――

問いかけた桜時に、大きく首を横に振ったトマト。

――花自身がねっ…――

思い出される笑顔。

「“花自身が、いつか散り逝くことを知りながら、それでも一生懸命咲くから美しいんだよ”って…」

「……っ」

トマトの言葉を繰り返す桜時に、輝矢が思わず視線を落とす。

「俺に…一生懸命咲くことを、教えてくれた人だったよっ…」

そう言って墓にそっと微笑みかけた後、桜時がゆっくりと立ち上がる。

「ババアは…トマトは…」
「……っ？」
やっと口を開いた輝矢の方を、桜時が振り返る。
「永遠の時を生きる自分は、この世界には必要ないと、そう言いました…」
目線を下に落としたまま、輝矢がゆっくりとした口調で言葉を続ける。
「だから…同じように永遠を生きるシルクと共に…この世界から消えようとした…」
「うんっ…」
桜時が再び墓の方を見て、輝矢の言葉に小さく頷く。
「トマトは…本当に…“永遠に咲く花”だったのでしょうか…」
輝矢が戸惑うように、そっと問いかける。
「この世界に必要のない、美しくない存在だったのでしょうかっ…」
――とっとと次の勝負行くよぉっ！小娘っ！――
眩しい程の、明るい笑顔。
「だから…死んでしまったのでしょうか…」
「……。」
悲しく響く輝矢の言葉を聞き、桜時が少し目を細める。

「確かに…」
「……っ」
ゆっくりと声を発する桜時の方を、輝矢が振り向く。
「確かに…永遠に咲く花を…人は誰も美しく思わないのかも知れないっ…」
立ち上がった桜時が、トマトの墓を見下ろす。
「永遠にも似た永い時を生きたババアは…刹那を生きる人の中には、あってはならない存在だったのかも知れない…」
トマトの墓を見つめ、桜時が厳しい表情を見せる。
「けどっ…」
桜時が右手をそっと、自分の左胸に当てる。
「俺は、この人のことをっ…」
まっすぐな桜時の瞳が、トマトの墓へと向けられる。
「きっと、永遠に忘れないっ…」
「……っ！」
その言葉に、隣で聞いていた輝矢が、思わず大きく目を見開く。
「俺だけじゃない…旦那はもちろん、ゴンやリンゴや皆も、きっと永遠に忘れないよっ…」
振り向いた輝矢へ、桜時が穏やかな笑みを向ける。
「心の中に咲く花なら…きっと、永遠に美しいと思うからっ…」

「……っ」

桜時の微笑みを見て、耐えきれずに俯いた輝矢が、強く目を細め、堪えるように口元を手で隠す。

「だからっ…」

桜時がゆっくりと体を横に向け、胸に当てていた右手を、俯いたままの輝矢の方へと伸ばす。

「……っ」

輝矢の頬へと触れる、桜時の温かな右手。輝矢がゆっくりと顔を上げる。

「皆っ…忘れられないから…悲しむんだよっ…？」

顔を上げた輝矢へ、桜時が優しい笑みを向ける。

「忘れられないから…泣くんだっ…」

桜時の手がそっと、輝矢の頬を撫でる。

「泣くことは、悪いことなんかじゃない…弱いことなんかじゃないっ…」

「……っ」

桜時の言葉に、手から伝わる温もりに、輝矢の瞳が徐々に潤んでいく。

「その人を忘れない為に…その人を憶えておく為に、泣くんだ…」

透き通った青色の瞳が、輝矢にまっすぐに向けられる。

「だからお前も…泣いていいっ…」

「……っ！」
微笑む桜時に、輝矢がきつく目を閉じると、その目尻から滴が零れ落ちた。

「ううっ…！」
目を伏せ、涙を零した輝矢は、勢いよく桜時に抱きつく。

「ううぅっ…！」
「……っ」
抱きついてきた輝矢の背に両手を回し、桜時がきつく、輝矢の体を抱き締める。

「皆で泣いて…皆でずっと、忘れないでいようっ…？」
輝矢を抱き締め、そっと目を細める桜時。

「誰よりも美しかった…」
優しい声が、落とされる。

「青守トマトって人のことっ…」
「うっ…！ううぅっ…！！」

桜時の腕の中で、輝矢はただ、泣き続けた。

その頃、オトポリ本部・長官室。

「ふわぁ～あっ」
長官室のソファーに腰掛けた太狼は、いつものように大量の角砂糖をコーヒーカップの中に入れながら、大きな欠伸をしていた。

「何だ？随分と暇そうだな」
「あっ、どうもぉ～お邪魔してますっ」
そこへ、座黒が部屋へと戻ってくる。
「こんなところに居ていいのか？」
長官席へと座りながら、座黒が太狼へ問いかける。

「竹取輝矢の傍に居てやらなくちゃ、いけないんじゃないのか？」
「……っ」
座黒の言葉に、角砂糖を入れ続けていた太狼の手が止まる。

「泣きっ面にハチ、いや蜂みたいなこと、言わないで下さいよぉ～」
「はっ？」
どこか子供染みた、拗ねるような声を出す太狼に、座黒が戸惑うように首を傾げる。

「お役御免ってやつなんですかねぇ～あぁぁ～超不快っ」
「……っ？」
顔をしかめる太狼に、さらに困惑した表情を見せる座黒。

「座黒さぁ～んっ」
「んっ？」
呼びかける太狼に、座黒が顔を上げる。

「俺っ、結婚しても、娘は生まないです」
「いやっ、生めんだろっ」
強く言い切る太狼に、座黒が思わず真顔で突っ込みを入れる。

「まぁ～だが、だいたいわかったっ」
座黒が納得したような表情を見せ、少し肩を落とす。

「その年で父親の寂しさを知るとは、なかなか苦労症だな、太狼っ」
「別に好きで苦労してるわけじゃないですよぉ～っ」
からかうように微笑みかける座黒に、太狼が少し口を尖らせる。

「失礼しっまぁぁ～すっ！」
そこへ勢いのいい声が聞こえてきて、長官室の扉が開いた。
「おっ！桃ちゃ～んっ！！」
「金ちゃんっ」
長官室へと入って来たのは、こんな日にもテンションの高そうな金汰であった。ソファーに座った太狼の姿を確認すると、金汰が嬉しそうな笑みを浮かべる。

「何だ何だぁっ！？長官と何のお話してたんだぁっ！？桃ちゃんっ！！」
「結婚出来る見込みのない金ちゃんには、関係のない話ぃ～っ」
「がっびぃ～んっ！」
素っ気なく答える太狼に、金汰が激しくショックを受ける。

「でぇ？何だ？金汰。何か用じゃないのか？」
「いえっ、俺が用事あるのは桃ちゃんですっ」
「ここ…私の部屋なのに…」

はっきりと答える金汰に、問いかけた座黒が、落ち込むように呟く。

「僕に用ってことはぁ～、例のアレっ？」
「アレっ？」
太狼の言葉に、座黒が目を丸くする。

「ああっ、アレの準備、万全に整えといたぞぉっ！」
「さっすが金ちゃ～んっ」
「ガッハッハっ！お安いもんよぉ～っ！」
誉める太狼に、金汰が調子に乗って、大笑いを見せる。

「おい、太狼っ、アレとは一体っ…」
「さっ、じゃあとっとと最終段階に入るとしましょうかぁ～っ」
座黒の言葉を遮り、太狼が素早くソファーから立ち上がる。

「ねっ？」
「……っ？」

鋭く微笑みかける太狼に、座黒は困惑した表情を見せた。

第87章　希望のカケラ　☆3

その日・夕刻。桃原家・リビング。

「……。」

誰もいないリビングのソファーに座ったアリスは、膝の上に置かれた針器を見ながら、険しい表情を見せていた。海中に行くために輝矢の月器と合成させた針器であったが、輝矢が龍国に戻り、アリスの手に戻って来たのである。

「はい」

「えっ…？」

針器を見下ろしていたアリスのすぐ前へと、差し出されるティーカップ。

「どうぞ」

アリスが顔を上げると、笑顔のグレーテルが、アリスへとティーカップを差し出していた。

「あ…ありがとう…」

少し戸惑うように礼を言いながら、アリスがティーカップを受け取る。

『ただいまぁ～っ』

「……っ」

そこへ玄関の扉が開く音とともに声が聞こえてきて、グレーテルが振り返る。

「お帰りなさいませぇ～っ！門貴様っ！」
「おうっ、ただいまぁ～っ」
ヘンゼルに出迎えられながら、葬儀から帰って来た門貴と由雉が、リビングへと入ってくる。二人に続くようにして、犬孝もリビングに姿を現した。

「あれぇ～？太狼はぁ？」
「青守国主の所に寄ってから帰ると仰られていましたよっ？」
「座黒んとこかぁ」
グレーテルと会話のやり取りをしながら、門貴がソファーへと腰を下ろす。

「輝矢はっ？」
「あっ…」
続いて問いかける由雉に、グレーテルが少し表情を曇らせる。
「それが…先程、お出掛けになられて、そのままっ…」
「行く先は？」
「……。」
「……そうかっ」
黙り込むグレーテルを見て、門貴が困ったように肩を落とす。

「輝矢がいないって、桜時、もしかしてっ…」
「ああ、行ったんかもなぁっ」
門貴と由雉が軽く、言葉を交わす。

「邪魔すっぞぉ～っ！」
『……っ？』
そこへ、聞き慣れた愛想のない声が聞こえてきて、門貴たちが一斉に顔を上げる。

「よっ！」
リビングへと姿を見せたのは、相変わらずの目つきの悪い顔をしたゴンであった。ゴンの後ろには羊スケ、リンゴ、イチゴの三人の姿もある。

「何やぁ～？ゴンゴンっ、押し入りかぁ～？」
「この家、見た目程、お金ないよぉ～」
「誰が押し入りだっ！！」
ゴンを悪党を決めつけた言い方をする門貴と由雉に、ゴンが勢いよく怒鳴りあげる。

「はぁっ！まさかっ、可愛いこの私を誘拐する気じゃっ…！？」
「黙れ、オカマ」
何故か一人、妙に危機感を感じているヘンゼルに、ゴンが冷たく言い放つ。

「んなくだらないことより、変態甘党兄貴はっ？どこっ？」
リンゴがゴンを押しのけるようにしてリビングの中を進み、周囲を見回して太狼の姿を探す。
「失敬なっ！太狼様は変態甘党爽やかお兄さんですわっ！」
「爽やか付けた方が、微妙じゃないっ…？」
力強く訂正するグレーテルに、リンゴが呆れた表情を向ける。

「太狼やったら、座黒のおっさんとこ寄ってく言うとったみたいやでぇ～っ」
「パパのっ？」
門貴の言葉を聞いたリンゴが、少し顔をしかめる。

「何だぁっ、それなら長官室寄って来れば良かったわねぇっ」
「太狼に何か用なのか？」
「あ、はい」
壁際にもたれた犬孝に問いかけられ、リンゴが詰まりながら頷く。
「今後のこと…色々と話し合おうかと思って…」
「何だぁ～っ？リンゴちゃんっ、結婚でもすんのかぁ？」
「違いますっ！！」
軽口を叩く犬孝に、リンゴが勢いよく怒鳴りあげる。

「牢戸知玖のことに決まってるでしょうがっ！！」
『……っ』
リンゴの口からシルクの名が出た途端、リビングの中を、緊迫した空気が包み込んだ。

「牢戸知玖のこと、ねぇっ…」
そっと眉をひそめた犬孝が、少し目線を下へ落とす。

「お姉ちゃんっ」
リンゴの後方から、イチゴが宥めるように呼びかける。
「何も、葬儀が終わってすぐのところで、そんな話しなくってもっ…」
「仕方ないでしょっ」
複雑そうな表情を見せるイチゴに、リンゴが強く言い切る。

「ウジウジしてる時間なんてないものっ…」
「……っ」
厳しい表情で言い放つリンゴに、イチゴもそっと眉をひそめる。

「このままじゃ俺たちっ、明後日にはみぃ～んな、鬼になっちゃう

んスもんねぇ～っ」
「お前が言うと、まったく緊張感ねぇーなっ…」
軽い口調で話す羊スケに、隣に立つゴンが少し呆れるように肩を落とす。深海で起こったこと、そしてシルクがやろうとしていることはすべて、犬孝から座黒へ、座黒からゴンたちへと伝わっていた。
「俺っ、緊張感とは縁のないタイプっスからぁ～っ」
「ああ、知ってる」
ヘラヘラと微笑んで答える羊スケに、ゴンが半ば、諦め気味に頷いた。

「オトポリ本部内にも、もう今回のことは伝わってるのか？」
「ええっ」
犬孝の問いかけに、短く頷くリンゴ。
「うっひゃぁ～っ、みんな、大混乱とちゃうんっ？明後日には鬼になるかもぉ～やなんて言われてっ」
「いえっ…どちらかと言うと、皆、茫然としているというか…」
「まぁ無理もないねぇ～」
暗い表情で答えるイチゴに、由雉がそっと肩を落とす。

「何とかしねぇーとなぁっ…」
「……。」
「あっ？」
悩み込んでいたゴンが、妙に顔を覗き込んでくる門貴に気づき、少し顔をしかめる。
「んだよっ？」
「いやっ、もう大丈夫なんかなぁ～って思ってっ」
「……っ」

門貴の言葉に、ゴンがハッとしたような表情を見せる。

「ああ、大丈夫だっ」

はっきりとした口調で、門貴へと答えるゴン。

「リンゴさんの愛の力で、元気満々らしいっスよぉ～っ！」

「うっさいわよっ！！」

「ぎゃんっ！！」

陽気な笑みを浮かべた羊スケの後頭部に、リンゴの飛び蹴りが炸裂する。

「ったくっ！」

「ううぅっ…」

「相変わらず、一言多い奴…」

頭を押さえ、苦しげにしゃがみ込む羊スケを見て、ゴンが呆れた表情で呟いた。

「輝矢も大丈夫だといいけどっ…」

「まぁ輝矢んのことはイヌコロに任せとくとしてっ、問題は人類の存亡の方やろぉ～っ」

「さすがですわっ！門貴様っ！」

「確かにサルにしては、まともなご意見～っ」

門貴の言葉に、ヘンゼルと由雉が感心したような声を出す。

「けどっ…」

門貴がふと、表情を曇らせる。

「後二日経てば…鬼になってまう、か…」
『……。』
その言葉に、リビングにいる皆の表情も曇った。

「実感、湧かへんなぁっ…」
「鬼になったことなんて、ないからねぇっ」
そっと口元を緩める門貴に、由雉も軽く笑みを浮かべて、言葉を続ける。

「何でやろなぁ…」
門貴が、戸惑うように声を落とす。

「実感も湧いてへんのに…少しの希望も持てへんっ…」
『……っ』
皆が眉をひそめ、険しい表情を見せる。

「何やってもあかんような…そんな気がしてまうっ…」
「門貴様っ…」
いつになく弱気な発言をする門貴に、ヘンゼルがそっと目を細める。

「そっ…そんなことないわよっ…！」
黙り込んでしまった皆の静けさを破ろうと、リンゴが少し慌てた様子で声をあげる。

「きっとっ…！何か出来ることがっ…！」
「鬼って…」

「……っ」
必死に繋ごうとしたリンゴの言葉が、イチゴの小さな呟きに止まる。

「鬼って…言葉も感情も、何もないんだよねっ…」
深く俯き、暗い表情で呟くイチゴ。

「そんな何もない生き物に…なっちゃうかも知れないんだよね…私たちっ…」
「イチゴっ…」
イチゴを見つめ、リンゴがそっと目を細める。

「鬼、かっ…」
二人の会話を聞きながら、肩を落とす由雉。

『……っ』

門貴や由雉、イチゴだけではない。羊スケも、アリスも、ヘンゼルもグレーテルも、そこにいる誰もが、希望を持つことの出来ない、そんな表情を見せていた。

「あっ…」
そんな皆の顔を見回し、リンゴが困惑した顔を見せる。
「……っ」
困った顔を見せたリンゴが、そっとゴンの方を振り向く。

「無理もねぇーよっ…」
「……。」

小さく呟くゴンに、目を細めるリンゴ。トマトという大きな存在を亡くし、ただでさえ不安定になっている中で、鬼になってしまうかも知れないという不安を抱え、成す術すらないのに希望を持てる者など、いるはずもない。こうなってしまうことは、ごく自然の話であった。

「ふぅっ…」

皆の様子を眺めながら、犬孝が深々と溜息をつく。

「困ったなぁ…」

「俺は諦めねぇーけどっ？」

『……っ』

犬孝が呟いたその時、リビングに新たな声が入ってきて、深く俯いた皆が一斉に顔を上げ、振り向いた。

『桜時っ！』

「ハチ公っ！」

「……っ」

皆が振り向いた先、リビングの入口に立っていたのは、穏やかな笑顔を浮かべた桜時であった。その姿を見て、皆が一斉に、桜時の名を呼ぶ。

「桜時っ…」

「俺は諦めないっ」

見つめる犬孝の横を通り過ぎ、桜時がリビングの中央へと歩いていく。

「希望を捨てないっ」

『……っ』

桜時の笑顔を見て、一瞬、表情を崩していた皆が、再びその表情を険しいものへと変える。

「諦めないって…捨てないって、言うても…」

「シルクと戦ってきたんだからっ…桜時の方がよくわかってるでしょっ？」

低い声で呟く門貴の声に続くようにして、由雉が桜時へ問いかける。

「ボクたち、このままじゃ…後二日で鬼になっちゃうんだよっ…？」

「……っ」

『……。』

由雉が告げる現実に、桜時が少し顔をしかめ、皆が思わず俯く。

「ああっ…わかってる…」

その現実を受け止めるように、しっかりと頷く桜時。

「けどっ…」

桜時が再び、その表情に笑みを咲かせる。

「俺たちはまだ、“人”だっ」

『……っ！』

笑顔で言い放つ桜時のその言葉に、皆がハッとしたように目を見開く。

「なら俺はっ…諦めたくないっ…」
桜時がそっと、自分の胸に手を当てる。
「人である、最後のその瞬間までっ、希望を捨てたくないっ…」
胸に当てた手を、きつく握り締める桜時。
「俺はまだっ…希望を持つことを知ってる“人”だからっ…」
『……っ』

微笑みかける桜時に、ただ険しいだけであった皆の表情が、変わっていく。

「俺たちはまだ“人”、か…」
桜時の言葉を繰り返したゴンが、そっと笑みを浮かべ、確かめるように自分の拳を握り締める。
「最後のその瞬間までっ…」
リンゴも目を伏せ、噛み締めるように桜時の言葉を繰り返す。
「希望を持つことを知ってる…“人”っ…」
門貴も同じく、桜時の言葉を繰り返す。鬼になってしまえば、希望を持つことすら叶わなくなる。ならば、希望を持てる人間であるうちから、希望を捨てるわけにはいかない。

「……っ」
門貴がグッと、拳を握り締める。

「せやなぁっ！」
大きな声をあげ、ソファーから勢いよく立ち上がる門貴。
「元々っ、無茶は承知で売ったケンカやぁっ！ここまで来て、尻尾

巻いて逃げだされへんわっ！それにっ」
立ち上がった門貴が、明るい笑みを浮かべる。
「ギリギリまで足掻きまくるんはっ、俺らの得意技やしぃっ？」
「……っ」
振り向いて同意を求める門貴に、ソファーに座っている由雉が、その口元を緩める。
「うんっ…うんっ！」
二度大きく頷いて、ソファーから立ち上がる由雉。
「諦め悪いのもっ、性分だしねぇっ」
『アハっ！』
『……っ』
笑い合う門貴と由雉の姿を見て、ヘンゼルとグレーテルが嬉しそうに笑い声を零し、アリスやイチゴたちも皆、一斉に笑みを浮かべる。
「よっしゃあっ！俺も諦めへんでぇっ！桜時ぃぃ～っ！！」
「おサルさんは鬼になった方が、知能指数上がるんじゃなぁ～いっ？」
「がびぃーんっ！！そりゃ酷いでぇっ！ユッキーっ！」
「ハハハっ」
一気に元気になった門貴と由雉の、いつもと同じような会話を聞き、桜時が楽しそうに笑みを零す。
「あそこまで絶望していた仲間たちを…一瞬で…」
笑う桜時を、犬孝が少し眩しそうに見つめる。
「大したものだよ…雲雀っ…」
犬孝が、息子の成長を喜ぶ笑みを浮かべた。

「さぁ～てっ、じゃあ早速、作戦会議といくかぁっ！」
『……っ？』
リビングの入口へ向けて話しかける桜時に、皆が戸惑うように首を傾げる。

「なぁっ？大将！」
『……っ』
話しかける桜時につられ、一斉に入口の方を振り向く皆。

『あっ…！』
振り向いた皆が、大きく目を見開く。

「輝矢っ！」
「……。」
リビングの入口に立っているのは、落ち着いた笑みを浮かべた輝矢であった。

「輝矢んっ！」
「輝矢っ！」
「竹取っ！」
輝矢の元気な姿を確認したからか、皆の笑顔に、さらに活気が戻る。

「ええっ、そうですね」
笑顔を見せた輝矢が、桜時の言葉にしっかりと頷いた。

「おっお前っ…！」
現れた輝矢のもとへ、ゴンが驚きの表情を消しきれていないまま駆け寄る。

「そのっ…大丈夫で…」
「私なら大丈夫ですよ、キツネ」
心配するような表情を見せ、躊躇いがちに問いかけるゴンに、輝矢がしっかりとした笑顔を向ける。

「そちらこそ、大丈夫なのですか？」
「へっ？あっ、あぁ～俺ならっ…」
「リンゴさんの愛の力で、元気満々らしいっスよぉ～っ！」
「だからうるさいっつってんのよっ！！あんたはっ！！」
「ぎゃんっ！！」
懲りずに、またしても余計なことを言った羊スケに、再びリンゴの飛び蹴りが炸裂した。
「ううぅっ…」
「だっから、お前は一言多いっつってんだよっ…」
痛がる羊スケに、ゴンが呆れた視線を送る。

「そうですか」
一連の流れを見て、納得したように頷く輝矢。
「私もハチの、世界を覆いつくす程に深い、スペシャル・ラブ・パワーのお陰で、すっかり大丈夫です」
「だっれがスペシャル・ラブ・パワーだっ！！」
シレっと答える輝矢に、桜時が顔を真っ赤にして怒鳴りあげる。

「へぇ〜っ、スペシャル・ラブ・パワーかぁっ…」
『……っ？』
その時、輝矢の後ろから、さらに声が聞こえてくる。

「あっ…」
「太狼さんっ！」
「げっ」
輝矢の後ろから姿を見せる太狼に、皆が驚きの声をあげる中、桜時が一人、勢いよく顔をしかめる。

「何っ？“げっ”って」
「いえっ…何でも…」
冷たい微笑みで問いかけてくる太狼に、目を合わすことも出来ずに、げっそりと俯く桜時。
「まぁスペシャル・ラブ・パワーのことは、後でじっくり聞かせてもらうことにするよぉ〜っ」
太狼の瞳が、急に鋭く光る。

「じっくりと…ねっ」
「……っ」
その刺すような視線に、全身を震え上がらせる桜時。

「ダメだっ…鬼になる前に殺されるっ…」
「ああぁ〜っ！桜時の最後の希望が消えたぁ〜っ！」
「バカっ…？」
その場に座り込み、両手を床へと付けて、がっくりとする桜時の姿を見て、門貴が焦ったように叫ぶ。そんな二人の様子を見ながら、呆れきったように呟く由雉。

「タローっ」
『お帰りなさいませっ！ご主人様っ！』
「ただいまぁ～っ、輝矢ちゃんっ、ヘンゼルっ、グレーテルっ」
太狼が、振り返った輝矢の頭を撫でながら、迎えるヘンゼルとグレーテルに、先程、桜時に向けていたものとは一転した、何とも穏やかな笑みを向けた。

「じゃあ早速っ、甘さダルダルココアタイムにするとしようかぁ～っ」
『ちょい待てぇぇっ！！！』
「えっ？」
寛ぐ気満々でリビングへと入っていく太狼に、ゴンとリンゴが、思わず同時に突っ込みを入れる。怒鳴りあげる二人に、不思議そうに振り向く太狼。

「何ぃ～っ？文句あるなら、家出てくか海の藻屑と化してくれていいよぉっ？」
「何ですかっ！その幅のある選択肢っ！！」
「ってゆーか、そもそもココア飲んでる場合ですかぁっ！！」
平然と言い放つ太狼に、ゴンとリンゴが全力で突っ込みを入れていく。

「このままだと私たちっ、明後日には鬼になっちゃうかも知れないんですよっ！？」
「あっ、そういえば、そうだったねぇ～っ」
「……。」
「次狼っ…やっぱお前の兄貴には、付いてけそうにねぇっ…」
リンゴに言われ、やっと思い出した様子で、暢気に頷く太狼に、さすがのリンゴも突っ込む力をなくしたのか、黙ったまま固まり、

その横でゴンがポツリと呟きを落とした。

「まぁ鬼になったら、ココアの甘みがわかんなくなっちゃうかも知れないわけだしぃ～」

太狼が考えるように言いながら、両手を組む。

「その前にたっぷり飲んどかないとぉ～グレーテルぅ～っ」

「はぁ～いっ！かしこまりましたぁっ！」

「甘みがわかんなくなった方が、世界と体の為にはいいんじゃねぇーのっ…？」

「ハチ君っ、何か言ったぁ～？」

「いえっ…」

笑顔で聞き返す太狼から、桜時が素早く視線を逸らす。

「ですがタロー」

輝矢が少し曇らせた表情で、太狼を見上げる。

「冗談抜きで、本当にゆっくりしてる場合ではっ…」

「十八時になったら、皆、オトポリの大講堂に集合ねぇ～っ」

「えっ？」

『へっ？』

太狼の言葉に、輝矢や皆が、その目を丸くする。

「大講堂っ？」

「何だって、そんなところにっ…」

「座黒さんに言って、全体召集かけてもらったからぁ～っ」

『全体召集っ！？』

ゴンとリンゴが、同時に驚きの声をあげる。

「何で全体召集なんかっ…」
「決まってるでしょ～っ？」
戸惑うように呟いたゴンへ、太狼が鋭い笑みを向ける。

「人類存亡を賭けた、一大作戦会議の為っ、だよっ」
『……っ』

微笑む太狼に、皆が驚きの表情を見せた。

第87章　希望のカケラ　☆4

そして十八時。オトポリ本部・大講堂。

「人類存亡を賭けた一大作戦会議、ねぇ…」

集まった全オトポリ隊員の一番前列、中央に並んだゴンが、舞台上の壇を見ながら、あまりやる気のなさそうな声を漏らす。

「作戦会議なんてっ、響きだけでワクワクしちゃうっスねぇ～っ！」

「んな作戦っ、本当にあるのかも怪しいけどなっ…」

隣で興奮している羊スケに、ゴンが冷めた返事を返す。

「けどまぁっ、桃タローさんがそう言ってるんスからっ！」

「あの人は頼りにしていいのか…いまいちわかんねぇーしっ…」

明るい羊スケの言葉を聞きながら、疲れたように肩を落とすゴン。

「……。」

大講堂の舞台袖の壁にもたれたアリスが、険しい表情で舞台を見つめる。

「もっと真ん中行って、聞けばいいのにぃ～っ」

「……っ」

横から聞こえてくる声に、振り向くアリス。

「一応っ、四大国主の令嬢なんだからさぁっ」

「桃原太狼っ…」

アリスの前へと現れたのは、こんな時にも明るい笑顔を見せた、

太狼であった。

「他人行儀だなぁ～っ、イトコなんだしぃ、“太狼お兄ちゃん”って呼んでくれていいんだよぉっ？」

「死んでも呼ばないわっ…」

笑顔で言い放つ太狼に、アリスがあからさまに嫌そうな顔を見せる。

「ここでいいわぁっ」

アリスが真剣な表情を見せ、ゆっくりと呟く。

「舞台がよく見えるしっ…」

「そうっ…」

そのアリスの言葉に、太狼は短く頷いた。

『ザワザワザワっ…』

『……っ』

急に騒々しくなる講堂内に、太狼とアリスが同時に、舞台の方を振り向く。

『……。』

皆が見つめる中、両端にリンゴとイチゴを連れた座黒が舞台袖から現れ、足早に壇上へと上がった。座黒が壇上へと上がると、騒々しかった講堂内が、急に静かになる。

「あぁぁ～っ…」

静かになった講堂内で、ゆっくりと口を開く座黒。

「皆、今日はよく集まってくれた…」
座黒の低い声だけが、大きな講堂内に響き渡る。
「御伽警察長官・青守座黒だ…」
ゆっくりと、自分の名を名乗る座黒。

「誕生日は三月九日の六時で、血液型はO型、趣味は盆栽でっ、現在のマイブームはぁっ…」
座黒が勢いよく、自分のことを語り出す。

「エコっ、かなっ？」
「知るかっ！！んなもぉ～んっ！！」
「ぎゃあああっ！！」
得意げに微笑んでみせた座黒のその顔面に、隣にいたリンゴが、強烈な蹴りを入れる。

「りっ…リンゴちゃんっ…パパ、鼻の骨がっ…」
「しょーもないこと話すからでしょっ！とっとと本題入んなさいよっ！」
『……。』
その座黒とリンゴのやり取りに、唖然とする、集まったオトポリ隊員一同。

「お父様…お姉ちゃんっ…」
同じように舞台に立つイチゴが、どこか恥ずかしそうに俯く。

「ここにも居たなぁ～、緊張感のないオッサンがっ」
「アハハっ…」
呆れた表情を見せるゴンの横で、空笑いを見せる羊スケ。

「ああぁ～…今、この御伽界が置かれている状況は、昨日、君たちに話した通りだ…」
腫れあがった鼻を押さえながら、座黒が真面目な表情を作って、話を再開する。

「我々の最大の敵・牢戸知玖の計画により、我々は二日後には皆、鬼になってしまうかも知れんという危機に瀕しておるっ…」
『……っ』
座黒の言葉に、集まった皆が一斉に、浮かぬ表情となる。

「我が偉大なる先祖、青守トマトも、牢戸知玖の前にその命を落とし…我々は大きな柱を失った…」
『……。』
トマトの名が出ると、ゴンとリンゴが、そっと俯いた。

「だが、この最大の危機を前に、我々には落ち込んでいる猶予などないっ」
そう言いきった座黒の瞳が、鋭くなる。

「今こそっ、牢戸知玖との最終決戦、いやっ、我々が人で在り続ける為の戦いに臨まなければならないのだっ！」
『……っ』
強く叫ぶ座黒に、皆が緊張した様子でゴクリと息を呑む。

「この負けられない戦いに勝利する為にも、我々は総力を結集する必要があるっ！」

座黒がさらに、言葉を続ける。

「そして、我々御伽警察は、その持てるすべての力を結集し、彼女たちに、それを託したいと思うっ！」

『彼女っ…？』

『たちっ…？』

座黒の言葉に、戸惑いの声を漏らす講堂内。

「御伽界きっての退治屋にしてっ、かの桃タローの弟子っ！竹取輝矢とその仲間たちだっ！！」

『……。』

座黒に紹介されるようにして、輝矢と、桜時、門貴、由雉の四人が、舞台上へと姿を現す。三人より前へと出た輝矢は、リンゴに場所を譲られるようにして、座黒のすぐ横へと並んだ。

「皆も知っていると思うが、この竹取輝矢はすでに三度、牢戸知玖と対峙しておるっ」

横に並んだ輝矢の方へ手を出しながら、座黒が輝矢の紹介を続ける。

「その際、牢戸知玖に手傷を負わせたこともあり、対牢戸知玖戦の最後の希望とも言えようっ！」

徐々に熱くなる、座黒の口調。

「青守トマトも、死に逝く直前っ、彼女にこの世界の未来を託したっ！」

――世界を…頼んだよっ……――

「……っ」

思い出されるトマトの言葉に、輝矢が少し眉をひそめる。

「私は、この竹取輝矢でなければっ、牢戸知玖を倒すことは不可能と考えているっ！」

座黒が真剣な眼差しで、はっきりと言い切る。

「よって我々、御伽警察は、竹取輝矢とその仲間たちを牢戸知玖のもとへ送ることを第一に、最終決戦を戦っていきたいと思っておるっ！」

『ザワザワザワっ…』

座黒の言葉に、急に騒々しくなる講堂内。

「託すったって…」

「仲間といっても、まだ皆、子供じゃないかっ…」

「いくら桃タローの弟子といってもっ…」

集まったオトポリの隊員たちは、輝矢たちを先頭に立てることに不安を感じているようで、次々とその疑心を口にした。

「チっ…」

後方から聞こえてくるたくさんの声に、顔をしかめたゴンが、思わず舌を打つ。

「あっ…」
「ふぅっ…」
ざわつく隊員たちに、不安げな表情を見せるイチゴと、そっと肩を落とす座黒。

「あいつっ…“鬼”なんだろっ？」
「……っ！」

聞こえてくる一つの声に、輝矢が大きく目を見開く。

「人類存亡の最後の希望が鬼って…」
「鬼相手には鬼が一番、ってことっ？」

「なっ…！！」
次々と聞こえてくる声に、舞台袖で壁にもたれていたアリスが思わず体を起こし、強く身を乗り出す。

「……。」
アリスの横で、厳しい表情を見せる太狼。

「皆っ！静粛にっ…！」

「あいつは…二日後に俺たちがみんな、鬼になっても、変化なしなんだろうっ…？」
「一人だけ、確実に無事ってことかよっ…？」
「そんな奴にすべてを託せって言われてもなぁっ…」
注意しようとした座黒の声を遮り、言葉はさらに続く。

「ゴンさんっ…これじゃあっ…」
「クっ…！」
不安げに名を呼んだ羊スケの横で、ゴンが強く唇を噛み締める。
「いい加減にしやがれっ！てめぇーらぁっ！！」
『……っ！』

後方を振り返ったゴンが、講堂内のすべての声を掻き消す程に大きな声で、勢いよく怒鳴りあげる。そのあまりに大きな声に、皆が一斉に口を噤み、講堂内が再び静まり返る。

「一人だけ無事で済むだとぉっ…？勝手なことっ、ぬかしてんじゃねぇーよっ！」
「ゴンさんっ…！」
さらに怒鳴り続けるゴンを、横から羊スケが必死に押さえる。

「ちょっ…！ゴンさんっ！落ち着いてっ…！」
「あいつのことっ、何にも知らねぇーくせにっ、あいつがどんな思いしてきたか知らねぇーくせにっ、勝手なこと言うんじゃねぇっ！」
「ゴンさんっ…」
輝矢のことを思い、必死に叫ぶゴンに、羊スケが思わず目を細める。

「お姉ちゃんっ…！早く、ゴンさんを止めっ…！」
「同感ねぇっ…」
「へっ…？」
リンゴにゴンを止めてもらおうとしたイチゴであったが、聞こえ

てくる、妙にドスのきいた低い声に、嫌な予感がして、恐る恐るリンゴの方を振り向く。

「何もわかってないくせにっ…ぎゃあぎゃあと喚き散らしてくれちゃってっ…」

眉間に皺を寄せ、負のオーラ全開の鋭い瞳で、講堂内を見下ろしているリンゴ。

「おっ…お姉ちゃっ…」

「今っ、輝矢に暴言吐いた奴っ!!一人残らず出てきなさいっ!!」

イチゴが止める間もなく、リンゴが隊員たちに向かって、勢いよく怒鳴りあげた。

「あったしが一人残らず、蹴り倒してくれるわぁっ!!」

「落ち着いてぇぇ〜っ!」

「リンゴさんっ!ここは一つ、穏便にぃ〜っ!」

「穏便になんて、してられるかぁぁーいっ!!」

今にも舞台を飛び降りて、隊員たちを蹴り倒しに行きそうな勢いのリンゴを、門貴と由雉が後ろから、二人がかりで必死に押さえる。

「お姉ちゃんっ…」

「やれやれ…」

「……っ」

「んっ?」

イチゴに続き、深々と頭を抱える座黒の横を出て、輝矢が舞台の最前へと向かう。

「おっおいっ!」

焦ったように、輝矢の方を見る座黒。

「少し落ち着きなさい、不良警官どもっ」
「だっれが不良警官だっ！！」
「ゴンはともかく、私は違うわよっ！？」
暴れ回るゴンとリンゴへ向け、輝矢が言い放つと、二人は同じように突っ込みを入れながらも輝矢の方を向き、その暴れ回っていた動きを止めた。

「輝矢っ…！」
「……っ」
心配するように身を乗り出す桜時の方を、輝矢が少し振り返る。

「大丈夫です、ハチ」
桜時に笑いかけると、輝矢はゆっくりと正面を向いた。

『……。』
壇の前へと立った輝矢の姿を見つめ、講堂内の皆が、黙りこんだまま息を呑む。

「ふぅ…」
心を落ち着かせるように、その場で一息つく輝矢。

「ご紹介に預かりました、竹取輝矢です」
少し笑みを浮かべた輝矢が、ゆっくりとした口調で自分の名を名乗る。

「誕生日は九月十五日の七時半、血液型はＡＢ型で、趣味はぁっ…」
「もういいってっ！！その流れっ！！」
座黒と同じように自分のことを語り出す輝矢に、桜時が勢いよく突っ込みを入れる。

「皆さんが仰ったように、私は鬼と呼ばれる種族です…」
「輝矢っ…」
鬼であることを明かす輝矢を、アリスが心配するように見つめる。
「二日後に放たれるという鬼力の光を浴びても…皆さんのように骸鬼となることは、恐らくないでしょう…」
『……。』
ゴンやリンゴたちが、真剣な表情で、輝矢の言葉に耳を傾ける。

「羨ましいですかぁ？ざまぁみやがれ、ですねぇっ」
『はっ…？』
急に軽い口調となり、明るい笑みを浮かべる輝矢に、皆が大きく口を開け、その場の空気が凍りつく。

「私は別に問題ないのに、アナタがたの為に一肌脱いで差し上げようと言っているんですよぉ？この私がっ」
輝矢が、偉そうな口調で、言葉を続ける。

「しかも無料でっ。ああぁ～っ、何て凄い慈善活動っ」
『……。』
予想外過ぎる輝矢の発言に、固まった隊員たちは、一言の声も発せなくなる。

「何言ってんだ…？あいつっ…」
「アハハハハァ～っ…」
唖然とするゴンの横で、羊スケが引きつった笑みを浮かべる。

「世界中の人間を敵に回す気か…？あいつはっ…」
「輝矢さんっ…」
引きつった表情を見せる座黒と、不安げに輝矢の方を見つめるイチゴ。

「まぁ皆さんがそういう態度ならぁ～っ、私は別に人類滅亡させちゃってもいいんですけどねぇ～っ」
『脅しに入ったぁっ！？』
試すような口調を見せる輝矢に、リンゴや門貴たちが焦ったような声を出す。

「あれがホントに…最後の希望かっ…？」
「でも協力しないと滅亡って…」
「牢戸知玖の前に、あいつが敵だろっ…」
講堂内に、唖然とした呟きが漏れ始める。

『ザワザワザワっ…』
「はぁっ…」
再びざわつき始める講堂内に、またしても深く頭を抱える座黒。

「……。」

皆が困った表情を見せる中、桜時は一人、落ち着いた様子で輝矢を見つめる。

再び口を開いた輝矢に、瞬時に静まり返る講堂内。

「私は…」

『……。』

「私は今日、大切な人を亡くして、泣きました…」

『……っ』

輝矢の言葉に、ゴンやリンゴが、その表情を曇らせる。話が変わり、声のトーンも低くなった輝矢の言葉を、隊員たちが皆、真剣な表情で聞く。

「大切な人を亡くして泣いたのは…これが二度目です…」

「……。」

目を細めた太狼が、まっすぐに輝矢を見つめる。

「一度目に大切な人を亡くした時…」

――いやあああああっ!!――

目の前で消えた、優しかった父と母。

「私は心の底から…“人”を憎みました…」

鬼であるからという理由だけで、何の罪もない黒鬼一族を犠牲にした玄上を、武国を、鬼を受け入れなかったすべての人間を、憎んだ。

「“人”に…絶望しました…」

――鬼の子だぁっ！――

――汚らわしいっ！――

向けられる冷たい言葉の数々に、人間と歩み寄ることを、やめた。

共に生きることを、諦めた。

「すべてに絶望した私でしたが…」

少し俯いていた輝矢が、ゆっくりと顔を上げる。

「そんな私に、希望をくれたのも…“人”だったんです…」

『……。』

穏やかに微笑む輝矢を、そこにいる皆が、まっすぐに見つめる。

「鬼の私に…“共に生きよう”と言ってくれる人がいました…」

「……。」

輝矢を見つめる太狼。

「鬼の私に…誰かに好きになってもらえるからと、敬語を教えてくれた人がいました…」

「次狼っ…」
「……。」
輝矢の言葉に、リンゴが思わず次狼の名を呟き、ゴンが少し俯く。

「鬼の私を…“好きだ”と言ってくれる人がいました…」
「……っ」
桜時がそっと、目を細める。

「鬼が現れてから、そう長くもない旅をしてきましたが…」
輝矢がそう言って微笑みながら、懐かしそうに上を向く。
「仲間たちは…私にたくさんのことを教えてくれました…」
そう呟き、輝矢が自分の胸に手を当てる。

――こんな立派な息子を持って…私は幸せねっ……――

「家族の…温もりっ…」
「輝矢っ…」
振り向く輝矢に、由雉が少し目を細める。

――この誇りっ…！そう簡単には折らせへんっ…！！――

「尊い…誇り…」
「……。」
振り向いた輝矢を、まっすぐに見つめ返す門貴。

「……っ」
門貴の方を見ていた輝矢が、また前方を向き、視線を落として、舞台下の前列に立つゴンの方を見下ろす。
――ならっ、俺の国へ行きませんかっ？――
「信じ合うことの…素晴らしさっ…」
「竹取…」
微笑みかける輝矢に、ゴンが小さく名を零す。
「そのどれもが、かけがえのない大切なものでっ…それと同時に、いつ失うかもわからない儚いものでっ…」
ゴンを見下ろしていた輝矢が、ゆっくりと顔を上げていく。
「“人”の周りには…大切で儚い、そんなものばかりでっ…」
そっと目を細める輝矢。
「だからこそ“人”は…限られた命の中を、一生懸命に生きるっ…」
噛み締めるように、輝矢が言葉を続ける。
「そんな“人”というものを…私はっ…」
輝矢が顔を上げ、正面を見る。

――花が、いつか散り逝くことを知りながら、それでも一生懸命に咲くからっ……――

「“美しい”と、そう、心から思います」

『……。』

曇りのない笑みを浮かべ、そう言い放つ輝矢を見つめ、皆が目を細める。

「私は…“人”が好きですっ…」

輝矢が、講堂にいる皆を見つめる。

「“人”の生きる…この世界が好きです…」

その声を、皆が聞く。

「だからっ…」

輝矢が、決意のこもった瞳を見せる。

「私は“人”を守りたいっ…！」

強く叫んだ、輝矢の声が、講堂へと響き渡った。

「輝矢…」

「輝矢んっ…」

「……。」

門貴と由雉が嬉しそうに思わず名を呼ぶその横で、桜時も笑顔を

見せ、輝矢を見つめる。

「……っ」

真剣な表情で聞いていた隊員の一人が、ゆっくりとその手を叩く。

『……っ』

その音に呼応するかのように、手を叩く者たちが、どんどんと広がっていく。

――パチパチパチパチっ…！！

広がったその音は、やがて喝采の拍手となって、壇上の輝矢へと降り注いだ。

「あっ…」

講堂中に広がる、拍手を送る隊員たちを、少し戸惑うように見つめる輝矢。

「ゴンさんっ…！」

「ああっ…」

嬉しそうに声をあげる羊スケに、ゴンも笑顔を見せる。

「輝矢っ…」

「……っ」
ホッとした表情を見せるアリスの横で、俯いた太狼がかすかに笑みを零す。

「さぁ～てとっ」
「へっ？」
明るい声を漏らした太狼が、首を傾げるアリスの横を通り過ぎて、足取りも軽やかに舞台の上へと上がっていく。

「タローっ」
「はいはぁ～いっ」
舞台へと上がった太狼を、振り向いた輝矢が、少し驚いた様子で見る。そんな輝矢に明るく手を振りながら、太狼が輝矢のもとへと歩み寄っていく。

「ご苦労さまっ、輝矢ちゃんっ！いいお話だったよぉっ」
「はぁ…」
満面の笑みで誉める太狼に、輝矢が少し戸惑い気味に頷く。

「まぁっ、どこのだぁ～れがウチの輝矢ちゃんに、“好きだ”とかホザいたのかは、保留にしておくとしてぇ～」
「うげぇっ」
そう言いつつも、鋭い視線を送ってくる太狼に、桜時が勢いよく顔をしかめる。

「どうもぉ～っ！御伽界の生きた伝説っ！最強の英雄・桃タローことっ、桃原太狼ですぅ～っ！」
隊員たちの方を見た太狼が、明るい笑顔で、名を名乗る。

「何というか…場違いっスねっ」
「あの人はいつもそうだ…」
皆へ向けて手を振りまくっている太狼に、呆れた表情を見せるゴンと羊スケ。

「誕生日は四月四日の十七時二十一分でぇっ、血液型はぁ～っ…」
「もういいっつってんだろうっ！！その流れっ！！」
座黒、輝矢に続いて、またしても自分のことを語り出す太狼に、桜時が勢いよく突っ込みを入れる。

「えぇ～？じゃあ、せめて趣味だけでもぉ～っ」
「世界甘い物探索だろっ！！」
「何でわかったのぉ？」
「わかるわっ！！」
不思議そうな顔を見せる太狼に、桜時が血管が切れそうなくらいの勢いで怒鳴りあげる。

「たっ太狼っ…」
「んっ？」
後方からやってくる座黒の声に、振り向く太狼。

「皆の士気が落ちん内に…そろそろ本題をっ…」
「ああぁ～っ、ハイハイっ」
呆れた表情で呟く座黒に、太狼が景気のいい返事を返す。

「でっはぁ～っ、ただいまより、人類存亡を賭けた一大作戦を説明したいと思いまぁ～すっ！」

「……っ」
太狼の言葉に、輝矢がその表情を引き締める。
「っつーか…他の奴に説明させた方がいいんじゃねぇーかっ…？」
「私も今、後悔しておるっ…」
ひっそりと呟く桜時に、しみじみと頷く座黒であった。

その頃、浮上した鬼国跡地。中央塔・最上階。

「鬼力の充填は…？」
塔の窓から見える、白い光を放つ塔の1本を見つめ、シルクがそっと問いかける。
「順調のようです…」
シルクから少し距離を取ったところに立った諸刃が、相変わらずの無表情のまま、ゆっくりと答えた。
「そうっ…」
「……っ」
短い返事のその声が、いつもとどこか違うように聞こえ、諸刃は少し眉をひそめた。

「シルク様…？」
「……。」
諸刃の呼びかけを背中に受けながら、シルクがそっと目を細める。

「死んだ…のよね…」
「えっ…？」
小さな声を漏らすシルクに、諸刃が戸惑うように首を傾げる。

「トマト…」
「……っ」
シルクがトマトの名を口にすると、諸刃はその表情を曇らせた。

「世界で一番煩わしい女…一番、憎い女っ…」

――習い事なんて、面倒なんだよっ――

奔放で、自由な女。

――知玖っ！！――

一番多く、その名を呼び、一番多く、名を呼ばれた。

――知玖ぅぅっ！！――

心の底から、憎しみ合った。

「……。」
シルクが、どこまでも広がる青い空を見つめる。
「もう…この世界にはいないのよね…」
「シルク様っ…」
「……っ」
そっと目を伏せたシルクが、窓際から姿を消す。

「シルク様…」
「……。」
次の瞬間、シルクは諸刃のすぐ目の前へと現れた。

「諸刃…」
シルクが諸刃の胸に、体を預ける。

「私を…抱き締めなさい…」
「……っ」
放たれる命令に、諸刃が少し眉をひそめる。

「はい…シルク様…」
しっかりと頷き、諸刃はシルクを抱き締めた。

第８８章　決戦前夜　★１

龍国。オトポリ本部・大講堂。

「でっ？」

桜時が舞台の前方に立つ、太狼へと問いかける。

「人類存亡を賭けた一大作戦ってのは、一体どんなのなんだ？」

真剣な表情で、問いかける桜時。

「ああ、それはねぇっ」

『……っ』

口を開く太狼に、講堂中の皆がその表情を強張らせ、緊張感を走らせて、ごくりと息を呑む。

「っと、その前に糖分摂取ぅ～っ」

『だあああああああっ！！』

話だそうとしたその直前に、どこからか出してきたコップで甘い香りの漂うココアを飲みだす太狼に、講堂中にいた皆がズッコケる。

「いい加減っ、真面目に話さないと、飛び蹴りかましますよ…？」

「やっだぁ～っ、リンゴちゃんてば、冗談通じなぁ～いっ」

今にもキレる寸前の表情を見せ、つま先を向けてくるリンゴに、太狼が明るく微笑みながらも、大人しくコップをどこかへと片付ける。

「一大作戦っていっても、中身は単純なもんだよぉ～っ」

『えっ…？』

「金ちゃ～んっ」

「あいよぉっ！」
太狼の呼びかけに、舞台袖で待機している金汰が大きく手をあげる。
「金汰っ？」
「あっ」
「えっ？」
金汰を見て、不思議そうに首を傾げていた桜時が、横からの門貴の声に振り向く。門貴の視線の先では、上方から舞台の壁際へと、巨大なスクリーンが降りてきていた。

「スクリーンっ…？」
「これが、御伽湖に浮上した元・鬼国の全体図っ」
太狼の言葉を合図とするかのように、スクリーンいっぱいに、大陸のような地形の描かれた映像が映し出される。

「中心に輝矢ちゃんたちの居た中央塔があってぇ」
大陸の中心部に、赤い丸印が浮かび上がる。
「その四方に、それぞれ四つの塔っ」
太狼の言葉通りに、増える四つの丸印。
「この四つの塔をそれぞれ、北塔、西塔、南塔、東塔と呼ぶことにするねぇ～」
『……。』
スクリーンの傍に立ち、画面を棒で指し示しながら話す太狼を、皆が真剣な面持ちで見つめる。

「作戦、というか僕らの助かる道は、すっごく単純で、恐らくこれ一つしかない」
『……っ』
鋭い瞳を見せる太狼に、皆が思わず息を呑む。

「周囲四つの塔と中央塔を壊して、鬼力の光の放出を防ぐ」
スクリーンを指し示し、力強く言い切る太狼。

「以上っ」
『へっ？』
あっという間に言い終わる太狼に、桜時やゴンたちが皆、目を丸くする。

「以上って、太狼さんっ…！」
「ねっ？単純でしょ～っ？」
「単純過ぎだろっ！！」
ゴンへと微笑みかけた太狼に、桜時が勢いよく突っ込みを入れる。
「確かにっ、言ってる分には簡単だけどよぉっ…！」
「タローっ」
「……っ？」
異議を唱えようとした桜時の言葉を遮り、輝矢が太狼の前へと出る。

「確かに作業自体は単純かも知れませんが、シルクがいるのです。そう簡単に進められるはずがっ…」
「牢戸知玖は恐らく、中央塔で待機してる。仲間たちと一緒にねぇっ」
「えっ…？」
太狼の言葉に、輝矢が戸惑うように眉をひそめる。
「これの要（かなめ）は何と言っても命力の結晶だからねぇ、それを全力で守ってくるはずだ」

「そっかっ、じゃあ他の四塔は蛻（もぬけ）のカラってことかっ」
「まぁある程度、骸鬼を仕掛けてくることが予想出来るけど、それでもシルクたちに比べれば、相当に緩いはずだよ」
桜時に頷きかけながら、太狼が話を続ける。

「だからまず、この四塔の破壊に取りかかる」
太狼の表情が、真剣なものとなる。
「この四塔を壊せば、中央塔での蓄積が止められて、少しは鬼力が抑えられる」
太狼が棒で、中央の赤い丸を指し示す。

「そうすれば中央塔を包む鬼力も弱まって、中への侵入も可能になるはずだ」
「中への侵入っ…？」
「うんっ」
聞き返した輝矢へ、太狼がはっきりと頷く。

「つまりは、牢戸知玖への道が開かれるってわけっ」
「……っ」
そっと微笑む太狼に、輝矢の表情が引き締まる。

「成程っ…」
太狼の説明を聞き、納得した様子で頷く座黒。

「よぉ～しっ！ではっ、オトポリ戦力を四つに分散しっ、それぞれを各塔へっ…！」
「ストップぅぅ～っ！」
「へっ？」
隊員たちに命令を下そうとしていた座黒が、後方から強く止める太狼の声に、戸惑うように振り返る。

「ストップ…？」
「早合点しないで下さいよぉ～座黒さんっ」
目を丸くする座黒に、注意するような言葉を向ける太狼。
「ただ単純に塔を破壊すればいいってわけじゃあ、ないんですぅっ」
『えっ？』
その言葉に、皆が戸惑った顔を見せる。
「どっどういうことだよっ？」
「いっくら外装の塔を粉々に破壊したところでぇ、鬼力放出の大もとを止めなきゃ意味ないってわけっ」
「鬼力放出の大もとっ？」
「それを止めるには、どうしたらいいんですか？」
ゴンが鋭く、太狼へと問いかける。
「鬼力よりもっと強い力で封じ込めるのさっ」
『鬼力より、もっと強い力ぁぁっ！？』
驚きの表情を見せたゴンたちが、大きな声で太狼の言葉を繰り返す。
「まっじで言ってるんですかぁっ！？あのシルクの鬼力より強い力なんてっ…！」
「四塔から放出される鬼力は、牢戸知玖のものじゃない」
問いかけるゴンの言葉を、太狼が遮る。
「そうでしょっ？」
「えっ？」
太狼に顔を向けられ、少し焦ったように声を漏らす桜時。
「えっとっ…」

桜時が何かを思い出すように、少し俯く。

――それよりも…四方の塔の解放を……――

――解っ！――

「あっ…」

思い出される光景に、桜時が大きく目を見開く。

「そうだっ！あの四方の塔を解放したのはっ、シルクじゃなくって他の二匹の鬼っ…！」

「そういえばっ…」

輝矢も桜時の言葉に頷きながら、思い出す。

「そうっ、牢戸知玖のものでなければ、上回るのも可能ってわけさっ」

太狼が、得意げに微笑みかける。

「まぁ、可能になるのは、ごく一部の人の、ごく一部の力ってことになるんだけどねぇっ」

「ごく一部の人の…？」

「ごく一部の力っ…？」

意味深な太狼の言葉に、戸惑いの声を漏らす皆。

「それは一体っ…」

「それは…」

太狼がそっと、自分の胸の懐に手を入れる。

「“これ”に、書いてある…」

『……っ？』

そう言って太狼が懐から取り出したのは、一冊の古びた本であった。青い色をしていたのだろうが、所々はげてしまっている。その本の表紙には、ある獣の絵が描かれていた。

「“龍”っ…」

描かれているその獣の名を、輝矢がそっと呟く。

「それは？」

「トマトさんが遺してくれたものだよ」

「トマトっ？」

「ババアがっ！？」

「そう…」

驚く皆へ、太狼が大きく頷きかける。

「海底へ行く前、僕にこの本を手渡してくれてね…」

「海底へ行く前っ…？あっ…」

首を傾げていた桜時が、何かを思い出したような声を発する。

――何の話してたんだ？――

――私の旦那にならないかって話だよっ――

海へと入る前、太狼へとひっそりと話をしていたトマト。

「あの、時…」

「うん…」

桜時の声に、太狼が短く頷く。

「“もし自分が帰らなかった時は、これを皆の為に役立ててくれ”ってね…」
『……。』
トマトの遺した言葉を、噛み締めるように聞く皆。

「お祖母ちゃん…牢戸知玖がやろうとしていたことに、予想をつけていたのね…」
「ああ…そして、自分が戻って来れないかも知れないってことにもな…」
「……っ」
リンゴとゴンの言葉を聞き、輝矢がそっと目を伏せる。

「じゃあ、書かれている内容を読み上げるよぉ～」
そう言って太狼が、古びた本の中央の方を開く。

「“知玖以外の白鬼一族による鬼力の解放、それを封じ込め得る力は、この御伽界に四つ存在する”…」
太狼が、本に書かれたトマトの言葉を、読み上げていく。

「“その力、即ち、龍国・青守の光力、雀国・朱実の花力、虎国・白雪の雪力、そして、武国・玄上の神器である”…」
『……っ！』

その言葉に、衝撃を走らせる皆。

「青守の光力…朱実の花力っ…？」

「四大国のっ…」
「そうっ、四塔の鬼力を封じられるのは、四大国主一族のその四つの力ってわけっ」
戸惑うように言葉を呟く輝矢たちへ、太狼が簡潔に答える。
「塔も四つっ、力も四つっ、ねっ？丁度いいでしょっ？」
「丁度いいって…」
「ちょっ、ちょっと待って下さいっ！」
『……っ？』
明るく微笑む太狼に、桜時が呆れた表情を見せていたその時、皆が振り返る程の大きな声をあげたのは、険しい表情を見せたリンゴであった。
「なぁにっ？リンゴちゃんっ」
「何じゃありませんっ！そんなのっ、無理ですよっ！」
問いかける太狼に、リンゴが強く言い放つ。
「確かにここに青守は居ますけどっ、他はどうするんですっ？」
リンゴが両手を広げ、太狼へ鋭く問いかける。
「それぞれの国から呼び寄せるにしてもっ、時間がないんですっ！そんなの待ってる余裕はっ…！」
「待つ必要なんてないわぁっ」
「えっ…？」
横から聞こえてくる声に、リンゴがゆっくりと振り向く。
「玄上なら、ここに居るっ」
そう強く言い放ち、舞台へと上がったのは、針器を持ったアリスであった。

「アリスっ」
輝矢がアリスの方を振り向き、少し驚いた顔を見せる。
「あなたは中央塔へ行かなきゃいけないんでしょぉっ？四方の塔の封印ってやつは、私がやるわぁっ」
「……っ」
素っ気なく吐き出された言葉ではあったが、輝矢や皆を思う気持ちのようなものが伝わって来て、輝矢は思わず笑みを零した。

「ありがとうございます、アリス」
「別にっ、私が鬼になりたくないだけよぉっ」
微笑んで礼を言う輝矢に、アリスが照れくさそうにそっぽを向く。
「まぁでもアナタごときの力で、大丈夫なものかっ…」
「貴女っ、ぶん殴るわよっ…？」
不安げに首を傾げる輝矢へ、アリスが恨みのこもった瞳を向ける。

「大丈夫か…？あいつらっ…」
「あれでも仲良くなってきてんだよぉ～っ」
顔を引きつって呟く桜時に、太狼がそっと微笑みかける。

「これで玄上はクリアかぁ」
「けど、後二つはっ…」
「オォ～ホッホッホッホっ！！」
『はっ…？』
上の方から聞こえてくる、場違いな程の高笑いに、皆が戸惑いながら上を見上げる。

『あっ…』

上を見た皆が、一斉に視界にその人物を映す。

「誰かっ、私のこと、呼びましてぇぇ～っ！？」

そんな言葉とともに、舞台の上から飛び降りてくるのは、派手なドレスを纏った白い髪の、外見は美しい少女。その両端に、よく似た顔立ちをした青年と少年を連れている。

「呼ばれて飛び出て、じゃじゃじゃじゃぁ～んっ！！」

『虎国主令嬢、白雪虎昌様のご登場であります』

「下の名前で呼ぶんじゃないわよっ！！気に入ってないんだからっ！！」

飛び出てきた少女は、代わりに名乗った従者の二人に、顔をしかめて、勢いよく怒鳴りあげた。

「白雪…」

「鈴白と芹も…」

出てきてすぐに派手な怒声を飛ばす白雪を、桜時と由雉が呆れたように見つめる。

「オォ～ホッホッホッホっ！久し振りねぇっ！竹取輝矢っ！！」

鈴白と芹に怒鳴りあげていた白雪が振り返り、輝矢の方を見る。

「……。」

特に驚いた顔も見せずに、白雪をまっすぐに見つめる輝矢。

「どっ…」

“どちら様でしたっけ？”って言うつもりでしょ～っ！？もうそ

の手は食わないわよぉ～っ！！」
　輝矢が言おうとしていたことを先に言い、白雪が輝矢の嫌味を封じる。
「どうしたら、そんなに迷惑な人間になれるんですか？」
「“どちら様”よりきついしっ！！失礼過ぎんでしょーがっ！！」
　違う問いかけをする輝矢に、白雪が激しく怒鳴りあげる。
「また煩いのがっ…」
「やれやれ、だねぇ…」
　白雪の方を見ながら、少し頭を抱えるゴンの横で、太狼も少し肩を落とす。
「そんなことよりっ、話は全て聞かせてもらったわよぉっ！」
　白雪が大きく腕を組み、半ば無理やり、話題を変える。
「どうやらっ、私の力が必要なようじゃなぁ～いっ！？」
「いいえっ、まったく必要としていません」
「何でよっ！！」
　あっさりと答える輝矢に、白雪がさらに声を張り上げる。
「四つの力が必要なんでしょっ！？ちゃんと聞いてたんだからっ！！」
「アナタの力を借りるくらいなら、私は鬼化を選びます」
「どんだけ嫌がってんのよっ！！私のことっ！！」
「っつーか、お前は鬼化しねぇーだろうがっ…」
　強い決意でも持っているかのように答える輝矢に、白雪が怒鳴りあげ、桜時が呆れた表情でひっそりと呟く。

「まぁ、輝矢っ」
桜時が宥めるように、輝矢と白雪の間に割って入る。
「こんな状況なんだからさぁ、そう好き嫌い言ってないでっ…」
「きゃあああああっ！！桜時様っ！お久しブリーフぅ～っ！！」
「ぎゃあああっ！！」
「やっぱり…許せませんね…」
桜時に勢いよく抱きつく白雪を見て、輝矢がさらに協力を拒む姿勢を見せる。

「まぁ輝矢はともかく、これで白雪はクリアねっ」
「ああ」
リンゴの言葉に、ゴンが頷く。

「後は朱実だがっ…」
「あっ」
ゴンの言葉に反応し、桜時が抱きつく白雪を引き剥がして、振り返る。

「朱実なら俺がっ…」
「ちょぉ～っと、待ちなさぁぁ～いっ！」
「へっ？」
『……っ？』

桜時が名乗り出るように手を上げようとしたその時、講堂の扉が勢いよく開き、講堂中に凛とした声が響き渡って、皆が一斉に振り

返った。

第８８章　決戦前夜　★２

「へっ…？」
扉の向こうに立つ、ゴテゴテとした派手な着物を纏った、燃えるようにきれいな赤毛の女性。その女性を見て、桜時が大きく目を見開く。

「くっ…孔雀さんっ！？」
「とっとと道を開けなさいっ」

講堂中に集まっていた隊員たちを左右に動かし、講堂のまん真ん中に道を作って、その床に赤い絨毯を敷き、舞台の方へと歩いてくるのは、雀国主・朱実孔雀であった。

「孔雀さんが…なんでここにっ…」
「どこから出してきたんでしょうねぇ…あのレッドカーペット…」
戸惑う桜時の横で、輝矢が呆れきった表情を見せる。

『……。』
「よいしょっ」
皆が呆然と見つめる中、孔雀がゆっくりと舞台上へと上がる。

「久し振りね、桜時」
「あ、えと…そのっ…」
振り向いた孔雀へ、桜時がまだ、戸惑いの表情を見せる。

「君たちが海底に行ってすぐ、僕が金ちゃんに頼んで、孔雀さんた

ちを呼んどいてもらったんだよぉ～っ」
「へっ？」
後方から聞こえてくる太狼の声に、桜時が振り返る。
「時間のない状況になるのは、予想出来てたからねぇ～っ」
「それでっ…」
「そうよっ、ったく、忙しいっていうのにっ」
振り向いた桜時に答えながら、孔雀が疲れたように肩を落とす。

「その割りには、レッドカーペットの準備まで完璧でしたけどね」
「うるさいわよっ！破天荒女っ！」
口を挟んだ輝矢へ、孔雀が強く怒鳴りつける。

「ともかくっ！」
「うっ…」
勢いよく振り向く孔雀に、桜時が少し怯む。
「塔の封じ込めってやつは、私たちに任せなさいっ」
「私…“たち”っ？」
孔雀の言葉に、桜時が首を傾げる。

「久し振りぃ～っ♪」
「久し振りぃぃ～っ♪」
「久し振りぃぃぃ～っ♪」
どこからか聞こえてくる、ハーモニー。

『久し振りぃぃぃ～～っ♪』
「……。」
見事なハーモニーを奏でながら現れる、松人・竹人・梅人の三人の姿を見て、桜時がしばらくの間固まる。

「出ましたね、三バカ兄弟」

「揃い踏みは、いつ見てもキツいなぁ～」
呆れた表情を見せる輝矢の横で、門貴がしみじみと呟く。

「ということで、塔には僕らが行くよ」
「任せてっ！桜時くんっ！」
「桜ちゃんの為ならっ、えんやこらぁ～っ！！」
「すっげぇ不安なんですけど…」
口々に言う三兄弟に、思い切り顔を引きつる桜時。

「やっぱ俺が行った方がっ…」
「そういうわけにもいかないんだよぉ～っ」
「えっ？」
首を横に振る太狼に、桜時が戸惑った顔を見せる。

「君には中央塔でやってもらいたいことがあるんだよねぇ～、ハチくんっ」
「中央塔で？何をっ…」
“命力の結晶”の回収っ」
「……っ」
鋭い表情を見せる太狼に、桜時がハッと目を見開く。

「いっくら四つの塔の鬼力を封じ込めて、蓄積を止めたって、中央塔の命力の結晶を何とかしないと、光の放出は止められない」
太狼が桜時へ、立てた人差し指を突き出す。
「この世界に命力を壊せる程の力なんてないしぃ、そしたら回収するしかないでしょっ？」
「確かに」
ゴンが、納得するように頷く。

「回収するには、元々あった君の体に戻すのが一番簡単で、一番リ

スクも少ないっ」
「うぅ～ん…それはまぁわかるけどっ…」
太狼の言葉に頷きながらも、桜時が気難しい表情を見せる。
「でも骸鬼わんさかだったりしたら…」
「大丈夫だよぉ～っ！桜ちゃ～んっ！」
「僕たち、やる時はやる男だよっ！」
「その根拠のない自信が余計に不安っ…」
明るく微笑みかける松人たちに、桜時が悩むように頭を抱え込む。

「護衛を強化すればいい。朱実と共には俺が行こう」
「えっ…？」
聞こえてくる声に、俯いていた桜時が顔を上げる。
「それでどうだ？桜時」
「あっ…」
桜時が顔を上げると、そこには、頼もしく笑った犬孝が立っていた。

「いっ…犬孝っ…？」
「……っ？」
名を呼ぶ声が聞こえ、犬孝が振り返ると、そこには戸惑いの表情で犬孝を見つめる、孔雀の姿があった。犬孝が孔雀へ、穏やかな笑みを向ける。
「お久し振りです、姉上」
「……っ！」

微笑む犬孝に、孔雀が大きく目を見開く。

「犬孝…貴方っ…」

俯き、少し震えた声を発する孔雀。

「一体、どの面下げて、私の前に姿を現わしやがったぁっ！！」

「ぎゃあああああっ！！」

「えええぇっ！？すっげぇ仲悪りぃっ！！？」

犬孝の腕を容赦なく捻りあげる孔雀に、桜時が焦ったように声を出す。

「ふんぎゃあああああっ！！」

「ちょちょっ…！やめてよっ！孔雀さんっ！」

犬孝の叫び声が響く中、桜時が慌てて、二人の間に割って入る。

「まったくっ！」

「痛たたたっ…」

孔雀が腕を離すと、犬孝は力なくその場にしゃがみ込んだ。

「だっ、大丈夫かぁ～？」

桜時が身を屈め、しゃがみ込んだ犬孝の方を覗き込む。

「“父さん”っ」

「……っ」

犬孝を、何の躊躇いもなく父と呼ぶ桜時に、ハッとした表情を見せる孔雀。

「大丈夫だ、桜時っ」
「もうっ」
犬孝の答えを聞きながら、桜時が孔雀が呆れたような顔を向ける。
「孔雀さんっ！何もいきなり捻りあげなくたってっ…！」
「いいんだ、桜時」
「えっ？」
孔雀を非難するような言葉を繋ごうとしていた桜時を、止めたのは犬孝であった。
「姉上っ」
真剣な表情を見せた犬孝が、改めて孔雀の方を見る。
「俺の勝手で、桜時の面倒を貴女に押しつけてしまったことは、本当に済まないと思っ…」
「いいわっ」
「えっ…？」
強く遮る孔雀の声に、犬孝が戸惑うように顔を上げる。
「その子が許したんなら、私はもういいっ」
「……っ」
そっぽを向いて答える孔雀に、少し驚いた顔を見せる犬孝。
「孔雀さんっ…」
桜時も目を細め、孔雀を見つめる。
「雲雀もきっと…そう言うわ…」

「……。」
孔雀の口から雲雀の名が出ると、犬孝はそっと目を細め、その場で俯いた。

「ありがとう…ございます…」
「……っ」
俯いたまま、礼を零す犬孝の姿を見て、桜時がその口元を緩める。

「これで朱実、クリアですね」
「うんっ」
その光景を見て微笑みながら、輝矢が太狼へと言うと、太狼も微笑んで大きく頷いた。

「じゃあ～北塔はアリスちゃんっ、西塔は白雪ちゃん、南塔は孔雀さんたちに行ってもらうとしてぇ」
太狼が赤丸の一つを差しながら、ゆっくりと振り向く。

「東塔はっ？どうするっ？」
『えっ？』
太狼に問われ、同時に声を出すリンゴとイチゴ。

「まぁ誰でもいいけどぉ～」
「じゃあわしがっ…」
「座黒さんじゃ力不足ぅ～っ」
「ううっ…」
「元気出してぇ～っ」
落ち込む座黒に、由雉があまり気持ちのこもっていない励ましを送る。

「……。」
少し考え込むように、俯くリンゴ。

思い出される、ゴンの声。

――あの人がっ…！死ぬなんてっ…！――

「……っ」
少し舞台下のゴンの方を見て、リンゴが目を細める。

「東塔へは私がっ…」
「私が行きますっ」
「えっ？」
名乗り出ようとしたリンゴの言葉を遮り、太狼へ向けて、高々と手をあげたのは、真剣な表情を見せたイチゴであった。先を越されたリンゴが、戸惑うようにイチゴを見る。

「イチゴっ、あんたっ…」
「お姉ちゃんは中央塔へ行って、輝矢さんたちのフォローをしてあげてっ」
戸惑うように名を呼ぶリンゴの方を、イチゴが振り向く。

「ねっ？」
「イチゴっ…」
明るく微笑みあげるイチゴに、そっと目を細めるリンゴ。恐らく

は輝矢たちとともに、中央塔へ行くであろうゴン。そのゴンを気にかけているリンゴの気持ちに、イチゴは気づいていたようである。

「わかった。東塔はあんたに任せるっ」
「うんっ！」
微笑みかけるリンゴに、イチゴはしっかりと頷いた。

「じゃあ東塔はイチゴちゃんっと。よしっ、これで決まったねぇ～っ」
二人の会話を聞き、満足そうな笑みを浮かべる太狼。

「じゃあ座黒さんっ」
「んっ？」
振り向く太狼に、落ち込んでいた座黒が顔を上げる。

「オトポリ隊員を振り分けて、それぞれを四方の塔へ行く人たちのバックアップに回してもらえますぅ～？」
「ああ、了解したっ！」
太狼の言葉に、座黒がしっかりと頷く。

「では早速っ、振り分けをっ…」
「俺たちも一緒に振り分けてもらえませんっ？」
「何っ？」
隊員たちへ向けて言葉を発しようとした座黒が、横から聞こえてくる声に振り向く。座黒と同じように、舞台にいた皆が振り向いた。

「黒羽っ！」

振り向いた皆の中で、由雉が一番に声をあげる。

「醍也に剛也、それに城歌と波跡もっ…」

「お邪魔しているファ～っ♪じゃなくって、わぁ～っ！」

振り向いた先にいた者たちの名を、門貴が次々に呼びあげる。歌うように話す城歌、そしてその横に並ぶ波跡、醍也、剛也、黒羽の４人。それは、鬼が島で門貴たちが戦った、トランプ兵団の面々であった。

「お前らっ、協力してくれるんかぁっ！？」

「あったり前さぁ～っ！」

「暇潰しに…」

「こっちも鬼にはなりたくないしね」

門貴の問いかけに、剛也たちが笑顔で答える。

「結構な戦力になる自信はありますけど…？」

「うむっ、わかった。君たちも一緒に振り分けようっ」

得意げに微笑む黒羽に、座黒が大きく頷いて答える。

「俺たちも一緒に戦わせてくれぇぇっ！！」

『……っ』

今度は講堂の扉側から声が聞こえ、またしても皆が一斉に振り向く。

「地蔵っ…？」

講堂の中へと駆け込んできたのは、地蔵やセンシ、ミイラ男を先頭とした、トマトの旦那の者たちであった。入って来た地蔵たちを、ゴンやリンゴが戸惑うように見つめる。

「青守トマトの旦那っ、総勢百十八名だっ！」
「私たちもっ、一緒に戦わせて下さいっ！」
「トマト…仇…一緒…行く…」
「みんなっ…」
必死に訴える地蔵たちの姿を見て、ゴンが少し目を細める。朝はトマトの死に、皆、涙を流していたというのに、もう立ち上がり、トマトの為に戦おうとしている。

「いいだろうっ、共に戦ってくれっ」
『おっしゃあああああっ！！』
微笑む座黒に、旦那たちが皆、嬉しそうに拳を突き上げる。

「凄い…」
集まった皆を見回し、思わず言葉を漏らす輝矢。

「こんなにたくさんの人が…集まるなんて…」
「自然と集まったわけじゃないよ」
「えっ？」
戸惑うように呟いていた輝矢に話しかけるのは、笑顔を見せた太狼であった。

「そりゃあみんな、自分から動いて、ここに集まってきてくれたんだろうけどねぇ」
「タロー？」
「君たちが居なかったら、ここにいる全員、ここには集まってなかったと思うよぉっ？」
「えっ…？」
優しく微笑みかける太狼に、輝矢が眉をひそめる。

「私たちが…居なかったら…？」
「そうっ」
聞き返す輝矢に、そっと頷く太狼。

「君たちが旅をして、色んな場所で、色んな人と出会った…」
太狼が周囲を見回し、目を細める。

「君たちがたくさんの出会いを作ってきたから、ここにいる誰もが今、ここにいるっ…」
「……っ」

太狼のまっすぐな瞳を向けられ、輝矢がハッとした表情を見せる。

――急に落ちてきたら危ないですよ？ワンコさん――
――ああっ！！てめぇっ！！さっきのサルっ！！――
――私の専属ブルーバードの由雉ですっ――

一つひとつの小さな出会いが重なって、皆が今、ここに、共にいる。

『……。』
太狼の言葉を聞き、過去の出会いを思い出して、そっと口元を緩める桜時たち。

「無駄だった時間なんて、一秒もないっ」
周囲を見つめる輝矢へ、太狼が大きく微笑みかける。

「君たちの旅が、今、この時を作っているんだよっ…」
「……はいっ…」

その言葉を聞き、輝矢は噛み締めるように頷いた。

「では以上のように振り分けるっ！」
輝矢が頷いたその頃、丁度、座黒からの振り分けの発表が終わる。
「出発は明日早朝っ！各自、それに向け、準備を整えよっ！！」
『おおおぉぉぉうっ！！』

座黒の言葉に皆が大きく頷き、一斉に拳を突き上げる。

「さてっ、じゃあまぁ四方の塔は、四大国の皆さんと座黒さんにお任せするとしてぇ」
太狼が一息つくように肩を落とし、輝矢たちの方を見る。

「僕らは別室で改めて、作戦会議といこうかぁっ」
「改めて？」
「作戦会議って何をっ…」
「それはもちろんっ」
戸惑う皆へ、太狼が再び鋭く微笑む。

「中央塔攻略について、だよぉっ」
『……っ』
微笑む太狼に、輝矢や皆が、真剣な表情を見せた。

第８８章　決戦前夜　★３

十分後。オトポリ本部・第十一会議室。

「皆、準備に入りました。各塔へ向かうメンバーで集まって、作戦を練ってるみたいです」

「そうっ」

会議室の上座に座った太狼が、遅れて部屋へと入って来たリンゴの言葉に、満足そうに頷く。中央塔攻略の為、作戦会議に部屋を移した太狼たち。そこには輝矢たち四人とゴン、羊スケ、そしてリンゴと黒羽の計九名が集まっていた。

「じゃあこっちも始めようかぁ～」

「はい」

太狼の言葉に頷きながら、リンゴがゴンの横の席へと座る。

「まぁこっちの流れとしては、さっきも言ったように、四方の塔すべてが封印されて、中央塔を包む鬼力が弱まったら潜入って感じなんだけどぉ～」

「中央塔にも骸鬼がわんさか待ち構えているのでは？」

「たぶんねぇ～」

輝矢の言葉に頷きながら、太狼が少し困ったように肩を落とす。

「骸鬼ごときぃっ！俺らがパァ～っと吹っ飛ばしてやるわぁっ！」

「本命とやり合う前に、体力使い切っちゃうつもりぃ～っ？」

「あっ、そうかぁ」

やる気満々に立ち上がった門貴であったが、由雉の指摘に、再び座り込んで首を捻る。

「中央塔には私と金汰さんの隊が付くわっ、バックアップは出来るはずよっ」
「隊長が隊長だけに、いささか不安ですけどね」
「何よっ！？その言いようはっ！！」
棘のある言い方をする輝矢に、リンゴが思わず顔をしかめて、怒鳴りあげる。

「案ずるな、俺がいるんだ…」
「すっごい自信っ…」
頼もしく答える黒羽に、由雉が少し呆れた表情を見せる。
「クロクロは中央塔の振り分けになったん～？」
「その呼び名はやめろ、サル…」
馴れ馴れしく話しかける門貴に、黒羽があからさまに不快な顔を見せる。

「ええっ、黒羽の他にも、トマトお祖母ちゃんの旦那の一部が来てくれるわっ」
「そんだけいれば、骸鬼は何とかなるか…」
「ええっ、意地でも無傷で、あんたたちを中央塔まで送ってあげるわよっ」
小さく呟く桜時に、リンゴが頼もしく頷きかける。

「まぁ潜入前のことは、そんなに心配してないよぉっ」
太狼が、落ち着いた様子で話す。

「こっちでも色々と手配はしてあるし…」
「えっ？」
「うぅ～ん～っ、何でもなぁ～いっ」
振り向いた輝矢に、太狼が笑顔で首を横に振る。

「それより問題は潜入後のことでしょ～っ」
「……っ」
太狼の言葉に、輝矢が厳しい表情を作る。
「最優先はハチくんの命力の結晶の回収っ、戦いを避けれるなら、それに越したことはないけどぉっ」
「無理、でしょうね」
「だよねぇっ」
はっきりと言い切る輝矢に、太狼がまたもや肩を落とす。
「まぁでも戦いが避けれなくても、道が閉ざされるわけじゃないさっ」
太狼が笑顔を取り戻し、輝矢たちを見回す。
「敵戦力はっ？」
「えっ？えぇ～っと、まず牢戸知玖だろぉ？」
太狼に問われた桜時が、思い出すように天井を見上げながら、言葉を続ける。
「ギン、んで新しく繭から生まれた緋鬼と蒼鬼って二匹の鬼、それからっ…」
桜時が少し目を落とし、躊躇うようにゴンの方を見る。
「御剣…諸刃っ…」
「……。」
出されるその名を聞き、ゴンが少し眉をひそめる。
「……っ」
そんなゴンを、どこか不安げに見つめるリンゴ。

「計五人っ、そんなに大人数でもないねぇ～」
太狼が指を折りながら、言い放つ。
「こっちもそんなに行ったって仕方ないから、潜入組の人数を絞ろうかぁ～」
そう言って太狼が、顔を上げる。
「まずはハチくんだねぇ」
「ああっ」
太狼の言葉に、桜時がしっかりと頷く。
「で、輝矢ちゃんっ」
「はい」
同じように頷く輝矢。
「後はぁ～そこのサルとキジぃ～っ」
「おっしゃあっ！任せときぃっ！」
「そんなに張りきらないでよぉ～」
勢いよく立ち上がる門貴に、由雉が疲れたような声を漏らす。
「それとぉもう一人くらいっ…」
太狼の鋭い視線が、巡り巡ってゴンを捉える。
「ゴンっ」
『……っ』
ゴンの名を呼ぶ太狼に、輝矢たちが皆、息を呑む。
「行ってくれる？」
「……はい」

太狼の問いかけに、ゴンは特に表情を動かさぬまま、短く頷いた。

「けっけどよぉっ…！」

「ハチ公っ」

「……っ」

思わず立ち上がり、太狼に何か言おうとした桜時であったが、後方から呼ぶゴンの声にその言葉を止め、ゆっくりと振り返った。

「そう心配すんなっ、自分の感情優先して、お前らの足引っ張るようなマネはしねぇっ」

「ゴンっ…」

強く言い放つゴンに、桜時が少し目を細める。

「さっき隊員たちに“いい加減にしろ”とか怒鳴ってた問題キツネじゃ、説得力ありませんよねぇ～」

「うっせぇなぁっ！お前庇って言ったんだからっ、ちったぁ感謝しろっ！！」

茶々を入れる輝矢に、ゴンが強く怒鳴りあげる。

「……。」

「大丈夫っ」

「へっ？」

まだ納得しきっていない表情で座った桜時へ、声をかけたのは太狼であった。

「そんなに弱い人間じゃないよっ、ゴンはっ」

「……っ」

そっと微笑む太狼に、桜時が少し目を細めた。

「じゃあもう一度言うよぉ～？最優先は、ハチくんによる命力の結晶の回収っ」
太狼が皆を見回しながら、確認するように言う。
「阻む敵を引きつけて、時間を稼ぐ。これが君たちのお役目っ」
『……。』
そっと微笑み、人差し指を立てる太狼に、皆が真剣な表情を見せる。

「阻む、か…」
「何かパッとせぇ～へんよなぁ…」
太狼の言葉を受けた由雉と門貴が、いまいち納得のいっていない様子で首を捻る。

「最終決戦の作戦が、パッとしててどうすんのよっ」
「それは、わかってるけどぉ…」
「なぁ～んか士気が上がらへんいうかぁ～っ」
「はぁっ…」
リンゴに鋭く指摘されている二人の方を見て、輝矢が深々と溜息をつく。

「“阻む”なんて甘い考え方では、無駄に命を落としかねません」
『えっ…？』
鋭い言葉を放つ輝矢に、皆の視線が集まる。
「甘いのは、タローのココアだけで十分っ」

「輝矢っ…？」
立ち上がる輝矢を、桜時が戸惑いながら見上げる。
「いいですか？アナタがたの役目は、阻むことじゃないっ」
「うわぁ～っ、いきなり作戦、全否定したねぇ～」
言い切る輝矢に、太狼が苦い笑みを浮かべる。

「アナタがたの役目はっ、向き合った敵に、全力で戦うことっ、そして勝つことっ！」
『……っ』
強く言い放つ輝矢の言葉を、皆が真剣な表情で聞く。
「敗北は許しません。死んだ奴は、私が殺しますっ」
「死んだ奴は殺せねぇーだろうがっ。まぁ～た無茶言うなぁ～…」
はっきりと言い切る輝矢に、桜時が少し困ったように頭を抱える。

『……。』
輝矢の言葉を受けた門貴と由雉が、互いの顔を見合わせ、しばらくの間、固まる。

「アッハッハっ！その方がわかりやすくてええわぁっ！」
噴き出したように、笑みを零す門貴。
「いつも通りだしねぇ～っ」
先程まで、納得していない顔を見せていた門貴と由雉も、輝矢の言葉に表情を崩し、笑みを浮かべる。

「あんたたちねぇっ…」
「相変わらずな奴らだなぁっ」

「そうっスねぇっ」
そんな輝矢たちの様子を見ながら、リンゴは頭を抱えるが、ゴンと羊スケは笑みを見せる。

「輝矢ちゃ～ん、作戦否定はひどいよぉっ」
「あ、すみません、タロー」
拗ねるような声を出す太狼に、輝矢が慌てて謝る。

「まぁ、でもっ、大将から景気づけの一言で、仲間の士気も上がったところでぇっ」
「今のが景気づけか…？」
輝矢の横で立ち上がる太狼に、桜時が疑問の目を向ける。

「最後に一個だけっ」
『……っ』
輝矢の頭を撫でながら、穏やかに微笑む太狼を、皆が見つめる。

「これは、世界中のすべての人の未来を賭けた、とても大切な戦いっ…」
太狼がゆっくりと、言葉を発する。

「君たちが負ければ…人類は終わる…」
『……。』
その太狼の言葉に、重い現実が圧し掛かるようで、輝矢たちは思わず、その表情を曇らせた。

「さっきから何回も最優先って言葉を使ってきたし、最も優先すべ

きは人々の命、世界の未来だけどっ…」
太狼が顔を上げ、まっすぐに輝矢たちを見る。

「君たちの命も、最優先だからねっ…」
『……っ』

微笑む太狼に、目を細める輝矢たち。

「それだけは、忘れないでっ…」
「……。」

願うように見つめる太狼を、輝矢もまっすぐに見つめ返した。

「まぁ要は死んだら殺すってことだよぉ～っあははぁ～っ」
「それじゃあ輝矢と言ってること、同じじゃねぇーかっ！！」
「さっすが師弟っ…」
軽い笑みを浮かべる太狼に、桜時が強く突っ込みを入れ、リンゴが呆れた瞳を向ける。

「それじゃあみんなっ、健闘を祈るっ！」

太狼のこの言葉で、輝矢たちは、作戦会議を終えた。

作戦会議が終わると、輝矢たちは皆、家へと戻るため部屋を出ていき、会議室には太狼だけが残る形となった。

「ふぅっ…」
「お疲れさんっ」
「へっ？」
深々と肩を落とし、座り込んだ太狼が、開く扉の音に顔を上げる。

「金ちゃんっ」
「よっ」
会議室へと姿を現わしたのは、金汰であった。

「ほいっ」
座っている太狼へ、金汰がボトルに入った水を投げ渡す。
「ありがとっ」
水を受け取り、笑顔を見せる太狼。

「こっちの準備は順調だ。予定通り、いけそうだよ」
「そうっ」
明るく笑いかける金汰に、太狼が安心したように頷く。

「色々と頼んじゃって悪かったね、金ちゃんっ」
「なぁ～にっ、こっちも自分が鬼にならない為にやってんだ。桃ちゃんが気にすることじゃないっ」
金汰が太狼に投げ渡したものと同じ水を飲みながら、明るい口調で答える。
「作戦も人員も形になって、後は明日を待つばかりだなぁ」
「うんっ…」
受け取った水を一口飲み、太狼が金汰の言葉に頷く。

「いやっ、しっかしさっすが桃ちゃんっ！トマトさんの本があったとはいえ、天晴な手回しでぇっ…！」
「金ちゃんっ…」
「……っ？」
言葉を遮り、名を呼ぶ太狼を、金汰が戸惑うように見る。

「桃ちゃんっ…？」
「どうして…」
真剣な表情を見せた太狼が、ゆっくりと声を放つ。

「どうして俺は…一緒に戦えないんだろっ…？」
「……っ」
小さく落とされた太狼の言葉に、金汰がハッとした表情を見せる。

「あの子たちが皆、命懸けで戦うっていうのにさっ…」
「……。」
悲しげに微笑む太狼に、金汰が少し目を細める。

「英雄だ何だ言って…俺は押しつけてばかりだっ…」
太狼がさらに、言葉を続ける。

――朝日っ！――

あの時も、命を懸けて戦いにいく朝日を、ただ見送ることしか出来なかった。

「いつもっ…」

目を落とした太狼が、自嘲するような笑みを浮かべる。

「桃ちゃんっ…」

「なぁ～んてねっ」

真剣な表情で呼びかける金汰に対し、急に明るい口調に変え、太狼がいつもの笑顔へと戻る。

「つい、しんみりしたこと言っちゃったぁ～っ！第二次思春期かなぁ～？僕ってばぁ～っ」

「……。」

無理やり作った笑みを見せる太狼を、金汰がまっすぐに見つめる。

「戦ってるさっ」

「えっ…？」

放たれる金汰の言葉に、太狼が目を丸くする。

「桃ちゃんは十分、一緒に戦ってる…あの子たちとっ…」

「……っ」

向けられる金汰のまっすぐな笑顔に、太狼が目を細める。

「それは、あの子たちが一番、よくわかってるさっ…」

「……。」

金汰の言葉を聞きながら、そっと目を伏せる太狼。

「ありがとう…金ちゃん…」

「作戦会議って…結局、死ぬ気で戦うけど、死んだら殺されるってことしか認識出来なかったねぇ～」
「まぁ要は勝てばええんよぉっ！勝てばっ！」
「いいなぁ。頭、単純な人はっ」
会議室から出た門貴と由雉は、廊下を歩きながら、あまり緊張感のない会話を続ける。

「準備の方は私たちでやるから、あんたたちは明日へ向けて、もう休みなさいっ」
「えぇ～？まだ二十時だよぉ～？」
「いいから、とっとと休むっ！！」
「はぁ～いっ」
リンゴに怒鳴られ、大人しく頷く由雉。

「じゃあ私行くわっ、羊スケ、あんたも手伝いなさいっ」
「うぃ～っスっ」
「俺はっ？」
「どうせ手伝っても邪魔になるだけなんだからっ、あんたもとっとと寝なさいっ」
「んだよっ、それっ」

ひどい言いようのリンゴに、ゴンが思わず顔をしかめる。

「じゃあね、輝矢っ」
「皆さん、また明日っ！」
「ええ」
軽い挨拶を交わすと、リンゴと羊スケは、本部へと続く廊下の奥へと消えていった。

「じゃあ俺たちは帰るかぁ」
「せやなぁ」
桜時と門貴が簡単に言葉を交わし、先頭を歩いて、出口の方へと向かっていく。

「あっ！でも晩飯、まだやっ！」
「帰ったら、ヘンゼルたちが用意してくれてんじゃねぇーかっ？」
「最後の晩餐になったりしてな…」
「縁起の悪いこと、言わないでよねぇ～」
ひっそりと呟く黒羽に、呆れた表情を向ける由雉。四人があれこれと会話をしながら、オトポリの会議塔を出る。

「ったく、緊張感のねぇー奴らだなぁ」
「……。」
その後を続くように歩く、輝矢とゴン。考え込むような表情を見せていた輝矢が、ゆっくりと顔を上げる。

「ゴンっ」
「あっ？」
立ち止まり、名を呼ぶ輝矢に、同じように立ち止まって、振り返

るゴン。

「んだよっ？」
「そのっ…」
「ああっ？」
躊躇いがちに俯く輝矢に、ゴンが眉をひそめる。

「ああっ、諸刃のことかぁ？」
ゴンが思いついたように、輝矢へと問いかける。

「大丈夫だってっ！お前らの足引っ張るようなマネはっ…！」
「いえっ、諸刃のことではなくてっ…」
「へっ？」
首を振る輝矢に、ゴンが目を丸くする。

「じゃあ何っ…」
「へェェ～イっ！マァ～イソォォ～ンっ！！」
『えっ…？』
前方から聞こえてくる、無駄に明るく大きな声に、少し引きつった表情で振り向く輝矢とゴン。

「はっ…？」
輝矢たちの前方で、固まる由雉。

「ハヤテぇぇぇぇっ！？」
「久し振りっ！マァ～イソォ～ンっ！」
帰ろうとしていた由雉たちの前方へと、突然現れたのは、今日もテンションの高そうな由雉の義父・ハヤテであった。驚く由雉に、ご機嫌の様子で手を振っている。

「あっ、バカキング」
「なんであのオッサンがここにっ…」
「ゆっきじぃぃ～っ！！」
『ぐへぇぇっ！！』
由雉の少し前からハヤテを見ていた桜時と門貴が、由雉へと勢いよく駆け抜けていくハヤテに、何の躊躇もなく踏みつけられる。

『うっ…うぅ…』
「会いたかったよぉぉ～っ！マイソォォ～ンっ！」
踏まれて、苦しげな声を漏らしている桜時と門貴のことなど目もくれずに、笑顔全開のハヤテが由雉へと駆け寄る。

「んなっ…ななんでっ…ハヤテ、ハヤテがっ…」
「最終決戦が間近だと聞いてねぇ～っ！新しい羽根を届けなきゃと、急いでやってきたのさぁ～っ！」
「新しいっ…？」
ハヤテの言葉に、由雉が素早く反応し、眉をひそめる。

「新しいって、何っ…」
「その前にマイソンっ！再会を喜ぶ、ダディ特別製の高い高いをぉ～っ！！」
「誰がやるかぁっ！！」
両手を広げ、高い高いをしようと追いかけてくるハヤテから、必死になって逃げ惑う由雉。

「あれが…父のライバルの…ハヤテ…」
そんなハヤテの姿を、黒羽が呆然と見つめる。

「はぁ～あ…何やってるんですかねぇ。あのバカキング…」
「あのオッサンも、太狼さんが呼んだのかぁ？」
その光景を後方から眺めながら、輝矢が頭を抱え、ゴンがゆっくりと首を傾げる。

「あっ、でっ？」
「へっ？」
思い出したように振り向くゴンに、目を丸くする輝矢。

「何か用ですか？」
「お前が何か聞きたいことがあったんじゃねぇーのかよっ！！」
問いかける輝矢に、ゴンが勢いよく怒鳴りつける。

「聞きたいことっ？ああっ」
やっと思いだしたように、頷く輝矢。

「そのっ…ギンの、ことなんですけどっ…」
「ギンっ？」
余程、意外な名前だったのか、ゴンが勢いよく顔をしかめる。

「ギンって、虎国で紺染といたアイツかっ？」
「ええっ」
聞き返すゴンに、輝矢が短く頷く。

「彼っ…」
思い出すように、そっと目を細める輝矢。

「彼は本当に…狐族なのでしょうか…？」
「はっ？」
輝矢のいきなりの問いかけに、ゴンが困惑した表情を見せる。
「何だよ？それっ。アイツと何かあったのか？」
「いえっ、何があったというわけではないですし、確証もないんですけど…」
――大人しくしてろって言ってるんですよっ――
ギンの、赤く染まった瞳。シルクと同じように、輝矢の鬼の力に影響を及ぼした、あの瞳。
「何となく…」
「何となくぅ～？」
輝矢のはっきりとしない言葉に、ゴンがさらに混乱した様子で顔をしかめる。
「けどまぁっ、何となくで答えるなら、狐族じゃねぇーかもなぁっ」
「えっ…？」
ゴンの答えに、輝矢が少し驚いたように顔を上げる。
「狐族では…ない、かも…？」
「ああっ、俺たちの一族って、危なくなる度に村捨てて、次の村に移ってただろっ？」
聞き返した輝矢に、ゴンが答えを続ける。

「その度に何人か死んじまって、一族の間でも、誰がどこの子供だとか、そういうのって把握しきれねぇーんだよっ」
話を続けながら、ゴンが少しその表情を曇らせる。
「実際っ、俺の親がどいつだったかなんて、一族の誰も知らなかったしな」
「……。」
あまり踏み込んではいけないところを聞いてしまったような気がして、輝矢は少し気まずそうに顔を下ろした。
「だから知らねぇー奴がポッと紛れてても、誰もわかんねぇーっ」
「ギンが狐族に紛れたとしても、気付く者はいないということですか…」
「ああっ」
「……っ」
ゴンが頷くと、輝矢がさらに険しい表情を見せる。
「けど、何だ?狐族じゃねぇっつーんならっ、アイツは一体、何だってんだよっ?」
「それは…」
問いかけるゴンに、輝矢がゆっくりと口を開く。
「それはっ…」

鬼国跡地。中央塔内。

「……っ」

窓の外の、突き上げる鬼力の光を見つめ、どこか満足げな笑みを浮かべているギン。

「……っ？何ですっ？」

少し眉をひそめたギンが、笑顔を作って後方を振り返る。

「僕に何か用ですか？」

「……。」

ギンが振り返ると、そこには怪訝そうな表情を見せた、蒼鬼が立っていた。

「貴方…」

蒼鬼が、ゆっくりと口を開く。

「貴方からは…もう一人の彼のように、人間の臭いがしない…」

「そうですかぁ？」

蒼鬼の言葉を受け、ギンが笑顔を見せながら、自分の腕の臭いを嗅ぐような素振りを見せる。

「けど僕、人間嫌いだからぁ、臭いがしないのは嬉しいですねぇ～っ」

「……っ」

明るく微笑むギンを見て、蒼鬼がそっと眉をひそめる。

「貴方からは…鬼の臭いがする…」

「……。」

その蒼鬼の言葉に、笑っていた瞳を、急に鋭くするギン。

「貴方は…何者ですか…？」

「……っ」

ギンがそっと口元を緩め、蒼鬼から天井の方へと視線を移す。

「さぁっ…？」

短く答えたギンの瞳が、血のような赤色に染まった。

第８８章　決戦前夜　★４

その日・夜。エセお菓子の家こと、『桃原家』。

「すやすやすやぁ～っ…うぅ～ん…門貴様ぁ～っ…」

「ううっ…くっ来るなぁ…ヘンゼルっ…」

「ササミ…チーズっ…」

リビングでは、食事を終えたモンキ、ユキジとヘンゼルが、床に寝転がり、気持ち良さそうに寝息を立てていた。ヘンゼルと門貴は同じ夢を見ているのか、妙に寝言が続いている。

「あぁ～あ、ヘンゼルまでっ…」

皆に毛布を掛けながら、少し呆れたような表情を見せる桜時。

「ウフフっ、今日はご馳走作るんだって、張り切ってましたから。お兄様っ」

そこへ、おぼんを持ったグレーテルが、キッチンからリビングへとやって来る。

「一人じゃ後片付け、大変だろっ？手伝おうか？」

「いえっ、大丈夫です」

声をかけた桜時に、グレーテルが笑顔を向ける。

「もう少ししたら、お兄様を叩き起こしますからっ」

「俺っ…時々、お前が怖いよ…」

満面の笑顔で答えるグレーテルに、桜時が少し顔を引きつる。

「片付けのことは気になさらずに、ハチ様ももうお休みになって下さいっ」

「そうだなぁ～…あれっ？」
何かに気づいたように、桜時が周囲を見回す。

「輝矢はっ？」
リビングに、先程までいたはずの輝矢の姿が見当たらず、グレーテルへと問いかける桜時。

「輝矢様なら先程、少し風に当たってくると、海岸の方へ」
「そうっ…」
グレーテルの言葉に頷きながら、桜時がゆっくりと立ち上がり、リビングを出て行こうと足を進める。

「輝矢様に、あまり遅くならないうちに戻られるよう、お伝えくださいっ」
「へっ！？」
リビングを出て行こうとした桜時が、グレーテルの言葉に、驚いた様子で振り返る。

「いっいやっ！俺っ、別にっ…！輝矢のとこへ行こうなんて、これっぽっちも思ってっ…！……はぁっ…」
必死に言い訳をしていた桜時が、言葉の途中で、諦めたように肩を落とす。

「いってきます…」
「いってらっしゃいませぇ～っ！」

どこか元気なく玄関から外へと出ていく桜時を、グレーテルは笑顔で見守った。

「……。」
扉がしっかりと閉まったことを確認し、グレーテルがリビングを覗き込む。
「皆様っ、もうよろしいですわよぉ～っ」
「ふいいぃぃぃ～っ！」
グレーテルの言葉を合図として、床に寝転がっていたモンキが、勢いよく起き上がった。
「さぁ～っ！お片付けっ！お片付けっ！」
同じように起き上がったヘンゼルが、素早く体を動かして、晩御飯の片付けに入る。
「ふわぁ～っ、ホンマに寝てまいそうやったわぁ～っ」
「ったくぅ～っ」
モンキの横で、顔をしかめながら起き上がるユキジ。
「何で、いきなり寝たふりなんか、しなきゃいけないのさぁ～っ？」
「お子ちゃまやなぁ～ユッキーはっ」
「はぁっ？」
『フフフっ』
モンキの言葉に、首を傾げるユキジ。そんな二人の様子を見て、ヘンゼルとグレーテルが、どこか楽しそうに笑う。
「愛っちゅーんはっ、時に何よりのパワーとなってくれるんよっ？」
「頭大丈夫なの？サル」
「ひどいわぁ～っ！ユッキーっ！！」
「ただいまぁ～っ」
『あっ！ご主人様っ！お帰りなさいませぇ～っ！』
そこへ、桜時と入れ替えになるようにして、オトポリ本部で最終打ち合わせをしていた太狼が戻ってくる。

「ふぅ〜っ、あれっ？」
リビングへと入って来た太狼が、リビングを見回し、首を傾げる。
「輝矢ちゃんとハチくんはぁ〜？」
『うえぇっ！？』
太狼のその問いかけに、あからさまに焦った表情を見せる面々。
「え…えぇ〜っとぉ、輝矢様なら、山へ芝刈り機を見にぃ〜っ」
「おっ桜時は、川へ洗濯機を買いに行ったでぇ〜っ！」
「芝刈り機と洗濯機ねぇ」
もう少し上手い言い訳が出来ないのかと思うくらい、下手な言い訳をするヘンゼルとモンキに、太狼が呆れきった表情を見せる。
「まっ、いっか。今日くらいっ」
そう呟き、太狼が少し肩を落とす。
「グレーテルぅ〜っ、甘さダルダルココアぁ〜っ」
「はぁ〜いっ！ただいまっ！」
太狼の声に、グレーテルは明るく返事をした。
その頃。龍国・海岸沿い。

「……。」

砂浜に立った輝矢は、遥か先に見える、御伽湖の上に浮かぶ鬼国跡地を、真剣な眼差しで見つめていた。薄っすらと見える5本の塔の中央が、明日、輝矢たちの戦う場所。最後の戦いが、行われる場所。

「ここに居たかっ」
「……っ？」
後方から声がして、輝矢がゆっくりと振り返る。
「ハチ」
「よっ」
輝矢が振り返ると、そこには笑顔を見せた桜時が立っていた。

「あぁ～…えっと…」
笑顔を向けたものの、次の言葉に困る桜時。
「グレーテルが、あんまり遅くならない内に戻って来いってさっ」
「それを伝えに…？」
「へっ？あっ、ああっ…」
「そうですか…わざわざ、ありがとうございます。ハチっ」
「いやっ…」
穏やかな笑顔を見せる輝矢を見て、桜時が少し目を細める。

「よっ」
「……っ？」
桜時が軽く足を動かし、砂浜に立つ輝矢のすぐ横へと並ぶ。

「緊張っ…してるっ？」
「えっ…？」
桜時の問いかけに、目を丸くする輝矢。
「ええ、そりゃあもう、ハチと二人きりで心臓バクバクというかっ…」
「そういう緊張じゃねぇっ！！」
饒舌に話す輝矢に、桜時が勢いよく突っ込みを入れる。

「明日のことだよっ！」
「ああっ…」
桜時に指摘された輝矢が、あまり興味なさそうに頷く。

「どうですかねぇ…」
「締まらねぇ返事だなぁ～っ、みんなの前では散々っ、偉そうなこと言ってたくせによぉっ」
「ハチの前では、強がらずにいられるんですよっ」
「んなっ…！！」
笑顔で答える輝矢に、桜時がその顔を、景気よく赤色に染める。

「だっ誰がっ…！」
「そうですねぇ…“緊張”というのとは、少し違うかも知れませんねぇ…」
「へっ…？」
海を見つめながら、自分でも戸惑うような言葉を口にする輝矢に、桜時が赤くなっていた顔をまた白に戻し、目を丸くして、輝矢を見つめる。

「どちらかと言うと…“怖い”、ですかね…」
「怖い…？」
「ええっ…」
聞き返した桜時に、輝矢が遠くを見るような瞳を見せながら、答える。

「世界中の人々を守れないことが怖い…大切な仲間を失うことが怖い…」
「輝矢っ…」
言葉を紡ぐ輝矢を、桜時が目を細め、見つめる。

「思っても仕方のないこととわかってはいますけど…それでもやっぱり、怖い、ですかねぇ…」
「……。」
桜時がそっと、目線を落とす。輝矢の言葉の意味が、輝矢の恐怖が、桜時にもわかるような気がした。明日の決戦を前にして、恐怖しないものなどいないだろう。

「……珍しいよなっ」
「えっ？」
遠くを見ていた輝矢が、桜時の声に振り向く。

「お前が素直に“怖い”とか言うなんて。珍しいってか、初めて？」
「ハチっ…」
「いっつも“大丈夫”だの“平気”だのの、一点張りだったのにさっ」
「……っ」
桜時の言葉を聞いていた輝矢が、そっとその口元を緩める。

「ハチには何でも言えるんですよっ、自然に素直になれるというかっ」
そう言って、穏やかな笑みを浮かべる輝矢。
「ハチのこと、頼りにしてるからですかねぇ～」
「お前が俺をぉっ？まっさかぁっ」
「ホントですよっ」
疑うように声を出す桜時に、輝矢が明るく微笑みかける。

「頼り、ねぇ…」
「そう、そこで一つ提案なんですが…」
「提案っ？」
声のトーンを落とす輝矢に、桜時が少し戸惑うように振り向く。
「ハチからチュ～してくれたら、私の恐怖も吹っ飛ぶと思うんですよっ」
「何でも素直に言い過ぎだろっ！！」
軽く右手を上げて意見する輝矢に、桜時が勢いよく怒鳴りあげる。

「えぇ～っ？ダメですかぁ？」
「当たり前だっ！！」
「チっ…」
「舌打ちをするなっ！！」
悔しがる輝矢に、桜時がさらに声の音量を上げる。

「ったくっ！どこが怖がってんだよっ！全然っ、いつも通りじゃねぇーかっ！」
「いつも通り、ですねぇ…確かに…」
顔をしかめて、不満げに声を発する桜時を見て、笑みを浮かべな

がらも、少し残念そうに肩を落とす輝矢。

「では、そろそろ戻りましょうか。グレーテルに心配かけたくないですし」

「へっ?あっ、ああっ」

笑顔を見せ、桃原家へと歩き出していく輝矢に、桜時が少し戸惑いながらも頷く。

「……。」

遠ざかっていく輝矢の背中を見つめ、少し眉をひそめる桜時。

「輝矢っ…!」

桜時が足を踏み出し、輝矢の名を呼ぶ。

「えっ…?」

前を歩いていた輝矢が振り返ると、伸ばされた桜時の手が、輝矢の腕を掴んだ。

「……っ!」

近づく桜時の顔に、輝矢が大きく目を見開く。

『……っ』

二人の唇が、重なった。

「えっ…」
重なった唇はすぐに離れ、輝矢の口から戸惑いの声が零れ落ちた。
「ハっ…」
「ぎゃあああああっ！！」
輝矢が桜時の名を呼ぼうとしたその時、桜時が勢いよく悲鳴をあげ、輝矢から手を離して、その場に思いきり倒れ込んだ。
「もっ…もうダメ…ぐぷっ…」
「……。」
白目を剥きそうになっている桜時を、輝矢が呆れた表情で見下ろす。
「チュ～されて倒れるならともかく、自分からしといて倒れるって凄いですよね…」
「ううぅっ…」
呆れきった様子の輝矢の言葉を聞きながら、少し頭を押さえ、ゆっくりと起き上がる桜時。
「まぁでもっ」
輝矢がその場で膝を折り、地面に座ったままの桜時の顔を覗き込む。
「本当に恐怖が吹っ飛びました。ありがとうございます、ハチっ」
「……っ」
嬉しそうに微笑む輝矢を見て、情けない表情を見せていた桜時が、

真剣な顔を作る。

「輝矢っ…」
「はいっ？」
呼びかける桜時に、答える輝矢。

「お前が…この世界中の、すべての人間を守るって言うんならっ…」
桜時の透き通った、まっすぐな青い瞳が、輝矢へと向けられる。

「俺は、すべての人間を守る、お前を守るっ」
「……っ」

強く言い放つ桜時に、少し驚いた顔を見せる輝矢。

「……。」
少し俯くと、輝矢はすぐにその口元を緩めた。

「ありがとうございます…ハチっ…」
再び礼を言う輝矢。

「最高の口説き文句ですっ」
「へっ…？」
輝矢が桜時の襟元を掴み、強く桜時の顔を引き寄せる。

「うっ…！」

「……っ」

桜時が拒否する間もなく、再び、二人の唇が重なった。

「ふぅ～っ」

「……。」

唇が離れ、桜時が硬直する中、満足げな笑みを浮かべた輝矢が、顔を上げる。

「やっぱりコッチの方が、しっくり来ますかねぇっ？」

「もうっ…どっちでもいいっ…」

問いかける輝矢に対し、桜時はがっくりと首を落とした。

こうして、決戦前、最後の夜は更けていった。

第８９章　最後の戦場　☆１

人類最後の日となるかも知れぬ日が、ついに訪れた。

最終決戦当日・早朝。龍国・青守トマトの屋敷裏。

「……。」

まだ夜の明けていない暗い空の下、オトポリの制服に身を包んだゴンは一人、昨日出来たばかりのトマトの墓を訪れていた。

「行ってくるよ…トマト先生…」

ゴンの小さな声が、墓に落とされる。

「随分と早いのですね」

「あっ？」

静けさの中、後方から聞こえてくる声に、少し戸惑うように振り返るゴン。

「竹取っ」

「おはようございます」

ゴンが振り返ると、そこには笑顔を見せた輝矢が立っていた。輝矢がゆっくりと、ゴンの方へと歩み寄って来る。

「お前こそ早いじゃねぇーかっ、まだ夜明け前だぞっ？」

「昨日、早く寝かされたものですから」

ゴンの横に並び、トマトの墓と向き合う輝矢。
「早く目が覚めてしまいまして」
「あー、それ、俺もっ。昨日九時に寝たら、今朝二時に起きちまってさっ」
「そうですか」
相槌を打つゴンに、輝矢が笑顔を向ける。

「……。」
爽やかな笑顔を見せる輝矢を見て、少し考えるような表情となるゴン。

「昨日より、前向きな顔だなっ」
「えっ…？」
ゴンの言葉に、輝矢が首を傾ける。
「前向き…？」
「ああっ、昨日は、肝は据わってたけど、どーも後ろ向きくさい顔してたからなぁ、お前っ」
「そう、ですかねぇ…？」
輝矢が眉をひそめながら、右手で軽く自分の頬を撫でる。

「いいことでもあったか？」
「えっ…」
ゴンの急な問いかけに、戸惑いの声を漏らす輝矢。

――俺は…すべての人間を守る、お前を守るっ――

「……っ」
思い出される桜時の言葉に、輝矢の口元が緩む。

「ええっ、少しっ」

「そうかっ」
微笑む輝矢を見て、ゴンもそっと笑みを浮かべた。

「じゃあ、まっ、ゆっくり話せよ。俺はもう終わったから」
「えっ？」
そう言ってトマトの墓に背を向け、立ち去ろうと足を進めるゴンに、輝矢が不思議そうに振り返る。

「どこへ？」
「もう一つっ、寄るとこ、あるんでなっ」
「……っ」
ゴンの言葉を聞き、輝矢が少し眉をひそめる。

「ゴンっ」
「あっ？」
輝矢に名を呼ばれ、足を止めて振り向くゴン。

「ジローによろしくお伝え下さい」
「……ああっ」
ゴンが向かおうとしている場所を知る輝矢に、ゴンは少し驚いた顔を見せたが、すぐにその表情に笑みを浮かべ、輝矢の言葉に大きく頷いた。

「じゃあ、また後でな」
「ええっ」
軽く言葉を交わすと、ゴンはそのまま、その場所から去っていった。

「……。」

一人残った輝矢が、再びトマトの墓の方へ、目を落とす。

「ババアっ…」

輝矢はゆっくりと、トマトを呼んだ。

エセお菓子の家こと『桃原家』。

「ふわぁ〜あっ…」

大きな欠伸をしながら、ハチが二階から降りてくる。

「グレーテルぅ〜、水ぅ〜っ」

「おそよう」

「へっ？」

欠伸の止まぬ内に、気の抜けた声を発しながらキッチンへと入ったハチであったが、返ってくるグレーテルのものとは違うその声に、不思議そうに顔を上げる。

「タローっ」

「おそよう、ハチくんっ」

キッチンでハチを迎えたのは、ダイニングテーブルでいつものココアを飲んでいる太狼であった。キッチンには太狼の姿しか見当たらず、ヘンゼルもグレーテルもいない。

「“おそよう”って、まだ夜明け前だぞっ？」
「だってハチくん以外は、もうみんな起きて、どっか行っちゃったよぉ～？」
「へっ？」
太狼の言葉に、ハチが目を丸くする。
「そういえば…えらく静かなような…」
「もうお家には、ハチくんと僕しかいないよぉ～」
リビングの方を覗き込み、ハチが思わず顔をしかめる。皆、寝静まっているというより、まったく人の気配がしなかった。

「えっ？じゃあ、ヘンゼルとグレーテルは？」
「オトポリ本部ぅ～今日の作戦配置の最終確認だってぇ～」
「へぇ～…って、えええぇっ！？」
「うわっ」
一度は頷いたものの、いきなり大きな声を出して驚くハチに、太狼が思わず、持っていたココアを零しそうになる。
「あっあいつらも行く気なのかぁっ！？」
「うん～昨日、君達が寝た後、気合い入れて、武器磨いてたよぉ～」
「そんなっ…」
眉を寄せたハチが、複雑そうな顔を見せる。

「危ねぇーのにっ…」
「“明日には鬼になってしまうかも知れないんじゃ、どこに居たって危険だ”」
「へっ？」
俯いていたハチが、太狼の声に顔を上げる。
「“なら、少しでも自分たちに出来ることを、出来る限りやりたい”、だってさっ」
ハチの方を振り向いた太狼が、穏やかな笑みを見せる。

「そう言われたら、なぁ～んか止め損なっちゃったっ」
「タローっ…」
笑顔を見せる太狼に、そっと目を細めるハチ。ハチが気にかけるように、太狼も二人のことを気にかけ、止めようとしたのだろう。太狼に止められなかったのであれば、恐らく、ハチにも止めることは出来ない。

「どこに居ても危険、か…」
ヘンゼルたちの言葉を繰り返し、ハチが少し視線を落とす。

「自分たちに出来ることを、出来る限りやる…」
「えっ…？」
同じように二人の言葉を繰り返す太狼に、ハチが不思議そうに顔を上げる。

「僕らはみんな…そうなのかも知れないね…」
「……っ」
決して明るくはない笑みを浮かべる太狼を見て、目を細めるハチ。

「そうだなっ…」
ハチは、その言葉にゆっくりと頷いた。

「……。」
視線を落としたまま、それでもやはりヘンゼルたちを心配している様子を見せるハチを見て、太狼がそっと表情を曇らせる。

「ねぇ、ハチくんっ」
「んっ？」

太狼に名を呼ばれ、ゆっくりと顔を上げるハチ。

「君にはもうっ…命力はない…」

「……っ」

太狼の言葉に、ハチがハッとした表情を見せる。

「取り戻しに行くことが目的だけど、恐らく戦闘は、命力なしでのものとなる…」

厳しい表情を見せた太狼が、まっすぐにハチを見つめる。

「君があのシルクの分身・ナイトを倒せたのも、命力があったからこそのことだ…」

「わかってるっ」

真剣な顔つきとなり、しっかりと頷くハチ。

「命力を失った俺の戦力に、お前が不安を感じるのもわかる。けど俺はっ、それでも戦っ…」

「戦って、死なない自信はあるっ？」

「……っ」

ハチの言葉を強く遮り、問う太狼に、ハチが少し驚いた顔を見せる。ハチをまっすぐに捉える太狼の瞳は真剣で、いつもの軽い空気はまったくなかった。

「あるっ…？」

「それはっ…」

もう一度問いかける太狼に、そっと俯くハチ。命力を失ったことで、桜時自身の力は半減以上に影響を受けた。しかも敵はシルクの側近となれば、死なないでいる自信など、持てるはずもないだろう。

「五分五分っ…くらいかなぁ…」

「ダメ。死んだら針千本、突き刺すから」

「飲ますよりきついわっ！！」
自信なく答えたハチに、強くダメだしを入れる太狼。そんな太狼に、ハチが思わず突っ込みを入れる。
「だいたいお前っ、いっつも、むしろ俺を殺しそうな勢いのくせにっ…！」
「そうだね、僕個人としては、今すぐ君が塵となって消えても、何の問題もない」
「おおぉいっ！！」
言い切る太狼に、ハチが思わず大声をあげる。
「ったく、お前なぁっ…！」
「けど、君が死ねば、輝矢ちゃんが悲しむっ」
「……っ」
怒鳴りあげようとしたハチが、太狼の言葉に思わず、自分の言葉を呑み込む。
「あの子が悲しむことが、僕は一番嫌いだ」
「タロー…」
その、太狼の迷いのないまっすぐな表情に、ハチが思わず目を細める。
「はぁっ…」
「……っ？」
深々と溜息をつき、肩を落とすハチに、太狼が少し首を傾げる。
「お前のその言い切っちゃう感じっ、ホントにすげぇって思うよっ…」

「えっ…？」
「……っ」

――ボォォォ～ンっ！

ハチの言葉に、太狼が戸惑うような声を出したその時、ハチの体を白い煙が包み込んだ。

「ふぅっ」
人化し、桜時の姿となると、桜時が高くなった視線で、座っている太狼を見下ろす。

「俺さっ、ホントはちょっと怖かったんだっ」
「怖い？」
「ああっ」
聞き返した太狼に、大きく頷く桜時。

「鬼が島で、俺の力を浴びて…鬼人化してた奴が普通の人間になったり、死んだ奴が生き返ったりしたこと…」
「……っ」
桜時の言葉に、太狼が眉をひそめる。
「他にも、瀕死だった皆の傷が治ったり、骸鬼があっという間に消えたり、島中に花が咲いたり…」
笑みを浮かべながらも、その表情を曇らせる桜時。

「良かったことばっかりなんだけどさっ、けど、やっぱり…何か怖かった…」

――お前が生まれ持ったのは…神の力っ……――

いつか、座黒に言われた言葉。

「全部、俺がやったんだって思うと…すっごく怖かったんだっ…」

「……。」

桜時の言葉を聞きながら、太狼がそっと視線を落とす。あまりにも巨大な力を持ってしまった桜時の、抱いたその恐怖が、太狼にも何となくわかる気がした。

「だから…命力が失くなった時、正直、ちょっとホッとしたっ…」

桜時が言葉の通りに、安心した笑みを浮かべる。

「あっ、別に命力取られちゃったことを、言い訳してるわけじゃねぇーからなっ！」

「わかってるよぉっ」

慌てて付け加える桜時に、太狼が少し呆れ気味に答えを返す。

「どっち道、命力を奪われたのは、君の責任だしっ」

「うわぁ…はっきり言ったな…」

冷たく言い切る太狼に、桜時ががっくりと肩を落とす。

「……っ」

肩を落としたまま、再びその口元を緩める桜時。

「それにっ、俺にはまだ、花力があるっ」

桜時が自分の右手を見つめ、確かめるように右手を握り締める。

「朱実の、母さんから受け継いだ花力がっ…」

父から聞いた母のことを思い出し、穏やかな笑みを浮かべる桜時。

「昔っ、俺、孔雀さんに付いて、龍国に来たことがあってさっ」
「えっ…？」
急に話を変える桜時を、太狼が戸惑うように見る。
「そん時、青守の屋敷で、同い年くらいの奴と会ってさっ」
懐かしむように、天井を見上げる桜時。
「すっごい暗い顔してたからっ、俺、庭の木、桜に変えて、その花びらをソイツにあげたんだっ」
「……。」
続く桜時の話を、太狼は真剣な表情で聞く。
「そしたら、ソイツっ…」
天井を見ていた顔を下げ、桜時がそっと目を細める。
「“ありがとうございます”って、笑ったんだよっ…」
――ありがとう…ございます……――
思い出される笑顔に、喜びを滲ませるように、大きな笑みを浮かべる桜時。
「その時っ…俺は花力が大好きになったっ…」
桜時が笑みを浮かべ、自分の両手を見つめる。

「だから最後までっ、この花力で戦うっ」
「……そうっ」
笑顔を見せ、迷いなく答える桜時に、少し間を置いた後、太狼は穏やかに笑みを浮かべ、ゆっくりと頷いた。

「さってとっ」
そう言うと、桜時がキッチンの前へと立ち、コップに水を入れて、あっという間にそれを飲み干す。
「俺もとっとと準備するかなぁ～っ」
空になったコップを残し、キッチンを出て行こうと入口に立つ桜時。

「タローっ」
「……っ？」
キッチンの入口に立った桜時が、太狼に背を向けたまま、太狼の名を呼ぶ。名を呼ばれた太狼は顔を上げ、桜時の方を見た。

「何っ？」
「……っ」
問い返した太狼の方を、桜時が振り返る。

「俺は死なない」
「……っ」
真剣な表情とまっすぐな瞳で、はっきりと言い放つ桜時に、少し驚くように目を開く太狼。

「約束する…」

桜時の透き通った青色の瞳が、太狼を捉える。

「だからっ…俺がちゃんと無事に戻って来たらっ…」

ゆっくりと緩む、桜時の口元。

「あいつを俺にくれよなっ！」

「……っ！」

満面の笑顔を見せる桜時に、太狼がさらに大きく目を見開く。

「んじゃっ、俺っ、支度してくっからぁ～っ！」

そう言って軽く手をあげると、桜時は足早にキッチンを後にし、二階へと登っていく音がキッチンにも聞こえてきた。

「……。」

キッチンに一人残った太狼は、少し呆然とした表情を見せて、手元にあるココアの入ったコップを眺める。

――あいつを俺にくれよなっ！――

「……っ」

先程の桜時の言葉を思い出し、太狼がそっと口元を緩める。

「だってさっ…朝日、武矢っ…」

笑みを浮かべた太狼が、天井を見上げ、遠い瞳を見せる。

「……。」

キッチンに、しばらくの間、沈黙が走る。

「やっぱり…戻って来ない方がいいかも…」

ポツリと呟き、複雑そうな表情を見せる太狼であった。

第８９章　最後の戦場　☆２

桃原家付近の海岸。

「……。」

夜明け前だというのにもう目覚め、すっかり準備を整えて桃原家を出た門貴は、まだ暗い海に、右手に持った如意棒を掲げ、まっすぐにそれを見つめていた。

「後、一戦っ…」

如意棒を見つめながら、門貴が感慨深そうに呟く。

「後、一戦やっ…一花…」

失った大切な人の名を口にし、門貴がそっと笑みを浮かべる。

「どうしょーもない、ただの暴れザルやったにしては、ようやってきた方やろぉ？」

まるで、そこに一花がいるかのように、門貴は自然に話しかける。

「だから最後もっ、ばっちり勝ってくるわっ！」

如意棒を左手で小突き、門貴は誓うように言った。

オトポリ本部・客人控え室。

「これが頼まれてた滅羽百枚とぉ、裂羽二百枚とぉっ、癒羽千枚だよぉ～っ！」

「……。」

机の上に積まれる、大量の色羽を見て、げっそりとした表情を見せるのは由雉。

「何かぁ…頼んでた数と全部、桁が一つ、違うんだけどぉっ…」

「備えあれば憂いなしだよっ！マイソンっ！」

「あっそう…」

由雉へと色羽を差し出したのは、ハネキングこと由雉の義父・ハヤテであった。昨夜、龍国へと駆けつけたのは、由雉へと色羽を届けるためであったようで、オトポリを通して連絡をもらい、やって来たようだ。

「それに、これは彼の分も入ってるんだよっ」

「彼っ？」

ハヤテの言葉に、由雉が眉をひそめる。

「黒羽クンっ」

「……っ」

ハヤテの口から出たその名に、驚いた顔を見せる由雉。

「で、あってたっけ？ウルシさんの息子さんっ」

「えっ、あ、うんっ…」

「彼も一緒に行くんだろうっ？」

「うんっ…」

次々と問いかけるハヤテに、由雉が少し躊躇いながら頷く。

「ならこの羽根を、彼にも渡してあげて欲しいっ…」

笑顔を見せながらも、真剣な瞳を向けるハヤテ。ハヤテと黒羽の父・ウルシは、どちらも天才と呼ばれる程の羽根造りであったが、ハヤテのみが大成し、ウルシは落ちぶれて、ハヤテを恨んだまま、死んでしまったのである。

「それとも僕の羽根なんて、嫌がって使ってくれないかなぁ～っ？」
「かもねぇっ」
「えええぇっ！？やっぱりぃっ！？」
あっさりと答える由雉に、激しくショックを受けるハヤテ。

「折角、精魂込めて作ったんだけど…」
「はぁっ」
がっくりと俯き、落ち込んでいるハヤテを見て、由雉が呆れたように深々と溜息をつく。

「ウソっ、ウソだよっ」
「えっ…？」
由雉の言葉に、ハヤテが戸惑うように顔を上げる。

「喜ぶと思うよぉっ、きっと」
「……っ」
笑顔を見せる由雉に、大きく目を見開くハヤテ。

「愛してるよぉ～っ！マイソン～っ！！」
「だから何でっ、そんな話になるんだよっ！！」
突然立ち上がり、息子への愛を叫び出すハヤテに、由雉が少し恥ずかしそうにしながら、怒鳴りあげる。

「とっ、とにかく、羽根はありがとぉっ」
由雉が手元に持っている袋の中に、ハヤテから渡された大量の羽根を入れていく。

「じゃあボク、そろそろ行っ…」
「由雉っ」
「……っ」
立ち上がり、部屋を出て行こうとした由雉が、呼ばれる名に、思わず足を止める。

「何っ…？」
少し戸惑いがちに、ハヤテに聞き返す由雉。

「また…虹羽を使うのかいっ…？」
「……っ」
真剣な表情で問いかけるハヤテに、由雉が眉をひそめる。

「うんっ…使うよ、多分っ…」
「……。」
頷く由雉に、ハヤテの表情が険しくなる。

「これ以上使えば、君の体がっ…」
「うんっ…わかってるっ…」
ハヤテが言い終わらないうちに、しっかりと頷く由雉。

「それでも多分、使うよっ」
「由雉…」

笑顔を見せる由雉に、ハヤテが目を細める。

「それは…自分の為に？それとも他人の為に？」

「うぅ～んっ…」

ハヤテの問いかけに、由雉が悩むように首を捻る。

「両方っ、かなぁっ」

「……っ」

晴れやかな笑顔で答える由雉に、ハヤテが少し驚いた表情を見せる。だがすぐにハヤテは口元を緩め、優しい笑みを浮かべた。

「マイソンは、僕と初めて会った頃から…少し変わったね」

「えぇ～？そぉっ？」

ハヤテの言葉に、首を傾げる由雉。

「うんっ、大人っぽい顔をするようになったよっ」

「……っ」

微笑んで答えるハヤテに、由雉が目を丸くする。

「そうかなぁ～？昨日っ、サルたちにお子ちゃまだって、バカにされたけどぉっ」

「待ってるよっ」

「えっ…？」

首を捻っていた由雉が、ハヤテの言葉に、素早く顔を向ける。

「ミチルや幸コちゃんや幸之助くんと、君の帰りを待ってるっ」

「……っ」

ハヤテのすべてを包みこんでくれるような、優しくて大きな笑顔に、大きく目を見開く由雉。その笑顔に自然と、笑顔が零れ落ちた。

「うんっ…！いってきますっ…！」

満面の笑顔を見せた由雉は、ハヤテの言葉に、大きく頷いた。

龍国・見届けの苑。

「あっ？」
「えっ…？」

トマトの墓で輝矢と別れ、ゴンが次狼の墓へとやって来ると、そこにはすでに先客がいた。

「リンゴっ」
「ゴン」

次狼の墓の前に立ち、訪れたゴンの方を振り返ったのは、リンゴであった。

「珍しいわね、あんたが私より遅く来るなんて」
「トマト先生の墓寄ってたからな」
「……そっ」

ゴンがリンゴのすぐ横に並びながら、軽く言葉を交わす。ゴンの話に頷きながら、リンゴは少し表情を曇らせ、視線を落とした。

『……。』

瞳を閉じ、次狼へと祈りを送るゴンの横顔を、リンゴがまっすぐに見つめる。

「ふぅっ…」

しばらくすると、ゴンがゆっくりと目を開いた。

「じゃっ、行ってくるぜ、次狼っ」

次狼の墓へそう声を落とし、ゴンが墓へ背を向ける。

「お前も準備あんだろ？そう長居すんなよっ」

「ええ」

リンゴにそう言って、ゴンがその場を去ろうと足を踏み出していく。

「……ゴンっ…！」

少し迷うように俯いた後、勢いよく振り返り、ゴンの名を呼ぶリンゴ。

「あっ？」

名を呼ばれたゴンが、その場で足を止め、振り返る。

「何っ…」

「どうして言わなかったの？」

「えっ…」

「トマトお祖母ちゃんを殺したのが、諸刃だってことっ」

「……っ」

厳しい表情を見せ言い放つリンゴのその言葉に、ゴンが少し動揺するように目を見開く。

「何でっ…」
ゴンが、戸惑うような声を漏らす。
「昨日の夜、パパから聞いたわっ…あんたには犬孝さんから、もう伝わってたはずだって…」
「……そうか…」
リンゴの言葉を聞き、頷きながら俯くゴン。
「あっ、ああぁ～っ！んだよっ、お前知らなかったんだぁっ！？俺、てっきり知ってんのかとっ…！」
「フザけたこと抜かしてると、蹴るっ」
「……。」
脅迫にも似たその言葉に、白々しく繋いでいた言葉を、ゴンがあっという間に止める。
「悪いっ…」
「……っ」
ポツリと謝るゴンに、眉をひそめるリンゴ。
「私が…傷つくと思った…？」
「……。」
静かに問いかけるリンゴに、ゴンが思わず目を落とす。
「お前っ…諸刃のこと、好き…だったし…」
「……っ」
遠慮がちに答えるゴンに、リンゴが少し目を細める。

「はぁっ…」
肩を落とし、深々と溜息をつくリンゴ。
「何、変な気遣ってんのよっ」
「えっ…」
リンゴの声に、俯いていたゴンがゆっくりと顔を上げる。
「確かに、昔は好きだったわよっ？寡黙なところに、憧れてたっ」

――リンゴ…――

いつも無表情の諸刃が、不意に見せる優しい笑顔に、かつてのリンゴは心惹かれていた。

「けど、今は違うからっ…」
「そっ、そうかっ…」
はっきりと答えるリンゴに、ゴンが控え目に頷く。

「リンゴ…」
「何よっ？」
「……っ」
振り向いたリンゴに、ゴンは少し悩むように俯いた後、決意した表情を見せ、顔を上げた。

「今日の戦場で諸刃と会ったら…俺は諸刃を殺すっ」
「……っ」
強く言い放つゴンに、リンゴが驚いた表情を見せる。

「もうっ…これ以上、あいつに誰も殺させるわけにはいかないっ…」

――次狼ぉぉぉぉっ！！――

諸刃に奪われた、大切な命。

――諸刃を…諸刃を頼みます……――

自らの命を奪った諸刃のことを、ゴンへと託した次狼。

「だから俺が、終わらせるっ…あいつの命を奪うことでっ…」

「……。」

険しい表情を見せるゴンを、まっすぐに見つめるリンゴ。迷いも曇りもないゴンのその瞳の中に、かすかな悲しみが見えるようで、リンゴはそっと、その表情を曇らせた。

「……っ」

自らの迷いを振り切るように、リンゴがその瞳を閉じる。

「わかった…」

「……。」

リンゴが頷いたことを確認すると、ゴンは再びリンゴに背を向け、見届けの苑を去っていった。

「これで…いいんだよね…？」

ゴンがいなくなると、再び振り向き、リンゴが墓の方を見る。

「次狼っ…」

次狼の墓を見下ろし、リンゴがそっと目を細める。

――お前っ…諸刃のこと、好き…だったし……――

「……っ」

ゴンの言葉を思い出し、リンゴが口元を緩める。

「相変わらず鈍いよねぇ、あいつっ」

そう呟き、リンゴはどこか諦めるように、肩を落とした。

戻って、トマトの墓前。

「ではトマト…いってきます…」

閉じていた瞳を開いた輝矢が、笑みを浮かべ、トマトの墓へそう伝える。

「……っ」

トマトの墓に背を向け、ゆっくりと振り返る輝矢。

「あっ…」

振り返った輝矢が、驚くように目を開く。

「輝矢ぁぁ〜んっ！！」
「朝からテンション高すぎぃ〜っ」
「まぁまぁっ、低いよりイイじゃねぇーかっ」
輝矢の見つめるその先には、輝矢へと大きく手を振る門貴と、そんな門貴に呆れた視線を送る由雉、そして由雉を宥める桜時の三人の姿があった。
「ハチ、サル、キジっ…」
三人のことを呼びながら、輝矢が三人の元へと歩み寄っていく。

「いよいよだなっ」
「俺はどこまでも輝矢んと一緒に行くでぇ〜っ！」
「もうみんな集まってるんだしぃ、とっとと行こうよぉ〜っ」
「……っ」
特に緊張した様子も見せず、いつも通りの笑顔を向ける桜時、門貴、由雉に、見つめていた輝矢が、そっとその口元を緩めた。

「三人ともっ、獣化してもらえませんか？」
『へっ？』
輝矢の言葉に、皆が目を丸くする。

「お願いします」
『……っ』
戸惑っていた三人であったが、笑顔で願う輝矢に、目を見合わせ、大きく頷き合った。

――ボォォォ〜ンっ！

白い煙に包まれ、三人がそれぞれ、イヌ、サル、キジの姿となる。

「これでぇ、いいのかっ？」
「……っ」
「ふえぇっ…！？」

獣化した三匹を、その場にしゃがみ込んだ輝矢が、大きく両手を広げ、三匹一斉に力強く抱き締めた。

「ちょちょっ…！輝矢っ…！」
「いっやんっ！輝矢んっ！俺っ、嬉し過ぎて死にそぉ～っ！！」
「く…苦しいっ…」
輝矢に抱き締められ、ハチが顔を真っ赤にし、モンキが幸せそうに顔を緩ませ、ユキジが息苦しそうに顔を歪ませる。

「輝矢っ…！何っ…！」
「ありがとうっ…」
『……っ』
輝矢の口から零れ落ちたその言葉に、三匹が少し目を見開く。

「輝矢っ…？」
「アナタたちがいたから…ここまで来れた…」
戸惑うようにユキジが名を呼びかける中、輝矢がゆっくりと言葉を続ける。

「アナタたちがいてくれたから…私は今、ここにいるっ…」
『……。』

噛み締めるように呟かれるその言葉を、三匹は真剣な表情で、しっかりと聞き入る。

「なっ…」

しばらく黙りこんでいたユキジが、少し慌てるように声を出す。

「なぁ～に言っちゃってるんだよぉ～っ！急にいっ！」

「由雉っ？」

羽根を広げ、輝矢の腕の中から抜け出たユキジが、尖らせた嘴で、輝矢の方を見下ろす。

「せやでぇ～？今生の別れみたいなこと、言わんといてやぁ～っ！輝矢んっ！」

「門貴っ」

輝矢から体を離したモンキが、少し困ったような顔で、輝矢を見上げる。

「ちゃ～んと皆で帰って来ようぜっ！礼とかはその後っ！なっ？」

「ハチっ…」

モンキの横に並び、明るく笑いかけるハチに、輝矢もそっと笑みを浮かべる。

「そうですね…アナタがたに礼を言うなんて、私、どうかしてました」

「そこまで言い切るかなぁっ！？」

さらりと答える輝矢に、ハチが思わず突っ込みを入れる。

「ではっ」

踏ん切りをつけたように言った輝矢が、まっすぐな瞳で、改めて三匹の方を見る。

「イヌっ」
「おうっ！」
「サルっ」
「はいはぁぁ～～いっ！」
「キジっ」
「なぁ～にぃ～っ？」
輝矢の呼びかけに、それぞれ返事をする三匹。

「どうか、私、竹取輝矢とともに最後の鬼退治を…そしてっ…」
決意を込めた表情を見せた輝矢が、大きな笑顔を見せる。

「最後の勝利をっ…！！」
『おうっ！！』

輝矢の声に、三匹は大きな声で返事をした。

第８９章　最後の戦場　☆３

そして夜明け直後。オトポリ本部前。

『ふっはぁぁ～っ……』

オトポリ正面玄関に立った、巨大な青色の龍を見上げ、ハチとモンキが大口を開き、感心しきった声を漏らす。

「リンゴに乗っていくのかぁ？中央塔っ」

「ええ、そうよっ」

問いかけるハチに、どこか得意げに答える青色の龍。それは、龍化したリンゴであった。

「オトポリの車で行くより、よっぽど速いんだからっ」

「けどぉ、リンゴって地龍でしょ～？龍国と鬼国跡地の間って、ちょっとだけだけど御伽湖があるんじゃぁ…」

「それなら昨夜の内に工事を終え、立派な道を作っておいたぞっ」

「道っ…？」

リンゴの代わりに答える座黒に、ユキジが目を丸くする。

「何か…凄いことになってるなぁ…」

「まぁ人類の存亡が懸かっとうからなぁ～」

唖然とした表情を見せるユキジに、モンキが少し暢気に答える。

「けどっ…」

ハチが、座黒やイチゴの後ろに並んだ、オトポリ隊員たちやトマトの旦那勢を見回す。

「何かぁ…昨日より数少なくねっ？」
「ここにいるのは、東塔に行く連中と、お前らだけだ」
「へっ？」
ハチの問いかけに答えたのは、リンゴの横に立っている金汰。
「他の者たちは、もうすでに龍国を出て、それぞれの塔へ向かっている」
「そう、なのかっ…」
金汰の言葉を聞き、ハチが少し残念そうに肩を落とす。孔雀や松人たち、そして犬孝も、すでに南塔へ向かい、ここにはいないということになる。

「孔雀殿たちなら大丈夫っ、犬孝も付いていることだしなぁっ」
「あっ…ああっ、そうだな」
孔雀たちの身を案じるハチを、安心させるように、ハチの頭を撫でる座黒。そんな座黒に、ハチも笑顔を向ける。

「では、わしはイチゴとともに東塔へ向かうから、中央塔のことは頼んだぞっ、リンゴ、金汰っ」
『はっ！』
座黒の言葉に、リンゴと金汰が敬礼で返す。

「お気をつけて、桜時さんっ」
「ああ、イチゴもなっ」
笑顔で見送るイチゴに、ハチもそっと笑顔を返す。

「門貴様ぁ～っ！必ずやっ、必ずや私のところへ帰ってきて下さいませねぇ～っ！！」
「あ、ああっ…」
涙を流しながら、勢いよくモンキを抱き締めるヘンゼルに、モンキが青い顔をしながら、ノリ気でない返事を返す。

「グレーテルたちは東塔へ？」
「はいっ！ご主人様とともに、イチゴさんのフォローに当たりますっ！」
問いかけた輝矢へ、グレーテルが笑顔で答える。
「そうですか…どうか無理はせず、くれぐれもお気をつけて…」
「はいっ、輝矢様たちも、どうかご無事でっ」
「ええっ」
グレーテルの言葉にしっかりと頷いた輝矢が、その視線を動かし、グレーテルの横にいる太狼の方を見つめる。

「タロー…」
「……っ」
そっと名を呼ぶ輝矢の頭に、太狼がゆっくりと右手を乗せる。
「いっておいで、輝矢ちゃんっ…」
輝矢の頭を撫でながら、太狼が輝矢へ、優しい笑顔を向ける。

「そして、必ず帰っておいでっ…」
その瞳が、願うように輝く。

「僕らのもとへっ…」
「……っ」
太狼の言葉に、輝矢の口元が緩む。

「はいっ…！いってきますっ！」
笑顔を見せた輝矢は、太狼の言葉に、大きく頷いた。

「さっ！行くわよぉっ！」
その大きな体を起き上がらせたリンゴが、輝矢たちへ呼びかける。

『ああっ！』
「はいっ」
リンゴの背の上へと、次々に乗り込んでいく輝矢たち。輝矢たち四人と金汰が乗ったところで、最後に遅れるようにして、ゴンがリンゴの背へと足をかけた。

「ゴンっ」
「……っ？」
後方から呼ばれる名に、ゴンがゆっくりと振り返る。ゴンが振り返ると、そこには真剣な表情を見せた座黒が立っていた。

「気をつけてな…」
「……はいっ」
座黒の言葉にしっかりと頷き、ゴンがリンゴの背の上へと乗り込んでいく。

「中央塔部隊っ！出発するわよっ！！」
『おおおぉぉうっ！！』
リンゴの声に皆が大きな声をあげると、輝矢たちを乗せ、オトポリ本部を駆け抜けていった。

『……。』
遠ざかっていく龍を、その場に残った者たちが、しばらくの間、ゆっくりと見つめる。

「さっ、のんびりはしてられんっ！我らっ、東塔部隊も出発するぞっ！」
『はっ！』
座黒の声に、隊員たちがしっかりと答える。

「太狼っ」
「ええ、行きましょうっ」

呼びかける座黒に、太狼も真剣な表情を見せ、しっかりと頷いた。

鬼国跡地北方。玄上アリス率いる北塔部隊。

「あれが私たちの目標の北塔ねっ…」
オトポリ隊員、トマトの旦那勢とともに北塔を訪れたアリスは、少し離れた地点から塔の全体を確認し、そっとその瞳を細めた。

「敵の姿は見当たりませんが…」
「今のところはねっ」
隊員の一人に話しかけられ、アリスが素早く答えを返す。確かに、北塔の周りには誰の姿もなく、骸鬼一匹も見当たらない。
「でも嫌な気配がプンプンするわぁっ、これ以上、近づいたら出てくるわよっ」

「……っ」
アリスの鋭い言葉に、話しかけたオトポリ隊員が、思わず息を呑み込む。

「……“針器・六刻”…」
アリスが持っていた懐中時計の針を弾き、銀色に輝く神器・針器を目覚めさせる。長針と短針がまっすぐに伸びた六刻を構え、さらにその表情を研ぎ澄ますアリス。

「絶対に成功させて…輝矢の道を開かないとっ…」
自分に言い聞かせるように、アリスが呟く。

「失敗だけは絶対にっ…」
「ドレミファソラシドォォ～～～っ♪」
「だあああああっ！！」
緊張感を走らせていたアリスが、後方から聞こえてくる歌声に、思わず顔面から倒れ込む。

「ドシラソファミレドォォ～～～っ♪」
部隊の中で、ご機嫌に歌声を響かせているのは、トランプ兵団からこの部隊へと振り分けとなった城歌であった。

「うぅ～んっ、やっぱり戦場に響く歌はいいものレェ～♪じゃなくって、ねぇ～っ！」
「何やってるのよぉっ！あなたはっ！！」
「あラっ？アリスさんっ」
城歌のすぐ前へと歩み寄り、勢いよく怒鳴りあげるアリスを、城歌が陽気な笑顔で見つめる。

「“あラ”じゃないわぁっ！ここはもう敵地なのよぉっ！？そんな

歌なんか歌ってっ、敵に気づかれたらっ…！」
「リラックスっ、リラックスですファ～っ♪」
「えっ…？」
怒鳴りあげるアリスの両肩を、城歌が両手でそっと叩く。

「そんなに固くなってちゃ、勝てるものも勝てないファっ♪」
「……っ！」
城歌の言葉に、アリスがハッとした表情を見せる。

――失敗だけは絶対にっ……――

自分に言い聞かせるように、呟いていた言葉。自分の言葉で、さらに自分を追い詰めてしまっていた。余裕のないアリスの状態に気づき、城歌は気を配ってくれたのだろうか。

「あなたっ…」
「さぁっ！皆さんも歌ってリラックスですファ～♪ドレミファソラシドォ～っ♪」
『ハハハっ』
城歌が部隊の者たちへ向け、微笑み、歌いかけると、先程まで緊張感を走らせていた隊員たちの顔がほぐれ、所々から笑い声が漏れた。

「……っ」
そんな皆の様子を眺め、アリスが笑みを浮かべる。

「やっぱりあなた、歌い手になるべきねぇっ」

「えっ？」
アリスの言葉に、城歌が歌を止めて振り返る。
「平和になったら、なるファっ♪」
「そうねぇっ」
得意げに微笑む城歌に、アリスもさらに笑みを大きくした。

「さてとっ」
アリスが北塔の方を振り返り、表情を引き締めると、右手に握り締めた針器を構える。

「では北塔部隊っ！出撃するわよっ！」
『おうっ！！』

アリスの掛け声を合図にして、北塔部隊が一斉に、北塔へ向けて駆け出していく。その部隊の中央に入る、アリスと城歌。

「……っ」
『グガアアアっ！！』

部隊が北塔へと近づくと、北塔の周りの地面から、次々に骸鬼が姿を現した。

「出たファねっ」
「ええっ」
城歌の言葉に、鋭く頷くアリス。

「敵を蹴散らしてぇっ！北塔が一番に鬼力を封じるのよっ！！」
『おおおおうっ！！』

アリスの言葉に、北塔部隊は、気合いの入った返事を返した。

鬼国跡地西方。白雪率いる西塔部隊。

『グガアアアっ！！』

「うぅわっ」

西塔の周囲の地面から、次々と現れる骸鬼たちを見て、芹が思わず顔をしかめる。

「すっごい数ぅ～っ」

「さっきまで一匹も居なかったのに、どうして急にっ…」

「どこかの部隊が、先陣を切ったようねっ」

『えっ？』

白雪の言葉に、鈴白と芹が、目を丸くして振り向く。

「どこかの部隊がですか？虎昌様」

「えぇ～？どこの部隊ですかぁ？虎昌様ぁ～っ」

「下の名前で呼ぶんじゃないわよっ！気に入ってないんだからっ！！」

『うわっ』

いつも通りの怒鳴り声を返す白雪に、鈴白と芹が、いつものように耳を塞ぐ。

「大方っ、あの血の気の多そうな、竹取輝矢の親戚女のとこじゃないっ？」
「ではこちらも」
「ええっ、そろそろ行くとしようかしら」
鈴白の言葉に頷きながら、白雪がゆっくりと立ち上がる。

「じゃあオトポリ連中たちの配置は任せたわよっ」
「ふわぁっはっはっはっ！！任せておいてくれたまえぇっ！！」
白雪の言葉に、大き過ぎる声で頷くのは、黒のおかっぱ頭にオトポリ制服、背中に大きなマサカリを背負ったこの男・正刈鉄汰である。

「オトポリの若き隊長っ！この正刈鉄汰が付いているのだからっ、君は安心して鬼力を封じてくれたまえっ！」
「……。」
髪をかき上げ、自信満々に言い放つ鉄汰に、白雪が呆れきった表情で固まる。

「何で私の部隊が、あいつなのよっ…」
「面識もあるし、丁度いいだろうってことで、こうなったらしいですよ」
「はぁっ…」
答える鈴白に、白雪が深々と溜息をつく。

「きゃああっ！！鉄汰様っ！頑張って下さいぃ～っ！！」
「だあああっ！！」
鉄汰を黄色い声で応援する、戦場には不釣り合いな、ど派手な赤

いドレスを纏った女が視界に入り、白雪が勢いよく転倒する。

「紅バラっ！！」

「ああぁ～っ！虎昌お姉様ぁ～っ！」

勢いよく名を叫ぶ白雪に、女が嬉しそうな笑顔を見せ、大きく手を振る。この女は牛国の国主令嬢・紅原牛盛で、白雪とは昔からの友人なのである。

「何で貴女がここにいるのよっ！？」

「鉄汰様の雄姿が見れると聞いたものですからっ！」

「……。」

「お祭りのノリですね」

笑顔で答える紅バラに、凍りつくように固まる白雪。そんな白雪の横で、鈴白がポツリと冷たく言い放つ。

「もういいわっ…どうせ来たんだったら、貴女も戦っていきなさいっ…」

「はぁ～いっ！」

頭を抱えながら呟く白雪の言葉に、紅バラが明るく返事をする。

「では全班っ！指示通りっ、指定した位置へっ！！」

『はっ！』

鉄汰の言葉に頷き、待機していた隊員たちが、四方へと散っていく。

「鉄汰様っ！私はどこへいけばっ？」

「君はまぁ適当にっ…ただし、仲間には突進しないようにしてくれ」

「はぁ～いっ！」

鉄汰の指示にウキウキと答えながら、紅バラも隊員たちに混ざっ

て、散っていく。

「よいしょ～っ」

芹も立ち上がり、隊員たちとともに移動を開始する。

「では白雪様、僕らも…」

「……。」

「白雪様っ？」

俯いたまま、その場に立ち尽くしている白雪に、振り返った鈴白が、戸惑うように首を傾げる。

「白雪様、どうかしっ…」

「鈴白っ」

顔を上げた白雪が、鈴白の言葉を遮って、鈴白の名を呼ぶ。

「はい？何でしょう？」

「五秒だけ…」

白雪が鈴白へ、まっすぐな瞳を向ける。

「五秒だけ…手を握ってくれない…？」

「……っ」

そう言って、鈴白へと右手を差し出す白雪。思いがけない白雪の言葉に、鈴白が驚いた顔を見せる。だがすぐに鈴白は口元を緩め、優しい笑みを浮かべた。

「喜んでっ…」

微笑んだ鈴白が、左手で白雪の右手を包み、強く握り締める。

「……。」
その五秒の間、鈴白の手の温もりを噛み締めるように、深く目を閉じる白雪。

「……っ」
五秒経つと、白雪の方から手を離した。

「さっ！最後も派手に決めるわよぉっ！！」
「はいっ！」

強く言い放ち、白雪は鉄汰たちとともに、西塔へと駆け出していった。

第８９章　最後の戦場　☆４

鬼国跡地南方。朱実孔雀率いる南塔部隊。

『グガアアアアっ！！』

「ひやぁぁぁ～～っ！！」

南塔を囲む骸鬼たちが、次々と咆哮をあげると、それを見た竹人は震え上がるように、何とも情けない声をあげた。

「予想はしてたけど、これ程の数とはねぇ」

「これだけの大勢を見ると、さすがに圧倒されるなぁ」

「こっ怖いよぉ～っ！お兄ちゃんっ！梅ちゃ～～んっ！」

感心したように言葉を交わしている松人と梅人へ、竹人が泣きつくように訴える。

「なぁ～に、のんびりしているのっ？」

『お母様っ！』

そんな三人のもとへやって来たのは、戦場でも派手な着物を身に纏った孔雀であった。たくさんの骸鬼に怯えた様子もなく、孔雀は堂々とした姿を見せている。

「オトポリ連中はとっくに戦闘を開始してるわよっ？貴方たちもとっとと行きなさいっ」

前方に見える南塔を指差し、三人へと指示を出す孔雀。

「貴方たちが鬼力を封印しないと、始まらないんだからっ」

「それはそうだけどぉっ…」

孔雀の最もな意見に、竹人が渋々と頷く。

「あれっ？お母様は行かれないのですかっ？」

「私は後方支援よっ、指示を送る者が必要ですからねっ」
「とか何とか言って、面倒ごとは全部、僕らに押しつけっ…」
「何か言った？梅人」
「いえっ…」
自分だけ安全な配置につく孔雀に、文句を言おうとした梅人であったが、孔雀の鋭い視線に負け、あっさりと言葉を遮られる。

「じゃあまぁっ、行くとしようか」
「うんっ、ほら、竹兄っ」
「うえぇぇ～んっ！怖いよぉ～っ！」
先頭を松人が行き、その後を竹人を引っ張るようにして、梅人が続く。すでに骸鬼との戦闘を始めているオトポリ隊員たちの後方へと、駆け出していく三人。

「さてっ」
「……っ？」
孔雀の横に立っていた犬孝が、三人の様子を見て、自らも時雨丸を抜く。

「では俺も行くとします。可愛い甥っ子たちの護衛もしなきゃですしねっ」
「あの子たちは、雲雀の甥っ子ではあっても、貴方の甥っ子ではないわっ」
「ハハハっ…厳しいなぁっ…」
冷たく言い切る孔雀に、犬孝が少し冷や汗をかいて、苦い笑みを浮かべる。

「犬孝」
「はい？」
「あの子たちに何かあったら…」

顔を上げた孔雀が、鋭い瞳で犬孝を見る。

「貴方を消す…」

「絶対、マジですね…」

突き刺さる痛い程の視線に、犬孝が表情を引きつった。

「……。」

顔を引きつっていた犬孝が少し俯き、緊張を走らせたその表情を、柔らかなものへと変える。

「あの子…」

「……っ？」

そっと声を漏らす犬孝に、眉をひそめる孔雀。

「あの子の言葉に…絶望していた仲間が、希望を取り戻していました…」

――俺たちはまだ、“人”だっ――

もうすぐ鬼になるという我が身を前に、絶望していた仲間たち。

そんな仲間たちに、一瞬で希望を与えた、桜時の言葉。

「あの子の言葉に…皆が勇気をもらっていました…」

「……。」

続く犬孝の言葉を、孔雀が真剣な表情で聞き入る。

「桜時を、息子を、あんなに立派に育てていただいてっ…本当にありがとうございました…」
「……っ」
深々と頭を下げる犬孝を見て、そっと目を細める孔雀。

「顔を上げなさいっ」
「……っ？」
すぐに言い放つ孔雀に、犬孝が戸惑うように顔を上げる。

「別に私が育てたわけじゃないわっ…」
顔を上げた犬孝から、目を逸らすように、そっぽを向いたまま呟く孔雀。

「あの子が勝手に立派に育っただけよっ…」
「……っ」
素っ気なく答える孔雀を見て、犬孝が口元を緩める。

「でもあの子は、“貴女を見て育った”と、言うと思いますよ」
「……。」
微笑んで答える犬孝に、孔雀が少し顔をしかめる。

「では、いきます」
「犬孝っ」
「……っ？」
松人たちに続き、戦場へ行こうとする犬孝を、孔雀が呼び止める。

「死んではダメよ」

振り返った犬孝へ、孔雀がまっすぐな瞳を向ける。

「必ず生きて、戻って来るあの子を迎えてあげなさいっ」

「……はいっ」

孔雀の言葉に笑顔で頷き、犬孝は南塔へと、駆け出していった。

「……。」

去っていく犬孝の後ろ姿を見つめながら、孔雀がそっと目を細める。

「貴方も死んではダメよ…」

細めた瞳で、遠くに見える中央塔を見つめる孔雀。

「桜時っ…」

孔雀の祈るような声が、戦場に響き渡った。

鬼国跡地東方。青守座黒・桃原太狼率いる東塔部隊。

「目標確認っ！周囲に骸鬼と見られる敵多数っ！」

「うむっ…」

輝矢たちに少し遅れるようにして龍国を出た座黒たちであったが、東塔は一番、龍国寄りであるため、そう時間もかからずに、目標地点へと辿り着いていた。座黒たちが着くと、東塔の周囲にはすでに、大量の骸鬼が待ち構えていた。

「予想通りっ…さて、ここからどうするか…」
「そんなこと、考えてるだけ時間が無駄です」
「へっ？」
作戦を練ろうと首を捻っていた座黒が、横から聞こえてくるイチゴの声に、戸惑うように振り向く。

「正面突破でいきますっ」
「へっ？」
もうすでに青く輝き始めている両拳を構え、やる気満々に言い放つイチゴ。
「後に続いて下さいっ！」
「あっあの、ちょっとイチゴちゃんっ…！？」
『おおぉぉっ！！』
座黒が止めるのも無視し、真正面から骸鬼の群れへと飛び込んでいくイチゴと、そのイチゴに続くようにして、次々と駆け抜けていくオトポリ隊員たち。

「あっ…」
その場に取り残された座黒が、小さく声を漏らす。

「一応…わしが部隊長なのにっ…」
「はいはぁ～いっ！落ち込んでる暇があったら、座黒さんも戦って下さぁ～いっ」
がっくりと俯いている座黒を、手を叩きながら、急かすように声

をかける、こんな場所でも明るい笑顔を見せた太狼。
「でないとっ、ただの邪魔なオッサンですよぉ～っ」
「お前なっ…」
笑顔で容赦ないことを言い放つ太狼に、落ち込んでいた座黒が、思わず顔をしかめる。

「ご主人様っ！」
「我々はどうすればっ？」
「んっ？」
そこへ、大剣と持ったヘンゼルと鎖鎌と持ったグレーテルが、駆け寄って来る。
「ああぁ～、適当に戦ってぇ～その場の判断は、君達に任せるからぁ～」
軽い口調で、二人へと指示を与える太狼。

「イチゴちゃんを東塔へ送ることを優先してねっ」
『はいっ！かしこまりましたっ！』
太狼の言葉に、二人が笑顔を見せ、大きく頷く。
「よっしゃ～っ！！とっとと鬼力封じ込めてっ、門貴様のところに駆けつけるわよぉ～っ！！」
「しゃべりが男になってますわよぉ？お兄様っ」
気合いを入れて駆け出していくヘンゼルを、突っ込みを入れながらグレーテルが追いかけていく。

「さぁ～てとぉっ」
「んっ？」
一息ついて、腰に下げた神狼丸の柄に手を掛ける太狼を見て、座黒が目を丸くする。

「僕も行くかなぁ～っ」

「おっ…おいっ！」
「へっ？」
そう言いながら、ヘンゼルたちの後を追うように、皆の戦う方へと歩いていく太狼を、座黒が慌てて呼び止める。座黒の声に足を止め、不思議そうに振り返る太狼。

「何ですぅ～？」
「おっお前っ、戦う気かっ！？」
「そうですけどぉ？」
「なっ…！」
あっさりと答える太狼に、座黒が驚くように、大きく目を見開く。

「だっ、だがっ！お前っ！体がっ…！」
「別に人獣化さえしなきゃっ、少々刀使うくらい、問題ありませんよぉ」
太狼の身を案じるように、不安げに声を出す座黒に、太狼が平然と答える。

「あんな雑魚相手なら、刀で十分ですっ」
「だがっ…！」
「座黒さんっ」
「……っ？」
座黒の言葉を遮るように、強く名を呼ぶ太狼。

「僕を、誰だと思ってるんですっ？」
「……っ」
得意げに微笑む太狼に、座黒がそれ以上の言葉を呑み込んでしまう。

「神狼丸っ…」
座黒に背を向けた太狼が、鋭い瞳を見せ、皆が戦う方へと歩いていきながら、ゆっくりと腰に下げた刀を抜く。真っ黒な刀身の神狼丸が、太陽の光を反射して輝く。

「“狼刃”っ…！」

――バァァァァーーンっ！！

『ギャアアアアっ！！』

太狼の振り切った神狼丸から放たれた一閃が、目にも留まらぬ速さで戦場を駆け抜け、数十匹の骸鬼を、あっという間に掻き消す。

『うあっ…』
その光景を、圧倒された様子で見つめるオトポリ隊員たち。
『きゃあああああっ！！さっすがご主人様ぁぁ～～っ！！』
「凄いっ…」
黄色い声をあげるヘンゼルとグレーテルの横で、イチゴも思わず声を漏らす。

「さぁ～て…」
振り切った神狼丸を構え直し、太狼がゆっくりと口元を緩める。

「桃原太狼っ、最後の鬼退治といこうかっ」

鋭い瞳を見せて、かつての英雄は、再び戦場へと立った。

「……。」

そんな太狼の様子を、茫然と見つめる座黒。

「誰だっ…？あいつが戦える状態じゃないとか言ったのっ…」

思わずポツリと呟いてしまう、座黒であった。

鬼国跡地中央。

――ドォォォーンっ！

「……っ」

遠くの方から聞こえてくる衝撃音に、龍化したリンゴの背に乗ったままの輝矢が、そっと目を細める。

「戦いの音っ…」

「各塔での戦闘が始まったみたいねっ」

『えっ…！？』
リンゴの言葉に、ハチたちが表情を強張らせる。
「もうっ…！？」
「そんならっ、俺らも急がなっ…！」
「大丈夫よっ、もう着いたわっ」
『えっ…？』
焦ったように声を出したハチとモンキに、リンゴが冷静に答える。
「ゴンさぁ～んっ！リンゴさぁ～んっ！」
『あっ…！』
前方を見たハチたちが、見えてくる人影に大きく目を見開く。
「こっちっ！こっちっスぅ～っ！」
『羊スケっ！』
リンゴたちへと大きく手を振り、自らの場所を伝えているのは、羊スケであった。羊スケの横に、きれいに配列したオトポリ隊員や、トマトの旦那勢の姿が見える。
「何だっ、お前、いないと思ってたら、先に来てたのかっ」
「ええっ、俺がいなくっても、ちゃんと起きれたっスかぁ～？ゴンさんっ」
「当たり前だっ！ボケっ！」
小バカにするように問いかける羊スケに、ゴンが怒鳴り声で答え返す。
「少し遅れたかしらっ？」
「いえっ、時間通りっスっ！」

眉をひそめるリンゴに、笑顔を見せる羊スケ。

「よっ！」

金汰がリンゴの背の上で立ち上がり、羊スケのすぐ横へと飛び降りる。

「全員の位置は？」

「予定通りに。準備も万端で、いつでもいけるっスっ」

「そうかっ」

珍しくハキハキとした口調で答える羊スケに、金汰が満足げな笑みを浮かべる。

「敵はすでに、中央塔の周囲に展開してるっス。数は骸鬼が、ざっと二百匹っ」

「二百かっ…何とかならない数じゃないなっ…」

「それ以上増えなければ、ですけどね」

「ああっ…」

リンゴが言葉を付け加えると、金汰がそっと表情を曇らせた。

「他の塔はすでに、戦闘を開始している。こちらも早速、始めるとしようっ」

「はいっ」

『……っ』

金汰とリンゴの言葉を聞き、輝矢たちが皆、表情を引き締める。

「お前らっ、人化を」

「ああっ」

「おうっ！」

「うんっ」

――ボォォォ～ンっ！

ゴンの言葉に頷き、ハチ、モンキ、ユキジの三匹が白い煙に包まれ、それぞれ人化し、武器を構える。

「“月器…」

輝矢もそっと、右耳のピアスを弾く。

「三日月”っ」

目覚めさせた三日月を、右手に構える輝矢。

「作戦を開始するっ！！全員っ、戦闘態勢用意っ！！」

『はっ！』

金汰の指示に、四方に配置されていた隊員たちが、一斉に立ち上がり、武器を手に取る。

「ここがっ…」

中央塔と、それを包む骸鬼、そしてさらに外を覆うオトポリ隊員たちを見つめ、輝矢がそっと目を細める。

「ここが…最後の戦場っ…」

そう呟き、輝矢は三日月を握る手に、力をこめた。

中央塔内部。

「……。」

広間の窓から塔の外を見下ろし、諸刃が、相変わらずの無表情の中で、そっと眉をひそめる。

「あぁ～あっ…」

諸刃の横に立ち、同じように外を見下ろしているギンが、どこか呆れたような声を漏らす。

「どーしてこう、人間は、無駄な努力が好きなんでしょうねぇ～っ」

そう言いながら、口端を吊り上げるギン。

「人間で居られる最後の時間を、大人しく、幸せに過ごしておけばいいものをっ…」

「……っ」

嘲るようなギンの言葉に、諸刃が少し顔をしかめた。

「シルク様っ…」

諸刃が振り返り、広間の玉座に座るシルクの方を見る。

「人間どもが、各塔、そしてこの中央塔にまで…」

「わかっているわ…」

諸刃の言葉に、シルクが鋭く返事を返す。

「人である最後の一日…総力を結集して、最後の反抗っ…」
シルクが落ち着いた声で、言葉を紡ぐ。
「迎えてあげようじゃないっ…？折角なんだからっ…」
「フフっ…」
「……っ」
そのシルクの言葉を聞き、どこか楽しげな笑みを零すギン。そのギンの微笑みを横目に、諸刃が少し眉をひそめる。
「さぁっ…」
シルクが玉座に座ったまま、ゆっくりと両手を広げる。
「最後の戦場でっ…命を散らせてあげるっ…」
シルクの冷たい声が、中央塔の広間に、響き渡った。

第９０章　いざ最終決戦　★１

――最後の戦場で…命を散らせてあげるっ……――

鬼国跡地中央。

『グガアアアっ！！』

『……っ！』

中央塔を取り囲んでいる骸鬼が、一斉に激しい咆哮をあげ、地面から隙間を縫うようにして、新たな骸鬼が次々と姿を現す。

「うわっ！何か一気に臨戦モードっスっ！」

「敵さんは出迎える気満々のようだなぁっ」

焦ったように声を出す羊スケの横で、金汰が表情を鋭くする。

「一服してる暇もなさそうだっ」

そう言って、金汰が背中のマサカリを構える。

「よぉーしっ！それでは、これより作戦を開始するっ！！」

『はっ！』

金汰の言葉を合図にし、骸鬼の外周に分散するように配置している隊員たちが、皆立ち上がり、すぐにでも飛び出していけるように、それぞれの武器を構える。

『……っ』

緊張感走る表情で、ごくりと息を呑んだ輝矢たちも、それぞれの武器を構える手に力をこめる。

「お前たちは、俺が指示するまで、このままリンゴの上で待機していてくれ」
『えっ？』
その思いがけない金汰の言葉に、輝矢たちが皆、目を丸くする。
「四方の塔の封印が終わり、中央塔への道が開いた時点で、リンゴがお前たちを中央塔へと送り届ける」
中央塔を指差しながら、真剣な表情で話を進める金汰。

「だからそれまでは、ここで待機を…」
「ちょっ…！ちょっと待てよっ！」
「待機って、どういうこっちゃねんっ！」
「んっ？」
勢いよく問いかける桜時と門貴に、金汰がゆっくりと振り返る。

「言葉の通りだ。お前たちには、この骸鬼退治には参加せず、体力フルの状態で中央塔へ行ってもらう」
「参加せずってっ…お前らが戦ってんのを、大人しく見てろってのかよっ！？」
「そうだよぉ～そんな後味の悪いっ。それにさぁ、敵さんもあんなにいるわけだしぃ～？」
「せやせやっ！無茶やでぇっ！俺らが入らんかったら、こっちの戦力はかなり低くっ…！」
「無茶なことは、初めから承知だ」
『……っ』
まっすぐな瞳で、真剣に答える金汰に、桜時たち三人が思わず言葉を止める。

「命力の結晶を奪う、鬼力の放出をやめさせる、牢戸知玖を倒す…一つでも無茶でないことがあるか？」
「そっ…それはっ…」

金汰の問いかけに、思わず口ごもる桜時。

「今日、この場に集まった者たちに、“無茶をしないでおこう”と考えている奴などいない」

『……。』

続く金汰の言葉を、桜時たちが真剣な表情で聞き入る。

「皆、覚悟はしている。そうしてまで、お前らを前に進めようとしているんだ」

金汰が強い瞳で、突き刺すように輝矢たち、一人ひとりを見つめる。

「だから、お前らが迷ってくれるなよっ」

「金汰っ…」

そっと笑みを浮かべる金汰に、桜時が少し目を細める。

「重要なのは、骸鬼の殲滅でも、中央塔への道を切り開くまでの時間でもないわっ…」

『えっ…？』

言葉を挟むリンゴに、背の上の輝矢たちが、下を見る。

「重要なのは、タイミングよっ」

「タイミングっ…？」

「ええっ」

聞き返した桜時に、リンゴが大きく頷く。

「四方の塔が封印されたら、中央塔を包む鬼力が弱まる…でも、すぐにでも牢戸知玖が、再び強化してくるはずよ」

鋭い表情で、中央塔を見つめるリンゴ。

「だから私たちは、その弱まっている間に、骸鬼を押しのけ、中央塔への道を作り、突破する必要がある…」
「予め突破して、中央塔付近で待機しとけばいいんじゃっ…」
「いえっ…」
「えっ…？」
由雉の言葉に首を振ったのは、輝矢であった。

「塔の付近で待機すれば、退路もない場所で、骸鬼たちに囲まれることになります…」
輝矢が険しい表情で、言葉を放つ。
「まして、塔から敵が出てくれば、挟まれることになるっ…」
「そういうことっ」
輝矢の言葉に、大きく頷くリンゴ。

「だから重要なのは、タイミングっ…アンタたちが骸鬼戦に加わってバラバラになってたら、集めるだけでチャンスを逃すわっ」
リンゴが真剣な表情で、鋭く言葉を放つ。

「この策が最も合理的で、最も良策なのっ、理解してっ」
『……っ』
リンゴの最もな言葉に、桜時たちはそれ以上、言い返すことも出来ず、大人しく俯いた。

「わかりました」
『えっ…？』
俯いた三人に代わり、大きく頷くのは輝矢。

「お願いします、金汰、リンゴ」

「輝矢っ…」
笑顔で言い放つ輝矢を、桜時が目を細め、見つめる。

「よぉーしっ！正刈金汰っ、どーんと任されたっ！！」
輝矢の笑顔に応えるように、金汰も大きく笑みを浮かべ、その胸を拳で強く叩く。

「今から対骸鬼戦を開始するっ！！俺に続けぇっ！！」
『おおぉぉーっ！！』
周囲のオトポリ隊員たちを引き連れて、金汰がマサカリを振り上げながら先頭に立って、骸鬼の群れの中へと飛び込んでいく。

「どりゃあああっ！！」

「あんなにトバしてっ…四方の塔が封印されるまでもつのかしらっ…？あの人っ…」
骸鬼との戦闘を始めた金汰を見ながら、リンゴが少し呆れたように呟く。

「さてっ…」
金汰に続くようにして突っ込んでいった隊員たちに、一人取り残されるような形となって、その場に残っていた黒羽が、ゆっくりと立ち上がる。

「では、俺も行くとしようか…」
「あっ」
歩き出そうとする黒羽を見て、リンゴの上の由雉が、思い出したように声を出す。

「黒羽っ！」
「……っ？」
由雉の声に、黒羽がゆっくりと振り返る。
「これっ！君にっ！」
「んっ…？」
そう言って由雉が、黒羽へ大きな袋を投げ渡す。戸惑うように袋を受け取り、紐を解いて、その中を確認する黒羽。
「これは…羽根…？」
袋の中に入った、大量の羽根を見て、黒羽が眉をひそめる。
「由雉、これは…」
「ハヤテからっ」
「何っ…？」
リンゴの上の由雉を見上げた黒羽が、由雉の口から出るその名に、表情を曇らせる。
「ハヤテ…だと…？」
「そっ、君の分だってぇ～っ」
「……っ」
素っ気なく頷く由雉を見た後、黒羽が再び羽根を見下ろし、複雑な表情を見せる。父が恨んでやまなかったハヤテからの羽根となれば、複雑な気持ちとなるのも当然であろう。
「無理に使う必要ないよぉっ」
「……っ？」
上から聞こえてくる声に、考え込むように俯いていた黒羽が、ゆっくりと顔を上げる。

「別にいらないならっ、捨てるなり燃やすなり、しちゃっていいしぃ」
そっぽを向いたまま、黒羽への言葉を続ける由雉。
「あっ、でもボクに返すのはナシねぇっ？ボク、もう持てないくらい山程っ、自分の羽根は持っ…」
「貰っておこう」
「……っ」
返って来る黒羽の言葉に、由雉が少し目を開き、黒羽の方を振り向く。
「えっ…」
「折角だ。貰っておく」
戸惑うような声を漏らした由雉に、黒羽は少しだけ笑みを零し、羽根の入った袋を肩に背負った。
「お前と同じ羽根を俺が使えば、どれほどの力となるのかを見せてやろうっ」
「なっ…！」
得意げに笑った黒羽の言葉に、勢いよく顔をしかめる由雉。そんな由雉のしかめっ面を見て、さらに満足げな笑みを浮かべると、黒羽は戦場へと駆け出していった。
「あの減らず口ぃ～っ…」
「アナタにそこまで言わせるなんて、大したものですねぇ」
悔しげに歯を食いしばっている由雉の横で、輝矢が感心するような笑みを浮かべる。

「ではリンゴさんっ！俺も出撃するっスっ！」
「ええ、任せたわよ」
笑顔で敬礼をする羊スケに、リンゴが大きく頷きかける。

「じゃあっ、ゴンさんっ」
「……っ」
敬礼をしたまま上を向き、リンゴの背に乗るゴンの方を見上げる羊スケ。向けられる羊スケの笑顔に、ゴンが少し目を細める。

「羊スケ」
「はいっスっ！」
名を呼ぶゴンに、羊スケがさらに明るい笑顔を見せる。

「ああ…その、何だっ…無理はぁ、すんなよっ」
「……っ」
見るからに無愛想な顔をして、そっぽを向きながらも、羊スケの身を案じるようなことを言うゴンに、羊スケが少し意外そうな表情を見せた。

「……。」
二人のやり取りを間から見つめるリンゴが、そっと目を細める。

「……っ」
少し俯いた羊スケは、再びその表情に笑みを浮かべ、ゆっくりと顔を上げた。

「その命令は聞けないっスっ！」

「ああっ！？」
満面の笑顔で答える羊スケに、ゴンが少しの間を置いた後、勢いよく顔をしかめる。

「聞けないって、お前なぁっ…！」
「だって」
「……っ」
口を開く羊スケに、ゴンが怒鳴ろうとしていた声を止める。

「だってっ、部下は上司に習うもんスからっ！」
「……っ」
大きな笑顔を見せたまま、どこか誇らしげに言い放つ羊スケに、ゴンが思わず目を見開く。

「……そうかよっ…」
ポツリと呟いた、ゴンの口元が緩む。

「なら、こっちの命令は聞いとけっ」
ゴンがまっすぐに、羊スケを見つめる。

「死ぬなっ」
「……っ」
まっすぐに伝えられるその言葉を、正面から受け止める羊スケ。

「はいっスっ！」
羊スケは大きく頷き、再び敬礼をした。

「ゴンさんも、まだ反省文三千枚くらい残ってるんスからっ、それ

押しつけて死ぬのとかナシっスよぉ？」
「わぁってるよっ」
口を尖らせ、注意するように言う羊スケに、ゴンが少しうんざりしながら答える。

「帰ったら、謹んで書かせていただきますっ」
「……っ」
そう言って敬礼をするゴンに、羊スケがそっと微笑む。

「ではっ、ゴンさん、輝矢さん、皆さんっ、ご武運をっ！」
「ええっ」
皆に笑顔を向けると、羊スケも金汰や黒羽の後を追うようにして、戦場へと駆け出していった。

「……。」
遠ざかっていく羊スケの背中を、ゴンがまっすぐに見つめる。

――部下は上司に習うもんスからっ！――

「いつの間にかっ…でっかくなってるもんだなぁ…」
先程の羊スケの言葉を思い出し、ゴンがしみじみと呟く。

「じじ臭いですよ、キツネ」
「うっせっ！」
こっそりと口を挟む輝矢に、強く怒鳴り返すゴン。

「ともかくっ、こっからだなっ」
「ええっ…」

ゴンの言葉に、輝矢は真剣な表情で頷いた。

第９０章　いざ最終決戦　★２

玄上アリス率いる北塔部隊。

「ドォ～はドカンのドォ～っ♪」

――ドッカァァァーンっ！

『ギャアアアアアアっ！！』

部隊の先頭に立った城歌は、歌を奏で、爆音と轟かせて、次々と骸鬼を蹴散らしていく。

「さすがは元・鬼人化人間っ」

「味方になると、こうも頼もしいとはっ」

圧倒的な強さで道を切り開いていく城歌に、その後に続くオトポリの隊員たちが、感嘆の声を漏らす。

「当然よぉっ」

その隊員たちの横で、小さく呟くアリス。

「私が苦戦したくらいなんだからっ…」

城歌を誉めるような言葉を口にし、アリスが少し顔をしかめる。

「一気に攻め込むファ～♪じゃなくって、わぁ～っ！」

白雪率いる西塔部隊。

「アイアン・スウィングっ…！！」
「赤っ…！赤っ…！赤っ！！赤ぁぁっ！！」
『ギャアアアアっ！！』
鉄汰がマサカリを振り上げ、紅バラが赤い皮膚をした骸鬼目がけて突進し、物凄い勢いで、次々と骸鬼を撃破していく。

「西塔との距離、半分くらいまで詰めたってぇ～っ」
「白雪様、そろそろ前に」
「ええっ」
芹と鈴白の言葉に頷き、今まで後方から支援するだけであった白雪が、部隊の前方へと歩き出していく。

「思ったより早く、塔へ辿り着けそうですね」
「楽勝だねぇ～っ」
「そうね」
笑顔を見せる二人に、白雪も少し余裕の見える笑顔で答える。

「こんなに援軍がいるとは思ってなかったんじゃない？牢戸知玖もっ」

朱実孔雀率いる南塔部隊。

「部隊の様子はどう？」

「はっ！順調に骸鬼を殲滅、突破しておりますっ！」

先頭を見てきた隊員の一人が、後方にいる孔雀へ現状を伝える。

「このまま行くと、後一時間程で南塔へ辿り着けるかと思われますっ！」

「一時間っ…予定より随分と早いわね」

「はいっ」

少し驚いたように呟く孔雀に、隊員が大きく頷く。

「犬孝様の強さが圧倒的なこともありますが、敵総力はそう大したものではありませんっ」

「……っ」

隊員の言葉に、孔雀が眉をひそめる。

「牢戸知玖は我々の力を侮ったようですねっ」

「……。」

笑顔を見せる隊員に対し、孔雀はどこか訝しげな表情を見せて、考え込むようにそっと俯く。

「……妙ね…」

青守座黒・桃原太狼率いる東塔部隊。

「妙っ？」
「ええっ…」
聞き返した座黒に、太狼は真剣な表情で頷いた。

「何が妙だというのだ？太狼」
「んん～っ、何というか、こうっ…“軽すぎる”んですよねぇっ」
「軽すぎるっ？」
太狼の言葉に、座黒が眉をひそめる。

「ええっ、このままだと、そう時間もかからずに、僕たちは塔を制圧出来ます」
「いいことじゃないかっ」
「いやぁ、いいことではあるんですけどねぇ～」
あっさりと言い返す座黒に、悩むように首を捻る太狼。

「なぁ～んとなく、やっぱり軽すぎるようなぁっ…」
「何だ？久々の腕慣らしだというのに、物足りないということか？」
「まぁそれもありますが、でもぉ、そういうことではなくってぇっ…」
「敵が私たちの戦力を見誤ったのでは？」
悩む太狼に、グレーテルが横から口を挟む。

「そうだ！きっとそうだろうっ！我々でも、ここまでの人員が集まるとは思ってなかったくらいだしなぁっ」
「相手はあの牢戸知玖ですよっ？」
笑顔を見せる座黒に、太狼が鋭く言い放つ。

「ココアのように、甘い考えが通じる相手じゃあないっ…」
『……っ』
厳しい表情を見せる太狼に、座黒とグレーテルも眉をひそめる。
「何を…」
中央塔の方を振り向く太狼。
「何を…企んでいるっ…？」

中央塔内部。

「各塔、人間共の攻撃を受け、塔への接近を許しています…」
壁に映し出された各塔の様子を見て、諸刃が玉座に座るシルクへと、現状を伝える。

「このままでは後一時間程度で、各塔への侵入を許すこととなりますが…」
少し表情を曇らせて、諸刃がゆっくりと振り返る。

「どうなさいますか…？シルク様…」
「……。」
「シルク様…？」
深く俯いたまま、諸刃の問いかけに何の反応も示さないシルクに、諸刃が戸惑うように首を傾げる。

「フフフっ…」
「……っ？」
シルクとは別の方向から聞こえてくる笑い声に、諸刃が素早く振り向く。

「ギンっ…」
「フフフっ…」
広間の窓際に立ち、相変わらず下の様子を眺めながら、どこか不気味な笑みを浮かべているギン。

「何がおかしい…？」
「いえっ…このような時に眠りにつかれている、我らが主の器の大きさに、思わず笑いが出ましてねっ…」
「眠りにっ…？」
ギンの声に戸惑うように眉をひそめた諸刃が、再びシルクの方を振り向き、深く俯いているその顔をそっと覗きこんだ。

「……っ」
シルクはその赤い瞳を深く閉じ、首を少し動かしながら、確かに眠りについている。眠っているシルクを見て、諸刃は驚くように、少し目を開いた。

「先程までは確かにっ…」
「一度眠り、戻った力と体との調整をつけようとされているのでしょうっ…」
「調整っ…？」
「まぁ要は慣らすってことですよ。力が大きくなった分、体へ負担

がかかってしまいますからねぇ」
「……。」
すらすらと答えるギンに、諸刃が眉をひそめる。

「随分と…詳しいんだな…」
「フフっ…怖い顔ですね」
鋭い視線を送る諸刃に、ギンがどこか楽しげに笑って見せる。

「それにしても、自ら眠りにつかれるとは…」
ギンが諸刃から、再び窓の外へと視線を移す。

「シルク様は、あの少女がここまで登ってきて、全力で戦うことになると…そう、思っているのでしょうかねぇ…」
「……。」
意味深なギンの言葉に、怪訝そうな表情を見せて、眠っているシルクの方を見つめる諸刃。何か予感めいたものを感じたからこそ、シルクは急に眠りについたのかも知れない。

「全力を出す必要があるかはわからないが…このままでは四方の塔を封印され、奴等がここへ登ってくるのは時間の問題だ…」
「ああ、それならっ…」
諸刃の声を背中で聞き、窓から下方を見つめるギンが、ゆっくりと口元を緩める。

「“無い”と、思いますよっ…」

正刈金汰率いる中央塔突破部隊。

「ゴールドぉぉラッシュっ…！！」

『ギャアアアアっ！！』

金汰の振り切ったマサカリから、巨大な金の塊が放たれ、それを受けた骸鬼が、激しい悲鳴をあげながら一斉に消えていく。

「ガハハハっ！！よぉ～しっ！順調っ！順調っ！」

片付いた周囲を見回しながら、金汰が満足そうに笑う。

『総長っ…！』

「このまま一気に前方を突破するぞっ！」

『はっ！』

集まった隊員たちが、金汰の言葉に大きく頷き、我先にとさらに前方にいる骸鬼の集団へと、駆け込んでいく。

「骸鬼っ！覚悟っ…！」

「グゥゥゥっ……」

「んっ？」

前に立つ骸鬼へと武器を構えた隊員の一人が、深く俯き、唸るような声を漏らしたまま、まったく攻撃してくる素振りを見せないその骸鬼に、少し眉をひそめる。

「グゥゥゥっ……」

「なっ…何だっ…？」
唸る骸鬼に、隊員が戸惑いながらも、ゆっくりと近づいていく。

「んっ…？」
「……っ！」
隊員が歩み寄った瞬間、勢いよく顔を上げる骸鬼。

「ガアアアアっ！！」
「なっ…！？」

顔を上げた骸鬼の背中から、皮膚を割るようにして、蝙蝠のような皮ばった巨大な翼が生える。爪と牙をさらに大きく長く尖らせ、その巨体をもさらに巨大化していく骸鬼に、大きく目を見開く隊員。

「……っ！金汰さんっ！あれっ！」
「んっ！？」
その骸鬼の変化に気づいた羊スケが、大きな声で金汰へと知らせる。

「なっ…！」
姿を変えた骸鬼に、驚きの表情を見せる金汰。

「逃げろっ！！お前じゃ、そいつの相手は無理だっ…！！」
「えっ…？」
変化した骸鬼のすぐ前にいる隊員にそう叫びながら、金汰がマサカリを構えて、その骸鬼のもとへと駆け込んでいく。

「あっ…はいっ…！」

金汰の言葉に慌てて頷き、その場を離れようと、駆け出す隊員。

「グガアアアアアっ！」
「えっ…？」
だが新たな骸鬼は、その翼を広げて空を飛び、今までとは比べものにならない程の速さで移動して、逃げようとしていた隊員のすぐ前へと現れる。

「グゥゥゥゥっ…」
「うっ…！」
爪を振り上げる骸鬼に、歪む隊員の表情。

「グガっ…！！」
「うっ…うわああっ！！」
骸鬼の鬼爪が隊員を襲い、斬り裂かれた隊員が、血を飛び散らせながら、地面へと倒れ込んでいく。

「クっ…！」
倒れていく隊員に、険しい表情を見せる金汰。

「こっのっ…！ゴールドぉぉラッシュっ！！」
「グっ…！グガアアアっ！！」
金汰の金塊を受けて、変化した骸鬼が苦しげな声をあげる。

「一発で倒せねぇーとはっ…」
ダメージを与えることは出来たものの、完全に倒すことは出来な

かった骸鬼。変化前の骸鬼であれば、一発で数十匹は倒せたのだ。
見た目だけでなく、力も明らかに異なっている。

「黒羽さんっ…！！」
「……っ？」
羊スケの声に反応し、少し離れた場所で戦っていた黒羽が、横目で金汰たちの状況を確認する。

「“十裂羽”っ…！」
『ギャアアアアアアっ！！』
「……っ」
周囲にいた骸鬼を一斉に片付け、黒羽が倒れている隊員のもとへと駆けつける。

「うっ…ぅぅ…」
「癒羽…」
鬼爪を喰らい、重傷の隊員へ、黒羽が由雉から貰った癒羽を施す。

「そいつはどうだっ…！？」
傷の治療をしている黒羽のもとへ、金汰が駆け寄って来る。

「死ぬことはないが…全快するまでに時間がかかる…」
「そうかっ…よしっ、お前はそいつに付け。後は俺たちがっ…」
「うわあああああっ！！」
『……っ！』
会話をしていた金汰と黒羽が、背後から聞こえてくる悲鳴に、一斉に振り向く。

『なっ…！』

振り向いた先に広がる光景に、大きく目を見開く金汰と黒羽。

『ガアアアアアっ！！』

中央塔を囲う骸鬼たちが、先程の骸鬼同様、背中から翼を生やし、体を巨大化するという変化を見せている。

「これはっ…どういう…」

変化していく骸鬼を、唖然として見つめる金汰。

『うわあああっ！！』

「……っ」

変化した骸鬼の圧倒的な力に、次々と傷つけられていく隊員たちに、金汰が厳しい表情を見せる。

「皆っ、一箇所に集まれっ！！陣形を立て直すんだっ！！」

金汰が必死に叫びながら、隊員たちのもとへと駆け出していく。

「こ…これはっ…」

金汰と同じように厳しい表情で、目の前に広がる戦場を見つめるリンゴ。

「形態変化っ…！？翼が生えたってことは、レベル四の紫鬼かっ！

？」
「いえっ…」
「えっ？」
身を乗り出し、眉をひそめる桜時の言葉に、輝矢が小さく首を振る。

「あれらの…皮膚の色を…」
「皮膚っ…？」
輝矢の言葉に首を傾げながら、桜時が、変化した骸鬼の皮膚の色を見る。

「……っ！あれはっ…！」
赤、青、黄と様々な皮膚の色をしていた骸鬼が、変化を終えると、その皮膚の色が、手先足先から、徐々に白色へと変わっていく。

「白っ…！？」
「ええ…あれは紫鬼ではなく、白鬼（びゃっき）…」
「白鬼っ？」
その言葉に、桜時の表情が曇る。

「白鬼って…まさかっ…」
「……。」
桜時が戸惑いの表情を向ける中、輝矢が厳しい表情で、中央塔を見上げる。

「……死んだ同胞を…骸鬼に…」
三日月を握る手に、力を込める輝矢。

「何て…非道なっ…」

「フフフ…」

塔の下で繰り広げられる戦いを高々と見下ろしながら、ギンが満足げな笑みを浮かべる。

「ねぇっ？問題ないでしょう…？」

「……っ」

ゆっくりと振り返り、微笑んで問いかけるギンに、その視線の先にいる諸刃が、途端に眉をひそめる。

「これで彼らが、ここに来る可能性は、随分なくなったと思いますよぉ」

「……。」

ギンの言葉を受け、壁に映し出された中央塔周囲の戦闘状況を見る諸刃。確かに先程まで押されていた骸鬼集団が、変化のお陰でオトポリ隊員たちを押し返し、一気に優勢となっている。

「白鬼…」

変化した骸鬼の、その皮膚の色を見つめ、諸刃が表情を曇らせる。

「あのようなこと…シルク様の許可は取っているのだろうな…？」

「いいえっ」
「何っ…？」
あっさりと首を横に振るギンに、諸刃が眉をひそめる。
「そんな必要、ありませんからっ」
「必要ない、だと…？」
「ええっ…」
聞き返した諸刃に、ギンがゆっくりと頷きかける。
「僕はね…“僕の意志で自由に何でもしていい”…」
ギンの口元が、吊り上がる。
「そんな権利を…シルク様に与えられているんですよっ…」
「馬鹿なことっ…」
微笑むギンに、諸刃がすぐさま否定するような言葉を吐く。
「シルク様が、そのような権限をお前に与えるはずっ…」
「与えますよ」
「……っ」
否定しようとした諸刃の声を、ギンが自信満々に遮る。
「彼女にとって…僕は特別ですからっ…」
「……。」
意味深に答えるギンに、諸刃はそっと眉をひそめた。

第９０章　いざ最終決戦　★３

玄上アリス率いる北塔部隊。

「うわあああっ！！」

「ぎゃあああああっ！！」

「……っ！」

変化した骸鬼に、前へ出ていたオトポリ隊員やトマトの旦那勢が次々と倒されていく。その痛々しい悲鳴を聞き、部隊の中央に立つアリスが顔をしかめた。

「私が針器で盾を作るから、その後ろへっ…！！」

アリスが針器の形を変化させながら、周囲にいる隊員たちへと声をかける。

「前にいる連中を戻らせてっ…！！早くっ…！！」

アリスの必死の声が、戦場に響き渡る。

白雪率いる西塔部隊。

「前にいる連中を下がらせるのよっ！！早くっ！！」

こちらも変化した骸鬼に押し返され、白雪がアリスと同じ指示を送っていた。

「皆を一箇所に集めてっ！守りを強化しないと、このままじゃ全滅するわっ！！」
「しかし白雪様っ…！」
「皆バラバラに散らばっている上っ、敵がこれ程いる中では、とても集めることはっ…！」
「クっ…！」

鈴白と芹の言葉に、白雪が顔をしかめる。

朱実孔雀率いる南塔部隊。

「“白首…割砕”っ…！！」
「ギャアアアアアっ！！」
部隊の先頭に立つ犬孝が、時雨丸を振り切り、変化した骸鬼の一匹を消し去る。

「ふぅっ…」
一匹を倒したところで、ほっと一息をつき、額に流れる汗を拭う犬孝。

「皆下がれっ！孔雀さんのところまで戻って、守りを固めるんだっ！！」
「けっけどっ、犬孝さんはっ！？」
そう指示を飛ばす犬孝に、梅人が焦った表情で問いかける。

「俺はここで敵を引きつけるっ…！」
「そんなっ…！一人でなんて無茶だよっ…！！」
「そうですっ！僕たちも一緒にっ…！」
「お前たちでは、奴らの相手にはならないっ！下がれっ！！」
『……っ』
必死に訴える三兄弟に、犬孝が強く言い放つ。犬孝の鋭い瞳に、思わず口を噤む梅人たち。

「……っ」
そんな梅人たちを横目に見て、犬孝がゆっくりと口元を緩める。
「それにっ…お前たちに何かあっては…孔雀さんと桜時に顔向けが出来ないからなっ…」
「犬孝さんっ…」
微笑んで呟く犬孝に、三兄弟が皆、目を細める。
「とにかく今は下がれっ！いいなっ！」
三兄弟にもう一度強く言い放ち、犬孝は一人、骸鬼たちの中へと飛び込んでいった。

青守座黒・桃原太狼率いる東塔部隊。
「無理に攻め込むなっ！一旦、退けっ！退くんだっ！！」

他塔と同じように、変化した骸鬼に苦戦している前方の部隊へと、座黒が必死に指示を送る。

「ご主人様っ…」

そんな座黒の様子を見ながら、どこか不安げに太狼の方を振り向くグレーテル。

「白鬼一族の骸鬼っ…こんな最低な手段、予想してなかったわけでもないけどっ…」

太狼が考え込むように俯きながら、その表情を険しくする。

「おいっ！太狼っ！」

指示を送っていた座黒が、焦った様子で太狼の名を呼ぶ。

「どうするのだっ！？このままでは到底っ、四方の塔の封印などっ…！」

「……っ」

座黒の言葉に、太狼がさらに眉をひそめる。

「まだかっ…」

俯いた太狼が、少し焦るように呟いた。

「副長官っ…！！」

「……っ」

各塔の連絡係として配置していた隊員が、慌てた様子でリンゴのもとへと駆け寄って来る。

「何っ？どうしたのっ？」

「はっ！各塔でも同じように骸鬼の変化が起こり、各部隊は押し返され、攻め込まれているもようですっ！」

『何だってっ…！？』

隊員の言葉に、リンゴの背に乗っている桜時たちが顔色を変える。

「父さんっ…孔雀さん…みんなっ…」

塔で戦っている者たちのことを思い、厳しい表情を見せる桜時。

「クソっ…！」

「どこ行く気だっ！アホ犬っ！」

「うっ…！」

飛び出して行こうとした桜時を、ゴンが勢いよく掴み止める。

「このままじゃみんながっ…！」

「ここでお前が行っちまったらっ、それこそ何もかも終わりだろうがっ！」

「けどっ…！」

強く止めるゴンに、桜時が険しい表情を見せる。

『ぐわあああああっ！！』

『……っ』

そこへ、中央塔部隊の隊員たちの悲鳴が、聞こえてくる。白鬼へと姿を変えた骸鬼に押され、隊員たちが次々と傷つけられていた。

「これでは埒がっ…」
癒羽で傷ついた隊員たちの治療に当たっている黒羽が、眉をひそめる。

「金汰さんっ…！！」
「クっ…！」
羊スケに呼びかけられた金汰も、今の状況に顔をしかめた。

「ああぁ～っ！もうっ！見てられんっ！！」
圧倒的不利のこの状況に、頭を抱えた門貴が、如意棒を握る手に力を込め、リンゴの背の上から飛び出して行こうとする。

「待ちなさいっ…！どこへ行く気っ！？」
飛び出して行こうとした門貴の前に顔を突き出し、門貴を止めるリンゴ。

「このままやったら負けるやろがっ！！」
「今、アンタたちが出て行ったらっ、すべての作戦がパァになるのよっ！？」
「このままじゃどの道、中央塔突破は無理だよっ…！」
「……っ」
門貴に代わって言い返す由雉に、リンゴが思わず口ごもる。

「四方の塔だって押し返されてるんでしょっ？なら、もう今の状況を何とかして、一旦退くしかっ…！」
「すべてを無駄にする気っ…！？」
今度はリンゴが、由雉へ強く言い返す。

「私たちが人間で在る為の、たった一つの作戦なのよっ…！？」
リンゴが強い瞳を見せ、さらに言葉を続ける。
「もう時間だってないのっ！一旦退いたりしたらっ、次にこの作戦を決行することだって、もうっ…！」
「だからって、皆が死んだら意味がないっ！！」
「……っ」
言葉を続けていたリンゴへ、言い返したのは、門貴と由雉の後方から顔を出した、桜時であった。
「人間で在れたって、皆が死んじまったら、何の意味もねぇーよっ！！」
「桜時っ…」
熱く言い放つ桜時に、リンゴは言い返す言葉もなく、そっと目を細める。
「……っ」
厳しい表情を見せたゴンが、桜時を掴み止めていた手を離す。
「お前が決めろっ、竹取っ」
「えっ？」
ゴンの急な言葉に、輝矢が驚きの表情で顔を上げる。
「私がっ…？」
「俺らの大将はお前だっ、お前の言うことになら、ここにいる誰もが従う」
「……っ」
まっすぐな瞳で輝矢を見つめるゴンに、輝矢が少し目を細める。

「輝矢っ…」
「輝矢んっ」
桜時や門貴たちの視線が、輝矢へと集まる。
「……。」
少し考え込むように、俯く輝矢。
「うわあああああああっ！！」
「ぐあああああっ！！」
「……っ」
輝矢が考えている間にも、聞こえてくる傷つけられた声。各塔でも同じことが起こり、同じように仲間が傷ついているのだ。白鬼が相手では、押し返して、四方の塔を封印することは難しい。そして、桜時の言うように、皆の命を失っては、何の意味もない。
「……わかりました…」
決意した表情で、輝矢がゆっくりと顔を上げる。
「ではっ…」
＜待ってっ…＞
「えっ…？」
どこからか聞こえてくる声に、輝矢が言葉を止める。

「誰っ…？」
「輝矢っ？」
戸惑うように周囲を見回す輝矢に、桜時たちが首を傾げる。
＜諦めないで…＞
「……っ」
声が聞こえてきたのは、輝矢のすぐ近く、輝矢の右手の方であった。
「月器…」
輝矢が声の方を振り向くと、そこには、輝矢の右手にしっかりと握られた、三日月があった。三日月は何かを訴えるように、わずかな金色の光を帯びている。よく考えれば、その聞こえてくる声にも、聞き覚えがあった。
――私を照らしてっ…！輝矢っ…！――
月器を復活させる際、水中の神殿で出会った、月器の化身のあの少女の声であった。
「あの…時の…」
＜諦めないで…輝矢…＞

優しい声が、輝矢の頭の中へと響き渡る。

＜あなたには…まだ…＞

三日月を包む光が、徐々に強くなる。

＜たくさんの仲間がいるっ…！＞

――バァァァーーンっ！！

『ギャアアアアっ！！』

『……っ！』

白鬼の群れのいる辺りの地面が突然、押し上げられ、白鬼たちの叫び声が響き渡ると、輝矢に向けられていた視線が、すべて、そちらへと流れた。

「ジィィ～ラァァ～～っ！！」

『なっ…！！』

押し上げられた地面の下の海面から、巨大な一頭のクジラが姿を現す。

「あれはっ…」
「クジラっ!?」
「もしかしてっ…」
皆が驚きの表情を見せる中、桜時が少し顔を青くする。

「きゃあああ〜っ!!桜時様ぁぁ〜っ!!」
「やっぱ泡美っ…」
決して黄色くはない声で桜時の名を呼びながら、その尾を大きく振り上げるクジラ。その尾の動きでさらに地面が揺れ、白鬼たちがバランスを崩していく。

「とゆうか、こちらまで揺れるだ…泡美…」
「大丈夫かっ!?輝矢っ!」
「渦礼っ」
「あっ!おサルくぅ〜んっ!」
「宇凪っ!?」
泡美の背の上には、宇凪、渦礼、岩士の、鯨国メンバーが乗っている。

「なんでアイツらがここにっ…!」
「それはですね…」
「ぎゃあああっ!出たぁぁっ!!」
戸惑いの表情で泡美たちを見ていた門貴が、いつの間にかすぐ背

後に立っていた、不気味な黒髪の女に、情けない悲鳴をあげる。

「万亀っ…！」

「フフフっ…どうも…」

恐怖に白目を剥いている門貴の横に立っている、今日も不気味なオーラ全開の万亀に気づき、輝矢が驚きの表情を見せる。

「何故、アナタたちがここにっ…？海中へ戻ったのではっ…」

「桃タローさんから連絡をいただきましてね…フフフっ…」

「タローからっ？」

万亀の答えに、輝矢が少し眉をひそめる。

――こっちでも色々と手配はしてあるしっ……――

「あっ…」

作戦会議時の太狼の言葉を思い出し、輝矢が思わず声を漏らす。

「あの時の言葉は、こういうこと…」

「はいはいはぁ～いっ！」

万亀の後方から現れる、色黒の無駄に陽気で、釣り竿を持った青年。

「俺が来たからには、もう安心ですよぉっ！竹取さんっ！！」

「どちら様でしたっけ？」

「がぁーんっ！万亀ぃぃっ！！俺っち、忘れられてるぅっ！！」

「フフフ…ドントマインド…玉之介…」

輝矢に冷たい言葉を吐かれ、泣きつく浦島を、万亀が不気味に励ます。

「来るのが遅くなってしまって、すみませんでした…フフフ…」

万亀が泣きついている浦島を適当にあしらい、改めて輝矢の方を見る。

「これからはこのバカと、あのゲイ共がお力になりますので…」

「お前はっ…？」

棘ばかりの万亀の言葉に、桜時が思わず素朴な問いかけをする。

「けれど…」

「……っ？」

少し浮かぬ表情を見せながら、低い声を出す輝矢を、万亀が不思議そうに見つめる。

「アナタたちごときが来たくらいでは、とてもこの状況を打破することはっ…」

「お前も大概っ、失礼だなっ！！」

万亀に負けることのない棘のある発言をする輝矢に、桜時が勢いよく突っ込みを入れる。

「だが事実だな」

「……っ」

冷静に呟くゴンに、桜時が眉をひそめる。

「フフフ…大丈夫っ…」

『えっ…？』

不気味に微笑む万亀に、皆が首を傾げる。

「連絡を受けたのは…私たちではありませんので…フフフっ…」

『えっ…』

「どっりゃああっ！“カニカニスラァーッシュ”っ！！」
『ギャアアアアっ！！』
『……っ！』
聞こえてくる威勢のいい声と、白鬼の悲鳴に、皆だ一斉に振り向く。

「この声っ…！」
万亀に恐怖し、白目を剥いていた門貴が、黒目を戻し、素早く振り返る。

「蟹軍っ、全員っ、突撃ぃいっ！！」
『おおぉおっ！！』
南方から現れた軍団が、先頭に立つ大バサミを持った赤髪の少女の声を合図に、一斉に白鬼の群れへと突き進んでいく。

「二花ぁぁっ！？」
「よぅっ！待たせたなぁっ！門貴っ！」
驚く門貴に、先頭に立っていた少女・二花が明るく手を挙げる。

「ご無事ですかっ！？門貴さんっ！！」
「と、チョキ三郎」
「どうせ俺は姉ちゃんのオマケですよ…」
明らかに二花とは違う驚き具合の門貴に、二花の横に立ったチョキ三郎が少し俯いて、落ち込む。

「なんでお前らがここにっ…！」
「ウチらだけちゃうでぇっ！」
「へっ？」

「猿軍っ！蟹軍に遅れを取るなっ！全員っ、突き進めぇぇっ！！」
『おおぉぉっ！！』
「……っ！！」
蟹軍に続くように、白鬼の群れへと突き進んでくる軍団を見て、門貴が大きく目を見開く。その軍団に指示を送るのは、眼鏡を掛けた、澄まし顔の青年。

「移貴っ…！」
「よっ！門貴っ！来てやったでぇっ！」
「門貴さぁ～んっ！！俺らも一緒に戦いますよぉ～っ！！」
「猿飛っ…みんなっ…」
移貴、猿飛を始めとした、多くの同族たちの加勢に、門貴が嬉しそうに笑みを零す。

「行けぇっ！！蟹軍っ！！」
「突き進めぇぇっ！！猿軍っ！！」
『おおぉぉっ！！』
猿長、蟹長の二人の声に応え、二つの軍団は共に合わさって、一気に白鬼を攻め込んでいく。

「サルカニ連中にもタローが連絡を？」
「ええ…フフフ…」

問いかける輝矢に、万亀がそっと頷く。

「っつーか、どうやって猿の村や蟹の村にまで、連絡入れたんだよっ？あいつはっ…」

「あやつは知らぬものなどない男だからな…」

「へっ…？って、じじいっ！？」

横から聞こえてくる声に、桜時が目を丸くして振り向くと、そこには、ずっと前から居たかのようにごく普通に、桜時の祖父・里見八房が、獣化したイヌの姿で立っていた。

「お久し振りです、桜時様」

「犬仁っ！」

八房の横には、八犬士の長・犬仁が立っている。

「お前までっ…！」

「ええ、桃タロー殿に連絡をいただきましたので」

「どんだけ連絡入れたんだよっ、あいつっ…」

「さっすが太狼さんだなぁ…」

笑顔で答える犬仁に、桜時が思わず顔を引きつり、ゴンが感心した声を漏らす。

「けど、桜時っ」

「んっ？」

横から呼びかける由雉に、桜時が振り向く。

「ここが何とかなっても、他の四塔がっ…」

「そっ…そっかっ！そうだっ！そうなんだよっ！じじいっ！」

由雉の言葉に頷いた桜時が、助けを求めるように八房の方を見る。

「俺らが良くっても、他の四塔がっ…！父さんや孔雀さんたちがっ…！」
「落ち着け、阿呆っ」
「あ痛っ！！」
必死に訴える桜時の頭を、八房がその上に乗っかるようにして、思い切り小突く。

「なっ…！何すっ…！」
「あれはそう簡単にやられる男ではないわ」
「えっ…？」
確信するように答える八房に、桜時が少し驚いたように目を開く。

「それって…」
「それに…」
口を開いた桜時の言葉を遮り、八房がさらに言葉を続ける。

「何故、この場に、犬仁しかいないと思う…？」
「えっ…？それって…」
「はいっ」
振り向いた桜時へ、犬仁が笑顔で大きく頷く。

「八犬士各位、他の塔へそれぞれ向かっておりますっ」

第９０章　いざ最終決戦　★４

朱実孔雀率いる南塔部隊。
「グガアアっ！」
「クっ…！」
勢いよく振り下ろされた白鬼の鬼爪を、時雨丸で受け止めた犬孝が、かかるその力に、少し顔をしかめる。

「ガアアアっ！！」
「うっ…！」
鬼爪を受け止め、身動きの取れない状態の犬孝へ、さらに襲いかかって来る三匹の白鬼。

「クゥっ…！」
犬孝が覚悟したように、歯を喰いしばる。

「“梅雨漸扇”っ…！」
「“縛竹”ぅ～っ！！」
「松葉杖っ！」
『ギャアアアっ！！』
「……っ」
犬孝へ襲いかかろうとしていた白鬼が、一斉に三方向へと吹き飛ばされていく。その光景に、驚きの表情を見せる犬孝。

「おっ…お前らっ…！」
『……。』
犬孝を攻撃しようとしていた白鬼を吹き飛ばし、その場へと現れたのは、犬孝が先程、後ろへ退くよう指示を送ったはずの松人、竹

人、梅人の三人であった。三人はそれぞれに松枝で出来た杖、竹刀、梅の柄の入った扇を構え、真剣な表情を見せている。

「フっ…！！」
「グガアアアアっ！！」
時雨丸に力を入れ、犬孝が向き合っていた白鬼を払いのける。

「お前らっ…！退けと言っただろうっ…！」
責めるように言いながら、犬孝が3人のもとへと駆け寄っていく。

「犬孝さんだけを置いてくなんて出来ないよっ！やっぱりっ…！」
「うんうんっ！梅ちゃんの言う通りっ！」
強く言い放つ梅人の言葉に、竹人が大きく頷く。

「だがお前たちに何かあってはっ…！」
「犬孝さん…」
「……っ」
遮るように名を呼ぶ松人に、犬孝が思わず言葉を止める。

「貴方に何かあっては…それこそ、僕たちが桜時くんに顔向け出来ません…」
「松人っ…」
少し微笑みながら言い放つ松人に、犬孝がそっと目を細める。

「貴方は僕らにとっても、大切な家族なんです。だから共に戦わせて下さい…」
「……ありがとう…」
優しい微笑みを向ける松人に、犬孝は少し俯き、小さく礼を言った。

「グガアァァ……」
「……っ！」
後方から聞こえてくる唸り声に、犬孝が素早く振り返る。犬孝が見たその先では、一匹の白鬼が、開いた大きな口の先を、犬孝や松人たちの方へと向けていた。

「鬼口かっ…！マズイっ！避けっ…！」
「そのままでいて下さいっ」
「何っ…？」
三人へ回避を促そうとした犬孝が、どこからか聞こえてくる声に、眉をひそめる。

「グガアアアっ！！」
大きく開いていた白鬼の口から、骸鬼よりも数倍大きな鬼口が放たれる。

「うっ…！」
「うわあああああっ！！」
勢いよく迫り来る鬼口に、もう避ける時間もなく、顔をしかめる犬孝と、恐怖するように顔をしかめる三兄弟。

「……っ」
「なっ…！」
迫り来る鬼口の前に、犬孝たちを庇うようにして、茶色い髪の少女が飛び降りてくる。向かってくる鬼口へ向け、両手を構える少女。

「“白防”っ…！！」

構えた少女の両手から、白い光が放たれ、光の壁のようなものが少女の前方に張られる。

――パァァァーンっ！！

巨大な鬼口を、あっという間に弾き返すその壁。

「グっ…！ギャアアアアっ！！」

弾き返されて来た鬼口を直撃し、白鬼が激しい悲鳴をあげる。

「……っ」

「グっ…！」

苦しむ白鬼のすぐ目の前へと現れる、長身の男。男が瞳を鋭くし、腰に下げていた大剣を抜き放つ。

「“白斬”っ…！！」

振り切られた大剣から、強い白色の光が放たれる。

「グゥゥっ…！ギャアアアアっ！！」

放たれた白い光を浴びて、白鬼は一瞬にして消えていった。

「あっ…」
「凄い…」
その男の圧倒的な強さに三兄弟が感心している中、男が大剣を鞘へと納め、防御をした少女の方へと歩み寄って来る。二人は並ぶと、犬孝の前で膝まづいた。

「んっ…？」
急に膝まづかれ、犬孝が戸惑いの表情を見せる。

「八犬士が二、第五十四代・犬義であります」
「同じく八犬士が七、第五十三代・犬智であります」
「八犬士っ？八犬士が何故っ…」
「桃タロー様より連絡をいただきまして、犬孝様、桜時様の加勢に参りました」
「他の八犬も、各塔へ向かっております」
「太狼がっ…そうかっ…」
顔を上げ、笑顔で答える犬義と犬智に、犬孝が納得したように頷く。

「間もなく他の加勢者も駆けつけるはずです」
「他のっ…？」
『おっりゃあああああっ！！』
『……っ？』
どこからか聞こえてくる野性的な大きな声に、犬孝や松人たちが、戸惑った様子で振り向く。

「ガラスの靴・シュゥゥーットっっ！！」
「ギャアアアアっっ！！」
履いていたガラスの靴を蹴り飛ばし、白鬼の顎下へとクリーンヒットさせながら現れる、きれいなドレスを纏った、ゴリラのような

顔立ちの女性。

「おっらぁぁっ！！打ち出の小槌ぃぃっ！！」
「針剣・ハリケェェーンっ！！」
『ギャアアアっっ！！』
小槌を振り回しながら駆け抜けてくる、真っ赤なドレスの悪人面の少女と、針製の剣を振り回している愛らしい顔立ちの少年。

「レイラっ！」
「油火っ！一寸っ！」
やって来た者たちを見て、松人と竹人がそれぞれ、驚いたように声をあげる。

「きゃあああっ！！竹人さんっ！会いたかったわぁぁ～～っ！！」
「僕も会いたかったよぉ～♪レイラぁ～っ！！」
「松人さんっ！！無事っ！？」
「無事っ…！無事だから、首から手ぇ離してぇっ！油火ぃぃっ！」
「姉上っ！兄上が死んでしまうでござるっ！」
やって来たレイラと、竹人が熱い抱擁を交わし、心配するように駆けつけた油火に襟元を掴まれ、白目を剥く松人に、一寸が焦ったように声をあげる。

「だ…誰だ…？」
「はぁっ…」
レイラや油火を見て、首を傾げている犬孝の横で、梅人が深々と溜息をつく。

「雀国からの援軍が到着したわっ」

「孔雀さんっ」
「お母様っ！」
声が聞こえ、犬孝と梅人が振り返ると、そこには多くの朱実の警備隊員が立ち並んでいた。

「ハッハッハっ！朱実の誇り高き警備隊長っ！“要塞ペンギン”の異名も取る銀ペー様が来たからには、もう安心っ…！」
「態勢を立て直して、もう一度攻め込むわよっ！全員っ、私の指示に従いなさいっ！」
『はっ！』
「……。」
ツルツル頭の愛らしいペンギン・銀ペーを無視し、孔雀の言葉に一斉に敬礼する朱実の警備隊員たち。あっさりと無視され、銀ペーが笑顔のまま、少しの間固まる。

「ううぅっ…俺が隊長なのにぃっ…」
『アニキぃぃ～っ！！』
落ち込む銀ペーに、二匹の子分ペンギンが駆け寄る。

「まったくっ…」
そんな銀ペーに呆れるように肩を落とし、孔雀が再び表情を引き締め、顔を上げる。

「今度こそ塔へ行くわよっ！いいわねっ！？」
『はいっ！』

孔雀の言葉に、犬孝や三兄弟は皆、大きく頷いた。

白雪率いる西塔部隊。

「グガアアアっ！！」
「うっ…！うわあああっ！！」
「“大雪界”っ！！」
「ギャアアアっ！！」

オトポリ隊員へ攻撃しようとしていた白鬼を、白雪が吹雪を放って消し去る。

「無事っ！？」
「あっ、はっはいっ…！」
「ならとっとと下がりなさいっ！邪魔よっ！！」
「ひぃっ！はぁ～いっ！！」

物凄い剣幕の白雪に怯えるようにして、助けられた隊員が、部隊の後方へと逃げ去っていく。

「どう見ても悪役…」
「うっさいわねっ！！」

隣でこっそりと呟く鈴白に、白雪が勢いよく怒鳴りあげる。

「それにしてもっ…」

額から流れ落ちる汗を拭い、その表情を険しくする白雪。

「戦力として通じる連中が少なすぎるわっ…」
白鬼に変化されて、前面にいる者たちを傷つけられてからは、ほとんど白雪、鉄汰、紅バラの三人だけで、白鬼の群れと対抗している状態であった。

「このままじゃっ…塔に着く前に力を使い切っちゃう…」
「白雪様っ…」
困ったように呟く白雪を、鈴白が不安げに見つめる。

「随分と苦戦しているようだな、腐り姫っ」
「えっ…？」
どこからか聞こえてくる声に、白雪が眉をひそめる。

「“白閃”っ…！！」
「いよぉ～っ！“白矢”ぁぁっ！！」

――バァァァーンっ！

『ギャアアアっ！！』

横から飛んで来た白光の一閃と、空から降り落ちてきた無数の白く光る矢により、西塔を囲んでいた白鬼の群れの一部が、一瞬にして消し去られる。

『なっ…』
目の前に落ちてきた威力ある攻撃に、思わず目を見張る白雪と鈴

白。

「うっわぁ～いっ！今日もシンちゃんっ、絶好調ぅぅ～っ！」
「その軽さ極まりないしゃべりをやめろ、俺の耳が腐る…」
「……。」
白鬼の消えた場所へと降り立ったのは、明るく無邪気な少年と、眼鏡を掛けた知的そうな青年。八犬士の犬信と犬礼の二人であった。
現れた二人を、白雪が少し茫然と見つめる。

「あっ！やっほぉ～っ！トラトラぁ～っ！」
「トラ言うんじゃないわよっ！気に入ってないんだからっ！」
明るく手を振る犬信に、白雪が勢いよく怒鳴り返す。

「久し振りだな、腐りひっ…」
「で、貴方たち、誰っ？」
「なっにぃぃぃっ！？」
白雪に親しげに声を掛けようとした犬礼が、あっさりと問いかける白雪に、思わず力いっぱい叫ぶ。

「ほら、桜時さんの部下とかいう、八犬士の方々ですよ、白雪様っ」
「ああ、あの無駄に自己紹介の長い連中ねっ」
そっと囁く鈴白に、白雪がやっと思いだしたように頷く。

「桃タローからの連絡を受けてなっ、今後は俺たちが腐ったお前らの加勢をっ…」
「さっ、とっとと戦いを続けるわよぉ～っ！鈴白っ！」
「無視っ！？」
「アハハぁ～っ！レイレイってば、無視られてやんのぉ～っ！」
白雪に無視され、ショックを受けている犬礼を見て、犬信が楽し

そうに笑う。

「白雪様ぁ～っ！」
「芹っ？」
そこへ、傷ついた隊員たちとともに、後方へと下がっていた芹が、どこか慌てた様子で白雪のもとへと駆け込んでくる。

「どうしたのっ？何かあったのっ？」
「はいっ！虎国から、援軍が到着しましたっ！」
「虎国からっ！？」
笑顔で答える芹に、白雪が勢いよく顔をしかめる。

『姫様っ！』
「……っ」
駆け込んできた芹の後に続くようにして、後方から続々と現れる、虎国の軍隊。隊の者たちはすぐに白鬼との戦闘態勢に入り、白雪の援護に回る。隊の先頭に立っていた軍隊長の男が、急ぎ足で、白雪のもとへと駆けつける。

「遅れて申し訳ありませんでしたっ！」
「いいえっ、十分有り難いわっ。でもどうして、ここへ？」
「はっ！桃タロー様から白雪国主のもとへ連絡が入りまして、それで白雪国主が指揮を取って、こちらへっ」
「パパがぁっ！？」
「はい」
驚いたように聞き返す白雪に、軍隊長がもう一度大きく頷く。

「でっ？そのパパはどこにいるわけっ？」

「それはぁ…あちらに…」
「あちらっ？」

どこか躊躇いがちに答える軍隊長の視線につられ、白雪がゆっくりと振り向く。振り向いた先にあるのは、この荒地とは似ても似つかない、植木鉢に入った、青々とした観葉植物。

「やっ…やっほぉ…虎昌ちゃんっ…」
「何っ、こんなとこにまで、観葉植物持ってきちゃってんのよっ！！」
観葉植物の後ろに隠れている父・虎克へ、白雪が勢いよく突っ込みを入れる。

「仕方ないでしょっ！虎昌ちゃんっ！パパはすんごく人見知りなんだからっ！」
「うわぁっ…人も鬼もいっぱいいるよぉ～っ…」
庇うように叫ぶ母・マーサの横で、虎克は全身をびくびくと震わせる。

「今っ、遅れちゃったのだって、パパがなかなか、皆の前に出て、出発の合図言えなかったからなんだからっ！」
「フタ迷惑よっ！！」
「それを言うなら傍迷惑です、白雪様」
「わかってるわよっ！！」
怒鳴りあげる白雪に、鈴白がこっそりと突っ込みを入れると、今度は鈴白へ怒鳴り返す。

「とにかくっ！陣形を組み直してっ、もう一度突っ込むわよっ！」

白雪が周囲にいる皆へ向け、大きく叫び放つ。

「貴方たちも私の指示に従ってもらうからねっ！！」

「はぁ～いっ！」

「偉そうな腐り姫め…」

強く言いつけられ、犬信は明るく手を挙げたが、犬礼は少し不満げに呟く。

「とっととこの塔封印してっ、終わらせるっ！いいわねっ！？」

『はっ！』

白雪の言葉に、皆が大きく頷いた。

玄上アリス率いる北塔部隊。

「ヒャッハっ！“白火”っ！！」

「むううぅんっ！！おんりゃああっ！！」

『ギャアアアっ！！』

他の八犬士と同じように、北塔へと駆けつけた犬忠と犬悌が、その圧倒的な力で白鬼を次々と蹴散らしていく。

「凄い連中レェ～♪じゃなくって、ねぇ～っ！」

「彼らは確か犬国の…」

感心したように歌う城歌の横で、アリスが少し考え込むように呟く。

「加勢っ…桃原太狼の仕業ってとこかしらっ…」
「当たりっ」
「えっ…？」
背後から聞こえてくる、よく聞き覚えのあるその声に、アリスが素早く振り返る。

「父上っ…！」
「やぁ、久し振り、アリス」
アリスが振り返ると、そこにはアリスの父であり、現・武国主の玄上武史が立っていた。驚くアリスへ、武史が穏やかな笑みを浮かべる。

「両端から攻め込めっ！我々で囲むんだっ！」
『はっ！』
「あれはっ…」
北方から現れた黒服の集団が、アリスたちの部隊に加勢し、両端から白鬼たちを追い詰めていく。

「玄上の警備団っ…」
「太狼から連絡を貰ってね、多分、犬国の彼らも同じじゃないかな」
武史がアリスの横へと並びながら、すらすらと答えていく。

「しかし何も父上まで、このような場所へいらっしゃらずともっ…」
「君も輝矢も戦ってるのにかい？」
「……っ」

笑顔で問いかける武史に、アリスが少しハッとした様子で目を見開く。

「さぁ、僕らが道を開くから、塔へ向かうんだ、アリス」

武史が笑顔で、アリスの肩を叩く。

「輝矢の力になってあげなさい」

「……っ」

微笑む武史に、アリスも口元を緩める。

「はいっ…！」

武史の言葉に、アリスはしっかりと頷いた。

青守座黒・桃原太狼率いる東塔部隊。

「じゃあ八犬士と各国の軍が、それぞれ他の塔へ？」

「ええ、そろそろ到着してる頃だと思います」

太狼から一連の話を聞き、確かめるように聞き返した座黒へ、太狼がもう一度しっかりと頷く。

「そうかそうかぁっ、それなら安心っ…！って、違う違う違ぁーうっ！！」

「へぇっ？」

大きく腕を横に振る座黒に、太狼が目を丸くする。

「この塔はどうするのだぁっ！？この塔はっ！」

座黒が必死に地面を指差し、太狼へと問いかける。

「八犬士も来んしっ、龍国の軍、つまりオトポリ部隊は、もうすでに各塔へ散らばっているのだぞっ！？」

「ん～じゃあまぁ、どうにかぁ」

「この塔だけ適当かぁーいっ！！」

適当な答えを返す太狼に、座黒が全力の突っ込みを入れる。

「ウソウソっ、ちゃ～んと考えてますよっ」

「何っ？」

そっと微笑む太狼に、座黒が目を丸くする。

「オトポリ隊員が皆、優秀なお陰で、僕の理想通りの到着時刻です」

「へっ？」

「“馬刺し”っ…！！」

「ギャアアアアアっ！！」

「……っ！」

白鬼の悲鳴が響き渡り、座黒が勢いよく振り向く。

「ふぅっ」

「なっ…！馬ロンっ…！」

「んっ？」

長い金色の髪を棚引かせ、その場へと颯爽と現れたのは、細身の

刀身の剣を持った、オトポリ隊員である、馬人の馬ロンであった。
勢いよく名を呼んだ座黒に気づき、馬ロンが太狼たちのもとへと歩み寄って来る。

「どうも、長官。オトポリの白馬の王子こと馬ロン、ただいま参上致しました」
「あ、ああっ…」
座黒が、馬ロンの挨拶に少し顔をしかめながらも、頷く。

「馬ロン、お前、今まで一体、どこにっ…」
「桃タローさんの使いで、部下の友人へ応援要請に行っていましてね」
「部下の友人っ…？」

『うおおぉぉっ！！』
「……っ？」
北東方から聞こえてくる、大勢の者たちの雄々しい声に、座黒が戸惑いの表情を見せながら、ゆっくりと振り返る。

「獅国が国主・獅子戸銃っ！我に続けぇっ！！獅子警護団っ！百獣の王の力を、見せつけよっ！！」
「おおぉぉっ！！」
勇ましい獅国の王を先頭に、続々と戦場へ降り立ってくる、誇り高き獅人の軍団。

「みんな、頑張ってぇ～っ」
「あなたも行くのよ…レオ…」

「ええぇ～っ！？」
後ろから皆を応援していた、銃の息子でありながら怖がりの青年・レオが、片手に斧を持った、きこりのキリコに無理やり引っ張られていく。

「嫌だぁ～っ！俺はまだ死にたくないぃ～っ！！」
「私の一族も、趣味は伐採で頑張るから…」
『伐採っ、頑張ろうねぇ～っ！！キリコちゃ～んっ！！』
「よくわかんねぇーよっ！お前らの頑張り方っ！！」
キリコの後方から現れる、斧を持った家族の一団。そんな一団に、レオが思わず突っ込みを入れる。

「俺も頑張るから、レオとキリコも頑張るぅ～っ！！」
「そうね…鹿男…」
「まっまぁ、鹿男が言うんなら、仕方ねぇーかっ」
戦場にあっても、陽気な笑顔を見せる鹿男に、キリコが優しい表情で微笑み、レオが渋々と頷く。

「彼らが僕らの援軍です」
「成程っ…」
笑顔で答える太狼に、座黒が納得したように頷く。

「獅国やきこり一族にまで声を掛けていたとはなぁ」
「利用出来るものは、何でも利用する主義ですからぁ～っ、僕っ」
「ハハハ…」
満面の笑顔を見せる太狼に、座黒が少し引きつった笑いを零す。

「さぁっ、ここからです」
「ああっ」

気を取り直して言い放つ太狼に、座黒はしっかりと頷いた。

中央塔部隊。

「では各塔、皆のところにも加勢が…」
「ああ、行ってるはずだ」
確かめるように問いかける輝矢に、犬仁がしっかりと頷く。

「さっすがタローやなぁっ！」
「けどぉ、加勢が来たって、早々、塔が封印されるわけじゃあっ…」
「いやっ…」
「えっ…？」
由雉の言葉を遮るゴンの声に、由雉が戸惑うように振り向く。

「見てみろっ…」
「……っ？」
そう一言だけを呟き、どこかをまっすぐに指差すゴン。そのゴンの指差した方角を、由雉や、他の者たちが振り向く。

『あっ…！』

ゴンの指差すその先にあるのは、一本の白い塔。その塔から、中央塔へ向けて放たれていた白い光が徐々に弱まっていき、やがて止まる。

「鬼力の光がっ…」
「止まったっ…！」
止まった光に、大きく目を見開く皆。

「封印が上手くいったんだっ…！！」
『おおっ…！！』
皆から、笑顔と歓声が漏れる。

「でも、誰がっ…」

輝矢が少し戸惑うように、光の止まった塔を見つめる。

北塔・内部。

「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」

何もない塔の床に座り込み、全身から汗を、体のところどころから血を流しながら、乱れた呼吸を何とか整えているのは、アリス。

「……。」

アリスが、塔内の中央へと視線を移す。中央に置かれた大きな透明の水晶に、真上から突き刺すように針器が突き刺さっており、水晶には激しくヒビが入っていた。

「……っ」

それを見て、アリスがどこか満足げに笑う。

「一番乗りっ…」

そう呟き、アリスはグッと拳を握り締めた。

第９０章　いざ最終決戦　★４（後書き）

第８部終わりました。
続いてラストの第９部。
「鬼斬りかぐや」もあと１０章で終わりになります。
最後までお付き合いのほど、よろしくお願いいたします。

第９１章　開かれる道　☆１

最終決戦の地・鬼国跡。中央塔部隊。

「鬼力の光が止まったっ！」
「あの塔は…北塔かっ！」
「北塔っ…」
隊員たちから漏れる声を聞き、桜時がそっと目を細める。

「って、じゃあアリスがっ…！」
「ええっ」
勢いよく振り向いた桜時に、輝矢が冷静に頷き返す。

「アリスっ…」
だが、北塔を見つめる輝矢の表情からは、自然と笑みが零れ落ちていた。

「金汰っ！」
「……っ」
輝矢がリンゴの背の上から身を乗り出し、やって来た援軍に少し圧倒されるように、後方に立ち尽くしていた金汰へと声をかける。
その声に気づき、金汰がゆっくりと振り返った。

「クジラやサルカニ共と連携して、態勢の立て直しをっ！私たちはこのまま作戦を続行し、中央塔を目指しますっ！」
『……っ』
高らかと言い放つ輝矢に、皆が少し驚いた表情を見せる。

「……よしっ！きたっ！」

少しの間を置いた後、金汰はどこか嬉しそうに頷く。

「よぉ～しっ！猿軍、蟹軍は両側からっ！オトポリは鯨連中と共に中央から、一気に攻め込むぞっ！」

『おおぉぉっ！！』

金汰の指示を中心に、泡美、二花、移貴たちも加わって、対白鬼戦が再開される。

「ではコチラも行くとするか、犬仁」

「はい、八房様」

「へっ？」

八房と犬仁の会話を聞いた桜時が、思わず目を丸くする。

「じじいも戦う気かぁっ！？」

「当たり前じゃろうが。何の為にこんな所へ、わざわざ来たと思っておるっ」

驚きの表情で問いかける桜時に、八房が当然だと言わんばかり、はっきりと答える。

「もう老いぼれなんですから、無理しない方がいいんじゃないですかぁ～？」

「貴様っ！八房様になんて口をっ…！」

「ホッホッホっ、言うてくれるわいっ」

失礼極まりない発言をする輝矢に、犬仁は睨みつけるように輝矢を見たが、当の八房は特に気にしていない様子で、あっさりと笑い飛ばした。

「雑魚はわしらに任せておけ」

少し微笑んだ八房が、まっすぐに輝矢と桜時の方を見る。

「世界のことは、お前らに任せたぞ」
『……っ』
八房の言葉に、輝矢と桜時が表情を引き締める。
「よっ」
そう言い残して、八房がリンゴの背の上から降りていく。
「では桜時様、私も参ります」
「ああっ」
「頑張ってなぁ～っ！犬仁ちゃんっ！」
「私の名前にちゃんを付けるなっ！」
「うわああっ！」
軽い口調で声を掛けた門貴に、勢いよく怒鳴りあげると、犬仁もリンゴから降り、八房の後を追うように戦場へと駆けていった。
「相変わらず怒りっぽい奴やなぁ～っ」
「まぁ門貴が怒らせてるようなもんだけどねぇ～」
何故怒鳴られたのかを悩むように、首を傾げている門貴の横で、由雉が呆れたような表情でポツリと呟く。
「フフフ…じゃあ私たちも行きましょうか…玉之介…」
「ええぇ～っ!?俺っ、あんなでっかい鬼と戦うの、怖いよぉ～っ！万亀ぃ～っ！」
不気味に告げる万亀に対し、浦島はまだ戦ってもいないのに、早速、泣き事を吐く。
「ここはぁ～安全に後方支援だけってことでぇ～っ…！」
「はい…」

――プシュゥゥーーっ！

「うぎゃあああああっ！！」

後方支援の希望を出した浦島の顔面へ向け、万亀が言葉も聞かずに、思い切りスプレーを吹きかける。

「ううぅ…ううううぅっ…うっ…」

顔を覆い、深く俯いたまま、どこか途切れ途切れの唸り声を発する浦島。

「うおりゃあああっ！！俺に釣られたい奴はっ、どこじゃあああああっ！！」

狂気に満ちた表情となった浦島が、勢いよくリンゴから飛び降り、持っていた釣り竿を振り回しながら、一気に部隊の戦闘に出て、白鬼を蹴散らしていく。

「フフフ…“強ガス”…」

「相変わらず問答無用だな、お前…」

“強ガス”と書かれたスプレー缶を持ち、どこか得意げに微笑む万亀に、桜時が呆れた表情で突っ込みを入れる。

「では玉之介が心配ですので…私も参ります…フフフ…」

「アナタが行った方が、逆に危険な気はしますけどね」

浦島の身を案じる万亀の言葉に、輝矢が思わず口を挟む。

「輝矢さん、皆さん…ご武運を…フフフっ…」

不気味な笑い声を残して、万亀もリンゴから降り、前方の戦場へと歩いていった。

「何か…あいつにご武運をって言われると、逆に不吉な感じ…」
「うん…凄いわかる、それっ…」
去っていく万亀の背中を見つめながら、小さく呟く桜時の言葉に、横に並んだ門貴がしみじみと頷く。

「けど、いいのか？竹取っ」
真剣な表情を見せたゴンが、輝矢の方を振り向く。
「北塔が封印されたとはいえ、他の三塔も上手くいくかは、まだっ…」
「道は必ず開かれます」
ゴンの言葉を遮り、輝矢がはっきりと答える。
「仲間を信じて、待ちましょう…」
「……っ」
迷いのない笑みを浮かべる輝矢に、ゴンがそっと目を細める。

――俺は君を信じますよ…？――

ゴンがたった一つ信じてきた、あの笑顔とよく似た笑顔。

「……ああっ」

ゴンも口元を緩め、しっかりと頷いた。

白雪率いる西塔部隊。

「なんくるないさぁ～っ！」

明るい笑顔を見せながら、高々と飛び上がり、両手を広げる剛也。

「“千糸”っ！！」

『グウゥっ…！ガっ…！』

剛也の両手から伸びる無数の糸が、白鬼たちの巨体を絡め取り、その動きを封じる。

「敗北者に…死を…」

そう呟きながら、身動きの取れない白鬼たちへ向け、醍也がゆっくりと十字刃を構える。

「“赤十字”っ…！」

『ギャアアアアアっ！！』

赤く輝く醍也の刃に斬り裂かれ、白鬼が次々と消し去られていく。

「トラトラぁ～っ！道が出来たよぉ～っ！」

「トラ言うんじゃないわよっ！！」

白鬼の群れの間に、出来たかすかな塔への道を指差し、犬信が大きな声で白雪を呼ぶ。いつものように怒鳴り返しながら、白雪が後方からまっすぐに、その道へと駆けてくる。

「気に入ってっ…ないんだからっ！！」
「ギャアアアアっ！！」
右手に持った雪剣を振り切り、周囲の白鬼を蹴散らして、勢いよく塔へと駆け抜けていく白雪。
「いっけぇ～っ！！白雪様ぁぁぁ～～っ！！」
「虎昌お姉様ぁぁ～っ！！」
「……っ！」
芹や紅バラが応援する中、白雪が西塔の中へと駆け込んでいく。

「……あれねっ」
何もない塔内を見回し、中央に置かれた、白く強い光を天井に突き上げている、大きな水晶に視線を合わせて、白雪がその表情を鋭くする。
「私があの女の足をっ…引っ張るわけにはいかないのよっ！！」
強く叫びながら、白雪が水晶のもとへと駆け込んでいく。

「“大雪界”っ…！！」

白雪が雪剣を振り切り、激しい吹雪で、水晶をあっという間に凍らせる。水晶が凍らされるとともに、突き上げられていた光が止む。

――パリィィーンっ！！

凍りついた水晶は、包み込んだ氷とともに、塔内に響き渡る音を残して、粉々に崩れ落ちていった。

「はぁっ…はぁっ…」
水晶が砕け散ったことを確認すると、白雪が雪剣を下ろし、その場に力なく座り込む。

「ああぁ～っ、しんどっ」
「お疲れ様です、白雪様っ」
「……っ？」
聞こえてくる声に白雪が顔を上げると、白雪の後を追って来たのか、塔の入口からこちらへと歩いてくる、笑顔の鈴白の姿があった。

「……ええっ」
鈴白を見て、白雪もそっと笑みを零す。
「これで貸し“二”よっ、竹取輝矢っ…」
天井を見上げながら、白雪は満足げな笑みを浮かべた。

青守座黒・桃原太狼率いる東塔部隊。
「うおっりゃああっ！“獅子砲”っ！！」
「きこり…伐採殺法っ…」

「“鹿威し”っ！！」
『ギャアアアアっ！！』
獅子警護団の加勢や、鹿男・レオ・キリコの息の合った連携もあって、押されていた前線を一気に押し返し、東塔部隊がどんどんと白鬼を攻め込んでいく。

「……っ」
部隊と白鬼の戦闘を見つめ、その瞳を緑から鋭い金色へと輝かせて、神狼丸を構える太狼。

「……っ“狼刃”っ！！」

――バァァァンっ！

『ギャアアアっ！！』
太狼の神狼丸から放たれた黒い一閃が、味方の合間を縫うようにして、白鬼だけをあっという間に消し去っていく。

『うぁっ…』
目の前を駆け抜けていった一閃に、何が起こったのかもわからず、ただ唖然とする部隊員たち。

「さすがは桃タローね…」
「かっけぇっ！俺っ、桃タローみたいになりたいなぁっ！」
「相変わらずデカいなぁ、お前の夢はっ」
目を輝かせる鹿男に、レオが少し呆れた表情を向ける。

「バカなこと言ってないでっ、とっとと敵を片付けるんだよっ！！」
そんな三人へ、横で戦っていた馬ロンが、少し怒ったような口調

で声をかける。

「言われなくてもわかってるわよ…」
「ガミガミとうっせぇオッサンだなぁっ」
「俺っ、馬ロンみたいには、なりたくなぁーいっ！」
「うるさいねぇっ！！」
揃いも揃って反抗的な態度を見せる鹿男たちに、馬ロンが血管が切れそうな程の勢いで、力強く怒鳴りあげる。

「まったくっ！」
「馬ロンさんっ！」
「んっ？」
名を呼ぶ声が聞こえ、馬ロンが目を丸くして振り向く。

「おおっ、イチゴちゃんっ！」
馬ロンが振り向くと、振り向いた方向から、馬ロンの元へと、全力で駆け抜けてくるイチゴの姿があった。

「イチゴちゃんっ！今日も一段と可愛っ…！」
「足場っ、お借りしますっ！」
「へっ？」
「……っ」
そう言ってイチゴが、馬ロンの前に来て、飛び上がる。

「よっ！」
「ぐはあああっ！」
馬ロンの頭を踏み台にして、さらに高々と飛び上がるイチゴ。イチゴに踏まれた馬ロンは、苦しげな声を漏らして、その場に力なく倒れ込む。

「青き拳…龍が如く…」

上空へと飛び上がっていきながら、その右拳を青く光らせていくイチゴ。鬼力の光の突き上げている、塔の真上に来たところで上昇が終わり、真下へ向けて、イチゴが拳を構える。

「“青拳突き”っ…！」

突き上げる鬼力の光に逆らうようにして、イチゴが拳を盾に、勢いよく降下していく。

「はあああああっ！！」

青く輝く拳で、塔の天井部分を砕き割り、イチゴがそのまま東塔の内部へと侵入していく。降下地点に見えてくるのは、鬼力を放つ巨大な水晶。

「……っ」

イチゴが唇を噛み締めると、さらに右手の光が増した。

「はあぁぁっ！！」

――パリィィィンっ！

イチゴの拳が水晶を突き抜け、勢いよく砕き割る。イチゴにより押し返された鬼力が、水晶が砕け散るとともに、一気に膨れ上がっていく。

――バァァァーンっ！

膨らんだ鬼力は、辺りを巻き込んで一気に爆発した。その爆発に塔は下方が砕け散り、一気に全体が崩れ落ちていく。

「ふわぁ…塔ごとっ…」

「さすがは最強の獣人だなっ」

崩れ落ちていく東塔を、ヘンゼルが圧倒された様子で見つめる中、獅子警護団の先頭に立つ銃は、イチゴを誉め称えるように笑みを浮かべる。

「痛つつつつつっ…」

「ああなっては駄目よ…鹿男…」

「うぅ～んっ！」

イチゴに踏み倒されたまま、倒れ込んでいる馬ロンを見て、キリコと鹿男が言葉を交わす。

「相変わらずパワフルな娘さんですねぇ～」

「ハハハっ…」

感心したように言い放つ太狼に対し、あまりのイチゴの力強さに、少し引きつった表情で空笑いを見せる座黒。

「けど大丈夫でしょうか？イチゴ様っ…」

「大丈夫大丈夫っ、ほらっ」

「えっ？」

不安げな表情を見せていたグレーテルが、太狼の指差す、崩壊した塔の辺りを見つめる。

「あっ…！」

「ふぅっ」

そこには、崩壊した東塔の瓦礫の上に立ち、何食わぬ顔で一息ついているイチゴの姿があった。イチゴの姿を確認し、グレーテルが安心した笑みを浮かべる。

「太狼さんっ…！」

「んっ？」

一息つくと、イチゴはすぐに真剣な表情へと戻り、太狼のもとへと駆け込んでくる。

――ボォォォ～ンっ！

白い煙に包まれ、龍化すると、イチゴは翼を広げて戦場の上を飛び越え、太狼のすぐ横へと降り立った。

「中央塔へっ…！輝矢さんたちの所へ行きましょうっ…！」

「えっ…？」

そう言って、“乗れ”と言わんばかりに、自分の背を差し出すイチゴに、太狼が少し戸惑ったような声を出す。

「けっ…けどっ…」

「行け、太狼っ」

「……っ」

迷うように声を漏らした太狼に、強く言い放ったのは、座黒であった。

「座黒さんっ…」
「残党処理は、我々に任せろ」
振り向いた太狼へ、座黒が笑顔を向ける。

「行ってやれ…竹取輝矢のもとへ…」
「……っ」
優しい笑みを浮かべる座黒に、太狼がそっと目を細める。

「……はいっ」
座黒の言葉に大きく頷き、太狼がイチゴの背へと飛び乗る。

「頼むよっ、イチゴちゃんっ」
「はいっ！」
太狼を背に乗せると、イチゴが大きく両翼を広げ、中央塔へ向け、空へと飛び出していく。

「お気を付けてぇ～っ！ご主人様ぁぁ～っ！」
「……。」
グレーテルが大きく手を振る中、座黒は笑顔で、飛び去っていく太狼たちを見送った。

「さぁっ！じゃあ太狼に代わって、指揮を取るかっ！」
「大丈夫なのですかぁ？」
「うっ…」

あからさまに不安げに問いかけるグレーテルに、座黒は少し顔をしかめた。

第９１章　開かれる道　☆２

中央塔部隊。

「すっごぉ～いっ、崩れ落ちちゃったよぉっ？東塔っ」
先程まで遠目に見えていたはずの東塔が崩れ落ち、由雉が感心したような声をあげる。東塔が崩れ落ちる音は、この戦闘の音が響く場所にも届いていた。それ程に激しい音であったのだろう。

「東塔っていうたらぁ～、イチゴちゃんかっ」
「あの子…まぁ～たやり過ぎてっ…」
門貴の声を聞きながら、リンゴが少し悩むように頭を抱える。

「北塔、西塔、東塔っ…」
周囲を見回し、鬼力の光の止まった塔を確認するゴン。

「後は南塔だけだなっ」
「ええっ」
ゴンの言葉に、輝矢がしっかりと頷く。

「南塔っ…」
二人の会話を聞き、そっと呟いた桜時が、南塔の方を見る。

「父さん、孔雀さんっ…松兄、竹兄、梅人っ…」
南塔に居る家族たちのことを思い、桜時はそっと目を細めた。

朱実孔雀率いる南塔部隊。

「打ち出の小槌ぃぃっ！！」

油火が自分へと打ち出の小槌を振るい、体を巨大化させる。

「おらおらおらぁっ！！踏み潰すわよぉっ！！」

塔の半分位の高さまで巨大化した油火が、足を振り上げ、振り下ろし、周囲の白鬼を踏み潰していく。

「うわわわわっ！」

「きゃああ～っ！竹人さぁ～んっ！」

「レイラっ！」

油火の足に、危うく踏まれそうになる竹人とレイラ。

「姉上っ！危ないでござるっ！！」

「うっさいわねっ！！私に文句言ってんじゃないわよっ！！」

「油火ぃ～っ！味方踏まないように気を付けてぇ～っ！」

「はぁ～いっ！！松人さんっ！」

「……。」

一寸の注意には怒鳴り返したが、松人の注意には笑顔で頷いた油火に、一寸が少し冷めた表情で固まる。

「時雨丸っ…！」

部隊の先頭に立った犬孝が、時雨丸を振り上げる。

「“白首割砕”っ…！！」
『ギャアアアアっ！！』
犬孝が時雨丸を振り切り、白鬼たちを斬り捨てた。

「んっ…！」
消え去った白鬼たちの向こうに、やっと見える南塔へと入口。目を見開いた犬孝が、素早く入口へと駆け寄る。

「入口を発見したっ！中へ入るっ！三兄弟っ！誰か付いて来てくれっ！」
「えっ？」
犬孝の声に、近くで戦っていた梅人が顔を上げる。

「えっとっ…」
「僕は油火止めなきゃなんないからっ、パスねぇ～っ！」
振り向いた梅人に、松人が巨大化油火を宥めながら、答えを返す。
「じゃあ竹兄っ…」
「俺はレイラとラブラブ避難中だからパスぅ～っ！」
「きゃっ！竹人さんっ！」
「何っ！？そのパス理由っ！！」
油火の足から避難しながらも、ただ単にイチャイチャしているだけの竹人とレイラに、梅人が勢いよく突っ込みを入れる。

「頼んだよぉ～っ！梅ちゃんっ！」
「梅人クンっ、頑張ってっ！」
「なっ…！何そっ…！」
「おおいっ！何やってるっ！？急げっ！！」
「……っ」
他力本願な兄たちに文句を言おうとした梅人であったが、後方か

ら急かすように犬孝の声が聞こえてきて、梅人は言葉を止めて、振り向いた。

「ああぁ～っ！もうっ…！」

少し不機嫌な表情で、梅人が犬孝のもとへと駆けていく。

「入るぞっ！」

「うんっ」

犬孝の言葉に、梅人がしっかりと頷くと、二人は中の様子を確認しながら、ゆっくりと塔内へと足を踏み入れる。

「塔内に鬼はいないようだな」

中に敵がいないことを確認すると、犬孝は構えていた時雨丸を下ろした。

「んっ？」

歩を進めた犬孝が、塔内の中央に置かれた、鬼力を放出している大きな水晶を見つける。

「これかっ…」

水晶のすぐ傍に立ち、目つきを鋭くする犬孝。

「おいっ！梅人っ！」

「……。」

「……っ？梅人っ？」

入口から入ってすぐの場所で、深く俯いたまま立ち尽くしている梅人に、犬孝が首を傾げながら、近寄っていく。

「どうした？梅人」
「僕に…」
低い声を漏らしながら、梅人がゆっくりと顔を上げる。
「僕なんかに…出来るのかな…」
「えっ…？」
呟かれた梅人の言葉に、犬孝が少し眉をひそめる。
「僕の花力なんて…桜時に比べたら全然ショボいのに…なのに、鬼力の封印なんてっ…」
「梅人っ…」
昔から桜時と比べられてきた梅人は、そのわだかまりは解けたものの、この重大な状況に際して、桜時ほどには力のない自分に、不安を感じているのだろう。そんな梅人の心中を察し、犬孝は少し目を細めた。
「大丈夫っ」
「えっ…？」
犬孝の手が梅人の肩に乗り、梅人が戸惑うように犬孝を見上げる。
「お前になら出来るよっ」
「犬孝さんっ…」
優しく微笑みかける犬孝に、そっと目を細める梅人。
「孔雀さんも兄貴たちも、そう信じている…」
犬孝がさらに、言葉を続ける。
「桜時もそう信じているっ…」
「……っ」

犬孝から桜時の名が出ると、梅人はハッとした表情を見せた。

「……うんっ」

少しの間を置いた後、梅人がしっかりと頷く。

「……。」

犬孝が肩に乗せた手を離すと、梅人は一人、ゆっくりとした足取りで、鬼力を放出している水晶へと歩み寄った。水晶の前に立ち、梅人が水晶へ両手を向ける。

「……っ」

ゴクリと息を呑む梅人。

「“瞬花っ…終掌”っ…！！」

梅人の両手から放たれた赤い光が、水晶を包んでいく。

――パァァァーンっ！

次の瞬間、水晶は真っ赤な梅の花びらとなって、周囲に舞い散った。水晶が花へと変わったことで、突き上げていた鬼力の光も止む。

「あっ…」

目の前を散っていく梅の花びらを見ながら、大きく目を見開く梅人。

「いっ…犬孝さんっ…」
「ああっ」
ゆっくりと振り返った梅人に、犬孝が笑顔で頷く。
「やったなっ、梅人っ」
「……っ」
犬孝の言葉に、梅人の表情に笑顔が咲く。
「やったぁぁぁっ！！」
喜びを全面に押し出して、梅人は高々と両手を突き上げた。

戻って、中央塔部隊。
「南塔の鬼力が…」
「止まった…」
光の止んだ南塔を、茫然と見つめる門貴と由雉。
「四方の塔の封印がっ…！」
「成功したんやぁ～っ！！」
徐々に声を大きくしながら、門貴と由雉が笑顔を零す。

「みんなっ…」
南塔を見つめ、安心した笑みを浮かべる桜時。
「これで鬼力の放出が止まったっ…！中央塔はっ…！」
変わらず真剣な表情を見せたゴンが、勢いよく中央塔の方を見る。
四方の塔から降り注いでいた、四本の鬼力の光がすべて止み、中央塔を包んでいた鬼力の光が徐々に弱まっていく。

「鬼力の光が…消えたっ…！」
光が完全に消えたことを確認し、ゴンが目を見開く。
「竹取っ…！！」
「ええっ！リンゴっ！金汰っ！」
ゴンに促された輝矢が、リンゴと金汰の名を呼ぶ。

「こっちはいつでも大丈夫よっ！」
輝矢の声に答え、いつでも飛び出せるよう、態勢を低くするリンゴ。

「よぉぉ～しっ！全員っ！中央へ結集っ！！」
マサカリを振り上げた金汰が、大声で、周囲に散らばっている部隊へと叫ぶ。
「全力で中央塔への道を開くっ！！」
『おおぉぉっ！！』

金汰の言葉に、皆が一斉に拳や武器を突き上げ、中央塔への前方突破を開始した。

中央塔内。

「……。」

四方の塔すべてからの鬼力の放出が止められ、中央塔を覆っていた鬼力が消えたことを受け、一気に活気づく中央塔周囲の者たち。

外を見つめているギンが、その様子を見つめ、不機嫌そうに眉をひそめる。

「思い通りにはならなかったようだな…」

「……っ」

後方から聞こえてくる諸刃の声に、ギンがゆっくりと振り向く。

「どんなに計算したところで、まったくその通りにはならない…」

振り向いたギンへ、諸刃がまっすぐな瞳を向ける。

「そういうものだ、人とはなっ…」

「……。」

強く言い放つ諸刃に、ギンが少し顔をしかめる。

「素晴らしい意見だぁ。さすが、人間であっただけのことはありま

すねぇっ」
「ああ、俺は元は人間だった…」
笑みを浮かべ、軽い口調で答えるギンにも動じずに、諸刃は落ち着いた口調で返事を返す。

「お前と違ってな…」
「……っ」
鋭く言葉を付け加える諸刃に、思わず眉をひそめるギン。

「緋鬼、蒼鬼とともに外へ出る…シルク様のことを頼んだぞ…」
そう言い放って、諸刃が足早に広間を出ていく。

「……。」
眠ったままのシルクとともに広間に残され、ギンが深々と俯く。

「……っ！」
――バァァァンっ！

ギンが腕を振り上げ、各塔の様子が映し出されていた壁を勢いよく殴った。壁に大きくヒビが入ると、その映像が消える。

「人間っ…」
顔を上げたギンの瞳には、怨念めいたものが渦巻いていた。

第９１章　開かれる道　☆３

「でっ？」
繰り広げられる戦いを見つめながら、桜時が声を出す。

「中央塔を包む鬼力ってのが元通りになっちまうまで、何分くらいなんだっ？」
「さぁ？太狼さんが、僕の勘では十分から二十分～とか言ってたけど」
「勘かよっ！！」
太狼の言葉を代弁するリンゴに、桜時が勢いよく突っ込みを入れる。

「まぁ言えることは、そう時間はねぇってことだな」
「そうだなっ」
冷静に答えるゴンに、桜時も真剣な表情を見せて呟く。

「ではっ」
「……っ？」
リンゴの首元のすぐ後方に立ち、前方で戦いを繰り広げている皆の方を見つめる輝矢。

「チンタラしてないでっ、とっとと道を開きなさいっ！」
「鬼かっ！！」
必死に戦っている仲間たちへ、厳しい言葉を投げかける輝矢に、桜時が思わず突っ込みを入れる。桜時の声に、ゆっくりと振り向く

輝矢。

「鬼です」
「そうだった…」
自信満々に答える輝矢に、桜時ががっくりと肩を落とす。

「ある程度、距離が詰まれば、私の蹴りで一気に中央塔まで行けるんだけどっ…」
「では、ある程度、距離を詰めましょうか」
「はっ？」
悩むように呟いていたリンゴが、迷いなく返って来る輝矢の声に、眉をひそめる。

「金汰っ！先頭にいる部隊を、少し後ろへさげて下さいっ！」
「えっ？ああっ、わかったっ！」
部隊の先頭で戦っている金汰へ、輝矢が大きな声で指示を飛ばす。
振り返った金汰は少し戸惑うような表情を見せたが、素直に頷き、先頭にいる部隊を下がらせた。

「これでいいかぁ～っ！？輝矢っ！」
「十分ですっ！」
問いかける金汰に、大きく頷く輝矢。

「さてとっ…」
輝矢がゆっくりと、右手に持っていた三日月を構える。

『……っ？』
三日月を構える輝矢を、首を傾げて見つめる桜時たち。

「今ならっ…」
金汰たちのいなくなった前方の白鬼の群れへ狙いを定め、輝矢がその瞳を鋭くする。

「……っ」
「あっ…」
黒から赤へと、瞳の色を変える輝矢に気づき、桜時が少し驚いた表情を見せる。

「三日月っ…」
鬼と同じ赤色の瞳を見せて、三日月を振り上げる輝矢。

「“水月”っ…！！」

――バァァァーンっ！

振り下ろされた三日月から、いつもの水月の二倍の大きさの水の刃が、いつもの倍以上の数で、横に走る滝のように前方の白鬼たちへと飛んでいく。

『ギャアアアっ！！』

前方にいた三十匹以上の白鬼が、激しい断末魔をあげて、一気に消え去っていく。

「すっ…凄げぇ…」
「俺たちが一匹倒すのにも苦労してる鬼を…一瞬であんなに…」
何もない荒地となったその場所を見つめながら、隊員たちが唖然とした表情を見せる。

「あそこまで一気に飛べますか？リンゴ」
「楽勝よっ！」
問いかける輝矢に、リンゴが自信満々に返事をする。
「振り落とされないようにっ、しっかり掴まってなさいっ！」
リンゴが地面に着いた四本の足を同時に曲げ、一気に伸ばす。

「いっくわよっ…！！」
『うわっ！』
地面が凹む程に思いきり飛び上がり、龍のその巨体を空へと舞わせるリンゴ。背中に乗った桜時たちが、振り落とされないように、必死にリンゴの鱗にへばりつく。

――ドッスゥゥーンっ！

『うわあぁぁ～あっ！』
地面を揺らして着地するリンゴに、近くにいた金汰たち先頭部隊が、思わずバランスを崩す。

「あっ、ごめんごめぇ～んっ！」
リンゴが後方を振り返り、バランスを崩している隊員たちへ、軽い笑みを向けた。

「さっすが輝矢さんっ！凄い威力だったぞぉっ！」
「ありがとうございます」
「……っ」
誉める金汰に笑顔を向ける輝矢は、すでにいつもと同じ黒い瞳に戻っていた。その輝矢の様子を横から見つめ、桜時が少し表情を曇らせる。

「あの…目は…」

桜時が、少し不安げに呟いた。

「あの水力…以前のように鬼の力を抑え込んでいた状態とは、明らかに違う…」
窓の外に見える輝矢たちの様子を見ていた諸刃が、少し考え込むように呟く。
「鬼の力を…制御しつつある…」
諸刃がそっと、眉をひそめる。

――あの少女がここまで登ってきて、全力で戦うことになると、そうお考えなのでしょうかねぇ……――

思い出されるギンの言葉に、さらに表情をしかめる諸刃。

「やはりシルク様は…」
「おぉーいっ、そこの人間臭い奴よぉっ」

「……っ」
前方から聞こえてくる声に、諸刃がゆっくりと顔を上げる。
「もう出てっていいのかぁっ？それとも、やっぱり待機とか言うんじゃねぇーだろうなぁっ？」
諸刃が顔を上げると、固く閉ざされた入口の門の前で、出撃を今か今かと待ち続けている緋鬼の姿があった。待機命令が長かったからか、その表情を不機嫌そうにしかめている。
「こっちは、てめぇーみてぇな人間臭せぇ奴と一緒にいるだけでも、超不快なんだっ！とっとと出させっ…！」
「よせ、緋鬼」
「……っ」
ケンカ腰に怒鳴ろうとした緋鬼を、横に立っていた蒼鬼が冷静に止める。
「コイツの命に従うことが、シルク様の命令なのだ」
「チっ」
正論を放つ蒼鬼に、緋鬼が小さく舌打ちを鳴らす。
「どうやって取り入ったんだかっ」
「……。」
毒づく緋鬼の言葉に、諸刃は少し目を細め、そっと俯いた。
「……っ」
諸刃が再び窓の外へと視線を移すと、中央塔への距離を半分に詰めた輝矢たちが、さらに中央塔を目指して動こうとしていた。その様子を確認し、諸刃が緋鬼と蒼鬼の方を見る。

「出るぞ…」
『……っ』
ポツリと呟く諸刃の言葉に、二匹が少し驚いた表情を見せる。
「俺たちの目的は敵の排除、及び敵を中央塔に近付けさせないことだが…」
――諸刃っ…！！――
ここへ、諸刃を殺しに来るはずの、かつての友。
「……出てからは、お前らの好きにしていい…」
「何っ？」
「……っ」
諸刃の言葉に、二匹が思わず眉をひそめる。
「どういった心境の変化です？あれほどまで“命令”にこだわっていた貴方がっ」
「“命令”など、何の意味もない…」
蒼鬼の問いかけに答えながら、諸刃が目を細め、どこか遠くを見るような瞳を見せる。
「“宿命”の前ではな…」
「……。」
鋭く答える諸刃に、少し表情を曇らせる蒼鬼。
「ハッハッハっ！よっしゃあっ！超暴れてやんぜぇっ！！」
諸刃の言葉など聞いていた様子もなく、喜びを全面に押し出した

緋鬼が、早速、重たく閉まっていた中央塔の門を開け放った。

「緋鬼っ」

「ハッハッハッハぁぁぁっ！！」

蒼鬼が止める間もなく、緋鬼は外へと飛び出していく。

「まったくっ…」

そんな緋鬼に呆れた表情を見せながら、蒼鬼も後を追うようにして、中央塔の外へと飛び出していった。

「……。」

その場に残った諸刃も、ゆっくりと門へと歩み寄っていった。

中央塔への距離を詰めた、輝矢たち一行。

「よぉ～しっ！ここまで来れば、私の蹴りで一気に中央塔まで行けるわぁ～っ！」

「味方巻き込まねぇーようにしろよ、バカリンゴ」

「うっさいわねっ！」

嫌味ったらしく口を挟むゴンに、リンゴが勢いよく怒鳴りあげる。

「では早速、中央塔へっ…」

『ギャアアアっ！！』
「……っ」
皆へ指示を飛ばそうとしていた輝矢が、前方から聞こえてくる、白鬼のものらしき激しい悲鳴に、眉をひそめて顔を上げる。
「なっ…何っ？」
輝矢と同じように、リンゴや皆も一斉に前方を見つめる。部隊の最前線は今、輝矢たちがいるこの場所なのだ。これより前方から、白鬼たちの悲鳴が聞こえるというのかおかしい。
「ハァ～ッハッハッハッハっ！！やぁ～ぱっ、外の空気は、超気持ちいいぜぇっ！」
「今、お前が吹き飛ばしたのは、こちらの味方だぞ…」
「あぁ～んな屍人形っ、必要ねぇってっ！」
悲鳴をあげ、消えた白鬼の一団のいた場所に現れる、真っ赤な髪と真っ青な髪を持った、二匹の白い鬼。
「あいつらはっ…？」
二匹の姿を捉え、ゴンが眉をひそめる。
「あいつら…」
ゴンの横で、桜時も同じように眉をひそめる。
――ふぅ～っ！やっと出られたぜぇ～っ！――
思い出される、海中の巨大な白い繭。
「あの時のっ、白鬼一族っ…！」
『えっ…！？』

桜時の声に、皆が一斉に険しい表情となる。

「白鬼一族っ？」

「ああっ、確か緋鬼と蒼鬼とかいうっ…あいつらが四方の塔を解放したんだっ」

「主戦力を塔の外に出してくるなんてっ…」

ゴンに答える桜時の言葉を聞きながら、リンゴが気難しい表情を見せる。

「困ったわねっ…連中の相手は、そこいらの隊員じゃ無理だろうしっ…だからってチンタラしてたら、時間がっ…」

「なぁなぁっ、リンゴさぁ～んっ」

「ああぁっ！？」

場違いに聞こえてくる陽気な声に、リンゴが勢いよく顔をしかめる。

「リンゴさぁ～んっ！」

「うっさいわねっ！今っ、色々と考えてっ…！」

「俺っ、途中下車するわぁ～っ！」

「えっ…？」

『なっ…！』

大きく手を上げ、そうリンゴへ名乗り出たのは、明るい笑顔を見せた門貴であった。門貴の言葉に、リンゴだけでなく、桜時やゴンも驚く。

「途中下車って、降りる気っ！？」

「下車やねんから、そういうこっちゃろぉ～？」

驚きの表情で問いかけたリンゴへ、門貴がごく自然に答える。

「何言ってっ…！」
「ボクも降りるぅ～っ」
「はぁっ！？」
さらに名乗り出る由雉に、リンゴの顔がどんどんと変形していく。
「なぁ～んか龍酔いしてきたしぃっ」
「あのねぇっ…！今っ、んなくだらないこと、言ってる場合じゃっ…！」
「アイツらと戦う気かっ…？」
「えっ…」
軽口を叩く由雉に、注意をしようとしたリンゴであったが、真剣な表情で問いかけるゴンに、リンゴは思わず言葉を止めた。
「アイツらを食い止めて、俺たちを先に進める気かっ…？」
「……それが俺らの役目やろっ？」
問いかけるゴンに、門貴は少し間を置いた後、落ち着いた口調で答える。
「門貴っ…お前…」
「まっ、何が最優先やとか、そういうこと深く考えとうわけちゃうけどなぁっ」
「へっ？」
目を細め、門貴を見つめる桜時に、門貴が大きな笑顔を向ける。
「ああいう活きのええ、強っそうな奴と戦ってみたいっちゅーのが本音っ！」
「門貴っ…」
笑って答える門貴が何とも門貴らしく、桜時は思わず口元を緩めた。

「ボクは龍に乗ってるのに飽きたっていうのが本音ぇ～っ」
「お前らしいよっ、由雉っ」
続いて答える由雉にも、桜時が笑みを向ける。

「どっどうすんのよっ？輝矢っ！」
結論を求めるように、リンゴが輝矢の方を見る。

「別にっ？お好きなようにどうぞっ」
「だあああぁっ！！」
少しも慌てた様子なく、適当に答える輝矢に、リンゴが思わず顔面を地面へとめり込ませる。

「お好きなようにって、アンタねぇっ…！」
「それが私たちのいつも通りです」
「……っ」
輝矢の言葉に、顔を上げたリンゴが引きつっていた表情を、真剣なものへと変える。

「いつも通り、戦って…」
ゆっくりと口元を緩め、門貴と由雉の方を見る輝矢。

「いつも通り、勝って来なさいっ…」
『……っ』

笑みを向ける輝矢に、門貴と由雉も笑みを浮かべる。

「かしこまりぃ～っ！」

「まっ、言われなくても勝つしぃ～？」
輝矢の言葉に、二人が笑顔で返事を返す。
『……っ』
そのやり取りを見つめ、ゴンやリンゴも穏やかな笑みを浮かべる。

「んじゃあ桜時ぃ～っ、世界と輝矢のことは適当に頼んだよぉ～っ」
「適当でいいのかよっ…？」
適当に頼む由雉に、桜時が少し呆れた表情を見せる。

「ほなっ、行こかぁ～っ」
「うん～っ」
互いに頷き合って、リンゴの背を降りようと、背の端っこへと移動をする門貴と由雉。

「あっ…！」
飛び降りようとした寸でのところで、門貴が何かを思い出したかのように立ち止まり、勢いよく振り返る。

「輝矢んっ！」
「……っ？」
大きく名を呼ばれ、少し首を傾げる輝矢。

「俺っ、四人で旅すんのっ、めっちゃ楽しくって好きやったわっ！」
「……。」
笑顔で言葉を放つ門貴に、輝矢が大きな瞳で目を見張る。

「だからっ、また四人で旅しよなぁっ！」

「……っ」
門貴の満面の笑みを見て、輝矢も、その横に立つ桜時も、大きな笑みを浮かべる。

「一匹で勝手にどうぞっ」
「そうだよぉ～サルだけで旅でも何でもしてなよぉ～」
「がっびぃぃーんっ！！」
冷たい言葉を投げかける輝矢と由雉に、門貴が激しくショックを受ける。

「はぁっ…」
こんな場面に立っても、相変わらずの皆の様子に、少し呆れた表情で、深々と溜息をつく桜時。

「……プっ！ハハハハっ！」
だが溜息をついていた桜時が思わず吹き出し、大きな笑い声をあげる。

『アハハハハハっ…！！』

桜時の笑い声が合図となって、輝矢と由雉も笑いだし、そして落ち込んでいたはずの門貴も、一番大きな笑い声をあげた。

「こんな時に…笑うなんて…」
「強いのさっ、アイツらはっ…」
驚きの表情で四人を見つめている黒羽に、金汰が横からそっと呟きかける。

「ほら行くよぉ～サルっ」
「へぇ～いっ！」
「門貴っ」
「んっ？」
由雉に続いてリンゴから降りようとした門貴が、後方から聞こえてくる輝矢の声に振り向く。門貴が振り向くと、輝矢が門貴へ、笑顔を向けていた。

「また、四人で旅をしましょう、必ずっ」
「輝矢んっ…」
「……っ」
目を細める門貴へ、輝矢が小指を突き立てた左手を向ける。

「約束ですっ」
「……っおうっ！」
同じように小指を立てた左手を突き上げ、門貴が大きく頷く。

「おっしゃあっ！行こかぁっ！」
門貴がリンゴの背から飛び降り、すでに地面で待っている由雉のすぐ横へと着地する。

「ユッキーっ、今、こっそり小指立ててなかったぁ？」
「うるさいっ！早く行くよぉっ！」
軽い会話を交わしながら、門貴と由雉が、二匹の鬼のもとへと駆け出していく。

「……。」

遠ざかっていく背を、しばらくの間、見つめる輝矢。

「……っ」

一瞬目を閉じ、決意した表情を見せた輝矢が、まっすぐに前方を見据える。

「門貴と由雉があの二匹を引きつけている間に、私たちは一気に中央塔まで攻め入りますっ！」

輝矢が大声で、堂々と言い放つ。

「皆っ、準備をっ！！」

『おおぉぉっ！！』

輝矢の言葉に決起し、一時戦いを止めていた者たちが皆、また一斉に白鬼との戦闘を開始する。金汰の指示に動き、リンゴの周囲から周りの白鬼たちを遠ざけていく中央塔部隊。

「リンゴっ！行けますねっ？」

「ええっ！勿論っ！」

声を掛ける輝矢に、リンゴがやる気満々に頷く。

「全員っ！巻き込まれて死ぬんじゃないわよぉっ！」

そう叫びながら、リンゴが青く輝かせた前右足を、勢いよく振り上げる。

「青き脚…龍が如くっ…」

前方の中央塔を見据え、狙いを定めるリンゴ。

「“龍蹴”っ…！！」

――バァァァーンっ！！

『ギャアアっ！！』

振り切ったリンゴの足から放たれた青い光が、中央塔まで一瞬で駆け抜け、その道筋にいた白鬼をあっという間に蹴散らしていく。

「すっげぇ威力っ…」

「痛てぇぞぉ～？あれを喰らって、俺は肋を五回は折られた」

少し引き気味に感心している桜時に、ゴンが横からしみじみと語りかける。

「くだらないこと言ってるとっ、振り落とすわよっ！！」

『うわぁっ！』

急に駆け出すリンゴに、話していた桜時とゴンが、バランスを崩し、背中へと膝をつく。

「金汰っ！両端を固めてっ、道を維持して下さいっ！」

「了解っっ！！全員っ！そんな感じだぁぁっ！！」

「適当な隊長っスねぇ～っ」

輝矢の指示を受け、出来たばかりの道を、リンゴとともに勢いよく突き進む金汰たち。適当な指示を飛ばす金汰に少し呆れながらも、羊スケもその波に続く。

『前方突破だぁぁぁっ！！』

『うおおおぉぉっ！！』

輝矢たちを乗せたリンゴを中心に、皆が拳を突き上げ、前方に見えた中央塔へと駆け出していく。

第９１章　開かれる道　☆４

「何だぁ？あの龍の蹴りっ、超すっげっ」
リンゴが放った蹴りを見ていた緋鬼が、感心したような声を漏らす。

「あれは龍人の光力…人間の中で最も強い力だ」
「あれが最強ぉ～っ？やっぱ前言撤回っ！」
「フっ…同意見だなっ…」
勢いよく顔をしかめる緋鬼に、蒼鬼が少し微笑んで呟く。

「まぁ何にせよぉっ、アイツらの思い通りに事が運ぶのは、超つまんねぇっ」
そう言って口元を緩めた緋鬼が、中央塔へと突き進んでいるリンゴへと、ゆっくりと右手を向ける。

「止まってもらうぜぇっ！！」

――ピュンっ…！

「……っ！」
リンゴへ向けて何かを放とうとした緋鬼が、放つことを止め、その表情をしかめる。

「これはっ…」
リンゴへと向けていた自らの右手を見つめ、緋鬼がそっと眉をひそめる。

「羽根っ…？」
緋鬼の右腕へと刺さっているのは、一枚の青い羽根であった。

「あの人たちにはさぁ～っ、終着地点があるんだよぉ～」
「……っ」
背後から聞こえてくる声に、緋鬼が勢いよく振り返る。

「てめぇーはっ…！」
「……。」
緋鬼が振り返ったその先に立っていたのは、右手に数枚の羽根を構え、鋭い表情を見せた由雉。

「だから君はっ、ここでボクと遊んでいきなよぉっ」
「……っ」
挑戦的に微笑む由雉に、緋鬼が少し顔をしかめる。

「へっ…！」
だがすぐに、緋鬼は笑みを浮かべた。

「超臨むところだぁっ！！」
「……っ！」

勢いよく飛びかかって来る緋鬼に、由雉が素早く羽根を構える。

「おいっ！挑発に乗るなっ！」
由雉のもとへと飛び込んでいく緋鬼を、止めるように声をあげる蒼鬼。

「緋っ…！」
「おぉ～っとっ」
「……っ」
緋鬼を追いかけて行こうとした蒼鬼の首元に、真っ赤な棒先が突き付けられる。突き付けられた棒に、出そうとしていた足を止め、眉をひそめる蒼鬼。

「お前の相手は、おぉ～れっ」
真っ赤な棒・如意棒を突き出し、蒼鬼の前へと立ち塞がったのは、門貴であった。

「貴方は…？」
「竹取輝矢んの永遠の愛猿っ！猿川門貴やっ！」
そっと問いかけた蒼鬼に、門貴が満面の笑顔で、緊張感なく答える。

「竹取輝矢…あの黒鬼の娘か…」
輝矢の姿を思い出し、蒼鬼がそっと目をほそめる。

「世界とか全人類とかっ、んなでっかいもんは小難しくって、ようわからんけどなぁっ」
門貴がその瞳を鋭くし、如意棒を握る手に力をこめる。

「輝矢んの行く道を開くんはっ、俺の役目やっ…！！」
強い瞳で、門貴は堂々と言い放った。

「よしっ！！白鬼の群れを抜けたっ！！」
両端を押さえ、リンゴが作った道を維持していた部隊の先頭に立った金汰が、無数の白鬼の一団を抜け、中央塔までもう後少し、というところまで辿り着く。

「俺たちはここで白鬼共を食い止めるっ！後は頼んだぞっ！リンゴっ！」
「わかりましたっ！」
金汰の言葉に頷くと、輝矢たちを乗せたリンゴは、そのまま中央塔へと突き進む。

「よしっ！まだ鬼力は消えたままだっ！」
「急げっ！リンゴっ！」
「わかってるっ！！」
ゴンの叫び声に答えながら、リンゴがさらに走る速度を上げる。

「もうすぐよっ…！！」
その距離を、どんどんと詰めていく中央塔。かすかにしか見えていなかった塔の姿が、徐々にはっきりとしていく。

「……っ？」
必死に駆け抜けながら、リンゴが少し眉をひそめる。

「塔の前に誰かいるわっ！」
『えっ…！？』
リンゴの声に、桜時やゴンが身を乗り出す。
「あれはっ…」
塔の前に立つその人物に、リンゴが大きく目を見開く。
「御剣諸刃っ…！」
「……。」
響き渡るほどの大きな声で、その人物の名を叫ぶ桜時。塔の前に一人、静かに立ち尽くしているのは、相変わらずの無表情に、首元には黒い紋様、腰に水晶の剣を下げた、諸刃であった。
「諸刃っ…」
「……っ」
目の前に立つかつての友に、ゴンとリンゴがそれぞれに顔をしかめる。
――ゴンっ！――
「……。」
穏やかな次狼の笑顔を思い出し、ゴンが力強く拳を握り締め、俯けていた顔を上げる。
「俺がアイツを入口から引き離す。その隙にお前らは、塔の中へ入

れ」
「えっ…！？」
「なっ…！」
ゴンの言葉に、桜時とリンゴがそれぞれ、驚きの声をあげる。
「お前らには塔内で役目があるっ。俺が行くのが適策だろうがっ」
「そりゃそうだけどよぉっ…」
すらすらと答えるゴンに、桜時が少し困ったように口ごもる。
「ゴンっ…！」
「コイツらをしっかり送り届けろよ、リンゴっ」
何かを言おうと名を呼んだリンゴへ、ゴンが言葉を放つことを遮るように、強く言い放つ。
「けどっ、ゴンっ！！」
「……っ」
「えっ…輝矢っ？」
ゴンへ強く言いかけようとした桜時の前に、制止を促すように輝矢の右手が突き出される。
「ゴンっ…」
桜時の前へ出た輝矢が、まっすぐな瞳でゴンを見つめる。
「俺に諸刃と戦わせてくれっ…」
ゴンもまっすぐに、輝矢を見据える。
「頼むっ…竹取っ…」
「……。」
偽りなく輝く瞳に、輝矢はそっと目を伏せた。

「わかりました…」
「輝矢っ…！」
目を開き、頷く輝矢に、桜時が驚きの表情を見せる。

「悪いな…」
「ですがゴンっ」
「……っ？」
言葉を付け加える輝矢に、ゴンが少し怪訝そうに顔を上げる。

「自分の心には…従うようにして下さいね…」
「えっ…？」
輝矢の言葉に、ゴンが戸惑うような声を漏らす。

「どうか…悔いの残らぬように…」
「……っ」
そっと微笑み、願うような言葉を放つ輝矢に、ゴンが少し目を細める。

「ああっ…」
その願いに、ゴンはしっかりと頷いた。

「竹取のことは頼んだぞぉっ！ハチ公っ！」
「えっ？あっ、ああっ」
軽く手をあげ、言い放つゴンに、桜時が少し慌てながら、大きく頷く。

「……っ」

「ゴンっ…！」
ゴンが桜時から、リンゴの頭へと視線を移すと、首を後方へと回したリンゴが、不安げな表情をゴンへと向けていた。

「ゴンっ…！私っ…！」
「二人のこと、頼んだぞ、リンゴっ…」
「ゴンっ…」
そんなリンゴへ、ゴンが穏やかな笑みを向ける。

「じゃあなっ！」
「ゴンっ…！！」
まるで止めるようなリンゴの声を背中に浴びながら、ゴンがリンゴの背を飛び降り、塔の前に立つ諸刃の元へと駆け込んでいく。

「天狼丸っ…！」
駆けていきながら、腰に下げた次狼の刀・天狼丸を抜き放つゴン。

「諸刃っ…！！」
「ゴンっ…」
向かってくるゴンの姿を捉え、諸刃も腰に下げた剣の柄へと手をかける。

「来いっ…！」
草薙を抜き放つと、諸刃もゴンの方へと駆け出していった。

「あいつがあっさりと塔の前を空けるなんてっ…」
「あの者もゴンと戦うことを望んでいるのでしょう…」
「えっ…？」
意外そうに呟いていた桜時が、隣で呟く輝矢の言葉に、少し驚いたように振り向く。

「それって…」
「リンゴ」
戸惑うように呟く桜時を余所に、輝矢がその場に足を止めたままのリンゴの名を呼びかける。リンゴは深く俯いたまま、何かを考え込むような表情を見せていた。

「リンゴっ」
「あっ！」
輝矢がもう一度名を呼ぶと、やっと気づいたリンゴが、少し慌てた様子で顔を上げる。

「ごっごめんごめんっ！すぐ出っ…！」
「私たちも、もうここで結構です」
「えっ？」
「……っ」
思いがけない輝矢の言葉に、リンゴが目を丸くし、桜時が少し驚いた表情を見せる。

「なっ…！何言ってっ…！」
「走って行けない距離ではありません。白鬼共は金汰たちが押さえてくれていますし」
「だからってっ…！」
冷静に答える輝矢に、リンゴが声を張り上げる。

「アンタたちを送り届けるのが、私の役目でっ…！」
「ゴンを見守ることも、アナタの役目ではないのですか？」
「……っ！」
そっと問いかける輝矢に、リンゴが衝撃を走らせるように、大きく目を見開く。

「……。」
輝矢とリンゴのやり取りを、真剣な表情で見守る桜時。

「そ…それはっ…」
「私はアナタにも、ゴンと同じように、自分の心に従って欲しい…」
俯き、迷うように声を発するリンゴに、輝矢がさらに言葉を続ける。

「悔いを…残さぬ為に…」
「……っ」
向けられる輝矢の笑顔に、リンゴがそっと目を細める。

――悔いを残しちゃいけないよぉっ！リンゴっ！――

「おばあちゃんっ…」
その笑顔は、リンゴの偉大な祖先と同じ、力強い笑顔であった。

「……っ」
「うおっ！」
リンゴが体を起こし、背を傾けて、背中に乗っていた輝矢と桜時を、ゆっくりと地面に滑り落とす。

――ボォォォォ～ンっ！

二人を地面に降ろすと、リンゴは白い煙に包まれ、人化した。

「……ごめんっ」

人の姿へと戻り、輝矢たちの前に立ったリンゴが、ポツリと呟く。

「何がですかぁっ？」

「……っ」

不思議そうに首を傾げる輝矢に、リンゴがそっと笑みを零す。

「ありがとうっ…」

リンゴは小さな声で、礼の言葉を呟いた。

「ゴンのこと、頼みますね」

「そっちこそっ、世界のことは頼んだわよっ！」

いつものように強気な口調に戻ったリンゴが、どこか偉そうに輝矢へ言い放つ。

「アンタには輝矢のことっ、頼んだからねっ」

「おうっ」

念を押すように言い放つリンゴに、桜時が笑顔を見せて頷く。

「じゃあっ」

「ええっ」

「……っ」

輝矢が頷いたことを確認すると、ゴンと諸刃を追いかけ、リンゴはその場を駆け出していった。

『……。』
その場に残った輝矢と桜時が、しばらくの間、去っていくリンゴの背中を見つめる。

「さぁ、私たちも急ぎましょうか」
「ああっ」
振り向いた輝矢に、笑顔で頷く桜時。

「ではっ」
「んっ？」
三日月を左手に持ち替え、右手を差し出す輝矢に、桜時が少し首を傾げる。

「何だ？」
「手、繋いで行きましょうっ」
「えぇぇっ！？手ぇぇっ！？」
輝矢の言葉に、桜時が目を見開いて、大きく驚く。

「手手手って、お前っ…！」
「ほらっ、迷っている時間はありませんよっ？」
「えぇぇ～っ！？もうっ…！」
輝矢に急かされた桜時が、動揺しながら、思いきって輝矢の手を取る。手を繋いだ二人は、中央塔への後わずかな距離を、駆け出し始めた。

「っつーか、手繋がないまま、走りだせば良かったっ…」

駆けだしながら、少し後悔したように呟く桜時。

「すみませんっ…」
「えっ…？」
謝る輝矢に、桜時が戸惑うように振り向く。

「後悔したくなかったものでっ」
「……っ」
そっと微笑む輝矢を見て、桜時が少し目を細める。

「そうだなっ…」
微笑んだ桜時が、握り締める手に力を込める。

「行こうっ…！」
「ええっ」

しっかりと頷き合い、輝矢と桜時は、中央塔を目指す。

第９２章　戦闘開始　★１

最終決戦地、鬼国跡。中央塔周辺。

「竹取輝矢たちが中央塔へ向かっているっ！」

部隊の中心で、必死に叫ぶ金汰。

「いいかぁっ！？中央塔にはっ、白鬼一匹たりとも近づけるなよぉっ！！」

『おおぉぉっ！！』

金汰の言葉に大きく返事をし、引き続き、白鬼との戦闘を行う隊員たち。

「へへへっ…！！」

「ダルっ…」

楽しげに笑う緋鬼の前へと立ち、面倒臭そうな顔を見せる由雉。

「貴方が私の相手というわけか…」

「ああっ！」

落ち着いた表情の蒼鬼へと、鋭く如意棒を向ける門貴。

「諸刃っ…！」

「ゴンっ…」

まるで宿命のように向き合う、かつての友。

「はぁっ…！はぁっ…！」

その二人のもとへと、必死に急ぐリンゴ。

中央塔前。

『……。』

目指してきた場所に、やっと辿り着いた輝矢と桜時。多くの仲間が駆けつけ、皆で作った道を進み、輝矢と桜時はやっと、この場所へ辿り着いた。

「やっと…ここまで来たな…」

「ええっ…」

互いに真剣な表情を見せ、輝矢と桜時が頷き合う。

「では…行きましょうか…」

輝矢がゆっくりと、右足を前へと踏み出す。

「……っ」

「えっ…？」

だが繋いでいた桜時の手が、力強く輝矢を引き止め、輝矢は前へと進むことが出来なかった。

「ハチっ…？」

少し戸惑うように、輝矢が桜時の方を見る。

「……。」
俯いたまま、厳しい表情を見せている桜時。

――あの…目は……――

道を開く際、その瞳を黒から赤へと変えた輝矢。海中での一戦から、輝矢は今まで暴走させていた鬼の水力を、徐々に制御し始めている。そのことに、桜時は小さな不安を抱いていた。

「輝矢っ…」
「……っ？」
少し悩むような表情で顔を上げる桜時に、輝矢が不思議そうに首を傾げる。

「死ぬなよっ…？」
「……っ」
桜時の言葉に、ハッとした表情を見せる輝矢。

「俺を置いて、死ぬなっ…」
「ハチ…」
不安を拭いきれない表情で、願うように言い放つ桜時に、輝矢がそっと目を細める。

「……はいっ…」
輝矢が噛み締めるように頷き、握り締めた手に力を込める。

「はいっ…」
もう一度頷いて、輝矢が桜時の胸に体を預ける。
「ハチも…」
ゆっくりと口を開く輝矢。
「私を置いて…逝かないで下さいねっ…」
「うんっ…」
輝矢の言葉に頷きながら、桜時は輝矢の肩口に顔を寄せる。

「ハチには私を、お嫁に貰っていただかねばならないのですからっ」
「おっ…！お嫁っ…！？」
その衝撃的な言葉に、ハチが勢いよく顔を上げて、すぐ近くの輝矢の顔を見る。

「お嫁ってっ、お前っ…！」
「私のすべてを受け止めて下さるんでしょうっ？」
少し頬を染めて言い放つ桜時に、輝矢が鋭く問いかける。
「それともあの言葉は、ウソだったのですかっ…？」
「うっ…！」
急に悲しげな表情となる輝矢に、桜時は言い返すことも出来ず、思わず顔をしかめる。内容とは異なり、輝矢に脅迫されているような、桜時はそんな気分であった。

「うっ…嘘じゃねぇーよっ…っつーかっ！」
桜時が何かを思い出したように、パッと顔を上げる。

「俺っ、お前にあん時の返事っ、貰ってねぇーんだけどっ？」
「返事っ？」

――好きだっ！この世界で一番っ、お前のことが好きだっ！――

「ああっ」

「“ああ”って、お前っ…」

今、思い出したと言わんばかりの声を出す輝矢に、桜時が少しがっくりするように肩を落とす。

「俺の一世一代の大告白をっ…」

「もう十分、言ってきましたので、今更言う必要もないかとっ…」

「確かに山程言ってたけどっ、告白の後は一回も言ってねぇーぞっ！」

「そうでしたっけ？」

「そうだっ！」

惚けたように首を傾げる輝矢に、桜時が少し口を膨らませて訴える。

「では、返事は、この戦いが終わったら言います」

「へっ？」

微笑んで答える輝矢に、桜時が目を丸くする。

「今、じゃなくって？」

「今言ったら、戦いなんて放り出して、そのまま二人でラブラブしたくなっちゃうじゃないですかっ」

「んなっ…！？」

さらりと言い放つ輝矢に、さらに顔を真っ赤にする桜時。

「戦い放り出すってお前なぁっ…！」

「私にとっては、ハチが最優先ですからっ」

「うぅっ…」
輝矢が恥ずかしげもなく言うと、桜時は恥ずかしさのあまり輝矢を直視出来ず、俯いてその視線を逸らした。

「やっぱ十分かもっ…」
「それにっ…」
「……っ？」
さらに言葉を付け加える輝矢に、桜時が戸惑うように顔を上げる。

「生き残る為の、“理由”が出来るっ…」
「輝矢っ…」
そっと微笑む輝矢を見て、桜時が思わず目を細める。

「……そうだなっ」
ゆっくりと口元を緩める桜時。

「そんじゃあ俺もっ、お前の返事聞く為に、頑張って生き残るとすっかっ！」
「ええっ」
大きな笑みを浮かべ、互いに微笑み合う輝矢と桜時。

『……っ』
二人が互いの体を離すと、固く握り締められた手が、ゆっくりと離される。手を離した二人は前方へと歩き、中央塔の巨大な門の前で立ち止まる。

「……っ」

固く閉ざされた門へ向け、左手を構える桜時。

「開けるよっ」

「はい」

桜時の言葉に、輝矢が真剣な表情で頷く。桜時がさらに表情を引き締め、左手に力を込めた。

「“瞬花”っ！」

――パァァァーンっ！

桜時の手が触れたその瞬間、塔の巨大な門が、無数の桃色の花びらとなって散っていく。

「行きましょうっ…！」

「ああっ！」

桜の散る中、輝矢と桜時は勢いよく、塔の中へと駆け込んでいった。

『……っ』

入口からすぐに、周囲に窓があるだけで、他に何もない大きな広間へと出ると、二人は足を止めた。

「ここはっ…」

「ようこそっ、中央塔へ」
『……っ！』
響き渡るように聞こえてくる声に、輝矢と桜時が身構えて、振り向く。

「ギンっ…！」
「……っ」
広間のほぼ中央に立ち、二人を出迎えるのは、怪しげな笑みを浮かべたギンであった。

「いやはや…まさか貴方がたが、本当にここに辿り着けるなんて、思ってもみませんでした…」
ギンが感心したように言い放つ。
「素晴らしかったですよ…集まった多くの仲間たちも、貴方がた皆の結束力もっ…」
よく響くその声で、ギンが誉め称える。

「人間というものは、素晴らしいっ…本当に…」
『……っ』
微笑んではいるのだが、少しも笑っていないその瞳に、輝矢と桜時は険しい表情で眉をひそめた。

「貴方がたがそうまでしてここへ来た理由っ…それは無論っ…」
ギンがゆっくりと足を動かす。

「“コレ”っ、でしょうねぇ」
「……っ！」

「あっ…！」
ギンが指し示したその先にあるものを見て、輝矢と桜時が大きく目を見開く。

「命力の結晶っ…！」

床の中央の台座の上に置かれた、巨大な水晶の中に浮かんでいるのは、白く輝く美しい結晶。海中で桜時の体から引き抜かれた、命力の結晶であった。今までギンの背後に隠れていたのが、ギンが動いたことで二人の前へと現れたのだ。

「四方の塔の鬼力を封印して、中央塔内へ侵入を図り、そして命力の結晶を回収して、鬼力の放出を止める…」
「……っ」
太狼の考えた作戦を、一つと間違うことなく言い当てるギンに、桜時が思わず顔をしかめる。
「何っ、誰が考えても、行き着く作戦です…そう驚くことはない…」
「えっ…」
それは、顔をしかめた桜時が何を考えているのか、すべてを見通しているような言葉であった。

「私たちが狙っているとわかっているのに…命力の結晶をそんな目立つところに…？」
「目的のものが見えている方が、やる気が湧くでしょうっ…？」
「……っ」
試すような口調をするギンに、輝矢が少し眉をひそめる。

「牢戸知玖は…どこにっ…？」
「シルク様なら、この塔の最上階で眠っていらっしゃいますよっ」

「眠って…？」
「ええっ」
戸惑うように聞き返す輝矢に、ギンがゆっくりと頷きかける。
「ああ、でも貴女が行けば、起きるかも知れないなぁ…」
ギンがそっと微笑み、思いついたように言う。

「あの方は今、眠りについて、自分が全力で戦える者が来るのを待っているんですよっ…」
「全力っ…」
続くギンの言葉に、厳しい表情を見せる輝矢。
「貴女が上へ上がって、シルク様が目覚めれば…貴女はシルク様に認められたということになりますかねぇ」
「……。」
どこか楽しげに微笑むギンに、輝矢は少し表情を曇らせた。

「輝矢っ」
「……っ？」
横から呼ぶ桜時の声に、ギンを見つめていた輝矢が振り向く。
「俺がアイツを押さえるから、お前は上に行って牢戸知玖をっ」
「えっ…」
桜時の言葉に、輝矢が思わず戸惑いの声を漏らす。

「しかしっ…！」
「アイツを倒さなきゃ、命力の結晶は奪い返せない。その間、シルクを押さえれんのはお前だけだっ」
「ハチっ…」
真剣に言い放つ桜時に、輝矢が複雑そうな表情を見せる。

「ですがっ…」

――何…者っ…？――

――狐族じゃねぇっつーんなら、アイツは一体、何だってんだよっ？――

まだまだ謎の多い、ギンの正体。

「ですが、あれが本物の命力の結晶という確証はありませんっ」

輝矢が桜時へ、強く訴える。

「私たちを分散させるための罠という線もっ…」

「本物ですよっ」

『……っ』

聞こえてくる声に、輝矢と桜時が同時に振り向く。

「これは本物っ」

結晶の浮かぶ水晶を軽く小突き、微笑むギン。

「アナタの言葉を、容易に信じることなど出来るはずがっ…」

「言ったでしょうっ？あの方は、貴女と全力で戦うことを望んでいらっしゃるのですよぉっ」

「……っ」

言い返そうとした輝矢が、ギンの言葉に、声を止めて息を呑みこむ。

「ならば、僕がすべきことは、その望みを叶えることだけっ」

水晶を見つめていたギンが、桜時の方を見る。

「その王子様がすぐ横に居て、貴女、全力で思い切り戦えます？」

「……っ」

ギンの問いかけに、何も答えぬまま、ただ顔をしかめる輝矢。その問いかけの答えなど、輝矢が言わずとも、誰もがわかりきっていることであった。

「だから僕の役目は、ここで彼を引き止めることだけっ。そして引き止めるには、この結晶がいい餌っ」

ギンが再び、結晶の方に目を移す。

「最良の手段だと思いませんっ？」

「……。」

意見を求めるギンに、輝矢が厳しい表情を見せる。

「確かに最良の手段だっ」

「ハチっ」

代わりに答える桜時に、輝矢が少し驚いたように振り向く。

「アイツの言う通りにすんのは癪かも知んねぇーけどさっ、今はそうするしかねぇーよっ」

そっと微笑んだ桜時が、説得するように輝矢に言い放つ。

「俺には俺の、お前にはお前の役目があるっ」

桜時のまっすぐな瞳が、輝矢を捉える。

「その役目を果たす為に、皆が道を作ってくれたっ…」

――一番乗りっ…――
――私があの女の足を引っ張るわけには、いかないのよっ！！――
――俺っ、途中下車するわぁ～っ！――

たくさんの人がこの戦場に集まり、そして作ってくれた道。

「俺たちはその道を、進んできたんだからっ…」
「ハチっ…」
この状況下でも、前向きな笑顔を見せる桜時に、輝矢が少し目を細めた。

「わかりました…」
輝矢が口元を緩め、ゆっくりと大きく頷く。

「ハチがそう仰るのならっ」
「……っ」
微笑む輝矢に、桜時の浮かべた笑みを大きくする。

「ではここはお任せします」
輝矢が三日月を持ち直し、ゆっくりと足を踏み出す。

「私は牢戸知玖のところへっ…」
「ああっ」
輝矢の言葉に、桜時が真剣な表情となって、しっかりと頷く。

「階段はあちらですよっ」
「……っ」
広間の端に見える、上へと続く階段を指差し、親切に教えるギン。
そんなギンに少し眉をひそめながら、輝矢はその階段のある方へと、体を向けた。

「どうもっ」
「フフフっ…」
顔をしかめたまま礼を言う輝矢を見て、ギンは少し楽しげに笑う。

「ではっ」
「あっ、輝矢っ…！」
「……っ？」
強く呼び止める桜時に、階段へ向かおうとした輝矢が、不思議そうに振り返る。

「ハチ？」
「さっきの約束っ、忘れないでくれっ」
「……っ」
真剣な表情を見せる桜時に、輝矢が少し目を細める。

――では、返事は、この戦いが終わったら言います……――

二人の間に、交わされた約束。

「……ええっ」
輝矢が笑みを浮かべ、もう一度しっかりと頷く。

「ハチも、どうかお気をつけてっ」
「ああっ」
「ではっ」

そう言うと今度こそ、輝矢が桜時に背を向け、牢戸知玖の待つ最上階へと繋がる、階段を駆け上がっていく。姿が消え、足音が遠ざかり、そして小さな音すらも完全に消える。

「……。」
音が消えた後も、余韻に浸るように、しばらくの間階段を見つめる桜時。

「随分と短めでしたが、良かったのですか？」
「……っ」
正面から聞こえてくる声に、横を向いていた桜時が、ゆっくりと前を向く。

「最期の会話となるかも知れないのにっ…」
「……。」
挑戦的に微笑むギンに、桜時が少し眉をひそめる。

「さっきので十分だっ」
桜時が強く言い放ち、右手に持っていた村雨丸の刃先を、ギンへと向けて構える。

「後でいっくらでも話せばいいんだからなぁっ！」
「……っ」
自信満々に言い放つ桜時を見て、ギンはどこか冷たく微笑んだ。

第９２章　戦闘開始　★２

中央塔前。正刈金汰率いる中央塔部隊。

「白鬼共を分散させろっ！中央塔へは近づけさせるなよっ！！」

部隊の中央に立ち、金汰が周囲へ、大声で指示を飛ばす。

「金汰さんっ！」

「んっ？」

上の方から聞こえてくる声に、指示を飛ばしていた金汰が、不思議そうに顔を上げる。

「どいて下さいっ！！」

「へっ…？」

高い空の上から、金汰の方へと勢いよく降下してくる、翼の生えた大きな生物。

「どわあああああっ！！」

――バァァァァーンっ！

金汰の叫び声が響き渡る中、中央塔部隊の中央へ、青き翼龍が降り立つ。その巨体に地面が揺れ、周囲で戦っていた者たちが、思わずバランスを崩した。

――ボォォォ～ンっ！

「ふぅ～っ」

青き龍は白い煙に包まれ、イチゴの姿となる。

「大丈夫ですかぁっ！？金汰さんっ！」

「もっ…もうダメっ…」

イチゴが振り向くと、そこにはイチゴが着地した時に下敷きにされ、地面に埋まるように倒れ込んだ金汰の姿があった。

「あららぁ～っ、金ちゃんっ、ぺっちゃんこぉ～っ」

「んっ…？」

イチゴの隣から聞こえてくる、妙に軽々しい声に、金汰が敏感に反応して顔を上げる。

「桃ちゃんっ…！？」

「やっほぉ～っ」

勢いよく顔を上げた金汰へ、イチゴの横に立つ太狼が、笑顔で手を振る。

「おおぉ～っ！来てくれたのかっ！桃ちゃんっ！」

「まぁ金ちゃんの為に来たわけじゃないけどねぇ～っ」

素早く立ち上がり、握手を求める金汰に、太狼が笑顔を見せながらも、突き放すような言葉を放つ。

「金汰さんっ！輝矢さんたちはっ…！？」

「んっ？」

必死に問いかけるイチゴに、金汰が顔を向ける。

「ああっ、リンゴが送っていった。今頃、中央塔に着いてるはずだっ」
「お姉ちゃんがっ？」
「ああっ」
聞き返すイチゴに、金汰が笑顔を見せて、大きく頷く。
「じゃあ作戦は上手くいったんだねぇっ？」
「ああ、バッチリだよっ」
確認するように問いかける太狼へ、金汰が笑顔を向ける。
「さすが桃ちゃんの作戦だなっ！ガッハッハっ！」
「まぁ当然でしょ～っ」

――ドォォォーンっ！

「んっ？」
金汰の言葉に得意げに答えていた太狼が、背後から聞こえてくる重く響く衝撃音のようなものに気づき、少し眉をひそめて振り返る。中央塔の向こうに、かすかに立ち上る煙のようなものが、視界へと入った。
「あれはっ…？」
「ああ、四方の塔を解放したとかいう白鬼一族の奴らが二匹程、塔から出てきてなっ」
問いかけた太狼へ、金汰が真剣な表情となって答える。
「今、サルとキジが応戦しているっ」
「二人っ…いや、もう一人見えるなぁ…」
「えっ？」

太狼の言葉に金汰が首を傾げ、目を凝らして、煙の上がっている方を見つめる。

「もう一人はゴンくんみたいだねぇ～」
「どっ…どうやったら見えるんだっ…？あんな小さいの…」
何食わぬ顔で言い放つ太狼に、少し唖然となる金汰。

「金ちゃ～んっ」
「んっ？」
太狼に呼ばれ、必死に戦いを見つめていた金汰が振り向く。

「白鬼たちをあっち側へ押し返してもらっていいぃ～？」
「へっ？」
そう言って、中央塔とは逆の方向を指差す太狼に、金汰が目を丸くする。

「あっ、あっち？」
「うん～っ」
思わず聞き返した金汰へ、大きく頷く太狼。

「だがあちらへ押せば、中央塔と離れることになるぞっ？折角、ここまで接近したというのにっ…！」
「僕らがここに居ちゃっ、彼らが思いきり戦えないっ」
「……っ」
そっと微笑む太狼に、金汰が続けようとした言葉を呑み込む。

「僕らに出来ることは、彼らを思い切り戦わせてあげることだよ」
「……。」
穏やかな瞳で笑う太狼を、真剣な表情でまっすぐに見つめる金汰。

「全員っ！南方へ向けてっ、白鬼共を押し返せっ！！中央塔から出来る限り、引き離すんだっ！！」
『はっ！』
金汰の指示が周囲に飛び、四方の隊員たちから一斉に、返答が返って来る。

「ありがとぉっ、金ちゃんっ」
「なぁ～にっ」
太狼の言葉通りの指示を出してくれた金汰へ、太狼が礼と笑顔を向ける。一息つくように肩を落とし、太狼の方を振り向く金汰。

「俺もあいつらの邪魔にはなりたくないからなぁ」
金汰が太狼へ、穏やかな笑みを向ける。

「それにっ…」
その瞳を、真剣に輝かせる金汰。

「俺もあいつらを信じてるっ」
「……っ」
自信を持って言い放つ金汰に、太狼はさらに笑みを深くする。

「……。」
二人の会話を聞きながら、ふとイチゴが、どこか不安げな表情で中央塔に視線を移す。

「桜時さんっ…輝矢さん…」

イチゴの声が、そっと風に乗り、中央塔へと吹き抜けた。

「はぁっ…！はぁっ…！はぁっ…！」

延々と続く階段を、息を切らせながら、止まることなく一気に駆け上がる輝矢。

「はぁっ…！！」

階段の終わりに続く広間へと、輝矢がそのままの勢いで駆け込む。

「はぁっ…」

広間に飛び込んだ輝矢が、その場に足を止め、ゆっくりと周囲を見回す。

「……っ」

見回していた輝矢の視線が、とある方向で、ぴったりと止まる。

「……。」

広間の端に置かれた玉座に、深く腰を掛けた状態で座っている、

細身の色白の女性。長い白髪の中に垣間見える、美しく整った顔。
だがその瞳は、深く閉じられていた。

「シルクっ…」
輝矢がその女性の名を、そっと口にする。

「……っ」
その瞬間、深く閉じられていた、女性の真っ赤な瞳が、勢いよく開く。

「牢戸知玖っ…！！」
「フフフっ…」
瞳を開いた途端、シルクはそっと口端を吊り上げた。

中央塔後方。ゴンｖｓ諸刃。

「天狼丸っ…！」
ゴンが目つきを鋭くし、右手に持った天狼丸を大きく振りかぶる。

「“一髪・二目・三耳・四首”っ…」
天狼丸の刀身を、真っ赤な炎が包んでいく。
「“五臓・六腑”っ！！」
天狼丸を包んだ炎が、数個の炎の塊となって、刃先から放たれる。
「……っ」
その炎の先に立つ諸刃が、少し後方へと飛び下がり、静かに草薙を構えた。
「“白雷”っ…！」
草薙から、白い雷が放たれる。
――バァァァーーンっ！
激しくぶつかり合い、互いに相殺する炎と雷。
「……っ」
消えていく二つの力を見ながら、ゴンがそっと眉をひそめる。
「相変わらずだな…ゴン…」
「ああっ？」
小さく呟く諸刃に、顔をしかめるゴン。
「感情がすべて炎に出ている…迷いも怒りも…」
「……っ」

諸刃の言葉に、ゴンが表情を曇らせる。

「俺に聞きたいことがあるのなら…早く聞いたらどうだ…？」

「聞きたいことっ…」

ゴンがそっと、諸刃の言葉を繰り返す。

――よく聞け、ゴン……――

輝矢たちが龍国へと戻って来た後、長官室へと呼び出され、座黒から聞かされた言葉。

――青守トマトが殺された…殺したのはっ……――

「お前がっ…」

少し躊躇うように、開かれる口。

「お前がっ…トマト先生を殺したっていうのは、本当かっ…？」

「……っ」

ゴンのその問いかけに、諸刃の無い表情が、かすかに動いたように見えた。

「……。」

諸刃がゆっくりと、草薙の刀身を見つめる。今はきれいに光るその刀身が、真っ赤な血に滲んでいた時の光景が思い出される。

――諸っ…刃……――

小さく呼ばれた名前。

「……ああっ…」

諸刃が少し目を伏せた後、再び目を開き、まっすぐにゴンの方を見て答える。

「俺が…青守トマトを殺した…」

「……っ」

座黒から聞いてはいたが、本人から知らされる事実に、ゴンの表情に衝撃が走る。

「次狼を殺した…この剣でっ…」

そう言いながら、諸刃が草薙の刀身を、ゴンに見せるように構える。

「なんでっ…」

少し震えるように、発せられるゴンの声。

――諸刃は私の旦那候補さっ！――

――俺は了解した覚えない…トマト先生…――

楽しそうにしていた時間が、思い出される。

「なんでっ…！！」

強く訴えるように、ゴンが諸刃を見つめる。

「何故っ…？」
少し不思議がるように、ゴンからの問いかけを繰り返す諸刃。
「そんなことは決まっている…」
低く重い声で、諸刃がはっきりと言い切る。
「あの女が…シルク様の敵だったからだ…」
「……っ！」
諸刃の言葉に、大きく顔を歪めるゴン。ゴンの楽しかった時を、次狼の未来奪った女の為に、諸刃はトマトを殺したと言う。諸刃のすべてを狂わせた女の為に、諸刃は師であるトマトさえ殺したと言う。
「そうかっ…」
ゴンが震えた声で、そっと頷く。
「お前にとっては…あの女が味方で、俺たちは全員、敵ってことかっ…」
「……ああ、そうだ…」
「……っ」
迷いなく答える諸刃に、ゴンが顔をしかめたまま、そっと目を伏せる。
――諸刃…諸刃を頼みます……――
次狼の最期の笑顔が、思い出された。

「わかった…」
思い出した笑顔を振り切るように、ゴンが強く天狼丸を握り締める。

「もういいっ…！」
「……。」

大きく天狼丸を振りかぶるゴンを、諸刃は落ち着いた表情で見つめた。

「はぁっ…！はぁっ…！」
輝矢たちと別れたリンゴが、中央塔の後方へと回り込み、ゴンと諸刃の戦っている場所の近くまでやって来る。

「……っ」
足を止め、戦う二人をまっすぐに見つめるリンゴ。

「ゴンっ…諸刃っ…」

リンゴの声が、悲しげに周囲に響き渡った。

中央塔右翼。由雉ｖｓ緋鬼。

『……。』

中央塔右側へと移動した由雉と緋鬼は、互いの動きを警戒し合いながら、攻撃のタイミングを見計らうかのように、まっすぐに見つめ合っていた。

「相手は白鬼一族…鬼人っ…」

由雉が、向かいに立つ緋鬼には聞こえぬ程の小さな声で、ひっそりと呟く。

「なら使う力は…輝矢やシルクと同じ“水力”っ…」

見定めるような鋭い瞳が、緋鬼の姿を捉える。

「どうしたぁ？おいっ！超クソガキよぉっ！」

「……っ」

乱雑な口調で話しかけてくる緋鬼に、由雉が少し眉をひそめる。

「超挑発的にケンカ吹っ掛けて来たくせに、その後は随分、大人しいじゃねぇーかぁっ！」

緋鬼が試すような笑みを、由雉へと向ける。

「吹っ掛けてみたものの、怖気づいたかぁっ？ああっ？」

「誰がっ」

小バカにしたように言い放つ緋鬼のその言葉に、由雉が思わず顔をしかめる。

「水力じゃ羽根を無効化出来るとも思えないしっ…」
由雉がそっと呟きながら、懐に手を入れる。
「まずは小手調べっ…！」
懐から出した右手に、握られている青い羽根。
「“右翼・裂羽”っ…！！」
由雉が真正面から、何の小細工もなしに、緋鬼へ向けてまっすぐに、青い羽根を投げ放つ。
「へへっ、やっと来たかっ！」
投げられた羽根を見て、嬉しそうに笑う緋鬼。
「……っ？」
笑ったまま、その場からまったく動こうとしない緋鬼に、由雉が眉をひそめる。
「ハハハハハっ！！」
「喰らう気っ…！？」
大声で笑い、勢いよく両手を広げる緋鬼に、戸惑った表情を見せる由雉。避けようともしない緋鬼へと、青い羽根がまっすぐに向かっていく。
――バァァァーンっ！

「……っ！」
由雉の放った羽根が緋鬼を直撃し、周囲に衝撃風が巻き起こる。
響く衝撃音に、驚きの表情を見せる由雉。
「ほ…本当に喰らっちゃったぁ…」
唖然とした様子で、由雉が思わず呟く。
「もしかしてぇ…物すっごく動きの鈍い奴なんじゃあっ…」
――……っ――
「……っ！」
緋鬼に対し、妙な疑惑を抱いた由雉であったが、衝撃風の巻き起こっている方から飛んでくる何かに気づき、途端にその表情を鋭くする。
「クっ…！」
素早く体を逸らし、横へと飛ぶ由雉。動いた由雉のすぐ横をかすめるように、刃のような数個の赤い物体が、勢いよく飛んでいく。
「あれはっ…」
「ハハハハハっ！」
「……っ」
戸惑うように、過ぎ去った刃の方を振り返っていた由雉が、薄れ

ていく砂煙の向こうから聞こえてくる笑い声に、再び前方を振り向く。

「ハハハハハハっ！！超調子いいぜぇっ！」

「あっ…！」

見えてくる緋鬼の姿に、由雉が思わず目を見開く。

「どんどん溢れてきやがるっ…！！ハハハハっ！！」

緋鬼の右腕には、先程、由雉の投げた青い羽根が深々と突き刺さっており、その傷口から流れ出た真っ赤な鮮血が形を成し、鋭い刃のようになって、緋鬼の右手に握られていた。

「血っ…？」

その緋鬼の姿を見て、由雉が戸惑うように呟く。

「赤い血っ…ボクたちと同じ…」

緋鬼の右手で凝固している血を見つめ、表情を曇らせる由雉。

「じゃあさっきのもっ…」

由雉の脳裏に、先程飛んで来た真っ赤な刃の姿が過ぎる。

「超気ィつけろよぉっ！クソガキぃっ！」

緋鬼が、その右手に出来た真っ赤な刃の刃先を、笑いながら由雉へと向ける。

「俺の力は、水は水でもっ…」

その口端が、勢いよく吊り上がる。

「体内を流れるっ…この緋色の液体だからよぉっ！」
「“血力”っ…？そんな力がっ…！」
高々と言い放つ緋鬼に、厳しい表情を見せながらも、由雉は素早く羽根を構える。

「さぁっ！俺を超傷つけてっ、俺に超血を流させろぉっ！」
「……マゾっ…？」

攻撃を受け入れようと、両手を広げる緋鬼に、由雉は顔をしかめ、思わず呟いた。

第９２章　戦闘開始　★３

中央塔左翼。門貴ｖｓ蒼鬼。

「如意棒・第一の舞っ…」

門貴が素早く、如意棒を構える。

「“空”っ…！！」

如意棒から放たれる、巨大な風の塊。

「……。」

その風の行く先に立つのは、特に焦った様子もなく、涼しげな表情を見せた蒼鬼。

「……っ」

蒼鬼が少し口元を緩め、素早く体を動かすと、門貴の放った風は、蒼鬼に当たることなく、さらにその先へと吹き抜けていってしまった。

「チィっ」

何食わぬ顔で風を避ける蒼鬼に、門貴が少し顔をしかめる。

「ならっ…！」

門貴が間を置くことなく、如意棒を構える。

「如意棒・第二の舞っ…“浄”っ！！」

如意棒の先を、勢いよく地面へと突き刺す門貴。

――バァァァーンっ！

如意棒が地面へと突き刺さったその瞬間、蒼鬼の立つ地面の四方から、竜巻のように風が巻き上げ、蒼鬼の体を包み上げる。

「……。」

風に囲まれても直、落ち着いた表情を見せる蒼鬼。

「……っ」

「あっ…！」

蒼鬼が高々と上方へと飛び上がり、囲んでいた風からあっさりと逃れる。

「ふぅっ」

終始、焦りの表情を見せず、風の巻き上がった場所から少し離れた位置へと、着地する蒼鬼。

「ちぇ～っ！コレもあかんかぁ～っ！」

着地した蒼鬼を見て、門貴が悔しげに声をあげる。

「ほんなら次はぁっ」

「貴方」

「んっ？」

またしても如意棒を構えようとした門貴が、聞こえてくる蒼鬼の

声に、思わずその動きを止める。

「貴方は、見た目よりもずっと、頭がいい」

「見た目よりって…」

どこか棘のある蒼鬼の言葉に、門貴が少し顔をしかめる。

「闇雲に攻撃しているように見えて…実はその攻撃には、一つの無駄もない」

蒼鬼がそっと微笑み、その微笑みを門貴へと向ける。

「今も、ただ適当に技をぶつけているように見せて…私の力を探っているのだろうっ？」

「……っ」

すべてを見透かすような口調をする蒼鬼に、門貴が眉をひそめる。

「バレとったかっ」

「フフっ」

悪戯っぽく笑う門貴を見て、蒼鬼も笑い声を漏らす。

「別に探る必要などない」

「何っ…？」

「私は白鬼一族…まぁ、要は鬼人だ」

眉をひそめた門貴へ、丁寧に言葉を投げかける蒼鬼。

「貴方の主人も鬼人…その力が何なのかは、よく知っているはずだろうっ？」

「……。」

試すように問いかける蒼鬼に、門貴が少し考え込むような表情を見せる。確かに、目の前にいる男が、鬼人であることに間違いはな

い。

――“水月”っ！――

そして、鬼人の使う力は、輝矢と同じ水力のはずである。

「今更、確認する必要がどこにある？」

「……せやなぁっ」

蒼鬼の言葉に、少しの間を置いた後、門貴がゆっくりと頷く。

「たしっかにあんたの言う通りやっ…けどっ」

「けど？」

「……っ」

「んっ？」

会話の途中で、蒼鬼の視界から、門貴の姿が消える。

「如意棒・第三の舞っ…」

「なっ…」

門貴の声が聞こえてくるのは、蒼鬼のすぐ後方。たったの一瞬で、蒼鬼の背後へと立った門貴が、蒼鬼の背中に如意棒の先を付けるようにして、風を巻き起こす。

「クっ…」

巻き起こる風に、初めてその表情を崩す蒼鬼。

「“戒”っ…！！」

――バァァァァーーンっ！！

蒼鬼の体に、逆巻く風が直撃する。

「確認するまでもない力をっ、そう勿体ぶるとも思えへんからなぁっ…！！」

風を巻き起こし、門貴が得意げな笑みを浮かべる。

「んっ…？」

風を喰らう蒼鬼を見つめ、眉をひそめる門貴。

「体が…消えるっ…？」

門貴の放った風に包まれた蒼鬼の体であったが、その体は斬り裂かれることなく、まるで風の中に掻き消えるように、その姿を消していく。

「これはっ…」

「水には三つの形態があるのを、知っている？」

「……っ」

背後から聞こえてくる声に、門貴が素早く振り返る。

「お前っ…」

「フフっ」

門貴が振り返った先に立っているのは、門貴が風に包み込んだはずの蒼鬼であった。今もまだ、かすかに風に包まれた蒼鬼の姿が見える中、無傷で立った蒼鬼は、門貴へ向けて微笑んでいる。

「三つの形態…それは、水、氷、そして…」

蒼鬼が、どこか楽しげに笑う。

「水蒸気っ」

「水蒸気っ…？」

「そうっ…空気中に散った水蒸気は、時に幻影を作り出す…」

「幻影っ…？あっ…！」

門貴が何かに気づいたような表情となり、風の中に掻き消えていく蒼鬼の姿を見つめる。

「そうっ…それは私が水蒸気で作り出した幻影…」

「成程、なっ」

納得した表情を見せながら、門貴が再び、幻影ではない方の蒼鬼を見る。

「水力は水力でも、水蒸気を操る“蒸力”ってわけか」

「そうっ…」

鋭い瞳で言い放つ門貴に、蒼鬼が微笑んだまま、大きく頷く。

「初めてだ…こんなに早く私の力に気づいた人は」

蒼鬼が、どこか感心したように言う。

「やはり貴方は…見た目よりもずっと頭がいいっ…」

「そら、どうもっ」

誉めるように言い放つ蒼鬼に、門貴が素っ気なく礼を返す。

「けどっ」

門貴が、如意棒を握る手に力を込める。

「“見た目より”はっ、余計やろぉっ！」

「フフっ」

強く言い放ちながら、駆け込んでくる門貴を見て、蒼鬼はどこか楽しげに微笑みながら、両手を構えた。

中央塔一階。桜時ＶＳギン。

『……。』

輝矢が上へと向かい、一階へと残った桜時とギンは、戦いを始めるその時を待ちながら、互いをまっすぐに見つめ合っていた。まったく動かぬギンに、桜時も飛び出すタイミングがわからず、ただ時間だけが過ぎ去っていた。

「いいんですかっ…？こんなにのんびりとしていてっ…」

「……っ」

ついに口を開くギンに、桜時が少し眉をひそめる。

「こうしている間にも…君の仲間は傷つき、君の大好きな月のお姫様も、シルク様にやられちゃってるかも知れませんよっ？」

「……。」

ギンの言葉に、桜時の表情が曇る。そう言って、桜時からの攻撃を誘っている可能性もあるが、ギンの言葉が正しいことも事実であった。

「君が攻撃し兼ねている理由っ、当ててあげましょうか？」
「えっ…？」
桜時が少し、戸惑ったような声を漏らす。

「“僕が狐族だから”…」
「……っ」
シンプルな答えを放つギンに、桜時が顔をしかめる。

「でも、そんなこと、気にする必要はありませんよ。僕はもうとっくに鬼ですからっ」
「……。」

――今更っ…人になんて戻れないよっ……――

険しい表情を見せる桜時の脳裏に、人に戻ることを拒み、自ら命を絶っていった哀しい双子・ロムとレムの姿が過ぎった。あんな遣り切れない思いは、もう二度としたくはなかった。

「でもっ…！鬼人化人間だってんならっ…！俺が命力を取り戻せばっ、また人間にすることだってっ…！」
「わかっていませんねぇっ…」
「えっ…？」
呆れたように肩を落とすギンに、桜時が首を傾げる。

「言ったでしょう？“僕はもうとっくに鬼”だとっ…」
「……っ？」

続くギンの言葉に、さらに困惑した表情を見せる桜時。

「僕は狐族などではありませんっ…」

「えっ…？」

ギンがそっと呟き、その口元を緩める。

「僕は鬼っ…」

「……っ！」

目つきを鋭くしたギンの瞳が、金色から、血のような真っ赤な色へと変わる。

「生まれ落ちたその日から、ずっと鬼なんですよっ…」

「生まれ落ちた…その日からっ…？」

「ええっ…」

戸惑いながら聞き返す桜時に、ギンは微笑みながらゆっくりと頷く。

「月のお姫様は多少、気付いていたようですが…どうやら君には話していなかったようですねぇ…」

「生まれた時から鬼ってっ…じゃあお前はっ…！」

「そうっ…鬼人です…」

「……っ！」

はっきりと答えるギン。桜時の表情に、衝撃が走る。

「鬼人っ…？お前も鬼人っ…？けどっ…」

――僕の主は紺染でもあの女でもなく…“あの方”…――

桜時たちはシルクと出会う前にすでに、ギンと遭遇していた。シ

ルクが桜時の力に気づく前から、内兎が解放される前から、ギンは自由に動き、桜時たちの前へと現れた。

「けどっ…」

――“鬼爪炎舞”っ……――

ギンの放った、赤々とした炎。

「お前は狐人の“火力”を使ってたじゃないかっ…！」

「僕が使えるのは火力だけではありませんよっ…」

強く言い放つ桜時に、ギンが冷静に答える。

「鬼人の水力は勿論っ…他にも“憶力”など、僕はあらゆる力を使うことが出来るっ…」

「あらゆる…力っ…？」

意味深なギンの言葉に、眉をひそめる桜時。

「お前はっ…一体っ…」

「フフっ…」

困惑しきった表情を見せる桜時を見て、ギンがどこか楽しげに微笑む。

「僕に勝つことが出来たなら…教えて差し上げますよっ…」

ギンが試すように、そっと呟く。

「どうですっ…？少しは戦う気が起こってきましたかっ…？」

「……っ」

楽しそうに笑うギンに眉をひそめながら、桜時が少し、握り締めている村雨丸へと視線を落とす。迷っていては、何も始まらない。すべての戦いを終わらせる為、ギンの真実に近づく為にも、桜時はギンと戦わねばならない。

「村雨丸っ」

「フフっ…」

村雨丸を構える桜時を見て、ギンがさらに口端を吊り上げる。

「“鬼爪…炎舞”っ…」

ギンは右手から鋭い爪を伸ばし、その爪に赤々とした炎を包ませた。

第９２章　戦闘開始　★４

北塔内。

「はぁっ…」

深々と息を吐きながら、床にしゃがみ込んでいたアリスがやっとの思いで立ち上がり、水晶に突き刺していた針器を抜く。

「アリスっ！」

「……っ？」

後方から聞こえてくる声に、振り返るアリス。

「父上っ」

アリスが振り返ると、塔の入口から、数名の従者とともに武史が塔内へと入って来た。

「よくここまで来られましたね」

「ああ、倒した白鬼たちが蘇らなくなってねぇ」

「蘇らなく…？」

「ああっ、恐らくは鬼力が封印された影響だろう」

「……っ」

武史の言葉に、アリスがハッとした表情を見せる。

「じゃあっ…！」

「ああっ、四方の塔の封印はうまくいったよ」

大きく目を見開いたアリスへ、武史が穏やかな笑顔を向ける。

「そっ…そっかぁ…」

安心したように笑みを浮かべたアリスが、力なくその場に膝をついた。

「良かったぁ…」

「……っ」

しみじみと呟くアリスを見て、武史がさらに笑みを大きくする。

「残党処理は他の者たちに任せて、君はしばらくここで休むといいっ」

「ううんっ」

「えっ？」

すぐに首を横に振るアリスに、武史が少し首を傾げる。

「私、行かなくちゃっ…中央塔にっ…」

そう言って、ゆっくりと立ち上がるアリス。

「輝矢がまだっ…戦ってるんだものっ…」

「アリスっ…」

笑顔を見せるアリスに、武史が少し目を細める。

「そうだね、じゃあ行こう」

立ち上がったアリスへ、武史がそっと手を差し伸べる。

「輝矢のところへっ…」

「うんっ！」

武史の言葉に、アリスは笑顔で大きく頷いた。

東塔付近。

「怪我人の治療が優先だっ！無理に白鬼を退治しようとはするなっ！」

太狼とイチゴを中央塔へと送った座黒は、残った部隊とともに、東塔付近の白鬼の殲滅にあたっていた。

「長官っ！」

「んっ？」

聞こえてくる声に、座黒が振り向く。

「おおっ、馬ロンっ」

戦地から、後方にいる座黒のもとへと駆け抜けて来たのは、馬ロンであった。体についた傷は、白鬼との戦闘というより、イチゴに踏みつけられた時のものであろう。

「状況はどうだ？」

「はっ！現状はっ…」

「白鬼もほっとんど倒しちゃって、全然蘇っても来ないから、結構いい感じだよぉ～っ！！」

「んなっ…！鹿男っ…！」

報告しようとした馬ロンの横から、明るい笑顔の鹿男が顔を出し、馬ロンの代わりに報告を終えてしまう。そんな鹿男に、勢いよく顔をしかめる馬ロン。

「君っ…！僕が言うはずの言葉をっ…！しかもまた、そんな軽すぎる言葉遣いでっ…！」
「そうか、わかった」
「えぇぇぇっ！？」
鹿男の報告で納得してしまう座黒に、馬ロンが大きく目を見開く。
「ならば、手の空いた者はっ…！」
「中央塔へ向かいましょうっ！お兄様っ！」
「よっしゃ来たぁっ！待っててねぇっ！門貴様っ！ご主人様ぁっ！」
「あっ…」
座黒が指示を出す前に、物凄い勢いでヘンゼルとグレーテルが、中央塔の方へと駆け抜けていってしまう。
「俺もぐぅ～んとこ行くぅ～っ！！」
「あっ！おいっ！」
ヘンゼルたちに続くようにして駆け出していく鹿男に、馬ロンが思わず手を伸ばす。
「待ちたまえっ！君はダっ…！」
「行きましょうっ、鹿男っ…」
「とっとと行こうぜぇっ！鹿男っ！」
「うん～っ！」
「あっ…」
馬ロンが止めるまでもなく、どこからか駆けつけたキリコとレオと共に、鹿男は中央塔の方へと駆け出していってしまう。馬ロンの伸ばした手が、何を掴むことなく、宙に舞った。
『……。』
その場に虚しく取り残される、座黒と馬ロン。
「わし…長官なのにっ…」

「僕が…上司なのに…」

二人の悲しげな声が、そっと響き渡った。

西塔内。

「はぁ～あっ」

西塔の鬼力を封印した白雪が、右手を包んでいた雪剣を消し、力の抜けた様子で、その場に深々と座り込む。

「虎昌様ぁっ！ご無事ですかぁっ！？」

「下の名前で呼ぶんじゃないわよっ！」

「うわぁっ！」

慌てて駆け込んできた芹が、強く怒鳴り返す白雪に、思わず駆け込んできていた足を止める。

「とっても元気そうで何よりです…」

「ええっ、そうねっ」

げっそりとした表情で呟く芹に、素っ気なく答える白雪。

「芹、外の状況は？」

「あっ、うんっ、もうほとんど白鬼も倒しちゃって、落ち着いて来てるよぉ～」

白雪の横に立つ鈴白が、芹へと問いかけると、芹はすらすらと答えた。
「だ、そうですよ、白雪様」
「えええっ」
振り向く鈴白に、白雪が頷く。
「そう無理はしないで、戦える者たちで交代しながら、白鬼共を鎮圧するよう言って」
座り込んだままの白雪が、芹へと指示を与える。
「それから芹は軍の治療班の連中と協力して、怪我人の手当てにあたって頂戴っ」
「はぁ～いっ！」
白雪の言葉に大きく頷くと、芹は再び西塔の外へと駆け出していった。
「ふぅ～っ」
芹が出て行ったところで、白雪がもう一息つく。
「少し休んだら、中央塔の加勢に行かれます？」
「何でそんなことしなきゃなんないのよ」
「えっ？」
面倒臭そうな顔を見せながら言い放つ白雪に、鈴白が少し目を丸くする。
「西塔の白鬼を掃討したら、虎国へ帰るわよっ」
「勝負の行く末はご覧にならないのですか？」
「必要ないわっ」
不安げに問いかける鈴白に、白雪がはっきりと答える。

「明日も変わらず、平和な一日が始まる…そうに決まってるものっ…」
「白雪様っ…」
穏やかに微笑む白雪に、不安な表情を見せていた鈴白も、そっとその口元を緩める。

「そうですね…ですがっ」
「ですが？」
言葉を付け加える鈴白に、白雪が不思議そうに顔を上げる。

「僕は見てみたいです」
「貴方も野次馬根性のたえない男ねぇ～っ」
はっきりと言い放つ鈴白に、白雪が少し呆れたように肩を落とす。

「どうせ行ったって、戦いの邪魔にしかっ…」
「見たいのは、戦いではありません」
「えっ…？」
「明日の勝ち獲られる、その瞬間です」
「……っ」
微笑んで答える鈴白に、白雪がハッとした表情を見せる。

「はぁっ…」
少し俯いた白雪が、深々と溜息をつく。

「負けるわっ、貴方には」
「我が儘を言って、申し訳ありません」
疲れたように言い放つ白雪に、鈴白が軽く頭を下げる。

「まっ、いいわよっ、たまには貴方の我が儘も聞いとかないとっ」
白雪がそう言い放ち、その場でゆっくりと立ち上がる。

「言ってばっかりも飽きるしねっ」
「ホントですねっ」
「笑顔向け過ぎでしょっ…」
満面の笑顔で頷く鈴白に、白雪が少し顔をしかめる。

「さっ！中央塔へ向かうわよっ！」
「はいっ！」

白雪の言葉に、鈴白は大きく頷いた。

南塔。

「犬智っ」
「はいっ！」
梅人による封印が終わり、南塔を出た犬孝が、付近で戦っていた犬智を呼び寄せる。
「オトポリや雀国軍と協力して、怪我人の治療を頼む」
「かしこまりましたっ！」
犬孝の言葉に、犬智が大きく頷く。

「犬義っ」
「……っ」
呼ばれた犬義が、戦っていた白鬼を退治して、素早く犬孝のもとへと駆けつける。
「はっ！」
「後の白鬼退治、任せていいか？」
「勿論です」
「桜時様のところへ？」
犬孝の言葉に犬義がすぐさま頷き、その横から犬智が問いかける。
「ああっ、封印は上手くいったようだが、出来れば近くで戦いを見守りたいからな」
「ぼっ…僕もっ…！」
「んっ？」
声に犬孝が振り向くと、南塔の入口から顔を出した梅人が、少し慌てた表情を見せていた。
「僕も行っていいっ…！？」
「えっ…」
必死に訴える梅人に、少し戸惑った表情を見せる犬孝。
「だが危なっ…」
「なぁ～にチンタラしているのっ！貴方たちっ！」
『えっ？』
聞こえてくる張りのある声に、犬孝と梅人が同時に振り向く。
『うっ…！』
振り向いた途端、顔を引きつる犬孝たち。

「おっ…お母様っ…」
「孔雀…さんっ…」

二人の見つめる先には、何とも派手な赤色のトラックの荷台に、腕組みをして堂々と立つ孔雀の姿があった。戦場とは場違いな空気を醸し出している孔雀を、2人が唖然とした表情で見つめる。

「中央塔へ行くんでしょっ!?とっとと乗りなさいっ!」
「えっ?これにっ?」
孔雀の言葉に、梅人があからさまに嫌そうな顔をする。
「何か文句でもあんのっ!?」
「いえっ、まったく…」
「というか、このトラックは一体、どこから…」
孔雀の睨みに負け、そっと俯く梅人の横で、犬孝が不思議そうに首を傾ける。

「他に行きたい者っ!いたら、とっとと乗りなさいっ!」
「あっ、じゃあ僕もぉ〜」
「松人さんが行くなら、私もっ!」
「俺も俺もぉ〜っ!そして、俺が行くなら、もちろんレイラもっ!」
「きゃっ!竹人さんっ!」
「……。」
その孔雀の指示を受け、松人と松人に続いて油火が、竹人とイチャイチャとしながらレイラが、次々とトラックの荷台に乗り込んでいく。その光景を、呆然と見つめる犬孝。

「くっ…孔雀さんっ…」
「何っ?貴方もとっとと乗りなさいっ」

「いやっ、そのっ…」
強く言い放つ孔雀に、犬孝が少し困った表情を見せる。
「中央塔はまだ恐らく戦闘中です。他の者たちはともかく、貴女やお坊ちゃま方はここに残っていた方が…」
「私に指図する気っ？」
「えっ！？」
鋭く睨みつける孔雀に、犬孝が焦ったように声をあげる。
「いっいやっ！そういうつもりではっ…！」
「私はあの子を、自分の息子として育てて来たつもりよ」
「……っ」
真剣な表情を見せる孔雀の言葉に、犬孝が少し驚いたように目を見開く。
「それでも、私を止めるっ…？」
「……。」
まっすぐな瞳を向け、問いかける孔雀に、犬孝もまた目を逸らすことなく、真剣な表情を見せる。どんなに危険な場所であろうとも、自分の息子がそこで戦っているというのなら、親は行くであろう。桜時の親である犬孝がそうであるように、孔雀もそうなのだ。
「わかりました、すみませんっ…」
「何で貴方が謝るのよっ」
思わず頭を下げる犬孝に、孔雀が少し顔をしかめる。
「いいから、とっとと乗りなさいっ」

「はいっ！」
孔雀の言葉に大きく頷き、犬孝がトラックの荷台へと乗り込む。

「じゃあ銀ペー、後は頼んだわよっ」
「はっ！国主様もお気を付けてっ！」
言い放つ孔雀へ、銀ペーが敬礼を向ける。

「後は頼む、犬義、犬智っ」
「はい」
「桜時様のことっ、お願い致しますっ！」
犬孝の言葉に、犬義がしっかりと頷き、犬智が願うように訴える。

「さぁっ！中央塔へ向けてっ、出発するわよっ！！」
『おおぉぉぉっ！！』
孔雀の言葉に、皆が右手を突き上げた。

中央塔・最上階。輝矢ｖｓシルク。

「フフフ…」
目の前に現れた輝矢を見て微笑みながら、シルクがゆっくりと玉

座から立ち上がる。

「思えば不思議な縁よね…」

「……っ」

そっと呟くシルクに、輝矢が少し眉をひそめる。

「ねぇ？知ってる…？月の少女…」

シルクが輝矢をまっすぐに見つめ、ゆっくりと問いかける。

「私たちが初めて出会ったのは…黒鬼一族が滅びた、十年前のあの運命の日っ…」

「……。」

口元を緩めるシルクの言葉に、少し顔をしかめる輝矢。

――いやあああああっ！！――

輝矢がすべてを失った、あの運命の日。

「それからネバーランド、龍国、海底…」

――神よ…アナタは何を救われるのですか…？――

――もちろん、世界をっ……――

初めて出会った、幼き国の太陽の神。

――次こそ我が手に…命咲かす者っ……――

――トマトぉぉぉぉっ！！――
――世界を頼んだよ…小娘っ…――

一つ一つの戦いの中に、たくさんのことがあった。

「そして今日っ…」
シルクの真っ赤な瞳が、正面から輝矢を捉える。

「これが五度目になる…」
「……。」
微笑むシルクに、厳しい表情を見せる輝矢。

「これが…最後の出会いとなるのかしら…？」
「……ええっ…」
確かめるように問いかけるシルクに、輝矢が少しの間を置いた後、
ゆっくりと頷く。

「これで最後ですっ…牢戸知玖…」
輝矢が鋭い瞳を見せ、右手の月器をゆっくりと構える。

「アナタとトマトが刻んできた、千年の因縁も…」
強く輝きながら、振り上げられていく月器の刃。

「人と鬼の…交わらない宿命もっ…」

シルクへとまっすぐに向けられる、輝矢の瞳。

「すべてを終わらせるっ…」

振り上げられていた月器が、空中で止まる。

「今日っ、ここでっ、私がアナタを倒すことでっ…！！」

「フフフっ…」

強く言い放つ輝矢に、シルクが楽しげに笑みを浮かべる。

「じゃあっ…」

シルクがゆっくりと、両手を広げる。

「始めましょうかっ…」

大きく両手を広げ、シルクが真っ赤な瞳を強く見開く。

「竹取輝矢っ」

輝矢が月器を構え、瞳を鋭くする。

「鬼退治いたしますっ…！」

五度目の対峙を果たした輝矢とシルクの、最後の戦いが始まった。

第９３章　禁忌の力　☆１

最終決戦の地、鬼国跡。中央塔付近。正刈金汰率いる中央塔部隊。

――ドォォォンっ！

『うわっ！』

地鳴りのように響く衝撃音とともに、大きく揺れ動く大地。海面に浮上したばかりで不安定ということもあるのだろうが、それでも尋常でない揺れを観測している。その揺れから、部隊の者たちは、何とかバランスを保とうとしていた。

「島全体を揺るがす振動が、断続的に起こっている…」

遥か彼方に見える中央塔付近から巻き起こる爆煙を見つめながら、冷静に言葉を発する金汰。

「余程の戦闘が繰り広げられているんだろうな…」

「うん、そうだね…」

金汰の言葉に、隣に立つ太狼がゆっくりと頷く。

「どちらが…有利と…？」

少し後方に立ったイチゴが、遠慮がちに太狼へ問いかける。

「さぁっ、わかんないなぁ」

「えええぇっ！？」

「えぇ～っ？」

首を傾げた太狼であったが、激しく驚くイチゴに、逆に驚いてしまう。

「なっ何…？」
「いえっ、太狼さんでもわからないことがあるんだなぁと…」
「僕を神サマかなんかだとでも思ってるわけぇ？イチゴちゃ～んっ」
「いえ、そんないい風には」
「あっそぉ…」
はっきりと答えるイチゴに、太狼が少し落ち込んだ返事をする。

「だが桃ちゃん、ゴンたちの修行に、ギリギリまで付き合ったんだろう？」
「付き合いはしたけどねぇ～」
金汰の問いに答えながら、太狼が門貴や由雉の戦っている方を見つめる。

「彼らの進化なんて、未知数だもんっ」
真剣な眼差しを見せ、言い放つ太狼。

「それに…」
太狼がそっと、眉をひそめる。

「敵の強さもねっ…」
『……っ』
付け加えられる太狼の言葉に、金汰とイチゴは険しい表情を見せる。

「“人獣化”を使わずに勝てれば一番なんだけどっ…でもまぁっ」
そう呟き、少し不安げな表情を見せる太狼。

「それは…無理って話か…」

戦う皆の身を案じるように、太狼はそっと目を細めた。

中央塔・右翼。由雉ｖｓ緋鬼。

「“裂羽・裂羽”…」

二枚の青い羽根を、重ね合わせる由雉。

「“合翼・重裂羽”っ！」

高く飛び上がった由雉が、右手を構え、下方にいる緋鬼へと青い羽根を投げ放つ。

「ハッハッハッハっ！！超来いぃっ！」

両手を広げ、由雉の羽根を受け入れる態勢を取る緋鬼。

「うっ…！」

羽根が緋鬼の右肩を直撃し、真っ赤な血が滴り落ちる。

「へへへっ…」

地面へと落ちる赤い液体を見て、その口元を緩める緋鬼。

「“血刃（けつじん）”っ！！」

「……っ！」

流れ落ちていた血が、地面へと落ちるまでの間に固まり、手のひら大の鋭い刃を作って、まだ空中にいる由雉のもとへと飛び出していく。

「とっとっとっ！」

――ボォォォ～ンっ！

空中で白い煙に包まれ雉化し、羽根を広げて、飛んで来た血の刃を避ける由雉。

「ふぅ～っ」

由雉が再び白い煙に包まれ、人化して、無事に地面へと着地する。

「ハッハッハッ！！もっとだぁっ！超もっとっ、俺を傷つけろぉっ！！ガキぃっ！！」

「うげぇっ…」

目の前で高々と笑っている緋鬼を見て、由雉がげっそりとした表情を見せる。攻撃を喰らわせ、血を流させている由雉の方が優勢なのだろうが、緋鬼の様子を見ていると、優越感を持つことは出来なかった。

「ったく、やりにくい相手だなぁ～」

由雉がボヤくように呟く。

「ゆっくり戦ってても気持ち悪いだけだしっ…」

そう言って、由雉が懐に手を入れる。

「望み通りっ、すんごく傷つけてあげるよっ…！」

強く言い放った由雉が、懐から赤・青・黄の三枚の羽根を取り出す。

「“滅羽・癒羽・裂羽”…合翼っ…！」

取り出した三枚の羽根を、重ね合わせる由雉。合わさった羽根か

ら、強い光が放たれ、やがて一枚の羽根が生み出される。

「“三位っ…一羽”っ…！！」

三色の光を放つ輝く羽根を、由雉が緋鬼へ向けて投げ放つ。

「ククっ…！」

その羽根に恐れることもなく、またしても両手を広げて、受け入れ態勢を取る緋鬼。

「ハッハッハッハッハっ！！」

――バァァァーンっ！

笑い声をあげる緋鬼へ、由雉の羽根が直撃し、激しい爆煙を巻き起こした。

「ふぅっ…」

爆煙を見つめながら、由雉が少し息をつく。

「いっくら変態だったってぇ、三位一羽を直撃したらもうっ…」

「“血塊陣（けっかいじん）”…」

「えっ…？」

爆煙の中から、聞こえてくる声。

「うっ…！！」

その声と共に、無数の血の刃が、爆煙の中から一斉に飛び出してくる。

「うぁっ…！！」

予想外の攻撃とその数に体が反応せず、由雉はいくつかの血刃を受けてしまう。体を斬り裂かれた由雉が、苦しげな声を漏らした。

「痛ったぁ～っ」
「へへへへっ…」
「……っ！」

聞こえてくる笑い声に、痛みに顔を歪めていた由雉が、勢いよく顔を上げる。

「なっ…！」
「へへへへっ…」

思わず目を見開く由雉。晴れていく爆煙の中から姿を見せたのは、全身血まみれの緋鬼であった。体中から大量の血液を流しながら、それでも笑みを浮かべている緋鬼の姿は、何とも不気味で、由雉は驚くというよりも、むしろ恐れるような視線を、緋鬼へと向けた。

「イイ痛みだっ…超気持ちイイっ…」

まだ流れ落ちる血を見ながら、うっとりと呟く緋鬼。

「これだっ…これだぜぇっ！俺の求めていた痛みはよぉっ！！ハッハッハっ！！」
「……。」

痛みに酔いしれる緋鬼に、由雉がこれ以上ないほどに顔を引きつる。

「変態にも程があるよっ…」
「ああぁ～んっ？」

思わず呟いた由雉の方を、緋鬼がゆっくりと振り向く。

「いくら鬼でも、それだけの血流したら、フツー振らつくぐらいっ…」
「俺の血液は超特別製でなぁっ」
「えっ…？」
遮る緋鬼の声に、由雉が眉をひそめる。
「てめぇーら人間の百倍以上の生成・運搬速度を保ってんのさぁっ！」
「百倍っ…」
緋鬼の言葉に、由雉が驚いた表情を見せる。
「なるほどぉ～っ、だから血の気が多いってわけかぁ～」
妙なところで納得する由雉。

「だからこのくらいの失血っ、超何ともねぇーってわけさぁっ！」
「……。」
言葉を続ける緋鬼に、由雉が少し考え込むような表情を見せる。

「つまり…“攻撃”じゃアイツは倒せないってことかぁ…」
由雉が、緋鬼に聞こえない程度の小声で、そっと呟く。

「これじゃあ黒羽の時みたいに虹羽を使っても…んっ？黒羽っ…？」
黒羽の名を出し、何か思いついたような表情となる由雉。

――ウルシの羽根に…癒しの羽根などないからな……――

「……。」
思い出される黒羽の言葉に、由雉が鋭い瞳を見せる。

「さぁっ！超もっともっと俺を傷つけやがれぇっ！」
「……っ」

相変わらず両手を広げ、高々と叫ぶ緋鬼に、ゆっくりと顔を上げる由雉。

「ならっ…」

由雉が、素早く懐に手を入れる。

「どうぞぉっ！」

緋鬼の要求に応えるように、由雉が緋鬼へと羽根を投げ放つ。

「ハッハッハッハっ！！来い来い来いぃっ！！」

先程同様、避ける素振りなどまったく見せずに、両手を開いたまま、羽根を迎え入れるように声をあげる緋鬼。その笑い声が、高々と響き渡る。

「……っ！」

緋鬼の胸部へと、突き刺さる由雉の羽根。

「さぁっ！行けぇぇっ！！“血刃”っ！！」

また由雉へ血の刃を飛ばそうと、緋鬼が意気込んで叫ぶ。

「……あっ？」

だが緋鬼の体から、血刃は放たれなかった。飛んでいかない刃に、緋鬼が顔をしかめる。

「何っ…うっ…！」

自分の体を見下ろした緋鬼が、大きく目を見開く。

「こっ…これはっ…！」

「“癒羽”っ…」

緋鬼の胸部へと突き刺さっているのは、黄色い羽根・癒羽であった。

「傷がっ…！」
由雉の放った癒しの羽根が、ボロボロに傷ついた緋鬼の体を、どんどんと治療していく。傷口の塞がっていく自らの体を見て、驚きの表情を見せる緋鬼。傷が塞がっては、血は流れない。血が流れなければ、緋鬼の刃は放たれない。

「クソっ…！」
「治しといてあげるよぉ～っ」
「……っ」
必死に羽根を抜いていた緋鬼が、聞こえてくる声に顔を上げる。

「ボクっ、親切だからぁっ」
「クっ…！」
わざとらしく微笑む由雉に、緋鬼の表情が歪む。

「冗談じゃねぇっ！！俺は“治す”とか“癒す”って言葉が、一っ番嫌いなんだっ！！」
「あぁぁ～、そんな感じするぅ～っ」
刺さった癒羽をすべて抜き、吐き捨てるように言い放つ緋鬼に、由雉があまり感心のなさそうな声をあげる。

「こんなんはいいからっ、超とっとと攻撃しやがれっ！！」
「血が武器と分かっててぇ、早々、流させるわけないでしょ～っ」
必死に訴える緋鬼に、由雉が呆れた顔を向ける。
「傷口は、これで全部、塞いであげるっ」
由雉が再び、癒羽を取り出す。

「それで完全に血が止まって、動きでも封じちゃえばっ、君はもうジ・エンドでしょぉっ？」

「クっ…！」
由雉の言葉に、顔をしかめる緋鬼。
「ボクが終わりにしてあげるよっ…！」
構えた癒羽を、投げる態勢を取る由雉。
「へへへっ…ハッハッハッハッハっ！！」
「……っ？」
急に勢いよく笑い始める緋鬼に、由雉が投げようとした手を止める。
「何っ？血の気多過ぎて、気でも振れたぁ？」
由雉が怪訝そうな顔を、緋鬼へと向ける。
「いぃ～やぁっ」
由雉の言葉に、大きく首を横に振る緋鬼。
「まぁ気は元々、振れてっけどよぉっ」
「あっそ…」
素直に認める緋鬼に、由雉が少し呆れたように言い放つ。
「ホントは傷つけられる方が超好きなんだけどよぉ…」
緋鬼が今までよりも少し低い、落ち着いた声を発する。
「お前が傷つけてくれねぇっつーんだから、仕方ねぇよなぁっ」
「……っ？」
言葉を続ける緋鬼を、由雉は戸惑うように見つめる。
「俺がっ、傷つけるしかっ！！」
「……っ！」
突き刺すような瞳を見せる緋鬼に、何かを感じたのか、由雉の背

筋が震えあがる。

「“血縛（ちしばり）”っ！！」

「えっ…！？」

緋鬼の声とともに、地面から紐のようなものが這い上がってきて、由雉の腕に絡みつく。絡み取られた衝撃で、握っていた癒羽が地面へと落ちた。

「これはっ…ボクの血っ…？」

腕を縛り付ける赤い紐状のものを見つめ、由雉が険しい表情を見せる。先程、緋鬼の血刃によって流された由雉の血が、形を変えて、由雉を縛りつけているのである。

「他人の血も操れるのかっ…！」

「自分の血だけと言った覚えはねぇーぜぇっ？」

射るような瞳を向ける由雉に、緋鬼は楽しげな笑みを浮かべる。

「流れ出ている血だったら、誰のものでも関係ねぇっ！俺は超自由に操れんのさぁっ！」

「クっ…！」

強く言い放つ緋鬼の言葉に、顔をしかめる由雉。両手の動きが封じられていては、癒羽を使って、自分の傷を治すことも出来ない。

「脚羽で、この縛りをっ…」

由雉が小さく呟き、靴に仕込んだ羽根を放とうとする。

「ああ、でもっ、お前の血はちょっと少なすぎるなぁっ」

「えっ？」

「ほらよぉっ」

「……っ！」

緋鬼が指を鳴らした瞬間、由雉の両足から、真っ赤な血が勢いよく噴き出る。

「うぁっ…」

走る痛みに、大きく目を見開く由雉。

「うわあああああっ！！」

由雉の悲痛な叫びが、響き渡る。

「ううっ…」

「“血縛”っ」

「うっ…！」

足が傷つき、そのまま前方へと倒れ込みそうになった由雉の体であったが、流れ落ちる由雉の血が、由雉自身の足を絡め取り、立たせたままの状態で止める。

「足りなかったんでっ、流させてもらったぜぇっ！ハッハっ！」

「こんなっ…ことまでっ…」

笑いあげる緋鬼を、由雉が力なく見上げる。

「傷口が開いてりゃあっ、中の血液操って、血を噴き出させることなんて超余裕よっ！」

「傷っ…」

痛みにしかめた表情のまま、由雉がゆっくりと自分の足を見下ろす。先程、刃に斬り裂かれた時の小さなかすり傷から、止まることなく大量の血が流れ続けていた。

「こうなることも計算に入れて…ボクにかすり傷をっ…」

まんまと作戦にはまってしまったことに、由雉が少し唇を噛む。

「あぁ〜っ、超羨ましいぜぇっ」
緋鬼が、由雉の足から流れ落ちる血を、まじまじと見つめる。

「その大量出血っ…」
「……っ」
流れ落ちる血を、相変わらずうっとりと見つめる緋鬼に、由雉は顔をしかめたが、走る痛みが半端ではなく、呆れた言葉を吐くことが出来なかった。

「さぁ〜てとっ…」
緋鬼が右手で、由雉の足から流れ落ちる血をすくい上げ、右手を纏う鋭い刃を作り出す。

「超ジ・エンドといこうかぁっ！！ハッハっ！！」
「クっ…！」

振り上げられる刃に、由雉は険しい表情を見せた。

第９３章　禁忌の力　☆２

中央塔・左翼。門貴ｖｓ蒼鬼。

「幻影っ…」

白鬼一族・蒼鬼を相手にする門貴は、水蒸気を利用し幻影を作る蒼鬼の能力“蒸力”に、そっと厳しい表情を見せた。

「力押しちゃうんかぁ～いまいち苦手なタイプやなぁ～」

「フフ…正直なお人だ」

頭で考えたことを素直に口にする門貴に、蒼鬼が軽く笑みを浮かべる。

「でも素直に負けては、もらえないのだろう？」

「そりゃ当ったり前やっ！」

試すように問いかける蒼鬼に、門貴がはっきりと答え、再び如意棒を構える。

「こうなりゃ“当たって砕けろ”よっ！！」

門貴がその瞳を鋭くする。

「如意棒、第二の舞っ…“浄”っ！！」

「……っ」

門貴が地面に如意棒の先を突き刺すと、蒼鬼の周囲を再び風が取り囲む。周囲に巻き起こる風を見回しながら、蒼鬼がその瞳を鋭くした。

「フフっ…」

不敵な笑みを浮かべながら、蒼鬼が上空へと飛び上がり、取り囲

んでいた風から逃げる。

「如意棒っ！」

飛び上がった蒼鬼へ向け、すかさず如意棒を構える門貴。

「第三の舞っ！“戒”っ！！」

「なっ…！」

空中にいる蒼鬼へ向け、門貴が間を置くことなく、強い風の塊を放つ。空中で風を上回る動きなど出来ず、蒼鬼が少し顔を歪めた。

――バァァァーンっ！

強い風が、空中の蒼鬼を直撃し、その体を斬り裂く。

「……っ」

だが、その様子を見守っていた門貴の表情が、途端に曇った。

「あれはっ…」

風に斬り裂かれたはずの蒼鬼の体が、まるで霧のように、風に流れて消えていく。

「幻影っ…」

「その通りっ…」

「……っ！」

呟いた門貴の、すぐ背後に現れる蒼鬼。

「残念っ」

「……っ」

門貴へ向けて右手を振り上げる蒼鬼に、門貴が一瞬にして、驚いた表情から鋭い表情へと変わる。

「如意棒っ、第三の舞っ…」
「なっ…！？」
後方を振り返り、すぐに攻撃態勢となる門貴に、右手を振り上げていた蒼鬼が、思わず大きく目を見開く。
「……“戒”っ！！」
「クっ…！」
――バァァァーンっ！
再び、強い風の塊が、蒼鬼を直撃した。
「よしっ…！」
声を漏らし、拳を握り締める門貴。
「フフっ…」
「えっ…？」
だが、背後から聞こえてくる声に、門貴の表情が止まる。
「フフっ」
「うっ…！」
門貴の前方で風に包まれているはずの蒼鬼が、門貴の背後で怪しげに微笑む。その蒼鬼を見た門貴が、驚いた様子で大きく目を見開いた。
「まさかあれもっ…！」
「残念っ」
振り返った門貴の顔面へ、蒼鬼が右手のひらを向ける。

「“蒸熱波(じょうねっぱ)”っ」
「クっ…！」
蒼鬼の右手から放たれる、熱い蒸気の塊。

「うあああああああっ！」
両手を顔の前へ交差させ、防御姿勢をとった門貴であったが、その蒸気風をもろに喰らい、勢いよく後方へ弾き飛ばされる。

「うっ…うぅ…」
後方へと倒れ込んだ門貴が、少し苦しげな声を漏らしながら、ゆっくりと起き上がる。熱い蒸気を喰らった両手は、火傷を負ったように真っ赤に腫れ上がっていた。
「痛っつぅぅ～っ…」
その両手を見下ろしながら、門貴が顔をしかめる。

「私が攻撃するその瞬間だけが、私が幻影ではない、攻撃の唯一のチャンス…」
「へっ？」
前方から聞こえてくる蒼鬼の声に、門貴が少し間の抜けた表情で、顔を上げる。

「たった一度、私の力を見ただけで、貴方はそこまで計算した」
「……っ」
微笑む蒼鬼に、門貴が眉をひそめる。

「“当たって砕けるのみ”だなどと言って…随分と良く出来た策だ…」
蒼鬼が感心したように言い放つ。

「だから貴方は、見た目よりずっと頭がいいと言うんだよ」

「だから見た目よりは余計やっちゅーねんっ」
先程と同じように突っ込みを入れながら、門貴がその場でゆっくりと立ち上がる。

「だいたいっ、ホンマに頭良かったら、二回目のお前の幻影も見破っとるわっ」
「それは仕方がない」
「へっ？」
すぐさま答える蒼鬼に、目を丸くする門貴。
「私は貴方よりも、もっと頭がいいのだからっ…」
「うっ…」
自信満々に答える蒼鬼のその態度に、門貴は思わず顔をしかめた。

「さいでっかぁ…」
「さぁ、次はどんな策で来る？」
軽く右手を上げた蒼鬼が、どこか楽しげに語りかける。

「私の予想では、次は力技に出ると見せかけて、確実な攻撃をっ…」
「悪いけどなぁっ」
「……っ？」
途中で言葉を遮る門貴に、蒼鬼が不思議そうに顔を上げる。

「こっちは、お前とチンタラ化かし合いやっとう暇はないねんっ！！」
門貴が強く言い放ち、また如意棒を構える。

「とっとと決めさせてもらうでぇっ！！」
「フフっ…それも何かの心理作戦かなっ…？」
勢いよく叫ぶ門貴を、蒼鬼は相変わらず楽しげな表情で見つめる。

「さぁ～てとぉっ」
真剣な表情を見せた門貴が、まっすぐに蒼鬼を見つめる。
「まぁとりあえず、真正面からぶつかっていってぇっ」
「フフ…」
門貴があれこれと次の策を考えている間もずっと、微笑みを浮かべている蒼鬼。

『フフフっ…』
「んっ？」
いつの間にか重なって聞こえてくる笑い声に、門貴が眉をひそめて顔を上げる。

「へっ…？」
『フフフっ…』
「げえええぇっ！？」
門貴が顔を上げると、門貴の周囲すべてに、同じ微笑みを浮かべた蒼鬼が、所狭しと立ち並んでいた。同時に微笑む多くの蒼鬼に、門貴が目玉が飛び出るほどに驚く。

「なっ…ななな何っ…！」
『この中の誰か一人は本物っ…後は水蒸気で作られた偽物だ…』
「偽物たってっ…」
困惑した様子の門貴が、近くに立つ蒼鬼を、まじまじと見つめる。

「どう見たって本物やぁ～んっ！」
『フフっ…』
偽物とは思えない精巧な作りの幻影に、思わず頭を抱える門貴。
そんな悩める門貴を見て、周囲の蒼鬼たちが、さらに楽しげに笑う。

『さぁ…？頭のいい貴方はどうするっ…？』

「うぅ～んっ…」
一斉に問いかける蒼鬼たちに、深く首を捻る門貴。
「どれかわからんのやったらっ…」
門貴が顔を上げ、如意棒を構える。
「全部攻撃するまでやっ！！」
『フフ…』
気合いの入った声をあげる門貴を見て、蒼鬼たちがそっと笑う。
「如意棒、第四の舞っ…」
狙いを定めるように鋭い瞳を見せた門貴が、如意棒を構えたまま、一周、体を回転させる。
「……“嵐”っ！！」
『うっ…！』
――バァァァーンっ！
門貴が叫んだその瞬間、辺り一面から、嵐のように逆巻く風が、一斉に巻き起こる。竜巻のように巻き上がる風に、次々と呑みこまれていく蒼鬼たち。
「クっ…！」
「……っ」
幻影の蒼鬼が掻き消されていく中、多くいた中の一人の蒼鬼が高々と飛び上がり、上空へと逃げる。その姿を、逃すことなく捉える門貴。
「本物は、この嵐の中を率先して逃げ出た奴っ…」
そう呟き、門貴が如意棒を握る手に力を込める。

「と見せかけてぇっ、後ろから狙ってる奴ぅぅっ…！！」
「何っ…！？」
そう叫び、勢いよく振り返る門貴に、背後から音もなく攻撃しようとしていた蒼鬼が、大きく目を見開く。
「如意棒、第五の舞っ…“全”っ！！」
「うっ…！！」
目にも留まらぬ一陣の風が、蒼鬼へ向けて吹き抜く。

――バァァァーーンっ！

再び蒼鬼を直撃する、門貴の風。

「はぁっ…はぁっ…」
如意棒を下ろした門貴が、少し苦しそうに、肩で息をする。
「んん～っ…んっ？んっ？」
門貴が周囲を見回し、どこにも蒼鬼がいないことを確認する。
「幻影を作った形跡なしっ、今度こそ、直撃やろぉっ…」
まだ目の前で逆巻いている風を見つめながら、門貴が力なく呟く。

「フフっ…」
「うっ…！」
逆巻く風の向こうから聞こえてくる、もうかなり聞き慣れてきた笑い声に、門貴がその表情を厳しくする。

「まさかっ…！」
「直撃はしたんだけどねぇっ…」
晴れていく嵐の中から、見えてくるもの。

「でも残念っ」
「なっ…！！」
晴れていく景色の向こうに見えてきたのは、綿飴のようなふわふわとした物体であった。その物体が徐々に空中に消えるように分解し、中から笑顔の蒼鬼が姿を見せる。

「無傷だっ」
「くっ…雲っ…？」
蒼鬼の周囲を包み込んでいたそれは、門貴が普段、毎日のように見る、青い空に浮かぶ雲と呼ばれるものであった。

「そう…“雲母（うんも）”という…」
蒼鬼が周囲に浮かびあがっている雲を見ながら、笑顔を見せる。

「雲も、空に浮かびあがった水蒸気から出来るんだ…」
完全に雲が晴れると、蒼鬼は広々と両手を伸ばす。
「そして嵐は、その雲から生まれる…」
「せやから、俺の風を吸収出来たゆーんかっ…」
「そう…」
「……っ」
微笑んで頷く蒼鬼を見て、眉をひそめる門貴。門貴の全力をこめた風でさえ、蒼鬼には傷1つつけることが出来なかった。いくら幻影を見破れたとしても、攻撃の術がなければ意味がない。

「困ったなぁ…」

門貴が首を捻り、弱々しい声を出す。

――出来る限り“人獣化”はしないでぇ～――

「タローにはああ言われたけどっ…でも他に手が…」

「でもまさか、本当に本物を見破られるとは思ってなかったなぁ」

「へっ？」

しみじみと呟く蒼鬼に、考え込んでいた門貴が顔を上げる。

「何故、飛び上がらせたのがダミーだとわかったんだ？」

「あぁ～っ」

蒼鬼からの問いかけに、門貴があまり興味のなさそうな声を漏らす。

「お前、さっきも二回、幻覚作って、俺引っ掛かったやろぉ？だから今回もそうちゃうかなぁ～と思てっ」

「成程…先程の私の攻撃を見て、学習したというわけか…」

素直に答える門貴に、蒼鬼が納得したように頷く。

「いい感覚だ。獣ならではの研ぎ澄まされた五感をいうやつかなっ？」

「さぁなぁっ、いいバナナ見つける嗅覚と、いい女見つける視覚には自信あるけどっ」

楽しげに問いかける蒼鬼に、素っ気なく答える門貴。

「だとすると、五感の鋭い貴方が次に考えるのは…“どうやって私に傷を負わせるか”だな」

「……っ」

門貴の考えを読む蒼鬼に、門貴が少し顔をしかめる。

「そして見た目より頭のいい貴方は、必ずその答えに行き着く…」
「せやから、見た目よりは余計やっちゅーにっ」
蒼鬼が相変わらずの言いようをすると、門貴も相変わらずの口振りで突っ込みを入れた。

「けどっ…今度は行き着かれると、少し困るなぁ…」
「えっ…？」
珍しく首を捻る蒼鬼に、眉をひそめる門貴。

「私は、緋鬼と違って、血を流すことが嫌いだからね」
「……っ」
そっと微笑み、左手を上げる蒼鬼に、門貴が少し警戒するような表情を作り、身構える。

「だから封じさせてもらう…貴方のその、いい女を見つけるのに長けているという視覚っ…」
「何っ？」
「“霧蒸（むじょう）”っ…」

――パァァァンっ！

「……っ！」
蒼鬼がそう呟いた瞬間、蒼鬼の全身から、まるで霧吹きのように、細かい何かが一斉に噴き出され、門貴を包み込んだ。

「えっ…？」
警戒するように身構えていた門貴が、その態勢を解き、途端に戸惑ったような声を漏らす。

「何や…？」
ゆっくりと首を動かし、周囲を見回す門貴。
「何も…見えへんっ…」
「フフっ…」
三六〇度視界を、白く深い霧で覆われてしまった門貴が、まるで周囲を探るように、必死に見回す。門貴を深く覆った霧は、蒼鬼の姿どころか、横に見えていたはずの中央塔も、すべての景色も、門貴の視界からすべてを消し去ってしまった。
「そんなっ…」
深い霧の中で一人、一歩二歩と足を動かす門貴。
「これじゃあっ…」
「さすがの頭のいい貴方も、どうすることも出来ないかなっ…？」
「……っ！」
すぐ近くから聞こえてくる声に、門貴が大きく目を見開く。
「どこやっ…！？」
勢いよく振り向き、真っ白な視界の中を、門貴が必死に目を凝らして、蒼鬼の姿を探す。
「ここ、だよ」
「んっ！？」
声だけを頼りに、門貴が振り返る。
「うっ…！！」
すると、振り返った途端、門貴の表情が激しく歪んだ。
「うっ…うぁ…」

苦しげな声を漏らしながら、門貴がゆっくりと自分の左腕を見下ろす。左肩から二の腕にかけて、大きく斬り裂かれた跡があり、そこから勢いよく血が流れ落ちていた。

「いつっ…の間に…」

傷口を押さえながら、門貴が力なく呟く。

「目の前で斬り裂かれても、斬り裂くその姿すら見えないっ…」

「ううっ…！！」

声を共に、今度は門貴の右足が勢いよく斬り裂かれる。

「うっ…！」

「フフっ…」

思わずその場に膝をつく門貴に、蒼鬼の笑い声だけが落とされる。

「視覚を完全に封じられたこの状況っ…」

真っ白な霧の中、右手に鋭い鬼爪を生やした蒼鬼が、膝をついた門貴を楽しげな笑顔で見つめる。

「さぁ…？頭のいい貴方はどうするっ…？」

「クっ…！」

再び投げかけられるその問いに、門貴は険しい表情を見せた。

第９３章　禁忌の力　☆３

中央塔・一階。桜時ｖｓギン。

「“瞬花っ…終刀”っ！！」

桜時が村雨丸を振り抜き、ギンへ桃色の一閃を向ける。

「“鬼爪っ…炎舞”…」

向かってくる一閃に対し、赤々とした炎に包まれた鬼爪を、軽く一振りさせるギン。すると、桜時の一閃はあっという間に砕け、燃え散る花びらが、次々に床へと落下した。

「クっ…！」

燃え散った桜の花びらを見て、桜時が険しい表情を見せる。

「ならっ…！」

もう一度、村雨丸を振り上げる桜時。

「“柔桜っ…無塵”っ！！」

桜時が勢いよく村雨丸を振り下ろすと、先程よりも大きな桃色の一閃が、目にも留まらぬ速さで、ギンのもとへと駆け抜けていく。

「フフっ…」

向かってくる桜時の技を前に、焦る様子もなく、そっと微笑んで左手を向けるギン。

「“水舞”…」

――パァァァンっ！

ギンの左手から放たれる無数の水飛沫に、桜時の花びらが、今度は一つ残らず、払い落とされてしまう。水に濡れた花びらが、燃え散った花びらの上へ、また散った。

「水力っ…」

右手からは炎を、左手からは水を放ったギンを、桜時がまじまじと見つめる。

「本当に…鬼人なのかっ…？」

ギンの言葉では聞いたものの、まだ納得できないでいる自分がいた。

「やれやれっ…」

ギンが構えていた左手を下ろし、どこか疲れたように肩を落とす。

「命力がなければ、この程度ですかっ…」

「……っ」

その言葉に、思わず顔をしかめる桜時。命力の結晶を取り抜かれ、命力を使えなくなってしまった桜時。命力だけではなく、花力で放っていたその技も、威力が半減してしまっているのだ。

「このくらいなら、僕が相手するまでもなかったですかねぇ…？」

「……。」

挑発するように言い放つギンに、桜時は厳しい表情を見せた。

中央塔・最上階。輝矢ＶＳシルク。

「“月器・上弦”っ…」

輝矢が三日月を満ちさせ、半月となった月器を構える。

「“水月”っ…！」

高々と放り投げた上弦から、雨のように降り注ぐ無数の水の刃。

「……っ」

迫る水月を見て、微笑んだシルクが、出迎えるように両手を上げる。

「なっ…！？」

「フフフっ…」

シルクが両手を上げると、降り落ちていたはずの水月が空中で突然、止まった。驚きの声を漏らす輝矢に、シルクが静かな笑みを零す。

「“水星”…」

「うっ…！」

空中で止まった水月が、その向きを下方から横向きへと変え、一斉に輝矢の方へと飛び出してくる。

「“月器・十六夜”っ！」

放り投げていた上弦をすぐに手元に戻し、素早く盾を作って、自分の体の前に構える輝矢。

――バァァァァーンっ！

「うっ…！」
十六夜にかかる衝撃に、輝矢が思わず顔をしかめる。
「はぁっ…はぁっ…」
やっと水の刃の奇襲が止まり、少し息を切らしながら、十六夜を下ろす輝矢。
「“月器・三日月”…」
輝矢が十六夜を、元の三日月の姿へと戻す。
「そんな、玄神の力で押し込めたような水力では…私には通じないわよ…？月の少女っ…」
「……っ」
そっと話しかけてくるシルクに、輝矢が顔をしかめ、シルクの方を見る。
「もっと…鬼人の力を解放しないとっ…」
シルクの高く響く声が、まるで誘うように輝矢に届く。
「さっき…使ってたでしょう…？」
「……。」
その言葉に、厳しい表情を見せる輝矢。
――今ならっ……――
白鬼たちの間に空間を作る際、輝矢はその瞳を赤に染め、いつもの数倍は威力のある水力を使った。何故、そのことをシルクが知っているのかは愚問であろう。海中での一戦から、徐々に輝矢は鬼人の力を操りつつある。いや、鬼に近づきつつあるという表現の方が

正しいかも知れない。

「……っ」

そんな自分の変化に、輝矢はただ表情を曇らせた。

「もっと…私に見せてっ…月の少女…」

「……三日月っ…」

鬼に近づくことになるとしても、今の輝矢には、三日月を握る手に力を込める他に、道はなかった。

中央塔・後方。ゴンｖｓ諸刃。

「はぁっ…はぁっ…」

少し乱れた呼吸を、肩で息をしながら、必死に整えるゴン。

「……。」

ゴンの目の前には、ゴンと激しい戦いを繰り広げているというのに、息１つ乱していない、静かな表情の諸刃が立っていた。

「技のキレ、スピードは相変わらずかっ…」

そんな諸刃を見ながら、ゴンは少し分析するように呟く。

「俺程度の小細工が通じる相手じゃねぇーなっ」

結論を導き出すようにそう言い放ち、ゴンが再び天狼丸を構える。

「“五臓・六腑”っ…！！」
ゴンが天狼丸を振るい、諸刃へ六つの炎の玉を向ける。
「……草薙っ」
少し退き気味に飛び、草薙を構える諸刃。
「“白雷”…」
草薙から放たれる、白い雷。
――バァァァーンっ！
雷がゴンの炎を包み、その場で消滅させる。
「おっりゃあああああっ！！」
「後ろっ…？」
諸刃が消えていく炎に目を取られていたその隙に、諸刃の後方から、勢いよく天狼丸を振り下ろすゴン。素早く振り向く諸刃であったが、天狼丸の振り下ろされる速度の方が速い。
「だあああああっ！！」
「……っ」
「うっ…！」
そこにいたはずの諸刃の姿がなくなり、天狼丸が勢いよく地面に突き刺さる。
「残像っ…！？本物はっ…！」
「ここだ…」
「なっ…！」

ゴンのすぐ後ろに立った諸刃が、戸惑うゴンへ草薙を振る。

「グっ…！！」

必死に体を逸らし、避けようとしたゴンであったが、草薙の刃先が左腕をかすめた。ゴンが痛みに顔をしかめ、赤い血が地面へと落ちる。

「チィっ…！」

滴り落ちる血を見て、悔しげに声を漏らすゴン。

「動きが読まれてやがるっ」

斬り裂かれた左腕を押さえ、諸刃との距離を取りながら、ゴンが少し眉をひそめている。

「直線的な攻撃だ…」

「あっ？」

聞こえてくる声に、ゴンが勢いよく顔を上げる。

「相変わらずだな…ゴン…」

「……っ」

その言葉に、ハッとなって目を見開くゴン。

――技のキレ、スピードは相変わらずかっ……――

それは先程、ゴンが呟いた言葉。

――相変わらずだな…ゴン……――

そして、かつての諸刃が放った言葉でもあった。トマトの屋敷で手合わせをした後、穏やかに微笑んだ、あの頃の諸刃の姿が思い出

される。外見こそ変わったが、その言い回しはかつての諸刃と何一つ変わらない。

「“相変わらず”…かっ…」

六年の時が流れても、互いの在るべき場所が変わっても、変わらないものがある。

――次狼ぉぉぉっ！！――

――死ぬなんてっ…！そんなことっ…！！――

だが、何一つ変わっていないことなど、無い。

「……。」

失ったものを思い出し、ゴンがそっと目を伏せる。

「ホントっ…変わらなければ良かったのにな…」

「……っ？」

小さく呟いたゴンに、諸刃が少し眉をひそめる。

「けど、変わっちまったんだっ…」

ゴンが天狼丸を握る手に、グッと力を込める。

「なら俺もっ、変わらなきゃなんねぇーっ！！」

「……っ」

素早く天狼丸を構えるゴンに、諸刃が少し顔をしかめる。

「あの構えはっ…」

「“一髪・二目・三耳・四首…」
高々と掲げた天狼丸から、赤々とした炎が発せられる。

「五臓・六腑・七臍・八脚…」
発せられた巨大な炎が、徐々に枝分かれし、左右に四本、計八本の炎の刃が、天狼丸から伸びるような形で作られていく。

「九尾”っ…」
ゴンの声を合図とするように、天狼丸を包む中心の炎が、さらに勢いを増す。

「この前は戦いの後だったし、足挫いてたからなぁっ」
九つの炎の刃を纏った天狼丸を構えるゴン。

「これが完璧バージョンだっ！」
ゴンが、鋭い瞳を諸刃へと向ける。

「喰らいやがれっ！！“九火煉刃”っ…！！！」
九火を纏った天狼丸を、ゴンが勢いよく振り抜く。天狼丸から放出された炎が、まっすぐに諸刃へと向かっていく。

「……。」
向かってくる炎を、静かな表情で見つめる諸刃。

――バァァァーンっ！

九火は諸刃を直撃し、辺りに激しい衝撃風が巻き起こった。燃え盛る炎と、舞い上がる砂煙の中に、諸刃の姿も見えなくなってしまう。

「凄いっ…」

少し離れた位置から、ゴンと諸刃の戦いを見つめるリンゴが、ゴンの放った技の威力に、思わず言葉を漏らす。

「これが…今のゴンの九火っ…」

リンゴの瞳が、まっすぐにゴンを捉える。

「あの頃のゴンとは…比べモノにならないっ…」

リンゴもまた、過去のゴンと今のゴンを比べ、驚きの表情を見せた。

「直撃…したか…いやっ、どうかっ…」

まだ燃え盛る炎を、様子をうかがうように、目を凝らしながら見つめるゴン。避ける動きはなかったが、諸刃がそう簡単に技を喰らうとも思えなかった。

「……っ」

炎が徐々に収まり、中から人影が見えてくると、ゴンがさらに目を見張る。

「なっ…！」

「あっ…！！」

見えてくる人影に、同時に目を見開くゴンとリンゴ。

「“八咫(やた)”…」

無傷で立つ諸刃のその前には、白い雷を纏った、丸い巨大な盾が立ち塞がっていた。その盾がゴンの九火をすべて受け、諸刃を守ったのだろう。盾は美しいまでに透き通っており、驚くゴンの姿を鏡のように映し出していた。

「盾っ…？」

「……“草薙”…」

「……っ！」

諸刃がポツリと呟くと、鏡のようなその盾は、先程まで諸刃が握っていた草薙の剣へと姿を変える。その様子に、さらに目を見開くゴン。

「可変式の武器っ…？」

――“月器・三日月”っ！――

思い出される、輝矢の操る月器。それは、かつて人間の神が持ったとされる、神話上の武器と、よく似ていた。

「まさかっ…“神器”っ…？」

「そう…」

「何っ…！？」

呟くように問いかけたゴンに、諸刃がゆっくりと頷く。頷く諸刃に、ゴンはさらに驚きの表情を見せた。

「じゃあお前もっ、“玄神”の血をっ…！？」

「いや…俺は玄神じゃない…」
「えっ…？」
すぐさま答える諸刃に、ゴンが眉をひそめる。
「玄神じゃねぇって、だが神器をっ…」
「神器を授かった一族は、玄神の他にも居たとされている…俺は恐らく、他の一族の流れを汲んでいるのだろう…」
「他の一族っ…」
諸刃の言葉に、ゴンが少し考え込むように俯く。
「まさか…牢戸知玖は、それを知ってて…」
「かもな…」
「……っ！」
ゴンの考えに、頷いてくる諸刃に、ゴンが勢いよく顔を上げる。
「あの方にとって…俺はただの駒の一つ…」
少し遠くを見るような瞳を見せ、諸刃が呟く。
「六年前、お前でも次狼でもなく、俺に目をつけたのは、そういった理由があったからなのかも知れない…」
「駒の一つっ…」
諸刃の言葉を繰り返し、ゴンが顔をしかめる。
「お前はそれでいいってのかよっ…！？」
「……。」
鋭く問いかけるゴンに、遠くの方を見ていた諸刃が、ゆっくりと視線を合わせる。
「……あぁっ…」
「……っ」

迷いなく頷く諸刃に、さらに顔をしかめるゴン。

「お前に…お前たちに…シルク様の創る世界を、壊させるわけにはいかない…」

「……っ？」

高々と草薙を掲げる諸刃に、ゴンが少し眉をひそめる。それは、諸刃が初めて見せる構えであった。

「これで…終わらせる…」

「クっ…！」

そっと呟く諸刃に、ゴンは警戒するように身構える。

「“八坂（やさか）”っ…」

――パァァァァンっ！

「何っ…！？」

諸刃がそっと囁いたその瞬間、草薙が強い光を放つと、その光が弾け飛ぶようにしていくつかに分かれ、警戒するゴンの八方へと飛んだ。

「これは…勾玉っ…？」

ゴンが、自分の八方を取り囲んでいる光の一つを見て、眉をひそめながら呟く。光の中に見えるのは、黒い、曲線を描いた、先端の円形部分に小さな穴のあいている勾玉であった。八方に散った勾玉が、放つ光を、徐々に強くしていく。

「……“雷帝”っ…」

右手を天にかざし、諸刃が呟く。

――バリィィィーンっ！

「うわあああああっ！！」

天から落ちた雷が、八方に散った勾玉を媒体とするようにして、中心に立つゴンへ、激しい雷撃を浴びさせる。

「あああああああっ！！」

八方から、容赦なく雷を浴びせられたゴンは、どこまでも響きそうなほどに激しい叫び声をあげる。

「あああああああっ！！」

「ゴンっ…！！」

叫び続けるゴンに、思わず身を乗り出すリンゴ。

「……っ」

「うっ…！」

諸刃が手を下ろすと、雷が止み、ゴンは大きく目を見開いたまま、力なくその場に座り込んだ。

「う…うぁっ…」

まだ電撃の残る体を、地面に突き刺した天狼丸で必死に支えながら、ゴンが何とか気を失わないように、歯を食いしばり堪える。

「うっ…うぅっ…」
「これが、今の俺とお前の差だ…ゴン…」
苦しむゴンの元へと、ゆっくりと歩み寄って来る諸刃。

「……“草薙”…」
諸刃が剣の名を呼ぶと、八方に散っていた勾玉は、また一つの剣となって、諸刃の右手へと納まる。

「お前に…俺を倒すことは出来ない…」
「……っ」
深く俯いたゴンのすぐ横へと、諸刃が立ち、その場で足を止める。

「これで…最後だ…」
座り込んだままのゴンへ、諸刃がゆっくりと草薙を振り上げる。

「俺も…」
「……？」
かすかに聞こえてくるゴンの声に、腕を動きを止める諸刃。

「俺も…殺すのか…？」
小さく、だが確かに聞こえてくる問いかけ。

「トマト先生や…次狼みたいに…」
「……っ」
俯いたままのゴンの問いかけに、ゴンには見られていないからか、諸刃は珍しくその無表情を崩し、大きく顔をしかめた。だがすぐに、その表情はいつも通りに戻る。

「ああっ…」
「……。」
聞こえてくる返答に、そっと目を細めるゴン。

――諸刃を…諸刃をお願いします……――
――俺は…諸刃を殺す……――
――自分の心には…従うようにして下さいね……――

思い出される、いくつもの言葉。

「……っ」
ゴンが俯いたまま、強く拳を握り締める。

「さらばだ…」
振り上げた草薙を握り締める手に、再び力を込める諸刃。

「ゴンっ…！」

草薙が、勢いよく、ゴンへと振り下ろされた。

――パシィっ…！

「何っ…！？」
諸刃の振り下ろした草薙が、素早く伸びてきたゴンの左手に、掴

み止められる。予想外の出来事に、思わず大きな声を発する諸刃。

「まだそんな力っ…うっ…！」

掴み止められた草薙を、引き抜こうとした諸刃であったが、掴む力があまりに強く、諸刃が力一杯引いても、草薙はピクリとも動かなかった。

「どこにこんな力がっ…んっ？」

草薙を掴み止めるゴンの左手を見た諸刃が、途端に眉をひそめる。

「……っ」

刃を掴むゴンの指先の爪が、急速に鋭く伸びていき、まるで鬼か獣のような爪となっていく。その手の甲も徐々に、深い金色の獣毛に覆われていく。

「こっ…これはっ…」

ゴンのその変化に、思わず目を見張る諸刃。少し体を引いて見れば、ゴンの体全体から、金色の光が溢れるように放たれている。

「ゴンっ…！お前っ…！」

「これが俺の…」

焦る諸刃の方を振り向いたゴンは、短髪だった髪が伸び、獣のように耳と尖らせ、金色に光るその瞳を、さらに鋭くしていた。

「最後の力だっ…！！」

「クっ…！」

ゴンを覆う金色の光が、その強さを増していく。

――パァァァーンっ！

第９３章　禁忌の力　☆４

「なっ…何っ！？」
大きく目を見開き、明らかに動揺した表情を見せる緋鬼。
「おっ俺のっ、俺の血縛を破っただとっ…！？」
緋鬼の足元には、先程まで由雉の動きを封じていた、由雉自身の血が飛び散っていた。
「いつまでも、トリを捕まえてられると思わないでよねぇっ」
「……っ！」
前方から聞こえてくる声に、地面を見ていた緋鬼が、勢いよく顔を上げる。
「お前っ…！何をっ…！！」
「……。」
困惑の表情で見つめる緋鬼の先に立つのは、全身を青い光に包まれた由雉。
「ホントはなるつもりなかったのになぁっ…」
青い光に包まれた由雉が、ぼやくように呟く。
「だってこの姿っ、可愛くないからさぁっ」
「……っ！！」
顔を上げた由雉がそっと微笑んだ瞬間、由雉の背中から、大きな青色の翼が、勢いよく生え出る。

「つっ…翼っ…！？」
由雉の背から生えた翼に、さらに動揺を見せる緋鬼。
「人間にっ…翼がっ…？」
「ねぇっ？どっちかって言うとぉ、“カッコイイ”でしょっ？」
戸惑いを隠しきれずに呟く緋鬼に、翼の生えた由雉が余裕の笑みで問いかける。青い髪は伸び、羽根を一体化するように広がり、大きかった真っ赤な瞳は、獲物を狙うように、細く鋭くなる。
「さぁっ、今度は君が血を流す番だよっ…」
由雉はその翼を大きく広げ、冷たささえ感じる瞳で、そっと微笑んだ。
「何故っ…」
こちらも戸惑いの表情を見せる蒼鬼。
「何故っ、私が見えるのですっ…！？」
声を荒げて問いかける蒼鬼の右手には、鋭く斬り裂かれた鬼爪の跡が残っていた。蒼鬼の周囲には、斬り落とされたのであろう鬼爪の残骸が、散らばっている。

「今の貴方には、何も見えないはずっ…！」
「言うたやろぉ～？」
蒼鬼の前方から聞こえてくる、陽気で明るい門貴の声。

「美味しいバナナ見つける嗅覚とぉ、イイ女見つける視覚には自信あるてぇ～」
「なっ…！」
まるで蒼鬼のいる位置がわかっているかのように、ゆっくりと振り返る門貴。振り返った門貴のその姿を見て、蒼鬼が大きく目を見開く。

「貴方っ…！その姿はっ…！」
「へっ」
深い霧の中、その霧を晴らすように突き上げる、真っ赤な強い光。
「ええ男やろっ？」

いつの間にか周囲に吹き荒れる風に、その長い茶色の髪をなびかせ、鋭く光る金色の瞳で微笑む門貴。微笑んだその口元からは、尖った牙が覗き、手や足、素肌の見えるその部分は、茶色の獣毛で覆われていた。如意棒を握るその指先からも、鋭い爪が生え、獣のように骨張った形へと変わっている。

「獣化っ…？いや、違うっ…」
戸惑うように呟き、また首を横に振る蒼鬼。

「その姿っ…その姿になったから、この霧の中でも私の姿が見えるとっ…？」
「そうみたいやなぁ～俺も実戦でなったんは初めてやから、ようわからんけどぉっ」

少し周囲を見回した後、門貴がまっすぐに蒼鬼に視線を送る。

「お前の顔は、よう見えるわっ」

「クっ…」

蒼鬼を見つめ、微笑む門貴に、蒼鬼が少し顔をしかめる。

「獣の感覚っ、ナメたらあかんでぇっ？」

門貴が試すように言い放ち、如意棒を構える。

「これがっ、見た目通り頭のイイ、俺の答えやっ！！」

如意棒の先を蒼鬼へと向け、門貴は力強く言い放った。

「このっ…光は…」

中央塔の左右、そして後方から突き上げた赤・青・金の三色の光を見上げながら、イチゴが戸惑うように呟く。

「また鬼人共が何かしようとしてるんじゃっ…！」

「いやっ…」

「へっ？」

険しい表情を見せた金汰であったが、すぐに否定する太狼に、少し目を丸くして振り向く。

「桃ちゃんっ？」

「……。」
首を傾げる金汰の横で、太狼は厳しい表情を見せ、突き上げた光をまっすぐに見つめる。
「“人獣化”での戦闘は…もって十分っ…」
太狼が誰にともなく、小さく呟く。
「それを超えれば…命はないっ…」
眉をひそめた太狼が、強く拳を握り締める。
「死ぬなよっ…全員っ…」
唇を噛み締めた太狼が、どこか祈るように呟いた。
「ゴンっ…」
目の前で姿を変えたゴンを、リンゴは目を逸らすことなく、まっすぐに見つめる。
「……っ」
「クっ…！」
ゴンが掴んでいた草薙を放すと、諸刃は素早く草薙を引き、ゴン

と距離を取るように後ろに飛ぶ。

「……。」

草薙から手を放したゴンは、その場でゆっくりと立ち上がった。

「“人獣化”…」

金色の光を纏い、一部獣化したゴンの姿を見つめ、諸刃がそっと目を細める。

「人の姿を捨ててまで戦うか…」

「鬼人化してる奴に言われたかねぇーなぁっ…」

「……っ」

返って来るゴンの言葉に、諸刃が少し眉をひそめる。

「わかっているのか…？その姿は…」

「ああっ、わかってるっ」

ゴンが、諸刃が言い終わらないうちに答える。

「この姿は、お前の名と同じ“両刃（もろは）の剣”っ、高い戦闘力を誇る代わりに、命を削るっ…」

「そこまでわかっていて…」

すらすらと答えるゴンに、諸刃が表情を曇らせる。

「そうまでしてでも…俺を殺したい、か…」

「……。」

そっと呟く諸刃に、ゴンが目を細める。

「さぁ…始めよう、諸刃っ…」

ゴンが、天狼丸を握り締める手に、力を込める。

「そして終わらせようっ」
その瞳が、強く光る。

「俺たちの宿命っ、すべてをっ…！！」
「……っ」

天狼丸を構え、強く叫ぶゴンに、諸刃もゆっくりと草薙を構えた。

第９４章　宿命の友　★１

流れるような白い髪も、感情の見えない赤色の瞳も、温もりのないその冷たい手も、すべてが新鮮で。

「大丈夫か…？」

「はい…」

初めて出会ったその時は、ただ、“綺麗な人”だと、そう思った…。

中央塔周辺・中央塔部隊。

「人獣化っ…！？」

驚きの表情を見せた金汰が、勢いよく振り向く。

「人獣化ってっ…！そんな危険なもんをっ、あいつらに教えたのかよっ！？桃ちゃんっ！！」

「……。」

責めるように問いかける金汰に対し、戦いを見つめたまま、厳しい表情を見せる太狼。

「人獣化がどれ程、危険なものなのかはっ、桃ちゃんが一番よくわかっているだろうっ！？」

「彼らに対抗する力を得る為には、それしかなかったんだよ」

「だからってっ…！」

冷静に答える太狼に、金汰が声を荒げる。

「ええぇいっ！こうなったら、力ずくでも割って入って、止めてやるっ！」

「ちょっ…！危ないですよっ！！金汰さんっ！！」

マサカリを振り上げ、戦うゴンたちのもとへと行こうとする金汰を、イチゴが腕にしがみつくようにして、必死に止める。
「止めてくれるなぁっ！イチゴぉっ！」
「金汰さんの実力じゃっ、止めに入ることなんて、間違っても出来ませんってっ！！」
「そっ…そこまで言い切らんでもっ…」
大人しい性格のわりに、相変わらずはっきりとした物言いをするイチゴに、思わず金汰が落ち込み、飛び出して行こうとしていた元気を失う。
「あっ！すみませんっ！私ってば、つい本当のことをっ…！」
「ずぅぅ～～んっ…」
謝るイチゴであるが、逆効果でさらに金汰を落ち込ませてしまう。

「あぁ～あぁ…何やってんスかねぇ～っ、あの二人はっ」
緊迫感のないやり取りを見せる金汰とイチゴを見ながら、呆れたような表情で、太狼の方へと歩いてくる羊スケ。白鬼との戦いも落ち着き、太狼たちのもとへやって来たのである。
「……。」
「桃タローさんっ？」
ただまっすぐに戦いを見つめる太狼を見て、羊スケが少し首を傾げる。

「あの時っ…」
「えっ…？」
ゆっくりと口を開く太狼に、羊スケが少し眉をひそめる。
「あの時っ…ゴンは、“自分が必ず仇をとる”って…僕にそう言ったんだ…」
静かに響き渡る、太狼の声。
「僕が…ゴンを止めるべきだったのかなっ…」
「……っ」

そっと微笑み、誰にともなく問いかける太狼を見つめ、羊スケが目を細める。

「止めても無駄っスよっ」
「えっ？」
すぐさま答える羊スケに、太狼が戸惑うように振り向く。
「止めて、止まるような人じゃないっスからっ」
「羊スケくんっ…」
微笑んで答える羊スケを、太狼がまっすぐに見つめる。
「そうだねっ…」
羊スケの言葉に頷き、穏やかに微笑む太狼。

「……っ」
再び真剣な表情を見せた太狼が、皆の戦う方を見る。
「二人の戦いを…君はどんな風に見つめてるのかなっ…」
どこか遠い瞳を見せる太狼。

「次狼っ…」
太狼の悲しげな声が、そっと響き渡った。

中央塔・後方。ゴンｖｓ諸刃。

「“宿命”…か…」
人獣化し、再び天狼丸を構えたゴンを前に、諸刃がゆっくりと、ゴンの放った言葉を繰り返す。
「そうだな…終わらせよう…」
諸刃が下ろしていた草薙を、再び構える。
「六年前から続く…俺たちの宿命を…」
「……っ」
鋭い瞳を見せ、かつての友は、互いに向き合った。

中央塔・一階。桜時ｖｓギン。
「さっきの振動はっ…？」
外から伝わった大きな振動は、この強固な中央塔をも揺るがし、一階で戦う桜時にも、外の様子の変化を知らせていた。どこか不安げな表情を見せた桜時が、遠くに見える窓を見つめる。
「外にいる君のお仲間さんたちがぁ、“人獣化”したみたいですねぇ」
「人獣化っ…！？」
少し微笑んで答えるギンの言葉に、大きく驚く桜時。
「みんながっ…！？人獣化をっ…！？」
「ええぇっ」
確かめるように聞き返した桜時に、ギンがゆっくりと頷きかける。
「そんなっ…」
そっと俯いた桜時が、険しい表情を見せる。

――ううっ…！！――

鬼が島で一度、人獣化した後、体中が引き裂かれるような激しい痛みが、桜時を襲った。あの痛みは、人獣化した者の後遺症。それ程に、人獣化というものは危険なのである。

――前線で戦えなくなるよぉっ？僕みたいにねっ――

かつての英雄・桃タローを、戦えなくしてしまう程に強大で、危険な力。

「あいつらに教えたのかよっ…！タローの奴っ…！」

桜時が険しい表情で、拳を握り締める。その危険さを身をもって味わい、桜時に使用を禁止しておきながら、門貴たちに人獣化を教えた太狼に、疑問を抱かずにはいられなかった。

「クソっ…！」

「外へ出て行って、お仲間の皆さんを止めて来ます？」

「……っ」

悔しげに唇を噛み締めていた桜時が、ギンの声に顔を上げる。

「別に構いませんよぉっ？僕は君がシルク様の邪魔にならなければ、それでいいですしっ」

冷静な微笑みを、桜時へと向けるギン。

「コレもっ、守らなくていいですしねぇっ」

「あっ」

ギンの指差す命力の結晶を見て、焦りを浮かべていた桜時が、ハッとした表情を見せる。

――俺っ、途中下車するわぁ～っ！――

――世界と輝矢のことは、適当に頼んだよぉ～――
――俺がアイツを入口から引き離す…――

皆が、必死に開いてくれた道。皆が人獣化をし、命を削ってまで戦っているのは、世界を、人を救う為。そして、それを達成する為には、桜時が命力の結晶を奪い返さねばならない。

「今…俺がすべきことはっ…」
仲間の身を案じることでも、仲間の加勢に行くことでもない。

「お前を、倒すことだ…！」
「……っ」
急にその表情を引き締める桜時に、ギンが笑みを止め、じっくりと目を見張る。

「その為に、俺もっ…」
村雨丸を構える桜時の体を、淡い白色の光が包んでいく。

「この命を懸けるっ…！！」
「……。」
強く言い放つ桜時を、まっすぐに見つめるギン。

「まだっ…楽しめそうですねっ…」
桜時の様子を見つめながら、ギンはどこか楽しげに呟いた。

中央塔・最上階。輝矢ｖｓシルク。
「突き上げる三色の光っ…」
広間の大きな窓から見える、空へと勢いよく突き上げた三色の光を見つめ、シルクがそっと口元を緩める。
「貴女の仲間が…戦っているわっ…」
シルクがゆっくりと、前方で膝をついている輝矢の方を振り向く。
「命を懸けてっ…」
「……っ」
どこか楽しげに言い放つシルクの言葉に、眉をひそめる輝矢。シルクの言葉を聞かずとも、外で起きていることはだいたい、輝矢にも予想出来ていた。
「楽しいと思わないっ…？仲間の命の光が、一つずつ消えていくのを見ながら戦えるなんてっ…」
「悪趣味ですね…」
「フフっ…」
顔をしかめ、強く切り返す輝矢を見て、シルクがさらに楽しげに笑う。
「特に、あれっ…」
「……っ？」
そう言ってシルクが指差したのは、三色の光の内の、金色の光。
「かつての仲間同士の因縁の殺し合いはっ…さぞ見応えがあるでしょうねぇ…」
「……。」
――俺に諸刃と戦わせてくれっ……――

険しい表情を見せた輝矢の脳裏に、別れ際のゴンの顔が過ぎる。

「アナタは…」

「……っ」

ゆっくりと口を開いた輝矢の方を、シルクが注目するように見る。

「アナタはそうやって…あの諸刃という者から、すべてを奪っていくのですね…」

輝矢が、突き刺すような瞳をシルクへと向ける。

「師も…友もっ…」

「……。」

どこか責めるような口調で、輝矢がシルクに言い放つ。そんな輝矢を、シルクは微笑みを止めた表情で、まっすぐに見つめる。

「ええ、そうよっ…」

「……っ」

素直に頷くシルクに、少し表情を曇らせる輝矢。

「私は諸刃からすべてを奪うっ…」

シルクが再び微笑みを浮かべ、ゆっくりと右手を上げる。

「諸刃には…私だけが残れば、それでいいっ…」

「えっ…？」

そっと囁かれたその言葉に、輝矢が思わず戸惑いの声を漏らす。

「それだけでいいのよっ…」

「……っ！」

シルクの右手から放たれる水力に、輝矢は険しい表情を見せた。

――それなりに、満たされた日々だった。

「んん～っ、名前かぁっ」

赤子の時に森に捨てられていたと聞いたけど、幸いにも、すぐに人に拾われたらしい。物心がついた時には、大きな屋敷に大勢の人間と住んでいて、俺に、特に“寂しい”という感情は芽生えなかった。

「“ダンナ”、とかどうだっ？」

「ダメ…」

「家中、お前の旦那だらけなんだぞぉっ？“ダンナ”なんて呼んだら、みんな振り返っちまうだろうがっ」

「んん～っ」

俺を拾ってくれたのは、一人の女と大勢の旦那たちだった。旦那だけで百人以上はいるその家は、子供の俺から見ても、かなり変わっている世界だった。

「じゃあっ、“諸刃”っ！」

「モロハ…？」

「そうっ、今から、お前の名は“諸刃”だっ！」

「うんっ！いい名前じゃないかっ！」

「うん…とても似合ってる…」

「……。」

でも、そのかなり変わっている世界は、とても温かかった。

「トマトおばぁ～ちゃ～んっ！遊びに来てあげたわよぉ～っ！！」
「またうっさいのが来たねぇっ」
「何よっ！！その言い方っ！！」
「アハハっ」

俺に名前が付けられて数日が経った頃、屋敷に、俺を拾ってくれた“トマト”という女の遠い子孫であるという“リンゴ”と、その友達らしい“次狼”という奴が遊びに来た。

「あらぁっ？この子、誰ぇ～っ？」
「未来の私の旦那だ」
「アンタっ、どんだけ青田買いなのよっ！！」

“リンゴ”は、声がデカく、居るだけでその場が賑やかになるような奴だった。

「こんにちはっ！」
「……っ？」
「俺っ、次狼っていいますっ！よろしくっ！」
「……っ」

“次狼”は、俺に初めて、“よろしく”と、手を差し出してくれた奴だった。

トマトや大勢の人たちに囲まれて、飽きることのない毎日を送っていた、あの頃。

「うっせぇなぁっ！！クソリンゴっ！！」

「何よっ！！バカゴンっ！！」

次狼がどこからか、“ゴン”という奴を連れてきた。

「やんのかっ！？こらぁ！！」

こいつが、リンゴ以上に声のデカい奴で、すぐに怒鳴り散らす所があって、一緒にいると耳が痛くて仕方なかった。

「おいっ！行くぞっ！諸刃っ！」

「……っ」

“ゴン”が入って、俺の居る世界は、また賑やかになる。

「……ああ…」

その賑やかさが、俺は嫌いじゃなかった。

満たされて、いたんだと思う。

あの頃の俺には、特別欲しいものも、特別行きたい場所もなかっ

た。

ずっとあの場所で、あいつらと一緒に居られれば、他には何もいらなかった。

そう、満たされていたんだ、と思う。

「次狼ぉぉおっ！！」

すべてが壊れたのは、ほんの一瞬だった。

「あっ…」

握る刃が、手が、視界が、血の赤に染まった。ゴンの叫び声が、リンゴの涙が、トマトの悲しい顔が、一気に頭の中を駆け巡って、そして最後に、次狼の顔を見た。

「……っ」

俺を見て、笑った気がした。

もう戻れない闇の中に堕ちた。二度と光の差さない場所に、足を踏み入れた。

「貴方は私のものよ…諸刃…」

俺のすべてを、奪った女。

「はい…シルク様…」

初めて抱き締めたその時は、ただ、殺してやりたい程に、憎かった…――――

第９４章　宿命の友　★２

「草薙っ…」
諸刃の構えた草薙に、空高くから黒色の雷が落ちると、雷は刀身を伝い、剣全体に帯びるように充電された。雷を纏った草薙を、諸刃が勢いよく振り上げる。

「“黒雷”っ…！」
草薙の剣先から、勢いよく放たれる黒い雷。

「……。」
その黒雷の向かう先に立つゴンが、慌てた様子も見せず、その瞳を鋭くする。

「……っ」
「何っ…？」
ゴンの姿がその場から消え、向かっていた黒雷は空を斬る。その様子に、少し驚いたように目を開く諸刃。

「ここだっ」
「……っ」
声の聞こえてきた右方を諸刃が振り向くと、そこには落ち着いた表情を見せたゴンが立っていた。黒雷が来たと同時に、一瞬で移動したようである。

「見えなかった…」
諸刃が少し眉をひそめ、ポツリと呟く。

「……“黒雷”っ」
もう一度草薙を振るい、諸刃が空を斬った黒雷を、再度、ゴンの方へと向かわせる。

「……っ」
向かってくる黒雷から、素早い動きで逃げるゴン。雷の速度も相当のものであるはずなのに、逃げるゴンとの距離は縮まらず、まったく追いつく気配がない。

「黒雷では…捉えきれないかっ…」
そのゴンの動きに、曇る諸刃の表情。

「天狼丸っ…」
「……っ」
黒雷から逃げながら、空中で天狼丸を構えるゴンに、諸刃が眉をひそめる。

「“五臓・六腑”っ…！！」
ゴンが振り下ろした天狼丸から、六つの真っ赤な炎の玉が放たれる。

「クっ…」
向かってくる炎の玉に顔をしかめながら、諸刃が草薙を、自分の体の前へと突き出す。

「“八咫”…」
草薙の剣が大きな光を放ち、その形を巨大な盾へと変える。鏡のように透き通った盾を、向かってくる炎の玉へと突き出す諸刃。

――バァァァーンっ！

八咫の鏡に、ゴンの炎が直撃する。

「クっ…！」

鋭い表情を見せ、諸刃が向かってきた炎を、遠方へと弾き返す。

「……っ」

炎を弾き返し、少し肩を落とした途端、諸刃の表情が険しくなった。諸刃の視線の先にある八咫は、先程の炎を受け、正面の部分が溶かされ、少し凹んでいた。

「人の状態の時は…九火も弾き返したというのに…」

そっと呟き、諸刃が顔を上げて、ゴンの方を見る。

「速さも力も…桁違いに上がっている…」

「……。」

諸刃の見つめる先には、人獣化をし、最早、人と呼ぶことも困難な姿となったゴン。獣人の“獣”の力を最大限に引き出したその姿は、力も速度も、人の領域を遥かに超えたものとなっている。

「ならっ…動けなくするまでだ…」

その表情を、さらに鋭くする諸刃。

「“八坂”…」

諸刃がそう呟いた瞬間、八咫が強い光を放ち、八つに分かれ、小さな勾玉へと姿を変えて、ゴンの八方へと散っていく。

「……っ」

周囲を取り囲む勾玉に、眉をひそめるゴン。

「焦げ尽きろっ…」
諸刃が素早く、右手を振り上げる。

「“雷帝”…！」

――バリィィィィーンっ！

天から落ちた激しい雷が、八つの勾玉を媒体とし、その勢力を増して、一気に中央に立つゴンへと襲いかかった。弾け飛ぶ閃光の中に、ゴンの姿が消える。

「これでっ…」
攻撃を喰らわせたいうのに、曇った表情を見せたままの諸刃が、まっすぐに前方の爆煙を見つめる。

「……っ」
「何っ…？」
爆煙の中に見える、確かに立っている人影に、諸刃の顔が歪む。

「なっ…」
「……。」
爆煙の収まったその場所には、雷を喰らう前と何ら変化のない、落ち着いた表情を見せたゴンが立っていた。その場に立ち尽くしたゴンは、静かに諸刃を見つめている。

「馬鹿なっ…あれ程の雷撃を喰らってっ…無傷でいられるはずっ…」
その表情に、少し動揺を見せる諸刃。

「……っ」
ゴンを見つめていた諸刃が、何かに気づいたような表情を見せる。
「あれはっ…」
「……。」
立ち尽くしたゴンの腰の辺りから生えているのは、金色の獣毛に覆われた、九本の大きな尾であった。その尾の周りに、かすかに閃く、小さな電流のようなものが見える。
「尾を…避雷針に使ったということか…」
そう呟き、眉をひそめる諸刃。
「人獣化の力…まさか、これ程までとはな…」
「天狼丸…」
諸刃の攻撃を防ぎ切ったゴンが、右手に持った天狼丸を、ゆっくりと構える。
「終わりだっ、諸刃っ」
「……っ」
強く言い放つゴンに、諸刃はそっと目を細めた。
「凄いっ…」
少し離れた場所から、ゴンと諸刃の戦いを見つめ続けるリンゴ。
「あの諸刃を相手に、圧倒的だわっ…」
諸刃の力は、人間の領域を遥かに超えた、異質とさえ呼べる程のものであった。だがゴンは、人獣化し、人間の領域を出ることで、その諸刃の力をも超えたのである。

「あれが…ゴンの人獣化っ…」
特異な姿を見せるゴンを、リンゴはまっすぐに見つめる。
「これならっ、勝てるかもっ…」
見え始める勝機に、リンゴが思わず呟く。

「勝てるっ…？」
だが、自分自身の言葉に疑問を抱き、リンゴはもう一度、その言葉を繰り返した。

「勝てる…」

――諸刃っ！――
――ゴン…――

仲良く笑い合っていた頃の、ゴンと諸刃の姿が思い出された。

「私は…」
リンゴが、そっと俯き、視線を地面へと落とす。

「私は…この戦いに何を望んでるのかしらっ…」
誰にともなく問いかけながら、リンゴが再び顔を上げる。

「ねぇっ…次狼っ…」

「草薙…」
「もう止せ、諸刃っ」

ゴンの周囲に散らばっていた八坂を手元へ戻し、元の草薙の剣へと形を変える諸刃に、ゴンがすかさず声を掛ける。

「俺はお前を殺したくないっ」

「……っ」

まっすぐな瞳で、はっきりと言い放つゴンに、諸刃の表情が歪む。

「殺したく…ない…？」

諸刃がゆっくりとした口調で、ゴンの放った言葉を繰り返す。

「何だ…？それは…」

「……っ」

呆れるように問いかけた諸刃の瞳が、突然、冷たいものへと変わる。鋭く突き刺さる諸刃の視線に、ゴンは少し、怯むように肩を上げた。

「お前がその力を…命を削ってまでその力を得たのは…俺を殺す為ではないのか…？」

「……。」

諸刃の問いかけに、真剣な表情を見せるゴン。

――諸刃を…諸刃を頼みます……――

――どうか…悔いの残らぬように……――

次狼の、輝矢の言葉が、ゴンの頭の中を駆け巡った。

「俺がこの力を手に入れたのは…お前を殺す為じゃないっ…」

「何っ…？」

ゴンの言葉に、眉をひそめる諸刃。

「俺がこの力を手に入れたのは…」
獣化した自分の手を見つめた後、ゴンがゆっくりと顔を上げる。
「お前に俺を殺させない為だっ！」
「……っ」
強く言い放つゴンのその言葉に、諸刃が多少、驚いたような表情を見せる。
「“殺させない為”、だと…？」
「ああ、そうだっ」
静かに聞き返す諸刃に、ゴンが大きく頷く。
「次狼とトマト先生の墓の前でっ、俺は誓ってきた」
ゴンが天狼丸を握る手に力を込め、諸刃へ向け、堂々と胸を張る。
「お前にもう、誰も殺させはしないとっ…！！」
「……。」
決意のこもった表情で言い放つゴンに対し、諸刃はどこか煩わしいものを見ているような、そんな様子で顔をしかめる。だが、諸刃がこれ程までに表情を崩したのは、これまでの戦いで初めてのことであった。
「甘いなっ…」
「……っ？」
ポツリと呟いた諸刃の声に、ゴンが少し眉をひそめる。
「俺は殺せるぞ…お前を…」
しかめていた表情を元の無表情に戻し、まっすぐにゴンを見つめ

る諸刃。

「何の、躊躇いもなく…」

「……っ」

はっきりと言い放つ諸刃に、今度はゴンの表情が歪む。

「非情になりきれぬお前では…俺を殺すどころか、勝つことすら到底、出来ない…」

「イキがってんじゃねぇーっ、今の俺とお前の実力差がっ、わかんねぇーお前じゃねぇーだろうがっ」

「……。」

「うっ…」

顔を上げた諸刃の、射殺すようなその視線に、ゴンが思わず言葉を呑み込んでしまう。

「確かに…今の俺では、お前に勝つことは出来ない…」

「えっ…？」

そっと俯いた後、素直に認めるような発言をする諸刃に、戸惑った表情を見せるゴン。

「今の俺の、この姿ではなっ…」

「何っ…？」

諸刃のその意味深な言葉に、ゴンが眉をひそめる。

「ハっ！鬼人化でもする気かよっ！？」

「いやっ…」

挑戦的に言い放つゴンに、諸刃はすぐさま首を横に振る。

「俺がするのは…“鬼人化”じゃない…」

鋭い瞳を見せた諸刃の、首元の紋様が強く光り、諸刃の体全体を、怪しげな紫色の光が包み込んでいく。

「俺がするのは…」

諸刃が右手を掲げると共に、諸刃を包んでいた紫色の光が、天へと突き上げる。

「“人獣化”だっ」

「何っ…！？」

――バァァァーンっ！

『うわあぁぁっ！！』

戦いを見守っていた金汰やイチゴ、中央塔部隊の者たちが、中央塔の後方から、勢いよく空へと突き上げる紫色の光に、皆、驚きの表情を見せ、一斉に声をあげた。

「あれはっ…！」

「“人獣化”の…光っ…」

大きく目を見開くイチゴの横で、太狼がそっとその表情を曇らせる。

「うっ…うぅ…」
シルクの攻撃を受け、広間の床へと倒れ込んでいる輝矢が、窓の向こうから差し込むようにして入ってくる強い光に気づき、ゆっくりと顔を上げる。
「光が…もう一つっ…？」
窓から見える、空へと突き上げる紫色の光を見て、輝矢は眉をひそめた。

「そうっ…」
倒れている輝矢の前方に、ゆったりと立ち尽くしたシルクも、その光へと視線を向ける。
「そうすることを…選んだの…」
シルクの赤い瞳が、まっすぐにその光を捉える。

「諸刃っ…」

「あっ…ああ…」
突き上げた紫色の光の中に立つ諸刃を見つめ、ゴンが大きく目を見開き、信じられないものでも見ているかのような表情を見せる。

「……。」

逆立った髪、眼球の大きくなった瞳、鋭く尖った牙、爪。そして、

手足を包む薄い水色の鱗。首元まで深く覆う鱗に隠れてしまったのか、諸刃の首元に刻まれていたはずの黒い紋様は、すっかり消えてなくなっていた。だが、今のゴンに、そこまで気づく程の余裕はなかった。

「ウロコっ…」

それは、鬼とはまったく別の生物。

「……大蛇(オロチ)っ…」

それは、まるで神話上の生物。

「何を今更、驚いた顔をしている…？」

困惑し切った表情を見せるゴンに、姿を変えた諸刃が静かに問いかける。

「お前なら、ずっと前から知っていたことだろう…？俺が“蛇人(じゃじん)”だということは…」

「……っ」

諸刃の言葉に、ゴンが顔をしかめる。

――遊びに行こうぜっ！諸刃っ！――

確かに、諸刃はゴンや次狼、リンゴと同じように、獣人であった。“蛇人”と呼ばれる獣人。かつて共に在った頃、蛇化した姿も何度か見たことがあった。今更、驚くことではない。驚くことではないのだが、ゴンには驚かねばならぬ理由があった。

「なんで…」

ゴンが、戸惑いの声を発する。
「なんでっ…」

――それは、輝矢たちが海中へ行っている時、ゴンが門貴や由雉と共に、太狼から“人獣化”を習っている時であった。

『はぁっ…はぁっ…はぁっ…』
「うぅ～んっ、これで一通り全員、人獣化出来るようになったねぇ～っ」
修行で疲れ果てたゴンたちに、太狼は相変わらずの軽い笑顔を向けた。

「じゃっ、修行はここまでってことでぇ～っ」
『ええぇぇっ!?』
あっさりと言い切る太狼に、疲れ果てていたはずの三人が、勢いよく身を乗り出す。
「ここまでって、これからでしょ～っ?普通ぅ～っ」
「そうですよっ!俺たち、まだ“人獣化”出来たってだけの話ですよっ!?太狼さんっ!」
「だってぇ～っ」
責めるように訴えるゴンと由雉に、太狼が少し困ったような顔を見せる。
「もう正直、面倒臭いしぃ～っ」

『だあああああああっ！！』
あまりに正直に答える太狼に、三人が思わず、地面へと倒れ込んでしまう。

「面倒って、あんたねぇっ…！」
「それにぃ、あんまり修行したら、戦う前に死んじゃうよぉっ？」
『……っ』
軽い笑みを浮かべたままのわりに、衝撃的な発言をする太狼に、さらに強く訴えようとしていた三人が思わず口ごもり、その表情を引きつる。
「死ぬっ…」
「一応言っとくけどっ、脅しじゃないからねぇ～」
険しい表情を見せる三人に、太狼がさらに明るく言葉を掛ける。

「だぁ～い丈夫っ、人獣化出来れば、それなりに戦えるよぉ～っ」
「すんごい適当っ」
何の根拠もなく話す太狼に、呆れた表情を見せる由雉。

「けどっ、敵さんかて、人獣化出来たらっ…」
「鬼人の最終形態は“鬼化”だよぉっ」
「へっ？」
懸念するように呟いた門貴に、太狼がはっきりとした口調で答える。

「鬼人に、“人獣化”は出来ないっ。勿論っ、鬼人化人間にもねぇっ」
「ホンマかっ！？」
「ホントホントぉ～っ」
「すんごい嘘臭いなぁっ…」
笑顔で何度も頷く太狼に、由雉が少し不安げな表情を見せる。

「なんでっ…鬼人は“人獣化”出来ないんですっ？」
「鬼人が“人”じゃないからさっ」
「……っ」
笑顔のまま、鋭い瞳を見せて答える太狼に、ゴンが少し驚いたような表情を見せる。

「“人獣化”はあくまで、人の血の通う獣人の技っ…」
太狼がその瞳を、そっと細める。

「覚えておくといいっ…」
太狼がまっすぐに、三人を見つめる。

「例え“鬼人化人間”であれっ…一度、“鬼”になると、人は“人”でなくなるんだっ…」
『……っ』

そっと囁かれた太狼の言葉に、三人は険しい表情を見せた…――

第９４章　宿命の友　★３

そう、太狼から聞いたあの時の言葉が、今、ゴンを大きく戸惑わせる。

「鬼人化人間は…“人獣化”出来ないはずじゃっ…」

「……っ」

頭の中に巡らせている言葉を、困惑し過ぎて思わず口に出してしまうゴン。小さく届いたゴンの言葉に、諸刃は少し表情を動かした。

「よく知っているな…桃タローにでも聞いたのか…？」

「えっ…？」

少し感心するように言い放つ諸刃に、ゴンは眉をひそめる。

「そうだ…確かに鬼人化人間となった者は、“獣化”までは出来ても、“人獣化”をすることは出来ない…」

諸刃がすらすらと、ゴンの知っている事実を述べる。

「なら何故…俺が人獣化出来るのか…」

「……っ」

ゴンの中の疑問を口にする諸刃に、ゴンが少し顔をしかめる。

「答えは簡単…俺が“鬼人化人間ではない”からだ…」

「えっ…！？」

諸刃の口にした、その確かに簡単な答えに、ゴンは大きく衝撃を走らせた。

「鬼人化人間じゃっ…ないっ…？」

「ああ…」
動揺を隠しきれない表情で聞き返したゴンに、諸刃は大きく頷く。
「そんなっ…」
諸刃の人獣化姿を見た時と同じように、信じられないといった表情を見せるゴン。
――次狼ぉぉぉぉぉっ！！――
シルクの手に堕ち、次狼を殺したあの日にはもう、すでに諸刃は鬼人化させられていたのだと、そう思っていた。実際に鬼人化した姿を見たことは1度もなかったが、鬼人化していなければ、シルクのもとになどいるはずがないと、そう思っていたからだ。
「じゃあっ…」
考えを巡らせ、俯いていたゴンが、勢いよく顔を上げる。
「じゃあっ…！牢戸知玖はっ、お前を鬼人化しなかったって言うのかよっ…！？」
「ああ、そうだ…」
強く問いかけるゴンに、諸刃は至って冷静に答える。
「んなバカなっ…！」
――クロト…？クロトっ…？――
――鬼人化するだけでっ、永遠に死ななくて済むのよっ！？――
――元の姿に戻れても…この罪は消えない……――
今まで戦ってきたシルク側の者たちは、そのほとんどが鬼人化さ

れた人間であった。シルクが人間を嫌っていることは、ゴンもよく知っている。そんなシルクが、1番近くに置いている諸刃を、人間のままにしておくはずがない。

「んなことっ、あるはずがねぇっ！！」

ゴンが、伝えられた事実を振り払うように、必死に首を横に振る。

「じゃあなんでっ…！なんでお前はっ！鬼人化もしてねぇーのにっ、シルクの味方してんだよっ！？」

「……っ」

強く問いかけるゴンから、逃げるように目を逸らす諸刃。

「それは…」

――諸刃っ……――

「それはっ…」

思い出される姿に、諸刃がそっと目を細める。

「諸刃っ！！」

「……っ」

現実に引き戻すように、激しく聞こえてくる自分の名に、諸刃がその表情を厳しくし、再び顔を上げる。

「今から死に逝くお前には、話す必要のないことだっ…」

「んだとっ…！？」

「くだらない会話は、もういい…」

そう切り捨てるように言い放ち、諸刃が再び、右手に持っている草薙を構える。

「俺はお前を…殺すっ…」
ゴンへとまっすぐに向けられる、殺意。

「構えろっ、ゴン」
「……っ」
強制するように放たれる言葉に、顔をしかめながらも、ゴンが天狼丸を握る手に力を込める。

「天狼丸っ」
素早く、刀を構えるゴン。

「“五臓・六腑”っ！！」
ゴンが天狼丸を振り切り、先程と同じように、六つの炎の玉を諸刃へと向ける。

「……。」
先程は草薙を八咫の盾へと変え、炎の玉を防いだ諸刃であったが、今度は草薙の姿を変える素振りは見せず、そのまま草薙を構える。

「“黒雷”…」
空から雷が落ち、草薙を伝う。

「……っ」
「突っ込む気かっ…！？」
雷を纏った草薙を構え、向かってくる炎の玉へと駆け込んでいく諸刃を見て、ゴンが驚きの表情を見せる。

「草薙っ…」
諸刃が炎の玉へ向け、勢いよく草薙を振り切る。

――パァァァァンっ！

「なっ…！？」

振り下ろされた草薙により、まるで柔らかいもののように、あっさりと真っ二つに斬り裂かれる炎を見て、ゴンが大きく目を見開く。

「炎をっ…斬るっ…！？」

「……っ」

「うっ…！」

六つすべての炎の玉を斬り捨てた諸刃が、草薙を構えたまま、その速度を落とすことなく、勢いよくゴンの方へと駆け込んでくる。

「草薙っ…！」

「クッソっ…！天狼丸っ！！」

草薙を振り下ろす諸刃に対し、焦りを見せながら、少し慌てた様子で天狼丸を突き出すゴン。

――――……っ！

ゴンの天狼丸と諸刃の草薙が、真正面からぶつかり合う。

「クっ…！」

ぶつかり合った草薙の刀身から、黒雷がゴンの腕へと伝う。

「ううぅっ…！！」

「ゴンっ…！！」

走る痛みに、顔をしかめるゴン。見つめているリンゴも思わず、身を乗り出す。

「……っ」
雷撃が走り、怯んだゴンのその隙を見逃すことなく、諸刃はすぐさま草薙を引き、間を置くことなく、もう一度、ゴンへ向けて振り切った。

「うあああああああっ！！」
勢いよく右肩を斬り裂かれたゴンが、後方へと吹き飛ばされる。

「うっ…うぅっ…」
斬り裂かれたオトポリの制服の下から覗く、狐色の獣毛が、血の赤に滲む。ゴンはすぐに起き上がったが、斬られた右肩を押さえ、その表情に苦しみを浮かべた。

「クソっ…！」
「形勢逆転…といったところか…」
顔を歪めるゴンに、諸刃は冷静に言い放つ。

「……っ」
余裕すら感じる様子を見せる諸刃を見ながら、ゆっくりと立ち上がるゴン。
「生半可な炎じゃ通じねぇっ…」
ゴンが、自分自身に言い放つように呟く。
「人獣化状態で打ったことねぇーけどっ…もう九火を使うしかっ…」
そう言って少し唇を噛み、ゴンが意を決した表情で天狼丸を構える。

「……。」
そんなゴンをまっすぐに見つめ、少し眉をひそめる諸刃。

「あの目…」
ゴンを見ながら、諸刃がゴンにも届かぬ小さな声を漏らす。
――まだまだっ！もう一勝負だっ！！――
諦めることを知らないかのような、強い瞳。
「本当に…変わらないな…」
そう呟き、一瞬目を細めると、諸刃は再び鋭い表情へと戻り、草薙を構えた。

「“一髪・二目・三耳・四首っ…」
ゴンが天狼丸を構え、一本ずつ、炎の刃を纏わせていく。
「五臓・六腑・七臍・八脚…」
天狼丸が、左右に八本の刃を纏う。

「九尾”っ…！」
八本目の刃が作られると同時に、激しい炎に包まれる天狼丸。その炎に呼応するかのように、ゴンの体を、九つの尾を包む金色の光も、その強さを増していく。

「喰らいやがれっ…！」
ゴンが瞳を鋭くし、狙いを定める。

「“九火煉刃”っ…！！」

――バァァァーンっ！

天狼丸から、九火が勢いよく放たれる。

「……。」

九火の向かうその先に、静かに立ち尽くす諸刃。炎の速度は速く、もう避けることも出来ない。草薙を盾へと変えている時間もない。

「燃え尽きろっ…！！」

「……草薙っ…」

ゴンが叫ぶ中、諸刃が草薙の剣先を、空へと向ける。

「“雷神…降来”っ…！」

――バリィィーンっ！

空から降り注ぐ何本もの光輝く雷が、ゴンの放った九火へと降り落ち、ゴンの炎を焦がし尽くす。

「なっ…！」

そのあまりの雷の威力に、大きく目を見開いたまま、表情を凍りつかせるゴン。

「そっ…そんなっ…九火がっ…」

「……っ」

「うっ…！」

唖然としているゴンの元へ、間髪入れずに飛び込んでくる諸刃。

「天狼丸っ…！」

諸刃の振り下ろす草薙へ、ゴンが慌てて天狼丸を突き出す。

「……っ」

「んっ？」

天狼丸と草薙がぶつかり合っている中、諸刃が静かに、左手をゴンへと向ける。

「キシャァァっ！！」

「ヘビっ…！？」

ゴンへと向けられた諸刃の左手が、ヘビの頭へと姿を変える。驚くゴンに、ヘビは大きく口を開き、長い舌を伸ばして、その鋭い牙を、ゴンの首元へと向けた。

「ううぅあああっ！！」

ヘビに首元を噛まれ、ゴンが痛々しい声をあげる。

「ううぅっ…！！」

痛みを堪えながら、何とか踏み止まるゴン。

「気をつけろよ…」

「何っ…？」

天狼丸と草薙を交わらせ合ったまま、苦しげな表情を見せているゴンへと、諸刃がそっと話しかける。しかめた表情で顔を上げ、諸刃へと睨みつけるような視線を送るゴン。

「これは毒ヘビだ…」

「毒っ…！？」
諸刃がヘビを手元に戻し、元の左手へと変えながら、はっきりと呟く。その言葉に、ゴンが衝撃を走らせ、空いている左手を、ヘビに噛まれた首元へと向ける。

「ああ…直にお前は、体のすべての自由を奪われ…そして死ぬ…」
「……っ！」
冷たく言い放つ諸刃に、隠しきれない動揺を見せるゴン。

「だが…その前にお前は死ぬだろう…」
「えっ…？」
“白雷”…」
「うっ…！」
諸刃がそっと呟くと、重なり合っている天狼丸と草薙へ、白い雷が降り落ちた。

「うあああああああっ！！」
天狼丸から白雷が全身へと伝わり、激しい叫び声をあげたゴンが、その場にゆっくりと崩れ落ちた。

「うっ…あぁ…」
地面に背をつけるようにして、倒れ込むゴン。体全体を雷に焦がされ、声にはならない声を漏らす。

「ヘビはお前に…毒と共に特殊な金属物質を、体中の血液へと流し込んだ…」
倒れたゴンを高々と見下ろしながら、諸刃が静かに言い放つ。
「より、雷撃を喰らいやすいようにな…」
「……っ」

降るように聞こえてくる諸刃の声に、かすかに眉をひそめるゴン。先程よりも電撃が走った時の衝撃が大きかったのは、それの為だろう。

「クっ…ソ…！」

ゴンが歯を食いしばりながら、必死に天狼丸を握る手に力を込める。

「毒が回って死ぬ前に…俺が楽に死なせてやる…」

「クっ…！」

倒れたままのゴンへと、草薙を振り上げる諸刃に、ゴンの表情が歪む。

「ゴンっ…！！」

「……っ」

背後から聞こえてくる声に、諸刃がゆっくりと振り返る。

「ゴンっ！！」

戦いを見守っていたリンゴが、もう見ているだけではいられなくなったのか、ゴンと諸刃のもとへと駆け込んできていた。

「……っ」

「……っ！」

リンゴを見ながら、左手を振り上げる諸刃に、ゴンが大きく目を見開く。

「リンゴっ！！来るなっ！！」

「“遠雷”…」

ゴンが必死に叫ぶ中、諸刃が冷たく雷を呼ぶ。

――バリィィィンっ！

「きゃああっ！！」

「リンゴっ…！！」

駆け込んできていたリンゴのすぐ横に、鋭く雷が落ち、リンゴがバランスを崩して、その場に倒れ込む。ゴンは体を捻り、うつ伏せ状態になって、必死に身を乗り出した。

「うっ…ううぅ…」

倒れ込んだリンゴが、ゆっくりと起き上がる。

「諸刃っ！！てめぇっ…！！」

「来るな…」

諸刃がゴンの怒鳴りを無視し、リンゴへと強く言い放つ。

「邪魔をすれば…お前も殺す…」

「……っ」

冷たい表情を見せる諸刃に、顔をしかめるリンゴ。

「何よ…」

深く俯き、少し震えた声を漏らしながら、リンゴがゆっくりとその場に立ち上がる。

「何よっ…それはっ…」

リンゴが勢いよく、顔を上げる。

「殺したいならっ、殺せばいいでしょっ…！？」
「……。」
強く叫ぶリンゴに、諸刃が少し目を細める。
「ゴンは殺せるんでしょっ！？」
「リンゴっ…！止せっ…！！」
「だったら、私も殺してみなさいよっ！！」
止めるゴンの言葉も聞かず、リンゴは諸刃へ叫び続ける。
「リンゴっ…！！」
「あんたに生かされるくらいならっ、あんたに殺された方がずっとマシよっ！！」
「……。」
諸刃への恐怖を見せながらも、曇りのない瞳で、堂々と言い放つリンゴのその姿を見つめ、諸刃はどこか眩しいものでも見るかのように、そっと目を細めた。
「相変わらずだな…お前も…」
「えっ…？」
懐かしむように、そっと微笑んだ諸刃に、リンゴが自分の目を疑うかのような、驚きの表情を見せる。
「諸刃っ…あなた…」
「……。」
「……っ」
リンゴが何かを話しかけるその前に、草薙の剣先が、リンゴへと向けられる。突き付けられる剣先に、リンゴは言おうとしていた言葉を止め、そっと目を細めた。

「望み通り…殺してやろう…」
「……。」
冷たく言い放つ諸刃を、リンゴが悲しげな瞳で、まっすぐに見つめる。

「やめろっ！諸刃っ！！」
痛む体を必死に起き上がらせ、諸刃へと叫ぶゴン。
「お前の相手は俺だっ！！そいつはっ…！！」
「私を殺すんならっ」
「……っ」
必死に訴えていたゴンが、リンゴの放つ声に振り向く。
「最後に聞かせてっ…」
リンゴが恐れることなく、正面から諸刃と向き合う。

「あなたは鬼人化していない、鬼じゃない…“人”なんでしょう…？」
「……ああ…」
リンゴからの問いかけに、諸刃が少し迷うように間を置いた後、ゆっくりと頷く。

「ならどうして…同じ“人”である私たちを、滅ぼそうとするのっ…？」
諸刃をまっすぐに見据え、リンゴが問いかけを続ける。

「次狼やトマトおばあちゃんを殺してまで…世界中の人間を敵に回

してまで…」
「……っ」
リンゴの言葉に、諸刃の表情がかすかに動く。
「あなたが牢戸知玖の為に戦うのは、何故っ…？」
「……。」
それは、先程、ゴンが諸刃へ投げかけたものと同じ問い。真剣な表情を見せた諸刃が、少し俯き、そっと目を伏せる。
――諸刃っ……――
思い出される、冷たい声。
「それは…」
諸刃が、ゆっくりと口を開く。
「それはっ…」

第９４章　宿命の友　★４

――どうしようもなく、憎かった。

何よりも、誰よりも。

――次狼ぉぉぉぉぉっ！！――

俺に、大切なものを奪わせた魔女。俺から、居場所を奪った魔女。憎くて、憎くて、この忌々しい洗脳が解けたなら、すぐにでも殺してやろうと、そう思った。

「そうね」

ある日、魔女は、何も言っていないのに、俺の言葉に頷いた。

「貴方がそうしたいと思ったら、迷わずそうしなさい…諸刃…」

俺の考えていることなど、すべて見透かしているような、赤色の瞳。

「でないと…いつか、私が貴方を殺すわよ…」

「……っ」

何のつもりで言ったのかなんて、わからない。だから、絶対殺されてやるものかと、さらに憎しみを募らせた。

「グガアアアアっ！！」

今日も闇では、鬼が生まれた。

「ふぅっ」

「今日はこの辺りに…？」

「ええっ」

次狼を殺してから、魔女と俺は、姿を隠すように、御伽界の片隅でひっそりと暮らしていた。どうやら魔女は力が完璧に戻っていないようで、その力の復活を待ちながら、残っているわずかの力で、毎日少しずつ、鬼を生み出していた。

「封印なんて煩わしいものねっ…以前はほんの一瞬で出来ていたことを、一年がかりっ…」

「……。」

骸鬼と呼ばれる異形の生物を、一匹生み出すだけで相当に疲れるらしい魔女。力を使い、弱り切った魔女は、すぐにでも殺せそうな程、脆いものに見えた。

「試してみるっ…？」

「……っ」

またも見透かされる、心。

「まだいい…」

「フフっ…後何度、その言葉を聞けるのかしらっ…」

殺すことを促すように問いかけるのは、何か裏があるからで、殺そうとすれば、魔女の罠に嵌るのではないかと警戒心を募らせては、俺は魔女を殺せずにいた。

「殺すのを勿体ぶるなんて…おかしな子ねっ…」
「……。」
そして魔女は、俺の前で、よく笑うようになっていた。

そんな日々が、いつの間にか数年続き、俺の洗脳は解け始めていたが、魔女は、俺に新たに洗脳をかける素振りは、まったくと言っていいほど見せなかった。だから俺も、洗脳の解けている素振りは、見せなかった。

「いやぁっ!!やめてっ!やめてぇっ!!」
「“鬼化帰化”…」
「いやあああぁっ…!!グガアアアアっ!!」
魔女の力は少しずつ回復して、人間を鬼へと変えることも出来るようになっていた。

「これで貴女も…私たち、鬼の一員よ…」
「ありがとうございます…シルク様っ…」
「……っ」
鬼人化した奴らに刻まれる、俺の首に刻まれたものと同じ、黒い紋様。

「どうしたの…?諸刃…」
魔女がいつものように、俺の名を呼ぶ。

「相変わらず…鬼人化を目の前で見るのは、嫌いっ…？」
「俺の…この首の紋様…」
「……っ」
首元を押さえる俺を見て、魔女はかすかに眉をひそめる。
「鬼人化人間の奴らと同じだ…」
俺はまっすぐに、魔女を見た。

「俺は…いつ、鬼になるんだ…？」
「どうして…そんなことを聞くの…？」
俺の問いかけに、魔女は問いかけを返した。

「鬼になるのが…怖い…？」
「いや…」
魔女に答えた通り、俺に恐怖はなかった。鬼になること、人でなくなることに、何の恐れもなかった。むしろ早く鬼になりたかった。
――次狼ぉぉぉぉぉぉぉっっ！！――

鬼になり、人の心を無くせば、もう罪の意識に苛まれずに済む、と、そう思っていた。

「別に…」
「そう…」
そっと首を横に振った俺に、魔女はあまり興味なさそうに頷く。
「貴方は…鬼にはならないわ…」
「えっ…？」
その思いがけない言葉に、俺は思わず、驚きの表情を見せてしま

った。

「ならないって…」
「貴方のこの紋様…」
「……っ」
魔女の冷たい手が、俺の首元の紋様に触れる。

「この紋様は…他の鬼人化人間に施したものとは、少し違うの…」
「違う…？」
「力を増幅するのは同じだけど…この紋様は、自動的に貴方を鬼へと変えることはない…」
「……。」
その言葉に安心したのか、残念がったのか、俺は複雑な心境になった。

「ただし…」
「……っ？」
そっと言葉を付け加える魔女に、俺は表情を曇らせる。

「貴方が“鬼”になりたいと、そう思った時…この紋様は、貴方を鬼へと変える…」
「俺が…？」
「そう…」
戸惑いながら聞き返した俺に、微笑んで頷く魔女。

「そして逆に…貴方が人獣化し、“人”であることを選んだ時…この紋様は消える…」
「えっ…？」
その言葉は、さらに俺を驚かせた。洗脳が解け、もしこの紋様ま

で消えれば、魔女が俺を縛るものは何も無くなる。俺は魔女から、解放されてしまう。

「貴方が“人”としての心の苦しみから逃れたいと思った時…“鬼”になればいい…」

紋様から、魔女の手が離れていく。

「貴方が“鬼”である私の存在から逃れたいと思った時…“人”になればいい…」

「……。」

俺は険しい表情で、魔女を見つめる。

「何故っ…」

「……っ？」

「何故、俺にだけ…そんな選択肢を与えるっ…？」

他の者たちの道は、平気で閉ざすのに。人で在りたいと泣き叫んだ者を、平気で鬼に変えたくせに。

「さぁっ…？貴方が特別だからかしら…？フフっ…」

感情のない瞳で、魔女は笑う。

「本当は…興味があるのかも知れない…」

「えっ…？」

「……っ」

魔女が、まっすぐに俺を見る。

「“人”でも“鬼”でもなく在り続ける貴方を…見たいと思ってしまっているのかも知れないわねっ…」

「……っ」

冷たい瞳。でも、目が離せない。

狡い魔女。俺に自由を与えた振りをして、さらに強い鎖で俺を縛り付ける。

初めて、憎しみ以外の感情を抱いたその時、ただ、ひどく戸惑った。

人でも鬼でもなく、在り続ける俺を見たいと、そう言った魔女の望みに応えるように、俺はその後、人になる道も鬼になる道も選ばなかった。心を無くす勇気も、魔女の呪縛から解放される勇気も、俺には無かった。いや、ただ、今のこの時間が続くことを、望んでいただけなのかも知れない。

そのまま数年の時が流れ、やがて世界は動き出し、俺は、再会の時を迎える。

「諸刃っ…」

「ゴン…」

かつての友と。

「シルク…」
「トマト…」

そして魔女も、宿命の相手との再会を迎えていた。

「過去の感情なんて…今を生きる私たちには、必要のないものなのよ…」

再会を終え、元の俺たちの場所へと戻って来た時、魔女は、いつになく饒舌に語り始めた。

「過去の繋がりなんて必要ない…断ち切らなければならないわっ…」

どこか必死に、言葉を紡ぐ魔女。

「断ち切らなければ…その繋がりに、いつか殺されるっ…」

その瞳に見え隠れする、憎しみという名の感情。

「わかったわねっ…？諸刃…」

その言葉は、俺に放たれたものではなくて。

「はい…シルク様…」

自分自身に言い聞かせる、暗示。

嘘つきな魔女。

過去の感情など必要ないと言いながら、過去の憎しみに囚われ、今、世界を壊そうとしている。

嘘つきな魔女。

断ち切ると言った繋がりに、今も縛られ、苦しんでいる。

「死んだ…のよね…」

あれ程、憎んだ女が死んだというのに、魔女は、まるで魂が抜け落ちたような表情を見せた。

「世界で一番煩わしい女…一番憎い女…」

ほら、やっぱり断ち切れていなかった。

「もう…この世界にいないのよね…」

なんて、哀しそうな顔。誰よりも過去に囚われているのは、魔女自身だというのに。

「諸刃…」

滑稽だ。

「私を…抱き締めなさい…」

今、世界を壊そうとしている貴女は、こんなにも脆い。

「はい…シルク様…」

本当に、滑稽だ。

狡い魔女。
嘘つきな魔女。
哀しい魔女。

俺の、魔女。

初めて、抱いた感情の名を知ったその時。それは、ただ、“愛しい”、だった…――

目を閉じ、左手を胸に当てて、過去を思い返していた諸刃が、ゆ

っくりと目を開く。

「俺は…」

開いた瞳で顔を上げ、まっすぐにリンゴを見据える諸刃。

「俺は…牢戸知玖を愛している…」

「……っ！」

「……っ」

諸刃から告げられる言葉に、それぞれ衝撃を走らせるゴンとリンゴ。

「愛してしまった…誰よりも憎かったはずの、あの魔女を…」

胸から離した手を、そっと見下ろす諸刃。

「だから…俺は戦う…」

草薙を握る手に、込められる力。

「誰を敵に回しても…誰を殺すことになったとしてもっ…」

迷いのない決意が、浮かびあがる瞳。

「牢戸知玖の為に…俺のすべてを懸けてっ…！」

「諸刃っ…」

声を張り、強く言い放つ諸刃を前に、ただ名を呼んだだけで、目を細めてしまうリンゴ。

「牢戸知玖を愛しているから…トマトおばあちゃんも殺したっていうの…？」

「ああ…」

「……っ」

すべてを奪ったシルクを、ただ愛していると言う諸刃に、育ててくれたトマトよりも、ただシルクを選んだ諸刃に、リンゴはそれ以上、投げかける言葉を、見つけることが出来なかった。

「ううぅっ…！クっ…！」
「……っ」
「ゴンっ…！！」
苦しげに聞こえてくる声に、振り返る諸刃と、目を見開くリンゴ。
二人が見つめるその先には、先程の諸刃の攻撃で傷だらけになりながらも、何とか立ち上がったゴンの姿があった。

「何のつもりだ…？死にたいのか…？」
「倒れてたってっ、どうせ死ぬんだろうがっ」
静かに問いかける諸刃に、ゴンが吐き捨てるように答える。

「お前みたいな奴っ、俺はもう一人、知ってるよっ」
「何っ…？」
まっすぐに諸刃を見据えて言い放つゴンに、諸刃が少し眉をひそめる。

「何もかもを奪われたってぇのにっ、愛したから、どうしようもなく愛しちまったからってっ…」
ゴンが強く唇を噛み締め、勢いよく顔を上げる。

「俺たち人間の為にっ、命懸けて戦ってる奴をなぁっ！！」
「……っ」
その言葉に、諸刃がそっと目を細める。

「輝矢っ…」

ゴンが知るという、その人物の名を口にし、思わず俯くリンゴ。

「お前が牢戸知玖を愛してるってのは、よぉくわかった…」

声を落ち着かせ、ゴンがゆっくりと言葉を続ける。

「お前の覚悟も、よぉくなっ…」

今、諸刃がしようとしていることは、愛した人間の為に戦う輝矢と同じこと。その覚悟が半端なものでないことは、輝矢を近くで見てきたゴンには、わかりきったことであった。

「だからもう一度っ、ダチだっただの、仇だのは抜きにしてっ、思いっきりぶつけ合おうじゃねぇかっ！」

ゴンが勢いよく、天狼丸を振り上げる。

「お前の覚悟はわかったっ、けどっ…」

――私は人間を守りたいんですっ…！――

――俺たちは、まだ“人”だっ…――

――ボクたちに、命を懸けてでも戦う理由がないって思ってんのぉ？――

――竹取輝矢のお供としてっ、命を懸けてなっ！――

思い出される、仲間たちの言葉。

「俺の覚悟だって、半端じゃねぇっ！！」

「……。」

強く叫ぶゴンを、真剣な眼差しで見つめる諸刃。その鋭い瞳には、

目を逸らすことを許されないかのような、強い力があった。

「いいだろうっ…」

ゴンの叫びに、諸刃がゆっくりと頷く。

「そこまで死に急ぐのなら…俺がすぐにでも殺してやるっ…」

諸刃がゴンの方を振り向き、草薙を構える。

「ゴンっ！！」

「下がってろ、リンゴ」

「……っ」

再び向き合うゴンと諸刃に、思わず身を乗り出すリンゴであったが、強く言い放つゴンのその表情は真剣で、とても立ち入ることなど出来ず、リンゴはそっと目を伏せ、その場から離れた。

『……っ』

二人が同時に後方へと飛び、互いに距離を取る。

「これが俺のっ…最後の炎だっ…！！」

『……っ！』

ゴンがそう言うと、天狼丸から、大きな金色の炎が燃え盛った。

「金色の…炎っ…？」

離れた場所へと移動したリンゴが、戸惑った様子で、その金色の炎を見つめる。

「色が変わった…いや、色だけじゃない…炎そのものが違う…」
諸刃もゴンの金色の炎を見つめ、どこか分析するように呟く。
「燃やしているのか…」
その炎の動力源を知り、そっと目を細める。

「“命”を…」
「他に燃やすもんも見つかんなくてなっ」
ゴンが燃やしているものを口にする諸刃に、ゴンは軽く笑みを向ける。

「人獣化状態の上に、そんなことまでっ…」
ただでさえ命を削る人獣化の状態で、さらに命を使って力を増大させているゴン。無茶と呼ぶことも軽すぎるほど、もはや自殺行為に等しい。

「お前は馬鹿か…？」
「ハハっ！その言葉っ、昔もお前によく言われてたっけなぁっ」
「……っ」
過去をただ懐かしむように、穏やかに笑うゴンに、諸刃が少し驚いた表情を見せる。次狼の、トマトの仇と、鋭い宿命を背負っていた先程までのゴンとは、包む空気が異なっていた。

「けどなぁっ、これが俺の生き方だっ」
金色の炎を纏った天狼丸を、ゴンが強く掲げる。

「何年経とうが、警察に就職しようがっ、これだけは変えられねぇよっ！！」
強く言い放ち、刀先を諸刃へと向けるゴン。

「……。」
そんなゴンを、諸刃がしばらくの間、まっすぐに見つめる。
「そうか…」
少し俯きがちに頷いて、諸刃がゆっくりと草薙を振り上げる。
「なら俺もっ…」
諸刃が掲げた草薙に、空から強い雷が落ち、草薙全体を包んでいく。
「この一撃に、全力を懸ける…」
強い雷を纏った草薙を構え、鋭い表情を見せる諸刃。
「俺はっ…」
少し躊躇うように、開かれる諸刃の口。
「俺は、成るように成れ主義だからなっ…」
「……っ」
そう言って、穏やかに微笑む諸刃に、思わず目を見開くゴン。
――俺は成るように成れ主義だ……――
それは、かつて、ゴンたちと共に在った頃の、諸刃の口癖。
「そうかよっ」
「……っ」
柔らかく笑みを零すゴンに、諸刃ももう一度、そっと微笑んだ。
『……っ』

二人が笑みを消し、鋭い表情となって、互いの武器を構える。

「……。」

静まり返る戦場を、強く両手を組み、祈るように見つめるリンゴ。

「草薙っ」

「天狼丸っ！」

それぞれの武器の名を呼び、ゴンと諸刃が、同時に互いのもとへと駆け込んでいく。

「“大雷帝”っ…！！」

閃く雷を纏った草薙を、諸刃が振るう。

「“輝火煉刃”っ！！」

輝く炎を纏った天狼丸を、ゴンが振るう。

「ゴンっ…！！」

「諸刃ぁぁぁっ！！」

二人の刃が、勢いよくぶつかり合った。

――バァァァーーンっ！

大きな爆発音と共に、激しい衝撃風が吹き荒れ、周囲に弾け飛ぶように散っていく、炎と雷の残骸。すべてが止み、静けさの戻った戦場には、二人の男が背中を向け合い、立ち尽くしていた。

「……。」

立ち尽くしたゴンが、ゆっくりと構えていた天狼丸を下ろす。

「うっ…うぅっ…」

急に振らつく足元に、下ろした天狼丸を地面へと突き刺して支えとし、必死に踏み止まるゴン。ゴンの伸びていた髪や、尖っていた耳や牙が元に戻り、人獣化の姿から、人の姿へと戻っていく。

「クソ痛てぇっ…」

「……っ」

素直な言葉を漏らしているゴンの方を、そっと振り返るのは、ゴンと同じように人獣化が解け、人の姿へと戻っている諸刃であった。

「相変わらず…」

諸刃の口元が、少し緩む。

「勝負強い奴だなっ…」

――パリィィィンっ！

そう呟き、諸刃が微笑んだその瞬間、諸刃が右手に握りしめていた草薙が、響き渡る音を出して、きれいに砕け散った。

「うっ…」

地面へと落ちる草薙の欠片を見た後、諸刃がゆっくりと地面へと倒れ込んでいく。

「……っ」

諸刃は力なく、地面の上に背中をつけて倒れ込んだ。

「……あっ…」

戦いを見守っていたリンゴが、ポツリと声を漏らす。

「ゴンが…勝った…？」

目の前の状況がなかなか呑み込めず、リンゴが戸惑いの表情で、誰にともなく問いかける。

「……。」

天狼丸を支えにしながら、ゆっくりと振り向いたゴンが、一歩一歩と足を動かし、倒れ込んでいる諸刃の方へと歩み寄っていく。やがて、諸刃のすぐ横に立ち、ゴンはその足を止めた。

「諸刃…」

ゴンが諸刃を見下ろし、そっと諸刃の名を呼ぶ。

「俺の…負けだ…」

「……。」

小さな声で、素直に敗北を認める諸刃に、ゴンが少し目を細める。

「ゴン…」
諸刃が空を見上げながら、ゴンの名を呼ぶ。

「俺を…殺してくれ…」
「……っ」
告げられる言葉に、ゴンが表情をしかめる。

「俺は…“人”になってしまった…」
そう呟き、諸刃が傷だらけの手で、黒の紋様の無くなった、自分の首筋に触れる。

「もう…あの方の求める俺では…無くなってしまった…」
――さぁっ…？貴方が特別だからかしらっ…？――
あの微笑みが向けられることは、もう無い。

「もう…生きている理由もない…」
「……。」
哀しげな瞳を見せる諸刃を、真剣な表情でまっすぐに見つめるゴン。

「生き延びる資格も…俺にはないしな…」
諸刃がそっと目を伏せ、どこか自嘲するような笑みを浮かべる。

――次狼ぉぉぉぉぉっ！！――
――トマトぉぉぉぉっ！！――

奪ってしまった、大切な命。人になったところで、人として生きていくには、諸刃の手は汚れ過ぎている。

「だから…頼むっ…」

再び目を開いた諸刃が、ゴンを見上げる。

「ゴンっ…」

「……。」

呼ばれる名に、ゴンはどこか諦めるように目を閉じた。

「……っ」

ゴンが目を開き、その表情を鋭くして、ゆっくりと天狼丸を振り上げる。

「ありがとう…ゴン…」

そんなゴンを見て、諸刃がどこか満足げに微笑む。

「お前の手で逝けるなら…本望だっ…」

「……っ！」

ゆっくりと目を閉じた諸刃に、ゴンが天狼丸を振り下ろす。

――……っ！

――共に在ったあの頃は、こんな日が来るとは、思わずにいた。

「うっせぇなぁっ！クソリンゴっ！！」
「何よっ！？バカゴンっ！！」
「まぁまぁ～っ、二人共ぉ～っ」
顔を合わせれば怒鳴り合うゴンとリンゴを、笑顔で必死に宥める次狼。

「次狼…激辛カレーが出来たぞ…」
「うわぁっ！さっすが諸刃ぁぁっ！！」
「まぁ～た激辛かよぉっ！」
「私、お弁当持参したもんねぇ～っ」
諸刃が作る、次狼の好物の激辛料理に、ゴンはげっそりとした顔を見せ、リンゴは弁当を得意げに見せつける。

「何が不満なんですか？ゴン」
「色々というか、すべてが不満なんだよっ！！っつーかっ、お前も激辛ばっか作んなよなぁっ！諸刃っ！」
「俺は成るように成れ主義だ…」
「とかって、自分用にだけ中辛カレー、作ってんじゃねぇよっ！！」

笑ったり、怒ったりで、忙しい日々。

「お前らっ！とっとと飯食ってっ、修行にするよぉっ！」
『はぁ～いっ！トマト先生っ！』

幸せだった、戻らない時間……――

「……っ」

諸刃がゆっくりと目を開くと、諸刃の首元のすぐ目の前で、天狼丸の刃先は止まっていた。

「……。」

「ゴン…」

天狼丸を握り締めたまま、深く俯いているゴンを、諸刃が目を細め、見つめる。

「動かねぇ…」

「えっ…？」

ゴンの口から零れ落ちた、小さな小さなその声に、諸刃が少し戸惑ったような表情を見せる。

「動かねぇっ…」

その声と共に、ゴンの肩が、小刻みに震える。

「次狼の刀がっ…動いてくれねぇんだよっ…！！」

そう言い放ち、顔を上げたゴンの瞳からは、涙が溢れ出していた。

「うっ…！ううぅっ…！」
天狼丸を引き、涙を流しながら、ゴンがその場に座り込む。

「ゴンっ…」
涙を流すゴンを、目を細め、見つめるリンゴ。

「ううぅっ…！！」
「……。」
涙に暮れるゴンを横目に見た後、諸刃はゆっくりと空を見上げ、
そして、目を伏せた。

「……っ」

閉じた諸刃の瞳から、静かに、一筋の涙が、流れ落ちた。

第９５章　血戦　☆１

中央塔・最上階。輝矢ｖｓシルク。

「二つの光が…消えた…」

大窓を見つめている輝矢が、ポツリと小さな声を漏らす。先程まで天へと突き上げていた四つの光の内、ぶつかるように重なり合っていた金色と紫色の光が、ほぼ同時に消えたのである。どういう結果に終わったかまではわからないが、一つの戦いが終わったことは間違いない。

「……。」

輝矢と同じように大窓を見つめながら、シルクがそっと目を細める。

――何故、俺にだけ…そんな選択肢を与えるっ…？――

感情のない表情で、瞳だけが戸惑うように向けられていた、あの頃。

「……っ」

過去を思い出し、シルクは少しの間だけ、目を伏せた。

「さぁっ…」

再び目を開いたシルクが、前方で膝をついている輝矢を振り向き、ゆっくりと冷たい笑みを浮かべる。

「後…二つっ…」

「……っ」

カウントするように、指を二本突き立てるシルクを見て、輝矢はその表情を曇らせた。

中央塔付近・中央塔部隊。

「ゴンっ…」

輝矢やシルクと同じように、消えた光に気づいた太狼は、勝敗の行方を気にかけながら、そっと眉をひそめた。

「状況はっ…！？」

「……っ」

後方から聞こえてくる大きな声に、太狼や金汰たちが、一斉に振り返る。

「お前はっ…」

「ハァっ…！ハァっ…！」

息を切らしながら、太狼たちの元へと駆け込んできたのは、黒羽であった。

「怪我人の治療はぁ？」

「ほぼ終わった。救護班の連中に任せている」

太狼の問いかけに、スムーズに答える黒羽。由雉からハヤテの色羽を受け取った黒羽は、戦闘に出た由雉に代わり、癒羽で、怪我人

たちの治療にあたっていたのである。
「白鬼たちの掃討も間もなく終わる」
「そうっ」
黒羽の言葉を聞き、太狼が少し安心したように肩を落とした。

「それよりあいつ等はっ…！？」
「あそこだよっ」
「あそこっ…？」
少し焦った表情を見せながら、黒羽が、金汰の指差した方向に視線を移す。

「あれはっ…」
飛び込んでくるのは、天へと突き上げている二色の光。

「彼らは戦っているよ、あそこで…」
太狼が落ち着いた口調で、語りかけるようにそっと話す。

「どうなるかは…まだわからないさっ…」
「……っ」
その言葉を受け、黒羽がそっと眉をひそめる。黒羽がそっと懐に手を入れ、そこから一枚の癒羽を取り出した。

「負けるなよ…由雉っ…」
羽根を握り締めながら、黒羽が祈るように呟く。

「俺に勝っておいて…負けるなっ…」
「……。」
呟く黒羽を横目に、太狼がそっと目を細める。

「門貴っ…」
白鬼との戦闘を終えた二花は、黒羽と同じように、祈るように両手を胸の前に組んで、突き上げる光に視線を送っていた。

「あいつはっ…!?」
そんな二花のもとへ、後方から犬仁が駆け込んでくる。

「あいつの勝負はどうなっているんだっ…!?」
「むっ!」
心配するような表情を見せ、少し慌てた様子で駆け込んでくる犬仁に、先程までしおらしく祈っていた二花が、勢いよく顔をしかめる。

「門貴の心配はウチがするっ!あんたはどっか行っときぃっ!イヌうっ!」
「はぁっ!?貴様こそっ、どこかへ行けっ!!邪魔だっ!カニっ!!」
「はぁぁぁっ!?」
「こんな時にやめてよぉ〜っ!姉ちゃ〜んっ!」
すぐさま険悪な雰囲気となって、怒鳴り合う二花と犬仁に、その横に立つチョキ三郎が、困った表情を見せながら必死に止める。静まり返った戦場に飛び交う罵声は、周囲の皆の注目を集めている。

「はぁっ…何をやっとるんだかっ…」
「門貴さんって、無駄にモテますよねぇ〜」
呆れきった様子で頭を抱える八房の横で、違うところに感心を持っている猿飛。

「ねぇっ?移貴さっ…」
「ううぅ〜っ!二花ぁぁっ…!」

「出たよ…万年振られ男…」
門貴を心配する二花の姿に、移貴は涙を流しながら、落ち込んでいた。そんな情けないことこの上ない移貴の姿に、猿飛が呆れきった表情を見せる。

――バァァァーーンっ！

『……っ』
その時、聞こえてくる衝撃音に、その場にいた皆が険しい顔つきとなって、一斉に音のした方を振り返った。

「門貴っ…」
不安げな表情を見せながら、皆は戦場を見守った。

その頃。龍国。

「マイソンっ…」
由雉に色羽を渡した後、そのまま龍国へと残ったハヤテは、人の出払ってしまったオトポリ本部から、今も戦闘が繰り広げられている鬼国跡地を、どこか不安げな表情で見つめていた。

「ハヤテさん」

「んっ？」
呼ばれる名に、ハヤテが不思議そうに振り向く。
「マイハニーミチルっ！幸之助くんにっ、コウノトリガールまでっ！」
「どうもぉ～っ！ハヤテさんっ！」
ハヤテが振り向くと、そこにはミチルと、ミチルを挟むようにして幸之助と幸コが立っていた。驚いた表情を見せるハヤテに、幸之助が笑顔で手を振る。
「どうしたんだいっ？みんな揃ってっ」
「家に居ても、ミチルさん、全然落ち着かなくて、いつも以上に家の中、グチャグチャにしちゃうからっ」
「どうせなら、近くで見ようって話になったんですよっ！」
戸惑うように問いかけるハヤテに、幸コと幸之助が口々に答える。
「ミチルっ…」
「一緒に…見守って下さいますか…？」
ゆっくりと振り向いたハヤテに、ミチルが穏やかな笑顔を向ける。
「ああ、勿論さっ」
そう言って微笑み、ハヤテがミチルの手を取る。
「由雉…」
二人並び、ハヤテとミチルは、我が子の戦う戦場を見つめた。

中央塔・右翼。由雉ＶＳ緋鬼。

「人獣化、か…」
「……。」

人獣化をし、背中からまるで鳥のような青い翼を生やした由雉を見ながら、緋鬼は少し険しい表情を見せた。姿だけでなく、由雉を包む空気のようなものも、どこか鋭く、緋鬼を威圧するようなものに変わっているのだ。

「どうしたのぉっ？攻撃して来ないのぉっ？」
こちらは変わらぬ柔らかな口調のまま、由雉が試すように問いかける。

「ああぁ～っ、出来ないのかぁっ」
急に思いついたような表情となる由雉。

「これじゃあっ」
「……っ」

由雉が右足を上げ、強調するように言い放つと、緋鬼はさらに顔をしかめた。先程負ったはずの由雉の両足の傷が、人獣化の影響なのか、きれいに塞がっている。傷もなく、血の流れていないこの状況では、緋鬼は攻撃の手段がないのだ。

「血がないならっ…」
緋鬼が目つきを鋭くし、両手を胸の前で交差させる。
「流させるだけだぁっ！！」
激しく叫んだ緋鬼の両手から、勢いよく鬼爪が伸びる。
「“鬼爪っ…天回”っ！！」
緋鬼の手のひらから、由雉へ向けて、十本の鬼爪が放たれる。
「……っ」
その瞳を強く光らせ、由雉が背中の青い羽根を広げ、空へと高々と飛び上がる。
「クっ…！」
飛び上がった由雉を、睨むように見上げる緋鬼。
「こっのっ…！」
緋鬼が両手を大きく動かし、飛ばした鬼爪を、由雉の後を追うように、空へと向かわせる。
「……。」
翼を広げた由雉が、落ち着いた表情で、その羽根を動かす。
「ノロっ…」
「うっ…！」
由雉は持ったばかりのその翼で、広い空が狭く感じる程に素早く飛び動き、緋鬼の飛ばした鬼爪を軽々と避けていく。掠ることもない鬼爪に、顔をしかめる緋鬼。
「ならっ…！」

鬼爪を避けている由雉へ向け、緋鬼が大口を開き、その先を向ける。

「超“鬼口”っ…！！ガアアアアっ！！」

「……っ」

緋鬼が放った鬼口に気づき、由雉が少し眉をひそめる。

「ハッハッハっ！！これでぇっ…！！」

「……っ」

「ハっ？」

突如として視界から消える由雉の姿に、思わず目を丸くする緋鬼。由雉へ向けたはずの鬼口は、何に当たることもなく、空へと突き上がっていく。

「どっ、どこにっ…！？」

「鬼さんっ、こっちらぁ～っ」

「何っ…！？」

背後から聞こえてくる明るい声に、緋鬼が焦ったように振り向く。

「やっほぉ～っ」

「お前っ…！」

緋鬼のすぐ後ろに立ち、笑顔で手を振っている由雉に、緋鬼が焦りの表情を見せる。

「……っ」

動揺を見せる緋鬼を見ながら、由雉はすぐさまその瞳を鋭くし、勢いよく羽根を振るった。

「ううぅっ…！！」

高速で動く羽根から生じた衝撃風が、真正面から緋鬼へと吹きつ

け、緋鬼の巨体が勢いよく吹き飛ばされる。

「うぐっ…！」

地面に背中を叩きつけられるようにして、倒れ込む緋鬼。

「クソっ…！」

顔をしかめながら、緋鬼がすぐさま起き上がる。

「俺の攻撃で捉えきれねぇっ」

吐き捨てるように呟く緋鬼。人獣化でただでさえスピードが上がっているというのに、その上、翼で自由に空を翔けることが出来る。普通の攻撃で今の由雉を捉えることは、不可能に近い。

「言ったでしょ～っ？」

「……っ」

前方から聞こえてくる声に、緋鬼が顔を上げる。

「“トリを捕まえられると思わないで”ってっ」

「……。」

余裕すら感じる笑顔を見せて言い放つ由雉に、緋鬼が思いきり顔を引きつる。

「ハっ！」

緋鬼が笑い飛ばすように声をあげ、その場に立ち上がる。

「俺にお前が捉えきれないとしてっ、お前こそ、どうする気だっ！？」

右手を振り上げた緋鬼が、挑戦的に由雉へと問いかける。

「俺に攻撃すれば血が出て、お前は不利になるっ！だから、お前は

俺に攻撃は出来ないっ！！」
「……。」
緋鬼の言葉に、由雉が笑みを消し、真剣な表情を見せる。
「だったらっ、まだ攻撃出来る俺の方が、超有利ってことにっ…！」
「誰が」
「……っ？」
遮る由雉の声に、緋鬼が少し眉をひそめる。
「誰が、“攻撃出来ない”なんて言ったのっ？」
「何っ？」
「……っ」
そう言うと、由雉が高々と空へと飛び上がり、上空で目一杯、翼を広げる。
「攻撃する気かっ…！？」
戸惑うように、由雉を見上げる緋鬼。
「“百裂羽”っ…！！」
由雉が広げた翼から、地面にいる緋鬼へ向け、百枚の青い羽根を放つ。
「ハハハハハっ！！超馬鹿めぇっ！！！」
大きく笑いながら、その百枚の羽根へ向け、勢いよく両手を広げる緋鬼。
――バァァァーンっ！
百枚の羽根が、一枚と残ることなく、すべて緋鬼へ直撃する。

「へへへへへっ…！」
地面へボタボタと流れ落ちる赤い血に、緋鬼が震え上がるような笑みを零す。

「これっ、これっ、これっ、これぇぇっ！！」
全身から流れ落ちる血に、興奮するように、激しく声をあげる緋鬼。

「ハハハハっ！！超喰らいやがれぇっ！！」
緋鬼の流した血が、凝固し、合わさり合い、赤く鋭い刃を形成していく。

「“血陣”っ…！！」
形成された血の刃が、一斉に上空の由雉へ向けて、飛び出していく。

「自分の馬鹿げた行為を超反省すんだなぁっ！！クソドリぃっ！！」
「……。」
高々と笑いあげる緋鬼を余所に、空の由雉は、至って冷静な表情で、飛び出してくる血の刃に対し、もう一度広々と、その翼を広げる。

「何っ？」
再び翼を広げる由雉に、眉をひそめる緋鬼。

「喰らうのは、君だよっ」
由雉の瞳が、冷たく光る。

「“千裂羽”っ…！！」
広げられた翼から、先程の攻撃を上回る、千枚の青い羽根が放たれる。

「何っ…！？」
緋鬼の飛ばした血の刃をすべて叩き落とし、さらに緋鬼の方へと向かってくる大量の青い羽根に、緋鬼が大きく目を見開いた。

「うっ…！」
大きく歪む、緋鬼の表情。

――バァァァァーンっ！

千枚の羽根も緋鬼へと直撃し、辺りに強い砂煙が巻き起こった。

「うっ…」
砂煙の中から、小さく漏れ落ちる声。

「ううぅっ…うっ…」
先程よりも、さらに多く流れる真っ赤な血。全身から溢れるばかりの血を流した緋鬼は、その身を少し屈めながら、苦しげな声を漏らしていた。

「あれぇ？」
不思議そうに首を傾げながら、由雉が地面へと降り立つ。

「攻撃して来ないのぉっ？」
「クっ…！」
試すように問いかける由雉に、顔をしかめる緋鬼。
「それだけダメージを与えれば、さすがに攻撃出来ないみたいだねぇっ」
「何をっ…！」
見透かすように言い放つ由雉に、緋鬼はすぐさま反論する。
「超んなことはっ…！」
“裂羽”っ」
「うっ…！！」
緋鬼が何かを言う前に、由雉が緋鬼へと青い羽根を向ける。
「クソっ…！！」
傷だらけの体を引きずるように動かして、緋鬼が何とか裂羽をかわす。
「ハァっ…！ハァっ…！ハァっ…！」
「へぇ～っ」
息を乱す緋鬼を見つめながら、由雉が感心したような声を出す。
「君でも、攻撃避けたりするんだぁっ」
「グっ…！」
嘲るような笑みを浮かべ、言い放つ由雉に、緋鬼の表情がさらに歪む。

「あんまり調子に乗んなよっ…クソドリっ…」
「……っ」
深く俯き、いつもの荒々しい口調から、どこか重く低い声へと話し方を変える緋鬼に、由雉が少し眉をひそめる。
「別に調子に乗っちゃいないけどぉ、君に負ける気はしてないよぉっ？」
「それがっ…」
緋鬼が右腕の血を振り払い、勢いよく顔を上げる。
「超調子に乗ってるって言うんだぁっ！！クソドリがぁっ！！」
――パァァァァァーンっ！

第９５章　血戦　☆２

「……っ！」

激しい叫び声と共に、緋鬼の体から突き上げる強く、白い光。思い切り目に飛び込んでくる光に、由雉は思わず目を細め、身を屈める。

「なっ…何っ…！？」

眩しい光を直視しないように、顔の前に手を出しながら、戸惑う声を漏らす由雉。

「ふぅ～っ」

「うっ…！」

白い光の中に立つ緋鬼の姿を捉えた由雉が、驚いた様子で大きく目を見開く。

「まさかお前ら人間如きを相手にっ…」

逆立つ緋色の髪に、白目のなくなった真っ赤な眼球だけの瞳。天へと突き上げる金色の角は長く、太くなり、一回り大きくなった牙は、その鋭さを増している。

「“鬼化”することになるとはなぁっ！！」

「鬼化っ…」

勢いよく両手を広げる緋鬼を見て、由雉が表情を曇らせる。

「これが…“鬼化”っ…」

純粋な鬼人だけがなることの出来る、鬼人の最終形態。あんなに負っていたはずの傷も、すべて修復され、血の一滴すら流れていなかった。

「けどっ、傷まで治っちゃってるけどぉっ？」

眉間に皺を寄せたまま、由雉が抱く動揺を隠しながら、先程と同じように、試すような口調で緋鬼へと問いかける。

「それじゃあ、また攻撃出来ないじゃなっ…」

「ハっ！」

「……っ」

笑い飛ばすように由雉の言葉を遮る緋鬼に、由雉が顔をしかめる。

「俺はなぁっ、世界に選ばれた特別な種族っ、白鬼一族なんだっ」

緋鬼が左手を胸に当て、得意げな笑みを零す。

「お前ら脆弱な人間共とはっ、超違うんだよぉっ！！」

「うっ…！」

激しく叫び、勢いよく由雉のもとへと駆け込んでくる緋鬼に、由雉が少し顔をしかめながら身構える。

「ハッハッハっ！！」

「真正面から突っ込んでくる気っ…！？」

緋鬼が鋭く変化した鬼爪を振り上げながら、由雉へと接近していくと、由雉は動揺したような表情を見せながら、空へと飛び立とうと背中の翼を広げた。

「そうはいくかよっ！」

「えっ…？」

飛び上がろうとした由雉の足元へ、緋鬼が左腕を振りかぶる。

「“血縫い”っ！！」
「なっ…！？」
どこからか地面を這うようにしてやって来た赤い液体が、由雉の足元を絡め取って凝固し、飛び立とうとした由雉の動きを止める。
「なんでっ…？傷は消えたはずっ…」
由雉が焦った表情を見せながら、血の流れてきた方を見る。
「あっ…！」
先程まで緋鬼が立っていた辺りの地面に、滲むように広がっている血の溜まり。
「さっきの血っ…？」
「その通りぃぃっ！！」
「うっ…！」
足場を止められた由雉へと、飛び掛かってきた緋鬼が、その鬼爪を勢いよく振り下ろす。
「おっらぁぁぁっ！！」
「クっ…！」
振り下ろされた鬼爪を、由雉が体を大きく逸らし、何とか避ける。
「もういっちょっ！！」
「……っ！」
もう一方の手の鬼爪を振りかぶる緋鬼に、由雉が厳しい表情を見せる。
「“左翼っ…！」

由雉が左手に構えた赤い羽根を、自分の足元へと向ける。

「滅羽”っ…！！」

――パアアアアンっ！

放たれた赤い羽根が、由雉の足元で凝固していた血液へと突き刺さり、粉々に砕き割って、由雉の足に自由を戻す。

「クゥっ…！！」

「チっ」

足が自由になった途端、由雉がすぐに後方へと飛び下がると、緋鬼が勢いよく振り下ろした鬼爪は、空を斬った。空振る鬼爪に、緋鬼が悔しげに舌打ちをする。

「“右翼っ…！」

後方へと飛び下がりながら、由雉が素早く青い羽根を構える。

「“十裂羽”っ…！！」

鬼爪の攻撃をかわされ、姿勢を崩したままの緋鬼へと、投げ放たれる十枚の羽根。

「……っ！」

――バアアアアーンっ！

顔をしかめた緋鬼へ、すべての羽根が直撃する。

「……。」
生じた砂煙を、地面に着地しながら、まっすぐに見つめる由雉。
「“血塊陣”…」
「うっ…！」
その声と共に、砂煙の中から、無数の大きな血の刃が飛び出してくる。
「グゥっ…！」
転がるように横に飛び、由雉が必死に血刃を避ける。
「ううぅっ…！」
だがすべてを避け切れず、一本の刃が由雉の右腕をかすめ、血が流れ落ちた。走る痛みに、由雉が右腕を押さえながら、顔を歪める。
「へへへへっ…」
「……っ」
起き上がった由雉が、聞こえてくる笑い声に顔を上げる。
「流したなっ…」
砂煙の中から見えてくる、大きく口端を吊り上げた緋鬼。
「血っ…」
「……っ！」
囁かれるその一文字に、由雉がハッとした表情を見せる。
「しまっ…！」

「ハハハハっ！！“血放（けっぽう）”っ！！」

――ブシュっ…！

「ううぅっ…！！」

緋鬼の笑い声と共に、右腕の傷口から、噴き出すように流れ出る由雉の真っ赤な血。飛び散る大量の血液に、由雉が大きく目を見開く。

「“血縛り”っ！！」

「うっ…！」

飛び散った由雉の血が、緋鬼に操られ、由雉の動きを封じようと飛び出してくる。

「クっ…！」

由雉が必死に羽根を広げ、迫り来る自分の血から逃れ、空へと飛び上がる。

「ケっ…」

空へと逃げられ、由雉を見上げながら、少し悔しげな表情を見せる緋鬼。

「“癒羽”っ…」

上空へと飛び上がった由雉は、すぐに懐から癒羽を取り出し、右腕の傷の治療を行った。どんなに小さな傷でも塞いでおかなければ、緋鬼の攻撃の手段とされてしまう。

「空へ避難して、すぅ～ぐに怪我の治療ってかぁっ？」
「……っ」
下方から聞こえてくる声に、由雉が少し眉をひそめて、下を見る。
「超ギリギリじゃねぇかぁっ！えええぇっ？クソドリぃっ！！」
挑発的な言葉を吐き捨てながら、緋鬼が上空にいる由雉へ向け、もう一度十本の鬼爪を構えた。
「“鬼爪・天回”っ！！」
十本の爪が、由雉へと勢いよく放たれる。
「今更こんな攻撃っ…！」
由雉を馬鹿にするかのような初歩的な攻撃を繰り出す緋鬼に、由雉が不満げに顔をしかめながら、その青い翼を広げ、放たれた鬼爪を、次々と軽く避けていく。
「こんな攻撃がボクに通用するはっ…！うっ…」
急に霞む景色に、由雉が思わずバランスを崩す。
「なっ…」
頭を押さえながら、何とかその場に踏み止まる由雉。頭の中が大きく揺れ動き、目の前の景色が所々、霞む。そんな自分に、由雉は戸惑うような表情を見せた。
「何っ…？これっ…」
「あれだけの血を流したんだ」
「……っ？」
戸惑っていた由雉が、聞こえてくる緋鬼の声に、再び下を向く。

「俺と違って、血液の生産も運搬も、ごく普通の人間レベルであるお前じゃあっ、まぁ当然だろうなぁっ」
「……っ」
軽い笑みを浮かべる緋鬼に、由雉の表情が一気に曇る。
「貧血ってことっ…？ダサっ…」
揺れる意識を何とか保ちながら、由雉が小さな声を漏らす。
「そんなんで負けるなんて、冗談じゃないよっ」
由雉がその瞳を鋭くし、頭を押さえていた手をゆっくりと下ろす。
「トロトロ戦ってなんていらんないっ」
下ろしたその手を、懐へと入れる由雉。
「……っ」
厳しい表情を見せながら、由雉が懐から出したのは、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫の七色の羽根であった。取り出した羽根を扇のように広げ、由雉がまっすぐに見つめる。
――また虹羽を…使うのかい…？――
そう不安げに問いかけた、ハヤテの姿が思い出される。
「使わなきゃ…勝てない…」
どこか、自分に言い聞かせるように、呟く由雉。
「……っ！」
由雉が表情を引き締め、七枚の羽根を素早く構える。

「……っ」

羽根を構える由雉を見上げ、どこか嬉しそうに微笑む緋鬼。

「さぁっ！超来いっ！！」

緋鬼が由雉の攻撃を待つように、目一杯両手を広げる。

「“滅羽・橙羽・癒羽・包羽・裂羽・重裂羽・壊羽”…“合翼っ…！！」

由雉が七枚の羽根を重ね合わせると、七枚の羽根は強い七色の光を放ちながら、一枚の羽根へと姿を変えていく。七色の光を放つその羽根を、由雉が構える。

「……七位っ…虹羽”っ！！」

七色の羽根が、由雉の手から、勢いよく投げ放たれる。

「ハハハハハハハっ！！！」

向かってくる虹羽に、避ける素振りもなく、ただ笑いあげる緋鬼。

――バァァァーンっ！

虹羽が緋鬼に直撃し、辺りに七色の光が弾け飛ぶ。

「はぁ…はぁ…」
由雉が肩で息をしながら、強く輝く七色の光を見下ろす。
「直撃っ…」
光を見つめながら、由雉が少し目を細める。

「いくらあの変態でもっ…虹羽を喰らえば…」
「へへへへっ…」
「……っ！」
聞こえてくる笑い声に、上空の由雉が大きく目を見開く。

「へへへへっ…イイ痛みだっ…超気持ちイイっ…」
止み始めた七色の光の向こうから聞こえてくるのは、全身から滝のように大量の血を流しながら、言葉の通り気持ち良さそうな顔を見せている、緋鬼であった。

「そんなっ…！」
笑う緋鬼を見下ろし、由雉が険しい表情を見せる。
「虹羽をっ…耐え切ったっ…！？」
信じられないといった表情で、由雉が声をあげる。

「さぁっ…クソドリっ…」
緋鬼がゆっくりと空を見上げ、獲物を狙うような鋭い瞳を、由雉へと向ける。

「今度はお前がっ、血を流す番だぁっ！！」
そう勢いよく叫び、緋鬼が血の流れる両手を、由雉へと向ける。
「“血風陣（けっぷうじん）”っ！！」

「うっ…！！」

大量の血の刃が、息もつかせぬ速度で、上空の由雉へと向かっていく。視界全体に広がる血刃に、もはや由雉は逃げる場所すらなかった。

「うぐっ…！！」

地面から降り注いだ血刃が、由雉の全身に突き刺さる。

「うぁっ…」

刃の突き刺さった腕から足から羽根から、全身から流れ落ちる、由雉の真っ赤な血。

「流したなっ…血っ…」

上空から零れ落ちる由雉の血を見て、緋鬼が微笑み、そしてすぐさま右手を掲げた。

「“血放”っ！！」

――バァァァァンっ！

「……っ！！」

全身に刻まれた由雉の傷から、同時に血が飛び散る。

「うぁあああああっ！！」

辺りに雨のように血が撒き散らされると、由雉は悲痛な叫び声をあげた。

「超イイ眺めだっ…」

空から降り注ぐように落ちる由雉の血を見上げながら、緋鬼がどこかうっとりとした表情を見せる。

「あ…あぁ…」

口からも血を流しながら、空から力なく降下していく由雉。傷ついた青い翼が、血で赤く滲む。

「うっ…うぅ…」

由雉は地面にうつ伏せに倒れ込み、弱々しい声を漏らした。

「あ…ぁ…」

血だらけの手足が、力なく地面に崩れ落ちる。

「ふぅ〜っ」

由雉が地面へと倒れ込んだことを確認すると、緋鬼が身構えていた手を下ろし、一息つくように深々と肩を落とした。

「超あっけなかったなぁっ」

緋鬼が少しがっかりしたように、言い放つ。

「まっ、俺の好きな、赤色の血を流す奴だっただけマシかっ」

自分を納得させるように言葉を発しながら、緋鬼がゆっくりとした足取りで由雉の元へと歩み寄っていく。由雉の倒れ込んだ辺りの

地面には、由雉の血が滲み、血の水溜りが出来ていた。

「……。」

近付いてくる緋鬼の足音を聞きながら、薄く開いた目を、どこへとも焦点を合わせることなく、ただ虚ろに、自らが流した血へと向けている由雉。

「冷っ…たいなぁ…」

瞳に映る景色はかすみ、もうはっきりとは何も見えない。痛みすら感じない体は、すべての感覚を失ったようで、ピクリとも動かすことが出来なかった。流れる血と共に体温も流れていくようで、体が徐々に冷たくなっていくのがわかる。

「死ぬっ…のかな…ボクっ…」

由雉が誰にともなく問いかけるように、かすかな声で呟いた。

「ふぅっ」

血の溜りの前に立った緋鬼が、その場で足を止める。

「こんだけ血を流せば、放っておいても死にそうだがっ…」

大量の血液を流し、もう指一本動かさない由雉を見下ろして、緋鬼が少し眉をひそめる。

「まっ、一応なっ」

ゆっくりと振り上げられる、緋鬼の鬼爪。

「……っ」

振り下ろされる鬼爪に、由雉は力なく、その瞳を閉じた。

第９５章　血戦　☆３

――ずっと、欲しいものがあった。

小さい頃に、自分の群れからハグれて、気付けば、たった一人だった。

「お父さんっ…お母さんっ…どこっ…？」

周りには、誰もいなかった。探そうにも、顔も覚えていない。どこへ行けばいいのかもわからない。

「ボクっ…どうすればいいのっ…？」

問いかけても、誰も答えを返してくれない。ただ、寂しくて、ただ、孤独だった。

「誰っ？あの子っ」

「ほらっ、この前入ってきたキジの子よっ！」

「ああぁ～っ、あの子がぁっ？」

「ハグれたからって、こっちの群れに入れてあげるなんてっ、鳥長も人が、というかトリがいいわよねぇ～っ」

「入れてあげたところで、キジがコウノトリになるはずもないのにねぇっ」

「……。」

同じような姿をした鳥の群れを見つけて、ボクはそれに付いていった。その群れは、幸せを運ぶコウノトリたちの群れで、ハグれたボクを迎え入れてはくれたけど、受け入れてはくれなかった。

「おぉ〜いっ！あっちに遊びに行こうぜぇっ！」
「ああっ！」

楽しい笑顔を見せて、駆け合っていく仲間たち。

「家に帰ろっ！お母さんっ！」
「ええ、そうねっ」

町に着けば、皆、家族と一緒に、自分の家へ帰る。

「……。」

群れに入ったのに、ボクはさらに孤独になった。

ずっと、欲しいものがあった。

一緒に帰れる、家。手を繋いで帰れる、家族。
笑い合える、仲間。どんな時でも一緒に居られる、友達。
みんなが当たり前に持っているもの。

ずっと、それだけが欲しかった。

「お帰りぃっ！マイソンっ！！愛しのダディだよぉっ！！」
「お帰りなさいっ、由雉っ…」

帰りたい、なぁ…。

「おぉ～いっ！ユッキーっ！」
「行くぞぉっ？由雉っ！」
「とっとと来ないと、置いていきますよっ？キジっ」

もっと一緒に、居たいなぁ…。

そっか。欲しかったもの、もう全部、この手の中にあるんだね。

帰りたい、ミチルさんやハヤテのところに。
一緒に居たい、輝矢、桜時、門貴、大切な仲間ともっと。

死にたくない。

生きたい。

勝ちたい。

勝ちたいっ…！！――

――パァァァァァンっ！

倒れ込んでいる由雉の体から、突如として放たれる強い青色の光に、緋鬼が振り下ろそうとしていた鬼爪を止めた。

「何っ…！？」

「何だっ…！？一体っ…！」

戸惑った表情を見せながら、緋鬼が後方へと飛び、由雉との距離を取って、警戒するように身構える。

「んっ…」

深く目を閉じていた由雉が、近くで輝く強い光を感じ、その瞳をゆっくりと開く。

「これ…はっ…」

顔を上げた由雉のすぐ目の前で、空中に浮かび上がりながら、強い青色の光を放っている、透き通った一枚の羽根。羽根を見た由雉が、ゆっくりとその瞳を開く。

「父さん…のっ…」

――由雉…この羽根はね……――

その羽根を由雉に手渡した時の、ハヤテの言葉が思い出される。

――君の強い想いに呼応して、その想いに合わせ、無限に力を解放する……――

「ボクの…想いっ…」

輝くその羽根へと、由雉がゆっくりと手を伸ばす。

――君の想いが強ければ…この羽根はたった一枚で、虹羽をも超える力を発揮するだろう……――

「……っ」

ハヤテの言葉を思い出し、由雉が強く唇を噛み締める。

――由雉っ…これが君の……――

「これが…ボクのっ…」

伸ばされた由雉の手が、力強くその羽根を握り締める。

「最後の羽根だっ…！！」

「なっ…！」

羽根を掴み、傷だらけの体を立ち上がらせる由雉に、少し離れたところから見ていた緋鬼が、驚いたように目を見開いた。

「あの傷でっ…立ち上がっただとっ…？」
「はぁっ…！はぁっ…！はぁっ…！」
緋鬼が少し動揺した表情を見せる中、由雉はまだ傷口から赤い血を流しながら、乱れた呼吸で苦しげに、大きく肩を揺らす。

「まぁいいっ…もう一度、地面に倒れ込ませてやるっ」
口端を吊り上げた緋鬼が、ゆっくりと右手をあげる。

「“血縫い”っ…！！」
「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」
「んっ…？」
緋鬼が右手を振り上げるも、由雉の足元に大量に流れ落ちた血液は、まったく動く素振りもなく、そのまま溜りとなっているだけであった。動かぬ血液に、緋鬼が眉をひそめる。

「何だっ？」
数回右手を振り上げるが、やはり由雉の血液は動かない。
「何かしやがったのかっ？あのクソドリっ…いやっ、そんな素振りはっ…」
由雉を見つめながら、緋鬼が考えを巡らせる。

「クソドリの血液が、俺の操作を拒んでやがるってぇのかっ…？」
思いつく可能性に、緋鬼の表情が曇る。

「ハっ！超まさかなっ」
自分自身の考えを、笑い飛ばす緋鬼。

「まぁいいっ、あいつの血が使えねぇっつーんならっ…！」
そう言って緋鬼が、勢いよく両手の鬼爪を振り上げる。

――ブシュっ…！

緋鬼自身の体に勢いよく突き刺さる、緋鬼の鬼爪。

「俺自身の血をっ、使うまでだぁっ！！」

自らつけた傷から大量の血液を溢れ出させ、緋鬼が大きく両手を広げて笑う。流れたばかりの緋鬼の血が凝固し、無数の血の刃を形成していく。

「ハッハッハッハぁぁっ！！」

「……。」

高々と笑いあげる緋鬼を見つめながら、そっと目を細める由雉。

「強い…想い、かっ…」

由雉が右手に持った最後の羽根を、ゆっくりと持ち上げ、顔の前へと持っていく。

――死んだ奴は、私が殺しますっ――

――いつも通り戦って…いつも通り、勝ってきなさいっ！――

「……わかってるよっ…輝矢っ…」

思い出される輝矢の言葉に、由雉はそっと口元を緩め、柔らかな笑みを浮かべる。

「ボクは…」

由雉が瞳を鋭くし、羽根を握る手に力を込める。

「あいつに勝つっ…！！」

――パァァァァンっ！

由雉の強い想いに呼応し、最後の羽根は、さらに強い青色の光を放った。

「ハハハハハっ！！！超“血風陣”っ！！」

大声で笑う緋鬼が、今までで一番多い数の血の刃を、一斉に由雉へと向ける。

「……っ」

迫り来る血の刃を見つめ、由雉が素早く羽根を構えた。

「“終翼”っ…」

――君達の未来に希望が満ち溢れることを願って……――

思い出される、父の言葉。

――その羽根の名はっ……――

「……っ！」

由雉が勢いよく、顔を上げる。

「“望羽（ぼうは）”っ！！」

青く光り輝くその希望の羽根を、由雉は向かってくる血の刃へ向けて、強く投げ放った。

――パァァァーンっ！！

「何いぃっ！？」

望羽が放つ強い光を浴びて、緋鬼の血の刃が、次々と砕け散っていく。

「馬鹿なっ…！俺の血がっ…！！」

大きく目を見開き、驚きの表情を見せる緋鬼。

「俺の血がっ…！白鬼一族である俺がっ…！！」

迫り来る血の刃を粉砕して、望羽はどんどんと前へ突き進んでいく。

「脆弱な人間如きに負けるはずっ…！！」

すべての血の刃を砕き、緋鬼の元へと辿り着く望羽。

「ううぅっ…！！」

目の前に迫る望羽に、緋鬼の表情が凍りついた。

――バァァァァーンっ！

望羽が緋鬼の左胸へと突き刺さり、緋鬼が激しい叫び声をあげる。

「うあああああああっ！！」

「こんなっ…！超こんなぁぁっ…！！」

真っ赤な血を流すことなく、青白い光の中に包まれて、崩れ落ちていく自らの体に、天を仰ぐように叫び続ける緋鬼。

「クッソぉぉぉぉっ！！」

――パァァァァンっ！

青い光が一瞬、さらに強く輝き、爆発するように弾け飛ぶと、最後の叫び声を残して、その光とともに、緋鬼は消えていった。

「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」

乱した呼吸を、肩を揺らして整えながら、緋鬼の消えた辺りを見つめる由雉。背中から生えた翼は消え、伸びていた髪も元に戻り、由雉は人獣化した姿から、元の人間の姿へと戻っていった。

「……っ」

静かになった戦場に一人立ち、由雉が薄っすらと笑みを浮かべる。

「これで…いいよね…輝矢っ…」

小さな囁きと共に、由雉が背中から、地面へと倒れ込んでいく。

「……。」

地面に倒れ込んだ由雉は、そっとその瞳を閉じた。

中央塔・右翼。由雉ｖｓ緋鬼。勝者・由雉。

第９５章　血戦　☆４

中央塔・左翼。門貴ｖｓ蒼鬼。

「“鬼爪・天回”っ…！」

深い霧の中で、前方に立つ人獣化した門貴へ向けて、蒼鬼が十本の鬼爪を放つ。

「如意棒、第一の舞っ…」

向かってくる鬼爪に、迷うことなく如意棒を構える門貴。

「“空”っ…！！」

門貴の振り下ろした如意棒から強い風の塊が放たれ、門貴へと向かって来ていた鬼爪すべてを、霧の遥かへ吹き飛ばした。

「完全に私の攻撃が見えている…」

その門貴の一連の動作を見て、蒼鬼が眉をひそめる。

「それ程のものなのか…人獣化というのは…」

人とは明らかに異なる姿を見せた門貴の全身を、ゆっくりと見回しながら、少し考え込むような表情を見せる門貴。確かに獣に近い五感を手に入れれば、この霧の中でも攻撃を見切ることは可能となってくる。

「しかしもっと霧を濃くすれば、もう一度、視覚を封じることもっ…」

「なぁっ」

「……っ？」

考えを巡らせていた蒼鬼が、聞こえてくる門貴の声に顔を上げる。

「俺なぁっ、こういう殺風景な場所で戦うのって、好きちゃうねぇ～んっ」

門貴が軽い口調で、蒼鬼へと話しかける。

「だからぁ、消してもて、ええっ？」

「はっ…？」

蒼鬼をまっすぐに見つめて問いかける門貴に、蒼鬼が戸惑うように首を傾げる。

「消すとは、何のっ…」

「コっ、レっ」

「……っ」

周囲を漂う霧を指差し、明るく微笑む門貴に、蒼鬼が顔をしかめた。

「如意棒、第二の舞っ…」

蒼鬼が答えるその前に、門貴が素早く如意棒を振り上げる。

「“浄”っ…！！」

如意棒の先が、勢いよく地面へと突き刺さる。

――バァァァァーンっ！

「何っ…！？」

門貴が如意棒を突き刺した地点から、一斉に、広範囲で突き上げる、強い竜巻のような風。その風に巻き上げられるようにして、蒼鬼の形成した霧が徐々に薄くなっていく。

「私の霧をっ…うっ…！」
蒼鬼が動揺した顔を見せていたその時、蒼鬼のすぐ足元からも風が突き上げ、蒼鬼の頬を斬り裂いた。蒼鬼の白い肌から、赤い血が流れ落ちた。

「風の威力そのものが上がっとうなぁ」
如意棒を握る右手を見つめながら、門貴が、自分自身の力を分析するように呟く。
「これも人獣化の影響かっ…」

――ミシっ……

「つっ…」
音を立てて軋む体に、門貴が少し顔を歪める。

――あんまり人獣化してるとぉ、死ぬよぉ？――

思い出される、太狼の言葉。

「これが代償っ…」
体中に散在するように走る痛みを感じながら、険しい表情を見せる門貴。
「あんましっ…手こずっとう時間はないなっ…」
門貴が如意棒を握る手に、さらに力を込めた。

「血っ…」
流れる血を指ですくい、その血のついた指を見ながら、そっと目を細める蒼鬼。

「血…」
「んんっ？」
自分の血を見つめ、茫然と呟く蒼鬼の姿に、門貴が顔をしかめる。
「私が…血を…」
「何やぁ～？」
軽く腕を組み、大きく首を傾ける門貴。

「まさかぁっ、“よくも私のキレイな顔を傷物にしてくれたねぇ”とかって言う気じゃっ…」
「私は、そんな愚かなことは言わないさ」
「あっ、そうっ？」
すぐさま否定する蒼鬼に、門貴が少し安心したように笑みを浮かべる。

「ただっ…」
「へっ？」
「よくも私の美しい頬っぺたに傷をつけてくれたねぇっ！！」
「あんま変わらんやんっ！！」
強く言い放つ蒼鬼のその言葉に、思わずショックを受ける門貴。

「しかも頬っぺた限定てっ…」
「もう許さないよっ…おサルくんっ…」
「……っ」
そう言って両手を振り上げる蒼鬼に、呆れた表情を見せていた門貴が、その表情を引き締め、警戒するようにそっと身構える。

「“蒸発”っ…」
「へっ…？」

蒼鬼が両手を振り上げると、蒼鬼の体を厚い蒸気が包み込み、どんどんと蒼鬼の体を覆い尽くしていく。見えなくなっていく蒼鬼の体に、思わず目を丸くする門貴。

「何やぁっ？」

「今度は、貴方の目が見えなくなるのではないっ…」

戸惑う門貴に微笑む蒼鬼の体が、蒸気の中へと消えていく。

「私の体が見えなくなるのだっ！」

「なっ…！」

蒼鬼を包んでいた蒸気が空中へと飛散すると、蒸気に包まれていたはずの蒼鬼が、その場から姿を消した。

「どこにっ…！」

周囲を見回し、蒼鬼の姿を探す門貴。

「おらへんっ…？」

だが、周囲すべての方向を見渡しても、どこにも蒼鬼の姿は見当たらなかった。

＜当然だ…＞

「……っ」

どこからか聞こえてくる蒼鬼の声に、門貴が眉をひそめ、身構える。

＜今の私は空中に混じる水蒸気と同じ状態…人間の目で、この姿を捉えることは不可能っ…＞

「水蒸気とっ…？」

蒼鬼の言葉を繰り返しながら、門貴がさらに表情を曇らせる。確かに、蒼鬼の声はすぐ近くから聞こえてきているというのに、どこをどう見渡しても、蒼鬼の姿を捉えることは出来なかった。

「目で見えへんのやったら…」
＜ちなみに水蒸気は無味無臭だよっ＞
「うっ…」
鼻を突き上げ、臭いを辿ろうとした門貴が、すかさず聞こえてくる蒼鬼の声に、思わず顔をしかめる。

「完全シャットアウトかいなっ…」
しみじみと呟き、門貴が眉をひそめる。
「いわゆる透明人間みたいなもんかぁっ…？」
＜少し違うが…まぁ頭の悪い貴方には、そんなところと理解しておいてもらおう…＞
「さっきまで散々、頭イイ言うてたくせにっ…」
聞こえてくる蒼鬼の声に、門貴は特に焦った様子は見せず、ただその言葉に引っ掛かり、顔をしかめた。

＜前言撤回だ…貴方は実に頭が悪い…＞
低く、重く、響き渡ってくる蒼鬼の声。

＜この私に…傷をつけてしまったのだからっ…！＞
「うっ…！！」
蒼鬼の声がより強く響いたその瞬間、突如、門貴の肩から腹部にかけてが激しく斬り裂かれ、胸部から勢いよく赤い血が飛び散った。

「なっ…！？」
血の流れる胸を押さえながらも、門貴が驚いた表情を見せる。

＜どうだ…？刃も見えずに斬り裂かれる、先程と同じこの状況っ…＞
聞こえてくる蒼鬼の声が、どこか楽しげに踊る。
＜先程と同じように、“獣の感覚”とやらで乗り切って見せたらど

うだっ…！？＞
「うぐっ…！！」
今度は背中を激しく斬り裂かれ、門貴の表情が歪む。
「かはっ…！」
斬り裂かれた体に、口からも血が流れ出る。
＜フハハハハハっ…！！無様な姿だねっ…！！おサルくんっ！！＞
傷だらけの門貴が一人立つ戦場に、響き渡る蒼鬼の笑い声。
＜これでっ…！終わりだぁっ…！！＞
「クっ…！」
どこからか聞こえてくる声に、門貴が瞳を鋭くし、如意棒を構える。
「如意棒、第三の舞っ…！」
誰もいない場所へ向け、勢いよく如意棒を突き出す門貴。
「“戒”っ…！！」
＜なっ…！？＞
如意棒から放たれた門貴の強い風に、焦ったような声が漏れてくる。
――バァァァァァーンっ！
「うあああああああっ！」
風が炸裂したらしき衝撃音がすると、誰もいなかったはずのその場所から、弾き出されるようにして、風に全身を斬り裂かれた蒼鬼が突然、姿を見せて、その場に倒れ込んだ。

「うっ…うぅ…」
倒れ込んだ蒼鬼が、すぐさま体を起こす。
「……血っ…」
体を起こした蒼鬼が、門貴の風に斬り裂かれた腕や足、全身から流れる自分の血に気づき、大きく目を見開く。
「私の…血っ…」
蒼鬼の声が、かすかに震える。
「何故だっ…!?」
起き上がった蒼鬼が、勢いよく門貴の方を振り向く。
「蒸発した私は、いくら発達した視覚や嗅覚でも、捉えることは不可能なはずっ…!!」
蒼鬼が大きく目を見開き、物凄い剣幕で問いかけを続ける。
「何故、私の居る場所がわかったっ…!?」
「へっ?」
その蒼鬼の勢いに少し押され、門貴が少し困ったように目を丸くする。
「んん〜っ」
首を捻り、深く考え込む門貴。
「獣の勘っ?」
「……っ!!」
軽く答える門貴に、衝撃が走ったかのように大きく目を見開く蒼鬼。

「……。」
「あっ、今のちょっと頭悪そうな答えやったかなぁ？」
深く俯き、黙りこむ蒼鬼に、門貴が少し焦ったように頭を掻く。

「……そうか…」
「へっ？納得したんっ？」
「よくわかった…」
落ち着いた口調でゆっくりと頷きながら、蒼鬼がその場で立ち上がる。

「そうかそうかぁ～っ、やぁ～っぱ俺の言葉ていうのは、そんじょそこらにはない重みがっ…！」
「貴方と言葉を交わすことは、無駄であるということが…」
「へっ？」
得意げに話していた門貴が、蒼鬼の言葉に固まる。

「……っ」

――パァァァァンっ！

「何っ…！？」
蒼鬼の体から放たれる強い白色の光に、門貴が険しい表情を見せる。

「そう…」
白い光に包まれながら、静かな声を漏らす蒼鬼。

「元々…言葉というものなど、必要はないのだからっ…」
「うっ…！」
光に包まれた蒼鬼の姿を見て、門貴が思わず顔をしかめる。

「我ら、鬼にはっ…」

天へと突き上げる二本の金色の角は、太く長くなり、白目のなくなった赤い瞳は、獲物を狙うかのように鋭く輝く。鋭くなった牙と爪、伸びた蒼色の髪、それは、先程までの蒼鬼の姿とは、明らかに異なっていた。

「鬼化っ…」

そう呟き、門貴が厳しい表情を見せる。

「言葉など…脆弱な人間共の、ただの命乞いの道具っ…」

蒼鬼が眼球だけとなったその赤い瞳を、さらに冷たく光らせる。

「乞いる意味の無い鬼の戦いには、無用の産物っ…！」

そう叫び、蒼鬼が右手を門貴へと向ける。

「“蒸熱波”っ…！！」

「うっ…！」

門貴へ向けて放たれる、巨大な蒸気の塊。門貴が対処に悩む時間すらも与えず、蒸気は物凄い速度で門貴へと接近し、そして直撃した。

「うがあああああっ！！」

蒸気を喰らった門貴が、後方へと勢いよく吹き飛ばされる。

「うっ…！うぅっ…」

背中から地面へと落ち、先程斬り裂かれた傷が擦ったこともあって、門貴が痛みに顔をしかめる。

「痛熱っ…」

素直な思いが、言葉となって零れ落ちる。

「あっちも姿変わったら、力も上がるみたいやなぁっ」

しかめた表情のまま、ゆっくりと起き上がる門貴。

「さっきとは威力が段違いやっ…」

目の前に立つ鬼化した蒼鬼を見つめ、門貴が険しい表情を見せる。

「どないしようか…」

「私はもう、貴方に言葉を発する時間すら与えない…」

「へっ？」

「“鬼爪・天回”っ…！」

「……っ！」

首を捻る門貴を待つことなく、蒼鬼がさらに鋭くなった鬼爪を十本、一気に放つ。

「クっ…！って、あれっ？」

身構えた門貴であったが、鬼爪が向かったのは、門貴より遥か上方の空の上であった。空の上で散らばっていく鬼爪を見て、門貴が目を丸くする。

「何やぁ～？ハズしたんかぁ？」

「まさかっ」

門貴の言葉に、蒼鬼がそっと笑みを零す。

「“熱蒸線”っ」

――パァァァァァンっ！

「なっ…！」

空に散った十本の鬼爪から、門貴へ向けて一斉に、熱い蒸気の光線のようなものが放たれる。

「如意棒、第四の舞っ…！」

向かってくる熱蒸線へ向け、その瞳を鋭くし、如意棒を構える門貴。

「“嵐”っ！！」

その名の通り、嵐のような風の塊が如意棒から放たれ、周囲の何もかもを巻き込んで、鬼爪から放たれた熱蒸線へと向かっていく。

「呑み込まれろっ…！」

「甘いっ…」

叫ぶ門貴に対し、蒼鬼はどこか楽しげに口端を吊り上げる。

「うっ…！！」

二つの力のぶつかり合いを見ていた門貴が、驚いた様子で大きく目を見開いた。

「俺の風をっ…突き抜けるっ…！？」

放たれたすべての熱蒸線が、門貴の風に呑み込まれることなく、その向きすらも変えずにまっすぐ、門貴のもとへと突っ込んでくる。

「うっ…！うあああああっ！！」

十本の熱蒸線がすべて、門貴の体を貫き、門貴の赤い血が、再び周囲に舞った。

「グっ…！」
地面に如意棒を先を突き刺し、それを支えとして、何とかその場に踏み止まる門貴。

「俺の…風がっ…」
必死に踏み止まりながら、門貴が険しい表情を見せる。

「人獣化で威力が上がっとうはずやのにっ…」
「これが力の差だ…」
立っていることもギリギリな様子の門貴の元へ、ゆっくりと歩み寄ってくる蒼鬼。その間に空へと飛んでいた鬼爪が、蒼鬼の指先へと戻って来る。

「クっ…！」
すぐ近くの距離で足を止める蒼鬼を、門貴が睨み上げるように見つめる。

「貴方と私のねっ…」
「……っ」
冷たく微笑む蒼鬼に、顔をしかめる門貴。

「俺と会話するのは、やめたんとちゃうんかっ？」
門貴がかすかに口元を緩め、蒼鬼に挑戦的な笑みを送る。

「無用なんやろっ？そんな、自己満足でしかない言葉なんてっ…」
「……。」
門貴のその言葉に、蒼鬼が一気に浮かべていた笑みを消す。

「まだ無駄口を叩ける気力があるか…」
蒼鬼がゆっくりと、右手の人差し指を、門貴の左足へと向ける。
「“熱蒸線”…」
人差し指の鬼爪から、放たれる鋭い熱蒸線。
「ううぅっ…！！」
熱蒸線が、勢いよく門貴の左足を貫いた。
「うあああああああっ！！」
門貴は先程、右足を鬼爪で激しく斬り裂かれており、今度は左足を傷を負わされて、如意棒を支えにしても立っていられなくなり、その場に力なく倒れ込んだ。
「うっ…うぅ…」
うつ伏せに倒れた門貴が、すぐ前の地面へ、弱々しい声を漏らす。
「醜い血っ…」
倒れた門貴の体中の傷から流れる赤い血を見て、蒼鬼が不快そうに顔を歪める。
「無様な姿だっ…」
蒼鬼がしみじみと言い放ち、否定するように大きく首を横に振る。
「戦いで醜い血を流すなどっ…我ら、誇り高き鬼には有り得ぬことっ」
「……っ」
その蒼鬼の言葉に、門貴がかすかに表情を動かす。

「誇…りっ…」
かすれ切った小さな声で、門貴が蒼鬼の言葉を繰り返す。

「その醜い存在、すぐに消してやろうっ」
そう言って蒼鬼が、目の前で倒れ込んだままの門貴へと、勢いよく鬼爪を振り上げた。

「さらばだっ…！」
「クっ…！」
蒼鬼が鬼爪を振り下ろしたその時、門貴が鋭い瞳を見せ、力なく伸びていた右手ですぐさま、如意棒を掴んだ。

「如意棒、第五の舞っ…！」
「何っ…！？」
倒れたまま、如意棒だけを振り上げる門貴に、鬼爪を振り下ろそうとしていた蒼鬼が、焦った表情を見せ、鬼爪を止める。

「……“全”っ…！！」

――バァァァァーンっ！

振り上げられた如意棒から、目の前の蒼鬼へ向け、真空波のような風の塊が放たれる。今までで一番強く吹き荒れる風は、蒼鬼に避ける暇すらも与えず、あっという間に蒼鬼の体を包み込んだ。

「うがあああああああっ！！」
風に包まれ、激しい叫び声をあげる蒼鬼。

「よっしゃっ！直げっ…！」
「……っ」
「うっ…！！」
嬉しそうな笑顔で顔を上げた門貴が、風の中に掻き消えていく蒼鬼の体を見て、大きく目を見開く。

「幻っ…影…」
「その通りっ」
「……っ！」
蒼鬼の声がする横方を、門貴が首だけを動かして、必死に振り返る。

「うぁっ…」
「残念、だったなっ…」
門貴が振り返った先に立っているのは、まるで無傷の蒼鬼であった。攻撃がかわされ、力が抜けたのか、門貴が勢いよく肩を落とす。

「最後の一撃の為に力を蓄え…私がトドメを刺すその瞬間を狙って攻撃っ…」
蒼鬼がゆっくりと足を動かし、再び門貴の正面へと立つ。

「読めていたよ、始めからっ」
正面へと立った蒼鬼が、高々と門貴を見下ろす。

「所詮は、頭の悪いサルの浅知恵だねっ」
「うっ…！」
門貴へ向け、再び人差し指を突き出す蒼鬼。

「“熱蒸線”っ」

「うっ…！うあああああああっ！！」
蒼鬼の放った熱蒸線が、門貴の右腕を貫き、門貴の右手から如意棒が零れ落ちた。

「うぅっ…！うっ…！」
四肢すべてを激しく傷つけられた門貴は、もう体を少しも動かすことが出来ずに、気を失いそうなほどに走る痛みに、ただ悲痛な声を漏らした。

「ううぅ…」
「ああ、醜い姿が、さらに醜くなってしまった…」
苦しむ門貴を見て、どこかうんざりした表情を見せる蒼鬼。

「私は緋鬼とは違って、血をここぞとばかりに散らして殺すことは、好みとしてなくてな…」
蒼鬼が落ち着いた口調で、穏やかに門貴に話しかける。

「そうだっ、最期は、安らかに逝かせてやろうっ…」
何かを思いついた様子で笑みを浮かべた蒼鬼が、倒れている門貴へ向け、左手を掲げた。

「優しい幻影の中でっ…」
門貴へと掲げた蒼鬼の左手が、淡い青色の光を帯びる。

「“夢蒸”っ…」
「……っ」

全身を包み込む深い霧に、門貴はそっと、その瞳を閉じた。

第95章　血戦　☆5

――……

「あれっ…？」

門貴が次に目を開くと、体中を包み込んでいたはずの霧は、そこには存在しなかった。

「俺っ…んっ？痛くないっ？」

戸惑いの表情を見せていた門貴が、ふと痛みの走らぬ体に気づき、自分の全身を見回した。

「傷が…ないっ…」

手や足、隅から隅まで見回す門貴であったが、そこには一つの傷もなく、蒼鬼にあれ程までに負わされた傷は、すべてきれいになくなっていた。

「どういうことやぁ～？あいつもおらんしっ、それにここはっ…」

門貴が見渡したそこは、鬼国跡地の戦場とは明らかに異なっていた。緑に溢れた、自然豊かな山。その山の向こうには、穏やかな海も見える。

「……っ」

門貴が振り向くと、そこには一本の大きな柿の木が立っていた。

「ここはっ…」

その柿の木を見つめ、門貴がそっと目を細める。

「柿之木山っ…」
「そうやでっ」
「……っ！」
背後から聞こえてくる、その聞き覚えのある優しい声に、大きく目を見開く門貴。

「ここは、柿之木山っ…」
「……っ」
門貴が恐る恐る、その声のする方を振り返る。

「私とアンタが毎日、二人で戦った場所っ…」
「一花っ…」

そこには、真っ白な着物を着た、肩までほどの赤毛に、優しい黒目をした少女が立っていた。それは、元・蟹長として何度も門貴と戦った、二花の姉・一花であった。

「ほん…まにっ…」
門貴は茫然とした表情で、自然と一花に歩み寄り、その手をゆっくりと一花の頬へ伸ばした。

「ほんまに…一花っ…」
そこに一花がいることを確かめるように、門貴が一花の頬に触れる。

「うんっ…」
一花はゆっくりと手を上げ、頬に触れる門貴の手を握り締め、笑顔で頷いた。

「ほんまに私やでっ…門貴っ…」

「……っ」
大きな笑顔で微笑む一花を見て、門貴がどこか泣きそうに目を細める。
――何言っとんやっ？門貴っ！私やでっ！？――
そこに居る一花は、砂漠でシンドバットが見せた偽物とは違う、本物の一花の穏やかな空気を持っていた。

「一花っ…」
頬に触れていた手の向きを変え、握られていた一花を手を、強く握り返す門貴。

「ってことは、ほんまに死んでもうたんかぁ、俺っ…」
一花の手を握り締めながら、門貴が少し落ち込むように肩を落とす。

「まぁでもええかなっ…」
俯いていた門貴が、ゆっくりと顔を上げる。

「もう一度、お前に会えたしっ…」
「門貴っ…」
笑みを浮かべる門貴を見て、一花もそっと微笑む。

「もうええよ…門貴っ…」
「えっ…？」
一花が門貴と繋いでいない方の手を伸ばし、顔を上げたばかりの門貴の頬に触れる。

「もうええからっ…私と一緒に、ゆっくり休もうっ…？」
「……っ」
頬を撫でる一花の手の温もりと、差し出されたその穏やかな言葉に、体中すべての力が抜けていくような気がして、門貴はゆっくりと目を細めた。

「一花…俺っ…」
「って…」
門貴がポツリと声を漏らしたその瞬間、一花の表情から笑みが消えた。

「んなぬるいことっ、私が言うと思たかっ！！ボケぇぇっ！！」
「ぐはあああああああっ！！」
頬に触れていたはずの一花の手が、いきなり拳骨へと変わり、目を閉じようとしていた門貴を、勢いよく殴り飛ばした。

「んなっ…！んななっ…！何っ…！？」
吹き飛ばされた門貴が、柿の木の根元に座り込んだまま、混乱したように一花を見る。

「一花っ…？」
「そうやっ！一花やっ！！」
指を差して問いかける門貴に、一花が堂々と胸を張る。

「私がっ、んなしおらしいことっ、言う女なわけないやろうっ！！」
「……。」
強く言い放つ一花に、しばらく思考を停止するように、考え込む門貴。

「……せやったわっ…」
しみじみと頷いた門貴が、どこか落ち込むように、がっくりと肩を落とす。

「どうせ、あの世逝くんやったら…しおらし一花でもうちょい、夢見させてくれても良かったのにっ…」
「悪かったなぁっ！」
小言のようにひっそりと呟く門貴に、一花が勢いよく怒鳴り返す。

「まっ、これが一花やけどなっ」
「……っ」
どこか安心したような笑みを浮かべる門貴に、一花が少し驚いたような顔を見せた。

「……門貴っ…」
真剣な表情を見せた一花が、座り込んだままの門貴のもとへと歩み寄っていく。

「アンタっ、ほんまにこのままでいいんっ？」
「へっ…？」
目の前に立ち、静かに問いかける一花を、門貴が少し間の抜けた表情で見上げる。

「ほんまにこのまま、私と2人であの世逝って、それでええのっ？」
「それはっ…」
「……。」
一花からの問いかけに、門貴が少し気まずそうに俯く。そんな門貴を見て、一花はそっと目を細めた。

「アンタはまだ、あいつに勝ってない…勝とうと、最後の足掻きもしてない…それにっ…」
門貴の前でしゃがみ込んだ一花が、まっすぐに門貴を見つめる。

「約束も…あるんやろっ…？」
「……っ」
一花の言葉に、ハッとした表情となる門貴。

――また四人で、旅をしましょう、必ずっ……――

思い出される、輝矢の言葉。

――約束です……――

「……。」
あの時、突き立てた小指を、門貴がじっくりと見つめる。

「けどっ…」
門貴が、突き出すように言葉を発する。

「けどっ、俺はもうボロボロでっ…あいつはほとんど無傷やのに、俺はこれ以上ないってくらい血だらけでっ…」

――無様な姿だっ……――

遥か上から見下ろすような、蒼鬼の視線。

「俺にはっ…もうっ…」
「なぁっ、門貴っ」
「……っ？」
門貴の手を取る一花に、俯いていた門貴が、ゆっくりと顔を上げる。

「あいつの言う戦いと、私らの戦いって、違うはずやでっ…？」
「えっ…？」
目の前にある一花の笑顔に、戸惑いの表情で首を傾げる門貴。

「あいつの言う誇りと、私らの誇りは違うはずやっ…」
「誇…りっ…」
門貴がゆっくりと、一花の言葉を繰り返す。

「よぉ思い出して、門貴っ」
一花が門貴の手を握る手に、さらに力を込める。

「私らのっ、私らだけの、誇りをっ…！」
「俺ら…だけのっ…」
噛み締めるように一花の言葉を繰り返すと、諦めかけていた門貴の表情に、再び希望の光が差し込み始めた。

「頭のええのとこなんてっ、見せんでええよっ」
一花がさらに笑みを大きくし、門貴へ、その満面の笑みを向ける。

「どうせ見せるんならっ、根性見せぇやっ！門貴っ！」
「うわっ…！」
握り締めた一花の手に引っ張られるようにして、門貴がその場から立ち上がる。

「そんなアンタが好きやったんやでっ？私はっ！」
「……っ」
晴れやかに笑う一花に、大きく目を見開く門貴。

「……ありがとうなっ…」
礼を呟いた門貴が、穏やかな笑みを零す。

「俺っ、戻るわっ！」
「うんっ！」
決意したように言い放つ門貴に、一花がどこか満足げに頷く。

「またっ…会えるかっ？」
「またしょーもないことに挫けて来よったら、叩き返したるわっ！」
「ハハっ！おちおち死ににも来られんなぁっ！」
口を尖らせ、言い放つ一花に、門貴が困ったように、だが嬉しそうな笑みを浮かべる。

「今度、出逢う時もっ…」
「笑顔でっ…」

微笑み合った二人の手が、ゆっくりと離れる。

――パァァァァンっ！

白い光に包まれた一花が、柿之木山の、二本目の柿の木へと姿を変えていく。

「……っ」

その光景を目に焼きつけ、門貴はゆっくりと瞳を閉じた。

ありがとう…一花……――

――パァァァァーンっ！

強く輝く赤色の光が、青い空へと勢いよく突き上げられる。

「……っ」

その光をから遠ざかるように後方へと飛び、光をまっすぐに見つめて、目を細める蒼鬼。

「驚いたな…」
蒼鬼が、どこか感心したように笑みを浮かべる。
「私の幻影を勝手に作り変えた上っ、そこから目覚めるなんてっ…」
「作り変えっ…？」
微笑んだ蒼鬼の視線の先で、ゆっくりと地面から立ち上がるのは、強い赤い光を纏った門貴。
「何やぁっ、作り変えられたんかぁ…」
零れ落ちた如意棒を、もう一度握り締めながら、門貴が少し残念そうに呟く。
「ほんなら、もうちょいロマンチックな設定にしたら良かったなぁっ…」
「……。」
ゆっくりと顔を上げ、微笑む門貴に、蒼鬼がかすかに眉をひそめる。
「本当に、往生際の悪いおサルくんだっ…」
蒼鬼が少し鬱陶しそうに、前髪を払いのける。
「あのまま眠っていれば…楽に死ねたものをっ…」
「しゃ～ないやろぉ？追い返されてもてんからっ」
困ったように答えながらも、門貴がその瞳を鋭くする。
「“根性見せてこい”ってなぁっ！」
「……っ」
戦いの意志を示すように、もう一度如意棒を構える門貴を見て、蒼鬼はさらに顔をしかめた。

「そんな血だらけの醜い状態で、一体、どんな根性を見せようというのだ…？」
「……。」
試すような蒼鬼の問いかけに、門貴が真剣な表情を見せる。

――よぉ思い出して…門貴……――
――私らの…私らだけの、誇りをっ…！――

「……っ」
一花の言葉を噛み締めるように、門貴は一瞬、深く目を閉じた。

「俺の…」
「……っ？」
低い声を発する門貴に、蒼鬼が少し眉をひそめる。

「俺らの戦いは…傷を負いながらも、血を流しながらも、それでも諦めずに最後まで戦う、根性の戦いっ…」
瞳を開いた門貴が、左手を胸に当て、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「流した血はっ…これまで必死に戦ってきた誇りっ…」
「誇り、だとっ…？」
「ああっ」
聞き返した蒼鬼に、門貴が大きく頷く。

「どんっなに血を流してもっ、どんっなにグサボロになっても、それでも戦うっ…」

――行けぇぇぇっ！蟹軍っ！！――
――猿軍っ！！誇りを見せつけろぉっ！！――

「それがっ…ずっと受け継がれてきた、俺らの戦いっ…」
胸に当てた手を、門貴が力一杯、握り締める。

「だからっ…！」
門貴が勢いよく、顔を上げる。

「流したこの血はっ、俺の誇りやっ！！」
「……っ」
気迫さえ感じる門貴の叫びを聞き、蒼鬼がその表情を曇らせる。

「流した血が誇りだとっ…？」
煩わしそうな顔を見せながら、門貴の言葉を繰り返す蒼鬼。

「馬鹿げたことをっ…！やはり頭の悪いサルだなっ！」
「……。」
門貴の言葉をすぐさま笑い飛ばす蒼鬼を、門貴は顔をしかめることなく、冷静に見つめる。

「無傷で敵を圧倒するっ、完璧な勝利こそが最高の戦いっ…！」
蒼鬼が大きく両手を広げる。

「これ程の戦闘を終えても無傷のこの体こそがっ、我が誇りだっ…！！」

両手を広げ、胸を張り、その血の一滴も流れていない体を誇張するかのように、堂々と言い放つ蒼鬼。

「それがお前の誇りかっ」

そんな蒼鬼を見て、門貴が納得するように頷く。

「ええでぇっ！」

勢いよく、如意棒を振り上げる門貴。

「俺の誇りとお前の誇りっ、どっちが強いか、決めようやぁっ！！」

振り上げた如意棒を、門貴の体全体を、地面から巻き起こるように強い風が包んでいく。

「望むところだっ…！！」

門貴の言葉に答えるように叫んだ蒼鬼の体も、分厚い蒸気が包んでいく。

「私の誇りを前にっ、醜い血と共にっ、跡形もなく消え去れっ…！！」

蒼鬼が両手を、門貴へと突き出す。

「“熱蒸乱線”っ！！」

先程、蒼鬼の放った熱蒸線よりも、さらに巨大な熱蒸線が無数、

門貴へと一気に乱射される。

「後一撃っ…頼むでっ…」

熱蒸線が差し迫る中、門貴がそっと如意棒に呟きかける。

「如意棒っ！」

門貴が強く叫び、傷だらけの体で、勢いよく如意棒を構える。

「これが俺のっ…」

門貴を包む赤い光が、如意棒へと伝わっていく。

「最後の風やっ！」

光とともに、強さを増していく風。

「如意棒っ、終の舞っ…！」

門貴が構えた如意棒を、力一杯、後方へ引く。

「……“一（いち）”っ…！！」

勢いよく押し出された如意棒から、門貴を包むすべての風を取り込んだ、巨大な風の塊が放出される。

「フハハっ！！そんな脆弱な風などっ、簡単に貫いてっ…！！」

――パアアアアンっ！

「何っ…！？」

門貴の放った風が、蒼鬼の無数の熱蒸線を、次々と弾き返していく。弾かれる自らの技に、驚きの表情を見せる蒼鬼。

「馬鹿なっ…！サルの風如きにっ、私の蒸気がっ…！！」

眼球が飛び出しそうな程に目を見開き、蒼鬼が信じられないといった様子で叫び散らす。

「そんな馬鹿なことっ…！ううぅっ…！！」

叫んでいた蒼鬼へと迫る、巨大な風の塊。

「うっ…！うあっ…！」

避ける場所すらもない程に、大きく広がった風を見上げ、蒼鬼が初めて、圧倒された表情を見せる。

「こっ…こんなっ…！ううぅっ…！！」

迫る風の一部が、蒼鬼の腕を掠め、そこから赤い血が流れた。

「血っ…血っ…！！」

血を見て表情を歪めた蒼鬼の顔に、恐怖の色が灯る。

「ううぅっ…！！」

――バァァァァーーンっ！

「うがあああああああっ！！」

風の一部が蒼鬼へと直撃すると、広がっていたすべての風がそこに凝縮し、蒼鬼へと炸裂した。風に全身を斬り裂かれ、あれ程嫌っていた血を流しながら、蒼鬼が後方へと倒れ込んでいく。

「そんっ…なっ…」

まだどこか目を疑うような表情を見せながら、地面へと倒れ込む蒼鬼。

「はぁっ…！はぁっ…！はぁっ…！」

蒼鬼を見つめながら、息を乱す門貴の体が、人獣化した姿から、元の人間の姿へと戻っていく。

「馬鹿っ…なっ…」

「……っ」

途切れ途切れの声を漏らす蒼鬼に、人の姿へと戻った門貴が耳を傾ける。

「終わりの舞がっ…“一”だとっ…？何と頭の悪い名付けようだっ…」

「終わりは、新しい“始まり”を意味するっ…」

呆れたように言い放つ蒼鬼に、まっすぐな瞳で答える門貴。

「そして、その名もっ…」

――門貴っ……――

「俺の誇りやっ…」

門貴が如意棒を強く握り締め、言葉の通り、誇らしげな笑みを浮かべる。

「馬鹿なっ…」

蒼鬼が門貴の笑みを見た後、空を見上げ、もう一度その言葉を繰り返す。

「我ら鬼の誇りがっ…そんな誇りに負けるはずっ…！」

何かを求めるように、必死に空へと手を伸ばす蒼鬼。

「負けるはずっ…！！」

伸ばされた手の先から一気に、蒼鬼の体が崩れ落ちていく。

「うあああああああっ！」

――パァァァァンっ！

一瞬の、強い白色の光を放って、蒼鬼は完全に、この世から姿を消した。

「……。」

一人残った戦場で、門貴がゆっくりと空を見上げる。

「勝ったでっ…一花っ…」

空を見つめ、柔らかな笑みを浮かべる門貴。

「……っ」

微笑んだ門貴が、そのまま力なく、地面へと倒れ込んでいく。

「はぁっ…」

地面へと背中をつけた門貴は、視界一杯に広がる青い空を見ながら、ホッとするように一息ついた。

「……。」

門貴が傷だらけの左手を空へと掲げ、そっと小指を突き立てる。

「約っ…束…」

突き立てた小指を見つめ、門貴が笑った。

「……っ」

上げられた左手が、力なく地面へと落ちる。

「……。」

落ちた手を少しも動かすことのないまま、門貴は深く、その瞳を閉じた。

中央塔・左翼。門貴ＶＳ蒼鬼。勝者・門貴。

第９６章　哀しき終焉　★１

中央塔・最上階。輝矢ｖｓシルク。

「すべての光が消えた…」

天へと突き上げていた光がすべて途絶えたことを、シルクが大窓から外の景色を見つめ、確認する。残っていた赤と青の光も、ほぼ同時に消え、外から聞こえていた衝撃音も、最後により一層大きな音を残して、すべて収まったのである。

「緋鬼と蒼鬼の反応も消えたけれどっ…」

輝矢には聞こえないように小さく呟き、眉をひそめるシルク。

「さぁ…これで貴女の仲間もっ…」

――パァァァンっ！

「……っ」

シルクが前方の輝矢を振り返ったその瞬間、輝矢とシルクの間の床下から、突き上げるように白い光が現れた。床から出た光は、中央塔の天井をも突き抜けていく。

「……。」

その光をまっすぐに見つめ、少し考えるような表情を見せるシルク。

「そういえば…貴女のお供はもう一匹いたわね…」

中央塔の下方から突き上げる白い光は、恐らく、一階でギンと戦う桜時のものだろう。床下を見つめたシルクが、どこか楽しげに微笑んだ。

「これも…いつ消えるかっ…」

シルクがまるで消えることを待ち望むように、言葉を発する。

「ねぇっ…？月の少っ…」

「仲間のっ…」

「……っ？」

試すような口調で輝矢に問いかけようとしたシルクであったが、膝をつき、ずっと俯いたまま、ただシルクの言葉を聞いていた輝矢が、久々に発したその声に、シルクは言葉を止めた。

「仲間の…声がした…」

まっすぐな瞳で床を見つめ、ゆっくりと言葉を紡ぐ輝矢。

――俺の覚悟だってっ、半端じゃねぇっ！！――

――ボクはっ…あいつに勝つっ！！――

――流したこの血はっ、俺の誇りやっ！！――

「命懸けで戦う、みんなの…声がした…」

輝矢がついていた膝を伸ばし、その場で立ち上がる。

――また四人で旅をしましょうっ、必ずっ――

――返事は、この戦いが終わったら言います――

「約束したのにっ…」

三日月を握る手に、こもる力。

――いつも通り戦って、いつも通り勝ってきなさいっ！――

「そう言ったのにっ…」
輝矢が強く、唇を噛み締める。
「私がっ…！負けるわけにはいかないっ…！！」
――パァァァーンっ！
「……っ」
勢いよく顔を上げた輝矢の、三日月を握る右手から、強い青色の光が放たれた。広間中に広がるその強い光に、シルクが眉をひそめ、少し驚いたような表情を見せる。
「あの…光はっ…」
曇らせた表情で、輝矢の右手から放たれる青い光を見つめるシルク。
「“光力”っ…」
――知玖っ！――
思い出される、一人の女。
「貴女はまだ…私の邪魔をしようというのっ…？」
シルクが誰にともなく、問いかけの言葉を発する。
「トマトっ…」
その女の名を呟き、シルクは少し険しい表情を見せた。

「この…光はっ…」
顔を上げ、改めてシルクと向き合った輝矢も、自分の右手から放たれる、その今まで発したことのない強い光を見つめ、戸惑ったような表情を見せていた。

――光だけは…置いてくからっ…――
――その内わかるさ…小娘っ…――

「……っ」
思い出される言葉に、輝矢がハッとした表情を見せる。

「……ババアっ…」
トマトを呼び、そっと目を細める輝矢。トマトが死の直前に、輝矢の右手を握り締め放った光。その時にトマトの光は受け継がれ、ずっと輝矢の右手に宿っていたのだ。

「……。」
左手を右手の上に乗せ、輝矢がそっと目を伏せる。

「三日月っ…！」
輝矢が大きく目を開き、右手を振り上げ三日月を構えると、右手から放たれている青色の光が三日月へと伝わり、三日月を淡く包み込んだ。

「これがっ…私とトマトの力っ…」
三日月を構え、狙いを定めるように鋭い瞳を見せる輝矢。

「受けてみなさいっ…！」
輝矢が勢いよく、三日月を振り上げる。

「“月光”っ…！！」

振り下ろされた三日月から、青く輝く水の刃が放たれた。

中央塔・一階。桜時ｖｓギン。

「……。」

一階から、中央塔最上階を突き抜け、さらに天まで伸びる白色の光。その光の中心に立つのは、長く伸びた髪の色を桃から白へと変え、耳の先を尖らし、口からは鋭い牙を生やして、獣のように鋭い目つきへと姿を変えた、桜時であった。その指先からも鋭い爪が伸び、服の裾から出た肌は、白い獣毛で覆われていた。

「“人獣化”、ですか…」

桜時の前に立ったギンは、特に驚いた素振りもなく、冷静に姿を変えた桜時を見つめる。

「ウサギくんとの戦いの時に見させてもらいましたよ…獣人の最終形態っ…」

ギンが楽しげに、口元を緩める。

「でもその姿になったところで…君が命力を使えないことに変わりはない…」

「……っ」

ギンのその言葉に、桜時が少し眉をひそめる。

「命力がなければ、ナイトも倒せなかった君が…この僕を倒せるとは到底、思えませんけどねぇっ…」
「……。」
続くギンの言葉に、どこか考え込むような顔を見せる桜時。シルクの力の一部である内兎を、遥かに上回っているかのような発言をするギン。ただの元・狐族の鬼人化人間の力とは思えない。
――生まれ落ちたその日から、ずっと鬼なんですよっ……――
――鬼人の水力は勿論っ…他にも“憶力”など、僕はあらゆる力を使うことが出来るっ……――
そして先程の、ギン自身の言葉。
「……っ」
考えれば考える程、見えなくなる事実に、桜時が気難しい表情を見せた。
「やはり気になりますか…？」
「えっ…？」
ギンに問いかけられ、少し戸惑うように顔を上げる桜時。
「僕の正体っ…」
「……っ」
考えていることをすべて見透かされているようで、桜時は思わず顔をしかめた。
「仕方ありませんねぇっ…」
少し困ったような顔を見せたギンが、軽く肩を落とす。
「君は僕の正体が気になって、戦いに集中出来ないようですしっ…

特別に教えて差しあげますよっ」
ギンがどこか冷たく微笑む。

「僕の正体っ」
「……っ」
微笑むギンのその言葉に、驚きの表情を見せる桜時。桜時はゴクリと息を呑み、次の言葉を待つように、ギンにまっすぐな視線を送る。

「僕は、シルクと同じように、この世界に初めて、“鬼人”と呼ばれるものを生み出した存在っ…」
「シルクっ…？」
今まで“様”付けにしていたシルクを、急に呼び捨てるギンに、桜時が少し眉をひそめる。

「かつて、世界に拒絶され…深海の牢に囚われていたところをっ…シルクに助けられてた…」
「えっ…？」
続くギンの言葉に、桜時の表情が変わる。

「それって…まさかっ…」
どこか信じられないといった表情で、桜時が戸惑いの視線をギンへと送る。

「まさかっ…お前はっ…」
「そうっ…」
少し震えた桜時の声に、ギンがゆっくりと頷く。

「僕の名は牢戸（ロード）っ…」
ギンが自分の左胸に、右手を当てる。

「シルクが愛し、この世界を鬼で満たそうとした、太古の鬼っ…牢戸っ！！」
「……っ！！」

大きく両手を広げるギンに、桜時は衝撃を走らせた。

中央塔付近・中央塔部隊。
「光の消えた三ヵ所に救護班を送るんだっ！」
慌ただしく動く隊員たちに、金汰が大きな声で指示を飛ばす。
「敵がいることが考えられるっ！警護は万全にっ！戦力を偏ることなく、分断しろっ！！」
『はっ！』
金汰の指示に頷きながら、隊員たちが速やかに中央塔の左翼、右翼、そして後方へと散っていく。空へと突き上げた光が途絶え、戦闘音も止んだことから、戦闘が終わったことが予想された。門貴たちの救護へ行くとしても、敵が勝った可能性もある為、厳重な配備で向かわねばならないのだ。

「俺も行くっ！」
「ウチもやっ！」
オトポリ部隊に混ざるようにして、共に駆けていく黒羽や二花たち。
「俺も行こうっ！桃ちゃんっ、イチゴっ、この場を頼むっ！」
「うん～っ」
「はいっ！」

金汰の言葉に、太狼とイチゴがしっかりと頷くと、それを確認した金汰は、皆を率いて、光の消えたその場所へと、急いで駆け出していった。

「……。」

その場に残った太狼が、どこか不安げな表情で、中央塔から突き上げている白色の光を見つめる。

「“人獣化”か…」

「……っ？」

横から聞こえてくる声に、振り返る太狼。

「八房さんっ」

「……。」

太狼が振り向くと、そこには桜時の祖父・里見八房が立っていた。

「お前が教えたのか？桃タロー」

「いえっ…」

真剣な表情で問いかける八房に、太狼はすぐさま首を横に振る。

「他の三人には僕が教えたんですけど…彼だけは自分でっ…」

太狼が浮かない表情を見せながらも、そっと笑みを零す。

「僕でも…トマトさんの指導を受けなきゃ、人獣化は出来なかったんですけどねぇ…」

「そうか…」

そう言って再び白い光を見つめる太狼に、八房は小さく頷き、そっと俯く。

「もう…わしやお前を通り越し…遥か先へと、行ってしまったんじゃな…」

「……っ」
突き上げる白い光を見つめ、どこか遠い瞳を見せる八房に、太狼が少し目を細める。
「……ええっ…」
少しの間を置いた後、太狼は短く頷いた。

『うわあああああっ！！』
「んん～っ？」
後方から聞こえてくる激しいブレーキ音と、何人かの悲鳴のような声に、太狼が不思議そうな顔を見せて、振り返る。

「桜時はっ！？」
「うわっ」
振り返った先に停まっている、戦場とは似つきもしない派手な赤いトラックと、そのトラックの荷台から飛び降りてくる、これまた派手な着物を纏った孔雀の姿に、太狼が思わず嫌そうに声を漏らす。

「孔雀さぁ～んっ」
「んっ？げっ！桃タローっ！」
名を呼ぶ声に振り向き、孔雀が視界に太狼を映すと、あからさまに嫌そうな声をあげる。

「“げっ”ってヒドいなぁ～っ」
「あんたこそ、“うわっ”とか言ったでしょっ？」
拗ねるように言う太狼に言い返しながら、孔雀が太狼の元へと歩み寄って来る。

「でっ、桜時はっ…！んっ？」

「むっ」
太狼の前に立った孔雀が、太狼のすぐ横に立つ八房と目を合わせる。

「出たわねっ！妖怪っ！クソイヌじじいっ！！」
「やる気かぁっ！？四大国のスズメ娘がぁっ！！」
「へぇっ？」
途端にケンカ腰となる孔雀と八房に、太狼が目を丸くする。犬国と雀国といえば、桜時の父・犬孝と母・雲雀のことで、色々と対立していたのである。それに、以前、八房は四大国のことを、ひどく恨んでいた。

「ここで会ったが百年目ぇっ！！」
「成仏せいやぁっ！！クソじじいぃっ！！」
「やっ…八房様っ！！」
『お母様っ！落ち着いてぇ～っ♪』
互いに突進しそうな勢いで向き合う八房を、すぐ傍から駆けつけた犬仁が、孔雀を、同じようにトラックから降りてきた三兄弟がハーモニーを刻みながら、必死に止める。

「また賑やかになっちゃいましたね…」
「ホントっ、もっと静かに見守りたいのになぁ～」
引きつった表情を見せるイチゴの横で、太狼が呆れたように肩を落とす。

「んっ？」
そんな太狼が、もう一人、トラックの荷台から降りてくる人物を見つけ、声を漏らした。

「あっ！」

「……っ？」

太狼と同じように、その人物を見つけた犬仁が、大きな声を出す。

犬仁に止められていた八房は、犬仁の様子が変わったことに気づき、犬仁が見つめるその先へと視線を移した。

「……っ！」

視線を移した八房が、大きく目を見開く。

「んっ？……っ」

『うわっ！』

八房の様子が変わったことに気づいた孔雀が、暴れていた体を止め、止めていた三兄弟の腕を振り払って、後方を振り返る。

「犬孝っ」

「……。」

トラックの荷台から降り、こちらへと歩み寄って来るのは、厳しい表情を見せた犬孝であった。

『……。』

八房と犬孝が、まっすぐに互いを見つめ合う。

――俺はっ…里見犬孝にはなれないっ…！！――

そう言い放ち、犬孝が八房の制止を振り切って、犬国を飛び出して以来の、親子の対面であった。

「父上っ…」

「……っ」

ゆっくりと歩み寄って来る犬孝を見て、八房が少し顔をしかめる。

「やっ…八房様っ！」
犬仁が八房の前へと立ち、前方に立った犬孝との間に入る。
「犬孝様は、十年前から鬼が島の見張りをされていてっ…！以前の鬼が島での戦いの時も、桜時様と我ら七犬の手助けをっ…！」
「良い、犬仁。黙っておれっ」
「……っ」
必死に犬孝をフォローする言葉を並べる犬仁であったが、八房の一言に一蹴され、すぐに言葉を止め、後ろへと下がった。犬仁がいなくなり、八房と犬孝が真正面から向き合う。

「父上…」
八房へ、まっすぐな視線を送る犬孝。

「本当に、申し訳っ…」
「お前と話すことなど、何も無いっ」
「……っ」
謝ろうとした犬孝の言葉を強く遮り、八房が犬孝へと背を向けて、再び中央塔の方を見てしまう。八房に背を向けられ、犬孝はその眉をひそめ、どこか悲しげな表情を見せた。

「父上っ…」
「わしに…」
「……っ？」
八房が発する小さな声に気づき、犬孝が首を傾げる。

「わしに謝る暇があるなら…少しでも多く祈れっ…」
「えっ…？」
八房の言葉に、犬孝が戸惑ったような顔を見せる。

「桜時の、息子の勝利を信じてっ…ここから、見守ってやれっ…」

「……っ」
白い光の放たれる中央塔を見据えながら、言い放つ八房。中央塔では、人獣化をしてまで、桜時が必死に戦っている。その八房の言葉を受け、犬孝は初め、驚きの表情を見せたが、次の瞬間、どこか泣きだしそうに目を細めた。

「はいっ…！」
少し震えた声で、犬孝がしっかりと頷く。

『……っ』
そんな二人のやり取りを見つめ、孔雀や犬仁が、穏やかな笑みを浮かべる。

「ふぅっ」
『ご主人様ぁ～っ！！』
「んっ？」
こちらも安心したように一息ついていた太狼が、聞き覚えのある声に、ゆっくりと顔を上げる。
『ご主人様ぁ～っ！！』
「ヘンゼルっ、グレーテルっ」
大きく手を振りながら、こちらへと駆けてくるのは、桃原家のメイド、ヘンゼルとグレーテルであった。その後ろには鹿男やキリコたちの姿もある。どうやら東塔での白鬼退治を終え、こちらへと駆けつけてきたようである。

「ご主人様っ！」
「ご無事でっ！？」
「うんっ、この通りピンピンしてるよぉ～っ」
不安げに駆け寄ってきた二人へ、太狼が穏やかな笑みを向ける。

「輝矢っ！輝矢はっ！？」
「桜時様ぁ～っ！！」
「……っ」
さらにそこへ北塔と西塔から駆けつけた、アリス率いる玄上軍や、白雪たちもやって来た。

「みんながこんなにっ…」
「凄いっスねっ！」
次々と集まって来る仲間たちに、イチゴと羊スケが思わず、嬉しそうな笑みを零す。

「こんなに大勢のみんなが、君たちの勝利を信じて、待ってるよっ…」
真剣な表情を見せ、中央塔を振り向く太狼。

「輝矢ちゃんっ…ハチくんっ…」

太狼の声が、どこか祈るように、その場に響き渡った。

第９６章　哀しき終焉　★２

戻って、中央塔・一階。
「牢戸っ…？」
真実の名を名乗ったギンを、驚愕の表情で見つめる桜時。

「牢戸って…」

トマトとシルクの千年の因縁、元は同じ象人でありながら、互いに人成らざる者を愛し、世界を大きく揺れ動かし、そして悲劇の末に、互いの愛する者を失った。輝矢がギンに見せられ知った事実は、桜時も輝矢から聞き、知るところであった。

「牢戸はっ…死んだはずじゃっ…」
桜時がギンへ、戸惑いの視線を送る。

――牢戸ぉぉぉっ！！――

シルクの手により、深海の牢から解放された牢戸は、人間を滅ぼし、鬼だけの世界を創ろうとして、輝矢の祖先でもある玄神の手により、殺されたはずであった。

「鬼の生命力は強靭なものがありますからねぇ…そして僕は運よく、生き残ったっ…」
ギンが目を細め、口端を吊り上げる。

「それで…今まで…？」
「ええっ、鬼は龍と同じように、長寿の生き物ですからっ…」

遠慮がちに問いかけた桜時に、ギンが大きく頷きかける。

「じゃあ…火力とかは、どうやって…」

「鬼にも、シルク等象人と同じように、特殊な力が備わっているのですよ」

「特殊な力っ…？」

「ええっ」

聞き返す桜時に、ギンが笑みを向ける。

「君は武国で、トランプ兵団の術斗クンと戦いましたよね？」

「術斗っ…？」

桜時が少し考えるように、眉間に皺を寄せる。

――何だっ！？この力っ！模写出来ないっ！！――

「あっ…」

武国で戦った術斗のことを思い出し、桜時が少しハッとした表情を見せる。

「彼の能力、覚えています…？」

「“模力”だろっ？相手の技をマネするっていうっ…って、まさかっ…！」

「ええ、そのまさかです…」

大きく目を見開く桜時に、ギンは穏やかな笑顔で頷く。

「まぁ、彼とは違い、僕の能力は真似ではなく、完全な写し取りっ…そして、それをより強化出来るっ…」

「写し取りっ…」

ギンの言葉を繰り返し、桜時が険しい表情を見せる。術斗の模力は、確かに本物と比べると劣るところがあった。だがギンは、完全に会得し、さらに強くすることが出来るという。

「この力を使って僕は、シルクの水力を、狐族の火力を、その他多くの力を手にしました…」
右手を上げたギンが、どこか楽しげに笑う。

「でもっ…」
「……っ？」
急に声のトーンを落とすギンに、桜時が少し首を傾げる。

「僕の力を持ってしても…この力を得ることは出来なかったっ…」
「……っ」
そう言ってギンが上げていた右手を置いたのは、命力の結晶を包む水晶の上であった。その手を見て、桜時が眉をひそめる。

「命力っ…」
「そうっ」
そっと呟く桜時に、大きく頷くギン。

「僕が命力を得ることが出来ていれば、色々と回りくどいことはしなくて済んだんですがねぇ…」
ギンが少し疲れたように、肩を落とした。
「まぁ、終わったことを、つべこべ言っても仕方ありませんっ」
再び笑顔を見せたギンが、水晶に触れていた手を離し、水晶の前へと立って、桜時と向き合う。

「存分に今を楽しみましょうっ…？」
「……。」
誘うように微笑むギンに、桜時が険しい表情を見せる。

「どうです？これだけ聞けば、もう戦いに集中出来そうですか？」

「……もう一つだけっ…」
「……っ？」
少し間を置いた後、ポツリと呟いた桜時に、ギンがかすかに眉を動かす。
「何でしょうっ…？」
「お前の…」
桜時が鋭い青色の瞳を、ギンへと向ける。
「お前の目的は…何だっ…？」
「……。」
桜時のそのシンプルな問いかけに、ギンは真剣な表情を見せ、一回、煩わしそうに首を横に振った後、ゆっくりと冷たい笑みを浮かべた。
「勿論っ、この世界を鬼で満たすことですよっ」
「……っ」
笑顔で答えるギンに、桜時が少し顔をしかめる。
「さぁっ、ではっ、そろそろ始めましょうかっ…！」
ギンが勢いよく振り上げた両手から、鬼爪を生やす。
「“鬼爪・天回”っ！」
「……っ」
両手を振り上げたギンが、指先を桜時へ向け、生えたばかりの十本の鬼爪を、桜時へ向けて放つ。飛ばされる鬼爪を見て、鋭い目つきとなった桜時が、素早く左手を突き出した。
「“瞬花”っ！」
桜時が左手から光を放ち、向かって来ていた鬼爪をすべて、桜の

花びらへと変える。

「村雨丸っ…！」

間を置くことなく、すぐさま右手の村雨丸を構える桜時。

「“瞬花っ…終刀”っっ！！」

桜時が勢いよく村雨丸を振り下ろし、桃色の一閃を、ギンへ向けて放った。

「……っ」

ギンが落ち着いた表情で、右手を突き出す。

「“炎舞”っ」

突き出されたギンの右手から、桜時の一閃へ向け、赤々とした炎が放たれる。

「……んっ…？」

だが桜時の一閃は、ギンの放った炎を押しのけ、そのまま、まっすぐにギンの方へと向かって来る。

「人獣化して、威力が上がっているのですかっ…仕方ありませんねっ」

「……っ？」

そう言って再び右手を突き出すギンに、桜時が少し眉をひそめる。

「“黒炎舞”っ…」

「……っ！」

ギンの右手から放たれる、禍々しいまでに真っ黒な炎に、桜時が大きく目を見開く。

「黒いっ…炎…？」

――バァァァーンっ！

「うっ…！」

先程、ギンの赤い炎は押しのけた桜時の一閃であったが、次の黒い炎とぶつかり合うと、一閃は一気に黒く燃え上がり、大量の桜の花びらとなって動きを止め、そのまま燃え尽きた黒い灰となって、床に崩れ落ちた。

「燃や…された…」

床に落ちる灰を見て、桜時が険しい表情を見せる。そうしている間にも、ギンの黒い炎が、桜時へと差し迫る。

「クソっ…！」

受け止めようと、村雨丸を構える桜時。

「避けた方が…いいと思いますよっ？」

「……っ」

そっと微笑むギンに、桜時が眉をひそめる。

「グっ…！」

ギンの言葉に従うように、桜時が横へ飛んで床に転がり、ギリギリのところで黒炎を避ける。

――バァァァーンっ！

「……っ！」

桜時の避けた黒炎は、そのまま壁へと直撃し、中央塔の分厚い壁を、まるで溶かすように一瞬で突き破って、外へと飛び出していった。

「あっ…」
床から起き上がった桜時が、その溶けた壁の断面を、唖然とした表情で見つめる。見た目では赤い炎の方が熱そうであったが、黒炎の方が相当に高温なのだろう。あんなものを受け止めていたら、村雨丸はおろか、桜時の体も一瞬にして灰と化していた。

「ねぇっ？避けて良かったでしょうっ…？」
「……っ」
親切にするかのように聞こえてくるギンの声に、桜時が表情を曇らせながら立ち上がる。

「鬼の力は滅びの力っ…この滅力に触れれば、君の存在そのものも、あっという間に滅びるでしょう…」
「滅びっ…」
再び壁の断面を振り返り、桜時が厳しい表情を見せる。

「もう一度、見せて差し上げましょうかっ…」
そう言ってギンが、今度は左手を桜時へと向けた。

「“黒水舞”っ…」
「うっ…！」
ギンの左手から放たれる、黒々とした水の塊。塊が何本かの水の管へと枝分かれし、桜時を四方から一気に責め立てる。

「クっ…！」
水の一角へ向け、左手を構える桜時。

「“瞬花”っ！！」
桜時の左手から、桃色の光が放たれる。

「……っ！！何っ…！？」
桜時の放った桃色の光は、水の一角へと直撃したが、水は桜の花びらとなって散ることなく、その禍々しい姿を留めたまま、引き続き桜時へと向かってくる。

「フフっ…」
驚きの表情を見せる桜時を見て、そっと微笑むギン。

「瞬花がっ…効かないっ…！？」
「滅びの力を前に、美しいだけの花など無力っ…」
「ううぅっ…！！」
防ぐ術もない桜時へと、ギンの黒い水が迫る。

――バァァァァーンっ！

床へと降り落ち、大きな音を立てて弾け飛ぶ黒い水。その飛び散る黒い雨の中に、桜時の姿が消える。

「あぁ～あっ…」
その様子を見ながら、少しがっかりとした声を漏らすギン。
「もう少し遊ぶつもりだったのに…つい、殺してしまいましたねぇ…」
ギンが困ったように、肩を落とす。

「はぁ～あ…また退屈になっ…」
「……っ」
「んっ…？」

感じる人の気配に、ギンがその瞳を鋭くし、黒い水に散っている辺りを、目を凝らして見つめる。

「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」

床に散っていく水の向こうから、見えてくる人影。少し乱れた呼吸で、肩を大きく揺らしながらも、しっかりと立っている。

「はぁっ…はぁっ…」

「……っ」

その人影は、勿論、桜時であった。体力は消耗している様子だが、体は傷ついていない桜時のその姿を確認し、ギンが少し眉をひそめる。

「あれはっ…」

そんなギンの視界に入る、村雨丸を包む、白い、炎のように燃え上がった光。

「あの炎は…“創力”っ…」

その力を分析し、ギンがそっと目を細める。

「そうでしたっ」

「……っ」

納得したように頷き、少し笑みを零すギンに、桜時が呼吸を整えながらも、警戒するような視線を送る。

「君の命力は元々、祖母から受け継いだものっ…君には祖母の命力、母の花力の他に、父から受け継いだ創力もあるんでしたねぇ」

「父…さんのっ…」

ギンの言葉を繰り返しながら、桜時自身も驚いた様子で、村雨丸

を包む白い炎を見つめる。創力も受け継いでいることは、考えればわかることであるが、使ったのは今が初めてであった。

「ですが、その力が今、この場で目覚めるなどっ…つくづく悪運の強い方だっ…」

「……。」

微笑むギンの、その瞳の冷たさに、厳しい表情を見せる桜時。確かに今、創力が目覚めていなければ、桜時はギンの水力を受け、すでに亡き者となっていただろう。

「それともぉ…君たちのお得意の“想い”とやらが、君を守ってくれているのでしょうかねぇっ…？」

「……っ」

試すような口調に、楽しむような瞳。だが、その中にかすかに感じる、強い憎悪。

――人間というものは…本当に素晴らしいっ……――

――勿論っ、世界を鬼で満たすことですよっ……――

一度は殺されかけた、人間たちへの憎しみなのだろうか。

「さてっ、では続きといきましょうかっ」

仕切り直すようにそう言い、ギンが再び両手を振り上げる。

「村雨丸っ…」

その目つきを鋭くし、村雨丸を構える桜時。

「創力が使えるんだったらっ…じじいや父さんの、あの技だって…」

桜時が村雨丸の刀身を見つめながら、考えるように呟く。

「よしっ…！」
気合いの入った声を放ったその瞬間、村雨丸の刀身から、先程と同じように、白い炎が燃え上がる。

「……いい目だっ…」
村雨丸を構える桜時を見つめながら、ギンがそっと笑みを零す。

「曇ることのない、希望に満ち溢れたまっすぐな瞳っ…」
「……っ？」
まじまじと桜時を見つめるギンに、桜時が少し眉をひそめる。

「誰からも愛される、人間の王子様…誰からも憎まれる我ら鬼とは、対局とも言える存在だっ、君は…」
「……。」
言葉を続けるギンを、桜時が真剣な表情で見つめる。

「君が羨ましくて…君のように愛されたくて…彼女が君を愛したというのなら、その気持ちも少しはわかる…」
「えっ…？」
そっと目を細め、どこか遠くを見るような瞳を見せるギンに、桜時が少し首を傾げる。

「鬼であれば…誰もが憧れる存在ですよっ…君はっ…」
「……。」
突き刺さるように注がれる視線に、桜時が険しい表情を見せる。

「俺だって…何もかもに満たされてるわけじゃっ…」
「知っています」
桜時の言葉を、ギンが勢いよく遮る。

「鳥の国に生まれながら…イヌとして生まれ、蔑まれた王子様っ…」
「……っ」
すべてを知るように話すギンに、桜時が少し顔をしかめる。
「けれど、君か僕に生まれ変われるというのなら…世界中すべての人間が、君を選ぶと思いますよっ…？」
ギンが問いかけるように言いながら、ゆっくりと口端を吊り上げる。
「所詮はそんなものです…僕の存在なんてっ…」
「……。」
何もかもを諦めたように笑うギンに、桜時が戸惑うように、眉をひそめる。

第９６章　哀しき終焉　★３

「人間をっ…」
「……っ？」
ゆっくりと口を開く桜時に、ギンが静かに視線を送る。
「人間を滅ぼして…この世界を鬼で満たして…それでっ…」
桜時の青い瞳が、まっすぐにギンを映す。
「それで…お前は満ち足りるのかっ…？」
「……っ」
その桜時の問いかけを聞き、ギンが再び笑みを浮かべる。
「満ち足りないでしょうねぇ」
「えっ…？」
あっさりと答えるギンに、桜時が戸惑った声を漏らす。
「きっと…何をやったって、満ち足りるはずがないっ…」
遥か遠くを見るように、視線を上へと向けて、そっと言い放つギン。
――人間がっ…！人間がぁっ…！！人間がぁっ！！――
底知れぬ憎悪の中で、叫んでいた人。
「そういう無駄なことが好きなんですよ…あの人はっ…」
「あの人…？」

ギンの呟きに、桜時がさらに表情を曇らせる。

「本当にっ…この世界には、無駄なことが多過ぎるっ…」

「……。」

それは、無駄なことばかりしている、愚かな人間たちを蔑むというよりも、どこか、それを嘆いているような、そんなように見えた。

「ギンっ…お前っ…」

「君も無駄なことばかりしていると、すべてが手遅れになってしまいますよっ…？」

「えっ？」

そう言いながら、天井を指差すギンに、桜時がつられるように天井を見上げる。

――ドォォォォォンっ！

塔の天高くから、壁を伝うようにして聞こえてくる衝撃音。恐らく、最上階で輝矢とシルクが戦っているのだろう。確かに、早く命力の結晶を取り戻し、上へ行って鬼力の放出を止めなければ、人は皆、鬼になり、何もかもが手遅れとなる。

「……っ」

桜時が表情を引き締め、改めて村雨丸を構える。

「……それでいいっ…」

身構える桜時を見て、ギンがどこか満足げに笑う。

「村雨丸っ…！」

桜時が、白い炎の燃え上がった村雨丸を、勢いよく振り上げる。

「“白首…割砕”っ…！！」
振り下ろされた村雨丸から放たれる、白い炎を纏った一閃。

「……っ」
ギンが笑顔を見せたまま、右手をその一閃へと向ける。

「“黒炎舞”っ」
ギンの右手から放たれる、禍々しい黒色の炎。

――バァァァァーンっ！

二色の炎が激しくぶつかり合い、一階中に強い風が吹き荒れる。

「んっ…」
ギンの黒色の炎が、桜時の白色の炎に押され弾き飛ばされると、黒色の炎は壁を突き抜け、外へと飛び出し、白色の炎はそのままギンの方へと直進してきた。

「クっ…！」
少し顔をしかめながら、素早い動きで横に飛びのくギン。

――パァァァァンっ！

「何っ…！？」
だが、ギンが避けたはずの炎は、ギンのすぐ後ろにあった命力の結晶により弾きかえり、驚きの表情を見せたギンのもとへと向かっていく。

「グっ…！」

炎の予測不能の動きに、今度は避けきることが出来ず、炎はギンの右腕をかすめ、その焼かれた右手から、血が滴り落ちた。

「赤い…血っ…」

ギンの右腕から流れ落ちる、人間と同じ色の血を見て、桜時がそっと目を細める。

「まさか命力の結晶を利用するとはっ…」

血の流れている右腕に、ギンがそっと左手を当てると、負ったはずの傷はすぐになくなり、零れ落ちていた血も見えなくなってしまった。

「やはり見える場所に飾っておくのは、失敗でしたかねぇ…？」

「……っ」

そう問いかけながらも、まだまだ余裕の表情で微笑むギンに、桜時は優位になった気など一切せずに、さらに警戒するような構えを取った。

「でもまぁ、人獣化した上に創力まで使われては、さすがに分が悪いのでっ…」

ギンが白い左手を伸ばし、自分の額に手を当てる。

「こちらも姿を変えるとしましょうかっ…」

額に当てた手から、白い光を放ちながら、ギンがそっと笑みを浮かべる。

――パァァァァーンっ！

「……っ！」

ギンの体全体から放たれる、強い白色の光に、桜時が思わず目を細め、左腕を盾にするように顔の前へと持っていく。

「この光っ…」

――“鬼化帰化”っ…！――

それは何度かこの目で見た、見覚えのある光であった。

「まさかっ…！」

桜時が眩しさに耐えながら、必死にギンを見つめる。

「フフフっ…」

徐々に弱まっていく光の中から、聞こえてくる不気味な笑い声。

「フフフフっ…」

やがて光が床へと吸い込まれるように消え、包まれていたギンの姿が、はっきりと見えるようになる。

「うっ…！」

見えたギンの姿に、顔をしかめる桜時。

「フフっ…」

そこに立っているギンは、金色の髪を逆立て、先の尖った耳のすぐ上から銀色の角を生やし、その肌を真っ白に、金色だった瞳を赤色へと変え、口からは大きな牙を、両手からは鋭い爪を生やしてい

た。

「……っ」

桜時は、その姿に見覚えがあった。

――驚いた…？――

鬼が島で戦った内兎が、戦いの途中で見せた姿。その姿と、今目の前にいるギンの姿は、とてもよく似ていた。

「“鬼化”っ…」

その姿の名を呟き、桜時が険しい表情を見せる。

「やっぱり、お前はっ…」

「……っ」

確信を持った瞳を向ける桜時を見て、ギンがそっと微笑む。

「さぁっ…」

微笑んだギンが、右手を振り上げる。

「始めましょうかっ」

ギンが右手の鬼爪を勢いよく弾くと、五本の鬼爪は空中で合わさり、一本の長く鋭い槍へと姿を変えた。

「“鬼槍”っ…！」

「クっ…！」

槍を構え、勢いよく駆け込んでくるギンに、桜時が少し焦った様子で村雨丸を突き出す。

『……っ！』

刀身と槍身から火花が散るのが見えそうな程に、激しくぶつかり合う村雨丸と鬼槍。

「そのままでいいんですかっ…？」

「えっ…？」

至近距離からそっと問いかけるギンに、桜時が眉をひそめる。

「フフっ…“黒炎包槍”っ…」

「うっ…！！」

ギンが呟き、微笑むと共に、ギンの鬼槍を黒い炎が包み込んでいく。燃え上がっていく鬼槍に、桜時が一気に険しい表情となる。

「クっ…！クソっ…！！」

桜時が少し慌て気味に、村雨丸に白い炎を纏わせていく。

「遅いっ」

「なっ…！」

だが村雨丸を白い炎が覆い込む前に、ギンは村雨丸を押し切り、黒い炎を纏った鬼槍を桜時へと振り切った。

「クっ…！」

体を屈め、必死に避ける桜時であったが、槍先の一部が、桜時の左腕をかすめる。

「うあっ！あああああっ！！」

小さな傷へ、鬼槍を包み込んでいた黒炎が伝わり、桜時の左腕を焼く。桜時は激しい叫び声をあげながら、痛みに耐えかねたのか、その場に力なく膝をついた。

「フフっ…」

楽しげに微笑みながら、ギンが鬼槍を下ろし、後方へと下がる。

「それで左手は使えないっ…」

「クっ…！」

顔を上げた桜時が、微笑むギンへ、険しい表情を向ける。

「村雨丸っ…！」

こちらまで痛みが伝わりそうな程に苦しげな表情を見せたままの桜時が、その瞳だけを鋭く光らせ、膝をついたまま、村雨丸を構える。

「“白首割砕”っ…！！」

「……っ」

桜時の村雨丸から放たれる白炎に、ギンが後ろに下がりながら、少し驚いたような顔を見せた。

「フフっ…」

だがすぐにギンは笑みを浮かべ、落ち着いた動作で鬼槍を突き出す。

「“黒水突”っ…！」

突き出された鬼槍の先から、激しく渦を巻く、黒い水が放出される。

――バァァァーンっ！

「うっ…！」

ギンの黒水に、すぐさま砕かれる桜時の一閃。小さく分かれ、飛び散っていく白炎に、桜時が思わず顔をしかめる。白炎を砕いた黒

水は、そのまま桜時のすぐ上の天井へと飛び上がり、勢いよく天井を貫いた。

「あっ…！」

貫かれた天井の瓦礫が、膝をついたままの桜時へと落ちてくる。

「“瞬っ…！ううぅっ…！！」

瞬花を放つため、落ちてくる瓦礫へ向け、左手を向けようとした桜時であったが、左手は黒炎に焼かれたため、少し動かしただけで、激しい痛みが桜時を襲った。

「クっ…！」

――バァァァーンっ！

打つ手のない桜時の上へ、勢いよく瓦礫の山が降り落ちる。

「……ふぅっ…」

目の前に出来た瓦礫の山を見つめながら、ギンが鬼槍を下ろし、少し呆れたように肩を落とす。

「石の塊すら…避けることが出来ないとはっ…」

ギンがそう呟き、がっかりしたような表情を見せる。

「んっ…？」

その時、ギンが瓦礫の隙間から、かすかに漏れる桃色の光に気づき、眉をひそめる。その光は徐々に強くなり、瓦礫全体を包み込んだ。

「“伝光っ…」
瓦礫の奥から、漏れてくる声。
「……刹花”っ！！」
――パァァァーンっ！
瓦礫の山がすべて、一瞬にして桜の花びらへと変わり、その奥から桜時が姿を現す。桜時は村雨丸を地面へと突き刺し、それを支えとするように立ち上がっていた。
「村雨丸っ…」
桜の降り落ちる中、桜時が地面に突き刺していた村雨丸を振り上げる。
「“柔桜っ…無塵”っ！！」
降り落ちていた花びらをすべて纏い、その花びらの集団を、ギンへ向けて放つ桜時。
「……っ」
向かってくる花びらを見つめ、ギンが軽く笑う。
「“黒炎円閃”っ」
先程と同じように鬼槍に黒炎を纏わせ、ギンがその鬼槍を、空中で円を描くように振り回す。
――バァァァーンっ！

「ううぅっ…！！」
あっという間に一枚残らず黒炎に包まれ、灰となって燃え落ちる桜の花びら。黒焦げになって床へと散っていく花に、桜時は大きく顔を歪めた。

「柔桜無塵でもダメかっ…！」
桜時が村雨丸を下ろしながら、悔しげな表情を見せる。

「今の君の力は…すべてが中途半端だ…」
「えっ…？」
ギンから放たれる言葉に、そっと首を傾げる桜時。

「中途っ…半端…？」
「えぇぇっ」
聞き返した桜時に、ギンがゆっくりと頷きかける。

「付け焼き刃の創力は…君の祖父や父の力よりも下っ…」
「……っ」
ギンの言葉に、桜時が眉をひそめる。

「本来、雀人のものである花力は…その犬人の人獣化により、力を抑えつけられてしまっているっ…」
「えっ…？」
続く言葉に、驚きの表情を見せる桜時。

「人獣化で…花力がっ…？」
桜時が戸惑うような表情を見せながら、犬人の白い獣毛に覆われた、自分自身の体を見る。

「やはり…命力を持っていた時に一度、戦っておくべきでしたかねっ…」
少し肩を落としたギンが、鬼化したその姿から、元の人間の姿へと戻る。

「今の君との戦いはっ…実に“無駄”だっ」
「……っ」
突き放すように言うギンに、桜時が少し眉をひそめる。

「俺はっ…」
「……っ？」
ゆっくりと口を開く桜時に、首を傾げるギン。

「俺はっ…この世界に、無駄なことなんて、たったの一つもないと思ってるよっ…」
まっすぐな瞳を見せた桜時が、正面からギンを見つめる。

――急に落ちてきたら危ないですよ？ワンコさんっ――

「どんな出会いもっ…」

――同時にいきなさいっ！イヌっ！サルっ！キジっ！――

「どんな戦いもっ…」
村雨丸を握る手に力を込め、その表情を引き締める桜時。

「俺の生きてきた時間の中にっ、“無駄”なことなんて一つもなか

ったっ！」
「……。」
強く言い切る桜時を、ギンが珍しく笑みを浮かべずに、あまり感情の見えない表情で見つめる。

「フっ…」
そっと俯き、零すように笑みを浮かべるギン。

「実に君らしい言葉だっ…」
感心するように言いながら、ギンが顔を上げ、桜時の方を見る。

「何もかもに恵まれ、誰もから愛される君でなければ…言えない言葉っ…」
「そんなことないっ」
「……っ」
はっきりと否定する桜時に、ギンが少し眉をひそめる。

「輝矢だって、きっとそう言うさっ」
言い切った桜時が、明るく笑みを浮かべる。

「だって、俺がそう思えるようになったのはっ…」
桜時が胸に抱いた想いを確認するように、そっと俯く。

「……輝矢と出会えたお陰だからっ…」

大きく微笑み、言い放つ桜時。

「だから、人だからとか、鬼だからとかなんて、関係ねぇーよっ」
桜時が笑みを止め、真剣な眼差しをギンへと向ける。

「無駄だと思うか、無駄じゃないと思うかは、自分次第だっ」
まっすぐにギンを見つめ、さらに言葉を続ける桜時。

「自分の境遇を嘆いて…自分はこうなんだって、初めから決めつけてる方が…よっぽど、無駄だと思うっ」
桜時の瞳が、鋭く光る。

「お前のようにっ…」
「……っ」
桜時の言葉に、珍しくあからさまに、顔をしかめるギン。

「君に…何がわかるというんですっ…」
少し俯いたギンが、低く重い声を発する。

「何も知らない君にっ…」
「何も知らねぇーよっ、けどっ…」
はっきりと答えた桜時が、最後に言葉を付け加える。

「お前が牢戸じゃないってことくらいはわかるっ」
「……っ」

桜時の言葉に、ギンの表情が曇る。

第９６章　哀しき終焉　★４

「何故、そう…？」
「一つは、お前が鬼じゃなくて、鬼人だってことだ」
ゆっくりと問いかけたギンに、桜時がすぐさま答える。

「鬼なら、人間の姿なんて持たないし、鬼化もしないっ…」
「…基本ですかねっ…」
ギンがそっと笑みを浮かべ、力を抜くように肩を落とす。

「まぁ、もっと鬼の振りをしようと思えば出来たところを、お前があえて、しなかっただけだろうけどっ…」
「フフっ…」
言葉を付け加える桜時に、ギンが小さく笑い声を漏らす。

「それともう一つはっ…」
桜時が少し躊躇うように、ギンへと視線を送る。

「お前の、世界を鬼で満たすってあの言葉が…嘘のような気がしたっ…」
「……っ」
桜時のその言葉に、ギンの表情が動く。

「お前は、そんなこと望んでないっ…人間を滅ぼすことだって、どうだっていいって思ってるって…そんな気がした…」
「随分と曖昧な答えですねぇ…」

予測ばかりの答えを口にする桜時に、ギンが呆れたように呟く。

「でもっ、悪くないっ」

「……っ」

どこか楽しげに微笑むギンに、桜時が少し驚いたような表情を見せる。

「確かに僕は、どうでもいいと思ってます…世界を鬼で満たすことも、人間を滅ぼすこともっ…」

微笑んだまま、ギンがゆっくりと一階を見回すように、視線を動かす。

「鬼が生き残ろうが、人が生き残ろうが…僕にとっては、どうでもいいことっ…」

本当に興味なさそうに、視線を落とすギン。

「ただ、あの人が言うから…そうしているだけっ…」

「あの人っ…」

――無駄なことが好きなんですよ、あの人はっ……――

先程も、ギンが口にした言葉。

「あの人っていうのは…シルクのことかっ…？」

「……。」

問いかける桜時に、ギンが少し目を細める。

「……ええっ…」

少しの間を置いた後、桜時の方を見つめ、頷くギン。

「お前は…シルクの…？」

「……っ」
首を傾げる桜時に、ギンはゆっくりと口を開いた。
「僕は、牢戸と知玖の息子です…」
「息子っ…」
ギンの口から告げられる事実に、桜時が思わず驚きの表情を見せる。牢戸ではなかったにしても、あのシルクの血縁の者であることは、事実だったのだ。
「鬼である父の血を色濃く受け継いだ僕は…兄弟が皆、死に逝く中、母と共に永い時を生き延びた…」
遠い瞳を見せながら、ギンが自分のことを語り始める。
「そう、千年もの永い時を…」
「……。」
桜時はまっすぐにギンを見つめ、ギンの話に聞き入る。
「僕の力もすべて、鬼である父から受け継いだもの…先程言った、力の説明はすべて、事実ですよっ…」
ギンが桜時へ、穏やかな笑みを浮かべる。
「なんで…牢戸だって言ったりなんかっ…」
「あの人が、そう言ったから…」
「……っ」
すぐさま答えるギンに、桜時が少し顔をしかめる。
――お前は今日から…牢戸よっ……――
「僕は“牢戸だ”と…そう言ったから…」

遠くを見つめるギンのその視線は、どこか力の抜け切ったような、弱々しい、儚いものに見えた。

「牢戸の代わりに…牢戸になって…牢戸の夢を叶えることが、僕の生きている理由だと、そう言ったから…」

「……。」

言葉を続けるギンを見つめながら、桜時がそっと目を細める。

「だから僕は、全部、あの人の言う通りにした…あの人の求める“牢戸”になり続けた…」

――虎国へ行って来てくれる…？――

「どんな言葉にも…ただ頷くだけ…」

ギンもそっと目を細める。

「そこに常に…僕の意志はない…」

――はい…シルク様っ……――

「だって僕は…」

――お願いね…ギンっ……――

「あの人の、あの赤い目に…映っていないから…」

遠くを見つめていたギンが、力なく俯き、下の地面へと視線を落とす。

「あの人の目に映っているのは…憎しみの対象である人間だけっ…」

小さく落とされていく、ギンの言葉。

「初めから…ずっとそうだった…」

――人間がっ…！人間がっ…！！――

激しい憎しみの中を、その憎しみだけを糧に、生きる人。

――お母さんっ…？――

――人間がぁぁぁっ！！――

憎しみのフィルターにかけられて、憎むべき人間以外の存在を、その瞳には映さない。

「あの人の目に…僕は映っていないっ…」

「ギンっ…」

その言葉を呟くギンが、どこか寂しげに、悲しげに見えて、桜時は思わずギンの名を呟いた。

「だから…どうでもいいっ…」

諦めたように言い放ち、ギンがゆっくりと顔を上げる。

「どう思ったって…映らないなら、“無駄”だからっ…」

「……。」

先程も口にした、“無駄”という言葉。ギンにとっての“無駄”という言葉は、ひどく重いように感じた。幼い頃から、人間を憎むばかりの母に、その視界にすら入れてもらえず、父・牢戸の代わりとして扱われ、自分の存在も、自分の考えも、すべて“無駄”なものなのだと、思ってしまったのだろう。

「愛され…たかったのか…？」
桜時がゆっくりと、問いかけを放つ。

「シルクに…母親、に…」
「……そんな安っぽい言葉を使うのは、止めて下さいっ…」
笑みを浮かべたギンが、数回、首を横に振る。

「無駄な問いかけだっ…」
「……。」
そっと言い放つギンに、桜時が再び、目を細める。

「さぁっ、無駄な会話はもう止めましょうっ」
ギンが右手を上げると、ギンの姿が、再び鬼化した姿へと変わった。

「僕は、あの人の言う通り…君を殺し、この結晶を使って、世界中の人間を鬼へと変えるっ…」
右手から放たれた鬼爪が、鬼槍を形成する。

「それだけですっ…！」
鬼槍を構え、その槍先を桜時へと向けるギン。

「……。」
戦いの態勢を取ったギンを、桜時が真剣な表情で見つめる。

「俺は…この戦いを、“無駄”なものになんてしたくないからっ…」
桜時の透き通った青色の瞳が、ギンの姿を映し出す。

「俺は、牢戸じゃなく、お前自身をこの目に映してっ…お前を倒すよっ…」
「……っ」
突き付けられるような、桜時のまっすぐな言葉に、思わず顔をしかめるギン。

「僕は君の…そういうところが嫌いですっ…」
ギンが感情を込めて、言い放つ。

「それにっ…！」
勢いよく顔を上げるギン。

「僕に君は倒せませんっ…！！」

ギンが強く叫んだ途端、鬼槍から黒々とした炎が燃え上がり、左手の鬼爪からは黒い水の塊が、手から浮かび上がるように形成される。

「火と…水っ…？」
少し戸惑うように、ギンを見つめる桜時。

「この黒炎と黒水は…合わさった瞬間、互いの力を打ち消そうと、強い滅ぼしの力を放出しますっ…」
戸惑う桜時に答えるように、ギンがゆっくりと言葉を紡ぐ。

「その滅力を喰らえば…君は跡形もなく、この世界から消えるでしょうっ…」
「……っ」

ギンのその言葉は、ただの脅しなどではないだろう。それがわかるからこそ、桜時は眉をひそめ、ただ厳しい表情を見せた。

「そうか…」
「……っ？」
白い光に包まれていく桜時の体を見て、ギンが眉をひそめる。

「なら俺もっ…全力でいかねぇーとなっ」
「なっ…！」
白い光に包まれた桜時が、人獣化していたその姿から、元の桃色髪の人間の姿へと戻る。人間の姿に戻った桜時を見て、ギンは大きく目を見開いた。

「自ら人獣化を解いたっ…!?ここに来て、何をっ…！」
「お前が言ったんだろっ？」
戸惑うギンに、桜時が強い瞳を向ける。

「犬人の人獣化じゃっ、雀人の花力は抑えつけられちまうってっ」
「……っ！」
桜時の言葉に、さらに驚きの表情を見せるギン。

「花力っ…？花力でこの滅力と戦おうというのですかっ…？」
「ああっ、そうだ」
「愚かなっ…」
頷く桜時に、ギンはどこか嘆くように呟く。

「いくら四大国の力とはいえっ…花力は攻撃には向かない力っ…創力の方がまだ強力だったというのにっ…」
ギンがしかめた表情で、桜時を見つめる。

「ただ一瞬、美しいだけのっ…脆弱な花などで何をっ…！」
「花は、脆くも弱くもないさっ」
完全に人の姿へと戻った桜時が、穏やかで優しい笑みを零す。
「儚いからこそ、何よりも強く一生懸命に咲くっ…」
――花自身が、いつか散り逝くことを知りながら…それでも一生懸命咲くから、美しいんだよ……――
教えられた、大切な言葉。
「人間と…同じようにっ…」
微笑んだ桜時が、噛み締めるように頷く。
「だから…美しいっ…」
「……っ」
桜時の言葉に、眉をひそめるギン。
「ならその美しい命の花っ…僕が枯らせて差し上げますよっ…！」
ギンが左手の黒水を、黒炎を纏った鬼槍へと合わせると、二つの力が混ざり合い、激しい黒色の光を生じる。
「“黒滅閃”っ…！！」
思い切り鬼槍を振るい、その黒い光を、桜時へ向けて放つギン。

「……っ」
向かってくる黒光を見つめ、桜時が鋭い表情を見せる。

「村雨丸っ…」
握る右手に力を込め、改めて村雨丸を構える桜時。

――姿は犬でも、あの力は紛れもない朱実の証…因果なものね…雲雀っ……――
――俺の愛した女は、最高の女だったと…胸を張って、そう言えるっ……――
――俺にはまだ、花力があるっ……――

命力ではない。神の力ではない。この力で、戦ってきた。生きてきた。犬である桜時を朱実に繋ぎ、朱実に生まれた桜時を父に繋いでくれた。この力が紛れもない、桜時のたった一つの力。

――私には見えますよ…？アナタの背に、その翼がっ……――

「……っ」
輝矢の言葉を思い出し、桜時が強く唇を噛み締める。

「これが俺のっ…」
村雨丸を大きく振りかぶり、桜時が勢いよく顔を上げる。

「最後の花だっ…！！」

振り上げられた村雨丸から、放たれる強い桃色の光。

「“百花っ…繚乱”っ！！」

振り下ろされた村雨丸から、柔桜無塵の時よりもさらに大量の、桜の花びらの波が、ギンの放った黒滅閃へと向かっていく。

「そんな花如きにっ…！僕の力がっ…！うっ…！何っ…！？」

背後から感じる強い光に気づき、ギンが焦った様子で後方を振り返る。ギンが振り返ると、そこには、強力な白い光を発する、命力の結晶があった。あまりに強い光のせいで、包み込んでいたはずの水晶に、激しいヒビが入っていく。

「バカなっ…！持ち手もいない命力が勝手にっ…！ハっ…！」

急にハッとした表情となり、ギンが再び、桜時の方を振り向く。

「まさかっ…彼の花力に呼応してっ…？」

放たれた命力の光が、ギンの黒滅閃を飛び越え、桜時の花びらを包み込んでいく。桃色と白色の光は、互いに合わさり合い、さらに強い光を生む。

「まさかっ…！取り出された命力の結晶がっ、自ら人を選ぶなんてっ…！」

命力も合わさった強い光に、徐々に押され始めるギンの力。

「クゥっ…！」

体も押され始め、その足を後退させながら、ギンが強く歯を食いしばる。

――貴方は私の言う通りに生きて…言う通りに死んでいけば、それでいいのよ…――

「……っ」

思い出されるその言葉に、ギンがそっと目を細める。

「初めて…言う通りにしなかったなっ…」

そう呟き、抵抗していた両手を、ゆっくりと下ろすギン。

「……っ!?」

そんなギンに、桜時が驚きの表情を見せる。

「……っ」

そっと微笑みを浮かべ、ギンの力すらも呑み込んで、向かってくる輝く花びらへと、まるで迎え入れるように、大きく両手を広げるギン。

「貴女はきっと…叱ってもくれないんだろうねっ…」

ギンが、どこか悲しげに呟く。

「……っ」

そっと目を閉じたギンへと、無数の花びらが直撃する。

――バァァァァーンっ！

咲き乱れる桜の花吹雪の中に、ギンの姿が消えていった。

――ドォォォォォォンっ！

『ううぅっ…！！』

中央塔から周囲の地面へと走る激しい衝撃に、中央塔を見守っていた皆が、思わずバランスを崩す。

「すっごい衝撃っスっ！」

「桜時さんっ…」

焦ったような顔を見せる羊スケの横で、祈るようにそっと手を組むイチゴ。

「……。」

イチゴの横から、太狼も真剣な面持ちで、中央塔を見つめる。

「桜時っ…」

「桜時…」

犬孝、八房、孔雀、大勢の者たちが、中央塔を見守った。

「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」

天井から舞い落ちる、尽きることのない程に無数の桜の花びら。桃色が支配するその空間の中に一人、立ち尽くす人影。大きく乱した呼吸を整えながら、桜時がゆっくりと持っていた村雨丸を下ろす。

「……っ」

力を使いきり、苦しげな表情を見せながらも、桜時が前方へとゆっくりと歩き出していく。

「はぁっ…はぁっ…」

少し足を引きずるように、ゆっくりゆっくりと歩いていく桜時。

「……。」

しばらく歩いたところで、桜時はそっと足を止めた。

「う…うぅっ…」

足を止めた桜時の前には、傷だらけのギンが倒れていた。鬼化していた姿は人間のものへと変わり、傷ついた体からは、人と同じ赤色の血が流れていた。

「フフっ…」
倒れ込んだままのギンが、小さな笑みを零す。
「まさか…命力までもが…君の味方をするとはっ…さすがは誰もに愛される…人間の王子様だっ…」
ギンが、どこか自嘲するような笑みを浮かべる。
「ギンっ…」
「何っ…です…？」
途切れ途切れの声を発しながら、桜時を見上げたギンが、傷ついた体を無理やり起き上がらせる。さらに流れ出る血に、ギンは少し顔をしかめた。
「君のっ…勝ちです…早く…結晶を持って…月の少女のもとへ行ったら、どうですっ…？」
弱り切った状態にあっても直、桜時への挑戦的な口調を変えずに、言葉を続けるギン。
「早くしないとっ…大切なお仲間さんたちがっ…鬼に、なってしまいますよっ…？」
「……。」
言葉を続けるギンを見て、桜時がそっと目を細める。
「ギンっ…」
「……っ」
名を呼ぶ声と共に、ギンへと差し出される桜時の右手。その右手を見て、ギンは勢いよく顔をしかめた。

「何のっ…おつもりですか…？」
「輝矢の父親と母親や、太狼が目指したのは、人と獣人と鬼、皆が幸せに生きられる世界だっ…」
冷たい瞳を見せ、問いかけるギンへ、桜時がまっすぐな瞳を向ける。

「だから…一緒に生き延びようっ…ギンっ…」
「……。」
告げられるその言葉に、ギンがそっと俯く。

「一緒に生き延びてっ…それでっ…」
「いい加減にして下さいっ…！」
「……っ！」
桜時の言葉を遮り、ギンが傷だらけの左手を動かして、残った人差し指の鬼爪を、勢いよく振り上げた。

「うっ…！」
後方へ飛びのく桜時であったが、振り上げられた鬼爪が、差し出されていた桜時の右手をかすめ、赤い血が零れ落ちた。

「ギンっ…！」
「どれだけっ…僕を見下す気ですかっ…」
「……っ」
強くギンを見つめる桜時であったが、睨むように見るギンのその言葉に、思わず眉をひそめる。

「見下すなんてっ…俺はそんなっ…！」
「君の優しさはっ…君のその刃より、僕を抉るっ…」
「……っ」
言い返そうとした桜時であったが、ギンのその言葉に、口を噤ん

だ。

「それと…覚えておくといいっ…」

起こした体を、引きずるように後ろへと下がりながら、ギンがゆっくりと桜時との距離を取る。

「この世界を生きられるのは…たった一種族ですっ…」

ギンが口元を緩め、そっと笑みを浮かべる。

「君たち人が生き残るというのならっ…僕ら鬼は皆、死に絶えるっ…」

強く光るその瞳を、桜時へと向けるギン。

「君の愛するっ…お姫様も共に…」

「……っ」

ギンのその言葉に、表情を曇らせる桜時。

「それが…この世界の理(ことわり)ですよっ…」

「……っ！」

そう言い放つと、ギンはその右手から黒炎を、左手から黒水を生み出した。ギンのその動きに、桜時が驚いた様子で大きく目を見開く。

「ギンっ…！」

「……っ」

「うっ…！」

身を乗り出した桜時へ、ギンがその両手を向ける。向けられる黒

炎と黒水に、ギンへと駆け寄ろうとした桜時が、その足を止めた。

「ギンっ…！何をっ…！」
「サヨウナラ…人間の王子様…」
二つの力を纏いながら、ギンがその場でゆっくりと立ち上がる。

「君は…僕が出会った人間の中で、最も優しく…最も残酷な人でしたっ…」

微笑みながら、ギンが両手を重ね合わせる。炎と水は合わさり合い、先程よりも規模は小さいが、強い黒色の光を放ち始めた。

「でもっ…」
「……っ？」
言葉を付け加えるギンに、桜時が首を傾げる。

「君の瞳に僕を映してくれたことは…感謝しますよっ…」
「……っ！」

穏やかに微笑んだギンに、桜時は大きく目を見開いた。

「ギっ…！」
「……っ」
桜時がその名を呼び切る前に、ギンは両手の黒い光を、自分へと向けて放つ。

「……っ！！」

黒い光の中へと消えていくギンに、桜時が大きく目を見開いた。

――パァァァァァンっ！

「……。」

黒い光が消えると、そこに、ギンの姿はなかった。

「ギンっ…」

――サヨウナラ…人間の王子様……――

思い出される、最期の笑顔。

「クっ…！」

拳を握り締めた桜時が、悔しげに唇を噛み締める。

「馬鹿野郎っ…！」

深く俯いた桜時が、少し震えた声を漏らした。

第９７章　輝矢の選択　☆１

中央塔・後方。ゴンと諸刃の戦った場所。

「……っ」

戦いを終え、立ち尽くしていた諸刃が、ふと中央塔の方を振り返った。

「ギンっ…」

遠くに見える中央塔。音や光はかすかに届くが、中の様子はまったく見えない。だが、それでも何かを感じたのだろう。諸刃はそっと眉をひそめ、その表情を曇らせた。

「ふぅ～っ」

地面に両膝をつき、座り込んでいたリンゴが、両手を上げて、大きく伸びをする。

「解毒完了っとぉっ」

そう言って、安心したような笑みを浮かべたリンゴのすぐ前には、深く目を閉じたゴンが横たわっていた。諸刃との戦闘に傷つき、蛇の毒も浴びたゴンは、諸刃との戦いが終わってすぐに、気を失って倒れ込んでしまったのである。

「諸刃っ、解毒剤ありがとっ！」

小さな瓶を持って、リンゴが諸刃の方を振り返る。

「あんたも傷の治療をっ」

「……。」

「諸刃っ…？」

中央塔を見つめたまま、指先一つ動かさず、リンゴの声にも反応しない諸刃に、リンゴが戸惑うように首を傾げる。

「諸刃っ、どうしっ…」

「悪い、リンゴ…」

リンゴの言葉を遮り、諸刃がリンゴの方を振り向く。

「俺…行かないと…」

「えっ…？」

真剣な表情で告げる諸刃に、リンゴが眉をひそめる。

「行くって、どこに…」

「……っ」

「あっ…！諸刃っ…！」

リンゴが問いかけるその前に、諸刃はリンゴへと背を向け、まっすぐに中央塔の方へと駆け出していってしまう。リンゴが思わず立ち上がり、去っていく諸刃へ手を伸ばした。

「諸刃っ…！！」

だがリンゴの声に、諸刃が止まることはなかった。

中央塔・最上階。輝矢ｖｓシルク。

「……。」

涼しげな表情で、最上階の広間に立つシルク。その後方の壁には

巨大な穴があき、外の青い空が、手が届きそうな程にすぐ近くに見えていた。

「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」

シルクの前方に立つ輝矢が、少し息を乱しながら、構えていた三日月を下ろす。下ろされると、三日月を包んでいた青い光が、徐々に弱くなって、やがて消えた。

「……っ」

そんな輝矢を見つめていたシルクが、ゆっくりと自分の右手に視線を落とす。傷ついた右腕からは、シルクの赤々とした血が滴り落ちていた。

「フフっ…」

流れる自分の血を見て、シルクが楽しげな笑みを浮かべる。

「驚いたわっ…まさか“光力”とは…」

シルクが顔を上げ、正面に立つ輝矢を見つめる。

「いつ、受け継いだの…？トマトが死んだ時…？それとも…」

細められた赤い瞳が、鋭く輝く。

「あの女の怨念が、貴女に宿ったのかしらっ…？」

「宿るっ…？」

輝矢がシルクの言葉を繰り返し、そっと眉をひそめる。

「まさかっ、トマトはもう、こんな戦場には居ませんよっ」

強く言い切った輝矢が、まっすぐ突き刺すようにシルクを見つめる。

「ここにあるとすれば…アナタの怨念の方じゃないですかっ…？」
「フフっ…」
どこか挑戦的に言い放つ輝矢に、シルクがまたしても笑みを浮かべる。
「それは言えてるわねっ…」
そっと視線を落としながら、シルクが傷ついた右腕に左手を触れさせる。すると一瞬にして傷は消え、白い肌から零れ落ちていた赤い血も止まってしまった。
「下から突き上げていた…最後の光も消えた…」
「……っ」
シルクの言葉に、輝矢が眉をひそめる。
「もうここで戦っているのは…貴女と私だけ…」
「……。」
その言葉を聞きながら、どこか浮かない表情で俯く輝矢。下での勝負が終わったということは、桜時とギンの勝敗が決したということ。桜時の強さを信じていないわけではないが、桜時の身を案じ、輝矢は少し不安げな表情を見せた。
「ねぇっ、月の少女っ…」
「……っ？」
改めて呼びかけられ、輝矢が少し眉をひそめる。
「人は何故っ…“憎しみ”という感情を持っているのかしらっ…？」
「えっ…？」
シルクのその問いかけに、戸惑った声を漏らす輝矢。

「だって、そうでしょう…？」
戸惑っている輝矢へ、シルクが不敵な笑顔を向ける。
「貴女たちの大好きな、愛だの友情だの、キレイな感情だけを持っていれば…」
シルクの瞳が、不意に冷たくなる。
「哀しい出来事なんて…何一つ起きなかったはずなのにっ…」
「……っ」
向けられるシルクの、その冷たい瞳に、輝矢が思わず顔をしかめる。
――牢戸ぉぉぉぉっ！！――
鬼を憎む人の心が、シルクから大切なものを奪い、そして、シルクの憎しみが、トマトの大切なものを奪った。千年経っても消えることのなかった憎しみは、新たな憎しみを生み続け、そして今も、絶えることなく続いている。
――いやあああああああっ！！――
「……。」
かつて、憎しみに奪われた大切なもの。それを思い出し、輝矢はそっと俯いた。
「答えを教えてあげましょうかっ…」
「……っ」
シルクのその言葉に、俯いていた輝矢が顔を上げる。

「愛だの友情だの、そのキレイな感情が…“憎しみ”に変わるからっ…」
「……。」
微笑んで答えるシルクに、輝矢が目を細め、厳しい表情を見せる。
「アナタとトマトの友情が…憎しみへと変わったように…？」
「ええっ…」
輝矢の問いかけに、シルクはすぐさま頷く。
「とても大切な友達だったのよ…？だから一層、許せなかった…」
シルクが少し上を見上げ、遠くを見るような瞳を見せる。
「私を…裏切ったことが…」
「……。」
ゆっくりと一言一言を重く呟くシルクを、輝矢は真剣な表情でまっすぐに見つめる。
「貴女にだって、わかるんじゃない…？」
シルクが見上げていた顔を下ろし、輝矢の方を見る。
「玄神の連中に、両親や仲間を皆殺しにされて…愛は憎しみに変わらなかったっ…？」
「……っ」
試すように問いかけるシルクに、輝矢が少し顔をしかめる。
「貴女と私は…よく似ていると思うわっ…」
しかめた表情を見せた輝矢を見て、シルクがそっと笑みを浮かべる。

「ほんのちょっと…少しでも何かが変わっていれば…私たちは共に在り、同じ道を歩んでいたかも知れない…」
「……。」
続くシルクの言葉を、輝矢は真剣な表情で聞き入る。
「それなのに…今はこうして、こんな場所で向き合っている…」
口元を緩めたシルクが、まっすぐに輝矢を見つめる。

「どうして…かしらね…？」
「……。」
ゆっくりと問いかけるシルクに、厳しい表情を見せる輝矢。

「私が鬼を愛して…」
シルクがさらに、言葉を続ける。
「貴女が…人である彼を愛したから…かしら…？」
「彼っ…？」
そう言って視線を輝矢から逸らすシルクに、輝矢が戸惑った表情を見せる。

「輝矢っ…！！」
「……っ」
聞こえてくる、よく聞き覚えのあるその声に、輝矢が勢いよく振り返る。

「あっ」
階段を駆け上がり、輝矢とシルクのいる最上階の広間へと駆け込んでくる、その人物。

「輝矢っ！！」
「ハチっ」
広間へと入ってきた桜時を見て、輝矢は大きく目を見開いた。

中央塔・右翼。
「んっ…」
地面に倒れ込んでいた由雉が、ゆっくりとその赤い瞳を開く。開いた視界には一面、真っ青な空が広がっていた。
「ボク…はっ…」
「気が付いたか？」
「えっ…？」
すぐ横から聞こえてくる声に、由雉が少しだけ首を動かし、空から視線を移す。
「黒…羽…」
「よう」
横たわっている由雉のすぐ横には、両膝をつき、座り込んでいる黒羽の姿があった。その手には黄色い羽根が握られており、由雉の腕にも何本か羽根が刺さっている。
「……っ」
腕に刺さった羽根を見て、そっと目を細める由雉。

「生きてたかぁ…」
由雉が再び空を見上げ、少し力の抜けた声を出す。
「お前があっさり死ぬような、軟弱なタマかよっ…」
「ハハっ…言えてるっ…」
黒羽の言葉に、由雉が口元を緩め、笑みを浮かべた。

「ほらっ」
「……っ？」
そう言って黒羽が、何かを由雉の顔の前へと差し出す。由雉が戸惑うように、差し出されたそれを見つめると、それは、半分崩れ落ちたような、ボロボロの一枚の青い羽根であった。

「望…羽っ…」
それは、由雉が最後に放った羽根。由雉がゆっくりと手を伸ばし、その羽根を手に取る。

「お前が勝ったんだ…由雉っ…」
「……っ」
微笑んで言う黒羽に、由雉も思わず笑みを零す。

「へへっ…」
小さく漏れる、笑い声。

「ガラにもなく…嬉しいやっ…」
そう呟き、由雉はしっかりと望羽を握り締めた。

中央塔・左翼。
「門貴っ！門貴っ！！」
静まり返ったその場所に、荒々しい二花の叫び声が響き渡る。

「しっかりせぇっ！門貴っ！目ぇ覚ますんやぁっ！！」
「ぐ…うぅ…ぅ…」
「姉ちゃん…そんなに首絞めたら、門貴さん、ホンマに死んでまうってっ…」
深く目を閉じ、倒れ込んでいた門貴を、その襟元を掴み、無理やり体を起き上がらせて、上下に何度も揺さぶり、必死に起こそうとしている二花。目を閉じたまま、苦しげな声を漏らしている門貴に、後ろからチョキ三郎が、何とか二花を宥めようと声をかける。

「んっ…んん～っ…」
「門貴っ！？」
ゆっくりと目を開ける門貴に、二花が大きく目を見開く。

「二…花ぁ…？」
「門貴っ…！！」
その金色の瞳を薄く開き、目の前の二花の姿を捉え、小さくではあるが確かに名を呼ぶ門貴に、二花が少し瞳に涙を溜めながら、嬉しそうな笑顔を見せる。

「門貴さんっ、ご無事で何よっ…」
「門貴ぃっ！！」
「門貴さんっ！」
「ううっ…」

二花の後ろから門貴へと声を掛けようとしたチョキ三郎であったが、横から駆け寄る移貴と猿飛の声に掻き消され、どこか悲しげに俯く。

「移貴…」
「んっ？」
二花に支えられながら、地面に横になった門貴が、すぐ横へとやって来た移貴の方を見上げる。

「俺ぇ…勝った…？」
「……っ」
どこか不安げに問いかける門貴に、移貴は少し驚いたような顔を見せたが、すぐに目を細め、笑みを浮かべた。

「ああっ、お前の勝ちやっ…門貴…」
「……そうかっ…」
笑顔で頷く移貴に、門貴が柔らかな笑みを零す。

「さっすが門貴さんですねぇっ！」
「……二花っ…」
「……っ？」
猿飛が満面の笑みを見せる中、門貴が移貴から二花へと視線を移し、小さな声で二花を呼ぶ。安心しきった様子で肩を落としていた二花は、その声に戸惑うように顔を上げた。

「一花が…一花が来てくれてな…」
――根性見せぇやっ！門貴っ！――
「俺を…勝たせてくれたわっ…」

門貴が穏やかな笑顔を、二花へと向ける。

「……そうか…姉ちゃんが…」

少し視線を落とし、そっと笑みを零す二花。

「そうかっ…」

「……っ」

伏せた瞳から涙を流す二花を見て、門貴もそっと微笑んだ。

中央塔・後方。

「諸刃…」

一人立ち尽くしたリンゴが、どこか不安げな表情で中央塔を見つめる。

「リンゴぉ～っ！！」

「……っ？」

遠くの方から聞こえてくる叫び声に、リンゴが戸惑うように振り返る。

「金汰さんっ」

「リンゴっ！無事だったかっ！！」

そこへやって来たのは数名のオトポリ隊員を引き連れた、金汰であった。リンゴの姿を確認し、金汰がどこか安心したような笑みを浮かべる。

「金汰さん、どうしてここに…」
「おおぉ～っ！ゴンっ！！」
リンゴが問いかける前に、金汰がすぐ近くで倒れているゴンを見つけ、焦った表情で駆け寄る。
「どうしたぁ～っ！？ゴンっ！！」
「大丈夫っ、ゴンなら無事です」
「へっ？」
ゴンへと駆け寄った金汰が、リンゴの冷静な声に、戸惑った様子で顔を上げる。

「傷はひどいですが、勝負はゴンが勝ちました。粗方の治療はしてありますけど、一応、救護班にっ…」
「そうかぁ～っ！よくやったなぁっ！ゴンっ！ガハハハハっ！！」
「傷はひどいっつってんでしょうがっ！！」
嬉しそうに笑みを浮かべ、倒れているゴンの腹を勢いよく叩く金汰に、リンゴが思わず顔をしかめ、怒鳴りあげる。

「痛うるせぇっ…」
『……っ』
小さく声を漏らしながら、ゆっくりとその目つきの悪い瞳を開くゴンに、リンゴと金汰が驚いた顔を見せる。

「ゴンっ！！」
「んっ？って、金汰さんっ…？」
目を開き、起き上がったゴンが、すぐ横に座っている金汰を見て、眉をひそめる。

「なんで金汰さんがここにっ…」
「ガハハハっ！！勝ったらしいなぁっ！ゴンっ！よくやったぞぉっ

！！」

「痛いっ！」

勢いよく背中を叩く金汰に、ゴンが思いきり顔を歪める。

「勝ったって…そういや俺っ…」

――俺の負けだ…ゴン……――

「……っ！」

諸刃の顔を思い出し、ゴンがハッとした表情を見せる。

「諸刃っ…！？」

周囲を見回し、諸刃の姿を探すゴン。だが付近に、諸刃の姿は見当たらなかった。

「リンゴっ！諸刃はっ…！？」

「……っ」

ゴンに問いかけられたリンゴが、表情を曇らせ、そっと俯く。

「諸刃は…」

ゆっくりと伸ばされる、リンゴの指先。

「あそこに…」

「……っ」

リンゴの指の先に見える、中央塔。それを見つめ、ゴンもその表情を曇らせる。

「諸刃っ…」

ゴンの声が、どこか不安げに響き渡った。

第97章　輝矢の選択　☆2

「ハチっ」
「輝矢っ…！」
驚いたような表情を見せた輝矢のもとへ、最上階へと駆け上がってきた桜時が駆け寄っていく。
「大丈夫かっ!?」
「ハチこそっ…」
少し慌てた様子で駆けてくる桜時に、輝矢が不安げな瞳を向ける。

「お怪我はっ…その手っ…！」
「えっ？」
桜時の体を見回した輝矢が、黒く焼け焦げた桜時の左手に気づき、険しい表情を見せる。

「だっ大丈夫だってっ！見た目程、痛くねぇーしっ！」
「ハチっ…」
平気そうに笑ってみせる桜時に、輝矢が複雑そうに目を細める。

「ギンは…？倒したのですか？」
「……っ」
輝矢のその問いかけに、桜時の表情が曇る。

「死んだ…」
そっと答えた桜時が、シルクの方を振り返る。

「あんたの息子は…死んだよ…」
「……っ」

「息子っ…？」
桜時の言葉にシルクが少し眉をひそめ、輝矢が困惑したような顔を見せる。
「ギンが…シルクの息子っ…？」
「ああっ、牢戸とシルクの息子だって、本人から聞いた」
「……っ」
答える桜時に、輝矢がそっと俯く。
――何者っ…？――
シルクと同じ力を操り、輝矢の鬼の力を目覚めさせようとしたギン。そのギンの正体に輝矢は疑問を持っていたが、ギンがシルクの息子であるならば、その疑問にも説明がつく。
「それでっ…」
どこか納得したように、声を漏らす輝矢。
「そうっ…」
シルクも、桜時の言葉を受け止めるような声を発した。
「貴方が殺したの…？」
「……。」
微笑んで問いかけるシルクに、桜時が少し視線を落とす。
「フフっ…貴方はそんなこと出来る人種じゃないわね…」
桜時のことを見透かすように、シルクが笑う。
「なら、自ら死んだの…あの子は…」
シルクが桜時から視線を逸らし、どこか遠くを見るような瞳を見

せる。

「愚かな子っ…」

「……っ」

そっと呟くシルクのその言葉に、桜時が思わず顔をしかめる。

――映らないなら…どう思おうと無駄だ……――

ギンの悲しげな笑顔が、思い出された。

「……てめぇっ…！」

桜時が勢いよく顔を上げ、シルクを睨むように見つめる。

「ギンはっ…！てめぇの為にっ…！！」

「ハチっ」

「……っ」

制すように呼ぶ輝矢の声に、桜時が放とうとしていた言葉を止める。

「輝矢っ」

「どんなに叫んでも…その言葉はあの者には届きません…」

険しい表情で振り返る桜時に、輝矢が冷静に答える。

「同感ねっ…フフっ…」

「……っ」

微笑むシルクに再び顔をしかめながら、桜時が輝矢からシルクへと視線を移す。

「まぁ…あの子に、鬼だけの世界を見せてあげられなかったのは…

少し残念に思うけれど…」
「鬼だけの世界なんて来ねぇーよっ」
「……っ？」
シルクが少し戸惑うように首を傾げる中、強く言い放った桜時が、懐に手を入れる。

「コレは返してもらったっ」
「あっ」
そう言って桜時が懐から取り出し、シルクの方へと見せたのは、美しく輝く結晶であった。

「命力の結晶っ…」
桜時の手の中の結晶を見て、輝矢が少し目を見開く。
「ああっ」
驚きの表情を見せる輝矢へ、桜時が大きく頷きかける。

「これで鬼力の放出は出来ないっ」
鋭い瞳を、桜時がシルクへと向ける。

「四方の塔も、俺たちの仲間が封印したっ」
シルクを突き刺すように見つめ、桜時がさらに言葉を続ける。

「俺たち人間をっ、鬼へ変えることは出来ないっ！」
桜時が、声を張り上げる。

「お前の野望は潰えたんだっ！！牢戸知玖っ！！」
「……。」
強く叫ぶ桜時の声を聞き、シルクがそっと俯く。

「シルクっ…」
ゆっくりとシルクの名を呼んだ輝矢が、桜時よりも一歩前へと出て、まっすぐにシルクの方を見る。

「アナタの…」
輝矢がゆっくりと、口を開く。

「鬼の、負けです…」
「……っ」
視線を床へと落としたまま、輝矢の言葉を聞いていたシルクが、ゆっくりとその顔を上げる。

「……。」
顔を上げたシルクは、とても冷たい瞳を見せていた。

「フフっ…」
「……っ？」
その口元を緩め、そっと笑みを零すシルクに、輝矢が首を傾げる。

「フフフっ…」
「……っ何、笑ってんだよっ！？」
顔をしかめた桜時が、思わず叫び声をあげる。

「ごめんなさいっ…でも、あんまりおかしくって…」
「おかしい…？」
微笑んだまま謝るシルクの言葉に、輝矢がそっと眉をひそめる。

「確かに…四方の塔は封印されて、命力の結晶は貴方の手の中…そして、今の私はたった一人っ…」

シルクがよく響く声で、ゆっくりと言葉を繋げる。

「だから…人間たちを皆、鬼にすることは諦めるわっ…」

『えっ…？』

あっさりと言い放つシルクに、輝矢と桜時が同時に戸惑うような声を漏らす。

「諦めるっ…？」

「ええっ…」

聞き返した桜時に、シルクは大きく頷く。

「“鬼にする”ことはっ…」

そう言ってシルクが、右手を掲げる。

――バァァァーンっ！

シルクが右手を掲げた途端、広間の天井が勢いよく崩れ落ちた。

「何やっ…！？」

中央塔の左翼で門貴の治療にあたっていた二花が、聞こえてくる大きな音に、勢いよく振り返る。

「今の音はっ…！？」
「中央塔の方からやっ」
「……っ」
皆が険しい表情を見せる中、座り込んだままの門貴が、不安げに中央塔を見つめる。
「輝矢んっ…」

「中央塔の先端がっ…！」
中央塔の右翼では、急に崩れ始めた中央塔の先端を見つめ、黒羽が厳しい表情を見せていた。
「……。」
黒羽の横で、同じように崩れ出した中央塔を見つめる由雉。
「桜時っ…」

『……っ』
粉々になって落ちてくる瓦礫に身を屈めながら、輝矢と桜時が戸惑った表情を見せる。

「何をっ…！」
「……っ」
困惑の声をあげる桜時の横で、輝矢が両手で頭を押さえ、降って来る瓦礫から身を守りながら、ゆっくりと崩れた天井を見上げる。

「なっ…！！」
「輝矢っ…？」
見上げた途端、大きく目を見開き、思わず声を漏らす輝矢。その輝矢の様子に首を傾げ、桜時も輝矢に続くようにして、崩れた天井を見上げた。

「うっ…！」
顔を上げた桜時が、輝矢と同じように、その表情に衝撃を走らせる。

「あっ…あれはっ…！！」
二人の見上げた先、崩れた天井の上、上方に広がった青い空に浮かぶように存在する、巨大な白い光の塊。激しい光を放ち、今にも弾け飛びそうな、そんなように見えた。

「鬼力っ…」
「ご名答っ」
厳しい表情で呟いた輝矢へ、シルクが右手を下ろしながら微笑みかける。

「あれは、四方の塔が封印されるまでの間に、蓄えられた鬼力よ…」
「あんなにっ…？」
シルクの言葉を受けながら、桜時が険しい表情で、もう一度、上空の鬼力の塊を見上げる。

「確かに、命力の結晶がなければ…この鬼力を世界中へ放出することは出来ないけれど…」
冷たい笑みを浮かべたまま、シルクがゆっくりと言葉を続ける。

「この鬼力をすべて取り込んで、この場で爆発させることなら…命力がなくても可能だわ…」
「爆発っ…？」
「ええっ…」
そっと眉をひそめる輝矢へ、シルクが大きく頷きかける。
「これだけの力よ…？私の力もすべて戻っているし、爆発させたなら、きっと…」
シルクの唇が、怪しく歪む。
「人間も獣人も…この世界を生きる、すべての生き物が死に絶えるわっ…」
『……っ！！』
そのシルクの言葉に、輝矢と桜時が衝撃を走らせる。
「すべての…生き物がっ…？」
信じられないといった表情で、大きく目を見開き、シルクの言葉を繰り返す桜時。
「そん…なっ…」
「ああっ、ここにいる貴女たち二人は、助かるかも知れないわねっ…」
途切れ途切れの言葉を発する桜時に、シルクがどこか悪戯っぽく、言葉を付け加える。
「アダムとイヴのように降り立つ…？」

シルクが、どこか試すように問いかける。

「誰もいなくなった地上へっ…」

『……っ』

そっと微笑むシルクに、険しい表情を見せる輝矢と桜時。

「“鬼にする”ことが出来ないんだもの…なら、“消す”しかないでしょう…？フフっ…」

問いかけながら、楽しげに笑うシルク。

「大人しくしてれば…皆、鬼になって、仲良く暮らせたのに…」

シルクの声が、少し低くなる。

「貴女たちがいけないのよ…？」

鋭く突き刺さる、赤い瞳。

「余計なこと、するからっ…」

「クっ…！」

「……。」

シルクの言葉に、桜時は強く歯を食いしばり、輝矢はそっと眉をひそめた。

「あの光はっ…！」
崩れた中央塔の先端に現れた、巨大な白い光の塊に気づき、中央塔後方にいるゴンや金汰が皆、険しい表情で中央塔を見上げていた。

「鬼力っ…！」
「牢戸知玖めっ…！まだ何かする気かっ…！？」
「……っ」
叫ぶように声を放つ金汰とリンゴの横で、眉をひそめるゴン。

「金汰さんっ」
「んっ！？」
ゴンに呼ばれ、金汰が勢いよく振り向く。

「皆で太狼さんたちの所へ…一箇所に固まりましょう」
真剣な表情で、ゴンが金汰へ訴える。

「このままじゃ…危険な気がする…」
『……っ』
ゴンの言葉に、金汰とリンゴも真剣な表情となる。

「……わかった」
金汰が大きく頷き、隊員たちの方を振り返る。

「全隊員っ！先程いた場所まで戻れっ！左翼と右翼へ行った連中にも、そう伝えろっ！！」
『はっ！』
金汰の指示に頷き、やって来ていた隊員たちが、素早く3箇所へ散っていく。

「俺たちも戻るぞっ！」

「はいっ！」
リンゴが金汰の言葉に頷き、駆け出していく金汰の後に続こうと、足を踏み出す。

「……。」
「……っ？」
立ち尽くしたままのゴンに気づき、足を止めて振り向くリンゴ。

「ゴンっ？」
「へっ？」
「早く行くわよっ！」
「あっ、ああっ」
振り向いたゴンに強く言い放つと、リンゴが金汰の後を追って、その場を駆け出していく。

「……っ」
その場に一人残り、中央塔を見つめるゴン。

「諸刃っ…」

「はぁっ…はぁっ…」
息を切らしながら、諸刃が今はもう誰もいない、中央塔の一階へと駆け込んでいく。

「シルク様っ…」
そっとシルクの名を呼び、諸刃が上へと続く階段を駆け上がった。

目の前に現れた巨大な鬼力の塊と、放たれたシルクの衝撃的な言葉に、輝矢と桜時はただ、その光を見上げたまま、その場に立ち尽くすことしか出来なかった。

「人間も獣人も…すべて…死に絶える…」

シルクの放った言葉を、茫然とした表情で繰り返す桜時。

「すべて…消えるっ…」

――イヌコロぉ～っ！――

――桜時ぃぃ～っ♪――

――桜時っ…――

仲間や家族、大切な者たちの笑顔が、次々と思い出された。

「そんなっ…」

思い出される笑顔に、そっと頭を抱える桜時。

「そんなっ…！！」

膝を折った桜時が、力なくその場に座り込む。

「ここまで来たのにっ…！やっとみんなで、ここまで辿り着いたってのにっ…！！」

桜時が床に、自分の右手を叩きつける。

「なのに最後がコレかよっ…！！」

「ハチっ…」

どうすることも出来ない自分への怒りをぶつけるように、何度も床に手を叩きつける桜時。そんな桜時を見ながら、止めることも出来ず、輝矢はそっと目を細めた。

「フフっ…」

「……っ」

笑みを零すシルクに、輝矢が厳しい視線を向ける。

「いつ見ても美しいものね…」

シルクの冷たい微笑みが、輝矢へと向けられる。

「希望が絶望に変わる姿はっ…」

「……。」

その言葉に、輝矢がより一層、険しい表情を見せる。

「とても美しかったわよ…？最後の貴女たちは…」

シルクが両手を広げ、語るような口調で言葉を続ける。

「儚く散り逝くさだめでありながら…それでも皆で協力し合い、一分一秒を、一生懸命生きたっ…」

広げられていた手のひらが、強く握り締められる。

「本当に美しかった…」

もう一度呟いたシルクが、桜時の方を見つめる。

「まるで…貴方の咲かす桜のようにっ…」
「……っ！」
シルクの言葉に、深く俯いたままの桜時が、大きく目を見開く。
――それでも一生懸命咲くから…美しいんだよっ……――
思い出される、大切な言葉。
「クゥっ…！！」
その言葉と今の状況を思い、桜時は込み上げる悔しさに、ただ強く唇を噛み締めた。
「だから…最後も一瞬で…美しいまま消してあげるっ…」
『……っ！』
そう笑ってシルクが両手を掲げると、浮かんでいた鬼力の塊が、シルクの方へと降りて来て、シルクの体全体を包み込んでいった。
その光景を、二人が厳しい表情で見つめる。
「クソっ…！」
桜時が村雨丸を抜き、勢いよく立ち上がる。
「力を取り込む前にっ…！あいつをっ…！」
「ダメですっ！ハチっ！」
「……っ」
シルクのもとへと飛び出して行こうとした桜時を、輝矢が腕を掴み、強く引き止める。

「あんな高密度の鬼力の中に飛び込んでいけばっ…！アナタが鬼人に変わってしまうっ…！」
「けどっ…！このままじゃみんながっ…！」
強く言い放つ輝矢に対し、桜時も思わず声を張る。

「みんなが死んじまうよっ…！！」
「……っ」
桜時の必死の叫びに、輝矢の表情が曇る。

「みんながっ…！みんながっ…」
少し混乱気味に言葉を繰り返しながら、桜時が深く頭を抱える。

「何とかっ…何とかしないとっ…！」
「……。」
どうすることも出来ないこの状況で直、諦めることなく必死に考えを巡らせる桜時。そんな桜時の必死の姿を見つめ、俯いた輝矢が、少し悩み込むような表情を見せる。

「……っ」
一瞬、目を伏せた後、輝矢が意を決した表情で、顔を上げた。

「私に…考えがあります…」
「えっ…？」

静かに呟いた輝矢に、桜時はそっと首を傾げた。

第97章　輝矢の選択　☆3

中央塔付近・中央塔部隊。
「太狼さんっ！」
「ん～っ？」
イチゴや羊スケたちと待機していた太狼が、聞こえてくる自分の名を呼ぶ声に振り向く。
「ゴンっ」
「ゴンさぁ～んっ！」
「お姉ちゃんっ！」
太狼が振り向くと、そこには金汰やリンゴに支えられながらこちらへとやって来る、ゴンの姿があった。ゴンとリンゴの無事な姿を確認し、羊スケとイチゴがそれぞれ、嬉しそうな笑顔を見せる。

「生きてたのぉ～っ」
「まぁ何とかっ…それより、他の奴らはっ…」
「やっほぉ～っ」
『……っ』
ゴンが太狼へ問いかけようとしたその時、ゴンたちがやって来た方とは別の方角から、暢気な声が聞こえてきて、太狼やゴンたちが一斉に振り返った。
「サルっ！」
「ゴンゴンも無事みたいやなぁ～っ」
皆が振り返ると、笑顔を見せた門貴が、二花と移貴の肩を借りながら、皆のもとへとやって来ていた。目を見開くゴンに、門貴が軽く手を振る。

「きゃあああっ！門貴様ぁぁっ！！」

「ぐへぇっ！！」
黄色い声を放ったヘンゼルが、突進するような勢いで、門貴へと飛び込んでいく。本来は男のヘンゼルにきつく抱き締められ、門貴が苦しげな声を漏らした。
「アホウっ！！門貴は怪我人やぞぉっ！？とっとと離れいやぁっ！！」
「ぐおおぉうっ！！」
「自分も怪我悪化させてんで…姉ちゃん…」
ヘンゼルから引き剥がすように、門貴の腕を引っ張り上げる二花に、チョキ三郎がこっそりと突っ込みを入れる。

「相変わらずバカうるさいねぇ～」
『……っ？』
聞こえてくる呆れたような声に、門貴や二花たちが一斉に振り向く。
「ユッキーっ！！」
「またバカは治らなかったみたいだねぇ～おサルさぁ～んっ」
二花やヘンゼルに動きを封じられたまま、思わず笑みを零す門貴。門貴の視線の先には、黒羽の肩を借りながらやって来る由雉の姿があり、悪態をつきながらも、門貴に笑顔を向けていた。

「無事やったんかぁっ！」
「カワイイボクがやられるわけ、ないでしょ～っ」
「ほぼ、やられかけだったけどな…」
「うるさいっ」
横から口を挟む黒羽に、由雉が鋭い視線を送る。

「おサルくんもトリくんも無事かぁ～じゃあ後はっ…」
「太狼っ！」
「ん～っ？」

再び名を呼ばれ、少し考えるような表情を見せていた太狼が、首を傾げながら振り返る。
「おおっ！皆も無事そうだなっ！」
「座黒さぁ～んっ」
そこには各塔に散ったオトポリ隊員や、駆けつけた各国の増援の皆を引き連れた座黒が立っていた。

「あれぇ？座黒さんも来てたんでしたっけぇ～っ？」
「ううっ…一緒に来たっていうのにっ、何て存在感の低さっ…」
何の遠慮もなく問いかける太狼に、座黒が悲しげに俯く。

「でぇ、四方の塔の状況はぁ～？」
「えっ？あっ、ああ…各塔の白鬼掃討も終わって、人員は皆、ここに集合させたぞ」
太狼の言葉に、座黒が真剣な表情となって真面目に答える。

「ってことは、今、鬼国跡地に居る人間は、みぃ～んな、ここに集まったってことだねぇ」
「後は…竹取とハチ公だけかっ…」
そう言いながら、ゴンが厳しい表情で、中央塔の方を振り向く。

「あっ…！あれはっ…！」
「……っ？」
中央塔を見上げた途端、大きな声を発するゴン。その声につられ、太狼たちも皆、中央塔の方を見上げる。

「中央塔がっ…！」
「分離しているっ…！？」

皆の見つめる先で、頂点の白い光も含めた中央塔の先端部分が、壁が総崩れになるようにして、下の塔の部分と分離し始めていた。

「浮いていくっ…？」

表情を曇らせるリンゴ。分離した先端部分は、下の塔部分との距離を徐々にひらき、確かに、青い空の中へと浮かび上がっていっていた。

「塔が浮くなんてっ…！そんなことっ…！」

「鬼力に…引っ張られてるんだ…」

『……っ』

信じ難い表情を見せていた皆であったが、そっと呟く太狼の言葉に、一斉に険しい表情となる。

「鬼力に…？」

「光が…どんどん強くなってる…」

眉をひそめる門貴の横で、由雉が上がっていく光を見つめる。

「何が…起ころうとしとんやっ…」

「輝矢…桜時…」

「……。」

二人の身を案じる門貴と由雉の横で、太狼もどこか不安げな表情を見せた。

「壁がっ…」
険しい表情を見せた桜時が、少しずつ崩れ始める、最上階の広間の壁を見回し、さらにその眉をひそめた。
「この感覚っ…浮いてるのかっ…？」
足をつけた床を見つめ、戸惑うように呟く桜時。壁の向こうに見える、青い空の景色に変わりはないが、崩れた壁の破片は下方へと落ちていっている。重力に逆らっている感覚も、確かにあった。

「鬼力と共に、塔の先端部分ごと…空中に浮上させているのでしょう…」
「えっ…？」
桜時が振り向くと、厳しい表情を見せた輝矢が、分析するように周囲を見回していた。

「恐らくは…地上と距離を取り、爆発の影響を受けない為…」
「……っ」
輝矢の言葉に、桜時が眉をひそめる。

「フフフっ…その通りよ…」
鬼力の中に包まれ、徐々にその力を取り込んでいくシルクが、二人へと柔らかな笑みを浮かべる。

「仲間や家族と一緒に消えたいのなら…今の内に地上へ降りることをお勧めするわ…」
シルクが案内でもするように、右手をあげる。

「これ以上、高度が上がれば…それすら叶わなくなるわよ…？」
「クっ…」
挑発するようなシルクの言葉に、強く唇を噛む桜時。

「このままじゃ本気でやべぇっ…！」
桜時が焦った表情で、シルクから輝矢へと視線を移す。

「輝矢っ…！考えって…！」
「……。」
「輝矢っ…？」
振り向いた桜時が、今まで見たことがない程に真剣な表情を見せている輝矢に、少し戸惑うように、もう一度、名を呼んだ。

「よく聞いて下さい…ハチ…」
輝矢が桜時へ、真剣な眼差しを向ける。

「今から…私が、あの鬼力の一部を取り込みます…」
「えっ…！？」
思いがけない輝矢の言葉に、桜時が衝撃を走らせる。

「なっ…！何言ってっ…！」
「そうすれば、シルクが取り込む鬼力は減り、私の力とぶつけ合わせることで、爆発は最小限に抑えられるはずです…」
「……っ！」
桜時の声を遮り、さらに言葉を続ける輝矢。その輝矢のあまりに驚きの考えに、桜時は大きく目を見開いた。

「バカなことっ、言うんじゃねぇっ！！」
声を張り上げ、思い切り右手を振り上げる桜時。

「んなことしたらっ、お前っ…！！」
「フフフフっ…！」

『……っ』
聞こえてくる笑い声に、会話をしていた輝矢と桜時が同時に振り向く。
「何とも愚かしい考えねぇっ…月の少女っ…」
「……。」
嘲笑うかのような笑みを浮かべるシルクに、輝矢がそっと目を細める。
「貴女は人と鬼人の間に生まれた…中途半端な鬼人っ…」
シルクが尖った爪を、輝矢へと向ける。
「そんな貴女が、この高密度な鬼力を取り込めば…正常に自我が保てなくなるのは然(しか)りっ…」
冷たい口元が、大きく歪む。
「“鬼化”…するわよっ…？」
「……っ！」
「……っ」
シルクの言葉に、桜時が大きく衝撃を走らせ、輝矢が眉をひそめる。
「……。」
厳しい表情を見せたまま、視線だけを落とす輝矢。高密度の鬼力を取り込めば、水力の暴走の時のように自我を失うことは勿論、人の姿でいられなくなってしまうことも、輝矢には予想がついていた。
「鬼化って…」

――今更っ…人になんて戻れないよっ…――
――鬼は消える…君の愛するお姫様も共に…――

不安げに呟いた桜時の脳裏に、哀しく消えていったロムやギンの姿が浮かぶ。そして、その姿が、今の輝矢の姿と重なった。

「そんな…ことっ…」
俯いた桜時が、震える拳を握り締める。

「ダメだっ！そんなのっ！！」
「ハチっ…」
勢いよく顔を上げ、強く言い放つ桜時に、輝矢がそっと目を細める。

「私が必ず爆発を抑えてみせます…だからっ…」
「お前のことは信じてるよっ！！」
「えっ…？」
叫ぶ桜時に、輝矢が戸惑うように首を傾げる。

「お前のことは信じてるけどっ…！でもっ！お前だけに、そんな危険なことさせるなんてっ！そんなのっ！！」
言葉を続ける桜時が、強く唇を噛み締め、否定するように首を横に振る。

「そんなのっ…俺はっ…！」
「……。」
輝矢の身を、自分のことのように案じてくれているのだろう。そんな桜時の様子を見つめ、輝矢はそっと目を伏せた。

「ですが…他に手がありません…」
「……っ！」
輝矢が厳しい言葉を投げかけると、桜時は強く眉をひそめた。

「人間たちを守れる…手が…」
「けどっ…」
現実を突き付ける輝矢に、それでも反抗するように声を漏らす桜時。

「けどっ…！！」
「ハチっ」
「……っ」
叫ぼうとした桜時の声を、輝矢が名を呼ぶことで遮る。

「ハチ…」
輝矢がもう一度、桜時を呼び、険しい表情を見せた桜時を、まっすぐに見つめる。

「私に…」
桜時を見つめた輝矢が、ゆっくりと口元を緩める。

「私に…人間たちの世界を、アナタの世界を…守らせてはいただけませんかっ…？」
「輝矢っ…」
穏やかに微笑んで、まるで願うように問いかける輝矢に、桜時がそっと目を細める。

「フフフっ…健気なものね…」

「……っ」
聞こえてくるシルクの声に、輝矢が桜時から鬼力の塊の方へと視線を移した。
「けれど…本当にいいのっ…？」
シルクが再度、確かめるように、輝矢へと問いかける。
「貴女は中途半端な鬼人…一度、鬼化すれば、また人間の姿に戻れる保証はない…」
「えっ…！？」
「……っ」
驚き、振り向く桜時のすぐ横で、輝矢が少し顔をしかめる。
「もし仮に私を倒せたとして…貴女は一生、鬼のままっ…」
輝矢に鋭い視線を送りながら、シルクがさらに言葉を続ける。
「そんな貴女を…人間たちが受け入れてくれると思うっ…？」
「……。」
シルクの問いかけに、輝矢がそっと視線を落とす。
――鬼の子なのよぉっ！汚らわしいっ！！――
過去の、受け入れてもらえなかった時の出来事が思い出された。
同じ姿をしていても、鬼の血が通っているというだけで、輝矢を受け入れなかった人々。
「きっと受け入れないっ」
冷たい瞳を見せたシルクが、はっきりと言い切る。
「貴女が命懸けで救った人間はっ、貴女を受け入れず、嫌い、蔑み、

そして“消えろ”と、そう思うのよっ…！」
「……。」
シルクの言葉を聞き、輝矢はそっと目を伏せた。

「覚悟は…出来ています…」
再び目を開いた輝矢が、ゆっくりと口を開く。

「……っ？」
「輝矢っ…？」
そんな輝矢を、戸惑うように見つめる桜時とシルク。

「人が…」
左手をあげた輝矢が、その左手を強く握り締める。

「人が…“この世界に、鬼はいらぬ”と言うのならっ…」
輝矢がゆっくりと、顔を上げる。

「アナタを倒して…私も死ぬっ…」
「……っ！！」

強い瞳を見せ、はっきりと言い放つ輝矢に、桜時が大きく目を見開く。

「クっ…！」

ただ、悔しげに唇を噛み締め、深く俯く桜時。その言葉は、偽りでも虚勢でもなく、輝矢は本当に死ぬ覚悟が出来ているのだ。それ

が伝わったからこそ、それが伝わっても直、かける言葉が見つからなかったからこそ、桜時はただ、唇を噛み締めることしか出来なかった。

「そこまでの覚悟が出来ているなんてねぇっ…」
シルクが、どこか呆れたように肩を落とす。
「本当…あんなくだらない人間どもの救世主には、勿体ないわっ…」
そっと微笑んだシルクが、諦めるように呟いた。

「……。」
「ハチ…」
輝矢がシルクへ背を向け、俯いたままの桜時の方を見る。
「爆発を最小限にしたとしても…この付近の大地には、それなりの被害が予想されます…」
桜時のすぐ前へと立った輝矢が、まっすぐに桜時を見つめる。

「アナタは下へ降りて…皆を守って下さい…」
「えっ…？」
輝矢の言葉に、桜時が驚いた様子で顔を上げる。

「アナタの命力ならば…それが可能なはずっ…」
「降りろって…」
優しく微笑む輝矢に、桜時の表情が歪む。
「ダメだっ…！俺もここに居るっ…！！」

必死に首を横に振った桜時が、必死に輝矢を見つめながら、大き

な声で訴える。

「俺もっ…！！最後まで、お前と一緒にっ…！！」
「……っ」
「えっ…？」
言葉を続けようとした桜時の方へと、近づいてくる輝矢の顔。

「んっ…！」

輝矢の唇が、桜時の唇を塞ぎ、桜時は、それ以上の言葉を発することが出来なかった。

「……。」
唇が離れると、輝矢が顔を後ろへ下げ、よく見えるようになった桜時の顔を、まじまじと見つめる。

「輝矢っ…」
「アナタを…愛していました…」

同じようにまっすぐに輝矢を見つめる桜時の頬に、左手を触れ、微笑んだ輝矢が、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「たぶんっ…」

――俺と同じ名前のっ、俺が一番好きな花だっ！――

絶望に埋め尽くされていた輝矢の心に、大きな花を、咲かせてくれた人。

「初めて出逢った時から…ずっとっ…」

少し俯いた輝矢が、噛み締めるように言葉を呟く。

「……。」

そんな輝矢を、まっすぐに見つめる桜時。

――返事は、この戦いが終わったら言います……――

生き残る為の理由だと言って、そう約束したその返事を、今言うということが、何を意味しているのか。それがわかるような気がして、でも考えたくはなくて、桜時はただ、今、目の前にいる輝矢を見つめた。

「アナタに出逢って…私の世界は変わった…」

穏やかに微笑んだ輝矢が、さらに言葉を続ける。

「アナタに出逢って…私は生きていることを嬉しく思えたっ…」

顔を上げた輝矢の瞳には、今にも零れ落ちそうな、水の滴が溜まっていた。

「アナタに出逢えて…本当に良かったっ…」

「……っ」

少し震えたその声を聞き、桜時もどこか泣きだしそうに、その瞳を細める。

「サヨウナラっ…」

輝矢がより一層、大きく笑う。

初めて呼ばれる名に、大きく目を見開く桜時。

「“桜時”…」

「……っ！！」

「……っ」

「あっ…！」

輝矢が強く桜時の胸を押すと、桜時の体が、崩れ落ちた壁の隙間から、中央塔の外へと零れ落ちる。

「かっ…！」

感じる重力の中、桜時が必死に輝矢へと手を伸ばす。

「輝矢ぁぁぁっ！！」

どこまでも広がる空に突き抜けるように、輝矢の名を呼んで、桜時が遥か下方の、分離した中央塔へと落ちていく。

第97章　輝矢の選択　☆4

「……っ」
桜時の叫び声を聞きながら、輝矢が俯き、強く唇を噛み締める。

「フフフっ…フフフフっ…！」
「……。」
聞こえてくる笑い声に、外を見つめていた輝矢が、顔を下げたまま、ゆっくりと振り向く。

「なかなか泣けるお別れシーンだったわよっ…？月の少女っ…」
シルクが、嘲るような笑みを浮かべる。

「まぁでも…そんなに寂しがる必要はないわっ…」
言葉だけは優しいものを、向けるシルク。

「もうすぐ…すべての鬼力の取り込みが終わるっ…死の世界で、彼らが貴女を待っ…」
「……。」
「うっ…！」
饒舌に語っていたシルクが、不意にその顔を歪め、言葉を止める。
シルクの視線の先では、顔を上げた輝矢が、先程までは黒であった瞳を、鋭く赤く光らせていた。

「鬼人の瞳っ…本当に鬼力を操るつもりだというのっ…？」
訝しげに、眉をひそめるシルク。

「中途半端な鬼人のっ、しかも黒鬼一族の娘などにっ…そんな真似が出来るはずっ…」
「月器…」
「……っ」
シルクが見つめる中、輝矢がゆっくりと、右手に持った三日月を振り上げる。
「三日月っ…！」
――パァァァァンっ！
「何っ…！？」
輝矢が三日月を振り上げた途端、シルクの周囲を包み込んでいた鬼力の一部が、三日月へと流れ込み始めた。流れ出ていく鬼力に、シルクが珍しく、焦りを表情に浮かべる。
「玄神の神器でっ…鬼力を蓄積しようというのっ…？」
信じられないといった表情で、輝矢を見つめるシルク。
「そんなことがっ…」
「これが私の力っ…」
「……っ」
険しい表情を見せていたシルクが、小さく声を漏らす輝矢に、ふとその眉をひそめる。
「父さんと母さんの…二人の力でっ…」
輝矢が三日月を握る手に、さらに力を込める。
「私がアナタを止めるっ…！！」
「……っ」

曇りのない表情で、強く言い放つ輝矢に対し、どこか不快そうに顔をしかめるシルク。

「いいわっ…止められるものなら、止めればいいっ…！」

鬼力の光の中で、シルクが堂々と両手を広げる。

「もう何をやったところで手遅れよっ…！！」

シルクの周囲の鬼力の光が、さらにその輝きを増していく。

「人間などを愛した、愚かな鬼の子っ…！せめて最期も、人間と共に消し去ってあげるわっ…！！」

輝きを増したその光を、シルクが輝矢へ向けて放つ。

「……っ」

鋭い瞳を見せた輝矢が、鬼力で包まれた三日月を、素早く構える。

「竹取輝矢っ…」

向かってくる鬼力の光に、狙いを定める輝矢。

「鬼退治致しますっ…！！」

そう叫び、輝矢が勢いよく三日月を振り下ろした。

――バァァァァーンっ！！

下方・中央塔付近。
『うわあああああっ！！』
中央塔上空での強い鬼力同士のぶつかり合いに、近くの空は急激に荒れ狂い、黒雲を呼んで辺りを暗くし、下にいる太狼たち周辺の大地にも、激しい風が吹き荒れた。攻めるように吹く強風に、皆が必死に身を屈め、何とか持ちこたえようとしている。

「何て風っ…！！」
「吹き飛ばされるっスぅ～っ！！」
「全員っ！一箇所に固まれっ！！相手押し潰してでも、留まるんだっ！！」
イチゴや羊スケが切羽詰まった声をあげる中、金汰が強風にも負けずに、必死に皆へと指示を送る。

「俺の風力でっ…！」
「あかんてっ！門貴っ！あんたはまだ、力使えるような状態やないっ！」
「包羽をっ…！」
「やめろっ！死にたいのかっ…！？」
力を使おうとした門貴と由雉を、それぞれ二花と黒羽が強く止める。
『クっ…！』
止められた二人が、何も出来ない自分のもどかしさに、そっと唇を噛んだ。

「あっ…！」
皆と同じように身を屈めていたリンゴが、沖合の方から崩れ始め

ている大地に気づき、その表情を険しくする。崩れ出した地面は、すぐさま風に持っていかれ、その地割れ部分が、徐々にこちらへと向かって来ていた。

「ゴンっ…！」

「クっ…！」

リンゴと同じようにその様子に気づいたゴンが、迫り来る地割れに厳しい表情を見せる。

「太狼さんっ！」

「……っ」

ゴンの振り向いた先には、同じように厳しい表情を見せた太狼。

「ここまでかっ…」

太狼がどこか、諦めるように呟いた。

――……っ！！

激しい爆発と共に、御伽湖へと浮上した鬼国跡地は、今度こそ跡形もなく、砕け散った。

「んっ…」
地面に倒れ込んでいた由雉が、ゆっくりとその瞳を開き、顔を上げた。

「あれっ…？ボク…って、海っ！？」
目の前に広がる、青々とした海を見て、由雉が思わず目を見開き、勢いよく起き上がる。先程まで大地の広がっていたはずの景色が、波の荒々しい海へとその姿を変えている。

「なん…でっ…」
「なんやぁ～っ？」
戸惑う由雉の横で、同じように地面に倒れていた門貴が、ゆっくりと起き上がる。

「俺ら、無事やったんかぁ～？って、何やっ！これっ！！」
寝惚け眼で顔を上げた門貴が、目の前に広がる海を見た途端、一気に目が覚めたように大きく目を見開く。

「海ぃ～っ！？」
「海っつーよりは、御伽湖だろうなっ」
二人のすぐ横で立ち上がったゴンが、頭を掻きながら、ゆっくりと周囲を見回していく。

「四方の塔も中央塔もねぇーし、浮上した鬼国跡地が、丸ごと吹き飛ばされちまったんだろっ…」
ゴンが厳しい表情を見せながら、後方を振り返る。

「俺たちのいる、この大地だけを残してっ…」
『ううぅ…ううっ…』

振り返ったゴンの視線の先には、皆、地面へと倒れ込んでいるが、欠けることなく無事な姿を見せている仲間たちの姿があった。皆が倒れている大地だけが残り、その周囲の大地はきれいになくなって、見事に御伽湖に囲まれている。まるで浮島のような状態であった。

「けどぉ…」
「なんで、ここだけ無事にっ…？」
「彼が助けてくれたみたいだよぉ～」
『彼ぇ～っ？』
太狼の言葉に、首を傾げた門貴と由雉が、同時に太狼の指差した方を振り向く。

「……。」
『あっ…！』
振り向いたその先に立つ人物を見て、大きく目を見開く門貴と由雉。

「桜時っ…！！」
「イヌコロっ！！」

皆が倒れていた地面から少し離れた浮島の端、丁度、中央塔のあった側の大地に1人、門貴たちに背を向けるようにして、静かに立ち尽くしている桜時。

「桜時っ…！」
「無事やったんかいなぁっ！イヌコロぉ～っ！」

後ろ姿だけで桜時と判別した門貴と由雉が、嬉々とした笑顔を見せ、まだ傷の治りきっていない体を動かして、桜時のもとへと駆け出していく。

「桜時が助けてくれたってっ、もしかして命力取り戻したとかっ！？」

「おおぉ～っ！そうかぁっ！」

思いついたように言う由雉の言葉に、門貴がさらに明るい声を出す。

「やったやんっ！イヌコロぉ～っ！！」

門貴が桜時のすぐ横へと駆け寄り、足を止める。

「んでぇっ！？輝矢んはどうしっ…！」

満面の笑顔を見せた門貴が、桜時の顔を覗き込む。

「……っ」

桜時の顔を覗き込んだ途端、眉をひそめる門貴。

「桜時…」

同じように桜時の顔を見た由雉も、静かに桜時の名を呼び、その表情を曇らせた。

「……。」

空を見上げ、立ち尽くす桜時の瞳からは、止まることのない涙が、流れ落ちていた。

「ハァっ…ハァっ…」

桜時たちが立つ地面の遥か上空、荒れ始めた空の中に浮かぶ、中央塔先端部。すでに天井部分は見る影もなく、ほとんど壁のなくなった最上階と、その下の胴体部だけが残り、空中に浮かび上がっていた。吹き晒しの最上階の床に膝をつき、シルクが少し乱れた息を漏らす。

「フフっ…」

乱れた呼吸の中で、シルクがそっと笑みを零す。

「まさかっ…本当に爆発を抑え込まれるとはねぇっ…」

そう呟いたシルクが、どこか感心したような笑みを浮かべる。

「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」

シルクが見つめる視線のその先には、シルクと同じように床へ膝をつき、深く俯いたまま、肩で大きく息をしている輝矢の姿があった。

「まぁいいわっ…人間たちは、貴女を殺してから…ゆっくりと始末していくことにするっ…」

楽しげに微笑んだシルクが、膝を伸ばし、その場にゆっくりと立

ち上がる。

「さぁ…始めましょう…？月の少女っ…」

シルクが両手を広げ、誘うように声を出す。

「私たちの…最期の戦いをっ…」

「……っ」

その言葉を受け、輝矢がゆっくりと顔を上げる。

「……。」

赤い瞳を光らせた輝矢の、その側頭部からは、二本の金色の角が伸びていた。

第９８章　人と鬼と　★１

――――鬼。
民話、郷土信仰に登場する、悪い物、恐ろしい物、強い物を象徴する存在。

御伽湖、遥か上空。中央塔・最上階部。竹取輝矢ｖｓ牢戸知玖。
輝矢とシルクがぶつけ合わせた鬼力の影響により荒れた天候に、強い風が吹きすさび、光は遮られ、そこは空の中だというのにひどく暗かった。

「はぁっ…はぁっ…」
暗闇の中で鋭く光る赤い瞳を輝かせ、輝矢が息を乱しながらも、ゆっくりと屈めていた体を起こす。
「はぁ…」
長く伸びた黒髪の毛先は、重力に逆らうように少し逆立ち、先の尖った耳のすぐ上から、天へと突き上げるような金色の角が二本、黒髪の中に引き立つように生えていた。かすかに開いた口の、右側の一本の歯だけが、牙のように鋭く尖り、両手の爪も、普通の爪と鬼のような鋭い爪が、規則性なく混ざっている。

「フフフっ…」
そんな輝矢の前方に立つ、同じように赤い瞳を闇の中で輝かせたシルク。

「醜い姿ね…月の少女っ…」

赤い唇を歪めながら、シルクがそっと微笑む。
「完全な鬼化も出来ていない…やはり半分は人の血を引いてるからかしらっ…」
輝矢のその姿を、頭から足先までじっくりと見つめて、シルクが言い放つ。

「今の貴女は、人でも鬼でもない…とても中途半端な存在だわっ…」
「……。」
シルクの言葉に、輝矢が少し目を細め、厳しい表情を見せた。

「そんな姿に堕ちてまで…あんな人間どもを守りたいなんてっ…気が知れないわねっ…」
少し呆れるように、シルクが肩を落とす。

「アナタには…わかりませんよ…」
「……っ？」
小さな声で、ゆっくりと言葉を発する輝矢に、シルクが視線を送る。

「何も…大切なもののないアナタには…」
輝矢が、突き刺すような鋭い視線を、シルクへと向ける。

「……っ」
その輝矢の言葉に、眉をひそめ、顔をしかめるシルク。

「そうねっ…」
小さく頷きながら、シルクがそっと俯く。

「確かに…大切なものなんて、何も無いわ…」
強い風の吹き荒れる中、かすかに響くシルクの声。

「だって…大切なものはすべてっ…」

――牢戸ぉぉぉぉぉっ！！――

「……人間どもが奪っていったんだからっ…」

「……。」

憎しみと怨みと、哀しみのこもった瞳で顔を上げるシルクを見つめ、輝矢は少し目を細めた。たくさんの感情に、震えた声。今まで何を考えているのかわからなかったシルクが、明らかに感情を示し始めている。

「だから…人間を滅ぼすと…？」

「ええっ…それが私に残った、唯一の望みっ…」

輝矢の問いかけに答えながら、シルクがどこか遠くを見るような瞳を見せる。

「だから私には…貴女が邪魔っ…」

「……っ」

輝矢へと視線を戻したシルクが、急にその表情を冷たいものへと変える。少し低くなった声に、気圧されるように、輝矢は少し眉をひそめた。

「人間を守ると、そう言う貴女が…」

シルクの赤い瞳が、輝矢の赤い瞳をまっすぐに捉える。

「だから…私たちで決めましょうっ…？」

誘うように、シルクが右手を輝矢へと差し出す。

「人間が…この世界を生きるに値する生き物なのかどうかっ…」

鋭い瞳を見せたシルクが、口元だけで笑う。

「貴女と私の…どちらが勝つのかによってっ…！」

シルクが差し出していた右手の、手のひらを、素早く輝矢へと向ける。

「“水星”っ…！」

向けられた手のひらから放たれる、激しい水の塊。

「……っ」

表情を厳しくした輝矢が、不規則に鬼爪の生えた右手を振り上げる。

「“水月”っ！」

輝矢の右手から放たれる、無数の水の刃。

――バァァァァーンっ！

御伽湖上。鬼国跡の小さな大地。

「……っ？」

残った大地の端に立ち、まだ波の揺れる湖を見つめていた由雉が、ふと何かに気づき、顔を上げて空を見た。

「雨かっ…？」
由雉のすぐ後方に立っていた門貴も、由雉につられるようにして空を見上げる。厚い雲に覆われ、暗く染まった空から、ポツリポツリと小さな水の滴が落ちてきていた。

「……っ」
由雉が手を伸ばし、広げた手のひらで、落ちてきた水滴を受け止める。

「これはっ…」
「“水力”、だね…」
「……っ」
落ちてきた水滴を見つめ、ハッとした表情を見せていた由雉が、横から聞こえてくる声に、少し驚いた様子で振り向く。

「タローっ…」
「……。」
由雉の横には、同じように手のひらで水滴を受け止め、その水滴を見つめながら、どこか哀しげな表情を見せている太狼の姿があった。

「まだ、戦ってるんだね…あの子は…」
『……っ』
笑みを浮かべながらも、その心の不安を見せる太狼を見つめ、門貴と由雉は少し目を細めると、再び水滴の降り落ちる空を見上げた。

「あそこに…」
「輝矢んがっ…」
もう目には見えぬ、遥か空の先を見つめ、門貴と由雉が厳しい表情を見せる。

「誰だっていいから、早くしろよっ！」
『……っ？』
後方から聞こえてくる大きな声に、門貴や由雉、太狼が戸惑った様子で、一斉に振り返る。

「ゴンっ…！」
注意するように、強くゴンの名を呼ぶリンゴ。

「トリになれる奴全員でっ、俺を上まで運べっ！早くっ！」
無事に生き残った仲間の皆へ、必死の形相で怒鳴りあげているのは、まだ傷も癒えきらず、リンゴに支えてもらっている状態のままのゴンであった。

「そう言われましても、わたくしはペンギンでしてぇっ…」
「今っ、飛べねぇトリに用はねぇよっ！それよりっ、他のちゃんとしたトリ連中っ…！！」
「とっ…飛べない鳥っ…」
『アニキぃぃぃ～っ！！』
ゴンに相手にもされず、落ち込む銀ペーに、子分ペンギンたちが駆けつける。

「おいっ！トリ連中っ…！！」
「何してんのぉっ、ゴォ～ンっ」
「……っ」
肩に手が乗り、ゴンが振り返ると、そこには少し呆れたような表情を見せた、太狼が立っていた。

「太狼さんっ…」

「恐喝容疑で逮捕しちゃうぞぉっ」
「こんな時にまでフザけないで下さいっ！」
手で銃を撃つ振りをしながら、笑顔で言い放つ太狼に、ゴンが勢いよく怒鳴りあげる。
「冗談やなく、逮捕されんでぇ～っ」
「そうそうっ、ゴンって、生まれつき恐喝顔なんだからぁ～」
「じゃかましいっ！誰が生まれつき恐喝顔だっ！！」
横から口を挟む門貴と由雉にも、ゴンが激しく怒鳴り返す。傷だらけの見た目のわりには、元気そうである。

「そうだっ！キジっ！てめぇーも、上へ行くのに協力しっ…！」
「上行って、どうすんのっ？」
「……っ」
真剣な表情となり、ゴンの言葉を遮って問いかける太狼に、ゴンが眉をひそめる。

「決まってんでしょうっ？竹取を助けるんですよっ」
「アンタねぇっ！そんっなボロボロで、手助けなんて出来るはずっ…！」
「手助け出来るなんて思ってねぇっ！！」
ゴンが強く叫び、リンゴの言葉を遮る。

「身代わりにでも盾にでも弾避けにでもっ、何かその辺になれればっ、俺はそれでいいんだよっ！！」
「ゴンさんっ…」
必死に叫び続けるゴンに、見つめる羊スケがそっと目を細める。

「竹取がっ…竹取がまだ、たった一人で戦ってんのにっ…！俺たちは何もせずにここにいるなんてっ…！」
「一人じゃねぇよっ…」

「……っ」

小さく聞こえてくる声に気づき、ゴンが言葉を止めて振り向く。

「ハチ公っ」

「一人なんかじゃない…」

ゴンの振り向いた先に立つのは、今はもう涙もなく、まっすぐに空を見上げる桜時。

「ここに居る、誰か一人でも欠けてたら…あいつは今、あそこで戦えちゃいなかった…」

桜時が透き通る青い瞳で、降り落ちる水滴を見つめる。

「ここに居る全員の頑張りがあったから…あいつは今、あそこで戦えてる…」

『……。』

そこにいる誰もが、動きを止め、桜時を見つめ、桜時の言葉に集中した。

「ここに居るみんなの想いを、願いを背負って…あいつは今、あそこで戦ってるっ…」

――私に…人間の世界を、アナタの世界を…守らせて下さいませんか…？――

思い出される、優しい笑顔。

「だからあいつは…一人なんかじゃないっ…」

強く言い切り、桜時が力一杯、拳を握り締める。

「……。」

そんな桜時の後ろ姿を、まっすぐに見つめるゴン。

「はぁっ…！」

「……っ？」

大きく息をついて、その場に座り込むゴンに、リンゴが不思議がるように首を傾げる。

「何よ？随分とあっさり引くじゃないっ」

「そりゃあなっ」

意外そうに問いかけるリンゴに、ゴンが素っ気なく答える。

「一番飛んでいっちまいたい奴に、んなこと言われたらっ…言い返す言葉もねぇーだろうがっ」

「……そうねっ」

困ったように頭を掻くゴンを見ながら、リンゴは少し悲しげな笑みを浮かべた。

「……。」

輝矢の戦う、遥か上空を、見つめる桜時。

「帰って来い…輝矢…」

桜時の小さな声が、風の吹き荒れる空に放たれる。

「どんな姿でもいい…必ず、帰って来いっ…」

祈るようなその声はかすかに震えており、空を見つめる桜時の瞳は、少し細められていた。

「俺はここでっ…お前を待ってるっ…」
そんな桜時へ、降り注ぐ水滴。
「待ってるからっ…」
桜時の瞳に落ちた水滴が、涙のように、桜時の頬を伝った。

「……っ“水漣”っ！」
鬼爪を振り下ろした輝矢が、シルクへと滝のような、激しい水の塊を放つ。

「……っ」
向かってくる水を見つめ、余裕の笑みを浮かべながら、その右手を突き出すシルク。

「“水盾”…」
シルクの突き出した右手の正面に、大きな水の壁が出来上がる。
水の壁に弾き返され、輝矢のもとへと戻っていく水漣。

「“水爆”…」
「……っ！」

――バァァァーンっ！

さらにシルクが言葉を続けると、輝矢へと弾きかえって来た水漣の小さな水飛沫の一つ一つが、その場で勢いよく爆発した。

「ううぅっ…！」

直撃は免れたものの、多少はダメージを受ける輝矢。

「そこっ」

「……っ」

水爆をかわした輝矢へと人差し指を向けるシルクに、輝矢が眉をひそめる。

「“鬼閃”…」

「……っ！」

シルクの指先から放たれる、白く鋭い光線。

「クっ…！」

鋭い表情を見せた輝矢が、素早く鬼爪を振り上げる。

――パァァァァンっ！

振り上げた鬼爪を向かって来た鬼閃に当て、そのまま腕を大きく振って、鬼閃の向きを変える輝矢。向かう方角を変えられた鬼閃が、暗い空の向こうへと消えていく。

「へぇっ…」

鬼閃を防いだ輝矢を見て、シルクが感心したような笑みを浮かべる。

「鬼爪っ…！」

間を置くことなく、輝矢が振り上げたままの鬼爪を、シルクへ向

けて勢いよく放つ。

「鬼人の技を…」

またしても感心するように呟きながら、シルクがその場で高々と飛び上がる。

「でもこんな単調な攻撃じゃあっ…」

「……っ」

「何っ…？」

飛び上がったシルクのすぐ後方へと、現れる輝矢。現れた輝矢に、シルクが眉をひそめる。

「喰らいなさいっ…！」

輝矢がすぐ目の前のシルクへと、左手を向けた。

「“水月”っ…！！」

「……っ！」

輝矢の左手から放たれた無数の水の刃が、至近距離からシルクの体を直撃する。

――パァァァァーンっ！

「なっ…！？」

だが、水の刃がシルクの体を斬り裂いたその瞬間、シルクの体は、細かい水飛沫となって、その場に勢いよく弾け飛んだ。

「水分身っ…？」

「そうっ」

「……っ！」

シルクの声が上方から聞こえてくることに気づき、輝矢がすぐさ

ま顔を上げる。

「フフっ…いい眺めっ…」

高々と輝矢を見下ろしながら、シルクが微笑んだその口を、そっと開く。

「“鬼口”っ」

「うっ…！」

シルクの口から放たれる、高密度の鬼口に、輝矢が大きく表情を歪めた。

――バァァァァーンっ！

シルクの放った鬼口が、中央塔最上階の床を勢いよく貫き、大きな風穴をあけると、最上階にくっついてきていた塔の下部分も、その半分が遥か下方へと崩れ落ちた。

「フフフっ…」

大きくあいた穴を眺めながら、シルクがゆっくりと床へと降り立つ。

「よく避けたわねぇ…」

「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」

床へ降りたシルクと、その大穴を挟むようにして、逆側に座り込んでいるのは、大きく息を乱した輝矢であった。ぎりぎりのところで、鬼口をかわしたようである。

「その素早さだけは大したものよ…？」

「はぁっ…はぁっ…」

肩を上下に揺らし、呼吸を整えながら、輝矢が、感心するように

言うシルクに、鋭い視線を送る。

「鬼爪も鬼の技も…よく使いこなしている…」

輝矢を誉めるような言葉を、ゆっくりと続けるシルク。

「でも…鬼化してその程度ではねぇっ…」

空と一体となったその場に、シルクがよく響かせる。

「それにっ…」

「……っ」

そっと人差し指を差し出すシルクに、輝矢が眉をひそめる。

「“鬼閃”っ…」

「うっ…！」

座り込んだままの輝矢へと、放たれる白色の光線。

「グっ…！」

輝矢が必死に横へと体を転がらせて、飛んできた鬼閃をかわした。

「はぁっ…！はぁっ…！」

さらに息を乱しながら、倒れた体を起き上がらせる輝矢。

「体がっ…はぁっ…苦しいっ…はぁっ…」

左手で強く胸元を掴んだ輝矢が、思い通りに動かぬ自分の言葉に、戸惑うように言葉を発する。

「……っ？」

そんな輝矢の視界に入る、床に無造作に転がっているある物。

「月器…」

それは、輝矢の月器、三日月であった。シルクの爆発を抑えた際に、そのあまりの衝撃に手放してしまったのだろう。鬼化し、鬼爪で戦っていた為、手元にないことを特に意識していなかった。

「自分でもわかるでしょう…？」

「……っ」

三日月を見つめていた輝矢が、聞こえてくるシルクの声に振り向く。

「体に相当、ガタがきているわ…」

鋭く光るシルクの瞳が、輝矢の体を捉えていた。

「鬼化がどれ程、貴女の体に負担をかけているかが、よくわかる…」

「……っ」

シルクの言葉に、眉をひそめる輝矢。

「所詮は鬼と人の混血…純粋な鬼の力には、その身は耐えられないっ…」

響いていたシルクの声が、不意に低いものとなる。

「このまま戦い続ければ…貴女は死ぬ…」

「……。」

はっきりと言い切るシルクに、厳しい表情を見せた輝矢の表情が、かすかに動いた。シルクの言葉が偽りでないことには、輝矢自身、気付いていた。

「どう…？私がいっそ、貴女を本当の鬼人にしてあげましょうかっ…？」

笑顔を見せたシルクが、軽い口調で輝矢へと問いかける。

「そうすれば貴女は死ぬことはない…その中途半端な存在で、苦しむこともなくなるわよっ…？」
「……っ」
シルクの誘いに、輝矢がそっと目を細める。
「お断りします」
「フフっ…即答ねっ…」
すぐさま答える輝矢に、シルクが思わず笑みを零す。
「まぁ貴女らしいといえば、貴女らしいけどっ…」
「私は…」
微笑むシルクを見つめながら、輝矢がゆっくりと口を開いた。
「私は…永遠に続く命などに興味はありませんっ…」
まっすぐな瞳を見せ、輝矢が堂々と言葉を放つ。
「アナタを倒して逝けるなら…今、この場で死ぬことに、何一つの悔いもないっ…」
「共倒れ覚悟…？そういえば、さっきもそんなことを言っていたわね…」
強い決意を見せる輝矢に、シルクが特に驚いた様子もなく、言葉を投げかける。
「逆に、アナタを倒さなければ、死んでも死にきれませんっ」
「フフっ…」
怯む様子など少しも見せずに答える輝矢に、シルクはそっと笑みを浮かべる。
「それに…」

「……っ？」
さらに言葉を続ける輝矢に、シルクが少し首を傾げる。
「私は確かに、人でも鬼でもない、中途半端な存在ですがっ…」
倒れていた体を起き上がらせ、その胸に鬼爪の伸びた手を当てる輝矢。
「だからこそ、守れるものもあるっ…」
顔を上げた輝矢が、どこか誇らしげに胸を張る。
「だからこそ、見える世界もあると…そう、信じていますっ…」
「……っ」
迷いのない瞳で言い放つ輝矢に、少し不満げに顔をしかめるシルク。
「貴女だからこそ見える世界…？フフフっ…」
輝矢の言葉を繰り返し、シルクがどこか楽しげに微笑む。
「そうねっ…それは確かにあるかも知れないっ…」
「……っ？」
納得するように頷くシルクに、輝矢が少し眉をひそめる。
「鬼化して、息も絶え絶えの貴女に…ここまでする必要もないのかも知れないけれど…」
輝矢にゆっくりと言い放ちながら、シルクがゆっくりと右手を振り上げる。
「折角だものっ…」
掲げられたシルクの右手から、放たれ始める白く、強い光。

「最期に見せてあげるっ…」
白い光に包まれながら、シルクが笑う。

「これが本物のっ…“鬼化”よっ…！」

――パァァァーンっ！

「うっ…！」

シルクを包み込んだ光が、より一層、強さを増していく。そのあまりの眩しさに、輝矢は起こした体を少し床へと倒し、光から目を逸らすように、その場でそっと俯いた。

第９８章　人と鬼と　★２

「フフっ…」
「……っ」
光が先程よりも収まり、笑い声が聞こえてくることに気づくと、輝矢が再び体を起こし、ゆっくりと顔を上げる。

「フフフっ…」
徐々に小さくなっていく白い光の、その中心に立つ、高い笑い声を響かせたその者。

「フフフフフっ…」
吹き荒れる風になびく、長い白髪から覗く二本の金色の角。白目のなくなった眼球だけの赤い瞳が、獲物を狙う獣のように鋭く輝く。血の通っていないような白い肌に、大きく鋭い牙と爪。それは、人と同じ大きさで、人と同じように手足を持った、人は明らかに異なる生き物。

「鬼…」
その生き物の名を、顔を上げた輝矢がポツリと呟く。

「そうよ…私は鬼っ…」
鋭い牙の生えた唇を歪ませながら、シルクが不気味に笑う。

「牢戸の遺志を継ぐ…この世界で最初の鬼人、シルクっ…」
自分の存在を天へと示すように、シルクが片方の手を空へ伸ばし、

もう片方の手を自分の胸へと当てる。

「私が貴女に…本当の世界を見せてあげるわっ…」

空へと向けられていた視線が、輝矢のところまで降りてくる。

「鬼に溢れたっ…地獄の世界をっ…！！」

「……っ」

威圧感ある叫び声をあげるシルクに、輝矢が少し怯むように、顔をしかめる。

「フフっ」

「えっ…？」

笑い声だけをその場に残し、消えるシルク。

「どこへっ…？」

「フフフっ…」

「……っ！」

笑い声の続きが聞こえてきたのは、輝矢のすぐ目の前。周囲を見回していた輝矢が、目の前に現れたシルクを視界に入れ、その瞳を大きく開く。

「速いっ…！」

「鬼爪っ…」

「うっ…！」

振り下ろされる太く鋭い鬼爪に、輝矢が少し表情を引きつる。

「グゥっ…！！」

下りてくる鬼爪に対し、輝矢も自分の鬼爪を突き上げる。

――パァァァァンっ！

「うぁっ…！」

だが輝矢の鬼爪は、鬼化し、強化されたシルクの鬼爪にあっという間に砕き落とされてしまう。

「クっ…！」

鬼爪を砕かれた輝矢が、必死に立ち上がり、後ろへと飛んで鬼爪をかわす。だが、その爪先が腹部をかすめ、勢いよく血が飛び散った。

「はぁっ…はぁっ…」

腹部の傷を押さえながら、輝矢が少し息を乱す。

「鬼爪がっ…」

鬼爪の砕かれた右手を見下ろし、輝矢が険しい表情を見せる。

「……っ」

そっと視線を横に流す輝矢。見つめる先には、先程見つけた、床に落ちている三日月があった。鬼爪を砕かれるのであれば、もっと強力な武器を手にするしかない。

「何を余所見しているのっ…？」

「……っ」

聞こえてくるシルクの声に、輝矢が再び、正面を向く。

「“水星”っ…」

微笑んだシルクが、振り向いた輝矢へと間髪入れずに、水を放つ。

「クっ…！」
向かってくる水星に顔をしかめながら、輝矢も素早く右手を突き出した。
「“水月”っ…！」
輝矢の右手から、放たれる無数の水の刃。放たれた二つの水が、二人の丁度、中間で、互いに激しくぶつかり合う。
「……っ」
だが、すぐさま押され始める水月に、表情を曇らせる輝矢。
「これはっ…」
「フフっ…」
シルクが微笑むのと同時に、シルクの水星が輝矢の水月を呑み込み、さらに大きな水の塊となって、輝矢の方へと向かっていく。
「うっ…！」
避ける術もなく、顔を歪める輝矢。
――バァァァァァーンっ！
「あああああああっ！！」
水の直撃を受けた輝矢が、勢いよく後方へと吹き飛ばされる。
「ううっ…！あっ…」
わずかに残っていた最上階の壁部分に丁度、当たり、背中を打ちつけた輝矢が、そのまま背を壁にもたれかけるようにして、その場へと座り込んだ。

「ううっ…」
「危ないっ…もう少しズレていたら…遥か下へ真っ逆さまだったわよっ…？」
「……っ」
苦しげな声を漏らす輝矢へ、明るく声を掛けるシルク。その言葉に、顔を上げた輝矢が、そっと顔をしかめる。落ちないように、シルクがわざと壁の残っている方へ吹き飛ばしたことなど、輝矢にはわかりきっていた。

「もういいじゃない…？」
座り込んだままの輝矢へ、シルクがまるで説得するかのように、声を掛ける。

「貴女はよく頑張ったわ…」
そう言ったシルクが、優しく微笑んで見せる。

「ここまでよく…たった一人で戦った…」
「……っ」
そのシルクの微笑みに、輝矢が少し眉をひそめる。

「私が誉めてあげるわ…」
言葉とは裏腹に、素っ気なく言い放つシルク。

「……っ」
シルクのその言葉の間にも、輝矢は視線を横に流し、三日月の落ちている位置を確認する。

「だから…もういい加減、諦めてっ…」

「……っ！」
「……っ？」
急に立ち上がり、シルクが居る場所とは見当違いの位置へと、勢いよく駆け出していく輝矢に、シルクが訝しげに眉をひそめる。

「逃げようとでもする気…？貴女らしくないわね…」
そう言いながら、シルクが、駆けていく輝矢へと右手を向ける。

「“水星”…」
シルクの右手から、無数の水の玉が放たれる。

「クっ…！」
水星が向かってくることを確認しながらも、避ける素振りも見せず、その足を止めることなく、まっすぐにどこかへと駆け続ける輝矢。

「……っ？」
そんな輝矢の様子に、シルクが少し首を傾げる。

「何を…？」
「クっ…！！」
水星が迫り、シルクが戸惑いの表情を見せる中、輝矢は必死に何かへと、その手を伸ばした。

――バァァァァーンっ！

放たれた水星が輝矢を直撃し、大きな衝撃音を響かせる。

「……。」
降り落ちていく水飛沫を、静かに見つめるシルク。

「んっ…？」
「はぁっ…！はぁっ…！はぁっ…！」
収まっていく水飛沫の中から見えてきたのは、全身に傷を負い、大量の血を流して、荒々しく呼吸を乱しながら、その場に座り込んでいる輝矢であった。水星にやられたのか、右側の角が欠け落ちてしまっている。

「はぁっ…！はぁっ…！」
だが、その傷だらけの輝矢の両手が、しっかりと抱えるようにして、三日月を握り締めていた。

「……っ」
きつく三日月を握り締めている輝矢を見つめ、シルクが少し眉をひそめる。

「そんなに傷だらけになってまで掴んだのが…それっ…？」
輝矢を見つめたシルクが、どこか呆れたように言い放つ。

「はぁっ…はぁっ…」
「今更、神器などで、どうしようというの…？」
必死に呼吸を整えている輝矢へ、シルクが問いかけを続ける。

「所詮は人の神如きの武具…私の攻撃は愚か、貴女自身の攻撃にだって耐えきれないかも知れっ…」
「これが…私の武器です…」
「……っ」

輝矢のか細い、途切れ途切れの声が、シルクの言葉を遮る。

「ここまで生きてきた…戦ってきた…私の、唯一の武器ですっ…」

「……。」

三日月を握り締め、まっすぐな瞳で言い放つ輝矢に、シルクが少し目を細める。

「鬼化に神器…」

そう呟きながら、シルクがそっと俯く。

「確かに…鬼でも人でもない貴女には、最もな姿なのかも知れないわね…」

俯いたシルクが、ゆっくりと口元を緩める。

「いいわっ…」

シルクが右手を上げると、五本の鬼爪が白い光を放ちながら、重なり合っていく。

「そんなにそれで戦いたいのなら…その望み、叶えてあげるっ…」

重なり合った鬼爪が、光の殻を破り、一本の長細い白棒となって、シルクの右手に収まった。

「……っ」

シルクの右手に収まった白棒を見つめながら、輝矢が傷だらけの体を立ち上がらせ、握り締めた三日月を、ゆっくりと構える。

「……。」

鋭い瞳を見せる輝矢に、微笑みを浮かべながら、シルクもゆっくりと構えを取った。

「三日月っ！！」
「“叶棒（かなぼう）”っ…！」
それぞれの武器を構え、互いのもとへと向かっていく輝矢とシルク。

――パァァァァンっ！

輝矢の三日月とシルクの叶棒が、真正面から勢いよくぶつかり合う。

「クっ…！」
「フフフっ…」
最上階の床を移動しながら、輝矢とシルクが、何度も互いの武器を重ね合わせる。

『……っ』
少し後ろへ飛び、二人が距離を取る。

「叶棒っ…“水星”っ…！」
「三日月っ…！“水月”っ！！」
互いを武器を振り下ろすと、その先から無数の水の玉と刃が、一斉に放たれた。

――バァァァァァーンっ！

最上階の中央で、激しく飛び散る水飛沫。

『……っ』

水飛沫の飛び散る中、互いの方へと向かって駆け込んでいく輝矢とシルク。

「フフっ…」

シルクが微笑みながら、叶棒を持っていない左手をそっと振り上げる。

「“鬼爪・天回”っ…」

輝矢へと放たれる、鋭い五本の爪。

「……っ」

向かってくる鬼爪を見つめ、その瞳を鋭くした輝矢が、不規則に鬼爪の生えた左手を振るう。

「鬼爪っ…！」

輝矢が足を止めぬまま、その不規則な鬼爪で、シルクの放った鬼爪をすべて叩き落とした。

「……っ」

先程は砕き落とせたはずの輝矢の鬼爪に、今度はシルクの鬼爪が叩き落とされ、シルクは冷静にしていたその表情を、わずかに曇らせた。

「神器を使うことで…鬼力が上がっている…？」

相容れないはずの二つの力を、まるで相乗させるかのように、高

めている輝矢。

「本当に…不思議な少女ねっ…」

向かってくる輝矢を見ながら、シルクが不敵な笑みを浮かべる。

「三日月っ…！」

鬼爪を叩き落とした勢いのまま、シルクへと突き進んだ輝矢が、勢いよく三日月を振り下ろす。

『……っ！』

再び激しくぶつかり合う、三日月と叶棒。

「……っ」

すぐ目の前に立つ、厳しい表情を見せた輝矢を見ながら、シルクがそっと目を細める。

「ねぇ…？月の少女…」

「……っ」

重ね合わせた武器の向こうから、そっと呼びかけるシルクに、輝矢が眉をひそめる。

「鬼でも人でもない貴女に…一つ、問いかけをしてもいい…？」

「……っ？」

問いかけの許しを乞うシルクに、輝矢が戸惑うような表情を見せる。

「ご自由にどうぞっ」

「フフっ…」

素っ気なく答える輝矢に、シルクがどこか楽しげな笑みを浮かべる。

「世界にはどうして…“人”と“鬼”、二つの種族が存在するのかしらっ…？」
「……っ」
叶棒にこもる力を緩めることなく、シルクがゆっくりと問いかけを口にする。その漠然とした問いかけに、問われた輝矢は、少し顔をしかめた。

「だって、そうでしょう…？世界に存在するのが、人か鬼、どちらか一方であったなら…」
シルクが突き刺すような鋭い視線を、輝矢へと送る。

「くだらない争いのすべてが…起こらなかったかも知れないっ…」
赤い唇が、大きく歪む。

「貴女も私も…大切な人を失わずに済んだかも知れないのに…」
「……。」
シルクの言葉に、輝矢がそっと視線を落とす。

「互いに歩み寄る為…？互いをわかり合う為…？」
選択肢を並べるように、次々と言葉を放つシルク。

「ううんっ…絶対違うわっ…」
強く首を横に振り、シルクがきっぱりと言い切る。

「争わせる為よっ…！」
「……っ！」
急に強く押し迫る叶棒に、輝矢が表情を険しくしながらも、三日

月の刀身を横へとずらす。

「クっ…！」

「フフっ…」

互いに後方へと飛び下がり、距離を取る輝矢とシルク。去り際に動かされた刃が、それぞれの右腕を斬り裂き、二人の居た場所に、赤い血だけが遺される。

「世界は…人と鬼が争う為に創られた戦場っ…」

右腕から血を流しながら、楽しげに微笑むシルク。

「世界は…人と鬼が争う為に存在しているのよ…」

「……っ」

シルクの冷たい微笑みに、輝矢が眉をひそめ、顔をしかめる。

「ほらっ…今もこうしてっ…貴女と私が争っているでしょうっ…？」

輝矢へと向けられる、叶棒の先。

「“鬼閃束”っ…！」

「……っ！」

人差し指から放っていた鬼閃とは、太さも大きさも十倍以上はある鬼閃束が、輝矢へ向かって、勢いよく放たれる。

「“月器・十六夜”っ…！」

三日月を十六夜へと変え、その金色の盾を、鬼閃束へと突き出す輝矢。

「ううっ…！」

十六夜へと直撃する、鬼閃束。そのあまりの重圧に、輝矢が思わ

ず顔をしかめる。

「クゥっ…！」

――バァァァァァーンっ！

輝矢がその赤い瞳を強く輝かせると、十六夜から青色の光が放たれ、鬼閃束を空の彼方へと弾き飛ばした。

「そういえばトマトの怨念がついてたんだったわねっ…」

十六夜の放つ青い光を見つめながら、シルクが思い出したように呟く。

「“上弦”っ…！」

輝矢が、青く光る十六夜を半月へと欠けさせる。

「“月光”っ！」

上空へと放り投げた上弦から、下方にいるシルクへ向けて、無数の青く輝く水の刃が放たれる。

「……っ」

水の刃の降ってくる空を見上げ、大きく口を開くシルク。

「“鬼口”っ…！」

シルクの口から放たれる、人の姿の時よりも、さらに巨大で高密度な鬼口。

――バァァァァァーンっ！

二つの力が激しくぶつかり合い、空に花火のように弾け飛ぶ光を放って、砕け散っていく。

「はぁっ…！はぁっ…！」

「フフっ…」

荒々しく呼吸をする輝矢に対し、息一つ乱さず、相変わらずの余裕の笑みを浮かべているシルク。

「何て力っ…」

鬼口の飛んでいった空を見上げながら、輝矢が少し顔を引きつる。

「あんなもの直撃したら…一溜りもないっ…」

そう呟きながら、輝矢が険しい表情を見せた。

「人と鬼は…どこまで行こうとも、永遠に相容れぬ存在っ…」

険しい顔つきの輝矢を見つめながら、シルクがそっと言い放つ。

「貴女の父親と母親が望んだような…共に生きる世界など、夢想に過ぎないっ…」

「……っ」

両親のことを口に出され、輝矢が少し顔をしかめる。

「創れるはずもないのよっ…」

「……。」

言い切るシルクに、輝矢が目を細める。

第９８章　人と鬼と　★３

「だから…自分は間違っていないと…？」
輝矢が鋭い表情を見せ、シルクにゆっくりと問いかける。

「間違っているのは私たちだと…そう言うのですかっ…？アナタはっ…」
睨みつけるように、シルクを見つめる輝矢。

「……。」
そんな輝矢に、シルクが少し目を細める。

「そうじゃないわっ…」
「えっ…？」
シルクが零す小さな声に、輝矢が首を傾けた。

「“鬼閃”っ」
「うっ…！」
首を傾げた輝矢へ、シルクが素早く人差し指を向け、鬼閃を放つ。

「あああああっ…！！」
鬼閃に左足を貫かれた輝矢が、その場に思わず膝をつく。

「ううっ…」
床に座り込み、苦しげな声を漏らす輝矢。

「そうじゃない…」
座り込んだ輝矢のもとへと歩み寄っていきながら、シルクがもう一度、先程の言葉を繰り返す。
「そう言ったのは…私じゃないわ…」
「……っ」
輝矢の少し手前で足を止めるシルクに対し、輝矢は痛みを滲ませた表情で、ゆっくりと顔を上げる。
「最初に“間違っている”と、そう言ったのは…貴女の祖先、黒鬼一族…」
「えっ…？」
急に話しを始めるシルクに、輝矢が戸惑ったような表情を見せる。
「黒鬼…一族っ…？」
それはシルクの白鬼一族と敵対した、人との共存を望んだ鬼たち。
輝矢や、輝矢の母・朝日たちの遠い祖先。
「彼らはね…私のしたことも、私自身も…すべて、強く否定したのっ…」
そう言いながら、シルクがそっと目を細める。
「“お前が鬼を解放したのが間違いだった”、“お前が鬼などを愛したことが間違いだった”と…」
「……っ」
続くシルクの言葉に、輝矢が少し顔をしかめた。
「私は悔しかったわ…彼らに、私が間違っていないことを、何としても証明してやりたかった…」
当時の悔しさを噛み締めるように、シルクがきつく拳を握り締め

る。

「そんな私の中の、黒鬼一族への固執…それがナイトになったのかも知れないっ…」

「内兎っ…？」

「ええっ…」

眉をひそめる輝矢に、シルクが大きく頷きかける。

「だからこそあの子は…あんなにも貴女に固執した…」

「……。」

シルクの言葉に、目を細める輝矢。

――輝矢っ…！僕はっ…！僕はっ…！！――

輝矢の脳裏に、最期の最期まで必死に、輝矢へと手を伸ばしていた内兎の姿が思い出された。確かに、シルクの力の一部として覚醒したばかりの内兎が、あんなにも輝矢の存在に拘ったことには、輝矢自身も疑問を抱いていた。

「そして、貴女の両親も言ったわ…“人を滅ぼし、鬼だけの世界を創ることなど、間違っている”と…」

「……っ」

話を戻すシルクに、輝矢が真剣な表情を見せる。

「いつもいつも…“間違っている”と否定されてきたのは私の方っ…」

「……。」

シルクの言葉に、輝矢が少し視線を落とす。

――お前の存在は…この世界には必要ない……――

否定されることの悲しみを、輝矢は痛い程に知っていた。

「私が牢戸を愛したことが、間違っていたっ…？」

少し目を見開いたシルクが、自らに問いかけるように言葉を発する。

「何が間違いだった…？手に触れたこと？名を呼んだこと？……出逢ったことっ…？」

「……。」

問いかけばかりを言葉にするシルクを、輝矢が険しい表情で見つめる。

「何故っ…愛するという行為までっ…否定されなきゃいけないのっ…？」

込み上げる怒りにか、少し震えるシルクの声。

「どうして…否定出来るのっ…？」

シルクが、不思議がるような顔を見せる。

「誰がっ…？」

急に低くなる、シルクの声。

「何の権限があってっ…！？」

「……っ」

強く叫ぶシルクに、輝矢が思わず顔をしかめる。

「どうせ貴女も、そう言うのでしょう…？」
再び輝矢へと、鋭い視線を向けるシルク。

「私は間違っていると…世界がこんな世界になってしまったのは、すべては私が間違えたせいだと…」
シルクが言葉の途中で、少しだけ間をあける。

「そう…言うのでしょうっ…？」
「……。」
改めて問いかけるシルクを、ただまっすぐに見つめる輝矢。

「私は…」
「……っ？」
そっと言葉を呟く輝矢に、シルクがかすかに眉を動かす。

「私は…アナタが牢戸という名の鬼を愛したことを…“間違っていた”なんて、言いませんっ…」
「……っ」
はっきりと答える輝矢に、シルクが顔をしかめる。

「優しくなんかしたって…手を緩めたりしないわよっ…？」
「別に優しくしてるわけじゃありませんよ…」
ゆっくりと言い放つシルクに、輝矢は少し俯きながら、言葉を続ける。

「私にだって…否定されたくないものはありますから…」

――輝矢っ！――

世界にたった一人の人に巡り合えたこと、その人を愛したこと、その人と愛し合えたことを、誰にも否定などされたくはない。

「誰かが誰かを愛することは…とても自由なことっ…」

俯いた輝矢が、そっと笑みを浮かべる。

「アナタにも、こんな私にも…平等に訪れた…」

「……。」

さらに言葉を続ける輝矢を、シルクがまっすぐに見つめる。

「そして…とても尊いことっ…」

輝矢が微笑んだまま、ゆっくりとその顔を上げる。

「誰にも止められない…誰も“間違ってる”だなんて言えないっ…」

「……っ」

向けられた輝矢の微笑みに、シルクが少し目を細める。

「アナタは…愛する者を間違えたわけじゃない…」

再び俯いた輝矢が、血の流れる左足を何とか立たせ、振らつきながらも、ゆっくりとその場に立ち上がる。

「アナタが間違ったことがあるとすれば…唯一つっ…」

言い切った輝矢が、鋭く顔を上げる。

「大切な友の存在から…目を逸らしたことです…」

「友っ…？」
輝矢の言葉に、シルクが少し戸惑うような表情を見せる。
――知玖っ…！！――
「ああっ…あの女のことっ…」
頭の中でトマトの姿を思い出し、シルクがそっと口元を緩める。
「目を逸らしたのは、あの女の方でしょうっ…？」
シルクが両手をあげ、訂正するように言い返す。
「鬼を愛した私から目を逸らし…逸らすだけでなく、消そうとまでしたっ…」
「トマトはアナタから目を逸らしてなどいなかった」
輝矢が間を置くことなく、すかさず言葉を返す。
「まっすぐにアナタを見つめ、真正面からアナタと向き合おうとしていたはずです」
「……っ」
輝矢の言葉に、顔をしかめるシルク。
――知り合いなんだっ！話をさせてくれっ！――
鬼と共に歩んでいたシルクを前に、トマトは何の迷いもなく、そう言い放った。
――久し振りだねぇ――
“何故、鬼と共に”と問う前に、友として、そう声を掛けた。

「それはきっと…トマトも、誰かを愛することに間違いなどないと、そう信じていたからっ…」

――誰だ…？――

――我が名は…青守……――

世界で初めて、人ではない者を愛した人。

「でもっ…あの女は私を裏切ったわっ…」

シルクが冷たく、吐き捨てるように言葉を放つ。

――牢戸ぉぉぉぉっっ！！――

目の前で失った、大切な者。

「私がこの世界で一番大切にしていたものを奪った…」

シルクがその冷たい瞳に、憎悪の色を浮かび上がらせる。

「奪ったのは…本当にトマトですか…？」

「……っ」

鋭く問いかける輝矢に、少し顔をしかめるシルク。

「アナタも…本当はわかっていたのではないですか…？」

輝矢が強く訴えるような表情で、まっすぐにシルクを見つめる。

「牢戸が死んだのは…トマトのせいではないことっ…」

「……っ」

その言葉に、シルクの表情が動く。

――玄上っ…！お前っ…！！――

牢戸の命を奪った玄上を、まるで責めるように見ていたトマト。

「アナタは…受けたあまりに深い悲しみと、抱いた憎しみのせいで…すべての現実から目を逸らした…」

目を細め、輝矢が言葉を続ける。

「すべてを…トマトのせいにしたっ…」

「……っ」

その言葉に、シルクがそっと俯く。

――貴女…初めから、そのつもりでっ……――

心を支配した、どこまでも深い憎しみを、すべて目の前の友へと向けた。

「すべてをトマトのせいにして…強くトマトを責めて…トマトの大切なものにまで手をかけたっ…」

「……。」

――青守ううううっ！！――

シルクがそっと視線を落とすと、あの日のトマトの叫び声が浮かんでくるようであった。

「黒鬼一族が、すべての混乱をアナタのせいにしたように…アナタも、すべての悲しみをトマトのせいにしたんですっ…」

「……。」

続く輝矢の言葉を聞きながら、シルクがそっと目を細める。

「だから何っ…？」

どこか開き直ったように、言葉を発するシルク。

「正しいじゃないっ…何もかも、あの女のせいでしょうっ…？」

シルクが両手を広げ、輝矢へ語るような口調で言う。

「あの女が龍を愛して、この世界に獣人なんて生み出さなければっ…私はこんなことにはならなかったっ」

「だからトマトは、アナタを責めなかった」

「……っ」

すかさず言い放つ輝矢に、シルクがまたしても顔をしかめる。

「変わりゆく世界も、変わってしまったアナタも…すべてが自分の責任だと、ひどく後悔していたっ…」

――悔いたことしか…思い出せないっ……――

死ぬ間際、悲しげにそう呟いたトマト。

「アナタは…アナタを責めないトマトの優しさに…ただ、甘えていただけですっ…」

「……。」

鋭く言い放つ輝矢に、シルクが浮かべていたすべての表情を消す。

「なら…他にどうすることが出来たというの…？」

「……っ」

無くなった表情と落ち着いた口調で、ただ単調に問いかけるシルクに、輝矢が少し戸惑うような表情を見せる。

「何もかもを奪われて…」

――何故っ、玄神が私たちをっ…！？――

何の前触れもなく、奪われていった同胞たちの命。

――牢戸ぉぉぉぉぉっっ！！――

いなくなってしまった、大切な者。閉ざされた、理想。

「たった一人…暗い海の底へ突き落されてっ…」

何もかもを奪われた上に、鬼国ごと海底へと沈められてしまった

シルク。日の光さえ届かない、薄暗い海の底の世界を思い出し、その表情を歪めた。

「あの女を憎むことで…生き永らえる以外っ…」

――奪ってやるっ…！！――

燃やした憎しみの炎で、復讐を誓うことだけで、暗い海の中を、ただ必死に生き延びた。

「私にどんな道があったというのっ…！？」

「……。」

今までで一番、冷たい表情を向けるシルクに、輝矢は思わず、ゴクリと息を呑んだ。

「何もかもを失ったこともない小娘がっ…」

輝矢を見つめるシルクの瞳が、より一層、強く輝く。

「知ったような口を聞くんじゃないわよっ…！！」

――パァァァァァンっ！

「うっ…！」

シルクの体から放たれる、強い鬼力の光に、向き合っていただけの輝矢も、その圧に押され、思わず身を屈める。

「何て鬼力っ…」
体に電気を流されてでもいるかのように、じんじんと伝わって来るシルクの鬼力。シルクの全身から、今までよりもさらに強い鬼力が放たれている。小さく呟きながら、輝矢はそっと顔をしかめた。

「まだこれ程の力がっ…」
「“鬼翼”っ…」
「……っ！」
輝矢が険しい表情でシルクを見つめていたその時、突如、シルクの背中から、服を突き破り、天まで届きそうな程に巨大な、白灰色の翼が生えた。空へと広がるその翼に、輝矢が驚きの表情を見せる。

「翼っ…」
「……っ」
唖然とする輝矢を見つめながら、シルクが冷たい表情で、生えたばかりのその翼を広げる。広がった翼が、全体から強い光を放ち始める。

「“鬼閃翼”っ…！」
「なっ…！？」
広がった翼の全面から、輝矢へ向けて、無数の鬼閃が一斉に放たれる。上空から足元まで、避ける隙間なく飛び出してくる鬼閃に、輝矢の表情が焦りへと変わる。

「うっ…！“月器っ…！」
避ける場所も見つからず、輝矢が右手に持っている三日月を、慌てて突き出す。

「十六夜”っ…！！」
満ちさせた金色の盾を、体の前へと押し出す輝矢。

――バァァァァァーンっ！！

「クウゥっ…！！」
次々とぶち当たる鬼閃に、十六夜を構えている輝矢の表情が歪む。

「ううっ…！」
繰り返し攻撃を受けた十六夜が、ついに鬼閃に貫かれる。

「十六夜がっ…！」
風穴のあいた十六夜に、衝撃の表情を見せる輝矢。

「あっ…！」
穴のあいた十六夜が、十六夜の形を保っていられなくなり、金色の光を放ちながら、自動的に三日月へと姿を変える。落ちてくる三日月を、慌てて受け止める輝矢。

「うっ…！」
盾の無くなった輝矢へ、無数の鬼閃が迫り、輝矢の表情が凍りついた。

「うあああああああああっっ！！」
正面からいくつもの鬼閃を浴び、輝矢が血の飛沫を飛び散らせな

がら、力なく後方へと倒れ込んでいく。

「う…うぁ…」

床へと倒れ込んだ輝矢が、口から血を吐き、苦しげな声を漏らした。

第９８章　人と鬼と　★４

「う…うぅ…」
「……。」
倒れたまま、起き上がろうともしない輝矢のもとへ、無表情のまま、ゆっくりと歩み寄っていくシルク。広げていた翼を少し折りたたみ、足音だけをその場に響かせる。

「どうしたの…？」
倒れた輝矢のすぐ前で足を止め、高々と輝矢を見下ろして、シルクがそっと問いかける。

「ねぇ…？月の少女…」
「うっ…」
呼びかけるシルクに、厳しい表情で何とか顔を上げる輝矢であったが、首から下の傷だらけの体は、少し動かすだけで激しい痛みが走り、起こすことが出来なかった。

「早く起き上がって…また、聞かせてよ…」
シルクの口元が、怪しく歪む。

「“私は人間を守る”って…」
伸びたシルクの人差し指が、輝矢へと向けられる。

「あの愚かな言葉をっ…」
向けられた人差し指から、強い鬼閃が放たれる。

「ううぅっ…！」
その鬼閃が、勢いよく輝矢の腹部を貫き、輝矢が大きく目を見開いた。
「うあぁぁっ…！あああああああっ…！！」
腹から溢れ出る真っ赤な血に、輝矢が何とも痛々しい叫び声をあげる。
「うっ…！ううぅ…！」
輝矢が歯を食いしばり、必死に痛みを堪える。
「ねぇっ…？」
「……っ」
もう一度呼びかける、見る者すべてが凍りつきそうな程に冷たい表情を見せたシルクを見上げ、薄く目を開きながら、輝矢が険しい表情を見せた。
「貴女が…いけないのよ…？」
輝矢を見下ろしたシルクが、表情を変えぬまま、ゆっくりと言葉を紡ぐ。
「貴女が…いけない…」
同じ言葉を、もう一度繰り返すシルク。
「私の心に…踏み込んだりするから…」
「うっ…！」
そう言い放ち、シルクが左手のひらを、倒れたままの輝矢へと向けた。
「“水星”…」

「……っ！」
輝矢へと放たれる、無数の水の玉。

「あああああああああああっっ！！！」
輝矢の叫び声が空へと響く中、水飛沫と輝矢の血が、辺りに舞った。

「うっ…」
水星に吹き飛ばされ、シルクから少し離れたところへ倒れ込んだ輝矢が、床に背中を打ちつけ、苦しげな声を漏らす。輝矢の右手に握られていた三日月は、輝矢がその握力さえも失い、力なく輝矢のすぐ横の床へと零れ落ちた。

「月…器っ…」
顔を横に向けた輝矢が、すぐ傍に落ちる三日月を見て、かすれた声を漏らす。倒れたその体は、三日月を拾うことは愚か、もう指一本、動かすことなど出来なかった。

「ダメ…だ…もう…動けない…」
かすかに動く口だけを動かし、倒れたまま空を見上げた輝矢が、弱々しく言葉を発する。

「勝て…ない…」

――輝矢ぁぁ～んっ！――
――輝矢っ！――

小さく呟いた輝矢の脳裏に、次々と浮かんでくる、仲間たちの大きな笑顔。

「みんなっ…」

空を見上げ、輝矢が仲間のことを思う。

――輝矢っ……――

「……ハチっ…」

愛する人のことを、思う。

「……っ」

最後に桜時のことを呼び、輝矢がそっと、その瞳を閉じる。

「……。」

瞳を閉じた輝矢を、少し離れた位置から見つめるシルク。

「あっけない幕切れ…」

シルクがどこか呆れたように、言い放つ。

「所詮は人の子ね…」

そう言いながら、シルクが倒れたままの輝矢へと、叶棒のその先を向けた。

「跡形もなく…消えるといいわ…」

白い光を放ち始める、叶棒の先。

「“鬼閃束”っ…！」

向けられた叶棒のその先から、巨大な鬼閃の束が勢いよく放たれる。

「……。」

向かってくる鬼閃束にも、瞳を閉じたまま、体の少しも動かす様子のない輝矢。最早、避ける意志すら見せない輝矢へ、シルクの鬼閃束が迫った。

「……っ」

揺るぎない勝利を確信し、思わず笑みを浮かべるシルク。だが、その瞬間。

――パァァァァーンっ！

突如、輝矢の体を包み込むように、大きく膨れ上がった青色の光が、シルクの放った鬼閃束を弾き飛ばした。

「なっ…！？」

空へと吹き飛んでいく鬼閃束に、シルクが驚きの表情を見せる。

「何っ…！？」

急に険しい表情となったシルクが、再び視線を下ろし、輝矢の方を見つめる。

「あの光はっ…！」
「んっ…」
シルクが焦ったような声をあげる中、強い光に包まれるのを感じたのか、深く瞳を閉じていたはずの輝矢が、ゆっくりとその瞳を開いた。瞳を開いた時、輝矢の瞳は、鬼の赤色ではなく、いつもの輝矢と同じ、黒色の瞳へと戻っていた。

「私っ…」
「いつまで寝てんだいっ！」
「……っ！」
朦朧とする意識の中で、薄く目を開いた輝矢であったが、聞こえてくる、聞き覚えのあるその声に、一気に瞳を見開いた。

「この声っ…！」
勢いよく、体を起き上がらせる輝矢。先程まで指一本動かなかったはずの体が、今は自然と動いた。

「……っ！！」
起き上がった輝矢が、さらに驚きの表情を見せる。

「よぉーうっ！」
輝矢が起き上がったすぐ目の前に立っているのは、青く長い髪に紅色の瞳の、艶やかな着物姿の美しい女性であった。

「ト…マト…」
茫然とした表情を見せた輝矢が、変に区切った声で、女の名を呼

ぶ。

「いつまで寝てんだいっ？小娘っ！まだ戦いの途中だよぉっ？」

「……っ」

深海での戦いで失ったはずのトマトが目の前に現れ、生前とまったく同じように、明るく輝矢へ話しかける。その信じ難い光景に、輝矢はただ、自分の目を疑った。

「なんでっ…」

その疑念を、思わず口に出してしまう輝矢。

「なんで…ババアがっ…」

「私だって、こんな戦場になんて来たくなかったさぁっ」

戸惑う輝矢へ、トマトが少し不機嫌そうな顔を見せる。

「けど、あんっまりお前が不甲斐ないもんだからねぇっ、舞い戻って来ちまったんだよっ」

トマトが口を尖らせ、輝矢へ厳しく言い放つ。

「ねぇっ、輝矢っ」

輝矢の名を呼びながら、トマトがそっと穏やかな笑みを浮かべる。

「お前は…人でも鬼でもないんじゃないんだよっ？」

「えっ…？」

優しい笑みを浮かべながら言い放つトマトに、輝矢が少し戸惑うように声を漏らす。

「お前は…人でもあり、そして鬼でもあるんだっ」

「……っ」

トマトの言葉に、ハッとした表情を見せる輝矢。

「そんなお前だから、見える世界があるっ」

輝矢へと右手を差し出しながら、トマトが頼もしい笑みを浮かべる。

「お前の見る世界っ…お前の願う世界はなんだいっ？」

「私の…」

まっすぐにトマトを見つめながら、輝矢が小さく言葉を発する。

「私の…見る世界は…」

輝矢がゆっくりと、言葉を続ける。

――バカザルぅ～っ――

――ひどいわぁっ！ユッキーっ！――

――おぉ～いっ！竹取ぃっ！――

――おかえりぃ～っ、輝矢ちゃ～んっ――

「みんなが…大切な人たちが…笑っている世界…」

空を見上げた輝矢が、どこか遠くを見るような瞳を見せる。

「私の願う世界はっ…」

――“瞬花”っ！――

「あの人の咲かす…美しい花がよく似合うっ…平和で穏やかな世界っ…」

目に焼き付いて消えることのない桜を思いながら、輝矢がそっと目を細める。

「なら、その世界は、お前が創りなっ」

空を見上げたままの輝矢へ、トマトがさらに大きな笑顔を向ける。

「創った世界を…お前が照らしなっ」

上を向いていた輝矢が、ゆっくりと視線を落とす。

「お前が世界を照らす、光になりなっ…」

「……っ」

微笑むトマトをまっすぐに見つめた後、輝矢がそっと目を伏せた。

――パァァァァーンっ！

「うっ…！」

さらに輝きを増す青い光に、見つめていたシルクは思わず目を細め、その光から目を逸らすように、少し俯いた。

「何がっ…」
「……。」
「……っ？」
眩いばかりの光の中で、ゆっくりと立ち上がる人影を捉え、シルクがそっと眉をひそめる。

「あれは…」
「……。」
強い輝きを放つ青い光の中、もう起き上がることさえ不可能な程に激しく傷を負っていたその体を動かし、その場に立ち上がる輝矢。その右手には、床に転がったはずの三日月が、しっかりと握られていた。

「サヨウナラ…」
落ち着いた表情を見せた輝矢が、シルクには届かぬ、小さな声を発する。

「サヨウナラ…」
その別れの言葉を、もう一度、繰り返す輝矢。

「私は…光になるっ…」
輝矢が、三日月を握る手に、力を込める。

「光になって…アナタの世界を照らすからっ…！！」
強く言い放ち、輝矢が三日月を構えた。

第９９章　明日への光　☆１

――光になって…アナタの世界を照らすからっ……――

御伽湖上。鬼国跡地の残骸・小さな浮島。

「……っ」

中央塔の上がっていった空を見上げていた桜時が、何かが聞こえたような気がして、ハッとした表情を見せる。

「今っ…のは…」

戸惑うように、暗い空を見つめる桜時。早朝から開始されたこの最終決戦も、すっかり夜が更け、薄暗い雲が覆っていることもあってか、辺りは光のまったくない、非常に暗い状態となっていた。

――鬼は皆、死に絶える…君の愛するお姫様も共に……――

「……。」

ギンの言葉を思い出し、桜時は不安げに表情を曇らせた。

「中央塔が上へ上がってから…もう何時間くらい経っただろう…？」

空を見上げながら、どこか不安げな表情で問いかける由雉。

「五時間…いや、もっとか…」

由雉の横に座り込んだ門貴が、由雉の問いかけに答えながら、厳しい表情を見せている。

「まだ…上昇し続けてるのかしらっ…？」
「さぁな…」
空を見上げながら、ゴンとリンゴが、気難しい表情で言葉を交わす。

『ご主人様っ…』
「大丈夫だよっ…」
不安げな表情を見せるヘンゼルとグレーテルの肩を抱き、太狼が二人へ穏やかな笑みを向ける。

「必ず帰って来るさっ…」
二人を安心させようと言葉を発する太狼であったが、その笑みの中にある確かな不安を、消しきれていない様子であった。

「……。」
そんな太狼の方を少し振り返り、桜時がそっと目を細める。

「輝矢っ…」
再び空を見上げた桜時が、どこか祈るように、輝矢の名を呼んだ。

御伽湖上空。中央塔・最上階部。竹取輝矢ｖｓ牢戸知玖。

「……。」

巨大な鬼力を解放したシルクの圧倒的な力を前に、手も足も出ずに倒れた輝矢であったが、その時、青い光が輝矢の体を包み込み、輝矢の目の前にトマトが姿を現した。トマトの言葉を受けた輝矢は、その傷だらけの体を再び立ち上がらせ、落ち着いた表情で、三日月を構えた。

「……っ」

青い光に包まれながら立ち尽くす輝矢のその姿を見つめながら、そっとその眉をひそめるシルク。

「あの傷で…立ち上がった…？」

輝矢の立っているその付近の床には、輝矢が流したものであろう赤い血が、広がるように滲んでいる。

「まだそんな力が…んっ…？」

訝しげに輝矢を見つめていたシルクが、ふと、輝矢の背後に見える何かに気づく。

「あれは…」

突き上げた青色の光が、まるで人のような形を形成している。

「トマト…」

その人物の名を口にし、そっと目を細めるシルク。

＜……っ＞

輝矢の背後に立つ、青い光で形作られたトマトは、シルクをまっすぐに見つめ、少し細めた瞳で、そっと口元を緩めると、光の中に姿を消していった。

「……。」
トマトの消えた辺りを見ながら、シルクが顔をしかめる。
「そんな目で…見ないでよっ…」
消えたトマトに話しかけるように、シルクが、輝矢にも聞こえない小さな声を漏らす。
「私が…可哀想みたいじゃない…」
俯いたシルクが、どこか力のない声を発した。

「……。」
そんなシルクと向き合うようにして立つ、青い光に包まれた輝矢。
「感じる…トマトの力…」
深く目を閉じた輝矢は、周囲に突き上げる青い光を全身から感じていた。

「痛みが引いていくのがわかる…体が…軽い…」
負った傷が治っているわけではない。流れる血も止まったわけではないが、痛みの感覚だけが引いていくのがわかった。トマトの光に包まれたからなのだろうか、指の一本も動かせなかった体が、今はすんなりと動かせる。

「……っ」
表情を引き締めた輝矢が、まっすぐに目の前のシルクを見据える。
「もう一度言ってと…そう仰っていましたね」
「……っ？」
はっきりとした言葉を放つ輝矢に、シルクが少し戸惑うように眉

をひそめる。

「望み通り…もう一度言って差し上げますっ…」

黒色に戻った輝矢の瞳が、さらに鋭く輝く。

「私は…人間を守るっ…！！」

「……っ」

何の迷いもなく強く叫ぶ輝矢を前に、今まで常に落ち着いた表情を見せていたシルクが、あからさまにその表情をしかめた。

「そう…なら私も、もう一度言ってあげるっ…」

ゆっくりと頷いたシルクが、冷たい声を響かせる。

「この世界を支配するのは、くだらない人間どもじゃないっ…私たち、鬼よっ！！」

そう叫んだシルクが、再び背中の翼を、大きく広げる。

「人間などに焦がれし、哀れな子っ…！あの女の怨念もろともっ、跡形もなく消し去ってあげるわっ…！！」

広がったシルクの翼が、強い白色の光を放ち始める。

「“鬼閃翼”っ…！」

先程同様、シルクの広げられた翼から、逃げる隙間もない程の無数の鬼閃が、輝矢へ向けて一斉に放たれる。

「……。」

飛び出してくる、数を数える気にもならない程の大量の鬼閃を目の前に、輝矢は動じず、その表情には落ち着きを浮かべたままであ

った。

「行きましょう…トマトっ…」

周囲の青い光へ向けて、そう言った輝矢が、三日月を握る手に力を込めた。

「これが私のっ…」

鋭い表情を見せた輝矢が、勢いよく三日月を振り上げる。

「私たちの力っ…！！」

振り上げた三日月へと、周囲の青い光が、一気に集束していく。

「“月輪（げつりん）”っ…！！」

輝矢が勢いよく三日月を振り下ろすと、三日月が纏っていた青い光が放たれ、輝矢の前に、天まで突き上げそうな程巨大な、円形の光の盾が形成された。

「何っ…！？」

青白く輝く月のようなその盾が、輝矢の前に展開し、輝矢へと向けられていた無数の鬼閃を、すべて受け止める。十六夜さえも打ち破ったシルクの強力な鬼閃を、大量に受け止めても、ビクともしないその強靭な光の盾に、見つめていたシルクが驚きの表情を見せる。

「あの光はっ…うっ…！」

輝矢の光の盾に遮断された鬼閃が、防がれただけでなく、その盾に弾き返されるようにして、シルクのもとへと戻って来る。

「クっ…！」

避ける場所もない自らの技に、シルクが険しい表情を見せながら、広げていた翼を畳む。

――バアアアアーンっ！

輝矢の弾き返した鬼閃が、放ったシルクへと直撃し、激しい衝撃音が空に響いた。衝撃に、また中央塔が崩れ落ち、二人の戦う場所が、徐々に縮小されていく。

「はぁっ…はぁっ…」

少し息を乱しながら、三日月を下ろし、前方に展開していた盾を消し去る輝矢。

「……っ」

巻き起こった衝撃風が晴れていき、その向こうに見え始める景色に、輝矢はそっと目を細める。衝撃風の中から見えてきたのは、小さく折りたたまれた、白灰色の翼であった。鬼閃を派手に喰らったからか、その翼には赤い血が滲んでいた。

「う…ううぅ…」

その翼が、ゆっくりとした動きで、上方へと広げられていくと、その中から、どこか苦しげな声が漏れた。

「ううぅ…」
翼が完全に広がると、その下から、険しい表情を見せたシルクが姿を現した。翼を盾代わりにしたのだろう。シルク自身の体に傷はなかったが、翼が受けたダメージの影響で、相当に弱っているようだった。

「私の鬼閃を…弾き返した…？」
シルクが少し曇った声を漏らしながら、俯いたまま、眉をひそめる。

「トマトの力を借りたとはいえ…トマト自体にここまでの力がないはずっ…」
考えを巡らせ、シルクが険しい表情を見せる。

「一体っ…んっ…？」
深く俯いていたシルクが、急に何かに気づいたような声を出した。

「明るい…？」
辺りが先程よりも明るいことに気づき、シルクはゆっくりと顔を上げた。戸惑うように周囲を見回す。

「曇を抜けたのね…」

シルクがすっかり壁のなくなった最上階から、周囲の空を見渡す。先程まで周囲を厚く覆っていた、薄暗い雲がなくなり、吹き荒れていた風も収まっていた。雲のかかる地帯を抜け、さらにその上の空へと出たため、風もなくなったのだろう。

「けど、もう日の出ている時間ではないし…この明るさは…」

首を傾けたシルクが、どこからか差す光の源を探し、ゆっくりと振り返る。

「あっ…！」

振り向いた途端、大きく目を見開くシルク。

「……。」

鋭い瞳で、立つ輝矢。その輝矢のすぐ後ろの空に、明々とした真ん丸の月が、暗い夜空の中で堂々と輝いていた。

「月っ…」

空に浮かぶ満月を見つめ、シルクが少し圧倒されたように呟く。

「……。」

「……っ」

月を背負うように、堂々とその場に立つ輝矢。月光を全身に浴びるその姿は、まるで絵画のようで、圧倒されてしまう自分自身に、シルクは思わず顔をしかめた。

「月が…あの子に力を…？」

眉をひそめたシルクが、怪訝そうに呟く。

「フフっ…」

しかめていたその表情を和らげ、そっと笑みを零すシルク。月の力をも味方につけた輝矢、その信じられない光景を前に、シルクに自然と笑みが零れたのであった。

「まさに…“月の少女”というわけねっ…」
シルクがどこか感心するように、そう言い放つ。
「月が相手なら…」
叶棒を左手に持ち替え、手ぶらになった右手を、シルクが勢いよく掲げる。
「私も全力を出さないとねぇっ…！！」
――パァァァァーンっ！
シルクの全身から放たれる、強力な白色の光。
「……っ」
そのあまりの眩しさに、輝矢が思わず目を細め、顔をしかめる。
「またっ…鬼力が上がっていくっ…」
肌を突き刺すように感じるシルクの力に、白い光に包まれていくシルクの姿を見つめながら、険しい表情を見せる輝矢。
「何て…底知れないっ…」
力に圧倒され、戦いの不安を感じながらも、輝矢は、際限のない力を持つシルクに感心を抱いている自分がいることに、気付いていた。
「牢戸知玖っ…」
まっすぐな瞳で、輝矢はただ、シルクを見つめた。

「うっ…うぅ…！」

白い光に包まれながら、シルクがどこかもがくような、苦しむような、そんな声を漏らす。

「ううぅっ…！！」

シルクの声が大きくなると共に、シルクの頭から生える角が、途端に巨大なものとなる。

「うあああっ…！」

さらに長く伸びた白髪が、勢いよく逆立ち、口から生える牙もさらに鋭く、大きなものとなっていく。左手に握られていた叶棒は、勝手に右手へと移動すると、シルクの白い肌に溶け込むようにして右腕に吸収され、右腕の先は鋭く尖り、右腕そのものが武器のように姿を変えた。

「あああああっ！！」

――パァァァァンっ！

シルクの激しい叫び声と共に、シルクを包み込んでいた白い光が、勢いよく辺りに飛び散った。

「……っ」

光の飛び散る、その美しい光景を、目を細め、見つめる輝矢。

「はぁっ…はぁっ…はぁっ…」

光の中を飛び出した、その姿を最早、鬼とも呼べぬ形へと変えた

シルクは、俯きながら、どこか荒々しく呼吸をしていた。

「ふぅっ…」

息を整えるように、一息ついたシルクが、ゆっくりとその顔を上げる。

「さぁ…始めましょうっ…月の少女っ…」

鋭い牙の生えた口元を歪めたシルクが、その両手を広げる。

「私たちの…本当に最後の…戦いをっ…」

「……っ」

シルクの言葉を受け、輝矢が鋭い目つきを見せ、素早く三日月を身構える。

『……っ！』

一瞬の間を置いて、輝矢とシルクが、同時に互いのもとへと飛び出していく。

「三日月っ…！！」

「叶棒っ…！」

接近したその場で、輝矢が三日月を、シルクが右腕と一体になった叶棒を、勢いよく振るった。

――パァァァァンっ！

火花でも飛び散りそうな程に、激しくぶつかり合う三日月と叶棒。

「“鬼翼”っ…！」

「……っ！」

武器を交えていたその時、シルクが背中の翼を動かし、その巨大な羽根の先を輝矢へ向けて振り下ろした。

「クっ…！」

輝矢が叶棒を前へと押し切り、三日月を自由にして、後方へと飛び上がって、降りてくる翼を避ける。

「フフっ…」

地面へと降りた翼が、間を置くことなく、再び広がる。

「“鬼口”っ…！」

「……っ！」

左右に広がっていく翼の間から、勢いよく放たれる鬼口。

「三日月っ」

向かってくる鬼口に少し眉をひそめながらも、輝矢は落ち着いた表情で、三日月を振り下ろした。

「“月輪”っ…！」

――パァァァァンっ！

輝矢の前に形成された光の盾が、シルクの放った鬼口を、勢いよく弾き返す。

「……っ」
返って来た鬼口を、翼を広げ、空へと舞って、避けるシルク。
「“月光”っ…！」
「……っ！」
そんなシルクへ、休む間もなく飛んでくる、無数の青く輝く水の刃。
「“鬼閃束”っ…！」
――バァァァァーンっ！
シルクが右腕の叶棒を突き出し、鬼閃の束を放つと、鬼閃は向かって来ていた水の刃と正面からぶつかり合い、一つ残らず床へと叩き落とした。
「……っ」
落ちる水の刃を見て、輝矢がかすかに表情をしかめる。
「叶棒っ…」
そんな輝矢を上から見下ろしながら、ゆっくりと右腕を振りかぶるシルク。
「“水流星”っ…！！」
振り下ろされた叶棒から、巨大な水の塊が放たれる。
「……っ」

向かってくる巨大な水に眉をひそめながら、輝矢が三日月を握る手に力を込める。

「三日月っ…」

ゆっくりと振り上げられる、三日月。

「“水月光”っ！！」

輝矢もまた、三日月から、巨大な水の塊を放つ。

――バァァァァーンっ！

第９９章　明日への光　☆２

――ドォォォォォンっ！

『うわあああああっ！！』

地面というよりも、世界全体を揺るがすような、大きな揺れに、小さく残った大地に狭々と立っていた皆が、一斉に大きくその体を揺らした。

「うおっ！」

浮島の端に立っていた金汰が、勢いよくバランスを崩し、そのまま御伽湖へと落下する。

――ボォォォォォ～ンっ！

「たっ…助けてくんれぇ～っ！俺っ、泳げねぇ～んだぁっ！」

「泳げもしないのにっ、んな端っこに立たないで下さいよっ！」

熊化して、必死に助けを求める金汰に、ゴンが島の上から思わず怒鳴りあげる。

「どうぞ…フフフっ…」

「ふぅい～っ！助かったぁ～っ！」

不気味に微笑む万亀に助けられた金汰が、安心しきった顔を見せる。

「たくっ」

そんな金汰の様子を見ながら、ゴンが呆れた表情で肩を落とす。

「信じらんないわね…」

「ああ、あんだけ鮭取って来るくせに泳げねぇーとか、マジ信じられねぇっ」
「そんなくっだらないことじゃないわよっ！！」
「へっ？」
うんうんと頷いていたゴンが、勢いよく怒鳴りあげてくるリンゴに、戸惑うように目を丸くする。

「凄い衝撃だったわ…もう相当、上空で戦ってるはずなのに、それでも伝わってくるなんてっ…」
「……っ」
リンゴの言葉を聞き、真剣な表情となったゴンが、そっと空を見上げる。

「それだけ強ぇ力で戦ってんだろ」
「まるで天界の戦いねっ…」
そう呟きながら、リンゴが遠いものでも見るかのように、空を見つめる。

「昔っ…」
『……っ？』
聞こえてくる声に、ゴンとリンゴが空を見上げていた顔を下ろし、ゆっくりと振り返る。

「遥か昔…」
二人が振り向いた先に立つのは、同じように、遥か空の上を見つめる太狼であった。

「玄神と鬼神、二つの神の激しい争いによって、海ができ大陸ができて…この世界は生まれたというけれど…」
太狼が真剣な表情で、言葉を続ける。

「まるで…神話でも見ているようだね…」
『……。』
その太狼の言葉に、ゴンとリンゴが、厳しい表情を見せた。

薄暗い雲を突き抜け、静かな空へと出た中央塔・最上階部は、さらに上昇を続け、月さえも近くに見えてくる程に高い空の上まで、上がり続けてきていた。激しい戦いで最上階の広間も、もう半分が崩れ落ち、わずかな床と、その下にくっつく下塔部分だけを残し、後は空の彼方に砕け落ちた。

「うっ…うぅ…」
そのわずかな床に、倒れ込んでいる輝矢。

「ううぅっ…」

頭部から血を流した輝矢が、ゆっくりと、その傷だらけの体を起き上がらせる。先程の攻撃で、残っていたもう一本の角、牙、そして鬼爪も砕け落ち、輝矢は鬼化する前と、何ら変わらぬ姿まで戻っていた。

「はぁっ…はぁっ…」
荒々しく呼吸をしながら、輝矢が必死に顔を上げ、前方を見つめる。

「はぁっ…！はぁっ…！」
輝矢の前方には、輝矢と同じように大きく息を乱したシルクが、立ち尽くしていた。

「ううぅっ…！」
シルクが苦しげな声をあげ、その表情を歪めると、背中から生えている血だらけの翼の左側が勢いよく折れ、大きな音を立てて、地面に落ちた。

「はぁっ…はぁっ…」
片翼となったシルクが、呼吸を整えようと、必死に息をする。シルクの頭に生えた角にも、突然、大きなヒビが入り、零れた金色の欠片が、地面へとキラキラと輝きながら落ちていっていた。

「……っ」
そんなシルクの様子を見て、起き上がった輝矢が眉をひそめる。

――フフフっ……――

以前のシルクは、傷を負っても、手をかざすだけで傷が癒え、攻撃を直撃させても、いつも涼しい表情を見せていた。だが、今のシルクは、負った傷を癒やすこともなく、ダメージを明らかに示している。

「シルク…」
倒れていた輝矢が、膝を立て、その場でゆっくりと立ち上がる。

「アナタっ…」
「フフフっ…この姿は、さすがにきついわね…」

輝矢が言いかけた言葉を終える前に、シルクが声を放った。涼しげな声で笑うシルクではあったが、その額には汗が滲み、呼吸で肩も大きく動いている。

「私にとってのこの姿は…貴女にとっての鬼化と同じっ…」

シルクがそう言いながら、血の流れる左手で、自分の胸を押さえる。

「このまま戦い続ければ…永遠を生きてきた私も、貴女と同じように死ぬわっ…」

「……。」

その言葉に、輝矢が厳しい表情を見せる。

「けど、もういいのっ…」

シルクが、何かを諦めるかのように、そっと言い落とす。

「貴女を倒して…人間どもを滅ぼせれば、それでいいっ…」

どこか遠い瞳を見せたシルクが、ゆっくりと空を見上げる。

「これ以上、永遠を生きたって…今の私には、もう何にも残っていないもの…」

空を見上げたシルクが、少し目を細める。

「わずかに…残っていたものも…」

――お母さんっ……――

脳裏を過ぎる、幼き日のギン。

「新しく…手に入れたものも…」

シルクのどんな言葉にも、そう言って頷いた諸刃。

――はい…シルク様…――

「もう…本当に全部っ…なくしてしまったもの…」

胸に当てていた手を力なく下ろし、シルクがゆっくりと視線を落とす。

「……っ」

哀しげに呟くシルクを見つめ、輝矢がそっと目を細める。

「愛して、いたのですか…？」

「えっ…？」

「御剣諸刃…のことっ…」

「……っ」

少し遠慮がちに問いかける輝矢のその言葉に、シルクの表情がかすかに動く。

「フフフっ…」

「……っ？」

急に笑い声を零すシルクに、輝矢が眉をひそめる。

「程遠いわね…愛なんて言葉っ…」
そう言ったシルクが、どこか呆れたような笑みを浮かべる。
「私が諸刃を選んだのは、諸刃が一番、あの女の愛した龍に似ていたからかしらっ…」
シルクが遠くを見るような瞳で、笑う。
「諸刃を奪えばっ…一番、あの女が苦しむと思ったのよっ…」
「……。」
シルクの言葉を聞きながら、輝矢がそっと目を細める。シルクを動かすものはすべて、トマトへの憎しみで、トマトへの憎しみだけを糧に生きてきたというシルクの言葉に、恐らく偽りはないのだろう。
「それと…」
さらに言葉を続けるシルクが、視線を床へと落とす。
「淋しかったのかもね…」
「えっ…？」
シルクの口から聞くとは思っていなかったその言葉に、輝矢が思わず戸惑うような声を漏らす。
「暗い深海の中で…ただ、あの女を憎んで生きて…」
――苫都っ…！！苫都ぉぉぉっっ！！――
絶望よりも重い世界で、何の希望もなく生きた。

――シルク様っ……――

「……っ」

思い出される諸刃の姿に、シルクがそっと目を細める。

「誰かに…傍に居て欲しかっただけかも知れないっ…」

「シルク…」

初めて、人間らしい言葉を口にしたシルクに、輝矢は驚きはしたが、それを前面には出さず、ただまっすぐにシルクの方を見つめた。

「フフフっ…同情した…？」

「……。」

薄く微笑みながら、どこか軽い口調で問いかけるシルクに対し、輝矢は少し目を落とし、そしてもう一度、視線を上げる。

「全然っ」

「フフフっ…」

はっきりと答える輝矢を見て、シルクが零すように笑みを浮かべた。

「貴女のそういうところが好きよ…月の少女っ…」

シルクが、どこか満足げな笑みを浮かべる。

「さぁっ…」

残った右側の翼を広げたシルクが、叶棒と一体化した右腕を、ゆっくりと掲げる。

「今日、ここで…一緒に滅びましょう…？竹取輝矢っ…」

シルクが口元を緩め、誘うように呼びかける。

「この世界と…貴女の愛する人間たちと共にっ…」
そっと落ちる、シルクの声。
「これが私のっ…」
掲げられたシルクの右腕から、白い光が放たれ始める。
「最後の力よっ…！！」
――パァァァァァンっ！
シルクの叫び声と共に、シルクの翼、右腕、そして全身から、今までで最も強い鬼力の光が放出される。生き永らえることを捨てたシルクは、その生命エネルギーさえも力とし、その力をさらに強めているのだろう。
「……。」
鬼力を高めていくシルクを、厳しい表情で見つめる輝矢。
「……っ」
輝矢が少し視線を落とし、そっと上げた自分の左手を見つめる。
――また四人で旅をしましょうっ…必ず……――
仲間と交わした、約束。

――俺を置いて…死ぬなっ……――

願うように発せられた、言葉。

「……すみませんっ…」

詫びるようにそう呟き、悲しげな笑みを浮かべると、輝矢は左手をきつく握り締め、その顔を上げた。

「いいえっ、シルクっ…」

鬼力に包まれているシルクに、輝矢が鋭い視線を送る。

「今日、ここで滅びるのは…鬼だけですっ…」

シルクをまっすぐに見据えながら、輝矢が右手に持っていた三日月を振り上げる。

「私と共に逝きましょうっ…！牢戸知玖っ…！！」

輝矢の振り上げた三日月が、金色の光を放ち始める。

「これが私のっ…」

輝矢が三日月を握る手に、力を込める。

「最後の力っ…！！」

――パァァァァンっ！

三日月の光に呼応するかのように、強く輝き始める、輝矢の後方の巨大な満月。空に浮かぶ月の光を浴び、輝矢を包む光が、さらに強くなっていく。

「フフフフっ…！」

力を高めていく輝矢を見ながら、同じように鬼力を高めるシルクが、この状況にあって、何とも楽しげな笑みを浮かべる。

「私は牢戸の遺志を継ぐっ…！世界最古で最後の鬼人っ…！！」

高められた鬼力が、シルクの右腕へと集束されていく。

「私がっ…人間を消し去るっ…！！一人残らずっ…！！」

シルクが鬼力の込められた右腕の叶棒を、勢いよく振り上げる。

「“鬼限漸（きげんぜん）”っ！！」

シルクが思いきり叶棒を振り下ろすと、叶棒から凝縮された鬼力が、一気に放たれた。

「竹取輝矢っ…」

向かってくる鬼力を見つめ、輝矢も力の集まった三日月を、ゆっくりとした動作で振りかぶった。

「鬼退治、致しますっ…！！」

輝矢が、勢いよく三日月を振り下ろす。

「“月下閃(げっかせん)”っ！！」

振り下ろされた三日月から放たれる、金色に輝く光。

――バァァァァーンっ！

『ううううぅっ…！！』

地震のように激しく揺れ動く大地と、吹き荒れる強い風に、鬼国跡の島にいる皆が、思わず声をあげる。

「皆で押し固まれっ！！吹っ飛ばされんぞぉっ！！」

地面に両手足をつけ、島の大地に必死に掴まりながら、ゴンが焦ったように叫ぶ。

「何て風っ…！！」

「クっ…！」

門貴や由雉も、周囲の人間と必死に押し合いながら、何とかその場に踏み留まろうとしている。

「……っ」

皆が固まり合うその中で、強い風に目を細めながらも、桜時が必

死に顔を上げる。遥か上空に見える、白と金の巨大な光が重なり合い、空を覆っていた暗い雲を、あっという間に吹き飛ばしていく。

「輝矢っ…！」

空の光を見つめ、桜時が思わず身を乗り出す。

第９９章　明日への光　☆３

それぞれの武器を振り下ろした輝矢とシルクの丁度、中央で、勢いよくぶつかり合う、金色と白色の光。輝矢とシルクが全力を込めた一撃が、強く押し合いながら、互いに譲ることなくぶつかり合っている。

「ううぅっ…！」

必死に三日月を握り締めながら、少し苦しげな声を漏らす輝矢。

「何てっ…力っ…！」

両手にかかる力の圧に、輝矢が険しい表情を見せる。

「フフフフっ…！」

一方、ぶつかり合う光を挟み、輝矢とは逆側に立つシルクは、叶棒となった右手を構えたまま、その光の攻防を見ることなく、高々と笑い声をあげながら、空の上を見上げていた。

「フハハハハハっ…！！」

さらに大きくなる、シルクの笑い声。

――僕は父さんじゃないよ…母さんっ…――

どこか、シルクを憐れむような瞳で、そう呟いた幼き息子。

――そうまでして人間を滅ぼして…その後、貴女は何をする…？――

感情の無い、純粋な瞳で問いかけた、シルクに付き従うだけの青年。

「もういいっ…」

かつて受け取った言葉を思い出しながら、シルクが力のない声を漏らす。

――またな…知玖っ――

「……っ」

憎み合った永い時ではなく、笑顔で別れた友であった頃のトマトの姿が思い出され、シルクがそっと目を細める。

「もう…いいのっ…」

シルクがすべてを振り払うように、大きく首を横に振る。

「世界は消えるっ…！」

大きく目を見開くシルク。

「私の憎しみと共にっ…！！」

――バァァァァァーンっ！

シルクの放った鬼力の白い光が、シルクの叫び声に呼応するかのように、さらに勢いを増す。

「うううぅっ…！！」

強くなった鬼力に、押され始める輝矢の金色の光。三日月を握り締める輝矢も、さらにかかる圧に、一気に険しい表情となった。

「まだっ…上がるなんてっ…！」

ここに来て、さらに鬼力を上げたシルクに、輝矢が信じられないといった表情を見せる。

「うっ…！」

その時、力を込めたせいで傷が開いたのか、輝矢の腹部から、再び血が溢れ始めた。

「うううぅっ…」

輝矢が少し身を屈め、苦しげな表情を見せる。

「傷がっ…」

溢れ出る血を、見下ろす輝矢。両手の塞がっているこの状態では、傷口を押さえることも出来ない。走る痛みに、三日月を握る手の力は弱まり、輝矢の光は、さらに押されていく。

「このっ…ままじゃっ…」

押されていく光を見つめ、険しい表情を見せる輝矢。

「もうっ…」

弱気な声を漏らした輝矢が、そっと目を細める。

＜諦めないでっ…＞

「えっ…？」

頭に響くように聞こえてくる、どこか懐かしい、優しい声。

「この…声はっ…」

戸惑いの表情を見せた輝矢が、聞いたことのあるその声を、必死に思い出す。

――あなたにはまだ…たくさんの仲間がいるっ…！――

中央塔への道を諦めかけた時、輝矢を励ましてくれた声。

「月器っ…？」

ゆっくりと顔を上げた輝矢が、その視界に映したのは、金色に光り輝く三日月であった。

＜聞いて…＞

「えっ…？」

もう一度聞こえてくる声に、少し首を傾げる輝矢。

＜耳を澄ませて…もっと聞いて…輝矢っ…＞

その声が、さらに輝矢に語りかける。

＜聞こえない…？＞

そっと問いかける、声。

＜あなたの名を呼ぶ…仲間たちの声が…＞

「声っ…？」

戸惑うように声の言葉を繰り返した輝矢が、その言葉に従うように、耳を澄ます。

「輝矢っ…」

「輝矢さんっ…」

「竹取輝矢…」

リンゴや羊スケ、白雪、その場にいる全員が、揺れる大地に吹き荒れる風に必死に身を屈めながらも、どこまでも高い空を見上げ、

輝矢のことを思う。

『輝矢様っ…』

祈るように両手を組み、輝矢の名を呼ぶヘンゼルとグレーテル。

「竹取っ…」

「輝矢ちゃんっ…」

ゴンと太狼が、まっすぐな瞳で、空を見つめる。

「輝矢…」

「輝矢ん…」

それぞれに輝矢の名を呼ぶ、門貴と由雉。

「輝矢っ…」

皆の中心で、桜時が、輝矢の名を呼んだ。

――輝矢っ……――

「……っ」

重なり合い、響き合うようにして聞こえてくる、たくさんの声。

確かに耳に届く声に、輝矢はハッとした様子で、大きく目を見開いた。

「みんなっ…」
皆が、輝矢の名を呼んでいる。
「ハチっ…」
愛する者が、輝矢の名を呼んでいる。

「……っ」
突然、その瞳に力を取り戻し、強く唇を噛み締めた輝矢が、緩み始めていた三日月を握る両手に、再び力を込める。
「みんながっ…」
そっと俯いた輝矢が、力のぶつかり合う衝撃の音に、掻き消されそうな程に小さな声を発する。
「みんなが生きる…この世界っ…」

――俺はイヌだけどっ…！もっと羽ばたきたいっ！羽ばたいていきたいんだっ！！――
――この誇りっ…！そう簡単には折らせへんっ！！――
――言えばいいでしょっ！？幸せも呼ばないっ、ただのキジなんかいらないってっ！！――
――たくさん裏切ってきたからっ…もう誰にも、信じてなんてもらえないっ…！――
――そうやって生きていこう…？俺たち……――

思い出される、仲間たちの言葉。瞳に刻みつけた、眩しい姿。

「美しい…世界っ…」
俯いたままの輝矢が、唇を噛み締める。

「私がっ…」
言葉を発した輝矢が、勢いよく顔を上げる。

「私が守ってみせるっ…！！」

――パァァァァァンっ！

輝矢の強い声に応えるようにして、三日月から放たれた金色の光が、天を、通って来た雲の下を、突き抜けるようにして伸びていく。月からもさらに強い光が放たれ、輝矢の先程放った光を照らし、その金色の光が、どんどんと大きくなっていく。

「なっ…！」
巨大化していく金色の光に、呑み込まれるようにして、一気に押されていく、シルクの白色の光。

「こんなっ…！」
迫り来る金色の光に、シルクが大きく目を見開く。

「こんなことがっ…！！」
目の前の光景を、まだ信じきれていない様子で叫ぶシルク。

「そんなっ…！」
シルクの鬼力の光が完全に呑み込まれ、輝矢の光が、シルク自身へと向かっていく。

「私っ…」
視界全体を支配する金色の光に、シルクがそっと目を細める。

「私はぁっ…！！」
激しい叫び声と共に、シルクが、金色の光の中に、呑み込まれていく。

「私はぁぁぁぁっ！！」

――バァァァァーンっ！

第９９章　明日への光　☆４

「……っ」

金色の光に包まれると、シルクの翼や角が消え去り、シルク自身の体も、徐々に崩れ落ち始めた。

「私っ…」

ゆっくりと崩れ落ちていく右腕を上げ、それを見つめて、目を細めるシルク。

「消えるのっ…？」

零れ落ちていく自分自身の右腕を見ながら、シルクが誰にともなく問いかける。

「人間ではなく…私が…？」

揺れ惑う、シルクの赤色の瞳。

――私たちは永遠を生きる…人間とは違う特別な存在っ……――

思い出される、かつての自分の言葉。

「永遠を生きてきた…私がっ…？」

そう問いかけながら、シルクが薄く笑みを浮かべる。

「シルクっ…」
問いかけを続けるシルクを、細くした瞳で見つめる輝矢。

「シルクっ…」
「……っ」
「えっ…？」

シルクの元へ足を踏み出そうとした輝矢の前に、制止を促すように出される、一本の手。そこに輝矢とシルク以外の者がいるはずがないと思っていた輝矢は、驚いた様子で、その手の持ち主の方を振り向いた。

「アナタはっ…」
「……。」
「御剣…諸刃っ…」
輝矢の前へと手を出したのは、諸刃であった。

「アナタが…何故、ここにっ…」
「お前は…仲間のもとへ帰れ…」
諸刃は、輝矢の問いかけに答えることなく、自分の言葉だけを輝矢に放つ。

「あの方と共には…俺が逝く…」
「えっ…」
真剣な眼差しで、はっきりと言い放つ諸刃に、輝矢が眉をひそめ

る。

「諸刃っ、アナタっ…」
「ゴンに…」
再び輝矢の言葉を遮り、言葉を発する諸刃。
「ゴンに…伝えてくれ…」
そう言った諸刃が、どこか哀しげに、そっと目を細める。

「“すまなかった”と…」
「……。」
穏やかに微笑む諸刃に、輝矢が険しい表情を見せる。輝矢は少し考えるように俯いた後、意を決した表情で、ゆっくりと顔を上げた。
「確かに…」
「……っ」
頷く輝矢を見て、諸刃がどこか満足したような笑みを浮かべる。

「ありがとう…」

輝矢にそう礼を言うと、諸刃は輝矢に背を向け、シルクを呑み込んでいく金色の光の中へと足を踏み入れた。自分も光を浴び、苦しいはずなのだが、諸刃は少しも足を止めることなく、シルクのもとへと進んでいく。

「私っ…」
「シルク様…」

「……っ」
消えていく自らの体に、虚ろに言葉を発していたシルクが、諸刃の呼びかけに、ゆっくりとその顔を上げた。

「諸…刃…？」
「……。」
歩み寄って来る諸刃を、シルクが戸惑うように見つめる。

「どうして…？」
近づいてくる諸刃へ、叶棒が崩れ落ち、普通の手となった右手を伸ばすシルク。

「貴方はもう…人になったはずなのに…」
伸ばされたシルクの手が、黒い紋様の消えた諸刃の首筋に、そっと触れる。

「どうして…私のところへ…」
「もういいです…もう眠りましょう…シルク様…」
困惑した表情を見せたシルクに歩み寄り、首筋に触れたその崩れかけの手を握り締めながら、諸刃が柔らかな笑みを浮かべる。

「俺がずっと…貴女の傍に居ます…」
「……っ」
諸刃のその言葉に、シルクがそっと目を細める。

「くだらないわねっ…」
小さく落とされる、シルクの声。

「そんな言葉が…こんなにも嬉しいなんてっ…」
「……っ」

その瞳に涙を浮かべ、今までにない崩した表情で微笑むシルクを見て、諸刃もどこか幸せそうに微笑んだ。

「もう…いいのねっ…」
崩れ落ちていく体を諸刃に預け、シルクがそっと呟く。

「もう…眠っても…いいのね…」
「はい…シルク様…」
シルクの体を抱き締めながら、諸刃がゆっくりと頷く。

「一緒に…眠りましょう…」
「……っ」

諸刃のその言葉に、シルクは安心したように、その瞳を閉じた。

――パァァァァーンっ！

さらに大きな光を放った金色の光の中に、寄り添い合ったシルク

と諸刃の姿が消えていく。

「……。」

その光景を、どこか哀しげな表情で見つめる輝矢。

「さようなら…御剣諸刃…」

目の前の金色の光へ、輝矢がそっと呟きかける。

「さようなら…」

そっと細められる瞳。

「牢戸知玖…」

シルクの名を呼んだ輝矢が、どこか祈るように、その瞳を閉じた。

――ピキっ…！

「……っ」

響くように聞こえてくる音に、輝矢がゆっくりと目を開ける。溢れ出す金色の光に、許容量を超えてしまったのか、輝矢の握る三日月に、勢いよくヒビが入った。

「三日月っ…」

ヒビ割れた三日月を見つめ、そっと目を細める輝矢。入ったヒビは、三日月を縦に割るように、三日月の全体へと広がっていき、そのヒビから漏れた金色の光が、輝矢の体をも包み込んでいく。

「私も…もう…いいですかっ…？」

力なく微笑み、そっと三日月に語りかける輝矢。

「みんなを…守れたんだから…」

光に包まれた輝矢が、三日月を握り締めたまま、ゆっくりと後方に倒れ込んでいく。

「もう…休んでもいいですよねっ…？」

ゆっくりと閉じていく、輝矢の瞳。

「……っ」

輝矢の体が、シルクと同じように、金色の光の中に呑み込まれていく。

――バァァァァーンっ！！！

「……っ！！」

空で起こる、激しい金色の光の爆発に、大きく目を見開いた桜時が、勢いよく立ち上がる。

「かっ…」

震えた唇を、大きく開く桜時。

「輝矢ぁぁぁぁぁっ！！」

第９９章　明日への光　☆５

――――……

「んっ…」

地面に倒れ込み、深く瞳を閉じていた輝矢が、ゆっくりとその瞳を開く。

「ここ…はっ…？」

目を開いた輝矢が、倒れていた体を起こし、戸惑いながら周囲を見回す。そこは、色取り取りの花の並んだ、何とも美しい花畑であった。花畑の終わりは見えず、まるでどこまでも広がっているようである。

「天…国…？」

花畑を見回しながら、輝矢が大きく首を傾ける。

「いっやぁ～っ、日頃の行い、悪くても来れるものなんですねぇ、天国って」

「フフフっ…！」

「へっ？」

感心するように言った輝矢が、どこからか聞こえてくる楽しそうな笑い声に、目を丸くして振り向いた。

「あっ」
「フフフっ…！」

輝矢が振り向いた先に立っているのは、長い金色の髪に、月模様の黒い着物を纏った、美しい少女。輝矢はその少女に見覚えがあった。

「月器っ」
「久し振りだねっ、輝矢っ」

名を呼んだ輝矢に、笑顔を向ける少女。そう、その少女は、輝矢が月器を復活させる時に、水中の神殿で出会った、月器の化身の少女であった。

「月器っ…すみませんでした…」
「えっ…？」

謝罪の言葉を発しながら、申し訳なさそうに深々と俯く輝矢に、月器の少女は戸惑うように首を傾ける。

「私はっ…」

大きくヒビ割れ、輝矢の手の中で砕け散っていった月器。

「アナタを…」
「……。」

どこか悔やむような表情を見せる輝矢を見つめ、月器の少女は、そっとその瞳を細めた。

「いいのっ」

月器の少女が、短く返事を返す。

「私の方こそ、ごめんなさいっ」
「えっ…？」
謝る月器の少女に、輝矢が不思議がるように顔を上げる。

「こんな風に…姿を偽ってしまって…」

――パァァァァンっ！

「……っ」
申し訳なさそうに呟いた月器の少女の体を、強い金色の光が包み、輝矢は思わず目を細めた。

「……。」

金色の光が収まると、そこには、先程の月器の少女ではなく、黒く長い髪に、強い赤色の瞳の女性が立っていた。

「なっ…」
その女性の姿を見て、輝矢が思わず言葉を失う。

「お母…さんっ…」
「……っ」
そこに立っていたのは、輝矢の母・朝日であった。困惑した様子で母を呼ぶ輝矢を見つめ、朝日がそっと優しい笑みを浮かべる。

「ごめんなさい、輝矢っ…」
落ち着いた、優しい声で、輝矢に謝る朝日。

「アナタのことがどうしても心配で…」
朝日がそっと、口元を緩める。

「鬼人のくせに、神器に乗り移っちゃったっ！アハハっ！」
「……。」
明るく笑う朝日に、輝矢は困惑と感動よりも、一気に呆れた顔を見せる。

「それと、ここは天国じゃないわっ」
「へっ…？」
「その一歩手前ってとこっ、ちなみにどんな極悪人でも、このお花畑に来るからっ」
「悪かったですね…極悪人で…」
どこか棘のある朝日のその言葉に、輝矢が思わず顔をしかめる。

「アナタはまだ、死んでない。だからとっとと帰りなさいっ」
朝日が輝矢へ、明るい笑みを向ける。

「アナタの世界へっ」
「……っ」
その朝日の言葉に、どこか浮かない様子で、そっと目を細める輝矢。

「私の世界ではありません…あそこは、みんなの…人間たちの世界です…」
輝矢が俯きがちに、どこか元気なく答える。

「鬼が存在する限り…また新たな争いが起こる…あの世界に、鬼はいない方がいい…」
険しい表情で、言葉を続ける輝矢。

「シルクと一緒に…私も消えるべきなんです…」
「輝矢っ…」
人間の世界の為に、苦しい決断をする輝矢を見つめ、朝日が少し眉をひそめ、目を細める。

「じゃあ…どうするの…？」
目を細くしたまま、朝日がゆっくりと、輝矢に問いかける。

「アナタの帰りを待ってる…あんなにたくさんの仲間たちは…」
「……。」
朝日の言葉に、そっと俯く輝矢。

「置いて逝くの…？」
朝日がさらに、問いかけを続ける。

「あんなにも…愛してくれている人をっ…」
「……っ」
その言葉に、輝矢が一気に表情を曇らせる。

――輝矢っ！――

一瞬、まばたきをしたその瞬間、目を閉じただけでも、浮かんで

くる優しい笑顔。澄んだように響く声も、その手の温もりも、きっと死んだって、忘れはしない。

「……。」

桜時のことを思い出しながら、輝矢が深く、その瞳を閉じる。

「ねぇ…？輝矢っ…」

「……っ？」

優しく名を呼ぶ母に、瞳を閉じていた輝矢が、もう一度、ゆっくりと目を開く。

「私と武矢が目指した世界は…人も獣人も鬼も、誰もが幸せに笑っていられる世界っ…」

目を開けた輝矢へ、朝日が穏やかな笑顔を向ける。

「アナタなら…アナタたちなら創れると…私も武矢も、そう信じているわっ…」

「お母さんっ…」

目の前の母の笑顔に、輝矢がそっと目を細める。

「アナタは本当に…よく頑張ったわ…輝矢…」

朝日の伸ばした手が、輝矢の頬に触れる。その手から伝わる温もりは、どこか懐かしく、輝矢はその温かさを噛み締めながら、まっすぐに朝日を見つめた。

「だから…幸せになりなさい…」

朝日の優しい笑顔が、輝矢を包み込む。

「愛する人と…幸せになりなさい…」

「……っ」

グッと閉じられた輝矢の瞳から、涙が零れ落ちると、その涙が、頬に触れている朝日の手を伝った。

「さぁっ、帰るのよっ」

輝矢の体が、金色の光に包まれていく。

「アナタの世界へっ…」

「……っ」

――パァァァァァンっ！

輝矢の体から、強い光が放たれた…――――

御伽湖上。桜時たちの居る小島。

『……。』

揺れも風も収まり、立ち上がった皆は全員、祈るような面持ちで、空を見上げていた。覆っていた雲も晴れ、長い夜の明けた青空からは、明るい太陽の光が差し込んでいる。

「あれっ…？」

眩しい太陽の光に目を細めていた由雉が、何かに気づいたような声を出す。

「雨…？」

空から降り注いでくる、無数の粒。

「雨ちゃうやろぉ～こんなに晴れとんのにっ」

「それにあれっ…何か…金色に光ってるっつーかっ…」

晴れ渡った空から、雨のように降り落ちてくるのは、太陽の光に反射し、キラキラと輝く金色の粒であった。数えきれない程の粒が、高い空の上から降って来る。

「あれは…月器の…」

『えっ…！？』

小さく呟く太狼の言葉に、一気に険しい表情となる門貴たち。

「月器ってっ…」

「じゃあ輝矢んはっ…」

門貴と由雉が不安げな表情で、落ちてくる月器の粒を見つめる。

「……。」

二人の横で、同じように不安げな表情を見せる桜時。

「……っ」

そんな桜時が、ふとその表情を変える。

「……っ？」

その桜時の変化に、気付く太狼。

「どうしたの？ハチくん」

「輝矢…」

「えっ？」

桜時の声に、太狼が首を傾ける。

「輝矢がっ…」

『えっ…！？』

「どこやっ！？」

空を見上げながら、ポツリと声を漏らす桜時に、皆が険しい表情を見せ、金色の粒の降る中、その空の中に必死に輝矢の姿を探す。

『あっ…！！』

一斉に目を見開く門貴たち。確かに、遥か空の上から、金色に粒に混ざって落ちてくる、人影のようなものが見えた。

「輝矢っ…！？あれっ、輝矢なのっ…！？」

焦ったような声を漏らすリンゴ。皆が必死に目を凝らし、その落

ちてくる人物を見つめる。

「よっ」

――ボォォォォ～ンっ！

その場で飛び上がった梅人が、白い煙に包まれ、空中で雀化する。そのトリならではの優れた視覚を生かし、徐々に降下してくるその人物を見つめる梅人。太陽の光が差し込み、その姿がはっきりと見えるようになる。

「あっ…！輝矢っ！確かに輝矢だよ！あれ！！」

『えっ！？』

梅人の言葉に、皆が身を乗り出して見つめる。

「確っかに輝矢さんだぁ～っ！」

「でも全然、動かないわよっ！？」

明るく声を出す熊化したままの金汰の横で、リンゴが険しい表情を見せる。

「目も閉じてるしっ…！」

「まさかっ！死んでるんスかっ！？」

「アホっ！」

「痛ってぇっ！！」

縁起でもないことを言う羊スケの後頭部に、ゴンの容赦ない拳が振り落ちた。

「気ぃ失ってんのかもな」

「そんなっ…！あのままじゃ湖に落ちてしまいますっ…！」

眉をひそめるゴンの言葉に、イチゴが焦ったように声を出す。

「泡美っ…着地点へ向かって…」
「了解っ！」
――ボォォォォォォ～ンっ！
万亀に言われ、鯨化した泡美が、御伽湖へと出て、輝矢が降りてくると予想される位置まで泳いでいく。
「ゲイくじらがクッションになっても、あの位置から落ちたんじゃ、相当の衝撃がっ…」
泳いでいく泡美を見つめながら、由雉が考えるように眉をひそめる。
「受け止めなきゃっ…！鳥類の獣人の人っ！手を貸してっ！」
「おぉぉぉっしっ！」
由雉の言葉に、先陣を切って、張り切って手を挙げる銀ペー。
「いやっ、だから君じゃなくてぇっ…」
やる気満々の銀ペーに、由雉が思わず呆れた表情となる。
「ボクが求めてるのはっ、ちゃんと羽根のあるトリさんであってぇっ…！」
――……っ！
「えっ…？」

すぐ近くから聞こえてくる羽音に、由雉が戸惑うように振り向く。

「桜…時っ…？」

「……っ！」

由雉の横から、広い空へと飛び立っていくのは、背中から真っ白な翼を生やした桜時。

「桜時っ」

「ハチ公っ…」

門貴やゴン、皆が大きく見開いた瞳で、空へと飛び立っていく桜時の姿を見つめる。

「そうか…桜時…」

飛んでいく桜時を見つめながら、犬孝が穏やかな笑みを浮かべる。

「お前は…母親の、雲雀の血も継いでいたんだな…」

青い空により一層映える白い翼を見つめながら、目を細める犬孝。

「桜時…」

孔雀も犬孝と同じように、まっすぐな瞳で、桜時のその姿を見つめていた。

――どぉ～してこんな所にイヌが居るのかしらぁ～っ？――

――ううっ…！――

翼を持たず、イヌである自分のその姿に、いつも一人、泣いていた少年。

「あなたは…ちゃんと…」

――俺はイヌだけどっ…羽ばたきたいっ！羽ばたいていきたいんだっ！！――

「トリ…だったのねっ…」

羽ばたく白い翼を見つめ、孔雀は優しい笑みを浮かべた。

「輝矢っ…！」

背中に生えたその白い翼をはためかせ、桜時が青空を駆け抜け、落下してくる輝矢のもとへと飛んでいく。

「輝矢っ…！！」

桜時が、輝矢の名を呼びながら、空中で、輝矢の体をしっかりと

受け止める。勢いよく落ちていた輝矢であったが、桜時が受け止めたことで、その降下速度が緩まる。

「輝矢っ」

翼を広げながら、輝矢を横抱きにし、その深く閉じた瞳の表情を、不安げに見つめる桜時。

「輝矢っ…」

「んっ…」

桜時の呼びかけに答えるように、輝矢の表情がかすかに動き、深く閉じられていた輝矢の瞳がゆっくりと開けられる。

「ハ…チ…？」

「輝矢っ…！！」

まだ薄く開いただけの瞳で桜時を見つめ、ゆっくりと桜時の名を呼ぶ輝矢に、桜時が嬉しそうな笑顔を見せる。

「輝矢っ…！」

「……っ」

その瞳に滴を溜め、喜びを噛み締めるように俯く桜時へ、輝矢がゆっくりと右手を伸ばす。

「ねぇ…？」

「……っ？」

輝矢の右手が、桜時の頬へと触れる。

「言った…でしょう…？」

桜時の輪郭を確かめるように、桜時の頬を撫でながら、輝矢がその口元を綻ばせる。

「アナタの背に…翼が見えると…」

「……っ」

輝矢のその言葉に、顔を上げた桜時が、今にも泣き出しそうに、その瞳を細めた。

「愛しています…ハチっ…」

「……あぁっ」

泣き出しそうな笑みを浮かべながら、そう言う輝矢に、桜時が大きく頷きかける。

「俺も…愛してるっ…」

「……っ」

その言葉に、輝矢の瞳から、涙が溢れ落ちた。

『……っ』

月器の欠片の降り落ちる青い空を降下しながら、二人が空中で、口づけを交わす。

――パァァァァァンっ！

その瞬間、降り落ちていた月器の欠片がすべて、桜の花びらへと変わり、青い空に目一杯、舞い散った。

「くぅぅ～っ……！！」

唸り声をあげた門貴が、まるで力でも溜め込むように体の重心を下にしながら、強く両拳を握り締める。

「おっしゃあああああっ！！」

溜め込んだものを一気に放出するように、体を勢いよく伸ばし、両腕を突き上げて、喜びの声をあげる門貴。

『うおおおおおおっ！！！』

その門貴の声につられるように、その場に居る皆が、大きな声を出し、強く手を突き上げた。

「よっ」
輝矢を抱えた桜時が、無事、皆のいる島へと着地する。
「ふぅっ」
着地と同時に、桜時の背中の翼が消える。

「ほらっ」
「すみません」
桜時に支えられながら、輝矢が地面へと降り立つ。

「かっぐやぁ～んっ！！」
「……っ？」
聞こえてくる大きな声に、輝矢が振り向くと、皆を力強く押しのけた門貴が、降り立った輝矢のもとへ、いの一番に駆け込んできた。

「俺と再会を喜び合う、熱き抱擁をぉっ…！！」
「どちら様でしたっけ？」
「がっびぃ～んっ！お変わりなくて、何よりぃ～っ！」
冷たい切り返しをする輝矢に、ショックを受けつつも、いつも通りの様子であることを、わずかに喜ぶ門貴。

「生きてたぁ～っ？」
「……っ？」
落ち込んでいる門貴の後ろから、特に喜んでいる素振りも見せず、素っ気なく問いかけるのは由雉であった。

「何とかっ」
そんな由雉へ、輝矢が笑顔を向ける。

「ただいま、由雉」
由雉に笑顔を向けた輝矢が、今度は落ち込んでいる門貴へ、笑顔を向ける。

「ただいま、門貴」
『……っ』
輝矢の笑顔を見つめ、門貴と由雉も笑顔を見せる。

『おかえりっ！』
二人は声を揃え、満面の笑みを見せた。

『輝矢様ぁぁ～っ！！』
「ぐほぉうっ！」
笑顔の門貴を踏み潰し、勢いよく輝矢のもとへと駆け寄ったのは、ヘンゼルとグレーテルであった。

「良かったぁ～っ！ご無事でぇ～っ！！」
「輝矢様ぁぁっ！！」
「ヘンゼルっ…グレーテルっ…」
輝矢に抱きつきながら、涙を流すヘンゼルとグレーテルの姿に、輝矢が少し目を細める。

「輝矢ちゃんっ」
「……っ」
よく聞き覚えのあるその声に、輝矢がすぐさま顔を上げた。

「おかえりっ」
ヘンゼルとグレーテルのすぐ後ろに立った太狼が、いつもの穏やかな笑顔で、いつものその言葉を、輝矢へと送る。

「……っ」
昔からずっと、輝矢を支えてきてくれたその言葉に、輝矢が大きく笑みを零す。
「ただいまっ…太狼っ」
輝矢は少し泣きだしそうになりながら、太狼の言葉にしっかりと答えた。

「うおおぉ～！よくやったぁっ！よくやったぞぉっ！！竹取ぃぃっ！！」
「あぁ～あっ…ボロ泣きっ…」
「見れたもんじゃないっスねぇ…」
滝のように涙を流しながら、声にはならない声で泣き叫ぶゴンに、リンゴと羊スケが、呆れきったように、冷めた視線を送る。

「ゴンっ…」
「んなっ…！泣いてなんかねぇーぞっ！！」
ヘンゼルとグレーテルを離し、ゆっくりとゴンのもとへと歩み寄ってくる輝矢に、ゴンは涙を見られたくないのか、腕で勢いよく涙を拭いながら、隠れるように輝矢に背を向けた。
「俺は全然っ、泣いてなんかっ…！」
「諸刃が…」
「……っ」
輝矢の口から諸刃の名が出ると、ゴンはすぐに、その表情を曇らせた。
「御剣諸刃が…アナタに、“すまなかった”と…」

「……。」
その言葉を聞きながら、ゴンが涙を拭っていた腕を、ゆっくりと下ろす。

「あいつは…？」
「シルクと共に…逝きました…」
そっと問いかけるゴンに、輝矢が俯き気味に答える。

「そうか…」
「……っ」
輝矢の言葉に、小さく頷くゴン。そのやり取りを聞きながら、リンゴもそっと視線を落とした。

「馬鹿な奴っ…」
ゴンが小さく、声を落とす。

「自分の人生、狂わせた女なんかと一緒に…死にやがってっ…」
「ゴンっ…」
少し震えた声を出しながら、空を見上げるゴンを見つめ、リンゴは少し目を細めた。

「ですが…」
「……っ」
聞こえてくる輝矢の声に、ゴンが少しだけ振り返る。

「御剣諸刃が牢戸知玖を愛したように…牢戸知玖も、御剣諸刃を愛していたのだと思います…」
言葉を紡いだ輝矢が、そっと笑みを浮かべる。

「諸刃が“傍に居る”と言った時…」

――そんな言葉が…こんなにも嬉しいなんてっ……――

「とても幸せそうに…笑っていましたから…」

「……。」

輝矢の言葉を聞き、目を細めたゴンが、そっと俯く。

「そうか…」

そう呟いたゴンは、どこか納得するように、深く瞳を閉じた。

「さぁっ！皆、怪我もひどいことだしっ、とっとと龍国へ帰るかぁっ！」

「今まで全然、目立ってなかったのに、最後になって、急に仕切るのね、お父様」

「何かその言い方、ひどくないっ…？イチゴちゃんっ…」

皆を指揮する為、立ち上がった座黒が、冷たく言い放つイチゴに、傷ついた表情を見せる。

「クジラに全員、乗れるかしらぁ～？」

「泳げそうな奴らは、自力で帰れぇ～っ！」

リンゴや金汰が先頭に立ちながら、島に居る皆を次々と動かしていく。

「君たちは傷もひどいし、先に行かせてもらいなぁ～」

「ほいほぉ～いっ！」

「はぁ～いっ」

太狼に言われ、門貴と由雉が皆に優先するように、泡美の上へと

乗っていく。

「……。」
「……っ？」
二人に続こうとした輝矢が、その場に立ち尽くしたままの桜時に気づき、不思議そうに振り返った。

「ハチっ？」
輝矢が首を傾げながら、桜時に呼びかける。

「どうかしっ…」
「俺だけ、まだ言ってもらってねぇーんだけどっ…」
「えっ？」
少し俯きがちに、言いにくそうに言葉を発する桜時に、輝矢が不思議そうに目を丸くする。

「“ただいま”って…」
「ああっ」
輝矢がやっとわかった様子で、ポンと手を叩く。

「ただいまっ、ハチっ」
「……。」
「んっ？」
笑顔でただいまを告げたというのに、それでもまだ、どこか不満げな表情を見せている桜時に、輝矢が首を傾げる。

「まだ何かぁ…あっ」
考え込んでいた輝矢が、何か思いついた様子で声をあげる。

「……っ」
笑顔を見せた輝矢が、桜時のもとへ駆け寄り、桜時の耳に、口を寄せる。
「ただいまっ…」
もう一度、その言葉を呟く輝矢。
「桜時っ…」
「うっ…！！」
呼ばれる名に、桜時の顔が、勢いよく朱色に染まる。
「んなっ…！何っ…！！」
「呼んで欲しそうにしていたのでっ」
「誰もしてねぇーよっ！！」
悪戯っぽい笑顔で答える輝矢に、桜時が必死に怒鳴りあげる。
「っつーか、だいたいっ、桜時ってのが俺の名前であってっ、ハチっていうのはお前が勝手にだなぁっ…！」
「ハイハイ、桜時っ」
「ううぅっ…！！」
必死に言い繕おうとしていた桜時が、再び呼ばれる名に、またしても顔を赤くし、それ以上、怒鳴ることが出来なくなってしまう。
「おぉ～いっ！輝矢ぁ～んっ！」
「早く来なよぉ～っ」
「はぁ～いっ」
泡美の背の上から呼ぶ門貴と由雉に答えながら、輝矢が二人のも

とへと歩き出していく。

「……っ」

その背中を見つめ、そっと目を細める桜時。

「輝矢っ…！」

「……っ？」

強く名を呼ぶ桜時に、輝矢がゆっくりと振り返る。

「おかえりっ！」

「……っ」

満面の笑顔で言い放つ桜時を見て、輝矢は少し驚いたように目を見開いた後、嬉しそうに笑みを零した。

「はいっ！」

こうして、最終決戦は、終わりを告げた。

第９９章　明日への光　☆５（後書き）

次回、最終章です。

第１００章　この世界に咲く君へ　★1

昔々、あるところに、人と鬼の間に生まれた、月のお姫様がおりました。
月のお姫様は、かつての英雄・桃タローのもとで、すくすくと育ちました。
悪さをする鬼を退治するため、旅に出た月のお姫様は、
旅の途中、イヌ、サル、キジを供にして、
仲間と協力し、すべての鬼を倒して、この世界に平和をもたらしたのでした。
めでたし、めでたし。

そんな“おとぎ話”が、世界中に広まり、定着し始めた頃。

竹取輝矢が牢戸知玖を倒し、御伽界に平和が訪れてから、三年。

――四大国が一、“雀国”――

雀国主・朱実家屋敷。国主の間。

「国主様ぁぁっ！！」
国主の扉が勢いよく開き、部屋の外から、元気のいい女性の声が入って来る。

「国主様っ！！」
「んっ？」

その声にゆっくりと顔を上げる、国主の間の玉座に座った、派手な桃色の髪に透き通った青い瞳の青年。現・雀国主、朱実桜時。十九歳。

「千鶴っ」
三年の時が経ち、以前より背も伸びて、雰囲気も少し大人っぽくなった桜時が、国主の間へ駆け込んできた、世話役の千鶴へ、笑顔を向ける。

「さっきの書類、どうだっ…」
「完璧でしたぁっ！！ありがとうございますぅぅっ！！」
ひどく感動している様子の千鶴が、桜時の問いかけが終わる前に、その答えを思い切り叫びあげる。

――ボォォォォォ～ンっ！

白い煙に包まれ、鶴化する千鶴。

「お礼に恩返しさせて下さいぃ～～っ！！」
「よっ」
嘴を尖らせて突っ込んでくる千鶴に対し、桜時は慣れた様子で、素早く玉座から立ち上がり、横へと避ける。

「お礼なんていいよっ、というか、国主の国務しただけだしっ」
「そうですかぁ～っ！？」

――ドスっ！ドスっ！

呆れた様子で微笑む桜時に答えながら、千鶴が、先程まで桜時の座っていた玉座を、その嘴で勢いよく突き刺す。

「では、こちらの書類もお願いしますぅ～っ！」

「ハイハイっ」

千鶴が差し出した書類を、桜時が受け取る。

「はぁっ…」

「……っ」

受け取った書類を見ながら、深々と溜息をつく桜時を見て、千鶴が少し目を細める。

――ボォォォォォ～ンっ！

再び白い煙に包まれ、人間の姿に戻る千鶴。

「少し休憩されます？」

「へっ？」

千鶴の言葉に、桜時が目を丸くする。

「お疲れなのでは？」

「ああぁ～っ」

桜時を気にかけるような、優しい表情で、そっと問いかける千鶴に、桜時が少し困ったように、頭を掻いた。

「いいよっ、確かに疲れ気味だけど、こんくらいで根を上げてちゃっ、孔雀さんの代わりは務まんねぇしっ」

「桜時様っ…」

笑顔を見せる桜時に、千鶴も笑みを零す。

「孔雀様にも、驚かされました」
千鶴が少し、感心するように言い放つ。

「急に国主の座を退くと宣言されて、しかもその後任が桜時様とはっ…」
「仕方ねぇーさっ」
桜時が肩を落としながら、諦めたように言う。

「松兄は燕国継がなきゃだし、竹兄はレイラとまだハネムーンとか言ってるし、梅人は自分探しの旅とかってのに出ちまったし…」
「消去法ですね」
「うん…そうなんだけど…もうちょっと遠慮しろよっ…」
はっきりと言い切る千鶴に、桜時が頷きながらも、多少傷ついた表情を見せる。

「けれど、桜時様には犬国のこともあるのにっ…」
「犬国は大丈夫っ、父さんが戻ったし、犬仁たち、八犬もいるしなぁっ」
千鶴に答えながら、桜時がゆっくりと歩を進め、玉座の後ろの大きな窓の方へと歩み寄っていく。

「俺っ、雀国好きだし、それに、疲れるけど、国主も結構、楽しくやってるよっ」
桜時が笑顔を見せながら、窓を開き、青く広がる空を見上げる。

「楽しくっ…」

昼の空にもはっきりと見える、明るく輝く月をその瞳に映すと、桜時は笑みを消し、そっとその表情を曇らせた。

「……。」

そんな桜時の背中を見つめ、千鶴が眉をひそめる。

「あれからもう…三年も経つんですね…」

少し俯いた千鶴が、どこか懐かしむように呟く。

「あれから…輝矢様からの連絡は何も…？」

「うんっ…」

遠慮がちに問いかけた千鶴に、桜時が小さく頷く。

「何にもっ…」

月を見つめる桜時が、遠い瞳を見せる。

――三年前。牢戸知玖との戦いから、数日後。

「私、一人で旅に出て来ようと思います」

「えっ…？」

傷の治った輝矢は、何の前触れもなく、桜時にそう告げた。

「旅…？一人で…？」

「はい」

聞き返した桜時に、輝矢は大きく頷きかける。

「一人で世界中を旅して回って…色んなものを見て…もう一度、考えてみたいんです…」
「考える…？」
「鬼である私が…本当にこの世界に生きていていいのかどうか…」
「……っ」
真剣な表情で答える輝矢に、桜時はそっと目を細めた。

「どういう答えが出るのかは、わかりません…どのくらいの時間がかかるのかも、わかりません…」
桜時を、まっすぐに見つめる輝矢。

「だから…ハチもその間、もう一度、考えて下さい…」
輝矢が桜時に、穏やかな笑みを浮かべる。

「アナタにとって、鬼の私が、本当に相応しいのかどうかっ…」
「輝矢っ…」

その言葉に、桜時は思わず、険しい表情を見せた。

「私以外の誰かを選びたくなったら…私のことなど待たずに、その方を選んで下さい…」
細められた輝矢の瞳が、どこか切なげに光る。

「でも…」
柔らかく緩む、輝矢の口元。

「私が帰って来た時っ…その時でも、アナタが私を選んでくれるというのならっ…その時は…」
輝矢の笑顔が、桜時へと向けられる。

「その時はっ…」

……――

「……。」

月を見つめながら、三年前の輝矢との別れ際の会話を思い出し、桜時がそっと目を細める。

「三年、かっ…」

何の音沙汰もなく、過ぎ去った長い日々。

「もう…俺のことなんて、忘れてんのかもなぁ…」

「桜時様…」

力ない声を漏らす桜時に、千鶴がそっと目を細める。

「そっ…！そんなことはっ…！」

――バァァァァァーンっ！

『……っ？』

千鶴が言葉を発しようとしたその時、大きく音を立てて、勢いよく開く扉に、桜時と千鶴が驚いた表情で、一斉に振り返った。

「桜時っ…！！」

「くっ…孔雀さんっ…？」

扉を開き、堂々と国主の間へ入って来たのは、率直に怖いと思えるほど、険しい表情を見せた孔雀であった。歩み寄って来る孔雀に、桜時が少し怯んだような表情を見せる。

「なっ…何っ…」

「……。」

戸惑う桜時のすぐ目の前に、孔雀が立つ。

「俺ぇ…何かマズイことでもっ…」

「桜時」

桜時の言葉を遮り、孔雀が力強く、桜時の名を呼ぶ。

「あんたっ、明日、結婚することになったからっ」

「へっ？」

「えっ？」

孔雀のその衝撃発言に、桜時と千鶴が、自分の耳を疑うように、目を丸くする。

「えええぇぇぇっ！？」

次の瞬間、激しい叫び声をあげる桜時。

「けっ…！結婚んんんっ！？」

「ええっ」

叫ぶ桜時に、とても冷静に頷く孔雀。

「お見合い、とかではなくてですかっ？孔雀様っ」

「ええっ、見合いじゃなくって、結婚っ」
確かめるように問いかける千鶴に、孔雀がはっきりと答える。
「んななっ…！なんでぇぇっ！？」
桜時が大声で、シンプルな問いかけを放つ。
「一国の国主たる者っ、とっとと身を固めるのが基本でしょうっ？その方が国も落ち着くわっ」
「だからってっ…！」
強く言い放つ孔雀に、桜時が思わず声を張り上げる。
「それに俺はっ…！」
「いぃ～つっ、帰って来るかもわからない、あの破天荒女を待ってるとか、乙女チックなこと言う気じゃないでしょうねっ！？」
「うっ…！」
孔雀に強く睨まれ、桜時が思わず口ごもる。
「とっとと忘れなさいっ、あんな鬼女のことなんてっ」
「んな言い方っ…！」
「三年も経つのよっ？どうせ、もう帰って来ないわよっ」
「……っ」
その厳しい言葉に、桜時は言い返すでもなく、眉をひそめ、力なく俯いた。輝矢が帰って来るという確証も持っていない桜時には、必ず帰って来ると言い切ることが出来なかったのだ。
「でも結婚て…お相手はっ…」
「私よぉっ」
『……っ』
千鶴が孔雀へかけようとした問いに答えながら、国主の間へと入

って来る人物。

「アリスっ…！」
「久し振りねっ、朱実桜時っ」
「やぁ、桜時クンっ」
「玄上国主までっ…」

国主の間へと入って来たのは、四大国が一、北の武国の国主・玄上武史と、その娘・玄上アリスであった。驚く桜時に、二人は明るく手をあげる。

「アリスが…俺の結婚相手っ…？」
「そっ」
「三年前の婚約、バタバタしてて結局、破棄せずにそのまま残ってたみたいなんだよねぇ～っ」
戸惑うように問いかける桜時に、アリスが短く頷き、武史がどこか楽しそうに言葉を続ける。

「そっ…そんなっ…」
「観念なさいっ、桜時っ」
「ううぅ…」

強く言い放つ孔雀に、桜時は深々と頭を抱えた。

第１００章　この世界に咲く君へ　★2

――四大国が一、龍国――

龍国主室（旧オトポリ長官室）。

「うぅ～んっ…」

国主室の机に席を置き、並べた書類とにらめっこをしているのは、眉間に皺を寄せたリンゴであった。

「失礼しまぁ～すっ」

「……っ？」

扉の開く音と共に聞こえてくる声に、リンゴが顔を上げる。

「金汰さんっ」

「頼まれてた書類っ、出来あがったぞぉっ」

書類の束をひらひらと動かしながら、笑顔で国主室へと入って来たのは、金汰であった。

「すみません、色々と頼んじゃってっ…」

「どうってことねぇーさっ」

申し訳なさそうな顔を見せるリンゴに、机に書類を置きながら、金汰が明るい笑顔を向ける。

「座黒さんから国主譲り受けたところで、お前も大変だろうからなぁっ」

「ええっ、まぁっ…」

金汰の言葉に、少し苦い笑みを浮かべるリンゴ。牢戸知玖との戦いが終わり、オトポリは解体、世界情勢も落ち着いてきた一年程前、座黒が国主の座を退き、隠居生活に入ったため、リンゴが龍国主を引き継いだのである。金汰はそんなリンゴの補佐として、国務の一部を担っていた。

「俺で良けりゃ、いっくらでも手ぇ貸すぜぇっ？青守国主っ！」

リンゴへ、さらに大きな笑みを向ける金汰。

「っと、もう狐上国主だっけかっ」

「無理して呼ばなくていいですよっ」

金汰にそっと笑いかけながら、リンゴが机の上の書類を揃える。揃えるその左手の薬指には、銀色に輝く真新しい指輪がはめられていた。

「ダンナは元気かぁ？」

「相変わらずです」

「ガハハっ！そうかぁっ！」

どこか困ったように答えるリンゴを見て、金汰が豪快に笑う。

「お前らの結婚式にも戻って来なかったなぁっ」

明るく笑っていた金汰が、そっとその視線を落とす。

「輝矢さんっ」

「……っ」

金汰の口から輝矢の名が出ると、リンゴもその表情を曇らせ、ゆっくりと俯いた。

「どこで何してんのかっ…」

「そうですね…」
言葉を交わしながら、二人が浮かない表情を見せる。

「国主様っ！！」
『……っ？』
そこへ、青守家の従者の男が、ひどく慌てた様子で、勢いよく駆け込んできた。

「何っ？」
「雀国からっ、緊急伝書バトが届いておりますっ！」
「緊急伝書バトぉ～っ？」
従者の言葉に、リンゴが顔をしかめる。

「それって、一大事って時の連絡手段じゃないっ」
「雀国で何かあったんだろうか？」
「さぁ～っ？とりあえず、見てみましょっ」
リンゴが従者からハトを受け取り、ハトが背中に背負っていた手紙を、ゆっくりと開く。リンゴが開いた手紙を、横から覗きこむようにして、見つめる金汰。

『……っ！』
手紙を見た途端、リンゴと金汰が大きく目を見開く。

『えぇぇぇっ！？』

二人の叫び声が、国主室に響き渡った。

龍国・中心街。

「うえぇ～んっ！」

大人たちの行き交う大通りの真ん中で、大きな声をあげて泣いている、一人の小さな女の子。

「うえぇ～んっ！お母さぁ～んっ！どこぉ～っ！？」

さらに泣きじゃくる少女。どうやら、母親とはぐれてしまった迷子のようである。

「どうしたぁっ？」

「……っ」

上から落ちてくる声に、少女が泣き叫んでいた声を止める。

「迷子かぁ～？しゃあねぇっ、俺が一緒に探してやっからっ」

「ホントっ…！？」

聞こえてくる優しい言葉に、泣いていた少女が、嬉しそうに顔を上げる。

「うっ…！」

顔を上げた途端、引きつる少女の表情。

「ああっ？」

少女が顔を上げた先に立っているのは、青い警官の制服を纏い、警官帽をかぶったゴンであった。三年の年月でさらにドぎつくなった目つきを、ゴンが容赦なく、少女へと向ける。

「ひゃっ…百パーセント悪人顔っ…」

「だっれが百パー悪人じゃあっ！！」

「ひぃっ…！」

怒鳴りあげるゴンに、少女が怯えた様子で震え上がる。

「うえぇぇ～んっ！！」

「うげっ」

先程よりも激しく泣き叫ぶ少女に、ゴンが焦ったような声を漏らす。

「えっえぇ～とっ」

「ハイハァ～イっ！泣かないでぇ～っ！」

焦りまくりのゴンと、泣きじゃくる少女の間に割って入って来たのは、ゴンと同じ警官服と纏った羊スケであった。羊スケが、少女に明るい笑顔を向ける。

「悪人オジちゃんっ、怖かったっスねぇ～っ！」

「誰が悪人オジちゃんだっ！！」

羊スケの言葉に、勢いよく怒鳴りあげるゴン。

「向こうのお姉ちゃんたちが、一緒にお母さん、探してくれるっスからねぇ～っ！」

羊スケが少女を優しく誘導し、少し離れたところに居る婦警たちのもとまで連れていく。少女は婦警に連れられ、そのまま近くの交番へと入っていった。

「ふぅ～っ」

少女を誘導した羊スケが、ゴンのもとへと戻って来る。

「ゴンさんっ、いたいけな子供泣かしちゃダメっスよぉ～？逮捕しちゃうっスよぉ？」

「うっせぇっ！」

注意するように言う羊スケに、ゴンが不機嫌そうに答える。

「やぁ～っぱ、ゴンさんに普通の警官は向いてないんスよぉ～っ」
「俺はただ単に、迷子が苦手なだけだっ！」
「この前は意気込み過ぎて、万引き犯の腕、骨折させてたっスよねぇ～」
「うっ…」
鋭く指摘する羊スケに、表情を引きつるゴン。

「とっとと押し売りかヤクザに、転職した方がいいんじゃないっスかぁ～？」
「うっせぇっ！警官が俺の天職なんだよっ！」
「天職ねぇっ…」
口を尖らせ、言い切るゴンに、羊スケが少し肩を落とす。

「何にせよ、あんまり下手なこと、しないようにして下さいよぉ～？一応、国主様の旦那なんスからっ」
「わぁってるよっ」
羊スケの注意に、聞く気が本当にあるのか、適当に頷くゴン。

「ゴンさぁ～んっ！」
「んっ？」
遠くから聞こえてくる、自分の名を呼ぶ声に、ゴンがゆっくりと顔を上げる。

「ゴンさんっ！」
「イチゴ」
大通りの向こうから、大きく手を振りながら、ゴンのもとへと駆け込んでくるのは、イチゴであった。オトポリでなくなり、制服も着なくなったイチゴは、可愛らしい服を纏っている。

「ここでしたかっ！」
「ああっ」
ゴンの前へとやって来て、足を止めるイチゴに、ゴンが少し笑みを向ける。

「どうでもいいんスけどぉ、イチゴさんはゴンさんのこと、“兄さん”って呼ばないんスかぁ？」
「えっ？」
急に横から問いを投げかける羊スケに、イチゴが目を丸くする。

「あっ、はい。何か癪なんで、呼びません」
「おいっ！！」
素直に答えるイチゴに、勢いよく突っ込みを入れるゴン。

「んでぇ？俺に何か用なんじゃねぇーのかっ？イチゴっ」
「あっ！そうだっ！お姉ちゃんから伝言頼まれてっ」
イチゴが思い出したように、ポンと手を叩く。

「実はっ…」
リンゴの伝言を、ゴンへと伝えるイチゴ。

『えええぇっ！？』

伝えられたその瞬間、ゴンと羊スケが、驚きの叫び声をあげた。

龍国・海岸。エセお菓子の家こと、『桃原家』。

「ふんふふぅ～んっ♪」
ホウキを持ったヘンゼルが、桃原家の家の前の地面を掃き、掃除をしていた。

「私はヘンゼルっ♪キレイ好きぃ～♪」
「クルッポーっ！」
「んっ？」
上の方から聞こえてくる鳴き声に、掃除をしていたヘンゼルが、ゆっくりと顔を上げる。

「ハトっ？」
高い空の上から、ヘンゼルのもとへと降りてくるのは、一羽の白いハト。ヘンゼルがそっと右腕を出し、降りてきたハトを受け止める。
「伝書…バトっ…？」
ハトの背負っている手紙に気づき、首を傾けるヘンゼル。戸惑いながらも、その手紙を手に取り、ゆっくりと広げる。

「……っ！」
手紙の内容に目を通し、大きく目を見開くヘンゼル。

「ご主人様っ…！」
ヘンゼルがその場にホウキを捨て置き、家の中へと駆け込んでいく。

「ご主人様ぁぁ～っ！！」

ヘンゼルの声が、桃原家に響き渡った。

御伽界・南東部。幸ノ街。

「あぁーっ」
「……っ」

まだ、言葉にもなっていない、無邪気な声を発する赤ん坊を見つめ、優しく目を細める由雉。十八歳になった由雉は、背も伸び、体も少し大きくなって、少年から青年へと成長していた。

「ゆぅっ！ゆぅっ！」
「はいはいっ」
必死に伸ばされた赤ん坊の手が、由雉の差し出した人差し指を握り締める。その小さな、柔らかな手の感触に、由雉はさらに、笑みを零した。

「由雉っ」
由雉のいる部屋の扉から、ミチルが中を覗き込むように、顔を出す。

「由加里、平気？」
「大丈夫～っ」
不安げに問いかけるミチルに、由雉が素っ気なく答えを返す。

「すっごいご機嫌な感じぃ～っ」
「はぁいっ！」

由雉のその答えを証明するように、由雉の指を握った赤ん坊が、楽しそうな笑い声を漏らす。赤ん坊の名を、由加里。結婚したミチルとハヤテの間に生まれた、由雉の義理の妹であった。今はハヤテの店で、皆で一緒に暮らしているのである。

「そうっ」

安心したように微笑み、ミチルが覗き込んでいた顔を引っ込める。

「フフフっ」

「……っ？」

部屋を出て、店のカウンターへと出ながら、笑みを零すミチル。そんなミチルに、カウンターに立っていた幸コが、不思議そうに首を傾げた。

「どうかしたんですか？ミチルさん」

「由加里ったら、本当に由雉のことが好きだなぁ～と思ってねぇ」

問いかける幸コに、ミチルが笑顔を向ける。

「ああ、確かにっ。よく懐いてますもんねぇ～っ」

幸コが奥の、由雉たちのいる部屋を覗き込みながら、納得するように頷く。

「強力なライバル出現ねっ、幸コちゃん」

「えっ！？」

ミチルの言葉に、幸コが焦ったように大きな声をあげる。

「そっ…！そんなっ…！私は別にっ…！」

「そんなぁ～っ！！」

「うわっ！」

必死に否定しようとした幸コが、後方から聞こえてくる大きな声に驚き、その言葉を途中で止める。

「ハヤテさんっ」

「いっくらマイソンでもっ、僕の由加里はあげられないよぉ～っ！！」

大きく首を横に振りながら、強く主張するハヤテ。

「ああぁ～っ！でもっ、マイソンが結婚していっちゃうのも、パパっ、寂しいぃ～っ！」

「バカなこと叫んでないで、とっとと新しい羽根でも作ったらぁ～？」

頭を抱え、悩み込むハヤテに、由雉が冷たい言葉を投げかける。

「由雉さぁ～んっ！」

「……っ？」

店の裏口から入って来た幸之助が、由雉の名を呼びながら、由雉のいる部屋へとやって来る。

「雀国から伝書バト来てましたよぉ～っ」

「雀から？」

幸之助から手紙を受け取りながら、由雉が少し戸惑うように首を傾げる。

「何だろっ」

「あゃー？」

手紙を広げる由雉の横で、由加里も手紙を覗き込む。

「えっ…！？」

次の瞬間、由雉が大きく目を見開く。

「桜時が…結婚っ…！？」

由雉の表情に、衝撃が走った。

御伽界・南西部。柿之木山。

「おっしゃああっ！！今日もいっちょ、やったるでぇっ！猿蟹合戦っ！！」

柿之木山の中腹、一杯に実をつけた二本の柿の木の下で、蟹軍の先頭に立ち、大バサミを構えた二花が、気合いの入った声をあげる。

「根性見せぇいやぁっ！蟹軍っ！！」

『おおぉおうっ！』

二花の言葉に活気づくように、蟹軍の皆が、拳を突き上げる。

「さぁっ！門貴ぃ～っ！今日もとっとと勝負といっ…！」

『きゃあああっ！門貴様っ！頑張ってぇ～っ！！』

「はいはぁ～いっ！」

「……。」

気合い十分で振り返った二花が、その対面で、愛らしい猿人の女の子たちに黄色い声援を送られ、思い切り鼻の下を伸ばしている門貴の姿を見て、その表情を凍りつかせる。

「猿長の俺に、どぉ～んと任せといっ…！」
「おらっ」
「痛ったぁぁぁっ！！」
可愛い女の子たちに、調子良く手を振っていた門貴の頭に、二花の大バサミが振り落とされる。

「何すんねんっ！二花ぁ～っ！まだ始まりて、言うてなっ…」
「あんたは猿蟹合戦を何やと思てんねんっ！！」
「うわっ」
至近距離から、凄い剣幕で怒鳴りあげる二花に、門貴が思わず体を引く。

「ただでさえアホ面やのに、デレデレと鼻の下、伸ばしくさってっ！聖戦やでぇっ！？誇りはどないしてんっ！！」
「えぇ～っ？」
熱く怒鳴る二花に、門貴がどこか不満げな声をあげる。

「せやかて俺ぇ～、女の子にキャアキャア言われたくって、猿長に戻ったんやしぃっ」
「……っ」
門貴の言葉を聞き、、二花の額に、勢いよく血管が浮き出る。

「そうかっ…よぉ～わかった…」
噛み締めるように、静かに頷く二花。

「ウチがぶった斬ってっ、引導渡したるわぁっ！！」
「うわぁ～っ！落ち着いてぇ～っ！姉ちゃ～んっ！！」
本気の気迫で大バサミを振り上げる二花を、後方からチョキ三郎が必死に止める。

「門貴っ」
門貴のすぐ横に立っている移貴が、少し厳しい表情で、門貴の名を呼ぶ。

「真面目にやらな、まぁ～た長老に怒られるでぇ？」
「へぇ～いっ」
移貴の注意に、門貴がやる気なく、返事を返す。

「門貴さぁ～んっ！」
「……っ？」
柿之木山の頂上の方、猿の村の方から聞こえてくる声に、やる気なく肩を落としていた門貴が、ゆっくりと振り返った。

「猿飛っ」
猿の村の方から、門貴のもとへと駆け抜けてくるのは猿飛。

「どないしたんやぁ～？」
「雀国から、伝書バトで手紙が届きましたぁ～っ！これっ！」
「伝書っ？」
門貴が眉をひそめながら、猿飛から受け取った手紙を開く。

「はぁぁっ！？」
手紙を読んだ瞬間、大きな声を出す門貴。

「イヌコロとアリスちゃんが結婚～っ！？」
柿之木山に、門貴の声が響き渡った。

第１００章　この世界に咲く君へ　★3

翌日。雀国・スズメーレ教会。

「ふっはぁっ…」

新郎控え室で、白一色の袴を纏い、そのド派手な桃色の髪をきっちりとまとめた桜時が、椅子に座り、目の前の鏡で自分を見つめたまま、深々と溜息をついた。

「桜時様っ」

「んっ？」

扉が開き、顔を出す千鶴に、桜時がゆっくりと振り返る。

「何っ？」

「あのぉ～っ…」

問いかける桜時に、千鶴が少し躊躇うように声を長く伸ばす。

「桜時様にお客様といいますかぁ…」

「客っ？」

「どういうこっちゃっ！こりゃあああっ！！」

――バァァァァーンっ！

「うえっ！？」

激しい怒鳴り声と共に、控え室の扉を蹴破って入って来たのは、紫色の艶やかなドレスを身に纏いつつも、その表情はドレスとは似つかわしくない程に険しい顔の、リンゴであった。

「リっ…リンゴっ…！」
ずかずかと部屋の中へと入って来るリンゴに、桜時が思わずその場で立ち上がり、どこか怯えたような表情を見せる。
「輝矢の帰って来ない内に、他の女と結婚だぁっ！？ナメてんのっ！？アンタぁっ！！」
「ぐえええぇっ…！ぐっ…！ぐるじぃっ…！！」
「おっ落ち着いて下さいっ！狐上国主っ！！」
桜時の襟元を絞め上げるリンゴに、青白い顔となっていく桜時を見て、千鶴が慌てた様子で止めに入る。

「やめろっ、リンゴっ」
「……っ」
「うえぇっ！」
後方から聞こえてくる声に、リンゴが瞬時に襟元から手を離す。
解放された桜時は、苦しそうにその場に膝をついた。

「ゴンっ」
リンゴが振り返ると、控え室に黒いスーツを着たゴンが入って来た。

「結婚式の前に、花婿殺す気かぁ～？お前はっ」
「……。」
ゴンの言葉に、リンゴが目を細める。

「ええ、出来ればっ」
「おいっ！！」
素直に頷くリンゴに、膝をついたままの桜時が思わず突っ込みを入れる。

「はぁ～っ、死ぬかと思ったっ」
「大丈夫ですかっ!?桜時様っ！」
首元を押さえながら、自分の無事を確認する桜時のもとへ、慌てた様子で千鶴が駆け寄っていく。

「ああ、大丈っ…」
「あっらぁ～っ！こんなに汚れちゃってぇ～っ！」
「あっ、そっちの心配ね…」
桜時自身ではなく、桜時が纏っている白袴の心配をしている千鶴に、桜時が少し呆れた表情となる。

「んでっ？」
「……っ？」
上の方から聞こえてくるゴンの声に、桜時が座ったまま、顔だけを上げる。

「本当にいいのか？これでっ」
「……。」
真剣な表情で、まっすぐに問いかけてくるゴンに、桜時はそっと俯き、その口元を緩めた。

「いいんだ…」
桜時の口から放たれる、小さな声。

「あれから三年…俺は十分、待ったっ…」

――ハチもその間、もう一度、考えて下さい……――

「もう…十分、考えた…」

顔を上げた桜時が、どこか諦めたような笑みを浮かべる。

「あいつはさっ、もうきっと、ここには帰って来ないんだよっ」

「ハチ公っ…」

明るく笑いあげる桜時を見て、ゴンが目を細める。桜時が無理をして言っていることは、誰が見ても、明らかであった。

「だから…もういいっ…」

『……っ』

力なく俯く桜時に、ゴンとリンゴは互いの顔を見合わせ、困ったような表情を見せた。

同刻。スズメーレ教会内。

「国主家同士の婚儀よっ、警戒は厳にねっ」

「はっ！お任せあれっ！！」

脇に立った、いつもにも増して派手な着物の孔雀が、真剣な表情で、指示を送っている。孔雀の言葉に、警備隊長の銀ペーは、大きな声で頷いた。

「ふぅっ」

銀ペーたちが去っていくと、孔雀が少し疲れた様子で肩を落とす。急に決めた婚儀を実施するため、昨夜は寝ずにあれこれと動いていたのである。

「さすがに疲れたわねっ…」
「あんまり無理しない方がいいですよぉ～っ？」
「……っ」
後方から聞こえてくる、妙に軽い、聞き覚えのある声に、孔雀が眉をひそめながら、ゆっくりと振り返る。
「太狼っ」

孔雀が振り返ると、そこには相変わらずの嘘臭い、爽やかな笑みを浮かべた、太狼が立っていた。

「もうお年なんですからぁ～っ」
「うっさいわねっ！！」
軽口を叩く太狼に、孔雀が勢いよく怒鳴りあげる。
「あんたが変わらなさすぎなのよっ！何！？その爽やかさ！あんた、もう三十路でしょっ！？」
「僕は永遠の十八歳ですからぁ～っ」
さらに怒鳴る孔雀に、太狼が調子のいい笑顔を向ける。確かに太狼は、三年の時が流れているというのに、その姿にまったく変化がなかった。

「ったく、でも龍国主の婚礼にも出なかった、面倒臭がりのあんたが、よく来たわねぇ～っ」
一息ついた孔雀が、感心するように言い放つ。
「招待状送ったのは、そっちでしょ～？」
「来て欲しくなくても、一応、送んなきゃいけないのが、世の中のしがらみじゃないっ」
「うわぁ～っ、ひどいなぁ～っ」
遠慮なく言い放つ孔雀に、太狼が少し苦い笑みを浮かべる。

「それとも何っ？式をブチ壊しにでも来たっ？」
「まっさかぁ～っ、忌々しいハチ君が、他の女の子と結婚してくれるなら、僕的には万々歳ですよぉ～っ」
孔雀の問いかけに、太狼が明るい笑顔を見せる。
「まぁっ、ウチの輝矢ちゃん差し置いて、他の娘とって考えると、複雑なところもあるんですけどねっ…」
「あんたの複雑親心に興味はないわよっ」
悩ましげに呟く太狼に、孔雀が冷たく返事をする。

「孔雀さんはぁ～？」
「えっ？」
「孔雀さんはどうしてっ、いきなりハチ君を結婚させようと思ったんですかぁ～？」
「……っ」
軽い笑みを浮かべながらも、瞳だけは鋭くして問いかける太狼に、孔雀が真剣な表情を見せ、そっと俯く。

「そんなのっ…決まってるじゃないっ」
顔を上げた孔雀は、どこか不敵な笑みを浮かべた。

数時間後。

「……っ」

閉じられた教会に入口の外で、父・武史と共に控えている、ウェディングドレス姿のアリス。アリスは幸せの象徴とも言えるドレスを纏っているというのに、どこか険しい表情を見せ、何度も何度も繰り返し、後方を確認していた。まるで、誰かが来るのを、待っているようである。

「そんなに後ろを気にしてちゃあ、いけないよぉ？花嫁さんっ」

「パパっ」

アリスのすぐ横に立った、黒袴姿の武史が、アリスに優しく声を掛ける。その言葉に、後ろばかり気にしていたアリスが、ゆっくりと振り向いた。

「けどっ…」

どこか不安げに俯く、アリス。

「大丈夫っ、心配しなくても、あの子は来るさっ」

そんなアリスの肩に手を乗せ、武史がそっと言い放つ。

「あの子が早々、彼を手放すと思うかいっ？」

「……そうよねっ…」

武史の言葉を受け、アリスもそっと笑みを浮かべた。

「……っ」

再び後方を振り返ったアリスが、険しい表情を見せる。

「とっとと来なさいよっ…」

誰にともなく、言い放つアリス。

「私が…貰ってっちゃうわよっ…？」

アリスの声が落とされたその時、ゆっくりと二人の前の、教会の扉が開いた。

『ララララララぁ～っ♪♪』

教会内の右端に並び、陽気にハーモニーを刻む、松人、竹人、梅人の三兄弟。

「ああぁ～っ、うぜっ」

「静かにっ」

参列者席に腰掛けたゴンが、聞こえてくるハーモニーに不機嫌そうに呟くと、隣に座るリンゴが、注意するように声を掛けた。

『……。』

ゴンたちを始め、太狼やヘンゼル、グレーテルなど、桜時をよく知る人物が並ぶ中、教会の中央に敷かれた真っ赤な絨毯の上を、腕を組んだアリスと武史が、ゆっくりと歩いていく。

「……っ」

二人の歩く先、神父の立つ壇の前で、一人待つ桜時は、神妙な面持ちで俯いていた。

「なぁっ、ユッキーっ」
声がするのは、神父の立つ後ろにある、巨大な十字架のその裏。
「俺がアリスちゃん、かっさらってくゆうんは、どないやろっ？」
「勝手にやりなよぉ～、ボク、他人の、というか他鳥の振りしてるからぁ～」
「がびぃぃーんっ！！」
十字架の裏に身を潜め、結婚式の様子を探っているのは、門貴と由雉であった。相変わらずの様子で、冷たく答える由雉に、門貴がショックを受ける。

「なんでそういう、くだらない考えになるかなぁ～」
「だってぇ、俺らがイヌコロさらってくとか、ちょいキモないっ？」
「確かにねぇっ」
門貴の言葉に、由雉が納得するように頷く。

「やぁ～っぱ、この式自体を何とか止めるしかないかぁ～っ」
首を捻り、考える由雉。

「どの羽根にしようかなっ」
「ちょいちょいっ、ユッキーっ？」
両手に色取り取りの羽根を広げ、どの羽根にしようか悩み出す由雉に、門貴が少し焦ったように手を伸ばす。

「やっぱ虹羽っ？」
「参列者、全員、殺す気ですかぁ～？」
マジ顔で言う由雉に、門貴が呆れきった表情を向ける。

第１００章　この世界に咲く君へ　★4

十字架の裏で、門貴と由雉やあれやこれやとやり取りをしている間にも、式は着実に進み、アリスは桜時のもとへ辿り着いて、武史の横から桜時の横へと辿り着いていた。並んだ二人が、一度顔を見合わせ、今度は二人で神父の方を見る。

「あぁ～、では玄上アリス」
「はい」
神父に名を呼ばれ、アリスがはっきりと返事をする。

「汝、健やかなる時も、病める時も、その命続く限り、この者、朱実桜時を愛することを誓いますか？」
「誓います」
神父からの問いかけに、アリスがすぐさま答える。

「では、朱実桜時」
「はっ…はいっ」
アリスから視線を移す神父に、桜時が少し戸惑いながら返事をする。

「汝、健やかなる時も、病める時も、その命続く限り、この者、玄上アリスを愛することを誓いますか？」
「……っ」
その問いかけに、桜時がそっと目を落とす。

――ハチっ……――

「……。」

脳裏に刻みついて離れない笑顔を、消し去るように、桜時は一度、深々とその瞳を閉じた。目を開いた桜時が、意を決したように、神父を見つめる。

「はい、誓いまっ…」

「あぁぁぁっ！！もうっ！！」

「へっ…？」

桜時が答えようとしたその時、後方の参列者席の辺りから聞こえてくる大きな声に、桜時の小さな声は掻き消された。目を丸くした桜時が、戸惑うように振り返った。

「しっ…白雪様っ…？」

「冗っ談じゃないわっ！！」

隣に座る鈴白が、引きつった表情で見上げる中、参列者の中で一人、立ち上がった白雪が、大きく声を荒げる。

「相手が竹取輝矢だってゆうから、諦めてやろうって気になってたっていうのにっ…」

拳を強く握り締めた白雪が、勢いよく顔を上げる。

「何だってっ、あんな女に桜時様をあげなきゃなんないのよっ！！」

「んなっ…！」

強く指差す白雪に、その指の先に立っていたアリスが、思わず顔を引きつる。

「あんな女ですってぇぇっ！？」

「アっアリスっ？」
険しい表情で白雪の方へと身を乗り出すアリスに、桜時が少し焦ったような顔を見せる。
「やろうってぇのぉっ！？」
「やってやろうじゃないのぉっ！！」
被っていたヴェールを取り去り、ドレスの下に隠し持っていたのであろう、針器を目覚めさせるアリスと、その右手に氷で出来た剣を纏わせる白雪。二人は、戦う気満々の様子で、互いの武器を構えた。
「おっおいっ…！」
そんな二人に、桜時が焦ったように声を出す。
「お前らっ…！」
「そういうことならっ、私もその戦いっ、参加しますっ！」
「へぇっ！？」
止めようとした桜時が、新たに聞こえてくる声に、間の抜けた表情で振り返る。
「いっ…イチゴっ？」
リンゴの横で、意気込んで立ち上がっているのは、イチゴであった。そんなイチゴを、リンゴは戸惑った表情で見上げる。
「輝矢さんが相手じゃないならっ、私だって譲れませんっ！」
「フフっ…！楽しくなってきたじゃないっ！」
前へと出て来るイチゴを見て、楽しげに笑う白雪。

「楽しくって、お前っ…」
「そうねぇっ！腕が鳴るわぁっ！」
「お前も…」
もうすでに婚儀などそっちのけで、針器を振り回し、その感触を確かめているアリスに、呆れた表情を見せる桜時。

「ええぇ～っ！？じゃあ僕も参加しちゃおっかなぁ～っ！？」
「色々と間違ってるわよ…泡美っ…フフフっ…」
ウキウキと立ち上がる泡美に、横に座る万亀が、不気味な囁きを入れる。

『わぁわぁっ！ぎゃあぎゃあっ！！』

「……。」
大騒ぎの教会内を、唖然と見つめるリンゴ。
「何これっ…」
「ハッハッハっ！」
呆れたように呟くリンゴの横で、ゴンがどこか楽しげに笑う。

「孔雀様っ…これは…どのようにっ…」
「……っ」
戸惑うように問いかける銀ペーに、強く唇を噛み締め、拳を握り締める孔雀。

「えええーいっ！全員っ！摘まみ出しなさいっ！！」
「花嫁もっ…ですか…？」
声を張り上げる孔雀に、銀ペーが困った様子で聞き返す。

『わぁわぁっ！ぎゃあぎゃあっ！！』

「あぁ～ららっ」

止めようとする警備隊や関係のない人間も混ざって、さらに騒々しくなっていく教会内に、太狼がゆったりと座ったまま、どこか楽しげに微笑む。

「ご主人様ぁ～っ！私っ、門貴様一筋なんですけどっ、楽しそうだから、参加してきていいですかぁ～っ？」

「いいよぉ～っ、どんどん楽しんでおいでぇ～っ」

「はぁ～いっ！」

太狼からの許可が出ると、大剣を構えたヘンゼルが、楽しそうにスキップをしながら、混乱の場へと飛び込んでいく。ヘンゼルが加わり、さらに大きくなっていく騒ぎ。

「ご主人様っ！」

それを見て、グレーテルが少し困ったように、太狼の方を振り向いた。

「何故っ、お兄様までっ？止めた方がっ…」

「大丈夫っ」

不安げに訴えるグレーテルに、太狼は穏やかな笑顔を向けた。

「もうすぐ止まるよっ」

「えっ…？」

自信を持って言い切る太狼に、グレーテルが首を傾げる。

「おっおいっ！お前らぁっ！！」
教会だというのに武器を振り回し、関係ない人間まで巻き込んで、暴れ回る白雪やアリスたちに、そのすぐ傍から、何とか止めようと声をかける桜時。
「いい加減にっ…！」
――バァァァァァンっ！
「ううぅわっ！」
止めようとした桜時が、すぐ横へと飛んで来た雪の塊に、勢いよく吹き飛ばされる。
「痛ってぇ～っ…」
倒れた体を起こし、打った頭を痛そうに押さえる桜時。折角、きれいに整えた髪も、今も衝撃でボサボサになり、白一色だった袴にも、黒い汚れがついてしまっていた。
「ああっ…もうっ…」
桜時は座り込んだまま、立ち上がる元気さえも出ずに、深々と頭を抱えた。
――ピキピキピキっ…！
『んっ？』
その時、参列者席の上辺りの天井に、勢いよくヒビが入り、その

音に皆が、戸惑うように顔を上げた。

「何っ…」

――バァァァァーンっ！

『うぎゃあああああっ！！』

突如、総崩れする、教会の天井。落ちてくる瓦礫に、参列者たちの悲鳴が響く。

「あれはっ…」

大混乱で戦っていた白雪たちも、崩れ落ちた天井にその手を止め、大きく穴のあいた天井から、教会内へと降りてくるその影に、目を見張る。

「スズ…メっ…？」

教会内へと降りてきたのは、人が軽く十人は乗れそうな程に、巨大なスズメ。

「チュンっ！」

『……。』

図体のわりに、可愛らしい鳴き声を漏らすスズメに、皆が唖然として、動くこともなく、その場に立ち尽くす。

「……。」
「……っ！」

そのスズメの背の上で、ゆっくりと立ち上がる人物をその目に映し、桜時が大きく目を見開く。

「あっ…」
小さな、小さな声を漏らす桜時。

「派手な登場っ」
「死人、出たんじゃねぇーのっ？」
呆れたように言葉を交わす、ゴンとリンゴ。だがその表情には、笑みが浮かんでいた。

「ほら、来たっ」
太狼もどこか、楽しげに笑った。

「あっ…」
「……っ」

風に舞う、長い黒髪。戸惑うように桜時が見つめる中、強く輝く黒い瞳で、その者は笑う。

「か…ぐ…や…」
一文字、一文字、確かめるように、その者の名を呼ぶ桜時。

「輝矢っ…」

スズメの背の上に立っているのは、見間違うはずもない、正真正銘、輝矢であった。

「ハチっ」
「……っ！」

笑顔で桜時の名を呼び、スズメの背の上から、桜時へと手を差し出す輝矢を見て、桜時が大きく目を見開く。

「……っ」

――もう…十分、考えた……――

考えたはずなのに、足は勝手に動いて、諦めたはずなのに、足は勝手に進んだ。

「……っ！！」

一瞬も迷うことなく、一目散に、輝矢のもとへと駆け込んでいく桜時。

『……っ』

桜時が必死に伸ばした手を、輝矢がしっかりと握り締め、強く引き、桜時をそのままスズメの背の上へと引っ張り上げる。

「チュ～ンっ！！」
『うわっ！！』

輝矢と桜時を乗せた巨大スズメが、教会の中で勢いよく翼を広げた。その衝撃風に、教会内にいる者たちが皆、身を伏せる。

「チュチュチュ～～ンっ！！」

『あっ…』

皆が止める間もなく、あっという間にその場を飛び立っていくスズメ。天井にあいた穴の向こうの、青々とした空へと飛び上がっていくスズメを見つめ、皆が大きく口を開き、呆然とした様子を見せた。

「あぁ～あっ、行っちゃった…」

武器を止め、穴を見上げながら、そっと呟くアリス。

「ってか、来るのが遅過ぎなのよぉっ、バカグヤっ…フフっ」

そう言って悪態づきながらも、アリスは込み上げる笑いを、堪え切れなかった様子で、そっと穏やかな笑みを零した。

「あっ、でも婚約はともかく、例の武国と雀国の先祖同士の約束ってっ…」

「輝矢もれっきとした、武国主の血筋だよ？」

思い出したように言うアリスに、武史が笑顔で答える。

「約束はバッチリ果たしてるさっ」
「そっかっ」
武史の言葉に、アリスは安心したように微笑んだ。

「いいなぁ～っ」
右手の雪剣を消しながら、白雪がボヤくように呟く。

「私も誰かと幸せになりたいなぁ～っ」
「じゃあ僕と結婚します？」
「……。」
横から聞こえてくる、鈴白のノリの軽すぎるその言葉に、思考が停止したのか、しばらくの間、固まる白雪。

「じょっ冗談じゃないわよっ！！誰が貴方となんかっ…！」
「じゃあ止めときましょうかっ」
「ええぇっ！？」
必死に否定しようとした白雪であったが、あっさりと頷く鈴白に、今度は焦ったように声をあげる。

「ちょっ…！ちょちょちょ待っ…！鈴白っ！私っ！別にしないとは言ってっ…！鈴白ぉぉっ！？」
「はぁ～っ、やれやれ、だねぇっ」
大声で四苦八苦、言葉を繋ぎながら、鈴白を追いかけていく白雪を見つめ、芹が深々と溜息をついた。

「どうされます？孔雀様」
大惨事の後のような状態となった教会を見回しながら、銀ペーがすぐ横の孔雀へと問いかける。
「桜時様を追いますか？」
「別に必要ないわっ、好きにさせときなさいっ」
「えっ？」
素っ気なく答える孔雀に、銀ペーの横に立っていた千鶴が、目を丸くする。

「ですが、それでは雀国主がっ…」
「国主には、私が戻るわぁっ」
『へっ？』
あっさりと言い放つ孔雀に、目を丸くする千鶴と銀ペー。

「一年くらい休めたしっ、いい気分転換になったぁ！さっ！とっとと、片付けるわよぉっ！」
『……。』
そう言って、足早に教会を出て行ってしまう孔雀に、呆然とする千鶴と銀ペー。

「輝矢の顔も一瞬だけど、見れたしぃっ」
参列者席に座っていたリンゴが、思い切り立ち上がって伸びをする。

「とっとと龍国へ戻りましょうかっ」
「そうだな」
「イチゴぉ～っ！帰るわよぉ～っ！」
リンゴに続くようにしてゴンの立ち上がり、イチゴを呼んで、皆

揃って、龍国へ戻ろうと、教会の出口へと歩き出していく。

『ご主人様っ、私たちもっ』
「うんっ、帰ろうかぁ～」
ヘンゼルとグレーテルの言葉に、笑顔で答える太狼。

「……っ」
立ち上がった太狼が、ふと顔を上げ、天井にあいた穴から、青い空を見上げる。

「いってらっしゃいっ、輝矢ちゃんっ」

第１００章　この世界に咲く君へ　★5

その頃。雀国上空、巨大スズメの背の上。

「あぁ～っ、イイ風ですねぇっ」

「お前ねぇっ…」

吹き抜ける風を気持ち良さそうに浴びながら、心地よい笑顔を見せる輝矢の隣で、引きつった表情を見せ、頭を抱えている桜時。

「何っ、やってくれちゃってんだよっ！！」

「へっ？」

怒鳴りあげる桜時に、輝矢が目を丸くして振り向く。

「私、何かしましたっけ？」

「スズメーレ教会っ、崩壊しかかってただろうがっ！常識的に考えて、滅茶苦茶過ぎだろっ！」

不思議そうに首を傾げる輝矢に、桜時が強く指を差し、熱く怒鳴り放つ。

「私に常識が通じると？」

「いやっ…それは思ってねぇーけどさっ…」

堂々と聞き返してくる、何も悪びれた様子の輝矢に、呆れた様子で肩を落とす桜時。

「だいたい、この巨大スズメはどっからっ…」

「雀国の入口に置いてあったんですよ」

眉をひそめて、自分の乗る巨大スズメを見つめる桜時に、輝矢が

笑顔で答える。

「こんな手紙と一緒にっ」

「手紙っ？」

そう言って、輝矢が差し出した手紙を、桜時が戸惑いながら覗き込む。

――破天荒女へ。使ったら必ず、必ず返すように。孔雀――

「……っ」

手紙の文面を読み、桜時が驚いたように目を見開く。

「孔雀さんっ…」

手紙に刻まれたその名を見つめる桜時。

――あんな鬼女のことなんかっ、とっとと忘れなさいっ――

「あんなことっ…言ってたくせにっ…」

俯いた桜時が、そっと笑みを浮かべる。

「さぁっ、じゃあ派手派手スズメババアの許可も下りたことですしっ、パァっと愛の逃避行でもっ…」

「ちょっ、ちょっと待てよっ！」

「……っ？」

手紙を懐に戻しながら、ご機嫌の笑顔で言う輝矢に、桜時が少し慌てるようにして声を発する。

「何かっ？」
「何かじゃねぇっ！孔雀さんがいいっつっても、俺はまだ何の許可も出してねぇだろうがっ！！」
不思議そうに問いかける輝矢へ、桜時がムキになったように、強く怒鳴りあげる。

「だいたいっ…！」
眉間に皺を寄せ、険しい表情を見せた桜時が、輝矢から視線を逸らし、そっぽを向くように首を外へ向ける。

「三年も音沙汰なかったくせにっ、今更、ポッと現れて、んなこと言われたってっ…」
「……っ」
徐々にその声を小さくしながらも、言葉を繋ぐ桜時を見つめ、輝矢がそっと目を細める。

「けれどっ…」
「……っ？」
声を発する輝矢に、桜時が少し振り向く。

「一目散に…私のところへ、走ってきてくれたじゃないですかっ…」
「……っ」
穏やかな笑顔を見せる輝矢に、思わず目を見開く桜時。

「他の誰でもなく…私の手を、取ってくれたじゃないですかっ…」
「そっ…それはっ…！」
気まずそうに俯いた桜時が、必死に声を発する。

「お前に一言っ、文句を言ってやろうと思っただけでだなぁっ…！！」

「心変わりしたとっ？」
「えっ…？」
桜時の言葉を遮って問いかける輝矢に、桜時が少し戸惑った表情を見せる。

「私ではなく、他の誰かを選ぶとっ？」
「そっ…それはっ…」
笑顔で問いかけを続ける輝矢に、俯いて口ごもる桜時。

「あっ…ああっ！そっ…！」
「……っ」
「うっ…！！」
少し自棄になった様子で頷こうとした桜時が、鼻の頭同士が触れ合いそうな程にまで、顔を近づけてくる輝矢に、思わず顔色を赤くし、その言葉を止める。

「かっ…輝っ…！」
「選べるものならっ」
「……っ！」

大きな笑顔を浮かべ、強気に言い放つ輝矢に、桜時が大きく目を見開く。

「……はぁっ…」
少しの間を置いた後、桜時が深々と頭を下げ、まるで観念したように、大きく息をついた。

「お前、自分で言ってたじゃねぇーかっ…“他の方を選ぶなら、選

んでくれていい”って…」
「ハチが私以外の誰かを選べるだなんて、初めっから思ってませんもんっ」
「すっげぇ自信っ…」
「……言ったでしょうっ？」
呆れたように呟く桜時へ、輝矢がさらに笑顔を向ける。
「私が帰って来た時っ、その時でも、アナタが私を選んでくれるというのならっ、その時はっ…」
――その時はっ……――
三年前、告げた言葉。
「“覚悟しておいて下さいね”ってっ」
「……っ」
晴れやかな笑みで言い放つ輝矢を見つめ、そっと目を細めた桜時が、零れるような笑顔を見せる。
「んでっ？」
再び顔をしかめた桜時が、話題を切り替えるように問いかける。
「三年間旅してっ、答えってのは見つかったのかよっ？」
「全然っ」
「はぁっ！？」
さらっと首を横に振る輝矢に、驚いた様子で声を出す桜時。

――鬼である私が…本当にこの世界に生きていていいのかどうか…
――

一人で考えたいと言って、その答えを探したいと言って、三年前、輝矢は桜時の前から去っていったのである。

「見つかんなかったっ!?三年間も行ってたのに、全然っ!?」
「ええっ」
確かめるように聞き返す桜時に、輝矢が大きく頷く。

「はぁぁ～っ……」
桜時がスズメの背に両手を付き、深々と溜息をつく。

「んだよっ、それっ…んじゃあ何の為に三年もっ…」
「生きていていいのかどうかは、わかりませんでしたが…」
「……っ？」
割って入ってくる輝矢の声に、俯いていた桜時が顔を上げる。

「この世界を生きる、たくさんの人たちを見て…一つ、思ったことがあります…」
「えっ…？」
穏やかに微笑む輝矢の言葉に、桜時が少し首を傾げる。

「私も…私も、みんなと同じように、この世界に咲いていたいっ…」
微笑んだ輝矢が、まっすぐに桜時を見つめる。

「アナタと、一緒にっ…」
「……っ」

そう言って笑う輝矢を見つめ、そっと目を細める桜時。

「……そうかっ…」
頷いた桜時は、その表情に、笑顔の花を咲かせた。

「朱実桜時っ」
「……っ？」
桜時の手を取り、名を呼ぶ輝矢に、桜時が少し目を丸くする。
「汝、健やかなる時も、病める時も…その命続く限りっ…」
言葉を続けながら、輝矢が強く、桜時の手を握り締める。

「この私、竹取輝矢を…愛することを誓いますか…？」
「……っ」

先程教会で、神父がしたものと同じ問いかけをする輝矢に、桜時が少し目を細め、そっとその口元を緩めた。

「はい、誓います」
「……っ」

大きく頷く桜時を見て、輝矢はとても幸せそうに笑った。

『……っ』

そっと瞳を閉じた二人が、口付けを交わそうと、互いの顔を近づけていく。

「あのぉ～っ」

「お楽しみのとこ、ちょっと申し訳ないんだけどぉ～っ」

「へっ？」

唇が触れ合おうとしたその瞬間、輝矢の両肩から、それぞれ顔を出す、一匹のサルと一羽のキジ。言うまでもなく、モンキとユキジであった。

「……。」

目を開いた桜時が、二匹の姿を見て、しばらくの間、固まる。

「どわあああああああっ！！」

やっと二匹を認識したのか、桜時が驚きの声を出しながら、勢いよく後退し、輝矢との距離を取った。

「おっ…！お前らっ…！」

後退した桜時が、口元を震わせながら、ひどく焦った様子でモンキとユキジを指差す。

「いつから居っ…！居やがっ…！」

『“あぁ～イイ風ですねぇ”からっ』

「それっ！一っ番、最初じゃねぇーかっ！！」

声を揃える二匹に、桜時が勢いよく突っ込みを入れる。

「ハチとのイチャイチャ時間を、邪魔しないでくれますぅ～？サルっ、キジっ」

「誰がイチャイチャだっ！」

不機嫌そうに言う輝矢にも、突っ込みを入れる桜時。

「せやかて、輝矢ん、やぁ～っと帰って来たんやもぉ～んっ！」

「えっ？」

口を尖らせるモンキに、輝矢が少し首を傾げる。

「俺っ、待ちくたびれとってんでぇ～っ？また四人で旅すんのっ！」

「そうそぉっ！約束っ、忘れたわけじゃないよねぇ～っ？」

「ああっ」

二匹の言葉に、輝矢がポンと手を叩く。

――また四人で旅しましょう、必ず――

三年前、最後の戦場で交わした、約束。

「すっかり忘れてました」

「がびんっ！」

「まぁそういう人だよ…君って…」

素直に答える輝矢に、モンキがショックを受け、ユキジが呆れたように呟く。

「では、今から行くとしましょうか」
「えっ!?今からっ!?」
即決する輝矢に、桜時が焦ったように聞き返す。

「やはり二人きりの方がいいですか？ハチ」
「んなことっ、思ってねぇーよっ!!」
自分に都合のいい解釈をする輝矢に、強く怒鳴りあげる桜時。

――ボォォォォォ～ンっ！

「ったくっ…！」
白い煙に包まれ、イヌの姿となったハチが、どこか諦めたように肩を落としながら、輝矢の肩から降りた、モンキとユキジの横に並ぶ。

「由雉っ」
「はぁ～いっ」

輝矢の呼びかけに、やる気のない返事を返すユキジ。

「門貴っ」
「ほいほいっ！輝矢ぁぁ～んっ！」

明るく両手を突き上げるモンキ。

「ハチっ」

「……あぁっ！」

ゆっくりと笑顔を浮かべ、大きく頷くハチ。

「……っ」

並んだ三匹の前に立ち、輝矢が満面の笑みを浮かべる。

「行きましょうっ！更なる冒険の旅へっ！！」

こうして、月のお姫様は、イヌ・サル・キジと共に、新たなる旅へと出たのでありましたとさ……

一人の少女と、一匹のイヌとの出会いから始まった、この“おとぎ話”。

こんなところで、このおとぎ話は、終わるのである。

めでたし、めでたし。

かぐや』　完

第１００章　この世界に咲く君へ　★5（後書き）

「鬼斬り　かぐや」全１００章、全４４２部、完結いたしました。
長いお話に、ここまで付き合って下さった皆様、本当にありがとうございました。
４０００分を超えるお話を、最後まで読んで下さった方がいるということが、何よりも嬉しく、そして幸せです。
輝矢たちの旅はまだまだ続いていきますが、「鬼斬り　かぐや」の物語は、ここで終わりとなります。
このお話が、少しでも皆様の心に残るものであったなら、幸いです。
では。
また別の物語で出会えることを願って。

２００９年２月２４日　千風

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1328d/

鬼斬り　かぐや

2010年10月8日15時08分発行